残酷処刑島

怖い女

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。

このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】

残酷処刑島

【Ｎコード】

Ｎ５５９７ＥＲ

【作者名】

怖い女

【あらすじ】

残酷処刑島。

国が選んだ女処刑人たちによる残虐極まりない拷問、性器破壊、処刑の執行。

美少女たちの悪者たちへのお仕置きが始まる……。

小学生、中学生、高校生の女の子たちから、残酷な暴行、拷問や

去勢、処刑をされる男女。

相手が女性でも幼児でも容赦なく性的拷問、処刑を繰り返す天使の顔をした悪魔たち。

煌びやかなアイドルたちが、裏では残酷処刑執行人の一員であった……。

幼児や小学生等の、児童に対する性的虐待や、去勢、処刑シーンもありますので、そのあたりが苦手な方はご遠慮ください。

極悪非道な犯罪者たちによって理不尽に殺害された人々に替わって、地獄の苦しみを与えて処刑する拷問処刑人たちのお話です。

報復拷問処刑を管轄する新しくできた国の機関である特殊任務省が、少女たちに遂行命令を下す。

３０歳のＯＬで、みんなをまとめるリーダー役の木村真紀、女子高校生の大山加奈、女子中学生の鬼頭美紅、女子小学生の菅野莉央。
(物語の初期はこの四人で拷問処刑を行います)

ここ最近のお話では、簡単に残酷拷問処刑できる精神的な強者の少女たちが増えすぎて現実離れし過ぎております。

戦闘力も、小学生や中学生にしては現実離れしてますが、その辺りはフィクションとしてどうかご容赦くださいませ。

拷問処刑人〔現在の全メンバー合計８人〕

菅野莉央（かんのりお）小学生アイドル
富田美香（とみたみか）小学生アイドル

結城明日香（ゆうきあすか）　小学生アイドル
荒木永遠（あらきとわ）小学生男子（苗字変更→菅野永遠）
堀越唯香（ほりこしゆいか）小学生
鬼頭美紅（きとうみく）中学生アイドル
宮垣咲良（みやがきさくら）中学生アイドル
円満愛衣（えんまんあい）高校生（苗字変更→菅野愛衣）

拷問執行人

沖野秋帆（おきのあほ）ゴスロリ姉妹の妹
沖野夏帆（おきのかほ）ゴスロリ姉妹の姉

〔現在卒業済メンバー〕
木村真紀（きむらまき）社会人
大山加奈（おおやまかな）高校生
坂本江美（さかもとえみ）高校生
島崎真理子（しまざきまりこ）高校生
菅野京介（かんのきょうすけ）社会人であり莉央の兄
大野真子（おおのまこ）中学生
小野メグ（おのめぐ）中学生

基本的には、美少女たちが凄惨で残酷な拷問や処刑をするお話です。

主人公たちは年はとらない、進級はしない方向で書いていきます。

残酷な女たちの初仕事（前書き）

全世界で後を絶たない凶悪犯罪……。

そんな犯罪者たちに理不尽に殺害された人々に替わって、地獄の苦しみを与えて処刑する拷問処刑人たちのお話です。

一応、国が残酷な気性の人間を選び、拷問や処刑を命令しているとゆう設定になっております。

特殊任務省……報復拷問処刑を管轄する新しくできた省庁だが、拷問処刑を執行できる残酷な気性の人間は滅多にいない。

様々な情報を元に、ついに四人の女性たちを見付けることができた。この四人は、強さも残酷さも全てを満たしていた。

３０歳のＯＬで、みんなをまとめるリーダー役の木村真紀（きむらまき）、女子高校生の大山加奈（おおやまかな）、女子中学生の鬼頭美紅（きとうみく）、女子小学生の菅野莉央（かんのりお）。

四人による普通の人たちには到底不可能な、残酷拷問処刑が始まる………。

（ここ最近の新しいお話では、簡単に残酷拷問処刑できる精神的な強者の少女たちが増えすぎて現実離れし過ぎております。戦闘能力も小学生や中学生にしては現実離れしてますが、（特に菅野莉央と鬼頭美紅）その辺りはどうかご容赦くださいませ……）

拷問処刑執行人〔現在の全メンバー合計八人〕

菅野莉央（かんのりお）　小学生アイドル
富田美香（とみたみか）　小学生アイドル
結城明日香（ゆうきあすか）　小学生アイドル
鬼頭美紅（きとうみく）　中学生アイドル
宮垣咲良（みやがきさくら）　中学生アイドル
円満愛衣（えんまんあい）　高校生
堀越唯香（ほりこしゆいか）小学生
荒木永遠（あらきとわ）小学生

拷問執行人

沖野夏帆（おきのかほ）
沖野秋帆（おきのあほ）

〔現在卒業済メンバー〕

木村真紀（きむらまき）
大山加奈（おおやまかな）
小鳥遊貴子（たかなしたかこ）
島崎真理子（しまざきまりこ）
坂本江美（さかもとえみ）
菅野京介（かんのきょうすけ）
大野真子（おおのまこ）
小野メグ（おのめぐ）

【基本的には美少女たちが、老若男女問わずに凄惨な拷問や処刑、

いじめ、性器破壊をするお話です。
想像の中で小、中、高生の若い女の子たちに残酷に殺されたり、性的な拷問をされたりするM思考の方は是非ともご一読下さい。
殆どのお話が、女性がSで、男性がM的な物語となっておりますので、ご理解よろしくお願い致します】

残酷な女たちの初仕事

日本の国の何処かの海に浮かぶその島は、残酷処刑島と呼ばれている。重大な罪を犯した罪人を処刑する処刑執行人たち。国家が選んだその四人は全て女性である。

国中でも最も残酷な気性を持つ四人を集めて、残酷な拷問や処刑方法などを訓練させてきた。

本日は彼女らの初仕事、初の拷問処刑執行日である。

四人は比較的若い女性で構成されていた。１２歳の少女の名は莉央、１４歳の少女は美紅、１８歳の少女は加奈、３０歳の女性は真紀。冷静で落ち着きのある全員をまとめるリーダー的存在だ。

＜ｉ２９９３３―２４９０３＞

記念すべき彼女らの初仕事の日は、２０歳のカップル二人が残酷処刑島に連行されてきた。

「ようこそ残酷処刑島へ。あなた達に名前は必要ないから男、女と呼ばせてもらいます。あなた達は三人もの尊い人命を奪ってきましたね？　かなり苦しい最後を遂げてもらいますから覚悟していてください」

真紀が淡々と処刑宣告をする。

「い、嫌だ！　まだ死にたくない！　殺さないでくれ！」

「そ、そうよ！　私達は生活の為に仕方なく殺しただけなのよ！　何であなた達みたいな意味のわからない女たちなんかに処刑されなくちゃいけないのよ！？」

　木の杭に大の字に磔にされたまま二人は叫んでいる。次の瞬間、女の顔面に加奈の拳がめりこんでいた。

「がはあっ！？」

　鼻血がボタボタと地面に降り注いだ。

「こいつ、叩き殺していい？」

「加奈さん、ここは取り敢えず私に……。おい女、股間の力を抜いててね！」

　女の背後に回りこみながら中学生の美紅が冷たく言い放った。次の瞬間……。

「グシャ！　メリメリ！！」

「痛あああああっ！！」

　美紅の蹴り上げた爪先は女の性器を直撃していた。つま先がパンツごと性器にめりこんでいた。

＜ｉ２９９９３９－２４９０３＞

「ひいいいいっ！！　痛いっ！　痛いいいいいいっ！！」

　女の股間から薄い黄色の液体が滴り落ちる。痛みのあまりに小便を洩らしていた。

「あれだけ美紅ちゃんの足がめりこんで血が出ないなんて……相当ヤリマンだね？　この女……」

「加奈に人のことが言えるのかしら？　近頃の女子高生なんて殆どヤリマンじゃなくって？　うふふ……。じゃあボチボチこの女に服を脱いでもらおうかしら？」

　リーダー格の真紀の合図と同時に女処刑人たちによって男女は素っ裸にひん剥かれた。

　美紅が男の前に仁王立ちして呟いた。

「キンタマ……潰していい？」

　そう言いながら男の睾丸を鷲掴みにした。

「い！？　痛いっ！！　やめろこのクソガキ！！」

「止めてくださいでしょ？　おっさん！　立場理解してないなぁ全く」

「ギャアアアアッ！！　や、止めて下さい美紅様っ！！」

　あまりの激痛に男のプライドは崩壊してしまったようだ。

「あ〜あ、中学生の女の子に様付けで呼んじゃって……。あたしも莉央様って呼んでもらおうかな」

　小学生の莉央が嘲るような口調で言った。

「待って！　生の睾丸を抉り出してから潰してやりなさい！」

　真紀の残酷な決断が下される。

「いやんっ！　生なんて……なんかやらしいね！　はい、美紅さんカッター」

「おーけー！　ありがと莉央ちゃん。じゃあコレで切り裂いて……生のタマタマにこんにちはしてもらおっかな〜？」

「だ、だめ！！　和希の大事なトコ……止めてあげて！　お願いいいっ！！」

女の悲痛の声も届かず女子中学生による解剖の時間が始まった。

「ズブッ！　ズズズズ！！」

玉袋の真ん中辺りから肛門のすぐそばまで美紅のカッターが走った。ペニスの付け根までが丸見え状態だ。

「ぎゃあああああああああっ！！」

男の悲鳴が島中に響きわたる。
切開された玉袋の中に女子中学生美紅の白くて細いしなやかな指がズブズブ挿入されていった。
生の睾丸を掴む。引っ張る。親指と人差指と中指に容赦なく掴まれた白っぽいピンク色の睾丸が体外へ引きずり出された。
美紅の反対側の手で、残された側の睾丸も引きずり出される。

「男にさようならの時がきたようだね。覚悟はできた？　あれ？泣いてるんだ？　泣いても許さないんだから。神経繋がってるままやったげるわね？」

「ギュウウウウウウッ！　グニュニュニュニュニュニュウウッ！！」

血管を浮き出させせながら変形していく睾丸……。

「グチャ！　ぐちゅっ！」

ピンク色の液体を美紅の両手にぶちまけながら、男は男を終了させられた。

「あぎゃあああああっ！！　があああああっ！！」

白目を剥き、泡を噴きながら失神した。

グチャグチャに潰された睾丸は隣で悲鳴をあげている女の性器にねじ込まれた。

「ほうら、彼氏のキンタマよ？　ほぼミンチだけど♪　これで妊娠でもしたら？」

美紅の言葉に、四人の拷問処刑人たちは爆笑しながら泣きじゃくる女を見つめていた。

「もうこれはいらないよね？　玉無しなんだから」

加奈は持っていた日本刀を鞘から抜き、一気に男のペニスを断り落とした。

「よっと♪」

『ザシュッ！！……ポトリ』

「ひいいっ！？　お願い！　もう殺してっ！　これ以上虐げられるのなら死んだ方がマシだわ！！」

「何言ってるの？　まだ男の射精ショーが残っているのよ？」

真紀の言ってることが理解出来ない女。

「性器を切り取られてどうして射精できるのよ！？　もういいから早く殺してっ！！」

加奈と美紅は頬を赤くするが、小学生の莉央だけは女と同意見で意味が分かってなかった。
真紀は傘を手にして、柄のU字型の先端部分を男の肛門に押し当てた。

「ウフフ、お尻の穴も許してあげな～い。ほら、飲み込めぇ～♪」

「ズブ……ヌプププププ……ズズズズッ！！」

　乾いた男の肛門にローションも塗らずに傘の柄が容赦なく突きたてられてゆく……。

「あぎゃぁあああああっ！？　痛いっ！！　あ、熱いいいいいっ！！」

「あはは！　お目覚めかしら？　痛いの？　熱いの？　どっちなのかなあ？　ほ～ら、どんどん奥まで入ってくよお～？」

「ひいいいいっ！！　裂けるうううっ！！　穴が裂けるうううっ！！」

「ん？　尿道がヒクヒクしてきたわね？　こんな姿、女の私に見られて恥ずかしいなぁ！　あはははは！」

「ほら！　お尻の穴を女性に掻き回されているのよ？　恥ずかしいわねぇ？」

「んぐ、ううう」

　「腸液撒き散らしながら彼女の前で射精なさいっ！」

「あうっ！　はっ、はううううううっ！！」

「ドピュ！　ピュピュピュッ！！」

「あ！　本当に射精しちゃった！？　男ってオチンチンこすらなきゃ射精出来ないと思ってた……。肛門掻き回されてなんて変態だね

こいつ」
「前立腺っていうんだけどね、一応性器に分類されるのよ。莉央もやりたい？」
「うん。あたし、こいつの彼女の前立腺抉り出してやる！」

　そう言いながら女の肛門に人差指を突っ込んだ。
＜i２９９９４０｜２４９０３＞
「いやっ！　やめて！　お願いよお嬢ちゃん」
「うふふ。女には前立腺は付いてないのよ？　覚えておきなさいね莉央」

　切断されたペニスから無様な強制射精ショーをさせられた男。真紀は傘の柄を肛門から引き抜き、こびりついた大便を拭き取りながら加奈に男の処刑を命じた。
　加奈は切開されているペニスの付け根に日本刀を突き入れ、肛門まで会陰部を切り裂き、腕に力を込めた。

『ズブ……ズズズ！』

「和希って言ったかしら？　人生の最後だから名前を呼んであげる。よく今まで頑張ったね。お待たせの処刑を執行します。前立腺どころか内臓を突き抜けてお口まで貫通させてやるから覚悟するのよ？
　大丈夫。彼女も子宮と卵巣を抉り出してから性器から串刺し刑にして送ってあげるから……。さようなら」

加奈が一気に力をこめる。
断末魔の悲鳴を轟かせながら男は息を引き取った。
「あれ？　女の肛門が開いていくよ？」
「恐怖と絶望でショック死したみたいね」
莉央は女の肛門から指を引き抜きながら、哀れな二人の亡骸を見つめていた。
「死んでも去勢させてもらうからね」
四人の女性の処刑人によって、子宮と卵巣を摘出された哀れな亡骸も、性器から口まで串刺しにされ男と並んで磔にされた。
四人はそれぞれ元のＯＬ、女子学生に戻り、次の罪人が現われるのを待っている。
残酷処刑島に二つの遺体が加わった。

残酷な女たちの初仕事（後書き）

人生初めての拷問処刑執行にもかかわらず、残酷極まりないやり方で執行した四人の美少女。

悲惨な運命を辿る死刑囚は、次回いつ現れるのか……。

小学生の処刑（前書き）

国からの指令が下り、二回目の処刑場へ集まった四人。　リーダー格の木村真紀が皆に指揮する。

小学生の処刑

国からの指令が下り、二回目の処刑場へ集まった四人。　リーダー格の真紀が皆に言った。

「みなさん、今日は少し悲しい処刑になりそうよ」

「どうゆうことなの真紀さん？　凶悪犯罪人を殺める事は楽しい事なんじゃないの？」

首を傾げながら残酷少女の加奈は聞き直した。莉央も美紅も同じように意味が分からないような表情だ。

「親殺しの小学生の女の子二人と男の子一人……６歳８歳１０歳ね。姉弟三人。長男の１０歳が企てた殺人計画みたい」

簡易な処刑島の港に船が着いた。汽笛も鳴らさずに静かに速やかに罪人が運び込まれる。手術台のようなベッドに三人は縛りつけられていた。

「今回は手術スタイルでの処刑になるんだね」

「カエルの解剖みたいなやつだね」

「相手が小学生とはいえ容赦しないわよ私は！」

　女子高校生と女子中学生と女子小学生の残酷な気性の三人が殺る気満々に会話している。

「ではよろしくお願いします」

　敬礼して去って行く女性看守。

既にパンツ一枚にされている小学生の少女二人と少年一人がシクシクとすすり泣いている。

「名前は聞かないわよ。少年と少女ＡＢでいいかしら？」

　真紀が呟いたと同時に女処刑人三人の猛烈な往復ビンタが炸裂した。

「うぎゃあああああああっ！！」

　たまらず大声で泣き叫び始める三人。

　女子空手世界一の実力を持つ加奈に叩かれた少年の被害が一番深刻だった。前歯は２本へし折れ、唇は裂け、鼻の骨もへし折れてドクドク鮮血が顔面をそめてゆく。

美紅と莉央に叩かれた少女二人の方は鼻血程度だった。

「どうしてビンタだけで歯がへし折れるのよ？」

「う～ん、どうしてと言われても……貧弱だからね！　最近のガキどもは」

「違うと思うよきっと……」

青ざめながら加奈を見つめる三人……。

四人の鞭打ち仕置きが容赦なく一時間続いた。子供達の顔面、胸部、腹、太もも、足まで万遍なく真っ赤に腫れ上がった。

「うあああああん！！　ひぎいい！！　助けてお母さーん！！」

泣き叫ぶ三人……。

「8歳の御嬢ちゃんかな？　少女Aだったね？　今、お母さんって言った？」

自分たちで殺しておきながらよくも助けを求められるものだ……。女処刑人達は全員同じ事を思っていた。

加奈は少女Aのかすかに膨らみをみせていたオッパイに鞭よりも強烈そうな平手打ちを数十回遂行した。

「ぎゃあああああっ！！　痛い痛い痛いっ！！」

狂ったように奇声をあげる少女A。
更にスラっと白く長い人差指をピンと立てた次の瞬間、パンツごしに少女Aの性器に突き刺した。
少女Aの処女膜は瞬間に破られた。第２関節まで挿入された時点で処女膜は悲鳴をあげたが、そのまま第３関節、加奈の全ての人差指を少女Aの膣内へ突っ込んだ。
真っ白い女の子のパンツがみるみる赤く染まってゆく。

「痛あああいっ！！　亜美のアソコが裂けちゃうっ！！」

顔をクシャクシャにして泣き叫ぶ8歳の少女。

「心配しないで。もう裂けちゃってるから」

一度指を抜き、パンツの裾から生で挿入し直した。
人差指に中指も加えて猛烈な勢いで膣内を掻き回し始めた。グチュグチュと卑猥な音をたてながら流れ出る血液……。少女の太ももが鮮血に染まってゆく。

「痛いっ！！　やめて許して！！　亜美死んじゃううっ！」

嘆願して許しを請う少女Ａの亜美。
「ひえ〜、痛そう！　指一本でもなかなか入らないような小学生のマンコに二本も挿れてあんなに激しく掻き回すなんて……ああ怖っ」
同じ女子小学生の莉央は楽しそうに舌を出す。
「まだまだ死なせないわよ。こっちの処女もいただくわ」
今度は真紀の人差指が、亜美のパンツの裾から肛門へ突き刺された。
「ツプ……ズブブブブ」
「んあっ！？」
どんどん奥へ飲み込まれてゆく真っ白な指の摩擦によって、気持ちいいのか痛いのか、ビクビクッと亜美の内股が収縮する。
女性器と肛門の間の薄い膜を隔てて、加奈の指と真紀の指がゴツゴツと触れるのがわかる。
「やだ！　汚い！！　私の指が直腸奥のウンチに当たってる。どうしてくれるの？」

理不尽な真紀の問いにも亜美の反応は変わらない。性器と肛門を懸命に閉めようと内股の筋肉をヒクヒクさせている。

真紀の生指でのアナル調教が始まった。亜美の直腸は真紀のしなやかな指によって突付かれ、掻き回され、きゅぽきゅぽと妙な音を立てている。

凄惨な目に逢っている亜美を気にするでもなく、莉央と美紅が１０歳の少年に歩み寄った。手には鈍く光る鋏が握られていた。

莉央が少年のパンツをゆっくり脱がし始める。

「おい少年！　今からあたしたちが何をするのか分かるわよね？」

いきなり美紅が質問した。

「や、止めて！　女の人にオチンチンなんか見られたら恥ずかしいよ！」

莉央の手で、足首まで完全にパンツが下ろされた。芋虫のような皮被りのペニスが、女子小学生と女子中学生の二人の眼前に晒された。いや、正式には四人だった。亜美の股間を責め立てながらも、真紀と加奈の視線も少年のペニスに注がれていた。

「男の子は最後に殺るつもりだったのに！　気が早いなぁ年少組は」

笑いながらも悔しそうな表情を見せる真紀。

「少年は去勢しちゃうんだっけ？」

亜美の性器から少しの愛液と多量の血液でふやけ気味の指を抜きながら加奈が冷ややかに質問した。

「だね。性器という性器を全部抉り取ってやるんだから！」

美紅が意気込みを語る。

「オチンチンとタマタマだけじゃあないんだよね？　男の性器は！」

頬を紅潮させながら小学生の莉央が言った。

「前回で勉強したんだ。莉央も少し知識増えたね」

褒め終わると、真紀も亜美の肛門から指を抜いた。

「てへっ！」

舌を出して小悪魔のように可愛く笑った。

『去勢？　性器は二つだけじゃない？　何？　どういう意味！？』

少年は震えながら女処刑人達の談笑を聞いていた。

「ぎゃあああああっ！！」

＜ｉ２９９５２－２４９０３＞

絶叫が島中に響き渡った。

加奈の手にした日本刀が亜美の肛門に一気に４０ｃｍほど突き刺さっていた。

既に直腸を通過して大腸壁を数枚は突き破っていた。

直腸、Ｓ状結腸、大腸、小腸、胃まで貫通させた。

「うぐあああああっ！！　ごぼぼっ！！」

口から血の泡を噴きながら人生最後の奇声をあげる亜美。

「あんたのお兄ちゃんの去勢が見たかったから予定を早めちゃった！　ごめんね〜！　私は女より男を責める方が好きだから」

加奈は更に力を込めて刀を突き刺し、ついに刀は亜美の口から飛び出した。
ビクビクと痙攣しながら口と肛門から鮮血を撒き散らしながら息絶えた。
「さすが加奈！　お見事な刀捌き！　力も強いから見事な串刺しの一丁あがりだね！　さぁ……じっくり去勢を見せてもらおうかしら？」
「莉央、浣腸しといて」
美紅がお願いする。
「おっけ～。よいしょっと！」
浣腸器に高濃度のグリセリンをセットする莉央。
少年の肛門へ尖ったガラス製の冷たい切っ先があてがわれた。
「ツプッ！」
ビクッっと少年の身体が仰け反る。

「ひっ！？　冷たい……やめて！　そんなとこに触れないで！！
恥ずかしいよぉ……」

少年は何が自分の肛門に触れたのか分かっていないようだった。
２㎝ほどの浣腸器の先端部が全て少年のアナルへと飲み込まれた。

「同じ小学生の女の子にこんなものお尻の穴に突っ込まれるなんて。とっても哀れだね？　嬉しい？　全部肛門から飲み込むのよ？　いくよお～。それぇ～」

莉央の手にした浣腸器から高濃度のグリセリンが注入されてゆく。

「や、止めて！！」

「だめ！　全部飲み込むの！」

「ぷちゅううう～……」

「ああ、あん」

少年の腸内に大量の浣腸液が注ぎ込まれた。

「あ～あ、女の子みたいな声出しちゃって。恥ずかしいなあ」

「少年！　限界まで我慢するのよ？　あはは！」

「やめて……女の人ばかりで僕の恥ずかしい所を見ないでよお～……お願い！」

「チンポとアナル見ないと去勢も浣腸もできないし……あんたバカ？」

「あはははは！　笑わせないでよ美紅」

「うう……何か凄くお腹が痛くなってきた……。」

「あ～あ、早くも出しちゃうんだ？」

　簡易便器をさっと構える莉央。

大量に大便をへり出した少年。恥ずかしさのあまりに泣き出した。排便の勢いで、小便までも漏らしていた。

「ごめんね少年くん。　あたしたちは皆残酷で、Sで、しかもエッチなの……。　顔も全身も叩いたりしたけど結局最後に一番ボロボロになるのは男女問わずに性器と肛門だから。少年くんはあたしのタイプだから特にムチャクチャにしてやるからね？」

「くさっ！　女の人の前でウンチとオシッコ洩らししちゃうなんて……もう生きていけないね？　今から死んじゃおうか」

排便処理している莉央の手際のよさに鼻をつまみながらも感心している加奈。

「美紅、手順は分かってる？　肛門から鋏を差し込んで会陰部を切り進み、陰嚢の中央を亀頭部まで切開するの」

真紀の凄惨な指示が出る。

「聞いてるだけでゾクゾクしてきちゃった！　やっちゃえやっちゃえっ！　キンタマ引きずり出しちゃえ～っ！！」

超ドSの加奈の膣内は興奮しきってジュクジュクに濡れてきていた。

「止めて！　お願い！！　もう痛い事しないで……許して」

少年も、恥ずかしいと感じている場合ではないとゆうことに、少しずつ気付き始めてきていた。

「ズブッ……」

美紅の鋏の片方の先端が少年の肛門に差し込まれた。

「ひいっ！　冷たいっ！！　何っ！？　いやっ！！　またお尻に何か入れるの！？　もうエッチな事するの許してよ！！」

　莉央が少年に猿轡を噛ませた。ここからは地獄の入り口だと莉央も気付いていた。

「殺人犯は死んで。でもあたしたちを恨まないでね！　全く落ち度のない人たちを殺した罰だから……命で償ってね」

　頭を撫でながら莉央が優しく声をかけた。小学生ながら可愛くて男前の少年の顔を見つめながら、数秒後には苦痛に歪む顔も想像している莉央だった。

「ジョキ！」

　美紅が肛門の上方向へ鋏を入れた。

「ピュピュウウウ〜ッ！！」

　凄まじい勢いで鮮血が飛び出した。

「んんん！！　うううううっ！！」

　声にならないが必死で痛みを訴える少年。

「ジョキジョキジョキ！」

　肛門括約筋を切り裂いた鋏は唸り声に構わずに会陰部へ切り進む。

陰嚢の中央を切り裂きながらペニスの裏筋、ついに亀頭の雁首の直前まで切り裂いた。

「うわあ～、すっごぉ～い！　中身はピンク色で綺麗な色してるんだ～」

「わぁ！　尿道が生で見えてるよ？　なんかエッチだよね。尿道って白いんだ！」

　莉央も１１歳とはいえ女の子。可愛い男子の性器を見ているだけで……しかもピンク色のペニスの内部を見てると、変な興奮を感じて性器を濡らしていた。自分のパンツが濡れて冷たくなっていることに気付いていた。

「さてと。覚悟はいい？　今からあんたのキンタマ引きずり出すよ

？」

切り裂かれた陰嚢へ女子中学生の可愛らしい小さな指が突っ込まれてゆく。そして内部の生の睾丸をしっかりと掴んだ。

「ずぶっ、ぎゅっ、ぐにゅ、ぐりり……」

少しずつ引っ張る。

白っぽい生の睾丸が陰嚢の内部からチラッと見えた。

「ズルズルッ…………！！」

ついに持ち主の少年の身体から生の睾丸が抉り出された。しかし精管や神経はまだ繋がっている。生殖機能は辛うじて失われていない状態だ。

生の睾丸の感触には美紅も堪えられなかった。莉央と同じくアソコを濡らしている自分に気付いた。美紅は両手にキンタマを乗せたまま見つめていた。

「じゃあ潰すからね……」

＜i２９９９５３―２４９０３＞

美紅がゆっくり手を握り締め出した時、真紀が叫んだ。

「待って！　莉央がタイプの男の子みたいだから莉央にその子を射精させてあげて！」

「えっ？　あ、そうか！　ペニスはこんな状態でもアレを刺激すれば……。」

「そうよ。さあ莉央、裂けた肛門から指を突っ込んで……射精させてあげなさい。この子には今、最新タイプの麻酔打ってあげたから。数分間だけ無痛状態になってる。痛みは麻痺しても気持ちいい感覚だけは残る麻酔らしいの」

「うん。じゃあやってみる」

少年が太ももをヒクヒクさせながら抵抗してみせる。同世代の小学生の女の子にいじられるのは凄く恥ずかしくて辛いだろう。莉央は頬を赤らめながらも、右手の人差指と中指を少年の菊門へ捩じ込んでゆく。

「んうっ!?　うう……」

少年はボタボタと涙を流した。

「ごめんね、人生最後の射精をさせてあげるから辱しめを受ける事を許してね。」

肛門から会陰部の裏側奥深くへ莉央の指がめり込んでゆく。
ついに少年の前立腺に指が当たり、鋭利に研いであった人差指の爪で直腸を切り裂いた。膀胱のグニャッっとした感触も伝わる。
前立腺だ。莉央はグリグリと揉み扱き出した。
少年の顔が紅潮しだした。

「多分人生初の快感を味わってるだろうねコイツ」
「最初で最後のオーガズムかあ、オチンチンから玉袋からアナルまで切り裂かれて何か哀れだね……」
「お尻の穴を掻き回してるだけに見えるんだけど？　変なトコに感じる部分持ってるのね男って……」

中学生なのに勉強不足の美紅の素朴な呟き……。

「んんんんっ！！」
「いよいよだよ！　チンポ見てて！」

全員の意識は人生最後の射精をしようとしている少年のペニスへ。
莉央の指が超高速で少年の肛門奥深くの前立腺を掻き回す！
「せめてあの世では少年くんの精子を女性に赤ちゃん生んでもらう

ためにに使えたらいいね？　ボチボチ出そうね？　ほら、莉央の指で思いっきり……イッけええっ！！」

「ぐちゅちゅちゅちゅちゅちゅちゅちゅちゅちゅっ！！！！」

「んんんんんんっ！！！！」

「ドピュ！　ピュピュピュピュピュピュピュウウッ！！」

　おびただしい量の精液が莉央の前立腺オナニーによって飛び散りまくった。

　最期が近付いてきたため、猿轡を外してあげる莉央………。

「いっぱい出たね？　セーエキ………気持ち良かった？」

「莉央ちゃん、ありがとう。殺されるのは無茶苦茶怖いけど無茶苦茶気持ち良かった……」

「良かった。今から美紅ちゃんがキンタマ……潰すから。覚悟しててね？」

「ひっ！？……や、やめてよ……許してよ……」

「初の射精、見届けてあげたわよ。美紅、気持ち良くさせるのは本来タブーだから一気に地獄へ送りなさい」

　真紀の冷酷な指示が出る。

「うんっ！　それええっ！！」

美紅は渾身の力を両手に込めた。

「ぶちゅっ！！ぐびゅちゅっ！！」

卑猥な音をたてて確かに二回、肉塊の潰れる感触を確信した。

ビクビク全身を痙攣させせながら泡を吹き出す少年。この激痛も人生で最初で最後の体験になるのだ。

「ジョキジョキ！」

間髪入れず精管と神経を切断する美紅。加奈がトドメを差そうと首に刀を押し当てた時、真紀が制止した。加奈が訝しげに真紀を見ていると、莉央が必死で力を込めている。

「んんんんっ……えいいいいいっ！！」

「グチュグチュグチャアッ！！！」

少年の肛門から引き抜かれた右手にはプルンッっとした赤黒い物体が握られていた。前立腺を引きずり出す事に成功したのである。

「ぐああああああっ！！　痛いいいいいっ！！」

「ごめん、少年くんのこと、タイプだから前立腺も見たかったの。以外と小さいのね。パチンコ玉くらいしかないし」

あまりの激痛に意識が戻った上、絶叫する少年………。

「うるさいわよ？　まだ射精させてあげようか？　ほらあっ！！」

『にゅぽっ！　ずりゅりゅりゅっ！！　どぴゅぴゅぴゅぴゅぴゅ　！！』

加奈は切り裂かれたペニスの裏筋から指を突っ込み、尿道を突き進み、そのまま尿道内を亀頭へ進み、尿道口から指を突き出した。尿道内に残っていた精液が完全に搾り出された。しかしこれは快感どころか睾丸潰しほどの激痛であった。

尿道に突っ込まれた加奈の指は猛烈な速さで出し入れされている。摩擦で雁首から湯気が立ち上るほど痛々しい。

「ひぃぃぃ。殺して……もう殺してくださいっ！！」

「…………わかった。じゃあ死んでみよっか？　さようなら」

「ザシュ！！」
　ついに真紀が首を切り落としトドメを差した。
　残るは一人。
「いやあああああっ！　やめて許して助けてぇっ！　理沙はお兄ちゃんに言われたとうりにしただけなの……だから許して」
「少女Bちゃん、目をつむって現実逃避してたみたいだけど？　順番回ってきたら急に命乞い？　刃物使わずに去勢してあげるからね？　特別に名前で呼んであげる。理沙ちゃんは特別よ。痛みもね」
「切らないで去勢できるの？」
「無理矢理腕をアソコから突っ込んで抉り出すのよ。切開するより数倍苦しむんじゃないかな」
「アソコもアナルもガバガバに裂けちゃいそうね！こわ～い」
「ツプ、ズブブブブ！！　ぱりっ！　グボボボボ！！」
　処女膜を突き破り、尚も真紀の腕が膣内に挿入されていく。
＜ｉ２９９９５４―２４９０３＞
「あがっ！？　がはあああっ！！　ぎゃあああああっ！！」

研ぎあげた鋭い爪で膣内部の肉を切り裂き、子宮を握り締めるころには性器が裂けて肛門と繋がっていた。

「ごめん、私の腕が理沙ちゃんのマンコには太すぎたみたいね？　いくよ？　引きずり出すよ？」

「ズルズルグシュシュシュッ！！　ぷるんっ！！」

「やあああっ！？　んぎゃあああああっ！！」

「ビクビクッ……ガクッ……ピクピクピク」

「すご～い！　無理矢理子宮を素手で抉り出しちゃった」

「痛みと出血でショック死したみたい。本日の去勢処刑はこれにて終了ね。皆さんお疲れ様」

残酷処刑島に新たに三人の亡骸が加わり、合計五人の磔を残して女処刑人たちは島を後にした。

小学生の処刑（後書き）

二回目の処刑も無事に終えた四人の処刑執行人。
まだまだ残酷な処刑は続いてゆく…………。

美紅の怒り（前書き）

３回目の処刑。今回は国の大臣や官僚の思考によって違った形の処刑になった。

美紅の怒り

八月の真夏日……。
ある理由で国家から選ばれた処刑執行人の女性たち四人が、国家から温泉旅行に招待されていた。
四人を乗せた黒い高級車がいくつもの峠を越え、橋を越え、秘境の温泉へと向かっている。
長時間走っている割には対向車もなければ後続車も見えない。

「あたし、オシッコしたいんだけど」

最年少の菅野莉央が辛抱たまらずに運転手に声をかけた。残り三人が同じくと首を縦に振る。

「もうすぐ着きますよ。何ならその辺りの脇道でされますか？　本日はあなた方四名様の貸切ですから誰も通りませんよ？」

冗談か本気なのか分からない運転手の答えに腹立たしさを覚えながらも全員が我慢する旨を伝えた。いくら誰にも見られないからと言っても、もうすぐ着くとゆうのなら我慢するのが女性とゆうものだ。

「貸切だったんだ。他の人に気を遣わず広々ノンビリと温泉楽しめ

るね！」

　鬼頭美紅は、尿意と戦いながらも声を張り上げた。

　特殊任務省とは、警察に逮捕され、裁判を受けて死刑判決が下りる前に容疑者を確保し、残酷な拷問の執行、及び死刑を行う目的で設立された国の機関である。

　理不尽に殺害された被害者の遺族の感情を、少しでも緩和させる目的で設立された特殊な組織である。

　残酷拷問処刑省などとは間違っても命名できない。

　普通の死刑では生ぬるいと判断された場合に身柄を確保して拷問処刑を行うだけに、亡骸は隠密に始末されたうえに、行方不明扱いとなる。

　普通の死刑でも反対派が多数存在するとゆうのに、残酷な処刑方法では遺族以外からはまず受け入れられないであろう。

　その特殊任務省の長官、藤堂孝夫と秘書の武田信治の二人が残酷処刑人の四人を選び、本日の秘境温泉に招待した。

「あの四人と会うのも久し振りだな。既に二回任務を遂行してる訳だが……。初めての任務を依頼した時にはかなり楽しみそうにしてたのを覚えてるよ」

「そうですね。私たちの情報源を駆使して全国から厳選した残酷無

比な女性達四人ですから。しかも知能、運動神経や反射神経も並外れている為、武器さえ持てば屈強な男性さえも敵わないかと思われます」

「基本的に男性より力の弱い女性を選んだ理由は、罪人により一層の屈辱感を与える為だったな。今回の話は更にその要素が高くなる。ん？　黄色い声が響いてきたな。彼女達が到着したようだ」

コンコンと軽くノックする音と共に、甲高い笑い声がきこえてきた。

「どうぞ」

「失礼しま〜す！」

無事に用も足し終えた四人が上機嫌で入室、着座した。

藤堂長官が楽にするようにと言うと同時に足を崩す三人。最年長の木村真紀だけが正座を保っていた。

短刀直入に主旨を伝える藤堂長官。

四人の表情が真剣になる。沈黙を破ったのは高校生の大山加奈だった。

「要するに罪人が希望する場合は私達が戦えばいいんですね？　そうしたら今まで通りに去勢しようが串刺しにしようが好きに殺して良いと？」

「そういう事だ。しかし去勢は必要性があるとは思えんが……」
　オールバックの白髪頭を手で整えながら秘書の武田信治に同意を促す視線を送る。
「確かに。痛みを与えるには他にいくらでも手段がありそうですが？」
　中学生の美紅が即答する。
「性器を破壊する事で恥辱感をより強く与える事が出来ると思います。男に対しての睾丸潰しはあたし達女には分からないけど、泡を吹いて失神するくらい苦しんでますから」
「もういい！分かった分かった。想像しただけで腹が痛くなってきた」
「私も気分が悪くなってきました」
　秘書の武田信治も七三分けの額から溢れ出る冷や汗を必死で拭いている。
　藤堂長官と秘書の武田は席を立ちながら、もうすぐ昼食が運ばれてくる旨を伝えながら退室した。
　温泉に早く浸かりたいが為にさっさと昼食を済まし、四人は足早に露天温泉へまっしぐら。

「何か面倒くさい事になってきたね」

莉央が頬を膨らませながら呟いた。

「まあ楽しみが増えたと解釈しようよ！　武器も色々たくさんくれたし」

加奈は戦闘意欲も満々に答えた。

「ともかく今は寛いで癒されましょう。ああ～！　それにしても気持ちいいなあ！　景色も綺麗だし最高だわ！　そうそう……来月には４０歳の夫婦を処刑する命令を受けたわよ」

露天風呂を満喫した四人は秘境を後にし、それぞれの故郷へ帰っていった。九月中には自分の子供を三人も虐待死させた男女が残酷処刑島にて処刑されることになる。

鳥に貪られ、既に白骨化した五人の骸がカタカタと揺れていた……。

九月三日。ついに処刑執行日を迎えた。

四人は罪人夫婦の到着を待ちながら、先月に藤堂長官から入手した様々な武器を手に取り眺めて吟味していた。

「あたしはこの警棒にするわ」

伸ばせば７０ｃｍほどになるとても硬い特殊金属で造られた警棒を握りしめる美紅。中学生なら女子でも振り回せる重量だ。

「あたしは……この軽くて細い剣みたいなのにする」

力がこの中では一番弱い小学生の莉央が選んだ武器は、サーベル（細身の洋剣）だった。

相手の攻撃を受けようものならすぐに折れてしまいそうな剣だ。軽さとスピードを活かして突き攻撃で相手にダメージを与えられる武器を選択した。

拳銃まで入ってることに全員が気付いていたが、さすがに卑怯な気がして誰も手を付けなかった。

真紀と加奈は日本刀から変えるつもりはない。

やがて目隠しをされた後、しばらく船は進んだ。

数分後、残酷処刑島に船が着いた。

「ではよろしくお願い致します」

夫婦が後ろ手に手錠を嵌められて連行されてきた。

美男美女といえるほどの顔もスタイルも抜群の二人は、ガクガクと震えている。

処刑場へ向かう道中に真紀が夫婦へ話しかけた。

「あなた達はまだ助かる術があります」

ひととおり理由を説明し終えるころには二人の目は輝きを取り戻して男がいきなり叫ぶ。

「本当か!?　あんた達に勝ったら無罪放免にしてくれるんだな??」

静かに頷く真紀の後ろで加奈がニヤリと微笑んでいた。

「さあ着きましたよ。ここであなた達は凄惨な最期を迎える事になります。大人しく処刑執行されるか私達と戦って生を望むか?　………………。既に答えは出ているみたいだからこのまま説明を続けます」

全てを聞き終えた夫婦は更に生存確率が上昇したと大いにはしゃいだ。

お互いに好きな武器を使用可能。

1対1のタイマン勝負。

更に罪人側が戦う相手を選択できるのだ。

「悪いが俺達は生きてこの島から出させてもらうぜ!　おい和子!

お前は小学生のガキと戦え！　剣道二段のお前でも一応念には念を。だ」

「あんたこそガキとやれば？　あたいはこの中の四人相手なら絶対負けない自信あるよ！　武道経験無しのあんたの方こそ男でも慎重にならなきゃね！」

「そ、そうか……じゃあ基本的にガキは好かん性分だから俺がやっつけるぜ！」

残り三人を吟味するように見回した女罪人は美紅を指差した。
真紀と加奈相手でも自信はあったのだが何せ命がけなのだ。
勝てる確立は１％でも高いに越した事はない。大人と高校生を避けて、中学生と小学生を相手に選ぶのは当然のことだった。

「ふわあぁ～。やっと決まったんだね。しかも私と真紀さんの出番無しだよ……」

大あくびしながら加奈が残念そうにぼやいた。
一瞬笑ってすぐに審判を始める真紀。

「では第一試合始めます！　両者前へ」

武器の日本刀を選択した女が目をギラギラさせながら一歩前に出た。

『何で果し合いしなきゃならないのにセーラー服のまんまなのよ？　みんなもいつものパンツ見えそうなのばっか』

頭の中で本日試合すると分かっていながらもいつもと同じ服装を命じた藤堂長官に対して今更ながらぼやいていた。

『この島での処刑もどこかから撮影されているとゆう話だし……もしかして試合中のあたしたちのパンチラでも期待してる？　あの糞エロオヤジめ』

「美紅！　早く一歩前に出なさい！」

真紀の叱責がとぶ。

「はい！　はいはいはい！」

慌てて特殊警棒を構えながら一歩前に……。

「始めっ！！」

「うりゃあああっ！！」

猛烈な勢いで４回も日本刀が振り回された。バックステップ、サイドステップで巧みにかわしながらも度肝を抜かれた。

「凄いスピードね！　こりゃ油断してたらやばいかも……うっ!?」

「ガシッ！！」

真紀にもまさかの展開だった。少しの不安がよぎった。

「まさかあたしが受けさせられるとはね……。さすが有段者だわ。鍔競り合いみたいな力比べは得意じゃないから早目にケリをつけさせてもらおっかな……それっ！！」

「ドゴッ！！」

不意に股間を蹴り上げられて一瞬女の力が抜けた。その隙に日本刀を受け流してジャンプした。

「はっ!?　どこに!?」

視界から美紅を失い、キョロキョロしている女を目がけて白いパンツを丸出しにしながら下降してくる美紅。

「和子！　上だっ！！」

「ガンッ！！」

　男が叫んだが遅すぎた。脳天に体重のかかった特殊警棒の強烈な一撃が決まった。意識を失った女は地面にうつ伏せに倒れこんだ。頭からの出血がすさまじく、真紀が包帯を巻き応急処置を施す。

「大丈夫よ。まだ生きてるから安心してね。数分後に死亡が確定しちゃったけど」

　現実が理解できていない男に向かって美紅が呟いた。

「くそう……何てジャンプ力だ！　カエルかこのガキ……。俺はこいつを使わせてもらうぜ！」

　素早く懐に入られる事を警戒して、リーチの有利な槍を選んだ。

『カ……カエルだって？　あたしのことをカエルって……。このオッサン、あたしがカエル大嫌いなことを知っていて？　もし勝ち残っても絶対殺してやるからね』

美紅が怒りで震えてる中、第二試合の始まりが告げられる。

「第二試合始め！」

これは話にならなかった。
槍の一突きをかわして左手で刃先を避けて柄を掴むと、そのまま一気に踏み込んで莉央のサーベルが男の左太腿を貫通していた。

「ギャアアアッ！？」

あまりの痛みに槍を手離し、ガクンと両膝をついて傷口を両手で押さえながら悲鳴をあげた。

「勝者莉央！　終わったわね。じゃあ死刑執行させてもらいます」

真紀が静かに死刑宣告をした。

「磔にして殺す？　それか手術スタイルでベッドに縛り付ける？
あたしのことをカエルとか言ってたからベッドに磔にしてやろうかな」

恨み節をぶつぶつ語っていると、その時加奈が閃いた。

「女も意識が戻ったみたいだし……せっかく夫婦なんだし、こいつら殺る前にセックスさせちゃおうか！？」

美紅と莉央は顔を赤らめた。真紀は大いに賛成し、布団を地べたに敷きながら鼻歌を歌っている。

アダルトビデオも見たことがない美紅と莉央は、これから目の前で起こる事態にテレながらも期待している。

「アハハ！　あたしに向かってカエルなんて言ったんだから死ぬほど恥ずかしい目に合うがいいわ」

思春期で傷付きやすい美紅はかなり根に持っている。

「ほら、早く二人とも敷布団に上がりなさい！　掛け布団は私達が鑑賞出来なくなるから使わせないわよ」

罪人の夫婦は勝負に負けた悔しさと死への恐怖で半泣きになりながらも莉央と美紅に素っ裸にされ、しぶしぶ布団に上がった。

命令されるがままに二人は抱き合い、キスし合い、愛撫し合った。

「さぁそろそろチンポをぶち込め！！」

加奈がはしゃぎながら叫んだが、恐怖で勃起するはずもなく、ただただ抱き締め合っている二人。

しかし最期の最期に抱きしめ合える事に対してだけは四人に感謝していた。

「加奈！　御下劣な言い方しないの！　一応女子高生なんだから」

「ごめんなさ〜い。だってこいつら、なかなか本番しないんだもん」

美紅は密かに思っていた。

『真紀さんだって以前チンポとか言ってたじゃん……。一応企業のＯＬなんでしょ？』

「無事に中出しできたら命は助けてあげるよ」

とんでもない真紀の提案に、三人は我の耳を疑った。

「本気なの？　真紀さん？」

「恐怖で勃起出来ないのなら安心させてやればいいのよ。うふふ」

加奈の耳にそっと本意を伝えた。
なるほど！　と思いながらもかなり残酷な発想だなと、戦慄を覚えた加奈だった。
「聞いたか和子！？　俺達は助かるんだ！　急に勃ってきたぞ！！」
「すぶぶ……くちゅ……バコバコバコ！！」
「あっ！　あんっ！！　あんた！　気持ちいいっ！！あんっ！！」
男のペニスは四人に見られながらもギンギンに勃起し、女の性器もグチョグチョに濡れてその一物を受け入れていた。
腰の動きは激しさを増してゆく。ついには女まで腰を使い出した。
「すっごぉ～い……。キンタマがタップンタップン揺れてるぅ～」
「莉央はそこに目がいってるのね！　あたしは見てる方が恥ずかしいよ」
「興奮させてくれるわね？　よ～し！　ぼちぼち切っちゃいますか」
加奈が真紀に問いかける。

「うん！　医療用の本物のメスも武器の中にあったから、コレでやっちゃいましょう」

真紀は射精寸前の睾丸を付け根からキュッと握り、中央からメスを入れた。

いきなりの激痛に慌てて女の膣からペニスを抜き、奇声を上げながら振り返る。生の睾丸を2つとも握り締め、抉り出した。神経の束を切り、更にメスで2個の睾丸を串刺しにした。

「ぎゃああああっ！！」

たまらず女から離れて無くなっている部分を両手で押さえて転がりまくった。加奈は拳銃を手に取り、女の股間の前に跪き、性器に銃口を突っ込んだ。

「あんっ！　止めてっ！！　そんなトコに銃なんて！　お願いだからやめて！！　お嬢ちゃん！　いやああああっ！！」

「死ぬ前に気持ち良くなれて良かったじゃん。汚いオバさんのオマンコに鉛玉をぶち込んでやるからね？　これでイきながら逝きなさい」

「パンパンパンパン！！」

絶叫する女の性器から鮮血が噴き出す。と同時に口と鼻からも血を噴き出して絶命した。
　血まみれの性器をヒクヒクさせて全身を痙攣させている。

「和子ー！！　貴様ら鬼かあああっ！？」

　気がふれたかの様に泣き叫ぶ男を無視して、加奈の銃口は女の肛門へとめり込んでゆく。

「臭いアナルにもぶち込んでやるんだから！！」

「パンパン……カチカチ」

　肛門からも夥しい量の鮮血が吹き出す。

「あれ？　もう玉が無くなっちゃったかな？　お尻の穴も大腸もまだグチャグチャにしたかったのになあ。残念。ん？　玉無しと言えば……今のあなたも一緒だね？　あはは！」

　痛みに耐え切れず男は失神した。睾丸を失った哀れな男を４人が取り囲んで見下ろしていた。

「莉央がやりなさい。メスで好きに切ってみて」

「うん」

今度は莉央が男の股間辺りに跪き、雁首を左手で掴み、右手のメスで付け根からスパッとペニスを切り取った。

意識を取り戻して絶叫する男の口に莉央が今切り取ったペニスを捻じ込んだ。

「このオチンチン、凄い臭いよ？酸っぱい匂いがしてる……ほら、あーんして」

「うごっ！？んぐうっ！？」

「それは女のマンコの酸の匂いよ莉央。さて次は……ムカついてる美紅にトドメを刺させてあげる」

四人で近くにあった岩に男を縛りつけ、激痛に暴れまくるのに対して保険をかけた。

＜ｉ２９９５６—２４９０３＞

岩を抱えるようにしてうつ伏せにお尻を突き出すような体制で拘束されている。

「もう一度特殊警棒の出番ね」

美紅はバトンのように特殊警棒をクルクル回して微笑みながら

男の肛門にあてがった。

「おいオッサン！　誰がカエルだって？　あんたのアナルにコレを捩じ込んで、大腸ぐちゃぐちゃにして絶命するまでお腹の奥にぶち込んであげるからね？　ほらぁ、いくよ？」

「ズブ！　ズブプププ！！メリメリ……バリバリ！！」

＜ｉ２９９９５７｜２４９０３＞

一気に４０ｃｍほどの特殊警棒が飲み込まれていく。腸が何枚も破られてバリバリ音を立てる。

「ギャアアアアッ！！」

「あんたの奥さんの方がまだ強いなんてどれだけ恥ずかしいオッサンなのよ？　初めてセックスシーンを見せてくれたお礼も込めて一気に殺ったげる。えいっ！」

「ぶちゅうっ！！バリバリバリバリ！」

更に大腸から小腸までも数枚突き破り、口から鮮血を噴き出し、ゴボゴボと血の泡を吐いて男は息絶えた。

死亡を確認して特殊警棒を引き抜くと、ペニスと睾丸が付いていた所と肛門からもドクドクと血が流れ落ちた。

全身を痙攣させている男を見下ろしながら美紅が一言。

「ざまぁ。あたしを傷付けた罰よ」

強制セックスショー付きの去勢処刑は終了した。
過去の処刑の中で、四人が一番興奮したのは間違いなかった。

美紅の怒り（後書き）

まだまだ４日目に続きます。

最後の仕事（前書き）

特殊任務省での会議により、取り止めになってしまった『残酷処刑島』での残酷処刑。最後の処刑が始まる。

最後の仕事

国家が選んだ処刑人の女性四人に最後の任務が与えられた。木村真紀がその旨を全員に伝える。

「特殊任務省から連絡があって、本日の処刑が最後になるみたい……」

「どうして？普通の死刑じゃ遺族が浮かばれないから私達が必要なんじゃなかったの？」

高校生の大山加奈が残念そうに聞き直した。

「人道的に間違っているとの最終決断がおりたみたいなの」

「じゃあ今回限りでお役目終了なんだね。まだまだ殺りたかったのに」

中学生の鬼頭美紅に続き、小学生の菅野莉央も呟いた。

「何か退屈そうだね。そうなると」

白骨化した今までの罪人達を横目に見ながら、島の浜辺を目指して歩いてゆく。

「最後の任務となる罪人は四人。ちょうど一人が一人を担当ね。あそこに見える牢獄で処刑前日の今夜、たっぷり拷問するのよ」

三人の顔色が変わった。元々残酷な血を持つ彼女達には十分満足のいくルールだろう。

真紀以外の三人は、こんな牢獄がこの島に存在していた事実さえ知らなかった。

放火殺人で六人も殺した家族だから遠慮はいらない旨を真紀から聞いた三人のうち、美紅が呟いた。

「家族かぁ。両親と子供二人かな？」

「そう。父親３８歳、母親３５歳、長男１４歳で長女が１１歳ね」

「息子が美紅と同い年で、娘が莉央と同い年かあ……偶然だね」

分担を真紀が全員に伝えた。

真紀は母親を、加奈は父親を、美紅は長男を、莉央が長女を拷問することになった。それぞれの担当も決まり、既に四人が拘束されている小さな牢獄へと足を速めた。

「こんばんは。人生最後の夜はキャピキャピキャピの女子高校一年生の私

と過ごしてもらうわよ？」

「なっ！？　綺麗なネーちゃんじゃねえか！！　どうせ明日殺されるんだ……。最期に抱かせてくれるのかっ！？」

「ごめ～ん。私はＳだから責めるのが専門なの」

　竹刀を握りしめながら男に近付いてゆく。

　嘲笑うかのような表情を浮かべた瞬間、猛烈な勢いで全身に連打を叩き込んだ。

＜ｉ２９９５８―２４９０３＞

　１００回打ち込んでからペニスへの強烈な往復ビンタが炸裂した。

「ぎゃあああああっ！！　皮が裂けるううっ！！　やめてくれえええっ！！」

「あはは！　裂くのよ！　尿道引きずり出してあげるから覚悟しておきなさい。醜い陰嚢も切り裂いて金玉も引きずり出してやるわよ～」

＜ｉ２９９５９―２４９０３＞

　女の部屋ではリーダー格の真紀が拷問を始めていた。

　包丁で右の乳房、左の乳房を切除。更に陰核を尿道から包丁を入れ、くり抜くように切り取った。

＜ｉ２９９６０―２４９０３＞

「ぎゃあああっ！！」

「血のオシッコが出てるわよ？　痛いよね？　まだまだこれからだから」

大陰唇を掴み、めくり返す様に内側を外側に引っ張る。
鈍く光る切っ先があてがわれ、ついに左右の大陰唇も切除されてしまった。更に大きな悲鳴が部屋中に響き渡った。

美紅は同い年の少年の顔面をひたすら殴っている。ボコボコに変形した顔で懸命に許しを請うていた。前歯も全てへし折れ、鼻の骨も折れて血まみれになりながら……。

「痛い！　止めて！！　お願いです！　僕死んじゃううう！」

「死んで。アッ！　やっぱりまだ死んじゃダメ！！　ボクの大事な所引きずりだしてからなら死んでもいいよ」

「大事な……とこ…………って？」

「ボクの大切な大切な股間にぶら下げてる2つの玉だよ。……ん？　これは剥かなきゃ不潔だよ？　ボク」

美紅は少年の皮被りのペニスを右手で握りしめ、下腹部目掛けて一気に引きずり下ろした！
皮が裂けて大量の血が拘束ベッドを真っ赤に染める。

「があああああっ！！」

「ごめん！　臭そうだからついつい頭にきちゃって。ホラ！　人生

最期の射精をさせてあげるよ。家で毎日1人でやってたんでしょ？」

美紅の高速手コキが始まった。

「イクぅ～？　あれ？　泣きまくってなかなかイかないのね？」

猛烈な美紅の手コキも包茎ペニスを根っこまで引き剥かれてはヒリヒリ痛んで快感どころではない。

少年の腹部と太腿、美紅の太腿までも、ペニスからの出血が真っ赤に染めてゆく。

「仕方ないなぁ。どうしても死ぬ前に射精させてあげたいから特別サービスよ？」

ツインテールの黒髪を左手の指で掻き上げながら、右手の人差し指をピンと立てて、少年の菊門へ捩じ込み始めた。

「ズブブブブ……」

「あはあっ！？　やめて！　お尻に指を入れないでぇっ！！」

「女みたいな声だすなよ。ほら、全部挿れてやる！」

美紅の人差し指がついに根元まで少年のアナルに突き刺さった。

「熱いっ！！　ヒイイイイッ！！　お願い、抜いて……」
　美紅は抜くどころか直腸をグリグリと掻き回しだした。ヌチュヌチュと卑猥な音を立てながら少年は熱い様な痛みと恥辱感で涙が止まらなかった。
「どう？　気持ちいいでしょ？　今イかないと明日は逝かなきゃならないのよ？　がんばれ少年！　ほらほらっ！！」
　女子中学生の美紅によって、直腸ごしに前立腺を容赦なく揉みしごかれた少年はだんだん気持ち良くなってきていた。１０分後には、美紅のセーラー服に大量の精液をひりかけていた。
「お気に入りのあたしの制服によくも汚いセーエキひりかけてくれたわね？　お礼にゆっくり時間かけて金玉潰してあげるから覚悟しなさい！　はい、ゆっくり深呼吸して」
　美紅は大型のペンチを２つ鞄から取り出すと、左右の睾丸を挟み込んだ。両手にゆっくり力を加えてゆく。
「ひっ！？　やめて！　おねぇちゃん！」
「同い年のお前におねぇちゃん呼ばわりされる覚えないわよ。よくも歳上みたいに呼んでくれたわね？」

「ぐ、ぐにゅ、ぐにゅにゅにゅにゅにゅう～……」

少年の睾丸が大型のペンチに容赦なく食い込まれ、少しずつ変形してゆく……。

小便を撒き散らしながら少年は叫び続けた。

「やめてやめてやめてぇっ！　何でもしますから許してぇぇっ！」

「わかったー。潰すのを止めてあげる。今から金玉を抉りとってあげる。精管とか神経とか切断しないで引きちぎってやるから、痛みでショック死しなかったら命も助けてあげる」

素直にわかってくれたと一瞬安堵した少年も、これから睾丸を抜き取られる……しかも生で抉りだして、繋がっている色んな管も引きちぎられる……まず死んでしまうレベルの激痛が自分を襲うようになることは中学生でも用意に推測できた。

手際よくメスで陰嚢の中央を切り裂き、左右の睾丸を両手でつかむと、一気に引きずり出すように手前に引っ張った。。

「ズルル……ブチッ、ブチチッ！」

神経、精管……睾丸に繋がっているあらゆる管が瞬時に引きちぎられた。

「ぎゃあああっ！！」

泡を噴きながら失神している少年のペニスを掴み、メスを尿道のワレメにあてがい、竹割りに縦に切断した。
その時一瞬ビクッとなり、激しく痙攣し始めた。
ついに少年はショック死した。
二本に増えたペニスの切断面に指を入れ、真っ二つになってしまっている尿道を引きずり出す。
「ここをオシッコが通ってたのよね。なんか美味しそうな色してるわ……」
プニプニと生の尿道の感触を数分楽しんだ美紅はゆっくり立ちあがり、莉央の部屋を目指した。
妹に生の睾丸を見せ付けて、ついでに妹の目の前で潰すために……。
一方、少女の横には莉央が添い寝している。拘束具も全て外されていた。
「あたしを許してくれるの？　莉央ちゃん……」
自己紹介も終わり、雑談が弾んでるうちに、同じ小学生の女の子として友情意識が芽生えたのだろうか。
「真理佳ちゃんはどうして人を殺しちゃったの？」

「パパに頼まれて二階に灯油を撒いたの。これで火をつけたりしたらもしかしたら死んじゃうかもしれないって思ったんだけど……」

「ふうん。死ぬことはわかってたんだ」

少女の目に涙が浮かんだ。後悔しているらしい。その時だった。ドアがバタンと開き、加奈が飛び込んできた。

「ジャーン！！　この子のパパの金玉抜いちゃったあ！！　こんなに左右で大きさが違う睾丸見たの初めてよ！！　あはは！　あれ？莉央ったら何寝てるのよ？」

少女は信じられない様な表情で父親の生の睾丸を見つめている。

「ちょ、ちょっと！　何で加奈さんが入ってくるの！？　父親のキンタマなんてこの子に見せないでよっ！！」

「そんなに目くじら立てないでよ……玉抜いた瞬間痙攣し始めてショック死しちゃったの。処刑前に死んじゃうなんてあのバカ！　ほんとサクいオッサンだね。見てて！　えいっ！」

「ぐちゃ！！　ぶちゅ！！　トロトロ……」

「ほうら、潰しても精液飛び散らないし。掌にトロトロたれ流れてくるだけ。キンタマまでショボイ男だったわね！」

「いやあああああっ！！　うわあああああああっ！！！！」
莉央は突然泣きわめきだした少女を抱きしめながら加奈を睨みつけた。

「出てって！！」

ドアの外では、加奈の摘出した父親のと同じように、少年の睾丸を摘出してきていて妹の目の前でお兄ちゃんの玉を潰してやろうと待ち構えていた美紅が、出鼻をくじかれてトボトボと自分担当の部屋に引き返し始めていた。

「ヤバいヤバい。あたしまで莉央に怒られる所だったわ……。本人死んじゃったけど本人の屍の前ででも潰してやるかな」

莉央は少女の頭を撫でながら少女にキスしていた。
＜:i２９９９６１―２４９０３＞
「んっ！？　……やめ、て莉央ちゃん……」

莉央は舌を入れて舌を絡めた。

「んぐっ！？　んんんっ！！」

同い年の、しかも自分がこれから処刑する同性相手にファースト

キスを捧げるようになるとは莉央自身、夢にも思ってなかっただろう。

「真紀さんに大人のキスの仕方を聞いてたの。なんかイヤらしいね。舌入れたら……。よしよし。真理佳ちゃん」

少女はこの慰め行為のお蔭で、かろうじて錯乱状態から立ち直っていた。

瀕死の母親に対してＯＬ真紀の責めは凄惨を極めてきていた。

「今からぁなたの去勢を始めます。汚い大陰唇も綺麗にサッパリしたし……。下半身とマンコの力を抜きなさい」

「ひぃいっ！！　これ以上何を！？　お願いです。許して下さい……真紀様」

「だめ！　マンコの中身もグチャグチャにしてやるから」

真紀の指先から手首が女の性器にねじ込まれた。子宮を握り潰して更に膣を引き裂きながら肘まで腕が入り込んだ。

「ぎゃあああああおおおおおっ！！　ふがあああっ！！」

「何を言ってるのよ？　意味わかんない……次は卵巣よ。ほらあっ！！」

ザクザクと鋭く研いだ爪で肉を千切り裂きながら、真紀の手が卵巣までめり込んだ。泡を吹いて失神する女から子宮を全て引きずり出した。

「もう完全に女じゃなくなったわね。あわれな外道女さん？　まだまだ死んじゃだめだからね？」

優しく抱き締めながら莉央が同い年の少女に囁いた。

「ぼちぼち始めようか？　真理佳ちゃん」

やはりそうなるのか、まさか……でももしかしたら……少女の頭の中で、許してくれる……助かる……許されない……殺される……2つに1つの自分の運命が近付いてきた緊張感が交錯する。

莉央の右手が少女の太ももに触れた。心臓がバクバクするのを自分で認識できる。

『やめて莉央ちゃん……。同い年のあたしを許して……』

　心で願う気持ちとは裏腹に、莉央の指は少女の股間へ滑ってきた。

　素っ裸で連行されてきているため、幼い少女のワレメも既に丸出しだ。

「挿れるよ？」

「ひっ！？　やめて！！」

　小学生の女の子の秘肉部分へ同い年の女の子の中指がゆっくりと挿入されてゆく。

「つぷ……ズブブブ」

「ひやあっ！？　やめて莉央ちゃん……あたしを許して！　酷いことしないで！　あたしの宝物も全部莉央ちゃんにあげるから！！」

　処女膜に指先が当たった所で許しを嘆願する少女。左手で頭を抱きかかえながら処女膜を更に押し込んでいく。

「じゃあまず真理佳ちゃんの宝物……この処女膜もらうわね」

「いやっ！　だめ！　いた……莉央ちゃん、あたし何でも莉央ちゃんの言うことときくから許してええっ！！」

「黙りなさい」

冷たく態度を変えた莉央が指先に力を込めた。

「ぐりっ……メリメリ……バリッ！！」

「いったあぁいっ！！　うわぁあん！！　わぁああああんっ！！」

ついに処女膜を破かれた少女は、痛みのあまりに号泣しだした。
爪を立てて莉央の背中を引っ掻きだした。

「ここを破らなきゃ去勢できないから。ごめんね。では真理佳！
今更だけど……今から真理佳の拷問を開始します！！」

中指で膣内への激しい出し入れ運動を開始！　人差し指、薬指も
小さな膣をメリメリいわせながらめり込ませた。太腿から血が流れ
落ちる。泣きわめく少女の口をキスして塞ぎ、三本の指で膣内をグ
リングリン掻き回す莉央……。

全ての指を膣から引き抜き、タオルで手を拭きながら少女の唯一
の手荷物であった縦笛をカバンから取り出した。

「真理佳の愛用しているこの縦笛で去勢したげる。あんたの子宮を
グチャグチャにしてやるから。ここからが本番だから悪いけどもう
一度手足を拘束させてもらうからね？」

友情の芽生えかけた相手を殺さなければならない、殺す覚悟を決めた莉央は、既に少女の名を呼び捨てにしていた。性器から流れ出る血を綺麗に拭い、縦笛をワレメに押し当てる。

膣口へ少しめり込む縦笛の先……。

縛られていながらも必死で太腿を締めようとする少女。

「もっと脚を開くの……足首じゃなく太腿開けるように縛るよ？」

「莉央ちゃん……縦笛なんてアソコに挿れられたら、あたし死んじゃう。やめて……お願い」

「殺人犯は死ぬの。同じように苦しまなきゃいけないの。さぁ脚を開いて！！　汚いマンコの中身を見せるの！！」

莉央の強い意思に負けて覚悟を決めてゆく少女……。

観念した少女は太腿の力をゆっくり抜いた。

「そう。それでいいよ。あたしにマンコの奥まで見えるように脚を開いていなさい。力を抜いてた方が痛みは少しマシになるからね？
いくよ？」

縦笛がゆっくり挿入されていく。

＜ｉ２９９９６２｜２４９０３＞

「ズブブブ………ズボォッ！！！」

少し挿入してから一度止めて、一気に２０㎝も突き刺した。

「んぎゃあああっ！！　痛ったあああああいっ！！」

悲鳴に構わず子宮を掻き回す莉央の手は緩まない。

「痛いでしょ？　子宮をグチャクグチャにされてるんだから痛いよね？　もう子供も産めないよ？　でもさぁ……もう死んじゃうんだから関係ないか……残念」

グチュグチュと音を立てて子宮はミンチにされた。泡を吹いて失神している少女の性器から抜かれた縦笛にはプルプルの子宮の肉片が付着していた。莉央は友情心から少女に浣腸をして、処刑される時に皆の前で脱糞しないように処理をしてあげた。

「これでよしっと。たくさんウンチ出しときなさい。処理してあげるからね？」

「ぐす……ぐす……莉央ちゃん、酷い……。お願いだからあたしを許して……」

『ズブズブ……グリグリ……グチュグチュ』

「……あひいっ！？」

莉央は真理佳の肛門へ中指を捩じ込み、掻き回し始めた。
「ここの穴も明日はぐっちゃぐちゃになって死んじゃうのよ？　もうウンコも出来なくなるよ？」
そう言いながら散々直腸を掻き回して、生温かい感触を楽しんでから指を抜いた。
「くさっ。浣腸して中身出したのに臭いんだね直腸って……」
「うわーん！！　うわーん！！　莉央ちゃん、助けて！　許して！お願いいいっ！！」
「ダメ。許さない。…………また泣かせちゃったね。ごめんごめん。じゃあお休み、真理佳。来世では人を殺しちゃダメだよ？」
あくる日。処刑執行の八時がきた。母親の性器に日本刀があてがわれる。麻酔は効いてるものの、半狂乱の女に既に恐怖はなかった。
「今からあなたのお母さんを串刺しにするからようく見てるのよ？」
嫌がる娘の少女の顔を、真紀が無理やり母親へ向けさす。

　加奈の日本刀が、切り取られた性器の中央の穴に的確に突き刺さる。
＜ｉ２９９９６３―２４９９０３＞
　子宮があった場所を突き進み、腸を数枚突き破り、女が断末魔の悲鳴をあげる。糞尿をまき散らした。
　母親の口から飛び出した内臓と日本刀を見つめながら少女は股を開いた。

「真理佳、あなたは肛門から串刺しにするから」
美紅が少女の肛門と内部の直腸に、ローションを塗りこんだ。
「挿入時の痛みが少しマシになるわね。本来タブーよ美紅？」

　真紀が睨みながら文句を言う。
日本刀より太い直径５ｃｍ、長さ２ｍほどの白檀の木を肛門から差し込む白檀の刑。莉央はゆっくりくりと少女の肛門から直腸まで差し込んでいった。

「ここね？　真理佳のお尻の穴は？　いくわよ？　今からどんどん痛くなるから。それっ……！！」
「うっ……痛い！！　痛いいいいいいっ！！　莉央ちゃん、痛いから止めて！！　お願いいいっ！！！！」
「だめ。最期はむちゃくちゃ苦しんでもらうんだから！」

直腸、大腸、小腸、既に胃の直前まで突き入れてから、一度引き抜き更に突き刺す。

「ぎゃあああああ！！　殺して！！　莉央ちゃ……ゲボ！！　ブハッ！！　ぴぎぃいいっ！！！！！」

「美紅、マンコからもバトンでも突っ込んであげて。２本同時に口から貫通させるのよっ！！」

「あれ？　私ったらアソコ濡れてきちゃった。真紀さんも皆さんもホント残酷だね」

加奈のＳっぷりも半端でない。

「ま～りかちゃん、ごめんね！　小学生の女の子には無茶苦茶酷な話だけど……アナルとオマンコ、２穴責めで逝きなさいっ！！　それえっ！！」

＜ｉ２９９９６４―２４９０３＞

「ズボォッ！！　ズズズズ！！　バシュッ！！」

ついに少女の口から内臓の絡んだ２本の異物が飛び出した。

「ぴぎぃっ！？　死ぬっ！？　しぬうううっ！！　ゴボッ！　コボボボッ！！　……ガクッ」

少女は激しく全身を痙攣させて絶命した。

「この子には悪いけど、最後の処刑はきまったね！！」

美紅は最高に満足そうだった。

「去勢してから処刑なんて萌えるわね～」

加奈もエッチな処刑に興奮できて大満足。

「あれだけ苦しめてホントに良かったの？　莉央……？」

苦しめるのが目的だから仕方ないとはいえ、友情が芽生えかけた少女を殺さなければならなかった莉央に気遣う最年長の真紀。

「やっぱり殺人犯は殺人犯だから。生きてちゃダメなんだ。明日から普通の友達と遊びまくるよ」

残酷処刑島に、また新たに四人の骸が加わった………。

最後の仕事（後書き）

それぞれの自分に帰ってゆく四人の女処刑人。

残酷処刑島での処刑は取り止めとなりましたが、美紅の中学校での話へ続きます。

美紅の中学生活（前書き）

残酷処刑島での処刑も中止になり、処刑人の女たちはそれぞれＯＬ、学生の日常生活へ戻っていった。美紅の通う中学校でのお話です。

美紅の中学生活

　東部地方の南端にある共学の中学校。
女子生徒が支配する甲南中学校があった。
女子は事ある度に男子に因縁を付け、殴ったり蹴ったりして鬱憤を晴らしていた。
　二年生の鬼頭美紅という名の少女が、全ての生徒を仕切っていた。
　彼女に逆らってケンカをした者は女子だけではなく、三年生の力自慢の男子までも多数病院送りにされていた。
　中にはペニスや睾丸を潰されて去勢された者もいる……それほど美紅は強かった。
　武器を持とうが素手だろうが関係なく最強だった。

　小柄ながら非常に短気で残虐な気性の西村百合香、背が高く非常に美人で残虐な気性の中田美佐子。
　美紅とつるんでいるこのクラスで……いや、この学校で最強の三人組だ。
　学校内で、女子が強気で男子をいたぶることが出来るのも、この三人の仕返しを男子が恐れているからに他ならない。
　この日も素っ裸に引ん剝かれたクラスメイトの男子が美紅達3人から殴る蹴るの暴行を受けていた。

「痛い……もう止めて。二度と逆らいませんから」

「謝って済むなら私達はいらないのよ！　分かる？」

全身アザだらけになって土下座している男子生徒の頭を足の裏でグリグリ踏みつけながらワザとらしく怒った顔をみせる美佐子。
＜ｉ３０１７５５―２４９０３＞

「痛いです……ごめんなさい！　許して下さい！！」

教室の床に額を擦り付けながら涙を流して許しを請う神谷義史。

「だってさ。どうする？　美紅ちゃん？」

「私は許さないよ。殺しちゃう？　美紅ちゃん？」

百合香も神谷義史を見下ろしながら美佐子に続いて冷やかに言い放った。

　二人から問いかけられた美紅の出した結論は……去勢刑。

「判決！！……神谷をあたしたちが手術しちゃいま～す！！」

「ひぃいいいいっ！？　やめてっ！！　それだけは嫌だっ！！」

　三人の本気での総攻撃が始まった。気を失うまで１０分ほど殴る蹴るの暴力が続けられた。

　顔面は更に歪な形になり、歯も数本へし折られ、鼻血で床を真

っ赤に染めていた。
　薄暗い部室……意識を失った神谷。
三人に素っ裸のまま運び込まれた。
　美紅が出て行った事で、どの生徒が姿を消そうが先生達も文句は言えない。
　知らぬふりで授業は続けられていた。

「どうする？　あいつを見捨てるのか？」

「シッ！　黙れよ。仕方ないだろ。ケンカしても勝てないし、あの美紅って女は国家機密の処刑人とかゆう超物騒な仕事やってたそうじゃねえか……人殺しても無罪だって噂だし。どこまで本当かわかんねぇけど……国も間違ってるよなあ？」

「今まで去勢されて姿消した男子は、あいつらのペットになってるらしいぜ？　怖い怖い」

　とにかく逆らわないように決めた男子達は情けないながらもクラスメイトを見捨てる選択をしていた。

　両手両足を縛られた神谷義史を取り囲むようにして三人が立っている。
＜ｉ３０１７５６―２４９０３＞
　大きなペンチを持って彼の股間に近づいたのは……小柄ながらも美しく長い黒髪を持つ百合香だった。
　髪を掻き上げながら彼の右側の睾丸をペンチで挟み込んだ。
思い切りのいい彼女に躊躇は全くなかった。

「いっけえ～～っ！！」

「ぐちゃっ！！」

＜ｉ３０１７６４｜２４９０３＞

「ぎゃあああああああっ　！！」

　百合香に潰された睾丸は一瞬でミンチ状になっていた。

　ペニスの先から噴き出す血と精液の混ざったようなピンク色の液体を避けながらもう一つの睾丸を彼女のペンチが捉えた。

「ぎゃあぎゃあ五月蠅いからこれで失神させたげるよ！でもショックで死んじゃだめだよ？　もいっこも逝っちゃええええっ！！」

「ぷちゅう！！」

　右より小さい左の睾丸は少し間抜けな音を立てて跡形もなく潰された。

「ぐぎゃああ！？……ぎひぃぃ……ブクブク…………ガクッ！！」

　ペニスから更に大量の血が混ざった液を噴き出しながら泡を吹いて失神する彼を見ながら百合香はキャハキャハ笑って満足していた。

　陰嚢内部に溜った液体がパンパンに陰嚢を腫らし始めた。

長身のスタイル抜群の美人である美佐子がハサミで陰嚢を切り裂いて、元睾丸だったミンチ状の肉塊をほじくり出して、管を全て切り取り再び陰嚢を縫合した。
これで死ぬことはないだろうが、ここで手にした麻酔注射を会陰部に打った。

「美佐子の縫合が長すぎたからペットを連れてきたよ」

美紅が以前去勢した男を、現在使われてない隣の部室で飼っていたのを引っ張ってきたのだ。
四つん這いで歩けと命令されており、首輪を付けられているので引っ張ってきたと表現するべきだろう。

「奴隷ペット君、あたしに何をお願いするの？」

「ううう……お、お尻を掻き回して射精させて……下さい……ペニスがないからお尻でないとイけないいんです……美紅様、イかせて下さいっ！！」

美紅が人差し指を奴隷男の肛門にねじ込む。
２本、３本と挿入していき、人差し指、中指、薬指の３本の指をねじ込んで掻き回す……腸液が溢れ出してグチャグチャ音がするくらいまで直腸を掻き回す。

「あん、美紅様っ！！　はうっ……イク、イックウウッ！！」

「ひっ！？　痛ぃぃぃ」
＜ｉ３０１７６３｜２４９０３＞
美紅は指５本全て突っ込んで、更に手首まで奴隷男の肛門にねじ込んだ。
　びくびく痙攣しながら肛門から鮮血を吹き出している。
「前立腺と金玉一つだけ残してやってるからっていつも射精できると思わないで！！　肛門切り裂いて前立腺抉り出してやろうか！？
　それともこの汚い直腸や大腸引きずり出してやろうか！？」
「ひぃぃっ！！　ごめんなさい美紅様っ！！　許して下さいっ！！」
「前立腺抉り出すの許してあげるからこいつのチンポしゃぶってイかせてみて！！　成功したら一生キンタマ１つだけは残してやるわ」

　すでに百合香に二つの睾丸を潰されている男を射精させる事など出来るわけがない、不可能だ、百合香も美佐子も思っていたが、美紅の本心を理解すれば黙って見ているだけだ。
　美紅の命令に逆らうことなく同性である男のペニスにしゃぶりつき、舐め回す奴隷男……麻酔も効いているので痛みもなければ快感もない。
　イけるはずのない男のペニスをしゃぶり続ける先輩の奴隷男。
　意識も回復させられて、同性の先輩に自分のアソコを舐められるのを見させられる屈辱男。
　どっちもどっちだが、そうゆう行為を強制させて興奮しながら眺めている三人の女子中学生たちの方が、変態と呼ぶにふさわしい

のかも知れない。

　結局命令を達成できず、先輩奴隷男は美紅に唯一残っていた睾丸を握り潰され、陰嚢から肛門までカッターで切り裂かれて、前立腺を抉り出された。

　一生射精出来ない体にされたうえ、元いた部室に繋がれた。

　死なない処置を美佐子にさせて命だけは助けてあげたのが、以前の処刑人の美紅と決定的に違う所だった。

「あれだけ尺八されてもイけないんだ？　やっぱキンタマ抜いたら射精出来ないのかな？」

「セーエキ作るのは前立腺って聞いたけど？　なら腹ます能力なくても射精だけは出来るんじゃあないの？」

「こいつもお尻の穴を切り裂いて前立腺抉っちゃう？」

　恐ろしくもあり、勝手でもある残虐な女子中学生達の話を聞きながら神谷義史は絶望感で一杯だった。

「とりあえず雁首だけにしてあげるから……よく謝って反省してたもんねあなたは」

「ありがとうございます……そうしていただけたらどうにかオシッコだけは立ちったままで出来そうです。感謝致します」

「いっくよお！！　一気に切断よおっ！　それえっ！！」

「ズバッ！！」

＜i３０１７６０｜２４９０３＞

可愛いツインテールを揺らして美紅の日本刀が一閃した。

　血を噴きながら吹っ飛ぶペニス……。

＜i３０１７６２｜２４９０３＞

百合香、美佐子の目と、本人神谷の目が点になる……。

　床に落ちたペニスは紛れもなく根っこから切断されている立派なペニス本体であった…………。

「えっ！？」

　全員が美紅を見つめる……。

「ごめん、手元が狂っちゃった！　てへっ！！」

　てへっと言われても困る三人だったが、その内の女子中学生二名は、わざとだろうと確信していた……。

　切断された本人は、わざとだろうがついだろうが関係ない。これでもう一生立ち小便は出来ないことになった。

　彼は一晩中泣いた。

――――数日後。

監禁された神谷義史を取り返しに、小学生の彼の弟と妹が、美紅達のクラスに押し入ってきた。

「僕らのお兄ちゃんを返さないのはお前たちだな！！　親には国が相手だから諦めろとか、死んではいないから辛抱しろとか言われたけど絶対返してもらうぞっ！！」

「そうよ！　お兄ちゃんを返せっ！！」

「ふ～ん、いい度胸してるわねあなたたち？　あたしたちに付いて来なさい」

「お兄ちゃんが小六で……妹さんが小五かぁ。年子なんだ。可愛い顔してるね！！」

「今ならまだ間に合うわ。早く帰りなさい」

「あほかっ！！お兄ちゃんを返すまで僕らは帰らない！　絶対返してもらうんだいっ！！」

１０分後……。

夕方の体育館は静まり返っていたが、妙な音で騒がしくなっていた。

「ガガガガガガガ！！」

<i301757—24903>

「痛ったあ～～いいいっ！　やめてええっ！！」

「いやあああっ！！お願いっ！！　やめてあげてえっ！！　お兄ちゃんのオチンチン潰れちゃうっ！！」

美佐子のスラッと長い美脚が凶器となって兄である１２歳の少年の股間を素っ裸にして電気アンマで攻め続けていた。

睾丸が潰れる寸前の痛みを味わっている少年に女子中学生の電気アンマは容赦ない。

オシッコを漏らしながら泣きわめく少年。

延々と見させられている１１歳の妹が我慢できず叫ぶ。

「やめてあげて～っ！！　このままじゃお兄ちゃんのアソコが潰れちゃうっ！！」

「潰れちゃう？　潰しているのよ！　お嬢ちゃん。あなたも覚悟してオマンコの力をお抜きなさいね？」

そう言いながら少女のスカートを捲り上げる美紅。

「いやんっ！？　何すんのよっ！？エッチ！！」

「こうすんのよ！！　動いたら殺すわよ？」

「ぬぷっ……ずぶぶ」

１１歳の少女の性器にパンツの裾から中指をすべり込ませていく……。

「マンカスいっぱい付いてるわね。お風呂入ったらもっとマンコの奥も洗いなさいね？　ん？　あったあった。薄い処女膜に到達したわよ」

美紅の中指が少女の処女膜に届いた。

「あんっ！？　ひあああっ！！　そんなトコに指入れちゃダメ！！　汚いよ？　お願い！　抜いて……」

「ダメだよ。あなたはあたしに処女を奪われるの……若干小学生高学年でね！！　しかも同性に！　でも安心して。痛みの次には必ず気持ちよくなるから」

「美佐子！　あたしがこの子の処女膜破ると同時に弟のキンタマ潰すのよ？　分かった？！」

「はいっ！！　任せて美紅ちゃん！！　わたしの足の裏に睾丸の肉片をぶちまけてあげるからっ！！」

「いたああっ！！　潰れちゃうっ！！　止めてええええっ！！」

「ガガガガ！！　ズガッ！！　ぶちゅっ！！　ズゴッ！！　ぶちゅっ！！」

＜:i３０１７５８―２４９０３＞
美佐子の足は確実に少年の睾丸を２つとも粉砕した。
「ぎゃあああああっ！！」

「ズブブ……グチュウ……バリッ！！」

美紅の中指は少女の処女膜を確実に突き破いた。
パンツがみるみる真っ赤に染まってゆく……。

「やああっ！！　痛ったあいいっ！！」

兄妹で奇声をあげて泣き続けた。
美佐子は更に少年をマングり（チングり？）返しさせて、包茎のペニスを握りしめ、皮を根っこまで一気に引きずり下ろした。
百合香も人差し指を少年の肛門にねじ込んだ。

「弱いのに男見せようとしてイキがるからこうなるのよ？　小学生のクソガキどもが！　おねぇちゃんがあんたのアナル掻き回してやるよ。　妹の前で泣け！　喚け！　あはは」

妹は自分より兄の身を案じていた。
必死で百合香と美佐子の手を掴もうとにじり寄る。

「処女膜奪われてるのに兄の心配？　泣かせてくれるわね？　小学生の女の子なんてイかせたことないけど……可愛いから、思いっきり気持ち良くイかせてあげる」

「あっ！？　あんっ？？　お兄ちゃんがあんなに苦しんでる時に……何？　何か気持ち……いい……ああん」
＜ｉ３０１７６５｜２４９０３＞
　小さなオマンコがヒクヒクしてくるのが美紅にも分かった。
　本気で気持ち良くさせてあげたい美紅の気持ちに偽りはなかったのか、変な愛情が少女に伝わった。
　その瞬間……小学五年生の少女は、人生初のオーガズムを味わいながらイってしまった。

「あはあんっ！！　理紗ったら変な感じ……理紗のアソコが……やあああんっ！！」

「プシュウウウウウッ！！　ビクッ！ビククッ！！」

潮吹きなのかオシッコ漏らしただけなのかわからないが、美紅はイった１１歳の少女にキスしていた。
　舌を入れてグチュグチュとディープキスをした。
少女はイった感覚に麻痺して身を任せながら美紅に抱きついてキスに応えていた。
　股を開いて自分の性器を敵である美紅の膝に擦り付けながら……。

　その傍らで六年生の兄は悲惨な目に逢っていた。

会陰部から肛門まで百合香にナイフで切開され、腕を突っ込まれて前立腺を引きずり出され、美佐子に足で踏み潰されていた。
猿轡は噛まされていたものの、苦痛のうめき声は痛々しく、妹の理紗は我に返って弟を抱きしめながら泣き崩れた。
引き剥かれたオチンチンも既に……百合香によって根元から切断されていた。
12歳の若さでペニス、睾丸2つ、前立腺と性器を全て失ったこの子には、将来の悲痛さを考慮して美紅は……死刑を決断した。
「理紗ちゃん、分かるわね？　お兄ちゃんはもう生きる価値がないなら今からあたし達が処刑するから。あなたは処女こそ失ってしまったけど……お兄ちゃんの分まで生きなさい！　長男のお兄さんは、あたし達の奴隷だから返せないけど。一生アナルは掘ってやるけど多分殺さないから安心してね」
「アナル掘るなんて言ったらかわいそーでしょ？」
「シッ！！　美紅ちゃんに聞こえたら私たちもお尻掘られちゃうかもよ？」
「聞こえてるよ。あんたたちのアナルなんて興味ないから……安心して」
頭を深々と下げて謝る二人。
妹を親の元へ強引に帰らせたあとで、13歳の少年の処刑を執行することにした。

どうしても命だけは助けてと妹が美紅に頼んで引かないので、殺さない約束で理紗を帰らせた。

「肛門から串刺しにして処刑したかったのになあ……。あっ！ そう言えば！！ あたしたち処刑人はプライベートでも殺人だけは認められてなかったんだっけ……。残酷処刑島を思い出すなあ。みんな元気かな？」

「処刑島？ 何それ？ で、でも美紅ちゃん、妹ちゃんとの約束だから仕方ないよ……。美紅ちゃんは理紗ちゃんのこと気に入ってたもんね？？」

「そ、そーだよ。私も虐めるのは大好きだけど殺しちゃうのまではね～……」

百合香のセリフに慌てて美佐子も合わせた。

本気で殺したくはなかったのだろう。

結局美紅は少年の両手両足を切断し、小学生の男の子バージョンのダルマ女、ではなくダルマ少年を作り上げた。

台車に乗せて校内中を曳き回し、三人の性器を舐めさせたり、美紅達のクラスの女子達にも、ガバガバに開いてしまっている肛門に代わる代わる腕を突っ込ませたりして遊んだ。

泣きわめくほど三人は興奮して同級生の奴隷ペット以上にこの少年を虐めた。

結局三人を止める者は、この中学校では誰もいなかった。

美紅の中学生活（後書き）

かなり現実離れした美紅の宇宙人退治の話へ続きます。

宇宙からの侵略者……を返り討ち（前書き）

鬼頭美紅の通う中学校へ、宇宙からの侵略者たちが降り立った。同級生の中田美佐子と西村百合香と共に、宇宙人たちとの戦いが始まる。

このお話だけは、かなり現実味がない設定ですので、かなり強引な展開になっておりますが、何卒ご容赦願います。

宇宙からの侵略者……を返り討ち

暗黒の大宇宙、遥か彼方から一機の小型宇宙船が地球に近付いてきていた。

「ついに生体反応がある星を見つけましたねエルザ様！　しかも大気の成分も我々の故郷とほぼ一致していますからすぐにでも侵攻をかけましょう！！」

エルザの子分のシネシーネが息を荒立てる。

「しかしゴミゴミしてるわねこの星は……支配している生物は大した戦闘力もないみたいだし……。取りあえずあの構造物の屋上に着陸してそのあたりの生物を殺すのよ！　解剖して身体の構造を調べましょう！！」

「はい！　では着陸します！！」

操縦している同じくエルザの子分のコロースが、ある中学校の屋上に小型宇宙船を着陸させた。

屋上にいる生徒たちが何だ何だと群がってゆく。

一方、何も知らずに教室で体操着に着替えていた三人の女子中学

生達……。

「美紅ちゃん、最近全く私達に逆らう生徒がいないから退屈だね？」

小柄で美しく残酷な気性の百合香が美紅に愚痴っていた。

「奴隷男子達のキンタマも全員抜いちゃったし、飽き足らず手足も切断してダルマ男にしてやったけど……ぼちぼち新しい男の去勢がしたくてウズウズしちゃうよ」

大柄な女性の美佐子も退屈に苛立っていた。

「他校に殴り込んで、彼女がいる男子全員をボコボコにして、彼女が見てる前でキンタマ潰してチンポ切断してやろっかぁ？」

「あはは。それいいね！　美紅ちゃん！！　泣いた彼女がいたらマンコに腕突っ込んで子宮抉り出してやろうよ！！　仲良く同じ運命を味わわせてあげようね！！」

冗談なのか本気なのか分からない残酷三人娘の会話を遮るように、いきなり教室に飛び込んできた他クラスの女子生徒が叫んでいた。

「逃げて！！　変な宇宙人だか悪魔だかわからないような奴らが襲

ってきたの！！　屋上で私のクラスメイトが既に２人も殺されて…

…とにかくみんな外へ逃げて！！」

「ふうん、この星の雄と雌は容姿がそっくりなのね！　股間と胸部の違いは私達と同じみたいだけど。雄がみんな同じ顔、同じ容姿の私達の星が異常なのかしら？　どちらでもいいか。この星は頂いちゃうようになるんだから」

「そうですよエルザ様！　雄は個人の権利も与えられていない、種を残すだけの道具ですものね、私達の星では。名前もブータAとかブータ２０１とか記号番号で呼びますもの。雄なんて奴隷ですから同じ顔で上等なのですよ。この星の雄は贅沢ですわね」

エルザ達は生徒達の飛び散る鮮血、内臓を眺めながら微笑んでいた。

宇宙人の雄（男？）であるブータに三人、四人と殺されていき、どんどん死体が増えていく屋上に、美紅達三人が現れた。

「な、何やってんの！？　宇宙人？　豚？　化け物なのっ！？」

<i３０２６２６—２４９０３>

さすがの残酷三人娘たちも三人の雌宇宙人と二匹の豚型の雄宇宙人を見て驚愕していた。

「化け物とは失礼ね！　私はエルザ。こんな低能な生物とまともに話し合う気はないから。翻訳回路の電池が勿体ないくらいだわ。大人しく死になさい！　その内仲間をどんどん連れてきてこの星をもらっちゃうんだから！！　ウフフ、あははは！！……んっ？！」

『ザクッ！！』

『ズバッ！！』

　一瞬の出来事だった。
　日本刀を手にした美紅と百合香が部下の雌二人を股間から首まで一気に切り裂いていた。

＜ｉ３０２６２５―２４９０３＞

「美紅ちゃん、今日は体操着だからめっちゃ動きやすいね？」
「うん！　バレーをズル休みする気だった美佐子はスカートが邪魔で動き辛いでしょうね～？　今日は大人しく見ててね！」
「有難いような残念なような……去勢するときは手伝わせてよね？」
「やっぱり宇宙人だろうが去勢やっちゃうんだ？　豚みたいな雄はモロに性器ぶら下げてるし、雌のボスはヒイヒイ言わせてやるんだから！！」
「シネーマ！！　コロース！！　死なないで！！　いやあああああっ！！」
　頭部だけまともに残った二人の死体の頭部を抱きかかえながら号泣しているエルザ。
「あのさぁ、顔は女の命だからね。汚いマンコや肛門はまっぷたつに切断してやったけどね、首までワザと止めてあげたの。優しい

でしょ？　地球人って。もういいかな？あんたをやっつけても……覚悟できた？　インベーダーおばさん」

「ブヒヒイー！！」

『ガキッ！！』

『ズガッ！！』

武器を持たない制服姿の美佐子に飛びかかったブータAとBだったが左右の手刀であっけなくダウンした。

男子に使おうとあらかじめ屋上に用意していた処刑台に2匹のブータを縛りつけた。

物凄い形相になって美紅に襲い掛かるエルザ。

マッハのようなエルザのパンチをサッとかわしながら両足の腱を切断した。

次いで百合香の日本刀が腕の神経を切断。

エルザの四肢はどうにか身体に付いてるものの、実質ダルマ女状態と化した。

百合香はエルザをブータ達と同じく処刑台に拘束した。

「ブヒヒ……こ、こんなきゃしゃな雌にやられるなんて……」

「きゃしゃで悪かったわね！　これでも人間の女性では大きいほうなのよ！　美紅ちゃん、私と百合香で二匹の豚の去勢するからメス豚の方はよろしくね！」

「な、何だと！！　低能生物の分際で！！」

美紅はエルザの胸をワシ掴みにしながら囁いた。

「黙りなさい。メスのあんたも去勢するから覚悟しなさいね？　生きてるままで子宮とか卵巣とか抉りだしてあげるから。」

「ひっ！！　去勢って！？　私がお前たちに解剖や去勢をする目的で……い、いや、すみません。許して！　助けてください！！　もう二度とこの星に近付きませんからっ！！」

自分の立場を悟って我に帰ったエルザは懸命に美紅に命乞いを始めた。

『サク……ズズズ』

「ブヒイイイイッ！！　グギャアアアアアアアアッツ！！……………ガクッ」

美佐子は３ｃｍほどのブータAの短いペニスをメスで根元から切断して、小指を切断面側から突っ込み、尿道を貫いて尿道口から突きださせた。

<:i３０２６３０―２４９０３>

「チンポの中の尿道は生温かいわね。あれ？　こいつチンポ切り取ったら死んじゃったわよ？　図体の割に生命力よわっ！！　百合香の方は？」

百合香は、肛門からメスを入れて陰嚢の真ん中を切り裂き、ペニスの付け根で止めた。

「ブ！！　ブヒョヒョヒョヒョー！？　痛いいいいいいいいいっ！！　お尻の穴が痛いいいいいいいいっ！！　エ、エルザ様、た、助けてえっ！！」

百合香はブータBの陰嚢に右手を入れて生の睾丸を掴んだ。
１０ｃｍはあるだろうか……ペニスに比べると睾丸の方は異常に大きかった。

「オチンチン切り取ったら死んじゃうんだよね？　分かった以上簡単には死なせないわ。まず右のタマ、潰すよ？」

「ブヒヒー！！　止めてお願い！！　エルザ様に命令されて仕方なく殺しただけなんだっ！！」

「そうなんだ……人のせいにするのはこの星では最低なの。わかる？」

『ぐちゃっ！！　ぐりゅっ……ぶちゅうっ！！』

「ひぶうううううううううっ！？」

右を潰して間髪入れず陰嚢内部で手の向きを変えて、そのまま左も即座に潰した。
青っぽい精液が百合香にかかる。
うっすら赤い血が混じっていた。
「インベーダー豚のくせに血は赤いんだ……でも青い精液はキモいなあ。でかい睾丸だからって射精しすぎだよ？　１リッターは出たよ？　しかも臭いし……自分で食べてみる？　ん？」
睾丸潰しでは死ねないのか処刑台でもがき苦しんで泡を吹いて唸っている。
潰した睾丸を口に無理やりねじ込んだ。
そして長い槍を取り出して百合香が微笑んだ。
「おちんちん切って殺しちゃう前に、串刺しになってもらうから。生きたまま貫通されるのってどんな気持ちでしょうね？　女の子の私なんかに拷問されて貫通刑にされるなんて哀れよね？　差し込み口は、お口からがいい？　それとも……」
泡を吹きながら苦しみ続けているブータＢには聞こえていなかった。
美佐子が下！　下！　と、頬を紅潮させながらジェスチャーで送ってくる。
やっぱり美佐子もエッチだなぁと思いながらブータＢの肛門に槍の切っ先をあてがった。

『つぷっ！』

「そうゆうわけだから……恥ずかしい方から差し込ませてもらうわよ？　お尻の穴……アナル……いやんっ！　やらしいっ！！　ねえ豚さん？」

『ズブッ！！』

「ブッヒィイイイーッ！！　お、お尻！？　ひいっ！！　痛い！！

　やめてえええええっ！！」

「だ～め。まだ直腸だよ？　大げさだなぁ。ここからが地獄なんだからね。Ｓ状結腸と小腸をバリバリと突き破っていっちゃうんだからぁー。それえええええっ！！　って……宇宙人も大腸とかあるよね？？」

＜:i３０２６２４｜２４９０３＞

『ズブブブブ！！　ブリュリュリュ！！　メリメリ……ぶちぶちぶちぶちっ！！』

「ブギギギギイイイイイッ！！　死ぬうううううううっ！！」

「当たり前。死ぬの！　いくよ？　お口からウンチまみれの槍を突き出さされて死になさい！！　ほら、いっけええっ！！」

大便、鮮血と共に口から切っ先が飛び出した。

　肛門、目、鼻、みみ、乳首、穴とゆう穴から血を吹き出しながらブータＢは力尽きた。

　百合香は差し込んだ槍でグリグリと内臓を掻き回していた。

「ほらほら、内臓ぐちゃぐちゃにされる気分はどうなの？　もう逝っちゃったからわかんないか？　あははは！！」

スイッチが入った百合香の残酷さに少し恐怖を感じながらも気になっていたエルザの方を見てみた。

「あ、あん、んあぁ、あんん」

何と美紅の指、いや、腕までもがエルザの膣に入り込んで肘まで入れては引き抜き、豪快な手マン、オナニーがされていた。
<i302622―24903>
「あの、美紅ちゃん、こいつ、アンアン言って感じてますけど？」

「あ、ごめんごめん！　宇宙人もイクのかなとか、愛液は何色なんだろうか、とか色々興味がでてきてね……ぼちぼち殺すから許して！！」

「あん、気持ちいい……美紅様、お願いです！　エルザを許して……あん……一生美紅様に尽くしますから。お願いです。あんっ！！　あんんっ！！　助けて下さい」

「だめ。泣いても許さない。でもね、最後に……イかせてア・ゲ・ル！！　ほらほらほらぁっ！！　いっけえーっ！！　雌豚インベーダー！！」

『クチュクチュ、グチュチュチュチュチュチュウウッ！！』
＜i３０２６２１—２４９０３＞
「あっはあああああっ！？　いく！！　いっくうううううっ！
！　ハヒイイイイイッ！！！！」

『プッシャアアッ！！　プシュウウウウウウウウッ！！！！』

美紅に潮吹きのようなオシッコみたいなのをへりかけて、顔を真っ赤にさせながらエルザは眠りについた。
　刀で真っ二つにしやすいように処刑台から吊り下げロープに縛りかえた。
　呑気にイッた後眠りだしたエルザを起こすため、美佐子がペンチを持って近寄って行った。

『ガシッ！　メリメリ……バリッ！！』

「あぎゃあああああああっ！？」

右手親指の爪を剥がされたエルザが飛び起きた。
　さっきまでとは違う体勢でもがいている。
二枚、三枚と順番に剥がしていき、泣き叫ぶエルザを無視するように淡々と爪を剥がしていく美佐子。
　十枚全てを剥がした時には小便も大便も漏らしていた。

「きったないなぁ。自分で処理できないのに漏らしまくってんじゃないわよ！！」

『パン！！パパパパパパパン！！　パンパンパンパンパン！！　バキッ！！　バキバキバキバキバキ！！！！』

百合香の容赦ない猛烈な往復ビンタとパンチがエルザの顔をイビツに変えた。

「ひぎいいいいいいっ！！　か、顔がこんなに腫れて……ひい、もう殺して！！　お願いですからもう殺してください！！」

「うるさい！！　あんたも雄豚みたいに生きたままケツの穴から串刺しにしてやろうか！？　んんっ！？」

「いやああぁっ！！　百合香様っ……ごめんなさい！！　ごめんなさいいいいっ！！」

美佐子からペンチを手渡され、泣きじゃくっているエルザの右乳首を挟み込んだ。

ギュウウッと握り潰した次の瞬間、ブチッと千切り取った。

白目をむいて泣き叫ぶのを全く構う様子もなく左の乳首も潰してから千切り取った。

足元に落としている乳首を更に足でグリグリとすり潰す。

「んぎゃあああああっ！！ごろじでー！！　もうごろじでえええええっ！！」

「まだよ。肛門から腕突っ込んで生きてるまま大腸引きずり出してやるんだから。いくわよ！？」

いきむ百合香を美紅が抱きかかえて止めた。

「殺された生徒の中に親友がいたのよね？　気持ちはわかるけど……もう十分苦しめたわ。後は任せて見てなさい。美佐子、お願い」

「百合香、さあこっちきて！　後は美紅ちゃんにまかせよ。ね？」

日本刀を構えて全神経を集中させる美紅。

「殺して、もう殺して！　お願いです！！」

「去勢するから。女でも。女じゃなくメス豚だったかしら？　間違ってごめんね」

「んあ？　やめて……恥ずかしいから普通に殺して……美紅様」

「安心しなさい。もう十分苦しんだみたいから生きてるまま子宮と卵巣を取らずに予定変更で股間から頭まで一気に真っ二つにしてあげるよ。そのあとで子宮や卵巣の性器類は全て抜かせてもらうけどね！　もちろん大陰唇や小陰唇の外性器も真っ二つになってるけどくり抜かせてもらうから。いいわね？」

「いや、なんか怖いのに、ヤらしい……濡れてきちゃった……クリトリスも抉って下さい美紅様……」

「死ぬ直前にMに目覚めちゃったんだ……ど真ん中斬っちゃうから尿道やクリトリスは原型留めないよ。あ！　生きてるうちにちぎっ

ちゃおうか？」
「ひいいいいっ！！　あんな敏感なトコ生きてるうちに取られたら痛すぎて死んじゃいます！！」
「はいはい。じゃあお待たせ！　去勢処刑を始めるわよ？　言い残すことは？」
「ご迷惑をおかけしました。ごめんなさい」
「良く反省できました。えらいぞ！　メス豚！　はい、では股間の力を抜いて！！」
「はい！　でもやっぱり怖いです……そ、そっと斬って下さい……」
『ズバアッ！！！』
＜ｉ３０２６１９―２４９００３＞
「ぴぎいいいいいいいいいいっ！！！」

美紅の一閃はエルザの股間から脳天まで一気に真っ二つに切り裂いた。
＜ｉ３０２６１８―２４９００３＞
緑色の子宮、黄色の卵巣、肛門や大腸は真っ赤だった、。
外性器だけは日本人のような肌色、ピンク色だった。
仇は討った。親友の分まで長生きしようと心に誓った百合香であった。

宇宙からの侵略者……を返り討ち（後書き）

時は戦国時代……美紅のご先祖の残酷な愛姫の物語へ続きます。

美紅の御先祖様物語（前書き）

残酷な気性は４００年前から継承されていた。美紅の御先祖の紅姫の物語です。

美紅の御先祖様物語

　時は戦国時代……広い世界からみれば決して大きいとは言えない島国で、武力によっての覇権争いが各地で繰り広げられていた。その小さな島国で、５０近く存在していた国々も、今では二つの国を残すのみとなっていた。

　滅ぼしたり騙し取ったり、共に戦おうと同盟して１つになったり……この島国を２分しての大戦は目前に迫っていた。

「東国に差し向けたくノ一はどうなったのじゃ！？　もうかれこれ一週間も経つが未だに敵武将の首が届かんではないか！！」

「姫君、ただ今忍びの者共を招集して事情を説明させますゆえ、今しばらくお待ちくださりませ」

「正々堂々と戦った国々は全て滅び、わらわが忍びを駆使して暗殺を繰り返してきたがゆえにこの国は今日まで生き残ったのじゃ！　何としても敵有能武将の半数は暗殺を成功させせねばならぬ！！　此度の一戦、天下を獲る為の最終決戦！！　絶対に負ける訳にはいかぬのじゃ！！」

　西国大将の一人娘である紅姫（べにひめ）は、現在１４歳……大好きな色である紫の着物を柄違いで何着もこしらえて、愛用している。黒髪の目の大きな、どちらかと言えば可愛い系の女の子。１０歳の頃より天賦の才を発揮しだし、武力に頼る父である西国総大将の天下統一の野望に多々貢献してきた。

妹であるこちらもまた、可愛い顔立ちの１２歳の弥生と常に行動を共にし、自軍兵士が、敵兵士を生け捕りにしてくる度に拷問に参加して、最終的に惨殺してしまうので、城内では鬼畜姉妹と囁く者もいた。

東国、国境では……二人の男女が切羽詰まった表情で話し込んでいた。
男は東国第一部隊の武将、名は壮健。
女は西国からの刺客、くノ一である志乃。

「本当にいいのですか？　東国最強部隊長である壮健様ともあろうお方が私なんかの為に……」

「いいんだ。昨夜もその前の夜も……ワシを殺す機会は幾度もあったはず。しかもワシを殺しにきたので先に殺して下さいだと？　わっはっは！！　この壮健に我の命を見逃してくれた人間を殺める事などできるか！！　とゆうか……ワシもそなたを愛してしもうたのじゃ……これから僻地の田舎に身を潜め、細々と暮らしていこうぞ！　志乃よ」

「うぅ……壮健様………私、すごく幸せです」

二人は抱き締め合いながら愛する者同士の幸せな時間を過ごしていた。

「あんまりゆっくりもしていられないな。追手が迫っているかもし

れん……ワシは捕えられても総大将がワシの叔父、多分死刑にはならんがそなたは違う。東国の僻地へ逃れよう」

「はい。一生壮健様の元を離れません」

二人で駈け出そうとしたその時だった。

「はい。一生紅姫様の元を離れません！！　じゃなかったの？　志乃……捜したわよ」

髪型は三つ編みで、くの一ではアネゴ的存在の雪乃が叫んだ……肌は雪のように白く美しかった。

「雪乃！？　楓(かえで)に梓(あずさ)も……」

「帰りましょう。第一部隊長さんまで見つかるなんて！　ツイてるわね。今は志乃の彼氏みたいだから当然か。これで姫君様に喜んでいただけるわ」

「ダメ！！　私は姫君様の拷問でも何でも受ける！　壮健様は見逃して！！　お願い……雪乃」

「わかってないなぁ志乃は……姫君様の立場としてあなたのことなどうでもいいの。東国武将の首が目的だから。その姫君様の目的の首が目の前にあるのよ？　今まで共に生きてきた仲間だからあなたは見逃してあげるから早く去りなさい。見付けられなかったこと

にしてあげるから」

「志乃、そうするんだ。東国へ逃げて静かに幸せに暮らすんだ」

壮健は静かに語りながら刀を抜いた。

「あっ！！　抜いちゃったぁ～。大人しく連行されたらお城までは苦しまずに行けたのに……うふふ。腕の一本じゃ済まないよ？」

捜しに来た三人のくノ一の中でも最も剣技が勝るショートヘアーが良く似合う二刀流の梓が刀を抜いた。

＜i３０３００３｜２４９０３＞

「止めて！！　梓っ！！　斬っちゃダメえっ！！」

「ギャリン！！　ギギ！　キンキン！！」

梓の連続攻撃を全て弾き返しながら更に懐に飛び込み一閃！！

「ズバッ！！」

梓が脇腹を押さえながら片膝を付いた。

雪乃と、もう一人のくノ一である楓、二人は薄ら笑いを浮かべていた。

「やった！！　壮健様！！　今のうちに逃げて！！」

「ぐわあああっ！？」

どくどく流れ落ちる鮮血……ヘソの辺りを横に２０㎝ほどの切り傷……腸がはみ出していた。

混乱して必死で両手で腹の中へ腸を押し戻そうとする壮健。

「なんちゃって。一瞬私が斬られたように思ったでしょ！？　あはははは！！」

「出たわね、梓の下手クソな演技。せめて裾だけでも斬らせてあげなきゃ私たちは騙せないわよ」

雪乃が失笑気味に呟く。

「いやあああああっ！？　壮健様っ！！　死んじゃいやああっ！！」

西国……城内では、素っ裸にされた上に拘束された壮健と志乃の姿があった。

壮健は辛うじて生きていた。

西国からの偵察隊に手当され、どうにか命尽きる前に城まで運ばれてきたのだ。

志乃も壮健がいなくては一人で生きて行けないからと、雪乃たち

の助言を退けて一緒に処刑される道を選んだ。

「紅姫様、ご命令通り二人を見つけ出し、拷問部屋へ拘束いたしました。武将の方は重傷ですが、応急処置も完了してますので苦痛を与えれば即刻目覚めると思います。もちろん、褌さえも脱がせて素っ裸にしてあります。では弥生様とお二人で拷問、処刑を堪能下さいませ」

紅姫に一礼して拷問部屋を去ろうとした三人に背後から声がかかる。

「待て！　わらわたちの拷問をお主たちも見ていくがいい」
＜ｉ３０３００５―２４９０３＞
「え？　あ、いえ、志乃は私達の仲間だった者……殺生すぎます。どうかお許し下さいませ紅姫様」

「そうか。では仲間が長時間地獄を見るぞよ？　もしそなたらが一部始終を見ていくと申すのなら、苦しむ志乃とやらが不憫に思えばトドメをさす行為を許そうぞ。志乃にとって救いになるぞよ。どうじゃ？　それとも仲間に長時間苦しんで欲しいのかえ？」

「わ、わかりました……では失礼します」
＜ｉ３０３００７―２４９０３＞
　こそこそと部屋の奥の志乃の方へ歩いて行った。
志乃は、ありがとうと言いたそうな目で雪乃たち三人を見回した。

「まずはこいつに目を覚ましてもらおうか？　ほらあっ！！」

「ドカッ！！」

「はがあっ！？　うぐぐ……ここは？」

弥生からペニスに回し蹴りを入れられて、激痛を感じながらも股間を押さえられない状況に気が付く壮健。

おまけに周りは全て女性なのに、自分だけ男で素っ裸……。

【なんてこった……ワシは志乃を守れなかった……ってゆうかくノ一に倒されて気を失って……志乃と２人……拘束されているのか……ここで殺されるんだなワシも……】

「何をハトが豆鉄砲食らったような顔してるの？　今日でそなたは死んじゃうんだけどね。この弥生様が人生最後の射精をさせてやるよ。彼女の目の前で他の女にシゴかれて……あはは」

「ぎゅっ！　シコシコシコシコ！！」

「あぐぐ！？　やめろ！！　女の子がそんな事……するんじゃな……い」

「ほらほらほらあっ！！　１２歳のオナゴに手コキされて……恥ずかしくないのぉっ！？　あはははっ！！」

紅姫も、くノ一の三人も、頬を真っ赤にして弥生の手コキを眺め

ていた。
志乃はなにやら意味の分からない言葉を叫んでいた。
弥生がまだ12歳の少女とはいえ、18歳の志乃から見ると、子供ではなく一人の女に他ならない……。
普通なら拘束された恐怖でヤキモチなど妬いてる場合ではないような気もするが、実は思いっきり妬いていたのである。
弥生を罵る言葉を気でもふれたかのように連発していた。

「いきがってられるのも今の内よ！　志乃とやら。こいつがイッたら睾丸抉り出して握り潰してからあんたの汚いオマンコにブチ込んでやるからね？　妊娠しても知～らないっと！　……あ！　あんたももうすぐ死んじゃうから何も心配ないんだね？　志～乃さんっ！！　うふふ」

「シコシコシコ……シュコココココココッ！！」

「ぐわ！　や、やめ……」

元々大きな陰茎の壮健だったが、弥生の猛烈な速度の手コキに更に大きくなってきていた。
ダメだと思いながらも女性達が見守る中で、いや……そんなことよりも恋人である志乃に見られながら他の女の行為で勃起するのは壮健自身、死ぬほど後ろめたかったのだ。

「おっきくなったねぇ！　おじさん。35歳ぐらいになるのかな？　いい年こいてあんたの娘のような子供になんか手コキされちゃう気分はどう？　ん？　泣いてるの？　あははは！！　彼女がかわ

いそうで私も泣けてくるよ」

「弥生、相変わらず男の性器が大好きね……わらわは女をいたぶる方が好みじゃ」

紅姫は、泣き叫びながら弥生を罵倒している志乃の方へ歩み寄った。

「彼氏の性器をシゴかれてそんなに辛いのかえ？」

拘束されて叫び続ける志乃をなだめるように優しく髪を撫でながら声をかけた。

黙り込んだので様子を見ていると必死で舌を噛んでいた。

紅姫は慌てて口を開かせ、玉口枷を噛ませた。

「ううう………うあわうぇ（死なせて）」

「まだ死なれたら困るのじゃ。わらわを興奮させてからでも遅くはないぞよ？」

くノ一の三人は見ていられないほど気分が落ち込んでいた。

「あ！男を見て！！　ヒクヒクしだしたよ？」

楓が壮健を指さす。

雪乃と梓が見たとき、まさにその瞬間、男は白濁液をぶちまけた。

「ドピュ！！　ピュルルルッ！！」
＜i３０３０８―２４９０３＞
「イっちゃったのね？　最低～。彼女の目の前で１２歳のオナゴにシゴかれて射精しちゃう～？？　弥生、信じられないよ」
泣きながら頬を紅潮させている壮健に口枷をかませながら弥生が愚痴る。
手に付いた精液を拭い終えると右手で右の睾丸を握りしめた。
更に左手も右手に添えて両手の握力で右睾丸を一気に潰す用意を終えた。

「性行為で男を暗殺するのは私達の常套手段だけど、手コキとかをこんな明るいところで見せられたらなんか恥ずかしいよね？　紅姫様の妹君の弥生様は全く平気そうだけど？」

雪乃の問いに楓も梓も頷いた。
顔を真っ赤にしながらも弥生の睾丸潰しに見入る３人。
「痛かったら言ってくださいね～？　言ったところで止めてあげないけどね。ほうら……キンタマが変形していきますよ～ん」
「ギュウウウウウ……」

「ふぐうううううううっ！！んんんんおうううううっ！！！！」

「ふぐう、とか、おうう、とかじゃわからな～い！！　痛いって言わないと止めないぞ～？　あはは！！　無理かその様では……」

一部始終聞こえてるのか志乃が号泣しながら頭を左右に振りだした。

気でもふれたかのように口枷を嵌められたまま頭を振り続ける。

「何してるのじゃ？　そんなに頭振ると肩が凝るぞよ？　そうか、彼氏が性器責めされて悔しいのじゃな？　分かった。悔しいとか悲しいとか忘れさせてやるぞ。わらわの拷問……の開始じゃ」

紅姫は忍びが使うクナイを取り出して、志乃の乳房に突き刺した。どくどく血が流れ落ち、みるみる床を染めてゆく。

とうとう右の乳房を抉り取り、次は左の乳房も抉り取った。

「んぐうううっ！？　んぎいいいいいっ！！」

玉口枷が潰れるほど噛みしめながら奇声をあげる志乃。しかし玉口枷のせいでまともに叫べない。

両手、両足、腹部、あらゆる肉を少しずつ削ぎ取ってゆく紅姫。

涎、血、尿、無意識に、出るモノを全て出してしまうほど、激烈な痛みが志乃の全身を襲っていた。

「知ってるかえ？　凌遅刑……。全身の肉を切り取ってゆく拷問なのじゃ。拷問とゆうか処刑じゃのう。その内に糞も漏らすぞえ？うふふ」

　一方、弥生はついに両手の握力を全開した。
変形していた右の睾丸はぶっ壊れた。

「ぐちゃ！！」

泡を吹きながら全身を硬直させて、ピクピク痙攣し始める壮健。
クナイで陰嚢の真ん中を切り裂き、潰れた睾丸を右手で掬い取った。
志乃の方へ歩いてゆく。
すでに全身の肉を愛姫により、１０ヶ所ほど削ぎ取られていたが、まだ生きていた。

「約束、覚えてるよね？　哀れな血まみれのくノ一さん？　この汚いマンコの力を抜くのよっ！　えいっ！！」
「ぐちゅうっ！！　ぶっちゅちゅちゅちゅううっ！！」
＜.i３０３００９―２４９０３＞
一気に弥生の肘までもが志乃の性器にめり込んだ。
子宮口を突き破り、弥生の手は奥の奥まで睾丸のミンチを擦り付けるように掻き回した。

「ほらほら。気持ちいいでしょ？　彼のキンタマたくさんお食べなさい！！」

その時、猛烈な速さで日本刀が真横に走った。

「ズバッ！！……ポトッ」

雪乃の一閃が志乃の首を切り落とした。ごめん、ごめんと、心の中で何度も謝っていた。

志乃にとっては、紅姫の言ったようにかえって救われたのだ。全身を切り刻まれても致命傷を与えられず凌辱を受け続けるくらいなら死んだ方がいいに決まっているのだが、口枷を嵌められていてはそれも出来ない。

雪乃の一閃が志乃を地獄の苦しみから解放した。

「ふん！　つまんないの。死体のオマンコ掻き回しても何も楽しくないよ！　あ、、お姉様、壮健の左のキンタマ潰してみる？　まだ生きてるから楽しめるよ？」

「あまり興味ないけど……やってみるか。チンチンも切り取っていいかえ？」

「そ、それは私の楽しみに……だから……あのぅ」

「ケチじゃの！　弥生は」
「あはは！ごめんなさい」
紅姫は血まみれの陰嚢に指を差し込み、生の睾丸の感触を楽しんだ。
「何か一部がコリコリしてるぞえ？」
「副睾丸だよ。痛みに特に敏感だからグリグリしちゃって！！」
「ふうん、まん丸ではなかったのじゃな、キンタマって。では潰すぞ！？」
＜ｉ３０３０１１―２４９０３＞
「ぶちゅっ！！」
ビクンビクンと大きく痙攣して紅姫の睾丸潰しに反応した。
涎と泡を垂らしまくり、小便と大便も一気に漏らした。
紅姫が陰茎を上に引っ張り、弥生が切り取りやすくした。
二人は顔を見合わせてニコッ！　と微笑んでからついに壮健のシンボルを根っこから切断した。
「私達はこの辺で失礼します」
雪乃は、泣き続ける楓と梓を抱き抱えるようにして拷問部屋を後

にした。
やはり仲間の死を目前で見せつけられたのは大ショックだったみたいだ。

「そんなに仲間の死が悲しいものなのかのう？」

「そうだよね！　私なんかお父様が死んでもお姉様が死んでも平気だよ！！」

「言ってくれるのう……わらわも父上だろうがお主だろうが死んだら笑いが出るぞよ！！」

「あははははは！！」

「ははははは！！　ぼちぼちトドメに肛門から木刀差し込んじゃおうよ！！」

「白檀の刑じゃな。わらわに任せるがよいぞ！！」

【ワシはこんな小娘達に殺されるんだな……股間が痺れてもはや痛みも感じない。このまま死ぬのだろうな。それにしても何て残酷で冷たい奴らだ……アッ！？　何てこった！　志乃の首が無い……かわいそうに全身血だらけだ……ワシも今から行くからな。志乃、志乃……】

「ガクッ」

「あ！？　このヘタレ！！　お姉様が肛門串刺し中に絶命しちゃったよ！　口まで貫通してから死ねって……」

「いいのじゃ。おしりの穴から串刺しにしてること自体、わらわは興奮してるぞえ……」

「お姉様もSですね～！！エッチ～」

残酷な鬼畜少女二人のいる西国は天下統一に成功し、この後も数百人の人々を処刑し続けた。

女子供関係なく殺し続けた二人は、数百年後々までも、西国の鬼畜姉妹と語り継がれていった。

美紅の御先祖様物語（後書き）

――――およそ４００年後。

残酷な紅姫の気性を継ぐ、残酷少女、美紅が産声をあげるのだった……。

莉央の通う小学生生徒たちの制裁（前書き）

残酷処刑島での処刑人では最年少だった小学生の女の子の菅野莉央。
小学生生活に戻った後のお話です。
同級生の女子児童である川田早苗を、彼氏の松田新吾と共にズタズタにしてしまうお話です。
菅野莉央と富田美香、結城明日香が、クラスメイトの女の子に対して、今までの中で最も凄惨な私刑を執行します。
六年三組の彼氏である松田新吾と共に莉央たち拷問処刑人に性器を壊されてゆく様をご覧ください。

莉央の通う小学生生徒たちの制裁

東部地方にある赤霧島小学校――――――

残酷処刑島の任務も終わり、小学生生活に戻った菅野莉央。
女子小学生の六年生では、平均的な身長。黒髪ロングの真っ白な肌の美少女で、運動神経と頭の良さは抜群。残酷な性格も抜群であった。

最後に処刑した同い年の真理香のことを思い出していた。

『縦笛で子宮抉ってた時のあの子の表情良かったなぁ。時間が許す限り抱き締めて苛めてあげたかったけどなぁ……』

「莉央ちゃん！　何ぼぉっとしてるの？　体育の授業は体育館でバレーだよ！　早く行かないとみんなもう行っちゃってるよ？」

同級生の小学六年生の結城明日香が莉央に催促した。

「あ、うん！　ごめんね！　考え事してた。あたしは見学するから制服のままで行くよ」

「莉央ちゃん、最近ね、川田早苗ちゃんが生意気なの！　あたしたち三人の悪口を言いふらしてるらしいよ？　ちょっと制裁が必要か

もね？」

同じく同級生の富田美香が莉央に話しかける。

体育館へ向かう三人。

結城明日香は背がクラスで一番高く、少し小麦色の健康的な肌である。薄い茶髪のポニーテールで切れ長の目をした綺麗系の少女で、黒ぶちの眼鏡を愛用している。

富田美香は、背がクラスで一番小さく、黒髪ツインテールで肌の色は普通。目の大きい可愛い系の少女。

二人とも莉央と同じく気の強いＳ系バリバリの小学生の女の子だ。

川田早苗。今回三人に目を付けられたこの少女は少しぽっちゃり系で、身長も肌の色もごく普通。少し赤毛で、三つ編みおさげのピッチリ分けの似合う古風な少女。

川田早苗には、付き合っている男子生徒が別のクラスにいた。男前で女の子に大人気の松田新吾である。

バレーの時間も終わり、皆が教室へ戻り始めた時、川田早苗が通るのを待つ三人。

「川田さん、ちょっと顔かしてくれる？　お話があるの」

莉央が教室へ戻ろうとする川田早苗を呼び止める。
喧嘩しても男子さえボコボコにしてしまう菅野莉央に呼び止められて、かなり動揺している川田早苗。
結城明日香と富田美香が川田早苗の右腕左腕をそれぞれ掴んで体育館の資材倉庫へ連行していく。
倉庫のドアを閉めながら莉央が口を開いた。
「川田さん、何であたしたちに呼ばれたか分かってる？」
「知らないよ！　いきなりなんなの？　バカなことやめてくれる？」
莉央にビビりながらも理不尽な拘束に対して怒りを露にする川田早苗。
「松田新吾。男前で大人気のあんたの彼氏、もうすぐここにくるわ。さっき声かけて呼んでおいたよ」
可愛いポニーテールの結城明日香が囁いた。
何で彼氏の新吾が呼ばれるのか全く理解出来ないでいる川田早苗にいきなり襲いかかる明日香の重たい正拳突き……。
まともに鼻っ面に食らった早苗は、大量の鼻血を吹き出し、その場にうずくまった。
「いったぁーい！！　なにすんのよ！？」

「これからあんたとあんたの彼氏を処刑するから。覚悟してね？体操服とブルマ、下着も脱いで素っ裸になりなさい！」

ツインテールの可愛い少女、富田美香が冷たく言い放つ。

このタイミングで、扉を開けて川田早苗の彼氏である新吾が資材倉庫へ入ってきた。

「な、何で鼻血出してるの？　早苗ちゃん、大丈夫？！」

心配しながら早苗に駆け寄りハンカチで血を拭いてあげた。

「おまえら！　よってたかって何やってんだ！？　卑怯だぞ！」

血まみれの彼女を庇いながら新吾が男らしく叫んだ。

「じゃあ一対一のタイマンでいいからあたしと勝負する？　もしあんたが負けたら新吾くんも早苗ちゃんもせっかく愛し合ってるのに結婚もできなくされちゃうよ？　あたし達にね」

松田新吾は、菅野莉央の挑発に乗ってしまった。

大きな過ちを犯し始めた事に気付いていない新吾と早苗のカップ

ルであった。
残酷処刑島に呼ばれる程の強さを誇る莉央に、その辺の小学生が敵うわけがない。
一分で前歯をへし折られ、両手両足を力が入らないほどに打擲させられた松田新吾が泣きながら叫んでいた。

「いててて……強すぎる……ごめん！　許して！　莉央ちゃん、お願いします！　彼女の早苗に何をしても構いませんから僕だけは許してください！　学校のアイドルなのに皆にバカにされる……」

「あとで可愛がってあげるから、そこで彼女がどうなっていくか見てて！　それとあたしの事は……莉央様、と呼びなさいね」

「はい……莉央……様」

莉央のあまりの強さにとんでもなくヘタレになる松田新吾。
小便をチビりながら小学生の女の子である莉央に許しを乞う。

「情けない男だけど、あたしの彼氏！　どうか新吾だけは何もしないで解放してあげて！　あたしは好きにしていいから。お願い……。新吾に酷いことしないで！」

この光景を見ながら、もうどうしようもない事態を察した川田早苗は、自ら体操服とブルマを脱ぎ、パンツ一枚になった。
しかし、ここでさすがに躊躇いを見せて、手を止める……。

「莉央ちゃん！　やっぱり、パ、パンツだけは……ゆ、許して……」
「ダメ！　早苗ちゃんのアソコにも用があるから……。せっかくの白と水色のストライプパンツだけど邪魔なのよ。あたしと同じパンツだし……。パンツごとアソコにめり込ませてやろうか？　でもそうしたら無茶苦茶痛いと思うけどね……」
　両膝を内側に向けて座り込む早苗に、莉央は立て膝を股間にゆっくり捩じ込んでいく。そのまま両膝を左右に開き、早苗の太腿をこじ開けてゆく。
「ほら、もう諦めて覚悟を決めないと……股間に膝蹴りブチ込むわよ？　恥骨がバキバキと粉砕骨折してスッゴく痛いぞぉ？　ん？　そんな無い胸なんて隠さなくても誰も見ないから安心して……」
＜ｉ４３５８６４―２４９０３＞
　そのままゆっくり押し倒して仰向けに寝かせてからパンツに手をかける莉央。
「往生際が悪いよ？　はい……脱ぎ脱ぎしようねぇ。いい子いい子♪」
「やだっ！！　止めて許して勘弁してぇっ！！　お願い……」

「ダ～メ。ほいっと♪」

『ズルリ……』

膝までパンツが脱がされた。

「やだっ!? 私のエッチな部分見ないでっ!! 許して……ごめんなさい!!」

明日香が早苗の左の乳房を右足で踏みつけながら叫んだ。

「謝っても許さないなら観念しろ! エッチな部分じゃなくて、汚い部分の間違いでしょう? あ、こいつオシッコちびってるよ! 本当きったなーい♪」

続けて莉央も囁いた。

「あら、ほんと……。ションベン臭いなぁもう……。あたし達がそんなに怖いんだ。じゃあ、そのご期待に応えてあげちゃう♪ 本日は、小学生にして女の人生最後の記念日にしてあげるからね。最後と言っても女が終わるだけで殺しちゃう訳じゃないから安心して! ほら、全部脱がすよ?」

一気に足首まで最後に残った一枚のパンツがずり下ろされた。
＜ｉ４３５５６１｜２４９０３＞
明日香は、素っ裸になった早苗の顔面に狙いを変更して、更に強く踏み始めた。
『ズンッ！　グリグリ……』
「涼しくなったなぁ？　素っ裸って気持ちいいよね？　何なの？　この不細工な丸い顔は？　ほらほら……」
＜ｉ４３５７３０｜２４９０３＞
「よっこいしょっと！　じゃ、あたしも踏ませてもらうとするかな。大事な所でも……」
富田美香も立ち上がり、早苗の性器に足を置き、グリグリと踏みつけ始めた。
「ほら、汚いマンコ踏んであげる♪」
踏みつける角度によって、くぱっ、くぱっ、と音を立てながら、開いたり閉じたりしている。

「あはは♪　何か変な音してるぅ。くぱくぱいってるし♪」

美香は変にウケている。

同時に莉央も立ち上がり、早苗の右の乳房をグリグリ踏みつけ始めた。

『こいつ、やっぱりあたしよりデカい胸してるじゃん……何かムカつく』

口では無い胸とか言いながらも、内心自分より大きい事に気付いていた莉央は、執拗に早苗の乳房をグリグリ足の裏で踏んだり擦ったりを繰り返す。

「顔と胸と、性器……。女性のもっとも大切な部分ワン・ツー・スリーだね。そんな部位を同時に全て足蹴にされるなんて……哀れだわ～？　もうお嫁に行けないね？　あたしたちが飼ってあげようか？　毎日三人で性的虐待して穴とゆう穴をボロボロにしていいかな？」

明日香が顔面を踏みつけながらニコニコしながら囁いた。

「あはは！　こんな肥えたメス豚飼ったら、餌代だけであたし達の小遣いなくなっちゃうよ！　殺して食べてもお腹壊しそうだしね」

美香の返答を聞いたとき、とうとう耐えきれず号泣を始めた早苗。
「可哀想に……傷つけちゃったから号泣しちゃってるじゃん？　物理的には早苗ちゃんの大切なモノを三つだけあたしたちが奪っちゃうけど許してね？」
と情けを示しながらも、早苗の体から処女膜と子宮と直腸を奪う段取りを頭の中で予習している莉央。更に足に力をいれて踏みつけ続ける。
右の乳房は広範囲に内出血し、乳首からも軽く出血している。
「痛っ！　痛いっ！！　胸がちぎれるうっ！！」
「可哀想にって言いながら、莉央ちゃんの足が一番力入ってて痛そうなんだけど……」
明日香も苦笑いする。
傷付いて号泣しながらも、莉央の足踏み攻撃が熾烈を極め、泣きわめく早苗。
<i435582―24903>
胸と同じく微かに膨らみをもつ恥丘部分には、非常に薄い産毛のような陰毛が生えていた。

早苗の泣き叫ぶ姿が楽しくて、半時間ほど三人の足踏みつけ攻撃は続いた。

「もう、止めて……痛い……グスン……グスン」

ようやく足を下ろす三人。

泣き落としで止めたと言うよりも、三人のふくらはぎが疲れてきてたのと、飽きてきていたのに過ぎなかった。

莉央はしゃがみこんで、明日香の足で真っ赤にされている顔面をパンパンと強く二回叩いた。

「痛っ?! ひぐっ!?」

「お待たせ! 今から早苗ちゃんの性器の解剖を始めます♪」

ススッと早苗の下半身へとしゃがんだまま移動した。

「止めてっ!! 切り刻まれるなんて絶対イヤッ!!」

「ほんとに解剖なんてしないよ……でも臓器は一つ潰すけどね♪いや、なんでもないよ。じゃあマンコの力抜こうか?」

真っ赤に腫れた大陰唇の割れ目を、パアンッ!! と思い切り平

手打ちした。
　奇声をあげて歯を食い縛り、痛みを我慢する早苗の顔は涙を流しながら歪んでプルプル震えている。
「もう泣き止んでよ。足で踏みまくったお詫びに気持ちいい事したげるからさ……さてそうゆうわけで……マンコの力を抜きなさい」
　美香の足で真っ赤になっている大陰唇の左右に、莉央の左手の人差し指と中指が置かれる。
　指を左右に開くと、くぱっ、と音がして、ピンク色の膣内が三人の眼前に晒された。
「やっ！？　中身なんて見ないで……恥ずかしいよ莉央ちゃん！」
「うわっ、イヤらしい色してるぅ。何か内側ってビロンビロンしてる」
「小陰唇のビラビラと膣口ね。あはは、ビロンビロンってどんな表現よ？　人によって小陰唇の形も膣内の幅も違うんだよ」
「へぇー。莉央ちゃんは今までに色んな女の子のアソコ見てきているんだね？」
　美香と莉央の会話を聞きながらも、明日香はピンク色したヌメヌメしてる早苗の膣内を頬を染めながら見入っていた。
　自分のでも見たこと無い膣内に、妙に興奮している明日香である。

しゃがみこんだ莉央が、ゆっくり川田早苗の秘部へ手を進める。
左手は大陰唇、小陰唇を思いっきり開いたまま……右手の細くて白い中指が膣口を捉えた。そして挿入されていく……。

「お邪魔しまーす」

『くちゅ、くぷぷ……』

「あんっ!?　や、やめて!!」

『クチュクチュ……くちゅちゅちゅちゅちゅ!!』

小陰唇に傷が付き、少し血液がとびちった。
体験したことの無い、あまりに変な感覚に同時に小便も飛ばしてしまう川田早苗。

＜ｉ４３５５８１―２４９０３＞

処女膜手前の浅い膣内を執拗に掻き回される。
少しずつ気持ち良くなってきている変な感覚を覚えた。
誰もいない放課後の教室で、クリトリスを机の角に擦り付けてコソッとオナニーを覚えていた早苗だったが、膣内挿入での快感は同級生の莉央の指が初めての体験だった。
　次は親指で、皮かむりのクリトリスをスコスコ擦る莉央。

「まだ深く挿れてないから、ここも刺激しないとイケないかな？やっぱ……」

「あ、あんっ！　き、気持ちいい……莉央ちゃん、あたし、何か変な感じなってる……」

中指と親指の二ヶ所責めは、三分ほど続けられた。
ゆでダコのように真っ赤な顔をして、その行為を見つめている明日香と美香。

「ぼちぼちイカせるか……」

三分が過ぎた頃、ビクビクッ！！　と、強く体が震え、明らかに早苗は莉央にイかされた。

「愛液たくさん出しちゃって……ツーンとする酸の独特の匂いだね。小学生の分際でイっちゃったんだ！？　あはは♪」

菅野莉央は、残酷処刑島で学んだ性教育が豊富すぎて、見ている二人は少し訳が分からず、呆気にとられている。

「じゃ、本番いくよ。早苗ちゃんのバージンは……あたしが頂きぃっ！！」

『ズブズブ……メリメリ……バリッ！！』

「いったあああああいっ！！　んあああああっ！！」
　あまりの性器の激痛に思わず泣き叫ぶ早苗。
　愛液と血が混じった液体が資材倉庫の床を濡らしていく。

＜i435557｜24903＞
「よしよし、痛いか痛いか……。じゃあ御褒美にもう一本くれてあげるね♪　ほら！」

人差し指も加えて、中指と同時に二本の指を根元まで捩じ込み、グリングリン同級生の女の子の膣内を掻き回し続ける。
　小学六年生の少女の性器からは、クチュクチュと卑猥な音が鳴り続けている。

「ひっ！？　ぎゃあああああっ！！　わーん、わーん！！」

「ほらほらほらぁ。たった指二本がそんな痛いの？　そうなんだ♪もっと泣け！　喚けぇ～。失神しても止めたげなーい♪」

　痛みで気を失う川田早苗のマンコから指が引き抜かれたのは10分も後だった……。
　白い指が、更に白くふやけてしまうほど膣内を掻き回していたが、ついに空気中に解放されて、強い酸性の匂いを辺りに撒き散らしている。

『パンパンパン！！』

容赦なく往復ビンタを与え、目を覚まさせる莉央。

寝惚けてる所へ莉央の声がする。

「おはよう。起きた？　慣れたらもっともっと深く挿れて掻き回した方が気持ちよくなるからね。　もう処女膜もないし、安心して指を深っかく突っ込んでオナニーしてみてね♪　さて、これから彼氏の処刑ショーだよぉ♪」

「男が保身して女が自己犠牲とは……。そんな男は死刑に値するね？　莉央ちゃん」

ポニーテールを揺らしながら、切れ長の目をした結城明日香が呟いた。

「さぁ、男前のあんたも裸になろうね……美香ちゃん、パンツだけはあたしに脱がさせてよ？」

「あーあ、美味しいところ持っていっちゃうんだ……明日香ちゃんは……了解でーす！　じゃ新吾くん、いくよ？」

『ズルズル……ずるり……』

美香によって体操服と半ズボンが脱がされた。

「や、やっぱり恥ずかしい……」

「恥ずかしい？　これからされることを思えば序の口序の口♪　じゃ、次はパンツ脱がすわよぉ？　あたし達に男前のオチンチン、見せてねっ♪」

新吾のパンツに手をかけながら、男前のパンツを脱がす行為にワクワクしている明日香。

『ズルズル……』

『ぷるるんっ！！』

少しパンツを下ろすと、新吾の包茎ペニスは前後に揺れながら小学生の女の子達の前に露出された。

「やだ!?　小さい上に皮かむってるぅ♪　くっさ？　ちゃんと洗ってる？」

「許してくれ……恥ずかしいよ」

「もうオチンチンも金玉も姿を現しちゃってるから手遅れよ？　後は一気に足首まで脱がしちゃうんだもんね……それっ」

明日香と美香が松田新吾の体操服を脱がし、残ったパンツも脱がせて、ついに素っ裸にひんむいた。

「男前のわりにちっちゃいチンポだね？　新吾くん？　金玉の袋が勝手に動いてるし……気持ち悪いなぁ。。あはは♪」

明日香が新吾のペニスをひねる。

「痛いっ!?　やめてくれ！」

「やめてーっ!?　新吾に変なことするな!!」

彼氏の陰部を、同級生の同性にいじられた嫉妬心から喚きちらす素っ裸になってしまっている川田早苗……。

「何生意気言ってるの？　早苗ちゃん？　まだ責めが足らないようね？」

『ずぷ……ずぷぷぷ……』

莉央の中指が早苗の菊門へ捩じ込まれていく……。

「ひあっ！？　痛いっ！！　やめて！！　莉央ちゃん！！　お願い！！　そんな汚い所に指入れないでぇっ！！」

「彼氏のキンタマ潰して良いなら止めてあげるけど？」

『ぐしゅ！！　ずぶぶぶぶっ！！』

一気に突っ込まれた莉央の右手の中指は、川田早苗の肛門へ根元まで突き刺さる。

「いったぁーいっ！！　いやあああっ！？」

『つぷ……づぷぷぷぷ……』

「んあああっ！？　やめてぇえっ！！」

一度引き抜き、更にもう一度突っ込む。

『ズボオッ！！』

人差し指と中指が、再び根元まで突き刺さされた。

「くっさ。朝うんこしてきちんと拭いたの？」

「やあんっ！　えーん。えーん。酷い……わーん、わーん！」

泣き叫ぶ早苗を尻目に更に許しを乞う彼氏の松田新吾。

「お願いします！　早苗は殺されてもいいから僕だけは助けて！許して！　お願いします！！」

情けない男への制裁が始まる……。

『ズドン！　ズドン！　ズドッ！！』

松田新吾はネットを張るために使われるポールに大の字に縛り付けられ、富田美香の足蹴りを股間に浴び続けていた。

「美香ちゃん、やめて！　僕のキンタマ、潰れちゃうよ！？」

「彼女さえも売る男のチンポやキンタマ……無事でおいとくと思うの？　男の子の価値はないから本日で男の子終了させてもらうからね？　早苗ちゃんみたい気持ちよくイかせてなんかあげないんだからお前は！」

『ズドッ！　ズドッ！　ズドッ！　ズドッ！』

容赦ない美香の股間蹴りに、新吾の睾丸はついに限界を迎える。

『ズッドーン！！　ぷちゅっちゅっ！！』

美香の強烈な最後の蹴りによって、同時に二つの睾丸が破裂した。

「ぎひいいいいっ！！」

泡を吹いて気を失う小学六年生の男子生徒、松田新吾。
ツインテールを揺らしながら、美香はカッターを取り出し、新吾のペニスに刃をあてがう。

「こいつの彼女の早苗ちゃん、根本からチンポ切断と、雁首だけ切断と、どっちがいい？　彼女のあんたに決めさせてあげるわ。どっちなの！？」

「いやあああっ！？　どっちも止めてあげてっ！！　あたしとエッチもできなくなっちゃうよ！？　お願い、美香ちゃん、止めてあげて！！　はうっ！？　いやあああっ！？」

彼氏の許しを乞う早苗に、莉央の二本の指は何度も何度も川田早苗の肛門、直腸を掻き回す。

「熱いっ！！　痛いっ！！　止めて！！　莉央ちゃん！！　お願いっ！！早苗の肛門、壊れちゃう！！」

「壊してア・ゲ・ル♪　直腸をグチュグチュにしてあげちゃうからね？　覚悟しなさいね？」

『ぷしゅっ！　ぷしゅううううっ！！』

莉央の人差し指と中指が、早苗の直腸を抉り倒す……直腸が傷付き、鮮血が肛門から飛び出す。

「莉央様っ！！　止めて！！　早苗を許してくださいい！！　ヒギイイイッって　！！いったあああいっ！！」

『ズルズル、ズルズルズルズル……ぷるるんっ！！』

<i435909―24903>

莉央の指が川田早苗の直腸を抉り出そうとしている。
直腸が、早苗の肛門から脱肛したようにモリモリはみ出してくる。

「何汚い直腸出そうとしてるの？　大腸全部引きずり出してやろうか？　あははは♪」

「莉央ちゃん！　それ以上直腸抉ったら早苗ちゃん、出血多量で死

んじゃうよ？　もう止めてあげて！」

「あ、ごめんなさい！　残酷処刑島なら殺しても良かったんだけど、もう普通の女子小学生だもんね。了解だよ！　また後で、死なないように痛み止め打ちながらやらせてもらうとするかな♪」

『ぬぽっ！！』

一気に肛門から指二本を引き抜いた。

「痛ぁっ！？　熱い……お尻が熱い……グスン、グスン……」

肛門を両手で押さえて泣き崩れる川田早苗。

夥しい鮮血をともないながらも、早苗の直腸責めは取り敢えず終了した。

「一気に仕上げるからね？　ここからは地獄への入り口だから。覚悟して四つん這いになって、お尻を突き上げなさい」

「ひいっ！　これ以上酷いことしないでっ！！」

「早くケツ突きあげないと殺すわよ？　汚い股を開いて！！」

「ひいっ！　こ、こう……ですか？　莉央様……グスン、グスン……」

泣きながら命令に従い、血まみれの性器と肛門が莉央達の三人に見えるよう腰を突き出す。お尻を突き上げる。

「マンコの力を抜きなさい！！」

「はいっ！　莉央様っ！！」

『ズッボオオオッ！！！！』

早苗の膣内に、莉央の手首までが一気にぶち込まれた。更にグリグリ捩じ込んでいき、ついに子宮まで到達した。

『くちゅっ！　ぶちゅ！　ぐちゅっ！！　ぷるるんっ！！』

子宮が莉央の右手によってミンチにされていく。ぷるぷるの子宮のミンチが早苗のマンコから抉り出されていく……。

「ぎゃあああああっ！！　いったあああああいいいいっ！！　死ぬっ！！　死ぬうううううっ！！」

「大丈夫、莉央があんたのお腹を切開して残った子宮のミンチを取り出して、消毒してから縫合してあげるから死なないよ？　安心して泡吹いてなさいね？」

泡を吹きながら失神している川田早苗を囲むように、女子小学生三人が松田新吾を取り囲む。

「さっきの続きよ？　雁首切断と根元から切断と選択させてあげる？　どっちがいいのかな？　新吾くん♪」

「あんたのチンポを切断して、彼女の早苗に食べさせてやるんだから！　もうお前たちが結婚しても絶対赤ちゃん生めない体にされちゃってるからどうでもいいよね？　チンポなんか」

睾丸を潰されて意識朦朧としている新吾には、半分夢の中で聞いている感覚だった。

痺れている下半身は、新吾の思考能力を奪い去っていた。

「オチンチン切断するなり、尿道を引き出すなり、莉央様達の好きにしてください！　お願いします！」

「そうなんだ……じゃあ好きにさせてもらうから」

「開き直ったM男かな？　あはは……」

「あたし達が今から松田新吾を去勢します。仰向けに寝て、股を開いてM字開脚しなさい」

莉央が冷たく言い放つ。
泡を吹きながらも素直に従う新吾……。Mに目覚めたのか自分でアナルに人差し指を突っ込み、前立腺オナニーを始めた。

「なにこいつ……自分で肛門ほじくってるよ？　キモい～……」

可愛い系の富田美香が頬を赤くしながら呟いた……。

「早苗ちゃんともども悲惨な目に遭わしちゃったけど、命までは獲らないから許してね？　アナル丸見えの哀れな彼氏さん……」

結城明日香が切れ長の目を更に細くして言う。
女子小学生の莉央が、同じく小学生の男の子、新吾のオチンチンを左手で握り閉める。
既に富田美香の強烈な足蹴りにより、睾丸は潰されており、陰嚢はイビツな形をしていた。
尿道からは少し出血している。
右手にカッターを握りしめ、少年のペニスの雁首にあてがう莉央。

「それじゃあ、あんたのリクエスト通り、去勢の時間です。三回に分けてチンポを切開するから……麻酔はないけど、縛り付けてるから動けないよ？　覚悟はいいかな？」

「ぐす……ぐす……は、はい、莉央様……お願いします」

「泣いてばかりいないの！　莉央様、新吾のペニスをズタズタに切り裂いて下さい！　お願い致します！　でしょ？　さあ言って！」

「莉央様……新吾のペニスを……ズタズタに……切り裂いて……」

『ブクブク……ガクッ……』

途中まで言ってから、また泡を吹いて意識を失った。

「目を覚ませ！　チンカス野郎！！」

そういって莉央の破壊力抜群の百烈拳が新吾の顔面にヒットしまくる……。

前歯は四本へし折れ、鼻の骨もへし折れ、顔面ボコボコに腫らしながら血まみれの新吾は目を覚ました。

「ぴぎい……もう殺して……僕を殺して下さい……莉央様……」

「もう人を殺したらダメだと国から言われてるの……残念だけどね……でも去勢許可はもらってるから……はい、そうゆう訳で、チンポの力を抜いて」

ギュッと左手でペニスを強く握り直して、右手のカッターを真横に滑らせた。

スパッと切断された雁首が、資材室の床に転がり落ちた。

「ぎゃあああああっ!?　いたいいいっ!!」
「痛いの当たり前でしょ?　はい、次は竹割りの刑よ!」
転げ落ちた雁首を拾い上げ、机の上に置きながら美香が呟く。
「後で早苗ちゃんに刺身で食べてもらおっと♪」
『ズズ……』
新吾の雁首を失ったペニスの断面に縦方向にカッターがめり込む……。
「尿道を真っ二つに切り裂きながら進みまぁ~す♪　あたしのカッターさばき、凄いでしょ?」
尿道を真っ二つに切り裂きながら、生えかけの薄い陰毛のある下腹部まで刃先が進んで止まった。
パックリ割れた陰部は左右に開き崩れた。
ドボドボと血が流れ落ち、松田新吾の陰嚢、太腿を真っ赤に染めてゆく。

「んぎゃああっ！？　痛いいいいいっ！！」

二つに切開されたペニスと、同じく真っ二つに切開された真っ白な尿道を見つめながら、三人の女子小学生達は頬を赤く染めていた。

「オシッコ通る管が真っ二つになっちゃってる……尿道って、白いんだね。。痛そうだけど……凄くエッチだね」

美香は陰部を濡らすほど興奮していた。
明日香も陰部を濡らしながら必死で男前の凄惨な陰部の切開面を凝視している。
莉央はカッターを一度床に置き、右手の人差し指と親指で二つに切り裂かれた尿道の内の片方を掴んで引きずり出して、腹部の根元から引きちぎった。。
もう片方も同じく引きずり出して、引きちぎる。
二つに切開された真っ白な尿道を松田新吾の口に捩じ込む。

「ほうら、あんたのオシッコが通っていた管だよ？　お食べ……ぷるぷるして美味しそうだね？」

「んぐ、んぐうっ？！　ごぽっ、　ごくっ、ごくっ……」

二本とも尿道を飲み込んでしまう少年……ひたすら涙を流してホルモンを生で食べてるような食感と、痛みに耐えていた。
莉央ちゃん……なんて残酷なことを……。

その行為を見ていた美香と明日香の二人は莉央に対して尊敬しながらも恐怖心を覚えていた。
同じく興奮も覚えている。

「キンタマも潰されて、残ったチンポもいよいよ無くなるよ？　男にお別れの時がきたわね？　僕、女の子になるうっ！って、叫びなさい」

「い、いやだ！　もう殺して……」

「あたしに逆らうの？　こんな惨めな姿で？　あんたの彼女と同じようにケツの穴から腕突っ込んで直腸、大腸掻き回してやろうか？　あん？」

「や。やめて……ごめんなさい、莉央ちゃん……」

「莉央様、でしょ？　もう手遅れよ。肛門の力を抜きなさい！　新吾！！」

「いやっ！　お願いだからもう許してぇえっ！！」

『つぷ……』

「あひいっ！！　やっ！　止めてぇえっ！！」

「お邪魔しまーす♪」

莉央の人差し指が新吾の肛門に根元まで突き刺さる。

「あひっ」

次の瞬間、全ての指、間髪入れずに手首まで挿入された。

「ぐわあああっ！？」

裂けていく肛門のヒダヒダ。構わずに大腸を掻き回し、大量の血液と、腸液が資材室の床を濡らしていく……。

『ぐちゃぐちゃ、ぐちゅちゅちゅ、ぐぽぐぽぐぽ……』

いやらしい音を立てながらも莉央の大腸掻き回しの刑は１０分ほど続いている。

「ほうら、感じる前立腺はここか？　ここ？　それともここかな？　あははは！！　ヌメヌメした腸液トロトロ出てくるね？」

「んひっ？！　痛い……あひっ、莉央様……あはっ、やめ……て……あんっ！　あひっ……んはあっ！！」

「女の子みたいな声だしてヨガっちゃってぇ？　あははははは♪　哀れだねぇ♪　ほらほら、腸液全て出しきるまであんたのケツの穴

掻き回してあげるから♪　でも気持ちいいのはここまでだから……
直腸裏の性器、頂きまーす♪　ほらあっ！！」

『ザクッ……ずるる……ズルズル……ぽんっ！！』

莉央は直腸上側を爪で切り裂き、新吾の前立腺を抉り出した。
またまた泡を吹いて失神する松田新吾。
莉央によって抉り出された変な赤黒いぷるぷるした臓器に明日香と美香の二人は絶句する……

「これは前立腺といって、男の子の性器の1つなの。睾丸とペニスと前立腺、３つとも男の性器よ！　覚えててね♪　これでこいつは一生快感を得ることは出来なくなったわ」
肛門に栓をして出血を止め、再びカッターを手にする。

「もう喋る気力もないだろうから台詞は勘弁してあげるね？　男にさようなら！　よろしく女の子ぉぉ〜っ♪」

竹割りにされた哀れなペニスの根元に莉央のカッターが横向きに走った。ついに少年の下腹部から完全にペニスが切り離された。
陰嚢も縦方向に切り裂かれ、ミンチになっている睾丸を綺麗に指で掻き出し、抜き取り、内部を消毒処理をして縫合した。

「はい、これで良し！　新吾くん、お疲れ様でした♪」

完全に生殖機能を失った小学生の男の子は、シワシワの平たくなってしまったキンタマ袋だけをぶら下げて、麻酔注射を打たれ、その場で深い眠りについた。

「ぷぷっ……哀れな下腹部だね♪」

笑いを堪えきれず、美香が思わず吹き出した。
隣で明日香も哀れな少年の下腹部を見つめて苦笑いしていた……。
ミンチになった子宮を腹部切開手術で取り除かれ、一命を取り止めている川田早苗にバケツの水をかけて叩き起こす美香。

「ほら、起きろ！！　もう少しであんたの私刑も終わるから……あと少しの辛抱よ？　早苗ちゃん♪」

頭を撫でながら優しく声をかける明日香。
莉央が囁いた。

「さあ、立って足を開いて向こうを向きなさい。両手は頭の上に……もし手を下ろしたりしたら、マンコから口まで串刺しに……いや、ケツから何か突っ込んで直腸や大腸抜き取ってやるからね？」

「ひいっ……。は、はい、分かりました。莉央様……あ、あたしにこれ以上何をなさるんですか？」

恐怖に震えながら問いかける早苗。

「股間の力を抜いて」

力を抜け……莉央のこの台詞は痛い思いしか想像できない……川田早苗は歯を食いしばって想像する事態に備えた……。

「こ、こうですか？」

「そう。じっとしてるのよ？　えいっ！」

『ドカッ！！』

「ひぎいいっ！！」

早苗の予想は的中した。

莉央のスニーカーを履いた足が的確に早苗の大陰唇を激しく捉えた。

「ホラホラホラァ！！」

『ドカッ！！　ドカッ！！　ドカッ！！　ドカッ！！』

容赦なく繰り出される莉央の強烈なマンコ蹴りは、的確に性器のど真ん中を捉えてヒットしていた。堪らずとうとう早苗は泣き出した。

「痛い痛い痛い痛いっ！！　わあぁーんっ！！　わあぁーんっ！！」

泣いてもお構い無く１００回ほど蹴り込む莉央。

「泣いても許さないよ。もう二度とあたし達の悪口言えないように徹底的に痛め付けてやるんだからね。同性の美人に性的暴行されて本当は興奮してるんでしょ？　嬉しいんでしょ？」

『ズドン！　パンッ！　パンッ！　ドカッ！　ドカッ！！』

執拗に莉央の足の甲が早苗の陰部を蹴り上げる。
避けた大陰唇からは夥しい出血が床を染めていく……。

＜ｉ４３５５５９―２４９０３＞

「ひぎっ！！　ううう、痛い……グスン、グスン……」

「ふぅ……あんたまだマンコに力入ってるよね？　でも次の一撃は力抜かないと小陰唇ズタズタになるわよ？　いい？　小陰唇大事にしたかったらマンコの力抜いて性器を思いっきり開いていなさい！
わかったかな？！」

早苗は泣きながら頷き、更に限界まで足を開いて、性器の力を思いきり抜いた。

『ヒュッ！！　ずちゅっ！！！！』

なんと莉央のスニーカーの爪先が早苗の膣内にめり込んだ！

靴の半分が膣内にめり込むほどの強烈な一撃は、早苗を半狂乱にさせるには、十分だった……。

「痛あああっ！？　ぴぎいいいっ！！　あはっ！　いやっはぁーっ！！」

半分笑いながら気が狂ったように意味のわからない単語を叫び続ける早苗。

『ずぼおおおおっ！！』

更に力の入った強烈一撃が、早苗の膣内に再度ぶち込まれた。

＜ｉ４３５５９０｜２４９００３＞

足を抜く時、鮮血と下り物と愛液と小便全ての体液が混ざった汁

を吹き出させた。

「汚い液体色々垂れ流して、あたしの靴汚してくれたわね？　ほんと串刺しにして殺してやりたいよ……」

「わーん、わーん！！」

明日香と美香は、泣き叫ぶ川田早苗を……顔を真っ赤にさせて微動だにせず莉央の責めを眺めている……。

ついに耐えきれず両手で性器を押さえて崩れ込んだ。

「あーあ、約束破ったなぁ。　両手を下ろすな！　とハッキリ言ったはずなのに。わかったよ。本当に解剖してあげる。お腹の中を……。大腸引きずり出しの刑が確定っ！！　子宮と処女膜と直腸で勘弁してやるつもりだったけど、四つ目を追加♪　大腸も半分くらい引き抜いてやるから覚悟してね？」

「いやあああっ！！　それだけは勘弁してくださいたつ！！莉央様っ！！」

「だめだよ」

『パン！　パン！　パパパパパパン！！』

強烈な往復ビンタを早苗の顔面にヒットさせる莉央。

これも１００回ほど繰り返した。

鼻血とヨダレが左右に飛び散る。

「ホレホレホレ！　痛い？　ピンタって地味なわりに痛いよね？
あはは……これ、彼氏のチンポ。あーん。召し上がれ♪」

更に先ほど切り取った松田新吾のペニスの雁首を口に捩じ込む。

「ぐり、ごぼっ！？　ゴリ……ブチュ！！」

顔面全体が真っ赤に腫れ上がり、誰かも識別出来ないほどに歪に変形してしまった上に、無理矢理捩じ込まれた雁首部分を思いっきり噛んでしまった。

更に頬を顎を叩きまくり、無理矢理飲み込まさせる美香。

「ほら、飲め！　噛んだ後はきちんと飲み込むのよ！！」

「ごくっ……うぷっ！？　ゲホッ！　ゲホッ！」

「美味しかった？　ほら、莉央様にごちそうさまです！　とお礼言いなさい！」

美香が髪の毛を掴んで前後左右に振り回す。

精液と小便と血と恥垢が混じった異様な味が早苗の口内を襲う。

大陰唇と小陰唇と顔面を真っ赤に腫らして、更に血だらけになっ

た小学生の女の子……。
カニバリズムを初めて味わった女の子……。
リンチをするのは同級生の１２歳の女の子……。
あまりに現実味のない惨事だが、このとある小学校では現実に行われていた。

「ごちそうさまでした……莉央様……」

「雁首だけでごめんね。じゃあ今からあんたの人生最高級の地獄へ連れていってあげる。泡吹いて失神しても死んじゃダメだよ？」

更に川田早苗の愛用している縦笛を以前から盗んでおり、その縦笛を今回の刑執行に使うつもりの莉央である。

「明日香と美香は、早苗を跳び箱の上にうつ伏せに寝かせて、両手両足と胴体を跳び箱に頑丈に縛り付けてくれる？　ここからは生き地獄を味わってもらうから、暴れられたら困るからね」

言われた通り、手際よく跳び箱に縛り付ける明日香と美香……。
少し高さもあるので、まるで処刑台のように感じて恐怖していた。
莉央は跳び箱にうつ伏せに縛り付けられた早苗にお尻側から近寄る。

「ここ？　……早苗の臭いアナルはここなのね？」

縦笛を肛門に押し当てた。

「ひゃっ！　ん？　縦笛の感覚？　まさか私の？……そ、そんなあっ？！　まさか私の縦笛を？？」

「肛門の力を抜きなさい」

またでた……力を抜け……莉央のこの言葉は毎回地獄への入り口だ。

「さっき直腸を掻き回されて腸壁ボロボロになってるのに……そんな固いモノで掻き回されたら、本当にあたし、死んじゃうぅ〜。莉央様お願い、止めて……」

「何言ってんの？　掻き回すだけじゃ済まないよ今回は。肛門から直腸とか大腸とか抉り出しの刑なんだよ？　まずは直腸通過ね？」

『ずぶぶぶぶっ！！』

「んにゃあああああっ！！あはあんっ！！」

「ここまではまだ気持ちいい場所だけど……ここからはS状結腸を突き破いて進むから痛いぞぉ？　あと五秒あげるから深呼吸して腸が破れる激痛に備えなさい」

『グリグリグリ……くぷくぷくぷ……』

腸液が湧いてきてぷくぷ音を立て始めた。

「あん、莉央さ、ま、やめ……て」

「止めない。時間よ？　ほら、いっけぇーっ！！」

『ズボオオオッ！！……バリバリ！！』

「ふんぎいいいいいっ！！！」

Ｓ状結腸が無理矢理破かれ、ドボドボ血を流しながら大腸に当たる縦笛。

『ビクビクッ！！　びくんっ！　ビクビク……』

『プシャー！！　ぷしゅううぅっ！！……ポタポタ』

白眼をむいて痙攣を始めた早苗。口は半開きでヨダレも大量に流している。

漏らした小便が、跳び箱台を伝って床へ滴り落ちる。

再び、肛門がパクパク開くように縦笛を回しながら直腸と裂けたＳ状結腸を掻き回す莉央。

横に這う大腸をグリグリ上に押し込み、破裂させる前に肛門まで引き抜き、もう一度スブッと奥まで捩じ込んで、掻き回す。

同じ作業を何度も繰り返している内に、肛門は裂けて大流血し、身体中の痙攣が大きくなってきた。

あらかじめ持ってきていた血止めと、痛み止めの注射を背中に打つ。

「死なれちゃ困るからね。これで少しは痛みがマシになるから、外傷性ショック死は多分ないと思うよ？　早苗ちゃん♪」

更に大量の血液が早苗の肛門から吹き出す。

奥の内臓からの出血と、肛門からの出血と混ざっていた。

「肛門や大腸からの出血って凄いでしょ？　よく見ててよ、明日香も美香も。このまま腸を引きずり出すから」

血と腸液まみれ、更に大便が微かに付着している早苗の縦笛を、十回目、肛門から引き抜き、裂けた直腸の穴に先端を差し込んで両端を左右の手で握りしめ、クルクルと巻き始めた。

「引きずり出し……とゆうよりは、大腸巻き取りの刑！　かな？　これでお腹の中にある半分くらいの大腸巻き取ってやるんだから」

『ズル……ズルズル……ずるるるる』

直腸、S状結腸、大腸がどんどん巻き取られていく……。

「んぎゃあああぁっ！！！！　痛いいいっ！？　死ぬっ！！　死んじゃううっ！！！！」

ブチブチ……と、お腹の中の脂肪との接続部分が剥がされて、血まみれの大腸がズルズルと肛門から引き出されていく。
縦笛で掻き回されて傷だらけになった大腸は、半分くらい縦笛に巻き取られた。

「明日香、右の乳首をコレで潰して」

「う、うん。それ！」

思いっきり乳首をペンチで掴み、一気に潰した。
プシュッと、小さく血飛沫があがった瞬間、早苗の意識が戻り、再び半狂乱になって喚き散らす。

「大袈裟ね。痛み止めでかなりマシでしょ？　それより見てこれ……あんたの大腸半分くらい抜いたんだ♪」

「ひっ！？　死ぬじゃん！？　私、しんじゃうじゃんっ？！　ヒイイイ！！　人殺しいいっ！！」

「大丈夫だから、そのまま振り向いたままで飛び出した自分の大腸を見てなさい！　生で見るの初めてでしょう？」

美香もペンチを借りて、残った方の乳首もゆっくり力を込めて、十秒くらいかけて潰した。

また奇声をあげる早苗に美香は笑いながら囁いた。

「あたしも潰した感触味わいたかったの。ごめんね……」

ホカホカの腸からは湯気が上がっている。

三人と、本人の四人は、じっと引き抜かれた……実際は巻き取られた直腸とS状結腸と大腸を凝視している。

早苗は肛門に力を入れて、必死でお腹に戻そうと気張っているが、裂けた肛門はヒクヒクするだけで、逆に大腸がどんどんはみ出してきていた。

「死ぬ……私、死ぬうっ！！」

「大丈夫だって！　黙ってろ早苗！！　ほんとに殺すぞ！？　明日香、ほら、触ってみて！　プニプニプルプルしてるから。温かいし気持ちいい感覚よ？」

縦笛に巻き付いた大腸を玩ぶ三人。

「うわぁ〜。ほんとだ……プルプルしてる。美香ちゃんも触って」

「しゅごーい！　柔らかくてあったかいね。大腸ってこんな感触なんだね？　莉央ちゃん」

「こんなのがまだ半分くらい入っていて、小腸に繋がってるんだけど、小腸まで巻き取ったらあたしの腕じゃ結合できないからね。殺したらダメなんでこの辺りで諦めるよ」

莉央は残った大腸を、おへその隣に切り込みを入れて、その穴から引っ張りだし、器用に人工肛門を形成してゆく。

縫合が時間かかったが、無事に手術は成功した。

「よしっと！　手術成功。これで死なないよ。今度からこのおへその隣にある新しい肛門から排便することになるから……」

しかしあまりの激痛に、再び泡を吹き、意識を失い、今度こそ深い眠りについた。

「莉央ちゃん、凄い！　人工肛門を作れるなんて！　大病院の執刀医になれるよ？」

明日香も美香も、莉央のあまりに見事なメス捌きと縫合技術に驚きを隠せない。

大便垂れ流しを防ぐため、小型のナイロン袋を装着してあげた。

「これでよし！　ロープをほどいてあげて、パンツや服を着せてあげましょ」

三人で体操着ではなく、担任に運ばせていた制服を着せてあげた。

「あ、そうだ。もう子供も産めないし、乳首も潰れちゃったし……一番敏感な性感帯も必要ないよね？」

莉央は履かせたスカートを再びめくりあげ、パンツの裾から手を入れて、クリトリスを思いっきりつまみ、一気に引きちぎった。

早苗は一瞬ビクンッ、と大きく震えたが、ヨダレを垂らしながら爆睡している。

痛み止めの麻酔効果が、強力に効いてきているみたいだった。

「ほら、お前も彼女の一部をお食べ♪　男の子の雁首に匹敵するクリトリスよ？　あーん」

同じく失神している彼氏の松田新吾の口へ、早苗のクリトリスを捩じ込んだ。

むにゃむにゃ言いながらゴクリ……。と飲み込んだ。

「あれも切り取ってあげとこうっかな♪」

もう一度早苗のパンツを膝まで脱がせた莉央は、再びメスを手にして、大陰唇をパクっと開き、ビロンッと震えている小陰唇をズズッと切り取った。左右の小陰唇を切り取ってからクリトリスのあった場所と、切り取った傷口に止血の薬を塗り込んだ。

尿道には針金をブッ刺し、膀胱まで差し込む。

一気に引き抜く……。

穴とゆう穴を犯した莉央は大満足して再びパンツを履かせた。

あまりに長い私刑のために、既に夜の10時を回っていた。

担任や生徒は莉央の存在を畏れているため、見てみない振りしか出来なかったため、両親にも警察にも連絡出来ていなかった。

男と同じく早苗も強い麻酔が効いて深い眠りについたまま、台車に乗せて転がしながら両親の待つ家に送り届けた。

先に松田新吾を送り届けたが、両親不在なので毛布をかけて玄関前に寝かせてきた。

次は川田早苗の家に着いた。

「こんばんは。早苗さんは眠ってるだけですから、明日には目を覚ますと思います」

「娘を運んで頂きありがとうございました」

担任から菅野莉央に関わる障害事件は、そっとしておかないと家族までも全員去勢されるかも……と、聞かされていたから、一見無事に見えても、自分の娘が去勢されていることは察知している早苗の両親。

「早苗は……もう子供を産めない体になってるんですよね？」

分かっていながらも思わず確認してしまう父親。

「はい。子宮は完全に除去しました。大腸も半分くらい残ってますが、一週間くらいこの点滴を続けて、この薬を飲ませながら安静にしていれば普通に生活できるようになると思います。あ、あと、肛門は直腸のかわりに大腸を直接繋いでますので、一生栓を付けて生活しないと、大便が垂れ流しになっちゃいますのでお気を付け下さい」

「そうですか……ありがとうございました」

「いえいえ。殺しちゃダメなんで仕方な……いや、何でもないです。次またあたし達の悪口言ったらダルマ女になってもらいますので、一生、車椅子生活になっちゃいますから。娘さんには重々その旨をお伝え下さい。あ、それと今回は乳首も両方潰してますので、消毒はしばらく続けてあげてください」

残酷な内容を両親に告げ、母親は泣き崩れた。

「お母様も子宮摘り出して、クリトリスはペンチで潰して、直腸、大便引き摺り出させて頂きます。お父様は睾丸潰してペニスは根元から切断させて頂きます。ダルマ女の娘さんと共に哀れな人生送るようになりますよ？　それが嫌でしたら、くれぐれもバカな早苗をしっかり教育しといてくださいね？　では失礼します」

明日香と美香も、莉央に従いながら、号泣する母親と睨み付ける父親の視線を感じながらも帰路についた。

「莉央ちゃん、ご両親にあそこまで酷いこと言わなくても……」

美香の言う台詞に明日香も頷く。
次の瞬間、莉央の右手が美香のスカートの中へ入り込み、パンツの裾から陰部へ手を滑らせた。

『スス……グチュ……』

膣内に莉央の中指の第一関節が入った。

「あひっ?！　やめて！　ごめんなさい！　莉央ちゃん！　バージン奪わないで！！」

「クチュクチュ……」

処女膜手前の膣内を掻き回しながら囁いた。

「今度あたしに逆らったら処女膜破いてアナルに腕ぶち込んで直腸使い物にならなくしてあげるから。わかった？　美香ちゃん？」

「ごめんなさい！　莉央ちゃん
　二度と逆らいませんから許して下さいっ！！」
「わかった。抜いたげる……あ、臭い！　美香ちゃん！　ちゃんと膣内も洗わなきゃ不潔だよ!?　わかった!?」
「ごめん、中まで指挿れるの怖かったから……今日のお風呂から思いきって中まで洗うよ莉央ちゃん……」

　二人の話を他人事でないと思いながら聞いている結城明日香も、処女なので膣内は不潔だった……。
　菅野莉央は明くる日、クラスで明日香と美香に、今度は二人ももっと凄惨なリンチをするようにと、言い聞かせていた。
「次は金玉抉り出したいね！　明日香と美香にも次はイヤらしい生のキンタマを見せてあげるよ♪」
　女子小学生とはいえ、やはり残酷処刑島の執行員の莉央は恐ろしい存在だった……。

莉央の通う小学生生徒たちの制裁（後書き）

残酷処刑島を読んで下さっている方々、本当にありがとうございます。

稚拙な文章ですが、一人でも読んで下さる方がいてくれるかぎり、出来るだけ長く続けていきたいと思っています。

女子小学生の菅野莉央の話が数話続く予定ですが、よろしくお願い致します。

莉央の男子奴隷化計画（前書き）

二月を迎える東部地方にある赤霧島小学校――

去年と同じく大して寒くない暖冬と呼ぶに相応しい冬らしくない冬のお話。

六年三組の菅野莉央、結城明日香、富田美香は親友同士である。

残酷な気性をもつ彼女たちは、クラスのみんなからも、学校中の全校生徒からも、校長や先生達からも恐れられていた。

菅野莉央の喧嘩の強さが半端ではない上に、殺人以外の暴力や、去勢の執行許可を国から与えられている特殊な人物だったからである。

先月の一月に、生意気な上、この三人の悪口を言いふらした同級生の少女、川田早苗の凄惨なリンチを終え、気持ちよく二月を迎えようとしていたある日……。

ある人物に恨みを買い、対決するようになる。

莉央の男子奴隷化計画

川田早苗の幼馴染みであり、親友の少年、柔道初段、ボクシングまで習っている剛力剛志は莉央達三人に報復をしようとその時を待っていた。

「三組の菅野莉央とかゆう三人組のメス共に、ワイの親友で、幼馴染みの川田早苗が酷い目に遭わされた。一緒にボコってくれるよな？」

少林寺拳法初段の大林憲夫が頷く。

「そいつら三人とも俺たち二人でボコボコにして、泣かせてやろうぜ！！」

体育会系で、力自慢の二人は、この学校の男子では最強の二人組であった。

身体の発育も小学生にしてはずば抜けて良く、六年一組の生徒達をよくいじめていた。

その日の昼休み、剛力剛志と大林憲夫は、菅野莉央達のいる三組の教室に乱入してきた。

「菅野莉央と、その部下二人……ひどい三人組とはお前らの事だな？」

いきなりクラスに乱入してきて、いきなり喧嘩を売られた三人はキョトンとして筋肉質の男二人を見つめている。

「ワイの幼馴染みであり、親友でもある川田早苗ちゃんを欲も登校拒否するまで虐めてくれたたな？　ギッタギタにしてやるから覚悟しろよ！！」

「聞いた？　あたし達をボコるつもりらしいけど……？　愚かにも程があるよ」

「そうね、莉央ちゃんの強さを見せてあげて！」

富田美香が莉央に声援を送る。

「やっちゃって！　ファイト！　莉央ちゃん！！　前に言ってた生の金玉の抉り出しはこいつらで決まりよね？」

結城明日香も莉央に声援を送る。

女子小学生の三人が話している内容に、一瞬たじろぐ二人の男子

生徒……。
「オラァ！！　死ねや！！」
　いきなり襲いかかる柔道初段の力自慢、ボクシングも習っている剛力剛志の右ストレート！！
　スウェーでサッとかわす。何事もなかったようにニコニコ笑いながら莉央が呟いた。
「そんなスピードであたしに当てられると思ってるの？　負けたら大恥かかせてあげるからね？　覚悟してかかってきなさいな」
『シュッ！　シュシュッ！！』
　ジャブ、ワンツー！　剛力剛志のパンチ全てが莉央には当たらない。
　カスリもしない。
　桁が違い過ぎた。
　明日香と美香の同時キックで、即ダウンした憲夫。早くも意識を失って倒れ込んだ。
「ほら、よく狙って当ててみて？　お前の親友大林君かな？　もうダウンしちゃったから。一人であたし達三人にはもう絶対勝てない

よね？　諦めて土下座したら？　そしたら金玉抜き取りくらいで勘弁してあげるんだけどなぁ……。あ、そう言えば小学生の男の子を犯したいとゆう変態の兄がいるんだけどね。呼んどいたから。兄ちゃんに犯されてあげて」

「ふざけんな！　何でワイが男になんか犯されなきゃなんねーんだよ！　ブスが！！　お前達のお陰で早苗ちゃんは散々な目に逢ってるんだ！！　男に犯されたうえに、金玉まで取られてたまるかってんだ！！」

殴る、蹴る、全ての攻撃を呆気なく交わされた剛力剛志は少しずつ、戦意を失いつつあった。

「ハア、ハア、どうなってやがる……全然パンチも蹴りもあたらないじゃねぇか!？　どうしてだ？？」

腕組みしながら莉央が不敵に笑う。

「もう諦めたら？　掛かってくる度にお前の代償は増えていってるのよ？　人生初の屈辱、大人のチンポをアナルにぶち込まれて犯されて、チンポも金玉も去勢……女の子になるのは確定しちゃってるけど？　まだ掛かってくるのかな？」

「うらあああっ！！」

奇声をあげて、最後の力を振り絞った一撃を繰り出す剛司。
左に体を曲げながら右のカウンターが剛司の鼻っ面を的確に捉えた。
鼻の骨が折れて鼻血を抑えながらうずくまる剛司。

「くそぉっ！！　くっそおおおっ！！」

悔しさの余り叫び散らす小学生男子の前に立ち、右足の甲で顔面へサッカーボールキックを蹴り込む莉央。
仰向けに引っくり返されながらも鼻を押さえていた両手の手の甲が骨折、全ての指に力が入らなくなり、肘を立てて必死でうつ伏せになり、起き上がる剛司の目には、既に闘う意志は感じられなかった。

「ムカつくけどもう無理だ。お前らを許してやる。ワイらはもう帰るぜ」

「許してくれるの？　ありがとう。でもあたし達がお前達を許さないんだわ」

勢いよく教室のドアが開き、二十歳の莉央の兄、菅野京介が入ってきた。

「莉央、本当に罪に問われず小学生の男の子を犯せるのか？」

「あ、きたきた。うん。あたしは殺人以外の暴力の許可を国から与えられてるからね。負けてるくせに許してやる！とか抜かしてる日本語を知らないアホなこいつを犯っちゃっていいよ」

「おお、小学生のわりに身長もあるし、犯しがいがありそうだな。閉まりも良さそうだ」

菅野京介は、変な性癖のため、就職しては小学生から幼稚園の男の子に悪戯をしては逮捕……出てきては逮捕……を数回繰り返し、次は何年も出てこれなくなるため、自分を抑えるのに必死だった。

そんなときに妹の莉央の連絡を受け、意気揚々と小学校にやって来た。

切れ長の目で、整った顔立ちの莉央に似た美形。かなりのイケメンだが、男しか性の対象にないホモセクシャル……しかも子供限定とゆう変態であった。

変な大人が乱入してきたことに驚いた他の小学校児童達は、男女全員が我先に出ていこうとドアへ駆け寄る。

莉央が大声でそれを制止した。

「出ていった子は後であたし達が私刑するからね！！　ボコボコにしてやるから！　それが嫌ならあたしの喧嘩だけじゃなく、これから起こることも全て見ていきなさい！！」

委員長の矢野弥生に更に命令する。

「弥生ちゃん、しれっと抜け出した者がいたら必ず報告してね？」
「う、うん。みんな！　これは正義の制裁なんだから怖いけどじっくり観察してくださいっ！」
殴り合いの喧嘩までは男子も女子も楽しんで見ていたが、変な大人が現れたら話は別とばかりに退散し始めたクラスの生徒達は、莉央にビビりながら、委員長の矢野弥生にも説得されながら……各々席に戻っていった。
担任は既に莉央に命令され、グランドを散歩している。

「暴れられちゃ犯れないから、力が入らない麻酔頼むぜ莉央」
「はいはい。でもこいつには苦しんで欲しいから、痛み止めは打たないからね。あくまでも暴れられなくするだけ。泣きわめいても辛抱してねお兄ちゃん」
「ハハハ！　そうでなきゃ人形みたいに動かないわ泣き叫ばないわでは何も面白くないからな！　それで頼むぜ」

鼻血もようやく止まり、手の甲を庇いながら肘で鼻血を拭き取る剛司の側へ歩いていき、手を出して注射を打たせるよう説得する莉央。
拒否してクラスから逃げ出そうとする所を、明日香と美香が顔面と腹部へ同時に前蹴りする。
再び折れ込んで起き上がれないところに、莉央が筋肉に力が入らなくなる麻酔注射を打った。

「お兄ちゃんがバックで犯りたいみたいだからうつ伏せであたしの机に縛り付けてくれる？」

莉央に頼まれた通り、うつ伏せ状態で、机に縛り付ける明日香と美香。

「やめろっ！　このバカども！！　メスブタども！！　絶対いつかギッタギタにしてやっからな！？　覚えてやがれ！！」

「威勢がいいなあ剛司とやら。俺の一物は勃起時には２０ｃｍあるから、剛司のケツの穴は多分持たないと思うぜ？」

京介は、ニヤニヤしながら小学六年生の男子児童、剛力剛司のズボンとパンツを足首までずり下ろした。

「おいっ!?　やめろオッサン！！　恥ずかしいじゃないか！！も、持たないってどういうことだっ!?」

「ここが裂けちゃうってことだよ？」

『つぷ……』

莉央が少年の菊門へ人差し指の第二関節まで突っ込みながら答え

てあげた。

「んがっ！！……このクソブス！！　ケツの穴に何すんだ！？　止めやがれドアホッ！！」

莉央が指を抜いた後、少年の尻の肉を両手の親指で左右に開いてゆく京介。

姿を見せた肛門がパックリ開いていく……。

「うーん、微かに臭う少年のウンコ臭。たまらんなあ。これが夢にまで見た悪戯を通り越した少年のレイプ！！　莉央に、親友のお二人さん、本当にありがとう！！」

「は、はい。ははは、は。とても入りそうにないから、アナルにはローション塗っておきますね？　ははは……は」

「莉央ちゃんにはお世話になっています。クラスのみんなに性教育としてセックスシーンを見てもらいますので早く犯しちゃってくださいお兄様」

明日香は引き吊った笑顔で応え、美香は興味津々でとても楽しみにしている。

クラスの生徒全員が顔を赤くしてドキドキしながら同い年の別のクラスの少年が、肛門をパックリ開かれている姿を見入っている。

「明日香ちゃんに感謝しろよ？　ローション塗ってもらってなきゃ、確実にお前の肛門括約筋はグチャグチャになってたぜ？　じゃあ剛司くん、俺の一物で天国にイかせてやるからな？　ホレ……」

『つぷ……ズブズブ……メリメリ……』

「痛ったあああああっ！！　あっ、熱いっ！？　ぐわあああああっ！！」

直径５ｃｍはあろうかと思える京介の亀頭部分が少年の肛門を押し開き、少しずつめり込んでいく。

裂肛はローションのお陰で辛うじて回避できたが、巨根を受け入れ易くされたとゆう点では、逆に不利だったのかも知れない。

どうやっても入らなければ諦めたかも知れないからだ。

「痛ぃの？　熱ぃの？　気持ちぃいの？　あたしの兄ちゃん、大きいでしょ？　みんなの前で泣いちゃってもいいよ？」

頭を擦りながら苦痛に歪んだ剛司に微笑みかける莉央。

「おいおい、少年！　まだ半分も入ってないのに、それだけ叫んでたら困るなあ。まだ１５ｃｍは奥まで入るんだぜ？　絶対泣く羽目になるなぁお前……」

亀頭部を出したり入れたりしながら反応を楽しむ京介は、典型的

なS丸出しの莉央にとってもそっくりな笑みを浮かべている。

「思いっきりクラスのみんなの前で泣きながら犯されちゃってね？　可愛いわよ？　剛司くん♪」

「誰が泣くかボケェェェッ！！　お前ら見るな！！　教室から出ていけ！！　後で殺すぞっ！？」

莉央の問いかけに大声で叫ぶ剛力剛司。

体は動かなくても、プライドは高い……。男子、女子の皆に見られている哀れな姿に耐えきれない様子だ。

「泣く方に千円！」

「ずるい！美香ちゃん！　私も泣く方に千円」

「美香ちゃんも明日香ちゃんもそれじゃあ賭けにならないじゃん！アハハ♪」

莉央も笑いながら、反対には賭けられなかった。

いつの間にか他の生徒も全員が立ち上がり、近くに寄ってきて必死で見物し出している。

「こんな沢山の少年少女に俺のチンポを見られたら、恥ずかしくて余計ビンビンになってきたぜ……」

更にカッチカチになったペニスを剛司の真横へ向いた直腸方向へ軌道修正する。

「みんな、これが今から全部入っちゃうから見てろよ？　ホレッ！！」

『ズボオオオッ！！』

そのまま一気に根元までぶち込んだ。

「ギャアアアアアアッ！！」

『ぷしゅっ！　ぷしゅしゅしゅっ！！』

少年が叫ぶと同時に、肛門からは真っ赤な鮮血が数回飛び出した。
学校中に響き渡るほどの奇声を上げる剛司。
肛門に莉央の指を入れられただけでも初めての事なのに、２０ｃｍもあろうかとゆう巨根をぶち込まれては堪らない。
思わぬ痛々しさに、両手で顔を覆う女子生徒もいた。
しかし指の隙間からしっかり見ている。

男子生徒も口を開けて目の前の惨事に全員が固まっている。

「小学生には強烈すぎるかな……セックス……とゆうかレイプ……とゆうかアナル淫行……とゆうか……」

やりすぎたかな？　と思いながら莉央が剛司を見ると、可愛いゲッタードリルみたいな形の皮かむりチンポから大量に小便を放出していた。

『ぷしゃぁ――――ポトポト…………ポトポト…………』

「オシッコまで漏らしちゃって……」

ヨシヨシと言わんばかりに痛がる少年の頭を擦ってやる莉央。

「一番奥のＳ状結腸押し込むくらいズッポリ入ったぜ？！　アナルのヒダがヒクついてやがる♪　ハハハハ！！　まだ泣いてはないようだな少年よ？　これからが本番だけどな。もしこれから起こることに泣かずに耐えられたら俺から莉央達に頼んでやるぜ？…………去勢だけは許してやってくれっ、てな。ハハハハ！！」

「ぐぐ、くっそぉおおおっ！！　抜きやがれえええっ！！」

「まだ威勢がいいな。じゃあいくぞクソガキ……食らえっ！！」

『バコバコバコバコバコバコバコバコバコバコ！！！！』

一秒間に三回ほどの菅野京介の猛烈な高速腰使いが始まった。

出ては入る……猛烈なピストン運動が繰り返される。

小学六年生の男女児童たちに見られながら、剛司の肛門は、盛り上がったり、すぼんだりを高速で繰り返されている。

ペニスが出てくるタイミング似合わせて、ヒダとペニスの隙間から鮮血がブシッ、ブシュッっと射出される。

「パンパンパンパン！！　パパパパパパパンッ！！」

更に人間技とは思えない激しいスピードで、京介の腹が少年のお尻の肉を叩きつけていく。

肛門からの出血も更に激しくなり、足元にはかなりの血だまりができていた。

「んぎゃあああっ！！　痛い痛い痛いいいいっ！！　抜いてえええっ！！　わぁーん、わぁーん！！」

ついに大量に涙を流して号泣し始める剛司。

六年三組の全生徒達の前で、更に醜態を晒してしまう……。

いじめっこで強い男の子とはいえ、所詮小学生の児童である。

あまりの痛みには泣いてしまうものだ。

皮かむりの剛司のペニスは、少し粘度のある透明な液が糸を引きながら、プルンプルン上下に激しく揺れている。

「前立腺も激しく擦られているから、カウパー液出してる……」

莉央の言うことによく分からないでいる明日香と美香。

「カ……カウパー液って何なの？」

「俗に言う……先走り液ってゆうイヤらしい液よ。男が興奮したり前立腺を刺激されたりすると、射精前に出てくる分泌物だよ」

明日香の問いに莉央が答える。

「へええ。さすが何でもよく知ってるね莉央ちゃんは……」

クラスのみんなも、初めて見る同級生の性器から出る粘度のある液体に、病気なのかな？　みたいに思っていた子もいたが、莉央の話でなんとなくは納得した。

一部のマセている子達は、全てを知っていたが……。

「うぐ……い、いく、いくぞっ！！んおおおっ！！」

『どぴゅゅぴゅぴゅっ！！』

「んあぁっ！？　熱いっ！、　痛いっ！！　熱いいいっ！！」

激痛の最中、生温かい液体を直腸内にぶちまけられた少年は、痛さと熱さを同時に味わい、更に小便を撒き散らして泣き喚いた。

「ふう。良かったぜ？　剛司のアナルバージン。おっ？　まだケツ穴がヒクヒクしてチンポを締め付けてるぜ。痛みでヒダヒダが痙攣してんのか？　もう少し抜かないで締め付けてもらうとするか。……………ハハハハ♪」

「あたしが先に人差し指突っ込んでやったんだから。あたしがアナルバージンはもらってたのよ？　お兄ちゃん」

「そんな細い指で痛くも痒くも感じてないわこのクソガキは……俺のチンポで絶叫したから俺の手柄だ！！」

レベルの低い兄妹の言い合いをクラス全員の生徒が聞いている。

『ぬぽんっ！　ぷしゅうううっ！！』

京介がペニスを引き抜くと、剛司のアナルからは大量の血液混じりの精液が噴き出した。

白い液体は、剛司の肛門からの分泌物みたいに思っているクラスの皆に、莉央が説明した。

「なるほど、これが前に性教育で習った赤ちゃんになる元の精子なんだね？」

「初めて見たよ」

「何か透明のような白いような……気持ち悪〜い……」

クラスの女子達は各々感想を述べ出した。

男子は相変わらず口を半開きにして京介のデッカイ血まみれの陰部を見ている。

「もうやめて……ごめんなさい。許して。もう乱暴しないから。お願い。グスン……グスン」

机に下半身だけ脱がされた哀れな姿で縛り付けられたままの剛力剛司がすすり泣く声が、教室に静かに響く。

明日香が、足元の小便と、直腸やS状結腸からの血液と、精液を雑巾で拭き取り、莉央に問いかける。

「どうする？　莉央ちゃん？　ついでにこの格好のままで去勢しちゃう？」

「そうね、泣いちゃったからお兄ちゃんのお願いも聞いてあげられないし。仮に泣かなかった所であたし達がリンチして泣かしてたんだけどね。あはは♪」

「どうせならお兄様のオチンチンで、射精もさせてあげたら？　人生最初で最期の射精を……ね♪」

美香の問いに左手の掌を右手でポン！と討ちながら、莉央は頷いた。

「うん、それいいね！　お兄ちゃん、まだ勃つんでしょ？　もう一回アナル犯して、剛司くんを射精させてあげてよ？　去勢しちゃう前にせめて一度だけでも……」

「確かに前立腺への刺激を続けたらその内イクかもしんねぇな。よし、試してみるぜ」

『ツプ……めり、ぐりり、すぷぷぷ……』

再び内側にすぼまされながら異物を受け入れさせられる少年の肛門。

再び血液も流れ出してくる。

「今度は速攻で犯ってやるからな！？　食らえクソガキ！！」

今回は初っぱなから根元まで一気に挿入して、激しく腰を動かし始める京介。

「うぎゃあああっ!?　わああんっ!!　わああんっ!!　お母ちゃん………助けてぇぇっ!!」

「お母さんにこんな姿見られたら自殺もんでしょ?　考えてモノ言うべきだわ?　わかってるのか?　少年よ」

泣き続ける剛司の頬を右手でギュッと掴み、タコみたいな口に変形させる莉央。

「うごごご……」

ヨダレが手についたため、パァンッ!　と顔を平手打ちした。

「汚いなあ……。殺すよ?　しかしあんたも穴とゆう穴から色んな液体出して大変だね?」

哀れそうに剛司の下半身を覗き込む莉央の顔は不敵な笑みを浮かべた子悪魔のようだった。

『ズコズコ！！　バッコンバッコン！！　ズコズコ……』

止まることなく腰を振り続ける京介。
肛門からは、出し入れされる度にイビツなイヤらしい音が奏でられる。

『ぐちゅぐちゅ……クプクプ……メリメリ……クチュクチュ……』

痛みで歪んでいた少年の顔が真っ赤に染まってきたころ、ペニスから大量にカウパー液が流れ出てきた。

「もう射精しそうね……。今よ！　お兄ちゃん！！　最も深く激しく犯っちゃって！！」

「よっしゃあ！！　ほらっ！！　クソガキ、俺のチンポでいっけえええええっ！！」

『バコバコバコバコバコバコバコバコバコバコッ！！！！』

「あはああっ！？　なんか気持ち、い、いい……。オシッコ出ちゃいそうっ！？　やめてえええっ！！」

『どぴゅぴゅぴゅぴゅぴゅっ！！』

人生初の射精は、男に犯されながら、同級生のクラスの全員の眼

前でさせられる羽目になった剛力剛司……。

「なんか、無茶苦茶気持ち良かった……なんなの？　いまのワイのチンポ……」

女子達は顔を真っ赤にして床に光る白い液体の溜まりを眺めていた。

「気持ち良かった？　剛司くん。今のを射精とゆうんだ。あたしのお兄ちゃんのチンポ大きくて良かったね？」

「射精……。そうか。赤ちゃん産ませるための精子ってやつだよな？　しかしケツの穴がヒリヒリして、感覚ないんだか……どうなってんだ一体？　ひっ！？　何っ！？　熱いいいっ！？」

「ハハハ！！　とどめに俺のションベン直腸に注いでやってるのさ。かなり熱いだろ？　へへへ♪」

「ふう。スッキリした。後はゆっくり莉央達からの処罰を受けてくれよ？　死ぬんじゃないぞ？」

そう言いながら、ようやく少年のアナルから巨根を引き抜くイケメンの京介。

ゴシゴシとティッシュで巨根を拭き始めた。

「んぎいいいっ！！」

『プシャー！　ぷしゅしゅううっ！！………。バシャバシャ……』

堪らず下腹部に力を入れて、京介の小便を噴き出させる剛司。

莉央が剛司の肛門近くに、注射を打つ。

ついでに去勢の為の麻酔注射もペニスと陰嚢に打ち込んだ。

自分の切り裂かれる股間を見ていられるように、かなり強力に痛みを抑えつつ、少しの痛みは感じる特殊な麻酔だ。

「かなり広範囲に肛門も裂けちゃって、出血が激しかったから血止めの注射を打っといたよ。これで死なないから安心して。ついでに麻酔もＯＫよ」

「良かった！　ん？　麻酔もＯＫって？　それよりぼちぼちコレを解いてくれないか？　もう憲夫と一緒に反省してから家に帰るからさ」

「まだまだ帰せないからさぁ。あんた、さっきの射精が人生で最初で最期になること……理解出来てる？　出来てないよね？　帰らせてくれ、なんて言ってるようじゃ……」

「おい、莉央！　俺は解剖とか去勢とか切り裂く系のは勘弁だぜ？　お前ほどは残忍になれないし……。全身の力が抜けてチンポも勃たなくなりそうだからさぁ……」

「お疲れ様。お兄ちゃんはもう帰っていいよ。剛司くんの去勢はあたしがやる。もう一人の憲夫くんとかゆう子はクラスの女子達にや

らせてあげるつもりだから」

「おう！　じゃあな剛司っ！！　気持ち良かったぜ。またケツ穴掘られたかったら莉央に頼んで俺を呼んでくれ。いつでもぶち込んでやっからよ？　ハハハハハ！！」

そう言いながら剛司の尻をパンパンと二回叩いて、ズボンのチャックを閉めて、クラスの皆に手を振りながら教室を出ていった。

「大人の男の人のオチンチンなんて初めて見たよ私……」

「あたしもだよ明日香ちゃん……なんか凄いイチモツだったよね？」

「このままだと後ろ向きだからやりづらいなぁやっぱ……。面倒くさいだろうけどさ、縄を一度解いて今度は椅子に縛り付けてくれるかな？」

莉央の指図で明日香と美香が素早く動く。

力が入らない注射を打たれている剛司は成すがままに体位を変えられる。

「また縛るのか？　もう、何も暴力振るったり仕返ししたりしないから帰してくれ！　お願いだ……」

「後少しの辛抱だよ。ここからがメインイベントなんだから。あたしの腕を信じなさい。絶対に死んじゃうことはないから……」

椅子に縛り付けられた剛司の正面に莉央がしゃがみこんで、医療用のメスを取り出した。

「女子の皆さん、もっと近く寄ってきて。ようく見える所まで近寄ってきて。今から男子の陰茎と睾丸の解剖を始めるから。いい勉強になるよ？」

何も言わずクラス中の女子全員が輪になって剛司と莉央達四人を囲んだ。

男子も遠巻きに隙間からヒョコヒョコ顔を出して見ている。

「じっくり冷静に自分の性器が見られるように麻酔してあげるから感謝しなさいね？　ほんとは麻酔無しで身動き取れないまま解剖するつもりだったんだから。莉央様、ありがとうございます。って言ってよ？」

「莉央様……あ、ありがとうございます……。ついでに許してくれ……」

「女の子になってこれからの人生、穏和に生きなさい。あんたは気性が荒すぎるんだよ……。でもね、去勢したら大人しくなるのが生き物の常だから、あんたも例外じゃないよ」

牛や豚のように、簡単に人様である自分が去勢される現実を受け

入れられないままの剛司であるが、こいつらは本当にやりそうだ……やりかねない……とゆう恐怖には本気で気が付いていた。

「ちょっと失礼しまーす」

美香がペニスを指で掴み、上に向けて陰嚢を丸見えにする。

莉央のメスの切っ先が小学生の剛司のキンタマ袋に襲い掛かる。

『プツッ……ススス……スパァァ~……』

「痛いっ!?　な、何してんだ!?　や、止めてくれっ!!」

「麻酔で痛みはあまり感じないでしょ？　少しは痛みがないとせっかく切り裂かれてるのに詰まんないと思ってね♪　特殊な麻酔打ってるからご安心なされ」

僅か三秒で剛司の陰嚢は縦に切り裂かれ、パクっと左右に開かれた。

莉央の白い人差し指と親指が陰嚢の切開部へ挿入されていく。

『ゴクッ……』

明日香も美香も女子生徒達も、生唾を飲んで莉央の指先を凝視している。

『くいっ。ズルル……ズルリ』

ついに右の睾丸がつまみ出された……。

ガヤガヤと女子達の動揺する声が教室に響き渡る。

「ひいいいい……あまり痛くはないけど何か金玉の中をいじられてる感覚があるぞ？　怖い……もうやめてっ！！　うわっ！？　ワイの金玉出てる！？　ギャアアアアッ！！」

精管や神経の管を切り取り、白い睾丸は完全に莉央の掌の上に乗った。

「うるさい。麻酔打ってあげてるんだから黙って見てろっ！！　これが男の金玉♡　金といっても白玉なんだけどね」

生の睾丸を初めて見た女子達は顔を真っ赤にして頬を両手で抑える。

でもやっぱり指の隙間から見ている。

剛司の眼前に手を近付けてアップで見せ付ける莉央。

「ほら、あんたの、右の金玉。抜き取られてどんな気分？」

歯を食いしばりながらも涙を流す剛司……。
目を瞑って下を向いた。

「見てられないか……。そっか。そうだよね。自分の性器が切り離される所とか切り離された生の自分の性器とか見たくないよね？」

横にいる美香の右手に睾丸を乗せた。
クラスの女子全員に廻されていく生の右側睾丸……。
指で掴んでプニプニさせたり、乗せた瞬間、気持ち悪がって横の女子に廻したり、反応は色々だった。

男子は横目で廻される睾丸を見ているだけだった。
下腹部がひゅっとなる恐怖を全員が体験していた。
他人事ではない、男にしか分からない恐怖を感じる男子生徒達……。

全員に廻された睾丸が莉央のところに帰ってくると、剛司の口元へ運び、一言言い放つ。

「食べろ」

周りの生徒達は莉央の残酷さに恐怖を覚えていた。
あまりの残酷さに、しくしく泣き出す女子も数人いた。

「そこまでするのか？　そこまで人間は残酷になれるのかっ！？
グスン……グスン」
　すすり泣きながら莉央に問いかける剛力剛司であるが、莉央は目を細めて更に囁く。
「食べないなら、お腹の中の内臓全て引きずり出して、犬や猫の餌にしてやるから……要するに殺してやるからね？」
「ひっ、ひいい……パクン……」
　それを聞いて慌てて自分の睾丸を咥える少年。
「飲み込もうとしてるよね？　ダメ。よく噛んでぐちゃぐちゃにしてから飲み込むの。分かった？」
「は、はい。　ぐちゃ、ぐちゃ、くちゃくちゃ……ゴクッ！！」
「やれば出来るじゃん、　さすがいじめっ子の剛司くんだね！　スッゴーい♪」
　莉央の説明を聞いた美香が右手の二本の指を少年の陰嚢へ挿入していく。

生の左の睾丸を掴み、ゆっくり引きずり出していく。

「こう、かな？」

『ズルリ……ぷるるんっ』

美香の右手に引きずり出された左の睾丸も、即、精管と神経の管を切断され、少年の眼前に持っていかれた。

「目の前で潰してやって」

莉央の命令に、すぐさま答える美香。

「うん。いくよぉぉ？　ようく見てなさい！」

「見たくない！！」

見たくないと言った瞬間に、莉央の往復ビンタが１０回炸裂した。
涙とヨダレを振り撒きながら目を開けさせられる剛司。

「ああぁっ！！」

『ぶちゅっ！！』

卑猥な音を立てて、左の睾丸は潰された。
白く、半透明な液体と、ピンク色の血液が美香の右手と顔に飛び散った。

「すっごーい……ほんとに潰しちゃった……」

「変な液体いっぱい出るんだ……」

続いてメスを皮かむりのペニスの先端にあてがう莉央。

「そこだけは勘弁してくれ……ションベンできなくなる……」

「尿道造形処理できるから安心して。座ってオシッコできるよ」

『ズブッ……ズズズズ……スパッ！！』

あっとゆうまに尿道の、割れ目に入ったメスは下腹部まで竹割りに切り裂いた。
左右に開かれたペニスの中身はピンク色で、真っ白な尿道も丸見えだった。

女子全員に数分間切断部を見せてあげた後、根元まから横方向にメスをいれて、完全にオチンチンは剛司の下腹部から消滅した。

ペニスの断面部に人差し指を突っ込み、残った尿道をきちんと手術して、尿道が、塞がらないように処置をしてあげた。

「よし！　剛司くんの制裁はこれで終了。帰っていいよ？」

そう言って拘束をといてあげる莉央。
しかし、あまりの絶望感に、目を閉じて意識を失ってしまう……。

「あらら、よほどショックだったんだね。しばらく寝かせといてあげようか……次は憲夫くんだけど……まだ寝てるの？」

「もう起きてるみたい。こっち見ながらオシッコ漏らしてるから……」

明日香がオシッコ漏らしてる憲夫を嘲笑いながら見つめている。

「こいつを素っ裸にしてやりなさい」

クラスの女子達全員に命令する莉央。

後が怖いため、嫌がりながらも別のクラスの同級生男子を寄ってたかって裸にする女子児童達……。

「…………」

無口な拳法の達人の少年は、黙って成り行きを見守っている。
自分の後ろに女子達が並び始めたことに、違和感を隠せなくなった大林憲夫がついに口を開いた。

「何をする気なんだ？」

「クラスの女子に、順番に股間を蹴っていってもらって、あんたの金玉潰した子に、好きな男子生徒のチンポを射精するまで触れる特権を与えたのよ。面白い発想でしょ？　あはは。好きといっても告白して断られた相手に限るだけどね。じゃなきゃ好きな恋人のチンポを、皆の前で晒すなんて出来ないし、嫌な筈だから」

「嘘だろ……やめてくれ！　ほんと頼むよ？」

『ドカッ！！』

「んぎいっ！！」

美香と明日香の合図に気づかなかった憲夫は、不意打ちを食らったかのようにカクンと腰を落として痛みに耐える……。
莉央が憲夫の睾丸を握り、潰れてないことを確認すると、さあ次と言わんばかりに並んでいる女の子に指示を出す。

『ズゴッ！！……ぶちゅっ！！』

違和感を覚える音に、莉央は念入りに確認すると、左の睾丸が確かに粉砕されていた。

「おめでとう！　伊藤美咲さんだっけね？　あなたの好きな佐藤哲也くんを射精させる権利を与えたからね！お楽しみに」

泡を吹いてた折れ込む憲夫。
痛み止めの注射を打ってから再開された。
七人目で音に違和感……二つ目の睾丸も潰されていることを確認。

「川栄美奈さんね？　鈴木達也くんのを好きにしていいよ」

莉央は、残されたペニスを左手で掴み、メスで根元から切断した。尿道をきちんと処理してあげた上で、左手に握られた切り離されたペニスは即、ゴミ箱に投げ捨てる。
更に陰嚢を縦に切り裂き、潰れた睾丸も綺麗に指でほじくり出して、消毒、縫合して仕上げた。

「これで終了。あんたも死なないから安心して」

服を着た二人はやっと莉央のクラスの皆から解放された。

腰をガクガクさせながら帰路につく剛力剛司と大林憲夫。
もう二度とあの三人に近寄らない事を決心するのであった。

「おい、チンポと金玉切り取られたこと、親に言うのか？」

「いや、俺は恥ずかしくて言えない……剛司は？」

「言えるわけないぜ……悔しいけどなんか金玉取られてから妙に穏和な気持ちになってんだよなぁ。こりゃ、牛や豚も温厚になるはずだな」

「そうだね、俺もなんか女の子になったような気分だよ」

敗者二人はトボトボと帰っていった。

まだ教室では皆、帰れない状況が続いている。
先程のゲームの勝者、二人の女子児童を以前に振った男子二人がズボンとパンツを脱がされた状態で、机の上に立たされている。

「振っちゃってごめんなさい！僕のオチンチンの皮を引き剥いて、生のカリクビ見てください！　って言いなさい」

莉央が男子二人に命令する。

伊藤美咲と川栄美奈は、以前に自分達を振った二人の男子児童を見上げていた。

好きだっただけに、どうしても顔とオチンチンばかりを見てしまう二人の女子児童だった。

「美咲ちゃん、振っちゃってごめんなさい。僕のオチンチンの皮を……」

『ぎゅっ、バリバリ……』

「痛あああいっ!?　わーん！わーん！！」

伊藤美咲は台詞を聞き終わる前に人差し指と親指でオチンチンを掴み、一気に亀頭が全開になるまで激しく引き剥いた。

更に血が出てるペニスに構わず、小指を尿道に付き刺して、グリグリ掻き回す。

佐藤哲也は更に激しく号泣し始めた。

「これで忘れてあげる。哲也くん。オチンチンってこんな風に割れ目が付いてるんだね？　可愛いよね？ほらほら……割れ目からも血が出てる。うふふ♪」

「まだ私たち以外に残酷な子っていたんだね？　美香ちゃん……」

「ほんとね。やっぱ莉央ちゃんが最強だけど……他にもいたんだね～」

「次！　川栄美奈さん、鈴木達也くんをやりなさい」

「うん。ちょっと痛いけど我慢してね？達也くん……」

「や、やめろ！　川栄！　タイプじゃないんだから仕方ないじゃん！　こんな恥ずかしいことしないでくれよ！？」

莉央が鈴木達也のお尻をパンパン叩くと、みるみるうちに包茎ペニスは膨張していき、少し亀頭部がはみ出すまでに、大きくなった。更に莉央の人差し指が達也の肛門へ根元まで突っ込まれた。更に固くなるペニス……。

「さあ、今がイカせるチャンスだよ！　川栄さん、早くチンポを！」

「ちょ、ちょっと！？　どういうつもり？　なんで莉央ちゃんにお尻を叩かれてお尻の穴になんか指入れられて大きくなってるの？……まさか……」

「そのまさかなの……ごめんね、川栄さん。鈴木達也くんは先月、あたしに告白してきて、断ってしまったから……あたしに変なことされたらすぐに勃つかなって思って……手助けしたげたのよ」

『シコシコシコシコシコシコ！！　シュコココココッ！！』

猛烈なスピードで川栄美奈のテコキが始まった。

「もうどうでもいいから。あんたなんて。最後にクラスのみんなの前で射精させまくってやるから」

やけになった川栄美奈のテコキには、気がない相手さえ関係なく気持ちよくさせていた。

「う、気持ちいい、あんっ、いく、いくっ！！」

既に精通していたオナニー好きの男子児童、鈴木達也は、皆の前で大量の精液を撒き散らした。

「きゃーっ！？」

「きったなーい！！」

「自分を好きだった子の前で、他の女子になんかされて興奮するなんて最低っ！　死んじゃえぇっ！！」

見ている女子達が色々ヤジを飛ばした。

「男子全員、フリチンになりなさいっ！！」

いきなり叫ぶ莉央。

ほんと男って録なのいない。最低っと思った莉央は、なんの落ち

度もない他の男子生徒も、全員下半身だけ素っ裸にして、後の授業を受けさせた。

グランドの散歩から戻ってきた25歳の若い担任の女教師も、クラスの男子全員が何でフリチンでいるのか、大体理解できていた。

『これって校長から去勢が趣味って聞いている……菅野さんたちの命令よね。逆らっちゃいけない……逆らっちゃいけない……見てみぬ振りだわ。あの男前の前田くんのチンチン、ちゃんと剥けてるじゃん♪　可愛い♡　やだ、私ったら。授業授業っと！』

菅野莉央たちの女尊男卑、男子奴隷化計画は順調に進んでいた。

莉央の男子奴隷化計画（後書き）

残酷なストーリーはまだまだ続きます。

莉央の女教師とその一家制裁計画（前書き）

調子に乗りすぎた担任の安藤幸恵に、莉央達三人の制裁が始まる――――。

莉央の女教師とその一家制裁計画

莉央の男子奴隷化計画が進む。男子は授業中ずっと下半身裸を強要させ、女子達の中には恥ずかしがる子や、嫌がる子や、喜んでいる子……様々な感情を持って授業を受けていた。女教師、安藤幸恵は25歳の6年3組の担任である。

小学生とはいえ、男前で自分のタイプの前田隼人のオチンチンをチラチラ見ることが最近の楽しみだ。

「前田君、次の四字熟語を読んでみて」

「……わかりません」

「昨日教えたばかりですよ？　私の横に来てずっと立ってなさい」

「はい……」

生徒達に次々と問題を出して行きながら、左右に歩き回る安藤幸恵。

前田君の前を通り過ぎる度に、ついの振りをして、右手や左手でオチンチンを触っていく。

「あっ！？」

「やあっ！？」

「ん？　どうしたの？　私が通る度に変な声出して。私の授業を聞いてないから立たされてるのよね前田君？　どうしてそんなに頬が赤くなってるの？」

６年３組の女子児童達には、クラスの男子に対して好きなことをして良い許可を与えている菅野莉央だったが、女担任の安藤幸恵に与えたつもりはなかった。

「あいつ、好き放題やってるよ？　ほっといていいの？」

莉央の感情を気にしながらも隣にいる富田美香に尋ねる結城明日香。

「あっ!？　前田君の後ろに回り込んで膝を股に突っ込み出したよ？　やだ！　キンタマをポンポンとリフティングし始めちゃってるし。なんかエッチ……。莉央ちゃん、担任の先生も男子を好きにさせて良かったの？」

調子に乗る安藤幸恵をじっと見つめながら静かに呟く莉央。

「今日の放課後、空き地にある廃墟の資材倉庫にあいつの家族を呼んで調教しよう」

「家族もやっちゃうの？　……確か幼稚園の年長組お兄ちゃんが５歳で、下の女の子か４歳って聞いてたけど――――」

富田美香が顎に右手をあてながら思い出すように言った。

「旦那さんは近所の小さい内科の先生みたいね。一度見たことあるけど、大人の男にしては背が小さくて、ガリガリで頭だけ良さそうな……要するにスッゴく弱そうな男だったよ」

結城明日香も一度見た女教師の旦那のことを思い出しながら悪口を言う。

「わかった？　今度からはきちんと私の授業を受けなさいよ？　おしりを突きだして四つん這いになりなさい！」

『パン！！　パン！！　パンパン！！！！』

前田君のお尻を容赦なく叩き始める安藤幸恵。

「痛いいいっ！　ごめんなさい。先生！　反省しますから許してくださいっ。あーん、あーん」

更に強く数十回と叩き続ける。延々と叩き続けられたお尻は真っ赤になっていた。
オシッコを漏らしながら涙を流し、その場にヘタリ込む小学6年生の男の子……。
後ろから股間に手を入れ、皮かむりのオチンチンをギュッと右手で握った。
剥ける範囲まで皮を剥き、少し露になったピンク色の柔らかい亀頭部をチョンチョンと人差し指で優しく触る。
ピリピリと、擦りむいた生傷に触れられるような痛みが少年のオチンチンを襲った。

「――――痛っ！！　――――痛いいっ！！」

「よしよし。こんなところお母さんにだって触られたことないでしょう？　ピリピリ痛かった？　根っこまで引き剥いて前田君の大切な部分の剥き身を見てみたかったんだけど……傷付けて犯罪者にはなりたくないからね。うふふ。もう今度から気を付けようね？　ちゅっ！」

「えええっ！？　オチンチン痛そう……」

「ひゃあっ！？　チューしてる！？」

「そんなことまでしてもいいの！？」

「そんなことしたらもう十分犯罪者になってると思うけど！？」

いきなりオチンチンの皮剥きと、前田君の頬を両手で包み、正面から口へのキスに、動揺を隠せない他の児童たち。

「う、うぷっ！？　んん……」

『ズズ……クチュクチュ……くちゃ。くちゃ…………』

キスさえしたことがない１２歳の男子児童に、いきなりのディープキスを食らわす女教師、安藤幸恵――――

更に服の裾から手を入れて、ピンク色の小さな右胸の乳首をグリグリと揉み扱き出した。

「痛いっ！？　先生……痛いよ？　やめて……」

『ぐちゅるるる……ぐちゅちゅ！！　――――ぬぽっ！』

安藤幸恵も男子児童の前田隼人ほどに頬を赤くして、散々舌から唇から歯から舐め尽くした後、ようやく少年の口内から舌を抜いた。

「本日の授業はこれでおしまい。男子は忘れずに下着とズボンを履いて下さいね！　では気を付けて帰りなさい。さようなら」

「先生、さようなら。皆さん、さようなら」

クラスの全員が声を合わせて挨拶する中、莉央達三人は安藤幸恵を睨み付けていた。
校門を出てから急ぎ足で幼稚園に子供二人を迎えにいく女教師。後を追うように後ろを付いていく。

「お世話になりました」

「今日はかなり鬼ごっこで走り回ってたので悠太くんはお家に帰ったら爆睡ですよ♪　花怜ちゃんも一生懸命お歌を歌ってましたから同じく疲れてると思います」

「悠ちゃん、花怜ちゃん、さぁ帰ろうか。お家に帰ったらすぐにパパとお風呂入ってきてね！　出てくる頃には二人が大好きなハンバーグが待ってるからね♪」

三人で歌を歌いながら帰路に付く。

「可愛いお子さん達ですね！　先生。悠太くんってゆうんだ。ボク……ママにそっくりだね！　何歳？」

公園の入り口から莉央が現れて声をかける。
5歳と答える年長組のお兄ちゃんの悠太。

「花怜ちゃんも可愛いねー？　お嬢ちゃんはいくつ？」

「4歳だよ」

結城明日香は娘の方に話しかける。即答する安藤花怜。

富田美香は安藤幸恵をじっと見つめながら、口を開いた。

「ちょっと話があるんだけど、親子三人であたし達と来てくれる？」

「な、何の用か知らないけど……早く帰って子供たちをお風呂に入れないと。主人も待ってるから急いで帰りたいのよ。また明日学校で聞くから」

「まああまあ……………今来ないと一生後悔することになるけど構いません？　せ〜んせっ♪」

美香は大きな目を目一杯細くして安藤幸恵先生に微笑みかける。

結局何か恐怖を感じたこともあり、素直に従う安藤幸恵。

半時間ほど歩いただろうか……。町の外れにあるこじんまりした倉庫らしき建物がある空き地へたどり着いた。

「ここよ。中に入って」

莉央の指示に従い、仕方なく倉庫に入る親子三人。

「こんなところに連れてきてなんだって言うの？　変なことしないでねお願いだから……」

「旦那さんも電話で呼んでおいたら？」

「なんか怖いから呼んでもいいなら呼んどきます」

町医者の旦那様にも電話で救援を呼び、倉庫の中で周りをグルッと見渡す教師であり、二児の母親でもある安藤幸恵。

『なんか不気味な倉庫だわ……嫌な予感がする』

嫌な予感がする…………それは確実に当たってしまうことになる。

『ガラリ……』

閉めて間がない扉が再び開いた。

「あなた！！」

「ヤッホー！！　今日も児童を犯せると聞いて颯爽と現れたぜいっ！！」

現れたのは菅野莉央の兄であり、ホモセクシャル……児童、幼児限定の変態野郎――――菅野京介であった。

「出た！！」

「出たわね……」

不意打ちの変態アニキの登場に焦る美香と明日香であった。

「おいおい………《出た！》とか言っちゃうのって酷くね？　お化けや妖怪みたいじゃないか？　なぁ莉央」

「あはは！　妖怪よりタチ悪そうだけどねお兄ちゃんの場合は♪」

「お？　ベッピンさんに二人の幼児ベイビー！！　二人とも可愛いいいっ！！　小学生児童も良いが幼児はもっといい！　うん！！」

二人の幼稚園児の方へ、しゃがみながら駆け寄る京介。
すぐに二人を抱き寄せ、庇おうとする安藤幸恵。

「やめてっ！！　子供たちに何かしたら殺すわよ！？」

「ひょっほぉーっ！！　威勢がいいな女教師さん♪　誰から犯して良いんだ？　莉央」

「う～んとね。。取りあえず安藤先生を犯すシーンを幼児の兄妹二人にようく見せてあげて。そのうち旦那さんが来るからボコボコにしてやってよ。そいつはあたし達が犯すから……」

「犯す？　女のお前達がオッサンをか？　何をする気なんだ？」

「この極太ペニスバンドで肛門ズタズタの血まみれになるまで掘ってやるのよ。奥さんが見てる前でね♪　お兄ちゃんに犯されながらだからそれどころじゃないか先生も……あはは」

「な、何を言ってるのあんたたち……バカなことはお願いだからやめて！！　ここから私達を帰して！！」

その時だった。
目を丸くして安藤幸恵から電話で呼ばれた町医者の旦那がドアを開けて入ってきた。

「なにやってんだこんなところで？　早く帰ろう。家ですることがたくさんあるだろう？　幸恵」

『ドカ！！　ズドン！！　ズドン！！　グシャ！！』

「ギャヒイイイッ！？　いたたたた……ごほ……ごほ」

京介の顔面パンチが一回と、二回の腹パンチと膝ゲリが肋骨に一回、四回の攻撃が連打で決まり、肋骨を折られた安藤公夫は呆気なく倒れ込んで咳き込む。

「じっとしててね旦那さん」

身動き出来なくなる麻酔注射を町医者の旦那に打つ莉央。
服を全て脱がして、仰向けに押し倒し、両手で旦那の両足を大きく開かせながら不敵に笑みを浮かべて呟いた。

「安藤先生の旦那さん、いつも安藤幸恵先生にはお世話になってます。幼児の兄妹さん達への性教育と、先生へのお礼もかねて……あたしが正常位で犯してあげるよ。あんたのケツマンコ……」

「えっ？　何言ってんだ!？　小学生の女の子に犯されてたまるもんか！！」

「ここね？　くさっ!？　汚ない……うんち付いてる。ちゃんとウォシュレットで綺麗にしとかないと？　おしおきだね。ほら、入るよ？」

『ズブブ……メリメリ』

妻と幼児の子供二人が見てる前で、肛門を小学生の女の子に犯されていく安藤公夫３８歳。その姿は究極に哀れである。

「痛っ!？　痛い痛いっ！！　や、止めろっ！！　くそ、体が動かんっ………」

「マングリ返しと言うか……ちんグリ返しだねこの格好？　恥ずかしいでしょ？　一気に飲み込むのよ？　ほらっ！！」

『ドボオッ！！　ブチブチ……プシュシュー！！』

「ンギャアアアッ！！」

莉央の直径５ｃｍ、全長２０ｃｍはあろうかとゆう極太ペニスバンドが、安藤公夫のアナルに根元まで突き刺さる。
肛門括約筋が数ヶ所断裂し、凄まじい量の血液が周りに飛び散る。
涙を流して苦痛に顔を歪める旦那。

「や、め……ろ。ひぎっ！？　痛いっ……くそおっ！！」

『バコバコバコバコ！！』

構わず激しく腰を振る莉央のケツマンコレイプ……。
太股から靴まで安藤公夫の血で染まっていく。

「ほらぁ～……ピストンするごとにドクドク血が出てくるねえ？　臭っさいケツマンコから……うふふ。小学生の女の子にアナル犯される心境は？　ちょっと！？　生温かいアナルの汚い血をあたしの足にヒリ掛けないでくれる？　腕突っ込んで大腸引きずり出すわよ？」

「あなたっ！！　大丈夫っ！？　やめてっ！！　もう許してあげて菅野さんっ！！　酷いっ！！」

「えーん！　えーん！！　パパが泣いてるよぉ！！」

「ママ！　パパを助けてええっ！！」

妻子三人の悲鳴が木霊する倉庫内…………。
明日香と美香は哀れな姿を妻子に見られてヒイヒイ叫んで泣いている旦那が可笑しくて堪らなかった。
二人とも手で口を塞いでクスクス笑いながら莉央に犯される旦那を見ていた。

『バリバリ……ビリビリ……ビリビリ……』

一気に安藤幸恵の服を引き裂く菅野京介。

「やっ！？　やめてっ！！　子供が見てる前でよくそんなこと……」

「大人しくしていないと余計痛い目にあうぜ？」

そう言いながら上半身を全て剥ぎ取り、更にジーンズとパンツを一気にずり下ろし、背後から抱き締めながら両方の乳房を激しく揉み扱き出した。

「ああっ……や、やめ……て」

幸恵の両足を、両手で背後から抱えあげ、そのまま机の上にうつ伏せに押さえつけた。
泣き叫ぶ子供が母親を助けに駆け寄ってくる。
構わず両手でお尻の肉をパクンと開き、母親の性器と肛門を見せつける京介。

「ほら、これがお前らが出てきたオマンコってゆう穴だ！　その上のが糞する汚い穴だ。ようく見てろよ？　それっ」

『ずぷぷ…………』

「ひっ！？　やめてえええええっ！！　それだけはやめてえええええっ！！」

「ダメだな……幼児の兄妹にマンコを見守られながら旦那の前でイカせてやるぜ？　最高の記念日になるな！？　ははは！！」

『ズボオオッ！！　バコバコバコバコ！！』

一気に性器に根元まで突き刺し、京介の特大ペニスは、そのまま激しくピストン運動されていく。

「んぎいいいいっ！！　痛いいいっ！！　裂けるううっ！！　やは

ああああっ！？」

「ママー！！　ママー！！」

ひたすら悠太は安藤幸恵の顔を覗き込んで苦痛に歪む顔を見ながら一緒に泣いている。

「あーん、あーん、ママに酷いことしないでえええっ！！」

花怜は京介のペニスを掴み、母親の性器に入れされまいと、必死に引っ張る。
感じているのか自然な反応なのか粘液でドロドロになってくる性器を触るので、４歳の花怜の右手も、母親の愛液でドロドロになっていた。
莉央は激しく腰を振り続けながら美香に言った。

「美香ちゃん、その子の処女膜破っといて」

「え？　こんな小さな幼児の女の子なのに？　酷くない？」

さすがに親への仕打ちは笑えても４歳、５歳の幼児の折檻は心が痛む小学六年生の富田美香であった。

「前の続き……やるわよ？　美香ちゃんの処女膜もらうけどいい？」

「ひっ！……わかった！！　………明日香ちゃん、ちょっとこの子抱いててくれる？」

「う、うん。いいけど。――――本当にこんな小さな子、やっちゃうの？」

「莉央ちゃんには逆らえないし……まぁあの調子に乗ってる変態女教師の子供だからね……そう思えばなんかムカつくし。抱いててね。ズボンとパンツ脱がせるから」

「うん。さぁ花怜ちゃん、高い高いしよーね！　ほーら、高い高い～」

「ぐす……ぐす……ママ！　パパ！！　えーん！　えーん！！」

莉央と京介に犯されている両親を交互に見ながら泣きじゃくっているので、結城明日香のせっかくの《高い高い》にも喜んではくれない。

『ぐっ……ズルズル……ズルリ』

美香は４歳の幼女のズボンとパンツを手際よく脱がせた。

「やあああっ！？　やめてええええっ！！」

下半身裸にさせられた幼児の両足を明日香が後ろから抱えて、左右に大きく開かせた。

『ぱくんっ』

４歳の女の子……花怜の性器がぱっくりと開き、中身が丸見えになった。

「こんな格好で昔よくお母さんにオシッコをさせてもらってたね……懐かしい。性器、ちゃんと見えてる？　美香ちゃん」

「うん。バッチリだよ。あたしの人差し指でも可哀想なくらい小さな膣口だけど……入るのかな？　でも大陰唇はデカいのね？　幼児って」

「あはは。確かに。性器の辺りは殆ど大陰唇みたい。膣口は多分強引に捩じ込めば入るよ。穴って意外と開くモノだから」

「パパもママも泣いてるのね？　痛いんだねきっと……可哀想に。花怜ちゃんも悲しいだけじゃなく、これから本当に痛くなるけど我慢できる？　覚悟してね？　いくよ？」

『ツプ……ズブズブ……』

「ンギャアアアッ！！　痛いよぉっ！！　痛いよぉっ！！　指入れないで！！　お姉ちゃん……ゆるちて……痛いよ……」

「ゆるちゃない。４歳で処女喪失……おめでとう♪」

『ズボッ！！……ばり』

４歳の女の子の小さな処女膜は、あっとゆうまに小学六年生の女の子の細い指で破かれた。

少量だが鮮血が流れ落ちる。

張り裂けんばかりに泣き叫び出した花怜は、必死で足を閉じようとヒクヒクさせるが、明日香がそれを許さない。

更に最大限に股を開かせるように左右に開いていきながら囁いた。

「ほら、ケツの穴にも美香姉ちゃんの指を入れてもらいなさい。イイ子だねぇ花怜ちゃん」

「ほら、今度はお尻の穴だよ？　泣きまくるうるさい子はこっちの穴も折檻しちゃうからね？　こっちの処女もいっただきっ♪」

右手の人差し指を性器に突っ込んだままで、左手の人差し指が花怜の肛門に突き刺さる。

『ツプ……ずぷぷ……すぼぉっ！！』

「んぎゃああああっ！？」

一気に根元まで捩じ込まれ、更に号泣する幼女の小さな膣口からは、ドクドクと血が流れ出ている。

「マンコからの血がアナルに流れてきてるから、ちょうどローション替わりになってる。これならもう一本入りそう」

『ぐぐ……めりめり…………バスッ！！』

更に中指までも根元まで花怜の肛門へ捩じ込まれた。

「ぎゃあああっ！！　んあああっ！！　いだいいいっ！！　抜いて抜いて抜いてえええっ！！」

「だめよ、だめだめ。花怜ちゃんのエッチな穴、前も後ろもぐちゃぐちゃにしてやるんだからぁ♪　それそれ。痛い？　気持ちいい？　まさかね……あはは」

『グリグリグリグリ……ぬぽっぬぽっぬぽっ……』

四歳の幼女である花怜の直腸を左手の人差し指と中指の二本の指でグチャグチャに掻き回す美香。

前の穴もクチュクチュ掻き回しながら……。

数分掻き回してからようやく右手の人差し指と左手の二本の指を二つの穴から引き抜いた。

痛みと恐怖ですぐに寝てしまった安藤花怜の口の中へ、恥垢と大便がこびりついた指を三本捩じ込んで、口内掻き回して綺麗にする

富田美香。
「美味しい？　自分の汚物は自分で綺麗にしなさいね。もうこれくらいであんたは許してあげるからゆっくり眠ってるのよ？　うふふ」
母親の幸恵は、あまりのショックと激痛の末、ついに気を失った…………。

――――数分経っただろうか――――ぼんやり目覚めると、同じく気を失って倒れている夫と、スヤスヤ寝ている花怜の姿が微かに浮かび上がる。
微かに耳元に響いてくる聞き覚えのある声……。意識が戻るにつれ、現実の大きな声となって確実に意識が戻る。

「あ、あ、あひいいいっ！！わーん、わーん」
「――――――ん？　この声は…………悠太？　悠太！？」
「ママー！！　ママー！！　痛いよっ！！　痛いよっ！！　助けてママァーッ！！」
『ズッコンバッコン！！　バコバコバコバコバコバコバコ！！』
莉央と明日香と美香に押さえ付けられながら、京介にバックでアナルを犯されている最愛の５歳の息子のよがり泣く姿が段々と浮か

び上がってきた。

「ママー！！　ママー！！　ひいいいいっ！！　許してっ！！　ボクを許してええええっ！！　痛いよおおっ！！」

「悠太あああぁぁっ！？　いやあああああっ！！」

その光景を見て、狂ったように泣き叫ぶ安藤幸恵。

莉央の右手が幼児の股間に伸びる……。

「先生、見てて。ほら」

『ぎゅっ……ぐぐぐ……ぶちゅっ！！』

「ワアアアッ！？　いだいっ！！　いだいいいいいっ！！」

母親の目の前で右の睾丸を潰された悠太。

アナルを犯されながら、裂けた肛門から夥しい流血。

莉央よって握り潰された1ｃｍほどの小さな幼児の右睾丸……。

駆け寄ろうと立ち上がった瞬間、明日香の右足の先端部分が幸恵の性器にめり込んだ。抜いた瞬間血が噴き出す。

「大人しく見てるのよ？　せんせ」

「ひぎいいいいっ！？　痛いいいいっ！！」

股間を押さえながら泣き喚き、転がりまくる先生……。

「左の睾丸だけは残しておいてあげるから、将来孫の顔は見られるかもよ？　先生」

少しの慈悲に涙を流す幸恵。

「もう家族全員むちゃくちゃ酷いことされてるけど……悠太の睾丸一つだけでも……それだけでもありがとう……莉央ちゃん」

号泣しながら三人に土下座してお礼を言う。
その隙に莉央は素早く医療用のメスを取り出し、悠太のオチンチンを根元からスパッと切断した。

「前田隼人君に悪戯した制裁がこれだよ？　せんせー♪」

激しく飛び散る血飛沫に、何事かと顔を上げる幸恵の顔面に強烈な明日香の前蹴りが炸裂した。

「今は見ない方がいいよ？　先生。また お家に帰ってから家族みんなの色んな所を点検してみてね？」

「娘さんの処女膜あたしの指で破いちゃってごめんなさい……破ける瞬間にぷちゅっ、とかゆう変な音がして面白かったです。アナルは指を二本突っ込んで掻き回してやったから。拡張気味に調教しといてやりましたので。花怜ちゃんよく頑張ってたよ。うんうん」

「…………………」

唇を噛みしめて顔を歪ませながら屈辱と怒りに震える幸恵であったが、もはや何をしてもこの三人には敵わないことを悟っていた。

『命があるだけまだマシだよね……』

そんなことを思いながら莉央の手配したタクシーで、無事に自宅へ帰りついた四人であった。

明くる日――――学校

「莉央ちゃん、おはよう！　昨日はお疲れ様」

「美香ちゃん、よくやってくれたね！　ありがとう。明日香ちゃんもご協力感謝するよ」

「いえいえ、私なりに楽しんでた気もするから……ね。莉央ちゃんの残酷さが私達にも移っちゃったかな？　あはは」

ガラガラ……。
生気のない表情で安藤幸恵が教室に入ってきた。
「みなさん、おはようございます」
やつれた顔でそのまま教壇に立つ。
「さあ、この問題がわかる人……手をあげて」
授業は進むが、莉央達三人が先生を取り囲んでいる。
「せんせ〜、あんたのガキのチンポが無くなってることに気付いてくれたぁ？　あはは♪」
「………酷いです………菅野さん。孫の顔が見られないかも知れないのに」
「キンタマ一つ残ってたら精液採れるんじゃない？　今の医療技術って凄いんだから心配ないよ！　そんなことより昨日の続きといこうか先生？　立ってるままでいいから股を大きく開いて」
「ひっ!?　もうやめて……菅野さん。あんな酷い目に遭ったばかりなのに……。お願いです。それに授業ができなくなる」

「莉央ちゃんの言うこと聞かないとあんたの息子の最後に一つ残してやったキンタマも潰しにいくわよ？　観念しなさい先生」
　スカートの中に手を入れ、一気にパンツを足首までずり下ろす富田美香。
「ピンク色のパンツって……アハハ。中坊か？？」
　ピンク色の可愛いパンツを無理矢理に口に捩じ込むと、明日香と美香が片腕ずつ抱え込み、それぞれの片膝で安藤幸恵の太股を無理矢理に開かせる。
　スカートを捲りあげて、ベルトの中へ捩じ込んで固定すると、下半身全裸状態が、クラスの全員に晒される。
「やめ、て、恥ずかしいから…………」
「ダメ。全児童が見てる前で愛液垂れ流しながら潮噴いて醜態晒させてやるんだから。さぁ、マンコの力を抜けオバサン」
　菅野莉央の中指と薬指がゆっくり女教師の膣口に挿入されていく。
『クチュ……ずぷぷ……』
「ひっ！？　やめてお願い……」

「ダメ！　そのまま授業を続けるの！」

「あんっ！！　んあ……誰か……この問題、わかる人……あっ！痛っ！？　あんっ！！……ひいい」

『ぐちゅっ！！……ぐちゅちゅちゅちゅちゅちゅ！！』

「痛っ！？……ひいい……あんあんあんあんっ！！」

莉央は一気に手首まで性器に捩じ込み、膣内を深く掻き回し始めた。

「先生、あんっ！！　とか、ひいい、とか言わないで頂けます？みんな気持ち悪がってるんですけど？」

そう言いながら更に膣内を掻き回す莉央。
明日香と美香も服の裾から手を入れて、更にブラの内側にスルリと手を入れて乳房を激しく揉み扱き始める。
あることを閃いた明日香は上の服も全て脱がせる。

「美香ちゃん、ミルクの飛ばしあいしようよ？」

「わかった！　面白そうだね♪」

「やめて……恥ずかしい……寒い……」

「うるさい。黙ってろババア！！　子宮抉りだすぞ？　さぁみんな、よく見ててねーっ！！　右の乳首と左の乳首、さぁどちらが遠くまでとばせるかな？」

美香は冷たく言い放つ。
明日香と美香は同時にせーので、乳房を強く握る。

「あはあっ！？」

『ぴゅぴゅ！！　ピュルルルッ！！』

白いミルクが全員の見てる前で数メートル飛び散った。

「せんせー……汚い白いミルクが飛び散ってるんですけどぉ？　きちんと拭いといてくれますぅ？　じゃなきゃケツからバトン突っ込んで口まで串刺し刑にしちゃうぞ？」

本気でやりかねない……と怯えている安藤幸恵は、夫と子供二人に受けた仕打ちも忘れ、泣きながら素っ裸で土下座して莉央達三人に赦しを請うている……。
小便を漏らし、膣からは莉央のフィストファックによって、オリモノ混じりの大きな血だまりが出来ていた。

「ほら、仰向けになれ」

莉央が脇腹を足でそっと蹴りながら引っくり返す。

両足首を掴んで、愛液と血とオリモノまみれの性器に足の裏を密着させる。

「やだ！？　足の裏なんかでそんなとこ触らないで菅野さん……バイ菌入っちゃいます」

「先生自体がバイ菌みたいなもんだから心配ないよ。クリトリスと膣口へ莉央様の超ウルトラスペシャルアルチメット電気アンマを喰らわせてやるわ。絶対逝くからお楽しみに♪」

「で、電気アンマ！？　そんなこと止めて！！　小学生の子供みたいなこと止めてーー！！」

「小学生の子供で悪かったわね？　ほら、いっくよー？」

『ガガガガガガガガガ！！！！』

安藤幸恵の身体は仰向けのまま前後に激しく揺れる。

莉央に蹴られて上へ進む度に莉央の両手で足を引っ張られてまた下げられる。そこへまたまた強烈な足裏蹴りが炸裂。この繰り返しが一秒間に三回は行われるものだからクリトリスもたまったものではなかった。

「ひぎゃあああっ！！　やめてやめてやめて！！　菅野さんっ！！　先生を許してえええっ！！　あがががっ！！　いく、いく、いっちゃうううう！！　あはっ！　あはんんんっ！！」

びくびく全身を痙攣させながら、莉央の電気アンマでイかされた安藤幸恵。

「イッた？　良かったね先生……天国の次は地獄も味わってもらうわよ。マンコとクリトリス……肛門全て裂けちゃうけどこれが終わったら保健室連れていってあげるから安心して喰らいなさい。いっくよー♪」

『ガガガガガ！！…………ドカッ！ドカッ！ドカッ！ドカッ！』

『ぎゃあああっ！？　蹴らないで！！　死ぬっ！　死ぬううううっ！！　痛い痛い痛い痛いっ！！　菅野様痛すぎですうううっ！！　ふんぎいいっ！！』

密着型の電気アンマから、空間を開けて蹴り込む超痛々しい電気アンマにチェンジされる。

泣き叫ぶ先生を嘲笑いながらお構い無く猛烈な蹴り型電気アンマが続く。

涙とヨダレと鼻水で顔をグシャグシャにして泣きわめく先生を生徒達は様々な感情で見ている。

「よし、先生の汚い股間がズタズタになったからこれで止めてあげ

る。せえのっと、とどめ！！」

『ドカッ！！……ぐちゃっ！！！！』

「ぴぎいいいっ！！」

仕舞いには泡を噴いて失神する安藤幸恵は、ようやく莉央の電気アンマ地獄から解放された。

下半身の辺りは、粘液まみれの血溜まりが出来ている。

明日香が素早く拭き取ると、美香はグチャグチャになっている下腹部へオキシドールを振り掛けた。

「ジュウウウウ……」

「ふんぎゃあああああああっ！！！！」

気が狂ったように目を覚まして陰部を両手で抑えながら号泣を始める安藤幸恵を、往復ビンタで落ち着ける美香。

「黙りなさい！！　消毒してやってるんだからありがとうございます！　でしょう？　ジュウウウウって言いながら泡吹いてるよ？　大切な所から……上から下から泡吹いて大変だね？　せ〜んせっ。アハハハハ♪」

「舐めろ。先生のアソコから出た汚い血と液体だよ？　あたしの靴の裏を綺麗に舐めとるまで保健室には行かせないから。わかった？」

「ぐす……ぐす……。はい、菅野様。ペロペロ……ペロペロ……」

全裸で正座したまま、莉央の右足を両手で掴み、靴の裏を必死で舐める安藤幸恵だった。

腕組みしながら目を細めて見下ろす莉央。

美香は先生の全身に付いた血と愛液をタオルで拭き取っていく。

胸を拭き取るときに思いっきり右の乳房を握り締めると、再びミルクが射出し、莉央の左足に掛かった。

爆笑する明日香と美香だったが、莉央は先生を睨み付けながら囁く。

「汚いミルクをヒリ掛けてすみませんでした。ってあたしに謝りなさい」

言われた通りに泣きながら謝る安藤幸恵。

ボロボロ泣きながら莉央の足の裏を舐め続けている。

『ドカッ！　プシュウウッ！！』

「うぶっ！？　痛っ……」

いきなり鼻っ面を蹴飛ばされて、鼻血が噴き出す。

「もう泣き止んで先生。鬱陶しいから。服着てもいいよ？」

「……ズズ……あ、ありがとう菅野さん」

鼻血を吸い込みながら、立ち上がってパンツを履き始めた。

全て着終わる頃にはチャイムがなり、一時間目の授業が終わりを告げる。

「今日は全時間が自習になります。また、帰りのホームルームには戻って来ますので……ぐす……ぐす」

まだ少し涙が止まらない先生。

「クリトリスも潰れちゃってたけど、あれはスッゴく痛そうだね？」

「大陰唇も小陰唇も裂けてボロボロだったね。肛門まで少し裂けてた。一番出血してたもんねアナルは……血止めが時間かかったよ」

明日香と美香が安藤幸恵を見送りながら囁き合っている。

「さ、席に戻って漫画でも読んで過ごそうか……。あなた達もかなり残酷さが増してきたわね！　やるなぁ♪」

莉央は満面の笑みを浮かべて明日香と美香の肩に手を置いた。

菅野莉央たち三人による女教師の処刑はついに終止符が打たれた。

この日の夜…………結城明日香と富田美香の家には、国の機関てまである《特殊任務省》から、残酷処刑島での死刑人を命ずる伝令が届いた…………。

「莉央ちゃん、私と美香ちゃんにも残酷処刑島での処刑執行人の許可が下りたよ。昨日伝令が届いたの」

「あたし、機会があれば思いっきり殺らせてもらうね!?　莉央ちゃん」

「そっか……あなたたち二人が残酷だってこと……早速国にバレちゃってたんだね……さすがだわ」

国の情報の早さに半ば呆れる菅野莉央だった。

また調子に乗ってきたらもっときつい制裁を三人から受けることになるであろう……。

莉央の女教師とその一家制裁計画（後書き）

安藤幸恵は結局担任を辞めてしまい、莉央の小学校から姿を消した。
新しく赴任した坂本温子先生。
優しくて熱心な４０歳の女性教師は、皆に好かれる人気者となった。
莉央たち三人も、坂本先生は大好きになったので、しょっちゅう話し掛けに行ったりしている。

残酷処刑再開命令（前書き）

もう行われることがないと思われていた凶悪犯の死刑。数ヶ月を経て再び任務につくことになる。二人の友人と共に……。

残酷処刑再開命令

暖冬続きで、冬らしい寒さが数日しか感じられないまま春を迎えようとしているとある小学校。

菅野莉央の周りではここ数ヵ月では色々なことがあったが、最近は落ちついた学校生活が続いていた。

国の機関である特殊任務省から菅野莉央に連絡が入った。

赤霧島小学校の菅野莉央に命ずる。犯人、宮崎俊男５５歳は、同じく東部地方に住む一家五人を惨殺。父親５２歳を包丁で刺殺、妻４２歳をレイプした後、絞殺。娘の三姉妹全員を拘束して順次レイプして、その後で三人全て首を切断して殺害。更に金目のものを奪って逃走。稀にみる最強レベルの犯罪者のため、一度は廃止した残酷処刑島での拷問処刑の執行を命ずる」

「あの……真紀さんたちは来てくれるのですか？」

「木村真紀、大山加奈、鬼頭美紅の……あなた以外の死刑執行人三人は、今回身内の喪に服すため、免除となる。あなたのクラスメイトの結城明日香と富田美香の二人を新たに残酷処刑島での処刑執行人として命ずる」

「…………あの、ちょっといいですか？　あの子達は残酷な気性とはいえ、人を殺せるほどの器は持ち合わせてないと思います。まだ小学生で女の子だし。どうかあたし一人でお願いします」

莉央は二人の友人に、処刑任務をさせまいと特殊任務省の長官に

お願いした。

「実は、今月に起きた映画館での爆弾テロ、死者数１５人の犯人、１８歳の男女二人の処刑も重なっている。菅野莉央一人では荷が重すぎるため、友人の二人の協力は命令である。あの二人は私達の情報によると、尋常ではない残酷さを持ち合わせているようだ。二人に処刑方法を教育しながら執行してください。わかりましたね？」

「はい。わかりました。仕方ありませんね……。まぁ確かに拷問中でもかなり楽しそうな二人だから心配ないか……」

携帯での会話を終えて、教室に戻る莉央。
結城明日香と富田美香が談笑している間に割って入る。
二人に国の特殊任務省からの命令を告げる。

「え？　冗談でしょ？　莉央ちゃん……私は人なんか殺せないよ」

結城明日香はひきつった笑顔で断る。

「ごめん、あたしも無理だわ……やっぱ拷問と違って殺してしまうのは勘弁して……莉央ちゃん」

富田美香も正義の処刑とはいえ、殺人には拒否反応を示した。
国の命令だからどうしようもない旨を二人に説明して、半ば強引

に残酷処刑島への出港を納得させた。
残酷処刑島での特殊な死刑執行の話は、莉央から聞いて少しは知ってはいたが、現実味がない上に他人事のように思っていた。
明くる日、特殊任務のため、学校を休む許可をもらった死刑執行人の女子小学生三人は、目隠しをされたまま早朝から小型ボートにて海を渡る。

「ふぁあ〜……四時起きなんて最悪。眠たいなぁ。あの、莉央ちゃん……死刑囚ならまだ分かるんだけど……どうして執行人の私と美香ちゃんまで目隠しをされてるのかな？　それと、何であたしと明日香ちゃんは体操着で莉央ちゃんだけセーラー服なの？」
「国の機密処刑だから、いくら執行人でも残酷処刑島の場所は教えてくれないのよ。あたしだって目隠しされてるんだから。それと、ブルマ姿の方が色々と動きやすいでしょ？　それだけのことよ。あと半時間ほどで着くからもう少し目隠しで辛抱していてね」

莉央達三人を乗せた小型ボートが、簡易な港に着いた。

「今回は処刑方法について特殊機密会議で決定しておりますので、別の処刑方法は許可できません。三人のうち、三種類ありますが、どの死刑囚にどの処刑方法で執行するかは執行人に任せます。とのことですのでよろしくお願いします」
「指定の処刑方法は何ですか？」
「凌遅刑――――鋸挽き刑――――白檀の刑（串刺し）――――と

なります。刑の執行にあたり、出来るだけ時間をかけて苦しめて罪を後悔させるようにとのことです。遺族の気持ちになって執行願います」

「はい。わかりました」

「では夕刻にはお迎えに参りますのでよろしくお願いします」

莉央達三人に敬礼しながら去ってゆく看守達。

「島の浜辺の方へ三人の死刑囚は拘束してあるみたいだから、早速向かいましょう」

「あの……莉央ちゃん……私と美香ちゃんが執行したことにして、莉央ちゃんが三人ともやってくれない？　とか思っちゃったりして……ね？　美香ちゃん」

「そ、そうだよ！　そうゆう手があったか！　これは勉強とゆうことで見てるだけの方がいいかもね？　莉央ちゃん」

「一人一殺のつもりだったけど、あんた達二人がやり易いように、三人一殺を三回やりましょう。要するに同時じゃなく一人一人処刑していくから、残っている囚人生存者に処刑シーンを見てもらうことが出来るね。最初の一人目は誰が死ぬとこも見れないけど……でもその方が幸せかもね。殺人シーンなんて見たい人いないと思うから」

「はぁ――――――やっぱり無理なのね……わかった。国の命令だ

から私も勇気だしてやってみるよ」
覚悟を決めた結城明日香であったが、深い溜め息を抑えられなかった。
隣で富田美香は未だに震えている。ぼやきながら涙が溢れてきてしまう。

「まさかあたしまで殺人者になってしまうなんて……信じられない。お母さんお父さんに何て言えばいいんだろ……こんな娘を許して下さい。ぐす、ぐす」

「あのさ、美香ちゃん。殺人者なんて人聞き悪い言い方しないでくれる？　公に出来ない機密事項とはいえ、国の命令で処刑してるんだから、殺人犯人とは似て非なる存在だから。そこ履き違えないでね？　あたし達は遺族の代わりに仇を討ってる正義の人なの。復讐刑が禁じられているこの国でも、あまりに酷い殺人事件ならこうゆうお仕置きも必要だと思うよあたしは」

緩やかな斜面を登り、しばらく下っていくと、真っ白な砂で彩られた美しい砂浜に辿り着いた。
そして拘束されている三人の死刑囚の姿が見えてきた。
刑を執行しやすいように、三人とも既に衣服は脱がされ、素っ裸の状態である。
強盗強姦殺人の宮崎俊男死刑囚５５歳は、周囲が1メートル、高さは2メートルはあろうかと思える立てて砂地に埋められている丸太に、首と足首をベルトで固定され、両手は前方で手首に手錠をは

められていた。腕を振り回せる状態のため、痛みは感じるが腕を動かせないよう肩に特殊な麻酔を打たれている。

18歳の女子高生は、両足を大きく開いたまま逆さ吊り状態で、二本の鉄製の杭に両足首を縛り付けられている。

頭に血が上り、顔を真っ赤にしてもがいている。

18歳の高校生、健作は木製の机にうつ伏せ状態で両手両足ともに縛り付けられている。両足は大きく開かれ、木製の棒の両端に足首を縛り付けられていた。

足が開いたたまま、閉じられない仕組みだ。

「女子高生は股間からの鋸挽き。男子高生は肛門からの串刺し。オッサンは凌遅刑。好きにしてもいいと言いながらもう処刑方法決めつけられてるし……」

愚痴を言う莉央に、55歳の中年男の宮崎俊男と、若い男女二人がほぼ同時に叫ぶ。

「おい、小学生のガキども！　わしらはまだ裁判も始まってなく、死刑判決も出ていないのに早朝から教誨師に説教食らうし……。しかもなんでこんな島に連れてこられた？　何をする気なのか教えろ！！」

「そうよ！　早くほどいてくれないと頭に血が上って死んじゃう！！　私みたいな若い女子高生を素っ裸にして大股開きにさせて吊り上げるなんて！　人権侵害も良いところだわ！！　健作も早くほど

いてあげて！！」

「俺はいいから早く詩織をほどいてやってくれ！！　逆さ吊りは酷い！！　顔が真っ赤になってるじゃないか！！　せめてパンツくらい残してやってくれよ？　詩織は少女なんだぜ！？」

「うるさいなぁ死刑囚のくせに！　三人ほぼ同時に文句言われても理解できないよ……新渡戸稲造じゃあるまいし」

「偉人の名前間違ってない？　莉央ちゃん……」

菅野莉央はしばらく考えた。

明日香のツッコミではなく、処刑の順番についてである。

――――――その末についに口を開いた。

「宮崎俊男の凌遅刑、健作の串刺し、詩織の鋸挽き、の順番で処刑を執行します。明日香ちゃんと美香ちゃんは国から用意されている道具から出刃包丁を取り出して。みんな右利き用でいいよね？」

自分も出刃包丁を取り出して握りしめながら明日香と美香に命令する莉央。

「これって………一番残酷なやつじゃないもしかして？　私も美

香ちゃんも体操着……血まみれになるよね？　きっと……」
「明日香ちゃんもそう思う？　凌遅刑って……あたしも一番痛そうなやつだと思うよ……よりによっていきなり凌遅刑なのか……」
女子小学生の三人が研ぎ澄まされた出刃包丁を握りしめ、５５歳の男性死刑囚を取り囲むようにして立ち塞がる。
「最低でも１０００回までは死なせないからね？　後はオッサンの運次第ですぐに死ねるか、２０００回、３０００回までもがき苦しむか……見届けてあげるから」
「冗談だろ？　ガキども！？　出刃包丁なんて魚を捌くもんであってやなぁ……人様を切ったり刺したりするもんじゃねえと思うんだがね？」
莉央は何も答えずいきなり宮崎俊男の鼻を左手で摘まみ上げると、出刃包丁をスッと上から下へ斜めに滑らせた。
莉央の左手には切り取られた鼻っ先が握られている。
いきなり過ぎて何が起こったのか分からないその場の全員。
「ギャー！！　いでえええええええっ！！　痛いいいいいっ！！」
切り取られた鼻のあった部分には二つの穴しか見えない。その二つの穴から大量の血を吹き出させながら叫びをあげる宮崎俊男。

「刺殺やら斬首やらＩＳＩＳみたいなことを日本でやらかしておいてよくそんなことが言えたわね？　オッサン。ここは無人島だから猿轡も嵌めないでおくから遠慮なく絶叫しまくりながら死んでいって？　今８時だけど、昼まで４時間かけて切り刻んであげるからね？」

切り取った鼻を地面に落として右足でグリグリと擦り潰しながら宮崎俊男に囁く。

「鼻だけでもこんなに痛いのにやめてくれーっ！！　やめろクソガキ！！」

「クソガキとかいつまで言ってられるかな？　ほら……次は太腿」

太腿を左手で摘まみ、右手の出刃包丁で肉を削ぎ落とす莉央。
更に激しく叫ぶ声が島中に響きわたる。
１８歳のカップル二人は震えていた。目を逸らしながら唇を噛み締めている。あんなに悲惨な目に遭うのか……現実逃避したい気持ちで目を逸らしていた。
莉央が友人の二人に凌遅刑の開始を命じた。

「ごめんね。恨まないでね……」

そう言いながら結城明日香は宮崎俊男の右腕の上腕二頭筋の肉をスッと削ぎ落とした。
同じく富田美香も左手の上腕二頭筋の肉を削ぎ落とす。
あまりの痛みに涙が滲み出る中年男。
狂ったように泣き叫ぶが、女子小学生達の拷問は終わらない。
両手両足、腹部など、５０箇所くらいの肉を削ぎ落とした時に、泡を吹いて気を失う宮崎俊男。

「気を失うには早すぎるよオッサン？　玉一つ潰してあげるから目を覚ませ！　ほら」

『ギュウウ……ぶちゅっ！！』

「んがあっ！？　ぎっひいいいいいいっ！！！！」

左の睾丸を一気に潰された宮崎は白目を剥きながらも、意識を戻した。
血の混じった粘液が尿道から滴り落ちる。

「なんで粘液なのよ？　もしかして精液混じってる？　四人も女性をレイプしながらまだ精液出してるんだ？　凄い性欲だね？　感心するなぁ。ほら、お食べ！　自分のチンポだよ」

左手でペニスの雁首をキュッと掴み、根元から出刃包丁でスパッと切断する。
切り取ったペニスは宮崎本人の口へ捩じ込まれた。

「んぐううううっ！？　ゴボッ！？」

「よく噛んで飲み込まないと右のキンタマも潰すから」

「ぐちゃぐちゃぐちゃぐちゃ……ゴクン…………」

あまりの痛みと恐怖に、思わず自分のペニスをよく噛んで飲み込んでしまった。

相変わらず絶叫をあげながら泣き叫ぶ宮崎俊男。

「飲み込んじゃった所で結局許さないんだけどね。てへっ。エッチな莉央様は性器とゆう性器は男女問わずグチャグチャにしなきゃ気が済まないのよ？　ん？　あんたの金玉袋って凄っごく毛むくじゃらだね？　ちょっと手術させてね～♪」

陰嚢をぎゅっと掴んで拡げると、真ん中辺りから切っ先を差し込み、縦に切り裂いていく。潰れた左睾丸とまだ原型を留めている右睾丸を左手でズルズルと引きずり出す莉央。

「ほうら……こんにちは～。生の睾丸ちゃん出ておいで」

「ギャアアアアッ！？　痛いいいいっ！！　助けてえぇっ！！　お願いやめてっ！！」

「だめ。ヌルヌルしてるね？　生のキンタマって……よっと！」
精管と神経の管を睾丸から引きちぎる。
潰れた睾丸と原型を留めている右の睾丸を更に宮崎の口内へ捩じ込む。
「ほら、キンタマも食べろ！　吐き出すと更に苦しめて殺すから」
「うごっ！？　んぐぐ……ゴクン……プハッ！？　おえええっ！！」
思わず飲み込んだ左右の睾丸を吐き出した宮崎俊男。
両手で受け取った莉央が再度口内へ捩じ込む。
「吐き出したらダメだよ？　全て飲み込みなさい」
「んごっ？！　ごっくん……がはあっ！！」
「美味しかった？　今日死んじゃうのに高い栄養採っちゃったね？
高タンパクだよ金玉は……」
ついに我の陰茎と左右の睾丸を食べさせられた宮崎俊男。
痛みと吐き気に更に大きな声で泣き叫ぶ。
美香は右の乳首を、明日香は左の乳首をギュッと思いっきりつねると、目一杯手前に引っ張り出して、一気に付け根から削ぎ落とし

た。
　更に叫んだ宮崎は、叫びすぎて喉が潰れた。
　ガラガラ声になっても泣き叫ぶのを止めない。痛みが激し過ぎて声が枯れようが叫ばずにはいられなかった。

「明日香ちゃん、美香ちゃん。グッジョブ♪　乳首ダブルアタックだね！　やれば出来るじゃん？」
「なんか、泣き叫ぶの見てると興奮してきちゃって……てへっ♪」
「私も……美香ちゃんと同じく……ゾクゾクしてきちゃった。やっぱりＳっ気が強いのかな私達って……血を見てたら段々興奮してきちゃって……切り取った乳首プニプニしてる。あはは」

　残酷な気性が開花した瞬間であった。
　うまく返り血を交わしながらやったので、以外とセーラー服も体操着も綺麗だった。
　こうなるともう富田美香も結城明日香も菅野莉央と同じく、超残酷な残酷処刑島の死刑執行人である。
　三人で宮崎俊男の体を出刃包丁で１０００回切り刻んだ。
　足元には削ぎ落とされた肉片がぐちゃぐちゃになって散乱している。

「大きく削ぎ落とし過ぎちゃったから１０００回で全身の皮部分がなくなっちゃった……首から下の全身が皮を失って、真っ赤になっちゃったね？　所々白い骨が見えてるけど……どんな感じ？　痛い？」

「がはあっ！！　ヒギイッ！！　はぁはぁ……早く殺してくれ……痛すぎて気が狂いそうだ……うぎぎぎぎっ」

「早く殺してほしいんだ？　でもね……まだ肉片が骨にかなり残ってるから、後１００回は筋肉や脂肪を削ぎ落とせそうだよ？　もう少し頑張れ」

致命傷を避けての全身への肉片削ぎ落とし……生き地獄の様な苦しみを味わい続けている男は、ついに自分の犯した罪の重さを痛感し始めていた。

「ワシのしたことは取り返しのつかない事だった……切られるのがこんなに苦痛だなんて……もう意識が朦朧としてきたわ。済まなかった……殺してしまった五人へ懺悔します。許してくれ……」

全身の肉を削ぎ落とされた宮崎俊男は、死の目前にて自分の罪を認め、死を覚悟した。

「はい、良くできました。殺された人達の痛みがわかって反省して死んでいけるならオッサンはもう一度人間に生まれ変わることが出来るかもね？　でもまだまだ苦痛を味わってからじゃなきゃ死なせないよ。あんたに殺された人の恐怖や痛み、遺族の方達の悲しみは、こんなもんじゃ済まないんだから……」

そう言いながら更に全身の肉片を削ぎ落としていく女子小学生の三人。

「あぱばばばば……ぴぎひひひひ」

あまりの苦痛に訳の分からない言葉を発する宮崎俊男。

「あはは！　何言ってんの？　意味わかんな～い。バカじゃないの？　オッサン」

「莉央ちゃん。服が血まみれなんだけど……これって着替えどうするの？」

いきなり帰りの心配をする明日香は莉央に問いかける。

「同じサイズのセーラー服とスカート、体操着にブルマを帰りに用意してくれるらしいよ。簡易シャワー室も島にあるし。問題ないない」

「そっか。安心したよ」

男は糞尿も撒き散らし、足元は肉片と血液と糞尿でぐちゃぐちゃになっている。

「全身真っ赤に剥けたし。ちょっと違うことしよっか？　内臓出してみる？」

ヘソに突き刺すように出刃包丁を差し込み、上に切り開く莉央。バックリ開いた腹部からは大腸と小腸がブリブリと我先にと飛び出してくる。

「ぐぎゃあああっ！！」

「うわっ！？　エグい～」

美香は一瞬仰け反った。

「内臓って、こんなに白いんだね」

明日香はジッと見つめながら冷静に呟く。
莉央が小腸を掴み、どんどん引きずり出していく。

「このヌメヌメ感が何とも言えないなあ。横行結腸も腸液でドロドロ……解剖されて感じてんのか？　オッサン？　まさかね……あはは……」

まだまだ死ねない宮崎俊男は断末魔の叫びをあげているが、それでもとにかく死ねない。
ことごとく致命傷を避けての莉央の拷問は凄惨を極めていた。
「痛い？　どんどん出てくるね？　オッサンの腸……何か臭いのは大腸の中のウンコ？　スッゴク臭いんだけど？」
「あがががが……」
もはや答えることも出来ない宮崎は再度泡を吹きながら全身をびくびく痙攣させ始めた。
「あららら……もう死亡寸前サインだね。その痙攣がまたエロチックでいいわぁ。じゃあぼちぼち死んじゃおうかオッサン。その前にちょっと下ごしらえさせてね」
莉央はそう言うと出刃包丁を握り締めて宮崎の足元にしゃがみ込み、刃を手前側に向けて肛門へゆっくり突き刺してゆく……。
「ここかな？　オッサンの汚い肛門は？……お邪魔しまーす♪」
『ズボッ！！　ズブズブ……』
「はうっ！？　切れるっ！　ケツ穴が切れるうううっ！！」

「まだ叫ぶ気力残ってたのね。肛門括約筋と直腸切り裂いた次は……っと。お腹の方へ切り開いて行こうね♪　この辺に前立腺あったかな？　ほら、真っ二つにしちゃったよ？　ごめ～ん。もう二度と快感も得られないか……死ぬからいいよね？」

『ズズズズ……』

前立腺を真っ二つにした後、そのまま会陰部を深く切り裂いていき、ヘソまで切り上げる。

「さっきヘソから上に切開したから、この股間からの切り口が繋がっちゃったね。あらあら……膀胱やら切れた前立腺やらズルズルと出てきたよ？　小便と一緒に……臭いなぁもう」

出刃包丁を下に置くと、右手を割けた股間から差し込んだ。
全身の皮と肉片を削ぎ落とされて真っ赤になっている宮崎俊男のパックリ切り開かれた肛門へ莉央の右手が食い込む……。

「空洞化してるから、以外とあっさり入る入る。ガバガバアナルだね♪　じゃあ……さようなら……もう哀れすぎるから逝かせてやるよ」

莉央の肩まで入るほど腕を全て突っ込んで、心臓を握りしめ、グリグリと二、三回マッサージしてから握り潰した。

「ぱきゅっ！！　ガクッ……」

意味の分からない断末魔の叫びをあげてようやく絶命出来た宮崎俊男。

肛門から心臓を引きずり出しながら不敵な笑みを見せて死体に囁きかける。

「長い時間地獄の苦しみを味わい続けて本当にお疲れ様でした。生まれ変わってこれたらもう二度と殺人なんてしないでね……」

その光景を見ていた女子高生は恐怖のあまり、小便を漏らしている。

逆さに吊られているため、自分の漏らした小便を自分の顔面に受けている。

男子高生はひたすら怒鳴り続けた。

「こんな事が許されるのか！？　これが先進国のする事かっ！？頭おかしいんじゃねえかお前ら！？　小学生のガキのクセに無茶し過ぎだろっ！？　目を覚ましてくれ！　俺たちを解放してくれ！頼むっ！！」

「何の落ち度もない人達をたくさん殺しておいてよくそんなことが

言えるね？　大した神経してるわぁなた……」

抉り取った宮崎俊男の心臓を地面に叩きつけて右足で踏み潰しながら莉央が言った。

直径2センチの幅で白檀の木で作られた長さ1メートルの棒を男子高生の肛門にあてがう莉央。

先はナイフで少し鋭利にカットされている。

「ここね？」

『つぷっ……』

先端がわずか1センチ肛門に入る。

「わぁっ！？　嫌だ！　止めてくれっ！！」

「二人で白檀の棒を持って抑えててね。口の方へ向ける角度で」

美香と明日香は軽く頷き、二人で白檀の棒を肛門にあてがったまま持っていた。

「次はあなたの番よ。これは白檀の刑といって、白檀の木を肛門からお口まで貫通させる処刑方法なの。でも心臓とか急所を避けて通すからお口まで貫いても数時間は死ねないよ？　あたしが下手くそで肺や心臓を貫いてしまったらあなたはラッキー！　すぐに死ねるから良かった良かっただよねぇ？」

「ねえ、美香ちゃん……もうちょっと先端入れとかない？　１０センチくらい差し込んどけば変な角度に進まないと思うから」

「それもそうだね。じゃぁいくよ？　せーの……」

『ズブブブ……』

美香と明日香は白檀の木の尖った先端部分を、１０センチほど直腸へ差し込んだ。

「痛っ！？　や、やめてくれ！！　痛いのは嫌だ！！　しかもそんな恥ずかしい所から突っ込まれるなんて……勘弁してくれっ！！」

「あたし達三人が順番に木製の槌でこの白檀の木を打ち込んでいくから……まっすぐお口まで抜けたら覚悟を決めてね？　大腸や小腸や、胃を貫かれたまま数時間死ねないから……さぁ打ち込むわよ？　大きく息を吸って～」

「わああっ！？　止めてくれええっ！！」

「止めない……えいっ！」

『ドカッ！！　ズッボォォォ！！　ブチブチブチブチ……』

莉央が一回目の槌を打ち込む。
一気に４０センチ突き刺さり、この時点で直腸、Ｓ状結腸、下部の小腸壁を数枚貫いた。
想像を絶する痛みが１８歳の少年を襲う。
肛門からの大出血……。

「ギャアアアアッ！？　ぐわあああああっ！！」

「さすが莉央ちゃん、一撃でスッゴい奥までブッ込んじゃったね！！　次は私、せーの…………えいっ！！」

思いっきり振りかぶって木の槌を打ち込む結城明日香。

『ドカッ！！　ぐちゅちゅちゅちゅっ！！！！』

これまた一気に20センチは突き刺さり、白檀の棒は小腸を数枚突き破り、少年の胃まで突き刺さった。

「がはあっ！！　ごぽぽぽ……」

「んふ。決まったぁ♪　こいつお尻ヒクヒクしちゃってるぅ～♪」

口と肛門から夥しく鮮血を流し、ヒクヒク悶絶する少年……。

「あたしの一撃でお口まで貫通するかな？　莉央ちゃん、急所を避けてお口まで貫けるよう、軌道修正してね？」

「うん。お任せあれ。え～と―――この角度で打ち込めば口まで

貫けそうだよ。さぁ、やっちゃって美香ちゃん」
「うごごご……やめて。お願い。俺、死んじゃう。死にたくない。お願いします。やめて下さい！！　やめてえぇっ！！」
「命乞い？　あんなにたくさんの人達を無差別に殺していながら欲もそんな恥ずかしいマネができるわね？　彼女の見てる前で尻の穴から口まで貫通させてあげる……数時間は死なせてあげないから」
『ドカッ！！　ぶちゅちゅちゅちゅちゅっ！！……ガボッ！！』
「うこおっ！？　ごぽっ！！　ぶっはあぁっ！？」
見事に少年の肛門から口まで白檀の木を貫通させた女子小学生三人でのタッグプレイ。
微かに1センチほど口から先端が出ている。
肺と心臓を避けての串刺しでは簡単には死ねない。
少年は地獄の苦しみを味わいながらゴボゴボと血を吐き出している。
同じく肛門からも夥しい量の真っ赤な鮮血を垂れ流していた。
ヒクヒク痙攣しながらも意識はしっかりしているため、生き地獄の苦しみを味わいながらひたすら号泣する少年。
「もう少し口から先端出しとこうか？　よっと。ほれほれ……」
『グリグリ……ズプププ』

莉央が足の裏で肛門側から白檀の棒を押し込むと、口から血液と大便と潰れた小腸が付着した先端が少しずつはみ出してくる。

「う～ん……これでちょうど真ん中辺りかな？　お手本のような串刺し刑の完成だね♪」

「健作っ！！　死なないでっ！！　お願いっ！！　口からはみ出してるじゃん！？　抜いてあげてぇえっ！！お願いだから健作を許して！！」

「カップルで爆弾テロなんて……欲もそんな恐ろしい事ができたわね？　時限爆弾なんて自爆するよりタチ悪いし。誰の指図？　ＩＳＩＳなの？」

「そ、そうよ！！　私達は〇〇教の信者だからバカな宗教のやつらに制裁してやったのよ！　何が悪いの！？」

「自分の宗教が馬鹿げてるわよ。だいたい違う宗派だからって、殺すとかゆう発想自体が間違ってると思うのね？　彼氏の死ぬ瞬間を逆さに吊るされたまんまでゆっくり見てなさいね」

「痙攣してるじゃない！？　早く抜いてあげてっ！！　このクソガキどもーっ！！　絶対に殺してやるからっ！！」

「殺してやるって……逆さに吊るされた状態で次に処刑される分際で欲もそんな強気な台詞が言えたもんだね？」

明日香が呆れながら呟いた。

「後三時間もすれば死ねると思うからそのまま見ててあげて。彼氏の最期を。その頃迎える夕方からの処刑は本日で一番苦しむ予定だから期待して待っててね？　うふふ♪」

美香も呆れつつも冷ややかに呟いた。

数時間が経過した。

三人と女子高生の四人が見守る中、ヒューヒューと苦しそうな呼吸をしてはびくびくと全身をくねらせながら、痙攣を繰り返す高校生の健作。

白檀の木が気道を通ってるため、まともに息が出来ない……だが喉と木の間に僅かに空気の通れる隙間があるため、か細く呼吸出来ている為に死ねない。

「明日香ちゃん、美香ちゃん、生きてる内にキンタマ潰しておいて！　更に全身痙攣して苦しむ所が拝めるわよ？」

莉央が促すと明日香は即座に少年の背後に移動して、右の睾丸を掴んだ。

「うん。あの玉が潰れる感触ってなかなか味わえないもんね！　さあ、美香ちゃんも反対側の睾丸を掴んで！　同時にセェのでぶっ潰そう♪」

「わかった！　よいしょっと」

左右の睾丸を小学生の女の子に鷲掴みにされた少年は顔を真っ赤にして左右に顔を振り始めた。

「ごぼぼーっ！！　んごぼぼぉーっ！！」

「やめてくれって言ってるのかな？　白檀の木を口から突き出したまま叫ばれてもハッキリわかんなーい。じゃあ潰しちゃって！　いち、にい、さん、ゴーアヘッド！！」

莉央の合図に同時に両手に力を込めてキンタマを握りしめる二人。

『ぎゅううううう……ぶちゅっ！！　ぷちゅっ！！』

左右の睾丸はほぼ同時に潰れ、ミンチになった。

「んぐううううっ！？　げぴいいいいいいっ！！」

泡を吹きながら更に激しく痙攣を起こす健作。

「オシッコ漏らして情けないわね？　こんなところから漏らしてるのぉ？　あははは」

『ツプッ……ズボボボボッ！！』

莉央は少年の尿道へ人差し指を根元まで突っ込んだ。

顔を小さく左右に振りながら奇声をあげて号泣する高校生の少年健作。

尿道へ激しく出し入れする内に、血が滴り落ちてきた。

尿道がかなり傷付いてしまっている。

「あれぇ？　早くも出血？　脆い尿道だねっ」

右手にボールペンを手にした莉央は、人差し指を引っこ抜くと同時に入れ替わりにボールペンを尿道へ突き刺す。

膀胱まで突き刺さったボールペンを上下左右に掻き回す莉央。

「ほら、ボールペンでオシッコ絞り出してやる」

『ぷしゅっ！！　プシャシャシャシャシャァ～！！』

膀胱内側からの血液と同時に小便が飛び出してくる。

更に激しく掻き回す。

血まみれになったボールペンを引き抜く頃には少年は虫の息だった。

白目を向いて痙攣しながら涙を流し続けていた。

少年の背後に回り、打ち込まれた白檀の棒をグリグリ捻りながら胸部辺りまで引き抜く。斬首には邪魔だったためだ。

「――――さぁ、この世とのお別れだよお兄さん……。彼女の見てる前で逝っちゃおうね。後で彼女も直ぐに送ってあげるから安心して死ねばいいよ。ちょっと顔上げてくれる？」

少年の背中に馬乗りになり、髪の毛を鷲掴みにして、グイッと手前に引っ張る。

急所の喉が前へ突き出された。

「ここ……かっ捌くから。今まで我慢してきたご褒美にもう楽にしたげる」

莉央の出刃包丁の刃が少年の喉仏と顎の間に添えられた。

「んご……んごご……がはぁ、がはぁ。やめ……てゆるし……て。お願いします……」

「だめ。許さない。成仏してね……いくよぉ？　よっよっ。ほいほいほいっと♪」

『ズズッ……ズバババ！！』

少年の首に出刃包丁をあてがい、激しく左右に擦り付けながら首を切り裂いていく莉央。

「うごっ！　ごぼぼーっ！！」

「ほらほら。食道切れてパックリ開いたよ？　切り口がヒクヒクしてるぅ～」

莉央の右手に握られている出刃包丁は、食道の切り口を確認して一瞬止まった後、再びどんどん深く少年の首に食ませてゆく…………。

飛び散る鮮血を浴びながら、薄ら笑いを浮かべながら半分くらい斬られた首から出刃包丁を一度抜き取り、左手で髪の毛を掴んで右手を大きく挙げて振りかぶる。

「首の骨って以外と固いから後部から叩き折らないと切断出来ないんだよね……えいっ！！」

『ガンッ！　ガンッ！　ガンッ！！』

『バキバキ！！　ブチッ……ポロン』

ついに少年の首は胴体から離れ落ちた。

離れ落ちる寸前まで意識はあったため、最期の最期まで苦しみ抜いた……。

『ブシュウウウウウウッ！！！！』

切断面の色んな管から噴水のように血飛沫が飛び出す。
左手に男の髪の毛を掴んだまま頭部を高くかざしながら莉央が叫ぶ。
「腐れ外道の首を取っちゃったぁ♪」
「ギャアアアア！！」
狂ったように泣き叫ぶ女子高生の前に三人が立ちはだかる。
切断した少年の頭部を女子高生、詩織の眼前へ突きつける莉央。
「キスしたら？　あんたの人生で彼氏への今生で最期のキスをさせてあげる」
「うっ、うう……ぶちゅっ！！　うぐぐ、健作、健作っ！　ぶちゅにゅ。ぐちゅぐちゅ」
詩織は頭部だけになった健作へディープキスを激しく繰り返す。
糸を引く唇と唇。健作の口からは唾液と共に血液も流れていたが、愛していた詩織は構わずに死体の口へ接吻を激しく繰り返した。
「本当にやっちゃった……。エロいね何だか……そんな激しく生首

にキスされたらあたし濡れちゃうじゃないの？」

莉央が性器を濡らしながら呟くと、明日香と美香の二人も性器を少し濡らしていた。

顔を赤くして切断された頭部と女子高生との接吻を眺めている三人の女子小学生。

「もう気が済んだでしょ？　はい！　お別れの熱々キスタイムはおしまい……」

莉央が接吻を引き離して、少年の生首を串刺しにされている本人の胴体の背中に置いた。

ゆっくりと詩織の元へ引き返してゆき、背後に回り込み、右手を詩織の股間へ伸ばす。

「ここから……鋸を入れて喉まで切り開いていきます。いいですね？」

『くちゅ……』

「あんっ!?」

詩織のオマンコに中指を差し込みながら、莉央が囁いた。

「ひぃっ！！　ノコギリっ！？　やめてやめてやめてやめてやめてぇっ！！　そんなトコに……そんなモノ……痛すぎるじゃないのっ！？　お願いだからやめて……お嬢さん達」

「お願いされても止めたげない！　詩織おねえ様は股間から真っ二つにされて本日お亡くなりになるの。お覚悟を決められて下さいな。ね？」

「あああんっ！！　やめてっ！！　お願いだから許してぇっ！！　あああああんっ！！」

「仕方ないなあ……ここ、気持ちよくしてあげる。特別サービスよ？　詩織さん♪　こんな可愛い小学生の女の子に指マンされて光栄だね？」

『クチュクチュ……クチュチュチュチュチュ！！』

詩織の膣内を中指で掻き回す莉央。

「あんっ！？　何てことを！？　やめて！！　お嬢ちゃん……」

「ここがノコギリでグチャグチャにされる前に、可哀想だから最期にイかせてやると言ってるの。ほらほらほらほらぁ♪」

中指に加えて人差し指も差し込んで、更に激しく膣内を掻き回し始めた。

＜ｉ４４２６１９―２４９０３＞

「あんっ……何か……気持ち……いい！？　やだ！！　いく、いっくうううっ！！」

「イけ！　女子高生！！」

「あはあああんっ！！　はひいいいいっ！！！！」

「イッちゃったんだ？　小学生の女の子に指でイかされるなんて思ってもみなかったでしょ？　うふふ」

「恥ずかしいけど……気持ち良かった……ありがとう。でも死ぬのはやっぱり嫌だから許してお嬢さん。何でもするから許して……」

「だ～め。もう死ぬのは確定してるから逃れられないよ？　ついでにアナルも切り裂く前に気持ちよくしてあげようか？」

「ぐす、ぐす……やめて。そんな汚い所……許して……」

『ズププププ……グリグリ……』

＜ｉ４４２６２１―２４９０３＞

「あんっ！　お尻に指が！？　痛いっ……抜いてっ……」

『スコスコスコスコ！！』

「あひいっ！？　そんなトコまで擦らないでえっ！！……でもいい、気持ちいいい！　いくっ！　いっくううううっ！！……あはあああああっ！！」

「アナルと陰核の同時責め……気持ちいいでしょ？　でも気持ちいい時間はこれで終わり。これから最高にもがき苦しませてあげる。日が暮れるまで生き地獄タイムスタートだからね！　これこれ、巨木でも伐れそうな凄い鋸でしょう？」

二回もイカされながら、命乞いで号泣する詩織に構うことなくデカい鋸を取り出す莉央。
両側に手で掴む柄がある二人で挽くタイプの特大ノコギリだった。ノコギリ自体は大きく長いが、歯が非常に小さい為、弱い力でも回数を挽けば固い骨も簡単に切断できる仕様だった。
明日香と美香の二人に渡すと、莉央は体育座りをしながら両手を頬に当てて、肘を膝に乗せてはにかむ。

「この女は人生最期のオーガズムを味わったから……もう殺っちゃっていいよ」

目を丸くしながらお互いを見詰め合う明日香と美香………。

「――――あの、莉央ちゃん……まさか私達にこれを挽けとおっし

ゃるのでは？」

「ちょ……ちょっとこれは…………荷が重すぎないかしら？　莉央ちゃま？」

「何を言ってるのかな？　お二人さん。あれだけ残酷に中年オヤジをバラバラに出来たのに、女子高生の腐れマンコごときを鋸で挽けないとかゆうの無しだから……ほら、早くやっちゃって！　あ……って言っても鋸挽き自体はゆっくり日が沈むまで二時間くらいかけて挽いていってあげてね♪」

「えーんえーん！！　股間から鋸挽きなんて嫌だ嫌だ嫌だぁーっ！！　やめてっ！！　許してっ！！」

「よく泣くなぁもう……１８歳の大人のくせして……大人しく下半身の力を抜いて切断されなさいね？　力を入れててもそれだけ股間開かされてたら意味ないか。小陰唇がヒクヒク動くくらいだよね？……し・お・り・さん♪」

「ふぅ。仕方ない……やるか？　美香ちゃん？」

「うん。…………今更後に引けないし。無惨に爆死させられた人達を思うとやりきれないから……やっちゃお！　明日香ちゃん。これは正義の制裁なんだよ」

覚悟を決めた二人は詩織の前と後ろにそれぞれ移動して、特大ノコギリを二人で握りしめ、詩織の陰部にあてがった。

「覚悟しろ！　女子高生！！　あたし達が今から股間からの鋸挽き刑を執行します！！」

美香が詩織を大声で威嚇する。

冷ややかな金属の冷たさを陰部に感じた女子高生詩織は全身を仰け反らせて恐怖した。

「ひぃいいいっ！！　冗談でしょっ！？　お願いだからやめてっ！！　股間から切り裂かれるなんて絶対嫌だからっ！！　いやあああっ－！！」

「おねえさん、覚悟を決めてね？　胃くらいまで挽き裂いたら心臓を抉ってあげるよ。そしたら楽になると思うから……それまでは我慢して苦しんでね。我慢して苦しむってのも変かな……？　ま、とにかく無茶苦茶痛いですよ？」

明日香が冷ややかに囁いた。

「心臓を避けて首までいこうよ？　その方が少しでも苦しむよ？　でも小腸挽いてる辺りで失血死ショック死とかならないかな？　それだけが心配だよ」

美香が心配そうに呟く。

よくぞそこまで残酷になってくれた。一生の親友になるなこの子達は。

莉央は心の中でそう呟いて嬉しがっていた。

『ズプッ……』

詩織の股間にあてがわれたノコギリが女子高生、詩織の小陰唇にめり込む。

「ひっ……！？　痛いっ！！　止めてっ！！」

思わず大声で叫ぶ詩織。

「まずは陰核と膣と尿道口、肛門を真っ二つに挽き裂きます。エッチな部分すべてが最初の五回くらいでパックリ開いちゃうけど許してね？」

美香が顔を赤くしながら詩織に問いかけた。

「嫌だ！　パックリ開かないでっ！！　やめて許して助けてっ！！お母さんっ！！　助けてええっ！！」

吊るされたまま顔を真っ赤にして号泣しながら母に助けを求める詩織に構うことなく最初の一挽きが始まってしまった。

「いい声……聞かせてね？　ほうら、詩織さんのオマンコ……切り裂かれるよ？」

明日香は優しく囁きながら先に鋸を自分側にゆっくり挽いた。

『ズシュッ！！　ザクザク……』

「ぎゃあああああっ！！！！」

島中に響き渡るほどの絶叫を上げる詩織。
構わず二回、三回とノコギリは挽かれてゆく……。
クリトリス、小陰唇はパックリ割れて、尿道口も縦方向に割かれてゆく。鮮血が飛び出してくる。
五回目を挽いたときには、今まで身体を仰け反って辛うじて避けていた肛門までもついに切開。
これまた夥しい量の血液が飛散する。
詩織の絶叫は、止むことなく響き渡る。
構わずにどんどんノコギリ挽きを続けていく二人……。

＜ｉ４４２６２２―２４９０３＞

子宮まで切り裂いた時に、莉央が一度手を止めさせた。

「こいつの女の子部分……真っ二つにするの少し可哀想だから抉り

出してあげちゃおう♪　よっと」

『グボッ！！　ぐちゅちゅ……ズルンッ！！　ぷるるんっ！！』

「ギッヒイイイッ！？　いだいいいいいっ！！」

莉央は詩織の子宮と卵巣を右手で抉り取った。
プルンプルンしたその臓器はお皿の上に置かれた。
生温かく、ひくんひくんしてる子宮と卵巣はお皿の上に飾られたまま、処刑は続けられた。
ズルズル……っと小腸が飛び出してくる。

「やだぁ……グロすぎ……」

明日香は真っ青になって凍りついた。

「きゃっ！！　あたしの太腿に小腸が巻き付いたっ！？　気持ち悪いっ！！　ヌルヌルしてるよ……ひゃあぁぁキモい」

美香は必死で巻き付いた小腸をほどいている。
泡を吹いて痙攣を始めた詩織。

「まだまだ死なせてあげないよ？　ほら、なかなか死ねない気付け薬を打ってあげるから！　まだまだ頑張って！！　お姉様♪」

失神しかけた詩織に再び意識がハッキリ戻る。
戻ると同時にこの世の物とは思えない激痛が再び彼女を襲い始めた。切開された腹部から流れ落ちる血が詩織の顔面へ伝い落ちてゆく……。

「ゴボッ……ゴボッ！！」

呼吸する度に自分の血までも口に吸い込み、何度もむせ返る呼吸困難な苦しみ。
一度小腸を切断して、ノコギリ挽きを止めて休憩する二人。
ビクンビクンしながら全身をくねらせてもがき苦しむ詩織を三人で眺めながら微笑んでいる。
クリトリスや膣、肛門や子宮のあった部位は空洞になってパックリ開いてしまっている。
そこからは流れ落ちる鮮血。と共に大腸、小腸のみがブラ下がって体の動きに合わせてブランブラン揺れていた。

「なかなか死なないもんだね？　かなり足が長くなったみたいに見えない？」

「あはは！　こんな長いのなんてアメリカ人でもいないよ」

冗談を飛ばす美香と明日香。
莉央が近付き右の乳首をペンチで掴む。

強く握りしめていき、潰してしまった。
白目を剥いて泣き叫ぶが、お構いなしにペンチを右に左にこねくり回して、ついに乳首を引き千切った。
そのまま左の乳首を掴み、同じく潰してから引き千切る。

「こんなもの、もう使わないから要らないでしょ？　子宮も無いからもう女性でもないんだし……」

『ずちゅうっ！！ズボボボボボ……』

そう言いながら右手をパックリ開かれた股間に突っ込んだ。

「いやっはあああっ！？　いだいいいっ！！　やめでえええええっ──！お腹が熱いっ！！　ひいいいいっ！！」

「うるさいわね？　後一時間は生きて苦しんでもらわないと困るから……ほらほら。小腸あたしの手で掻き回してあげるからイきなさい。────ってマンコ真っ二つに切り裂かれるわ子宮抉り出されるわでイける訳ないか。あはは♪」

「わ～。えげつないなぁお腹の中って……」

「ほんと。なんか白やらピンクやらで内臓とかお腹の中ってエロいわね？」

美香と明日香は変な興奮に目覚めている。

リョナ系とゆうかＳＭでゆうサド系か……。
どちらにせよ人を処刑することに躊躇いが無くなってきている二人だった。
お腹の中は莉央が綺麗に抜き取った。
大腸、小腸は全て抜き取られ、生命を維持する臓器以外は全て抜き取られた状態だ。
普通ならショック死するところだが、妙に死ねない気付け薬を打たれているため、地獄の苦しみは続いて生き続けている詩織。
明日香と美香は休憩後、出刃包丁に持ち替えて、再び詩織に近付き、右の乳房、左の乳房を根元から抉り取った。

「乳首も性器もないし。ついでに乳房も取ってあげるね？　嬉しいでしょ？」
「あたし達を恨んで化けて出てこないでね？　幽霊になってもあんたのマンコ切り裂いてヒイヒイ言わせて泣かせてやるんだから！あはは♪」

二人は切り取った乳房を切り裂いている股間から腹部へ捩じ込んだ。

「オッパイは母の元に還る。うん、一件落着」
「良かったね。持ち主の中へ還れて。うふふ」

残酷な行動と会話を淡々とこなしながら再び特大ノコギリを手に

して詩織の前後に立ちはだかった。
胃の辺りまでスッとノコギリを落とすと、再び力を込めて挽き出す二人。

『ギコギコ……ギコギコ』

「ほらほら、もっとゆっくり時間をかけて挽いてあげてね！」

莉央が体育座りのまま二人の処刑を見守りながら指示をする。

「うん。了解！　莉央ちゃん。何かびくびく大きくケーレンし始めたけど許しませんよぉ？　恥骨も背骨も刃の小さい特大ノコギリにかかれば簡単に真っ二つになっていくね？　美香ちゃん」

「そうだね。よいしょ。よいしょ。あはははは！　こいつ、血反吐吐きながら目ん玉グルングルン回してるよ？　きもーい♪　おっぱいも血まみれでブルンブルン揺れてるぅ。哀れな女子高生だねっ！　あはは♪」

<i442623―24903>

「ゴボッ！！　ごほぼぼ……」

嘔吐と吐血を繰り返す詩織に最早叫ぶ生命力さえなかった。
後、数センチで心臓へ達すると思える所で再び手を止める明日香と美香。
まだ死なせてもらえなかった。
よくわかってると言わんばかりに微笑みながらペンチを持って詩

織に近寄る菅野莉央。

「詩織おねぇさん、もう背骨の神経やられて自分の意思で体も動かせないでしょう？　じゃあ次いくね？　はい。お口を開けて。あーんして？」

「むごごご……いや……もう……はや……く……殺し……」

そう言いかけたとき、莉央の激しい往復ビンタが股間から切り裂かれて死にかけの女子高生、詩織に襲いかかる。
あっと言う間に１００回のビンタが顔面を激しく左右に揺らせた。
涙とヨダレと血液と嘔吐物を辺りに撒き散らしながら、詩織は顔面の激しい痛みに耐えきれなかったが、体が動かせない……。

「仕方ないなあ。動かせないいんだったよね……あたしが開けてあげる」

『グリ……ググ……パカッ！』

無理矢理大きく開かされた口目掛けて莉央のペンチが口内へ捩じ込まれる。
ペンチで前歯を挟み、一分間ほどかけてグリグリ捏ね回してついに引き抜いた。
尚更大きく口を開けたまま自分の意思で閉じれないまま絶叫する詩織に、容赦なく一本一本歯を抜いていく。
一本に一分以上かけて、苦痛を長引かせるためにグリグリ捏ね回しながら………。

ついに全ての歯を引き抜かれた歯茎は血まみれで、ズタズタに変形している。

「全部歯がないとお婆さんみたいだね？　詩織さん……次はこの、汚い舌をもらうわね？」

そう言うと無慈悲に舌の根元をグリッと掴み、潰して引き抜く。失敗して真ん中辺りが潰れた感じで滑り抜いてしまった。

「ギャアアアッ！！　ごろじでぇぇっ！！　もうごろじでえぇっ！！　お願いいいっ！！」

『バキッ！！』

ペンチで鼻を殴り、鼻の骨を叩き折った。どくどく鼻からの鮮血が、足元に降り注ぐ。
最早血の海だった。

「次は目ん玉抉りだすから」

そのまま右目にペンチを突き刺そうとするが、強く目を閉じて抵抗した。意識しての抵抗ではなく、もはや身体を守る条件反射みたいなものだった。
それならばと、瞼ごとペンチを突き刺し、半ば無理矢理に瞼ごと眼球を抉り出した。
泡を吹いて絶叫しながらまたまた意識を失う詩織。

そのまま左目も抉り取る。
激痛でまたまた意識が戻る。
まさに死ぬに死ねない地獄絵図だった……。
「お待たせ詩織さん。はい、あーんして。今度は失敗しないから安心してね？　目も見えなくなっちゃったね？　怖さも半減したんじゃないの？」
左手の指を口内へ突っ込んで、再び舌を掴み、今度は右手に持った出刃包丁で根元から切り取った。
舌が巻き込み、喉を塞ぐ。
ヒュウヒュウと窒息して死にかけたとき、明日香と美香のトドメが再開した。
「ほっておいても巻いた舌で窒息死だろうけど……あたしたちの鋸挽きでトドメだね？　明日香ちゃん」
「オッケー！　よいしょっ！　よいしょっ！」
『ギコギコ……ギコギコ……ブシュッ！！……』
「ぴぎゃああああっ！！」
『ガクッ………びっくんびっくん！！びくんびくんっ！！』
ついに詩織の心臓がノコギリで挽かれ、絶命した。

本日最大クラスの大痙攣を起こし続ける遺体。
あまりに惨めな見た目で可哀想と思い、莉央は遺体の首を切断し、足元に（遺体の首元）そっと置いて両手を合わせた。
「さっき美香ちゃんも言ったけどあたし達を恨んで出てこないでね。幽霊でも容赦しないわよ？　マンコ切り裂いて苦痛で地獄に送ったげるから」
「さ、帰ろうか、莉央ちゃん、美香ちゃん。迎えのボートも着いたみたいだし。」
「お疲れ様、明日香ちゃん。今日は何か強くなれた気がしたよ莉央ちゃん。また三人で凶悪犯を処刑しようね！」
島に迎えに来た看守に、着替えのセーラー服一式と体操着上下をもらった三人は、残酷処刑島の岩場に設置されている簡易シャワー室で仲良くシャワーを浴びて、新しい服に着替えてから小型ボートで帰路についた。
残酷処刑島に数ヶ月の時を経て、新たな三人の遺体が加わった――――。

残酷処刑再開命令（後書き）

残酷処刑島での初めての死刑執行任務を遂行した明日香と美香の二人。
戦慄の処刑方法だったが、遺族の敵討ちと自分に言い聞かせて勇気を振り絞った。
莉央との友情を深める結果になり、またの処刑任務が与えられたら胸を張って望む所。
平和な学園生活はしばらく続くのだろうか？

ＯＬ真紀たちの残酷折檻（前書き）

残酷処刑島での任務を終え、ＯＬとして普通に暮らしているリーダーの木村真紀が勤めている会社で、新入社員の１８歳の女の子に騙されて、かなり残酷なお仕置きをしてしまう。
同い年の二人のオフィスレディを従えて――――

ＯＬ真紀たちの残酷折檻

「木村さん、この二人が本日から当社で働いてくれることになった越智（おち）めぐみさんと、小西優作さんよ。経理部も若い人が入って活気がでてきたわね？　あなたの担当になったから優しく指導してあげてね」

「はい。分かりました」

徳吉丸商事株式会社――――主に百貨店に輸入品の雑貨類を販売する中小企業である。
今年は高卒の男女二人を、新入社員として採用した。
かつては残酷処刑島にてリーダーを務めていた３１歳になったＯＬの木村真紀が、１８歳の二人をうまく教えていけるのか？
最近、セミロングを茶色に染めて、眼鏡をかけている。身長も１７０ｃｍと、大柄の女性だが、普段鍛えているのもあって、バランスの取れているナイスバディであった。
残酷な気性は隠して真面目に働いてはいるが、牙を剥く者が現れたら辛抱を続けられるかどうかは分からない……。

「ここはこうゆうふうにするの。エクセルもかなり使えるのね？　教えるのも早いから助かるわ」

「はい。趣味でもパソコンいじってましたからそれなりには分かります」

手際よく軽快にキーボードを叩く小西優作。
明るく活発な性格で、中肉中背。足も長く、目が大きく可愛い系の男前である。

越智めぐみの方は、あまりパソコンが得意ではないようで、必死でキーボードを見ながら一つ一つ押している。
営業部希望だったみたいだが、経理部が忙しくなってきたため、急遽こちらに回されたとゆうことらしい。

四ヶ月が過ぎ、高卒の二人は木村真紀の指導により、順調に仕事も覚えていき、会社の偉いさんや先輩たちの名前も覚えてかなり板に着いてきた。

「越智さん、前から言おうと思ってたんだけど……」

「なあに？　改まって。まさか告白とか？」

八月のまだまだ明るい仕事帰りの夕方五時半……近くの駅まで二人は歩きながら話している。
お互い反対方面の電車に乗るため、駅までのほんの１０分間のみだったが、毎日一緒に帰っていた。

「なっ！……何で分かったの！？　まじか！？」

「えっ！？…………」

思わず立ち止まって大声になる小西優作。

越智めぐみも完全に冗談のつもりで言った台詞に、想像もしなかった返答が返ってきたため、同じく立ち止まって小西優作の目を見つめ返している。

微かに頬が赤くなるのを感じていた。

「俺さぁ、木村さんのこと……スッゴく好きになってきちゃってさぁ……入社した頃はそんな感情なかったんだけど」

「え？…………あ、ああ、…………き、木村さんね。凄い美人だもんねあの人！　私達より一回りくらい歳上だったかな？　確か……」

狼狽しながら慌ててロングの艶やかな黒髪の頭を手で掻く仕草をする越智めぐみ。

「美人ってのもあるんだけど何かこう、何て言ったらいいのか分かんないけどさ……掴み所がないような……神秘的な感じがするってゆうか……そんな雰囲気が俺的に凄くそそるんだよなぁ」

「へぇ〜。小西くんって歳上好みだったんだ。歳下好みのロリコンだと思ってた」

「おいおい……ロリコンは酷くね？」

「あはは。んでいつ告るつもり？　好きになったとはいえ、相手は上司だから場所とかタイミングとか難しそうだよね？」

しばらく考え込むように上を見ながら歩く小西優作だったが、近くの駅に着いてしまった。
「あのさ、木村さんって確か車で通勤してたから、会社の裏の通りにある駐車場で待ち伏せしたら？　殆ど電車通勤だから、周りの人に見られる確率も低いと思うし……」
「あ、そ、そうだね！　ありがとう越智さん！　思い切って明日の夕方にでも告白するよ！　できたらだけど……ははは。じゃあまた明日ね」
「うん。頑張れ少年！　私も応援してるから！　バイバイ」
先に電車に乗って帰って行く越智めぐみを見送りながら少し恥ずかしそうに小さく手を振る小西優作だった。
「ただいま。今日はご飯いいから」
「どうしたの？　めぐみが夕ご飯食べないなんて。大地震でも来なきゃいいけど……」
母親の皮肉に答えないまま二階の部屋に上がり、ベッドに横になる。
自分では理由が分からないまま涙がこぼれた。

『な、なんで泣いてるの私。同期で少し男前で帰り道いつも話しながら帰っていただけの男が――――他の女性を好きになったからって……まさか私ってあいつのこと……』

バタンっといきなりドアが開き、母親が話しかけてきた。

「夏場なんだからお風呂くらいは入りなさいよ？　ちょうど沸いてるから。お腹すいたら、冷蔵庫にハンバーグ二つとご飯をラップして入れてるから夜中でもいつでもチンして食べなさいね」

慌てて壁の方を向き、涙をバレないようにする。声を出してもバレそうなので黙ってやり過ごした。

『ありがとう。母さん』

「全く……返事くらいしてよね。社会人なんだから少し何かあったからってクヨクヨしてたらこの先やっていけないよ？　元気出してね」

階段を降りていく母親に感謝をしながら着替えを手にして風呂場へ向かう。

結局ご飯は食べる気もしないまま部屋に上がってきて、取り敢えず小西のことは考えないようにしよう、と心に決め電気を消した。

明くる日――――

「おはようございます」

「おはようございます。小西くんも既にベテランだね。私も営業部の同僚の二人も誉めてたわよ？」

「ありがとうございます！　この調子で頑張っていきますのでこれからも御指導よろしくお願いします」

上司の思いを寄せている木村真紀に誉められ上機嫌の小西は、後から出社してきた越智めぐみにも明るく大声で挨拶した。
呟くように挨拶を返すと、いつもより無口で淡々とキーボードを叩いていく越智だった。
元気がないように思っていたが、まさか自分のことを好きになってくれてたとは夢にも思っていなかった小西は、そのまま越智と同じく作業に入った。

「お疲れ様。頑張ってきてね小西くん」

「あ、ああ。ありがとう越智さん。また結果報告するから。心臓バクバクしてきたよ……今日は駅までお互い一人だけど気をつけて」

「うん。まだまだ明るいし平気。じゃあね！　ファイト！」

朝より普通に話してくれた越智めぐみに安堵を覚えた小西は、不安も拭えてますますやる気になってきていた。

「よし！　六時には木村さん駐車場にくるな。いくぞ！　頑張れ！　勇気出せ俺！」

上司の木村真紀を待ち伏せするように駐車場の壁に隠れて、ひたすら待ち続けていると、オフィスレディのそのままの制服姿で愛車の赤いセダン車に乗り込む木村真紀を捉える。

すかさず駆け寄り窓をコンコンと叩いた。

「あ、あの……じ、実は俺……いや、僕は……き、き、き、き」

「…………横に乗りなさい」

緊張し過ぎて言葉が出てこない小西に真紀が声をかける。

「は、はいっ！！」

ともかく慌てて助手席へ乗り込む小西を見ながらクスッと微笑む真紀だった。

一時間も走ると、少し高級感がある住宅街へ車は辿り着く。

「何の用か分からないけど私に言いたいことがあるのね？　何かしら？　……って言っても、もう家に着いたから上がってコーヒーでも飲んでいく？　私独り暮らしだし」

「あ、ありがとうございます！　帰りは歩いて帰りますから」

「あはは。こんなとこから歩いて帰ったら足が吊るわよ？　あなたの家までちゃんと送っていってあげるから心配しないで」

真紀の家に上がり、コーヒーを飲んでいるうちに、段々と落ち着いてきた小西はついに真紀に告白する。

「木村さん、実は僕……木村さんのことが………」

「え？　私のことが？」

「だ、大好きになってしまいまして、その、あの、出来れば僕とお付き合い願いませんかっ！？」

意を決して半分叫ぶようにいい放つと、顔が真っ赤になっていくのを感じた。
目を丸くして小西を見つめる真紀……。
この数秒間の沈黙は、小西にとって途方もなく長い時間に感じられた。

「一回りほども歳上の私で構わないの？」

「は、はいっ！！　木村さん以外考えられませんからっ！！」

「ふぅん。そうなんだ。私も小西くん可愛い顔してるし明るいしタイプだから別に構わないよ」

「え？え？え？……ほ、本当ですか！？」

　真紀はコーヒーを飲み干してから黙って立ち上がると、小西の後ろへ回り込み、ギュッと背後から抱き締めた。

　とてつもない高揚感が小西を襲う。

「一緒にお風呂入ろうか？　優作」

「ええっ！？　いいんですかっ！？　木村さんっ！！」

「私のことは会社以外では真紀と呼んで」

「ま、真紀……さん。呼び捨ては無理ですから真紀さんでお願いします……」

「木村さん……じゃなかったらいいから。じゃ、お風呂いこ」

　まだ童貞だった小西は、素っ裸の真紀を直視出来ないまま上を向いて湯船に浸かっていた……。

　ビンビンに勃起している下腹部を悟られないようにするため、両膝を閉じて真紀から見えなくしている。

「いつ頃から私のこと好きになってたの？」

「え？　えーと……入社してから三ヶ月ほどたった頃から気になり始めてまして……半年後は真紀さんのことばかり考えるようになってました」

「同期の越智めぐみさん……あの子も普通に若くて可愛いから、てっきり付き合ってるのかな？　とか思ってたよ。仲良く毎日一緒に駅まで帰ってるみたいだったし……」

「そ、そうなんですか……越智さんも僕のことは何とも思ってないと思いますよ？　そんな素振りも見えなかったし……日常会話だけでしたから……毎日……」

「ふうん。何か今日は不機嫌そうだったけど……私に告白するとか彼女に話したの？」

「え？　は、はい。すみません……でも夕方には上機嫌でしたよ？　越智さん」

照れながら背中の流しあいをして、風呂から上がった頃には夜の九時を回っていた。

家の両親に電話をして、友人の家に泊まっていくと嘘をついた小西は、憧れの上司、五歳歳上の木村真紀と素っ裸でベッドで横になっていた。

「エッチしようか？」

「え？　あ……は、はいっ」

狼狽する小西の顔をスッと両手の掌で抱え込み、引き寄せてキスをする真紀。

「ん……んん！！」

『ぐちゅ……ぐちゅ……』

１８歳の童貞男に舌を入れて口内を掻き回す真紀。舌を絡めて卑猥な音をたてる。

更にビンビンになった下腹部を、今度は気にしないまま必死で真紀との距離を詰める小西であった。

横向きに身体を密着させ、両手でお互い強く抱き締めあい、ディープキスを続ける二人。

真紀のヘソの辺りにビンビンになった陰部が当たる。

絡めた舌を抜きながら、右手でそっとイチモツを握り締める真紀。

「ああっ……真紀さんっ！　恥ずかしいです」

「凄い固くしちゃって…………私を上から抱き締めながら、これを挿れて……」

「ごくっ……は、はい」

生唾を飲みながら覆い被さり、必死で挿れようとするが、なかなか入らない……。
見かねた真紀が再び右手でそっと握り、膣口へ誘導してあげた。

「ここよ」

『ずぷ……ずぷぷぷ……』

「あ、あん……大きい……」

18センチはあろうかとゆう童貞だけど大きなペニスが真紀の膣を貫く。
子宮口まで届きながらピストンを繰り返す。
真紀は本気で感じていた。

「こんな大きな……始めて……あん、あん……」

「真紀さん、好きです！　真紀さん……い、いく……いきそうですっ！！」

「中に出してもいいわよ。イッて」

「イク、イクううっ！！真紀さあああんんっ！！」

『ドピュッ！　ドピュピュピュピュピュウウッ！！』

大量の精液を真紀の膣内にぶちまけた小西は満足そうに真紀にキスをする。

「早かったけど初めてにしては気持ちよかったよ？　やるなぁ優作」

「すいません……あまりに気持ち良かったので我慢出来ませんでした……」

「いいのよ……まだ溜まってる？」

小西の睾丸をギュッと掴んで、コリコリの手応えにまだまだ精液が残っていると判断した真紀は、ゆっくり手でペニスを扱き出した。

「あはっ！？　ま、真紀さん、真紀さんの手で……しごかれて……気持ち良いです……」

「羽毛布団汚れてもいいからそのままたくさん出しなさい。もう買い換えようと思ってた所だからね」

「はい、イク、イク、イクううっ！」

一度目と変わらないほどの大量の精液を羽毛布団にぶちまけた小西は、女性との本番セックスと、女性による手コキと――――人生で初の快感を二種類も味わえて、凄く幸せな気持ちであった。

「これからもよろしくね。優作。明日の朝は早めに起きて送っていくから……服も着替えないと会社の人達に怪しまれちゃうからね」

「そ、そうですよね。一緒に車で会社へ……とも思ったのですが、それこそ見られたらマズイですもんね……すみませんがよろしくお願いします」

そのまま早めに眠りにつき、五時に目覚まし時計で起きた二人。小西が通勤に間に合う時間に家に送り届けた。

家に帰ってシャワーを浴びながら、見慣れた自宅を見ているうちに、これが夢ではないと更に実感できて、益々嬉しくなってゆく小西だった。

――――――――そして一ヶ月が過ぎた。

週末には必ず真紀の自宅へ泊まりにいって、二人の仲は益々深まっていた。

それと反比例して、越智めぐみとの仲はどんどん気まずくなっていた。

「もう一緒に帰るの止めとこうね。みんなに内緒とはいえ、小西くんは木村さんと、付き合ってるんだから。男女二人で会うのはダメだと思う」

こんな台詞を越智めぐみから、木村真紀と初エッチした後にすぐに聞かされてからとゆうもの、仕事中も殆ど口を聞いてくれない状態になっていた。

この一ヶ月間、先輩に対する態度も段々と横柄になっていき、木村真紀本人と、その同僚の二人に対してもかなり生意気な態度をとるようになってきていた。

心の中に、小西優作を奪った女＝上司＝木村真紀とゆう図式が何処かに少しでもあったのだろうか。

好きな気持ちはあっても、正式に告白もしてない内に、他の女性と付き合い出したのでは文句も言いようがないのだが、何処かに真紀への妬みや恨みがあるのは否めない自分がいた。

「越智さん、今日はここまでは計算しといてくれる？」

「はーい。わかってまーす」

「越智さん、木村さんにそんな返事をしたら失礼だよ？」

「あんたには関係ないでしょ？　ほっといてくれる？」

少しは罪悪感もあり、我慢してきた真紀だったが、ついに堪忍袋の緒が切れる日がやってきた。

「お疲れ様です」

「お疲れ様越智さん……」
　そそくさと帰ろうとする越智めぐみに木村真紀と同僚二人の三人が立ちはだかる。
＜ｉ４４７０６１―２４９０３＞
「……何か……御用ですか？　私は残業も終えたし、早く帰りたいのですが……」
「もう会社には私達三人と、越智さんの四人しかいないわ」
「残業が長引きましたので……それがどうかしましたか？」
「今日はね……越智めぐみさんの解剖をすることにしたの」
「はあ？　解剖って……あはは。私は実験用のカエルですか？　１８歳のＯＬなんですが？　笑わせないでくれます？　帰らせてください。どいて」

　真紀にドンとぶつかりながら、階段へ走りながら向かう。
　三人のうち、営業部の二人は表上では真紀の友人であり、陰では部下と同じだった。
　真紀の本当の怖さを知っていたからである。
　気は合うが、常に真紀の機嫌を窺っている二人だった。
　真紀が石原聡子に目配せする。
　艶やかな真っ黒な髪の色を持ち、ポニーテールで童顔の石原聡子は、１５０ｃｍと小柄な割には足が物凄く早く、誰かを追い掛けるとか捕まえるのには最適だった。
　ラージリングのイヤリングを愛用している。

胸は小さな方だが、スマートで余分な肉がない健康的な身体である。

「止めて！　離して下さい！　離して！！」

「木村さんの命令は絶対なの……今日は遅くなるって親にも電話しときなさいよ？　越智さん」

あっという間に捕捉された越智めぐみが階段で叫び出すが、お構いなしに引っ張って二階へ連れ戻されてきた。
もう一人の真紀の同僚でありながら部下である有村佳歩は、髪型は赤毛に染めたショートシャギーで、少し吊り目の綺麗系の女性だった。
独特の口調で話す上に、かなり天然が入っている変わった女性であった。
胸は大きい方で身長は155cmと、女性では平均的だった。柔道二段の強者。そのせいもあって力はかなり強かった。
真紀の目配せを確認すると同時に、越智めぐみを背負い投げで床に叩きつけた。

『ぐるんっ……ドカッ！！』

「ぎゃっ！？　痛あああっ！！　何するんですかっ！？　上司とはいえ暴力振るうなら訴えますよ？」

「取り敢えず動けないよう両手両足へし折ってあげて有村さん」

「了解しましたぁ。真紀さんの御命令ならば御安い御用ですぅ♪」

「や、やっ！　やだ！　冗談ですよね？？」

「冗談に見えますぅ？　ホントに折っちゃいますから。はいっと！」

『ギュウ……バキッ！！』

「んぎゃああっ！？」

右手を両手で股に挟み込み、捻って簡単に越智めぐみの右腕をへし折ってしまった有村佳歩。
あまりに叫び声が大きいので、真紀は痛み止めの麻酔注射を打つ。
痛みのないまま、確実に左手、両足の膝も合計四ヶ所の骨をへし折ってしまった。

「あはは。動けないでしょ？　痛みが麻痺してるのは骨折してる両手両足だけだからね？　こんなとこは痛いのよ？」

そう言いながら真紀は強烈な往復ビンタを十回ほど叩き込む。

「痛あああっ！！」

仰向けに倒れたまま立ち上がれない状態で大声で叫ぶ越智めぐみの両足を掴んでパックリ開かせる石原聡子。

「白いパンツ丸見えね？　あんたまだ処女らしいね？　私に頂戴♪
ほら、ここはオマンコかな？」

『ツプ……ズズズ……バリッ！！』

１０センチはあろうかというヒール部分をパンツ越しに処女の性器へ差し込む。

一瞬で処女膜は破られ、白いパンツは真っ赤に染まってゆく。

「あーあ……私のハイヒールが汚れちゃったじゃないの」

「いったあああいっ！？　私の処女が……いやああっ！！　止めろーっ！！　このクソ女っ！！」

「オマンコ流血してらっしゃるのに威勢がいいですねぇ？　ほら、全裸になってください！　めぐみさ～ん♪」

有村佳歩と石原聡子によって、身動き出来ないまま素っ裸にされていく。

「やめてーっ！！　恥ずかしいっ！！　女が女の服脱がせて何が嬉しいの！？　やめろっ！！」

「恥ずかしいくらいで済むと思わないで下さいね～？　あんたはね

……今から真紀さんに……何と！　解剖されちゃうのです～。あらあら……大事な穴が前も後ろも丸見えになっちゃいましたねぇ」

「そうよ。処女膜破られたくらいで喚かないの。結婚しても一生子供産めなくなっちゃうんだから。ね？　木村さん」

「早くもバラさないでよ。面白くないなあ。あんたが好きだった優作……セックスうまくなってきてるわよ？　最近Mにも目覚めてきちゃって。私に肛門に指突っ込んで下さい。とか言ってくるの。男って変態が多いんだね？」

「あはは。残念でした！　木村さんとエッチする前に私とエッチしてたのよ彼は。私が振ってやったら今度は木村さんに、アタックする！なんて言い出したから応援してあげてたの」

「嘘をついてもダメよ？　あなた処女膜付いてたじゃん？あんな少しヒール突っ込んで流血するなんて……処女膜付いてた証拠だよ。あはは」

「キスしてオッパイ揉ませてあげただけよ。それでもエッチはエッチでしょ？　木村さんより私が先に優作くんとエッチしたのでーす！」

「ふうん、そうなんだ。じゃあ今から呼んで確認するわ」

電話をして一時間後に会社に着き、階段を駆け上がってくる小西優作。

「はぁ。はぁ。こ、これは！？　どうゆうことですか！？　真紀さん！！　越智さんが素っ裸にされてる上に頬が真っ赤になってるし血が出てる……可哀想に！……一体何をしてるんですか！？」

「優作……あなた、越智さんとエッチしてたって本当なの？」

「え？　そんなことするわけないないじゃないですか！！　僕は真紀さんを愛してます」

「……って言ってますが？　めぐみさん？　もう嘘は止めといた方が身のためだよ？」

「嘘じゃないですよ！　その証拠に優作くんのおちんちんには二つのホクロが並んでついてます。舐めろ！とか言われてフェラしちゃいましたから」

真紀の顔色が変わった。
確かに朝起きてジックリ観察しているときに、二つの並んだホクロを見ていたからだ。

「優作……私は信じてたんだけどね……道理でいつも仲がいいと思ったわ」

「嘘だ！　フェラなんて強要してないし、胸を揉んだりもしていない！　ってゆうかキスさえしていない！　何で嘘をつくんだよ越智さん！？」

「嘘なんて言わないよ私……タップリ私の口の中に精液出したじゃ

ないの。苦くて美味しくなかったよ？　優作くん」
「もういいわ！　優作！　この子、四肢の骨を折ってるから動けないの。今から正常位で犯してあげなさい」
「な、何でですか！？　僕は真紀さんのことしか愛してないです！」
小西優作の前に立ち、ゆっくりとベルトを外し、ズボンを脱がし始める真紀。
パンツも一気に引きずり下ろすと、肛門へ人差し指を一気に突っ込んだ。
「あはっ、ま、真紀様……それやられたら……ムチャ気持ちいいです。ぼ、僕のアナルを掻き回してください……」
「ほらほら、掻き回してあげるから早くチンポ勃起させなさいね？」
『グリグリ……ぐりりり……』
顔を赤くして見つめる同僚の二人と、歯を食い縛りながら身動き出来ないままの越智めぐみ。
ショートカットでおっとり系、柔道二段娘の有村佳歩が不思議そうに呟く。
「男性って……おしりの穴なんかで感じちゃうのですね……変態ですね～」

「勃起率全開ね。ほら、越智めぐみのマンコに突っ込んでやりな」

「うう……真紀さんだけを愛してるのに……でも真紀さんがそうおっしゃるなら……ごめん！　越智さん」

「や、止めてっ！！　止めろっ！！　あんた最低っ！！　鬼畜っ！！……やあっ！？」

『ズプ……ズプププ』

「やめ、い、痛いっ！！　やだっ！！」

処女膜は有村佳歩のヒールで破かれてるとはいえ、男性のペニスを生まれて初めて挿入される屈辱まで味わわされるとは思ってもいなかった。越智めぐみは心から拒否して叫んだが、真紀の命令だと自分自身を言い聞かせながら強姦しようとする小西優作には届かなかった。

好きな相手なら屈辱どころか幸福だったのだろうが、既に木村真紀との仲を知っている状況では、愛情など芽生えることはなかった。ペニスの二つのホクロも、優作の男の上司が、トイレで連れションン中に覗き見して、コソッと越智めぐみに教えただけのことであった。

真っ赤な嘘に騙された木村真紀は、もう小西優作さえも許す気はない。

『ズボオオオッ！！』

「ぎっひいいいっ！！　痛いいいいっ！！」

「根っこまで挿入できたようね？　次は腰を激しく振りなさい」

そう命令しながら優作の直腸を前後左右に激しく掻き回す真紀の白い指。

『グリグリグリグリ……クチュクチュクチュクチュ……』

「あっ！！　真紀さん……気持ちいいです……もっと僕のケツマンコを掻き回して下さい……あああっ」

会社の床は越智めぐみの性器からの血でどんどん赤く染まってゆく。

人生で初めての膣内への異物侵入を許してしまった上に、激しくピストン運動されてゆく。

「や、やだ！　止めろっ！　私のこと好きでもないくせに……よくもそんなことが……」

「イ、イク……イキそうです！！　真紀様……」

「イけ！　タップリ越智の中に出してやりなさい！！」

「やめてっ！！　中に出さないでっ！！」

「うっ……イックううう！！」

『ドピュピュピュピュ！！　ドクンドクン……』

「やだ……こ、このバカ！！　妊娠しちゃったら殺してやるわよ！！」

真紀は小西優作の肛門から指を一気に引き抜いた。大便混じりの腸液がプシュッ！と飛び出す。

「優作ってば汚いなあ……少しウンコ混じってるじゃん……くさっ。次は睾丸ね？」

背後の股間から手を伸ばし、右の睾丸を鷲掴みにした。
ビクッとなりながらもMに目覚めた小西優作は、木村真紀のアナル責めの余韻に浸りながら幸せな気持ちになっていた。

「ま、真紀様、もっと僕の睾丸を……強く握ってください……あん」

「握り潰して下さい……でしょ？　優作。言い直しなさい」

「え？　は、はい。……僕の睾丸を握り潰して下さい……」

『ギュウウ……』

「ぎひいいいっ！？　ホントに痛いですうっ！？」

「へぇー……そうなんだ。ほれ」

『ブチュウッ！！！……ドピュピュッ！！』

まさか本当に睾丸を握り潰されるとは思っていなかった優作は、血まみれの精液を再び越智めぐみの膣内へ放出させた。

「ギャアアアアアッ！！」

「また出した！！　もうやだ……ほんとに妊娠しちゃう……危険日なのに……グスン……グスン」

妊娠させられる恐怖にとうとう泣き出した越智めぐみだったが、泡を吹いて気を失っている優作の左睾丸も真紀の強烈な蹴りによって、瞬間に潰された。
また血液か精液か分からない液体がめぐみの膣内に飛び散る。

「泣かなくていいよ越智さん。妊娠の心配よりも生きて帰れるかどうかの心配をしたほうがいいよ？」

「そうですねぇ。あなたは真紀さんによって解剖されるって運命ですから。　はい、小西くん、もうおちんちん……抜いて差し上げましょうねぇ？」

そう言いながらカッターを取り出し、半勃ちになってしまっていながらも、めぐみの性器へ辛うじて入っているペニスを根元からスパッと一引きで切断する有村佳歩。

「ンギャアアアアッ！！！！」

目を思いっきり見開いて泣き叫ぶ優作。

「この女性の処女膜を奪っちゃいましたのは石原さんだから、おちんちん切断は私で良かったんですよねぇ？　真紀さん？」

「うん。こんな浮気者……もう彼氏でも恋人でもないから別にいいよ。私が金玉潰したのがその証拠だから」

「もう邪魔ですから少しどいていていてくださいねぇ？　はいっと」

『ドカッ！！……ゴロゴロゴロ』

泡を吹いて失神したまま、二つの睾丸とペニスを失った小西優作は、柔道有段者の有村佳歩によって数メートル横に蹴り転がされた。

『プシャー……』

「や、やめろ！　……やめて……止めてください先輩の方々……何

でもします。許してください……」

小便を漏らしながら恐怖に怯え出す越智めぐみ。
改めて木村真紀の恐ろしさに気がついてきたのか、震えながら許しを乞い出した。

「石原さん、私の鞄から医療用メスを取り出してくれる？」

「はーい……どうぞ。木村さん」

「私に今から何されるかわかるかな？越智めぐみさん」

「ひいっ！！　メスで切り刻むなんて酷いこと……止めてください」

「ちょっとマンコを解剖させてもらうわね？　二人に押さえ付けてもらいながら麻酔は無しだから……死ぬほど痛いけど死んでもいいよ？　もし生きてたらラッキーだけど、子宮も切り刻んでやるから子供は諦めてね」

「や、止めてっ！！　木村様……真紀様……ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいっ！！　わーんわーん」

「１８歳の大人がむやみに謝ったり泣いたりするなよ。まずはクリトリスだよ？　突き刺してからすぐに切り取るからね？」

『ブスッ』

「んぎゃあああああっ！！」

『ズズ……ザクッ……ポロ』

「はい、感じるところだからとっても痛かったね〜。きちんと取れたからね？　次は……尿道に爪楊枝いこっかぁ？　ほれ」

尿道へ爪楊枝を根っこまで全て差し込むと、更にもう一本、差し込んだ。更にもう一本……どんどん膀胱へ爪楊枝が突き入れられてゆく……。

この世の物とは思えないほどの絶叫をあげる越智めぐみだったが、膀胱がパンパンになるまで、尿道から爪楊枝を突き入れてゆく真紀。

「もう百本以上入ったね？　スゴイスゴイ♪　次は……このビラビラした気持ち悪い小陰唇を……切除しまーす♪」

カッターを器用に動かし、淡々と小陰唇のビラビラを、切除してゆく。

オマンコの原型を留めず、血まみれのヌチャヌチャした穴……といった感じの穴が残っている。

中指を突き入れてグチュグチュ掻き回し始める。

＜ｉ４４７０６２—２４９０３＞

血と愛液が混じりあって卑猥な音をたて続けている１８歳のオマンコだった。

「あはっ♪　スッゴくやらしい音をたててるねぇ。有村さんも石原さんもやってみる？」

「楽しそう♪　私も指入れさせて！」

石原聡子は人差し指と中指を血まみれのオマンコに捩じ込む。

「私も……二本づつ指を入れさせて頂いて、反対方向にお互いが思いっきり開けたらどれだけパックリ開いちゃいますかねぇ？　もしかして裂けちゃいます？　試してみますかぁ？　石原さん♪」

「そうだね。私はもう突っ込んでるからスタンバイOKだよ？有村さん」

「よーし！　いきますよぉっ！」

『ぐちゅちゅっ！！　……ギュウウ……びろーーん……』

「あああんっ！！　痛い痛い痛い！！　ギャアアアアアアアッ！！」

二人の二本の指が限界まで少女の性器を開いていく。

「まだまだまだいきますよぉ〜！　それそれ」

『メリメリ……バリ……バリバリ……』

「やめてやめてやめてえええっ！！　ひいいいいっ！！」

「ほら、裂けてゆくね？　会陰部分が……おしりの穴と繋がりそうだよ？　アハハ♪」
「あらぁ。メリメリ音立てながら裂けちゃってますねぇ♪　いくら泣いても喚いても許さないですからぁ～」

肛門方向へ少しずつ裂けていく性器。

「お二人さん、お見事！　よくそこまで開いちゃったね！　ようし！　子宮まで私の拳をぶちこんでやるわっ！！　それっ！！」

そこへ真紀のパンチが性器を直撃した。
開ききったオマンコに真紀のフィストが突き刺さり、一気に子宮まで届いた。
握り締めていたカッターの刃で子宮を丸く綺麗に切り裂いてくり貫いていく。
ポコッと出てきた手の中には、越智めぐみの子宮が半分ミンチになりながら握られていた。
全身痙攣させながら白目を剥いている彼女が生きているかどうかは分からなかったが、構うことなく更にすり潰してミンチにした子宮を浣腸器にセットする真紀。
さっき蹴り転がした小西優作の肛門を、有村佳歩と石原聡子に思いっきりパックリ開かせて、木村真紀が子宮のミンチが詰まった浣腸器のガラス製の先端を差し込む。

「フェラしてもらった彼女の子宮のミンチをケツの穴に入れてあげる。ほうら彼女と一心同体におなりなさい」

『プチュウウウ……』

「あ、熱いっ！　ひいい……」

痙攣しながら涙を流しながら越智めぐみの子宮ミンチを肛門から注ぎ込まれる小西優作……。

すぐさまブリブリと大便と一緒に出してしまった。

「あらあら、早すぎるわよ？　ご馳走なのに勿体無い。罰として越智めぐみさんを背負って病院でも連れていってあげて。膀胱にたくさん爪楊枝入ってるから医者にきちんと教えてやりなよ？　金玉潰されたまま動けないと思って痛み止めの注射打ってやってるけど、お前も診てもらった方がいいかもね？完全に潰れてるし……」

「はい……分かりました」

「それと、もし彼女が途中で死んじゃったり私たちのことを誰かに話したりしたら絶対殺すからね？　お前も越智さんも退職届を出してもう二度と会社来ちゃダメよ。分かった？　私たち……捕まりたくないしね」

「は、はい。分かりました……今までありがとうございました真紀さん……ほんと好きでした」

「ふん！　嘘付け！　さっさと行けよマゾガキが」

「お疲れ様で～す！　お気を付けて～」

「M男くーん、達者でねーっ！」

血を拭き取ったり後片付けをしたあと、普通に帰宅していく木村真紀たち三人だった。

部下の二人もさすが木村真紀の友人……かなり残酷な気性の持ち主である……。

ＯＬ真紀たちの残酷折檻（後書き）

新入社員への残酷な行為を、全て小西優作がやったことにさせて、難を逃れた木村真紀、有村佳歩、石原聡子の三人のＯＬは、これからも事あるごとにイジメやリンチを繰り返すだろう。

近い内に残酷処刑島へ渡航する日も訪れるかも知れない………。

ＯＬ真紀たちの残酷過ぎない調教の日（前書き）

木村真紀たち三人のＯＬは、この度の土日の連休で、バーベキューをするために湖のある穴場へ向かう。何かが起こりそうな予感がする……。

ＯＬ真紀たちの残酷過ぎない調教の日

九月のまだ少し暑い土曜日の午後――――

１８歳の高卒新入社員二人を折檻して辞めさせた三人の三十路のＯＬたちは、木村真紀の乗用車でドライブしている。

この土日は連休だったので、真紀の家から車で走って三時間はかかるが、意外と空いている穴場のキャンプ場へ向かっていた。

「気持ちいいわね～。緑に覆い尽くされて……心が洗われるわ～」

助手席の足の速い元陸上部の石原聡子が半開きの窓から吹き込む風を上半身に受けながら口を開いた。

「まだまだ暑そうだし～。バーベキューには時期尚早じゃないですかぁ？」

家でのんびり読書して過ごしたかった柔道二段の有村佳歩は相変わらずの力の抜けた中途半端な敬語でゆっくりマイペースに話す。

ほぼ強制的に連れてこられたため、いささか拗ねている感じだった。

「それにバーベキューって言いましてもねぇ……真紀さんの車の中、何も載ってないですよー？　これってまさかの買い忘れとかじゃぁ

ないですよねぇ？　もう引き返してそのまま帰りますぅ？」

「あのね、有村さん。最近は墨で火を起こしてお肉や野菜も揃えてくれて、一から十まで全てやってくれるバーベキュー屋さんがいるのよ。その道のプロが来てくれるから安心してお腹一杯お肉食べていってね？　今日は私の奢りだから！　しかも送り迎えつきなんてとっても贅沢だよ？　お二人さん」

「そうなんですか〜。便利な世の中になったもんですねー。じゃあ遠慮なく戴きますね〜」

「ありがとう木村さん。本日は甘えて戴きまーす♪」

峠の登り下りを数回繰り返し、長いトンネルを抜けると、小さな美しい湖が見えてきた。

「ここを右に曲がって少し行けばさっき見えた湖の畔に着くわ。そこでバーベキューだから。お腹一杯食べましょう」

対抗がギリギリ出来るほどの狭い砂利道に右折して、小径を少し進んでゆくと、湖の少し手前に簡易な駐車場が現れた。

「さぁ着いたわよ。規模は小さいけど綺麗な湖だねー。大学生かしら？　二十歳くらいの若い男たち……。いや、頭悪そう……なんかヤンキーっぽいな。そいつらが三人と、小学生の息子と娘を連れた四人家族……先客は六人だけか。さすが穴場の秘境だわ」

「こんな素敵な場所なら来て良かったですぅ♪」

「わー！　もうバーベキューのプロさんが来て、お肉や野菜焼いてくれてる！！　スゴい時間ピッタシだね！！」

「あ、どうもどうもこの度はご利用頂き、ありがとうございます木村様、三名様。後五分ほどでお肉も焼けますのでもう少々お待ちください」

「ありがとう。本日はよろしくお願いします。この二人はバカほど食べますので……」

「すいません〜。お腹すいてますのぉ」

「バカほど食べてやるー♪」

肉も野菜も焼けて、次々に頬張る三人のＯＬだった。
プロが忙しいくらいのペースで食べ続ける三人。
焼き肉を食べながらも、真紀は隣の四人家族の異変に気付き始めていた。

「ねえ、あの小学二年か三年くらいの女の子と、五年か六年くらいの男の子、何か変じゃない？」

「私も思ってた。なんか子供なのに無口とゆうか……淡々と焼き肉を食べてるだけで、全然楽しそうじゃないし……。小学生ってもっとはしゃいで笑顔が弾けるイメージなんだけどね」

「そうですわね。何か腕とか脚とかにアザがたくさんあるみたいですし……虐待とか受けてるかもしれませんねぇ……」

真紀たち三人は、気になり出したら仕方がないほど気になり、チラチラと四人家族の動向を観察しながら焼き肉を食べていた。
こうなるともう焼き肉の美味しさは半減してしまうレベルだった。
とりあえずもう焼いて食べるだけなら自分達でも出来るので、バーベキューのプロには精算して帰ってもらうことにした。

「ありがとうございました。またどこかでバーベキューするときは是非私に御連絡くださいませ」

「ありがとう。またお願いします」

その時だった。
大きな怒声が湖の畔に響き渡る。

「こぼさずに食べなさい！　健太！」

母親が小学校の高学年に見えるお兄ちゃんらしい男の子を平手で思いっきり叩いた。
顔をしかめながら半泣きになって謝っているみたいだった。
これは助けてあげないといけない……ような気持ちになってきた三人は、止めに入るタイミングを見計らっていた。

その時だった。
父親が小学生低学年らしい少女を連れて席を立った。
どうやらトイレに向かっているらしい。

「女子トイレに父親も入っていったよ？　何か気になるから私も行ってくるね？　母親の様子見ていてね？」

「うん。任せて木村さん」

「お任せください真紀さ〜ん」

同僚の二人に任せて、父親と娘らしい少女の後を小走で追う真紀。
女子トイレに辿り着くと、鍵が閉まっている隣のトイレに駆け込んで、耳を済ませた。

「スッキリしたか？　理沙」

「うん。オシッコ終わったよパパ」

「そうか……いつものやつをしてもいいか？　幸せになるおまじないを」

「……うん。今日もおまじないして。指入れてもいいよ。理沙はもう痛くても我慢出来るから」

「偉いぞ！　理沙はホントに賢い子だ」

いつものやつ？　指を入れてもいい？　おまじない？？　………普通の父親と娘の会話ではない嫌な予感を感じた真紀は、更に耳を木製の仕切り板に当てながら、隣のトイレの会話や音を聞き始めた。

「んあっ！？　痛いっ！！　パパ……理沙、痛いよ……」

「唾付けてもう一度入れ直すから我慢しろ！　幸せになりたいよな？　理沙は賢いんだから我慢出来るだろ？」

「うん。理沙は幸せになりたい。んぎぎぎ……痛い……あああっ！！」

これはヤバい親子だ！　これ以上聞いてるだけにはいかなくなった真紀は、慌ててドアを開け、隣の親子がいるトイレのドアを何度も蹴りまくる。

『ガン！　ガン！』

「だ、誰だ！？　何をしている！？」

「うるさい！　出てこい！！　変態オヤジ！！」

構わずドアを蹴り続けていると、ついに木製の脆いドアはブッ壊れて内側に開いた。

小学低学年っぽい少女の性器に指を入れたままで真紀を睨み付ける父親らしき男。

「うっ!? お前は後からきたバーベキュー客の中年女だな!?」

「お前なあ……そんな小さな娘になんちゅうことしてんの! バカなことやめてちょっと出てきなさい。それに誰が中年女よ? 殺すわよ?」

「くそう! 良いところだったのに!! ブッ殺すぞクソアマァッ!!」

少女の性器から中指を抜くと同時に真紀に殴りかかってきた。サッとかわしてみぞおちに強烈なボディブローが炸裂する。

「ぐはあっ!? うぐぐぐ……がはっ!!」

泡を吐きながら脇腹を押さえてうずくまる男に、真紀は素早く身動き出来なくなる特殊な麻酔注射を打った。

「パパ! 大丈夫!? お姉ちゃん……パパを苛めちゃダメ!! やめてあげて!!」

「なんて健気な子なの……。あなた、理沙ちゃんって言うのよね? いくつ?」

「六歳。小学一年生だよ。何でお姉ちゃんはパパを叩いたりするの？　酷いよ？」
「理沙ちゃんの方が酷い目に遭わされてるのよ？　分かるかな？」
「パパは理沙を叩いたりするけどいつもは優しいんだよ。痛がってたりすると、頭ナデナデしてくれるんだよ？　理沙のオシッコするところ辺りをよく触って幸せになるおまじないをしてくれてるの」
「そっか。でもそんなことしてもらわなくても理沙ちゃんは幸せになれるよ？　私が新しいおまじないをしてあげるね……」

殆どまともに歩けない父親の右腕を抱え込んでトイレから引きずり出す。

「さぁ、来なさい。これから私たちがタップリとお仕置きしてあげるからさ。今日があんたの人生で男でいられる最後の日にしてあげる……」

冷たく話しかけながら、二人の同僚の方へ連行してゆく。

「あれ？　なにやってるの？　あんたたちは？」
＜i４４７２４２―２４９０３＞
気が付くと長男らしい男の子が泣きわめいている。
男の子の母親の衣服を全て脱がせて、有村佳歩が馬乗りになって

背後からヘッドロックを決めている。

＜ｉ４４７２３９―２４９０３＞

　お尻だけ突き上げた体勢にさせていた。

　その後ろで、石原聡子が平手打ちで何度も思いっきり母親のお尻をスパンキングしている。

＜ｉ４４７２４０―２４９０３＞

「ママを叩かないで！！　お姉ちゃん、お願い！　わーんわーん！！　やめてええっ！！」

「どうしたのかな？　このバカオヤジは可愛い娘を性的虐待してたから、身動き出来なくしてトイレから引きずり出して来てやったんだけど……」

「真紀さーん、この鬼畜母親はですねぇ……五歳の息子のおちんちんを握りしめたり、キスしたりしてたのですね……普通自分の息子にそんな変なことしませんよねぇ～？」

＜ｉ４４７２４５―２４９０３＞

「だから私たち二人が慌てて駆け寄って息子から引き離して折檻してたわけなの。二人の子供たちが見てる前で、マンコ捌いて子宮引きずり出してあげましょう」

　スパンキングの手を止めて、母親の膣口に人差し指と中指を軽く突っ込みながら石原聡子が真紀に説明する。

＜ｉ４４７２４６―２４９０３＞

「木村さんの方は？　その旦那さん、何かしたの？」

＜ｉ４４７２６１―２４９０３＞

「何かしたも何も……娘のマンコに指突っ込んでたよ。絶対変態だ

わこいつ……幸せになるおまじない……とか嘘付きながら。ほんと最低っ！！」

若いヤンキー風の男三人組が、バーベキューも中断して食い入るように騒ぎを見守っている。
真紀は、父親を強引に皆の元へ引っ張っていくと、娘の理沙もそそくさと後を付いてくる。
真紀はいいことを思い付いた。

「そこで見ている不良っぽい三人の少年たち。お願いがあるんだけど？　見ての通り、この夫婦はバカ同士だからお仕置きをする必要があると思うのね。旦那と子供たちの見てる前で妻をレイプしてくれない？　三人でまわしても構わないよ？　私が許可したら殺人以外は無罪になるから安心して犯してあげて」

「え？　ホントにいいんすかぁ？　犯しても捕まらないなんて無茶苦茶おいしい話じゃんんか！４０くらいだけど十分綺麗だから犯しがいがあるぜ？」

「俺はアナルをヤらせてくれ！」

「穴兄弟も何か嫌だから僕は強制フェラしてもらうわ！　もし噛みやがったら頭かち割ってやるからな？　オバハン？」

「ひっ……バカなことやめて……旦那も子供も見ている前で……絶対やだ！！」

『ずぷ……』

有村佳歩がヘッドロックをしているまま、バックで母親の性器に挿入する少年A。

「ホラ！　俺のチンポをブチ込んでやるぜ！！　久しぶりだなぁ。女とセックス出来るなんて！！」

「ひっ！？　やめて……あなた！　助けてっ！！」

『バキバキ！　ズガッ！！　ボコッ！！　バキッ！！　バキッ！！』

「ぐわあああっ！！　痛いっ……やめてくれえっ！！」

「あなた！！　大丈夫！？……あ、あん、あん、やめて、抜いて……この人をなぐらないでっ……あはあっ！！　痛いっ！！」

真紀が妻の見ている前で、旦那の顔面を変形するほどボコボコに殴っている。

「バックで知らない男にバコバコ犯されてるのに旦那の心配してんの？　あなたは自分の心配だけしてなさい！」

許しを乞う父親を更に力を込めて殴り続ける真紀。

口には二人目の少年Bのペニスをねじこまれ、アナル待ちの三人

目の少年Cには、上半身も脱がされ二つの乳房を乱暴にグニグニグリングリン揉みしごかれる……。

「フェラさせるのは勝手ですけどぉ～。三十路のレディの目の前で全開に勃起したおちんちん見せないでくれますぅ？　しかもそんなアップで……フシダラですわよぉ？」

呆れながら母親へのヘッドロックを解き放ち、馬乗りを解いて傍らに逃げる有村佳歩。

「おい、ケツが下がってきてるぞ！？　もっと最初みたいに突き上げろよ！　チンポ抜けちゃうじゃないかオバハン」

「四つん這いになって胸も揉みやすいように上半身ももっと持ちあげなさい！　そうそう。その体勢崩したら鼻の骨へし折ってあげるからね？」

冷たく言い放つ木村真紀。

少年Aは、両手でお尻を掴んで引張り上げて、母親のお尻を突き上げ直すと、更に激しく腰を振り始めた。

パンパンと大きな音を響かせながら、前後に体が揺れる…………。

口には少年Bのペニスを喉まで突っ込まれては抜き、また喉まで突っ込んでは抜き……を繰り返す。

「ごほっ、がはっ！！　げえぇっ！！」

「えげつないイラマチオだね？　苦しそう……エロビデオ見すぎだわ……」

石原聡子が腕組みしながら呟いた。

少年Ｃも負けじと両方の胸をグリングリン揉みしごく。

「スッゴいでかいチチだからブヨブヨしてて気持ちいいぜー♪」

乳房は真っ赤になっていた。

息子と娘は目の前で両親が暴行されるのを見せ付けられながら、恐怖で座り込んで泣き喚いている。

「イ、イクっ……オラァ、きちんと飲み込めよ？　イクぅううっ！！」

『ドクン……ドクドク……』

「んごっ！？　んぷぷっ！！……ゴクン……」

いきなりのイラマチオから、いきなり喉の奥に大量の精液をぶちまけられ、たまらず飲み込んでしまう母親。

父親をひたすら殴っていた真紀はようやく顔面への攻撃をやめて胸ぐらを掴んで引き起こした。

「あらあら、セーエキ飲んじゃったよ？　お前の嫁さんって淫乱だね？　それにオッサンの顔面さぁ、腫れまくって原型留めてないよ？　以前より男前になっちゃってるね？　あはは。鼻の骨だけは堪えてやるよ」

「ひぃぃ……いでぇ……いだいぃ……もう娘には手を出さないから許してくれ……頼む。お姉さんたち……」

「奥さんの心配もしてあげてね？　ほら、隣の光景をようく見るのよ」

少年にバックで犯されながら、クチュクチュ音をたててアソコをグショグショにしている妻がいた……。

口からは飲み込み切れなかった精液をヨダレのように垂らしている。

「このオバハン無茶苦茶濡れてきたぜ？　たまんねーなぁ♪　旦那も子供も見てる前でよく感じてられるもんだよな？　口から精液垂らしながら……ハハハ♪」

「あなた……ごめんなさい……私、気持ちいい……あん、あん……もっと激しく突いて……ください……あん」

「ひゃっはぁ！　ホラホラホラホラホラ！！　イクぞ！！　オバハンの

マンコに！　中にタップリ出すぞ！？　ううっ……」

『バコバコバコバコ！！　ドビュ！！　ドピュピュピュピュピュ！！』

「ヒイッ！　熱いっ！　あはあぁあんっ！！」

『プシュウウウッ！！　ビクンビクン……ガクガク』

潮まで噴いてイッて、ヘタリ込む母親の姿を見ながら子供たちは更に激しく泣き出した。

旦那は体が動かないまま視線を向け、うっすらと涙を浮かべた。

「くそぉ……こいつら……殺してやる」

「おーい！　理沙ちゃんに、イタズラしたお前にそんな怒る資格ないと思うよ？　スボンとパンツを脱ごうね？　お前も同じような目に遭うんだよ？　お父さん。うふふ♪」

真紀が冷たく言い放ちながら身動き出来ない父親のスボンとパンツを脱がした。

「な、何をする気だ！？　やめろ！！」

「私にヤらせて！　こんな最低な奴は指で肛門ぐちゃぐちゃにしてやりたいから」

「わぁ。怖いですぅ〜。石原さんってばぁ〜」

石原聡子は両手で、父親のお尻の肉を左右に思いっきり拡げた。

パックリ開いてゆく中年オヤジの菊門……。

右手の人差し指と中指をピンと立てて、ゆっくり挿入してゆく石原聡子。

「ケツ毛一杯生やして……きったないケツしてるねぇ？　ほうら、飲み込むのよ？」

『ずぷぷ……ずずず』

「はおうっ！？　やめろ！　痛いっ！　ワシは切れ痔なんだ！　やめてくれっ！！」

「ほんとだ。早くも血が出てきたね？　でも私の指でほぐしたら手首まで入るようになるから直腸ボコボコに掻き回して前立腺グリグリしてやっからお楽しみにね♪　もしかしてイクかもよ？　オッサン！　あはははは♪」

隣の母親は少年Bによって、再びお尻を突き上げさせられ、アナルへフル勃起したペニスを差し込まれてゆく所だった……。

「んぎいっ！？　お尻はやめてっ！！　そこは私感じないから！！許してぇえっ！！」

『めりっ……ズブッ！　ズボボボボッ！！』

母親のアナルを押し開きながら、ほぼ一気に根元まで突き入れられた。

「熱いっ!?　痛いっ！！　ひやああああっ！！　やめて許してお願いっ！！」

「くっさ……お前、クソした後できちんとケツ拭いてるか？　マンコは感じるくせにケツ穴は痛いのかよ？　俺を満足させてくれーっ！！」

『バコバコバコバコバコバコ！！』

「んぎゃあああああっ！！　あひいいいいっ！！　お尻が熱いいいいっ！！」

石原聡子も少年のペニスに負けない勢いで父親を指で犯してゆく。無理矢理こねくりまわして、ついに手首まで入った頃には、大量の血液が地面を染めていた。

母親以上に、大きな声で悲鳴をあげる。

「アナルフィストファーック！！　気持ちいいか？　オッサン？　ほれほれ、もっともっと強く直腸掻き回してやるからね？　イクぅ？」

「ぎゃあああっ！！　痛いいいいいっ！！　やめてくれえええっ！！」

一足先に、母親の肛門内へ射精を終えた少年Cが、パンツとズボンを履き始めた。

「少年たち、ここからはあんたたちには見せられないシーンが多くなるからもう帰ってくれるかな？」

「夕方五時頃に代行呼んでるから、それに乗って帰るよ」

「タイミング良かった。じゃあそれまで別のことして遊んでるかな。有村さん、母親の調教してやって」

「はーい。まだ全体的に五体無事そうですもんねぇ～。あら？　でも股間は前からも後ろからもエッチな白い粘液溢れ出してるわねぇ～。上の口からもセーエキのヨダレが垂れてますし……汚いですわね～。今度は仰向けになってもらえますぅ？」

「ぐす……ぐす……もうこれ以上酷いことしないで……隣の夫も許してあげて……」

「泣いてもダメですのよ？　子供に性的虐待なんて最低ですからぁ」

そういうと柔道で鍛えた力の強い有村佳歩は、少し涙を流しだし

た母親の両膝を掴んで、左右に押し開き始めた。
性器が大きくパックリ開き、膣口からまだ残っていた精液が溢れ出す。
二人の小学生の子供も、少し慣れてきたのか泣くのをやめて涙目ながら折檻されている母親と父親を交互に眺めていた。

「痛い……やめて！　股が……裂けちゃう……いたたた」

「体が固いようですわねぇ？　股関節外しちゃいますからぁ。どこまで開いたら外れるか楽しみですぅ♪」

真横を通り越えた辺りでイビツな音がして、母親の股関節が脱臼した。
同時に大量の小便を垂れ流した。

「んがあああっ！！」

『プシャアアア～！』

「これでぇ……歩けなくなっちゃいましたねぇ？　そんなにオシッコ漏らして……子供たちも見ていますのよ？　お恥ずかしい母親ですこと」

駐車場から二人の運転手が歩いてくる。
少年たちの迎えの代行がきたようだ。

「じゃあ帰るか。レイプさせてくれてありがとな！　お姉さんたち」

「俺も感謝するよ」

「イマラチオやってみたかったんだ！　ホントに気持ち良かった！　じゃあな」

三人は真紀たちに礼を言うと、代行タクシーで帰っていった。

「邪魔な奴らが帰ってくれたから今から本番の罰をお二人夫婦に与えたいと思います。何するか当てたらやめてあげるけど？　一応答えてみる？」

「ひっ！　爪を剥がすとか？……歯を抜くとか？…………ですか？」

「ブー！　残念でした。とりあえずあんたは私刑確定しました。次は旦那にも……あれ？」

『ぐちゅっ！　ぐちゅっ！　グリングリン！　ぐぽぐぽっ！！』

まだ石原聡子の拳が旦那のアナルを犯し続けていた。
白目を剥いて失神しているのに、石原聡子の手の出し入れに呼応して腸液と大便と血の混じったミックスジュースがドロドロ垂れ流されている。

「まだやってたんだあんた……もう白目を剥いて失神してるじゃん？　おーい！　石原さーん、もう拳抜いてやって？」

「あ、ごめんごめん！　グチュグチュいって面白いし、なんか直腸の擦れる感覚が気持ちよくて……てへへ」

『ボコンッ！』

半時間ぶりに男の肛門から石原聡子の拳が抜かれた。
ドクドクと溢れ出す血液が大地を真っ赤に染めてゆく。
金属製の銀色に輝くアナルプラグを抉るように差し込む聡子。

「出血多量で死なれちゃこれからの楽しみがなくなるからね？　さぁ起きなさい。木村さんからのラストチャンスを答えさせてやるから」

そういうと強烈なお尻へのスパンキングを開始する。
５０回ほど叩いた頃には臀部の八割が紫色に変色するほど強烈なスパキングだった。更に一部は皮が裂けて血が滲んでツゥッと流れていた。
お構い無く目を覚ますまで激しく叩き続ける石原聡子であった。

「早く起きないとお尻の皮が全てめくれてお猿さんより真っ赤になっちゃうよ？　ホラホラホラァ♪」

『パンパン！　パパパパパパパパン！！』

「ん……ん？　ぎゃああっ！！　痛いいいっ！？」

「やっとお目覚めのようね？　オッサン。今から子供たちの見てる前で私たちに何をされるのか当ててみて？　当たれば木村さんが許してくれるみたいだから。もう奥さんの方はダメだったけどね」

「な、何のことだ？　意味が分からねぇ……」

「今から私刑するんだけどね？　どんな方法かって聞いてるの！？」

怒りながら男の顔面への正拳突きを入れる石原聡子。その一撃は強烈で、一瞬で鼻の骨が折れて鼻血が噴き出す。

体が自由に動かないため、鼻を押さえることも出来ず、歪に変形した顔のままで、ひたすら鼻血を出し続けるしかない。

「あーあ、顔面殴りまくっても、鼻だけは折らない程度にしてやってたのに石原さんってば手加減なしなんだ……あはは、酷いなぁ♪」

「木村さんには負けます」

「私も～、真紀さん最恐だと思いますぅ～」

「最強じゃなくて最恐なの？　貞子みたいに言わないでくれる？

二人だって最近私と変わらないわよ。かなり残酷になってきてるじゃん」

このタイミングで、真紀のスカートを引っ張る小さな手に気付く……。

六歳の理沙であった。

「お願いお姉ちゃん、もうママとパパを許してあげて……これ以上酷いことしないであげて……ぐす……」

顔をしかめて泣きながら訴えてくる顔に真紀は言葉では言い表せない妙な感情になってきた。

しゃがみこんで理沙を両手で抱え込むように抱き締めながら背中を頭を優しくさすってあげる。

「理沙ちゃんはとっても優しいんだね。どうしてこんなバカな両親からこんな子が生まれるのかな？　こんなこと理沙ちゃんに聞くのもおかしいか……」

更に力強く抱き締める真紀。

「痛い……お姉ちゃん、痛いよ……」

「！！　ごめん！　ごめんね理沙ちゃん」

慌てて力を抜いて理沙の両肩に両手をポンと置いた。

「わかった。警察に行ってあなたたち二人には施設に入れるよう頼んであげるからもう一緒には住めなくなるけど我慢してね。それでも無理矢理連れ戻したりしたときは私は理沙ちゃんのパパとママを酷い目に遭わすから。そうならない限り理沙ちゃんに免じて許してあげる」

「ありがとう！　お姉ちゃんも理沙の割れ目に指を入れてもいいよ！　大人の人って、ここに指入れたいんでしょ？」

そう言いながらスカートの中のパンツを膝まで下ろし、真紀の右手を小さな手で掴んで自分の小さなワレメに擦り付ける。

「！？」

いつもの癖で咄嗟に中指を差し込もうとしてしまうが、第一関節まで入れた瞬間正気に戻り、慌てて理沙の性器から指を抜いた。

慌てて股間から手を引っ込めると、両手でサッとパンツを履かせてあげた。

「少しでも指入れちゃってほんとごめんなさい！　気持ちだけもらっとくからね？　代わりにキスさせて……」

そう言いながら再度優しく抱き締めて、理沙の口に軽くキスをした。
あまりに愛しく思えたので、頬にも額にもキスをしまくってしまう真紀。

「何で女が女にそんなことするの？」

目を丸くして真剣に真紀に問いかける理沙。

「理沙ちゃんが可愛くて仕方ない上に大好きになっちゃったからだよ。それともう二度と理沙ちゃんのワレメもお尻の穴も誰だろうと触らせないで……これはお姉ちゃんからのお願い。幸せになりたかったらいつも笑顔で明るくしていればきっとなれるから。ね？」

「うん。分かった！　理沙は出来るだけ笑顔で明るく生きていくよ。でもお姉ちゃんにならワレメもお尻の穴にも指を突っ込んで欲しかったかなぁ……理沙も大好きだから」

恥ずかしそうに少し俯いて、頬を紅潮させながら呟く六歳の理沙。

「………でもそうゆうことさせちゃダメなんだよね？　分かったよ。お姉ちゃんの言う通りにしていくよ」

横で石原聡子はグスグス言いながら顔をしかめて泣いている。

有村佳歩は欠伸をしていた……。

「そう言う訳だからもう去勢するのは理沙ちゃんと健太くんに免じて堪えてあげる。本当は男はペニスと睾丸、女は子宮と小陰唇、全てを切り取るつもりだったんだから。……さっさと服を着なさい。もう麻酔も切れかけてるから服ぐらい着れるでしょ？オッサンも」

二人の元へ歩いていき、声をかける。

もうこの時点で既に相当酷い目には遭ってるが、真紀たち三人からすれば序の口も序の口……お遊び程度の折檻だった。

「この子たちを捜さないでね？　もしまた同じことをしたら今度は特殊任務省（残酷処刑島の管轄）にお願いして処刑許可もらってやるんだからね？　わかった？」

「はい。もう二度としません。子供のことは忘れるようにします」

「無理矢理犯されて気が付きました。私たちはこの子たちに最低のことをしていたんだなって……また性根を入れ換えて本当にこの子たちを愛せる自信が出来たら捜して会いに行っても良いですか？」

「あなたねぇ……無理矢理犯されて気付きましたって言ってますけどぉ～。バックで犯されて感じてませんでし……んぐ？」

真紀が慌てて有村佳歩の口を塞いだ。

有村さんは相変わらず空気を読めない変な人だなと思った木村真紀と石原聡子だった。

顔と肛門は大ダメージを受けていたが、辛うじて運転出来そうだったので、父親が帰りも運転していくようになった。
隣に両足を脱臼した母親を真紀たち三人で担ぎ込み、子供二人に寂しそうに手を振る両親。
両親の乗った車が見えなくなるまで手を振り続ける理沙と健太を見て、再び涙が滲む真紀と聡子だった。
有村佳歩は……車の起こした砂煙でクシャミをしていた。

帰り道――――

「優しそうな先生がいる施設見つかって良かったね。本来は色々いきさつも聞かれてこんな簡単には入れないいんだろうけど、木村さんは国と繋がってるから凄いよねほんと」
「残酷処刑島での報復処刑……近々また再開されたように聞いたけど。やっぱり人を殺すのは妙にあとで疲れがくるんだよね……リンチくらいが楽しいかもね」
「怖いですわね……真紀さん、やっぱり殺人経験あったのですねぇ……私は殺さないでくださいませ〜」
「友達を殺すほど落ちぶれちゃいないわよ失礼ね……」
「あはははは」
一人爆笑する石原聡子の声が響く木村真紀の車は、自宅を目指し

て再び高速道路を突っ走っていく。

ＯＬ真紀たちの残酷過ぎない調教の日（後書き）

誰に頼まれても泣かれても許さない……減刑しない真紀が初めて見せた恩赦。

国の命令なら小学生の子供も平気で殺すほど残酷な真紀だったが、何の罪もなく、酷い目に遭ってきた子供には負けたようである。

鬼の目にも涙……的なお話でした。

加奈の百合的高校生活（前書き）

残酷処刑島では一、二を争うほどの残酷な気性である大山加奈の高校生活。

本気で人を好きになる意外な面が見られる学生生活とは？

加奈の百合的高校生活

真夏のある晴れた日……一人の女子高生が自転車で学校へ向かっていた。
とある田舎の女子高校。
残酷処刑島の処刑人である大山加奈が通っているその山川女子高等学校は、一学年に三組までしかなく、一クラスに２０人ほどの全校生徒を合わせても２００人を切るほどの小さな学校であった。
来年には取り壊されて少し町の中心部の女子高校と、合併される予定だ。
大山加奈は最後の三年生、最後の卒業生となる。
最近茶髪のセミロングに、ワンカールを入れて、軽く決めていた。少しキツい目付きをしているが、背もそこそこ高く、スタイルもよく、かなりの美形である。性格はとてつもなく気が強く、相手によっては残酷さを極めている。

「加奈ちゃん、急がないと遅刻するよー？　相変わらず落ち着いてるね？」

同級生で三年目も同じクラスの小鳥遊(たかなし)貴子が声をかける。
真っ黒な前髪有りのボブで、大人っぽく決めているが、小柄で目も大きく、童顔で可愛い顔をしている。
性格はかなり温厚で、優し過ぎるくらいだ。

「私に文句言ってきたらビビらせてやるだけだから。担任だろうが

校長だろうが容赦しないんだから」

「女子空手世界一の実力者だもんね！　怖い怖い……。あたしは怒られるから先に行ってるよ。時間キワどいからごめんね！　後ほど！」

手を振る加奈を一度振り向き、ニコッと笑顔で走り去る小鳥遊貴子。

１０分後、確実に遅刻して大山加奈がクラスに入る。

「であるからして、このような政策になったわけであるが、このような時代には仕方がなく……あ！　大山さん、おはようございます。一時限目は社会に変更になりまして。よろしくお願いします」

「ふぅん。担任の崎山道子はサボってんのかな？」

「え～と……確か昨日大山さんに……あ、いえ、なんか体調不良みたいですなぁ。二年生の社会がなかったので、たまたま私が三年二組の一時限目に呼ばれた次第です」

「アソコ痛いとか言ってなかった？　私のせいなんだよね？　」

「いえいえ！　理不尽なことで怒った彼女が悪いんだと私は思っております。勝手に怒って勝手に倒れたのですから。教頭も校長も同じように話しておられましたので……大山さんは少しも悪くないですので安心してください」

「加奈ちゃん、アソコ痛いとか何？　私のせいってどういう意味？

また何かやらかしたの？」

「いやいや、何もやらかしてないよ！　生理痛が酷くてアソコが痛いとかよく言ってたからね」

「ふぅ～ん。生理なら頭痛とか腹痛は聞いたことあるけど……」

「そうゆうことってさぁ、何てゆうか、個人差があるじゃん？」

焦って誤魔化す大山加奈だった。

「前から思ってたんだけど、なぜか先生たちも加奈ちゃんには本当に遠慮してるもん。敬語まで使うことないのにね？」

「は、はは。確かにそうだねー………」

たまに言葉に詰まるような際どい所を突いてくる小鳥遊貴子だった。

事の真相は、貴子のことを怒って批判したことに立腹した加奈が、放課後に崎山先生を体育館に呼び出して全裸にして、体操で使用するバトンを膣口から無理矢理突っ込み、掻き回して子宮をミンチにして病院送りにしていた。

性器を血まみれにして、泣き叫ぶ崎山道子先生に、この事を誰かに話したら今度は殺すから、と脅しをかけていた。

誰にもチクってないことに安心する加奈だった。

授業中はいつものように小鳥遊貴子とスマホで通信対決ゲームで遊ぶ加奈。
周りの生徒たちも、喧嘩は強いわ担任は病院送りにするわ、校長は認めるわ、そんな相手に喧嘩を売る生徒はいなかった。
バレてないと思ってるのは加奈本人だけで、殆どの傷害事件は加奈の仕業だと皆は薄々分かっている。
ただ一人、半信半疑の小鳥遊貴子を除いては……。
この頃は既に、いつの間にか大山加奈のことが人生で一番大切な親友になっていることに気付いていた。加奈にどんな疑いがかかろうと小鳥遊貴子は命を懸けて庇うつもりだった。
心の奥では、大好きを通り越した感情も芽生え始めていた………。

「貴子、狡いなぁ今のは……そんな方向から撃ってくるのは反則じゃん」

「隙を見せた加奈ちゃんが悪いんだから！　あはは♪」

結局そのまま一時限目が終わり、チャイムが鳴り響く。
二時限目の数学がはじまったとき、珍しく加奈の携帯が鳴り響く。
周りの生徒から警戒されて、友人と呼ばれる生徒は二年半一緒のクラスでいる小鳥遊貴子だけだったので、家に帰っても貴子以外からはまず電話が鳴らない。

「もしもし……大山です。…………あ、はいそうです。……あ、そうなんですか。残念ですが仕方ないですねそうゆう規則なら。誰か

私以外に執行するのですか？　菅野莉央………小学生の莉央ちゃんだけしかダメなんですね今回は。分かりました。また来年以降はよろしくお願いします。失礼します」

「執行って？　前に言ってた残酷処刑島での処刑の話？」

「そう。私のおばあちゃん今年亡くなったから喪に服すため処刑業務しちゃいけないんだってさ。堂々と人を殺せるから楽しみにしてたのに……」

「こ、怖いよ加奈ちゃん……その冗談話はもういい。それより今日帰りしな遊びに行ってもいい？」

「いいけど？　私も貴子といると楽しいからケーキでもご馳走するよ」

「え！？　ほんと！？　ありがとう！　じゃあイチゴのショートケーキよろしくね♪」

「残念ながら私の好きなチーズケーキしかないから辛抱しなさい」

「ええーっ？　まぁチーズケーキもまあまあ好きだからいいんだけどね」

放課後………帰りは遅刻の心配がないので、加奈のペースに合わせてゆっくり自転車を漕ぐ貴子。
３０分ほど田舎道を進んで行くと、長い坂道にさしかかる。

「加奈ちゃんの家ってこの強烈な急勾配があるからいつも着いたら汗まみれで息があがるんだよね……」

「行きしなは楽勝なんだけどね。行きは良い良い～♪　帰りは怖い～♪　ってね～。何でこんな田舎の中の田舎の場所に引っ越してきたんだろ？　よくわかんない」

「あはは。そんな歌あったね。童謡だったっけ？　なんか怖い意味があるとかお母さん言ってたけど。……帰り怖くなるからそうゆう話は敢えてしないあたしであった。……そうだね。加奈ちゃんは一年の時に初めてこの土地に引っ越してきたんだったね」

「それが身のためだね。私も幽霊とかは苦手かな……殴れないし……。ってゆうか今日も泊まっていきなよ？　まだ貴子の着替えも一着分は置いてた筈だし」

「先週も泊まったのに今日もいいの！？　早速お母さんに電話入れとくよ！　やったあ！　……ってゆうか、幽霊に殴りかかっちゃダメだからね？　加奈ちゃん……」

残酷処刑島に呼ばれる程の残酷な気性の少女である大山加奈を、本気で慕う小鳥遊貴子であるが、それには理由があった。

話は二年半前に遡る――――――――

山川女子高等学校の入学式も終わり、教室で同じクラスになった女子高生たちが賑やかに騒いでいた。
初めて話す子もいれば、顔は知ってるが話したこともない子も、それぞれだった。

「一年一組……あたしの記念すべき高校生活の初っぱなが一組とは縁起がいいなぁ。一番好きな数字が1だから。裕子は？」

横山裕子。
小鳥遊貴子とは、中学の時からのクラスメートなので、新しい高校でも同じクラスになれて喜んでいる二人だった。

「私は7が好きだけど……この高校は全学年三組までしか無いみたいだから無理だね……」

「それは仕方ないなぁ。中学の時から一緒なのはこのクラスで裕子だけだから今日から三年間も仲良くしてね？」

「こちらこそ。私も貴子が居なかったら寂しかったから嬉しいよ！」

教室の片隅には、誰とも話さずに一人スマホで遊んでいる大山加奈がいた。
２０人ほどの少ない人数もあり、中学時代から知り合い、友人みたいな組がどんどん何組も出来ていき、本当に一人ぼっちは両親の都合でこの田舎町に引っ越してきた大山加奈だけだった。

「貴子！　あの子、見たことある？　中学の時、あんな子いたっけ？」

「さぁ。あたしも見たことないなぁ。少ないけど別の中学からも来てるみたいだし、引っ越してきたのかも知れないし……どちらにせよ一人で寂しそうだから一緒に友達になってあげようか？」

「なってあげる……なんて、上から目線は良くないよ？　私たちとお友達になって頂きましょう！　ね？」

「ごめんなさい！　そんなつもりじゃなかったんだけど……言葉にはほんと気をつけなさい！　と、お母さんからいつも言われてたのに……」

「貴子に悪気はないのはわかってるよーだ！　からかっただけだよ♪」

小悪魔的に舌を出して小鳥遊貴子の手を引き、一人でいる大山加奈の元へ歩いてゆく二人。

「あの、私たちまだ友達少ないんで、良かったら仲良くしてもらえたら嬉しいんだけど……」

「…………」

「そうなのよ！　中学のときに同じクラスで居た子が裕子だけだか

ら。顔は知ってる子が殆どなんだけどね！　クラスが違うかったから話したこともなくて……あたしたちと友達になってくれたら助かるかなぁ、なんて思っちゃったりして……てへへ」

「………………」

少し顔を赤くして照れながら必死で話しかけた貴子と裕子の二人だったが、大山加奈はスマホを見てばかりで、視線すら向けてくれない。

いきなり席を立つと、大欠伸をしながら教室から出ていった。

「………………トイレでも行ったのかな？」

「ってゆうか失礼なヤツだよね！？　見た！？　今の態度！　私たちのこと完璧に無視してたわよ？」

白から始まり、照れたピンクから怒りの真っ赤にカメレオンの様に顔色を変えながら、裕子が吠える。

「うーん……無視してたとゆうか……全くあたしたちに興味がないってゆうか……」

「それって同じ意味じゃない？」

「まぁまぁ。二人だけでも寂しいのにあの子は一人ぼっちなんだからそんなに怒らないであげて！　クールそうだけど何か悪い人には見えないんだよなぁ。あたしには……」

何か気になり始めた小鳥遊貴子は、それから数日間、休み時間の度に大山加奈の隣へ行き、自分の趣味や好きな映画や、色んなことを話しかける。
帰宅時も自転車で並走して自分の家との分かれ道まで一緒に帰っていた。
最初の数日は、裕子も一緒に行っていたが、返事をしない加奈に段々腹が立ってきて、一ヶ月も過ぎた頃には、完全に違うグループの子と仲良くなってしまっていた。
変わり者に話しかけ続ける小鳥遊貴子に対し、周りの子たちは少しずつ距離を置くようになってきた。

「貴子、もういい加減あんなヤツに話しかけるの止めといたら？　みんなあんたに引いてるよ」
「絶対悪い子じゃないんだって！　たまにクスッと笑ってくれるもん！　その内心開かせてやるんだからあたし」
「ふぅーん。私よりあんな子を選んだんだから頑張って。じゃあね」
「え？　選んだって……そんなんじゃないよ！　今でも裕子のこと友達だと思ってるし……必ず加奈ちゃんもみんなと仲良くできるからもう少し待ってよ？」
「口も聞いてくれないヤツに加奈ちゃんだって！　アハハ！　受けるわあんた♪」
「アハハハハハハ！！」

横山裕子に合わせて、新しく裕子の友達になったグループの全員が大爆笑している。
　その日の放課後、また二人は並んで帰っていた。
「加奈ちゃんはほんと口数少ないよね？　ってゆうか全然話してくれてないか……あはは。名前だって貼り出してるのを見て知ったんだし……。こうなったら根比べだから！　あたしはいつか加奈ちゃんに口を開かせてみせる！　じゃあね！　また明日」
「…………」
　全然答えてくれない加奈に対し、ここまで話しかけるのにも訳はあった。
　時折見せる加奈の屈託のない笑顔。
「返事をしてくれなくてもいいんだ。あの笑顔は絶対性格イイんだよ！　うん、そうだよきっと！」
　いつの日か大山加奈の心を開かせる事が小鳥遊貴子の生き甲斐になっていた。
　そんなある日……ついにクラスメイトからの嫌がらせが始まる。
　最初は軽い無視程度だったが、日に日にエスカレートしていき、ついには親友だった筈の横山裕子本人からも嫌がらせを受け始めた。
　嫌がらせとゆうかイジメに近いモノであった。

「貴子！　あんたがちゃんと掃除しないから皆が迷惑してるんだよ？　わかる？　よくそんなにクラスの皆に嫌がらせできるね？」

「嫌がらせだなんて……あたしはきちんとやってるつもりだけど……」

横山裕子の新しい親友である大柄で力の強い杉浦久美子が胸ぐらを掴んで振り回した。

足をかけてひっくり返される。地面に倒れ込む貴子。

「親友の裕子を裏切ったんだって？　あんな変なヤツを構ってばかりで親友見捨てるなんて最低のクズだねあんた！」

クラスのほぼ全員で取り囲み、小鳥遊貴子の服を脱がし始める。

「いやっ！？　止めて！！　何すんのよっ！？」

「ほら、大人しくしてろ！　騒ぐと体に傷がつくよ？」

横山裕子がニヤニヤしながら腕を組んで裸にされる所を眺めている。

「いやあっ！！　……ぐす……ぐす……みんなで……寄ってたかって……こんなことするなんて……酷いよ」
パンツ一枚だけ残して裸にされた小鳥遊貴子は、股を閉じて座り込んで涙を流し始めた。
「見ないで……服を返して！」
「パンツも脱げ！」
「やだっ！！　もう止めてよ！！　あたし何もしてないし」
「私を裏切ったという自覚もないんだね？　みんなの前でオナニーでもしてもらおうかな？　そしたら許してやるよ。ほら、早くパンツも脱げ！　みんなで無理矢理剥いでやろうか？」
「ぐす……くすん……くすん……酷い。もう止めてみんな……」
「杉浦さん、もう強引に脱がしちゃってくれる？」
「オッケー！　ほら、観念しろ裏切り者のカス女！」
　そう言いながら思いっきり往復ビンタを頬に食らわせて、強引に貴子のパンツを脱がしてしまう杉浦久美子。
　取り返しにくる貴子を嘲笑うかの如く、投げられる様に小さく丸めてコンパクトに折り込んだパンツを、クラスの全員でパスを繰り返し、絶対に取られないように楽しんだ。

号泣しながら、素っ裸でパンツを追いかけ回す姿に、クラスのみんなは大爆笑。
後ろから前から蹴ったり殴ったりの暴行が始まった。
中には両手の人差し指を揃えて小学生レベルのカンチョーを決める女子もいた。
山西知恵とゆう成績優秀な生徒だった。

「スキあり！」

『ずぼっ！！』

「ひゃあっ！？　痛いっ！！」

「軽く突くつもりがモロ入っちゃったよ……指にウンコ付いちゃった……くっさぁ〜。なに食べたらこんな臭い肛門になるのかしら？　小鳥遊さん？」

頭は良いが、かなりエッチなイタズラ好きの山西知恵は思いっきり厭らしい笑みを浮かべて小鳥遊貴子に問いかける。
再び大爆笑になるクラスの全員。
そこにいきなり大きな音が響く……。

「ズドオッ！！！！」

大山加奈の右足が、カンチョーを決めた女子の……山西知恵の股

間に突き刺さった。

『メリメリ！！　バリッ！！』

「！？　んぎゃあああああっ！！！！」

処女膜は一瞬で突き破られ、子宮近くまでめり込む加奈の爪先……。

パンツで吸収しきれなくなった血液は、瞬く間に床を真っ赤に染めてゆく……。

更に振りかぶり、もう一度パンツ越しに肛門へめり込む爪先……。

「いったあああいっ！！　わあああんっ！！　わあああんっ！！」

いきなり蹴り上げられて処女膜を足で蹴り破られた上に、肛門が裂けて裂肛になってしまった１６歳の少女は、性器と肛門を両手で押さえながら座り込んで号泣を始めた。

「こいつ、いきなり知恵ちゃんに何しやがるんだっ！！」

殴りかかるもう一人の少女。

軽くスウェーでかわすと、強烈な右フックが鼻っ面に決まる。

鼻血が噴き出し、直ぐに鼻を両手で押さえて座り込む少女。

嫌な音がしたので、鼻の骨が無事ではないことは周りの子たちに

も理解できた。
たまたまではなく、本当に強い事がわかると、周りの子たちはすくみあがって動きが止まった。
パンツを持っている子の近くに歩いていき、これまた強烈な往復ビンタを１０回ほど決める。
更に股間を強烈に蹴りあげる。
風圧でスカートがフワッと持ち上がり、パンツが丸見えになるほどの強烈な一撃は、大陰唇と小陰唇を殆ど潰してしまう。

「んぎゃあああああっ！！　アソコがっ！？　裂けるううっ！！」

「安心して。もうマンコのヒダヒダ殆ど潰れてるから……」

そう冷たく言い放つと、パンツが手から離れて床に落ちる前にサッと掴み取り、何も言わずに小鳥遊貴子の前でしゃがみこみ、そっとパンツを履かせてあげた。

「あ、あり……がとう……」

側に落ちている制服も全てを手渡すと、小鳥遊貴子は我に戻り、慌てて自分で服を着た。

「お前ら、今度貴子に何かしたら殺すからね？」

もちろん本気ではなかった。

国が認めた残酷処刑島の処刑人でも、暴行や去勢の許可はおりていても、殺人だけは認められていなかったからだ。
でも怒りに任せて本気で殴れば、相手は本当に死にかねない……。
それほど大山加奈は力もスピードもずば抜けていた。

「横山裕子！！　ちょっと来な！」

「は、はいっ！！」

恐る恐る加奈の前に歩み出る裕子。

「オナニーしなさい」

「え！？　な、なに？」

「全裸になってみんなに見えるよう股を全開に開いて、オナニーしなさい」

「や、やだ！　恥ずかしくてできないよ？　許して……」

「ダメだよ。皆の前でオナニーしてイカなければマンコの縁のヒダヒダ全部切り取って子宮抉り出してやるからね？　ほら、早く脱げ！」

無理矢理加奈によって全裸にされた裕子は、まだ恥ずかしくて震えている。

「はい、大きく脚を開け！」

震えながら、お尻を着いたままでM字開脚の体制で少しずつ脚を開いていく。

閉じられた膣口がパックリ開いていき、クラスのみんなが顔を赤くしながら見つめている。

「み、見ないで……みんな……お願い」

全開に開いた頃、黒板から持ってきたチョークを手に取り、加奈がそっと前に立ち、問いかける。

「それで全開なの？　処女じゃなさそうなマンコの色してるね？」

「ほっといて！」

ついカッとして加奈を睨み付ける裕子。

「まだそんな元気あるんだ……」

そう言いながらサッとしゃがみ込むと、いきなり肛門にチョーク

を半分くらい突っ込んだ。

「痛いっ！？……な、なんてことすんのよ？……抜いて」

更に左右に捻りながら根元まで捩じ込んでゆく。

少し出てる部分も完全に埋まるように人差し指で、直腸深く押し込んだ。

更に二本目、三本目も突っ込んでゆく。三本目が半分くらい入った所で、一本目のチョークが、Ｓ状結腸に突き当たり、激痛が走った。

「痛ったあああいっ！！　やめて抜いてやめて抜いてえぇっ！！」

「チョークって一本がだいたい６．５ｃｍくらいだから……三本で約２０ｃｍかぁ。直腸の長さって２０ｃｍもなかったんだね……突き当たりの腸壁突き破りたいよほんと。はい、次はオマンコね？」

ボールペンを取り出し、性器に挿入してゆく。少しはみ出してるままで膣内を掻き回し、処女膜がないことを確認して手を離した。

「気が変わった。オナニーは後でやってもらうから……血まみれのマンコでね。」

ゆっくり立ち上がると、股間めがけて右足の踏み付けキックを炸

裂させた。

『バリバリ！……グチャ！』

「ギャアアアッ！！」

チョークもボールペンも、はみ出していた部分を一気に奥の奥まで蹴り込まれて、二つの穴から同時に大出血する。

「チョークでＳ状結腸が裂けて子宮口も少しめくれちゃったかな？　さて、本番はこれからよ？　今度はバトンを突っ込んで子宮をズタズタにしてあげるから……閉じかけた脚をもう一度開け！　汚い血まみれのマンコ丸見えにしろ！　ほら！」

泣きながら股間を両手で押さえている手の甲を、ガツガツ踏み付ける加奈。

あまりの凄惨な光景に泣き出す女子生徒や、目を逸らす女子生徒も現れた。

「加奈ちゃん、もう止めてあげて。凄く出血してるじゃん……裕子が可哀想」

「だってこいつ、貴子にこれだけ酷いことを……妊娠出来ないようにしてやらなきゃ……」

「もういいの。あたしには貴女という親友がいるから。もう裕子やクラスのみんなに酷いことするのは止めて」

「………わかった。ごめんね貴子」

「うん！　こちらこそごめんね！　あたしのために喧嘩なんてしてくれて！　助けてくれてありがとう」

「おい、もうみんなの前でオナニーするのも去勢も堪えてやるから服着ろよ」

「……う、うん。ご、ごめんなさい……本当にごめんなさい……」

グスグス泣きながらグシャグシャの顔になって痛みを堪えながらパンツを履く裕子。

しかし手が震えて上手く履けない。

見てるクラスの子たちが数人近寄り、裕子の涙や鼻水や股間の二つの穴からの血を拭き取って、パンツを履かせてあげた。

そのまま泣き止まないので、結局上も下も制服全てをみんなで着せてあげた。

「ぐす……ぐす……ありがとう。みんな」

その時から誰も大山加奈の親友である小鳥遊貴子をいじめる者はいなくなり、大山加奈は心を開いて貴子と話すようになった………。

そして現在――――

高校三年生になった今も…………。
二人の良い仲は続いている。

「お風呂沸かしてくるから待っててね」
「うん。加奈ちゃんの好きな漫画でも読んでるから」

１０分後、下から加奈が呼ぶ。

「貴子ーっ！！　母さんがご飯作ってくれたから一緒に食べよー！！　下りてきてっ」
「はーい」

お風呂に入る前に三人で食卓を囲んだ。

「こんばんは。おばさん。頂きます」
「父さんは出張で数日は帰らないから今日もいないけど、ゆっくり

していってね貴子さん。こんな変な娘と遊んでくれてほんとありがとう」

「ちょ、ちょっと母さん！！」

「いえいえ！　前からお話してるようにですね……あたしの方からお友達になってもらうようお願いしたんですよ？　ほんとです！」

「あらまあ、気を遣ってくれて……ほんとに優しい子だね貴子さんは。うちの加奈とこれからも仲良くしてあげてね」

「はい！　こちらこそです」

「なんか力抜けるなぁ。母さんが何か喋ると……」

「加奈ってば失礼なこと言わないの！」

「あははは」

楽しい三人での食事も終え、楽しみにしていたチーズケーキも完食した二人は、一緒にお風呂に入る。

「今更だけど……一年の時はほんとに色んなことあったね？　加奈ちゃんがなかなか返事もしてくれないからあたしったら、半分ムキになっちゃって……」

「無視するつもりだったけど、たまに貴子はとんでもなく馬鹿げた事言うもんだから……ついつい吹いちゃったんだよ……不覚だわ私

も」

「面白いからじゃなくて？　馬鹿げてるから？　呆れてクスッと笑ってたんだ……なんかショックぅ～」

「あはは！　小学生の頃も中学生の頃も、私には一人も友達出来なくて、格闘技ばかり習ったりしてたのもあったんだけど……もう私には友達なんていらないや！　って思ってたの」

「そうだったんだ……」

「そろそろ逆上せてきたね？　あがろうか？」

「うん。あたしもクラクラしてきたよ……あは」

仲良く風呂から上がって、加奈のベッドへ入る二人……。

「これで何回目かなぁ？　加奈ちゃんと一緒に寝るのは……」

「さぁ。何回も泊まってるから忘れちゃった」

「だよね……あたしも忘れた」

「私のせいで親友の横山裕子さん……敵にまわしちゃったんだよね？　ごめんね」

「あ、いや、あーなったのは仕方ないよ！　あたしが勝手にあーなるようにしちゃったから加奈ちゃん何も悪くないから」

「なんか未だに罪悪感あるんだよね。クラスのみんなとも決別しちゃったのも、私のせいだと思うし……ごめん」

「………」

「ん？　貴子？　今度はあなたが無視するつもり？」

『ギュウウッ……』

「！！？」

黙ったまま両腕で大山加奈に力強く抱きつく小鳥遊貴子。

「ちょ、ちょっと……どうしたの貴子？」

「………あたしね。あの時本当に嬉しかったんだ。みんなが敵になっちゃって、親友の裕子さえ敵になってしまって……みんなにいじめられてるときに加奈ちゃんがあたしを助けてくれた事……」

「あれは……私のせいでもあるから……堪えきれなくなって爆発しちゃっただけなのよ」

「………好き」

「え？　あ、うん。私も貴子好きだよ」

「大好き！」

「う、うん。私も大好きだよ」

パジャマの上を脱ぎ始める貴子。

ついに下とパンツまで脱いでしまった。

「ちょ、ちょっと貴子？　……何でパジャマ脱いでるの？」

素っ裸になってもう一度強く抱きついてくる貴子に、なんとも言えない複雑な気持ちになる加奈だった。

「加奈ちゃん……抱いて」

「え！？　ええっ～！？　今何て！？」

今度は加奈のパジャマを脱がし始めた貴子に、無意識に抵抗出来ない自分を感じている加奈だった。

全て脱がして素っ裸にさせると、今度こそお互いに素っ裸の状態で再度抱き締める貴子。

「た、貴子……？」

『ちゅ……くちゅくちゅ』

「ん！　んん！？」

加奈の口へキスした次の瞬間、舌を入れてディープキスをする。
動揺を隠しきれない加奈は、一瞬今起きていることを理解出来ずに固まっていた。
我に返ったとき、今親友と同じベッドに寝てるんだ、同性の女の子とキスしてるんだ、素っ裸になって抱き合ってるんだ、とゆう実感が少しずつ沸いてくるのを感じていた。

「加奈ちゃんのことが、めちゃくちゃ好き……愛してる」

舌を抜き、唇は重ねたままで囁く貴子。

「あ、愛……って、ええっ！？　わ、私としても……大好きだし、あ、あ、愛してるよ！　ええっ！？　何言ってるの？　私まで！？」

とにかく冷静になろうとすればするほど再び混乱させられるほど小鳥遊貴子の意思表示は凄まじかった。
二つの胸を両手で揉んでくる貴子に対して、咄嗟に揉み返す加奈。
更に激しくディープキスをしながら、強く抱き締め合いながら、加奈の太腿がたまたま貴子の股間にスルッと入る。
ビシャビシャに濡れていた……。

「！？　貴子……本気で本気……なの？　凄い濡れてるけど……」

「ここまでして冗談でしたぁ、とか言わないよ。大好きな加奈ちゃん、あたしの処女……奪ってくれる？」

「え、そ、それは……これから出会う心から愛した人に捧げるものかな？　と思うのだけど……ね？」

「加奈ちゃんを愛してるからいいじゃん」

「愛した男性に！　とも思うんだけど……その辺はどう思ってらっしゃいますのですか？」

動揺が酷すぎて、訳のわからない敬語であたふたする加奈だった。
加奈の右手を掴んで自分の股間へ運んでゆく。

「入れて……加奈ちゃん！　奥まで指突っ込んであたしを犯して」

「犯してって……その表現少し違うと思うんだけど……」

「好きだから無茶苦茶にしてほしいの」

加奈の手を性器に擦り付けながらキスをしてくる貴子に、自分の本当の気持ちも、ようやく気付いたようで、何かが吹っ切れた気がした。

「私も大好きだからいいよね？」

意を決して、貴子の膣口へ、右手の中指をゆっくり差し込んでゆく……。
処女膜に当たると一瞬ビクッとしたが、そのままゆっくり差し込んでいく……。
「んん……ん。あん、加奈ちゃんの指があたしに入ってくる……もっと、もっと突っ込んで！　あん、加奈ちゃん！　大好き！！」
「私も大好きだよ！　貴子……処女、奪ってあげるね？」
『ズププププ……バリ！』
加奈の中指によって、ついに貴子の処女膜は破かれた。
「痛っ！　んん、加奈ちゃん……加奈ちゃん！　ありがとう。もっと痛くして……あたしを……壊して」
そのままゆっくり中指を根元まで差し込み、しばらく掻き回す。ドクドクと夥しい量の愛液が加奈の指とベッドのシーツを濡らしてゆく……。
愛液に混じった微かな血液もシーツを染めていた。
キスをしながら、身体を強く抱き締め合い、頃合いを見て人差し指も追加する。

二本の指で膣内をぐちゅぐちゅと掻き回す加奈。

「あんっ。あんっ。気持ちいいっ！！　好きな人とするエッチってこんなに気持ち良かったんだ……クリトリス擦る一人エッチより加奈ちゃんの方が気持ちいいっ」

「一応やってたんだ。オナニー……私もしてたけど。クリトリスだけじゃなく、挿入オナニーもしてたから処女膜は自分の指で破いちゃったんだよね……」

「処女膜は無くてもいい？……私にも貴子の指……入れて」

「処女膜なんて関係ないよ。あ!?　あたしを抱きながらこんなに濡れてくれてたんだ加奈ちゃんも……」

『ずちゅっ！　くぷぷぷ……クチュクチュクチュクチュクチュ！！』

「あっ！　あんんっ！！　貴子……いきなり突っ込んだ上に掻き回し方が激しすぎるよっ！？　あんっ！！　あはあああんっ！！」

「大好きだからグチョグチョにしてあげる」

優しく激しく入れたり抜いたり掻き回したり、先が全く読めない激しい指捌きに、思わず潮を噴き、先にイカされてしまう加奈であった。

「うそっ！？　後からなのに……私の方が……先に……あ、あはっ！　イクっ！！　イックウウウウ！！」

「イケ！　イッケぇぇーっ！　あたしの大好きな加奈ちゃんっ♪」

『ぐちゅちゅちゅちゅっ！！　プッシャアアアアアッ！！』

「はぁ、はぁ、はぁ……」

ビクビクと震えて愛液と潮を激しく放出した加奈は、顔を真っ赤にして貴子を強く抱き締めた。

「痛いっ！？　加奈ちゃん……ぐ……ぐるしい……」

「！？　ご、ごめんっ……」

怪力で身体を締め付けられて本気で死にかけた貴子だったが、辛うじて難を逃れてベッドに潜り込むと、ドロドロに濡らしている加奈の性器を舐め始めた。

「うっ！　貴子……汚いからやめて」

「お風呂も入ってるし……加奈ちゃんの愛液なんて全然汚くないから。全部舐め取って飲んであげる」

『ピチャッ……ピチャピチャ……ゴクン……ピチャピチャ……』

卑猥な音を立てながら加奈のオマンコを激しく舐め取っては飲み込むイヤらしい音が加奈の部屋に響く……。

「あ、あん。気持ちいい……あん」

加奈は、シックスナインの格好に誘導して、自分も貴子のそれを舐め始めた。

指を差し込んで掻き回しながらクリトリスを舐めると、今度は貴子がビクッとなる。

「あ、イク、イッちゃううううっ！！　加奈ちゃん、むっちゃ大好きいいいいっ！！」

『プッシャアアアア！！』

イク寸前に性器全体を口で塞ぎ、噴き出す愛液と潮を全て口内へ受け取って、全て飲み込んだ。

クリトリスと尿道と、膣口、膣内、更に肛門まで激しく舐め回す加奈。

自分をここまで愛してくれる貴子に、本気で愛情を持って理性を抑えきれなくなった加奈は、再び愛液で下半身をグショグショにしながら貴子を抱き締めて、全身で愛を表現しながら抱擁するのであった。

二人ともオーガズムを迎え、エッチのピークを越え、軽く抱き締めあいながら、優しくキスを繰り返していた。

「あたしと結婚して。加奈ちゃん」

加奈の胸を軽く揉みながら囁く。

「いいよ。法律的に無理でも卒業したら一緒に暮らそうよ」

「ほんと！？　ありがとう！！　やったあ！！」

「でも残酷処刑島での拷問処刑人にはなれそうにないね？　貴女は優しすぎるから……」

「え？　それって前に少し聞いた……あれって作り話でしょ？　こんな時にそんな冗談言うなんて！　あはははは♪」

「よく分かったね？　冗談だって。そんなこと国が認める訳ないもんね！　ブラックユーモアって感じかな。は……ははは」

それからは貴子が泊まりに来るたび、二人は濃厚なレズエッチを繰り返した。

クラスの皆に嫌われていても、大好きな親友が一人いればへっちゃらな二人だった。

加奈の百合的高校生活（後書き）

とうとうカップルになってしまった女同士の残酷少女の大山加奈と、
心優しい小鳥遊貴子。
小鳥遊貴子には残酷処刑島で活躍する日は来ないであろう……多分。

加奈と貴子の奴隷育成（前書き）

あまりに執拗な仕返しに、ついに何かが吹っ切れた心優しいはずの小鳥遊貴子。

彼女が大山加奈と一緒に取るべき行動に、少しずつ変化が現れる………。

加奈と貴子の奴隷育成

もうすぐ取り壊しになる山川女子高等学校。
最近、色々な事が起きたが、一日一日と取り壊しに向けて時は過ぎて行く……。
暖冬とはいえ、かなり冷え込んだ初雪が舞う二月のある日、大山加奈と小鳥遊貴子は隣町の遊園地に遊びに来ていた。
二人は愛し合っていたからデートというべきだろうか……？
「ううう……ジェットコースターはもう勘弁して……吐き気がする……うう」
「加奈ちゃんってば喧嘩強い割には乗り物弱いのね？　可愛い！　あはは♪」
「………乗り物ってゆうか……絶叫モノはほんと勘弁……貴子は喧嘩弱いし気が弱い割にはとても強いんだね……げぇっ！！」
ついに堪えきれず嘔吐する加奈。
残酷処刑島での処刑人に選ばれるほどの残酷な気性の持ち主の大山加奈だったが、ウィークポイントはあったわけだ。
「あらあら大丈夫？　苦しいの苦しいの……飛んでけー！」

しゃがみ込んで遊園地の側溝に嘔吐する加奈の背中を優しく撫でながら小鳥遊貴子は加奈を気遣った。

「ありがと。少しマシになってきたよ。小学校以来に聞いたわそんなマジナイみたいなやつ……」

「そりゃマシにもなるでしょ？　あたしのは本気の祈りが籠めてあるんだから！　大好きな加奈ちゃんには一生元気でいてもらわなくちゃ困るから……ね？」

「貴子ってば……なんかいつも上から目線だよね？　あんたには敵わないわ……」

「あはは！　あたしも加奈ちゃんには敵わないよ！」

ぎゅっと抱き締めていきなりキスをする貴子。

「んっ！？　んん……」

「こんな大勢いる所でやめてよ貴子」

「いいじゃん！　愛し合ってるんだからあたしたち」

数人が見て見ぬふりをして通り過ぎてゆく中、いかにも鍛えられてそうな屈強な体格をした男が近寄ってくる。

加奈と貴子の二人をジッと見つめている男。

「なんか私たちに用なの？」

加奈が睨み付けながら１９０ｃｍはありそあうな男を威嚇する。

「横山裕子って知ってるよな？　俺の彼女なんだけど」

「知ってるよ。少し前にシメてやったクラスメイトだねそいつは」

「裕子の話を聞いてると段々腹が立ってきてな。やり過ぎじゃあねえのか？　みんなが見てる前で欲もあんな残酷なことができたな？おい？」

「この子の情で許してやったのよ。ほんとは子宮抉り出してやるつもりだったんだから……軽傷で済んでお礼言ってほしいくらいだわ全く……ね？　貴子」

屈強そうな大男を前にしても少しもビビることなく余裕の態度で小鳥遊貴子に同意を求めてくる大山加奈。

「ごめんなさい。もう少し早くあたしが加奈ちゃんを止めていればあそこまで酷い目に……。親友だった裕子をあんな目に遭わせて本当にごめんなさい」

「ごめんなさいで済んだら警察は要らねえわなぁ？　この遊園地を今すぐ出て近くの森林公園に来てもらおうか？」

「はいはい。私たちをボコボコにするつもりなのね？　単純な発想だわ」

「やめてよ加奈ちゃん……もう帰りましょ！　あたしは喧嘩ばかりする加奈ちゃんはイヤだよ」

「貴子の元親友の彼氏となれば仕方がないよ。ここで逃げても必ずまた仕返しに来るから。殺しはしないから安心して、貴子」

「うん。絶対約束だよ！　少しだけ痛い目に遭わせたらすぐに帰るんだよ！」

完全に勝利を前提に話を進める二人に苛立ちを隠せない男、高橋和樹はついに叫んでしまった。

「お前ら！　ボコボコにした後で絶対犯してやるからな！　謝っても許さねぇからな！？」

「ええっ？　いいのかな？　レイプもセックスだから彼女が妬いちゃわないの？　あはは♪」

「制裁だからわかってくれるさ！　ガハハ！」

「あ、そう……じゃあ行こうか」

半時間後……遊園地を出た三人は、人気のない森林公園の山頂へ来ていた。
子供たちも使わない錆で覆われた古いブランコが揺れている。
そこには小鳥遊貴子の元親友……横山裕子が座っていた。

「ごめんね貴子。女同士の喧嘩に格闘家の彼氏を巻き込んで……あの時に私が受けた屈辱を晴らしてくれるらしいんだわ。この和樹が」

「裕子！？　どうしてここにいるのよ？　あたしたちに復讐するためにこんなバカな事を思い付いたの！？　遊園地に着く前から尾行してたのね？」

「あはははは！　よく分かったわね！　レズのあんたたちがデートすることを盗み聞きしてた子がクラスにいたからね！　復讐するチャンスだと思ってさ。女子高にこんないかつい彼氏を連れ込む訳にはいかないからね〜。少しヤキモチ妬いちゃうけど和樹にはあんたたちを犯してもらうから！　あはははは♪」

目が点になり、呆然とする加奈と貴子。

「やっぱりこの子、普通じゃないよね？　貴子」

「…………うん。親友だった子にこんなこと言いたくないけど……憎い敵とエッチさせたら、その相手と裕子は穴兄妹……いや、女同士だから穴姉妹？　こんな場合は何て言うんだろ？」

「私だったら自分の恋人が嫌いな奴とエッチされたら、いくら復讐とはいえ……やっぱり嫌だけどなぁ」

色々と学校で騒ぎを起こす大山加奈も、今回ばかりは貴子に正論を語る………。

「ガタガタうるせぇんだよ！！　だから裕子は分かってくれるって言っただろ！？　………ってな訳で女子高生なんかボコるのは申し訳ないんだが、可愛い裕子のため……覚悟してもらうからな！？」

「覚悟ねぇ……はいはい。でももしあんたが負けたら、カップル揃って私たちのペットになってもらうから。裕子と和樹……一生可愛がってやるわ」

「ほざけっ！！　おらあっ！！」

凄まじい形相で殴りかかってくる高橋和樹。
余裕でかわす……何度も殴りかかってくるが、全てかすることもなくかわす加奈。

「ゼエゼエ……くそう……しぶといガキだ……はぁはぁ……」

「何をやってんの！？　遊んでないで早く大山加奈をボコボコにしてやって！！」

「くっ……わかってるから少し黙っててくれ！　はぁ……はぁ」

「そんなんで息があがってるようじゃ私には死んでも勝てないわ……彼女の裕子さんが見てる前で逆にボコボコにしてあげるからね？」

殴る蹴るの連撃を繰り出す加奈に、防御しきれない和樹は、どんどんダメージを負ってゆく。

筋肉質の和樹にとっては、加奈の攻撃は女子高生の軽い攻撃だが、終わることなく浴びせ続けられていればダメージは蓄積されてゆく……………。

ローキックを数十発食らい、観客からの見た目は大して効いてないような地味な攻撃に見えるのに、堪らず崩れ込む格闘技の選手みたいに、大男の高橋和樹も片膝を付き動けなくなった。

そこへトドメの一撃が入った。

『バキイッ！！』

鼻の骨をへし折る強烈なサッカーボールキックが決まると同時に、鮮血が噴き出す。

「ぐわあああっ！？」

うずくまる和樹に背後からヘッドロック……数秒後、泡を吹いて落ちてしまった……。

その光景を見ながら震えている横山裕子に歩みより、往復ビンタを食らわせた。

「今から学校の体育館倉庫に来てもらうから……何されるか分かってるよね？」

薄い黄色の液体が、裕子の股間から太腿へ垂れてくる……やがて靴下へ染み込んでゆく。

靴の中まで小便でタプンタプンになった。

「あらあら……いい歳した女子高生が人前でお漏らしですか……？小便チビってても漏らしても許さないからね。どんな目に遭うか分かってる？　って聞いてんのよ？」

「は、は、はい……でも許して……もうほんとに何もしないから……」

「格闘家の彼氏まで巻き込んで欲も許してなんて言えるもんだね？大したもんだわ……。その彼氏……重たいから運べないし。意識戻ったら自分で歩いていってもらうから」

自分で歩いて付いてきたら殺さない、と言う約束をして、高橋和樹と横山裕子は歩いて二人に付いてゆく。

学校の体育館倉庫に着くと、動けなくなると同時に痛みも和らぐ麻酔注射と、大きな傷を受けても、出血が和らぐ特殊な注射を二人に打つ加奈。

「これでもう動けないし逃げられないわよ？　覚悟してね？　さぁ脱ぎ脱ぎしようか……」

冷たく言い放つ大山加奈。

「なんで加奈ちゃんを怒らすことばかりするの？　今度ばかりはあたしも庇いきれないよ？　裕子……ごめんね……」

「ごめんねって……貴子！？　助けてよ？　親友だったじゃない！？　見捨てるなんて酷いよ！？」

「…………」

半泣きになりながら横山裕子を見つめる小鳥遊貴子。

「今回ばかりは私を止められないって……分かってたんだね……貴子」

「分かってるよ。でも出来るだけ苦痛は与えないであげて。お願い……加奈ちゃん」

「分かってる。だから痛みも和らぐ麻酔打ったんだよ。ってゆうかそこまで私を止めないってことは……もう気付いていたんだね？　私の裏の顔に……」

横山裕子の服を脱がし始めながら貴子に問いかける加奈。
最後の一枚のパンツを脱がせてる最中、裕子は手でパンツを掴み、少し抵抗を見せた為、お腹に強烈な一撃を入れて、苦しんでいる間に全て脱がせた。
高橋和樹は、異性に脱がされることが恥ずかしかったので自ら素っ裸になっていた。

「うん。気付いたよ……最近だけどね。ようく考えたらあたしに嘘なんか付かないもんね、加奈ちゃんはさ。残酷処刑島での処刑人……大山加奈。本当の話だったんだよね。そしてその処刑人は、あたしの大切な恋人……」

「………本当はね……貴子にバレたくなかったんだ。私が人殺しだってこと……。冗談だと思っていてくれたら、それはそれで良かったんじゃないかって思ってた……」

「加奈ちゃんは国から任命された処刑人！　殺人犯じゃない！　酷い殺され方をした遺族の人たちの恨みを晴らすために国が選んだ処刑人……何も悪くないんだよ加奈ちゃんは」

「ありがと。でも今から私が行うことは国の命令じゃない。私の意志で行う私刑……認めてくれるの？　貴子……」

「加奈ちゃんの恋人でいるために……悪い人には残酷になる！　今

日からあたしは……生まれ変わるの」
何だかんだ言っても最後には元親友の心優しい小鳥遊貴子が助けてくれる……許してくれる……そう鷹を括っていた横山裕子は凍り付いた……。
これでもう大山加奈の私刑を逃れることは出来ない……殺されなくても無茶苦茶酷い目に遭わされる……。
恐怖に全身を震わせながら涙が溢れるのを感じた。

「和樹……巻き込んでしまってごめんね。私のせいで酷い目に遭っちゃう……ほんとごめんなさい」
「女子高生ごときに負けた俺が悪いんだ。気にするな。どんな目に遭わされようと俺はお前が大好きだぜ？　これから先もずっと愛してるよ裕子……」

電動ノコギリのコイルを引っ張りエンジンをかける加奈。
激しく、不気味な高音が体育倉庫に響き渡る………。

「愛し合うって素晴らしいことよね？　でもこれからの人生は私と貴子の支配下に置かれ、奴隷となって生きていってもらうから……安心して。いつも二人は一緒にしてあげるから。でも私と貴子の奴隷として……だけどね……」

ギュインギュインと電動ノコギリの鋭い歯を回転させながら男に

歩み寄る加奈。

「ダルマに……してあげる」

先ずは高橋和樹の右腕が、肘の少し上辺りから電動ノコギリで落とされた。

「うっ！？　えっ？？　な、何をして……痛くな……いぞ？」

余りの現実味のない光景に、横山裕子は現実逃避している。
そのまま左腕の同じ部位……右太腿、左太腿……四肢全てが切断された。

「！？　嘘だろ！？……痛くも痒くもないぞ？　血も殆ど出てこないし！　これは夢だろ？　おい！　夢だと言ってくれ裕子！！　俺の手足がなくなっちゃったぞ？」

無惨な光景に、半分覚悟していたとはいえ、まだまだ恐怖心が隠しきれない小鳥遊貴子は、半泣きになりながらも涙を堪え、包帯で切断部位をキツく巻いてゆく。

「裕子は……ダルマにするのは……許してあげて」

半泣きになって振り向き様に加奈に囁く貴子であったが、ゆっくり首を横に振る加奈。

「こいつはもう昔のあんたの親友の横山裕子じゃない。ここで許してしも何度も同じことをしてくるわ。もう優しすぎる貴子でも分かってるでしょ？」

「…………」

黙り込む貴子を尻目に、今度は裕子の右腕を切断しようとする加奈。

「やめてっ！？　こんな酷いことやめてえええっ！！」

気が狂ったように叫び出す横山裕子だったが、麻酔注射により、体は全く動かない……。

『ギュルルルル！！　ブチブチブチブチ……』

勢いよく回転する電動ノコギリの歯は、容赦なく裕子の右腕を肘の上から切り離した。

「ぎひぃいいっ！？　許してえええっ！！」

　左腕、右太腿……左太腿……四肢全てが彼氏の高橋和樹と同じく切り離された……。

　特殊な注射のお陰で出血は少ないが、速攻で止血作業をこなす小鳥遊貴子。

「少しは痛かっただろうけど……よく頑張ったね？　裕子。手足なくなっちゃったけど、絶対死なせないから安心して……」

　またもや包帯でぐるぐる巻きにして、四肢の出血を防いだ。

「ひぃい……わ、わ、私……こんな姿で……お嫁に行けない……お母さんお父さんにこんな姿見せたくない……いやあああああっ！！わあああああんっ！！」

　痛みが少ない分だけ、より客観的になれる余裕が自分自身に出来ていたことが、逆に悲惨な現実を冷静に受け止めさせられている……これは皮肉以外の何物でもない。

　だが、激痛を与えられて気を失っても、結局は目覚めた時に過酷な現実を知ることになるから、理屈は変わらない。

「これでもう死ぬことはないわ。取り敢えずこの体育館倉庫で卒業

まで暮らしてもらうから。両親と先生方には私から話しておくから安心して」

「裕子……ごめんね。あたしたちの奴隷で一生生きていくことになるなんて……本当にごめんね」

「謝るくらいなら助けてくれたら良かったのに！！　この鬼！！　悪魔！！　うわぁぁぁあんっ！！　わぁぁぁあんっ！！」

泣き叫ぶ裕子にそっと近寄り、激しく往復ビンタを決める加奈。

「生かしておいてくれただけでも感謝しろと言ってるの！　貴子に免じて痛みも少ないように注射までして切断してあげたのよ？　ありがとうございます！って言え！！」

「あ、ありがとうございます……」

『ズブッ！！』

「ひあっ！？　痛いっ！！」

加奈の中指と人差し指が裕子のオマンコにめり込む。
激しく膣内を掻き回し、ダルマ女は必死で股を閉じようと太腿に力を入れる。
太腿をぱっくり左右にこじ開ける両手があった。
小鳥遊貴子の両手だった。

「ひっ！？　貴子まで……酷い！　お願い！　見ないで……」

「もう裕子はあたしの親友じゃない……今日から、今から、あたしたちの奴隷なの。股を……開きなさい」

「や、やだっ！？　貴子だけは助けてくれると信じてたのに！！　酷いいいいっ！！」

『ガボッ！！　ズブブブブブッ！！』

「ぎひいいいいっ！！　私のアソコ……裂けちゃううううっ！！　やめてっ！　許してっ！！　抜いてええっ！！」

肘まで突っ込まれ、子宮を右手で掻き回される裕子……。子宮に傷がつき、ドクドクと真っ赤な血が流れ出る。

『ぐちゅ！　ぐちゅううっ！！　グボッ！！　ズルズル……ぷるんっ……』

引き抜かれた加奈の右手には、血まみれの子宮のミンチが握られていた。

「結局、あんたの子宮は抉り取られる運命だったってことよね？　うふふ♪」

痛みはあまり感じないが、自分の股間からとんでもないモノが引きずり出された事は十分理解できた横山裕子は、絶望感のあまりに、気を失ってしまった。

「ほら、子宮を失った彼女の前で射精してやれ！　ほらほら」

高橋和樹の背後から股間に手を滑らせ、ペニスをぎゅっと掴むと、高速でピストン運動を始める加奈。

四肢切断されても、痛みも出血も止まっている以上、性的な快感は感じられた。

自分をボコボコにした相手とは言え、かなりの美女である大山加奈にテコキされては堪らない。

みるみるうちに勃起した一物は２０ｃｍを越えていた。

「ボコボコにされた相手にシゴかれてこんなにデカくして……情けないなぁ。ほらっ！　たくさん出せっ！」

「うっ……いく……いくうううっ！！」

『ドピュッ！！　ピュピュピュピュピュッ！！』

「ダルマ男にされた上に射精までさせられて……あは。哀れだなぁあんたも……」

それからずっと数日間、朝昼晩と担任が体育館倉庫に四肢切断された二人に食事を運んだり、世話をした。

担任の崎山道子だった。
以前に小鳥遊貴子に厳しく接し、大山加奈に体育館で子宮を抉り出された担任であった。
病院送りにされたが、二月入ってから担任に復帰していた。
勿論、大山加奈の恐ろしさは誰よりもよく理解していた。
「あなたたちも大山さんにやられたのね。四肢切断なんて酷過ぎる……。可哀想に。私も以前彼女に子宮抉り取られたの……無茶苦茶する子だわあの子……」
「あれから一度も訪れないけど、大山さんと小鳥遊さんは普通に登校してるのですか？　先生」
「普通に登校してます。傷口が完全に塞がるまでそっとしておいてあげる……とか言ってたけど。確か今日くらいから調教しに行く、とか言ってたわね。覚悟しといた方がいいわよ？」
「そ、そんな……こんな格好にされたけど、そっとしておいてくれるならまだましだと思ってたのに……やっぱり許してくれてないんだ……」
「裕子……お互いこんな姿になってしまったけど、まだ俺はお前が好きだ。挫けずに生きていこうな？」
「大山加奈のテコキでイカされたあんたにはもうそんな気持ちなんてないわよ！　男ってやっぱり最低ね！」
「まさか……あの時、意識あったのか！？　それは忘れてくれよ？」

「あんたが射精する瞬間に意識戻ったのよ。最低過ぎて意識戻ってないふりしちゃってたもん私……もう別れて！」

「そんな……両手両足無いもの同士仲良くいこーぜ？　頼むよおい！」

その時、静かに体育館倉庫のドアが開いた……。

『ガラッ……』

「崎山先生……よくこの数日間、こいつらに餌をやってくれたわね？　感謝するよ」

「は、はい、ありがとうございます大山さん。もう両手両足の傷口もほぼ完全に塞がったみたいですね。良かったです」

「あんたの子宮あった場所も塞がった？　ちょっと確かめてあげるからじっとしてなさい」

崎山道子先生のスカートをまくり上げ、パンツの裾から右手を滑り込ませる加奈。

一気に指から手首まで膣口にぶち込んだ。

『ズブブブッ……ぐちゅうっ！！』

「ひあっ！？　痛いいっ！！……大山さん、許してお願い！！」

「確認してんだからじっとしてるの！　卵巣も引き抜かれたいの？　私のマンコ、掻き回して下さい！　って言え！」

「ごめんなさい……ぐす……ぐす。私のマンコ、か、掻き回して……下さい……加奈様」

「大山様、じゃなくて加奈様なのね？　うふふ。そっちの方がしっくりくるわね。今度から私のことは加奈様って呼びな」

小鳥遊貴子と、二人の奴隷である横山裕子と高橋和樹が見守る中で、大山加奈の子宮跡確認が続けられる。

グチュグチュと膣内を掻き回すだけの楽しみの行為であったが、崎山道子は逆らえない。

教え子の女子高生に、性器を掻き回されるとゆう、あまりの痛みと羞恥心から涙がどんどん溢れ出してくるが、ひたすら加奈が飽きるのを待つのみであった。

勢いよく右手を引き抜くと、血と愛液が混じった液体が糸を引きながら、崎山道子の口へガボッと捩じ込まれた。

「ほら、自分の汚いマン汁綺麗に舐めとりな！」

「うっ……うう。はい。加奈様……ゴフッ……ペロペロ……ベロベロ……ゴクン……」

「よしよし、良くできました。でも少し臭かったよあんたのマンコ……お仕置きにこれをあげる」

次の瞬間、股間に強烈な膝蹴りを入れる加奈。
恥骨にヒビが入った。
痛みのあまり、小便を洩らしながら踞る崎山先生を尻目に四肢切断された奴隷である二人の元へ歩み寄る加奈。
小鳥遊貴子は立ち止まり、崎山先生に優しく声をかけた。
「先生、あたしは先生に痛いことや酷いことしないから……安心して下さいね」
「あ、ありがとう小鳥遊さん……ぐす……ぐす」
「恥ずかしいことはしちゃうかもだけど……うふ」
「えっ!? 今何て……?」
「何でもないです! ヒビ入った恥骨をお大事に! せんせっ♪」
ニコッと微笑みかけると、振り返って加奈について行く。
「もう傷口も塞がって犬みたいに歩けるんだ? 偉いね～」
犬のような四つん這いでこちらを見ている二人に声をかける加奈。

「下の処理はどうしてたの？」

「崎山先生が掃除してくれて、私たちの股間を洗って拭いてくれてました。本当に助かりました」

小鳥遊貴子の問いに、元親友の横山裕子が即答した。

「ふうん。良かったね本当に……」

そう言いながら横山裕子の隣に体育座りする貴子。
そのまま裕子の陰部に手を伸ばし、中指を突き立てる。

「あはっ!？　……貴子、何するの!？」

「小鳥遊様、何をなさるのですか？　でしょ？　もうあたしは以前のあたしじゃないんだから。逆らうと加奈ちゃんみたいに体バラバラにしちゃうぞ？」

「ひ、ひいっ!？　ごめんなさい……小鳥遊様……これ以上バラさないで……お願いします」

「やれば出来るじゃん……酷い人間のあんたでも性欲はあるんだよね？　イカせてあげようか？」

『クチュクチュ……』

人差し指も加えて裕子の性器を思いっきり掻き回す小鳥遊貴子。
速度を変え、色んな部位を激しく掻き回す。
加奈さえ瞬時にイカされた指技に、横山裕子も数秒と持たなかった。

「あ、あん、小鳥遊様、いく……いっちゃううっ!!」

潮を噴き、愛液をドクドクと垂れ流し、両膝をひくひくさせながら小鳥遊貴子の指を締め付けながらイッてしまった。

「貴子も急にSに目覚めてきたわね？　何か嬉しいよ私も……えーっと……高橋和樹さんだっけ？　あなたは気持ちよくさせるどころか今日は地獄を味わってもらうけど覚悟しといてね？」

ゆっくりと男へ近寄る加奈。

「ひっ、やめてくれ……何をする気なんだ⁉︎」

「一つ潰すの……あんたの玉を……」

「う、嘘だろっ!?　キンタマを!?　ショック死することだってあるんだぞ?!　やめてくれ!!　ほんとに勘弁してくれ!!」

「死んだら桜の木の下に埋めてやるから安心して。じゃあじっとしてるのよ？」

そう言いながら一気に右手を股間に伸ばし、右睾丸を握り込む加奈。

世界レベルの腕力を誇る加奈の握力は８０は超えていた。

ゆっくりと変形していく男の右睾丸……。

「ギャアアアアッ！！　やめてくれっ！！！！」

必死で太腿の半分から上しかない短い脚を、パタパタしながら暴れるが、睾丸を潰そうとしている加奈の手の圧力から逃れることは出来なかった。

そして限界まで変形した和樹の右睾丸は、ついに持ち主と別れを告げる……。

『ぷちゅっ！！』

長年ぶら下げていた片方の睾丸は、跡形もなく握り潰された。

泡を噴き、痙攣しながら切断された両膝をひくひくさせる高橋和樹。

尿道からは血の混じった精液が絞り出されていた。

「脆いキンタマしてるね？　お兄さん……彼女に笑われるわよ？」

「もう彼氏じゃないから……そんなやつ」

「あらあら……仲間割れ？　ダルマ男とダルマ女の仲なんだから仲良くしなくちゃ？　ね？」

「加奈ちゃん、この二人、授業に参加させちゃおうよ？　みんなにバレても国の許可もらってるから罪に問われないんでしょ？　あたしたち」

「かなり惨めだけどそこまでやっちゃう？　貴子も残酷処刑島で処刑出来そうだね……」

数日後…………
一時限目の授業中。

「であるからして、こうなるべくしてこの国の政治はこうなったのです。分かりましたか？」

崎山先生も立ち直って授業を再開していた。
高橋和樹は転校生として存在していた。
横山裕子と共に……。
二人とも首輪を付けられ、鎖で繋がれている。
男は大山加奈が飼い、女は小鳥遊貴子が飼っていた。

「ほら、和樹！　お互い抱き合ってセックスしろ！」

「は、はい加奈様……」

「裕子！　先にお尻の穴に挿れさせるのよ？　分かった？　そしてウンコまみれのオチンチンを尺八して綺麗にしてから子宮のない惨めな腐れマンコに挿入ね？　分かったの！？」

「はい！　貴子様……分かりました……」

四肢切断されたダルマ同士が必死で腰を振りながらアナルセックスする教室の中……。

寒い一日も心温まる性交渉を見ながら、クラスの皆は授業が頭に入らなかった………。

「はーい、クラスの皆さんご注目！　授業が終わるまでにアナルセックスと普通のセックスを終わらせてくれたこの二人のダルマ人間に拍手！」

大山加奈がクラスの皆に大声で拍手を促した。

『パチパチパチパチパチパチパチ……』

殆どの生徒は、カオス的なこのシーンになぜか興奮していた。頬を紅潮させて一部始終を見学して手を叩いている。

四肢切断された者同士のセックスなど、普通の生活をしていれば、まずお目にかかれるものではない。
短く軽くなった男女が、必死で腰を振る姿に、密かに性器を濡らしている生徒も複数いた。
「そう言えば、私の親友に指浣腸しやがった生徒いたよね？　名前は山西知恵だったたっけ？　こちらにきなさい。それと、親友のパンツを脱がせた奴……確か杉浦久美子って名前ね。二人とも出てきなさい」
ダルマ人間のセックスを見ながら密かに陰部を濡らしていた二人だったが、事態は急変してきた。
四肢切断の恐怖を覚えるほどの蒼白した顔で生徒の集団の中から出てくる二人……。
「はい。私が小鳥遊さんのパンツを脱がした杉浦久美子です。あの時は本当に申し訳ありませんでした」
「わ、わわ、私が……た、小鳥遊さんに……ゆゆ、ゆ、指カンチョーしてしまいました……や、山西……ち、ち、知恵と申します。ご、ご、ごめんなさい。もう二度と……しま、しま、しません」
ビビりながらも少し冷静な体格のある杉浦久美子に比べ、成績優秀な秀才、山西知恵は狼狽が隠せない。

かなり恐怖している。

「加奈ちゃん、まさか……ダルマにしちゃわないよね？　もうやめてよほんと……あたしはこの子達にそれほど恨みないから……」

「そうなの？　じゃあ四肢切断は勘弁してやる代わりに……」

「代わりに？」

呼ばれた二人は震えながら生唾を飲み、大山加奈の判決を待っている。

「ダルマ男とダルマ女の尻叩き１０００回ね。途中で止めたりしたり、力を抜いたのがわかり次第、杉浦、山西の二人もダルマの仲間入りしてもらうからね？　分かった？　あと、失禁させられなくてもダルマね」

「１０００回は凄いけど加奈ちゃん的にはかなり軽い刑だね！　安心したよ。でも回数が回数だから素手の平手打ちで勘弁してあげてね？」

「うふふ……いいよ。貴子の言う通り、素手の１０００回でも竹刀使ってもどっちでもいいよ。二人に任せるから」

机二つにそれぞれ裕子と和樹をうつ伏せにロープで縛り付ける加奈。

「オシッコ漏らしたりしたらあんた達の乳首……二つともハサミでチョン切ってやるからね？　いくら痛くてもお漏らし厳禁だよ。分かったわね？　じゃあ頑張って」

「加奈ちゃんってばまたそんな酷いルールを……でも我慢できると思うなあたしは……ただのお尻叩きだもん」

気楽に笑いながら話す小鳥遊貴子は、ある意味、矛盾（ほこたて）の理論になる凄惨な状況を理解していなかった。

責める側二人は失禁させられなかったらダルマにされる……。

責められる二人は失禁したら乳首を切り落とされる……。

必ずどちらかは無事では済まない、とゆうことだ。

しかも1000回少し手前で、まだ失禁していなければ、躊躇うことなく素手から竹刀に切り替えるだろう。

ダルマにされるくらいならクラスメイト相手にさえ、高確率で鬼になるだろう。

責められるダルマ側の二人が非常に不利なゲームとなる。

「力の強い杉浦久美子は男を。山西知恵は女を叩きなさい。じゃあ用意……始め！」

１０００回の尻叩きが始まる。
パンパンと素手で二人のお尻を叩く音が放課後の教室に鳴り響く。
１０回、５０回、１００回……お尻は所々真っ赤になり、かなり痛そうだが、まだ二人のダルマたちは声も出さずに堪えている。
２００回……３００回……５００回……臀部全体が真っ赤になり、所々紫色に内出血の痕も見られてきた。
まだ歯を食いしばって堪える二人。
９００回を迎えた頃には、皮膚が裂けて、数ヵ所から血が滲んでいた。
それでも失禁はしないで踏ん張っている二人のダルマ。
横山裕子は涙を流していたが、あと１００回堪えてやる！とゆう一念で我慢していた。

「はぁ、はぁ……竹刀に替えてもいいですか？」

「わ、私も竹刀に……お、お願いします」

ニヤリと微笑む加奈が二人に竹刀を手渡した。
思い通りの展開に嬉しくてワクワクして仕方がなかった。

「加奈ちゃん……これって……あの二人死ぬ気で叩き始めることにならない？」

「間違いなくなるね。当たり前じゃん。ダルマにされちゃうんだよ

？　あはは」
「ケツの皮が裂けての血飛沫と、痛みに堪えきれずに勢いよく飛び出すダルマたちの小便が目に浮かぶよ！　そして乳首までも切断される哀れなダルマのカップル……哀れすぎて笑っちゃう……アハハハハハ♪」
「もう……ほんと残酷なんだから加奈ちゃんは。じゃああたしが裕子の乳首を切り取るからね！」
「おっ！　やる気満々じゃん貴子！　元親友に対して冷たいなー」
「もうとことん残酷になってやるんだから！　裕子は殺さないで一生オモチャにしてやるわ」
「怖っ……さすが私の恋人ね。私とのエッチの時は優しくしてね？」
「うん。当たり前だよ」
９９０回……後１０回以内で失禁させないとダルマにされてしまう杉浦久美子と山西知恵。もう後がない。
一打一打が思いっきり全開になる。
『バシッ！！　バシッ！！　バシッ！！』
「ぐっ！　んがあっ！！　ぎゃあっ！！」
「痛いっ！！　んああっ！！　ひいいっ！！」

９９９回……ついに山西知恵の渾身の一撃で、横山裕子は失禁してしまった。
臀部すべての皮がベロンと捲れて、流血も酷かった。
よくここまで我慢したものだった。

『プシャアアア～……』

「いやあああああっ！！　後一回だったのにいっ！！　わああんっ！！　わああんっ！！」

あまりの痛みに……惜しさに……悔しさに号泣する裕子。
９９９回……高橋和樹は堪えていた。

「よし！　俺は堪えて見せるぜ！！　ケツは血まみれでも乳首切断より遥かにマシだからな！　さぁこいっ！　後一発！！」

「さぁ杉浦さん、後一発で高橋和樹がションベン漏らさなかったら……あんたもダルマ女だから覚悟してね？」

「ひっ！？　そ、そんな……」

「思いっきり思いっきりやれば大丈夫だよ？　いっちゃぇ！！」

自分のパンツを脱がせた相手を思わず応援してしまう小鳥遊貴子

だったが、心の中では杉浦久美子の四肢切断を楽しみにしていた。

「後一打では無理だねきっと……ダルマ男の粘り勝ちだわ」

「あたしもそう思う。加奈ちゃんが杉浦さんをダルマにしてね！　あたしは裕子の乳首を抉り取ってやるから」

「いいよ。どっちでも私は構わないから」

その時、凄まじい異音が響き渡った……。

『ぶっちゅううううっ！！！』

「んがああああっ！！！」

『プシャアアアアア！！！』

「え？　ぶっちゅううううっ？　バシッ！　じゃないの？」

加奈が慌てて振り向くと、高橋和樹のペニスからは大量の小便が噴き出している。

「あ……竹刀を……こ、肛門にブチ込んじゃってるよ？　加奈ちゃん……しかも４０ｃｍは入ってるから直腸貫いて小腸まで突き刺さってるわね……失禁させたけどあんなのアリ？」

「やったぁ！！　どう！？　こいつ、失禁させたから私は許してくれるんですよね！？」

得意気にダルマ男の肛門に差し込んだ竹刀をグリグリ掻き回しながら、杉浦久美子は高笑いする。

肛門からの夥しい返り血を全身に浴びながら…………。

――――そして数時間後…………。

体育館倉庫には薄暗い電球が灯され、時計は夜中の０時を指していた。

真っ暗な世界が段々薄暗くなってゆく…………。

やがて目を覚ます杉浦久美子。

『パチッ！』

目を見開く。

「あれ？　私、どうしちゃったの？　夜中の０時？　こんな時間まで私ってばどこにいる……の？　ん？」

「ん？　どこにいるの？　って聞かれたらここは学校の体育館倉庫だよ。杉浦久美子さん」

目の前に見覚えのある顔が二つ浮かび上がった。
大山加奈と小鳥遊貴子だった。
どこかスッキリしたとゆうか身体が軽い気がした。
壁に目をやると、誰かの腕と足のようなモノが見えてくる……。

「ん？」
「ん？」
「あれ？」
「あれ？」

久美子の台詞に続けて答える正面にいる加奈。
その隣で無表情で自分を見つめる貴子。

「ひいっ！！？？　いやあああああっ！！！！」
「何がいやあっ、なのかな？」
「わ、私の手足が……な、無くなってるじゃん！！」
「私たちが今さっき切り落としたんだよ？　正面の壁に飾ってあげ

てるでしょ？　私が両手で、あなたがパンツを脱がせた貴子さんが両足を……ね♪」

「太腿の骨って太くて頑丈だから、電動ノコギリでもなかなか時間かかったよ。あたしは加奈ちゃんみたいに腕力ないからね……」

「ちょ、ちょっと……冗談でしょ？　これって夢の中だよね？　ですよね？　痛くないし……普通両手両足切断されたら痛いから！　絶対夢よね！　アハハ！！」

「夢なら良かったのにね！　アハハのハ♪」

『ズブッ……ズズズ……』

「えっ？　一体、な、何をなさってるんですか？」

加奈の手には医療用のメスが握られていた。
ヘソのど真ん中へ突き刺さってそのまま陰部の方へ切り開いてゆく……。

「あの、私のお腹に何をされてます？」

縦に真っ直ぐ切開されている自分の腹を見つめながら久美子が加奈に問いかける。

「あんたの女の子を頂こうかな、と思って。てへっ♪」

「もう加奈ちゃんってば……てへっ♪　って笑っても可愛くないし怖いだけだから。ぁ、それ以上切ったらクリちゃん真っ二つになっちゃうよ？　止めて」

「な、何てムゴいことしてるのあなたたち！？　夢って分かってるけどあまりの仕打ちに腹が立ってきた……いい加減にしてよ！？」

１５ｃｍほど縦に切開された腹部へ加奈の左手が突っ込まれた。

「これが杉浦久美子の女の子ね？　プニプニしてて気持ちいいわ」

そう言いながら右手のメスが差し込まれ、数秒後には綺麗に切り取られた子宮が腹部から摘出された。

「どう？　子宮って綺麗でしょ？」

「うわぁ～。あたし的には……凄いけど気持ち悪いよ。棄てちゃって加奈ちゃん」

「ちょ、ちょっと！？　夢だから全く痛くないんだけど、見てるだけで痛々しいから私のお腹、無茶苦茶にしないでくれる？」

『ガボッ！！　ぐちゅちゅ……』

「痛っ！？　え、何？　今マジで痛かった……小鳥遊さん？　あな

たまで私のお腹に手を……やめて……何か段々痛くなってきたから抜いて……いた、いたた」

「早めにアレやっちゃって貴子！　麻酔が切れてきたみたい……もう麻酔無いから早くアレをしないとショック死しちゃうよ？」

《アレ》が、何のことなのか理解できないまま痛みに堪えながら自分のお腹に突き刺さっている小鳥遊貴子の右手を見ていると、手首まで入っていった。

「よっ。よいしょ。よいしょ……こう来てこう来て……こうなって……ここかな？　出口は？　よっこらしょっ……と」

「な、何？　私のお腹の中の出口って？　どうゆうこと？小鳥遊さん……」

『プシュウウッ！！』

自分の切開された腹部を見ていた杉浦久美子は目玉が飛び出るほどビックリすることになった。

「キャアアアアッ！！？？」

何と、自分の性器から何かが飛び出してきたのであった。
一瞬ペニスが生えたのかと思った久美子だった。

よく見るとそれは二本生えている。
そしてそれはパカッと広がり、ピースサインに見えた。
…………とゆうかピースサインだった。
小鳥遊貴子の人差し指と中指が膣口から飛び出して来たのだった。
切開された腹部から手を入れて、子宮を抉り取られた部分から膣内を逆走して膣口からコンニチハ……を、したのだ。

「ビックリした？　オチンチン生えたんじゃなくって、あたしの指だよ！　これ前から一回やってみたかったんだ！　あはっ♪」
「マンコから手を突っ込んで子宮までブチ込む経験あったけど、まさか子宮から逆走してマンコから指突き出す……なんて。凄い発想だね貴子ってば……ほんとエッチね」
「エッチって……加奈ちゃんに言われたくないよ。ほら、見て！　子宮のミンチと愛液とオリモノと血液のマーブル色だよ？　ネトネトして糸引きまくってるぅ～。凄いエッチね～」
「やめて……やめてえええっ！！　痛い！！　抜いてっ！！　これってまさか……夢じゃ……ない？」
「ほらほら。一生赤ちゃん産めない替わりにあたしの指産めて嬉しいでしょ？　ありがとうございます貴子様、って言えよ」
二本の指を膣口から何度も出したり引っ込めたりする貴子。
その度にクチュクチュと卑猥な音を立てながらマーブル色の粘液が糸を引く…………。
「あ、ありがとうございます……貴子様……でもとっても痛いし怖

いから、お願いだからもう腕を抜いて下さい……」

あまりの恐怖と痛みに堪えきらず、小便を漏らしてしまう杉浦久美子。

小鳥遊貴子の二本の指に降り注ぐ形になる。

「温かい……ん？　これってオシッコ！？　汚いわね！？　ここね？　悪い子は？」

指に小便をヒリかけられてちょっとムカついた貴子は、ピースサインを止めて、人差し指を尿道へ向けて差し込む。

切開された腹部から挿入された右手が、膣内を貫通し、膣口から飛び出した指がくいっと上部へ曲がり、尿道へ突き刺さる……。

ある意味凄く恐ろしい光景であった。

膣口から指が出ている光景はシュール過ぎる………。

「痛いっ！！　ンギャアアアッ！！」

「ほらほら、尿道あたしの指で掻き回されて……痛いでしょ？　汚いオシッコかけた罰だから！」

「貴子、あなたがやってあげたら？　はいどうぞ」

鋭く光るメスを手渡す加奈。

「うん。あたしがやる」

人差し指を尿道から引き抜き、更に右手をマンコから引っ込めて、腹部から引き抜いた。

「はうっ！！　痛いっ！！　もうやめて！！私、本当に死んじゃうよおおっ！！えーん、えーん……」

現実だと理解できた頃には、切れかけている麻酔の痛みと四肢切断された絶望感と……そして死の恐怖に襲われる杉浦久美子だった。

「あんたのクリトリス……一番敏感なとこ……くり抜いてあげるから」

「そ、そんな！？　止めて！！　痛すぎるっ！！　小鳥遊貴子様っ！！　私の一生あなたに捧げますから！！　それだけは勘弁してくださいっ！！！！　ひいいいいっ！！！！」

「そんな姿で何を捧げられるって言うの？　笑わせないで！　くり抜く前にメスを突き刺してやるから。ほらっ！」

『ズブッ！！』

「んっぎゃああああああっ！！！！」

貴子のメスは久美子のクリトリスのど真ん中を正確に貫いた。
男性の亀頭部分のような敏感な部位に突き刺される医療用のメス……激しく血飛沫が上がった。
「やっだぁ～。汚ない。スッゴい血が出るのね？　陰核穴開けたら……あはは」
そのまま不敵な笑みを浮かべて、鼻歌を歌いながらクリトリスを丸く綺麗にくり抜いてゆく。
「ふんふんふふう～ん♪　ルンルンル～ンと♪」
ついに久美子の陰部から隔離された陰核……。
親指と人差し指でソレを摘まみ上げて、久美子本人の鼻の穴へ突っ込んだ。
「ほら、鼻クソみたいになったからお鼻へ突っ込んだげる？　アハハ♪　ションベン臭いでしょ？　クサトリス！　な～んてねっ♪」
白眼を剥いて泡を吹いて意識を失った。
どれほど時間が過ぎただろうか……再び目を覚ますと、不思議なほど痛みは消えていた。

しかし身体が全く動かない……。

再び周りが薄暗くながら見えてきた……。

身体が上下に揺れている、。

『ヌチュヌチュヌチュ……』

なんか生々しい音が響いているが、それが自分の発している音だと気付くには少し時間がかかった。

首輪を嵌められ、切断された両腕の脇部分に天井からのロープで結ばれて吊るされている。
背後から誰かに両手で太腿の根元辺りを抱えられていた。
切断された太腿を左右に開くように抱えられている。

斜め下に置かれた鏡を覗き込むと、直径５ｃｍ、長さ２０ｃｍはあろうかと思える巨大なペニスバンドが自分のアナルに突き刺さったり出たりを繰り返されている。ドクドクと腸液と血液を垂らしながら……。

「ひ、ひいっ！！　お尻の穴が……裂けるうっ！？　やめて！！」

「安心して！　加奈のちゃんが予備の痛み止めと止血剤を注射してくれてるから！　あたしに抉り取られた陰核も痛くないでしょ？　お尻の穴もとっくにパックリ裂けちゃってるけど痛くはないはずよ？　良かったね？」

「こんな姿で……同性に手足切り取られたり解剖されたり犯されたり……もうお嫁に行けないよ……殺してほしい……ぐす……ぐす……」

肛門を大山加奈に、バッコバッコ掘られながら眉間にシワを寄せて涙をポロポロ流す久美子。

「お嫁さんに行けなくなっちゃったねぇ？　同情するよほんと。いっそもう舌でも噛みきって死んだら？　見ててあげるよ？……うふふ。ほんとは死ぬ度胸なんてないくせに……」

「どう？私の極太ペニバン責めは？　お嫁に行けなくてもこんなに激しく私たちが犯してやってるんだから満足しなさい！　痛み止めなかったらショック死してる所よ？　ラッキーだね杉浦久美子さん♪」

「痛み止めはほんとツイてるよ？　せめてものあたしたちの情けってトコね。あらぁ～……肛門が裂けちゃってマンコほど大きくなっちゃってる。あは♪　ちなみになんでこんな目に遭ってるか分かってる？　心当たりあるかな？」

応急で縫われたオヘソの傷を擦りながら小鳥遊貴子が問いかける。
黙り込んで首を横に振る久美子の両方の乳を両手で鷲掴みにして、思いっ切り握り閉める。

「ちゃんと変事して！　貧相なオッパイ握り潰すぞ？」

「痛いっ!?　やめて！！」

「あれ？　痛み止め効いてないみたいよ？　加奈ちゃん……」

「四肢と腹部と肛門、マンコには効いてるけど……オッパイだけ効きにくい体質なのかな？　この子……。人によって効きにくい部位とか効きやすい部位とか色々あるからね……」

「ふぅん。まぁいっか。少々痛がってもらわないとね今からは……あなたはね、ズルをしたのよ。覚えてる？」

「ズル？　何のこと？」

「ダルマのカップルの男を担当したあなたは１０００回のお尻叩きで、最後まで失禁しなかった高橋和樹に対して、竹刀でカンチョーしたのよ？　叩いて失禁させたら……と言ってあったのに、竹刀を肛門深くまで突っ込むなんて……自分がダルマ女になりたくないからって随分酷いと思わない？」

一部始終を思い出した杉浦久美子は、まだ少しは、もしかしたら夢の中の出来事かもしれない……という唯一の希望も諦めなくてはならなくなっていた……。

「そ、それで私はダルマ女にされてこんな酷い仕打ちを……あぁ、何てこと……。死んだら絶対化けて出てきてやるから！　あんたたちを呪い殺してやる！！」

「はぁ、全く反省してないなぁ。でも化けて出てこられたら鬱陶しいから殺さないで飼ってあげるよ。ね？　そうしましょ加奈ちゃん」

肛門からペニスバンドを抜き取り、医療用メスを再び手に取る加奈。

前方へ回り込み、顎を掴んでグイッと突きあげながら囁いた。

「今の言葉……忘れないでね？　必ず私たちが後悔させてやるからね？　あのダルマカップル二人と、あんたの三人は一生飼い殺し……&拷問地獄を味わわせてあげるよ」

「くっ……くそっ……あっ！」

「あ？　何だよ？」

「あの……山西知恵は？　どうなったの？」

「あの子は無事に１０００叩きで、ダルマ女の横山裕子を失禁させたから無罪放免してやったけど？　文句ある？　ちなみに横山裕子と高橋和樹の乳首はもう切り取ってやったよ。二人とも白眼を剥いて大便漏らしちゃってたわ……汚いなぁ」

「なんであいつだけ五体満足で助かって横山さんや高橋さんや私の三人だけがこんな酷い目に……くそっ！　くそおおおっ！！」

「あたしのこと忘れてない？　二人で仲良く話してばかりで……」

久しく放ったらかしにされた小鳥遊貴子が少し拗ねる。
「はい、次はあたしたち二人からの同時攻撃よ？　お尻叩き２００
０回ね？」
「じょ、冗談やめてよ、小鳥遊様……」
「都合悪くなったら小鳥遊様って……死んでやる、とか呪い殺して
やる、とかは何処へいったのかな？」
「ごめんなさいごめんなさい！　もう二度と強がりませんから２０
０回にしてください！！　お願いします！！」
「ダメ。今日一日で杉浦久美子さんには二人のダルマカップルの一
年ぶんの拷問を受けてもらうから覚悟しといて」
「ええっ？　ちょっと疲れてきたからせめて今日と明日の二日に分
けようよ貴子！」
「うーん。分かった。じゃあ全ての歯をペンチで抜くのと、直腸巻
き取りの刑は明日ね」
「ありがとう！　じゃあ今日は全身骨折と、お尻の皮ズル剥け２０
００叩きで終了ね！　始めようか？」
這い回らないようにうつ伏せにして低い跳び箱に縛り付けると、

二人の地獄の尻叩きが始まった。
最初から竹刀と木刀で叩き始める。
１０００回で泡を噴き、叫び狂ったが、２０００回までには数回失神を繰り返した。
臀部の皮は完全にズル剥け状態に……。
もうお尻がお尻の原形を留めていなかった。
竹刀と木刀には骨の一部と肉片がたくさんこびりついていた。
びくびくと痙攣しながらヨダレと泡を噴きながら、肛門と膣口をパクパク閉じたり開いたりしている。

「アハハ！　加奈ちゃん見て見て！　何もしてないのにアソコと肛門がパクパク開閉しちゃってるよ？　面白ーい♪」
「貴子の木刀でＳ状結腸突き破るくらいまで串刺しにしてやったら？　竹刀は柔らかくて入らないからね……」
「死なないかな？」
「血止めの注射まだあったから打っとくよ。明日の拷問を前に死なれたら楽しみ半減しちゃうからね」
「うん。ほら！　メス豚久美子！　醜いダルマ女の姿でお尻を突き上げて！」
「う、うう、助けて……。もう家に返してください……」

「受けるっ！！　久美子さん、あんたまだ家に帰れると本気で思ってるんだ！　おめでたいなぁほんと。あんたは死なないけど一生私と貴子のペットなの。奴隷として一生生きるのよ？　死なない程度に二日に一回は拷問してあげる。濡らしてもイッてもいいわよ？　あははは」

「ほらっ！　早くケツを突き上げて股開くんだよ！？　肛門パックリ開くの！！」

「はい……」

「はい……じゃなくて！」

「わかりました。こうですか貴子様？　私のお尻の穴に木刀をぶち込んで下さい！　って言いなさいよ？」

「わかりました……こうですか貴子様……私のお尻の穴に木刀をぶち込んで下さい……」

「良くできました！　ではもう少し高く突き上げてぇ……そうそう。そのままもっと左右に脚を開いてぇ～」

「貴子ってばむっちゃSになりきってる…………もしかして本質は私より残酷かも……怖っ」

「そうそう。よく肛門見えるよ！　そのままジッとしてなさいねぇ～。それっ！」

『ズボッ！！』

「はうあっ！？」

「はうあっ！？　何それ……受ける（笑）」

『ズボボボボ……』

「久美子の汚い直腸部分を全て貫通っ♪」

「汚くないっ！　んぎいいいっ！？　痛い痛い痛い痛いいいいいっ！！」

「汚いの！　あんたのアナルなんてこの世で一番汚ないんだから。S状結腸突き破りかけてんのよ？　そりゃ痛いわ……」

「ホラホラホラァ……木刀の先っちょがあなたの結腸突き破っちゃうぞぉ？　5秒前……4、3、2、1……ほら深呼吸して。ゼロ！……いっけえええええっ！！！」

『ぶちゅうううっ！！……バリッ！！！！』

S状結腸を突き破った木刀は小腸の束の真ん中辺りまで一気に食い込んだ。

「ぴぎいいいっ！？　いったあいいっ！！　死んぬうううっ！！」

「バリッて……何とゆう手応え……快感っ♪」

『バチュバチュバチュバチュ！！』

３０ｃｍほどまでも木刀を肛門から突っ込み、全部引き抜いてもう一度３０ｃｍまで突っ込みの、豪快なアナルファックが始まった。腸液と大便と血液まみれになっても小鳥遊貴子の木刀アナルファックは止まらない。

「ホラホラ、木刀を出し入れする度に肛門が盛り上がったりすぼんだり……哀れなケツ穴だわね？　うふふ。このまま口まで貫通させてあげよっか？」

『ビクッ！……ビクビクビクビクビクビクビクッ！！』

一時間も繰り返された頃には死んでしまうかとゆうほどの激しい痙攣を起こし始める杉浦久美子。

これには貴子本人と加奈もビックリして、この日の拷問は終了とした。

「おーい。そんなケーレンするほど痛かった？　今日はこれぐらいにしといてやるから。早く意識戻して……ね？」

「貴子、ちょっとやり過ぎちゃったみたいね～？　アハハ……」

明くる日の放課後、体育館倉庫には乳首を切り取られたダルマカップル二人と、貴子のマンコからピース刑と、子宮を摘出、木刀ア

ナルファックで生きる希望を失くしかけてるダルマ女の杉浦久美子と、加奈に子宮を抉り取られて、恥骨粉砕キックを食らった女担任、崎山道子。
それに小鳥遊貴子と大山加奈の二人の六人が存在していた。
これからずっと、高校が廃校になった後も、崎山道子が三人の世話をする（自宅で飼育）ことと、週に数回は加奈と貴子が崎山先生の自宅へ赴き、三人に拷問を行うことを取り決めた。
崎山先生は、主に加奈が性器を掻き回したいだけで、拷問までは許してもらえていた。
イジメの欲求として崎山先生を気に入っているだけだった。
皆が見てる前で、ダルマ女は縛り付けられ、杉浦久美子の歯を抜く拷問を………ついに加奈が開始する。

「うごごご……ごご」
『グリグリ……グボッ！　グリグリグリグリ……グボッ！！』
「んぎいいいっ！！　痛いいいっ！！」

一本一本ペンチで捏ねながら抜かれてゆく……。

「加奈ちゃんさすがだわ……これはあたしには無理そう……」
「良く言うわ……お腹切り開いた所から手を突っ込んで、マンコか

ら（こんにちは）してからのピースサインなんて……私より遥かに残虐だと思わない？」

「そうかな？　歯を抜くのは絶対無理……見てるだけで力が入っちゃう……ひいい」

「何がひいい……だよ。貴子ったら。ほら、もっと大きく口開けろ！　後一本で全部抜けるから！　頑張れ！」

『グリグリ……グボッ！』

「はがはがはが……うごうごうご……んんん……」

涙をポロポロ流し、口からドボドボ血を流しながら号泣する杉浦久美子。

『ズルズル……ストーン！』

歯を抜く拷問が終了した次の瞬間、崎山道子先生のスカートがずり下ろされた。

「やっ！？　何っ！？」

ピンク色の可愛いパンツの裾から白くて可愛い手が滑り込む。

「あんっ！？　加奈様、今日も私のマンコに腕突っ込んで、子宮跡を調べて下さい！あんん……加奈様～」

「あのさ、私じゃないんだなこれが……良く見てから言ってくれる？　しかも最近感じてたんだね？先生……イジメにならないじゃん……つまらないわ」

「うふ。崎山先生！　前にも言ったけど痛くはしないけど何もしないとも言ってなかったでしょ？」

『クチュクチュ……ぐちゅちゅちゅちゅ！！』

「あっ！あんっ！　あはあっ！　あれ？　……いつもより少し手が小さいと思ったら……小鳥遊さん！？　小鳥遊さんみたいな優しい子がこんなことをするの！？」

「あたし、残酷になったんだから。急に吹っ切れたの。ほら、先生、気持ちいいですか？　ここ……」

加奈の数倍激しい動きで膣内を掻き回す貴子。

「あっ、あんっ！！　き、気持ちいい！　貴子様！！　私を犯してっ！！　あんんっ！！」

そう言いながら自分からパンツを脱ぎ始める崎山先生。

「貴子様、お願い……私のお尻の穴も指入れて……私を無茶苦茶にしてっ！！」

「この変態女教師～。あたしの指技、そんなに気持ちいいんだ……じゃあダルマたちの面倒も見てくれてるし……特別サービスよ？崎山先生のお尻の穴も……掻き回してあげるぅ♪」

『ズブッ……ズボボボボ……クプクプ……クチュチュチュチュチュチュ』

「あっ！あんっ！！やあああんっ！！　貴子様、気持ちいい！気持ちいいですうっ！！　先生、イッちゃううううっ！！」

「ほら、マンコも高速掻き回しよっ！！　腸液ドロドロ垂らしちゃって……淫乱女教師崎山道子っ！！　ほらほら、イッちゃえええっ！！」

『ぐちゅちゅちゅちゅちゅ！！グボボボッ！！』

「あはあああああんっ！！　貴子様っ！　いっくうううっ！！」

潮を噴きまくり、崩れ込む崎山先生……。
小鳥遊貴子の足首を掴み、足首辺りを自分の膣口とクリトリスに擦り付けている。

「やめてよ先生……汚ないなぁ。お気に入りの靴下が汚れちゃうじゃん……参ったなぁ……」

「加奈様と貴子様、お願いだから私もダルマたちと同じようにいじめて……あなたたちに性的いじめされてると、無茶苦茶興奮するの私……はぁはぁ……」

「ダルマ女にしちゃう？」

「……そうだね。あたしのお気に入りの靴下を汚い愛液で汚されちゃったし……。崎山先生、あなたも四肢切断してあげよっか？　毎日毎日マンコとアナルは犯してあげるから安心して」

「えっ!？　……で、でもそれされちゃうと……この子達の面倒も見れなくなりますけど？　それでもいいですか？　私は……あなたたちに一生虐められたいから四肢切断されたいですけど……」

加奈があわてて止めに入る。

「そ、そうだね！　貴子！　こいつをダルマにしちゃったら三人のダルマたちがノタレ死んじゃうよ？　ダメだわやっぱ……」

「確かにそうだね……。先生は五体満足のまんまであたしたちがこいつらの拷問ついでにイジメてあげるよ」

「あ、あん、貴子様の指捌き、最高です……はぁはぁ」

また寝転がり、貴子の足首を股で挟み込み、股間を擦り付けてくる崎山先生。

「もう、ほんとに変態女教師なんだから……こうしてやる」

靴を履いたままの土の付いた足の裏で、崎山先生のクリトリスと尿道をグリグリ擦り付ける貴子。

「朝に犬のウンコ踏んじゃったから絶対膀胱炎になるだろうから帰りに泌尿器科寄ってくださいね？　うふ♪」

「ひっ！？　酷い……貴子様……でも気持ちいいからもっともっと私の大事な所、踏みまくって……あんん」

「ほんとにエッチなんだから……ほら、膣口に爪先突っ込んでピストンしてやるからイキなさい。ほら、道子！イケ！」

「あはっ！はっはっ！！　いくいくいく……いっちゃううううっ！！」

『ぐしゅしゅしゅしゅしゅしゅ！！』

高速で崎山先生の膣内を爪先で掻き回す。
またしても潮を噴き出して、イッてしまった。

「変態教師、あたしの靴を舐めろ！　あんたの垂れ流した汚い液を綺麗にするまで舐め取るのよ？」

「ちょっとー！　もしもーし！　貴子さーん、性格変わりすぎて私のキャラ……薄くなってきてるんですが？」

加奈がキャラを奪われて不安がる。

「ごめん、加奈ちゃん！　あたしが愛するのは一生加奈ちゃん一人だけだから！」

『チュッ』

「んっ！……貴子……私も大好きよ」

二人の仲良しアピールと、崎山先生の豪快なＭっぷりに、ダルマたち三人は目を丸くしてしばらく見入っていた。

そんなこんなで奇妙な三人と哀れなダルマ人間三人は、卒業までは山川女子高等学校で……卒業後は崎山道子先生の自宅でたまに六人全員終結して、拷問とレズプレイとＳＭプレイを繰り返していくことになる………。

ダルマ男もダルマ女二人も、加奈と貴子にイカされることだけが人生の楽しみになった。

生きていく中で、唯一の快楽が加奈と貴子による性的調教だから自然とそうなってゆくのだろう。

更に卒業式の日、小鳥遊貴子に一通の手紙が届く。

【　　地区。小鳥遊貴子殿　大山加奈と共に残酷処刑島での拷問処刑業務を任命する（特殊任務省）】

加奈と貴子の奴隷育成（後書き）

かなり残酷な気性へと変貌する小鳥遊貴子。
しかし残酷処刑島で処刑人になるにはまだまだ甘いか？
大山加奈と共に過ごす以上、ますます残酷さを増していくことになるだろう。

――――結局

類は友を呼ぶ…………。

集結……再び悲しい処刑（前書き）

久し振りに終結した本家本元の残酷処刑人たちの四人…………。
残酷処刑島にて拷問処刑が始まる。

集結……再び悲しい処刑

その日は粉雪が舞っていた。

まだまだ寒い二月末……。

ＯＬの木村真紀、高校生の大山加奈、中学生の鬼頭美紅、小学生の菅野莉央。

四人の残酷な女処刑執行人達が、ある町の港に久し振りに集結していた。

喪に服すため、前回の処刑に参加出来なかった菅野莉央以外の三人も、今回は国の機関である『特殊任務省』に呼ばれた。

「お久し振り！　木村さん、大山さん、鬼頭さん！　前回の処刑はあたしと同級生の友人二人の計三人で執行させてもらったよ。今回はもう皆さんＯＫなんですね？　良かった」

小学生の菅野莉央が三人の方を見回しながら挨拶する。

「少し見ない内に随分大人になった感じがするね？　莉央」

リーダーの３１歳、木村真紀が一番に返答する。

「ほんと久し振りだね！　みんな。木村さんも美紅も莉央も……凄く懐かしい気がするよ」

女子高生の大山加奈も嬉しさを隠せない。

「あたしもみんなと会えて嬉しいな。前回はお婆ちゃん死んじゃったから喪に服すとか言われて国が呼んでくれなかったけど……学校で同級生の友達とストレス発散出来てたからまぁいいんだけどね。莉央ちゃん、同級生の二人も処刑人に任命されたんだって？　どこに行っても残酷な人はいるもんだね！　あはは」

中学生の鬼頭美紅も嬉しそうに小学生の菅野莉央に問いかける。

今回処刑するのは四人……初期のメンバーだけでちょうど良かったため、四人の残酷な気性のそれぞれの友人たちは呼ばれなかった。リーダーのＯＬ、木村真紀が口を開いた。

「今回は…………二回目の時以上に悲しい処刑になりそうだわ」

「え？　また小学生の処刑ですか？」

小学生の菅野莉央が即座に答える。

「幼稚園児二人とその両親なの。年子の二人はお兄ちゃん5歳で、

妹さんが４歳、両親は同い年で２５歳よ。二人が二十歳で長男を生んだみたいね」

「ふぅん。でもどうしてそんな小さい子まで残酷処刑島に送られることになったのですか？　悪いことも出来そうにないほど小さい子どもたちなのに」

「幼稚園児のお迎えにくるバスに、兄妹はイタズラ心から同じ園児を同時に突き飛ばしたの。お兄ちゃんと同い年の男の子の園児は二人とも即死……バスの運転手の方もたまったもんじゃないわね……」

二人の会話を聞いていた大山加奈と鬼頭美紅は絶句……。言葉が出て来なかった。

小型のボートが港に着き、四人の処刑人を乗船させる。

「お久し振りです。この度はかなり気が重い処刑になるとは存じますが、よろしくお願い致します」

「はい。いくら子供でも幼児でも、残酷な人間には残酷な死を与えるのが当然のことですから……御気遣いなく」

「はい。突然命を奪われたご両親の気持ちを思えばそれもそうなのですが……さすがに幼稚園児となると……心中御察し申し上げます」

ふと疑問に思った大山加奈がリーダーの木村真紀に問いかける。

「あの……幼稚園児の兄妹は分かったんだけど両親までどうして残酷処刑島に？」

「……それも非常に悲しいことなんだけど……今回の被害者は加藤貴史君と、佐藤健児君という二人の園児なんだけど、幼稚園の先生から連絡をもらった佐藤健児君の両親が、逆上して加害者の両親を包丁を持って襲いに行ったの」

「そりゃ当然そうする親御さんもいるよね。気持ちは分かるけどね私も……」

顎を右手の指で押さえながら大山加奈が納得している。

「包丁を持って殴り込んだのは良かったんだけど、逆に刺し殺されたの」

「え？　息子の敵討ちで刺し殺しにいった両親が逆に返り討ちにあったと？」

「そう。子供のイタズラ心からたまたま死んじゃったのは事故だ！　それなのに親の俺たちに報復にくるなんて！　と、怒声をあげながら包丁を奪い取って、逆に刺し殺しちゃったのよ。妻も気が強い人でね。父は父を……母は母を……逆に刺し殺しちゃったとゆうわけ」

「その被害者の両親を返り討ちにした殺人犯が、今回の御手洗良夫、優香里夫妻なのね。突き飛ばして園児二人を殺した園児の二人は確か……勇一くんと愛子ちゃんだっけ？」

「よく覚えてたね加奈ちゃん。そうなのよ。その両親も２５歳とかなり若い上に、二人の子供も幼稚園児……かなり悲しい処刑には違いないわ」

残酷処刑島が見えてくるが、木村真紀たち四人は目隠しをされているため、もうすぐ港に着くことは分からない。

「あぁ、寒い！　こんな雪が舞うような寒い日に残酷処刑島に呼ばれるなんて……あたしたちもツイてないよ……」

中学生の鬼頭美紅が愚痴をこぼした。
残酷処刑島は一年中風が強く吹き、真冬となればかなり冷え込む状況だった。
厚着をしている四人だったが、早く終わらせて帰りたい気持ちは四人とも同じであった。
簡易な港に小型のボートが着く。

「ではよろしくお願い致します！　今回の処刑方法は貴女方に委ねられておりますので……とりあえず両親二人は非常に狂暴なので体が動かなくなる麻酔注射を打っております。幼稚園児の二人は動けなくなった両親を心配して、傍から離れない状態なので、逃げられる心配はないと思われます。それではまた夕刻にお迎えに参りますのでよろしくお願い致します！」

残酷女処刑人の四人は、看守たちに敬礼しながら見送った。

「さて……誰が誰を担当するかだけど……私は２５歳の父親を殺ろうかなと。加奈は同じく２５歳の母親を。美紅は5歳のお兄ちゃん、莉央は４歳の妹さん、これでいいかしら？」

三人は黙って頷いた。

素っ裸にされ、ベッドに括りつけられた上に、動けなくなる麻酔注射を打たれた夫婦が視界に入る。
その傍らで、兄妹の幼稚園児、勇一と愛子が泣きながら寄り添っている。

「パパ、ママ！　僕たちが助けてあげるから！」

「わぁーん！　わぁーん！　お兄ちゃん、早くパパとママを動けるようにしてあげてっ！！」

泣きながら寄り添う二人の兄妹。
リーダーの木村真紀が声をかける。

「パパとママにお別れ出来た？　先にあの世に行ってもらうのはパパとママに決めたから……しっかりお話をしてあげてね」

「あの世ってなに？　なんか紐で手足を括られて痛そうだから、パ

パとママを早く自由にしてあげて！　お願い！！　お姉ちゃんたち、お願いだから紐をほどいてあげて！！　わーん、わーん」

５歳の長男である勇一が泣きながら木村真紀に訴える。

妹の愛子も泣きながら真紀たちを見回す。

二人の園児を無視するかのように父親の良夫のベッドの横に進む木村真紀。

「お父さん……御手洗良夫さんだっけ？　今から、あなたを処刑する木村真紀と申します。よろしくお願いします」

「やめろ！　許してくれ！　殺されかけたから先に殺してやっただけなんだ！　正当防衛なんだよ！　分かってくれよ！？　凄い寒いし……凍えそうだ！」

「息子さんの命をある日突然奪われた上に、自らの命まで奪われたご両親の無念……あなたには理解できませんよね？」

「知るか！！　ガキのやったことにイチイチ本気でキレて、殺しに来る方がキチガイだろうが！？　分からねぇのかよ！？」

「そうよ！　私たちだって殺されかけたのよ！？　逆にああなってしまっても仕方ないし！　やった本人の子供にだけ罰を与えたら済む話じゃないの！？　早くこの紐をほどいて！！　寒くて凍え死んじゃったらどうしてくれるのよ！？」

同じく２５歳の妻である御手洗優香里も怒りに任せ、怒声をあげ

た。
小学生の菅野莉央が中学生の鬼頭美紅に歩みより、そっと耳打ちする。
しばらく死刑囚の両親の方を見つめて黙りこんでいた美紅だったが、軽く頷いてゆっくり歩き出した。
美紅はリーダーのＯＬ木村真紀の隣に立って、そっと耳打ちする。

「………ふぅん。莉央がそう言ってたんだ……。美紅よりは優しさを持ってるんだねやっぱり」

「そうかな？　結局あたしたちがこれからやることは同じだから大した意味ないと思いますけどね」

「じゃあどうして莉央の意見を聞き入れて私に美紅が頼みにきたのかな？　あはは。あなたも莉央には甘いもんね」

「……そうかな？　真紀さんに頼んでみて！　と言われたら断れなくなっただけです。まだ小学生のガキだし……」

「はいはい。分かりました。莉央を妹みたいに思ってる鬼頭美紅さん。確かに莉央の言う通り最高級の残酷な処刑を行う気になっていたから……。直接私に言えばいいのにね。じゃあ早く子供たちを連れて向こうの岩場の裏でも行って視界から消えてくれる？」

「ありがとう。真紀さん」

木村真紀に礼を言うと、莉央にその事を告げた。

二人の雰囲気でだいたいは察していたが、完全に聞き入れてもらえたと聞いてホッとした。

「じゃあ、今からおねーちゃんたちとあっちの岩場の方で遊ぼ」

しゃがみこんで二人の兄妹の頭に手を乗せながら莉央が微笑みかける。

兄妹は、しばらく立ったままの美紅としゃがみこんでいる同じ目線の莉央を交互に見つめながら真剣な顔をしていたが、兄の５歳の勇一が表情を緩めて話しだした。

「うん！　パパとママの紐をほどいてくれるならいいよ！　服も着させてあげて！　雪降ってるもん……」

「愛子もパパとママも一緒がいい！」

美紅もしゃがみこんで兄の肩に手をかける。

「それは無理なの。パパとママには今から真紀さんと加奈さんの用事があるから。大人は色々忙しいのよ。後で帰ってきてからもう一度頼んでみたらいいんじゃない？　じゃああっちへ行こうか？」

「うん。美紅ねーちゃんからも一緒にお願いしてね！　約束だよ」

「…………」

返事出来ずに固まってしまう美紅。
隣に同じく座り込んでいる莉央をじっと見ている。

「み、美紅さん、あたしに救い求めてる!? あ、あのね……とにかく大事な大事な大人の話し合いとゆうか、ケジメを付けるとゆうか……忙しいからあの四人はね。早く遊びにいこ! 愛子ちゃんも分かってくれるよね?」

両親の今から起こる悲惨な運命が分かっている美紅と莉央の二人は、迂闊に返事出来ないので、かなり動揺していた。
隠れるのにちょうどいい程度の大きさの岩がたくさんある場所に辿り着き、莉央の提案でかくれんぼをすることになった。

「もういいかーい?」

「まーだだよ」

「よし! この岩の隙間ならなかなか見つけられないぞ! 愛子、隣に来て。声出しちゃだめだぞ?」

「うん! お兄ちゃん」

「もういいよー」

………しばらく本気で捜しまわるが、なかなか園児二人を見つけられない美紅と莉央。
鬼頭美紅が口を開く。

「莉央ちゃん、このまま見つけられなかったらあの子達処刑しなくて済むのかな？」

「ええっ！？　鬼の美紅さんらしくない発想だね！？　どうかな……特殊任務省の偉いさんが認めてくれるかどうか……。それにこんな無人島に残していっちゃったら結局餓えて死んじゃうんじゃない？　なら余計哀れなことになるよ？」

「そっか……。それもそうだよね」

「あたしも両親を残酷な拷問してるところを見せつけるのは、さすがに可哀想だと思って真紀さんに頼んでみてもらったけど、園児たちの命を助けるような発想まではこれっぽっちもなかった。さすがの美紅ちゃんも幼稚園児には情けが出たんだね？」

「そんなんじゃないけど………」

「へっくしょん！！」

「！！　んふふ。見ぃーつけたっ！！」

鼻がむず痒くてついくしゃみしてしまう愛子が莉央に発見される。

「なかなかうまく隠れたじゃない？　おねーちゃん愛子ちゃんのくしゃみ無かったらまだまだ見付けられなかったよ」

美紅が二人の頭を擦りながら褒める。

二人の幼い兄妹は、頬を赤くして照れながら喜んでいた。

その時、風に乗って微かに男女の呻き声が聞こえてきた。

両親の拷問は段々と凄惨さを極めてきていた。

「んんんんっ！！　んぐぐぐ！！」

「んおおおおっ！！」

木村真紀と大山加奈は、夫婦の両手の爪を、同時にペンチで剥がしていき、最後の一枚の親指の爪を剥がし取った。

猿轡を噛まされているのであまり大声は出なかったため、かくれんぼしている園児の子供たちには聞こえていない。

「この寒い中、素っ裸でベッドに縛り付けられてるだけでも辛いのに両手の生爪全て剥がれちゃったねぇ？　無茶苦茶痛いでしょ？　良夫さん。次は足の指も十枚全部剥がしちゃおうかな？　うふふ」

痛さのあまりに涙を流しながら首を左右に振る御手洗良夫だったが、真紀は残酷にも右足の小指の爪からペンチでグリグリ捏ねながら引きむしってゆく。

「メリメリ……バリッ！」

「んんんんっ！！」

「あはっ。小指の爪って小さすぎるから脆いわね？　そんな猿みたいにしかめっ面して泣かないの！　あはは」

　真紀は生爪を剥がされる拷問の痛みと戦っている夫婦の両肘、両膝辺りに、特殊な血止めの注射を打ってゆく。

「さてと……これからが本番だからね？　お二人さんに簡単に死なれないように頑張ってもらわなきゃ。………………ほうら、これでＯＫ！　出血性ショック死は出来なくなったから安心してね？　生地獄が長引くだけだけど……あはは。さぁ加奈、本格的に始めましょう」

「はーい。じゃあ今からスッゴく残酷なこと始めちゃうから！　動けなくなる麻酔で痛みも少しはマシになってるかもしれないけど……それでも生爪剥がすよりは遥かに痛いわよ？　うふふ」

　そう言いながら大山加奈は微笑みながら糸鋸を取り出した。

　妻の優香里の右足の太腿にあてがう。

「あんたは足の爪じゃなくて、両方の太腿……真ん中辺りから落としちゃおうね？　小便漏らして臭いから罰をあげる」

『ギギ……ギコギコ……ギコギコ……』

「んぐっ！！？？　んんんんんっ！！！！」

優香里の右太腿からは大量の血が流れ落ち、瞬く間に骨まで曳かれてしまった。

「ふう、太腿の骨って太くて固いからゆっくり時間かけて曳いたげるね？」

『ギコ……ギコ……ギコ……ギコ……』

「んうううううっ！！！」

「よいしょ。よいしょ。うん、一番太い骨切断しちゃったよ？　あらあら……今度はウンチまで漏らしちゃって……そんなに痛いか？　あはは。ほら、切り落とされたよ？　気分は？」

漏らした糞尿に構わず、今度は左太腿の中心辺りに同じく歯をあてがい、糸鋸を曳いてゆく加奈。

「両足短くなっちゃおーね！　私、ダルマ人間作るのにハマってるかも～♪」

白目を剥いて意識を失う頃には左足も太腿から綺麗に切断されていた。
短くなった太腿をパクパク開閉するように痙攣する優香里。
「んん？　汚い糞尿撒き散らしながら痙攣してんじゃないわよ？　エッチな穴が二つとも丸見えだし……。パクンパクンしちゃってるしぃ～。あはは♪　いやらしっ……」
切り離した両脚を一本ずつ抱えては海に投げ込みながら頬を赤くする加奈。
隣では真紀によって両足の全ての指の生爪剥がされた夫の良夫が目を見開いて号泣している。
勿論、猿轡のせいで大声は出せなかったが……。
続いて真紀も本格的に凄惨な拷問を開始する。
電動ノコギリを、予め用意された段ボール製の箱の中から取り出し、素人には少し難しい動作をこなしてゆく。
燃料は入っていたので、チョークを引いたり戻したりしながら手際よくこなし、素早くリコイルスターターを数回引き、エンジンをかけた。
低く鈍い音が響き渡る。
数回エンジンを吹かし、調子を確認する。
「よし！　エンジン絶好調♪」

そのまますぐに御手洗良夫の右太腿の切断に入る。

「うぐっ！？　んんううううっ！！」

必死で何か叫ぶが言葉にならない御手洗良夫。
ほんの一分で、右、左と、両脚が太腿から切断された。

『ギュイイイイン！！　ブチブチブチブチッ！！』

肉と骨を切り裂く音が、鈍く響くエンジン音にかき消されながらも微かに聞こえた。

「んうううっ！！　ふぐううっ！！」

「あーあ、真紀さんズルいなぁ。チェーンソーとか電動ノコギリとかなんて楽すぎるよ！」

「私は３０越えてるのよ？　糸鋸なんかでこんなブットい太腿の骨なんて切断したら息があがっちゃうわよ……やだ！？　股全開に開いて汚ったない肛門ヒクヒクさせてる……直腸まで丸見えね……よしよし、よっぽど痛かったのね～」

御手洗良夫の額を、血まみれの手で二回ほど軽く撫でてあげた後、

切断された脚の足首を掴んで、両脚とも近くの林に投げ捨てる真紀。
結局数分後には両腕も肘の上辺りから切断され、夫婦は四肢切断された。
両手両足をヒクヒクさせながらベッドを血塗れにして、奇声をあげる25歳の若い夫婦だったが、かくれんぼで遊んでいる息子と娘には届かなかった。

「美紅ねーちゃん見ぃつけたっ！」

「あちゃぁあ〜。結構見つかりにくい岩の隙間だと思ってたのになぁ。やるなぁ愛子ちゃん」

「キャハハ！！　お馬の尻尾みたいなのが飛び出してたから見付けられたよっ！！」

「あたしの自慢のツインテールが仇になったのね……」

兄の勇一も怪しい岩の裏をどんどん素早く覗いてゆく。

「莉央ねーちゃんも見つけたっ！！」

「なるほど……この子達は運動神経も勘もいいみたいだね美紅さん……」

鬼ごっこもしたり、縄跳びもしたり、一通り遊んで疲れ果てた美

紅と莉央。
「はぁ。小さい子ってどこにこんなパワー蓄えてるんだろーね？　莉央ちゃん……」
「ほんとに。あたしも負けちゃうよこの子達には……」
なんとなく想像はつくが、悲惨な状況になっているであろう二人の園児の両親の方を振り向く中学生の美紅。
小学生の莉央も、ぼちぼちかな、と思いながら何気なくそちらの方へ目をやる。
「勇一くん、愛子ちゃん、もうかなり遊んだし……パパとママのトコへ行こうか……」
時刻は16時を過ぎていた。
両親の処刑シーンを見せないであげて……でもきっちりやるべきことである二人の兄妹の処刑を執行してから戻るつもりが、そのまま連れて帰ろうとしている美紅と莉央だった。
いつものように特殊な注射である、痛みを麻痺させる注射と、血止めの注射を打たれて四肢切断状態で逆さ吊り状態である。
両手両足の付け根をキツく金具で絞められ、その金具にロープを括りつけ、ほどよい高さの木の枝からぶら下げられていた。
両足は太腿から下は無いが、大きく開かれていた。

「良夫さん、どうして奥さんの優香里さんと向い合わせで吊り下げられてるか理解できる？」

冷たい無表情で女子高生の大山加奈が問いかける。
四肢切断された絶望感と、それでも身体に痛みを殆ど感じないギャップに、逆に恐怖を感じる父親……。

「頭がぼうっとする……もう俺たちは殺されるんだろ？　こんな身体で生かしておかれてもゴメンだから早く殺してくれ……」

「私の質問に答えなさい」

吊るされた顔面に強烈な膝蹴りを入れる加奈。
前歯が四本へし折れ、強く閉じられた目からは再び涙がこぼれ落ちる。

「がはっ？！　ごほっごぼっ！！…………」

「せっかく最後に猿轡外してやってるんだから普通に返事してくれる？　どうして向い合わせで吊り下げられてるか答えなさい」

「わ、わからない」

「あなた……今日までありがとう……なんだかもう絶望しかないから……もし生きて帰れてもこんな姿で生活なんてできないし」

『バキバキバキッ！！』

「いだあああっ！！　うごご……」

今度はリーダーでありＯＬの木村真紀が吊るされた女の顔面に連打の拳を入れる。

『ボタボタ……』

「アホか！　あんたたち夫婦はここでこれから死ぬから！　生きて帰れるなんて甘いこと一瞬でも抜かすなよ？　わかった？」

前歯が二本折れて鼻の骨も折れた優香里は、ドボドボと鼻血と歯茎から血を流しながら涙ぐむ……。

「あ、ついでに閃いちゃった！　あーんして」

「むごご……い、イヤ……」

『パンパンパンパパパパパン！！』

「いだだだだっ！？　やあああっ！！」

真紀の命令を拒否した御手洗優香里の股間へ、十連発の平手打ちをかます真紀。
大陰唇と小陰唇が瞬く間に真っ赤に腫れ上がり、再び小便を漏らす。
陰部の痛みに堪えきれず恐る恐る口を開く。
すかさずペンチを口内へ差し込み、折れた前歯の隣の歯を挟み込む。

『グリグリグリグリ……ぶちゅっ！！』

数回捏ね回して引き抜いた。

「んがあああっ！！　痛いいいっ！！」

叫んだ直後、痛みに口を閉じた優香里に対し、右の乳首を挟み込んで、一気に潰す。
再び口を開けた所にすかさずペンチ……。
五分も経った頃には左右の乳首が、潰れて無くなり、上下全ての歯をペンチでむしり取られた哀れな御手洗優香里の姿があった。
潰れた乳首ももう一度ペンチで掴み、左右とも引きむしった。
乳房の皮も数センチついでに剥がれてしまい、痛々しく真っ赤な身が丸見えになる。
気が狂わんばかりに号泣するが、真紀は上唇を指で掴み、冷たく囁く。

「あーんして……よーし！　綺麗に全部抜けて歯茎だけになっちゃったね！可愛いお婆さんみたい……お待たせ。じゃあ送ってあげて！　加奈」

「あの世に送られる直前に歯まで全てむしり取られちゃったのね……可愛くなったじゃん？　お祝いとして一番乗りで逝かせてあげちゃうよ！　でも二人のクソガキ兄妹がもう逝っちゃってるかもしれないから……三番手かも。ま、どっちでもいっか」

勢いよくリコイルスターターの紐を二、三回引くと、電動ノコギリのエンジンがかかり、鈍い音を立てながら女の方へ歩み寄る加奈。パックリ開かれた短い脚の股間にゆっくり振り下ろされてゆく。

「ひっ！……い、いやっ！」

『プシャーー！！』

大量の小便を漏らして、恐怖に目を見開く御手洗優香里だったが、情け容赦なく電動ノコギリは25歳の女の股間に迫りくる。

「やめてええっ！！　お願いっ！！　何でもしますから許してくださいいいいっ！！」

「だーめ♪　マンコと肛門が真っ二つに裂けていくシーンは何度見ても興奮するのよね私は……。あの人殺しクソガキ兄妹を育てた汚

い子宮もパックリ切り開いて内側をじっくり見てあげる……」

「ひいいっ！！　嫌だあっ！！　わーん、わーん！！」

「恐怖のあまり子供に戻っちゃった？　あはは。いくら泣いても許さないけどね。さぁ曳き裂いてやるぅ～。汚ったない御手洗優香里の腐れマンコォ～！　いっくよおおっ！？」

『ギュイイイイン！！　ブチブチブチッ！』

一瞬で膣口とクリトリス、肛門を切り裂き、女性器と肛門が一つに繋がる。

「ギャアアアアッ！！　んがあああっ！！」

断末魔の叫びに構わず、どんどん股間を切り開いてゆく。
そのまま回転歯は、恥骨を切り裂きながら膣内、直腸、子宮まで真っ二つにしてゆく。

「大事な子宮……パックリ開いちゃったよ？　汚いと思ってたら真っ白で綺麗な子宮じゃん！　でももう子供も産めないね？　今から死ぬのに杞憂の……何とかかな？　んふふ♪　どんどんいくよ！　それそれそれー」

強くエンジンを吹かしながら、一気にヘソまで切り進んだ。

大腸と小腸がブリブリとはみ出してくる。

「んぎゃあああっ！！　痛いいいいっ！！　死ぬっ！！　死ぬううううっ！！！！」

「ん？　痛いか？　死ぬ？　死んで♪　そりゃ痛いでしょ？　最後の最後だけは痛覚が戻る注射を打っといたから。地獄を味わいながら死んでいって！　旦那が見てる前で内臓ぶちまけながらね……ほら、まだまだどんどんいくよ？」

大量の血飛沫を全身に受けながら、旦那の良夫は目を瞑って現実逃避に入る。

嫌でも聞こえてくる妻の断末魔の叫び声に気が狂いそうになるが、耐えているうちにとうとう静かになる。

壮絶な痛みと苦しみの末に、ようやく永遠の死に辿り着いた御手洗優香里だった。

電動ノコギリの歯は、御手洗優香里の顎の骨をゆっくり削りながらほぼ止まっている。

「あの…………完全に真っ二つにするより、首は横に切断して生首残してあげようか？　真紀さん」

「そうね……園児の子供たちもぼちぼち美紅と莉央がバラバラにして帰ってきてる頃だろうし……仲良く四人の生首並べて終わりにしようっか？」

「了解。ほいっと」
『ギュルル……ポトン…………ブシュウウウ！！』
手際よく横方向に歯を滑らせ、優香里の首は地面に落ちた。
首からは本日最強クラスの出血が飛散する。
とぐろを巻くように落ちている小腸の上に落ちた生首は、半分以上食い込んで埋まっている。
更に腹部を抉り取るように切り続けて、パックリ開かれた子宮、卵巣、腎臓、肝臓、胃に大腸、直腸に至るまで、殆どの臓器を地面に切り落としていった。
四肢を切断され、首を切断されて、お腹の中はほぼ空っぽにされ、骨だけが見えていた……。
真下には内臓に埋まっている頭部のセミロングの髪の毛が微かにはみ出していた。
「おええええっ！！　ぶはあっ！！……ドボドボドボドボ……」
「あらあら、自分の奥さんの成れの果てを見てゲロ吐くなんて……ちょっと可哀想じゃない？　奥さん死に切れないかもよ？　あは♪」
落ちている長さ２０ｃｍほどの木の枝を御手洗良夫の肛門に突き刺す木村真紀。
幅も５ｃｍほどあるので、肛門はパックリ開かれて痛々しい。

「ぐわあああっ!?　痛いいいっ！！」

「そりゃ痛いでしょ……こんなブットい木の枝がアナルに突き刺さってるんだからね。全部入れたげる」

前立腺を刺激された御手洗良夫の陰部は、ダルマになった哀れな状態でも勃起してゆく。

奥まで木の枝を突き刺してから、高速テコキが始まった。

「ほら、人生の最期に綺麗なＯＬ真紀様がイカせてやるよ！　タップリ射精しなさいね？　牛や豚の様に解体された哀れな妻の肉塊でも見ながらたくさん出すがいいわ！」

「う、うあああ……」

こんな状態で死ぬ前に女性にテコキされている自分が愚かで哀れで仕方なく思えてきた良夫は、またまた号泣を始めた。

まだ少し痛み止めの麻酔が効いているのか、かなり気持ちのいい真紀のテコキに、遂に堪えきれず大量の精液をヒリ出した。

「すっご！　四肢を切断されて宙吊りにされて、シゴかれて……こんな状態で普通イケる？　カッコいいなこいつ」

加奈も１ｍは上に飛んだ精液を見ながら半ば呆れて呟いた。

「男って殺される直前とかに、本能的に子孫を残そうとするために勃起するみたいよ？　でもダルマ状態でテコキで射精させられて死亡……とか、めっちゃ受けるけどね　アハハ♪」

そこへ美紅たち四人が帰ってきた。

「キャアアアッ！！？？」

「うわあああああっ！！」

先に4歳の娘が、父親の御手洗良夫を認識して叫び声をあげると、ワンテンポ遅れて5歳の息子が叫んだ。

横の母親の肉塊は、何なのか意味が分かってなかったが、まだ顔が付いていて、その上生きている父親の顔を見たら、驚くのは当然だった。

恐怖で駆け寄りたくても駆け寄れないで足がすくんでいる園児の兄妹は、美紅と莉央に抱き抱えられて、無惨な肉塊になった母親と、まだ生きている父親の前に連れていかれた。

「まだ子供たちを殺ってなかったのね？　何してたの？」

少し顔をキツくして美紅に問いかけるリーダーの木村真紀。

「………なんか。なぜか。ちょっとまだ。最後の最後に殺ったらいいかなって……」

美紅が動揺していると、小学生の莉央が前に出る。

「そうなんです！　もう両親死んじゃってるかなって思って来てみたらまさかまだ父さん生きてるなんて……あたしたちの早とちり……」

「早とちり……って……。こいつら二人の処刑シーンを見せたかったのに本当は。親の死を見せ付けないでおく優しさは認めてあげたけど、でも子供たちの処刑は楽しみにしてるんだな……って思ったから岩場へ行かせてあげたのに……まさか情け……じゃないでしょうね？　莉央」

「そんなことないない！　思ってないです！　ほら！　こんなことしちゃうし。処女喪失アタァーック！　それっ」

４才の愛子のスカートとパンツを一気に摺り下ろすと、中指を小さなワレメに一気に突き刺した。
根元まで掻き回しながら挿入してゆく莉央。

『ずぼおっ！！　グリグリ……メリメリ……どくどく』

園児の小さな太腿をツゥッと血が流れ、やがてドクドクと大量に流れ落ちる。

「んぎゃあああっ！？　いったああいいいっ！！　やめて莉央ねーちゃん！　指を抜いてっ！　痛いよお！」

「ダメ。今から愛子ちゃんはスッゴく痛い目に遭うのよ？　覚悟しなさいね」

いきなり襲う下腹部の激痛に、園児の愛子は大便を漏らしてしまった。

「愛子っ！！　やめろおっ！！　愛子が痛がってる！！」

咄嗟に妹を庇おうと莉央の手を掴む兄の勇一だったが、美紅に無理矢理押さえ込まれる。
父親である良夫の陰部に顔が来るまで持ち上げると、たった今射精したばかりの精液まみれのペニスに勇一の顔を押し付ける美紅。

「パパのチンポ舐めろ」

「え？　そこは妹じゃないんだ……」

「あら……そうきたのね美紅」

美紅の発想に一瞬たじろぐ年長の真紀と加奈だった。

「上手に舐めてパパがイッたら妹を殺さないであげる」

「やだ！！　パパのチンチンなんて舐めたくないっ！！」

「じゃあ電動ノコギリで麻酔なしで、妹の愛子はマンコから身体を真っ二つにしてやるから……ママみたいにね。それはそれでいいんだよ。楽しみだから……」

「ママって？　まさか……」

顔が引きつる兄の勇一に、ハッキリと答えてあげる美紅。

「その真っ二つになってプランプラン揺れてる肉塊……勇一くんと愛子ちゃんのママだよ。下にドバドバ落ちてる内臓に顔が埋まってるから分からなかったでしょ？」

「ひっ……ひいっ！？　ママ、ママ……ママァーーッ！！」

「わぁーんわぁーん！！」

妹の愛子も、莉央に膣内を中指で掻き回されている痛みも忘れて、母親がすでに死んでしまっている事実を理解して号泣を始めた。

「どうする？　良夫さん。息子が口であんたをイカすことが出来たら娘さんの命を助けてあげるけど？　チャレンジしてみる？」

「く、くそう……実の親子になんて酷いことをさせる……鬼か悪魔かこのガキども……」

「は？　あたしたちの事をガキどもって言った今？　あ、そう。ならいいわ。子供たちをあんたが息してる内にバラバラにしてやるから。ようく見ててね。二人の可愛い子供たちがミンチになっていく様を……」

鬼か悪魔と言われても全く気分を害せずに、《ガキ》に反応するちょっと変わったスイッチを持つ美紅だった。

「わ、わかった……済まない。どうせ俺は優香里と同じ助からない運命だからな。せめて娘だけでも助けてやってくれ……息子も一緒に頼む！」

「息子さんまでは無理だよ。一人くらいなら国の偉いさんも分かってくれると思うけど二人は無理……」

「そんな……お願いします！　美紅様」

「この期に及んで様付けされてもねぇ……。取り敢えず勇一くん、パパのオチンチン早く舐めなさい！　ほら！」

僕たちは両親と共に処刑される……殺される……とゆう事態を理解した5歳の勇一は、妹を助けたい一心で鬼頭美紅の命令を聞く覚悟を決めた。
恐る恐る父親のペニスを口に頬張る……。

「かぽっ……ん、んぐ……んぐぐ……」

人生で初めて味わう不思議議な口の中の感触に、吐き気を催しながらも、懸命に良夫のペニスを舌を使ってむしゃぶり付く勇一。

「おっ！　いいねえ。腐女子には最高のシーンじゃない？」

真紀が目を丸くして見つめている。

「親子だから、どちらかと言うと近親相姦モノかな？　あまり人気ないジャンルかも……。ほらほら、もっと舌を使って舐め回すの！……さぁ勇一くん。……お尻の穴の力を抜きなさい」

「ん？　どうして？　んぐんぐ……」

「こうするのよ」

『ズプ……ズブブブブ』

女子中学生、鬼頭美紅の人差し指が5歳の勇一のアナルにめり込んでゆく……。

「んあっ!? んんんあっ!! んごっ!! プハッ!! やめてっ!! 美紅ねーちゃん……おしり痛いよおっ!!」

あまりの痛みに思わず父親のペニスを吐き出してしまう勇一。

『グリグリ……スボボ!! クプンクプン……ずちゅっちゅっ!!』

人差し指に続き、中指まで園児の小さな小さな肛門に強引に突き入れてゆくエッチで残酷な美紅。ついに二本の指が肛門括約筋を破壊しながら挿入しきった。

園児の脚を、ドクドクと鮮血が流れ落ちる。

「ホラッ! 早く咥えろ!! 誰が吐き出して良いって言ったの? 腕までブチ込んで直腸引きずり出すわよ?」

「んぎいいあっ!! 痛ったあああいいっ!! …………かぽっ……ちゅぽ……ちゅぽ」

再び父親のペニスを咥えさせられた勇一は、必死でしゃぶり付きながらも女子中学生の二本の指で容赦なく直腸内を掻き回され続け

る………。

「だから力を抜けと言ったでしょ？　肛門力んでると痛みが増すだけだからね？　一つ賢くなったね」

生まれて初めてのアナルへの異物挿入を許してしまう兄の勇一だった。

莉央も段々と、Ｓの心に火が付き始める。

小さな園児のオマンコに、二本目の指までめり込ませた。

中指に続き、人差し指までめり込む。

これには４歳の園児の性器は悲鳴をあげた。

『ずちゅっ！！　バリバリ……』

「んぎゃあああっ！！　痛いっ！！　痛いよおおおっ！！　莉央ねーちゃん！　愛子のお股痛いよおおっ！！　お願い抜いてっ！！　愛子をゆるちぃてっ！！」

「ゆるちゃない。お兄ちゃんはオチリの穴掘られながらお父さんのチンポしゃぶって頑張ってるんだよ？　愛子ちゃんもアソコ裂けるくらい我慢しなきゃね？」

「うぎぎ……痛いよ痛いよぉおぉぉ……えーん、えーん」

小学生莉央の二本の指でのマンコ掻き回しは、かなり痛々しかった。

『くちゅ……くちゅ……グチュチュチュチュチュウッ！！』

「んっ！　んあっ！！？　やあっ！？　ぐす……ぐす……痛いよぉ……」

ドクドク血が流れ落ち、愛子の太腿は、性器からの血で真っ赤だった。

――――そして半時間が過ぎた。
でも未だに射精出来ない父親。
見るに見かねた……とゆうかそろそろ飽きてきた加奈が、父親の右睾丸をガシッと掴んだ。

「もう無理みたいね？　イク前に死んじゃいそうだから、愛子を助けるために手伝ってやるよ？　私に……射精させてください！　加奈様。とお願いしろ」

「ぐっ……イキたいけど意識が朦朧としてきて……お願いだ……俺を……射精させてください……加奈さ……ま」

「よく死にかけ状態で言えました。願い、聞き届けたり！　えいっ！　イッけえええええっ！！」

『ぶちゅっ！！！！』

「うがあああっ！！」

『ドピュピュピュピュウウウッ！！！！』

握力８０はあろうかとゆう大山加奈の握力に負けた御手洗良夫の右睾丸は、跡形もなく握り潰された。

血まみれの精液が息子の勇一の口の中へ夥しく飛び散る。

「んぐううっ！！　コポッ……ゴポポ……」

口で受け取りきれない父親の精液が大量に園児の口から顎へ流れ落ちる。

ビクビクと激しくダルマ男が痙攣を始めた。

数人かに一人は、睾丸を潰されたらショック死することをわかっている加奈は、トドメを刺すつもりで、もう一つの左睾丸も一気に潰した。

「あがががががっ！！……ゴボゴボ……」

泡を噴きながら切断されて短くなっている両手両足をバタバタさせて、更に激しく痙攣する良夫。

やがてガクン……とうなだれてペニスからドロドロとした粘液混じりの血液を吐き出しながら息絶えた……。

「はい、二丁あがり！」

笑顔でそう言うと、電動ノコギリで父親の首を切断し始めるリーダーの木村真紀。
そのまま上部の会陰部に歯を移動させ、陰嚢、ペニス、肛門……と、切り裂いてゆく。
二人の子供が見ている前で……。

ヘソまで切り裂いた時にズルズルと飛び出す大腸や小腸に混じって大便がボトボト降り注ぐ。

「臭いなあ。こんなたくさんウンコ溜めてやがったのね良夫は……子供たちも見てるのにね？　臭いね？お父さんってば」

それを見ながら、美紅と莉央は、二人の園児の股間から二本の指を引き抜いた。

突然木村真紀のスマホが鳴り響く。
特殊任務省のトップ、藤堂長官からだった。
ヘソまで切り開いた電動ノコギリを一度引き抜き、タオルで手の返り血を拭い終わると、慌てて電話に出る。

「はい。木村です。あ、藤堂長官、こんにちは。はい……はい……あ、それがですね、今回４歳の御手洗愛子の命を助けてあげてほし

いのですが……。はい……はい……あ、分かりました。本当にありがとうございました。夕刻までには残り三人の処刑を終わらせますので。失礼します」

黙って真紀を見つめる二人に軽く微笑むと、ゆっくり話し出す。

「安心して。美紅と莉央の望み通り、女の子の愛子だけ四肢を切断とゆう条件で生かしてくれるよう話が付いたわ。死亡扱いで戸籍からは抹消されるから、一生誰かが面倒みなさいよ？　それと……愛子を生かしておくには、リーダーである私から一つ条件があるの……」

「条件？　何？　真紀さん」

大山加奈が真剣な表情で問いかける。

「勇一くんにナイフを貸してあげるから、自分で陰嚢を切り裂き、二個ともキンタマを引きずり出して食べて飲み込むことが出来たら妹さんの愛子の命は助けてあげる。失敗したら四人で一緒にあの世へ行ってもらうわ」

「そ、そんな……あたしたちがキンタマ引きずり出すのなら分かるけど、そんな痛いこと自分では無理でしょ！？　酷いです真紀さん……」

愛子だけでも助けたい菅野莉央が一番にリーダーの真紀に文句を付ける。
美紅も隣で真紀をじっと見つめる。
言いたいことは同じみたいだ。

「本来全員この残酷処刑島で処刑されるべきなのよ。それを命乞いしてくれた真紀さんに感謝こそすれど、文句言うなど論外だわ。無理なら私が今すぐ殺してやるよ」

日本刀を持ち上げると、つかつかと愛子の元へ歩み寄る加奈。
すぐさま庇うように前に立つ莉央だった。
スッと横をすり抜けて園児の前にしゃがみ込む。

「おい、勇一くん。このナイフであんたの股間の袋切り裂いてタマタマを引きずり出して、食べれたら妹は助けてあげる。やってみる？　どのみちあんたは死ぬんだけど……やる覚悟ある？」

加奈が園児の顎を掴んでグイッと上に持ち上げながら問いかける。
顔をしかめて涙をたくさん流しながら頷く5歳の園児……勇一。

まだほんの子供だが、男気はあった。
一気に陰嚢を切り裂くと、大号泣しながら二つの睾丸を握りしめ、一気に精管と神経の管を引きちぎった……。

「ぐああああっ！！　かぷっ！　かぷっ！」

二つの睾丸を口に入れて一気に……。
飲み込もうとした瞬間、父親のように激しく痙攣を始めて、そのまま意識を失った。
ショックで死んでしまった。
口からはあと少しで飲み込めた二つのキンタマが転げ出てきた。

「愛子ちゃん……お兄ちゃんは頑張ってくれたね？　立派なお兄ちゃんの後を追わせてあげるね？　マンコから……股間から真っ二つに切り開いて送ってあげる……さぁ股を開いて寝転がりなさい」

愛子を助ける事を諦めた美紅が電動ノコギリを手にしてリコイルスターターの紐を引く。
数回引くと、鈍い音がしてエンジンがかかった。

莉央が兄の口から転げ出た二つの睾丸を拾いあげ、愛子に手渡す。

「ようく噛んで飲み込むのよ。それが出来たらあたしが助けてあげる。木村さんに命だけは助かるようお願いしてあげるから。早く食べて」

自分以外の家族全員が殺され、自我を失いかけて、死を覚悟し始めた所へ、莉央の一言。
サッと正気を取り戻した４歳の愛子は、泣きながらも必死でお兄ちゃんの二つの睾丸を口に含み、一生懸命噛みしめる。

なかなか苦戦していたが、一分もたった頃、ついに二つの睾丸を飲み込むことに成功した。

よほど不味かったのか、兄の睾丸を食べることがよほど辛かったのか……顔をしかめて号泣する愛子だった。

「木村さん！　結局キンタマ飲み込めたからいいよね？　命は助けてくれますよね？」

「…………」

「真紀さん、お願いだから莉央ちゃんのお願い聞いてあげて！　四肢を切断されても生きたいと愛子ちゃんが願うなら……助けてあげてください」

莉央に続いて美紅までも頭を下げる。
大山加奈が呟いた。

「切り取った本人が必ず食べないといけない、とは言ってなかったよね？　真紀さんは」

「加奈まで……分かったわよ。四肢を切断する条件は命令だから変えられないけど……命は助けてあげましょう。前例がないから不公平だし……。本当は確実に殺しておきたかったんだけどね……」

ほっとする美紅と莉央。

「私の高校はもうすぐ廃校になるんだけど、バカな女担任がダルマ人間二人の面倒見てるから、その女担任に愛子も預けようよ。私に任せて莉央」

「ありがとう！　加奈さん。良かったね！　愛子ちゃん」

頭を擦りながら、思わず抱き締める莉央。

「小さくなるけど我慢してね」

「愛子……許してもらえるの？　莉央ねーちゃん……」

「うん。助かるよ。でもお手々と両足はこれからサヨウナラしちゃうから……大丈夫。痛みが殆どなくなるタイプの麻酔打ってあげるから。大人しくしてたらすぐに終わるよ」

そのまま注射を打たれて意識を失う御手洗愛子。
ふと目覚めた時は本島の港に帰ってきてからだった。
病院のようなゴマの付いたベットで運ばれながら、ふと身体を見てみると、手足がなくなっていることに気付く。

「ギャーーーー！？　あたしの手足がないいいいっ！？　ひいいっ！

！」

「それはそれで仕方がないよ。でも生きていたら楽しいこともあるし……加奈さんが拷問するのを楽しみにしている高校生の二人と一緒に、三人で仲良く暮らしていくのよ？　あたしもたまに遊びにいくから……ね♪」

そう言いながら莉央はダルマ女にされた園児の膣内に指を突き入れた。

「痛いっ！？」

「あなたを殺すのは正直美紅ちゃんもあたしも未練タラタラだったけど、虐めるのは別だから……愛子ちゃんのココとおしりの穴は……遊びに行く度に引き裂けるほどぐちゃぐちゃに掻き回して遊んであげるから……泣いても許さないよ？　あはは」

数日後…………加奈の通う山川女子高等学校の体育館倉庫。

「崎山先生、愛子の体調はどう？　元気にしてる？」

「はい、加奈様！　ご親友の小鳥遊貴子様にも気に入られ、しょっちゅう遊んでもらっているようです」

「そう……貴子もエッチだから幼稚園児とはいえ、色々苛めてるんでしょ？」

「そうですね……最近見たのは、小さな性器に指を四本ほど捩じ込んで、掻き回してました。愛子ちゃんは本気で号泣してましたけど、今度はお尻を１００回ぐらい叩いて……愛子ちゃんは、あまりの痛さに意識を失ったりもしてましたね……」

「………さすが小鳥遊貴子……私の親友だわ。残酷処刑島に今回は呼ばれなかったけど、立派な処刑人に選ばれてるからね彼女は……」

「そうなんですか……私のアソコもたまに掻き回されます。貴子様にはあれから何十回もイカされました……」

「今日もイカせてやるよ？　ほら」

いつものようにスカートの下から手を差し込み、パンツの裾からスルスルと指を這わせ、担任の崎山先生の性器へ中指を突き刺し、掻き回し始める大山加奈であった。

「あ、あんあんあんっ！！　加奈様っ！！　私を壊してください！いく、いっくうっ！！」

『プシャアアアーーッ！　ガクガク……』

「あんたをイカすスポットを見付けたんだよ？　アハハ♪　１２秒で毎回イカせてやるよ崎山道子！」

「ありがとう……ございます……加奈様……でも12秒って……中途半端ですよね？　はぁ、はぁ、はぁ……」

『スパァンッ！！』

「ぴぎいっ！！？？」

顔がイビツに変形するほどの強烈な平手打ちが崎山先生の顔面にヒットした。

「10秒じゃあギリギリお前がイカないから12秒してやってるんじゃん？　その半端な2秒が大事なんだよ？　わかる？　ほら！　私の指に付いた臭いマンコ汁綺麗にしな！」

「……はい！　加奈様っ……ズズ……ちゅぱちゅぱ……ペロンペロン」

「ほら、爪の内側にまで汚いマンカスが入り込んでるよ？　舌先でもっとしっかり舐め取れ！　このメス豚」

「汚いマン汁だけじゃなく汚いマンカスまで付けてしまってごめんなさい！　加奈様……道子を許して下さい……」

愛液でパンツをグショグショにしながら半泣きで加奈の指に付いた自分の愛液と恥垢を必死で舐めとる崎山先生。

そこにしくしく泣きながら四つん這いで佇む御手洗愛子を見つけ

る加奈。

「お、いたいた！　あの様子じゃ貴子にかなりいたぶられてるなぁ。やれやれ。美紅や莉央も近々性的苛めにやってくるとゆうのに……死んだほうが幸せだったかもね愛子は……」

そう言いながら愛子に近づき、往復ビンタを１０回くらい叩き込む加奈。
泣きじゃくる幼稚園児、愛子の姿に、余計興奮を覚えた加奈は、肛門に人差し指を一気に突っ込み、激しく掻き回す。
ドクドクと血を流しながら泣き叫ぶ愛子を更に激しくビンタを数回……。
愛子を責めながら加奈の性器も濡れてきていた。
オシッコを漏らしながら切られた短い両足をバクンバクン開閉しながら大便まで漏らし始める愛子。

「あれ？　加奈さん……教室で待っていてと言いながら既に愛子ちゃんをいたぶってる……ズルいですよ？」

美紅が体育館倉庫に走り込んでくる。
莉央も後からゆっくり付いてゆく。

「久しぶりね愛子ちゃん。おねーちゃんと遊ぼ♪」

一瞬莉央を見て、ビクッと震える愛子。

「ほらほらほらぁっ！！　誰のお陰で命があると思ってるの？　あたしに一生苛められなさいね？　可愛い可愛い愛子ちゃん♪」

莉央の激しいお尻叩きが始まった。
泣き叫ぶ愛子の肛門に人差し指と中指を付き入れる。

「何うんち漏らしてるの？　汚い大便だらけの肛門……ただじゃ置かないんだから！」

「痛いよー！　あーんあーん！！　許してー！　愛子のお尻、避けちゃううっ！！」

「汚いアナルだから……裂いて……あ・げ・る♪」

『グリッ！　バリバリ！！』

なんと、莉央の手が全て園児の愛子の肛門にめり込んだ。
いくら小学生の女の子の手とはいえ、幼稚園児にフィストファックは残酷過ぎる……。
気が狂ったかと思えるほど号泣しながらアナルから大流血の愛子。
さすがの美紅も、見てるだけで苛める気力がなくなってくるほど残虐な莉央の行為だった。

「高橋和樹！　横山裕子！　こっちへ来い！」

「は、はいっ！」

「はい！！」

大山加奈が叫ぶと、ダルマにされた二人の元カップルが犬のように奥から這い出してくる。

菅野莉央が園児の愛子を必死で拷問しているので、鬼頭美紅に遊ばせてやろうと思い、呼んだのだった。

「私の友達の中学生の鬼頭美紅ちゃん。この子に苛められたい人、短い脚を開いて！」

加奈の掛け声に、二人とも脚を開いてお尻を突き上げてくる。

裕子は小鳥遊貴子に調教され過ぎて、お尻を突き上げただけでマンコをグチョグチョに濡らしていた。

「美紅も莉央に負けないよう拷問してやって！」

そこへ現れる加奈の親友の小鳥遊貴子。

「あら？　この方たちは……前に聞いていた残酷処刑島の執行人の

方々だね？　加奈ちゃん」

「そうよ。リーダーの木村真紀さんだけは用事で来られなかったけど、新しく処刑人に選ばれた小鳥遊さんには是非ともよろしくと言ってたよ？」

「それは光栄だわ。加奈ちゃんの親友の小鳥遊貴子です。よろしくです！　鬼のようないかついイメージだったけど。小学生と中学生だっけ確か……。お二人ともスッゴく可愛いよね？　キスしたいなぁ。………あ！？　裕子！！　また汚いマンコを見せてるな！今日もグチョグチョにしてやるんだから！」

ダルマ女の横山裕子……。

元小鳥遊貴子の親友だったが、今は小鳥遊貴子と大山加奈の奴隷……。

もう美紅の責める相手は高橋和樹しか残っていない。

「裕子の元彼氏……高橋和樹しか残ってないけど……ヤっちゃって！　美紅」

「男子高校生かぁ。ふぅん。なかなかの男前じゃん……。タイプには特にキツくお仕置きしたくなっちゃうんだよね………。じゃあちょっとあたしの得意の前立腺抉りで……イカせてやるか。あは♪」

ゲストである女子中学生の鬼頭美紅の責めを、正直舐めてかかっていた高橋和樹だったが、度肝を抜かれる羽目になる……。

『ズッドオッ！！　ズブブブブッ！！　グリリッ！！　ぐちゅっちゅちゅちゅちゅっ！！！！』

「ぎっ！？　ぎひぃいいいっ！！　痛いっ！！　み、美紅……様、でしたっけ？　お名前……あの……痛過ぎます！！　もう少し優しくしてくださいぃいいっ！！　ひぃいいいっ！！」

強引に高橋和樹の肛門へ肘までぶち込まれた美紅の右腕は、抜いたり差し込んだりしながら確実に前立腺を抉る。

激痛と、超が付くほどの快感が交互に繰り返される。

「ほらほら！　気持ちいいか？　中学生の少女にケツ穴ホジくられて感じてる男子高校生……あはは。スッゴい哀れだね～」

激痛に慣れてきた頃には凄まじいオーガズムが高橋和樹の前立腺に襲いかかる。

人生で最大量の夥しい精液を噴き出せさせられる高校生の和樹であった。

「はひぃっ！！　美紅様っ！　イク！！　イッちゃううううっ！！」

「いいよ。イケイケイケ！！　高校生」

「美紅さまぁあっ！！　イクうううううっ！！！！」

『ドピュピュピュピュピュウウウッ！！』

中学生の美紅のアナル責めで夥しく精液を吐き出した高橋和樹。愛子を散々いたぶって満足した菅野莉央も幼児の愛液で汚れた手を拭きながら満足げに加奈に挨拶した。

「今日はありがとう。加奈さん。加奈さんの担任の崎山先生、これからもダルマ幼児の愛子もよろしくね」

「は、はい菅野様……」

「莉央、こいつ私の手でアソコグショグショにしてイッちゃったから、莉央もイカせてやってくれないかな？　アナルでね♪」

「ひっ！？　こんな可愛い小学生の女の子にアナル責めされるなんて……想像しただけでも濡れちゃいます……」

「あたし、そんなに可愛い？　ありがとう先生」

少々照れて頬を赤くする莉央。

加奈に散々掻き回されて、グショグショに濡れている性器を押さえながら恥ずかしがる崎山道子先生の背後に回り込み、後ろからパンツの裾に手を滑り込ませて、お尻の肉を掴む。

「肉付きいいね？　せんせ」

五回ほどお尻の肉を揉みしごくと、一気にパンツを引きずり下ろした。

「ひゃあっ！？　恥ずかしい……莉央ちゃん」

完全に脱がし取ったパンツをクシャクシャに丸めて、崎山先生の口に捩じ込む莉央。

「むぐっ！？　んんん……」

「あたしのアナル責めは少し痛いと思うから……思いっきり叫ばれたら耳が痛いの。ちょっとの間だけパンツでも咥えててね。それに責めてもらうんだから、あたしのこと莉央様って呼んでくれる？立場分かってるの？」

そう囁きながらゆっくりと崎山先生の肛門へ中指を差し入れてゆく……。

『つぷ……ずぷぷぷぷ……』

「んんんっ！！　んんううう」

「何て言ってるか分かんないけど気持ちいいんだ？」

簡単に中指が根元まで全て入った。

「ん？　お尻の穴……ガバガバじゃん？　指だけじゃイカせられないね……これじゃあ。ん～んと……こうなったら数本の指どころか腕を入れてあげるね。肘までぶち込んでS状結腸掻き回してあげなきゃダメだね？　せんせ」

「んんうううんんっ！！」

「ありがとうって言ってるのね？　いいえ。どう致しまして♪」

『ズボオオオッ！！』

「ふんぐううううううううっ！！」

ガバガバのアナルに一気に肘まで腕を突っ込まれて、あまりの激痛に泣き出してしまう崎山道子先生だった。

泣いてることに気付いていた莉央だったが、逆にゾクゾクしてくるのを感じた。

やはり小学生の女の子とは言え、真性のS女だった……。

『ぐしゅっ……ぐしゅしゅっ！！』

手首を曲げてまでS状結腸の更に奥まで突っ込んでゆく。

奥の奥で横向きになっている大腸までも激しく掻き回す莉央。

「こんな奥の奥まで腕を突っ込まれたことなんて、今までの人生で一度もないでしょ？　先生がガバガバアナルだからいけないんだよ？　ごめんなさいは？」

そう言いながら口に捩じ込んである崎山先生本人のパンツを左手で掴み、引き抜いた。

ピンクの可愛らしいパンツは、ヨダレでビショビショに濡れていた。

糸を引いて口から抜かれるパンツ……。

「ごぽっ！！うぅう……痛っ……痛いっ！！　ご、ごめんなさい……莉央ちゃ……いえ、莉央様っ！！」

「うんうん。良く言えました。これからもずっと《ちゃん》じゃなく《様》で呼びなさいね？　あたしが小学生だからと調子に乗って舐めてたら、前に抉り取られた子宮のあった空間に爆竹ぶち込んで爆破の刑ね？　カエルをよく吹っ飛ばしてバラバラにしたもんよ。あたしも……」

「ひっ………分かりました莉央様！　来られる度に女教員の私を苛めてください………」

「うん。いいよ。遊びに来る度に崎山道子が本気で泣くまで性的虐待してあげるから期待していてね！　せんせっ♪」

数分間も掻き回して、ようやく肛門から引き抜かれた莉央の右腕は、腸液と血液と大便で汚れていた。
周りの床も肛門からの大量出血で、かなり真っ赤に染まっていた。
大便と腸液、血が肛門からドクドクと溢れ出してくる。止まらない……。

「ヌルヌルしてて生温かくて……直腸の中、かなり気持ち良かったよ。ありがとっ。かなり痛くしてごめんね、せんせっ♪」

「うう……痛い……ぐすん。ぐすん……」

「肛門括約筋、緩みきっちゃったから、このパンツで栓をしといてあげるね？　ちゃんとトイレで便座に座ってから抜かないと、血とか腸液とかウンチとかドバドバ出てきちゃうよ？　わかった？」

「はい……莉央様……ありがとうございました……ぐす……ぐす」

ハラワタを肛門から引きずり出されたかと思うほどの激痛を伴う小学生の女の子の残酷過ぎる責めに、前のめりに倒れ込んで両手でパンツの捩じ込まれた肛門を押さえながら泣き崩れる崎山道子先生だった。

莉央が崎山先生の隣にしゃがみ込み、スカートが捲れ上がってしまい、パンツのない丸見えの臀部をジッと見詰める。
そっとスカートを引っ張り、お尻を隠してあげた。

「よしよし。痛みがマシになるまでゆっくりと横になっていいよ

！　せんせっ。うふふ♪」

残酷少女たちの処刑と拷問はこれからも続いてゆく…………。

集結……再び悲しい処刑（後書き）

全員が処刑されるべき残酷処刑島にて、初めての生還者となった幼稚園児の御手洗愛子……。

しかしダルマ女にされてこれからの人生生きてゆくことが、彼女にとって死より辛いことにならなければいいが。

それほど残酷少女たちの責めは残虐だった……。

アイドルデビュー？　イジメっ子を撃退せよ（前書き）

菅野莉央と結城明日香、富田美香の残酷女子小学生トリオが、あるきっかけで意外な道へ進む事になる。

アイドルデビュー？　イジメっ子を撃退せよ

〇〇都の北部、〇〇区某所にある北部ドーム、収容人数五千人。

人気絶頂の女子アイドルグループ（絆ＧＩＲＬＳ）が、今日も満員御礼での大きなライブを行っている。

この国で一番大きい規模を持つ大東ドーム五万五千人の収容人数と比べると、五千人は小さな規模だが、毎月三回は公演を行う地元にある百人収容の劇場と比べれば、十分立派な規模であった。

「皆さん、今日は私たち《絆ＧＩＲＬＳ》の半年に一度の北部ドームでのライブ《桜花乱舞》を見に来てくださりありがとうございまーす！！　この度も無事に皆さんと楽しめました！　また半年後の秋もこのドームに会いに来てくださーい！！　今月は５の付く日に劇場公演を三回やりますので、そちらの方にも遊びに来てくださいねっ！！」

「ワーー！！　ワーー！！」

その後、アンコールも無事に終え、半年に一度の五千人収容北部ドームでのコンサートが閉幕した。

結成してから一年間で、爆発的に売れて今のところ女子アイドルグループでは堂々一位の人気、ＣＤ、ＤＶＤの売上も一位を誇っている。

小学高学年から高校三年生までのグループだが、去年の春にオー

ディションを行い、千人の参加の中から選ばれた十人の精鋭たちだった。
少し事情のある十人だが…………。
――――――――菅野莉央の自宅。
小学生の菅野莉央の携帯が鳴る。
「こんにちは。菅野莉央さんだね？」
「はい。そうです。特殊任務省の方ですね？」
「そうだ。先月の四人の処刑はご苦労様。いや、正式には三人か。君の提案で御手洗愛子だけを生かしておくようにしたそうだが……
……それを最終的に認めたのは、特殊任務省長官であるこの私、藤堂だ」
「あ、はい。その節はありがとうございました。あたしの我儘を聞いてくださって…………」
「うむ。だが園児とゆう幼さで四肢切断……これはあまりにも残酷な処置であると思う。しかも現在は君たちの奴隷と化してるみたいだな？　御手洗愛子には処刑された家族三人の分までこれからの人生、生き地獄を味わってもらうことになるだろうな…………まぁ死刑を免れたのだから当然と言えば当然だがな」
「あの…………あたしは何をすれば良いのでしょうか？」

何かを察したように菅野莉央が催促するように問いかける。

「ふっ。話が早いな。さすが小学生とはいえ残酷処刑人の一人だ。運動神経だけじゃなく勘も良いんだな」

「頭は良いとは言ってくれないんですね？　誠に失礼ですが、何となく恩着せがましくおっしゃられてましたので……」

藤堂長官の長話が始まる。

延々と話を聞いていている内に、少し眠気を感じてきた莉央だったが、顛末を理解する頃には、かなりの怒りが込み上げてきていた。

「そうですか……最終選考に残った二十人の内、受かったのは当然ながら今の《絆ＧＩＲＬＳ》の十人……。落選した残り十人の内、自殺が二人、残る八人も全員鬱状態で通院、または引きこもり……ボーカルの高校生、前島敦美が主犯となって、中学生の岸峰美波、小学生の吹矢こなみの二人と手を組んで徹底的に辞めさせた十人を苛めた可能性があるってことですね？」

「そうだ。自殺者以外の鬱状態である八人の親御さんたちから、娘さんが鬱になる直前の状態とかの詳細を聞く限り、どうやら主犯格のその三人の名前が上がっておるのだ」

「最終選考に残った二十人が宿泊したグループ運営会社が所有する秋葉ホテル……。このホテルで発声練習とかダンスの指導とか最終選考試験もあったのですね。その最終選考試験の前に、恐らく三人

からの苛めで棄権した者が十人……。最終選考の意味などなく、残った十人が全員合格。あり得ないですねこんなこと……」

「アイドルの事情はよく理解できんが、全国各地から夢を叶えるために集まった女子たちが、十人も自殺と鬱で棄権するなんておかしいからな。……という訳で、今年の《絆ＧＩＲＬＳ》のオーディションを１２歳の君たち菅野莉央、それと君の二人の親友との計三名で受けてもらうことにしたのだよ」

「あの……あたしたちが不合格になったら笑えないんですけど？　しかも三人の内、あたしだけ落ちたりなんかしたら……あたしが自殺しちゃうかもですけど？」

別の次元での恐怖を感じる小学六年生の菅野莉央であったが、すぐさま救済措置が告げられる。

「心配ない。君はそんなに弱くない。とゆうか、犯人捜しが目的なので、今回のは特別な君たち三人だけの特待生オーディションだ。すでに飽本支配人に話をつけてある。運営側も事を大きくしたくない姿勢だから、隠密に主犯格の三人を辞めさせるように持っていきたいみたいだ」

「だって主犯格の三人の内の一人はメインのボーカルですよね！？　辞められたら運営のダメージ大きくないですか！？」

「………心配ない。これを言ってしまえば君が調子に乗るので言いたくはなかったのだが……」

「な、なんですか？　あたしが調子に乗るって？　どうゆう意味でしょうか！？」

ムッとした莉央は、ついつい藤堂長官に対して大声で聞き直してしまう。

「ボーカルとやらの前島……敦子だったかな？」

「…………《絆ＧＩＲＬＳ》のボーカルは前島敦美とゆう高校生です」

「そ、そうだ！　その前島敦美を今回の自殺者たち、鬱になった者たちを生んだ主犯格だと確定すれば……」

「確定すれば？」

「………………」

５秒ほど沈黙する特殊任務省の藤堂長官。

「あの……確定すればどうなるんですか？」

「……君がだね………君を………」

「あたしを？」

「ボーカルにしたいらしい………飽本支配人が君のことを千年に一人の美少女だとおっしゃっていたのだ」

まさかの展開に一気に頬が赤くなる莉央。

「………あたしが………嘘ですよね？」

「本当だ。今回は処刑とかけ離れた潜入捜査とゆう特殊な任務だが、飽本支配人がそうおっしゃるなら君をアイドルにするのも良しとするか……と思っている。だが君は残酷処刑島の処刑執行人……殺人経験者だ。調子に乗り過ぎるではないぞ？　アイドルになれても処刑島には呼ばれる運命だからな。………あ！　そう言えば、君の写真と動画を見たときの飽本支配人の反応は凄まじかったよ」

藤堂長官の意外と早口での長い説明を聞き終わった後、間髪入れずに即、問いかける莉央。

「あたしの写真と動画？　………それらはいつの間に撮ったのでしょうか？」

「うむ。君が知らぬ間に。だ……」

「………………それって盗撮ですよね？」

「………盗撮などではない。君が気付いていなかっただけである。ちなみに君の友人である、結城明日香と富田美香も十分魅力あるよ

うにおっしゃって下さっていたぞ。レッスンでタップリ修行したら、仲良く三人揃ってデビュー出来るかも？　だぞ！」
「盗撮とゆう行為も最低ですが……殺人経験者とかゆう相手を傷付けるような言い方………それも止めて頂けますか？」
「うむ。に……任務だから殺人と言うのは失礼だな確かに。取り消す」
　引くに引けない藤堂長官の動揺が手に取るように分かった莉央は、非を認めて謝ることを全く知らない上司をこれ以上責めても仕方がないと思い、話を変える。
「分かりました。ともかく早目にあたしの親友二人に連絡を取り、今年の特待生オーディションを受けさせてもらいますね」
「うむ。必ず受かるのでよろしく頼む！　それと……主犯格のボーカルと残りの部下二人が黒だと確信した場合……処刑は許可出来ないが、いつものように徹底的に痛め付けてもらう。その上でその三人には《絆ＧＩＲＬＳ》を辞めさせるように事を運んでほしい」
「はい。それも分かりました。ボーカルの前島敦美、残り二人、岸峰美波、吹矢こなみの三人とも徹底的にお仕置きしてきます」
「うむ。君たちの大好きな拷問だな。そりゃ破壊力抜群だ！　あの三人も猛反するであろう……。間接的にも二人を殺してるのと同じだからな。しかしくれぐれも黒だと確定してからの話だぞ？　決して殺さぬ程度にな。ではよろしく頼む」

――――――三月二十日。

秋葉ホテルにて、《絆ＧＩＲＬＳ》に特別な三人を追加する《特待生オーディション》が始まる。

決められたレールの上を走る電車の様に、次々と全ての試験をパスしてゆく三人だった。

様子を見に来ていた飽本支配人が、ダンスの指導員に話しかける。

「例の私の推薦した女子小学生の三人はどうでしたか？」

今回の推薦が、国の特殊任務省からのお願いとゆうことは、飽本支配人以外はどの担当スタッフも指導員も知らない。

極秘事項であった。

「一応午前中の半日だけ先月発売された新曲のビデオを見させて、覚えられる範囲でいいから覚えてきてもらって、昼から三人に一人ずつ踊ってもらいました。飽本さんのお申し出により、今回のオーディションは形だけと思い、正直適当に見てました。でも運動神経と素質は天性のものをもってますね！　今月一杯みっちり練習すれば、来月には即デビューも可能かと思いました」

「発声も歌唱も、午前中少し基本だけでもと指導したのですが、三人とも十分合格ラインでしたね。特に菅野莉央は、何か人を惹き付けるような魅力的な声を持っています。彼女は逸材ですね！」

発声の指導員も続けて感心する。
「僅か半日だけの御指導の後の即日試験、お世話になりました。無理を通して頂きありがとうございます。私も彼女の容姿は千年に一人の逸材だと思ってます」
結局合格の報せを聞いた三人は、《絆ＧＩＲＬＳ》の十人と合流して秋葉ホテル屋上にてバーベキュー方式の夕食パーティーに参加した。
三人はまずイジメの主犯格のボーカル、前島敦美を捜す。
岸峰美波と吹矢こなみも同じテーブルを囲んで焼肉を頬張っていた。
ゆっくり近付いてゆく三人。
菅野莉央が前島敦美に声をかける。
「こんばんは。本日早朝からこの秋葉ホテルに入り、昼から行われた特待生オーディションに合格させて頂きました菅野莉央と申します。この二人もあたしも今年１２歳になりました。前島さんに憧れて今回の特待生オーディションを受けました。いつも本当にお綺麗ですよね？」
早速真実を探る第一歩として、機嫌を損ねないようお世辞を盛り込む。

前島敦美。《絆ＧＩＲＬＳ》のセンターポジションでメインボーカル。薄い茶色のショートカットで軽く決めて、目は大きく唇は厚い方で、色っぽいが気は強そうな顔付きをしている。

「結城明日香です。こんばんは」

「富田美香です。こんばんは。前島さんも、岸峰さんも、吹矢さんも大ファンですので、お会い出来て光栄です」

「こんばんは。こちらこそよろしくね。菅野莉央さん……あなた本当に可愛いわね？　同じく富田さんも可愛い系だし、結城さんはどちらかとゆうと綺麗系なのよね……三人はお友達かしら？　特待生ってあまり意味が分からないんだけど？」

「いえ、別々の区から偶然選ばれまして……あたしたち三人は今日の朝に、このホテルで初めて顔を合わせました。結城さんも富田さんもたまたま同い年だったんだよね？」

「そうなんです！　今回の特待生オーディションは小学生が目的だったようですね。三人とも一緒に受かって本当に嬉しいです」

莉央の咄嗟の嘘に、明日香も慌てて合わせた。

「ともかく菅野さん、結城さん、富田さん、今日は本当におめでとう。心から祝福するわ」

『パチパチパチパチパチ………』

『パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ』

ボーカルの前島敦美が莉央たち三人に対し、拍手を始めると、他の九人のメンバーも会話を止めて、一斉に拍手を始めた。

「聞いてると思うけど、特待生のあなたたちが加わると、私たち正規メンバーの三人と入れ替わりになるの。高校生と中学生の子たちから多分、その三人は選ばれるでしょうね……小学生がたくさん欲しいみたいだから運営は……」

莉央の目を見ながら話す前島敦美の目が、一瞬鋭く光ったように見えた。

黙ったまま頷いていると、そのまま途切れることなく話しかけてくる。

「今晩は二階にある大部屋で、私たち十三人が一緒に寝ることになったみたい。さっき飽本さんが教えてくれたんだ。異例よね？　こなみちゃん」

隣で真っ黒のポニーテールが良く似合う小学生の吹矢こなみに問いかける。

「うん。ベッドがない……。畳の上にお布団敷いてアイドルを寝か

せるなんて……なんか悲しいね？　岸峰さんもちょっとムカつかない？」

「何か意味があるのかしら？　運営も無理矢理感が半端ないよね……特待生オーディションを行うだけでも異例なのに、その日にいきなりメンバー全員合流させて、しかもバーベキュー？　その上みんなでお泊まり？　ほんとこんな展開初めてだわ」

茶髪のショートボブで大人っぽい魅力を醸し出している中学生の岸峰美波も、運営への不満をこぼした。

少しポッチャリした顔を持つ一見優しそうな少女である。

大人も含むアルコール類無しのバーベキューも終えて、アイドルたち一行は一階の大浴場に浸かっていた。

「先に身体を洗わないで浸かる人種ってあたしは許せないわ」

湯でサッと身体を流して湯船に浸かりにいく子たちを見ながら莉央がボヤく。

明日香も美香も莉央と同じく先に身体をナイロンタオルで擦っていた。

「そう言えば私たち三人で裸でお風呂入るのって……初めてだよね？」

結城明日香が莉央と美香を交互に見ながら呟く。
莉央を真ん中に挟むように左右に明日香と美香が座っていた。

「そう言えば……あたしは真紀さんたちと四人では藤堂長官から秘境の温泉に招待されたことあったけど。同級生のあたしたちはほんと初めてだね……」

富田美香の小さな小さな胸を見詰めながら菅野莉央が答えた。
小学生にしては一番立派な胸を持っているのは結城明日香だったが、一番小さなペッタンコは富田美香であった。

「莉央ちゃん！　あたしの胸をジッと見ないでくれる？　恥ずかしいじゃん……」

「ちょっと触らせてよその乳首……」

莉央的には美香は同性とはいえかなり可愛いと思っていたため、冗談も少し過ぎてしまった。
真横を向き、両手で美香の乳首をつまむ。

「やっ！？　莉央ちゃん！　やめてよっ！！」

「良いじゃん！　いつか去勢してやった女の両親に会いに行ったとき、あたしの指を美香ちゃんのマンコに突っ込んでやったの覚えてる？」

「あ！　そう言えば……でも処女膜破れない程度で抜いてくれたんだよね……ありがとう」

「次あたしに逆らったらバージン奪っちゃうからね……」

「ひっ……莉央様には決して逆らいませんっ！！」

莉央はニヤけながら美香の陰部へ手を滑らす……少し大陰唇に触れた瞬間、ビックリして椅子から後ろへ仰け反る様に転げ落ちてしまう。

『ステン！』

「痛っ！！」

「あはは！　そんな股開いて転げたらアソコ丸見えだよ？　美香ちゃん」

結城明日香がモロに美香の膣口を見てしまい、吹き出す。

「だ、だって……ほんとに触るんだもん莉央ちゃんってば……」

「あはは！　あたしはたまーに……レズ化しちゃうから気を付けることね！　同い年の真理香の拷問の時も少し抱いてやったら少し濡れちゃってたの……」

「処刑する相手を抱いて濡れちゃったの!?　そんな感情になるときあるんだ……」

思わず意外と言わんばかりに莉央の方を向いて頬を赤くする明日香。

「あの子も可愛かったからなぁ。縦笛マンコから差し込んで子宮抉りながらも何か興奮しちゃってたなぁあたし」

「ゴクリ……それ、あたしには絶対しないでね……莉央ちゃん」

「わ、私も痛いのはイヤ……するのはいいけどされるのは……」

「あはは!　心配しなくても美香ちゃんも明日香ちゃんも殺る側の立場だから。また残酷処刑島で悪い奴等を成敗しちゃおー!」

「そんなこと言いながら今回私も美香ちゃんも呼ばれなかったじゃん?　どうしてなのかな?」

明日香が口を尖らせる。

「今回は囚人四人に対して、初期のメンバー四人で調度良かったから……またそのうち呼ばれるときが来るよ」

笑いながら盛り上がっているところにいきなり激痛が走る。

『ドカッ！　ガンッ！！』

「きゃっ！？　ぶはっ！！」

背後から同い年の吹矢こなみが思いっきり明日香を蹴飛ばした。
勢い余って正面の鏡に顔をぶつけて、豪快に鼻血を流す。

「いたたた……」

「だ、大丈夫！？　明日香ちゃん！？　ちょっと！　何すんのよいきなりっ！？」

貧乳の美香が立ち上がって睨み付ける。
莉央も、椅子に座ったままでジッと睨んでいた。

「え？　歩いてたら何かに足がぶつかったみたい……ごっめーん！
あはははは！　年頃の他の女の子たちもいるんだから変な事しないでくれます？」

嘲るように笑いながら湯船に戻ってゆく小学生のアイドル吹矢こなみ。

「今から始まっちゃったみたいね……あたしたちへのイジメが」

菅野莉央が明日香の背中に手を当て、気遣いながら呟く。

『ザバァッ！！』

『バシャアッ！！』

「きゃあっ！？　冷たいっ！！」

「ひゃっ！！　うわっ！？」

今度は両隣のアイドルから洗面器の水攻撃が始まった。

明日香と美香はモロに食らった。

真ん中の莉央が立ち上がり、まず美香に水をかけた一人に、顔面へサッカーボールキックを食らわせる。

その中学生らしきアイドルの名は畑中奈緒。鼻の骨を一瞬でへし折られ、その場で顔面を両手で押さえて泣き叫ぶ。

鼻血がどくどく出ているが、お構いなしに両手で両足首を掴み、莉央の電気アンマが始まった。

思わず両手を顔から離し、鼻血を撒き散らしながらアソコを蹴り込む莉央の右足首を全力で掴むが、力強い莉央の足は勢いを増してゆく。

『ずぷ……ずぷぷぷ』

莉央の右足の親指が少しずつ、畑中奈緒の膣口へめり込んでゆく。左側の小陰唇まで内側へ巻き込みながらどんどん深くめり込んでいった。

「ほら……早く侵入止めないと処女膜破れちゃうよ？　あたしの足の指って長い方なんだから。うふふ」

「ひいっ！？　やっ！　やだっ！！やめ……」

『バリッ！！』

思いっきり力を込めると一気に莉央の親指は根元までズッポリめり込み、処女膜を突き破った。

「痛ああっ！！　足なんかで私の処女が……イヤアアアッ！！」

『ポンッ……ドカッ！！……バキバキ！』

「残念でした。恥骨も破壊しておいてあげたからね？」

親指を膣から抜いたと思った瞬間、思いっきり右の踵を性器に直撃させる前蹴りを食らわせた。

音を立てて恥骨が粉砕する。
処女喪失よりも、恥骨が砕けた痛みのショックで、気を失って倒れ込む中学生アイドルの畑中奈緒。
股間からは処女膜からの少しの出血が、水に混じって排水口に流れ込む。

逃げようとするもう一人も中学生アイドル、松山樹里。
手を掴んで莉央の前に引っ張り込む美香。

「人に水かけといてそのまま去る気なのですか？　先輩」

「は、離せっ！　私たちにこんなことして……ただで済むと思わないで！　友達の岸峰美波ちゃんに酷い目に合わせてもらうんだからっ－！－！」

水をかけてきたこの二人は、中学生とゆうこともあり、容疑者三人の内の中学生アイドル、岸峰美波の仲間だった。

鼻血を出しながら明日香も反対側の手を掴む。
明日香と美香に両手を押さえられ、そのまま莉央の制裁に入る。
据え置きのシャンプーを手に取り、松山樹里の肛門へ先端を突き刺す。
そのまま容器を思いっきり絞りこんで、シャンプー浣腸の刑が始まった。

「つ、冷たいっ！？　ひいっ！！　何かが入ってくるっ！？　ヒャ

アアアアッ！？」

「髪の毛も綺麗になるし、大腸も綺麗になるかもよ？」

「ひいっ！！　あたしのお尻の穴に、まさかシャンプー！？　やめて……死んじゃう……」

『プチュウウウ……』

「お腹壊すくらいで死にはしないよ……きっと多分」

莉央は冷たくそう言い放つと、一本全てを直腸から注ぎ込み終わった。

肛門からブクブクと泡を吹きながらお腹を押さえて苦しむ松山樹里。

「あなたたち！！　何をやってるの！？　誰がこんなことを！？」

他のアイドルの子が呼んだのか、４０歳のマネージャーの女性が服を着たままで飛び込んできた。

明日香と美香に水をかけた二人は、医務室に運ばれたが、飽本支配人の計らいでお咎めは一切無し。

何事も無かったように残り八人のメンバーと共に大部屋の寝室へ移動する莉央たち三人であった。

医務室に運ばれたその二人は、《絆ＧＩＲＬＳ》をその日をもって脱退させられた。

残り八人も三人に対して完全な無視状態になり、挨拶したときの笑顔は微塵も見られない。

「そりゃこんな事をずっとされ続けてたら普通の女の子なら参っちゃうわなぁ」

「美香ちゃんはまだいいわよ？　私なんて背中蹴られて顔面強打……鼻血ブーなんだから！」

美香の独り言に即突っ込みを入れる明日香を慰める様に低い声で菅野莉央が話し出す。

「吹矢なこみ……同い年と思ってナメてたけど、なかなか強かなやつね……。去勢刑はボスであろう高校生アイドルの前島敦美だけでいいや、と思ってたけど……医務室に運び込まれた二人の友人を持つ中学生の岸峰美波と共に、三人仲良く子宮抉り出してやるわ」

一番奥に陣取っている前島敦美たち三人が向こうからやってきた。座って話している莉央たち三人を見下ろしながらボーカルの前島敦美が口を開いた。

「ちょっとお願いがあるんだけど？」

「…………なんでしょうか？」

静かに睨みながら返事する莉央に、笑みを浮かべながら続ける。

「25日にある劇場公演は、取り敢えず今の十一人全員出場できるらしいんだけど……その公演であなたたち三人はノーパンで踊りなさい」

「え？　意味が分からないんですけど？　あのダンスでは間違いなく観客に股間を見られちゃいますが？」

「見せるのよ。チラチラ躍りの合間で見せてやりながら、公演終了間際に三人揃ってすっ転んで大股開き……観客たちは大喜びだよ！　ファンのハートを鷲掴みにできるよ！？　うふふ」

一度目で辞める気配がなければ、二度も三度も仕掛けてくる。ひつこいのがイジメっ子の特徴であるが、前島敦美も負けてはいない。

続いて中学生アイドルの岸峰美波も続ける。

「そのまま観客の前でオナニーもしてもらおっかな？　そしたら私たちの仲間と認めてやるよ！　ねぇ、なこみちゃん。私の親友の樹里と奈緒をあんな目に逢わせてくれた奴らめ………これからずっといたぶってやるんだから！」

「いやん……敦美さんも美波さんもエッチなんだから……」

頬を赤くする小学生アイドル、吹矢こなみだったが、一番イヤらしそうな顔で莉央たちを見ていた。

「はい。また三人で相談しておきますので……先輩方に喜んで頂けるよう、精一杯頑張ります」

「ふん！　もしできなかったら八人がかりでリンチしてやるから覚悟してなよ？」

「はい。わかりました」

菅野莉央は我慢して素直に返事した。

取り敢えず25日の劇場公演で恥をかかせてから、拷問してやろうと決めた三人は、秋葉ホテルで爆睡タイムに突入した。

――――――――――三月二十五日。○○区某所、《絆GIRLS》の劇場公演が開演された。

覚えた曲をどんどんこなしてゆく莉央たち三人。

昼から始まった公演も夕方を迎え、ついにアンコールのラスト一曲を残すのみとなった。

「本日も劇場公演に来て頂き、ありがとうございます！！　アンコールにお応えしまして、私たちの一番大好きな曲、《絆女子》で締

め括りたいと思いまーす！！」

「ワーワー！！　ワーワー！！」

「どんな時も〜♪　信じ合い〜♪　自分じゃなくて友のために泣くこともあった〜♪　そう全ては私たちの絆〜♪」

「ヒューヒュー！！　いいぞーっ！！　あっちゃーん！！」

「美波ちゃーん！！　最高っ！！」

「なこみちゃーんっ！！　娘になってくれーっ！！」

ファンたちはここぞとばかりに声援を送るが、やはり前島敦美と岸峰美波と吹矢こなみの人気は凄まじいものがあった。

『ドカッ！！』

「痛っ…………」

急に倒れ込む小学生アイドル吹矢なこみ。
その両手は股間を押さえていた。
背後から莉央の強烈な蹴りが、なこみの股間を捉えていた。

『ストーン！！』

「ひゃあっ！！？？」

次は中学生アイドル岸峰美波のスカートとパンツが一気にずり下ろされ、ファンたちの前でまともに陰部を晒してしまう。

あらかじめサッと脱がせる事が出来るように細工されていた衣装だった。

どよめき始める劇場………。

スタッフが飛び出してきて、照明全てが切られた。

「本日お集まりのファンの皆様、誠にありがとうございます。只今、思いがけないトラブルが発生致しましたので、本日の公演は急遽終演とさせて頂きます。お気をつけてお帰り下さいませ。またのご来場を《絆ＧＩＲＬＳ》と共にスタッフ一同、心よりお待ち致しております」

アナウンスも流れてついにアンコールの最中、異例の終演となった。

ここからは飽本支配人の力が凄かった。

他のアイドルたち七人は帰らせて、例の疑惑の三人と、莉央たち三人の、六人だけを秋葉ホテルの地下にあるジムに集めた。

「どうしてこうなるの！？　何で？　美波となこみまで……私を裏切ったのね？」

莉央たちに公演終演した直後、殴りかかった時に徹底的にボコられて、返り討ちに逢った岸峰美波と吹矢なこみは、公演時の仕返しどころか、あっというまに莉央たちの手下になっていた。

「このベンチプレスの台に紐で縛り付けてくれるかな？　ついでに素っ裸にひん剥いてからね……」

菅野莉央の命令に素直に従う美波となこみだった。
スルスルと二人がかりで前島敦美を全裸にする。

「やめろよ！　裏切り者！！　五人相手に私でも敵う訳ないじゃん！！　卑怯だぞお前ら！！」

「ゴメン、前島さん……菅野さんたちの言うこと聞かないと、こなみも美波ちゃんも子宮抉り取られちゃうの。ほんとゴメンね」

「こなみちゃん！？　そんな……」

医療用のメスを取り出しながら莉央が囁く。

「かなり悲惨な目に合わす代わりに、苦痛だけは和らげてあげるから。美香ちゃん、痛み止めと、血止めの注射打ったげて！」

「痛み止めは……いらないんじゃ？　こんな冷たい女子高生なんて、

徹底的に苦しめてやろうよ？　莉央ちゃん」
「私もそう思うよ！　何でこんな奴に痛み止めなんて？」
明日香も不思議に思い、莉央に問いただす。
「いいの……こいつはね……シャニーズＪｒ．とかゆうデビューしたての美男子アイドルの西山紀夫と密かに出来ていてね」
「ええっ！？　あの超美男子の西山紀夫と！？」
密かにファンだった結城明日香が焼き餅を妬きながら立腹する。
「あたし、全く知らない……」
アイドルに興味ない富田美香はノーリアクションだった。
「しかも西山紀夫との間に……妊娠四ヶ月……１２週ね」
「１２週と言えば……もう男女の区別も出来て、外性器も形成されてるころじゃないの？」
「良く知ってるね？　明日香ちゃん。だからかなり悲惨で残酷な目に合ってもらうから、せめて痛みだけは和らげてやろうかな……と

思った訳。言いたいこと分かる？」

薄々気付き始める明日香と美香だった。

「まさか……いつもの様に子宮抉り出しちゃうってことは……赤ちゃん死んじゃうよ？　莉央ちゃん、本気なの？」

「そ、そうよ！　拷問は許されていても、今回は殺人はダメだって言ってたじゃん！？　莉央ちゃん、やめとこ」

「は？　胎児なんてまだ意識も何もないのよ？　自分の存在すら認識出来てない上に、恐怖も痛みでさえも分からないモノなんだけど？」

そう思えばそう思えてきた二人だった。

「確かに……残酷なのは残酷だけど、痛みも恐怖も分からない内に死んじゃったら何も可哀想じゃないよね……美香ちゃん」

「そう……かな？　まあ、莉央ちゃんの決定と、明日香ちゃんの同意があれば、あたしに止める権利はないわよね……はーい。分かりました！　じゃあボーカルの前島あっちゃん……注射の時間ですよぉ……」

『プスリ……プチュウウウ……プス……プチュウウ……』

手際よく二本の注射を打ち終わった富田美香。

「出血多量もなく、痛みも殆ど感じない様にしてあげたから……西山紀夫とかゆう美男子アイドルとの赤ちゃん……産めなくなるけどゴメンね？」

「やっ！　やめてっ！！　来年にはアイドル辞めて西山君との赤ちゃん産んで周りに自慢するつもりなの！　お願いだから産ませて！！」

「ダメだよ。あなたは十人の少女の夢を奪った挙げ句、二人も死に追いやっているの……処刑されないだけマシと思いなさいね？」

非情にも、莉央のメスは極秘で妊娠しているアイドル、ボーカルの前島敦美のおへそに突き刺さり、そのまま腹部を下に向かって切り裂いてゆく………。

「やめて……許して……ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……莉央ちゃん！！　お願い許してええっ！！」

「だーめ。男の子か女の子か楽しみだね？　最後にそれだけは確認させてあげるよ前島あっちゃんさん？　このままクリトリスまで切開してあげたいよ……」

１５ｃｍほど腹部を縦に切り裂いた後、結構ボウボウの陰毛の生え際辺りでメスを止める。
メスを美香に渡すと、すぐさま右手を腹部に突っ込む莉央。

「ギャアアアアッ！？」

「殆ど痛くないくせに大袈裟言わないの！　ばーか」

『ぐちゅちゅ……ニュプニュプ……ぐちち』

異様でイヤらしい卑猥な音を立てながら、莉央の右手は敦美のパックリ切り裂かれた腹部から同じく縦に切り開かれた子宮の内部を捏ね回す。
痛み止めの注射がなければ、苦痛でショック死してもおかしくないレベルだ。
やがてパクパク開閉している腹部から血まみれの白っぽい物体が取り出される。
ヘソの緒を強引に引きちぎった。
何となく人の形をしたその物体をつまみ上げ、両足を開ける。
そこには小さな小さな割れ目が付いていた……。
確かに確認できる……女の子だった。

「い、いやっ！？……私の……赤ちゃん……？　いやあああぁっ！！」

自分の子宮から無理やり抉り出された胎児を見せ付けられ、気が狂ったかの様に泣き叫ぶ前島敦美。

明日香と美香に胎児の両足を持たせて、開脚状態で逆さに吊り下げさせる。

「女の子だったみたいね？　無事に産めていたら男女アイドル同士の娘……さぞや可愛い女の子に成長してたんだろうけどね……。可哀想だけど……。じゃ、胎児のマンコ……切開しまーす♪」

「うそっ！？　や、やめてえええぇっ！！」

『ズ……ズズズズズ……』

胎児の性器らしき小さなワレメにめり込んだメスは、一直線に性器と肛門を切り裂き、頭まで真っ二つにした。

「さすが胎児の女の子！　骨盤も柔らかいし、頭蓋骨もフニャフニャ……あはは。見事に真っ二つになったよ？　脳ミソ殆ど入ってないかも？　アハハ」

「う、うわあああああんっ！！　うわああああああんっ！！」

楽しみにしていた美男子アイドルとの間にできた女の子……無惨にも胎児の内にマンコから真っ二つにされ、たまらず号泣する前島敦美だった。

真っ二つになった女の子の胎児を地面に叩き付け、足で踏み、グリグリと踏み潰す莉央。

原型を止めなくなってしまったその肉塊は、道路で車に擦り潰された動物のミンチのようになってしまっていた。

切り裂かれた敦美のお腹に再度右手を突っ込み、そのまま子宮のあった場所を通りすぎ、膣内を通り、膣口から右手を付き出した。

そのまま上部にある尿道とクリトリスを中指で超高速で擦る。

「あ、あんっ！あんっ！？　ひゃあっ！！　き、気持ちいい……どうしてこんな状態で気持ちいいの？　私……」

「痛みと出血はなくても、気持ち良く感じる神経はそのままにしてあるから……ほら、赤ちゃん殺っちゃったお詫びにイカせてあげるよ。イキなさい！　変態女子高生、前島敦美っ！！」

「あ、あんっ！！　だめっ！　イクっ！！　イクううっ！！」

『プシャアアアッ！！』

「あーあ、こんな切り裂かれたお腹に腕突っ込まれて……マンコから突き出されて……そのままクリトリスオナニーでイッちゃう？哀れ過ぎて笑えないなぁ」

結城明日香は呆れて血と愛液にまみれた人気絶頂アイドルの陰部を眺めていた。

『グボボッ！　ずちゅっ！！』

　マンコから突き出していた右手を切り裂いた腹部から引き抜く莉央。

「消毒して縫合しといてあげるから……あなたは死なせないから安心してね？　もう《絆ＧＩＲＬＳ》ではいられなくなるけどね……」

　縛り付けられているベンチプレスの台に右膝を乗せて、かがみ込む様にして前島敦美の顔へゆっくり莉央の顔を近付けてゆく。
　顔をしかめて唇を噛み締めて、ボロボロ涙を流しているその唇へ、そっとキスをした。

「…………んっ！？」

　不意打ちの唇への感触に思わず目を見開く敦美。

「あたしの顔、可愛いって本気で言ってくれてありがとね。センターのあなたに誉められるなんてスッゴく嬉しかったよ」

「菅野……さん……無茶苦茶可愛い……けど……無茶苦茶……残酷なんだね？　どうして……大事な子宮を奪っちゃうの？　意味ある

の？」

「意味？　無いよ。あたし、エッチで残酷だから。男だろうが女だろうがチンポやマンコやアナルをズタズタにするのがダーイ好きなんだっ。去勢が趣味なのでーす。でも胎児はいきすぎたかな？　てへっ。許してね……あっちゃん……」

未だにヒクヒク軽く下半身が痙攣している敦美。

縫合が無事に終わり、さぁ解放かとおもった矢先……。

肛門へ白く長い指が突き刺さる。

富田美香の人差し指だった。

「こんなピンク色した綺麗な肛門見せられたらあたしも……じっとしてられない！　ゴメンね！　腸液タップリ扱き出してあげるから……あは♪」

『ぬぽぬぽ……ぐちゅぐちゅ……くちゅちゅちゅちゅちゅっ！！』

痙攣がおさまったと思いきや、アナルへの強烈な指での掻き回し責め……。

「ぴぎいいいっ！！　お尻の穴……き、気持ちいい……あ、あん……」

「美香様、アナルでイカせて下さいっ！　って言えっ！！」

「あはあっ！！　み、美香様っ、敦美のアナル掻き回してイカせて下さいっ！！　あっはああっ！！」

「ほら、イケイケ！！　女子高生の癖に女子小学生なんかにクリトリス擦られてケツ穴掘られて二度もイカされるなんて……笑っちゃうね！」

「い、イクっ！！　イックウウウッ！！　美香様あああっ！！　あひいいいいいっ！！」

『ガクガク……ビクンビクン……プシャー！！』

腹部を切開され、子宮と共に胎児を抉り出され、クリトリスオナニーでイカされ、更にアナルでイカされ……白目を剥いて痙攣しながら潮を噴く女子高生アイドルでありボーカルの前島敦美。

女子高生にしてはかなりの豊胸を二つとも両手で鷲掴みにしてグリグリと揉みしごきながら莉央が再び話しかけた。

「美香ちゃんもエッチだね相変わらず……。さぁ、もういつまでもオシッコ漏らしたり潮を噴いたりしてないで！　あのね。もし次ココを舐めてくれる彼氏が出来たら、付き合えても子供は諦めて！って、きちんと言うのよ？　分かった？」

「……はい、分かりました……ぐす……ぐす」

「こらこら！　泣くのは勝手だけど、潮を噴くなと言ってるでしょ

？　もしあたしの脚にかかったりしたら、小陰唇やクリトリスや膣をバラバラに解剖してやるんだから。そして肛門も抉り取ってから尿道引き摺り出してやるからね？」

結城明日香も続ける。

「あんたがスッゴく可愛いと思った菅野莉央ちゃんに色々責められて良かったねぇ？　子宮と赤ちゃんだけで済んだのは莉央ちゃんの情けだから感謝しなさいよ？　うふふ。いつもなら直腸、大腸とかまで抉り取られてるわよ？　何なら私がそこまでやってあげようか？」

「ひっ……勘弁してっ！！　うわあぁあんっ！！　わあぁあああんっ！！」

更に激しく号泣して、ただただ泣き喚くしかできなくなってしまった前島敦美だった。

一部始終の拷問を見ていた中学生アイドル、岸峰美波と、小学生アイドルの吹矢こなみは、共に小便を漏らし、しゃがみこんでシクシク泣き続けていた……。

「こなみ！　美波！　オシッコ漏らしてる場合じゃないでしょ？今すぐパンツ脱いで両脚開いてあたしたちにマンコ見せるの！　早く！！」

富田美香が、二人のアイドルに強く命令する。

「は、はいっ！！」

「ひっ……はいっ！！」

衣装のヒラヒラスカートと、小便でビショビショになったパンツを足首まで完全に脱ぎ終わると、ゆっくり両脚を開いてゆく二人……。

「私、中身が見てみたい」

結城明日香が目を細めながら冷たく言い放つ。

「えっ？　中身って……何ですか？」

鼻水をすすりながら涙声で問いかける小学生アイドルの吹矢こなみ。

富田美香が歩みよって、思いっきり頬を右手で平手打ちした。

『パァンッ！！』

「ひぎゃっ！？」

「両手でパックリと腐れマンコ開けて奥まで見せろっつってんだよっ！？」

「美香ちゃん……スケバンみたいになってるよ？　はは……」

「私も莉央ちゃんと同じ事思った……言葉遣い悪すぎ～」

「え？　そうかな？　コイツらが頭悪いからついつい。あはは」

グスグス泣きながら二人は大股開きの体制で、更に両手の指で性器を限界まで全開に開いてゆく……。

『くぱぁ～』

『ぱっくん……』

しばらく二人の性器内部をジィーっと見つめる莉央たち三人。
ピンク色で艶々の女性器を見ていると、莉央は頬が赤くなってきていた。

「ほら、次はお尻の穴……思いっきり開けて直腸まで見せろ」

美香が更に催促する。

子宮を抉り取られるかもしれない恐怖と戦いながら、言われるがままに恥部を開いて見せ続けるこなみと美波だった。

「もう三人とも二度と姿を見せないでね！　もし辞めなかったらあんたら二人も白目剥いて潮から泡から吹いてる女と同じ目に逢わせてやるからね？　いい？」

開脚したまま陰部と肛門を交互に指でパクパク開閉させる惨めな小学生と中学生を、腕組みして見下ろしながら話しかける菅野莉央。

「はい……ぐす……ぐす」

「はい。分かりました……アイドル引退して二度と貴女方の前にも芸能界にも現れませんから……許して下さい……」

「分かった……じゃあもう二人とも汚いマンコしまっていいから」

莉央に許しを得た二人は泣きながらゆっくりパンツとヒラヒラスカートを履いてゆく。

「この淫乱女子高生アイドルの前島敦美も叩き起こして連れて帰ってね？　じゃあさようなら」

莉央に続いて明日香と美香も手を振りながら笑顔で見送る。

「バイバーイ」

「もう他人を苛めちゃダメだよーっ」

岸峰美波と吹矢なこみは、子宮と胎児を抉り取られて、縫合された惨めな腹部をした前島敦美を両側から抱えながら、フラフラしながら地下のジムから去っていった………。

――――――数日後。

次の公演に向けてレッスンする菅野莉央たち三人と、残ったメンバー五人との合計八人での新ユニットが組まれた。

八人に因んで《末広がりＧＩＲＬＳ》＝《末広がーるズ》………飽本支配人が名付けた。

最終決定グループ名　　《スエ広ＧＩＲＬＳ》

カタカナと漢字と英語の混じった上に、洒落の入ったネーミングは、八人とも大いに気に入っていた。

三人が前列に並び、五人は後列、二列に別れての編成だった。ど真ん中のセンター、メインボーカルは勿論菅野莉央、１２歳だった。

気合い入れて叫ぶ莉央。

「明日香ちゃん、美香ちゃん、こうなったらアイドル界の天下獲ってやろーねっ！！」

アイドルデビュー？　イジメっ子を撃退せよ（後書き）

ついにイジメっ子の制裁に成功して、アイドルデビューを果たした莉央たち三人の女子小学生。
勉強と、義務教育中のアイドル活動と、残酷処刑島での死刑執行……三つを同時にこなしていけるものかどうか…………。

桜満開マラソン訓練（前書き）

《絆ＧＩＲＬＳ》での内密侵入捜査にて、三人のイジメ主犯メンバーを拷問、お仕置きに成功した菅野莉央たち三人。
とある田舎の村でのマラソン中にトラブル発生？

桜満開マラソン訓練

桜の花が満開で、雲ひとつない運動日和の晴天の下、川沿いの土手を走っている少女たちがいた。

センターでボーカルの前島敦美と、イジメ仲間の岸峰美波、吹矢こなみが脱退したため、《絆ＧＩＲＬＳ》から《スエ広ＧＩＲＬＳ》にグループ名を変えて生まれかわったアイドルグループは、国の北方に位置する過疎地の自然豊かな村に泊まりで訓練に来ていた。

訓練と言っても歌やダンスの系統ではなく、走るのみ。ただひたすら走るために月に一度、一泊二日で強制参加となる基礎体力を付けるための飽本支配人が考案して実施されている運営の訓練である。

「アイドルはアイドルで大変だね。こんなこと体力ないヤツにだけやらせたらいいのに」

さすがの菅野莉央も２０㎞マラソンは少し疲れる。

左右を走る二人に愚痴をこぼす。

「はぁ、はぁ、はぁ。ほんとだよ……もう四番手以降の子が影も形も見えないんだけど？　まさか歩いてるんじゃないよね？　あの五人……」

富田美香が息を切らしながら振り向いて苦しそうに声を出す。

「はぁ、はぁ、はぁ。あぁ苦しい………………私たちが早すぎるだけだと思うよ。でも高校生三人と中学生二人にしては小学生の私たちに付いて来れないなんて……体力無さすぎだわ。ってゆうか莉央ちゃん、息も上がってないけど凄い持久力だね？」

「あの橋まで走ったら１０㎞かぁ。もう折り返し地点だね。そこで休憩してから帰りは少し歩こうか」

「やったぁ！　このペースで２０㎞完走はあたしには無理だわ……と弱気になってた所だよ」

折り返し地点の浅田橋に着く。

これより北は山になり、川の幅が極端に小さくなり、道沿いを歩けなくなっていたため、直線の土手の散歩コースとしては行き止まりだった。

Ｔ字に交わる県道を西か東に進むのみとなる。

一級河川である清流の浅田川を見ながら三人は腰を下ろした。

川の畔に並ぶ桜の花びらが、川面を斑のピンクに彩って、心が洗われる気分だった。

清流の清らかな音に混じって、その景色に似合わない不愉快な音が聞こえてくる。

音ではなく、声だと分かるまでに数秒必要だった。

振り向く三人の後ろに立って話し掛けてきている男が二人。

運営の関係者には到底見えない、一見ヤクザにも思える風貌をし

たその二人は、どうやら莉央たち三人をナンパしているらしかった。

「ハハハ！　やっと振り向いてくれたねお嬢ちゃんたち！」

茶髪で無意味に腰までロン毛の一人がニヤニヤしながら話してきた。

ボロボロでダブダブのジーパンにドクロのプリントがされた長袖Tシャツ。

見るからに田舎のヤンキーである。

「ほんとだよ！　このまま聞こえないふりして無視され続けてたら俺ら君たちをさらっちゃってたかもね。へへへ。あれ？　この子たちって、どっかで見たことあるような……」

極端に背の小さいもう一人は、モヒカン頭で僅かに縦に残した頭髪は濃い紫色に染められていた。

上下ジャージ姿である。

「うわぁ……だっさ」

思わず富田美香が正直に口に出してしまった。

「なっ、何だとっ!?　そんなこと思ってても言っちゃだめだろー

が！？　おおっ！？」

短気そうなモヒカン頭の男が、細く剃った眉毛を八の字にしながら凄んでくる。

「…………中学生くらいかな？　お兄さんたち。あたしたちは今仕事中なの。ナンパするなら他を当たってね？」

「何が仕事だよ？　小学生のガキのお散歩だろうが！？」

莉央は冷静に返事をするが、美香の右手首を掴んで引っ張り回しながら怒鳴り散らし始めた。

「ちょっと！　暴力振るうなら警察呼ぶわよ？　今すぐ手を離しなさい！！」

美香を心配した結城明日香が本気で叫んだ。

「まあまあ、モヒカン！　その辺で止めてやってくれ。相手は小学生の女の子だぞ？　俺たちと遊ばないと決まった訳じゃないんだからな」

「ちっ。分かったよチャーロン……次ダサいとかほざいたらワイらが犯してから桜の木の下に埋めてやるからな！？」

これはキツかった。

最初に笑うのを我慢していた菅野莉央と結城明日香も、これには堪えきれなかった………。

ヤンキーたちから後ろを向いて、しゃがみ込み、プルプルと背中を震わせている。

「え？？　莉央ちゃん？　明日香ちゃん？　震えてるの？　大丈夫？　まさかこんな奴らにビビったんじゃ……」

笑いを堪えているとは思わなかった美香が、二人を心配して声をかけた。

「お、おい！　どうしたんだ大丈夫かお前ら？」

茶髪のロン毛が背後から近付き、問いかける。

その横で逆八の字……Ｖ型に眉毛を戻したモヒカン頭の男も大丈夫かと言わんばかりに首を傾げて莉央と明日香の背中を見ている。

「アハハハハハ！！」

「キャハハハハハハ！！」

ついに二人は限界を迎え、転げ回りながら大爆笑している。

「わ、笑ってた！？　何を文字通りに笑い転げてるの？　莉央ちゃん、明日香ちゃん？」

美香だけは未だに真顔だった。

意味が分からないままの、凄まじく顔の怖い中学生ヤンキーの二人は口を半分開けて呆気に取られている。

「ひぃ、もう勘弁して…………モ、モヒカンとチャーロンって……アハハハハハ！！」

普段三人の中では一番大人っぽい明日香も、莉央以上に笑い転げ回って涙まで流していた。

「チャーロンって……茶髪でロン毛から取ってるの？　そ、そうだよね？　絶対に！　アハハハハハ！！　１０㎞走ってきたより、こっちの方がお腹が痛いっ！！　ひぃぃ……」

「こいつら……完璧にナメてやがるぜ？　チャーロン」

「そうだな。モヒカンはツインテールのガキを犯るか？　俺は背も胸もデカい茶髪のポニーテールの方を犯る」

ようやく笑い地獄から解放された莉央と明日香が、涙を拭いながら立ち上がった。

「あの、ほんとにどうでもいいことなんだけど……一つ質問していいかな？　お兄さんたち……」

「何だクソガキ？」

「今この子たち二人を犯る……とか言ってたけど、あたしは誰が犯ってくれるのかな？　まさかの眼中にない……とかじゃあないよね？」

菅野莉央からの不意を突かれた質問に、一瞬膝がガクッとなるチャーロンだったが、体勢を整えてニヤけながら答えた。

「心配するな！　お前は一番可愛いから最後に俺が犯してやるのさ！　ハハハ」

「チャーロン！　ズルいぞ!?　ワイには一人だけか!?」

「ケツ穴残しといてやるよ？　後ろの方が締まりがいいから大好きと言ってたやないかモヒカン」

「ぐへへ……黒髪ロングのカワイコちゃんのアナル……想像しただけで勃ってきたぜぃ!!　ほんとアイドルみたいなツラしてんなコイツ……早く誘拐して監禁しちゃおーぜ？　チャーロン」

「俺の自宅には両親がいるが、何をしても見て見ぬ振りだからな！　監禁して犯しまくってやるから覚悟しとけよ？　へへへ」

「チャーロンの親は心広いな！　お陰でワイも監禁ホテルがわりに重宝してるぜっ！！　がははは」

チャーロンの手を掴み、ヤンキーたちが来た方へ引っ張ってゆく莉央。

明日香と美香もモヒカンの両手を掴み、真ん中に挟んで連れてゆく。

「お、おい？　何をしている？」

「アイドルみたいな顔したあたしを犯してくれるんでしょ？　一時間くらいしたら友達たちが来ちゃうからそんなに長居は出来ないけど……だから早く家に行こっ」

「モヒカンも一時間しか無いんだから急がなきゃ！　ね？」

美香もモヒカンに話しかけながら微笑んだ。

「な、何だコイツら……頭おかしいのかな？　まさか何か病気持ってるとか……大丈夫なのかチャーロン？」

「俺にそんなこと聞かれても……どう見ても健全な女子小学生にしか見えないぜ？　ただのオマセなガキどもだろ……早く行こうぜ！！　泣き叫ばれるより都合がいいじゃねぇか」

「それもそうだな！　ガハハ！！　ツインテール♪　ツインテール♪っと！　ツインテール引っ張り回しながらバックで前も後ろもグチャグチャに犯してやるぜぃ！」

しばらく山の麓を縫うように歩いていくと、川が見えなくなり、段々畑が見えてきた。
ウグイスの鳴き声が心地よい空気の綺麗な田舎の村だった。
そこにはそぐわないヤンキーが二人……小学生の女の子……アイドルたちを監禁しようとしていた。

「あたしだけ選ばれないと思った時はゾッとしたよ……一番可愛いから最後に取っておいてくれるなんて……ありがとうね？　チャーロン」

「チャーロンって呼び捨てにするな！　どう見ても俺たちが歳上だぞ？　最近のガキは敬語も使えねぇのか全く……」

「使う価値もないでしょ……」

「あ？　何か言ったか？」

「別に……。そう言えばこれが初めてじゃないみたいに言ってたけど……これまでに何人もの女の人を部屋に連れ込んで強姦とかしてたんだ？」

「あぁ。田舎だしやることないしな。若いやつらは殆ど村を出ちまって、残ってる女たちは３０代や４０代のオバハンばかりだけどな。中学生の俺たちに犯されてヒイヒイ泣いて許しをこうてたな」

「警察に言われなかったの？」

ウグイスの声を耳にして、歩きながらしばらく莉央とチャーロンの会話が続く。

「言ったら村のみんなにバレて両親とかにバレるのが恥ずかしいんだろ？　別に言ったら殺すとか脅しちゃいないぜ？」

「泣き寝入り……ってやつね。ほんと女の敵だわコイツら……」

後ろを歩いている美香がついつい笑顔を崩してしまう。

「女の敵だと！？　あいつらはワイらに犯されて泣きながらも濡らしてたんだぜっ！？　感じてたんだよ！！　気持ちいいことしてやっただけなんだわ！　分かったかツインテールちゃん？」

「濡れてたら同意があるってことなのね？　分かりました」

「ふん！　ちぎれるほどその可愛いツインテール引っ張り回してやるからな絶対」

「はいはい。何度も言わなくても分かってるわよオチビのモヒカンさん……」

「ああっ！？　んだとゴラアッ！？」

そうこう言っている内に、チャーロンの自宅に辿り着く五人。
家の前の花に水をやりながら母親らしき４０歳くらいの暗そうな女性が軽く頭を下げた。

莉央たち三人も頭を下げて通りすぎる。

玄関を入ったすぐに階段があった。
先に二階に上がってゆく莉央たち三人。

「こんな可愛い小学生の女の子を犯れるなんて……。しかも前の女みたいに中年じゃないし小学生！　二人で一人犯すんじゃなくて、一人に一人……プラス０．５人かな？　ハハハ！」

「その０．５はワイはアナルだけ！　お前はマンコだけってか？ダハハハハ！！」

今から起こる先を想像して、下品な笑い声を響かせるチャーロンとモヒカンだった。

運営から支給された短パンとＴシャツとゆう軽装だったため、その気になれば裸にしやすい服装だった。

「意外と綺麗な部屋じゃん？　原付に乗って写真撮ってるんだ。中学生が乗っちゃだめだよ？　……さてと。これから何しよっか？」

体育座りで問いかける莉央。
明日香と美香は、周りの本や模型とかを物色中。

「おい、勝手に俺の部屋のモノをいじるな！　…………そうだな。取り敢えずギンギンになった俺のチンポを見てもらおうか？」

一気にジーパンを脱ぎ、ブリーフも脱ぎ捨て、中学生にしてはまあまあ大きなサイズである勃起時１０ｃｍほどのペニスを小学六年生のアイドル三人の眼前に晒すチャーロン。

「ヒヒッ！　何かチンポを女に見せる瞬間も変に興奮するよなっ」

体育座りで拍手する三人。

「露出狂なんだね。おお！　ギンギンじゃん」

「でかっ！ヒューヒュー」

「ついでに上も脱いでぇっ！！　手間が省けるから」

小学生の女の子ならキャーキャー喚きながら頬を真っ赤にすると想像して興奮していたヤンキーたちは一瞬怯んだ。

「お前ら反応が何かおかしいぞ……？　脱がす手間が省ける？　どうゆう意味だ？」

モヒカンも隣で既にジャージの上下を脱いで素っ裸になっていたが、少し小さく萎む仮性包茎のペニス。

「ふっ、まぁいいぜ！　ホラ、茶髪ポニーテール！　早く短パンを脱いで後ろを向け！　いきなりバックで挿れてやる」

「あれ~？　私の大きな胸が見えなくなるのにバックでするの？残念だね」

続いてモヒカンも叫ぶ。

「ツインテールちゃん！　じゃあ短パンとパンツ脱ごうかぁ？　胸ペッタンコだから上は脱がなくていいぜ？　早く下を脱いでケツを突き上げろ！　ダブルでバックタイム始まりだぁっ！！　ガハハハハ！！」

なかなか自分で脱がない女子小学生たちを、無理矢理脱がせようと素っ裸で歩みよってくる二人……。
脱がす手間が省けた……三人の残酷ショーの開演ベルが鳴る。
中学生くらいなら男でも負けるはずはない莉央が一気に畳み掛ける。
『ドカドカッ！！　バキバキ！！　バコッ！！　ズボ！！』
連打の拳と脚蹴りを二人に浴びせると、畳の上に折れ込む二人のヤンキー。
「いたた……え？　あれ？　鼻血が……」
「いってえーっ！？　ぐわあああっ！！」
鼻の骨を折られたチャーロンと、目潰しで片目に指が入ったモヒカンは何が起こったか分からないまま痛みに堪えている。
すかさず持ち歩いている血止めと体が思うように動かなくなる麻酔注射を打つ富田美香。
「な、何を打ちやがった？　ってゆうか今俺たちがお前に殴られた？」
「死なないおまじないの薬。そうか……莉央ちゃんは動きが速すぎ

るからまともに見えなかったんだね……そうだよ。二人とも莉央ちゃんに殴られて蹴られて目潰しまで食らってましたよ？」

右目を押さえながらうめいているモヒカンにも結城明日香が二本の注射を打ち終わる。

「莉央ちゃん、このモヒカンあたしに犯らせてくれるかな？　人の胸の事小さいとか言ってくれちゃったから。しかもツインテール引っ張り回してバックで犯してやる、とかも言ってたから逆にモヒカン頭を掴んで引っ張り回してバックで犯してやりたいの。いい？」

「いいよ。あたしと明日香ちゃんはチャーロンさんとやらを責めるから……先に言っておくけど殺すのは絶対ダメだよ。でも去勢は今までの被害者の事もあるし、玉と竿は両方取る完全去勢でいくからね」

「直腸引き抜いてやってもいいかな？」

「いいよ。肛門から直腸から破壊するなり大腸ごと引きずり出すなり好きにして。医療用メスも縫合する糸も持ってきてるから手術で命は救えるから。あたし、人工肛門の手術できちゃうんだ。おヘソの隣にでもアナル作っておいてやるから安心してヤっちゃって♪」

「どこに持ってたの？　あの軽装で…………あ！　そこは突っ込んじゃダメなのかな莉央ちゃん？」

「そりゃそうだよ。細かいことは突っ込まないで！　何でもかんでもポケットに入ってると思っていてくれたら有り難いな。あはは。

漫画にある《ドザえもん》の、五次元ポケットみたいなもんだよ。うふふ」

しばらく三人による拘束タイムとなり、手際よくチャーロンはベッドに縛り付け、モヒカンは小さな四角のテーブルにうつ伏せに縛り付けられた。

バックから責める為にである。

「止めろ！！　何をする気だ！？　ここは俺の部屋だぞ！？」

「ワイらだけ素っ裸で女どもが脱がないなんて……ズルいぞ！？お前らも脱げよ！？」

立場が全く理解できていない、かなりすっとんきょうな事を言うモヒカンだった。

「ねぇねぇモヒカン……お尻の穴に……女の子に指突っ込まれたことってある？」

真っ白な可愛い人差し指をピンと立てて、モヒカンに見せながら笑顔で問いかける美香。

「なっ、無いに決まってるだろ！！　アホかお前は！！　女は入れられる方で、入れる方じゃねぇんだわ！！」

「あんたは今からこの美香様にケツマンコのバージン奪われるんだわ♡」

『つぷ……』

美香は笑顔を絶やさずに第一関節まで人差し指を挿入する。

「うわあああっ！？　や、やめろ！？　何しやがるんだっ！？」

「ん？　モヒカン君のお尻の穴に指突っ込んでるだけだよ？」

『ズブブブブ……ズボォッ！！』

「はううっ！！？？」

真ん中まではゆっくり……あとは一気にモヒカンの肛門へ根元まで突っ込まれた美香の人差し指。
ゆっくり入れたり抜いたりを繰り返し始める。

「うっ、うわっ、はおっ、んぐっ！　や、やめっ……いたっ！」

「よく締まってるね～？　さすがヤンキーとはいえ中学生男子だわ。あたしが持ってきたペニスバンドの極太張り形がこれじゃあ入らないよ？　しばらくほぐしてあげるからね？　うふふ」

『ズプズプ……ずぷずぷ……ズプズプ……ずぷずぷ……』

「止めろ！！　そんな汚い所に指差し込むなんて……指にウンコが付いちゃうぞ？　小学生のガキがそんなことを……はうっ！　うはっ！？　熱いっ！　何かケツ穴が熱くなってきた……やめ……いたっ－！－！」

「便なんて後で石鹸つけてキレイに洗うから心配ないよ。直腸のツルツルでヌチュヌチュした感触が何かヤラしくて何とも言えないのよね……癖になりそうだよ♡」

富田美香のアナル調教が続いてる内に、チャーロンは仰向けに縛り付けられたベットの上で頬を真っ赤にしていた。

ベッドの左右に座り込んだ莉央と明日香がジィ～っとペニスを眺めていたからだ。

「お、おい、何かモヒカン……凄いことされてるけど？　俺はチンポを見るだけで勘弁してくれるのか？　おいって！」

「さぁどうなるんだろ？　どうなると思う？」

「女性の敵にはピッタリのお仕置きをしてあげるから期待しててねチャーロン……さん」

体が動かせない上に縛り付けられた状態ではもうどうあがいてもこの三人には勝てないと悟ったチャーロンは、事を穏便に運ぼうと画策する。

「お仕置きだと？？　おい、莉央ちゃんってゆうんだろ……あんた。そんなアイドルみたいに可愛い顔してチンポを見られたら俺は凄く恥ずかしいんだけど……もうほどいてもらえるかな？」

「だってアイドルだもん」

「あ？　バカにしてん……いや、確かにアイドルほど可愛いよな莉央ちゃんは」

「だからアイドルだって言っててんじゃん……田舎に住んでるんだからもっとテレビを見てほしいもんだわほんと……。ね？　明日香ちゃん」

「そうそう。新しいボーカル込みで、数人メンバーが入れ替わってからユニット名が変わった《スエ広ＧＩＲＬＳ》って知らないの？」

「あ？　ん？　そう言えば……どこかで見たことあるような面だと……あっ！！　ほんとだっ！！　まだ数回しか見たことないけど確かにカンリオにトミカーに……後一人何だっけ？　嘘だろ……テレビで見たより顔が小さく見えるんだけどなぁ？」

「劇場公演で最近ファンの一部の人が言ってる呼び方だ！　あの公演のテレビ放送たまたま見たんだね多分。何で私の名前だけ知らないんだバーカ！　テレビで数回見ただけでファンでもないなら仕方ないか……派手な衣装着てるし薄くメイクもしてるからね～。でもこれからファンになって完璧に私たちの名前も顔も覚えてね♡」

「そんな小学生メインのアイドルたちに拷問されて良い思い出になりそうだね？　チャーロンさん。あはは」

『ボコォッ！！』

そう言いながら思いっきりお腹を殴る明日香。

「ぶはあっ！！？？」

「ぼちぼち始めようか……あと半時間もしたら流石の鈍足の先輩たちでも折り返し地点の橋まで来ちゃうからね。姿消しちゃってたのがバレたら飽本さんに怒られちゃう」

「痛い……ほんと痛い……冗談はやめてくれ……早くほどいてくれよ？　頼むよ？　アイドルなんだろ？　こんなことしちゃ首になっちゃうぞ？」

「余計なお世話だよ。ちょっと両足開きぎみにしてもらうね？　足の裏を天井の方向けて……体は仰向けで寝ていて貰っていいから……そうそう。足だけ開いて上に吊り上げるように縛り直すね？　よいしょ。よいしょ。はい、ＯＫ！　明日香ちゃんどうぞ！　これで取り敢えず１００回いっちゃお」

「うん。さぁおっ始めるわよチャーロン。それっ！！」

『バシッ！！』

「ギャアッ！？」

小さなトゲトゲが沢山付いているイバラの鞭だった。

新しく拷問用に買っておいた道具である。

一度打っただけでも点々と血が滲み、回数を重ねていけば本体も皮なので強烈な痛みがある。

回数によっては皮膚は剥がれて身が露出するほどの破壊力があるものだった。

「いってえええええっ！？　やめろやめろやめ……」

「その引き締まったお尻の肉ズタボロにしてやるんだからっ。えいっ！」

『バチイイインッ！！』

「えっぎゃあああああ！！」

明日香のイバラの鞭スパンキングが、ひたすら続いて絶叫が木霊する中、隣の富田美香によるアナル調教が終わった。

「よし、まだまだ肛門括約筋が固いけどもういっか……時間ないから挿れちゃうね？」

幅は５ｃｍ、長さは２０ｃｍある超極太張り形のペニスバンド……先端がモヒカンの肛門にゆっくり当たる。

『ぴたっ』

「ひっ！？　冷たい？　指の次は何を……？　はぁ。はぁ。もうやめてくれ……これ以上恥ずかしいことやめてくれ……まさかアイドルにこんなことされるなんて……これからファンになるから許してくれ……ツインテールのカワイコちゃんよぉ……」

「何がカワイコちゃんよ？　莉央ちゃんが一番可愛いと思ってるくせに……口が上手なんだね？　スムーズに出し入れしたいから特別に締まりのいい肛門にローション塗っといてあげるよ。痛かったら言ってね？　いくよぉ……それっ」

『めりめり……すぶっ！！　バリバリッ！』

先端がモヒカンの肛門に１ｃｍほどめり込んだ。
幅が５ｃｍもあるので、一瞬で肛門括約筋が裂けて激しく血が噴き出すが、血止めの注射のお陰で一瞬だけの血飛沫だった。

「ぐはあっ！？　痛いいっ！！」

今からはモヒカンの１４年の人生の中で最大の激痛を体験することとなる。

「あらら……肛門のヒダヒダが二本ほど裂けちゃったよ？　これなら全部入りそうだわ。一気に根元までぶち込んであげるからショッ

クでイカないでね？　それとも逝くかな？あは。ともかくいくよぉ？　それっ！！」

『ズボオオオオッ！！　バリバリ……………』

「ぐわあああああっ！！！！」

巨大なペニスの形をした張り形が直腸奥まで突き刺さり、Ｓ状結腸までも突き歪めている。
殆どの肛門のヒダヒダは張り裂け、もはやガバガバアナルになってしまった。
耳を塞ぎたくなるほどの絶叫が下の階に居る両親の耳にも届いた。

「あなた……また上であの子たち、強姦とかしてるんじゃ？」

「もうほっておけよ。どうせ警察にも言われないんだからあいつらの好きにさせといてやれ」

「下手に注意すると金属バットで殴ってくるからねあの子……女性には気の毒だけど……今回の女性は小学生っぽかったけど大丈夫かな？」

「何だと！？　それはまずいだろ……ガキは親に先生にチクる恐れがあるからな……ちょっと上に言って謝って帰してあげよう。いくぞ」

「はい、あなた……止めにいきましょう」

　チャーロンの両親が二階に上がってゆくが、その頃既に手遅れの状態になっているヤンキーの二人だった。

『パンパンパンパン！！』

「うぎっ！　あはっ！ぐえっ！　ぎひっ！」

　バックで美香に突き上げられながら、突く度にいちいち声をあげるモヒカンだった。

「よっぽど痛いのか知らないけどね。いちいちうるさいんだよモヒカン！　ローション使ってやってるのにこんなにケツマンコ裂けちゃって……ぱくぱく開いてクチュクチュとヤラしい音立てて……血と腸液でグショグショだよ？　あは♡」

「ひぎっ！　や、止めて…………痛い」

「止めないよ。……あっ！　そう言えば確かモヒカンってば、女の人がアソコ濡れてたら同意があるとか言ってたよね？　腸液ドロドロ出してアナル濡らしてるあんたも同意がある！　と言うことだよね？……あれ？　うんちが付いてきた……殺すぞこらっ！　ごめんなさいは？　モヒカン！！」

　モヒカン頭の頭髪を、後方へガンガン激しく引っ張り回しながら美香が暴言を吐く。

「痛いいっ！　やめてええっ！！　ごめんなさい！　ごめんなさいいいっ！！　うわあああんっ！！　わああああんっ！！」

余りの痛さにとうとう泣き出してしまった男子中学生のモヒカンだった。

「怖っ。………美香ちゃんって、たまにスケバン化しちゃう時あるよね？　莉央ちゃん」

「うん。急に言葉遣い怖くなる時あるよね。可愛い顔してるけど芯はドSなんだろうね……ヤンキーと言っても中学生なんて所詮まだ子供だから泣いちゃうかやっぱ……」

明日香の問いに莉央も同意する。

「泣いても許さない。この腐れケツマンコめ！　ボロボロになった直腸とS状結腸は引きずり出してあげるんだから。わかったか？チビモヒカンッ！　おらっ！？」

「わあぁーん！　わあぁーん！　許して！　やめてくれ……」

『ぽんっ！　………ぶししゅしゅしゅううゅっ！！』

「ぐわあっ！！　ひいい……」

ペニスバンドの超極太張り形を一気に引き抜くと、裂けた肛門から血の塊のような血飛沫が吐き出された。

「じゃあモヒカン……今からあたしが肛門くり抜いてあげるからね？　人生最期のうんちは今朝に済ませたかな？」

「や、やめてくれ！　……やめて……ください美香……様。お願いします……」

「今更様付けしてもだ〜めだよっ。あたしに偉そうに言った事を後悔させてやるんだから。肛門括約筋部分だけだから……黒い花弁部分だけま〜るくキレイにくり抜いてあげるね♡」

「ひいっ……そんなことされたら……クソが垂れ流しになっちゃう……ひ、人殺しっ」

「うるさい！　ほら、ケツの穴の力を抜くのっ！　そう、いいわよぉ〜……えいっ」

『ズッ……ズズズズ……ぐりっ。ブチッ！』

「んぎゃあああっ！！」

莉央から借りた医療用メスで肛門を丸くくりぬき、肛門部分を切除する美香。

「あは♡　切り取ってみると結構肉厚あるんだね肛門括約筋って！　プニプニしてる……やらしいなぁ。真ん中の穴に指を通しちゃえ♡」

しばらく切り取った肛門括約筋部分で遊んでいると、モヒカンは激痛に堪えきれず、白目を剥いてヨダレを垂れ流して意識を失っていた。

「やっぱり切り取っちゃったら締まりが全くないわね。つまんない……。あんた血止めの注射を打ってなければアナルからの出血多量で死んでたよ絶対！　良かったねえ？　死刑じゃなくて……ちょっと臭いけどあんたのコレ……自分で食べちゃえ！」

丸く抉り取ったばかりの肛門括約筋をモヒカンの口に捩じ込むと、無理矢理口を閉じさせた。

「ごぽっ……うごおっ！　ぶくぶくっ……」

「あはは。泡まで噴いちゃって♪　可愛いなぁモヒカン。さぁて……お次はあたしの大好きな直腸抉り出しの刑よっ。覚悟はいいかな？　既に意識ないか……えいっ！」

直腸を右手で握り締めると、一気に引っ張りだす美香。
どんどん血と大便と腸液を撒き散らしながら、モヒカンの肛門か

ら直腸とＳ状結腸が抉り出されてきた。
膝を左右にガクガク振りながら痙攣させるが、お構いなしにズルズル腸を抜いてゆく。
「美香ちゃん、それ以上大腸を抜いたら死んじゃうよ？　小腸や盲腸まで引き摺り出しちゃダメだからね？」
「はーい！　ツインテールのカワイコちゃんのお尻責めはこれでお仕舞いっ！　うわぁ～。お尻の穴に大穴開いちゃったね？　痛かったね？」
そう言いながら６０ｃｍほど引き摺り出した大腸をメスで切断して、はみ出した部分を肛門と直腸があった空間に押し込む美香。
「くっさ。なに食べたらこんなくっさい便になるの？　やだ……くり貫いた肛門周りの肉がヒクヒク痙攣してる！　アハハ♪　何かエッチィ～♪」
隣ではチャーロンが、仰向けで縛り付けられたまま、１００回のイバラの鞭で打たれたお尻は真っ赤に腫れ上がり、数ヶ所皮が捲れて肉片が剥がれ落ちていた。
お尻の周りにはかなりの血ダマリが出来ていた。
仰向けで叩かれたため、少し上に鞭がズレると、必然的に睾丸を直撃するが、五回くらい手元が狂って陰嚢部を直撃したため、皮が裂けて白い生の睾丸が一つ飛び出していた。

右睾丸は鞭で潰されて原型を留めていないが、残った左睾丸は歪な楕円形のままぶら下がっている。

莉央が立て膝でしゃがみ込んで、いきなりペニスを握る。

「あたしの事を一番可愛いって言ってくれたお返しに、人生で最期の射精をさせてあげよっか？　チャーロン」

「あひっ！？」

ペニスを強く握られた刺激により、思わず意識を取り戻すチャーロン。

莉央は、左手で痛み止めの注射をお尻の肉に打った。

「これでお尻の痛みと、睾丸を潰された痛みは一時的に麻痺したわ。今なら勃起出来るハズだよ？　ほらほら」

チャーロンのペニスを上下にピストン運動する莉央。

少しずつ大きくなってゆく上に、感じてくる。

明日香と美香もシゴかれているペニスを頬を赤くして凝視していた。

莉央の手がペニスをシゴく度に、連動して陰嚢から飛び出している生の白い左睾丸が、管にぶら下がったままでブランブラン揺れている。

「プッ……くすくす」
揺れる生の睾丸を見ていたら、あまりにも哀れすぎて何か可笑しくなってきた。
ついつい吹き出してしまう莉央であった。
「な、何がおかしい？」
「あ、いや……ごめんね。何でもないよ。さぁぼちぼち射精しようか？　あたしの本気のピストン運動……見せてあげちゃうんだから」
「え？　そんなことやめ……」
『シコシコ……シュココココココココココ！！！！』
「あわわわわわわ！？」
残り時間の関係で、速攻イカせるために、女子小学生とは到底思えない超高速のテコキを開始する莉央。
「う、うう！　うううううっ！！　……イ、イク……イクうううっ！！」
「いいよ。イッちゃえっ♡」
『どぴゅぴゅぴゅぴゅっ！！　ドクンドクン……トロトロ……ひくっひ

くっ……』

本気のテコキでは、ほぼ瞬間にイカされてしまったチャーロン。

思ったより上に飛ばず、尿道から出た瞬間、ドロドロと莉央の手に流れ落ちてくるチャーロンの精液だった。

「なんか勢いなかったね？　射精するとこ初めて見たけど……」

美香は呆れ気味に呟いた。

「私も初めて見たけど……なんか弱々しいなぁ今のは……」

明日香も残念そうに呟いた。

「一つしかないキンタマからの射精だから仕方ないのかな……」

そう言いながら人差し指と中指で尿道をパックリと大きく開いて尿道を覗き込む莉央。

明日香と美香も屈み込んでまで覗きにゆく。

「わぁ〜。中身は綺麗なピンク色だね〜♡」

明日香は目を細くして凝視する。

「指突っ込んであげたら？　莉央ちゃん」

美香はエッチそうな笑みで莉央に囁く。

「……まぁ後でもっとイイことしてやるからいいよ……」

ペニスから手を離してスッと立ち上がると、手にこびりついた精液をチャーロン本人のロン毛に擦り付ける莉央。

「か、髪の毛に擦り付けないでくれ！！……ってゆうかやっぱキンタマ一つだけでも残しておいてくれないか？　お願いだよ」

「それはダメ……何をプルンプルンと風もないのに揺らしてるのかかな？　生キンタマめ！」

『ピンッ！』

『ビクウッ！！』

「んぎゃあっ！？　痛いっ！！」

そう言いながら、陰嚢からはみ出してぶら下がっている生の白い睾丸を中指で強く弾く。

ビクンと体が仰け反る反応が楽しくて、ついつい生の睾丸弾き遊びに入る莉央。

更に連続で生の睾丸を弾き続ける。

『ピン！　ピン！　ピン！　ピン！！』

『ビク！　ビク！　ビク！　ビク！！』

『ぎゃっはああああああっ！！　いでええええええええっ！！』

色んな角度から弾かれた為に、大きく上下左右に激しく揺れまくる生の睾丸。

「あはは！　キンタマ弾く度に全身仰け反ってビクビクしてるぅ♪　面白〜い♡　こんなになってもまだ管が数本繋がってたら射精も出来るし、痛みも感じるんだね？　凄いね？　チャーロン」

イバラの鞭で破かれた陰嚢の底に溜まっていた右側の睾丸のミンチが、揺れる度に溢れ出てくる。

「あっ！　私が鞭で破壊したキンタマが垂れてきてるぅ♪　ほんとごめんね〜」

「明日香ちゃんってばワザと狙ったでしょ？　キンタマ……」

美香の鋭い問いに口笛を吹いて天井を見る明日香だった。

「五回中、五回ともワザと狙ったでしょうね。明日香ちゃんも残酷でエッチだね〜♪　ほんとよく成長してくれたよ」

「やっぱ二人にはバレてたか……えへへ」

残虐さとエッチさを誉めてくれた莉央と、本心を見抜いた美香に照れ笑いで誤魔化す結城明日香。

「さてと。じゃあ去勢の時間です！　チャーロン君、男の子にさよ

うならの時がきたよ？」

冷たく答えると、左右に揺れてる生の左睾丸を左手で掴み取り、手前にぐっと引っ張り出してきて、右手の医療用メスで数本の管を切る。

『スパパッ』

「ぐわあああっ！？　いだああっ！！」

「もうちょっと辛抱してね？」

そう言いながら切り取った睾丸を明日香に手渡し、人差し指と中指を半分裂けた陰嚢の内側へ突っ込んで、底辺りに溜まっているミンチの右睾丸を掻き出す。

「うぎぎぎぎ……痛いいい……やめて……くれ」

「だから少し我慢しなさい！　キンタマ残したら数日で腐っちゃうわよ？　袋の内側のミンチをキレイに除去したら消毒処理と縫合してあげるからね？」

「うう……ぐ……ぐす……」

余りの激痛と屈辱感に、ついにチャーロンも泣き出してしまった。

「男の子が泣かないの！　キンタマ取られたくらいで……って男じゃなくなったから一大事か……そりゃ大変だわ」

慰めか追い討ちか分からない事を話しかけながら、手際よく睾丸

の失われた裂けた陰嚢を何十回と綺麗に縫合してゆく。

「な、何でそんな可愛い顔してるのに……こんな残虐なことが出来るんだよ……ぐすん……ぐすん」

「何でって言われても……あたしたち三人は残酷処刑…………いや、何でもない。残酷でエッチな三人組とゆうだけだよ」

『ガラッ！！』

「だ、大丈夫かっ！？　あれ？」

陰嚢の縫合を無事に終えた所へチャーロンの両親が入ってきた。

「あら？　これはこれはご両親様ですね？　お邪魔してまーす。アイドルやらせてもらってます菅野莉央と申しまーす！」

「この莉央ちゃんと私の二人で息子さんの二つのキンタマにトドメをさしてあげた所でございまーす」

明日香も続いて挨拶する。

「おっそーい！　息子さんのお友達は今大腸抜き取ってあげたところだよ？　部屋を臭くしてしまってごめんなさいっ。てへっ」

その地獄絵図的なシーンを見たチャーロンの両親は、あまりにも凄惨で信じがたい光景に思わず固まる。

「ちょっと待っててくれます？　後は息子さんのペニスを切断してから直腸抜いて………直腸は……明日香ちゃんの鞭打ちでお尻の肉ズタズタにしちゃったから許してやるか……とにかくちょっと待っててくださいね？　ご両親さんにも用があるからあたしたち……」

「え？　私たちに用って……とゆうかこれって夢でしょ？　あなた」

「多分な……こんなに可愛い小さな女の子たちがこんなむごいこと出来るわけないしするわけない……夢だなきっと……」

両親は現実逃避し始めるが、莉央はチャーロンの顔を覗き込みながら一言告げる。

「竹割りと輪切りとどっちがいい？　あたしは尿道からメス入れるの大好きだから竹割りでいこうか？　………おーい！　返事は？」

モヒカンほどは泣き叫ばないので我慢強いかと思い、ようく表情を見てみると、白目を剥いて泡を噴いて鼻水垂れ流し、意識を失ったまま涙を流しまくっているチャーロンだった。

「………顔から出るもの全て出しちゃってるじゃん。もう……」

呆れて楽しみが減った莉央は諦めてペニスを左手で握り締めると、

カリクビをメスでスパッと切断する。

「ギャアアアアッ！？」

「おっとぉ～？　カリクビちょんぎってから断末魔の叫びなのか……あはは。反応遅いなぁ」

切断したチャーロンの亀頭部分を左手に取るとさっき切り取った左睾丸を右手に乗せ、母親の方へ歩みよる。

「お母さん……息子さんの金玉と亀頭部分……召し上がれ」

両手をそっと伸ばして満面の笑みを浮かべ、美少女アイドルのぶりっ子顔で声をかける。

「ひっ……！？　これって夢なのよね？　お嬢さん？　息子の陰部なんて切り取ってきて母親の私に食べろって？　おかしな夢見てるわ……私……怖い映画見たからかしら……」

『がぽっ！！』

「んぐっ！？　むぐぐうっ……！？」

無理矢理母親の口へ切り取った亀頭を捩じ込む莉央。

「あんたが昔に子宮で作ったチンポでしょ？　食べろ！」

「んぐんぐ……ゴクン……ぶはっ！？　なんか生臭いっ！？　これって本当に夢なの？？」

腕を掴んで妨害しに来る父親に顔面ハイキックを炸裂させる。前歯二本と鼻の骨が折れて歪に鼻が凹む。

「ぐわっ！？」

倒れ込んだ所に動けなくなる麻酔注射を打つ明日香。

「そっちは注射打たなくてもいいわよね？　おばさんだから」

「……そうね。暴れてもボコボコにするからこっちは打たなくてもいいよ。止血注射だけ打っといてくれるかな？　ちょっとお母さん、後ろ向いてくれます？」

「な、何を？　…………あなた！？　大丈夫！？」

「旦那さんの心配してる場合じゃないんだけどな……はい、それで良いわよ。両足を思いっきり開いて下さーい」

明日香がサッと、止血注射を母親のお尻に打った。

「お、お嬢さん、見たことあると思ったら、《スエ広ＧＩＲＬＳ》の新しいセンターの子だよね？　この前ハットスタジオとかゆう番組で見たの。なんで都会のアイドルの子がこんな田舎に？　あ、やっぱり夢だからなのねこれは……」

『ズッドオオオンッ！！』

「いだあああああっ！？」

背後から母親の性器に莉央の右足が食い込む。爪先キックがまともに４０歳の母親の膣口へめり込んだ。

「痛い？　もしかしたら夢じゃないかもね？　これもお食べくださいませ」

座り込んで股間を押さえて苦しんでいる母親の口へ今度は息子の左睾丸を捩じ込む。

「食べないと殺しますよ？　両親も息子さんも……」

無理矢理食べさせた後、母親のパンツの裾から四本の指を強引に陰部へ突っ込む莉央。

「いったあああいっ！！　やめてっ！！　お嬢さん！！」

『ズブズブ……ぐぼおっ！！　ぐちゅちゅちゅ！！』
　仰向けに倒されたまま、明日香と美香が上半身と両足を押さえつけている。
「痛いっ！！　死ぬっ！！　死んじゃうわっ！！　やめてお嬢さんっ！！」
「こんなガバガバマンコ………肩までぶち込んでも平気だよ？」
　肘まで突っ込まれた莉央の右腕は母親の子宮の内側を激しく掻き回す。
　数秒後、一気に腕を引き抜くと、大量の愛液と血液が噴き出す。
　だが止血注射のお陰で、血は直ぐに止まった。
　手にした改造型の少し大きめの爆竹を握り締めると、二人に指示する。
「明日香ちゃんと美香ちゃん、こいつガバガバだから片方ずつ手を突っ込んで思いっきりマンコ開いていてくれる？」
「おっけー」
「はーい莉央ちゃん」
　二人は母親を押さえつけながらも片方の手をお互い性器に突っ込んだ。
　思いっきり力を入れて左右に開いてゆく……。
「痛いいい……やめて……そんなに開いたら裂けちゃうわよ！？」

「もっと！　子宮口が丸見えになるくらいまで全開に開いて！」

「それーっ！」

「えいいっ！」

「やめてやめてやめてえええっ！！ひいいっ！！」

『ぐちゅちゅ……メリメリ……ぷちゅちゅちゅ……くぱぁぁ～……』

全開に開かれた母親の性器は、子宮口まで丸見えになった。
すかさず爆竹に火を付けて右腕を突っ込み、子宮の奥に差し込んだ。
右手を抜き終わると、莉央がカウントダウンを始めた。

「5　4　3　2　……………」

「なに？　何のカウントダウンなの？」

「ゼロになったら分かりますよ？…………はい0！！」

『ポンッ！！』

「ぐぎゃあああああああっ！！」

少し大きめの爆竹が母親の子宮内で破裂した。

密閉されているので、音こそ地味だったが、子宮はお腹の中でズタズタに吹っ飛んでいた。

「おー。血止めの注射打ってるわりに大量の血が流れ出てきたね？　パンツがあっとゆうまに真っ赤だ……もう脱いどいてあげるからね？」

「何か白い肉片みたいなのも流れ出てきたね？　これって莉央ちゃん……あれだよね？」

ニコニコしながら美香が問いかける。

「そう。あれ。指を突っ込んで掻き回してたらスッゴいデカイ子宮だったからね。これは爆破したほうが抉り取るより早いかな……って閃いたの」

「爆破は初めてだね……スッゴい破壊力だわこの爆竹……あ、そうだ。父親のチンポに突っ込んで爆破しようよ？」

「モヒカンにしようと思ってたけど……そうね。父親の尿道に突っ込んでカリクビ吹っ飛ばしてあげてくれる？　明日香ちゃんと美香ちゃんで。あたしはモヒカンの仕上げにいってくるわね」

富田美香にバックで激しく犯され、肛門と直腸、大腸を抜き取られ、死にかけ状態で痙攣しているモヒカンのヘソの隣辺りにメスを入れ、先ほど美香が切断した大腸の切り口を引っ張り出して、その

腸管の先端部分を内部が表に向くようめくり返して、真っ赤な人工肛門を作製した。

抉り取られた肛門部分も、何十針も周りの皮を縫って、化膿することがないようにきちんと消毒しながら綺麗に仕上げた。

見事なメス捌きと縫合だった。

「……ふぅ。消毒も終わったし……今度からこのおヘソの横の人工肛門から排便するんだよ？　あんたの大腸引っ張り出して苦労して作ってやったんだからあたしに感謝しなさいよ？　股間にあった肛門部分にはもう腸も繋がってないし、その内縫った所が完全に塞がるからもう何にも使えないけどね。これで死ぬことはないよモヒカ……」

後ろ向きで縛り付けられたまま、全身を震わせて泣き出した。

「あらら…………そんなにショックなの？　まさか小学生の女の子にアナル犯された上に肛門から直腸から抉り取られるなんて思いもしなかったよね？　でもあなたの両親は何もされてないからまだマシなんだわ。分かる？」

背後からモヒカン頭の髪を掴み、後方へ思いっきり引っ張りながら顎を突き上げさせる莉央。

「おらっ！　返事しなさい！　首の骨へし折ってやろうか？」

「ううう……ぐす……ぐす……お、親にはなにも……しないでくれて……ありがとう……ございます」

「分かってきたじゃん！　言葉遣いが賢くなってきたね？　単に家に居ないから見逃しただけで、いたらあなたの両親も去勢してるんだから。まさかこのままあたしたちが帰ると思ってないわよね？」

「ま、まだ何かを……するとゆうの……です……か？　センターのカンリオちゃん……」

「その呼び方止めてくれる？　あたしは気に入らないんだ。んとね……まだね……モヒカン君のおちんちんと……お金玉……残ってるよね？」

「んあ……？　ひっ！？　やめ、やめめ……やめてくださ……」

「時間ないから一気にいくよ？　力を抜いててね？」

特大ワニ型のペンチを取り出すと、背後から縫いまくられた肛門の下方へゆっくり近付けてゆく………。

軽く右睾丸を挟むと、体が大きくビクッと仰け反る。

「ひゃあっ！？」

「いい反応だね。小学生アイドルのあたしでも濡れちゃうわ……」

『ギュウウウ……ぶちゅ！！』

「ぎぎぎぎいいいいいいいっひいいいいいっ！！」

「あはは。昆虫みたいな声出さないの。チンポの先から血の混じった粘液ドロドロ出てるよ？　さあ次っと♪」

間髪入れずに反対側の睾丸も挟み込み、一気に潰す。

断末魔の叫びをあげるが、死亡にまでは至らなかった。

「良かったね！　ショック死しなくて。少しは麻酔が効いてたんだね？　さぁこれで最後よ。一時間の拷問お疲れ様でした」

そう言うと左手でガシッとペニスを握り締め、尿道の割れ目に添ってメスを当てる。

「ひゃあっ！？」

「ここから……このワレメから……今までオシッコを出してたんだよね？　もう二度と出来なくなるから。いくよ？　よっと！」

『スパッ！』

ゆっくり手前に引くと、簡単にカリクビまでメスが入った。

「痛ってええええええええっ！！　やめてえええええっ！！！！」

「今カリクビまで切れてるよ。痛い？……うふ。ここで少しメスを止めてと……」

「俺のチンポ！　切らないで！！お願いだああっ！！」

「要らないと思うよあたし……こんな汚いモン……えいっ」

『ズズズズズ……スパァ～！』

ペニスを真っ二つに縦に切り裂いたメスは、ついにお腹にまで届いた。パックリと二つになったペニスは、左右に倒れてゆき、ついに両足の付け根にペタンペタンと着地してしまう。
縦方向に切り裂かれたペニスは、内部が丸見えになってしまった。白く見えているパックリと裂かれた尿道を左右両方とも左右の人差し指で絡め、引き摺りだす。

「ほうら、オシッコ通ってた管が真っ二つになって、出てきたよ？スゴいね？」

「あばばばばば……ガクガク……」

「嬉しすぎて言葉にならないんだね～♪　肛門の真上の会陰部に穴開けて、導尿して、ちゃんとオシッコ出来るように手術しといてあげるからね？　あ、前立腺も抉り出していい？」

返事もできず失神しているモヒカンに構わず、二本に分かれたペ

ニスの根元を切り落とし、更に奥深くメスを入れる。
膀胱を傷付けないようにうまく切り裂き、指を差し込む。

『ずちゅ……きゅむっ！』

「よぉしっ。前立腺見ーつけたっ！」

前立腺を掴んだ。
ぐにゃぐにゃの感触を楽しむように何度も指で揉み揉みしているうちに、少し裂けてしまった前立腺の傷口から莉央の指に生温かい液体がヒリかかるのを感じた。
「やだ……こんな状態でもセーエキ出しちゃった？　スッゴいねモヒカン……１４年の人生の中で、前立腺が製造した最期の精液だったみたいね。さてと。もう用もないし……引き摺り出してあげるから」

『ズズ……ぐちゅちゅちゅちゅ……ポコンッ！　』

ついに前立腺を抉り出した莉央。

「んん〜いつ見ても前立腺って、ヤラしい形してるなぁ〜♪」

右手で思いっきり握り潰すと、まだ内部に残っていた僅かな精液が飛び散り、莉央の顔面にかかった。

「うわ！？……汚ったな……まだ残ってたんだ……。スゴい粘度ねあんたのセーエキ……」

無事に尿道を引っ張り出して、縫合が終わると、モヒカン頭をポンポンと二回叩いて立ち上がる。

「お疲れ様♪　もうレイプなんてしちゃダメだぞ！　って、絶対出来ないか……てへっ♪」

背後で鈍い乾いた破裂音がした。
振り向くと父親のペニスの上半分がミンチになって、肉片の裂け目から飛び出している白い尿道から小便が噴き出している。

「あはは。噴水みたい♪　終わったみたいね……これで拷問完了！」
「ちょっと待って！莉央ちゃん。オッサンの玉も潰しとくから」

美香が足を高く振り上げて一気に叩き落とした。
踵落としの先には父親の睾丸があった。
まともにヒットした美香の右の踵は同時に二つをペチャンコにしてしまった。
ニョロっと飛び出している尿道から血の混じった精液までも飛び出した。

「さあ早く帰らないと時間が！　莉央ちゃん、急ごう」

明日香が時計を見ながら急かす。

「じゃあね！　最低のカスたちさん」

走り去りながら母親の顔面へ思いっきり膝蹴りを炸裂させる美香。前歯は見える範囲は全てへし折れ、血まみれでうつ伏せに倒れ込み、絶叫をあげた。

莉央は半分になった父親のペニスを根元から切断して、切断面の奥から尿道を引っ張り出して固定するように縫合する。さっと消毒して立ち上がった。

「安静にしていたらオシッコは座って出来るようになるからね？子供の育て方間違えた罰だから。残りの人生奥さんと一緒に反省して生きるのよ？　分かった？」

「あうあうあう……申し訳……ございませんでした……ごめんなさいごめんなさい……ぐす……ぐす」

明日香は父親の頬を平手で思いっきり打ち付けた。

『パァンッ！！』

「ふがあっ！？」

ヨダレを叩かれたのと反対方向に飛ばしながら涙を溢れさせる。

「お父さーん、痛かった？　意味はないけど急に顔面叩きたくなっちゃって……。ゴメンね！　莉央ちゃんによく立派に謝れました。偉い偉い偉い！　じゃあ一時間も長いことお邪魔しました～」

桜満開マラソン訓練（後書き）

まさかの体力アップの訓練中における残酷拷問。
莉央たちのアイドル活動は続いてゆく。

仲間への制裁（前書き）

アイドルとしての活動も板に着いてきた莉央たち三人だったが、色々と問題が起こる。
どうしても受け入れられない仲間が現れ、制裁を目論むアイドルたち。
八人は無事に八人でいられるのか？

仲間への制裁

「今度の日曜日は新曲の振付けで丸一日レッスン尽くしになるみたいだよ？　聞いてくれてる？」

「うん。私にも飽本支配人からラインきたよ。美香ちゃんは？」

「あたしもきたきた！　お母さんとフランス料理食べに行く約束してたのに……アイドルになってから自由時間なんて無いに等しいよね？　ストレス溜まっちゃう！」

東部地方にある赤霧島小学校の教室で、愚痴をこぼし合う小学生のアイドルたち三人だった。

土曜日午前９時――――

特殊任務省の藤堂長官から菅野莉央に連絡が入る。

「おはよう。学校とアイドルの両立は大変かね？」

「おはようございます。その二つに処刑執行任務がたまにありますので、一人で三人分生きてる気がしてます」

「ほう。一人で三人分か。それはいい」

「………で、今回は何をすればいいのでしょうか？」

「うむ。君は毎回毎回察しがいいので私も話を進めやすい。最近君たちの住んでいる東部地方で神隠しが頻繁に起きている。しかも女子小学生ばかりが通学途中……殆どが帰宅中に行方不明になっているのだが……」

「知ってます……もう合計八人は消えてるらしいですね。今月だけでも五人、あたしの学校の生徒も二人行方不明になってますから。出来るだけ集団登下校しろと先生たちがうるさく言ってますね」

「そこで君たち三人に頼みがある」

「分かりました。その囮役、受けます。その代わりあの二人には絶対に無事でいてもらいますから」

特殊任務省の一番奥の席でふんぞり返ってタバコをふかしていた藤堂長官だったが、一瞬目を大きく見開いた。

「よく囮捜査だと気付いたな。実に勘のいい子だ君は……その辺りは心配ない。わが国の鍛え抜かれた特殊任務班の五人を配置する。銃の腕もトップクラスだ」

「なら安心出来ますね。きっと犯人は誘拐してからのイタズラやレイプが目的でしょうから、誘拐されてもいきなり殺されることはないと思います」

「そうだな。しかしレイプされたその後はもう殺されてるかも知れ

ないがな……まぁ君たちにはＧＰＳと緊急スイッチを奥歯に仕込ませてもらうから心配ない。殺される前に事は終わるはずだ」

「結局アイドルにならされた時の侵入捜査といい、今回の囮捜査といい……警察みたいな捜査まで協力させられてますからあたしたちは一人四役ですよね？　はぁ。。………犯人の拘束後は？」

「ベッドに犯人を拘束したまま残していくので君たち三人で処刑してもらえるかね？　警察関係には内密なので裁判を起こす事もなく死刑にできる。処刑後の遺体は我々が処理しておく」

「残酷処刑島じゃなくても処刑出来るのですか？」

「八人も誘拐しておいて未だに捕まえられない犯人だ。犯行に及んだのは恐らく辺鄙な山奥か、裏をかいた大都会のマンションの一室か……君たちが連れていかれたアジトが辺鄙な山奥の方なら、その場が処刑場だ。都会のマンションとかなら眠らせたまま残酷処刑島へ連行する。いいかな？」

「分かりました。どちらにせよ非公開で隠密処刑できるのですね！　思いっきり苦しめて地獄を見せてあげます」

「心強いな……では後の二人にも説明のほうはよろしくだ」

通話終了後、そっとスマホを握り締め、怒りの感情と共に犯人の容姿を想像し始める莉央だった。

日曜日の振り付けレッスンは飽本支配人の意向もあり、一日中予定通り行われる。

月曜日からはとりあえず一週間ほど学校を休み、菅野莉央、富田美香、結城明日香の三人の女子小学生アイドルは、通学路を何度も往復するウォーキングをさせられることになった。

振り付けレッスンの行われる日曜日がきた。

レッスン室の手前にある廊下の椅子に座りながら、莉央の説明を聞く美香と明日香。

美香はいきなり愚痴をこぼし始める。

「ええっ!? そんな……囮なんて絶対に安全な訳じゃないよね？ マジか～……」

「大丈夫だよ！ 美香ちゃん。莉央ちゃんが奥歯のスイッチを噛み締めた瞬間、プロのハンターが雪崩れ込んでくるんでしょ？ 殆ど命の危険はないじゃん。それより犯人に早めに目を付けてもらって誘拐されないと、ひたすら通学路をウォーキングさせられるんだよ？ そっちの方が怖いよ私は……」

二人の愚痴を聞き終わった莉央が口を開く。

「いきなり殺されないという絶対の保証はないけど、９９％心配ないから！ ね！ 分かって！ 美香ちゃん」

「ま、あたしたちは処刑人なわけだし……もうすでに普通の女子小学生じゃないからね……ある程度覚悟してたから」

「ありがとう」

ホッとする莉央を尻目にゲラゲラ笑う結城明日香。

「あははは！　美香ちゃんってば思いっきり手が震えてるぅ♪」

「し、仕方ないでしょ！！　勝手に震えるんだから！　あたしの意思じゃないから！」

「せっかく覚悟を決めてくれた美香ちゃんをそんな笑わないの！　明日香ちゃん！」

「ごめーん。てへへ……」

菅野莉央に注意されながら舌をだす明日香。

そのときふと、何か泣き声のようなものが聞こえた気がした。

「あれ？　私たちのロッカールームの方だよ。もう一時間前だしぼちぼち着替えに行こうか？」

明日香に促されて三人はロッカールームへ向かった。

何かを叩くような音まで聞こえてきた。

そっとドアノブを回す莉央。

「あれ？　鍵かかってる……あたしたちがまだ来てないの分かってるのに鍵かけるなんて……あの馬鹿高校生トリオと中二病の中学生二人め！　少し威嚇しとかないと」

鍵を開けて一気にドアを開け放つと、三人が目を疑う光景が飛び込んできた。

素っ裸になったたままお腹や胸をアザだらけにして号泣している三人が座り込んでいた。

「な、何してるの？」

莉央が慌てて立っている二人に問いかけた。

いきなり鍵を開けて入ってきた莉央たち三人に、驚く様子も見せず振り返る二人……。

大野真子と小野メグの中学生アイドルだった。

二人とも気性が荒く、同じ中学校である極北女子中学校に通っている喧嘩最強の仲良しコンビだ。

ショートカットがよく似合うボーイッシュな二人。

真子は切れ長の目で、メグはパッチリ二重の大きな目を持っていた。

「あ、菅野さん！　富田さんと結城さんもおはようございます！」

「今日もよろしくお願いしまーす」

莉央たち三人が目を疑ったのは、明らかに身体が大きい女子高生の三人が、華奢な女子中学生二人に暴行を受けている、とゆう事実に対してであった。
小学生に敬語を遣う中学生とゆう関係も異常ではあるが、菅野莉央が強すぎるため尊敬しているので仕方がなかった。
この中学生二人も運動神経抜群で、これといって格闘技も習ってはいなかったが、喧嘩は無茶苦茶に強かった。
でもやはり、菅野莉央には敵わないことは十分理解していた為、莉央たちには逆らえなかった。
尊敬しているが故に、逆らわなかった、とゆうべきだろうか。
「なんで高校生三人をこんな目に？　八人で力を合わせてやっていこうと頑張ってたのに！」
莉央が眉をつり上がらせて真子とメグに歩み寄る。
「私もメグも、前のイジメ事件の時に菅野さんたち三人を無視しちゃってた時あったんだけど……その時の事を一度謝っておきませんか？って……高校生三人にお願いしたんです」
大野真子が少しビビリながら莉央に説明を始めた。

「そ、そうなんです！　そしたらこの三人……五人で手を組んで生意気な小学生三人をリンチして追い出してやろう！　なんて言い出したものだから……前々から菅野さんたち三人とは仲良くやっていく気はなかったみたいで……だから私と真子で裸にさせてボコってたわけです」

「胸やお腹ばかりを殴ったり蹴ったりしたのは、飽本さんにバレたらアイドル首になるからだよね？」

結城明日香が中学生アイドル二人に質問する。
続いて富田美香も口を開いた。

「あちゃ〜。マラソン訓練の時は出発前とか普通に笑顔で話してくれてたのに……あたしたちを隙あらばボコっちゃおう！　とか思っちゃってたのねこの人たち三人は……どうする？　莉央ちゃん？」

中学生アイドルの二人を通り過ぎ、すすり泣いている三人の前にしゃがみこむ莉央。

「あんたたちがみんなで、多数のアイドルの子たちを追い込んで辞めさせたのも、あたしたち三人を無視してたことも……ボスのボーカル、前島敦美にビビって仕方なくやってたんだと……そう思ってたから許してあげてたんだ……」

「………ちっ。それもあるけど、お前たちのような小学生のクソガキが先輩の高校生の私たちを仕切るとか……段々胸糞悪くなって

きてたんだよ！　もうちょっとでお前らをボコれたのに……ペッ！」

一番傷が痛々しい一人が、泣きながらも莉央を罵倒しながら唾を吐き掛けた。

凍りつく周りの雰囲気をよそに、顔に付いた唾を肘でゆっくり拭きながら残り二人の女子高生アイドルにも問いかけた。

「この人と同じ意見なの？　あなたたちも？」

「…………」

「…………」

泣きながら黙り込む二人だったが、二人とも首を横に振り始めた。
そして呟き始める。

「真理子が言い出したの……」

「そう。私たちは真理子に脅されて同意しただけなの……」

一瞬目を大きく見開き、裏切った二人を交互に睨み付ける真理子。
そのあと大粒の涙を流しながら唇を噛み締めて黙って俯いたまま泣き続けた。

中学生アイドル二人に殴られまくった島崎真理子の髪の毛を鷲掴みにして、引き起こす莉央。

「真理子さんだっけ？　ちょっと立ってくれる？」

「うう……くそう……お腹が痛くて……力が入ら……」

『ボコォッ！！』

「ぐはあっ！！？？」

莉央の強烈なボディーブローが真理子のミゾオチにめり込んだ。

『ゴボゴボゴボ……げはあっ！！　ごぼぼぼぼ……』

思わずせっかくの朝御飯を全て吐き出してしまう真理子。

『ドドドドドッ！！』

「うごごごおおっ！？　ぶはっ！！　おえええええっ！！」

『ビシャビシャビシャビシャ！！』

足元もゲロだらけにしたうえに、吐くものもなくなり透明の胃液を吐き出す真理子の目は、まだ死んではいなかった。

キリッと莉央を睨み続けてくる。

「え？　この人……あれだけ強烈な莉央ちゃんのパンチ受けながら泣きも入れないし、まだ睨んできてるよ？　スッゴい根性だね？明日香ちゃん……」

「美香ちゃんもそう思った？　凄い根性とゆうか何か強い意志を感じるわね……あそこまで根性持った人って最近少ないよ……」

「あなた……カッコいいね？」

再び髪の毛を掴み引き起こす。
顎の下を右手の掌で掬い上げ、ゲロだらけの唇にそっとキスをする莉央。

「んんっ！？」

思わず目を疑う真理子。
別の意味で……あるいは色んな意味で凍りつく周りの六人……。

『ゲロだらけなのに……バッチイ……』

『やだ……』

『え？？』

『なんでキスを……？？』

『え？』

『！？』

口には出せないが、色んな思いがその場の六人に浮かぶ。
本人である真理子も到底理解できない莉央の行動だった。

「なっ！　何てことしやが……」

『ズドオッ！！』

文句を言い掛けた女子高生真理子に、強烈な膝蹴りが突き刺さる。
一瞬宙に浮いたかと思われるほどの膝蹴りは、一瞬にして真理子の意識を奪った。
うつ伏せに折れ込み、ついに動かなくなった。
中学生の大野真子と小野メグも、当たり前に理解してはいたものの、あまりの圧倒的な莉央の強さにかなり動揺している。
残る高校生の二人は仲良く小便を垂れ流しながらガクガク震えている。

「凄ぃ膝だね莉央ちゃん♪　でもコイツら中学生コンビにボコられている状態ではちょっとズルいかも……ね？　明日香ちゃん」

「ま、ズルいと言えばズルいかもだけど……元気１００％でも結果は変わらなかったと思うけどね……しかも莉央ちゃん、かなり手加減してたよ」

「ええっ！？　あれだけ強烈なパンチや膝が！？」

「まだまだ甘いなぁ美香ちゃんは……もっと莉央ちゃんを理解してあげなきゃ」

「ま、まさか明日香ちゃんも莉央ちゃんのことを！？」

「明日香ちゃんも……って？　あはは♪　まさか美香ちゃんレズビ……んごっ……」

慌てて明日香の口を塞ぐ美香。

「友達として好き！　ってことね！　変なこと言わないでね明日香ちゃん？」

二人の会話など聞くよしもなく、莉央はせっせと高校生二人を柱にくくりつけている。

「オシッコ漏らしちゃった二人には今からあたしたち小学生トリオ

がお仕置きしちゃうからね？」

それを聞いた柱を抱かすように拘束された二人は恐る恐る口を開いた。

「あ、あの……お仕置きって……？　私たちは真理子に脅迫されただけなんだけど……許してもらえるん……だよね？」

「後半時間でレッスンも始まるし……くったりしてる時間ないように思うんだけど……ね？　菅野さん、ほどいて……私たちは許して……」

「美香ちゃん、明日香ちゃん、この鉄パイプでお尻叩き１００回お願いね。本気モードでね」

「え？　どこにあったの？　こんな鉄パイプ……ってゆうか鉄パイプで本気でそんなに叩いたら……」

「そ、そうだよ莉央ちゃん。お尻の皮がズル剥けになっちゃって血だらけになっちゃうよ？　レッスン受けられなくなっちゃう……」

「レッスン？　コイツらはもうこのロッカールームから出た時からアイドルでもなくなるし、女でもなくなるし……不便な体になっちゃうんだよ。だから気にしなくていいから……」

薄々女子高生二人の運命に気が付いた明日香が、中学生の大野真子と小野メグに声をかける。

「真子さんとメグさんだっけ？　これから先はちょっと衝撃的なシーンになるから終わるまで廊下に出といてもらえるかな？」

かなり強く説得するが、ムカツク高校生の運命をどうしても最後まで見たいとゆう女子中学生二人の意志に負け、莉央も観察を許可した。

ひたすら鉄パイプで叩かれる音が響きわたるロッカールーム。

二人の絶叫もドアを閉めきっているロッカールームからは殆ど漏れない。

『バシッ！！　ビチャビチャ……』

「んぎゃあああっ！！」

臀部の裂けた皮と肉片が、床を真っ赤に染めてゆく……。

肉片までが叩き潰されて削がれた部分は歪に凸凹になっていた。

「うっ…………ねぇメグ……私はもうマトモに見てられないんだけど……気分悪くなってきた……」

「こ、このバケツに吐けばいいよ！　ほら！　表情変えずに見てるみたいだったから真子は平気なんだと思ってた……」

とりあえず一度嘔吐を済ませた真子が気を取り直して血まみれのお尻を再び観察し始めた。

１００叩きが終わると今度は長椅子にうつ伏せで拘束されていく。

「あの……中学生アイドルのお二人さん？　見てるだけでは面白くないよね？　次は真子さんとメグさんにやってもらうから……今使った鉄パイプで串刺しの刑を担当してもらうわね？」

「え？　串刺し？　先が丸いからお腹や背中に刺さらないと思うんですけど……」

切れ長の目を更に細めて、手渡された血まみれの鉄パイプをしげしげと見つめる大野真子。

「穴を開ける必要ないじゃん。初めから穴は開いてるから♪」

富田美香が満面の笑みで女子高生の背中に乗り、両手の親指で、思いっきり血まみれの臀部の肉を左右にこじ開けると、パックリと女子高生アイドルの菊門が全開に開かれた。

隣では同じように明日香が馬乗りになり、もう一人のアナルもパックリと開けて見せた。

「さあ、私たちがコイツらの肛門を開いてあげてるから……その固

ったいイチモツをぶち込んであげて♡」

気の強い中学生とはいえ、人様のお尻の穴を見ることなんて、生まれて初めてであった真子とメグの二人は、一気に頬が真っ赤になってきた。

「そ、そんなトコに入れちゃうん……ですか？　ほんとに……？　菅野さん？」

「うん。ケツの穴から串刺し刑だもん♡　ゆっくりゆっくり挿入していってもいいし、一気に根元まで突っ込んでやってもいいし……その長さじゃ死なないから。後で人工肛門の手術してやるからＳ状結腸だけじゃなく小腸も一枚や二枚くらいなら突き破ってもいいよ。心配しないで！」

「そ、そんなことしたら……痛すぎなんてものじゃ……」

「出すところに入れられるなんて……自然の摂理に歯向かってないですか？」

「早く入れてっ！！　早く早くう～♪」

美香が待ちきれずに笑顔で肛門を閉じたり開けたりパクパクさせている。

「メグ、私からいくね？」

「うん。ゴクリ……」
「あなたたちが悪いんだからね？　いくよ？　コレ……今からあなたのお尻に突っ込ませてもらうから……」
「やっ！　やだっ！！　やめてよおおっ！！」

直径２ｃｍほどの鉄パイプが中学生の女の子によって女子高生のアナルにめり込まされてゆく……。

『ツプ……づぷぷぷぷ』

「ひあっ！？　やめてっ！！　許してっ！！　私たち悪くないって、さっき説明したじゃん！！　なんでこんな目に……」
「か、菅野さん！　１２ｃｍくらい入ったところで……何か止まりましたけど？　もう一番奥ですかね？」
「それが第一コーナーのＳ状結腸だよ。突くと激痛だから、ゆっくり押し込んで突き破ってあげて！」
「は、はい。こう……ですか？」
『グリグリ……ズズズ』
「ギャアアアーッ！！　痛いいいいいっ！！　死ぬうううっ！！」

腰を低くして鉄パイプを両手で掴み、全体重をかけて肛門に押し込んでゆく真子。

「死ぬほど痛いけど死なないから安心しなさい姉さま♡」

大野真子に串刺しをやり易いように開いてあげている富田美香が上機嫌で声援を送る。

ついにＳ状結腸を突き破り、内臓からの凄まじい返り血を全身に受けた大野真子は怯んで鉄パイプを離してしまう。

「んぎいいいいいいっ！！」

『プシャアアアアアーーッ！！　ビシャビシャ！！』

「きゃっ！？」

「もう１０ｃｍほど突っ込んだら小腸も何枚か突き破れるよ？　うふふ♡」

富田美香が両手の人差し指を鉄パイプの裾から直腸へ捩じ込み、出血を止めながら微笑みかける。

「も、もういいです……さすがに怖くなってきました……これ以上

差し込むのは勘弁してください。富田さん……」

「ふうん……じゃあコイツの串刺し刑はこれにて終了っ♪」

「じゃあ次はコイツね。メグさん、どうぞ♡」

今度は隣の女子高生のアナルを結城明日香が押し開いた。

「くっさ……きちんとお尻ふいてるのかな？　この人……臭いアナルしてるから一気に突っ込んであげましょ！　ね？」

「は、はい結城さん……やってみます……」

槍を突き出す前のような体制で両手で握りしめた鉄パイプを思い切り後方へ引き、狙いを定めるメグ。

「あ、あの……そんな距離から一気にいくと、的が外れて私の手に刺さらない？　大丈夫……？」

「やあっ！」

必死に狙いを定めていたため、明日香の忠告は耳に届かず、一気に鉄パイプを突き出した。

『グサッ！！　ずちゅちゅちゅちゅちゅちゅうっ！！　ぶちゅっ！！』

「んぎゃあああああっ！！」

的は外れた。
が、明日香の手にではなく、先ほど小便を漏らしたばかりのすぐ隣の穴……オマンコに一気に突き刺さる。
一気に行きすぎて、膣内を一気に突き進んだ直径２ｃｍの鉄パイプは、二人目の女子高生の女の子を奪った。

ファンと内緒でセックスして、処女膜はなかった経験者だったが、子宮を貫通してしまったのだ。
本当に女の子では無くなってしまった。

「あーあ、そこは莉央ちゃんの最後のお仕置き場所だったのに……へたくそ！」

「ひっ！？　アソコに刺さっちゃっ……た？　ご……ごめんなさい！」

『フラッ……バタッ！』

自分で差し込んでおきながら、女性器から激しく鮮血が噴き出すのを見て、恐怖で意識を失いその場に倒れ込んでしまう小野メグ。
慌てて大野真子が駆け寄り、メグを抱き起こした。

「やっぱり出ていよう……私たちには限界だよメグ」

「そうだね……ありがとう……」

真子の肩を借りて千鳥足でロッカールームから出てゆく二人であった。

「だから言わんこっちゃない……あはは。莉央ちゃん、一人目のヤツはどの体制で縛って女の子抉っちゃうの？　明日香ちゃんと一緒に縛ってあげるけど？」

「ぼちぼちトドメささないとレッスンの時間が迫ってきてるしね……マンコ突き破られた方はもういいか……ね？　莉央ちゃん」

「仕方ないわね……ソイツのアナルが無事なのが残念だけど。お腹開いて子宮が腐らないように取り出して縫合するから仰向けに縛っといて。コイツの方はこのままうつ伏せでいいよ。バックで子宮抉りとってやるから」

見事なメス捌きでおへそから陰毛辺りまでメスを入れ、穴が空いてしまった子宮を取り出してから開いたお腹を縫合する莉央。

「いつ見ても凄い腕ね……外科医になったらいいのに……」

感動して溜め息をつく結城明日香。

「ほい。子宮。運営に見つかると騒動だからゴミ箱じゃなく便所で流してきてくれる？　美香ちゃん」

『ビチャ！』

そう言いながら切り取った子宮を美香の足元に投げ捨てる莉央。

「はーい！　面倒臭いけどしかたないよね……よいしょっと」

床に落ちてる子宮を鷲掴みにして女子便所へ流しに向かう美香。廊下でうなだれてへたり込んでいる真子とメグに掌に乗せた子宮を見せ付けた。

「ほら、女の子の大切な部分だよー♪　触ってみる？」

「きゃっ！？」

「ひいっ！？　何ですかそれ……」

「女子高生Bさんの子宮だよん。女子高生Aさんは今、莉央ちゃんが手術してるところだよ」

「ひいっ！！」

「やだっ！？」

気の強い二人組の中学生コンビも、ここまでエゲツないことを平気でやる女子小学生三人に、更なる恐怖を覚えたのであった。

肛門からの出血も治まり、子宮を流してきて帰ってきた美香も加わり、三人が女子高生の左右と後部にしゃがみ込む。

「さてと。親友のBさんは中学生のミスで先に女の子辞めさせられちゃったけど……Aさんのあなたはしっかりあたしがヤッたげるからね？　覚悟しなさい」

「やめてっ！！　お願いっ！！　菅野さん、菅野様！！　お願いですから許して下さいっ！！　わぁあん、わぁあんっ！！」

「泣いてもダメだから……後１０分あるから地獄の苦しみを味わってもらうわね？　子宮どころかあんたには肛門も性器も全てもらうから……」

「ひっ！？　ひいいっ！！　そんなことされたらお嫁にいけない！死んじゃううううっ！！」

「お嫁に行けるかもよ？　仮に行ったとしても子供も産めないしセックスも出来ないし、肛門からウンコも出来ないだけだよ。死ぬことはないから安心して」

絶望感から狂ったように号泣を始める女子高生Aに、さすがに哀

れみを感じた結城明日香が口を開いた。

「莉央ちゃん……コイツと子宮取り出した今のヤツは、真理子に脅されてただけなんでは？　しかも真理子ってヤツは莉央ちゃんに唾吐き掛けたわよね？　私ならコイツらが殴る蹴るだけで堪えてあげて、そこで気を失ってる真理子の方を子宮抉り出してやるけどね？」

「あたしもそう思う！　酷く制裁与える相手が逆だと思ってた！どうゆうことなの？　莉央ちゃん？」

メスを肛門に差し込みながら莉央が答える。
刃を下に向けて一気に女性器へ切り裂いた。
一瞬にしてアナルとオマンコを繋げられてしまった女子高生は凄まじい絶叫をあげながら体を痙攣させせている。

「真理子はコイツらを庇ったんだよ。気付かなかったの？」

「え？　どうゆうこと？　だってコイツに暴露されたとき、真理子は何も反論しなかったじゃん？　本当だから言い返せなかっただけではないの？」

美香の問いに即答する莉央。

「真理子がコイツらを睨んだ時に、コイツら嘘付いたんだな！　裏切ったんだな！　ってあたしは気付いた。親友と思ってた相手二人

に同時に裏切られた時の真理子の気持ちは痛いほど分かった」

「そ、そんな……それって」

「酷すぎるよそれは……真理子可哀想過ぎる……」

「そう。その上で切れて言い返した所で、三人ともあたしたちに酷い目に逢わされる……それなら自分だけ酷くリンチされたら残る二人は少しはマシになるかな……って。そこまで自分を裏切った相手を気遣っていたんだよ真理子は……」

気を失って素っ裸で倒れている真理子を見ながら涙ぐむ美香と明日香。

二人は真理子にパンツや服、スカート全てを着させてあげた。

切り裂かれて一つになった女子高生Aの陰部へ右手の人差し指と中指を突っ込んでゆく莉央。

やがて手首まで捩じ込み、腕を使っての強烈な出し入れ運動が開始された。

血と愛液とオリモノが床に長椅子にビチャビチャと飛び散る。

「おねーさん、これってどっちの穴かな？　汚いアナル？　それともキショイおまんこ？　入り口が繋がっちゃったから分かんなーい……あは♪」

狂ったように泣き叫ぶが、莉央の地獄のピストン運動は止まらな

い……。

「ほらほらほらぁ。痛い？　臭いオリモノ垂れ流してるからここはオマンコだったみたいだね？」

更に肘まで捩じ込んだときには、泡を吹いて全身を痙攣させた。

腕を抜いて鉄パイプを差し込み、グリングリンかき回す。

ほどよく子宮をミンチにした頃、再び右手を突っ込んで、ゼリーのようになったミンチの子宮を抉り出してゆく。

「ふう……こんな腐ったヤツの子宮でも綺麗な色してるんだね？」

『ビチャビチャ！』

ミンチの子宮を床に投げ捨てながら莉央が呟く。

全ての真実を知った美香と明日香は思いっきり憎しみを込めて子宮を足の裏で踏みつけてグリグリ擦り潰した。

「莉央ちゃん、コイツの直腸……私に抜かせて！　ムチャムカつくから！」

「……いいよ。でも殺しちゃダメだから……小腸が出てきたらすぐに止めてね？」

「うん。ありがとう莉央ちゃん」

「あたしもやりたかったのにぃ～」

拗ねる美香の頭をポンポンと叩きながら莉央が微笑み掛けた。

「今回はアナルからマンコへ切り裂いたから……クリトリスと尿道が無事に残ってるよ？　後でミンチにしてあげて♡」

「あっ、　そっか！！　その辺りが残ってたんだ！！　アハハ♪」

手を叩いて歓喜する美香。

ズルズルと抜き取られてゆく直腸……大腸……。

床は愛液と血液とオリモノと、漏らした糞尿とでビシャビシャになっていた。

再び意識を取り戻した女子高生は喉が渇れるまで叫び続けた。

「友達を裏切った罰よ？　小腸まで引き抜いてやるんだから！　覚悟しなさい！　もっと泣け！　叫べ！　喚け！　あはは。また小便を漏らしてるの？　哀れな女だねぇ♪」

莉央は前に回り込み、この世の絶望を全て味わってるかのような

苦痛に満ちた表情を数秒楽しんだ。

その後強烈な往復ビンタを百連発……。
鼻血が飛び出し、唇は裂け、鼻の骨も折れた。
瞼も腫れ上がり、原型を留めない哀れな顔に変形した。

「痛い？　あたしはね。ほんとはね……あんたたち二人を殺してあげたいの……でも法律が認めてくれないから残念だよね～」

そう言いながら、トンカチで半開きになって歯が丸見えになっている所を思い切り殴った。
前歯が二本へし折れ、血が吹き出す。

「あがが……痛い……痛いよぉ」

「明日香ちゃん、ストップ！　そこからは小腸だからもう抜いちゃダメ！」

「はーい。このまま殺してやりたいけど残酷処刑島じゃないから無理か……美香ちゃん、タッチね」

「よーし！　あたしの激痛地獄タイムの開始っ♡」

クリトリスにまち針を突き刺す。一本だけで絶叫したが、二本、三本と突き刺していき、ついに１０本刺さった。

「アハハ♪　小さな小さなハリセンボンみたい！」

あまりの激痛に腰を下ろしきり、長椅子にピッタリ陰部をくっつけたまま動かなくなった。

「そんな格好してもこの美香様の拷問は避けられないよっ！　えいっ」

明日香が引き抜いた腸と肛門の間に人差し指と中指を捩じ込み、立ち上がると同時に一気に上に引っ張りあげる美香。

肛門はパックリ裂けて鮮血が噴き出す。
あまりの痛みに腰を浮かせた隙にペンチを差し込み、針だらけのクリトリスを一気に掴み、捻り潰した。

「ンギャアアアアッ！！！！」

上下左右にお尻を振り回しながら逃げ場を探す下半身だったが、それは敵わなかった。
美香の膝蹴りが陰部を襲う。
小陰唇がバックリ裂けて、更に血みどろになる下半身……。

更にもう一発。
今度は腸が飛び出している肛門に直撃した。

飛び出している腸がプルンプルンと踊るように宙に舞う。

「邪魔になるから切り落としておくよ。よっと。クリトリスに刺さったまんまの、まち針も危ないから抜いといてあげるね♪」

莉央が肛門からはみ出している腸を切断した。

「マンコと肛門繋がっちゃって……ほんと可笑しいわね？　オシッコ出す穴も……許さないから」

針金を取り出して尿道へ差し込んでゆく。
もう全身の激しい痙攣も治まり、またまた意識を失っている女子高生Ａであった。
膀胱まで差仕込んで掻き回すと、血まみれのオシッコが噴き出した。

「くっさ……これであんたの穴とゆう穴はあたしたちに壊されたわね。あ～あ。あなたの人生で一番辛い日になったね？　アイドルで幸せになれると思ってたのに……残念っ♡」

拘束具を外しながら仰向けに縛り直す莉央。

「生き地獄をもう堪能したみたいよ？　さて、意識を失ってる間に

人工肛門作っといてやるか……尿道は消毒したらそのまま使えそうね……」

先ほど美香に頼まれて救急車を呼んでいた真子とメグがロッカールームに入ってきた。

「もう終わりました？　救急車が到着しました」

「ありがとうお二人さん……今日からはあたしたち三人と真子さんとメグさんに加えて、この唯一残った女子高生……島崎真理子さんの六人で再結成してもらうから」

救急車で運ばれる二人を見送った後、いきさつを話すと、中学生アイドルコンビの真子とメグも猛反省していた。

「そんな友達思いの人だったたんですか……島崎真理子さんは」

「一番菅野さんを恨んでるみたいだったたから一番酷く暴行しちゃったんですけど……」

「もういいよ。あたしを憎んでるのは事実だし。あたしの為にそこまでやってくれた真子さんとメグさんには感謝してるから」

「早く練習場へ向かいなさい！　もう先生方もとっくにいらっしゃってるわよ？　何やってるの全く！！」

マネージャーに怒られながら慌てて走って逃げる莉央たち六人だった。

島崎真理子は莉央が背中におんぶしていた……。

厳しいレッスンの最中に目を覚ます島崎真理子。

「あれ？　私は一体……お、お前ら！？」

「ちょっと待って！　落ち着いてくれます？　あたしたちは真理子さんと仲直りしたくて……あの……良かったら仲直りしてください……」

あたふたしながら富田美香が歩み寄って右手を差し出した。

『パァンッ！！』

「いったぁっ！？　やめてよーっ！！」

強烈な真理子のビンタが美香の左頬を襲った。

左手で頬を押さえながら慌てて莉央の後ろへ逃げる美香。

「真理子さん……あたしを憎んでるのは十分分かったけど……良かったら一緒にアイドル活動やっていってくれませんか？　真子さん

とメグさんもこのように十分反省してますから」

傍らで土下座したまま頭を上げない中学生コンビがいた。

「私からもお願いします！　真理子さんを裏切った二人は救急車で運ばれましたが命には別状ありません。もう二度と私たちの前にも現れないと思います。友達思いの真理子さんを私たちは……好きになってしまったんです」

「………………」

しばらく沈黙を続ける真理子だったが、その場に仰向けに寝転がり、溜め息をつきながら呟いた。

「はぁ……しょーもね。なんかもうどうでも良くなってきた……」

「どうでも良いってことは!?　私たちと一緒に頑張ってくれるんですね!?」

結城明日香が嬉しそうに叫んだ。

「信用していた友達に見捨てられたら正直もうどうでもいいんだよ。アイドル自体は夢見て頑張ってきたから辞める気はねーし。好きにしてくれ」

小学生トリオの莉央と美香と明日香、中学生コンビの真子とメグも大いに喜んだ。

新しいユニットの誕生だ！　と、喜んでいたのも束の間……。

莉央のスマホが鳴り響く。

「飽本さんから連絡がきたぞ。やらかしたそうだな？」

「はい。申し訳ございません藤堂さん。病院や警察には手を回していただけたのでしょうか？」

「当たり前だ！　あれだけ大怪我をしたアイドルが救急車で運ばれたら普通なら大ニュースだぞ！！　今回はかなり大変だった。大いに反省してくれたまえ！」

「はい。本当に申し訳ございませんでした。今のあたしたちにはどうしても受け入れられないカス女どもでしたので……」

「次回のターゲットはカスどころの存在じゃないぞ？　万死に値する相手だ。明日から心してかかってくれたまえ」

「心してと言われましても……ただウォーキングしていればいいんですよね？　あたしたち三人で」

「そうだ。そして犯人に目をつけられ、誘拐されて……緊急ボタンで私の手下が突入！　犯人ゲット！　んで処刑……とゆうわけだ」

散々怒られたあげく、振り付けのレッスンは半端なくキツく、ヘトヘトになって帰宅した六人。

時刻は午前三時を回っていた。

明日からの囮任務ウォーキングに備えて即刻眠りにつく三人だった。

寝る時間は殆ど無かった………。

仲間への制裁（後書き）

どうしても受け入れられないアイドル仲間の制裁を終えた莉央たち三人と、中学生コンビの真子とメグ。
女子高生アイドルの島崎真理子を加えて、今度こそ本当に絆で結ばれたのか？
巷では連続誘拐事件が頻発するが、その事件の囮捜査に選ばれた莉央たち三人。
次回の月曜日からの任務の為に、睡眠不足の三時間睡眠を必死に取ろうとするが、爆睡できるのかどうか…………。

連続誘拐殺人犯を処刑せよ！（前書き）

ついに連続誘拐殺人犯を捕らえるべく、莉央たち三人の小学生アイドルたちは、囮捜査へ参加する羽目になる。
果たして生きて無事に任務を遂行できるのであろうか？

連続誘拐殺人犯を処刑せよ！

東部地方某所にある鬼畜山。
その山は標高５００ｍで、数十年前から誰も住んでいない寂れた状態だった。
山頂付近に数件の廃墟があるが、その内の一つに巷を騒がせている犯人たち三人が住んでいた。

二人の男と一人の女……。
三人とも同い年の２０歳である。
二人の少女を二人の男が裸にひんむいていた。

「おい京介！　今度の小学生は胸がなかなか大きいな！　セーラー服ごしにでも揉みがいがあるぜ！」

「それは言える！　二人とも六年生だからかな……せっかくここまで発育してきたのに……残念ながら今日が人生で最期の日になるなんてな！　ガハハハハ！！　両親も哀れなもんだ！」

「ここまで娘二人を育てて来て俺たちに誘拐されて犯されて殺されるなんてな。ハハハ！　ほんと笑えるぜ！　京介は男のガキしか興味無かったはずだが？　スッカリ少女もＯＫになったみたいだな？」

「おうよ！　初めは抵抗あったが、少女のマンコもなかなかいいもんだと感じてきたぜ！　男のガキのアナルといい勝負だな！　ヒヒヒ！！　それも手際よく女子小学生を拐ってきてくれる圭介の彼女のお陰だな！　感謝するぜ！」

六年生の少女が二人……。
必死で抵抗を続けているが、セーラー服、Tシャツ、ブラジャー、スカート……順番に脱がされてゆく。

上原圭介が小学六年生の三原千恵を、菅野京介が同級生の双子の妹、三原美奈を、それぞれ犯そうとしていた。
上原圭介の彼女である上戸みゆきは、誘拐担当であった。女性の方が子供からは安心してもらいやすいからだ。今回は拐った姉妹の小学校とは別の学校からも、自分のショタ的欲求を晴らす為に、理想のタイプの四年生の男子生徒である飯田明を拐って来ていた。

「ほら！　あっちではボクと同じ小学生の女の子が裸にされてるね？　女の子の裸なんて初めて見るでしょ？　うふふ」

自分の彼氏である圭介と、その友人の京介に裸にされていく12歳の姉妹の女の子を見ながら、20歳のみゆきは、四年生の男子の服を脱がしていた。

「お姉ちゃん……ボク恥ずかしい……服を脱がさないで」
「ダメよ。後一枚……パンツも脱いじゃおうね？　ほら」
『ズルリ……』
「いや……ボクのパンツ……返して！」

「お姉さんがボクに気持ちいいことしてあげるから……じっとしてなさいね？」

『かぷっ！　クチュクチュ……』

皮かむりの小学四年生の男子である飯田明のペニスを口に含み、舌を使って激しく舐め始める２０歳の女、みゆき。

「う、うあぁ……変なとこ舐めないで！　嫌だっ！！」

「大人しくしてないと……ココ、潰しちゃうわよ？」

パチンコ玉の様なまだまだ発育途中である小さな睾丸の右の玉を白いしなやかな指でキツく握り締めながら脅迫する。

「痛あぁっ！？　お、大人しくするから許してお姉ちゃん！　痛い……」

「分かればいいのよ……ペチャ……ペチャ……しょっぱいわね？　オシッコがたくさん付いてる……チンカスも」

「ごめんなさい……お姉ちゃんに連れて来られる少し前にオシッコしたばかりなの……」

「ションベン臭いのもまあいいわ。許してあげるね。子供らしくて

興奮しちゃうから♡」

少し離れたベッドでは姉妹の女子小学生がついに素っ裸にされていた。

「美奈っ！！　大丈夫っ！？　やめてっ！！　美奈だけは勘弁してあげてっ！！」

「お姉ちゃんっ！！　助けてっ！！　怖いよおっ！！」

「京介！　お前の相手のガキが妹らしいな？　少しでも若いから羨ましいぜ？」

「双子なんだから姉も妹もねーよ！　姉の真横で先に泣かせてやるとするかな？　がはは♪」

そう言いながらベットの上に正座して、妹の美奈を後ろ向けにして両膝の上に乗せる京介。

京介も美奈も、隣のベッドにいる圭介と姉の千恵の方へ向いている。

両腕を美奈の膝の内側へくぐらせ、一気に両脚を開いた。

「ほうら、可愛いおねーちゃんにぱっくり開いた美奈ちゃんのオマンコを見てもらいな！へへへ♪」

「きゃっ！？　美奈に何をするのよっ！？　やめてよ！　変態っ！

！　今すぐ妹を解放してあげてっ！！　あたしはどうなってもいいからお願いっ！！」

「ここは？　妹のここは何て言う部分だ？　言ってみろ？　おねーちゃん♪」

そう言いながら小学六年生の少女の性器は菅野京介とゆう変態男の指によって犯された。
中指がゆっくり突き刺さってゆく……。
処女膜は微かな音をたてて、破かれた。

『つぷぷ……クチュ……ベリッ！』

「痛っ！？　わーん！　わーん！　痛いよぉおねーちゃんっ！！」

京介の膝の上に、処女膜喪失による鮮血が流れ落ちる。

「チンポで突き破るのもいいが、指でぶち抜くのも気持ちいいもんだな！　小学生の処女膜は……がはははは♪」

「美奈っ！！　やめろーっ！！　ひどいっ！！　このカス野郎っ！！」

「千恵ちゃんだっけ？　おねーちゃんの君も今から酷い目に逢うんだよ？　この１５ｃｍはある俺のビンビンのチンポが……今から千

恵ちゃんの股間に突き刺さるんだよぉ？　痛いけど泣いてもいいからね？　泣き叫ぶ少女の顔を見てると益々興奮するんだ〜俺は……がははははは♪」

そう言いながら自分のイチモツを姉の千恵に握らせる圭介。

「ひっ！？　こんなもの絶対入らない……やめて……お願い……」

「知ってるか？　戦国時代はね……12歳ならとっくにお嫁に行かされてたんだよ？　生理とゆう出血ももう経験してるだろ？　なら君はもう大人なんだよ。妊娠して赤ちゃんだって生める体なんだから♡」

「やめてっ！！」

「やめないよ。安心してよ千恵ちゃん……もし俺の精液で妊娠しても、生まなくて済むよ？　なぜならね……お嬢ちゃんたち姉妹はね……本日死んじゃうんだっ！！」

『ずちゅっ！！　メリメリメリ……バリッ！！』

そう言いながら一気に根元まで15cmはあろうイチモツを小学生の女の子の性器にぶち込む圭介。

夥しい血液がベッドと千恵本人の下半身を染め上げてゆく……。

「んぎゃあああっ！？　いったあああああいいいいっ！！」

『ずちゅっ！！　ずちゅっ！！　バッコン！！　バッコン！！』

「あひっ！！　ひぎゃっ！！　がはっ！！　やはあっ！！」

「がははははっ！！　俺のチンポぶち込む度に泣きながら何か声出してるぜっ！？　面白いなあ♪　ハハハハハ♪」

「姉妹揃って泣かせちゃったなぁついに……ま、いいか。どうせ妊娠する間もなく死んじゃうんだからコイツらは。ははは。さあおねーちゃんも頑張ってるから妹ちゃんも頑張っていこーかっ？」

そう言いながら妹の美奈をベッドにうつ伏せに寝かせると、おもむろにお尻の肉を鷲掴みにして、手前に引っ張りあげる京介。

「ほら、ケツ突き上げろっ！！　おねーちゃんの隣でお前はバックで犯してやるっ！　初めてのセックスがレイプで……しかも肛門丸見えのバックで？　がはは！　恥ずかしいなぁお前は……ほら、奥深く飲み込め……」

『つぷ……ずぷぷふぷ……ズボオッ！！』

「やはっ！！　痛いいいっ！！　んぎいいいいいっ！！」

「処女膜は俺の指で破いてやったが……やはり痛いか？　チンポ突っ込まれたら……。俺のチンポもたいがいデカイ方だし。男でも激痛で泣きわめくほどだからな！　ははは♪」

『バコバコバコバコッ！！　パンパンパンパンパンパンッ！！』

「いやあぁぁっ！！　わあああんっ！！　わあああんっ！！　おねーちゃんっ！！　助けてえぇっ！！」

「だってよ？　千恵ちゃん？　妹ちゃんを助けてやらないのか？　ほらほら？」

「んぎっ！　いあっ！　あひっ！　………あんっ！　あんっ！」

頬を赤くしてヨダレを垂らしながら圭介の陰部を人生で初めてのオマンコに受け入れさせられている三原千恵。
痛みの間に少し快感も覚え始めてきていた。

「お？　顔を赤くしてよがり声！？　まさか感じてるのか？　ハハハハハ♪　小学生の癖にオマセちゃんだな？　がはははは！！」

妹の美奈をバックで犯してる京介は、ついに限界を迎える。
勢いよく大量の精液を１２歳の少女の膣内にぶち撒けた。

「お、おらっ！　いくっ！　いくぞっ！？　美奈ちゃんのマンコの中に出しちゃうぞっ！！　いっくううううっ！！」

『どぴゅぴゅぴゅぴゅぴゅっ！！　ドピピピピッ！！』

「んあああっ！？　ひっく……ひっく……えーんえーん……」

突き上げたお尻をペタンと落としながら泣きわめく妹の美奈だった。

ぐったりして泣いている美奈を、今度も後ろから責める京介。

人差し指をゆっくりお尻に伸ばしていき、肛門に突っ込んだ。

「綺麗な色してるな？　お嬢ちゃんのアナルも……ここか？　ほらっ！」

『つぷっ……ズボボボボ……』

「ひぎっ！？」

「ひぎっ！？　ってか！　ガハハ♪　ケツの穴もタダじゃあおかないよ？　妹ちゃん……グフフ。お兄さんが掻き回してあげるからね？」

小学六年生の少女のアナルを思いっきり人差し指で掻き回す京介。

「痛っ！！　いだいいいい…………やめて……」

時折抜いては臭いをかぎ、再び突き入れて掻き回す……何度もこの行為を繰り返した。

「京介は変態だなぁやっぱ……ケツの穴なんて臭いし汚いだけなのにな……気が知れないぜ全く」

「このウンコの臭みがまた興奮を高めるんだよなぁ。分かんねぇかなお前には……女子小学生のアナルの臭いだぞ？　想像しただけでも興奮すんぜっ」

姉の千恵は、痛みを越えて知った快感のあまりの気持ちよさに、自ら圭介を抱き締めていた。

「おいおい……そんなにマンコ気持ちいいか？　ごめんな。俺はみゆきとゆう同い年の彼女がいるんだわ。いくら小学生の若い女の子が好きになってくれても……お嬢ちゃんとは付き合えないんだ。だから死んでくれるよな？」

「はぁ……はぁ……え？　あたし……死ぬの？　やだ！　死にたくない……」

「死ぬ瞬間って、思いっきりマンコ締まるからその時俺は千恵ちゃんの中に出すよ。小学生の女の子は特によく締まるんだ。楽しませてくれてサンキュー♪　妹の美奈ちゃんもすぐに送ってやるから安心して死ねよ？」

『ギュウウ……』

「うぎっ？！……くる……しい……ううう」

『キュウウウウッ！！』

「おっ！　すごい締まりだっ！！　最高だぜ千恵ちゃんっ！！　イクッ！　イックううぅっ！！」

『どぴゅぴゅぴゅぴゅぴゅぴゅっ！！』

「ぐええっ！！！！　……ガクッ……」

姉の千恵の膣内へ大量に射精し終わると同時に、三原千恵は妹の見てる前で短い12年の人生に終止符を打った。

「いやあああっ！？　おねーちゃんっ！！　おねーちゃんっ！！」

「おいおい……ケツの穴ホジくられながら泣きわめいても感動もくそもないぜ？　お前の糞は俺の指に付いてくるけどな」

「ハハハ！　うまいこと言うじゃねぇか京介！　今から手足切り落としてマンコバラバラにして内臓全摘手術してやるからな？　見てろよ妹ちゃん♡」

「おい、妹ちゃんどころか俺も殺しとか内臓ぶちまけ系は苦手なんだよ。あっちでやってくれるか？　妹ちゃんと気持ち良くやってる時に吐きたくねーんだよ！」

「ヘタレだな相変わらず……レイプ出来る残酷さがあるなら殺るのも捌くのもよく似たもんだと思うけどな……まぁいっか。早めにシメちゃえよ？」

「ああ。どうしても殺れなかったらお前に任せるわ。もう少し生きてるこの子を楽しませてくれ」

「好きにしろ。さぁあっちへいってバラバラになっちゃおうね？　おねーちゃん♪」

近くの部屋に姉の遺体を運び込む圭介。

手足……首を切断してから、お腹にナイフを差し込み、子宮、卵巣、と抉り出してゆく。

「ヒヒヒ……少女の子宮……プルプルしてて気持ちいいなぁおい！　これが卵巣……前の少女のより小さいな……個体差があるのか……おお！　小腸がまた綺麗にテカってるぅ♪　たまんねーな！」

更に首のない遺体の性器に指を突っ込み、掻き回す。

「胸もそこそこある少女のマンコ……まだ掻き回しとかないと腐らせるの勿体ないよな……へへへ♪」

十分死体凌辱も楽しんだ圭介は、黒いゴミ袋に全ての肉片を詰めむと、庭に埋めにいった。

帰ってきて彼女であるみゆきに声をかける。

「おーい！みゆきーっ！　もう男のガキは始末したのかーっ！？」

１０ｍくらい離れたベッドに近寄ると、手足を切断されて猿轡を嵌められた１０歳の少年の姿があった。
肛門に人差し指と中指を突っ込んで掻き回している。

「あら圭介……担当の姉の子はもう始末したの？」

「ああ。俺に感じて抱きついてきやがってたけど、首絞めて逝かせてやったよ。バラして庭に埋めてきた」

「そう。何かムカツクけど私も男の子を性的虐待してるからね。文句も言えないか……あはは」

「ううん……ううううん……」

「ダルマにされてんじゃん……無茶苦茶痛そうだぞ？早く殺してやれよ？」

「止血して包帯グルグル巻きにしてるから一時間は生きてるでしょ……まだまだこの子を責めたいからもう少し待っててくれる？」

「仕方ないなあ。京介もまだ殺さないし……俺だけ早めにやり過ぎたかな……ちっ」

「ボク……お姉さんの腕……入るかな？」

「んんんんっ！！」

大きく首を振りながら号泣している男子児童。

「入らないよね～。でもお尻の穴を大きくしちゃえば入るかもよ？」

そう言いながら少年の肛門へカッターをそっと近付けるみゆき。

陰部の方へ刃を向けて肛門に突き刺した。

『ズブッ！！』

「んうううううううっ！！」

「肛門……切り裂いてあげるね？　ほうら……血がすごく出てくるねぇ？　あは♡　ついでにキンタマ袋も切り裂いて睾丸を摘出しちゃおうか？　あはは♡」

肛門に入れられたカッターは、まっすぐ陰嚢へ向かい、ペニスの根元まで切り裂いて止まった。

ポロリと生の睾丸が一つ飛び出して来た。

何かの管にぶら下がって左右に揺れている。

「あはは♡　ボクのキンタマ……飛び出して来て揺れてるよ？　面白ーい♡」

「んぶぶぶふぶ……」

男子児童は猿轡の間から泡を吹いて失神してしまった。
「痛かった？　でもね……まだもう一つ袋に残ってるんだ……よいしょ。よいしょっと……ほら！　出てきた！　残りの右のキンタマ！」
切り裂いた陰嚢に突っ込んだ右手を引き抜くと、内部に残っていた右の睾丸が握られている。
一気に潰した。
少年の顔を見るが、泡を吹いて失神したままびくともしない。
とゆうかビクビクと痙攣を始めていた。
「あらいやだ……もう死んじゃうかも……生きてる内に左のぶら下がってるキンタマも潰しておくからね？　ほら」
『ギュウウウッ……ぶちゅっ！！』
包茎のペニスから血の混じった精液らしき液体が飛び出した。
「やだ……小学生のくせに射精？　エッチね♡　そのませたチンポ……痛い目に遭わせてあげる……チンポの皮……引き剥いてあげるっ♡」
『ギュッ……ぐりり……バリバリッ！！』

力を込めてペニスを握り締めると、一気に包茎のペニスを根元まで引きずり剥いた。

「んうううううううううう！！」

あまりの激痛に意識を取り戻した少年は、白目を剥いて更に激しく痙攣し始める。
血まみれになった右手を激しく上下にピストン運動するみゆき。
みゆきの右手は血まみれになり、真っ赤な肉片を晒したペニスからはドクドクと流血する。
雁首にカッターを当てて、スッと引くと、呆気なくポロリと亀頭部がベッドに転がり落ちた。

「痛い？　もっと痙攣していいのよ？　小さな可愛い男の子の性器破壊は私の最高の至福の時だから♪　ボクのお母さんって、とっても美人でしょ？　分かるわ何となく♡」

２０ｃｍはあろうかとゆう張り形をペニスバンドにセットして、切り裂いて大きく開いた肛門にあてがう。

「さぁ仕上げよ？　私のアナルファックで出血性ショック死をさせてあげる……ママに言い残すことはない？　それどころじゃないか……うふふ♪」

正常位で少年に覆い被さり、張り形を突き入れてゆく。

「ほうら……飲み込むのよ少年♡」

『ズブズブ……ズププププ……メリメリ』

「ふごごごごっ！？」

白目を剥いてヨダレを垂らしながら痙攣している少年に、容赦なく突き入れられた２０ｃｍの張り形は、Ｓ状結腸を突き破り、直腸を激しく掻き回してゆく。

夥しい出血が続く中、少年の１０年とゆう短い人生に終わりが近付く。

死にそうな少年を抱き抱え、今度は背中を向けさせてバックで犯し始めた。

「腸液ドボドボ出てきてるよ？　ボク……ガキのくせにおませちゃんだね？　気持ちいいんでしょ？　おねーちゃんにお尻の穴掻き回されて……イク？逝く？　どっちなの？　どっちもだって？　欲張りのオマセさんねっ♡　それそれっ！！」

「パンパンパンパンパンパンパンパンパン！！」

みゆきの下腹部が激しく少年のお尻に何度も打ち付けられる。
その度に少年の直腸は激しく傷付き、出血してゆく……。

『どぴゅぴゅぴゅっ！！』

『プシュウウウッ！！』

切断された尿道から血の混じった精液が再び飛び散った。
みゆきの太股に透明の粘液……腸液が大量にヒリかけられた。

「前からも後ろからも出すもの全て出しちゃったみたいね？　うふふ♡　私の脚を汚した罰は……死刑ね♡」

２０ｃｍの血まみれになった張り形を少年のアナルから引き抜くと、太股にヒリかけられた腸液をハンカチで拭き取るみゆき。

「こんな汚い卑猥な液体を私の脚にヒリかけるなんて……覚悟しなさいクソガキ！　ほら」

ベッドの下に隠されていた日本刀を取り出して抜刀すると、少年の切り裂かれてガバガバになった腸液まみれの肛門に突き刺してゆく。

「凄いでしょ？　本物だよコレ……ここかしら？　裂かれた哀れな肛門は？……お邪魔しまーす♡」

『ズプププ……』

「んごごご……」

　お尻を上下左右に激しく揺らしながら逃げようとするが、みゆきの差し込む刀は確実にお口を目指して一直線に直腸、小腸を突き抜いてゆく。

『ズボボボ……ぐちゅちゅちゅちゅちゅ……メリメリ……ザクザク……』

「動いてもダメだよ。綺麗に口まで貫通させてやるんだから。色んな音がしてるね？　貫く内臓によって色んな音が……あはは！　素敵♡　はい、もうゴールよ？　あーん♡」

『かぱっ……バシュッ！！』

「さようなら。ありがとう楽しませてくれて！　来世でも私の性的虐待を受けてね♡」

　日本刀が内側から口腔内へたどり着き、勝手に口が開いてしまい、血まみれになった切っ先が少年の口から飛び出した。

「あぼぼ……ゴボボボボ……ガクッ」

２０歳の女に性的虐待と、凄惨な拷問を繰り返された１０歳の少年は最終的に肛門からの串刺し貫通により、永遠の眠りについた。

「後は内臓全て摘出してから、背骨とあばら骨切断してから外に埋めるだけね……おーい！　圭介ーっ！！終わったわよーっ！！」

「あと少し待ってくれーっ！　京介がもう一回イッたら妹ちゃん殺すらしいから。時間読めないからその男のガキを埋めるのは明日にしてくれーっ」

「ハエが来ちゃうじゃん……全く。まだ殺ってなかったのね……遅いなぁ。ってか京介さんには殺人は無理なんでは？」

ブツブツ言いながら京介と圭介のベッドへ向かうみゆき。

京介は、ドでかいイチモツを妹の美奈のアナルへ突っ込んで激しくバックで犯していた。

「痛い痛い痛いいいいっ！！　わーん！わーん！　おねーちゃん……助け……」

姉を呼ぼうとしたが、既に殺されている事を思い出し、口をつぐ

む美奈。
シーツを噛みながらひたすら肛門の激痛に堪えるしかなかった。
やがて夥しい量の精液で美奈の直腸は満たされた。
大便のこびりついたペニスを拭きながら、後始末を圭介とみゆきにお願いする京介。

「やっぱお前はヘタレだな。これだけのレイプをしときながら殺人だけは出来ないなんて……」

「そうよ……もし捕まってもあんたも死刑だからね？　殺してないからって自分だけ助かるとか思わないでよね？」

「すまん、どうも内臓系は苦手なんだ……先に寝てるよ」

「やれやれ……みゆきがやるか？」

「女の子はあまり興味ないけど……でもこの子可愛いから殺ってみたい。圭介も京介と一緒に休んでて」

「分かった。じゃあバラしたらすぐに俺のベッドへこいよ！思いっきりイカせてやるからな！」

「少女のマンコに出しまくっといてまだ出せるの？　イカなかったらキンタマ潰してやるからね？あはは♪」

「怖い怖い……ガキにやってるだけに冗談に聞こえないぜ……じゃあ後程な」

「はーい！　後でね！」

「グスン……グスン……痛いよぉ。おうちへ帰りたいよぉ。おねーちゃんと一緒に帰りたい……グスン」

「美奈ちゃん……だっけ？　おねーちゃんはもう死んじゃったのよ？　圭介がバラバラにして埋めちゃったの。分かる？」

恐怖と絶望で更に激しく泣きわめく妹の美奈。

「とりあえずおねーちゃんが今からあなたを殺しちゃうのね？　どんな殺され方がいいかな？」

「いやっ！！　いやあああっ！！　許してっ！！　助けてっ！！」

「おねーちゃんも男の子も死んじゃったのにあなただけ助かろうなんて……死んだ二人に悪いでしょ？　ね？　死んじゃおっ♪」

竹刀を持ってきたみゆきは、お尻を突き上げるように美奈に命令する。

「痛みでお尻を下げたら日本刀で、肛門から串刺しにしてやるから……分かった？」

「は、はい……」

『パァンッ！　パァンッ！！』

「んがっ！？　ぎひいっ！！」

みゆきの拷問が始まった。
その時圭介と京介はグッスリと眠りについていた。
１００回叩き終わると、小便を漏らし、所々お尻の皮が裂け、血が流れていた。
それでも堪えている美奈。
よほど死ぬのが怖かったのだろう。

「よく堪えたわね……仰向けになりなさい！」

「は、はい」

「脚を開いて」

「はい……こうですか？」

「美奈のマンコが開くようにもっと大きく開いて！」

「はいっ！」

『ズガガガガッ！！』

「ぎゃああああああっ！？」

みゆきは大きく開かれた美奈の両足首を掴み、強烈な電気アンマを繰り出した。
靴を履いたままである。
ハイヒールの踵部分がたまに肛門に突き刺さる。
その度に血が吹き出していた。

「臭いウンコ……私のハイヒールに付けてくれたわね？　どうしてくれるのかしら？」

「はぁ。はぁ。なんでもしますから許して下さい……」

「そう。私のココ……舐めなさい」

あまりに可愛い顔をしていたので、つい同性の少女に発情してしまうみゆきであった。

「え？　おねーさんのオシッコする所を？」

「そう。早く舐めろ！　殺すわよ？」

「は、はいっ！　ピチャッ！　ピチャッ！」

「あっ！　あんっ……もっと激しく舐めろ！　舌を奥に突っ込んで」

「んんっ！　レロレロ……くちゅっ……ぬぽっ！　ぬぽっ！」

「いいっ！　いいわよっ！！　私、イク……イッちゃううううっ！！」

『ビクビクッ……ビクンビクンッ！！』

小学六年生の少女の口内は、二十歳の女の愛液で満たされた。

「ごほっ！　ごほっ！　げほっ！」

「私の愛液……美味しくない？」

あわてて首を横に振る美奈。

「そう。ありがとう。今度は私がイカせてあげる……股を開いて……じっとしてるのよ？」

『ピチャッ！ピチャッ！　クチュクチュ！』

「ふぅ、ふぅ、ふぅ。」

生まれて始めての陰部を他人に舐められる感覚に、激しく鳥肌を立たせたが、時間が過ぎるにつれ、少しずつ気持ちよくなってゆく自分がいた。

「ふぅ、ふぅ……あん……あんっ」

「ついに感じてきたみたいね？　とても可愛いわ美奈。あなたは私が守ってあげる。だから一生私の側にいて……」

「あんっ！！　あはあぁあぁあんっ！！」

『ガクガク……プシャー！！』

小さく震えたかと思った次の瞬間、潮を吹き、夥しい量の愛液を垂れ流した美奈。

小学生でも高学年ともなればオナニーは当たり前とゆうものだった。

イクことも、何かのきっかけがあれば簡単だった。

「美奈ちゃん……おねーちゃん殺してしまってごめんね。あなたは私が守るから……私のこと好きになって……」

抱き締めてキスをするみゆき。

小学生相手に思いっきり舌を入れてのディープキスだった。

逆らえば殺される恐怖から、美奈は大人しくみゆきの舌を口内に受け入れていた。

更に舌を絡めてペチャクチャクチャ音をたてる。

気が付けば火曜日の朝が来ていた。

「おはようみゆき……あれ？　その子……殺してなかったのか？」

「おっは！　おっ！？　俺の犯した妹ちゃん、生きてたんだな！　何かホッとしたぞっ！」

「どうゆうつもりだ？　みゆき。生かして返したら絶対にガキは口を割る……俺たちはあっとゆうまに捕まるぜ？」

「誰も帰すなんて言ってないじゃん……私が面倒見て育てるよ」

「育てる！？　な、何をバカなことを？　今までの少女は全て一緒に殺してバラして埋めてきたじゃないか？　何でコイツだけ！？」

「私が好きになったの……お願いだから見逃して……あなたのことも大好きだから……ね？」

「…………」

「いいじゃんか！　たまには生かしておくことも！　俺はどちらかといえば殺人は反対だな！　わははは♪」

「ちっ……分かったよ。好きにしろ……」

東部地方某所……。

「結局月曜日は歩きっぱなし……なんか本当に現れるのか不安になってきたよ……もう2時だし」

「美香ちゃんはほんと……よく愚痴るね……まだ火曜日……二日目じゃないの？　一週間ウォーキング続けてもダメだったら愚痴ればいいと思うけど？」

美香と明日香の会話を聞きながら、莉央もひたすら歩き続けていた。

朝の7時から夕方5時まで……まだ5時までは3時間もあった。

散歩中のお爺さんのラジオが響いてくる。

《最近立て続けに起こっている連続失踪事件ですが、今月行方不明になった○○小学校の12歳の女子児童二人に続き、△△小学校の10歳の男子児童も行方不明になっていることが捜査当局の調べで明らかになりました。事件と事故の両面での捜査が進められております》

「男の子まで拐われ出した？　犯人は変態中の変態なのかもね……」

「明日香ちゃんと同じく！　あたしもそう思う。だいたい子供とはいえ同性を性の対象として見ること自体がどうかと思うのよね！」

「美香ちゃん……莉央ちゃんのこと……」

「しゃーらっぷ！！　黙りこくってくれるかな？　明日香さん」

「さんって……呼ばれてもね……まぁいいか」

「出たわよ？」

莉央が真顔で呟く。

「え？　どこどこ？」

「見えないんだけど？」

美香と明日香はキョロキョロ周りを見渡す。

「キョロキョロしないで！　向こうの電信柱の影……あたしたちを待ち伏せしてるのが明白に見てとれるわ。そっとこのまま近付きましょう」

少しずつ電信柱に近付きながら不意の自体に備えて気を引き締める三人だった。

すると、一人の女性が現れた。

茶髪でロングの、長身で美女と言えるほどの女性だった。

「お嬢ちゃんたち、ちょっといいかな？」

「何ですか？　見知らぬ大人に声を掛けられたら付いていったらダメだと先生に言われてますが？」

少し訝しげに女性を見上げながら返事をする莉央。

「あらあら！　そんな怪しいものじゃないわよ！　だいたい怪しい人や犯罪者って男性でしょ？　こんな美人がそんなことするわけないじゃん」

「明日香ちゃん！　この人、自分のこと美人って言ってるよ……聞いた？　今の……」

「聞いた聞いた！　自意識過剰にもほどがあるわよね？　最悪っ」

ぼそぼそと小声で陰口を言う美香と明日香だった。

「悪かったわね？　自意識過剰で……でも本当だからしかたないでしょ？」

「ゲッ！？　聞こえてた！？」

「なんちゅうデビルイヤー……」

「ちょっと黙っててくれるかな？　お二人さん」

再度目の前の女性を睨み付ける菅野莉央。

「私の家、少し遠いんだけど今から遊びに来ない？　美味しいお菓子もたくさん買ってあるし、お庭になってる野菜や果物も食べ放題よ！　そこに停めてある車で３０分くらいだから」

「後であたしたちを家まで送ってくれるなら構いませんけど？」

「フルーツ食べ放題！？　それいいなっ！」

「美香ちゃんは食べ物にはほんと弱いんだから……私も野菜食べ放題素敵っ！」

「決まったわね！　じゃあ私に付いてきて」

言われるがままに付いていき、真っ赤なマーチに乗って車はどんどん進んで行く。
峠を越えた辺りに小さな小径が見えてきた。
更に狭くなる小径を突き進んで、山頂方面へ車は進む。
昔ながらの平屋の建物が見えてきた。

「そこ、私の家だから。さぁ向かいましょう」

玄関を入った三人は、まず異臭に違和感を感じた。

「なんか……変な匂いしますね？　この家」

「失礼なこと言わないの！　美香ちゃん」

叱る結城明日香も少し異臭を感じていた。

『なに？　このツンとする匂い……よく嗅いだことのある血生臭い匂い……？』

莉央がそう感じた瞬間、玄関のドアが外から閉められた音に気付く。

「やっぱりコイツが犯人……女だったのか……」

「莉央ちゃん、女の人だけとは限らないよ？　奥から二人近寄ってきてる……」

珍しく富田美香が莉央と明日香より先に気付いた。

「やぁやぁ！　小学生の少女たち！　アリスの部屋へようこそ！」

「アリスの解剖室へようこそ♪」

聞き覚えのある声に一瞬硬直する莉央。

「お兄ちゃん？」

「へっ!? り、莉央っ!? 何でお前がここに!?」

「京介さん……莉央ちゃんのお兄ちゃんだよね？ これって……酷すぎる運命が……」

美香がその場に膝をついて崩れこんだ。

「…………美香ちゃんも覚えてたんだ…………私も覚えてる。これはヤバいよ。酷すぎる運命なんてもんじゃ……」

「どうした!? 京介！ 何を動揺してる!? 今回も可愛い子ちゃんばかりじゃないか？ 犯しがいがあるぜ？ 殺しがいもな♪」

「今、お兄ちゃんって……言った？ ………京介くん、まさかあの子？」

誘拐担当のみゆきも今回ばかりはやってしまった感が半端でなかった。

「へ？　京介………お兄ちゃんって……まさかお前の妹がいるのか？」

「あぁ………終わった」

「はぁ？　何が終わったんだよ？　終わんねーよ！　こんな小学生のガキども相手に負ける訳がないんだし……妹だけは帰してやって、ツインテールとポニーテールのガキだけやっちゃおーぜ？」

「終わったんだよもう……俺たちは全員……死ぬ」

「バカな事を言わないでよ！　だからあんたの妹さんは助けてやるから残りの二人だけ犯して殺して埋めちゃったらいいじゃん？　圭介はそう言ってるのよ！　意味理解できてる？　京介くん」

「お兄ちゃん……男の子にしか興味ないと思ってたから今回の犯人の一味だなんてこれっぽっちも思ってなかったよ……どうして？　どうしてこんなバカな事を？」

「待ってくれ莉央！　確かに女が誘拐してきた女子児童をレイプした。でも俺は一人も殺しちゃいない！　俺は血を見るのが苦手なんだ！　莉央もよく知ってるハズだろ？」

「殺したのは俺と彼女のみゆきさ。お前の兄貴はほんとに殺人はやっちゃいない」

俯いて黙り込む莉央に声をかける美香。

「良かったじゃん！！　殺人してないならお兄ちゃんは対象じゃないよね？　誘拐殺人の犯人を処刑するのが今回のあたしたちの任務だし！　ね？　明日香ちゃん」

「そうだよ！　殺してないならお兄ちゃんにはいつもの無罪で済むんじゃない？　藤堂さんにもお願いしてみようよ！　唯一処刑を免れた愛子ちゃんの例もあるし」

「莉央………分かってるさ。行動を共にしたら同罪なんだよな……せめて苦しめないで死なせて欲しい……」

「それはダメ………今回の犯人は誰だろうと無茶苦茶苦しんで死んでもらうって決めてたの。ごめんねお兄ちゃん」

しばらく沈黙が続く山奥のアジト……。

美香と明日香は涙を流しながら膝を付き、ヘタリ込んでいる。

「おい……おいって！！」

沈黙を破る圭介の怒声が山奥のアジトに響き渡る。

「大人三人と小学生のガキが三人……この状態で俺たちが死ぬ？　何をふざけたことを言ってやがる！　今すぐぶち殺してやるよこんなガキども！！　おらぁっ！！」

『カチッ！！』

襲いかかる圭介を難なくかわしながら、奥歯のＧＰＳ兼、緊急スイッチを押す莉央。

『パリンッ！　パリンッ！！　』

奥と手前の大きな窓が一瞬で叩き割られ、五人のマシンガンを持った部隊が押し込んで来た。
映画のようなシーンに、さすがの圭介もみゆきも凍りつく……。

「動くな！　少しでも動くと国の命により射殺する！」

素直に手をあげる京介とみゆき。
圭介も、マシンガンを持った五人には敵わないと悟り、慌てて手をあげる。

「冗談だろ？　足がつくようなことした覚えないのに……」

「私の誘拐も完璧だったと思ったけど……なるほどね……囮捜査って訳か。お嬢ちゃんのどこかにＧＰＳでも仕込まれていたんだねきっと」

「申し訳ございません……そうゆうことでした。今日はあなたたち

三人の命日となることも……ついでにお伝えしておきますね」

「え？　それは冗談キツいわお嬢ちゃん。どうせ死刑だろうけどさ。弁護士付けてきちんと裁判してから……判決に従うよ。帰ってゆっくり寝なさいね！」

ポンポンと莉央の頭を軽く叩いて連行されようとするが、何か様子がおかしい。

ベットに仰向けに拘束されてゆく圭介と京介……。

次の瞬間、みゆき自身も連行されずにベットに拘束されていった。

「あれ？　警察のみなさん、これはどうゆう事でしょうか？　早く私たちを連行してもらえます？」

「そうだ！　もう逃げも隠れもしないから拘束を解いて早く連行しろ！　何をしてやがるんだ！？」

「………諦めろ……そいつらは警察じゃあない。国の特殊な機関の連中だ。俺たちは俺の妹たちに……莉央たちに拷問されて処刑される。もう覚悟をきめてくれ圭介！　みゆきちゃんもな……」

敬礼して去ってゆく五人の武装集団。

莉央たち三人も深く御辞儀をして見送った。

さすがの莉央たちも、大人の男二人にはなかなか敵わない。

藤堂長官の特殊部隊のお陰で事なきを得た。

もともと藤堂長官の命令を聞いただけの話であるが……。

「とりあえず一番狂暴な圭介さんとやらを……拷問開始します。美香ちゃんと明日香ちゃんはみゆきとゆう女性を拷問して。お兄ちゃんは……最後に考えるから」

「うん。出来れば許してあげて莉央ちゃん」

「私もそう思う。自身のお兄ちゃんなんだから血も繋がってるわけだし……残酷すぎるよ……藤堂長官も知らないハズだしね……」

「早くやって！」

圭介の衣服をメスで切り裂き、裸にしながら恫喝する莉央。

「は、はいっ！」

「はいっ！」

美香と明日香は慌ててみゆきの衣服を切り裂き、脱がせ始めた。
莉央は圭介の爪を一枚一枚ペンチで剥がしてゆく。

「ギャアアアッ！！　いってええええっ！！　やめろクソガキッ！！　ぶっ殺すぞおおおっ！！」

『バリッ……バリッ……バリッ』

ゆっくりと的確に剥がしてゆき、ついに両手の１０枚の爪は全て剥がされた。
歯を食い縛って痛みに堪えようとするが、あまりの痛さに泣き叫んでしまった。

「いでええええっ！！　いでえよおおおおっ！！」

「そう。痛いんだ。足の爪も全部剥がしちゃうから……」

『バリッ……バリッ……』

「ぐぎゃああああっ！！　やめてええええっ！！　お願いですっ！！莉央様っ！！　許してええっ！！」

「様付けされても困るのよね。あたしに少しでも罪悪感を感じさせないでくれる？　よっと」

『グリグリ……バリッ！』

ついに足の指の爪も１０枚全て剥がし終える。

泣き叫ぶ圭介の声が響き渡る中、美香と明日香も圭介の彼女であるみゆきの両手と両足の爪を、ペンチで剥がし始めた。

「あたし両手いくから！　明日香ちゃんは足の爪お願いね！えいっっ

！」

「いいよ。小さいから剥がしやすいし。よっと」

『バリッ……バリッ……』

『バリッ……バリッ……』

一枚一枚足と手の爪を交互に剥がしてゆく二人。

「ギャアアアアアアッ！！　痛い痛い痛い痛い痛いっ！！　やめてえええっ！！　お嬢ちゃんたちっ！　何でもしますから許してえええっ！！」

「みゆきさんの内臓ちょうだい♪」

笑顔で美香がお願いする。

「ひいっ！　そんな……死んじゃう」

「死ぬんだよ！　だからいいじゃん？　子宮と卵巣は生きてる内に抉り出してやるからね？お楽しみに♪　この辺かな？　ほれほれ」

そう言いながら明日香はみゆきのおへその辺りをポンポンと軽く叩いた。

莉央は、糸鋸を取り出して圭介の太腿にあてがう。

「嘘だろ……や、やめてくれっ！！　それは酷すぎるっ！！」

「小学生の女の子にやってたよね？　あんたたちも……同じ目に遭ってくれるかな？　いくよ？」

『ギコギコ……ギコギコ……ギコギコ』

狂ったように泣き叫ぶが、みゆきの方も同じく美香と明日香に手足を切断されている真っ最中なので、お互い恋人を心配してる場合ではなかった。

出血性ショックでは死ねないように血止めの注射と、ショック死も出来ないように少しの痛み止めの注射も打った。

これは圭介にもみゆきにもだった。

「少しは痛みがマシになった？　でも地獄はこれからだよ？」

圭介のおへそへメスを突き入れる莉央。

「ぐえっ！？　痛いい……」

ペニスの真上まで一気に切り裂く。

その傷口へ右手を突っ込んでゆく。
膀胱を握り締め、溜まっていた小便を絞り出した。
凄まじい勢いで小便が真上に吹き出した。
膀胱にメスを入れ、くり貫いて取り出す。顔に乗せてグリグリと擦り付けた。

「ぐえっ！　くさっ！　ぶはあっ！！」

更に右手を突っ込み、グリグリ捩じ込んでゆく。
前立腺を握り締めると、物凄い早さで揉みシゴキ始めた。

「うっ!?　な、何か気持ちいい……イキそうだ……ひいっ」

「イケば？　あんたの人生最期の射精……前立腺マッサージで見届けてあげるから。こんな丸い物ニギニギされて射精するなんて……何か哀れだけどね……」

『グリグリ……ぐちゅくちゅぐちゅぐちゅぐちゅ』

「は、はうっ!?　イクッ!?　イクウウッ！！」

「イっていいよ」

『ドピュピュピュピュピュッ！！』

「たくさん出たね？　隣で彼女もイカされてるよ？　ほら」

『ぐしゅしゅしゅしゅしゅしゅしゅうっ！！』

美香の中指が高速でみゆきの膣内を掻き回していた。

「ほら、人生最期のオーガズムを味わわせてやるよ？　イケ！　オバサンッ！！」

「やあっ！　イク……イックウウッ！！」

『プシャー！　ぷしゅっ！ふめしゅっ！　プシャシャー！！』

『ひくひく……ガクン……』

イッた瞬間、みゆきのおへそにもメスが突き入れられ、クリトリス近くまで一気に切り裂かれた。

「ンガアアアッ！？　痛いっ！　死ぬうっ！？」

「簡単には死ねないから安心して！　オバハン」

今度は明日香の右手がお腹に挿入されていき、子宮を握り締めるとグリグリ扱き始める。

「いやっ！そんなとこっ！　やめてっ！」

「丸くてプルプルしてるぅ。悪いことしなかったらこの中で赤ちゃん育てられたのにね？　引きずり出してあげるね？　えいい……」

『ぐちゅちゅちゅ……ぱちゅっ！！……プルルンッ』

「ギャアアアッ！！」

「ほら、オバハンの子宮よ？　こうやって真っ二つに切り裂いたらね……よっ。よいしょっと……ほうら！　中身はこんななってるの！　凄いね♡」

「やめて……死ぬ……死ぬ……」

「だから二十歳のオバハンは今日ここで死ぬの！　彼氏の圭介もほぼ同時に逝けるから安心して死んで♪」

そう言いながら抉り出してから更に真っ二つに切り裂かれた子宮を床に落として足の裏で擦り潰しながらもう一度穴が空いたお腹に手を入れる明日香。

「私の右手が……どこから出てくると思う？　ほらほら……答えてオバハンッ！」

「し、知らない……何か子宮のあった辺りが痛い……と言うか何か熱い……」

『ぐちゅちゅちゅちゅ……ばちゅっ！！』

「こんにちわー♡」

みゆきの性器から明日香の右手が飛び出した。

「ひっ！？　やめてお嬢ちゃんっ！！　内臓の中を……しかも性器から抜くなんて……そんなことしたらバイキン入って化膿しちゃううっ！！」

「私の手はバイキンまみれといいたいの？　失礼な女ね？」

そのまま性器から突き出した右手の人差し指と親指で、クリトリスを思いっきり摘まんでギュウッと力を込めた。

「痛いいいっ！！　ごめんなさいごめんなさいごめんなさいっ！！わーんわーん！！」

「20歳の大人が泣いちゃダメなんだ〜。みっともないオバサンにはあたしもお仕置きしちゃうからね？　ほら、ここから切り裂いたお腹に突き出してあげるよ♡」

『つぷっ……ズズ……ずぽっ！！　グリリリリ……バリッ！ボコッ！！』

「ひいいっ！　やめてえええっ！！　痛いっ！！」

美香の人差し指と中指が肛門に入り、徐々に手首まで突っ込み、直腸を進んでから大腸を突き破り、お腹から飛び出した。
当然ながら指にはウンコが付いていた。
「私と美香ちゃんの手はコイツのお腹の中で交互通行になっちゃったね？　あはは」
「ほんと。あたしの方はウンコまみれになっちゃったけど……」
ここでまさかの激しい痙攣が起こった。
大量の血を噴き出して死んでしまった。
「あっ！　早くも死んじゃった!?　やらかしちゃったなぁ」
「私もまさかここまでで死んじゃうとは……ごめんね莉央ちゃん。あまり苦しめられなかったかも……」
隣では両手両足を切断されたままお腹を開かれて、陰部をシゴかれている圭介がいた。
陰嚢はパックリ真ん中から切開され、二つとも睾丸は飛び出している。
莉央が上下にピストン運動するのに合わせて圭介の内膝の上をプルンプルン揺れていた。
「うわぁ～。四肢切断された男がチンポをシゴかれてるぅ～。凄い

エッチな光景だね？　莉央ちゃん……やっぱり男の生の睾丸を見てたら変に興奮してきちゃうよ♡」

美香がしゃがみ込んで精管にぶら下がって揺れている睾丸を見つめ出した。

「二個ともこんにちはしちゃってるけど……管が繋がってるってことは……シゴいたら射精できちゃうんだよね？　莉央ちゃん？」

明日香も反対側にしゃがみ込み、圭介の睾丸と、莉央の高速のテコキを眺め出した。

「もちろん。もう前立腺シゴいて一回はイカせてるんだけどね……性欲旺盛なヤツだから死ぬまでに何回イケるのかなぁって思っちゃって……てへ♡　ほらほら……もし１０分以内に射精できないと、万力で時間かけて生の睾丸を一つずつ潰してやるからね？　わかってるの？圭介とやら」

『シコシコシコシコ！！』

「ひいい……痛い……全身が痛いい……もう殺してくれ……」

「時間かけて殺さなきゃ面白くないじゃん？　こうやって可愛い小学生の女の子たちに囲まれて……手コキしてもらえるなんて……とっても幸せなんだよ？　お前は。わかってんの？ほらほらほら！」

『シコシコシコシコシコシコシコシコシコ！！』

更に激しくピストン運動をする莉央の右手。
激しく揺れる生睾丸……左右どころかパンパンと自身の膝に跳ね返りながら上下にも揺れ出した。
「アハハ♪　上下左右に踊ってるわよ？　白い生のキンタマが♡　やっぱり管が繋がってるまま抉り出したほうが楽しいね？」
明日香は嬉しそうに人差し指で右睾丸を弾き始めた。
『ピンピンピンッ！！』
「ぐわっ！おうっ！あはっ！ひぎっ！」
『びくっ！　びくっ！ビクンッ！！　ビクンッ！！』
指で弾くのに合わせて、声と共に大きく仰け反る圭介の体。
「面白そう♪　あたしも反対側の玉弾こっと♡」
『ピンピンピンピンピンッ！！』
「いぎっ！がっ！　ぎっ！　ぐっ！げっ！　ごっ！」
明日香と美香がバラバラのタイミングで好き勝手に金玉弾きを始めたものだから、圭介の体は超忙しく痙攣するかのように大きく小さくビクンビクンし続けている。

「もう～……。そんなに激しく二人してキンタマ弾いたらあたしがせっかくシゴイてるのに激痛過ぎてなかなかイケないじゃんコイツ……」

「ごめんなさい。ちょっとプニプニ握って、触り心地でも楽しんでるよ」

「私も……」

美香と明日香のキンタマ弾きが止まったので、圭介は射精するチャンスが訪れた。

もしイケたらまた１０分生き延びることが出来る。

「次が正真正銘の人生の最期の射精になるだろうから……あたしも本気出してあげるよ。ほらほらほらほらぁっ！」

『シコシコシコシコシコ……シュコココココッ！！！！』

「うっ、全身が痛いのに……出そう……うっ、イクッ！！イクウウッ－！！」

『どぴゅっ……ドロドロ……』

ほんの数センチだけ上に飛んだ程度で、殆どは莉央の手を汚しながら、トロトロと勢いなく垂れ流れてきた。

「そんな状態でイケて良かったね♡　汚いセーエキあたしの指にかけられたけど……罰として割り箸で尿道から串刺しの刑ねっ♪」

割り箸をパキッと割りながら静かに宣告する。

「ふぅ。ふぅ。も、もう嫌だ……痛いのは……全身が痛い中でようやくイケたのに……早く殺してくれ……」

「もうすぐ死んでこの肉体も全て焼かれてこの世から消えちゃうんだから……最後にもっと圭介の体が壊れる所楽しませてよ〜。あたしたちドＳだから。ねっ？」

『ずぷ……ズホホボボボッ！！』

「ひぎゃあああああっ！！！！」

莉央が握りしめた割った後の半分の割り箸は、尿道から一気に根元まで突き刺さった。

膀胱は取られているので傷付く心配はなかった。

「ありゃりゃ……こりゃ相当痛いわ……尿道に針金といい勝負かな？」

「四角形だから針金より痛いと思うな私は……」

美香と明日香はそれぞれ感想を述べながら性的拷問を楽しんでいる。

「この半分残った割り箸で好きなことしてあげて！」

莉央が美香に渡す。

「はーい！　好きに使ってと言われてもこの状況じゃ……アナル串刺しか生の金玉の田楽刺し……うふふ♡」

圭介は地獄の激痛の中でも嫌な予感を感じていた。
嫌な予感は的中してしまう。
本日最大最強の激痛地獄は富田美香に執行されることとなった。
左手に右の生睾丸を掴み取り、半分に折られた割り箸を玉の中心部にあてがう美香。
グリグリと押し付け始めた。

「何するかわかるよね？　圭介さん♪」

「うぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃあああっ！！　痛い痛い痛いいいっ！！ヤメロヤメロヤメロオオッ！！」

「いっくよぉー♡　割り箸で生のキンタマが田楽刺しぃ〜っ♡」

『グリグリグリグリ……ぶちゅ！　ぶちゅううううっ！！　ぷすんっ』

先が尖ってないため、無理矢理手首を捻りながら捩じ込むように割り箸を貫通させせることに成功した美香。

「ギィエエエエエエッ！！！！　がくっ。ブクブク」

これは超がつく激痛だった。意識が飛び、泡のヨダレを噴き出す圭介。

「ふう～。少し固かったなぁ。何がギィエエエエエよ？　車に潰される時のカエルかお前は！　さぁも一個もいっくよぉー♪」

同じように手で掴んでからグリグリと捻り込むようにして表面の膜を突破！　ゼリー状の内部を貫通して、また反対側の膜を突き破る。

生睾丸の田楽刺しが出来上がったが、まだ神経の管を切っていないため、激痛信号は男の身体中を駆け巡っている。

「首を左右に振りながら、切断されて短くなった両手両足も最大限にバタつかせながらの痙攣が始まった。

「アハハ♪　よっぽど痛かったんだね美香ちゃんのキンタマ串刺し……田楽刺し？　ま、どっちでも同じか……私もしたかったなぁ」

「明日香ちゃんはこのメスで肛門括約筋でも繰り貫いて、垂れ流しアナルにしてやってよ♪　もう殺しちゃうからこの男も後々心配ないし」

明日香は手際よく圭介の肛門を繰り抜き、かなり臭い肛門を圭介の直腸深く捩じ込んだ。

「ほらほら、ついでに私の長い指で直腸掻き回してあげるね？　もう気持ち良くもならないか……そんなダルマのような哀れな姿で睾丸まであんなにされちゃ……あは♡」

「ぐ、ぐわああはあああっ！！」

死にきれずに再び意識が戻った圭介はこの世のものとは思えないほどの絶叫を始めた。

「ちょっと待って！圭介さん。あと少しで逝かせてあげるから！よっと。」

『ズッ……サクッ……ブシュウウウッ！！』

喉をナイフで少し裂き、声が出せないように細工した。

『ゴボボ……かひゅっ！　ゴボボ……かひゅうっ！！』

血と空気が混じって痛々しい呼吸音が聞こえるなか、莉央は圭介の乳首を摘まみあげ、二つともナイフで切り取った。
その乳首は圭介本人の鼻の穴に捩じ込む。

「圭介さんっ。これであたしたちはあなたのエッチな部分は全て破壊しちゃいましたぁ♡」

「かひゅっひゅっ！　かひゅひゅひゅひゅうっ！！」

「あれ？　死ぬサインだね？　過呼吸起こしちゃった……お待たせだね」

「莉央ちゃん、凄い発想だね……切り取った乳首をまさか鼻の穴に突っ込んじゃうとは……もうついに殺っちゃうのかな？」

「うん。でももう一つやり残した事があるのよ圭介さん」

大きなサイズの爆竹を取り出すと圭介の直腸深くへ差し込む。明日香によって、肛門をくり貫かれているので、少々太い爆竹も簡単に飲み込んだ。
微かに見えている導火線に火をつける莉央。

「これ、前に女の子宮ドロドロにしちゃった爆竹だ……」

「ほんと……これで死ぬ寸前に直腸や大腸、小腸までチョグチョだ

ね♡」

『ポンッ！！』

「ごぼぶぼあっ！？」

直腸深くで炸裂した爆竹は、直腸全てと、大腸と小腸の一部をミンチにした。
肛門のあった部位には大きな穴がパックリと開き、大量の血と大便と腸の断片が流れ出てくる。

「あはは。何て言ったの？　今……もう一回言ってみて？」

「ごぼぶぶぶ……」

「もう意味分かんないけど……ともかく無茶苦茶苦しんだね？　いいわ。もう楽にしてあげる。長い長～い地獄の旅……お疲れ様でした」

半分切れた首を引き起こして、後ろからナイフを叩きつける。五回、六回と叩きつける内に、ついに骨が砕け、ポロリと転がり落ちた。
床に落ちた生首を足の裏でグリグリと踏みつけたうえで、思いっ切り蹴飛ばした。
美香と明日香の方へ転がってくる。

「きゃっ！？」

「やだっ！！」

慌ててジャンプしてかわす二人だった。

「アハハ！　まるでトンキーコングが樽をジャンプするシーンみたいね♪」

「何？　トンキーコングって？　無茶苦茶古そうなゲームの名前なんじゃないの？　しかもジャンプしてたのゴリラだったたのでは……？　酷いな莉央ちゃんってば……あはは♪」

笑いながら三人で歩み寄る先には……実兄の菅野京介がいた。

急に現実に戻り真顔になる三人。

「相変わらず残酷だな……お前たちは……俺はどうゆう拷問を受けるんだ？　莉央がやるのか？」

「…………」

「…………」

「…………」

「おい！　みんなして沈黙かよ？　もう覚悟はしてるから……早く

殺ってくれよ」

その時だった。
どこからかすすり泣く声が聞こえてくる。
「あれ？　莉央ちゃん！　何か泣き声が聞こえるよ？」
「ほんとだ！　奥の方から……行ってみよう！」
「私には全く聞こえなかったんだけど……？？」
三人で向かった奥の部屋には……一人の少女が座り込んで泣いていた。
「あれ？　あなた、どこかで見たことある……」
美香が首を傾げて考え出す。
「きっと隣のクラスの子だよ。すれ違うくらいで話す機会もなかったから、見たことはあっても名前なんて覚えてないだけ……」
明日香は美香に囁いた。

「行方不明になってたうちの学校の生徒だね！　良かった！　生存者がいたんだ！」

莉央も素直に喜んだ。

「莉央ちゃん！　これは快挙だから！　生存者確保の朗報の代わりにお兄ちゃんの命を助けてもらえるかも！」

「ほんとだよ！私も思った！　藤堂長官に電話してみて！　莉央ちゃん！　お兄さんは人を殺して無いんだから拷問処刑は絶対可哀想だよ！」

二人に促されて特殊任務省の藤堂長官へ電話をかける莉央。

「やぁ、お疲れ様！この度は囮捜査成功したようだね？　大したもんだ。生存者はいないと報告は入っているが……残念だ。だが君たちが無事だったことは大いに称賛出来る！　ほんとにお疲れ様だ！後の二人にも良くやったと伝えておいてくれたまえ」

莉央の兄がいた成り行きと、生存者がいたことを長官に伝えた。

「そうか！　君たちと同じ学校の三原美奈さんが生きていたか！……六年二組の双子の姉妹……妹の方だな。姉の三原千恵さんと△△

小学校の飯田明君は残念だったが……。しかし絶望的な状況だったのによくぞ一人だけでも殺されなくて済んだものだな！　これは君たちの手柄とも言える。この度の囮捜査がなければ手遅れだったかもしれん……ではお疲れ様だ」

「あっ！　あのっ！」

「何だね？　もう何も言うことは無いのだが……」

「えっ？　あたしのお兄ちゃん……処刑対象ですよね……」

「何も言うことは無いと言ったはずだ。君の兄も同罪なのかも知れんが、人を殺すことなど出来ない気の弱い男だ。生かしておいても殺される人間は出ないだろうこれから先も……ずっとな。君が色々人生の指導をしてやってくれ。血縁者は大切にな。ではさらばだ！」

泣いてる三原美奈を抱き締めて、頭を数回撫で終わると、スッと立ち上がり菅野京介のもとへゆく莉央。

「莉央ちゃん……まさか……あたしそれは見たくない」

「藤堂長官は何て言ったの？　許してくれなかったの？」

拘束されている兄の前に立ち、じっと目を睨み付ける。

「お、おい、怖いな莉央……無茶苦茶痛いことして殺す気だな？

まあお前にならば残酷に殺されても……本望かな。さあやってくれ……煮るなり焼くなり……」

『パンパンパンパン！！』

「ぶはっ！　げはっ！　いってえぇぇぇぇっ！？　ちょ、ちょっと待ってくれ！　まだ話してるのに拷問開始かよっ！？　最後に話しくらい……ん？」

京介の頬に水滴が落ちた。

「！？」

「？？」

震えながら隣で見ている美香と明日香も水滴の出所を探した。

莉央の目から溢れ落ちた涙だった。

「莉央……お前……」

『パンパンパパパパパパン！！！』

「でへっ！　ぶはっ！　ふぎゃっ！！　ぶはははあっ！！」

凄まじい勢いの往復ビンタが兄の京介に襲いかかる……。
１００回はヒットした。
瞼も頬も真っ赤に晴れ上がり敗戦したボクサーのような男らしい顔になっていた。
「もう二度と殺人犯なんかとつるむなよ！　今度は絶対殺すからね！！」
「………ぶは？」
「ぶは？　じゃないわよバーカッ！！」
きょとんとしている兄に背を向け、美香と明日香に目配せしてアジトを出ていく莉央。
二人は満面の笑みで顔を見合わせると、そそくさと駆け寄り、菅野京介の拘束を解いた。
「あ、ありがとう。君たちも俺のこと……心配してくれてたんだ……ほんと反省するよ。もう二度と今回のような事件は起こさない……」
「当然です！　今度やったらあたしはお兄さんのオチンチン……切断します絶対に！」
「私は……お尻の穴から腕突っ込んで脳味噌引きずり出してやるんだから」

「怖っ！！　マジか……莉央と変わらないじゃねぇかそれ……なんかどこかのオッサンギャグみたいだけど……」

「あははは」

三人の笑い声が響く中、△△小学校の１０歳の男の子、飯田明君と、埋められた三原千恵さんの遺体と、二人の殺人者カップルの遺体は迅速に運び出された。

血のシミが残る床やベッド………。
山登りに訪れる人々が『幽霊屋敷』と名付けてからは、人が立ち入る事も無くなり、完全な廃墟と化した………。

「ねえねえ莉央ちゃん！　私たちどうやってお家に帰るのかな？」

「ほんとだ！　特殊部隊の人達みんな引き上げちゃったし……もうすぐ日が暮れるよ……」

「焦らないの！　あたしたちにはあの女の残していった真っ赤な車があるじゃない！　……お兄ちゃん、運転できるよね？」

「がはは！　俺に運転できるわけねーじゃん！」

「………………」

「………………」

連続誘拐殺人犯を処刑せよ！（後書き）

無事に任務を遂行出来た三人。
血縁者の菅野京介も処刑せずに済んだ。
誘拐された小学生も、一人だけは無事に生還できて、今回は大いに社会に貢献出来た残酷処刑島の処刑執行人たちだった。

少年の夢　（前編）（前書き）

アイドル好きな中学生の男の子が現実離れした体験をしてしまう。
波乱万丈の少年の人生はどうなるのか？

少年の夢　（前編）

僕は南部地方の田舎町に住む中学三年生の男子、武藤誠也。
お父さんは物心つかない内に病気で死んじゃったから、お母さん一人で僕を育ててくれている。
あと、高校三年生の姉がいるからお母さんが夜お仕事に行ってるときは、殆どお姉ちゃんの作ってくれるご飯を食べている。

「おはよう誠也。昨日も遅くまであんたの友達部屋にいたみたいだけどゆっくり眠れた？　それとね……今夜は日曜日だけどお母さん仕事に行くんだって。日曜日担当の人が用事で休むからお母さん呼ばれたみたい。ほら、早く食べちゃって冷めない内に。今日の昼御飯は私の得意なハンバーグだよ！」

僕のお姉ちゃんの武藤和美。１８歳の私立高校に通う普通の女子高生。
真面目で責任感が強く、クラスでは委員長をやってるみたい。家族思いのとっても優しい性格なんだ。

「そうなんだ。母さんも大変だね。昼も週に三回はスーパーマーケットのレジ打ちのバイト行ってるし……早く僕たちが仕事について助けてあげなきゃだね……美味しそう！　頂きまーす！」

「そうだね。私も進学しないで高校卒業したらすぐに働くよ。お母さん倒れちゃう前に助けてあげたいから。そう言えばお母さん疲れ

てまだ寝てるみたいだから、起きてきてからハンバーグをチンして食べてもらうよ」
「うん。起こすの可哀想だもんね！　お父さんの保険とかかけてなかったの？　働き盛りの大人が死んだら凄い保険代が入るって親友の静夫が言ってたよ？」
人が死んだら大金が手に入る。国から貰える。どの家庭もみんな生命保険に加入している。みたいにずっと思っていた。
「なんかの手違いで数ヶ月保険代が家の預金から引き落としが出来なかったらしくて、一度契約が途切れたらしく、再度加入し直すとゆう形になったらしいんだけどね……加入した時は健康だったんだけど、健康診断で糖尿病になってたらしいの。だから同じ条件の保険に入れなかった。かなり不利な条件の保険に変わっちゃって……」
「だから死んじゃっても保険代は大して入ってこなかったんだね。お母さんが必死で働くのにはそうゆう理由もあったんだ」
家庭により色々事情があって、友人の知り合いが大金もらえたからといって、僕の家も同じとはいかない。
これからお姉ちゃんに色々教わりながら社会の仕組みとか理解していかなきゃ。
友人にシスコンとか言われるけど、お母さんや僕を大事にしてくれるお姉ちゃんが大好きだ。
台所のドアが開いてお母さんが入ってきた。

「あらおはよう。いい匂いね？　おっ！　和美得意のハンバーグだ！　母さんも大好きなんだよね〜♪」

「お母さんもゆっくり休めたの？　昨日も遅くまで帰らなかったし、今晩も仕事なんだよね？」

「大丈夫大丈夫！　水商売は私の天職だから！　お客さんと飲んでると色々楽しい話も聞けたりするのよ」

「ふうん。変な男に身体触られたりしてない？」

「うちの店はオサワリ現金だから！　大丈夫よ」

「厳禁じゃないのね……」

「ママさんがね！　面白い張り紙してるのよ。お客さんにお願い！って書いて、お尻一回触ったら現金三万円。胸は現金二万円。ほんとに戴いてる所を見ちゃったから冗談じゃない！　って、お客さんも認知してきてるから。最近全く触られたりしないよ。あはは♪」

お姉ちゃんとお母さんはしょっちゅうこう言った下的な話をするけど、中学生の僕にはかなり恥ずかしいので聞いていない振りをして話を変えている。

「あのさ！　今晩も莉央ちゃん見に行ってくるよ。夕方から八時までの劇場公演だから。静夫は明日香ちゃんに早く会いたい言ってた

しね」

「また見に行くの！？　最近改名したアイドルグループの……えっと……《真・絆ＧＩＲＬＳ》だっけ？　お小遣い殆どそれに使ってるんじゃないの？」

「静夫が月に一回は会いに行きたい行きたいとうるさいからね」

咄嗟に親友のせいにしたが、僕から熱く静夫を誘っているのが真実なんだよな。

「他にこれと言った趣味もない誠也だから……熱く女の子に惚れ込むのはいいことなんじゃない？　和美」

「まぁそうだけど……思春期だし仕方ないかな。あはは」

他愛もない話をしながら僕たち三人は食事を終えた。

お父さんを失った残りの家族三人は、お父さんの分まで幸せに一生を過ごすことが出来る……この時の僕はそれを信じて疑わなかった。

〇〇区某所。アイドルグループ《真・絆ＧＩＲＬＳ》六人による劇場公演が始まった。

「君を初めて見たときから～♪　この胸のときめきは本気だと気付いていた～♪　そうもう僕には君しかいない君しか見えない～♪」

「ワーワーワー！！」

「莉央ちゃーん！」

「明日香ちゃーん！」

「真理子ちゃーん！」

それぞれのファンの大声援に囲まれながら莉央たちの公演はどんどん盛り上がってゆく。

「めっちゃ可愛いよな明日香ちゃんは！」

「うん！　明日香ちゃんも美香ちゃんも可愛いけど僕はやっぱりセンターの莉央ちゃんだなっ♡　ヒューヒュー！！」

親友の静夫は明日香ちゃんばかりガン見しながら声援を送っていた。

胸が大きすぎるのは大人っぽ過ぎて僕にはちょっと苦手だった。

静夫には言えないけど…………。

小学生には小学生のオッパイの許容範囲があるのだ。

少なくとも僕の中ではね。

その点美香ちゃんは小さすぎる……。

いくらなんでも小さすぎるんだよな～。限度ってものがあるんだ。

「はっくしゅん！！」

「何っ！？　……美香ちゃん！　歌ってる最中にくしゃみはダメだよ？」

間奏中に明日香が小声で美香を叱る。

「ゴメン……誰かあたしのこと噂してる？　人気アイドルは辛いね！　テヘッ♪」

観客にばれないように器用な小声で会話する明日香と美香。
どんどん盛り上がってついにアンコールでの最終曲が始まった。

「今夜もあたしたち五人に会いに来てくれてありがとうみんな！　アンコールに応えて《大和ナデシコシコ》で今夜はシメたいと思いまーす！　皆さんも一緒に歌ってくださいねっ！！」

「ワーワー！！！！」

大盛況の中、その日の劇場公演が終幕した。

「あ～。ほんと可愛かったよなぁみんな！　また行こうな静夫」

「あぁ！　明日香ちゃんに今日も会えて幸せだぁ〜♡　じゃあな！　また明日学校で語ろうぜ！」

一時間ほど色々盛り上がって話をしてから静夫と別れた。バス停から自宅が近い静夫はバスで帰路につく。一人で電車に乗り込んだ僕は、少し疲れていたせいか、浅い眠りについた。

「今日も会いに来てくれてありがとう」

誰かが僕に話しかけてくる。

半分夢の中にいた僕は、その可愛らしい女の子……ボーカルの菅野莉央ちゃんそっくりの可愛らしい声に……その問いかけに無意識に答えていた。

「菅野莉央ちゃんは僕の人生で一番タイプの女の子なんだよな。いつでも会いに行くよ！」

半分夢の中で答えた僕だったが、数分後、かなりリアルな右手の感覚に目が覚めた。

知らない間に女の子と手を繋いでいる僕がいた。

「ん？　小学生の女の子？　君、何で僕の手を握ってるの？　嬉しいけど恥ずかしいな……」

黒髪ロングのその女の子は、大きなマスクを装着し、大きな帽子を被っていた。
なんだ……寝てるのか……。
何で僕の手を握ったまま寝てるんだ？　この子は………。

「むにゃ……あ、今晩は。君、もう１０回以上あたしの公演見に来てくれてるよね？」

何を言ってるんだこの子は？　僕は申し訳ないが少し頭のおかしい子なのか？　と勘ぐってしまった。
その子が《真・絆ＧＩＲＬＳ》のセンターの菅野莉央ちゃんだと気付くには少し時間が必要だった。
だって……帽子とマスクで殆ど素顔が見えないんだもん……。

「あれ？　その可愛らしい目は……どこかで見たことあるような……」

おもむろにマスクを外す少女の素顔を見た僕はチビった。
いや……本当に少しチビったと思う。

「り、莉央ちゃんっ！？　マジかっ！？」

「しっ！　大きな声出さないで！」

僕の心臓は飛び出しそうだった。

無茶苦茶大好きな理想の女の子……。しかもアイドルとゆう身近ではない存在………。

夢か現実かを自分の中で探っていた。

漫画のように自分の頬を思いっきりつねってみたが、どうやら夢ではないらしい。

隣に座って僕の手を握ってるのは紛れもなく人気絶頂のアイドルグループのボーカルの女の子……菅野莉央ちゃんその人だった。

「莉央ちゃん……ぼ、僕は莉央ちゃんを見たくて……莉央ちゃんだけに会いたくて……劇場公演に行かせてもらってます！　ごめんなさい！」

「あはは♪　どうして謝るの？　悪いことしてないし！　いつもいつも会いに来てくれてありがとうね！　舞台の上から君のこと見てたんだよ。しょっちゅう来てくれてるから顔を覚えちゃった。君みたいなファンがいるからあたしたちも頑張っていけるんだよ！　ほんと感謝してる」

「い、いえ………僕も静夫も毎日元気もらってます！　ありがとうございます！」

「どう見てもあたしより歳上だよね？　敬語って違和感あるんだけど？　普通に話してくれていいよ」

「はい！　わかりました莉央ちゃん！」

「あはは！　言ってる意味理解してくれてないし……」

「あはははは！　ごめんなさい！　ほんと夢のようで未だに信じられない……あの莉央ちゃんとこうして隣で座って……じかに話をしてるなんて……」

「また謝ってる♪　君はMなのかな？　あはは♪」

「え、M？　それってどうゆう……」

「今度の日曜日空いてる？」

「え？　ええっ！？」

「今度の日曜日はライブも劇場公演もレッスンも……なーんにもないんだ……良かったらあたしと遊園地でも行かない？　最近ＣＭで見たグランドコースターとかゆうエキサイトランドのジェットコースターに乗ってみたかったんだ」

「あれすごく怖いらしいね！　うん！　行こう！　……ってゆうかほんとにアイドルの莉央ちゃんと僕なんかがデートしていいの……かな？」

「いいんだよ。あたし、君みたいな男の子……タイプだよ。名前なんてゆうの？」

「せ、誠也です！　武藤誠也１５歳の中学三年生ですっ！！」

「だから普通に喋って誠也くん。ふふふ。三つ歳上なんだね。何か幼い顔してるけど」

３歳下の女の子に、幼い顔と言われたことは喜んでいいのか？

良い方に解釈すれば若く見られてるから喜ばないと。

でも悪く解釈すれば、子供扱いされてるような下に見られてるような………。

ま、こんなに可愛い理想のタイプの……しかも現役アイドルの子とデート出来ることになったのは、奇跡としかいいようがないほどの幸運だ！

素直に喜ぶべきだと思う。

偶然の奇跡でも莉央ちゃんが僕を見付けて付けてきてた？

どちらにせよこの一週間はあっと言う間に過ぎちゃいそうだ。

「じゃあね！　あたしこの駅で降りるから。日曜日の朝九時にエキサイトランドの正面入口前で待ち合わせね」

「う、うん！　絶対行くから！　気を付けて帰ってね！」

降りてから手を振ってくれてる莉央ちゃんが見えなくなるまで僕も手を振り続けた。

家に帰りついてからもまだ夢の中にいるようだった。

「誠也お帰り。どうだった？　ライブ楽しめたかな？」

「うん！　テレビも良いけどやっぱり生で見たらもっともっと可愛かったよ！」

「ふうん。後ろの列で踊ってる高校生っぽい子はちょっと私に似てない？　クラスの子に一昨日言われちゃったんだけど」

「唯一の女子高生メンバーの島崎真理子ちゃんのことだね…………ま、雰囲気とゆうか、鼻が何となく似てる気がする……」

「鼻？　鼻だけなの？　何か失礼ねあんた……カレー温めたからサッサと食べて早く寝てちょうだい」

「あはは！　ゴメン、馬鹿にしてるつもりじゃないから……お姉ちゃんはお姉ちゃんにしかない魅力があると思うよ」

「顔じゃなく真面目さで？　性格で？　なんかフォローにもなってないけど？」

　だんだん押し問答が面倒くさくなってきた僕は前から思っていた疑問を投げ掛けた。

「そう言えばお姉ちゃんって、たまに土曜日の夜から日曜日の昼まで帰ってこないときあるけど何処に行ってるの？」

「あ、それは……前にも言わなかった？　友達の美紀ちゃんの家に泊まりに行ってるのよ！　あの子、お父さんしかいないない上に兄弟も

いない一人っ子だから寂しがり屋さんなの。お父さんは殆ど会話しないみたいだし」

「そりゃ寂しいよね。お姉ちゃん相変わらず優しいなぁ」

真面目で優しい、容姿は普通でも十分過ぎる魅力だと僕は本気で思っている。
友達にも自慢出来るお姉ちゃん。
シスコンと呼ばれても恥ずかしくないほど大好きなお姉ちゃんだ。

「あのさ、お姉ちゃん……実は今日ね……」

「誠也っ！　早くカレー食べないと冷めちゃうし片付かないから！」

「聞いてよっ！　菅野莉央ちゃんに電車の中で会ったんだ！」

「え？……凄いじゃない！　サインぐらい貰ったんでしょうね？」

「サインどころか今度の日曜日、なんと！！　遊園地でデートするんだ！」

呆気に取られながらも僕の話を信じて聞いてくれたお姉ちゃん……
…ありがとう。
お土産買ってきてあげるからね！

ベッドに入ってもなかなか寝付けなかった。

お姉ちゃんに怒られたけど、今日は風呂に入らないで寝る。
当たり前だがあの大好きな莉央ちゃんと手を繋いだんだ。
明日の朝に顔を洗うまではせめて……。

ニヤニヤしながらゴロゴロしていると、いつの間にか眠りについていた。

月曜日の朝が来た。
早速静夫と昨夜の劇場公演についての話が始まる。
六人に絞られると名前は覚えやすいけど何か寂しい、とかショートカットの中学生コンビもスッゴく可愛かったとか。
鼻がお姉ちゃんに似てる島崎真理子も綺麗だとか。

「結局好きなアイドルグループだからみんな可愛く見えるんだろなぁ」

「それは言える！　中でも一番なのは莉央ちゃん！　お前は明日香ちゃん。ってだけだよなぁ」

「今度の日曜日は劇場公演もないし……また誠也の家に遊びに行こうかな」

「すまん、静夫！　今度の日曜日は莉央ちゃんとデートなんだ」

咄嗟に口から出てしまったが、何も心配なかった。

普通に信じてくれる訳がないもんな。
一瞬でも『しまった！』と思っただけ損した気分だよ全く。

「ま、マジか！？　いつの間に莉央ちゃんに会ったんだ！？　ズルいぞ誠也！」

「え？」

まさかの反応にビビった僕は、どう言い訳するか考え始める。

「実は俺も明日香ちゃんとデート予定なんだ！　今晩の夢の中でな。誠也は日曜日まで夢でも会えないんだな可哀想に！　へへへへへ」

「へっ。へへへへ。早速今晩とは。さすが静夫だな……。へへへ」

「誠也ももっともっともっと強く想いながら寝たら、今晩も明日の晩もずっと莉央ちゃんと会えるんじゃね？　へへへ」

「ふっ。努力してみるよ。へへへ」

土曜日の夜がきた。

いよいよ明日、アイドルの莉央ちゃんとデートが出来る。
一番のよそゆきの服装で決めていこうか？　それともカジュアルに決めるか？　悩むところだ。
莉央ちゃんといても恥ずかしくない格好しないとな。

「誠也！　今お母さんがスナックで倒れて救急車で青十字病院に搬送されたって！　タクシー呼んだからすぐパジャマ脱いで服を着て！」

「え？　心配ないの？　お母さん」

「まだ分からない！　ママさんも動転していて……詳しく教えてくれなかったから。とにかく命に別状がないことを願いたいよ」

僕たちの願いとは裏腹に、ある意味最悪の現実が待ち構えていた。意識をなくして色んな装置を付けられたまま横たわるお母さんがいた。

「頭部外傷による重度の脳損傷です。倒れた時にどこかの角で頭部を強打されたみたいです」

「あの、母の意識は戻るんですよね？」

「今の状態では何とも言えません。直ぐに戻る可能性もありますが、数日、数ヶ月戻らない可能性もあります」

「それって……植物状態ってことでは？」

「もしこのまま一ヶ月以上意識が戻らない場合は、そう判断せざるを得なくなります。その場合は回復する見込みは極稀になってきますので、早急に意識が戻るよう我々も最善を尽くします」

「よろしくお願いします」

何てことだ。

お母さんが……昼も夜も僕たちの為に我武者羅に働いてくれてたお母さんが……あまりに急な事で動揺してるためかな？
涙も出てこない。
お姉ちゃんも異常なほど冷静で落ち着いて見える。

「集中治療室は感染防止とか患者の安全の為に付き添いの人数や時間の制限があるみたいだから、今日は私に任せて誠也は帰りなさい」

「ぼ、僕もお母さんと一緒にいたいんだけど？」

「意識が戻ったらすぐに連絡してあげるから。明日はアイドルの子と遊園地行くんでしょ？　寝不足で目の下にクマ作って会ったりしたら莉央ちゃんとか言う子にも失礼だよ？　いいからここは私に任せて帰りなさい」

無茶苦茶有り難いけどお母さんが心配でデートどころじゃない。

こんな心境で遊園地行っても楽しいのかな？
莉央ちゃんには悪いけど断ろうかな……。
あっ！　しまった！　電話番号も聞いてないじゃないか！

これは僕が行かないと莉央ちゃんは入口で待ち惚けになっちゃう……。

「ありがとう。お姉ちゃん。明日は約束してるから遊園地行ってくるよ。お母さんに何か変化あったらすぐに連絡してね？」

「うん。任せて。早く帰ってすぐに寝るのよ」

タクシー代を貰って病院の外へ出た僕は、改めて今の状況を整理した。

お母ちゃんが……生きていた。
生きていたけど……意識がない。
一ヶ月以上意識が戻らない場合は植物人間になっちゃう。
そんな…………。

「お母ちゃん……そんな……ぐすぐす……わぁーんわぁーん」

気丈に振る舞うお姉ちゃんに負けてなるかと……集中治療室では我慢してたけど……限界だった僕はタクシーが来るまでの間に泣き続けてしまった。

少年の夢　（前編）（後書き）

姉弟の大切な母を襲った植物状態。
苦難の時だが、姉の優しさに甘えてアイドル菅野莉央とのデートを決意した武藤誠也。
辛い出来事を忘れて楽しむことが出来るのかどうか……。

少年の夢　（後編）（前書き）

待ちに待った日曜日。

心から楽しむことが出来るのか？

少年の夢　（後編）

日曜日がきた。

結局一睡も出来なかったことは気にならないが、莉央ちゃんに顔色悪いのを見られるのは失礼だし恥ずかしかった。

心の中は雨のち晴れ……。

悲しみと喜びが同時に来た時の例えは……雨のち晴れ。

頭の中で何度もそう思っていると聞き覚えのある少女の声が聞こえてきた。

「おっはー♪　ギリギリに来ちゃったからかなり待たせちゃったかな？　ゴメンね」

「お、おはよう！　莉央ちゃん。その服もスッゴい似合ってるね？やっぱりアイドルは何を着ても可愛いよな。マスクと帽子が邪魔だけど……」

「誉めても何も出ないよ。割り勘だからねー。変装は仕方ないよ……かなり有名になっちゃってるからね。我慢して誠也くん」

「誠也くん……莉央ちゃんに名前で呼ばれるだけでも幸せだぁ～。少しぐらいなら僕に奢らせてよ。お姉ちゃんに特別にお小遣いもらってきたんだ」

「おっ！　じゃあ早速バナナジュース貰っちゃおっかな？　いい？」

「あはは！　バナナジュースときたか！　アイドルさんならもっと粋なもの飲むのかと思った。地味だな……バナナジュース」

「シンプルイズベストだよ。ごちゃごちゃ混ざってるより好きなの」

「なるほど。僕はじゃあ……オレンジジュース！　オレンジジュースとバナナジュース下さい」

「スムージーとかじゃなくオレンジジュース……誠也くんも人のこと言えないじゃん。あはは」

ジェットコースターも高所恐怖症の僕はかなり苦手だったけど、せっかくの一生に一度あるかないかの奇跡の日だ。

思いきって色んな乗り物、乗りまくっちゃうぞ！

心に強く決めた僕だった。

「げえぇー」

「大丈夫？　グレーチングが近くにあって良かったね」

二つ目のジェットコースターを降りてから一気にもよおしてきた僕は咄嗟にグレーチングの中にゲロを吐くはめになった。

そんな……人生で始めての女の子とのデートで、しかも相手はアイドル……ゲロ吐くか僕？

背中を優しくさすってくれてる莉央ちゃんに僕のゲロの臭いが襲

ってると思ったら申し訳ないやら恥ずかしいやら……。

「ご、ごめんね。ありがとう莉央ちゃん……」

「一回だけにしとけば良かったね……気を取り直して次は観覧車乗ろうよ。あれなら吐かないと思うよ」

「確かに吐かないだろうけど……怖いと思うよ！　高所恐怖症の僕にはある意味、遊園地で最高高度を誇る観覧車はかなり恐怖だと思われますよ？　莉央ちゃん……乗る？」

「男でしょ？　頑張れ！　観覧車乗れない中学生男子なんてみっともなーい！　あはは♪」

「ひどいな莉央ちゃん……分かったよ。分かりました！　行こー♪」

開き直って莉央ちゃんの手を握りしめて僕から切符売り場に引っ張って行ってあげた。

少しずつ上昇してゆく観覧車…………。

簡単な事だ。下を見なきゃいいんだ。

空か莉央ちゃんの顔だけ見ていれば知らない間に大地に戻ってるはずだよな。

「見て見て！　あんな大きな船が浮かんでる！　２０００ｍくらいあるんじゃないアレ！」

「超時空要塞へカロスじゃあるまいし……豪華客船みたいだけどそ

こまで大きくはないよ。ダイヤモンドプリンスかな？」

「ふぅん。詳しいんだね……あれ？」

「ん？　どうしたの？　何か見える？」

「いや……何でもないよ。今が一番高い所かなあって思ってね」

そう言いながらわざと観覧車を大きく揺らす莉央ちゃんに、一瞬本気で怒りたかった僕がいた。

頼むからじっとしていてくれ……。

意識が飛ぶほど怖いじゃないか……。

固まる僕をよそに満面の笑顔で顔を寄せてくる。

え？　これってもしかして……。

「チュッ」

「んっ！？」

まさかアイドルが僕に……キス……嘘だろ……おい……顔が真っ赤になってきたのが分かる。

本来肩ぐらい抱き締めるのがこういった状況の男側の取るべき行動なんだろうが、僕は恥ずかしくて動けなかった。

両手を膝に乗せたままピンと背筋を伸ばしたまま、僕はアイドルの菅野莉央ちゃんとキスをしている。

「誠也くんのこと好きになっちゃったみたい。男の子にキスしたの初めてだよ」

「えっ？　女の子にはあるの？」

「!？　い、いやいや、それはノーコメント」

あるって言ってるようなものじゃん。
莉央ちゃんって同性の子にもそんなことする子なのかな……。
嬉しいながらも変な妄想をしてしまう自分がいる。

あれ？　これは夢なのか？
なるほど……こんな人生うまくいくことないよな。
やっぱりアイドルとのデートなんて夢だったんだ。
僕がそう確信したのは莉央ちゃんが僕のズボンを脱がし始めたからだ。
手際よくパンツまで脱がしてゆく莉央ちゃん。

「あの、もうどうせ夢だから言わせてもらうけど……あと数センチそれを下げちゃったら僕の汚いモノが出てきちゃうよ？　小学生のアイドルの莉央ちゃんには相応しくないほど汚いモノが……」

『ぷるんっ！』

「わあっ!？　出ちゃったじゃないか！　恥ずかしいよ莉央ちゃん……そんなに見つめないで僕のチンポ……」

やけに生々しいぞ？　これは夢じゃないのか？　いや可愛い右手で僕のモノを掴んでシゴき始めた？
マジか……恥ずかしいけどみるみる内に勃起してゆくのが分かる。

「り、莉央ちゃんっ！　やめてっ！　恥ずかしいよっ！」

『かぷっ……くぽかぽくぽかぽっ』

「うっ!?　あはっ！　あんっ！」

何を女みたいな声を出してるんだ僕は……。
人生で初めてのことが一度に起こりすぎる……。
僕の脳味噌が付いていけないじゃないか！

アイドルの莉央ちゃんとキスをした。
ここまでならまだ分かる。
今は……ズボンとパンツを脱がされて手で握りしめられただけじゃなく上下にピストン運動されて……更にお口で咥えてしゃぶってる!?
僕の皮かむりのチンポを!?

「うう……無茶苦茶先っぽ部分が気持ちいい……うわあああっ！！
イクっ！　出ちゃうっ！！」

帽子もマスクも外したアイドルの莉央ちゃんが、僕のチンポをシゴきながら根元まで口に入れて先っぽあたりを舌で舐め回してくれ

ている。
その現実離れした光景を見ながら僕は射精した。

『どぴゅぴゅぴゅぴゅぴゅっ！！』

オナニーではなく人生で初めての他人の行為による射精だった。
その他人がまさかの理想のタイプのアイドルとは……。

「はぁ。はぁ。ごめん！　莉央ちゃんの口の中に出しちゃった……」

『ゴクン……』

「いいよ。誠也くんの……飲んであげたかったから……」

オチンチンに付いている僕の精液を綺麗に舐めとると、そっとパンツとズボンを履かせてくれた。
観覧車も降りてきて従業員の人が扉を開ける。
フラフラしながら飛び降りた。

「大丈夫？」

「う、うん、ありがとう」

情けない話……不意打ちでイカされた僕の足はフラフラだった。

莉央ちゃんの手に捕まり、辛うじて転倒を免れる。
近くのベンチに座り、何を話せばいいのか分からなくなってしまう僕がいた。
「あの……えっと……あの」
「あたしも舐めたり飲んだりしたの……初めてだから……いつもしてるとか思わないでね」
「そ、そんなこと思うわけないじゃん！　ほんとビックリしたけど……とっても幸せだったよ！」
「なら良かった。急にあーゆうことしたくなっちゃったから……ごめんね。唐突過ぎて……」
まだ顔の熱が引かない。
どうにか夢ではないとまでは自分の中で納得出来ているのだが、未だにどこか信じられない自分もいる。
奥にある公園からゆっくり歩いてきた中学生くらいの少女がふと立ち止まり、莉央ちゃんの方をジッと見詰めだした。
「ん？　この人莉央ちゃんの知り合い？」
「美紅ちゃん………さっき観覧車から見えたツインテールはやっ

ぱり美紅ちゃんだったんだね……」

「相変わらず鷹のような視力してるね……。武藤和美の件、藤堂長官の恩赦の許可がおりたわよ。良かったね莉央ちゃん」

「ありがとう美紅ちゃん……でもその場合、あの条件はやっぱり必須なのかな？」

「………ごめん。それは絶対条件みたい」

「武藤和美って……僕のお姉ちゃん？　恩赦の許可って？　どうゆうことなの莉央ちゃん？」

「やっぱりまだこの子に話してなかったのね……電話も出ないし何かまた変な情が出てるんじゃないかと思ってたよ。電話出なくても会いに来ちゃったから現実逃避は出来ないよ？　莉央ちゃん」

「ごめんなさい美紅ちゃん。最後まではまだ話さなくていいでしょ？　今話すべきことはあたしから誠也くんに話すから……」

何を言ってるんだこの子たちは？
何でこの女子中学生みたいな子が僕のお姉ちゃんを知ってる？
それに恩赦って？
何かやらかしたのかな？
いや、あの真面目な委員長タイプのお姉ちゃんに限ってそんなことやるわけないし……。

ってゆうか秘密のデートのはずなのに何でこの子は初めから色んなこと知っていたかのように現れた？

何者なんだ一体？
訳が分からなくなってる僕に莉央ちゃんが話しかけてきた。
とりあえず話を聞いてみることにした。

「あのね……誠也くんは全く知らないと思うけど……お姉さんの武藤和美さんは……」

「ゴクリ……お姉ちゃんは？　なにかあったの？」

「新しく現れた麻薬の密売組織に関わって、組織の犯行を助長してるの。いや、助長とゆうか主犯クラスの仕事をこなしてるかな……。お姉さんがさばいた人間だけで１０人亡くなってるの」

「う、嘘だっ！！　そんなこと……人様を殺めるようなことをお姉ちゃんがするわけないだろ！？　デタラメ言うな！！」

「落ち着けこのクソガ……うぷっ？」

美紅の暴言を手で口を塞いで阻止する莉央。

「ありがとう。でも美紅ちゃんは黙ってて」

「確かに直接殺したりはしていないけど、お姉さんが売りさばいた麻薬はとても強力で、少し分量間違えると死に至るものなの。それを細かく説明しないで売りさばいた結果……１０人が亡くなったんだよ」

「そんな……そんな麻薬とか売りさばく暇なんてなかった……」

待てよ……。

そういえば土曜日から日曜日にかけてたまに帰ってこなかったことがあったな。お姉ちゃん。

まさか友達の家に泊まってたとゆうその時に麻薬の組織の一員となって……そ、そんな……でもお姉ちゃんは泊まるほどの親友は一人もいなかったはず……。少しおかしいなとは思ってたけど……。じゃあやっぱり……。

「お母さん大変だったね。そんな大変なときに申し訳ないんだけど……誠也くんのお姉さんは残酷処刑島での処刑が決まったの」

「そんな……処刑だなんて……ってゆうかなんでそんなこと莉央ちゃんが知ってるの？　美紅さんとゆう人まで……まさか……」

僕は鬼頭美紅とかゆう切れ長のキツい目をした美人の目を睨み付けてしまう。

「あなたのお姉さんの処刑が決まったときに、お母さんやあなたの事も全て調べさせてもらったの。あなたが莉央ちゃんのファンで、お母さんが無理して働いていること……とかね」

「じゃあ電車の中で僕に声かけてきたのは偶然じゃなくて処刑する対象の弟だから？　そんな理由で近付いてきてデートまで誘ってき

てあんなことまでしたの？　莉央ちゃん！　そうなの？」

「ごめんなさい。あたしのファンで嬉しかったから声をかけた……デートに誘った……のは国の命令じゃない。あたしの意思だから……」

国の命令？　何を言ってるのか本当に理解できない。

この美紅とかゆう女が現れてから莉央ちゃんまで変な仲間と思えてきだしたよ。

「莉央ちゃんに感謝することね。あなたのお姉さんは、本来なら拷問処刑されるところが四肢切断と去勢刑で許してもらえる恩赦がでたのよ？」

「恩赦？……感謝しろだって？　僕なんかとデートしてくれたことには感謝してるさ！」

「まぁ恩赦が出た理由は莉央ちゃんのお願いもあるんだろうけどね。お母さんが植物人間になり、あなたが死ぬことになり、それらを考慮した結果の恩赦って意味もあるんだけど。拷問刑でも残酷刑には変わらないから残酷処刑島で執行されるから……」

おいおい！　ちょっと待って！

今僕が死ぬことになるって言った？　この女子中学生。

僕が何をした？　へ？　死ぬ理由が分からない。

なぜ死ななければならないか理解できない。

思わず声を荒らげてしまった。

「僕が死ぬことになるってどういう事だよ!?　莉央ちゃん!　こいつの言ってることは本当なの!?　答えてくれ!!」

小さく……でも確実に縦に首を動かす莉央ちゃんを見た。
心臓が冷たくなる感覚……電気が走るような感覚に近いかな。
かなり恐怖を感じてしまう僕の手を……そっと握ってきた。

「もう全てを美紅ちゃんが話しちゃったから仕方ないけど、誠也くんは余命一年なの。一度お母さんと大きな病院で色々検査受けたの覚えてる?　そのあと度々検査しに連れていかれてたよね?」

え?　それは生まれつき調子の悪いところがあるからたまに検査して薬飲んでたらいつか治るってお母ちゃん言ってたぞ?
余命一年??
僕が死ぬことになる?
まさか……そんな。
動揺して何も言葉が出てこなくなってしまった。

「膵臓がん……全身に転移してる。手術は不可能な状態だよ」

「僕が膵臓がん……そんな……お母ちゃんもお姉ちゃんも何も言ってなかったぞ?」

「お母さんは心配させないようにお姉さんにも黙っていたんだよ。

あんた、お姉さんを本当に生かせてあげたい？」
「あ、当たり前だよ！　僕が死ぬことになるとは夢にも思わなかったけど病気なら仕方ないもんな……かなり動転してるけど自分を納得させるよ……」
「誠也くん、あたしたちと一緒に……ある島に行って、辛いものを見る勇気……ある？」
「何を見るの？　嫌だな莉央ちゃん……顔が怖くなってる……もう拷問とか処刑とか変な冗談はやめてよ！　お願いだから……僕が臓がんで死ぬことは頑張って納得してみるからさ」
「莉央ちゃん、もういいから。情が入ってるあなたには酷だわ。あたしが説明してあげるから……」

最悪だ。
お母ちゃんは植物人間になり、僕はあと一年の命。
おまけにお姉ちゃんは四肢切断？……去勢？
神様……ちょっと僕たち家族に冷たすぎないか？
僕は天を仰いで自分たちの運命を呪った。

「一緒に残酷処刑島に来てもらって、あなたのお姉さんの拷問を一部始終見てもらうから。もし目を瞑ったり目を背けたりしたら……」
「お姉さんは残酷拷問処刑に切り替わる。この世の生き地獄を味わいながら散々苦しんで死ぬことになるわ。まぁ四肢切断と去勢だけでも十分生き地獄だけどね……」

「うう……そんな……お姉ちゃんが手足切断とかされてる所なんて……見ていられる訳がないじゃないかぁあっ！！　鬼かお前らはーっ－！！」

「もうお姉さんは拐われて残酷処刑島に連行されてるわ。明日の朝五時に〇〇埠頭に一人で来てくれる？　お姉さんの命を救えるのはあなたの勇気だけよ」

「誠也くん……四肢切断されて子宮、卵巣抉り取られて生きてゆくことは、正直死ぬことより辛いかもしれない。自分で歩けない。服も着られない。這うことは出来るだろうけど……。いっそのこと、誠也くんが明日来ないことも……お姉さん想いになるのかもしれないよ？」

「莉央ちゃん……死んだら全て終わりじゃないか……どんな姿になっても生きていれば何か楽しいこともあるんじゃないのかな？　……お姉ちゃんを……お姉ちゃんを助けてあげたい……」

あれ？　泣いてる？

いつの間にか小学生のアイドルと、女子中学生の前でボロボロ泣いてる……マジか……。

情けないやら恥ずかしいやら悔しいやらムカツクやら。

色んな感情が駆け巡り、その結果ボロボロ泣いてるじゃん僕は……。

振り向いて去ってゆく二人を見ながら僕は最後に質問をする。

「莉央ちゃん！」

何も答えずに僕の方を振り向く莉央ちゃんは、今まで見たことないくらい哀しそうな表情をしていた。

「ひとつだけ最後に教えて！　僕が一年で死ぬことが分かっていたから……僕のオチンチン舐めたりしてくれたの？　射精とかさせてくれたの？　あれは死にゆく者に対する最後の情けだけで行った行為だったの？　教えてくれ……」

「え？　莉央ちゃん……そんなことしたの？」

美紅の驚いた問いに答えることなく、莉央ちゃんの口が開くのが見えた。

「そうだよ」

世界が闇に包まれた気がした。
いや……世界が終焉を迎えた気がした。
デートまでは自分の意思でも……エッチは単なる情け……。
なんて虚しいんだ。
僕はもう明日死んでもいいんじゃないか？
お姉ちゃんの拷問刑と引き換えに、僕を拷問処刑してもらえないだろうか……。

どれくらいの時間が過ぎたのか分からないけど、ふと我に還ったときには二人の姿はとっくになかった。

まもなく閉園を迎える遊園地。

どうやって帰ったかさえ覚えていないが、僕は無意識に自宅に帰り着いていた。

だいたい分かってはいたが、もし彼女たちの言ってることが真っ赤な嘘なら……お姉ちゃんが台所で僕の夕御飯を作ってくれているはずだ。

希望的観測をもって台所へ向かう。

……………そこにお姉ちゃんの姿はなかった。

本当に国の機関みたいな組織に拐われたのか……。

そんなこと現代のこの国で許されるのか？

裁判も行わないで処刑だの拷問だの……。

頭がおかしいんじゃないのか？

大好きだったアイドルの菅野莉央に舐めてもらったオチンチン。

何事もなく楽しいままで今日が終わっていたなら、一週間はお風呂に入らなかっただろう。

情けだけなら虚しさが残るだけ。

お風呂で念入りに全身とオチンチンを洗いまくった。

明くる日……残酷処刑島。

「私、拐われちゃったみたいだけど……貴女たちは何者なの？」

「単刀直入に言います。本日、武藤和美１８歳はあたし鬼頭美紅と、隣にいる菅野莉央の二名により、四肢切断されます。一生赤ちゃんも出来ないように子宮と卵巣も切除します。これは弟さんが来てたらの話ですが」

「せ、誠也がくるの！？　なぜ誠也がこの事を知ってるの！？」

「お姉さん、あなたの命は誠也くん次第です」

「あれ？　あなたどこかで見たことが……！？　《真・絆ＧＩＲＬＳ》のボーカル、菅野莉央！？」

「お姉さんもご存知でしたか……そうです。誠也くんはあたしのファンでほんとに光栄です」

なんだ？　この不気味な島は……。
何か見てるだけで背中がゾッとする。
嫌な気配が半端ない。
本当にこの島では年に数回残酷処刑が行われてるんだな。

「武藤誠也さん、着きました。岩場の向こうに見える赤い旗の下で、皆さんお待ちになられております。帰りもきちんと本島までお送り致しますのでご安心を」

無表情な看守らしき男に軽く御辞儀して赤い旗を目指してゆく僕。

「お姉ちゃーん！　助けにきたよーっ！！」

「……あいつきたよ莉央ちゃん」

「うん。……あなたの処刑はこの時点で消滅しました。拷問刑を執行します」

「拷問？　ちょっと待って！　お嬢ちゃんみたいなアイドルの小学生と……まだ中学生っぽい少女と二人で……私を拷問？　四肢切断？　無理でしょ？　普通の神経じゃそんなこと出来ないよね。早く縄を解いて本島に帰してよ。きちんと裁判も受けるから」

固そうなベッドに素っ裸にされて縛り付けられているお姉ちゃんがいる。

くそう……何て酷いことを……。

「おいっ！　来たぞっ！　お姉ちゃんを約束通り殺さないでくれよ！？」

「約束は守るわ。莉央ちゃんの横にある椅子に座ってこれから起こることをじっと見てなさいね」

「ようこそ。残酷処刑島へ。誠也くん、頑張って耐えてね。お姉ちゃん酷い目に逢っちゃうけど……絶対目を背けちゃダメだよ？」

コイツら……甘いな。何がようこそだよ莉央ちゃん。
だいたいいくら喧嘩の弱い僕でも、小学生と中学生の女の子二人残して全員去っていくか？
国の機関の割に甘すぎる。
莉央ちゃんには申し訳ないけどお姉ちゃんを助けるためにボコボコになってもらうしかない。

「おらあっ！！」

いきなりの不意討ちで隣の莉央の顔面狙って蹴りを入れようとした。
これはマトモにヒットだな。
ごめんね莉央ちゃん。しばらく気絶しといてもらおうか？

『ドッ！！』

「ぐふうっ！？」

え？
何が起こったんだ……。
今確かに僕の回し蹴りが莉央ちゃんの顔面に……？

「いたたたた……ぐふっ」

『プスリ……チュウウウ』

ん？
何か苦しんでる間に注射みたいなの打たれてる？
何か意識が朦朧としてきた……。
僕にはお姉ちゃんを助けられなかったってことか？
本当に僕はダメだなあ。
余命一年だから体力も落ちちゃってたのかもしれないな……。
言い訳かなこれは……。
ダメだ。意識が…………………………………………

『ペチャペチャ……くぽっくぽっ！ずちゅちゅちゅちゅっ』

何かオチンチンが気持ちよくなって意識が戻る僕だった。
誰かが僕のオチンチンを舐めている？
まさか莉央ちゃんが！？

「ほら！　もっと根っこまで咥えて激しく舐めるのよ！」

「は、はい！　んごごっ！！　ペチャペチャ！！」

そこには両脚を太腿から切断されて、包帯巻かれて止血処理されたお姉ちゃんが、僕の股間の高さに口を調整されて、必死で舐めている姿があった。
両腕はまだ付いていた。

右手は僕の睾丸、左手はペニスの根元を握り込み、しゃぶり続けている。

おいっ！！お前ら！！

お姉ちゃんに弟である僕のチンポ舐めさせるかっ！？

信じられない鬼畜の仕業っ！！

『やめろーっ！！　お姉ちゃん！！　コイツらの言うことなんか聞かないでっ！！』

あれ？叫んだつもりが声がでないぞ？

喉に何か違和感が……？？

「あたしのファンの弟さんを一分以内に口でイカせられたら……誠也くんだけは命は助けてあげるからね？　頑張れお姉さん！」

『やめろーっ！！　莉央めっ！！　嘘をつくなっ！！　僕の命助けるなんて言ってお姉ちゃんを服従させるなんて汚いぞっ！！　僕は放っておいても来年には死んじゃうんだ！　騙されないでお姉ちゃんっ！！』

ちきしょう！　やっぱり声がでない……。

何かされてるのか……？

「誠也くん、あなたがお姉さんに余命のことバラしたら、せっかく必死であなたを助けようとフェラしてるお姉ちゃん……やる気失くなっちゃうじゃない？　だからね……声帯麻痺する薬塗り込んでるから……一時間は声が出ないよ？　安心してお姉さんのお口の中にたくさん出しなさいね？　あはは♪」

「莉央ちゃん、弟に浣腸しといて！　イク前に漏らしたら姉の頭から熱湯ぶっかけて顔面変形させてやろうよ？」

「分かった。これ、濃度高いから一分持たないかも……あたしは誠也くん応援してるから……頑張れっ。ここね？　誠也くんのアナルは………えいっ♡」

『プスッ！　プチュウウウウウ〜』

はうっ！！

何て恥ずかしいことを平気でするんだこの子たちは……。

もう声も出ないが最悪だ。

アイドルの皮を被った鬼だな菅野莉央……。

この鬼頭美紅も本物の悪魔だ。

ほんとにお姉ちゃんの両脚を切り離しちゃってるし……。

「何をブツブツ口を動かしてるの？　ホラ！　早くウンチ出せ！」

『ずぼっ！　ずぶぶぶ……グリグリ』

ひぐっ！？　今度は中学生美紅とやらの人差し指が？

肛門に突っ込んで掻き回してる？
何てことを……。
いかん、泣けてきた。
情けなさすぎる……。

『ポンッ！！　……ブリブリブリブリ！！』

「弟さんが漏らしちゃったから……一度ペニス吐き出しなさいっ！
莉央ちゃん、その沸騰させている鍋の湯を頭からかけてあげて！」

「ほーい」

そりゃ強力な浣腸打たれて指突っ込んで直腸掻き回されて一気に引き抜かれたらウンチも出るわな。
もう恥ずかしいとかも言ってられない。
お姉ちゃん……ごめんね。

『ザバアッ！！　じゅううううううっ！！』

「んぎゃああああっ！！　あついいいいいいっ！！」

みるみるお姉ちゃんの顔が変形してゆく。
溶けるように変形してゆく。
頭皮も重度の火傷によってボロボロ抜け落ちて半分ほどツルツルになってしまった。
わああっ！？　わああああっ！！

やめてよ！
もうやめてあげてええええっ！！

「ひいっ！！　ヒイイイイッ！！」

両手で焼けただれた顔を押さえながら両脚の無い哀れな姿で転げ回って苦しみもがくお姉ちゃん。
お姉ちゃん本当に命は助けてくれるのかな？
少し不安になってきた。

「弟ちゃん？　あんたまさかお姉さんの命は助かるとか思ってないよね？　莉央ちゃんに攻撃した時点であんたら姉弟はこの残酷処刑島にて拷問処刑が確定してるから！　散々苦しめて無茶苦茶にしてあげるから覚悟して勃起させせなさいね！」

「美紅ちゃん……なんで殺される覚悟した状態でオチンチン勃起させられるのよ……無理でしょ？」

「いやいや！　男は死ぬ寸前の痛みや苦しみを与えたら、本能で子孫を残そうと射精するために勃起させるみたいよ？　前にも誰か言ってなかったっけ？」

「ふうん。でも誠也くんはあたしが初めてフェラして精液飲んであげた男だから……あたしに殺らせてね」

「いいよ！　あたしは姉の方をズッタズタにしてズッチュズッチュしたげるから♡」

「意味わかんないよ美紅ちゃん……要するにオマンコからお尻の穴からぐちょぐちょにヤっちゃうんでしょ？　あたしたちの趣味は性器破壊だしね♡」

「よく分かってるじゃん！　さすが可愛い顔した鬼だ♪」

「鬼でも悪魔でもどっちでもいいよ。凶悪殺人犯がもがき苦しんで死んでゆくのは快感だもん♪」

「そうだね……ほら、顔が焼けて美人になったお姉さん！　処女かどうかチェックしたげるから斬られた短い脚を開きなさい」

お姉ちゃんの股間に触ろうとしてる！？

あの美紅って子もトコトン変態女だっ！

「ううううーっ！！　いやあっ！！　許してっ！！　私は家族の為にやっちゃっただけなの！！　大金がなければやっていけなかったのよ！！」

「あのさ……あんたたち一家の為に何の罪もない赤の他人を１０人以上も殺しちゃっていいわけ？　ふざけるなよ？　あんた処女膜付いてなかったら股間から糸鋸で二時間かけて真っ二つにしてやるからね？　ほら、さっさと臭い股開け！」

お姉ちゃん……僕やお母ちゃんの為に……しちゃった事自体は間違ってると思うけど……やっぱり僕には世界で一人の大好きなお姉

ちゃんだよ！
そ、そんなやつらの言うことなんか聞かないで……。
くそう……力が入らないし声も出ないよ。
ほんと何もできないままウンチまで漏らして……惨めだよ……。
更に大粒の涙が頬を伝うのを感じた僕だった。

『ずぷぷ……ばりっ』

「あれ？　処女膜あったんだ……無いと思って一気に突っ込みすぎちゃったかな？　ごめーん♪」

『バキバキ！　ドカッ！！　バキバキ！！』

「がはああっ！！　こぼっ！　ごぼおっ！」

「マンコ臭いんだけど？　あたしの指にマンカス付けた罰よ！　オラオラオラッ！！」

馬乗りになって変形した顔面を更に拳でタコ殴りにする美紅。
お姉ちゃん、鼻から口からたくさん出血しちゃってる……もうお姉ちゃんも今日死んじゃうんだ……。
前歯も殆ど全て折られちゃってる……。
可哀想で見たくもないのになぜ見てしまうんだ僕は？
もうこの世で最後のシーンだから見ておかないと損……そんな感じかなうまく言えないけど。

「莉央ちゃん、弟に拷問しないの？　暇ならちょっとこいつの背中に乗って押さえてて。両腕も切断しちゃうから」

「うん」

『ギコギコギコギコ……』

「うわああああんっ！！　うわああああんっ！！　痛いよぉっ！！
　痛いいいいいいいっ！！！！」

「痛いでしょ？　もっと泣け！　喚け！　ほらほら、どんどん肘の上部分が胴体から離れていこうとしてるよ？　うふふ♡　太い血管からたくさん汚い血を噴射しちゃって……よいしょ♪　よいしょ♪」

『ボトリ……』

「んぎゃあああああっ！！　うわーんっ！！　うわーんっ！！」

「さあ次は右手いこっか？　これ切り落としちゃったらあんた正真正銘ダルマ女の仲間入りだよ！　おめでとう♪　それそれ～♡」

『ギコギコ……ギコギコギコギコ』

「がぎゃあああっ！！　やめてやめてやめてやめてええっ！！」

「うるさいなぁ。もうちょっとで右手も切り落としちゃうから大人しくしててよ？　そうだ！　あたしの特製の爆竹プレゼントしちゃう！　ほら……この締まりのいいお尻の穴に♡」

『ずぷぷぷ……ずぼおっ！！』

「あはあっ！？　止めてそんな汚い所にっ！？」

『ギコギコ……ギコギコ……ボトリ』

「いやっ！？　私の両腕まで……いやっ……いやあああっ！！」

ついにお姉ちゃんの両手両足が無くなっちゃった。
凄く血が出てるけど……あの変な色の注射を打ったら血が止まった。

あっ！？　莉央ちゃんがお尻をライターで炙ってる？　や、止めろっ！！　そんなとこまで火傷させる気かっ！？　あれ？　何か火花散ってる？　導火線？？

『パァンッ！！』

「ぴぎゃあああっ！？　お尻の穴で爆発したあっ！？　ひいいっ！！　お尻の穴が裂けちゃううううっ！！　痛ったあああいいっ！！」

「肛門は血みどろになっちゃってるけど……どうにか無事だよ！　安心してお姉さん♪　直腸は脱腸しちゃってるけどね！　あは♡」

「痛い痛い痛い痛いいいいっ！！　酷いいいいっ！！　えーんえーんっ！！」

「やれやれ……莉央ちゃんの改造爆竹は中途半端に強力だね……」

「うん♪　オマンコの場合は子宮がミンチになってドロドロと膣から流れ出してくるんだよぉ♡　凄いでしょ？」

「アナル近くの直腸は飛び出して、内部の大腸はぐっちゃぐちゃ……ってか？　あー怖っ……」

お姉ちゃん……お尻から大腸みたいなの飛び出しちゃってる……
無茶苦茶痛そうだ……。
酷すぎる……。

ん？今度はナイフで何か切ってるぞ？
あちこちに血飛沫上がってる……。

何かこっちに飛んできた？

『べちゃっ！』

これはお姉ちゃんのオッパイだな。
普通のサイズの女子高生のオッパイだ。
乳首が上に向いて着地したからすぐにわかった。

何か莉央ちゃんが立ち上がって
こっちに来てる？
何か手に持ってるなあ。

『ベチャッ！！』

おいおい……パイのように切り離したオッパイの内側を僕の顔面に叩きつける？
そんなこと人間にできるのか？
鬼だった……莉央ちゃん……莉央……くっそう……無茶苦茶しやがってコイツら……。

「お姉ちゃんのオッパイの血と肉片をようく味わいなさいね？　誠也くん……今ので興奮してきたでしょ？　もう一回イカせてあげるね？」

『ぎゅっ！　シコシコシコシコ』

信じられない……お姉ちゃんをバラバラに解剖しながらの弟にテコキ……これで射精したら、僕は鬼畜以下だぞ全く。

「弟がシゴかれてる内にどんどんいこーね？　お姉さん……耳無し芳一……じゃなくて……耳無し和美～♡　ほらっ両耳切断しちゃったよぉ？」

「んぎゃあああっ！！　やめて……全身が痛い……お願いです。もう許して」

「普通ここまでバラされたら……もう殺してください！って言うも

んだけどね……ねえ？　莉央ちゃん？」

「そうだね……生への執着心が半端ないね。でもその方が殺しがいがあるってもんだけど。お姉さんと誠也くん、同時にイカせてあげちゃおーか？」

「人生最後だし……同性のあたしで悪いけど……気持ちよくなってくれる？　焼けただれた哀れなダルマ女さん♡」

『ずちゅっ……クチュクチュクチュクチュクチュ！　くちゅちゅちゅちゅちゅちゅちゅちゅっ！！！！』

「あはあっ！？　あっはあああああんっ！！　気持ちいい……気持ちいいいいっ！！」

「あはは♪あまりオナニーとかしたこともない真面目な女子高生だったみたいね。同性の指でそこまで感じるなんて……美紅ちゃんの方が先にイカせてしまうんじゃないの？」

「そうなると……麻酔なしでマンコ引き裂いて……子宮抉り出しの刑ね！うふふ」

「いやっ、そんなことされたら私……死んじゃううううっ！　許して……」

「知ってた？　イこうがイクまいがあんたはあたしたちに今から殺されるんだよ？　生きて帰れるなんてまだ思ってるの？このブサイク！」

『クチュチュチュチュチュチュチュチュチュ！！』

「やんっ！やはっ！あああはああああんっ！！」

僕も莉央ちゃんにシゴかれてイキそうだけど……あの様子じゃあお姉ちゃんの方が先に……。

あーあ……ほんとに女子中学生にイカされちゃってるよお姉ちゃん……。

思いっきり透明のネバネバした液体飛ばしてる？

何だろうあれは？

女性の射精みたいなもんかな？

お姉ちゃんもエッチだったんだな。

『ぎええっ！？　痛いっ！？　いきなりの激痛だ！？　なぜっ？』

相変わらず声は出ないけどどうやら僕の右のキンタマが莉央ちゃんに潰されたみたいだ。

ワニ型の巨大なペンチが僕の睾丸を確実にペッタンコにしている。

少しオチンチンの先から粘度のある血が出てきちゃった……。

麻酔のせいか激痛ながらオチンチンは気持ちいい……。

あ、イク……イッちゃううっ！！

『ドピュッ！！　ドピュピュピュピュピュッ！！』

莉央ちゃん……もう好きにして……。

ん？　なんかキンタマ袋にメスを入れて……潰れた睾丸を抜き取

ってる？　今度はキンタマ袋を縫い始めたぞ？

消毒までしてる？

中で腐ってしまわないように処理してくれたのか？

これから殺す相手に何の意味が……？

お姉ちゃんが目の前でバラバラにされてイカされて……同時にキンタマまで潰されながらイカされる僕……。

歯向かう気力も無いしお姉ちゃんの最後を見るのが使命みたいに思ってきちゃってる。

もうズタズタにしてあげて。

どうせ二人とも死んじゃうんだから。

「かひゅう……かひゅう……ほごほご」

変な声が聞こえる。

お姉ちゃんの首が半分斬られて息に血の音が混じってる。

これ……ＩＳＩＳの動画で見たことあるぞ……。

まさか身内がされるところ見ちゃうなんて……。

本当に僕はツイてないな。

「さあ後ろから叩き付けてトドメよ？　あら？　固いな……コイツの首の骨……えいっ！　えいっ！　それえっ！！」

『ガンガン！　バキッ！！　ポロン……ぶしゅううううっ！！』

「ヨシ！　斬首完了！　サッカーボールキイ～ック！　とおっ！」

『ドカッ！』

『ゴロゴロゴロゴロゴロゴロ……』

お姉ちゃんの首が完全に切り取られちゃった。
蹴られてこっちに転がってくる？

『ピタリ……』

え？　どうして僕の股間でピッタリ止まるの？
上向いてるし……。
見ないでお姉ちゃん……。

「あはは。お姉ちゃん誠也くんのオチンチン見たかったんだね？
ほら、舐めろ」

『かぽん』

おい、またキツイ冗談だ。
お姉ちゃんの生首持ち上げて口をこじ開けて僕のチンポ突っ込むか普通？
莉央ちゃん……残酷過ぎて僕はもうメロメロだ。
好きにして殺して。
莉央ちゃんの右手は手首まで僕の肛門に突っ込まれた。
無理矢理小さな僕の肛門に捩じ込まれたアイドルの綺麗な白い手

は、僕の肛門括約筋を破壊し、大量に出血させている。
お構いなしに直腸内部をグリグリ掻き回してる莉央ちゃんは、こう言う拷問自体に興奮しているみたいだ。
前立腺がどうとか言いながらお尻の穴を掻き回されてる内に、無茶苦茶気持ちよくなってきて、また射精させられた。
今度はお姉ちゃんのお口の中に。
…………って言っても生首だけど。
「良くできました誠也くん。お姉さん？　生首になっちゃっても弟さんの精液飲めて良かったね？　成仏してね♡」
『ゴトッ……ガツ！　グリグリ……グリグリ』
成仏してねと言いながらお姉ちゃんの生首地面に落として足でグリグリ踏み付けちゃってるじゃないかっ!?
口から鼻から精液と血とヨダレ……色んな液体を垂れ流しながら……。
そこまではやめてあげて莉央ちゃん……。
お願いだ……。
「しまった！　生きてる内にマンコから器具ぶち込んで子宮抉り出すの忘れてた～。せっかく弟さんが見てるのに……残念」

「死体の解剖しちゃお？　今からでも誠也くんに見せつけてあげられるよ？」

「そうだね莉央ちゃん。ようく見てなさいね弟さん！　今からお姉ちゃんの解剖を始めちゃいまーす♪」

もう無茶苦茶にして。何でもして。何をされても見させられても、もう莉央ちゃんは僕の永遠のアイドルだよ。

お腹にナイフを入れて……おヘソ辺りかな？
うわっ！？　何か赤と白が混じったような……小腸かなあれは？
どんどん引っ張り出してる。
もう数メートルは出てきたけど……。
腸って無茶苦茶長いんだな。

「小腸と大腸は全部抜き取れたみたいだね？次は子宮だね」
「うん。美紅ちゃん、卵巣二つにメス入れてくり抜いてくれる？あたしは子宮くり抜くから」
『ズズ……ぐちゅちゅ……ぷるるんっ』
「子宮抉り出し成功！　イヤらしい色してるなー♡　コイツの子宮……」

二人が同時に何かを取り出した？
大きな方は何か白くてプルプルしてる内臓みたいな……。

「犯罪者の汚い子宮なんて足で擦り潰しちゃってよ！　莉央ちゃん」

「そだね！　もう赤ちゃんも作れない抉り出された惨めな子宮なんてぐちゃぐちゃにしてやるぅ～♡」

地面に叩き付けて足で踏み潰してる？
あの行動に何の意味があるんだろう？
ま、いいや。どうせお姉ちゃんはもう死んでるから痛くも痒くもないだろうしね。

「トンネルしようよ莉央ちゃん」

「トンネル？」

「マンコから手を入れて切り開いたお腹から突き出すやつ」

「あぁアレね！　何か興奮するよねアレは♪」

今度は何だ？
お姉ちゃんのアソコから手を突っ込んで……そんな……指だけならまだしも腕まで入らないよ……。

「キツイなぁ。コイツのマンコ……処女だったし穴が小さいし……」

「ちょっと切ったら入るようになるよ？　このクリトリスじゃない方からメスを入れて……よいしょっと！　肛門まで繋げてやるの。はい、これで腕まで入ると思うよ美紅ちゃん。ちょっと待って！　クリトリスも切除しといてやるから♪」

「やんっ！　止めて莉央様っ。そんな一番感じる所にメスを入れるなんて……激痛で死んじゃうぅ♡」

「だーめ。切り取ってやるんだからっ♡　四肢切断された上に首も無い……ただの肉塊ダルマ女めっ。陰核なんて要らないでしょ？　それぇっ♡」

『ズ……ズズズ……プツン！』

「ほうら……切除しちゃったよ？」

「ひぃいっ！　莉央様～。痛いよぉ～。私の陰核返してぇっ」

「あはは♪　こんな惨めな切り取られたクリトリス……指で擦り潰しておいてあげるから♪　…………ありがとうね美紅ちゃん」

「へ？　何のこと？」

「あたしが誠也くんに情があること知ってたから、生きたまま子宮くり抜くのを我慢して先に首落としてシメたんでしょ？　せめて子宮取り出す苦痛だけでも与えないようにしてやろうと思って……」

「い、いや、単に忘れてて先にシメちゃっただけだよ！　うん」

「性器破壊が誰よりも好きなエッチで残酷な美紅ちゃんが、一番楽しい作業を忘れる訳ないよ。ほんとにありがとう。」

「……それって誉められてる？　酷いなぁ莉央ちゃん」

「あはは！　じゃあお姉ちゃんのマンコ……思いっきり腕をぶち込んでやって♡　切開したマンコ、あたしが思いっきり開いておいてあげるよ」

『くぱぁ～……にちゅにちゅ……』

「あはは♡　血と粘液で変な音してる♪　膣ん中糸引いてるぅ♡　それだけパックリ開いてててくれたら一気にぶち込めるよ！　いっくよぉ……えいいっ！！」

『ずちゅううううっ！！　ぶちゅぶちゅぶちゅっ！！』

あっ！？　腕を振りかぶって一気に肘まで突っ込んじゃった！？

お腹から手を出してピースサインしてる……。

あの中学生もほんとに悪魔だな……。

お姉ちゃんの死体を散々弄んだ鬼と悪魔は、全身に返り血を浴びた血みどろのセーラー服姿で再び立ち上がって僕の方へ歩み寄ってくる。

血とか内臓とか……もう全く平気なんだろうな。

凄いや……可愛い顔してるのに二人とも……。

ついにこの世とお別れの時が来たみたいだな……。

もう覚悟はとっくに出来てるけどね。

「と言うわけで誠也くん、お姉ちゃんの死体の解剖見てくれた？　なかなか興奮するよね？　お姉ちゃんのオマンコ……パックリ切り開かれて……。惨めだったよね♡　ようく見てくれたかな？」

「もう大好きな莉央ちゃんの言葉にも反応しないわね？　ぼちぼち殺っちゃおうか？」

「お姉ちゃんとお母さんに会わせてあげちゃうからね？　その前にオチンチンの皮……根元まで引きずり下ろして剥き身にしてやるからね？　あたしの大好きな…………せ・い・や・くん♡」

「…………あら？　と思ったけど時間切れだわ莉央ちゃん！」

「え？　そうなの？　……参ったなあ。これからチンポの皮引き剥いて内臓ぶちまける最高のショーの始まりだったのにぃ。腸の長さをお姉ちゃんと比べてあげたかったのになぁ。誠也くんだけ殺り損なっちゃうとはね……」

「さようなら。あと一年しっかり生きるのよ♪」

「お母さんとお姉さんの待ってる世界に行くまで元気でね。キンタマ一個残してやってるからオナニーでもしながらあたしを応援してねー♡」

何てこった。

こんな恥ずかしい格好のまま僕を残して二人は去っていって、別の看守たちにこんな姿……見られちゃうのか……。

これはこれで残酷だけど。

どうやらあと一年、寿命までは生きられるみたいだ。

アイドルとキスとエッチ……一時の夢をありがとう莉央ちゃん………………。

君みたいな可愛い子に射精させてもらって……キンタマ潰されちゃった僕は幸せ者なのかも知れないな…………。

少年の夢　（後編）（後書き）

処刑人二人から命だけは見逃してもらった誠也であったが、余命一年の短い人生を無駄にせず生きていってもらいたい。

傷付けた罪を償うこと（前書き）

少し前の誘拐殺人事件での被害者である三原美奈を傷付けた同級生の男の子。

莉央たちの制裁が始まる。

傷付けた罪を償うこと

「ほら、早くズボンとパンツ脱ぐのよ」
「六年二組と六年三組の女子はみんな……あんたのチンポ見るの楽しみにしてるの。早くしなさい」
「あはは。足首まで下ろしたあとは、きちんと畳んで机の上に置きなさいね」

僕は梶原佑斗１２歳。
○○小学校六年二組の男子生徒だ。
ついこの前、僕のクラスの双子の女の子が誘拐されて、妹だけ無事に保護されて今週から登校し始めたんだ。

ニュースでは乱暴されたとかイタズラされたとか話してたので、エッチなことを色々体験したんだなぁと思って、興味津々その妹の女の子にどんなことされたのか聞いてみたの。
そしたら急に泣き出しちゃって教室から飛び出していって、自宅に帰っちゃったんだ……。

亡くなったお姉ちゃんの事とかは一言も言ってないのに大袈裟なんだよなぁ。なんて思ってたら隣のクラスの女の子三人が僕のクラスに怒鳴りこんで来て……殴りかかったら返り討ちに逢って。
身体中痛いよ……。

挙げ句の果てにその狂暴な女の子三人に引きずられてきて六年三組に監禁されてるんだけど……。

なぜか僕のクラスの二組の女の子も全員集められて、六年二組と三組の女子が勢揃い……。

代わりに、二組と三組の男子生徒は全員校庭でマラソンさせられてるんだ。

１５人と１５人で３０人もの女子生徒が見てる前でズボンとパンツを脱げと命令されてる僕……。

逆らったらオチンチンをチョン切るみたいに言われてるから逆らえない。

菅野莉央と富田美香と結城明日香。

この三人の名前は一生忘れないからな。

いつか必ず仕返ししてやる。

『ズルズル……ズルリ……』

「パンツだけは……許して菅野さん……」

「は？　３０人の女子たちが何を見たくてわざわざ集まってくれてると思ってんの？　早くパンツも脱げ！」

「は、はい。ごめんなさい菅野さん……」

『スルスル……ズルリ……』

３０人の小学六年生の女子たちに、僕の皮かむりのオチンチンは姿をさらけ出さされた。

「きゃあっ！　ほんとに脱いじゃった！？」

「気持ち悪いっ！　変態っ！！」

「臭そうなチンポだね……」

「いやんっ……」

悲鳴から罵倒から無言から……色々な女子生徒たちの反応がこだまする教室。
僕は恥ずかし過ぎて顔が真っ赤になってくるのを感じた。
アソコを両手でついつい隠しちゃった。

僕にこんなことさせて無茶苦茶ムカつくけど、この三人……今大人気のアイドルグループに所属してるんだよな。
菅野莉央。一番可愛いと思うけど無茶苦茶喧嘩強いし幻滅だよ。
女の子でアイドルならもっと和しとやかでなくちゃ……。

近寄ってくる……。
手で隠してるのを咎められるのかな？
耳元で何かを囁いてる？　僕をもう許してくれるのかな？
だとしたら有難い。
早くパンツ履いてこの超恥ずかしい状況から脱出したいんだ。

「…………しろ！」

「ん？　何だって？」

「…………をしろ！」

「え？　何をしろって？？」

「オナニーをしろ！　……と言ってるのよ！　何度も言わせないで」

何だって！？
僕は一瞬耳を疑った。
ば、バカな！？
お母さんにさえ見られたら自殺ものなのに……同級生の……しかも二つのクラスの女子全員の見てる前でオナニーだって！？
出来る訳がないじゃないか！！

「そ、それだけは勘弁して下さい！！　菅野さんっ」

「ダメ。あんたはあたしが命懸けで助けた女の子を傷付けたのよ？　オナニーして射精出来なかったら二つのクラスの女子たち全員見てる前であんたのキンタマ二つとも潰してやるから」

「ひっ！？　そんな……」

涙が出てきた……。

マジか！？
こんな生き恥さらすくらいならいっそ走って逃げて転校とかしちゃった方が……。
「逃げても無駄だよ。もし逃げて捕まったらキンタマだけじゃなく、その臭そうなチンポもチョン切ってやるからね？　分かってるの？　おら？」
バレてる！？
ぐ、苦しい……そんな胸ぐら掴んで締め上げないで……。息が出来ないじゃないか……小さい手なのに何て力だ……。
「分かった！　離して……げほげほ……はぁはぁ……」
『ギュッ！！』
「ひゃあっ！？」
アイドルのボーカルの……そんな可愛い顔していきなり僕のチンポ鷲掴みにするか！？
あり得ない事態に僕のチンポはみるみるうちに勃起していった。
僕のクラスの女子たちと三組の女子たちは、巨大化してゆく僕の股間を食い入るように見詰めている。
顔を赤くしながらも全員目を逸らさないんだね？

女の子もみんなエッチなんだなきっと……。
覚悟を決めた僕はビンビンにイキり勃ったチンポを家でやってるようにシゴキ始めた。
もうヤケだ！　どうにでもなれ！

『シコシコシコシコ……シコシコシコシコ』

「やれば出来るじゃん。射精できそう？」

「い、イクっ！　わあああっ！！」

『どぴゅぴゅぴゅぴゅぴゅっ！！　ビクンビクンッ！！』

アイドルの菅野莉央の顔をアップで見ながらの僕の射精。
恥をかかされた事にはムカつくけど凄く興奮して気持ち良かったよ。

「床に飛ばした精液……舌で舐めとりなさい。そして飲み込め」

「え！？　そんな……汚いよ……勘弁して」

『ペチャ……ペチャ……ゴクン……』

「舐め取って……飲み込みました菅野さん……これで良いでしょうか？」

鋭利なメスみたいなモノを取り出して睨んできたからね。。
こりゃマジでチョン切られる……と思った僕は素直に自分の飛ばした精液を舐め取って飲み込んだよ。
そうするしかないじゃん。
この菅野莉央……どう見ても本気だもん……。

この後、結城明日香にお尻を叩かれた。
平手打ちで１００回も叩かれた僕のお尻は、真っ赤に腫れ上がり、無茶苦茶ヒリヒリして痛かった。

これで終わりと思ったら最後に最悪のお仕置が待っていた。
富田美香の１２ｃｍはあろうかとゆう張り形を装着したペニスバンドでのレイプだった。

ローションは菅野莉央が僕の肛門にタップリ塗ってくれたけど……。
それでも直径５ｃｍもある張り形は僕のお尻の穴を引き裂いた。

「あたしの腰使いで快楽を味あわせてあげるよ♡　ほら……入るよぉ～？　ここかな？　佑斗くんのお尻の穴は？」

『ズブズブ……メリメリ……』

「ひっ!?　痛いいいいっ！！　やめてくれーっ！！　入れないでええっ！！　ひいいいいっ！！」

『バリッ！！　バコンバコンバコンバコン！！！！』

「んぎゃあああっ！！　痛いよおっ！！　熱いよおっ！！　止めてください富田様っ！！」

「あははっ！　富田美香様のアナルファックだよー♪　もう一回イカせてやるよー！　気持ち良いかっ？　ほらほらほらあっ♡」

「あんな太くて長いモノが全部あの子の肛門に入ってるぅ♡」

「やだ……お尻の穴に入れたり抜いたり……痛そう……」

「佑斗って子……号泣しちゃってるよ！　よっぽど痛いんだろうねお尻の穴……」

痛い……痛すぎる……この富田美香って子も可愛い顔をしてる割に無茶苦茶激しい腰使い……僕の肛門は引き裂けそうだ！

「わーんわーん！　痛いよおっ！　やめて許して勘弁してえええっ！！　富田様っ！！」

「ダーメ♡　前立腺抉られて射精させてやるうっ♡　ほらほらほらあっ！　あっ！？　痛すぎるからってオシッコもらしたなっ！？許さないぞぉっ！？」

『バコンバコンバコン……バコバコバコバコバコバコ！！』

「ひんぎいいいっ！！　痛いいいっ！！　でも何か気持ち良い……変な感じっ！！　あれ！？　イク？？　イックうううっ！！」

『バコバコバコバコ……どぴゅぴゅぴゅぴゅっ！！』

「前立腺抉るあたしの腰使い……参ったか！？　一杯出しすぎだし……あはは♡」

恥ずかしいけど後半は無茶苦茶気持ち良かった……。
何でお尻の穴なんかを抉られて気持ちいいの？
射精しちゃうの？
僕には未知の世界だった。
痛みを越えた先にこんな世界があったなんて……。
無茶苦茶凄く気持ち良かった。

二回射精させられてもまだなおビンビンに勃起させながら、自分の二回目の精液を綺麗に舐め取っている僕がいた。

「今この子が出した白い液が、赤ちゃんの元となる精液と言うものだよ。二組の子はもう自分の教室に帰ってくれる？」

六年二組の女の子たちは続々と帰っていった。
みんな顔は真っ赤になっていた。

その後も僕は六年三組のアイドル三人組に性的虐待を受けた。
代わる代わる僕のお尻の穴に指を差し込み、何分も掻き回した。
キンタマは潰れるほど強く握り締められては離して……の繰り返しを延々とやられた。

この子たちは残酷で正真正銘のSだな、と痛感した。

「ごめんなさい。もう二度と女の子を傷付けるような事は言いません！！　許して下さい」

「今度あの子を傷付けたらチンポ輪切りにしてやるから！　分かった！？　クソガキ！」

「はいっ！！　ごめんなさいっ！！」

土下座したまま動かない僕を三人は足の裏でグリグリ頭から背中から……踏みまくってた。

ズボンとパンツは返してくれていたけど……正直またまた僕のオチンチンは全開に勃っていたんだよな。

嬉しいやら恥ずかしいやらで、泣きながら家に帰った僕は、風呂に入って眠る前、ふと思った。

「アイドル三人組にエッチなことされて射精までさせられて……ようく考えたら僕は得したんじゃないだろうか？　あの《真・絆ＧＩＲＬＳ》のメインの三人から性的虐待なんて、なかなかファンでも受けられないぞ！　いやはや、ほんとに得した気分の一日だったぞっ！　あははっ♪　僕って変態なのかな……」

結局この少年もＭに目覚めてしまうのだった……。

「でも明日登校したら……クラスの女子たちは全員僕の射精シーンを見てるんだよな……恥ずかしいな……」

裂けた肛門にオロナイン軟膏を塗りながら、苦痛を感じながらも梶原佑斗は不敵な笑みを浮かべながら眠りについた……。

傷付けた罪を償うこと（後書き）

人を傷付けたら自分に返ってくる因果応報を思い知った少年、梶原佑斗であった。

しかしMに目覚められては……。

性器破壊までは出来なかった莉央たちが何か損したような…………。

処刑執行人の卒業と人生の終止符（前書き）

四人から始まった残酷処刑島での処刑。
ついに卒業を迎えるメンバーが現れた。

処刑執行人の卒業と人生の終止符

特殊任務省の藤堂長官から初期の処刑執行人たちである四人へ連絡が入り、東部地区の繁華街にある高級フランス料理店へ招待されていた。

御手洗一家の処刑執行から久しく全員で会っていなかった四人は、もう一時間ほど雑談に花を咲かせている。

前回の残酷処刑島での処刑執行は中学生の鬼頭美紅と、小学生の菅野莉央が行ったため、年長の木村真紀と高校生の大山加奈は、処刑執行任務はかなり間が開いていた。

「今日みんなに集まってもらったのは最後に挨拶がしておきたかったから……」

全てのコース料理も出揃い、閉店まで残り一時間ほどとなった頃である。

満腹状態で幸せを感じている時間だったが、中学生の鬼頭美紅がふと我に返って、リーダーである三十路の木村真紀に聞き返す。

「最後にって……まさか！？」

小学生の菅野莉央も驚いて、真紀の目を見詰めながら次の言葉を

待つ。

「そうなのよ。実は会社の友人の石原聡子さんの紹介で会った人と、すぐに意気投合しちゃって……。三回目のデートの時に婚約しちゃったのよね。なんか恥ずかしいけど……」

「藤堂長官に連絡したら、既婚者は処刑任務を執行出来ないらしいんだよ。だから美紅と莉央に挨拶しとこうと思って……木村さんと相談してたんだ」

高校生である大山加奈も木村真紀に続けた。
これには菅野莉央がすぐに反応する。

「えっ!?　美紅ちゃんとあたしに挨拶って？　まさか加奈さんも結婚するの!?」

「はは。そうなんだ。この前会ったあの人だよ」

「この前会った……??　あたし、男性と会った記憶がないんだけど……」

「小鳥遊貴子。莉央の事、《鬼のような顔した女の子かと思ったら、可愛いんだね！》って誉めてもらってたじゃん？」

「あっ!!　あの普通の女子高校生って感じ全開の……そうか！加奈さんは小鳥遊さんと愛しあってたんだね！」

「女性同士って結婚出来るんですか？」

美紅の無粋な質問に真紀が答える。

「籍を入れて一緒に住めば同じことよね？　加奈」

「そ、そうゆうことなのよ。はは……」

肘を付いて自分のことを考え出す莉央だった。

『あたしは……男も女もどっちも好きになれそうな気がするなぁ。あれ？　あたしってもしかしたら変態なのかな??　両刀使いってこういうことなの??　う～ん……』

「莉央！　おーい莉央！」

「は、はい!!　何でしょうか!?」

「何か考え込みすぎて目玉が真ん中に寄ってたわよ？　だっふんだぁ～ってか？　大丈夫？」

「え？　ヒドイなぁ真紀さん……人を変なオジサンみたいに言わないで……」

「あはははは♪」

爆笑する真紀に釣られて加奈と美紅も同時に吹き出した。

「何か寂しくなるけど……普通の生活に戻れるならそれはそれで良かったよね？　美紅ちゃんもそう思わない？」

「そうだね。処刑任務はあたしと莉央ちゃんで頑張るから後の事は気にしないで幸せになってね！　お二人さん♪」

せっかくの祝福の言葉に即答しないで一息ついて答えだす真紀。

「あれだけ人を殺しておいて幸せにはなれないかも知れないけど……」

「そうだね。真紀さんの言う通り、虫が良すぎるかな……少なくとも死んだ後は間違いなく地獄行きだよ私たちは……」

「ちょ、ちょっと……止めてくださいよもう……あたしたちは何の落ち度もない人たちが無惨に殺されて、その報復で拷問処刑してるだけだから。報復刑がないこの国ではあたしたちのやってることは遺族の方々にとっては凄く有難いと思うんだけど？」

よほど地獄に行くのが怖かったのか……莉央が慌てて否定する。

「人を呪わば穴二つ……みたいなもんなのかな……そう考えたらあたしも莉央ちゃんも地獄行きだ！　あはは♪」

「あはは♪　じゃないよ。あたしは一人だけでも天国に行ってやるんだから！」

冗談半分で話す三人に対して、一人本気でムキになっている小学生の莉央だった。

楽しい時間も過ぎ、店員からの閉店を告げられた四人は、そそくさと店を出る。

「じゃあね！　美紅、まだまだ幼い莉央の事、よろしく頼むね！」

「はーい！　加奈さんも小鳥遊さんとお幸せに！　真紀さんもお幸せに！」

「ありがと美紅。あ、そうだ。忘れる所だった。はい、これ！　藤堂長官から莉央にって！」

真紀はそう言いながら一通の封筒を莉央に手渡す。

「まさか莉央ちゃんだけ臨時ボーナスとかじゃあないでしょうね！？」

「だったら嬉しいんだろうけど……手紙って藤堂長官言ってたから

心配しないで美紅。また家に帰ってからでもゆっくり読んであげてよ。　じゃあね！　また会うときまで元気でね皆さん」

真紀と加奈は、呼んでいたタクシーに各々乗り込んで帰っていった。

見えなくなるまで手を振る美紅と莉央。

「行っちゃったね……何か寂しいけど仕方ないか」

「仕方ない仕方ない！　じゃあ莉央ちゃんも頑張ってね！　結城さんと富田さんだっけ？　元気な友人のお二人さんにもよろしくね！　もう立派な拷問処刑人に成長してるみたいだけど……」

「そうなの。元々あの子たちには拷問処刑なんてやらせたくなかったんだけどね。素質があったとゆうか……最近心から楽しんで拷問してる気がするよ。あたしより残酷なのかもね！」

「それはないない！　莉央ちゃんには敵わないよあの子たちでは」

「そのあたしの上をいくのが……鬼頭美紅さん……だけどねー」

しばらく一緒に歩いて駅へ向かう。

美紅は妹のように可愛く想っている莉央とお別れするのが少し寂しく思っていた。

「じゃあまたね莉央ちゃん！　アイドルやりながら処刑任務から勉強からホント大変だろうけどファイト！！」

「うん！　勉強とか色々大変だろうけど頑張ってね美紅ちゃんも」

逆の方向の電車に乗り込み、先程のように見えなくなるまで手を振り合う二人だった。

次の日曜日――――――――――

東部地方にある東神社で毎年夏に行われている夏祭り。

この日は劇場公演もレッスンもないフリーだったので、莉央たち三人は浴衣を着て遊びに来ていた。

綿菓子を食べ、イカ焼きを食べ、フランクフルトも食べて、大満足の食べ歩きをしていた。

昼から来ていたが、もう夕方になっていた。

浴衣は赤、青、黄色……信号機のように見事に揃えている。

たまたまの偶然なのだが……。

莉央が赤、明日香が青、美香は黄色。

それぞれ模様は違うものの、色彩は見事に三色信号機だった。

「あたしたち三人の浴衣って……信号機みたいって周りから思われてそうだけど……信号機の青はどう見ても緑なんだよね。そう思わない？　青いのを着てる明日香ちゃん？」

富田美香のどうでもいい質問に即答する明日香。

「う～ん……なるほど。青い海って言われてるけど、場所によっては茶色だったり緑だったり紺だったりするじゃん？　それと同じだよ。細かいことは言わないの！　小さい事ばかり言ってると、お乳大きくならないよ？」

「ムッカ！！　それは禁句ですよ明日香さん！！　ねえ？　莉央ちゃん？」

「あはは♪　明日香ちゃんのふくよかな胸も、美香ちゃんのペッタンコの胸もどっちも素敵だよ。気にしない気にしない！」

「はぁ～。何でこんな小さく生まれたんだろ……オカンを恨むよ全く……」

「オカンって……。美香ちゃんは西部地方人か！？　ここは東部地方だよ？　あはは」

明日香のツッコミが入った直後、莉央が真剣に話し出す。

「ちょっと話し辛かったんだけどね……実は今日……」

「どうした？　なんか悩みでもあるのかな？　あたしに全て話してご覧なさい！　ついに生理でも来たのかなっ？」

「美香ちゃんってば……そんな発想してる時点で大して役に立てない気がするよ……はぁ」

「この前中学生の美紅ちゃんとあたしの二人で残酷処刑島で高校生の女の子を処刑したんだけど……その子の弟の武藤誠也くん……もうすぐここに来るんだ」

「え？　それって……ええっ！？　この前莉央ちゃんが言ってた四肢切断して内臓バラしたってゆう女子高生の弟さん！？」

「その弟さんって……確か末期ガンで療養中って言ってなかった？」

「うん。元々あたしたちのファンで、何回も劇場公演に足を運んでくれてたから、あたしも顔を覚えてたの。何の因果かその子のお姉ちゃんが結果的に１０人もの人々を殺してしまっていて……」

「その弟さんが来てるんだ……え？　昼から来てるのに今までほったらかしにしていたの？」

「いや……今日の治療が終わり次第、病院にタクシーを手配してくれているから、夕方六時頃にここに着く予定なの」

数日前──────────

莉央は木村真紀と大山加奈と別れて帰宅した。
真紀から受け取った藤堂長官からの手紙を開いた。

《菅野莉央殿────潜入捜査から囮捜査から拷問処刑任務から、ここ最近の活躍は目を見張るものがある。本当によくやってくれて

いるな。感謝する。本題に入るが……この前武藤和美とゆう女性を鬼頭美紅と君の二人で処刑してもらったのだが……その時の弟さんは末期ガンだった。たった一人の姉を処刑され、植物状態だった母親も先日死亡したようだ。担当医の話によると、もう立ったり歩いたり出来るのは今週一杯が関の山だとか……。最後に君のファンだとゆう武藤誠也くんを遊びに連れていってはもらえまいか？　無理強いはしない。君が良いと言うなら……。もしＯＫならその日の治療が終わる時間へ病院にタクシーを手配する。君が幼い頃から遊びに行っているとゆう東神社の夏祭りに連れていってあげてほしい。では朗報を待つ。藤堂》

「そうなんだ……余命宣告されてる子にどんなふうに接したら良いのかよくわからないけど……私なりに普通に接してみるよ」

「あたしも！　普通でいいよね？　そんな構えてたら誠也くんも楽しくないだろうし……」

「ありがとう。普通に接してるだけで誠也くんは楽しんでくれると思うよ。あ、タクシーが着いた。多分誠也くんだ」

鼻に酸素の管を付けた状態でタクシーから降りてくる武藤誠也。駆け寄って手を貸す莉央だった。

「大丈夫？　肩を貸すからつかまって！」

「ありがとう莉央ちゃん……まさかまた会えるなんて夢にも思わなかったよ。藤堂さんとかゆう国の機関の人が色々気を遣ってくれた

みたいで……」

「ふんぞり返っていながら命令ばかりしてくる人と思っていたから最初は苦手だったけど……なかなか良い所あるよね？」

「あはは、　そうなんだ。じゃあ運転手さん、ありがとうございました。いくらですか？」

「お金は藤堂様から頂いておりますので。ありがとうございました」

「そうですか。こちらこそお世話になりました」

礼儀正しくタクシーを見送る武藤誠也。

「ごめんね。お姉ちゃんのこと……あの……」

「もういいよ。お姉ちゃんはもう帰ってこないし……責任はお姉ちゃんにもあったし……結局お姉ちゃんを殺したのは美紅とかゆう中学生の子だったし……」

「遺体を切り刻んで……弄んだことは謝るよ」

「死んでるから痛くも痒くもない、と思いながら見てたから……人を殺した人じゃなきゃあんな酷いことしないんでしょ？　もうお姉ちゃんのことには触れないで。今日が人生で最後のお外での遊びになるんだから……」

「そうだよ！　莉央ちゃん、四人で楽しくお祭りを満喫しましょー

！」

「美香ちゃんは食べ物ばかりだけどね。その点私は射的とか金魚すくいとか……食い気以外のモノでも楽しみたいけどねー」

「あはは！　美香ちゃんは食欲旺盛なんだね！　そう言えば美香ちゃんと明日香ちゃんも《真・絆ＧＩＲＬＳ》だったんだよねっ！？　凄いや！　アイドル三人と両手に花でお祭りに行けるなんて！」

四人は金魚すくいと射的とくじ引きと……色々と楽しんだ。

七時も回り、辺りが黄金色に染まってゆく。

結城明日香が夕焼け空を指差して叫んだ。

「見て！　一番星！　スッゴい光ってる」

「ホントだ！　金星かな？」

「また美香ちゃん適当言ってるね？　あれはあたしには木星に見えるんだけど？　ワッカ付いてるよ」

「あはは！　莉央ちゃんは木星まで見えるんだ！？　ほんと鷹のような視力してるね？」

呆れながら爆笑する武藤誠也はとっても幸せそうだった。

植物状態になって死んでしまったお母さんには親も兄弟もいなくて、お母さんが死んだ後は遠い親戚の人が嫌々誠也くんの面倒をみているらしい。

幼い頃に両親が離婚し、付いていった母親に捨てられ、施設に引き取られて育った菅野莉央は、自分の境遇と重なって見える武藤誠也が、余計にむごく思えるのだった。
今は母親の母親……莉央のお婆さんの家で暮らしている。
家計に余裕がなく、最初は莉央を施設に手放した祖母だったが、藤堂長官の計らいである拷問処刑執行給与の早期支給のお陰で早めに莉央と一緒に住むことが出来ていた。
兄の京介も殺人犯とつるんで莉央に怒られたあとは猛反省して、お婆さんの家に帰ってきて、現在三人で暮らしている。

日も完全に沈み、屋台の雰囲気が余計に盛り上がってきた頃、大きな花火が夜空に咲いた。
ドンドンと連続して打ち上がってゆく花火は、夏祭りを大いに盛り上げた。

「やっと始まったね！　楽しみにしてた花火大会が♪」
「これを見なきゃ夏が来ない気がするねっ！！　きれい……」
「花火なんて何年ぶりだろうな。小さい頃はよく家族で見に来てたっけ。いつ頃からかなぜかパッタリ行かなくなったんだよなぁ……。お姉ちゃんがよく僕の代わりに金魚すくってくれてたよ。何十匹もね」
「どうして誠也くんが自分ですくわなかったの？」
「不器用だったからスグに紙破いちゃって……。結局一匹も取れな

かったよ。あはは…………………………お姉ちゃん……ぐす……ぐす……」

思わず姉を……両親を思い出し、涙を溢してしまう誠也。
莉央は気付かないフリをして、そっと手を繋いだ。
明日香は莉央の優しさに微笑みながらもらい泣きしている。
美香は……『たまやーっ♪　キャー！！　スッゴいキレー♪』と、はしゃぎっぱなしだった。
花火以外見えていなかった。
色とりどりの鮮やかな光が莉央たち四人の顔を照らし続けた。
花火もついに終わり、屋台の出店も仕舞い始めた頃に明日香が口を開いた。

「さてと！　明日も朝が早いからボチボチ帰りますか美香ちゃん？」

「え？　まだ九時半だよ？　今夜はオールナイ……んぐ！？」

口を押さえられたまま結城明日香に引きずられてゆく富田美香。

「な、何すんのよ？　明日香ちゃん！」

「莉央ちゃんはあの子のことタイプなの。それは本当なのね？　あ

の子は《真・絆ＧＩＲＬＳ》のファンだけど、莉央ちゃん推しなの。分かる？」

「あ……そうか……ごめん。楽しいからついつい四人で夜中まで遊びたかったから……ほんとだね。帰ろうあたしたちは」

境内の階段に座り込んでいる莉央と誠也に声をかける明日香と美香。

「莉央ちゃん、あたしたち明日掃除当番で早いから帰るね！　バイバーイ」

「美香ちゃんは……私が責任を持って家まで送り届けちゃいます！　安心して二人の時間をお過ごしくださーい♪　じゃあねっ莉央ちゃんに誠也くん」

「また明日学校でね！　さようなら」

「遅くまで僕と遊んでくれてありがとう！　また劇場公演見に行くからそのときもよろしくねっ！　明日香ちゃん！　美香ちゃん！」

屋台も全て閉まり、ヒグラシの声も止み、辺りを三日月の微かな光が灯すのみとなった。

「心から大好きなアイドルの莉央ちゃんとこうして一緒にいられるなんて……遊園地の時からそうだったけど……今でも信じられないよ。本当にありがとね」

「いやいや……あたしの方こそいきなりキスしたり変なことしたりして……しかも残酷処刑島では……お尻の穴に手首まで突っ込んで直腸を掻き回して……痛い思いさせちゃってごめんなさい……」

「あれは僕が悪かったんだ。莉央ちゃんを蹴ろうとしちゃったから……」

「そうだよ！　アイドルのあたしの顔を足蹴にしようとしたんだから！　その罰だよ！　……でもお姉ちゃんを助けたかったんだよね？　あの時は……　ごめんね本当に」

誠也は莉央の右手を掴んでゆっくり擦りながら呟いた。

「こんな真っ白な小さな可愛い手が……僕の肛門に手首までぶち込まれて……なんかもうお姉ちゃんどころか僕まで……その……なんてゆうか……莉央ちゃんに殺されてもいいかな……なんて本気で思っちゃった。そう思いながらオチンチン勃ってきちゃってたんだよ。Mってやつに目覚めたのかな？　あはは……情けない」

「変態さんだったんだね誠也くんは。あたしも誠也くんタイプだし……実はさっき一緒にいた美香ちゃんって子もタイプなんだ……同性なんだけどね。以前一回美香ちゃんのアソコに指突っ込んじゃった……あはは。変態なんだよあたしも……」

「そんなことあったんだ……でも見た感じあの子も莉央ちゃん好きそうだったよ？　何となく分かる」

「え？　好きは友達としての好きでしょ？　あたしはあの子を抱いてみたいの……」

「だから美香ちゃんも莉央ちゃんに抱かれてみたいと思ってると思うよ。僕には分かるんだ」

「そうか……ならいつか隙を見せたら犯してやろうかな？　美香ちゃんも……誠也くんのアナルを犯したように」

「止めてよ！　こんな酸素お鼻に通した状態で勃ってきちゃったじゃないか！　あはは♪」

三日月なので星空はとても輝いていた。
しばらく無言で星空を見詰める二人。

「死んだら人間ってどうなるのかな？」

「……お星様になるんじゃない？」

「冗談キツいなぁ莉央ちゃん。生まれ変わりとかって……あるのかなって意味だよ」

「あたしは天国も地獄も信じてないけど……生まれ変わりは信じてる……いつか死んじゃってもね、またいつか自分が自分だって思える自分がいるの。だから生まれ変わり。前世の記憶は無いと思うけ

ど……」

「ふうん。だったら良いね！　生まれ変わり。僕も信じたい」

「犬や猫に生まれ変わるかもしれないけどね……」

「ははは。犬ならトイプードルになりたいな。昔飼ってたから」

「あたしはグレートデン！　♂に生まれ変わってトイプードルの♀の誠也くんのマンコ破壊するくらい正常位で犯してあげるから覚悟しててね♡」

「いやんっ！　莉央ちゃんは本当にSだなぁ。はは……ってゆうか犬はバックでしかセックスできないからね？」

馬鹿な会話をしてる内に三日月はどんどん上に登ってゆく。
時刻は午前零時を指していた。

「あのさ……一つ聞きたいんだけど。いいかな？」

「なに？　あらたまって」

「残酷処刑島でのことなんだけど……最後に船が迎えに来る直前に僕を殺しに来てたよね？」

「…………」

「あの美紅とかゆう子が、時間切れだから……とか言ってたけども

し時間があったら……僕は処刑されてたの？」

「………お姉さんだけが処刑対象者だったから、誠也くんは殺せなかった。殺す気もなかったけどね。怖がらせてしまってごめんなさい」

「そうだったんだ……なーんだ。でもあの時は死を覚悟してたからどっちでも良かったんだけど」

しばらく沈黙して空を見上げる二人。

「………………キスして」

「え？　ええっ！？」

「今度は誠也くんの方から……ね？」

「ご、ごくん！！　うん。莉央ちゃん……」

誠也は莉央を優しく抱きしめて、人生で初めて自分から女の子にキスをした。
ゆっくり舌を入れて、しばらく二人の舌を絡めあった。
不思議なくらい静かで、温かい気持ちになれる時間が流れた。
ほんの数分のことだったが、誠也には永遠にさえ感じられた至福の時………。

「セックスしよ」

心臓が止まりそうになる誠也。

「え？　あ？　う、うん！　…………でも、こ、こんな階段じゃ無理だよ！？　あっちの平地へいこう」

絵画が飾ってある部屋の床はコンクリートだった。
構わずコンクリートの上で全裸になる誠也。
慌てて酸素の管も外した。

「大丈夫なの？　付けたままでもいいよ？」

「莉央ちゃんを抱きながらキスができるんだもん！　こんなもん邪魔だよ！　大丈夫だから……ありがとう」

仰向け体勢で、固いコンクリートに直に寝転がる形になる莉央のために、自分の来ていたシャツやズボンを出来るだけ拡げて敷いてあげた。
ゆっくり莉央の赤い浴衣をぎこちなく脱がしてゆく。
余りにぎこちないので、半分は自分で脱いだ形になる莉央だった。

「神様……ありがとう」

「何で神様にお礼言ってるのかな？」

「だって……余命一週間かもしれない末期ガンの僕のオチンチンが……ほら……こんなに固くなってる……」

「ほんとだ！　これならお尻の穴にあたしの指突っ込まなくても大丈夫そうだね？」

「それはそれできっと興奮するんだけどね……」

「あたしが潰したキンタマ……縫っておいた陰嚢の傷痕は順調にふさがってるみたいね！　良かった」

そう言いながら一つ残している睾丸を軽く握ってコリコリ擦る莉央の指先。

「んっ！？　莉央ちゃん……気持ちいい……もっとグリグリして」

「あまりニギニギし過ぎてつい潰しちゃったらもう射精できなくなっちゃうから少しで止めとくよ。うふ♡」

「莉央ちゃん！」

『ガバッ！　ギュウッ……』

叫びながら莉央に覆い被さり、強く抱き締めた。
お互い丸裸で抱き締め合いながら、お互いの肌の温もりを感じ取

る二人。

「肌、柔らかいね……温かいし。大好きだよ莉央ちゃん」

「あたしも大好き。こうやって好きになった男の子と抱き締め合うことも初めてだけど……なんか……こうしてるだけでも気持ちいいよね」

切れかけてパチパチ点滅している薄暗い蛍光灯の下で、莉央の目をじっと見詰める。

やがてゆっくりと目を閉じて、唇を重ねた。

抱き締め合ったままでの濃厚なキスが数分繰り返される。

「おっぱい……舐めて」

「うん……んぐっ……ペチャ……ペチャ……クリクリ」

微かな膨らみを持つ女子小学生の左の胸を軽く右手で揉みながら、ぎこちなく……それでも一生懸命に乳首を舐め続ける誠也だった。

「あ……んん。き、気持ちいい誠也くん……あん」

「ペチャペチャ……んぐっんぐっ……コリコリッ！！」

「んあっ！？　んん……はぁ。はぁ」

インターネットで少しは勉強していたのか、軽く乳首を噛む技まで披露する中学生男子。

「アソコがかなり濡れてきちゃった……舐めて」

「うん……大好きな莉央ちゃんのアソコ…………ペチャ……ペチャペチャ……」

「あ、あん……んん」

「ズルズル……ゴクン。ピチャッピチャッ……ズルズル……ゴクン」

「いやだ……飲み込まないで……汚いよ」

「大好き……莉央ちゃんのアソコの液なんて全く汚くないよ！！……ペチャペチャ……ゴクン！」

「んん。あん……あたしも……舐めさせて……」

誠也が体の方向を変え、シックスナインの体制でお互いの性器を舐め合う小学生と中学生………。

虫の鳴き声がラブホテルのＢＧＭがわりだった。

莉央自身、ここまでアソコが濡れたのは生まれて初めてだった。

グチョグチョに濡れたアソコに、武藤誠也のオチンチンを右手で握って導く……。

「ここだよ。挿れて……」

「うん。いくよ？　莉央ちゃん」

『ヌププ……クチュチュ……』

「あっ！？　あはんっ！！」

「莉央ちゃん！！　大好きだっ！！」

『ズブッ！……バリッ！！』

「痛いっ！！」

「あっ！？　ごめんっ！！」

処女膜が破れて、思わず悲鳴をあげてしまう莉央だった。
残酷処刑人とはいえ処女の小学生の女の子。
初めてのセックス経験は、余命僅かなファンの少年……武藤誠也だった。

慌てて抜こうとする誠也に叫ぶ莉央。

「駄目っ！！　抜かないでっ！！」

「え？　だって痛がってるよ？」

「我慢するからそのまま全部挿れて……誠也くんのオチンチン……

根元まで突き差して……んん。そして激しく腰を振って……」

「うん！　いくよ！それっ！」

『ばちゅっ！！　バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「あっ！　あはあああんっ！！　気持ちいいっ！！　もっと激しく出し入れしてっ！！　誠也くん……大好きっ！！」

「莉央ちゃん！　僕も大好きだあぁっ！！　イク……イッちゃううううううっ！！」

『ドピュピュピュピュピュッ！！』

「はぁ……はぁ……はぁ……気持ちよかった……ごめん、莉央ちゃんの中に出しちゃった！　大丈夫かな？」

「大丈夫だよ。あたしまだ初潮来てないから……来年くらいには来るかな生理……気持ち良かったよ誠也くん」

素っ裸の中学生の少年は、頬を赤くして火照っている素っ裸の少女、莉央を再び強く抱き締めて、軽くキスをした。

「ありがとう……莉央ちゃん。生まれ変わってもアイドルになってね！　僕は来世でも莉央ちゃんのファンだから！」

「あたしもありがとう。誠也くん……めっちゃ大好きだよ！」

一時間ほど抱き締め合った後、彼の呼吸は急に荒々しくなり、莉央が抱き締めている胸の中で段々弱々しくなってゆく。

ついに……静かに呼吸は停止した。

彼の頬に莉央の涙が止めどなく伝い落ちる。

もう既に息をしていない武藤誠也にもう一度口づけした。

「わぁーん！　わぁああーんっ！！　誠也くん……ぐす……ぐす……」

菅野莉央の今までの人生で、一番激しく泣いた夜だった。

喉が渇れるまで強く抱き締めたまま泣き続けた。

人生で最後の夜を憧れのアイドル、莉央と過ごせた武藤誠也は、たとえ若くして死んだとしても……幸せな人生と言えたのだろうか……。

救急車のサイレンが夜明け前の東神社の境内に近付いてゆく――――――

処刑執行人の卒業と人生の終止符（後書き）

残酷処刑人真紀と加奈の卒業。

この先新しく処刑執行人は選出されるのだろうか？

理想の相手と人生の最後の幕を閉じた武藤誠也。

生まれ変わっても菅野莉央を愛してほしい。

たとえ犬や猫に生まれ変わったとしても…………。

真実（前書き）

初めて恋した男の子に死なれた莉央は、人生で一番の悲しみを味わう事になった。
明日香と美香に励まされながら立ち直ろうとするが、そう簡単に忘れ去ることは出来ないでいた。

《今回のお話は、残酷描写やエロ描写が一切ございません。それらの内容を楽しみにして読んで下さっている方は、スルーして頂き、後書きだけでも目を通して頂けたら有り難いです》

真実

「ふぁあああ……まだまだ眠いな……だる……」

「おはよう。早く朝ごはん食べてサッサと教習所行ってきなさい！　莉央はとっくに済ませたわよ！」

「ごちそうさま」

ご飯と目玉焼きと、ワカメの味噌汁を食べ終わって箸を置く莉央。お婆ちゃん手作りの朝食は簡単なものだがとても美味しかった。

「ついでに起こしてくれてもいいじゃないか莉央！　冷た……ん？　どうした？　冬眠から目覚めたばかりのツキノワグマみたいな顔して……」

ゆっくり顔を上げ、京介を静かに睨み付ける。

「誰がツキノワグマよ？　寝起きの熊なんて見たことあるの？」

少しムッとしながら席を立つ。

「すまんすまん！　……瞼が腫れて顔面の迫力が増してるからな……ついつい。何かあったのか？　寝不足みたいだし」

おどけた表情をしながらドカッと椅子に座ると同時に先ずはご飯を掻き込む。

「ご飯粒ポロポロこぼしてるよ？　全く昔からお兄ちゃんは食べ方汚ないんだから……。お婆ちゃん家にお世話になるんだったらあまり迷惑かけちゃだめだからね」

「おいおい！　朝から説教はやめてくれよ。早く学校行かないと遅刻するぞ？」

「だいたい何で今頃教習所なんか行くの？　免許取った所でどうせ車なんて買えないでしょ？」

「さすがの俺も傷つくぞそれ……人生頑張っていればどうにかなるもんなんだよ」

「そう。せいぜい頑張ってみてね。じゃ、行ってきますお婆ちゃん」

「行ってらっしゃい」

兄である菅野京介が再び一つ屋根の下で住む事になった。

莉央は内心ホッとしてはいたが、相変わらず人生を舐めている態度に頻繁に頭を痛めていた。

『あんな性格で仕事なんか見つかるのかな？　はぁ……』

小学校に着くと、明日香と美香がはしゃいでいる。

「おっはよー莉央ちゃん！　昨日は楽しかったね！　あたしはやっぱり花火や屋台大好きだよー！」

「誠也くん……タクシーで無事に病院へ帰ったのかな？」

俯いて黙り混む莉央を見て察した明日香は静かに呟く。

「そうなんだ……辛かったね莉央ちゃん。でも誠也くんとても幸せそうだったよ？」

「え？　誠也くん死んじゃったの！？　マジで！？　結構元気そうに見えたのになぁ。可哀想に……。でも人生最期の夜を大好きな莉央ちゃんと過ごせたことは、彼にとってスッゴく幸せだったよ思うよきっと！」

美香なりに一生懸命慰めて励ましていた。

軽く頷いてから静かな笑顔でお礼を言う。

「ありがと。美香ちゃん、明日香ちゃん。ちょっと疲れたから今日

は一日中寝て過ごすよ。先生にはあまりうるさく喋らないように言っといてね？」

「はーい。昼休みも寝てるなら莉央ちゃんの分も給食食べていい？」

「いいよ。今日は朝ごはんだけでも食べきるの必死だったからね」

「美香ちゃんはほんと食い意地張ってるわね？　鯨の肉は半分もらうから私も！」

「ええ〜っ！？　食パン丸々あげるから鯨は全部ちょーだいよぉ」

「もう……ほんと子供なんだから美香ちゃんは……ね？　莉央ちゃん？」

「スヤスヤ……くぅ〜」

「ありゃりゃ……もう寝ちゃってる？　凄いなあ……」

「よほど疲れてたんだね。精神的な方が寝不足よりも大きい気がするね……私も好きな子に何かあったらやつれきるよ」

その頃菅野京介は――――――――

下町自動車教習所にて必死で授業を受けていた。

「え〜。この度皆様方は、自動車の運転とゆう人生で初めての経験をされようとしております。自動車とゆうものは、非常に便利で私

たちの生活を大いに助けてくれますが、もし油断して調子に乗ってスピードを出しすぎたりすると、人の命を簡単に奪いかねない凶器と化します。あ〜。本日初日から実地教習を受けられる方は、え〜。その辺りをどうか真摯に受け止め、慎重かつ安全な運転を心掛けられますよう、お願い致します。あ〜。それとですね……」

『そんなこといちいち言われなくたって分かってるよジジイめ！　何十分無駄な話を続けるつもりだ？　ちっ……』

イライラする京介に構わず、延々と入所式での心構えを語り続ける所長であった。

続いて初めての実地教習に進んだ。

「君は今日が初めてだね？　教習所手帳を貸してもらえるかね。菅野京介くん、２０歳か。１８歳で取得しようとは思わなかったんだね？　ま、必要になったときが免許の取り時、車の買い時、だからね。はっはっはっ」

「そうっスね！　……クチャクチャ……」

「ん？　おい！　菅野くん、君は今ガムを食べてるね？」

「え？　あ、はい。ガム噛んでたら何事でも集中出来るんッスよ。それが何か？」

「吐け！　今すぐ吐けこの野郎っ！！」

いきなり本気で怒り出す先生に一瞬本気でビビった京介だった。

「ワシは生徒にガムを噛まれるのが一番腹立つんだ！！　人にモノを教わる分際で何を舐めてやがる！？」

『舐めないで噛んでますが？』

と、言いたいところをグッと我慢して素直に傍らの草むらに吐き出しに行ってきた。

ここで逆らったらクビになる気がしたからであった。

「すいません、気を付けますんで……よろしくお願いします」

「うむ！　分かれば宜しい。ワシ以外の先生の時でもガムを噛むなど絶対してはならんぞ？」

「はい。分かりました」

内心かなりムカついていながらも、せっかくの免許取得のチャンスを逃してはならない！　と、心に刻んで我慢した京介だった。

一方、莉央の小学校では無事に鯨肉をゲットして、二人分をバクバク食べる富田美香がいた。
あまりの豪快な食べっぷりに、結城明日香はパンが喉を通らない。
ひたすら美香の食べる姿を飽きないで終始見物していた。
ようやく我に還り、パンが喉を通り始めた頃には、美香は完食してお腹をパンパン叩いている。

「あぁー食った食った！！　鯨は最高だなっ！！　明日香ちゃん」

「そ、そうだね。ってゆうかどこかの中年オヤジがログインしちゃってるわよ？　美香ちゃん……あなたのお父さんの姿が浮かんでくるんだけど……」

「あたしの父ちゃんはそりゃ食べるし飲むし凄いんだよ！　ビールなんて毎日大瓶五本は飲んでるし」

「肝臓壊さない？　少し注意してあげた方が良くない？」

「母ちゃんがいつも言ってるけど聞かないんだ。だからもう好きなだけ飲んで食ってさせてあげてるの。酒癖悪くて暴力振るったりとかはないからね！　ゲラゲラ笑いながら、笑い上戸になる性格だよ。あははは」

「ふぅん。なら明るくて楽しそうな家族だね……だから美香ちゃんみたいなのが生まれ育ったんだね。うふふ」

「ん？　何か引っ掛かるなぁ今の言い方……ひょっとしてバカにしてるでしょ？　そんなやつは……こうしてやる！！」

パンをようやく食べ終わった直後にクスグリ攻撃を受ける明日香。

「ちょ、ちょっと！　やめてよ！？　あは！　あはははは！！　死ぬっ！　死んじゃううっ！！　アヒャヒャヒャヒャ！！」

「アヒャヒャヒャヒャって……変な笑いかたするなぁ明日香ちゃんは！　あははは！　えいえいっ！！　笑い殺してやるぅ♪」

あまりに騒ぐ二人にさすがの莉央も目を覚ました。

「むにゃ……？」

「あら？　起こしちゃった？　ごめんね！」

「そりゃそれだけ悪戯したら莉央ちゃんも起きちゃうでしょ？　死ぬかと思ったよ全く……」

「ふぁ～あああ…………何を体や腕を掴みあってるの？お二人さん？」

明日香が呆れぎみに美香の悪戯を説明すると、やれやれと言った表情で美香のお尻をスカート越しに叩く。

「やんっ♡　痛いです莉央様っ！」

「ほんとはお尻叩かれて喜んでるでしょ？　あなた……」

「軽く叩いてもほんとに痛いんだよ？　莉央ちゃん破壊力あるから……喜ぶわけないよー。てへへ♪」

明日香のツッコミに本気で照れ隠しをする美香だった。

給食後は完全に目が覚めてしまい、普通に授業を受けて一日を終えた。

数週間後の日曜日――――――――

「おい莉央っ！　俺はついに免許を取ったぞ！！　これで彼女が出来てもドライブ行ける訳だ。車さえ買えればな！　楽しみだなぁ！！　イヒヒ」

「あれ？　お兄ちゃん男性か小さい女の子にしか興味なかったんでは？」

「がははっ！！　それが最近男も女も大人も子供も何でも受け付けるようになったんだ！　好きになったら何でもＯＫってわけだ！！　ハートフルな俺の性欲だろ！？」

「何でもアリかよ……どんどん変態さが急上昇しちゃっていってる

ねぇ……さすがはあたしのお兄ちゃんだわ……」

「莉央みたいに冷酷にはなれないがな！　イヒヒ！！　さぁ、車も買いたいし、仕事でも探しに次は職安行ってくるかな！　がはははっ！！」

「いちいち、がははっ！！　とか、イヒヒ！！　とかゆう笑い方止めてくれる？　キモいから」

京介が意気揚々と出ていった後、祖母に呼ばれて話をすることになった。

いつになく真剣な表情で莉央に語るお婆ちゃん。

「お前の母親、つまり私の娘の良江からは聞かされてないと思うけど……莉央には全てを話しておくよ。実はね……」

「な、何かあらたまってそう言われたら怖いんだけど？　お婆ちゃん……」

「お前が兄と思っている京介はお前が2歳の時に施設から引き取られてきた養子だったんだよ。京介が１０歳の頃だったかな？　京介の実の両親から性的虐待を受け続けて、しまいに暴力で頭を強く打って……一時は軽い記憶喪失になっていたのね……」

「えっ!?　お兄ちゃんが実の兄じゃない？　そんな……全く知らなかったよそれは……」

「お前が６歳……小学一年生の頃に良江に捨てられた時に、京介は

１４歳で中学二年生だった。その頃くらいから記憶喪失もマシになり、新しく妹であるお前や、施設の先生たちを親と思えるだけの記憶は形成されていったんだと思う……。京介の中では私も本当のお婆ちゃん。莉央も本当の妹である記憶しかないからこの事は一生内緒だよ？　いいね？」

「うん。それは分かったけどどうしてお兄ちゃんに急に自動車免許取るためのお金渡したりしたの？」

「それも黙ってたけどごめんね。その内話すつもりだったけど……特殊任務省の藤堂さんから連絡があり、京介の教習所にかかる経費と、新しい車代を支払う代わりに、特殊任務省で働いてもらう……と言っていた。お前の残酷処刑島での仕事は無理だけど、潜入捜査や囮捜査……お仕置きのみの任務の際に、京介を足代わりに使ってやってくれと……藤堂長官はそうおっしゃっていた」

「残酷処刑島のこと……お婆ちゃん知ってたんだ……血の繋がったあたしが血の繋がりのないお兄ちゃんより残酷だと分かっても平気でいられたの？　あたしのこと嫌いになったら嫌いと言ってねハッキリ……」

「嫌いになるもんか！　お前は理不尽に殺されたり、残酷なめに逢っている人たちのために、心を鬼にして制裁をしてやってるんだよ！　私は素晴らしい事だと思ってるよ」

「うん。悪い人を拷問するのも処刑するのもあたしは平気だよ。殺された方はいきなり人生を奪われちゃったわけだから……無期懲役とかは甘すぎるよ。死刑も甘すぎる」

「私には処刑シーンを見る度胸もないけど、因果応報とゆうものだ

よ。胸を張って任務を果たしてね。数百万円給与貯まってるけど私が管理してるからね。また大金が必要な時は言いなさい。下ろしてくるから」

そこそこ処刑任務遂行による報酬は支払われてるとは聞いていた莉央だったが、アイドル稼業よりも多いかも知れない金額に少し動揺していた。

「仕事を探しに行った京介には悪いけど……あの子の仕事はもう決まったようなもんだね。莉央の分も同じ口座に特殊任務省から給料振り込まれるから。運転手としてこき使ってやりなよ莉央！」

「そうだね。色々とあたしたちの役に立ってくれればいいんだけど……」

部屋に戻り、ふと頭をよぎる藤堂長官の優しさ。

『藤堂長官に気を遣わせちゃったかな……。お兄ちゃんはずっと定職に就かなければまた犯罪を犯しかねないから……。誠也くんの時も藤堂長官の気遣いのお陰で一緒に夏祭りに行けて最後の夜を過ごせたもんなぁ。感謝しなきゃ……』

実の兄でないことはかなりの衝撃的な事実だったが、取り敢えず職安からの帰りを待つ莉央だった。

夜の十時過ぎにようやく帰宅する京介に莉央が詰め寄った。

「遅くまで開いてるんだね？　職安って……」

「おう！　まだ起きてたのか？　ろくな仕事がねーもんだから職員のネーチャンに、楽で給料高くて労働時間短い会社ないか直接聞いたら急に怒り出しやがって！　客に対して説教するなんざ十年早いぜ全く……その内苦情の投書してやる！」

「どうせパチンコでも行ってたんでしょ？　まぁ良いけど……仕事はもう探さなくても良いから、あたしたちの足になってね？」

「へ？　どうゆうことだ？？　足になれ？」

「そう。車は藤堂長官から来週にでも届けられるらしいから……指令を受けたらその場所まで積んでいってくれたらいいからね。給料は特殊任務省からお婆ちゃんに振り込まれるの。お兄ちゃん無駄遣いしそうだからちょうど良かったじゃん？」

「おいおい！　そりゃないぜ？　……でもろくな仕事がないときだからなぁ。我慢して運転手してみるか。指令のないときは待機なのか？」

「連絡するから好きにしていてもいいよ」

「ひゃっはぁーっ！　そりゃ嬉しいな♪　何の車をもらえるんだろ？　ヒヒヒ♪」

数日後――――――――

藤堂長官からの贈り物……京介の車が届いた。

「お兄ちゃーん！　車庫に届いたわよ？　キレイな真っ赤な車が。エンジンかけてみて！」

「ほんとか！？　ひゃっはぁー！！　カウンタックかフェラーリか！？　真っ赤なポルシェかあっ！？　ヒヒヒ♪」

「…………ん？　何だこれ？？　ま、マーチじゃねぇか？」

「真っ赤なマーチだね」

「おいっ！？　しかもよく見ると中古じゃねえかコレ……冗談キツいぜ！」

「あれ？　あたしどっかで見たことある…………あっ！　このマーチって！？」

「いつか山小屋でお前が処刑した女の車じゃねえかっ！！　おいおい…………マジで冗談キツいって！　幽霊乗ってないか？」

「あたしたちに処刑されたら戸籍から抹消されて行方不明扱いになるらしいから……始末に困ったのね藤堂長官。でも一石二鳥じゃん」

「何が一石二鳥だよ……常に横にあの女……みゆきちゃんが乗ってそうで怖いわっ！！」

「ビビリだねやっぱり……あんな酷い女、幽霊になる資格もないわよ。心配ないない。良かったね！　車もタダで手に入ったことだし

！　試運転に行こうか？　来週末は劇場公演あるけど今日は暇だから……」

早速試運転にドライブに出掛ける兄妹の二人。

赤の他人の兄妹だったが……。

せっかくだから、予定がないと言っていた結城明日香と富田美香も誘おうと、京介に道を教えながら二人を迎えに行った。

騒がしい二人を真っ赤なマーチに乗せて、再びドライブに出掛ける四人だった。

助手席に明日香が乗り、後部座席右側に莉央、左側に美香といったふうに乗り込んでいた。

「どうだ？　俺の運転は？　免許取ったばかりとは思えないくらい上手いだろ？」

「そうですね……でも少し飛ばし過ぎかと……ハッキリ言って怖いです」

助手席の明日香の顔が引き吊っている。

バイパス道路を１５０キロで飛ばす京介。

かなり調子にのってどんどん追い越してゆく。

「お兄さん大丈夫なの？　あたしたちの足になってくれるのはこれからかなり助かるんだけど……運転荒すぎない？」

「そうだね。ちょっと危ないよねこれは……」

『ドカッ！！』

「痛っ！？　け、蹴るなよ莉央っ！！　なんだよっ！？　シート越しでも結構痛かったぞ？？」

「二人とも怖がってるからもっとゆっくり運転してくれる？　事故したらどうするのよ？」

「ちっ……せっかくサーキット気分だったのに……わかったよ」

　ふと信号待ちで隣に停まった車を見ると、六年三組の担任の女性の先生が乗っている。

　美香と明日香が窓をドンドン叩きながら先生に叫んでいるが、全く聞こえなかったために、京介がホーンを鳴らしてアピールした。

　こちらを向き助手席の明日香と目が合う坂本温子先生。

　美香にも気付いた坂本先生は、こちらに向かって微笑みながら手を振ってくれた。

「私に気付いてくれたよ！　美香ちゃん！」

「ヤッホー！！　センセー！　お買い物かなー！？　……って言っても聞こえないか……若々しい格好してるね坂本先生の私服は」

　莉央は美香の肩越しにチラリと見える程度だったが、先生と目が

合った気がしたので一応手を振った。
信号が青に変わり、再び走り出す真っ赤なマーチ。
しかし次の信号でも再び真横に並ぶようになった。
またまた手を振る二人。
先生も手を振ってくれているが、少し顔が引き吊っている。

『ドカッ！！』

「げひゃっ！？　な、なんだよ莉央！？　また背中蹴りやがって！？　もう飛ばしてないぞ！？」

「げひゃっ……じゃないわよ。一度挨拶した相手と何度も横に並んだら、お互いに気まずいでしょーが？　ほんと気が利かないんだからお兄ちゃんは！　何度も真横に停まらないで少しズラして停まってくれる？」

「へ？　何だそれ？　変なことに気を遣うんだな……俺の背中を気遣ってくれや全く……」

無事にドライブを終えた莉央たち四人は、明日香と美香を送り届けて帰宅した。
拷問処刑人の三人の女子小学生たちに、２０歳の菅野京介が加わる事となった。
処刑を執行出来ない気の弱い男に運転手でも勤まるのかどうか、かなり不安に思う莉央だった。

真実（後書き）

お婆ちゃんから告げられる驚愕の事実。
実は血が繋がっていなかった莉央と京介。

莉央が2歳の頃に性的虐待を受けていた１０歳の京介を引き取った莉央の両親だったが、父親の浮気が原因で離婚することとなり、莉央と京介は母親の良江に付いていくことに。

新しい男に惚れ込んだ良江は自身の母親（莉央の祖母）に強引に世話を頼み、男とともに姿を消した。

祖母は面倒みる余裕がないと、施設にお願いして莉央と京介を手放した。

莉央と京介は《菅野》とゆう苗字を気にいっており、変える気は全くなかったため、離婚した後の母親の旧姓を名乗らず、父親の苗字である《菅野》を名乗り続けている。

両親の離婚、母親からの育児放棄、施設送り……様々な原因で兄妹の心はすさんでいき、後のレイプ魔京介、残酷少女莉央の基盤が形成されていった。

莉央は虫から動物から平気で殺し、施設の同世代の子供たちに暴力をふるい、施設の職員も困って国の相談センターに幾度となく電話で相談していた。
残酷さでは兄の京介を遥かに凌いでいる莉央。

相談センターから聞き付けたのか、特殊任務省の藤堂長官から施設に連絡が入り、菅野兄妹は祖母が引き取って育てる旨を聞き、安心する職員たち。

結局施設では一年間しか在籍しなかったことになる。

特殊任務省藤堂長官は、残酷少女の莉央に特殊な任務を執行してもらう替わりに高額な給料を祖母の通帳に振り込むことを約束して、祖母はそれを受け入れた。

莉央が１２歳になってから任務を行ってもらうが、二人の養育費は引き取った直後から支払うとゆう好条件だった。

もともと莉央と京介が嫌いではなく、お金に余裕がなく貧乏な思いをさせたくないが故に施設に預けた祖母だったので、国の機関の特殊任務省には大いに感謝していた。

しかし莉央が１０歳、京介１８歳の頃に、京介は柄の悪い連中と同じアパートに住むことになり、祖母の家をでていく。

二年後……１２歳の莉央は、初めて残酷処刑島に呼ばれ、その時莉央と同等な残酷な気性の女性たちである真紀、加奈、美紅と出会い、残酷拷問処刑を真紀の指導のもと覚えていった。

レイプやイタズラしては補導、逮捕され、挙げ句の果てには殺人犯とつるんでしまったことに猛反省した京介は、再び祖母の家に帰ってくる決意をする。

同じ屋根の下で再び暮らし始める三人だったが、更に莉央たちの運転手として、特殊任務省に雇われた菅野京介。

両親から性的虐待を受け、引き取られたことを京介には内緒にする

莉央とお婆ちゃんだったが、明日香と美香にも言わないでおこうと決意する莉央だった。

運転手として国に雇われ、莉央たちの新しい仲間になった菅野京介。

現在では木村真紀、大山加奈、小鳥遊貴子が卒業した。

そのため、菅野莉央、富田美香、結城明日香、鬼頭美紅、菅野京介の五人が特殊任務省の新しいメンバーとなった。

遠方への移動も真っ赤なマーチを運転してくれる京介が加わったため、かなり楽になる仲間たちであった。

北の女番長　（前編）（前書き）

中学生メンバーの大野真子と小野メグが通う中学校は、東部地方からかなり北に位置する北部地方に存在する。
その極北女子中学校で繰り広げられる女番長の紛争。
真・絆ＧＩＲＬＳの六人も巻き込まれてゆく…………。

北の女番長　（前編）

冬には度々雪の降る極寒の北部地方に存在する極北女子中学校。

気性が荒く喧嘩も強い大野真子と小野メグが通っている。

アイドルグループである《真・絆ＧＩＲＬＳ》の中学二年生メンバーの二人だ。

この中学校は北部地方でも柄が悪いことで有名であった。

近隣の中学校の生徒たちは、女子はおろか男子でさえも目を合わさないように気を付けているほどだった。

いくつかのヤンキーグループが喧嘩をして、潰し合い、吸収され、今では極北女子中学校を二つの大きなグループに分けていた。

《紅姫鬼神》と《卑弥呼隊》だった。

紅姫鬼神は主に一年生と二年生の集団で、卑弥呼隊は三年生の集団であった。

全学年の女子生徒の中では、三年生が圧倒的に多かったので、勢力的には約２００対２００といったほぼ互角の数だった。

破格に喧嘩の強い真子とメグを仲間に入れようと、しょっちゅう中学二年生の紅姫鬼神の総長、宮垣咲良からオファーがあるが、学生生活を気楽に過ごしたい二人にはヤンキーのグループとか、学校を仕切るとか、これっぽっちも興味がなかった。

「今度の日曜日はまたあの厳しい女先生、牧野杏奈とかゆうやつのダンスのレッスンがあるみたいだね？　メグ」

「あ～そうかぁ。また怒られまくりでストレスたまるね……少し厳しすぎるよねあいつ……ちょっとムカつくよ。でも今度の日曜日って、学校側の都合で登校日になってたよね？　水曜日が替わりに休みって言ってたよ？」

「あたしたちは芸能活動優先させてくれてるから日曜日は授業受けなくて済むから良かったじゃん！」

「でも鬼の牧野のレッスンだよ？　素直に喜んでもいられないけどね……」

アイドルであり極北女子中学校の生徒である二人は、廊下を歩きながら愚痴りあっていた。

前から一年生二年生の統括ボスである宮垣咲良が歩いてくるのが見えた。

「また二年二組の面倒臭いのが前から来たよ？」

大野真子が細い目を更に細めて呟く。

「ほんとだ……また勧誘してくるんじゃね？　面倒くさい……」

「おぃ！　大野と小野！！」

「あ？　何偉そうに叫んでるんだ咲良？」

無視するつもりだったが、一瞬イラついてつい言い返してしまう大野真子。

「お前もしつこいなぁ。あたしたちは群れるのは苦手なんだよ……咲良ほど強かったら三年生の総長、指原理子なんてタイマンでヤれるだろうが？」

小野メグも大きな目を見開いて、呆れ気味にぼやく。

「負けることはなくても勝てねーんだよ！　いつもタイマンになる度あたいも指原も痛み分け……動けなくなるんだよお互いに……」

「それはそれでいーじゃん？　仲良く二人で倒れてたらお互いのグループの仲間たちが起こしてくれて介抱してくれるだろーが？」

数秒下を向き、考え込んだ挙げ句、土下座をする宮垣咲良。

「この通りだ！　お前たちが仲間になって……あたいの替わりに総長になってくれたら指原は間違いなく倒せる！　あたいの大切なダ

チたちが大勝利を納めて気分よく毎日を過ごせるんだよ……」

「おいおい……土下座なんかやめてくれって……あたしたちはほんと興味ないしアイドル活動で疲れてるんだよ……なぁメグ？」

「そうそう。この前アイドル仲間の高校生三人ボコったら菅野さんに怒られて土下座までさせられる羽目になっちゃうし……アイドルも大変なんだよ？　わかってくれ」

土下座する宮垣咲良を振り向くこともなく行き過ぎて行く大野真子と小野メグ。

「おいっ！　宮垣さんがこれだけ頼んでるのにいい度胸してるじゃねえか！？　死ねやっ！！」

総長に恥をかかせた二人……取り敢えずどちらでもよかったのだろうが、大野真子に殴りかかる渋谷凪子。

サッとかわされてみぞおちに強烈な膝が入る。

「がはっ！？　ぐえええっ！！」

たまらずゲロを吐きながら崩れ込む宮垣咲良の右腕の渋谷凪子。

「そんな大振りじゃ当たるものも当たんないよ？　その辺のヤツと一緒にしないでくれるかな？」

「ボスを思うその気持ちは大切だね。カッコいいよあんた……」

大野真子に一発で仕留められた渋谷凪子に振り向いて、敬意を払う言葉を投げ掛ける小野メグ。

自分のためにかかっていき、ゲロまで吐かされている渋谷凪子を何も言わず抱き締めている宮垣咲良。

「真子……なんかあたしはアイツら憎めないんだけど？　助けてやる？」

「子供の喧嘩にアイドルのあたしたちが首を突っ込む必要ないんじゃない？　飽本さんに怒られるよ？　菅野さんにも……」

「そうだね……それどころじゃないもんね……牧野杏奈のレッスンはハンパねぇから……」

日曜日のレッスンの日がやってきた――――

「ちゃんとリズムに合わせて！　ホラ！　そこ何やってんの！？」

小野メグがダンスに付いて行けず、ワンテンポ遅れている所を的確に見抜くダンス振付講師の牧野杏奈。

「はい！　止めて！　みんな座って。小野さん、あなただけでもう一度最初から踊ってみてくれる？　ハイ！　音楽スタート」

流される新曲のリズムに合わせて覚えたての振付を必死で踊る小野メグだったが、他の五人よりどうしても少し遅れるタイミングがあった。

曲はサビの部分に突入する。

「そこっ！　何でそこで右手を上げるのがワンテンポ遅れるかなぁ？　タンタンタン！　で、右足引いて右手を上げる！　そこ大切な部分だから。絶対遅れないようにしなさい！　あなただけあからさまに遅れてるからとっても目立ってるの。分かる？」

「はい！　もう一度最初からやってみます！　すいません」

「ダメ！　まだまだ遅れてる！！　もう一度」

「はいっ！　すいませんっ！！」

莉央たち五人も牧野杏奈による小野メグの徹底的なシゴキを見ているとと少し可哀想になってきていた。

五回ぐらい一人で踊らされて、ようやくタイミングが合って来たところで休憩となった。

「やれば出来るじゃない小野さん。そのリズムとタイミングを忘れないように！　頭で考えるんじゃなくて体に刻むのよ？　そうすれば自然に体が動いてくれるから。分かったわね？」

「はい。ありがとうございました！」

レッスンルームから牧野杏奈が出ていった瞬間、一気に全身の力が抜ける六人だった。

「悔しくて涙が出てきちゃった……」

「大丈夫？　でももう完璧だったよ！　午後のレッスンは一人だけ踊らされる事もないよきっと！」

半泣きになる小野メグを励ます親友の大野真子だった。

休憩室に移動した六人は、配られた弁当を食べながら元気を取り戻してゆく。

「あれ？　小野さん、エビフライだけ残してるけど嫌いなんですか？」

「あ、あたしはエビのアレルギーなんですよ……」

また始まった。
結城明日香が敏感に気付いた。
食い意地の張った富田美香がメンバーのおかずをロックオンした瞬間だった。

「良かったら食べます？」

「えっ！？　いいんですかぁ？　では遠慮なく♪」

言葉とは裏腹に音速を凌ぐスピードで動く割り箸は、目にも見えない速さでエビフライを補足した。

次の瞬間には美香の口の中へ……。

「毎回毎回よくそれだけバクバクと食べられるもんだね？　人のおかずを……」

「ムシャムシャ……ゴクン……ひ、人聞きの悪い言い方しないでくれるかな？　明日香ちゃん。残したら勿体ないから残飯処理係が一人は必要でしょ？　ねぇ？　莉央ちゃん」

「……うん。世の中には食べたくても食べられない人たちがいるから……美香ちゃんは偉いと思うよ」

「やれやれ……莉央ちゃんも美香ちゃんには甘いんだから……」

その頃極北女子中学校では、土下座をしてまで真子とメグを勧誘していた噂を聞き付けた敵対グループの卑弥呼隊総長である指原理子が、十人の三年生たちと共に紅姫鬼神総長の宮垣咲良を取り囲んでいた。

「三年生しか使用しない南棟のトイレに一人で来るなんて油断したわね？　今日の失態は一生後悔ものだよ？咲良さん♡」

「腹壊して仕方なく使っただけだ！　よくそのタイミングで見付けられたな！？　ちくしょう……あたいを倒すために十人がかりか？　堕ちる所まで堕ちたのか？　指原」

「もうね……段々面倒くさくなってきたんだよ。お前とのタイマンも……いつもいつも五分五分で痛み分けだし……ここらでボコボコになってもらって二度と私に逆らう気もなくなるほどに痛め付けてやるよ本日は。あはは♪　……お前たち、やっておしまい！」

「ドロンジョかお前は！？」

宮垣咲良のツッコミにも笑みさえも見せず部下の九人が取り囲んで迫ってくる。

意味が通じてなかったみたいだ。

仕方なく一人、二人に殴り掛かる咲良。

「やってやるよっ！！　オラオラオラオラーッ！！」

『バキバキ！　ドカッ！！　ドカッ！！』

「ひぎゃっ！！」

「がはっ！！」

あっとゆうまに二人を殴る蹴るで吹っ飛ばすが、背中側からの蹴りをマトモに食らい、倒れ込んでしまった。

畳み掛けるように殴る蹴るの猛攻を食らう宮垣咲良……。

中には金属バットで腕や足を本気で殴ってくる者もいた。

鼻の骨も折れて顔面も血まみれの姿でひたすら痛みに堪える咲良の姿があった。

腕も足も骨が折れて立ち上がる事すら出来ない悲惨な状態だった。

「あらあら……さすがの一年生二年生を束ねる総長も惨めな姿になったもんだね？　ハハハハハ！」

「だ、黙れ卑怯者……お前みたいなクズは久しぶりに見たよ……」

「ほう。この状況でワビを入れずに挑発するか？　後悔するよあんた……咲良を全裸にしちまいな！」

「やっ！？　止めろっ！！　何しやがるっ！？」

マトモに五体の動かない咲良は九人の三年生たちによってあっとゆう間に素っ裸にされた。

悔しさと腹立たしさで思わず涙が溢れる宮垣咲良。

「くそう……ぐす……ぐす」

「あれれぇ！？　泣いちゃってるぅ？　まさかの総長の涙？　ハハハハハ！　情けないねぇ？　一年生二年生の仲間たちが見たら哀れ過ぎて泣かれちゃうよ？　泣きたいのはこんな哀れな総長を持った部下たちのほうだよなっ！　なぁみんな？」

「アハハハ！！」

「ほんと哀れな女〜♪」

「もう自殺しろや！　アハハハ♪」

「汚い乳やケツ晒しちゃってぇ〜？　お嫁に行けないねぇ？　ははは♪」

指原の命令で五人が両手両足、頭を押さえつけた。

「さぁ咲良ちゃん。今から私が何をするか分かる？」

「うう……な、何をしやがる気だ！？　いたた……」

骨折しているので押さえつけられなくても動けなかったが、宮垣咲良の強さを知っている三年生たちは念には念を入れていた。

「お前の腐れマンコの膜をバリッと破いてやるのさ♪　私みたいな美人にバージン奪われて幸せだろ？　あはは♡」

「や、やめろ……」

「まさかの経験者とかじゃあないよな？　私の勘が正しけりゃお前は間違いなく……処女だ！」

そう言いながら指原理子の右手の中指は、宮垣咲良の膣口にそっと触れた。

「ここか？　咲良のオ・マ・ン・コ♡」

「うわっ!？　や、止めろって！！　同性のお前なんかに……止めてくれえええっ！！」

「止めて下さい指原様、だろ？　ほら、言ってみろ？」

「うぐ……止めて下さ……さ、指原………死ねやっ！！　指原ああっ！！」

バージンを奪われかねない恐怖心から危うく詫びを入れる所だったが、間一髪で我に返った咲良は思いっきり指原を罵倒する。

『ズボォッ！！……バリッ！！』

「痛ああっ！！」

指原の中指は一気に根元まで差し込まれ、宮垣咲良の処女膜は瞬時に破かれた。

１４年間膣内に張り続けた処女膜は、無惨にも敵対する同性に奪われる事となった。

『グチュグチュ……ヌププ……くちゅちゅちゅちゅ！！』

「あはっ！？　やめて……痛い……わああっ！！」

血が溢れだす膣内を人差し指まで突き入れて、二本の指で執拗に掻き回す指原理子。

「ほらほら……汚い処女膜破れて汚い血が溢れだしてるよぉ？　あはは！　変な粘液まで出てきてるぞ？　まさか感じちゃってるのかなぁ？　咲良ちゃん？　アハハハ♪」

更に三年生の指原の右腕である田島美緒がボールペンを肛門に突き刺し始めた。

『ずぷっ……ズズズ』

「ひああっ！？　やめてっ！！」

「やめて……じゃねーよ！　急に可愛い声出してもダメだよ総長さん♡　ほらほら……ボールペンってお尻の穴にどこまで入るのかなぁ？　教えてベッピンさんの咲良ちゃん♡」

他の三年生たちも各々乳房を揉んだり乳首をつねったり、クリトリスを猛烈な勢いで擦ったりした。

性的いじめは延々と一時間続いた。

指原理子は、意地でも宮垣咲良をイカせなければ気が済まないようだったので、周りもとにかく乳首とクリトリスと肛門を執拗に責め続けた。

その上で激しく上下左右に膣内を掻き回す指原の中指と人差し指……。

全身の骨を折られた咲良は戦闘意欲が失われていたうえに、痛みに堪えるため気持ちいいどころではない。

痛み止めでも打たれているのなら快感も得られるのだろうが……。

恥ずかしさと悔しさで声こそ出さなかったが、大きく体をビクンビクンと仰け反らせ、無駄な抵抗を続けるしかなかった。

『クチュクチュ……ぬぷぬぷ……ぽんっ！』

指原は、散々膣内を掻き回した指をようやく引き抜いた。

「やっぱ嫌いな相手にマンコ掻き回されてもイカねぇか……ツンとしたクッセエ愛液少しは出てるんだけどなぁ。ただの生理的な反応かね？　しかし同性の私の指で処女膜破られて……哀れだなぁっ！！　アハハハ！！」

肛門からボールペンを引き抜く田島美緒。

「あたしのボールペンを糞まみれにしちゃって……あーあ。汚い女だなぁ。ほら、舐めて綺麗にしろや！　自分の糞を！」

「んぐっ……んんっ！！」

無理矢理に口へウンコまみれのボールペンを捩じ込まれて、必死で吐き出そうとする咲良。

「今度楯突いたらお前の部下たちも全員処女膜奪っていってやるからな！　部下が可愛かったら逆らわず三年生に服従するよう早めに伝えておけよ？　分かったか？　あぁ？」

そう言いながら仰向けのまま立ち上がれない宮垣咲良の陰部を足の裏でグリグリと踏みつける。

愛液で糸を引く足の裏を見ながら九人の三年生たちは爆笑していた。

『パンパンパンパンパンッ！！』

更に田島美緒が馬乗りになり、涙を流している咲良の頬を数回平手打ちした。

「あの意気がっていた宮垣がこの醜態か？　ほんと笑えるよ！　ハハハハハ♪　ボールペンはお前にやるから持って帰れよ？　ほら」

『ずぼっ！……ずぷぷぷぷ』

「んっ……！？」

そう言いながら再び涙を流す咲良の肛門に半分ほど差し込んだ。

皆で抱えあげて無理矢理椅子に座らせて縛り付ける。

体中に皆でマジックで落書きをした。

（アホ）

（かす）

（腐れマンコ）

（私、敵にイカされて潮吹きました）

（お願い犯して）

（⬇　ここにブットイの挿入して〜）

放課後、宮垣咲良の姿が見えない一年生二年生の仲間たちが捜索してようやく南棟のトイレで椅子に縛り付けられている咲良を見付けた。

急いで縄を解き、保健室からアルコールを持ってきて身体中の落書きを消した。服を着せてあげて救急車を呼ぶ仲間たち。

――そして数時間が過ぎた。

菅野莉央たちのレッスンもついに終了して、最後の挨拶を聞いていた。

「本日の振付レッスンはこれで終わります。私が一人一人に指摘した部分は次回のレッスンまでに必ず克服しておくこと！　新曲の発表に間に合わせないと劇場公演やドームでのコンサートも行わせる訳にはいきません！　心して練習に励むように！　分かりましたね？　ではお疲れ様でした」

「ありがとうございました！」

莉央たち六人が深々と頭を下げる。

クタクタになってロッカールームへ戻り、汗だくの服を私服に着替えてゆく。

大野真子と小野メグには、聞き覚えのある声が玄関口から聞こえてきた。

慌てて外に出てみると、宮垣咲良の右腕である渋谷凪子だった。警備員と取っ組み合いになって叫んでいる。

「離せっ！　今すぐ話を伝えたい奴らがいるんだよ！　離しやがれって！！」

「落ち着きなさい！　どこの中学生だね君は？　この辺りじゃ見たこともない制服だが？　とにかく関係者以外は入れないんだ！　諦めて帰りなさい！」

慌てて駆け寄る莉央たち六人。

「どうしたんだよ？　お前は確か宮垣咲良の右腕の……名前は知らんけど……北部地方から東部地方のここまでは４００キロはあるのによく来れたな？　ここでレッスンしてるのは……先生に聞いたんだな？」

「そんなことはどうでもいい！　私は渋谷凪子ってゆうんだ！　総長の宮垣さんが、リンチにあってしまって……全身骨折して病院送りにされちまった！」

「リンチ？　指原理子っていえば三年生を統括している総長だよな？　アイツはそんな卑怯なことしなかったはずだけど？」

「咲良の話では今まで何度もタイマン勝負で、リンチなんて聞いたこともないけどあたしも……」

真子もメグも首を傾げて不思議がる。

今までの極北女子中学校でのいきさつや成り行きを菅野莉央たちに説明する大野真子と小野メグ。

「とにかくその宮垣咲良とやらが入院している病院へ行って事の真相を確かめるのが先決だな」

高校生アイドルの島崎真理子が呟いた。

「それもそうね……飽本さんに話してタクシー手配してもらうから急いで新幹線の駅まで行って急行しましょう」

――――北部総合病院。

「眠ってるな……酷い怪我だ……ギブスだらけじゃないか……ちっ」

大野真子が言葉を詰まらせた。

「真子……どうする？」

「んん……いたたた……」

ふと目覚めた宮垣咲良は、大勢のお見舞者に少しびっくりしているようだった。

「大野……小野…………お前らにこんな姿見せたくなかったよ……凪子の仕業だな？」

「ご、ごめん……だってもうコイツらしか頼れるヤツが浮かばなかったから……」

宮垣咲良から一通りの顛末を聞き終える六人。

「藤堂長官に連絡だね？……莉央ちゃん」

「あたしもそう思う。お仕置きの許可をもらって！」

明日香と美香はかなりイライラしている。

「でもなぁ……女子中学生とはいえ三年生２００人と戦うには圧倒的に不利だぜ？　一年生二年生の２００人は頭をヤられたことで士気はだだ下がりだろうし……役に立たねえよもう……」

島崎真理子は尤もなことを普通に言った。

「簡単だよ。頭だけボコボコにしちゃったらその一年生二年生たちと同じように三年生たちも士気は下がるから大人しくなる」

「その頭の指原は護衛がかなり付いてるから、正面から行けばかなり大騒ぎになっちゃう。辿り着く前に先生たちに捕まっちゃって何も出来ないよ。居城にしている南棟二階の部室の窓から侵入出来たら……中には田島美緒と指原理子しかいないと思うから話は早いんだけど……」

「いきなり窓から入ってきたらビックリするだろーねアイツら」

真子がそのシーンを想像してはにかむ。

「でももういいからホントに……わざわざお見舞い来てくれてありがとね」

「二階の窓から侵入か……これはお兄ちゃん役に立ちそうね！」

菅野莉央はそう言うと京介に電話をかける。

「おうっ！　莉央。なにか用か？」

「緊急だけど北部地方の総合病院まで今から来れるかな？」

「ん？　北部総合病院って……ぎゃはっ!?　バカを言うな!!　そんなとこまで車で行ったら高速使っても七時間は掛かるぞ？　着くのは明日の午前一時だっ。ゆっくり寝て明日の昼頃にならドライブがてら行ってやってもいいけどな？」

「なら取り敢えず昼頃に北部地方の高速のパーキングまでは来ていてね。また連絡するから」

「おう！　じゃあな」

『そっか……確かにそうだな。藤堂長官には申し訳ないけど京介がくるまではタクシー使わせてもらうか』

莉央は京介が来てくれたらかなり有利な展開になりそうな気がしていた。

「もういいから……大野、小野。ここまで総長のあたいがヤられたら、もう皆はビビっちゃってると思うし……三年生の言うことを聞いて大人しくしてたらアイツらだってあたいほど痛め付けたりはしてこないと思う」

そう言いながらも涙がどんどん溢れ出している。
よほど悔しいのだろう。
大野真子と小野メグはすぐに後ろを向き、見て見ない振りをしながら病室を出て行く。

「早く治せよ。今はそれが一番大事だよ」
「お前も渋谷凪子とやらも……カッコいいよな……じゃあな」

静かにドアが閉まった。

「ちょっと！　莉央ちゃん。どうするの？　もう時間遅いし今更極北女子中学校とかに行っても幽霊くらいしかいないと思うよ？」
「美香ちゃんの言う通りね。幽霊は除いて……。明日は休みを取っ

てどこかのホテルにでも泊まってから作戦練りましょう」

「ん？　あんたたち……よく見たら小学生みたいだけど？　大野たちの知り合い？　もう真っ暗だし早くおうちに帰りなさいね！　お嬢ちゃんたち。今日はありがと。高校生っぽい貴女が無事に送り届けてあげなくちゃだめだよ？」

莉央と美香と明日香と真理子を一通り見回して心配してくれる宮垣咲良。

「私が高校生でこの三人は小学生。正解っ！　…………分かってるよ。ありがとう。じゃあいこうか？　菅野」

とにかく涙が止まらない宮垣咲良を見ているのが辛いのは島崎真理子も同じだった。

莉央たちに早く立ち去るよう促してきた。

「あたしも……宮垣さん、カッコいいと思います」

「早く元気になってくださいね」

「あの二人のことは安心してね宮垣さん」

莉央たち三人も軽く挨拶した。

「安心？　なんか安心は出来ないな……あの目はあたいの仕返ししようと思ってくれてる気がする……あなたたち、出来ればあの子たちを止めてあげてね。もういいから本当に……ん？　あなたたちってどっかで見たことある気がするけど？　小学生だよね？　あれれ？　思い出せない……んん？」

「お大事に。さようなら」

莉央の言葉を最後に四人も病室を出ていく。

ロビーで立っている真子とメグと共に、六人のアイドルたちは近くのホテルに泊まることになった。

北の女番長　（前編）（後書き）

あまりに卑怯な行動を取った指原理子を制裁することを決意した六人。

京介の真っ赤なマーチが仕事では初出動となる。

果たして役に立つのか？

菅野京介……。

北の女番長（後編）（前書き）

仕方なくラブホテルに宿泊することになった莉央たち六人の《真・絆ＧＩＲＬＳ》のフルメンバー。

色々と雑談しながら一緒にいられる時間を楽しみ、就寝のときがきた。

そのホテルには、ダブルベッドとソファーが二つあるだけで、あとの四人は床やソファーに寝るようになる。
真子とメグは二つあるソファーに。
莉央と年長の真理子は床に寝るようになった。
ダブルベッドに横たわる美香と明日香。

「これってラブホテルだよね？　普通に旅館とかなかったのかな？」

「私もそう思ったんだけど……ラブホテルしかなかったみたい……しかも六人を二人の部屋に放り込むなんて……藤堂長官も以外とケチだよね？　今回は国の指令じゃないから仕方ないか……」

「おおっ！？　超フカフカして気持ちいいベッドだねこれ♪」

はしゃぎながらも急に真顔になって床に寝ている莉央の方を見詰める美香。

「あのさ……………美香ちゃん！　ほんとは莉央ちゃんの隣で寝たかったんでしょ？　ごめんね。莉央ちゃんの命令だから。私に気を遣ってくれたのねきっと……」

「え？　いやいや……明日香ちゃんでもいいよ！　てへへ」

「でもいいよ？……でも……ってどうゆう意味よ？　こらっ」

　この前の仕返しとばかりにクスグリ攻撃をする明日香。

「きゃはっ！？　あはは！！　やめ、やめてっ！！　げへははは
っ！！」

「げへははは……って、変な笑いかたするなぁ美香ちゃん♪　笑
い殺してやるぅ〜♪」

「げへへっ！　ど、どっかで……聞いた……げへへ！　セリフだね
それ……げへははは！！　やめてっ！！　死ぬううっ！！」

　夜中に騒ぎまくる美香と明日香。

「うるさいっ！！　寝れねえじゃないかっ！！」

「…………怖いね」

「…………そだね」

　島崎真理子がたまりかねて恫喝すると、一瞬で静まり返る寿司詰
め状態のラブホテルであった。

「すぴー……すぴー」

そんな騒ぎもお構いなしに横になった瞬間から爆睡している莉央であった……。

明くる日――

一番乗りに寝た莉央が皆を起こして回る。

真っ先に美香と明日香のダブルベッドへ向かう。

口を開けてピーピー言いながら寝ている美香へそっとキスをする莉央。

「あんっ。すぴー……すぴー……莉央ちゃん…………すぴー……すぴー……」

美香の寝言にビクッとする莉央だった。

『あえぎ声出してあたしの名前？　どんな夢見てんだろ……。誠也くんが言ってたこと……本当だったんだ。何か嬉しいけど今日はそれどころじゃないな……』

我に返って美香を起こす莉央。

「う〜んん……あら？　おはよう莉央ちゃん！」

元気よく目覚めた美香を抱き締めたい気持ちで見詰めた後、全員を起こしてゆく。

「近くのパーキングで待機している京介に電話もしたし……昼前には迎えに来てくれるよ。さぁ……鬼退治に出掛けようか！」

昼前に京介から到着を告げる電話が来てホテルを出る六人。

「おう！　待たせたな」

「迷わずに無事に来れたんだね？　やるじゃんお兄ちゃん」

「お前が教えてくれたカーナビのお陰だ。ホントに便利な世の中になったもんだ！　ガハハ……って、お前たち頭数多すぎね？」

「人をキングギドラみたいに言わないでくれる？　頭は一つよ」

「絶対わざとボケてるだろ莉央？……俺を入れて七人か……どうみてもマーチは五人が限度だぞ？」

「え〜と……。助手席に体の大きい島崎さん、後部座席に中学生の

二人と明日香ちゃん。あたしと美香ちゃんはその三人の足元に体育座りでしゃがみ込む。どうにかなるよこれで」

「マジで！？　あたしと莉央ちゃんがスカクジかぁ〜。詰め込んだら四人座れそうじゃない？」

「キツいでしょ皆が……ホテルでフカフカベッドで寝れたんだから我慢してよ。ね？」

「はーい！　莉央さまの仰せのままに〜♡」

カーナビをセットして指原理子の仕切る極北女子中学校を目指して出発する六人のアイドルを積んだ真っ赤なマーチであった。

極北女子中学校――――――

「もう一年生も二年生もあたしたちに逆らうヤツはいないみたいね指原さん」

「頭をズタボロにしてやったからね！　私たちの天下だわついに♪ようやくこの時が訪れたかぁ〜♪」

次々と廊下ですれ違う一年生と二年生が頭を下げてゆく姿に優越感に浸る指原理子と田島美緒だった。

気持ちよく昼休みの食事を食堂で終えて、二階の部室に戻ってくる指原と田島。
昼からの授業はボイコットして、居城である部室でタバコを吸いながら過ごす二人だった。
廊下には見張り役、兼ボディーガードで、喧嘩の強い精鋭たちを8人ほど立たせていた。
「プハーッ。やっぱ食後のタバコは最高にうめえな田島」
「そうだね！　至福の時だ〜。プハーッ」
缶コーヒーを片手にセブンスターをふかす。
ついに極北女子中学校の裏門に辿り着く七人。
「着いたぞ！　あっちが正門だからこちらが裏門だな。簡単に乗り越えられそうな低い門だ」
京介が真っ赤なマーチから降り立ちながら校庭を見渡す。
「ここから校内へ侵入して一番南に位置する南棟の二階の部室。そこの窓はタバコを吸ってるからいつも全開に開けてるの。そこから

侵入出来たら大騒ぎにならないうちにボスを直にやっつけられると思う」

「おっ！　さすがメグ！　よく調べてるねぇ？」

　ここはこの学校の生徒である真子とメグの話を聞いて、その通りに行動しようとする莉央たちだった。

　生徒にも先生にも見付からないように静かに植え込みの間をすり抜けて南棟へ近づいてゆく七人。

「着いたぞ。あの開いてる窓がそのボスのいる部室だな？」

「そうです。でも高さ１７０ｃｍはあるブロック塀の上に登らないと、窓の下にある出っ張り部分に乗れないから……どうやって登るかだけど……」

　梯子がわりになるようなモノを探す真子だったが、なかなか都合よくそんなモノは見付からない。

「あっ！　お兄ちゃん！　四つん這いになって背中貸してよ？　そしたらどうにかブロック塀に登れそうだよ！」

「お、おう！　それもそうだな！　よしみんな！　俺の背中を踏み台にして先へ進め！」

「カッコいい！　お兄ちゃん！　じゃあ島崎さんから行ってくれます？　上からみんなの手を引っ張ってくれたら更に助かるんだけど……」

「分かったよ。じゃあ失礼します」

「おうっ！」

京介の背中に登り、ブロック塀へ手をかける島崎真理子。

「痛っ？　あのさ……靴は脱いでくれないのかな？」

「ブロックに這い上がる時に足の裏怪我するじゃん？　それくらい我慢して！」

「お、おう！　一番重い女子高生をクリアーだ。後は痛くもないだろう……」

『重いだって？　このオッサン……ちっ』

頭上から静かに睨み付ける島崎真理子の視線には全く気付かない京介だった。

小学生より中学生より重たいのは当たり前なので、悪気はなかったのだろうが、迂闊に女性に対して重たいとゆうワードは使わない方がいいみたいである。

中学生のメグと真子が登り、小学生トリオが続く。

「ごめんなさいねっ！　よっと！」

「おっ！　軽いな美香ちゃんは」

チラッと上を覗く。

『ゲヘヘッ♡　予想通り純白パンツだなこの子は♪』

「失礼しますお兄さん」

「どうぞぉ～」

『明日香ちゃんも白か？』

チラッと上を向いて明日香のパンツを覗きみる京介。

『うはっ♡　ピンク色の可愛いパンツ履いてるやんけ～っ♡　先の中、高生も覗いときゃ良かったぜ』

嬉しくて笑いが止まらない京介だった。
最後に莉央が背中に乗る。

『…………こいつはどうでもいい。早く登りやがれ』

「よいしょっと！」

『ガンッ！！』

「いでえええっ！？」

背中から上がれるものを、ピンポイントで後頭部を思い切り踏みつけてジャンプする莉央。

「何でわざわざ後頭部を踏み台にするんだ！？　痛いじゃねえか莉央っ！！　今首の骨、ゴッキンって鳴ったぞっ！？」

「少しでも高い位置にあったから……ごめんね」

「わざとに違いない……」

「ふふ……自業自得だよ……」

ボソッと呟く莉央の声を微かに聞き取る京介。
敏感に表情も読み取る。

『うっ！？……今ニヤけた？　バレてたのか？……まさか……』

幸い気付いているのは莉央だけだと悟った京介は、気を取り直して皆に手を振る。
「俺は裏門を見張ってるからな！　頑張ってやっつけてこいよ～」
窓のすぐ下にコンクリートの足場があるので、そこから簡単に侵入出来た。
真理子が一番乗りで突入し、中学生コンビと小学生トリオが続いた。
「なんだてめえらは！？　お、お前たちは確か二年生の……」
「そうでーす！　あたしが宮垣咲良のお礼を言いにやってきました大野真子でーす！」
「同じく小野メグでーす」
「同じく部外者アイドルの菅野莉央です」
「同じく高校生アイドルの島崎真理子参上っ！」
「同じく……もうきりがないから私で止めとこう」
「えっ！？　あたしも名乗りたかったのに！！　明日香ちゃんってば余計なことを……」

拗ねる美香に構わず話を続ける明日香。

「指原さん、あなたには選択権があります。無条件降伏で莉央ちゃんに子宮を抉り取られ、一生子供を生めなくされるか……大野真子、小野メグ、もしくは菅野莉央とタイマンで勝負して勝ったら無罪放免！だけどタイマンした場合……もし負けちゃったら……」

「ああ？　なんだてめーら！？　いきなり窓から現れて何寝言抜かしてやがる？　殺すぞ？」

威嚇してくる指原理子に続いて右腕の田島美緒も続ける。

「この方を極北女子中学校の総長、指原理子さんだと分かっっててモノ言ってるのか？　後悔するぞ！？」

「明日香ちゃんの話を最後まで聞きなさいって！　後悔しないためにもね♪」

一瞬睨み付けて黙って耳を傾ける指原と田島だった。

明日香は続ける。

「もしタイマンで勝負して負けちゃったら……右腕の田島美緒も酷い目に遭います。アソコもアナルもブットい張り形で犯されちゃい

まーす♪」

「あん？　張り形って何だよ？」

「ペニスバンドに装着するチンポの模型みたいなモノのことだよ。ホラ、これ。処女膜裂けちゃうどころかマンコ自体裂けちゃうかもよ？　てへ♡」

直径５ｃｍ、長さ２０ｃｍはある張り形をブルンブルン振り回しながら見せつける美香。

あんなのをもし本当に性器や肛門に突っ込まれたら……想像しながら恐怖で顔が引き吊る田島美緒……。

ワンテンポもツーテンポも遅れて島崎真理子が文句を言う。

「ちょっと待ってくれよみんな！　一つ聞いていいか？　私がタイマンの選択肢に入ってないみたいだけど？」

「ごめんなさい島崎さん。今回はあの一年生と二年生を統括する番長である宮垣咲良さんでさえ互角な相手……大野さんか小野さんかあたしに任せて」

「……ちっ。何かムカつくけど負ける訳にはいかないもんな。分かったよ菅野。絶対勝てよ？」

「どうします？　あなた的に勝てる確率で言ったら、あたしが金保留で大野さんと小野さんは赤保留ってところかな？　パチンコで言えば……」

「何だそれ？　パチンコなんてしねーから意味わかんねーんだよクソガキがっ！！　とにかく生意気なこと抜かすお前からボコボコにしてやんよ！　小学生だからって手加減しねーからなっ！」

「でも違うんだよな〜。あたしは保留変化無しで大野さんと小野さんは青保留かな？　結局貴女が勝てない確率はレインボー保留ってことだよ……」

「何がレインボーだよ！　意味わかんねーっつってんだろうがクソガキがあっ！！　オラアッ！！」

『バキバキ！　ドカッ！！　グシャッ！！』

「ぷぎいぃぃ……ひくっ……ひくっ……」

凍りつく周りの全員……。

真子とメグは当然ながら最も凍りついたのは田島美緒だった……。

「嘘だろっ！？　指原さんっ！！　指原さんっ！？」

「きゅうう……」

意識を失って返事が出来ない指原理子。

菅野莉央の本気のストレートとミドルキックは指原を即死（気絶）

させるには十分過ぎるオーバーキルだった。

「スッゴい……莉央ちゃんの本気の攻撃は初めて見たかも……」

「えっ!？　今のパンチとキックは本気だったの!？」

好きな割にはまだまだ莉央を見る目がない富田美香だった……。

あまりの強さに田島美緒は戦意喪失……。

指原と自分をとにかく許してほしいと土下座を始める始末。

「約束は守ってもらうから。脱ごうか？」

しゃがみこんで莉央が言う。

頭を擦り付けて泣きながら詫びを入れる田島美緒。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいっ!!　お願いしますっ!!　指原さんも私も二度と大野さんや宮垣さんに逆らいませんから許して下さいっ!!」

「友達思いだね田島さんは。特別に性器だけは許してあげる。バージンはこれから出来るかも知れない彼氏のために大切にとっておきなさいね？　スカートとパンツを脱いでうつ伏せになってお尻を突き上げてくれる？」

「な、何をするんですか？……脱ぎますから許して……」

ビビりながらもスカートとパンツを脱ぐ田島美緒。

「少しだけ痛みが和らぐ麻酔注射も打ってあげるから感謝してね？」

突き上げられた臀部に特殊な麻酔注射を打つ莉央。

『プチュウウウ……』

「ひっ！？　痛い……」

「肛門……少し裂けちゃうと思うけど我慢して。一週間はうんち我慢したほうが身のためかもね……美香ちゃん……ヤったげて」

「はーい♪　田島美緒さん。お邪魔しまーす♡」

『ズブッ……ズブブブ……メリメリ』

生まれて初めての肛門への外部からの侵入物に悲鳴をあげる肛門括約筋。

メリメリと音を立てながらパックリと拡げられてゆく。

「いぎぎぎぎ！？　痛い痛い痛い痛いいいいいっ！！」

「半分入ったところで凄い流血だねぇ？　でもね……根元まで全部ブチ込んじゃうんだ……ほらっ♡」

『ボコオッ！！……メリメリバリバリ……ブチチチ……ぶしゅううぅっ！！』

アナルは裂け、Ｓ状結腸を突き破り、張り形と肛門括約筋の隙間からは夥しく血が噴き出す。

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

鬼のような激しい腰使いで張り形を引き抜き……根元まで一気にブチ込み……また引き抜き……ブチ込む……この繰り返しに部室の床はみるみる田島美緒の肛門からの鮮血で真っ赤に染まっていった。

美香のスカートも返り血を浴びて血まみれになっていた。

「うわあぁーんっ！！　痛いよおおおっ！！　うわあぁーんっ！！」

泣きわめく女子中学三年生。

見慣れてない真子とメグと真理子の三人は、顔を紅潮させながら両手で口を押さえてドキドキしながら眺めていた。

張り形を引き抜いて口に持っていき、無理矢理捩じ込む美香。

「ほら、あたしの大切なチンポの模型……汚いあんたの血と便で汚れちゃった。舐めて綺麗にしなさい」

「んごごっ！？　んぐんぐ……ほごおおっ！！　んごんご」

大きすぎて舐めるとゆうよりは口内を掻き回されているといった表現がよく似合う。

「指原さんがかかってきて負けたから仕方なかったの。恨むなら指原さんを恨んでね？　仲間想いの田島さん」

「指原さんは尊敬してるから恨めない……痛いよぉ。えーん、えーん……ぐすぐす」

「はい、取り敢えず黄色いシミの付いてるパンツ返してあげるから履いてから指原さんの解剖を見てなさいね？　強烈な血止めの薬塗ってあげるけど、帰りに病院行って大腸縫ってもらってくるのよ？　分かった？　Ｓ状結腸裂けてるからほっといたら死んじゃうからね？」

「ぐす……ぐすぐす……はい。わかりました。指原さんに酷いことしないであげて……」

莉央から返してもらったパンツを履きながら微かな声で訴えかける。

「それはダメ。あなたに生の子宮を見せてあげるから」
真子とメグに素っ裸にされた指原理子を仰向けに机の上に縛り付ける明日香と美香。
分娩室での手術のように両足は大きく開いたまま縛られ、固定された。
ショック死しない程度の痛み止めと、止血の注射を打ってイソジンを振り掛ける明日香。
「準備ＯＫだよ莉央ちゃん」
「ありがとう」
鈍く光るメスを持った莉央が近付く。
ヘソの下部から陰毛まで縦にメスを入れる。
『ズブ……ズズズズ……ズズ』
「ひっ！？　やめてあげてえぇっ！！」
流れ出る血を見ただけで狂ったように泣き叫びながら両手で後頭部を押さえ込み、しゃがみ込んでしまう田島美緒。
普通の反応だった。

慣れている美香と明日香。
恐怖と戦いながらも必死で慣れようとする真子とメグと真理子。
一分も過ぎた頃には莉央の左手には血まみれの子宮が握られていた。
大野真子は堪らず嘔吐しながら苦しんでいた。
《真・絆ＧＩＲＬＳ》のメンバーでは、一番血に弱い真子だった。
「ほい。摘出完了！　うずくまって泣いている田島さんによーく見せてあげといてね美香ちゃん」
「はーい♡」
莉央から受け取った子宮を田島美緒の前まで運んでゆく美香。
「顔をあげろ！」
『ビチャッ！！』
内臓が床に落ちた時のような何か柔らかいものが潰れるような音に、かなり嫌な予感がしたのか、一向に顔を上げて見てくれる気配がない田島。
「尊敬する親友の子宮だよ？　見ないとあんたの子宮も抉り出すか

らね？」

「ひっ！　きゃ……きゃああっ！？」

恐る恐る顔を上げて見てみるが、やっぱり恐怖で悲鳴と涙が止まらなくなる。

莉央の右手はメスを置き、指原理子の膣口へ伸びていた。

まずは中指を差し込み、処女膜の有無を確認する。

『くちゅ……くぷっ！』

「あれ？　こいつ……中学生の癖に処女膜なかったね？　経験してたんだ……おませさん♡　なら遠慮なくいくよ？」

『ぱちゅっ！！　ぶちゅちゅちゅちゅちゅちゅううう……』

一気に全ての指、手首まで突っ込み、お腹から突き出してピースサインを皆に見せる。

「出た！　莉央ちゃん必殺のマンコトンネルだー！　あははははは♪」

明日香は拍手しながら爆笑している。

美香もスケベそうな顔でニコニコしながら見ている。

「痛ったあああいっ！？　やだ……お腹に穴が？　何で手が飛び出してるのっ！？　いやああああっ！？」

突然目覚めた指原理子は余りの激痛と子宮を摘出された後のお腹の穴をみながら号泣しだした。

「あんたの親友の右腕さんに免じて特別にアナルは許してやるよ。お腹縫ってあげるからその後で大野さんと小野さんに土下座して謝れ！」

「は、はいっ！！　謝りますからこれ以上酷いことしないで……」

消毒をして縫合してあげたあと、土下座をして謝る指原理子。その傍らで、田島美緒も泣きながら土下座をしている。

「ごめんなさい！　大野さん、小野さん！　咲良さんにも謝っていたとお伝えくださいっ！」

「よくできました。ほら、顔をあげて」

明日香が指原の髪の毛を掴んで引き起こす。明日香と美香が同時に乳首にナイフをあてる。

「アナルは許してあげるけど乳首は二つとも切り取るから……」

「ひいっ！？　お願いします……許して下さい……ぐす……ぐす」

「肛門抉り取られるより数倍マシなんだから文句を言わないのっ！　いくよ？　美香ちゃん！　せめて乳輪だけは残してあげようね？　せーのっ……」

鮮やかな手付きで、明日香と美香はほぼ同時に指原理子の乳首を切り取った。

残された血塗れの乳輪がヒクヒク震える。

「ぎゃあああああっ！！痛いいいいっ！！」

「痛み止め打ってるから我慢できる程度でしょ？　ショック死されたら困るからね。もう赤ちゃんも産めないんだし、乳を飲ます事もないから調度良かったじゃん？　あはは♡」

そう言って笑いながら切り取った乳首を指原本人の鼻の穴に突っ込む明日香。

美香は無事に残してあげた肛門へ、人差し指の先に乳首を乗せたまま根元まで突っ込んだ。

「ほら、無傷の直腸に突っ込んどいてたげる♪　次ウンコするとき一緒に出してあげてね♡」

『ずぷ……ズブブブ！』

「ひあっ！？　やめて……酷い……ぐす……ぐす……」

「あっ!?　指先がウンコに当たったよ!?　汚いなぁ。直腸で汚いウンチが待機してたよ?　舐めて綺麗にしてくれる?」

「んごっ!?　んうう……ペチャペチャ……んんっ」

肛門から引き抜かれたばかりの大便の付いた美香の人差し指を無理矢理舐めて綺麗にさせられる指原理子。

切り取られた乳首部分も、きちんと縫合して消毒して服を返してあげる莉央。

「これからは汚いことをしないで正々堂々とヤンキー続けていくのよ?　わかったかな?」

「はい。ごめんなさい……」

「ごめんなさい……」

土下座して謝る二人を残し、ドアを開けて堂々と出てゆく六人。

「な、なんだてめーらっ!?　ぶっ殺す……」

「止めろっ!　そいつらに手を出すな!」

　掛かっていこうとする手下の三年生を恫喝して、莉央たちから無意味な暴力を受けないよう気遣ってあげた。

「この人たちに付いていって、正門まで送ってやってくれ。下のやつらにもお前が説明しながら、絶対喧嘩にならないよう……頼んだぞ……」

「え、あ、はいっ！　指原総長っ！」

　正門まで無事に送り届けられたが、ようく考えたら裏門から侵入してきていた為、歩道をぐるっと回り込んで引き返し、数分歩いてようやく無事に京介と合流した。

「おっ！　どうだった？　バシッとやっつけてきたか莉央！？」

「お兄さん、何で莉央ちゃんがやっつけてたこと分かったの？　凄いね！」

「イヒヒヒ！！　俺の勘は超能力並だからな！　美香ちゃんと明日香ちゃんが白とピンクだってことも知ってるぜ？　ゲハハハ……
……！？　し、しまった！！」

　スカート越しに両手でガバッと股間を押さえて、京介を睨む美香と明日香……。

「ま、まさかなっ！　勘で言ったが本当に当たる訳はないんだけどな……ガハハハハハ！！　……はは」

かなり疑いの目で……目を細～くして睨み続ける白とピンクのパンツを履いている女子小学生の二人であった。

「自爆……ふふふ」

莉央はボソッと呟いた。

北の女番長　（後編）（後書き）

卑怯なリンチによって全身骨折の酷い目に逢った宮垣咲良。
無事に仇を討つことに成功した六人と運転手京介。
帰りに北部地方病院に見舞いに寄った七人は、咲良に報告する。
少し複雑な心境だったが、取り敢えず感謝する咲良だった。

退院後、指原理子と宮垣咲良は仲良くなり、新しく《極北女子同盟》と改名して、一年生から三年生まで約４００人全員で仲良くヤンキー生活を満喫していくことになった。

めざせ！　総合格闘家（前書き）

いざというときに頼りになる男！

菅野京介は総合格闘家になるため、ジムに通うことを決意する。

半分強制みたいなものだったが………。

《今回のお話は、残酷描写やエロ描写が一切ございません。残酷描写やエロ描写を楽しみにして読んで下さっている方は、スルーして頂き、後書きだけでも目を通して頂けたら有り難いです》

「おっ！　今日は珍しくハマってるな妹ちゃん！　ワシは甘デジで２０００発も出したから勝ち逃げさせてもらうとするよ。あまり熱くなっちゃダメだぞ？　はっはっはっ」

「莉央、マックスばかり打たないでせめてライトミドルにしろよ？　もう万発突っ込んでるじゃないか？」

負けが込んで熱くなる莉央にアドバイスする兄の京介。

東部地方にあるパチンコホール。
京介の友人の父親が経営している小さなホールだった。

「マックス以外打てないよ。ショボい出玉だから……。お兄ちゃんが二年前にあたしをこんなとこ連れてくるから悪いんじゃない！　お兄ちゃん出て行った後も一人で通っちゃったじゃないの！　小学生の女の子が昼まっからパチンコ打ってるなんて……全部お兄ちゃんのせいなんだからね！？」

「おいおい！　勝手に依存症になっちゃってるのはお前自身の意思の弱さだぞ？　経営者の息子である俺の友人のお陰で未成年のお前が打たせてもらってるんだから感謝してほしいくらいだぜ？」

「………って言いながら諭吉五枚目……悔しいな。今日は当たる気がしないわ」

「そんな日は帰って屁こいて寝ろや！　俺が代わりに勝っといてやるから♪」

「よし！　赤保留に変化した！　これ当たるよきっと♪」

「北東無双の赤保留って50％もなかったんじゃね？　スカるぜきっと……」

「え？　赤は当たってくれなきゃショックだなぁ……。あっ！？　金に変わった！　こりゃもらったよお兄ちゃん」

「激熱だなそれは……」

『7　7』

「7テンパイに変わった！　やっと当たるぞぉ♪　さぁ大連チャンだー♪」

『787』

「嘘！？　通り越しちゃったけど……？」

「復活するだろ？　7テンで金保留なんてほぼ確定みたいなもんだぜ？」

「でも次の回転始まった……嘘でしょ！？…………開いた口が塞がらないよ…………もう今日は帰る！」

「お、おう。散々突っ込んだのに残念だったな……雄二の親父に文

句言っといてやるよ。遠隔操作してんじゃねぇの？　ってな。がははは」

菅野莉央の住んでいる祖母の家から、歩いて半時間ほどの場所にあるパチンコホール。

月に一度か二度は打ちに行ってしまう莉央だった。

お客も常連ばかりなので顔見知りになり、みんなが内緒にしてくれているため、小学生ながらパチンコが打てていた。

最近濃い目の化粧で少し顔付きを変えてる上に、髪も結ってポニーテールにして雰囲気も変えてる為に、アイドルの菅野莉央と見抜かれることはない。

明日香と美香も外出する際は、顔や髪に色々工夫して雰囲気を変えていた。

トボトボと歩いて自宅へ帰り着く。

「お婆ちゃん、ごめんなさい。今月分の小遣いあと一万円もらっていい？　もう今月はパチンコ行かないから……」

「おやおや、いつも勝ったり負けたりで遊べてるのに今日はボロ負けだったんだね？　はい。１００万円持っときなさい」

「あ、いや、一万円でいい。今でも普通の子の小遣いのレベルじゃないから……。一万円で今月乗り切るよ」

「そうかい。莉央のお陰で本当に生活が楽になったし贅沢できるよ。

ありがとうね。国からの給与がほんと凄いから……」

「法務省の普通の死刑なら、執行人の臨時執行手当は全額死刑囚の御供え物に遣うらしいんだけど……。特殊任務省の残酷処刑島での死刑囚は常軌を逸したレベルの犯罪者だから、全額あたしたち執行人の自分の給与として遣わないといけないない法律があるのよね……」

「そうなんだね。なら莉央たちが処刑してきた犯罪者の方々に感謝しなくちゃいけないかもね？」

「感謝や情けは要らないよ。人間じゃないような理不尽で我が儘で残酷な人たちばかりだからね……当然の報いだし」

莉央のスマホが鳴り響く。
藤堂長官だった。

「はい。もしもしこんにちは。……あの、先日は私的な報復の為に宿泊費とか色々お世話になりました。それと言い忘れてたのですが、亡くなった誠也くんの件では色々気を遣って頂いて……お陰様で誠也くんの最期を看取る事が出来ました。ありがとうございました」

「いやいや……鬼頭美紅の話を聞いていると君が誠也くんとかゆう少年にかなり気を遣っているみたいだったからな。母親と姉を失って独りぼっちになってしまった彼を楽しませてくれて感謝してるよ」

「……………すいません」

「いやいや、何も謝ることはない。普段心と顔を鬼にして凶悪犯を処刑したり拷問したりしてくれているのでな。こちらこそ助かってるよ」

「………相変わらず一言多いんですね？　顔までは鬼にしたつもりはないですけど？　自分では可愛い、とさえ思っています」

「わっはっは♪　すまんすまん！　自分で可愛い言うなよ……。所で今回連絡をした理由はだな……」

「はい」

「キミの兄である京介くんに格闘技を習ってもらい、いざと言うときに更に助けになるようになってほしいわけだ」

「いざと言うときは、特殊任務省のマシンガン持った方々が来てくれたら済むと思うんですけど？」

「連中は他の業務を兼用してるからな。忙しいんだよ。相手が余程の人数か強者でもない限り出来るだけキミたちの力で遂行してほしいわけだ」

「でも……あんなぐうたらなお兄ちゃんが格闘技なんて習う気になってくれるのでしょうか？」

「キミの仲間の結城明日香。あの子の父親が元総合格闘技の世界チャンピオンだ。もう話はつけてあるから今度の日曜日に兄と共に結城ジムを訪れなさい。場所は東部地区〇〇市〇〇区西町の………」

「あの……親友だし……住所知ってます。あの明日香ちゃんのお父

さんが……なんか想像もできませんね……」

「そ、そうだったな。うっかりしていた。では昼の一時頃に二人が行くように結城勝利さんには伝えてるので遅れないようにな！」

兄である京介が格闘技を習うことにあまり気が進まない莉央だったが、取り敢えず結城明日香に電話した。

「もしもし明日香ちゃん！　お父さんって格闘技やってたの？　全く聞いてなかったからビックリしたよ。元チャンピオンだったなんて凄いね！」

「おはよー莉央ちゃん！　私もついさっきお父さんから聞いたんだけど……お兄さんがジムに習いに来るなんて想像もしてなかったよ。隠してるつもりじゃなかったんだけど、何か自慢してるみたいでついつい黙ってて……ごめんね」

「じゃあ今度の日曜日お兄ちゃん連れて遊びに行くから……じゃなかった……お兄ちゃん連れてあたしも見学に行くから宜しくね」

「うん。私もお兄さんの人生初の格闘技チャレンジを楽しみにしてる」

明くる日学校にて――――

「お父さんのこと黙っててごめんね！　美香ちゃんも見に来るでしょ？　今度の日曜日」

早速、富田美香にも謝る明日香だった。

「いいよ！　でも凄いなほんと……おっとりした明日香ちゃんから想像もつかなかったよ！　お父さんは世界チャンピオンで娘の明日香ちゃんは人気絶頂のアイドル……もっとニュースになってもおかしくないと思うけどなぁ」

「世界チャンピオンとはいっても……もう１０年以上も昔の話だからね……今の現役チャンピオンは、夜暗風太とゆう中部地方の有名ジムに所属してる選手なの。カウンター合わせるのがとっても上手いんだよね」

「カウンターと言えば莉央ちゃんも超得意だよね！　動体視力もハゲ鷹並みだもん」

「普通に鷹並でいいんじゃない？　美香ちゃん……こうしてやる♡」

『ギュッ』

両手で美香の殆ど無い胸を後ろから揉む莉央。

「やんっ！　止めて莉央様っ♡」

「美香ちゃんはいつもいつも莉央ちゃんに責められると喜んでるみたいだからもっと激しく揉んであげて」

呆れ気味に明日香が呟く。

「喜んでないってば！　なんかくすぐったいんだなこれが……エヘへ……へへへ♪」

だんだんと変な気持ちになって来はじめたので止めることにした莉央だった。

いちゃつく二人に少しヤキモチを妬く明日香。
莉央と美香は両想いだと気付いていただけに、少し取り残された感の寂しさもあったが、大好きな二人が楽しく笑顔でいてくれることは、明日香にとって癒されることでもあった。

いつもの調子で一週間も過ぎ、日曜日になった。
莉央も京介も、昼近くまでゆっくり寝て、朝食兼、昼食中だった。

「京介、どうしても辛かったら辞めてもいいからね！　無理して怪我とかしないでおくれよ？」

「ああ。あまり気が乗らないけど男が強くて損なことはこれっぽっちもないからな。タダで格闘技を習わせてくれるなら取り敢えずやってみるさ婆ちゃん」

「まさかお兄ちゃんがこの話受けるなんて……あたしの判断も衰えてきちゃったかな……」

「ガハハハハ！　俺だって男だ！　やるときゃやるぜ？　ムッチリボディの明日香ちゃんのオヤジさんなら挨拶もついでに出来るしな」

「その挨拶、他意がない？　まさか明日香ちゃんに惚れてるとかじゃあないよね？　ダメだよあたしの友達だから……」

「えっ!?　そ、そんなんじゃないさっ！　はは……ははは。小学生相手に惚れるかよ……」

「だってお兄ちゃん何でもアリの変態じゃん？　そのうち犬や猫に獣姦とかしてそう……」

「お前な……俺を何だと思ってやがる？」

「だから何でもアリの変態」

「コラコラ！　朝から二人でしょーもないこと言い合いしないで早く服着替えないと！　余裕持って出発しないと遅刻しちゃうよ？」

「おっと！　そうだな。もうこんな時間か……すぐ出ても10分前にはなりそうだ。急ぐぞ莉央」

「あたしはもうすぐに出れるよ。早く着替えてきてくれる？　美香ちゃん待ってるよ？」

「お、おうっ！」

慌てて服も着替え、二人で家を出発した。
美香の家に着く。
「美香、何か真っ赤な車がクラクション鳴らしてるんだけど？　知り合い？」
「あっ！　来たんだ！　そうそう。友達の莉央ちゃんとお兄ちゃんなの。一緒に明日香ちゃんの家に遊びに行くんだ」
「いつも三人一緒なのね。友達は大切にしなさいよ？　気を付けてね」
「はーい。行ってきまーす！」
富田美香を乗せて再び真っ赤なマーチは走り出した。
「ヤッホー！　莉央ちゃん♪　お兄ちゃんも今日はお世話になりまーす♪」
「おっ！　相変わらず威勢がいいなっ。最近ツインテールだったりほどいたりしてるみたいだが？　莉央もしょっちゅう髪型変えてるみたいだし……たまに気分でも変わるのかな？」
「そうなんですよ！　気分が変わるとゆうか、人気の多い場所では髪型変えてお化粧して雰囲気を変えないとあたしたちアイドルだから……」

「あっ！　そうかそうか！　もしファンのヤツらとかに会ったらサインとか強請られて面倒くせぇわな！　なるほど。それで莉央も場所によっては厚化粧してみたりポニーテールにしたり三つ編みにしたりしてたのか……」

「厚化粧のとこだけ強調しないでくれる？　わざとでしょ？」

「ガハハ！　化粧で女は別人になるってゆうからなっ。俺が眉毛描いてやろうか？　厳つく見えるよう縦幅三センチくらいにしてやるよ？」

「完全に星飛雄馬じゃないの。人の顔で遊ばないで」

「せめてケンシロウ言ってくれよ……何百年前のアニメ知ってんだ？お前……」

「あの……出てくる名前が全く分からないんだけど……」

「美香ちゃんには全く興味ない名前だと思うから気にしないで！それより明日香ちゃんのお父さん凄いよね？」

話に取り残されて寂しくなる美香に気を遣い話を変える莉央。

「そうそう！　明日香ちゃんからは想像も出来ないよね！　おっとりした感じだから。胸もデカイし……」

「はは……胸の大きさは関係ないと思うな……あたし」

一方、結城ジムでは――

一番の実力者である１９歳の亀山頭吉が結城勝利会長にミット打ちをしていた。

『ドン！　ドン！　ドドドドン！！』

「その調子だ！　今日もいいパンチが打ててるな。来週のアウトサイダーでの試合に勝てたらいよいよ世界に向けての本格的なリングに上がれるようになるからな」

「はい。ありがとうございます！　今日は２０歳の人と僕がスパーリングするんでしたっけ？」

「そうだ。一時には来るようになっている。取り敢えず軽くお前とのスパーリングを拝見させてもらって、素質があるかどうかを見極めさせてもらうとする」

「本気でやってもいいんですか？」

「最初は軽くやってくれ。相手の実力に応じてレベルアップしていってくれるか？　とは言ってもドが付く素人さんだ。ヘッドギアを着けているとしても手加減はしてやってくれ」

「はい。わかりました」

言い終わると同時にドアが開いた。

『ガラガラ……』

「こんにちは。本日はよろしくお願いします！」

莉央と美香が入ってきて挨拶をする。
ワンテンポ遅れて京介も入ってきた。

「ちーっす！！　今日はよろしくお願いしまーす！！」

「普通に挨拶も出来ないの？　失礼だよお兄ちゃん」

「ちっ。はいはい！　わかりましたよ」

「明日香ちゃーんっ！！　ヤッホー♪」

「美香ちゃんこんにちは！　莉央ちゃんと京介さんもようこそ」

美香は始めて見るリングに感動して駆け寄っていき、下段ロープを引っ張りまくり始めた。

「自宅の真裏にジムがあったんだね……今お母さんに聞いて始めて

ココの存在知ったよ。あはは……」

「ごめんっ。言い忘れてた私が悪かったよ。完全に真裏だから分からなかったよね？　ごめんね」

「これがリングかぁ。テレビでは見たことあるけどカッコいいねやっぱ……」

　リングから結城明日香の父である結城勝利会長が降りてきて挨拶をする。

「こんにちは。いつも明日香がお世話になってるらしいね？　ありがとう。これからも仲良くしてやってくれると嬉しいよ」

　そう言いながら莉央の手を握ってきた。

「初めまして。菅野莉央です。あそこでロープ引っ張って遊んでる子が富田美香で、こちらが本日お世話になります兄の菅野京介です。…………お兄ちゃんっ！」

　隣で物珍しそうにキョロキョロしている京介にきちんと挨拶するよう恫喝する莉央。

「あっ、はいっ、はいっ！　こんにちはっ！　本日はよろしくお願

いいたしますっ！！」

「こんにちは。肩の力を抜いて気楽になってもいいからね。リングにいる人が今日菅野くんとスパーリングしてくれるうちのジムのホープ……亀山頭吉くんだ」

「ぷっ！！　……くくく」

急に吹き出す京介。

「ん？　どうしたのかね？」

「なに笑ってるの？　お兄ちゃん？」

会長と莉央が問いかける。

「亀山の頭吉って……くくく……亀頭じゃね？……ぷぷくくく」

必死で笑いを堪えているが目には涙が浮かんでいる。

『ドカッ！』

「ほげえっ！？」

後方から股間へ直撃の蹴りを入れる莉央。

「いでででで……なに……しやが……る莉央……いたたた……」

股間の余りの激痛に崩れこんでしまい、涙の意味が真逆に変わってしまう京介だった。

「申し訳ございませんっ！　兄は悪気はないんですがかなり頭が薄いのでお許しくださいっ！」

深々と頭を下げる莉央に会長は優しく答えた。

「ははは。頭が薄いのは私も同じだ。小学生なのに君はしっかりしてるね？　感心するよ」

よく見たら頭が薄い結城会長。
一瞬、しまった！　と思う莉央だったが、悪気はないことは分かっていた会長は優しくシャレに変えてくれたみたいだった。

リング上ではかなり頭にきて必死で冷静さを保とうと苦心している亀山頭吉がいた。

『ちきしょう……人の名前を笑いやがって……初対面の僕をバカに

してるのかアイツ！？』

そんな亀山の感情に誰一人構うことなく話は進んでゆく。

「このヘッドギアを着けてもらうが、サイズは大丈夫かな？　どれどれ……うむ！　調度いいな。では一度外して上の服は脱いで靴も脱いで裸足になってもらえるかね？」

「は、はいっ！」

慌てて服と靴を脱ぎ、改めてヘッドギアを装着する京介。

リングに上がろうとする所を明日香に励まされる。

「京介さん、頑張って！　あまり無理しないで下さいね」

「おっ！　ありがとう明日香ちゃん♪　お兄さんって呼ばれるより名前の方が嬉しいぜっ♡　元気１００倍だっ！！」

「お兄ちゃんガンバレー♪」

美香も続いて声援を送る。

「サンキュ♪」

莉央は黙って見送っている。

リング上で対峙する二人。

「よろしくお願いします亀……亀……亀山さん」

『ちっ。わざとか？　コイツ……』

またもイラッとしてしまう亀山。
どうにか冷静さを保ちつつ返事をする。

「よろしくお願いします菅野さん」

「あれ？　亀さん……亀山さんはヘッドギア着けないんですか？」

「大丈夫です。ご心配なく」

下で結城会長がルールを軽く説明する。

「総合格闘技なので本来は寝技もあるが、本日はキックボクシングスタイルでスパーリングしてもらう。金的と肘は無し。膝はアリだ。倒れたあとの追撃も無し。では三分間頑張ってくれ」

『カーン』

ゴングが鳴った。

「凄い臨場感だねリングの真下から見てると……お兄ちゃん頑張ってほしいね？　莉央ちゃん」

「…………相手は少し怒ってそうだからいい体験出来るんじゃないかな？　お兄ちゃんは……」

明日香もそこは気になっていた。

亀山頭吉は真面目な少年だったが、かなり神経質な部分があり、結構根に持つタイプとゆうことは父である会長から聞いて知っていたからだ。

『ドン！　ドン！　ドン！』

右左右とワンツースリーを繰り出す京介だったが、素人の大振り。全てガードされる。

同じパターンで攻撃を繰り返すが、ことごとく頭を前後左右に振って交され、だんだんと疲れてくる。

「余裕で交わせるものをわざとガードしたりして楽しんでるみたいだね亀山選手は」

「さすが莉央ちゃんだね。私もそう思った。受けることも交わすことも楽勝だと誇示してるみたいだわ」

「ねぇねぇ、莉央ちゃんが本気で戦ったらあの亀山選手とかゆう人にも勝てるよね？」

「あのさ美香ちゃん、普通の男子の中、高生ならどうにかなるかもだけどプロみたいな人相手には無理だよ」

「ふぅん。あたしは勝てる気がするけどなぁ……」

とにかく攻撃が当たらない京介の疲労は一分そこそこで頂点にまで達していた。

素人がプロデビュー直前のような旬の選手にどうこうできる訳はなかったが、もう少し攻撃は当たるものだと思っていた京介はかなりのショックを受けている。

苦し紛れにローキックを繰り出すと、これは亀山の左脚を捉えて快音が響いた。

『パシィッ！！』

『おっ！？　当たったぞ！　無理に顔ばかり狙ってたからダメだったんだな。ようし、蹴りまくって痛め付けてやるぜっ！』

「オラアッ！！」

更に本気のローキックを繰り出そうと左足を一歩前に出し踏ん張った瞬間だった。

亀山の強烈な右カウンターが京介の顔面を捉えた。

ヘッドギア越しにも意識が飛ぶほどの衝撃だった。

倒れ込もうとする直前に追い討ちの一撃である右のミドルキックが左の脇腹に炸裂する。

音を立てて京介の肋骨が二本折れた。

「ぐわあああっ……いでででで」

たまらず倒れたあと肋骨を押さえながら苦しむ。

会長から明日香から全員が心配してリングに上がった。

「大丈夫か？　これは肋骨いってるなぁ。明日香、救急車を呼んでくれ」

「あ、え、うん！」

「加減したつもりだったんですけど……すいません」

「あまり人をバカにし過ぎたらバチが当たるってこと……ちょっと

は身に染みたかな？　お兄ちゃん」

「うぐぬぬぬ……な、何の事だ？　い、痛たたた……」

「お兄ちゃんは骨折しちゃってるんだよね？　そんな言い方可哀想だよ莉央ちゃん……」

美香にしては珍しく真剣な顔をして呟いた。

明日香も……珍しい感情をさらけ出した。

「わざとでしょ？　亀山さんってこんなことする人だと思わなかった！　幻滅したよ」

亀山の方へ振り向いて、本気で睨み付けながら明日香がキレていた。

いつも温厚なおっとりしたイメージの明日香がここまで感情にだすのはかなり珍しい。

「な、何のことかな？　明日香ちゃん。普通にやって反則もしてないし……」

「右のカウンターで意識飛んでたのに……倒れること分かっていたはずなのに……最低」

「明日香ちゃん、もういいよ。お兄ちゃんの方が悪いから」

「あっ！　またそんなこと言って！　莉央ちゃん冷たいよぉ」

美香が半泣きになって莉央に愚痴るが、莉央は黙って苦しむ京介を見守るだけだった。

「大丈夫ですか？　京介さん……もうすぐ救急車くるから少し辛抱して下さいね」

そう声をかけながら京介の右手を両手で握りしめながら心配そうに見詰める明日香。

「へ？　こんな俺なんかの為にそんな心配してくれるの……明日香ちゃん……いててて っ！！……あ、ありがと……」

間もなく救急車が到着した。

「せっかく格闘技を習いにきてもらったのに申し訳ない。亀山にも少し反省してもらうから……。また傷が完治したら菅野くんと一緒にきてくれるかね？　莉央ちゃん」

「はい。本日はありがとうございました。亀山さんをあまり怒らないであげて下さい。あたしが亀山さんなら間違いなく同じミドルを入れてますから……では失礼します」

救急隊員に運ばれて京介は東部総合病院へ搬送されてゆく。
莉央と美香も同乗して病院へ向かう。

「あの妹さんもお前と同じく死者に鞭打つミドルを見破ってたのか？　明日香」

「あの子は下手したら亀山さんといい勝負するかもしれない化け物だからね……体重さえ同じなら亀山さんより絶対強いから」

「本当か!？　凄い小学生がいるもんだな……亀山がもうすぐ上がるリングの《天神》には女子の試合もある。いつかプロの女子総合格闘家になってくれんかのう？」

「無理よ。アイドルだし処刑……何でもない。」

肋骨が折れた場合、臓器への損傷も危惧されるとゆうことで、整形外科ではダメならしい。
胸部外科のある総合病院への搬送は仕方がなかった。

診断は肋骨が二本骨折、全治三ヶ月……。

「じゃあお兄ちゃん、三ヶ月後にまたジムに行こうね！」

「あ、ああ。わかってるよ。こんなことくらいじゃ俺はめげないぜ!！　明日香ちゃんの手は柔らかくて温かかったなぁ〜♪　デヘヘ♡」

「そう言えば明日香ちゃんってば両手で握りしめてくれてたね？　京介さん……大丈夫？　ってか！　あははは」

「…………明日香ちゃんに手だしたら殺すわよ？」

「おいおい！　何もしてねえって！　向こうから手を握ってきたんだぜ！？」

「自分のジムで起きた怪我だから罪悪感沸いただけで、お兄ちゃんに気持ちなんてコレッぽっちもないからね？　勘違いしないでね」

「あちゃあ～。お兄ちゃんには無茶苦茶冷たいんだね相変わらず……お兄ちゃんかわいそっ……」

「美香ちゃんはわかってくれるか……さすがペチャパイでロリコン好みのアイドル天使だっ！　がはははは」

しばらく沈黙する美香と莉央。

静かに美香が呟いた。

「…………莉央ちゃん……お兄ちゃんに甘すぎない？」

「……そだね」

めざせ！　総合格闘家（後書き）

特殊任務省の藤堂長官の提案で、結城明日香の父親が経営している総合格闘技のジムで戦闘レベルを上げることを決意する菅野京介だったが、肋骨を折ってしまい出鼻を挫かれる事となる。

結城明日香のジムの亀山選手の破壊力は半端じゃなかった。

自業自得という言葉がよく似合う京介だったが、明日香の優しさに触れることができて満足？　してるようだった。

また完治したら再チャレンジだ。

少女の後悔……夜の残酷処刑島　（前編）（前書き）

ついに菅野京介が残酷処刑島に渡ることになった。
変態でありレイプ魔だが、血に弱い男はどこまで拷問処刑を実行出来るのだろうか……。

少女の後悔……夜の残酷処刑島　（前編）

「どうしたの？　相田希美……飛び降りたら楽に死ねるわよ？」

「…………うう……やっぱり怖い……」

辺りが茜色に染まり始める九月の日曜日の夕刻…………。

ここは北部断崖岬。

中部地方と北部地方との中間にある断崖絶壁の自殺の名所である。

『ザパーンッ！　ザザザ……ザパーンッ！！』

暗闇で下方の海までは目視出来ないが、３０ｍはあろうかと思える断崖絶壁の頂上にまで、磯に打ち付ける波の音が激しく響き渡ってくる。

残酷処刑島の処刑執行人である１４歳の鬼頭美紅が一人の１７歳の女子高生に問いかけている。

「一緒に死のうとしては男性だけを飛び降りさせてきたのに……自分だけは死にきれないのね？　ほんと都合いいよね？　じゃあもう埠頭へ行こうか？」

「…………はい。どうしても怖すぎて……やっぱり無理です」

「後悔しない？　今ここで飛び降りたら本当に楽に死ねるよ？」

「分かってますけど……やっぱり死ぬのは怖いのっ！！　お願い。私を許して……」

「特殊任務省から執行命令が下ってるから……相田希美の残酷処刑島での拷問処刑が。せっかくあたしの情けで自殺を認めてあげたのに……残念だよ」

「お願いだから見逃してっ！　だって私は……誰一人殺してないんだからっ！！」

「一緒に自殺しましょうとの肩書きのサイトで知り合った男たちをこの断崖絶壁に連れてきては……先に飛び降りさせた。あなたは死にきれないまま警察を呼んで保護される。何度もその行為を繰り返した。直接突き落としていなくてもあなたが殺したのと何ら変わらないよ」

「そ、そんな……」

「あなたと出会わなきゃ今でも生きてる男性が殆どだと思う。みんな後から一緒に飛び降りてくれると信じて死んでいったのにね？　哀れなもんだよ」

菅野京介が岩場の陰からゆっくり現れる。

「時間だぜ？　美紅ちゃん。やっぱりその子は自分で自らの命は絶てなかったか……当たり前だと思うけどな俺は……自殺ってムチャ

クチャ勇気要ると思うぜ？」

「それはそうですね。菅野さんにとって残酷処刑島では始めての執行となりますが、○○埠頭までよろしくお願いします」

「ああ。分かってるよ。もう莉央たちも先に送り届けてるから待ってるはずだ。今からここを出たら船が迎えに来る五分前には着ける予定だからな」

菅野京介が肋骨骨折して退院するまで三ヶ月かかった。

ようやく退院した京介は藤堂長官から残酷処刑島での拷問処刑人としての参加を打診される。

最初は断るのみの京介だったが、本当に拷問や処刑が無理なら見ているだけでも手伝うだけでも構わないとゆう条件をのみ、ついに残酷処刑島デビューとなった。

数日前――――――――

東部地方繁華街の居酒屋に集まる菅野莉央と兄の京介、同じく残酷処刑島での拷問処刑人である鬼頭美紅の三人。

「まさかお兄ちゃんが拷問処刑人に抜擢されるなんてね……絶対無いと思ってたけど……。藤堂長官は最初からお兄ちゃんを仲間に入れるつもりだったみたいだね。こちらが１４歳の女子中学生であり、

拷問処刑人である鬼頭美紅ちゃん。あたしのことをいつも気にかけてくれてるの」

「は、初めまして！　莉央の兄である菅野京介といいます。これからも色々よろしくです」

「菅野京介さんですね！　菅野さんと呼ばせてもらいます。こちらこそよろしくです。莉央ちゃんとは今まで何度も拷問処刑を執行してきました。分からないこととかあれば何でも聞いて下さいね。それとあたしは中学生だし、敬語で話さなくてもいいですよ？」

「あ、はい！　……ああ。分かったよ美紅……ちゃん」

取り敢えず注文していた飲み物が先に来たので、三人は烏龍茶で乾杯した。

一口飲んでから美紅が口を開いた。

「正直今回の１７歳の女子高生の拷問処刑は少し気が進まないのよね……」

「藤堂長官から執行命令が下ったんだ。今度の日曜日だったね。どうして気が進まないの？　もう一人の３０歳の男性の方はそんなこともないんでしょ？」

「そう。その男は仕事をクビになってイライラしていて、八つ当たりで６５歳になる母親を殴って死なせた上に、木造の自宅に火をつけて事故の焼死に見せかけつつ、火災保険を騙し取ろうとしたの。

去年の父親の病死だってかなり怪しいみたいだし……」

「それで警察に捕まる前に情報網が半端でない特殊任務省が、捕まるかも知れないと悟って逃走していた男を先に確保しているわけだね。日曜日の夕方には残酷処刑島へ連行される……」

「それは間違いないわね。内容を聞く限り確かにその女子高生も悪いんだけど、直接殺してもいないのに拷問処刑はちょっと可哀想かと思って……藤堂長官にあるお願いをしたら認められて」

「あるお願い？」

「そう」

ゆっくり正面に座っている京介の顔を見上げる。

さらに続けた。

「菅野さん、お手数をお掛けするようになりますが、莉央ちゃんたち小学生の三人は先に港へ送っておいてから、あたしとその女子高生を北部断崖岬へ連れていってほしいんです」

「えっ？　そこは有名な自殺の名所だけど？　連れていくのは構わないけど一体何をする気なんだ？」

菅野京介が目を丸くして美紅に聞き返す。

「彼女に自殺するチャンスをあげようかなって……」

「自殺するチャンス！？」

莉央と京介の声が見事に重なり、同時に聞き返した。

「もし自殺する勇気があって、あたしと菅野さんの見届ける中、飛び降り自殺が出来たなら………〝死刑囚事故死〟として藤堂長官に通知を届けるつもりなの。『死刑囚が話を聞いて認めたなら別にそうしても構わない』と藤堂長官の許可も下りたわ。無事に自殺できた場合は村山勇太郎３０歳の拷問処刑のみとなるから、あたしと菅野さんは任務から外れることになるの」

「確かに残酷処刑島での拷問処刑は地獄すら生ぬるいほどの阿鼻叫喚地獄だからね。あたしが死刑囚なら飛び降り自殺を選ぶよ」

「またまたお前は……そんなこと気楽に言って……人間ってなかなか自殺なんて出来ないもんだぞ？　いざとなったら……俺はこんなこと言うのも何だが、自殺出来る人は尊敬するぜ。誉められたことじゃあないんだろうけどな。並大抵の覚悟じゃ恐怖心に負けて実行出来ないと思うからさ……凄い勇気だと思うわけだ」

そう言い終わると、烏龍茶を一気に飲み干す京介。

「すべては今回の死刑囚の一人……相田希美のため。ありがとうございます菅野さん。ではあたしの住所は莉央ちゃんが知ってますの

で、○○埠頭に小学生の三人を送っといてからあたしの家まで迎えに来て頂けますか？　相田希美が拘束されている倉庫を教えますので先にそこへ連れに行ってから北部断崖岬へお願いします」

「わかった。その女子高生の死刑囚が少しでも楽に死ねる可能性があるなら……俺は喜んで協力させてもらうぜ」

「無理だよきっと。そんな勇気があるなら今までの五回の挑戦で一度は飛び降りてる筈だから……まだ生きてるってことは……」

「そんなことは分かってるさ莉央。でもチャンスは与えてもいいんじゃないかと俺も思っただけだよ」

鬼頭美紅の心遣いで自殺を推薦したが、どうしても決行出来なかった死刑囚の女子高生、相田希美。

連行のため、再び美紅に手錠を掛けられて真っ赤なマーチに乗り込む。

涙が止まらない相田希美だったが、心を鬼にしてハンドルを握り、○○埠頭を目指す京介であった。

後部座席で美紅に抱きついている。

ボソボソと何かを話しながら泣いているみたいだったが、京介はひたすら運転に集中した。

「お願い……私を許して……殺さないでよ。ぐす……ぐす」

「ごめんなさい。あたしもあなたには残酷な拷問はしたくなかったんだけど……自殺出来なかったんだからもう諦めて。担当はあたしと菅野莉央とゆう女の子だから。もう一人の死刑囚の男には三人がかりになるから、あなたより遥かに苦しむと思うわ」

「いやよ。いやいや。お嬢ちゃんみたい中学生の女の子にそんな残酷な拷問処刑なんて……出来るわけないよ……ぐす……ぐす……」

「気が進まないとは言え出来るから安心して。安心してと言うのも変だけど……あなたが思ってるより莉央と言う子もあたしも残酷だから……」

真っ赤なマーチは残酷処刑島への渡し船がくる〇〇埠頭に到着する。

「さぁ降りましょう。相田希美」

「ぐす……ぐす……は、はい」

近くの駐車場に車を停めて美紅は手錠で繋がれたままの泣き止まない相田希美を乗船口まで連れてゆく。

かなり不安な気持ちを抑え切れない京介も後へ続く。

「美紅ちゃん……その人を連れているということは……」

莉央の問いに黙って頷く美紅。

「とても綺麗な人だね……何か勿体ないよ」

莉央は少しうつむきながら残念そうに呟いた。

明日香と美香も綺麗な死刑囚、相田希美を見詰めながら同じように思っていた。

お迎えの船が埠頭に着いた。

菅野京介と小学生の処刑人の莉央、明日香と美香、中学生の処刑人美紅……そして死刑囚の女子高生、相田希美の六人は、小型の船に乗り込み、全員目隠しをされる。

船は静かに○○埠頭を出港した。

残酷処刑島――――

すでに第一便で連行されてきていた３０歳の男、村山勇太郎。

十字架型の磔台に、素っ裸にされたまま両手を開けた状態で両手首と両足首を縛り付けられてもがいている。

「もう日も暮れて真っ暗になってるのになんてこった……こんな訳のわからない島に縛り付けられてこのまま俺は死んでいくのか？

蚊にかまれまくって全身が痒ぃっ！！　ちくしょおおおおっ！！
誰か助けてくれえええっ！！」

必死で叫ぶ死刑囚の勇太郎。
その時、残酷処刑島の簡易な港に小型の船が着いた。
特殊任務省の女看守が皆に話しかけた。

「では二人の拷問処刑執行をよろしくお願いします！　拷問に使用する道具や武器類は、村山勇太郎を縛り付けてあるあの丘のすぐ近くにある大型の木箱の中に入れておりますので、好きにお使い下さい」

「分かりました。迎えは何時頃ですか？　電気はついてるんですか？」

すかさず質問する美紅。

「現在夜の8時……今から明日の朝8時までお願ぃします。その女性用の拘束具は、男と同じく十字架型の磔台と、股間を開かせたまま固定できる大の字型の磔台と、ベッド型の拘束台の三つを用意しておりますので拷問に応じてお好きなのをお使ぃ下さぃ。では12時間後にお迎えに参りますのでよろしくお願ぃします！」

「あの、電気は？」

再度、莉央も問いかけた。

「死刑囚を影なく照らすように１０００ルーメンの明るさのＬＥＤライトが四方から四基設置されてますのでご心配なく……では！」

そう言いながら敬礼したまま去ってゆく女性看守。

六人全員で頭を軽く下げて見送る。

村山勇太郎死刑囚を拘束している丘に辿り着いた。

暗闇の中に懐中電灯の光が数個近付いてくるのが見えた。

「だ、誰か来てくれたのかっ！？　おいっ！　この縄を解いてくれっ！」

設置されている四基のライトを点灯させる莉央たち。

「眩しいっ…………助けてくれっ……ん？？　お前たち……え？子供だらけだけど？　しかも女の子だらけだし……何でこんな夜にこんな無人島に？　男も一人いるのか……と、とにかく手首と足首を縛ってる縄をほどいてくれ！　頼むっ！！」

「話聞いてなかったのか？　オッサン！　俺たちはあんたを処刑するためにやって来た拷問処刑人なんだよ？」

ただの山登りパーティーかなんかと勘違いしているらしい３０歳の村山勇太郎に真実を伝える京介だった。

「冗談だろ……裁判さえ受けてないのに何が処刑だよ？　しかも拷問処刑だって？　映画の見すぎだし。ふざけないで早く縄を解いてくれって……なぁそこの可愛いお嬢ちゃんたち♡　ワシが頭をよしよししてやるから。なっ？　早く解いてくれ」

莉央と明日香と美香の小学生トリオを見渡しながら少しニヤけて話し掛けてくる。

「現実逃避とゆうか……このオッサン本気で冗談だと思ってるみたいだね？　明日香ちゃん」

「そうだね。まぁこのオジサンも朝までには本気で現実逃避し始めるんじゃないかな？　オシッコ漏らしながらね……。私と美香ちゃんと京介さんの担当みたいだよ。京介さん、ほんとに大丈夫ですか？」

只でさえ気の弱い……血に弱い菅野京介。

初めての拷問処刑参加に心配そうな視線を投げ掛ける明日香と美香。

「お、おうっ。顔殴ったり腹を殴ったり……ムチャクチャ酷いことしてやるさっ！　がはは！！」

「子供のイジメじゃないんだから……」

端で聞いている莉央が呆れ気味に呟く。

菅野莉央と鬼頭美紅の二人は真剣に協議を始めた。

相田望美の拘束方法について……である。

二人の協議中に、明日香と美香は相田望美の服を脱がせてゆく。

「衣類は邪魔だから私たちが脱がせてもらいますね？」

明日香が冷たく囁く。

「いや……やめてよ。恥ずかしい……」

もう涙も涸れて瞼を腫らしたまま美人の女子高生は少し抵抗を見せる。

立ったままで抵抗している人の服を脱がすのは困難なので、明日香と美香は大型のハサミを使って、どんどん服を切り取ってゆく。

最後は右手で押さえている白いブラジャーと、左手で押さえてい

る純白のパンツだけが残った。

「高そうなブランドもんの私服をズタズタにしちゃってごめんね？　もう一生服を着ることもないから安心して……」

そう言いながらブラに手を掛ける明日香。

「や、やめてっ！！　下着だけは脱がさないでよ……」

『ブチブチ……バリッ！！』

明日香が思いっきり引ったくると中途半端に破れながらついにブラジャーが剥ぎ取られた。

思わず両手で二つの胸を押さえて悲鳴をあげている間に……。

「スキありっ！　えいっ♡」

『ズルズル……ストーン』

美香が残された最後の一枚の純白パンツを一気に足首まで引きずり下ろした。

「ひゃあっ！？　いやあああっ！？　返してっ！　お願いお嬢ちゃん……パンツ返してえええっ！！」

「あたしが形見にもらっといてあげるよ」

いじめっこが浮かべる嫌らしそうな笑顔で相田望美の裸を見ながら丸めてポケットに詰め込む美香。

もう胸は放ったらかしで股間だけを両手で押さえて再び泣き出す望美であった。

京介の目が光る。

美人の女子高生の裸を目の当たりにして勃起させながらふくよかな胸を見ながらムラムラしている京介だった。

結局ベッド型ではなく、男の隣に据え付けられている大の字型の磔台に縛り付けていく。

「脚を開きなさい」

美紅の命令に従わず泣きながら抵抗を続ける望美に、莉央が強烈な往復ビンタを数回打ち込んだ。

『パンパンパンパンパンパンパンッ！！』

「ぶひぃいいぃいっ!?　痛ぃいいぃいっ!!」

涙とよだれが左右に飛び散り、鼻血が噴き出す。

「まだまだ足りないかな?」

莉央が冷たく睨みながら大きく次のビンタ体制に入った。

「分かった!　分かったからもう叩かないで……こうですか?」

「う~ん……もうちょっと開いて。この板に足首縛るから。それでOKだよ。よいしょっと」

相田望美は、村山勇太郎の隣に並ぶようにして大の字型の磔台に拘束された。

「あの時美紅ちゃんの恩赦で自殺しなかったこと……即死できなかったこと……後悔させてあげるからね?　12時間たっぷりかけてゆっくり逝かせてあげる」

「ひくっ。ひくっ。いや……いやだああっ!!　死にたくない……わあーん!　わあーん!」

自殺する寸前にまで追い詰められていたとは思えないほどの死に対する恐怖心を見せる望美。

国が用意した拷問道具箱の中には、日本刀やサバイバルナイフ、短銃、ライフル、チェーンソー、金属バット、アイスピック、巨大なペンチや糸ノコギリといったあからさまな凶器や武器から、張り巡らされた鉄の網に電流を流し、電気で蚊を捕るテニスラケットの形をした蚊取り器、ハエ叩き、－８５度の冷気でゴキブリを殺す冷凍ジェットスプレー、キャンプ用の先の長いライター、釣り針に竿とリール……等々普通の拷問ではまず使わないような一般家庭使用物まで詰まっていた。

１２時間丸々使っての長時間拷問……夜の残酷処刑島に相応しいように用意された何十種類もの拷問道具たち。

「では只今より村山勇太郎３０歳と、相田希美１７歳の拷問処刑を執行します。致命傷を避け、出来るだけ朝の8時まで絶命しないよう時間をかけての執行をお願いします」

美紅がそう言うと、莉央も続ける。

「あたしのバッグの中に出血性ショック死を防ぐ血止めの注射と、外傷性ショック死を防ぐ痛みを軽くする麻酔注射、部分的に動けなくする局所麻酔注射を用意してあるので、自由に使ってね？　明日香ちゃんたちも。特殊任務省の命令で極秘に開発された凄い薬だから重宝するよきっと」

「はーい！　でも痛み止めは死なない程度の最小限にしないとね。苦痛を与えるのが一番の目的なんだから♪」

富田美香が一番に返事する。

菅野京介は脚を大きく開かれて拘束されている隣の女子高生の股間を凝視して相変わらずペニスを勃起させていた。

これから幕を開けようとしている本格的な拷問処刑に京介のペニスはどこまで威勢を張っていられるのだろうか……。

少女の後悔……夜の残酷処刑島　（前編）　（後書き）

ついに男女の拷問処刑が始まる。
まだまだ元気の京介だったたが、最後まで残酷でいられるのか？
後編へ続きます。

少女の後悔……夜の残酷処刑島　（後編）　（前書き）

勇気を振り絞り、拷問の開始をする菅野京介。
でも所詮、気の弱い菅野京介以外の何者でもなかった……。

少女の後悔……夜の残酷処刑島　（後編）

「京介さん、初のお仕事ご苦労様です。何か道具を選んで先ず拷問を開始してもらえます？」

明日香に声を掛けられ、ふと我に返る京介。

「あっ！？　え？　あ、はいはい！　道具ね？　どれがいいかな？」

「あの……それと……言いづらいんですけど、京介さんの担当は村山勇太郎ですから。あまり隣の担当の女子高生ばかり見ないでもらえますか？」

必死で拷問道具を探る京介を背後から怒り気味に注意する明日香。

「そうだよお兄ちゃん！　せっかく結城ジムでは『大丈夫ですかぁ？　京介さぁ～ん♡』なんて言いながら両手で握りしめてもらったんだから！　明日香ちゃんの言うことを聞いてくださーいっ！」

「あ、ガハハ！！　そ、そうだな……すまんかった」

右手で頭を掻きながら少し照れてしまう京介だった。

「ちょ、ちょっと！　『さぁ〜ん』とか延ばしてないし！　小説か漫画のセリフにしないと分からない♡マークまで引っ張りだしてきて……勝手に改ざんしないでくれるっ？」

「てへへ……ごめんなさい。でもムキになるところが怪ちい……」

目を細くして明日香を見詰める美香を無視して明日香が京介に話す。

「殺傷力が高い武器や道具は出来るだけ最初から選ばないで下さいね。いくらショック死防止の注射を打っていても、致命傷を与えちゃったらポックリ逝っちゃいますから……たまに私や美香ちゃん早めに殺っちゃう時あるんですよぉ……」

「あ、ああ。分かってるよ。殺っちゃうって……可愛い顔して怖いことさらっと言うね君たちは……。え〜と……俺はこれにするぜっ！　これで身体中叩きまくってやるさ」

「はは……ハエ叩き……お兄ちゃんらしい選択肢だね」

美香が呆れ気味に薄笑いする。

『パァンッ！！』

「いでええっ！！」

京介が本気で勇太郎の裸体をハエ叩きで叩き始めた。
これが凄惨を極める夜の残酷処刑島での第一歩となる。
拘束前の莉央のビンタは起こってしまっていたが……。

隣では武器をまだ使わず、莉央の顔面ビンタと、美紅の腹部への蹴り攻撃が開始された。

『パンパンパンパン！』

『ドスッ！　ドカッ！！　バシッっ！！』

「痛っ！！　ひぎっ！！　んぎゃあああああっ！！　止めてえええええっ！！」

更に激しく泣き叫ぶが、延々とビンタと蹴りは女子高生の身体を少しずつ痛み付けてゆく。
頬は真っ赤になっているが、まだ形は変わってないので、女優の様な綺麗な顔付きは保っていた。

美紅の足の甲が性器を直撃する。
急な恥部への攻撃にびっくりした女子高生の尿道からは、勢いよく小便が飛び散り始めた。

「痛ああぁいいっ！！　酷いよっ！！　そんな大事な所まで蹴らないでよおおお！？」

小便を出し切るのを待って、再び性器への蹴りが入る。
みるみるうちに大陰唇は真っ赤になり、内側の小陰唇のビラビラがヒクヒク痙攣していた。
美紅と莉央はヒクヒク痙攣する小陰唇が面白くて、しばらく眺めていた。

「股間のどこをヒクヒクさせてるの？　おねーさん」

正面に立って、莉央が問い掛ける。

「んんん……いたたたた……どこをって……言われても。私には自分のアソコなんて見えないから」

『バキッ！！』

『ボキッ！！』

「ぐえっ！！！！」

かなり力を込めた正拳突きが相田希美の鼻っ面に入った。
エグい音を立てて鼻の骨がへし折れる。

ドボドボと大量の鼻血が再び噴き出した。
ビンタのときとは比べ物にならない激しい鼻血だった。
更に顔面を左右のパンチでタコ殴りにする莉央。
頬の骨と顎の骨も数ヶ所ヒビが入った。

「ほぎえええええっ！？　やめれえええええっ！！」

舌も少し噛んで変な言葉を叫びながら口からも血を流す希美。
ハエ叩きで男の身体中が真っ赤になるくらい叩いて、叩き過ぎて疲れて休憩しながらチラチラ莉央の方を見ている兄の京介。

『ひっでぇ……我が妹ながら血の気が引くぜ相変わらず……何で容赦なくあんなに酷く拳で女子高生の顔面殴れるんだ？　怖すぎるぞアイツ……』

ずっと見ていたらまた明日香に怒られるのですぐに明日香の責めに視点を戻す京介だった。
明日香の選んだ責め……それは大型のペンチでの爪剥がしだった。
手首を縛られた上に、指は伸ばしたままで一本一本縛られていたため、抗うことも出来ない村山勇太郎だった。
狂ったように絶叫をあげるが、お構い無く明日香は右手の小指、薬指、中指、人差し指、と順番に剥がしてゆく。

一枚に一分くらいかけてゆっくりゆっくり剥がしていった。

『これもヒッデェェ……見てるだけで金玉が縮み上がるぜ！？　ピンク色のパンツ履いた可愛い明日香ちゃんが何でこんな酷いことできるんだ？　莉央から聞いてはいたけど……信じられないぜ……莉央のせいだなこれは……アイツの冷酷さが移ったに違いねえ……うっ。吐きそう……もう無理だ。下を向いていよう……』

京介は両手の爪剥がしさえ最後まで見ることができなかった。

数分後、明日香の足元には１０枚の両手全ての爪が剥がし落とされていた。

声が渇れるほどの絶叫も延々と続けば慣れてくるのか、ビビリの京介も絶叫に対しては以外と平気にさえ思ってきている。

「止めてくれっ！　痛すぎる……許してくれっ！！　何でもするっ！！　痛いいいいっ！！」

痛みの余りに強く閉じられた両目からは涙が溢れ出していた。
人を傷つけるのには慣れていても、傷つけられることには慣れていない勝手な男の派手な涙であった。

血まみれの大型ペンチを持ったまま振り返り、美香に質問する。

「さ、美香ちゃんの出番だよ。何を使うのか決まった？」

「テニスラケット型の電気式の蚊取り器！　これって乾電池式のくせして指に当ててみたらムチャクチャ痛かったの！　これを延々と身体中にやられたら地獄だよ？　あはは♪」

「随分と可愛い地獄だね美香ちゃん……」

「さすがロリコンファンが好む美香ちゃんだ！　可愛い拷問をするぜ全く！　ガハハ！！　ちょっと俺の指に電流当ててみてくれよ？」

「いいよ。はい」

『バチイッ！！』

「げはあっ！！？？」

予想を遥かに上回る激痛に思わず大声をあげてしまう京介だった。

「いで……いってえええええっ！？　こんな痛えのかこのオモチャみたいなの……」

「だから言ったでしょ？　指先でこれだけ痛いんだからあんな所やこんな所に当てられたら……てへっ♪　こいつイッちゃうかもねっ♡」

左手の指先を押さえたまま、いまだに残る痛みと戦っている京介に明日香が声を掛ける。

「大丈夫ですか？　オモチャみたいなのに……そんなに電気痛いんですか？　アレって……」

「外傷が残る様なもんじゃねぇと思うけど……半端なく痛いぜ？　まだ指先ヒリヒリしてるし……」

明日香に爪を剥がされた指先にあてがう美香。

『バチイッ！！』

「がはあああっ！！　いってええええっ！！」

指先をプルプルさせながら絶叫する勇太郎。
一本一本全ての指先に電気を当ててゆく。
ブルブル震えながら顔をしかめて泣き続ける３０歳の男。
京介も明日香の爪剥がしに比べれば、見た目の残酷さはまだマシだったので、どうにかまともに電流責めを見ることが出来た。

「綺麗に皮が剥けてる大人のチンポだね……」

スケベそうな笑みを浮かべて男のペニスを見詰めながら、蚊取り器を近付けてゆく美香。

『嘘だろっ！？　指でもあんな痛いもんチンポになんか当てられたら……ひええっ！！　止めてあげて美香ちゃん……』

心の中で一人悲鳴をあげている京介に構うことなく（聞こえないので当たり前だが）村山勇太郎のペニスの亀頭部分にヒットするラケット型の蚊取り器電流。

『バチバチバチバチバチバチィッ！！』

しかもすぐに離さない当て続ける連続アタック……。

「んぎゃあああはああああああああっ！！！！」

悲鳴も無茶苦茶に長いこととなった。

『見ちゃいられねえ……痛すぎんぜあれは……』

再び目を逸らしてしまう京介。

１０秒くらい連続で電流を流し続けられた男のペニスからは血の混じった小便が噴き出した。

「きゃっ！？　ラケットにオシッコ付いちゃったじゃない……舌で綺麗に舐めてもらわなきゃだね？　はい。あーんして舌を出してオッサン」

舌にも電流を流される恐怖を感じた勇太郎は強く口を閉じ、意地でも開けようとはしない。

再びペニスに当てて電流を数秒流し続ける美香。

「ふんぎゃああああっ！！」

ついに諦めて口を開け、震えながら舌をゆっくり出してゆく３０歳の男。

もしかしたら舐めるだけで勘弁してくれるかもと言う微かな希望的な予測とともに……。

当たり前のように舌に与えられる強烈な電撃。

あわてて舌を引っ込めるが、唇や鼻や耳に無差別電流攻撃を開始して苦しむ様子を楽しむ美香だった。

あっち向きこっち向き逃れようとするが、首が拘束されているため所詮は美香の射程距離だった。

仕上げに左手でペニスを掴んで上に持ち上げ、無理矢理キンタマ袋にまでラケットを当てて電流を流した。

「隠れててもダメだよ？　ドキンタマちゃん♡　それっ♪」
流される電気の中で、陰嚢のシワが動きまくり、内部の睾丸を必死で守ろうとしている。
「あははっ！　電気流されてキンタマ袋が勝手に動いてるぅ♡　気持ち悪いなぁもう♡」
声が渇れてもまだ叫んでいる声が哀れすぎて仕方がない京介だった。
一方隣では両乳首に釣り針を貫通させられて、竿を持ってリールを巻かれている女子高生がいた。
「大物だね？　美紅ちゃん」
「そうだね。でも強く引っ張り過ぎると千切れてバラしちゃうから慎重にリールを巻こうね♪」
「痛い痛い痛い～！　えーん、えーんっ！！」
泣きわめく女子高生に構わず竿を軽くシャクったりリールを巻いてはドラグで糸を出したりして乳首とのファイトを楽しんでいる。
乳首からドクドクと血が流れてきて、全ては開かれた陰部の陰毛部分が吸収している。

飽きもせず二人で一時間以上引っ張り糸を出したりして乳首を苛め抜いた。

「ぼちぼちフィニッシュだね美紅ちゃん」

「もう相手も弱ってるから一気に釣り上げちゃおうか？　それえっ！！」

「えいっ！！」

美紅と莉央はドラグを最強に閉めて、一気に後方へ竿を振り上げた。

『ブチブチッ！！』

「ひぎゃああああっ！？　いだいいいいいいいっ！！」

見事に釣り針に引き千切られた二つの乳首からは数センチ血が噴き出した。
後はドクドクと胸、お腹を伝って股間へ流れてゆく。
陰毛で吸収しきれない血液は、蹴り上げられて真っ赤になったクリトリスと小陰唇、膣口を伝いながら、肛門まで伝い、地面に落ちていった。

「結局千切れてバラしちゃったぁ……残念だったね？　莉央ちゃん」

「そだね。釣りも難しいなぁ。ちょっと美香ちゃんが使い終わったテニスラケット型の電撃器で千切れちゃった乳首に当ててみようかな……ほら」

『バチバチバチバチバチバチバチバチバチバチバチイッ！！』

「あぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃああああっ！！」

１０秒ほど連続で電気を流す莉央にたまらず叫び続けるしかない相田希美。

片方の流血中の乳首にも同じくらい電気を流す。

バチバチと火花が散る度に小便がピュッ、ピュッっと飛び出す。

「美紅ちゃん……今このおねーさんのオシッコ……あたしの太股に掛かったんだけど？　もう殺していい？」

「ダメダメー！　まだ3時間も経ってないよ？　朝の8時までの12時間たっぷり使わないと……渇れた涙も何度も噴き出させてやるんだから♪」

「そーだよねー。それもそうだねー。このハエ叩きも隣は使用済みだから……えいいえいっ」

ハエ叩きで、釣り針に引き千切られた血まみれの乳首をパンパン

叩きまくり始める莉央。
１０回くらい右乳首を連打すると、左乳首にまた連打……。
１００回ずつ両方のオッパイに２００回連打を加えた。
激しく叫びまくるがかなり本気で叩き込んだため、両乳房は赤から紫に変色して、紫色のブラジャーを着けているように見えた。

「もうオシッコ飛ばさないの？　今度あたしにヘリ掛けたらスッゴい地獄をみせてあげるのに……」

「あはは♪　莉央ちゃんってば、ヘリ掛けられなくても強烈な生き地獄を味わわせてあげるのによく言うよ」

「てへっ。まぁね。一応そう言ってみたかっただけなんだけどね」

美紅は人の首を切断出来るほどの大きさのサバイバルナイフを木箱から取り出して、刃の側面で左手の掌をパンパン叩きながら相田希美に近寄ってゆく。

「少しずつ解剖していっちゃおうかなボチボチ……ふふ♡」

恐怖に引き吊る女子高生の右の乳房を左手で根元から鷲掴みにすると、右手のサバイバルナイフを上から斜め下にスッと引いた。

『ズバッ……ぱくんっ』

乳首どころか乳輪ごと切り取る美紅。

半分ほどの面積の乳房が一瞬で奪われた。

本日で最大クラスの絶叫が夜の残酷処刑島に響き渡るが、ここにいる人間以外には誰にも聞き取ってはもらえなかった。

かなり大量の血が流れ出してきたので、死ねないように莉央は血止めの注射を両側の乳房の根元に打った。

ついでに肩や肘、膝や足首、腹部背中と、あらゆる箇所に注射を打つ。

鬼頭美紅の、相田望美への拷問処刑に対する躊躇を理解していた莉央は、かなり多目に痛み止めの注射も打つ。

かなり切り刻まれて全身が凄惨な見た目になっても、見た目以上に苦痛が和らぎ、幾分楽に死ねるレベルだった。

「気が早いなあ莉央ちゃん」

「最後はバラバラのグチャグチャになるんだから……その瞬間まで死なれちゃ困るからね。今回は記念すべき初の夜の残酷処刑島だから」

「はは。それもそうだ」

『ガツ……グニュグニュ』

残った左側の乳房を荒々しく揉みしごく美紅。

「痛いいいっ！！　もう止めて許してええっ！！　わーんわーん」

「あの時飛び降りなかった事……後悔してきたかな？　もう遅いけど。女に生まれてきて最後の乳房を激しく揉んであげるね？　ほらほら」

グニュグニュグリングリンと激しく揉みしごく度に切り取られた右側の乳房と千切れた乳首からはドクドクと血が流れ出る。

薄い黄色のリンパ液みたいなものも流れ出ている。

血止めの注射が効いてきたのか少し出血が減少したのを確認して再びサバイバルナイフを上から斜め下に一気に引いた。

ワンテンポ遅れてから血がドボドボ溢れ出してきた。

真っ赤な切断面の肉片が処刑人たちの前に晒される。

「さすが美紅ちゃん！　あたしならそのサイズのナイフだと二回か三回は引かなきゃオッパイ切断出来なかったよきっと」

「コツがあるんだよねナイフって……莉央ちゃんは名医の様なメス捌きがあるじゃないの？」

テーブルの上にお皿が用意されており、切り取られた部位は、いつもの様に地面に捨てて足で踏み潰したりせず、お皿の上に置いて

ゆく事にしていたため、両方の女子高生の乳房は、真っ白い丸いお皿の上に一つずつ置かれた。

「今回はみんなで肉片集めだよね？　美紅ちゃん」

「そう。死刑囚の男女を料理して、お互いの体の部位を食べ合ってもらうの。血が繋がってあの世でこの二人が結婚出来るかもね？　あははは♪」

隣でチラ見している京介に強烈な吐き気が襲った。
切り取られた後のパックリ開いた二つの胸をモロに見てしまったからである。

もはや血まみれの女子高生に対して勃起対象ではなくなってしまった。

「うう……処刑する前にレイプでもさせてくれるかと思ったのに……こりゃもう無理だな……うっ。マジ吐きそう……ううう」

目の前の男の方に集中して視線を戻すと、美香の持ち歩いている幅５ｃｍ、長さ２０ｃｍのペニス模型（張り形）を振り回しながら男の腹をポンポン叩いている美香が目に入った。

「ねぇねぇオッサン！　人生最後だから本来タブーだけど気持ちよくさせてあげるからね？　このチンポの模型で♡」

「美香ちゃんに前立腺扶ってもらって人生最期の射精させてもらいなさいね……」

明日香が冷たく話し掛ける。

がに股になるように膝を外側に曲げて、少しでも股を開けさせる美香。

強引に股を開かせるため、京介に頼む。

「お兄ちゃん、この体勢で太股縛って！」

「お、おう。分かった！」

「いてて……止めろ！　足首真下で縛ってるのに膝曲げられたら足首痛いじゃないかっ！？」

曲げた分だけ上に上がろうとするので、確かに足首が激痛だった。あまりに痛がるので……とゆうか無理があったので足首は一度ほどいて、股を開けさせる様に工夫して縛り直した。

「ありがとうお兄ちゃん。このオッサン、一回は射精させたいからローション塗ってスムーズに入れたげるね！　おじゃましまーす♡」

『ズズ……メリメリ……ぶちぶち』

「うぎゃあああっ！！　痛いっ！　ワシは切れ痔なんだっ！　止めてくれえええっ！！」

元々裂けていた肛門括約筋が更に裂けてブチブチと音を立てながら押し拡げられてゆく。

「おっ！　力入れてるな？　オッサン！　負けないぞぉっ！！　よーいしょっとぉ♡」

『ばちゅうっ！！……バリバリ……ぶちっ！！』

肛門のヒダヒダは殆ど裂けて、S状結腸も突き破いた。

美香の腕力でも腸を簡単に突き破れるように、張り形の先端を少し鋭利に加工していた。

ここで活躍する痛み止めの注射と、血止めの注射。
特殊な薬でよく効く莉央が愛用している薬だった。
明日香は、早速莉央から借りてきて男の全身に打ちまくった。

「余りに打ち過ぎたら痛みを殆ど感じなくなっちゃって拷問の意味なくなっちゃうから気を付けてね！　明日香ちゃん」

「加減が難しいんだよね〜。莉央ちゃんは苦しめながらも、射精させるってゆう絶妙の量を打てるから凄いよ」

「はいストップ！　それ以上打ったら痛覚麻痺しちゃうよ？　明日香ちゃん」

隣でチラ見していた莉央が明日香に加減を教える。

周りへの配慮が出来る莉央だった。

『ズボッ！　ズボッ！　グチュッ！　グチュッ！』

ドクドクと肛門から血が流れ落ちる中で、激しくピストン運動を繰り返す美香の右手だった。

「うぎゃあああっ！！　いでででで……うう……あっ、うおお……んん」

腸を突き破られた激痛で苦しんでいた男も薬が効いてきたのか気持ちよく感じだしてきていた。

やはり前立腺は男の性器の一つである。

みるみる内に勃起してゆく村山勇太郎のペニス。

「俺に任せとけっ！」

何でもアリの京介はイキリ立つイチモツを見ていると、押さえきれなくなってきていた。

「オラオラオラオラ～！　たっぷり出せよオッサン！」

「え？　京介さんって…………。やっぱ莉央ちゃんの言ってた事本当だったんだ……」

「莉央ちゃん何て言ってたの明日香ちゃん？」

「幼児や少年だけじゃなく大人の男にも性的興奮できる何でもアリの変態に進化した……って言ってたの」

「へぇ～。まぁ同性を手でイカすぐらいなら許してあげてよ？　ねぇ？　あたしたちもたまに女の人イカせたりするじゃん？」

ズボンを脱ごうとしている京介に、珍しく敏感に反応する美香が咄嗟に言葉を投げ掛ける。

「お兄ちゃん！　自分のアナルにコイツのチンポ入れようとしてるでしょ！？　ダメだよそこまでやっちゃ！　明日香ちゃんに嫌われちゃうからっ！」

あまりのビンビンのチンポに我を失い、自分の肛門に入れたくてウズウズしていた京介は、無意識にパンツまで脱ごうとしていた。

美香に諭され我に返る。

明日香にはギリギリ聞こえない声量での会話だった。

「あっ！？　お、おうっ！　そうだな！　みんな見てる前で入れられる……のは恥ずかし過ぎるよな？　あ、ありがとう美香ちゃん……」

『シコシコシコシコ！！』

「ううっ！　イク……何で男なんかにシゴかれてイカなきゃなんねーんだ畜生っ！！　うわあっ！！」

『どぴゅっ！！　ドピュピュピュピュピュウウッ！！』

美香のアナルからの前立腺責めが気持ちよすぎて、迂闊にも男の京介の手コキで射精してしまう哀れな変態ではない男、村山勇太郎であった。

「うわあっ。イッパイ出たね♡　あたしの張り形ピストンで直腸ズタボロになってるはずなのに……莉央ちゃんの持ってる薬は凄いよやっぱ」

美香はそうはしゃぎながら２０ｃｍ全て飲み込んでいる肛門から一気に引き抜く。

『ぼこおっ！』

凄まじい量の血液と腸液が噴き出すが、薬のお陰で直ぐに治まった。

「くそう！　何でこんな目に遭わなきゃなんねーんだっ！！　お前ら絶対ぶち殺してやるからなっ！！」

よほど悔しいのか30のオッサンは涙を滲ませていた。

「怖いこと言うからこうしてやるっ」

ー85度の凍結ジェットスプレーを男の足首に吹き掛ける。
10秒……20秒……30秒……ほんの数秒なら痛みくらいで済むが、これだけ長時間吹き掛けられたら当たり前だが凍傷になり、細胞は壊死してしまう。

そのまま明日香は、両手首と両足首を一分ずつ吹き掛けていき、四ヶ所を壊死させた。

これもまた余りの激痛で、ついに涙を流して泣き出す村山勇太郎。

続いての数時間は、死刑囚の男女共に金属バットでの手と足限定のタコ殴りだった。

代わる代わる金属バットで殴り付ける……もう夜中の3時が回っていたが、ひたすら殴り続けられた村山勇太郎と相田希美の手足の

骨は殆ど粉砕骨折してしまった。
痛み止めのお陰で外傷性ショック死もできないが、痛みはかなり激痛レベルだったので、この世の地獄絵図だった。
縛り付けられたままでも、あらぬ方法にひん曲がっている関節は見ていても滑稽だった。
二人合計では１００ヶ所を超えるほどの骨折。
夜明け前の残酷処刑島に声が渇れきって動物の断末魔のような叫び声が響き渡り続けた。
先端が長いライターを点ける美紅は、希美の足元にうんこ座りで踞る。
「生きたまま……焼いちゃおうか？」
「えーんえーん……痛い……痛い……痛いよぉ痛いよぉ～！！」
全身の痛みが激しすぎて美紅の問いに応えられない。
「食べるときに美味しくなるようミディアムでお願いしまーす♡」
莉央が舌なめずりしてピンと立てた人差し指を左右に振りながらお願いする。

「うん！　任せといて♪」

「ひいっ！？　止めて！！　お願いだから焼かないでっ！！　どこを焼くつもりなのっ！？　やだっ！！」

我に返りライターの火に気付いた希美は必死で嘆願するが、一直線に美紅の手は股間に迫ってきた。

「どこって……ここに決まってるじゃん。マンコの残酷焼き♡　いい声聞かせてね！　ほお～ら。焼いちゃうよぉ～♡」

『じゅ……じゅううう』

「ふんっぎゃあああああああっ！！！！」

この度の拷問処刑では最大級の絶叫が響いた。

声は渇れてるはずだが記録更新……生きたまま焼かれる激痛は想像を遥かに越えるものがあるだろう。

アワビの残酷焼きなど気楽に食べてもいいものではない筈だ。

しかし莉央の心遣いで痛み止めをかなり多目に打たれていた望美は、激痛を感じているとはいえ、通常よりまだまだマシなレベルだった。

ある意味アワビの残酷焼きであるこの刑は３０秒ほど続いた。

真っ黒な煙が希美の鼻を直撃し、激痛と煙で意識を失い、白眼を剥いて泡を噴いていた。

「おお……小陰唇と膣口に狙いを定めて焼いたから……小陰唇がほどよく焼けたみたいよ？　マンコ全体が溶けてドロドロ垂れてきてる♡」

『くぱっ』

美紅はライターを置き、人差し指と中指を軽く火傷している大陰唇に押し当て、一気に左右に開いた。

煤で黒くなってはいたが、小陰唇には火が通り、引っ張ると簡単に千切れた。

両側の小陰唇を千切り取り、お皿の上に置く。

「クリトリスはあたし……生で食べてみたい」

「えっ？　莉央ちゃんが！？　これは男の死刑囚に食べさせる女の身体なのに……ま、いいか。莉央ちゃんがそういうならクリトリスくらい食べてもお腹こわさないでしょ。生でくり貫いたげる」

「あたしにやらせて！」

メス捌きは莉央の方が長けていたため、サッと美紅が退いてあげる。

「ほうらお姉さん……クリちゃんの皮剥いたげるね？　くり貫くのに邪魔だから♡」

左手の親指で、被っている皮を上に押し上げ、生の陰核を剥き出しにする。
さらに的確にメスを突き入れ、クリトリスをくり貫いてゆく。
気を失ってはいるものの、小刻みに内股をヒクヒクさせる希美。

「スッゴいメス捌きだね莉央ちゃん！　関心するよ」

「ありがとう！」

見事にくり貫かれたクリトリスも、皿の上に乗せられる。
膣口に中指を突っ込んで、掻き回してみると、少し生焼け状態だった。

「うーん……まだグチュグチュしてるなぁマンコの中身……もう少し膣内を焼いてくれるかな？　目が覚めても耳が痛くならないように猿轡かましておくから」

「うん。分かった」

『じゅううううう……』

「んんんんんんんんんんんっ！！？？　ふぐうううつんんんっ！！！」

猿轡のせいで、絶叫も全く迫力はないが、目覚めてしまった希美は阿鼻叫喚の地獄を味わっているのには間違いなかった。
白眼を向いた目からは、大量の涙が溢れ続け、内股を猛烈な勢いでヒクヒクさせている。
これにはさすがに隣の男を拷問している明日香と美香も手を止めて見入ってしまっている。
菅野京介も、怖いモノ見たさ的にチラチラ覗いていた。
「明日香ちゃん……隣……マンコ、焼かれちゃってるね……無茶苦茶痛そう」
「そだね。これは白眼を剥いて泡噴いても足りないくらいの激痛じゃないかしら……」
「おっ！　おえええええっ！！」
ついにチラ見しただけで嘔吐してしまう京介に明日香が背中を擦る。
「もう京介さんは何もしなくていいですよ？　横になっててもらっていいです」
「あ、あぁ。済まない……後は可愛い顔した悪魔っ子ちゃんたちに任せるわ……」

そう言いながらベッドで横になる京介。
もう恐怖で動く気力さえ失われていた。

「お兄ちゃんには優しいなぁ～♡　明日香ちゃんはさー♪」
「優しいとかじゃなくて……これだけ慣れてないと可哀想だよ？」
「それもそーだね。あたしたちは元々残酷な気性を持ってたみたいだけど……お兄ちゃんは根は優しいんだろーねきっと……」

菅野京介……初めての残酷処刑島での任務。
性器の残酷焼きにてギブアップ。
ついに寝込んでしまうのであった。

しかも自分の担当ではなく、盗み見での大失態であった……。

メスを深く突き入れ、大陰唇、膣口、膣内をくり貫いて抉り取る莉央。

ついでに尿道口からメスを入れ、くり貫かれた陰核のあった部分を上部へ切開し、被っていた陰核の皮も真っ二つに切り裂きながらお腹を切開してゆく。
ついに子宮も卵巣も抉り出した。
お皿の上には、膣口と内部の膣内、更に子宮、卵巣までもが置か

れた。

「子宮も刺身で頂こうかな……」

「莉央ちゃんってカニバリズム持ってたのね……」

「蟹がリズム取る？　え？　ワタリガニは大好きだけど……」

いよいよクライマックスが迫ってきたことを把握した美香が、日本刀を手にとって抜刀する。

明日香は男の雁首に釣糸を巻き付け、平行に引っ張る。

「日本刀と言えばペニスちょん斬り刑だよね！？　これで斬り易いでしょ？　美香ちゃん」

「あたしがお願いしたかったこと直ぐに理解してくれる明日香ちゃん！　さすがだわ！　ほんと大好きっ♡」

「莉央ちゃんの次にでしょうけどね……」

「え？　何か言った？」

「いいえ、何にも。どうぞ！　根元からスパッと落としちゃって♡」

「うん！　このアイドル天使の美香様が、死ぬ前に男としての人生に引導を渡してあげるからねっ！」

そう言いながら日本刀を振りかぶる美香。

「ひいいっ！？　止めろっ！！　止めてくれえええっ！！」

『ヒュンッ！！……スパッ…………ポトリ』

「ぎぇえええええええっ！！　ひぎいいいいいいっ！！！！」

見事に切断された男のペニスは、見事に的を外れ、根元からではなく、雁首にヒットしていた。

「ごめーん。手元狂っちゃった。てへっ♡　もう一回ねっ？」

ペニスからの流血で血まみれの日本刀をくるくる回しながら舌を出して可愛く笑う美香の笑顔は天使のように可愛いかったが、村山勇太郎にとっては地獄に住む鬼、畜生、修羅の類いにしか映らなかった。

「痛ああああっ！！　も、もう一回だとおっ！！　ふざけんなっ！！　いでえええええええっ！！！！」

「根元から落とさないとね……えいっ！」

『ヒュンッ！！……ザシュッ！！』

先程の一振りがわざとかと疑うほど見事にお腹ギリギリの根元部分からペニスは切断された。
ついでに斬られた陰毛が数本宙に舞う。

『ポトリ……』

「やったあっ！！チンポ見事に切り落としちゃったよ！？明日香ちゃん！！」

「あはは。そうだね。亀頭と胴体に別れちゃったけどね……」

そう言いながら二つを拾い上げて、お皿の上に乗せる明日香。
あまりにうるさいので、男の方にも猿轡を嵌める明日香。

「さてと……うるさい口も塞いだし。次は金玉抉り出しちゃおっか？」

「そだね。明日香ちゃんがやって！あたしは陰嚢拡げて持ってるから。糸鋸で真ん中から切り裂いたら生の金玉飛び出してくるよ？」

時間をかけて、糸鋸で金玉袋を切り裂いてゆく明日香。
ほどなく白い生の睾丸が二つとも飛び出してきた。

「やだっ……いつ見ても、ヤラしいなぁ生の睾丸って……」

かなり照れながら精管と神経の管を引きちぎる。
管を切り取らずに、引きちぎる所が明日香の残酷な所だった。

二つとも引き千切ったあとで、残った精管や、神経を綺麗に睾丸本体から切り離し、皿の上に乗せた。
ふと男の表情を確認すると、女と同じく白眼を剥いて、泡を吹きながらかなり痙攣していた。

そして夜が開けた。
午前7時……。
残酷処刑島での拷問処刑はクライマックスを迎えようとしていた。

『ギュイイイイイン！！　ザクザク……バリバリ』

『ギュイイイイイ……ザシュザシュッ！！』

美紅のチェーンソーが、相田希美の両手足を根元から切断した。
同時に美香のチェーンソーが、村山勇太郎の両手足を根元から切断する。

それぞれ莉央と明日香が、首付きの胴体を抱え上げて、ダルマ状態の二人をベッドに寝かせた。

ここで大出血サービス中の切断部分の全てを包帯でキツく縛って血止めをして、拷問の休憩が入る。

その間に先程切り取った男性器と女性器を、まな板の上で調理する美紅だった。

「莉央ちゃん！　亀頭部分の輪切り刺身と、胴体部分の塩焼きと睾丸の煮付けができたわよ？」

「はーい」

ダルマ女の希美の前に運び、ペニスの刺身を醤油を付けてあげてから口元へ運ぶ莉央。

猿轡はこのタイミングで外してあげた。

「はい、あーん。男性器のお刺身だよぉ♡　お食べっ♪」

「んんっ！　パクンッ！！　……ムシャムシャ……ゴクン」

「どう？　薄く輪切りにしてるから食べやすいでしょ？　美味しい？」

「ううう……ぐす……ぐすん……お、美味しかったです……」

もう四肢切断された上、この世で最後の晩餐だと理解していた相

田希美は開き直って、隣の男の陰部を味わいながら食べてしまっていた。

「次は睾丸の煮付けだよ。あーん」

「んあっ……パクンッ。ムシャムシャ……」

「美味しい？」

「はい。なんか繊維みたいなものが舌に絡み着いて……何か飲み込みにくいです……」

「せっかく料理してあげて食べさせてまでしてあげてるのに飲み込みにくい？　あんたの直腸今から抉り出して、うんち付いてるままで刺身で食べさせてあげようか？」

莉央は、食事用のナイフを相田希美の肛門に突き刺しながら脅しかける。

「ひぃっ!?　痛いよぉ……ごめんなさいごめんなさいごめんなさいっ!!」

『ズブッ！……ズズズズズ……ぐりりっ！　べちゃっ!!』

器用に肛門と直腸を食事用のナイフで抉り取った莉央は、それらを鷲掴みにして本人の希美の口に強引に捩じ込んだ。

「あーん。あんたの肛門と直腸だよ？　食べろ！」

「むぐうううっ！？　いやぁっ！！　臭いいいっ！！　んぐんぐ……モグモグ……ゴックン！！」

「よく飲み込めたねぇ？　臭くて汚い自分の肛門と直腸なんて……うんちまみれだったけど？　あはは♡　もう最後の晩餐だもんね！　哀れな女だね？　希美おねーさんは♡　あとチンポの胴体部分の塩焼きも残さずお食べなさいね？　うふふ♡」

忙しく包丁で捌く鬼頭美紅が、次に相田希美の性器の刺身とミディアム焼きを皿に盛り付けてゆく。

今度は明日香が村山勇太郎の前に運んでいった。

「オジサン……隣の女子高生の小陰唇のミディアム焼きと、膣の刺身です。乳房の煮付けと、子宮と卵巣の酢の物もあるよ？　はい、あーんして♡」

猿轡を外してから口元へ運ぶ。

「ふご……ふご……」

四肢切断された余りのショックで半狂乱になってしまっている勇太郎であった。

美香が無理矢理口を抉じ開ける。
そこへ手で掴んだ希美の生焼け状態の小陰唇を突っ込む。
「んごおっ！？　モグモグ……ゴックン！！」
「どお？　可愛い可愛い女子高生のマンコ焼きだよ？　美味しい？オッサン……」
「カパカパカパカパ……」
半狂乱になっている勇太郎は、口を開けたり閉じたりしながら股間を開いたり閉じたりし始めた。
「……やだ。太腿から切断された短い脚を開いたり閉じたりされたら……肛門丸見え♡　なんかヤらしいよ？　苛めたくなって来ちゃった……えいっ」
美香は衝動が抑え切れずに、裂けてぱっくり開いてしまっている肛門に指を突っ込んだ。
更に手首、肘まで突っ込んで直腸から大腸から小腸までグリングリン掻き回した。
『ぐちゃぐちゃ……ぐちゅちゅちゅちゅちゅう〜』
「ぴぎいいいいいっ！！　助けて……許して……もう殺して……ぐれ

ぇ」

「何キモいこと言ってんの？　オッサン……生温かくて、ヌメヌメしてて……何かヤらしいケツマンコしてるねぇ？　うふふ♡　このまま内臓全て引きずり出してあげようかな？　あはは♡」

「ふんぎきいいいいっ！！　あひあひあひっ！！」

美香の腕を肛門から捩じ込まれたままで狂ったようにお尻を振りながらよがり出す村山勇太郎だった。

すでに気が狂っていた。

「はい。女子高生のクリトリスだよ」

莉央の前に運んでくる美紅。

「ありがと。美紅ちゃん」

「ホントに食べる気なの？　莉央ちゃん」

「……うん。一度マンコか陰核は食べてみたかったの……男のペニスもだけど」

「そうなんだ。感想聞かせてよね？」

「いいよ。じゃあ頂きます……希美さん」

四肢切断されて、狂ったように自分の肛門と直腸を噛んで飲み込み終えた綺麗な女子高生、相田希美がいた。

「パクン……ムシャムシャ……ペッ！！」

「あっ！？」

ビックリする美紅。

莉央の吐き出したクリトリスは、相田希美の頬にへばりついた。

そのクリトリスを掴み取り、相田希美本人の口の中へ捩じ込む莉央。

「何かしょっぽくてオシッコ臭かったからやっぱり止めとくよ。持ち主のあんたが食べろ！　ほら！」

「んぐうう……パクン……ムシャムシャ……ゴクン」

「ごちそうさまでした！　でしょ？」

「ご、ごちそうさま……でした」

「よろしい。もうぼちぼち8時だね。長時間苦しんでお疲れ様でし

た希美さん……何か言い残すことは？」

美紅も莉央に続ける。

「苦しめちゃってごめんなさい……生まれ変わってきたら優しく抱きしめてあげるからね？」

「………無茶苦茶酷いことされ続けてとても痛かった……苦しかった……でもこれは当然の報いだったんだよね？　思い知らせてくれてありがとう。後悔もしてるけど死ぬ間際の今となっては……ありがとうとしか言えない……ぐす……ぐす……えーんえーん！！」

そこまで言って急に号泣し始める相田希美。

「トドメは美紅ちゃんだね。この人だけは……」

「分かってる……この子には……かなり多目に痛み止め打ってくれてありがとね」

「ん？　へへ……バレちゃってたか……」

「ここまでバラバラに解剖されて最後の反省の言葉が言えるのはおかしいもん……」

サバイバルナイフを掴んで四肢切断されて小さくなっている相田

希美の元へ歩み寄る美紅。
ゆっくり抱き締めて頭を数回撫でてあげた後、そっと囁く。

「トドメをさしてあげるね。さようなら希美さん……」

「うう……お世話になりました。ぐす……ぐす。さようなら」

次の瞬間、美紅のナイフは目にも止まらないスピードで左右に動き始め、あっというまに喉をかっ捌いてゆく。

『ズバババババ！！』

「ふんぬうっ！？　うごごごごおおっ！！　ごぼごぼっ！！」

『ブシュウウウウッ！！』

二本の頸動脈から噴水の様に数メートル噴き出す鮮血。
食道まで斬り進むと、ゴボゴボと血の混じった苦しそうな呼吸が響いてきた。

サバイバルナイフを素早く首の後ろに引き抜き、力強く何度も叩き付ける。
ほどなく脊椎が叩き折られ、透明の脳脊椎液が数センチ飛び散った。
その瞬間、相田希美は苦痛とは無縁のデスマスクに変わる……。

正に絶命する寸前、相田希美の顔は安らかに微笑んだかのように見えた莉央であった。

村山勇太郎の方は……半狂乱で短い手足をバタバタさせながら笑い転げていた。

「最低の人生を生きたオジサンも……やっと安らかに眠れる時が来たよ？　みんなして苛めちゃってごめんなさいね？　ほら、これをお飲み……」

『ズブッ！……ずぶぶぶぶ』

哀れに思った明日香が日本刀を握りしめ、ゆっくり男の肛門へ差し込んでゆく。

「ふぎゃっ！？　んぎひひひいっ！？　ゲボハハハァッ！！」

訳の分からない奇声をあげながらも明日香の日本刀はゴールである口を目指してどんどん内臓を突き破りながらめり込んでゆく。

「生まれ変わってきたら親孝行するのよ？　さようなら」

『ザシュッ！！……ブシュシュシュシュシュウウウウッ！！』

ついに明日香の日本刀は、男の肛門から口まで貫通した。

口と肛門から激しく血が噴き出す。

力任せに日本刀を大きく前後や上下左右に掻き回した為、内臓はグチャグチャになり、心臓を破壊した。

その瞬間、村山勇太郎は目玉をグルグル回転させた後、白眼を剥き激しく痙攣しながら……ついに息絶えた……。

午前８時……ほぼ完璧な時間活用で拷問処刑は完遂した。

目覚めた京介は、二人の無惨な遺体を見て再び激しく嘔吐する。

「ん？　解剖された家畜動物みたいな肉塊が二つ……げはっ！？ごほっごほっ！！　おえええええっ！！」

「大丈夫ですか？　よしよし」

そう言いながら京介の背中と頭を擦ってあげる明日香。

女子小学生の明日香に背中を擦られ、頭をよしよしされながら嘔吐を続ける京介を呆れ顔で見つめる妹の莉央と、ロリコンアイドル天使の美香だった。

残酷処刑島に新たな骸がまた二つ……加わることとなった。

少女の後悔……夜の残酷処刑島　（後編）（後書き）

ついに残酷処刑島始まって以来の夜の執行となった。

夜の執行は１２時間かけて処刑すると言う、残酷極まりないルールがあった。

この度処刑された二人には、心からお悔やみ申し上げるしかない……。

禁断の恋（前書き）

以前宮垣咲良に卑怯なリンチを行い、折檻のために子宮を抉り出して去勢した指原理子の経過を心配した莉央たち。

京介の運転で、再び極北女子中学校へ向かうのであった。

禁断の恋

１０月になり、少し暑さも和らぎ過ごしやすい季節となった。
食欲の秋、運動するにも秋、とゆうことで一人の男が日曜日にひたすら汗を流している。
名実共に残酷処刑島での処刑執行人に選定され、結城ジムにて先月から練習を再開した京介である。

「９８……９９……ひゃ、ひゃくうぅぅ……」

『バタッ……』

「はぁっ、はぁっ、はぁっ、はぁっ……」

腕立て伏せ５０回の後の腹筋１００回を必死でやりきった京介は、寝転がったままでしばらく起き上がれないでいた。

「基礎体力はとても大事だからな。今の苦労は必ず報われる時がくる。本格的に技術を教えるのは春頃からでも遅くはないから焦らずに怪我なく慣らしていこうな？　じゃあ昼休憩にしよう。亀山くんは午前だけだったね今日は。お疲れさん」

「お疲れ様です。菅野さんと妹さんもお疲れ様です」

「あ！　はい。お疲れ様っす」

亀山に挨拶をしてヘトヘトになりながら見物に来て座っている莉央のベンチの隣へ座る京介。

莉央もロッカールームへ去ってゆく亀山に頭を下げて挨拶をした。

「よく頑張ってるじゃんお兄ちゃん！　少しは見直したよ」

「そりゃそうだ！　俺だってやるときゃやるからな」

「その調子で基礎体力付けられたら春頃からは本格的に教えてくれそうだね？」

「いくら運動の秋だからって……走って腕立て伏せして腹筋して……縄跳びにシャドーだぜ？　少しはミット打ちくらいさせて欲しいもんだね」

「いきなり初日で大怪我しちゃったからね。会長も反省してるんだよきっと。手首の骨折っちゃう心配してくれてそう」

家から持ってきていた烏龍茶のペットボトルを手渡す莉央。

「サンキュー」

500mlを一気に飲み干す。

「ぷはあっ！！　生き返ったあっ！」

「そんなに一気に飲んじゃったらお腹壊しちゃうよ？　加減知らないんだからお兄ちゃん……」

「これだけ汗を流せば心配ないさ！　しかしかなりハードだぜ明日香ちゃんのパパは……ぅげっぷ！」

「くさっ！？　……ほんと汚いなぁ。まぁその調子で頑張れ！」

「おうっ！！　強くなりたいのは山々だからな！！　……ちょっと聞きたいことがあるんだけどいいか？」

「なに？」

「お前を含めて明日香ちゃんや美香ちゃんは何であんな残酷になれるんだ？　俺には理解出来ないぜ。到底小学生の女の子のなせる所業じゃねぇわ」

「そ、それは……生まれついて持っている気性なんじゃないのかな？　お兄ちゃんは優しすぎるんだよきっと」

「そ、そうなのか！？　俺が優しすぎる？　気が弱いって意味か？お前たちが無茶苦茶すぎるだけなんじゃね？　俺とお前は血が繋がってるんだからもう少し莉央も気が弱くて良い筈なんだけどな？」

「………そだね。あたしだけ突然変異なのかもね……とにかく持

って生まれたモノだから、冷酷になるのは無理な人には無理だと思う」

「まぁお前たちは理不尽に殺された人の遺族の為に残酷になってやってるんだから……それはそれで良いことしてると思うぜ……それともう一つ」

「なぁに？」

「残酷処刑島でやってること……俺らのばあちゃんみたいに明日香ちゃんや美香ちゃんの両親たちも知ってるのか？　話を聞いてるとごくごく普通の両親みたいなんだが……」

「あたしもそこは気になってて……この前藤堂長官に少し聞いたんだけど……」

「何て言ってた？」

「無人島を人が住める島にしようキャンペーンとかで小学生代表で無人島の掃除に呼ばれている……とゆうことになってるそうだよ」

「やっぱり！　そりゃ普通の家庭の親には言えねーわな。俺たちは色々複雑だったからまだ分かるけど」

「でもお婆ちゃんも少し複雑かもね。正義の報復とは言え、やってることは人殺しだから……」

「それは言うなよ。お前は死ぬほど辛い思いした遺族の仇を討ってやってるんだ。気にするな」

少し俯いて沈黙したあと、笑顔で顔を上げて弾むように返事する莉央。
「ありがと。お兄ちゃん！　………じゃあ会長は昼でしばらく帰らないだろうから……あたしと少しスパーリングしようか？」
「お？　まじか！？　基礎的な訓練ばかりで飽きてきてたんだ！少し頼むわ」
リングに上がる二人。
ヘッドギアを装着した菅野京介と、何も着けていない莉央がリングに上がる。
「いつでも打ってきてねお兄ちゃん」
「ほんとに良いんだな？　ヘッドギア着けなくて？　グローブは怪我しないよう16オンスでいいよな？」
「グローブなんて要らないし……ごめんだけど……お兄ちゃんの攻撃食らうくらいの反射神経ならあたしは喧嘩やタイマン辞めるよ。いつでもどうぞ？」
「大した自信だな。だが心置きなく打てるようグローブだけは着けさせてもらうぜ。……後悔すんなよ？　アイドルとはいえ、熊の子みたいなお前には遠慮しないぜ？」

「熊の子見ていたかくれんぼっ♪　おしりを出した子露出狂っ♪」

「そんな歌知るかっ！！　いくぞオラアアアッ！！」

京介の右、左、結構早いワンツーが繰り出される。

呆気なく交わされる。

顔面への回し蹴り。

前蹴り……連続で繰り出される京介の攻撃はことごとく莉央に交わされる。

「バカな……何で当たらねぇんだ？　おかしいだろっ！？　この感じ……亀山選手とやってる感覚！？　バカな……」

「攻撃する直前に手も足も引き過ぎ。次の攻撃が全て分かっちゃう……もう少し振りかぶる動作小さく早く出来ない？」

「そんなことしたら威力なくなるじゃん！」

『ブン！　ブンッ！！』

話し掛けながらも莉央を殴ろうとパンチを繰り出すが、相変わらずヒラヒラと交わされて当たらない。

「今の基礎体力上げる訓練続けてたら、その内至近距離からでもそ

ここ重たいパンチ打てるようになるよ」

『ボコッ！！』

「ふごおおっ！？　がはっ！！」

京介の大振り右フックをかいくぐっての強烈な右ボディーブローがみぞおちに突き刺さった。

たまらず腹を押さえて膝を付いて痛みに耐える。

「くそう……キックボクシング用のグローブなんか着けずにお前の腕や足を掴めたら力で捩じ伏せてやれる筈なのにっ！」

「負け惜しみ言わないの……みっともないよ。弱い部分はちゃんと克服していってね？　運転手兼、ボディーガードにもなってもらわなくちゃ困るんだから」

その時ジムのドアが勢いよく開いた。

「やばっ！　怒られちゃう！！」

慌ててリングから飛び降りる莉央。

「あら莉央ちゃんも来てたの？　明日香がいつもお世話になってる

わねー。仲良くしてくれてありがとうね！」

結城勝利会長の妻であり、明日香の母親である結城房代がジムの冷蔵庫に冷やしておくスポーツドリンクが沢山入ったビニール袋を抱えて買い物から帰ってきた。

「こんにちは！　おばさん。お邪魔してます。こちらこそ明日香ちゃんにいつも遊んでもらってます！」

明日香も後から入ってきた。

「あれ？　莉央ちゃんも来てたんだ！　京介さんの練習見てても退屈じゃない？　亀山さんも帰ったみたいだし……」

「今日と明日は連休だし暇だし家でいるのも勿体ないかなぁって思っちゃって。美香ちゃんは明日はあたしと一緒に来てくれるけど、今日は施設に入ってるお婆さんに会いに行くからって断られたよ」

「え？　明日もゆっくりしないで何処か行くの？　美香ちゃんも誘ってるなら私も行っていいでしょ？」

「うん！　勿論だよ。でも遠いから朝が早いよぉ？　大丈夫？」

「まさかの大野さんと小野さんの住んでる……」

「さすが明日香ちゃん！　アイドル活動以外であの二人に会えるの

も楽しみなんだけど、宮垣咲良さんと指原理子さんが仲良くやってるってのがどうもしっくり来なくて……どんな雰囲気の極北女子中学校になってるのか見ときたくてね」
「あの卑怯で狂暴だった指原さんって三年生ね……まぁ大野さんたちがそう言ってるなら仲良くやってるんじゃない？」
話から置いていかれて存在を忘れられた京介が、いきなりシャドーボクシングを始め出した。
少し寂しそうである。
「あたしが手術したお腹の縫合痕も順調よく回復してるか見ておきたいしね」
「そうだね。乳首と子宮取っちゃったもんね……優しいじゃん莉央ちゃん」
「何か悪さしてたらもう一度折檻してやるんだ♪」
「あはは。もう懲りてるでしょ指原さんも」
結局昼から帰ってきた結城会長に更にシゴかれて、くたくたになってロッカールームへ入る京介だった。
真っ赤なマーチに乗り込んで帰路につく。
二人の時は普通に助手席に乗っている莉央に皮肉を言う京介。

「お前は基本的に助手席に乗れよ」

「何でよ？」

「いきなり背中に蹴り入れて来るときあるからよぉ。痛いしビックリするすんだよ！」

「高校生とか大人を助手席乗せないと後部座席は狭苦しいから仕方ないよ。普通にしてくれてたら蹴ったりしないから」

「そうか……じゃあ普通にしてるぜ。……いや、普通に運転してるつもりなんだが……」

「そう言えば亀山選手の《天神》出場が決まったそうだね！　来年の三月に後悔園ホールで前座試合だってさ」

「お！　はやくも知ってやがったか！？　どんどん上に行っちまうなぁ亀山選手……俺より年下なのに凄いわ……いつか俺も《天神》出て試合したいぜ」

「その前にアウトサイダーに出られるレベルにならなきゃ。今はドが付く素人だからね」

「ま、まぁな。焦らず少しずつ強くなってやるさ。結城ジムに菅野京介ありっ！ってな」

「いつか亀山選手とも本気でやる時もくるかもだね」

「ああ。肋骨の借りは返してやるさ」

「根が深ぃんだね……」

明くる日――――

極北女子中学校は遥か北の北部地方にあるため、車では7時間はかかる。

昼頃に着こうと思えば必然的に朝五時には出発しなくてはならない。

お婆ちゃんに起こされた京介は眠たい目を擦りながら、大好物のにゃんこ飯を掻き込んでいる。

ご飯に鰹節を振り掛けて、醤油を回しがけして食べる猫まんま。

シンプルだが莉央も大好きだった。

手早く朝食を食べ終わった二人はお婆ちゃんに挨拶して家を出た。

「女子中学校なんて堂々と入れないから俺は今回も裏門で待ってるぜ？」

「前回みたいに襲撃じゃないんだから正門で待っててよ」

「そうだな。ははは。じゃあスマホで動画でも見てるから気にせずみんなとのんびり話してこいよ」

「ありがと」

明日香と美香を迎えに行って高速道路へ乗り込む四人。

「大野さんと小野さんに会うのもちょっと間が開いたから嬉しぃね」

「そうだね！　私も平和になった極北女子中学校が楽しみだよ」

「お兄ちゃん、スピード出しすぎ」

「あ、ああ。すまんなついついつい……お前が助手席に乗っていたらスゲェ安心感……なんだこの解放感は！？」

足蹴りでなくても、いざというときは右手が飛んでくることに全く気付いていない平和な京介であった。

極北女子中学校――――――

新しく結成された一年生から三年生まで統合した極北女子同盟の総長は二人……指原理子と宮垣咲良。

指原の右腕である田島美織と、宮垣の右腕である渋谷凪子がこの中学校の四天王になっていた。

大野真子と小野メグは相変わらずアイドル活動以外には全く興味がなく、適当にブラブラしていたが、実質の最強はこの二人なので、

逆らうものは全校生徒でも一人もいなかった。

「咲良！　今日は面白いモノが見られるぜ？」

「何だよそれ？　漫画か何か見せてくれんのか？」

「もうすぐこの部室に三年の蘭子と桃子が連れてくるさ」

『ガラガラッ！！』

二階にある南棟の部室のドアが勢いよく開いて、蘭子と桃子が一人の一年生を連れてきた。
その一年生は筒井真理亜。
小学三年生の弟の筒井直樹も連れていた。

一年生の中では一番の可愛さを持つ女の子。
弟の直樹も目が大きく、一見女の子に見えるほど可愛いらしい顔つきをしていた。

真理亜は、色白で三つ編みで可愛く決めているが、半泣きで表情は暗かった。

「指原さん、連れてきました！　コイツが指原さんの悪口を言いふらしていた筒井真理亜とかゆう一年生です！　コイツの弟が早めに小学校の授業が終わったらしく、正門で待ってたのでついでに連れてきました」

腕を組んで立ち上がり、睨み付ける指原。

「せっかくみんな団結してきて新しく生まれ変わろうとしてるのに……余計なことしてくれるよな？　真理亜」

「ごめんなさい……他の学校の生徒にボコられたとかゆう噂を聞いたのでついつい……ほんとに強いのかどうか疑ってしまって……すみませんでした……」

「ちっ……蘭子、桃子！　裸に剥いちまいな！　弟もついでに」

「えっ！？　直樹は関係ないっ！！　止めてお願いっ！！」

必死で抵抗するが、四天王の二人である田島美織と渋谷瓜子も加わり、四人がかりで脱がせにかかった。

一分も経たない内に素っ裸にひん剥かれた姉弟。

首輪を付けられて、犬の様に散歩をさせる。

三年生の田島が姉の真理亜を、二年生の渋谷が小学三年生の弟、直樹を……それぞれ鎖で首輪を繋いで四つん這いで歩かせた。

「真理亜！　ケツを突き上げて自分の両手でマンコ開いて中身を見せな！」

「嫌です……恥ずかしいから許して下さい」

「弟の包茎チンポ……根元まで引きずり下ろしてもいいんだな？　皮が裂けて血まみれになって泣きわめく羽目になるぞ？」

「ひいっ！？　止めてあげて！！　分かりました……こうですか？」

『くぱぁ～』

四天王と蘭子、桃子の六人が見ている前で、真理亜は思いっきり性器を開いて皆に見せた。

「アハハハハ♪　アソコパックリ開いて丸見えだー♡」

「何か白いカスみたいなのこべり付いてるよ？　マンカスかなっ！？　あはは！！　くっせぇ～♡」

恥ずかしさでついに泣き出した一年生の筒井真理亜だったが、田島と渋谷の責めであるお尻叩きが何度も繰り返されて、お尻は皮が裂ける寸前の紫色にまで変色していた。

「真理亜……痛いか？　反省した？」

「痛いです……ごめんなさい！　もう二度と指原さんの悪口を言わないですから許して下さい……」

「お前はもういいよ。でもその無茶苦茶可愛いお前の弟さん……し

ばらくオモチャになってもらうぜ？　ははは♪」

かなり興奮しながら次の命令を出す指原理子。

「凪子、美織！　弟のチンポの皮……剥いてやれ！　中身がどうしても見たくなってきた♡」

「はい！」

「分かったよ！」

泣き叫び出す弟の直樹のオチンチンを、ゆっくりゆっくりくり剥いていく田島美織の指先……。

「痛いっ！？　痛いよっ！！　お姉ちゃんっ！！　助けてぇえっ！！」

泣きながら姉に助けを求めるが、今度は肛門を開いてみんなに見せている真理亜はそれどころではなかった。

「皆さん、真理亜の肛門です……奥の奥まで見て下さいませ……」

「あはっ！　直腸真っ赤だな！？　咲良！　弟のチンポも半分まで剥けてピンクから真っ赤に変色してるぜ？　あはは♡　あれ以上無

理矢理剥いたら血が出るかな？　あはははは♡」

過度に興奮しながら隣の宮垣咲良の肩をポンポン叩く指原理子だったが、咲良は姉弟の痴態をチラチラ見た後、頬を真っ赤にして俯いていた。

「もう……止めてあげようよ指原……弟まで可哀想だぜ？」

田島美織の指先は、亀頭の半分まで剥かれてヒクヒクしている8才の弟の尿道をパクパク開いたり閉じたりして遊んでいる。

「ここからオシッコ出してるんだね～？　指突っ込んであげよっか？　おねーちゃんが♡」

「いっ、嫌っ！？　そんなことされたら僕痛くて死んじゃうよぉ……うぇーん、うぇーん……」

ついに号泣し始めた弟の筒井直樹。

「泣いても許さないんだから……おねーちゃんを恨みなさいね？　ボク……ほぅら。ここは？　何てゆう穴かしら？」

『ツプ……ズブブブブ……』

田島美織の人差し指が小学三年生の男の子、直樹の肛門へゆっくり突き刺さってゆく……。

「やぁあっ！？　痛いっ！！　痛いよおおっ！！　止めてぇえええっ！！」

爆笑する指原の隣で、頬を紅潮させながらもついに立ち上がって叫び出す宮垣咲良。

「もうやめろっ！！　何の関係もない弟が可哀想すぎるぜ指原っ！！」

「ん？　そうか？　団体をまとめるには多少の罰は与えないと……と、思うんだがね私は……」

咲良をなだめている時、廊下が妙に騒がしい事に気付く指原。

「誰か来たのか？　立たせている親衛隊が騒いでいるみたいだけど？」

「どこがで聞いた声がするなぁ。ちょっとドアを開けて確認してくれ凪子！」

宮垣咲良の右腕である二年生の渋谷凪子が一気にドアを開けると、

親衛隊全員がダウンして寝転がってうめいている。

最強の大野真子と小野メグ……それに菅野莉央と富田美香、結城明日香が部室に入ってくる。

「せっかく仲良くやっているると思ってたのに……イジメは良くないなぁ指原？　それと私たちにかかってくるなんてさ。廊下の親衛隊の教育……ちゃんとしとけよ？」

「真子と同じ意見だね。ほんと弱いものイジメはみっともないよ？」

指原を睨み付ける一人の少女……小学六年生の菅野莉央。

指原理子は目を見開き、激しく震えだした。

「ど、どうした？　指原？　スッゴく震えてるぞ？　大丈夫か？」

「あ、あああ……や、やだ……ひいいい」

咲良の掛け声も届かないほどの怯え方。

両手で頬を当てながら怯えてしゃがみ込む指原理子。

「指原理子！　今すぐ素っ裸になりなさい！！」

莉央は鋭い眼光で指原を睨み付けながら言い放つ。

『プシャー……ぷしゅしゅしゅしゅう～……』

あまりの恐怖に小便を漏らし出す指原理子。
パンツを濡らした小便は、吸収しきれずに膝から足首の靴下まで流れてゆく。

「なっ！？　あ、あんたはあの時の……菅野とかゆう……名前だっけ？　お願いだ！　もう指原さんに酷いことしないでくれ！　この通り！」

指原を親身に想う田島美織が再び土下座をして許しを請う。
恐怖に引き吊る表情は、異常な程のレベルだった。

この情景を見た宮垣咲良は、頭が混乱してきた。

「えっ？　この子はこの前あたいの入院中に見舞いに来てくれた菅野莉央とかゆう小学生の女の子……え？　何でこの子に指原はこんなにビビってるんだ！？」

宮垣咲良の質問には答えず富田美香が指原理子に催促し始めた。

「莉央ちゃんがお腹の手術痕を診てくれるって言ってんの！　早く脱いでよもう……」

「私もそこは心配……大人しく脱いでくれます？」

結城明日香も指原を気遣ってアドバイスした。
ゴタゴタしてる間に、イジメられていた当の筒井真理亜と弟の直樹は、慌てて服を全て着始める。

「おいっ!?　指原？　お前がやられたのは確か島崎真理子とかゆう女子高生だって言ってたよな!?　おいって!?」

「……ひ、ひいっ!?　お願いだ……止めてくれ……」

涙を流しながら震え続ける指原理子。

「あの、咲良さん？　指原さんから何て聞いてるのか知りませんけど……」

申し訳無さそうに種明かしをする富田美香。

「指原さんをタイマンで倒したのは……この莉央ちゃんなんです。以前咲良さんが全身骨折で入院中、帰りにあたしたちが見舞いに行ったときに確か報告したつもりですけど？」

「え！？　ええっ！？　いや……あの時は確か……〝あたしの仇は討った〟としか聞いてなかったけど？　自分の手で指原を倒せなかったことは何か納得いかなかったけど……あんたたちの気持ちは嬉しかった。一番体格のいい島崎さんってゆう年長の女子高生の人が指原を倒したのだと勝手に思い込んでたけど……まさか……」

半泣きになりながら小便を漏らす指原に、更に詰め寄り強引に服を脱がせてゆく明日香と美香。

「はい。大人しくしようと思えば出来るんですね？　偉いですよ指原さん」

「そのまま大人しくしていてくれたら酷いことはしませんからね今日は……あなたを心配で手術経過を見に来ただけですから……はい、最後のパンツ脱がしますね？」

ついに明日香と美香に素っ裸にされた指原理子は、部下のみんなと宮垣咲良が見守る中で、静かに土下座を始めた。

「何やってるのかな？　指原……土下座なんてしなくていいからお腹の縫った痕を見せなさいと言ってるのよ？　仰向けに寝転がってくれる？」

「は、はい…………」

素っ裸にされた指原は静かに仰向けになり、菅野莉央にお腹の縫い目を何度も擦られる。

「うんうん。順調に治っていってるね！　安心したよ指原」

「あ、ありがとうございます菅野さん……」

小学生の女の子に土下座して、泣かされて、素っ裸にひんむかれて……お腹を擦られている指原理子を見守る極北女子中学生の部下の女子たちは、目の前の光景が今だに信じられないシュールなものに映っていた。

同等の立場である宮垣咲良も現実味がないのは同じだった。
冷静になって深く考えてみても、どう頭を使っても、指原理子が目の前にいる体の小さな小学生の女の子にタイマンで負けたとは受け入れがたい……信じられないでいた。

『パァンッ！』

「痛っ！！」

指原の陰部へ強烈な平手打ちが入る。

『ぐちゅ……』

「やあっ！？　痛いっ！！」

膣内に中指と薬指を一気に根元まで突っ込んで掻き回す莉央。

『ぐぽっ！！　クチュクチュクチュ……』

「あんっ！？　やめてくださ　い菅野さ……ん」

「相変わらず汚いマンコしてるね？　小陰唇のビラビラ引きちぎってあげようか？　それともお腹開いてあたしの右手でマンコトンネルまたやったげようか？」

「ひいっ！？　………許してくださいっ！　ごめんなさいっ！勘弁してくださいっ！」

「じゃあ汚いマンコの解剖は許してあげるから、四つん這いになってお尻突き上げろ指原」

そう言いながら二本の指を一気に引き抜いて、白に少し茶色が混じった色のマンカスを指原の太腿に擦り付ける。

「は、はいっ！　ありがとうございますっ！！　こうですか……？」

「もっと突き上げろ」

「はいっ！！」

ゆっくり右手を振りかぶる莉央。
次に何が起こるのか周りは息を飲んで見詰めている。

『パァンッ！』

「痛いっ！？」

大きな音を立てて、指原の尻の肉が激しく振動した。
それほど莉央の平手打ちは強烈だった。

『パンパンパンパンッ！！』

「いったあいっ！！　ごめんなさいっ！！　許してぇえっ！！」

みるみる内に真っ赤に染まってゆくお尻を、心配そうに見詰める周りの部下たち。
だが指原の態度を見る限り逆らってはいけないことは本能が教えていた。
ただ一人熱いヤツを除いては………。

『パシッ！』

「！？」

連打のスパンキングで指原をお仕置きする莉央の右手首を掴む右手があった。

「そのくらいにしておけよ？　今の指原はあたいのダチだ！　これ以上酷いことするならあたいが相手になってやるぜクソガキが」

『あちゃあ～……な、何てことを！？』

『仇を討ってくれた張本人に牙を剥くなんて……。宮垣さんまで痛い目に遭っちゃうかもっ……』

明日香と美香は心の中で本気で心配して真っ青になってしまった。

「うふふふふ……」

目を瞑って不敵な笑みを浮かべる菅野莉央に、周りは凍りつき、当の宮垣咲良は気持ち悪がった。

「何がおかしいんだ？　舐めてんのかっ！？」

「勝てると思ってるのかな？　指原ごときと五分五分の宮垣咲良様？　あははははは♪　お腹痛いよ。笑わせないでくれます？」

これ以上指原のお尻を叩くのは難しいと判断した莉央は、ゆっくりと立ち上がり宮垣咲良と対峙する。

「こんなカスのためにあたしにボコられるなんて……賢明とは言えないなぁ宮垣さん……」

「こんなヤツでも良いトコもあるんだよっ！！　オラアッ！！」

セミロングの艶やかな黒髪をなびかせながら莉央に襲いかかる咲良の右フック。

『バキッ！！』

拳が頬を的確に捉えた快音が部室に響いた。

「ん？」

「あれ？」

目が点になる明日香と美香。

左頬を押さえながら大袈裟にその場に跪く莉央。

「痛ったーいっ！！　ストレートと思ったらフック来るんだもん……不意を突かれたわ。顔面痛すぎてギブアップ！　ごめんね。一応こう見えてもアイドルだからこれ以上顔殴られたら商売あがったりだから。もう帰るから許して宮垣さん……」

そそくさと部室を出てゆく莉央。
その後をすぐに追う明日香。

「…………お邪魔しました皆さん。お元気で」

「えっ？　ええっ！？　待って！　あ、あたしも帰るから」

慌てて明日香に続く美香。

固まっている大野真子と小野メグ。
指原本人と部下たちも固まっている。

真っ赤なマーチの中で居眠りをしている京介を叩き起こして莉央たちが乗り込んだ。

「思ってたより強烈だったわ宮垣さんの右フック……」

「お前がパンチ食らったのか？　負けたのか？　嘘だろっ！？　熊の子も避けて通る莉央だぞ！？」

変に心配する兄の京介だったが、ツッ込む間もなく美香が続けた。

「莉央ちゃん！　嘘でしょほんとにっ！？　わざと食らってあげたんだよね？」

「聞かなくても分かるでしょ？　あの程度なら莉央ちゃんに当たるわけないよ美香ちゃん……」

「何かね……最初は憎み合っていてもあーやって本気で心配出来る親友になれるんだなぁって思ったら……マジでパンチが見えなくなっちゃった。あはは……」

「マジで食らったの！？」

明日香が目を見開く。
京介も美香も信じられない気持ちで高速道路をかっ飛ばす真っ赤なマーチで東部地方に帰っていった……。
色んな事が起こり過ぎた極北女子中学校の部室も夕方になり、薄暗くなってきていた。
皆は帰り、指原理子と宮垣咲良だけが残っている。

「嘘をついていて済まなかった咲良……」

「ん？　タイマンで島崎ってゆう女子高生じゃなく、菅野莉央ってゆう小学生のガキにヤられちゃってたってことか？」

「ああ。お前と仲直りして学校中が一致団結出来ても……それだけはみっともなくて……どうしても言えなかったんだ。ほんと済まなかった……」

「もういい。見舞いに来てくれた事は感謝してるけどお前を叩きまくってたのにはマジでムカついたからな」

「アイツは……バケモンだった。よく殴れたな咲良は……」

「当たる前の一瞬……避ける動きをしてたんだ……でもそのまま食らっていた。一瞬考えて食らう選択をしたって言ったら良いのかな……うまく言えないけど。とにかくわざとだよ。あたいもバカじゃないからそれくらいわかってるさ。末恐ろしいヤツだな。菅野ってガキは」

「大野と小野もバケモンだし……なかなか一番にはなれねぇもんだな咲良……」

「ああ。頭悪いあたいでも、この中学校なら喧嘩で頭取れると思ったらこれだよ。今は大野や小野に取らせてもらってるって感じだもんな……」

どんどん暗くなってくる部室。

立ち上がり、電気をつけようとする咲良だったが、蛍光灯が殆ど切れていて、たまに点滅する寿命が近い状態だった。

「あーあ。蛍光灯ちゃんとつかねぇよ。もう帰ろうぜ指原」

「…………」

返事をしない指原が気になり、隣の椅子へ再び座る咲良。

「聞こえてるのか？　おい？」

『ガツッ！……ギュウウ』

「うわっ！？　おいっ！　何しやがる指原っ！？」

急に咲良に抱きつき、床に押し倒す形になる。

「私は……お前が……咲良のことが……」

「えっ！？　何？　何言ってる指原……」

強く抱きつかれて身動き出来ない咲良に、声を振り絞って口を開く指原理子。

「私は……初めて会った時からお前が……咲良が……好きだった！　大好きだ咲良っ！！」

「な、何だって！？　落ち着けよとにかく！！」

「タイマンしててもお前と密着出来る時間が幸せだった。最後にボコったのもお前の……咲良の……アソコに指を……突っ込みたかったから……処女膜奪っちゃってほんとすまんっ！！　許してくれ」

「…………お前……同性なんて好きになれるのかよ？」

「咲良は私の理想だった。でも喧嘩することでしかお前と密着出来ないと知った私は……とにかくお前に喧嘩を売った。素直に好きだと告白出来なかったんだ。嫌われるのが怖くてさぁ」

「変態なんだな……指原は」

「変態でも何でもいいさ。私にはお前しか見えない。頼むから私と付き合ってくれっ！！」

「ええっ！？　ちょ、ちょっと待て！！　落ち着け指原っ！！」

『ぶちゅっ！！』

「んんっ！？」

強引に咲良にキスをした。

「んんん……止めろって！！」

両手で指原の胸を強く押して、どうにか唇を引き離した咲良だったが、今度は強引に制服を脱がしにかかる指原。
本気で抵抗すれば脱がされる訳もなかったが、好きだ好きだと言われ続けた咲良は何か指原をいとおしく想い始めていた。

ついに素っ裸になった二人。
指原に強く抱き締められながら、今の現状を必死で理解しようとする咲良だった。
頬やオデコや頭に、数回キスを繰り返し、頬を紅潮させながら変に興奮している指原。

そしていきなり再び口へ……。

「んんっ！？　んん……」

一回目ほどの抵抗は見せなかった咲良も悪かったのだろうが、いける！　と確信した指原は咲良の口内へ舌を捩じ込んでゆく。

『ずぷ…くちゅちゅ』

「！？　んん……んううううっ！？」

人生初めてのキスにディープキス……以前のバージンといい、結局全てを同性の指原理子に奪われる形となる宮垣咲良だった。

他人の舌が自分の口内でうにょうにょと自分の舌に絡み付く異様な感覚……。

止めてくれと心で思いながらも、少しずつ変な気持ちになってくる。

絡み付く舌の生々しい感覚に、恥部が少しずつ湿ってくるのを感じた。

「んん……あ……ん」

『な、何だこの変な気持ち……あたいが同性に感じてるのか！？

そんなバカなことって……』

ディープキスに感じてきていた咲良の乳首を激しく舐め回し始める指原。

ちゅぽちゅぽと卑猥な音を立てながら、舐めたり吸ったりを繰り返した。

「んあっ！？　やめろよ……何か変な感じ……うう」

「私の胸も舐めてくれ咲良……」

「舐めてくれって……あたいはレズじゃないんだよ……ん？　お前、乳首が無いじゃねぇか！？」

なんだかんだ言いながらも舐め返してあげようと思いながら乳首を探す咲良の右手が一瞬固まる。
明日香と美香に切り取られて平面になってしまっている乳首のあった場所を優しく擦る咲良。

体を震わせてすすり泣く指原だった。

「ぐす……ぐす……。そうだった。菅野の仲間に乳首切り取られたんだ……咲良に……いつか舐めてほしかったのに……ぐす。ぐす」

子供のように肩を震わせながらすすり泣く指原理子を見ていると、可哀想でいとおしくて仕方なくなった咲良は、人生初の変な感情に目覚めた。

咲良の心の奥底に眠っていた禁断の扉が完全に開かれた瞬間だった。

強く指原を抱き締めて、優しく頭を数回撫でてあげた。
その後、体をゆっくり下にスライドさせて、指原の股間に口を持ってゆく。
ゆっくり膣を舐め始めた。

「綺麗なマンコが残ってるじゃん？　舌入れてやるよ。ほら。クチュクチュ……クチュチュチュ……」

「あっ！？　あんっ！　咲良っ！　もっと深く舌入れてっ！！　気

持ちぃぃ……あんんっ！！　咲良大好きっ！！」
何で同性の……しかも自分をリンチしてバージンまで奪った……敵であった女のアソコを舐めているのか冷静な判断が出来ないまま、いとおしく想ってしまった指原の性器を舐め続ける咲良だった。
クリトリスも優しくしくながら激しく舐め回した。
やがて腟内に中指を差し込み、激しく掻き回し始める。

「ほら、お前があたいにやったようにオマンコ指で掻き回してやるから……ほらほらほらあっ！！　ん？　ケツの穴までひくひくさせちゃってぇ……ほらほら気持ちぃいか指原あっ！？」
「あっ！！　あはっ！！　気持ちぃいっ！！　咲良っ！！　むっちゃ好きっ！！　私イッちゃううっ！！　イクっ！！　イックうううっ！！！！」

咲良の指と腕をグショグショに濡らすほどの潮を噴いてイカされてしまった指原理子。
再び咲良を強く抱き締めて、舌を入れて激しくディープキスをした。

夜中まで二人は抱き合った。

「本当に私と付き合ってくれるのか？　咲良……」
「ん？　んん……今度はあたいをイカせてくれよ？」

「ありがと……愛してるぜ咲良っ！」

『ギュウウウ』

思いっきり強く咲良に抱きつく指原理子。

「痛いっ！　痛いって指原……」

ここに新しいレズビアンカップルが誕生した。

そんな事とは露知らず、スヤスヤ眠る三人の女子小学生に囲まれながら、必死で眠気と戦いながら高速道路を突っ走る京介だった。

禁断の恋（後書き）

レズビアンに目覚めた極北女子中学校の番長である指原理子と宮垣咲良。

去勢した指原理子の順調な回復を確認した菅野莉央。

大敵だった者同士の禁断のレズビアンプレイが、夜の部室で数時間も行われていたことは……誰も知らない。

覚悟（前書き）

拷問処刑人、鬼頭美紅の通う甲南中学校。

三年生の男子が幸せを掴み取ったかのように見えたが…………。

覚悟

――――今年の夏は10年ぶりの猛暑らしい。いくら暑かろうと有意義な時間を過ごせる楽しい夏休みが始まった。

僕は東部地方の南端にある甲南中学校に通う15歳で三年生の佐川兼人。

僕が二歳の頃だったらしいんだけど、お父さんを亡くし、お母さんと二人で今の2DKのボロマンションに住んでる。

お父さんの記憶は殆どない。

微かにでも覚えていそうなもんだけれど。

上か下に兄弟でもいたらもっと楽しかったんだろうけどなぁ……。

アルバイトしながら僕を育ててくれてるお母さんには本当に感謝しかない。

前に住んでいた持ち家は、ギャンブル狂だったお父さんの借金に宛がうために売却。

当時築30年の安いマンションに引っ越してきた。

おませかも知れないけど僕には自慢の彼女がいる。

三つ年上の甲南高校三年生の大坂麗奈さんだ。

もう付き合い始めてから丸一年経つかな。

僕と同じマンションに住んでるんだけど、僕は二階で彼女は三階だった。

両親と何か理由があって別々に暮らしているらしい。

２ＤＫのマンションに独り暮らしなのだ。
去年の夏休みに近所のスーパーでアルバイトしている彼女に、お母さんから頼まれた調味料の棚を聞くために声をかけたら、僕のことを同じマンションに住んでる事、覚えてくれてて……。

その時の彼女の笑顔がもうとっても可愛くて。
お母さんに毎日のように何か買う物ないか催促したっけ。
三日に一度で十分だからと言う母を説得してほぼ毎日三分の一ずつに分けてまで買い物しに行ったよ。

家族構成とか趣味とか、好きなアニメとか……色んな話をするようになってきた頃には、彼女の部屋に遊びにこないかと誘われて、無茶苦茶ドキドキして嬉しかった瞬間を、今でも鮮明に覚えてるなぁ。

野菜を並べたり魚を並べたりしてる間が彼女との会話のチャンスだった。
もう一人のアルバイトのおばさんと、交代でレジに入るんだけど、レジに入る頃には買いたいものをカゴに詰めてひたすら彼女のレジを打つ姿を見ている。
この時間は話しかけちゃダメなんだ。
二つの事を同時に出来ない彼女は、大きなミスを犯しちゃうからね。

去年の事なのに未だに彼女は恥ずかしそうに怒っちゃうからあまり言えないけど……。
８００円の買い物して５０００円払ったら、９２００円帰ってきたんだよ。
諭吉さんと一葉さんを勘違いしたんだね。

彼女によると、肝心な時に話しかけちゃった僕のせいだとの事。
一年経った今でもやっぱり僕が一番悪いらしいんだけど……。

「お母さん、今夜は夕食いらないから。麗奈の部屋でスキヤキするんだ」

「あらあら……また泊まるの？　夏休み入ってから二日に一度は泊まりに行ってるみたいだけど？　麗奈ちゃんだって色々忙しいんだから少しは遠慮しなさいよ！」

生意気に呼び捨てにしてるけど……これは『“さん”付けや、“くん”付けは、よそよそしいからお互い呼び捨てにしよう』とゆう彼女の希望によるものだから。

一年も付き合ってるから当然エッチも経験済みだ。
全て麗奈のリードでどうにかこうにか脱童貞に成功してから泊まりに行く度、夜中まで抱き締め合っている。

「兼人と付き合ってもう一年にもなるんだね！　早いもんだよ」

「麗奈が僕の顔覚えてくれてたお陰かな……じゃなきゃあんなに積極的に会いにいけなかったかも？」

「何度か階段でもすれ違ってるのに私の事覚えてないなんてヒドいんだから兼人は！」

「それを突っ込まれてはかなり返答に困るんだけど……。それには理由があるんだよね」

僕は心底女の人が苦手で……苦手と言っても嫌いとかじゃないんだ。

恥ずかし過ぎて……前から女子が歩いて来てると分かった時点で目を逸らして頬が赤くなるレベルの……“超”が付く恥ずかしがり屋なんだ。

小学生の頃からそれは変わらない。
まともに女子と話せない性格。
話したいのに恥ずかしさが邪魔をする。
変な葛藤と戦ってるうちにも友人たちは平気でクラスの女の子と話をしてたなぁ。

15歳になった今思い出しても、やっぱり女の子が苦手でない男子を羨ましく思っちゃう……。

「何急に考え込んでるの？　おーぃ？　牛肉もう焼けてるよ」

肉類は、しっかり芯まで火を通さないと一切食べられない僕のためにじっくり時間をかけて焼いてくれた牛肉を慌てて頬張る。

大して面白くもないテレビ番組をつけっぱなしにして、色々楽しく会話しながらスキヤキを食べてゆく僕たち。

ふと気付けば、前から気になっていた麗奈のご両親の事を何気な

く聞いてしまっていた。

「私が小さい頃から喧嘩ばかりしてて……もう物心もついてた私はいつも悲しかった。小学校の高学年になった頃には、ついに別れちゃって養子に来ていたお父さんが出て行っちゃったのね」

僕の場合は、物心つかないうちにお父さん死んじゃってたけど、麗奈の場合は………そんなの辛すぎるじゃないか。

小さい頃から僕より悲しい経験をしてきたんだね……。

でもここからの話の方が壮絶だった。

「中学校に通い出した頃にお母さんに好きな人が出来て再婚したんだけど」

「そうなんだ……姉弟もいないなら、その人がいい人なら寂しさもかなりマシになるね？」

少し沈黙して、今まで見たこともないくらい寂しそうな表情を見せる麗奈。

その表情でおおよその見当は付いていたが、話を遮ることも出来なかった。

「お母さんと同い年の３３歳の新しいお父さんは……お母さんが用事で出かけているときに何回も私に……」

「ごめん！　もう話さなくていいから！」

泣き出しそうな麗奈の雰囲気に、とうとう我慢出来なくなった僕は背中から麗奈を抱き締めながら会話を遮っていた。

「もういいよ。麗奈も色々あったんだね。もうそんな男と別れちゃってるんでしょ？　お母さんがいてくれるだけでも僕たち幸せだよ……」

「お母さんはある日……用事がキャンセルになり早めに家に帰ってきたのね。私が強姦されてるシーンをまともに見ちゃったの……」

なっ……なんてこった……もう言わなくてもいいと言ったのに……。

僕まで悲しくなってきちゃうじゃないか……。

「一目散に台所へ姿を消したと思ったら、帰ってきたお母さんは……必死で私を抱き締め続けていたお父さんの背中を刺した」

自業自得だ。

当たり前だ。

死んでしまえばいいんだ。

普通にこれらの考えが頭に浮かんでいた僕は、驚く所かお母さん

の勇気に絶賛したい気持ちで一杯だった。

「……その男は死んだの？」

「私のお腹が血まみれになって、激しく泣き出した私を見ながら表情一つ変えずメッタ刺しにして……激しく痙攣し出してそのまま出血多量で死んじゃった……」

お母さんが怖いとか犯罪者だとかいう感情は一切なく、素晴らしい英雄にさえ思えている僕は、世間一般では当たり前の思考を持つ人間なのだろうか？

少し自問自答してしまって、ぼうっとしたまま数秒が過ぎる。

「裁判では……情状酌量はあったものの、出血が激しく、抵抗も出来なくなった命乞いする相手を躊躇わずメッタ刺しにしたことが重くのしかかり、懲役１０年の実刑判決が下りた」

一緒に面会に行こう！

僕は心の底から尊敬すべき麗奈の母親に会いたいことを告げた。

「殺人を犯した事と、娘である私の目の前で残酷な殺し方をしてしまった呵責の念からか、殆ど食事が食べられなくなって……二年後……つまり三年前に、お母さんは獄中死しちゃったの。何度か会いに行って励ましたんだけど……殺人犯の娘にしちゃったことを何度も何度も謝ってた」

麗奈の事を思ってたこその行動なのに……なんかやるせないよ。
僕だって鬼畜野郎には同じ行動を取ったに違いない。

「兼人は私に何かあっても復讐したり自殺したりしたらダメだよ？
先月に高熱だして寝込んでいた時の兼人の心配の仕方を見てたら
こっちの方が心配しちゃうから」

うーん……。復讐……自殺……本当にそれらを選択してしまいか
ねないと思った。
いざ麗奈が死んだときの事を想像してみる。
考えられない。
その寂しさはもう絶望と死に等しい。生けていけないレベルのも
のだ。
恋だの愛だの流行りの歌も熱く若者に訴えているが、僕の麗奈を
思う気持ちは絶対に愛だ。
一生一緒にいたいと最近特に強く思い始めてきていた。
話の内容がかなり重たくなりながらも、スキヤキを食べ終わった
僕らは、シャワーを浴びてから時間が過ぎるのも忘れて抱き合った。

夏休みが終わる数日前から、そんな愛しい麗奈と急に連絡が取れ
なくなった。
スキヤキを食べに行った日のあとも、何度も泊まりにいって抱き
締め合ったのに……どうして僕に何も言わず急にいなくなるんだ？
携帯も取ってくれない、チャイムを鳴らしても出てこない。
本当に部屋にいるのかどうかさえ分からなかった。

生活費とか色々と世話になっていると言っていた親戚の人の住所も知らないし……。
勝手に身内でないものが捜索願い出すわけにもいかないし……。
心配で心配で、ご飯もまともに喉を通らないじゃないか。
とにかく無事でいてくれと願うしかなかった。
その願いは学校が再開してから叶う事となる。
願いが叶ったからと言って必ずしも総合的に見て良い結果になるとも限らない。

数日後――

夏休みも終わり、麗奈のことばかり考えていた僕はかなりやつれてしまっていた。
お母さんに八つ当たりまでしちゃった事は反省しなくちゃだけど、何か麗奈に会えないストレスは色んな意味で僕を歪めていった。
もし何か事件とかに巻き込まれていたとしたら……どこかの山奥にレイプされて殺されて埋められてたりとかしたら……。
必ず僕が犯人を殺してやる！
全く先生の挨拶も校長の挨拶も頭に入らないままで、夏休み明けの新学期初日を終え、自転車で帰路につきながら思考をめぐらす。
そこそこ威力のあるボーガンと矢のセットも通販で買った。
お母さんの名義で買ったから中学生の僕でも入手できた殺傷能力

のある武器。

お母さんに内緒で押印までしちゃったから多少の罪悪感はあったが、仇を取るための武装は必要だった。

中学生の華奢な身体では大人の男に敵うわけがないし、複数いても返り討ちに遭う可能性だってあるからな。

ナイフより飛び道具が安全に相手をやっつけられる。

あれ？

近所の公園のベンチにふと目を遣ると、目を疑う光景……衝撃が僕を襲った。

麗奈！？

横に座ってるのは……同級生か？

かなり親密そうに話をしている。

慌てて自転車から飛び降りた僕は駆け寄ろうとした。

男は麗奈の肩に腕を回し、引き寄せる。

そのまま目を閉じる麗奈がいた。

え？　嘘だろ！？　何かの冗談だ！！

僕の目の前で同級生らしい高校生と濃厚なキスをしているのは紛れもなく数日前から連絡の取れなくなった僕の彼女、大坂麗奈その人だった。

ほんの数秒間の出来事が、永遠に感じられるほど長く感じた。
駆け寄る所か体が動かない。
固まったままで、ずっと二人のキスが終わるまで見てしまっている僕。
背筋はなぜか凍りつき、寒気がする感覚。
それでも勇気を振り絞り、公園の木々の間を縫って麗奈と男の前に歩み寄る。
僕に気付いた二人は、一瞬目を見開いて直ぐに立ち上がった。

「麗奈……これはどうゆうことなの？」

特に驚く風でもなくじっと僕の目を見詰める麗奈。
隣の男の方がまだ動揺してるような雰囲気だった。

「あ、あのね。色々相談とかしてるうちに拓也に心ひかれちゃって……ごめん！　私の事はもう忘れて」

「なっ……なんだって!?　本気なの？　この一年は何だったんだよ!?　急に連絡取れなくなって心配したんだぞ!?　酷いじゃないかっ!!」

怒りと悲しみが同時に込み上げてきたぼくは、思わず麗奈の両手首を強く握りしめて、捲し立てていた。
いきなり右頬に強烈な痛みが走る。

『バキッ！！』

「痛っ！？」

殴られた？
あまりにも咄嗟の痛みに、しゃがみこんで右頬を掌で押さえている僕を認識するのに数秒間必要だった。

人の彼女を奪っておいて暴力まで振るうかコイツ……。
ちくしょう……痛い……。

「麗奈が俺を選んだんだ！　男らしく諦めろよ？　それとも俺がボコボコにしてやろうか？　あ？」

「拓也……ありがとう。手首千切れるかと思っちゃった」

「ああ。お前に暴力振るうやつは俺が絶対許さねえから！　大好きだ麗奈」

強く抱き締め合う麗奈と拓也。
え？　ん？　僕は今何をしてるんだ？　何を見てるんだ？
どうして目の前で彼女である麗奈が見知らぬ男と抱き締めあってる？

どうして僕は鼻血を出しながら右頬を押さえてる？
少し間が開いて、冷静になってきた。
思考回路が冷静になればなるほど悔しい想いが込み上げてきた。
怒りと……殴りかかっても勝てないとゆう恐怖と……こんなに心配していた僕を裏切った麗奈に対する哀しみと憎しみ……。

「二度と俺の麗奈に近寄るなよ？　殺すぞクソガキ」

「今までありがとう。兼人くんとの一年間は私、忘れないから。もう近所で会っても他人のふりしてね？　私は一途でいたいから」

二人はそう言いながら去っていった。

僕は二人が今まで座ってキスをしていたベンチに座って泣いていた。
こんなにバカみたいに本気で泣いたのは久しぶりだろうな。いや……多分人生で初めてかも知れない。
デート中の高校生のカップルが、泣いている僕をチラチラ見ながらも目を逸らして通り過ぎてゆく。

高校生……麗奈……あの男……………………。

僕が何をしたってゆうんだ。
裏切った訳でもなければ暴力を振るった訳でもない。
ある日突然姿を見せなくなり音信不通になり……姿を見せたと思ったら彼氏が出来て殴られて……僕は見捨てられた。

ちくしょう……絶対殺してやる！

９月３０日――――

残酷処刑島は珍しく風が殆ど無く、穏やかな日和だった。
暑さも少し和らぎ、８月の猛暑が嘘のように清々しい気候である。

僕は甲南中学校三年生の佐川兼人。
９月２９日に甲南中学校二年生の女子生徒、僕の後輩にあたる鬼頭美紅とかゆう名前の少女に呼び出され、気晴らしに離島に遊びに行こうと誘われて、朝早くからやってきたんだ。

《真・絆ＧＩＲＬＳ》の小学生メンバーである菅野莉央と富田美香と結城明日香も来るからと言うから来てみたら本当にいたんだ。
テレビでしか見たことないアイドル三人が僕なんかと一緒に離島で遊んでくれるなんて……。
光栄だし嬉しかったな。
運転手の二十歳くらいのヤンキーみたいな男性は港で手を振ってくれてこの島には来てくれなかったけど。

もう人生嫌になって自殺しようとかも思ってたから年下の可愛い女の子たちと最期にいい思い出作らせてもらうとするか。

鬼頭美紅……二年生にこんなに綺麗な子がいたんだ。
何度か廊下ですれ違ってるかもしれないのに気付かなかったなぁ。
切れ長の目でなんかクールな美人だな。

ツインテールは小学生までにした方がいいかな？　とは思ったけど本人には言えないな……。
アイドルの小学生三人と後輩の美紅ちゃん。
こんな島で何して遊んでくれるんだろ……。

「おい、冗談は止めようよ！　年下の女の子とボクシングなんて出来るわけないよ！　こう見えても男だしまともに顔面に入ったら骨折れちゃうよ？」

美紅ちゃんが僕とボクシングして遊ぼうって言ってきたんだ。
考えられないよね？
しかもグローブも着けないでやろうなんて。
ははは。死にたいのか？

『カーン！』

菅野莉央ちゃん。
アイドルグループのボーカルの子がいきなりゴングを鳴らした。
マジかよ……まぁいいか。
ボクシングゴッコと思って適当に軽く当てて楽しませてもらうよ。

開始早々の１０秒後――

ちょっと待ってくれる？
痛いんだけど……。
たまただろうけど、ホントにたまたまたまなんだろうけど……まともに鼻っ面に美紅ちゃんのパンチが入って、鼻血ドボドボ出てくるんだけど？

頭来たぞ！
中学の後輩の女の子だからって、パンチさえ当てる気もなかったけど、手痛いのを一発くれてやる！

「おりゃあっ！！」

『バキッ！！……ぐしゃ』

「いってえええっ！？」

ちょ、ちょっと待ってって！　カウンター？　殴ったと思った瞬間また鼻っ面に衝撃が……。
骨が折れてる？
嘘だろっ！？
痛くて立ち上がれないじゃないか！

座り込んでいる僕の頭と顔を更に連打で殴ってくる美紅ちゃん。
ガードしている手の甲が痛くなって、思わず反対の手で押さえようとしたら顔面にまた正拳が突き刺さった。

何度も何度も殴られて頬の骨も……手の甲の骨も多分折れたかな？
僕の顔面はボコボコに腫れ上がっていった。

「どしたの？　もっと頑張らないと顔がボコボコになってるよ？」

莉央が体育座りで両手を頬に当てながら声援を送る。

「ファイトー！　兼人くんっ！　中学生なのにツインテールなんてよく出来るよねっ！って罵っちゃえっ！！」

「もう本気でやっつけちゃえ！　そんな後輩の女の子なんて！」

美香と明日香も続けて声援を送る。

思いっきり美香を睨みつける美紅だったが、無意識に本音を叫ぶ美香に対してどうしようも出来なかった。

美香自身のツインテールと美紅のがダブってるので、心の奥底で少し気に入らないのだろう。

ダメだ……無茶苦茶強いぞこの子……。

馬乗りになってきた？

顔が痛すぎて死にそうだ。もう止めて！

『バキバキッ！！　ドカッ！！　バコッ！！　グシャッ！！』

なんで執拗に顔ばかり殴るんだよ？

瞼が腫れてまともに見えなくなってきた……。
意識が遠ざかってゆく……。
マジかよ……女の子に殴られて僕は失神しちゃうのかよ……？

数分……いや数時間経ったのかな？
ゆっくり意識が戻った僕は手術台のような長いベッドに、素っ裸にされて両手を開いたまま拘束されていた。

下半身は……縛られた感覚がない。
足は自由に動くみたいだ。

あれ？
動くには動くけど何か軽いぞ？　異様に軽い？
ふと太腿の方に目を遣ると、膝の上辺りから両脚が無い。
文字通り“無い”のだ。

「うわあああああっ！？」

いきなり過酷な現実を見てしまった僕は、思わず喉が渇れるほど叫んでしまっていた。
短くなった両脚をバタバタ開いたり閉じたりしながら。

「あはは。そんなに短い脚開いたり閉じたりしたらオチンチンだけじゃなくお尻の穴まで……丸見えだよぉ？　うふ♡」

富田美香がツインテールを揺らしながら頬を赤くして僕の下半身を凝視している。
全裸にされているので脚をバタバタさせなくてもオチンチンはまともに見られている状態だ。
「わざわざアナルまで見せてくれるなんて……サービス精神旺盛だね兼人くん♡」
結城明日香も頬を赤くしながら、ボコボコになっている僕の顔を撫でてくる。
コイツら可愛い顔して何て事を！？
でも……痛みが殆どないぞ？　麻酔打たれてるのかな？
変なとこに安心している僕だったが、いきなり漏斗を口の中に突っ込まれて再び我に返った。
「うごっ！？　んんんっ！！」
「さぁ兼人くん。今から何リットル飲んだら吐いちゃうのかコーナーだよ♪　海水たくさん汲んできてるから頑張ってたくさん飲んでね！」
2リットルのペットボトルに海水が満タン入っている。
見渡せば周りに五本は置いてある。

「10リットル飲みきる事が出来たらかなり楽に逝かせてあげるよ？　頑張ってね！」

お、おい、無理だって……海水なんて2リットルさえ飲みきれないよ！？　“いかせてあげる”ってどうゆう意味だよ？　どこか連れていってくれるのか？　まさかの射精させてくれるのか！？

ってゆうか両脚切断されてる時点でもう僕の人生終わってないか？

色々考えてるうちに口内へ大量の海水が注ぎ込まれてきた。

「ガボッ！　ガボッ！　ごくごく……ごくごく……ぶはあっ！！」

苦しい……死ぬ……止めてくれよもう……。

ドボドボこぼしながらも2リットルの海水を飲み干した僕に、アイドルの三人と後輩の美紅ちゃんは拍手喝采。

「良くできました！　一本目を飲みきった御褒美として……兼人くんの好きな子による手コキタイムをプレゼントするわね。誰がいい？」

笑顔で莉央が訪ねてくる。

手……手コキ……タイムだって？　脚を切断する前にしてくれる

かな？　それ……。
　自殺しようか考えてる時にこんなとこ連れて来られて、タコ殴りにされて顔面ボコボコにされて両脚を切断されて……更に生きる気力無くなってきたところに手コキだと？　ふざけるなよホントに……。

「早く決めないと両脚の麻酔切れてきたら地獄の激痛で射精なんか出来なくなっちゃうよ？　兼人くん？」

　明日香も心配して催促してきた。

　くそう……無茶苦茶辛いけど……なぜかオチンチンは勃起してしまっているじゃないか……。
　やはり可愛い子たちに恥ずかしいとこ見られてると反応しちゃうのか僕は……。
　旅の恥はカキ捨てだ！　どうせなら一番タイプの子に抜いてもらおう！
　そう決めた僕はツインテールが無茶苦茶可愛い小学生アイドルの女の子……富田美香ちゃんを指差した。
　手首を縛られていても、指先だけで指名はできたのだ。

「えぇ～？　あたしが手コキなのぉ？」

「美香ちゃんはアナル責めるのが大好きなのにね……」

「そうなのよぉ。あたしがこれしたら肛門責めは明日香ちゃんか莉

央ちゃんか……美紅さんだよねやっぱ……んん……残念っ」

そう言いながらシコシコと僕のいきり勃ったペニスを手コキし始める美香ちゃんに、僕の興奮はどんどん高まってゆく。

Mでもないはずなのに縛られた状態でこんなに興奮できるなんて……やっぱりアイドルの可愛い子ちゃんにエッチな事してもらってるからだろうな……。

「ほら！　これくらいのスピードが気持ちいいんでしょ？」

「あう……うう」

あの世から僕のこんな姿を見てるのだろうか？　麗奈……。他の女の子にこんなことされてる所なんて見せちゃってごめんね。でも麗奈だって他の男とキスしてる所見せたよね僕に……。

ダメだ……早くも出そうだ……。

「ううっ……イク……」

「早くもイクの？　あたしの手コキもレベル上がったかな？　莉央ちゃん？」

『どぴゅぴゅぴゅぴゅうっ！！』

「スッごくいっぱい出してるじゃんコイツ……美香ちゃんは上手く

なったと思うよ」

「テヘヘ♪　ありがと。尿道に残ってるのも絞り出しといてあげるね？」

『ギュウ……どくん……どくんっ』

僕のオチンチンの裏側の根元からカリクビまで美香ちゃんは人差し指でシゴいてゆく。

尿道に残された僕の精液はすべて吐き出された。

「ううっ！！はぁ。はぁ。ああ……」

『ガボッ！！　ごぼごぼごぼ……んぐうっ！！？？』

次のペットボトルの海水が再び漏斗をぶち込まれた口から喉の奥へ流し込まれてゆく。

「んぐう……ごくごく……ごくんごくん……」

これはキツいぞ……もう限界だ……喉は乾くし腹は痛いし息が苦しくなってきたし……。

「もう無理。止めてくれ。もう僕は自殺する予定なんだから解放してくれ……」

『ボコッ！！』

パンパンになっているお腹へ思い切り拳をぶち込む美紅。

「げぼおっ！？　げえええええっ！！」

僕は今飲んだ海水の殆どを吐き出してしまった。
更に冷たく質問する美紅。

「今何て言ったの？」

「げほっ！　げほっ！……だから……もう僕は……自殺するつもりなんだ。解放してくれ」

「兼人くん、まだ分かってなかったのね。今日あなたは、あたしたちに拷問処刑されてこの残酷処刑島であの世に逝くのよ」

「えっ！？　確かに僕を励ましてくれるつもりにしては残酷さがエスカレートし過ぎて殺されちゃうかも？　感はあったけど……処刑だなんて……」

いつ警察に捕まるかびくびくしながらお母さんと最後の思い出作

りと思ってたくさん親孝行してたんだけどなぁ……。

まさかの後輩とアイドルたちに連行されて処刑されるとは夢にも思ってなかった。

「ボーガンで殺したの？　二人とも……」

「そうだよ。公園の繁みに隠れてその時を待っていた。麗奈とあの男がお互いの帰路に着くタイミングをね。一人ずつ首を撃って殺してやったよ。麗奈は急所から外れたのか１０分以上苦しんでのたうち回っていたけど、僕も親孝行終わったら後から逝くからねって……あの世では僕を裏切らないでねって……心でそう言ってきたんだ」

「そうなんだ。あなたを裏切ったと思った二人を殺しちゃったんだねやっぱり……特殊任務省の偵察は凄いなぁ」

「裏切ったと〝思った〟だと？　麗奈は僕を裏切ったんだ！変な言い方するなよ！」

「……あんたってホントに哀れだよね……」

莉央はそう言いながらワニ型の大型ペンチを手にしてゆっくり歩み寄ってきた。

約一ヶ月前。８月３０日――――

「おいおい……そんな残酷なこと出来ないぜ？　こう見えても俺は曲がった事や暴力は嫌いなんだ。麗奈もよく分かってるはずだろ？」

「あの子の……兼人の為なの。お願いだから協力して拓也くん」

「ううん……でもな」

「私が筋肉が萎縮する難病で、いずれ心臓が止まって死ぬ事を知ったら兼人は……兼人は絶対自殺しちゃう……あの子まで死なせたくないのよお願いっ！　自殺させてしまうくらいなら私を憎んで別れた方が絶対いいからっ！」

「そ、そうだな。兼人とやらの事を思えば俺も心を鬼にしてその悪役……買ってやるよ麗奈」

「ありがとうっ！！　好きでもない私とキスすることになるけど本当に構わない？」

「はははっ！　俺は麗奈は大好きだぜ？　兼人とかゆう中坊に獲られちゃったけどな」

下を向いて震える麗奈。涙が溢れ出してきて止まらない。
優しく肩を抱き締めながら拓也は言った。

「その涙……アイツの命助けるためと……俺の告白が嬉しかった……どっちとも捉えていいかな？　はは……」

「……うん。私も兼人と出会えてなければ拓也と付き合ってたかも……」

「酷いなぁ……かもは止してくれよ？」

「ホントだね。あははは。余命数ヶ月だけど兼人にケジメを付けたら……その数ヶ月は拓也を愛していい？」

「……もちろんだよ」

強く抱き締め合いながら麗奈と拓也の新学期初日〝帰り道に兼人にキスを見せ付ける作戦〟は出来上がった。

「——と言うわけであなたが殺しちゃった元恋人の麗奈さんと拓也さんは……あなたに自殺してほしくなかったから心を痛めながらも演技をしたのね。どっちにせよ振られたのは事実だけど……」

美紅ちゃんはそう言いながら僕の短くなった脚……太腿の付け根あたりを内側から握り、思いっきり左右に開けた。

菅野莉央は大型ペンチを僕の右の睾丸に宛がう。

ヒヤリと金属の冷たさが僕の陰嚢を襲う。

この子たちが今から何をするつもりなのか早急に理解は出来たが、不思議と恐怖はなかった。

事実を知った僕は声をあげて泣いた。
号泣した。
麗奈と拓也の苦しんで死んでゆく姿を浮かべながら涙が止まらなかった。
『ギュウ……』
「ぐわあああっ！！」
でも麻酔の効いていない睾丸への圧力は、想像を絶するものだった。
悲しむどころか激痛での涙に切り替わってしまったかもしれない。
「後悔しても遅過ぎるんだよ。もうすぐ……金玉潰れちゃうからね？」
『ギュウウウウウ……ぶちゅっ！！』
鈍い音を立てて僕の右睾丸はミンチになった。
地獄の激痛の中でも、もう殺してくれ、地獄に送ってくれ、とゆう自虐心が芽生えていたため、四人の女の子たちには心から感謝していた。
でも激痛過ぎて気が狂いそうだ。
尿道から精液混じりの血が噴き出した。

明日香の小さくて綺麗な左手が、僕のペニスを握った。次の瞬間、右手の人差し指をピンと立てて僕の尿道のワレメからゆっくり差し込まれてゆくのが見えた。

「尿道から指入れたげるから。ペニスの力抜いてなさいよ？」

「えっ！？　いやだ……やめ……痛いっ！！　壊れちゃうっ！！」

指の隙間から時折血が噴き出す。

構わず強引にグリグリと捻りながら捩じ込んでいく。

「あなたの性器を……壊してるのよ。黙らないと尿道引き摺り出しちゃうからね？」

細くて小さい小学生の女の子の指でも尿道から人差し指を全て埋まるまで突っ込まれたら……それはそれで超激痛だった。

しかも痛みに敏感な尿道を掻き回しながら……。

痛みで涙が止まらないが、少女たちの責めは止まらない。

莉央は僕の潰れた睾丸の部分を左手で鷲掴みにして、残ってる睾丸に的を絞る。

陰嚢ごと右手に握られた千枚通しを的確に内部の睾丸本体へ刺し込んで引き抜く。

また別の角度から刺し込んでは引き抜く。

「えい。えい。やあっ。あはは♪　突き開けた穴から白と赤の液体でてきてるぅ♪　金玉の一部かなぁ？」

「ふんぎいいいっ！？　うぎゃあああっ！！」

数十回繰り返した頃には睾丸は蜂の巣みたいに穴だらけになって、潰した右睾丸と変わらないくらい中身はミンチ状態だろうと思う。

白目剥いて失神しちゃったからその辺はよく覚えて無いんだけどね……。

再び目を覚ました僕は、更に体が軽くなっていることに気付いた。
両手も肩から切断されて、ベッドに寝転がっている僕。
止血注射を打たれて包帯でグルグル巻きにされてるのか、血は止まってるみたいだ。
痛み止め注射も打たれてるのか、両脚同様に両肩も殆ど痛みは感じない。

縛られていないけど、もうこんな姿なら縛る必要もないいんだろうな。
小学生の女の子にでもボコボコにされるほど戦闘力は皆無だと思うよ。
相手を殴ろうと思えば、手も脚もない僕は、股間に付いているオチンチンくらいしか残っていないんだ。
睾丸の痛みもかなりマシになっている。
まさかキンタマも麻酔注射打ってくれたのか？
多分後々の拷問を楽しくするためなんだろうな。

ずっと泣きわめいていたらどの責めで痛がってるのかも分からないもんな。

莉央が背後に回って両脇に手を入れて僕を抱えあげる。

一体次は何をする気なんだろう？

明日香と美香が僕の短い両脚を全開に開いた。

『パンパンパンパンッ！』

「ひゃあっ！？　痛たたたっ！！」

莉央の右の膝で僕のオチンチンをサッカー選手がやるようにリフティングし始めた。

膝で蹴り上げられる度に、僕のオチンチンは上下に激しく揺れて、何回もお腹を叩く。

「あははっ！　莉央ちゃんのチンポリフティング出たぁ♡」

「ぷるんぷるん揺れてるチンポ見てたら笑えるね♡」

美香と明日香も嬉しそうに僕の正面側からじっと見ている。

美紅は脇目も振らずに大型のサバイバルナイフを磨ぎ始めた。

あれで最後はトドメ刺す気なんかなぁ……。

無茶苦茶斬れそうで何か怖いな。

痛い……何回も蹴られてるとオチンチンが痺れて激痛に変わってきたぞ？

もうやめてくれ……痛いよ。

莉央のチンポリフティングで、再び涙を流す僕だった。

透明の先走り液が莉央と言う少女の膝を濡らしているのが見えた。

蹴り上げて膝を下げる度に糸を引いている。

アイドルの女の子たちに見られてると思ったら恥ずかしくて恥ずかしくて更に涙が出てきた頃に、莉央のリフティングがようやく終わったみたいだ。

「汚い液……あたしの膝に付けてくれちゃったね？　兼人くん？」

え？　そんなこと言われてもあなたが勝手に背後から蹴り上げまくって……そりゃ変な液も少々出ちゃうよ……。

心の中で言い訳してると肛門に激痛が走る。

「痛いっ！！　熱いっ！！　んぎゃあああっ！？」

莉央は一気に親指以外の四本の指を肛門に捩じ込んでいた。

ローションを塗っているので滑り込むように少女の指を数本受け入れざるを得ない僕の肛門。

ついに親指どころか手首まで捩じ込んで掻き回している。

手首が入った時点で僕の肛門括約筋は数ヶ所引き裂かれ、四方八方に鮮血が飛び散るのが見えた。

痛さと熱さで超が付く激痛だったが、莉央の右手のアナルファックは止まらない。

指先が見えるほどまで引き抜いたと思えば一気に手首までぶち込む。これを繰り返してくるから堪らない。

僕の全身の血が噴き出したと思えるほどの大量の直腸と肛門からの出血が地面を斑に染めてゆく。

「んぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃあああっ！？　ひいいいっ！！」

「出てこようとするウンコ……大腸奥まで押し返してあげたからね？　死んだあと勝手に肛門開くから……その時に沢山へり出しちゃえばいいよ」

後輩の美紅がサバイバルナイフを右手に持って近寄ってきた。

『ぎゅっ！』

「雁首からいく？　それとも根元からがいい？」

左手で雁首を掴み、水平に引っ張る。

首と思ったらそっちの首か！？

まだ尿道以外は無傷のオチンチン……やっぱりエッチな部位は全

て破壊されるんだね。
覚悟はできてるよもう……。

「人生最期だから女の子になっちゃおっか？　根元から全て斬っちゃおーね♡」

美紅ちゃんは一気にサバイバルナイフを引いた。
狙い通りに根元からスパッと斬れて、切断面から血が噴き出した。
尿道が１センチくらい飛び出して、血の混じったオシッコを振り撒いた。
少女たちの行動を見ていると、解剖されてゆく自分自身が惨めで仕方なく思えて、更に涙がこぼれ落ちる。
後輩の美紅ちゃんは、莉央に切り取られたオチンチンを手渡した。
僕の肛門に再び手を突っ込んで、大腸深くに捩じ込んでゆく。
自分のオチンチンが自分の肛門に差し込まれるとゆう、死ぬ寸前でなければ味わえない地獄の痛みと、恥辱を同時に味わったじゃないか……。

「痛いよぉ。全身と股間……お尻の穴も痛い……もう殺して……」

「明日香ちゃん、これでお尻叩いてあげて」

美香が明日香に金属バットを手渡す。

まだそんなことするの？
もうお願いだから殺して……。

「おっけー！　お尻の皮がズル剥けになるまで叩いてあげる♡」

それから10分ほど金属バットでひたすら僕の臀部を殴る明日香だった。
50回打ち込んで疲れたら美香に代わり、莉央に代わり……美紅ちゃんは締めくくりだった。
一人50回……交代交代で合計200回を打ち終わった頃、僕のお尻の皮が剥がれ落ち、真っ赤な身がはみ出しているズル剥け状態のお尻になってしまっていた。
実際には美紅ちゃんに代わってからのラスト50回でお尻の殆どの皮が打ち裂かれた。

うつむけのままで、背中を縄で縛り付けられてゆく。
もう縛り付けなくてもなにも抵抗出来ませんが？

そう心から思ってると、察したのか莉央が僕に囁いた。

「あなたの身体の中心がブレたら上手くいかない事するから縛られる事には我慢してね？　もうすぐ逝かせてあげるから……」

ようやく死ねるのか……あの世ではまず麗奈と拓也さんに謝ろう。
許してくれるかな？　あの二人……。

美紅ちゃんがフェンシングで使用される細身の剣を持ち、目の前でグニャリグニャリと曲げている。

「こんなに柔らかいけど兼人くんの身体なんて簡単に貫通するんだよ？　あたしが何するか分かるよね？」

「首に刺してトドメをさすんだよね？　今まで拷問してくれて感謝してるよ。麻酔まで使って……本当にありがとうございましたみなさん……ぐす……ぐす」

「首を切るのは最後の介錯だよ？　美紅ちゃんはあんたの肛門からフェンシングの剣で串刺しにしちゃうんだ♡　痛いよぉ？　最期の刑罰になるから麻酔はしないから……思いっきり絶叫して反省しながら死んでいく事ね」

莉央は微笑みながら、僕の頭をナデナデしてくれた。

「うん。どれだけ痛くても我慢するよ。四肢切断されてちゃ自殺もなかなかできないから助かるよ」

覚悟を決めた僕はゆっくり目を閉じてお尻の力を抜いた。

「もっとケツ突き上げろっ！」

『ドカッ！！』

美紅ちゃんは思いっきり僕のお腹を蹴飛ばした。
ズル剥けになっているお尻を蹴らなかったのは彼女の最後の情けだろう。

「ひぎいっ！！　ごめんなさい……こうですか？」

「そうそう。ケツ穴ヒクヒクさせ過ぎだし！　莉央ちゃんに肛門引き裂かれてガバガバになっちゃって……。赤い直腸まで丸見えだよ？　スッゴくヤらしいなぁ♡　ほぉら、いくよぉ～。肛門串刺しの刑……執行しま～す♪」

『ツプ……』

「ひあっ!?……んん……お願いします」

『ズブブブブ……ピタリ』

「はうっ……ううっ……」

「S状結腸まできたよ？　ここ突き破ったら激痛開始だから……覚悟はいいかな？」

「はい！　早く僕を処刑してくださいっ！　麗奈の元へ逝かせてくださいっ!!」

「は？　麗奈さんの元へは行けないよ？　兼人くんは必ず地獄へ行くから……」

「うっ……ごめんなさい……ごめんなさいっ！！」

「謝らなくていいから。僕の汚い肛門から口まで美紅様の剣で串刺しにしてくださいお願いします……って言ってごらんなさい！」

「ぼ、僕の汚い肛門から……美紅様の剣で……串刺しにしてください……お願いします……」

泣きながらお願いしたのに三人の小学生アイドルの女の子たちは大爆笑していた。

何がそんなにおかしいのか理解できないまま美紅ちゃんの握っている剣がゆっくり刺し込まれてくるのを感じた。

『ズブブ……ばちゅっ！！』

「ぴぎゃあああああっ！！　痛ったあああああああっ！！」

美紅ちゃんの剣はついに僕のＳ状結腸を突き破った。

「ケツ穴からの汚い血をあたしの脚にかけないでくれるかな？」

『ズブズブ！　ズブブブブ！！　バリバリバリバリッ！！』

僕の大腸から小腸から大事な臓器をどんどん突き抜いてゆく美紅

ちゃんの剣。
半端でない激痛が身体の中心部を駆け巡る。

「やはあっ！？　ふんぎいいいいいっ！！」

この世の最強の激痛……生き地獄だった。
金玉潰しと良い勝負の激痛だ。
これだけの痛みを味わえば……あの世の麗奈も許してくれるかな？

「色んな臓器突き破ってやっと喉まできたわよ？　ゴールのお口まで後５㎝……４、３、２、１……ゼロ！　はいっ、あーんしてっ♡」

島中に響き渡るほどの僕の人生の中で最大音量の絶叫のあと、喉にまで灼熱の痛みを感じた僕は無意識に口を開いた。
僕の口から鮮血と共に剣が飛び出したのが見えた。
身体が激しく痙攣し始めたのがわかるけど、あれ？　まだ意識がある？　激痛でも死ねないじゃないか！？
ぐ、ぐるしい……。

「痛い？　まだ死ねないでしょ？　ほらほら……」

美紅ちゃんはグリングリンと内臓を掻き回すように剣を上下左右に動かしながら微笑んでいる。
動く度に口と肛門から血が断続的に噴き出した。

数分間も散々僕の内臓を掻き回して全身の痙攣を楽しんで観賞した後、一気に剣を肛門から引き抜く。

「あはは♡　ぼちぼち抜いたげようか？　それっ！！」

『ぶしゅっ！！』

「はうっ！！……痛い……うがががが……」

夥しい量の腸液混じりの血液が、僕の肛門から噴き出した。
肛門括約筋がズタズタに引き裂かれちゃっている為、拡散しながらあらゆる方向に飛び散る。

「きゃっ！？　汚ないわね～全く……」

残酷な少女たちは僕の肛門からの射出液体をスカートや脚に少し掛かりながらも交わそうと逃げまくる。

「やれやれ……拡散波動砲食らうとはね……。臭いし汚ないヤツだね。きだ生きてるんだ～？　あはは♪　急所裂けて貫通させちゃったからねっ♡　莉央ちゃん、お願い」

「うん。ほら、首を突き出せっ。佐川兼人……」

背中から馬乗りになった莉央はサバイバルナイフを喉仏の真上にあてがい、高速で左右にスライドさせる。

『ズバズバッ！！　ぶしゅうううううっ！！』

血飛沫が数メートル噴き出すのが見えた。

「んごご……ごぼごぼっ……かひゅうっ……かひゅうっ」

「頸動脈と食道まで斬れたよ？　血の音が混じった呼吸音……苦しそうで素敵だね♡」

「ごぼごぼ……ごぼごぼ……かひゅうっ……かひゅうっ」

「空気が食道から漏れて返事も出来ないか。じゃあ首の骨に当たるまで一気にやったげる♡」

『ザクザクザクザク……ぶしゅしゅしゅしゅしゅううっ！！』

「ごぼぼっ……んごごごおおっ！！」

背中から馬乗りになった莉央が僕の首を前から半分斬り、更に3メートルくらい血飛沫が上がったのが見えた。

「ここを叩き折ったら楽になるからね……さようなら♪」

『ガンッ！　ガンッ！　バキバキっ！！』

首の背後からナイフを数回叩きつけて脊椎をへし折ってくれた。

その瞬間僕は白目を剥いて一瞬にして意識がなくなった。
首と肛門からドクドクと血を流しながら僕の骸が横たわる。
肛門からは鮮血と共に、沢山の便もブリブリと垂れ流していた。

「莉央ちゃんが強引に腸の奥に押し込んでたウンチだね。……死んだら勝手に出てくるって言ってたでしょ？　うふ。これにて串刺し処刑完了っ♡　みなさんお疲れ様でした♪」

美紅の終了宣言に、切り取った生首を兼人の背中に置きながら頷く莉央だった。

「誰かも分かんないくらい男前がボコボコになっちゃったね？　ごめんね……」

明日香と美香も静かに頷いて、哀れな少年の屍を残し、簡易な港で迎えの船を待つのであった。

覚悟（後書き）

後悔先に立たず。

一時の感情で凶行に及び、真実を見抜けなかった少年、佐川兼人の末路には相応しい死に様だった。

あの世では辿り着く場所が違うので出逢うことは不可能であろう。

ただ生まれ変わりが本当にあるのなら……今度こそ幸せな人生を歩んでほしいものである。

本当の幸せ　（前編）（前書き）

夢を追いかけて掴めない者。
追わずとも手に入る強運を持つ者。
それぞれの運命が交錯する。

本当の幸せ　（前編）

　一人の女子高生、柳川美登里。彼女の人生は振り返れば色々と散々な目に逢っていた。

　彼氏のせい？　友達のせい？　親のせい？

いや……彼氏は今まで一人も出来たことがなかった。友達さえも、親友と呼べる友人には巡り会えていなかった。

　両親は……彼女の中では最悪の悪夢だ。

　もしも彼女のせいだとしたら、運のない星の下に生まれてきた彼女自身の運命を憎むべきかも？

　暑さも和らいできた初秋の頃だった。

　徒歩通学中である女子高生、柳川美登里に一人の少女が自転車で追い付いてくる。

　ボーイッシュな女の子の坂野瞳。

「美登里！　おっはよー！　相変わらず本日も浮かない顔しちゃってるねぇ？　もう過ぎたことは忘れて前向きに生きないと色々損だよ？」

東部地方では田舎の方になる、とある町の普通のレベルの私立高校に通う三年生の柳川美登里。南部地方で生まれ育ち、父親の勤めるそこそこ大きい製薬会社の転勤で東部地方の町へ引っ越してきていた。

父親が課長に出世しての転勤だが、南部地方が大好きだった父親は、しょっちゅう田舎が恋しくなり、ホームシック気味で元気がなくなる。

母親は少し気の強い性格で、負けず嫌い。かなり顔に出ているので、一目見たらすぐに気の強さが分かる。近所の主婦友達や、男友達としょっちゅう飲みに行くため、週に二回くらいは夜中まで帰ってこない。

美登里が中学を卒業するまでは南部地方で過ごし、高校一年から東部地方の私立高校にかれこれ二年半通っている。

柳川美登里。ごく普通の顔立ちで、あか抜けしない雰囲気の父親似で、黒髪ロングで、プライベートでも口紅はつけない、化粧はしない素っぴん主義な女の子。

「また昨日のこと思い出してるんでしょ？　あいつらまた美登里に変なこと言ってきたら絶対容赦しないから！　もう気にしない気にしない。泣いても笑ってもあと半年くらいしかないんだぞ？　分かってる？　」

クラスの皆からはなぜか冷たくされて、複数の子に嫌われている美登里を、いつも庇って助けてくれる大親友の坂野瞳。

ほんと感謝していた。

「うん。いつもごめんね」

ニコッとはにかむ瞳。

「よっと！　かなり涼しくなったね？　空が高くて気持ちいいなぁ」

自転車から飛び降りて二人一緒に歩き出す。

一年の時から美登里をかなり気に入ったのか、休み時間にいつも一人で本を読んでいた美登里に近寄ってきてはペラペラと話しかけてくる坂野瞳。

家から高校が少し遠いので、自転車で通学している。とにかくよく喋り、活発でお人好し、ショートカットでボーイッシュだけど、目鼻立ちのハッキリした可愛い系の女の子。小学生の頃から柔道を習っていて、今では初段の腕を持っている。

父親が都心の電工会社では最大規模の大企業である、坂野電工の部長で、瞳のことをとても大切に育ててきた。

母親は、父親の部長の幼馴染の同い年で、小さい頃から仲良しで、しょっちゅう遊んでいるうちにそのまま中学、高校、大学と一緒に通い、当たり前のように夫婦になっていた。柔道好きな一人娘の熱血少女をうるさく叱りながらもいつも心配していた夫婦である。

両親揃っての溺愛度は半端なものではなかった。

瞳には、密かにアイドルになりたい夢もあった。
初めは人間不振の美登里には信用出来ないうるさいヤツだったが、全く悪意のない鬱陶しさにいつの間にか心を許してしまっていた。

「美登里！　今日暇？　ちょっと相談があるんだけどね。美登里の家に久しぶりにお邪魔してもいい？　帰りに最近オープンした美味しいケーキ屋さんのイチゴショートケーキ買ってあげるから！　ね？」

何も言って無いのにどんどん勝手に話が進んでいく。

「大丈夫だけど……。瞳から相談なんて珍しいな。私の相談もよく聞いてくれているし、両親も今日は遅くなるって言ってたし……。断る理由はないし構わないよ！　でもイチゴのショートケーキが美味しくなかったら即、退室してもらいますけどね」
「うんうん、それくらい嫌味のある美登里も大好きだよ！　じゃあ決まり！　さっさと授業終わらせて早く一緒にケーキ食べよっ」

坂野瞳と出会えた都会での高校生活、二年半前の入学式の日から、美登里の人生は明らかに好転してきている。
彼氏なんかいなくても、瞳が側にいてくれるだけで、一生元気よく生きていけそうな気がしていた。

――――放課後。

浮かれ気分で最高に評価の高い店のショートケーキを買って、機嫌よく美登里の家に向かっている二人。
あまりにも美味しそうで早く食べたくてついつい足早になる。
ワクワクしながら帰り着いて、早速お茶を淹れて自分の部屋へ瞳を招き入れた。
色々と雑談しているうちに、話は本題に近付いてきた。

「………なるほどっ！　そう言うと思ったよ！　美登里ならね。あたしもそりゃ本音言っちゃうとアイドルになりたいよ！　でもオーディションなんかそう簡単に受かるわけないし、だいたい母さん考えが甘すぎるのよね！　ほんとに……」

「受かるか受からないかは受けてみなくちゃわからないし、お母さんの言う通り、何回もオーディション受けられるから。　まだまだ若いからね私も瞳も。柔道初段アイドルなんてそうそういないよ？」

「うーん、じゃあ来月にある《令和乙女》のオーディション受けてみるか……ありがと！　相談乗ってくれて。結局母さんと同じ意見だったけどなぁ美登里も。あはは……」

『私より遥かに可愛いし、ほんとに瞳なら受かっちゃいそう！もし瞳がアイドルになれたら……毎週でも劇場に見に行きたいな。

キラキラのステージで踊りながら歌う姿が想像できちゃうなほんと……。でも何か瞳が遠くに行っちゃいそうな寂しさもあるけどなぁ……』

深く想像してみればみるほど、少しずつ寂しくなってゆく美登里だった。

瞳が帰るのを途中まで送っていった後、コンビニで大好物の杏仁豆腐を買ってくる。

父親の会社の社宅である一軒家に、ケーキ同様早く食べたくてこれまたワクワクしながら帰り着いた。

大きな製薬会社なので、社宅も課長クラスになると二階建ての立派な一軒家である。

「あ、あん、あぁん……」

『まただ。お母さんのこの声はいつ聞いても嫌悪感しか生まれてこない。お父さんが残業で夜中になる日だけ必ずと言っていいほど男を連れ込んでいるんだよね。私の気持ちなんかどうでも良いんだろうし、お父さんに対してだって罪悪感さえないんだよね？　お母さん……』

いつから家族の歯車が狂ってしまったのか？

１０年前、南部地方で暮らしてた時に弟を癌で亡くしてから、母は　父に対して愛が醒めたみたいに色んな男を招き入れるように

なった。

『お母さんのあんな果したたない声なんか聞きたくない』

複数の男性なんかと抱き合えること自体、母を心底信じられなくなる美登里は、耳を塞ぎながら二階の自分の部屋へ駆け上がった。

——————１１年前。

南部地方の辺境にある団地。美登里が７歳の時だった。

既に小学二年生だった美登里は、あの日のことを結構鮮明に覚えている。当時弟は二つ下の５歳、まだ幼稚園の年長組だった。

「あなた、光孝が！　凄い熱出してうなされてるの！　下痢と嘔吐も激しいからどこか悪いのかも？　もう数日前から熱が下がらないし。一刻も早く病院へ連れていかないと！」

「俺は遅刻はできないんだ！　救急車呼べば済む話だろう？　病院へ運んでから会社へ行けば間違いなく遅刻する」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ！？　もういい！　救急車呼ぶから！！」

「お母さん、光孝は大丈夫なの？」

「大丈夫なわけないでしょ！！　早く学校へ行きなさい！！　あんたと光孝と替わってほしかったわ！！」

私なんて生まれてこなけりゃ良かった……。

どうしてそんなに私のこと嫌いなのに生んじゃったの？

――その答えはすぐに分かることになる。

「光孝くんの病状ですが……。肺癌が脳や胃にも転移しています。誠にお伝えにくいのですが、余命は……抗癌剤治療を行って一年くらい……行わなければ三ヶ月前後かと思われます。もちろん同じ病状でもその何倍も生きておられる患者さんもいらっしゃいますので一概には言えませんが……。私たちも最善を尽くしますので……力を合わせて光孝くんを応援していきましょう」

精密検査が終わって母親に告げられた医師の宣告は、とても残酷なものだった。

当たり前のように母は抗癌剤治療を選択するが、柳川家にとっては辛く悲しい看病の日々が始まった。

貴重な時間の始まりとも言えた。

「お母ちゃん、僕はなんか病気なの？　昨日凄く吐き気がして……。前からたまに頭が熱かったんだけど、昨日は我慢できなかったんだよ」

「何ですぐに言ってくれなかったの？　でも大丈夫よ！　光孝はすぐに良くなるから……きっとまた元気に友達とも遊べるからね？頑張って早く治すのよ？」

「うん、いっぱいごはん食べてすぐに治してみせるから！！」

　美登里も父も……出来る限り何度も見舞いに行った。母は付きっきりでやつれるほどに病院で一緒に寝泊まりしたりもした。

　しかし一年半後……。その時はやって来た。

「午前零時三分……ご臨終です。」

「わあああああんっ！！　光孝っ！　光孝あぁぁぁっ！！」

　美登里は泣き崩れる母を見ながら、一生トラウマになる事態が更に重なることになる。

　美登里の方へ振り返った母は、叫ぶように言った。

「あんたが替わりに死んでくれたらよかったのに！　どうして……どうしてあんたが生き残って光孝がこんなめに遭わなきゃいけないの！？」

「おい、何を言ってるんだ美咲！　いくらなんでも酷すぎるぞ？美登里に謝れ！」

「あなたは黙ってて！！　あんたはね！　私たちが結婚する前にこの人の前の彼女が産んだ連れ子なんだよ！　私の子供は光孝だけだった……。前の女は何度か見たことあるけど、あんたにそっくりだったわ！！　何であんたが死ななかったのよぉー！！　うわあああんっ！！」

――一年後。

アイドルデビューしたての柳川美登里は、西部ドームとゆう大きな規模の夢舞台で、コンサートを行っていた。

「ワーワー！！」

「ヒューヒュー！！」

「美登里ちゃーん！！」

「翔子ちゃーん！！」

「七海ちゃーん！！」

去年……東部地方へ引っ越してきてからの美登里の大切な〝親友だった〟坂野瞳は、結局残念ながら《令和乙女》のオーディションには受からなかった。

あんなに活発で明るい性格の瞳に何度も泣かれて……美登里はろ

くに慰めることも出来ず、黙って聞いてあげることしか出来なかった。

全くアイドルなんか目指してなかった柳川美登里が、都心の百貨店で買い物中にたまたま芸能関係のスカウトマンの目に留まりオーディションも受けずに即アイドルデビューとなった。

三人の小さなユニットだが、センターも任されて初めは動揺していた美登里だったが、短い期間で必死でダンスも歌も厳しいレッスンを堪えて、急速に成長していた。

卒業する数ヶ月前、瞳とは音信不通になり、後少しで卒業だったのに結局卒業式にも来なかった。

美登里の好転は瞳にとっては耐え難い屈辱に他ならなかったのかもしれない。

でもアイドルデビューとゆうとてつもない夢を、周りの誰かの力でいきなりでも手に入れてしまったら、断れなかった上に、結局は嬉しかった美登里であった。

その日の大きなコンサートも無事に終え、入籍させてもらっている《朝田プロダクション》の社長、朝田琢磨の個室に呼ばれた。

「たった数ヶ月のレッスンでよくそれだけ上達したもんだね美登里くん。　君は先田くんの見込んだ通り、素晴らしい人材だったよ。センターとしても輝いているな」

「ありがとうございます！　先田さんにあの百貨店で私を拾って頂けなかったら今の私は絶対にないですので……先田さんの期待を裏切らないよう頑張っていきたいと思っています！」

「いい心掛けだ。それと……ちょっと言いづらい事なんだが……」

「はい。何でしょう？」

朝田社長は百通以上のファンレターの入った封筒を、目の前の机の上にばらまくように置いた。

「君たちに何かあってはいけないから、ファンレターや贈り物はすべて事務所でチェックしてから君たちに渡すのだが……これらは全て剃刀が封入されていた。しかも手紙には〝死ね〟とだけ書かれている」

それを聞いた美登里は、一瞬背筋が凍るほどの寒気を感じた。

『一体誰がそんなことを？』

瞬時に脳裏に浮かぶ親友だった坂野瞳。

『ま、まさか瞳が！？　いや……それともお母さん？？　卒業してからお母さんとの縁を切りたかった私は、プロダクションの息がかかっているマンションに住ませてもらっているから、それを恨んでのお母さんが……でもまさかそこまでするかな……？』

美登里の中では、恨みを買うとすれば母と瞳しか思い当たる人物は浮かばなかった。
血の繋がっている父の方は、かなり応援してくれていたからだ。
「ほんの少しなら本人に言わずに隠すのだが、あまりにも枚数が多いのと、筆跡も違うようなので、かなり複数の人間に恨まれているようだ。しばらくは一人で出歩いたりせず、慎重に行動してもらおうと思ったわけだ。いいかね？」
「はい。レッスンにも劇場公演にも全て事務所が手配して頂いている車で移動します。ありがとうございます」
マンションに送られてからも、その日の夜は一睡も出来なかった美登里だった。
『休日だったから調度よかったんだけどね。夜眠れなくて昼寝しちゃった……。結局疲れてたら人間寝れちゃうんだなぁって本気で感心したよ。明日は厳しい歌のレッスンがあるのに夜眠れないかも……。まぁいっか！　思いっきり昼寝してるから♪』
剃刀入りで気持ちの悪いメッセージ付きのファンレターの事はできるだけ考えないようにして寝る努力をするアイドルの柳川美登里だった。

――東部地方某所にある坂野電工株式会社。

坂野瞳の祖父が会長で、社長は血の繋がりのない飾りだけの社長である今川勇二。

現役の若頭のポストを持つ極道でもある。

会社関係のいろんなトラブルを脅しで解決させるために雇っている武闘派の男だった。

もちろん社長のポストを餌にして、部長が雇っていたのだ。

瞳の父である坂野道三部長が、実質の坂野電工の全ての権限を握っていた。

「もしもし。おお、瞳か。心配するな！　社長の今川に頼んで例の事はしてやった。バレないように最終的にはお前の望み通りにしてやるからな」

「ありがとう。私はあの子を絶対許せない！　何が〝望まない者にこそ手に入る幸運ってあるんだね〟だよ！　私がどれだけアイドルになりたかったかわかってたらあんなセリフ言えないはずなのに！　くそう美登里め……今に見てろ！！」

――東部地方の巨大組織である渡良瀬組事務所。

「今川の兄貴、組員総出でファンレター書いちゃいましたけど……役に立ちやしたか？　極道がアイドルにファンレターなんて書くのは初めてでしたぜ？」

「剃刀入れた上に、死ねと書くのがファンレターと言うのか？　はははは！　お嬢さんの憎む相手を脅すには効果抜群だったよ」

「そうですか……来週は例の件……本当に実行するんですかね？」

「当たり前だ！　実行したお前たち二人には、ムショでのお務め後にゃあ一人一億用意する。そのくらい今回の坂野部長からの報酬はとてつもないんだ！　組にも一億入る。ほとんどお前たち二人のものだ」

「可愛い愛娘の報復の為に三億とは……無茶苦茶儲けてるんですね、兄貴の電力会社は……出てきたら一生遊んで暮らせるんで俺たち……組やめちゃってもいいっすか？」

「ははは。それはオヤッサンに聞いてくれよ」

――明くる日。《令和乙女》の発声練習が始まる。

「よしっ！　今日も頑張ってレッスンするかっ♪　アイドルってゆうのも本当に悪くないな。あんなにたくさんの男性たちに声援贈られて……。翔子ちゃんと七海ちゃんと私の三人で、アイドルの天下をとってやるっ！　今までの暗い人生を払拭するような素晴らしい人生にしてやるんだからっ！！」

本当の幸せ　（前編）（後書き）

たった二人の少女の為に、大きく人生を狂わされてゆく周りの大人たち……。

壊れ始めた歯車は……もう止まることはない。

本当の幸せ　（後編）（前書き）

希望を持って前へ進もうとする柳川美登里たちだが……。

一筋縄ではいかない人生が待っているようである。

本当の幸せ　（後編）

発声練習も必死でやり遂げ、三人はどんどん絆を強めてゆく。

「美登里ちゃん、今日もお疲れ様♪　土曜日の劇場公演も気合い入れてやり遂げちゃおーねっ」

「そうだね翔子ちゃん！　ミスしないよう頑張ってこー♪」

「美登里さんのセンターはほんとピッタリですね！　これからも美登里さんと翔子さんと三人一緒に頑張っていきましょう！《真・絆ＧＩＲＬＳ》を追い抜いちゃいましょうっ！！」

「そうだね七海ちゃん！　一つしか年変わらないんだからタメ口でいいよ？　ね？　翔子ちゃん？」

「うんうん！　菅野莉央と結城明日香と富田……何とかゆう小学生コンビになんか負けてられない絆の深さにしていかなきゃだもんねっ！」

かつての大親友であった坂野瞳が夢見ていた芸能界……アイドル。今となっては柳川美登里の生き甲斐となるほど熱い存在となっていた。

そして……。

土曜日の劇場公演が始まった。

「果てしなく続く星空に〜僕はお願いしたんだ〜♪　８８の星座の様に君と二人並んで無限に輝きたいんだ〜♪」

大声援を受けながら土曜日の劇場公演のアンコールも終わりを告げる。

「皆さん、アンコールありがとうございましたぁっ！！　これからも私たち三人の応援よろしくお願いしまーす！！」

「ワー！　ワー！！」

「ピーピー！！」

――――明くる日の日曜日。坂野道三自宅。

『次のニュースです。昨夜、アイドルグループの令和乙女のメンバーで、ボーカルを務めていた柳川美登里さん１９歳が、所属しているプロダクションの経営しているマンションに帰宅後、連絡が取れなくなり、行方不明となっています。その日は、三人で劇場での公演を終え、午後９時頃に柳川さんはマンションに帰宅したと思われますが、同じメンバーの一人が用事を思い出し、親元の自宅から電話したところ連絡がつかず、数時間待っても連絡が返ってこないた

め、マンションの管理人に確認を要請したそうです。その時既に柳川さんの姿はなかったとゆうことです。なお、ドアには鍵が掛けられており、管理人の合鍵を使用して………』

「はははっ！　あいつら上手いことやりやがったな！　あの柳川とかゆうアイドルも、夜の9時回って電気工事にくる会社なんて本気で存在すると思ってやがったのか？　甘いお嬢ちゃんだぜ。部長、例の報酬は俺が預かっときます。渡瀬橋組のオヤッサンに現金でお渡ししときますんで……」

「さらった後は……始末したのか？」

「龍二と竜也の二人は手が早いですからね！　もう強姦でもしてからどこかの山奥にでも埋めちゃってますよきっと」

「本当に……本当に美登里を殺して始末してくれたの？　お父さん？」

「ああ。もうデビュー仕立ての三人グループは二人グループに再結成せざるを得んな！　ワシの可愛い一人娘を登校拒否するほどまで追い込んで苦しめた罰だ！　当然の報いだ！」

三億円の詰まったスーツケースを、渡瀬橋組若頭であり、坂野電工社長である今川勇二の足元にドンと置く。

「ありがとうございます部長！　間違いなくオヤッサンに届けておきますんで」

柳川美登里が行方不明になり、世間は大騒ぎになるが、当たり前のように日は沈み、町に夜の帳がおりた。

警察は聞き込み情報や、防犯カメラ等の映像を元に、数百人での懸命な捜索活動を始めていた。

――――都内某マンションの一室。

一人の少女が手足を拘束され、猿轡を噛まされて素っ裸で拘束されていた。

その少女はバックで犯され、破られた処女膜からの血が太股を伝い落ちている。

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「んんん……んんんんんっ！！」

磯崎龍二と神崎竜也。

若頭の今川勇二の頼る右腕左腕となる存在のチンピラだった。

二人の絆は深く、タメ口の仲とはいえ、神崎竜也は一つ年上の磯

崎龍二を兄のように慕っていた。

「よほどそのアイドルが気に入ったんだなお前は……。よく飽きずにヤり続けられるぜ全く。じゃあ俺はお務め行ってくるからな？　龍二」

「おうっ！　一緒に務める予定が変わっちまって済まなかったな。その代わりお務め後に俺たちが組から貰える二億は全て竜也のもんだからな！」

「あたりめーだ！　俺がその嬢ちゃん殺ったことになって全ての罪を被るんだからな」

「頭には俺から説明しとく。死刑になるなよ？　元気でな」

「縁起でもないこと言うなっ！　一人殺ったくらいで死刑になってちゃたまんねぇよ！　しかもホントに手を下すのは龍二だしな……」

手を挙げながら龍二の部屋から去ってゆく神崎竜也。

最後のタバコを思いっきり吸いきると、覚悟を決めて東部警察署のドアをくぐった。

『今入りました速報です。東部警察署はたった今、本日午後8時過ぎ、昨夜から行方不明になっているアイドルグループの柳川美登里さんを殺害したとして、自首してきた自称無職の男を拘束して事情

を詳しく聞いております。殺してバラバラにして海に沈めた、との供述をしている模様です。東部警察署は裏付けを急ぐと共に……………』

柳川美登里を散々バックで犯し、中出しを二回行い、まだ犯し足りない磯崎龍二は、髪の毛を鷲掴みにして首を上に引っ張りあげる。

「うう……うう」

「猿轡、外してやろうか？　でも騒いだらすぐに殺してバラバラにしてやるからな？　わかったか？　おら！」

涙を流しながら首を縦に振る柳川美登里だった。
息苦しい辛さから解放された瞬間、ビンビンに勃起している精液と愛液にまみれた陰茎を喉深くまでぶちこまれる。

「んごごごおっ！？」

「本番バックの次はイラマチオだっ！　オラオラッ！！　妊娠しちゃうかもな今のバックで？　でも明日には死んでるから心配すんなよ！　ガキを産む間もねぇからよ？　ハッハッハッ！！」

再び美登里の髪の毛を掴むと、前後に激しく振り回す。
その度にいきり立った龍二のペニスは美登里の口と喉を猛烈な勢

いで擦り付けながらピストン運動を繰り返す。
「むごごごおっ！！　んぐううっ！！」
「べっぴんだなお前はホントに……イク……イクぜぇえっ！！」
『どぴゅぴゅぴゅぴゅぴゅっ！！』
「うごおっ！？　ごぽごぽ……ブクブク」
柳川美登里は吐き出す息と共に泡を噴くように精液を噴き出し続けている。
手首を縛ったままで抱きつき、更にキスを、ディープキスまでも繰り返す龍二。
胸を粗暴に揉み拉き、痛がる19歳の少女には構うことなく乳首にまで貪りついて舐め回し始めた。
シャワーを浴びに姿を消したあと、運営が経営する自宅マンションでの浅はかな自分の行動を恨み、反省し始めたが、全てが遅かった。
麻酔を嗅がされ、意識を失ったまま気が付けばこの部屋で素っ裸で拘束されて、目覚めた瞬間バックで人生初めてのセックスを体験させられている自分。
どう後悔しても後の祭りだった。
しかも殺害予告までされている柳川美登里は、犯された恥辱感よ

りも、殺されるかもしれない恐怖の方が勝っていた。

「ぷはあっ！　やっぱりビールは風呂上がりが最高だなっ！」

「ぐす……ぐす」

「いくら泣いてもお前はもう死んじゃう運命なんだよ？　諦めて覚悟を決めろよ？」

「いや、こ、殺さないで……いやだ……死にたくない」

震えながら止めどなく涙を流し続ける美登里。
あまりにも可愛いく、龍二のタイプなので、再度美登里を抱き締めて今度は指を膣に挿入してグチュグチュと掻き回し始めた。
初めての経験でも少しずつ気持ちよくなってきていた美登里は思わず声を漏らしてしまう。

「あ、あん……」

磯崎龍二の精力は常人離れしたものだったが、いくら感じようがこれから殺されるかもしれない恐怖を感じながらのレイプや性行為は美登里にとって恐怖以外の何物でもなく、人生最悪の日となったのには違いない。

数日後、マンションから連れ去った姿が本人と確定し、誘拐、殺人、死体損壊、死体遺棄のうち、誘拐のみで取り調べを継続させられている神崎竜也だった。

『龍二……もうあの子を殺して埋めちゃってんのかな？　俺は人なんて殺す度胸ねえからな。罪は被っても殺さずに二億だけもらえりゃ御の字だぜ。あいつにも百万くらいは小遣いでもやるかな。フフフ……』

『ドンッ！！』

取り調べ室の机を激しく叩きつけながら厳しい取り調べが続く東部警察署。

「何をにやけてやがるっ！？　どうやって殺してどこで死体を損壊させたんだっ！？　答えろっ！！　海に撒いた？　どこの船を使った？　ああっ！？」

「だからハッキリ覚えちゃいねーんだよ！　俺は精神病患ってるしなぁ。俺がアイツのマンションから拐ってゆく証拠映像残ってんだろ！？　その俺が殺して海に撒いたってんなら間違いなく海に撒いたんだよっ！！　魚のエサになっちまってるさ今頃な……」

「ふざけんなよてめえっ！！」

若い取り調べ官は、思わず胸ぐらを掴んで振り回すが、先輩に制

御されて少し落ち着く。
全ては龍二のため……組のため……いずれ手に入る二億円のため……死んでも真実を隠し通して罪を被る意思を固める神崎竜也だった。

「これだけ支払ったかぁの娘想いの部長は……よくやったぞ今川」

「ありがとうございますオヤッサン……でも二人で共犯と聞いてたんですが、竜也だけに罪を被せて龍二が連絡取れなくなってるんです」

「磯崎龍二か……自首した神崎竜也と共にあの二人はお前の信用してた弟分じゃなかったのか？」

「はい……。とにかく連絡を取り続けて早めに見つけ出します。どうゆうつもりで連絡を絶ったのかきちんと説明させてケジメ取らせてもらいます」

「やるべきことをやってるなら構わん気はするが、今川……お前はアイツらを信用してたからな……それなりに反省させるのは筋とゆうものだな」

「はい」

――――数ヶ月後。南西部の霞峠を越えた田舎に佇む平屋の一軒家。

「ほら、今日は鍋にしようぜ！　美登里の大好きな牛肉たくさん買い込んできたぞ」

「やったぁ！　すぐに準備するね龍二さん」

………神崎竜也が拐ってきたアイドルのボーカル、柳川美登里を、今川勇二のカシラの命令通り殺してバラして埋め去る。

その計画はことごとく予定変更となり、殺すのは龍二だけに委ねられ、殺害した罪を被り自首するのが竜也だけになり、更に殺される予定だった美登里は生きていたのである。

磯崎龍二がレイプを続けて抱き続けているうちに、情が生まれ、愛が生まれ、とても殺害するなど出来なくなってしまっていた。

柳川美登里の方も、命を助けてくれたから無理矢理恋人を演じている訳でもなく、毎日毎日共に時間を過ごしているうちに、磯崎龍二を本気で好きになってしまっていたのかも知れない……。

《ストックホルム症候群》とゆう一種の心理的な病が存在するが、この状態で警察が雪崩れ込んできても、美登里は龍二を助ける、庇うとゆう行動を取る可能性は高い。

「アイドルの夢を奪ってしまって済まなかったな……だがもう美登里は死んだことになってるんだ。辛抱してくれよ？」

「分かってる。ほんとはあの日に……拘束されてレイプされた日の内に……龍二さんに殺されてどこかに埋められてたんだよね私は……」

その日の夜、龍二は恐れていて電話もできず、月日だけが過ぎていったカシラへの連絡を取る決心をしていた。
最後の一つのダイヤルを押そうとしては一度切り……また最後のダイヤルを押そうとしては切る……。
激怒しているだろうと容易に推測できる若頭の今川勇二に対して、そう容易く電話など出来るものではなかった。
勇気を振り絞り最後のダイヤルを押す。
「………龍二か？　今まで何やってた？　竜也だけに務めさせてお前はどこで何をやっている！？」
「え、あの、えと……申し訳ございませんカシラっ！！　俺は組を抜けさせて頂きますっ！！　今まで本当にお世話になりましたっ！！」
勇気を振り絞って叫ぶように言い放つが、嫌なほどの長い沈黙が訪れる。
「カ……カシラ……すみません」
震えながらも返事のない若頭の今川にもう一度謝ってみる。

「あの女の始末はしたんだろうな？」

「…………はい。それは確実に。人気のない西部の霞山まで運んで埋めてます。あの辺りは監視カメラもない道ですので」

「組を抜ける気持ちは変わらねえのか？」

「はい、本当に申し訳ございません！　他に生甲斐を見つけてしまいまして……」

「好きにしろ。もうお前の帰る場所はねぇからな？　オヤッサンには俺から侘びを入れといてやる。二度と組にも顔を出すなよ？」

「ありがとうございますカシラ……失礼しますっ！」

「ふう〜…………」

数日間ずっとつかえていたわだかまりが取れたようで、妙な安堵感が龍二を包み込む。

柳川美登里……死んでしまったことになっているとゆうことは、血の繋がったお父さんにも会うわけにはいかない。

龍二のことを思えば……この先、自分の生存を世間に知らしめることになれば……ヤクザに命を狙われる可能性は高い。
結果的に家に帰るわけにはいかなかった。
アイドルに返り咲くわけにも………。
いや……本気で龍二を愛している？

それとも何かのために愛した振りを演じている？
美登里自身、時折そんなことをふと思ってしまうのだった。

――――――――数日後。

「瞳っ！！　瞳いいいいいっ！！　なぜお前がこんな目に…………」
拳銃で頭を撃ち抜かれて即死していた１９歳のＯＬ。
坂野電工の実権を握る坂野道三部長の愛娘、坂野瞳の哀れな死体を見つめながら悲しみにくれる父親。
「普通に暮らすＯＬが拳銃で撃ち殺されるなど……本来あってはならんことだ！！　お前のようなヤクザが瞳の事件にも絡んでるんじゃないのかっ！？」
「…………少し時間を下さい。思い当たる節はありますので……」
「なんだとっ！？」
『ある組員が龍二にそっくりな男と見覚えのある若い女性と、一緒に田舎の峠道を走っていたとゆう報告を受けている。前に電話を受けた時のアイツの動揺……違和感……俺の勘が正しければアイツは柳川美登里を……殺してはいない。情か愛してしまったのかわからねぇが……』
「おいっ！　組員関係で思い当たる節があるだとっ！？　もし知ってる奴に犯人がいるなら絶対殺せっ！！　報酬はいくらでも払う！

！　分かってるのかっ！？」

「とにかく少し時間を下さい……」

娘のお葬式で棺に花を添える時……最後のお別れ時に怒りの感情を抑えきれない坂野部長をどうにか諌めると、本気でケジメをつける決心をする渡良瀬組の若頭、今川勇二だった。

その日の夕方、今川は若い組員を三人引き連れて、黒いレクサスで南西部の霞峠へ向かう。

「すごい山奥だな……こんな場所に本当に民家があるのか？」

「はい。あまりにも似てたもんで、引き返して小径に曲がり込む所までは確認してますので。十数メートル小径を下っていった所に平屋の古い民家がありました。多分龍二さんの新しい家です」

少しずつ山奥の新しい住み家に迫ってくる今川勇二と組員の四人だった。

「本当にありがとう。もうアイドルも普通の生活も捨てた私には……龍二さんに感謝だわ」

「本来なら坂野瞳の望み通り美登里が死んで……彼女が笑いながらのうのうと生きていたんだよな。何の因果かこんな物語になっちまったけどな」

「龍二に命を救われたよね。しかも私を殺そうとした瞳を撃ち殺してくれるなんて！　私は本当に嬉しいよ！　愛してる龍二さん……」

「あぁ。もう後戻りは出来ない。とにかく早めにここを出よう。ヤクザの情報網は警察以上だからな。長居は危険だ美登里」

「うん。じゃあ今から荷物まとめようか」

『バタバタンッ！　バタバタンッ！』

四回の車のドアが閉まる音が響いてきた。

「ちっ。マジか！？　遅かったか……美登里、俺がどうにかするから、お前は山をかけ降りて谷まで逃げろ！　谷を添って南へ歩いていけば集落に出る。そこには俺の婆ちゃんが住んでるんだ。赤い屋根は一軒しかないからすぐに分かるはずだ！　もしもの事態にはお前をかくまって貰うために話は付けてある！　いいな？」

「そんな……龍二さんも一緒に行こう！」

「俺はコイツで全員始末する。後で行くから早く！！」

鈍く光るトカレフを取り出して手を挙げて合図する。
必死で月明かりの中をひたすら駆け出す柳川美登里。
獣道は何度も躓き、膝はすり傷で血だらけになっていた。

『パンッ！！　パンパンパンパンッ！！』

一回の銃声のあと、連続して四回の銃声が美登里の耳に響いてきた。

「龍二さん……」

心配ながらも命の危機を察している体の方はひたすら全力で龍二のお婆さんが住んでいるとゆう集落を目指して走り続けている。

「あった！　赤い屋根の平屋……ここに龍二さんのお婆さんが住んでいる！　私をかくまってくれる！」

『バタンッ！！』

「お婆さんっ！！　助けてっ！！」

息が止まるほど激しく呼吸を乱しながらも勢いよく玄関の木製のドアを開け、必死で叫ぶ柳川美登里だった。

奥の部屋から人影らしきものが見える。

薄暗い吊り下げ電球に照らされて、ゆっくりと視界に近付いて来

たのは……。

――――変態だった。

いや――――拷問処刑人の菅野京介だった。

「今晩は。幽霊アイドルの柳川美登里さんっ♪　この男前をお婆さんなんかと見間違えないでくれるかな？」

「あらら？　ライバルの令和乙女のセンターさんじゃないですか！　この世に未練があって成仏出来ないでさまよっているのね……」

京介の妹である拷問処刑人、菅野莉央も続けて現れた。

「な、何よ！？　あなたたちは！？」

「何って言われてもなぁ。幽霊の処刑とゆうとんでもない指令を国から受けちゃってさぁ。今度こそ成仏してもらいにきたんだよ」

「あたしたち兄妹で貴女を本当のぁの世って所に逝かせてあげちゃうから♪」

「ちょ、ちょっと待って！！　ここに住んでいた私の彼氏のお婆さんはどこへやったの！？　まさか……」

「心配ないない！　事情を説明してこの集落の人たち全員、この霞峠の麓の団地に引っ越してもらってるから」

「どうゆうこと？　何日も前から私がここに来るって分かってたみたいなこと言って……バカじゃないの！？」

本気でキレ気味に叫び出す柳川美登里だった。

「特殊任務省ってゆうのがこの国にはあるのさ。俺たちはその配下ってわけ。警察より上の組織だから実際捜査とかの全ての実権を握ってる訳なのよ。分かる？　お嬢ちゃん」

「意味分かんない！　だいたいヤクザに追われて命からがら逃げてきた私が何で見ず知らずのあなたたちになんか殺されなきゃいけないの！？　こんな時にほんと冗談はよして！　早く私をどこかに隠してよっ！！　ヤクザに殺されちゃうっ！！」

あたふたしながら身を隠せそうな押入れを探す美登里。

「その心配はないよ。それと残念ながら……あなたの彼氏さんとやらの龍二さんは只今死亡が確認されたよ。特殊部隊の隊長から今ラインが来た。相手のヤクザの若頭の今川って人も相討ちで死亡。……残る三人の組員は特殊任務省が拘束して今から警察へ送られるわ」

「そんな……龍二さんが死んじゃったなんて……ぐす……ぐす」

「おいおい！　落ち込んだ振りが上手いなぁ……感心するぜ全く」

「あなたたち一体何なのさっきから！？　私の事をどれだけ分かってるってゆうのよっ！？」

目の前まで近付いて莉央がそっと囁く。

「全て知ってるよ。特殊任務省の情報網を舐めないでね柳川美登里さん。《真・絆ＧＩＲＬＳ》のセンターやらせてもらってます。よろしく」

「あっ！？……どこかで見たことある子だと思ったら……《真・絆ＧＩＲＬＳ》センターの菅野莉央っ！？　まさか……なんでこんな所に！？」

とにかく京介に一度、目で合図を送って裸にさせる莉央。

「や、止めてっ！？　何すんのよっ！！　変態っ！！」

必死で抵抗するが、二十歳の格闘家、京介相手に１９歳の女の子ではなすすべもなく全裸にされていった。

古びた木製の机にうつ伏せに縛り付けてゆく京介。

「よおしっ！　縛れたぞっ！　ホラアッ！！」

『パァンッ！！』

縛り終えたついでに強烈な平手打ちをお尻に一発叩き込んだ。

「痛ったあああいっ！？　何すんのよおっ！？」

「まだまだ元気だな？　さてはて……いつまで強気でいられるのかな？　げへははは っ！！」

「……さぁお兄ちゃん！　思い存分犯しちゃってくれるかな？　腐れマンコも汚いアナルもね……明日香ちゃん今日は来られなかったから嫌われちゃう心配もないよ？　良かったねぇ？」

「うっ！？　お前は一体どこまで人の心を読んでやがるんだ……」

動揺しながらも美登里の膣口にペニスを持っていき、一気に２０ｃｍ近くある巨根をぶち込んだ。

『ずぼおっ！！……メリメリ』

「ふんぎいいいいっ！！　痛い痛い痛いいいいいっ！！」

菅野京介にバックで犯されながら苦痛に歪んでいる顔をゆっくり擦りながら莉央は話しかける。

「龍二さんとゆう極道の彼氏……彼が貴女をレイプして殺そうとした時に、実は貴女の元親友である坂野瞳が父親である坂野道三に頼んで……ヤクザに頼んで……貴女を殺そうとしてることを聞いた。その瞬間、貴女は磯崎龍二を自分に惚れさせせて逆に仕返ししてやろうと心に決めた。ヤクザを利用してやろうと思ったわけね」

「なっ！？　何をバカなことを……そんなに簡単に人が人を惚れたり……出来ない……でしょ？　あ、あんんっ！！　ひいいっ！！」

京介の激しい腰使いにヒイヒイ言いながらも必死で莉央に答える柳川美登里であった。

「自分も磯崎龍二を本気で愛してしまった演技をひたすら続け、いつか完全に自分に惚れさせることが出来たときに……自分の命を奪おうとした坂野瞳の銃殺をお願いする……全てうまくいって良かったね？　美登里さん♡」

「うっ！　イク……イクぞっ！？　莉央っ！！」

『ドピュドピュッ！！』

「いやあああっ！？　中に出さないでええっ！！」

「あのさお兄ちゃん……イクとか言いながらあたしの名前叫ばないでくれる？　何かあたしとエッチしてるみたいに聞こえるじゃん？」

ゆっくりペニスを抜いて今度は肛門へ宛がう京介。

『ずぷぷ……メリメリ……ずぼおっ！！』

「ギャアアアッ！！！！」

人生初めての肛門への来客に、思わず本気で泣き叫んでしまう美登里だったが、莉央は冷静に話を続ける。

「でさあ。結局言いたいことはね……なんだかんだ言って坂野道三も娘の元貴女の親友の坂野瞳も、結局貴女に危害を与えられていないのよね？　でも貴女はヤクザの彼氏を利用して……手玉に取って瞳さんを射殺させた。これはダメだよ。惚れさせるまでは良かったんだけど逆に殺しちゃったらダメってことね？」

『バコバコバコバコ！！』

「ひぎゃぎゃぎゃぎゃあああっ！！　痛いいいいいっ！！」

「お兄ちゃん！　ちょっと肝心な所だから一旦オチンチン抜いてあげて！」

「ええっ！？　後少しで二回目イケそうだったのにっ！　分かった

よ……」

ブツブツ言いながらも美登里のアナルから巨大な血まみれのイチモツを引き抜く京介。

ここで少し我に返るが、股間の痛みとは別の意味で号泣を始める美登里。

「えーんえーんっ！！　誘拐されてレイプされて……十分過ぎるくらい被害受けてるじゃんっ！？　その上私、何もしてないのに一方的に殺されかけたんだよっ！？　何で私だけが悪いのよっ！？　アイドルになれなかったからって……なれた私を逆恨みしての嫉妬心だけで殺そうとして……瞳だって無茶苦茶酷いじゃないのよっ！！」

その辺りはよくよく考えると確かにその通りだった。

この度の処刑は霞峠とゆう人気のない山奥ということと、そのまま死体を特殊部隊の人たちが後始末もしてくれるので、この平屋の家で時間をかけて苦しめて執行される予定だった。

「そっか……殺しに比べたら雲泥の差だけど……確かに被害は受けてるね。お兄ちゃん……お尻も犯すなら早くやっちゃって」

「ん？　あ、ああ。久しぶりの若い女との本番だからな！　遠慮なくやらせてもらうぜっ！　オラオラ美登里〜！！　俺のチンポはどうだっ！？　感じるかっ！？」

「んあぁっ！？　あひっ！！　痛いっ！！　止めてえええっ！！」

『ドピュピュピュピュウウッ！！』

傷付いた直腸からは、大量の血液がドボドボと京介の太股に流れ伝い落ちてゆく。

二回目の射精は死んだはずの元アイドルのセンター……柳川美登里の肛門へヒリ注がれた。

鈍く光るメスを右手に握りしめる莉央は、京介へ退室を促す。

「かなり大幅に予定変更だよ。この女は……あまり苦しめずに処刑してあげようと思う。短時間で一気にぐちゃぐちゃに解剖しちゃうから、お兄ちゃん出て行ってた方がいいよ？　それともじっくり切開シーンを見学して慣れる努力しちゃう？」

「ひいっ！？　嫌だっ！！　待ってくれっ！！　チンポに付いちまったウンコ拭くまで待ってくれってて！！」

慌てふためき、地獄の鬼のような悪魔のような女子小学生の拷問の場から逃れようと必死に急ぐ京介であった。

かなり大量の痛み止め注射を打つ。

あわよくば早く死ねるように、血止めはあえて打たなかった。

莉央のせめてもの情けであった。

メスをくるくると器用に回転させてから柳川美登里の肛門へゆっくり宛がう。

「人生初のアナルセックスは気持ち良かった？　人生最期にもなっちゃうんだけれど……。貴女はできるだけ早く殺してあげるつもりだけど肛門とマンコだけは破壊させてもらうからね？　覚悟してくれる？」

「止めて……あなたもアイドルなんでしょ！？　なんでそんな酷いことが出来るのっ！？」

「性器破壊は……あたしの趣味だから。あたしの答えはそれだけ。はい、肛門の力を抜いて」

『ズブッ……』

ゆっくりと莉央のメスが美登里の肛門へ突き刺さる。

「痛いっ！！」

一気に直腸へめり込ませる。
そのまま肛門と膣の境目である薄い膜を切り裂き、一瞬で肛門とオマンコが繋がった。
激しく飛び散る鮮血。

「次、一番感じるとこ……真っ二つの刑よ♡」

『ズズズ……ズバアッ！！』

「ぎゃあああああっ！！！！　ふんぎいいいいいっ！！！！」

断末魔の絶叫をあげる美登里に構わず、一気に尿道、クリトリスを真っ二つに切開した。

クルッとお腹方向に回り込んだメスは、そのままオヘソまで切り進む。

一度メスを置き、一度はやっておきたいマンコトンネルを食らわせる。

肛門と繋がってバックリ切り開かれたマンコに右手をぶち込み、子宮を鷲掴みにする。

直後に子宮をむしりとった右手は、切開されたオヘソの辺りから鮮血と共に飛び出した。

ぷるぷると揺れながら怪しくテカる自分の子宮を見せつけられて、気が狂ったように泣き叫ぶ美登里。

子宮はすぐに床に落として足で磨り潰した。

『べちゃっ！　ぐちょぐちょ……ぴゅるるっ！』

「ぐちょぐちょヤラしい音立てながらミンチになっていくね？　あっ！……今、白い精液みたいなの飛び出してきたよ？　中出しエッチし過ぎだって！　あのヤクザの彼氏の赤ちゃん、妊娠する間がなかったね？　せっかくの有精卵……ってゆうか有精子宮だったのにね」

「うう……あそことお腹が痛い……痛いよおぉ。。お父さん……助けて……」

「あ、そう言えばお父さんだけは美登里さんの味方だったんだよね？　でも世間ではもう貴女は死んじゃってることになってるから……もうお父さんも諦めちゃってるよ？」

「お父さん……ごめんね……ぐす……ぐす」

殆ど麻痺した身体をメスでズバズバ切開してゆく。

「泣いても許さないからね？　オッパイは輪切りの刑だよ？　ほうら……パックリいっちゃうよぉ♪」

右の乳首……左の乳首……右の乳輪、左の乳輪……手際よくオッパイを輪切りにしてゆきながら、苦痛に歪んだ美登里にそっと口づけした。

ゆっくりと美登里の唇から離すと、光る唾液が糸を引く……。

美登里の唾液を舌なめずりして吸収しながらそっと囁く莉央。

「少し早いけどもう殺してあげるからね！　美登里お姉さん。じゃあ最期に……。莉央様、美登里の身体……オッパイもマンコも内臓も……全てぐちゃぐちゃにして逝かせて下さい！　って言ってごらん？」

もう自分の身体を見て助からない……助かっても生きてはいけない身体にされていることを悟った美登里は、素直に莉央に従った。

「莉央様、私の……美登里の身体を……オッパイもオマンコも……内臓とゆう内臓全て……ぐちゃぐちゃにして逝かせて下さいっ……ぐすぐす。わーんっ！　わーんっ！！」

涙が止まらなくなり、号泣する美登里に最期のトドメを刺しにかかる莉央。

「良く言えました。そこまでMになられたらあたし……責めながら濡れてきちゃったじゃん！　うふふ♡」

頬を紅潮させて、満面のエッチそうな笑みを浮かべながら、再びバックリ切り開かれた股間から手を突っ込んで大腸と小腸をぐちゃぐちゃにかき回しながら……ついに心臓を掴む。

その時、莉央の右腕は肩まで美登里の性器にめり込んでいた。

「さようなら。美登里さん。あの世で瞳さんとアイドルメンバーに

なってあげてね？」

「ちょっと待って莉央ちゃん……好きな人の幸せ……自分の為の幸せ……一体どっちが叶うことが本当の幸せなんだろう？」

「……あたしには分からないよ。ごめんね」

『ぐちゃっ！！……ぷぎゅううっ！！……がくん……』

心臓を一気に握り潰された美登里は奇声をあげて絶命した。

玄関のドアがゆっくり開き、莉央が出てくる。

「終わったか……相変わらず血まみれの悪魔だなお前は……」

「うん。悪い人には情けはいらないからね……何とでも呼んでくれて構わないよ」

「明日香ちゃんと美香ちゃんは、今日の拷問処刑のこと知ってるのか？」

「知ってるけど……今回は対象が女性一人。あたしたち二人で十分だったから藤堂長官にお願いして休ませてあげたの」

「俺に明日香ちゃんのいないところで本番させてやろうとか思ってくれたんじゃねぇの？　いいとこあるじゃねぇか！　可愛い妹よ♪」

「人のこと熊の子みたいに言ってるくせに良く言うよお兄ちゃん…

……」

真っ赤なマーチは祖母の待つ我が家へ向かって走り出した。

本当の幸せ　（後編）（後書き）

大切な人の成功を心から祝ってあげられることが幸せなのか。

自分が成功して周りを見返せることが幸せなのか。

人の嫉妬心はある意味一番恐ろしい感情なのかも知れない。

哀しい女たち　（前編）（前書き）

南部地方にある高速道路に『南部夢見サービスエリア』とゆう人気の場所があった。

週末は地方アイドルとか新人のお笑いタレントを招待して、無料で訪れるドライバーたちを楽しませてくれているからである。

その日も当たり前のように沢山の家族連れの人々が、歌を聴いたり漫才を見たりして楽しんでいた。

それは昼間の明るいときの光景であり、夜中は別の意味で、一部の人達からは噂のスポットと化していた。

大型トラックの長距離ドライバーの角田慎二（３８歳）は、運転手仲間から噂を聞いた、とある事が本当かどうか試したくてウズウズしながら『南部夢見サービスエリア』に到着した。

「やっと着いたぞ！　ここが二十歳前後のベッピンさんと本番できるとゆうサービスエリアだな。南部地方へ来るのは五年ぶりか……去年辺りから夜な夜な現れるとゆうベッピンさんに本当に会えたらいいがな……」

大型のトラックに鍵をかけてとりあえずトイレに向かう角田慎二。

肌寒い１１月の夜中だったので、ホットのブラックコーヒーを買ってトラックへ戻る。

『室内灯をつけたままハンドルに足を上げて……と。この格好で待っていれば向こうからやってくるのか……あくまでも噂だからな。でも本当に現れてセックスなんてしちゃったら出発の朝五時になんか起きられないかもな……。延着してクビにならねぇかな？　ハハハ……』

コーヒーを飲み終えてウトウトしていると、強めに数回ドアを叩く音に目が覚めた。

はっと我にかえった角田慎二は、慌ててイスを立てて起き上がると窓の外に立っている若い女性に気が付いた。

一気に目が覚めた。

窓を開けてじっと暗闇に目を凝らすと、二十歳くらいの切れ長の目をした黒髪ロングの美女がだんだんハッキリと目に映ってくる。

「三万でどうでしょうか？」

『ま、マジか！？　本当に現れやがった……でも三万も取るとは聞いてないぜ？　……まぁこれだけ美女なら惜しくないか……』

「お、おうっ！　構わないぜっ！　さあ、助手席から乗ってきてくれ！」

赤いワンピースを来た黒髪女性は、静かに助手席側に歩いて、素直に乗り込んできた。

「室内灯を消してもらえますか？」

「あ、え？　ああ！　分かった！」

いきなり服を脱ぎ出す美女に驚きながらも慌てて室内灯を消した。

「トラックには一応室内カーテンもついてるから外からは見えないけど……？」

「明るいところで男性に見られたら恥ずかしいのです。電気は消したままでお願いします」

あわよくば裸をじっくり見られるか？と思った角田慎二は少しガッカリしながらも自分も服を脱いでゆく……。

お互い素っ裸になったあと、後部へある一人用のベッドへ女性を仰向けに寝かせると、上から覆い被さるように抱き締める。

まずは唇を重ねてみるが、抵抗されることもなく、舌まで挿入して絡めてきた。

かなり慣れてるな、と思いながらも角田慎二のペニスはビンビンにいきり立っていた。

胸を揉み、乳首を舐めていると、女性から微かにあえぎ声が聞こえてくる。

右手の人差し指でそっとアソコに触れてみると、グショグショに濡れていた。

しばらく指で掻き回した後、逸物を一気に根元まで突き入れて、激しく腰を動かした。

「あ、あんっ……あはっ！　気持ち……いい」

「はぁはぁ……俺もだ！　いく、いくぅっ！！」

抱き締め合い始めてから僅か１０分も経たない内に、大量の精液を二十歳くらいの切れ長の目をした美女の性器に注ぎ込んでしまった。

「すまん！　中に出してしまったけど……大丈夫なのか！？」

「はぁ、はぁ。。構いませんよ。どうせ長くは……」

「え！？　どうゆう意味だ？」

「いえ、別に……。じゃあ三万円頂けますか？」

静かに服を着ながら催促してくる美女に、慌てて財布を取り出して三万円を支払うと、その美女はお礼を言いながら助手席から降りていった。

「はぁ。何か夢のようだな……あんな美人と本番できて中出しまで出来てキスまで嫌がられなかったなんて。俺の事を以外とタイプだったりしてな？ハハハ……いけねぇ！　早く寝ないと五時にはここを出なくちゃいけねぇのに！」

三日後――

東部地方の運送会社へ無事に帰り着いた角田慎二は、早速運転手仲間に三日前のサービスエリアでの話をした。
自慢気に話す角田とは対極的に、真剣な顔をし始める大型ドライバーの岩田道人と先輩である本多正志。

同い年の３８歳である岩田道人がまず重い口を開いた。

「本当にあの噂の女と会ってセックスしたのか？」

「だからそう言ってるじゃん！　噂以上のベッピンさんだったぜ！

？　ハハハ！」

「岩田から話してやれよ！　俺はパス！」

「ん？　何のことだ？　岩田でも本多さんでもどちらからでもいいから何かあるのなら話してもらえるかな？」

焦る角田慎二にゆっくり語り始めた岩田道人は、隣町にあるライバルである運送会社のドライバーが昨日失くなったことを伝えた。

そのドライバーも先月『南部夢見サービスエリア』で美人を抱いたとドライバーたちに自慢していたとゆうことも……。

「ちょ、ちょっと待て！　そのドライバーはどうして死んだんだ！？　事故かなにか？？　まさか……」

「すまん！　角田……もっと早くそのことに気付いていたらお前に早めに連絡してやれたんだが……」

「病気をもらったんだな！？　不治の病を……」

「そうだ……後天性臓器腐敗症候群というらしい。移されたら半月で発症して一月後に命を落とすらしい。取りあえず休みを取って病院で診てもらったほうがいいと思う」

「な、なんてこった……」

それを聞いてから家に帰るまでのことは殆ど覚えていなかった。
ショックはそれほど大きかった。
自分より先に先客のドライバーが居てくれれば……もしあの夜にたまたまあの女が現れなかったら……もしセックスを断っていたら……。
タラレバばかり繰り返し、頭のなかで後悔を重ねる角田慎二だった。
急いで一人暮らしのアパートの部屋中を探し、ようやく健康保険証を見付けると、東部地方最大規模の東部中央病院へ直行する。
「血液検査の結果……非常にお伝えしづらいのですが……陽性です」
「……………………そうですか……覚悟はしていました」
致死率１００％の病気での陽性宣言は、角田慎二に死刑宣告と変わらないほどのダメージを与えた。
病室も隔離され、生き地獄のような入院生活を余儀なくされた。
――一ヶ月後。

「角田……見舞いにも行けずに済まなかったな」

「俺たちがお前に余計な噂を教えなければこんなことには……うう」

思わず泣き出す本多先輩に吊られて涙を流す同い年の岩田。

「一ヶ月前からとゆうことはあの女ももう死んでるんでしょうね……」

「あの病気は女性なら半年くらいは生きていられるらしいぞ？　まだ生きていてあのサービスエリアで売春しまくってるんじゃないのか？　ほんと悪魔だぜ」

「死にゆく女性に報復もできないし……なんか理不尽なモヤモヤ感が残りますね……」

「ああ。本当にな」

――――――四ヶ月後、四月。残酷処刑島。

防護服、ゴーグル、特殊マスク、手袋、重装備で美女を取り囲む者たちがいた。

赤霧島小学校六年生の女子児童である菅野莉央と、そのクラスメ

イトである富田美香と結城明日香であった。

「只今より水島加奈子２０歳の拷問処刑を始めます。みんな装備は完璧かな？」

「うん。私はいつでもＯＫだわ」

「あたしも大丈夫っ！　おっぱじめよー莉央ちゃん♪」

拘束もされずに残酷処刑島に送られるのはかなり珍しいパターンであった。

ガリガリにやつれきった美女は、美女とは呼べないほど痩せていた。

まともに歩けないほど憔悴しきっている女性を、拘束するまでもなかっただけの話だった。

「分かってると思うけど……罪もない男性五人に性行為をもって不治の病を移し、死に追いやったこと……万死に値します。水島加奈子！　あなたはほうっておいても、後数日で死に至る診断が下りてる。でも楽に死なせちゃ殺された人達が成仏できないの。わかるよね？」

「あうう……うう。好きにしたらいいわ。私はもうやりたいことはやった。全てはあの人のため……どんな拷問でも好きにして……」

「そう。じゃあまずは上半身裸になりなさい」

「は、はい」

冷たく言い放つ莉央の命令に素直に従う水島加奈子。処刑人に着せる体操着のような長袖シャツを脱いでフラフラしながらも立っている。

「ブラも脱ぐの」

結城明日香が背後からブラも脱がし、両手で両乳房を揉みしだく。

「こんなガリガリになってもオッパイの身だけは残ってるのね？加奈子さん？　ここは？」

「あんっ！？」

明日香が人差し指と親指で乳首をこねくり回し始めると、水島加奈子は敏感に感じ始める。

皮の鞭を持って正面から近付く富田美香。

「お乳の気持ちいい時間は終わりだよ？　加奈子さん。正面に立っ

ている美香ちゃんって子が今からあなたの胸をお仕置きしちゃうから……」

「うう……やめて……」

「好きにしてってさっき自分で言ってたじゃん？　ここから地獄の始まりだから……気が狂うほど叫んでいいからね？」

「ひ、ひいい」

「さあ最低人間の加奈子！　この美香様があんたの汚いオッパイ……鞭で叩きまくってズタぼろにしてやるからね♡」

かなり練習した美香の鞭捌きは見事なものだった。

的確に乳房と乳首をヒットしてゆく。

激しい連打は半時間ほど続いた。

狂ったように泣き叫ぶ水島加奈子だったが、美香の鞭打ちは激しさを極め、その胸は無惨にも原型を留めないほどグチャグチャに潰され、破壊されていた。

身が抉れて、中身がザクロのように裂けて飛び出している。

「あれ？　乳首どこにあったっけ？　失くなっちゃってるよ？　あははは♪」

明日香が背後からグチャグチャになった胸部に手を突っ込んで掻き回した。

「んぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃあああっ！！　痛いいいいっ！！」

「あたしの鞭打ちと変わらないほどの奇声あげちゃってるね？　明日香ちゃんの胸肉抉り……あはははは！」

体操着みたいな短パンの裾から小便が垂れ流れてくる。

「あれえ？　クッサイ小便が漏れちゃってるよぉ？　今度は痩せきってるとはいえその綺麗な顔面にお仕置きだね！？　それっ♪」

美香の鞭は小便を漏らしている水島加奈子の顔面にヒットした。

一発目で鼻血が噴き出すが、お構いなしに連打を叩き込み、みるみる内に醜く変形してゆく美女の顔。

「それそれそれそれそれぇ～っ♡」

『バチバチバチバチバチバチバチィィインッ！！！！』

「ひぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃあああっ！！」

気丈にも立って堪えていたが、思わず崩れ落ちてしまう水島加奈子。

背後からお尻へ思いっきり蹴りを入れる明日香。

明日香の爪先は短パン越しに美女の肛門へ直撃した。

再び奇声を上げてお尻を押さえて泣きわめく。

「今の蹴りってお姉さんのお尻の穴に当たらなかった？　あたしが診てあげようか？」

エッチそうな笑みを浮かべながら菅野莉央が明日香の足元へ跪き、水島加奈子の短パンを引きずり下ろした。

「ひっ！？　やめてお嬢ちゃん……恥ずかしい」

「あのね……あたしたち小学生だけど……マンコとか肛門とか見慣れちゃってるのね？　だから心配しないであたしたちに見せなさい。パンツも脱がすよ？」

「やめてええっ！！」

「ずるりっ！！」

うつ伏せのままついに素っ裸にされた水島加奈子は、小学生の女の子三人にその裸体を見られながら本気で恥ずかしくて泣いていた。

ボコボコに腫れた顔面と、グチャグチャになった両方の胸の痛みと共に、羞恥心も激しいものがあったのだ。

「ほんとは生で突っ込みたかったんだけど……手袋越しでごめんね。お姉さんが変な病気持ってるから移されたくないのよ。わかってね？　ほら！」

『ズブッ！！』

「はうっ！？」

莉央の人差し指が一気に根元まで加奈子の肛門へ突き刺さる。

「触診してるんだから黙りなさい！　ん〜。ここは？　ここかな？　え〜と。ここか？　何か直腸ガンみたいなシコリ発見！　今から肛門の手術しちゃいまーす♡」

グリグリと直腸内を掻き回して加奈子の反応を楽しむ莉央。

「美香ちゃん！　やっちゃって！」

「はーい♪　この極太ペニスバンドでガンなんてグチャグチャにし

てやるんだからっ！　安心してお尻を突き上げなさい！」

富田美香が長さ２０ｃｍ、幅が５ｃｍの超極太張り形をペニスバンドにセットしながら命令する。

「いや……恥ずかしいから肛門なんか見ないで……お嬢ちゃんたち」

「見慣れてるって言ってんの……早くケツ突き上げないと酷いわよ？」

莉央は突っ込んでいる人差し指を思いっきり上に引っ張りあげて、無理矢理お尻を突き上げさせた。

「ひいいっ！　裂けるううっ！？」

「今から本当に裂いちゃうからね？　安心して！　大腸ガンなんてグチャグチャに擂り潰してやるから♡　ではでは……いっくよぉ～」

『ずぷぷぷ……ずずず……』

「ぎひいっ！？　痛い痛い痛い痛いいいいっ！！」

「黙れ！　まだ半分しか入ってないよ？　全部飲み込んでしまえっ！　それえっ！！」

『ばちゅっ！！　バリバリバリバリバリッ！！』

「ぴぎいいいいいいいっ！！　いったあああああいいいいっ！！」

激しい肛門からの鮮血で、美香の太股はみるみる内に真っ赤に染まっていった。

「ほらほらほらほらほらあっ！？　どう？　感じる？」

『パンパンパンパンパンパンッ！！』

「んぎゃああああっ！！　死ぬっ！！　死んじゃううううっ！！」

泣き叫ぶ醜く腫れた顔面を、更に往復ビンタでお仕置きする結城明日香。

『パンパンパパパパパパパパパンッ！！』

「ひぶぶぶぶぶぶぶぶうぅっ！？」

「あはは♪　変な顔して泣きわめいて……哀れな女だねぇあなた。美香ちゃんのペニスバンド食らったら、アナルはもう使い物にならないけど……今日死んじゃうからもうウンチもしなくていいから安心してね？　うふふ♡」

美香が極太張り形を加奈子の肛門から引き抜くと、ミンチになった直腸も一緒に飛び出してきた。

「あはは。病気で直腸まで脆くなってたのね？　グチャグチャになって飛び出してきてるよ？　さあ今度は仰向けになってくれる？」

「えーん、えーん、今度は何を……」

「ケツ穴の次はマンコに入れるんだよっ！！　早くしろっ！！」

怒りながらお尻を思いっきり叩く美香。

「美香ちゃん……そのウンコまみれの張り形をマンコに突っ込むつもり？」

莉央が頬を赤くしながら聞く。

「うん♪　子宮の奥の奥まで大腸菌ぶちこんでやるんた♡　大腸菌の赤ちゃん産まれちゃったりして！」

「はは……怖いな。でも産むどころか妊娠する間もないと思うなぁ私は……」

冷静に答える明日香も頬を赤くしながら見ている。

正常位に替えさされた後、膣が壊れるほどの大きな逸物をぶちこまれ、膣内からも夥しい流血を見せる２０歳の美女。

狂ったように泣き叫ぶが、美香の激しい腰使いは更に激しくなってゆく。

ついに性器から引き抜かれた時には、ミンチになった子宮が絡み付いたまま飛び出してきた。

「うそ……子宮まで脆くなってた？　ごっめーん莉央ちゃんっ！　子宮まで抉っちゃったぁ……」

「あたしのメスで子宮取り出すの定番なのに……美香ちゃんってば酷いよ……」

「だからごめんって……あたしの処女膜破っていいから許して♡」

「わかった。いつか本当にもらうからね？」

「わーい♡」

変な所で喜んでる美香を少し冷たい横目で見ながら、明日香が莉央に囁いた。

「加奈子のトドメはどうする？　日本刀でメッタ斬りか四肢切断か股間からノコギリ引きか……」

「ううん。。絶命するまで三人で日本刀でメッタ斬りにしよう。四肢切断もノコギリ引きも最近よくやってきたからマンネリ化してるもんね～」

無理矢理立たされた水島加奈子は、股間の二つの穴からドクドクと家を流しながら立ち上がった。
立ち上がったまま木の枝に体を括られ、立たされたままの姿勢で身動き出来なくされてしまった。

「あたしたち三人で今から水島加奈子を日本刀で斬り刻んじゃいます！　覚悟はいい？」

「えーん、えーん、痛い……顔と胸と股間が焼けるように痛い……早く殺して……」

莉央の問いに泣きながら答える加奈子。

「日本刀捌きは美香ちゃんが一番上手いよね？　トドメは美香ちゃんお願いね？」

「明日香ちゃんよくわかってるね！　任せといて！　さぁいっくよぉ♪」

「思いっきりやっちゃってね美香ちゃん♡」

莉央の言葉を最後に、とにかくお腹に、背中に太股、両腕と、所構わず日本刀で斬り刻み続ける明日香と美香。
深く入った美香の横引きは、加奈子の小腸の殆どを地面に引きずり落とした。

『ズルズル……ビチャビチャ……』

「うわっ！？　えっぐーい……さすがだね美香ちゃん……」

「えへへ♡　斬り付ける瞬間に引く動作を意識して斬ってみて！　そしたら明日香ちゃんでも深く斬れるよ？」

「そっか。日本刀は引いて斬る……前にも誰かに聞いたような……こうかな？　それっ！」

『ズバッ！！　ばくんっ！！　ぶっしゅううっ！！　ズルズルズルズル……ビチャビチャ……』

「スッゴい！　明日香ちゃん！！　やれば出来るねっ！」

明日香の一閃で残っていた横行結腸や、上行結腸が一気に飛び出して地面に落ちた。

もはや女子児童たちの足元は二十歳の美女の内臓と鮮血で阿鼻叫喚地獄絵図だった。

『かひゅーっ！！　かひゅぅうううっ！！』

「苦しそうな声だして白目剥いてるけど……まだ逝かせてあげな～い♡　それっ」

美香の強烈な一撃で、右手が肘から落とされた。
明日香も真似して左手……皮一枚残ってしまい、プランプラン揺れている。
手でつかみ、引きちぎる明日香。

「落とせたことにしといて？　ね？」

「ズルいけど……まぁいいか。今のは皮一枚だったから殆ど成功だよ明日香ちゃん！　腕あげたじゃん？　何回で太股切断出来るか勝負しよう」

「うん！　私は右脚いくよ。美香ちゃん左脚ね？」

「オッケー！　さん、にい、いち……スタート！」

ズバズバと、太股に連撃する明日香と美香をのんびり見ている菅野莉央。
出血も夥しく、全身が軽く痙攣し始めた。
ボトリ……と落ちたのは左足だった。

数秒遅れて右足が落ちる。
両手に繋いでいた紐は両腕と共に落ちているので、両脚が無くなった瞬間に首の紐へ全体重がかかる。

「ぐえええええっ……ブクブク」

泡も吐いて痙攣が激しくなってきた。
ゆっくり見物していた莉央が、ゆっくり正面に立ち、水島加奈子に囁いた。

「よく激痛の中頑張って来ました。感染症のお姉さん。あたしがトドメ刺してあげるね？　何かアイツに言い残すことは？」

「うごごご。。アイツに……って……意味が分からない……何もないから……早く殺して……」

「そう。じゃあ分かった。成仏してね♡お姉さん」

『ツプッ……』

「あひいいっ！？」

莉央の日本刀の切っ先が、四肢を切断されて揺れている加奈子の

局部にゆっくり突き刺さる……。

切っ先が入りきった時にはクリトリスも尿道口もパックリと真っ二つになった。

刃を手前側に向けて突き入れていたからだ。

「ピギャアアアアッ！！！！」

「アナルより子宮より……クリトリス切開が一番あなたの急所だったみたいね。うふ♡　またそんなにオシッコ飛ばしちゃって……汚いなぁ最後まで……お口まで後少し……頑張って♪　ほら切っ先出やすいように上を向けっ！」

『ズズズズズ……ばしゅっ！！』

ついに日本刀の切っ先は、加奈子の口から飛び出した。

「おごごご……はごおうっ！！？？　ガクンッ！！」

奇声を上げて絶命する水島加奈子。

数々の男達に病気を移して殺害してきた女の哀れな末路だった。

哀しい女たち　（前編）

南部地方にある高速道路に『南部夢見サービスエリア』とゆう人気の場所があった。

週末は地方アイドルとか新人のお笑いタレントを招待して、無料で訪れるドライバーたちを楽しませてくれているからである。

その日も当たり前のように沢山の家族連れの人々が、歌を聴いたり漫才を見たりして楽しんでいた。

それは昼間の明るいときの光景であり、夜中は別の意味で、一部の人達からは噂のスポットと化していた。

大型トラックの長距離ドライバーの角田慎二（３８歳）は、運転手仲間から噂を聞いた、とある事が本当かどうか試したくてウズウズしながら『南部夢見サービスエリア』に到着した。

「やっと着いたぞ！　ここが二十歳前後のベッピンさんと本番できるとゆうサービスエリアだな。南部地方へ来るのは五年ぶりか……去年辺りから夜な夜な現れるとゆうベッピンさんに本当に会えたらいいがな……」

大型のトラックに鍵をかけてとりあえずトイレに向かう角田慎二。

肌寒い１１月の夜中だったので、ホットのブラックコーヒーを買

ってトラックへ戻る。

『室内灯をつけたままハンドルに足を上げて……と。この格好で待っていれば向こうからやってくるのか……あくまでも噂だからな。でも本当に現れてセックスなんてしちゃったら出発の朝五時になんか起きられないかもな……。延着してクビにならねぇかな？　ハハハ……』

コーヒーを飲み終えてウトウトしていると、強めに数回ドアを叩く音に目が覚めた。

はっと我にかえった角田慎二は、慌ててイスを立てて起き上がると窓の外に立っている若い女性に気が付いた。

一気に目が覚めた。

窓を開けてじっと暗闇に目を凝らすと、二十歳くらいの切れ長の目をした黒髪ロングの美女がだんだんハッキリと目に映ってくる。

「三万でどうでしょうか？」

『ま、マジか！？　本当に現れやがった……でも三万も取るとは聞いてないぜ？　……まぁこれだけ美女なら惜しくないか……』

「お、おうっ！　構わないぜっ！　さあ、助手席から乗ってきてくれ！」

赤いワンピースを来た黒髪女性は、静かに助手席側に歩いて、素直に乗り込んできた。

「室内灯を消してもらえますか？」

「あ、え？　ああ！　分かった！」

いきなり服を脱ぎ出す美女に驚きながも慌てて室内灯を消した。

「トラックには一応室内カーテンもついてるから外からは見えないけど……？」

「明るいところで男性に見られたら恥ずかしいのです。電気は消したままでお願いします」

あわよくば裸をじっくり見られるか？と思った角田慎二は少しガッカリしながらも自分も服を脱いでゆく……。

お互い素っ裸になったあと、後部へある一人用のベッドへ女性を仰向けに寝かせると、上から覆い被さるように抱き締める。

まずは唇を重ねてみるが、抵抗されることもなく、舌まで挿入して絡めてきた。

かなり慣れてるな、と思いながらも角田慎二のペニスはビンビンにいきり立っていた。

胸を揉み、乳首を舐めていると、女性から微かにあえぎ声が聞こえてくる。
右手の人差し指でそっとアソコに触れてみると、グショグショに濡れていた。
しばらく指で掻き回した後、逸物を一気に根元まで突き入れて、激しく腰を動かした。

「あ、あんっ……あはっ！　気持ち……いい」

「はぁはぁ……俺もだ！　いく、いくうっ！！」

抱き締め合い始めてから僅か１０分も経たない内に、大量の精液を二十歳くらいの切れ長の目をした美女の性器に注ぎ込んでしまった。

「すまん！　中に出してしまったけど……大丈夫なのか！？」

「はぁ、はぁ。。構いませんよ。どうせ長くは……」

「え！？　どうゆう意味だ？」

「いえ、別に……。じゃあ三万円頂けますか？」

静かに服を着ながら催促してくる美女に、慌てて財布を取り出して三万円を支払うと、その美女はお礼を言いながら助手席から降り

ていった。

「はぁ。何か夢のようだな……あんな美人と本番できて中出しまで出来てキスまで嫌がられなかったなんて。俺の事を以外とタイプだったりしてな？　ハハハ……いけねぇ！　早く寝ないと五時にはここを出なくちゃいけねぇのに！」

三日後――――

東部地方の運送会社へ無事に帰り着いた角田慎二は、早速運転手仲間に三日前のサービスエリアでの話をした。

自慢気に話す角田とは対極的に、真剣な顔をし始める大型ドライバーの岩田道人と先輩である本多正志。

同い年の３８歳である岩田道人がまず重い口を開いた。

「本当にあの噂の女と会ってセックスしたのか？」

「だからそう言ってるじゃん！　噂以上のベッピンさんだったぜ！？　ハハハ！」

「岩田から話してやれよ！　俺はパス！」

「ん？　何のことだ？　岩田でも本多さんでもどちらからでもいい

から何かあるのなら話してもらえるかな？」

焦る角田慎二にゆっくり語り始めた岩田道人は、隣町にあるライバルである運送会社のドライバーが昨日失くなったことを伝えた。

そのドライバーも先月『南部夢見サービスエリア』で美人を抱いたとドライバーたちに自慢していたとゆうことも……。

「ちょ、ちょっと待て！　そのドライバーはどうして死んだんだ！？　事故かなにか？？　まさか……」

「すまん！　角田……もっと早くそのことに気付いていたらお前に早めに連絡してやれたんだが……」

「病気をもらったんだな！？　不治の病を……」

「そうだ……後天性臓器腐敗症候群というらしい。移されたら半月で発症して一月後に命を落とすらしい。取りあえず休みを取って病院で診てもらったほうがいいと思う」

「な、なんてこった……」

それを聞いてから家に帰るまでのことは殆ど覚えていなかった。

ショックはそれほど大きかった。

自分より先に先客のドライバーが居てくれれば……もしあの夜にたまたまあの女が現れなかったら……もしセックスを断っていたら

……。

タラレバばかり繰り返し、頭のなかで後悔を重ねる角田慎二だった。

急いで一人暮らしのアパートの部屋中を探し、ようやく健康保険証を見付けると、東部地方最大規模の東部中央病院へ直行する。

「血液検査の結果……非常にお伝えしづらいのですが……陽性です」

「…………そうですか……覚悟はしていました」

致死率１００％の病気での陽性宣言は、角田慎二に死刑宣告と変わらないほどのダメージを与えた。

病室も隔離され、生き地獄のような入院生活を余儀なくされた。

――一ヶ月後。

「角田……見舞いにも行けずに済まなかったな」

「俺たちがお前に余計な噂を教えなければこんなことには……うう」

思わず泣き出す本多先輩に吊られて涙を流す同い年の岩田。

「一ヶ月前からとゆうことはあの女ももう死んでるんでしょうね……」

「あの病気は女性なら半年くらいは生きていられるらしいぞ？　まだ生きていてあのサービスエリアで売春しまくってるんじゃないのか？　ほんと悪魔だぜ」

「死にゆく女性に報復もできないし……なんか理不尽なモヤモヤ感が残りますね……」

「ああ。本当にな」

――――――四ヶ月後、四月。残酷処刑島。

防護服、ゴーグル、特殊マスク、手袋、重装備で美女を取り囲む者たちがいた。

赤霧島小学校六年生の女子児童である菅野莉央と、そのクラスメイトである富田美香と結城明日香であった。

「只今より水島加奈子２０歳の拷問処刑を始めます。みんな装備は完璧かな？」

「うん。私はいつでもＯＫだわ」

「あたしも大丈夫っ！　おっぱじめよー莉央ちゃん♪」

拘束もされずに残酷処刑島に送られるのはかなり珍しいパターンであった。

ガリガリにやつれきった美女は、美女とは呼べないほど痩せていた。

まともに歩けないほど憔悴しきっている女性を、拘束するまでもなかっただけの話だった。

「分かってると思うけど……罪もない男性五人に性行為をもって不治の病を移し、死に追いやったこと……万死に値します。水島加奈子！　あなたはほうっておいても、後数日で死に至る診断が下りてる。でも楽に死なせちゃ殺された人達が成仏できないの。わかるよね？」

「あうう……うう。好きにしたらいいわ。私はもうやりたいことはやった。全てはあの人のため……どんな拷問でも好きにして……」

「そう。じゃあまずは上半身裸になりなさい」

「は、はい」

冷たく言い放つ莉央の命令に素直に従う水島加奈子。

処刑人に着せる体操着のような長袖シャツを脱いでフラフラしながらも立っている。

「ブラも脱ぐの」

結城明日香が背後からブラも脱がし、両手で両乳房を揉みしだく。

「こんなガリガリになってもオッパイの身だけは残ってるのね？加奈子さん？　ここは？」

「あんっ！？」

明日香が人差し指と親指で乳首をこねくり回し始めると、水島加奈子は敏感に感じ始める。

皮の鞭を持って正面から近付く富田美香。

「お乳の気持ちいい時間は終わりだよ？　加奈子さん。正面に立っている美香ちゃんって子が今からあなたの胸をお仕置きしちゃうから……」

「うう……やめて……」

「好きにしてってさっき自分で言ってたじゃん？　ここから地獄の

始まりだから……気が狂うほど叫んでいいからね？」

「ひ、ひいい」

「さあ最低人間の加奈子！　この美香様があんたの汚いオッパイ……鞭で叩きまくってズタボロにしてやるからね♡」

かなり練習した美香の鞭捌きは見事なものだった。

的確に乳房と乳首をヒットしてゆく。

激しい連打は半時間ほど続いた。

狂ったように泣き叫ぶ水島加奈子だったが、美香の鞭打ちは激しさを極め、その胸は無惨にも原型を留めないほどグチャグチャに潰され、破壊されていた。

身が抉れて、中身がザクロのように裂けて飛び出している。

「あれ？　乳首どこにあったっけ？　失くなっちゃってるよ？　あはは♪」

明日香が背後からグチャグチャになった胸部に手を突っ込んで掻き回した。

「んぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃあああっ！！　痛いいいいっ！！」

「あたしの鞭打ちと変わらないほどの奇声あげちゃってるね？　明日香ちゃんの胸肉抉り……あはははは！」

体操着みたいな短パンの裾から小便が垂れ流れてくる。

「あれえ？　くっさい小便が漏れちゃってるよぉ？　今度は痩せってるとはいえその綺麗な顔面にお仕置きだね！？　それっ♪」

美香の鞭は小便を漏らしている水島加奈子の顔面にヒットした。

一発目で鼻血が噴き出すが、お構いなしに連打を叩き込み、みるみる内に醜く変形してゆく美女の顔。

「それそれそれそれそれぇ～っ♡」

『バチバチバチバチバチバチバチィィィンッ！！！！』

「ひぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃああああっ！！」

気丈にも立って堪えていたが、思わず崩れ落ちてしまう水島加奈子。

背後からお尻へ思いっきり蹴りを入れる明日香。

明日香の爪先は短パン越しに美女の肛門へ直撃した。

再び奇声を上げてお尻を押さえて泣きわめく。

「今の蹴りってお姉さんのお尻の穴に当たらなかった？　あたしが診てあげようか？」

エッチそうな笑みを浮かべながら菅野莉央が明日香の足元へ跪き、水島加奈子の短パンを引きずり下ろした。

「ひっ！？　やめてお嬢ちゃん……恥ずかしい」

「あのね……あたしたち小学生だけど……マンコとか肛門とか見慣れちゃってるのね？　だから心配しないであたしたちに見せなさい。パンツも脱がすよ？」

「やめてえええっ！！」

「ずるりっ！！」

うつ伏せのまままついに素っ裸にされた水島加奈子は、小学生の女の子三人にその裸体を見られながら本気で恥ずかしくて泣いていた。

ボコボコに腫れた顔面と、グチャグチャになった両方の胸の痛みと共に、羞恥心も激しいものがあったのだ。

「ほんとは生で突っ込みたかったんだけど……手袋越しでごめんね。お姉さんが変な病気持ってるから移されたくないのよ。わかってね？　ほら！」

『ズブッ！！』

「はうっ！？」

莉央の人差し指が一気に根元まで加奈子の肛門へ突き刺さる。

「触診してるんだから黙りなさい！　ん～。ここは？　ここかな？え～と。ここか？　何か直腸ガンみたいなシコリ発見！　今から肛門の手術しちゃいまーす♡」

グリグリと直腸内を掻き回して加奈子の反応を楽しむ莉央。

「美香ちゃん！　やっちゃって！」

「はーい♪　この極太ペニスバンドでガンなんてグチャグチャにしてやるんだからっ！　安心してお尻を突き上げなさい！」

富田美香が長さ２０ｃｍ、幅が５ｃｍの超極太張り形をペニスバンドにセットしながら命令する。

「いや……恥ずかしいから肛門なんか見ないで……お嬢ちゃんたち」

「見慣れてるって言ってんの……早くケツ突き上げないと酷いわよ？」

莉央は突っ込んでいる人差し指を思いっきり上に引っ張りあげて、無理矢理お尻を突き上げさせた。

「ひいいっ！　裂けるううっ！？」

「今から本当に裂いちゃうからね？　安心して！　大腸ガンなんてグチャグチャに擂り潰してやるから♡　ではでは……いっくよぉ～」

『ずぷぷぷ……ずずず……』

「ぎひいっ！？　痛い痛い痛い痛いいいいっ！！」

「黙れ！　まだ半分しか入ってないよ？　全部飲み込んでしまえっ！　それえっ！！」

『ばちゅっ！！　バリバリバリバリッ！！』

「ぴぎいいいいいいいいっ！！　いったあああああいいいいっ！！」

激しい肛門からの鮮血で、美香の太股はみるみる内に真っ赤に染まっていった。

「ほらほらほらほらほらあっ！？　どう？　感じる？」

『パンパンパンパンパンパンッ！！』

「んぎゃあああああっ！！　死ぬっ！！　死んじゃうううっ！！」

泣き叫ぶ醜く腫れた顔面を、更に往復ビンタでお仕置きする結城明日香。

『パンパンパパパパパパパパパンッ！！』

「ひぶぶぶぶぶぶぶうううっ！？」

「あははは♪　変な顔して泣きわめいて……哀れな女だねあなた。美香ちゃんのペニスバンド食らったら、アナルはもう使い物にならないけど……今日死んじゃうからもうウンチもしなくていいから安心してね？　うふふ♡」

美香が極太張り形を加奈子の肛門から引き抜くと、ミンチになった直腸も一緒に飛び出してきた。

「あはは。病気で直腸まで脆くなってたのね？　グチャグチャにな

って飛び出してきてるよウンチと一緒に……。さあ今度は仰向けになってくれる？」

「えーん、えーん、今度は何を……」

「ケツ穴の次はマンコに入れるんだよっ！！　早くしろっ！！」

怒りながらお尻を思いっきり叩く美香。

「ひいいっ！？　や、やめて……お願い……お願いします！！」

「美香ちゃん……その腸とウンコまみれの張り形をマンコに突っ込むつもり？」

莉央が頬を赤くしながら聞く。

「うん♪　子宮の奥の奥まで大腸菌ぶち込んでやるんだ♡　大腸菌の赤ちゃん産まれちゃったりして！」

「はは……怖いな。でも産むどころか妊娠する間もないと思うなぁ私は……」

冷静に答える明日香も頬を赤くしながら見ている。

正常位に替えさされた後、膣が壊れるほどの大きな逸物をぶちこ

まれ、膣内からも夥しい流血を見せる２０歳の美女。
狂ったように泣き叫ぶが、美香の激しい腰使いは更に激しくなってゆく。
ついに性器から引き抜かれた時には、ミンチになった子宮が絡み付いたまま飛び出してきた。

「うそ……子宮まで脆くなってた？　ごっめーん莉央ちゃんっ！　子宮まで抉っちゃったぁ……」
「あたしのメスで子宮取り出すの定番なのに……美香ちゃんってば酷いよ……」
「だからごめんって……あたしの処女膜破っていいから許して♡」
「わかった。いつか本当にもらうからね？」
「わーい♡」

変な所で喜んでる美香を少し冷たい横目で見ながら、明日香が莉央に囁いた。

「加奈子のトドメはどうする？　日本刀でメッタ斬りか四肢切断か股間からノコギリ引きか……」
「ううん。。絶命するまで三人で日本刀でメッタ斬りにしよう。四肢切断もノコギリ引きも最近よくやってきたからマンネリ化してる

もんね〜」

無理矢理立たされた水島加奈子は、股間の二つの穴からドクドクと愛液や腸液や血液、小便をタレ流しながら立ち上がった。

立ち上がったまま木の枝に体を括られ、立たされたままの姿勢で身動き出来なくされてしまった。

「あたしたち三人で今から水島加奈子を日本刀で斬り刻んじゃいます！　覚悟はいい？」

「えーん、えーん、痛い……顔と胸と股間が焼けるように痛い……早く殺して……」

莉央の問いに泣きながら答える加奈子。

「日本刀捌きは美香ちゃんが一番上手いよね？　トドメは美香ちゃんお願いね？」

「明日香ちゃんよくわかってるね！　任せといて！　さぁいっくよぉ♪」

「思いっきりやっちゃってね美香ちゃん♡」

莉央の言葉を最後に、とにかくお腹に、背中に太股、両腕と、所構わず日本刀で斬り刻み続ける明日香と美香。

深く入った美香の横引きは、加奈子の小腸の殆どを地面に引きずり落とした。

『ズルズル……ビチャビチャ……』

「うわっ！？　えっぐーい……さすがだね美香ちゃん……」

「えへ♡　斬り付ける瞬間に引く動作を意識して斬ってみて！　そしたら明日香ちゃんでも深く斬れるよ？」

「そっか。日本刀は引いて斬る……前にも誰かに聞いたような……こうかな？　それっ！」

『ズバッ！！　ばくんっ！！　ぶっしゅううううっ！！　ズルズルズルズル……ビチャビチャ……』

「スッゴい！　明日香ちゃん！！　やれば出来るねっ！」

明日香の一閃で残っていた横行結腸や、上行結腸が一気に飛び出して地面に落ちた。

もはや女子児童たちの足元は二十歳の美女の内臓と鮮血で阿鼻叫喚地獄絵図だった。

『かひゅーっ！！　かひゅううううっ！！』

「苦しそうな声だしして白目剥いてるけど……まだ逝かせてあげな～い♡　それっ」

美香の強烈な一撃で、右手が肘から落とされた。

明日香も真似して左手……皮一枚残ってしまい、プランプラン揺れている。

手でつかみ、引きちぎる明日香。

「落とせたことにしといて？　ね？」

「ズルいけど……まぁいいか。今のは皮一枚だったから殆ど成功だよ明日香ちゃん！　腕あげたじゃん？　何回で太股切断出来るか勝負しよう」

「うん！　私は右脚いくよ。美香ちゃん左脚ね？」

「オッケー！　さん、にい、いち……スタート！」

ズバズバと、太股に連撃する明日香と美香をのんびり見ている菅野莉央。

出血も夥しく、全身が軽く痙攣し始めた。

ボトリ……と落ちたのは左足だった。

数秒遅れて右足が落ちる。

両手に繋いでいた紐は両腕と共に落ちているので、両脚が無くなった瞬間に首の紐へ全体重がかかる。

「ぐえええええっ……ブクブク」

泡も吐いて痙攣が激しくなってきた。

ゆっくり見物していた莉央が、ゆっくり正面に立ち、水島加奈子に囁いた。

「よく激痛の中頑張って来ました。感染症のお姉さん。あたしがトドメ刺してあげるね？　何かアイツに言い残すことは？」

「うごごご。。アイツに……って……意味が分からない……何もないから……早く殺して……」

「そう。じゃあ分かった。成仏してね♡お姉さん」

『ツプッ……』

「あひいいっ！？」

莉央の日本刀の切っ先が、四肢を切断されて揺れている加奈子の

局部にゆっくり突き刺さる……。

切っ先が入りきった時にはクリトリスも尿道口もパックリと真っ二つになった。

刃を手前側に向けて突き入れていたからだ。

「ピギャアアアアッ！！！！」

「アナルより子宮より……クリトリス切開が一番あなたの急所だったみたいね。うふ♡　またそんなにオシッコ飛ばしちゃって……汚いなぁ最後まで……お口まで後少し……頑張って♪　ほら切っ先出やすいように上を向けっ！」

『ズズズズズ……ばしゅっ！！』

ついに日本刀の切っ先は、加奈子の口から飛び出した。

「おごごご……はごおうっ！！？？　ガクンッ！！」

奇声を上げて絶命する水島加奈子。

数々の男達に病気を移して殺害してきた女の哀れな末路だった。

哀しい女たち　（前編）（後書き）

何かのために体を捧げる。
自分のため？
人のため？
自己犠牲とは哀しいものである。

哀しい女たち　（後編）（前書き）

新東部国際空港から海外へ飛び立とうとしている青年がいた。

母に見送られながら……。

――――一週間後。新東部国際空港。

「頑張ってくるんだよ光一。お前は絶対よくなるよ。寄付してくれた世間の方々に感謝します」

「ありがとう母さん……絶対治してくるからね。安心して施設で待っててて！」

今飛び立とうとしている飛行機へ、通路が開いて繋がった。

極東のアジリカ帝国行きの飛行機だった。

「行ってらっしゃい光一！」

「うん。行ってくるよ母さん……」

そこへ二十歳くらいの男が突然現れた。

男前だが変態だった。

「車椅子大変でしょう？　俺がタクシー乗り場まで押して行ってあげますよ？　おばあちゃん」

「おや、ありがとうございます……でも大丈夫ですよ」

「いや、母さん、せっかくだからその青年の方に甘えて連れていってもらってよ。もう無理はできないんだから……どこのどなたか存じませんがご厚意有り難くお受け致します。母をどうかよろしくお願いいたします」

「はい。お任せを！　息子さんと別れも済んだし……帰りましょうかおばあちゃん」

「ありがとうございます！　じゃあお願いいたします。光一、必ず治してくるんだよ？　手術終わり次第連絡してきてね！　じゃあね！」

「ああ。じゃあね！　母さん」

振り向いて出発の通路へ向かう杉山光一だった。

「杉山光一さん……ですよね？」

「ん？　誰？　お嬢ちゃんたち小学生みたいだけど……。親御さんとはぐれてしまったのかい？」

「ご心配なく。もう少しで海外に逃げられたのに残念でしたね？

光一さん」

「逃げられた？　僕が逃げてる？　どうゆうこと？　何の冗談言ってるのかな？　お嬢ちゃんたち……僕は暇じゃないんだよ。今から飛行機乗らないといけないの。海外で手術しなくちゃこの国じゃ治せない病にかかってるの。わかるかな？」

冷静に聞いていた明日香も口を挟む。

「瑠璃子さん……病気になってまでも必死になってあなたの手術代稼いでくれてたのよね。半年間の間、両親の元にも殆ど帰らないであなたのために高速のサービスエリアで……」

「その優しい彼女がいたのに……これから向かう国に婚約相手が待ってるよね？　それって最低じゃん……小学生のあたしたちにも分かるよ」

美香も睨み付けながら言い放った。

「な、何でお前らみたいなガキが瑠璃子の事まで知ってやがる！？何もんだお前らは！？……ん？　こんなときに誰に電話してやがるっ！？」

「プルル……プルル……ガチャ。もしもし……佐藤さんですね？菅野莉央と申します。例の話で婚約者の杉山光一さんに替わりますので最期の挨拶をしておいてくださいね。……はい、じゃあ替わり

ますね」

菅野莉央がスマホを光一へ突き出した。

「だ、誰だよ？」

「アジリカ帝国であなたを待ってる佐藤瑠璃子さんだよ」

「何だと！？」

光一は莉央から電話を引ったくると、焦りながら話しかける。

「おい！　本当に瑠璃子なのか？」

『うん。私は光一さんを信じてた。でも……特殊任務省とか名乗る人たちがきて、浮気をしているあなたの動画を見せられて……しかもその相手の女の人はあなたのために苦しみ抜いて死んだって聞いたわ』

「嘘だっ！　そんな奴等の言う事と僕の事と……どちらを信じるんだ！？　おいっ！？　瑠璃子っ！！」

『ごめんなさい。全ての希望を失った私は今から死にます。あなたのために死んでいった加奈子さんと……私を裏切ったあなたのために……ガチャ。ツーツー……』

「瑠璃子っ！！　瑠璃子おおおっ！！　………ちっくしょう！！　お前らのために僕の人生台無しだっ！！　瑠璃子の父親が世界中で僕の手術を出来る唯一の名医だったんだっ！！　どうせもう手術も受けられなく僕は死ぬんだ！！　お前らブッ殺してやるっ！！」

莉央に殴りかかろうとしたその瞬間、光一に衝撃が走る。

『バキッ！！』

「ぐわあっ！？」

変態が戻ってきた！

……いや、格闘家である莉央の兄、菅野京介だった。

「気を失ってる内に眠らせる注射打ってくれ莉央。俺がマーチまで担いでいくからよお」

「うん。明日こいつと一緒に残酷処刑島に渡るんだ。港の近くの例の倉庫まで今夜までに運んどいてね。お兄ちゃんは今回も拷問処刑メンバーに入ってないからお留守番だね」

「ホッ。良かった……」

「なんか言った？」

「いや、何でもないぜ！　じゃあこいつを港の倉庫まで運ぶとするか」

「京介さんもきてほしかった……」

「明日香ちゃん、俺も明日香ちゃんと一緒に渡りたかった！　でもまあまたジムの方で会えるからなぁ！　へへへ……」

「最近サボってるじゃん？」

「いや、そんなことないぜ！　来週もいくからよぉ！　応援してくれよなっ！　あ、それと……この杉山光一のお母さんには、『連絡付かなくなる国へ出張に行かされるかも知れないから何年も連絡出来ないかも知れないけど心配しないで！』と息子さんの光一さんが言っていた。と伝えておいたからな！　死ぬまで心配しながら息子の連絡を待ち続けるなんて不憫すぎるからよぉ……」

「お兄ちゃん良いとこあるじゃん」

「だてに明日香ちゃんのオヤジさんとこでシゴかれてないからなっ。じゃあまたなっ！」

莉央と美香が、京介と明日香の会話に少し疑問を抱いている内に、京介はそのまま男を背負って去っていった。

「………明日香ちゃん？　お兄ちゃんに前からタメ口だったたっけ？」

「え！？　私、今タメ口で喋ってた！？」

「気付いてなかったんだ……無意識のタメ口……これはかなり気持ちが進展してない？　美香ちゃん？」

不敵な笑みを浮かべながら美香に問いかける莉央。

「うんうん！　無意識に京介お兄ちゃんの事をどんどん好きになっていっちゃってるね……でしょ？　明日香ちゃん！？」

「そ、そうかな？　年もずいぶん離れてるし……そんなんじゃないよきっと……」

頬を赤くしながらモジモジする明日香に、確信を得た莉央と美香だった……。

ふと藤堂長官の電話を思い出して、ボソッと呟く莉央。

「そう言えば……明日の拷問処刑人は明日香ちゃんと美香ちゃんも入ってなかったなぁ。お兄ちゃん共々たまにはゆっくりしてね。さてはて……真子さんとメグさんがどこまで執行できるかだな問題は……」

――――明くる日。再び残酷処刑島。

甲南中学校に通う１４歳の女子中学生の鬼頭美紅と、赤霧島小学校の六年生女子児童、菅野莉央。
定番の二人に、極北女子中学校に通う１４歳の女子中学生の小野メグと大野真子が加わり、今回は女子中学生三人と、女子小学生一人の合計四人での拷問処刑人となった。

「何でこんなことに……ちきしょうっ！！　ブッ殺すぞお前ら本当に！！」

「素っ裸で縛り付けられたまんま小学生や中学生の女の子たちに汚いチンポ見られながらそんなこと叫ばれてもねぇ……惨めとしか思えないよ？　お兄さん」

「メグってば言うことまで拷問処刑人らしくなってきたわね……でも私たちまだまだ血に弱いから、トドメとか内臓ズルズルとかは勘弁してくださいね？　菅野さん、鬼頭さん」

「そんなことじゃあいつまで経っても処刑できないじゃん？」

弱音を吐く大野真子の後ろから両方の胸を揉みしだきながら鬼頭美紅が囁く。

「いや……何をするんですか鬼頭さん……やめろ……」

「あ？　やめろだって？　昨日今日のヒヨッ子が誰に口を聞いてるの真子？」

スカートの裾から手を滑り混ませ、パンツの中へ滑らせる。
あっと言う間に真子のオマンコに中指が挿入された。

『くちゅ』

「いやあっ！？　やめろっ！！　やめてっ！！」

「このままみんなの前で処女膜ぶち破ってやろうか？　あん？」

「いやんっ、やめて……わーん。わーん」

ついに極北女子中学校喧嘩最強の二人組の一人である大野真子ともあろう者が、鬼頭美紅の前では子供のように泣き出した。

「ホラホラホラ！　泣くなよ気持ちよくさせてやるから」

高速でクリトリスを擦り出す美紅に、顔を真っ赤にしながら泣きじゃくる真子。

「イヤイヤイヤイヤ！　あーんっ！！」

「美紅ちゃん！！　もうやめてっ！！　あたしの大事な親友なんだよ真子さんもメグさんも！！」

「え？　そんなに大切に思ってたんだ莉央ちゃん……ごめんごめん……でも処女膜は残しておいてやったから安心して♪」

『くちゅ、ぽんっ！』

「あっ！はんっ！？」

パンツ内から手を抜く寸前にもう一度膣に指を突っ込んでクリトリスを擦り付けながら引き抜いた。

しゃがみ込んで股間を押さえながらしばらく泣き続ける大野真子に、そっと近寄り背中を擦る小野メグだった。

静かに美紅を睨み付ける莉央だったが、真子のマンコに突っ込んだ指を舐めながら上を向いてとぼけていた。

「ふーん……美紅ちゃんは真子さんがタイプだったんだね？　知らなかったよ。自分と同じ切れ長の目をしてるから？」

「え？　あたし女に興味なんてないよ？」

「指を舐めてたじゃん？　普通好きでなかったらアソコの液なんて汚くて舐めないよ？」

バレたか！　と言わんばかりにもう一度泣きじゃくる真子に近付き、抱き締めて頬にキスをしながら謝った。

「ごめんなさい、怖がらせちゃって……あなた可愛いから……ってゆうかこのオッサンあたしたち見ながらチンポおっ勃ててやがるよっ!?」

美紅が光一のチンポが勃起しているのを見付けてしまった。

「今からあたしたちに殺されるのに舐めてるのかおいっ!?」

小野メグが真っ先に男へ向かい、往復ビンタを数十回食らわせた。

「いたたたたあっ!?　女同士で指なんか突っ込み合いされたら普通勃起するだろがっ!?」

「黙れっ！！　真子は無理矢理突っ込まれたんだよっ！」

『バキッ！！』

「がはあっ!?」

顔面への正拳突きがまともに入り、鼻の骨が綺麗に折れた。

残酷処刑島でのこの男の最初の血は、メグの正拳から始まることになった。

そのまま色んな方向からフックとストレート、アッパーを入れまくり、顔面はみるみる内にボコボコに変形してゆく。

同時にペニスはみるみる小さく萎んでいった。

「そのくらいでいいよメグさん……次は真子さんに責めてもらうから」

美紅と莉央が両肩を支えて立ち上がらせた。

「美紅ちゃん！　もう一回謝って！」

「ご、ごめんなさい真子……あんたもメグも……二人はあたしと同い年なんだから、あたしのことは美紅と呼び捨てでいいし……タメ口でもいいから……もう泣かないでくれない？　莉央ちゃんに怒られるから……」

「はい。……うん。分かったよ美紅。許してやるよ！」

やっと立ち直った真子は金属バットを持って光一へ近付いてゆく。

「……可愛い顔してるんだけど……やっぱなんかムカツクんだよな

真子は……」

「自分で呼び捨てタメ口でいいって言ったんだから我慢して！　それより真子さんの責めが久しぶりに見られるよ♪」

『バキバキッ！！　グシャグシャッ！！　ドカッ！！　ガキッ！！』

「うっぎゃあああっ！！　いだいいいいいいっ！！」

手足に集中した真子の金属バット攻撃は、数十ヶ所の手足の骨をバラバラに粉砕した。

あまりの激痛に勢いよく小便を漏らしてしまう光一だった。

もう拘束をほどいても何もできないレベルだった。

「次は美紅ちゃんいく？」

「うん」

「武器は？」

「とりあえずメグみたいに殴りまくってくるよ」

ボコボコになりながらも微かに見える鬼頭美紅は、無茶苦茶タイプの顔だった。

じわじわと再び勃起してくる。

「あたしの顔をアップで見てチンポおっ勃てるなんていい度胸してるじゃん？　オッサン？」

「つ、ツインテール……髪型も顔も……あんた無茶苦茶可愛い……わ」

「へぇ〜。嬉しいなぁそんな誉められると……一応女の子だからね〜あたしも。でもねぇ。あんた二股かけてしかも二人とも殺してるじゃない？」

「自殺と病死だっ！！　俺は一人も殺しちゃいないっ！！」

「あんたに裏切られたショックで外国の彼女は自殺して……こちらがわの彼女はあんたのために体を売り続けて感染症をもらった。そして処刑……いや、病死と同じ。あんた最悪じゃん？」

みるみる内に顔が真っ赤になっていき、泡を吹き始める光一。

美紅の右手が左の睾丸を掴んで、握り潰す寸前まで変形させていた。

美紅の握力は７０を越えている。

簡単に片手で睾丸を握り潰せるレベルだった。

くしゅっと間抜けな音を立てて左の睾丸は潰れた。

気を失いながらペニスからは血の混じった赤い粘液がトロトロと垂れ流れている。

「キンタマ潰れたくらいで泡吹いて失神すんなよ？　オッサン？　なによ？　この汚い粘液は？　あん？」

『スドオッ！！……ぶちゅっ！！』

右手を離した瞬間、間髪入れずに右の膝蹴りが股間に突き刺さった。

一瞬で右の睾丸が潰された。

ピュピュッと赤い粘液が射精のように吹き出し、美紅の太腿にヒリかかる。

「なによこの液？　汚いんだよオッサン！」

『ドカッ！！　……ズボッ！！』

『ドピュウウッ！！』

もう一度蹴りあげた。

今度は股間への膝蹴りでなく、股間に爪先がめり込む蹴りだった。

美紅の強烈な爪先蹴りは、男の肛門のヒダヒダを何枚も破壊し、５ｃｍほど直腸にめり込んだ。

前立腺までめり込んだ為、思いっきり射精させられてしまう羽目になった。

激痛の射精であった。

すべて狙い通りの攻撃である。

「肛門を蹴られて射精しちゃうなんてMだね？　オッサンさぁ♪　あはは♡」

激痛によるショック死をしかねない美紅の攻撃に、慌てて痛み止の注射を太腿や首に打つ莉央。

「キンタマ痛かったよね？　いきなり二個とも潰されたらたまんないよね？　ごめんね～光一お兄さん」

莉央は医療用のメスを取り出し、腫れてパンパンになっている陰嚢袋を切り裂き、ミンチになっている睾丸をホジくりだして、再び縫合してあげた。

「まだまだ死なれちゃ面白くないからね♡」

満面の笑みを浮かべている美紅と莉央を見ていたメグと真子の二人は、改めてこの二人の残酷さに小便をチビりそうだった。

「メグさんと真子さんはこいつの四肢を切断してくれます？　この箱に入ってるチェーンソー使っていいから！」

「え？　殴る蹴るくらいでいいと聞いてましたが……」

「あたしも……せめて金属バットでバッキバキにしばくとゆうことくらいで構わないと……」

「あっ、藤堂長官と電話したんだね。じゃあそれあたしと美紅ちゃんがやるから、あとで逆さ吊りにして、肛門から溶かした鉛流し込んでくれる？　そして生きたまま首を斬るの。お願いね♡」

チェーンソーのエンジンをかけて男に近付いてゆく莉央と美紅。

「ちょっと待ったぁっ！！」

「待ったってー！！」

メグと真子は同時に叫んだ。

「それ、あたしたちがやる！　やらせてくださいっ！！」

「内臓に溶かした鉛流し込む……とか、生きてるまま首を斬る……とかよりは……マシなのかなって……はは。あはは」

本当に？　と言わんばかりの鋭い眼光で振り返る莉央と美紅を見ながらガクガク震えていると、意識が朦朧としている内に、チェーンソーを手渡される二人。

既にエンジンはかかっている。
やるしかない。
お互いに顔を見合せ大きく頷くと、意を決して光一の方へ歩いてゆく。

「縛ってるロープから切って一度地面に落としてから切断しようね？　メグ」

「うん。ごくり……。いくよ？　せーのっ」

見事に両手と両足のロープを切断し、光一は崩れ落ちるように倒れ込んだ。
お尻を突き上げて仰向けに倒れ込んだので、肛門からプシュプシュと鮮血が飛び出している。
真子は、ちょうどいい大きさの石を拾って、肛門へ捩じ込む。
飲み込まれるようにスポンと入り、ドクドク流れる程度に変わった。

「今度は手足だね。脚から斬ろう。あたしは右足やるからあんた左脚ね？メグ」

「分かったよ。一気にいっちゃお！　いっくよー？　せーのっ！！それえっ！！」

『ブイイイイン……ギャギャギャギャギャギャギャギャン……』

見事に両脚が、太腿辺りから切断された。

「うう……うっぎゃあああっ！！」

麻酔が切れてきて男が目覚めたと同時に絶叫を始める。
その声にビビった二人は退いてしまう。

「首を少し断って黙らせるんだよ？　気道少し断ってまともに息が出来なくするの！」

「え？　首？　それ死んじゃうやつですよね？」

美紅の指示も頭に入らず身動き出来ないメグと真子は、ただ震えているだけだった。
莉央が再び痛み止の麻酔注射を腰とお尻と肩に打った。
大人しくなる男。

「さ、どうぞ。大人しくなったから残り両腕もお願いね。出来るだけ根っ子から断ってね。振り回されたら危ないから肩口からでもいいくらいよ？」

「はい。やってみます菅野さん」

「分かりました」

再びチェーンソーを唸らせ、見事に両腕の切断も成功した。

「やれば出来るじゃん真子！」

「あ、あったり前じゃん！　あたしだってヤンキーなんだ！　これくらい朝飯前だよっ！」

「ふうん。ションベンチビってなけりゃ大したもんだったんだけどな。着替えのパンツやるよ」

メグは震えが止まらないレベル……真子は足首まで流れるほど小便を漏らしていた。

美紅に言われて初めて気付く大失態だった。

再び泣きながら美紅のパンツに履き替える大野真子。

メグは背を向けて気付かない振りをしてあげた。

美紅と莉央で男を逆さにして縛り付けてゆく。

四肢を切断されているため、中学生と小学生の女の子でも意外と楽勝だった。

真子が先ほど捩じ込んだ石を、肛門から引き抜く莉央。

ドクドクと血が流れ出てくる肛門に、熱に強い特殊な漏斗を差し込み、先ほどから熱して解かしていた鉛を美紅が持ってくる。

「どこまで入っていくかなあ？　途中で大腸が溶けちゃって一気にお腹のなかに広がるか……直腸、Ｓ状結腸、下行結腸、横行結腸まで重力にしたがって流れ込んじゃうかなあ？」

美紅が舌なめずりしながら仮性包茎の光一のペニスの皮を剥いてゆく。

「こんないい年して、半分皮かむってるなんてあり得ないよね？　莉央ちゃん。どこまで剥いたら血が出るかな？」

「え？　あ、そうだね。手足の止血の包帯巻いてたからよく見てなかった……てへ。何て言ったの？」

『バリバリ……メリ……バリッ！　どくどく……』

もう一度説明する前にゆっくり確実に男の皮を根元まで引き剥く美紅。

避けたペニスの雁首辺りから血がドクドク流れ出してきた。

「あははっ！　やっぱり包茎のチンポを無理矢理に引き剥いたら血が出るんだ♡　面白いね莉央ちゃん♪」

「はは……クラスの子はみんな包茎だから逆に見慣れてるけどねあたし……引き剥くのは痛そうだけど、なんかエッチで興奮しちゃうよね！　あたしたちドＳだから♪　また生意気な男子でも見付けて引き剥いてみよっと♡」

「殆ど脚の付け根から切断しちゃってるから、脚よりオチンチンの方が長いよ？　超受けるんだけど（爆）」

「プランプラン揺れて目障りだから先に斬っちゃおっか？　根元からスパッといくか、縦に尿道からメスを入れて竹割りにするか、雁首だけ落としちゃうか……美紅ちゃんが決めて」

皮を引き剥いたペニスを人差し指でピンピン弾きながら真剣な表情で悩む美紅。

「う～ん……全部やっちゃお！」

「え？　全部？」

「そっ。先ず尿道から雁首辺りまでメスを入れて……横から雁首切断して……ここで亀頭部分の肉片が二つ取れまーす♡　んで丸見えになってる尿道からメスを縦に入れて竹割りにして、真っ白な真っ二つに裂けた尿道を引きずり出してやってぇ……トドメに根元から真横に輪切り♡」

「一番痛々しいやつだ……前に一回やったパターンだねそれ……じゃあ今回もそれでいこう♪」

メグと真子も近くに呼ばれ、性器に対する恥ずかしさを克服するよう美紅から命令される。

言われた通り、メグと真子の人差し指で、ペニスの尿道口をお互

い反対方向に引っ張った。
ピンク色の尿道口がパクっと開いて見えてくる。
「やだ……オチンチンの中ってピンク色でねとねとしてるぅ……」
女子中学生の小野メグは顔面真っ赤っ赤にしながら尿道口を覗いている。
開いたり閉じたりして遊びながら見ていると、大野真子も変に興奮してきた。
「うわぁー。なんかパクパクしてパックマンみたいだね～。やらしいピンクとゆうか赤とゆうか……へえ～こんなになってるんだ～」
莉央のペニス解剖が始まると、さすがにメグと真子は目を背けがちだったが、どうにかこうにか最後まで見ることが出来た。
二回メスを入れた過程で、亀頭が半分ずつ二つに切り離される。
その二つをメグと真子に手渡し、おもちゃにさせてあげた。
親指と人差し指で、プニプニと揉みしだきながら遊び出すメグと真子。
亀頭の無くなった哀れなペニスを縦に切り裂き、二枚に開く。
真っ二つの尿道を引きずり出す役も、メグと真子が挑戦した。
みんなに内緒にしていたが、メグと真子はアソコをグショグショに濡らしていた。
今まで恥ずかしくて仕方なかったが、性器破壊の興奮を覚えてきた二人だった。

人を苛めることがこれから先、もしあるならば、パンツを脱がせたり、性器や肛門に指を突っ込んだりしてしまうかも知れない、と本気で思っている二人だった。

トドメに根元から切断してしまったあとは、何もない尿道だけが飛び出している腹部だけだった。

「生かしておくなら尿道再生手術するんだけど、こいつは処刑だから楽でいいよ♪」

莉央は引き抜いた尿道と、二枚に下ろされたペニス本体を、男の口へ無理矢理捩じ込んで、大量の水で飲み込ませた。

「逆さになっていても喉はきちんと通るのが不思議よね？　重力に逆らってる喉の力だね」

本日一番の地獄の時間が始まった。

莉央が熱に強い特殊な漏斗をグリグリと肛門深くに差し込み直す。
美紅はそっと解けた鉛を男の直腸の中へ流し込んでいった。

少し痛み止めの麻酔も切れかかっているため、物凄い地獄の激痛で目覚めるだろう。

『じゅううううう～』

肉の溶ける何とも言えない気分の悪い臭いが立ち込めた。

「うっ！？」

四人全員が鼻をつまんだその時、光一が目を見開き、この世のモノとは思えない気の狂った奇声を上げ始めた。

首を大きくウナヅク左右に振りながら、切断されて短くなった手と脚を必死でバタバタさせながら、お腹もグルングルン捩りながら苦しんでいる。

腸奥深くまで流れ込んだ鉛は、ゆっくり大腸や小腸を溶かし、腹部が焼けて白く変色してきた。

物凄い異臭とともに白目を剥きながら奇声を上げ続けるまさに生き地獄。

「スッゴい痛そうだね美紅ちゃん……」

「うん。脚がバタバタする度チンポ切り取った穴から鉛と焼けた腸が流れ出てきてるよ……しゅごーい♡」

楽しんで見ている二人をよそに、これは限界を越えてしまった。

いつかと同じように、うずくまってゲロを吐き続けるメグと真子の中学生コンビであった。

「どこまで飲み込んだの？　ここか？　この辺りかな？　エッチだなぁ。お尻の穴からどんどん飲み込んじゃうなんて♡」

白く赤く変色してゆくお腹を見ながら、おへその辺りや胃の辺りを人差し指で突つきながら光一に話しかける莉央。

血の泡を噴いて痙攣し始めた。

「今で2Lくらい入ったよぉ？　もう最期の時みたいだね？　生きてるまま首を斬っちゃおっか莉央ちゃん？」

「そだね。ほらほら、何か言えば？」

優しくささやきながら、莉央のメスは喉を気道まで切り裂いた。

「かひゅうっ！　ごぽごぽっ！！　かひゅうっ！！　ごぽこぽ」

「あはは。何がかひゅうっ！！だよ。面白い音だしてくれるね？光一お兄さん。そう言えば加奈子さんだっけ？　あなたの二人目の利用するだけして病気にさせて殺しちゃった人。ほんとはあたしたちが処刑したんだけどね。ほっておいても明日か明後日には死んでたのよね……」

「ごびぼぼはあっ！！」

「ちゃんと聞いてんの？　そいでさぁ、最後に言い残すことがないか聞いてあげたのね……アイツに言い残すことないかって。アイツってもちろんあなたのことね？　そしたら……何もないんだってさ。あなたを大好きなまま死んでいったよ？　よかったね♡」

首の切れ目から溶けた内臓がゴボゴボ噴き出してきた。

「ん？　美紅ちゃん？　解けた鉛注ぎすぎたよ？　こいつ逝っちゃうよ？」

「４Ｌ目をぶち込んじゃった。聞いてたら段々腹立ってきて……ごめんね莉央ちゃん。早く殺したら結果コイツを楽させちゃうのにね……」

莉央は特殊な漏斗を引き抜いて日本刀を美紅に手渡した。

「美紅ちゃん得意の肛門串刺し刑で！　やっちゃってザクッと♡」

メグと真子もようやく冷静になり、ペニスを切り落とされ、睾丸の入ってない陰嚢を縫われ、お腹の内臓を溶かされてびくびく痙攣している哀れな男の姿をそっと見つめていた。

「いつか二人にもやってもらう日がくるから目を逸らさないで最後まで見ててくださいね？」

「はい菅野さん」

「頑張ってみます」

「ぎえっ！　ぎえっ！　じぬううううっ！！かひゅううっ！！」

「黙れ腐れ外道め！　ここね？　汚い肛門は？」

『ツプッ……』

美紅の日本刀の切っ先が男の肛門にめり込んだ瞬間、男の口から煙が出てきた。

「早く美紅ちゃん！　こいつ死んじゃう五秒前だよっ！！」

「逝っけええええっ！！」

『ズバズバズババババババアッ！！　ざしゅううっ！！』

肛門から口まで見事に貫いた。
その瞬間目玉がポコンと飛び出して最期の断末魔の叫びを上げて絶命した。

「お見事美紅ちゃん♪」

「あースッキリした♪　最低なヤツほど時間かけて殺すのってやっぱり気持ちいいよねっ♡」

罪の重さを考えると意外と平気な風に思えてきた小野メグと大野真子であった。

次回残酷処刑島に呼ばれる時は……性器破壊とトドメの処刑を遂行出来るだろう。

残酷処刑島にまた新たな遺体が加えられた。

哀しい女たち　（後編）（後書き）

誰かの為に犠牲になっても、他の誰かを犠牲にしてはならない。

自己犠牲も人間の哀しい性である。

小野メグと大野真子の中学生コンビが、耐性の無かった筈の残虐性に目覚めようとしていた……。

親心　（前編）（前書き）

六年三組の女子児童への暴力。

最強の女子児童がいるこのクラスへの暴挙は許されない。

親心　（前編）

プーさん。
赤霧島小学校に雇われている掃除のおじさんがいた。
背は高く１８０ｃｍ、体重も１００kgとかなり大柄な体格をしていた。
年齢６５歳とは感じさせないくらい可愛らしい愛嬌のある熊の縫いぐるみのような顔つきをしていた。
熊のプーさんから取ったあだ名のプーさんであった。
殆どの児童たちはプーさんのことを慕っていた。

「あはは！　プーさんって奥さんいなかったんだ！　寂しくないの？」

「はっはっはっ！　わしにはこの小学校の君たちがいるから全く寂しくなんかないよ！　みんなはわしの子供たちだと思ってるから」

放課後に学校中のゴミを集めて袋にまとめたり、落書きを消したりと、ある意味教壇に立つ教師たちより忙しい掃除のプーさんであった。

――――六年三組。放課後。

「六年三組の女子に対して暴力振るったってことは何を意味するか分かってるわよね？」

六年四組の男子児童、田岡俊一を三組に呼びつけて説教している女子児童がいた。

特殊任務省から拷問処刑人として雇われている残酷少女、菅野莉央と、結城明日香と富田美香の三人だった。

「ごめんなさい！　三組の女子とは知らなかったんです……許して下さい！」

「鹿目由美子ちゃん、無茶苦茶泣いてたよ？　女の子の顔をげんこつで殴るなんて許されることじゃないよね？」

冷たい表情で男子児童に問いかける莉央。

「そうね。私は絶対許さない。美香ちゃんは？」

「あたしも許せないよ。一生後悔させてやるんだから！　ね？　莉央ちゃん？」

「うん。ってわけで今から六年四組田岡俊一の死刑を執行しまーす！」

一瞬で凍りつく俊一だった。
すぐさま土下座をして泣き出す。
「わーん！！　ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！　もう二度と女子に暴力振るったりしませんから許してくださいさ菅野さんっ！！」
ボトボトと涙を床に落としながら泣きじゃくる田岡俊一。
同級生の女の子に土下座をしながら泣きまくる男の子……かなりシュールな光景だが、残酷処刑島での拷問処刑執行人である莉央たち三人には到底相手が悪すぎることを悟っている男子児童だった。
机を三台並べた簡易ベッドに、仰向けに寝かされた俊一は、富田美香によって手際よく一枚一枚着ている服を脱がされてゆく……。
途中で何度か抵抗しようと美香の手を掴むが、その度に強烈なビンタを食らい、最後の方はとうとう泣きながらじっとしているだけであった。
四回ほど左右の頬にビンタを食らったため、顔は真っ赤になっていた。恥ずかしいのとビンタと原因がダブルだったので、文字通り真っ赤っ赤であった。
最後の一枚、パンツに手をかける美香。
「わーん！わーん！　富田さん、お願いします！　僕のパンツだけ

は脱がさないでっ！！　なんでもしますからお願いしますっ！！」

「だめ！　あたしたちにチンポ見せなさいっ！」

「わあああっ！！　やめて許してお願いっ！！」

『ズルズル……ストーン！！』

『ぷるんっ！！』

美香は俊一のパンツを一気に足首までずらし終えた。揺れながら小さな皮かむりのペニスは、莉央と明日香と美香の眼前に晒される。

「わあああっ！？　止めて！　見ないでっ！！　ごめんなさいっ！」

「そんなに泣いて謝るくらいなら最初から女子を殴ったりしちゃだめだよ！　ね？　鹿目さん」

莉央は冷たく囁きながらドアの方を振り向いた。

『ガラガラ』

静かにドアが開いて、おかっぱ頭の目の大きな可愛い女の子が現れた。

被害者の鹿目由美子である。

ゆっくりと莉央たちの方へ歩み寄ってくるが、並べられた机の上に、素っ裸にされて仰向けに寝かされている加害者の少年が視界に入った瞬間、はっと口を開き、目も見開いて慌てて両手で目を覆った。

「きゃっ!?　あ、あの……菅野さん……これって一体??　みんなが帰ったあと、田岡くんにきちんと謝らせるってことで結城さんから話し聞いてたんだけど?」

「ごめんね~!　最初はそれだけで許してやるつもりだったんだけど……莉央ちゃんと美香ちゃんが再犯を防ぐ為にも徹底的に懲らしめてやろうってなっちゃってね。はは……」

クラスメイトの鹿目由美子とそこそこ仲の良い結城明日香は、頭を掻きながら言い訳して舌を出す。

「こいつの人生で初めてのモノを三つ奪わせてもらうことにしたの。鹿目さんも良かったら参加して」

菅野莉央の問いに、全然意味が理解できないでいる鹿目由美子であった。

相変わらず素っ裸にされている男子児童を直視出来ないでいる。

「美香ちゃん、説明してあげてくれるかな？」

「えっ？　明日香ちゃんの友達なのになんであたしが？」

とりあえず莉央に逆らってみるが、諦めて由美子に説明を始めた。

一通り説明を聞き終えた鹿目由美子は、顔面どころか耳や首まで真っ赤になって、大きな目をパチパチさせている。

「そ、そんな……。ホントにそんなことしちゃうの富田さん!?」

「うん！　あたしたちは見慣れてるけど……鹿目さんは初めてかなやっぱり……どれかやってみたい？」

「いやいやいや……絶対無理だから私には!!　むしろそこまでしないであげて、と言いたいです……」

「それはダメだよ。六年三組の女子を舐めたらどうなるか身体を通して分からせてやらなきゃ。ね？　莉央ちゃん」

静かに頷いて田岡俊一の傍へそっと歩み寄る莉央。

「ただいまより暴行罪を犯した田岡俊一の死刑を執行します！　最期に言い残すことはありますか？」

「ひっ！　ひいいっ……し、死刑だって!?　な、何をする気なんだよっ!?　死にたくないよおおっ!!　わーん！　わーん！」

「冗談だよ。バッカじゃないの？　こんな教室なんかで殺しちゃったらさすがのあたしたちでも大目玉だよ……ほら、うるさいから大声出さない！　まだ職員室に先生残ってるんだから」

そう言いながら莉央の右手がそっと男子児童の下半身へ伸びてゆく。

「殺しちゃっても大目玉だけで済んじゃうのっ！？　嘘でしょっ！？」

大きな目を更に大きくして少年のペニスを凝視している明日香に問いかける由美子。

「あ、それは嘘じゃないよ。基本的に殺人は認められてないけど、わざとじゃないと証明できたら大目玉だけね私たちは多分……」

「そ、そうなんだ……噂通り怖い上に凄い人たちなんだね明日香ちゃんたちって……」

「凄くなんかないよ。残酷なだけ……。恥ずかしがらないで自分を殴ったムカつく男の醜態を見ていてね由美子ちゃん♪」

「え？　それは……ちょっと……」

まだまだ顔は真っ赤だが、勇気を出してか好奇心からか、鹿目由美子は人生で初めて父親以外のイチモツを見てしまった。

「そのうち慣れるから頑張って見ててね！　鹿目さん♪」

そう言い終わると同時に、そっと人差し指と親指で俊一の皮かむりの陰茎を握る莉央。

「わあっ!?　やめてっ!!」

「黙れ！　今度大声出したらチンポの皮根っこまで引きずり下ろすわよ？」

「ひっ！　は、はい……」

ゆっくりと男子児童のペニスの皮を剥いてゆく小学六年生の白い小さな指。

今まで空気に触れたことのない亀頭部分が少しずつ露出されてゆく……。

亀頭の半分くらいまで剥いた所で莉央の手が止まる。

「ピンク色で綺麗な亀頭してるね少年？　このまでが限界かな……」

「きゃっ……男の子にもワレメみたいなの付いてたんだ……もっと剥けないの菅野さん？」

手を止めた莉央に問いかける鹿目由美子。

「これ以上剥いたら血が出て大怪我しちゃうよ？　それでも構わないなら被害者のあなたが言うならそうするけど？」

美香と明日香はニヤニヤしながら、生唾を飲んで考えている由美子を見ながら答えを楽しみにしている。

「根元まで……剥いちゃって……中身がどうなってるのか全部見たい」

「あたしは怪我なく剥ける範囲で堪えてあげるつもりだったけど……鹿目さんがそう言ってるから……覚悟してね？　俊一くん」

黙って涙をボロボロ流し始める田岡俊一。

人差し指と親指に続き、中指も加えてガッチリ握り直した莉央の三本の指は、男子児童の陰茎を更に下方へと引き剥いてゆく。

『ぐぐぐ、、、バリ……』

「ぎゃああああっ！！　痛いいいいいいいいっ！！！！」

「うるさいっ！　我慢しなさい男の子でしょっ！？」

『ガキッ！　バキバキッ！！　ぐしゃっ！！　ドカドカッ！！』

あまりの激痛に叫びだした田岡俊一の顔面をタコ殴りにする結城明日香だった。

男の子だろうが痛いものは痛い。

大人になっても亀頭部分が全て剥けない人もいるというのに、小学生で無理矢理引き剥かれているのだから、たまったものではない。

両目を腫らして鼻血をダラダラ流しながら呻き続ける俊一の口に、ハンカチを丸めて無理矢理突っ込む明日香。

猿轡がわりだった。

『ギュウウウウ……めりめり……メリリリ』

「ふんぎいいいいっ！！！！　んんんんんんうううううっ！！！！！」

目玉が飛び出るほど大きく見開き、大声で悲鳴をあげようとするが、ハンカチを詰め込まれているせいでうまく大声が出せない。

明日香と美香により、両手両足を完全に押さえられて身動き出来ないまま、ついに雁首まで皮が引き剥かれた。

莉央の右手の指は血塗れになり、簡易ベッドの机の上にもポタポタと流れ落ちていた。

「痛い？　ごめんね。あたしはここまで剥く気はなかったんだけれど……鹿目さんが望むなら仕方ないよね？」

「あはははは！　チンカスたくさん付いてたけど殆ど血で洗い流されちゃってるぅ♪　受けるっ♪」

富田美香は血塗れになった陰茎を見ながら大爆笑していた。

「チンカスなんてはしたないわ美香ちゃん……せめて恥垢って言ってあげてよ♪　うふふ」

明日香も上品に笑う。

出血にかなりビビった鹿目由美子は少しの間固まっていたが、やがてゆっくりと近寄ってきて、まじまじと莉央に握られて血塗れになっている陰茎を見つめ出した。

「すっごーい……。痛そうだけど……なんか凄くエロいってゆうか……エッチってゆうか……」

「鹿目さんも結構残酷なのね？」

「あ、いや、そんなんじゃないよ菅野さん。あはは……」

「根元まで引き剥く？　その場合は簡易に手術しなきゃならなくなるけど」

冷酷そうな薄笑いを浮かべて頬を赤くしながら莉央が問いかける。

「こ、これだけ血が出てるのにもういいよ。さすがに可哀想で……あの……次の責めに入って！　次は明日香ちゃんなの？」

ドキドキしながらも初めて見る男子のペニス、皮が剥かれた血塗れの亀頭部……全てに変な興奮を覚えている鹿目由美子だった。

「美香ちゃんでもいいけど……先に私がやっていい？」

「どうぞどうぞ！　あたしは最後でいいよ明日香ちゃん」

明日香は俊一の左右の睾丸を同時に右手の指全体でガシッと鷲掴みにして、ゆっくり握り締めてゆく。

『ぎゅううううううう……』

「ふんごおおおっ！？　むぐううううううっ！！！！」

いびつに変形してゆく二つの睾丸を襲う痛みもまた、半端ではなかった。

白目を剥いてドクドク涙を流しながらハンカチを噛み締めて耐え続ける田岡俊一。

途中で力を弱めてはコリコリとマッサージしたり、また思い切り握り締めて変形させたり……明日香の睾丸いじめは凄惨を極めた。

たまらず勢い良く小便を漏らす俊一であった。

飛び散った小便は、富田美香の太ももにかかった。

「きゃっ!?　きったなーいっ!!　なんであたしの脚にかけるかなもう……覚えてなさい」

これ以上力を込めたら潰れる……とゆう、睾丸の限界値を知っている拷問処刑人たち三人からすれば、潰れる寸前の生き地獄を味あわせるのは簡単な事であった。

白目を剥いて泡を吹き出した俊一を見ながら、最後の美香へとバトンタッチ。

この時点で小学六年生の鹿目由美子は、人生で初めて性器を濡らしていた。

「スッゴいね……ここまで男子を責めるなんて……凄すぎるよ明日香ちゃんたちって……」

「由美子ちゃんもやってみたら？　見てるだけで退屈しない？」

「ありがと。見るのは以外と慣れてきたけど責めたりするのは怖いかな。あはは……」

丁重に明日香の誘いを断りながら富田美香の責めを楽しみに待っている由美子である。

ボールペンを指で掴んで、莉央に雁首まで引き剥かれて血塗れにされたペニスを、ペンペンと数回叩きながら呟いた。

「後ろの方も血塗れになっちゃおうか？」

「うあうおおおあううう……」

辛うじて意識が戻った俊一は、美香の言っている言葉の意味が分からないまま呻き声で返事をしていた。

莉央と明日香が何も言われなくても男子児童の両足を掴み、左右に大きく開いた。

更に膝が俊一本人の耳の横にくるほどまで上方に持ち上げる。

マングり返し……ならぬ、チンぐり返し……状態だ。

富田美香側からは、肛門までもが丸見えになった。

「鹿目さん、あたしの方に来て！」

「う、うん……どうしたの富田さん？」

「ほら、二人が大きく脚を開いて持ち上げてくれてるから……お尻の穴が丸見えになったでしょ？」

「あ！　うん！　犬とか猫とか動物以外の肛門なんて初めて見た……」

「同級生の男の子のケツの穴だよ！　なんかぐちゃぐちゃにしたくなっちゃうでしょっ！？　あはっ♪」

「ちょっぴり開いちゃってるぅ。。やだ。。なんかエッチィ……」

「うふふ。じゃあ始めよっか？　ここは何てゆう穴かな？　いっくよぉ？」

『ツプ……』

ボールペンの先端を俊一の肛門へゆっくり突き刺す美香。

「はうっ！？」

「はうっ、じゃないわよ！　どこの穴か聞いてるんだよ？　俊一！！」

「む、むごごごご」

「は？　聞こえなーい。ちゃんと答えるまでどんどん奥まで突っ込んでやるんだから」

『ずぶぶぶぶ』

「んごうううううっ！！　ふんごおおおおおっ！！」

　ハンカチの猿轡のお陰でまともに話せないのを分かっていての富田美香の嫌がらせであった。

　１０ｃｍほど突っ込んでは引き抜き、また突っ込んでは引き抜きを何回も繰り返す内に、ボールペンは男子児童の大便まみれになっていた。

　悪臭が美香と由美子の鼻をつく。

「あたしのボールペンをよくもうんちまみれにしてくれたわねっ？　罰を受けなさい。ほら、全部飲み込むの……ほらほらほらほらぁ」

『ずぼぼぼぼっ！！　バリ……』

『ぶしゅううううううっ！！』

「ふんぐうううううううっ！？」

　殆ど根元までぶちこまれたボールペン……。

当たり前だがS状結腸に穴が開き、凄まじい激痛が走る。
夥しい血液が肛門から噴き出した。
さっと身をかわす美香と由美子。

「やりすぎだよ美香ちゃん……あたしが手術しなくちゃいけないじゃん！　めんどくさいなぁもう。。」

「莉央ちゃんのメス捌きはプロの外科医なみだからね！　どうせ直腸の手術する羽目になるのなら、ついでにオチンチンの皮も根っこまで引きずり下ろしちゃっていい？　由美子ちゃんにやらせてあげたいの。ね？　莉央ちゃんいいでしょ？」

「えーーっ？　やれやれ……わかったよ。明日香ちゃんの友達が本当にやれるならいいよ。無理だったら明日香ちゃんがやるのはダメだからね？」

肛門には応急処置の栓を突っ込み、止血されている。

身動き出来ないように全身を机に縛り付け、準備万端。
莉央たち三人が見守るなか、鹿目由美子はゆっくりと田岡俊一の血塗れになっているペニスを右手で握り締めた。

「尿道って……唇みたいで可愛いね？」

左手の人差し指と中指でパクパクと尿道を開いたり閉じたりして遊び出す由美子。

「ううう、んんんん」

首を左右に振りながら、止めてアピールを繰り返す男子児童だが、由美子の握り締めた指先はゆっくりと腹部を目指して下がり始める。

莉央によって雁首まで剥かれただけでも大激痛と大流血だったのに、更に引き剥かれてゆく。

『ぎゅううううっ！　メリメリメリメリ……』

ある程度剥いたら止まってしまい、それ以上簡単には剥けなくなった。

「明日香ちゃん、これ以上剥けないんだけど？」

「思いっきり力を込めて一気にやってみて！」

「う、うん。一気に……ね。えいっ！！」

『バリバリバリィッ！！！！』

『ぶしゅしゅしゅしゅうううっ！！』

「ふんぐうううううううっ！？」

陰茎の真横の皮までパックリと裂けて、ピンク色のペニスの生の身がさらけ出された。
凄まじい出血が辺りに飛び散る。
莉央は速攻で田岡俊一に特殊な麻酔を注射すると、手際よくＳ状結腸と、裂けたペニスの皮を縫合する手術を始めた。
そのまま菅野莉央の兄である菅野京介を学校まで呼び、真っ赤なマーチで特殊任務省直属の病院へ運ばせた。
血塗れの机を拭いてる時に、帰ったと思っていた担任の坂本先生が入ってきた。
「凄い叫び声してたけど……四組の田岡くんだったわよね？　今青年に担がれて行ったのは……」
「あっ、先生！　色々あったけどもう終わりましたから♪　心配しないでくださいねっ！」
富田美香が、明るく坂本先生に告げる。
「凄い血……まさか田岡くんの……前から言おうと思ってたけど……いくら学校側が強く言えないからって限度を超えてると思うのね。菅野さん、もうここまで酷いことするのはやめてもらえる？」

「……先生、本気で言ってるのですか？」

「え、ええ。国のなんとかゆう省庁がついてるからってね、ここは小学生児童が通う学校なの。本当にもうリンチとか拷問みたいなことするの……止めて！」

手招きする菅野莉央の方へ歩いてやってくる４０代の女教師、六年三組の担任である坂本先生。

「あたしに逆らうんですね？先生」

「莉央ちゃんっ！　坂本先生には、何もしないであげてっ！　お願いだから！」

担任の先生が大好きな富田美香は必死で莉央にお願いするが、胸ぐらを掴んで体落として一気に床に叩きつける。

そのままお腹の上に乗ってマウントポジションをとる莉央。

「きゃっ！？」

『パンパンパンパンパン！！』

「痛いっ！？」

往復ビンタを敢行する莉央に飛びかかる美香。

「止めて莉央ちゃんっ！！　お願いだからっ！！」

涙を流しながら哀願する美香だったが、構わずビンタを繰り返す。

明日香と由美子はただ、見守ることしか出来なかった。

「先生、マンコから手を突っ込んで子宮ミンチにしてやるから覚悟してくださいね？」

スカートを捲り上げ、パンツの中へ一気に右手を滑り込ませる莉央。

「ひゃあっ！？　菅野さんっ！　やめなさいっ！！」

『くちゅ……ぐちゅちゅちゅちゅちゅっ！！』

「痛っ！？　やめなさいっ！！　やめてっ！！」

中指と薬指で４０代の女教師の性器を掻き回す菅野莉央は本気で激怒している。

「あーん、あーん！！　お願いだから坂本先生だけは止めてあげてええっ！！」

美香は泣きわめきながら強引に莉央の右手を掴んで引っ張り、坂本先生の膣内から莉央の指を引き抜いた。

「何やってんの？　ふざけてると殺すわよ？　美香ちゃん？」

「お願いだから！　莉央ちゃん！　先生だけは許してあげてっ！あたしの子宮引きずり出してもいいからっ！！」

そう言いながら大好きな先生のために、大好きな菅野莉央の右手を美香自身のスカートの中へ引きずり込んだ。

更にパンツの中へ……美香の膣へ莉央の指をあてがわせた。

「入れて、　莉央ちゃんにあたしのバージンあげるっ！！　大好きだから子宮抉られても構わないっ！」

『くちゅ…』

莉央の中指を無理矢理自分の膣内へ突っ込ませる美香。

「さぁ、あたしを犯して大好きな莉央ちゃん……でも先生は許してあげてっ！　ぐす、ぐすん……」

「………泣いてんじゃん」

「え？」

「あたしを大好きって言いながらそんなに泣かれちゃ無理矢理感半端ないよ？」

「ぐすん……だって……莉央ちゃんとはいつかきちんとベッドの中で抱き合ってバージンあげたかったんだもん……大好きだから……でもね、坂本先生もあたしは大好きなんだ！　だから辛くて悲しくて涙が止まらないんだよ……ぐす、ぐすん」

『ちゅぽんっ！』

「あんっ！？」

莉央は強引に誘導された美香の膣から指を抜くと、美香を抱き締めた。

「ごめん、ついカッとなっちゃって……あたしも美香ちゃん大好きだから」

「ふえぇーんっ！！　先生許してくれるんだっ！　ありがとうっ！！　本当にありがとうっ！！　大好き莉央ちゃんっ！！」

更に強く抱き締め返してくる美香に、莉央は反省しながらも嬉しかった。

ラブラブな二人の会話と抱擁ショーに、開いた口が塞がらない明日香と由美子だった。

「ぐ、ぐるじい……のいて……」

莉央と美香に腹の上で抱き締め合われて、重たくて息が苦しくなった坂本先生の呻き声でふと我に返った莉央と美香だった。

「あっ!? ごめんなさい先生っ!!」

慌てて飛び降りる美香に続いて莉央も先生の腹から降りた。

「ごほっ! ごほっ!」

「すみません、先生。もう二度と学校では血塗れにするような行為は行いません」

「わ、分かればいいわ。君たちは小学生なんだから血塗れにするとかされるとか絶対似合わないから……ほんとこれっきりにしてね菅野さん?」

「はい。ごめんなさい」

少し股間を押さえながらフラフラしながら教室を去ってゆく坂本先生。

坂本先生はふと思った……。

『なんて事なの……菅野さんに指で掻き回されて濡れちゃうなんて……あんな瞬間なのに凄いテクニック……色んな意味で恐ろしい子だわほんとに……帰って一人エッチしよう……』

「どうだった？　男子を苛めるのって、結構楽しいでしょ？」

「は、はは。そうね。明日香ちゃんたちのお陰で私の鬱憤もはらせたし……本当にありがとう！　あと、あの、少し気になる事件があって。それも明日香ちゃんと菅野さんと富田さんに相談していいかな？」

「もちろん！　私たちで出来ることなら協力するわよ」

「ありがとう！　実はね……」

親心　（前編）（後書き）

男子児童の制裁、私刑を終えた三人と、被害者の鹿目由美子。
更に担任へと向いた矛先を、美香によって事なきを得た。
気になる事件は後編へと続きます。

親心　（後編）（前書き）

怪しい人物をさぐる拷問処刑人たちとクラスメイトの鹿目由美子。
非情な犯人の追跡が始まる。

親心　（後編）

「二年生や三年生の低学年の女子児童たちで、極端にプーさんを恐れている子たちがいるみたいなの」

「プーさんって……あの優しそうな掃除のおじさん？」

「そうなの。あんなに優しくて愛想がよくて、真面目なプーさんが、一部の女子児童たちから怖がられてるって……何かおかしくない？」

明日香と由美子の会話に莉央と美香も入ってくる。

「あたしたちで探ってみようか？　何か怪しいよね……そこまで怖がられてるなんて絶対何かありそうだよ」

「そうだよね莉央ちゃん！　まだ焼却炉の辺りでゴミをまとめてる筈だから行ってみよう」

美香も正義感は強いので、こうゆう話にはすぐに乗ってくる。

数年前まで使われていた焼却炉も、既に法律で使用できないようになっており、撤去されないまま残っていた。

その傍らで、タバコをふかしながら一服しているプーさんだった。

「こんにちは。遅くまで大変ですねプーさん」

莉央の挨拶と同時に明日香と美香と由美子も頭を下げる。

「ほっほっぼっ！　ワシは毎日6時半までは学校に残ってるぞい。君たちも遅くまで大変じゃな！　居残り授業でも受けさせられたのかな？」

「担任の坂本先生が熱心でして……成績悪いあたしたちはしょっちゅう居残りさせられてますぅ。てへっ」

「ほっほっほっ！　真っ暗になる前に早く帰るんじゃぞ？　これでも飲んで元気よく帰るのじゃ」

そう言いながら小型のクーラーボックスに入っていたヤクルトを四人全員に配ってくれた。

校門前で四人は立ち話をする。

「低学年の子がそんなに怖がるのが信じられないくらい優しい人じゃん！　噂通りの優しい熊のプーさんだよ」

莉央の意見にはみんな賛成だった。

「とりあえず今日は全校生徒かえっちゃってるから、また明日低学年の子たちに直接話を聞いてみよーよ？」

「そうだね。私もそれがいいと思う。じゃあ由美子ちゃん、気を付けて帰ってね！　莉央ちゃんと美香ちゃんも！　また明日ね」

担任の坂本先生に怒られながらも、無事に男子児童の制裁も終えた女子児童四人は、それぞれ帰路に着いた。

――――――――東部地方北部。

団地から少し離れた場所にポツンと建っている平屋の一戸建ての家があった。

プーさんの家である。

「ぐすん、ぐすん、痛いよぉ～痛いよぉ～」

「痛いのは少しだけ。慣れてくるし我慢するのよ？　理沙ちゃん」

加藤理沙。

赤霧島小学校二年生の女子児童がプーさんの家に監禁されていた。

加藤理沙の両親にはプーさんから電話をして夜の９時までには送り届ける旨を約束していた。

『くちゅくちゅ』

「んんんっ！　痛いっ！！」

「ローション塗ってやってるんだからそんなに痛くないでしょ？

ほら、クリトリス舐めてあげる……」

『ぺちゃぺちゃっ……』

「んあっ！？　理沙の汚い所……舐めないでお姉ちゃん……」

「可愛い理沙ちゃんのオマンコ……いくら舐めても汚くなんかないよっ！　うふふ」

大倉敬造。

プーさんの本名だった。

奥さんはいないが、３０年前に別れた女性との間に、女の子を二人授かっていた。

長女は普通に五体満足で産まれ、女性が引き取ったが、次女の大倉恵子は軽度の知的障害があり、敬造が引き取った。

別れた当時は３５歳であったが、当時５歳の次女である恵子は今では３５歳になっていた。

その３５歳の恵子と二人でずっと暮らしてきていた。

女性だが小学生児童を愛するとゆう性癖の持ち主で、プーさんの赤霧島小学校の低学年の生徒を、プーさんの持ち前の優しさで信用させて家に連れてきて、恵子の夜の相手にさせるとゆう犯罪行為を

行っていた。
親にバラしたら、両親ともども殺すとゆう脅し文句で脅迫して家に帰すため、相手の親にも学校にもバレずにこの３５歳の女による女子児童への性的虐待行為はもう数年間続いていた。

『ズブッ！　ぐちゅちゅちゅちゅちゅ。ばりっ！！』

「いたああぁいっ！！　えーん！　えーん！」

「あはは♪　理沙ちゃんの処女膜破れちゃったぁ♪」

「えーん、えーん！」

恵子が処女膜を破って泣かせたところで大倉敬造の、登場である。
ケーキに果物、美味しいものをたくさん食べさせて機嫌をとってから、両親のもとへ送り届ける。

「うちの娘は可愛い女の子が大好きなんだ。許してやっておくれ。また学校でもヤクルトやケーキあげるからね？　ワシの所へ遊びにおいで！　でもこの事をパパやママに話しちゃダメだよ？　大切な理沙ちゃんのパパやママが、死んじゃうことになるからね？　話さなければ一生両親と楽しく幸せに過ごせるよ！　分かったかな？」

「分かった！　パパとママ、死んじゃうの嫌だから絶対言わない！」

「偉いね理沙ちゃんは♪　ほっほっほっ！」

――――――明くる日の放課後。

プーさんを見て逃げるように下校する女子児童を見つけた莉央。
走っていき、両肩に手を置いてゆっくり優しく話しかけた。

「お嬢ちゃん、さっきね、みんなでプーさんと話してたときあなただけ逃げるように帰ったわよね？　何かあったの？」

「……何もないよ」

「顔が怖がってるように見えるんだ。ほんとお姉ちゃんを信用して！　絶対心配ないし何があってもあなたを守ってあげるから！　だからお願い！　あのプーさんと何かあったのなら教えて！」

「パパとママ死んじゃうから言えないの」

「絶対パパとママを死なせないから話して！　ねっ？」

プーさんの名前が大倉敬造で65歳。前妻との娘が35歳の恵子。
軽度の知能障害あり。
児童、しかも女子限定で愛する趣向。

全てを聞き出した莉央は早速制裁計画を四人で練る。

「あんなに優しくて明るい掃除のオジサン……熊のプーさんがねぇ……」

呆れ気味に呟く莉央。

「人は外見じゃ分からないものだね」

明日香もため息つきながら呟く。

「あたしが囮になろうか莉央ちゃん？」

富田美香が名乗りをあげる。

「そうだね。相手の変態娘は小学生でも低学年が好きみたいだから……六年生でも三年生に見えるロリコン少女、美香ちゃんが一番適任かもね」

莉央も即、賛成した。

「ごめんなさい、富田さん……私が変な事件に巻き込んじゃったみたいで…」

「気にしないない！　明日香ちゃんの友達の鹿目さんの為なら何でもするから！」

「ありがとう。ほんとかなり前から気になってたから……まさかプーさんが変態娘に女子児童を提供していたとはね……はぁ」

莉央と明日香と由美子はプーさんの家の近くへ先回りした。

美香はプーさんのいる焼却炉へ向かった。。

「プーさん！　こんばんは！」

「君は昨日の……ヤクルト美味しかったかね？」

「うん！　ありがとう♪　実はね……あたしね……」

「どうした？　何か悩みでもあるのかな？　ワシに出来ることならしてあげるから話してごらん？」

「変な趣味で恥ずかしぃんだけど……歳上の女性に抱かれたいなぁ、なんて夢があるんですぅ」

「な、なんどまぁ。小学生なのにオマセさんじゃ。ほっほっぽっ！　ワシには娘がいてのぅ……さみしがり屋で小学生の児童と会っていると凄く元気になるんじゃよ。今晩会ってやってはくれんかのう？　ご両親にはワシから電話しておくから」

「えー？　いいんですかぁ？　両親にはあたしから遅くなるよう電

話しておきますから心配ないです。では娘さんに会わせてください」

――東部地方北部。プーさんの家。

「こんな可愛い女の子……パパ、ありがとう！！」

「恵子さんですね？　パパじゃなくてこの美香様に感謝してほしいわね？」

「え？　どうゆう意味？」

「こうゆう意味だよ」

美香は自分から素っ裸になって、大倉恵子のベッドの中へ入っていった。

「やん、積極的な児童初めて見たよ♪　思いっきり派手に処女膜をぶち破いてあげるわ……お嬢さん」

「お手柔らかに……」

――プーさんこと大倉敬造の部屋。

「プーさん、あたしね。プーさんのこと大好きなんだ！」

「いきなり告白されても……ほっほっほっ！　君の友人の美香ちゃんとかゆう子も今ワシの娘と遊んでくれてるぞ！　君はこんな歳よりのワシと遊んでくれるとゆうのか？」

「うん。プーさんの心が痛まないならね……」

「ん？　心が痛むも何も……君がワシを好きなんじゃろ？」

「そうだよ。オチンチン出してくれたら舐めてあげる。心が痛まないならズボンとパンツ脱いで」

「ほっほっほっ！　ワシだって男じゃ！　こんな可愛い女子児童がチンポ舐めてくれるなら喜んで脱ぐぞな！」

「電気消していい？　恥ずかしいから……」

「ほっほっほっ！　うぶじゃのう～！」

電気を消して数分経った。

「あれ？」

静寂が大倉敬造を包む。

「おーい！　莉央ちゃーん！　どこ行ったのかな？　オジサンのチ

ンチンはフルボッキしてるぞぉー？　ほっほっほっ！」
「そのままゆっくり進んできて。やっぱりフェラよりいきなり挿れてほしくなったの……」
「そうかそうか！　ようしようし！　気持ちよくさせてあげるからなぁ〜！」
「机の上にお腹付けてお尻突き上げてるからバックで犯してくれる？」
「ほっほっほっ！　いきなりバックで本山とか……莉央ちゃんはオマセちゃんじゃのう〜！」
暗闇をゆっくり進むと確かに柔らかい女の子のお尻らしきものに当たった。
莉央に言われるがまま、プーさんは後ろから思いっきりペニスを突き入れた。
濡れている性器に一気に突き刺さり、激しく腰をふる６５歳のプーさん。
「あんっ！　あんっ！　気持ちいいっ！！　プーさん最高……」
「そうかそうか！　小学生なのにほんとスケベじゃなぁ莉央ちゃんは！」
『バッコンバッコンバッコンバッコンバッコン！！』

莉央の喘ぎ声に更に興奮したプーさんは激しく腰を振りだした。

「出して……あんっ。あたしの中に一杯ぶちまけてー！」

「よっしゃ！　妊娠しても知らんぞ六年生！　いく、いっくううう
っー！！」

『ドピュピュピュピュピュウウウッ！！』

「はぁ、はぁ、良かったぞ莉央ちゃんのオマンコ……小学生とは思
えんほどのお尻の肉付きも良かったしのう……」

その時電気が点いた。
一瞬眩しくて目が眩むプーさん。
目を開ければ凍りつく光景が飛び込んできた。

自分の娘の大倉恵子がお尻を突き上げたまま縛り付けられ、猿轡
を嵌められ、肛門とオマンコをヒクヒクさせていた。
オマンコからは今自分が出したばかりの精液がドロドロと流れ出
ている。

自分の本当の娘と性交した上に、中に出してしまったとゆう事実
に気付くのには数秒必要だった。

「あ、あ、あああ……恵子……」

「ううんんんんっ……」

猿轡を嵌められているせいで殆ど喋れない愛娘が性器から大量の精液を噴き出しながらピクピクしている……。

何度考えてみても現実を受け入れられないでいるプーさんに莉央の麻酔注射が打たれた。

「信じてたのに……」

「な、何をした！？」

「一応動けなくなる麻酔注射打たせてもらったよ。年寄りだから喧嘩しても勝てるんだけどね……でもプーさんは体格あるんで用心に越したことはないと思ってね……美香ちゃん、恵子さんにご馳走を」

「はーい♪　マンコにお父さんのザーメンの次は……アナルに長さ２０ｃｍ幅５ｃｍの超特大張り形ペニスバンドをご馳走してあげるね？」

「ひいっ！？　そんな大きいのお尻になんか入らないっ！！　やめてっ！！」

「あたしの処女まで奪おうとしてたのに……許されると本気で思ってるの？　あはは♪　さぁ、肛門の力を抜きなさい恵子！！」

『つぷ……ズズズズズ……めりめりめり……ブチブチブチブチィ』

「ひぎいっ！？　いやああああっ！！　痛っ！？　痛ったああああ

いっ！！」

「何ブチブチ音立てて肛門括約筋裂いちゃってるのぉ？　あらあら、恵子さんってぱホント小さな肛門してたんだね？　殆どケツ穴のビラビラ裂けちゃったよ？　あはは。スッゴい血が出てる♪」

「やめてっ！！」

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！！！』

「んぎゃあああああっ！！　ぎっひいいいいいっ！！　助けてっ！！パパアアアッ！！」

富田美香の超特大ペニスバンドでのアナルレイプを食らいながらも、必死で痛みにたえながら父親のプーさんに助けを求める娘の恵子だった。

だが隣では、明日香によってワニ型の巨大なペンチで二つとも睾丸を潰されて血の精液を尿道から噴き出して泡を噴いている父親の姿を見てしまう恵子。

更に莉央が医療用のメスを取り出して、プーさんのペニスを根元から切断した。

切断したペニスを泡を噴いているプーさん本人の口へ捩じ込む莉央。

「ほら、泡なんて噴いてる暇はないよ？　あんたたち親子はこの家での処刑許可もらってるから死んでもらうからね？」

「むごご……ぶはっ！！　娘だけでも助けてやってくれ……」

「誰がチンポ吐き出して勝手に喋って良いって言ったのかな？　鬼畜のクソジジイ！！」

『パンッ！　パンッ！』

「ぐわあああああっ！？」

莉央は拳銃を鞄から取り出して、プーさんの両足の太ももに一発ずつ撃ち込んだ。
更に両腕の上腕二頭筋にも一発ずつ撃ち込む。
冗談ではなく本当に殺されると悟ってきたプーさんだったが、まだ恵子の方は信じられないでいるみたいだった。

恵子の目前に父親のお尻が見えるように位置を変えて、銃口をプーさんの肛門に捩じ込む莉央。

『グリグリ……ズブズブ……』

「ひっ！？　まさかっ！？」

「良く分かったね？　そのまさかだよ恵子さん……パパの最期、よーく目の前で見てなさいね？」

「やっ！　やめてえええっ！！」

『パン！　パン！　パン！　パン！』

乾いた銃声が父親の直腸内で鳴り響いた。

しばらく静寂に包まれる。

血も出て来ないので冗談だったのかと恵子は一瞬思った。

莉央が拳銃をプーさんの肛門から引き抜いた瞬間……激しい音と共に激しく大便、腸液、直腸の肉片混じりの血液が娘の恵子の顔面へと降り注いだ。

内臓のミンチ入りなので、粘度のある赤黒い血液が恵子の顔面を、真っ赤に染め上げた。

「ぶはあっ！？　うごごごっ！！　げえええっ！！」

驚いて口を開けた瞬間、口内にも入り込んだので、吐き出すのに必死だった。

父親の直腸のミンチを吐き出しながら、びくんびくんと激しく全身を痙攣させている父親を見る頃には、恵子も死を覚悟し始めていた。

激しくバックでアナルを犯していた美香もようやく張り形を引き

抜き、お尻を激しく叩き始めた。

「ドクドクとパパと変わらないほどアナルから血を噴き出してるの……気付いてます？　恵子さん♪」

美香の平手打ちがお尻を叩きつける度に、プシュップシュッっと大量の血液が噴き出していた。

「あたしの太股もあなたの顔と変わらないくらい血塗れになっちゃったよ？　どうしてくれるの？　あたしを犯そうとした恵子さん？」

そこへ莉央が割り込んできた。

「ほら、アナルと前立腺をあたしに撃ち抜かれて気持ち良さそうな顔して死んじゃってるわよ？　変態のあなたのパパ。あはは♪」

莉央がプーさんの首を切断して恵子の目の前に置いた。
気が狂ったように泣きわめき出して立ち上がって激しく攻撃してくるが、知能障害もある中年女性の攻撃を食らう莉央ではない。
医療用のメスを大きく二回振ったと思った瞬間、恵子の乳首が二つとも宙に舞っていた。
血を噴きながらクルクル回転しながら床に落ちた。
踏み潰してミンチにする明日香。

「干しブドウみたいな汚い乳首じゃなくて、小さなオマメさんも切り取っちゃってよ莉央ちゃん♪」

「明日香ちゃんもエッチだねやっぱ……そこ忘れてたよ」

「ひいっ！！　痛い痛い痛いっ！！　これ以上痛いの嫌あっ！！」

両手で切り取られた胸を押さえながらドクドク血を床に落とし続けている恵子。

強く膝を閉じて、クリトリスを守っているつもりらしい。

「股を開いてマンコ見せて？」

「いやあっ！！　いやああああっ！！　許してお嬢ちゃんたちっ！！」

「泣き叫ぶ小学生の、しかも低学年の女の子たちの処女を奪ってきた罪は許せないの。人殺しでなくても処刑許可下りるのはそうゆうことね。大罪だと気付きなさい。股を開かないなら開くまで太股の肉をそぎおとしていってあげるから」

ズバズバと肉を削いでゆく莉央についに降参した恵子は自ら仰向けに寝転がり、両足をぱっくりと開いた。

「やれば出来るじゃん！頭悪いババアの割には。うわっ、くっさぁ。

ちゃんとオマンコ洗ってるの？　激臭だよ……」
「莉央ちゃん、ちょっとのいて……臭いマンコにはあたしがお仕置きしてやるんだからっ」
『ぐちゅっ……』
美香は、おもむろに両足首を両手で掴むと、革靴の足の裏の部分を膣全体とクリトリス、尿道全てが当たるように押し付けた。
臭いオマンコから音がした。
先程のアナル責めで激痛ながらも濡らしていたようだ。
「腐れマンコめ……美香さまの電気アンマを食らええぇっ！！」
『ガガガガガガがガガガガガッ！！』
「あっひいいいいいいいいいいいっ！！」
「更にクリトリスに全集中っ！！　いっ…けえええええぇっ！！」
「ぴぎいいいっ！！　イクっ！　イクっ！　イッちゃうううううっ！！」
『プシャシャシャシャシャアアッ！！』

美香の電気アンマで思いっきりイカされた恵子は小さくびくんびくんと痙攣しながら、アへ顔で美香の足首を掴み、自ら擦り付けて悶えている。

「こ、この変態女……痛め付けるつもりが……」

「あはは！　美香ちゃんらしいわね～！　私と替わって」

今度は結城明日香が恵子の両足首を握って右足を性器にあてがう。

思いっきり膝を曲げて性器と距離を取る。

『ドカアッ！！』

「ぎゃああああああっ！？」

『ドカドカドカドカドカドカッ！！！！』

富田美香の電気アンマは、性器に足の裏を当てたまま激しく擦り付ける普通のに対し、結城明日香の電気アンマは、一回一回が思いっきり蹴り付けるパターンだった。

これは激痛以外他ならない。

３０回ヒットした頃には大陰唇、小陰唇が裂けて、流血していた。

「オラオラオラッ！　臭いマン汁私たちの足裏に付けてくれた割にはモロいオマンコだねーっ？　どうだどうだ？　こうかこうか？　うふふふふふ♪」

あまりの激痛に股を閉じようとするが、その度に莉央にメスで太股の肉を削がれたのでまた股を開いて明日香に蹴られて……の、繰り返しだった。
一撃食らわせるごとに臭い血の混じった愛液が糸を引く。

「明日香様のトドメ……いくわよ？」

爪先立ちするようにピン！　と爪先を立てると、今度はオマンコの内部……膣内へめり込ますつもりの明日香だった。
泡を噴いて痙攣している恵子にはそんな目論見も伝わらない。

『シュッ……ぶちゅっ！！ぼっこおおおんっ！！！』

ものすごい卑猥な音を立てて恵子の膣に、メガネっ子明日香の爪先が１０ｃｍ以上めり込んだ。

『ビックンビックンビックンビックンッ！！』

大きく仰け反ってエビのように激しく痙攣し始める。

「もう一回♪」

更に爪先を引き抜いて強烈な一撃をぶち込んだ。
少し上部に狙いがズレて、クリトリスを直撃。
明日香は脚力が半端なく強いので、恵子の陰核はぐちゃぐちゃに潰されてしまった。
あまりの衝撃で、尿道からも血を吐き出している。

「うっわ……明日香ちゃんってば、めっちゃ残酷ぅ～」
「あなたのアナル責めには負けるわよ……ね？　莉央ちゃん」
「あたしのメスでクリトリス抉り取り出したかったのにぃ。ぷんぷん」

莉央は少しご機嫌ナナメだったが、外で見張りをさせている鹿目由美子にも悪いのでぼちぼち女の方も処刑執行しようと思う莉央だった。

「痙攣してるけど大きく両脚開いて固定してて」

明日香と美香にお願いすると、メスを手に取り深呼吸する。

「いっくよぉ。莉央ちゃん初の〝メスでオマンコ百烈刺し〟」

「なにそれ？　むっちゃ痛そうなんだけど？」

「そうだよ！　臭い汚いマンコだから無茶苦茶ズタズタにしてやるってことだね莉央ちゃん？」

「そっ。こんな臭いマンコメスいれて子宮抉り出す気にもならないよ。見える部分はメスでズタズタ、奥の子宮とか肛門とかはパパと同じく拳銃で鉛の玉をぶちこんでやるわ」

『ズブズブズブズブズブズブズブズブ！！』

「いったあああああいいいっ！！ぴんぎいいいいひひひいいいいっ！？」

数回、数十回、数百回と延々と莉央のメスは恵子の外性器に突き刺さる。

大陰唇、小陰唇、膣口付近、尿道口はぐちゃぐちゃのミンチになった。

もともと明日香に潰されていたクリトリス部分も肉片がボタボタ削ぎ落ちるくらいズタズタになっていた。

最後に膣に突き刺したあと、下方へ一気に切り裂き、膣と肛門が繋がり、肛門括約筋がぱっくりと開き、直腸が丸見えになった。

拳銃を取り出して、ぱっくり開いた肛門へ銃口を捩じ込む。

「恵子さん、あなたは肛門よりオマンコの方が臭いから……パパと同じ穴から撃ち込んで逝かせてあげるからね？」

「ごめんなさい…は？」

「最後にみんなに謝れ恵子っ！」

美香と明日香はニヤニヤ笑いながら反省の言葉を促すが、無理と分かっていての最期のイビりだった。

そっと莉央の銃口が恵子のアナルに捩じ込まれた。

「まずは直腸から小腸ね」

『パン！　パン！　パン！』

今度は向きを子宮側に上方へ向けて更に撃ち込む。

「次は臭い膣内と、汚い子宮に卵巣よ」

『パン！　パン！　パン！　パン！』

三人とも身体をかわしてから銃口を肛門から引き抜く莉央。
噴き出す血も全員が食らわずに済んだ。

まだアへ顔で股を閉じたり開いたりしているのを見て、莉央は目玉両方と口の中へ銃撃した。
さすがにこれはトドメになった。
小刻みから大きく痙攣して、穴とゆう穴から血を噴き出しながら逝き絶えた。

「ほんと最悪だったよねお前！」

怒りが治まらない美香は、死体のぐちゃぐちゃになっているオマンコを、思い切り踏みつけてから部屋を出た。

大倉敬造と恵子の家の前では、鹿目由美子が見張りをしていた。

「どうだった？　明日香ちゃん」
「うん！　たっぷりお仕置きしてきたからもう大丈夫だよ！　学校も辞めるってさ」

美香も続ける。

「あんなにいい人っぽく見せといて本性はけだもの……なんかやりきれないよね莉央ちゃん？」

「そうだね。ほんと見た目で人は判断しちゃダメだよ。……あっ！　お疲れ様です！　後は宜しくお願いします！」

特殊任務省の特殊部隊の数人が待ち構えていた。

早速家に入り、ズタズタになっている拷問処刑後の遺体を処理してくれる。

「今回もズタズタのぐちゃぐちゃなの？　ったく。たまにはあっさり殺っちゃってよね。私たちの身にもなってよ……」

「は？」

莉央に皮肉を言いながら家に入っていったのは防護服やマスクを付けていても女性と分かる声だった。

「それがあなたたちの仕事でしょうが！」

明日香もつい声に出す。

「血塗れにしないと拷問処刑らしくないよねー。莉央ちゃん？」

振り返ってじっと玄関を見つめる莉央だった。

親心　（後編）（後書き）

外見で人は判断できない。

ついつい見た目で判断してしまう時もあるが、出来るだけ中身を見てあげたいものである……。

奪われたいモノ（前書き）

久々に泊まりでのアイドルの仕事がきた莉央たち。

新年早々大変である。

前々から気持ちのあった同士の莉央と美香。

二人きりになれたらついに禁断の扉は開かれるのか？

【小学生同士のレズ要素を含む内容となっております】

奪われたいモノ

――――一月一日元旦。

　飽本先生プロデュースのアイドルグループ六人を乗せた貸切バスは、一月中に放送予定であるテレビ番組《アイドルたちの秘境温泉レポート》の撮影のため、北北東地方にある田舎の秘境温泉を目指していた。
　毎年異なるアイドルを招待する企画に、巡り巡って選ばれたとゆうことになる。
　正月から仕事なので、各々不満はあるだろうが、それなりに楽しみながら向かっているみたいである。
　バスは薄く雪の積もり始めた山頂へ続く国道をひたすら進む。
　寒い季節に寒い地方へ向かうことは、《真・絆ＧＩＲＬＳ》のメンバーであり、ボーカルである菅野莉央にとっては非常に気が滅入ることであった。
　右側の二席の最前列に菅野莉央、富田美香が座り、二列目は島崎真理子、結城明日香が座る。三列目は中学生コンビの小野メグと大野真子がそれぞれ座り、左側の席は飽本先生、カメラマン、照明係、等の関係スタッフが座った。
　空席には機材や荷物などが無造作に置かれている。

「凄い山奥来ちゃったね……雪がどんどん積もってきてるし無事に秘境温泉とやらにたどり着けるのかな？」

莉央と同じく寒さが苦手な富田美香がぼやき始めた。

「スリップしてガードレール突き破って谷底に落っこちちゃったらもっと有名になれるかもね」

冗談か本気か分からない真顔で莉央が答える。

「死んじゃうじゃん！　あたしは死体になってまで目立ちたいとか思わないよ……」

「美香ちゃんだけは生き残ってそうだよね？」

「ご冗談を！　あたしは莉央ちゃんに死なれたら生きて行けないもん。早くあたしの処女奪ってね？」

「あはは！　いざと言う時泣いてたくせに」

「違うもん！　綺麗なホテルに泊まってきちんと抱いてほしいだけなんだから！」

そう言いながら窓際に座る莉央の左手を握り締める美香。

会話の内容が内容なだけに、隣のスタッフが好奇の目でチラチラ

こちらを見ていることに気付き、二人は慌てて手を離した。

二列目に座る結城明日香は、ふと前から聞こうと思っていたことを、このグループ唯一の女子高生である島崎真理子に質問した。

「そう言えば島崎さんって……何地方出身なんですか？」

しばらく答えない真理子に、聞かれたくないことを聞いてしまったのか不安になってきた明日香は質問を変えようとしたが、数秒後口を開いた。

「北北東地方だよ」

「えっ！？　ここなんですかっ！？」

「うん。話してなかったっけ？　だから私、寒さに強いんだよ」

「納得っ！　ふと思うんですけど……島崎さんって最近……なんか」

「ん？　最近どしたの？」

段々畑に降り積もる雪を見ながら笑顔で答える明日香。

「可愛くなったと思います！」

目を丸くしながら明日香の顔をじっと見る島崎真理子。
すぐに吹き出してしまう。
「あはは！　そう？　私はこのグループで一番の年長者だし、中学生コンビはヤンキーだし喧嘩強いし……小学生の菅野さんにも敵わないし。もう普通にアイドルらしく可愛くしっかりしていかなくちゃと思ってたからね！」
「そうですよね～。小野さんも大野さんも中学生とは思えない強さだし、莉央ちゃんなんて化物ですから……私と美香ちゃんと島崎さんの三人が普通の人間なんですよ！」
「そんなバケモノとか言ったら菅野さんに怒られちゃうよ？　あははは！」
「だって……ほんとですから！　うふふふふ！」
いきなり前列シートの上から莉央の顔がニュッと現れた。
「聞こえてるんだけど～？　お二人さ～ん？」
明日香と真理子は本気で飛び上がり、寿命が三日は縮まったような気がした。

三列目に座る喧嘩最強中学生コンビである小野メグと大野真子は、クチャクチャとガムを食べながらボーっと雪景色を眺めていた。

「えー、皆さんここまでの長旅お疲れ様でございます。あと五分ほどでついに北北東地方が誇る秘境温泉、鬼夜叉地獄温泉へと到着致します。到着前の皆さんの笑顔を撮影したいと思いますので、楽しそうにお隣の仲間さん同士で話したり笑ったりしてくださいね？　楽しく話す内容は適当で構いません。楽しそうな雰囲気が伝われば良いですので。ではカメラお願いしまーす！」

六人は適当に話をして、笑う話しでもないのにニコニコしながらはしゃいでいる“演技”をした。

段々プロのアイドルらしく成長してゆく六人に、飽本先生も笑顔になってきていた。

最後のヘアピンコーナーを登り詰めると、ようやく築２００年は越えてるだろうとゆう昔ながらの雰囲気のある鬼夜叉地獄温泉へと到着した。

迎え入れられるシーンでもカメラマンが先に降りて玄関内から外からカメラをスタンバイする。

「スッゴい古い建物だね……由緒正しく引き継がれて来たんだろうねぇ〜。時代を感じるわぁ」

そう呟くと、ポカンと口を開けっぱなしにして感動している富田美香。

「ようこそお越しくださいました！　皆様どうかごゆっくりおくつろぎ下さいませ」

丁寧に女将さんに出迎えられると、上機嫌でアイドルたち六人は温泉旅館へなだれ込んだ。

一通り話をしたりするシーンを撮影し終わると、大浴場へ入ることを許される。

タオルを巻いて入り、入浴中もアイドルたちの雑談を撮影とゆうことらしかった。

「また何を話せば良いか気を使うじゃん！　カメラ回ってると気楽に下ネタも言えねーしよぉ。せっかくなのにもっと気楽に温泉浸かりたかったよ」

「全く……身体を洗ってる所まで撮りゃしねーんだろうなぁ？」

中学生アイドルコンビのメグと真子が愚痴る。

カメラが回ると嘘のようにキャピキャピ話し出すメグと真子。

「あー、なんて素敵な景色なのかしら！　お風呂入りながらこんなのってスッゴい幸せだわ♪」

「そーよねーメグちゃん！　丸い湯船もお洒落だしぃ～♪」

「はいカーット！　いいよぉ！　お二人さん。楽しそうな雰囲気がよく出てたよ！」

あまりの切り替えの上手さに思わず笑ってしまう莉央たち四人であった。

気持ちよく温泉を背にした六人はようやく食事にありつける。

「お腹すいたー！　こんな立派な温泉旅館だからスッゴい豪華なもの出てくるんじゃない？　楽しみよねーみんなっ♪」

食い意地の張っている美香がはしゃいで踊っている。

二人ずつ三つの部屋に泊まるようになるが、食事は六人とスタッフが入っても余裕のある専用の大部屋へ通された。

またまた撮影に入る旨が告げられる。

「さて本日この旅館の特別メニューに挑戦するのは人気アイドルグループの〝真友ガールズ〟の皆さんです！」

『え？　挑戦？？　どうゆうこと莉央ちゃん……それに真友ガールズって何？』

『ごめん、話してなかったけど今日からグループ名が真の友達仲間って意味で“真友ガールズ”に改名したらしいの。挑戦の意味は分かんないけどあたしにも……』

司会者が話している隙に小声で莉央に問いかける明日香だったが、大事な改名とかは朝イチでみんなに教えてほしかったと、少し不機嫌になっていた。

次々に運ばれてくる山菜からお魚、見ているだけでヨダレが出てくる六人のお子様アイドルたちだった。

「ジャーン！！　これを皆様に食して頂きましょう！」

「あれ？　これは一体何なんでしょう女将さん？」

「ほほほ！　何だと思いますか？」

「うーん……司会の私には判断しかねますねぇ。ボーカルの菅野莉央さんにクエスチョンしてみましょう！」

『何がクエスチョンしてみましょう！　だよ……わざとらしい！』

莉央は、猿芝居のごとく分かっているくせに分からないふりをして撮影用に演技をしている司会者に少しイラッとしながらも、運ばれてきた料理を覗き込んだ。

「ん？　何か見覚えあるようなないような……」

「絶対見たことあるよねこれ……少し形が違うけどこれは紛れもなく……」

「私も見覚えある……」

しばらく無言でお皿に盛られたその料理を凝視する六人のアイドルたち。

「さて、菅野さん分かりましたか？」

「…………キンタマ」

「はい！？　今なんと？」

「キンタマー！！」

「なんとっ！？　可愛いアイドルの少女が口にする言葉ではないですよねぇ？　“ピー”が入っちゃいますね今のセリフは！」

たまにとはいえ、普段から人間の生の睾丸を抜いたり潰したりしている小学生トリオの莉央と美香と明日香は何とも平気だったが、まだまだ拷問や処刑の場数が少ないメグと真子と真理子は頬を真っ赤にしていた。

「でも正解なんですよ！　ここの名物〝ヤギの睾丸〟なんです！　おほほほほ♪」

「なんとまあ！　菅野さんの答えた通り、本当にタマタマだったわけですねえっ！？　でもこのジビエを食すのはアイドルたちには無理でしょう……ん？」

『ブスッ！　パクン……ぐちゃぐちゃぐちゃぐちゃ……ごくんっ！』

「へぇえ。ヤギのキンタマなかなか美味しいよっ！　みんなも早く食べてみて♪」

「うん！　モグモグ……ほんと、美味しいね莉央ちゃんっ♪」

フォークを振り回しながら薦めてくるが、莉央と美香以外の四人のアイドルたちは、ヤギの睾丸を凝視しているまま動かない。固まってしまっている。

「カーーーットッ！！」

監督が乗り出してきて莉央に話しかける。

「あの、莉央ちゃんだっけ？　ボーカルの……」

「はい。そうですけど？」

「小学生の女の子が“キンタマ”って言うのはどうかと……もっと恥ずかしそうにしながら“股間に付いてるものですか？”とか言ってよ！　それと本当に食べちゃダメね？　アイドルのイメージってものがあるから……やっぱ食べるのは無理ですっ！って叫ぶの。分かった？　美香ちゃんもね？」

「はい。すみませんでした」

「ごめんなさい。つい美味しそうだったから……」

結局撮影が終わってから、ヤギの睾丸を完食した莉央と美香だった。

色々あったがついに就寝時間がやってくる。

バスの隣でいたもの同士が同じ部屋に泊まるようになっていたので、美香は無茶苦茶はしゃいでいた。

部屋に入って来て“お休みなさい”を言う所まで撮影していたカメラマンもようやく退室し、二人分の布団をくっ付けて並べた。

蛍光灯を豆球に切り替えて横になる二人。

「はぁ。今日も色々疲れたね莉央ちゃん」

「ほんとだよ。あたしなんか監督に本気で怒られちゃったんだから。初めから指示してくれてたらきちんと演技するのに！　あのハゲ監督ってばムカつくわ」

「あはは！　ホントだね！　金玉なんて食べられるのあたしと莉央ちゃんくらいだよね？」

「今度男のチンポ食べてみる？　もちろん死刑囚のだけど」

「ええっ？　チンポはちょっと気持ち悪いかな……でも小学生や幼児のチンポなら食べてみたい♪」

「ＯＫ！　次男の子の処刑があったら半分こしよーね！」

「うん！　刺身で食べてみよう」

普通の小学生児童の会話とは到底思えない内容であるが、少しずつ会話が途切れてきた。
時刻は夜中の零時を指している。
次の日も６時起きと、アイドルの仕事も大変なのだ。

「ふあぁぁぁ～！　眠気がきたかな……お休み美香ちゃん」

「うん。明日も朝早いもんね！　お休みなさい」

カチカチと、大きな掛け時計の針音が響く中、なかなか寝付けないでいる美香だった。

「…………」

「…………」

「莉央ちゃん、もう寝た？」

「……起きてるよ」

再び静寂の中に掛け時計の針音が響く……。

「莉央ちゃんの布団に……行っていい？」

「……うん。いいよ」

少しは断られる不安もあったからか、とても安心した。
莉央の布団に転がり込む美香。

「あたしね。莉央ちゃんのこと……初めて会ったときから大好きだったんだ。正直言うとね……最初は残酷な莉央ちゃんが凄く怖かったんだけど。でも残酷な処刑をする莉央ちゃん見てるとスッゴく興奮してきて……自分自身が元々残酷な気質があったのもあるかもだけど。エッチで残酷な莉央ちゃんに無茶苦茶にされる想像しながら一人エッチとかしてたの」

「…………変な子」

「莉央ちゃんに、串刺しにされて処刑される想像とか、子宮抉り取られる想像とか……本当にやられて殺されちゃうのは怖いから嫌だけど……死刑囚を殺すとこ見てたり、想像だけとかならあたしは死なないじゃん？　だから想像でやってたの」

「…………」

「怒ってる？」

「怒ってないよ。おかずは人の自由だから」

しばらく豆球の薄明かりのしたで莉央の横顔を見ていた美香だったが、衝動を抑えきれなくなってきていた。

仰向けに寝ている莉央をそっと横から抱き締める。

「莉央ちゃん……」

「なに？」

「大好き」

「…………」

「愛してる」

「えっ？　愛してまでしちゃってくれちゃってるの？」

意味の分からない日本語を使って動揺している莉央を強く抱き締めながらキスをする美香。

「ん、んんっ！？」

強引な美香にかなりビビりまくりの莉央だったが、気持ちは前から分かっていたし、自分も美香のことが大好きだったので、ついにこの日がきたか、といったある種の覚悟を決める莉央がいる。

舌を入れてくる美香に丁寧に応えて、こちらも舌を絡め返す。

くちゅくちゅと卑猥な音を立てながら、女子の小学六年生同士の濃厚なキスは１０分ほど続いた。

美香は浴衣をするすると脱ぎ捨てると、莉央の浴衣も器用に脱がしてゆく……。

「莉央ちゃん、あたしを……犯して……」

「本当にいいの？」

「うん！　大好きだから……今日こそ処女を奪ってください」

「分かった。ん？　何でいきなり敬語なの？」

「莉央ちゃんに無茶苦茶に犯されたいから……エッチの時だけは奴隷にして……ください莉央様」

「よし！　今から美香の死刑を執行する！　あんたのオマンコ切り裂いて子宮を抉り出してから、最後は肛門から口まで槍で貫通刑で逝かせてやるから覚悟しなさい」

「あんっ！　やだ……許して下さい莉央様……あんん」

ドSでありながらもドMである美香は、莉央の口責めだけでアソコをぐしょぐしょに濡らしていた。
下側に寝ている莉央の太股を大量の美香の愛液が伝い落ちてゆく。
股を開いて莉央の右の太股を挟み込み、激しく陰部を擦り付け始めた。

「ちょ、ちょっと美香！　なに汚い液あたしの太股に擦り付けてるの？　クリトリスをペンチで潰してミンチにしてほしいの？」

「いやあっ！　許してくださいっ！　ひいいっ！　あんっ、イクっ！　イックううっ！！」

『プシャアアアッ！！』

言葉責めだけで一回目の絶頂を迎えた美香は勝手に莉央の膝でイッてしまった。

「やだもう……あたしの脚、びちゃびちゃになっちゃってるじゃん……どうしてくれるの美香！　罰として肛門から串刺しにするから

！　四つん這いになってお尻突き上げろ！」

「は、はいっ、こうですか莉央様……」

両手で思いっきりお尻を左右に開いて、直腸が見えるほどパクンパクンさせる莉央。
ゆっくり白いしなやかな指先を美香の肛門へ差し込んでゆく。

『ツプ……』

「いやあっ！　やめてください……許して」

「ダメ！　口まで貫通させるから……途中で前立腺も真っ二つにしてやるからね？　覚悟しなさい」

「やんっ。前立腺はないと思うけど……」

「何ですって！？」

『ずぼぼぼぼっ！』

「ひいいっ！！」

莉央の人差し指は、美香の肛門の根元まで差し込まれた。
グリグリと掻き回しながら、中指も差し込んでゆく。
二本の指を根元まで飲み込ませて掻き回す。

「ほら、そろそろお口から槍が出てくるわよ？　死んじゃえ♪」

そう言いながら薬指までも突っ込んで、三本の指でグリングリン掻き回す莉央。

「やんっ、だめっ！　イク……イク……イッちゃうううっ！！」

またもや激しく愛液を垂れ流す美香。

「莉央ちゃんの口責め……無茶苦茶興奮するよ……」

「そう？　お口まで槍で貫通さされた感想は？　実際あたしの指だけど♪」

「想像しながら死んでた。しかもアナルにはそれなりの痛みと快感があるし……ありがとう」

「いえいえ。最後はオマンコからメス入れて子宮を抉り取るわよ？さぁ今度は仰向けに寝て」

仰向けになった美香の股間へそっと顔を埋めてゆく莉央。
ゆっくりと美香の性器を舐め始めた。
卑猥な音を立てながら、クリトリス、小陰唇、尿道口、膣内と、念入りに丁寧に舐めてゆく。

ぐしょぐしょに濡らしている愛液をじゅるじゅる啜っては飲み込んだ。

「んん……あん、莉央ちゃん、汚いよ……」

「美香ちゃんのなら全く汚くないよ！　もっと舐めさせてね？」

「莉央……ちゃん……あんっ！！　あたしにも飲ませて……」

莉央の顔と自分の性器を支点にしてクルっと回り、シックスナインの体制にすると、美香も激しく莉央の陰部を舐め始めた。

莉央もかなり濡らしていたので、じゅるじゅると吸い込んで啜ってしながらどんどん飲み込んでゆく。

お互いのクリトリスを舐め合うときは、莉央も美香とのエッチでは初めてイッてしまった。

半時間くらいお互いの股間を舐め合ってから再び正常位に戻り、ディープキスを始める美香。

「もう我慢できないから奪ってください」

「忘れてなかったんだ……何回もイッちゃったのに？」

「莉央ちゃんが奪ってくれなかったらあたし絶望するから」

「好きな男の子できたときの為に取っておきなよ」

「いやっ！　莉央ちゃんに破ってもらいたいのっ！」

莉央の右手首を掴み、自分の股間へ引っ張ってゆく。
更に人差し指と中指を伸ばして、強引に入れ始めた。

『くちゅ』

「あんっ。莉央様、美香を犯して……」

「どうしてもあたしでいいのね？」

「そう。処刑の時みたいにぐちゃぐちゃに掻き回してっ！　お願いだから……莉央ちゃん」

ついに折れた莉央は美香の膣内へゆっくりと二本の指を差し込んでいった。
処女膜に指先が当たる。

「美香ちゃん、大好きだよ」

『ズブズブッ……ばりっ！』

「痛いっ！！」

ついに莉央の指によって美香の処女膜は破かれた。
かなり多目に出血してしまう。
初めて指先を少しだけ挿入された時から大好きになっていた美香の念願は、ついに叶ったのであった。

「破いちゃったらもう遠慮しないからね？」

激しく出し入れを繰り返し、膣内を掻き回し、あまりの快感に盛大に潮を吹いてしまう美香だった。

『プシャアアアッ！！』

「凄い潮吹きだね美香ちゃん」

「だ、だって……莉央ちゃんの指先無茶苦茶気持ちいいんだもん……」

激しく深い愛の時間は終焉を迎え、ついに就寝する二人。
だが朝の４時を回っていたので、強烈な睡眠不足となってしまう二人だった……。

朝ご飯まで撮影される羽目になったので、不覚ながらも小学生で薄化粧をしてしまう莉央と美香だった。

どうにか“くま”を消すことに成功したのであった。

雪も止んで快適な帰りのバスの中。

後ろのシートから明日香が顔を覗かせている。

殺気を感じた莉央は即、振り向いた。

「な、なに？　明日香ちゃん？」

「ついに奪っちゃったんだ！　うふふ♪」

「なっ！　何をっ！？」

「うふふふふ」

笑いながら顔を引っ込めてゆく明日香。

『まさか……喘ぎ声聞こえちゃった！？　嘘でしょ……』

莉央の心配をよそに、隣で幸せそうな寝顔でスーピー眠っている美香がいた。

そしてゆっくり口が開かれてゆく。

結構大きな声で寝言を叫ぶ美香だった。

「莉央様っ！！　あたしを犯してっ！！」

思わず赤面してしまう菅野莉央。

「……ほんと勘弁して美香様……」

「ぐひひひひ……莉央ちゃん愛してる……」

「……ほんとは起きてる？」

「スピー……スピー」

「……」

奪われたいモノ（後書き）

ついに念願の夢が叶った富田美香。

後々のアイドル活動や処刑任務にも精が出ることだろう。

性は関係なく自由に好きな人と結婚できる国に変わってほしいものである。

狂気の血筋（前書き）

良家の血筋、悪の血筋、血は争えないとゆう言葉が存在するが、果たして……。

狂気の血筋

――――１月。残酷処刑島。

珍しく風が殆ど吹かず、穏やかだが雪が少し舞う極寒の日曜日だった。

大人が一人くらい楽に浸かれそうな大きな釜に湯が張られている。

ギャンブルの借金が返せずに自己破産をした一人の男は、その時に妻と子供二人に出ていかれ、ボロボロのアパートで一人暮らしをしていた。

少しずつでもお金を貯めてきていたが、数年後にまたギャンブルに手を出してしまい、再び全てを失った男は自暴自棄になり中学生の少女を誘拐してしまう。

泣き叫ぶ少女をバレて捕まる恐怖から首を締めて殺害し、遺体をレイプしてしまった。

処理に困って風呂場で解体して共有の畑に埋めるが、だんだんと腐って強烈になってくる悪臭に気付いた同じアパートの住人が通報。

行方不明となっていた中学生の少女は、最悪の結果の姿となって両親の元に帰宅することとなった。

一人なら殺そうがレイプしようが死刑にならないと、たかをくくっていた男、楠山一樹４０歳。

警察に捕まる前に、特殊任務省の特殊部隊たちによって確保され、

残酷処刑島へと送られてきた。

島に連行されて数時間経つが、未だに裁判も経ないでまさか処刑されるとは思っていない。

しかも拷問処刑などとは夢にも思わないだろう……。

「菅野さん、４０度くらいに沸きました！」

「ありがとうメグさん。それから……あたしは年下だし、お互いタメ口で話しましょって前にも言ったよね？　真子さんもね！」

最近、残酷処刑人に選出された女子中学生アイドルの二人に、小学生アイドルの菅野莉央が答える。

高校生アイドルの島崎真理子も選出され、ついに“真友ガールズ”全員が残酷処刑人となってしまった。

歳も喧嘩の強さも関係なく、同じ処刑人だし、同じアイドルグループ仲間だから、全員タメ口で話そうと、富田美香の提案だった。

すぐには慣れず、何度も敬語を使ってしまう小野メグと大野真子だったが、そのうち段々と慣れてゆくだろう。

特殊部隊によって、今までの半分の力しか出せない注射を打たれているため、楠山一樹の力は女子中学生のメグと真子と同等くらいまで落ちている。

「おい、なぜ俺は警察に捕まる前に変な奴らに連行された？　ここはどこの島なんだ？　お前たちは何とかゆうアイドルグループだよな！？　可愛くて実際アイドルに会えるのはラッキーだが全く意味が分からねえよ……？」

本日の残酷処刑島には、フルメンバーが降臨している。
楠山一樹の前にいるのは、三人の小学六年生である菅野莉央と富田美香と結城明日香。
二人の中学生である小野メグと大野真子であった。
莉央の兄である格闘家の菅野京介と、初期からいる中学生の鬼頭美紅に女子高生の島崎真理子は、海岸側で拷問を開始していた。
女子の中で鬼頭美紅のみ、アイドルではなく普通の女子中学生である。
２０歳の格闘家の卵である菅野京介よりも戦闘力は高い。
ずば抜けて反射神経とスピードを持ち合わせている鬼頭美紅。

「楠山さん、裸になってその釜へ入ってくれる？　適温だから温まるよ？」

菅野莉央がそっと近付きながら優しく促した。

「ちょっと待てよ！　小学生とはいえ、君たちみたいな可愛いアイドルたち三人に見られながら裸になれんよ？　いい加減に本島へ帰

してくれないか？　俺のスマホが見当たらないんだよ」
「皮がね……剥けちゃって服にこびり付いちゃうから脱がないと余計苦しむよ？」
「へ？　皮が剥ける？　どうゆう意味だ？」
莉央は拳銃を鞄から取り出して数発辺りの木々に撃ち込んだ。
バキバキと折れて枝が辺りに降り注ぐ。
「うわっ！？　マジか！？　何で女子小学生がそんなもん持ってるんだ！？　え？　や、やめてくれ……恥ずかしい」
両側から歩み寄った美香と明日香が、楠山一樹の着ている衣服をどんどん手際よく脱がし始めた。
「心配ないよオッサン。あたしたちはチンポやマンコは見慣れてるから♡」
「そうなの。だから安心して脱ぎ脱ぎしましょうね♪　かなり寒いけど風邪引かないように気を付けて♪」
「わああっ！！　やめてくれって！！」
逆らえば莉央に撃たれる恐怖から、されるがままに素っ裸にひん

むかれた４０歳の腐れ外道男であった。

「最期にイッとく？」

「え？　どこに行くって？　そりゃ本島に帰して貰って自首させて欲しいな。そしたら更に罪は軽くなると思うんだよお嬢ちゃん」

この時点でもまだ自分の運命を悟れない男に三人は半ば呆れかけていた。

明日香が右手で右の睾丸を鷲掴みにする。

思わず飛び上がる楠山一樹だったが、恥ずかしくて嬉しくて極寒の中でも顔が赤くなる。

「この丸い大切な所に溜まってるモノ……出しとかない？　って聞いてるんだ……私たちは」

「そうそう。人生の締め括りに小学生アイドルのあたしたちがオッサンの醜いチンポから汚い精液絞り出してやるっ！　って言ってんの！　分かった？　嫌ならいいんだよ別に……」

明日香に睾丸を握られてグリグリされてるうちにみるみる大きくなってゆくペニスを見ると、答えを聞くまでもないと悟った三人だっ。

『ズブッ！』

「はおうっ！？」

明日香の反対側にいる美香の中指が中年オヤジの肛門に突き刺さる。

一気に根元まで捩じ込んでグリグリ掻き回しながら囁きかける。

「あれ？　オッサン直腸に大きなシコリがあるね？　多分末期の大腸がんだわ。でも良かったね～関係なくて♪」

「う、うう、そんなとこに指を入れるなんて……女の子のやることか？　うう……」

執拗に直腸内を掻き回す美香の指先が、前立腺に当たる度、気持ち良くてついつい声を出してしまう中年オヤジだった。

明日香も睾丸マッサージを続けている。

ゆっくりと楠山一樹の前に立つ莉央。

「……仰向けに寝転がってくれる？」

「え！？　冷たいんだけど！？　雪が少し積もってるんだ……素っ裸にされてるんだから勘弁してくれよお嬢ちゃん」

明日香の左手がペニスを捕らえ、人差し指が少し尿道に突き入れ

られる。
短い悲鳴を上げた後、尻餅をついてそのまま顔面を莉央に足裏で蹴られ、半強制的に仰向けにされた。
莉央もしゃがみこみ、男の両側の足首を掴み、強く手前に引っ張り込んだ。
しゃがみこんだスカートの隙間から純白のパンツが見えたとき、再度楠山一樹のイチモツはビンビンにいきり立ってきた。
「この変態っ！　ロリコン。鬼畜野郎」
「え？　何か言ったか？」
莉央の右足の爪先が肛門に軽く当たる。
美香に直腸を掻き回されていたため、少し直腸と肛門の体温が上がって、湯気が立ち上っている。
そのままペニスの裏側に足の裏を密着させた。
「おいっ！　汚ないからよせっ！　土足の足の裏なんかで人の大事な部分蹴るなよ!?」
『スコスコスコ……』
「え？」

『スコスコスコスコスコスコ……』

「はうっ！？　やめ……ろ……」

小学生アイドルのパンツがチラチラ見え隠れしながらの電気アンマに、男はたちまち脳天を突き上げられるほどの快感に襲われる。

「や、やめてくれっ！！　あう……き、気持ち……いい」

無表情でひたすらペニスの裏スジ辺りを足裏で上下に擦り続ける莉央だったが、明日香と美香に両側の乳首をグリグリつねられた時に絶頂を迎えてしまう。

「で、出る……」

「いいよ。あたしの足でイきなさい！　スピード上げちゃうんだからっ。ほらほらほらぁ♡」

『スコココココココココココッ……』

「わああっ！？　イ、イっくうううっ！！」

『ドピュピュピュピュピュウウウッ！！』

更に激しく擦り付ける莉央についに楠山一樹は大量の精液を射出

してしまった。
夥しい量の精液を、全て自分の腹部や胸部や顔にまでへりかけてしまう羽目になる。

「うふふ♡　汚い液いっぱい出たね？」

ゆっくり立ち上がり、腹部に溜まっている精液を手で掬いとると、男の口元へ流し込んだ。

「ほら飲め」

「ごくんッ！！　ゴホッゴホッ！！」

あまりの快感に目を閉じたままでハァハァ言ってる所に、まさかの精液流し込み。
直接喉奥に流し込まれたため思わず飲んでしまった。

「あの、菅野さん……お湯が４４度にまで沸いちゃいましたけど？」

小野メグが小さな声で報告する。

「いいよ。まだ我慢できる範囲だから。楠山一樹！　只今よりこの残酷処刑島にて、あなたの死刑を執行します！」

「へ？　し、死刑？　何の冗談だそれ？　はは……わははははは」

「立って」

「い、嫌だ、やめてくれ……」

拳銃を心臓へ向けて命令する莉央を見た楠山一樹は、少しずつ現実が理解できてきた。

拷問されることはまだ予測できてなかったが、もしかしたらこのままこの島から生きて帰れない……ことくらいまでは理解しはじめてきていた。

明日香と美香に、あまり力の入らなくなった両腕の脇を抱えられ、無理矢理立たされる時には、あれだけ勢いよく射精したペニスも陰毛の隙間から亀頭だけが覗いている……ように見えるまでに縮こまっていた。

恐怖によってである。

「さ、温まりにいこ？」

「ほらオッサン！　歩け！　早く浸からないと熱くて入れなくなっちゃうよ？」

美香と明日香に少しずつ釜の方へ連れていかれてゆくうちに、男の目から涙が溢れる。

「嫌だ……死にたくない……お願いだから許してくれ……」

「……泣いてるの？　でも人にお願いする言い方じゃないわよね？　お願いする時はどうゆうふうに言うのかしら？」

メガネっ子の明日香が、少しずれ下がったメガネを人差し指でかき上げながら楠山一樹に促した。

「し、し、死にたくありませんからどうか私を許してください。お願い……致します」

「だめだよーん！絶対許さないからオッサン。前途ある１５歳の女子中学生殺して死姦したんでしょ？　最悪だわほんと！　法務省なんかに任せといたらこんなカスでもただの死刑か無期懲役にされちゃうよ……」

美香の一言は当たり前だが容赦はなかった。

「うぐっ……ひくっ。ひくっ」

かなり大粒の涙を流しながら釜の前に辿り着いた。

「一応下半身に力入らなくなる注射を打たせてもらうね？　暴れて

釜から出られたら困るから……」

明日香に注射を打たれて、更に力んで踏ん張るが、莉央の威嚇射撃を足元の地面にくらい、慌てて自ら釜に入っていった。

「ぐっ!?　かなり熱いっ……ううう」

しばらく湯船の熱さに耐える中年男を観察する五人のアイドルたちだった。

「メグさん、今何度?」

「48度になってる」

「ぐわあああっ!!　出してくれっ!!　熱いっ……熱いいいいっ!!」

激しく鼻血を噴き出させて釜の湯船を赤く染めてゆく。

「あたしらと同じ中学生の女の子の気持ちを味わってもらうんだからね?」

「よくもあんな惨いことができるよねほんと……」

拷問処刑にまだ慣れていないメグと真子も、自分と同じ中学生の惨事となれば、余計に同情心が芽生えて、残酷さに拍車がかかっていった。
お湯が５０度になった頃には発狂したように叫びだし、両手の力だけで這い出そうとするが、メグと真子に肩を押さえ込まれる。
その時、海岸側で拷問処刑を行っていた菅野京介と、島崎真理子と、鬼頭美紅が岩陰から姿を現した。
美紅は女性の生首を髪の毛を掴んで右手に持っている。
すでに頭部に残った血はほぼ流れ尽くしていたため、首からの出血はポタポタと滴る程度だった。
島崎真理子と菅野京介はなにやら肉塊らしきものを抱いていた。
「お待たせ莉央ちゃん！　その石川五右衛門オヤジに最期のあがきチャンスをくれてやろう」
「うん」
莉央が返事をした瞬間、美紅は持っていた生首を男の湯船に放り込んだ。
ゆっくりと首の断面部分から血を流しながら湯船に沈んでゆく顔を見て男は目を見開いた。

数年前に家を出ていった妻の聡子であった。

「ぐわあっ!？　さ、聡子っ!？」

「お前の元ヨメも小学生の男の子を部屋に連れ込んではヤらしいことして性欲満たしてたんだよ？　最後には首を絞めて殺害して、お前と同じように死体を弄んだ。男子児童のペニスと睾丸をカッターで切り裂いたり解剖し足りしてぐちゃぐちゃにしてオナニーしてたのよね。娘も息子も死体をバラバラにするのに協力していたよ。こんな鬼畜女、時間かけてゆっくりと斬首してやった。最期に顔が見えて嬉しいでしょう？」

鼻血をドクドク流しながら熱さに耐える楠山一樹は、もはや悲しんでいる場合でも驚いている場合でもなかった。

地獄のような熱さが彼のヘソから下の下半身を襲っている。

「菅野さん、５０度より上がったらコイツすぐに死んじゃうんじゃ？」

「メグさんの心配はごもっともだけど心配ないよ。オヘソから下の下半身だけしか湯を張ってないから簡単には死ねないんだこれが。うふふ♡」

「なーるほどっ!　さすがプロの拷問処刑人の菅野さんだっ!　こいつには長く苦しんでもらいたいからあたしも」

大野真子が安心して笑顔で手を叩く。
菅野京介が抱いているのは12歳の息子の勇斗だった。
両手両足は既に無いが、止血処理されて生きている。
父親である楠山一樹の事は覚えてないだろうが、父親の方は面影で誰であるか気付いた。

「ゆ、勇斗……勇斗おおおっ！！　貴様ら何て酷いことをっ！？」

何が起こるか察した美香は、京介に気を遣って明日香に目隠しをする。

「ちょ、ちょっと美香ちゃん？」

「ちょっと数分間このままでいてね」

「やめなさい美香ちゃん！」

「そのままでいて！　明日香ちゃんっ！」

「え？　……莉央ちゃんまでお願いしてくんの？　しゃーないなぁ……」

少しふて腐れながら目隠し明日香はその場に座り込んだ。
莉央の兄である菅野京介に対し恋愛感情を持つ明日香に、京介の性的虐待シーンを見せない配慮だった。

「莉央に美香ちゃん、サンキュー♪　さあ少年よ俺と合体しちゃおーぜ？　下半身だけのフュージョンだ！　げへははははっ♪」

「またそのきしょい笑い方……止めてくれるほんとに？」

妹の注意勧告は無視して、ダルマにされた小学生の男の子の脇の下に手を入れて父親である楠山一樹の方に顔を向けさせる京介。

そのままズボンとパンツを美香に脱がさせて、いきり立ったイチモツを１２歳の男子児童のアナルに突き当てる。

ゆっくりとめり込んでゆく巨大なイチモツだが、さすがに小さすぎる小学生児童である勇斗の肛門にはなかなか入らなかった。

「や、やめろおおおおおっ！！」

釜茹でにされながらも怒り狂う父親の眼前で、美香が開ききってもイチモツを受け入れられないでいる小さな肛門にハサミを入れる。

「ボク……おねえちゃんがお尻の穴拡げてあげるからね？　ほらぁ～♡」

『ズブッ……バチンッ！』

京介のペニス側へハサミの刃の背中側をあてがい、ペニスを切らないよう細心の注意を払いながら男子児童の肛門括約筋を切断した。

『ブシュウウウウッ！！』

「んぎゃあああああっ！！　痛いいいいいっ！！」

「うるさいぞクソガキ！　こうでもしなきゃあんたのちっちゃすぎるケツ穴にチンポ入らないじゃないっ！」

肛門から噴水のような激しい血を噴き出させた張本人の美香が、更に男子児童の画面を数十回くらい拳で殴りまくる。

タコ殴りにした。

「ほらほら！　あんたもバカな母親に協力して自分と歳の近い男子児童たちをバラバラにしてきたんでしょ？　鬼畜たちの子はやっぱり鬼畜だよね？　あんたもお姉ちゃんも……」

前歯が二本へし折れ、鼻の骨が折れて鼻血まで噴き出させた瞬間に、２０ｃｍはあろうかとゆう京介の巨根が、一気に根元まで肛門を貫いた。

「気がきくな美香ちゃん！ありがとうっ！　キツすぎて入らないと心配してたんだよ。ははは っ♪」

「お安いご用ですよ京介お兄ちゃん♪　外道のガキなんて直腸グチ

ャグチャになるまで犯してあげて♡」

そこからは地獄のような猛烈なピストン運動が始まった。

『バッコンバッコンバッコン！！　パンパンパンパンパンパンパン！！』

「んぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃはあああっ！！！！」

京介の腹が男子児童のお尻の肉に叩きつけられる度、直腸の奥の奥から真っ赤な鮮血がプシュプシュと噴き出す。

大便は美紅が何度も何度も浣腸して、全て抜いていたため、辺りは臭くならなかった。

「やめてやってくれ……勇斗が死んでしまううう……ぶはっ！！」

更に大量の鼻血を出す父親の楠山一樹。

美紅が大野真子にそっと近付いた。

以前、圧倒的な強さを見せつけられ、膣口に美紅の指を差し込まれた真子はかなりビビりながら身構えた。

「おい真子っ」

「は、はいっ！！　な、な、何でしょう美紅様っ！！」

「ガキのキンタマ握り潰してこい」

「えっ！？　あたしが……ですかっ！？」

「そうだよ。あんたのマンコ、裏返しにめくり返してやろうか？　それとも陰核を爪楊枝で串刺しがいい？」

「ひいっ！？　わ、分かりましたっ！！」

“マンコをめくり返す”？？　美紅の言葉の意味が分からないまま少しチビりながらも息子の元へ歩み寄る真子。

とにかく逆らったら自分の性器が悲惨な姿になることだけは理解できていたので、すぐさま行動に移した。

両手で鷲掴みにすると、一気に袋の中の二つの睾丸を全力で握りしめて潰した。完全にミンチにした。

粘度のある血の混じった液体が芋虫のようなペニスの先から糸を引きながら流れ落ちる。

京介のペニスにも少し真子の手が触れた。

「あっ、ごめんなさいっ！」

「構わないぜ！　そのままついでにガキのチンポの皮も引きずり下ろして血まみれチンポにしてやってくれお嬢ちゃん」

「は、はい。こう……ですか？」

『メリメリ……むちむちっ……』

イビツな音を立てながら勇斗の小さなペニスは根元まで引き剥かれてゆく。

先ほど自分の睾丸を潰した女子中学生の手によって……。

『バリバリ……ズルンッ！』

「ひぎいいいいっ！？　わあああんっ！！　痛いよおおおおっ！！」

真子の人差し指と親指が勇斗のお腹に当たったときは、根元まで引き剥かれたペニスがびくんびくんと痙攣していた。

「良くできたねマンコ……じゃなかった真子。もうどいて」

「はい……今あたしのことマンコって呼びました？」

「あ？　文句あるの？」

「あ、いえっ……な、何でもないですっ！」

父親の目前で京介にアナルを犯される息子。

「さてと……ぼちぼちママの所へ送ってあげる。あの世でママにお尻の穴へオロナインでも塗ってもらいなさいね……」

鬼頭美紅は息子の前に立ち、サバイバルナイフをビュンと振ると、男子児童の首にあてがい、凄まじいスピードでザックザックかっ捌き始めた。

「嫌だっ!?　ンギイイイイイ……!?　痛いいいっ!!」

骨まで切り裂いても苦しそうな息をしながら意識があったが、手際よく背中際からバキバキとサバイバルナイフを数回叩きつけると、簡単に首がポトリと落ちた。

痛みからようやく解放された瞬間だった。

首からの噴水のような出血を画面に食らった菅野京介は、死んで肛門が開いてしまった少年からペニスを引き抜いた瞬間、同時に意識も失って倒れ込んでしまう。

ここで京介に気のある結城明日香の目隠しを外す美香。

「やっと外してくれるんだね?　全くひどいなぁ。あっ!?　京介さんっ大丈夫っ!?　きゃあっ!?　顔が血まみれだわっ……ん?きゃあっ!?　オチンチンまで血まみれ!?　しっかりしてよ京介さんっ!!」

莉央と美香は目と目を合わせて吹き出してしまった。
事実を知らず心配して半泣きになっている明日香と、射精する前に斬首を目の前でされて失神した京介はこの時点で拷問処刑からリタイヤとなってしまった。
男子児童のアナルに中出しくらいさせてあげても良かったのではと思う莉央だった。
「60度を越えたよ菅野さん」
小野メグが再び温度を計って報告する。
「楠山一樹さん。あなたに、ラストチャンスをあげるよ」
「死ぬ……死ぬう……熱い……熱い……ひぃぃ」
下半身のみとは言え、45度から60度までじっくり茹でられたら叫ぶ気力も無くなるほどダメージを受けるのは当然だった。
覗き込むと、オヘソから下は有り得ないほどの赤さに変色していた。
もう助かったとしても下半身の強度火傷は免れない。

女子高生アイドルの島崎真理子が抱いているもう一体の肉塊……それは同じく楠山一樹の子供……さっき息絶えた男の子の姉である15歳の少女、楠山秋絵であった。

母親と一緒にさらってきた男児数人のペニスを何度も切断している。

聡子の残虐行為を見ているうちに、自我の特異な性癖がめざめてしまったようだった。

弟と同じくダルマ女にされていて、痛み止めと止血の特殊な注射が打たれているため、手足切断面の痛みは殆ど感じていない。

「あ、秋絵……あ、ききき……あちいいいっ！！」

「娘の心配より自分の心配してるのオッサン？　トコトン外道だねお前。父親もやっぱ失格だよ。うんうん♪」

美香がニヤけながら目を細くして囁いた。

「このあんたの娘を両手で抱き上げて三分間我慢できたら、この子の命は助けてやるよ。やってみる？」

美紅が父親に問いかけると、真っ赤な顔で両手を上に上げ始めた。

美紅と莉央は二人で担いでそっと胴体と頭部だけになってしまっ

た女子中学生を父親へ手渡す。

「お父さん……なんか面影残ってるね？　微かに覚えてるよお父さんの顔……」

「まだ幼かったけどお姉ちゃんのお前は俺のことを覚えていてくれたか……ありがとう」

「なんとなくだけどね。凄い熱そうだね？　痛いでしょ？　もう手を離していいよ！　あたしと勇斗でお母さんに協力して遺体をバラバラにしたりしてきちゃったの。オチンチン切断したりもさせてもらった。だからもう被害者の子達に死んで詫びなきゃと思ってる……それにみんな処刑されてあたしだけ生き残ってはいけないから……」

「そんなこと言うな！　俺だってお前と同じ年頃の子を殺して埋めちゃったんだ」

驚く娘の秋絵の顔はしばらく固まったが、ゆっくりと涙が溢れ落ちた。
二人の会話を遮るように莉央の罵声が響く。

「殺して埋めちゃった？　殺してレイプして散々遺体を弄んでからバラバラにして埋めた！　が正解でしょ？　きちんと事実を娘に報告しなきゃダメだよ？」

富田美香も続ける。

「肝心な部分を娘の前で誤魔化すなよ腐れ外道っ！　死体のマンコにチンポ突っ込むなんて……死者への冒涜にもほどがあるよ？」

しばらく父親の手に抱き上げられたまま泣いていたが、急に大声をあげる秋絵。

「うるさいっ！　黙れっ！！　何をやってもお父さんはお父さんなのっ！！　あんたたちの知らない良いところも沢山あるんだからっ！！」

予想外の鬼畜女の逆ギレに一同しばらく沈黙してしまうが、気が付けば約束の三分まであと残り一分を指していた。

「おっと！　忘れてたけどチェーンソータイムだよ？　迫り来る鋸の歯から娘を守り抜け！　ってか？」

そう言いながらチェーンソーのエンジンをかける美紅。
冷たい表情で釜に近づいてゆく。

「待って美紅ちゃん」

「どしたの？　莉央ちゃんがやりたい？」

「いや……この先島崎さんもどんどん拷問処刑を執行しなきゃならなくなるから……どこまで出来るか見てみたいから」

「それもそうだね。ほい、島崎さん。ここ握ったらアクセル。切断できるからね？　楠山一樹が抱き上げている娘の身体を切り刻んできてくれる？」

かなりの美少女である島崎真理子もさすがに震えが止まらなくなる……。

勇気を出してチェーンソーを受け取り、父娘の前に立つ女子高生の真理子。

『ギュイイイインっ！！』

「キャーッ！！」

死を覚悟しているはずの娘がエンジン音に恐怖し、泣き叫び始めた。

そのまま腰が砕けて膝から崩れ落ちる真理子。

小便を漏らしている。

「ダメだねコイツ……しばらく殴る蹴るくらいしか使えないわ」

「ごめん美紅ちゃん……お兄ちゃんも島崎さんも軽い拷問限定でお願いするからもういいよ」

この時点で約束の三分間が過ぎた。

とりあえず８０度まで上がっている湯を抜き、父娘を釜から解放して地面に転がす。
上半身まで真っ赤になり、下半身は赤と白が混じり、水脹れだらけになっていた。
美紅が木刀で軽く太股を撫でると、同時に皮が捲れて真っ赤な肉片が晒された。

「ぐわあああっ！！　ひいい、熱い……熱いい……」

もはや火傷の激痛で意識が朦朧としてきている。
このままでは数分で意識を失う。
そう判断した美紅は日本刀を手にし、秋絵をうつ伏せに寝かせて、お腹の下に大きなクッションを置いて、お尻を突き上げた状態にさせた。

察した美香は、ダルマにされた秋絵のお尻の肉を左右に押し開く。

「ほら、ここから何かが突っ込まれちゃうよ？　開いて中身みせてね？」

『くぱあっ』

「いやあっ！？　やめろ変態っ！！」

性器と肛門が同時にぱっくり開かれた。

「オッサンが意識あるうちに娘の処刑を見せつけなきゃね！　莉央ちゃん？」

「…………チェーンソーやめたの？」

「うん。目の前でゆっくりとマンコから串刺しにしてやろうと思う。それでいい？」

「いいよ。アナルは美香ちゃんに残しておいてあげてね？」

「アナル責めが好き？　小さなツインテールちゃんは変態だなぁ」

「むかっ。莉央ちゃん、やっぱあたしこの長いツインテールの人嫌い」

どくれている美香に少し笑みを見せてから父親に気付け薬を注射する莉央。

再び薄れかけた意識が鮮明になってきた。

「楠山さん、まだ娘さんもあなたも生きてるよ？　しっかり娘さんの最期を見届けてあげなさい」

「や、約束が違う……汚いぞお前ら！　うぐぐ……」

「ほらあっ！　よく見て見てっ！！オッサンの娘のマンコの中身だよん♪」

そう言いながら子宮が見えるほど両手の親指で膣口を思いっきり開いてみせる美香。

そこへ鈍く光る日本刀の切っ先がゆっくりと近付いてくる。

「や、やめろっ!?　秋絵のそんなとこに刀なんて……やめてくれええええっ！！」

『つぷ……』

「やはあっ!?」

手足がない状態で必死でかわそうと身体を捩るが、美香と莉央に押さえ付けられて逃げられない。

切っ先はゆっくりと性器に入り、人生初めてのロストバージンは、尖った鋼の切っ先となってしまう。

しかも同性の同じ中学生の少女に突き破られた。

『バリッ……』

「痛ああああっ！？　ひいいっ！！」

『ズズズズズ……ズバズバ』

刃をお腹側（下側）に向けて、処女膜を貫いた刃は、どんどん少女のデリケートな部分を切り裂いてゆく。
まず尿道口、クリトリスを真っ二つにした。
痛み止めは切断面しか効かないように調整してあるため、生き地獄の激痛が秋絵を襲っている。
この世のものとは思えない悲鳴をあげるが、残酷処刑島に空しくこだまするだけだった。

娘の陰部からドクドクと激しく流れ出る血を見ながら、父親の楠山一樹は発狂したように泣き叫んだ。

「痛い？　あはは♪なに黒い菊みたいな部分ヒクヒクさせてるのぉ？　あたしにほじくってくださいってことなのかなぁ？　あはは。いいよ。掻き回してあげるね？」

無惨に切り開かれた性器とは対照的に、無事だった穴までも美香の指で犯された。
一本、二本、三本、まで捩じ込む頃には大腸、小腸がぶりぶりと飛び出し、お腹の下側は小腸まみれになってゆく。
口までの一撃での貫通は難しく、途中で何度もお腹を突き破って切っ先が飛び出してしまったからである。
その切れ目から腸がブリブリと飛び出してくるわけだ。

無意識の身体全体の軽い痙攣が始まる。

「お、父さん……あたし、先に行ってるね……痛みまで麻痺してきたけどもう最期が近いのは何となく分かるの……じゃあ、ね、お父さ……ぶはっ！！」

『ガクン……』

「わあああぁっ！？　死んじゃダメだああぁっ！！　秋絵っ！　秋絵えええっ！！」

『グリグリ……』

「よっと。この辺りかな？　それっ♪」

『ばしゅうっ！！』

かぱっと開かれた遺体の口から日本刀の切っ先が飛び出した。

「美紅ちゃん！　お見事っ！」

「何回もお腹を突き破っちゃったけどね……。ありがとっ。更に……よっと。小さなツインテール！　危ないからケツ穴から指を抜けっ」

更に力を込めて刃を背中側に刃を反転させた。

「え？　は、はいっ！」

「えいっ！」

『ザシュッ！！　ぱっかぁ～』

肛門側へ刃を向けて思いっきり引き抜いた結果、会陰部と肛門部分が全て縦に切開された。

性器と繋がった肛門は火山の火口のようにバックンと開いてしまう。

「やだぁ～。膣口どころか肛門と直腸までぱっくり開いてパックンパックンしてるぅ。うっわ？　内側ヤラしい色してるなぁ♪」

美香は頬を真っ赤にして切り裂かれた陰部と肛門を裏返しにめくり返して遊んでいる。

「があああああっ！！　秋絵えええっ！！　お前らっ！！　畜生畜生畜生おおおおおっ！！」

赤く白くただれた下半身を莉央が何度も蹴り込んだ。

涙を流して泣き叫ぶが、容赦なく踏み続ける。
何度も脇腹を蹴り、コロコロ転がすと、仰向けの状態で止める。

「畜生はあんたなんだよ？　分かる？」

莉央は足裏を白くふやけたペニスに置くと、思いっきりグリグリと踏みつけて捏ね回し出した。
ふやけたペニスはミンチ状態になり、ぶちぶちと千切れては床に肉片が落ちてゆく。
靴の裏の目にも肉片が入り込んでいるが、気にせず踏み続ける。

「茹でられたキンタマ……どうなってると思う？」

「ううう。ひいいい。やめて。やめて。いやだ。死にたくない」

半分意識が飛んでプライドも娘を眼前で殺された憎しみも飛んでいる。
更に強くグリグリと踏み込むと陰嚢が裂け、二つの睾丸が飛び出した。

「白くてきれいなまんまだったよ？　踏み潰してあげるね」

『ぐしゃっ！！……ぶちゅっ！』

口から血を吐いて痙攣が始まった。

「ちょっと待って！　まだ死んじゃいやっ！」

あわてて残されたもう一つの睾丸を右手で鷲掴みにする美香。

「あたしが潰していい？　美紅さん」

「あたしに聞くなんて可愛らしいとこあるじゃん。アナルもあたしが　破壊しちゃったし……あんたに潰させてやるよ！」

「ありがとうございまぁすっ！　お姉さまっ♪」

『ギュウウウウッ……』

「いくよ？　潰すよ？　さようなら！」

『ぶちゅっ！！』

最後の睾丸を潰された激痛とショックで、バッタンバッタン全身を激しく動かす大痙攣が始まった。

莉央は馬乗りになり、美紅のサバイバルナイフで斬首した。

ゴボゴボと血の泡を噴き出させながらようやく家族の元へ逝けた。

……絶命できた楠山一樹だった。

そのまま四つん這いのポーズを取らせて、お尻を突き上げさせる。下半身だけ火傷で赤白くなっているので、まるで白いズボンと赤い服を着ているように見えた。

ゆっくりと肛門が開いてゆき、痙攣が止まり、完全に身体が死を迎える。

「美紅ちゃんの日本刀借りて練習しといて」

「はーい！　死んでも遺体弄ばれて可哀想だね～？　哀れだね～？　ここかな？　オッサンのアナルは……」

『つぷ……ズズズズズ』

「でもねぇ、オッサンが女子中学生を殺して遺体で弄んだんだよぉ？　どお？　死んでまで犯される気分は？　うふふ。美香様が首なし男のケツマンコから内臓掻き回してぐっちゃぐちゃにしてやるからね♪」

一気に差し込んで途中何度も骨に当たって止まる。

美紅が美香の手の上から握りしめ、口まで貫通させるルートを教えてあげた。

ようやく喉の切断面から切っ先が突き出た頃には、腹か胸から穴だらけになり、腸が一面に飛び出してウネウネしていた。

「人のパンツ見て興奮しやがって……本当にロリコンだよね？　大好きな娘さんの子宮に埋めてやるよ……ほら」

莉央は切り取った生首を、娘のお腹の内臓に詰め込んだ。

パックリと切開されている子宮の中に、小腸を掻き分けながら無理矢理捩じ込まれる父親の頭部。

凄惨な四人家族の処刑を完遂した残酷拷問処刑執行人である八人は、雪の積もった残酷処刑島を後にした。

狂気の血筋（後書き）

別れた後の家族全員が人を殺めてしまう。

数年後の感動の再会は叶わず、最悪の残酷処刑島での再会となってしまった。

あの世では家族仲良く暮らせているだろうか……。

親友の性癖（前書き）

アイドルグループの一人、島崎真理子が通う高校。

二人の一年生男子の短い青春物語。

【ＢＬ要素を含む内容となっておりますので、苦手な方はスルーお願い致します】

親友の性癖

僕の名前は後藤光。

北北東地方にある大志高校に通う一年生だ。

争い事が苦手で、中学の時も殆ど喧嘩を避けて話し合いだけで解決してきた。

最終的に謝れば余程の事がない限り相手は許してくれるし、変なプライドで殴り合いになるくらいなら土下座してでも回避するほうがましだと僕は思うからだ。

でもヤンキーが比較的に多いこの高校ではしょっちゅう喧嘩を見かける。

今日も僕のクラスで殴り合った男子生徒が救急車で運ばれたんだ。

限度を知らないヤツはほんと恐ろしいよ。

いつか死人が出るんじゃないかと本気で心配する。

「光っ！　今日はゲーセン寄っていこうぜ！」

「あ、うん。ストリート何とかゆう格闘ゲーム面白いもんね」

僕の親友の黒崎昌之は、高校になってからの友人だが、無茶苦茶喧嘩が強く、入学したすぐから絡まれて苛められてた僕を庇ってくれたり守ってくれたりしてくれてる。

なぜか僕の事を放っておけないんだって。

『おとなしいからって苛められるのは理不尽だ』

黒崎くんの僕を守ってくれる理由らしいんだけど、とにかくそのお陰で僕は毎日平和に過ごせているから感謝しかないよ。

楽しくゲーセンで遊んだあとはいつもの店でお好み焼きを食べて釣りの話とかアニメの話とかして家に帰る。

「じゃあな光！　明日1日頑張ったら明後日は日曜日だ！　またブラックバス釣りに行こうぜ」

釣りが好きな黒崎くんの影響で、僕も高校生になってから釣りを覚えた。

竿とかリールとかルアーとか買うものは全て教えてもらって揃えたんだ。

貯金が殆どなくなっちゃったんだけどね。

僕が黒崎くんの最高記録を上回る４５ｃｍを釣ったものだからムキになっちゃって、週末になる度最近釣りばかりなんだ。

週末の日曜日がきた。

いつもの池に自転車で現地集合でやってきた。

先に来て早くもルアーを投げている黒崎くんがいた。

「おーいっ！　早くも釣ってるのーっ！？　気が早すぎるよっ！」

自転車を停められる所から釣り場までは３０ｍ以上あったけど、とりあえず叫んで挨拶してから　道具を持ってゆっくりと向かう。

釣り場に着いて僕も慌ててルアーをセットして投げる。

「負けないからね黒崎くん」

「ふん！　今日こそは俺が光の記録を破ってやる！」

結局お互い大きなブラックバスは釣れず、３０ｃｍ前後のを一尾ずつ釣って釣り場を後にした。

「握るかと思ったぜ。とりあえず一尾でも釣れて良かったな」

「そうだね！　とりあえず釣れたら来たかいもあったよ」

釣りに来たときは帰りに１００円うどんの店に寄る。

これも定番だった。

「今日はちょっと俺の家に寄ってかないか？　光に見せたいものがあるんだ」

このパターンは初めてだった。
僕の家に黒崎くんが来たことは数回あったけど、逆に呼ばれるのは初めてだった。
ヤンキーだけど僕には優しい男から見ても男前の黒崎くんの家に遊びに行く。
前から一度は行きたいと思ってたからちょうど良かったよ。
「ほんと!?　黒崎くんの家行くの初めてだから凄く楽しみだな♪」
自転車で仲良く並んで走り、一時間ほど走ってようやく家に着いた。
凄く大きな豪邸だった。
そう言えば黒崎くんのお父さんって競輪選手だったんだよな。
立派な家に住んでるのも頷けるよ。
玄関に入ったとたんに黒崎くんのお母さんが出迎えてくれる。
黒崎くんそっくりで無茶苦茶整った顔立ちの美人な人だった。
「こ、こんにちは。初めまして！　いつも黒崎くんにお世話になっています後藤光と申しますっ！」
「あらあら、礼儀正しい子ね！　うちの昌之と大違いだわ。女の子みたいな可愛い顔してるわね♪　ゆっくりしていってね光くん」
女の子みたいな顔してるって何度も言われるけど、何か素直に喜べない僕がいた。

まあでも不細工って言われるよりマシなのかな……。
二階の黒崎くんの部屋に上がり、色んな竿やリールやルアーを見せてもらう。
僕のお小遣いでは到底不可能な豪華なラインナップだった。
「スッゴいね！　この竿だけでも一万円で買えないんじゃあ？」
「それは三万くらいだったかな？　これが五万のやつ」
もう羨ましいとしか思えない豪華な竿とリールに、僕はただただ呆然とするしかなかった。
そこに美人なお母さんがコーヒーとケーキも持って来てくれた。
「良かったらこれ食べてね。友達なんて連れてきたの初めてだから私も凄く嬉しいわ。これからも昌之と仲良くしてやってね？」
「やかましいわっ！　さっさと出ていけよババア！」
「そんな照れないの！　じゃあゆっくりしていってね光くん」
「ありがとうございます！　遠慮なく戴きます」
お母さんが出ていった後、美味しそうなケーキに貪りつく僕。
「このケーキ無茶苦茶うまいなぁ！　黒崎くんのお母さんベッピン

さんだし羨ましいよ」
「そんなことねーよ。やかましいババアだよまったく」
楽しく話も盛り上がり、時間は夜の九時を指していた。
流石に親に怒られると思った僕はぼちぼち帰ろうと思って立ち上がった。
「今日は泊まって行かないか？　光の親には心配しないようにババアから連絡させとくから」
「え？　初めて家に上げてもらっていきなり泊まり？　凄い展開だねそれ？」
「ははは！　まだまだ話も出来るし構わないだろ？」
親にさえ連絡してくれていたら怒られずに済む。
それだけが怖かったから美人なお母さんが連絡してくれるなら安心して泊まれるってもんだ。
僕は快く承諾して本日は泊めてもらうことにした。
釣りの話や色んな話で盛り上がり、あっという間に夜中になり、就寝の時間が来た。
僕の布団がないことに気付き、黒崎くんに聞いてみる。

「俺って寝返り激しいからさ、ダブルベッドなんだ。だから十分二人並んで寝れるから……」

意味を理解するのに数秒かかった。

『え？　それって黒崎くんと一緒に寝るってこと？』

「ほら、早く来いよ！　早く寝ないと明日は学校だぜ？」

『ええええっ！？』

固まる僕をよそに、そそくさと布団に潜る黒崎くんだった。

マジですか？本当ですか？……　色々と訳の分からない気持ちになりながらも寒いので黒崎くんのベッドに入ってゆく僕がいた。

「いつも僕を守ってくれてありがと」

「……ん？　ああ。何て事ないよ」

「どうして入学当時から僕を苛めっ子から守ってくれたりするの？」

「……」

返事がない黒崎くんはもう寝ちゃったんだと思い、僕もゆっくり

と目を閉じた。

うとうとしてきた頃に、なんか下半身に圧を感じて目が覚めた。

『え？　僕のオチンチンを誰かが握っている？』

誰かがとは言うものの、隣には黒崎くんしかいない。
ってことは黒崎くんが僕のオチンチンを握っている！？
なかなか現実が理解できず、夢なのか錯覚なのかと思い自分の手を股間に入れてみる。
間違いなく黒崎くんの手が僕のオチンチンを握っていた。

「ちょ、ちょっと！？　何を……」

「ごめん……俺、初めて見たときから光の事が……」

「えっ！？　どうゆうこと！？」

「光の事が……好きになっちゃって……」

一瞬頭の中が真っ白になった気がした。

「やめて黒崎くん……僕は男にそうゆう気持ちはないから……」

いくらいじられようが揉まれようが僕のオチンチンは大きくならない。当たり前だけど仕方がない。

「わかったよ。もう光のは触らないから……俺のを……握ってくれ」

「え？」

そう言いながら黒崎くんは僕の手を握り、無理矢理オチンチンを握らせた。

かなり焦ったけど握られるよりはましかな……。

「気持ち悪い？　もし大丈夫なら光の手でイかせてくれないか？」

気持ち悪いとゆうか、親友のいきなりの性癖に戸惑っているんだ。でも黒崎くんは恩人だし大好きだから……でもこんなことしていいものか？

自問自答してる内に僕の手でオチンチンを握らせたままピストン運動させてる……。

「うっ、気持ちいい。光、もっと激しくシゴいてくれ……」

もうどうにでもなれ！

僕は半ば諦めた気持ちで同性の……しかも親友のオチンチンをシゴき始めた。

なんかとても変な気持ちだったけど親友の黒崎くんはそうゆう性癖があったんだ。

理解してあげようとは思ったんだけど抱き締めて来て唇を重ねて来たときは本気で焦った。
舌を入れてこようと必死だったけど僕は頑なに唇を開かなかった。
諦めて頬と唇を軽くキスするだけにしてくれたけど、もうとにかく早くこの夜が明けて欲しかった。

僕の手や足に生温かい液体みたいなものが沢山付いた。
本当に射精しちゃったんだ……僕のテコキで……。

それで満足してくれて眠りについた。

――――――明くる日。

早めに起きて寝不足のまま家に帰ることにした。
手から足から洗いたくて……とにかくシャワーを浴びたかった。
まだ半分夢なのかと思ってしまうほど信じられない事が起きた。
学校についてもまだぼうっとしている。
黒崎くんに何て言おう？
どんな風に接したらいいんだろう？
色々考えていると黒崎くんが普段通りに挨拶してきた。

「おはよー光！　少しは寝れたか？」
「う、うん。四時間くらいは寝れたからどうにかなりそうだよ」

普通に一週間が過ぎた。

また僕は黒崎くんに言われるがままに、家に泊まりに来ていた。
また何度も僕を助けてくれて守ってくれた親友の頼みは断れなかったんだ。
それだけじゃないかな。
自分のなかで黒崎くんに気持ちよくなってもらうくらいお返ししないと！
そんな感情まで出てきて、無理矢理じゃないけど出来る範囲で応えてあげたい、みたいな気持ちになってきちゃったんだ。

一週間前とは違い、かなり早めにベッドに入る僕たち。
黒崎くんは自ら服を脱いで全裸になった。
かなり動揺しながらも僕も全裸になった。
なんかもう僕の事を守ってくれる親友に悲しい思いをさせたくなかったから。
本気で同性とエッチしたくなったとか言うのではないんだ本当に。
そっと両手を伸ばしてきて、黒崎くんは僕を抱き締めた。
もういいや。どうなっても。嫌いじゃないどころか好きなんだし。
気がつけば僕も抱き締めてキスも受け入れて舌を受け入れてしまっていたんだ。

お互いのオチンチンを握ったり揉んだりしながらしばらく抱き締め合った。
布団へ潜り込んで行った黒崎くんは、こともあろうか僕のオチンチンを口に咥え込んだ。

「わあっ！？　やめてっ！！」

思わず叫んでしまったけど舐めるのを止めてくれない。
なんか半分皮かむりの僕のオチンチンの先っぽが無茶苦茶気持ちよくなってきて、勃起してきたのが分かったんだ。
目の前でイキり勃っている綺麗に皮の剥けた黒崎くんのオチンチンを僕も咥え込んだ。
あまりに気持ち良かったから同じように気持ちよくさせてあげようって思ったんだけど……。
自分の手でするより気持ちよくなってきた僕は不覚にも……。

『どぴゅっ！！　ぴゅぴゅぴゅっ！！』

「んっ！？　ごくん……」

「ごめんっ！　黒崎くんっ！！」

「いいよ。光の精液、少し苦かったぜ？」

何か申し訳ない気持ちでいると、僕の体は一瞬のけ反ってしまった。
お尻の穴に指を入れてきたからだ。
「やはっ!?　そんなことやめてっ!!」
「お願いだ……光に俺のを……入れさせて」
意味が分からなかった。
同性でそんなことするとは夢にも思っていなかった。
でも気が付けば黒崎くんの言うがままに四つん這いになっている僕がいた。
「ババアから借りたローション塗ってやるから!　出来るだけ痛くないようにするからな?」
「う。うん。痛いのは嫌だよ僕だって……」
親指で思いっきり僕の肛門が丸見えになるまで臀部の肉を押し開く黒崎くんは、ゆっくりとオチンチンをあてがった。
「いくぜ」

『つぷ……ずずず』

「んんっ！？　痛っ！！」

一度抜いては少し入れ、またローションをつけて……数回繰り返す内に、ついにオチンチンは全部僕の内臓に差し込まれた。

ゆっくりと腰を振り始める。

かなりの激痛が僕の肛門を襲うが、慣れてくると少し気持ちよくなってきた。

僕って……変態だったのか？

どうして気持ちよく感じる？　こんなうんちする穴なんかで……。

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「んぎいいっ！　黒崎くん、痛いよっ……うう」

「ひ、光っ！好きだっ、イくっ、イくうううっ！！」

『どぴゅぴゅぴゅぴゅぴゅううっ！！』

熱いものが肛門から直腸全体に広がった。

痛みと快感で涙を流してしまった僕を、再び抱き締めて優しくキスをしてくる黒崎くんだった。

お尻の刺激でもう一度勃起してしまった僕のオチンチンを、優しく握りしめて、ピストン運動してくれる。

「あ、うう。イく、またイっちゃう僕も……んああっ！」

二度もイってしまった僕は意外と早く眠りについた。

朝起きたとき、腕枕をしていてくれる黒崎くんに、今度は僕の方からキスをしちゃったんだ。

その日は仲良く一緒に学校へ登校した。

今回は睡眠時間もたっぷりだったせいか、全然眠くなく、無事に授業を終えることができたよ。

校門前で今日はどこにご飯食べに行こうかと相談してたら、三年生の先輩で、アイドル活動している島崎真理子さんと、見かけない制服の中学生らしい女の子二人がこちらへ寄ってきた。

「あれ？　島崎さん？　最近よくテレビに出てるよなあ？　俺アイドル好きだしよぉ♪　隣の二人も同じグループの中学生コンビじゃねぇかっ！？　すげえっ！　同じ高校の島崎さん以外は初めて見たぜ！」

確かに目の前にいるのは“真友ガールズ”のメンバーである島崎さんに、大野真子と小野メグだった。

凄いことがあるもんだ。

島崎さんは見慣れてるけど中学生コンビの二人もショートカットが良く似合って無茶苦茶可愛いぞ！
でも僕たちに近寄って来るなんて……一体何の用事なんだろう……。

「あなたが黒崎くんだっけ？　ちょっと私の弓道部の部室まで来てくれるかな？」

何だ……黒崎くんだけなのか用事があるのは。
僕なんかより男前だもんなあ、そりゃ仕方ないか。

「ちょ、ちょっと待ってくれよ！　俺はこれからコイツと飯食べに行くんだ。
アイドルから誘われるなんて有難いこったが、今日はお断りするぜ！　行こうか？　光」

「あ、う、うん！」

僕なんかよりアイドルたちと部室でラブラブしてた方が数倍楽しいと思うけどなあ。
同性好きになるくらいだから何ともないのかもね黒崎くんは。
手を掴んで引っ張って行こうとする島崎さんに、かなりムカついたのかお腹を殴っちゃった!?
まずいなあ女性に手をあげちゃ……手を………あれ？

僕は夢でも見てるのかな？
大野真子ちゃんと小野メグちゃんが黒崎くんに殴る蹴るの暴行をしたように見えたけど？
一応聞いてみようかな？　夢だとは思うけど。

「黒崎くん？　何で鼻血出して両目を腫らしちゃってるの？」

「ひ、光……見てなかったのか……コイツら無茶苦茶強い……」

「え？　本当にやられちゃったの！？」

そのまま女子中学生二人に両腕を抱えられて大志高校校内へと連行されてゆく黒崎くんを、ぼうっと眺めている僕がいた。

「一人で帰りなさい。お友達は数時間は帰れないから」

「島崎さん、どうして黒崎くんをあんな目に合わせるんですか？お腹を殴ったくらいであそこまでボコるなんて……」

「それは私じゃなく彼女たちに言ってくれる？　かなり短気だからあの子たち……」

「やっぱり僕は黒崎くんを放っておけないです。いくら女性でアイドルとはいえ、暴力なんて許されないですよ！？」

思わず女性相手に叫んでしまったけど……本気で黒崎くんを助け

たい気持ちが僕の中には強くあったんだ。

「仕方ないな。いいよ一緒にきても」

「あ、ありがとうございます！　先輩っ」

「でもあの子を助けようとか思わないでね？　あなたまで痛い目に遭うわよ？」

何を言ってるんだ島崎さんは？

僕が放っておけないとゆうのは黒崎くんを助けたいと言う意味だぞ？

どうしてそれが分からない？

まあ、たまたま負けただけで僕たち男が本気で抗えば女子たちなんてどうにか止められる。

そう信じて島崎さんに付いていったんだ。

もう殆どの生徒が帰っている？

いつもなら部活で騒がしいのにどうしたんだろう？

生徒も先生も全て帰り、閑古鳥がなくような学校に僕たち五人だけがいる。

こんなことって……。

「特殊任務省ってゆう国の機関があってね。そこの偉いさんからの

指令が下ったの。この学校に。４時までに全校生徒も先生たちも校長までも……全てに下校命令が下りてたのね」

「特殊……そんな国の機関知らないよ。どうして国の命令で島崎先輩やアイドルたちが動いてるんですか？　意味がわからないですよ」

僕は少し熱くなってきていた。

とにかく黒崎くんを無事に返して欲しかったんだ。

弓道部の練習場へ連れて行かれた僕は、信じられない光景を見てしまう。

『ヒュン……ドカッ！』

素っ裸にされた黒崎くんが両手と胴体を縛られた上、四つん這い状態で、お尻をこちらへ向けて固定されていたんだ。

しかもそのお尻を狙って小野メグと大野真子が弓で射っている。

「わああっ!?　止めろっ！！　危ないじゃないかっ！！」

『ヒュン……ドカッ！』

中学生コンビの矢が交互に飛んでくる。

隣の的にドカドカと刺さる度に生きた心地がしないだろう。

危ないから止めさせなきゃ！

「ちょっと君たちっ！　ん？　いててててっ！？」

止めに行こうとしたら島崎先輩に腕を掴んでひねり上げられちゃった。

女性なのに凄い力だった。

恥ずかしいけど僕じゃなにもできないことに気付いたよ。

『ヒュン……ざしゅっ！』

「ぎゃあああああっ！？」

大野真子の放った矢が黒崎くんのお尻の肉に突き刺さってしまった。

「惜しかったねぇ真子……」

「うん。でも結局先に射抜くのはあたしだから」

「そうは問屋がおろさないんだから」

僕はお尻の肉から血が出てること、非常に危険なことを島崎先輩に強く言い聞かせた。

だけど帰ってくる言葉は耳を疑うものだったんだ。

「アナルに突き刺さるまであの子たちは止めないよ」

「ええっ!? そんな……下手したら死んじゃいますよ! お願いですから許してあげて下さいっ!」

そう言いながら僕は泣いていた。
本気で心配だった上に、やっぱり黒崎くんが大好きだったからだ。

「アナルにオチンチン入れられたのによくそんなこと言えるね? あなたも被害者の一人なのよ?」

被害者の一人?
どうゆうこと!?
僕以外にも被害者がいるみたいな言い方に聞こえたけど?
彼は僕が好きだから抱いたんだし、お尻にオチンチン入れてきたんだ。
僕以外にはしてないはずだぞ?

『ヒュン……ズボオッ!!』

「びぎゃああああっ!!!!」

「やったぁ♪」

「真子凄いじゃん！　ケツ穴にドストライクッ！！」

マジか……酷すぎる……早く病院連れていかないと死んじゃうよ？
一目散に駆け寄ろうとしたが、島崎先輩に押さえ付けられる。
しかも僕の服まで脱がし始めた。
どうするつもりなんだろう？

『ズブッ！』

「はうっ！？　嫌だっ！？」

「どした？　男なら本気で抗って私をやっつけたら？」

『ズブズブズブブブ……』

「痛いよぉ……くっ」

島崎先輩は人差し指と中指の二本の指を僕の肛門に根元まで差し込んだ。
痛みと屈辱で涙が出てくる僕だった。
今度は女の人に……なんでみんな僕の肛門ばかり突っ込んでくるんだよ……？
あれ？　この変な感覚……この前も……？

『グリ…グリングリン……くちゅくちゅ』

僕のお尻の穴を掻き回す大志高校が誇るアイドル生徒の島崎真理子先輩……嘘だろ……なんでこんな美少女に肛門を掻き回されなくちゃならないんだ僕は……き、気持ちよくなってきた？　嘘だろ？　あれ？　オチンチンに触れてもないのに……イきそう……あ、ぁあっ！？

『どぴゅぴゅぴゅぴゅぴゅうっ！！』

「あはは。島崎さんも前立腺オナニーで射精させることに成功したんだね？　大したもんだよ」

なんだ今度は？
小学生が現れたぞ？
あれ？
“真友ガールズ„のボーカルの菅野莉央じゃないか！？
小学生の癖になんて卑猥な単語を喋るんだ！？
うう。お尻の穴が痛い……けどなんで射精しちゃったんだ僕？
はてなだらけが頭の中をぐるぐる回る中、菅野莉央は黒崎くんの方へ歩いていき、矢が刺さったお尻と、肛門から矢を抜いて、止血処理と消毒をしてくれてるようだった。

「痛み止も止血もしてあげたから立ちなさい」

「う、うう。まだケツの穴が痛い……」

「もうすぐ痛みなくなるから安心して！　早く立つの！　目を閉じて」

小学生のボーカルの少女は黒崎くんのオチンチンを左手で掴むと、右手に持っている小さな刃物みたいなもので根元から切り落とした。

麻酔を打たれているのか痛がることも、暴れることもなくじっと目を閉じて立っているだけだ。

頬を赤くしてその光景を見ている女子中学生の二人。

島崎先輩はその光景を見ながら僕のオチンチンをシゴき始める始末。

「あう、もう止めてください先輩……」

「男なんかより女性にされるほうが気持ちがいいでしょ？　あの子は完全去勢刑の命令が下ったからこれから菅野さんによる残酷去勢ショーが見えるわ」

去勢？

あの犬とか猫にするやつか？

まじでそんなことするの？

正気の沙汰じゃないよ、そんなの！

一生子供作れなくなっちゃうじゃん！

そんなの可哀想だよ黒崎くんが……。

ヤバい！　無茶苦茶気持ちいい……またイかされそうだ……。

目の前で黒崎くんはオチンチンを切断されて、今は睾丸まで抜かれようとしているのにごめんなさい！
僕は島崎真理子先輩のテコキによって、またまた沢山の精液を撒き散らしてしまった。

『ズズズズ……にゅるっ。にゅるんっ』

「凄いメス捌きだね菅野さん！　あんなに綺麗に金玉出てきたよ二つ同時に……」

「ほんと……あたしたちもいつかやりたいね？　ぷるんぷるんしてる生のキンタマ……ヤらしいなぁ♪　うわっ？　陰嚢と肛門の間切り裂いて赤黒い丸いの出てきたよ！？　前立腺だねきっと……えぐぅ～」

中学生の二人も見ながら顔真っ赤にして楽しんでるじゃないか……。
この子たちアイドルだよなほんとうに……。
信じられないよ。
黒崎くんの睾丸がボーカルの少女によって切り落とされた時、僕の腹部はヒュッと寒くなるのを感じた。
幸い痛みは全く感じてないようだが、黒崎くんのあとの人生を思えば本気で涙が止まらない。

「ペニスとキンタマ、前立腺も……性器は全て切り取らせてもらったから」

「なっ！　何だとっ！？　うわっ！？　俺のチンポがないっ！？」

　ボタボタと血が流れ落ちている股間はペニスを根元から切断され、睾丸を抜かれた陰嚢だけが揺れている哀れなものだったんだ。

　泣いている黒崎くんを見ながら僕も泣いていた。

　菅野莉央……可愛い顔した悪魔だな。

　しかも手術までやってのけてる？

　本当に小学生かこの子は……。

「尿道が塞がらないよう手術しといたから。でも一週間はお風呂入らないでね？　化膿したら大変だから。毎日病院へ検査に行くんだよ？」

　自分で切り落としといてよく言うよ……ほんとアイドルの仮面を被った悪魔だ……。

　菅野莉央と中学生コンビの二人と、その仲間らしい男が運転する真っ赤なマーチに乗せられた黒崎くんは、そのまま家まで送られるみたいだった。

　自転車を残して……。

　それを校門前で見送る僕と島崎真理子先輩。

「あの子はね……あんただけじゃなく他の高校の男子生徒も数人犯してるの。しかも強制的に暴力でボコったあとにレイプみたいな感

じで。だからあんたを好きだったのは本当だと思うけど……」
「もういいです。島崎先輩に指でアナルを犯された時、やっぱり男より興奮しちゃいましたから……これを機に黒崎くんとも男同士でのエッチなことはなくしたいと思います」

僕は思いっきり清々しく言い放った。

「クスクス」
「何がおかしいんですか島崎先輩？」
「慌ててパンツとズボン履いたんでしょ？　飛び出してるわよ？　クスクス……あはははは♪」

僕はゆっくりうつむくと、射開の窓から元気よく飛び出している半分皮を被ったマヌケなイチモツを目の当たりにしたんだ……。

親友の性癖（後書き）

親友との楽しい時間、怪しく純粋な愛の時間、制裁と正常への目覚め……。

短期間に様々な体験をした高校一年生。

これからの未来に幸あることを願う。

称賛と憤怒の果てに　（前編）（前書き）

年に一度か二度しか行われないスポーツ大会は沢山あるが、駅伝大会もその一つだ。

高校生の男女が青春をかけて走る。

【ＢＬ要素を含む内容となっておりますので、苦手な方はスルーお願い致します】

称賛と憤怒の果てに　（前編）

　１２月の恒例である全国高等学校駅伝競争大会……駅伝大会が中部地方で行われている。
　地元の高校である中部星蘭高等学校は、男女共に四年連続で優勝しており、今大会勝利で五回連続優勝となる。
　１０時２０分に開始された女子のレースは、最終区間を走る絶対的エースである上島きらら選手が、二位と大きく引き離してのゴール、ダントツ一位で五回連続優勝を決めた。

　残る男子の最終５区でドラマは起きてしまう。

「おおっと！　ゴール１キロ手前の緩やかな坂道地点で四回連続優勝を果たしている中部星蘭高等学校のエース、福田哲也選手が大きく失速！　４区にて三分ほど引き離していた東部地方の甲南高校、坂田敏郎選手が一気に差を縮め、とうとう抜き去りました！　甲南高校は記念すべき初優勝となります！」

　あまりの信じがたい光景に、テレビ中継でのアナウンサーも熱く叫びながらの解説となっていた。

　会心の大逆転、満面の笑顔で両手を高々と上げながらゴールする坂田敏郎選手。

　一分近く遅れて、４区までダントツ一位を走っていた中部星蘭高

等学校の福田哲也選手がゴール。
その場に倒れ込み、悔し涙を流している。

「よく頑張った！　二位なら十分だよ！」

「お疲れさまっ！　そんなに泣かなくても準優勝じゃん？　おめでとう！　卒業してもマラソン大会とか頑張ってくれよ」

「ほんとよくやった！　二位は守り抜いたんだから元気だしてくださいね！　福田さん」

大きな拍手と共に、優勝した坂田敏郎選手以上に声援を受ける福田哲也選手。
心臓が止まりそうなほどの苦しさの中でも、その激励は本人に届いていた。
恥ずかしさ、悔しさの涙と共に、観客の暖かい心に更に大粒の涙が冷えきっている１２月のアスファルトに溢れ落ちた。

心身ともに疲れきっていたせいか、風邪を引いて高熱を出してしまい、数日間休んでの登校となる福田哲也に待ち受ける運命は悲惨なものとなる。

放課後、陸上部の部室では殴る蹴るのイジメが行われた。
３区を走った岸谷三郎と、４区を走った谷川悦司は、最終５区で大逆転を許した福田哲也に激しく暴行を繰り返す。

１区２区を走っていた一年生の二人は気が弱く、優しい性格なので三年生たちのイジメ、リンチに加わることが出来ず、岸谷と谷川の勧誘を振り切って下校していた。

「母親の看病で寝不足だっただと！？　そんな言い訳が通用するとおもっているのかてめえっ！！」

「お前の母ちゃんが本当に具合が悪くて寝込んでたにしても、俺たちの先輩たちから受け継いできた連続優勝のバトンを五年目にして落としてしまったんだ！　悔しくてムカついてお前が登校してくる今日まで夜も眠れなかったぜ！？」

更に激しく暴行を繰り返す二人に対し、病み上がりの倦怠感と罪悪感からの心労で大した抵抗も出来ないままの福田だった。

「うう、本当にこの度はすまなかった……もう部活も辞めるし陸上も辞めるから許してくれ……」

顔面を腫らして鼻血をドクドク流しながら土下座して謝る福田を嘲笑うように岸谷が囁く。

「制服全部脱いで素っ裸になれや！」

「！？　そ、それだけは恥ずかしいから勘弁してくれ」

「谷川が同性にしか興味ないやつだからよぉ！　せめてもの詫びとして相手してやってくれよ！　なっ？」

シャニーズ系の美形である福田に対し、これから起こることを想像しながら一物を最大限に勃起させている谷川が無理矢理制服を脱がせに掛かった。

激しく抵抗するも、更に顔面を殴られ続け、ついに岸谷と谷川に素っ裸にされてしまうのだった。

もう既にシャニーズ系の美男子とはお世辞にも言えないほどボコボコに腫れ上がった顔面をしている福田の髪の毛を鷲掴みにしてグイッと引き起こす。

四つん這いのままで顔だけ上に向けられたまま、谷川のいきり立ったペニスが近付いてきた。

「舐めろ！」

「うっ……嫌だ……許してくれ……」

『ずぼっ！！』

「痛いいっ！？」

いきなり肛門に激痛を感じた福田は後ろを振り向いた。

岸谷が人差し指を根元まで突っ込んでニヤけている。

「俺は男になんか興味ねえがな！　小学校の時のイジメでよく同級生男子のケツの穴に指突っ込んでたの思い出してな！　ははは！」

「痛いっ……止めてくれ！　抜いて」

『がぼおっ！！』

「ふぐうっ！？」

喋って口が開いた隙に強引にペニスを福田哲也の口内に捩じ込む谷川悦司。

「オラオラ！　ようく舌を使って舐め回すんだ！　噛んだりしたら絶対ぶち殺すからな！！」

「うう、ぺちゃ、ぺちゃ、くちゃくちゃ……きゅぽきゅぽ」

鼻血をドクドクと谷川のペニスに振りかけながら、最初は恐る恐る、少しずつ大胆に舐め始めた福田。
もう抵抗する気力は残っていなかった。

二本目の中指まで差し込んで肛門を執拗に掻き回す岸谷は、直腸のヌメヌメした感覚を鼻歌を歌いながら楽しんでいる。

「お、おうっ……やれば出来るじゃねぇかお前……き、気持ちいい

「……い、イク……イクうっ！！」

『ドピュッ！！　ドピュピュピュピュピュウッ！！』

夥しい量の精液が、福田哲也の口内に溢れる。

「んんっ！？　ごぼごぼっ！」

「飲み込めっ！！　吐き出したら殺すぞっ？」

口を押さえながら激しく前後に顔面を揺さぶる谷川悦司。

『むごおっ！？　ごっくん！　ごくごく……ごくり』

「うまかったか？　ははは」

「ぼちぼちケツ穴がほぐれてきた頃かな？　お前のアナル……掘らせてもらうからな？」

「ひいい、そんな大きなもの入らない……止めてくれ……」

１５ｃｍほどもある大きなペニスをブルンブルン振り回しながら男前である福田の顔をイチモツで何度も叩く。

「ははは！　ボコボコになってもまだ男前だなお前は！　根元までぶち込んでヘブンに連れてってやるぜ？」

『ガラガラ……』

ゆっくり部室の扉が開く。。

鍵を閉め忘れたことに一瞬動揺する谷川と岸谷だったが、数秒後には胸を撫で下ろした。

「上島か。ビックリしたぜ……」

「あらあら……リンチ好きとは聞いてたけど“そっち”のほうもなの……可哀想に」

「お、おうよ！　俺は男しか対象にならねーからな……」

慌ててパンツを履く谷川。
女性には見られたくないようだった。

１７５ｃｍある長身の美少女である女子駅伝優勝の立役者、上島きらら。

ミディアムの黒髪を軽やかに揺らして走るその姿は、男子だけではなく、女子からも羨望の眼差しを受けていた。

ボコボコに顔面を腫らして鼻血を出し続けてる福田の前にしゃが

みこんで頭を撫でながら囁いた。

「福田くん、最終区間よく頑張ったね？」

「うう、うん。でも寝不足で……実力出しきれなくて皆さんにはご迷惑おかけして申し訳ない……」

『パァンッ！！』

「ぶはあっ！？」

美少女の平手打ちとは思えないほどの超強烈な平手打ちが福田の左頬にヒットした。

鼻血が更に激しく噴き出す。

「申し訳ありませんでした。……でしょ？　舐めてるのあんた？」

いきなりの事態に固まる谷川と岸谷。

「男女揃って五年間連続優勝ってスッゴい大記録なのよ？　あんたの体調管理が出来てなかったせいでこの学校すべての関係者に迷惑かけたの。わかってる？」

「はい。申し訳ございませんでした」

「土下座してきちんと言いなさい」

後頭部を踏みつけて床におでこをぶつけさせる上島きらら。

グリグリと足の裏を後頭部に擦り付ける。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいっ！！」

スカートから覗く白くて美しい太股に思わず目がいき勃起させる岸谷だったが、続きのアナルファックがやりたい谷川は早く上島きららが帰ってくれないかと切に願うのみだった。

「さぁ私に構わず続きをやってちょうだい谷川くん」

「え？　続きって？」

「とぼけても無駄なんだから。福田くんに散々フェラさせた後、お尻を犯す気だったんでしょ？　私ＢＬってあまり興味は無いんだけど人生勉強に一回くらい見ときたいなぁって思っちゃって……いいでしょ？」

あまり女に見られたくは無かったが黙って引き下がってくれるとも思えなかった谷川は、仕方なく見物を許可して福田の後方へ近寄る。

「ほら福田！　その四つん這いの姿のままでケツを突き上げろ！」

「ひっ！？　いやだ！　それだけはやめてくれ……」

「お前はな、女子たちにも迷惑かけてるんだ。上島にケツ穴犯されてる所見てもらって少しでも償え！」

椅子に座って冷ややかに見つめる上島きららの目は十分すぎるほど鈍く光っているように見えた。

ＢＬに興味はないなんて嘘だとゆうことは、その場の男子全員が悟った。

罪悪感から覚悟を決めた福田は全身の力を抜く。

それを確認した谷川は、両手で福田の臀部をガシッと掴み、一気に突き上げるように引き上げた。

黒くヌメヌメした美男子のアナルがヒクヒクしている。

「へへへ。さぁ挿れてやるぞ！　ゆっくりがいいか？　それとも一気ににに根元までぶち込んでや………うわあっ！！？」

福田のアナルにペニスの亀頭部分が触れるか触れないかのところで背後に気配を感じた谷川がゆっくり振り向いた瞬間、上島きららのドアップを視認して飛び上がった。

「び、びっくりしたじゃねぇかっ？　しれっと真後ろに来るんじゃねえよっ！？」

「だって……入る瞬間ハッキリ見たかったんだもん……気にしないで続けて！」

ゆっくりとペニスを福田の肛門に差し込んでゆく谷川。
頬を紅潮させせながらじっと見入る上島きらら。
苦痛と屈辱に歯を食い縛り涙を流す福田。

その三人を客観的に見詰めながら何故か勃起する岸谷だった。

ついに１５ｃｍもある巨根は根元までぶち込まれ、ぶちぶちと二枚、三枚と破壊された肛門括約筋から血が流れ出る。

「すっごお～い！　入るもんなんだねこんな大きなモノが……」

初めて生で見るＢＬアナルファックに興奮を隠しきれない長距離走の女子エース、上島きららだった。

更にゆっくり腰を振り始めると、福田の苦痛の叫び声が陸上部部室に響き渡る。

岸谷が泣き叫ぶ福田の顔面を更に拳で数回殴り付ける。

思わずペタンと床に胸を着けるまで崩れ込んでしまうが、構わず腰を振り続ける谷川。

『パンパンパンパンッ！！』

『ぐちゅちゅちゅちゅちゅちゅちゅちゅっ！！』

激しくバックで犯す。お尻にお腹が叩き付けられる音と、大便と腸液が直腸の中でペニスに擦られて鳴るイヤらしい音が響き渡る。

前立腺が刺激される生理的反応なのか、福田のペニスは勃起し、透明の液が床に向かって糸を引いている。

「あはは♪　福田くんってば男にアナル掘られて勃たせてるんだねっ？　何かヤらしい液体垂れてるし……エッチねぇ。私が射精させてあげる」

そう言いながら福田のペニスを右手で握り、激しくシゴき始める上島きらら。

谷川のペニスによる直腸や前立腺刺激と、女子陸上部の美少女エースである上島きららによる手コキで、顔面をボコボコにされながらも、人生初の何とも言えないほどの究極の快感を体験する羽目になる福田哲也だった。

あまりのシュールな光景に、ついに興奮を抑えきれなくなった岸谷は、福田の口の中へ、いきり立ったペニスをぶち込んだ。

「へへ……なんか俺まで変な気分になってきたぜ。同性でもとことん苛めると興奮するもんだな！　ほら、舌で舐め回すんだ福田！」

数分間奇妙な絵面が続いたあと、ついに谷川が限界を迎えた。

「イ、イクっ！！　福田のアナルに注ぎ込んでやるぞおっ！！　ふぐうううっ！！」

『どぴゅぴゅぴゅぴゅっ！！』

「むごごっ！？　熱いっ！！　僕もイクッ！　あはああああっ！！
ガブッ！！」

「ぎゃあああっ！！！！　痛いじゃねえかっ！！　このクソガキめっ！！」

あまりの快感に思わず岸谷のペニスを思いっきり噛んでしまう福田。

『どぴゅぴゅぴゅぴゅぴゅぴゅぴゅううっ！！』

谷川の生温かい精液を直腸に注がれた瞬間、岸谷のイチモツを噛んでしまった福田も上島の手コキによって凄まじい量の精液を床に飛ばした。

「汚いなぁ。私の膝にセーエキの飛沫が少しかかっちゃったわよ？」

そう言いながらヒクヒクしているお尻をパンパンと叩く上島きらら。

隣では大便と腸液と自分の精液まみれになったペニスを福田のアナルから引き抜き、必死で濡れティッシュで拭いている谷川。

岸谷は半泣きになって歯形がついて血が滲み出ている自分のイチモツを優しく擦っていた。

『ガラガラ……』

再び部室のドアが開き、女子の３区を走った上島の後輩の二年生、滝山七海が同級生の二年生で同じクラスである白川利奈を連れてきた。

「上島先輩、こいつが白川利奈といって、三年生の福田先輩の彼女です。少し遅くなってすみませんでした。ほら、早く部室に入るのよ！」

「やめ、やめてよ滝山さん！　なんであたしがこんな目に逢わなくちゃいけないのよっ！？　あっ！？……福田先輩？　なんですか？」

あまりに腫れ上がった顔に、すぐには気付けなかった福田の後輩であり、彼女である白川利奈だった。

「り、利奈ちゃん……なぜここに？」

「とにかく話があるかららって無理矢理連れて来られたの。でも大丈夫ですか？　その顔……素っ裸だし……まさか先輩たちで福田さんをリンチに！？」

「人聞き悪いこと言わないでくれるかな利奈ちゃん、だったっけ？　福田くんの彼女よね？」

「そ、そうです！　福田さんは前の駅伝でショックを受けて病気になって……今はまだ病み上がりなんです！　お願いですから服を返して家に帰してあげてくださいっ！」

慌ててパンツを履く谷川と岸谷をチラチラと横目で見ながら上島きららに訴えかける白川利奈。

「利奈ちゃんと福田くんはもうセックスしたの？」

「し、してませんっ！！」

唐突な質問に頬を染めて下を向く二年生の白川だったが、更に続ける上島だった。

「もう半年以上付き合ってるみたいじゃないの？　エッチもしてないわけないでしょ？　処女膜があるかどうか確かめるわよ？　滝山、白川利奈を裸にして」

「はい！　さぁ脱ごうね白川さん」

「いやっ！！　止めてって！！　先生に言い付けるからっ！！」

「黙って裸にされないなら今から彼氏の福田くんのオチンチン……チョン切るから。それでもいいなら帰ってもいいわよ？」

キリキリとカッターナイフの刃を出しながら上島が白川を睨み付ける。

「そんな……でも……分かりました。じゃああたしの性器を見て処女膜を確認できたら、福田さんとあたしを帰してくれるんですね？」

「うん。私はあなたが嘘を言っていないか確認したいだけなの。処女膜を確認できたら絶対帰してあげるよ」

本当にキスまでしかしていなく、性交経験のない白川利奈は、自ら制服やスカートを脱いでゆく。

あまりに淡々と脱いでいくので、谷川と岸谷と滝山は目が点になって棒立ちしている。

最後のパンツに手をかけてから少し躊躇うが、決意して一気に足首までずり下ろした。

「きれいな身体してるのねあなた……この長机の上に仰向けになって寝てくれる？」

「は、はい」

「膝を立てて脚を大きく開きなさい」

「……こ、こうですか？」

まともに性器を見られているのは先輩の三年生の上島きららだけであったが、恥ずかしくて顔が真っ赤になってきている白川利奈だった。

両手の親指を大陰唇にあてがい、一気に左右に大きく開く上島。

『ばくんっ！！』

「ひゃあああっ！？　いやあっ！！」

「いやなの？　なら止めてもいいのよ？」

「なんでもありません。すみません。どうか確認してくださいね上島先輩……」

「いい子ね。素直な後輩は大好きよ」

そう言いながらドアの前で頬を赤くしながらチラチラと見ていた滝山七海を手招きして傍らに呼ぶ。

「滝山、ちょっとこうやって大陰唇を左右に開いていてくれる？　指先入れてみないとハッキリわからないみたいだから」

「え？　は、はい」

『くぱあ～っ』

上島きららに言われるがまま、同級生である白川利奈の陰部を左右に開いてゆく滝山七海。

「やだ……そんなに開かないでよ」

憧れの上島先輩の命令とあって緊張したのか、開けるための力が入りすぎて、小陰唇までもがパックリ開いてしまい、真上にヒダヒダが剥き上がっていた。

「ごめん！」

「ごめんじゃないのよ。それくらい開いてくれてたほうが指差し込みやすいからＯＫよ？　小陰唇のヒダヒダってかなり観察に邪魔だ

し！」

もう一度力を入れて思いっきりオマンコを開く滝山七海。
ヒダヒダがパックリ開いて真上に立った。

膣内までもが丸見えになった。

「あれ？　なんか泡が見える……まさか白川利奈ちゃん？　あなた同性にオマンコ見られて感じてるのかな？」

「ち、違いますっ。かなり恥ずかしいだけです！」

『ずぶっ……くちゅ！』

中指を第一関節まで入れると、愛液による卑猥な音がした。

「やっぱり濡れてるじゃん？　ねえ滝山？」

「はい。確かに膣口に透明の泡が数個見えるし……今、何か流れ落ちました」

「愛液がお尻の方へ流れ落ちるほど興奮してるのに嘘をつくのね？　これは罰を与えなきゃね？」

更に指を差し込んでいき、綺麗な処女膜を確認した。
本当に処女だったことを確認した後、中指に人差し指を加えた二

本の指を一気を根元まで差し込んで、処女膜を瞬時に貫通破壊させる上島きらら。

『ズブズブ……めりっ！』

「ひいっ！？　いったああああっ！！」

更に構わず膣内をぐちゅぐちゅに掻き回す美少女ランナーの白い指。

粘液と血液がトロトロと流れだし、白川利奈の肛門までも真っ赤に染めていった。

「約束が違います……ぐす、ぐす」

処女を喪失した現実を理解した白川は思わず泣いてしまう。

「ごめんなさいね！　つい力を入れすぎちゃって……滝山、この子のオマンコ綺麗に拭いてあげて」

「はい」

――――その日のリンチはようやくこれで終わったが、その後もストレスのたまった時などには二人を呼びつけて同じメンバー

で陸上部の部室にて殴る蹴るのリンチは繰り返された。

七回目のリンチは極めつけのものとなる。

「さて、今日のリンチは一回目の時みたいに二人に裸になってもらおうかな？」

美少女だがかなり残酷な気性を持つ女子陸上部のエース、上島きららの命令により、福田哲也と白川利奈の二人は素っ裸にされ、全身痣だらけの身体を晒した。

「何をするつもりなんだ？　上島」

同じ三年の谷川悦司が悪者特有の笑顔で問いかける。

「私たちの見てる前でセックスしてもらおうと思って！　もう処女膜も私が破いちゃったし、未練はないでしょう？」

「そりゃいいぜ！　え〜と……俺と岸谷と、お前と……二年生の滝山七海ちゃんか……四人にも見られたらさぞや興奮するだろうな！　はっはっはっ！！」

福田と白川は素っ裸で抱き合い、愛撫し合うが、どうしても福田のペニスが勃起しなかった。

とうとう本番を見られなかった上島きららの苛立ちは頂点にまで登り詰めてしまう。

「二人を四つん這いにさせて、バックでアナル犯してよ！　谷川くんが福田のアナル、岸谷くんが白川のアナル！」

「そりゃあいいな！　おら、お前たち四つん這いになって向かい合え！」

抵抗する二人を更に殴る蹴るの暴行で無理矢理従わせる四人。

ついに女の子である白川利奈の顔までボコボコに腫れ上がってしまった。

『ズブズブ……バッコンバッコンバッコン！！』

「ほごおっ！？　ぐわあああっ！！」

『メリメリ……バコバコバコバコッ！！』

「やはああっ！？　止めて止めてっ！！　痛いいいいっ！！　わーんわーん！！」

岸谷のアナルファックではついに白川利奈はバックで犯されながら号泣を始めた。

上島きららはそっと二人の顔に近付き、白川の顔をビンタで数十回叩きまくる。

「泣かなくていいからキスしなさい。それぞれ違う男に犯されながらディープキスしながらイキなさいね？　あはは♪」

二人が肛門からイチモツを引き抜いたとき、大量の大便がぶしゅうっと射出して、辺りが糞まみれになった。
谷川と岸谷の顔や腹にへり掛かる二人の大便。

「うわっ！？　きったねえっ！！」

「げっ！？　くっせぇーっ！！」

「あはははっ！！　私が内緒で浣腸しといたの！　はははは！」
お腹痛いっ！　ほんとごめんねっ！　あはははは♪」

大便に大騒ぎする谷川と岸谷。
上島きららの大爆笑と、滝山七海の固まった表情……。
大便を漏らしながらも涙と鼻血を流しながらディープキスを続ける福田哲也と白川利奈の哀れな愛が続く部室であった。

称賛と憤怒の果てに　（前編）（後書き）

七度繰り返されたカップルへのリンチ。

少しずつ二人の思いは最悪の結末へと向かい、動きだしてゆく。

称賛と憤怒の果てに　（中編）（前書き）

凄惨なリンチが繰り返された陸上部の部室。

運命の流れは抗うことが出来ないのだろうか？

称賛と憤怒の果てに　（中編）

　男子第７１回、女子第３２回の全国高校駅伝競争大会も無事に終えてから、一ヶ月あまりが経過した一月の終わりの頃。
　タクシーで北東地方の北東アルプス（通称北日本ヒマラヤ）へ向かう二人の姿があった。
　標高は約２０００ｍあり、無事山の約３０００ｍに続いて、日本で二番目に高い山である。
　タイヤチェーンをすぐに巻ける技術を持ったドライバーが在籍し、寒冷地仕様専用のタクシーを保持するタクシー会社へ手配していたため、雪が降り積もる険しい峠道をどんどんと日本ヒマラヤ中腹へ向かって進んで行く。

「お客さん、見たところスキーやスノボーをしにきたようではないみたいですが……こんな大雪の降る雪山に何をしに行かれるのですか？」

「…………彼女と二人の想い出を作りに来たんです」

「私が小さい頃によくお父さんに連れてきてもらってスキーしてたんです。だから彼氏に無理言ってついてきてもらって……」

「そうですか。スキー場は中腹の駐車場から五分ほど歩けばリフト乗り場が有りますので。リフトから下りてからはあまり上へ登らないほうが良いですよ。では着きました。２５０００円になります」

「ではこれで……お釣りは結構です。ありがとうございました」

「５０００円もチップ戴けるんですか！？　本当にありがとうございました！」

普通の冬服程度の軽装で、何の滑る板も着けずにリフトに乗っているニ人の姿はかなり異様であったが、周りの目からは降りしきる大雪のお陰で少しは誤魔化せていたのかも知れない。

「わぁ～！　懐かしいなぁ。小学生の頃よく見てた景色だよ」

「ほんと利奈ちゃんはスキー好き少女だったたんだね！」

「うん。お父さんが事故で死んじゃってからは全く来なくなったけどね……」

「お母さんはスキーやらないの？」

「やらない。嫌いだし」

遥か遠くにある崩れ落ちた絶壁を目を細めて見詰めながら呟く白川利奈。

「なにか事情があるんだね……」

「……お父さん十年前に再婚したの。実の母じゃないんだ。本当のお母さんは男を作って私とお父さんを残して家出しちゃった」

しばらく沈黙が続く二人乗りのリフト。

５００ｍほど上部の終点に着いた。

他のスキー客とは正反対の山頂方面へ登りだす二人。

１００ｍほど登った辺りで二人は仰向けに寝転がる。

粉雪は遠慮することもなく二人の身体に降り積もってゆく。

「本当に僕と一緒に死んでくれるの？　利奈ちゃんだけでも引き返してくれないかな？」

「何度も言わせないで。お父さんに死なれてからは人の汚くて醜くて残酷な部分ばかり見せられて育ってきた私がやっと見つけた福田先輩。その大切な人が死ぬと決めたんだから……私も死ぬの。一人では死なせないんだから」

「そうか……あんな状況でも利奈ちゃんとキス出来たこと……嬉しく思ってるよ」

「私も。鬼畜野郎に汚されちゃったから福田先輩とセックスできなくなって本当にごめんなさい。こんなことになるならもっと早く福田先輩とセックスしとけば良かった……ごめんね」

歯を食いしばり、唇を噛みながらすすり泣く白川利奈を、福田哲也は優しく抱き締めてキスをした。

舌を入れての濃厚なディープキスは数分……数十分……続いてゆく。

「愛してるよ利奈ちゃん……」

「愛してる……福田先輩……」

——東部地方、菅野邸。

『午後6時のニュースです。本日、北東地方にある北東アルプス、通称北日本アルプススキー場にて、高校生二人の遺体が発見されました。二人のうち男性の方は、先月の駅伝大会にて最終区域を完走し、準優勝を決めた高校三年生１８歳の福田哲也さん。女性の方は、同じ高校に通う高校二年生の１７歳、白川利奈さんと二人が所持していた学生証から確認されました。

通報者の証言によりますと、「スキー禁止区域に登っていく男女二人の姿を見たが、降りてくる気配が一向になかった。あまりに長時間姿を見なかったので、まさかと思って一応通報したが最悪の事態となってしまい、もっと早急に通報しなかったことを後悔している」とのことです。警察では目撃者の証言をより詳しく聞くと共に、自殺や事件性の有無についての確認を急いでおります』

「高校生の自殺か？　命をなんだと思ってやがる！　若いのにカップルで心中とか悲しすぎないか莉央？」

「そうだね。でも自殺するにはそれだけの理由があるんだよ。その

悲しみや辛さは本人にしかわからないものだから……ましてやのうのうと気楽に生きてるお兄ちゃんなんかには死んでもわからないと思うよ」

「おいおい！　言ってくれるじゃねぇか！　残酷に人を拷問処刑できるお前が言うセリフかよ？」

晩御飯を食べながらニュースを見ていた菅野莉央と京介に冷たい空気が流れる。

「京介！！　何てことを言うんだい！？　莉央は可哀想な遺族のために心を鬼にして仇を討ってくれてるんだ。ヘタレのあんたが生意気言うんじゃないよ！」

「お婆ちゃん、もういいよ。お兄ちゃんの言うことも一理あるから」

「へ、ヘタレだと？……わ、悪かったなヘタレで！　こんな不味い夕飯もういらねぇよ！　ふん……もう寝るわ」

拗ねた京介は夕飯を半分以上残したまま自分の部屋に去っていった。

「こんな若くして自殺なんて……さぞや辛いことがあったんだろうね莉央」

「そだね。もしカップルだったのならせめて天国では結ばれて欲し

いよね……」

――明くる日。中部星蘭高等学校。

グランドで準備運動を行っている一人の三年生男子がいた。

「駅伝は終わったが俺が目指すのはオリンピックだ。世界一になってやる！」

颯爽と走り始める男子生徒。
グランドを一周もしない内に、制服を着た一人の少女がスタート地点から走り始めるのが見えた。

『ん？　あの子……見かけない制服だな……どこかの高校生だろうけど……俺を追いかけているつもりか？　はは。面白い！　周回遅れにさせてやるぜ。舐めんなよガキが』

駅伝大会ほどのペースにスピードを上げる。

『あれ？　引き離せないぞ？　それどころかどんどん迫ってくる？　ば、バカな!？　くそう！　こうなったら本気で走ってやるっ！！』

ラストスパートほどのスピードへ加速するが、差は縮まるばかり。

どんどんと迫ってくる制服を着た少女は遂に三年生男子の真後ろにピタリと付けた。

「うわっ！？　な、なんだお前っ！？　舐めるのもほどほどに……」

そう言いかけた時だった。

遂に見かけない制服の少女は三年生男子を軽やかに抜き去った。

どんどんと引き離してゆく。

あまりのシュールな現実を理解できないまま周回遅れにされてしまった。

「嘘だろっ！？　この俺が女ごときに周回遅れに……嘘だろおおおっ！！」

あまりのショックにその場に崩れ込む三年生男子。

更にもう一周回ってきた身長１５０ｃｍほどの小柄な少女は崩れ込む三年生男子の前に立ち、静かに話し掛けた。

「えへっ♪　坂田敏郎くんだね？　ちょっと私と一緒に来てくれる？」

「なんで俺の名前を知ってるんだ!?　無茶苦茶速いし……何者なんだよ一体お前は!?」

中部星蘭高等学校の裏山にある空き地へ付いてゆく先月の全国駅伝大会最終区間、大逆転優勝を達成した三年生男子の坂田敏郎。

「私は高校一年生、１６歳の坂本江美ってゆうの」

「し、知らねぇなそんなやつ……どこの高校だよ?　女子高校か?」

「それは内緒。そんなことより私と喧嘩してくれない?　素手の殴りあい。もちろん蹴りも有り」

「ア、アホかお前!?　男子三年生の俺がどうして女子の一年生なんかと殴りあいなんかしなくちゃいけないんだよ!!　死んじゃうかも知れないぜ?　お前……」

一分後、顔面をボコボコに腫らした坂田敏郎が、鼻血をドボドボと流しながら土下座をして、一年生の小柄な女子高生に詫びを入れている姿があった……。

「な、なぜそんなに強いんだ……いくら喧嘩素人の俺でも女の子に一発の拳も蹴りも入れられないなんて……もう無理です。許してください」

「えへへ♪　今からバスに乗って私と一緒に来てもらうから。いい

わね？」

「は、はい。荷物を教室から取って来ますので少し待っててくださ
い……」

フラフラしながら裏山から校舎の方へ降りてゆく坂田敏郎。
後ろから高校一年生の坂本江美が呟いた。

「荷物はいいからそのままバス停に来て」

「え？　だって用事の後家に帰るから荷物は持っていっておいた方
が……」

「荷物はいらない……もう一生使うこともない……」

「え？　一生？　何ですって？」

よく聞こえずに聞き直しても答えてくれない少女。
しばらく無言で歩いて校舎を通り過ぎて、中部星蘭高等学校前の
バス停へ辿り着いた。
間もなくバスが到着する。
そのまま黙ってバスに乗り込む二人。

しばらく走り続けては乗り換え、また乗り換えて、とある女子高
校前のバス停へ停まる。
キャーキャーと黄色い声をあげて騒ぎながら、授業を終えたバス
通学の女子高生たちが２０人くらい乗り込んできた。

「坂田敏郎！　ズボンとパンツを脱いで下半身素っ裸になりなさい」

「えっ！？　今なんと！？」

聞こえていても、あまりにも信じられない内容に思わず聞き返してしまう坂田だった。

「この最前列の席から、真ん中の通路を通って最後部まで行って戻ってきなさい。下半身素っ裸でね」

「ちょ、ちょっと待ってください坂本さん！　こんなボコボコに腫れたイビツな顔の男が振りチンで女子高生たちの前を歩こうもんなら……大騒ぎになって逮捕もんです！　ご勘弁を……」

「やらないと今すぐに睾丸握り潰すから。いいのね？」

「ひいっ！　や、やります！　ごめんなさいっ！！」

坂本江美の半端ない強さを知っている坂田敏郎は慌てて運動着である短パンとパンツを脱ぎ、下半身スッポンポンで後部座席へと歩きだした。

「きゃあっ！？」

「やだっ！！　変態っ！！」

「いやあっ！？　なにこの子っ！？」

それぞれに顔を真っ赤にしながら叫び散らす女子高生たちの真横を通り越しながら歩いてゆく坂田敏郎。

最後部席まで行って、再び最前列まで戻ってきた頃には全員の視線を釘付けにしていた。

「オナニーして射精しなさい。もし射精出来なかったら頭かちわってぶっ殺すからね？」

普通なら冗談と思えるセリフだが、完全に本気と分かっている坂田は出来るだけタイプの女子高生を見付けて、その子を見ながら猛烈な勢いで勃起させたペニスをシゴキ始める。

当たり前のように更に大騒ぎになるバスの車内だったが、運転手は坂本江美に『知り合いの少年が漫才の練習をしている』と、嘘をつかれて平然と運行を続けていた。

「うっ、イクっ……イクううっ！！」

『どぴゅっ！　どぴゅぴゅぴゅぴゅぴゅうっ！！』

遂に大量の精液を辺りに飛ばしまくってしまう坂田敏郎。

「きゃあああっ！？　なんかチンポから飛び出したっ！？」

「最低っ！！　ほんとに射精するっ！？　この変態っ！！」

泣きながらパンツを履きかける坂田に、坂本江美が怒鳴り付ける。

「誰がパンツを履いていいと言ったの？　そのまま次のバス停で降りるの！　分かった？」

「は、はい。分かりました……」

とある埠頭にあるバス停で降りる二人。

最後まで下半身素っ裸にされた坂田敏郎を、恥ずかしげに紅潮させた頬のままで最後まで見送ってくれる女子高生たち。

埠頭にある倉庫の南京錠を開ける坂本江美。

「さぁこの倉庫に入ってくれる？」

言われるがままに埠頭の倉庫に入った坂田敏郎は、坂本江美に上の服まで脱がされてスッポンポンにされたまま、柱に縛り付けられ

る。

「明日の朝、楽しい所に連れていってあげるからこの倉庫で大人しくしてるのよ？　いい？」

「ちょ、ちょっと、こんな汚い倉庫に素っ裸で縛り付けられちゃ寒くて死にそうです……ほどいてください！」

半泣きになって許しをこう坂田だったが、高校一年生の少女は倉庫の扉を閉めて南京錠を外から掛けて去って行った……。

夕方、小学生であり、アイドルである拷問処刑人の菅野莉央に特殊任務省の藤堂長官から電話が入る。

『久しぶりだな菅野莉央くん。アイドルと学生と拷問処刑人は全て両立できているかね？』

「アイドル活動を少し抑えてもらってるのでどうにか出来てます。新しい拷問処刑任務ですね？」

『そうだ。今回の残酷処刑島での処刑執行人は……死刑囚坂田敏郎は菅野京介と坂本江美』

「お兄ちゃん……今回は運転手じゃなく拷問処刑人なんですね気の毒に……坂本江美って誰ですか？」

『日本で最南端の南西地方にある南西女子高校一年生、坂本江美だ。内緒と言われてるからワシから聞いたことは忘れてくれ。とゆうか聞いてないことにしておいてくれたまえ！　分かったな？』

「分かりましたから早く続きを話してください」

『うむ！　幼い頃、彼女が四歳の時、両親を居直り強盗に目の前で惨殺されて、生きる希望をなくした彼女を引き取ったのが、闇の総合格闘技の元チャンピオンである坂本十兵衛さんだ。名前も坂本に改名し、１６歳になる今まで1日たりとも休まずに格闘技だけを訓練され続けてきた彼女は……その辺の大人の男性でも敵わない強さを持っている。これから君たちの力となってくれるだろうからよろしく頼むぞ』

いきなりの最強現る宣言に、一瞬動揺しながらも一呼吸おいて更に質問する莉央。

「その坂本さんって……美紅ちゃんより強いですか？」

『……話にならんな。彼女は今のところ最強だとは思うが、坂本江美と比べればライオンと子猫だ。絶体喧嘩売るなよ？』

「は、はい。でもどうしてそんな強い人が拷問処刑人に加わることになったのですか？」

『これから先、どんな屈強な人物と戦うことになるかも知れん……鬼頭美紅と君の戦闘力はかなり高いが、更に保険をかける必要があ

ると思ったからだ。拷問処刑人がやられる訳にはいかぬからな』

「お兄ちゃんがもう少し強くなってくれればいいんですが……。でもいざとなれば特殊任務省の精鋭部隊の方たちもいるし。本当に必要なのかな……。処刑執行は坂田敏郎だけですか？」

『いや、鬼頭美紅の住む地域である東部地方南部の甲南高校三年生、谷川悦司と、上島きららとゆう女子高生もだ。合計三人の拷問処刑を命ずる！　知っているとは思うがつい先日のカップル凍死事件は今回の三人が招いた惨事である。法律では大した罪に問えないので特殊任務省で制裁するのだ。今から兄の京介くんと共に、鬼頭美紅を連れて甲南高校へ赴き、その二人を埠頭の倉庫へ運んで監禁しておいてくれ。坂田敏郎は坂本江美が既に監禁しているはずだ。明日の朝一から残酷処刑島へ運ぶ。君たちも明日は学校を休んで残酷処刑島へ渡ってもらう』

「上島きららと谷川悦司は誰が処刑するのですか？」

『坂田敏郎は坂本江美と菅野京介に任せておる……。谷川悦司は君と鬼頭美紅。上島きららは富田美香と結城明日香の組み合わせで執行してくれ！　では明日の朝、例の埠頭に集まってくれ。よろしく頼むぞ！』

兄である菅野京介に全てを話した菅野莉央は、直ちに真っ赤なマーチで鬼頭美紅の自宅へ向かう。

三人で甲南高校へ向かい、取り敢えず陸上部の部室へ向かった。

たまたま集まっていた内の、二年生である滝山七海を菅野莉央が殴る蹴るでボコボコにした上で、性器に手首まで腕を突っ込み、処女膜を突き破った。

共犯である二年生の滝山と、三年生の岸谷の二人は、残酷処刑島での拷問処刑は免除されたものの、かなり痛め付けておくよう藤堂長官から指示されていたからだ。

岸谷は、鬼頭美紅がこれまた殴る蹴るで半殺しにして、ズボンとパンツを足首まで脱がせ、カッターナイフでペニスを切断、失神している本人の口へ尿道口側から捩じ込んだ。

上島きららと谷川悦司は、菅野京介が説得して真っ赤なマーチに勧誘した。

一緒に付いてきたら悪いようにはしないと言いながらも、二人を埠頭の倉庫へ連行してきて、柱に縛り付ける。

これで明日の残酷処刑島での囚人が三人とも揃ったわけである。

藤堂長官の命令通り、今回は小野メグと、大野真子の中学生コンビは残酷処刑島に呼ばれなかった。

称賛と憤怒の果てに　（中編）（後書き）

拷問処刑人の選出も終わり、美少女たちと、変態男による拷問処刑が開始されようとしている。

坂田敏郎は、新しく処刑人となった１６歳の女子高生である坂本江美と、菅野京介の担当となった。

変態だが気の弱い菅野京介。今回も……？

称賛と憤怒の果てに　（後編）（前書き）

ついに始まる残酷拷問処刑。

最低のクズたちに最恐の裁きが始まる……。

称賛と憤怒の果てに　（後編）

――明くる日。

三人の拷問処刑の日がやってきた。

六人の拷問処刑人と、三人の死刑囚は目隠しされたまま、ある島へ連行されていた。

一月の粉雪が舞いちる肌寒い残酷処刑島である。

陸上部である高校生三人の処刑が執行されようとしていた。

十字架型の磔台にくくりつけられた三人の内、ただ一人のみ素っ裸にされている坂田敏郎の処刑から始まった。

「初めて見る人だけど……誰なの？」

チェーンソーのエンジンをかける高校一年生の坂本江美を見ながら菅野莉央に問い掛ける女子中学生の鬼頭美紅。

莉央と同じ小学六年生である結城明日香と富田美香も、坂本江美を見つめながら莉央の答えを待っている。

「南西地方の女子高校生らしくて、１６歳みたいなの。無茶苦茶強いらしいから絶対に喧嘩売らないようにって釘刺されてるよ」

「あたしより……強いのかな？」

拷問処刑人の中では現在最強の美紅が問い掛ける。

「小さい頃から闇の総合格闘技のエキスパートとして育った彼女には、あたしも美紅ちゃんも敵わないいんだってさ」

『ギュイイイイン！！』

「えへっ♡　健気な女子高生に何てエッチな所見せてるの？　罰を受けちゃおーね？　ほらほらほらっ♡」

「うぎゃあああぁっ！？」

ほんの一分もかからない内に、坂田敏郎の両手両足は切断され、胴体本体もお腹から地面に叩き付けられた。

顔面も強打して、前歯が三本折れて鼻の骨も折れていた。

気が狂ったかのように泣き叫ぶ四肢を切断されたダルマ状態の坂田の首を木の杭に縛りつける。

「頭くり貫いて脳みそ出しちゃおっかぁ？　えへへ♡」

「ひぎっ！？　や、やめ……」

短くなった手足からドクドクと血を流しながら絶叫を続ける坂田の頭部を、耳の真上くらいから円を描くようにチェーンソーが一周した。

「痛み止の麻酔も打たずにあの仕打ちは残酷すぎるね……」

さすがの残酷少女、菅野莉央も戦慄を覚えながら鬼頭美紅に話し掛ける。

「そうだね。早めにショック死しないか心配だわ……」

鬼頭美紅も、坂本江美が死刑囚を苦しめる前に殺してしまうんじゃないかと心配していた。

頭蓋骨を丸く切り裂かれた坂田は糞尿を撒き散らしながら喉が枯れるまで叫び続けた。

『パカッ！』

坂本江美は、丸くくり貫いた頭蓋骨を、まるで帽子を脱がすかの

如く頭部から外した。
丸見えになっている脳みそがプルプルと揺れている。
チェーンソーを置いて右手の人差し指で脳みそをツンツンする。
「えへへ♡　プルンプルンだね。興奮しちゃうなぁ♡」
本当に性器を濡らした坂本江美は、バケツの水で下半身の糞尿を流したあと、首の縄を解いて軽くなっている坂田敏郎を持ち上げた。
「ほれ高い高ぁーい♪」
「うぎゃあああああっ！！　ンギイイイイイッ！！」
「大袈裟だなぁ。ちょっと手足が短くなって脳みそが全開に見えてるってだけで……えへへ♡」
高さ２０㎝ほどの低いテーブルの上に座らせながらさらに続ける。
「私の初任務のパートナー……菅野京介さんでしたよね？　このプルンプルンしてる脳みそ……犯してみたくないですか？」
「え？　脳みそを……犯すですって？」

高校一年生の坂本江美に対して思わず敬語で返してしまう菅野京介。

少し丸顔の天使のような愛嬌のある顔をしている少女が、痛み止の麻酔さえ打たずにショック死さえ起こしかねないほどの残酷拷問を目前で行う。

わが妹、莉央を越えるかのような残虐性に対して畏れを抱いてしまっての年下への敬語であった。

坂口敏郎と同じように縛られている甲南高校三年の谷川悦司と上島きららは、映画を見ているような現実を受け入れがたい半信半疑な気持ちで一部始終を見ている。

どうみてもリアルだが、あまりのシュールな出来事に、脳が追い付いていないみたいである。

『あのプルンプルンした物体を犯す！？　まさか俺のイチモツをぶち込んで……とゆうことなのか？』

坂本江美の言ってる意味がわかってきた頃にはなぜか興奮してきた京介。

２０㎝ほどの巨根はみるみる内に勃起し、一気に真上にまで成長し、下腹部にピタリと寄り添った。

「お、おうっ！　なんか気持ち良さそうだな！　やってみるぜ！」

少し気になって結城明日香を横目でチラリと見る。

「いいよ。男相手だし……犯っちゃぇノーミソ♡」

明日香のまさかの激励に興奮を限界値にまで高めた京介は、坂田敏郎の脳みそに後頭部からペニスをぶちこんだ。

『ぷるるん……ぐちゅ。ぷちゅん！　ぶちゅん！　ぶちゅちゅん！』

脳みそを腰を振る勢いで突き落として死んでしまわないように、前頭部方向からから坂本江美が脳みそを押さえる。

シワとシワの間を巨大なペニスがピストン運動を始め、ぶちゅぶちゅと聞いたこともないような卑猥な湿り気のあるイラらしい音が辺りに響く。

『ぶちゅんぶちゅんぶちゅんっ！！』

「ほがあああっ！？　げひへへへぇっ！！」

京介のペニスが脳の一部を傷付けたのか、目玉をグルングルン回

しながら鼻血とヨダレをドボドボ流しながら……奇妙な喘ぎ声をあげ続ける悲惨な坂田敏郎。

「えへっ♡　ぐるぐる目玉回ってるよ？　面白い顔してるね坂田く～ん♪」

上島きららはここで失神……。

谷川悦二は目をつむって現実逃避に入った。

「うっ、イク……イックうううっ！！」

『どぴゅぴゅぴゅぴゅぴゅうっ！！　ぼこおっ！！　ぷしゅーっ！！』

「はがぺえっ！！！！」

京介の勢いある射精で、裏側から精液に押された二つの目玉が同時に飛び出した。

飛び出した眼球の回りの空洞からは血と粘液の混じった京介の精液がプシュプシュと噴き出している。

全身を短くしたダルマ男は、両手両足の切断部分から激しい流血、脳みそと目玉から血と精液を噴き出しながら激しく痙攣を始めた。

激しく痙攣が続いている途中だが、押さえていた脳みそから両手

を離し、再びチェーンソーのエンジンをかける江美。
「京介さん、ちょっと坂田くんを脇の下から両手を入れて抱き上げていてくれる？」
「お、おうっ。すっげえ痙攣してて怖いんだけど……？」
「えへ♡　エロいよね〜。四肢切断されたまま脳みそと目玉飛び出させて……痙攣なんて。。えへへ♡」
今まで静かに眺めていた小学生の富田美香が同級生の菅野莉央と結城明日香に問い掛ける。
「ひゃあ……痛そ〜。ここまで全く血止めとか痛み止めとか……ショックを抑える麻酔さえ打ってないんだよね？」
「…………そだね。ある意味早くは死ねるから楽かな……と思うんだけど……かなり強烈な生き地獄を味わうことになってるね」
「莉央ちゃんでも感心してるんだ……私たちより残酷なのかしらあの坂本江美さんって……」
鈍い音を立てながら江美のチェーンソーは坂田敏朗の股間へ襲い掛かる。
いきなり垂れ下がったペニスを縦に真っ二つにすると、そのまま

陰嚢のど真ん中を肛門にかけて切り裂いてゆく。

切り裂かれた陰嚢の中央部分からは、二つの睾丸がずり落ちてきて、管に繋がったままプランプランと揺れていた。

「えへっ♪　生の金玉初めて見ちゃったぁ。何かヤらしいなぁ♡　次はお尻の穴を真っ二つにしてあげる♡」

肛門を切り裂いた刃は、そのまま会陰部から前立腺までも真っ二つに切り裂き、一気におへそまで切り裂く。

「ぐわあああああっ！！…………ガクッ」

『ぶりゅりゅりゅりゅりゅっ！　べちゅべちゃっ！！』

大量の大腸と小腸が、江美と京介の足元に降り注ぐ。

「げはっ！？　う、おえええええっ！！」

思わず吐いてしまう京介に構わず引き抜いたチェーンソーを振り上げて今度は水平方向へ滑らせる江美。

血と大腸と小腸が降り注ぎ、血の海と化した足元へ更に首から切断された頭部が、脳みそを振り撒きながら着地した。

頭から内臓へめりこみ、首の切断面が覗いている。

そこからはまだ少し血が湧いて流れ出ていた。

「あの……もうこの死体を離していいか……のでしょうか？」

「いいですよぉ。そのかわりはみ出してる生の金玉がみんなに見えるよう仰向けに落として下さいね♪」

臓器の上にそっと仰向けに四肢のない胴体を置きながら、京介が訪ねる。

「そう言えばコイツはどうして今回拷問処刑になっちまったんですか？　自殺に追い込んだのは同じ甲南高校に通う上島きららと谷川悦司の二名ですよね？」

「あぁ。知らなかったんですね。駅伝大会に勝つために同じ区間を走る福田選手の母親に調子の悪くなる薬を飲ませ、看病疲れに仕向けたらしいですよ」

「そんなにうまくいくものなんですかね？」

「福田選手が帰ってくる前に忍び込んでお茶の急須にでも何か入れたんじゃないですか？　今回のカップル心中事件の一番の立役者はこの生の金玉揺らして死んでるクズ野郎ですよ」

そう言いながら血みどろのチェーンソーを武器を保管してある大きな箱に戻す坂本江美。

富田美香がツッコミを入れる。

「立役者って……日本語おかしくないですか？　悪い意味なんだからそこは〈悪者〉とか〈元凶〉とかだと思いますけどね？」

「…………」

富田美香の問いに完全無視を決め込む高校一年生の坂本江美。

「さぁ私とこの京介さんの仕事は終わったからサッサとこの二人やっちゃってくれる？」

「え？　まさかあたしスルーされた！？　莉央ちゃん、悔しいよっ！」

「お兄ちゃんには敬語まで使って話してたのに……。あたしたちは眼中にないってことかな？」

「あたしがガツンと教えてやろうか？　先輩への礼儀ってやつを」

歩み寄ろうとする鬼頭美紅を右手で抑止する莉央。

「やめて！　あの人はそっとしとこう」

「まさか莉央ちゃん、あたしがあんなやつに負けると思ってるの？」

「……分からない。いい勝負にはなると思うけど……」

絶対勝てないと理解していながらも美紅を思い遣り、言葉を濁らせて話を終わらせる莉央だった。

谷川悦司の拷問処刑が開始された。

暴れられないように、まともに動けない麻酔注射を打ったあと、ベットに拘束し直す菅野莉央。

「マジかよ……絶対嘘だよな？　あんな残酷な殺し方、制服着た可愛い女子高生なんかにできるわけねぇもんっ！　特撮かなんかで俺たちをびびらせてやがるんだろ！？」

女処刑人たちの制服は、高校生まではセーラー服と決められているため、余計に現実味がないみたいだった。

そのセーラー服のまま、甲南中学二年生の鬼頭美紅は、拘束ベッドに上がり両ひざで谷川の胸部を挟み込んで固定すると、初めは平手打ちを何十回と繰り返して、顔面が真っ赤になる頃に拳に切り替えた。

マウントポジションでの顔面殴打がしばらく続く。

鼻の骨が折れて前歯が全てへし折れて、瞼を腫らして原型を留めなくなった頃には、それを見ていたまだ無傷の上島きららが泣き叫び始める。

「もうやめてええっ！！　こんなことする権限なんてあなたたちには無いはずでしょっ！？　おかしいよこんな残酷なことするのっ！！」

「高校生のお兄さん、女子中学生に殴られて嬉しい？　まさか痛いとか無いでしょ？」

「はがが……いらい……いらいうぉ」

「は？　何て言ってるのかわかんなーい」

『ガツ！　ガツ！　ガツ！　ガツ！　ドカッ！！　ドカッ！！』

前歯が無いためまともにしゃべれない谷川悦司を更にタコ殴りにする中学生の美紅。

女子中学生に殴られたとは思えないほど歪な顔になったまま、今度は小学六年生の菅野莉央がそっと傍らへ。

ハサミでチョキチョキと手際よく制服を切ってゆき、拘束されたままでも見事に素っ裸にされた。

最後に残ったパンツを切り取ると、なぜかムクムクと大きくなる男子高校生のペニス。

「あれ？　コイツまさかロリコン？　莉央ちゃんにチンポ見られて勃起したよ？」

「まさか……その顔面事情で勃てないよ。男って死が近付くほどのダメージ受けたら、子孫を残さなきゃ、って本能が目覚めて、死ぬ間際に勃起するみたい」

「へぇ～。そうなんだ。莉央ちゃんはなんでもよく知ってるね？」

「何でもは知らないよ。エッチ関係だけ」

「え？　エッチ関係そんなに詳しいの！？」

「うふふ♡　あたしの一番の趣味は……性器破壊だから♡」

そう言いながらいきり勃っている谷川のペニスを左手でキュッと握り、高速でピストン運動を開始する莉央。

「さっきの男は気持ちよくさせないで殺しちゃったのにコイツだけイカせるんだ？　まぁいいけど」

「イカせるけど射精中にとんでもないことが起こるんだよ美紅ちゃん？」

「そーなんだ……一体何を企んでるだ莉央ちゃんは？　あははあ、もう時間あまり無いからその女の処刑も同時進行でやってくれる？　明日香ちゃん」

「あ、はいっ！　じゃあ私たちはこの最後に残った人、やっちゃお美香ちゃん」

「ほーい。あたしの名前は呼んでくれなかったね……美紅さんめ……」

「ははは。美香ちゃんから喧嘩売ってたじゃん以前に……さぁそんなこと気にしないで拷問処刑を開始しましょ」

「はーい！　そだね。う～ん……あたしから喧嘩売ったつもりはないんだけど……ま、いっか！　じゃあ甲南高校三年生の陸上部エースである上島きららさん、今からこのツインテールの小学生美少女富田美香様と、ポニーテールの小学生結城明日香が貴女を処刑しちゃいまーす！　覚悟してね♡」

十字架型の拘束台に固定されたまま、ひたすら固く目を閉じて現実逃避を続けている上島きららに対し、腕を組んで大きく両足をひらき、かなり偉そうな格好で処刑宣言を通告する美香。

「自分には〝美少女〟が付いて、更に〝様〟まで付いてるのに私はただの紹介な上に呼び捨てなのね……」

「何か言った？　明日香ちゃん？　サッサと悪者女をギッタギタにやっつけちゃうよ！？」

「はは……そだね。始めますかじゃあ……」

美香と明日香は、上島きららの拘束具を外して、自由に動けるようにする。

「わ、私をゆ、許してくれるの！？」

祈るように手を組ながら全身を震わせる上島きらら。

「まさか。脱がすの面倒臭いから自分で全裸になってもらおうかなって思っただけだよ。あたしは稀代のめんどくさがり屋さんなんだ」

「私も。早く素っ裸になってもらえます？　急いでますので私たち……」

思い通りの行動を取る上島きららを見ながら大爆笑をする美香と明日香の二人だった。

全速力で浜辺の方向へ駆け出した。

ひたすら走るが、なぜか彼女を襲う嫌な予感……。

『パンッ！』

乾いた音がしたと思った瞬間、右の脹ら脛に人生で初めてクラスの激痛が上島きららを襲った。

倒れ込んで動けなくなる。

右手で押さえると、掌は血で真っ赤に染まっていた。

数ミリ程度の小さな穴からドクドクと血が噴き出してきていた。

「明日香ちゃん、上手だよっ♪」

「やっぱり銃撃って逃げてる獲物を撃つのが面白いね！」

美香と明日香はゆっくりと上島に近付き、血止めと痛み止の麻酔を脚に打つ。

「さ、服を脱いでもらおうか？　陸上部のおねえさん♡　あたしはスポーツする人の裸ってスッゴい興味あるんだ」

「締まりがよさそうだもんねっ！　あんなとこやこんなとこも……うふふ♡」

「明日香ちゃんってばエッチ！！　筋肉以外にどこが締まりあるってゆうのっ！？　あはははは！！」

諦めて少しずつ制服を脱いでゆく上島きららだった。
ガクガク震えながら涙が頬を伝う。

――――一方、ベッドの上でぼこぼこに顔を腫らしたままイキそうになっている谷川悦司は、ついに我慢の限界が来た。

『うっ……こんな小学生のガキに手コキでイカされるなんて……ちきしょう……うっ！！』

『どぴゅっ……』

『グサッ！！』

射精の一回目の噴射が終わるかどうかほどのタイミングで、尿道へ突き刺さる金串……。

莉央の右手に握られていた金串は、尿道口からペニスを貫通し、膀胱にまで突き入れられた。

普通のオナニーなら、これから何度もドクドクと精液を射出し、気持ちいい瞬間が数回続くばずの射精……微かな瞬間のみの快感で、あとの９０％は地獄の激痛が谷川悦司を襲った。

それくらい菅野莉央の反応は俊敏だった。

「ぐわあああっ！？　ひぎゃああああっ！！」

ペニスの付け根ほどまで金串を引き抜き、今度は左手に持ったメスで一刀両断。

スパッと一気に根元から切断される勃起したペニス。

切断されながらも尿道口から夥しい量の精液と血液が射出し続けている。

グリグリと金串の中央までペニスを串刺しにしてゆく。

切断面から切っ先が突きだした。

「チンポの串焼き……毎度あり♡」

「ぐぎゃああっ！！　ひぎいいいっ！！」

「あらあら……スッゴいえぐいこと考えるね莉央ちゃんは……あたしにボコボコに殴られても泣かなかったのに莉央ちゃんにチンポチョン切られて串刺しにされたら大号泣ってか？　あはは♪」

携帯用のガスコンロに網を置き、ペニスの串焼きを始める。

「あたしはね……性器とゆう性器は全て破壊しなくちゃ気が済まないから……」

「やめでえええっ！！　なんでもしますからゆるじでえええっ！！　うわぁぁあんっ！！」

高校三年生の男子陸上部……鍛えられた肉体の成人男性が、アイドルであり、小学生の女の子に号泣させられる。

かなりシュールではあるがこの残酷処島では当然のごとくこれまでにも繰り返されている。

陰嚢中央部にメスが入ると、白っぽい生の睾丸がズルリと二つ飛び出してきた。

ここまでは号泣レベルだった。

小さな白い手で生の睾丸をきゅっと握り、右の睾丸を真っ二つにする。

絶叫をあげてブルブル小刻みに身体を震わせて堪えているが、更に１０回ほど薄く切ってゆく。

睾丸の薄造りができた。

更に残った方の睾丸へ、２０回ほどメスを入れて、更に薄いお造りを完成させる莉央。

薄く刻んでも皮一枚で微かに繋がっている状態の、下手くそがやるお造りだった。

もちろんワザとである。

精管や神経が睾丸に繋がっているため、地獄の激痛がメスを入れる度、下腹部に襲い掛かるわけだ。

「うぬうっ！！　ふんぎきぎいいいいいっ！！　んぎいいい……」

白目を剥いて小刻みに痙攣しながら泡を噴いている。
キンタマ潰しの比ではない、睾丸切り刻み薄造りの刑……。
莉央の考えた地獄のえん魔さまもビックリの拷問だった。

ここでコラボレーションを思い付く鬼頭美紅。

「このキンタマの刺身、あの女にご馳走しない？」

「そうだねっ！　それいいよ！」

美香と明日香のほうをチラッと見てみると、時間がないとゆうのに時間をかけて楽しんでいるようだった。

上島きららに素っ裸で変なポーズを取らせたり踊らせたりしている。

「きららさーん！　両足を思いっきり開いてくれる？」

頬を赤くしてスケベな笑みを浮かべながら富田美香の命令が下る。
「恥ずかしい……許してお嬢さん」
「子宮と卵巣が見えるまで開いたら命は助けてあげるわよ？」
結城明日香もにやけながら囁く。
少しでも可能性があるからと、思いっきり開脚して、両手で性器を拡げて見せる上島きらら。
パッカリ開かれた性器の奥には子宮口が見えていた。
「やだ……ヤらしい……膣内と子宮までも丸見えだね明日香ちゃん♡」
「そだね。あれ？　まんこに泡が見えるよ？……まさか少し濡れてる？」
「あははは！　小学生にマンコや子宮見られて濡らしてるんじゃねーよオバハン！　惨めだね？　あはははは♡」
美香がわざとヤンキー風に言い出した。
そこへ莉央がやってくる。
「あれ？　莉央ちゃんどうしたの？　男の方はもう死んじゃった？」

「あの男のキンタマを刺身にしたの。この女にご馳走させてみようと思って……」

「人間のキンタマあたしも食べたいっ♡」

美香ははしゃぐが、全て食べきれば許してやると嘘を付いてからかう作戦に、ヨダレを垂らしながらも承諾する。

「さぁ召し上がれ♡」

美紅が上島きららの髪をつかんで振り回しながら谷川悦司の下腹部へ近付ける。

ペニスの切断面から流れ落ちる血液が、陰嚢内部に綺麗に並べられた薄く切断された睾丸のお造りに降り注いでいる。

「チンポからの血が刺身醤油みたいだね！　美味しそ♡」

美香はヨダレをすすりながら本気で羨ましがっている。

まだ生還への一縷の望みを絶ちきれない上島きららは、泣きながらも睾丸のお造りを口へ入れる。

顔をしかめながら無理矢理飲み込んでいるようだった。
何度も何度も噛み締めて飲み込んでゆく。
その時、後方へお尻を突きだした体勢でいた肛門へ、冷たいものが触れる感覚に一瞬飛び上がる上島きらら。
『ずぷ。。ずずず』
「痛いっっ！？」
富田美香の極太ペニスバンドの張り形が、上島きららのアナルへ少しずつめり込んでくる……。
『ばちゅっ！！　メリメリメリイッ！！　ブチブチッ！！』
「んぎいいいっ！？　ぎゃあああっ！！　やめてやめてやめてえっ！！」
「なにあたしたちに汚い肛門やマンコ見えるようにお尻を突きだしてるのかな？　ん？」
肛門括約筋を五枚ほど破壊した張り形は、ついに直腸最深部までめり込まされた。
S状結腸を貫通し、激痛と共に噴水のような血しぶきが美香の太ももを襲う。

大腸と肛門からの凄まじい出血に必死で耐えながら睾丸の刺身を食べ続ける上島きらら。

「どう？あたしのケツ穴責めは？　気持ちいいでしょ？　空気入ってブーブー鳴らしても許してあげないんだから♡オラオラ！」

『バッコンバッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「ふんぎいいいいいっ！！死ぬううっ！！」

「は？　あんたはこれから死んじゃうんだよ？　あはは♡」

「んんっ！　……食べきりますから……命だけは……許して……」

スカートと太ももは真っ赤に染まっていたが、なりふり構わず激しくアナルを犯し続ける美香。

「ご馳走様でした……でしょ？」

苦痛の中で全て食べきった上島きららの顎を突き上げながら結城明日香が問い掛ける。

「ご馳走……ううっ……でし……痛いっ！！……たた」

「良くできました。お詫びに次は気持ちよくさせたげるね？」

血と大便まみれの張り形を肛門から引き抜き、そのまま膣口へ押し当てる美香。

「や、やめて……私まだ処女なの……やだ……」

「そうなんだ。じゃあ一気に奥までぶちこんであげるよ……ほらあっ！！」

『ばちゅううっ！！　ブチブチブチイッ！！』

「ピギイイイイッ！！」

一気に処女膜を突き破った汚物まみれのイチモツは、上島きららの子宮まで突き刺さる。

絶叫をあげながらおしりを下げようとするが、美紅と莉央が尻の肉を左右から掴んで開きながら上方へ引っ張りあげる。

「はううっ……あんっ！　やはっ！　ひいっ！　やだっ！」

突き入れられるごとに喘ぎ声を出す痴態に、美紅と明日香と美香は大爆笑。

莉央は表情を変えず、焼き終わったペニスの串焼きを、気付け薬を注射して、目覚めたばかりの谷川悦司の口へ無理矢理捩じ込んだ。

「チンポは自分でお食べ♡」

「むぐっ！？　んんん……むうう。グスグス……ムシャムシャ……グスグス……」

「あはは。大の男が泣きながらチンポ食べさせられるなんて……凄いエッチなエズラだわ♡　おいしい？」

「むごご、は……はい。ムシャムシャ……ごっくん！」

全てを食べきった後、金串が足元に音をたてて落ちる。

明日香が拾いあげて、美香の責めが終わるのを待った。

結局あまりにも気持ちよく、ペニスバンドでイかされた上島きららは、頬を紅潮させながら潮を噴いた。

「あ、あんっ！！　はぁ。はぁ。はぁ。」

「あのさ美香ちゃん……気持ちよくイかせてあげるのは少しでも同情出来る死刑囚だけにしといた方が……」

「てへっ！　そだね！　ごめん明日香ちゃん」

小学生の女の子に潮まで噴かされて、イかされた上島きららは、

肛門と子宮の痛みと戦いながらも快楽の余韻に浸っていた。
殺されかけている……とゆう極限の心理が、同性からの責めになど感じない、とゆう彼女の中での常識を覆しているようだった。
膣から引き抜いた張り型からポタポタと鮮血が滴り落ちている。
明日香に髪の毛を引っ張られながら、莉央たちから離れてゆく。
「ほら、元の場所に戻るからこっち来なさい！」
明日香と美香は、分娩する妊婦のような格好で、ベッドに両足を開いて、立て膝の格好で上島きららを拘束した。
明日香は先程の金串を、大きく勃起したクリトリスにツンツンと当てる。
激しくビクッ、ビクッ、と身体を仰け反らせる姿が楽しくて、数十回も続けてから、いきなりクリトリスを貫通させた。
拘束部分から血が滲むほど力を入れて股を閉めようとするが、頑丈すぎて太ももが鬱血するのみだった。
一度抜いては真横から……斜め後ろから……というように、数ヶ所から何度もクリトリスを貫く金串。
貫通させる度に奇声をあげて泣きじゃくるが、明日香はやめない。

美香は肛門に人差し指を差し込んで掻き回しながら、性欲を満たしている。

血塗れになったクリトリスをペンチできゅっと挟み、深呼吸する明日香。

「何するか分かる？」

「んぎいいっ！　ひゃあああああんっ！！」

「泣きじゃくるのみで何言っても聞こえないよねもう……教えてあげる。このペンチで陰核を潰して……思いっきり引き千切っちゃうんだよぉ？　死ぬほど大きな声聞かせてね？　せーのっ……」

両手の握力で一気に潰されたクリトリスはミンチと化した。

この時点で莉央と美紅も振り返るほどの絶叫だったが、更にこね繰り回してからの強烈な引き千切り……。

派手に漏らしたオシッコが宙に舞うと同時に、四方八方にクリトリスからの鮮血が飛び散る。

「いやんっ。クリちゃん潰してからの引き千切りなんて……明日香ちゃんってば……エッチだなぁ♪」

裂けた肛門に手首まで捩じ込んで掻き回しながら頬を赤くする美

香。

「ついでにぁんたの汚い便まみれの直腸……引き摺りだしてあげるね？」

更に奥にある張り形で突き破られて出血が止まらないＳ状結腸を、人差し指と中指を引っ掛けて、一気に直腸ごと引き吊りだした。

『がぼっ！！　ぶりゅりゅりゅりゅっ！！　ズルズル……』

「やん♪　直腸から湯気が出てるぅ♪　ヤらしいなぁ美香ちゃんも……」

「てへへ！　このまま大腸全部引き摺りだしちゃってもいい？」

「うん！　いいよっ」

「わだぢにぎいでえええ……んけえええっ……ぢぬぅ。もうごろぢで……ぎぎぎぃぃ」

「は？　何言ってんの？　キモい声だして……」

どんどん大腸を引き摺り出しながら美香が怒ったように罵る。

「私が翻訳すると……ん～とね。『私に聞いて～。んぎいいい。死

ぬうっ。もう殺して。ひぎぃぃ』って、言ってると思うよ美香ちゃん」

「あはは。なるほど。そんなに簡単に殺さないよ残念だけど。うりゃうりゃあっ！」

直腸からＳ状結腸、下行結腸、横行結腸……ついに大腸最終である上行結腸まで引き摺り出した。

「あら？　急に細くなったね？」

「私が思うに……盲腸みたいな可愛いの垂れてるから……ついに小腸こんにちわ！　だよっ！！」

「ようし！　あとは胃が出るまで小腸引き抜いてやるうっ♪」

「んぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃあああっ！！ぐひひひいいっ！！」

太ももが千切れるほど股を閉めて防ごうとするが、内股から血が出るのみで、拘束バンドは外れない。

全身の激しい痙攣が始まり、どんどん抜かれてゆく大腸、小腸からは温泉のような凄まじい湯気が辺りを包んでゆく。

何ｍ出てきただろうか？

うにょうにょとまるで蛇のようなとぐろを巻いた腸の塊が激しく

痛々しく見える。

「よく生きてるねこいつ……」

「空洞のお腹見てみたいからナイフでかっ捌いてみようか？」

「明日香ちゃん、莉央ちゃんがメスでやるみたいにかっ捌いてやってえっ♪」

まず明日香はサバイバルナイフの切っ先をおへそに突き立てる。
奇声をあげる上島きららを無視して、あばら骨まで一気に切り上げた。
バックり開いた腹部は面白いほど空洞になっており、殆どすべての大腸と小腸が抜き取られていることが分かった。

「これが腎臓、これが肝臓かな？」

「すごいね明日香ちゃん！　パッと見て何の臓器か分かるんだ！」

「大体ね……ん～ん。あっ！　エッチィ～♪」

「なにが？」

ゆっくり手を差し込んで白っぽいヌメヌメしてピクピクしている子宮を握り締める明日香。
グリグリと膣に癒着している肉片と脂肪を引き剥がしながら一気に引き摺り出した。

『ぶちゅちゅっ！　がぼおっ！！　ぷるるるるんっ！！』

「ほらっ！　子宮えぐり出してやったよ美香ちゃん！」

「しゅごーい！　莉央ちゃんみたいにマンコトンネルもやっちゃおう♪」

明日香はお腹側から……美香は性器側から手を突っ込んで、ちょうど恥骨の裏辺りで手をつなぐ。

そのままお互いの手が反対方向からつき出すまで大きく出し入れを繰り返した。

二人がかりのマンコトンネルは、死への激痛となった。

「きゃぴいいいっ！！！！」

拘束されている部分全てが刷り剥けるほど大きな痙攣を繰り返し、白目をむき、血の泡を噴き始める。

「ちょっと待て！　まだ死ぬなっ！」

あわてて手を離してマンコトンネルをやめた二人は、それぞれに

したいことをし始める。

美香は肛門にサバイバルナイフを刃を上向きにして突き入れ、ゴリゴリと会陰部、マンコへと切り裂く。トンカチで恥骨を粉砕し、肛門側から膣、外性器、尿道を真っ二つに切り裂いた。

「ようし！　股関真っ二つにしたよ！」

明日香はハサミで乳首を切り取り、胸元から丸々胸も切り落とした。

『がはっ!?　がくっ……ブクブク』

「ギリギリ死んじゃう前に肛門とマンコ切り裂けたよ〜♪」

「私もギリギリ……おっぱいが……ばっくう〜り♪」

爆笑しながら死体の肝臓、心臓、腎臓、卵巣等すべての臓器を切り取り、抜いてゆく明日香と美香。

臓器に興奮を覚えた二人はあそこをぐちょぐちょに濡らしていた……。

早々と処刑を終えて昼寝している女子高生、坂本江美と、まだ気分悪く半分死んでいる菅野京介の隣に座り込んで最後の処刑を遠目に見守る明日香と美香だった。

『つぷっ……ズボッ！　ぷちゅうううううう』

「はうっ!?　な、なにを!?　ひぐっ!?　冷たい……」

「浣腸だよ。あたしたちの前でブリブリうんち出しながら死んでいって。ほら、全部飲み込め！　汚いアナルから……」

『ぷちゅちゅちゅちゅちゅうううううう』

「あううう……」

莉央と美紅はじっと待つ。

たまらず大便をドップリへり出したあと、美紅が日本刀を鞘から抜いてお尻から近づいてゆく。

「さてお待ちどおさま♪　女子中学生の美紅ちゃんが串刺しにしてくれるって。良かったね外道さん？」

「く、串刺しって……まさかケツから……嫌だっ……お願いだ！　口から差し込んでくれ……早く死にたい……」

『パァンッ！』

「ひぃっ！！」

思いっきり平手でお尻を叩く莉央。

「正解っ！　口からだと簡単に死んじゃうから面白くないの……大人しくお尻の穴の力を抜きなさい」

「いやだ……」

きゅうっと固く肛門括約筋を締め付けるが、美紅はお構いなしに切れ味抜群の日本刀の切っ先をアナルに差し込んだ。

『プツッ！！　ぶしゅうううううっ！！』

「んぎゃあああっ！！」

ほんの切っ先しか差し込んではいないが、裂けた肛門から夥しい血が噴き出す。

サッと血飛沫をかわしながら真横に移動し、ズブズブと直腸からS状結腸をいとも簡単に切り裂き、更にお腹に空間効率よく詰め込まれている小腸をズタズタにしながら口方向へと進んでゆく。

串刺しにする前に、四つん這いのうつ伏せにさせ、首から胴体から殆ど動かせないよう固定し直してあるため、頭を振ることすら出来ずに激痛と戦う谷川悦司。

「目玉……抉り出していい？」

胃まで貫いた美紅の日本刀の激痛で返事も出来ない谷川。

「これ、メスじゃなくて綺麗に眼球をくり貫けるスプーンなの。国に頼んで作ってもらった特殊機器なんだよ？　ほら……」

目を思いっきり瞑るが、瞼ごと切り裂いて眼球に沿ってめり込んでいくスプーン型のナイフ……。

莉央は器用にグリグリと掻き回しながら手首を一周捻らせる。

『ぶちゅっ。。ぶりゅっ。。ポコンッ！』

「んぎゃああああっ！！　ぐひいいいいっ！！」

「そっか。痛いか。ごめんね……でも今日は玉とゆう玉は二つとも許さないんだ……お造りにされた金玉同様……目玉もね♪」

優しくそう言いながら反対側の目玉もくり貫いた。

涙と血を目玉があったはずの部分からからからドクドク流しながら思いっきり奇声をあげる。

「痛い？　次は歯をもらうね？」

口が閉じれないようにする専門の器具を捩じ込み、一本一本奥歯から丁寧に抜いてゆく。

固い歯は、マイナスのドライバーを歯茎に当てがい、ハンマーでガツガツと根元から粉砕させて無理矢理引き抜いていった。

すべての歯を抜かれて頬の痙攣が始まる。

「あはは。そんなに喜ばなくてもいいんだよ？　可愛いアイドルのあたしに無茶苦茶にされて興奮してるんだ？」

頭をよしよしするように撫でる莉央。

美紅は肛門へ突き刺した日本刀をぐるぐる掻き回し始めた。
肛門括約筋は全方向切れてしまい、もはやガバガバアナルになっていた。
器用に日本刀をグリンと回し、肛門部分をくり貫いた。

「莉央ちゃん！　見て見て！　肛門くり貫いたら大腸丸見えになるほどぱっくり開いちゃったぁ♪　あはは！」

「ほんとだ。なんかエッチだね開ききった肛門って…この切り取られた後のヒクヒク動いてる尿道も何かヤらしいよ？」

莉央も顔を赤くして、ペニスの切断面の尿道へ小指を差し込んで掻き回しながらピュッピュッと飛び出す血尿を見て興奮した。

「ウゴウゴ……んふっんふっ！！」

「え？　何をうふんうふん言ってるの？　まだ責めが足りないんだね……わかった。口をあーんしてるついでに……」

莉央は血まみれの口を覗き込み、両目を抉り出されてヒクヒクしている舌を左手でギュッと掴むと、一気に引っ張り出してグリグリと捏ねる。

「ヌメヌメしたヤらしい舌だね？　これも頂戴♡」

『ズ……ズズ……スパッ！！』

メスで一気に根元から切り取った。

「舌ってね……中途半端に切ると残った部分が巻き込んで窒息しちゃうんだよ。知ってた？」

「ほがぼがほがあ〜。ほおほおほおおっ！！」

「あはは♡舌抜かれたら呻き声までもエッチな喘ぎ声に聞こえるね

ぇ？　あのね、お口から美紅ちゃんの刃物がこんにちはするまで死なれちゃ困るのよ。だから根元から全部切断しちゃったんだ。あたしって賢いでしょう？」

「かひゅううっ。かひゅうううっ。」

全身が激しく痙攣を始める。

「ヤバイよ美紅ちゃん！　こいつ死んじゃう五秒前っ！　早くっ」

「うん。汚いケツアナからこの美紅様に串刺しにされて……逝っけええええっ！！」

『グリン！　ブチブチブチぶしゅううつうっ！！』

「ふんごおおっ！？　げぼおおおおっ！！……ガクガク……ガクン」

見事に口から突きだした切っ先には腸の肉片と大便がこびりついていた。

「あはは！　お見事美紅ちゃん♪　口からウンコ出しちゃって……哀れな男だね。くっさ♡」

美紅は一気に日本刀を引き抜いた。

腸から大便から血液から前立腺液から様々な混じり物の液体がパックリ開いた肛門から飛び出している。

「あらら……なんてカオスな……」

「カオスって何莉央ちゃん？」

「よくわからないけど……てへっ！」

視線を感じてチラッと坂本江美を見ると、しばらく視線が合った。なぜかガンの飛ばし合いになってるが、莉央が前に立ち塞がり、邪魔をした。

「さて、もうとっくに迎えの船が来ちゃってるから帰ろ！　美紅ちゃん。ほらほら！」

予定の時間より一時間ほど遅れてしまい、真っ暗闇の中、残酷処刑島を後にする六人だった。

ただ一人男の菅野京介は時化た海での船酔いで吐いていた。

結局吐かないといられない京介の背中を優しく擦る結城明日香だった。

称賛と憤怒の果てに　（後編）（後書き）

二人のカップルを自殺へと追いやった学生たち。

直接手を下さずとも殺人と何も変わらない。

普通に法律で捌いても被害者の無念は晴れない。

特殊任務省の拷問処刑が終わることはこれから先もないだろう。

残酷処刑島にまた新たな屍が三体増えた……。

狂気の教団　（前編）（前書き）

ある所に狂気の宗教……教団施設が存在していた。

信者たちに救いはあるのか？

狂気の教団（前編）

――――――ヨウム改心教。

南西地方の山奥に存在する、信者１０００人を越える巨大な宗教の総本部がある。

朝原翔子とゆう３５歳の女性が、この教団を大きくした創始者であった。

十代で結婚し、双子の姉妹を出産。

現在１４歳になる姉妹は、この教団では朝原翔子に次いで二番目に権力がある。

姉の朝美と妹の沙夜……どちらも母親の朝原翔子を遥かに凌ぐほどの残虐性を持っていた。

ヨウム改心教が設立されて五年ほどになるが、二年前、朝原翔子３３歳の時に、同い年の旦那である朝原文宏の浮気が発覚。

教団の武闘派四天王と呼ばれる元プロレスラーの四人に命じて、教団施設地下の牢に監禁し、妻と娘二人の三人で毎晩拷問を繰り返した。

二年間も殴る蹴るに加え、録な食事も与えられていなかったので、ガリガリに痩せ細り、見るも無惨な姿となっていた。

地下の牢の南京錠が開く音がする。

素っ裸で両手両足をベッドに拘束されている朝原翔子の夫、朝原文宏３５歳。
排便と排尿が出来るように、お尻の回りが直径２０ｃｍほど丸くくり貫かれているベッドであった。
ベッドの底にある大きなバケツに糞尿が貯まっている。
定期的に破棄されてはいるが、数年間風呂に入れていない朝原文宏の身体からは糞尿以上の強烈な悪臭が放たれていた。

「お父さんこんばんは」

一卵性双生児である姉の朝美が拘束されている父に挨拶する。

「今日はね……ちょっとスッゴいことになるよ？」

妹の沙夜が後から牢に入って来ながら囁いた。

「うう、うう。もう父さんを許してくれ……俺はこのままじゃ死んじゃうぞ？」

「ヨウム改心教創始者のグル様であるお母さんを裏切ったんだよ？まさか生きてこの牢から出られると思ってた？」

「そんな甘い考えだから浮気とかしちゃうんだよね。今日はね……お父さんの去勢しちゃうから！　このキッチンバサミで♪」

鈍く光る強烈な切れ味のキッチンバサミをチョキチョキと数回挟み込む妹の沙夜。
残酷姉妹はゆっくりと父である朝原文宏に近付き、姉の朝美がペニスの先端部分を軽く掴み、真上に引っ張る。
「35年間もオシッコ出してくれたこのチンポに感謝するのね？」
「ひいいっ！？　朝美に沙夜……ほんとやめてくれ頼むっ！！　いつものように殴る蹴るだけで勘弁してくれえっ！！」
娘二人にボコボコにされても泣くのを堪えていた父親の文宏であったが、ペニスを切断されるとなってはさすがに平常心ではいられなかった。
泣き叫びながら実の娘である姉妹へ嘆願する。
『ジョキ……ジョキジョキジョキ……』
「ぐあっ！？　ぎゃあああああっ！！」
実の娘に握られたのでは勃起もできない……フニャチンを無理矢理真上に持ち上げられたまま、キッチンバサミは躊躇なく父親のペニスを根元から切断した。
夥しい血液がベッド下部へ用意されているバケツへ流れ落ちる。

「あはは。切断されてるのにピクピクしてる……今日の夜ご飯はお父さん自身のチンポだから。お楽しみに♪」

切断された陰茎の雁首を、人差し指と親指で掴みあげ、父親の眼前でプルンプルン振りまくる姉の朝美が嘲笑いながら囁きかけた。

「お父さん……麻酔もしてないのによく気絶しないで我慢できたね？　次は多分無理だと思うけどね……」

「沙夜、私はこのチンポを台所で唐揚げにしてくるから。それまでにお造り完成させといてね？」

「うん。あたしの包丁捌きはお姉ちゃんより上だから任せといて！」

姉が牢から去った後、浮気をして妻の逆鱗に触れて拘束されてから、最高クラスの絶叫が地下の牢に響き渡る。

器用に陰嚢をキッチンバサミで切り取った後、生で飛び出した二つの睾丸を、一つずつ精管と神経の束を下腹部から引きちぎった。

潰されるのと大して変わらないレベルの激痛が朝原文宏の下腹部を襲っている。

「ほんとは神経繋がってるまま潰してみたかったんだけど……綺麗なお刺身食べさせてあげるためには原型留めたままもらったから」

泡を噴きながら気絶している父親をよそに、用意してあるまな板の上で、見事な包丁捌きでスライスしてゆく妹の沙夜。

――――母親に似て双子の姉妹は目も大きく、整った顔立ちで非常に美しく、この教団に入信した信者の中には、朝原の母子に惚れたとゆう者もかなり多く存在した。

友人がさらに友人を連れてきて、知り合いが知り合いを……親戚までをも連れてくる……。

数年前は百人程度だった信者も、今では千人を越える巨大な宗教に進展していた。

朝原翔子の父親が繊維工場を運営していたが、ライバル会社の巨大工場が隣町に設立され、繊維工場は閉鎖。父親は自殺する。

事故を装っての自殺で、数千万の保険金は娘である翔子のものとなる。

閉鎖した工場を父親の保険金を宛てて改装し、ヨウム改心教を設立したわけである。

面接は朝原翔子と娘である双子の姉妹、朝美と沙夜の三人で行っていたので、集人効果は抜群であった。

この世での金銭への執着や、様々な欲望、憎悪、妬みなど、あらゆる邪心を追放する教えは、美人目当ての男性信者だけではなく、女性や子供、お年寄りまでも沢山入信させることに成功したのであ

った。

朝原文宏は結局、実の娘たちに睾丸を抜かれたことによる外傷性ショックで死亡。
四天王の屈強な男性信者四人に担ぎ出され、教団施設にある火葬場で焼かれて灰となった。

「あはは！　最期は金玉抜かれてショック死だって？　最期まで哀れな男だったのね……もうあの人を拷問できないのは寂しいけど何かスッキリしたわね！　よくやったよ朝美に沙夜」
「もうちょっと苦しめても良かったんだけどね……ねぇ沙夜」
「そだね。あたしが致命傷を与えちゃって……ごめんなさい♪」

学校の体育館以上の広さがある大広間。
朝原翔子が彫刻家に造らせた女神の銅像がある。
女神の銅像を、千人近くの信者たちが毎朝毎晩拝みながら、朝原翔子の創造した経を唱える。
創始者の朝原翔子自身、神仏など一切信じていなかった。
ただ、世の中で様々な苦難に打ちのめされ、心を病んだ者たちが宗教にすがって、道を示してあげることにより心が救われるであろうことは理解していた。

それなりに尤もな経を唱えさせ、信じてお布施を続ければ必ず幸せになれる。
死んだ後も極楽浄土へ行ける。
ヨウム改心教を聖なる存在と信じて疑わない信者たちは哀れなものだった。
なにせ創設者自身が神仏を屁とも思わない偽善者だったからである。

ある信者たちが本来ご法度である私語をはじめた。

「ここに入信した者のうち、３歳から５歳までの幼児を持つ親たちは丘の上に建つ五重の塔にて生活させられているみたいなんですが、ご存知ですか？」

「ええ。実は私の弟夫婦も４歳の女の子がいまして……。一家全員五重の塔に住まわされているみたいなのです……突然見かけなくなったときは心配でしたが、朝原翔子尊女様にそのことを聞いてからは安心しております」

「やっぱり噂は本当だったのですね。夜な夜な悲鳴が聞こえて来るとか、しょっちゅう何かを焼いてる匂いがするとか怖い噂もあるんですよ……」

「まさか……五重の塔は一般信者の住む仕切り小部屋より遥かに優遇された環境だと朝原尊女様はおっしゃってました。心配ないですよ」

――――数日後の深夜零時。五重の塔最上階。

創始者の朝原翔子の双子の娘である朝美と沙夜が遊んでいた。
遊んでいた……とゆうのもおかしなものであるが、確かに二人は
“あるモノ”で遊んでいた。

ある信者の4歳の娘は、姉の朝美。
ある信者の5歳の息子は妹の沙夜が……遊んでいた。

「ほら、もっと舌を入れて!」

4歳の娘、岡田千華は14歳の朝原朝美の性器を舐めさせられている。

「あ、あん。いいよぉ。もっと広範囲に舐め回しなさい……」

『ぺちゃっ……ぺちゃっ……ぐす。ぐす。ぺちゃぺちゃぺちゃ』

何度も頬を平手打ちされ、顔面真っ赤にしながら泣きながら……
必死で10歳も年上の中学生の性器を舐め続けていた。

隣では５歳の男の子である神田裕太が同じく双子の妹である朝原沙夜の性器を舐めている。
　裕太も激しく顔面に暴行を受け、鼻血まで流しながら必死で沙夜の性器を舐め回していた。

「沙夜、今晩のオモチャはどちらも可愛いね？」

「そだね♡　お姉ちゃんのアソコ舐めてる女の子……お人形さんみたいに可愛いよ♡」
「うん！　あ、あんん。可愛い女の子に舐められたら余計に感じちゃうわ……」

　朝原朝美は堪らずに、慌てて全身素っ裸になり、素っ裸にひんむいてある４歳の幼女である千華を抱き締めてキスをする。
　泣きながら抵抗するが、思いっきり顔面を殴られて目を腫らしながら泣きながら朝美のディープキスを受け入れる千華だった。
　散々千華の口内を舐め回したあと、舌を抜いた朝美は、ひたすら顔面を殴りまくる。

『ドカッ！　ガツッ！　バキバキッ！！　グシャッ！！』
「んああっ！？　わあああんっ！！　痛い痛い痛いいいいっ！！　ママァッ！！　助けてええっ！！」

「ママ？　あはは。あんたたちの両親は毒殺されてとっくに死んじゃってるわよ？　焼かれて灰になって施設の花壇の肥やしになっちゃってるわ。うふふ♪」

3歳児から5歳児までの子供を持つ両親は、朝原朝美と朝原沙夜の双子の娘のオモチャに子供を捧げさせられた上に、三階の（永眠部屋）にて毒殺されることになっていた。

創始者である朝原翔子尊女が、娘たちの意思を承諾して決めた凄惨なルールである。

五重の塔地下は隠し部屋となっており、創始者である朝原翔子と双子の残酷娘、朝美と沙夜の三人が寝泊まりしている。

顔面をボコボコに腫らしながら素っ裸で泣きじゃくる4歳の女の子を、更に全身を蹴りまくる朝原朝美。

「ほらほらほらあっ！　あはは！　全身真っ赤にそまっていくねぇ？」

姉に負けじと妹の朝原沙夜も、男児の髪の毛を鷲掴みにして持ち上げてから、何十回とげんこつで顔面を殴りつけた。

「んぎぎぎいっ！？　痛いいいいいいっ！！」

「うるさいなぁくそガキめ」

『バキバキッ！！　ドカドカッ！！　ぐしゃっ！！』

小便を漏らしながら顔面を押さえ、泣きじゃくる５歳男児の裕太。

姉と同じく素っ裸の男児を運動靴を履いたままで蹴りまくる妹の沙夜。

「私、いいこと思い付いた！」

「なぁに？」

姉の閃きにワクワクする沙夜。

「今までのガキどもはここで殺してきたけど、コイツら可愛い顔してるから特別にカップルにしちゃお♡」

「あはは！　カップルってお姉ちゃん……コイツらまだ４歳と５歳だよ？　カップルって……あはははは！」

１４歳の残虐姉妹によってシックスナインをさせられる幼児たち……。

ペチャクチャと恥垢だらけの４歳と５歳のお互いの性器を舐め合う幼児たち。

“舐め合わさせられる”……と言った方が正解だろうか……。

「スッゴいヤらしい光景だよね？　沙夜。……私、また濡れてきちゃった……」

「あたしもだよ。ほら、もっとオチンチン根元まで咥えて！」

そう罵りながら５歳児のペニスを舐める４歳の女児の肛門へ人差し指を勢いよく第二関節まで突っ込む朝原沙夜。

『ズブッ！！』

「やはあっ！？」

思わずペニスを吐き出してしまう千華へ制裁を加えるかのように、人差し指を根元まで一気にぶち込む。

『ぐぽおっ！！』

「痛いいいいっ！！　やめてっ！！　千華のお尻、裂けちゃううううっ！！」

「うふ♪　締まりがいいアナルだね？」

更に中指、薬指まで強引に差し込んで掻き回す沙夜。
幼女の小さなアナルの肛門括約筋は何枚も裂け、激しく鮮血が噴き出す。

「んぎゃあああああっ！？」

辺りは岡田千華の鮮血で真っ赤に染まってゆく。
一気に三本の指を肛門から引き抜くと、大便まみれの指をそのままオマンコにぶち込む朝原沙夜だった。

『ぶちゅっ！！　めりめりっ！！』

瞬時に処女膜は破られ、性器からも大量の血が流れ出る。

「ほら、大腸菌で妊娠してうんちみたいな赤ちゃん産めよ？」

「ひぎゃあああああっ！！」

頭を激しく前後左右に振りながら泣きじゃくる千華。
もう5階歳男児のオチンチンを舐めるどころではなかった。

「ガキどものシックスナインはもういいわ。えいっ！」

姉の朝美は、神田裕太の両足を掴み、思いっきり左右に開くと、マシンガンのような激しい右足の裏側直撃の電気アンマを浴びせかけた。

『ガガガガガガガガッ！！！！』

「げはははははははあっ！！？？」

白目を剥いて泣き叫ぶ男児に構わず膝を思いっきり曲げて、距離を開けてからの一撃！

「ほらあっ！　同時に二個とも潰してやるぅっ！」

『ズドオッ！！　……ぐちゃちゃっ！！』

これはアンマではなく、完璧な“蹴り”であった。
二つの小さな睾丸はぐっちゃぐちゃのミンチになってしまった。
泡を噴いて失神する男児に構うことなく、潰れた睾丸とペニスへ向けての激しい蹴りの連打が浴びせられてゆく。

「ほらほらほらあっ！　ミンチになっても更にぐっちゃぐちゃのび

ちゃびちゃにしてやるんだからぁ♡　あははははは♪」

『ドカドカッ！！　ガガガガガガッ！！』

激しく痙攣を起こした裕太は血反吐を吐きながら絶命した。

死んでも止めない朝原朝美の電気アンマ……ではなく、股間への脚力全開での蹴りの連打。

「お姉ちゃん、そのガキ、もう死んじゃってるよ？」

「分かってる。死んでもグチャグチャになってゆく金玉を想像したら興奮してきちゃって……あは♪　あっ！？　見てっ、沙夜っ！　チンポの皮がズリ剥けて真っ赤な雁首の剥き身が出てきてるぅ。しかも尿道から血が噴き出してるよっ！？　やだぁ……何かスッゴくエッチィ～♪」

靴の裏を男児の股間からの鮮血で真っ赤に染めながらも激しく電気アンマを繰り返す朝美。

神田裕太は蹴り込まれる度に小さな身体を前後に激しく揺らし、口からはヨダレと泡を辺りに撒き散らしながら小刻みな死の痙攣を続けていた。

「はは……さすがにもう止めてあげたらお姉ちゃん？」

「恥骨割ってやろうと思ってね。だからまだ止めたげないっ。それそれそれえっ！」

『ガツッ！　ガツッ！　ドカッ！！　ドカッ！！……ボキボキィッ！！』

「やった！　男児の恥骨割れたよ？　私の足の裏で！」

「お姉ちゃん……残酷ぅ～♡」

恥骨を足蹴りで割られた五歳の神田裕太は、更に朝美のフィストファックをアナルから食らい、肘まで腕を突っ込まれ、大腸と小腸をぐちゃぐちゃに掻き回されてゆく。

卑猥な音を立てながら裕太の内臓は、朝美の右腕によって、睾丸と同じくミンチにされていった。

そしてズルズルと、直腸、大腸と小腸を肛門から引きずり出してゆく……。

「しゅごーいっ！　何メートルあるのこいつの腸……」

頬を赤くしながら腸を引きずり出してゆく姉を見ながら妹の沙夜にもサド心にバリバリ火がついてきた。

恥骨が邪魔をして三本以上入らない幼女のマンコに、地獄の電気アンマをぶちかました。

「ほらほらほらっ。割れろ恥骨っ！！」

『ドカドカドカッ！！』

「や、やめれえええっ！！　いぎゃああああっ！！」

数分電気アンマと蹴りを性器に浴びせるが、岡田千華の恥骨は固く、びくともしなかった。

鈍く光る高校生用の金属バットを手渡す姉の朝美。

「はい。これでぶっ叩いてやったら速攻ぶっ壊れるよ？　幼女の恥骨なんて」

「ありがとうお姉ちゃん。あたしのキックだけじゃ無理だったよ……てへっ♡」

姉の朝美が幼女の両足を掴み、まんぐり返しの体制にさせる。

更に大きく左右に両足を開かせた。

「ほうら、邪魔な恥骨を叩き折ってあげるね？　あんたのマンコ……今からぐっちゃぐちゃになっちゃうよぉ～♪　覚悟しなさいね？」

女子中学生によってぱっくりと開かれた幼女のオマンコは、恐怖

でヒクヒクしている。
沙夜が金属バットを高く振りかぶって、性器に狙いを定めたとき、恐怖でオシッコが噴き出す。

『プシャアアアアッ！！』

「あはっ。きったないの♪　えいっ！！」

『ビュンッ！……ドカッ！！……ぐしゃあっ！！　パキパキ…………』

瞬時に粉砕する幼女の恥骨……。
大陰唇と小陰唇も裂けて、鮮血が流れ出す。
更に数回、何度も金属バットを陰部に叩き付ける。
左右の小陰唇が潰れて千切れかけてピランピラン揺れだした。

「えいっ。えいっ。それえっ！　それえっ！」

『ガンッ！　ガンッ！　ガンッ！』

「はぎゃあっ！？　ひぐっ！？　けぺっ！？　ふぎいっ！？」

女児の性器は膣口、小陰唇、クリトリスまでも原型を留めないほどぐちゃぐちゃになり、尿道らしい潰れた穴からは血の混じったオシッコが激しく噴き出してきた。

肛門までヒットしたためか、裂けた肛門括約筋からも激しく出血している。

「まんこと肛門繋げたら金属バット入らないかしら？」

「試してみようよ♪」

沙夜に言われて笑顔で女児の会陰部をカッターで切り裂く姉の朝美。

「ほら。ぱっくり開いてやった！　あはっ。繋がったよ？　ヤラしい～♪」

金属バットをぶちこんで掻き回す。

口からも血反吐を吐き、ついに岡田千華も激しく痙攣を始めた。

「し、死ぬぅぅ……ぶぶぶぶぅっ」

「死ねっ！　お姉さんが逝かせてあげるからね？　ほらあっ！」

一気に金属バットを肛門から深く差し込む沙夜。

血の泡を噴いて痙攣する千華の顔面を引き抜いた血まみれの金属バットで何回も殴り付ける。

前歯が抜け落ち、頬の骨も粉砕して、目玉が飛び出した。

ぐちゃぐちゃになるまでタコ殴りにする沙夜。

「死ね死ね死ね死ねっ！！　あはははは！」

性器をグショグショに濡らしながら、女児の顔面を殴り続け、脳みそも辺りに飛び散り、ついに頭部はグチャグチャになってしまった。

「ガバガバのオマンコとアナルからズルズル大腸へリ出しながら顔面をミンチにされて……無茶苦茶エロい死に方だね？　千華ちゃん……あたし……イッちゃう……あんっ。あんんっ。いっくうううううっ！！」

自分たちで惨殺した４歳と５歳の幼児の死体を見ながら、自分の指で激しく膣内を掻き回してオナニーして果てる朝原沙夜。

隣では姉の朝美もオーガズムを迎えていた……。

狂気の教団　（前編）（後書き）

教団創始者である朝原翔子。

その娘たちによる残虐ショー。

幼児たちの犠牲は日に日に増えてゆく……。

狂気の教団（中編）（前書き）

どんどんとエスカレートしてゆく狂気の沙汰。

神を信じて入信した一部の信者たちの地獄は続く…………。

狂気の教団　（中編）

「お母さん！　もう処刑できる幼児はいないの？」
　ヨウム改心教の創始者である朝原翔子の双子の娘である朝美と沙夜。
　姉の朝美が母親である朝原翔子にねだる。
「昨夜の二人で最後だね。もう赤ん坊か六歳児から上しかいないよ。もう幼児の処刑は諦めな！」
「つまんないの！　次は小学生の拷問処刑しちゃう？　沙夜？」
「いいねえそれ！　お母さん、小学生でもいいから殺させて！」
　可愛い娘たちの願いを叶えるため、次なる犠牲者を五重の塔に送り込む朝原翔子。
　小学三年生の男子児童二人が新たに拷問処刑された。
　性器は全て双子の姉妹に切断され、四肢切断したあとお腹を割いて内臓を全てえぐり出す。
　腸を引きずり出している最中に男児二名は出血性ショック死にて絶命した……。

――東部地方、夕刻。菅野邸。

「お兄ちゃん、来週の日曜日に入信するから」
「んあ？　妊娠するって？　小学生のお前が？　まじかっ！？」
「まだ来るもの来てないのに妊娠するかっ！　にゅうしん。一緒に宗教に入るの。ヨウム改心教とかゆう」
「な、何でだよ？　俺は神仏なんぞ信じねぇ。信じられるのは己だけよ！　改心したけりゃお前だけ入りゃいいだろうが？」

食後のカフェオーレをすすりながら目を瞑り、静かに続ける莉央。

「藤堂長官からの指令だよ。一般的に見て一番不信なモノを信じてるのね可哀想に……。今回は総員出動だから特殊任務省が手配した車が家まで迎えに来てくれるみたい」
「え～と。俺と莉央と……明日香ちゃんに美香ちゃん……少し南だけど鬼頭美紅ちゃんも同じ東部地方の地区だな。確かに総員となりゃ俺のマーチにゃ積み切れないわな。後の遠方のメンバーたちは？」
「それぞれ別の担当が迎えに行ってくれるみたいだね。全員揃ったら南西地方の教団施設のある手前の町の貸切高級料亭に集合。そこでご馳走食べながら作戦会議だから。当日は朝ごはん控えめにしと

いた方がいいよ？」

「そりゃいいなっ。懐石料理とかムッチャ楽しみだぜっ！！」

立ち上がって両手の拳を握り締めて感動している兄の京介。

莉央はカフェオーレを飲み終えてゆっくり立ち上がり、先に自分の部屋へ向かい歩きだす。

「おばあちゃんご馳走さま。今日のカボチャとニシンのパイ、とっても美味しかったよ」

「そうかい？　隣の若い奥さんからの直伝なんだよ。うまく作れて良かったわ。おやすみ莉央」

「うん、おやすみなさい。お兄ちゃんも早く寝てね？」

すれ違い様パジャマ越しに兄のオチンチンを手の甲でパシッと叩く。

「はうっ！？　な、何しやがるっ！？」

「今回は教団だし。若い女性のターゲットも多そうだから……久しぶりに使わせてあげるよソコ……」

「ほ、ほんとかっ！？　で、でも」

「明日香ちゃんのいない部屋で拷問出来るよう出来るだけ段取りしてあげるから」

「ほんとかっ！？　ははあっ！！　神さま仏さま妹さまっ！！」

台所を去る莉央に土下座をする京介。

つい先ほどまで神仏不信を唱えていた京介に半ば呆れながら莉央は振り向かずに呟いた。

「定期的に誰かをヤれないとまた性犯罪事件起こしかねないから仕方ないもんなお兄ちゃんは……。半人前だからプライベートでの暴力、去勢等の特権も未だに与えられてないみたいだし。今回はごめんね明日香ちゃん……」

莉央は部屋へ戻ると、藤堂長官へもう一度連絡し、一般信者の被害者が増えないうちに明日にでも教団施設へ乗り込めないのかを確認する。

機関銃装備の特殊部隊が教団施設を完全に包囲するためには八人が必要だが、全ての御膳立てが整うのは来週の日曜日になるらしかった。

万が一莉央たちが危機になれば乗り込んで援護する、もう一つは教団施設から外部へ逃れることの出来る八つある門を、全て機関銃を装備して監視するためには最低限必要な人数であった。

警察省よりも情報が早い特殊任務省ならではの配慮である。

中学生の鬼頭美紅、莉央と同じ小学生の富田美香と結城明日香に

も電話して、日曜日に用事を入れないよう一報入れてから眠りについた。

――――土曜日午前八時。ヨウム改心教。

中学生になる子供たちは全信者の中で四人。
三年生の男子二名と一年生の女子二名が、（改心の部屋）とゆう五重の塔一階に誘導されてくる。
教団では朝原翔子の右腕とも言える立役者である大川冬美と小川春美の二人が、全信者の集まる大部屋から連れ出してきた。
二人とも25歳の同い年で、入信当時から朝原翔子に惚れ込み、あらゆる指令を何十人と存在する幹部に伝えたり指示したり、教団の中ではトップクラスの権力者であった。
暗い雰囲気の二人だったが、明らかに美形である。
朝原翔子の双子の娘である朝美と沙夜にもこの二人は気に入られている。
この日は朝原翔子から中学生4人の拷問を命令された。
元プロレスラー幹部四天王のために男子2人の肛門をほぐすよう伝えられた。
「中学生の年頃であるお前たちに大人へなる試練を与える」

ショートカットの美女、大川冬美が、四人の子供たちへ冷たく言い放つ。

「全員服を脱いで素っ裸になりなさい」

黒髪ロングのあどけない顔立ちの小川春美も続ける。

恥ずかしくてしばらく顔を赤くしている四人だったが、春美の平手打ちが全員にヒットしたとき、ついに諦めて脱ぎ始めた。

そのまま四つん這いになって、お尻を大きく突き上げるよう命令する大川冬美。

「命令にはすぐに従わないと容赦しないから。わかった？　一番身体の大きな三年生の少年Ａくん？」

そう言いながら少年Ａの傍らにしゃがみこみ、人差し指をいきなり肛門へ捩じ込む。

あどけない可愛い顔立ちの小川春美だったが、エッチさと残酷性は大川冬美より遥かに勝っている。

「ひっ！？　痛いっ！！」

「痛いの？　お前たちは人生初めてのココを掘られるのよ？　大人になれるの。嬉しいでしょ？」

そう言いながら四人の中では一番美形の男子のアナルを執拗に掻き回す黒髪美女の人差し指。

ぐちゅぐちゅと卑猥な音を立てさせられながらも、少しずつ気持ちよく感じてくる少年Aだった。

「春美ったら一番男前取っちゃって……仕方ないなぁ」

「少年Bもまあまあじゃない？　早くほぐしてあげないと筋肉バカ四天王がきちゃうよ？」

「そだね！　ほら、少年Bくんも……私がほぐしてあげるからお尻の力を抜くのよ？」

冬美が少年Bのお尻を思いっきり平手打ちしながら、左右に臀部の肉を押し開く。

ヒクヒクしながら黒い菊なような少年Bのアナルがパックリ開いて直腸が少し見えた。

「やだ。いやらしい色してる……ヒクヒクさせて……こうしてやる！」

『ズブッ！』

「ああっ！？　やめてっ！！」

「私の人差し指、かなり長いから気持ちいいわよ？」

『ズズズズッ！！　ぐぼおっ！！』

「痛いっ！！」

「あはは。全部飲み込んじゃったぁ♪」

しばらく男子中学生二人へのアナル調教が続く。

女子中学生の二人は、年の近い男子がどうしてこんなめに遭わされているのか……自分たちがどうして素っ裸にされてこんな恥ずかしい格好をさせられているのか……理解できないでいた。

やがて元プロレスラーの屈強な四人が現れると、冬美と春美は少年たちのアナルから指を抜き、同時に立ち上がる。

「女の子二名は性器を……男の子二名は肛門を……それぞれ犯してやりなさい。制限時間は一時間。何度中出ししても構わないから」

小川春美が四人の男たちへ命令する。

「犯し終えたら両手両足の関節をへし折っておきなさい。ヨウム改心教の医学部で生きたまま解剖実験に使うから。殺しちゃダメよ？」

大川冬美も四人へそう命令すると、部屋の隅にある椅子へ腰掛け

て静観し始めた。
それぞれ狙いを定めると、一斉に四人の中学生たちに襲い掛かる元プロレスラーの四天王たち。
濡れてもいない中学生の処女の性器へ根元まで一気に捩じ込まれる極太ペニス。
狂ったように泣き叫ぶ１３歳の女の子二人は、処女膜からの激しい出血と共に、バックでガンガン犯される。
「処女はやっぱりええなあ。マンカスだらけでくっせえけどそれがまたそそるんだよな！？」
「へへっ♪　そりゃ言えるな！　こっちのガキはマンコにぶちこまれたショックで糞漏らしてやがるぜ！？　俺のチンポに掛かったビチグソがそのまま自分のマンコの中に入っていってらぁ♪　子宮まで糞まみれだな……病気になっても知らねーぞっ。がははははっ！！」
『バッコンバッコンバッコン！！』
『バコバコバコバコバコッ！！』
「んぎゃあああああっ！！　痛いいいいっ！！助けてママァーッ！！」
「いやっ！？　痛いっ！！　やめてっ！！　んぎいいいいっ！！」
処女を奪われた上に極太ペニスを深々と捩じ込まれ、激しく腰を振り続けられる女子中学生信者の二人。

あまりの痛みに腰を下げてしまいそうになるが、屈強な男たちは柔らかなお尻の肉を鷲掴みにして思いっきり上部へ引き戻す。

そして激しくピストン運動。

バックで根元までペニスを捩じ込む度に、男の腰と女子中学生のお尻が叩かれてパンパンとエッチな音を立てる。

二人の男は大量の精液をほぼ同時に女子中学生の子宮内へぶちまけた。

号泣しながら腰をペタンと落とし込む隣で、今度は１５歳の二人の男の子が悲鳴をあげる。

少年Ａはどうにか根元までペニスを捩じ込まれ、直腸内に中出しされたが、四人目の男のペニスが大きすぎて、少年Ｂの肛門へ入らない。

無事に一回目の射精を済ませた三人からエールを送られるが、とにかく入らなかった。

頭にきた男は両手の親指を肛門へ捩じ込むと、思いっきり左右にこじ開き始めた。

ミシミシ、メリメリと音を立てる肛門括約筋……。

「ぐわあああああっ！？　やめてくれえええっ！！」

『ミシミシ……メリメリメリメリ……バリッ！！！！』

ついに少年Bの肛門括約筋は引き裂かれ、パックリ開いてしまう。
真っ赤な直腸が丸見えになり、激しく出血し始める。
すかさずペニスをぶち込んで、血まみれの肛門へ激しいピストン……。
白眼を剥いて意識を失う少年Bは、前立腺を強烈に抉られたせいで、無意識に射精をしてしまった。

「ゲヘヘヘッ！！　こいつ、俺にケツ穴犯されてイッちまったぜ！？がははははっ！！」

幹部である大川冬美と小川春美をチラッと見てから、確認をする元プロレスラーたちだった。

「では遠慮なく」

男子中学生二名と女子中学生二名の信者は、両手両足の関節をバラバラに砕かれ、泣き叫ぶ中、第二ラウンドが始まる。
今度は正常位で性器とアナルを犯される四人。
喉も枯れるほどの激痛の中で、性的虐待を受けた四人を残し、元プロレスラーたちの四人は部屋を去ってゆく。
大川冬美と小川春美にキッチリ会釈をしながら……。

「うふふ。中学生のレイプシーンなんてそう見られるもんじゃないからとってても興奮したわよ？　四人の子供たち♪」

「明日はこの教団専属医師のレベルアップのためにバラバラになってちょうだいね？　生まれてきた価値があったわよお前たちは……あまりにうるさいから特別に痛み止めの麻酔打ってあげるね？」

激痛の中でも何となく殺されるかもしれない恐怖を感じとる四人だったが、麻酔注射によって股間と両手両足の激痛は治まってきた。

『チャキチャキチャキチャキ……』

冬美と春美はほぼ同時にカッターを取り出し、刃を出した。

「どちらが先に取り出せるか勝負よ？　冬美」

「うん！　負けないから」

仰向け状態で天井を仰いでいる少年二人のお腹の上に、背中向けで座る冬美と春美。

二人とも何か激しく右手を動かしているみたいであったが、お尻と背中が邪魔をして何をしているか分からない男子中学生二人だった。

自分の下半身を見ながら泣き出す二人の女子中学生に、何か嫌な予感はしたが、その予感は的中することとなる。

立ち上がった冬美と春美の左手には、血まみれの白く丸いものが二つずつ乗っかっているのが見えた。

泣き叫ぶ少女二人の口へ、その丸いものを無理矢理捩じ込んで食べさせている。

「あの……一体何を食べさせたのです……か？」

嫌な予感はしていたが、全身に全く痛みがないので冷静になって聞いてみる少年A。

少年Bも冬美と春美を恐る恐る凝視する。

「何だと思う？　当てたら偉いよ」

「そだね。ちょっと待ってなさいな。今から女子たちも解剖しちゃうからねっ♪」

女性幹部の二人は、同じように女の子に背中を向けてお腹の上に座り直すと、血まみれのカッターを女の子二人の股間へそっと近付けた。

『ズッ！』

『ズブッ！』

同時に女の子二人の肛門へカッターの切っ先が埋め込まれる。
さらに手際よく数回に分けて膣の方向へ切りつける。
何度も切りつけていくうちに、どんどん深く切り刻まれていき、ついに肛門と性器が繋がってしまった。

今度は男の子二人が恐怖で半泣きになる。
横向きなのでまともに見えなかったが、ピュッピュッと真上に上がる血飛沫から、少女のアソコ付近が凄惨なことになってしまっていることは容易に推測できたからである。

カッターを置いてからは二人の観察が始まった。
先ずは大川冬美がパックリ開かれた血塗れの女性器へ手を伸ばす。
クチュッ、クチュッと、音を立てながら中指と薬指で膣内を掻き回す。

「見て見て春美っ！　肛門と膣内の隔たりってこんな薄い膜一枚だったんだね？」

「ほんとだ！　こいつのマンコもそんな感じだね！　へぇ～。うんち通る直腸と赤ちゃんが通るマンコとの仕切りが……こんな薄っぺらな皮一枚かぁ～」

春美も自分担当の少女の肛門側から人差し指を差し込み、ぐちゅぐちゅと掻き回す。

「ねぇ春美。この子ったらマンコ掻き回す度にオシッコ漏らすんだけど？」

「私の方も……果したないわね。二人ともタコ殴りにして金玉失った男の子たちのチンポでもフェラさせるか……」

「春美もタコ殴り好きだね〜。可愛い顔がドザエモンみたいなっちゃうのにさぁ」

「そのボコボコに腫れた顔から涙を流して、糞尿タレ流しながら号泣しながら死んでゆく所が興奮するんだよね私……」

「あはは。実は私もそれ好き♪　じゃあ中学生男子たちが見てる前で……先に女子中学生をシメちゃいますかっ！」

大川冬美と小川春美は、再度向きを変えてマウントポジションをとる。

「さぁ改心タイムだよ。この世での罪を懺悔して今度こそ純真無垢に生まれ変わってきなさいね少女さん。面倒くさいから名前も聞かないでごめんね？」

「あはは。いちいち名前聞かなくても少女AとBでいいわよ。じゃあ改心して逝かせてあげるからねお姉さんたちが……教団医学部の実験台なんかにさせないから安心してね？」

顔面への平手打ちから始まり、頬が真っ赤になって泣き始めてからが本番だった。
容赦ない拳でのタコ殴りが始まった。
悲鳴をあげようとする度に次の拳がガンガン打ち付けてくるため、泣き叫ぶ猶予さえ与えられない。
切り裂かれた股間は麻酔が効いているが、顔面は壮絶な激痛が二人の少女を襲っている。
女性幹部とはいえ、二十歳を越えた大人に身動き出来ないままで本気で殴られ続けたら、大の大人の男性でもその内死んでしまいかねない。
春美の殴っている少女が全身の痙攣を始めた。
座っている腹部からお尻が宙に浮くほどの激しい痙攣だった。
「冬美！　私の勝ちだね♪　もう〝改心懺悔死〟しちゃうよこいつ。トドメの鼻っ面への三発いっちゃお。ほらほらほらぁっ！　死んでこの世での罪を改心しろぉっ♡」
『ガンガンガンッ！！……ビックンっ！！　びくびくびくぅっ！！』
最後に数回、大きな痙攣を起こし、切り裂かれた股間から激しく血を噴き出させてあの世へ旅立った。
「手伝ってあげようか？」

「いや、私一人で始末したい。鉄のハンマー使って頭かち割ってやるわ」

「冬美ってばそれやっちゃうかぁ。脳みそ飛び散って掃除係が大変なんだけど？」

「ふぎぃぃ。。顔が痛い。痛いよおお。助けて……許して……お願いしま……す」

「あはは。お嬢ちゃん、中途半端に前歯二本折れちゃって無茶苦茶間抜けだよ？　このハンマーで上の歯も下の歯も全部へし折ってあげるから安心して……」

『ガンッ！　ガンッ！　ガンッ！』

『パキパキ……パキパキ……パキンッ！』

「はがあえあああえあっ！？　うごおおあえあっ！！」

ヨダレと鮮血をドクドクと口から流しながら訳のわからない呻き声をあげる女子中学生。

痛々しく切り裂かれた性器と肛門……股間からもドクドクと血が流れ落ちている。

もう一つハンマーを持ち出した春美は、ついに頭をかちわ割ってトドメを刺そうとする冬美に嘆願する。

「逝かせるの後一分だけ待って！　お願いっ」

「いいよ。前歯も全部へし折れて顔中ボコボコに腫れて……もう間違えても女子中学生には見えないくらい面白い顔に出来ちゃったから♪　うふふ♡　ちなみに一分で何するの？」

「こうするの♡」

春美はドクドクと流血する股間の少し上部をめがけて激しくハンマーを打ち下ろした。

「きゃぴいいいいいっ！？　うごあああああっ！！！！」

『ひゅんっ！　グシャッ！！』

小川春美の振り下ろしたハンマーは、虫の息の女子中学生のクリトリスを直撃した。
鈍い音を立ててその小さな可愛い陰核は、鉄の塊によって完全に潰されてしまった。

「あちゃ～。まだ生きてるからってソコ潰しちゃうかぁ。ヒッドイなぁ春美は……」

「まだまだいくよっ♡　尿道口も原形分からないほどにぐちゃぐちゃにして、恥骨もバラバラに砕いてやるからね♡」

元々切り裂かれて繋がってしまっている性器と肛門までにも、更にハンマーで叩きのめし、もはや女子中学生の股間はミンチ状態と化していた。

隣の男子中学生二人は睾丸をくり貫かれたことを自覚し始めてきていたが、もはやそれどころではない。

女子中学生二人みたいに更なる拷問を受けて殺される恐怖と戦って震えているしかなかった……。

春美は、ハンマーの柄も器用に使って、膣内を掻き回したりもしたため、内部の膣、子宮までもぐちゃぐちゃの肉片となってパックリ切り開かれたミンチ状の性器からはみ出してきている。

「かはっ！？　ピギイッ！！！」

「あはは♪　ピギイッって何よ？　ウケるわ♡　さて冬美さーん。もうぼちぼちこの子の頭かち割らないと麻酔も弱くなってきてるからマンコの激痛でショック死しじゃうかもよ？」

「ホントだね。じゃあお嬢ちゃん、あなたの脳みそ男子中学生たちと私たちの前にぶちまけて〝改心懺悔死〟しちゃいなさいね？　ほら、逝きなさい……」

『ガンッ！！　ガンッ！！ガンッ！！　ガンッ！！』

思いっきり振りかぶって全身全霊の力を注ぎ前頭部を叩きまくる冬美。

激しい流血と共に、ついにオデコの頭蓋骨も粉砕して白い脳みそが飛び出してきた。
たまに目にも当たってしまい、ぐちゃぐちゃになった目玉もゼリー状になって頬を伝い落ちている。
片方の目はオデコ部分が砕けた衝撃でポンと飛び出してきた。

「あはは！　目玉のオヤジみたい♡」

更に何度も叩きのめし、ついに頭蓋骨もバラバラになって首から上は原形を留めなくぐちゃぐちゃになった。
震える男子中学生二人はあまりの非現実的な光景を見せられ、現実逃避を始める。

「あらあら……何がおかしいの？　少年Ａくん？」
「何がって……私たちが金玉取っちゃったから気が狂ってるんでしょ？　同じ中学生の女の子たちもカルログローチェ状態だし……」
「何よカルログローチェって？」
「悲惨な死体を載せてるサイトだよ。私は色んな死体を見ながらオナニーする癖あるから♡」
「変態だね春美は……」
「人の事言えるの？　さぁもう時間も時間だし……男子中学生ちゃ

んたちも改心して懺悔して死んでもらいましょ？」

恐怖と戦いながらも二人の女性幹部の言いなりになる奴隷のような時間が続く。

男子中学生二人に、それぞれタイプの男子を選び、自分の性器を舐めさせる春美と冬美。

「あん……気持ちいい♡」

「あはあっ！　この子も上手……あんっ♡」

数分間タップリ性器を舐めさせると、皮カムリのペニスを激しくピストン運動する春美。

「お姉さんのテコキ……凄い破壊力でしょう？　金玉無いから射精も出来ないし麻酔が効いてて痛くもないから分からないだろうけど……根元まで皮を引きずり下ろしてるよ？　オチンチンずる剥け状態の血まみれ状態なんだよ？　あはは。えっちぃ♡」

「ひっ！？　や、やめて……くださ……」

『ザクッ』

ずる剥け状態の哀れな血まみれペニスを根元からシレッと切断する春美。

「酷いよ……痛いこと……もうしないで……」

「麻酔で痛覚無いから分からないか……あんたのチンポはもう切り取っちゃった。ようく見てごらん？」

皮を引き剥かれた肉片のような哀れなペニスをブルンブルン振り回して本人に見せつける。

「これは隣の男の子に食べさせるから……もう死んでいいわよ？」

号泣する少年Aの首へカッターナイフを当てて一気に滑らせる。頸動脈を瞬時に切断された首からは天井まで届くほどの血しぶきをあげる。

バタバタと、まともに動かせない手足に力を入れながら股間と首から大量の血を流して徐々に意識を失ってゆく……。

「一丁あがり。出血性ショック死にでご臨終♡」

「春美は気が早いなあ……まだこの子のオチンチンいじりまくっていたかったのに……そうゆう訳だから君も逝っちゃおうか？」

「んんっ!?　いや、嫌ですっ！！　助けてください何でもしますから！」

「じゃあこれを完食出来たら考えてあげてあげてもいいわよ？」

そう言いながら震える冬美の股間から顔をあげた瞬間、先ほど切り取った皮が引き剥かれたペニスを少年Ｂの口へ捩じ込む小川春美。

「むぐうっ！？　おえええっ！！」

血生臭さに堪えきれず思わず吐き出してしまう男子中学生だったが、これは完食できていても吐き出していても運命は変わらない。

パンツとミニスカートを履いて立ち上がると、今まで冬美の性器を舐めていた体勢のまま、うつ伏せ状態で横たわっている少年の、元プロレスラーである四天王に犯されて半開きになっているアナルに爪先蹴りを食らわせる大川冬美。

「はぎいいっ！！！！」

『ひゅんっ！　ぐちゃっ！！』

「あはは！　ぐちゃ、だって。いい音させるなぁ♡　爪先殆どめり込んじゃったぁ♡……スッゴいケツアナ開いちゃってたんだねぇ？　私の靴に直腸の血とウンコ付いちゃったじゃないの？　どうしてくれんの？　ん？」

小川春美が少年Ｂをひっくり返りし、仰向けにさせる。

「ほぉら……美人の女性幹部の大川冬美様にエッチな所踏んでもらいなよ？　うふふ♪」

「やだ。エッチなチンポね……中学生の癖に殆ど剥けてるじゃないの？　今死んじゃったA君と大違いだわ♡」

『ズッ……グリグリ……グリグリ』

「んあっ！？　痛い……やめて……」

「このまま足でイかせてあげたかったんだけど……金玉無いから諦めてね……せえのっ……えいっ！！」

思いっきり振り上げた右足は一気に少年Bのペニスを踵で捉え、尿道から血が噴き出した。

「えいえいえいえいえい♡」

『ドカッ！　ドカッ！　ドカッ！　ドカッ！』

「ぎひいいいいっ！！」

何度もペニスを踏みつける。

……とゆうよりは蹴りつける破壊力だった。

踵の分厚い革靴を履いていたため、ペニスは紫色に内出血し、尿

道からは更に激しく出血する。

「あら少年……痛いの？　麻酔も殆ど切れてんのかな？　冬美お姉さんの足コキで血の射精しちゃったねぇ？　あはは♡」

春美は顎に両手をかけて、首を上部へ持ち上げた。

「はい。トドメの首蹴りでボキッといっちゃお！」

「はーい！　君の御奉仕……気持ちよかったよ……私のパンチラ見ながら逝かせてあげるね？　ほらあっ！！」

『ブシュンッ！！　バキッ！！』

「お見事っ！　さすがサッカー経験者だね冬美♪」

「ありがとう。さぁこの生ゴミ四体を片付けてもらって……ゆっくりワインで乾杯しましょうか？」

「うん。朝原翔子尊女と娘さんたちに栄光あれ！　だね♡」

運び出された中学生男子と女子の四人の死体は、手際よく焼却炉にて焼かれて骨となった……。

狂気の教団　（中編）（後書き）

ヨウム改心教にて更なる被害者が出てしまった。

狂気の教団に鉄槌は下るのか？

狂気の教団　（後編）（前書き）

ついに総動員で敵の本拠地へ乗り込む莉央たち拷問処刑人。

何の罪もない信者たちを、狂った教団幹部たちから守ることは出来るのだろうか？

狂気の教団　（後編）

シトシトと小雨が降り続ける肌寒い日曜日だった。

警察省より上に位置する国の最高秘密機関である特殊任務省の黒塗りの高級車が四台……南西地方のとある高級料亭に駐車されていた。

全室貸切状態の、静まり返った店内の一室にて低い声で話し始める中年男性。

「菅野くん、結城くん、富田くんの小学生三人に……鬼頭くん、大野くん、小野くんの中学生三人。えー……島崎くんと坂本くんの高校生二名か。合計八名だね」

「えっ?!　あの……俺も任命されてるのですが?」

ヤンキー風の２０歳の男が慌てて問いただす。

「お兄ちゃん!　長官の話、最後まで聞いてくれる?」

小学六年生ながらもリーダー的な落ち着きを持つ黒髪ロングの美少女、菅野莉央が兄である京介を諭す。

「ははは。構わないよ菅野くん。……え〜と……女性の合計が八名で、菅野京介くん２０歳、特殊任務省刑務執行員で、自称格闘家……唯一の男性一名だね。」

「は、あ、はい！　ん？　自称って……」

「お兄ちゃん、いちいち言い返さないの」

伊勢海老に松茸、季節を彩る高級食材をチラチラと見ながら反論する兄を威嚇する妹の莉央。

その傍らで、透明に光りながら流れ落ちる液体を、敏感に察知する結城明日香。

「美香ちゃん、ヨダレ出てるよ？」

小声で教えてあげる明日香に一瞬遅れて反応する富田美香。

「んあ？　……えっ？　やだっ？　ごめんなさいっ！！」

無意識のヨダレを拭きながらいきなり大声で謝る美香に藤堂長官と秘書は苦笑いしながら逆に詫びをいれる。

「ははははっ！　こちらこそすまないな。もうとっくに料理は運ばれ

てきてるのに……では皆様方、海の幸と山の幸を美味しく頂きましょう！」

目を輝かせながらバクバクと食べ始める美香に思わず笑ってしまう莉央たちだった。

ただ一人、真顔で食べ続けている最近拷問処刑人となった女子高生、坂本江美。

藤堂長官から作戦の詳細が延々と告げられてゆく。

残酷処刑島での執行とは違い、今回は現場執行となるため、一般信者のいない五重の塔だけで拷問処刑を遂行し、朝までに特殊任務部隊が全ての死体を回収することを先ず最初に説明した。

誰と誰が組んで誰を処刑するのか……等々、皆が納得するまで一時間以上確認を取り合う拷問処刑人の九名と、特殊任務省の二名。

秘書の男は殆ど喋らず、ただ藤堂長官の隣に座っているだけの役割だった。

「ではぼちぼち任務に向かってもらうか……機関銃装備の特殊任務部隊は、既に八つある全ての門に配置してある。あくまでも保険だとゆうことを忘れないようにな。各種武器等は五重の塔攻略前に、八名いるそれぞれの門番から受け取って活用するように」

「はい。では今から向かいます。行きましょうみんな……ん？」

富田美香の視線がテーブル上の伊勢海老のお造りにロックオンされている。

静かに口を開いた。

「あの……長官、その伊勢海老食べないんですか？」

「ん？　あ、ああ。ワシはエビはアレルギーなんだよ。良かったら食べてくれないか？」

満面の笑みを浮かべて音速を凌ぐ速度で美香の箸が伸びる！

『ガツッ！！』

「あれ？」

美香の箸は虚しく空を切り、テーブルを叩いた。

光速を凌ぐ速度で、伊勢海老を盛っている皿ごと引っ張り寄せてガツガツと食べ始める坂本江美。

音速を凌いでも光速には到底敵わなかった……。

「え？　ええっ！？」

事態を把握出来ていない内は驚くだけの美香だったが、目の前で坂本江美の口内へ消えてゆくお造りを見ていると段々と泣けてきた。

「う、ううう。わーん！　わーん！　あたしの伊勢海老があぁあっ！！　ヒドイヒドイヒドイイーッ！！」

大人げない16歳の女子高生も去ることながら、伊勢海老を取られただけで幼児のように号泣する小学六年生の児童。
富田美香の中で、鬼頭美紅以上にムカつく要警戒人物となったのは間違いなかった……。
あまりにも馬鹿らしく、冷たく寒い空気が流れる指令執行前の高級料亭であった。

――――ヨウム改心教。大広間。

「神秘の力が宿る銅像に祈りなさい。愛と無欲の心を授かるのです」
「ははぁっ！！」
千人近くの信者たちがひしめき合う大広間にて、盛大なお経の合唱が始まる。
「偉大なる我が母、朝原翔子を称えなさい！」
「尊大なる我が母、翔子尊女様を唱いなさい！」

美形の双子の姉妹も母の傍らで禅を組んでいる。

『しょうこーしょうこーショコショコしょうこー♪　あ、さ、は、ら、しょうこー♪　翔子ぉ翔子ぉしょこしょこ翔子ぉ～朝原～翔子ぉ～♪』

朝原翔子を讃える大広間での大合唱がしばらく続けられた。

夕方になり、空が茜色に染まり出す頃、双子の姉妹は上機嫌で五重の塔最上階、五階にて談笑していた。

「お母さんのお陰で退屈しないわねほんと♪」

「これだけ何人もの可愛いガキどもを虐待させてもらえたら最高よねっ♪」

静かに五重の塔最上階の扉が開き、元プロレスラーの四天王たちに連れられて小学生らしい少女三人が入ってきた。

「こんばんは。あたしたち両親がいなくて２０歳になる里親に引き取られて育てられてたんです」

「毎日虐待を受けて育ってきたのです私たち……ぐす。ぐす」

「この度その変態のお父さんと四人で入信する運びとなりました。今日は朝原尊女様の双子の娘様であられる朝美さまと沙夜さまに遊んでいただけるとゆうことでお邪魔させてもらいました。宜しくお願い致します！」

ニヤニヤと嘲笑いながら三人の少女を残して去ってゆく四天王の屈強な体格の幹部四人。

「あはは。黒髪ロングの子もーらいっ♪」

「お姉ちゃんずるいっ！　ならあたしはポニーテールの薄い茶髪っ子ね♪」

いきなり抱きついて激しく女子小学生たちにキスをする朝美と沙夜。

「……ぐす。あたしだけ選んでくれないのね……くすん。くすん」

朝原姉妹に抱き付かれなかったツインテールの少女は本気で泣いていた。

意外と傷付きやすい面倒くさいタイプであった。

――ヨウム改心教。大広間。

「本日はたくさん新しく入信してくれたみたいね。鬼頭美紅さん、大野真子さん、小野メグさん、あなたたち中学生の年代の子は小川春美と大川冬美とゆう二人の25歳のベッピン幹部たちが大人への道標を示してくれるわ。五重の塔一階へ行きなさい！」

先ほど五重の塔最上階へ小学生三人を送り届けて帰ってきた元プロレスラーの四天王たちが中学生三人へ声をかける。

「こちらへどうぞ。暗いので俺たちが足元を照らしながらご案内致しますぜ？　へへへ。あれ？　お嬢ちゃんたち、どっかで見たことあるような？」

「俺も思ってたわ。さっき五階へ送っていった奴らもどっかで見たことあるような気がするんだよな……」

屈強な四天王二人が必死に弱い頭で考え始めた。

「何してるのお前たち？　早く送りなさい！　春美と冬美が待ってるんだよ！？」

「へ、へいっ！　行くぞお前たち……ではお嬢ちゃんたち、こちらへ」

ほぼ真っ暗になってしまった砂利の坂道を、五重の塔へ向かって歩き出す幹部四人と美紅たち中学生三人。

「あの、美紅さん……」

「ん？」

恐る恐る問いかける小野メグに、振り向きながら返事をした。

「ほんとに特殊任務部隊の方から武器貰わないで大丈夫なんでしょうか？　一応何かを持っといた方が……」

「あたしたち三人が相手するのは２５歳の女幹部二人だ。そんなもん要らないよ。コイツら元プロレスラーの四天王を相手にする坂本美江とかゆう変な女子高生こそ武器は必要だろ……」

ニヤけながらたまに振り向く男たちには全く聞こえていないようで安心するビビりな大野真子。

しれっと名前を言い間違えた鬼頭美紅にキッチリ知らせてあげる几帳面でもある大野真子だった。

「あの、坂本美江じゃなくて“江美”だったと思いますが……」

『ガツッ……ぐいっ！』

「ひゃあっ！？」

振り向き様後ろを歩く真子の胸ぐらを掴んで引き寄せる美紅。
睨み付ける眼光は相変わらず鋭い。
ガクガク震え出す足元。

「ご、ごめんなさい美紅さんっ！！」

『ちゅっ』

「んっ！？」

いきなりキスをする美紅に固まる真子だったが、隣にいる小野メグの方が焦ってあたふたしていた。

「今度あたしと寝るか？　腑抜けにしてやるぞ？」

「えっ！？　ご、ごめんなさいっ！　あたしはそうゆう気がないんで……ごめんなさいっ！！」

暗闇でも分かるほど顔を真っ赤にして美紅を振る大野真子だったが、当の美紅は爆笑しながら頭を数回撫でて、再び前を向いて歩き出した。
チラッと見ていた親友のメグも、真子を見ながらおどけるように

笑った。

「……ひどいなぁ。メグまで笑うなんて……」

「……何か好きだよあたしは」

「えっ！？　だからあたしはレズじゃないって！！」

「違う違う！　美紅さんのことね」

「マジかっ！？」

暗闇の中、屈強な四天王たちに足元を照らされながらしばらく歩くと古風な造りの五重の塔へたどり着く。

小川春美と大川冬美に挨拶すると、再びニヤニヤと嘲笑いながら去ってゆく四天王たち。

「ようこそ新入りさん。五重の塔一階、（改心の部屋）へようこそ。担当の春美です。宜しく」

「同じく担当の冬美です。中へどうぞ。可愛いわねぇあなたたち♪」

暖色系のＬＥＤ電球が灯され、淫らな雰囲気が増してくる室内。

「実はね。あなたたちはさっきの四天王たちに……」

頬を赤くしながらスケベそうな顔で先頭に立っている鬼頭美紅に話しかける大川冬美。

「四天王たちに？」

今度は小川春美が黒く長い髪をかき上げながら美紅に答える。

「犯されちゃうのっ！」

「え？」

「だ、か、らぁ……。お・か・さ・れ・ちゃ・う・のっ！　あはっ♪」

「そうなんだ……それは嫌だな」

「は？　嫌だな？　誰に口をきいてるのかなお嬢ちゃん？」

『バシッ！！』

思いっきり美紅の左頬をビンタする女性幹部の小川春美。

頬を押さえながら静かに春美を睨み付ける美紅。

恐怖で固まる大野真子と小野メグ。

「男の子の場合はね。未成年だし入らないし痛いだろうから肛門を指突っ込んでほぐしてあげるんだけど……女の子はマンコだからぁ。ほぐさなくてもどうにか極太ペニスが入っちゃうんだよね～。あはは♪」

「でも今日は……女の子でもアナルの方を犯したいみたいなのよね！　あの屈強な四天王たちが。だから私たちがお嬢ちゃんたちのアナルをほぐしてあげようって訳なのね？　さぁ三人とも大人しく服を脱いで素っ裸になりなさいっ！　私たちが肛門を……ぐちゅぐちゅにしてあげる♪」

大川冬美も続けて説明してきた。
頬を赤くしながらエッチな表情を浮かべながら……。

「はぁ……。やっぱりコイツら拷問だけじゃ済まないな。さすが藤堂長官の特殊任務省は偵察力凄いわ。あたしは春美とかゆう黒髪美人をやるから……真子とメグは冬美とかゆうヤツやってくれる？」

「分かりました……じゃあ真子、あんたは見てて！」

「え？　一緒にやらないの？」

「あはは。さすがにこんな雑魚女相手に2対1はないでしょ？　拷問処刑は一緒にしようね」

「あ、う、うん。じゃあ楽させてもらおかな今回は……」

大野真子は部屋の隅に腰をかけて、ゆっくり静観することにした。

「コイツら私たちに……冬美！　四天王に電話！」

「うん！」

返事をした瞬間、小野メグの前蹴りが冬美のスマホをブッ飛ばす。

次の瞬間には、鬼頭美紅の回し蹴りが春美の側頭部をまともに捉えた。

倒れた春美を見て驚愕している冬美へ、メグの飛び膝蹴りが炸裂する。

鼻の骨はへし折れ、鼻血を撒き散らしながら春美の上へ倒れ込む。

冬美を押し退けて立ち上がって殴りつけてくる春美の顔面へ、カウンターの右ストレートを食らわす美紅。

「さてと……こんな何の色気もない教団服脱いで……処刑人のセーラー服に着替えましょうか」

真子が持っていた巾着袋から三人分のセーラー服とスカートを取り出して着替え終える。

「美紅さんの学校のスカートって極北女子中学のより短いんですね？　ちょっとしたアクションでもパンツ見えてますから」

「余計な所見てないで、女幹部の処刑方法でも考えてくれる？」

「すいませんっ！　てへへ。あたしたちの肛門がどうとか言ってたから……肛門ズタズタにしちゃうとか？　ね？　真子」

「そうだね。あたしたちも少し処刑に慣れてきたし……こんな外道たちは生きてる価値無いと思うから……」

美香が使っている極太の張り形をペニスバンドに装着する美紅とメグ。

直径５㎝、長さ２０ｃｍのソレは、半端なく鈍く恐ろしく光っていた。

「さぁあたしの頬をぶった小川春美さん……その趣味の悪い教団服のズボン脱いで、パンツも脱いでお尻を突き上げなさい」

「ちょっと待った！　やめて……今ならまだ許してあげるからっ！朝原翔子尊女様にお願いしてあんたたち三人を解放してもらってあげるからっ。ねっ！？」

『バキッ！！』

「げひゃあっ！？」

思いっきり顔面を足の甲で蹴り上げられて、前歯が二本折れる重症を負う小川春美。

「気が変わった……歯を全部引き抜いてから犯してあげるわ」

「はがっ!?　やめれくらはい……れれ」

『グリグリ……きゅぽんっ!!　グリグリ……きゅぽんっ!!』

一本一本ペンチでこねくり回して春美の歯を抜いてゆく美紅。泣きじゃくりながら許しを乞うが、逆らう度に顔面を殴り付けて口を開かせては歯を引き抜いていった。

瞼を腫らして鼻の骨は折れて、頬の骨も折れ、すべての歯を失った春美を見て、隣の大川冬美が逃げ出そうとする。

真子が足を引っ掛けて転ばすと、メグが覆い被さりマウントポジションで拳の鉄槌を連打する。

「あたしにも……できるかな?」

「まさかメグ……あなた」

『グリグリ……グリグリ……きゅぽんっ!!』

「んがあああっ!!」

美紅の真似をして歯をペンチで引き抜くことに成功したメグ。

「メグ……ついにそこまで残酷さをた高めちゃったんだ……」

「うふふ。なんかゾクゾクしてきた……真子もやってみ」

「ご、ごめん、あたしはまだ無理……」

逆らってはタコ殴り……ついに絶叫の中、冬美の歯も全てがメグによって引き抜かれた。

隣では極太のペニスバンドに絶叫する春美。

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！　パンパンパンパンパン！！』

「ひんぎゃあああああえあっ！！」

美紅の激しい腰使いに、春美の肛門はズタズタにされ、夥しい鮮血が床を染めていた。

「じゃああたしも……おい、冬美。お隣の春美のようにうつ伏せになってお尻を突き上げて」

「や、やめれくらはいおひょうはん……うう」

「もしかして〝やめてくださいお嬢さん〟って、言ってるのかな？」

縦に大きく何度も頭を振る冬美。
どうやら正解だったらしい。

「ダメだよ！　可愛いアイドルに犯されるんだから有り難く思うのね？」

『ずぷ……ずずず』

「ふんぬうううっ！？」

『ばちゅっ！！……バリバリ！！』

「ふおおおおぬぬぬぬうぅっ！！」

「あはは！　全部飲み込んじゃったね？　なんちゅう意味のわからん悲鳴をあげてるのかな？　おばさん……エッチ♡」

冬美もS状結腸が突き破られ、隣の春美と共に大量の血液を撒き散らしながらアナルを掘られ続けた。

鬼頭美紅は、泣き叫ぶ春美にトドメを刺す決意をした。
そのまま右腕を背後から首に回して、腕で首を締め付ける。
一気に後方へ引っ張ると、大きな音を立てて春美の首の骨はへし

折れた。
痙攣しながら小便を漏らし、美紅の太ももを濡らす。

「武器を使わずにシメるには首の骨折るのが早いんだ。そいつにもやってみな？」

「ゴクリ……は、はい」

小野メグも同じようにするが、いくら締め付けながら引っ張ってもなかなか首の骨は折れてくれない。

「張り形抜いて背中に乗ってからやってみな！」

アナルに深く突き入れられた張り形を引き抜くと、物凄い勢いで血が噴き出す。言われた通り背中に乗ってかわしながら、もう一度首に右腕を回して、思いっきり後方へ引き上げた。

『んぎぎぎぃ～……ぎひいい……バキッ！！……ガクンッ』

「凄い手応え……やりました美紅さん」

「今の感覚忘れないで」

「はい！　今度は真子もやってみな！」

震えながら見つめ続けている大野真子。
やはり一番血に弱い気の弱い女の子は大野真子であった。
菅野京介よりはマシだったが……。

――――五重の塔最上階。

「あなた可愛いわね？　名前は？」
同性の女子小学生にキスをしながらそっと囁きかける朝原朝美。

「…………死神」

「!?…………なんだって!?」
咄嗟にキスを剥がして後方へ飛び退く朝美。
隣の妹の沙夜も飛び退いた。

「お、お姉ちゃんっ！　今コイツ“今日が貴女の命日だね”って言いやがったよ!?」
「沙夜も変なこと言われたんだ！　一体何者だお前ら!?　ん？
どこかで見たことある気がする……もしかして《真友ガールズ》の

小学生トリオじゃないっ!?」

「いきなり抱き付いてきて小学生にキスをする中学生の方が何者だ？　と聞きたいくらいだよ……ね？　明日香ちゃん」

「そだね。人生で最期のキスだと思って我慢してあげたけど……タイプじゃないわねあなた方姉妹は……」

挨拶の時とは一変して冷ややかに言い放つ菅野莉央と結城明日香。富田美香は自分を選んでくれなかったことを未だに悲しんで拗ねている。

何も言わずに朝原姉妹を睨み付けていたが、静かに口を開いた。

「そうだよ。あたしたちは《真友ガールズ》の小学生トリオ。今日は《拷問処刑人》とゆう役柄だけどね」

「やっぱり……何でアイドルがそんなことやってんのよ!?　ともかく今日は生かして帰さないから！　沙夜っ！幼児と違って油断出来ないわ……小学生と言っても六年生ならあたしたちと大して変わらないんだから……」

「そうだよねお姉ちゃん……これで先に殴り殺してから死体で遊ぼ♪　可愛いアイドルたちの自慢の顔をボコボコに変形させて内臓を引きずり出して逝かせてあげちゃおっ♪」

朝原姉妹は堅く勝ちにきたのか、二人とも金属バットを握りしめ

た。

「あらあら怖い怖い……生かして帰さないとか悪役ならではの名ゼリフだよね？　……取り敢えずセーラー服に着替えていいかな？　こんな趣味の悪い教団服嫌だから」

「バカにするな！　ヨウム改心教はみんなこの服でやってきてるんだから！　嫌なら文句言わずにサッサと着替えたらいいじゃん？」

お言葉に甘えて拷問処刑執行服であるセーラー服に着替える三人。

「お待たせ♪　待ってくれてありがとね♡　さぁかかっておいでバカ姉妹にお仕舞いを見せてあげる」

「莉央ちゃんうまいっ！」

莉央のダジャレに爆笑しながら手を叩く富田美香。
ダジャレに気付きさえもしない結城明日香は真剣に金属バットを持つ朝原姉妹を睨んでいる。

「ふざけてるだろお前ら？　武器を持った中学生に素手の小学生が敵うと思ってんの？　死なせてあげるわほんと」

数秒後……アイドルであり小学生である三人に土下座をしている

中学生が二人いた。

「さっきまでの威勢はどうしたの？　朝美さんに沙夜さん？　まだ一分も経ってないんだけど？」

「ごめんなさい！　許して下さい！　もう悪いことはしませんから！」

　数回殴り掛かるが全く当たらない上に、度々カウンターを食らい、鼻血を流しながら戦意喪失した朝原姉妹は、土下座をして命乞いをしていた。

「明日香ちゃんもなかなかやるじゃん！」

「だてに格闘技やってる父親に育てられてないんだから」

　思いもしなかったメガネっ子の強さに少し動揺している美香だったが、すぐに声援を送る。

「やっちゃえやっちゃえー♪」

「今までの囚人は普通に殺してきたけど……コイツらにはカップルになってもらっちゃお♡」

「え？　莉央ちゃん……コイツら実の姉妹なのにカップルって……

あはは♡」

どこかで聞いたことがあるようなセリフに、朝原姉妹は戦慄を覚えた。

「あ、あたしたちの真似をしてるのっ！？　あたしたちがあの幼児たちを殺したように……性的虐待でいたぶり殺すつもりなのね！？」

――かれこれ半時間が過ぎた。

ひたすらお互いの性器を舐め合う双子の姉妹がいた。

「ふぁああ～。姉妹のシックスナインも飽きてきたね明日香ちゃん」

「そうだね。アナルに指でも突っ込み合いしてくれるかな？」

「は、はい……分かりました明日香さま」

朝美と沙夜は莉央たちに言われるがまま、恥辱の限りを尽くした。お互いの大便のついた指を舐めろと美香に命令されればお互いに舐め、処女膜を破り合うよう言われたらお互いに破いた。

今は美香か貸したペニスバンドを装着した妹の沙夜が、姉の朝美をバックで犯している。

大きすぎて長すぎたペニスの張り形は、姉である朝美の子宮までめり込んでいる。

性器から流れ落ちる大量の血液が妹である沙夜の太ももを赤く染めていた。

「ひいいいっ！　痛い……痛いよおおっ！！　沙夜っ、お願い……やめてええっ！！」

「やめたらあたしが殺されるの……我慢してお姉ちゃん」

しばらく地獄のピストン運動が続いたが、ついに莉央によって姉を犯す行為を辞める許可がおりた。

超小型の時限爆弾を姉の朝美の性器に捩じ込む菅野莉央。

「下半身……吹っ飛んじゃうけど勘弁してね？　朝美さん……」

「ひいっ！？　やだ……止めて止めて止めてええっ！！」

朝美から逃げる莉央たち三人。

妹の沙夜までも数メートル逃げた。

『ボンッ！！』

鈍い音を立てて朝原朝美の下半身は吹っ飛んだ。
見事なまでに吹っ飛んだ。
おへそから下は全て吹き飛び、大腸から小腸、子宮までもが裂けた腹部から飛び出している。

「ひぎっ！？……許して……殺さないで……ひいいっ！！」

「両足失って大腸小腸から子宮まで飛び出させて……そんな姿でもう生きていけないでしょう？　殺して下さいは？　お願いしてみ？」

「わーん、わーん！！　嫌だまだ死にたくないっ！！　わーんわーんっ！！」

吹き飛んだグチュグチュにされた腹部に右腕を突っ込んで掻き回す莉央。
そのまま心臓を握りしめ、一気に潰した。

「アーメン……死ね！」

「ぎゃぴっ！？　がはあっ！！」

上半身だけになって内臓を撒き散らした状態で、痙攣しながら死んでゆく姉を見ながら小便を漏らす妹の沙夜。

「美香ちゃん……例のやつ、頼むよ」

「うん！　ほら！　お姉さんみたいになりたくなかったらお尻を突き上げてお尻の穴を開けろ！」

莉央に命令されて、極太のペニスバンド張り形を強引に朝美沙夜のアナルにぶち込む美香。

狂ったように泣き叫ぶ沙夜のお尻を容赦なく平手打ちで叩きまくる美香。

「何おまんこ濡らしてるの？　中学生なのにエッチなんだから♡」

「痛いっ！　抜いてお嬢ちゃん殺さないでっ……許してお願いっ！！　あひいいいっ！！」

「そうやって命乞いする信者たちを何人殺してきたの？　あたしは絶対あなたを許さないから……」

更に激しく腰を振る美香。

直腸が抉れて美香の腹部に飛び出してきた。

「なに汚い直腸飛び出させてるの？　臭いよ？」

美香は右手で掴んで飛び出させてしまった沙夜の直腸を握りしめ、

一気に引きずり出した。

「ほらほらほらあっ！　どんどんと出てくるねぇっ！？　汚い大腸が……あはははは♡」

殆ど腸を引きずり出されてあの世へ旅立つ寸前の沙夜を莉央が仰向けに寝かせる。

ヘソからメスを入れて、下方へ切り進んでゆく。

薄く生えかけている中学生らしい可愛らしい陰毛ごと、陰核と尿道口まで切り裂いてから、更に力を入れて膣口と肛門まで切り開く。左手をお腹に突っ込み、子宮を抉りだした。

「ほい、鬼畜女の子宮」

『びちゃっ！』

明日香と美香の足元へぷるんぷるんした弾力のある女子中学生の子宮を投げ捨てる莉央。

「いやんっ！　いつ見てもエッチな形してるなぁ子宮ちゃん♪」

美香は足の裏でグリグリと擦り潰した。

くちゅくちゅくちゅと卑猥な音を立てて小学生児童にミンチにされてゆ

く子宮。

莉央は更にもう一度、子宮のあったスペースへ左手を捩じ込む。

「ほぉら……無茶苦茶痛いでしょう？　麻酔もなしでよくショック死しないで生きてるわね？　今からあたしがスッゴいことしてあげるね？」

「あがががが……痛いよぉ。お母さん……助けて……」

「お母さん？　朝原翔子のこと？　あはは。今頃あたしのお兄ちゃんたちにズタズタにされちゃってるよ？　安心して。あの世で会わせてあげるから……と言ってもあんたたちは地獄行き確定だけどね……」

「お、お母さんまで……ううう……鬼、悪魔っ！」

「あはは！　鬼畜女に鬼とか言われちゃったぁ♪　じゃあ可愛らしい12歳の少女鬼に犯されながら哀れに死んでいってくれるかな？」

そう言いながら姉によって処女膜を破られているオマンコに右手を捩じ込んでゆく……。

『くちゅ。ぐぷぷぷぷ』

「ひゃあっ!?　いやあああっ!!」

全ての指と手首、肘まで挿入されたとき、沙夜は白眼を剥いてガ

クガクガク震えながらヨダレを垂らしていた。

「あらら。白眼剥いて変なアヘ顔しちゃって！　不細工な顔が見るも無惨になっちゃってるよ？　ね？　美香ちゃん」

「あははははは！　莉央ちゃんの腕ぶち込まれて感じまくってるんじゃない？」

美香も沙夜のアヘ顔を見ながら大爆笑する。

そのまま抉りとられた子宮のあった場所で右手と左手を掴み合わせる莉央。

「うふふ。マンコトンネル完成♡」

「莉央ちゃん必殺のマンコトンネル出たあっ♡　あたし濡れてきちゃった……今度あたしにもして♪」

妙に興奮する美香だった。
明日香も頬を赤くして、無惨な沙夜の姿を静観していた。

「明日香ちゃん、目玉抉り出してくれる？」

「うん。特製のスプーン貸してくれる？」

「いいよ！　はい」

特殊任務省特製の拷問器具である眼球摘出スプーンを器用に使い、片方ずつ目玉をくり貫いてゆく明日香。

血の涙を流しながら殆ど動かない手足をバタつかせてのたうち回る沙夜。

「動けなくなる麻酔も効いてきたみたいね？　でも特別に痛み止めは打ってないから地獄の激痛を味わいなさいね？　何の罪もない児童を性的虐待で拷問処刑なんて……地獄すら生ぬるいわあなた……」

オマンコとお腹から差し込んだ両手同士を掴んで、腹部内で激しくピストン運動させせる莉央。

「ホラホラホラホラ……オヘソとマンコが繋がったマンコトンネル……痛いでしょう？　うふふ♡」

大型のペンチを握りしめて激痛に苦しむ沙夜に問いかける明日香。

「今まで殺めてきた小さな子たちにごめんなさいは？」

「うう、うう……はごおっ！？　うごごご！？」

一本一本前歯から引き抜いてゆく明日香だった。
前歯を三本ほど抜いた所で血の泡を噴いて大痙攣を起こす朝原沙夜の肛門へ小型の爆弾を差し込む莉央。

「みんな離れてっ！」

莉央の掛け声でその場から飛び退く明日香と美香。

『ボンッ！！』

大便まみれの大腸と小腸が辺りに飛び散り、大痙攣から下半身吹っ飛ばされて即死するはめになる朝原沙夜。
目玉を抉り取られた二つの穴からは、ピュッピュッと血液が噴き出していた。
前歯を失い、両目は穴だけで顔面見まみれ……内臓をぶち撒けた上半身だけの死体は、まるで地獄でもがき苦しむ魑魅魍魎にも見えた。
原型を留めている膝から下の両足を、膝方向から内臓が飛び出しているお腹へ突っ込む莉央。

「なんかニコチャン大魔王みたい！　あははは♪」

それを見ていた美香は爆笑し始める。

極端に短く見える両足と、ぱっくり開かれた腹部、全体をなんとなく見ていると確かにニコチャン大魔王のようだった。

「鬼畜姉妹の拷問処刑……完了だね♡」

「うん！　莉央ちゃんのマンコトンネル……いつ見ても興奮しちゃうあたし♡　心と同じ様な醜い顔になっちゃって……惨めだね？　沙夜さん♪」

そう言いながら沙夜の死体の顔面を足の裏でグリグリと踏みつけ回す美香。

「マンコや肛門がバラバラになって、どこに飛び散ったのか分かんないほど細かくグチャグチャになるのがまたソソるのよね。この小型時限爆弾。特殊任務省からまた大量に貰っておこっと。さあ引き返そうか……怒り狂った信者たちが襲って来る前にね……」

――――五重の塔。地下室。

「あんっ！　あんっ！　気持ちいい……大好き京介……」

「好き者だな朝原翔子ともあろう者が……アナル好きの変態女教祖だと信者たちが知ったら呆れられちゃうぜ？　がははは！」

いきなり現れて力ずくで朝原翔子を犯す菅野京介。
四天王である元プロレスラーの四人がかなり遅れて助けに来るが、時既に遅かった……。
２０歳の変態男、菅野京介のビッグマラは、朝原翔子のアナルをガバガバに犯していた。
流血しながらも快楽を得ている女教祖を見た四天王たちは血相を変えて京介に襲いかかる。
ヒュンヒュンと何かを振り回す音がしたと思った瞬間、元プロレスラーたちがバタバタと倒れてゆく。
ほんの数秒の出来事だった。
両手の肘の腱を的確に斬り裂き、四天王たちは膝から崩れ落ち、各々絶叫し始める。
「えへっ♪　せっかくの“未亡人アナルファック”シーンを見てる私を邪魔するなんて……良い度胸してるんだ？」
薄っぺらいが幅のある大きな刀……青龍刀をヒュンヒュン振り回しながら１６歳の女子高生、坂本江美が不敵な笑みを浮かべている。

「ぐおおおおっ……すいません、朝原尊女様……両手が動きませんっ」

「お、お前たち大丈夫！？……ちくしょう…………あんっ！？」

「がははっ！　怒りながらも感じてやがるのかこのメスブタ女教祖めっ♪」

「もう射精しちゃってチンポ抜いた方が良いですよ？　えへっ♪」

「え？　そうなの？　わかったぜ！　ほらほらほらほらあっ！　イくっ！　イっくううっ！！」

『ドピュピュピュピュウウッ！！』

「ひぎいっ！！　あっはああああんっ！！」

直腸へ大量に精液を注ぎ込まれた朝原翔子は不覚にも大声でよがってしまう。

菅野京介が射精を済ませてペニスを抜いた瞬間、地下の部屋に妹の菅野莉央が入ってきた。

続いて結城明日香と富田美香も入ってくる。

慌ててペニスを仕舞う菅野京介。

『あぶねぇぜ……明日香ちゃんにこんなとこ見られてたら嫌われちまうところだった……ん？　まさか莉央たちが入ってくるの見抜い

てたのか？　この江美って人は？』

「えへっ♪」

京介の方を見て屈託のない笑顔を見せる女子高生の坂本江美。

「慌てて何隠したのお兄ちゃん？」

「な、何も隠してねぇよっ！　いちいち苦しい所突っ込んでくるなよお前はっ！！」

「怪しい……」

目を細めて睨み付ける小学生の女の子たち三人。
だが莉央だけは演技で、初めから兄の京介に女教祖をヤラせてあげる計画通りだった。

更に中学生トリオたちの鬼頭美紅と大野真子と小野メグも地下室へ入ってくる。

「スッゴい……元プロレスラーたちが全員倒れ込んじゃってる……」

小野メグが目を丸くして驚いている。

「これ、あなたがやったのですか？」

鬼頭美紅が静かに坂本江美へ問いかけた。

「えへっ♪　そうだよ？　文句ある？　京介さんを守ったんだよっ♡　てへへっ♪」

なぜかヤキモチを妬いて静かに女子高生の江美を睨み付ける小学生の明日香。

「ん？　何で朝原翔子は肛門から出血してるの？」

結城明日香が京介に聞く。

「えっ！？　あ、あの……それは……」

『ズブッ！！　ぐちゅちゅちゅちゅちゅ……』

いきなり江美の青龍刀が、うつ伏せ状態でアナルファックの余韻に浸っている朝原翔子の肛門へ刺し込まれ、次の瞬間には性器も縦にぱっくり斬り裂き、尿道、クリトリスまでも真っ二つに。

更に恥骨を粉砕してどんどん刃は腹部奥へとめり込んでゆく。ついに子宮までも真っ二つに斬り裂いた。

立ち上がって逃れようとするが、莉央と明日香が左右から頭と両腕を押さえ込み、四つん這い体制を維持させる。

「じっとしてなさい。あなたは今から死ぬの」

莉央が静かに処刑宣告をした。

『ほごおおっ!?　ぎゃあああああっ!!!!』

「私が青龍刀で肛門……突き刺したんだよ。テヘッ♪」

『ザシュッ!!』

『がはっ!!　はううっ!!　ビクンビクンッ!!　……ガクン……』

江美の青龍刀は瞬く間に朝原翔子の肛門と性器、子宮、幾多の内臓を突き破りながら喉まで切り裂いた。
うつ伏せで四つん這い状態の朝原翔子に対して刃を下に向けて突き刺したため、腹部の皮までも所々切り裂かれ、ドバドバと小腸が床にこぼれ落ちている。
胃とか肝臓は床には落ちずに、ぷるんと腹腔から飛び出したままブラブラと揺れていた。

「肛門もおマンコもブッ刺しちゃってごめんね。えへっ♪　もう抜

いたげるよ」

右足の裏を翔子のお尻にグリッと押し付けて、一気に青龍刀を股間から引き抜くと、夥しい大流血と内臓が辺りを真っ赤に染めてゆく……。

口と股間と腹部から血飛沫をあげながら崩れ落ちる朝原翔子。

恥骨を刀で簡単に突き破る破壊力を持つ坂本江美に、菅野莉央と鬼頭美紅も戦慄を覚えた。

「あたしも日本刀さばきには自信あるんだ！」

西口の門を見張る特殊部隊の隊員から受け取った日本刀をヒュンヒュン振り回しながら富田美香が得意気になっていた。

「じゃあ美香ちゃん、その自信とやらを倒れて呻いている四天王たちで試してみてくれる？　さっきしれっと動けなくなる麻酔打っといたから」

「うんっ！　だから仰向けに寝転んじゃってたのか！　明日香ちゃん、コイツらのズボンとパンツ脱がしていって！」

「はいはい。ちょっと待っててねお嬢ちゃん」

「早く早くぅ～。筋肉マンみたいな屈強な男のチンポ早くぶった斬

りたぁーいっ♪」

「お待たせ。四人とも脱がせたよ」

「ありがとう♪　じゃあ見ててね～。ほいっと！」

『ヒュンッ！……スパッ！！』

「ぐわあああああっ！！」

四天王の一人のペニスが根元から切り落とされて吹っ飛んだ。

「おおっ！　お見事だねっ！」

明日香も美香の日本刀さばきには本気で感心していただけに拍手しながら笑っている。
その調子で四人全てのペニスを切断していった。
坂本江美も負けじと股間へ向けて青龍刀をヒュンヒュンと振ってゆく。
陰嚢が中央から切り開かれ、睾丸がプルンプルンと飛び出してくる。
合計八個の生の睾丸が拷問処刑人九人の眼前に晒された。
「四天王のコイツらは、完全去勢のみで命までは取れない……さぁ

引き上げま……」

「あ、そうだ。大野真子！　まだこいつらの金玉の精管とか神経とか繋がってるから四人分の計八個……全て引きちぎるか完全に潰しておいて。分かった？」

菅野莉央の退却の声を遮るように鬼頭美紅が大野真子に命令する。

「えっ！？　なんであたしが！？」

「あなたは拷問も処刑も殆どやってなかったわよね？　給料泥棒になりたくなかったらそれくらいやりなさい」

「ううう。わ、分かりました……」

潰す握力はないうえペンチも持ってなかった真子は、一つ一つ丁寧に精管の束を引きちぎっていく。

どれだけ絶叫しようが動けない元プロレスラーの四天王たちは、女子中学生アイドルの大野真子に全ての睾丸を引きちぎられて泡を吹いて悶絶している。

真子はご丁寧に、引きちぎった本人のお腹の上に、二つの睾丸を置いていった。

「ごめんね。ちゃんと金玉は返してあげるからあたしを恨まないでよね？」

「やれば出来るじゃん？」

「は、はい。処刑じゃないなら意外とやれます……こんなですけど一応ヤンキーですからあたしも……」

莉央が階段の方へ歩き出す。

「さぁ引き上げましょう。無事に任務遂行完了だねみんな」

特殊任務省の隊員たちから話を聞いていたのか、ナイフや木刀を持っている信者たちが道を開ける。

教団施設は警報も鳴りやみ、昼間のように照らす強力な照明だけが、力強く輝いていた……。

狂気の教団　（後編）（後書き）

残酷な気性を持つ狂った教団の幹部たち……諸悪の根源を根絶やしにすることに成功した莉央たち拷問処刑人。

残されたまっとうな者たちで新たな教祖を立ち上げ、真の意味での心の拠り所を……魂の救済を……信者たちは見付け出す事が出来るのであろうか……。

女子小学生たちのイジメ（前書き）

思春期……人を初めて本気で好きになる年頃。

たとえ結ばれたとしても、複雑に変化してしまう運命もある。

女子小学生たちのイジメ

春の陽が射し込み、初夏のように暖かい教室で、一人の少女がイジメをうけている。

赤霧島小学校でのお昼休み。

女性担任と男子生徒は、全員校庭に追い出され、六年三組の女子児童たちのみが教室に残っていた。

この小学校を実質仕切っている菅野莉央と富田美香と結城明日香が、一人のクラスメイトを取り囲み、尋問している。

「六年四組の男子生徒。葛西亜依ちゃんの彼氏にいきなり抱き付いてキスしちゃったらしいね？　亜依ちゃん一晩中泣いてたらしいよ？」

「クラスメイト泣かして胸が痛んだりしないの？」

「あたしならクラスメイトと付き合ってるって分かってたらいきなりそんなこと絶対出来ないけどなぁ。凄い神経してるね友恵ちゃんは」

机と椅子は全て放課後の掃除の時みたいに教室の隅に片付けられ、女子たち全員で取り囲むように立っている。

その中の一人が泣きながら鞭目友恵を睨み付けていた。

彼氏を強制的に奪われた葛西亜依である。

「亜依ちゃんに土下座して謝ったら許してあげるけど？」

菅野莉央が胸ぐらを掴みながら静かに問いかけた。

「人を……好きになるのは自由だと思う……どうしてクラス全員にこんなことされるのか、わたしには全然意味が分からない……」

伏せていた目を静かに上に向けて、セーラー服を掴んで捻りあげてくる莉央をじっと見詰めながら言い返す鞭目友恵。

「あーあ。ここで素直に反省の言葉があれば痛い目にも遭わず恥も最小限で済んだのにね……明日香ちゃん？」

「そうね。せっかく莉央ちゃんが頭を下げてまで、“鞭目さんが土下座してくれたら許してあげてね”って、亜依ちゃんにお願いしてくれてたのに……」

明日香と美香が鞭目友恵の両手を左右から掴む。

莉央が静かに目前に立った。

「最後のチャンスをあげるわ。亜依ちゃんに謝る気はない？」

「どうして女子のみんなからこんなイジメみたいなことされるのか意味が分からないって言ってるの！　寄ってたかって卑怯だし」

取り囲んでいる十数人のクラスメイトたちがざわつく。

「まじ？　信じられない」

「亜依ちゃんと付き合ってるの分かっててあれは酷いよね」

「最低」

激しい乾いた音が教室に響いた。
ざわめきが一瞬で収まる。

莉央の強烈な左手のビンタが右の頬にヒットした。
押さえたくても明日香と美香に両手を掴まれているため押さえられない。

「痛かった？　次は利き腕でいくから……正面向き直してくれるかな？」

「んんんん……い、痛い……」

半泣きになりながらもクラスメイトの女子が全員見てる前で泣く

のは恥ずかしいため、必死で涙を堪えている。
肩までの少し癖毛のミドルの髪を左手で鷲掴みにして無理矢理自分の顔へ向けさせる莉央。

『バッチィィィィンッ！！』

「ぶはあっ！？」

あまりの衝撃に歪に顔がヒン曲がる鞭目友恵。

「痛ったあぁぁぁいいいいっ！！」

両頬がみるみる内に真っ赤になってゆく。
あまりの強烈な莉央のビンタに、クラスの女子たちは震えながら固まっていた。

『パンパンパンパンパンパンパンッ！！』

更に往復ビンタが友恵の両頬を襲った。
パッチリと大きな目と、整った鼻と口は美少女といえるレベルの友恵の顔は、夕焼け空のように赤く染まっていた。
可愛い顔をしている割に根性があるのか、歯を食い縛りながら痛

みに堪えて、莉央の目を睨み付けている。

「この子すっごい根性してるね莉央ちゃん。男の子でも今の平手打ち連打は泣いちゃうほどだけど……」

メガネっ子の結城明日香が、鋭い眼光の友恵の横顔を見ながら感心する。

「あたしたちのこと殆どの生徒が分かってると思ってたけど……こんな無知な命知らずがまだいたとはね……」

ツインテールが可愛い富田美香も続けた。

「今から一分間泣かないで我慢できたらもう止めてあげるよ友恵ちゃん」

「か、菅野さんたちって……アイドルやってて可愛くて……喧嘩も無茶苦茶強いって思ってたけど……卑怯だよね三人掛かりで……最低」

ここで美香と明日香が両腕を離して、友恵を解放する。

「あのね友恵ちゃん……私たちが三人がかりで“イジメ”とゆう呈

をとっているからぁあなたはこんなレベルで済んでるんだよ？　莉央ちゃんとタイマンなんか張って負けたら……どんな恐ろしい目に遭うか想像できてる？」

あまりの痛みに両手で頬を擦りながら涙を堪えている友恵に優しく問い掛ける明日香だった。

「大人しくあたしたちにイジメられて泣いてたらいいの！　そうすれば無茶苦茶酷いことはしないから。ね？」

美香も友恵を気遣う。

「どうして一分間も菅野さんのイジメを堪えなくちゃいけないのよっ!?　私も両手両足使えたら喧嘩だってできるんだからっ！」

泣きそうで泣かない鞭目友恵は莉央に対峙してファイティングポーズを取る。

「やられっぱなしじゃ終わらないんだから！」

クラスメイトたちは結果は十分分かっていながらもワクワクして声援を送りだす始末……。

やっちゃえやっちゃえ！　と捲し立てる。

「大人しくあたしにやられてたら手加減もしてあげたのに……本当にやるのね？」

「わあああっ！！」

奇声をあげながら莉央に殴りかかる友恵だったが、簡単にかわされてフラフラとよろけた。

「一分間は攻撃しないであげるから頑張ってあたしをやっつけてみて！　そしたらあなたのリンチはお仕舞いにしたげるわ」

これ以上恥もかかずに小学校最強の噂のある菅野莉央を倒すことができれば誰も自分に逆らわなくなる。
一石二鳥のストーリーを頭に思い浮かべながら更に殴る蹴るの攻撃を繰り出す友恵だった。

息が上がり倒れ込む……。
しゃがみ込んでそっと囁く莉央。

「じゃあそろそろ……制服……脱いじゃおっか？」

「はぁ。はぁ。はぁ。はぁ。や、やだっ！　許して……」

「だーめ。許さない。クラスの女子全員にあなたの恥ずかしい部位

を見せてもらっちゃうんだから。諦めて」

「いやっ、イヤだよ。いやあああっ！！」

『バキッ！！』

　この場から逃げ出したい一念で、思わず叫び出す友恵の鼻っ面に正拳がヒットする。

　ワンテンポ遅れて鼻血がドクドクと流れ出してきた。

　慌てて両手で押さえるが、指の隙間から教室の床へ、ポタポタと血の斑点を刻んでゆく。

　あまりの激痛に意識を失いかけるが、辛うじて状況は理解出来ている鞭目友恵であった。

　富田美香と結城明日香も加わり、三人がかりで友恵の制服、シャツ、ブラジャー、スカートの順番で脱がしてゆく。

　もう鼻の激痛で戦意喪失していたため、莉央たちにされるがまま脱がされていった。

　靴下も脱がされてついに最後の一枚である純白のパンツに手をかける菅野莉央。

「もう抵抗しないんだね？　最後のパンツ……脱がしちゃうよ？」

「ぐす、ぐす、ううう……わーん。わーん。やめて許してお願い……」

六年三組の女子たち全員に見られながら素っ裸にされる恥辱感を、この時点で確実に痛感した鞭目友恵は、ついに涙を流して泣き出した。

明日香と美香に両手を掴まれて仰向けにさせられたまま、ゆっくりパンツを下げてゆく莉央に女子たち全員の視線が注がれる。

産毛のような薄い陰毛が微かに生えている小学生らしい恥丘部と陰部が露になった。

泣きじゃくる少女を気にもとめずに、膝から足首までゆっくりと確実に脱がしていき、ついに足の裏からも剥ぎ取られた。

「鞭目さん、生まれた時の姿になっちゃったね？　意外とオッパイあるんだ……」

「やめて……菅野さん、お願いっ！　もう止めて……くすん、くすん」

「今からスマホのスピーカーでラジオ体操第一を流すから教壇に立ってしっかり決めてくれる？　うまく体操出来たら許してあげる」

明日香がボリュームを最大に上げてラジオ体操を流す。

莉央と美香に無理矢理立たされて皆の視線が注がれる教壇へ連行されてゆく友恵。

「第一できちんと決めないと第二はゴリラポーズがあるから大恥かくよ？」

泣きながらラジオ体操を始めるが、時々鼻血が流れ出て来るので、顔半分と右手の甲は血塗れになっている。

無事に体操第一を終えて座り込んでしまう友恵にそっと近寄り、頭を撫でながら囁く莉央。

「よくできました。四つん這いになってお尻をみんなの方に向けてくれる？」

「は、恥ずかしい……もう許して菅野さん……」

「恥ずかしい事をしたのはあなただから……クラスメイトの彼氏を奪うなんて最低だと思わないの？　誠意を見せなさい」

「土下座して謝るから許してよ……ぐす、ぐす」

再び泣き出してなかなか四つん這いになろうとしない鞭目友恵を、美香と明日香が強引に後ろへ向けさせて四つん這いにさせる。

「5分ほどじっとしてたら終わるから頑張ってね。鞭目さん。こうやって……こうね。力を抜いてお尻を突き上げてね？」

メガネっ子の明日香が友恵のお尻を突き上げさせながら囁く。

「処女膜は失うことになるけど子宮までは抉り取らないから安心して！」

美香が静かに右手を伸ばし、微かな産毛の生えた小さなオマンコに中指を差し込む。

「ひゃあっ！？　いやいやいやっ！！　止めて富田さんっ！！」

「あたしが友恵ちゃんのバージン貰っちゃうから♪　どれどれ……処女膜さんはどこかなぁ？　お邪魔しまぁーす♪」

『ずず……』

「ひいっ！？　やだっ！！　止めてえぇっ！！」

『ぐちゅっ。バリッ……』

「痛いっ！？　そんな……酷い……えーんえーんっ！！」

処女膜を破いた美香の中指は、しばらく１２歳の同級生の女子児童、鞭目友恵の膣内を掻き回し続けた。

「狭い膣道だね。いつか男子とエッチしたら締まりがよさそうだよ

？」
頬を赤くしてスケベな笑みを浮かべながら中指を抜く美香。
微かに糸をひく透明の液と、薄く赤く染まった爪の辺りを友恵の背中に擦り付ける。
「ほら、記念すべき処女喪失の血液だよ。背中に擦り付けてあげるから喜べ♪」
「あーん、あーん、お嫁にいけないぃいっ！　しくしく……ぐすん……」
呆気ないほどのロストバージンを目の当たりにしたクラスの女子児童たちも、頬を赤くして一部始終を見ていた。
「お嫁には行けるから大丈夫だよ。子宮に何もしてないし……次はこの〝クスコ〟とゆう医療器具を使ってマンコの中身をクラスの女子全員に見てもらってからあなたのリンチは終わりにしてあげる。もう一度お尻を突き上げて友恵ちゃん……」
ペタッとお腹を床に付けてへたりこんでいる友恵の腰をもう一度突き上げさせる莉央。
ローションをタップリとクスコに塗り付け、出来るだけ苦痛を与えない配慮をしながらゆっくり友恵の秘部に近付けてゆく。

小陰唇の小さなビラビラを巻き込まないように、明日香と美香が大きく大陰唇に手をあて、左右に思いっきり開くと、くぱあっと、イヤらしい音を立てながらオマンコがぱっくり開いた。

小陰唇もまっ縦に立ち上がり、更に左右へ押し開かれていった。

もうクスコを差し込んでも小陰唇のビラビラは膣内に巻き込まれる心配はなくなった。

「莉央ちゃん、これくらい開けば簡単に入る？」

明日香の問いに小さく頷きながら、ぱっくり開かれた陰部にクスコを押しあてる。

「ひっ！？　冷たいっ！！　何をしてるのっ！？」

「黙ってマンコの力を抜かないと痛いぞぉ？」

美香が反対の手で友恵の左胸を鷲掴みにしてグリグリと揉みしだきながら脅しをかけた。

「クラスの女子全員で鞭目友恵のマンコ視診を開始しまーす。いくよ？　ほらぁ……」

『ずぷっ……ぐちゅちゅちゅちゅちゅちゅ……』

「いやあああっ！！！！」

「うるさいなぁ。黙らないと子宮抉り出すわよ？」

冷たくそう言い放ちながら、奥までめり込ませたクスコを上下左右に激しく動かし、膣内を掻き回す莉央。

「はうっ！？　あひいっ！　やあっ！？　あはあっ！！」

「あはははははっ！！」

頭を激しく振りながら奇声をあげまくる友恵にクラスの女子児童たちは大爆笑。

更に大粒の涙を流しながら全身を震わせてひたすら莉央たちのイジメを堪える友恵だった。

『グリッ……くぱあああ〜っ！』

ついに全開に開かれたクスコは、１２歳の女子児童の性器を容赦なく全開に押し開いたまま動かなくなった。

「と、閉じてええっ！！　いやあああっ！！」

「友恵ちゃんって……顔と同じく綺麗なマンコしてるね？」

そう言いながらゆっくりと立ち上がり、クラスの全員に交替で見て回らせた。

各々頬を真っ赤にしながら同級生の膣内を観察し終えると、ようやく全開に開かれたクスコは友恵のオマンコを閉じ、無事に引き抜かれた。

辱しめを受けた秘部を両手で塞ぎながらうつ伏せに崩れ込んで泣きじゃくる。

「さぁぼちぼち〝去勢の時間〟だね」

そう言いながら百均の小さなバッグから医療用のメスを取り出し始める莉央。

「え！？　クラスメイトの彼氏にキスしただけで子宮取っちゃうの！？　朝に莉央ちゃん言ってたのは、鞭目友恵の刑罰は軽い暴力と処女喪失、更に恥をかかせるくらいだと……」

富田美香が目を丸くして驚愕していると、六年三組のドアが勢いよく開き、見覚えのある中学生が入ってきた。

「み、美紅さん！？」

結城明日香が咄嗟に叫んだ。

「どうして甲南女子中学の美紅さんがこの小学校に来てるの？」

更に続けて莉央に問い掛けた。

「今回の恋人奪取事件の黒幕の登場だから……先に美紅ちゃんにシメておいてもらってたのよ」

美紅は後ろへいる“誰か”を引っ張り込み、思いっきり蹴り込むと、ごろごろと勢いよく転がってくる人影があった。

顔面はボコボコに腫れ上がり、歯も抜けている。
鬼頭美紅の暴行の凄まじさがすぐに理解できた。

「だ、誰なのこの子……この小学校の男子みたいだけど？」

美香も莉央に問い掛ける。

「話せば長くなるから簡潔にね……」

顔で判別できないボコボコにされた男子児童の方へゆっくりと歩み寄りながら莉央が真相を語り始めた……。

――――三日前の放課後。赤霧島小学校の正門前。

「あの……三組の鞭目さん……だよね？」

「うん。あなたは？」

「俺は四組の星倉智樹ってゆうんだけど……」

「あーっ！！　うちのクラスの葛西亜依ちゃんと付き合ってる噂の星倉くんだ！？」

「えー？　そんなに俺たちのこと有名になっちゃってるの！？」

「うんうん！　みんな応援してるんだから頑張ってよ！？」

「あ、うん」

頭をかきながら天を仰ぎ、沈黙する三組の星倉智樹。

「名前は聞いてたんだけど顔は知らなかったなぁ。でも野球部の子だよね？　たまに放課後の練習中、見かけた……見覚えのある顔だったもん！」

「え？　俺の顔覚えてくれてたんだ！？」

「そうだよ。ちょっと私のタイプだったからね！　廊下ですれ違うときもチラチラ見てたんだよ？　あはは。こんな事普通なら恥ずかしくて本人に言えないんだけど……亜依ちゃんと付き合ってるなら振られる心配もないし安心安心っ♪」

「…………ってくれっ！！」

鞭目友恵のタイプだったけどまさかのクラスメイトの恋人だったとは……的な発言を遮るように叫ばれた星倉智樹の声は、一回目に理解できなかった。

「え？」

「鞭目さん……お、俺と……付き合ってくれっ！！」

「え？　ええっ！？」

隣のクラスの星倉智樹は野球部のスポーツマンで自分のタイプ……でもまさかのクラスメイトの葛西亜依の恋人その人だった……。

その恋人本人が今……自分に告白！？

頭が真っ白になりながらも少しずつ状況を理解してゆく鞭目友恵であった。

「そ、そんな……。あはは。冗談は止めてくれる？　亜依ちゃんは毎日友達にあなたのこと自慢してるんだよ？　……んっ！？」

周りに誰もいないことを確認して、いきなり抱き付きキスをする星倉智樹。

両目を見開いたままの人生初のファーストキスは、まさかの自分のクラスメイトの彼氏だった。

「休み時間……教室でいつも一人で小説を読んでいるキミを廊下を通る度に見ていたんだ。いつの間にか大好きになっていた……」

「…………葛西さんと……何かあったの？」

「何もないよ。今でも好き。でも半年前、あの子が俺にコクってくれて付き合い出したけど……俺はどちらかとゆうとタイプじゃなかったんだ」

「え？　じゃあどうして付き合い始めたの！？　葛西さんが可哀想じゃない！？」

少しずつエキサイトしてくる鞭目友恵だったが、構わず続ける星倉智樹。

「あまり可愛くないけど、私は大好きだったから。もし嫌いになったらいつ振ってくれても構わないから！　お願いだから付き合って！　と、半ば強制的に頼まれたんだよ……で、俺も悪い気はしなかったから……」

「そんなの勝手すぎるよ……そんな言い訳亜依ちゃんに言えないでしょ！？」

「……うん。でもキミが付き合ってくれるなら……近いうちに勇気を出して彼女に話すよ……どれだけキレられても覚悟はできてる」

赤く染まった頬もいつもの色に戻ってうつ向いて何も言えなくなる鞭目友恵。

「すぐでなくてもいい。また返事聞かせて……俺は友恵ちゃんのことが大好きだから」

茜色に染まってゆく校舎の影もだんだんと見えなくなって薄くなりかけてゆく。

しばらく佇んだ後、鞭目友恵は全力で走っていた。
星倉智樹に背中から抱き付き、決断を告げる。

「私がなってあげる！」

「え？　何に？　……まさか俺の彼女にっ！？」

「悪者に……だよ。でも、それも正解になるかな……」

「どうゆうことなの？」

「私も実際、星倉くんのことはタイプで……たまに見掛ける練習中も胸がドキドキしてたんだ。だからいいかなって……悪者になっても」

「……友恵ちゃん」

「私から星倉くんに皆の見てる廊下でいきなりキスするから！　動揺しながらも私を好きになった演技をしてくれる？」

殆ど真っ暗になり、ハッキリとは見えなかったが、鞭目友恵を強く抱き締めながら涙を流す星倉智樹。

「ありがとう。ズルいけど俺からの場合は……二股みたいになっちゃうから……助かるよ」

「いいよ。どうせ私なんか元々誰からも好かれてないし……友達も一人もいないから……嫌われついでだよ。あはは」

「笑えないよ……ごめんねほんとに……」

――――菅野莉央が今回の顛末を大まかに話し終えると、女子たちの視線は顔面をボコボコに腫らした六年四組野球部の星倉智樹……らしい男子に注がれた。
当たり前だが軽蔑の眼差しである。

「莉央ちゃん、こいつ拷問処刑していい？」

「ダメダメ！　そこまでのことやってないないっ！」

「そ！　じゃあもう少し顔面イビツにしてから莉央ちゃんたちに任せるとするか……」

いきなりの中学生の来客にざわめく六年三組の女子児童たち。
担任と男子児童たちは未だに校庭でブラブラしていた。

うつ伏せに寝転がり、顔面からお腹から色んな部位を擦りながら呻き声をあげている星倉智樹を足の裏で蹴り転がし、仰向けにさせる鬼頭美紅。

切れ長の目で美しい顔立ちのツインテールの少女は、両膝を開きながら星倉智樹のお腹の上に座る。
マウントポジションを決めた。
右手で頬をぐにゃっと変形させ、ヒョットコのような変顔をさせる。

「おいクソガキ。乙女の心を弄んだ罪は重たいよ？　顔も全身もまだまだボコボコにしてやるから覚悟しろ！」
「う、ううああ、もうこれ以上殴られたら……俺は死んじゃ……う……もう、止めてくれ……あうう」
数回、数十回と美紅の拳は小学六年生男子児童の顔面を殴り続けた。
ついに小便を漏らし、床に広がってゆく。
「くっさ……クソガキめ！　自分で始末できるのっ！？」
怒りに任せながら髪の毛を掴んで無理矢理立たせると、お腹への膝蹴りが入る。
一瞬身体が宙に浮くほどの強烈な一撃で、星倉智樹はゲロを吐き散らした。
「うぐおおっ！？　おえええええっ！！」
うずくまる後頭部へ足の裏を乗せて、床に顔面が当たるまで踏みつける。
激しく顔面を打ち付けて、鼻の骨もバラバラになり、夥しい血が床を染めてゆく。

この時点でクラスの女子たちは殆ど両手で顔を覆い、または下を向き、目を背ける者が現れだした。

「相変わらずあたしと同じツインテールが気に入らないけどやっぱ強すぎるよね美紅さんは……」

「うん。あたしでも美紅ちゃんには敵わないから……」

遠慮気味に答える莉央だったが、戦闘力は美紅と大して変わらない……。

明日香も続けて口を開く。

「ところで莉央ちゃん。どうしてさっきの“廊下でいきなりキスしてあげる作戦〟の顛末を知ってたの？　まさか星倉くんや鞭目さん本人が暴露しないでしょ？」

「うちのクラスの委員長の矢野弥生ちゃんが、四組の星倉智樹くんのクラスの委員長と親友なの。その親友の委員長の子に星倉くんが相談してたみたい。だから委員長から委員長へ情報が筒抜けって事ね」

「そっかあ。信用して相談してた四組の委員長がまさか三組の私たちのクラスの委員長とツウツウだったとはね……星倉くんって子もツイてないわね。今からこの子は去勢しちゃうのね？」

「うん。完全去勢の刑。特殊任務省の藤堂長官から許可は貰ってるから、親御さんたちの文句も通じないから心配ないよ」

美紅の激しい暴行の末、大便まで漏らして全身の骨にヒビが入ってしまった星倉智樹を、鬼頭美紅の命令で三組の女子たち数人で制服を脱がしてゆく。

「委員長の弥生ちゃんってば、どさくさに紛れて星倉くんのおちんちん触りまくってたよ？　見た？」

富田美香がはしゃぎながら結城明日香に話しかける。

「どうでもいい所だけはよく見てるわね相変わらず……」

「てへっ。だって弥生ちゃん……無茶苦茶嬉しそうにズボンとパンツ脱がしてたから……」

素っ裸にされて、並べたベッド替わりの机に仰向けに寝かされる星倉智樹。

美紅のあまりの激しい暴行に意識を失いかけていたので、ついでに痛み止めの麻酔と、血止めの薬を打ってあげる明日香。

「準備ＯＫだよ莉央ちゃん！」

明日香のゴーサインで、鈍く光るメスを持って少年の下半身へゆっくりと近付いてゆく莉央。

「怖いと思うけどみんな見ててね？　これからのこの国は、人を平気で傷付ける奴らには厳罰を持って対処していくようにあたしたちが変えていかなきゃならないから。特殊任務省はそのために……あ、ごめんなさい。何でもない」

手際よく皮かむりのペニスを根元から一気に切断する。

切り取ったペニスの先端側にメスを入れ、皮を剥いてゆく。

根元から切り離されているため、ズルリと服を脱ぐかのように皮全体がペニスからズルむけるように剥ぎ取られた。

「よし！　ズルムケ赤チンポの出来上がりだよ？」

美香に手渡すと、真っ赤な剥き身のような小学生児童のペニスを鉛筆で尿道から付け根まで貫通させて遊び出す美香だった。

「オシッコ通るところにお邪魔しまーす♪　あはは♪」

隣で目を背けて泣きくずれている鞭目友恵の顔へ、切断されて皮

を剥かれて串刺しにされたペニスを、ペンペンと当てて楽しみ始めた。

「ほら、愛する外道男子のチンポだよ？　ズルムケ赤ちんぽにされちゃってるけど！　あはははは！！」

「相変わらず下品だね美香ちゃんってば……」

冷めた目で見詰める明日香をよそに、友恵の両方の胸を揉みしだき始める美香。

「彼氏の解剖されてるとこ見ないの？　解剖学の勉強になるよ？」

「もう止めてあげてっ！　こんな酷いことして……ただで済むと思ってるのあなたたち……警察に捕まるわよ？　先生、助けてよぉ～。ぐす、ぐす……」

『つぷっ……ずずずずず』

「ひぎいっ！？」

友恵の肛門に人差し指をゆっくり捩じ込んでゆく美香に、奇声をあげて抵抗するが、それも虚しく根元まで突っ込まれ、グリングリン直腸を掻き回される。

「あ、あんっ！！　止めてよっ！！　富田さん……この……変た…

「…い……やだあっ！！」

「ウンコに当たったけど押し返してあげたからね？　あははクッサァ〜♪」

陰嚢中心部に埋まり込んだメスは、まっ縦に切り進んでゆく。

切り裂かれた部位から二つの真っ白な生の睾丸を掴み出して、指でピンピンと弾く莉央。

「生の睾丸を指で弾いたり握って感触を確かめたい人、並んでくれる？」

真っ赤な顔をしながらも半数近くの7人の女子たちが並んだ。

陰嚢からはみ出して無様にプランプランと揺れている生睾丸を、7人の女子たちは揉んだりつついたり弾いたりして楽しんだ。

麻酔が効いているとはいえ、まだ精管や神経の管は繋がっている状態なので、睾丸に何か刺激を与える度にビクンッ、ビクンッ、と少年の身体が反応する。

「お尻の穴に鉛筆突っ込みたい人いる？　きっとアナルバージンだと思うよ？」

莉央が振り向くと委員長の矢野弥生が恥ずかしそうに赤面しながらも手を挙げている。

「はは。弥生ちゃんが……はい、鉛筆どうぞ。アナル処女奪ってやって♪」

「……うん。こう？　かな？」

『つぷっ……ズプププ』

「はうおっ！？」

「ははは。何が〝はうおっ〟だよ情けない声だして……もう少し水平にして入れて。その角度だと直腸を突き破っちゃう。そうそう。その角度のまま……１０ｃｍ以上は入れないでね？　一番奥のＳ状結腸突き破っちゃうから」

莉央の説明を受けながら少年の肛門へ鉛筆を突き刺してゆく委員長の矢野弥生は顔中を真っ赤っかにしながら人生初の性的いじめを楽しんでいるようだった。

「グリグリ掻き回してみて。前立腺ってゆう部位が刺激されて気持ちよくなるはずだから……チンポはないけど射精だって出来るんだよ？」

「そ、そうなんだ。莉央ちゃん凄い何でも知ってるんだね？　やってみるよ」

芯を削ってない新品の鉛筆とはいえ、掻き回す角度によって直腸に激痛が走る。

星倉智樹はその度ビクンビクンと太股を痙攣させた。

ゆっくりと鉛筆を抜き、莉央に返す弥生。

「私には気持ちよくさせられなかったみたい……莉央ちゃんやってみて？」

「いいよ。一分以内にチンポ切断面の尿道の穴から白い液飛び出させてやるから他の女子たちもようく見ててね？」

弥生に掻き回されてウンコまみれになった鉛筆を再び莉央が差し込んでゆく。

「はううっ！？　んんっ……」

「チンポ切断しちゃってごめんね星倉くん。せめて人生最期の射精させたげるから……ほらほらほらあっ！」

『ぐぽっ！　ぐちゅちゅちゅちゅちゅっ！　くぷくぷくぷっ！！』

ありとあらゆる角度で直腸内を執拗に掻き回す莉央に、星倉智樹の全身がビクンビクンと反応する。

「ここ？　ここか？　智樹の前立腺は？　ほらほら」

「あ、あう。んおおおうっ。なんか変な感じ……き、気持ちいい……」

「莉央様、イカせて下さい……って言え！」

「はうう……んん……莉央さ……ま。イカせて……下さい」

超高速の動きで前立腺をピンポイントでグリングリン掻き回す莉央に、遂にクラスの女子たちが見守るなか、大量の白濁液を尿道の切り口から射出する男子児童であった。

「きゃっ！？　すっごーい……オチンチン切られてるのに射精できちゃうなんて……」

矢野弥生は目を丸くしてドクドクと流れ出る精液を眺めている。

他の女子たちも口や顔を両手で押さえながらも確実に少年の人生最期の射精を確認した。

「星倉くん、どうだった？　自分自身でするオナニーよりあたしの前立腺絞りのほうが気持ちいいでしょ？」

「うう。はい。俺、無茶苦茶気持ち良かった……」

莉央は少年の射精を確認して一気に肛門から鉛筆を引き抜くと、再びメスに持ち替える。
「さて、じゃあ完全に女の子になっちゃおうね？」
残っている神経の管、精管等も遂に莉央のメスによって切り離され、完全去勢が完遂した。
切り口が見事に縫合されてゆく男子児童の下腹部を見ながら、女子児童たちはかなり興奮して性器を濡らしている者もいた。
明日香が睾丸二つを持って美香がいじめている鞭目友恵の元へゆく。
「あなたが想った男の子の金玉だよ？　食べなさい」
「ひっ！？　いや、やだっ！！　許してっ！！」
美香にアナルを掻き回されながら明日香から遠ざかろうとする友恵だった。
アナルから指を引き抜いた美香が背後から両膝を抱えて大きく股を開かせる。

「上のお口が嫌みたいだから下のお口に飲ませてあげようよ明日香ちゃん♪」

「そだね。もう処女膜も失っちゃってることだし……子宮までぶち込んであげちゃおっか？」

「ひいいっ!?　止めて止めて止めてっ!!　明日香ちゃんお願いだから許して……何でもするからっ」

「ふうん。じゃあオマンコの奥の奥まで私たち皆に見えるよう思いっきり自分の指で開いてみて？」

「ぐすん、変な器具みたいなのでさっき散々開いて見られたのに……酷いよ……こう？」

『くぱあ〜』

美香に両足を大きく開かれ、自分の指でも全開に性器を開かされた体勢のまま、何本も糸を引きながらヒクヒクしている膣口。

一つずつ莉央が切り取った睾丸を、膣口から入れてゆく明日香。

「ひいっ!?　んはっ!?　やだあああっ!!」

「明日香ちゃん、これ使って！」

莉央からクスコを手渡され、鞭目友恵のリンチはトドメに向かう。

「ほら、飲み込みなさい……さっきと違って今回は金玉を子宮にぶち込んじゃうから……覚悟しなさいね？」

『くちゅ……ぬぷぷぷぷ』

「いやあああああっ！！　痛い痛い痛いいいいっ！！」

『ぼこおおおおっ！！！！』

「はぎいいいいいいっ！！！！」

明日香の握るクスコは奥の奥まで深く突き刺さり、二つの星倉智樹の睾丸は、見事に鞭目友恵の子宮に埋まり込んでしまう。

「帰りにでも大きな病院に行って取って貰わないと、子宮が腐っちゃうかもよ？」

莉央が冷たく笑いながら友恵にアドバイスをする。
意識を失いかけている鞭目友恵のクリトリスを思いっきり人差し指と親指で摘まんで前後左右に引っぱりまわす美香。

「こらこら！　寝るんじゃないっ。もう許してあげるから」

「美香ちゃんっ！　クリちゃん千切れちゃうよ？　そんなに引っ張ったら……もう。ほんっとに扱いが雑なんだから」

「じゃあ皆さん、これで二人のリンチタイムを終わりまーす！　矢野委員長さん、もう男子と坂本先生を呼んできてもいいよ。昼休みから始めてもう放課後かぁ……三時間か四時間は楽しんじゃったね」

重症の星倉智樹と、軽傷の鞭目友恵の二人は、担任の坂本先生の自家用車で東部中央病院に運ばれていった。

「莉央ちゃん、また坂本先生あたしたちに呆れてたよね？」

「平和が一番な先生だから……あれ？　美紅ちゃんいつの間にかいない……やることやったらサッと帰っちゃうんだ……」

「甲南女子中学の制服ってスカート短いから何回もパンツ見えちゃってたね？」

ポニーテールを軽く擦りながら、メガネっ子の明日香が恥ずかしそうに笑う。

校庭から帰ってきた男子児童たち全員に、床に付いてる血液や小便や大便を拭き取らせて机と椅子を元に戻させた。

何も知らない男子児童たちと、リンチの一部始終を見ていた女子児童たちは、それぞれ両親の待つ家庭へ帰って行くのであった。

女子小学生たちのイジメ（後書き）

二人の小学生児童のリンチや去勢を行った拷問処刑人たち。

その二人は数日間入院するはめに……。

星倉智樹は当然としても、女尊男卑のこの小学校では珍しい女子生徒である鞭目友恵の性的虐待私刑（リンチ）となってしまった……。

愛と裏切り（前書き）

人は短期間に何度も恋をすることがある。

恋多き保育士、皆川春奈の運命は……？

愛と裏切り

私は南西地方の“さくら保育園”に勤めている保育士、皆川春奈。２５歳独身で、彼氏いない歴２５年。

幼い頃から……とゆうか物心ついた頃からずっと太っていて、身長１６０ｃｍで体重は８０kgあるんだ。

お父さんもお母さんも太っていて、もう遺伝なんだなと思ってる。そのお父さんも太りすぎて糖尿病を患い、なかなか不摂生が治らず、人工透析から二年後に……去年失くなっちゃって、兄弟もいない私は一戸建ての二階建てに母と二人で暮らしているの。その母も末期の肝臓がんで、余命一年と言われてる。

不安で凄く怖いけど、親御さんたちから預かっている元気な子供たちのお世話が忙しく落ち込んでばかりもいられないんだ。

「ほらほら、じっとしてお弁当食べないと！　お箸を咥えたまま走らないいっ！」

保育園から歩いて半時間の公園にある桜の木の下で、お弁当を食べながら慌ただしく動き回る幼児たちを叱ってるところ。

幼児たちってかなり面倒見るの大変で、しょっちゅうイライラもさせられるけど……やっぱり可愛いな。

彼氏ができるものなら早く結婚して私にも子供が欲しい。
母が元気な内に、早く孫を見せてあげたいんだけどなぁ。

中山茂くん。
四歳の茂くんは私の一番のお気に入り。
保育士たるもの、どの幼児が好きで嫌いで……とかあってはダメなんだろうけどこの子は特別なの。

お父さんの中山忠彦さん。
私と同い年の25歳なんだけど、とっても魅力的で素敵なんだ。
決して男前って訳じゃないけど、みんなに優しくて私に対しても好意的に接してくれてる。

「こんにちは。お迎えご苦労様です」

「あ、どうもこんにちは皆川先生。今日も茂をありがとうございました！　お花見に行ってたんですよね今日は。茂は賢くできてましたか？」

「はい。とってもお利口さんでしたよ。きっとお父さんの教育が出来てらっしゃるのですね！」

「いえいえ……とんでもない。妻を事故で亡くしてからこの数年間、ホントに色々大変ですが、ワガママばかり言って私を困らせるのでしょっちゅう説教しちゃってますよ。あはは」

「そうなんですか？　毎日お利口さんなんですけど……でも少々ワンパクなくらいのほうが男の子は良いと思いますよ！」

私は多分恋をしている。
こんな太ってる身体で恋をしてしまうのも図々しいとか言われそうだけど……でも恋をしている。

「お母さん！　今日も中山さんって人と10分も話しちゃった。他の親御さんたちはとっくに帰っちゃってるのに！　私と茂くんと中山さんで話し続けちゃって……仲の良い富樫美智子先生からも、まるで家族のようだって言われたんだよ？　うふふ」

「そうなんだ。それは良かったね！　私はあんたの楽しそうで元気そうな姿を見てるだけで幸せだよ」

「………早く孫も見せてあげたいのにごめんねお母さん…」

「そんなこと気にしなくて良いよ！　子供は天からの授かり物だからね。その内あんたにも彼氏が出来て結婚して……自然にそうなっていくよきっと」

――――二年後。

27歳になった私。
半年前、たった一人の私の親である母がこの世を去った。
余命宣告よりは半年も長く生きててくれたお母さん。

涙が枯れるほど泣いたけど、今私は幸せ者なんだ。
ずっと想い続けていた中山忠彦さんから告白された私は、一年半前に無事結婚したんだ。
ほぼ一年間、私の母の介護も一緒によくしてくれた忠彦さん。
本当にありがとう。

茂くんも小学一年生になり、益々可愛く男前に育ってる。

平穏無事に続くかと思っていた新婚生活だったけど、ある出来事をきっかけに私の人生は大きく狂っていった。
更に一年後の28歳の誕生日を迎えた日、ある男性が私のことを好きになってくれた。
竹下勇斗さん23歳で、竹下聡くん四歳のお父さん。
凄く男前で、私の理想像である勇斗さんは、誕生日のその日に私に告白したんだ。

「旦那さんがいるのは分かっています。でも……中山先生のことを思えば居ても立ってても居られなくなって……しまいには息苦しくなっちゃう始末。もし旦那さんとなにかあれば僕と……結婚してくれませんか？　聡もあなたのことが大好きなんです」

旦那のことがあれだけ好きだったのに……。
醜く太っている私に対して誰も気にも止めてもくれない中、私を愛してくれた旦那……。
一緒に痩せよう！　と言ってくれて結婚してからたった半年で嘘

のように痩せることもできた。
今思えば旦那と一緒に頑張ったダイエットのお陰で、理想のタイプである竹下勇斗さんがこの度私にコクってくれたのかも……。
勝手とは思っていたんだけれど、どんどんと竹下勇斗さんのことを私自身も好きになってゆき、そのストレスは旦那である中山忠彦の息子、7歳になったばかりの中山茂向けられた。
「お母さん、痛いよ……許して……ごめんなさい」
「どうして小学生にもなってオネショをするの！？　後始末する私の身にもなりなさいっ！！」
「ごめんなさいごめんなさい……わーんわーん」
泣きわめく義理の息子である茂を、平手打ちで叩きまくってしまう私がいた。
「あんたなんか私の本当の息子でないんだからっ！　わかってるの！？」
『バシッ！　バシッ！』
容赦なく平手打ちの折檻をしてしまった。
一緒にダイエットまでしてくれた今の旦那の子供に対しても悪い

とは思っていた。
　思っていたけど……私の中の隠されていた性癖が目覚めてしまったの。

「茂っ！　服を全て脱いで素っ裸になりなさい！」

「い、嫌だよお母さんっ……恥ずかしいよ……」

　嫌がる義理の息子である茂を、力ずくで素っ裸にしてしまう私。
　お尻を平手打ちで何十回も打った。
　真っ赤に染まってゆく茂のお尻を見ていると、更に激しく苛めたくなり、皮かむりのオチンチンを、無理矢理に亀頭が全開に露出するまで引き剥いた。

「痛いいっ！！　やめてお母さんっ！！　痛いよおおっ！！」

「何が痛いの！？　汚い白いカスが沢山ついてるからキレイにしてあげるって言ってるの！」

　無理矢理剥かれた息子の茂のペニスは、充血して真っ赤になり、少し出血も見られた。
　赤く腫れ上がった小さな皮の引き剥かれたペニスを見ていると、舐めたくなる衝動を抑えきれなくなる私。

　義理の息子のオチンチンを雁首まで完全に引き剥いてから、鬼の

ようにむしゃぶりついて舐めまくってしまった。
更に肛門に人差し指を捩じ込み、執拗に掻き回したの。

「何をトロトロした液体出してるの？　変な液体をお母さんの口の中に出してるよね？」

私はそう罵りながら茂の透明のカウパー液を飲み込んだ。
記念すべき初の粘液垂れ流しだもんね。
そりゃ飲んじゃうよ。

「お、おいっ！？　何をしてるんだっ！？」

残業で夜中まで帰ってこないはずの旦那、中山忠彦が帰ってきたのには正直無茶苦茶驚いちゃった。
慌てて茂の肛門から指を引き抜いて笑って誤魔化したんだ。

「まさかお前……本当に最低だな。もう無理だ。別れよう」

「ほんとっ！？　別れてくれるんだっ！？」

「！？　なんだ？　振られて嬉しいのか？　……そうか……他に男が出来てたって訳か……？」

「ふんっ！　もうあなたには関係ないじゃん！　もうあんたなんかに……」

私たちはその後、真剣に話し合い、無事に離婚届けを提出したんだ。
もうその日の旦那は私に呆れきっていたのか、驚くほど落ち着いて冷静だったよ。

私の本当の理想の彼との入籍。
離婚してから１００数日は入籍出来ないけど、早めに市役所へ転入届けを出して竹下勇斗さんと聡くんとの三人暮らしが始まったの。
南西部は暖かい地方なので、一年中旅行客がくる人気のあるスポットがたくさんあるから、入籍できる日がくるまでも、三人で週末になる度遊びに行ったんだ。

ある日の週末、三人でレンタルしてきた映画を見ながらのんびりしている時間……私は竹下さんに聞いてみた。

「私のどこが一番好きなの？」

「どこって……やっぱりその可愛い顔かな？　俺って面食いだから」

「少し前の太ってる時の私だったら告白してないってこと？」

ブラックコーヒーをすすりながらおどけた表情でカップを置くと、私の目を見ながらこう言ったの。

「ブタは嫌いなんだよ！　絶対有り得ないなそれは……でもよく痩せて可愛くなれたよね？　今の君は俺の一番のタイプの女だよ！」

正直今の私を誉められて嬉しかった。

嬉しかったけど………。

太っている私でも好きになってくれた元の夫である中山忠彦のことを思い出している。

決して男前ではなかったけれど、とっても優しかったあの人を、私は裏切っちゃったんだ……。

さすがに多少の罪悪感を感じながらも幸せな日々は続いていった。

――半年後。

「うっ、ううっ。春奈さま……もっと叩いてください……」

「ほんと変態だねお前は！　ブタ以下だよね？　ほらあっ！」

『バシッ！　ビシッ！』

「あうっ！！　あはっ！！　もっと……もっと激しく叩いて……」

人間って深く付き合ってみなくちゃ分からない色々な性格とか性癖とかあるけれど……無事に入籍して夫婦になってからすぐに、変態色を醸し出してきた新しい夫である竹下勇斗さん。

勇斗さんが見付けた南西地方の繁華街にあるＳＭ部屋付きのホテルで、今日もＳＭプレイを楽しんでいる私たち。
私たちってていっても、私自身Ｓっ気のない純粋なＭなのに……。
大好きな勇斗さんがＭだったから仕方なくＳの演技をするのも大変だよ全く。

「春奈、今回は浣腸プレイもやってくれないか？」

「え？　そんなことまで？　私もたまには責めて欲しいんだけど？」

「分かった！　三回目になる次回は俺がＳになって責めてやるから今回も頼むよ？」

「約束よ？　じゃあ雰囲気高めるためにこの黒い目隠しを着けてもらうわね？　ほらっ、次はお尻を突き上げて両足を開きなさいっ！」

「はいっ！　春奈さまっ！　こうですか？」

「もっと高く突き上げろっ！　ケツの穴が丸見えになるように大きく開いてて！！」

「はいっ！　春奈さまっ。私のケツマンコにお仕置きしてくださいっ！」

Ｓっ気のない私も大好きな旦那を性的に責めてる内に、少しアソコが濡れて来ちゃったかも……。

痛っ？
あれ？
なんかチクッとしたと思ったけど？
ん？
意識が遠のいてゆく……。
どうしたんだろ私……。
浣腸し終わって勇斗さんのウンコを洗面器で受けなきゃならないのに……その後アナルバイブを突っ込んで……。
――――クラッ……がくんっ。……すーすー。

「ううっ、春奈さまっ！　もう我慢できないっ！　出る……出ちゃうっ！」
「えへっ。いいよ。思いっきり出しなさい」
『ブリブリブリブリブリブリブリィッ！！』
「はぁ。はぁ。？？　春奈？　なんか声がおかしくない？」
「えへっ。おかしくないよ！　ちょっと女子高生っぽい声出した方があなたが興奮するかと思ってね！」
「そ、そうなんだ。凄い若い声出せるんだね春奈は……その調子で

もっと俺を責めてくれっ！」

「えへっ。いいよぉ。今夜はお前を去勢しちゃうから」

「去勢？　ははは。言葉責めだな？　なんか可愛い女性に去勢するとか言われたら変に興奮するよ！」

数十分間に渡り、男の尻を平手で打ち付ける音が響き渡るＳＭルーム付きのラブホテル。

「あっ、あはっ。もう止めて下さい春奈さま……お尻の皮が破れそうなくらい痛いです……」

『バシッ！　バシッ！　バチイイインッ！！！！』

「がはあっ！？　痛いっ！！」

「何を言ってるのかな？　これからが本番なんだよお尻叩きはね……」

物凄く激しい音を響かせて、止めるどころか弱めるどころか、どんどんと強く激しく打ち付けるお尻への平手打ちに、竹下勇斗は本気で怒り出した。

「痛いって！！　マジで痛いからもう叩くのをやめろ春奈っ！！本気で怒るぞっ！？」

「両手に手錠掛けられて素っ裸でお尻突き上げながら本気で怒られてもねぇ。なーんも迫力ないよ？　えへっ♪」

「さっきから、えへっ。えへっ。って……まさかお前、春奈じゃないんではっ！？　声もさっきから何かおかしいし……おいっ！　何者だお前っ！？」

『ズププ……』

「ひいっ！？　痛たたた！？」

２０ｃｍはあろうかとゆう二十歳の男のペニスが竹下勇斗の肛門へゆっくりと突き入れられてゆく。

やがて根元まで差し込まれ、勇斗の肛門から激しく流血し始めた。

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「ぐわあああああっ！！　ぎえええええっ！！」

「菅野京介さん……ほんと立派なイチモツ持ってるんだね？　えへっ」

しゃがみ込んで目を細めて頬杖をつきながら、竹下勇斗の肛門を激しく犯す京介のペニスに見入ってしまう南西女子高校一年生の拷問処刑人、坂本江美。

あまりの激痛にペニスを引き抜こうとする勇斗の臀部を両手で鷲掴みにして引き寄せる京介。

「オラオラ、動くと直腸破れて更に激痛味わうことになるぜっ！？」

『ぷすっ。ちゅううううう』

太股に筋肉注射を打ち込む江美。

「少し痛みが麻痺する薬と、まともに動けなくなる麻酔注射打ったから……もう騒いでも無駄だよ？　えへへっ♪」

四つん這い状態から両手の力が抜けてしまい、ペタンと胸から床に着いてしまう勇斗。

その顔を平手打ちで何度も往復ビンタする坂本江美。
このビンタは強烈で、両頬はみるみる内に真っ赤になり、鼻血が激しく噴き出し、歯を食い縛り必死に堪えようとする勇斗だった。

夥しい量の精液を勇斗の直腸内に吐き出すと、さっさとズボンを履く菅野京介だった。

「菅野さんの役目はこれでおしまい。隣の部屋に本日の拷問処刑人たちの寝室とってるから先に休んでてくださいね？」

「あ、ああ。ありがとう！　毎回毎回殺すところまで出来なくてごめん……」

「えへっ。いいのいいの。ってゆうか今回男は拷問刑だけみたいだよ。あとは任せといて。妹さんの莉央ちゃんたち残酷トリオもいるし、私もいるから……じゃあ夜中にでも起きてたら一杯やりましょね？」

「一杯って……坂本さんはまだ高校一年なんでは？」

「えへへ♪　最近では小学生でもビールくらい飲んでますよ？　お気遣いなく」

「分かった。じゃあよろしく！　莉央たちは寝てる女をやるのか？」

睡眠薬を打たれ、爆睡している皆川春奈を裸に剥きながら、菅野莉央と富田美香と結城明日香の小学生三人組に問い掛ける菅野京介。

「うん。この夫婦はお互いの惨めな姿を見ながら逝ってもらうことにしかたったけど……そこまでの罪じゃないので夫は睾丸去勢。妻はダルマにして完全去勢なの。お兄ちゃんも見ていきなよ？」

「京介さんもレベルアップするかもよ？」

「あはは！　明日香ちゃんもそう言ってくれてるし……お言葉に甘えたらどうですか？」

三人から返事を貰うが苦笑いを浮かべながらそそくさと部屋をでてゆく京介。

「ははは。やはり殺さなくても血の海になることに違いはなさそうだからお言葉に甘えずお先に失礼するよ。後はよろしく頼むぜ皆様方……」

そう言いながらドアが閉まり、拷問処刑人である菅野京介は男性の肛門を犯したのみで部屋を去っていった。

「処刑執行か強レベルの拷問執行しないと遥かにお給料も安くなるのにね？　莉央ちゃん」

裸にしている皆川春奈に目線を戻しながらポニーテールの明日香が莉央に問い掛ける。

「そうなんだよね。お兄ちゃんの場合、半ば強制的に拷問処刑人にならされたから……とにかく殺しちゃうことやバラバラにしちゃうのは恐いんでしょ」

「見た目はヤンキーなのに意外だよね？　あははははは♪」

美香は笑いながら最後の一枚であるパンツを脱がせた。

「きったなぃなぁ。シミだらけじゃんコイツのパンツ……Mの旦那様にはお似合いのエッチなシミ付きだね……」

夫の血塗れの顔に頭から被せる美香。

ＳＭプレイ用の分娩台に、莉央たち三人で素っ裸にさせた皆川春奈を運び、両足を大きく開いた体勢で両手両足を拘束した。

「きつく完全に拘束してるから、どんな激痛でも動けない。だから特別に麻酔類を一切打たないで拷問刑を執行しようと思う」

莉央が大きく育った左右のおっぱいを揉みしだきながら美香と明日香に確認する。

「春奈さん……あなたの拷問刑を執行する菅野と富田と結城です。よろしくね。ここまでするほどの罪じゃないと思うかもしれないけど……太ったあなたでも愛してくれた元旦那さん、電車に飛び込んで自殺しちゃったのね……」

麻酔でスヤスヤ寝てる春奈に語りかけながら指の骨をバキバキと鳴らし始める。

「え？　そうだったの！？　無茶苦茶可哀想じゃんそれ……こいつが性的虐待してた幼稚園の息子さんはどうなったの？」

明日香が眉を潜めて莉央に問い掛けた。

「ロープで絞殺して風呂場に放置して死にに行ったみたいよ」

「あちゃあ……こんなブタでも愛してくれるような優しい人を裏切るわ息子さんを性的虐待するわ……痩せられたからって、すぐに理想の男に乗り換えるなんて最低じゃん！　ほんとわざとじゃないフリして処刑しちゃわない？」

「それはダメなの美香ちゃん。あくまでも結果的にそうなっただけでこいつは誰も殺してないから……」

美香の意見も尤もだがそれを遮った莉央は、皆川春奈の左乳房を思いっきり平手打ちする。
更に激しく往復ビンタのようにパンパンと左の胸を高速で打ち付ける。

「んん……い、痛いっ！？」

「お目覚めですか皆川春奈さん？　今日はあなたに地獄のような激痛を与えます。それと……いろんなとこ解剖させてもらうからね？」

「え？　激痛と解剖？　お嬢ちゃんたち誰なの？　え？　え？」

『パンパンパンパンパンパンパンパンッ！！』

「いたたたたたたたあっ！？　やめて痛いって！！」

「私も参加させてもらおうかな……キレイな顔にするか……」

結城明日香は怒ったように叫ぶ女の顔面へ往復ビンタを開始する。

「いやっ！？　はぎいッ！！　ひぐうっ！？」

「あははははっ！　お顔と左のおっぱいがみるみる内に真っ赤っ赤になっていってるぅ♪　じゃああたしは開かれたマンコに平手打ちしちゃおっかぁ♪」

『スパァァンッ！！』

「んぎいっ！？　ひいい……そんなとこまで叩かないでっ！！　いやあああっ！！」

拷問処刑人の小学生三人の平手打ちが延々と続いてゆく中、旦那の竹下勇斗は女子高生の坂本江美に殴る蹴るの激しい暴行を受けていた。

『ドカッ！！　ボコッ！！　ガンッ！！　バキバキッ！！』

「ぐぎゃっ！！　んぐっ！！　痛いっ！！　いきなり現れて襲いかかってきて……一体何者なんだお前たちは！？　警察呼ぶぞっ！？」

「えへっ。私たちのトップは警察より上なんだけどぉ。呼んでも相手にされないけど呼んでみる？」

「な、何だとっ！？　おえええええっ！！」

高校一年生の江美から腹部に受けた一撃が強烈で、堪らず戻してしまう竹下勇斗。

「素っ裸で奥さんから責められて喜んでたじゃないですかぁ？　えへへ。女子高生にやられたらもっと嬉しいハズだよねっ？」

「お前のは痛すぎんだよっ！！　加減しらないのはプレイじゃなくてただの暴力だっ！！　痛たたた……おえっ。おええっ！！」

激しく嘔吐する竹下勇斗の背後から右腕を首へ回し、強く締め上げる江美。

息が止まるほど締め上げられたため、軽く窒息状態となり顔が赤く染まってゆく。

同時にペニスが一気に勃起してきた。

「えへへ。男って死の直前に子孫残すために無意識に勃起するんだよねぇ～？　苦痛に歪む顔に比例していきり勃ってゆくチンポ……なんか哀れだなぁ。えへへっ♪」

『スコスコスコスコスコッ！！』

「ううう……はっ。はううううっ……」

両足を背後から男の陰部へ回しこみ、足の裏で高速の足コキを始める江美。

「ほらほらほら、真っ赤な顔したまんま真っ白な液出してくれる？」

「うごっ、はうっ、ふんぎいいいいっ！！」

死ぬほどの息苦しさを味わいながら激しく感じる股間に、竹下勇斗はついに大量の精液を吐き出した。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……」

「エッチな白濁液いっぱい出しちゃったね？　えへへ♪」

「の、喉が痛い……死ぬかと思った……ぜぇ、ぜぇ。」

トロトロと糸を引きながら尿道に残った液も床に垂れ流す勇斗の

髪の毛をガツッと掴み、一気に立ち上がらせる江美。

「両手を頭の上に乗せて足を開いてくれる？」

「な、何をする気だ……はぁ、はぁ。」

「2回だけお前に膝を食らわせる」

「ん？　どうゆう意味だ？」

お尻の肉を思いっきり数発平手打ちしながら少し怒り気味に催促する江美に、仕方なく少しずつ大きく股を開いてゆく竹下勇斗。

『ズドンッ！！……ぐちゃっ！！』

「がはあああっ！？」

『ズゴッ！！……ぶちゅっ！！』

「ぎえええええええっ！！」

連発で2回繰り出された女子高生の強烈な膝蹴りは、まだまだ若い働き盛りの男性の睾丸を確実に2つ潰した。

ゴロゴロと転がりながら絶叫をあげながらもがき苦しむ勇斗の尿道口からは、精液と共に真っ赤な血液もドクドクと流れ落ちている。

潰された睾丸からの出血だった。

腹を抱えて転がり回る姿を見て爆笑する坂本江美。
その内痙攣を始めた竹下勇斗に気付き、迅速に痛み止めと麻酔を打ちに来る菅野莉央。
鈍く光るメスを取り出すと、いつものように手際よく陰嚢を中央から切開し、破壊された睾丸を2つ取り出してから縫合してゆく。

「いやんっ。生の金玉って、ぐちゃぐちゃしてて潰したプリンみたいだね〜♪」

女子高校一年生で、父親は闇の格闘技の元世界王者である坂本江美は、ニヤニヤしながらキンタマ袋が縫合されてゆく過程を楽しんでいた。
江美は、睾丸を失った竹下勇斗に馬乗りになって顔面を数発殴り叩き起こすと、思いっきり高く右手を振りかぶった。

「チンポ残していただいてありがとうございますって言ってみ？」

「んぐ？　ううう……なんのことだ……？？」

麻酔が効いていて今の現状が理解できていない勇斗に、まともに振り下ろした拳が入る。
前歯が二本抜け落ち、喉に落ちると慌てて横を向いて飲み込まな

いように吐き出す。

「立ちションできる体で済んで良かったよね～？　えへっ♪」

ゆっくり立ち上がる江美をぼうっと見上げながらもう一度眠りにつく竹下勇斗だった。

江美は莉央たち小学生トリオに笑顔で手を振り、隣室の菅野京介が休んでいる部屋へ向かう。

「じゃねー！　のちほど宜しく～♪」

皆川春奈の乳房への平手打ちは莉央が戻ってきてからもまだまだ続いていた。

紫色に腫れ上がった両方の乳房は、所々皮が避けて出血している。

「痛い痛い痛いっ！！　止めてお願いっ！！」

莉央は新兵器を取り出しながら美香と明日香に自慢する。

「どう？　凄いエゲツないでしょこの器具……」

握りやすく細くしてある柄の部分を除いても、全長３０ｃｍ、直径１０ｃｍはあろうかとゆう銀色に鈍く光る太短い鉄パイプのような〝ソレ〟は、スイッチを入れると内側の空洞部分から円形の刃が飛び出し、子宮を挟るように切り裂き、空洞の筒の中に子宮を納めて抜き取る……とゆう、菅野莉央考案の〝子宮抉り取り器〟だった。

「この回転刃が子宮口を傷つけないで子宮の外側を切り裂いていって、丸ごとキレイなまま子宮を抜き取る……といった拷問器具なんだ」

「えっぐぅ……無茶苦茶痛そうだねソレ……」

富田美香は青ざめて冷や汗を流している。

結城明日香は生唾を飲み込み、言葉が出てこない……。

だがそっと春奈の顔を覗き込むと、恐ろしく冷たい表情で微笑んだ。

この女にはお似合いだと言わんばかりに……。

「ひいっ!?　止めてっ!!　そんな恐ろしい器具を私に入れないでっ!!」

「皆川春奈。今からあなたの子宮をこの器具で抉り取ります」

莉央が静かに睨み付けながら、ぱっくり開かれた春奈のオマンコに鈍く光る鋼鉄製の器具の先端を近付ける。

直径１０ｃｍはあろうかとゆう太さの先端部分を押し当て、ゆっくり押し開きながら膣内へめり込んでゆく器具。

『ぐぐっ……くちゅっ！　ぬぽぽぽっ……』

「ひっ！？　冷たいっ！！　やあっ！？　痛いっ……んんん」

「ここでGスポットを一秒間に１０回転する丸みのある回転部分が高速刺激♪」

『カチッ！　ウイイイイイイインッ！！』

「あっはああああああっ！？　やめてやめてやめてえええっ！！」

『ぐちゅちゅちゅちゅちゅちゅちゅううううっ！！』

「イクイクイクイクイクイクイクゥッ！！……ひゃあああああああっ！！」

あまりの気持ち良さに女子児童三人が見守るなか、肛門をヒクヒクさせながら潮を噴かされる春奈だった。

サッと横に身を寄せて潮噴きをかわすと、もう一度器具の柄を強く握り締め直す莉央。

少しずつ膣道を限界まで大きく押し開きながら深くめり込んでいき、ついに先端が子宮口まで辿り着いた。

「気持ち良かったでしょ？　高速回転部分でイカされた御気分は？」

「はぁ、はぁ、気持ち良かった……けどアソコが裂けちゃうほど痛い……太すぎて痛い……お願いコレを抜いて！　もう許してお嬢ちゃん……子宮を抉り取るとか絶対私死んじゃうから……やめて」

「直ぐにお腹開いて消毒してからまた縫合したげるよ。心配ないない。あなたみたいな外道女のガキなんてこの世に産まれたら最悪じゃん？　だからその可能性をゼロにしたげるんだあたしたちが……」

『カチッ。ウイイイイインッ……』

静かに回転し始める先端部分……ゆっくり内側から鋭い回転刃が飛び出してくる。

子宮口の周りを子宮ごとくり貫くように切り刻み始めた。

あまりの激痛に白目を剥いて絶叫するが、莉央の器具はどんどん奥までめり込んでゆき、ついに子宮をすっぽり筒の中に飲み込んだ。

そのままゆっくり引き抜くと、見事にくり貫かれたプルンプルンの白い肉塊を包み込んだ器具が、血塗れ状態で抜き取られた。

「この中に……抉り取られた子宮が入ってるの」

「うっそー？　すっごいわね……」

「莉央ちゃん早く中身見せて～♪」

明日香と美香がワクワクする中、莉央は器具の先端を開き、逆さに向けた。

『びちゃっ！！』

見事に抉り取られた子宮が床の上に落ちる。

「醜い肉塊だね？　踏み潰してミンチにしてあげるねオバサン……」

そう言いながら結城明日香の足の裏でぐちゃぐちゃに踏み潰された皆川春奈の子宮は、白い膜みたいに見える擦り潰された肉片だけが床に残された。

「こんなにキレイに抉り出せるんだっ！？　今度あたしにもやらせてね莉央ちゃん♪」

美香ははしゃぎながら床に擦り潰された白い肉片を眺める。

「さて次は……その紫色に変色した汚いおっぱいを始末しようね？おばさん……」

泣きじゃくる春奈を気にも止めず、明日香は右側の乳房の下へサバイバルナイフをそっと入れ込み、一気に引き抜いた。

『スパッ！！……ズルズル……べちゃっ！！』

「ぎゃああああっ！！」

見事に右乳房は切断され、ズルズル滑りながら床へ落ちた。
かなり勢い良く血が流れ落ちているが、そのまま左側の乳房も一気に切断。
同じく床に落ちる。

「明日香ちゃん凄い気迫だね？　あたしもこんなカスなメスブタには容赦しないんだからっ♪　さってと。汚いおっぱいも無くなったし……今度は両手いこうか？」

美香は嘲るように笑いながら、チェーンソーのエンジンをかける。

「いだああああいっ！！　んぎゃあああああっ！！」

麻酔なしで子宮と両方の乳房を切り取られた皆川春奈は狂ったように絶叫を続けている。
チェーンソーの恐怖を感じている場合ではなかった。
そのまま美香は、右手を肘の真上から……左手も同じく……両腕を切り落とした。

「もうどこが痛くて叫んでるのか分かんないよオバサン？　あはは♪　次大きく開いたまま固定されている両脚いくから。これで分娩台から解放されるわよ？　良かったね♪」

美香のチェーンソーは躊躇うことなく膝の真上から2つの脚を切り落とした。

台から転げ落ちてあらゆる方向へ血飛沫を飛ばすダルマ女に、血止めと、動けなくなる麻酔注射を打つ莉央。

「痛いでしょ？　あなたには最後まで痛み止めは打ってあげないから……もがき苦しんで激痛を堪能しなさい」

「があああああっ！！　ぐわあはあああああっ！！」

もう絶叫をあげるしかない春奈だったが、痛みは感じられるのに身体が動かなくなってゆく……。

莉央と美香が四つん這いにさせたまま固定させると、日本刀を持った明日香は静かに近付き、女のお尻を反対の手で叩きまくる。

激しく首を振りながら泣き叫び続けるが、明日香の激しいお尻叩きはますますエスカレートしてゆき、お尻も紫色に変色して、所々から流血し始めた。

実際は四肢切断と子宮を抉り出された激痛で、明日香のお尻叩き

による痛みなど、眼中にない皆川春奈であった。

「これだけ子供みたいに泣き叫ばれたら余計苛めたくて興奮してくるね？」

メガネを人差し指の第二関節でちょこんと上に押し戻すと、肛門に日本刀の先端を押し当てる。

「おばさん……ＳＭプレイでは定番のアナル責めだよ？　鋭利なモノを思いっきり突っ込んであげるからね？　“イク”前に逝っちゃったらゴメンね……」

「明日香ちゃん、そこ……やっちゃうんだ？」

「あたしがやりたかったのにぃ！」

大好きなアナル責めを明日香に取られた美香は、頬を膨らませて拗ねてみる。

「ほうら、究極のＳＭプレイの始まりだよ？　下のお口、それも後ろの汚い方のお口から飲み込みなさい」

『ずず……ずぼぼぼっ……ぼちゅっ！！』

「ふんぎゃあああっ！？　死ぬうううっ！！」

一気に２０ｃｍは突き刺さった明日香の日本刀は、皆川春奈の直腸、Ｓ状結腸を突き破った。

「ごめーん♪　力み過ぎちゃったかな？」

「あれ？　これって……明日香ちゃんトドメさしにいってない莉央ちゃん？　死んじゃわないのかな？　このおばさん……」

「あらあら……そこ突き破っちゃったらもう手遅れだね？　拷問だけのつもりが事故も起きちゃうものだよね……特殊任務省から怒られるのはあたしなんだけどなぁ……」

「ゴメンね莉央ちゃん。拷問のやり過ぎで、たまたま死亡……とゆうことで……えいっ！！」

『ずぼぼぼぼ！！　めりめりっ！！　バリバリバリバリバリッ！！』

『ふんぎゃあああああああっ！？』

更に奥深く明日香の日本刀は女の肛門へ突き刺さってゆく……。

直腸、Ｓ状結腸、小腸をバリバリと突き破った鋭い切っ先は、既に皆川春奈へ致命傷を追わせている。

「ふんぎぃいっ！！　死ぬうっ！！　ごぼっ！！……死ぬううっ

！！」

「ごめんね皆川春奈。あなたは明日香ちゃんにとって、最も嫌いなタイプみたいだね……」

胃まで突き刺さった日本刀と肛門の隙間からは激しく血が噴き出す。

全身をびくんびくんと激しく痙攣させる春奈。

手足のないダルマ女が血塗れでもがき苦しみながら肛門を串刺しにされて痙攣している。
その姿を見ながら莉央と美香は少しアソコを濡らしていた。

「あれあれ？　短い手足蠢かせてそんなに激しく痙攣しちゃって……もう逝かせて欲しいのねぇ？　任せてっ。えいっ！！」

『ドカッ！！　ばちゅうっ！！』

「ごはあっ！？……ごぼぼぼぼぉっ……んぎぎぎぎ」

柄の部分を思いっきり足の裏で蹴りこむ明日香。
切っ先は口から出ずに、喉から突き出した。

「明日香ちゃんってば怒り任せに蹴り込んじゃったから変な所から飛び出ちゃったじゃん……よいしょ」

美香は日本刀を一度２０ｃｍほど引き抜いて、左手で強引に女の頭を下げさせてからもう一度差し込む。
今度は見事に口から切っ先が飛び出した。
ビクンビクン痙攣しながらまだ息がある皆川春奈だったが、莉央が小型爆弾を、子宮を抉り取られて血塗れの性器から膣内へ差し込む。

「もう子宮はない空洞化したお腹の中だけど……大腸も小腸も卵巣も……ぐっちゃぐちゃに飛び出させてあげるから。ヌメヌメしたエッチな大腸や小腸を撒き散らしなさいね？」

一斉に離れる三人。

『ドオンッ！！……びちゃっ、びちゃちゃちゃちゃちゃっ！！』

「ぴぎいっ！？……はが、はが、はがぁ……ごぼっ。がくんっ……」

顔まで痙攣させて血の泡を吐きながらついに絶命することを許された皆川春奈。
おへそから下の下半身は見事なまでにバラバラに吹き飛び、辺りは肉片と内臓まみれの凄惨な地獄絵図だった。

胸まで切り取られて串刺しにされた上、下半身を吹っ飛ばされた哀れなダルマ女の遺体を足で数回蹴り転がす莉央。

「腸から湯気が立ち上ってる……身体から飛び出したてのホカホカの内臓だね。何かエッチだわ。あれれ？　日本刀が大便まみれね……くっさぁ……」

「ごめんね莉央ちゃん。こいつだけはどうしても殺したかったの」

「いいよ。長官にはあたしから詫び入れとくから。こんなメス豚なんて、ダルマ女でも生きてる価値ないとあたしも思ってたんだ」

「すっごーい！　腸から湯気だけじゃなく煙まで出てる……小型爆弾ってコワッ……ウンコいっぱい詰まってる糞ウインナーって感じ♪」

おどけた表情で飛び出した大腸を握ってしごいて大便を絞り出して遊ぶ美香。

「お兄ちゃんと坂本江美さんが待つ本日お泊まりする隣室へ移動しましょ。朝までには特殊部隊の処理班が遺体は片付けてくれるから……金玉のない面食い野郎も病院へ搬送してくれるし」

「うん。お疲れ様」

「は～い。あたし小腹すいちゃったよ……何か食事頼めるのかなぁ？」

愛と裏切り（後書き）

拷問と処刑を終え、隣室へ移動した莉央たち三人。

酔っ払った坂本江美が菅野京介の膝の上で寝ている姿……。テーブルの上に置いた自分の両腕を枕がわりに、授業中居眠りをするような体勢で京介自身も爆睡中。

結城明日香の機嫌はやはり治らなかった……。

「美香ちゃん……明日香ちゃんの気持ちを考慮して今晩は別々の布団で眠りましょ……」

「そんなあ……久しぶりに莉央ちゃんとエッチできると思ったのにい～。ふえぇぇ～ん」

それぞれの想いと共に立ち尽くす小学六年生の女子児童……莉央たち三人の前で、女子高生とヘタレな青年のイビキがこだますラブホテルの一室であった……。

少年少女の悲劇～強制的売春～　（前編）（前書き）

売春に買春。

強制と同意。

性犯罪にも色々あるが、今回の被害者はどんな事件に巻き込まれるのだろうか？

少年少女の悲劇～強制的売春～　（前編）

東北地方の最北端にある海に面する田舎町である東北美波町。
築４０年の２ＤＫのマンションに住む４０歳の中年男がいた。
名取繁樹。
半年前に妻を病気で亡くし、男手一つで１４歳の娘、美優と１０歳の息子、浩志を育てているが、仕事である食品工場が大規模なリストラを行い、今では子供二人を抱えてのプー太郎であった。

職業安定所に通うもこれといった仕事は見付からず、職員の冷たい対応にもかなりイライラが募り、どんどんストレスもたまっていった。
更に半年後……名取繁樹は人としての道を踏み外してしまうこととなる。

「おい美優、わかってるな？　クラスでも一番大人しそうな子を選ぶんだぞ？」
「うん。思い当たる子が一人いるから。でも出来るだけ酷いことはしないであげてね？」
「ああ。それは客にも伝えておく」

――――土曜日。東北地方の海側にある名取美優の通う美波中学校。

同じクラスの二年一組の生徒である北野綾子は、人と話すのが小さな頃から苦手で、いつも休憩時間は一人で小説を読んだりして過ごしていた。

美優も仲良しメンバーから厭われるのを警戒して、あまり近寄らないようにしていたが、今回の父親との作戦のターゲットは北野綾子、その人である。

「北野さん、この一組で一緒になってから一度も話したことないよね？」

「え？　私？」

誰からも話しかけられない北野綾子は、本当に自分に話しかけてくれてるの？　と確認するかのように名取美優の目を見詰め返した。

「実は前から仲良くしたいと思ってたんだ。ショートカットが可愛いし良く似合ってるよ？」

「そ、そんなことないよ！　あ、ありがとう」

小学生の頃から誰かと仲良くしては裏切られ、ある種の人間恐怖

症になっていた綾子は、警戒しながらも美優に話しかけられたことに対して恥ずかしく、嬉しくも思っていたので、思わず赤面してしまう。

「今晩お父さん出張で帰ってこないの。お母さんも死んじゃったし弟と二人きりだから遊びに来てよ」

「え？　今までまともに話したこともないんだよ？　どうしていきなり……」

「だから北野さんと仲良くしたいなぁって思ってきたの！　理由なんていらないでしょ？　友達になることに」

しばらく俯いて考えていたが、ゆっくり顔をあげて照れくさく答える北野綾子。

「うん。明日は日曜で学校も休みだし……私で良ければお邪魔させてもらいます」

「あはは。何で敬語なの？　じゃあ北野さんの両親には電話しといてね？　朝帰りになっても心配しないで……って！」

「うん！　両親以外とゆっくり会うなんて超久し振りだからワクワクしてきちゃった」

「私も。じゃあ放課後一緒に帰ろうね。お風呂も沸かすから一緒に入ろ」

「ええっ？　何か恥ずかしいなぁそれって……」

名取美優の親友たちの制止も振り切り、いつも孤独な北野綾子と仲良く話しながら帰宅する。

「ただいまー」

「お帰りおねーちゃんっ！」

弟の名取浩志が奥の部屋から駆け出してきて姉を迎える。

「可愛いっ！　お名前何て言うの？　私はお姉ちゃんのクラスメイトの北野綾子だよ。こんにちは。」

「こんにちは……僕は浩志」

「浩志くん。いい名前ね？　今日はお邪魔させてもらうね？」

「うん。汚い部屋だけど上がって」

「こら浩志！　何を偉そうに私たちのマンションけなしてるの！？」

「がはははは っ！」

一人爆笑しながらダイニングキッチンへ逃げてゆく小学四年生の弟だった。

浩志と三人でご飯を食べて、結局シャワーは別々に浴びて、パイナップルの缶詰を食べながら雑談を続ける二人。

時間も遅いので泊まっていくよう説得された北野綾子は美優の部屋である一番奥の部屋に移動する。

一つ手前の部屋が父親と弟の寝ている部屋で、玄関口がダイニングキッチンとゆう間取りの２ＤＫマンションであった。

「今日は楽しかったね綾子ちゃん」

「うん！　声かけてくれてありがと。凄く嬉しかったよ。これからも仲良くしてね美優ちゃん？」

食事をしながら雑談している時に、お互い下の名前で呼び会う事を決めた二人は、それを実行しながら仲を深めたようにみえた……。

真夜中午前一時…………。

あまりの眩しさに目を覚ます北野綾子。

二人の中年男性がニヤニヤしながら寝ている自分を見下ろしているのがうっすらと霞みながらも見えてきた。

「!？　ん？　あれ？　美優ちゃん？？」

隣で寝ていたハズの名取美優の姿はなく、不思議そうにキョロキョロするだけの挙動を見せる。

「マジっすか名取さん!？　こいつ、ほんまものの女子中学生じゃないっすか!？」

「お客さんに嘘は言わねぇよ。きっちり五万頂いたんだから約束通り三時までの二時間は好きにしていいぜ？」

インターネットでさりげなくロリコン客を募り、足がつかないように直接の連絡を取り会い、中学生や小学生好きのお客として招待していた名取美優の父親の繁樹であった。

五万円を無造作にポケットに詰め込みながら襖を閉めようとする傍らに、申し訳無さそうに自分を見詰める美優の姿を確認した綾子。

にやけながら裸になってゆく見知らぬ中年男と二人きりにされた状況のなか、だんだんと自分の置かれた立場が分かってきた。

「な、なにしてるんですかっ!？　止めてくださいっ!」

「まだ服を脱いでるだけだぜ？　お嬢ちゃん……ヒヒヒ」

「た、助けて美優ちゃんっ！！　そこにいるんでしょっ！？　襖を開けてよっ！！」

すべての服を脱ぎ終わって素っ裸になった白髪混じりで角刈りの中年男、長谷川純也３８歳は、北野綾子の掛け布団を引き剥がし、ピンク色の可愛いパジャマ姿の女子中学生に思いっきり抱きついた。

「キャアアアアッ！！　やめてええっ！！」

『バシッ！！』

素っ裸でいきなり抱きついてきた上に、強引にキスまでしようとした長谷川に思わずビンタを食らわせる綾子。

「やりやがったなこのクソガキめっ！！」

抵抗されたら暴力も認めるとゆうお墨付きをもらっていた長谷川は、綾子の頬を思いっきり殴り付ける。

平手打ちからエスカレートして拳を使ってまで顔面を数回殴り付けた。

鼻血をドクドク流しながら両手で顔を押さえて泣きじゃくる少女のパジャマを、ズボンから脱がせ始める。

顔面のあまりの激痛に、パジャマを押さえるどころではなかった綾子はほんの数秒でズボンとパンツを脱がされた。

「ひっひっひっ！！　ちゅ、中学生のマンコ……すっげぇ♪」

『くぱぁ〜』

白色のＬＥＤが点いている明るい部屋で、マトモに陰部を見られることだけでも恥ずかしいのに、初めて会った中年男に……しかも処女のオマンコをパックリ開いて、膣の奥まで覗かれている。

慌てて局部を左右に押し開く手を退かそうと両手で中年男の手を掴むが、またもや顔面を拳で強打され、遂にボコボコに顔面を腫らした少女は、男になすがままにされてゆくのだった……。

「わーん、わーん。ぐすぐす。わーん、わーん」

泣き続ける１４歳の少女の性器を貪りつくように舐めまくる長谷川。

「くっさ。このマンカス臭いのがまたたまらんのだよなぁ♪　処女の証明だぜ……ペチャクチャ……ピチャッ、ピチャッ……」

卑猥な音を立てながら半時間ほど舐め続ける。

大陰唇から小陰唇、クリトリス、尿道……隈無く舐め尽くすと、舌を深く突き入れて、膣内までもぐちゅぐちゅと舐めまくるロリコン中年男であった。

人生で初めての陰部の変な感覚を体感した中学二年生の少女は、気持ちいいけど気持ち悪い……何とも言い現せられない入り雑じったカオスな感覚を覚えて震えていた。

そのまま両足首を掴んで左右に押し開きながら上へ曲げてゆき、マングり返し状態にさせると、いきり立ったペニスを自分の唾でべチャベチャになっている綾子の性器へゆっくりと捩じ込んでいった。

『ずぷっ。ずずず……』

「ひっ！？　やめてっ！！」

「やめたげない。ヒヒヒ……ほらほら、もうすぐマンコの膜、突き破っちゃうぞぉ～？」

『めりめりめり……』

「いやっ！！　いやあああああっ！！」

悲鳴を上げる本人と処女膜に対し、容赦なく一気に１５ｃｍはあろうかとゆう一物をブチ込んだ。

『ばちゅっ！！！！……バリバリッ！！』

「痛ったあああああいっ！！」

一気に根元まで突っ込んだため、息が止まる程の激痛と共に処女膜は破壊された。

『ずちゅっ！！　ずぷっ！！……バコバコバコバコッ！！』

血塗れになるシーツを気にすることもなく正常位で激しく犯しまくる長谷川純也。

大量の精液を膣内に吐き出した後、血と精液と愛液にまみれたペニスを綾子の口へ近付ける。

「ほらお嬢ちゃん……俺の精液と処女膜の血を舐めてきれいにしな！」

泣きながら左右に首を振るが、またしても激しいげんこつでの殴打が綾子を襲う。

『ひいいっ！！　わかりました……かぷっ。くちゅ、くちゅ。ペロペロ……がぽっ！　がぽっ！』

乱れたショートカットの髪を掴み、前後に激しく頭を動かせる。

「ひぶうっ！？　ガッポガッポガッポガッポ！！」

イラマチオは丸々五分ほど続けられた。
二回目の射精は少女の喉の奥へブチまけられた。

「ほら、飲み込め」

『ドピュッ！！　ドピュピュピュピュピュウウッ！！』

「がはあっ！？　ゴホッゴホッ！！　おええええっ！！……ドボドボ」

飲み込むどころか夕飯と共に吐き戻してしまう綾子。

「きったねぇなあ。ゲロは少女のもんでも臭いぞ？」

四つん這いにさせてお尻を何回も何回も平手打ちして折檻する長谷川。

「痛い痛い痛いっ！！」

「反省したか？　反省したら次で終わりにしてやる」

お尻はお尻でも今度は中心点に圧を感じる綾子は嫌な予感がした。

『ぐぐっ。メリメリ……』

「ひいっ！？　そんな所やだあっ！！　やめてお願いっ！！」

「俺も三度が限界だ……お嬢ちゃんのアナル犯したら止めてやるからな。よたかったたな？　ほらあっ！！」

『ズボオオッ！！……バコバコバコバコバコッ！！』

「んあああああっ！！　ひぎいいいいいっ！！」

午前三時……時間をほぼ使い終わって散々女子中学生を犯した長谷川純也は奥の部屋から出てきた。

「サンキュー♪　現役中学生なら五万でも価値があったぜ」

「しばらく脅してでも週末に呼ぶからまた利用してくれよ？　ん？上の服脱がしてないままじゃねえか？　せっかくの少女の胸を見

なかったのかな？」

「ははは っ！　上は着けているままでスッポンポンの下半身を犯すのが萌えるんじゃねぇかっ！　俺はペチャパイにゃあ興味ねぇよ！」

上機嫌で三度も少女を犯した中年男は帰路についた。

下半身を押さえたまま鼻血を流しながら泣きじゃくる北野綾子にそっと布団をかけながら名取繁樹は囁きかけた。

「よしよし。良く頑張って稼いでくれた！　来週もきてもらうからな？」

「しくしく……ぐすぐす。嫌です！　もう二度と来ません！　美優ちゃんともグルだったんでしょ？　彼女ともう絶交しますから」

「難病で入院中の父親のために必死で働いてる母親……北野幸代さんだっけ？　数人の仲間に声かけて犯しまくって殺して埋めてもらうわ。今月中実行するから。それまでせいぜい親孝行しとけよ？」

「ひっ！？　やだ！　お母さんを殺さないでっ！！」

「君次第だよ。俺の娘と仲良くしてくれて毎週遊びに来てくれるなら一切お母さんには手を出さない。約束するぜ。もちろん警察になんかチクったりしてても出所してから絶対お前ら二人とも殺しにいくからな！？」

そのまま美優と二人で横になるが、結局寝付けないまま朝を迎えた。
色々謝ったり話しかけてきたりする名取美優には、一切答えないまま一晩中泣きながら過ごした、人生で一番最悪な土曜の夜だった……正確には日曜の朝だった……。

――――北野綾子邸。

日曜日の午前に帰宅した北野綾子。
母親である北野秀美は、娘の顔面の怪我を見て警察に通報しようとしたが、泣きながら制止する綾子。

「絶対通報しないで！　私が悪いからこうなったの」
「悪くても悪くなくてもどうしてそんなに腫れるまで誰かに殴られなきゃいけないのっ？　お母さんはあなたをそんな目に遭わせた人を絶対許さないから！」
「…………ありがとう。ごめんねお母さんっ！　わーん！わーん！」
「綾子……もうなにも言わなくていいから早く病院へ行きましょう。日曜日だから急患で救急車呼んであげるからね」
「本当に大丈夫だよ。数日学校休んで安静にしてたら治るから。本当に心配かけてごめんねお母さん……疲れたから部屋で寝てくる」

心配そうに見送る母親に見送られながら二階の部屋へ上がってゆく北野綾子だった。

その日の夜はずっと部屋から出て来なかったが、明くる日の月曜日からは、一緒に朝食をとってから母親である秀美は近所のスーパーのパートへと向かった。

帰りに綾子の父親が入院している東北中央病院へと見舞いに行ってから帰宅するというパターンの毎日だった。

父親が難病で話すことも出来ない重体のために、母親である秀美は北野綾子にとって唯一無二の頼れる存在である。

自分がどうなっても母親に危害を加えられたくないとゆう健気な優しさで、毎週鬼畜のいる名取繁樹のマンションへ通うことになった。

「おらおら、ワシのチンポは気持ちええぇやろっ！？」

「あ、あんっ。あああ、気持ちいい……」

「がはははっ！！」

まだ少し顔の傷は残っていたが、名取繁樹の見付けてきた二人目の客の相手を終えた綾子。

もう今の運命にだんだんと開き直れてきて、セックスも気持ち良く感じだしてきていた。
気持ち良くてお金になる。
二回目からは一晩相手すれば現金で五千円もらえるようになった。
いつか嫌になって逃げられないための名取繁樹のズル賢い気遣いに見せかけた作戦だった。
どこかの麻薬王が行うような、見せしめに肉親を虐殺するようなリスクは犯したくないのは当然の事である。
お金のため、母親のため、考え方をポジティブに切り替えて開き直ろうと決心する少女だったが、どうしても自分を裏切ったクラスメイトの名取美優のことを許す気にはなれなかった。
適当に返事をして適当に会話して、クラスでは元のようにひたすら休憩時間に小説を読む、とゆうスタイルで生活を続けている。
三度、四度、毎週毎週北野綾子は自分の身体を売り続けた。
「月２０万から２５万か……北野綾子のお陰で俺がインターネットで客を見付け続けられる限り食っていけそうだな」
「良かった。でも私とはまともに口も聞いてくれなくなったよ……当たり前か。私たちの為にオッサンたちとエッチしてくれてるんだから少々は我慢するよ私も」
「そりゃそうだ！　お前も少しは大人になったじゃねぇか！　はっはっはっ！」

パソコンの前で必死で次のロリコン男を探そうとキーボードを叩きながら爆笑する名取繁樹。

「うーん。なるほどなぁ。そうかそうか」

「なにをブツクサ言ってるのお父さん？」

「いやいや……最近の変態は少女に興味あるだけじゃなく、幼稚園や小学生の小さい子供なら男にまで興味あるやつ多いんだよなぁ……」

「ふーん。確かに小さい子なら女の子と変わらない可愛い顔した子も多いもんね。大人みたいに毛深くもないし……」

「戦国時代なら武将が若い男の子を戦場に連れていってチョメチョメしてたみたいだからなぁ。戦国武将も変態だな……はっはっはっ！」

「女の子は戦には縁起が悪いからって友達から聞いたよそれ。昔はとにかく男の子産んだら万々歳だったみたいだもんね～」

「…………」

いきなり何かを閃いたかのようにパソコンから目を背けると、自分の部屋でテレビを見ている小学四年生の息子をずっと見詰め出した。

「お父さん……何か企んでるでしょ？」

「ん！？　あ、いやいや！　浩志の友達も大人しそうな子を連れてきてもらって……」

「それいいんじゃない！？　私の時と同じ様に両親を殺すからとか言って脅しをかけて！　二人に働かせたら単純計算で倍は儲かるよきっと！」

「そだな！　ははは♪」

「そだね！　うふふ♪」

自身の父親と姉が何か悪いことをしていると、何となくは理解していたが、あまり意味も分からないので見て見ぬ振りをしている……気付かないふりをしている小学四年生の男子児童。

まさか自分までも利用されることになろうとは露知らず……平和な笑顔でテレビ番組を見ている１０歳の名取浩志であった……。

少年少女の悲劇~強制的売春~　（前編）（後書き）

生活のためとは言え、娘のクラスメイトを脅迫してまで売春婦にさせる悪質な犯行。

更に息子のクラスメイトまでも目をつける父親の名取繁樹と娘の美優であった。

少年少女の悲劇～強制的売春～　（中編）（前書き）

女子中学生の同級生に続き、小学生の男児までもが毒牙にかけられる……。

少年少女の悲劇～強制的売春～　（中編）

東北美波小学校四年二組。

「名取くん……やっぱり無理だよ」

「うるさいなぁ。学級委員長の東條雪乃が好きなんだろ？　だったら気持ちを見せるチャンスじゃんか！　早くやってこいよ」

「ごめん、本当に恥ずかしくて出来ない……勘弁して……」

名取繁樹の息子である名取浩志は、かなり気が強い方でクラスでは苛める側のグループに属していた。

二組のクラスメートが恐れるいじめっ子の三人組……の中でもリーダー格であった。

名取、山口、山崎……気の強い三人組は、今日もターゲットを定めて苛めている。

「この休み時間は島西の処刑を執行する！」

「大人しく机の上に寝転がれ！」

「早くしないとボコボコにするぞ！？」

“処刑”とゆうのは、ターゲットの男子児童を三つ並べた机の上に寝転がさせて、ズボンとパンツを脱がす苛めの儀式だった。
オチンチンを握って観察したり、三人が交代で肛門に鉛筆を突っ込んだりもすることがある。
名取たち三人には、気の弱い男子児童は何人もやられている事であった。
山口が両手を押さえ、山崎が両足を押さえて、名取浩志がズボンとパンツを脱がせてゆく。
「いやだ！　止めてよ！！」
「黙れっ！　女子を呼んで見てもらうぞ？」
「そ、それだけはやめてっ！！」
「なら大人しくしてろよ？　ほら、パンツを脱がすぞぉ？　ははは♪」
名取たち三人によって、教室の列べられた机の上で、ついに下半身をスッポンポンに剥ぎ取られる本日の苛めの対象である島西祐司だった。
二組の女子たちは、名取たち三人が常に男子の誰かのズボンとパンツを脱がす儀式を知っていたので、休み時間にこれが始まると一

斉に教室から出てゆくのだった。
しょっちゅう休み時間に練習している縦笛を取りに来た学級委員の東條雪乃。
チラッと島西祐司の下半身をさらけ出される儀式を見て、頬を赤くして教室を出ていこうとする。
「おい東條っ！」
いきなりいじめっ子の名取浩志に声をかけられて足を止める。
「なぁに？」
「今からコイツの処刑するんだけどお前もやらないか？」
「しょ、処刑？　何をする気か知らないけど島西くんが可哀想だからズボンとパンツを履かせてあげてくれる？」
立ち止まって振り向かないまま答える東條雪乃。
ミディアムの少し癖毛で、目の大きい可愛い系の学級委員長だった。
正義感が強いため、ついにいじめっ子にクレームを入れてしまう。
「こいつ、お前の事が好きなんだぜ？　このままほっといて行って

しまう気なのか？」

「……そ、そうなんだ。有難いけどあなたたちが無理矢理言わせてるだけなんでしょ？　だいたい分かってるんだから」

「そんなことないよ！　なぁ？　島西……東條のこと大好きだよな？」

名取浩志は、皮かむりの島西祐司のオチンチンを握りながら答えを催促する。

金玉をぎゅうっと強く握りしめながら更に囁く。

「大好きだ東條雪乃さん。僕を苛めてっ！　って大声で叫べ！」

「いやっ！　そんな恥ずかしいこと言えないよっ！！」

「なら金玉潰すからな？　おらあっ！！」

『ぎゅううううっ！！』

「痛いいいいいっ！　……分かった！　言うから勘弁してっ！　潰れちゃううううっ！！」

脅しに屈した苛められっ子の島西祐司は、とうとう恥ずかしい台詞を思いっきり叫んでしまう。

「大好きだ雪乃ちゃんっ！！　僕を苛めてっ！！　苛めてくれないと名取くんたちに金玉潰されちゃう……お願いだから……」

一気に頬を紅潮させながら本気で可哀想と感じた東條雪乃は、恥ずかしさを感じながらも振り向き、四人の元へ歩み寄った。

「名取くん、島西くんが痛がってるからやめてあげて」

「はーい。止めまーす♪」

名取たち三人のいじめっ子は、慌てて東條雪乃に立ち位置を譲る。

しばらく島西のペニスと睾丸をじっと見詰めている東條雪乃だったが、頬がどんどん真っ赤になってゆくのが本人にも分かっていた。

更に突然大声で叫び出す島西祐司に、一瞬大きく仰け反る雪乃。

「東條さんっ！！　前から大好きでしたっ！！」

「！？　……う、うん。ありがと」

「突っ込んで……」

「え？」

「僕の……お、お尻の穴に……東條雪乃さんの指を……突っ込んで

下さいっ！！」

もちろん本気で言っている訳ではない。
名取と山口と山崎に強制的に言わされているだけだった。

「ははは っ！！　女子にケツの穴に指突っ込んでくれなんて……なんて恥ずかしいこと言ってんだよコイツ……はははははっ！！」

爆笑する名取浩志に続いて山口と山崎も罵声を飛ばす。

「心配しなくても俺たちがいつも誰かにやってるように鉛筆突っ込んでケツ穴掻き回してやるよ？」

「昨日の奴みたいに血が出るまで奥深く突っ込んで掻き回してやるからな？　はははははっ！！」

『つぷ……』

「やあっ！？」

真面目な学級委員の女の子の白くてか細い人差し指は、第一関節まで島西祐司の肛門にゆっくり突き入れられた。

「え？」

「嘘？」

「マジかっ！？」

目を丸くして東條雪乃を見詰めるいじめっ子たち三人。

「島西くんのこと、あまり好きとかじゃないけど……私がこうしなきゃ……後でコイツらに鉛筆とか突っ込まれちゃうんでしょ？　怪我しちゃうかもしれないもんね？」

「う、うう。うん。だ、だけど……そんなとこ……汚いから。東條さんの指なんて入れなくてもいいよ……指にウンコ付いちゃうよ？」

「いいよ。あなたが解放されて、こうゆうこと私にされて喜んでくれるならやったげる……力を抜いててね？」

『ズブズブ……ズブブブブ』

ついに学級委員の東條雪乃の右手人差し指は、クラスメイトの苛められっ子の男子生徒、島西祐司の肛門に全てめり込んでしまった。

『ぐちゅぐちゅ……』

「あっ！　いやだ……恥ずかしい……やめて」

「だめ。掻き回してあげるからじっとしてて。ん？　ウンコに当たってるよ？　今朝ウンコしてなかったでしょ？」

真面目で可愛い女子学級委員長の思いがけない行動に、思わず皮かむりのオチンチンは大きく膨らむのだった。
少しだけ亀頭部分が姿を現すくらいに勃起してしまっていた。
頬を更に赤くしながら勃起したオチンチンを凝視すると、根元まで突っ込んでいた人差し指をゆっくり引き抜く東條雪乃。

「初めて実物の〝ココ〟が大きくなるとこ見ちゃった……パソコンでは何度も見たことあるんだけれど……凄く膨らむんだね……じゃあ私はこれで。苛めはほどほどにしといてね？　名取くんたち」

目を大きく見開いて一部始終を見ていた名取たち三人だったが、ハンカチで指に付いた大便を拭きながら教室を去ってゆく学級委員長の後ろ姿を見ながら全員が勃起していた。

「おい島西っ！！　ホントにやってもらえるなんてすっげえな！？」
「女のクセにスケベだな東條は」
「ヤバイ……なかなか小さくならん……」

実際肛門に指を突っ込まれた島西祐司以上に興奮していた名取た

ち三人だったが、ここで名取浩志は島西祐司に囁きかける。
「今日ちょっと僕んちに遊びに来ないか？」
「えっ！？　まさか鉛筆を……」
「入れないよ。東條雪乃にあんなことされたらもう島西を苛められないからな。一緒に帰ろう。招待するよ」
島西祐司にズボンとパンツを履かせ終わると、休み時間終了を告げるベルが鳴った。
トイレで手を洗い終わって戻ってきてから、何事もなかったように席に着く学級委員長の東條雪乃と、他の女子生徒たち。

――――放課後。

徒歩で半時間くらいの場所にある名取浩志の２ＤＫマンションへ向かう二人。
「名取くん、遊びに行ったらもう僕を苛めたりしないよね？」
「当たり前じゃん！　家に来てくれるような友達にそんなことしないよ」

「ありがとう」

「僕んちに着いたら、今日は泊まっていくようにお前の親には電話しといてくれよ。」

「うん。ゲームとか一緒にしようよ！」

「ゲームするよりユーチューブばかり見てるからなぁ。ま、家で考えようぜ」

少し薄暗くなった頃に、名取のマンションに二人は着いた。

「お邪魔しまーす！」

姉の名取美優が玄関に出迎えに来る。

「あら浩志のお友達？　今日はゆっくりしていってね？」

「は、はい。あ、ありがとうございます」

アイドルなみの美形の姉に緊張してモジモジする島西だった。

「おう、帰ったか。先に二人で飯を食え。7時頃に風呂沸かすから

友達と一緒に入れよ？　ようく汚れを落としてくるんだぞ？」

「うん。じゃあご飯食べよう島西」

「ありがとう。頂きます！」

父親の繁樹と姉の美優は先に済ませていたため、浩志と祐司で晩御飯のチャーハンを食べる。

夜中の零時まで二人でゲームをしてユーチューブを見て、普通に楽しんだ後、布団が二つ敷かれている一番奥の部屋で横になる。

「今日は楽しかったよ。また明日もゲームしようね名取くん」

「ああ。じゃあもうぼちぼち寝ようぜ。電気消すから」

「うん。お休み」

零時を回った直後、名取の部屋の玄関が開いた。

「いらっしゃい。高原正人さんだね？」

「はい。小学生の男子児童は本当に来ているのですか？」

「用意できてる。今から三時までの三時間、お好きに楽しんでもらって構わない。泣いたり逆らったりしたら殴り付けても構わない」

「ははは。出来るだけ暴力は振るいたくないですが……では五万円を先に払っときます」

「毎度あり！　では美優、奥の部屋へ連れていってくれ」

「うん。こちらです。あれ？　どこかで見たことあると思ったら……シャニーズジュニアから最近ユニットデビューした〝青年隊〟の高原くんじゃん！？」

「俺のこと知ってるんだお嬢さん。嬉しいなぁ。でも今夜のことは絶対内緒にしててね？　こんな性癖や犯罪が世間にバレたら即クビになっちまうから」

今をときめくアイドルがまさかの少年買春……しかも小学生児童。犯罪も犯罪ながらかなり罪が重い買春である。

名取美優が奥の部屋への襖を開けると、寝入ったばかりの二人が見えた。

「なんであんたまで寝てるのよ？」

ついつい島西祐司とほぼ同時に寝入ってしまった弟を揺さぶり起こすと、手前の部屋へ連れ出した。

「ではシャニーズ所属のアイドル、高原正人さま。１０歳の男子児

童と素敵な夜をお過ごしください」
「あ、ああ。ありがとう。後でキミにサインあげるよ」
「本当ですかっ!?　ありがとうっ!!　ではごゆっくり」
白色ＬＥＤの電気が灯されてもなかなか目覚めない小学四年生児童の顔をしゃがみ込んでじっと見詰める高原正人。
「フフフ。俺の好みだな。大人しくて賢そうな男の子だ……」
ゆっくり布団に入り込むと、１０歳の島西祐司をそっと抱き締める。
唇を重ねてキスをしてもまだ起きない男子児童のパジャマを脱がせてゆく。
素っ裸にされた頃ついに目覚める祐司だったが、訳が分からない感覚に寒気を覚えた。
高原はもう一度キスをして、舌を入れて祐司の舌や口内を掻き回していたのだ。
「うぶっ!?　やめれええっ!?」
慌てて両手で突き離す島西祐司は、未だに何が起きているのか意

味が分からない。

「あれ？　おじさん誰？　名取くん何処行ったの？」

「お友達はねぇ……お姉さんと一緒に寝るんだって。祐司くんは俺と一緒に寝るようになったんだよ？」

「い、嫌だっ！！　名取くんっ！！　助けてっ！！」

わめき散らす祐司の声を隣の部屋でビールを飲みながら聞いている名取繁樹。

「良くやったぞ浩志。あの子も変態同性愛ショタ野郎客の為に毎週通ってもらうことにするわ。両親にチクったら家族皆殺しと脅しとけばガキでもチクらねーだろ……」

「う、ん。父さんの……好きに……して。……くぅ～」

いじめっ子とはいえ、まだまだ小学生の児童なので、零時を回れば眠たいのは当たり前だった。

そのまま深い眠りに付いた名取浩志。

「お父さん。ちょっとお願いがあるんだけど……」

「なんだ美優？　出来ることなら何でも聞いてやるぞ？」

激しく全身を叩く音と、悲鳴が聞こえてくるが、すぐに静かになる。
大人に逆らうと暴行されるとゆうことを、一人の男子児童が悟った瞬間であった。
「祐司くん……もっと舌を使うんだよ？　分かるかな？」
「んぶうっ。ううう。ペチャペチャ……」
シャニーズ所属のアイドル、高原正人の１２ｃｍある普通レベルのいきり立ったペニスを強制的にしゃぶらされている。
「そうだ。その調子だよ。俺は泣き叫ばない限り殴ったりしないからね？」
「んんん。んごんご。ペチャペチャ……」
ひたすら半時間ほど舐めさせると、今度は児童のオチンチンを揉みしだき始めた。
「んっ！？　かぷっ！」
「ぐわあっ！？」

いきなりオチンチンを握られたショックで思わず高原のペニスを噛んでしまう祐司。

思いっきり頬を平手打ちして、更に馬乗りになってビンタを数十発食らわせた。

「痛かったじゃないか！？　おらぁっ！　このクソガキがっ！！」

「ぎゃあああああっ！！　痛いっ！！　ごめんなさいごめんなさいごめんなさいっ！！　わーん、わーんっ！！」

あまりの往復ビンタの痛みに号泣してしまうが、更なる暴行を恐れて必死で泣き止む努力をする祐司だった。

そのまま男子児童の股間にゆっくり顔を埋めて、皮かむりのオチンチンを軽く舐める。

ビクッ、ビクッ、と反応する身体を楽しんでから全て口に含んだ。

皮の中に舌先を突っ込んで、亀頭に触れる。

この度に大きく身体を仰け反らせて呻き声をあげる小学生男児。

「チンカスがスゴいな……舐めて綺麗にしてやるからね？」

祐司のオチンチンの皮をゆっくり引き剥きながら、さらに小さな亀頭部分を舐め回す高原。

亀頭の半分手前くらいまで剥いたら皮が突っ張って止まってしまう……小学生特有の仮性包茎なので、強引に引き剥くのは大怪我になってしまうため我慢する高原正人だった。

用意してある粘度の高いローションを指に塗り込み、男児の菊門へそっと塗り込む。

「ひゃあっ！？」

「ひゃあ、じゃないよ。今からボクのココ……かなり酷い事になっちゃうけど出来るだけ泣き叫ばないように我慢するんだよ？　夜中だから近所迷惑だしね？」

人差し指をゆっくり根元まで突っ込んで掻き回す。
一本だけでもキツい小学生の肛門に、更に中指までねじ込んでゆく。

「んぎぎぎぎ！！　痛いいいいっ！！　止めておじさんっ！！」

「ははは。この倍くらいの俺のアソコを挿入しちゃうんだよ？　指二本くらいで泣いてちゃボク死んじゃうかもね？」

前の女子中学生の行為時に、叫び声があまりに大きかった為に、丸い型の口枷まで用意されていた。
ゴルフボールほどもある大型の口枷を強引に捩じ込んでベルトで

止めると、顎が外れてしまった。
ヨダレをドロドロ垂らしながら呻き声をあげるが、はるかに静かになったので、安心していきり立ったペニスを菊門にあてがう。

『ぴとっ……ヌププ……ずぷぷぷぷ』

「んんんっ！？　んおおおおおおううううっ！！！！」

高原の亀頭の大きさに張り裂けんばかりに押し拡げられてゆく小さな肛門は、めりめりと音を立てながら少しずつ１２ｃｍのペニスを直腸へと飲み込んでゆく。

「あと2、３ｃｍで全部入っちゃうよぉ？　痛いかな？　ここから一気にぶっ刺しちゃうからねぇ？　ははは♪」

『ばちゅっ！！……パンッ！！』

「んおおおおうっ！！！！」

一気に残りを根元までぶち込んで、激しく高原の下腹と、男児のお尻の肉とがぶつかり、パンッ、と鳴る。
両膝を高く抱え上げ、マングり返しのような体制のまま、更に激しく腰を振り始める。

『パンパンパンパンパンパンパンパンッ！！』

「あっあっあっあっあっあっあっあっ！！　んんんんっ！！」

ペニスを直腸へと突き入れる度にヨダレを撒き散らしながら呻き声をあげる祐司だが、口伽のせいで大声は出せなかった。

肛門括約筋が数枚引き裂かれ、激しく流血するが、お構い無く腰を降り続けてゆく。

高原の太股と下腹部も肛門からの血で真っ赤に染まっていった。

一度引き抜いて今度は四つん這いにさせながら、両手でパックリと肛門を開く。

「あはは！　ドクドク血が出てるよボク？　今度は血まみれのケツまんこにバックで犯してあげるね？　ほら、飲み込むんだ」

四つん這いのまま激しくバックで犯される小学四年生の男子児童は、あまりの前立腺への刺激に、透明の粘液をペニス先端から垂らしていた。

高原がバックで腰をお尻に打ち付ける度に血が吹き出し、透明の先走り液がプランプランと糸を引いたまま揺れ動く。

「イ、イクっ……イクううっ！！」

『どぴゅぴゅぴゅぴゅぴゅっ！！　ドクドク……』

男児の肛門から直腸は、シャニーズ所属のアイドルの精液で満タンに満たされた。

「ふふ。その辺の女の子なら俺に犯されたらキャーキャー言って喜ぶぜ？　ボクは羨ましがられるよきっと。ははは」

時計を見て残り時間を確認してから、更にお尻の肉を両手で掴み、上に引き上げてもう一度ペニスを突っ込んだ。

「ほら、第二ラウンドだ。もう一回バックで犯してやる」

二回目の射精を終えた頃には、祐司のオチンチンからも夥しい量の粘液が滴り落ちていた。

「おっ？　生意気にも小学生の分際で射精してるのかな？　透明に見えるけど少しは精子も混じってるのかね？」

そう言いながらオチンチンをゆっくりシゴき始める。

「んんんんっ！！　ううう……」

あまりのペニスと肛門の刺激により、少し快感に近い感覚を覚えた10歳での初体験中の島西祐司であった。
彼のたった一つの情けは、仮性包茎のオチンチンの皮を、祐司の可動域にまでしか剥かずに堪えてあげたことである。

午前三時が来た。
もう一度正面から抱きついて、濃厚なディープキスを男児に行うと、笑顔で挨拶した。

「ボクのケツマンコ、最高だったよ？　時々犯してあげるからまた遊んでね？」

「ぐす、ぐす。痛い。痛いよおお。しくしく……」

口伽を外してヨダレを拭き取り、肛門に綿を捩じ込んで出血を止めてあげる。
そしてゆっくり立ち上がり、服を着て島西祐司に手を振って部屋を出る高原正人。

「お疲れさん。またいつでも予約して来てちょうだいよ？」

「あの子は良かったですか？」

「あ、どうも！良かったですねっ！　また近い内の週末に来れたら来ますのでお願いします」

名取親子に挨拶され、照れ臭そうに返事をして去ってゆく高原。

「さてと。じゃあお父さん、さっきお願いしたことやっていい？」

「ああ。朝までまだ時間はある。美優の好きにしろ」

奥の襖を開けると、まだ祐司はしくしくと肛門を押さえながら泣き続けている。

「ゾクゾクするうっ！！」

変なＳっ気に目覚めてしまった名取美優は、男児のお尻を平手で叩き始めた。

「痛いっ！！　もう酷いことしないでっ！！えーん、えーん！」

「もっと泣け！　もう一度コレ咥えてくれるかな？」

『がぼっ！……カチッ。……うごごおっ！？』

再び大きめの口枷を捩じ込まれた祐司は大声を出せないまま、逃げようと立ち上がった。

思いっきりお尻を蹴る。

何度も何度も蹴り続けると、ついに痛みに負けて座り込んだ。
更に足で全身を踏みつける美優。

「今度逃げようとしたら殺すからね？　分かったボクちゃん？」

「んんん。ん～ん、ん～ん。しくしく……」

絶望感で一杯になり、そのまま泣き続けるしかなくなった祐司。

押し倒して強引に寝転がすと、パジャマ姿のままで膝を股間に差し込む。
激しく膝をペニスにグリグリと擦り付けると、あまりの亀頭部分の快感に、別の意味の呻き声をあげてしまう。

「ほらほらほら。気持ちいいでしょ？　高原さんが言ってたよ？　透明の粘液を垂れ流してたって……あはは」

「んん、んんんっ！」

「私は白い粘液を出させてあげるから。本当の意味での精通……させてあげるだからあっ。ほらほらほらぁ！」

更に激しく膝で股間を擦り付けると、美優の動きに合わせて身体をビクビクさせる祐司だった。
顔が真っ赤に紅潮してきた。
今回はおっさんではなく、少し歳上の可愛い少女なので、興奮度

も高かったのだろう。
大きく身体を仰け反らせて痙攣しながら射精した。
「なんか温い感覚が……イッちゃったみたいね？　あ～あ。私の膝に沢山出しちゃって……」
「んふう。んんん……」
気持ち良さそうな顔で大粒の涙を溢し続ける男児。
パジャマをについた男児の精液を、手で拭いとると、白い液が透明か白色かを確認する美優。
「あはっ。精通おめでとう！　白いまともな精液だねっ」
そう言いながら祐司の顔に精液を塗りたくる。
「じゃあついでに割礼儀式もしちゃおうか？」
そう言いながら美優の膝でびちゃびちゃに濡れさせられているオチンチンを右手の人差し指と親指できゅっと握る。

ゆっくり力を入れて包皮を剥いてゆく。
半分近く剥いた所で手が止まった。

「ここまでが限界かぁ～。下半分が恥垢で不潔だよ？　分かるかなボクちゃん？」

「ううう……痛いよぉ～」

『パァンッ！！』

「ぶううっ！？」

「ごめんね。余りに間抜けな顔してるから叩かなきゃいられなくなっちゃって……でもこれからする事はボクちゃんの人生で最大級の激痛だと思うから……覚悟しててね？」

これ以上剥けない限界可動域から更に下腹部へ力を込める美優の右手。
オチンチンは少し勃起していたが、刺激のために最大限に勃起してしまう。
これは不利だった。
固くなればなるほどペニスの皮は引き剥きやすくなる。

「んん？　さっきの膝で射精した時でも半勃ちだったのに……今になってフル勃起？　そんなにボクちゃんの身体は私に割礼して欲しいのねぇ～？」

『ギュウウウ……メリメリ』

皮が張り裂けそうに下腹部へ寄せられて、亀頭部も圧迫されて充血してくる。
しかし美優は手を止めなかった。
メリメリと音を立てながら少しずつ強引に小学四年生の包茎のペニスは、雁クビまで引き剥かれようとしていた。

思い切り目を瞑って、出来る限りの唸り声を張り上げて泣き叫ぶ男児。

「あと１ｃｍくらいかな？　ここから一気に雁クビまで引き剥くからね？　あはは！　変な顔っ。そんなに痛いんだ？　じゃあいくね？　せ〜の…………えいっ！！」

『バリッ！！』

「ふんぬうううううっ！！　んぐうううううっ！！」

完全に亀頭部分が、丸出しにされた。皮が圧迫されて紫色に変色してゆく。
裂けた皮から出血しながらピクピク痙攣する。
首を大きく左右に振りながら絶叫するが、口枷のせいで唸り声にしかならなかった。

「てへっ♪　チンポの皮……無理矢理にでも引き剥いてあげたから。感謝してよね？」

ペニスからの出血で汚れた手を、祐司のお腹に擦り付けながら引き剥かれて紫色に変色したオチンチンを足の裏でグリグリと踏みつける。

「足の裏が血まみれになっちゃったじゃん〜。靴下が汚れちゃったじゃん？　汚いなぁもう……」

襖を開けて部屋を出ると、父親の繁樹が心配そうな表情で突っ立っていた。

「おい、大丈夫なのかそいつ。ピクピク全身が痙攣してるみたいだぜ？」

「チンポの皮を引き剥いたくらいで死なないよ。痛みでのショック状態じゃないかな。ほっとけば治まるよきっと……」

ふと気付くと午前三時半を少し回っていた…………。

『ピンポーン！』

有り得ない時間にベルが鳴る……。

少年少女の悲劇～強制的売春～　（中編）（後書き）

１９歳の男性アイドルと、女子中学生から、人生で最大級の苦痛と恥辱を経験させられた小学四年生男子の島西祐司。

真夜中の来訪者とは？

少年少女の悲劇〜強制的売春〜　（後編）（前書き）

ついに動く警察省。

意外な部署の協力を得て、実行犯を拘束することに成功する特殊任務省。

少年少女の悲劇～強制的売春～　（後編）

「こんな時間に誰だ？　心当たりあるか美優？」

「あるわけないじゃん！　こんな時間に友だち来ないし……何か怖いからお父さん行ってきてよ」

午前三時半の来訪者に、不安を隠しきれない名取繁樹と娘の美優の傍らで、平和そうな寝顔で爆睡している息子の浩志が寝返りをうつ。

とりあえず何者なのかを確認するのが先決だと、覚悟を決めて玄関に向かう繁樹だった。

そっと覗き窓から確認するが、暗くて殆ど見えなかった。

「…………どちらさまですか？」

「…………」

こちらの声が、扉の向こう側に届かなかったのか返事がない。
もう一度大きめの声で問いかけてみた。

「こんな時間に誰だ！？」

「東北警察署の者だ。鍵を開けなさい！」

「!?　警察っ!?　刑事か？　な、何の用だ!?」

まさかバレたのか、と恐怖のあまりに一気に心拍数が上がり、名取繁樹の額に冷や汗が滲む。

「未成年者の監禁、暴行と強姦幇助で逮捕状が出ている。諦めて出てきなさい！　署で詳しく話を聞こう」

しばらく目を瞑って我の人生が詰んだ事を痛感している繁樹だったが、少し間を開けてから観念して扉を開けると、刑事らしい者が１０人ほど取り囲んでいた。

「娘の名取美優さんと息子の浩志くんもいるね？」

「はい……奥にいます」

「上がらせてもらうよ？」

５人ほどで名取繁樹を取り囲んで手錠を掛けて確保。残りの刑事たちは、部屋に上がり込んで奥へ向かう。

「名取美優さんだね？　未成年者みたいだけど“監禁”の疑いで署

で話を聞かせてもらうよ？」

「は、はい。……弟の浩志はどうなるんですか？」

熟睡中の名取浩志に目を落とすと、刑事は美優に静かに答えた。

「小学生の子供さんを一人残して置いては行けないので、東北警察署で一時保護させてもらう。お父さんとあなたはしばらくは帰宅出来ないと思うから……パジャマでは何だから服だけでも着替えてもらっても構わないよ？」

「……はい。分かりました。ご配慮ありがとうございます」

そう言いながら泣き崩れる美優だったが、あれだけ小遣い稼ぎに躍起になっていたクラスメイトがなぜ今になって警察に通報したのか頭の中は疑問が飛び交っていた。

「下腹部に出血、鬱血を認められる小学生男児を発見。確保しました。救急車の手配をお願いします！」

『了解！　至急手配します！　５分ほどで到着しますので誘導願います』

「署員を一人、マンション前の道路へ立たせます。よろしくお願いします！」

救急車で名取浩志のクラスメイトの島西祐司が運ばれてゆくのを見届けた後、名取繁樹たち三人は親子共々、東北警察署へパトカーで連行された。
早朝4時頃に警察署に到着。
早速早朝にも関わらず取り調べが開始された。
署内の保護室のベッドで、もう一度眠りにつく小学四年生の名取浩志であった。

――――――日曜日の早朝。

『ピロロロロ……ピロロロロ』

スマホが早朝6時から、けたたたましく鳴り響く。

『もしもし……』

『菅野くんか？　早朝からすまんな。早急に聞いて欲しい重要事項があるんだが構わないかね？』

大きく欠伸をしながら口を手で押さえる、特殊任務省所属の拷問処刑人である女子小学生、菅野莉央。

『構おうが構うまいが……結局今聞かなきゃダメなんですよね？』

『そうだ。本日の昼から君たちに動いて欲しい』

『はい。続きをどうぞ。……ふあぁぁぁぁぁ』

更に特大の欠伸をしながら特殊任務省トップの藤堂長官の指令を待つ莉央。

『以前中学生である被害者の母親から“なんでも相談室”へ、誰かによる娘への暴行の相談連絡があったのだが、我々が動く前に被害者本人の北野綾子から東北警察署に通報が入ってしまった』

『え？　意味が分からないのですが……単刀直入にお願いします』

少しイライラしてきた菅野莉央はかなり眠気も覚めてきて、藤堂長官に事件の詳細を催促した。

警察に逮捕されれば被害者の無念は晴れないと、“なんでも相談室”への相談や通報は、即座に特殊任務省へ報告される。

その上で捜査して結果を審議し、残酷処刑島での処刑か、それとも拷問か去勢のみでの制裁を与えるか……藤堂長官が中心となって特殊任務省の主要人物数人で判決を下すことになっている。

その後、菅野莉央たち拷問処刑人へ指令が下ることになっているのだが、今回はどうやら何かしくじったようである。

『この度の主犯である名取親子が東北警察署へ連行された。もうこうなってしまっては私たちは手を出せない』

『なら仕方ないじゃないですか……拷問も去勢も処刑も出来ないのであれば……あたしはなぜこんな早朝から起こされなければならなかったのですか？』

『うう……相変わらず手厳しいなキミは……』

特殊任務省の藤堂長官は、前から禿げている頭を掻きながら今回の事件の一部始終と、緊急会議で決まった制裁内容を、拷問処刑人のリーダーであり、アイドルグループのボーカルでもある菅野莉央に伝えた。

『酷い話ですね。完全去勢どころか名取ファミリー全員を処刑したかったですよ……』

『まぁ気持ちは分かるが、被害者の母親の北野秀美の相談だけならばそうできていたのだが……まさか北野綾子本人から警察へ通報してしまうとは……一番の誤算だよ。それに逮捕時に小学四年生の息子の友達までも誘拐して監禁、更に別の若い男客が性的暴行を加えていたことも分かっている。名取繁樹の“お客様„の犯行だ。以前の女子中学生に続き、酷いことをするもんだ』

『その女子中学生の北野綾子さんは既に亡くなられたのですね？』

『そうだ。先日土曜日の午前中に母親と言い争いになり、汚らわし

い娘扱いされたことに失望して、電車へ飛び込んだ……前途ある若い娘が

何とも惨たらしい話だよ……』

『名取繁樹と娘を処刑できなかったのは非常に心残りですが……その被害者の女子中学生、北野綾子を犯して自殺に追いやった３８歳の長谷川純也の拷問と完全去勢刑。先日の事件で、小学生男児をレイプしたアイドルグループ所属の高原正人も長谷川と同じ刑に……今日の昼から残酷処刑島にて遂行させて頂きますね』

『うむ！　すでに警察上層部からの報告を受け、二人は我らの特殊任務部隊が拉致して残酷処刑島へ連行しておる。宜しく頼む。今回はキミと……兄の菅野京介くんと……中学生の鬼頭美紅くんと高校生の島崎真理子くんの合計四人で執行してくれたまえ。港までは兄の菅野くんに車で連れて行ってもらうことだな』

『最近は警察とも連携取っているんですか？』

『うむ。上層部で協議して、被害を受けた関係者から直接警察へ通報が入る時とかの仕方ない場合を除いては協力してくれるようになった。あくまで上層部のみでの極秘事項だ。いくら我々が被害者側の感情に立って犯罪人を仕置きしても、世間的には“拷問”や“同害報復刑”等は間違いなく批判の的になってしまうからな……』

『そうですね。凶悪犯罪も所詮みんなニュースで見る程度の他人事ですから。自分の身内が実際に被害を受けなきゃその人たちの気持ちは分からないと思います』

『いい心がけだ。特殊任務省の仕事は被害者の仇を討つことに他ならない。いくら名取繁樹にインターネットでそそのかされたお客と

はいえ、未成年者と分かっていての凶行……許す訳にはいかん』

眠気も覚めて完全に復活してしまったので、そのまま起きて歯を磨き始めた莉央だったが、拷問の内容を考慮し始める。

その時、兄の菅野京介は結城明日香の父親が経営するジムで全身を鍛えていた。

莉央からの連絡を受けて大急ぎで帰宅し、さっとシャワーを浴びて残酷処刑島への渡航の覚悟を決めて服も動きやすいカジュアルなものを選んだ。

「すっごい急な指令だな今回は……しかも俺たちと美紅ちゃんと真理子ちゃんの四人だなんて……何だか嫌な予感がするぜ」

「ん？　嫌な予感って何よ？」

「二人の処刑に対して四人……拷問処刑人の数が少ないほどついに俺も人を殺すことになるのか……と、毎回ヒヤヒヤしてるんだ」

既にセーラー服に着替え終わっている莉央は、お気に入りのクシで髪をとかしながら少し微笑む。

「今回は拷問と去勢のみ。処刑はナシだよ。……安心して中年オヤジのお尻でも犯してあげててね」

「マジかっ！？　ホッとしたぜっ！！…………ってゆうかアイドル

グループ所属の若い男前もいるんだろ？　どうせならそいつのケツをヤラせてくれよ？」

「それはダメ……今回は長谷川純也とゆう中年のオッサンで我慢して。美紅ちゃんちへ行ってから、高速使って東北地方の大志高校へ向かってくれる？」

「誰かの通ってる高校だったよな？　確か島崎真理子ちゃん……了解だ。じゃあ急いで出発しよう」

鬼頭美紅は同地方区域の東部地方南部なので、ほんの半時間で到着した。

軽く挨拶をかわす。

三人を乗せた真っ赤なマーチは、早朝から高速道路で東北地方を目指して疾走する。

「島崎真理子さん……まだまだ処刑にビビってる高校生の人だね？今日は活躍してくれるかな？」

後部座席でぼうっと景色を眺めている莉央に問い掛ける美紅。

「どうかな……あたしは今日は島崎さんには拷問してもらいたくないんだ……」

「え？　どうゆうこと？」

そのまま黙り込む莉央を見て、美紅も何かを察して黙り込んだ。

「まさか拷問される奴らと島崎真理子ちゃんは知り合いとかだったりして？　同じ東北地方だし！　がははははは！」

完全無視で黙り込む莉央の反応が気になりバックミラーでチラッと覗き見ると、鋭い眼光でミラー越しに睨み付ける莉央に、一瞬本気でビビる京介だった。

『そんな悪いこと言ったのか俺……』

気まずいほどの沈黙が数時間続いた後、高速道路を下りて待ち合わせのコンビニに到着すると、制服姿で佇んでいる島崎真理子を見つけて真っ赤なマーチに乗せる。

「こんにちは。菅野さん今日は宜しくお願いします。こちらから向かうべきだったんでしょうけど莉央ちゃんがお兄ちゃんに甘えて待ってるように言ってくれたから……」

「いいよいいよ！　運転手代も給料もらってるから気にしないでくれよ！　ははは」

女子三人で雑談しながら東部地方にある残酷処刑島へ渡る港へ着

く。
既に特殊任務省の迎えの船は待機していた。
乗船と共に四人は目隠しをされる。
いつもより凪ごい海のようで、揺れも少なくスピードもいつもよりかなり速く感じた。
潮風が心地よく四人の顔を撫でるが、結局拷問か処刑を行うべき島へ向かっているので、心境は穏やかではない。
残酷処刑島へは半時間ほどで到着した。
敬礼して去ってゆく特殊任務省の係員へ軽くお辞儀をする莉央たち四人。
「私と島﨑さんはここから西側へ少し歩いた砂浜で、シャニーズ所属のアイドル、高原正人を拷問するから、美紅ちゃんはお兄ちゃんと東側へ少し歩いた場所にある岩場で長谷川純也の拷問をお願いします」
「うん。分かった。じゃあ夕方4時に……この簡易港にて合流しようね」
美紅と京介は、莉央と真理子に軽く手を振ってから、東の岩場へ向かった。

「さ、西側の砂浜へ行きましょうか島崎さん……」

「う、うん。分かった……」

高い草が生い茂っている獣道を進んでゆく菅野莉央と島崎真理子。

「島崎さん……」

「なに？」

「……いや、何でもないです」

「菅野さん……いや、莉央ちゃん！　言い掛けて止めるのお願いだから止めてくれる？　ただでさえ拷問とか、処刑とかまだまだ私は慣れてないんだよ？」

そのまま沈黙を続ける莉央に不快感を持ちながらも歩き続けると、エメラルドグリーンに輝く綺麗な海と、真っ白な砂浜が視界へ入ってくる。

寝転がっている一人の男の姿が見えてきた。

「莉央ちゃん……あの人が高原正人……なの？」

「そうです。完全に寝ちゃってるみたいだけど……」

気持ち良さそうに砂浜で昼寝している高原正人の傍で、二人は立ったまま見下ろしている。

よく見れば砂浜へ深く突き刺さっている金属製の杭に、両手両足は手錠で繋がれていた。

寝てはいるが確実に拘束状態である。

「ん？　ふぁあああ～。……こ、ここは？」

間抜けな欠伸をしながら目を覚ましてキョロキョロし始める高原正人は、莉央と真理子に気付いて大きく目を見開いた。

「!？……ま、真理子っ!？　なぜこんなところにお前が!？　あれ？　俺は拘束されているのか!？」

必死で少ししか動かない手足を動かしながら、立ち上がることも出来ない現状を理解する高原正人であった。

「お兄ちゃん……昔から男の子に変な性癖持ってたよね？　でも想像だけで我慢してたじゃん？　どうしてあんなバカなことをしちゃったの？」

「す、済まなかった……アイドルになってから同年代や年下の女の子たちにはモテたんだが……やっぱり小さな男の子とエッチしたい

願望がどうしても抑えきれなくってさぁ……」

「お兄ちゃんが大好きで、……お兄ちゃんに憧れてたから私もアイドルを目指したんだよ？　しくしく……」

抑えていた感情がついに爆発してしまい、涙が止まらなくなる"真友ガールズ"所属のアイドル、島崎真理子であった。

しばらく泣き続ける真理子。

涙は仰向けに拘束されている高原正人の頬へ落ちている。

しばらく沈黙していた島崎真理子と同じアイドルグループに属しているボーカルの菅野莉央が囁く。

「確か島崎さんと高原さんは腹違いの兄妹だったんですよね？　ごめんなさい、藤堂長官からあたしだけって約束で……聞いちゃってます。去年１８歳でシャニーズからデビューしたお兄さんの正人さん。その時１７歳の真理子さんは正人さんに憧れて飽本さんの事務所にオーディション受けに行こうと色々ダンスとか歌の勉強始めたばかりだったんですよね？」

「私と高原正人のこと……全部知ってたんだ……」

「ほんとごめんなさい……拷問前に二人で話したいこともありますよね？」

島崎真理子にそう言いながらしゃがみ込む菅野莉央。

高原正人の手足を拘束している手錠の鍵を、セーラー服のポケットから取り出し、その全てを外してゆく莉央。

「り、莉央ちゃん!?　な、何してるのっ??」

「よくわかんねぇけどありがてぇなっ!　感謝するぜお嬢ちゃん」

手錠の痕が付いている手首を反対側の手で揉みながら莉央にお礼を言う高原だった。

「あれ?　お嬢ちゃんどこかで見たことあると思ったら……真理子と同じグループの子じゃん!　どうして一体“真友ガールズ”の君たちがこんな辺鄙な無人島みたいな所にいるんだ?　俺がここにいるのも意味分かんねーんだがな……」

「あたしは一旦港に戻ってます。一時間したら帰ってくるからそれまで自由にしててもらって構いませんから……じゃあ」

真理子に手を挙げて元の港に戻ってゆく莉央。

感謝の気持ちで後ろ姿を見送りながら更に涙が溢れる島崎真理子だった。

二人は、数年間とはいえ一緒に暮らしたことのある兄妹。

それぞれにアイドルになるまでとなってからの楽しかったことや

辛かったことを話し合った。
真理子が兄に食べてもらう為に慣れない手付きで家で握ってきた“おにぎり”を鞄から取り出すと、時間を掛けて二つずつ座って食べた。
おにぎりも食べ終わり、一通りお互いの思い出話を終えると、あっとゆう間に５０分が過ぎていた。
ゆっくり立ち上がる島崎真理子。

「今日はね。私たちがこの島に呼ばれた理由は……お兄ちゃんの拷問と去勢なの」
「えっ!?　おいおい……物騒なことを言わないでくれよ真理子……去勢って？　犬猫じゃねぇんだぞ俺は？」
「大人しく下半身を全て脱いで寝そべってくれる？」
「は、ばかを言うな！　去勢なんかされてたまるかよ？　もしお前が本気なら俺だって本気で抵抗するぞ？　女が男には敵わないぜ？」
ファイティングポーズをとり、妹と一戦交える覚悟を見せる高原正人。

――――一方、東側の岩場では……。

「ぐわあっ！　やめてくれえええっ！！　痛い痛い痛いいいいっ！！」

『バコバコバコバコバコッ！！』

岩にうつ伏せに縛られて、バックで菅野京介にアナルを掘られて泣きわめいている38歳の中年オヤジ……長谷川純也が絶叫を上げていた。

肛門のあまりの痛みに、ついお尻を下げると、鬼頭美紅の強烈なビンタが長谷川の顔面を襲う。
すでに10回近く叩かれて、左右の頬は真っ赤に変色している。

「ほらほらっ！　感じるかケツの穴は？　よくもか弱き中学生の女の子をレイプなんてひでぇ事が出来たもんだな？」

「ワシは名取とかゆう男に紹介されて訪れて事に及んだだけだっ！一番悪いのは名取だろがっ！？　いててててっ！！」

その瞬間、夥しい量の精液が発射された。
中年の男の直腸は二十歳の菅野京介の精液で満たされてゆく。

「おうっ！？　熱いっ！！　ひぎいっ！！」

「京介さんのオチンチンは気持ちよかったかな？　次はあたしの番ね？　ほうら……入るよぉ？　肛門の力を抜いてなきゃ痛いわよ？」

『ずぷ。ズブズブズブズブ……』

「ひぎっ！？　ぐわあああああっ！？」

直径６ｃｍ、長さ２５ｃｍもある超特大の極太アナルバイブをペニスバンドにセットして、美紅がバックでアナルを犯し始めた。

『ばちゅうっ！！　バコバコバコバコバコッ！！』

「ふんぎいいいっ！！　いでででででええっ！！」

『パンパンパンパンパンパンパンパンッ！！』

ひたすらアナルを犯す美紅の腰使いは、京介の倍のスピードがあった。

張形の大きさでも京介のソレを遥かに凌いでいるので、その激痛は地獄のモノと言えるものだった。

散々長谷川の直腸を犯した美紅の張形は、大便と腸液と、血液まみれになって一気に引っこ抜かれた。

同時に京介の出した精液もドクドクと垂れ流しになる。

「ユルユルになっちゃったね？　オッサンのケツまんこ……」

「うがあああぁ……うごっ。うごっ。ぐすん。ぐすん」

「泣かせちゃった。ごめん。泣いてるついでにオチンチン切り取っちゃおっか？　ちょっと失礼。それそれっ」

美紅は、肛門のあまりの激痛に思わず泣いてしまう中年男のペニスをキュッと握り、反対の手に握られたサバイバルナイフを横に滑らせる。

二回ほど往復すると男のペニスは根元から切断された。

思わず顔をしかめて後ろを向く京介だったが、気にしないでそのまま肛門へサバイバルナイフを突き入れると、一気に会陰部、陰嚢までも深く切り裂いた。

二つの睾丸が切断面からはみ出してくる。

右の睾丸を右手で握りしめて引きずり出してから精管や神経の管を無理矢理引きちぎった。

この世のモノとは思えないほどの絶叫を聞きながら、すぐさま左の睾丸も握って陰嚢から引きずり出して、全ての管を引きちぎる美紅。

泡を吹いて痙攣する長谷川の口に、ちぎり取った睾丸を二つ捩じ込むと、右手のサバイバルナイフを喉元にあてがった。

「あなたが犯した中学生の女の子……自殺しちゃったんだ。結局あなたは人殺し……よって天の裁きを与えます」

「ふがあぁはあっ！　な、何をする気だっ？　やめでぐれええっ！」

『ズッ！！……ズバババババババババッ！！』

「うごおっ！？　んんんっ……ゴボゴボゴボッ！！」

高速で左右にサバイバルナイフを動かす美紅。
一気に喉が半分切り裂かれ、数mもの血が高く飛び散った。

「ええっ！？　ちょ、ちょっと美紅ちゃん！？　今日は拷問と去勢だけって聞いてたけどっ！？」

チラッと見た菅野京介はビックリして美紅に問い掛ける。
問い掛けながらもまともに斬首を見られない京介は、真横を向いて目を逸らしている。

「ごぎいいいいいっ！？　痛い痛い痛いっ！　ゆるじでぇぇ……ごぽごぽっ！」

許しを乞うが、美紅は手を止めない。
半開きになっている口からも泡のような血が溢れ出してくる。
苦痛に歪んだ顔がスッと真顔になり、ついに長谷川の首は美紅の手によって本体から切り離された。

地面に置いて思いっきり蹴飛ばす美紅。

「汚ったな～い。直腸ブリブリ股間の切れ目からはみ出してるじゃ

ん……惨めなオッサンだねほんと……」

首を失った長谷川純也の身体はバタッと倒れ込み、哀れに切り裂かれた股間からは、直腸から大腸から〝とぐろ〟を巻いたように円を描くようにハミ出している。

サバイバルナイフに付いた血を、長谷川純也の背中に擦り付けながら美紅は京介に一言。

「これは事故だから。拷問のつもりが殺しちゃっただけだから。いいですね京介さん？　あれ？　もうしまってもいいですよソレ……」

「はがはがはが……は、は、はいっ！」

しまい忘れた大きなイチモツは、恐怖のあまりフニャフニャに縮こまり、女子中学生の美紅の前で揺れていた……。

――再び残酷処刑島の西海岸。

「あれ……眠たいぞ？　んん？　……ぐぅ。ぐぅ」

ファイティングポーズを取ったままでその場に崩れ込み、爆睡してしまう高原正人であった

「ごめんねお兄ちゃん……さっきのおにぎりには全身がの神経が麻痺する薬と……睡眠薬が入ってたの……私が……去勢してあげるから……」

慣れない手付きで高原正人のペニスを根元から切断してゆく島崎真理子。

小型のナイフで何回も切り付けて、ようやく切り離した。

そのまま陰嚢にも切り込みを入れて、二つの睾丸を取り出すことに成功。

速やかに足の裏で踏み潰すことにした。

血塗れになった下腹部にガーゼを当ててからパンツを履かせると、人の気配に気付き後ろを振り向く。

菅野莉央が戻ってきていた。

「莉央ちゃん……今私の手でお兄ちゃんの去勢刑を執行したよ！でもアソコからの血が止まらない……止血してあげてくれないかな？」

「…………思い出は作れました？」

「え？」

すぐに止血処理をしてくれると思っていた真理子の期待に応えてくれない莉央は、ゆっくり倒れて眠り込んでいる高原正人の元へ歩み寄った。

「あの……莉央ちゃん？　止血処理をしてくれないと正人死んじゃうかも？」

「…………」

「莉央…………ちゃん？」

「腹違いとはいえ、大好きなお兄ちゃんに対して酷いことさせちゃってごめんね……藤堂長官が今回島崎さんに任命したのは……お兄ちゃんと最期に会わせてあげるため……思い出を作ってもらうため……」

「ちょ、ちょっと……最期って……まさか？」

「後はあたしがやるから……島崎さんは先に港へ戻っていてくれませんか？」

「そ、そんな……お願いっ！　お兄ちゃんを殺さないでっ！！」

咄嗟に駆け寄って莉央に抱き付く真理子。
泣きながら莉央にしがみつく。

「莉央ちゃんお願いっ！　正人お兄ちゃんを……許してあげて。ぐす、ぐすっ。しくしく……お願いだからっ！」

「これは特殊任務省の命令なの。ごめんなさい島崎さん」

「えっ！？　だって今回は……拷問と去勢だけに決定したって……そう聞いたから相手がお兄ちゃんでも勇気を振り絞ってこの島に来られたのに……」

――――――7時間前の早朝。菅野邸。

「では長官……長谷川純也と高原正人の拷問と去勢刑……あたしを含むその四人にて執行させてもらいますね？」

「ああ。よろしく頼む」

「では失礼します。兄の京介に早く話して車を出してもらいますのでこの辺で失礼しますね」

「………菅野くん」

「はい？」

「残酷処刑島での連行と執行……これが何を意味するか……こちらの意図を汲み取ってくれてるね？」

「………もちろんです。でも島崎さんの腹違いのお兄さんですよ

ね？　本当にいいのですか？」

「ああ。少年の方は自殺してないみたいだが、後々犯されたことを苦にして自殺する可能性も否めない。未成年への性的な犯罪は基本処刑でいくつもりだ。島崎真理子を選んだのは最期に兄と会わせてやりたかったのだよ……」

「分かりました。ではご厚意に甘えさせて頂きます。何といっても一番辛いのは兄妹の島崎さん本人でしょうから……」

――――夕刻迫る残酷処刑島。

「そう言うわけで島崎さんとお兄さんとは今生の別れとなります。これでも藤堂長官は情けをくれた方です。分かってください……」

天を仰いでいたが、そのまま膝を突き泣き崩れる島崎真理子。その背中を擦りながら莉央が囁く。

「出来るだけ苦しめないで短時間で逝かせてあげますから安心して島崎さん」

「ぐす。ぐす。わーん。わーん。ええええんっ！　ええええんっ！」

しばらく泣き止まない女子高生アイドルの島崎真理子だったが、優しく背中を擦っているうちに少し落ち着いてきた。

「島崎さん……辛いでしょうけど堪えて……お願いです」

「うん。悪いことしちゃったんだから仕方ないんだよね……莉央ちゃん……お兄ちゃんをよろしくお願いします……」

「はい。必ず3分以内で逝かせてあげます。約束します」

フラフラと頼りない足取りで、西海岸を去ろうとする島崎真理子だったが、愛しく想っていた兄の高原正人を何度となく振り向いて涙目に焼き付ける。

眠っている高原正人を仰向けにして更に強力な痛み止めの麻酔を打ってから、チェーンソーで素早く手足を根元から切断してゆく。縛らなくても暴れないようにするためだった。

ダルマ男が完成する頃には、真っ白な砂浜はみるみる内に真っ赤に染まっていった。

１mほどの長さの槍を手に持ち、高原正人の傍らに立つ莉央。最期に目覚めるのを待つ。

「んん？　キミは……真理子のメンバーのボーカルの……確か菅野莉央ちゃんだっけ？　何をしてるの？　長い棒みたいなの持って…

「……あれ？」
痛みが全くないので気付き遅れたが、自分の手足が失くなっていることに気付き、発狂したように泣き叫び始めた。
「そんな短い手足で暴れ狂われてもね……惨めなだけだよ高原さん……最期くらい男らしくしてください」
「お、お前がやったのかっ！？　ア、アイドルの俺の手足をこんな短くっ……こっ、この鬼っ！！　鬼畜女めがっ！！」
「言いたいことはそれだけ？　じゃあ今から高原正人の処刑を執行します。肛門からの串刺し刑だよ？」
「はあっ！？　バカなことを言うなっ！？　人殺しになってもいいのかっ？お前もアイドルだろうがっ！？」
ゆっくりしゃがみ込んでから槍の切っ先を高原の肛門へあてがう莉央。
つぷっとゆっくりだが確実に直腸を突き進んでゆく。
「んぎゃあっ！？　痛いいいいっ！？」
「小学生男児の痛み……分かったかな？」
「いでででっ！！　チンポと槍じゃ痛みが全く違うぜっ！？　酷

すぎるぜこれはっ！？」

ゆっくりＳ状結腸を突き破った槍は一度止まる。
小腸の腸壁が侵入を阻んだ。

お尻を着いて座り込んだ莉央は、電気アンマの要領で槍の柄を小さく何度も蹴り込んでゆく。

みるみるうちに小腸を何枚も突き破り、胃まで届いた。

血反吐を吐いて絶叫する高原に問い掛ける莉央。

「このままお口まで貫通させたげるね？　覚悟して口を開けて」

「ごほっ！　ごほほっ！！　がはあっ！！」

「ほれほれっ。いく？　逝っちゃう？」

『ズププ……ズズズズ……ドカッ！！　ドカッ！！……バリバリ……ばちゅっ！！』

「けぺえっ！！！！……あがあがあが……ごぽぽっ！！」

ついに口まで貫通した莉央の槍は、血の泡を纏って口先で鈍く光っている。

全身を痙攣させながらもまだ死ねない高原正人の眉間に、リボル

バー式拳銃の銃口を向ける莉央。

「もう約束の3分が来ちゃう……生まれ変わったら妹さんを泣かせちゃダメだよ。さようなら……男前のアイドル、高原正人さん」

ゆっくりと引き金を引くと、パンッとゆう乾いた発砲音と同時にボコッと額に穴が開く。

その瞬間に両方の目玉がポンッと飛び出し、白い脳みそが後頭部側から四方八方に飛び散った。

「あれ？　目玉飛び出しちゃったみたい……醜い顔にしちゃってごめんなさい。銃弾全部撃ち込んでグチャグチャにしてあげるから……成仏してね」

更に5発撃ち込む莉央……。

「パンパンパンパンパンパンッ！！」

拳銃の弾丸は全て顔面に撃ち込まれ、首から上は原型を留めない肉塊と化した。

白い砂浜が更に真っ赤に染まってゆく。

皆が待つ港を目指して帰り始める莉央だったが、島崎真理子の気持ちを思うと胸が痛くなって涙が頬を伝う。

残酷処刑島に、新たに二つの遺体が加わる事になった……。

少年少女の悲劇～強制的売春～　（後編）（後書き）

島崎真理子の大切な人が処刑された。

お互いにアイドルデビューして急に忙しくなり、殆ど会えなかった幼馴染みのような恋人のような親友のような兄妹の二人。

自業自得とはいえ、運命は過酷だった。

拷問処刑人外伝……残虐三姉妹①（前書き）

美しく残酷である拷問処刑人の小学生、莉央と明日香と美香。

三人が生まれ変わる前は、実は同じ両親から生まれた残虐な三姉妹であった。

時は４００年昔の戦国時代……リオたち三人姉妹の暗殺剣士の残虐物語。

拷問処刑人外伝……残虐三姉妹①

――――４００年前、時は戦国時代。

多数の国々が天下を獲るため虎視眈々と戦略を練っていた。
幾千と戦を繰り返し、数百存在した国々は、最早二人の大名を残すのみとなる。

日本列島を二つに分けた東西分け目の大戦（おおいくさ）が眼前に迫っていた。
もちろんこの戦に勝利した総大将が、全国統一覇者となる。

東軍総大将である樽賀（たるが）の国、徳山家男（とくやまいえお）は、元々５００万石の大大名である。

知略と謀略の限りを尽くし、齢７５になるまで危うい橋を決して渡らず、ほぼ必勝と言えるほどの勝率の高い戦しか参戦せずに固く戦国時代を生き抜いてきた狡猾な古狸である。

樽賀の国、安川城城主として東の国々を統治し、天下を狙う。

これに対し西軍総大将は、貧乏な百姓から少しずつのし上がってきて、小さな城を持つ武将にまで成り上がる。

非道なる山賊などを討伐しながらも戦での武功を重ね、６００万石の城主にまで登り詰め、日本列島西側の国々を一つにまとめあげた豊神秀郎であった。

だが天下統一まであと一戦（ひといくさ）とゆうところまできて、約一年前に、西日本統一戦勝利の酒宴の席で鯛の骨を喉に詰まらせて、この世を去ってしまう。

享年７４であった。

存命していれば徳山家男と同い年である。

１０年ほど前に豊神秀郎に士官してから、西軍統一国の五奉行の取り巻きの中でも特に大切にされていた奉行の一人、石立睦成（いしだてむつなり）が豊神秀郎の意志を受け継ぎ、西軍総大将となった。

元々は東国の出身だが、人一倍正義感の強い同郷の仲間たちと徒党を組み、武装しながら非道なる外道侍や山賊などを討ち果たしたり、捨て子を拾っては有志に預け入れたりもしている。

噂を聞いた西国の猛将、豊神秀郎に召し抱えられ、正義を語る親友となっていった。

東国時代から別の国に住む兄と共に、正義感の強い男であった。

知略に長けた東西お互いの軍師が各地に忍者を放ち、敵国の内情を探りあい、いつ何時に戦が起きてもおかしくはない状況であった。

敵国との境になる平野である席ヶ原は、中野国という国に存在するが、総決戦の中心地になるであろう土地だけに、お互いの国々は常に見張りを立てて、ピリピリとした空気の中、この田舎の村の農村区域での毎日を過ごさなければならなかった。

中には敵国の有能な武将を、毒殺する強者の忍者たちもいる。

戦を自国の有利にするためには、戦に長けた猛将を一人でも暗殺しておけば、かなり有利になることだろう。

腕はあってもツテがなく、運悪くどこの国のお城にも仕官できずに、放浪せざるを得ない武士たちも多数存在した。

基本的に収入が無い為、毎日の生活に困窮し、徒党を組み、農民や商人を襲い、残虐で悪質な山賊化する者たちも現れ始めている。

東軍と西軍の境界線からは百里ほど離れている場所に、既に徳山家男の統轄下にある東野城（ひがしのじょう）があった。

東野城城主である春日井長政は、無類の剣術好きで、さすらいの浪人たちや、力の強い町人たちを一同に集めては木刀にて城内の広場で戦わせ、最後の一人になるまで試合を行い、強者は常に召し抱えていった。

「本日の勝者は本田十兵衛と申す浪人じゃな！　５万石でそなたを召し抱えようぞ！」

「ははっ！　有り難き幸せに存じまする！」

常に強者を抱えてゆくだけあって、この国での治安を守る東野城お抱えの〝春日井隊〟は、近隣の国々からも一目置かれる程の地位を確立していた。

新しく士官することになった本田十兵衛は、先に隊員となっている川崎八兵衛と豊田七兵衛と共に百人もの兵隊を持つことを許された。

仲を深めるべく三人で宴を開く。

「本田殿、この度はよくぞ最終まで勝ち残られた！　ワシの時と同じ数を相手にお見事！　のう、豊田殿！」

「ああ！　見事な試合を見せてもらったぞ。この百人の兵たちをワシらで更に腕を磨いて春日井様の国の治安を守ってゆこうではないか本田殿！」

先任の豊田と川崎からも激励を受け、調子にのって酒を飲み続ける本田十兵衛であった。

――東野城管轄の東村山村（ひがしむらやまそん）。

五十人ほどの村人が農業と、猪や鹿の猟をしながら細々と暮らしている田舎の村である。

「お母ちゃん、山芋これだけ掘れたよ！」

「おやまぁ……今日はたくさん頑張ってくれたんだね志乃！　助かるよ」

「えへへ。父ちゃんは今日こそ猪獲ってきてくれるかなぁ？」

「ここんとこサッパリだからねぇ。たまにはお肉も食べないと栄養つかないよ全く……」

母と子の平和な日常が、多数の蹄の音で切り裂かれる。

「さ、山賊だっ！　みんな逃げろっ！！」

村の若者の一人が叫ぶが、三十人あまりの山賊たちが槍や斧、日本刀等様々な武装をして馬の上から村人たちをこれ見よがしに斬り倒してゆく。

山賊の頭だけ妻がいて、そのたった一人だけいる女は笑いながら男たちの非道な行為を馬上から眺めているだけだった。

「ぐわあああっ！！」

「キャアアアッ！！」

『ズバッ！！　ザクッ！！　ザシュッ！！』

野菜を収穫していた村人たちは逃げ切れずにバタバタと倒れてゆく。

「がはははっ！！　ババア以外のオナゴは斬るなよっ！　犯しまくってからトドメをさせっ！！」

「うひょひょひょひょっ！！　ひゃっはぁーっ！！」

ほぼ半数の二十人が女性だったが、次々と山賊たちに犯されてゆく。

年老いた女性たちは即斬り殺された。

村人たちの血で染まってゆく田舎の農村は、まさに生き地獄と化していた。

「やめて下さいっ！　ひいいっ！！　せめてこの子の命だけでも助けて下さいっ！！」

「愛娘の前でお前がイけたら、娘の命だけは助けてやるぜ？」

殆どの村人が虐殺され、残るは女性の親子のみとなる。

犯す相手にありつけなかった山賊たちから代わる代わるに輪姦(りんかん)されながらも、懸命に9歳の娘の命乞いを続ける村の若い女。

「わーんわーんっ！　お母ちゃんっ！　お母ちゃんっ！！」

「げへへ。ほうらよく見なお嬢ちゃん！　お前の母ちゃん激しく腰振って喜んでるぜ？　がはははっ！」

「あはっ！　あんっ！　あんっ！　ひいいいいっ！！」

「ほらイクか？　オラオラオラァッ！！」

『パンパンパンパンパンパンッ！！』

激しくバックで犯す五人目の男。

「イく……イくううっ！！」

無理矢理犯されて気持ちいいはずもなかったのだが、娘だけでも命を助けてもらうために、わざと絶頂を迎えた演技をする母親。

「ははは っ！　ワシのがそんなに気持ち良かったか！？　ついでにこっちの穴も犯してやるぜっ！」

「や、止めてっ！？　痛いっ！！　ひいいいっ！！」

母親の肛門にまでイチモツを差し込み、それが出たり入ったりするのを涙目で見せ付けられている9歳の娘の志乃。

「お母ちゃんを苛めないでえぇっ！！　あーんあーんっ！！」

苦痛に歪む母親を見せ付けられていた志乃は更に号泣を始めるが、そのまま肛門を犯し続ける男であった。

母親の直腸にたっぷりと精液を注ぎ込んだ後、娘の眼前で小刀を首にあてがうと、ズバズバと切断してゆく。

「ぎ……ぎゃあああっ！！　志乃っ！　志乃おおおっ！！　んぎぎぎ……ごぼごぼ……がくん……」

やがて胴体から切断された口から血の泡を噴き流した生首を、志乃の足元に置いた。

「いやああああっ！？　お母ちゃんお母ちゃんっ！！　わーんわーんっ！！」

狂ったように泣き叫ぶ志乃の前で、更に別の男が母親の生首の口へ、ペニスを捩じ込む。
そのまま前後に振り、生首の口内オナニーを始めた。

「ほっほっ。うほっ。うほっ。気持ちえええのう～っ♪生ぬるい血がまた興奮するぜぇ～い♪」

「がはははっ！！　こいつ手の替わりに死体の口使ってコイてやがるっ！　ほんと変態野郎だなっ！？」

『ドピュッ！　ピュピュピュピュピュピュウッ！』

射精を終えると生首を投げ捨て、母親の来ていた衣服でペニスを入念に拭く。

あまりの凄惨な光景に、小便を漏らして震えるしかない志乃であ

った。
母親を殺された恐怖で全身に力が入らない。
「さてお嬢ちゃん……母ちゃんもあの世へ行ったことだし、お嬢ちゃんも後を追わせてやるからな？」
そう言いながら薙刀を志乃の首元へそっと近付ける山賊の男。
「ちょっと待てよ！　俺は小さな子も大好きだから殺す前に一発ヤらせてくれよ？」
「おいおい。こんなガキに入るのかよ？　まだ産毛も生えてないような小さなマンコしてるぜ？」
「入らなきゃ無理矢理ぶちこんでやるまでよっ。ホレでも無理ならケツの穴まで切り裂いて穴を拡げてから突っ込んでやるわっ！」
「げへへへへ。ほんと鬼畜だなお前は……前の村でも１２歳の女の子無理矢理犯してたもんなぁ？　タチ悪い外道だぜ全く」
「普通に女どもを犯して殺してる奴に言われたかねーよ！　がはははは
はっ！」
衣類と下帯（したおび）を脱ぎながら大きなイチモツをおっ立てて９歳の志乃に見せつける鬼畜男。

「お嬢ちゃん……せっかく生まれて来たんだから最期に男とゆうものを味わわせてやるぜ……後ろ向いてケツを突き上げてじっとしてな！」

泣きながら抵抗をする少女を何度も殴り付け、無理矢理四つん這いにさせると、下帯を脱がせ、両手で乱暴に臀部を鷲掴みにして左右に性器を押し開き、そのまま膣口にペニスを押し当てる鬼畜男だった。

『メリメリ……』

「いやあああっ！！　痛いいいいいっ！！」

「痛いか痛いか？　げはははは！　小さなマンコが無理矢理押し開かれてゆくのはいつ見ても興奮するぜ……入るぞ？　ほうら、志乃ちゃんの大切な部分が壊れちゃうぞぉ〜？　げははははっ！！」

亀頭部分が半分ほど少女の性器にめり込んだ時……バックで犯そうとしている男の目前を何かが上から下へ横切ったのが見えた。

『ビュンッ！！』

「ん？」

少女のお尻を掴んでいた筈の両手が、手首から先が失くなっていた。

何が起こったのか理解できないまま下腹部にも激痛が走る。

「ぎゃあああああっ！？」

両手首とペニスは鬼畜男の身体から切り離され、両膝の前に転がり落ちていた。

あまりの激痛に叫び狂う男は、転げ回ってもがき苦しみ始める。

そのあと更に男たちの悲鳴が数回響いた。

血の噴き出す音が何度も志乃の耳に聞こえてくる。

泣きながらも振り向いた9歳の少女……志乃が見た光景は、あまりに信じられない内容であったが、これまでに見てきた血みどろの残酷な光景……と言う意味では何一つ変わりはなかった。

ただ、首を斬られて血飛沫をあげて絶叫しているのが、自分を取り囲んでいた山賊の男たちの方、だとゆうことを除いては……。

「危なかったねお嬢ちゃん」

「強がって意気がる男どもを斬るのってやっぱり楽しーですわねぇ♪」

「アハハ！　あたしに斬られたチンポから噴水のように血が噴き出してるぅ♪」

かなり細身の日本刀を持つ三人の若い女たちが志乃を取り囲んでいた。

――長女のリオ２０歳、次女のアスカ１８歳、三女のミカ１５歳の三姉妹であった。

幼少の頃、食い扶持に困窮した両親に捨てられた三姉妹は、暗殺剣、闇柳生流創始者である闇柳生助平（やみやぎゅうすけべえ）に山奥の山道で拾われ、命を落としかねない程の過酷な剣の修行を強制的に積まされてきた。

この世の秩序を乱す害悪、徒党を組む山賊や外道たちを天に変わって抹殺するため、これまでに何十人と少年少女を引き取ってきては剣術を教え、この三姉妹も女とは思えないほどの暗殺剣を習得させられている。

――しかし闇柳生助平が男子たちと同じ様に、世の泰平の為にと育て上げた筈のこの三姉妹には致命的な欠陥があった。

それに気付いて助平自身が三姉妹を抹殺しようとしたのだが、三対一で返り討ちに遭ってしまうのである。

その欠陥とは………。

三姉妹による幼い男女たちへの“ある行為”が問題だった。

９歳の少女である斉藤志乃は、目の前で母親を虐殺され、猟から帰ってきていた筈の父親も既に村の入り口付近で斬り殺されていた。

山賊たちの暴挙から、土壇場で現れてくれた三姉妹に命を助けられたのには違いなかったが、後々残酷な運命が志乃を待つのであった。

「ぐす。ぐす。ありがとうございます……もう少しで乱暴されて殺されるところでした……ぐすぐす」

泣きながら衣服をただし、パンツである下帯を股間に巻こうとしたその時……。

「お嬢ちゃん……誰が下帯を巻いて良いと言ったのかな？」

長女のリオがパンツである下帯をもう一度引き脱がした。

「ひっ！？　やだっ！？」

「さっきの続きですよお嬢さん……四つん這いになってお尻を高く突き上げてくれますぅ？」

『パァンッ！！』

次女のアスカが志乃の臀部を思いっきりひっぱたき、四つん這いにさせる。

「志乃ってゆうんだね？　カワイー名前だね。あたしが可愛がってあげるから大人しくしてるのよ？」

三女のミカがニヤけながらお尻の肉を左右に押し開き、性器と肛門がぱっくり中身が見えるほどまでに力を入れる。

信じられないといった表情で固まる志乃は、山賊からの暴行の延長のように感じてしまい、再び恐怖で涙が頬を伝うのが分かった。

「ううう。女の人たちなのに……どうして私のお尻とか見たいのですか？　助けてくれたのではなかったのですか？　ぐすぐす……」

哀願するように泣きながら後ろを振り向くと、三女のミカが、中指をペロペロ舐めてから、志乃の性器へゆっくり押し込んできた。

「ひいっ!?　そんなとこ触らないで下さいっ！！」

『ずぷ。ずずずず』

「触る？　あたしの指を突っ込んでイカせてあげるんだよ？　あはは。ほらっ！」

『ずちゅっ！！　パリッ！』

「んあぁっ！？　痛いいいいっ！！　いやぁぁぁっ！！」

一気に根元まで差し込まれた三女のミカの中指は、９歳の少女の処女膜を瞬時に突き破り、流れ出る血を全く気にもせずにグリグリと掻き回す。

「痛いっ！　止めて下さいっ！　んぎいいいいっ！！」

「あはは。あたしたちのオモチャになって一緒に旅をするか……ここであたしたちに殺されるか……選んでくれる？」

そう言いながらも執拗に膣内を掻き回すミカの指に、生まれて初めての異物挿入に対し、快感を覚えてきた志乃であった。

「あうう……あんっ。な、なんか変な感じ……」

「あはっ♪　気持ちいいんでしょ？」

「んぐ……んんん。もっと掻き回して……私をもっと……気持ち良くさせてくださ……い。一生あなたたちのオモチャにでも何でもなりますから……あんん」

「分かった。じゃあイカせてあげるから力を抜きなさい」

「は、はい」

『ぐちゅっ。くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ……グチュチュチュチュチュチュチュッ！！』

「い、いくっ！　はああああんっ！！」

『ビクッ……ビクビクッ！！………プシャーッ！！』

三女であるミカの責めに堪えきれず、人生初のオーガズムを迎えた9歳の少女、斉藤志乃であった。

同性による淫乱行為は志乃の望むところではなかったが、生き抜くための本能がこの三姉妹に服従することを選択した結果、“イくぅ”とゆう快楽を味わえたことに他ならない。

「一杯オシッコ漏らしちゃって……明日は肛門も調教してやるんだから！　覚悟してなさい志乃」

「は、はい。ミカ様……私は一生三姉妹の方々に尽くします……だから殺さないで下さい……」

「お姉ちゃんたちは男の子好きだから志乃はあたしだけのオモチャだねっ！」

長女のリオに確認するミカ。

「好きにして。ミカと違って私たちは女の子なんかに興味ないから……ねぇアスカ」

「そうですわねぇ。私もオナゴには興味ございませんわ。でも飽きたらトドメ刺すのは私にやらせてねぇ？　手足切り取ってお腹かっ捌いて血塗れにしちゃってから殺してあげたいのぉ。うふふ♪」

「あはは。アスカねーちゃん趣味悪っ。でもしばらくはこの子で楽しむからすぐは殺させないよっ♪」

ようやく衣服を着ることを許された志乃は、リオとアスカとミカの三姉妹と共に村の出入口である門へ向かう。

山賊の頭領と妻の女が、二本の木の杭に拘束されている。

山賊たちを皆殺しにする前に……志乃を助ける寸前に二人を縛り付けておいたのであった。

「頭領のあんただけ女がいるなんて……山賊の中でもズルいよね？」

三姉妹の長女である２０歳のリオが頭領に話し掛ける。

「不意討ちで三人がかりでワシを拘束するとは卑怯なオナゴどもだな！　お前らごときにワシは負けんぞ！！」

「へぇ～。大した自信だね？　じゃあ私と一対一で戦ってくれるの

かな？」

「そうしてくれるなら有り難いが殺されてから後悔するぞ？」

「アスカ、ミカ！　こいつをほどいてあげて」

長女のリオに命令されて縄をほどくアスカとミカの二人。

「奥さんの見てる前で私たちを斬り殺して……いやんっ。怖いっ。私イッちゃうかも……」

「な、舐めやがって！　おいっ！　ワシは貴様と素手で戦わなきゃならねぇのかっ！？」

「アスカ！　あんたの刀貸してあげて」

「はーい。はいおじ様。私の銘刀使ってくださる？……大切に扱って下さいね～」

次女のアスカから名のある鍛冶屋が打った斬れ味抜群の日本刀を受け取った頭領の男は、不敵な笑みを浮かべてリオに斬りかかる。

「ほっほぉ！　軽くて強そうな良い刀だな！　貴様らをぶった斬ったあとワシが貰ってやるわ！　死ねオラアアアッ！！」

呆気なくかわされて、腹部へ深く突き刺さるリオの日本刀……。

『ズブッ………』

「ぐふっ！？　ごがが……ば、ばかなっ！？」

「あれぇ？　もう終わりなの？　奥さんが見てる前で情けないよね？」

「あ、あんたっ！　しっかりしてっ！！　あたいを守ってちょうだいなっ！！」

「済まぬ……ワシはもうダメだ……がくっ！」

腹部からの出血多量で数秒で死亡する頭領の男。

「あらあら……旦那さん死んじゃったね？」

「あんたっ！　あんたあああっ！！」

泣き叫ぶ山賊の頭領の妻に囁きながら縄をとくリオ。

「さぁ逃げてもいいよ。もし私たちから逃げきれるならね……」

即、殺されるかと思った頭領の妻は、必死で逃げ始めた。
数分間……数十分間……ひたすら走り続けた。
後を追う長女のリオ。
長距離を走るのには自信のあった女だが、ついに息を切らせて座り込む。

「はぁ。はぁ。こ、ここまでくれば大丈夫……はぁ。はぁ」

「あらあら……まだこんなところに居たんだ……せっかくチャンスをあげたのに。よっぽど私に殺されたかったのねぇ？　いいよ。殺してあげる」

「ひいっ！？　ど、どうして！？」

「どうしてもなにも……あなたが遅すぎただけの話じゃない？」

「ひいいっ！！　止めて……許して下さ……」

「あはは。許さな～い。あんたの汚～い所から斬っちゃおうかな？」

『ザシュッ！！』

下から上へ斬り上げた日本刀は、女の衣服ごと性器からヘソまでパックリと切り開いた。
腸（はらわた）が足元にドバドバと落ち広がってゆく……。
真っ二つにされた膣口、陰核や尿道口からも激しく血が噴き出し

ている。

「ひ、ひいいっ！？　痛い……いや……死にたくない、許してお願い」

「やだぁ……エッチな部分パックリ開いちゃってぇ。汚いマンコの中身まで丸見えだよ？　そんな腸も出てきちゃったらもう今更私が許しても死んじゃうよね？　あははははは！」

『ぶしゅううう！　ドクドク……ドクドク』

腹部と下半身は悲惨なほど流血しているが、必死で腸を自分の腹部へ手で拾っては押し戻している。

「よく土の上に落とした腸なんてお腹に戻せるわねぇ？　汚い……」

しゃがみ込んで膝に肘を置いて頬杖をつきながら女の必死な作業を見守るリオ。

「んあああ……痛い……死にたくない死にたくないっ！　ひいいい」

「どうせ死ぬのに無駄な作業しちゃったね？　哀れすぎて見ていられなくなっちゃった……もう逝かせてあげる」

「ひっ！？　やめ……」

『ヒュカッ！！』

リオは凄まじい速度で真横に一閃。
瞬時に女の首は胴体から切り離され、ポトリと地面に落ちた。
大便と小便を漏らし続け、首の切断面から激しく血を噴き出しながら遂に息絶える女。

「あはは。頭領の妻にしては可哀想な死に様ね♪　通行人にマンコの中身まで見て貰うために格好決めなきゃ……よいしょ。よいしょ。こうやって……こうして……」

女を素っ裸にひん剥き、まんぐり返しの体勢にさせた上で、左右に大きく脚を開かせ、縄で縛り付けて固定した。
縦に切り裂かれた性器がパックリと開ききり、奥の子宮まで見えてしまっていた。

「あはは！　コイツやだぁ～。赤ちゃん作る白～い臓器まで見えちゃってるぅ。なんかエッチィ～♪　お尻の穴もかなり開いちゃって奥のうんちが見えちゃってるし……これは女としてすっごく可哀想だね。ん～と……あ、そうだっ！」

仕上げに桜の枝を折って肛門へ差し込み、大便が見えなくしてあげるリオ。

「これでよし！　色んな通行人に桜の差し花とマンコの奥まで見てもらいなさい！　じゃあさようなら。成仏してね」

長女のリオが頭領の妻にトドメを刺して村に再び引き返すと、殺された山賊の頭領の死体が素っ裸にひん剥かれていた。

「ほら、短刀を貸しといてあげるからコイツのチンポ斬り取ってやって！」

「早くしないとあなたの大切なオマンマン……串刺しにしちゃいますわよ？　うふふ♪　将来赤ちゃん産めなくなっちゃいますわよぉ？」

アスカとミカに脅されながら半泣きになりながら、先ほど腹を深く突かれて殺された山賊の頭領のペニスを短刀で斬り取るよう強要される志乃。

「こんなところ……斬り取るのイヤだ……」

「ならオマンマンかお尻の穴から串刺しの刑ですわねぇ？　足を開いて貰えますぅ？」

「ひっ!?　わ、分かりましたっ！　すぐに切断させて頂きますっ！！」

震えながらも必死になり短刀で頭領のペニスを根元から切断する9歳の少女……志乃であった。

「切断面に穴が見えるでしょ？　そこをオシッコが通ってたの。指突っ込んであげて」

「は、はいミカ様」

根元の切断面から人差し指を尿道に差し込み、亀頭の尿道口から指先を出させる志乃。
生まれて初めてまともに見る大人の男性の陰部。
その中心部に指を突っ込んでいる自分を冷静に思えば、かなり恥ずかしくなって頬が真っ赤になってきている。

「この魚籠に入れておいて。頭のチンポは斬り取って集めてるから」

長女のリオは敵の中のボスである男のペニスは斬り殺した後で必ず斬り取り、魚籠に集めてゆくのが趣味だった。
中で少しずつ腐ってゆくので、干しモノになるまではかなり臭うが、切り刻んだ生姜を混ぜ込んで少しは臭みが取れていた。

「これから殺したカシラのチンポを削ぎ取る作業は志乃に任せるから。いい？」

「ええ！？　もうチンポを削ぐのはイヤだ……」

「リオねーちゃんに逆らうと即殺されるよ？　諦めなさい志乃」

「は、はいっ！　ごめんなさいミカ様っ！　ぐすんぐすん……」

強要されているあまりに恐ろしい作業に、思わず置かれた立場を忘れて反抗してしまったが、三女の自分の主になったミカに諭されて泣く泣く納得する志乃であった。

なにはともあれ……闇柳生助平の育て上げた残虐三姉妹によって、世間の人々を惨殺し続け、悲しみに追いやっていた一つの山賊集団が東村山村にて滅ぼされたことには間違いはなかった。

東野城城主である春日井長政は、東村山村の村人の全滅の報を受け、原因を探るべく調査を開始……リオたち三姉妹の存在を確認する。恩師である剣士、闇柳生助平を討ったこと、放浪を続ける中、各地で未成年に対する性的暴行を繰り返していること……。

管轄する全ての武将へ三姉妹討伐令が伝達され、闇柳生助平の元弟子である三姉妹は東日本限定だが天下のお尋ね者となった……。

拷問処刑人外伝……残虐三姉妹①（後書き）

山賊によって滅ぼされた村に現れた三姉妹……。

生き残った少女である志乃の命を救うが、女同士での非道なレイプが行われた。

若干９歳の少女……志乃が生きてゆく為に仕方なく取った行動。

リオとアスカとミカによる残虐三姉妹の悪者成敗？　の旅は続く……。

拷問処刑人外伝……残虐三姉妹②（前書き）

弱冠１０歳にて両親を失うことになる悲しい宿命を背負う男子、勇太郎に更なる試練が待ち受ける。

拷問処刑人外伝……残虐三姉妹②

次の悪党を捜すため、山道を西へ向かって進むリオたち三姉妹と、東村山村の唯一の生き残り少女である９歳の斉藤志乃。

四人は東村山村を出て、身体を洗える河川を見つけて野宿し、朝早くから出発した。

緩やかな山道からかなり険しい峠にさしかかると、三女のミカが愚痴り始める。

「春なのに暑いなぁほんと……もうダメ疲れた……ちょっと休憩していこうよリオねーちゃん！　アスカねーちゃんからも言って！」

「もう少し辛抱したら峠茶屋がありますわよ。先ほどすれ違った商人風の方がお団子持ってらっしゃったわ」

「そうなんだ！　お茶のついでに団子まで食べれるのならもう少し頑張る頑張るっ！」

一気に元気を取り戻したミカは、先陣を切って両手を大きく振りながら歩き出した。

三姉妹の中でも一番食い意地が張っているミカは、よく食べ物に釣られる癖がある。

「そう言えばミカ……東の果ての極東村で数日泊まってた時に襲っ

てきた山賊を一人逃がしてたよね？　あれってまさか……」
「えへへ。バレてたの？　リオねーちゃんには敵わないなぁ。あの男は大量の砂糖菓子を持ってたから……止め刺そうとした時に、命を助けてくれたら保管場所を教えて全部あたしにくれるって言ったの」
「そんなの叩き斬ってから後で探せばいいじゃん？」
「冗談でしょ？　あんな大きな村で砂糖菓子を探すなんて……大変過ぎるよ……」
「なるほど……貰った後に殺す手もあったけどね」
「リオねーちゃんってば相変わらず非道だねっ！　あはは！」
峠の茶屋はかなり敷地が広く、儲けに儲けている店主が羽振り良さそうに手を擦りながら愛想を振り撒いてくる。
「いらっしゃいベッピンさんたち！　四人はお友達かな？　ヨモギ団子が出来立てでほっかほかだよ？」
「それ四人分ちょうだいっ！　それと陰で冷やしたお茶も四人分ね」
ミカが即答で注文を入れると、完全に作った笑顔で奥に消えてゆく店主らしい男。

「あのおっさん、完全に愛想笑いミエミエだね。なんかムカつく笑顔だよ」

たった一つだけ拍子よく空いていた四人用のテーブルの椅子に座りながら、長女のリオが悪態をつく。

峠を越えて隣の城下町や村へ往き来する商人が多い中、リオたち四人の風貌はかなり目立つものがあった。

紺色の着物は太股が丸見えの色っぽいモノだったが、一見すると忍者か女剣士か見分けが付かないほどの中途半端な衣服だった。

「何か私たち目立ってますわね。毎回毎回何処へ行ってもじろじろと見られてる気が致します……。闇柳生師匠の仕立ては格好よさの欠片もないですわねぇ。裾も短いから少し派手に動くと下帯(したぎ)までチラチラ見られちゃうし恥ずかしいですしねぇ。どこかの城下町で粋な着物見付けて買いません？」

少し照れながら次女のアスカが呟く。

『くちゅ……くちゅ』

ぼうっと繁盛している店の方を眺めているリオとアスカの耳に何

か如何わしい音が響いてくる。

「いやっ。痛いっ……んんんっ！」

ふと三女のミカに二人の姉が目をやると、膝の上に志乃を乗せ、背後から左手で殆どないような胸を衣服越しに揉みしだきながら、右手は志乃の性器を背後から掻き回している。

まだ開発されてない９歳の小さな女性器を、１５歳の少女が執拗に掻き回す音が周囲にまで漏れている。

「ぐすんぐすん……いやだ。痛いです……許してミカ様……」

「うるさい！　その内慣れたら血も出なくなってヤらしい透明の液が出てきちゃうんだからっ。我慢しなさいっ！」

『くちゅくちゅ……くちゅちゅちゅちゅちゅちゅちゅっ！』

大きな赤いゴムで留めた黒髪のツインテールを揺らしながら志乃を犯し続けるミカ。

「んあああっ！？　ひあああああっ！？」

志乃はあまりのミカの膣内を掻き回す指の動きが速すぎて、変な

感覚と変な気持ち良さと、色んな痛みを同時に味わい、太股から全身をビクビクさせて涎（よだれ）を垂らしている。

「やれやれ。そんなこと先に団子食べてからすればいいのに……」

「ってゆうか……こんな場所でそんなことする意味あるのかしらん？　疑問ですわ……」

姉の二人は呆れながら団子を頬張る。

「志乃！　だんだんと愛液たくさん出すようになってきたじゃん？」

「はぁ、はぁ。いや……恥ずかしい……」

いくらかいる商人の一家たち。

その内の一組の父親が、こちらを睨み付けているようだ。

「お母ちゃん、あの席の女の人……おいらくらいの女の子の股間を触りまくってるよ？　何やってるのかなぁ？　女の子泣いてるみたいだけど可哀想」

「勇太郎！　見ちゃダメだよ！　あなたもそんなにじっと見ないで……勇太郎まで気になって見ちゃうから」

「公然のこんな場所でなんとゆう果したない事を……ワシがちょっ

と文句言ってくる」

　１０歳になる息子に果したたない場面を見せつけた三姉妹に頭に来た商人の男は、サッと席を立つとリオたち四人の方へスタスタと歩いてきた。

「おい、ちょっとオナゴさんたち！」

「何でございますか？　大富豪さんに見えますが私たちのような底辺の輩に一体？」

　次女のアスカが惚けて冷静に返答するが、初めから何の用事かは理解できていた。

　リオは無視して団子を口に入れてはお茶を啜る。

　等の本人のミカは志乃の性器を責めるのを止めないでずっと指で掻き回している。

『くちゅくちゅくちゅ……』

「んあああっ……あん」

　拳を握り締めてミカを睨み付ける商人の男。

「おいキミ！　そんな小さな子に一体何をして……」

『ドカッ！！』

そこまで文句を言いかけた時に、いきなり立ち上がったリオが男を蹴飛ばす。

ミカの後方へ吹っ飛ぶように蹴飛ばした。

『グサッ！！』

「ぐわあああっ！？」

男の背中には長い矢が突き刺さっている。
しばらく苦しんでいた後、顔が紫色になり、泡を噴いてとうとう絶命してしまった。

「きゃあああっ！？　あなたっ！！　しっかりしてええっ！！」

「……毒矢ね。あの桜の枝上に忍の者がいたわ。店の西側に隠れよう」

発狂したように泣き叫ぶ妻の姿を見ながらも慌てて回避行動を取る三姉妹。
ミカに性器をグショグショに濡らされてピクピクしている志乃は、そのまま責任感じた張本人のミカに抱き抱え上げられて運ばれる。

「ありがとうリオねーちゃん……この子犯すのに必死で殺気に気付かなかったよ」

「太股まで志乃の愛液まみれにしちゃって……そこまで没頭してたらそりゃ気付かないでしょ……今度から気を付けなさいよ？」

「ありゃ？　なんかヌルヌルしてると思ったよ……てへっ」

長女のリオに命を救われた後、キッチリ説教を受けるミカだった。

「行ったみたいね。峠茶屋のお客も店主もみんな逃げちゃった……あれだけ騒がしかったのに嘘みたいに静かになっちゃったわね」

「あなたあっ！！　わあああああんっ！！　わあああああんっ！！」

「お父ちゃんっ！！　お父ちゃんっ！！　死なないでよおおっ！！」

静寂の中、父親を失った母子の号泣する声は三姉妹にもよく響いてきた。

少しは慰めようとして声をかけるミカ。

「あの、あたしの身代わりになっちゃったみたいで……ごめんなさい」

「…………」

鬼のような罵声を浴びせかけられると三姉妹の皆が思ったが女は沈黙して泣き止み、ゆっくり顔を上げる。

「あ、あなたたちにお願いがあります……」

「え？」

「私は元気そうに見えても不治の病にかかっております。お医者さまの話ではもう一月も持たないと……」

怒りの爆発どころか逆に低姿勢でこられて拍子抜けした三人は、そのまま女の話を詳しく聞いた。

旦那であった男の店は、元々旦那の兄が所有する店の一つで、それを借りて商売していただけであって、旦那の兄は弟の妻を敬遠していたらしい。

女との結婚を反対していた兄の意見を聞かずに、弟である旦那は無理矢理結婚して、兄の所有する店を経営し始めたので、絶縁されてしまい子供が生まれたときすらお祝いさえしてくれなかった。

要するに旦那が死んでしまった以上、帰る場所がない。

しかも我の命は後一ヶ月……身内からは望まれない子供が今いる息子の勇太郎。

自分が逝ってしまった後、１０歳の息子の勇太郎が不憫でならなかったのである。

「…………どうかよろしくお願い致します」

「お母ちゃん？　何をこの人たちに頼んでるの？　お父ちゃん死んじゃったから葬式でも頼んだの？」

「勇太郎を……お願い致します！」

「分かりました。一応私たちは何時でも誰からでもお金は奪え……いや、お金は持ってるので。小さいこの子にもう一人増えたくらい面倒みられると思いますので」

勇太郎の両手をリオとアスカが掴む。

フラフラしながら何度も振り向いて息子に手を振りながら去ってゆく母親。

何度も大粒の涙が頬を伝い落ちる。

「達者で暮らすんだよ勇太郎……またいつか会いに来るからね」

「お母ちゃんっ！！　おいらを置いてどこいくんだよっ！？　お母ちゃんっ！！　わーんわーんっ！！」

泣き叫びながら手を振りほどこうとするが、強く掴まれていてそれは叶わなかった。

突然咳き込み、倒れ込む姿がみえた。

「ゴホゴホッ！！　ぐはあっ！！　ゴホゴホッ！！」

「母ちゃんっ！？」

地面が真っ赤になるほど血反吐を吐き、もがき苦しみ始めた。

「ミカ……この子のお母さんをお願い」

「…………うん」

ミカが母親の元へ駆け寄ると同時に、アスカが息子の勇太郎の両目を両手で完全に塞いだ。

短刀をスッと鞘から抜くと同時に苦しんでいる母親の喉元にあてがう。

「勇太郎くんはあたしたちが守りながら育てるから……安心して」

「ゴホゴホッ！！」

死ぬほど咳き込みながらも数回頷く女。
覚悟を確認してから頸動脈を深く斬った。

『ズッ！　ザシュッ！！……ぶしゅううううううっ！！』

噴水のような激しい血飛沫は、数秒で女の意識を奪う。
痙攣しながら息を引き取るのを確認してからミカは短刀を布で拭き取り、懐へしまうと、リオたちの場所へ戻った。
「お母ちゃんはね。どうしても今行かなきゃならない所があるらしいの。もう見送らないであげて。余計悲しむからお母さん。これからは私たちと旅をするんだよ？」
「えーんえーん！　今まで……父ちゃんも母ちゃんも傍にいてくれたのに……急に二人とも居なくなるなんてイヤだよおっ！！　えーんえーん……」
泣き止まない勇太郎に残虐な三姉妹も少しは憐れに思ったのか、リオは勇太郎を背中におんぶして歩き出す。
「もう泣かないの！　男の子でしょ？　隣で歩いてる志乃って子も目の前でお母さんを殺されたんだよ」
声には出さないが、それを聞いて思い出した志乃の頬には涙が伝っていた。
リオの背中で志乃を見ながら必死で涙を堪える１０歳の少年、勇太郎であったが、この加東勇太郎も、この先自分の身に起こる運命をこの時はまだ知らなかった。

「さっきの忍者はどこかこの近くの城主が差し向けたのかな？」

「どうでしょう……前の村での山賊成敗では、女子供容赦なく斬り殺してお子さんには性的イタズラしちゃいましたからねぇ私たち……いくら山賊の家族でも小さな子供にエッチするのは世間ではご法度ですからねぇ。命を狙われてもおかしくはないでしょう……」

リオがアスカの予想を聞くと、ミカも続けた。

「その前回に加えて最近での東村山村での虐殺……今回は山賊の子供はいなかったけど、頭領の女を一人殺っちゃって……この小さな子供の志乃を拐(さら)っちゃってるからねぇ。どこやかしに殺し屋さん居ると思うわあたしも……」

日も落ちてきたので、とりあえず今日の閨(ねや)を探そうと、近くのお寺に寄る三姉妹と子供二人。

「すいませーん！　旅の者ですが一晩宿を貸してくれませんかぁ？」

長女のリオが背中に勇太郎をおぶったままで叫ぶが、お寺からは何の反応もない。

「…………リオねーちゃん、気をつけて！　血の匂いがする」

「凄い殺気ですわねこれは……気を抜かないよう気を付けましょ」

取り囲むように現れる山賊たち。

二十人ほどに囲まれていることに気付くが、鉄砲は持ってないことを確認すると気は楽になる三姉妹だった。

三人は闇柳生流暗殺剣を駆使し、確実に一人一人を斬り伏せてゆく。

寺の僧たちの死体が階段の下から廊下の下からチラチラ見えるが、気にすることもなく山賊たちを全滅させた。

「ぐぐ……女子供になど殺られる筈が……どうなってやがる」

「どうなってやがるって？　襲う相手を間違えただけじゃない？」

「そうですわね。雑兵が何十人集まろうが闇柳生流の剣法には勝てませんわよ？　うふふ♪」

「志乃、こいつが死んだらアレをすぐに削ぎ取るのよ！」

三女のミカの命令に慌てて短刀を取り出し、頭領らしき男へ駆け寄る。

「な、何をする気だ！？」

「おじさんの……オチンチン削ぎ取らせて貰います」
「何だとっ！？　や、止めてくれっ……ぐわっ！？」
『ズズ…ズバズバズバズバ……ぶしゅううううっ！！』
「ぎゃあああああっ！！……ビクビク……がくんっ！」
まだ十分に意識が有るままでペニスを根元から切断する志乃。
「リオさん、オチンチン魚籠に入れときますね……」
「よく生きてるままで削ぎ取れるまで残酷になれたね？　あたしもお姉ちゃんたちも嬉しいよ」
外傷性ショック死したらしい頭領に近付き、念のために頸動脈をかっ捌き、止めを刺すアスカ。
「はい。死んだふりとかしてないですよねぇ？　首からたくさん血抜きしといてあげますから……成仏してくださいねぇ」
『ぶしゅううううっ！！……ゴポゴポ……ドクドクドクドク……』
完全に全滅した山賊たちの死体を全て床下に蹴り転がし、お堂に入るリオたち五人だった。

六畳ぐらいの寝室部屋を見つけ、長女のリオと10歳の勇太郎が一緒に寝ることにした。

後の三人は仏像の飾ってある大広間で雑魚寝するようになる。

――丑三つ時。

父親を目の前で殺され、母親に置き去りにされたショックはなかなか消えずに、勇太郎の心はズタズタに傷付いていて、なかなか眠れずにいた。

実際は不治の病の発作がでて、生い先短い理由からも、早く楽にさせてあげるためにミカが止めを刺している。

「ぐすん。ぐすん」

「なかなか眠れないの？」

「お母ちゃん……お父ちゃん。ぐすん。ぐすん……」

両親を思い出しながら涙が止まらない勇太郎だったが、それを本気で可哀想と思えるような慈悲は、残念ながら三姉妹には持ち合わせていなかった。

広間で熟睡しているアスカとミカと志乃に、絶叫と号泣する少年の声が響いてくる。

「ん？　リオねーちゃんの調教がはじまっちゃったみたいだね」

「ふぁあああ。起こされちゃいましたわね。まだまだ真夜中なのに……例え両親を失くした可哀想な子供でも男の子は責めなきゃいられないみたいですわねお姉様は……」

次女と三女の心配をよそに、長女のリオが勇太郎を調教している。志乃はミカに何度も指でイかされて憔悴しきっているのか、少年の絶叫にも目覚めずに爆睡している。

『パンパンパンパンッ！！』

馬乗りになったまま何度も何度も勇太郎の頬を打ち付けるリオの平手。

数発の内、何度かは拳が鼻っ面など顔面にもヒットするので、瞼は腫れ上がり、鼻血も大量に噴き出し、唇も切って血が滲んでいる。

「わあああんっ！！　わああああんっ！！　痛々しいよおっ！！痛いよおおっ！！」

顔面を数回殴った後、手際よく勇太郎の衣服を脱がしてゆく。

「うえええええんっ！　なんでこんな酷い目にあわせるの？　ぐすぐす……おいらお姉ちゃんたちに何もしてないのに……止めてよ」

「甘えないでねボク……引き取るのは約束したけど虐待しないとは一言も言ってないから……私はボクみたいな小さな男の子を苛めるのが趣味なの。ほら、四つん這いになって！　お尻を叩いてあげるから」

「やだ……もう痛いことは止めてよ……お願いお姉ちゃん……」

『パンパンパンパンパンパンパンパンパンッ！！』

「ひぶぅううううううううっ！？」

激しい往復ビンタが勇太郎の顔面を左右に激しく振らせる。
号泣しながらも覚悟を決めた１０歳の少年は、２０歳のリオに向けてお尻を突き出した。
腰までのストレートの黒髪をなびかせて、右手を大きく振りかぶる。

「叩くのは今日はこれで最後だから頑張って堪えるの……いい？」

「う、うん」

激しい臀部への平手打ちが延々と続けられる。

真っ赤になったお尻を下げては引き上げられ、また痛みで下げては引き上げられ……延々と叩かれている内に、少年の声は叫びすぎて枯れていた。

「なにをヒクヒクさせてるの？」

『ずぷ……』

「いやあっ！？」

ショックでヒクヒク動いている肛門括約筋を見て、笑みを浮かべながら人差し指をゆっくり差し込むリオ。

『ズボオッ！！』

「痛あああっ！！」

一気に根元まで突っ込んでしまう。

「いやいやいやいやあっ！！　やめて抜いてっ！！　お願いお姉ちゃんっ！！　わーんわーん！！」

『ぐちゅぐちゅ……グリングリン……ぐぷぐぷ』

勇太郎の直腸に突っ込まれたリオの指は、ありとあらゆる方向に激しく動き、少年はあまりの肛門内部の熱さに、ペタンと胸を床に着けてへたり込んでしまう。

手の甲を床に向けて、一気に起き上がると、少年の肛門は縦方向にパックリ開かれて、引き裂かれそうになる。

「何をへたり込んでるの？　早くお尻を突き上げないとケツ穴裂けちゃうよ？」

「ひぎいいいっ！！　ごめんなさいごめんなさいっ！！」

再度四つん這いにさせると、今度は中指までも突き入れ、二本の指で肛門の調教が始まった。

あまりの激痛に枯れた喉で叫び続け、小便まで漏らしてしまう勇太郎。

「あれあれぇ？　お漏らし？　私の前で小便漏らすなんて……更なるお仕置きが必要だね？　そのままの体勢で膝を大きく開きなさい」

「ぐすん。ぐすん。はい……こ、こうです……か？」

『パァンッ！！……パンパンパンパンッ！！』

下から上へ掬い上げるような平手打ちが、連続で5発ほど少年の陰部と睾丸を同時に襲った。

再度へたり込んでしまう少年を、蹴り転がして仰向けにさせると、足の裏を陰部と睾丸に押し付け、激しく振動させた。

「ひああああっ！？」

「あはは！　痛いか痛いかほれほれほれっ♪」

必死で両手でリオの足首を掴み、引き剥がそうとするが、全然動かせなかった。

どころか更に激しく足の裏は上下左右に激しくバイブする。

「痛いいいいいいっ！！　やめてええええっ！！」

「ほらほらほらほら……ボクくらいの年齢ならそろそろ精通を迎える頃だから、私が手伝ってやるからね？」

「せ、せいつ……なにそれ？……あはあんっ！」

「あははははは♪　何女の子みたいによがり声出してるの？　少しずつ気持ちよくなってきたでしょ？」

「あっ、あっ、あっ、お姉ちゃん……なんかオチンチンが変な感じに……」

「人生初の射精のお時間だね？　ほら、いっけえええっ！！」

『シュコシュコシュコシュコシュコ……シュシュシュシュシュシュッ！！』

「やあああっ！？　そんなに激しくしたらだめええっ！！」

『どぴゅぴゅぴゅぴゅぴゅっ！……どくんどくん……』

勇太郎の始めての射精は、残虐三姉妹長女であるリオの足の裏での摩擦による足コキとなった。

そのまま足の裏を勇太郎の顔へ擦り付ける。

「ほらボク……自分の出した汚い液を自分で舐めて綺麗にしろ……」

「ぺちゃっ、ぺちゃっ。ぐすん。ぐすん。ぺちゃぺちゃ」

リオによる顔面と臀部の激痛の虐待と、精通の快感を一夜にして同時に味わった１０歳の少年は、両親を一度に失ったショックも忘れ、リオに抱き締められて深い眠りについた。

「これからは毎晩私が苛めてあげるから……おやすみ」

――――大広間。

「リオねーちゃんの調教ようやく終わったみたいだね……」

「そうみたいですわね。はぁ。私も小さな男の子を早く見付けて無茶苦茶に犯してから内臓ぶちまけて殺して差し上げたいですわ。想像しただけで濡れてきちゃいました……ふぅ」

「あの……アスカねーちゃん……丁寧な口調で言ってること恐ろしいんだけど……」

拷問処刑人外伝……残虐三姉妹②（後書き）

残虐三姉妹による無慈悲な調教はこの日も行われた。
悲惨な少年の人生はこれからも続く。

拷問処刑人外伝……残虐三姉妹③（前書き）

西を目指して旅を続ける三姉妹と幼子二人。

ついに正面切っての刺客が差し向けられる。

拷問処刑人外伝……残虐三姉妹③

山賊に襲われて僧たちが全員惨殺された寺を出発する五人。
しばらく平野を進んでいると、前方に煙が立ち上るのが視認できた。小さな村が見えてくる。
「家が7個有るかどうか……スッゴい小さな村だねリオねーちゃん」
「うん。立ち寄って腹ごしらえしてゆくかな……」
「そうですわねぇ。本日もまだまだ歩かなきゃならないでしょうから」
村へ入ると、通りの左右には花壇が作られており、たくさん色とりどりの花が植えられている。
「うわあ～綺麗っ！　すっごーいっ！」
9歳の志乃が目を輝かせて花壇の脇に座り込む。
「花なんて何が良いのよ？　あたしはそんなモノより食べ物だなぁ……」

志乃の主である１５歳の三女のミカは、小さな女の子と食べ物以外に興味はなかった。

小さな畑の付近に、村人が数人見えてきた。

リオたち五人を見つけると、そそくさと家に入ってしまった。

「あれ？　今あたしたちを見て家に逃げ込んだ？」

「もうそこそこ中心地に近い西方へ来てますから伝令が広がっていてもおかしくはないですわねぇ。もう手っ取り早く村人全てを斬り殺して無理矢理食糧奪いますぅ？」

「それは最終手段ねアスカ……とりあえず誰かに話を聞きたい所だけどなぁ。誰も居ないか……ん？」

近くの家の扉がスッと開いたと思うと、五人ほどの武士らしい姿をした者がその家からのそのそと姿を現した。

「やぁやぁお嬢さん方。遂にお目にかかれた。この先の山谷城城主、谷川勝利殿の元で剣術を学んでいる精鋭部隊、川口隊の隊長川口左近と申す」

五人の隊員の中では最も強面（こわもて）で髭面の男が、立派な打刀を帯刀している。

川口左近は身体もかなり大きく、他の四人を圧倒していた。
男四人はそれぞれ、普通の打刀と脇差を帯刀し、そこそこ剣術は修練していそうな雰囲気だが、一人だけ女が混じっていた。
その女だけは二本とも長い打刀で、脇差は帯刀していない。最近では珍しい二刀流使いである。
別の師匠の元でも修行したらしく、かなりの技量を持っている女剣士であった。

「ここから西へ八十里ほど行けば東野城がある。城主である春日井長政殿は無類の剣術好きで、その春日井殿の親友で有られる我らが主、山谷城城主、谷川勝利殿もその影響で剣術はかなり興味をお持ちになり、我らをこれまで修練して戴いた」

静かに聞くリオとアスカの隣で、ミカは大きな生欠伸をする。

「ふぁあぁぁぁ～。谷だの川だの山だのややっこしい紛らわしい名前ばっか出てくるね？　そんなのどうでもいいから……結局単刀直入に言えば、あたしたちを討ちに来たんでしょ？」

一瞬いかつい目を大きく見開き、三姉妹の中でも一番小柄なミカを見詰める川口左近。
少し間を開けて大きく口を開いた。

「がっはっはっはっはっ！！　これはしたりっ……失礼つかまつった！　まぁ要するにそうゆうことだ！　大の大人であるワシらが

いくら悪党とは言え、こんな若いオナゴ共を斬り捨てるなど……うぅむ。胸が痛むところであるわ。のう？」

急に泣きそうな表情で背後の四人の仲間たちを見回す。

「ちょっとオッサン！　完全にあたしたちが負けるとゆう前提で話を進めているみたいだけど？　舐めないでくれる？　この髭オヤジ！」

顔を真っ赤にして目くじら立てている三女のミカは地団駄を踏んで怒りを露にしている。

「そうですか……女は斬れないとかそんな男らしい慈悲をお持ちの隊長様がいらっしゃるとゆうことは……あとの四人の方々もそれはそれは素晴らしい人格をお持ちの方々だと存じ上げますわ」

次女のアスカは、本気で感銘を受け頭を軽く下げた。

「私たちも自分たちのことを悪党とまでは思ってないけど、言われてみれば確かに非道なことも沢山やってきたから仕方ないかな……でもそんな悪党の私たちが優しく立派である武士の……あなた方を斬り捨てるなど……胸が痛んじゃうなぁ……」

川口左近はゆっくり振り向き、本気で長女のリオを睨み付ける。

「場所を変えようぞ。この場では村人たちに迷惑がかかる」

「どこでもどうぞ。私たちは西を目指してるから少しでも西方なら有難いんだけど？」

「なぜに極東から旅を始めたと聞くが西を目指すのじゃ？　最早東西分け目の大戦（おおいくさ）が起きようとしている。境界辺りはピリピリしているぞ？　御尋ね者でなくとも命を落としかねない」

「気遣いありがとう。だけど西国に行く必要があるのよね」

「東国では御尋ね者だが、あちらでは命を狙われなくて済むからだな？」

「そんなことどうでもいいよ。狙われたら返り討ちにしてやるだけだから。私たちの真の目的は……」

一度立ち止まり目を伏せるリオだったが、アスカが慌てて口を出す。

「お姉様、少し口が過ぎるのでは？」

川口左近と部隊の四人も平然を装いながらも確実に聞き耳を立てているのが分かったアスカがリオを止めに入る。

「西軍総大将の身を守ること」

「ん？　なんだと！？」

「この東国からの強者忍者たちが総大将を暗殺しようと目論んでいる。それらを壊滅させるのが私たちの真の目的」

「西国の内通者か！？　おのれ自分の故郷である国を裏切るつもりかっ！？」

「元々こんな国になど恩も未練もないよ」

アスカは右手を額に当て、天を拝んでやれやれポーズを決める。

「なぜそんな隠密情報をワシに話した？　まさかワシらに力になれとなど！？」

「まさか……あなたたちは今日あの世へ旅立つからだよ」

「…………ゆうてくれるのう。そなたを斬り捨てることに何の躊躇いも無くなったわ。感謝する」

川口左近と部隊の四人は木々のない開けた草むらを見付けて立ち止まる。

どうやらこの場で真剣での仕合を行うみたいだ。

「こちらは五人！　リオ殿たちは兵力三人……ワシらの中から三人選出して全て倒した方が勝利とゆうことでよろしいかな？」

「ご冗談を……五人ごとき私一人で十分だけど？」

「お姉様！　かなりの強者の匂いがします！　せめて三人対五人でいきましょう。交代したら疲れも取れますから」

「リオねーちゃんっ！　あたしはあの川口左近とかゆうオッサン殺っていいでしょ？　なんかムカつくから」

三姉妹の会話をすべて聞いている川口左近たち五人は、怒りと恐れと呆れの入り交じった……なんとも形容しがたい気持ちでそれを聞き終わる。

女とは言え、かなりの残虐さと戦闘力を伝えられているのだ。

見た目の幼さとは裏腹に、まさかの恐怖までが全身をよぎる。

「分かった。では五人対三人でお相手させてもらおう」

「左近殿っ！？」

「何を！？」

残りの隊員たちが隊長に叫んだ。

「段々と分かってきたぞ……真剣での仕合いの刻が迫るごとに感じる気迫と殺気……このオナゴたちは本物の暗殺者だ」

そう言いながら仲間の女剣士をチラッと見る川口左近。二刀流の女が小さく頷いたように見えた。

中山権太と名乗る武士が先陣を切って前に出る。

「いざ尋常に勝負っ！！」

三姉妹の先陣を切ったのは次女のアスカ。細身の打刀をゆっくり鞘から引き抜き、静かに歩み寄る。

「先陣を切らせて頂きますね……久し振りに全開で動いちゃいますわよ～」

『ビュンビュンッ！……ヒュンッ！　ヒュンッ！』

「ほっ。よっ。さっと。よいさっ」

必死で斬り掛かる中山権太の刀筋は完全に見切られ、少し赤みのかかった長めのポニーテールを揺らしながら殆ど皮一枚の際どさでかわしてゆくアスカだった。

「中山殿も我らの部隊に選出される程の数百人の中でも五本の指に入るほどの腕を持っている筈なのだが……まるで子供扱いじゃ……のう楓（かえで）殿」

「受け太刀無しか……闇柳生流やね。こりゃあ、ウチにまで回ってきそうやわ」

「闇柳生……あの必殺の暗殺剣を編み出して山奥に道場を拓いたとゆう闇柳生助平師範の……ん？　そう言えばあの女の刀は……幻と言われている銘刀紫龍ではないかっ！？」

「助平殿御用達の、日本でも二本の指に入る名のある刀鍛冶が打った超幻の名作と言われている銘刀紫龍……東国の最高傑作やね」

　川口左近と楓が囁くように会話している間に、アスカの横一閃、絶叫をあげながら中山権太が膝を付いて倒れ込んだ。

　腹を押さえているが衣服を通り越して手を伝い、更にボタボタと大地に流れ落ちる大量の血が見える。

「ほら、みんなに見てもらいませんか？　てかてか光る腸（はらわた）を……うふふ」

「がはあっ！？……ゴポゴポッ！」

　血を吐くと同時に手で口を押さえると、先に押さえていた腹部からドロドロと、大量の腸がはみ出してくる。

「ごぼおっ！！　ぐ、ぐわあああっ！！」

『ズルズル……ベチャベチャ……ズルルルル』

みるみるウチに周りは血と腸の海になった。

「みんな……川口殿……済まぬ。……後は……たの……む」

最後の力を振り絞って頸動脈を掻ききり、噴水のような激しい血飛沫をあげながら絶命する中山権太だった。

「あらあら……腸にまみれてもがき苦しむ姿がもう少し見たかったですわねぇ。残念です……」

『ビュンッ！！……ビチャビチャッ！！』

刀に着いた血を振り飛ばし、そのまま残りの四人の方を向くアスカ。

「川口殿と楓殿でしたっけ？　お二人はお姉様と妹にお任せするから……残り二人も私がお相手致しますわ」

川口左近は次に出てゆこうとする二人にそっと囁きかける。

「西山殿と田岡殿はもう帰りなされ。あとは拙者と楓殿に任せるのだ」

「ば、ばかを言わないで下され左近殿。中山殿の無念、この私が晴らして見せまする」

先に西山大吉が立ち上がり、一人目を勝ち抜いたアスカへ歩み寄る。

「先程の仕合、見事であった！　オナゴとは言え手加減はせぬぞ？」

「はい。こちらこそ全力でいかせてもらいますわ。いつでもどうぞ」

「うおおおおっ！！」

『ビュンッ！……ザシュッ！……ポトッ。コロコロ』

あっという間だった。
斬りかかったと思った瞬間、首への一閃。
ポトリと落ちた西山大吉の首を足の裏で踏みつけるアスカ。

「おほほ。カッコつける割にはお弱いんですわねぇ〜。うふふふ」

「くっそっ！！　川口殿、これまでお世話になりました！　あいつだけでも必ず倒してきますっ！！」

「くっ……もう止めてもムダなようじゃな……では頼む！　悔いなきよう全力でやって来てくだされ！」

アスカの相手は三人目。

この相手を倒したらもう出番はないことが確定しているので、しばらく軽い足使いで攻撃をかわし、遊んでいる。

「はぁ。はぁ。はぁ。ちくしょう……なんてすばしっこいヤツだ……」

「田岡殿……でしたっけ？　あなた様がかなりお鈍いだけだと思いますわ。もう逝かせて差し上げますね？　私も少し疲れて来ましたから……」

「くそおっ！！　どりゃあああっ！！」

『スルッ……ザシュッ！！』

「ぐはっ……ゴボゴボ……うぐぐぐ」

「痛いですかぁ？　今オヘソから刀刺し込んじゃったんですけどぉ？」

血が足元を染めてゆく中、痛みの限界でとうとう、膝をつく田岡恭造だった。

「ちょっと刀から手を離してもらえますぅ？　それから仰向けになってくださいますかぁ？　えいっ」

『ドカッ！！』

「ぐはあっ！？」

銘刀紫龍を握りしめて、血まみれになっている両手を振り払うように顔面へ強烈な蹴りを入れるアスカ。

蹴り離された勢いで、刀を握りしめていた手をパックリ斬り開かれた上に、後方へ倒れ込む田岡。

さっき穴を開けたヘソへ、もう一度刀を刺し込むと、一気に胸元まで斬り裂く。

ドバドバと溢れ出す腸を見ながら不敵な笑みを浮かべると、右足を開かれた腹部へ突っ込んだ。

『グチャッ！！……ぐちょぐちょぐちょっ！！』

そのまま内臓を足で掻き回すアスカ。

「ほらほら、せっかく出てきた腸にぐっちゃぐちゃになってもらいましょうね？　ほうら。卑猥な音がくちゅくちゅ鳴ってますわよ？」

「ひぎゃあああっ！？　ご、ごろじてぐれえええっ！！」

『ズッ！　ズッ！　ズッ！　ズッ！』

両手両足の腱を斬り、身動きが取れなくなる。
右目に刀を突き刺し数回掻き混ぜてから引き抜く。

「ぐぎゃあああっ！！」

「ママからもらった大切な身体の部位を少しずつ壊していってあげるわね？　まだまだ死なせてあげませんからねぇ～」

左目にも容赦なく刀を突き刺し、こちら側も眼球がミンチになるまで掻き回してから引き抜いた。

はち切れんばかりの絶叫をあげる中、舌を切っ先で器用にちょんぎり、鼻を削ぎ、耳を削ぐ。

「ぐぎゃあああっ！！　やめでぐれえええっ！！　もうごろぢでええええっ！！」

「もう殺して？　まだまだ大切な部位がありますわよ？　次はココ」

着物を大きく開いて、はみ出した腸の下方へ向かい、切っ先を移動させると、ペニスの真上で停止させるアスカ。

「あれぇ？　オシッコ漏らしましたぁ？　果したないですわねぇ。うふふ♪」

『ズッ……ザクッ』

雁首を切断し、切り裂かれたお腹の中へ切っ先で転がしてゆく。そのまま足で腸の奥深くまで押し込んでしまった。

『グチャッ！！　ズブズブ……ぶちゅうっ！！』

「あれぇ？　おちんちんの先っぽが腸の中に埋まり込んじゃいましたですわ……切断面も白い尿道管がピクピクして……哀れですわねぇ♪」

半分辺りから切断されてドクドク血を流すペニスの切断面と、プルンプルン揺れながらはみ出してテカっている腸を見ながらアスカは頬を赤くして喜ぶ。

『ヒュヒュヒュンッ！！』

「！？」

『キンキンッ！……グサッ！！』

「ぐわっ！？」

三本の短い棒型手裏剣が飛んでくる。
咄嗟に刀で弾くが、三本のうち、一本が倒れて呻いている田岡恭造の首元に突き刺さった。
急に痙攣が始まり、あっさりと息を引き取る。
超即効性の猛毒が塗られていたようだ。

『同時に三本？　二本までなら刀を直線で同時に合わせて受けられるけど……三本目となると三角形で飛んでくるから絶対に同時には弾けないわ。まさかそこまで計算して……しかし同時に三本をあんな正確に投げられるものかしら！？』

投げたのは川口左近ではなく間違いなくあの楓とかゆう女剣士の方……。
振り向いて楓をじっと見詰めると、向こうもこちらをじっと見詰めていた。

三本同時なら受けられない。それを見抜いて、それを実行できる楓の強さ……かなりの戦慄を覚えたアスカは、時間をかけて殺すつもりだった男を、あっさり毒殺されたことをリオとミカに告げた。

「ミカは希望通り髭オヤジを殺ってきて。あの楓とかゆう女ほどじ

ゃあないけどかなり出来るわよ？　決して油断しないで」

「はーい。じゃあちょっくら遊んでもらってきまーす！」

当然のように先に前に出たのは川口左近であった。

大将は最後、とゆう常識があるが、当初の予想を裏切り、後の訂正後の予想は当たり、楓が大将である。

「ワシは一番小さなガキか……舐められたもんだ。もしヤられてワシも苦しんでたら……止めを刺してくれるな？」

「……無理や」

「なにっ!?　冷たいではないか最期の最期になるかもしれんとゆうのに……」

「……」

「ん!?　そうかそうかっ！　がはははっ!!　あのチビにはワシが負けることはない、とゆうことじゃな！　失礼つかまつった楓殿っ」

安心した表情で立ち上がり、ミカの立っている方へ仕合に向かう川口左近。

「気付かへんのん？　あの子は真ん中のアスカより強いんやわ？

下手すれば長女のリオと互角……上回ってるかも知れへんで……ウチでも引き分けが良い所やわ……」

「何だとっ！？　そうか……では間違いなくこれがお主とも今生の別れになるんじゃな？」

「そうやね。ウチのせいでこんな運命に巻き込んでしもうてゴメンな。ウチも殺られたらあちらで一緒に暮らそうな左近」

「がっはっはっ。ワシも楓を愛してるぜ。じゃあせめて一矢報いてきてやるとするかっ！　……じゃあな」

「うん。今までありがとな。愛してるで左近……」

中央で両者が向き合う。
鞘からゆっくりと銘刀紫龍を抜くミカ。

『こんな小さなオナゴがワシより強いと申すか楓……未だに信じられんわ。万が一にも勝てぬものかのう……』

「あの……ちょっといいかな？　さっきから一体何を考えてるの？　オッサンはムカつくんだけどね……でも安心して。あたしは男嫌いだから」

「ほう。だからどうした？　ムカつくけど安心しろだと？　意味がわからんぞ。何が言いたいのじゃお主は？」

「だからぁ。男を苛める趣味はないからすぐに止めを刺してあげる

って言ってるの！　鈍いオッサンだなぁほんと……さぁおっ始めようか？」

「ぐっ！　何だとこのガキ……！？　何だこの虚無感は！？　人と対峙している感覚がない。一体この感覚は……？」

「いつでも良いよ？　一太刀も振らない内に殺しちゃったら面目立たないでしょ？　彼女も見てるんだから……」

全てを見透かされているような感覚の正体が理解できた気がした瞬間であった。背筋にゾッとする寒いものを感じる川口左近。

「ど、どうしてそのことを！？」

「あの楓って女がオッサンのことを見る目付き……おねーちゃんたちもみんなバレてるよ？」

「うぐ……おいクソガキ。お願いがあるんじゃが」

銘刀紫龍を後ろに回して、お礼するように腰を曲げ、覗き込むように川口左近を見上げるミカ。
ツインテールが可愛く揺れる。
やがて目が合うとニッと笑って一言。

「人に何か頼むのに“クソガキ”なんて言う人見たことないわぁ。オッサンやっぱりムカつくね？」

「す、済まぬ……か、楓を……殺さないでやってほしい」

「え？　ええっ！？　あの女の方が強いのにそんなこと言っていいの！？　ってゆうか殺されたくなかったら、オッサンがあたしとねーちゃん二人を斬り殺しちゃえば済むことじゃん？　自信あるんでしょ？」

「しっ！　声がデカい！　彼女の事とはいえ、命乞いをしてるなど皆にバレたら恥ずかしいからな……」

「そうゆう問題なの？」

ミカに分かってもらえたかどうか分からないまま深々と頭を下げて誠意を見せる川口左近。
自分は死んでも愛する楓にだけは生きてほしいと願う一種の男気には違いなかった。

「では尋常に勝負っ！　ゆくぞっ！」

「もう……何か腹立つけど憎めないオッサンだな。やりにくいよ全く……」

何十回、何百回と刀を振るが、受け太刀をしない闇柳生流はヒラヒラとかわすだけ。
当てるつもりで思い切り振りつける刀が空を切るのは、かなり体力を奪われる。

もう精も根も尽き果てて、膝まづいて崩れ落ちる川口左近。

「よく頑張ったね」

「はぁ。はぁ。闇柳生流……流石だ。流れるような動きは捉えきれぬ……」

「闇柳生助平のジジイもあたしたちを始末しに来なけりゃ生かしておいてやったんだけどね……自業自得ってヤツだよ」

姉のリオとアスカ、奴隷である志乃と勇太郎。
そして………敵である楓。
五人が左近とミカに注目している。
もう姉妹の二人と楓には、“この二人の勝負は決している”ことは分かっていた。

「さてと。どうやって殺そうかなぁ」

「うぐぐ……楓だけは助けてくれるのか？」

「リオねーちゃんに頼んどいてあげるから安心して。じゃあとりあえず素っ裸になってくれる？」

「う！？　それは勘弁してくれないか？　武士の情けだ……」

『ヒュンヒュンヒュンヒュンッ！……パラパラパラパラ……』

ミカに全身の衣服を斬られ、下帯のみの姿となる。

数ヶ所深く斬りすぎて血が流れ落ちているが、全く致命傷レベルではなかった。

「楓とかゆう女の方を向いて射精しなさい」

「な、なんだとっ!?　そんなことが出来るかっ！！」

無理矢理立ち上がり、下帯のみの姿で今一度刀を手にする川口左近。

よほど恥はかきたくなかったのだろう。

連続で流れるように振るわれるミカの暗殺剣は、その辺の道場師範レベルでは到底手に追えるものではなかった。

全身を楽しむように軽く薄く刻まれ、数十ヶ所から血が流れ落ちる。

「ぐわあああ。ぐぐ……やはり勝てぬか……無念」

「無念。じゃないわよ。大人しくあたしの言う通りにしなかったこと……後悔させてあげるからね？」

下帯に刀を入れ、ブチブチと斬ってゆく。

最後の下着まで剥ぎ取られ、ついに素っ裸にされてしまう川口左近だったが、死ぬことも許されず、口には布を丸めたモノを無理矢理押し込まれた。

「んんんっ！？　ふごごごっ！？」

「え？　何故こんなもの咥えさせるかって？　舌を噛みきられたら困るからだよ。オッサンには女の前でとことん恥をかいてもらうことにしたの」

「んんんんっ！！　ふんぬうううっ！！」

自分の刀を拾い、自刃しようと試みるが、ミカにより手足の腱を切断されており掴むことすら出来なかった。

「チンポまで丸見えにされちゃって……なんて哀れなんだろ……楓さんも泣いてるよ？」

「ううううう……んぐんぐっ！！」

必死で罵声を浴びせようとするが、大量に詰め込まれた布が邪魔で殆ど声すら出なかった。

しゃがみ込んで両足首を掴むと、右足の裏をペニスにあてがう。

『ガガガガガガガガガガッ！！』

「ふんぬうううううっ！？」

猛烈な勢いで１５歳の少女の電気アンマが始まった。

「ほらほらほらほらぁ。このまま足コキで射精させてやるからね」

声にならぬ声で絶叫するが、最早ミカの玩具と化している川口左近だった。

楓はどうすることもできず、唇を噛んで下を向いて目を逸らしていた。

怒りに任せて今出ていこうモノなら、確実に三姉妹に殺されてしまう。

それなら我慢して次のリオとの戦いに勝てば、まだ生き残れる可能性は高くなる。

彼氏を三女のミカに弄ばれながらも泣きながらも……生きる望みを捨てないでいる楓。

「ふんぐううううっ！！」

『ガガガガガッ！！……ドピュッ！！……ドピュピュピュピュウッ！！』

ミカの高速での足コキに我慢しきれず大量の精液を自分の腹とミカの足の裏にへリ掛けてしまう左近だったが、大粒の涙を流して泣き始めてしまう。

「泣いても許さないから。次は手足を穴だらけにしてあげるね？」

殆ど動かない手足を数回、数十回、数百回と突いてゆく。
この辺りからは自分の銘刀紫龍は鞘に戻し、川口左近本人の打刀を使用していた。

死んだ方がましとも思える生き地獄を味わうことになるが、未だに死ねないままだった。

「手足からだけの出血じゃなかなか死ねないんだよねぇ。あはは。ほら、乳首も突いてやる」

両方の乳輪と乳首もズタズタになるまで切っ先で突かれ、ドクドクと血が流れ出る。

「次はチンポ切断だよ。覚悟はいい？」

「ふぐふぐふんぐう……」

まともに返事が出来ないままで、水平方向へ刀を振る。一刀両断にて雁首から先が吹っ飛んだ。
真上に上がる血飛沫が噴水のようだった。

チラリと楓の方を見ると、たまたま目が合う。
涙目でチラチラとこちらを見ていたのだ。
ミカは満面の笑みを浮かべながらもう一度水平方向へ刀を振る。
今度は根元から切断されたペニスが真横へポトリと転がり落ちた。

全身をビクビクさせて痙攣が始まる。
外傷性ショック状態に陥った川口左近にそっと近付き、一言囁きかけるミカ。

「彼女から若いオナゴから子供たちから……みんなに射精するところ見られた挙げ句に直後、チンポちょん斬られるなんて……しかも死んじゃうんだよ？　人生最期の射精劇場かよ？　あはははは♪」

『ビクビクッ！　ビクンビクンッ！！』

「分かった分かった。そんなに激しく痙攣しないでよ……今から止めを刺してあげるから……弄んじゃってゴメンね？　ほいっと！」

『ズブッ！！　ぶしゅううううっ！！……がくっ……』

二回に分けてまで切断された川口左近のペニスを拾うと、わざわざ楓の前まで歩いてゆき、ポトリと眼前に落とした。

「ほら、彼氏のチンポだよ楓おねぇさん……まだ尿道から血と一緒に精液でてるんですけどっ！？　あっはははははっ！！」

地面で色んな液体を垂れ流す哀れに切断されたペニスを見ながら腹を抱えて爆笑する三女のミカだった。

楓は涙を流しながらも、歯を食い縛りながら、屈辱と彼氏の死とゆう苦境を乗り越えようと必死だった。

長女のリオが中央で楓を待つ。

ゆっくりと立ち上がり、ミカを見ぬ振りしながらリオの方へ向かった。

「大将戦だね？　もし私に勝てたらここから帰してあげるから」

「……まだ鬼畜のような妹たちが二人も控えてるやんか？　ほんまゆうてんのん？」

「皮肉言われちゃうとはね……元々私たちは残虐三姉妹と言われてるから仕方ないよ。とにかく私だけに勝てばあなたは生きて帰れる。それだけ」

二本の刀を鞘から抜き、交差して構える二刀流の楓。

リオも銘刀紫龍をゆっくりと抜き、中段に構える。

オーラだけの仕合がすでに始まった。

周りが苛つくほどお互いに動かない。動けなかった。

「はっくしゅんっ！！」

いきなり志乃が大きくクシャミをする。
それを合図にキンキンと何度も打刀がぶつかり合った。
基本的に受けることをしない闇柳生流だったが楓の二刀流は凄まじく速かった。
受けないと斬られてしまうことを悟ったリオは、刀身が欠けることも厭わずに何度も受け太刀してしまう。

「はぁ。はぁ。はぁ。はぁ。ほんま手強いわぁ闇柳生流三姉妹……」
「ふぅ。ふぅ。やれやれ……スキが無さすぎて打ち込めないじゃん。こんな強いヤツ初めてだよ。はぁはぁ……」

かなりの時間を費やすが、それでも攻撃に入れない二人だった。

拷問処刑人外伝……残虐三姉妹③（後書き）

遂に旅の本当の目的を敵である川口左近に話してしまったリオ。

その左近もミカによって倒されるが、暗殺剣である闇柳生流を持ってしても、一筋縄ではいかない二刀流の女剣士、楓を相手にどう戦う？

大将戦決着の行方は……。

拷問処刑人外伝……残虐三姉妹④（前書き）

遂に迎える二人の決着。
長女のリオは面目を保てるか？
二刀流、楓との死闘はクライマックスを迎える。

あらゆる角度から斬りかかるが、片方でさばかれて片方でカウンターを合わせられるので、数回ヒヤリとさせられるリオ。

「闇柳生流と互角以上に戦えるなんて……その二刀流はどこで習ったの？」

「流派など知らんで……育ての父から学んだだけや」

「え？　まさかの剣術好きオヤジからの付け焼き刃!？」

固唾を飲んで見守る次女と三女も、かなり苛立ちを隠せなくなってきていた。

「見てられないんだけど？　もう三人がかりであの女殺しちゃおうよ？」

「それは約束が違いますでしょう……あの子の二刀流がもし〝本宮流〟ならかなりまずいですわねぇ。もう病で亡くなってるんだけど数年前まで本宮勝蔵とゆう二刀流の猛者がいて、私たちが返り討ちにした闇柳生助平師範の宿敵だったみたいですわ。何度も仕合をしたらしいんだけど、最後まで勝負は付かなかったみたいで……」

「助平師範と同等と言うことは……あたしたち三人がかりでないと

倒せない人……その弟子があの女だとしたら……最低でもあたしたちと同等ってことか……」

「そう言うことですわねぇ。齢（よわい）は25くらいに見えますので修行年数は私たちより遥かに長そうです。そうなると……余計マズそうですわねぇ……でも本宮勝蔵は弟子をとらずにひたすら二刀流での腕を磨いていたと聞いてましたが……」

本気で長女のリオを心配するアスカとミカだが、二刀流で踏み込んで強く攻めて来はじめる楓に、防戦一方となりさらに苦戦する。

隙を見て二本の刀で銘刀紫龍を挟み込んだまま腹に強烈な前蹴りを食らわせると、リオは刀を離して足元に落としてしまう。

受け身を取りながらも見事に後方へ一回転させられる。

瞬時に踏み込みリオに馬乗りになり、動けないように左手の刀で首を押さえ付け、右手の刀を大きく振りかぶる。

――最早勝負はついてしまった。

死を覚悟したリオは静かに呟く。

「あのさ……あんたみたいに強いヤツは初めてだよ。凄いね……妹たちには手を出さないでやってくれるかな？」

元々切れ長の目を、伏せ目がちにして細目でしばらくリオを見下

ろしているが、なにも答えないまま右手に力が入るのが見えた。
少し微笑みながらそっと目を閉じるリオ。
剣士として死の覚悟はできていたのだ。
凄まじい速度で右手の刀は振り下ろされた。

「リオねーちゃんっ！！」

「お姉様っ！！」

『グサッ！！』

鈍い音がして深く突き刺さる楓の刀……。

「くそっ！！　あの女ぶっ殺してやるっ！！」

即座に立ち上がり、リオの元へ駆け出そうとするミカの手を掴み、目だけはリオと楓を見詰めているアスカ。

「離してアスカねーちゃんっ！！　あいつリオねーちゃんを……」

「ミカちゃん、落ち着いてもらえます？　ようくご覧になって下さい」

「え？」

良く見ると楓の刀はリオの首を微かに避けて、地面へ深く突き刺さっているのが確認できた。
刃がかすった首からは、ほんの少しだけ血が滲み出ていた。

「どうして殺さない？」

「……簡単な事や。リオはんに止めを刺せばウチは即座にミカはんに殺されてたわ」

「ん？　それは心配ない。確かにあの子たち二人がかりならあんたを倒せてたかも知れないけど……アスカに強く頼んでたからね……私が負けようが殺されようが、絶対にミカを押さえ込んででも楓さんを殺さないように逃がしてあげて、ってね」

「リオはん……あんた何か勘違いしてはるようでんなぁ。二人がかりやなく、あのミカとゆう子ただ一人にウチはナマス斬りにされると言ってんねん。ミカはんが本気になったらアスカはんは瞬時に意識を落とされる。その次にウチは……あ～怖っ……」

リオの無事を確認したミカは、今度こそアスカの手を振り払い、猪突猛進で駆け寄ってくる。

「リオねーちゃんっ！！　生きてるっ、良かった！……うう。……わーんわーん！！」

リオの胸に額を当てて、両肩を掴みながら子供のように泣きじゃくる１５歳の三女……ミカであった。

面目無さそうに三女のミカの肩を抱きながら上半身を起こし、座り込んでため息を深くつく。

「自分の命が惜しかったから私を殺さなかったの？」

「せやな。そうゆうことにしといてや。今日ばかりはウチの命も果てると人生で一番ビビったわほんま……リオはんも思ってた以上に強いし……アスカはんも三人の中では一番弱いやろうけど……その辺の刀自慢より遥かに強いしなぁ」

「え？　そ、それって私が…………ふぅ」

誉められたのか、けなされたのか分からないまま一瞬口を開いてすぐに黙り込んでしまう次女のアスカ。

本気で落ち込んでいるみたいだった。

「三人がかりの場合でも、ミカはんとウチを仕合わせても獲れたウチの命……助けてくれたことには感謝するわ。ほな……」

刀を二本とも鞘に納め、ゆっくり後ろを向いて立ち去ろうと三姉妹に手を挙げる楓。

ミカもその頃には泣き止んで、止めを刺さなかった楓に声をかける。

「楓ねーちゃんっ！　ありがとっ！！　何かあったらすぐに報せてねあたしが絶対守ってあげるから」

「…………」

真実を聞かされているリオもアスカも、ミカの台詞をいつものように冗談で笑えずに沈黙する。

ミカがまさかそこまで……心の中ではそれだけだったが、二人で沈黙して楓を見送る姿勢を崩さない。

「あっはっはっはっ！！　ミカはんにそう言ってもらえたらウチは一生安泰やなっ！！」

笑い飛ばしたのは楓一人のみだった。

足を止め、更に言葉を続ける。

「知っていたら余計な事やけど……あんたらが幼い頃に、捉えられていた山賊たちから救いだして闇柳生助平に預けはったのは、今の西軍総大将である石立睦成殿や。まだまだヤンチャで正義感の強い

若者やった頃に、正義ゴッコで徒党を組む村の集団の一人やったわ。ウチもその睦成殿の兄にあたる、石立新太郎殿に拾われて本宮勝蔵家に養子縁組まで工面していただいたんや。弟子は取らぬとゆう本宮を土下座してまで頼んでくれてた。ウチはその光景を一生忘れへん」

「そ、そうなんだ……だから助平師範は残虐に育った私たちを始末しようと決心するまで、石立睦成にいつかは会いに行って御身を守るように話してたのか……まさか育てて刀術を教えた私たちに返り討ちにされるなんて……死んでも死に切れないだろうね……ちょっと罪悪感」

「そうですわね。でも理由の分からないままとにかく西方へ旅して、石立睦成殿にお会いしに行くことが私たちの使命だと思っていましたから……まさか命の恩人だとは……」

楓は去っていった。

とりあえず石立睦成に会ってみよう、会えばわかるだろう、とゆう気持ちから、必ず会いたい、会って恩返しをしたい、に、心境が変化した三姉妹であった。

「大丈夫ですか？　かなり泣かれてましたけど？」

９歳の志乃が主であるミカを気遣う。

１０歳の勇太郎も心配そうにミカを見詰めていた。

「余計なお世話だね！　ほんとにリオねーちゃん殺されたと思っちゃった……かなり疲れたよ今日は……志乃！　ちょっと来なさい！」

心配そうにミカを覗き込みながら近寄ってきた。

「ミカ様……あたしの股間に……指を挿れてもいいですよ？」

「はぁ？　言われなくてもそうするつもりだったの！　ほらっ！」

『ずちゅ……ぐちゅぐちゅぐちゅ……』

背後から志乃を抱き締めて、下帯の下へ指を回し、志乃の陰部へ指を潜り込ませるミカ。
執拗に掻き回す。

「あん、あんっ！　あっはあああっん？？」

「ほら、気持ちいいか？　イかせてやるからね？　ほらほら……」

「んんんっ！？　ミカ様っ！　いくっ、いっくううううっ！！」

『プシャーーッ！！』

姉であるリオを失う恐怖を一瞬とは言え味わったミカは、かなり志乃に八つ当たりをするような性的虐待責めになった。

『ずぷっ！』

「はううっ！？」

肛門にまで深く人差し指を突っ込むと、志乃の直腸を激しく掻き回した。

「痛いいいっ！？　や、止めてくださいミカ様っ！！　志乃……壊れちゃううううっ！！」

「うるさいっ！　黙って脚を開けっ！！」

「あ、いやっ！？　痛い痛い痛いっ！？　わーんわーんっ！！」

余りの肛門の激痛に号泣してしまう志乃だったが、ミカは中指までも突っ込んで激しく掻き回す。

腸液が志乃の肛門から大量に溢れ出す。

「あひいっ！？　ミカ様っ……許して下さいっ！　志乃を許して下さいっ！！　あひいいいいっ！！」

『ぐちゅちゅちゅちゅちゅっ！　ぐりんぐりんぐりんぐりんっ！』

「壊れちゃえ！　ほらあっ！」

「ぴぎいいいっ！！」

『プシャーッ！！』

１５歳のミカに激しく肛門を指で犯されてイッてしまう9歳の少女、志乃であった。

「なに愛液噴き出してるのっ？　だれがイッて良いって言ったの！？」

志乃の腸液と愛液まみれの手で、激しく志乃の頬を往復ビンタで何度も何度も打ち付けるミカ。

「その辺にしといてあげたら？　八つ当たりはダメだよミカ……」

心配した張の本人である長女のリオが制止に入る。

「……だって……わーん、わーん！」

「えーんえーんっ！！」

痛みで号泣する志乃と共に、やるせなさを感じて泣きじゃくる三女のミカだった。

勇太郎もミカの激しい性的虐待を見て恐怖で震えて泣いていた……。

その日宿する閨を探すために歩き続ける五人。

途中にある屋台から二人の酔っ払い男が絡んでくる。

「おうおうねぇちゃんたち！　俺らと一緒に一杯やらねえかっ？」

「あらあら……まだ明るい時刻だとゆうのにお顔が真っ赤ですわね……」

「昼間っから飲んでんだ！　そりゃあ酔いもするさ。文句あっか！？　お？　良く見るとこいつら全員べっぴんさんだぜ銀次……犯しちまうかっ？」

「はははっ！　本当だな！　犯しちまおうぜ金次っ！　小さい子供も二人いるみたいだがこいつらもケツ穴にぶちこんでやろうぜ！　男のガキは俺が犯るっ！！　がっはっはぁっ！！」

『ズバババババッ！！』

「ぐわあっ！？」

「ぎゃあああああっ！？」

ミカが高速で銘刀紫龍を数回振り付けると、二人の男の両手は大地に転がり落ちた。

信じられない顔つきで血飛沫が上がる肘から先が失くなった自分の両手を見ながら絶叫する二人。

機嫌が悪いミカの強さと残虐さは異常だった。

「ほら、お兄さんが串刺しにされるところ……じっくり見せてあげる」

兄である金次をロープで縛り付けてから、肛門に刀を差し込むミカ。

「ぎゃあああああっ！！　止めてくれっ！！　死ぬうううっ！！」

「あたしたちに喧嘩売っといて死なずに済むと思ったの？　力を抜いてなさいね？　金次とやら……」

『ズッ……ズブブブフ……ブチブチ……メリメリ……』

直腸を通過したミカの日本刀の切っ先は、S状結腸までも突き破

り、小腸を何枚も突き破って胃にまで達していた。
ゴボゴボと吐血する金次。

「ゴボゴボ……ぐはあああっ！！　いだいいいいいいいっ！！」

「イけっ！！」

『ザシュッ！！』

遂に肛門から口までの串刺し刑を食らった外道兄弟の兄は絶命する。

「止めてくれ……何でもするから許してくれ……ひぃいっ」

「何でもするの？　じゃあお兄さんの後を追って死んでくれるかな？　あたしは今、猛烈に機嫌が悪いんだ……」

弟である銀次の全身を切り刻んで血塗れにするミカ。

「ふんぎゃあああっ！？　助けてっ！　お願いしますっ！　命だけは助けて……」

「そうやって命乞いをする女性たちを何人犯して殺してきたのかな？」

『ズバババババッ！！』

全身を切り刻まれて全く動けないようにされたまま、ミカの止めを待つ羽目になる銀次。

「お尻の穴から串刺しにされるのと……内臓を全てぶち撒けて死ぬのと……どっちがいい？　選ばせてあげる」

結局全身をナマス斬りにされて、全身から血を噴き出させて絶命する弟の銀次だった。

刀を強く振って外道兄弟の血を払うと、紙で拭き取り、ゆっくり鞘に納めるミカだった。

この後、更にもう一度志乃に近付き、再度オマンコに指を突っ込む。

「いやあっ！？　ミカ様っ……あたし狂っちゃう……」

最初は恐怖と苦痛しかなかったが、幾度となくミカから性的虐待を受けているうちに少しずつ快感を覚え、今ではミカに責められることを望んで性器を濡らしている志乃がいた。

「ミカ様…あたしを……志乃をぐちょぐちょに犯して下さいっ！」

「この変態糞ガキめ……望み通り無茶苦茶に犯してやるから覚悟しなさいっ！」

ミカの幼女虐待を見てる内に、リオも変な感情が襲ってきて、10歳の勇太郎を素っ裸にひん剥くと、激しくオチンチンを扱いて射精させる。更に肛門に人差し指を差し込み、掻き回す。

「ほら、歳が変わらない志乃がイッたんだからお前もイキまくるのよっ！」

号泣しながらもリオの肛門と前立腺責めで、二回目の射精を遂げる勇太郎。

「リオ様……おいらをもっと苛めて下さい……」

「言われなくてもそうさせてもらうよ。そのうち金玉潰してあげるから覚悟してなさいね？　あんたは一生私の奴隷なんだからね？」

「はい。リオ様……ぐすんぐすん……いつか金玉潰されても文句ありません……ぐすんぐすん……」

興奮はしていても、やはり恐怖も隠せない勇太郎だった。

虐待する相手がまだいない次女のアスカは、ひたすら拗ねるだけの一日であった……。

拷問処刑人外伝……残虐三姉妹④（後書き）

遂に決着を迎えた大将戦。
本宮流の二刀流に惨敗するリオ。
だがミカの秘められた実力を知った姉たちは、複雑な心境で西方への旅を続ける事となる。
旅の目的がはっきりした今、西軍総大将である石立睦成の命を守る決意を固める三姉妹であった。

拷問処刑人外伝……残虐三姉妹⑤（前書き）

ついに動き出す東野城城主、春日井長政。

三姉妹は刺客相手に今度こそ完勝できるのか？

――――――――――東野城天守閣。

「忍の情報に寄りますれば極東より旅を続けている例の三姉妹が山谷城の精鋭部隊、川口隊の四人を斬り殺した模様でござりまする」

東野城城主、春日井長政が大きな目を見開き、側近の本山幹太郎へ即答する。

「うむ。そうであるか。折角ワシの影響で山谷城城主、谷川勝利殿も剣術に関心をお持ちになっておられた矢先に……。そこの精鋭部隊がいとも簡単に殺られるとは……おのれ三姉妹……こうなれば谷川殿が育て上げた川口隊の仇を討ってやろうぞ！」

「早目に手をお打ちになりませぬと、あの三姉妹は西軍総大将である石立睦成に忠義を示しているそうですぞ？」

「……やはり……以前にも忍から報せられた、幼き頃に石立睦成に救われたとゆう話……誠であったか」

スッと立ち上がり、天守から商人たちで賑わう城下町を見下ろす春日井長政。

しばらく目を閉じていたが、静かに目を開くとそっと呟く。

「そう言えば川口隊は五人おったはずじゃが？　確か二刀流のオナゴが一人……一番強者と聞いておったが……そいつは一体どうなったのか……？」

「ははっ。例の三姉妹の長女、“リオ”との仕合に打ち勝ちはしましたが、何故か止めを刺さずにその場を立ち去ったそうです。忍の読唇術によると、その女剣士である“楓”とやらも、西軍に忠義を示す者とゆうことですな……三姉妹と手を組まれたら厄介そうですぞ？」

「構わぬ！　所詮はオナゴの集まり……東軍が誇る我が精鋭部隊である“春日井隊”に掛かればその“楓”とやらも赤子同然！　いくら川口隊所属とはいえ、谷川殿を裏切ったのと相違なしなれば、三姉妹と共に見つけ出し次第、首をはねるのじゃ！　生け捕りにする必要はない！」

側近の本山幹太郎へ振り向き、扇子であおぎながら不機嫌そうな表情を見せる春日井長政。

「川崎、豊田、そして最近に五万石の録を与えて間もない本田十兵衛……計三百余の兵と共に、春日井殿の“三羽烏”を差し向けまするか？」

「うーん……先ずは本田十兵衛をこの先二十里先にある山谷城城下町の外れにある二条河原橋へ向かわせるのだ。百人の本田の兵と共に、もうじきやってくるであろう三姉妹をその場で討ち取るよう早

急に伝えよ！」

「鉄砲隊は数人でも付けまするか？」

「一般の町人たちが多数往来する場所である上に、谷川勝利殿の城下町付近である。鉄砲はまかりならぬ。百人余の刀のみで斬り殺すのじゃ！」

「はっ。では早速っ！」

————山谷街道。

東村山村から山谷城城下町へ向かう街道である。

その先二十里ほど西へ行けば、対西軍との最前線を守る春日井長政の居城、東野城がある。

東軍の主要戦力である東野城は、兵の収容数も五千人を越えていた。

平らな何の変哲もない山谷街道を西へ西へ向かうリオたち三姉妹と二人の幼子。

「もう少し歩けば山谷城城下町だねリオねーちゃん？　もうお腹ペコペコだよ」

三姉妹の中でも一番食い意地の張っている三女のミカが、長女のリオに愚痴り始める。

「そうね。今日はその城下町で宿を探して泊まるようになりそう。でも私たちが討った川口隊があった城下町だから、いつ追手が来るか捕らえられるか分からないから二手に別れて行動しようと思う。どうかな？　アスカ」

リオがそう言いながら次女のアスカの意見を聞く。

「間違いなく三姉妹が一緒にいたら、即怪しまれて御用となっちゃうでしょうねぇ。いい案だと思いますわ」

リオがしばらく考えて、分ける組を考慮する。

リオとアスカと勇太郎の三人組と、ミカと志乃の二人組に決めた。

「三姉妹が手配されてるだけに、女三人いたらとにかくマズいからこれでいいよね？」

「これで時間をずらして城下町へ入れば完璧でしょう」

「ええ～？　三姉妹であたしだけ一人の方になっちゃうんだ……寂しいなあ」

「我慢してねミカ。一日の辛抱だから。……このままますぐ行けば二条河原橋を渡るようになるけど、間違いなく何れかの刺客が待ち受けていると思う。遠回りになるけど城下町の西口へ繋がる東西

街道へ山を越えて抜けましょう。途中にある西山村とゆう大きな村で、衣服を買って変装もしていかないとね。商人が沢山出入りするのでお店も多い村みたいだから……」

リオの案に次女も三女も従い、かなりくたびれるが、山道から獣道を越えて、汗まみれになりながらも西山村に到着。

早速五人は衣服屋で、商人風の衣服を買い揃え、無事に着替え終えた。

次に食事をしようと店を出ると、丸々太った初老の女性に声を掛けられる五人。

「おやおや、珍しいオナゴさんだらけの旅の方たちだね？　商人さんですかい？」

「そうです。山谷城の城下町へ行く前に大きな村だと聞いていたこの西山村を覗いてみたくて……結構何でも揃ってる村なんですね？」

「そうなんだよ！　この村は数年前は山谷城城下町に加えられる予定だったんだ。でも城主の谷川殿が、〝平和な村は平和な田舎のままで残しておきたい〟とか言って下さってねぇ。戦が起きても被害が少ない村のままでと、心優しいご配慮を下さったのじゃよ。おほほほほほほっ！」

よくしゃべる村の初老との会話を無難にこなし終えたリオは、そそくさと城下町へ向かおうとする。

「お姉様っ！　よくよく考えたら無理に城下町で泊まらなくてもこの西山村でゆっくり体力を回復させてから明日にでも城下町へ向かう方が得策かと……」

「そう言えばそうかも……油断できないのはここも同じだと思うけど危ない場所は二条河原橋以外にもたくさんあるからね……今日はこの村で泊まりましょう」

――山谷城城下町南部。二条河原橋。

「もう日が暮れる……やはり我らが主、本田様のおっしゃる通り、三姉妹は西山村に向かったのだろうな……」

「春日井殿の命令とあれば本田様もとりあえずこの二条河原へ我らを置かぬわけにはいかなかったのだろうが……まさか三姉妹と一対一の殺しあいを所望されるとは……」

「本田様の持つ我らが百名の兵の中でも、屈指の実力を誇る田宮と宮田が本田様に付いて西山村に行ってるんだよな？」

「そうだ。もし本田様とその二名の全員が倒された報を受けたら、我らは解散せよ、との事だ。西山村の忍が報せにくるらしい。三姉妹に勝たれたら俺たち九十八名も路頭に迷うことになるぞ……参ったな」

「いやはや。本当に困ったたな。とにかく我らはこのまま二条河原で

朝まで野宿となるのか……ほんと夏場なら虫だらけで気が狂ってたわい……」

本田の兵たちはほぼ全てが春日井長政の命令通り山谷城城下町近くの二条河原へ集結させられていた。

事実を聞かされている兵たちは本田の男気と無茶振りに、感心する者と呆れる者と半々に分かれていた。

――――――西山村。夕刻。

食事を終えた五人は村で唯一の宿屋を見付けて、暖簾(のれん)をくぐった。

「こんばんは。この宿に一晩泊めて頂けますか？」

「いらっしゃいいらっしゃい！　五名様ですね！　聞いてましたよ。こちらへどうぞ！」

奥から現れた女将らしい女は、満面の笑みを浮かべながら奥の八畳の間へ通そうとする。

「やれやれ。今宵はすぐには眠れそうにないか……」

リオの表情が険しくなる。

「お腹たくさん食しておいて良かったですわね……」

長女のリオと次女のアスカの会話の意味が分からない三女のミカは、きょとんとしている。

「リオねーちゃん！　どうして今夜は眠れないの？　こんな立派な宿も見付かったのに？」

「あの女将さん、私たちの事を“聞いてましたよ”って言ってたでしょ？」

「ん？　え、そうだっけ？」

人の話を普段からあまり聞いていない三女のミカは、未だに意味が理解できていなかった。

「お代はあなた方が朝を迎える事が出来たら……で構いませんからね？　私の宿もあなた方のお陰で名を馳せられますわ。おほほほほ」

「あはははは。“お尋ね者が討ち果たされた宿”ってことでだよね？」

瞬時に真顔になり、キッとリオを睨み付ける宿の女将。

「あんたたちが負けたら腰のモノから衣服から全て身ぐるみ剥がさせてもらうからね？　本田様から許可をもらってるんだからね。元の服に着替えたら裏庭に出ておいで。あなたたちが人生で最期に逢うことになる客人たちが待ってるから……それと！　私の大切な鯉がいる池には決して入るんじゃないよ？　汚い血で汚さないでおくれ」

態度をガラッと変えた女将は、リオたち三姉妹を散々愚弄し終わると、奥の部屋に消えていった。

「そうゆうことね……やっと分かったよあたしも……」

「分かったら早急に衣服を着替えましょう。こんな商人の服なんかで果たし合いなんか出来ないですわ……」

アスカとミカの会話を聞きながら、連れている幼子の二人に振り返って見詰めるリオ。

「あなたたちは私たちが帰ってくるまでこの部屋から出ないで。分かった？」

「……うん」

「……はい」

何か恐ろしいことが始まりそうな予感を感じ取った9歳の志乃と10歳の勇太郎は、うつむき気味に不安そうな表情で返事をする。

茜色に染まる空を見上げながら裏庭の広場へ向かう三姉妹。
奥の木々から三人の人影が現れた。
一番背の大きな男が口を開く。

「…………そなたたちが世間を騒がせている残虐三姉妹であるか？」

ハッキリと輪郭も見えにくくなるほど夜の帳が降りようとしている薄暗い中でさえ、背の高い男の鋭い目付きとキリッと斜め上に延びた凛々しい眉が見てとれた。
つい昨今、春日井長政から五万石を与えられた武将、本田十兵衛である。

「残虐三姉妹とはまた……かなり失礼極まりない名称ですわね。まぁ、山賊とかの悪党の血筋限定とはいえ、女子供も平気で殺してますけど……」

「幼児虐待もしてるけど、悪党の子供じゃないなら犯しても殆ど殺さないから……山賊たちと比べたらまだ救い様のある悪党でしょ？
あたしたちって……ねぇリオねーちゃん？」

「悪党なりに恩を返さなきゃならない人が出来ちゃいましてね……

西軍側の統治国へ向かってる所です」

ミカの問いには答えずに、本田十兵衛へ話し掛けるリオ。

「ほほう。なぜ変装したままさっさと移動しない？　わざわざ時をかけながら向かうのだ？」

「……あなたたちみたいな勇猛な東軍の武将を一人でも屠(ほふ)っておけば、この先起こるであろう大戦(おおいくさ)の折に少しでも……いや、かなり西軍側が有利になるでしょう？」

更に近付いてきた三人の顔が、ハッキリとリオたち三姉妹に確認できた。

「はっはっはっ！　物凄く大袈裟な事を申す娘じゃのう……」

「控えめに話したつもりですが？」

リオは釣られて笑わず真剣な眼差しで本田十兵衛たち三人を見回した。

「あの川口隊を女剣士一人を除いて斬り殺したとゆう刀の技……見せてもらいたく本日は推参した。先ずは宮田大介殿、お願い致す」

「はい。私の相手は誰がしてくれる？　急がねば日が暮れるぞ？」

髷をキリッと決めた若い男前の武者が鞘から刀を抜く。

「私の理想なお顔ですこと。この男前は私に殺らせてくれません？お姉様……」

次女のアスカが一歩前に出てリオに催促する。

「いいよ。じゃあ第一仕合はアスカと宮田殿で」

銘刀紫龍をゆっくりと鞘から抜くと、下段に構えたままじわりじわりと間合いを詰めてゆくアスカ。
中段に構えて全神経を集中させる宮田大介も、左右にずらしながらも自分の間合いを探る。

しばらく睨み合いが続くが、隙を見い出した宮田が一閃、アスカの腹に狙いを定めて刀を真横に振り付けた。

『シュンッ！……ズドッ！！』

空を切った刀をかいくぐるようにアスカの紫龍が縦方向に突き刺

さる。

「ぐはあっ！？」

宮田大介のヘソを的確に貫いたアスカの刀は、ドクドクと鮮血を噴き出させている。

「この辺りかな？　あなたが幼い頃、母さんから栄養を貰ってきた緒があった穴は？……うふふ」

「ぐおおおおっ！！　ごはあっ！！」

ついに口からも大量の血を吐き出した。
敗北を悟った宮田は、自決しようと首に刀をあてがう。
アスカに払われて宙に舞う日本刀は、本田十兵衛の目の前に突き刺さる。

『ズバババババッ！！』

「ぎゃああああっ！？」

刃を真上に向けて、胸骨の中央部に当たるまで腹部をまっ縦に切り開くアスカ。

勢いよく腸（はらわた）がビチャビチャと生々しい音を立てながら足元に広がってゆく。

「あらいやだ……男前の腸（はらわた）なんて久し振りに見ちゃったわ……もっともがき苦しんでプリプリの腸をヒリ出してぇ……おほほ♪　おメメもお仕置きしちゃいますね？　はいっ！」

『ドスッ！』

「ぎいいいいいっ！！」

右目に刀を突き刺し、グリグリと掻き回す。
引き抜いて更に左側の目も刺し込んで潰し終えると、首へ切っ先をあてがう。

「あなたの生の腸……今夜のおかずに使わせて貰いますわね？」

『ズッ！！……ごふっ！……がくんっ』

銘刀紫龍を丁寧に紙で拭き終わると、ゆっくりと鞘に納め、残る二人の方へ深々と頭を下げてリオたち側へ戻ってくるアスカであった。

「むむむ……自害さえ邪魔立てして尚も苦しめようとは……聞きしに勝る残虐さ……外道女め」

怒りを露にする本田十兵衛の脇をスッと前に出る田宮平六。
一見ガリガリでか細く見えるが、非常に引き締まった筋肉を持つ、刀の速度で勝負するタイプの剣士がこの男であった。
女剣士であるリオたちとスタイルは同じであった。
力より速度……同じ戦い方の二人が前に出る。

大将戦はミカに任せて長女のリオが先に構えた。

「おや？　そなたは本田殿と仕合うのではなかったのか？」

思っていたのと違う方が前に出たので一瞬たじろぐ田宮平六であったが、剣先を前に突き出す構えで迫ってくるリオを見て、改めて上段に構え直す。

突きを見せるフェイントに大きく引き下がる田宮は、カウンターを合わせられずに再び構え直す。

『速い……こいつやはり一番強者？……　しかし本田殿が最後に戦うのはあの一番小さいガキ……どうゆうことだ？』

「何を他事を考えているの？　失礼な方ね？」

「む、すまぬっ……くらえっ！　ふんふんふんふんふんっ！！」

『シュンシュンシュンシュンッ！！』

物凄い速度で縦に横に繰り出される刀に、リオは防戦のみになる。
睨み合いの後、再び連続攻撃を仕掛けてくるが、一度めで癖を見破っていたリオの銘刀紫龍が縦に一閃。

『ズバッ！！……ぱくっ』

額から鼻っ面、唇と、顔面がパクりと斬り開かれた。
骨までは斬れてなかったが、急所の縦中央部を斬られた田宮は一気に戦意を喪失して、刀を落としてまで顔面を押さえて叫び始める。
蹴飛ばして仰向けにさせると、猛烈な速度で下方への突きを乱打するリオ。
みるみるうちに全身が穴だらけになってゆく。

「いでででででえっ！？　ふぎゃあああああっ！！」

泣き叫んでも手を止めないリオは、既に百箇所以上の穴を開けてしまう。
噴水のように噴き出す血を見ながら静かに刀を拭き、鞘に納めて引き返してゆく。

「うぬぬ……今度は最後まで致命傷を避け続けた上に止めさえ刺さ

ずに引き返すとは……腐れ外道めっ！！」
　慌てて駆け寄り、泣きながらもがき苦しむ田宮平六の喉へ短刀の切っ先をあてがう。
「ワシに着いてきたがために……宮田殿も田宮殿も……本当に済まなかった……」
　そのまま詫びを入れて喉奥まで短刀を突き入れ、田宮に止めを刺してやる本田十兵衛。
「このような残虐な輩を生かしておくわけにはいかぬ！　百の兵を持って確実に仕留めておくべきだったか……じゃがそれももう遅い。最早悔いなきよう全力にて三人を叩っ斬るのみじゃ！」
　怒りの形相を露に鞘に手を掛け、ゆっくりと力強く銘刀である“東宝”を引き抜くと、三人の方へ歩み寄る。
　三女のミカは本田十兵衛の文句を聞き終わると、大欠伸（おおあくび）をしながら滲み出る涙を右手で擦りとる。
「ちょっと！　まさかあたしたち三人と同時に戦うつもり？」
「おのれら……百の兵を任されたこのワシを舐めるなよ……まとめ

てかかって来いっ！！」

仲間を失った哀しみと悔しさで、我を忘れて錯乱状態になってしまっている本田十兵衛の前に、ようやく一歩前に出てから掌を相手に向けて、行動を制止させるポーズをとるミカ。

「まぁまぁまぁまぁ。どうどう！　落ち着いてってって」

「ふんぬううっ！　どこまでもコケにしよって！　何がなんでもお前ら三匹とも叩っ斬って刀の錆にしてやるわっ！！」

「三匹って言った今？……あたしはちょっとムカついちゃったぞぉ。後悔しても知らないんだからね？　三人の中で最も惨めな殺し方してあげちゃうんだから……」

「いざ参るっ！！　きえええええいっ！！」

凄まじいほどの見事な太刀筋は、速さと重さを兼ね備えている。受け太刀などしようものなら流石の銘刀紫龍でも刃こぼれは免れない。

「すっご……もし受けちゃったら折られちゃいそ……」

予想を遥かに上回る本田十兵衛の太刀筋のキレに、かなり本気になってくるミカであった。

数回、数十回とヒョイヒョイとかわしているうちに、やはり強者でも疲れは襲ってくる。

「はぁ、はぁ、はぁ、くぬぬ……ちょこまかと細かく逃げ回りよってからに……くそうっ！！」

思わず立ち止まって息を切らす羽目になるが、ニコニコ笑いながら手のひらを返して〝おいでおいで〟しながら挑発を続けるミカ。

「ぐぬぬ。未だに本気を出さぬつもりか……では良いことを教えてやろうぞ。お主たちの連れていた二人の幼子を、ワシらが仕合している隙に殺すよう部下に伝えておいた。今頃二人仲良く三途の川を渡っておるじゃろう。がははは。腐れ外道のお主たちに虐待されるよりは死んだ方が幸せとゆうものだ！」

「……志乃」

「がははははっ！　早くワシを殺さないと！　仇を討たないと！……がはははっ！」

「ホントに……殺しちゃったの？」

「ああ。ワシの兵は忠実に命令を執行する者ばかりじゃからの」

一瞬ツインテールの黒髪が逆立つかのように見えた。

赤いオーラみたいなものも感じとるリオとアスカは、全身に寒気

を感じて目を見開く。
瞬時に本田十兵衛へ踏み込むと、目にも止まらない凄まじい速度で刀を振るう。
受け太刀しようとするが、全てかわされ、まともに全身のあらゆる部位へと、ミカの銘刀紫龍が接触する。

『パラパラパラパラ……』

「うおっ!?」

着物がパラパラと細かく分断されて足元に落ちてゆく。
下帯だけを残して裸にされる本田十兵衛。
次の瞬間、両手両足、胸部腹部、顔面から勢いよく血が噴き出す。

既に致命傷を受けていたことに気付くのは、連撃を受けた数秒後である。
そのくらいミカの太刀筋は速かった。

「ぐわあああっ!?」

四つん這いになり、握力もなくなった手からは刀が離される。
銘刀東宝が音を立てて地面に落ちた。

「志乃はあたしの大切な奴隷だったのに……何て事をしてくれたの？　今からオッサンの性的虐待ゴッコを始めるから……大丈夫。出血死するまでの辛抱だから……」

「ぎいいいいっ……全身が痛い……何をどうするつもりだ……？」

ミカは最後に残っている下帯の下へ刀を入れ、瞬時に断ち斬った。パラパラと地面に落ちてとうとう１５歳の少女に素っ裸にされてしまう４０半ばの本田十兵衛。
自分の銘刀紫龍の血を拭い、鞘に納めると、落ちている銘刀東宝を握りしめ、そっと呟く。

「オッサンの刀、借りるね？」

「ぐ、く、くそう……太刀筋が全く見えぬほど……これほどまでに速いとは……」

「はい、お尻を突き上げてジッとしてるの」

「そ、そんな恥ずかしい格好が出来るかっ！　早く止めを刺してくれっ！！」

脇腹に軽く切っ先を刺し込むと、あまりの激痛にビクッとなる。
既に戦意は消失するほどの重症を負ってはいるが、四つん這いで踏ん張る事ぐらいは出来る状態にされている。

「活かさず殺さずって……難しいんだよ？　オッサン斬るのに微調整しまくっちゃったんだから……早くお尻を突き上げないとお城に住んでるあんたの奥方をバラバラにして殺してやるから……」

「や、やめろっ！！　どうして奥方の存在を知っておる！？」

「あはは。鎌掛けただけ……やっぱ奥方いたのか～。数日以内にバラバラのぐっちゃぐちゃにしてやるからね？」

「お、お願いだっ！！　女房と子供にだけは手を出さないでくれっ！！」

「ふぅん。子供もいたんだ……ガキは肛門から槍で串刺しにして豚のように丸焼きにしてやる」

墓穴を掘った本田十兵衛は、号泣しながら家族の無事を確約させる代わりに、何でもミカの命令を聞く事を承諾させられる。

刀の鞘で数十回臀部を叩かれ、真っ赤になってしまった所に、刀で何度も斬りつける。

ズタズタになってしまった臀部を更に鞘で叩かれる。

「ほら、あたしがお尻を叩いてる間にチンポしごいて射精しろ！」

「うぐぐ……そんな……オナゴどもが見てる前で……勘弁してくれ……」

『ズッ……ズブブブブ……』

「はうおおうっ！？」

ミカは鞘の先端の丸みを帯びた部分を本田十兵衛の肛門へ差し込んだ。

かなり太いが無理矢理捩じ込まれてゆく銘刀東宝の鞘の先端。

「ぎいいいいっ！！　痛いいいいいっ！！　そんな所に……鞘を入れないでくれええええっ！！」

「だって……あたしたち三姉妹の趣味って、性的虐待なのよ。あんたみたいなオッサンにはあまり興奮しないんだけれどね……ほら！」

『グリッ……ズボボボボ……メリメリ……バリバリ』

「ぐぎゃあああああ！！！！」

腸の仕組みなど全く知らない１５歳の少女は、遠慮することなく限界を越えて奥深く捩じ込んでゆく。

直腸を簡単に通過した鞘は、Ｓ状結腸も突き破り、小腸壁をバリバリと破壊しながら腹腔内へどんどんとめり込んでいった。

こうなればもう射精どころではないが、死の危機を感じた陰部は勃起するよう出来ている。

「やだ〜。肛門から粘り気のあるドロドロした血を流しながらもチンポおっ勃ててるぅ〜」

あまりの直腸への刺激により、腸液が大量に分泌され、腸からの鮮血と混じって粘度のある血液に見えていた。

「何か病気なの？　お尻の穴からの血がネバネバしてるよ？」

『グリグリ……ぐっちゅぐっちゅ』

更に激しく鞘を掻き回すミカ。

膝を立てて中立姿勢で座っているが、肛門からの返り血で、ミカの生の膝は血塗れになっていた。

「射精できなくてもしごいてやるっ。ほらほらほらあっ！」

『しゅこしゅこしゅこ……くちゅくちゅ』

肛門からの血で、陰部まで血塗れになってきたが、構わず激しくピストン運動を開始すると、腸液の混じった血液が、ミカの手コキで卑猥な音を立てている。

『しゅこしゅこしゅこしゅこ……ぐちゅくちゅぐちゅちゅ……』

「ふんぐうううう……ぐおおおおお」

「痛い？　まだまだ死なせてあげないから。射精できなくても頑張ってしなくちゃ家族皆殺しだよ？」

「な、何だとおおおっ！？　き、きさまあああ……」

血塗れのペニスをひたすらシゴく光景は、大人相手の性的虐待でもリオもアスカも少し興奮してきている。
二人とも少し性器を湿らせていた。

「じゃあねぇ。可哀想だからこう言ったら奥方とガキは見逃してあげるよ」

「な、何と……言えば……ぐ、ぐあああっ！　ひぎいいいっ」

「痛くても我慢しなさい！　オッサンでしょ？　んとねぇ……」

考えながらも本田十兵衛の肛門を掻き回す手を止めないミカ。

「私の全身をバラバラにして下さい。肛門から口まで貫通させていたぶってから殺してくださいミカ様っ。って言え！」

『メリメリ……バリバリ』

「うぎゃあああっ！！」

そうしている間にもどんどん口を目指して食い込んでゆく鞘が、激痛を誘う。

「だらしないなあ。ほれ」

『ドカッ！！』

「ふぎいっ！？」

一度鞘から手を離し、立ち上がってからペニスを思いっきり蹴りあげる。

同時に二つの睾丸にもミカの足の甲が捉えていた。

違う系統の激痛がまたもや本田十兵衛を襲う。

そのまま数回、数十回と繰り返すうちに、ミカの足の甲が、何かを潰した感覚を得た。

全身をビクンビクンと痙攣させながら四つん這いの体勢を崩してしまい、お腹から地面にへたり込んでしまった。

陰部の皮も所々裂けて、桃色の身が剥き身のように剥き出しになっていた。

それほどミカの蹴りは強烈だった。

「オッサン！　誰がへたり込んで良いって言ったの？　志乃を殺した罰はまだまだ続くわよ？　ほら、目覚めろっ」

『ドカッ！！……ブチブチメリメリッ！！』

「ぐぎゃあああえあっ！！　ごろじでえええっ！！　もうごろじでええええっ！！」

肛門から突き出ている鞘の空洞側を思いっきり蹴り込むと、さらに腸を数枚突き破り、ついに口からも鮮血を吐き出した。

足の裏でグリグリ捻りながら少しずつ口を目指して串刺しにしてゆく。

「あはは。汚いケツ穴のひだひだが数枚裂けちゃってるね？　なに潰れた金玉プランプラン揺らしてるの？　殺すわよ？」

瀕死のままで殺さないでいるミカに、次女のアスカが声をかける。

「ミカちゃーんっ！　こっち見て下さるうっ！？」

「え？」

リオとアスカの方を振り返ると泣きながらこちらを見つめる志乃と勇太郎の姿があった。

「生きてるからねーっ！」

「え……し、志乃……」

「そいつはミカちゃんに本気で戦って欲しかったから嘘をついちゃったみたいですわよ？　どちらにせよ良かったですわねー」

一緒に旅を続ける内に、かなりの情も湧いてきていたのか、志乃の無事を確認した瞬間、涙が頬を伝い落ちた。

「本田十兵衛さん……冗談が過ぎるよ？　でも結果的にありがとう。じゃあもう楽にしてあげようかな……えいっ」

『ドカッ！！……バリバリバリバリッ！！……ばしゅうっ！！』

鞘に当てていた足の裏を一旦離して、膝を高く上げて振りかぶると、思いっきり勢いをつけて蹴り込んだ。
一気に臓器を突き破った鞘の先端は本田十兵衛の口から腸（はらわた）と共に飛び出した。

「ふんぐううっ！？　ごぽぼぼ……ゴポゴポ」

血の泡と内臓を口から吐きながら激しく全身を痙攣させる。
しかしまだ死にきれない……。

「人間って、思った以上になかなか死ねないものなのよね……。でも今度こそ止めを刺してあげるから……その首、頂戴しまーす。お疲れ様」

『ズバッ！！……　ポトリ……コロコロ……』

うつ伏せになって痙攣している状態のまま、首に背後から強烈な一閃を放つと、見事に首は胴体から離れ落ち、数回転がって止まる。噴水のように首から血が噴き出すが、数秒でそれもとまった。長い長い地獄からようやく解放された本田十兵衛の顔は、ようやく苦痛の表情を停止させる。

「さぁ志乃！　最後の大将の死体はどうするんだっけ？」

リオが志乃の背中を押すと、よろけながら前に出る。半泣きになりながらも、主（あるじ）であるミカの元へ歩み寄っていった。

「志乃……生きてたのね」

「はい。ミカ様。ぐすぐす……」

「どうして泣いてるのか知らないけど早くこの男のチンポを剥ぎ取りなさい」

「ええっ!？　もうチンポを剥ぎ取るのは嫌やっ！！」

「何を西方の方言で反論してるのっ？　ふざけてると今夜はお尻百

叩きの刑だからっ！」

「は、はいっ！　ごめんなさいミカ様……」

ふざけているのか本気だったのか分からないが、少し慣れた手付きで短刀を取り出して本田十兵衛の陰部を根元から切断する志乃。

「真っ赤になってズル剥けになっちゃってます……」

切り取った血塗れのペニスを掌で転がしながら志乃がミカに報せる。

「えへへへへ……。何度も思いっきり蹴りまくっちゃったから……ま、仕方ないよ。早く魚籠(びく)に入れておいてね」

「はーい。　ミカ様」

拷問処刑人外伝……残虐三姉妹⑤（後書き）

ほぼ楽勝で本田十兵衛と宮田、田宮の刺客三名を討ち果たしたリオたち残虐三姉妹。

ミカの感情が昂ると、赤いオーラを纏うかのように見えたリオとアスカは、三姉妹での最強を確信することとなった。

無事であった志乃と勇太郎を連れ、村に戻る五人。

朝起きてから宿屋の女将に挨拶すると、この世の終わりを見たかのような表情で驚き、宿代はタダにしてくれた。

再び商人風の軽装に着替えると、三姉妹は城下町を目指して再び村を出発する。

拷問処刑人外伝……残虐三姉妹⑥（前書き）

新しく差し向けられた二人の刺客。

残虐三姉妹に争いの種は尽きない……。

拷問処刑人外伝……残虐三姉妹⑥

　別の追手部隊が待ち伏せしているとも限らない城下町へ入るため、三姉妹と二人は、再び商人仕様の服装に着替えた上、二手に別れて山谷城城下町へ向かう。
　先ずは午前中に長女のリオと次女のアスカが、１０歳の少年である勇太郎を連れて城下町へ到着。
　町の様子を色々と探る。
「この“かんざし”素敵ですわぁ～。お兄さん、これ頂けますかぁ？」
　アスカは桃色に染められた花飾りが付いた“かんざし”を買って、直ぐにポニーテールの束ね際に差し込んだ。
「そんな髪型に使うものなの？　それって……」
「よく分かりませんけど……綺麗でしたので私は満足ですわ」
　お店を目で見て楽しんで、一通り徘徊した後、三女のミカとの待ち合わせ場所に決めている、この町で一番大きな宿を見付けた。
　夕刻にミカと志乃も合流し、五人は宿屋で汗を流すことにする。

混浴である大浴場は、誰一人姿が見えずに貸切状態だった。
……と思えたが……一人の女性の背中が湯けむりの奥から微かに浮かびあがってくる。

「……こんにちは。三姉妹さんたち……」

「!?　何者だっ!?」

男子のような短いおかっぱ頭の女性は、まだ十代の若々しい肌を持っていた。
ゆっくりと振り向くその女性は、まさに絵に描いたような美人である。

「剛力沙絵……春日井様から貴女方を始末するよう命を受けてこの城下町まで来ました」

「へぇ〜。闇討ちじゃなく正々堂々と……それどころか五人の敵前に一人で現れて宣戦布告とか？　もしかして頭が……アレしてる人なのかな？」

あまりのふてぶてしさに、リオは半ば呆れ気味に問い返した。

「あはははは。夕刻日が暮れるまでに私がこの宿を生きて出ていかない場合、この宿は一瞬で吹っ飛んじゃいますよ？　貴女方はバラバラの肉片と化しちゃうわけです！　あはははっ！」

「ふん。そうゆうことね。大砲かなんかで狙い打ちってわけ？」

おかっぱ頭をかき上げながら気持ち良さそうに目を閉じる沙絵。

「はぁよく温まった……貴女方が逃げないのもわかっています。そもそも刺客が現れそうな場所に無理矢理居座ってまでそれらを始末していってるみたいな貴女方は……逃げる理由などないですもんね？」

「あたしたちの目的を知っているみたいね？」

三女のミカも初めて口を開いた。

横を向いてそっと答える沙絵。

「西軍総大将、石立睦成殿の命を刺客たちからお守りすること……それと……」

三姉妹たちは１６歳の少女である剛力沙絵を、湯船に浸かったままで静かに睨み付けている。

「今のうちに一人でも二人でも、強敵となる忍や雇われ浪人などを始末しておくこと……やがて起こる大戦（おおいくさ）までに少しでも有利にするため。今がその状態ですよね？　でも私は剣術と忍術の双方を極め

た者……残念ながら貴女方三姉妹は石立睦成殿にお会いすることはできません……」

三姉妹の後ろでは、逆上せて顔を真っ赤にした勇太郎と志乃が、湯船から這い上がり大の字になって寝転がる。

「まぁ可愛い童子さんたちだこと……噂によると貴女方の“性”の奴隷にしているみたいですね？　そんな鬼畜な所業も今宵限り……ゆっくりと最期の夜をお楽しみ下さいね。明日の早朝、夜明けと共に町の中央広場で……城下町の人々が見守るなかで仕合いして頂きますので……私の兄、三四郎と貴女方三名ですので、二対三の仕合いになりますが」

「どうしてわざわざ人ごみを選ぶの？」

「あはは！　簡単なことですよ。見せしめです。み・せ・し・め♪」

そう言いながら湯けむりの向こう側へ消えてゆく沙絵。

今回は簡単にはいかない予感を隠せない三姉妹であった。

――――東野城西の丸。

「おのれ三姉妹……本田十兵衛をいとも簡単に屠（ほふ）ったただと……」

「百人の兵たちの内、九十八名ほどが路頭に迷う羽目となりまして、半数ほどの兵たちが再び召し抱えて欲しいと、奉行筆頭まで嘆願しているそうにござりまする」

「うむ。大戦を前に今は少しでも兵力が欲しいところ……二分割して川崎と豊田の兵に加えよ！」

「ははっ。仰せのままに」

「忍と剣術の双方を免許皆伝……と聞く強者である兄妹の刺客を放っておいたが、万が一討ち果たされた場合、豊田と川崎両軍をもって徹底交戦を仕掛ける！　東野城に近付けるでないぞ！　一里東側にある五九道峠にて挟撃をかけるのだ」

「ははっ！　では一旦その刺客とやらの報をお待ちくださりませ……凶報なれば即手配させて頂きまする！」

側近である本山幹太郎は三姉妹に対しての備えをしておくよう川崎八兵衛と豊田七兵衛へと伝令を送るため、西の丸門口を立ち去った。

春日井長政の正室である“御鉢の方”が一日を過ごす西の丸月下の間。

一般的に正室という正式な妻の場合、侍女を数人連れて回るが、この春日井長政の正室だけは違っていた。

よほどの事が起こらない限り、西の丸月下の間で一人で過ごし一日を終える。

長政も御鉢の方当人の希望ということもあり、侍女を従えないこ

とを承諾していた。

　その普段無口であり、独りを好む御鉢の方が口を静かに開く。

「此度の天下分け目の大戦は、東方(ひがしがた)の勝機はいかほどでございましょうや？」

「ううん……薄汚い裏切り者が現れぬ限り、我らが東軍に勝機はある！　オナゴが戦の事など考えずとも、もう少し気楽に愉しく毎日を過ごされよ！」

「いえいえ……あなた様がこうやってたまにでもお会いしに来て頂けるだけで私は幸せでございます」

「うむ。徳山殿に天下を獲って頂き、誠の平和な世を築いて頂きたいものじゃ……」

　　　　　――日暮れの城下町。

　何やらよく分からない内に宣戦布告をされた三姉妹は、とりあえず湯舟で身体を温め終わり、宿屋の十人くらいが雑魚寝できるほどの大部屋である〝大滝の間〟にて、布団に入る。

「志乃っ！　こっちへこいっ！」

「は、はいっ！」

三女のミカが奴隷童子である9歳の志乃を自らの布団へ呼ぶと、慌ててミカの隣へ移動する。

「下帯脱ぎなさい」

「はい！　ミカ様……」

15歳の三女であるミカは幼い女子が大好きである。
これまでにも何人もの山賊の娘たちを悪戯した上で殺してきたが、この志乃だけは生かして旅に連れている。
“山賊の血筋”以外は、出来るだけ殺さないと決めている三姉妹であったが、年端もいかぬ童子たちに性的虐待を行うこと自体が異常であり、“残虐三姉妹”と呼ばれる所以(ゆえん)でもあった。

『くちゅ……くちゅ……』

「あっ！？　あああっ……痛いっ！」

「まだ人差し指一本だよ志乃……今日は三本入るまでマンコ掻き回してやるからね？　分かった？」

「やだ……あんっ！　痛いいっ！！」

ついに度重なる悪戯にて、９歳の女児である志乃の膣は、親指と小指以外のすべての指を根元まで受け入れさせられた。
ミカの激しい指使いで傷付いた膣口から愛液と共にうっすらと血が流れ出てくる。
やがて痛みは快感となり、志乃の全身を痙攣させる。
「ほら、志乃……あたしがイカせてあげるから股を大きく開け！」
『ぐちゅちゅちゅちゅちゅちゅっ！！』
「は、はいっ！　んあああああっ！！　イク……イックううううっ！！」
顔を真っ赤にした幼い少女は、更に微かに膨らみをみせる乳房までミカに揉みしだかれる。
「舐めなさい」
「えっ！？　何をですか？」
「あ、あたしの、アソコだよ！　あたしがいいって言うまで舐めなさい」
「あ、えと……は、はいっ！……ペチャペチャ」

布団へ潜り込んで、１５歳のミカの陰部を必死で舐めまくる９歳の幼き少女。

「う、あぁ。い、いいわよ志乃……陰核舐めるの上手いわね？」

「ペチャ……ペチャ……ありがとうございます」

「次は膣内（なか）に舌を深く突き入れて舐め回すのよ？」

「はい」

ツンとする酸性の匂いが充満する宿屋の一室で、長女のリオも段々我慢できなくなってくる。

「勇太郎っ！　ちょっと来なさい！」

「え？　う、うん」

１０歳の少年も、もうこの姉妹たちから逃げられないことは悟っている。

大人しくリオの布団へ潜り込む。

「私も今宵は参加させて頂きますわん。よろしくって？　お姉様？」

「いいよ。二人で可愛がってあげるとしよう」

勇太郎を挟み込むように長女のリオと次女のアスカが両脇から挟み込むように布団に納まる。

手際よく衣服を脱がされてゆくが、もう抵抗さえできない勇太郎であった。

素っ裸のままリオの膝が股間を何度も擦り付ける。

「あ、ああん……」

思わず女の子のような喘ぎ声を出してしまう。
半分皮かむりの１０歳の少年の陰部は、黒髪で長髪美人のリオによって、小さいながらもビンビンになってきていた。

「ほら、私の左の胸を舌で転がして頂けます？　右はあまり感じませんので……」

「う、あう。うん……ピチャッ、ピチャッ……ペロペロ……」

「うふん。お上手ですわ勇太郎くん」

ひたすらリオの膝による擦り付ける刺激と、アスカのやや大きな胸の乳首を舐めまくる感覚にこの世の極楽を味わった気分になる勇太郎。

更にリオの脚の摩擦が高速になると、ついに限界がくる。

「あ、あんっ！」

『ドピュッ！……ピュピュピュピュピュピュッ！』

思わずアスカの乳首を口から出してしまうほどの射精の快感に、全身を硬直させる勇太郎。

「あらあら……童子のくせにこんなにたくさん出しちゃったんだ？」

「ふぅ。ふぅ。う、うん……」

「自分で出した汚い液は自分で処分するのよ？　分かった？」

アスカの胸は一度置いといて、リオの白い膝にへリ掛けた白い液体を舐め取らされる。

ようやく大量の自分の精液を舐め取り終わると、今度はアスカの秘所を舐めるよう命令される。

「ほら、私の下帯脱いでおりますからお布団潜ってアソコをお舐め下さい」

「アソコって？　ど、どこを？」

アスカは少年の髪の毛を掴み、強引に顔面を股間に当て付ける。

「むぐっ！？　んんんっ！？」

「時間をかけて舐めてくださるかしら？」

「ん、んん！　ぺちゃ、ぺちゃ、ペロペロ……んんっ？　臭い……」

膣内深くまで洗う習性のなかったアスカの性器は、１０歳の少年にとってはかなり臭かったようである。

「はい？　今、何とおっしゃいましたのっ！？」

一瞬で傷付いてぶち切れたアスカは、勇太郎を布団から引きずり出して、素っ裸のままで、何度も顔面を殴り付ける。

勢いよく飛び出した鼻血が、布団だけでなく畳まで赤く染めていった。

ポニーテールに束ねていた、微かに茶色く長い髪を揺らしながら、ひたすら顔面を殴り付ける。

遂に前歯が一本抜け落ちる。

うつ伏せになり、号泣しながら防御体制に入るが、肛門に人差し指と中指を根元まで差し込み、畳に着いている膝が浮くほど勢いよ

く一気に上部に引っ張り上げる。
縦方向にパックリ開いた肛門があまりにも痛々しい。
「んぎゃあああっ！！　痛い痛い痛いいいいっ！！」
「お尻の穴が裂けちゃうのが嫌でしたら早くお立ちになってくださいますぅ？」
「は、はいっ！　わああんっ！　わああんっ！」
引き裂かれかけた肛門を右手で押さえて庇いながらも、号泣しながら立ち上がる勇太郎。
更に腹部と顔面を交互に殴り付けると、再び痛みで倒れ込み、顔と腹を押さえて泣きじゃくる。
その光景を見ることすら怖くなった志乃は、自分まで勇太郎のような酷い目に合わないよう、ミカの機嫌を取る行動にでる。
「あっ！？　やだ……志乃ったら……そんなとこまで……舐めてくれる……の？　汚いわよ？……あんっ！」
「はい。ミカ様の部位なら汚い部位などございません。志乃の舌で綺麗にさせて頂きます」
お風呂上がりに一度だけ厠(かわや)へ行き、大をしてしまったので、便が

多少は付着してしまっているミカの肛門を、執拗に舌で舐め回す志乃。
　更に直腸へ舌を突き入れて、直腸内の便までも舐め取り始める。

「あ、あん。志乃……汚いってば……もういいから」

「ペチャ、ペロペロ、ぺちゃ、ぺちゃ……んんん……ミカ様大好きです」

　性的虐待を重ねられている内に、大人の快楽を覚え、その快感を与えてくれるミカをご主人様としてだけではなく、性の相手としても本気で愛してしまっている志乃であった。

　アスカの責めは止まらない。
　両足首を掴み、思いっきり開けさせると、右足を陰部に押し当て、強烈な高速での電気アンマが開始された。

『ガガガガガガガガガッ！！』

「いやあああああああっ！！」

　これはアスカの情けもあり、“蹴り付け型”ではなく、“密着型”の電気アンマだったので、陰部や睾丸が潰れるような危険は伴わなかった。
　だが、あまりにも激しい足の裏の摩擦により、勇太郎は痛みと快

感を同時に味わい、ついに二度目の射精をしてしまうことになった。

「痛め付けるだけじゃ可哀想過ぎますものね……気持ち良かったですか？」

「う、うう。うん」

『ズドンッ！！』

「ぎゃああっ！？」

思いっきり陰部を踏みつけるアスカ。
更に精液が絞り出される。
辛うじて潰れかけはしたが、潰れずに済む睾丸。

「はい。分かりました。……と答えて頂けますか？　立場を理解してらっしゃるのかしら勇太郎くん……今度私が傷付く事をおっしゃったら御両親の元へ送ってあげますわね？」

冷たい目で見下ろしながら睨まれると、勇太郎は恐怖で竦み上がる。
陰部からはトロトロと、絞り出された精液が太股に垂れ続けていた。

「結構ムチャするんだねアスカは……ほら、顔を上げて」

「うう、ぐすん。ぐすん」

顔面を歪に変形させられた上に足でイカされた涙が止まらない勇太郎は、リオに薬草を塗ってもらう。

「はい、これで明日には腫れも引くと思うよ。今日はもう勘弁してあげるからゆっくり眠りなさい」

「うん。……い、いえ……は、はい。ぐすん、ぐすん」

リオは勇太郎を布団に帰してから自分の布団に帰って眠りにつくが、まだ怒りが納まらない次女のアスカは、少しふて腐れぎみにブツブツ言いながら布団に入って自慰行為に浸り始める。

ミカと志乃はお互い素っ裸になり、激しく抱き合っていた。お互いの乳房を揉み合い、乳首を舐め合い、陰部を触り合う……。

「ミカ様……志乃はこれからもずっとミカ様をお慕い申しております。お願いですから殺さないで下さい……」

「虐待しても殺しはしないから安心して。山賊の娘たちは殆どマンコから串刺しにしてやったけどね。鬼畜の血を引く奴ら以外は無意味な殺生しないから……」

強くミカに抱き付きながらそっと囁く志乃。

「はい。虐待だけなら我慢します。ミカ様に悦んで頂けるなら……」

「可愛いなお前は……明日は果たし合いが待ってるからそろそろ寝るよ？　おやすみ志乃」

「おやすみなさいませ……くぅ。くぅ……」

色んな意味で疲れていた志乃は瞬時に眠りにつく。

橙色に揺れる蝋燭が照らす宿屋の一室で、三姉妹は直ぐには寝付けず、各々明朝の剛力兄妹との死闘を丑の刻過ぎまで思い浮かべていた。

――明朝の中央広場。

童子が１０人ほど走り回れるほどの円型の石畳で敷き詰められた中央広場には、町中の人々が取り囲むように集まっていた。
少し奇妙な服装をしている剛力兄妹が宣伝していたお陰で、集客効果は抜群であった。

「待ってましたよ？　残虐三姉妹さんたち」

「ほっほっ！ほっほっ！」

赤と白の派手な紅白で決めた着物を着ている剛力兄妹は、一見傾き者にも見えるほどであった。

少し賢くないのか、兄の剛力三四郎はヘラヘラ笑いながら涎を垂らし、常に空を見ている。

「あのさ……やっぱり二対二でやらない？　こちらは私とアスカでいいから……先に私がやるけどそちらはお兄さんが先なの？」

見た目と殺気の強さで、剛力兄妹の力量を見切ったリオは先陣を決意する。

「せっかく三対二で構わないと言ってあげてるのに……後悔しても遅いですよ？　長女のリオさんには私がお相手致しましょう」

剛力沙絵はゆっくりと忍の者が愛用する銘刀村雨を抜く。

リオも一本前に出て、銘刀紫龍を抜刀した。

暫く下段に構えたまま動かない二人。

勢いよく袈裟斬りからの横払い、更に連続の突きと、激しい攻撃を繰り出す沙絵。

前後左右に身体を振りながら見事に紙一重で全ての攻撃をかわすリオ。

「はぁ。忍と剣術両方極めたって聞いてたけど……そんなもんか……アホ面したお兄さんの見てる前で逝かせてあげるからね？」

「はぁ。はぁ。はぁ。何てすばしっこいんですか……でも私の実力はこんなものじゃないですよっ！？　それっ！！」

『ブシュンッ！！』

高速の斬り上げも余裕でかわすと、一歩踏み込んで二回銘刀紫龍が唸った。
音を立てて石畳の上に落ちて何度も跳ねる銘刀村雨……。
その後、ワンテンポ遅れて沙絵の両手首から先が落ちる。
激しく手首から噴き出す血が、辺りを血の海に染めてゆく。

「ひっ！？　ぐわああああっ！？」

思わず膝を着き、崩れ込む沙絵に背中を向けながら、兄の三四郎の方を振り返るリオ。
剛力三四郎は泣きそうな表情で妹の沙絵を見つめているが、リオが遮るように視界へ移動して三四郎を見つめ返す。

「あはっ♪　妹ちゃん、両手なくなっちゃったね……」

「ほっほっ！！　ほっほおおおおっ！！」

泣き崩れた顔は瞬時に悪鬼のような形相になり、腰の刀にゆっくりと手をかける三四郎。

「一対一なのに動いていいの？　お兄さんなんだから分かるわよね？」

「ほううっ！？　うほほほほっ！！」

まともに言葉を喋れないが、言ってる事の意味はだいたい分かるらしい。

抜きかけた刀を再び鞘に戻して心配そうに妹の沙絵を見つめる。

その目には、涙が浮かんでいた。

「ぐわあああっ！！　ちきしょうっ！　ちきしょうっ！！　早く私を殺せっ！！」

「あれあれ？　さっきまで丁寧な話し方してたのに……何を急にブチ切れてモノ言ってるのかな？　お嬢さん？　あはは」

『ズバズバッ！！』

二回真横に刀を振り抜くと、今度は両足首から先が失くなった。

ようやく立ち上がった所に止めの足首切断。

転がりかながら激痛と戦う羽目になる１６歳の少女剣士、剛力沙絵であった。

更に沙絵のお腹のヘソに刀を突き入れ、まっ縦に胸骨まで斬り裂くと、腸（はらわた）がドボドボとはみ出してきて、石畳の上にびちゃびちゃと敷き詰められてゆく。

「がはあっ！！　ぐええええっ！！　痛いいいっ！！　殺してっ！！　もう殺してええっ！！」

「殺して下さい……でしょ？」

開かれたお腹に足を捩じ込み、掻き回しながら問い返すリオ。グチュグチュと生々しい音が響く。

「こ、殺して……下さ……い」

「良くできました。生まれ変わったら戦う相手を間違えないようにきっちりと力量を付けてね？　さようなら……」

『ザシュッ！！……ぶしゅうううううううっ！！』

頸動脈を断ち切り、噴水のような夥しい血飛沫が半径数メートルに飛び散った。

ゆっくりと呼吸が遅くなり、遂に心臓が止まる剛力沙絵は、１６年とゆう短い人生に終止符を打った。

「ほうほうほううっ！？　あっはあああおうううっ！！」

一気に駆け寄って号泣しながら血まみれになって死んでいる妹の死体を抱き締める兄の三四郎。

「悲しい場面に水を指すようで悪いですが……オツムの弱そうなあなたも後を追わせてあげますわ」

後ろに引いたリオに変わって、号泣する三四郎へ近付きながら銘刀紫龍を抜く、次女で１８歳のアスカ。

「あうあう……おおうう……おーん！！　おーん！！」

あふれでている腸に顔を擦り付けながら妹の死を悲しむ三四郎に、憐れみを感じたアスカは、我に帰って抜刀するのを待つことにした。

「妹さんとのお別れが出来たらいつでも構いませんわ。少しお待ちしておりますね？」

悪鬼の形相で振り返った三四郎は、一気に抜刀し、アスカに襲い掛かる。

「アスカねーちゃんっ！　そいつ妹より強いと思うから気をつけて

っ！」

「え？　きゃっ！？」

振り抜いた妖刀鬼正は、アスカの袖を斬り裂き、少し右腕から出血する。

「ほうっ。ほうっ。はううっ！！」

意味の分からない言葉を口にしながらもジリジリと間合いを詰めてくる兄の三四郎に、とてつもない恐怖を感じるアスカだったが、深呼吸して我に戻り、慎重に数回の攻撃をかわす。

「ちょっとびっくりしましたけど……妹さんより少しお強いくらいの腕ですわね？　次は私から行きますわよ？」

「はうおっ。ほうううっ」

口を開けて涎を垂らしている三四郎に、迅速なる銘刀紫龍の刃が襲い掛かる。

妹の沙絵と同じように両手首を飛ばされ、激痛に暴れ狂う三四郎。

「うほほほおっ！？　ぐわええおおおうっ！？」

「さぁ妹さんの所に逝きましょうか？」

首に切っ先を当てるアスカに、三女のミカが叫ぶ。

「ちょっと待って！　アスカねーちゃんっ！」

「え？　どうかされましたかミカちゃん？」

ゆっくりと座り込んで両手首から血を噴き出しながら泣いている三四郎に歩み寄る三女のミカ。

「あなた……まだ生きたいんでしょう？」

「あうっ！　おおううっ！！」

ミカの方を向き、目を見つめながら大粒の涙をボトボト落とす剛力三四郎。

「もう両手も使えないから怖くないし……血止めしてあげてこいつを生かしてあげようよ？　アスカねーちゃん」

「ええっ!?　何をおっしゃいますのミカちゃんは？　この兄妹は私たちを屠ろうと差し向けられた刺客ですわよ？　正気なのですか？」

リオの方を振り向き、許しを乞うミカの目に、長女のリオは直ぐに口を開いた。

「頭悪そうだけど両手がなくちゃ何も出来ないだろうし……アスカの奴隷も居なかったことだし……ね？　アスカ。ミカの望み通りそいつを殺さないであげて。２０歳前後かな？　虐待する奴隷として大人が一人くらいいても調度いいでしょう？」

「えっ？　お姉様まで？　ウーン……あまり好みでは無いですが……勇太郎くんや志乃ちゃんみたいに私も性奴隷が欲しかったですから……分かりました」

紙で刀に付着した三四郎の血を拭い終わると、布切れを強く巻き付けて、両手の止血を施すアスカ。

「沙絵さんのことはもう忘れて……今日から私たち三姉妹の性的奴隷となるのですよ？　よろしくって？」

「うう、あううう。ほうううううっ！」

何て言ってるのかは理解できなかったが、命を救われて喜んでいるらしいのは三姉妹にも察することはできた。
志乃、勇太郎に続き、残虐三姉妹の奴隷は２０歳の剛力三四郎を新しく加え、これで三姉妹全てに各一人ずつオモチャができた。

剛力沙絵の死体は、城下町で予め三姉妹の死体の処理を手配されていた葬儀屋に土葬にして葬られることになった。

いい見世物を堪能した町の住人たちは、各々引き返してゆき、城下町に再び夜の帳が降りる……。

――その日の夜、三姉妹はそれぞれペアで一つの部屋を借りて、奴隷を虐待することにした。

アスカの三四郎への虐待は今宵が初めてである。

「全ての衣服を脱がしますわよ？　まだ手首の血が止まりきっていないから私が脱がしてあげますわ。ほら……」

『スルスル……スルスル』

「おうう。うはほほほっ」

手際よく大人の男である三四郎の衣服を全て脱がせると、仰向けのままで両足首を掴み、そっと足裏を陰茎へ押し当てる。

「まずは挨拶替わりに電気アンマでたくさん出してもらいますわね？　いきますわよぉ？」

『ガガガガガガガッ！！』

容赦ない高速の電気アンマで、三四郎は手のない手首で必死でアスカの足をはね除けようと抵抗するが、握れない手首だけではなにもできなかった。
訳のわからない唸り声をあげながら、アスカのなすがままにされている。
「うほほっ！？　うほほほおおっ！！」
『ドピュピュピュピュッ！！』
足の裏から自分の太ももから精液まみれになってしまった三四郎は、恥ずかしさと気持ちよさと痛みで、更に変顔をして涙を流し始めていた。
「さすが若い青年男子ですわねぇ。たくさんお出しになられたこと。さぁ私の足の裏にこびりついた汚い液を舐めて綺麗にしてくれますぅ？　ほら……」
泣きながらアスカの足の裏を舐めて綺麗にすると、今度は頬を数回平手打ちされ、四つん這いにさせられる。
「後ろの門……調教してあげますからねぇ。力を抜いてお尻を突き上げて頂けますかぁ？」

「うわあああっ！　あああああえええええっ！」

「初めは一本からですね。ほうら……」

『つぷ……ずぶぶぶ』

「はあおおおおおうっ！？」

初めて肛門から異物を突っ込まれた三四郎はショックと痛みで激しく動揺する。

お尻を下ろしては強烈な平手を臀部に打ち込まれ、真っ赤になったお尻と動揺、肛門からも真っ赤な血が流れ出てきた。

アスカの指が四本ぶちこまれ、直腸内を掻き回されている。

傷付いた腸壁からの出血であった。

「ほうら、ヌチャヌチャとイヤらしい音立ててますわねぇ？　血が出てますわよ？　うふふふ。菊の門が拡がりきってかなり裂けちゃいましたし……もっと泣きわめいてもかまいませんのよ？」

「うほほほほはおおおっ！！　うおーんっ！！　うおーんっ！！」

アスカの指が五本とも直腸に入りきり、手首までも挿入された頃には三四郎は全身を痙攣させて号泣していた。

白目をむいて失神したのを確認したアスカはようやく肛門から手を引き抜いた。

ブバッと鮮血が畳を染める。

「うふふふふ♪　毎回毎回菊の門を掻き回して拡張してあげますからね？　逃げ出したら睾丸二つともくり貫いてから潰してあげますからお覚悟決めてからお逃げくださいねぇ？」

三四郎のアスカによる性的虐待初夜は、失神するほどの凄惨なものであった。

ようやく解放されて眠りにつく三四郎であった。

リオも１０歳の勇太郎を無理やり手コキで三回射精させ、ミカも９歳の志乃を手マンで五回イカせていた。

相変わらず性奴隷にも容赦のない三姉妹である。

拷問処刑人外伝……残虐三姉妹⑥（後書き）

強者とされた兄妹の刺客を打ち倒した三姉妹。

妹を目の前で殺されても我の命を惜しがった、兄の剛力三四郎。

両手を失いながらも三女のミカの提案で生き残る事となる。

次女のアスカの性的奴隷としての人生を送ることとなる三四郎に、

真の幸せなど訪れるのであろうか……。

拷問処刑人外伝……残虐三姉妹⑦（前書き）

順調に旅を続ける三姉妹たちであったが、待ち伏せの挟撃とゆう危機を迎えることになる。

果たして無事に峠を越えられるのか？

城下町へは立ち寄るが、攻守ともに優れた造りである城内には決して入らない三姉妹は、谷山城を素通りして東野城城下町を目指して再び旅立つ。
五九道峠を越えれば一里ほどで辿り着ける位置にあった。

「後何日かかるのかなあ？　春日井長政とかゆうオッサンの城下町って……早く落ち着いてのんびりしたいんだけど……少々目立っても構わないから山賊から馬でも奪ってこようよぉ～」

三女のミカが愚痴をこぼす。
愚痴には答えずに、長女のリオが静かに語り始める。

「この先の五九道峠は……崖がなだらかすぎて川側と山側から簡単に山道まで移動できるの」

「やれやれですわね。では遥かに遠回りして海側の崖道を越えていくしかないですわねぇ」

次女のアスカは困り顔で天を仰ぐ。

「海側の崖道って……冗談でしょ？　そこまで行くのに何日かかる

と思ってるの！？　それにあたしたちは崖道を越えられても勇太郎と志乃には無理だよ！　手のない三四郎だって同じだし！　落っこちて死んじゃうよ！？　最短距離の五九道峠を越えればいいじゃない！」

意味が分からないでいるミカに、今度はしっかりと答えるリオ。

「私たちは春日井長政の本田隊を丸々一つ壊滅させた上に、刺客までも倒したの……長政もブチ切れて自慢の川崎八兵衛と豊田七兵衛の軍を間違いなくけしかけてくるわ。峠で挟撃をかけてくると思う。本田の壊滅した兵たちも新たに加わってるらしいから一人で百人近く相手にしなきゃならないよ？　ミカは自信あるの？」

絶句するミカの肩にそっと右手を置きながら、優しく諭すアスカ。

「ミカちゃん、自信と言ってもね……敵を倒す事だけじゃないですのよ？　二人の童子とアホヅラした三四郎さんの性奴隷たち三名を庇いながら……ですからね。かなり難易度高そうですわ」

「あっ。そっか。挟撃されて三人庇いながら百人斬りかぁ……」

真顔になって下を向き唇を噛み締めるミカは静かに目を閉じて震えだした。

「え？　ミカでもそんなにビビることとあるんだ？」

「死ぬのが怖いのじゃなくて、性奴隷を失う事が怖いだけですわよねぇ？　ミカちゃん？」

「ワックワクするうううっ！！」

目を見開いたかと思った次の瞬間、いきなり大声で叫ぶミカに、リオもアスカも全身がビクッとなる。
三四郎は涎を垂らしながら天を仰いでいるまま動じているようではなかったが、童子の志乃と勇太郎は心臓が止まりそうになるほど飛び上がった。

「び、びっくりするじゃん！？　いきなりどしたの？？」

「いやいや……歩いてばかりの旅は退屈で眠たくなるけど百人斬りなんて想像したらワクワクしてアソコ濡れてきちゃったよ！」

一番の実力者である三女のミカがその気になっているのは心強いことだが、やはりリオとアスカにはかなり不安が残っている。

「どうします？　お姉様……楽しんでおられるミカちゃんに二百人ほど斬ってもらって、私たちは五十人、五十人、でいきますぅ？」

「はは。ミカの速さなら私たちが一人殺ってるうちに二人やっちゃうだろうねほんとに……五九道峠に行こうか？　このまま本田に続

いて猛将を二人屠れたら西軍が更に有利になりそうだしね」

「そうですわねぇ。挟撃なら同士討ちを避けるため鉄砲も使えないでしょうし……長政殿は数で必ず私たちを倒せると自信満々で立ち向かってきそうですもんねぇ。うふふ♪　返り討ちにして差し上げちゃいましょう」

――――五九道峠。

「申し上げます！　三姉妹たち六名が峠を上り始めた模様でござりまする！」

「うむ。ご苦労であった！」

密偵の報告を受けた豊田七兵衛は、五九道峠の頂上から遥か下方に見える山道を覗き込む。

中腹辺りには、百人余りの兵がいつでも山道へ掛け下りる体勢が出来上がっていた。

「三姉妹どもが下に見える〝轟の滝〟前を通りかかった時がその時だ。狼煙を上げて河原側で待機する川崎八兵衛殿へ掛け上がる時合をお伝えせよ！」

「はっ！　承知致しました！」

緊迫する時間が過ぎてゆく中、三姉妹たちはある作戦を考えていた。
ある程度敵を斬り殺してから性奴隷たち三人を楽して庇う方法である。
発案者のミカが誇らしげに胸を張るが、肝心の煙幕弾を持っているのは長女のリオだった。
「なかなかいい作戦でしょ？　リオねーちゃん」
「ミカにしては上出来上出来！　その時は私に任せて」

――轟の滝前河川敷。

「三姉妹はぬけぬけとこの峠へ向かっているそうだな。命知らずなのかただの馬鹿なのか……後は山側に控えている豊田殿の狼煙を待つだけだな……」
「はっ！　しかし本当に鉄砲隊での射撃は遂行されまするか？　下り降りてくる豊田七兵衛殿の兵にも死者が出ますぞ？」
「構わぬ！　豊田殿へは後で詫びを入れる。これは春日井長政殿の命令なのだ。我らが川崎鉄砲隊は東国でも有数の精鋭部隊であるからな。大役を任させて当然なのだ」
「御意！　完全に三姉妹もこれで終わりですな。十人の三例構えで

ある我らが三十人の鉄砲隊から一斉射撃を食らっては流石の剣術を持ってしても歯が立ちますまい」

同士討ちを想定しながらも長政の指令を実行する心構えの川崎七兵衛だったが、事態は思いもよらぬ方向へ向かい始めるのだった。

『ガラガラガラガラ………』

五九道峠を西に進む三姉妹と性奴隷たちの六人の後を、被り笠でほぼ顔を覆い隠した二人が大きな荷車を押しながら近付いてくる。殺気というより血の匂いを感じ取った三姉妹が足を止めた。

「あうあう〜。うううう━！」

斜め上を見ながら歩いていた剛力三四郎も背後の異様な気配を感じ取り、足を止めて振り向いた。

「こら三四郎！　振り向かないの！　みんなもそのまま歩き続けてくれる？」

「あうあう……」

言ってることはだいたい理解できるらしい三四郎は、リオに小声で注意されてすぐに前を向き直して歩き出した。

「この気配はただ者じゃないですわね」

「おねーちゃんたちも気付いてたんだ……リオねーちゃん！　あたしが後ろの奴らの正体確かめてていい？」

銘刀紫龍の柄をゆっくり握りしめながら、親指の付け根を鍔に密着させて抜刀体勢を整えるミカであったが、そのまま何も答えないまま歩き続ける長女のリオ。

歩みを速めるが、追従して後ろの二人も速くなる。

しびれを切らしたミカが振り向こうと横を向いた瞬間、同時に真横に出てきてかなり驚かされるが、そのまま荷車をガラガラと鳴らしながら追い越してゆく二人。

「ちょっと待って！」

驚かされたことに少し頭にきたミカが被り笠の二人に静止を求める。

ゆっくりと静止しながらこちらを向くが、目も鼻も笠に隠れていて未だに風貌が読み取れない。

「何者なのかご存知ありませんけどそんな大きぃお荷物を積んでどちらまでいかれるのでしょうかぁ？　この先はちょっとした合戦場になる予定ですの……引き返された方が身のためですわよ？」

「？　女？　あなたたち女だよね？　忍なの？　答えなさい！」

リオも堪らずに問い掛けてしまうが、しばらく沈黙した女らしい二人の内、一人が笑い始める。

「あはははははっ！　熱い方々やんなぁ相変わらず。ウチらはただ荷車押して歩いてるだけやで……」

どこかで聞いた話し方と声に、三姉妹は一気に緊張が解けるのを感じた。

「あれ……その声は……！？」

ゆっくりと被り笠を脱ぐと、かなり懐かしい顔が現れた。

「あはは！　声とゆうより話し方の方が気になるやろ普通？」

「楓（かえで）ねーちゃん！！」

元々敵として戦ったが、長女のリオを倒した後、止めを刺さずに見逃してくれた“姉の命の恩人”とまで感謝していたミカは、なりふり構わず楓に抱き付いた。

「おっとっと！　痛たたっ！　そんな強く抱き締められたら痛いがなミカはん……あんたは最強なんやから……元気そうで良かったわ三姉妹と性奴隷の童子の二人……あれ？　この両手のないゴツそうなお兄さんはどないしたん？」

「私の性奴隷の剛力三四郎さんですわ。妹さんを目の前で私たちに殺されて、更に両手までもを奪われて……でも生きたいと願ってるようでしたのでこうして連れて旅してるわけですわ。ほら挨拶なさって！　三四郎さん」

「うほっ！　ほほほうっ！」

呆けた外見にまともに話せない様子を見ながらしばらく興味深そうに観察を続ける楓。

「ちょっと変わってはるなぁ。よう分からんけど……こんな大人の男まで性奴隷にするとはさすが鬼畜三姉妹やね……」

「残虐三姉妹とは呼ばれてるみたいだけど……鬼畜三姉妹なんて初めて呼ばれたよ。そちらの方は？」

リオが楓の“連れ”にそっと目をやる。

「この子は“茜(あかね)”って言うんや。ウチが数日前立ち寄った村で山賊に犯されてた所を助けたら、『一緒に付いて行きたい』とゆうもんやから。こう見えてもかなり力は強いから重いもんを運んだりするのに助かると思ってなぁ」

被り笠を取らないまま深く頭を下げて三姉妹たちに挨拶する茜。
このタイミングで最も気になっていた事を確認するミカ。

「その簑で覆い尽くしている荷車には何が乗ってるの？」

「ああこれな。ある大名の奥方様やで」

リオたちは一瞬言っていることの意味が理解できず、固まってしまう。

「…………奥方様？　ええっ！？　生きてる人間を運んでらっしゃいますのっ！？」

アスカが真っ先に口を開いた。

「ううう……うう」

簑の下から微かに女性の声が聞こえてくる。

「ここまで来たらもう騒ぎにもならんし、ぼちぼち出てくる？　お七様？」

簑がガサガサと動いたと思えば、白い腕がヌッと飛び出してくる。

これには性奴隷の童子である志乃と勇太郎が声を上げて飛び上がった。

説明を受けた瞬間だったので、心の準備が出来てなかったみたいである。

楓と茜も手伝い、全ての簑を取り払うと、齢３０くらいの品格高そうな女性がゆっくりと両足を地面に着けて立ち上がった。

「無理を聞いて頂きありがとうございます。もう戦場に着くのですか？」

髪を留めもしないで、黒い長髪をなびかせながら村人が普通に着用する全く似合わない衣服で楓に問い掛けてくる。

顔だけが品格ある大名の奥方で、髪型も衣服も村人そのもので、かなりの違和感を醸し出している。

「そうやね。後少し山道を歩けばもう戦場に辿り着くで」

「そうですか。八兵衛……私の気性を存じている筈なのですが……あの方のお恥ずかしい行為をどうあっても阻止したく思ってございます。本当にありがとうございます楓さんに茜さん」

「ちょっと待って！　八兵衛って……これから私たちが戦う川崎八兵衛のことよね！？　まさかその奥さん！？」

「せやな。川崎八兵衛に嫁入りする前は、ウチの剣術の師匠……二刀流本宮勝蔵の姪にあたる人で、遥か東の国の大商人の一人娘だったらしいわ。修行中も度々師匠に土産持って遊びに来たりしてたんや」

「道理で二刀流の道場開いて弟子なんか取らなくても、山奥の小屋で剣術だけ磨いて生活できる筈ですわねぇ。納得ですわ」

アスカも少しずつ点と線が繋がってきていた。
後少し聞かなければならないことがある。
それはリオが問い掛けた。

「どうやって大名屋敷から逃げ出せたの？　大戦を前にした大名の奥さんなんて……殆ど人質みたいに監禁されてるようなものじゃないの？」

商人風に着こんだ服を脱ぎ始めるお七。
スルスルと恥ずかしげもなく寸刻で全裸になってしまった。

「な、なにしてるのっ！？」

「うほっ　うほほほほおっ！！」

慌てて問い掛けるリオに続いて両手首から先のない三四郎が大きく口を開けて顔を真っ赤にしている。
綺麗な女性の裸を見て普通の男並に興奮しているようだった。

『ぎゅっ！！』

「はうおおおっ！？」

いきなりアスカにいきり勃ったイチモツを鷲掴みにされ、一瞬飛び上がる三四郎。

「私以外の女性でイチモツをお勃てになられるとは大変度胸がおありですわね？　三四郎さん……逃げ出してはいませんけどそんな変態はタマタマ一つずつ潰して差し上げましょうか？」

イチモツの次は睾丸に狙いを変更し、強烈に握り絞めてゆくアスカ。

「ほうっ！？　はううあうっ！！」

大粒の涙を溢しながらアスカに土下座して許しを乞う姿を見れば、性奴隷としてすでに酷い責めを受けていることが窺えた。

「今宵も三四郎さんが一番泣いて失神までしちゃった菊門責めをやらせて頂きますからお覚悟してなさってね？　しばらく排便出来なくなるほど肛門を傷め付けて差しあげますから便は夜までに済ませて置いてくださいねぇ？」

「ううあああぁっ！　うおおおおんっ！！」

顔をグシャグシャにして号泣する三四郎。
よほど凄惨な肛門責めをされた経験があるのだろう。
同情している暇もないリオは、再度お七に答えを求めた。

「あの方が私の父の出している呉服屋へやってこられた時、色々と説明をさせて頂いてるうちにあの方は私をおきに召してくださいました。話を聞けば聞く程に男らしい義理と人情をお持ちになる方だと……私もどんどん惹かれてゆきました」

「そんなカッコいい人が一体何をやらしかしたの？」

お七が素っ裸になってしまっている理由よりも、先に聞きたいことを優先してしまったリオは、真っ白な長く伸びた脚をチラチラ見ながらも話を進めてゆく。

「これから〝やらかそう〟としているのです」

キッと五九道峠の先を睨み付けながら力強く言い放つお七。

三姉妹征伐がうまくいかない春日井長政が怒り心頭の余り、かなり強引で無慈悲な同士討ちも厭わない手段を選んだこと……それをまさかの実行に移そうとしている主がこの先に待機していること……お七はその全容をリオたちに語った。

「なるほどね。だいたいわかった。大名屋敷から逃げ出せたのもそうゆう人柄だから協力者がたくさんいたわけか……でもどうして……」

「お姉ちゃんどうして裸になってるの？」

その場にいる殆どが思う疑問を、問い掛けかけたリオを遮り志乃が唐突に切り出す。

「すみません、お嬢さんたちのような幼い童子たちもいる前で……私が大衆の前で恥をかくことで、あの方が羞恥心を味わってもらえたら少しは目が覚めるかと思ったのです。少なくとも鉄砲隊を使うことは出来なくなる筈です」

「鉄砲隊なんて……反対側から同時に豊田の兵と挟撃するつもりなのにそんなことしたら味方も確実に数人死んじゃいますわよねぇ。

ほんと何とお冷たい作戦ですこと……」

「残虐三姉妹のあたしたちも山賊とかの悪者以外は滅多に殺さないのにねー」

アスカとミカも呆れ気味にぼやいた。
周囲の目を誤魔化す必要もない場所まで来ているため、全員で荷車を捨てて歩いて進みはじめた。

——川崎八兵衛布陣の轟の滝前。

「狼煙が上がりました！　豊田殿の兵たちが掛け降りて来るのが見えます！」

「うむ！　鉄砲隊を前へ！　上方へ見える山道へ向けて狙いを定めよ！　火縄を点火っ！」

木々の隙間から数十間(すうじゅっけん)先の上方の山道を目を見開いて睨み付ける川崎八兵衛。
リオたちが通りかかると同時に右手を振り上げた。

「構ええええっ！！」

一斉に十人の鉄砲部隊が斜め上方向へ銃口を向ける。
火縄の点火も終えているためいつでも発砲できる状態だ。
三姉妹に続いて何やら白くて美しく見覚えのある姿が目に入る。
「撃て……てってってっ！　しっ、しばし待てええっ！！」
号令を思わず発してしまうが慌てて訂正する川崎八兵衛。
「え？」
「は？」
鉄砲部隊が川崎の号令を確認するかのように、不思議そうな表情で振り返る。
「あれはっ！？　川崎殿の奥方ではありませぬかっ！？」
「ぬぬぬっ！？　佐吉よ……お主の目にもそう映ったか？　何故(なにゆえ)あんな果したなき姿でこんな場所に……うぬぬぬっ」
川崎八兵衛の長年の側近である三好佐吉も、真っ白な長い顎髭を震わせながら目を見開いて驚愕していた。

「はっ！　某の目は鷹の目と呼ばれるほど優れてござりまする。紛れもなくあれに見えまするは素っ裸のお七様にござりまする！」

そうしている間に山岳部から雄叫びを上げながら掛け降りて来る豊田軍。

「うおおおおおおっ！！」

「おおおおおおっ！！」

裸の女性がいることに驚きながらも、全員生かしておいてはならない令を受けていた豊田の兵たちは、容赦なくリオたちを目指して槍と刀で襲いかかってきた。

「予定どおり鉄砲撃って来ないね。じゃあ楽勝楽勝っ！　リオねーちゃんに、アスカねーちゃん。派手にやらせてもらおーねっ！」

「とにかく目先の敵をやるしかないもんね！　いっちょ暴れようか」

「全滅させて頂きますので豊田兵の皆様、ご容赦下さいませ〜♪」

三姉妹は一斉に銘刀紫龍を抜くと、川崎八兵衛の奥方であるお七と、楓の連れてきた茜、奴隷の三四郎と勇太郎と志乃に背を向け、五人を取り囲むようにして庇いつつ、近付いてくる兵を一人一人確

実に斬り倒してゆく。
鎧等は簡単には斬れないため、止めは甲冑の隙間から的確に刀を突き入れ、心臓や内臓等へ致命傷を与えてゆく。

「ウチも助太刀させてもらうわ！」

三姉妹の戦い方を少し静観していた楓も二本の刀を抜刀し、下段構えから豊田兵に斬りかかった。

「下手にかわしたら後ろが殺られちゃうから槍攻撃はかわしながら真っ二つに斬るのよアスカ」

「はーいお姉様。仰せのままに。ミカちゃんは心配ないですわねぇ？……って、凄い速さでバタバタ倒してますのねっ！？　怖い怖い……」

「ミカの心配は要らないから背後の人たちを守ることだけに専念してアスカッ！！」

「はーい」

しばらく斬り合いが続く中、山岳部に控える豊田七兵衛は憤慨している。

「おのれ三姉妹めっ！　鬼神のような強さではないか……川崎殿は

何をされておるのだっ！？　まだ兵が掛け上がって来ないではないかっ！？」

「申し上げます！　轟の滝付近で布陣中の川崎殿の兵たちは、総員撤退を始めた模様にござりまするっ！」

「なっ、何だとっ！？　鉄砲隊だけではなく槍使いの猛者も数多くおった筈の川崎殿が……まさか」

まさかの我の奥方、お七の出現に度肝を抜かれ、かといって敵である三姉妹たちとお七たちを守って豊田軍と戦う訳にもいかない川崎八兵衛のとった苦肉の策は……戦線離脱であった。

「お七……ワシはお前を失いとうない……かといって豊田殿に刀を向けることも出来ない……どうか無事でいてくれ……。三姉妹が追ってきた場合には殿をしっかり頼むぞっ！」

蜘蛛の子散らしたように全速力で撤退する川崎隊を見ながらミカはガッカリしていた。

リオとアスカは百人斬りが無くなったことに安堵の色を隠せない。斬り殺すのは大好きでも疲れるのも嫌だった。

敵の頭数が減ったので、抑えていた力を解放するかの如く、敵兵を斬り殺す速度を上げる三姉妹。

みるみる内に斬り倒してゆき、ついに全てを斬り伏せた。

静まり返る峠の山道。

「結局煙幕弾の出番なんてなかったね。リオねーちゃん、川崎八兵衛には逃げられたけどこの山の上にいる筈の豊田七兵衛には死んでもらっちゃう？　あたしだけでちょこっと登って殺って来ようか？」

そう言いながら三女のミカが銘刀紫龍を思いっきり斜め下に振り下ろすと、地面にビシャビシャと振り落とされる兵たちの鮮血。

「………その必要はないみたいよ」

「そうですわね。逃げも隠れもしない潔い方ですこと。川崎八兵衛とは全く違う本物の漢（おとこ）ですわねぇ」

リオに続いてアスカも呟いた。

ゆっくりと山頂へ続く獣道から山道へ降りて来る者がいた。

豊田七兵衛と側近の男である。

側近といってもまだ１６歳ほどの一見女に見間違うほどの美形な顔をしている。

「山の上から目を細めて拝見させてもらっていたぞ。残虐三姉妹……まだまだうら若き少女ではないか……」

「殿、見た目はか弱そうな女子でも殺気が桁外れです。この三姉妹と二刀流の女は真の殺戮者たちです」

「言われなくても分かっている。見た目と余りにも違うのでそこに驚いたまでよ。ワシはのう……そなたらに頼みがあるのだが……」

側近の少年から由緒ある刀鍛冶が打ったと思われる派手な装飾のある刀を受けとると、ゆっくり鞘から引き抜いた。

「言わんでも分かるで。サシでウチらと仕合いたいんやろ？」

「ほう。やはり武器を鞘から抜きながらだと簡単に悟られるか。はっはっはっ！」

「死にゆく者とは思えない甲高い笑い声だね？　可哀想だけどあんたにはここで死んでもらうから。好きな相手を選んでいいよ？」

刀の血を紙で拭いながらミカがそっと囁いた。

ゆっくり指差す豊田七兵衛だった。
だがその先には…………。
お七がいた。

「ちょ、ちょっと！　あなたバカ！？　何をスケベ面して素っ裸の女性を指名してんの！？」

顔を真っ赤にして本気で怒るミカを見て爆笑する豊田七兵衛だっ

たが、周りは誰一人笑っていない。
死を悟った武将の、人生最期の傾奇（かぶき）だったようだ。
「言っとくがワシは強いぞ」
「そうなんだ。良かったわね。じゃあ早く相手を選んでもらえる？」
リオが優しく問い掛ける。
少し微笑んでから、側近の少年に振り返り、語り掛ける川崎。
「ワシがもし倒されたら首を取って西軍の総大将の石立睦成にでも持ち込むが良い。お主はそこで幸せに暮らせ。良いな？」
「私も三途の川までお供致します」
「ワシはそなたが妻よりも好きじゃった。戦場で抱いた時には本当に興奮したぞ。急がずともいつか年老いてから天に召されてからゆっくりワシの所へ来れば良い」
「はい。私も殿に抱かれている時間が最も幸せでした」
ミカが顔を赤くして素早く反応する。
「えっ！？　美形と言っても男同士なのに……しかも戦場で抱きし

めあうって！？　あんたら変態だーっ！　きゃーっ！」

「ミカ……あのね……戦場に女は縁起が悪いから連れて行けないの。だから替わりに幼い男子を連れていって……それは当たり前のことなのよ？　変態は女のくせに幼女が好きなあんたの方だよ！」

「えええええっ！？　あたしが一気に変態者扱いなのっ！？　ぐすん……」

色々とお取り込み中だったたが、素っ裸でいる必要のなくなったことに今頃気付いたお七が、ようやく服を着始めた。

「お主だ。ミカとかゆう……ワシの相手をしてくれるか？」

「はーい。あたしで良ければ……それと大変申し訳ないんだけど一つだけ言わせてもらってもいいかな？」

「なんじゃ？」

「その女みたいな可愛い顔した側近の男子も殺しちゃうから……西軍統括国に辿り着くことは出来ないよ？　側近の首とあんたの首は曝したりせずに仲良く一緒にこの場所に埋めてあげるから安心して死んで」

「むむむ……それは無念……じゃが万が一このワシがお主だけでも倒したら……この小姓、天羽秋吉だけでも生かしてやってはくれぬか？　前の側近が病死したから急遽替わりに側近の世話をしてもらっておっただけなのだ。まだ若すぎるただの小姓を死なすには酷す

ぎる」

「うん。約束するよ」

血を振り飛ばして紙で拭いてまで鞘に納めた銘刀紫龍をもう一度ゆっくりと引き抜くミカ。

「ワシだけ甲冑着けては戦えぬな……しばし待たれよ」

漢らしく纏っていた甲冑類を全て脱ぎ去り、同等の軽装となる豊田。お互いが中段に構えて睨み合う。

「いつでも良いよ」

「うむ！　友に裏切られた無念の怒り……申し訳ないがお主にぶつけさせてもらうぞ？」

「とばっちりだよねそれって……まぁいいけど」

一瞬口角を上げて微笑んだと思った刹那、猛烈な速さで斬りかかる豊田七兵衛。

かなり驚きながらもヒラヒラとかわすミカ。

連続で斬りかかる勢いが止まらない。

思わず受け太刀しそうになるが辛うじてかわし続ける。

「はぁ。はぁ。流石だな……このワシの刀捌きでも受け太刀すらしてはもらえぬのか……。上から見てた所、お主が一番強そうだったのでな。やはり正解だったか……はぁ。はぁ」

「死亡率一番高いこと分かっててあたしを選んだの？　でもね、リオねーちゃんたちも変わらないくらい強いよ？」

「まぁどの道ワシが倒せないことには変わりないからどうでもいい。最期の力、振り絞って……いくぞ？」

「どうぞ」

再び激しい連続攻撃が繰り出されるが、全てをかわされ遂に限界を迎えた豊田は膝をついて座り込んだ。

派手な装飾のある気高そうな豊田所有の刀を手から奪い取り、目の前に落とした。

『ガシャッ……』

「……はぁ。はぁ。ワシの刀？　どうゆうつもりだ？」

「あんたカッコいいから自分で腹を斬らせてあげる」

「なんだと！？」

「あたし知ってるよ。武士の立派な死に様は切腹だって。処刑とかで動けないままで斬首とかされるのは惨めな死にかただって……」

周りは固唾を飲んで見守っている。

静かな刻が流れるが、川崎八兵衛の激しい息使いだけが響いていた。

側近の男子は、唇を噛んで涙を流しながら豊田を見詰めて震えている。

泣くのを必死で堪えている様子だ。

泣きたい気持ちは、自らの死への恐怖ではなく、主(あるじ)の死期が目前に迫っていることに対してである。

「わっはっはっはっ！　誠に有り難いがワシの人生の締め括りは合戦でと決めてるんでな……もう息も整った！　今度こそ決着を着けようぞ！」

「ふぅん。そうきたか。分かった！　じゃあ今度はきちんと反撃するね？　人生最期の相手にあたしを選んでくれてありがとね」

「うむ。ゆくぞ……うおおおおおっ！！」

連続攻撃ではなく、渾身の一撃を放つ。

袈裟斬りを斜め下にかわし、懐へ素早く潜り込むミカ。

『ズッ……ズズズ』

「がはあっ！！」

派手な音を立てながら刀を落とす豊田の腹部には、ミカの銘刀紫龍が腸を数枚も貫通している。

更に力を込めて捩じ込むと、背後から背骨を避けて刃先が飛び出した。

腸どころか胴体までも串刺しとなる。

「ごほっ！　ぶはあっ！！…………」

『ドボドボ……ぶしゅううううっ！！』

口から傷口から一気に血が噴き出す。

ミカは一気に引き抜き、横に強烈な一閃を振り付ける。

瞬時に首が切断され、ポトリと足元へ落ちた。

噴水のような鮮血を切断面から噴き出しながらドサリと倒れ込む豊田七兵衛。

「お見事やなミカはん。今の一閃は全く見えんかったわ」

軽く手を叩く二刀流の楓。

隣で茜は両手を合わせて拝んでいる。

「志乃っ！　豊田七兵衛のチンポを剥ぎ取りなさいっ！」

「え！？　ええっ！？　こんな男らしい人のチンポを剥ぎ取るのは嫌だっ！……嫌です」

いきなりリオに命令されて動揺している志乃を引き寄せ、着物の下方の裾から手を入れて、下帯を剥ぎ取ると、人差し指を肛門へ一気に捩じ込む。

「痛いっ！！　やめて下さいっ！！」

「このまま肛門引き裂いてマンコと繋げてやるからね？」

「ひいっ！？　ごめんなさいリオ様っ！！　すぐにチンポ剥ぎ取りますっ！！」

短刀で手際よく着物を切り取り、下帯も断ち切り、かなり大きな陰茎を左手で引っ張り出す。

「こ、こんな大きなチンポは初めてだ……ごめんなさいね」

『ズッ……ザクザク……スパッ！』

右手の短刀で根元から巨大な陰茎を切り取り、リオの魚籠に入れる志乃だった。

「な、何てことをするのですっ！？　こんな漢らしい武将のそんな部分をそんな事するなんて……酷すぎますっ！！」

急に怒り始める川崎八兵衛の奥方。

「黙れ！　この大きな胸切り取るわよ？」

「ひいいっ！？　何てことを……やめ……」

商人風の服の裾から手を入れて生の胸を両手で二つとも揉みしだくリオ。

思いっきり千切れるほど乳首を爪で挟み込む。

「うぎいいいっ！！　痛いいいっ！！」

「ちょっとリオはんっ！　このお七様のお陰でウチらは鉄砲玉食らわずに済んだんやで？　その辺でやめとくんなはれっ！」

「それもそうだね。ごめんなさい」

顔を真っ赤にして恥ずかしそうに自分の胸を押さえて涙を流すお七。

ふとミカが下を見ると、若い美形の側近が首を斬ろうとしている。アスカが即座に刀を蹴り飛ばして、ギリギリ死なれずに済んだ。

「あんたには拷問を受けてから死んでもらうの。簡単には死なせないんだから……」

四つん這いで泣いている側近の服を短刀でスパスパと斬ってゆき、みるみる内に素っ裸に引き剥かれた。

「やめて……恥ずかしい……私は殿の元へ早く逝きたいのです！死なせて……」

泣き叫ぶ美男子を見ていると、興奮を抑えきれない次女のアスカが、足で何度も全身を蹴りつけ始めた。痛みで転がり回るが、お構い無しに踏んだり蹴ったりを繰り返す。

「うふふ。もっと泣いて下さるかしら？　もっと叫んで喚いて……可愛いオチンチンがプルンプルン揺れてますわよぉ？　うふふふふ♪」

『ドカッ！　ガツッ！　ゴンッ！　ズドオッ！！』

「痛いっ！　ひいっ！　んあっ！？　ぎゃあっ！！」

顔面までも蹴りまくられて女子のような美形が原型を止めなくなっていた。

「ほら、三四郎さん！　勃起させて頂けますぅ？」

そう言いながら三四郎の肛門を掻き回し、強引に勃起させると、四つん這いにさせた側近の男子の肛門を犯させる。

「あうう。うううううおおっ！」

「ほら三四郎さん、この方の菊門へイチモツを挿入して差し上げて」

「うほほほうっ！！」

『ずちゅっ！　バコバコバコバコッ！！』

「ぐわあああっ！！」

お七は男同士の肛門性交を見て意識を失って倒れ込んでしまっている。

散々腰を振り続けてドップリと中出しすると、アスカは三四郎を引き剥がし、今度は側近男子を仰向けに寝かせると、側近の陰茎を手でシゴき始めた。

「ほうら、人生最期の射精をさせたげますわ。こんな大勢に見られながら嬉しいでしょう？」

「あはっ！？　あうう。もう早く殺して……」

『シコシコシコシコ……』

「ダメです。早くお出しください」

茜は顔を真っ赤にしながらも美男子の陰茎がシゴかれている場面をじっと見詰めている。
楓は口を開けたまま……頬を真っ赤にして同じ様に見詰めている。
勇太郎と志乃は……童子なりに……かなり興奮しながら見詰めていた。

『ピュピュッ！……ドクドクドクドク』

「あらあら……勢いが弱い射精ですこと……お恥ずかしい」

アスカは呆れ気味に失笑を浮かべる。

「さっきまでこの山の上で戦でも見ながら豊田に抜かれたんでしょきっと。短期戦くらい性欲我慢しなさいってねほんと……」

リオも呆れながら雑兵が持っていた斧を拾い上げ、側近男子の右手を足で踏みつけて、肩口あたりに狙いを定める。

「リオはん、何するんや？　まさか？」

『ビュンッ！……ザクッ！！』

「ぎゃあああああっ！！」

リオの強烈な一撃は、瞬間的に上腕二頭筋と上腕三頭筋を真っ二つにした。

絶叫しながら反対側の手で切断された右腕を掴もうとするが、遥か後方へ蹴り飛ばした。

「はい、次は左手いくよ？」

「んぎいいいっ！！ひぎゃあああっ！！」

「一度自ら死を覚悟した男が泣き喚かないでくれるかな？　いくよぉ？　それっ！」

次も一撃で切断される左腕。

立ち上がることすら出来ずに転げ回る美男子の側近。

辺りは再び血の海になっていた。

意識を失っているお七を手首だけで抱き起こしながら心配する三四郎と一緒に、勇太郎と志乃も汗を拭いたりしてあげている。
意外と優しい性奴隷たちであった。

うつ伏せになりながら激痛に耐える側近男子の両足首を、斧で落としてゆくリオ。
そのまま手足の神経を深く突き刺し全身を痙攣させて動かなくさせると、大きな切り株に仰向けに縛り付けて止めの準備をする。
脚も邪魔だと判断して太股から斧で数十回切り付けて切断した。
厚目の布で手足の切断面をキツく縛り付けて、簡易な血止めを済ませてからの処刑執行である。

「志乃っ！まずは生きたままでいいからチンポを切断しなさい！」

「えっ！？　もうチンポを剥ぎ取るのは嫌ですっ！」

と言いながらそそくさと左手で側近美男子の雁首をきゅっと掴み、ビーンと上方へ引っ張る。
陰茎の皮がピーンと張った所で短刀をスッと真横に滑らせる志乃。
あっさりと美男子の陰茎は、９歳の女子によって切断された。
根元より半寸ほど上を切ってしまい、中途半端に残ってしまった。

「こらっ！　志乃っ！　切り株みたいになっちゃってんじゃんっ！男前のチンポに何てことすんのよっ！？」

志乃を叱りつけるミカだが、顔は笑っている。
極端に短いイチモツに見えて可笑しかったみたいである。
切断面からは激しく血が噴き出しているが、尿道の切断面からだけは透明の小便が勢いよく噴き出していた。

「おしっこ中なのにごめんなさい。もう一回切るからね？」

「ぐわあああああっ！！　ひいいいいっ！！」

ミカに頭を下げながら側近男子に謝り、もう一度下っ腹に沿って完全に根元から切断し直す。
陰毛も殆ど同時に切り取られてパラパラとヘソの上へ落ちる。
急いでリオの前に駆け寄り、魚籠に無惨な形になった陰部を入れる志乃。

落ちている槍を適度な長さに切って、アスカは側近の肛門へ切っ先をあてがう。
既に気が狂うほどにもがき苦しんで縛られたままで痙攣を激しく繰り返しているので、こと切れる寸前ではあるが、生きてる内の串刺しの反応が見たかったアスカは少し慌てていた。

「ほらほら、両手両足とオチンチン切り取られたくらいでまだまだ意識なくしちゃダメですわよぉ？　これをお口まで串刺しにするまでは死んじゃダメですからねぇ～？」

「うわあぁあっ！！　んぎいいいっ！！」

「元気なお悲鳴ですこと。いきますわよぉ？　そぉれっ♪」

『ツプ……ズズズ……』

「はううっ！？　ぎっひいいいいいいっ！！」

　グリグリと槍の柄を大きく掻き回しながら切っ先を肛門へ捩じ込んでゆくアスカ。

　激しく噴き出す肛門と直腸からの血飛沫を見事にかわしながらバリバリと腸を貫いてゆく。

　何度も骨に当たるが、その度に軌道修正しながら上の口を目指して貫いてゆく。

「うごっ！？　んごごごおっ！　ごぼおっ！！」

　痙攣が激しくなり、口から大量の血を噴く側近男子。

「うふふ。槍の切っ先が喉まで来ましたわよ？　痛いですか？　苦しいですか？」

「おおおおうっ！！　ごぼっ！！　うごおおおおっ！！」

「まだうら若き美男子が、四肢切断されて縛り付けられた上で串刺

しの刑だなんて……そそりますわ。ミカちゃん、まだ辛うじて息がある内に睾丸も潰しておきませんこと？」

「あちゃ～。アスカねーちゃん無茶苦茶残酷ぅ♪」

志乃から短刀を受け取ると、側近の傍らにしゃがみ込み、槍が突き刺さっている肛門上部の絵陰部へ差し込む。
ゆっくりと切断された陰茎方向へ陰嚢を切り開いてゆく。
ズルリと飛び出した二つの睾丸を両手で握り締めゆっくりと絞り込んでゆくミカ。
短く切断された太股を左右にパクパク開閉しながら今生最期の生き地獄を味わっている側近。

「生温かい生の金玉……そそるわねぇ。ぼちぼち潰れちゃうよ？　ほれほれ……」

時間をかけて二つの睾丸を握りつぶすと、更に力を込めて精管ごと引きちぎるミカ。

「がはあっ！？　ブクブクブクブク……」

「あはは。蟹みたいにすっごい泡噴いてる！　もう死んじゃうよコイツ……アスカねーちゃん早く早く！」

「うふふ♪　ありがとミカちゃん！　ではお待たせ美男子くん。止めにお口から大便まみれの切っ先を出して昇天しちゃってください

ねぇ～」

『ズドオッ！！　ばちゅっ！！』

思いっきり槍の根元を足の裏で蹴り込んで、とうとう槍の切っ先が美男子の口から大量の鮮血と共に飛び出した。

更に爪先をグリグリと肛門へ突き刺してゆく。

「ほらほらぁ。足まで突き刺さっちゃたですわよぉ？　くさぁーい♪」

「ごぼっ！！……がくんっ」

お七以外の、その場の者全員に死ぬ瞬間を見続けられた若くして側近となった天羽秋吉は……若くして豊田七兵衛の後を追った。
ようやく地獄の苦しみから解放された頃には、頭部はミカに切断され、屍はカラスや狼等に食べ尽くされる運命であった。
約束通り、大きく堀った穴に二人の頭部を入れて埋葬してやることで、豊田七兵衛と美男子の側近であった天羽秋吉の魂を供養するリオたち三姉妹であった。

拷問処刑人外伝……残虐三姉妹⑦（後書き）

過去に戦った楓が連れてきた豊田七兵衛の奥方、お七のお陰で、五九道峠での挟撃と待ち伏せを打破できた三姉妹は、春日井長政の自慢の猛将である豊田七兵衛の軍を壊滅させることに成功する。

逃げ出した川崎八兵衛を倒すため、春日井長政を追い詰めた後、西軍統治国へ辿り着きたい三姉妹たちの旅は、後少し続いてゆく。

拷問処刑人外伝……残虐三姉妹⑧（前書き）

東西分け目の大戦が遂に始まろうとしている。
三姉妹の目的は成し遂げられるのか？

――樽賀（たるが）の国、安川城。

東軍総大将であり、安川城城主。

2万5千の兵を抱え、5百万石の大大名である徳山家男は、既に齢75とゆう高齢である。

天下統一するまでは死んでも死にきれない思いで、遂に東軍5万と西軍5万の、総兵力約10万による大戦（おおいくさ）を決意するのであった。

「すべての東軍統治国大名への伝令はできておるか？　西方は明朝にも席ヶ原へ集結する！　出遅れるでないぞ？」

徳山家男の影の立役者である保野田影安（ほのだかげやす）へ問い掛ける。

かつての戦の勝利はほぼこの側近のお陰とも言えるほどの謀略者である。

東の国を統括出来たのもこの男の知略あってこそであった。

「はっ。総決戦予想地である中野国の席ヶ原は、敵である西軍の最前線である葛西城（かさいじょう）の領地でありますゆえ、慎重に兵を集結させる必要がございますが……明日の早朝には全軍間に合わすよう手配しておりまする」

「うむ。葛西城と言えば西軍最大勢力である３万の兵を抱える竹中（たけなか）善吉（ぜんきち）……奴は口は悪いが人望もあり、何と言っても３百万石の大大名じゃ。兵の統率も優れておると聞く。真っ先に春日井殿の川崎鉄砲隊で叩いておくべきじゃ」

「承知しております。敵側は中心部に竹中軍３万の兵を配置し、西軍側の地の利を生かして鶴翼の陣を敷くと思われます」

城下町を見下ろしながら眉間にシワを寄せる東軍総大将である徳山家男。

少し間をおいてそっと囁くように口を開いた。

「鶴翼の陣だと？……ほぼ同等の５万対５万のこの戦……屈強な鉄砲隊で優勢だと思っていたゆえに決意したものの……挟撃などされても本当に勝てるのか？」

「ははっ。既に東軍勝利の暁には１００万石の保証をあて、親族すべての命を保証する旨を北側にある東西へ伸びた鷹尾山（たかおざん）に布陣予定の小早原秀太郎（こばやばらひでたろう）に伝書を送っております」

「小早原と言えば１０万石前後の小大名……１００万石の餌には必ずや食らい付くであろうな」

「忍の報せに寄りますれば、東軍統治国にも小早原の血縁者がかなり流れ込んでおりますゆえ、親族たちの命も保証するという好条件でこの度の寝返り作戦に小早原秀太郎を選出した旨にござりまする」

「そうか。１０万石の数千の兵力とはいえ、鶴の左側の翼が折れた

ら形勢は一気に好転するであろう。でかした！　すべての指揮は任せたぞ！」

「ははっ！」

燻り続けていた国々だったが、遂に一つにまとまるための大戦が明朝にでも起きようとしていた。

大名たちはそれぞれの思いを胸に決戦場である席ヶ原へ集結しつつあった……。

――東野城。西の丸月下の間。

「遂に西軍との戦が始まるのでございますね？　この様子ですと明朝にでも？」

「うむ。前にも話したように十分な勝算があっての戦だ。我らが東軍は鉄砲隊の強さも去ることながら、団結力が違う。心配せずともよい」

「はい。勝利を信じております。戦のない平穏な世の為にも是非徳山様に勝利を……」

「そうだな。それと……」

春日井長政は、東野城西の丸の護衛の兵たちを見つめながら話し

ていたが、ゆっくりと振り向き正室である御鉢の方を向く。

「世間を騒がせておるお訪ね者たち……残虐三姉妹とか呼ばれておったか確か……今一番にワシの命を狙っておるはずだ。お主はここから三里ほど北にある寺へ行き、尼僧（にそう）になるがよい」

「…………」

しばらく答えずじっと長政の目を見据える御鉢の方。

絵にかいたような美形であるが、表情にはいつも物悲しげな雰囲気があった。

「私にこの城を出て行けとおっしゃるのですね？」

「うむ。此度の戦は物事の終わりではなく、すべての始まりなのだ。徳山殿の下で色々と試してみたいこともある」

ゆっくりと春日井長政の手を握り締めながら目の奥を覗き込む。何もかも見透かしたような澄んだ瞳に長政は一瞬たじろいだ。

「色々と邪魔な私は仰る通りにさせて頂きます」

「悪いがそうしてくれ。一段落すれば寺に顔を出す」

護衛の兵に両脇を守られながら西の丸を出て行く妻を目を細めて見守る長政。

「戦には勝てても……命は獲られる……あの三姉妹に。不安に揺れ動く心が顔に出ております」

目を見開いて御鉢の方の背中を見詰める長政に、更に言葉を続ける。

「長政様の命を奪ったら私はその三姉妹を決して許しません」

「は……はっはっはっ！　お主には参ったな！　そこまでワシの心中を読んでおったか！　心配するな。ワシとてただでは討たれんよ。成敗出来ずとも三人全てを道連れにしてやるわ。そなたは尼になってでも寿命を全うしてほしい。万が一が起こっても仇を取ろうなどとは頼むから考えないでくれ……」

春日井長政は、首を縦に振らない御鉢の方を見送った後、総勢1万2千の兵を引き連れて、席ヶ原を目指して東野城を出た。

主力戦力に任されている東軍方の中央部への布陣を敷くために。

その後方には東軍総大将である徳山家男が、本陣2万5千の兵を陣取る予定であった。

――――五九道峠(ごくどうとうげ)。

「はぁ。せっかく一里近く歩いて東野城寸前まで行ってたのに何で引き返すかなぁ」

ツインテールの髪を両手で扱きながら残酷三姉妹の三女であるミカがぼやいていた。

この五九道峠にて数日前、春日井長政の抱える猛将である豊田七兵衛を討ち取った三姉妹であったが、川崎八兵衛にはまんまと逃げられた。

今頃は無事に長政と共に席ヶ原へ向かっている頃だった。

「仕方ないでしょ！　私もここまで戦が早まるとは思って無かったから……長政を討つ前にまずは谷川勝利をやっつけとかないとね」

長女のリオは冷静に考慮し、狭い道幅である五九道峠にて確実に殺れる武将を先に殺っておこうとゆう判断に辿り着いたのであった。数日かけて西に進んだ道を、また東に引き戻すことには次女のアスカも不満はあった。

三姉妹たちの性奴隷である9歳の少女志乃と、１０歳の男子勇太郎と、二十歳の三四郎は商人っぽく変装させて東野城城下町の宿屋へ預けてきていた。

「お気持ちは分かりますけど東野城目前まで行ってたのにお引き返

しになるなんて……往復二里もあるのに。しかも性奴隷を置いてくるなんて……正気の沙汰じゃないですわお姉様ったら……」

「まぁまぁ。長政は護衛も強力だし簡単にはやれないけど谷川勝利ならわざわざ挟撃にもってこいのこの峠を通ってくれるらしいから……まさか私たちにこんなところで殺されるなんて夢にも思ってないんじゃない？　元々城からなかなか出ない大名だけに、やっと機会が訪れたって感じ。もう合戦が始まるんだからやることやるまでは性奴隷の責めは我慢してよ！」

　含み笑いを見せながらリオが気合いを見せる。

「城攻めってほんと怖いもんね。どっから矢とか鉛玉とか飛んでくるか分かんないし……」

　ミカも城攻めの難しさと恐ろしさは嫌と言うほど長女のリオから聞かされているだけに、これが機会だと納得した。

「ついでに東軍総大将の徳山家男もこの峠でやっつけちゃおうよ？」

　ミカが調子にのって続ける。

「谷川勝利の山谷城以東の諸大名は全て、水軍の船で席ヶ原の北東に位置する中野港へ何往復もしながら兵を移動してるみたい。五九

道峠を通る谷川勝利はある意味私たちに対する囮を買って出たみたいな感じだね」

リオの読みにある意味感心しながら次女のアスカも呆れ気味に話し出す。

「どんな理由があっても徳山殿も冷たいですわねぇ。谷川殿がこの峠を通って私たちに襲われている間は少なくとも他の東軍の大名は無事に席ヶ原に渡航できるとゆうわけか……私たちには船も持ってないし、どうしようもなかったですのにねぇ」

「とにかく挟撃ついでに谷川軍を全滅させちゃおうよリオねーちゃん！」

「そうだね。アスカもミカも千人斬りの覚悟は出来てる？」

長女のリオの確認に大きく返事をするアスカとミカ。

何も知らずに……ではなく恐らく全てを知った上で五九道峠に谷川勝利軍３千の兵が進軍してくるのであった。

山道から山側と川側の両側へ向けて槍隊を配置し、慎重にも慎重を重ねている。

静けさを一気に打破する派手な炸裂音が数回鳴り響いた。小さな煙幕弾が炸裂し、兵たちの緊張が高まり始める。

「ぐわあっ！！」

「ぐはっ！！」

白く霞む視界の中、バタバタと倒れてゆく谷川軍の兵たち。
長い列を形成しているので、三千人といえど谷川勝利を守る兵の数は限られていた。

「出たな残虐三姉妹……成敗してやる！」

春日井長政の影響でかなり剣術も修行した谷川勝利が直々に腰のものを抜いた。
十名の騎馬隊に守られていたが、既に辺りは血の海……煙幕弾の煙も薄らぎ、残虐三姉妹三女のミカが仁王立ちしているのが微かに見えてくる。

「格好いい黒毛の馬に乗ってるね？　分かっていると思うけどここから西へは行かせないよ」

「お主が残虐三姉妹か……西側と東側で我が兵たちをバタバタと斬り倒しておるのは姉たちじゃな？」

「どうして私が三女って分かったの？　凄いじゃん」

「一番ちっこいからのう……わしの相手はチビのお主でいいのじゃな？」

左手の親指で鍔をゆっくりと押し上げながら右手を柄にかけるミカ。

「あまりチビチビ言ってると男とはいえ無茶苦茶苛めちゃうからね？」

助けに入ろうとするそこそこ名のある武将や兵たちは、少しも谷川勝利に近付くことができないまま長女のリオと次女のアスカに斬り殺されてゆく。

三千の兵も既に千を切っていた。

「ワシの望みは東軍徳山殿の勝利！　お主たちはここで足止めさせてもらうぞ？　うおおおおっ！！」

そこそこの師範に稽古をつけてもらっているだけあって、なかなかの太刀筋であったが、闇柳生流暗殺剣を使うミカには足元にも及ばない。

ミカの銘刀紫龍は谷川勝利の右手首を瞬時に切り落とした。

派手な音を立てて刀が山道に落ちる。

握り締めていた手首より先の手と共に……。

「ぐわあああっ!?　ふんぬううううつっ！！」

人生初の余りにも超絶な激痛に対し、絶叫しか出せない谷川勝利。
左手で切断面を押さえながら狂ったように叫び続けている。
ゆっくりと近付きながら切っ先を喉元にあてがうミカ。

「うるさいなぁ。これだけ派手に泣くのはあんたが初めてだよ……意気地無し！　今楽にしてあげるね？」

大きく振りかぶり、首を切断しようとした刹那、高速で飛来する何かに気付いて慌てながらも的確に刀で弾いた。

『キンッ！……カッ！！』

「なっ！？」

ミカの弾いた三方手裏剣が近くの木に深く突き刺さる。
まともに食らっていれば危ない所だった。
体勢を崩しながらも慌てて手裏剣の放たれたであろう杉の木を睨み付ける。

「誰っ！？」

辺りに木の葉が数枚舞ったと思った瞬間、激しく斬りつけてくる二つの刀。

『キンキンキンキンッ！！』

余りの速さについ受け太刀してしまうミカ。

数度の攻撃を全て受け終わったのち、敵を確認するが、一瞬全身が固まるのを覚えた。

「か、楓ねーちゃんっ！？」

数日前会ったときとは別人のように鋭い眼光でミカを睨み付ける二刀流の楓の姿があった。

「ミカはん……ウチはこの谷川殿の元でずっと世話になっていたんや。命にかえても殺させへんで」

「え？　あっ、そうなんだ！　そう言えばそうだったような……」

動揺しているミカに対し、更に熱く語り出す楓。

「東が勝とうが西が勝とうが知ったこっちゃあらへん。せやけどこの谷川殿だけは守ってみせるで。……もし無理でもせめて守るために戦って死にたいわ。一度は裏切って放浪してたけど……やっぱ見

捨てられへん。ん？」

半泣きになりながら語る楓だったが、相手のミカが視界から消えていた。

「リオねーちゃんっ！！　ちょっと聞いて！！」

「え？　まだ敵が百人近く残ってるんだから聞いてる場合じゃないって！　甲冑の隙間から止め刺し込むのって結構疲れるのよっ！？」

「谷川勝利を殺さないでっ！！」

「え？　この襲撃はそれが目的でしょうが！？　何をとち狂ってるのミカ！？」

楓のことを話して全てを承諾したリオは、反対側で戦っているアスカにもその旨を伝えるようミカに言った。

しばらくして遂に三人がかりで三千余りの兵を殲滅させることに成功する三姉妹。

谷川勝利を庇うように立っている楓を取り囲むように三姉妹が近付いた。

「楓さん、あなたは私を助けてくれたから……アスカもミカもあなたの言う通りにするよ」

「ほ、ホンマ!?　せやけど谷川殿の命がこの度の最大の目的なんちゃうの!?」

冷静に会話を進める四人に対し、一人激痛に絶叫をあげている谷川勝利は、左手で短刀を抜き、切っ先を我の首へ向けて叫ぶ。

「ぐおおおおっ!!　我が兵が全滅したとゆうのにワシだけ生き残れるかあああっ!!　愚弄するにもほどがあるぞお前らあああああっ!!」

頸動脈を断ち切り、凄まじい血飛沫をあげながら息絶える山谷城城主、谷川勝利であった。

「せっかく殺さないであげようとしたのにね」

細い切れ長の目を更に細くして長女のリオが囁いた。
次女のアスカも続く。

「お侍ってこんなものなんでしょうねぇ。命より誇り……敵ながら天晴(あっぱ)れとはこうゆう時に言うのでしょうか……」

世話になった大名の見開いた目を、そっと閉じてあげてから立ち上がる楓。

ミカは何も言わず楓に抱きついた。

「ちょ、ちょっとミカはん……やめとくんなはれ」

寂しそうな表情で胸元で楓を見上げるミカに、更に楓は冷たく言い放つ。

「ウチの愛した左近殿を弄んで惨殺したあんたのことは……ウチは一生忘れへんから。大切なトコまで切り取ってわざわざウチの目の前に落とした事もな……」

三姉妹と楓との死闘の後、あれだけ仲良く接してきたのに、まさかの根深い楓の想いに胸が冷たくなるのを感じるミカだった。

「そ、それは……ご……ごめんなさい」

「あの戦いの時は……自分の命が助かった事に安堵したウチは、左近殿の死を深く受け入れられなかったんや。果たし合いで負けたんやから仕方ないと思いながらも……最近よく左近殿が夢に出て来てなぁ」

うつむきながら何も言えずにただ楓の愚痴を聞いているミカ。

「ゴメンなぁ。仕方ないのは分かってるけど一度ミカはんに文句言わんとおれんかったわ……気にせんといて。ウチはこれから戦が終わるまで山谷城で待ってくれてる茜（あかね）と共に、谷川殿のお身内を御守りするわ。この戦乱に漬け込んで山賊たちがまたわんさか増えてるらしいからなぁ」

「うん」

ミカから目をそらした後、リオの目をじっと見つめる楓。

「リオはんたちは早く卑怯者の川崎八兵衛をイテ込まして春日井長政もボコボコにしてやってくんなはれや。石立睦成殿に忠義を示してきたらええ。谷川殿を囮に使うような東軍はウチはどうでもええからもう……」

何か重々しい雰囲気のまま楓と別れて再び西へ向いて歩き出す三姉妹。

普段やんちゃなミカが元気を無くしていたので、リオとアスカが必死で慰めるように冗談を混じえながら話し掛けるが全く相手にされなかった。

しばらくは、とぼとぼと沈黙したまま歩いてゆく三姉妹であった。

席ヶ原にて春日井長政と川崎八兵衛をどうやって討ち取るか……試行錯誤を重ねるがなかなか良い案が浮かばないまま夜の帳が降りてくる。

暗闇をハッキリ照らすほどの満月が頭上に見えてきた頃に、忍の気配を感じてふと立ち止まる三人。

「敵ですか？」

「いや、この匂いは……楓ねーちゃんの仲間だよ」

警戒するアスカにミカが安心するよう嗜める。

「些細な情報とは思いますが……東野城城主、春日井長政の正室、御鉢の方が三里ほど北にある北願寺(ほくがんじ)へ入った模様です。始末すれば東軍の要である武将の士気が下げられますかと……」

それだけ伝えると、忍は闇夜の中へ消えていった。

「明朝の合戦にまではまだまだ時間があるから行こう」

長女のリオが満月を見上げながら呟く。

「僧まで皆殺しにするのですか？」

寺の僧たちを殺すことに抵抗を感じた次女のアスカが問い掛ける。

「逃げる者と寝た振りしてる者は殺しちゃダメ。御鉢の方を守ろうと挑んでくるものはどんどん殺っちゃっていいよ」
「今は志乃たち性奴隷がいないから鬱憤溜まってたんだ！　残酷に殺しまくってやるぞぉ～！」

月明かりの下、進路を北に変えて、春日井長政の正室を屠るために胸を昂らせる三姉妹。
どんどんと北願寺へ近付いてゆく。
そうとも知らずに僧たちから手厚い歓迎を受けて、温かい夕食を済ませた御鉢の方は、本堂にて教えてもらったばかりの経を読んでいた。

激しく門が開く音がしたと思った瞬間、僧たちは大騒ぎになった。

「キャー！」
「うわああっ！！　逃げろーっ！！」
「武器を持てっ！！　戦うんだっ！！」
僧でも比較的若い男たちは竹槍を持って三姉妹に抵抗を見せる。
正義感が強いのか１０歳前後の子供たちまでもが竹槍を持って突いてきた。

老若男女関係なく勇敢な者は勇敢であり、逃げる者は逃げた。
児童虐待の性癖がある残虐三姉妹からしてみれば、涎が出るほど好都合である。
リオの決めた規則は女子供関係なしに掛かってくる者全て惨殺できるものだったからである。
成年の男から優先的に斬り殺していき、みるみる内に辺りは血の海に染まっていった。
「わあああんっ！！　死んじゃ嫌だあぁっ！！　お父ちゃんっ！！」
父親を目の前でアスカに斬り殺された１０歳くらいの男の子が泣きじゃくる傍らで、３０歳くらいの母親が怒りの形相を露にして竹槍で突いてくる。
「あらあら……そんな武器で私たちを倒そうなどと本気でお考えなのですかぁ？　大人しく逃げて頂けたら山賊以外殺しませんのにねぇ。うふふ」
突く度にスパスパと切断していき、遂に十寸ほどの竹になってしまった。
アスカは銘刀紫龍を父親の着物で拭き取り、鞘に納めると、素手で母親を殴り付けた。
奇声をあげて倒れ込む母親に馬乗りになり数十回殴り付けると、

前歯は二本折れ、唇は裂け、瞼と頬は腫れ上がり、もはや原型を止めなくなってしまった。

１０歳くらいの息子が、ボコボコに殴られて泣き叫ぶ母親を助けようとアスカの背中や膝をポンポンと両手で叩き付けてくる。

「痛いですわねぇボク……私たちに敵意を見せたらみんな殺しちゃうんですよぉ？」

「やっ！　やめてっ！！　私を殺しても構わないから末吉だけは許してやってええっ！！」

「それじゃあ今からあなたの拷問を始めますわ。それを最期まで泣かずに静観することができたら末吉くんは助けてさしあげますわ」

「あ、ありがとうございます！　末吉っ！！　私がどんな目に遭おうと絶対泣いちゃダメだよっ！！　黙って見てるの！　良い子だから母さんの最期のお願い聞いてね……しくしく……」

運が良ければ息子は助かる。でも自分が死ぬことになれば結局もう二度と息子と過ごせない。

どう転んでも今生の別れになると思えば涙が止まらなくなる母親であった。

そんな哀れな女を鼻にも掛けず鼻歌を歌いながら淡々と衣服を脱がしてゆく次女のアスカ。

「アスカねーちゃん！　面白そうなことやってるじゃん？　息子に母親の裸見せつけちゃうなんて」

全身浅い刀傷だらけで血塗れである１４歳ほどの少年の手を引っ張って連れてくる三女のミカが隣にきた。

「ミカちゃんも……男前の少年死なない程度に斬りつけて大した腕前ですわねさすがに」

素っ裸にひんむかれた母親に抱きつきながら泣き止まない男の子を引き剥がすアスカ。

「はい。ぼちぼち泣き止んで頂けますかぁボク？　拷問の開始となりますわよ～」

アスカは、後ろで束ねて括ってあるポニーテールを揺らしながら卑猥な笑顔を見せると、母親を無理矢理四つん這いにさせた。

「いきますわよぉ？」

『パンッ！！』

「痛いっ！！」

『パンパンパンパンッ！！』

「ぎひいいいいっ！！」

猛烈なアスカの尻叩きが開始されると、母親は歯を食い縛りながらも大粒の涙を流し始める。
しばらく臀部への平手打ちが続けられた。
みるみるうちに真っ赤っ赤に染まった左右の臀部は、息子の末吉の表情を凍りつかせた。

「ミカちゃん」

「はーい？」

「その全身血まみれの男前少年を裸にしてこちらへ連れてきてくれますぅ？」

「あはは！　なんかよからぬことを企んでますなぁアスカねーちゃんってば♪」

素っ裸にひんむいた後、少年の着物で全身の血を拭いてあげると、アスカの隣に引っ張ってゆくミカ。

「ほら、美男子くん、よ～く御覧遊ばせ」

『くぱぁ～』

「いやぁぁぁあっ！？」

「あら果したない。おまんカスがたくさんこびりついてますわよ？　臭いですわねぇ……ちょっとこの汚い穴に私の指入れちゃっても良いですかぁ？　うふふ♪」

背後から四つん這い体勢の母親の大陰唇に両手の親指を当て、思いっきり左右に開いて少年に膣の内側を見せつけるアスカに、再び大きく奇声を上げる母親だった。

死の恐怖を肌で感じて震えていた少年の陰部が少しずつだが確実に大きくなってきている。

挿入許可をくれない女を気にすることもなく右手の人差し指と中指をゆっくり差し込んで掻き回すアスカ。

クチュクチュと卑猥な音を立てる女の陰部。

「やだっ。こいつオバサンのマンコ見て勃起させてるよっ？　しかもデカっ！！　あはははは♪」

そこに長女のリオが４歳ほどの幼女を連れてやってきた。

「あらあら、色々お楽しみ中だね。逃げない大人は全て斬り殺してきたよ。この子、ミカにお土産」

そう言いながらおかっぱ頭の髪の毛を掴んでミカの方へ突き出す。

「いたいいいっ！？」

「うわっ！　可愛い女の子だあっ！　ありがとうリオねーちゃんっ！……でもこんな幼女……苛め殺しちゃっても構わないの？」

「お父さんぶっ殺したら私に噛みついてきたからね。ぐちゃぐちゃにしてあげて♪」

「わーんわーん！」

泣きわめく幼女を抱き締めて頭を撫でるミカだったが、残酷に殺す前の情けの優しさとゆうだけであった。

「名前なんてゆうの？」

「ぐすん、ぐすん。許して助けて……ユミってゆうの」

「ユミちゃんね。可愛い名前だけど今日でユミちゃんの人生終わっちゃうけどおねーちゃんを恨まないでね？」

幼女の頭を撫でながら優しく抱き締めながらも幼女のユミを殺す気が満々であった。

ミカがユミの頭を撫でている間に、傷だらけの美少年は３０歳の女の性器にイチモツを捩じ込み、激しく腰を振り続けていた。

実際には挿入を強要され、腰を振るのもアスカの強要であった。

「美少年くん、性交なんて初めてなんでしょう？　ほら、もっと激しく腰をお振りになって……うふふ。イヤらしいですわねぇ……」

「あっ、あんっ！　あんんっ！！」

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

手取り足取りアスカに教わりながら３０歳の一児の母親を犯す１４歳の少年。

原型を止めないほどアスカに殴られて変形している顔をしかめながらも三十路の女はイッてしまう。

「あんっ！！　あはあああんっ！！」

四つん這い状態からペタリと地面にへたり込んでしまう母親を庇うように抱きついて泣きじゃくる息子の末吉。

「はぁ、はぁ、末吉……私は大丈夫だよ。絶対泣いちゃダメだからね？」

「ううう……わーんわーん！！」

　１４歳の他人の少年に目の前で母親が犯される所を見せつけられた５歳の息子の末吉は、早くも号泣してしまう。
　アスカは銘刀紫龍を三十路の女の性器へ切っ先を突き入れながら囁いた。
「息子さんついに泣いちゃったですわねぇ？　あなたの後で送ってあげますわ。マンコから……殺らせて頂きますわね？　ここですか？　汚いオマンコは？」
『ずぷ……』
「ひぎゃあっ！？」
「一気に貫かせて頂きますわねぇ？　うふふ♪」
『バシュッ！！……ズブブブブ！！』
「んぎゃあああああっ！！　やめてえええええっ！！　ぎひいいいいいいいっ！！」
　アスカの銘刀が三十路の女の陰部へ一気に突き刺さった。
　既に腸を貫通して胃まで達している。
　激しくあがる血飛沫を見事にかわしながらもどんどんと口を目指して刀を差し込んでゆく。
　小便を激しく垂れ流しながら口からも血を吐く女。

「いやだあっ！！　母ちゃんっ！！　母ちゃんんんっ！！」

「ごぼぼぼおっ！！……がくん……」

血の泡を吹いて息絶える頃にはアスカの刀の切っ先が女の口から飛び出していた。

白目を向いて大きく全身を痙攣させせながら絶命した。

アスカが女の性器から一気に銘刀紫龍を引き抜くと、噴水のように血飛沫が飛び散り、辺りを血の海に染めた。

肛門も開ききり、ブリブリと大量の便を垂れ流して痙攣を続ける母親の遺体を抱き締めながらも号泣する息子の末吉だった。

その女に人生初の中出し性交を完遂した少年は、みるみるうちに目の前で人が死ぬ場面を見せ付けられた恐怖で陰部を縮めてゆく。

「あらあら……いけませんわね？　息子さんの見てる前で母親を犯すなんて……こうしてあげますわ。それっ！」

『ビシュンッ！……スパッ！！』

「ぎっ！？　ぎゃあああああっ！！！！」

アスカの一閃により、根元から一気に切断された陰部が宙に舞う。

ポトリと地面に落ちた頃には激しく股間の切断面から血が噴き出していた。

リオも激しく銘刀紫龍を数回振り付けると、美少年の両手首と、両足首が見事に切断され、地面に顔面から叩き付けるように崩れ落ちた。

「あはは。女を犯して射精したと思った次の瞬間にはチンポと両手両足切断されて這いつくばってるの？　受けるわねあなた……」

刀を大きく振って少年の血を飛ばしながらリオが嘲笑する。

「うふふ。あなたは後ろから串刺しにしてさしあげますわ……お尻の穴はココかしら？　一気に突き入れて差し上げますから……えいっ！」

『ズブ……ズブブブブッ！！』

「ぐぎいいいいっ！！　痛いいっ！……ごぼおっ！！」

陰部と両手首両足首を切断された美形の少年は、アスカによって肛門から口まで一気に串刺しにされて絶命した。
刀を抜いたあと、陰嚢も切り裂き、睾丸を手でほじくり出すと、宙に放り投げ、二回刀を振るった。

「よっ！　ほっ！　お金玉の切開が完了ですわ♪」

見事に真っ二つに切断された二つの睾丸が、四回卑猥な音を立てて地面に落ちる。

精液と血の付いた刀を紙で拭き、鞘に納めるアスカ。

「美男子の串刺し刑と、陰茎、金玉切断刑を執行させて頂きましたわ。うふふ♪」

アスカは満足そうな笑みを浮かべて、照れたように舌を出す。

「末吉くんと幼女の始末はお姉さまとミカちゃんにお任せしますわね？」

１０歳の男子末吉と、５歳の幼女のユミを残虐三姉妹が取り囲むようにして見下ろしている。

二人の童子は抱き付き合ってひたすら泣き続けるのであった。

「アスカは美男子殺っちゃったから私は末吉殺るわ。ミカはユミの方がいいでしょ？」

「もっちろんっ！　幼女を無茶苦茶犯すのが最高の至福のときだよ！」

童子二人に対し残虐三姉妹による凄惨な拷問が始まろうとしていた……。

拷問処刑人外伝……残虐三姉妹⑧（後書き）

大戦を前に春日井長政の正室の潜む寺に奇襲をかける残虐三姉妹。
性癖である性的虐待を楽しむ三姉妹であったが、本来の目的である御鉢の方の行方は……？

拷問処刑人外伝……残虐三姉妹⑨（前書き）

三姉妹による北願寺での惨殺行為は最終段階へ。

拷問処刑人外伝……残虐三姉妹⑨

残虐三姉妹によって血の海となった北願寺。

幼い男の子と女の子が、その三姉妹によって短い人生を終えようとしていた。

「ミカが先にユミを殺る？」

母親の亡骸に抱きつきながらひたすら泣き続ける１０歳の男の子の髪の毛を掴んで無理矢理立たせながら長女のリオが問いかける。

「うーん……とりあえず裸に剥いて幼児同士でふしだらな事させちゃおうか？」

「なんて卑猥な発想なのかしら！そそりますわねぇそれは……」

次女のアスカも、ミカの提案に大賛成といった感じで頬を赤くする。

「聞いたかなボク？着てるモノ全部脱いで素っ裸になりなさい」

「いやだ…恥ずかしいよぉ！！　わーんわーん」

抵抗するが何度もリオに平手打ちを喰らい、ついになすがままに全裸にされてゆく男の子。

「ほら、いつまでも泣いてないで座って両脚大きく開くのよ。私たちにボクのチンポとケツ穴を見せなさい！」

「リオねーちゃんったら、はしたない言い方するねー。あははは♪」

そう言いながらミカが５歳の幼女であるユミを、男の子の目の前に座らせる。

「ほうらユミちゃん、ようく見ておくのよ。これが男の子のオチンチンだよ」

「えーんえーん。イヤ……許して助けて……えーんえーん」

「もう泣かないで。人生の最期に異性の陰部を全部見せてあげてるんだから……あたしたちに感謝してほしいくらいだよ」

優しく囁きながらもゆっくりと幼女の服を脱がせてゆくミカ。

男の子の陰部を見る余裕など更に無くなったユミは、必死に抵抗するが、男の子と同じようにミカの強烈な平手打ちを数発顔面に喰らい、鼻血を出しながら号泣し始める。

「あらあらミカちゃん……平手打ちだけで死んでしまいますわよ？　そんなに強く打っちゃいましたら……」

　ミカは全裸にひん剥いた幼女の両足首を両手で握りしめると、左右に大きく開き、性器を丸見えにさせる。

「あは♡　幼女のワレメってやっぱデカいなぁ！後でグチャグチャにしてあげるからね？とりあえず……」

『ピト……』

　右足の裏を幼女のワレメに押し当てる。

「ひっ！？な、なにを！？」

『ガガガガガガガガガッ！！』

「痛ああああいいいっ！！嫌あああっ！！ぎひいいいいいっ！！」

　全身に電気が走るような激痛を与える強烈な勢いの電気アンマが開始された。

「ほらほらほらあっ。このままマンコ破壊してあげようか？うふふ♡」

ミカの激しい電気アンマは泣き喚く5歳の幼女に構う事なく数十回続けられた。

たまらず小便を漏らすユミ。

「あーあ汚いなぁ。あたしの足の裏にオシッコかけた罰は重いよ？四つん這いになってお尻をつきあげてくれるかな？」

泣き喚いて震え続けるユミを、リオとアスカが強引に四つん這いにさせる。

「ミカの逆鱗に触れたわね？大人しく力を抜いてないと余計痛い思いするよ？」

「そうですわお嬢さん。じっとしてないと何回も喰らうハメになっちゃいますわよ？　どうせ死んじゃうんですから身を委ねてくださいな」

『ズドンッ！！』

「んぎゃあああああっ！？」

リオの爪先が右の臀部を激しく蹴り上げる。
オシッコが宙に舞い散るほどお尻の肉が激しく上下に弾かれた。

「もう……ヒクヒク動くから的がズレちゃったじゃん？　もう一回いっくよぉ？　それえっ！」

『ズドンッ！！……グチャッ！！』

「ぴぎいいいいいいっ！！」

今度は的確に【的】に的中する。
ミカの爪先が幼女の性器に深々と突き刺さった。

「いだいいいいいっ！？　死ぬううううっ！！　わーんわーんっ！！」

性器を両手で押さえて転がりまわりながら絶叫する幼女のユミを見ながら三姉妹は大爆笑してしまう。
男の子は他人事ではない恐怖から顔が引き吊って身体も動かなくなっていた。

「じっとしてたら一回で済ませてあげたのに……マンコから少し血が出ちゃったね？　ごめんね～」

白々しく謝るミカだったが、性器の奥からドクドク流れる鮮血を見ていると、更に笑いが収まらない残虐な三姉妹だった。
処女膜は一瞬でミカの爪先で破られ、幼女の下半身は血まみれになってゆく。

脱がせた幼女自身の服で股間を綺麗に拭いてあげると、１０歳の男児と5歳の幼女を重ねて抱き合わさせるリオ。
下側に男児の末吉、上に幼女のユミを重ねる。
頭は正反対を向けているのでシックスナインの体勢にさせている。

「ユミ！これ以上大切な所をミカに蹴られたくなかったら男のガキのチンポを舐めなさい！」

「ひっ！？嫌だあああっ！！許して助けてっ！わーんわーん！」

ミカは幼女の下半身側にしゃがみ込んで、ゆっくりとお尻を撫で始める。

「じゃあ今からお尻叩き１００回の刑だね？いい声聞かせてねユミちゃん……いくよぉ？」

数回は耐えるが、１０回超えた辺りから臀部は真っ赤に染まり、激しく泣き喚きだす。
それを下から見ていた男の子まで恐怖で号泣し出した。

「かぽっ！ベロベロ……ぴちゃぴちゃ……」

激痛に負けた幼女は、なりふり構わず１０歳の男の子の陰部を咥えて舐め始める。

「あはは。やれば出来るじゃん」

手を叩きながらエールを送るミカ。

「ミカちゃんのお尻叩きは強烈ですわねぇ。怖いですわ……」

血が滲む幼女の臀部を見ながら青ざめる次女のアスカ。

「幼児同士のスケベって変に興奮するわね……ボクもユミのマンコ舐めてくれるかな？」

「ひっく。ひっく。ぴちゃぴちゃ……」

ひたすら泣きながら陰部を舐められていた男児も幼女の性器を舐め始めた。

腕を組んで、小さな皮かむりのオチンチンを必死で舐め続ける幼女を見ながら興奮する長女のリオ。

残虐三姉妹の悪趣味な性癖の奴隷と化した幼女と男児の二人は、ひたすら１０歳と5歳とゆう若さで異性の性器を舐め続けさせられた。
ひたすら液体を舐める卑猥な音が響き続けるお寺の片隅。
ユミも陰核を舌で転がされる刺激が気持ちいいのか、顔を真っ赤にさせて顔をしかめ始めている。
「うごっ！？おえええっ！！」
いきなり幼女が何かを吐き出した。
末吉はユミの口によって人生初の射精をしてしまう。
「わあっ！？まさかイッちゃった！？」
頬を赤くして男児のお腹の上に吐き出させた白い液体を見ながらミカが叫ぶ。
「こんな小さな男の子ですのに……精通とゆう」
アスカも頬を赤くしてお腹から地面へ流れ落ちる精液を見つめ続けている。
いきなり口内へ粘度のある液体を出された幼女はひたすらむせているが、リオによって男児から引き剥がされる。

「もう舐め合いも飽きたからやめていいよ。ミカに遊んでもらいなさい」

ミカはおかっぱ頭の髪の毛をむんずと掴んで引きづり回す。

「何を吐いてるのかな？誰が吐き出して良いって言ったの？」

「うえっ！うおうっ！ゴホッゴホッ！！」

『パンパンパンパン！！』

幼い唇から精液を垂れ流しながらミカの往復ビンタを喰らい続けるユミ。

「どこが気持ち良かったの？」

泣きながら座り込んで答えられないユミの両足首を再度掴んで思いっきり左右に開かせると、性器を睨み付けながら叫んだ。

「マンコのどの部分が気持ち良かったのか聞いてるんだけど？」

両足首を持ったまま逆さにして持ち上げると、リオとアスカに声を掛けて三人がかりで木の枝に括り付けた。
両脚を大きく開いた状態での逆さ吊りであった。
頭に血が上り、かなり苦しそうにもがき始める幼女のユミだったが、今度は腹部へ何度も正拳突きを入れるミカ。
もう仕上げの止めに入ろうとしていたので、一撃一撃は凄まじく重い。
数十発拳を受けた所で血の混ざった液体を嘔吐してしまう。
「殴り殺すおつもりですかミカちゃん？志乃ちゃんみたいに生かしてはおかないのですわねぇ？」
「あの子は情が湧いちゃってるからね。この子は久しぶりに思いっきりぶっ殺しちゃうよ！」
「そうですか……でも殴り殺すのは品がないですわねぇ」
「まさか。もっと卑猥な殺し方しちゃうからご安心を！アスカねーちゃん！」
銘刀紫龍をゆっくり鞘から引き抜くと幼女のお腹目掛けて横向きに一閃する。
一瞬遅れてパックリ開いた腹部からはドボドボと腸が飛び出してくる。

「んぎゃあああぁっ！！いだいいいいいっ！！」

「あははは。綺麗な腸してるねぇユミちゃん。次は縦向けにいくよ？えいっ！」

十文字に切り裂かれた腹部からは胃までも飛び出して幼女の顔を隠すようにぶら下がる。

腸と胃が自分の顔面にベチャベチャとぶつかり、息もまともに出来ない状態で激痛と戦う幼女であった。

「うぶぶぶうっ！？ふんぎいいいいっ！！死ぬっ！死ぬううううっ！！」

「心配しないで！間違いなく今からユミちゃん死んじゃうから♪」

「痛い……痛い……あががが……」

「あらあら？まだ死なないでくれるかな？幼女だけど容赦しないいんだから……せーのっ……」

銘刀紫龍を上段に構えて幼女の股間に狙いを定めるミカ。

「やだぁ。結局そこ斬っちゃうんだねミカは……」

長女のリオがニヤけながら真剣に見詰める。

「ユミちゃんのおまんこ……ミカちゃんによって真っ二つになっちゃいますわよぉ？　いやん♪」

「やあっ！」

『ズバッ！！』

一閃は股間からおへそまで一気に走る。
一瞬遅れて幼女の股間はパックリと開いた。
恥骨までも簡単に斬り裂かれ、子宮と卵巣が飛び出してパックリ開いていたお腹あたりでブランブランと揺れ動く。

「ぎゃああああああっ！？　ごはあっ！！」

肛門から性器まで見事にパックリと切開された幼女の身体は、激しい血飛沫を飛ばしながらプランプランと揺れている。
血の嘔吐を最後に吐き終えるとユミは激しく痙攣しながら息を引き取った。

「えぐっ！　すっごい一閃だねミカ」

「恥骨ごと真っ二つとは……恐ろしい破壊力ですわねほんと……」

「てへっ！　ありがと！　……この白い袋みたいなのって赤ちゃん作る臓器だよね？」

飛び出して揺れている子宮を握り締めながらリオに問い掛けるミカ。

「そうよ。そこに男の精液が入って赤ちゃんが出来るの。その子は身籠ることもなくこの世を去ってしまったけどね」

「こんな袋の中で命が育つなんて不思議ですわねぇ。なんかイヤらしい液体でてますけどぉ。うふふ」

「イヤらしい身体の中身見せてくれてありがとう。恥ずかしいだろうから首を落としておいてあげるね。それっ」

『ヒュンッ！ズバッ！！……ボトリ……』

５歳の幼女の首は真下に落ちて数寸転がって止まった。
激痛から解放されて穏やかな表情に見えた。
幼女をバラした刀を思いっきり振り、血と色々な体液を払い飛ばしてから鞘に収めるミカ。

「飛び出した腸からいっぱい便が出てきてる……なんか臭いと思ったらこれが原因なのね……」

「そうですわねぇ。でも仕方ないですわズタズタに切り裂かれましたら誰でも出てきちゃいますからぁ。子宮とか直腸とか恥ずかしい臓器ぶら下げたまま成仏なさってね。うふふ♪」

気が狂うほどの恐怖で糞尿を漏らしひたすら震えている１０歳にしては小柄な男の子末吉。

幼女の始末をした三姉妹が取り囲む。

「さぁボクはどんな死に方が良いかしら？」

リオが冷ややかな表情で問い掛けるが、恐怖を通り越して泣くことも忘れて怯えている男の子には通じてないみたいだった。

「許して助けて許して助けて……死ぬの嫌だ死ぬの嫌だ……」

泣き叫ぶのは忘れていても涙は大量に流れ続けている。
涎と鼻水も止まらない。
死ぬことへの恐怖が幼児を錯乱状態にさせてしまっていた。

「女の子は解剖しちゃったから……ボクも解剖しちゃおうか？」

「ひっ……やあっ！！いやあっ！！あは。あひひひひいっ！！」

何度も転びながら必死でその場を逃げ出そうと走り出す。

幼女であったユミの惨殺される瞬間を見てしまった男の子は既に半狂乱になっていた。

「何を笑ってるのボク？　お姉さんたちを舐めてるのかな？」

しゃがみ込んで顔面を数発往復ビンタするリオ。

涎と涙と鼻水を前後左右に振り撒きながらも命乞いを始める始末だった。

「許して！　お姉ちゃんたち……ボク何でもするから許してぇっ！！」

「じゃあボクにはちょっと実験に付き合ってもらおうかな。南門の小屋まで一緒にきてくれる？」

リオがアスカとミカと男の子を連れて寺の南門まで誘導してゆく。

小さな道具入れの小屋が見えてきた。

「リオねーちゃん……この末吉ってゆうガキどこで殺すつもり？　あの小屋の中で殺るの？」

「あの小屋には面白いものが待ってるから。お楽しみに！」

ミカの質問に答えは出さず、ひたすら小屋へ向かって歩いてゆくリオ。

「楽しみですわね。なんかなんとなく想像出来てきましたけど……」

次女のアスカはリオの性格もよく知っているのである程度予想は出来ていた。

『ガチャ……キイイイ……』

リオが扉を押すと、きしみ音を立てながら静かに木の扉は開いた。

「んごおっ！んぎぎぎぎいっ！！」

猿轡を噛まされた御鉢の方が呻き声を上げている。
薄暗い中をじっと目を凝らして見ていると、段々ハッキリと見えてきた。
天井からロープで括り付けられたままで、木の杭が下半身に刺さっていた。
実際には御鉢の方自身の体重で、ゆっくりと刺さっていっている段階であった。

「マンコから串刺しの刑にしてるの。御鉢の方自身の体重でゆっくりゆっくり口まで貫通するよう計算してるから。あと数刻で口から飛び出すから楽しみにしててね？」

冷たい笑みを浮かべながらリオは御鉢の方の臀部を掴み、杭の進行方向の微調整をする。

口へ向かって進むように……。

素っ裸の色白な美女が少しずつゆっくりと串刺しにされている光景を見ているとアスカとミカもかなり興奮してきていた。

「うごっ！うんうううううっ……」

「もう子宮口は突き破って腸まで入ってるわね……もう少しでお口まで突き抜けるから頑張るんだよ？」

そう励ましながら真っ白なお尻をパンパンと大きく二度叩くリオ。

「ボクの杭も用意してあるから……ほらこれ」

かなり鋭利になるまで切先を削ってある白檀の木で出来た杭を見せつけるリオに、激しく泣きじゃくりながら首を左右に振る男児。

「アスカとミカも手伝って！」

「はーい」

「了解しましたわ。性器はワレメじゃないですからやっぱりこの子は肛門からですか？」

「そうね。会陰部に切れ目を入れて差し込んでも良いんだけど……肛門からぶち込んだ方が手っ取り早いわね」

「嫌だ嫌だ嫌だ嫌だああああっ！！やめてええええっ！！わーんわーんっ！！」

泣くのを忘れていたのを思い出したかのように泣きじゃくる末吉を無視して両手両脚をロープで括り、徐々に下ろしてゆく。

杭の切先に当たるまでゆっくり下ろしていき、串刺しの準備はできた。

「大きく開いてもらうわね？ほら」

リオは末吉の肛門を思いっきり左右に開いた。

直腸の奥が丸見えになるほど力を込めて開いてから、ゆっくりとロープを下ろしていき、杭の切先を肛門にあてがう。

「ほうらボク……入るよ？」

『つぷっ！』

「ひゃっ！？嫌だあああああっ！！許して助けて止めてえええええええっ！！」

「だめー。今日ボクは死んじゃうんだよぉ？ほらぁ」

リオの合図で更にロープを下ろすアスカとミカ。

末吉自身の体重で杭はどんどんと肛門内部へめり込んでゆく。

『ずぶぶぶぶ……』

「んぎゃあああああああっ！！」

かなり早くめり込んでいき、御鉢の方を追い越してしまう。

胃まで突き破ってからリオが慌ててアスカとミカに止めるよう促した。

「切先を削りすぎちゃった！ごめんねボク……このまま御鉢の方より先に死んでくれるかな？」

『ぷしゃーっ！！』

血を吐きながら小便を漏らす男児。

皮かむりの陰部を上下左右に揺らしながら泣き喚く。

「リオねーちゃんっ！！」

「え？なに？どしたのミカ？」

「衝動が抑えきれない……」

「だから何の？」

「引き剥いていい？」

「え？」

リオとアスカが顔を見合わせてからミカをマジマジと見詰める。

「幼女だけじゃなく男児まで責めたいんだねあんたは……やれやれ。いいよ。でも切断は私だからね？」

「ありがとうっ！リオねーちゃんっ！」

ミカは、肛門から胃まで杭を突き刺されて血を吐きながらもがき苦しむ１０歳の男児の陰部を親指と中指でしっかり掴むと、ゆっくり根元に向けて力を込めていった。

『メリ……メリメリ』

「ぐぎゃあああああっ！！」

ゆっくり顔を出す幼児の亀頭部分。
桃色の綺麗な亀頭には真っ白なカスが所々にこびりついている。
卑猥な音を立てながら１５歳の少女に引き剥かれてゆく１０歳の男児の陰部は真っ赤に変色し、尿道からは糸を引く真っ赤な血が流れ出てきた。

「ほらほらほらあっ！どんどん剥けていくよおおっ？あはははは♪」

「ぎゃあああああああああっ！！ひぎいいいいいっ！！」

耳を塞ぐほどの奇声を上げるが、ミカはお構いなく末吉の腹部を目掛けてどんどんペニスの皮を引き剥いてゆく。

『バリッ！！ベロンッ！！』

ついに１０歳の男児末吉のペニスは無惨にも根元まで無理矢理皮を引き摺り剥かれてしまった。
尿道口はパックリ開き、小便と血と粘液の混ざった液体をドロドロと垂れ流す。
白目を剥いて痙攣を始める末吉を見て爆笑する三姉妹であった。

「根っこまで引き剥いちゃうなんて……ほんとミカちゃんは残酷ですわねぇ。うふふ」

「私がやりたかったのにミカってば……もう止めは任せるよミカに」

振り向いて御鉢の方の方へ歩いていき、血みどろになっている性器を確認するリオ。

「陰核がヒクヒクしてるよ？」

人差し指でクリクリと転がして御鉢の方の反応を楽しんでから短刀を尿道からから突き入れて陰核を抉り取る。

「一番感じるトコ……抉り取っちゃった。もうマンコから串刺しで感じることは出来ないかな？あはは！」

「ふんぬうううっ！！！ふぐううううううっ！！！」

「うるさい女だなぁ。ちょっと陰核くり抜かれたぐらいで……」

「リオねーちゃん……そんな感じるトコ抉り取るなんてすっごい……」

「想像しただけで激痛を感じますわねぇ。うふふ♪」

ミカとアスカは更に興奮を深めて少し陰部を濡らし始めていた。

中指をそっと御鉢の方の肛門へ差しこむ。

「こっちの穴も容赦しないから……春日井長政も後をおわせてやるからあの世で仲良くするんだよ？　わかった？」

『ずぶっ！……グリグリ』

「ふんふんふんんっ！！？　ふんぬううううっ！？」

「後ろの穴は人生初めての経験だった？　長政にも入れられた事のないケツの穴は感じるかしら？　あはははは！」

下品な笑い声と共に直腸を掻き回すリオに、意味のわからない絶叫をあげる御鉢の方。

指を引き抜くと、便まみれの指を御鉢の方の右の乳首に擦り付ける。

やがてゆっくりと口から杭を出す。

血の泡を噴きながらもなかなか死なない御鉢の方だったが、隣では１０歳の男児が息を引き取る寸前だった。

ミカは男児の脇腹を掴み、思いっきり下部へ引き下げた。

歪な音を立てながら、内臓ごと口から切先を突き出させる男児。

『ごぽっ！！ぶしゅううううっ！！……がくんっ！』

「あはははは！血と一緒に腸まで口から飛び出しちゃって……惨め

な死に方してるんじゃないよ全く」

ついに10年とゆう短い人生を終えた男児、末吉の処刑は完了したが、未だに死にきれない御鉢の方は、串刺しの状態のままでもがき苦しんでいた。

ロープを引き上げ、御鉢の方の身体を上に持ち上げるアスカとミカ。

息があるままで杭を抜かれて床に転がされる。

「かひゅううう……かひゅうう……」

「まだ死に切れないんだ？ほんと哀れな女だよねあんたって……もう内臓グチャグチャの筈なのに……生き残ったついでに後ろの穴からもう一回やったげようか？」

「あううう……ふんぐうううっ！！」

激痛と薄れゆく意識の中で最後の奇声を上げる御鉢の方だが、猿轡を噛まされているため言葉にはならなかった。

銘刀紫龍をゆっくりと鞘から引き抜き、地面に横たわる御鉢の方の肛門へ切先をあてがう。

「二度も串刺し刑を味わえるなんて……ある意味凄い人ね？地獄へ……行きなさい」

『ズッ……ズブブ……』

「んぐうううううっ！！」

小便を垂れ流しながらもリオの刀を肛門から飲み込まされてゆく哀れな女。
激しく刀を動かしながら突き入れていったため、性器と肛門が繋がってしまっていた。

「あはは。もうどっちが肛門かマンコか分かんないけど……もう一回口まで貫通させてやるからね？ほらあっ！」

『ごぼっ！！げはあっ！！』

横向きとはいえ噴水の様な血飛沫を撒き散らしながら絶命する御鉢の方。
銘刀紫龍を一気に肛門から引き抜くと、先に脱がせておいた御鉢の方本人の着物で綺麗に血を拭うリオ。

「ふう。これで長政にとりあえず一矢報いたね」

「早く知らせてあげたいよね！お前の妻はマンコからお尻の穴から二度も串刺しにされてようやく死ねたんだよ〜ってね♪」

「残酷ですけど興奮しましたわねぇ～。ではぼちぼち席ヶ原へ向かいますかぁ？」

ミカは短刀で男児と御鉢の方の首を切断すると、二人の背中の上に置いて手を合わせた。

「あそこ濡らしちゃうほど興奮させてくれてありがとね♪」

拷問処刑人外伝……残虐三姉妹⑨（後書き）

大敵である春日井長政の正室である御鉢の方の処刑を完了した三姉妹。

男児と幼女の幼児への性的虐待と処刑も終えて、とうとう次に目指すは最終決戦が待ち受ける席ヶ原へ……。

拷問処刑人外伝……残虐三姉妹⑩（前書き）

刻々と変化する戦況に苛立ちを隠せない東軍総大将徳山家男。
勝ち戦と鷹をくくっての開戦だが果たして……？

拷問処刑人外伝……残虐三姉妹⑩

――時は戦国時代。

幾十からなる国々は数百年に渡り戦を延々と繰り返し、遂に東軍と西軍二つの勢力となった。

席ヶ原にて両軍合わせて十万を超える大軍での大戦が始まろうとしていた。

東の空が微かに白み出す頃、両軍の緊張の糸は頂点にまで張り詰められてゆく。

辺りは深い霧に包まれ、視界が光を得ても未だ一軒先がまともに見えないほどの濃霧であった。

「むむっ！？　あれに見えまするは葛西城城主、竹中善吉の旗印っ！！」

「鉄砲隊火縄に点火を急げっ！！」

三十人ずつ横並びに三列に分け、九十人での鉄砲隊精鋭部隊が一斉に火縄に点火を開始する。

「撃てーっ！！」

『パン！　パンパンパン！！』

三十挺の火縄銃が一斉に火を噴いた。
鉛玉が霞む視界の奥から突然に竹中隊に襲い掛かる。

「ぐおおおっ！？」

「がはあっ！！」

バタバタと倒れてゆく前衛部隊。
発砲を終えた前列の三十人が素早く最後列へ回り込み、二番目に構えている三十人が再び一斉に銃撃を浴びせかける。
鉛玉をかいくぐって突撃してくる竹中隊を長槍部隊が突き伏せる。
辺りはほんの数刻で血の海となり、東西分け目の大戦は東軍優勢にて開始された。

北側と南側でも騎馬隊対騎馬隊、槍隊対槍隊、両軍の雄叫びを上げながらの戦いが繰り広げられる。

川崎八兵衛の東軍最強を誇る鉄砲隊の猛攻にも関わらず、西軍の大名たちの騎馬隊が凄まじく勇猛で、一進一退を繰り返す戦況となった。
主力である春日井長政の部隊は、既に半数が戦死し、六千人弱となってしまっていた。
じりじりと徳山家男本隊２５０００へと迫り来る西軍主力部隊と猛将の指揮する屈強なる騎馬隊。

たまらず側近の保野田影安へ歯噛みをしながら怒りと恐怖の混ざった不安をこぼす東軍総大将の徳山家男。

「ギリギリ……うぬぬ……西軍主力の竹中隊のみではなく右翼側から迫り来る芦田友政、湯浅道長の騎馬隊がここまで強力とは……左翼側に陣取る鷹尾山の小早原秀太郎なる小倅はまだ動かぬかっ！？」

「はっ。未だ鷹尾山に布陣したまま微動だにしておりませぬ。鉄砲で威嚇射撃をして催促をかけてみまするか？」

「小倅め……威嚇しても動かぬなら本隊へ撃ちかけよ！」

「ははっ。肝がすわってない小倅ですゆえ、紛うことなく慌てふためき駆け降りてくるでござりましょうや」

――鷹尾山。小早原秀太郎本隊。

「申し上げます！　我が陣の麓へ向けて徳山殿の本隊からの発砲を確認しました！」

「殿、もう限界でござりまする。これ以上戦況の静観を続けるならば徳山殿を本気で敵に回すことになりまするぞ？」

「う、ううう。ど、どどど、どうすれば良いのじゃ！？」

まだまだ若い小倅である小早原秀太郎は側近の催促にも即決できないまま生死の掛かった判断に対し恐れおののき、慌てふためいている。

「狼狽(うろた)えまするな！　今こそ山をかけ降り麓にはびこる西軍の竹中隊へ春日井殿と協力しつつ挟撃をかけ、徳山殿のお気持ちにお応えするべきですぞ！」

「そ、そ、そうじゃな！　ワシの親族たちの命も守らねばならぬ！　……ぜ、全軍突撃じゃあっ！！　迎え撃つは西軍の主力部隊っ！！　竹中善吉の首を取るのじゃーっ！！」

「おおおおおっ！！」

小早原秀太郎三千の部隊は一気に鷹尾山をかけ降り、戦場で猛威を奮う西軍の芦田隊と湯浅隊の騎馬隊へ襲いかかった。

しかし小早原の兵たちには多少の動揺もあった。

「うおおおおっ！！　うぬ？　我らは西軍側ではなかったのか？」

「おおおおおっ！！　ん！？　そう言えばそうじゃったのう……しかし我らが殿の御命令じゃ！　鷹尾山の麓のお味方であった竹中殿へ斬り掛かるしかないでござる！」

思いもよらない方向からの奇襲により、一気に形勢は再び東軍へと傾き始める。

最強の布陣である西軍の鶴翼の陣は完膚なきまでに崩れ去り、左翼が中央部隊である味方であった竹中善吉へと襲い掛かった。

「申し上げます！　鷹尾山に布陣していた西軍部隊の小早原隊が山を駆け下り、我が隊の左方面から強襲を掛けてきておりまする！」

竹中善吉へ、伝令兵から近況が伝えられる。

「おのれ小倅め……録に釣られたか……東軍主力の春日井長政と挟撃する気じゃな……」

「如何なされますか？　鉄砲隊は既に壊滅させておりまするが、まだまだ徳山家男と合わせれば三万近くの兵力が存続しておりまするぞ？」

「両方面へ二手に分けて迎え撃て！！　一兵たりとも逃亡はまかりならんっ！　石立睦成殿に受けた恩義を今こそ命を懸けて返す時じゃっ！」

「うおおおおおっ！！」

再び士気をあげて春日井隊と小早原隊へ突撃する竹中隊であった。

――――席ヶ原南部にある綾南峠。

峠の山道を駆ける二騎の馬がいた。

「殿っ！　此度の戦は我らが東軍の勝利に間違いごさらぬ！　遠方まで逃げずとも宜しいかと？」

側近の三好佐吉が何度も振り向きながら問い掛ける。

「竹中の騎馬隊に我らが鉄砲隊は壊滅させられた。しかも春日井殿の我が部隊と隔離されてしもうた。今は出来るだけ遠方まで離れることが先決じゃ」

「そうですな。勝ち戦で命を落とすのも馬鹿らしいですゆえ」

颯爽と戦場から南へ駆ける馬二頭であったが、唐突に悲鳴をあげて激しく転倒する。

「ぐおっ!?　うぐぐ……な、何があった!?」

二頭の馬は、慌てて起き上がると一目散に駆け出してその場から去ってしまう。

落馬のショックで全身を強く打って、身動きが出来なくなった川崎八兵衛が咄嗟に側近の三好佐吉に問い掛ける。

しかし返事はない……。
打ち所が悪く、首の骨を折って絶命していた。
激しく痙攣する身体を見て事態の深刻さを知る。

「佐吉っ！　佐吉っ！落馬ごときで死んだのかっ！？　おいっ！？」

仰向け状態で天を見上げながら打ち付けた全身を擦り、長らく支えてくれた側近の死に涙を流す。

「やっと見ーつけた」

「南側から戦線離脱するだろうなと思ってたのよね」

「側近の死を悲しんでる暇は無いですわよ？　すぐに後を追わせてあげますわ。うふふ♪」

打ち付けた痛みも和らがない内に、若い女子の声に周りを見渡す川崎八兵衛。
どこかで見た覚えのある三人の女子たち。

「ぬぬっ！？　貴様たちは残虐三姉妹じゃなっ！？」

慌てて起き上がり刀を抜くが、頭も強く打ってるためかフラフラと視点が定まらずに転げそうになる。

「あらあら……お七さんは立派なのにあんたは本当に哀れだね？」

長女のリオが銘刀紫龍をゆっくり鞘から抜きながら囁いた。

「何を抜かしておるかっ！？　ワシを愚弄するかっ！？」

「愚弄するも何も最低じゃんオッサン。あたしなら部下をみんな死なせちゃったら腹を切るけどなぁ」

三女のミカが両腕を組みながら呆れ気味に言うが、腹を切るような器ではなかった。

次女のアスカに即座に突っ込まれる。

「あらミカちゃん……あなたも咄嗟の時は逃げると思いますわよぉ？　おほほほほ♪」

「てへへ。良く分かってるね！　さすがアスカねーちゃん」

リオはゆっくりと滲み寄り、切っ先を川崎八兵衛に向ける。

「お七さんは生かしておいてあげるから……安心して死んで……」

「ぐぐっ……肩と腕に力が入らぬ……無念……」

「何が無念……だよ。あんたなんか五体満足でも私たちに勝てるわけ無いでしょ。鉄砲隊を仕切ってただけのクセに。笑わせないで」

『ズッ！！』

「ぐわあっ！？」

甲冑の隙間から脇腹へ突き刺さるリオの銘刀紫龍。
刀を落として膝を着く川崎八兵衛を前蹴りで思いっきり蹴飛ばすリオ。
仰向けに激しく転倒しながら嗚咽をあげるが、即座に馬乗りになり甲冑の紐を切ってゆく。

「殺る前に素っ裸にしちゃうんだ？」

「うふふふふ♪　どんなイチモツつけてらっしゃるのか楽しみですわ♪」

脇腹の刺し傷の痛みで自害して果てる余裕すらない川崎八兵衛は、リオになすがままに素っ裸にされていった。

「や、やめろ！　こんな生き恥をかくぐらいなら早く殺してくれ……」

「早く殺して？　大切な仲間を見捨てて戦線離脱した男の言う言葉なのかな？　ミカ、山賊から奪った大型の斧を渡してくれる？」
「はーい！　斧で首落としちゃうのかなぁ？　あはは！　そんなわけ無いよねっ。はい、どうぞリオねーちゃん♪」
素っ裸にされながらも必死で立ち上がろうと右手で傷口を押さえながら左手を地面に付き、膝を立てて立ち上がろうとする川崎八兵衛。
大きく斧を振りかぶり、地面に付いている側の右手の肘辺りを一閃。
一瞬で肘から先は地面に転がり落ちて、切断面からは噴水のような血飛沫が飛ぶ。

「ぐわあああっ！！」

「あらあら……後少しで立ち上がれたのにねぇ？　残念でした！　え～と次は……左足いっちゃおーか？……よっ！」
太ももの中央辺りを大型の斧が襲う。
だが太ももは骨も太く、一撃で切断出来なかった。
何度も骨が見えている太もも目掛けて斧を振り下ろすリオ。
「ぎひいっ！！　がはあっ！！　ひぎいいっ！！」

「ふぅ。やっと皮一枚になったよ。アスカ、手で引きちぎってくれる？」

「はい、お姉さま♪　じゃあ八兵衛さん、太ももお体からサヨウナラしちゃいますわよぉ？　えいえいっ。ほらほらっ。うふふふ！　切断面がぐちゃぐちゃしてて見てるだけで濡れてきちゃいますわん♪」

『グリグリ……ぶちっ！』

「ぐおおおおおっ……ふぬううううっ」

遂に本体から切り離された左足を、アスカは円を描くように振り回して、はるか遠くまでぶん投げた。
血の糸を引きながら回転しながら飛んでゆく左足。

「あははっ！　あと二本も早く切っちゃえ～っ！」

もがき苦しむ川崎八兵衛を、満面の笑みではしゃぎながら見詰めているミカ。

「ミカ、あなたも左手か右足落としなさい」

「え？　あたしにもやらせてくれるの？　やったぁ！　一回で斬ったげるからね？」

片手を失った状態ではすべての切断面を押さえきれず、左足だけを押さえて絶叫を続ける。
何気に振り上げて何気に振り下ろすかのように見えたが、一瞬で川崎八兵衛の左足は太ももから切断された。
ミカの一閃は強烈だった。
太い骨も分厚い筋肉も、たった一撃で切断されてしまった。
ついに四肢切断まで左手一本のみとなり、痛みと恐怖で半狂乱となってゴロゴロと転がり回りながら逃げ場を探す。
「うふふ。そのままミカちゃんが最後の一本も斬っちゃってくださいますぅ？　私は見ながら楽しみますわ♪」
「ありがとうアスカねーちゃん♪」
散々転がり回り、辺りを血の海にすると、大量出血のせいか動きが鈍くなってきた。
「余り持ちそうにないからさっさと済ませちゃうよオッサン？」
『ズドンッ！！　ザシュッ！！……ぶしゅううううっ！！』
「がはあっ！！　ぐおおおおっ！！」
三姉妹によって達磨状態にされた川崎八兵衛は、短くされた手足

をクネクネと動かしながら悶え苦しむ。
　糞尿も存分に漏らして、周りを悪臭が支配する。

「くっさ……なにうんこまで漏らしちゃってるのあんた……最低」

　リオが顔をしかめて鼻を摘まみながら蔑む。
　アスカも真顔のまま鼻を摘まんだ。
　ミカは何も反応せず川崎八兵衛の刀を拾うと、ゆっくりと達磨男に近付いた。

「腸（はらわた）……見せてもらうね？」

『ズッ……ズバババババ……ぱっくんっ！！』

　陰毛の生え際辺りからオヘソ、更に胸骨のあたりまでゆっくりと切り裂いてゆく。
　ぱっくり開いた腹部からは白い臓器、桃色の臓器、真っ赤な臓器が蠢いている。

「あらぁ～。イヤらしいですわ！　色んな臓器がムニムニつまってますわねぇ♪」

　こんな状態になりながらも死を悟った川崎八兵衛の身体は、本人のイチモツを勃起させてゆく。

「おっ！　勃ってきた勃ってきた！　やっぱ男って死ぬ間際に勃起しちゃうのね……あはは。何か哀れで笑える♪」

長女のリオが頬を赤くして三女のミカの処刑を見て楽しんでいる。足の甲でパンパンと数回陰部へ蹴りを入れるミカ。

「ほらほらっ。何を腸さらけ出して手足ちょん切られてチンポおっ勃ててるのオッサン？　間抜けすぎるんだけど？」

ミカに蹴られる度に腹部へ詰め込まれている色んな臓器がプルプルと揺れ動いた。
そのまま足の裏を陰部へ押し当て、激しく擦り付ける。

「あ、あうあう。あひふふふぅ……あわわ」

「お腹開いちゃったから射精も出来ないか……人生最期の快感も与えてあげられなくてごめんねオッサン。じゃあお詫びに金玉潰してあげるね？」

今度は思いっきり右足を振りかぶって、渾身の力を込めて陰部を蹴り上げた。

『スパァァンッ！！……ぶちゅちゅっ！！』

「はごおおおおっ！？」

ミカの足の甲の一撃で、川崎八兵衛の睾丸は二つとも瞬時に粉々に粉砕された。

「あはは！　ミカったら何が“お詫びに”だよ。更にトドメにいってるじゃん」

「うふふ。白目剥いて泡を噴いちゃってますわ。おちんちんの先からネバネバした液体出しちゃってますわねぇ〜。あら？　血も混じってるみたいですわ。お金玉潰されたらさすがにこうなっちゃいますかぁ♪」

「アスカねーちゃん、トドメ刺す前にその“かんざし”でチンポを串刺しにしちゃって！」

「ええっ！？　お気に入りの私のかんざし……そんなことに使わせるなんて……分かりました。横からと縦からとどちらが良いですかミカちゃん？」

ミカは睾丸を蹴り潰されて激しく痙攣している川崎八兵衛の側にしゃがみこみ、陰部を粗暴に握ると、そのまま皮を全開の力を込めてお腹方向へ引きずり下ろした。

陰部の皮が下側に限界まで引っ張られているために、尿道口がパックリと大きく開いた。

「ほうら、もっとチンポの穴開いてオシッコ通る管を見せろ！　やだぁ……イヤらしい桃色の管してるのねぇオッサン？　この管を串刺しにしたいから縦方向へお願いできるかなアスカねーちゃん？」

四肢切断されて泡を噴きながら痙攣している中年男の陰部をとことんまで苛め抜き、弄ぶ齢１５の少女。

齢１８のアスカと齢２０のリオも相変わらずの残虐さを存分に見せつけていた。

「見事にパックリ開いた尿道口……うふふ。私のかんざしが今からここを通りますわよぉ？　お覚悟を……」

『ズッ！　……ズブブブブブ』

「ごがががあっ！？」

ミカに固定された身動き出来ない陰茎は、アスカによって“かんざし„で串刺しにされてゆく。

遂に根元まで突き刺さって身体の痙攣は最高潮に激しくなる。

「あはは！　スッゴい飲み込んじゃったね？　小便と血が差し込み口のチンポの先から噴き出してる……膀胱まで突っ込んじゃったみたい。赤と黄色の液体が入り雑じって飛び出してるぅ。面白～い♪」

アスカは円を描くように激しく尿道内部を掻き回した。
激痛に堪えきれず横を向こうとする達磨男……。
アスカは一気にかんざしを引き抜くと、臀部を足で思い切り蹴飛ばした。
今度はうつ伏せ状態にされる。
「ほら、トドメさしてやるからケツを突き上げろ！」
『スパァァンッ！！』
「おごおっ！！」
太ももの切断面が地面にペタリと着いて、猛烈な痛みを味わうが、すでに思うように身体が動かない川崎八兵衛は、達磨状態のままお尻を突き上げた恥ずかしい体勢にさせられた。
開かれている腹部から小腸がドバドバと大量に地面に落ちてくる。
「あらあら……お腹の中の臓器たくさん出しちゃったねぇ？　ついでにその汚い色した肛門にあんたの愛用していた刀をブッ刺してあげるからね？」
「うおうっ、うおおおうっ！！」

激痛と失血のせいで、まともに喋れなくなっている川崎八兵衛は、痙攣しながら泡を噴きながら少女たちによってこの上ない地獄を味わわされてゆく。

「肛門串刺し執行はリオねーちゃんに任せたからね」

「ゆっくりと時間をかけてブッ刺してあげてくれちゃいますぅ？　おほほほほ♪」

「ほら、尻の穴から口まで串刺しにしてやるから。言い残すことはなぁい？」

冷ややかな笑みを浮かべながら、長女のリオが達磨男に問い掛ける。

「ぶ、ぶほっ！　あがが……」

「あがが……って？　意味わかんないけど？　ま、いっか。じゃ、いっきまーす♪」

『つぷ……』

「げはあっ！？」

命を完全に絶ちきろうとするトドメの切っ先が、川崎八兵衛の肛門にゆっくりと突き刺さる。

肛門括約筋が切り裂かれ、四方八方に激しく鮮血が飛び散った。
白く美しいリオの太ももを真っ赤に染めてゆく。

「ひぇ～っ！　やっぱいつ見ても肛門の血ってスッゴいなぁ♪」

「ほんと！　鮮やかな真っ赤で綺麗ですわねぇ♪」

両手両足と尿道口、肛門から鮮血を飛ばしながら白目を剥いて歯を食い縛るが、情け容赦なくリオの持つ日本刀は直腸、S状結腸、小腸と突き破ってゆき、腸という腸を何枚も突き破りながら口を目指して順調に突き進んでゆく。
地面に落ちている小腸へ、腹部に残留している小腸からの鮮血が降り注がれる。

「ほら、どんどん入ってゆくよ？　あ、言い忘れてたけど死んだ後でチンポ切り取らせてもらうからね？　あんたの奥さんのお七さんに届けてあげるんだから」

「ええーっ？　そんな果したない部分を愛しの奥方に見せ付けるなんて……鬼ですわぁお姉さまってば……」

アスカは照れたように笑いながら銘刀紫龍をゆっくりと抜刀する。

「お口から切っ先が出てくるまでの間に汚い顔を化粧しときましょ

うねぇ？　それ」

『ヒュンッ！！……ザクッ！！』

アスカの振り下ろした刀は川崎八兵衛の鼻を根元から削ぎ落とした。

左右に顔を振りながら奇声をあげるが、お構い無く右目に切っ先を突き入れる。

「もう絶望しか見えないでしょうから死ぬまでの数刻の間何も見えないようにしてあげますわね？」

器用に掻き回して目玉をくり貫くと、左目も手際よく刀でくり貫いた。

「おほほ♪　血みどろで美しい顔になってきましたわね？　お目目がドロドロになっちゃってますわよぉ？　次は唇いきますから」

「痛い痛い♪　顔面そこまで無茶苦茶にしないであげてアスカねーちゃん！　あはははは♪」

肛門にどんどん食い込んでゆくリオの日本刀と、アスカにぐちゃぐちゃにされてゆく顔面を見ていると可笑しくてたまらないミカだった。

死んでからと長女のリオは言っていたが、ミカは我慢しきれず左

手で陰茎の亀頭部をキュッと摘まみ、右手に握りしめた短刀で一気に根元から切断する。

「先にもらったからねおちんちん！　とりあえず魚籠に入れとくね♪　リオねーちゃん」

「色んな男たちの陰茎を切り取っては入れてる臭い魚籠に一緒に入れちゃうのですかぁ？　前の分が中で腐っちゃってません？」

「腐りかけたら鳥や魚に食べさせてる。切り取って魚籠に入れる行為自体が私の楽しみだからね。最近は志乃に殆どさせちゃってたけど♪　腐ったチンポなんて激臭だからずっと持っとけないしね……」

「そうだったのですねぇ……。まぁこの方のおちんちんは餌にしないできちんとお七さんに渡したいですわねぇ？」

「あはは。そうだね。アスカの言う通りにするよ。お七さんの悲しそうな顔が早く見たいんでしょ？」

リオは少し微笑むと、再び川崎八兵衛の串刺しに集中する。アスカによって上下両方の唇も切り落とされて顔面の原型を止めなくなった顔からひたすら血と涙を流しながら蟹のように泡を噴き流す悲惨な姿となってしまった。

リオは日本刀の刃を下側に向けて肛門から刺し込んでいたため、下方に力を入れると、会陰部を切り裂いて陰嚢までも中心部から真っ二つにされた。

ミカに潰された生の睾丸がブチュブチュとはみ出してくる。

「やだぁ。金玉ぐっちゃぐちゃの液状になっちゃってるじゃん……ミカの蹴りってやっぱ怖いなぁ。あはは……」

「そりゃそうだよ。一撃で二つとも潰すのってちょっとコツがいるんだよ！　キンタマ袋だけはそのまま残してあげようと思ってたのに切り裂いちゃったのねリオねーちゃん……」

「パンパンに腫れてたから中はどうなってるのかなぁ……ってきになっちゃってね。ごめんごめん」

アスカは銘刀紫龍に付着した血を、川崎八兵衛本人の衣服で拭うと、大きく足を振りかぶった。

『パァンッ！！』

「げぼおっ！！」

思いっきり血塗れのもはや人間の顔とは思えない悲惨な顔を更に足で思い切り蹴飛ばした。
右から……左から……左右の足の甲で交互に何度も蹴り付ける。
蹴り付ける度に左右に大量の血が飛散した。

「アスカ！　ぼちぼち仕上げるから足どけててね？」

「はい、了解ですわお姉さま」

すでに太ももで踏ん張っていた無理矢理の四つん這い状態も保持できず、自分の落とした内臓の上に突っ伏している川崎八兵衛は、心臓が停止する寸前の痙攣を起こしていた。

「あの世で豊田七兵衛さんに謝るのよ？　さようなら」

『ザシュッ！！……ぶしゅううっ！！』

「ごぽおおおっ！！　ふごおおおおっ！！」

口から飛び出す刃先……しかし心臓をかわした刃は川崎八兵衛に致命傷を与えていなかった。

「すごっ！　腸撒き散らして達磨にされてお尻の穴から串刺しにされて……まだ生きて苦しんでるなんて」

ミカは感心しながら背中に乗ると、リオに目で合図を送る。
それを見てリオは刀を引き抜いた。
その瞬間、口と肛門から激しく血飛沫が舞う。

顎に左手を掛け、上方に無理矢理向かせると、短刀を喉にあてがい、高速で何度も切り付ける。

みるみるうちに首がパックリと開いてゆく。
気道まで切り裂いてから空気の漏れる苦痛の呼吸音を確認すると、今度は首の上から短刀を何度も叩きつけ、遂に脊椎をへし折った。
川崎八兵衛の苦痛に歪む顔はようやく穏やかになった。
髪の毛を掴んでグリグリ首をこねると、皮一枚で繋がっていた首はとうとう胴体から完全に切り離された。

「ふう~。全て終わったよ！　痛かったね？　よく我慢したよ。ちゃんと成仏してねオッサン」

「私のケツ穴串刺し刑でも死なないとか凄すぎるわあんた。忘れ物だよ。よっと！」

『ドカッ！！』

川崎八兵衛の日本刀を四肢切断された上に首まで無くなった遺体の背中に思いっきり突き刺すリオ。
内臓がほぼ空洞化してるので、あっさり胴体を突き抜け、地面にまで深々と突き刺さった。

「哀れな死に様ですわねぇ♪　陰茎を見たお七さんの表情が早く見てみたいですわ。うふふ♪」

三姉妹は再び席ヶ原を目指して北上を続けるのであった。

「さぁ、最後の使命を果たしにいこう。石立睦成殿を助けないと」

「そうですわね」

「席ヶ原はもうすぐそこだね……行こう」

拷問処刑人外伝……残虐三姉妹⑩（後書き）

五九道峠で逃亡を許した因縁の川崎八兵衛を遂に拷問処刑にて殺害。
最終決戦場へと向かう残虐三姉妹の目的は無事に果たせるのであろうか？

拷問処刑人外伝……残虐三姉妹⑪（前書き）

天下統一へ向けて大きく形勢が動き出した席ヶ原。
日本列島を二つに分けた大戦に決着の時が迫る。

鶴翼の陣が覆り、逆に味方側の翼に包み込まれる惨事となる西軍。夕刻前には全ての隊が総崩れとなり、敵に屠られなかった者たちも、山岳へ逃げ込む者、自刃する者、大きくふた通りに運命は別れた。

「殿、お見事です！　竹中善吉、芦田友政、湯浅道長の首が届いたそうですぞ！　もう勝敗は決しましたな」

「うむ！　大義であった。小早原の小倅(こせがれ)め！　ワシの肝を冷やさせおって……」

「いずれにせよ小早原秀太郎の裏切りのお陰で大勝利となりましたな。もう御安堵くださりませ」

「石立睦成の首はどうなったか？」

「生き残った騎馬隊数十名を全て捜索に走らせております！　その内見付けられ、殿の元へ届くことと思われまする」

「おのれ……まさか死を臆して逃げおったか睦成……」

まさに血の海となった席ヶ原は、東軍武将たちの旗印のみで埋め尽くされていた。

勝ち戦となっても死の覚悟を決めている武将が一人……茜色に染まりゆく席ヶ原の自陣で立ち尽くしている春日井長政。

「三姉妹は現れなかったですな？　もう殿を襲撃することは不可能でしょう」

「……今日一日は命がありそうじゃな」

「殿！　何を弱気なことを申される！　城に帰りつけばこの戦場より遥かに強固な守りになりまする！　もう小娘どもに手出しは出来ますまい？」

「これからの人生城から一歩も出ないなど……無理な話だ。お鉢の首もきちんと葬ってやらねば……」

「お鉢殿は……お気の毒でございました……係の者に手はずは整えておりますゆえ。無事に極楽浄土へ行けますよう一同祈っておりまする」

「すまんな」

――――息吹山峠。

席ヶ原から南西へ獣道が続く。
この息吹山の峠を越えれば坂神（さかしん）の町とゆう大きな商業が盛んな町へ出る。

商人と農民が売買のために各国から集まるほどの規模の大きな町であった。

「大丈夫ですか？」

「あ、ああ。少し足を挫いただけじゃ」

残虐三姉妹と西軍総大将の石立睦成の四名が歩いて峠を越えていた。

自分の兵も側近も全てを失って自刃する刹那、三姉妹が止めに入って逃亡することを説得したのであった。

追手を既に数百人は斬り倒している非常に頼りになる殿軍の三姉妹。

長女のリオの問い掛けにかなりしっかりと答えながらも少し歩きづらそうにしている。

坂神の町で残虐三姉妹の言うがままに商人の服に着替え、二階の部屋を借りて住み込むように手配した。

「ワシは生き延びて本当に良かったのか？」

「そりゃそうですよ！　あんな胡散臭いタヌキジジイがこの国全てを仕切るなんてあり得ませんから！」

「そうですわね。睦成様ならきっとその内再起を図って徳山家男を倒せるはずですわ」

「あたしもそう思う。昔にあたしたちを助けてくれてホントにありがとうね！　おじさん」

三女のミカの発言に、リオとアスカが慌てて同時に口を塞ぎにいった。

「むぐぐ！？」

「こらミカッ！！　命の恩人である上に西軍の総大将の殿様に“おじさん”って……謝りなさい！」

結局ミカの口へ先に手が届いたリオがミカを叱りつけた。

「構わぬ。あの時の一番小さかった小童がこんなに屈強な剣士に育っていたとはな……お主ら三姉妹の中でも抜きん出ておる」

ここまで逃げてくるまでの殿軍（しんがり）を勤めてくれた三姉妹を、何度となく振り向きながら見ていた石立睦成は、三女のミカが三姉妹でも群を抜く強さを備えていることを見抜いていた。

「噂によると……恩を受けた闇柳生助平殿を三人で討ち果たしたみたいじゃが…………だがもはや理由は聞くまい。今こうして再起を図るためにワシの命を救ってくれたのじゃからな」

夜の帳が降りる頃には無事に坂神の町へたどり着き、三姉妹の指示通りに誰がどう見ても商人そのものという位まで町人たちの手も借りて変装することになる石立睦成だった。

「しばらくはこの町で商人としてお過ごし下さいね」

「うむ！　世話になった。必ずや徳山を討ち取る機会を待って、この天下を覆してみせるぞ」

三姉妹は石立睦成を住まわせてくれる町人の商人から夕飯を振る舞われ、殿軍（しんがり）の疲れを癒してから再び闇夜の中、東へ向かった。

――東野城城下町。

丑の刻。
三姉妹たちは性奴隷である三人を預けていた城下町の宿屋に辿り着いた。
微かな月明かりの下、戸を開けて三人を探すが、姿が見当たらない。

「志乃～っ！　勇太郎っ！　三四郎～っ！！」

ミカが大声で呼んでも返事はなかった。
仕方なく宿屋の主である“お鈴”の部屋へ行き、起こして事情を聞く。
三姉妹の来訪に震えながら掛け布団にしがみつく齢40になるこの家の一人娘のお鈴。
あまりの恐怖のためか涙も出ずにひたすら怯えているみたいだった。

「怯えていても何も分からないよ？　志乃たちをあなたに預けたのは、両親も幼い頃に亡くして兄弟もいない一人娘だと聞いてたから……あなた自身の寂しさも癒されると思ったからなのね？　なのにどうして三人がいないのか教えてくれる？」

長女のリオが少し強目に問い掛ける。
震えながらもようやく唇を開くお鈴。

「す、少し前に……お城からの使者が来て……三人を……」

「え？　まさか……春日井長政の東野城に連れていかれたの！？」

「ご、ごめんなさいっ！　怖くて逆らえなかったのです！　本当に申し訳ございませんっ！！」

布団から這い出して土下座をして詫びを入れるお鈴だったが、三姉妹の冷ややかな視線は真上から降り注いでいた。
ミカが真顔で口を開いた。

「オバサン……とりあえず……素っ裸になってもらえるかな？」

「わ、わかりました……でも命だけはお助けを……」

「あたしは衣服を脱げと言ってるんだよ？　聞こえなかったの？」

「ひっ！　申し訳ございませんっ！　すぐに脱がせて頂きますっ！」

「脱がれましたぁ？　ここでは暗すぎますから月明かりの射すお庭へ出ましょうかぁ？」

次女のアスカがお鈴の手を掴み、外へ誘導する。

「は、恥ずかしいです……衣服を着させて下さいませんか？」

ミカが呆れ顔で腰につけた銘刀紫龍をゆっくりと右手で抜いた。
一歩一歩お鈴へ歩み寄ってゆく。

「なます斬りにされるのに恥ずかしいだなんて……能天気な女だね？」

「ひっ！？　や、止めてっ！！　お願いです……殺さないで……わーん！わーん！」

恐怖のあまりその場に崩れ込んで泣き喚き始めるお鈴の髪の毛を左手でむんずと掴み、思いっきり引き上げて無理矢理立たせるミカ。

「どこから切り落としてほしい？　いい年したオババサン」

『ヒュカッ！！』

いきなり振るった刀は一瞬でお鈴の乳首を二つとも同時に切り落とした。

速すぎて痛みが分からないまま立ち尽くしていたがかなり遅れて絶叫をあげる。

乳輪を残して見事に乳首だけ切り落とすミカの腕は神がかり的だった。

ドクドクと血を流しながらしゃがみこむ後頭部を足の裏でグリグリと蹴り付ける。

顔面が地面に付いて傷だらけになるが、構わず泣き喚き続けるお鈴。

リオとアスカも参加して四方八方から全身を蹴りまくり、踏みつけまくる。

月明かりの下での壮絶な私刑が数刻続くと、既に乳首の激痛と対等になった全身の痛みに、どの部位を押さえるともなく、転げ回ってのたうち回る。

「あはは！　土まみれで惨めだねオバサン？」

「止めは私にさせて」

今度は長女のリオが抜刀しながらお鈴の傍らに立った。
腹部に深く突き刺す。
そのまま腸を抉りながら掻き回すと、腸と子宮と膀胱がにちゃにちゃと卑猥な音を立てながら飛び出し、不気味にテカテカと月明かりに反射し始めた。

「うぎゃあああああっ！！　ひぎいいいいいっ！！」

断末魔の叫びをあげるが、リオは構うことなく数回刀をなぎ払う。
一度目で乳輪が吹っ飛び、二度目で乳房全てが付け根から吹っ飛んだ。
二つとも同時にぶった斬る所は長女のリオも流石であった。
糞尿を漏らしながらもがき苦しむ所に、次女のアスカが右足を振りかぶる。

「ここですか？　大切な部分は？」

『ズドンッ！！……ぶちゅうっ！！』

「けぴいいいっ！？」

爪先が殆どお鈴の膣にめり込んだ。
肛門をヒクヒクさせながら更に尿道から尿を噴射する。

「あらあら……はしたないですわねぇ。血と粘液が混ざってクチュクチュ鳴ってますわよぉ？　お下劣なオマンコですわねぇ？」

爪先が膣に出たり入ったりを繰り返す度に卑猥な音を立てる。
全身をうねうねと動かしながら必死で逃れようとするが、既に致命傷を受けているお鈴であった。
腸の大部分をリオが刀で抉り出し、アスカは今度は抜いた足で性器全体を何度も蹴り付ける。
大陰唇と小陰唇が激しく裂け、挽き肉のようになっていた。

「膣の中身の次は外性器破壊ですわ……もうズタズタになって血の泡噴き出してますわよオマンコから……うふふ」

アスカは興奮してきて更に激しく性器を蹴りまくる。

「ほら、ほらほらぁ。痛いですかぁ？　おほほほ♪」

「まんこ……大変なことになってるよ？　腸も殆ど抜いちゃったし……もう死にたい？」

ミカはしゃがみこんで顎を強く掴み、口を無理矢理開かせた。

「ご、ごろじで……くだざいいい……ぶくぶく」

「きったなぁい！　血の泡上の口からも噴いちゃった……もう臨終の時だね？　死んじゃえ役立たず」

『ズッ！』

「ぐえっ！？　ゴボゴボ……」

喉元に一気に刀を差し込むミカ。
激しく全身を痙攣させせて鮮血を噴き散らしながら息絶える独り身の中年女、お鈴は、三姉妹によって儚い人生を終えさせられた。

「さて……お鉢の方の報復のためか知らないけど……性奴隷たちを拐った春日井のオッサンをぶっ殺しに行こうか？」

「そうですわね。城攻めは難しいですけど……夜襲の上に戦で疲れきって殆どの兵は寝入ってるでしょうしねぇ。良い機会ですわね今が」

「千人斬りだね！　やっちゃおうっ！！」

三姉妹は刀の血を紙で拭うと、お鈴の亡骸の顔へ被せてから血に染まった宿屋の庭を去った。

――――東野城。

戦の疲れからか、見張りの交代を立てているとは言え、朦朧とする意識の中半分寝ている者もいた。
明け方前の東野城に、絶叫がこだまする。

「敵だぁっ！！　殿のお命を狙う三姉妹が現れたぞおおっ！！　皆の者、出合え出合ええええいっ！！」

寝ぼけ眼で薄暗い月明かりの中、必死で斬りかかってくるが、暗闇でも慣れている三姉妹には到底敵わなかった。
みるみるうちに斬り殺されてゆく春日井長政の兵たち。

木製の台の上に見慣れた顔があった。
正確には首から上が乗せられていた。
思わず刀を止めて絶句してしまう三姉妹。

「志乃……」

「勇太郎！」

「三四郎……小さくなっちゃったですわねぇ……」

既に三人の処刑は終えられていた。
覚悟はしていたが涙が滲むミカ。
赤いオーラを身に包み、ミカの千人斬りが開始される。
数倍の速度で敵をなぎ倒していき、すでに逃げ惑う兵しか残っていなかった。

城に火を放ち、本命が降りてくるのを待つ。
死を覚悟してか否か……煙に巻かれながらも側近の本山幹太郎と三人の猛者に護られながら姿を表す春日井長政。

「この煙の中、よく生きて出てこれたわね？　戦にせっかく勝てたのにごめんなさいね……」

「お鉢の仇討ちだ。ケリを付けてやる！」

「こちらも勇太郎と志乃と三四郎の仇は取らせてもらうから……」

一気に駆け出す三姉妹に対し、手練れの三人が春日井長政を護りながら抜刀して駆け出す。
激しく刀を振り付けてくるが、基本的に受け太刀はせず、全てかわしながら両手を落としてゆく。

三人全ての両腕は肘から落とされ、絶叫をあげる。
次の瞬間には三人の首が落ちた。

「流石だな。覚悟はしていたが大戦からこれだけ早くお前たちが現

れるとは思っていなかったわ」
「殿、次はわたくしめが盾になりますゆえその隙に逃げられよ！」
「幹太郎……世話になったな。お主のお陰で剣術に興味を持ち、人生に生き甲斐ができたわ。生きて家族のために尽くしてやれい」
「そ、それは……妻も子も万が一の覚悟は出来ておるはずです」
「早く行けいっ！！」
目を見開いて恫喝する春日井長政。
「殿……承知しました。どうかご無事で……」
「残虐三姉妹よ！　この幹太郎は子が多いのじゃ。見逃してくれるな？」
「……本来ならバラバラにしてやるんだけど。あなたの男気に免じて希望にこたえてあげるよ」
「すまぬ残虐三姉妹……さぁ行くのだ幹太郎」
「ははっ！　ご武運を……」
涙を堪えながらも家族のためにその場から立ち去る側近の本山幹太郎。

「あのさぁ。いちいち残虐残虐って何度も繰り返さなくてもいいから……何かいい気しないいんだけど？　じゃあ今から心置きなくお鉢さんの元へ送ってあげるね？」

リオがゆっくりと前に出る。
激しい攻防が開始された。
剣の道を修行してきた春日井長政はかなりの時間リオの攻撃を見事なまでに回避する。
受け太刀しながら身をかわしながらお互いに無傷のまま長い時が過ぎる。

「へぇ～。やるなぁ。ここまであなたが強いとは……」

「はぁ、はぁ、ワシも剣の戦いは大好きじゃからな。じゃがそろそろ……本気を出してもよいぞ？」

「……うん。じゃあサヨナラだね……あなたは一瞬で逝かせてあげるよ」

「ああ。今度は男に生まれ変わってこいよ。お前らなら大した武将になれるぞ？」

「ありがとう。でも次も女でいいよ。じゃあね……」

もう既に己の全てを出しきり、精根尽き果て、殆ど体力の残って

いない春日井長政の首がリオの一閃により一瞬でふっ飛んだ。

銘刀紫龍の血を振り払い、刀を鞘に納めると、残る兵には目もくれずに東野城から逃げ出す三姉妹であった。

春日井長政の亡骸は、油を撒かれてごうごうと広がる炎に包まれ、城と共に焼き崩れてゆく……。

——一年後。樽賀の国。

安川城から三里ほど北に離れた野原で、側近と世話役の二人と四人で鷹狩りを楽しむ徳山家男の姿があった。

側近の保野田影安が長い髭を揺らしながら口を開いた。

「殿、依然として西軍総大将である石立睦成消息の報せは入ってきておりませぬが……既に時間の問題かと思われます。多額の賞金を出して似顔絵もかかせて各地に通達しておりますゆえ……」

「そうか。出来るだけ早急に見つけ出して公開処刑にしないとな。戦で死んでいった戦友たちにも示しが付かぬわ」

「はい」

五十間ほど坂を登った場所に小さな林がある。その中へ飛んでいった鷹が、大きな鳴き声を残して帰って来なくなったことに心配した徳山家男は、四人で林の中へ探しに行った。

ボロボロの継ぎはぎだらけの着物を身に纏った齢１６くらいの少女が立っている。
顔も土や埃で汚れて、男か女か、美人かどうかさえ判別できないほどである。
「鷹を探しているのですか？　少し向こうの高い木の方に落ちていきましたよ」
「そうか。こんな林の中で嬢ちゃんは何をしておるのだ？　両親は？」
「…………」
うつむいて何も答えない少女を不思議そうに横目で見ながら高木の方へ歩いて行く徳山家男。
少女はいきなり駆け寄ると、徳山家男に背後から抱き付いた。
「おおっ！？　ビックリしたわ。何事かと思ったぞ。寂しいのか？」
「はい。寂しくて寂しくて…………死んでほしいです……」
最後の方は聞き取りにくいほどボソッと呟くように言った。
「ん？　寂しくて死にたい、と申したか？　まだうら若いのに命は

大事にいたせ。影安よ！　お主もこのオナゴを励ましてやってくれ」

少女に背後から抱き付かれたままで、側近たちの方へ振り向く徳山家男。

少し照れ臭そうにニヤけていたが、信じられない光景が次の瞬間目に飛び込んでくるのであった。

『ズドッ！！……ヌウッ！』

何かが“ヌウッ”っと徳山家男の腹から伸びてきた。

「ん？」

本人も何だ？　と言わんばかりに下を向いて確認する。

「え？　と、殿っ！！」

『ズズズ……ドパアッ！！』

「ぐはあっ！？」

側近たちの見守る目の前で、飛び出してきた“何か”は、胃のある上方へ移動し、次の瞬間には腸が飛び出した。

口からは大量の血を吐き、悶絶しながらドボドボと腸を足元に落下させてゆく。

「うごおおおおっ！？　なんじゃこれはっ……」

両手で腸を押さえようとするが、縦に大きく切開された傷口から滝のように流れ落ちて止まらない。

『バシュッ……ヒュカッ！！』

突起物が引っ込んだと思った次の瞬間、横方向へ凄まじい速度の一閃が走り、徳山家男の首がポロリと落ちる。
前回りで半回転したその首は、自ら落とした腸の中へグチャッと後頭部からめり込んだ。
頭部を無くした本体は数秒かけてゆっくりと尻餅を付くように崩れこみ、仰向けに倒れて痙攣を始める。
噴水のように噴き出す頸動脈からの血をかわしながら少女はニコッと笑い、舌を出した。

「てへっ！　タヌキ親父を殺っちゃったぁ♪」

「と、と、殿おおおおっ！？　貴様ああっ！！」

「じゃあね！　」

辺りの木から飛び降りてきた二人の女と合流し、一気にその場から走り去った。

「完璧な連携だったねリオねーちゃん！」

「うん！　まさか木の上から刀落として渡すとは全く思わなかっただろーね」

「丸腰の女の子だったからこそ皆さん方は警戒しなかったんでしょうねぇ。作戦大成功ですわ。残りの御三方も殺らないで良かったのですかぁ？」

「あいつらを生かしておかなきゃ誰が安川城にタヌキ親父の首を持って帰るの？　どんな心境で主人の首を持ち帰るのか想像しただけで楽しくない？」

「持ち帰られた側も卒倒しますわねぇ。うふふ♪」

席ヶ原の天下分け目の決戦に大勝利した徳山家男だったが、全国各地に大名を新しく配置を終えた矢先の一年後、無念にも残虐三姉妹によって暗殺されてしまう。

大大名の天下人の油断を誘うために一年間も待ったことは、三姉妹にとって結果的に大正解であった。

――――坂神の町。

「ありがとうございました！　よく似合ってますよお嬢様」

「ありがとうおじさん。一生大切にするからね」

仕立てたばかりの花柄の着物を着て上機嫌で店を出て行く少女。両親も笑顔で会釈して娘の手を繋いで帰ってゆく。

「さて暖簾を下ろすか……今日も良く売れたし♪」

ふと男が通りを見渡すと、懐かしい顔があった。

「お久しぶり。一年ぶりです」

長女のリオが声を掛ける。

「おおっ！　リオにアスカ……ミカも！　三姉妹揃って元気そうでなによりじゃ！」

「睦成おじさんってばすっかり商人になっちゃってない？」

「もう誰がどう見ても天下分け目の合戦の西軍総大将には見えませんわねぇ……」

アスカとミカも少し呆れ気味に続けた。

「あなたちょっと！　あの奥の部屋の壺を持ち上げててくれる？
おや？　どちら様ですか？　」

いきなり暖簾をくぐって顔を出してきた齢３０ほどの女性が、三姉妹に挨拶する。

「え！？」

三姉妹揃って同時に驚きの声を出しまう。

「半年前にお客として来たこの女性と縁を持って……この店を主人から任せてもらったから二人で住んでるのじゃ。こんなことになるとはワシ自身思ってなかったわ。すまんのぅ」

固まる三姉妹に女性が続けて声を掛ける。

「良かったらお入り下さい。お茶でも淹れますので」

「い、いや、結構ですお構いなく……一言お伝えしたいことがあっ

て来ただけですから……」

リオは動揺しながらも両手を振って断った。

「アスカねーちゃん、こりゃ再起を図るどころじゃないよね？」

「そうですわねぇ。まぁこれも一つの生き方なのでしょう」

ひそひそと後方で話すアスカとミカに構うことなくリオは続けた。

「徳山家男を屠って来ました」

目を見開き、一瞬戦国武将の表情になるが、すぐに冷静になり俯く。

「そうか……良くやってくれた。じゃが見ての通りこの町でワシにも妻ができた」

「分かってます」

「最早天下をとりたいとゆう欲望が残っておるのか否か……商人として生きていきたい……とさえ思っておる」

「私たちは睦成様のお陰で今日の命があります。恩返しが出来たのなら後はどうなってもいいのです」

意味を理解してない風な、きょとんとしている妻を見ていると、本当の立場とかを話していないように感じたリオは、深々と頭を下げて挨拶をする。

更に続けた。

「徳山家は、無能だけど家男にそっくりな弟がいると聞いています。おそらく影武者代わりに弟を立てて、家男の死を隠し通しながら今の政権を維持していくことでしょう。徳山政権の時代はもう誰にも止められないと思います。……ではお達者で！」

「しばし待て！　長い旅になるのならどこで寝ることになるかわからんのじゃ。これを持っていくがいい。近頃の夜はかなり冷え込むからのう」

高そうな毛皮のマントを三枚受け取るリオ。

「ありがとうございます！あったかそう……ではお元気で」

「どうも。失礼します」

「奥さんと仲良く元気でねっ！」

アスカとミカも挨拶して笑顔のまま石立睦成に背を向けた。

「……ワシの為に苦労をかけたな。すまぬ」

去ってゆく三姉妹の後ろ姿を見送りながら石立睦成も深々と頭を下げた。

隣で首を傾げながら不思議そうに見つめる妻に構うことなく頭を下げ続けた。

身体を洗う為にしばらく獣道を歩いて、下方に流れる谷をめざして山道を降りてゆく。

落ち葉や枯れ木を集めて来て焚き火をし、冷たい水で冷えた身体を温める。

「今夜はここで寝よう」

リオはこの場所を安全だと確信して、泊まることを決意する。

魚も三尾竹の槍で獲ったので、細い枝を串代わりにして焼いて食べた。

「山と崖を越えて移動しないと普通に街道歩いてたらすぐ捕まっちゃいそうですもんねぇ。もう私たちの顔は既に似顔絵で広まっちゃってますから……」

アスカはこれからが大変だと言わんばかりに深い溜息を付いた。

「お尋ね者の宿命だよね。そう言えばミカ……最近志乃のこと思い出して泣かなくなったよね？　もう振り切れた？」

「うん。いつまでも泣いていられないもんね。ただの性奴隷だと思ってたのに……なんであんなに辛かったんだろ……自分でも良く分かんないや。あーあ。アメゴは美味しいけど疲れたなぁ……。遥か西の国に早く行って、ど田舎で平和に暮らしたいなぁ。もうやることもやっちゃったし……あっ！」

毛皮のマントを被って一人だけ横になっていたミカがいきなり起き上がりながら叫ぶ。

「極西に行く前に谷川勝利の身内の元へ護衛に行った楓ねーちゃんに会いに行かない？」

大きな目を更に大きく見開いて三女のミカがリオとアスカに問い掛ける。

「会いたい気持ちは分かるけど……もう一刻も早く西方へ移動しないと……時が経つごとにマズい状況になるわ」

「それもそうですわね。仮眠だけとって早めにこの国を出ましょうミカちゃん」

「残念っ。分かったよ……お休み。くう～。くう～」

寝ようと思えば瞬時に寝れるミカに呆れながらもリオとアスカも仮眠をとった。

戦勝国である東軍所属の新しい大名が各地に入城しているとはいえ、西軍に何となく味方したが石高を削られつつも命は取られずにお家を存続させてもらっている元々の西軍総大将である豊神秀郎恩顧の大名も多数いる。

徳山家男を敵に回したくはなかったが、“豊神家の御為”と石立睦成に唆され、嫌々ながらも西軍に付いた大名は、特に存命率が高かった。

西に行くほど安全だということは、石立睦成の命を救った、とゆう点で三姉妹にとっては当然のことであった。

拷問処刑人外伝……残虐三姉妹⑪（後書き）

天下統一を果たした徳山家男。

命からがら三姉妹によって救われた石立睦成。

大戦は遂に決着したが、一年後、徳山家男は暗殺される。

再起を図るかと思われた石立睦成は思いもよらぬ残りの人生を歩むこととなった。

残虐三姉妹は、無事に豊神恩顧の大名が多数配置された極西の国まで辿り着けるのか？

（最終回⑫へ続く）

拷問処刑人外伝……　（最終回）（前書き）

徳山政権の存続には成功したが、亡き徳山家男の仇を討つため、岩で覆われた牢獄を目指す東条高虎。
望みは叶うのだろうか？

拷問処刑人外伝……　（最終回）

「御家来衆も連れず御馬も曳かせずにお一人で旅をされるとは……少々御酔狂が過ぎまするぞ？」

「はっはっはっ！　丸一日歩けば辿り着く距離じゃ。大袈裟過ぎるぞ栄太郎」

「しかし……出発されるなら前夜にでも一言お伝え下されば……殿は幼少の頃より某を信用されておりませぬな？」

東条高虎。

席ヶ原での東軍勝利において、かなりの武功を上げた猛将である。元々徳山家男からの溺愛を受けて成長したこともあり、戦後は南東地方の１０万石から東北地方北願城城主、５０万石までの太守に成り鎮(おさ)まることになる。

幼き頃から世話をしてきた側近の北野栄太郎は、異変に気付き慌てて城を飛び出して追いかけてきた訳であった。

馬曳き役の男は東条高虎を馬上の人にさせると、ニッコリ微笑みながら歩を進める。

「もう今からは我らが守護しますゆえご安堵めされまするように。馬を曳いてるこの男は……こう見えてもかなりの剣術の手練れでござりまするぞ」

「そうか。ならば好きにせい！」

北北東へ向かう三人は、途中の小さな村で宿を借り疲れを癒すためゆっくりと風呂に入り、宿泊した。

――――明くる日。

北北東の極地には断崖絶壁が延々と続く海岸がある。
その崖の洞窟を利用して作られた暗く強固な牢獄があった。
死罪を言い渡され、刑の執行を待つ罪人たちが閉じ込められていた。

「さあ入るんだ！」

「いててっ！　離しやがれっ！　痛いじゃねぇか畜生っ！」

『ガチャガチャ……』

新しく投獄されてきた活きのいい男が騒ぎたてるが、手際よく鍵を閉めて去ってゆく看守たち。
齢２０の若い男、小竹簑助は薄暗い中、目を凝らして辺りを伺う。

「辛気臭え場所だな……上から水滴は落ちてくるわ何か臭えわ最悪

だぜ」

うっすらと辺りが見えかけてきた頃に、四人の人影が見えてきた。

「ん？　先客がいたのか？」

「ううう～あううう～」

微かにうめき声が聞こえてきた。

「許して下さい……二度と逆らいませんから……」

かなり大柄なむさ苦しい男が、小竹簑助と同じくらいの若い男に覆い被さっているようだった。
よく見ると激しく腰を振り続けている。

「んがあっ！　ひぃいっ！　痛いいいっ！！」

「ほっ、ほっ、ほっ、ほっ！」

泣き叫ぶ男を気にとめることもなく、更に激しく腰を振る大男。

「な、なんてこった……男が男に犯されてやがる」

両足首をガシッと掴み、股を大きく開かせてパンパンと音を立てながら激しく肛門へ出し入れされる巨根……。
よく見ると肛門からはかなり出血し、陰茎からは透明の液を垂れ流していた。

「ぎひいっ！　痛いっ！　やめてくれえええっ！！」

「もう出していいですか？」

「いいよ。直腸にたっぷりぶちまけてやりな」

「あはは！　イヤらしい液先っぽからだしてんじゃん！　早く出してやれええっ♪」

「はい」

『ドピュッ！　ドピュピュピュピュピュピュウウッ！！』

「んおおおおうっ！？　ひいいいっ！！」

誰に許可を得たのか不思議に思った小竹簑助は、岩に座っている人影に目を凝らす。

「二人の女の声がしたようだが？　ん？」

肩ぐらいにまで伸ばした髪の女が二人、足を組んで座っていた。

「ワシと同じくらいの齢だなきっと。同じような顔をしてるが……双子の姉妹なのか」

一人ごとを言いながら歩み寄ってゆく小竹。

四人の目前に出ると、軽く挨拶をしようと口を開いた。

「おう、今日からここに入ることになった小竹ってもんだ！　三人をぶち殺してここにきた！　宜しく頼むぜ」

小竹の挨拶を無視しながら、大男は肛門を犯した男を裸のまま引っ張り起こすと、岩に座っている女二人の前に運んだ。

「今日の夕御飯は私たちにくれる約束だったよね？」

「ううう、腹が減りすぎて死にそうでして……すみませんでした……」

男は肛門から血を流しながらも女二人に対して土下座をする。

「おい、なんで女なんぞに土下座してんだ？　なんならワシが同じような顔した姉妹を犯してやろか？　はっはっはっ！」

「仰向けに寝転がってくれる？」

「は、はい」

依然として小竹のことは眼中にない四人だった。

「こ、こいつらワシをシカトかっ！？　ちきしょう……どうしてくれようか……うぐぐ！」

怒りを堪えながら顔を真っ赤に紅潮させる小竹だったが、あまりにも侮辱的な光景が目に入り、ふと我に返った。

姉妹らしい女一人が岩から降りると、肛門を犯された男の顔面を踏みつけ始めた。

「ほら、ちゃんと反省してるの？」

「ううう、むぐぐうぅ……」

『グリグリ……ぐしゃっ！』

「うぎゃっ！？」

踏みつけていた足を少し高く上げて、今度は一気に顔面を蹴りつけると、男は鼻血を噴き出した。
更に顔をグリグリと執拗に踏みつけ始める。

「ほらほら、汚い血を流しちゃって……あたしの足の裏が汚れるじゃん？　どうしてくれるのかな？」

「うごごごおうう……ひいい」

大男は必死で女の足を掴んで払おうとする男の両手をむんずと掴み、抵抗できなくさせる。

「由奈ねーちゃん、こいつも今日殺っちゃおうか？」

岩に依然として座り続けているもう一人の女に、男の顔面を踏みつけながら声をかける女。

「そうだね。じゃあ死ぬ前に天国にイカせてやろーかいつものように……真奈がやる？」

「いえいえ、それは由奈ねーちゃんの趣味でしょ？　あたしは男の変な部位になんて興味ないから」

「そうだったなぁ。真奈は女を責めるの好きだもんな。じゃあ私に任せてくれ～」

双子の姉らしい女、由奈も岩から飛び降りると、妹の真奈に顔面を踏みつけられている男の太もも辺りに足の裏を置いた。
そのままグリグリと踏みつけながら少しずつ股間へ向けて移動してゆく。

「そんなに顔面を踏みつけられて痛いだろ？　私がこれから気持ちいいことしたげるからなぁ。うふふ♪」

小竹簑助は無視された怒りを通り越して、目前でこれから何が起こるのか興味がでてきて必死で一部始終を見詰め続けている。

姉の由奈の足は少しずつ移動していたが、遂に男の股間を捉えた。陰茎にそっと足の裏を押し付けてゆく。

『グッ！　グリグリ……グリグリ』

「んんっ！？　んおおおお……」

真奈の足の裏を無理矢理舐めさせられながら男は唸り声を上げた。
そのまま小刻みに陰茎を擦り付けると、男は更に低い唸り声を上げながら全身を震わせた。

「お、おい、この女何てことをしゃがるんだ？　女のくせに男の陰部を踏みつけるたぁひでえこったぜ全く……」

完全に無視を続けて男に声をかける由奈。

「おーい、気持ちいいかぁ？」

「ううう……は、はい」

『スコスコスコスコ……』

由奈の足の裏は、確実に男を快楽の世界に導いてゆく。
顔をクシャクシャに歪めながらも大量の精液を吐き出した。

「お！　なんてこった！　イッちまったのか？　女の足の裏なんかで擦られて……情けねぇなあ……」

大男は男を抱え上げると、並んで立っている二つの岩に逆さ向けにして両足首を縛り付け始める。
股関節が外れそうなくらい限界まで大きく股を開かせて手際よく縛り付けていった。
肩の辺りは地面の岩に乗るような形になるので、全体重が足首の括り目にくるような悲惨な状態ではなかったが、頭に血が昇るかなりきつい体勢ではある。

どこから用意したのか、なぜ死刑囚がこんなものを持っているのか……大男は岩影から日本刀を取り出し鞘から抜くと、姉の由奈へ手渡した。

由奈は静かに日本刀の刃を下側へ向けて男の股間へそっと置いた。

「これ、挽いちゃうから。覚悟はいいか？」

男勝りな話し方をする姉の由奈は、男の肛門と陰嚢、陰茎の裏筋辺りの全てが刃に当たるように日本刀の位置を微調整しながら問いかける。

「い、嫌だっ！！　助けてくれえええっ！！」

「お願いする割には偉そうに言うんだ……もう一度機会をあげる。お願いするときはどんな風に言うんだ？」

「ひっ！　ゆ、由奈様、お願いします！　私を許して下さい……殺さないで下さいっ！！」

「やればできるじゃん。大したもんだ。でもこうしちゃうんだ♡」

『ズバッ！』

由奈は刃の根元から切っ先へかけて、瞬時に一気に引いた。数秒ほど遅れてぱっくり開く男の股間。

縦方向へ肛門は切り裂かれ、陰嚢は中央部分からぱっくり開いて生の睾丸が飛び出してきて、神経の束で下へは落ちずに辛うじてぶら下がって揺れている。
陰茎は裏筋から尿道にかけて見事に切り裂かれ、まるで二本生えてるかのように真っ二つになってしまった。
飛び出した真っ白な尿道から小便が大量に飛び出し始めた。

「うぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃああああっ！？　ぎえええええっ！？」

「あはは！　まずは刀でバッサリいっちゃった♪」

そのまま日本刀を大男に返すと、今度は交換に斧を手渡した。

「さぁ次は恥骨をぶちこわしてやるからな」

泣きわめくことしか出来ない逆さ吊りの男へ、再度歩み寄り大きく斧を振りかぶる由奈。

「すまないなぁ。この骨砕いとかないとノコギリで挽くの苦労するんだよ。せぇの……えいっ！」

『ドカアッ！！　ぐしゃっ！！　バキバキボキボキィッ！！』

大きな重たい斧は、一撃で男の恥骨を縦に粉砕した。

真っ二つにされた直腸と、小腸の一部がブリブリと腹部から飛び出してくる。

「ひぎゃあああああっ！！　ぐわあああああっ！！」

もう絶叫を上げるしか出来なくなった男は、縛られたままで全身をくねらせ抵抗を見せるが、由奈は薄ら笑いを浮かべながら、桃色のくの一装束についた血を布で擦る。

姉妹は見た目もそっくりだが、格好も桃色の同じような服装をしているので、喋らないでいるとどっちが由奈か真奈かは判断できない。

本来は紫のくの一装束を特別に桃色に拵えたお洒落な服を着ていた。

白い太ももが殆ど見えるくらい、裾は短いため、風が吹くとすぐに下帯が見えるほど色っぽいものだった。

今度も斧を大男へ返し、刃の小さなノコギリを手に取る由奈。

ぱっくり裂けて血まみれの股間へゆっくりと差し込むと物凄い速度で挽き始めた。

『ギィコギコギコギコギコギコ！！』

男は断末魔の絶叫と共に、カブトムシのサナギのように狂ったよ

うに身をくねらせるが、由奈の挽くノコギリは、確実に身体の中央部分を頭部の方へ切り裂いてゆく。

既に前立腺も膀胱も真っ二つにされていた。

曳く度に飛び出している睾丸二つがプランプランと前後左右に揺れる。

「あはは！　背骨を縦に挽くのは大変だから、心臓と反対側へズラして背骨に沿って挽いたげるからな。真奈ぁ～。キンタマぶらぶら揺れてムカつくから潰しといてくれるかな？」

「もう……あたしは女を責めるしか興味ないのに……金玉なんて気持ち悪いだけじゃん……」

嫌々短刀を取り出すと、右側の生の睾丸へ一気に突き刺した。

『ズッ！……グリグリグリ！……ぐちゅぐちゅぐちゅ！』

刃先全体を使って睾丸内部を激しく掻き回すと、ぐちゃぐちゃに液状化してしまった真っ白な中身がドロドロと流れ落ちてくる。

『トロトロ……』

「うわ！？……きしょ」

真奈は、あまりの気持ち悪さに、もう一つは生で摘んで精管と神経を引きちぎり、岩ばりの足元へ落としてから足の裏で踏み潰した。

そうしている間にも由奈の処刑は続く。

背骨を掠めるようにほぼ真っ二つに身体を挽き裂かれてゆく男……すでに自分の血で上半身も顔面も真っ赤に染まっている。

「すっご！　ドボドボ腸(はらわた)落ちてくるなぁ……スッゴく痛いだろ？　あはは！　そそるわぁ～」

「おえっ！　おえええっ！……ゲロゲロ」

「きゃっ！？」

『ドカッ！！』

ノコギリ挽きの死刑を見ていた男は、遂に耐えきれず戻してしまう。

咄嗟にかわした真奈は思いっきり脇腹を蹴飛ばしてしまった。

ゲロを撒き散らしながら豪快に二転三転する男は、文字通り“ゲロまみれ”になってしまう。

「やっと構ってくれたと思ったら……げほげほっ！　いきなり蹴飛ばすのかよ？　げほっ！　げほっ！」

胃まで挽いた時には全身を激しく痙攣させて、遂に息を引き取る男。

「男に犯されてケツ穴からバックリ切り裂かれて死ぬなんて……ホント哀れなやつだな？　あの世で私たちに逆らったこと後悔してるのかぁ？」

そう言いながら男の身体を中央まで股間から切り裂いたノコギリをそのまま手放して血まみれの顔面を何度も爪先で蹴りつける由奈。

『ガチャガチャ……』

その時、門の方から再び鍵の外れる音がする。
何者かが入ってくるみたいだった。

「由奈ねーちゃん、また新しいの来たのかな？　まだこいつ殺ってないのにね」

「そうだな。まぁチマチマ殺るのがめんどくさい時は一気にシメてやるまでよ」

太ももに付着した男の血を手で拭いながら門の方を凝視する由奈。
男は大男の力強さと姉妹らしき女二人の残酷さに震えていた。
あんな殺され方をするくらいなら普通に早く斬首してほしいとま

で思ってひたすら震えていた。

「こちらです。どうぞ」

「ああ。すまぬな……おおっ！？」

松明で明々と照らされた姉妹の姿を見た大名風の威厳のある男は、女に声をかけてきた。

「お前たちが東北で有名な最強剣士……ユナマナだな？」

「なんだお前は？　投獄まえの私たちのあだ名を知ってるとゆうことは助けにきてくれたのか！？」

「はっはっはっ！　噂通りとてつもない威勢だな。しかもオナゴのくせに身体がデカい……しかし足も白くて綺麗な肌の色をしとる」

「変態かお前は？　何者かと聞いているんだ！」

看守が一歩前に出て由奈と真奈の姉妹を睨み付ける。

「立場を弁えろ！　お前たちは死刑囚だぞ？　今まで生かしておいたのは死刑執行する前にお前たちが囚人たちを始末してくれたから我らの手間が省けるからだ。　この御方が今日会って頂けなくばお前たちは死ぬまでこの場所から出られなかったのだぞ！？　それに

この御方に対してこれ以上の無礼な口のききかたは許さんぞ！？」

怒鳴りつけられながらも呆然と立ち尽くす姉妹。

「え？　もしかして私たちをここから出してくれるのか！？」

「おじさん！　本当に出してくれるの！？」

オナゴにしては身体が大きく、だが美形で色白な由奈と真奈を凝視していた男は、ゆっくりと口を開いた。

「ワシは北願城城主、東条高虎と申す。今日はそなたたちを無罪放免とし、世に再び戻して自由にさせてやる為にここへ来た」

目を見開き、由奈と真奈はお互いを見詰めあい、投獄されてから初めての心からの笑顔を見せる姉妹だった。

「だが……」

一瞬で最大限に声を低くする東条高虎。

「あ？」

「え？」

それに対して一瞬戸惑いを隠せない姉妹。

「……条件がある」

椅子のような形をした岩にゆっくり腰掛けると、更に続ける東条高虎。

「ワシは父上以上に尊敬しておった方を亡くした……徳山家男殿じゃ。前の大戦で見事勝利を納め、天下統一までされたのに……その一年後にある者たちによって暗殺されたのじゃ」

「ええっ！？　あの徳山殿が……私たちも幼き頃に世話になったと聞いているが」

「そうなの！？　あたしは知らなかったけどそんなこと……」

「では行こうか……何度となく刺客を送り込んだがことごとく返り討ちにあってばかりじゃ。ユナマナ……もうそなたたちしか残虐三姉妹を討つことは不可能じゃ」

由奈はふと振り返り、先ほど投獄されたばかりの震える男へ歩み寄る。

「どうやらこの牢獄での私たちの最後の仕事があんたになったみたいだな。でも時間がないから安心しろ……すぐに逝かせてやるよ」

「まだ……生きたい……頼む……見逃してくれよ」

「私たちもあんたも……そうやって命乞いする人間を何人も殺してきたなぁ？　つまりそんな命乞いは通用しないとゆうことだ。死ね！」

横に一閃。

一瞬で首が岩盤へ転げ落ちる。

「この大男は……私たちの代わりに罪人の処刑をしてくれるだろう……生かしておいてやってくれないか？」

「分かった。看守殿、ワシからもお願いいたす！」

「は、ははっ！　東条様がそうおっしゃられるのなら……しかしこの男は気が弱く、この姉妹がいなくなれば最早人も殺せませぬ。それでも生かしておきまするか？」

「ああ。宜しく頼む」

丁寧にくるまれた包みを開き、元々由奈と真奈が使っていた妖刀（ようとう）春雨（はるさめ）を姉妹に返す看守。

「不思議な妖力を宿しておるなこの刀は……そなたたちが片っ端から腕利きの剣士を屠ってきた理由が分かるぞ」

妖刀春雨を受け取りながら由奈が答える。

「そうそう。私たちは代々妖怪みたいに罵られて生きてきた者だからな。伝家の宝刀までも〝もののけ〟染みてるわけだ」

妹の真奈も続けた。

「この刀……取っておいてくれてたんだ。ありがとう看守のくそじじ……あ、ごめん、いつもの癖で……看守のおじさま、ありがとう♪」

満面の笑みで誤魔化しながら睨み付けてくる看守から妖刀春雨を受け取る真奈だった。

――――南西関所。

席ヶ原より三十里ほど南西の位置に、南西関所とゆう見張り番が

数人住み込んでいる小屋があった。

「聞いたか？　東方面からくる女は一切通すなとゆう伝令が徳山殿からきているらしいぞ」

「ああ。そう言ってたな交代の助六たちが……女だけってまた……男は通していいのだな？」

「そうゆうこった。北西の関所から西部中央関所まで片っ端からこれ以上西へは行かせないみたいなことも言っていたぞ。よほど物騒な女たちが向かってるんだな」

厳重に関所を固められ、これ以上西へは向かえなくなった三姉妹。

「こりゃ参ったな。しばらくこの辺りの村人に扮してほとぼり冷めるまで身動き取れないかも……」

残虐三姉妹長女のリオが珍しく弱気になっている。

「そうですわねぇ。この辺りは断崖絶壁なり峠なり険しい道がないですからどうあっても関所を越えないと先へ進めませんものねぇ……」

「もうやりたいことはやって来たし……あたしはいつ死んでもいい

よもう」

冗談なのか本気なのか分からない口調で呟きながら三女のミカが微笑む。

霧ヶ隅村とゆう二十人ほどしかいないない小さな村にしばらく住み着くことに決めた三姉妹は、村人に挨拶してみんなから好かれるよう努力した。

――――――一ヶ月後。

漆黒の馬を駆り、二人の姉妹が西へ西へ向かっている。

東条高虎は、徳山家代々に縁のある忍を使って細かく情報を収集し、霧ヶ隅村に“それらしい三姉妹„が住み着いていることを知る。それを聞いた由奈と真奈は、驚異的な速さで馬を走らせ、夜明け前に霞ヶ隅村の手前の小さなお寺に辿り着く。

「真奈、夜明けと共に村で残虐三姉妹を処刑だ。それまで仮眠して疲れを癒しておこう」

「ほーい。かなり手強いみたいだけどあたしたちの腕とこの“妖刀春雨„があれば無敵だよね。じゃおやすみ」

晴天だがかなり風が強い朝だった。

辺りは徐々に明るくなり、霞ヶ隅村に朝日が射し込む。
与えられた農作業をこなすため、三姉妹は鍬をもって畑へ向かう。
そこには田舎の畑には到底馴染めない桃色の衣服が浮かび上がっていた。
正式には“浮いて見える”ほどに明るく見えた。

「おはよう」

姉の由奈が大声で挨拶する。
何者かとしばらく黙って様子を見る三姉妹だったが、更に妹の真奈も口を開いた。

「残虐三姉妹さんたち……だよね？」

どこをどうみても農作業する村人にしか見えないはずだが、派手な服装の相手方は自分たちの正体を知っている。
この時点でリオたち三姉妹もある意味での覚悟を決める必要があった。

「そうだけど……随分と派手な服着た刺客だね？」

長女のリオが皮肉をこめて探りを入れる。

「あはは！　刺客だって気付いてたんだ♪　今日がお前たち三姉妹の人生最期の朝だよ。冥土の土産にようく朝日を拝んどけよぉ！」

「あたしたちと一対一で仕合いしてくれないかな？」

姉の由奈に続いて、真奈も単刀直入に話を切り出した。

「リオねーちゃん……何か嫌な予感がする。こいつら体格あるだけじゃなく“何か”を秘めてる気がするよ」

「そうなの？　私にはその“何か”は分からないけど」

三女のミカの不安に対して大して気に止めないリオだったが、次女のアスカも少し気になっていた。

「そう言えばミカさんも……いざとゆうとき何か“赤い闘気”みたいなもの纏ってるように見えましたわね？　不思議な力を持っている同士だからこそ……分かることなのかしらねぇ？」

アスカとミカに軽く微笑むと、リオは一歩前に出る。

「向こうも姉妹みたいだけど……とりあえず私からいく」

「リオねーちゃんっ！　今日はあたしから先にやらせてっ！　一人目倒したら二人目もあたしにやらせてっ！」

「いくら一番強いからって美味しい所ばかり持っていくのは無しだよミカ……次にやるのをアスカかあんたで相談でもしてて。じゃ、サクッとやっつけてくるから」

畑の中央まで銘刀紫龍を抜きながら歩を進めるリオ。

薄ら笑いを浮かべていたユナマナ姉妹も先鋒を決めたのか、先に姉の由奈がゆっくりと中央へ向かう。

妖刀春雨をゆっくりと抜きながら笑顔で睨み付けてくる。

「すまんな。お前たちには死んでもらう。私たち姉妹もたいがい悪党だが、徳山殿のご厚意で幼い頃から闇で活躍する猛者たちから数々の暗殺剣修業を受けてきた。だから……まず負けない」

「やってみなくちゃ分かんないよ。ぐだぐだ言ってないで掛かってきたら？」

「死刑囚とされながら処刑人にされて一生牢獄で生活させられるところを助けてくれた徳山殿恩顧の東条高虎様直々の頼み……必ず果たさせてもらう。いくぜっ！」

話し終わる寸前に一気に踏み込む由奈。

凄まじい闘気を放ちながら一閃二閃と振るわれる妖刀春雨は、殆ど目視できない速度であった。

『キンキンキンッ！』

「なっ！？　なにっ！？」

一瞬で何度も振るわれる妖刀には受け流すこともかわすことも出来ず、刃こぼれしながらも全て受ける羽目になるリオ。

「リオねーちゃんっ！！」

心配のあまり大声で叫んでしまうミカだったが、次の瞬間には銘刀紫龍は弾き飛ばされ、回転しながら十軒ほど向こうの地面に突き刺さった。

『ズバズバッ！！』

「ぐああっ！？」

刀を失ったリオの両手首は足元に落ち、大量の血が地面を染めてゆく。

痛みのあまりに膝まづいてしまう。

「は、ははは。あはははははっ！」

「リオねーちゃんっ！！」

助けに入ろうとするミカをアスカが止める。

「ミカさん、気持ちは分かりますけど一対一の仕合だけは固く規則を守ってきた筈ですわ？」

「そ、そんなこと言ったって……リオねーちゃんが……」

涙を流しながら激痛に堪える長女のリオを見詰めるミカ。
由奈は水平方向を大きく振りかぶり、首を一閃する構えを取った。

「ほら、泣きじゃくる妹のガキに最期の言葉をかけてあげろよ？」

唇を噛みながらゆっくりミカの方を見て、口を開きかけた瞬間、由奈の妹の真奈が口を挟む。

「やだあっ！　由奈ねーちゃんったらカッコつけちゃってぇ！　似合わないよっ！？　あははははっ♪」

「ミ、ミカ……アスカ……今日までありがとうね。今までやってきたことを思えば……当然の報いかも知れないけど……あなたたちと姉妹でやってこれて……楽しかった」

「リオねーちゃん……ぐすぐす」

「お姉さま……私も次戦ってきますわ。あっちへ行っても応援して
て下さいね」
「きっちり皆に後を追わせてやるからな。安心して成仏しろ」
『ビュンッ……ザシュッ！！……ポトリ……』
真下に落ちるリオの首は穏やかに笑っているように見えた。
「リオねーちゃあああんっ！！」
「私も殺られたら……逃げてくれますミカさん……一人でも生き残
って欲しいですわ」
「だ、ダメだよっ！！　アスカねーちゃんまで失いたくないっ！！
あたしが次戦うからっ！！」
「うふふ。妹を盾にする姉なんて聞いたことがないですわ……お姉
さまの次は私……順番とゆうものがありますから。じゃあお姉さま
と共に私を応援してて下さいね大好きな妹の……ミカさん」
顔をクシャクシャにして泣き喚くミカを背にスッと銘刀紫龍を鞘
から抜くと、リオの遺体の前に跪き、生首の頭を優しく数回撫でる
アスカ。
ゆっくりと立ち上がり振り向くと、既に次の対戦相手である妹の
真奈が大欠伸をしながら待っていた。

「ふあぁぁぁ〜。もう残虐おねーさんとのお別れは終わった？　山賊の子供とはいえ幼い童子までも犯して惨殺してきた三姉妹が……何を価値つけて泣いちゃったりしてるの？　残虐な奴らになんかお墓も涙もいらないっ！　なんてねっ！　あっはははははっ♪」

「こら真奈っ！　私たちだってガキも女も散々ぶっ殺してきただろーがっ？　人のこと言えんのかよっ！？」

「てへっ！　由奈ねーちゃんってば……痛いトコついてくるのねぇ〜。やだやだ……」

震えながら憤りに堪えるアスカだが、ついに抑えきれずに怒りの感情で斬りかかってしまう。

「アスカねーちゃんっ……ダメだよっ！！　もっと冷静になって！！」

怒りに任せて刀を奮うアスカは、今までの仕合の中でも最も貧弱なアスカであっただろう。

ヒラヒラとかわしながら口笛さえ吹いている真奈。

「はぁ。はぁ。はぁ。はぁ」

「あれあれ？　残虐三姉妹次女ともあろうお方が、こんなにも早く

お疲れなの？　もうケリ着けちゃっていいかな？」

「アスカねーちゃんっ！！」

アスカにも心配で声をかけるが、全力で数十回と斬りかかったアスカにはもう既に体力の限界がきていた。
勝てないことを悟ったアスカは、ミカの身だけを心残りに自決の選択をする。

「ミカさんっ！　必ず生き残ってくださいねっ！　私たちは死んで当然の姉妹なのかも知れないけど……あなた一人くらい生き残ったってバチは当たらないですわ。じゃあ……さようなら」

『キンッ！！』

「え？」

頸動脈をたち斬ろうとしたアスカの刀を、真奈の妖刀が凄まじい一閃で弾き飛ばした。

「ちょっと……なにを早まったことしてくれてるの？　あたしは由奈ねーちゃんと違って女を犯すことが趣味なのよ？」

『シュバババババッ！！』

見えない速さでアスカの衣服を断り裂く妖刀。
力を入れすぎてかワザとかは分からないが、全身小さな切り傷だらけで血だるまになってしまう。
この時手足の関節の腱を全て切断し、動けないようにもしておいた。
ヒラヒラと、下帯を除くすべての衣服が地面に落ちる。

「もごおっ！？　ふがふがっ！？」

更に真奈は、舌を噛みきられないように布切れを大量にアスカの口内へ捩じ込んだ。
刀を置いて傍らに座り、アスカの下帯の下へ右手を滑り込ます。

「むごおっ！？」

『グリッ……ぐちゅっ！！』

「ふんぐうううっ！？」

真奈の人差し指は少しずつアスカの肛門へ挿入されてゆく。

「ほらほら……締まりのいい肛門してるじゃん？」

『ずぼおっ！　グリグリ……グリグリ』

執拗に直腸内を掻き回す大柄な女である真奈の大きくて長い指。
根元まで差し込んで掻き回しては次の中指、また掻き回しては次の薬指、と徐々に肛門をほぐしてゆく。
うつ伏せに倒されてお尻を突き上げさせられての陵辱行為……見るに見かねたミカが飛び出す。
「うおおおっ！！　アスカねーちゃんに触るなあああああっ！！」
『キィンッ！！』
真奈に斬りかかろうとするが、姉の由奈の妖刀がミカの銘刀を阻止した。
「一対一なんだから邪魔立ては許さんぞクソガキがっ！」
「なに変なことしてんのよっ！！　お前ら殺してやるっ！！」
アスカに忠告しながらも本人さえ熱くなってしまうミカ。
あまりのミカの強さに由奈も本気で全力を出して斬りかかる。
「ぐっ!?　何だこいつ……二人の姉と桁違いじゃねーか……くそっ！」

『キンキンキンキンッ！！……ガシッ！ググ……』

刀を激しくぶつけ合ってからの鍔競り合いになる。
お互いひけをとらない由奈とミカの攻防が繰り返される。
チラチラと横目で見ていた真奈の目付きが鋭くなる。

『こりゃ本物だわ……こいつを陵辱してる場合じゃないかな……』

早めにアスカを始末するように予定変更した真奈は、妖刀春雨の切っ先をうつ伏せ状態のアスカの性器へ近づける。
ゆっくりと膣口へ切っ先を差し込むと、背中をアスカの頭部へ向け、反対向きに馬乗りになり、串刺しがしやすい体勢を取った。

「まんこから串刺しにしてあげるね？　言い残すことはなぁい？」

「うごごっ！　むごごごおううっ！！」

「猿轡してたんだ……ごめんごめん。でも舌を噛みきって死なれちゃったら芸がないから仕方なかったんだよね～。いっくよぉ？　よっと！」

『ズグッ！……ズププププ』

「ふんぐうううううううっ！！！！」

目を大きく見開き、激痛に対する絶叫を上げるアスカ。
既に真奈の刀は直腸の一番奥の突き当たり部分を突き破り、小腸を何枚も突き破っていた。
この時点で致命傷は免れない。
ガクガクしながらお尻を下げるが、刀を上方へ引っ張りあげられ、強引に元の体勢に戻される。
更に深く突き入れてゆく……の繰り返しで、とうとう胃まで貫いた。

「ごぼぼっ！！」

「あははっ！　下の口から上の口からドボドボ血を流して……忙しいなぁ。今までやってきたことをやられてるだけなんだから感謝してよねあたしたちにっ♪」

「まんこと肛門を繋げておいてあげるから。あの世で赤ちゃん産みやすいでしょう？　刀を半回転させて刃を肛門側に向けなおして……えい」

『グリ……ザクッ！！　ぶしゅしゅしゅしゅしゅううっ！！』

「むごおおおおっ！？」

刃を腹部側に向けて串刺しにしていたため、手首を捻って刀を半回転させると、刃が肛門側に向く。真奈の側へ手前に少し引くだけで、瞬時に会陰部が切り裂かれる。
性器と肛門が繋がってしまい、噴水のように勢いよく鮮血が噴射し始めた。

「あれ？　刀の隙間からウンコ出ちゃってるよ？　くっさぁ～♪　じゃあぼちぼちおねーさんの後を追わせてあげる。あの三女のガキもすぐに送ってあげるから安心して死んでね？　よっ、えいいいいいっ！」

『グリグリ……ズブブブブブ……ばしゅうっ！！』

「けぺえっ！！　ごぼぼぼぼっ！！」

遂にアスカの口から無理矢理捩じ込まれた刀の切っ先が飛び出した。

白目を剥いて鼻から目から口から鮮血を噴き出す。

『ザシュッ！　ザシュッ！　ザシュシュシュシュシュッ！！』

「ほらほらほらほらあっ。何度も口から出したり引っ込めたりしてあげるよ？　何か腸みたいなのも口からはみ出しちゃってるよ？　あはっ！　エロいわねぇ～♪」

『ザシュッザシュッザシュッザシュッ！！』

「アスカねーちゃあああんっ！！　くっそおおおっ！！」

いきなり由奈を捨て置き真奈の方へ突っ込んでくるミカ。

あわててアスカの性器から刀を引き抜き、防御の体勢を取る真奈。

『キンキンキンキンッ！！』

激しく打ち付けてくるミカの銘刀をことごとく受け太刀しながら尻込みする。

「な、何っ？　この赤い闘気？　あたしたちの妖刀が放つのと同じ様な……この子の場合刀じゃなく人に憑いてるのっ！？……し、しまった！」

刀を落としてしまう隙をミカは見逃さない。
赤い闘気を纏ってるように見えるその動きは、人間のモノとは思えなかった。

『シュバババババッ！！』

「ぐきゃあああっ！！」

右手の手首、肘、肩口、次は左手の同じ部位。
最後に足首。
瞬時に切断され、その場に崩れ落ちる真奈。
傍らに立ち、銘刀紫龍を真っ直ぐ持ち上げる。
切っ先は喉に向けられていた。

「すぐに姉も送ってやるから」

「うぐぐ……お前みたいなバケモンがこの世にいたとは……」

「おねーちゃんたちの仇……死ね」

『ザシュッ！！』

瞬時に止めを刺したのは強敵の姉が残っていたからに過ぎない。

「あたしもこいつに性的虐待して殺してやりたかったんだけど……姉のあんたには長い時間地獄を見せてあげるから覚悟しててね？」

太陽がほぼ真上に昇る頃には決着は着いていた。

心配で沢山の村人が駆け寄ってくるが、三人の屍を見て家の方へ逃げ帰る。

「くそおっ！　全身が動かねえっ！？　あの一瞬で手足の腱だけ突き斬りやがったのか！？……いてて」

「ちょっと待っててね。リオねーちゃんとアスカねーちゃんを埋めてくるから……」

畑の隅の木影に鍬で大きい穴を二つ掘り、リオとアスカを入れると、最期のお別れをするミカ。

「ぐすん、ぐすん……やっぱりあたしが先に戦えばよかった……ごめんね、リオねーちゃん……アスカねーちゃん」

死に顔を見詰めていたら涙が止まらなかったが、勇気を出して土を被せてゆく。

目を真っ赤にして瞼を腫らして、仰向けに倒れて動けなくなっている由奈の前に戻ってくると、腹部辺りに座り込み、両手で顔面を平手打ちし始めた。

『パンパンパンパンパンパンパンッ！！』

「痛いいいいいっ！！」

数十回、数百回と往復ビンタを続けている内に、由奈の顔面は真っ赤っ赤に染まってしまう。

涙を流し始めた頃に、平手を拳に変えるミカ。

『バキバキバキバキバキバキバキッ！！』

「んがあああっ！！　いだいいいいいっ！！」

拳での殴打も数百回殴り続ける。
鼻の骨は折れ、唇は裂け、瞼は腫れて裂けて血みどろに……更に前歯四本がへし折れた。
石でガンガンと顔面を叩きつけて、すべての歯を破壊して抜いた。
舌を噛んでの自殺を阻止するためでもある。
原型を留めないほどに歪に変形した血塗れの顔面。

「痛い？　なんかバケモンみたいな顔になっちゃったね？」

「うごご……んごご……ごぽごぽ」

唸り声と呼吸に血の混じった雑音が入る。
鼻からの激しい出血が容赦なく喉に流れ込んでいるみたいだった。
ゆっくりと桃色の可愛らしい着衣を脱がし始めるミカ。
所々短刀で切り裂きながら手っ取り早く裸に剥いてゆく。
最後の下帯も断ち切り、スルッと脱がせた。

「あら、ホント大きい身体してるね？　由奈さんだっけ？　妹さんと同じ顔に同じ体型……双子なのね」

「ううう……痛い……痛い……わあぁんっ、わあぁんっ」

「そんな大きな身体してるのに号泣するんだ？」

素っ裸に剥いた後は無理矢理立たせて、両手を木の枝に縛り付ける。
両足も開いた状態で固定して縛り付けた。
背後に回り込むと、足の甲で性器をパンパンと軽く蹴る。
「まんこ蹴りの時間だよ。痛みでオシッコ漏らしたりしたらどうなるか分かってる？」
「ぐす、ぐすん。もうやめてくれ……殺してくれ……」
「質問に答えなさい由奈」
「ど、どうなるか分からない……どうする気だ？」
ミカは、ゆっくりと右手の中指を由奈の膣口へ捩じ込みながら囁いた。
「あなたのココ……まんこ全てをくり貫いてあげるの。そしてね……大切なトコ、グチャグチャにしてあげるの」
「ひいっ！？　もうやめてくれええええっ！！」
それから数百回、背後から性器への蹴りが延々と続けられる。
大陰唇は裂けて、皮が剥けてズタズタになっていた。
それでも構うことなくミカは蹴り続ける。

『パァンッ！！　スパァァンッ！！』

「んぎいっ！！　ぎえええっ！！」

『プシャー！！……ドバドバ』

遂に痛みで感覚が麻痺した由奈は、小便を漏らしてしまう。

「あ~あ。あれだけ忠告したのにオシッコ漏らしちゃうんだぁ？　いけないない人だね」

短刀を鞘から抜くと今度は由奈の前に跪く。

「今汚いモノ飛ばしたの……ココだよね？」

短刀の鋭い切っ先を、まだ小便で濡れている尿道口へゆっくりと差し込む。

ミカの由奈に対する拷問が始まって以来の大絶叫が村にこだました。

一寸二寸……尿道口はどんどん切り裂かれて大きく開いてゆく。

刃を上に向けているため、数秒後には陰核に刃が触れた。

「ここ、感じる所だけど……真っ二つにしちゃおうね」

『グリッ……プツッ！！』

「んぎゃあああああああああああっ！！！！」

少し上向きに力を込めると、瞬時に陰核は縦に真っ二つに切り裂かれた。

「そんなに痛かった？　まだまだこれからなんだけどなぁ。本当の地獄は……」

性器をくり貫くように裂けた大陰唇辺りをザクザク丸く切れ目を入れてゆく。

一度抜いて膣口へ深く突き刺す。

粘度のある糸を引いた血がドクドクと膣内から流れ落ちてきた。

「ひぎゃあああああっ！！」

『ぐちぐちっ、ぐちゅぐちゅっ！！メリメリ』

膣内を短刀で豪快に掻き回すミカ。

もう膣道から子宮口までもズタズタに切り裂かれていた。

「尿道と陰核失ったんだからマンコ自体いらないでしょ？　ほらほらもっと内部ぐちゃぐちゃにしてあげるね？」

「ぐおおおおおううう っ！！　ひぎいいいいいいっ！！」

短刀を性器に差し込み掻き回す……それだけでも激痛だが、更に小陰唇を左右二枚とも切り取り、性器全体をくり貫くように深く切り裂き、ついに由奈の性器は抉り取られた。

膣道に白い袋みたいなものが引っ付いてズルズルと腹部から飛び出してくる。

「やだ……これ子宮っていうんだよね確か……こんなモノまで取り出す気はなかったんだけど」

続いて卵巣までが二つ飛び出してきた。

「変な形した臓器一杯出てきたよ？　ん？　叫び疲れて喉を壊しちゃった？」

「かひゅううっ……かひゅうううう っ！！」

原型を留めない血みどろの顔面は、白目を剥いて鼻血を流し、ヨダレを流して泣いている。

喉が潰れて声にならない悲痛の唸り声を絞り出していた。

性器辺りにポッカリ穴があき、そこから白い子宮と卵巣までがぶら下がって揺れている。
既に膣全体と外性器は地面にベチャッと落とされていた。
それを足で踏み付けてグチャグチャにすり潰す。

「うわぁ。スッゴいヤラしいんだぁ由奈さん……何をぶちゅぶちゅ腹部から飛び出させちゃってんの？」

もう一度大穴が開いている股間へ足の甲による蹴りが再開される。
蹴られる度にプルンプルンと揺れる子宮と卵巣は、遂に本体から切り離されて地面へ落ちた。

『ベチャッ！　ニチャッ！！』

「ひどい有様だねー！　あはははは♪」

リオとアスカを亡くしたショックで顔は笑っていないミカ。
余計に不気味であった。

再び拘束を解いて丸太の上に仰向けに寝させる。
爪を一枚一枚じっくり時間をかけて剥がしてゆく。
声は殆ど出ない由奈だったが、顔をしかめて涙を溢れさせていた。
それでも舌を噛めないよう歯を全て抜かれている。
手の爪、足の爪、合計２０枚を剥がし終わる頃には夕刻になっていた。

短刀で両手の小指、薬指、と順番に落としてゆく。
それも第一関節、そのつぎは第二関節、最後に根元から……すべての指を切断してから呼吸が荒くなってきた。
「もう死んじゃいそう？　生きるのに必要ではなくても子宮まで抜かれてるんだもんね……死んでもおかしくないか……」
ヘソに短刀を突き刺し、胸まで一気に切開し、小腸と胃を掻き回す。
更に乳首、乳輪と少しずつ切り落としていった。
「んおおおううっ！　じぬうっ！　じぬうううっ！！」
「まだ生きてるのがスゴいよ。じゃあ死ぬ前に例のアレ……で止めを刺してあげる。普通うつ伏せにさせるんだけど特別に仰向けのままやったげるから」
銘刀紫龍を鞘から抜くと、抉り取られた性器の真下に微かに残る小さな穴……肛門へ切っ先を突き入れる。
「お尻の穴から……串刺し刑だよ。死ぬ前にイカせてあげられなくてごめんね。あなたは仇だから」
『ズブズブ……ぶちゅちゅちゅちゅちゅうううっ！！』

一気にぶちこまれた銘刀紫龍は、由奈の肛門から口までを瞬時に貫通した。

「ぴぎいいいいいいいいいっ！！」

「一気にいっちゃった……最期の最期に変な声出すんだね……」

激しく痙攣を起こしてようやく地獄のような苦痛から解放される由奈だった。

女性にしては大きな身体で、妖刀春雨を使いこなし、残虐三姉妹を二人も殺したユナマナ姉妹は最強の敵であったことには違いなかった。

拷問処刑人外伝……　（最終回）（後書き）

最強の死刑囚、ユナマナ姉妹に命を狙われた残虐三姉妹。
長女のリオと次女のアスカは命を落としてしまうが、三女のミカは必殺の闘気を纏い、全力で由奈と真奈の姉妹を倒した。

拷問処刑にて由奈を殺したミカは、再び二人の姉の墓の前で泣いている。

「ぐすん、ぐすん」

村に夜の帳が降りようとした頃、背後からミカを抱き締める者がいた。
一瞬心臓が止まるくらいに驚愕したミカだったが、抱き締めかたで敵意がないことを悟り、静かに問いかける。

「だ、誰？」

「ウチや」

「え？」

懐かしい声に慌てて振り向くと、今までにないほど優しい目をした楓がいた。

「楓ねーちゃん！？　なぜここに！？」

「谷川殿のご身内は、既に安全な大名屋敷へ移られたんや。ウチの役目も終わったんやなあ思ってたら縁の深い忍がミカはんたち三姉妹のことを報せてくれたんや」

「か、楓ねーちゃん……会いたかった……会いたかったよおおおっ！！　わーん、わーん」

手作りのお墓が二つある上に、リオとアスカの姿が見えないことで聞かずとも全てを察知した楓は、更に強くミカを抱き締める。

「二人同時に失ったらそら辛いわなぁ。ウチがもう少し早目に来れてても……どうにかなる相手やなかったわ。力になられへんですまんなあ」

「えーんえーん」

楓は、泣き続けるミカにそっと囁いた。

「ウチの妹になってくれへんか？」

抱き締める手を緩めて涙でグシャグシャの顔を楓に向けるミカ。

数秒後には再び抱きついて泣きじゃくる。

「それは了解した、とゆうことでええんやな。よろしく頼むでミカはん……いや、妹やからミカ……」

その後、いくつまで生きられたのか幸せになれたのかは定かでないが、ミカは楓と一緒に家族のように仲良く暮らし続けることになる。

――――戦国時代のお話『残虐三姉妹』は一応今回で最終回となります。

次回からは現代の話に戻りますのでまたよろしくお願い致します。

小学生のイジメ主犯に制裁を（前編）（前書き）

久方ぶりに菅野莉央へ藤堂長官からの指令が下る。
残酷処刑島での拷問処刑命令ではなかったが、懲らしめる意味では大きな意味があった。
しかし今回の相手は只者ではない強者の霞由奈と霞真奈の最凶姉妹。
菅野莉央と富田美香、結城明日香は無事に任務を全う出来るのか？

小学生のイジメ主犯に制裁を（前編）

「お兄ちゃん、最近ジムの方頑張ってる？」

学校もアイドル活動も休みで、自宅でのんびりとすごしていた小学生アイドルであり、残酷処刑島での拷問処刑執行人の一人である菅野莉央が、朝食の食パンを頬張りながら兄である京介に問いかける。

「ああ。かなりレベル上がってきたって実感してるぜ……会長のシゴキも半端ねぇからな最近特に。久しぶりにスパーリングしてみるか？　今の俺にはさすがのお前も敵わないだろうけどな。へへへへ」

「…………止めとくよ。あたしは最近疲れ気味なの。だいたい学校とアイドル活動の共有って全く自由なんてないと言えるんだから……」

ゆっくりと立ち上がりながらミルクティーでパンを飲み込んでから自分の部屋に立ち去ろうとする莉央。

背後から机に足を放りあげながら京介が呆れ気味に言葉を返す。

「言ってるそばから本日のんびり休んでるじゃねぇかよ。久しぶりにツレが経営してるパチンコ屋にでも行かねぇか？　ストレス発散になるぜ！」

「あんなインチキな店、もう止めとくよ。よく回るけど全然当たらないじゃん。この前なんか１０００回転ハマりを二回連続食らったんだから。絶対無抽選とかのズルしてるよ！　しかも両方単発……もう二度と行かないってバカ店長に言っといて！」

「ん？　そう言えばデータ集計用のホルコンとは別に利益調整用の裏モノのホルコンがあるって言ってたな……一般的にパチ屋の利益の調整は釘調整が全てとか言われてるけど実際違うんだなこれが……客もバカじゃないからガチガチに釘閉めたら誰も打ってくれなくなるし、運のいい客ばかりが打ちに来られたらガンガン連チャンされて大赤字になっちまうってこともあるらしい」

「海物語ばかり箱積んでるのに牙狼は一人も積んでない時ってのも、その裏のホルコンで調整されてたの？」

「そうゆうこと。その裏ホルコンでシマごとに回収とか還元とかのパーセンテージ設定が出来るらしいぜ。お前はたまたま大回収のシマに座っちまったんだろう。今日は牙狼が還元設定らしいから座れたらほぼ勝てるぞ？」

「ふぅん。やっぱそんなズルしてたんだね……設定付きでもない機種なのにおかしいと思ってたよ。同じ確率の同じ台なのにほぼ単発が一日中続いたり、一日中ほぼ単発なしの連チャンばかり繰り返してる台があったり。運だけじゃ片付けられないことが多すぎだと思ってたから。……回収台では裏ホルコンのせいで何百回転も無抽選状態ってか？　そりゃ３１９分の１が合計２０００回転もハマるわけだわ……アホくさ」

「ははは。そう言うな。パチ屋は客と違ってギャンブルしてるわけ

じゃねえ。商売だから負けるわけにはいかねぇのは当たり前じゃん。それと勘違いすんなよ？　シマごとに回収とか放出の設定は出来ても特定の1台を狙い撃ちは出来ねぇらしいから。これは遠隔になってバレたら捕まるらしい。お前は運悪くたまたま負けるシマの台に座っちまっただけなんだよ」

「それって本人の運とかヒキとかじゃなく……結局全てお店の掌の上で踊らされてない？」

「ははは！　まぁそうゆうこった。そもそもパチンコ台自体が長期間打てば絶対客側が負けるようにできてるんだからほっといても利益はでる。だがそれだけでは目標の利益に届かない時とかに店長が多くのシマで回収モードに入れちゃったりするわけだな。客が多く入った月とか利益に余裕が出たら、すべてのシマで大放出してくれたりもするから、回収ばかりに裏ホルコン使ってる訳じゃねぇらしいぞ？　そこは汲んでやらないと」

「つまりお客さんの多い店じゃないと殆ど勝てないってことね」

「そうゆうこった。いくら軽くボーダーを越えた1000円で50回転回ろうが100回転回ろうが……ガラガラの店では客に還元できない。光熱費や土地代、人件費が半端ねぇから当たり前だな。パチンコは釘だけで勝てるほど甘くない。店選びが一番大事なんだ。勝率を上げたかったら客の多い店で打つこったな。釘を見るなんてのはその後の話だ」

「ふぅん。バカ店長と先週末に飲み明かして……色んな極秘情報聞き出したみたいね。勉強になったけどあたしはあの店ムカついてるからしばらく行かないよ。疲れてるから寝てくる」

「それともう一つ。１０連チャンくらいするような台は殆ど４００回転以内に当たった時だ。４００回転越えるくらいハマったら、ホルコンから無抽選状態に選ばれた回収台の恐れがある。高確率で８００回転、１０００回転まで連れていかれるから手を出さない方が無難だぞ！　更に当たっても単発率が激高だ。俺はデータを見て調子よく当たってる台を４００回転くらいまで回して当たらない時はまた別の調子のいい台を見つけて４００回転まで回してダメなら止める……を繰り返して最近は連勝中なんだよな！それじゃあ今から閉店まで牙狼剣を何度もブッ刺してくるからな♪」

聞いてもいないウンチクを散々満足げに語り続けた後、颯爽とパチンコへ向かう京介。

莉央は半ば呆れながらも部屋に戻り眠りについた。

――――ルルル……プルルル……

数十分ほど眠っただろうか？
けたたましく鳴り響くスマホによって現実へ戻される莉央。
眠りについて間もなく起こされたので眠気が半端なく襲ってくるなか、スマホを耳に当てる。

「菅野くん、私だ。久しぶりだね。今日は休みと聞いていたが早急にやってほしいことがあって連絡させてもらったのだが……ん？　鼻息が荒いが？　まだ半分寝てるのかね？」

「フーッ……フーッ。むにゃ。。はぁ。あの……まだ寝てました…

…なんですか？　こんなに絵に書いたようにあたしにとって最悪のタイミングで電話を下さるなんて……さすが藤堂長官ですね？」

「ははは！　相変わらず手厳しいな菅野くんは。嫌味と皮肉に益々磨きが掛かっておる。単刀直入に言う。隣町にある山坂小学校へ明日転校してもらいたい」

突然の宣告にも少しの動揺も見せない莉央だった。
だいたいの予測はできていたからである。

「明日香ちゃんと美香ちゃんと三人で転校して悪者をやっつけるわけですよね？」

「うむ！……君たちと同い年である六年生の姉妹、霞由奈と霞真奈だ。山坂小学校を実質的に仕切っているみたいだな。一年から六年までの女子生徒、どころか男子生徒さえもオモチャのように毎日リンチ、もしくは陵辱をしている。今回はかなり手強いけど大丈夫そうかな？」

なぜか名前を聞いた瞬間、背筋が寒くなるのを感じた莉央は思わず生唾を飲んでしまう。

『何故だろう……？？　なぜ名前を聞いただけでこんな寒気が……初めて聞く名前なのに恐怖に近いほどの嫌な気分になっちゃってる……ど、どうして？』

「おい？大丈夫かな菅野くん？」

異変を感じた藤堂長官の問い掛けにも数秒固まって応えられないでいる莉央だったが、数秒かけてようやく我に返り慌てて返事を取り繕う。

「ご、ごめんなさいっ！はい、分かりました！」

「顔色がすぐれない様だが……本当に大丈夫かね？」

「はい。本当にもう大丈夫です……すみませんでした」

カチカチと電話の向こう側でタバコに火をつけるライター音が二回響く。

「スゥー……ふうう～。この霞由奈と真奈の姉妹が手強い理由だが……破格に素手の喧嘩も強く性格も凶暴で、これまでに様々な学年の生徒たちを三十人近く凄惨なイジメを繰り返して三人の同じ六年一組の児童を自殺に追い込んでいる」

「そうですか……確かに手強そうですね」

「直接殺してはいないが、かなりの罪の重さと私たちの会議でも指摘する声が溢れた。よって……重たい体罰と……君たち得意の拷問を命じる。死ななければ何をしてもよい」

「はい。分かりました。半殺しにするつもりで取り掛かります」

「うむ。頼んだぞ。どうしても手強くて無理そうなら最強中学生の鬼頭美紅に頼むのだが……」

「いえ！」

美紅への交代を口を挟む様に瞬時に遮る莉央。

「本当に大丈夫ですから……では明日よろしくお願いします」

「うむ！　明日の朝６時に君の家に車を手配する。富田美香と結城明日香へは君から連絡しておいてくれ。全員車にて山坂小学校まで送り届けるのでな。では頼んだぞ」

「はい！」

昼頃、時刻は１２時をさしていた。
美香と明日香に早朝迎えにゆくことをつたえたあと、兄である京介に電話をする。
パチンコをしているため気付かないのか、なかなか電話に出ない。

「ちょっと出かけてくるねお婆ちゃん」

「はいよ。気をつけてね」

直接京介の友人が経営するパチンコ屋へ向かう莉央。
顔を真っ赤にして必死で遊戯をしている兄を見つけた。
カウンター上では１５００回転ハマっていた……。

「お兄ちゃん！　お兄ちゃんってば！！」

「ん？　お、おう！　莉央か！　来ないとか言ってたのにどうした？」

「ちょっとスパーリング付き合って」

「あ？　ちょっと待てよいきなり！　この台８００回転も打ち込んでるんだわ！ぼちぼち爆発する予定だからよ！？」

「はぁ？　何をハマり台に手を出して更にハマり込んでるのよ？自分で４００回転以上の台は打っちゃダメって言ってたじゃん？本当に１０００回転以上連れていかれちゃってるし！　しかも１５００回転って……バカなの？」

「うっ！……ついつい熱くなっちまって……もうすぐ止めるから少し待っててくれ」

数分外で待って京介と一緒に所属のジムへ向かう二人。

「たった４時間で五万も負けたの？」

「あぁ。ロングリーチはよく掛かるが全く当たらねえ……こんな事なら遊タイム付きの方の牙狼にすりゃ良かった」

「遊タイム付きなら７００回転ハマってる台なんて空くわけないじゃん」

「それもそうか……くそう、最近すこぶる調子良かったのになぁ。打ち方間違えたらやはりダメか………ってゆうか何でいきなり俺とスパーリングなんてする気になったんだ？」

藤堂長官から細かく聞いた霞姉妹の残虐さを兄の京介に説明する莉央。

「酷いな……小学生の女の子とは思えない鬼畜の仕業。思い切りとっちめてやれよ？残酷処刑島での拷問処刑に出来なかったのが残念なくらいだな。お前たちの私刑のあとで俺様が散々犯してやろうか？そのくそガキ姉妹を」

「それいいね！　大人の怖さを味あわせてやってくれる？」

「本当に良いのか？藤堂長官の許可はあるのかよ？」

「無いけど相手は鬼畜だから大丈夫だよ。……私刑が終わったらまた電話するからすぐに来て」

「ひゃほうっ！！　久しぶりに小学生のガキを犯せるぜっ！」

「明日香ちゃんを帰らせた後だからね？絶対悟られちゃダメだよ？」

「お、おう、すまんなお気遣い……ってゆうか親友の明日香ちゃんに悪いとか思わないのかよお前？」

「今回だけは……相手を殺せないからこそ無茶苦茶酷い目に遭わさないと気が済まないからね。知らぬが仏とゆうことで明日香ちゃんには悪いけど……」

ジムに着き、結城会長の奥さんに挨拶してから少々気まずいながらも明日香と話す莉央と京介。

「こんにちは明日香ちゃん！　今日会長は留守なんだね？」

「こんにちは。さっきお母さんに頼まれた夕食の買い物に出かけたの。京介さん最近とても頑張ってるって褒めてたわよ？」

「はは。強くなってる実感が湧いてきて俺自身ハイテンションなんだよなぁ。先輩の亀さんもスパーリング容赦なく打ち込んでくるし。なかなか追いつけないぜあの人には……」

「応援してるからこれからも頑張って京介さん」

「おう！ありがとっ！」

京介との挨拶が終わった後、莉央から更に細かく説明を聞いた明日香がゆっくりと喋り始める。

「酷い姉妹だね本当……真奈ってゆう妹の名前を聞いた時、何故かスッゴく寒気がしたんだよね私」

「明日香ちゃんも！？　あたしも由奈って名前聞いた時に恐怖に近いほどの嫌な気分がしたの……寒気も」

「何なんだろうね？　まさか前世で霞由奈と真奈の姉妹に殺されてたりして私たち……あははははは！」

「まさか……あは。あははは。なぜか笑えないよあたしは……」

しばらく話の蚊帳の外に置き去りにされた京介が少々機嫌悪くなり出しながら莉央に催促する。

「おいおい！　明日香ちゃんと延々と雑談しにきたのかよ？　俺とスパーリングする為に来たんだろ？　早く用意してくれ莉央」

「はーい。ごめんごめん」

五分間のほぼ本気での兄と妹のスパーリングが始まった。
グローブを着けているとはいえ、ヘッドギアを着けていないのでかなりの衝撃が走る。
……京介の顔面に。

『ドス！　ドス！パパパパンパン！！』

「ひぐっ！　げはっ！　ぐひっ！？」

鼻血を大量に噴き出しながら四つん這いに倒れ込む菅野京介。

「ちょ、ちょい待った！はぁ、はぁ。」

「大丈夫？」

鼻血で血塗れになっている兄を気遣う妹の莉央だったが、明日香がたまらずタオルを投げた。

「もうやめて莉央ちゃん！」

「え？　タオル？　スパーリングだよこれ？」

「技量が違いすぎて京介さんが可哀想……もうやめてあげて」

明日香の優しさに思わず涙ぐむ京介だったが、まだ妹に敵わないとゆう悔しさも感動と同時に襲ってきていた。

「ちくしょう……なんで小学生のガキがこんな強いんだ！？　おかしいだろ全く」

「モーション付けすぎってるじゃん？　ノーモーションで打たなきゃあたしには当たらないから」

「ちっ。それもこれもかなり少なくなる様練習積んできたつもりなんだがなぁ」

『ぎゅっ！』

「はうっ！？」

いきなり自分の睾丸をトランクスの裾から手を入れて生で握りしめる明日香に対して間抜けな声を上げてしまう京介。

「もっともっと強くなってよ！　京介さん……キンタマ付いてるんでしょう？」

「あ、はうう、は、はいっ！　頑張って強くなりまっす！　ひい」

ぐりぐりと揉みしだく明日香の右手。

「あ、明日香ちゃん？　かなり大胆になってきちゃったねお兄ちゃんに……あは、ははは」

「え？　あっ、ついつい握りしめちゃった……ごめんなさい京介さん」

「いやいや、はは。ははははは」

思いっきりトランクス越しに勃起した兄のペニスを見ながら、冷たく無言で嘲笑する莉央であった……。

「美香ちゃんにも連絡してるんだよね？」

「うん。三人で霞姉妹を成敗しに行こうね！　じゃあ今日はありがとう。明日の朝またよろしく」

「うん。じゃあね。京介さんもまたよろしく」

小学生の女の子に金玉を揉みしだかれた二十歳の京介は、顔を赤くしたまま結城ジムを後にする。

未だに勃起しているペニスを横目で呆れて見ている妹、莉央の目に全く気付くことは無いまま帰宅することになった。

小学生のイジメ主犯に制裁を（前編）（後書き）

名を聞いただけで恐怖を感じてしまう莉央と明日香だったが、ついに明日は決戦を迎える。

珍しく意味のわからない震えからくる不安で、一睡も出来ないまま朝を迎えてしまう莉央であった。

小学生のイジメ主犯に制裁を（中編）（前書き）

遂に山坂小学校へ乗り込む菅野莉央たち。
霞由奈と霞真奈は思惑通りに動いてくれるのか？

小学生のイジメ主犯に制裁を（中編）

――明くる日の月曜日早朝。

特殊任務省からの送迎車が菅野莉央と富田美香、結城明日香の少女三人を乗せ、転校先の山坂小学校へ向かっている。
なぜか名前を聞いただけで複雑な心境になって動揺している莉央と明日香をよそに、美香は一人冗談を言って一人笑っていた。

「でね！　この前なんかお父さんってば本当にだらしないんだよ！　あっはっはっ！」

「……ふぅん。相変わらず美香ちゃんのお父さんはおっちょこちょいなんだね」

「……ほんと大変そうね」

「そうそう！　お腹痛いよ全く！……ってゆうかせっかく久しぶりの任務で人をリンチ出来るのに冴えない顔してるねぇお二方？」

高級車である黒塗りのレクサス。後部座席の真ん中に座った美香が左右に首を振り、何度も莉央と明日香の顔色を窺い始めた。
鈍感な彼女もようやく二人の異変に気付いたみたいであった。

「どうしたの？　二人とも元気ないみたいだけど？」

国道バイパスから県道に入り、更に小路を何度も左右に曲がり、更に山への登り口の川沿いの土手に入る。

「ナビ見ても迷いそうなくらい入りくんだ場所にある学校ですねぇ山坂小学校は。さぁ到着しました。私はこの校門前の駐車場でお三方の仕事が終わるのを待たせて頂きます。何かあればこの番号まで電話していたければ私で良ければ助けに参りますので」

「……小林勇太郎さん、ですか。ありがとうございます。心配ないとは思いますが何かあれば連絡させていただきますので……」

「はい。ご遠慮なくかけてきてください。それと……この手紙を藤堂長官から菅野さん宛に預かっております。早急にお目を通し下さい、とのことです」

「何か予定変更でもあったのかな……分かりました。任務遂行前には目を通しておきますね。では行ってきます」

レクサスから降り立った三人は、意外と都会なはずの区域なのにかなり辺鄙な田舎にそびえ立つ校舎を見上げる。

「スッゴい草花と木だらけの学校だね？」

莉央があらゆる場所に植えられている花や木を見ながら感心する。

「ほんと。見てるだけで癒されるわね。でも美香ちゃんは花より団子だから興味ないか……ね？」

「頭からそう決めつけるのは酷いなぁ明日香ちゃん……あたしだって花は綺麗だと思える心くらい持ってるんだから！　ちなみに英語ではねぇ、木に咲いてる花はブロッサムっていって、地面から直接生えて咲いてる草みたいな花がフラワーって言うんだよ。えへへ。知ってたかな明日香ちゃん？」

「なになに？　ブロッコリーとカリフラワーって？　美香ちゃんが言えば食べ物にしか聞こえないのが不思議だわ……」

「はあっ！？　どっ、どんな耳してるのよっ！？」

「ぷっ！　あはははっ！」

美香の知識自慢に対する明日香の返しに、思わず爆笑してしまう莉央だった。

校門へ歩み寄ると、派手なジャージを来た角刈りの男が校舎から走りながら近付いてくる。

「え？　なんか熱血先生みたいなオッサンがこちらへ猛ダッシュしてきてるんだけど？」

莉央が人相の悪い走り寄る中年男に対し、率直な感想を述べた。
明日香と美香はあまりの足の速さに驚愕しながら半分口を開けて眺めている。

「おいっ！　お前らっ！！」

「は、はいっ！！　何でしょうかっ！？」

いきなり怒鳴られて飛び上がった美香が背筋をシャキンと伸ばしながら返事をする。

「早いじゃないか……ワシより早く登校する生徒がこの学校にいたとはのう。偉いぞ！　早起きは三文の得。良いことあるぞお前らには！」

イカツイ顔で満面の笑みを浮かべながら莉央たち三人を称賛する体育教師である生田敏郎４５歳（独身）であった。
愛想笑いをしながら少々ひきつった顔で校舎へ向いて歩き出す三人。

「お前ら見掛けない顔だが……もしかしたら今日からくるとゆう転校生だな？」

話が伝わっていたことで面倒くさいことにならなかったことに安心した三人は、普通に自己紹介を済ませた。

「お前ら運動神経良さそうだな？　ワシが指導してる陸上部に入らないか？　今日から早速しごいてやるわ！」

「いえ、結構です……」

「私は勉学に勤しみます」

「あたしたち放課後は凄く忙しくて……ごめんなさい」

莉央に続き、明日香と美香も丁重に部活動へのお誘いを断った。
職員室へ向かう三人の前に、いかにも女性教師とゆう雰囲気の35歳くらいの女が立ち止まる。

「おはようございます。菅野莉央さんですね？」

「おはようございます。はい。私たちの担任の榊原先生でしょうか？　藤堂から聞いています」

「榊原京子と申します。菅野さん、富田さん、結城さん、本日はご足労いただき、ありがとうございます。お手数おかけします」

年上の……しかも先生からの妙に丁寧な話し方に、莉央たちのほうが恐縮してしまうほどだった。

「とりあえず職員室へどうぞ。椅子もご用意しておりますので」
霞由奈と霞真奈の普段の行動や態度などを細かく説明してもらう三人。
とにかくイジメやリンチを行い放題で、仕返しが怖いためかいじめられた側の生徒もほぼ全員が泣き寝入り……見張りまで立てて、リンチの現場を教師に見つけられない工夫をしている、等を教わった。

「聞いてるとは思いますが……今日は霞姉妹をお仕置きします。ちょっと行きすぎた拷問まで行いますから放課後は早めにクラスの子達を帰宅させてもらえますか？」

「それは……」

「え？」

「いえ、ごめんなさい。そうしてみます」

『そうしてみます』の意味が良く分からないまま、聞き返すこともせずそのまま榊原先生と共に六年一組に入室する莉央たち。
クラスの全員が物凄い眼光で睨んでくる。睨んでくるとゆうよりも、凄い何かの興味を持って必死で凝視してくる……とゆう表現が近いだろうか。

とにかくクラスの子たちのあまりの視線の強さに一瞬たじろいでしまう莉央たちであった。

「菅野莉央さん、富田美香さん、結城明日香さん。この三人が親御さんのご都合で本日からこのクラスの一員となります。皆さんよろしくお願いします」

榊原先生に続いて莉央たちも頭を下げた。

「菅野さんたちの席は……えーと……」

わざとらしく席を探す振りをして周りを見渡しながら、結局最後には一番最後列に陣取る霞姉妹で目を止める榊原京子。

「霞由奈さんの隣に菅野さん、霞真奈さんの隣に結城さん……それと富田さんは一番端っこの田渕聡太くんの隣ね。それでは月曜日の一時限目の授業である社会を始めます。教科書の２３ページを開いて」

霞姉妹と莉央たち三人はチラチラと互いに様子を窺いながら時間が過ぎ、授業が進められてゆく。

『ドカンッ！！』

「きゃっ！？」

結城明日香が床で何回転も転がり込んでいる。
クラスの生徒たちが一斉に振り返るが、何事も無かったように見てみぬ振りをしながら一斉に前を向き直す。
榊原先生も心配そうに一瞬明日香を見るが、そのまま授業を続けた。

「痛ったぁ～……もう……いてててて」

強く打ち付けた腰を右手で揉みながら衝撃が起きた方向を見上げると……妹の方である霞真奈が冷ややかな笑みを浮かべてこちらを見下ろしていた。
横を向いて明日香の椅子を思い切り蹴飛ばしたみたいだった。
大体予測できていた範囲だったので、何事も無かったように椅子を立てて、もとの位置に座り直す明日香。

「おい！」

「……」

「おい転校生のお前！　無視してるのか？」

「え？　私？　そうゆうつもりじゃないんだけど……だっていきなり転んじゃったから……何が起こったのかなぁって考えてたのよ」

「バカかお前は！　あたしが蹴飛ばしたの見てただろ？」

「えっ！？　そうだったの！？　痛いし危ないからそうゆうこと止めようよ……ね？」

満面の笑みで霞真奈に語りかける結城明日香。
それを見ていた莉央と美香は、悔しい思いを同時に耐えている。

「ねーちゃん、こいつなんかあたしのこと舐めてない？」

「んんん。そだね。一時限目から男子たちに喜んでもらっちゃおうか？」

「あはっ！　それいいなぁ♪」

妹の真奈はそう言いながらゆっくりと立ち上がり、明日香の胸ぐらを掴み、ねじ上げる。
由奈も立ち上がり、近付いてきた。

「おーい、ちょっと裸になってくれるか？」

「そ、それはちょっと恥ずかしいから勘弁してくれるかしら？」

『ボスッ！！』

「うぶっ！？」

真奈の強烈な腹部へのボディーブローが入る。
明日香はたまらず朝食を戻してしまった。
両手両膝をついて吐き続ける姿を腕を組んで眺める由奈と真奈。
右足の裏を後頭部に乗せて思いっきり床へ押し付けると、自分の吐いたゲロをまともに顔面に受けることになる明日香。

「がはあっ！？おええっ！！」

「あははは。自分が吐いた汚物なんだから全部舐め取って綺麗な食べないと殺すぞ？」

「真奈ってば残酷ぅ〜。私は長い黒髪が素敵な菅野さんを責めちゃおっかなぁ。。さぁ、立ってくれる？」

ターゲットを莉央に決めた姉の由奈が、腰まで伸びた艶やかな黒髪を鷲掴みにして思い切り引き上げる。

「ちょ、ちょっと待って！痛いっ！！……イタタタタッ！！」

『ドカッ！！』

無理矢理立ち上がらせた莉央の左胸辺りを思い切り前蹴りで吹っ飛ばす由奈。

「うわっ！？」

『ドスンッ！』

思わず仰向けにひっくり返ってしまう。
両脚を開いて膝を立てた状態でひっくり返ったので、まともに純白のパンツをクラスの全員に見られるハメになった。

「あはは！パンツ丸見え！はしたないわねー」

「莉央ちゃん！？大丈夫っ！？」

慌てて席を立ち、倒れた莉央の手を握りゆっくりと引き起こす美香。

「いてててて……あたしの大切な胸をよくも足蹴に……乱暴だなぁコイツらほんと。あ、大丈夫だよ美香ちゃん、手を貸してくれてありがとね！」

由奈は、お団子にまとめている自慢の茶髪を軽くさすりながら莉央を鋭く睨み付ける。

榊原先生を含むクラス全員が見守る中、当たり前と言えば当たり前の由奈と真奈によるイジメの光景が繰り広げられていた。

「今なんて言ったの菅野さん？私たちに向かって〝コイツら〟って言ったよね？マジでぶっ殺してさしあげようかな……」

指の骨をバキバキと鳴らしながら莉央に追い討ちをかけようとゆっくりと近寄る由奈の目は、本気の殺気を放っていた。

もう一つの強大な殺気と共に。

『パァンッ！！！』

「ぶはあっ！？」

結んでいたお団子の紐が弾け飛び、髪を振り乱して横向きに倒れ込む由奈だった。
平手打ちが速すぎて誰もが見えていなかった。
クラス全員の視線は、何故倒れてるか理解できないままに霞由奈に向けられていた。

「痛いいいいっ！！な、何を！？」

「何を？ただの平手打ちだよ。ビンタだよーん」

「そんなこと分かってるわよっ！！私のこと殴ってタダで済むと思ってるのかを聞いてるのっ！！」

冷たく嘲笑しながら右手をすっと持ち上げて、中指をピンと立てる莉央。

「何人もの生徒たちを殴ってきたのかな今まで……よく言えるよそんな……」

「榊原先生っ！！今から霞さんたちにお仕置きしますのでクラス全員帰宅させてもらって構いません？」

呆れながら罵る莉央の言葉を遮るように美香がしゃしゃり出て言葉を被せる。

「え？あ、そうですね！皆さんっ、本日の授業はこれにて終了です！速やかに下校してくださいっ！」

教師の指示も聞かずに誰一人帰る様子のない生徒たち。

「……そうゆう訳です。帰る気はさらさらないそうです。ごめんなさい菅野さん」

「そうゆうことね。分かりました。そりゃ毎日無理矢理コイツらに仕切られてクラスメート三人も自殺に追い込んじゃった生徒の制裁だもんね。見ておきたい気持ちは分かります」

「ありがとうございます。私の力ではこの子たちを帰宅させるのは無理そうですから……このまま私も見てる前で続けて下さい」
「了解です。でも色んな意味で……榊原先生もそうですが、小学生児童に見せるのはかなり憚られるモノが多々ありますが……教育上よろしくない、とゆうか」
「だいたいの事は校長から聞いています。私も実は霞姉妹には何度もリンチされてますので……つい最近では先週の月曜日に、この教室で痛くて恥ずかしい思いをしました……」
まさかの担任にまで手を出す霞姉妹の凶暴さを改めて知った莉央たち三人であった。
どんな事をされたのか恐縮とは感じながらも聞いておくことにする莉央。
思った以上に凄惨であった。

――――一週間前、放課後。

「よくも国語の授業では皆の前で恥をかかせてくれたな榊原」
「私も妹の真奈があんな大恥かかされれば黙ってはいられなくてね……どうゆうことになるか分かってます先生？」
「ご、ごめんなさい」

胸ぐらを掴み捻り上げる妹の真奈。
霞姉妹は小学生とはいえ姉妹揃って身長１６８㎝とゆうかなり恵まれた体型をしていた。喧嘩が強いのも、そのお陰でもある。

「下だけ脱げ！」

「え？下？」

「上半身はいいから下半身だけ脱げって言ってんだよ？」

「ひっ！？……や、やめてそんなこと……恥ずかしい」

「全校生徒もう帰ってるし私と真奈しか見られないわよ。早く真奈の言う通りにして」

半泣きになりながら足首まである長さのスカートと黒いパンツを脱いでゆく。

「これでいい？」

「スッゲェ量のマンゲだな！ねーちゃん、自殺した幸絵みたいに犯しちゃっていいか？」

「あはは。真奈はホント好きなんだから。はい、ペニスバンド」

姉から桃色に鈍く光る２０㎝はあろうかとゆう巨大な張り型のついたペニスバンドを受け取ると、口笛を吹きながら腰に装着する真奈。

「これ幸絵の肛門引き裂いちゃったヤツだよなぁ。幅も６㎝くらいあるぞぉ。痛いぞぉ？さぁ四つん這いになってケツ突き上げろ榊原！」

「ひいっ！？そんな大きなの無理っ！！この前みたいに由奈さんと真奈さんの指で掻き回すやつで堪忍してくださいっ！」

由奈が手取り足取り榊原先生を四つん這いにさせて、スッポンポンの下半身を大きく突き上げさせる。

「先生の大きすぎるオマンコには私たちの指なんかじゃあ物足りないと思ってね……暴れたら余計痛いわよ？じっとしててね先生」

「やぁっ！無理無理無理無理無理っ！！やめてええっ！！ひいいっ！！」

大きく数回榊原京子のお尻を平手打ちした後、すっと巨大な張り型を局部に近付ける真奈。

「小西幸絵ってゆう最近自殺しやがった奴覚えてるだろ？あいつのケツ穴に無理矢理捩じ込んでやったら肛門裂けちゃってよぉ。教室血まみれになって掃除が大変だったんだ！あははは♪」

「小西さんもあなたたちが追い詰めたのね……酷い」

「何とでも言えよ！　死ぬ奴が悪いんじゃねーか。あたしはアイツのアナルを破壊しただけなんだよぉ？　人の心配より……ほら、入るぞ？　ローションなんて付けてやらねぇからなぁ♪」

『ピト……つぷ……ズブブ』

「ひゃあっ！？　やめてっ！！」

「黙れババア！！」

『ズブブブブ……メリメリ』

「いぎいいっ！！痛いいいいいっ！！」

榊原京子の肛門はメリメリと音を立てながら巨大な張り型を飲み込んでいく。
由奈と真奈はその一部始終をまじまじと見つめていた。

「あーあ、遂にヒダが裂けて血が出て来ちゃったぁ……一気に入れすぎなんじゃないの真奈？」

「ええ〜？　そうかな？　でもまだ半分残ってるよ。ここから一気に根元までぶち込んでやるからなババア！　入れてください真奈様って言えー！」

それどころではなかった。人生で最強に近いレベルの激痛を肛門に味わっている中、そんなセリフは言えるはずもない。

「んぎぎぎぎい……」

顔をクシャクシャにして痛みに耐えるが、たまらずに涙がポタポタと床に落ちてゆく。

「いくそぉ？一気に行くぞおお！くたばれババアッ！えいっ！！」

『ぱちゅっ！！……ぶちぶち！メリメリ！バリバリ！』

「んぎゃあああああああっ！！！！」

一気に肛門の根元まで埋まり込むペニスバンドの張り形。

少し人より直腸が長いことが幸いしてS状結腸が突き破られる事は辛うじて裂けられたが、先端はそのS状結腸に穴が開くほど強くめり込んで本人に激痛を与えていた。

気が狂ったように叫び続け、泣き続ける事数分、ようやく真奈は張り形を肛門から引き抜いた。

裂肛により夥しい血液が噴射しているからビビって抜いてしまっただけであるが。

ガムテープをお尻中に張りまくり、肛門からの血を止めると、今度は口を無理矢理開けさせて、血と大便まみれの張り形を本人の口

へ捩じ込んで口内を掻き回した。

「うごおっ！？むごおっ！！うむぐぐうっ！！」

「あははは！何て言ってるんだ榊原のババア？ウケるよねコイツ……」

姉の由奈は大きくふくよかな二つの胸を両手で粗々しく揉みしだく。

「乳輪でかいオッパイしてるのね先生……イラマチオで感じてる間揉んでてあげるね？」

１時間以上に及ぶ霞姉妹の拷問を終えた榊原京子は、二人が帰った後、自分で救急車を呼び、自慰行為によって肛門を引き裂いてしまったと救急隊員に告げて丸一日入院した。

大きな恥をかいても辛抱して二人を学校に訴えることもしなかったのである。

「あなたたち、ホント酷いことやってるんだね？生徒も先生も容赦なしかぁ。感心するよ」

榊原先生が姉妹から受けた仕打ちをクラスの全生徒と莉央たち三人が聞いて真実を一つ知ることとなった。

「私たちに逆らう奴はみんな酷い目に遭わしてやるの。今からあなたちちもね。うおおっ！！」

本気で襲い掛かってくる姉の由奈の拳と蹴りを簡単にかわしながらカウンターを決める。

鼻血を出しながら膝から崩れる由奈。

「ぐっ！？な、なんで？痛たたたた」

「あなたちちの名前を初めて聞いた時、なぜかすっごい恐怖みたいなのを感じたんだけど……会ってみれば払拭されちゃった。大した事はないわね。この学校では一番……ってだけのレベルだよ」

立ち上がり、狂ったように殴りかかるが、またしても腹部へのカウンターを喰らい、ゲロを吐きながらうずくまる姉の由奈。

それを見ていた妹の真奈も莉央に殴りかかる。

「よっ。ほっ。はっ。本気でやってくれる？」

「おらっ！おりゃっ！どりゃあっ！！……くそうっ！！パンチが当たんねえっ！？ちくしょおおおおっ！！」

一時間ほど経ったころ、完全に戦意を失った霞由奈と真奈が全身

痣だらけになって鼻血を大量に流しながら土下座をしている姿があった。

それを囲むように見ている全生徒と担任の榊原京子。

「由奈、真奈！よしよし。よく頑張ったわねあたし相手に。あれ？土下座してるだけでもあんたちちのパンツ見えてるわよ？」

莉央がしゃがみ込みながら霞姉妹の頭を撫でている。

「そうか……ここの学校のセーラー服はスカート丈短いからな……」

『スパァンッ！！』

「ひぐうっ！！」

「何をタメ口聞いてんの？スカート丈短いですから菅野様……でしょ？真奈」

「うう、ごめんなさい。スカート丈短いですからパンツ見えちゃってます。ごめんなさい菅野様」

菅野莉央にコテンパンにやられて皆の前で強烈なビンタを喰らい、遂に泣き出してしまう真奈だった。

隣では姉の由奈がまだ歯を食いしばって泣くのを耐えていた。

「よく頑張ったお二人さんに朗報っ！セーラー服もスカートも鼻血で血まみれになっちゃって汚いから全部脱いじゃおっかぁ？」

富田美香が満面の笑みで二人に問いかける。
しばらく黙っている姉妹に対して唾を吐きかける生徒がいた。
だんだん二人、三人と増えてくる。

「小西幸絵ちゃんと大西冴子ちゃん、それに中山由美子ちゃんを返して！」

「そうよ！あんたたちも死んじゃえばいいのよ！」

「死ね！」

数人が唾を吐きかけたり足蹴にしたりする中、ただ一人霞姉妹に土下座する女の子が現れる。

「由奈さん、真奈さん、あなたたちがしたイジメで三人の命が失われてます。どうかこれから先の人生、イジメなんかやめて優しく生きて下さい！お願いしますっ！」

小西幸絵の親友だった森山瑠美だった。
今なら仕返しが出来る、何を言っても殴っても蹴ってもいい中で、土下座をする生徒が現れたことに莉央たち三人は胸を熱くする。

姉妹は何も答えない。

「こんな奴らにそんな優しいお願いが通用するとは思えないけど……やれるだけの調教はやってみるからあとは見ててね森山さん」

名札を見て莉央は森山瑠美へそう伝えた。

「あのう。私たちは由奈さんと真奈さんに制服を脱ぐように言ったわね？早くしないと強制的に脱がしちゃうけど構わない？その場合、はるかにキツーいお仕置きになってしまうけど？」

明日香が目を細めて霞姉妹へ催促をかける。

「じゃあ立ってくれる？」

莉央が二人を立たせると、意地でも脱ごうとしない二人を遂に美香と明日香が脱がし始めた。

「抵抗したら鼻の骨折るから」

明日香は真奈へ恐ろしい脅しをかけながら服から脱がしてゆく。

「抵抗したら目ん玉くり抜くから」

美香は究極に恐ろしい脅しをかけながら由奈の服をスカートから脱がしてゆく。

パンツのみになった時点で顔が真っ赤になる由奈と真奈。

女子も男子も食い入るように二人の痴態を見つめ続けている。

セミロングの黒髪を揺らしながら号泣し、嗚咽を漏らし続ける妹の真奈の隣へ立ち、囁きかける。

「真奈さん、あなた処女？」

「ぐす、ぐす。……はい。」

「私が今から処女かどうか検査するけど構わないわね？」

「い、いやっ……」

ハイと言わない真奈の顔面へ思いっきり拳で殴りつける明日香。

鼻の骨が折れて更に大量の鮮血が噴き出す。

「殺すよ？」

「はいっ！お願いします明日香様っ！！わーんわーんっ！」

『スス……』

おへそ側から上から下へ右手をゆっくり差し込んでゆく。
真奈の性器へ少しずつ近付いて、遂に明日香の中指が小陰唇を捉えた。

『ズッ……ズブブ』

「ひゃあああっ！？いやあああっ！！」

「何がイヤよ……一年生から二年生から低学年の女の子の処女膜まで奪ってるくせに……ほら」

『ぐしゅっ！！……バリッ！』

「痛あああああっ！！わーん！わーん！」

中指と薬指を途中から一気に根元まで突き入れると、霞真奈の処女膜は悲鳴を上げた。
裂けた膜からはゆっくりと出血し、白いパンツがみるみるうちに赤く染まってゆく。
明日香の指は止まらない。
グリングリンと真奈の膣内を執拗に激しく掻き回す。
粘度のある液体な醸し出す卑猥な音が六年一組の教室に鳴り響いた。

「あんっ！あんっ！あんっ！あんんんっ！！気持ちいいいいっ！！」

『プシャーッ！！』

的確にジースポットを捉えて掻き回した結果、小学六年生になって初めて潮を噴かされてイカされた霞真奈であった。

周りで見ていた女子たちは頬を赤くしながら目を背けたり下を向いたりし始めるが、男子は小さなイチモツをイキリ立てながら見ている者もいた。

震えながら泣き続ける真奈の血で染まったパンツを一気に足首まで引きづり下ろす明日香。

「気持ち良かった？私の手マンは？天国の次は地獄に堕ちなさい。股を大きく開くの」

逆らえば強烈な一撃が来るので、泣く泣く大きく股を開く。

隣の姉である由奈は、下を向いて現実逃避しているようだったが、莉央によって四つん這いにされて、パンツを先に脱がされた。

医療用のクスコをカバンから取り出すと、ゆっくりとマンコにねじ込んでゆく。

『グリッ……ズブブ』

「ひいっ！？いやっ！？やめ……」

「やめないよ。由奈！あんた処女でないよね？」

「処女だよ！」

「嘘をつかないで！」

強引にクスコを根元まで差し込んで全開まで一気に開いた。

『ぐちゅっ！！……くぱあ～』

「いやんっ！！やめてよおおおっ！！」

嫌らしくピンク色にテカる膣内をクラスの男女全員に見て回らせる莉央。

「糸を引いてイヤらしいマンコだけど出血は全くないでしょみんな……みんなにも見てもらったようにコイツは経験者です！」

ざわざわする全生徒。

「あんたがヤッたのよね？」

ゆっくりと振り向きながら椅子に座って動かない男子児童の方を向く莉央。

その先には……霞姉妹のすぐ近くの富田美香の隣の席にいた田渕聡太だった。

話の展開を見守っていたため、結城明日香による真奈へのマンコ蹴りの刑は、とりあえず保留されていた。

「えっ！？どうゆうことねーちゃんっ！？」

「……何でそんなことまで知ってるのあなたは？」

「あなたと真奈は姉妹で田渕聡太を好きだった。どちらとも付き合わない約束をして微妙な三角関係を保っていたのよね？」

「誰がチクったの？」

「何をマンコにクスコ突っ込まれている状況で偉そうに聞き返してるの？ハイかノーだけでいいんだよ由奈」

「す、すみません……はい」

「田渕聡太への思いをどうしても抑えきれなかったあなたは半年前遂に打ち明けた。ＯＫを貰ったあなたは妹、真奈と三人での約束をする」

「やめてっ！」

「三人での友達としての三角関係を維持すること。決して姉妹を裏切って田渕聡太と付き合わないこと……」

股を大きく開かされて明日香の蹴りが襲ってくるか分からない恐

怖よりも、姉の由奈が裏切っていた事に怒りを通り越して悲しみの涙腺が最大限に開き切る真奈。

「ねーちゃんと聡太付き合ってたのかよおおっ！？そんなの聞いてないっ！！あたしもねーちゃんも聡太大好きだから三人で仲良くやっていこうって……あの時約束したじゃんかぁあああっ！！酷い……酷いよおおっ！！わーん、わーんっ！！」

『ズドンッ！！』

「わー……はぎゃあっ！？」

号泣始めた真奈にまさかの明日香のマンコ蹴りが炸裂する。
爪先や足の甲が性器に直撃する後ろから来る蹴りなので、本人は振りかぶる明日香の足が見えない為、かなりの恐怖と闘う中での激痛となる。
足の甲が真奈の大陰唇と小陰唇に直撃し、裂けた大陰唇から微かに血が滲み出る。

「うわあっ。。この可哀想なタイミングで蹴っちゃう？明日香ちゃんってば鬼だよー」

富田美香がわざとらしく顔をしかめて明日香の反応を確かめる。

「あなたより姉の方が魅力的だったってこと。そらだけなのよ。、

いちいち泣き喚かないで。ほら！」

『ズドンッ！！……ぐちゅっ！！』

「ぎゃはあっ！！」

二度目の蹴りは爪先が膣にめり込む方だった。
小陰唇ごと膣内にめり込む明日香の爪先は、性器破壊とも言えるべき強烈な一撃であった。
崩れ込む真奈。
号泣しながらも性器を両手で押さえて悶絶している。

「痛みと戦っているうちは姉への絶望感も薄らいでるでしょ？」

「明日香ちゃんなりの優しさだったんだね！」

美香は少しホッとした気持ちで悶絶中の哀れな真奈の頭を数回撫でてやった。

「さてと……由奈。あなたには地獄を味わってもらわなきゃね？」

「ひっ……いや」

「あんたもだよ……田渕聡太くん！」

振り返り、田渕聡太の目を睨み付ける莉央。

腕を組んで霞姉妹と菅野莉央たちのやり取りを見つめながら不敵な笑みを浮かべる男子児童、田渕聡太であった。

小学生のイジメ主犯に制裁を（中編）（後書き）

悪の中でも菅野莉央たちの中での順位ができてきた。
最恐の極悪らしい男子生徒は、莉央の挑発にどう応えるのか？

小学生のイジメ主犯に制裁を（後編）（前書き）

遂に二人への地獄の制裁が始まる。

小学生のイジメ主犯に制裁を（後編）

「あなたはもう許したげるから服着ていいよ」

クスコを性器に挿入されて、膣内をクラス全員に観察された霞由奈へ莉央が優しく声をかける。
妹の霞真奈の方は横向きに倒れ込んで明日香に蹴られた性器を押さえながら泣き続けていた。
富田美香が大き過ぎないアナルバイブを取り出して、泣きじゃくる真奈に近寄り、下半身の近くにしゃがみ込む。

「真奈ちゃん、あたしたちのお仕置きはまだまだ終わらないよ？このバイブであなたのお尻の穴掘っちゃうけど……覚悟してね」

「いや、いやぁ……もう何も信じられない……みんな死んじゃええぇっ！！　あーん、あーん！！」

「おねーちゃんに裏切られた上に一番酷い目に遭わされるなんてねぇ？　世の中間違ってるよねぇ？　おねーちゃんより酷い目に遭わされるなんてねぇ？　ほら！　飲み込め！」

『ズブッ……ズブブブブ』

「うぎゃあああっ！？　いったああああいいいいっ！！」

全長１２㎝、幅が３㎝ほどのアナルバイブをゆっくりと確実に真奈のアナルへ捩じ込んでゆく美香。
ピンク色の綺麗な少女の肛門を押し拡げてゆく黒いシリコン。
お尻を押さえながら必死で肛門を締めるが、締めるほど強引に突き入れてくるので、激痛が走る。

「ほらほらぁ。力抜いてないと逆に痛いんだよぉ？　肛門括約筋を何枚かブチ切ってやろっかぁ？　大人しく美香様にアナルを掘られなさいねぇ。。。あははは♪」

『メリメリ……バチュッ！！』

「ふんぎいいいいっ！！」

遂に根元までズッポリとハマり込んだアナルバイブを今度は激しくピストン運動させる。
美香のアナル責めは淡々と続けられて、床は痛みの余りに漏らした真奈の尿と腸液でベトベトになっていた。

泣きながらパンツを履く姉の由奈には、妹の惨状を救う余裕など到底なかった。
なぜ妹より自分の方が先に許してくれたのかも考える余裕はなかった。
ただ仇は討って欲しい気持ちはあるのか、縋る思いで恋人である処女を捧げた相手、田渕聡太へ目を遣る。

「その辺にしとけよ……」

ゆっくりと立ち上がる田渕聡太の手が一瞬素早く動いた気がした。
その瞬間、煙のようなモノが噴き出す。
みるみるうちに視界は桃色の煙で覆われた。
催涙スプレーをまともに直撃された莉央は両手で顔面を押さえながら膝をつき崩れ込む。

「ゴホッゴホッ！！……ゲホッゲホッ！！」

窓を開けていたのは風向きを計算に入れていたためであった。
カンの鋭い聡太は転校生がくる、とゆう時点で何かイヤな予感がしていたのだろう。
用意周到な催涙スプレーを机の上に置くと、莉央の顔面に渾身の前蹴りを入れる。
思わず後方へ倒れて鼻血が噴き出す。
クラスの全員は田渕聡太が霞姉妹とつるんでいることは知っていたため、元々恐れていて誰も手を出せなかった。
続けて呆然としている明日香に右フックを入れ、未だ真奈の肛門を責めている美香に回し蹴りを側頭部に入れた。
あっとゆう間にダウンさせられる莉央たち三人。

「いたたた！　目が開かないっ！」

「ううう……私の頬骨折れてない今の？　いたたた……」

苦痛に唸る二人と、完全に意識を失ってしまった富田美香。

「大丈夫か？　真奈」

ゆっくりと手を差し出して助け起こそうとする田渕聡太。

「……ほっといてっ！！」

その手を思い切り弾き飛ばし、目を背ける真奈。
三角関係を、姉の由奈と二人して自分を裏切り続けていたことがどうしても許せなかった。

「どうしても自分の気持ちを抑えきれなかったの。本当にごめん真奈」

「……」

肛門から血と腸液をタレ流しながら、四つん這いのまま涙が止まらない真奈だった。

静かに教室のドアが開き、一人の人物が入ってきた。

そのままスタスタと田渕聡太の方へ歩いてくる。

「な、なんだお前はっ！？」

「あーあ、藤堂長官の言った通りだなぁ。散々な目に遭ってるねぇ
あんたたち！　えへへ♪」

目が見えない莉央の傍で、明日香が叫ぶ。

「江美さんっ！？」

「小学生のガキ相手に暴れるなんてあまりカッコ良くないけど……
えへ。かかってきなそこの卑怯者！」

「女子高生か！？　普通にデカいな……しかし俺も１７０㎝近くあ
るんだ。女になんて負けねぇよ。おらあっ！！」

目を見開き得意の右フックで襲い掛かる聡太。
カウンターを合わされ、顔面に右ストレートを喰らって崩れ込む。

「痛っ！？……あれ？」

何が起こったのか分からないまま鼻血を噴き出しながら片膝を付
きながら坂本江美を睨み付ける。

そのまま側頭部へ超高速の回し蹴りが決まる。
見えないほどの急角度から入った高速の回し蹴りは、小学生の意識を飛ばすには十分過ぎた。
白目を剥いて仰向けに倒れ込んで、完全に意識を失う田渕聡太。
この時点で教室のドアが勢いよく開き、菅野京介が入室してくる。
「こら莉央っ！　約束が違うじゃねーかよ！　え？　何泣いてるんだお前？」
「催涙スプレーにやられたの！くっそぉ。まだジンジンして目が開かない……熊用のカプサイシン使いやがったな聡太とかゆうクソガキめ！　いたたたた」
「熊の子みたいなお前には丁度良いんじゃね？　ガッハッハッハッ……ん？」
かなり不機嫌そうな顔で近付く明日香に気付き、一瞬動揺する京介。
いきなり頬を叩かれて変顔になる。
『パァンッ！！』
「げはあっ！？」
「もし莉央ちゃんが失明したらどうするのよ？　血の繋がった妹なのにもっと心配してあげてよ！」

涙を流しながら莉央の心配をする明日香に、謝ることしかできない京介だった。

「京介さん、久しぶりですっ！」

「あれ？　江美さん……久しぶりだね！元気してた？」

「毎日喧嘩してたら誰も相手がいなくなっちゃって……退屈してたんだ。えへへ♪　今日はたまたま私の町の駅前でお買い物してたから……藤堂長官から電話きてすぐに電車でこの町に来れたの」

「そうだったんだ。莉央たちを助けてくれたみたいだなぁ。ありがとう！　莉央とある約束してたんだが……その連絡の前に俺にも藤堂長官から電話来て、この二人を連れ去るようにとね……」

どうやら菅野京介と坂本江美の二人は、この学校にて莉央たちを助けた後、霞姉妹の姉である由奈と、田渕聡太を運び出す役割を担って登場したらしかった。

京介の見た目の怖さもあって、この時点で担任教師の榊原京子と、クラスの生徒殆どが蜘蛛の子散らしたように帰宅を始めた。

明日香が汲んできたバケツの水で何度も目を洗い、ようやく見えてきた頃に、美香も涎を垂らしながら目を覚ます。

「ふわぁー。いてててて……あっ！？　江美さんに京介にーちゃん

！　田渕は！？　あ、もうやっつけてくれたのね？」
「そうみたい。あたしも今日は大失態だよ美香ちゃん……」
そう言いながら意識のない田渕聡太の右腕に、強力な睡眠剤の入った注射を打つ莉央。
ゆっくりと立ち上がり、霞由奈の前に立つと、静かに囁いた。
「真奈に……謝ることが出来たんだね？」
「う、うん」
「あなたと田渕聡太は……長い旅に出ることになるから。妹に挨拶しといた方がいいよ？」
「え？　長い旅！？　どういう意味なの？」
「今は知らなくてもいいよ。腕を出して」
霞由奈にも右腕に睡眠剤を注射した。
「一分くらいで意識なくなるから。それまで待ってあげる」
「ええっ！？　そ、そんな……私たちをどうするつもりなの！？　もう許してよっ！」

明日香はそっと真奈に語りかける。

「お姉さんに何か言い残すことはない？」

「……どうでもいい。みんな死んじゃえばいいんだ」

「そう。後悔しないわね？」

「…………ぐす。ぐす」

後はひたすら泣きながら鼻水をすする真奈。

その傍で遂に深い眠りにつく姉の由奈であった。

「じゃあ京介さん、江美さん……よろしくお願いします」

閑散とした教室で、残されたメンバーだけが会話を進めるが、それも終局が近付いてくる。

菅野京介と坂本江美によって、担ぎ上げられ、連れていかれるのを泣きながら見守る霞真奈。

この時、莉央たちの言葉のやり取りから、何となく嫌な予感を抱きつつも、裏切られた怒りが上回って引き留める気力も何もなかった。

莉央たち三人で、霞真奈の服を着せるのを手伝ってあげると、そのまま椅子に座り込んで更に泣き続ける姿を見ながら教室を後にした。

「よほど姉に裏切られてたのがショックだったみたいね真奈は……」

「うん。でも明日のことは絶対話せないし、最後に由奈に声をかけてあげられなかったことは一生後悔すると思うけどね……」

寂しそうに語る明日香へ静かに返す莉央。

美香も続ける。

「田渕聡太……殆どの自殺の元凶はあの子だったんだよね。藤堂長官も任務変更をどうして手紙なんかで伝えてきたんだろ……電話すりゃ早いのにね」

「何か変なとこに拘り持ってる人だから仕方ないよ。あたしもまさか霞真奈以外二人とも拷問処刑に変更するなんて思ってなかったから……」

担任の榊原京子にも挨拶をし、もうこの山坂小学校ではイジメは起きないだろうことを伝えて校舎を出る。

熱血教師の生田敏郎も既に帰宅したのか姿は見えない。

小林勇太郎の待つレクサスへ乗り込む莉央たち三人。

「お待たせしました。あの……小林さん、先に出てきた大人二人と児童二人はどうしたのですか？」

「確か、えーと。真っ赤の古そうなマーチでやって来た茶髪の若い人が、女性と生徒さん二人を乗せていかれましたよ？　女性は最初ここに来た時は凄い速さで走り込んで来ましたけど……どこから走ってこられたのでしょうね……」

坂本江美は最寄りの駅から走って来たことを知ると莉央は驚愕するしかなかった。

いざとゆうときのために二人がくるかも知れないことは聞いてはいたが、時間を逆算すると凄い速さで１０㎞を走ってきたことになる。

「凄いね江美さんは……」

「え？」

「ん？」

ボソッと呟く莉央に意味が分かっていない明日香と美香だった。

――――明くる日、早朝。残酷処刑島。

処刑人たちを簡易な港へ送り届けてから去ってゆく看守が手を挙げる。

女子小学生の拷問処刑人リーダーである菅野莉央、兄の菅野京介、女子中学生の鬼頭美紅、女子高校生の坂本江美の四人がこの度の拷問処刑人に選出された。
　選出される基準は、特殊任務省の藤堂長官たち上層部が決定するので分からない。

丘の上に歩いてゆくと、簡易ベッドに縛り付けられている二人の小学生児童がいた。
　１３歳の霞由奈と田渕聡太……山坂小学校の同級生三人を自殺に追い込んだ黒幕の二人である。
　深い眠りから先に田渕聡太が目を覚ます。

「ん、んん。眩しい……あれ？　ここは？」

無人島の自然溢れる木々と草花が、目に飛び込んできた。

「おはよう聡太くん。人生最期の朝を迎えることになったけど気分はどうかな？　えへへ」

坂本江美が頷く様に覗き込んで話しかける。

「え？　お、おい、冗談だろ？　俺まだ小学生なんだけど……あれ？　由奈!?　由奈じゃないかっ！　おい起きろっ！！」
「んん……ん」

目を細めて顔をしかめながら直射日光を顔面に受けている霞由奈も、聡太の呼び掛けに目を覚ました。

「んん？　あれ？　ここどこ？」

「無人島だけど一応名前は付いてるみたい。残酷処刑島だよ」

菅野莉央が無表情で答えた。

「な、何が残酷処刑島よ！！　この縄を解いてっ！！　私たちを家に帰してっ！！」

落ち着いたかと思ったら突然叫び出し、身体を揺さぶって暴れ出す由奈だったが、キツく縛られた縄は簡単には緩まない。

「まずは田渕聡太を菅野京介によって拷問開始します。お兄ちゃん、縄を解いて好きにしていいよ」

「ガハハハッ！！　学校行ったときにできると思って出来なかったから大ショックだったがまさか処刑島で犯れるとはなっ！　感謝するぜ藤堂長官さんよぉ♪」

「今日は最後までヤレる？」

「え？　やれる？　犯るのじゃなくって殺れるってことか？」

「そう。お兄ちゃんいつも殺せないじゃん？　初挑戦してみない？」

「そ、それはまだ勘弁してくれ……ボコボコにはさせてもらうけど……」

「ヘタレ」

「まぁそうゆうな妹よ……すまん！」

ヘコヘコしながらも男子児童の縄を解いてゆく京介だった。
簡易ベッドから飛び降りると、一目散に駆け出す田渕聡太。

「こんなとこでボコられてたまるかっ！　へへんっ！　俺の足には誰もがついてこれねぇよっ！」

小学生の割に驚異的な脚力を持つ聡太は、１００ｍを１２秒で駆け抜けるほどであった。

「はぁ、はぁ。ここまで来たら平気だな。やれやれ……眠らされて誘拐されてボコられるなんてまっぴらゴメンだぜ。高そうな丘だからここからなら周りが見渡せそうだな。一体ここは何処なんだ？」

ゆっくりと周りを見渡す。

海……海……海。
360度海であった。

「え？　えええっ！？　し、島なのかここはっ！？」

「えへへ。そう。だから残酷処刑島と教えたでしょ？　憲法の元で公式には処罰できない極悪人を、国民から避難を受けることなくお仕置きできる島。安心して。ここで死んだ人間は行方不明扱いとなるから、あなたのご両親もあなたの死に一生気付かなくて済むわよ？」

「じょ、女子高生！？　い、いつの間にっ！？」

「ちょっと木々に隠れながら追っかけたから分からなかったでしょ？　えへへ♪　私とここで戦ってみる？」

「勝ったら家に帰してくれるのか？」

「うーん……残念ながらそれは無理だけど、そもそも私に勝つこと自体が無理だから安心して」

目の前の女子高生と、先ほどいた人間を全員倒せば助かる見込みがあると確信した田渕聡太は、坂本江美に全力で殴りかかった。
ヒョイヒョイとかわす江美に一撃も入れられない聡太は、ついに息があがってしまう。
指の骨をバキバキ鳴らしながらゆっくりと近寄る江美。

「じゃあ私の番だね？　いくよぉ♪」

『ドカッ！！』

まずは顔面に蹴りを入れて後ろへ倒すと、一気に馬乗りになってマウントポジションからの鉄槌連打。

『ボコッ！　ガンッ！　ガシッ！　バキバキ！』

様々な上方向の角度から振り下ろされる江美の拳は強烈な重さがあった。
３分ほど殴り続けると、聡太の顔面はボコボコに腫れ上がり、鼻血が噴き出し、前歯は四本へし折れていた。

「わーん、わーんっ！　いだいいっ！　いだいよおおっ！！」

いきがっていても所詮は小学生の児童である。
極限の激痛に泣き喚く。
構わずそのまま児童の制服を脱がし始める江美。

「えへへ。男前になったよ聡太くん？　負けちゃったんだからお詫びとしてお姉さんにオチンチン見せてくれる？」

「わーん、わーん、イヤだ！　やめて恥ずかしいよおおっ！！」

やめてと言われてやめるわけがない拷問処刑人の女子高生、坂本江美は最後のパンツに手をかける。

「さぁ脱ぎ脱ぎしようね♪　男子児童のオチンチン……皮被ってるかなぁやっぱ。それえっ！」

『ズルリッ！……ぷるるんっ！』

８㎝ほどある小学六年生のペニスにしては大きいイチモツが、ムクムクと更に大きくなってゆく。
１２㎝くらいまで大きく膨らんだ。

「デカっ！？　あ、あんたガキの割にはでかいねぇ！？　勃起までしちゃって……えへ♪　まさか私に見られて興奮したの？」

女性に陰部を見られるなど初めてだった児童は、恥ずかしいながらも勃起してしまった。
坂本江美もアイドルではないが、かなりの美人系であったから余計にそうなる。
恥ずかしくてか痛くてか分からないが、ボコられて腫れ上がった顔を涙がポロポロと流れ落ちる。

「でも皮被りは勿体ないよね？　臭いからお仕置きだね？」

江美はそう言うと、両足首をガシッと掴んで、児童の勃起したペニスに足の裏をあてがう。

「イヤッ！？　何をっ！？」

「えへへ♪　くらえ！　電気あ…ん…ま！　それえええええっ！」

『ズガガガガガガガッ！！』

「ぴぎゃあああああっ！？　いだいいいいいいっ！！」

凄まじい勢いで江美の電気アンマが児童の股間を襲う。
ほんの数回で激痛の為に勃起は治まり、１００回ほどで被っていた皮が裂けてズル剥け、亀頭部が剥き出しになってしまった。
構わず連打する足の裏。
尿道から血の混ざった尿が溢れ落ちる。
糸を引きながら透明の液も流れ落ちていた。

「あれぇ？　もう勃起しなくてもいいの？　さてと……今度は全身踏みまくり&蹴りまくりの刑だよぉ！」

陰部を押さえて歪に変形した顔で泣きじゃくる児童の背中や腹、両足に両手と、本気で何度も蹴りまくる江美。
絶叫をあげて泣きじゃくってもやめなかった。

「ほらほらほらぁ。痛い？　えへへっ♪」

全身の至るところが赤くなり、紫色になり、所々皮が破れて出血していた。

背中側から両腕を聡太の膝裏へ入れて抱き起こし、抱き抱えてからの股間への膝蹴りが始まる。

背後からいきなり蹴りがくるので、いつ蹴られるのかタイミングが分からない聡太は、激痛だけではなく恐怖とも戦うはめになった。

「こんな風にお母さんに抱えられてウンコとかしてた記憶ないかな？　あんたの場合、女子高生による金玉蹴りの刑なんだけどね～。えへへ♪」

『ドカッ！！　ドカッ！！　バスッ！！　バスッ！！』

「痛っ！！　ひぎっ！！　やっ！！　いだあっ！！」

睾丸を潰さない程度に加減してペニスごと陰部を蹴りあげる。

尿道から血のオシッコを撒き散らしながら江美の膝が当たる度に大きく上下左右にプルンプルンと揺れ動く男子児童のペニス。

「キンタマはまだ潰さないから安心して。私はペンチで潰すのが大好きだから♪　さぁ戻りましょ！　楽しい経験が待ってるわよぉ！　えへへっ♪」

拷問処刑執行場へ江美に連れられて戻ってきた聡太。
あまりにも悲惨な光景に思わず声をあげてしまう。

「うわあっ!?」

両手両足を切断されて、切断面を包帯でぐるぐる巻きにされて笑っている霞由奈の姿を見たからだ。

「由奈っ!?　どうしてそんな酷い姿に!?　こんなことしたら死んじゃうじゃん!?　やめろっ!　やめろよお前らああああっ!!」

『パァンッ!!』

「ひぎゃあっ!!」

鬼頭美紅が思い切り素っ裸の男子児童の顔をひっぱたいた。
ボコボコになってるにも関わらずお構い無しだった。

「黙れ糞ガキ!　あんたたちは処刑されるんだよこの島で」

「え?　処刑って……お仕置きのために連れてこられたんじゃなかったの!?」

「先にあの子を殺るからそこで黙って見てるのね」

京介の２０㎝はあろうかとゆう巨大なイチモツをダルマ女にされた小学六年生の女の子の性器へ近づけてゆく。

「あはは！　あはははははっ！！」

「ちっちゃいマンコだなこりゃ……ほんとに入るのかよこんなガキに……気が狂ったように笑ってるし気持ち悪いぜ全く」

「あたしが電動ノコギリで手足切断したときから頭おかしくなっちゃったの……気にしないで！　アソコにはローション塗ってるから試してみて」

莉央によって由奈の小陰唇や膣内はローションをたっぷりと塗り込まれていてドロドロになっていた。

「じゃあ、ロリロリレイプといくか！」

『ぴと……めりめり』

「あははっ！あはははははははっ！！」

ワレメに先端が入ったところで更に気が狂ったように笑い出す由奈。

『メリメリ……ぐりぐり』

「いてっ!?　おい莉央っ!　恥骨が邪魔してやっぱマンコにゃ入んないわ……諦めてアナルに入れていいか?」

「ちょっと待って。入らなければ入るようにするだけよ」

そう言いながら大きな金槌を持ち、ダルマ少女の股間の前に立つ莉央。

「へぇ~。綺麗なピンク色のオマンコしてるじゃん?　マンカスだらけだけど……ちょっと痛いけど我慢してね由奈」

「あは。あはははははっ!」

「いつまで笑っていられるのかな?　うふふ」

口を大きく開けたまま、涎を垂らしながら笑い続ける由奈。
莉央は大きな金槌を大きく振りかぶり、思いっきり振り下ろした。

「えいっ!」

『ヒュンッ……ドカアッ!!』

「んがあああっ！？」

「えいえいえいえいっ！」

『ガンッ！ガンッ！ガンッ！ガンッ！』

「ぴぎいいいいいいいいっ！！！！」

笑うことも忘れて大絶叫をあげてしまう霞由奈。
莉央の振り下ろした先のターゲットは……女性器である。
左右の大陰唇、小陰唇を順番に何度も何度も叩きまくった。
その下にある恥骨の粉砕が目的であった。

『ガンッ！！……バキィッ！！』

ついに膣を取り巻くように存在する由奈の恥骨がバラバラに粉砕された。
ズタズタに潰された小陰唇をひくひくさせながら、ドクドクと糸を引いた鮮血を流すオマンコ。
中身の膣内も血の泡を噴いて、ポコポコと卑猥な音を立てていた。

「あはは。汚いヒダヒダ部分ピクピクさせないでよ？　これはオマケ」

『ヒュンッ……ドカッ！！』

「ぎっひゃああああああっ！！！！」

莉央は由奈の陰部を金槌で数回殴り付け恥骨を粉砕し終えたあと、更に小さなクリトリスまでも叩き付けた。
真っ赤に腫れ上がるが、辛うじて原型を留めているクリトリス。
同時に打ち付けられた尿道口からは微かに血が流れ出る。

「お兄ちゃん、これでずっぽり入るはずだから子宮までぶち込んであげて」

「お、おう……やっぱエグいなお前は……」

妹の莉央の残虐さに震えながらもペニスを再び女子児童の性器へ押し当てる京介。
ズブズブと卑猥な音をたてながら確実に埋まり込んでゆく。

『ズブズブ……ずぶぶぶぶ』

「はううっ！！　ひぎいいいっ！！」

あまりの激痛に遂に号泣に変わってしまった由奈。
お構いなしに遂に巨大なイチモツは女子児童の膣内に根元までズッポリと入った。
亀頭部分は完全に子宮にまでめり込んでいた。
無理矢理突かれてこじ開けられた子宮口からの鮮血が噴き出すが、

更に激しく腰を振り始める京介。

『バッコンバッコンバッコンバッコンッ！！』

「やんっ！　やんっ！　あはっ！はんっ！」

『パンパンパンパンパンパンパンパンッ！！』

「うがあああああああああっ！！」

大粒の涙を流しながら手足のない小さな女の子は、二十歳の男の巨根を根元まで挿入され、激しく出し入れされ続ける。
短くなった手脚がブランブラン人形のように揺れて、見ているだけでも哀れであった。

「い、いく、イクッ！！」

『ドピュピュピュピュピュピュピュウウウッ！！……どくんどくん』

大量の精液を女子児童の膣内にぶちまけた京介は、満足げにイチモツを引き抜いた。
抜くと同時に噴水のような愛液と鮮血が京介に降りかかる。

「うわあっ！？　血はあまり見たくねぇぞっ！？」

「何勝手なこと言ってるのよ……もうベッドから降りていいよお兄ちゃん。この男子児童のアナルで二回目イッててくれる？」

「お、おうっ！　さっきはよくも逃げてくれたなぁ？　俺のビッグマグナムをケツ穴にくれてやっからな？　げひひひひっ！」

中学生の鬼頭美紅が田渕聡太を無理矢理四つん這いにさせる。
中指と人差し指にローションをたっぷりと塗り、聡太の肛門へ一気に捩じ込んだ。

「ほらっ。クソガキ！　お姉さんに肛門見せろ！えーと……ここね？」

『グリッ……ズボオッ！！』

「いだあっ！？」

「おらあっ！　着地掻き回してやるからな？」

『ぐちゅぐちゅ……くぷくぷ』

執拗に男子児童の直腸内を二本の指で掻き回す女子中学生の美紅。

「痛みが和らぐようにしてあげてるの！　あたしに感謝しなさいね？　はい、もういいよ」

『ぽんっ！』

「はうっ！！」

「さぁ用意は出来たようだなガキよ？」

「ひいっ！？や、やめて……」

『ズズズズ……ぐりぐり……ずぷぷ』

「痛いいいいいいっ！！嫌だあああああっ！！」

『ずぷぷ……バスッ！！』

「んぎいっ！！」

美紅のお陰で聡太のアナルには見事に挿入でき、恥骨を割る手間も省けた。

今度は地べたで同性に犯される聡太の絶叫が島中に響き渡る。

肛門括約筋は京介の巨大なペニスにより引き裂かれ、腰を振る度に辺りに鮮血が飛び散った。

「オラオラオラオラァッ！！　先っぽがお前のクソに当たってるぜっ！？朝きちんとクソしなかったようだなあっ！？　ガハハハハッ！！」

『パンパンパンパンパンパンパンパンッ！！』

「うぎっ！　ひいっ！　やめっ！　ぐぎゃっ！　ひぎいいいいいっ！

！」

兄に犯される聡太に背を向け、カッターの刃をギリギリと伸ばして、由奈の方へ歩み寄り、簡易ベッドに上がりひざまづく莉央。
左手で微かな膨らみを帯びたピンク色の右乳首を摘まみ、捻りあける。
顔をしかめて性器と乳首の痛みに堪える由奈。
手足の切断面の痛みは、強力な局部麻酔で全く感じていないからまだ幸せだった。

「もうこんなもの……男に舐めてもらうことも赤ちゃんに吸ってもらうことも無くなったから……いらないよね？切り取ってあげる」

乳首の根元に横向きに刃を当て、一気に引く。
短くなった手足をバタつかせながら奇声をあげるが、決断した乳首を本人の右の鼻穴に突っ込んだ。

「鼻くそみたいだからソコにしまっときなさいね？　左側もやったげる」

同じ様に残った方の乳首も決断し、左の鼻穴に捩じ込んだ。

「なんで切れ味悪いのにカッターなんか使うの莉央ちゃん？」

「なんか痛々しくて面白かったから♪　今からは出刃包丁で本格的にやっちゃう！　例のアレ……キッつい拷問刑」

「あー。凌遅刑ね。あたしも手伝うよ。三千回くらい肉片切り落とすまでは死なないように気付け薬打ちながら長く楽しもうよ♪」

莉央と美紅は楽しそうに由奈の拷問処刑の準備に入る。

研ぎ澄まされた出刃包丁を更に砥石で研ぐ二人。

その会話と包丁を研ぐ音を聞いただけで京介のペニスは縮み、男子児童の肛門から自然と抜け落ちた。

「全身の肉を数千回切り落とすだと……想像しただけで吐き気が……江美さん、俺はちょっと休んでくっから後はよろしくお願い……」

「はーい。相変わらず血には弱い方ですねぇ。男の子は私が始末しときますから。えへへっ♪」

ダルマ少女の由奈を、簡易ベッドから低い椅子に移動させて座らせる。

極細の糸で鎖骨の辺りとヘソの真上辺りを縛り固定していった。

膝から上しかない両足は、大きく開いたまま性器と肛門が前から丸見えの状態にして縛り付けた。

膝を閉じられないよう膝上に糸を巻いて左右に引っ張るようにしてきつく縛りあげる。

恐怖のあまり糞尿をもらしながら命乞いをするが、莉央と美紅は微笑みながら由奈の左右にしゃがみこみ、出刃包丁をゆっくりと振る。

「美紅ちゃんとあたしでこれからあなたの全身のお肉を削いでいくからね？」

「千回くらいで死んじゃダメだからね？　クソガキ……」

「お願いです！　なんでも言うことききますからっ！　もうイジメとか絶対しませんからっ！　命だけは助けてくださいっ！」

「もう遅いよ。あなたの妹の真奈さんは、明日から赤霧島小学校に転校させて、あたしたちが毎日可愛がってあげるから心配しないでね？」

更に漏らす糞尿を、美紅がタオルで拭き取り、いよいよ拷問が開始される。

「只今より、霞由奈の凌遅刑を開始します！　美紅ちゃんは右半身、私は左半身を担当します。では霞由奈……始めるからいくらでも泣き喚いてね？」

「いやあああああっ！！やめてえええええっ！！」

二人は肘より上の腕から肉片を削いでいき始めた。

１０円玉の大きさに削いだりお煎餅の大きさに削いだり、適当に何箇所も肉片を切り落としていった。

麻酔が効いてない部分なので、気が狂った様に絶叫する由奈だが、

意識を失っては電気ショックで叩き起こされ、延々と拷問は続いてゆく。
　バッテリーから繋いだ細い二本の電極棒を肛門と性器に捩じ込み、電気を流されるものだから堪らない。
　性器から脳天まで身体の中心点を貫かれる電気の激痛に嫌でも目が覚めてしまうのである。

「意識を失うたびマンコとアナルが焼けていっちゃうよ？　うふふ♪」

　冷たく笑みを見せながら由奈に囁く莉央。
　乳輪も丸くくり抜く様に切り取り、簡易ベッドに並べていった。

「美紅ちゃん、もう全身一通り削いじゃったから真っ赤っかだね？　次は骨が見えるまで筋肉部分を削いでいくよ？」

「オッケー！　内臓はまだダメ？」

「肉片を全て削ぎ終わったら内臓に移ろう。あくまで心臓とか肺とか急所は最後ね！　出来るだけ生き地獄を与えてやりたいから」

「あはは。それいーね！　分かった♪」

『ズ、ズズズズ……ベチャ、ベチャ』

肉を削いでは地面に落とす。
忌まわしい肉片の切り裂かれる音と、地面に着地する音が辺りに不気味に響く。
「由奈……由奈あああっ！！　わーん！わーん！　死にたくないよおおっ！！　わーんわーんっ！！」
京介がダウンしてからしばらく放置されていた田渕聡太が我に返ったように泣き叫ぶが、目の前で彼女である霞由奈は惨めに骨と内臓だけになってゆく。
「ここまでで二千回かぁ。手足が無いから三千回削ぐのは無理そうだね」
「そう言えばそうだ！　でもここまでバラして生かしてるなんてあたしたち凄くない？」
「えっへん！それはあたしが致命傷をうまく避けるように美紅ちゃんに指導しながらやってるお陰だよ？」
それぞれのセーラー服を血で染めながら、笑顔で会話しながら肉片を削ぎ落としていく女子小学生と女子中学生の姿は、田渕聡太には強烈すぎた。
はち切れんばかりの奇声を上げ続ける由奈だが、一片一片確実に身体の肉を削がれていった。

意識が朦朧としてくる中、聡太の股間に激痛が走る。
坂本江美に蹴り上げられたのだ。
右手には大きな斧を持っている。
何をする気なのか察した聡太は必死で逃げようとするが、すぐに追いつかれ、江美の餌食となる。
手足を切断された男子児童は泣きじゃくることしかできなかった。

「小さくなったねぇ？　これから金属バットで何回どついたら死ぬのか試させてね？　えへ♪」

「ひぃいっ！！」

ダルマ少年にされてから全身を金属バットで殴打され、ついに意識が薄くなってくる。
頭部からの出血が激しく、生温かい感触が顔を伝う。
ペンチで睾丸を挟み込み、力を入れている姿が微かに見えた瞬間、全身に電気が走る様な激痛に襲われる。

『ぶちゅ！』

「ぐぎゃあああっ！！」

右の睾丸が瞬時に潰された。
残る左睾丸はゆっくりと数分かけて潰している。

「ほらほらぁ～。左のキンタマもゆっくり変形してきたよぉ？　もう限界かなぁ？」

その地獄のような数分後、確実に二つ目も潰された。

『グリリ……グニャァ～。ぶちゅっ！！』

「んぎぎぎぎいいっ！……ひぎゃあああっ！！」

「まだそんなに叫ぶだけの体力あったんだ？　オチンチンに爆竹入れていい？」

ダメとも言えないまま無理矢理爆竹を捻じ込まれ、火がつけられる。

乾いた破裂音と共に尿道内の小さな棒が爆発した。
亀頭部分が見事に裂けて、パックリ開いてしまった。
尿道が飛び出してプルプルと揺れる。

「すっごぉーい！　こんな破壊力あるんだ爆竹って！尿道飛び出しちゃってるじゃんっ！」

「うわーんうわーんっ！！痛いよおっ！！いだいいいいっ！！」

「うるさいなぁもう。さぁさぁ次いくよ次っ♪」

『グリグリ。シュボッ……ジジジジジ……パァンッ！！』

二回、三回と残った陰茎の尿道に爆竹を差し込んでは破裂させていき、遂にペニス部分が全て吹っ飛んでしまった。

会陰部から飛び出した尿道から女の子の様に尿を漏らす男子児童に、坂本江美は笑いが止まらない。

白目を剥いて意識を失っている聡太にライフルを持って近付く。

「えへへへ♪　女の子みたいになっちゃったぁ！　後は肛門かぁ。けケツマンコにお仕置きだねっ」

「うわあああんっ！！痛いよおおっ！！うわあああんっ！！」

股間の激痛に泣き喚くばかりで、もう江美の言葉は耳に届いていないようだった。

「もう無理か……ほら、この強烈な一撃を肛門に食らわせてやるよ。よっと！」

『グリ……ズブブブブ』

先端部をゆっくり肛門へ差し込み、グリグリと直腸を掻き回す。

「ほら。前立腺を銃口で掻き回される気分は？気持ちいい？えへへ

♪」

『ぐちゅっ、ぐぷぷっ、ずちゅちゅっ』

「あううっ！？　うううんっ！！　んんんんっ！！」

「女の子たちみたいな声出しちゃって……こんな状態でも前立腺は気持ちいいんだねぇ？　でもさすがに射精までは無理か……」

聡太の直腸は卑猥な音を立てて悲鳴をあげる。

「くっさ！ウンチの匂いしてきた……いっぺん死んでみる？」

遂に女子高生である江美の人差し指が、引き金にかけられた。

「言い残すことはなぁい？聞いといてあげるけど？」

「アーンアーンッ！！わーんわーんっ！！」

「やれやれ。じゃあね僕。お姉さんが肛門から鉛玉貫通させてドタマ吹っ飛ばしてやるから覚悟してね？」

ゆっくりとライフルの引き金を引く江美。

『ドンッ！！……ぶしゅっ！！　ベチャベチャベチャッ！！』

肛門から頭部まで一気に貫通した銃弾は、脳みそと目玉まで吹き飛ばす。
両方の目玉を飛び出させて脳みそぶちまけて口から腸を吐き出して死んでいる姿を見て、江美は更に可笑しくなる。
耳と鼻からも脳みそが飛び出していた。

「えへへへへ♪　マヌケなお魚みたいな顔してるっ！　かわいっ！肛門からプスプス煙出てるし……哀れだなぁ」

銃声に振り向いた莉央が田渕聡太の処刑完了を確認した。

「あれ？順番後先しちゃったね？江美さんが田渕聡太止め刺しちゃった……」

「じゃあこいつもぼちぼち殺る？　ケツ穴とマンコの周りだけ肉削げてないけどいいの？　お尻と会陰部の肉も削いじゃおうか？」

「そこは残しておいて。その方がこれからすることが余計エッチに見えるから……お尻や性器周りだけは原型残しておきたかったの。えーと。まずは肛門をくり抜いて……そこから直腸、大腸を引きずり出すから。性器破壊は小腸を全て引きずり出してからだよ？その方が楽しめるから♪」

「聞いてるだけでエッチだね。濡れてきちゃうよ……」

「肛門をくり抜く前に……こうしてやるぅ！」

『ずぷっ……ずぼぼ。グリグリ』

中指を肛門へ根元まで差し込み、直腸を掻き回す莉央。

「あはは。支配してる気分が凄く味わえるから……ちょっとコレやっときたかったの」

「あははは。本当にＳだよね莉央ちゃんも……指にうんこ付いちゃうよー？」

数分掻き回してから指を抜き、由奈本人の口に捩じ込んで指にこびりついた大便を舐め取らせる。

「ほら、自分の汚物を舐め取りなさい」

「ううう〜ぺちゃ、ペチャ……」

「よくもアイドルの綺麗な指にあんたの汚いウンチつけてくれたわね？　今からその臭い肛門をくり抜いてやるんだから」

「おおっ。無茶苦茶理不尽なアイドルだねっ」

メスに持ち替えてリオの一人舞台となった。

「じゃあ見ててね美紅ちゃん」

「はーい！　莉央様のメス捌きじっくり拝見させて頂きまーす♪」

「はい、まずは肛門ね」

『つぷっ！　ズズズズ……くちゅくちゅ……ベチャ！』

円を描く様に見事に肛門をくり抜く。
左手を突っ込んで肛門を取り出してから簡易ベッドに置いた。

「この少し見えてる丸い管みたいなのが直腸だよ。カーブになってるS状結腸部分まで引き出してから切断。よっと」

『グリ……キュッ。ズズズズズ……スパッ！』

「そして中身はウンチだらけだから……指でシゴいて絞り出すの。やだ。コイツのウンチくさぁ～」

「ぎゅっぎゅっ！！……ぶりぶりぶりぶり……ビチビチ」

しごいて絞り出した大便は地面に落として、残った直腸を先程抉り取った肛門の隣へ並べた。

「そしてＳ状結腸が出てきたからぁ。ここからは運動会だよ！　引きずり出しタイム開始！　いっくよぉ……それえっ！！」

『ズルズルズルズルズルッ！！』

「んぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃああああああっ！！！！」

「ほらほらほらほらほらほらあっ♪」

『ずりゅりゅりゅりゅりゅりゅるっ！！　ぷるるるるるるんっ！！』

莉央が両手を使って綱引きをする様にどんどんと大腸を引き摺り出してゆく。

ニュルッと音を立てて細いテカテカした腸に変化した。

「おっ、出たよ小腸が。下行結腸に横行結腸、上行結腸、十二指腸、全て大腸は引き摺り出しちゃったね。ここからは長い長い小腸さん……途中で交代してね美紅ちゃん？」

「長いんだよね小腸は……疲れたら途中で代わってあげるよ」

しばらくズルズルと引き摺り出されてゆく小腸。

湯気を立てながら椅子の下に溜まってゆく。

「はぁ。はぁ。代わって！」

「オーケー♪」

「あひあひあひ……はひぃぃぃ……ガクッ」

莉央と美紅の連携で、全ての腸を引き摺り出すことに成功した。
再び意識を失っている霞由奈の肛門と性器に、電極棒を突っ込んで電気を流す。

『ぐちゅっ。ズボッ。……バリバリバリバリッ！！』

「あれ？　遂に死んじゃったかな？」

今度はそれでも起きない。既に死がかなり近付いてきているからだろうか？

「そっかぁ。ケツ穴とマンコ同時電極でも起きないか……じゃあ少々手荒くなっちゃうけど……これっきゃないっ」

莉央自身が考案して作られた子宮回収装置を取り出す莉央。

「うわぁ～……またゴッツイのが出てきたね？」

「これでコイツの子宮を抉り出しちゃうの」

「へぇ～お腹切らなくてもそんなことできるんだ？」

「まぁ見てて！　あたしが考えた装置で子宮を抜き取って起こしてあげるからね？　ほら、入るよぉ？」

『ズズズズ……ばしゅっ！ザクザクッ！！』

子宮まで突っ込まれた先端部分から回転刃が出てきて、子宮をくり抜く様に切り取る。

そして受け口の筒の様な装置の中へ子宮がすっぽり飲み込まれる仕組みだ。

後は引き出すだけで子宮が抉り取れた。

「いっけぇぇっ！！」

『ズズズズ……ずぽんっ、ぶるんっ！』

小さなオマンコから白いぷよぷよした臓器が抜き取られる。

子宮回収機の筒の部分は透明なので抜き取った子宮が丸見えだった。

「んぎゃあああっ！？痛いいいっ！！」

「あははは！　痛いったってそんな全身骨が見えるほど身を削がれ

て今更だよね美紅ちゃん？」

「そうそう。ケツ穴から腸出し切ってマンコ開いて子宮抜かれて空洞になっちゃって……今更過ぎるよ？　そうだ！　記念撮影しよっか？」

「それいいね！　江美ちゃん撮ってくれるかな？」

「はーい！　なんて残酷でエッチなんだろ……まだ肛門部分から腸はみ出してプランプランしてるじゃん？」

「もう胃が肛門部分から飛び出しそうになってるの。会陰部に胃が引っ掛かってるだけだから」

「ふぅん。凄いことになっちゃってるんだねコイツのお腹の中……じゃあ撮るね！　あ、もっと思いっきりマンコ開いて莉央ちゃん」

「こう？」

『グリ……くぱぁ～』

美紅と莉央の二人同時に性器に指を二本突っ込み、思いっきり左右に開くと、子宮を失った空洞の膣内が丸見えになった。
その傍で残った肛門部分からはみ出している腸が粘液まみれでゆっくりと揺れている。

「いいよー！　エッチな絵面だわ♪　はい、チーズ！」

『パシャッ！』

江美によって美紅と莉央による、本日一番に残酷なシーンが見事に撮影された。
この時、霞由奈は狂った様に顔をしかめ、全身の苦痛と戦っていたが、莉央と美紅の笑顔が対照的な、なんとも言えない一枚となった。

「由奈！　生きてる？　今からあなたの大切な陰核を切開するよ？　今日で人生終わるからもう感じることもないし……尿道口が先に切れちゃうけどいいでしょ？　ほら、いくよぉ？」

パックリ開けた性器に刃を上向にしてメスを差し込み、上へ切り裂いた。

「マンコ斬りいいいっ♪」

『ズ、ズババッ！！』

尿道口と陰核が瞬時に真っ二つにされる。

「びぎいいっ！！　んごおおおおっ！！」

「さっきから何訳の分かんない絶叫続けてるのよ由奈……ほら、尿道口もクリトリスもパックリいっちゃたよ？　もう生きていけない

よね？　あはは！　小陰唇と外性器も全て削いじゃうからね？」

『ズボッ……スパッ！スパッ！　ズシュ。ズシュ。ザシュシュシュシュシュッ！』

手際よく左右の大陰唇を削ぎ落とし、更に小陰唇を左右とも切り取り、性器自体をくり抜くようにして片っ端から削ぎ落としてゆく莉央。

「あはは。マンコ自体の全てのパーツを削ぎ落としちゃったぁ♪もう真っ赤な肉片に膣の穴しか見えな～い♪　じゃあ次は内臓いくわね？」

そう語りかけながら尿道と陰核、性器自体を削ぎ落とし、グチャグチャに破壊したメスは、おへそへ深く突き刺さり、胸まで一気に切り開いた。

「後は肝臓や腎臓、膵臓に胃とか抜いて、最後に肺と心臓でフィニッシュだよ？」

「心臓抜くまで死なせない莉央ちゃんの技術が凄いわ……」

「超強力な強心剤使ってるからね～。さあ仕上げといきましょう」

どんどんと内臓を抜かれていき、遂に虫の息となる頃、美紅が尿道を指で摘み、ズルズルと引き摺り出した。

「ついでにオシッコ通る管も抜いとくね」

「あっ、忘れてたっ！　あはは。真っ白で綺麗だね由奈の尿道」

最後に心臓を残すのみとなり、霞由奈は激しく死へと続く痙攣を始めた。

「ようやく死ねるね。妹さんのことは任せといて。一生可愛がってあげるからね？」

「ううう……おでがいじまず…いも……さないで」

「妹を無事におかないで？分かった。散々いじめてあげる。安心して死んで！　美紅ちゃん……」

「ほーい。んじゃ長いことお疲れ様！　今までで一番苦しめた拷問処刑だったよ！　ごめんね♪　じゃあさようなら」

『ぐしゅっ！……バリバリ……ベチャッ！！』

「けびいいっ！？……がくっ」

「ほい、最後の心臓もーらいっ♪」

遂にズタズタにされてトドメの心臓を抉り出されて息絶えた霞由奈は、莉央によって髪をきちんととかされ、サッと化粧して口紅を塗られ、顔だけは肉を削がれずに綺麗なままで済ませてあげた。

「痛い思いさせちゃったから化粧はサービスだよ。でも顔以外は肉の断片と骨だけになっちゃったね？　何か作り物みたい……あの世で自殺した三人にきちんと謝るのよ？」

寝ている京介を起こして残酷処刑島を後にする四人。

迎えの小型ボートの中、血まみれのセーラー服には内臓の断片がこびりついて風に揺れていた……。

小学生のイジメ主犯に制裁を（後編）（後書き）

数日後、莉央たちのクラスに転校させた霞真奈が皆の前で挨拶していた。

「今日からこのクラスにお世話になります霞真奈です。よろしくお願いします」

「皆さん、仲良くしてあげてね！」

担任の坂本先生が笑顔で全生徒に頭を下げる。

「あなたの席は……えーと」

わざとらしく周りを見回し、菅野莉央と目を合わせる。

「あそこに座って。菅野莉央さんの隣にね」

六年三組の宿命（前書き）

菅野莉央たち、三人の処刑人がいるクラスでは当たり前の残酷なリンチが今日も行われようとしていた。

六年三組の宿命

「よ、よろしくお願いします」

菅野莉央の隣に、生気の失せた表情でゆっくり腰をかける転校生がいた。

霞真奈である。

姉の由奈と彼氏の田渕聡太は先日、残酷処刑島で処刑され、三人組の中で唯一生き残った由奈の妹である。

過去最高クラスの残忍な拷問処刑といえるほど凄惨な拷問を受けて死んだ霞由奈の遺体は、今ではもう残酷処刑島に埋まっていることだろう。

「おはよう真奈さん」

「おはよー真奈ちゃん」

結城明日香に続いて富田美香も笑顔で挨拶する。

セミロングの髪をいきなり掴んで引っ張り回す莉央。

「痛いいいいいっ！！」

「真奈！　お姉さんが行方不明になったらしいね？　気分はどう？」

「…………」

しばらくうつむいて黙っていたが、突然泣き出し、クラスの全員の視線を浴びるハメになる。

担任の坂本先生も心配そうに見つめていた。

「だいたいどうなったか分かってるみたいね？　あなたの予想より遥かにムゴい死に方になったわよ？　何で姉が死んで妹だけ生きてるのかしらねぇ？　服を脱いで全裸になりなさい」

「えーん、えーん、嫌ああっ！！」

泣いてる真奈の左頬をビンタで思いっきり引っ叩く莉央。

明日香も美香も目を丸くして驚く。

「莉央ちゃん朝から機嫌悪いねぇ明日香ちゃん？」

「うん。昨日の任務でストレスは解消されてるはずなんだけどねぇ……」

莉央が怖くてどんどん制服を脱いでゆく霞真奈。

最後のパンツに手をかけて動きが止まる。

「パ……パンツだけは許して」

『ドカッ！！……ゴロゴロゴロゴロ』

思いっきりお腹を蹴飛ばして、何度も床を転がって吹っ飛ぶ真奈。

「許して下さい莉央様……でしょ？　明日香ちゃんと美香ちゃんにもこれからずっと敬語で話さないと殺すわよ？」

「い、いたた。は、はい。ごめんなさい……莉央様」

土下座して謝る姿を見るに見かねて担任の坂本先生がやってくる。

「菅野さん、もういい加減にして！　校長からあなたの隣に席を決めてと言われてたけどまさかそんなことするなんて。この子の姉は行方不明になってるのよ？この子が今どんな気持ちでいるか分かってるの？」

無視してスマホを手に取る莉央。

「プルル……プルルル。ガチャ。はい西野です」

「あ、西野校長？　三組の菅野ですけど。担任の坂本ボコっちゃって構いませんか？」

「そ、それは困る！　彼女がどうかしましたか？………ふむふむ。そうですか。分かりました。今日は帰らせるから勘弁してやってくれまいか？」

「はーい」

それから一分も経たない内に、教頭が教室へ駆け込んでくる。

「さ、坂本先生っ！ダメですよ菅野さんたちに逆らっちゃ！」

「本当に校長に電話してたの？　どうしてそんな権限を小学生のあなたなんかに与えるのよっ！？　この国って頭おかしいんじゃない！？」

「ささっ！　ともかく今日の授業はもう結構ですからお帰り下さい！　後は私が授業しますので！」

坂本先生を無理矢理廊下へ押し出すと、迎えにきた二人の若い教師によって引っ張られていった。

「さあ皆さん、52ページを開いて！」

再会される授業の中、莉央は土下座している由奈の後頭部に足を乗せてグリグリと踏み回す。

突然閃いたように目を丸くして叫ぶ莉央。

「そうだ！　鞭目友恵も呼んで一緒に裸踊りさせようか！？」

「私たちに逆らった罪はまだ消えてないのよね。そう言えば確か美香ちゃんがあの子の処女奪っちゃったんだよね？」

「そうそう！　あれから大人しくしてるけど真奈も一人じゃ寂しいだろうから……友恵ちゃーん！　こっちおいでーっ！」

美香はかつてリンチした鞭目友恵も真奈の隣に呼びつけた。

「真奈ちゃんの隣で素っ裸になって土下座して！」

「はい。美香様」

無表情のままで、大人しく素直に制服を脱いでゆく友恵。
もうこの三人に目をつけられたら逆らってはいけないことを身体で覚えさせられていたからだ。

躊躇うこともなく最後のパンツも脱ぎ終わると、土下座して莉央たちの方を向き、額を床に押し付ける。

「へぇ。偉いじゃん友恵。少しあんたのパンツ黄ばんでるね？　昨日と同じの履いてるでしょ？」

「ご、ごめんなさい莉央様……」

「友恵さん、隣の真奈さんのパンツ脱がすの手伝ってあげてくれる？」

「……はい。明日香様」

明日香の命令も素直に聞き、真奈に優しく話しかける友恵だった。

「鞭目友恵っていうんだけどよろしくね霞さん。大人しくパンツ脱いでくれるかな？」

「い、いやよっ！　何度も何度もみんなに見られるなんてイヤだっ！」

莉央がゆっくりと近づいてゆき、鼻っ面を殴る。

『バキッ！！』

「うっ！」

思わず鼻を押さえるが、鮮血が指の間からドロドロと溢れ流れてくる。

美香が髪の毛を掴んで無理矢理立たせると、背後へ回り込んだ明

日香が腰に手を回して、そのままバックドロップをかける。

『フワッ……』

「ひっ！？」

明日香の引き上げる力によってあっとゆうまに宙に浮く真奈の身体。

長い滞空時間に感じる真奈を襲う地獄の衝撃。

『グシャッ！！』

投げ捨てのバックドロップが炸裂した。

「げはあっ！！」

真奈は後頭部と背中を強打する。
クラスの全員が振り向くが、また前を向いて教頭の授業を続ける。
そのままジャンプして膝から腹部へニードロップ。

『ドスンッ！』

「ぐほおっ！？んぎぎぎ……」

明日香の連続技に美香は大はしゃぎする。

「すっごーい！　いけいけ明日香ちゃーんっ！！」

仰向けに転がってから起きあがろうとした真奈の両足首を莉央と明日香が片足ずつ掴んで、大きく開ける。

「痛いっ！股が裂けちゃ……うう」

美香はモップをロッカーから取り出して、クルクル回しながら叫んだ。

「くらえ正義の一撃っ！」

モップの柄を真奈の股間に向けて近寄っていき、一気に性器へ突っ込んだ。

『ズボッ！！』

「いやあっ！？」

パンツごと膣内にめり込んでゆく柄は、もう１０㎝ほどもめり込んでいた。
先端部が子宮口に突き刺さる。

『ジュワア～……』

少しずつ血がパンツに滲んできて、遂に真っ白なパンツが真っ赤に染まる。

『グリグリ……ぐちゅちゅ』

「いだいいいいっ！！　わーんわーんっ！！」

ここで初めて泣き叫ぶ真奈だが、美香は手を緩めない。
どんどんとブラシの柄は子宮の中へ深く挿入されていった。

「あははは。美香ちゃんってばパンツ脱がしてから突っ込んだ方が入れやすいのに……私が指で処女膜破ってるからってモップの柄を使うなんてねぇ。。なんて酷いこと」

明日香が苦笑いを浮かべながら呟いた。

「パンツごとぶち込むのがソソるんだよね？　美香ちゃん」

「そーそー！　さすが莉央ちゃんはよくわかってるなぁ♪　少女の純白パンティがワレメにどんどんめり込んでいって、真っ赤に染まっていく瞬間がむっちゃ興奮するんだよねっ！？」

「そ、そうなんだ。それはごめんねお二人さん。もう子宮の奥の奥までぶち込んでやってよ。うふふ♪」

明日香は呆れながら更に真奈の足を強く大きく開ける。

『グリグリ……メリメリ……ドクドク』

床に伝い落ちた鮮血は、ドロドロと辺り一面に広がっていった。

「パンツ脱がなかったからパンツ越しにやったげてるのよ？摩擦で余計痛いでしょう？　自業自得なんだから」

美香は舌を出して助平そうな表情を浮かべる。
グリグリと左右に掻き回しながら子宮内をパンツ越しに陵辱する。パンツの性器に当たる部分が、子宮の奥まで捩じ込まれているため、残りの部分が太腿に深く食い込み、余計にイヤらしい構図になっている。

「もう子宮からもかなり出血してるからあぶないかも……ぼちぼち

抜いてやってくれる？　美香ちゃん」

「はーい♪　それっ」

『すぽんっ！！……ドクドクドクドク……』

莉央の忠告を素直に聞き入れ、素早く膣からモップの柄を引き抜く美香。

真っ赤に染まったパンツ……床を染めてゆく鮮血……。
それを真横で見ていた鞭目友恵は以前の自分に対するリンチを思い出して、すすり泣いてしまった。

「ぐすん、ぐすん。しくしく……」

「友恵ちゃん、ごめんねー！　あなたの処女膜奪ったのはあたしだもんね。怖い？　怖くてないちゃってるのぉ？　あははは！」

血に染まったパンツを一気に引き摺り下ろし、血まみれの外性器をタオルで拭くと、医療用のクスコをローションをつけてからゆっくり挿入してゆく莉央。

『くちゅっ……ズブブ……』

「あ、あんっ!?　嫌っ！！」

「子宮のダメージ診てあげるからジッとしてなさい真奈っ！」

無理矢理黙らせて子宮口の奥までもパックリ開いてライトをつけて覗き込む。

「かなり血は出てるけど手術まではしなくても大丈夫そうだね。よし、クラスのみんなっ！　順番に見ていって！　これが１３歳女子の子宮の中だよぉ」

男子も女子も頬を赤くしながらも霞真奈の膣内や子宮を順番に除いていった。

齢６０近い教頭までもが真剣な顔をして除いている。

「ちょっと教頭先生っ！　先生まで見ていいなんて言ってないわよ？」

「えっ!?　こりゃすまんすまんっ！　御免なさい」

後頭部をかきながら慌てて教壇へ戻っていった。

学級委員長の矢野弥生が食い入るように見ているのを見た美香が声をかける。

「弥生ちゃんエッチだねぇ？　そんなにしげしげと見入らなくても……」

「……入れたい」

「え？　入れたい？」

「アナルに……コレを」

明日香が思わず聞きなおした。
鉛筆を手にした矢野弥生はどうやら霞真奈の肛門に鉛筆を突っ込みたくてウズウズしていたらしい。

「そうゆうことね。いいよ！　でも結腸突き破らないよう突き当たりまでいったらやめてあげてね？」

「うん。それじゃあ……挿入します」

「この前あたしが掘りまくってやったからかなり直腸傷んでるからゆっくりやってあげてねー♪」

富田美香に散々ぶっといアナルバイブで調教されているため、真奈の直腸は傷だらけだった。

『つぷ……ずぼぼぼ』

「やんっ!?　やめ……て」

委員長の弥生の鉛筆でのアナル調教が延々と続いていく。
抜いては差し込み、抜いては差し込み……たまにゆっくりと縁を描くように掻き回す。
「矢野さん、そろそろやめてあげて……今から友恵とコイツをレズプレイさせるから」
「え？　あっ、ごめんなさい菅野さんっ」
慌てて鉛筆を肛門から引き抜く弥生。
すぐさま自分の席に戻り、机の角に股間を押し付けながら小刻みに震え出した。
「莉央ちゃん美香ちゃん！　委員長ってば真奈さんへの肛門責めを思い出しながらオナニーしてるわよきっと！」
明日香が少しニヤけながら頬を赤くして二人にコソコソと報告する。
「間違いないよねぁあの動き……まぁそっとしておいてあげよう。友恵に真奈は今から素っ裸のまま抱き着きあいなさい！」

泣きながらも逆らう気力もなくなっている二人の１３歳の少女は静かに抱き合った。

「お互いのアソコに指を突っ込んで激しく動かしなさい」

「はい」

友恵は返事をして命令された通りに真奈の膣内に中指を差し込み、激しく動かし始めた。
気持ち良くなってきた真奈も友恵にお返しする。
二人のお互いの性器を掻き回す音が教室に響き渡る。

『クチュ……クチクチ……ぐちゅちゅちゅちゅ』

同時に酸性の酸っぱい匂いが辺りに立ち込めてきた。

「今度は向きを変えてお互いのマンコを舐めるの」

莉央の言われるがままに音を立てて舐め合う二人。
一人、また一人と、気がつけば円を描くようにクラスの全員が二人のプレイを観察していた。

教頭は迂闊に見ていたらまた莉央から怒られるので、たまらずに職員室に逃げ戻った。

自慰行為が終わった矢野弥生も円に加わってレズプレイを必死で観察していた。
乳首、性器、膣内、クリトリス、肛門、全てのエッチな部分の舐め合いをさせた莉央は、更に二人に命令する。
「ほら、座って脚を思いっきり開いてクラスのみんなにマンコの中を見てもらいなさい！」
「両手の指も使って押し広げるのよ！」
「アナルも開いて直腸見せろー♪」
莉央に続いて明日香も美香も命令する。
散々みんなに見られた友恵と真奈は、顔を真っ赤にしてすすり泣いていた。
まだ莉央は許してくれない。
四つん這いにさせて二人に浣腸するよう委員長にお願いする。
矢野弥生は戸惑う振りをしながらも内心喜んでワクワクしながらグリセリン濃度８０％のガラス管浣腸器をまずは友恵に差し込み、ゆっくりと液を注入していく。
更に真奈にも注入。
元々Ｓっ気のある弥生は、同級生を性的に責めることに興奮してアソコを少し濡らしていた。

「先にウンチ出した方は、お尻叩き１００回の刑だから」

莉央が冷たく言い放つと、二人は必死で我慢大会になった。

「うう、もうダメです！　あんっ！！」

『ブリッ！　ブリブリブリブリッ！　ぶしゅうううううっ！！』

最初に大量の便を出してから、水分に近い便を何メートルも噴き出させる鞭目友恵。

「あーあ。転校生に負けちゃったねぇ？　友恵」

莉央が本格的な革製の、平面の正方形をした鞭を手にして友恵の臀部へ近寄る。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」

「ダメだよ。今からお仕置きだから。お尻を思いっ切り突き上げて歯を食いしばりなさい友恵」

「いやあああっ！　許して下さい莉央様っ！！」

大きく振りかぶり、莉央の一発目が臀部に直撃する。

『スパァンッ！！』

「ぎゃあああっ！！」

一発で真っ赤になるほど超強力な破壊力を持った鞭であった。

『スパァンッ！！　スパァンッ！！』

二度、三度と打ち付けると、みるみるうちに真っ赤を通り越して紫色に変色してゆく友恵のお尻。

更に数回打ち付けると、逃れようと言い出し始めた。

慌てて明日香が頭を押さえつけ、美香が後ろ向きに馬乗りになってお尻を思いっきり突き上げさせる。

「ほら、負けたんだから覚悟決めなきゃ友恵ちゃん。あはは」

冷たく笑いながら紫色に変色したお尻を平手で思いっきり叩きつける美香。

「ぎひいっ！！やめてええっ！！えーんえーんっ！！」

ここでまさかの大号泣。
真奈はひたすらすすり泣きながら、教室の端に逃げて震えながら小便を漏らしていた。
１０回、２０回、３０回と莉央の手を抜くことのない本気の革製鞭の調教が続いてゆく。
皮が剥けて肉が剥き出しになり、左右の臀部は血塗れになっていた。

「莉央ちゃん……肉が見えるほど凄惨なことになってるけど？もうやめたげない？　あはは……」

流石に可哀想と思った美香が剥き出しになったお尻の肉片をさすりながら莉央に問いかける。

「あと５０回は叩き切るから。ほらあっ！　なに肛門ヒクヒクさせてるのっ！？　ヤラしいぞ？　それっ！！」

『パァンッ！！　スパァンッ！！』

「んぎいっ！！　ぎゃはあっ！！」

血飛沫が美香の頬を染めてゆく。

「なんかスイッチ入っちゃったかな莉央ちゃん……もう止められな

いなぁ。病院送りにしてやっちゃえっ。あはは♪」

開き直った美香は凄惨なお尻叩きを楽しみながら静観することに決めた。

「莉央ちゃん、この子オシッコ漏らしてるんだけど？」

明日香が真奈を指差して指摘する。

「汚い……お仕置きが必要だねぁなたにも。明日香ちゃんも真奈のお尻叩いてやって」

「はーい。私はコレで！」

金属バットを棚から取り出す明日香。
こりゃ結局二人とも病院送りになると確信した美香は、もう既に激痛であまり動けなくなった友恵から降りて、今度は真奈の背中に馬乗りになる。

「真奈ちゃん、友恵ちゃんのようになっちゃうけど覚悟してね？」

「許してええええっ！　ごめんなさいごめんなさいごめんなさいいいいっ！！」

「ダメダメダメダメ～ッ！　もし動いたりしたらあたしがモップの柄を肛門に突っ込んでやるからね？　そしてね……大腸を引き摺り出してあげるから♪」

泣いて謝っても許さない残酷な三人。

結局真奈の臀部も明日香によって皮が剥けてズルズルになり、床を血塗れにしていった。

明日香の臀部へ振るうバットは渇いた音を立てて何度も鳴り響く。

隣の友恵は、遂に莉央からの１００回目を迎える。

「はい、次で最後よ？　あれ？　失神しちゃったんだ……　でもやめたげない。最後は渾身の一撃をくれてあげるんだからっ！　ほらあっ！！」

『スパァンッ！！……ブチブチッ！……ベチャベチャベチャベチャッ！！』

更にお尻の肉片が数ヶ所ちぎれて教室の壁に飛び散る。

「ふう。スッキリしたぁ♪　後の肉片掃除が大変そう……」

足でぐりぐりと血塗れのお尻を踏みつけながら掃除の心配をする莉央。

足の裏が血塗れになってゆく。
うつ伏せに倒れて号泣しながら全身を痙攣させる友恵。
漏らした小便が床に広がってゆく。
意識を失う寸前だった。

「莉央ちゃんの方は終わったみたいね！　あなたの方もこれで最後よっ！……１００っ！！」

『バシィッ！！』

「ひんぎいいいいいいいっ！！！！」

最後の１００回目が打ち下ろされるころには、真奈のお尻の皮はズル剥けになった。
二発ほど間違えてオマンコに直撃もあり、小陰唇からもかなり出血していた。

先に莉央の鞭打ち１００回を終えている友恵は、尿に続き便まで漏らし、意識を失って小刻みに痙攣している。
明日香の金属バットより莉央の鞭打ちをされた鞭目友恵の方が肉の抉れ方が酷かったのは、莉央の恐ろしい所である。

「ほらっ！　目を覚ますのよ？　誰が糞尿を掃除するのっ！？」

『バシィッ！！　バシィッ！！』

うつ伏せに倒れ込んで痙攣している友恵の髪の毛を鷲掴みにして引き起こし、頬に往復ビンタを入れる莉央。

「あううう。ひっ！？　ひいいっ！！　痛いいいいいっ！！」

「うるさいっ！！」

『パンパンパンパンパンパンッ！！』

「あばばばばあっ！？」

左右に髪の毛を振り乱しながら涙と涎を撒き散らして莉央の往復ビンタを受け続ける友恵の臀部は歪に変形して足首まで血を流している。

糞尿を更に漏らしながら泣き喚く。

このタイミングで一人の少女が大きく声を出した。

「わ、私がお掃除します！」

矢野弥生委員長が手を挙げて、バケツと雑巾を運んできて床の糞尿を掃除し始めた。

「ありがとう委員長」

更に激しく往復ビンタを続ける莉央に、明日香が問いかける。

「最近鞭目さんは何かしでかしたの？　殺しかねないほどのリンチだったけど？」

「うん。実はこの前の春日さんのお財布紛失事件。真犯人は鞭目友恵だったの。みんなの前で何回も告白するチャンスをあげたのに隠し通した。だから入院レベルまでリンチレベルあげちゃったんだよねー」

「そっか……やっぱね。なんか理由なきゃ流石の莉央ちゃんもここまで酷くはやらないと思ったから……」

納得したように明日香は頷く。
美香はズタボロになったお尻の肉塊を開き、肛門へアナルバイブを挿入している。

「あはっ。ここまでやったら更に中身もぐっちゃぐちゃにしてやっちゃえっ！　ほらあっ！」

漏らした便も押し戻されてしまうようなアナルバイブの仕打ちに、もう一度鞭目友恵は号泣して意識を失ってしまう。
何度も出し入れして大便まみれになったバイブを今度は膣に挿入。

「ほら、友恵ちゃん！　マンコの愛液でクソを洗ってくれるかな？」

『ズブブッ……グチャグチャグチャグチャッ！！』

何度目かの意識が戻らない状態のまま莉央に往復ビンタを喰らい続けながら美香にバイブで激しく出し入れされて、身体は前後左右に踊っているように揺らされまくった。

哀れすぎる光景であった……。

ここで救急車が到着し、救急隊員が突入してきた。

それに気づかない明日香は金属バットの柄で真奈の膣内を掻き回していた。

二人は意識を失ったまま東部の大病院へ運ばれていった。

壁にこびりついた肉片を拭きながら委員長の弥生が呟く。

「すっごく興奮しちゃった……良い経験させてもらってありがとう菅野さん……」

六年三組の宿命（後書き）

霞真奈は全治二ヶ月、鞭目友恵は全治三ヶ月。
しばらく二人が登校してくることはなかった……。
少しリンチの度が過ぎたことを、特殊任務省の藤堂長官から長時間電話で説教されるハメになる菅野莉央であった。

高校生の受難　（前編）（前書き）

ある真夏の出来事。
高校生同士のイジメはエスカレートしてゆく。

高校生の受難　（前編）

「川北さん……気持ち、いいよ」

「ん、んんっ！　あんんっ！」

いつもより蒸し暑く感じたある八月の夏の日。
ひぐらしが数匹、力強く鳴いていた。

生徒数は中型規模である中央南部高校の教室で、五人の生徒たちが未だ帰宅しないでいる。
今日もこの学校ではイジメが起きていた。
イジメと言っても放課後に三年生の男子生徒と女子生徒が教室でセックスをしているだけの光景。

普通に愛し合った者同士の行為ならば何も問題はなかったのだろうが、強制的に行わされている、となったら話は違う。
いや、放課後の教室内でする行為ではないので何も問題がない……と言えば嘘になるのかも知れないが……。

「ほら、一度抜いて今度はバックでやれよ！」

「は、はい。川北さん、いい？」

「う、うん」

正常位で性行為を行なっていた二人は、体位を変更する為に一度起き上がる。川北真衣は四つん這いになり、村西悟史はイキリ勃っているイチモツをそのまま再度真衣の性器へゆっくりと突き入れてゆく。

『パンパンパンパン！』

「あんっ！？　あはあああっ！！」

思わず感じてしまい、大声を出してしまう真衣だったが、頬を紅潮させたままお尻を高く突き上げてゆく。

「あははは！　真衣！　お前はなんだかんだ言って気持ち良いんだよな？　ヤリマンめ」

「今日でコイツらのセックス見るのも五回目かぁ。そろそろ妊娠しちゃってるんじゃないの？」

「あはははははは！」

爆笑するイジメっ子メンバーの三人。

三人を仕切っている青嶋梨花は、父親が南部地区を統括するヤクザの組長であり、母親は繁華街で風俗を経営している。

クラスの生徒たちは仕返しを恐れて誰も逆らえない状態だった。
その青嶋梨花の腰巾着みたいな二人が白井優香と緑川冴子。
茶髪に染め、見るからに不良であるこの三人は、この学校の厄介者たちでもあった。
カツアゲや暴行などを常日頃繰り返し、それらに飽きてきた三人が選んだ遊びは……クラスの生徒同士をセックスさせて見物することだった。
リーダーの青嶋梨花は、ボールペンを握りしめて必死でバックで腰を振る村西悟史の方へ近づいていった。

「もうイキそうか村西？」
「いえ……さっき一度出しちゃったのでもう少し時間が……」

そう言いかけたとき、村西悟史のある部位に激痛が走る。

『ズボッ！！……ズブブブブ』
「ひっ！？　痛あああっ！？」

芯の出ているボールペンを、先から村西の肛門へ突き刺したのだ。
ゆっくりと直腸深くへねじ込んでゆく梨花。
ロングの茶髪の前髪を左手でかきあげながら、右手のボールペンはどんどん深く肛門へ捩じ込まれてゆく。

ヤンキーとは言え目は大きく笑うとその辺のアイドルよりも可愛いくらいの美人である梨花はイヤらしい笑みを浮かべながら村西悟史へ質問する。

「ここは何てゆうの？」

『ズブブブブブ……』

「痛いっ……やめて……いぎぎぎぎ」

梨花のボールペンは村西悟史の肛門へ殆ど全てが飲み込まれた。しばらく直腸を掻き回しているうちに、川北真衣が大きく叫んだ。

あまりにいきなりだったので、いじめている側のヤンキー仲間の優香と冴子も一瞬ビクッとなる。

「あたしの前立腺責めで射精できたんだろ？　あん？」

「はぁ。はぁ。ぜ、前立腺？」

「なんだ、高校生にもなって自分の股間に付いてる性器もしらねぇのかよ。やれやれだな」

男子生徒を瞬時に射精させた梨花は、得意げにボールペンを引き抜き、お尻をパンパンと二回叩いた。

二度目の中出しをされた川北真衣と優香と冴子にも“前立腺〃のことを教えてあげる青嶋梨花。

服を着ようとする真衣の顔をいきなりビンタすると、大声で怒鳴りつける梨花だった、

「きゃっ！？」

「誰がもう制服を着ていいといったんだ？　お前もケツ穴にボールペンくれてやるからもう一度四つん這いになれ！」

「ひっ！？　お尻なんてイヤだ……許してよ……」

大粒の涙を流しながら抵抗するが、優香と冴子に押さえつけられて無理矢理四つん這いにされる。

「ほら、村西のアナルに入っていたクソまみれのボールペンだよ？飲み込め」

「やあああっ！！」

『ズブブ……ヌポポ……ズブブ』

入れて抜いてを何度も繰り返して肛門の食い込みや盛り上がりを楽しむ三人。

「見て見て！　マンコすっごい濡れてんじゃん！」

「わぁ～ホントだ！　指突っ込みたくなってきたけど……いいかな梨花ちゃん？」

「優香も変態だな！　指と言わずに腕までぶち込んでやれよ？　あははははは♪」

白井優香の中指が同級生の膣へゆっくりと捩じ込まれていった。大声で泣いていた川北真衣だったが、同性の感じるポイントを熟知している指先は、的確にジースポットを捉えていたため、恥辱と快感にまみれた複雑な心境で震えて泣くしかない真衣であった。

大便まみれのボールペンは、緑川冴子が再度、真衣の肛門へ差し込んでは抜き、掻き回しては抜き、を繰り返した。

「おい村西っ！！」

「は、はいっ！？」

「てめえ何あたしらのリンチ見ながらチンポおっ勃ててやがるんだよっ！？　死にてえのかっ！？」

そう言いながら村西悟史を思いっきり蹴飛ばすと、仰向けにひっくり返って後頭部を強打してしまった。

陰部からは透明のカウパー液が教室の床に伝い落ちている。

「きったねえ液トロトロ垂らしやがってよおっ！　ん？　そうだ。三回目は手で抜け！」

「ひいっ！？　もう無理ですさすがに……」

「今勃ってたじゃねぇかよっ！？　あたしがもういっぺん勃たせてやるよ」

そう言うと村西の両足首を掴み、強引に足を開けさせて、右足の裏を半勃ちの陰部に押し当てると、猛烈な勢いでて電気アンマが開始された。

『ガガガガガガガガッ！！』

「いぎゃあああああっ！？　潰れるうっ！！　やめてええええっ！！」

「キンタマ潰さない程度に加減してやってんだよっ！　ありがとうございますは？」

『ガガガガガガガガガガッ！！』

「あ、ありがどうございますうううううっ！！　ひいいいいっー！」

『ドピッ！　ドピュピュピュピュピュピュピュピュウウウッ！！』

青嶋梨花の足コキがあまりにも気持ち良すぎて、お気に入りのピンクの靴下を精液まみれにさせる村西悟史。

「あっ！？　てめえコラアッ！？　何で今出すんだよっ！？　ぶっ殺すぞっ！！」

「ひっ、ごめんなさい！　すみませんでしたっ！！」

いじめられていながらも実は無茶苦茶タイプな顔の青嶋梨花。理想の女性から足コキをされたら村西悟史的には致し方なかった。

「えへへ。お前はケツ叩き百回の刑だな」

「ひっ。お願いですから許して下さい……」

「ん？　てめえ……やめてくださいと言いながら自分からケツ突き上げてんじゃねぇか……舐めてるのか？」

「そ、そんなんじゃないです……ごめんなさい梨花様」

「きっしょ！　今梨花ちゃんのこと梨花様、とか言ったよコイツ！」

真衣の膣内を掻き回しながら優香が呆れる。

冴子もボールペンで肛門をほじくりながら続けた。

「ホントだね。もしかして梨花ちゃんの事が好きだったりして？」

「ふ、ふざけんなよ冴子っ！！　こんなカス野郎に好かれたくないからっ！」

青嶋梨花による本気の尻叩きが始まるが、皮膚を真っ赤に腫らしながらもビンビンに勃起させている村西悟史の陰部を見てると、優香と冴子は冗談が真実に思えてきたのであった。

「ほら、制服とズボンを返してやる」

「は、はい。ありがとうございます」

丸められたままの衣服を村西悟史の前に投げ捨てると、お尻を真っ赤にしながらパンツから履いてゆく。

それを見て川北真衣を責めていた優香と冴子も責めを止める。

一気に性器から中指と薬指を引き抜くと、真衣本人の口へ捩じ込む優香。

「はい。今日はこれでおしまいにしてあげる。自分の愛液綺麗に舐め取って！」

「むごっ！？　ぴちゃぴちゃ……ぐすん、ぐすん」

「そんなに泣くなよ？　気持ち良かっただろあたしの指？」

同性からの性的なリンチが余程辛かったのか、村西悟史との強制セックスよりも、女三人からの責めがプラスされた今回のリンチの方が、余計激しく泣き喚いた川上真衣だった。

しかし直接性的なイジメを行うことに快感を覚えた青嶋梨花たち三人は、この日を境に強制セックスの後は必ず性的イジメを繰り返すことになる。

――――――――数日後の放課後。

「ほらどうした？　村西のチンポ舐めないと家には帰さないよ？」

「……村西くん」

「ごめん、言うこと聞かないと何されるか分からないし……言われた通り僕のチンチン舐めてよ？」

「う、、ん。カポッ！　ペチャペチャ……レロレロ」

「うっ！　き、気持ちいいよ川北さん……うう」

教室の片隅で繰り広げられるＡＶさながらのエッチ行為を、釘付けになって見入っている不良三人娘たち。
リーダー的存在である青嶋梨花がそっと歩み寄り、川北真衣の頭に手を乗せると、猛烈な勢いで強制イラマチオを行った。

「んんんっ！？　んごごおっ！？」

「もっと早く顔を振れ！　早くイカせてみろよ！？」

『ペチャペチャペチャペチャペチャペチャペチャッ！！』

卑猥な音を立てて髪を振り乱して強制イラマチオをされる川北真衣の口内に、大量の精液がぶちまけられたのはほんの数秒後であった。

『ドピュピュピュピュピュウウウッ！！』

「んごっ！？　んんんんんっ！！」

「吐き出すなっ！　飲めっ！！」

「んんんっ！！　ごっくんっ！！」

顎を掴んで捻り上げ、無理矢理村西悟史の精液を飲み込ませる梨花。
白井優香は村西悟史に電気アンマを開始する。

「あたしも一度やってみたかったんだコレ。あはっ♪」

梨花のように加減が分からないのか激しく蹴り付ける電気アンマに、本気で睾丸が潰れそうになり激痛に涙を流す村西だった。

「おい村西っ。気持ちいい？　ほらほらほらあっ」

『ドガガガガガガガガガッ！！』

「んぎゃあああああっ！！　潰れるうううううっ！！」

あまりの痛々しい光景に目を背ける川北真衣だったが、それだけではなくなぜか号泣してしまう。

「あれあれぇ？　村西がキンタマ潰れそうになって苦しんでるの見て泣いちゃったぁ？　もしかして川北は村西のことが好きだったりして……ははは」

緑川冴子はそう言いながら川北真衣の両足を思いっきり広げた。泣きながらも意味がわからないでいる真衣の股間のワレメへ足の裏を密着させる。

「あたいは……女の子にコレやってみたかったの……いっくぞおおおっ！　オラオラオラオラァ〜ッ！！」

『ガガガガガガガガガッ！！』

「んぎいいいいいいいいいっ！？」

女から女への電気アンマを初めて見た青嶋梨花は思わず吹き出してしまう。

「ぷっ！　あははは！　冴子ってば女にそれは効かねぇだろ流石に……」

「そうかな？えいえいえいえいえいっ！！」

「痛いいいいいいいっ！！　やめてぇええっ！！」

「止めるかボケェ♪　なにヤラしい音立ててんだよマンコから？まさかお前、さっき村西のチンポ舐めてたとき濡らしてたなぁ？えへへへ♪」

ぐちゅぐちゅぐちゅと卑猥な音を立てながら大陰唇と小陰唇を激しく蹴り付けられる。

「あたしが男の村西にやった時でも靴は脱いでやったのに……靴履いたままで女子の一番大切な所を蹴り付けるなんて……やだやだ怖

いわねぇ」

青嶋梨花がワザとナヨナヨしながらおどけたように話す。

小陰唇が裂けて血が流れ落ちてくる。

流石に一度足を止めるが、爪先をゆっくり膣内へ突き立ててゆく。

「悪いな。小陰唇ズタズタにしちまったからお詫びにマンコの中かき回してやるよ。あたいの尖った靴の爪先でな……ほらあっ！」

『ズッ……ぐちゅうっ！　めりめりめり』

「んぎゃあああああああっ！！　やめてっ！！」

不潔な靴のままで性器を貫かれ、狂ったように泣きじゃくる川北真衣。

容赦なく何度も何度も爪先を突っ込んでは掻き回す冴子。

今度は膣内からまでも出血してしまう。

「あたしもいじめたいなぁそいつ……おい川北、四つん這いになれよもう一回」

「は、はい。ぐすん、ぐすん」

「あたしにケツ穴が見えるくらい大きく脚広げてケツ突き上げろや？」

「は、恥ずかしい……こ、こうです……か？」

「そうそう。マンコの力抜いとけよ？」

「え？」

ようやく緑川冴子の爪先攻撃から解放されたと思ったが、次の瞬間には四つん這いにされて、どんな攻撃が襲ってくるか分からない恐怖に怯える真衣だった。

『ズドンッ！！』

本日一番の絶叫を上げる羽目になる。
四つん這いにされ、後方から思いっきり陰部を蹴り上げたのだ。
青嶋梨花の爪先は半分までも膣内に侵食した。
子宮の入り口が破壊される。
ドクドクと大量に流れ出る鮮血に、流石にやり過ぎたと感じた梨花は、自分の生理のナプキンを、川北真衣の膣内に深く捩じ込んだ。

「すっごいめり込んだな今の……はは。死んだら許せよ。ほら、あたしのナプキンやるから血を止めてみろよ？」

「えーん、えーん。痛い。痛いよぉ」

「だ、大丈夫？」

白井優香に睾丸を潰されかけた村西悟史も半泣きになりながらも川北真衣を気遣って声をかけている。

「きょ、今日はこのくらいで勘弁しといてやるよ」

「帰っていいぞおまえら」

「じゃあな！　親に言い付けたら殺すからな？」

梨花たち三人は、高校生にもなって子供のように泣きじゃくる性器血まみれの真衣の姿を見て、流石に少し怖くなって捨て台詞を残しながらもその日は解散した。

血で汚れた教室の床はそのままにして……。

高校生の受難（前編）（後書き）

膣内、子宮までも血まみれにされるほどの酷いリンチに合った川北真衣。
村西悟史も強烈な電気アンマで睾丸が腫れ上がるほどの重症だった。
二人はこの先もずっと梨花たち三人の性的なオモチャにされ続けるのか？

高校生の受難　（中編）　（前書き）

誰に助けられることもなく繰り返される性的いじめ。
二人に平穏な日々は訪れるのか？

高校生の受難　（中編）

アーケード街が次々と店仕舞いを余儀なくされる中で、繁盛し続けている中央南部百貨店。

地下一階はレストラン街になっている。

チーズケーキが有名なコーヒーの美味しい喫茶店で、二人の男女が深刻な面持ちで向かい合せに座っていた。

「最近元気ないよね真衣さん」

「…………」

「とりあえず何か頼もうか？　コーヒーとチーズケーキでいい？」

「うん。ありがとう」

久しぶりの外出デートに誘われたものの、彼女の余りの落ち込みぶりに、嬉しさ半分、心配半分といった感じである。

中央南部高校一年一組の村西悠也。川北真衣と同級生の村西悟史の弟であった。

「兄貴も最近様子がおかしくてさぁ。俺との会話も殆どないんだけど……もしかして兄貴とクラスで何かあったの？」

返事もなく俯いて黙り込むだけの川北真衣に、ついに痺れを切らして本気で思っていた内容に触れてしまう悠也。

「もしかして……ほんともしかしてだけどさぁ。あの、えーと……兄貴も真衣さんもクラスでみんなから苛められてたりして！……あははははは！」

数秒間固まった後、肩を揺らして泣き始める川北真衣を見て、まさかと思いながらもそのことが真実だったことを認識できた。

「ま、真衣さん……どうしてそのことをもっと早く俺に話してくれなかったの？」

「ぐす、ぐす。ごめんなさい。心配かけたくなかったの」

何でも話し合える仲だと信じて疑わなかった村西悠也からすればショックは大きかったが、それだけ自分に気を遣ってくれていたんだな、と考え方を変える努力をする。

「お待たせ致しました。コーヒーとチーズケーキで御座います」

かなり泣いている所をウェイトレスに見られてしまうが、真衣は気にした様子ではなかった。それどころではなかったのだ。

「誰なの？　相手……俺が話し合いにいこうか？」

「いや、ほんと心配しないで。悠也くんに迷惑かけたくないから」

頑なに犯人を黙秘する真衣だったが、悠也の真衣を救いたい気持ちが上回り、遂に折れて全てを話してしまうのであった。

「そんな酷いことを……ちきしょう！」

「そう思ってくれるだけで有難いから絶対仕返しとか考えないでね！　さっきも話した通り、地元で有名な暴力団が絡んでるから。話だけでも聞いてくれてありがとう」

――夕方。村西家。

「兄貴！　ちょっと話があるんだけど」

「僕にはない。さっさと飯食って部屋へ帰れ」

「俺にはあるんだよ！　重要な話が！　ちょっと来いよ！」

強引に部屋へ帰ろうとする兄の村西悟史の腕を掴み、キッチンへ

引っ張ってゆく。
ダイニングでは両親がテレビを見ていたから話が出来ないと判断したのである。
「ここでいいか？　俺の部屋にきてもっとじっくり話すか？」
「……ここでいい。ってゆうかさっきから兄に対して何偉そうに言ってんだお前？　しまいには怒るぞ？」
「怒ってんのはこっちだよ！　学校で起こったこと俺に話してみろよ！？」
両手でドン！　と、テーブルを叩き、醤油やソースが倒れる。
村西悟史は慌ててそれらを立てながら返事に困る。
しばらく黙ったまま机上の整理を続けるが、逃げられないと判断した悟史は重たい口を開く。
「ああ。誰も逆らえない不良の三人組に目を付けられて……最近よく嫌がらせをされてるよ」
「俺の彼女……真衣さんを助けることも出来ずに情けない兄貴だよな？」
「……僕の彼女じゃない。僕にとってはただの同級生。川北真衣を守る義務もなければお前に全てを話す義務もない」
「何だとっ！？　それでも男かっ！？」

『バキッ！』

「ぐはっ！？」

思わず立ち上がって兄である村西悟史の左頬を殴ってしまう。

「お前……川北から聞いてるのか？」

「は？　何を？」

「僕たちが苛められている内容だよ」

「殴ったり蹴られたりしてるんだろ？　それ以外は聞いてねぇよ」

「そうか……僕には罪の意識がある。途方もなく大きな罪悪感だ。墓まで持っていこうと思ったがここまでするお前のためを思って話してやる。全てをな」

鋭い眼光で兄を睨みつけ、グラスに注いだ水道水を一気飲みすると、ゆっくりと振り向いて、もう一度着席した。

「隠してることがあったら全て話せ！　俺は真衣さんを愛してるんだ。兄貴みたいに自分が一番じゃないんだ」

「ふん。やっぱ止めとくよ。人間言っていいことと悪いことがある。

僕は人間を辞めたくはない

「おい！　言いかけてそれはないだろバカ兄貴っ！！」

立ち上がって兄の胸ぐらを掴んだ瞬間、玄関のベルが鳴る。
両親は大音量でテレビを見てるため全く聞こえてないので、いつも兄弟のどちらかが玄関へ向かうことになっていた。

「ちっ。俺が行ってくる。まだ部屋に帰るなよ？」

苛々を隠しきれないまま玄関へ向かう悠也。
こんな時間に誰だと言わんばかりに勢いよくドアを開くと、思いもよらない人物がいた。
渦中の人、川北真衣本人であった。

「ま、真衣さんっ！？　何でまたこんな時間に……と、とにかく上がって」

「ご、ごめんなさい。お邪魔します」

そのまま兄である村西悟史を連れて、今度は二階にある悠也の部屋に三人で入った。

「兄貴にも今話した所なんだよ。真衣さんと兄貴が苛められてたこ

と」

「そう。そのことでどうしても二人に話しておきたいことがあって。電話で話せないと思ったから自転車できちゃった。こんな時間にほんとごめんね」

「学校で会った時でも良かったのに……一体どうしたの？」

三人が部屋の中央にある三角形の机に向き合って座り、真衣が口を開きかけた時にドアをノックする音がする。

悠也が部屋に入る許可を出すと、母親が茶菓子を持って入ってきた。

「真衣ちゃんの靴を見つけたからね～。玄関前に自転車もあったし。こんな時間に珍しいわね？　とにかくゆっくりしていって」

トイレに立った時に玄関の靴に気付いて来訪を悟ったらしい。

すぐに差し入れをするところは川北真衣を次男の彼女として認めていたからであろう。

「ありがとうございます。夜分に申し訳ございません。一時間ほどで帰りますので。それまでお邪魔しますね」

母親が出て行ってから再び深刻な表情に戻る三人。

大好物のメロンソーダに口も付けずに真衣が重たい口を開いた。

「悠也くん。ほんと御免なさい」

「え？　な、何を急に？」

「私、実は……あの……悟史さ……」

「あっ！！　そういえばショートケーキも冷蔵庫にあったぞっ！！食べるか悠也！？　真衣ちゃんも！？」

川北真衣の必死の言葉を遮るように大声でケーキをアピールする悟史。

だが〝悟史〟の名前まで口に出してしまった以上、もう悠也の注意を反らすことは出来なかった。

「兄貴は黙ってろ！　今なんて言おうとしたの真衣さん！？」

「私は……実は……お兄さんの悟史さんと」

「兄貴と？」

「セックスしたの」

「…………」

目を大きく見開き、返す言葉を見失う悠也であった。

数秒間、完全に固まってしまう。
その隙に尚も続ける真衣。

「昼に話したクラスの青嶋さんたちの苛めで、お兄さんとセックスをさせられたの」

「なっ、なっ、なんだって……言ってる意味が分からない！？　苛めとセックスがどうゆう関係が？」

「強制セックスって言えば分かってもらえるかな？」

しばらく兄の悟史を睨み付けながら黙っていたが、急に立ち上がり悟史を殴りつけた。

「ぐっ！？」

「やめてっ！！悟史さんは悪くないのっ！！」

倒れ込む悟史に駆け寄り抱き起こす真衣。

「まさか真衣さん……」

「……ほんとごめんなさい」

衝撃の肉体関係の事実を聞かされた上に……まさかの感情の変化まで悟らされた悠也はしばらく下を向き、歯を食いしばって耐えていたが、やがて大粒の涙が頬を伝う。

「どうして……なんでだよ……あり得ない。あり得ねぇんだよちくしょうううっ！！」

どう声を掛けていいか分からない真衣に背を向けて、急に部屋を飛び出す悠也。

後を追い掛けようとする兄の悟史を静止させて、じっと見つめる真衣。

「川北さん、これは一体……さっきの〝ごめんなさい〟はどうゆう……」

「わ、私は……あなたのことが好き」

「え、ええっ！？」

「悠也くんに何て謝ったらいいのか全く分からないけど……わーん、わーん」

いきなり告白されていきなり泣かれて戸惑う姿勢を見せる村西悟史。

『あれ？　僕と川北さんはお互いクラスで苛められていて……付き合っていたのは弟の悠也だよなぁ。あれれ？』

色々考えているような表情をして、目を点にして川北真衣に質問する。

「青嶋たちの命令でああゆう行為をしていたとはいえ……彼氏の兄である僕のことも本気で好きでいてくれてたんだ？」

「好きでいた、って言う訳じゃない。二回、三回とエッチを繰り返す内に、あなたに対して本当に感じちゃうようになっちゃった……身体も心も……。悠也くんとはまだエッチしてなかったし私の中で同級生のあなたしか見えなくなってきてた。本当に申し訳ないと思うけど……自身の気持ちはどうしようもなかった」

「エッチしてなかった、とゆうのは言い訳にならないと思うけど……でも僕も弟の彼女と分かっていてやっていたからなぁ。お互い同罪だよ」

「悟史くんは私のこと好きじゃないの？」

「えっ？　いや、す、好きだよずっと前から」

「！？……ずっと前から！？……なの？」

しばらくお互いに見つめ合ってからゆっくりと抱きついてくる川北真衣を、強く抱きしめる村西悟史だった。

「悠也を探しに行ってくる。川北さんはもう遅いから家に帰って。送っていくよ」

「私が一番悪いから放っておけないよ。一緒に行く」

深夜０時頃、二人は夜の街から公園から思いつく場所を探し回るが、とうとう悠也を見つけることは出来ず、交番に寄り行方不明を届けることになる。

川北真衣を自宅に送り届けた頃には空が白んでいた。

午前八時……まだ弟の悠也を見つけることはできない。

諦めずにもう一度探しに行くことにした。

小さい頃に一緒に行った公園や森林公園、遊園地など片っ端から探すが、見つけることはできなかった。

――――中央南部高校の裏山。

「こんなとこにあたしらを連れてきて……レイプでもするつもりかよ？」

「男のくせに女相手に喧嘩とは卑怯なカス野郎だな？」

「青嶋さんに手を出したらあんた、ただじゃ済まないよ？　分かっ

てんのか？」

指の骨をバキバキと鳴らしながら女三人へ近づいてゆく少年がいた。

村西悠也である。

「おまえたちが兄貴と川北真衣さんを苛めたりしなければあんなことにはならなかったんだ。絶対お前らを許さない」

「あんなこと？　お前はあいつの弟か？」

「兄貴といえばそうに決まってるだろボケェ！　俺は川北さんと付き合ってたんだ。兄貴といかがわしいことをする前の川北真衣を返してくれ！」

「あはは！　そんなこと無理に決まってんじゃん！　もう済んだことだし……川北真衣もお前の兄貴とのセックスに感じてたぜ？　なぁ優香」

「そうそう。マンコ濡らしまくってアンアン言ってたぜ？　両思いなんだろ結局。お前は川北真衣に振られたんだよ！　ははは！」

青嶋梨花と白川優香に続いて緑川冴子も腹を抱えて爆笑する。

「はははははっ！　ほんと哀れなヤツだな！　あはははは

っ！！」

散々罵られた悠也はもう後のことは覚えてないほどに三人の不良少女に殴りかかった。
三人すべてが鼻血を流し、目が腫れるほど殴った。

「いててて……ちくしょう……チンカス野郎が……」

「痛いい！　わーん！　わーん！」

「あたいらだけじゃなく梨花ちゃんに手を出したこと……絶対後悔するよあんた……うっ！　痛たたた」

「ふん！　スカッとしたぜ。でもまだまだ怒りが治まらねえ。くそう！　次あの二人を苛めたら今日以上に叩きのめしてやるからなっ！　覚えとけよカス女どもっ！」

そう言いながら真っ白なTシャツが少女たちの鼻血で真っ赤に染まったまま裏山を去る村西悠也だった。

――――夕刻。中央南埠頭第二倉庫。

『バキッ！バキッ！』

「ぎゃあああああっ！！」

『ドカッ！！』

「がはあっ！！」

五人の男たちから殴る蹴るの暴行を受ける少年がいた。

「おいクソガキ！　オヤジからお前を殺すように言われている。残念だが死んでもらうぞ？」

「ぐぐ……おええっ！！　ゴホゴホッ！！」

腹部を蹴られたショックで嗚咽が止まらない。
吐いても吐いても、何度でも殴られて蹴られるの繰り返し。
数時間が経ち、ボコボコに腫れ上がって原形を止めない顔になった頃には日付が変わろうとしていた。

「もうかれこれ六時間は殴ってるぜ？　ぼちぼち殺してやるか？」

「散々痛めつけて殺すようにお嬢さんから言われてるからなあ。でももう十分だな」

「ドラムカンに詰めてコンクリート流し込んで……固めてからこの先の沖、渚湾沖に沈めてやろう」

青嶋組のヤクザたちは好き放題話すと、村西悠也を素っ裸にしてドラムカンに頭から放り込んだ。
足をM字開脚のように折り込んで、器用に詰め込む。
「生き埋めも楽しそうだが銃撃して止め刺してやろうぜ？」
「そうだな。俺に任せとけ。オヤジから預かったコレがあるからよー」
一人が胸の裏側のポケットから小型拳銃トカレフを取り出すと、悠也の肛門へ銃口を捩じ込む。
「おいおい、そっから撃つのかよ？　へへへ」
「この体勢だと急所はケツアナだろうがよ？　ははは」
「ううう……痛い……痛いいい」
「ほら、銃口突っ込まれただけでも痛い痛い泣いてるぜ？　早く楽にしてやれよ？」
「ああ。お嬢さんをボコった命知らずさん、あばよ！」
『パンッ！　パンパンパンパンパンパンパンパンッ！！』
「へへッ！　全弾ぶちこんでやったぜ」

八発の銃弾を肛門から撃ち込むと、口からの出血でみるみる内にドラムカンの底に血が溜まってゆくのが見えた。
肛門括約筋が緩み、ゆっくりと穴が開いてゆく。
直腸まで捩じ込んで撃っているため、肛門自体はほぼ無傷。
噴水のように血が噴き出すことはなく、口からだけの出血で済む。
便のついた銃口をティッシュで拭くと、ドクドクと内臓からの鮮血が流れ出る肛門へ捩じ込んだ。

「ははは。テッシュくらいじゃコポコポ出てくる血は止まらねぇか」

フォークリフトで埠頭に用意してあるコンクリ車の所へ運び、すぐさまコンクリートを流し込んでゆく。
全身が埋まるのにそう時間はかからなかった。
固まるのを待ち、中型クラスの船に積み込むと、渚湾の最深部へ向かう。海に放り込むと、どんどんと深海へ沈んでいった。

年間に何万人もの行方不明者が出る内の一人となってしまった。

一ヶ月が経ち、何かの事件に巻き込まれたのか事故なのか分からないまま捜索の手も緩くなってきていた。

「あの男はケツアナから銃で撃ちまくって殺しちゃったみたいよ！あははは！」

「うわぁ～。えぐっ」

「梨花ちゃん、肛門から撃ち込んだりしたら口から弾とか内臓とか飛び出しちゃったんじゃないの？」

「あははは！　そこまで聞いてないけど有り得るなぁそれ♪　キショ過ぎるけどねぇ♪」

休み時間に誰もいないトイレで楽しく会話する青嶋梨花たち三人であった……。

高校生の受難　（中編）（後書き）

遂に起こってしまう復讐の復讐。

負の連鎖に終わりはない。

ヤクザによる完全犯罪となってしまうのか？

高校生の受難　（後編）（前書き）

弟の安否は分からないまま時は過ぎてゆく……。
二人の運命は？

高校生の受難　（後編）

――――一年後。

「あんっ、あんっ、イクっ！　イクぅっ！！」

「真衣っ、僕もイク……うっ！」

卒業まで何度も青嶋梨花たちのイジメで強制セックスをさせられていた二人も、同じ大学に通いながら付き合っていた。
ホテルでの熱い一夜を過ごしている。

「悠也くん、まだ見つからないの？」

「うん。連絡がないなぁ。もう死んじゃってるのかもね悲しいけど……」

「な、なんてこと言うのよ！？　それだけは違って欲しいけどなぁ。どこかで誰かと結婚して普通に生活してくれていたらどれだけ嬉しいか……」

「もう悠也のことを話すのはやめよう。ひょっこり戻ってくるかも知れないし」

「そうだね。私そこのスロットやりたい」

「モンスターハンターか……懐かしい。ホテルにこんなものまで……楽しそうだね。僕も少し打ってみるか」

楽しい時間も過ぎて、川北真衣を家まで送っていき、帰路につく村西悟史だった。

目の前に赤い車が停まる。
そこから降りてくる茶髪の男。
そこまでは村西悟史の意識はハッキリと残っていた……。

――――――残酷処刑島。

ふと気が付けば、暖かい風が頬を撫でていた。
青空が広がり、白い雲が浮かんでいる。
潮の香りが心地よい。

自分の身体がベッドに縛り付けてられているのを除けば自然に包まれた最高の場所であることに違いはない。

「ん？　あれ？　何で僕は縛られてるんだ!？」

もがいてもももがいてもキツく縛られた縄を解くことは出来なかっ

た。

「あれ？　真衣とホテルで過ごした後……僕は家に帰ったはず……あれれ？　帰り着いた記憶がないぞ！　なんでこんな場所に縛り付けられてるんだ僕は？？」

ガチャガチャと音がする。

その方角を辛うじて動く首を回して確認すると、アイドルのような可愛い女の子たちが五人ほどで、大きな箱の中を物色している。

「人がいたんだ……あ、あのう。ここは何処なんですかね？　僕は何故ここに縛り付けられているのでしょうかね？」

年下の女の子とはいえ、初対面の人には敬語を使い、丁寧に問いかける律儀な村西悟史だった。

１３歳くらいの黒髪ロングの少女がゆっくりと近づいて来た。

「お目覚めですか？　村西悟史さん」

「な、何故僕の名前を知ってるんだ！？　どうゆうこと！？」

「どうゆう……ってゆうかあなたは本日死にます」

「えっ！？……えええっ！？」

「死ぬって言っても簡単には死ねないよ。あたしたちがこれから拷問してから散々いたぶってから殺してあげるから」

全く言っている意味が分からないまま空を眺めている村西悟史。
ただ一つ言えることはその少女に見覚えがあったとゆうこと。
しかも好きなタイプの子なのでゆっくりだが名前が浮かんできた。

「あ、あの、菅野莉央ちゃんだよね？　真絆ガールズのセンターの……」

「知っててくれてたんだ。他にもメンバーはほぼ揃ってるよ」

「こんにちは村西さん」

「ヤッホー」

小学生トリオの結城明日香と富田美香も挨拶をする。
中学生コンビの大野真子と小野メグも目が合い、軽く会釈をした。

「おおっ！！　スッゲェ！！　ファンクラブまでは入ってないけど真絆ガールズの子たち大好きなんだよなぁ！　後でサインくれる！？」

能天気にサインをねだる男に、莉央は少しキツめに言う。

「だからね。今日、本日、今からあなたを拷問して……その後日が暮れるまでには殺します。いい加減自分の置かれている立場を把握してくれるかな？」

「あの、もう冗談はそのへんにして……この縄を解いてくれない？　莉央ちゃん」

莉央は呆れながらも、黙ったままで、筋力が落ちて殆ど力が入らなくなる特殊な注射を腕に打つ。

「え？　何打ったのかな？　おっ！？　縄を解いてくれるんだ！　サンキュー！」

すぐさま簡易ベッドから飛び降りるが、足に力が入らず転んでしまう。

額を強打して思わず両手で押さえて座り込んでしまう。

「てててて……なんか体調悪いなぁ」

「あのね悟史さん。最初はパーとグーの素手で叩きまくり殴りまくりの刑だよ。蹴りも有りだから。思い存分あたしたちと戦ってみてよ？」

「はは、冗談を！　小学生や中学生の女子アイドルなんかと戦え……」

『ズドンッ！！』

「ごはっ！？」

言い掛けた途中、莉央の腹部への前蹴りが炸裂した。
思わず前のめりに倒れかけたところを、顔面へサッカーボールキックも炸裂。
鼻血を噴き出しながらうつ伏せに倒れてしまう。

「あははは。まともに入ったね今の」

「私もやりたいなぁサッカーボール……」

結城明日香と富田美香も前に出てやる気満々になってきていた。
力が入らないことが一番の原因ではあるが、菅野莉央の破壊力は小学生レベルでは破格であった。

少しずつ現実を受け入れざるを得なくなって来ている自分に気付くが、背中から後頭部から遠慮なくガツガツ踏みつける明日香と美香に対して段々と本気で腹が立ってくる。

「やめろおおおおっ！！　やめてくれえっ！！　僕が何をしたんだっ！」

セーラー服を着た少女が男子高校生を蹴りまくり、踏みまくる。
普通では異常な光景だが、この場所では、この無人島では当たり前に行われている行為の一つである。

莉央が歩いてくるのを見て明日香と美香は足を止めて一歩退く。

「何をした？　そう言えば大切な事、まだ話してなかったよね。ごめんなさい」

「いててて……ほんともう痛いからやめてくれよお嬢ちゃんたち。アイドルなんだろ？」

なかなか動かない身体の男があぐらをかいてちゃんと座るまで話すのを待つ莉央。

大野真子と小野メグ、中学生の二人は茂みの奥へ向かって歩き出した。

「あの二人はどこへ？」

「もう一人処刑する人がいるから……あの二人の担当なの」

「ま、マジか……真子ちゃんとメグちゃんが処刑……ってゆうかほんと処刑させちゃうのかっ！？　僕が一体何をやったってんだよっ！？」

ゆっくりと腰を下ろして体育座りをしてから話し始めた。
真っ白なパンツがチラチラとスカートの隙から見えているのに気を取られ、話がなかなか頭に入ってこない。

「……たい」

「え？」

「変態」

「ん？　あっ！？　ごめんごめん！　目の前にアイドルの生パンツ見えてたらそりゃ誰だって……ははは」

ゆっくりと立ち上がってから正座に座り変える莉央。

「まだ笑う余裕があるんだ。すごいね？」

「内容聞いてなかったし……もう一度話してくれよ？」

「青嶋梨花。知ってるよね？」

「も、もちろん。同級生だからな。しかしそいつを含む三人から毎日のように苛められてたし……」

明日香と美香の笑顔が消え、真顔になる。

莉央はそのまま続けた。

「あなたは青嶋梨花がクラスの誰かを苛めているのをもちろん知っていた。ある日あなたは青嶋梨花に自分と川北真衣を苛めてくれるようにと頼んだの」

「！　！　……そ、そんな馬鹿な。誰がそんなこと頼む奴がいるかよ！　何の得があるってゆうんだ？」

引き攣った笑みを浮かべて誤魔化そうとする。

「報酬に数万円を貰った青嶋梨花は、仲間と三人であなたの言う通りに苛めて、あなたの言う通り性的イジメを実行した」

「…………」

「弟がまさか自分の想っていた同級生と付き合うようになるとは思ってなかったよね？　奥手な弟だから数ヶ月付き合ったくらいではまだエッチもしてないだろう、まだ間に合う！　と考えたあなたは……青嶋梨花に頼んで川北真衣とセックスが出来るように絵を描いた。不良娘たちの余りにも加減を知らない責めに、あなたも川北真衣もかなり怪我しちゃったみたいだけどね。そこは大誤算だったでしょう？」

「ど、どうしてそこまで知ってるんだ？」

「全生徒やクラスの子や先生たち、ヤクザ……色んな所から情報は

入ってくるの。特殊任務省って凄いでしょ？」

「し、知らないよそんな省庁……」

莉央も明日香と美香同様真顔どころか村西悟史を睨み付けるようになっていった。

「天国で悠也さんが待ってるよ。ちゃんと謝ってきてね？」

「て、天国？　し、死んじゃってたのかアイツは！？」

「青嶋梨花を殴りまくってボコボコにしちゃったの。そしてヤクザの組員に誘拐されて……今頃は渚埠頭でドラムカンが海から引き上げられて大騒ぎになってるはずよ。もう可哀想だけど原型は留めてないかもね弟さん」

「くっ、そんなことが……あれだけ青嶋梨花は相手が悪いと僕からも真衣からも教えてやったのに……」

「そうゆう訳だから大きな裏切りを弟さんに行い、そのせいでヤクザに殺された哀れな悠也さんのためにも、あなたには拷問処刑執行命令が下されました。隣りでは青嶋梨花が本日仲良くあの世に旅立つことになるけどね」

「あ、青嶋が……あの茂みの向こう側にいるのか！？　青嶋がっ！？」

「ええ。真子さんとメグさんがこれから青嶋梨花を拷問して……ま

ぁほぼ同刻にあなたと青嶋梨花を処刑するから仲良く旅立てると思うよ」

「ひっ、い、いやだ……いやだぁぁあっ！！　許してくれっ！　助けてくれっ！　何でもするから！！」

両手をついて土下座して泣き喚く高校三年生に構うことなく金属バットを持って歩み寄る明日香。

「だったらしばらくジッとしていてくれる？　先にコレで手足の骨を折らせてもらうわね？　後は素手だから安心して」

「あ、安心できるかっ！　真綿で首締めるような殺し方すんじゃねぇよっ！！」

必死で止めるように嘆願するが、結城明日香は容赦なく全身を金属バットで殴りつけていった。

バキボキと音を立てながら数十箇所の骨を折られて絶叫する村西悟史。

金属バットをポイと投げ捨てると、今度は美香が仰向け状態で激痛と戦っている男の顔面を数十回往復ビンタを行った。

『パンパンパンパンパンパン！！』

「ひぶぶぶぶぶうっ！！　痛いいいいっ！！」

「何が〝ひぶぶぶぶうっ〟だよバーカ！」
一瞬ペロッと舌を出して笑ったあと、平手から拳に切り替える美香。
「さぁ美香ちゃんのゲンコツタコ殴りコーナー始まり始まりぃ♪」
『バキッ！　ガッ！　グキャッ！　バキバキッ！！』
「がはあああっ！？　いでえええてっ！！」
みるみるうちに顔つきが変形していった。
瞼の腫れが凄まじく、もう誰だか分からなくなっている。
美香の手はまだまだ止まらない。
楽しそうにビンタと拳を交互に打ち付けたりしながら鼻血が四方八方に飛び散るのを見て喜んでいる。
唇も瞼も裂けて血が流れ出るが、更に激しく打ち付ける美香。
「あはははは！　痛いか痛いか？　ほれほれ〜。莉央ちゃんのパンツじろじろ見やがってぇ。あたしの大好きな莉央ちゃんのパンツ……よくも見たなぁ？」
嫌でも見える座り方をしていたので致し方ないと言えばそうなるが、美香は少し妬いていた。
殴りつける回数も半端ではないため、これで死なれては軽すぎる拷問になるので莉央が静止する。

「美香ちゃん、やり過ぎ！　もう殴るのやめて。次に移ろう」

「はーい。ごめんなさい」

顔面血まみれのままで、莉央は服をハサミで切って脱がしていった。

ズボン、パンツは普通に引きずり脱がす。

『ズル……ズルル』

「やだぁ～。高校生の割にデカいチンポ！」

美香が一瞬頬を赤くして驚く。
莉央の兄の京介とほぼ変わらないほどのデカマラだった。

「こりゃ強制セックスでも普通のセックスでも女が虜になるわ」

莉央も涼しく笑いながら続ける。
明日香はただジッと下腹部を睨みつけていた。
菅野京介のイチモツでも連想しているのだろうか……。

傍に立っているため、そよそよと風に揺れるスカートの中身……男からは三人のパンツが丸見えだった。

顔面を歪に変形させながらもペニスは少しずつ大きくなり、完全に勃起して更にデカくなる。

「コイツ、あたしたちのパンツ見てチンポおっ勃てたよね？」

美香が鋭い目で村西悟史を睨みつけながら叫ぶ。

「仕方ないなぁ。人生最期の射精……させたげようか？」

莉央はスッとしゃがみ込むと、イキリ勃った男子高校生のペニスをキュッと握りしめる。

やがてゆっくりと上下にピストン運動を開始すると、悟史は唸り声を出した。

「んんん……んんう」

「幸せよね？　好きなアイドルの子に手コキしてもらえるなんて……私なら短刀で一気に切断してやるんだけど」

明日香の恐ろしい一言に一瞬萎えかけたが、莉央のしなやかな高速手コキに再度ビンビンになる。

「い、イクッ！……莉央ちゃん！　イクうっ！！」

「いいよ。出せ」

『ドピュッ！ドピュピュピュピュピュウゥッ！！』

粘度のある勢いのある精液が空へ向いて何度も噴き出した。
自身の腹と、莉央の手に降り注ぐ。

顔がボコボコに腫れあがっている最中、女子小学生に手コキで射精させられるとは……村西悟史も色んな意味で、人生で初の経験をたくさんする事が出来た。

白く小さな手についた精液を、悟史の腹部に塗り付けると、すぐにペニスを握り直して再度ピストン運動を開始する。

数十分ほど繰り返され、結局男は莉央に四回も射精させられた。

「ふぅ。ふぅ」

「気持ち良かった？　あたしたちのファンって聞いてたから特別サービスだよ」

「う、うん。もう死んでも後悔ないくらい気持ち良かったよ……でもまだ本気で処刑されるとか……信じ難いけどね」

まだ少し体力的にも精神的にも余裕のある村西悟史だった。
この時点でも未だ、生きて帰れる可能性の方が高いと思っていた

からだ。
何かの冗談だろう。
手コキシーンだけカットして、近い内テレビで放送するドッキリ番組かなんかだろう、と思っていた。

「チェーンソーで一気に四本やったげるからね」

「え？　チェーンソ……な、なんの冗談だそれ？」

結城明日香と富田美香が大型のチェーンソーのエンジンをかけた。
ポニーテールとツインテールがエンジンの振動で、細かくたなびく……。

その頃、茂みの反対側では、青嶋梨花が十字型に埋め込まれた杭に縛り付けられている。
極北女子中学生の二人、大野真子と小野メグが本日の梨花の拷問処刑担当であった。
特に血に弱い大野真子と、真子よりは少し気の強い小野メグが、処刑を無事に遂行することができるのか……。

「ヤンキーと聞いてたけど綺麗な顔してるじゃんあんた……」

そう言いながら梨花の頬をぺんぺんと軽く叩く小野メグ。

「やめろクソガキッ！！　なんであたしがこんな場所に連れてこられたのか教えろといってんだよっ！！　親父は青嶋組組長だぞ？分かってんのかコラァ！？」

『ぐっ……ズルリッ！！』

「いきがってるなぁほんと。ただの女子高生のくせに。とりあえず下だけ脱いでもらうよ？」

制服のスカートを一気に脱がす大野真子。

「ひっ！？　や、やめろっ！！　この変態っ！！」

「殺す前に気持ちいいことしてやるから……」

「え？　メグ！？　莉央ちゃんたちに頼らずに殺せるの本当に？」

「うるさいなっ！　もしビビったら速攻菅野さん呼んでこいよ！分かったか真子？」

「ああビックリした……そこまでレベルアップしてたらあたしどうしょうかと思ったじゃん……」

２０㎝ほどの極太バイブを腰に巻いたペニスバンドへ装着する小野メグ。

『ガチャガチャ……ガシャンッ！』

「もういいよ。縄を解いてやって真子」

「ああ」

真子によって青嶋梨花の拘束が解かれた。
瞬間駆け出して逃げようとするが、メグにすぐ追いつかれ、足をかけて倒される。

「いてっ！　く、ちくしょう！　見逃してくれよっ！　まだあんたら中学生なんだろっ？　歳上には優しくしないといけねぇよ？」

「何を下半身パンツ一丁で変態みたいな格好で喚いてるの？　まずは正常位からね。そのまま仰向けでじっとしてるのよ？」

そう言いながらメグは青嶋梨花に覆いかぶさり、装着した極太バイブを下着越しに性器にあてがった。

「ここかな？　青嶋梨花のマンコは？　パンツ越しにぶち込んでやるんだからねっ！　ほらぁ～」

『グリ……メリメリ』

「ひっ！？　痛っ！！　や、やめ……」

『ズボオッ！！　ブチブチメリメリイッ！！』

「んぎゃぁあああぁっ！！！！」

いきがっているようで実は未だ処女だった青嶋梨花は、直径５㎝、長さ２０㎝もある極太バイブを一気に根元までぶち込まれ、一瞬で同性から処女膜を奪われる羽目になった。

子宮口をこじ開けて、半分くらいは子宮内部まで突き刺さっていた。

しかもパンツごとめり込んでしまっているので、膣壁から子宮口に擦れまくり、余計に激痛だった。

「ひんぎいいいいいっ！！　せめてパンツ脱がしてからやってええええっ！！　信じられないっ！！」

「黙りなさい。パンツ履いたまままめり込ますのがまたそそるのよ！ちゃんと子宮までぶち込めたかな？……お、入ってる入ってるぅ♪　さぁ次は腰振っちゃうよぉ～」

「ぱ、パンツ越しだけはやめてええっ！！　お願いしますううっ！！」

「ちっ。分かったようるさいなあ……」

子宮の奥までバイブに連れて行かれて鮮血と愛液でドロドロになってしまったパンツを引っ張って膣内から引き抜くと、今度は一気に足首までずり下ろした。

両手の親指を大陰唇に当てがい、思いっきり開いて膣の中を見る小野メグ。
楽しんでマンコを開いて閉じてを繰り返す。
「やん。エッチ♪　しかし臭いマンコだなぁお前……血と愛液の糸引いてクパクパ音出してるぅ~ヤラしいなあ。今度は生でぶち込んでやるからねぇ？　あははは♪」
セーラー服の下から手を入れて、ブラジャーの下にまで潜り込ませ、両胸を生で揉みしだき始めるメグ。
「ねーちゃん。いい乳してるわぁ。ほら、いくぞ？　メグちゃんの地獄のピストン！　今度はパンツ無しの生バイブでねー♪」
泣きながら許しを嘆願するが、メグは返事もせずに笑顔のまま極太バイブを挿入してゆく。
「痛いっ！！」
更にゆっくりと腰を振り始めた。
青嶋梨花の開いた脚がバタバタ揺れるほど激しく腰を振るメグ。
外性器周辺は処女膜と子宮口からの出血で真っ赤になっていた。

感じるどころではない筈だが、粘度のある液体も混ざっていた。
『バッコンバッコンバッコンバッコンバッコンッ！！』
『ひぎいいいいいいいっ！！　痛い痛い痛い痛いいいいいいいっ！！』
「ほらほらほらほらほらほらぁ～♪」
『バコバコバコバコバコバコバコバコバコバコバコッ！！』
更に激しく速度を上げるメグ。
大野真子は頬を赤くしてその光景を眺めている。
「あ、あのメグ…………あたしたちってさぁ……マンコとか肛門とかエッチな部分を責めるキャラじゃなかったよなぁ？」
「ん？　そうだな。菅野さんとかの拷問とか見てて、少しずつ変な趣味に目覚めちゃったって感じかなぁ。なんか興奮するだろ？　真子も？」
「そう言えば……青嶋梨花がメグに犯されて泣き喚いてる姿見ながらアソコ濡れてるもん……内緒だけど」
「あたしもすぐ濡れちゃうよ。ははは……」
数分間犯し続けたあと、ようやく恐ろしく巨大なバイブを引き抜

くメグ。
ドクドクと愛液とオリモノと血が流れ出るが、気にせずニッコリ笑いながら真子に話し掛ける。

「次、真子の番だよ！　バックで後ろ犯してやって」

「ええっ？　あたしだけお尻？」

渋々ペニスバンドを借りて装着すると、青嶋梨花を無理矢理起こして四つん這いにさせる真子。

メグよりは遥かに弱そうに見えたのか、思いっきり殴りかかってくるが、その辺の女子高生に負ける極北女子中学校の最強コンビではなかった。

二回三回とカウンターを合わせ、両目が腫れ上がる青嶋梨花。大野真子に返り討ちにあってしまった。

「ほら、再度四つん這いになれ！」

「く、くそう」

『ドカッ！！』

「ぎゃっ！！」

ムカついた真子は四つん這いになろうとしている梨花のお尻を思

いっきり蹴飛ばした。
愛液と血がマンコから噴き出す。
再度気を取り直してバイブを梨花の菊門へ押し当てる。

「くっさ。お前クソしただろ今日？」

「ご、ごめんなさい」

「うわぁ。マンコからよくそんな色んな液体流せるなぁ～？　ヤラしい……今度はアナルだぞ？　ほらぁ！」

『ズブ……ズズズズ』

「ひっ！？　痛いいいいいいっ！？」

「さっきメグが使ってたマンコ用だなこれって……可哀想に……あははは。でも無理矢理捻じ込んだら入らない事はないよなぁ？　肛門ってかなり開くから……ね？　高校生のおばさん？」

『メリメリ……ぶち、ぶち』

強引にゆっくりと確実に飲み込ませてゆく真子。

メリメリと音を立てて、肛門括約筋を数枚破壊しながら、直腸深くへどんどんめり込んでゆく極太バイブ。
性器用だけに５㎝とゆう直径は、肛門には地獄過ぎた。

膣以上に肛門から鮮血を流す羽目になってしまう青嶋梨花。

「ひぎっ！　んぐっ！　あはっ！　こ、壊れるっ！　壊れるううっ！！」

「壊れてみろよっ！　ほらっ、ほらあっ！　あははは♪」

延々と大野真子のバックでのアナル責めが続く中、待ちくたびれた小野メグが、青嶋梨花の口に新しいバイブを捩じ込んだ。
これも同じ極太サイズのモノであった。

「おうおうっ。んごおおおっ。んおっんおっ！！」

「おら、ちゃんと咥えて喘ぎ声を出せよオラァッ！　涎凄いなぁ。あっ、顎外れそうになってるじゃんか？　あははは♪」

「ひいいいいっ！」

前も後ろも女子中学生二人に突かれまくり、口内までも傷だらけにされた青嶋梨花は、肩で息をつきながら震えていた。

「もう落ち着いた？」

「はぁ、はぁ。は、はい」

「じゃあ次は上の服も脱いでもらおうか？」

「いや、上だけでも脱がさないで！　お願い」

泣き喚きながら抵抗するが真子とメグに力ずくで脱がされて、遂に素っ裸にされてしまう。

「いや、恥ずかしい……」

「コイツもだいぶヤンキー言葉も無くなって、可愛らしい女性らしくなってきたよな？真子」

「そーだなぁ。可愛い可愛い！あははは♪」

「許して……家に帰して……お父さんに仕返しとかしないよう頼んであげるから」

「お父さん？　あぁ、そういえばあんたのお父さんってヤクザの組長だったよなぁ。そりゃお気遣いありがとう」

そう言いながらチェーンソーのエンジンをかける小野メグ。

「もっと可愛くなろうね。話し方だけじゃなく外見もね」

「あたしは両脚やるから真子は両手お願いね？」

「えっ！？　ええっ！？」

「いい加減拷問くらいはできないと菅野さんに怒られるよ？」

「そ、それは分かってるんだけど……また吐いちゃうかも」

少し気の弱い大野真子もチェーンソーのエンジンをかけた。

「な、何を！？　まさか……あたしをそれで」

「うん。死なないように痛み止めの注射と、内臓の痛みが麻痺する浣腸するからちょっと待っててね」

一度チェーンソーのエンジンを切り、足元に置くと、緑色の液が入った注射器と、桃色の液が入った浣腸器をカバンから取り出して、そっと梨花の元へしゃがみ込んだ。

腕に注射を打ち、へたり込んでいる所を再三、四つん這いにさせ、ガラス管の大きな浣腸機器を青嶋梨花の肛門へ差し込んだ。

「ケツアナちゃんは……ここかな？えい」

『プス！　ぷちゅううう』

「あはあっ！？　冷たいいっ！！」

「これでいいわ。ハラワタぶち撒いても痛みはあまりないから安心

して。注射のおかげでなかなかショック死もできないし……無茶苦茶な自分の姿を自ら満喫させてあげるから……」

「さぁ両脚からいこうか？」

再度チェーンソーのエンジンをかける小野メグ。

『ブルルンッ！　ウイイイインッ！』

「いやああああっ！？　やめてえええええっ！！」

『ザシュッ！　ザシュシュシュシュッ！！』

「うぎゃあああああっ！！！！」

右脚が膝上辺りから見事に切断された。
小便を漏らしながら転げ回る青嶋梨花。

「次は左脚ね。ほら、じっとしてないと目ん玉抉り出すぞ？」

そんな脅しの言葉も届かないほど激痛を味わっている梨花の左脚も切断し、辺りは血まみれになるが、特殊な注射のお陰ですぐに血は止まり、出血は少なかった。
両脚をパカパカ開いたら閉じたりして苦しんでいる。

『ぐちゃ。グリグリグリ』

「ションベン漏らしてんじゃねーよ？　オラァ」

右足の裏を性器に置き、グリグリと押さえつける。
卑猥な音を立てて小陰唇が開いたり閉じたりしていた。

「さぁ真子の番だよ。好きな方から切ってあげて」

「う、うん。もうやけくそだ！　オラアアアアアッ！！」

『ザシュシュシュシュ！！』

「ひぎゃああああっ！！」

泣き喚く青嶋梨花の右手を肘辺りから切断に成功。

「おっ！やるじゃん真子！」

「ありゃあああっ！」

そのまま左手にも刃を当てがい一気に切断する。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ」

「今、目を瞑りながら切ってたなおい？　まぁやれたら上等だよ」

少し呆れながらも切断する事が出来た真子を称賛するメグだった。出血が少ないとは言え包帯をぐるぐる巻きにして、念入りに出血死を防ぐ。

「はい、これでよし！　もう薬も効いてきて痛みは和らいでるだろ？　まだ痛いか？」

「ひっく、ひっく。かなりマシになりました……」

「そっか。とりあえず菅野さんたちと合流する前に……ダルマ女の完成を記念してと」

『ズブ……』

「ひいっ!?やあっ！！」

中指をそっと肛門に当てがい、ゆっくりと挿入してゆくメグ。

「お前はなかなか可愛い顔してるからよぉ。ちょっとエッチな事させてもらうぜ？　ほら」

『ズブブブブブ！』

「痛ぃっ！　やめて下さぃいっ！　もう私のソコはズタズタなんですうっ！！　ひぃいっ！！」

大野真子によるアナルファックで、傷だらけになっている肛門と直腸を中指でグリングリン掻き回すメグは、不敵な笑みを浮かべながら楽しんでいた。

「肛門でもぐちゃぐちゃ音たてるんだな？　腸液ってやつか？　ヤラしいなぁ～。あははは♪」

「メグばかりずるいぞ！　あたしにも指突っ込ませてよ！」

「やだぁ～。痛いい！　わーん、わーん！」

この後しばらく女子中学生アイドルの二人に交互に肛門を掻き回されるダルマ女であった……。

その頃、菅野莉央によって何回も射精させられた男は、結城明日香と富田美香によって四肢切断されていた。
こちらの男にも特殊任務省開発のショック死防止の特殊な注射を打ってある。
痛みも少しマシになるのでなかなか死ぬこともできない恐ろしい薬であった。

「ひ、ひぎゃあああああっ！？　ぼ、僕の腕が……足が……何てことをしてくれたんだクソガキどもめえっ！？　もう何も出来ないじゃないかっ！！」

気持ちよく射精させてもらった恩も忘れて莉央たちに怒鳴りまくる村西悟史だった。

「プルル……プルル」

莉央が電話を取る。

「もしもし……小野さん？　女の四肢切断終わったのね？　了解です。こちらへ運んでもらえますか？　男もダルマにして準備ＯＫですから」

台車に乗せて手足が肘と膝から切断された女、青嶋梨花が、村西悟史のいる菅野莉央たちの元へやってきた。

「小野さんが全部切ったの？」

「いえ！　今回は勇気を出して真子も両手を切断しましたよ！」

「へぇー。大野さん、やるじゃない」

「あ、あ、ありがとうございます。か、か、菅野さん」

その切断シーンを想像しただけでも手足が震える真子。

小刻みに震えながら台車を押している所を見ると、チェーンソーで両腕を切断することが死ぬほど怖かったことが窺い知れる。

「あ、青嶋さん！？」

「村西！？」

お互いダルマ人間になってからの再会を果たすが、痛み止めは打たれているとはいえ、お互いの哀れな姿に二人ともさらに絶望の淵へ追いやられる。

その中での感動の再会……微妙な心境である。

「ごめん、僕が君にあんなことを頼まなければ……」

「……ゴメンじゃねぇよちきしょう！　結局お前の弟を殺すハメになったのも全部元はと言えばテメェのせいじゃねーかよっ！？　どーしてくれんだよこんな姿にされてっ！！　ううう……嫁にいけないじゃねぇかよぉ〜。ぐす、ぐす」

「あのう……盛り上がってるとこ非常に申し訳ないのですが……青嶋梨花さん、あなたは今日この島で死にますからお嫁に行く心配はしなくていいですよぉ？」

富田美香が舌を少しだして、申し訳なさそうにおどけて言う。

「もういやあああっ！！　夢なら早く覚めろやボケェエエエッ！！」

村西悟史は、発狂したように首を左右に振りながら泣き叫ぶ青嶋梨花に、目を背けることしか出来なかった。

「段取り分かってますか小野さん？」

「はい。女の性器へローションたっぷり塗り込んでおきます」

「な、何のために？」

菅野莉央から何も聞かされてない大野真子は真顔で聞き直す。

「ダルマ男とダルマ女を強制セックスさせるらしいよ」

「ええっ！？　むっちゃエグ……ってゆうかエロそうじゃん……」

真子は顔をしかめながらも何か楽しみにしているように見えた。

泣き叫ぶ梨花の陰部へ躊躇うこともなくローションをたっぷりと

付けた中指と薬指を捩じ込む小野メグ。

「今度はマンコにも指入れちゃうからねぇー」

ぐちゃぐちゃと卑猥な音を立てながら掻き回す。

「ひっ、やめてお願い。許してえええっ！！」

本気で殺されるかもしれないという事実が理解できてきた頃には、ヤンキーではなく普通の女性となって喚き散らしていた。

十字架型から『土』の字型の木製の杭に縛り付け替えられているダルマ人間にされた村西悟史と青嶋梨花。

「真子！　もっとマンコ剥き出しになるよう全開に股開いて拘束し直して！」

「う、うん」

少し『ハ』の時になって下方に垂れ下がっている短くなった太腿を、横一文字になるよう無理矢理持ち上げて丸太に拘束し直す大野真子。

「よっこらしょ！　こうかな？」

『ぐいっ！　ぱくんっ』

「んあっ……やめ……て」

再び性器と肛門が、前から見れば丸見えの剥き出し状態となった。

「いやだ！　やめてっ！　許してお願い……えーん、えーんっ！」

遂に大声をあげて泣き出す梨花。そっと膣から指を抜くメグ。

「死ぬ前に何度かイカせてやるから。本来タブーとされているローションは大サービスだし、何とかゆう気持ちよくイケる薬を菅野さんが打ってくれるみたいだから。良かったね？」

指についたローションを青嶋梨花のお腹に擦り付けて拭き取ると、菅野莉央が注射器を持って近寄る。

「青嶋梨花。人生の最期に気持ちよくさせてあげるからね？　１８年間お疲れ様でした」

莉央は優しく声をかけると、梨花の肛門と膣の間の会陰部へ、赤い薬液の注射を打った。

大きめの簡易ベッドを用意し、富田美香と結城明日香で男を担ぎ上げ、下側に仰向けに寝かせると、莉央が男にも会陰部へ赤い注射を打った。

「村西悟史。あなたも今度こそ人生最期の快感となってしまうから。心して射精するのよ？」

「う、うう……許してくれ……死にたくない……」

「赤くて綺麗な色だね莉央ちゃん？」

「うん。男女兼用の性欲強壮剤だよ。超強力なんだから」

みるみる内に村西悟史の陰部はムクムク膨れ上がり、はち切れんばかりに勃起した。

土の字型に組んだ木材に拘束したまんま、青嶋梨花を男の上に被せてゆく。

小野メグと大野真子が慎重に重ねてゆく。

「もちょっと右！　行き過ぎ！　もっと左っ！　あっ、もっと斜め下っ！！」

なかなか青嶋梨花の膣へ村西悟史のペニスの位置が合わないので四苦八苦していると、莉央がペニスを掴んで強引に向きを変えて見事に膣内へ挿入される。

『くちゅ、ズブズブ！』

「あんっ！？　あひいいいいいっ！！！！」

『ぷしゅうううううっ！！』

潮を吹いたように愛液が噴き出す。

莉央の打った性欲強壮剤は半端な効果ではなかった。

後はダルマになっている下側の村西悟史に腰を振らせるだけであった。

「村西悟史！　ペニスは奥まで入ったよ。今から激しく腰を振りなさい」

莉央が冷ややかに命令すると、速攻で腰を振り始める悟史であった。

『バコバコバコバコバコバコバコバコッ！！』

「うっ、気持ちいい……青嶋さん、ごめん」

「やだっ！　あんっ！　まだ異性は未経験だったのに……あんんん

「んんんっ！！　イクっ！　イックううううっ！！」

『プシャアアアアアアッ！！……びくんびくんっ！！』

青嶋梨花は巨大なペニスの速い腰使いに早くも昇天してしまう。
小学生三人と、中学生二人の合計五人の少女に見守られながら……。

「スッゴいエッチだったよね今の……」

美香は頬を真っ赤にして喜んでいる。
莉央がペニスの根元を掴み、明日香と美香が梨花を土型の杭ごと引き上げる。
ドクドクと、大量の精液と梨花の愛液が男の太腿を垂れてゆく。
膝から切断された短い足をぴくぴくさせながら、射精の余韻に浸っている村西悟史だった。

「じゃあ小野さん、青嶋梨花の斬撃をお願いします」

菅野莉央の指示に従い、青嶋梨花の杭を深く地面に立てて、日本刀を手に持ち、小野メグが近付く。

「ほんとに大丈夫？　代わりましょうか？」

「だ、大丈夫です。もうあたしも平気にならないといつまでも菅野さんたちに迷惑かけちゃいますから。斬り方も菅野さんから教わってるし」

「よく校庭で素振りして練習してたらしいもんね……分かりました。ではお願いします」

意を決して日本刀を振りかぶり、青嶋梨花を睨み付けるメグ。

「先にあなたを処刑します。まずはオッパイを一気に二つとも切断するから」

梨花の真横から一気に日本刀を振り下ろすと、二つの胸が根元から切断された。

『べちゃっ、べちょっ！』

二つの肉塊が地面に落ちる。

この世のものとは思えない絶叫を上げるが、構うことなく今度は横に一閃！

４０㎝ほど真横に切れたお腹から大量の大腸と小腸がドバドバと垂れ流すように落ちてゆく。

「んぎゃあああああっ！！　いだいいいいいいっ！！」

「痛い？　中学生の女の子に殺される気分はどうですか？　ヤクザの娘さん？　綺麗なオッパイ吹っ飛んじゃったなぁ？　ははは」

刃を上に向けて股間へゆっくり差し込んでゆく。
ほぼ根元辺りまで奥に差し込んでから肛門と性器へ刃を密着させるメグ。

「うふふ。これ一気にあたしの方へ引いたらどうなると思う？」

目を細めてスケベそうな微笑みを浮かべながら耳元で囁くメグ。

「ぎひいいいいっ！！　鬼っ！！　悪魔あああっ！！　やめてえええええええっ！！」

「もっともっと泣き喚いて♪　やめたげないけどな。　いっくよぉ？　それえっ！！」

『ズバアッ！！』

一気に日本刀を引き抜く。
股間は見事なまでにぱっくりと開き、会陰部に陰核、尿道口、膣口から肛門にかけて全てが切開された。
恥骨に当たって止まった刃の上に更に小腸が振りかかってくる。

足元は血の海だった。

「あははは♪　今ので何処が斬れたか分かってる？　会陰部でしょ、アナルでしょ、マンコでしょ……それに陰核に尿道……でしょ。ん？　やだ！　ハラワタずるずる垂れてきてキチンと斬り口の確認できないじゃん！　あははは♪」

「あばばばあっ！！　ぴぎいいいぐぐぐうっ！！」

切断されて拘束されている短い手足をびくびく小刻みに動かしながら白目を剥いて痙攣を始めた。
莉央が杭から抜いて横向きに寝かせる。
飛び出した腸が周りに広がってゆく。

「もうぼちぼちかな。青嶋梨花に止めを刺してあげて」

「え？　どうやってですか？」

そう言いながら裂けている肛門を両手の親指で押し広げて思いっきり左右に開き、直腸を剥き出しにする莉央。

「原型止めてないけど……ココから口まで串刺しにしてくやってくれますか？」

「あ、はいっ。分かりました。……青嶋梨花！　あの世で反省しな

さいね？　ほら、肛門から串刺しだよ？　いくよぉ？」

『ズブッ！……ズズズズッ！！』

ゆっくりと確実に日本刀の切っ先は青嶋梨花の直腸を貫き、口を目指して貫通していった。

「この臓器を貫く時の手に来る感触……たまらないわ」

内臓を貫いてゆく感触に、快感を覚え始めた小野メグであった。この時の小野メグの性器はベチャベチャに濡れていた。

『ばしゅっ！　ぶしゅううううっ！！』

「うごおおおおおおおおおっうっ！！！！」

口から切先が飛び出し、鮮血が泡のように噴きこぼれる。

『ゴポポポッ！！……がくんっ』

断末魔の叫びを残して遂にあの世へ旅立つ梨花を見ながら、メグは一気に肛門から日本刀を引き抜く。

「それっ！」
『バシュッ！！……ぶっしゅうううううっ！！』
ジェットエンジンのように肛門から噴き出す鮮血は、あまりにも凄まじいものだった。
処刑完了あと、思いっきり日本刀を斜め下に振り下ろし、鮮血を払い飛ばす姿は、なかなか処刑人として様になってきていた。
「見事ですね小野さん。もう安心して処刑を任せられそうです」
「てへへ。ありがとうございます菅野さん」
大野真子は顔を青くして固まっている。
そのまま崩れ込んでゲロを吐き始めた……。
「まだ大野さんには早すぎたみたいだね……」
「すみません、またスプラッター映画でも見せてメンタル鍛えさせときますので……」
小便を漏らして顔がひきつっている村西悟史。
まだ目の前で起こったことが現実だと受け入れられていないよう

だった。

「あの、ぁ、ぁ、……青嶋？」

莉央が村西悟史を引き起こして肛門に指を突っ込む。

「ほら起きなさい。ここ、富田美香ちゃんに犯してもらうから。まだまだあなたは死ねないからね？」

『グリ……ズブブ……ブブブ』

「はおうっ！？　熱いっ！　ぐおお……」

『グリグリグリングリン……きゅぽきゅぽっ！』

「痛いっ！　はうううっ！！」

莉央が直腸を執拗に掻き回すと、腸液が分泌されて、卑猥な音を立て始めた。

「ローションがわりだよ。自らの分泌液でブッといいのを飲み込みなさいね？」

そう言いながら莉央は肛門から指を引き抜いた。

美香がそっと男に近付き、バック体勢で肛門にバイブを当てがう。

「お兄さん、ここに極太のをぶっ込んであげるからね？　“ツインテールの天使”と呼ばれている美香様に思いっきり犯されなさい♪　ほらぁ」

メリメリと音を立てて大きく拡げられる肛門。
美香の極太バイブが一気に直腸へ捩じ込まれた。

『グリ……ズブブ……ばっくん！　ズボオッ！！』

美香の取って置きの極太バイブで犯される肛門はみるみる内に破壊されてゆく。
すべての肛門括約筋が破断され、辺りに血飛沫が飛び散る。

「ほらほらあっ！　美香様のアナル責めは強烈でしょう？　お前の人生最期のアナル調教だよんっ！　あははははは！」

「ふんぎいっ！！　うぎいいいっ！！　やめて許して抜いてっ！！　ぎゃあああああっ！！　死ぬっ！！　死ぬううううっ！！」

『バシュッ！！……ぶしゅしゅしゅしゅうっ！！』

美香は一気にペニスバンドの張り形を引き抜き、立ち上がって血

飛沫をかわすと、お尻を思いっきり蹴りつける。

「ほらあっ！　汚い血飛沫飛ばすなよっ！じゃあ明日香ちゃん、後はお願いねっ！」

更に美香により蹴り転がされて仰向けにさせられると、結城明日香が軽く頷いた。

「弱い緩々のアナルだなぁほんと……罰として明日香ちゃんにチンポ斬ってもらっちゃえ！」

結城明日香がポニーテールを風になびかせながら歩み寄ってくる。日本刀を真横に構えながら呟いた。

「ペニスカット！　結城明日香がいきますっ！……えいっ！」

『ブシュンッ！……ザクッ！！』

猛烈な速さの一閃は、村西悟史のペニスを見事に仮首から上をふっ飛ばした。

噴水のような血飛沫を見ながらアイドル少女たちは大爆笑。

「やだっ！　雁首だけ吹っ飛んじゃってるぅっ♪」

大野真子が顔を真っ赤にして大喜びすると、小野メグも続けた。

「お見事っ！　まだ上に飛んでるよ雁首っ♪　二回目で根元からズバッといくんですよねぇ♪」

「そうだよ！　ふんっ！」

『ヒュンッ……スパッ！！』

更に逆方向から刃の向きを変えて一閃。
今度は根元から完全に切断された。
血が噴き出す切断面を、足の裏で踏みつけてグリグリと踏みにじる明日香。

「いつまでも汚い血を飛ばさないでくれる？　このヘタレチンポめ」

「ひぎいいいいっ！！　いでえええええっ！！」

かなり強力な痛み止めを打っているとは言え、陰部切断は地獄のような激痛であった。
顔をしかめて子供のように泣きじゃくる村西悟史。
莉央は腰の辺りに跪き、小型の万力を悟史の睾丸へ挟み込んだ。

「ひっ！？　ひぎいいいいいっ！！」

「ん？　なぁに？　そのまま泣き続けてくれていて構わないよ？　今からこれでゆっくりと時間をかけて少しずつ変形させせながら金玉潰してあげるね」

頬を赤くしたアイドルたちに囲まれて万力で金玉を変形させせられてゆく光景はかなり異常だったが、ここ残酷処刑島では当たり前の光景だ。

絶叫は島中に響き渡る。

なかなか一気には潰してくれない菅野莉央の拷問は、本日では一番の地獄だったであろう。

「ひんぎいいいいいっ！！　ふんぬううう〜っ！　んぎいいいいいい〜」

「あれあれ？　痛みでまともに喋ることも出来ないの？　もうちょっとで潰れそうだから後少しの辛抱だよ？」

「あがががが……ぅんぎいいいい〜」

身体中の血管が浮き出すほどの激痛を味わっている村西悟史。

痛みで身体に力を入れる度に切断されたペニスからはピッピッピッと、血と精液の混じった小便が小刻みに噴き上がっている。

少女たちは哀れなペニスの切断面をジッと見つめながらも、ジワジワと確実に変形してゆく睾丸も見ながら、その時が訪れるのを今か今かと待ち侘びている。

莉央の万力を回す手は、相変わらず超ゆっくりであった。

『キイィ…………キイィ…………キイィ』

「こんなに歪んでも潰れないのよねキンタマって……あはは。哀れなほど長細くなってるけど？　みんな、もうぼちぼちだよ！　ようく見ててね♪」

『ミシッ……ミシミシッ！』

「ふんぎいいいいいいいいいいいっ！！！！」

『………………グチャッ！！』

夕刻前に、三時間かけて遂に潰された睾丸。ミンチになったその塊は、精管から尿道を通過して、尿道の切断面から飛び出してきた。何十個と色んな道具で睾丸を潰してきた莉央は、だいたいの潰れる限界値を手の感覚で覚えていた。

「あはは！　今回は金玉袋を切り裂いてないから全部チンポから飛びだして来ちゃった……キンタマのミンチが♪」

「はぶぶぶぶぶうっ！！…………ピクピク……ガクッ」

村西悟史はここでショック死してしまった。

「あれ？　まさかの死んじゃった！？　ごめんなさいみんな……ショック死しないだけの量の注射打ったハズなのに……キンタマ潰したら数十パーセントの男はショック死しちゃうから……ほんとごめんね」

莉央は恥ずかしそうに舌を出すと、もう一つの無事な方の睾丸を握りしめて、陰嚢をメスで切開した。
陰嚢の内側へ親指と人差し指を差し込み、左側の無事だった生の睾丸を指で挟み、手前に引き摺り出す。

周りの拷問処刑人の女の子たちは繁々と見詰めている。
やはり男子の生の睾丸は興奮するみたいだった。
精管や神経の管が繋がっているままでメスを睾丸に突き刺し、真っ二つに切開する。
中身を開いてみんなにじっくり見せた。

「こんな感じだよキンタマの中身は。エッチな色してるでしょ？」

「わぁ～すっご」

「ほんとヤラしい色してるぅ」

「へぇ～。金玉なのに白玉だ～。白子だね」

アイドルの女の子たちはそれぞれに感想を述べるが、頬は真っ赤に染まっていた。
みんな男性器解剖には興味が強かったみたいだ。
「あなたも予定通り串刺しにしてあげるね？　死んでもまだ許さないんだから……」
莉央は簡易ベッドの上に遺体を置き、３㎝ほどの幅の１ｍの長さの白檀の木を取り出した。
先端はかなり鋭利に削っており、木の槍とも言えるシロモノだった。
美香と明日香がうつ伏せに寝かせた村西悟史の遺体のお尻を突き上げさせて、二人で同時に左右に引っ張り、肛門を全開に拡げた。
「死んでも陵辱されるなんて夢にも思ってなかったでしょ？うふふ♪」
美香は遺体に話しかけて笑っている。
莉央とメグが白檀の木の尖っている方を肛門へ差し込んで、二人の力の限り、グリグリと捻りながら奥へ突っ込んだ。

「はぁ。ここまでかな手で入るのは……腸も束になるとなかなかねぇ。じゃあ大野真子さん、村西悟史を串刺しにしてやってください」

「ええっ！？　あたしがっ！？　もうかなり突き刺さってるし、既にこの人死んじゃってますがっ！？」

「だからいい経験とゆうか……生きてる罪人の止めを刺す練習になるでしょう？」

莉央が優しく微笑みながら、大きな木槌を真子に渡す。

「え、これで叩き込むのですか？」

「そう！　口まで綺麗に貫通させるようあたしたちがこまめに向きを調整してやっから！　頑張れ真子っ！」

親友である小野メグも激励する。

「仏さんなのに……ごめんなさい！　それぇっ！！」

『ドカッ……ズボオッ！！』

意を決して白檀の木の反対側を思いっきり木槌で叩きつけると、一気に５０㎝ほど体内に食い込んだ。

背骨の神経を貫いたせいか、全身がビクビクと生きてるかのように痙攣し始めた。

莉央は白檀の木を背骨から少し引き抜いて、口の方向へ向きを調整する。

「かなり入ったねっ！　いい感じ！　頑張って！」

美香も大いに応援する中、二回、三回、四回と打ち込んでゆく真子。

遂に五回目で口から飛び出す切先。

『ドカッ！！……バシュウッ！！』

「や、やった……ふぅ。ふぅ」

息が上がってしまった真子にみんなからは賞賛の拍手が起こる。

「口を見て大野さん。見事に切先が出てるでしょ？」

「はぁ。はぁ。ホントだ！　スッゴい……なんか串刺しってエロいですね？　菅野さん……」

「そう感じられるなら次回は生きてる罪人の止めますできそうだね！是非お願いします」

「えっ!?いや、まぁその……まだまだ殴る蹴る、くらいがやりやすいですあたし……」

動揺する大野真子に他のメンバーは笑いに包まれる。

「じゃあこれにて本日の拷問処刑は終了です。皆さんお疲れさまでした」

残酷処刑島に新たに二つの骸が加わった……。

高校生の受難　（後編）（後書き）

いじめはまさかの村西悟史と青嶋梨花の共謀であった。
弟の村西悠也があまりにも不憫に感じた拷問処刑人たちであった。
悠也を殺したチンピラたちは全員終身刑となり、青嶋組長は娘を失ったショックで拳銃自殺をしてしまう。
妻もあまりの寂しさから風俗をやめて、細々と暮らすことになる。

非情なる拷問処刑（前書き）

我の恨みを晴らすため、幼い児童まで利用した母親。
元凶の母親と兄妹たちの運命は余りにも悲惨なものとなる。

（ほぼストーリーの無い拷問と処刑シーンのみがメインの回となっております。幼児に対する性的虐待シーンや残酷なシーンも出てきますので、それらが苦手な方は申し訳ございませんがスルーでお願い致します）

非情なる拷問処刑

「はい、脱ぎ脱ぎしようね？」

「お医者さんゴッコでもするの？　おねぇちゃん」

「うん。ある意味お医者さんゴッコだね。賢いなぁ志帆ちゃんは」

「お母さんとお兄ちゃんはどこ？」

「ちょっとあの林の中で色んなことと反省してるの。もうすぐここに来るから安心して」

『ズルズル……』

女子高生アイドルの島崎真理子によって、ズボンとパンツを脱がされる４歳の幼女。

島崎真理子。
真絆ガールズの最年長メンバーである。
しばらく体調を崩して高校もアイドル活動も休んでいたが、今日から完全復帰となった。

残酷処刑島での処刑執行メンバーとして……。

「菅野、この子は拘束しなくても良いの？」

「うん。暴れたら顔面殴りまくって大人しくさせてもらえますか？」

「……相変わらず残虐だねあんた」

「島崎さんも拷問処刑人に選ばれてるんですから……そこは心を鬼にして頂かないと……」

「はーい。つべこべ言って申し訳ございません」

色々辛いことや腹立たしいことも重なり、精神的に病んでいた島崎真理子だったが、かなりメンタル面で鍛えられていた。
罪悪感や戸惑いは持ちつつも、目の前にいる幼女の処刑を遂行する自信はあった。

「いきなり首を落とすのはダメなんだよね？」

「ダメです。あたしが朝説明した通り、たとえ幼児でも拷問処刑でお願いします」

「ふぅ。そっか。って訳だからごめんね志帆ちゃん……今から私が痛い事するけど許してね？」

「ええっ？　痛い事はやだ！　遊んでっ！」

意味の分かっていない幼女に対し、島崎真理子は黙ってTシャツも脱がしてゆく。

完全に全裸にさせると、莉央の方を振り向き、目で確認する。

「あっ、島崎さんちょっと待ってください！」

「え？　この子の処刑は中止なのか？」

「あたしの兄の京介が４歳の娘に見せたいそうなので」

「何を？」

「母親がレイプされてるシーンです」

「ほんっと、引くわ〜。あんたたちの発想は恐ろしすぎるなぁ」

林の中で拷問処刑を遂行する予定を変更して、母親の高井吉江４０歳と息子の博正６歳を娘の元へ連れてくる菅野京介。
後から鬼頭美紅も歩いてきた。

「林の中であたしのお兄ちゃんの京介がレイプして、美紅ちゃんが処刑する予定だったたんだけど……」

「ガハハッ！！　息子だけじゃなく娘も見てる前で犯す方が尚いっそうソソると思ってなぁ！　美紅ちゃんに聞いてみたらお前に連絡してくれてよぉ。ありがとなっ！」

京介に腕を掴まれて連れてこられた高井吉江も、既に素っ裸にさ

れていた。
美紅に手を繋いだまま連れて来られたのは6歳の息子の博正。
なぜ母親が素っ裸にされているのか理解できていないが、心配はしているみたいだった。

「ママッ！！　お兄ちゃんっ！！　ママもお医者さんゴッコするの？　診てもらう側だねあたしと同じ！　んふふ♪」

「あれ？　どうして志帆まで裸なの？」

「博正くんの今までの人生の中で、一番すっごいことが起こるからよく見てなさい」

美紅は静かに返事した。

母親に続き妹まで裸なので、不思議に思った兄の博正は美紅に問いかける。
これから身の上に起こる運命を何も知らない幼女の高井志帆は、母親と弟に再会できて大はしゃぎ。

「ママがどうなるかそこで見てろよガキどもっ！」

処刑の拘束具としてはもはや定番となった簡易ベッドに無理矢理押し倒すと、一気に両脚を拡げ、イキリ勃ったイチモツを性器に押し当てる。

「やめてっ！　いやあっ！！」

『ズチュッ……メリメリメリメリ……』

「ひぎいいいっ！？　いだあああああいいっ！！」

咄嗟に母親の元へ駆け出す志帆と博正。

「ママッ！？　やだあっ！！　ママを苛めないでえええっ！！」

「かあちゃんっ！！　かあちゃんっ！！」

志帆のおかっぱ頭をむんずと掴み、それを阻止する島崎真理子。
美紅も博正の腕を掴んで静止させた。

「いい子だからここからじっくり見てようね？」

「わーん！　わーん！　ママ嫌がってるよおおっ！！　離しておねーちゃんっ！！」

ゆっくりゆっくり挿入してゆく京介。
２０㎝程もある極太ペニスはまだ雁首辺りまでしか挿入されていない。

『メリメリ……メリメリ』

「んぎゃあああぁっ！！　痛いいいいっ！！」

「まだ半分しかはいってねぇぜ？　奥さんよぉ。ゲヘヘ……オラアッ！！」

『ズボオッ！！……バリバリッ！！』

遂に根元まで無理矢理捩じ込まれる京介のペニス。

膣口が少し裂けて鮮血が流れ出る。

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「んぎぎぎぎいいいいっ！！死ぬううううっ！！」

泣き喚く高井吉江に構う事なく激しく腰を振り続ける京介。

「死んだ旦那のチンポより倍くらいデカいだろっ！？　ガハハハハッ！！　こんなはしたない姿をガキどもに見られて幸せだろおっ！？んん……イク……イクぜぇえええっ！！」

『ドピュッ！　ドピュピュピュピュピュピュピュピュウウウッ！！』

大量の精液を膣内にぶち撒けた京介は、幸せそうな表情を浮かべながらイチモツを引き抜いた。
膣内とゆうよりは、子宮口まで雁首が入り込んでいたので、子宮内に直接精液をぶち撒けられた事になる。

「わーんわーん！！　ママァーッ！！　ママァーッ！！」

「かあちゃああああーんっ！！　こらぁ！　手を離せっ！　離せって！！」

激しく泣き喚く幼女を背後から抱き締める真理子。
美紅は腕を捻り上げて怒り狂う博正を黙らせる。

「今日だけの辛抱だからね？　夕方にはママとお兄ちゃんと仲良く三人で良い所に行ってるからね……」

京介がペニスについた血と精液を拭いている最中、鬼頭美紅は簡易ベッドの上で吉江を四つん這いにさせる。

「動いたら子供を目の前で殺してやるからね？」

「ううう……それだけはやめて……下さい」

超本格的な革の鞭をしならせる美紅。

「ふんっ」

『スパァンッ！！』

土の地面に少し穴が空く。
破壊力抜群の鞭だった。

「お尻に鞭打ち１００回ね。痛みでお尻下げたりへたり込んだりしたら……即、息子を殺してやるから。分かった？」

「ひっ、それだけは……わ、分かりました。我慢します」

後ろに鞭を振りかぶり、思いっきりしならせて吉江の臀部へ打ち下ろす美紅。

『ヒュンッ……スパァンッ！！』

「ふぎっ！？」

目を見開き叫んでしまうが、一発打たれただけで真っ赤に腫れ上がるほど強力な鞭だった。

『スパァンッ！！　スパァンッ！！』

何回も打ち込まれてゆくが、息子の身を想い、必死に耐える高井吉江であった。

莉央が幼女を抱き締めるように抱き上げる。
母親を想い延々と泣き続ける志帆に、そっと囁く。

「五人ね。……馬鹿なママに協力して毒盛ってあなたたち兄妹が殺した人の数だよ？　死ぬとゆう意味が……殺すとゆう意味が……あなたたちには分かってないと思うけど。親子三人揃って責任取ってもらうから覚悟しといてね。たとえ幼児だからって、あたしたちは容赦しないから」

島崎真理子は、細長い人参を鞄から取り出して、先端側細い方へローションをタップリ塗り込んだ。

莉央に抱かれたまま、真理子は幼女のお尻を左右に開き、人参の先端を肛門に押し当てる。

「コレ、根元まで入れたら死んじゃうかな？」

「入らなかったら膝で蹴り込んでもらえますか？」

「そりゃ痛そう……分かったよ莉央ちゃん。高井志帆、あなたの拷問を開始するからね？」

『つぷ……』

「んあっ！？」

女子高生アイドルの島崎真理子の手で、人参の先端が幼女の肛門へ１㎝ほどめり込む。

「ふんっ！！」

『ズボボボッ！！』

「ぎゃあああああっ！！痛いいいいいっ！！」

泣き喚く幼女に構うことなくグリグリと回しながら無理矢理ねじ込んでゆく。

「えいっ。えいっ」

「やだああっ！！　抜いてええっ！！」

奥に入るごとに肛門は押し広げられ、４歳の子供としては限界ま

で広がりきってしまう。

「きっとこのあたりが限界だね。長い人参だからまだ半分も入り切ってないいんだけど？」

「膝で蹴り込んで。一撃でお願い。殺す相手だしＳ状結腸ブチ破っちゃっても構わないから」

「了解でーす！　志帆ちゃん……死んじゃったらごめんな……せーの」

『ズドオッ！……ばちゅっ！！』

「ぎゃあああああっ！！　わーんっ！！　ぎゃああああああっ！！」

顔をクシャクシャにして泣き喚く高井志帆。
人参は長さ２０㎝、太い根元部分は幅５㎝はあったが、真理子の強烈な膝蹴りによって、全てが直腸に飲み込まれた。
莉央は正面から冷たい目でその顔を見つめていた。

「うんこする所から何か入ってきちゃったね？痛い？あたしのスカートと太腿があなたの汚い肛門からの血で血塗れなんだけど？」

両脇の下に手を入れて高く持ち上げ、思いっきり下に落下させる。
その下に待ち受けていたモノは……。

『ガキイッ！！』

「あぎゃあああああっ！！」

菅野莉央の膝だった。
股間へ強力な一撃が決まる。
出てこようとはみ出してきていた人参は再度直腸深くぶち込まれ、更に性器にも直撃していたため、小さな小陰唇まで裂けて膣口からも出血する。

「すっごい顔して泣いてるね？　あはは。膝打ち、もう一回いくよ？　それっ」

更にもう一度同じように膝で股間を打ち付けると、遂に幼女の柔らかい恥骨は莉央の膝によって粉砕された。

血の次は小便を漏らし、莉央の膝は血と小便塗れになる。

「あったかいなぁもう。あたしの膝に漏らしちゃうなんて更にお仕置きが必要だよね？」

Ｓ状結腸を突き破って夥しい出血をしている肛門から莉央は人参を引き抜くと、代わりにアナルプラグを強引に捩じ込んで、出血を止めた。

肛門括約筋が裂けているため、肛門自体からの出血も激しかった
が、後々の拷問を考慮して血止めの特殊な注射を会陰部に打つ。
顔を真っ赤にして激しく泣き喚く幼女を四つん這いにさせ、平手
でのスパンキングを開始する。
まだ幼き娘が酷い目に遭ってる事に気付かない母親の高井吉江は、
ひたすら美紅の鞭打ちに耐えているが、既に限界がきていた。
臀部の皮が殆ど剥けてしまい、真っ赤な肉片が見えている過酷な
状態での更なる打ち込みに耐えられるはずはなかった。
気が狂ったように泣き叫び、お尻を両手で庇いながら簡易ベッド
から転がり落ちる。

「あーあ。約束破ったわね？　娘はスパンキングに耐えているの
に……息子の博正は約束通り一番残酷に殺してあげるからね？」
「ううう、痛い痛い……ううう、博正！？博正ああっ！！」
『スパァンッ！！　スパァンッ！！』
莉央の強烈な平手打ちが４歳の幼女を責めまくっていた。
「わーんわーん、痛いよぉっ！！　ママァーッ！！　助けてええっ
！！」

「志帆おおおっ！！　やめてあげてええええっ！！」

博正より先に志帆の方が心配するべき状況であったことに気付く吉江。

美紅がそっと倒れ込んでいる吉江の前に立ち、体操部が使うバトンを持ち出してクルクル回す。

「このバトンでやったげる。スムーズに入るよう両側のゴムは細くカットしてあるから安心してね」

「志帆おおおおっ！！　やめてえええっ！！」

「娘の心配してる場合じゃないんだけどなぁ。よっと」

『ズブ……ズブブブブブブッ！！』

「ひいっ！？　いったああああいいいいっ！？」

四つん這いで這いながら娘の元へ馳せ参じようとする吉江の肛門へ、美紅のバトンが容赦なく突き刺さる。

『グリッ……ズズズ』

「んぎいいいいいっ！！　やめてっ！　お尻が裂けるっ！　壊れちゃ

うううっ！！」

「全部突っ込んだら口から出ちゃうかな？　あはは。半分くらいで止めてやるよ。ほらあっ！！」

『ドカッ！！……バリバリバリバリバリッ！！』

三分の一突き刺さっている状態から、足の裏で思いっきり蹴り込むと、一気に半分まで突き刺さった。

あまりの激痛に意識を失い小便を漏らす。

美紅はバトンを掴み、一気に引き抜いた。

「少しくらいゴムを細くしてもやっぱ裂けちゃったか……ごめん」

肛門は裂けて大きく開いてピクピクしながら腸からの鮮血が噴き出す。

息子の博正が駆け寄って吉江に抱きつき泣きじゃくる。

「わーんっ！　かあちゃんっ！　しっかりしてえぇっ！！」

鬼頭美紅の手の武器は、バトンから白檀の木へと換装されていた。

痙攣している吉江を仰向けに寝かせて股を開かせて縛り付ける島崎真理子。

「準備できたよ」

「サンキュ。よっと」

『つぷ……』

今度は散々京介に犯された性器……膣口へ白檀の木の尖った先端を突き入れる美紅。

『ズブブブ……ぶちぶち』

子宮口に突き入り、奥側を突き破った頃に激痛で目覚める吉江。

「うぎゃあああああっ！！」

「うるさいババァ！！　子供たちの前で串刺しにしてやるからおとなしくしてなさい」

『ズブブブブブ！！　バリバリバリバリ……』

腸を数枚突き破り、喉元まで切先が届く頃には、白眼を剥いて血を吐き始める。

「あがががが……ごぽごぽごぽぉっ！」

泣き叫びながら母親の最期を見続ける博正と志帆。
志帆は莉央のスパンキングの痛みを忘れるほど泣き叫び、母親の吉江を呼び続けていた。

『ばしゅうっ！！』

「ごぼおおおああっ！！……がくん」

遂に口から出てきた切先には、腸が絡み付いている。
右手で持った白檀の木をグリグリと掻き回しながら、左手で口からはみ出した小腸を掴み、引き摺り出してゆく。

「おーい。死んだかババァ？　ほらほら、あんたの汚い内臓がズルズル出てくるよ？」

『ズルルルルルルッ！』

素っ裸で串刺しにされて腸を引き抜かれている母親の胸に抱きついて泣きじゃくる息子の博正。

その後ろで莉央は志帆のスパンキングをやめ、金属製のフックを取り出した。
釣り針のように曲がって切先は鋭利に削られている。

「これ、どうするかわかるかな志帆ちゃん？」

「ぐすん。ぐすん。ママ……ママ……わーんわーん！」

肛門とお尻の痛みも我慢して目の前で死んでいる母親の姿を見つめながら泣き続ける志帆だったが、その股間には更なる脅威が近付いていた。

「名付けてマンコフックの刑……なーんてね♪　それっ」

『グサッ……』

「んぎゃあっ！？」

直径３㎝ほどの鉄製フックを幼女の性器へ突き刺す莉央。
惜しげもなく遠慮もなく４歳の幼児の処女膜は瞬時に破られた。

「恥骨の間を貫いちゃうからねぇ？　ここかな？　よっと」

『グボッ……ザシュッ！！』

グリッと器用に捻るように力を加えると、膣から刺さった切先は、志帆のおへそから飛び出した。

「んぎぎぎぎぎぎいっ！？ぎゃあーっ！！」

「あはは！　ヘソから刺し込んでマンコから抜くか……悩んだんだけどね。やっぱ性器から突っ込んだほうがエロいかなぁと思って。てへっ♪」

小悪魔のように舌を出して笑うが、やってることはとんでもない鬼畜の所業だった。

美紅は腹を抱えて笑ってるが、京介は母親が死んだ時点でとっくにダウン……島崎真理子は顔が引き攣っていた。

「このフックの紐を真上の木の枝に投げて引っ掛けるから一緒に下方へ引っ張って。志帆を逆さ吊りにしたいの」

「うん」

「了解！」

フックでマンコとおへそを貫通させされた幼女は逆さまに吊るされる。

痛みで泣き喚くが更に拷問は続く。

美紅は皮の鞭をゆっくり身構えると、一気に逆さ吊りにされている幼女の顔面を打った。

派手な音を立てて志帆の顔が変形する。

くちびるが裂けて血が噴き出した。

「とりあえず可愛い顔を無茶苦茶にしてやるからね？　どんどんいくわよ。それっ！」

二度目のヒットでは鼻の骨が折れて鼻血が噴き出した。
三度目、四度目、顔面を集中攻撃する鬼頭美紅の皮の鞭。
４歳の幼女の顔は歪に腫れ上がり、瓢箪のように膨れ上がってしまった。
プランプラン揺れながら足をバタバタさせて手で顔面を押さえながら泣きじゃくる。
莉央は日本刀を鞘から抜くと、スッと上段に構えた。

「手が邪魔ね。えいっ」

腫れた手を押さえる両手を肘あたりから片方ずつ切断すると、激しく出血し始めた。
今度は島崎真理子がチェーンソーのエンジンをかけて、志帆の両足を脚の付け根あたりから切断した。
マンコフックなのでダルマにしてもぶら下がったままである。

「サッパリしたわね。どう？　妹さんの小さくなった姿は？」

鬼頭美紅は、母親の死体と手足を切断されて歪に顔を変形させられた志帆を放心状態で見ている兄の博正のズボンを下ろしながら問い掛ける。

「ひ、酷いっ！　酷いよおおっ！！」

「なんの罪もない人たちを何人も毒殺したあんたたちが酷いわよ？」

『ズルリッ！』

そう返事をしながらパンツも一気に足首までずり下ろした。

「わあっ！？　やめてっ！　脱がさないでえええっ！！」

「シャツは着てていいから……下半身だけスッポンポンのままでいなさい」

「美紅ちゃん、妹の方は久しぶりに熱湯責めでもする？」

「いいね！ちょうど沸騰してる湯がバケツに三杯分はたまってるから」

一応予定していたら拷問なので、島崎真理子が予め沸かしてバケツに溜めていた。

「おーい！　何プランプラン揺れてるのぉ？　今からあんたの子供マンコから熱湯かけてあげるからね？　その前に……逆さずりで真っ赤になって変形しまくってる顔をもっと殴らせて♪」

『ガコッ！！　バキッ！！　グシャッ！！　ガコッ！！』

「ふえええええーんっ！！うぎゃあああああっ！！」

両手両足を切断されて性器からフックを通され逆さずり……さらにタコ殴りに遭う悲惨な幼女…高井志帆４歳であった。

しばらく殴り続けていると、兄の博正が大号泣し始める。

「やめてええっ！！志帆を許してやってええええっ！！わーんわーんっ！！」

歪に顔が変形して顔面血まみれの幼女は、これからさらに地獄をあじわうこととなる。

「島崎さん、調整お願いします」

「はーい」

吊っているロープを伸ばして、頭が地面スレスレになるよう調整する島崎真理子。

「膣に刺さってるフックは抜くの？」

「マンコにも熱湯流し込みたいからなぁ。一度フックは抜いてロープで直接縛ろうか……腰にロープをキツく巻いて」

「膣から熱湯流し込むの？　えぐっ。。子宮が茹で上がっちゃうよ？」

「あははは。ボイルにしてから子宮を解剖して茹で上がりを確認します」

「勘弁してよ菅野……」

真理子はドン引きしながらも志帆の性器に刺さっているフックを抜き取り、脚の付け根と腰にロープを巻きつけ、再び頭がスレスレ浮くぐらいに高さを調整する。

「４歳でこんな姿にされて顔面ボコボコにされて……しまいに臓器焼かれるなんて……不憫だな志帆ちゃん。私たちを恨まないでくれよ？」

鼻フックを二本膣に突っ込み、反対側に引っ張ると、幼女のマンコは全開にパックリと開いた。膣内が丸見えになる。

漏斗を膣から突き入れ、小さな子宮口を貫く。

これでダイレクトに子宮内に熱湯が注ぎ込める状態になった。

バケツからポットに入れ替えた熱湯を、ゆっくり性器に刺さっている漏斗へ近づける莉央。

「いい声聞かせてね……これから志帆ちゃまの子宮ちゃんにダイレクト便で熱湯をお届けしまーす！」

『トクトクトクトクトク……じゅううううう』

注ぎ込まれてゆく100度近い熱湯が幼女の内臓を焼いてゆく。

「んぎきいいいいいいいっ！！ぎゃあああああああああっ！！」

「そんな短くなった手足をバタバタさせても無駄だよ志帆ちゃん？マンコの奥が熱いねぇ？　今激痛を感じてる臓器で赤ちゃんつくるハズだったんだよぉ？　あんたには使うこともなかったけどね。ほらほらぁ♪」

どんどん注いで1リットルのポットの湯が全て無くなる前に漏斗から溢れ出した。
子宮に入りきらない熱湯は、そのまま漏斗から溢れて股間を焼く。大陰唇、小陰唇、クリトリス、尿道口、肛門と大火傷を起こし、股間全体が真っ赤になっていった。

「うーん……まだ子宮が半生っぽいからもう1リットルおかわりね

？　完全に火を通さないとダメだよね？」

更に熱湯を注ぎこみ、少しぬるくなった湯と再び熱湯とが子宮内で入れ替わる。

『トクトクトクトク……じゅじゅじゅじゅ』

「ぐぎゃあっ！！はぎゃああああああっ！！」

幼女は逆さずりのままで狂ったように暴れ狂う。

「もう子宮のボイルが完成したみたいね！　よしよしいい子だ。止めはマンコに直撃だから」

三杯目のおかわりは、漏斗を引きぬき、直接性器に降り注いだ。

『トクトク……じゅううううう』

大事な部分が真っ白にふやけてビロンビロンになる。
遂に膣口も肛門も赤から白に変色して火が通ってしまった。

口から血の泡を吐いて全身の痙攣を始める幼女。

「あははは。莉央ちゃん、死んじゃう5秒前だよそいつ」

腕を組んで楽しそうに見ていた美紅がつぶやく。

「じゃあ島崎さんに……止め刺してもらおっかな？」

莉央の言葉を聞いた美紅は、斧を取り出して真理子に手渡す。

「えっ！？　私が斧でっ！？」

「早くやりなっ！　死んじゃう前に最期の激痛を与えてやるんだ」

美紅が急かす。

「もう……て、手が震えるじゃん……え～と……マンコの割れ目に沿って縦に真っ二つにするつもりで打ち込めばいいのかな？　せぇの……えいっ！！」

『ドガッ！！……バキバキッ！！』

「ぴぎいいいいっ！？……がくんっ」

見事に割れ目に沿って食い込んだ斧の刃は、恥骨を軽々と粉砕し、子宮口も真っ二つにしてようやく停止した。
４歳の幼女、志帆の呼吸はこの時点で停止した。

「おおっ。マンコ真っ二つじゃん！」

美紅が嬉しそうに手を叩く。
莉央はパックリ裂けた股間から手を入れて、メスで更に切開して子宮を取り出す解剖にとりかかる。

「死んじゃったみたいだね。お疲れ様。お兄ちゃんもすぐに送ってあげるから成仏してね？」

『ザク……ズズズ……ぐちゃぐちゃ』

「よし！　取れたよ子宮。ほら」

『ベチャッ！』

座り込んで泣き喚く弟、博正の前に落とす。

『ベチャ！』

「さすがによく火が通って……焼いたミノみたいになってる！　ほら、妹の子宮のボイルだよ。食べる？」

「ひっ、やめてっ……志帆っ！　志帆おおおおっ！！」

四肢切断されて逆さ吊りにされ、股間から半分ほど身体を切り裂かれて、更に内臓を抉り出されて死んでしまった妹の屍を見ながら泣きじゃくる兄の博正。

母の死と妹の死を目の前で見せられた６歳の児童は、肉親を殺された悲しみや怒りよりも、ただ死ぬことが怖いとゆう恐怖に苛まれていた。

「うあうう……許して……許して……わーんわーんっ！！」

震えながら許しを乞いながら泣き叫ぶしかなかった。

下半身スッポンポンのまま小便を漏らす博正。

菅野莉央、島崎真理子、鬼頭美紅の美女三人に取り囲まれる様になった博正は、土下座までして泣き崩れている。

「おねーちゃんたちはね。土下座なんて望んでないよ」

「そうそう。博正くんのもがき苦しむ姿を求めてるの」

「……」

莉央に続いて美紅も冷たく言い放つ。
真理子だけは何も言えなかった。

「島崎さんからも何か言ってあげて」

莉央が促す。

「え？ 何かって……あ、あの、拷問なのでかなり痛いけど我慢してね」

真理子の必死で放った言葉が更に男子児童を恐怖に陥れる。
大便まで漏らして泣きじゃくる。

「きったないなぁ。ついでだから浣腸して全部出してもらおうか？ みんなでお尻虐めたいし……」

１３歳の少女、莉央はそう言いながら特大の浣腸器をセットし始める。
美紅と真理子が博正を四つん這いにさせ、グリセリン濃度１００％の浣腸を施す。

「ほら、ここかな博正くんの肛門は？ グリセリン濃度１００％の強烈なのをあげるから……出来るだけ我慢してね？」

『つぷって……ぷちゅううう』

「ひっ！？　冷たいっ！？　やぁぁぁあっ！！　やめてええっ！！」

『ブリブリブリブリッ！！』

ほぼ即座に便を出してしまう博正だった。

中学生の美紅がペニスバンドを装着して幼児用とは思えないほどのバイブをセットする。

「じゃあ島崎さん、肛門ほぐしといてくれます？」

「あ、う、うん」

あまり性的な虐待に慣れてない女子高生の島崎真理子は、頬を真っ赤にしながら４歳の男子時代の肛門へ人差し指をゆっくり差し込んでゆく。

『つぷっ』

「あんっ！？」

女の子みたいな声を出してしまう博正。

まだ涙は止まらない。

『ズズズ……ズボッ！！』

「ひゃああっ！？」

遂に根元まで女子高生の白いしなやかな指は、４歳の幼児の肛門へ突っ込まれた。

ゆっくり掻き回し始める真理子。

……もう十分ほど掻き回している。

「あの、島崎さん、もうアナル掻き回すのはその辺でいいと思います……あはは」

「ご、ごめんっ！すぐ抜くわ」

直腸を掻き回すのが思ったより楽しくて興奮した真理子はついつい長時間ほじくってしまう。

待ちくたびれた美紅が幼児の背後に歩み寄る。

両手の親指でお尻の肉を掴み、前回に左右に押し開いた。

『くぱぁ～！』

「やあっ！？　見ないでぇえっ！！」

恐怖の中でも女の子たちに肛門を広げられてまで見られる恥辱感から叫んでしまう博正だったが、美紅に即咎められる。

「何を恥ずかしがってるの？　お前は今からあたしたちに犯されて殺されてバラバラにされるんだよ？ほらっ。特大のをくれてやるよ」

『ズ……ズブブ』

「んぎいっ！？　痛いいいいいっ！！」

更に奇声を上げて泣き叫ぶ児童に構うことなく、長さ１５㎝、直径３㎝のバイブをゆっくり菊門へ捩じ込んでゆく美紅。
半分ほど入った辺りで一度止めて、一気に根元までぶち込んだ。

「んぎぎぎぎいいいいっ！！　やまたやめてやめてぇええええっ！！」

『バッコンバッコンバッコンバッコンッ！！』

「死ぬっ！！　死んじゃううううううっ！！」

「死ねよ。あははは」

『バコバコバコバコバコバコバコバコバコバコッ！！』

更に腰を振る速度を上げると、思わずお腹を地面につけてお尻を下げてへたり込んでしまう博正。
一瞬バイブが抜けてしまうが、うつ伏せにヘタリ込んでしまっている姿勢のまま、美紅が覆いかぶさるように抱きつき、再度肛門へ突き入れた。
そのままの体勢で再び激しいアナルファックが再開される。
あまりの激痛に両手で美紅の太腿を引っ掻いてきた。

「莉央ちゃん、こいつの手をどうにかして！　あたしの太腿傷だらけにされちゃうよ」

「仕方ない子だねこの子は……」

莉央はそう言いながらチェーンソーを手に取り、エンジンをかけた。
右足で手の甲を踏み付けて博正の右手を肘あたりから一気に切断する。

「ぐわあああああっ！！」

児童とは思えないほどの絶叫を上げるが、莉央はお構いなしに左手も同じ様に肘から切断した。

「処刑人を傷付ける罪人なんて聞いたことがないんだけど？」
皮肉を男子児童に言い放つと、後の拷問に備えて、ある程度の痛みは麻痺する注射を背中に打った。
「痛みはかなり和らぐから安心してね。ショック死だけじゃなく失血死もされたら困るから、ついでに血止めの注射も打っといてあげるから」
二本の注射を打たれた後、肛門からの激しい出血も穏やかになり、絶叫もほとんど上げなくなって落ち着いてきた。
それでも完全に痛みが消えるわけではないので痛みに耐えながら泣き続ける高井博正であった。
両肘に包帯をぐるぐる巻きにされて、肛門責めの次は全身の鞭打ち刑が開始される。
手で顔をガードできないので、必然的に後ろを向いて背中ばかりに鞭を受けることになった。
何十回、何百回と莉央たち三人が交代しながら革の鞭を打ち込み続けるうちに、背中の皮がズルズルに剥けて血塗れとなってしまう。
「痛いよぉ！　アーンアーン！　痛いいいいっ！！」
泣き続けても少女たちの責めは止まらない。

「じゃあ次は抜歯タイムだね。痛いけどズル剥けの背中を下にして仰向けに寝てもらおうか？」

抵抗するが、６歳児で両手が無い状態では高学年の小学生の女子一人にさえ勝てない。
無理矢理簡易ベッドに拘束されて、腰と首をベルトで固定された。

「アーンして」

大きめのペンチを持って博正に話しかける美紅。
拒否して頑なに口を閉じたまま動かない児童に、莉央がバッテリーを繋いだ電極棒を用意した。
二本のソレをカンカンと擦り付ける度に強烈な火花が散る。

「直径２㎝のこの電極棒……どうすると思う？」

美紅と真理子はハテナ顔で首を傾げている。

「こうするの」

『ズブブ……』

「ひぎいっ！？」

片方の電極棒を無理矢理肛門からねじ込むと、片方を皮カムリのペニスに押し当てた。

『バリバリバリバリッ！！』

「んっぎゃおおおおおおっ！！！！」

『プスプス……』

「あはは♪　スッごい威力だね！　みんな萱野ラムちゃんってあたしのこと呼んでくれる？」

ペニスと肛門から煙が昇る。

「萱野ラムちゃんありがとう！　口が開いたからこの隙を逃さない」

『ガツッ……グリグリグリグリ』

「むごっ！？　うごごごおっ！！」

『ばちゅっ！！』

前歯の一本が美紅によって引き抜かれた。

慌てて口を閉じるが、再び肛門と陰部に莉央の電撃が走る。
地獄の激痛の繰り返しにより、一本一本確実に歯を抜かれてゆく博正。
遂に奥歯まで全ての歯を抜かれて口内が血まみれになる。
「全部抜いたよ。もう好きに身体中焼いちゃったら？」
「そっか。もう抜歯に合わせなくてもいいもんね。ほら少年！　僕のオチンチンを焼いて下さい、と言え！」
「むごごご……うぉーん、うぉーん！」
博正はハッキリ喋らないまま泣きじゃくるしかなかった。
「え？　チンポもアナルもこんがり焼いて欲しいって？　分かった！　じゃあやったげるね？」
『ズブ……バリバリバリバリバリバリバリバリバリッ！！』
「うぎゃあああああああっ！！」
更に数十回繰り返し、直腸と肛門は焼けただれて、電極棒に腸の肉片が付いて出てきた。
ペニスも皮が焼けて剥けてしまい、尿道から血の泡が噴き出している。

更にズタズタの肛門をメスでくり抜き、同じくグチャグチャになってしまった直腸を指を突っ込み掻き出す莉央。

「あーあ。焼いたホルモン状態じゃん。もうウンコなんてできないね……要らない腸なんて引き摺り出しちゃおうか？　島崎さーん！お願いします」

「え？　また要所要所で私なのかよっ！？」

「大腸は全て引き摺り出して下さいね」

「もう、ほんと菅野さんたちは怖いなぁ……分かったよ」

『ぎゅっ……びちょ』

「わっ！　気持ち悪っ！　グニャグニャしてるっ！？」

S状結腸を生で掴んだ感触があまりにビチャついていたので、気持ち悪くてつい手を離してしまう真理子。

再度気合を入れてしっかり掴むと、グイグイ引き摺り出し始める。

「えいえいえいっ！！　こうか？」

『ズルルルルルルッ！！』

「うぎいいいんんんんっ！！」

「うん！　いい感じです。そのまま下降結腸から横行結腸から大腸は全て引き摺り出して下さいね。小腸に切り替わるからそうなったら美紅ちゃんに交代してください」

「あ、ああ。分かったよ！　それえええっ！」

『ズルズルズルズルッ……ぷるるるるんっ！！』

「ひゃあああああっ！！　いはいよおおおっ！！　いはいいいいむ！！　ひゃめへえええっ！！」

歯を抜かれてまともに喋らないが、とにかく腸を抜かれている激痛に絶叫を上げる６歳の男子児童であった。

ペニスを根元からメスで切断する莉央。
そのまま皮を剥いて縦に真っ二つに切開し、開いて尿道の中までみんなに見せる。

「尿道から雁首から白く変色しちゃってんじゃん！　電撃で焼けた証拠だよね？」

美紅がエッチそうな笑みを浮かべて尿道を人差し指でグリグリ突っつく。

「尿道は元々白いんだけど確かに火は通ってるよ。キンタマも見て

みようか？」

「うん！　早く取り出して！」

美紅に急かされて慌ててメスを入れる。
真理子は必死で大腸を抜いていた。
会陰部にメスを入れて、ペニスの切断面まで一気に切ると、陰嚢がパックリ開いて二つの睾丸が飛び出してきた。
二つとも精管と神経の管を切り、美紅の掌の上に乗せてあげる。

「おおっ！　ちっこいヤツの割に大きくない？　莉央ちゃん！」

「そだね。なかなかいいタマ持ってたなこの子……さて。殺しちゃうから陰嚢を縫合する必要もないし……あっ！　小腸に変わったから美紅ちゃんに代わってあげて島崎さんっ！」

急に腸が細くなり、小腸に切り替わった。
ここからは美紅が猛スピードで小腸を引き摺り出す。

「オラオラオラオラオラオラァーッ！！　このクソガキめっ。どんどん汚いケツ穴から出てくるわねぇっ！？　このソーセージみたいなのは何なの一体！？　あはははははっ♪」

『ズルルルルルルルルルルルルッ！！』

「うひゃあああああああっ！！」

博正は全身をヒクつかせながら肛門を閉じようと力を入れるが、既に肛門自体が莉央によって焼かれた上に、くり抜く様に切除されているため、全く力が入らなかった。

「そんなにピクピクしないの！　いい子だから。あっ、そうだ。これスッゴく痛いの知ってたかな？　こうやって……こう突っ込んで……えいっ！」

『ズンッ…ズンッ！！』

割り箸を二つに折り、両方の鼻の穴に突っ込むと、掌底で二回鼻穴に叩き込む。

ものすごい勢いで血が流れ出る中、今度は割り箸をペニスの切断面に開いている尿道から膀胱まで一気に刺し込んだ。

『ズブ……ぶちゅっ！！』

目一杯の奇声を上げて大粒の涙をポロポロ流すが、莉央は澄ました顔で刺し込んだ割り箸を掻き回す。

膀胱からの血が切断面から噴き出してくる。

「あはは。痛い？　苦しい？　もう少しでお母さんと妹の所へ行け

るからね？」

割り箸を尿道から引き抜くと、今度は右の目玉に突き刺した。

必死で目を瞑って回避しようとするが、瞼越しに無理矢理ぶち込まれ、目玉はミンチとなってしまった。

『グリッ……グチャグチャ』

「はおおおおうううっ！！」

そのまま左目にも突っこんで掻き回す。

完全に両目を失明させせると、おへそからメスを入れて内臓を露わにさせた。

美紅によって引き摺り出されるごとに段々と減ってゆく様を見て楽しむ莉央。

「あはは♪　腸がどんどんなくなっていくねぇ？　もうちょっとでハラワタ全滅だよぉ？」

激しい痙攣が始まり、血の泡を噴き出すのを確認すると、小型の爆弾を心臓の上に置く。

「もう少しで腸が全部抜き取れるから頑張れっ！」

「うん！　オラオラオラァッ！！」

『ズルルルルルルッ……プリュンッ！！』

「やったあ美紅ちゃん！　出し切ったよ！　じゃあ早く離れてっ！」

慌てて博正から離れる三人。

激しく爆発する特殊任務省新開発の小型爆弾によって、小学生児童の身体は木っ端微塵に吹っ飛んだ。

「スッゴおおいっ！　身体が跡形もなくバラバラの肉片になっちゃったぁっ！」

「ず、頭蓋骨までバラバラかよ……の、脳みそが……おええええっ！！」

大はしゃぎする美紅の隣で盛大に吐き始める島崎真理子。

「おーい！　もう処刑は終わったのか～？……うっ！？……内臓ズルビチョじゃねぇかっ！？　おえええええっ！！」

菅野京介も現れて事態を確認するが、ミンチの様な肉片を見て真理子と並んでゲロ大会となってしまう。

「お二方は大変苦しそうですが、これにて本日の拷問処刑を終了します！　皆さんお疲れ様でした」

お決まりになっている莉央の一言で、拷問処刑は終了した。

残酷処刑島に新たに三つの骸が加わることになった。

非情なる拷問処刑（後書き）

幼児までをも手にかける残酷処刑人たち。
この世から理不尽な殺人をなくすために……更に残酷処刑島に骸が
増えてゆく……。

姉弟の悲運（前書き）

幼児、学生、大人、いくつになっても絶えないイジメ。
中学校で起こったイジメは異質なものだった。

姉弟の悲運

「ほら、弟の制服脱がせろよ」
「やめて……私は何でもするから聖司には何もしないで」
　東部地方南部にある甲南中学校の三年三組で、姉と弟が辛い目に遭っていた。
　安原美希。所属していたクラブを辞めたとゆう事が理由での苛めであった。
　放課後だった事もあり、他の生徒たちはほぼ帰宅している。
　一年一組の弟、安原聖司まで教室に連れてこられて姉弟揃って苛められていた。
　女子レスリング部三年の秋山祐子、夏川麻里、春日朋美の三人は同じ三組であり、同じレスリング部であった。
　この三人によるイジメである。
「あんたが急に辞めたせいで大会に出られなくなったこと……分かってるの？」
　レスリング部のキャプテンでもある秋山祐子が髪の毛を引き回しながら叫ぶ。

「痛いっ！　は、はい。分かってます！　ごめんなさい」

三人のいじめっ子たちは、皆１７０㎝を超えており、本気で強かった

ため、一年生の弟である男の安原聖司さえも逆らえなかった。

この中学校自体が女尊男卑とゆう形式が成り立っており、女子に逆らったものはタダでは済まないとゆう風習ができていたのもある。

二年生の鬼頭美紅、西村百合香、中田美佐子の最強三人組が仕切っていたからだ。

何度も平手打ちを受け、頬が真っ赤になる姉の安原美希を泣きそうになりながら見詰める弟の聖司。

「今日はビンタだけじゃ済まさないから……ね？」

リーダー格のレスリング部キャプテン、秋山祐子が仲間の二人に同意を求める。

「そうそう。弟の見てる前ですっごいことしてもらうから」

「あははは！すっごい事って何よ朋美っ？」

「オナニーだよ。ってわけで……制服を全部脱げっ！」

三人で安原美希を取り囲み、全裸を強要する三人。

「わ、わかりました。でも弟には何もしないで下さい……」

「分かったよ！　さっさと脱げ」

三人の中でも一番口の悪い春日朋美が強い口調で命令する。

涙を流しながら制服を脱いでいき、ついにパンツ一枚となる。

ここで手を止めて号泣し始めるが、一番の怪力を誇る夏川麻里が無理矢理脱がせにかかった。

「いやっ！　だめっ！　許してえぇっ！」

一気に足首まで引き摺り下ろすと、ビリビリに破いて教室にばら撒いた。

「あはは。素直に言うこと聞いていたら弟は許してやったのに……後で弟も色んな事してやるんだから」

腕を組んで不敵に笑いながら美希を見下ろす麻里。

キャプテンの秋山祐子は、しゃがみ込んで素っ裸で泣いている美希の腕を掴んで無理矢理立たせてから背後に回り込み、背後から両腕を回して腰をクラッチし、そのまま後方へと反り投げ、背中から床に叩きつけた。

「出た！　キャプテンのジャーマンスープレックスだっ！」

「本気で女子プロレス目指してる私たちには練習台が必要なのよ。なのに辞めちまいやがって！　絶対ゆるさねぇからな？　ん？　エッチな部分丸見えだぜ？」

朋美はジャーマンスープレックスを決められて足をバタバタさせている安原美希の傍らにしゃがみ込んで、人差し指をピンと立てると、股間にそっと突き入れた。

「食らえオラアッ！！」

『つぷっ……』

「ひゃあっ！？　そんなトコやだっ！？　やめてお願いっ！！」

「綺麗なピンク色してんじゃねーか。お前のマンコ……まだ処女だよな？」

「や、やめて……」

「バージンもーらいっ♪　ほらっ！」

『ズブ……ズブブ……バリッ！』

「痛いいっ！！　やだ……やだぁ～。わーん、わーん」

激しい膣の痛みと、処女膜を同性に破られたショックに泣き崩れる姉の安原美希。

「そのまま押さえ込んでてねキャプテン……ほら、こっちの穴にはコレをあげるね」

『ズブ……ズズズ』

「やはあっ！？痛いいいっ！！」

夏川麻里は芯を引っ込めている状態のシャープペンシルを先から肛門へ突き入れた。

「心配ないよ。芯は出してないから血は出ないでしょ？　あはは」

春日朋美の指と、夏川麻里のシャープペンシルで膣と肛門を同時に掻き回される美希を見ながら弟の聖司は大声を出した。

「やめろおおおおっ！！ねーちゃんが痛がってるじゃないかっ！！」

それを聞いて黙って指とボールペンを抜く二人。
キャプテンの秋山祐子も決めていたジャーマンスープレックスを解除させる。
ゆっくりと立ち上がり弟を睨み付ける三人。
股間を両手で押さえながら泣き崩れる姉の美希を背にして、ゆっくりと聖司の元へ歩み寄る。
秋山祐子がタックルをかけて後方へ引き倒すと、夏川麻里が右腕を取り、肘関節を決める。

「ぐわあああっ！！お、折れるうううっ！！」

口の悪い春日朋美がニヤけながら問い掛ける。

「おい弟っ！　このまま腕をボキッといくか、私たちの言うことを聞くか答えてもらおうか？」

『ギュウウウウ……ミシミシ』

「ぐわあああっ！！」

夏川麻里の太腿に押し付けられた右腕の肘が悲鳴を上げる。
後数センチでも手前に捻り上げれば、即骨折するとゆう段階まで決まっていた。

「な、何でも言うこと……き、聞きますから……やめて」

半泣きになりながらキャプテンたち三人の要求を飲むことを宣言してしまう聖司だった。

「はい。気をつけっ！」

「は、はいっ！」

ピシッと気をつけ、の姿勢を取らされた後、ズボンとパンツを脱がしてゆく春日朋美。

『ズル……ズルリッ！』

「ううっ！？……やめて」

「はーい。フルチン男の登場だぁっ！　ほら、そのまま下半身曝け出したままおねーちゃんの前に行け！」

「嫌だよっそんなの……」

『ドカッ！！』

背後から夏川麻里が思いっきり蹴飛ばすと、姉の美希の眼前に転がり込んだ。

「大丈夫！？」

「いてて……う、うん。どうにか」

立ち上がって、ふと姉の方を向くと、まともにオチンチンを見られていることに気付き、慌てて両手で股間を隠す聖司。

「もう見ちゃったから……隠さないでいいよ聖司」

「え！？　で、でも……やっぱ恥ずかしいし……」

「言うこと聞かないともっと酷い目に遭わされそうだから……我慢して。ね？」

「……うう。う、うん。分かったよねーちゃん」

背後からゆっくり忍び寄るキャプテンの秋山祐子。

「おーい！　どうしたのかな？　手をどかさないとお姉ちゃんにオチンチンを見てもらえないでしょう？」

被害が及ぶ前にと、勇気を出してゆっくり手をどかす。
それをじっと見つめる姉の美希。

「あははは傑作だなおい！　弟のチンポをジッと見つめるスッポンポンの姉と、下半身のみスッポンポンで姉にチンポを見せる弟！　バッカじゃねーのっ！？　変態っ！　あはははははっ！！」

その光景を見て腹を抱えて笑う三人の中でも一番男勝りな春日朋美だった。
キャプテンの秋山祐子がボソッとつぶやく。

「しごけ」

「……」

「しごけ」

「え？」

一度目は耳を疑い黙っていたが、二度目では確実に聞こえたのでおもわず聞き返す安原聖司。

「姉の前でオナニーしろ」

「えっ！？　やだよそんなことっ！！」

「じゃあ先輩を呼んでるからお姉さん犯されてるトコ見ながらシゴけよ？」

そう言いながら指をパチンと鳴らすと、教室のドアがガラッと開いて、３０歳前後の茶髪モヒカン頭のイカつい顔をした見るからに頭の悪そうなヤクザみたいな男が入ってきた。

「祐子！　ホントにいいのかよ？」

「いいよ。前も後ろも犯してやって」

中学校の教室に乱入してきた男は素っ裸で叫び続ける安原美希を押さえ付け、無理矢理正常位で抱きついた。

慌ててズボンとパンツを膝まで下げ、ビンビンにいきり勃っているイチモツを美希の陰部に押し当てた。

『グリッ……メリメリ』

「痛いっ!?　ひいいっ！！　やめてえええっ！！」

「ゲハハハハッ！！　まさか本当にＪＣと本番出来るなんてよぉ！ラッキーすぎんぜっ！！オラアッ！！」

『ズブブ……ぼちゅっ！！』

「んぎいいいいっ！！　痛いいいいいいっ！！」

正常位でイチモツを根元まで突き入れると、弟の聖司ご見ている前で激しく腰を振り始めるヤクザ風なモヒカン男。

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「いやあっ！　許してえええええっ！！」

狂ったように泣き叫びながら姉を助けにゆく下半身のみ裸の弟だったが、春日朋美に足を払われ派手に転倒する。

そのままマウントを取られ、今度はゲンコツでの顔面殴打を始める。

「お前が弱いからねーちゃんが犯されてんだよオラアッ！！　分かってんのかっ！？　オラオラオラアッ！！」

『バコッ！！　バキバキッ！！　ドカッ！！　グシャッ！！』

「ひぎっ！？　ぶはっ！　ぎゃはあっ！！　ひぎいっ！！」

姉と変わらないほどの大声で泣き喚く弟に呆れた春日朋美は、更に強く顔面を殴り続けた。

その頃、ヤクザ風な男は姉の膣内に大量の精液をぶち撒ける。

『ドピッ！！　ドピュピュピュピュピュピュピュウウウッ！！』

「やあああああああああっ！？」

犯し終わり一度立ち上がると、今度は足で美希を蹴り転がせる。

「次はバックだ！　ケツアナ犯してやるから覚悟しろ」

「ひいっ！？　いやあっ！？」

後背後からしがみつき、肛門から一気にイチモツを突き入れて激しく犯す３０くらいの男の行為を見ながら頬を赤くするキャプテンの秋山祐子と夏川麻里。

春日朋美は未だだらしがない弟の聖司を殴り続けている。
小便を漏らして足をバタバタさせるが、マウントポジションを返せない内は殴られ放題だった。
鼻血をドクドク流しながらもがき続けるが何も出来なかった。

やがて美希の肛門にも大量の精液を出し終えた男は、秋山祐子に感謝を述べて教室を去ってゆく。

「またチャンスがあれば頼むわ！　サンキュ！」

両手で膣と肛門を押さえて横向けに寝転がった姿勢で泣き崩れる安原美希。
その指の間からは白い粘液が垂れ流れてきていた。

「わぁ。エッチだなこの絵面も……」

秋山祐子は更に頬を赤くして、美希の二つの穴から流れ出る液体を見て興奮している。

「弟の射精も早く見たいよね？」

思い出したように夏川麻里が呟く。

「朋美っ！　もう殴らなくて良いからそいつも射精させてやって」

「え？　私がやるのか？」

「コレつけて先ずはトロコテンの刑だよ！」

夏川麻里が用意していたペニスバンド……前立腺を抉るような角度の大きい真っ赤な張形が装着されていた。

「あ？　トロコテンって何だよ？」

「アナル犯して無理矢理射精させるの」

秋山祐子の説明を聞いて一気に頬を紅潮させる春日朋美。

「ええっ！？　シゴかなくてもケツなんかでイケるのかよっ？」

「前立腺を抉るような作りの張形だからねそれ！　やってみて」

「あ、ああ。オラッ！　もう殴らないでやるから四つん這いになってケツ突き上げろ」

「ん、んん。い、嫌だ……そんなもの入れられるなんて絶対嫌だっ！」

顔を押さえながらも泣きながら抵抗する弟の聖司を図体のデカい女三人がかりで無理矢理四つん這いにさせる。

「動いたら殺すからね？」

キャプテンの秋山はそう呟くと、お尻の肉を左右に広げる。中学一年生男子の肛門が、パックリと開いてゆく。

「はい、朋美。ぶち込んであげて！」

「あ、ああ！　行くぜオラアッ！」

『つぷ……ズブブ』

「ひぎいっ！？　痛い……痛いいいい」

「気持ち良くさせてやっから大人しくケツアナ開いてろよガキめっ！」

『ズブブ……ズボオッ！！』

「ぎゃああああああっ！！」

直径３㎝、長さ１２㎝はあろうかとゆう大きな張形は、１３歳の少年の肛門へ根元まで突き刺さった。
更に激しく腰を振る朋美。

「いやあっ！！　やめて抜いてええっ！！」

「オラオラオラアッ！！　ケツマンコ気持ちいいかあっ！？」

『バコバコバコバコバコバコバコッ！！』

「ひんぎいいいいいっ！！」

弟が同級生に犯されている姿を見て、姉の美希はゆっくり這ってでも助けに行こうとするが、夏川麻里に静止させられる。

竹刀を取り出して美希のお尻を叩き始める秋山祐子。

「麻里、コイツ押さえててね。実は前から竹刀でケツ叩きまくってやりたかったの」

「ははは。Sだなぁキャプテンも……」

『バシィッ！！　ビシイッ！！』

「んぎっ！？　ぎゃあっ！！」

臀部を竹刀で叩き込まれて号泣する姉と、ひたすら肛門を掘られて号泣する弟……。

「んんんっ！！　んんんんんっ！！」

ボコボコになっている顔が更に赤くなり、涎を垂らして膝をヒクヒクさせ始める聖司。

「見てっキャプテンっ！　コイツもう出そう！」

「あっ！……なんかヒクヒクしてるぅ。ホントだ……ほら、出せ！

エッチな液たくさん出してみてよっ！」

「は、はうう、んんんっ！！」

『ドクドク……ドクドク……トロトロ』

勢いこそなかったが、夥しい量の精液を吐き出す聖司だった。
１５歳の少女である朋美のバックでのレイプによって、前立腺を無理矢理に抉られた少年は、強制的に射精にまで至らせられるのであった。

「わぁ～。お尻を掘られてホントにイッちゃうんだ～」

「キャプテンってば顔真っ赤だし……ヤラしいんだから」

はしゃぐ二人を見ながら不満を溢す春日朋美。

「バックで犯したら出るとこ見えないじゃん！ずるいぞ」

怒りながらペニスバンドの張形を聖司の肛門から引き抜く朋美に、キャプテンがアドバイスをする。

「まだ勃ってるよソイツ……朋美のアナルファックがよほど気持ち良かったんじゃない？　手で触ってみて？」

「ん？　あ、そ、そうか？　じゃあ遠慮なく……こ、この辺りかなぁ？」

固い肉塊にドロっとした液体の感触を右手で感じ取る。

「こ、こんなに固いんだチンポって……」

「あはは。何あんたが照れてんだよ朋美っ！」

普段一番気の強い春日朋美が妙に照れているのでキャプテンの秋山祐子はおかしくてたまらなかった。
笑いながらも竹刀で美希のお尻を叩いている。
夏川麻里も笑いながらその光景を見ている。
美希の少し膨らみを帯びた胸を両手で揉みしだきながら。

気は強くても男子のオチンチンを触るのことは人生で初めてだったので、かなり緊張して照れている朋美だった。

「そのまま手コキでイカしてやりなよ？」

「あ、わ、分かった！」

『シコシコシコシコ……』

慣れない手つきで手コキを開始する朋美。

「う、うう、あああああ」

姉の見ている前でボコボコにされながら、肛門を掘られながら、更に女子中学生の先輩から手でシゴかれる哀れな少年であった。

「もうケツバットやめてやるから弟のチンポを舐めろ！」

「わっ。キャプテンったら凄い発想だね！　私も胸を揉むのやめてやるから早くチンチン舐めて！　見たーい♪」

結局激痛のお尻叩きを味わうより恥辱を選択した安原美希は、朋美にシゴかれている弟のペニスを咥え込んだ。

『シコシコシコシコ……カプッ！　んんっ！』

「やだコイツ……ホントに咥えちゃった」

ドン引きしているキャプテンの秋山祐子に朋美が口を挟む。

「おいおい！　あんたの命令だろがっ！？」

ヤンキー見たいな女子とは言え、目の大きな可愛い顔をした朋美の手コキで、どんどん勃起してきたおとの聖司は、もう射精を制御することは出来なかった。
たとえ姉が咥えていても……。

「うああ！　うううっ！！」

『ドピッ！　ピュピュピュピュピュピュッ！！』

「んごおっ！？　んんんんっ！！」

いきなりの口内射精に、思わず声を漏らしてしまう美希。
実の弟の精液を口で受け取った姉は、次の瞬間吐き出していた。

「おえええええーっ！！　ゴホッ！！　ゴホッ！」

「コラコラ！　大切なタンパク源を吐き出して勿体無いなぁ」

キャプテンは腹を抱えながら爆笑して指を指す。

「飛び出すトコ見たかったたんだけど？」

朋美が不平を言う。

「シックスナインさせて今日の授業は終わりにしようか？」

夏川麻里のとんでもない提案に周りの全てが固まったが、数秒後には無理矢理その体勢にさせている三人であった。

「ほら舐めろ！　おねーちゃんのマンコだぞ？」

「精液まみれのチンポ……もっと舌で綺麗にしてやれよ？　弟なんだろーがよっ！？」

秋山祐子と春日朋美が暴言を吐く。

泣きながら姉弟で互いの性器を舐め合う二人。
しくしくと啜り泣きしながらもピチャピチャと卑猥な音が響く夜九時の教室。
甲南中学校では女子の言うことは絶対である。
校長ですら女子生徒には逆らえなかったから仕方がなかった。

――一週間後。甲南中学校三年三組。

「アイツあれからずっと学校こねぇな？」

「流石に姉弟でエッチさせたのはやりすぎたか？　ねぇキャプテン？」

「一年の弟までずっと一週間休んでるみたいだから。今日くらい見舞いに行こっか？」

「あはははははは！！」

三人で大爆笑。

静かにドアが開き、少女が三人入ってくる。

そのままツカツカとやって来て三人の前で立ち止まる。

「何だよお前ら？　二年か？」

「鬼頭美紅ってゆうんだけどあたしのこと知らない？」

「え？　あ、あんたが鬼頭美紅さんっ!?　ご、ごめんなさいっ！　もっとイカつい人想像してた……」

噂を聞いていているだけに焦るキャプテン。

朋美も続ける。

「美紅さんに百合香さんに美佐子さんだね。あたしは名前まで知ってるよ。その最強の三人が何の用なんだい？」

夏川麻里だけは何も喋らず美紅たち三人の姿をまじまじと見つめていた。

「放課後……体育館に来てもらえる？」

「体育館？　なんで？　今日は同級生の見舞いに行こうと思ってるからよぉ……」

西村百合香が突然笑い出す。

「あはははは。見舞いに？　もうその子、死んじゃってるわよ？」

「え？」

目を丸くして驚く秋山祐子たち三人。

「弟さんもＰＴＳＤとかゆう精神疾患でもう普通じゃなくなってるわ。。よく言えたわねお見舞いなんて……」

中田美佐子は睨みつけながら強い口調で言った。

これは逆らえないと思ったレスリング部の屈強な三人は、美紅たちに言われた通り放課後の約束をする。

まだこの時は自分達の運命を知らなかったため、笑いながら楽しく授業中もおしゃべりをして過ごした。

運命の放課後がやってくる。

体育館に三人対三人が対峙する。

「一体何なのかな？　鬼頭さん？」

「あのね。いくら女尊男卑に決めたこの学校でも、訳の分からない中年男を招き入れてセックスさせるなんてことは許されないんだよ？　分かる？」

「ど、どうしてそれを？」

「特殊任務省を舐めないで。えーと。とにかく三人は死刑。じゃなくて私刑……痛い目に遭ってもらってもらうからね？」

冷たく言い放つ鬼頭美紅。

その瞬間体育館へ入ってくる小学生がいた。

「美紅ちゃん頑張ってる？」

「莉央ちゃん！　待ってたよ。それが例の恐ろしい機械だね？」

「うん。簡単に子宮丸ごと抉り出せちゃうんだよぉ。まぁ知ってる

と思うけどね」

「あはは。知ってるよ。しっかり回収するから見てて」

「はーい。殺しちゃダメだからね美紅ちゃん。あ、百合香さんに美佐子さん、お久しぶりです」

「こんちはー♪」

「相変わらず可愛いね莉央ちゃん♪」

鬼頭美紅の親友二人に挨拶を済ませてから隅の方へ移動して座り込む菅野莉央。

「とんでもないこと言ってんな美紅って子……怖い人だとは聞いてたけど私たち身体170あるし……やっつけちゃうキャプテン？」

夏川麻里が黙ってやられるわけにはいかないと反撃の提案をする。

秋山祐子も春日朋美もこれに賛成。
結局三人ｖｓ三人で戦うことになった。

「莉央ちゃーん！　コイツらあたしたちとヤル気だって！　こーなる場合って脚くらい貰っていいかな？」

「そだね。キャプテンとかゆう奴だけ四肢切断して子宮取っちゃっ

て惨めな姿になってもらってもいいよ！」

「はーい！　ありがとう。後の二人はダメなの？」

「うん。子宮取って痛めつけるだけにしといてくれるかな？」

「分かった！」

莉央の許可をもらった美紅はワクワクして前に出る。

「あたしが全員と相手するからいつでもかかってきな」

「な、舐めてんのかてめえっ！？」

春日朋美が怒りに任せて吠えるが、美紅は人差し指と中指をクイクイしてかかってくるよう促す。

タックルをかわす、掴ませない、とにかく打撃で確実にダメージを与えてゆく。

キャプテンの秋山祐子は正拳突きをカウンターで喰らい鼻の骨を折られて戦意喪失。

「キャ、キャプテン！　くそう！　次は私が……」

『ボコッ！』

「ぐはあっ！？」

三日月蹴りが一閃。
脇腹を抱えてダウンする春日朋美。
夏川麻里は美紅のあまりの強さに完全にやる気を失い、どでかい図体で土下座をして謝り始めた。
「あなたが一番賢そうだね。スカート脱いで！」
「え？　私、土下座をしたのに許してくれないんですか！？」
「イカせてやるだけだから安心して脱げ」
「は、はいっ！」
暴力がないことを確認すると安心してスカートを脱ぐ夏川麻里。
西村百合香がパンツを一気にずり下ろす。
「M字開脚しなさい！」
「は、はいっ！」
百合香の命令通り、サッとM字開脚して受け入れ態勢を作る夏川

麻里。

『くちゅ。バリッ！！……グチュチュチュチュチュッ！！』

百合香の中指があっとゆう間に麻里の処女膜を破り、膣内に根元まで食い込んだ。
その後はロングの黒髪を揺らしながら高速の指マン。

「あっ！？　痛いっ！　あ、あんあんあんあんっ！！」

「イきなさい！」

「あっ！！　イクっ！　いっくううううっ！！」

『ぶしゅううううっ！！』

百合香の中指は超高速で動き、わずか数秒で夏川麻里は潮を吹かされた。

「ありがとうございますは？」

「あはあっ！　ゆ、百合香様、ありがとうございました……はぁ。はぁ。はぁ」

「汚いマンカス着いちゃったじゃない？舐めてきれいにして」

「はい、百合香様」

服従したため唯一無事で済んだ夏川麻里はその場から家に帰されることを許された。

春日朋美は……。

『ガガガガガッ！！』

「いやっはあああああっ！！　ひいいいいいっ！！！！」

中田美佐子の高速電気アンマをパンツごしに受けていた。
あまりの高速に無意識に愛液が分泌される。
パンツは瞬く間に湿っていった。

「パンツを脱げ！　生でやったげるから！」

「ひっ！　やめて下さい！　アソコが汚れちゃう」

「お前のマンコなんて元々腐ってるんだよっ！？　脱ぎなさいほらあっ！」

無理矢理パンツを脱がせる美佐子。

生のマンコに高速の電気アンマが炸裂する。

『ガガガガガガガガガッ！！』

「やあああああああああああっ！！　許してエエエエッ！！」

『ズチュッ！！グボオッ！！……バリッ』

激しい連打の後、つま先が膣に深く突き刺さる。
瞬時に処女膜は美佐子の足によって奪われた。

「くっさ。ホント臭いマンコしてるなぁあんた。ごめんなさいは？」

「ひいいっ！　ご、ごめんなさいいいいっ！！　痛いいいっ！！」

まだ美佐子はつま先を膣から抜いてくれない。
グリグリと靴を履いたままのつま先で掻き回す。

「痛いだ、痛いいいいっ！！　許して下さいいいいいっ！！」

『グチュチュチュチュ！！……ぽんっ！』

「はひいっ！！」

「もう抜いてあげる。これからは秋山祐子なんかとつるまずに真面

目に生きなさいよ？」

「は、はい！分かりましたっ！」

鼻を押さえて未だに悶絶しているキャプテン……秋山祐子は、どさくさに紛れてその場から逃げようと立ち上がった。

「どこに行くの？　まだあなたの私刑はこれからなんだけど？」

「ご、ごめんなさい……もう二度と逆らいませんから許して下さい」

夏川麻里に続き、もう手遅れながらも土下座をする。

「あたしたちのプライドだけの話じゃないんだ。あなたは一人の同級生を死に追いやってるから死刑でもおかしくなかったの」

鬼頭美紅は土下座をしている祐子を見下ろしながら冷たく言い放つ。

西村百合香も続ける。

「美紅ちゃんが拷問処刑を回避するよう藤堂長官と交渉してくれたから両足とマンコ抉り取りだけですんだの。感謝しなさい」

「百合香ちゃん！マンコ自体じゃなく子宮抉り取り！だよ？」

中田美佐子が慌てて訂正する。

「あっ！　ごめんなさーい！」

両膝をついて落胆する秋山祐子にそっと近付き、三人で服を脱がしてゆく。

「いやっ。お願い。許して」

「激痛にならない様特殊な麻酔注射打ってあげるから。それと後の病院も救急車呼んで手配してるから死ぬ心配もないわ」

「ひっ！そんな……私、病院送りにまでされるのですか？」

「両足切断して子宮を膣から特殊な機械突っ込んで抉り取るからね。病院行かないと多分死んじゃうよ」

「いやっ！　いやあぁぁぁぁっ！！　冗談でしょ！？　ね？　自体って言って！」

黙々と一枚一枚制服を脱がしてゆく三人。残すはパンツ一枚のみとなる。

「やだ。やめてっ！やめてよおおおっ！お願いっ！！」

『パァンッ！！』

「ふぎいっ！？」

強烈な美紅の平手打ちが祐子の左頬に炸裂する。
クビが一回転したと思うほど激しく回転した。

「パンツ脱がないと子宮が取れないから……大人しくしなさい。さもないと……殴り殺すからね？」

「しくしく……」

抵抗を諦めた祐子は最後の一枚を百合香に脱がされてゆく。

「見ないで……恥ずかしい」

「はぁ？　女のマンコなんて見慣れてるわよ気にしないでもらえる？」

冷たく言い放つ百合香に一瞬寒気を覚えた祐子だった。

美佐子がお尻に特大の注射を打つ。
傍でチェーンソーのエンジンをかけながら美紅が囁いた。

「脚の付け根からと、膝からと……選ばせてあげる」

「どっちも嫌あああああっ！！　ほんとごめんなさいっ！！　許してええええっ！！」

百合香と美佐子で身体を抑えつける。

「いつも膝からいくから今回は付け根からいくか……じっとしてないとマンコから縦に真っ二つにするよ？」

「ひっ！？」

『ウイイイインッ！！　ウイイイイインッ！！』

チェーンソーを空ぶかししながら右足の付け根にそっと触れる回転刃。

『ウイイイインッ！！……バシュウッ！！』

「いだあああああっ！！！！」

１㎝ほど太腿に回転刃が食い込む。

その後は一気に肉に食い込み、大腿骨でかなり時間をかけて切断

してゆく。

「図体でかいから脚の骨もブッといなぁ……なかなか切れないよ」

『ウイイイインッ！　ガガガガガガガッ！！』

「ぎゃあああああああっ！！」

固い骨を切断し、ようやく右足は胴体から切り離された。

麻酔で痛みはマシとは言え、激痛に転がり回る祐子。

「すっごい筋肉してる。断面みたら分かるけど……さすがレスリング部キャプテンだね！　あはは」

百合香は大量に流れ出る血を見ながら笑い始める。

そのまま背後から羽交い締めにして動きを止めると、更にもう片方の脚を落とした。

「わーんっ！　わーんっ！　こんな姿じゃお嫁にいけないよおおっ！！」

「行こうとしてる神経を疑うわよ。あんた殺人犯となんら変わらないんだからね？」

菅野莉央が長い筒のような機械を美紅に渡す。

「美紅ちゃんがやってみる？」

「うん。一度は使っておかないとね！新兵器だし」

『ウイイイインッ！！』

「や、嫌っ！！　やめてっ！！　そんなもの私のアソコに入れないでっ！！」

空ぶかしして刃の確認をする美紅。

「へぇ～。えげつない兵器だねこれ……ほら、股を開いてオマンコ開くの」

「あたしが考案したの。メスでいちいち子宮取り出すの大変だからね。時と場合によるけど」

「嫌だあぁーっ！！」

百合香と美佐子で大陰唇に指を置き、左右に思いっきり広げる。
小陰唇がめくり上がり、一気に膣口がパックリ開いた。

莉央の説明通りにまずは祐子の性器にローションを塗り、膣に強引に差し込む。
奥の子宮口に先端が当たると、スイッチをオンにする。

「いっくよおお！……それっ！」

先端部から回転刃が出てきて、膣を丸ごと抉り取り、筒の中に収納する。

『ウイイイイン……ブチブチッ！　バリバリッ！』

「んぎゃああああああっ！！」

肉や内臓のちぎれる様な音が秋山祐子の腹部の奥から鳴り響く。

「おおっ！　すっごい！」

何事も無かったように筒が膣から出てくるが、ぱかっと開いた瞬間、機械の中からプルンっと子宮が飛び出してきた。

『プルンッ……びちゃ！』

体育館の床に血みどろの白い内臓……子宮が落ちる。

血と粘液の糸を引きながらプルンプルンプルン揺れていた。

「わぁー。エッチ！　子宮だぁ♪」

百合香は大喜びしている。

「わーんわーん！酷いっ酷いよおおっ！！」

泣き喚く中、莉央は子宮を足で踏み潰し、グチャグチャのミンチにした。

「泣かないでおねぇさん。そんな哀れな姿になっても生きてるだけまだマシじゃん？」

「そうだよ。安原美希の気持ちを思えばマシマシ。屁の河童」

莉央に続けて美紅も気持ちを伝えた。

「屁の河童で思い出したんだけど……この子、お尻も責めていいの？」

「いいよ。裂肛になるまで責めてあげて！　じゃあ美紅ちゃん。あたしは帰るね」

「はーい！　またね！」

西村百合香と中田美佐子がそれぞれ形の違うアナルバイブを持って祐子に歩み寄る。

両足のない中学三年生は、一つ歳下の二年生二人によって、肛門が裂けるまで責められるのであった。

「アナルにバイブ挿し込む度にマンコから血が噴き出すから楽しかったよ。ね？　美佐子」

「そうそう。あ、それと……やっぱり肛門裂けちゃったから病院で診てもらうことね。うふふ」

姉弟の悲運（後書き）

数日後……。
体育館での切断刑は禁止となる。
藤堂長官にこっぴどく怒られた菅野莉央であった。
（個人的に好みなイジメのシチュエーションが続いて申し訳ございません。お読みいただきありがとうございます）

非道なる里親　（前編）（前書き）

里親。
両親に恵まれなかった子供たちの何割かが手に入れる新しい家族の幸せ。
本来はそうであるべきだった。

非道なる里親　（前編）

「ほら、なにやってんの！？」

「ご、ごめんなさい」

「何度言えば分かってもらえるのかなぁほんと……」

「ごめんなさい」

コップに注ぐ麦茶をこぼして叱られる男児。

「じゃあ行って来るよ」

「行ってらっしゃい。あ、帰りに牛乳買ってきて」

「ああ。分かった。じゃあ……」

朝食の食パンを食べ終わると、宮沢修司はそそくさと駅に向かって家を出てゆく。
高級住宅が建ち並ぶ団地からは、電車の駅はそう遠くはなかった。

二階にある折檻部屋……。
宮沢修司の妻である里沙子が作った趣味の部屋である。

修司と里沙子は３５歳の同い年で、お互いが子供の出来ない身体であることが分かり、二人の児童の里親となっていた。
数ヶ月前に児童相談所へ夫婦で赴き、基礎研修の受講も終えて、正式に児童福祉審議会で認められて引き取って育てている。
宮沢正治と郁美。５歳にして宮沢家に引き取られてから家族として登録され、今月からは晴れて小学一年生となり、双子の兄妹は６歳になっていた。

「正治……賢くないあんたには今日もお仕置きが必要だね？　二人とも上の折檻部屋へ来なさい。郁美はいつものように私たちをのんびり見てるだけでいいわ」

嫌々ながらも手を引っ張って二階へ連れていかれる正治。
後に郁美もついて来る。
折檻部屋と称する六畳の間のドアを開ける里沙子。

「さぁ入りなさい」

「ごめんなさいお母さん……ごめんなさい」
「ほら、もう謝らなくても構わないから自分で服を全部脱ぎなさい」
「ごめんなさいっ！　もう痛いの嫌だ……許して」

最近始まった里親からの折檻に、毎日涙を流して堪えている正治だったが、この日は遂に里沙子に対して刃向かってしまう。
ツカツカと歩み寄り、思いっきり強く頬を引っ叩くと、無理矢理服を脱がせに掛かる里沙子。

「許して？　お前は誰のお陰でこんな大きな家に住めてるの？　誰のお陰で美味しいご飯が食べれてる？　よく考えなさいね」

結局全裸にされた6歳の男児は、ベッドの上に乗せられ、四つん這いにさせられた。
その体勢のまま腹側に台を置き、台に手足や腰を縛り付けられて固定される。

右手の袖を捲り上げて冷ややかな笑みを浮かべると、お尻へ強烈な平手打ちが炸裂した。

『スパァンッ！！』

「んがあっ！！」

激痛に奇声をあげる正治を無視して何度も平手打ちを繰り返す里沙子。

「99……100！！」

「うわああんっ！！　うわああんっ！！　痛いよおおっ！！」

右手の人差し指にローションを塗りたくりながら郁美を呼ぶ。

「ここにおいで。肛門が見えるようにお兄ちゃんのお尻開いてて」

「はい。……ごめんねお兄ちゃん……こうですか？」

「いいわよ。そのまま開いてなさいね」

パクッと開いた小さな肛門に３５歳の女の指が容赦なく捩じ込まれてゆく。

『つぷっ……ズブブブ！！』

「ひゃああっ!?　いやっ！！　やめてお母さんっ！！　痛いいいいいっ！！」

『グリグリ……グチュチュチュチュ』

根元まで捩じ込んだ指をグリグリと掻き回す里沙子。
ローションを塗っているため、卑猥な音が折檻部屋に響く。

「言い忘れてたけど今日から直腸検査も加えることにしたから……癌でも出来てたら大変でしょ？　ほらほら！　ちゃんと私が診てあげるから」

泣き喚く正治を見ながら延々と直腸を掻き回す里沙子は、興奮して性器を少し濡らし始めていた。

「6歳の男児のアナル調教……うふふ。そそるわね」

「痛いっ！　痛いよおおおっ！！　アーンアーンッ！！」

「ほらぁ。汚い穴からグチュグチュと卑猥な音立ててぇ？ふしだらな子だねぇお前は……」

半時間ほど掻き回してから指を抜くと、なぜか臭いを嗅ぐ変態女。

「くさっ。あはははは！　臭いから明日からは指二本入れてやるからねぇ？　覚悟しておきなさいっ　分かった!？」

「ぐすん、ぐすんっ……はい。お母さん。今日もごめんなさい」

長時間前立腺を刺激された男児のペニスからは、児童なのに粘液が垂れていた。

「あれぇ？　子供なのにカウパー液出ちゃうのねぇ？郁美！お兄ちゃんのネバネバしたオシッコを拭いてあげなさい」

「は、はい」

兄妹とはいえお尻に続きペニスまで触ることになり、かなり恥ずかしくて頬を真っ赤にする郁美。

優しくティッシュで拭いてあげると、丸めてゴミ箱に捨てた。

拘束を解き、四つん這い状態からようやく解放された正治だったが、今度はベッドに仰向けに寝かされて手足を括られる。

「よく見てるのよ」

里沙子は郁美に声を掛けてから正治の小さな皮かむりのペニスを親指と中指でキュッと握った。

「いやあっ！？」

いきなりの事態に大声を出してしまう正治。

「この皮をめくったらどんな風になってると思う？」

「……わ、わかりません」

頬を赤くしたままで兄のペニスから目を逸らす郁美。

「正治……オチンチンはね、剥き癖をつけておかないと将来困るのよね？　だから……」

『ぐっ……メリメリ』

「痛ああっ！！！」

ゆっくりとペニスの皮を剥いてゆく里沙子の指。
半分くらい剥けた所で手が止まる。

「これ以上はまだ無理そうね。ほら、女の子みたいなワレメが見えるでしょう？　ここからオシッコ出すの」

「……あ、は、はい。赤いワレメが見えます」

「男の尿道口よ。ほら中身も見なさい」

そう言って親指と人差し指で尿道口をパックリ開いて見せる里沙子。

「痛いっ！！　いやあっ！？　やめてお母さんっ！！　痛いから触らないでっ！！　見ないで郁美っ！！」

兄に叫ばれて思わずペニスから目を逸らす郁美だったが、里沙子に無理矢理顔を掴んで向きを転換……結局芋虫のような小さなイチモツを見させられるハメになる。

「うわぁ。オチンチンの穴の中って……真っ赤なんだ」

「ピンク色がかった赤色ね，所々に付いている白いモノがチンカスとゆう垢よ」

「……ち、ちんかす？」

「臭いばい菌」

「取らなくていいのですか？」

「そうねぇ。綿棒で取っていこうか？　よく見てなさいね郁美」

６歳の男児の恥垢を綿棒で取り続ける母親の里沙子。
それをじっと傍で見せつけられている妹の郁美。
異常な行為がこの高級住宅団地で続けられていた。
たまに亀頭に綿棒が触れるたび激痛が走り、途中何度も奇声をあげる正治だったが、里親の里沙子は最後まで手を止めることはなかった。

――――――――明くる日。

「昨夜ね、正治の折檻ついでに恥垢掃除してやったの。よほど痛かったのが今朝見たら半分しか剥けてない亀頭が真っ赤っ赤になっちゃってるの！　もう可笑しくて可笑しくて！」

「おいおい、あまりやりすぎるなよ？　正治に訴えられたら里親の資格取り消されちゃうどころでは済まないぞ？」

「心配ないわよ」

振り向いて正治を睨みつける。
そのままゆっくり微笑みながら問い掛けた。

「そんなことしたらどうなるか分かってるわよねぇ正治？」

「う、訴えるって……な、なんですか？」

「私にされてるお尻叩きとかあんなことこんなこと……誰かに話しちゃうって事よ。話したら許さないからね？分かった？」

「は、はい。分かりましたお母さん……」

「偉いわよぉ。また美味しいケーキ買ったげるからねぇ。……修司

さん、あなただって私が里親になったらこうなること初めから分かってたはずだよ？」

「あ、ああ。そりゃそうだが……お前を愛してるからこそ俺だって頑張ったじゃないか？　分かってくれよそこは」

「役所の人たちに上手いこと言って信用させてくれたもんね！　ありがとう」

定期的に様子を見に来る役員をたぶらかして機嫌を取るのは修司の仕事であった。

相手をするのが面倒くさい里沙子は体調不良を訴えて部屋に篭ってしまうからだ。

週に何日かは小学校を休まされ、里沙子の折檻部屋で長時間虐められる正治であった。

――――そんなこんなで三年が過ぎ、双子の兄妹も１０歳になり、四年生になった。

妹の郁美は学校へ行き、兄の正治は昼前から里沙子による調教が始まった。

「ほら、今日も肛門掘り掘りの時間だよ！」

『パァンッ！！』

「痛いっ！　ひいっ！！」

１００回のお尻叩きが終わると、いつものように肛門に指を突っ込まれる正治。
ふと、いつもと違う異変に気付く里沙子であった。

「ん？　あれえぇぇ？　何オチンチン硬くしてるのぉ！？　遂に勃起する歳になったのね……」

『ぎゅうっ！』

「んあっ！？」

「仮性包茎のガキの癖に生意気だねぇ？　先ずは私の手でイカせてあげる♪」

『シコシコシコシコシコシコシコシコシコシコッ！！』

猛烈な速さで小学生の男児に手コキを始める中年女の里沙子。
生まれて初めて味わう不思議な感覚……時に肛門を掻き回されて感じたあのなんとも言えない感覚……四年生の男子児童は里親の手によって人生初の射精を経験することになる。

「あ、あんっ！」

『ドピュッ！』

「小学生中頃にして精通かぁ〜♪　おめでとう」

里沙子の手にタップリついた精液を正治の口に捩じ込む。

「ほら、人生初の自分の精液だよ！　ようく味わいなさい」

「んごおっ！？　んんんっ……ごくん」

無理矢理指を口に突っ込まれた勢いで思わず飲み込んでしまう正治だった。

夕方6時……宮沢修司が帰宅する。

ここのところ上司の機嫌が悪く何かあるごとに八つ当たりされ、かなり苛立っていた。

「まだ風呂も沸いてないのかよっ！？　何度も言ってるだろ？連絡ない時は6時に風呂に入れるようにしておいてくれって！」

「ごめんなさい。そんなにカリカリしないでよ！　正治の折檻に時間使い過ぎちゃったんだから」

「…………まだずっとやってるのか？」

「当たり前よ。男子児童の性的虐待が私の夢だったんだから！　しかも本当の自分の子じゃないから余計虐めがいがあるのよね！　あははははは。あんたもやってみたら？」

「は？　何を言ってるんだお前は？」

「元々あんたが私を殆ど相手にしてくれないからよ？　あ、そうそう郁美も小学中学年になって少し胸も膨らみかけてきてるわよ？セックスだってできる歳になったんじゃない？　戦国時代なら赤ちゃん産まさせられてる歳かもよ？　あははは」

「ちっ！……そんな趣味はねぇよ俺は」

そう答えたものの、妻の里沙子にはもう性的興奮ができない状態となっている今、欲求不満のようなものは心の奥で感じていた修司であった。

仕方なく自分で風呂を沸かして入ると、続いて四時には帰宅していた郁美が入る。
最後に妻の里沙子と正治が入った。

風呂から出るとそのまま折檻部屋に連れて行かれ、夜の折檻タイムが始まる。
執拗に肛門を掻き回し、前立腺を刺激して射精させたいと思った里沙子は、実験台のように扱ってひたすら正治の直腸をほじくり回す。

「う、あん。ううん……」

前立腺を里沙子の中指が的確にヒットする度、顔を真っ赤にして女の子のような声を出してよがり始める正治。

小学生にして性の快感を感じる身体に仕立てられていった。
里親である母によって……。

「ほら正治っ！　ここか？　ここが感じるトコかっ！？」

『グリッ！　グチュチュチュチュッ！！』

「あっ！　あんんっ！！　お母さんそこ気持ちいい……んんんっ！」

『ドピュッ！　ピュピュピュピュピュッ！！』

遂にペニスに触れずにイカせる指技を身に付けた里沙子は大いに喜んだ。
喜び余って革の鞭で全身を打ち付け始める始末である。

「えいっ！　えいっ！　あははは！　そんなにしゃがみ込んで丸まって……そんな格好しても背中がガラ開きなんだよっ？それえっ！」

『バシィッ！！　ビシイッ！！』

「うぎゃあああっ！！　痛い痛い痛いいいいいっ！！　許してお母さんっ！！　わーんわーんっ！！」

お尻と背中の皮が真っ赤になって、所々血が滲むほどの凄惨な鞭打ちにも快感を得てきている里沙子はかなり危険な状態といえる。
泣き喚きながら苦しむ顔を見ているとどんどん性器が濡れてくる

のであった。

「今日はこれくらいにしておいてあげる。明日は仰向けに縛り付けて身体の表面に鞭打ちしてあげるから……うふふ」

家族全員が布団に入り寝静まった頃、正治と郁美の部屋のドアがゆっくりと開く。

布団に潜り込むその男は素っ裸であった。

全身の痛みで寝付けずに泣いていた正治が1番に大声を出す。

「うわあっ!?　誰っ!?」

『バキッ!!』

「ひぶっ!?」

いきなり叫ばれた為、修司のほうもビックリして咄嗟に正治の顔面を殴ってしまう。

鼻血を噴き出しながら布団に顔を埋めて更に泣き喚く。

「お前は黙ってろ!　おい郁美……お前は賢いから俺が何をしに来たのか分かるな?」

「んん……?　むにゃむにゃ……あれ?　お、お父さん?」

「まだ寝ぼけてるのか？　お、俺のチンポを触ってくれ」

女子児童である娘を犯そうと意を決してやってきたものの、やはり少しは羞恥心が残っていたのか、戸惑いながら震える声を出す修司。

「え、ええっ！？　お父さんのを？　い、嫌です」

抵抗する9歳の少女の手首を掴み、無理矢理自分の下腹部へ誘導する。

陰部に触れる娘の手……。

かなり興奮してきた修司のペニスはこの時点で全開に勃起した。

「に、握ってくれ郁美」

「や、やめてっ！？　やだっ！！」

「郁美が泣いてるじゃないかっ！？　やめろおおおっ！！」

鼻血をドバドバ垂れ流しながら必死に妹の郁美を庇う正治だったが、更に数発顔面を殴られ、今度は転げ回って苦しみ出す。

嫌がる女子小学生の手を陰部に強引に擦り付けると、両手を使ってでも無理矢理握らせた。

「上下に擦ってくれ」

「嫌だぁっ！　もうやめてお父さんっ！！」

泣き叫びながら布団から出ようとする郁美を、思い切り平手で叩く。

大人の男性の本気のビンタなので、首の骨が折れるかとゆうほど反対側に反り返る頭部。

「きゃあっ！！　痛いいいいっ！！」

そのまま抑え込んでパジャマを上下全て脱がせて、更にパンツも脱がせた。

まだ膨らみ始めたばかりの小学生の胸を揉みしだく。

「じっとしてないと殺すぞ？」

「ひっ！？」

この台詞で完全に恐怖に包まれた郁美は、この後本気で抵抗することはなかった。

散々胸を揉まれた後、秘部には中指を突き立てる。

『ズ……ぐちゅ』

「痛ああああああっ！？　きゃあああああああああっ！！」

「大きくなったな郁美。この家に来た頃はマンコの穴も随分と小さかったのに……もう俺のチンポを飲み込めそうだ」

「えーんえーん」

泣き喚く郁美の両膝を両手でガシッと掴み、マングリ返しをさせて更に左右に大きく開いた。

この時に修司は足でリモコンボタンを押して部屋の電気を点ける。

「おおっ！　綺麗なピンク色した膣だな！　里沙子のソレとは大違いだ！」

パックリと開かれた少女の陰部は、膣口が丸見えになって修司の手の力加減でパクパクと動いている。

「誰が私のソレとは大違いって？」

「おわあっ！？」

いきなり子供部屋に入ってきた妻の里沙子にビックリして郁美の両脚を広げていた手を離してしまう。

「何だお前！？　寝たのじゃなかったのかっ！？」

「子供たちの叫び声で目が覚めたのよ。折檻の続きなら私も混ぜてくれる？」

「あ、ああ。俺は今から郁美を犯す。もうお前の悪事を知ってて放ってるから逮捕されたら同罪だ。どうせ逮捕される時が来るなら俺もいい思いしとかないと損だしな」

「あははは。そんな訳の分からない考え方どうでもいいわよ。郁美は今からお父さんと愉しむからあんたは私の胸を舐めなさい」

そう言いながら修司と同じく全裸になる里沙子。
鼻血を両手で拭きながら必死で里沙子の胸を舐め始める正治。

「あ、あん。なかなか上手いじゃない正治……ご褒美にお尻の穴掘り掘りタイムは更に激痛を与えてあげるからね」

「グス……グス……ちゅぱちゅぱ……ちゅぱちゅぱ」

恐怖に涙しながらも必死で里沙子の乳首を舐め続ける正治に少し同情しながらも修司のペニスは再度ビンビンに勃起してくる。

「両手で握るんだ郁美」

「わぁーん、わぁーん、ぐすんぐすん」

恐怖に号泣しながらも無理矢理ペニスを握らせられて、後頭部に両手を回される。

「まさか郁美にイラマチオさせる時が来るとはなぁ」

「あはは！それだけちっこいチンポおっ勃てながらよく言うよ」

夫の修司まで加わってエスカレートしてゆく性的児童虐待……。

小学生の兄弟二人に襲い掛かる不幸の連鎖は止まることを知らない。

非道なる里親　（前編）（後書き）

非道なる夫婦の責めはどこまでエスカレートしてゆくのか……。
道を踏み外しても開き直って過ちを続ける人間は一番恐るべき存在なのかも知れない。

非道なる里親（後編）（前書き）

郁美に襲い掛かる悲劇。
狂い始めた歯車はもう元には戻らない……。

非道なる里親（後編）

「うごっ！？　んんんんっ！」

「もっと大きく口を開けるんだ郁美」

「んごおおおううううっ！！」

勃起しても全長１０㎝、幅が３㎝ほどの大したことのないペニスを９歳の少女の……しかも里親とはいえ我が娘の口内へ無理矢理捻じ込んでゆく宮沢修司。

『ガッポポガッポポガッポポガッポポッ！！』

「むごおおおおおおっ！！」

「そうだ！　上手いじゃないかっ！　チンポにもっと舌を絡めるんだ」

小学生の娘の頭部を手で強引な前後させ、口でピストン運動をさせるイラマチオ……この行為は三分ほど続けられた。

「うっ！　イ、イクっ！！」

『ドピュ！　ドピュピュピュピュピュウッ！！』

「うええええっ！？　うごおおおっ！！　おえええええっ！！」

夥しい量の精液を郁美の口内に発射し終わると、慌ててペニスを口から引き抜き、手で口を閉じる。

「んんんっ！！」

「吐き出すな！　飲めっ！」

「んぐうっ！　ごくっ、ごくんっ！」

かなり満足した修司は娘の郁美を抱きしめて、今度はディープキスをする。

諦めたのか黙って涙を流しながら天井を見つめている郁美。

「娘に精液飲み込ませるなんて最低な事すんるだねぇあんたって……あははははは！」

そう言いながら正治の肛門に指を二本挿入させる里沙子。

ゆっくり入れていくが、泣き喚いて痛がる正治に、思いっきり平手打ちをする。

何度も往復ビンタをしてから、人差し指と中指を9歳の男児の肛門へ全て飲み込ませた。

「何を直腸ピクピクさせてるのかなぁ？　変な動きしないでくれる？笑えるから♪」

ここまで来れば修司も完全に開き直り、もう止まることは出来なかった。

里沙子のローションをタップリと陰部へ塗りつけ、９歳の女児のワレメへあてがう。

「ひっ!?　いやっ！！」

「お父さんとセックスしよう」

「やだっ！！　やめてお父さんっ！！　いやああああああっ！！」

『ズブ……ズブブブブ……バリッ！』

「痛ったああああいいっ！！　ひいいいいいっ！！」

遂に根元までめり込む父のペニス。
娘の処女膜は瞬時に破かれ、白いシーツを血で染めてゆく。
構わずに強く娘を抱きしめて激しく腰を振る修司。

「うっ、き、気持ちいい……何て締まりがいいんだ……郁美っ！

郁美っ！　ううっ！」

「いやあああああっ！！　やめてやめてやめてえええっ！！　わーんわーんっ！！　痛いよおおおっ！！　お父さんっ！　痛いいいっ！！」

『バッコンバッコンバッコンバッコンッ！！』

「ひぎいいいいいっ！！」

髪を振り乱して首を振り抵抗するがペニスを決して抜かない父親だった。
やがて二度目の射精は娘である郁美の膣内に中出しであった。
ゆっくりとペニスを抜きながらティッシュで娘の愛液と血液と自分の精液を拭き取る修司。

うつ伏せになり、片手で性器を、片手で顔を押さえて泣き喚く小学四年生の郁美。

「おや？　泣き喚いちゃって……そそるわねぇ。あんたも肛門虐めてやるよ？　ほらっ！」

『ズブッ！』

「ひゃあっ！？」

右手の指二本は息子の正治のアナルへ突っ込み、左手の人差し指

は娘のアナルへ突っ込む母親の里沙子。
ゆっくりと、やがて一気に根元まで突き入れ、女児の肛門を指で犯す母親であった。

地獄のような一夜が過ぎ、朝を迎えた。
兄と妹は痩せこけた表情で学校へ向かう。

「誰かに話したら殺すからね？」

「ぜ、絶対誰にも言うなよお前ら！」

里沙子に続いて修司も脅しをかける。
だがこの日の性的虐待が、この夫婦の人生最期の癒された日となった。

――――――――――残酷処刑島。

「こ、ここはどこなの？　いきなり私たちをさらってきてどうゆうつもり!？　警察へ訴えるわよ!？」

「今日は大切な会議があるんだ！　出勤しないと首になるっ！　早く帰してくれっ!!」

素っ裸でベッドに拘束されている夫婦は、ひたすら怒声を上げる。

「えーと。あたしは本日あなたたちの拷問処刑を担当する菅野莉央と申します。この二人は富田美香と結城明日香。宮沢修司３８歳と、妻の里沙子３８歳を拷問にかけ処刑執行させて頂きますのでよろしくお願い致します」

セーラー服に身を包んだ小学六年生の少女三人がベッドの傍らに立っている。

「ふざけるなっ！　何が拷問処刑だっ！　早くこの縄を解け」

「そうよ！　あんたらみたいな小学生のガキどもにどうして処刑なんかされなきゃいけないのよっ！？　訳分かんない」

結城明日香が冷静に説明を始める。

「三年前に養子縁組して迎え入れた正治くんと郁美ちゃん。双子の兄妹に対する度重なる性的な凌辱と暴力。私たちは特殊任務省が行った盗聴器による聞き取りを通して全て内容を聞かされています」

「と、盗聴器だとっ！？　いつの間に！？」

「何度か点検と称して電気屋さんが来訪しなかったですか？」

「うっ！　あいつらか……何か違和感あったんだよな電気屋にして

は……」

「あなた……私たちの行為が全てバレてるとしたら……この子たち本当に私たちを……」

菅野莉央が夫婦に特殊な注射を打ってゆく。

「な、何を打った!?」

「変なもの打たないでっ!」

「これから拷問を受けるあなたたちにとっては好都合な薬だと思いますけど? 激痛を緩和してショック死を防ぐの。それとコレは……全身の筋肉が収縮して殆ど力が入らなくなる薬。コレを打った後に縄を解いてあげますからね」

ようやく縄の呪縛から解放される宮沢修司と里沙子であった。フラフラしながらも立って歩いてとゆう動作は可能であった。

「変なモノ打ちやがって……俺たちをこれからどうする気だ?」

「何度も言わせせんなバーカ! あたしたちが拷問してぶっ殺すんだよっ!」

富田美香が日本刀を手にして振り回しながら威嚇する。

「危ないじゃないのっ!?　それ本物の刀じゃないのっ!?」

「えへへ!　当たり前じゃん!　これで先ずは旦那さんから……」

思わず後退りしながら本気で恐怖を感じる宮沢修司。

「ま、まさか。嘘だよな?　う……」

『ビシュンッ!……ズバッ!!』
美香は素早く真横に一閃。
腹部を綺麗に斬り裂き、腸がはみ出してくる。

「ぐわあっ!?　いでででででっ!!　痛いいいいいっ!!」

『ぷるるんっ……ドバドバドバッ!!』

両手で押さえるが、意思に反してどんどんと大腸、小腸が飛び出して足元に落ちてゆく。

「あなたっ!?　大丈夫っ!?」

「ぎゃああああっ!!　いでえええええっ!!　ひぎいいいいっ!!」

美香は爆笑しながらしゃがみ込んで、今度は右足首を払うように斬る。
見事に足首から切断され、背中から派手に転んでしまう修司だった。
「あはははは♪　きったない中年親父のチンポがプランプラン揺れてるよぉ？　しかも成人男性では今まで見てきた中でも最小だわ。哀れねぇ……」
美香はドクドク血が流れ出る足首と腹部を気にもせず股間に刃をあてがう。
腸が纏わりついて変な生き物みたいに見える修司のペニス。
纏わりついた大腸ごと刃を一気に引くと、ペニスは雁首から切断された。
「ぐわああああっ！！　や、やめろおおおっ！！」
「やめろったってね。もう斬れちゃってるから手遅れだよ？　中途半端に数センチ残してるから立ちションくらいはどうにかできるかもね？」
すけべそうにニヤけながら血を噴き出すペニスの切断面を眺める美香。

「こらこら美香ちゃん！　変な期待は持たせちゃダメだよ。もう人生終わりなんだし立ちションなんてすること二度とないんだから」

結城明日香が美香を睨み付けながら注意する。
痛み止めを打っているとはいえかなりの激痛には変わりない。
しばらく転げ回って痛みに耐える修司だった。

「きゃあああああっ！！　ひ、ひとごろしいいいいっ！！」

気が狂ったように駆け出す妻の里沙子だったが、菅野莉央に呆気なく追いつかれてしまう。

「もう覚悟を決めて下さいね？」

「ちくしょうっ！　何で私たちがこんな目に……お願いだから許してよっ！　ねっ！？　もう二度と虐待とかしないから！　ね！？」

涙を流しながら莉央に土下座を始める里沙子。
しばらく見下ろしていたが、頭の上に右足の裏を置き、グリグリと擦り付けた後、思いっきり踏みつけた。
地面で顔面を強打した里沙子は、大量の鼻血を出す。

「ぐはっ！　ウググ……このクソガキめえっ！」

「あのう……もう今更助かるとか思わない方がいいですよ？　早速ですが四つん這いになってくれます？」

「嫌だっ！　そんな恥ずかしい格好したくないっ！」

『バキッ！！……グシャッ！！』

莉央の強烈な膝蹴りが鼻っ面に入り、一瞬で鼻の骨は粉砕される。

「ぎっ！？　ぎひぃぃぃぃっ！！」

「痛かった？今日は人生で最悪の日にさせてあげるから覚悟しておいてくれますか？」

溢れ出る鼻血を両手で押さえながらうつ伏せに倒れ込んでしまう。小学生の使う縦笛を取り出して覚えたてのエーデルワイスを少しだけ吹く莉央。

結城明日香がお尻を里沙子の頭へ向けて背中へ馬乗りになる。両手を腹部へ回して一気に引き上げてお尻を突き上げさせた。

「莉央ちゃん、これでいいかしら？」

「ありがとう！　じゃあ縦笛を汚い穴にぶち込んじゃいますかぁ」

縦笛をクルクルとバトンのように器用に数回すと、ピタッと肛門にあてがいゆっくりと力を込める。

『ズブッ……ズブブブブ』

「痛いっ！？　やだっ！　そ、そんなとこに縦笛なんか入らないっ！や、やめてっ！！」

「やってみなくちゃ分かんないよね明日香ちゃん？」

「そうね。何事もチャレンジだよオバサン」

明日香も笑いながら莉央に続ける。

「ほら……いきますよぉ？」

『グチュグチュ……メリメリメリ……』

「んぎゃあああっ！！　痛いいいいっ！！」

「もっともっといきますよぉ？……ん？」

縦笛が半分ほど入った所で何かに引っかかって止まる。

「んん……何かに当たってるなぁ。多分突き当たりのＳ状結腸だね。

強行突破しちゃいますかぁ」
「あははは。何で今日はいちいち中途半端な敬語なの莉央ちゃん？」
「丁寧な口調で残酷なことするのも一興かなと……てへっ♪　じゃあ一気に行くから力抜いてなさいね里沙子」
「今度はいきなり呼び捨てなのね！　あはは」
ゆっくり立ち上がると縦笛の吹き出し口に狙いを定め、思いっきり蹴り込んだ。
『ドガッ！！……グチュッ！　バリバリッ！！』
「ひぎゃあああああっ！！！！」
一気に直腸からS状結腸を突き破って小腸のスペースにまでめり込む縦笛。
ドクドクと色の濃い鮮血が肛門から流れ出る。
必死でいきんで肛門から縦笛を吐き出そうとするが、今度は爪先が直腸にめり込むほどまで強く蹴り込まれる。
『ズドオッ！！……ぐちゅっ！！』
「ぎゃあっ！！」

「あははは！」

「もう……やめて許して……痛いいい……ひいい……」

『ズルズル……ズルズル……』

片手で直腸からの出血で血まみれの肛門を押さえながら這ってでも逃げようとする里沙子を見ながら爆笑する莉央と明日香。
どこまで這えるのかしばらく腕を組んで見守る二人だった。

振り向くと、美香がいつもの極太の張形をペニスバンドに装着して、修司の口に捩じ込んでいる。
中年男が小学生の女の子にイラマチオされるとゆうシーンである。

「オラオラおっさん！　もっと喉の奥まで飲み込むんだよっ！」

修司の後頭部を掴んで強引に喉の奥に捩じ込んでゆく美香。

「ふごおっ！！　むごむごっ！　おおうっ……」

言葉にならない言葉を口にしながら大腸小腸を必死で腹の中に戻す修司。

「腸なんてほっとけば？　戻した所でオッサンはあたしたちに処刑されちゃうんだから意味ないよ。そんなことより地獄のイラマチオ

タイムだよ？　それえっ！」

『バコバコバコバコバコバコッ！！』

「おうおうおうおっ！！うごおおおおっ！！」

小学生の女の子から激しくイラマチオさせられる中年の男。
現実味のない絵面だが、ここ残酷処刑島では当たり前であった。
処刑人は一人の男を除けば全員が少女だった。

一気に口から張型を引き抜くと、今度は背後に回る美香。

「ほら、腸が飛び出しても麻酔効いてるからそれほど痛くないでしょ？我慢して！……さぁお尻を突き上げなさい」

四つん這いのままで必死に腸をかき集めている修司に呆れながら莉央と明日香が手伝いに入る。

「明日香ちゃん、右の骨盤支えてくれる？　あたし左の方支えるから」

「はーい」

「ありがとう。それじゃあ……お尻を突き上げさせてもらうわね？汚い穴を見せてもらいますから。ほらっ！」

『ぎゅぎゅっ！……ばくんっ！』

莉央と明日香の親指でお尻の肉を思いっきり開くと、中年男の肛門がパックリ露出された。

「うおおっ！？やめてくれえっ！見るなぁっ！」

抵抗する修司に美香は微笑んで答える。

「そんなこと言わないで見せて！見なきゃ突っ込めないじゃん？じゃあせっかく直腸が見えるまで開いて見せてくれたお尻の穴に感謝の気持ちを込めて……と。ほら、飲み込め！」

『ズブ……メリメリメリメリ……ズッボオオオッ！！』

数センチのみゆっくり挿れたあと、一気に腰を押し込み、張形の根元までぶち込む美香。

「んごあああああっ！！いでええええっ！！」

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「んぎぎぎぎぎいいいいっ！！」

１３歳のアイドルの少女に肛門をバックで犯されるとゆう残酷処刑島ならではの非現実なシーンが起こっている。

「あれぇ？２０㎝の張形ぶち込んだら普通Ｓ結腸突き破っちゃうのに……オッサン直腸長いんだね？あはははは！」

大爆笑しながらも激しく腰を振り続ける美香。
地獄のような激痛が修司の肛門と直腸に走り続ける。
何度もお腹を地面につけてお尻も下へ逃れようとするが、莉央と明日香にお尻を突き上げさせられて阻止される。

「気持ちいいですか？オッサン？」

「前立腺抉られてるからイキそうでしょう？うふふ」

莉央に続けて明日香も皮肉を言う。
長さ２０㎝、幅が５㎝もある極太バイブでは快感もクソもなかった。
肛門括約筋は半分くらい裂け、激しい鮮血が小学六年生の少女の制服とスカートを赤く染め上げていった。

ようやく張形を抜き終わった頃には全ての肛門のヒダが破壊され、ポッカリと穴が空いたように肛門が開いていた。
便と腸液と血液がドクドクと流れ出てくる。

「血止めの注射がなかったらオッサンはとっくに出血多量で死んでたなぁ？　あたしたちに感謝してね！」

「ちょっとちょっと！美香ちゃん！逆になかなか死なず長時間苦しむことになるんだけど？皮肉にしかきこえないわね。やーね」

明日香が美香に呆れる。

莉央は肛門に両手を当ててもがき苦しむ修司を蹴飛ばして仰向けにさせる。
斧を取り出して股間に当てる右手首に狙いを定めると、一気に振り下ろした。

『ズドオッ！！……ブチッ』

「ぎゃあああああっ！？」

一撃で切り離される右の手首。
同じように二度目を振り下ろし、左の手首も切断する莉央。
激しく絶叫を上げる中、構いもせずにしゃがみ込み、雁首から切断されて半分しか残っていないペニスを左手で掴むと、右手の人差し指をピンと立て、切断面から尿道口へゆっくり差し込んでゆく。

「痛えええええっ！！ぎひいいいいいっ！！」

「無理矢理性器を犯される気分はどうですか？」

『グチュグチュ……グリグリ』

「んぎゃあああああっ！！　痛い痛い痛いいいいっ！！やめてっ！やめてくれええええっ！！」

更に尿道内を掻き回す。

必死で抵抗して阻止しようとするが、手首から先は切断されているため、なかなか莉央の手を退かせない……。

「無理矢理犯されても気持ち良くないよね？ほらほら……気持ち良いなら射精してもいいよ？」

厳しい表情で激しく人差し指を尿道に出し入れさせる莉央に、修司は遂に号泣してしまう。

いくら泣き喚こうが尿道へのピストン運動を止めない莉央を冷やかな笑顔で見つめる明日香と美香。

「なんか尿道から血の泡みたいなの出てきたよ？」

「膀胱からの出血なのかしら？」

「殆どがペニスの切断面からの出血だね。あたしの指で尿道に送り込まれてるだけだよ」

莉央は二人の質問に答えながら尿道から指を一気に引き抜くと、今度はメスを用意し始めた。
明日香が思わず問いかける。

「もう止め刺すんだ？」

「いや、まだ。コイツの腹腔内に美香ちゃんに切断された下行結腸が半分残ってるから……肛門をくり抜いて引き摺り出すの」

「じゃあ私と美香ちゃんで脚を短くしとくわね？」

「その方がバタつかないからやり易いね。ありがとう」

殆ど動けなくなっている宮沢修司だが、念のため明日香と美香はチェーンソーで太ももから脚を切断する。
唸り声を出しながら激痛に耐える修司だったが、大粒の涙は止まらない。
二人はチェーンソーを足元に置くと、修司のお尻の肉を左右に押し開く。
パックリ開いただらしない肛門が丸見えになった。

「がはあっ！　な、なんでこんな姿になっても生きてるんだ……なぜ？」

「失血死やショック死出来ない注射打ってあるっていったでしょ？はい、じっとしてて」

『ズッ……ズズズズ』

「ぎぇえええええっ！！」

莉央のメスによって、見事に肛門が丸く切り裂かれてゆく。
肛門をくり抜いて直腸を掴むと、一気に手前に引き摺り出す。

『ズルルルルルルッ！！』

「はおおおおおっ！？」

直腸、S状結腸、下行結腸がみるみる内に引き抜かれていった。

『ズルルルル……ぽこんっ！……ベチャベチャ！』

「ほうら全部出てきたぁっ♪　くっさ……やっぱ腸を抜く時は下処理しとかなきゃダメかな……」

肛門側と下行結腸側の両方から便が大量に飛び出し、辺りを異臭に染める。
莉央は鼻を摘んで顔を顰めた。

「今度からはキチンと浣腸しときましょう……臭いわねほんと……」

明日香も莉央に続いて鼻を摘んだ。
美香はポッカリと開いた肛門があった大穴へ、拳ごと捩じ込み、一気に肩まで差し込んだ。
「この内臓のあったかい感じ……良いなぁ♪　オッサン！　今から全ての腸を掻き出してあげるから覚悟して！　ほらっ！」
『ぐっちゅぐっちゅぐっちゅぐっちゅ！！　グチャグチャグチャ！！』
右腕全部を全開に動かして修司の腹腔内を掻き回す美香に、修司はコロコロと転がって逃れようとする。
転がるほど腸を腕に絡め取られ、一気に切開されたお腹側から掻き出されてゆく。
『ビチャビチャビチャッ！　ズルルルルルルッ！！』
「ふごおおおおおっ！！　しっ、死ぬううううっ！！」
莉央と明日香と美香は、宮沢修司の周りを囲むようにして立ち、小刻みに痙攣を始める姿を見下ろしている。

「もうぼちぼち逝っちゃいそうだなぁ」

美香が澄ました顔で呟く。

「うん。両手両足切断されてオチンチンまで切り取られて……お腹パックリ空洞にされちゃって……無茶苦茶哀れね」

明日香も真顔で続けた。

莉央は再度しゃがみ込み、メスを取り出すと、陰嚢を綺麗に切除してゆく。

住処を失った二つの生の睾丸は、神経管と精管のみにぶら下がって痙攣に合わせてブランブラン揺れ続けた。

小刻みに激しく揺れる真っ白な睾丸を見ながら三人は冷ややかな笑みを浮かべる。

「あはは。惨めねオッサン……最期の最期だけど止めの激痛を与えてあげるわ」

莉央はメスを今日に操り、切断された睾丸を薄くスライスしてゆく。

『スパスパスパスパスパッ！』

「ぐわおおおおおおっ！！」

一つの睾丸につき、２０回もメスを入れるほどの薄造りが出来上がった。
合計４０回の早技である。

莉央に睾丸を切り刻まれながら、最期の断末魔の叫びを４０回も上げた後、宮沢修司の心臓は遂に停止した。

「さて……と。あの女はどこまで這っていったのかなぁ？」

美香がおでこに右手を当てて遠方を探す。

「いたいた！　まだあんな所に……逃げようとしただけにお仕置きを強化しなくちゃだね莉央ちゃん？」

「そだね。生き地獄を味あわせてやる」

ゆっくりと歩いて里沙子の元へゆく莉央たち三人。

「少しは這ってこれたじゃんオバサン？」

「ひっ！？　いやあああっ！！」

低い声で囁く莉央に、目一杯の恐怖を見せる里沙子。
ゆっくり振りむいて、色々な拷問道具を両手に持っている三人が目に入ると、小便を勢いよく漏らしてしまう。

「やだ……やめて……怖いっ！　お願いです！　許して下さいっ！」

小便を垂れ流しながら再度土下座して、三人の女子小学生に媚びる３８歳の中年女。
土下座して下半身に力が入ったため、肛門から先ほど蹴り込まれた縦笛がニュッと飛び出してきた。

「あらあら……まだ大事に腸の中にもっていてあくれたのね？莉央ちゃんの縦笛」

「ほんとだ。ウンチまみれにしてくれてありがとう。お礼に注射打ってあげる。なかなか死ねないようにね」

明日香が女を誉めるように囁くと、莉央は冷たい笑みを浮かべながら注射を取り出す。
ドクドクと肛門からは鮮血が流れ出ているが、特殊な血止め注射によって、直ぐに血は止まった。

「お願いしますお願いします！　許して下さい。何でもします！」

「オバサン！　とりあえず泣き止もうよ。先ずはあたしが持ってる道具を味わってくれるかな？」

美香は木刀と金属バットを持っていた。

「まずは木刀で全身の骨を折ったげるね？いっくよぉ？」

「いやあああああああっ！！！！」

一時間ほど美香の木刀での全身メッタ打ちが繰り返された。
両手両腕、肋骨、鎖骨は数十箇所もへし折れ、全身が痣だらけになって泣き喚く。

「痛ぁーいっ！　痛いよおおっ！！　うわあああああんっ！！」

「はぁ。はぁ。ちょっと休憩させて……手が疲れてきた。金属バットの尻叩きはちょっと待って」

美香の息があがってしまったので、明日香が前に出る。
両手にはハサミと電極棒を持っている。
長さ２０㎝、直径３㎝ほどの二本の電極棒を擦り合わせると、バッテリーからの電気でバチバチと豪快な火花を散らした。

「美香ちゃんゆっくり休んでてね。さぁて。どこを焼こうかなぁ？

どこ焼いて欲しいですかぁ？」

「マンコ」

明日香の問いかけに里沙子に代わって莉央が即答する。

「マンコですかぁ？　分かりました。じゃあ股を開いて汚い膣口を見せてもらえますかぁ？」

泣いて首を左右に振る里沙子を、莉央が背後から両脚を全開に開いた。

『くぱぁ〜』

「莉央ちゃんありがとう！　それなら丸見えだよ」

「痛いいいっ！やめてぇっ！　そんなことされたら私死んじゃううっ！！」

『ズッ！　グチュッ！！』

「んああっ！？」

まずは強引に電極棒を膣から奥の子宮口まで差し込む明日香。

「うーん。。まだ長さに余裕あるわねぇ。いっそ子宮も焼いちゃおっかぁ？　せーの……」

『ぐぼおっ！！』

「ぎゃああああっ！！　痛いいいいっ！！」

電極棒は根元まで全て飲み込まれ、子宮口を突き破り、奥の奥のヒダにまで到達した。

性器からドクドクと鮮血が流れ出る。

「子宮口突破しちゃったわよ？　さぁ地獄タイム開始っ♪」

『バリバリバリバリバリバリバリバリッ！！』

「あぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃあっ！！」

電気の波に合わせて踊るように全身を痙攣させせながら奇声をあげる里沙子。

大便をブリブリと垂れ流しながらも膣内と子宮内を焼かれてゆく。

「あははは。オバサンが踊ってるみたい♪」

美香は里沙子の姿を見て大はしゃぎ。

莉央は両手を感電して慌てて手を離して苦痛の表情を浮かべてい

た。

「莉央ちゃんまで感電しちゃった!?　ごめん」

「いやいや、あたしがうっかりしてただけだから気にしないで!」

『バリバリバリバリバリバリバリバリバリッ!!』

長時間電撃を繰り返している内に、プスプスと焦げ臭い匂いと共に、煙が膣口から立ち昇ってきた。

「程よく焼けたかしら?　抜いてあげるね?　えいっ」

『ボコオッ!!　ズルズル……』

「んぎゃあああああああっ!!」

電極棒に貼りついた剥がれた膣内が丸々出てきた。

「おおっ!　膣が丸々出てきちゃった!?　すっごぉい!」

明日香が爆笑しながら剥がれた膣を見て喜ぶ。

「子宮は丸く広がってるから無事だったのね。膣は電極棒に密着してたから……でも内側からボイル状態かな子宮ちゃんも……あはは。でもなかなかエグいなぁ」

莉央も明日香の電撃が膣を抉り出すとは思ってなかったので、かなり驚いてしまう。

両手で性器を押さえてコロコロと転がりまくる里沙子だった。

「全身の骨折られてるのに転がれるんだ!? すごいねオバサン……」

転がったショックで、折れかけていた肋骨が更に数本へし折れ、今度こそ動けなくなってしまう里沙子。

莉央は更に強力な痛み止めの注射を里沙子に打った。

「まだまだ死なれちゃ困るからね。これでよしっと!」

「さぁ私の二段階目は……ジャジャーン! はさみ♪」

「いやぁーっ! いやぁーっ! えーんえーんっ!!」

膨よかな胸をプランプラン揺らす里沙子の横にしゃがみ込み、右の乳房を鷲掴みにする明日香。

「なかなか大きなオッパイしてますわねぇ……この黒い干し葡萄みたいなのが邪魔だから切り落としていいですかぁ？」

「ひいっ！？　やだ！　絶対やだっ！！」

「何を少女みたいな話し方になってるの？笑わせてくれるわねほんと……よっと」

『チョキンッ！！……ポトリ』

「ぐわあああああああっ！！！！」

大きなハサミは、一気に中年女の乳首を切り落とす。勢いよく血が噴き出し、明日香のセーラー服は真っ赤に染まってゆく。

素早く反対側のちくびも切断し、今度は下半身に移る。陰核の皮を左手の親指で押し上げて剥き、クリトリスを露出させると、ハサミでそっと挟み込む。

「クリトリス……切断します。覚悟しなさい」

「いやあああああっ！！！！」

『チョキンッ！……ポトリッ……コロコロ』

「ギャアアアアアアアアッ！！！！　ぐわあああああああああっ！！！！　ぎひいいいいいいいいいっ！！！！」

全身の骨が折れているにもかかわらず、再度転げ回る里沙子。
彼女の人生では過去最強の激痛を今、味わっているだろう。
陰核切断……女性の一番感じる部分を切断面されては生き地獄を今生で味わっているとしか言えなかった。
小学生の女の子たちはクリトリスをちょん切られて転げ回る中年女を見て薄ら笑いを浮かべている。
あまりに楽しいので数分間見ていると、遂に動かなくなり、悲鳴だけをあげる状態となった。
ハサミを少し開いた状態で明日香は再度女の下半身に狙いを定める。
片方の刃を肛門へ……もう片方の刃を膣口へ突っ込んだ。

『くちゅ……ズブブ』
「アナルとオマンコ……繋げてあげるから。ほいっと！」
『ジャキンッ！』

一文字に裂かれた会陰部から大量の血が噴き出す。
更に血まみれになる明日香だったが、気にすることなくチョキチョキと、ハサミを深く入れて直腸と膣内を奥に切り裂いてゆく。

「莉央ちゃん、子宮抉り出したいんだけど恥骨砕かなきゃ無理なか

なぁ？」

「マンコから取り出すのはそのまま腕を突っ込んで子宮掴んで引き抜けばいいよ。それだけ会陰部を深く切れてたら簡単に抜けそうね」

『ズブブ……グリッ！……ガシッ！！』

「ほんとだ、簡単に腕が入っちゃった♪　子宮みたいなの掴んだよ？」

「そのまま引き抜いてやって！　卵巣もズルズル付いてくると思う」

「うん！　えいっ」

『ズル……ズルズル……ズルルルルッ！……ごぽおっ！！』

「やった！　出たっ！」

明日香によって見事に生焼け状態の子宮が抉り出された。

卵巣も二つ付いている。

「イヤらしー♪　卵巣まで付いてきてるじゃんっ！」

美香も頬を赤くして大喜びしている。

喉が枯れて母が出なくなっても大きく口を開けて叫び続ける宮沢里沙子。

胸も性器も肛門も押さえることが出来なくなっている女は、ひたすら大声を出すことでしか痛みに対処が出来なかった。

「チチにマンコにクリトリスに肛門……エッチな所ばかり血を流しちゃって……あはは♪　哀れねぇ！」

更にはしゃぐ美香。

「さぁぼちぼち回復したし……ケツバットいきましょうかっ♪」

悲惨な状態の里沙子は、更に無理矢理四つん這いにされ、お尻に金属バットで１００叩きを受け、臀部の皮がズル剥け状態となる。

「ひぎいいっ！　許してぇぇぇっ！　お願いいいっ！！」

「あはは！　まだ命乞いするのかオバサン？」

『ドガッ！』

美香が呆れてもう一発お尻を強打する。
ここで止めを刺す役の莉央が、両手にペンチとハンマーを持っているが、先にハンマーを右手に構えた。

「笑って」

「ううう……痛い。痛いいい～」

『ガンッ！　！……ブチブチッ！』

「うぎゃっ！？」

悲鳴をあげる口元に、ハンマーを叩き込む莉央。
唇が裂けて鮮血が飛び散る。

『ガンッ！　ガンッ！　ガンッ！　ガンッ！』

「うごおおおっ！……ひぃぃ」

必死で左右を向いて逃れようとするが、追いかけるように口を叩かれるので、なす術がないまま前歯は上も下も全てへし折られてしまった。
頬と鼻も何度も叩き込む。
悲鳴さえあげる気力が無くなるほど顔中の骨もへし折られ、歪に変形していった。
ただ涙を流しながら莉央の顔を見上げている。

「なんか文句あるの？」

「うぅぅ、ご、ごろじて…」

「もうちょっと我慢してくれるかな～？次は目玉くり抜くから……
その前に奥歯をもらうね？」

ペンチに持ち替えて、全ての歯を一本一本引っこ抜いてゆく。
遂に歯茎だけになって顔面は血みどろだった。
必死で目を閉じて目玉だけは守ろうとする里沙子。

「いいよ。瞼はペンチでいくから」

『ガツッ！……バリバリバリバリッ！！』

「んごおおおおおっ！！！！」

右の瞼を引きちぎる。
間髪入れずに左目も瞼をペンチで引きむしった。
里沙子本人は目をつぶっているつもりなので白目を剥いている。

「あはは！　もう目ん玉丸出しになっちゃってるよ？ほら……」

全開に開いたペンチを目の縁に沿って二箇所めり込ませて、眼球を掴む。

『ガシッ！　グググ……ボコッ！！』

遂にペンチで抉り出される眼球。

「きぇえええええええっ！！！！」

「あははは！　なんて変な奇声あげてるの？　さぁもう一個もくり抜くよ？それっ」

二つ目もペンチでくり抜くと、口をパクパク動かしながら痙攣を始めた。

歯茎をペンチで掴み、大きく口を開かせて、口内へ目玉を二つ捩じ込んだ。

「ほら、食べろ！　人生最期のご馳走はあんたの目ん玉だよ」

「むごおっ！！……うごごごごごっ！！」

顔面中血まみれで歪に腫れ上がり、もうこれが宮沢里沙子だとは誰にも分からなかった。

「さてと。もうご臨終の時が近いけど少し暑くない？」

「むごむごむご……あひあひあひ」

質問をしても訳の分からない言葉しか返ってこなかった。
莉央はメスに持ち替えて、首の周りを皮膚だけ薄く切る。
切れ目に両手を入れて首から顔面の皮を剥がし始めた。

『メリッ……メリメリメリメリッ』

「アヒャヒャヒャヒャヒャアッ！！」

ゆっくり時間をかけて見事に顔面の皮を全てめくり上げてしまうと、真っ赤な肉塊の顔が残る。

「ひぇ～。莉央ちゃん、それはやりすぎじゃない？」

青ざめた顔で美香が問いかけるが、顔は笑っている。
明日香もメガネをかけ直してじっくり観察していた。

「少し涼しくなった？　今度は身体も脱いでいこうね？」

腹部にメスを入れると、今度は首まで皮を剥がしてゆく。
切り取った乳首の部分に丸い穴が開き、マヌケな皮となった。

「乳首部分に穴が……ごめんねうまく剥がせなくて。今度は下半身だよ」

脚の付け根と膝に丸く切れ目を入れて、手際よく全ての皮を剥がしてゆく。

明日香と美香も片脚ずつ手伝った。

全身皮を剥がされた真っ赤っ赤の肉塊が出来上がった。

「いひぃいいいいっ！……あひゃあああああっ！」

泡を吹いて激しく痙攣し始める里沙子。

「子供たちの心をズタズタにした罪の重さに気がついた？それじゃあ死ぬまで見ててあげるから早く死んで」

莉央たち三人は、仰向けに倒れて全身から血を流している人型の肉塊を見下ろして立っている。

止めは刺さず、痙攣後の死亡を待つ三人。

「痛いか？　オバサン？　もっともっと苦しんでいいんだよ？」

美香はしゃがみ込んで膝に肘をついて両手を頬に当ててじっくり観察する。

「地獄で修司さんが待ってるわ。早く逝きなさい」

明日香は立ったままで冷たく囁きかける。

しばらく痙攣していたが、遂に動きが止まる。
一瞬激しく鼓動した後、ピタリと停止する心臓。

「やっと死ねたみたいね。本日の任務を終了します。お疲れ様でした」

明日香と美香に終わりを告げる莉央。
残酷処刑島に新たに二つの遺体が加わることとなった。

非道なる里親（後編）（後書き）

宮沢修司と里沙子夫婦は残酷処刑島にて命を落とした。
元凶の里沙子の方は、修司より数倍激しい拷問が与えられる事となる。
悪を成敗しても、正治と郁美の心には一生消えない傷が残ってしまうのであった。

因果応報（前書き）

全世界で決して無くなることがないイジメ問題。
深刻だがそれ以上に愚かなのは、親による性的な虐待であろう。

因果応報

秋吉沙都子。
今年５０歳になる彼女には１７歳になる娘がいた。

これといった結婚願望もなく、数年間何となく付き合っていた彼とも別れ、２９歳の時に地域限定の宝くじで１０００万円当選する。
その時に世界旅行に行こうと決断した。

万里の長城が夢に出てくるほど好きだった沙都子は、真っ先に中国へ飛んだ。
そこで出会った彼は……中国マフィアのボスであった。
そのボスである彼は、日本が大好きであったため、日本語がペラペラで、秋吉沙都子が着ていたＴシャツを見て日本人だと確信した彼は即時に話しかけてナンパをする。
万里の長城で出会った二人は半年も経たない内に日本へ行き、間もなく入籍することになった。
麻薬の密売での待ち合わせとしてボスであるリ・シャウランが直々に万里の長城へ出向いていた時の出来事である。

弟のリ・チャンポンにマフィアのボスの座を譲ってまで日本へ行き、日本人の夫となった彼は、ある意味熱い男であった。
弟にボスの座を譲ったとはいえ、日本にいる彼の命令一つで中国からいつでも部下を呼べ、彼の命令一つで殺人さえも厭わない数百人の部下たちは、とてつもなく恐ろしい存在だと言える。

彼なりに日本の女性である愛しの妻、秋吉沙都子に嫌われたくはなかったため、出会った頃から現在まで中国マフィアのボスである

ことは隠し続けていた。
何も知らない里沙子は、リ・シャウランのことを未だに優しくて繊細な理想の男性として、人生で最高に尊敬している男である旦那であった。

名前はもちろん変えている。
秋吉亮一。

中国最大のマフィアのボスであるリ・シャウランは、秋吉亮一として、日本人として、平和に暮らしている。

……厳密には平和とは言えない事実もあった。

彼の一人娘である秋山有里亜を非常に溺愛していたのである。
溺愛も限度を超え、妻である里沙子にさえ話していない極秘事項を話していた。
そう。女子高生である秋山有里亜は、実の父が中国人であり、マフィアのボスであったことまで知っていたのである。
中学時代に虐められていた有里亜は、何でも話せる大好きな父親にだけイジメの事実を打ち明けていた。
度重なる愛娘のイジメ相談を聞いているうちに怒りが限度を超えた亮一は、イジメがあるごとに中国から部下を呼びつけ、虐めていた女子中学生のクラスメートを合計三人ほど監禁してレイプして殺害し、海に沈めてしまっていた。
キッチリとドラム缶の中でコンクリートで固めてから投棄してるので、決して死体が海上に浮かび上がることは無い。
三人の部下たちが三人の少女を殺害……。
秋吉亮一との関係は警察にも固く口を閉ざし、三人の部下たちは全員、無期懲役を言い渡されて刑務所に収監されて服役中である。

意外と気の弱い秋山有里亜は、西部青蘭女子高校でクラスの数人から虐められていた。
高校生になってからは初めてのイジメ体験となる。

「何か事あるごとにブリッ子みたいに両頬を押さえながら『やだぁ』とか言うのやめてくれないかな？　いい加減我慢の限界来たんだよ有里亜」

「ごめんなさい。だって……口癖だから……」

「次の英語の授業中に……素っ裸になれ！」

「えっ！？　みんなに、見られるのに恥ずかしい…嫌だそんなの許して……」

「同性しかいないからそんなに恥ずかしくないと思うよ？　ねぇ奈美恵？」

「そうそう！　英語の先生まで女だし……何も恥ずかしくないないない！」

主犯格の黒髪ロングの美人である真鍋優香に同意を求められたショートボブの短髪であるボーイッシュな柔道娘、中道奈美恵が手を叩きながら爆笑する。

前から三列目の席である秋吉有里亜の両隣に座っているイジメの

主犯格の真鍋優香と優香の親友の中道奈美恵。

二人に挟まれているから余計にタチが悪かった。

二人からの命令通り嫌々立ち上がって震えていると、真鍋優香がそっとスカートに手を掛けてゆっくりと脱がしてゆく。

足首まで脱がされてからしばらくは、四列目以降のクラスメートの女子たちに下半身パンツ姿を晒し者にされる。

クスクスと笑う声も聞こえてきた。

実行犯二人以外にも、秋吉有里亜を嫌っている女子がたくさんいたのであろう……。

「秋吉さん！　何を立っているのかな？　座りなさい！」

「あ、あの……」

４０歳になる英語の女教師に咎められた有里亜は、頬を赤くしながら下を向いてモゾモゾしている。

「マンコが擦れて痛いから立ってます、と言え！」

ショートボブの柔道娘である中道奈美恵が催促する。

しばらく何も言えずにモゾモゾしている有里亜のパンツに手をかける奈美恵。

「ちょっと股間の大切な所見せてもらうわよぉ？　それっ！」

一気にパンツを足首まで引き摺り下ろした。

「ひゃあっ！？」

「えっ！？　何っ！？」

「いえ……何でもないです、すみません……あ、アソコが痛いのでしばらく立ったままで授業を受けさせてください……お願いします青山先生……」

「……な、何もそんな卑猥な言い方しなくもいいです……下半身が痛いのですね？　ではそのまま立っていなさい。保健室に行かなくても大丈夫？」

「はい。大丈夫です。ありがとうございます」

何が起こっているのか分からない三列目より前の二列目と一列目の少女たちは、思わず振り向いて状況確認をする。

授業中に下半身素っ裸という非現実的であり卑猥な光景を見て、クスクスと笑う者から爆笑する者まで現れた。

半数以上が笑っている中、半数近くは黙って見て見ぬフリをしている。

結局救ぃの手を差し伸べる者は誰一人いなかった……。

「やれば出来るじゃん有里亜！」

「あはははははは！」

主犯格の真鍋優香に褒められて大爆笑に包まれる教室。
パンツを足首まで脱がせて完全に脱がせ取り、自分のポケット捩じ込む中道奈美恵。そのまま中指をそっと秋吉有里亜の下半身に近づけてゆく……。

「これは記念に貰っておいてあげるから。お礼に気持ちいいことしてあげるよ」

『つぷっ……』

「ひぃやあああああっ!?」

中指を有里亜のピンク色した肛門にゆっくりと差し込んだ。
ズブズブと第一関節、第二関節と直腸にめり込ませてゆく奈美恵。

「痛いっ!!」

「黙ってないとカッターでケツ穴とマンコ繋げちゃうぞ!?
ああっ!?」

「あははっ！！　奈美恵ったらヤンキーみたいな口調になってるじゃん？」

「だって……大声出されたら先生にバレちゃうじゃん？　指の根元まで突っ込んでから直腸グリグリ掻き回してやるつもりなのに」

「今のは青山先生には聞こえてないみたいよ？　聞こえないフリしてるのか知らないけど……あはは」

『ズブブブブ……グリッ！！』

「いやあっ！」

遂に中道奈美恵の中指は、秋吉有里亜の肛門深く、指の根元まで全てぶち込まれた。

宣言通りに執拗に直腸を掻き回す奈美恵。

「歳の割に綺麗な色してるわね？　普通はもっと黒っぽいんだけど……あっ！　腸の奥で指がうんこに当たってる……汚いなぁあんた」

「あはははは！　自分で勝手に突っ込んでおいて良く言うよ！」

奈美恵による性的イジメを見ながら少し呆れ笑いしながら脚を組む真鍋優香。

四列目より後ろの女子生徒たちは頬を赤くしながら奈美恵の肛門

が掻き回されているのをチラチラと見ている。

「痛い？　もっと掻き回して欲しいのかな？答えろ！」

「ひいっ！？　痛いいいっ！　や、やめて下さいっ！！」

思わず涙を流しながら叫んでしまう秋吉有里亜。

『グププ……ズッ……ズボオッ！！』

「ひゃはあああっ！？」

肛門に挿入されている中指に人差し指を添え、一気に2本とも奥の奥まで捩じ込んだ。

メリメリと音を立てて張り裂けそうにバクバクする有里亜の肛門。

ある意味どんなことをされているのか悟った青山先生は、もう知らないふりをして授業を続けた。

可哀想と思いながらも自分に生徒のイジメが降りかかるのが怖かったのである。

教師失格とも言える怠慢であったが、苦労して教師になり、まとまった年収を稼いでである公務員の座は手放したくはなかった。

ボールペンをクルクルと回しながら冷たく微笑む美女……主犯格

の真鍋優香であった。

「あたし……あんたの汚い穴に奈美恵みたいに指突っ込む勇気なんてないから……このボールペンでやったげるね？」

中学生の時のイジメでは、クラス全員からの無視、軽く頭をしばかれる、前蹴りをくらう……程度であったが、このような性的イジメを受けるのは秋吉有里亜の人生の中で初めてのことであった。

肛門の処女は中道奈美恵によって既に奪われているが、まさか本当のロストバージンまでもクラスメートの同性に奪われることになろうとは思いもしなかった有里亜である。

『スゥーッ……ピトッ』

「やはあっ！！」

黒髪ロングの美少女の右手に持つボールペンが有里亜の膣に当たる。

「ここに……入れて欲しい？」

「ひいっ!?　ぜ、絶対嫌ですっ！　お願いですっ！　許して下さいっ！！」

「ダメ♪　ほらあっ。入るよぉ？」

『つぷっ……ズズズ』

「やてえええててっ！！　ひいいいいいいっ！！！！　有里亜のアソコ……好きになる男性のために汚したくないいいっ！！」

「嫌いな同性で悪かったわね？　あたしはこう見えても男にモテるんだよおっ？　美女に犯されて嬉しくない〜？　ほらほらぁ♪」

「いやいやいやあああっ！！」

『パンッ！　パンッ！　パンパンパンパンパンパンパンッ！！』

「はぎゃああああっ！！」

女子柔道家の中道奈美恵の攻撃力は凄まじかった。
猛烈な勢いでもう片方の手で有里沙亜の臀部を叩きまくる奈美恵。右手の中指と人差し指は、未だに肛門へ突っ込まれたまま……左手で鬼のスパンキングが始まった。
激しく声を上げて涙をダラダラと流しながら文字通り号泣してしまう有里亜だったが、クラスメイトたちは目を背けるか苦笑いするだけであった。

「ほらほらほらほらあっ！！　ケツの皮裂けるほど叩きまくってやるからなあっ！！」

「痛い痛い痛い痛い痛いいいいいっ！！　やめてえええっ！！　わー

「んわーんっ！！」

数分間叩き続けてようやく止まった頃には、真っ赤どころか紫色に内出血した臀部……左右満遍なく叩かれて同じように紫色に変色してしまっていた。痛すぎて座りたくても座れなくなった有里亜のお尻……その中心部の肛門からもようやく２本の指が引き抜かれた。

大便まみれになっている中道奈美恵のその二本の指を、有里亜の口に無理矢理捻じ込んで舐め取らせる奈美恵。

もう泣くしかなかった哀れな有里亜の股間に、更なる人生で最悪の出来事が起きようとしていた。

『ズブブブ……グボッ！！……バリッ！』

「んぎゃあああああっ！？　痛いいいいいっ！！」

黒髪ロングの美しい髪をかき上げながら、一気に同級生の性器へボールペンを突っ込む真鍋優香。

一瞬で処女膜を貫かれて血を太腿にドクドクと流しながら目を見開いて号泣し始める秋吉有里亜……。

思わず床に崩れ込んでしまう。

ピクピクしながらお尻を痙攣させるが、更に追い討ちをかける優香。

まだ数センチ出っぱっているボールペンの根元を、右足の裏でぐっと押さえて全て入るまでゆっくりと蹴り込んだ。

「ほら……全部飲み込ませてあげる」

『グボボボボ……メリメリメリメリッ！……ぴゅううううっ！！』

「ふんぎいいいいいっ！！」

子宮口まで一気に貫かれた膣口からは、更に激しく血が噴き出す。

「マンコの奥の奥まで貫通刑だよ？　あはははは♪」

「そこまで差し込んだらヤバくない？」

流石に恐怖心に駆られる親友の柔道娘である中道奈美恵が口を両手で塞ぐ。

「まだ生きてるんだから心配なかったってことだよね？　ねぇ有里亜ちゃんっ！？　それそれそれええっ！！」

『ガガガガガガガガッ！！』

「ぎゃほほほほほほほおうっ！？」

足の裏を有里亜の性器と肛門に押し当て、思いっきり電気アンマを敢行する優香。
遂には小便も漏らし、床は血と小便まみれになってゆく。
大陰唇と小陰唇、膣口までも真っ赤になり、粘膜が爛れて所々出血していた。
処女膜からの出血と外的損傷とが重なり、更に勢いよく血を噴き出させている。

慌てて有里亜の膣口からボールペンを引き抜き、ポケットから取り出したパンツを履かせる中道奈美恵。
子宮口と処女膜からの真っ赤な鮮血がドクドクと流れ出てくる。

「も、もうこれ以上はやめとこっ！　ねっ？　優香」

「あははは！　血塗れじゃんこの辺りっ！　あたしたちに前も後ろもバージンを奪われちゃったね？哀れだねぇ？　あはははははっ♪」

みるみるうちに真っ赤に染まってゆく純白パンツ。
ガムテープで押さえつけるように下半身をぐるぐる巻きにして血を止めることに成功する中道奈美恵であった。

「少し手荒いけど血は止まった。帰りに絶対病院行くんだよ有里亜」

「ぐすん、ぐすん。うん。ありがとう中道さん……」

余りの恥辱と傷みに苛めた相手にお礼を言ってしまう秋吉有里亜であったが、ようやく二人のイジメから解放されて少し力が抜けていたみたいである。

明くる日、有里亜は登校してこなかった。

やり過ぎた不安と恐怖からか、八つ当たりする相手を英語の女教師に向けてしまう真鍋優香であった。

放課後に駐車場で自家用車に乗り込もうとする青山先生を二人で引っ張ってゆき、体育館の裏に連れていった。

二人がかりで殴る蹴るの暴行を与えたあと、更に全裸になるよう強要する。

「いやっ！　先生にこんなことして済むと思っているのっ！？　痛たたたた……お願いだからもうやめて。このまま帰してくれたら暴力は黙っていてあげるから……お願い真鍋さん……」

「ダメ。４０になっても独身のオバさんが処女かどうか確かめてやるんだから早く脱げっ！！」

「殺すぞババアッ！！」

青山先生を羽交締めにして優香の暴行を大いに助けながら中道奈美恵も声を荒げる。

有里亜に性的イジメを敢行している辺りから、何かが切れたようにヤンキー化した二人であった。

泣きながら素っ裸になり、更に四つん這いにされて両脚を大きく開かさせる高校教師、青山結衣４０歳。

教え子から陰部の強制診察を受けさされるとゆう、醜態を晒す羽目になった。

「きったないケツしてんなぁ……なんかアザとかホクロだらけだよ？」

「ほんと、こんなんじゃ男できてもすぐ振られるわね？」

二人に言葉責めを喰らい、思わず涙を流してしまう青山先生……。

「もうやめてええ。ぐすんぐすんっ……」

「あれぇー？　まさか教え子に虐められて泣いちゃったぁ？　なんて哀れな先生……あはははは！」

「女医を目指してる優香先生に汚いマンコ……診てもらいましょうねぇ？　ほらあっ！」

『グリッ……くぱあっ！！』

両方の親指を小陰唇に押し当てながら、一気に力をこめて全開に左右に開かせる中道奈美恵。
一気に小陰唇と膣口は子宮が丸見えになるほどまで大きく開かされた。

「いやあああああっ！？」

「わぁ～すっご。なんか変なヒダだらけできったないマンコしてるなぁ……」

パックリと開かれた膣口を、奥の奥までＬＥＤの電池で照らしながら覗き込みながら呟く優香。

「やだっ！？　コイツ処女膜付いてるよっ！？」

「えっ！？　嘘でしょ優香っ」

思わず中道奈美恵も覗き込む。
形は歪だが確かに処女膜は付いていた。
４０年間破かれることなく今までの人生を歩んできた青山先生……。

とにかく恥ずかしさが大き過ぎて、泣きじゃくる羽目になる青山先生であったが、数分ほどして我に返った時、えげつないほど大きく育った胡瓜を握りしめて笑っている二人に気付く。

瞬時に察した青山先生は思いっきり走って逃げようとするがあっ

とゆうまに二人に追いつかれてしまうのであった。
低い位置にある四角いコンクリートの壁に縛り付けられ、両脚を大きく開かされて固定される。
「高校教師、教え子に処刑される！」
青山先生の背後にゆっくり近づきながら胡瓜をクルクルと回しながらそっと呟く優香。
「なんかそんなタイトルのＡＶありそうだよねっ！？　あはははは！」
奈美恵もそれに続いて爆笑する。
手には同じように大きくて長い胡瓜が握りしめられている。
「さてと。処刑方法だけど。もう貫通串刺し刑しか浮かばないんだよね……先生」
「私も優香と同じです。私は肛門から串刺し……優香先生はあなたの初めての処女膜を貫く処刑人となるわけよ。んふふ♪」
「ちょっと奈美恵！　いつから先生になったのよあたしは？」
「変態女医さんってか？　えへへ」

「なるほど……診察を終えたあたしは串刺し刑の処刑人に変わっちゃってるけどね……ははは」

日暮れ前の黄昏時、女子高生による女教師の串刺し刑……処刑ごっこが開始された。
まずは肛門に胡瓜を半分までねじ込まれて号泣する羽目になった。

「痛い痛い痛い痛い痛いっ！！　やめてええええっ！！」

『グリッ……グリグリッ』

「んぎいいいいっ！！」

「少し血が出てるけどさぁ。まだまだ入ると思うんだ私。直腸って10センチ以上はあるでしょ？　突き当たりの何とか結腸までは入れなきゃだよね？」

「S状結腸だよ。そこを無理矢理突いたら間違いなく激痛だと思うよ？」

『グボボボッ！！　ぐにゅうううっ！！』

「ぎゃあああああっ！！」

中道奈美恵の差し込んだ胡瓜は突き当たりのS状結腸を捉えて突き抜かんとばかりに変形させていた。
直腸破裂寸前で気が付いて引き抜く奈美恵。

「グニャグニャして跳ね返ってくる？　もう最深部の結腸まで突っ込んだみたい。抜いてあげる。ほらっ」

お尻をピクピクさせながら震える青山先生。
呼吸するたびに肛門が開いたり閉じたりして、時々血がトクトクと流れてくる。

足の甲でパンパンと股間を2回蹴り上げる奈美恵。

「お尻を突き出したままでコンクリートに縛り付けられて……何をケツ穴ピクピクさせてんの？　いやらしいわねぇ」

理不尽な理由で蹴られた足の甲には大便と血液と腸液が混じった粘液が糸を引いてきた。

「うわぁ。きったねぇなぁもう……アナルから糸引いてる粘液みたいなの出ちゃってるよコイツ」

「なんかそれはそれでエッチじゃない？　粘液なんてマンコからしか出ないと思ってたから……さぁではではお待たせの前から串刺し刑といこっかぁ？　ね？」

「わぁあんっ！　わぁあんっ！　やめてお願い助けてお願いほんと

お願い許して下さい優香様あっ！！」

「はぁ？　教え子に『様』付けなんてしてんじゃねーよこのクソババアがっ！　きしょいんだよ」

『スス ッ……ピトッ』

「ひっい！？　やだあっ！！」

「ここね？　汚い処女膜付きの腐れマンコは？　一気に行くのとゆっくり行くのとどっちがいい？」

「痛くない方がいい……やめて……ほんと痛いの嫌なのっ！」

「もう肛門串刺しで痛いのには慣れたでしょ？　一つ教えておいてあげよっか？　どっちも痛いからぁ～♪」

「あはははははっ！！　酷いこと言ってるなぁ優香様♪」

「奈美恵まで様付けしないの……全く。さぁてと。結論から言いますねぇ？　マンコは一気にやったげる♪」

「お願い許してください助けてください真鍋様っ！！」

「今度は苗字に様付けですかぁ？　青山先生……青山結衣っ！　お仕置きよ……えいっ！！！」

『グボオッ！！……バリッ！！』

「ひんぎいいいいいっ！！　やっはあああっ！！」

一気に処女膜を貫いた胡瓜は、子宮口をも貫いた。
ショックで全身を痙攣させる青山結衣。
白目を剥いて涎を流し、危険な状態だと誰にも分かったほどだった。

爆笑する二人は更に踏んだり蹴ったりして拘束を解かない。
一気に処女膜を貫いた胡瓜を引き抜いてもう一度奥まで一気に差し込む。
それを繰り返し、最後は猛烈なピストン運動に変わっていた。

『ズチュチュチュチュチュチュチュチュチュチュッ！！』

透明な粘液と真っ赤な鮮血と白いオリモノが入り混ざった液体がブチャブチャと辺りに飛び散る。
二人の女子高生の太腿や腟辺りに振りかかる。

「そんな痙攣続けていてもやめたげなーい♪　ほらほらほらほらぁっ。可愛い教え子に犯される気分はどうかな？　青山先生？」

全く動かなくなる先生。
ショック死したと二人が気付いたのは拘束を解いて脈を確認してからのことであった。

「そ、そんな。二つの穴同時に犯したくらいで死んじゃうなんて……やばいよ優香」

「う、うん。もう真っ暗で人もいないしスコップで深く掘って体育館裏の花壇に埋めちゃおうよ」

「ええっ!?　そんなことしたら犯罪じゃんっ!!　自首しようよっ!!」

「あんなヘタレババアのために人生棒に振りたくないんだよっ!　頼むよ奈美恵っ!　絶対内緒にしよう二人の……」

「……分かったよ。じゃあ夜明けまでに頑張って埋めちゃおう」

必死で花壇を掘り続ける二人であったが、幸い花壇の土だけに柔らかかったので、零時頃には人一人ちょうど完全に埋まるくらいには掘れていた。

「はぁ。はぁ。もうこんなもんでいいよ奈美恵」

「ふぅ。ふぅ。そうだね。さぁ担いできて穴に置いて埋めちゃお」

二人が帰宅したのは午前1時を回っていた。
幸い友達の家で遊んで遅くなる、とゆう連絡はしていたので両親が捜索願いを出すこともなく、無事に朝を迎えることができた。

ビクビクしながら過ごす二人であったが何事もなかったように通

学を続けていた。

――――一か月が経過する。
その時二人の身体はある山奥の倉庫に横たわっていた。

「――――ん？　あれ？」

ふと目を覚ました少女は辺りを見渡す。
見覚えのある顔が隣で寝ていた。
薄暗い暖色系の光が、親友の顔を照らし出していた。

「優香っ!?　優香っ!!」

「――――んんん……んあ？　奈美恵？」

二人はようやく目を覚まして今の現状がどうなっているのか状況確認を続ける。
身体が動かない。
ベッドに拘束された首しか回らない状態で無傷であるとゆうことまでは理解できた。

「無事に一ヶ月間ほど警察に捕まらずに済んでホッとしてたのは覚えてるけど……どうしてこんな所に？」

「か、監禁されたのよ！　誰かに捕まって眠らされて……最悪だわ。

私たちもしかしたら通報されちゃうかも！？」

中道奈美恵が顔面蒼白になってキョロキョロと周りを見渡しながら叫ぶ。

「監禁って……あたしたちが青山先生殺しちゃったこと誰かが知ってるわけないじゃん……だいたいこんな回りくどいことしなくても普通にあたしたちを通報したら済むことだし……」

「それもそうだね。じゃあ犯人の目的は一体……」

『ガチャ！ウイイイーン』

重たそうな鉄製の扉がゆっくりと開いている。
電気も白色系の鮮やかな光に切り替わった。
ぼやけていた顔がお互いはっきりと認識出来るようになった。

「ようこそドリームウェアハウスへ」

そこには50そこそこの凛々しい顔をした髭面の男が立っている。

屈強そうな男が二人……後から付いてきた。

「だ、誰？　あなたたちは？」

意外と冷静に問いかける優香だったが、奈美恵の方はかなり動揺して叫ぶように罵声を浴びせかける。

「どうして私たちを拐った！？　カネ目的か？　それとも青山先生を殺したことでの仕返しなのかっ！？」

「威勢のいいこったな。残念だがどちらも違うぞ。青山先生とかゆう教師を殺してしまったのか？」

「バ、バカッ！！　自分から殺人自白してどうすんのよっ！？」

「うっ！？　ご、ごめん」

ごめんじゃすまない大失態をやらかしたと思える中道奈美恵だったが、どうやら安心もしていられないようだ。
ワンテンポ遅れて気付く優香。

「ちょ、ちょっと待って……殺人したのを咎める訳でもなくお金目的でもないとしたら……まさかあなたたち……あたしたちを売春婦として外国に売り捌くつもりでしょうっ！？」

「ええっ！？　マジかっ！？　最悪じゃんそんなのっ……そう言えば後ろの二人の男は中国語みたいなの話してたよねさっき……中国や香港なんて言えばまさか……ダルマ女にされてからの売春婦っ！？ひぃいいいいっ！！」

二人の予想はあらぬ方向にエスカレートしていくが、半ば呆れながら男は続ける。
「残念だがそれも違うな。売春婦とゆうところは少し近いか……だが結果が全く違うからやはり間違い……だな」
恐怖心がどんどんと芽生えてくる。
心臓が恐怖ではち切れんばかりに高鳴るのが拘束されていても感じ取れた二人だった。
黙って震えながら日本語が話せるたった一人の髭面の男を見つめ続ける優香と奈美恵。
屈強な二人がゆっくりと近づいてくるのが見えた。
目の前で立ち止まると、ゆっくりと拘束具を外してゆく。
二人は助けてくれるのかと思い、泣きながらお礼を言うが、その後が想像を遥かに超えていた。
一気にスカートを捲り上げ、パンツを膝あたりまで引き下げると、強引に四つん這いになるような体勢にされる。
「ひゃあっ！？　やめてっ！！」
「何すんだこの野郎っ！！」

思わず怯む優香に対して、急に強気になる柔道初段娘だったが、女子ではどうにも成らない男の身体つきは、スタローンを遥かに超える全身の筋肉を持っていた。

二人同時にバックで犯される羽目になる。

「はぎゃぁあっ！！　痛いいいっ！！」

「はうっ！？　ヤダッ！？　そこはケツの穴ぁあああっ！！　ひいいっ！！」

犯されのは同じだったが、ただ一つ違うところは、優香は性器を……奈美恵は肛門を犯されていたのだ。

異常に大きく硬いイチモツは、五臓六腑を抉り出すかと言うほどの激痛を二人の女子高生に与え続ける。

優香は処女ではなかったとは言え、子宮口を突き破り、奥の奥まで突き当たるデカブツに号泣を余儀なくされた。

一方の奈美恵は処女であった。
後ろの穴も処女である。
とりあえず肛門はロストバージンと言うことになってしまった。
散々人の肛門を虐待してきたバチが当たったのか……自分のこの世の生き地獄は、肛門責めによるものになってしまう。

少しは痛みにも慣れてきたのか、犯されている、とゆうことを冷静に見つめ直す自分がいた。
二人ともそれは同じであった。
ふと顔を上げるとどこかで見た顔がある。

「あ、有里亜っ！？」

「有里亜……そうか、あの男はお前の父親か身内だな？私の肛門責めを受けた仕返しが私の肛門へのレイプか……チキショウッ！！」

不敵に微笑む秋吉有里亜は、まず奈美恵の、顔面をゲンコツで殴り始めた。

「痛っ！？　何をしやがるこのクソガ……」

『バキイッ！！……グシャッ！！』

「んぎゃおおおっ！！」

話してる最中への一撃は柔道娘の鼻の骨を粉砕した。
後は痛みで歯を食いしばりながら泣くことしかできない。
数発……数十発…百発。
信じられないくらいの回数を顔面ばかり集中して殴られた中道奈美恵は、別人と思えるほどに顔が変形してしまった。
両目は腫れ上がり白目を剥き、鼻はぺちゃんこになり、唇は上下とも裂けて激しく出血していた。

「お父さんごめん……私の力ではいくら殴っても前歯は折れないみたい……」

「ワハハハハ。それは分かっていたわ。ほらコレを使えば楽に折れるぞ」

金属バットを手に取った有里亜は、冷たく表情を一変させ、再度奈美恵の前に立つ。

「じょ、冗談だろ？　や、やめ……」

『ブンッ！！……グシャアッ！！』

「ぶはあっ！！」

一撃で前歯は４本とも吹っ飛んだ。
下の歯も４本……一撃で８本へし折る会心の一撃だったみたいだ。

「いだい……いだいいいっ！……ひいいいいっ！！」

号泣することも忘れて嗚咽を上げる奈美恵。
更にバックでアナルファックが再開されると、顔を上下左右に振りながら短い髪を振り乱して白目を剥いている哀れな姿になった。

動きが止まると更に顔面と頭を金属バットで殴りつける有里亜。
頭からの出血は凄まじく、唸り声を通り越して再び絶叫を上げてしまう。
その間、止まることなく性器を犯され続けている優香にもその光景は見えている。
あまりの惨さに目を背けてしまうが、ついに嘔吐してしまった。

『ガキッ！　バキッ！　グシャッ！　ドカッ！』

何度も何度も顔と頭を殴り続けると、遂に全身を痙攣させ始めた。
致命傷になる一撃が混じっていたみたいだ。

「ほらコレを使え」

有里亜の父親である秋吉亮一が小型の自動拳銃を手渡した。
握りしめてトリガーに指を付ける。

「アバババババッ！！　うっひぃいいいいいっ！！」

訳の分からない奇声を上げながら痙攣を続ける奈美恵はまだ辛うじて意識もあり、死ぬ寸前の苦痛を味わっているに過ぎなかった。

「ほら、早く撃たないと死んでしまうぞそいつ……風穴空けてやれ」

肛門を犯していた男が静かにイチモツを引き抜き、父親の隣に移動する。

横目でチラッと優香を見てから奈美恵の背後に回りこむ。

「頭なんか撃ち抜かない。即死しちゃうから……」

ゆっくりと長めの銃口を奈美恵の膣に差し込んでゆく。

「うひいっ！？　ひぎひぎいっ！？」

意識が朦朧とする中でも性器への異物挿入は受け入れ難いのか、首を何度も傾げながら振り向いてくる。

「そんなに見ないで……中道奈美恵。あなたの処女膜、奪っちゃうのはわたしだから。しかも銃撃でね」

「ひひゃ？　やめれてくらはいい～ひううあ」

「さようなら奈美恵」

『パンパンパンパンパンパンパンッ！！』

「風穴風穴風穴風穴風穴風穴風穴風穴あっ！！」

「はぎゃあああああああああああっ！！！！」

「マンコ入り口の膣口から子宮の奥の奥の臓器まで全て貫けぇっ！　風穴ああああっ！！」

『パンパンパンパンパンパンパンッ！！』

「威力が中途半端に弱い銃だからなかなか致命傷にならん。まだまだ激痛を与えてやれるぞ？　有里亜」

「そういうことね。ありがとうお父さん」

一気に血塗れになっている処女膜を撃ち抜かれた性器から銃口を引き抜くと、今度は肛門へ捩じ込む。

「くさいわねこっちの穴は……ほら、いっけええっ！！　風穴風穴風穴風穴ああっ！！」

『パンパンパンパンパンパンパンッ！！』

「びぎいいいいいいいいっ！！！！……ガクンッ」

「はぁ、はぁ、はぁ、今のガクンって？　死んだの？」

口から泡のような血を噴き出し、目玉が一つ飛び出していた。
何度も打ち抜く内に数回当たった内臓に穴が開き眼孔まで貫通してしまったようだ。
「ははは。それだけ連射したらいつかは目か口から弾丸とびだすわ」
『ブリブリブリブリッ……ぐちゅちゅちゅちゅちゅう〜。ブリブリ』
膣からは子宮のミンチが……肛門からは直腸と小腸のミンチがブリブリとはみ出してくる。
流れ落ちるように床に広がってゆく内臓のミンチ。
威力は弱くても銃には変わらないことがよく分かった有里亜だった。
「オマンコと肛門に風穴空けてやったから……あの世では好きになった彼氏にでもオチンチンで空けてもらってね。銃でなんか空けちゃってホントにごめんなさい」
「そんな不細工になった顔ではあの世でも彼は出来まい……ライフルを貸してやるから打ち抜いてやれ」
小型の自動拳銃からライフルに持ち替えた有里亜は、再度後ろへ回る。
内臓がブリブリとはみ出してくる性器に銃口を近づけて、膣内へ

深く差し込む。
子宮があった所くらいまでねじ込んでからＭ１６の引鉄を引いた。

『ズキューンッ！！……ドパアアアッ！！』

顔と頭の頭部全体がスイカを割ったように木っ端微塵に吹き飛んだ。

「死んだ身体に風穴……何か死姦してるみたいでごめんなさい。でもこの無事にヒラヒラしてるエッチな小陰唇が何か気に入らない……」

Ｍ１６の銃口を肛門に差し込み、大きく捻り、性器や膣方向に向け直す。

『ズキューンッ！！……グシャアアアッ！！』

肛門から性器全てが吹っ飛んで、両脚付け根部分まで引きちぎれていた。

「凄い威力ねこのライフル……コレで綺麗にマンコに……ってゆうか腰部全体に風穴空けてやったわ」

足元をふと見ると優香が泣きながら土下座をしていた。
何度も何度も額を床に擦り付けながら土下座をしている。
いつの間にかレイプは終了し、有里亜の処刑準備が整ったとゆうことである。

「わーんわーん！　ごめんなさいごめんなさい！　本当にごめんなさい許して下さいっ！！」

「……まずはどちらの穴に風穴空けてほしい？　両方撃たせてくれないと殺さないから……結局もがき苦しんで死ぬ事になるけどね」

「やめて……せめてそのライフルで頭だけを撃ち抜いて……性器からなんてイヤっ！！」

静かに小型拳銃に再び持ち変えると、優香の背後へ回る。

頭を向けようとするが屈強な部下の男たちに無理矢理有里亜に対してお尻を向けさせられる。

「ひっ！　イヤだイヤだイヤだああああっ！！」

「真鍋優香……あなたは肛門から行くね。まずは銃口を飲み込みなさい」

『つぷっ……ズボボボボ……』

「嫌ああああああっ！！　やめて有里亜様あっ！！　お願いしますううっ！！」

「許さない。ほら、お尻の穴に……風穴風穴風穴ああああっ！！それそれそれええええっ！！」

『パンパンパンパンパンパンパンパンッ！！』

「ひぎいいいいいっ！！　いっだあああーいいいいっ！！」

撃ち抜きながら腹腔内の色んな方向へ向けながら連射した。同方向に連射すれば内臓を貫通してしまいやすくなり、脳に当たれば即死してしまうからであった。

「有里亜！　なぜ執拗に肛門を掻き回した？」

「色んな方向へ撃ってなかなか死なせない為だよ。さっきのやつで学んだの……」

「そうか……威力が弱いとゆうのはなかなかに残酷だな……」

『ズポッ……ブチュブチュブチュウ……』

直腸と小腸のミンチがブリブリとヒリ出されてくる中、性器へ銃口を差し込み直す。同じように連射を始めた。

「マンコに風穴風穴あぁっ！！」

「ひぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃああああぁっ！？」

『パンパンパンッ！　パンパンパンッ！　パンパンパンパンパンパンパンパンパンッ！！』

「今のわかった？　お父さん」

「何が？」

「マンコには……三三七拍子で打ち込んでみたの……」

「おおっ！　なんて酷いことを！　ワハハハハハ！」

「笑ってるじゃん……」

『ブリブリッ！　ブリブリッ！　ブリブリブリブリブリブリブリッ！！』

「ぴぎいいいいっ！！　痛い痛い痛い痛い痛いいいいいっ！！」

「あはは。子宮や膣のミンチまで三三七拍子ではみ出してきちゃってる……何か笑っちゃう……さあ今度はイかせてあげるね？」

クリトリスにＭ１６の銃口を当て、肛門へ向けて撃ち抜く。恥骨ごと吹っ飛び、下半身はバラバラに吹っ飛んだ。

「キエッ！！……ガクンッ」

「ショックで死んじゃったかあ。クリトリスのミンチ……どこに吹き飛んじゃったのかなぁ？　ま、いっか。みんなありがとう」

「お前を虐める奴は許さん。いつでも言ってこいよ。今回はコンクリで固めて東国湾に沈めてしまうから誰にもバレないだろう。拐うときに監視カメラには気をつけたからな」

「さすがお父さん。仕返しできたのは部下の方々のお陰だから捕まらなくて済むなら嬉しぃよ」

――――一ヶ月が過ぎた。

「お母さん……最近お父さん見ないんだけど？」

「特殊任務省とかゆう国の機関から連絡が来て連れて行かれた。私にさえ話さないことを有里亜には話してたみたいね。かなり人を殺してるらしいからもう二度と会えないかも知れないって言ってた。……優しい人だと信じてたのに……私にだけには隠し事は無いと信じてたのに……ぐすん、ぐすん、わーん！わーん！」

目の前で号泣する母親に対して何も言えない自分がいた。
自分はお父さんに溺愛されて育った。
お母さん以上にお父さんの愛を注がれていた。

それは確信できる。でも結果的にお母さんを悲しませせた結果になってしまった。

『私は中学生の時に約束したんだもん。お父さんのオチンチンを舐めて射精させて飲み込んであげることで……一生私の敵をやっつけてくれるって……お母さんには絶対内緒とお父さん言ってたんだけどね……』

――残酷処刑島。

「私にこんな事をして済むと思っているのかガキども！」

「うーん……秋吉亮一さんかぁ。でも本当の正体は……中国からきたマフィアのボスであるリ・シャウランよね確か」

「な、なぜそれを知っている！？」

「国の特殊機関を舐めないでくれる？　あたしたちに殺される中国マフィアボスの亮一さん」

美香が小型拳銃を中指でクルクル回しながら話しかける。

菅野莉央と富田美香。

本日はこの１２歳の少女二人のみでの、残酷拷問処刑執行となる。

「この縄を解いてくれないかお嬢ちゃんたち？　私にはまだまだやらなければならないことがあるんだこの日本で……」

「娘さんとの淫乱行為ですか？　お父さん？」

「な、なぜそこまで知っている！？　一体何者だ貴様らっ！？」

菅野莉央と富田美香は女子小学生の処刑執行人である。

アイドル活動をしている傍で特殊任務省とゆう国の機関に雇われて離島にて拷問処刑を執行している。

性格はかなりの冷血さを持つ。

「本日あなたを処刑する菅野莉央と富田美香とゆうものです。どうかお覚悟なさってください」

「どうして私が小学生のクソガキなどに処刑されなくてはならんのだ！？　殺されるのが嫌なら早く私を解放するのだな悪いことは言わん。そもそも私を誰だか分かっているのか！？」

「だから……中国マフィアの元ボスなんでしょ？　知ってるよそんなこと。問題はあなたが娘の有里亜さんにした行為……未成年に対する性的虐待ね。コレは死んでもあまりある凶悪犯罪だよ。それと度重なる未成年殺害。実行犯よりあなたみたいな方がタチが悪いよ。だから今日死ぬことになっちゃったのね。分かるかな？」

富田美香が珍しく顔を厳しくして説明する。

「アイツだって喜んでいたんだ！　だから今もアイツの……有里亜のために殺人まで犯しているんだ！　私の気持ちなどお前らには分かるまいっ！？」

『ズッ……』

「はうっ！？」

「素っ裸で拘束されたまま凄まれてもなんも怖く無いんだけどぉ？　あたし、美香ちゃんはねぇ。お尻の穴虐待するのが趣味なのよ。分かる？」

「痛い……何を入れやがった畜生っ！？」

「威力の弱い超小型拳銃だよ。でも一応ホンモノの鉛玉だから痛ったいよぉ♪　さぁ食らえ！　風穴空けてやるんだからっ！　それそれそれえっ！！」

『パンパンパンパンパンパンパンパンパンッ！！』

「ぐおおおおおっ！！　ひぎいいいいいいっ！！」

男を拘束していた白いベッドが、みるみる内に真っ赤に染まってゆく。

「痛いでしょ？　お尻の穴に鉛玉なんて撃ち込まれたら……あんたの娘がやった罪はあんたにある。だからこうなったの。今までに殺

してきた少女たちの罪もこの際きっちり責任取ってもらうから」

「うるさいっ！　私は直接手を下していないっ！　早く拘束を解かないとお前らみたいなガキでも皆殺しにしてやるからなっ！」

今度は菅野莉央がそっと歩み寄る。

「秋吉亮一さん、中国マフィアのリ・シャウランさんね。今からあなたへの拷問処刑を開始します。娘さんの凶行も全てはあなたの性的虐待のせいでした。わかりますか？」

「だから同意があっての行為だから虐待にはならんだろっ！？　何度言えばわかるんだクソガキがっ！？」

『ぎゅっ！……シコシコシコシコッ……』

「はおうっ！？　ううぅっ！？……私をイカせるつもりか……お主はまだ幼い児童のようだが？」

「小学六年生はもう立派な大人です。早く射精しなさい。肛門撃たれた痛みは痛覚を麻痺する麻酔を打ってますのでご心配なく」

「むっ！……射精だの麻酔だのそんな言葉まで知っておるのか……全く最近のガキはマセている……」

『シコシコシコシコッ……ドピュッ！　ドピュッ！！』

「おおうっ！……次は口でイカせてくれんか！？」

　超小型拳銃の直径５㎜ほどの極細銃口を、亮一の尿道にゆっくり差し込む莉央。

「うっ！？　いだいっ！？　そこは挿入するところであって、挿入される所では無いっ！　早く抜いてくれ……痛いではないか……いでででで！」

「さてと。穴に入れた後は……何かを出さなきゃね？　鬼畜な男たちのチンポのように……あたしは白い液の代わりに鉛玉を出したげる。えいっ！」

『パンパンパンパンッ！！』

「ひぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃあっ！？」

　撃たれた銃弾は非常に威力が弱いとは言え、尿道を縦に貫通し、膀胱を破壊して小腸を二枚ほど貫通して止まっている。

　かなりの激痛に耐えきれなくなった秋吉亮一は、気が狂ったように絶叫を始めた。

「まだまだ絶叫するには早いよオッサン？　生のキンタマ引き摺り出してから潰してやるんだから」

　使い慣れた医療用のメスをスッと取り出すと、手際よく陰嚢の中

央辺りをまっ縦に切り裂いた。
　トロトロと溢れ出す血にも構う事なく、ぷるんっ！　と、飛び出した白い生の睾丸を両手で同時に掴んで握りしめてゆく。

「あは♪　綺麗な睾丸してるじゃんオッサンの割に……」

『くちゅ……ギュウウウウウ』

「ぎひいっ！！　ぐがあああああああっ！？」

「あたしの握力をナメないでね！」

「や、やめてくれえええっ！！　お願いだああっ！！」

「右からいくね。ほら」

『ギュウ……ブチュッ！！』

「ぐわあああっ！！」

「痛かった？　次はこっち」

菅野莉央によってほぼ同時に二つの睾丸を潰された元マフィアのボスは、泡を噴きながら全身を硬直させて苦しむのであった。

「さて。ぼちぼちトドメを刺してあげちゃおっかな……」

威力があるライフルに持ち替えて、四つん這い状態で拘束し直すと、銃口を口に突っ込んだ。

「アガガ……うごご……」

「今度は破壊力抜群のをあげる。口から貫通させたげるから……どこに抜けるように撃つと思う？」

「うごごおっ！？　むぐあうううっ！？」

「何を言ってるか分からないけど教えてあげる。あんたの肛門だよ。残されたお嬢さんと奥さんは……今回は無罪だから。安心して死になさい。ほら、お尻の穴から吐き出せっ！」

『ズキューンッ！！』

「ほごおっ！！？」

『バシュウッ！！』

見事に弾丸は肛門から飛び出した。

岩を破壊してようやく止まる。

顔面は吹っ飛び目玉は遥か上空に飛び出して、肛門から小腸と大腸と直腸を撒き散らしながら絶命するマフィアのボス……秋吉亮一であった。

「無様な死に方ね。顔が車に轢かれたカエルみたいになっちゃってるよ？　あはは」

「莉央ちゃん上手いこと例えるなぁ。お尻の穴から色んな内臓撒き散らしてるところも似てるんだよなぁ。アッハハハ♪」

残酷処刑島に、今回は外国人の死体が新たに加わることとなった……。

因果応報（後書き）

外国人でも容赦はしない。
特殊任務省の執拗な捜査は決して無駄には終わらせない。
誰からもイジメられるとゆう人格を形成させたのは最も愚かな実の父親であった。
娘である有里亜には一刻も早く立ち直って欲しいものである。

仇は隣に……（前編）（前書き）

女子高生の復讐から始まる惨劇……。
復讐は復讐しか呼ばない。

仇は隣に……（前編）

「痛いっ！　痛いいいいっ！！」

「オラオラァ！　マンコピクピクさせやがって変態クソ女がっ！」

『バコバコバコバコッ！！』

「ひぎいいいいいっ！！」

北部地方に存在する不良生徒が多い極北中央高校。
生徒たちも先生たちも帰宅した人気のない部室の中、一人の女子中学生が不良たち三人に輪姦されている。
腕を組んで冷たく微笑みながら一部始終を見守る一人の女子高生もいた。
須藤梨沙子。
その少女だけは１６歳の一年生だが、男たち三人は三年生だった。
高校生四人による中学生一人への性的イジメ……リンチである。

「ほらっ！　中に出して欲しいか！？　いっ、イクうっ！！」

『ドピュッ！　ドピュピュピュピュピュッ！！』

「ひゃあああああっ！！」

スカートとパンツのみ脱がされて下半身裸のままバックで無理矢理三人の高校生たちに犯されて中出しされてしまう少女。

泣き崩れながら陰部を押さえて床に崩れ込んだ。

「コイツ、中学生の割にガバガバだったな？」

「ははは。お前のチンポが小さすぎるからそう感じたんだろ？　俺はソコソコ締まりがあったぜ！　小林はどうだった？」

「……普通かな。この前僕らで犯した大学生に比べたらマシな方だと思うよ」

大林太志、中林並兵、小林小治、この極北中央高校を仕切る最強三人組だった。

大林と中林は見るからに不良だが、小林だけはその辺にいる普通の高校生に見えるし、話し方も丁寧だった。

だが考え方が残酷なのは後の二人と何ら変わりない。

身長は１８０センチを超えている三人は、そこそこ身体も鍛えているので筋肉質な締まりのある体型をしていた。

三人の中出しレイプが終わり、須藤梨沙子の次の指示を待つ。

「邪魔だから上の制服も脱がしといてくれます？　ついでに柱に縛り付けてくれたら助かりますわ」

「ほいよっ」

梨沙子の指示通り三人は速やかに中学生の制服を脱がしていき、手際よく両手両足を木製の柱に縛り付ける。

梨沙子は真っ赤な革の鞭を握りしめると、思いっきり床に叩きつけて冷たく微笑む。

セミロングの軽い茶髪に、よく似合う真っ赤なカチューシャを付けている。

可愛らしい大きな目をしているが、冷ややかに微笑む時は目を細める癖があった。

『ビシイッ！！』

扱い慣れている事もあり、とてつもなく強烈な音を奏でる。

「私の鞭打ちタイム……今日は最後まで見ていってくださいね御三方」

「……」

ヤンキーの三人の顔が軽く引き攣る。

以前リンチした女子大生の時は全身真っ赤になり、所々紫色に変色して皮が破れて血が出ている部分も多々あった。

いきがってる割に酷すぎる行為には引いてしまう大林、中林、小林トリオは、女子大生への鞭打ちを最後まで見ることが出来ずに途中から部室を退出していた。

「いきますわよ。私の実験台になっていただきますわね」

『ビシュンッ！！……ビシイッ！！』

「ぎゃあっ！？」

素っ裸で縛り付けられた中学生の少女のふくよかな胸部を音速のような革の鞭が襲い掛かった。

凄まじく上下左右にプルンプルン揺れ動く右の乳房。

「うぐぐ……や、やめて……」

「右のオッパイに集中して打ち続けると、何回目に乳首から血を吐くか……実験させてね指原さん」

「ひっ！？　い、いやだ……やめてくれ」

『ビシイッ！！　バシイッ！！　ピシィッ！！』

様々な角度から右の乳房だけを集中的に打ち込む梨沙子。

極北女子中学校に通う中学三年生の指原理子は、ついに右の乳首

から血を噴き出しながら号泣する。
乳首と言っても以前に莉央たちからのお仕置きで、子宮と同時に乳首も切断されていたため、乳首のように生成したシリコン製の乳首であった。

「77回目にやっと乳首から出血ですか……うふふ。あれ？　何か乳首が取れたみたいに見えるけど？異常にプヨプヨして変な乳首ですわねぇ？」

紫色に内出血して腫れ上がった乳房からも、所々皮が破れて出血していた。
三人の不良たちはこの時点で部室から退却することになる。

「お嬢さん、俺たちはこの辺で……終わったら出て来てくれ」

「はーい。相変わらず血には弱いのですね御三方」

極北中央高校を仕切るほどの最強最悪なヤンキーたちがなぜ『お嬢さん』と呼んだまで言いなりになるのか？　なぜそこまで慕うのか？
それは前科者で仕事も続かない三人の父親たちを、地元ではかなり有名な大企業である須藤建設が雇い、そこそこの管理職につけてあげていたからであった。
幼なじみの男友達三人は、同性の友達がいない梨沙子にとっては親友みたいなものであった。

父に何度も相談して遂には願いを聞いてもらい、不良たちの父親は前科を持ちながらも、無事に高給を手にすることができている。
全ては須藤梨沙子のお陰であった。

お嬢さんと呼ぶほど梨沙子を慕う彼らは、暴力行為により前科者になる事も厭わない覚悟で彼女を大切にしている。

「あら果したない……お漏らしですか？　ここはトイレじゃないんですけどね」

『ビシイッ！！　バシイッ！！』

「ひぎゃあああっ！！」

一時間が経過する頃には指原理子の正面側の全身が真っ赤に染まり、至る所から出血、流血していた。
号泣しながら震え続ける少女に追い討ちを掛けるような冷たい言葉が告げられる。

「白い肌の素敵なお顔は私の平手とゲンコツでやらせていただきますわね？　うふふ」

「や、やめろ…………や、やめて……ください」

「あら？　一応礼儀正しく言えるのですね？　極北女子中学ではナンバーワンとかツーとか聞いてましたけど……」

ライバルであった二年生の宮垣咲良と何度もタイマンを張り、最後には親友となってヤンキーばかりが集まる女子中学校が一致団結出来た極北女子中学校の生徒であった。

「そこそこ可愛い顔してるけどボッコボコのギッタギタにして差し上げますわね？　お覚悟なさってください」

「ど、どうして私を拐ってまでこんな酷いことを……」

「どうして？」

キョトンとした間の抜けた顔をしておどけて見せる須藤梨沙子。

「あなたが去年公園でボコったポニーテールの有名進学校の中学生覚えてる？」

「ん？　なんか私のこと見ながらニヤニヤ笑ってたから舐めてんのかと思ってボコった奴か？」

「覚えてましたのね。その後どうなったか知ってます？」

「顔を殴りまくってやったからかなりショックは受けてたんじゃねぇかな……でも歩いて帰れないほど痛めつけてはなかったはずだ！」

「あの後ね。彼女はその公園でどこの馬の骨か分からない不良たちに囲まれて輪姦されたの」

漏らした小便をティッシュで拭いてあげながら静かに語る梨沙子はかなり冷たい表情を浮かべていた。

「タコ殴りにしちまったのは悪かったけど……後のレイプのことはほんと知らねえっ！　私の仲間でもなければ知り合いでもない。そんなことまで知らねぇんだよほんとっ！！」

『バキッ！！』

「ぐはあっ！？」

思いっきり鼻っ面の顔面を右ストレートが捉える。

ボタボタと流れ落ちる鼻血で足元はみるみるうちに真っ赤に染まってゆく。

「その後首を吊って命を絶ったの」

「うぐぐ……えらい詳しいなあんた……」

「私のたった一人の妹ですの。怖くて何もできなかったらしいのだけど、あなたからの暴行と、その後の数人から輪姦される所を私の仲のいい後輩が見てたから……暗くて男たちの顔までは見えなかったみたいだけど。あなたはその公園で、『極北女子中学の指原理子を知らねぇのかっ！？』とか言って、自分から宣伝してたみたいだし。だいたい最初からあなたに妹がボコられてなかったら、その

後の男たちによる輪姦なんてされる事なく帰宅出来てたのですよ」

鼻血を流しながらうつむいていたが、さっと顔を上げて梨沙子の目を凝視してしまう指原理子。

「ま。マジかっ！？　そ、そうか……それは悪いことをしてしまった。謝るよ。じゃあ私は更にボッコボコにされるんだろうな？」

「半分正解ですわね。今更謝られても許せませんから。人間ってどれくらい叩いたら……どれだけの外傷を与えたら絶命するのかを実験させてもらいますわ」

目を見開いて梨沙子の細めた目を覗き込む指原理子。

「絶命？　え？　私は殺されちゃうのか！？」

「うふふ。まぁ自殺とは言っても全ての元凶はあなたの暴力にあった訳ですから。あなたが殺したのと同じですからね？」

覚悟を決めなければいけない……だがそれに勝る恐怖心を抑えることができない……。

いくらヤンキーとは言えまだうら若い中学生の女の子である。

余りの恐怖と不安に思わず涙が溢れ出てくる。

「ぐすん、ぐすん……嫌だ。死にたくない……お願いだから命だけは助けて……妹さんのことは一生かけて償わせてもらうから」

『パンパンパンパンパンパンッ！！』

「ひぶぶぶぶぶうっ！！」

強烈な往復ビンタが指原理子を襲う。

「あなたが出来る償い？それは〝死〟以外に有り得ない。心配しないで。死体はお父さんの会社の大きな焼却炉で溶かし切ってから埋めてあげるから……」

「いやっ！　いやあああああっ！！」

「あはは。いい声でお鳴きになるんですね殺人犯のくせに……」

「だから殺してないいいいっ！！」

平手打ちと拳での殴打は半時間ほど続いた。
鼻血と唇、瞼が切れての出血が夥しく、胸から足先まで指原理子自身の血で真っ赤に染まっていた。

「へぇ～。これだけ殴ったらさすがにここまで変形しちゃうんだ……別人みたいになっちゃってますよ指原さん？」

『ボコォッ！！』

「がはあっ！？　オエエエッ！！」

更に強烈な膝蹴りが指原理子のみぞおち部に突き刺さる。
たまらず午後に食べたパスタの溶解物を吐き出してしまう。

「くっさ……私たちの部室にオシッコだけじゃなくゲロまで吐いちゃって……生きて帰れるなんて思わないでくださいね？　ほらっ」

『ズドオッ！！』

「やはあっ！？」

大陰唇を直撃する股間への膝蹴りが見事に決まった。
恥骨に鈍い衝撃が走る。
更に数回、股間への膝蹴りを続ける須藤梨沙子。
シャープな角度で決まった時は、小陰唇が捲れ上がるまで衝撃を受けてしまう。

血の混じった粘液が梨沙子の膝から糸を引いた。

「あらやだ。何か糸引いてますけど？これはもしかして……愛液ですかぁ？」

『ズドドドドドォッ！！…メキメキッ！』

「いだあああああっ！！！！」

右膝による陰部へのマシンガン膝蹴りを食らわせると、遂に恥骨にヒビが入ってしまう。

「痛いっ！！　痛いいいいいいっ！！　んぎゃああああああっ！！」

再び鞭を手にした梨沙子は二歩ほど下がり、鞭打ちの態勢を整えた。

今度は顔面へ鞭打ちを再開する。

『バシイッ！！　ビシイッ！！』

「ほがあっ！！　ひげえっ！！」

意味のわからない悲鳴を上げてボコボコに腫れ上がって誰だか判別できなくなった顔を歪ませながら、更に顔面を打たれ続ける。

歯が一本へし折れて床に落ちた時、指原理子の意識は完全に飛んでしまった。

何分？　何時間？　どれくらいか定かではないが完全に眠っていたようだ。

ふと目覚めてゆっくり目を開ける。

痛くて目が開かない。

「うぐぐ。そうか……顔を殴られて鞭で打たれて完全に腫れ上がってしまってるんだ……身体も痺れてあまり感覚がない。くそう。今自分がどうなってるかも分からないや」

「机にうつ伏せに縛り付けられてますわ。今から竹刀でお尻叩きのお仕置きタイムです」

「うっ。まだ生きてはいたんだな私は……」

「死んでた方が良かった、と後悔させてあげますからどうかお覚悟を」

ゆっくり竹刀を振りかぶると、思いっきり理子な臀部へ叩きつける。

右、左、右、左と、交互に一撃ずつ打ち続けていくと、数分でお尻全体が真っ赤っ赤に腫れ上がる。

喉が枯れるほど悲鳴をあげるが誰も助けには来てくれない。

部室の外にいるはずの不良三組もまだいるのか帰宅しているかさえ指原理子には分からなかった。

唯一白い肌を保っている背中にまでも竹刀を数回打ち付けると、遂に表も裏も全身が真っ赤、所々紫に変色してしまった。

「まだこれぐらいでは死にませんか流石に。ちょっと身体検査をさせてもらいますわ」

「痛い……痛い……死ぬぅうう。お願いだからもうやめて」

許しを懇願する女子中学最強レベルの不良娘、指原理子を気にかける事もなく竹刀を突きの構えに持ち替えた。

「二つの穴の深さを知りたくて……まずこっちから」

『ピトッ』

「ひいっ！？」

竹刀の丸みを帯びた切っ先は、理子の小陰唇に軽く当たって止まった。

「この先には膣があって……そのまた先には赤ちゃん作る袋、子宮があるんですよね？子宮の奥まで……つまりもう入らなくなるまで思いっきり突っ込んであげちゃいますね？　ほら」

『つぷっ……ズブブブブブブ』

「ひぎゃっ！？ひゃあああああああっ！！やめてやめてめてえええええっ！！」

目を細めて冷たく口角を持ち上げて微笑むと右手に力を込める。

「指原理子。可愛い妹、由真の仇……思いっきりいたぶってから殺

してあげますからねぇ？」

『ズボボボボボッ！！』

「はぎゃあっ！！」

一気に２０センチほど膣内にめり込む竹刀。
遂に子宮に届くかと思われたが……以前拷問処刑人である女子小学生の菅野莉央によって去勢刑に処されているため、既に子宮は存在しなかった。
腹腔内深くまでめり込んだ竹刀の先は、莉央が縫い付けた膣道の奥まで行って停止する。

「あら？　なんかガバガバみたいですね？　何も子宮を貫いた手応えがないのですが？　使いすぎなんでしょうかね中学生のくせにオマセさん」

『バシュウッ！』

手応えのなさに呆れながら竹刀を膣から引き抜く梨沙子。

「こっちの方は少しは楽しませてくれるんでしょうね？」

『ピトッ……ずぷっ！』

「やっ！？やだあっ！！」

次のターゲットは理子の肛門……そっと当ててからゆっくりと差し込んでゆく。

『ズボボボボ……』

「痛いっ！熱いっ！！はぎゃあああああっ！！」

「うふふ。痛いのか熱いのかどっちなのですかぁ？ヒダヒダがピクピクして変な動きしてますわよぉ？　なんかエッチです」

『グリッ！グリリリリッ！！』

１０センチほど直腸に差し込んだ後、グリグリと上下左右に直腸を掻き回し始める梨沙子。

「ほらほらほら。もっと熱くして差し上げますわ。こうやって掻き回したら痛くて熱くて感じちゃうでしょう？　あはは♪」

ついつい下品な高笑いをしてしまう梨沙子。

「痛い熱い痛い熱いいいいっ！！　んぎゃあああっ！！　ひいいいいいっ！！」

「黙りなさい。次は突き当たりまで一気にいきますわよ？　痛いですよおお？　ほらぁっ！」

Ｓ状結腸を突き抜けるほどの勢いで差し込まれた竹刀の切っ先は、どうにかこうにか直腸内で停止した。

これ以上少しでも差し込めばＳ状結腸は間違いなく突き破ってしまう所であった。

「うーん……どうやらここがお尻の穴の限界ですか……手応えあって止まってしまいましたもんね」

『グリグリ……グリングリン。グチャグチャ』

「うぬうっ！！はうううっ！！んはあっ！！」

執拗に直腸の突き当たりを掻き回す梨沙子に対し、悲痛な呻き声をあげてしまう理子であった。

「あはは。なにをいちいち私が掻き回す度変な声出してるのですかぁ？イヤらしいですわねぇ……なんかブヨブヨしてるからもっと奥まで入りそうですねコレ……」

「ぎひいいっ！！無理っ！！もう無理ですううっ！！お尻の奥が壊れちゃううっ！！」

「なるほど。壊しちゃえばいいんですね？　いい事聞きました。ありがとうございます指原さん」

竹刀から手を離し、四つん這いに縛られた指原理子の身体と水平になるように肛門から突き出して揺れている竹刀を調整する。

「今から私が何するかわかります？」

「や、やめてください……死んじゃう……痛い」

舌を出して下唇をペロッと舐めながら不敵な笑みを浮かべて右足を思いっきり後方へ振りかぶる梨沙子。

「こうするんですよ。いっけえええええっ！！」

『ズドオッ！！』

思いっきり竹刀の柄を足の裏で蹴り込む。

しかしS状結腸小腸は意外と伸縮して、先の丸い竹刀では激痛は与えるものの貫くことは出来なかった。

キリキリキリキリと電気が走る感じの生き地獄のような腹部の激痛が理子を襲う。

「ぎゃあああああああああああああああっ！！！！」

「あら？なんて強情な肛門なのでしょう……私の渾身の一撃を持ってしても根元まで入らないなんて」

『ズドオッ！！……ぶしゅうううううっ！！』

再度蹴り込むが、傷付いたS状結腸と直腸からの出血があるくらいで、突き当たりにあるS状結腸の腸壁は破れなかった。

「おっとっと。汚い肛門からの血をまともに食らうところでしたわ……これじゃ貫通できないですねやっぱ。今竹刀を抜いてあげますからね」

『ズズズ……ポコッ！』

「はうっ！！」

「あの……いちいち卑猥な声を出さないでくださいます？」

棚の上に置いてある直径2ミリほどの針金を手に取ると、まっすぐに伸ばしながら目を細める梨沙子。

「この針金……どうすると思います？」

「ぐすん、ぐすん。痛い……もう許して」

「きちんと質問に答えてくれなきゃ困りますね……」

鮮血がドクドクと流れ出る性器と肛門の前にしゃがみ込むと、右手で性器をパックリ開けると、左手の親指で股間中心部を弄り始めた。

「うっ！？　な、何を！？」

「見ーつけた♪　次は尿道を犯してあげますね？」

「ひゃあっ！？そんなとこに針金なんか入れないでええっ！！」

『つぷ……ズズズ』

「痛いいいっ！！」

たまに尿道の色んな部分を貫いてしまいながらも器用に膀胱へ向けて挿入してゆく梨沙子。

「間違えて尿道を貫くたびに血が噴き出すから面白いですわ♪」

縛られた両脚をビクビクと痙攣させながら発狂するような壮絶な痛みと闘う指原理子であった。

２０センチほど挿入し終わると針金をペンチで切断し、もう抜け

なくなるように人差し指で全て尿道内へ押し込んだ。

「あはは！　全部入っちゃいましたわよぉっ！」

「ひぐぐ……痛いいい！　抜いて抜いて抜いてえぇっ！！」

「穴とゆう穴は全て犯してあげちゃいますからね？　その前に……ココを始末しときましょうか？」

ペンチである部分に狙いを定めると、ゆっくり確実にソレを掴んだ。

『ギュッ！』

「ひっぎゃああああああああっ！？」

梨沙子の次のターゲットは理子の陰核であった。

『ギュウウウウウ……』

ゆっくり確実に力を込めてゆく。

『ギュウウウウウウ……ぶちゅっ！』

「ピギィッ！！！！」

数秒ほどで指原理子のクリトリスは完全に潰されてしまった。

全身が引き攣るほどの大きな痙攣の後、白目を剥いて泡を噴きながら気絶してしまう。

「やだぁ。そんなピクピクしちゃったら私まで感じちゃいますよ？さてと……潰れたクリトリスなんて邪魔なだけだから……こうしてあげますね。えいっ」

『ブチイッ！！』

尿道からの流血で血塗れのクリトリスは、ミンチにされた上引きちぎられた。

この激痛は男性に例えると亀頭部切断と匹敵するか、それ以上であろう。

「アバババババババッ！！　ぶくぶくぶくぶくっ！！」

「何訳の分からない事いってるんですか？　ほれほれ！」

『パンパンッ！』

立ち上がって血塗れの股間を右足の甲で二回ほど蹴り上げると、

股間の穴全てから粘液と血がピュピュッと噴き出す。
正面へ回り込んで指原理子の表情をじっくりと見つめる梨沙子。
「やだあっ！　白目剥いて泡噴いて……あはははははっ！！　何その顔っ！？　あははははは！」
「ひぐぐ……やはあっ……」
「ドザエモンみたいなボコボコな顔になってるけど……まだまだいきますわよっ？　ほらほらほらあっ！」
『バキッ！　グシャ！　ガンッ！　ドカッ！』
急に真顔になり本気での顔面殴打を始める梨沙子。
拳についた血を雑巾で拭きながら部室の外を覗くと、大林と中林と小林の三人組は、スマホでゲームを楽しんでいる。
須藤梨沙子の拷問には少し引いていたから見物さえ恐怖心から出来なかった。
「あのう、御三方！もうそろそろトドメ刺しちゃおうと思ってるんですが……指原の死体運んでもらえます？」
「あ、ああ。俺だけ免許持ってるから……言われた通り軽トラ校舎の裏門に用意してる」
「私の人生初めての殺人ショー……見ていってください」

「嫌です」

「いえ！」

「遠慮しとく」

三人ほぼ同時に断ると、目を細めて部室に一人戻ってゆく須藤梨沙子であった。

先の長いライター、チャッカマンを取り出して火を付けると、ゆっくり頭部へ近づけてゆく。

「もう死んじゃうんですから女の命である髪も要らないですよね？」

『チリチリチリチリ……』

意識を失っているまま髪の毛を焼いてゆく。

独特の不快な異臭が部室内に蔓延する。

気にする事もなくチリチリと少しずつ髪の毛を焼いてゆくと、毛根付近に残る髪のみとなった。

「アフロみたいですね。可愛い」

『カチッ！　ボワッ！　ゴオオオオッ！！』

頭部全体に灯油を塗りつけてから再度チャッカマンで点火すると、一気に指原理子の頭に炎が立ち登った。

流石の気絶者でもこれで目覚めなければ死んでいる。

「ギャアアアアアアッ！！　熱いっ！？　ひいいいっ！！」

髪の毛がほぼ燃え切った時点で濡れた大きな布を被せる梨沙子。一瞬で鎮火したが、もう頭部はツルツルで、所々火傷で白くふやけていた。

「いやっ！　もう嫌だあーっ！！」

「あはは♪　毛と言えば……股間にもありましたよね？」

『カチッ！　チリチリチリチリ』

「んぎゃあああっ！！」

再び四つん這い状態の指原理子の背後に回り、陰毛を焼き尽くしてゆく。

『チリチリチリ……じゅううううっ！』

「ヒャッ！！！！……！！！！」

とっくに焼き尽くしているのにずっとそのまま股間を焼き続ける梨沙子。
大陰唇と小陰唇が白く黒く変色し、煙を吐きながらジュクジュクに焼き尽くされてゆく。
絶叫をあげているつもりが、声も出ないほどの激痛で喉が潰れてしまう理子だった。

「うわっ……焼け爛れたヒダがピクピク動いてる！　鮑の残酷焼きみたいですわ♪　でもあなたのはマズそうですすねぇ……」

「かはあっ！！　ひゅうっ！　ひゅうっ！」

あまりの激痛に過呼吸を起こして瀕死の状態に陥る指原理子。
更に須藤梨沙子の責めは続けられる。
チャッカマンを一気に肛門へ差し込んだ。

『ズッ！……ズボボボボ』

「直腸内にガスを溜めて……と」

『シュウウウウッ……』

グリップを軽く握って、液化ガスを直腸へどんどん送り込んでゆく。

「メタンガスと混じってパワー全開の爆発を見せてくださいね？ほらっ」

『カチッ……ボンッ！！』

４０センチほどの炎が肛門から噴き出し、直腸内は焼け爛れてしまった。

「あはははは！　すっご～い♪」

『ガクガクピクピク……ガクンガクン』

激痛と出血性ショックによる全身の痙攣が始まった。
女子中学生の少女に、死のカウントダウンが始まる。

「死ぬ直前まで大事なとこ焼いてあげますから安心して成仏してくださいね？」

『カチッ！　ジュウウウウウウウッ！』

「黒く爛れてグチャグチャになっちゃいましたねぇ女の性器が……オマンコはこのくらいで許してあげましょうか。次はココです」

潰れてちぎり取られた陰核、尿道、膣を丹念に焼いてゆき、ドロ

ドロになった所で肛門を焼き始める。

『ジュウウウ……プスプス』

「あばばばばばっ！！！！」

「あははっ！　何言ってるんですか指原さん？　私の妹の痛みや苦しみはこんなものではなかったですよ？」

沸騰して地の泡を吐き出す肛門を、目を細めて冷たく微笑みながら見つめる梨沙子。

呟くように指原理子に死の宣告をする。

「死ね！　生き地獄を味わいながら地獄へ堕ちろ！」

『ジュウウウウウウウ……ボコボコ……グツグツ』

「汚い所沸騰させちゃって……哀れな女ですわね」

「きひいいいいっ！！　咲良あああっ！！」

『ビックンビックン！！…………ガクンッ！』

最期に断末魔の叫びを上げたのち、指原理子は１５歳とゆう若さで人生を終えることとなった。

「さくら？　何ですかそれは？　人の名前？　ま、どうでもいいですか。哀れな女子中学生の最期の言葉として覚えといてあげますわ。うふふ♪」

全身が赤と紫に変色し、性器と肛門を中心に焼け爛れて真っ黒になった死体は、不良三人組が軽トラに運んで荷台に放り込み、大林太志の運転で須藤建設の巨大な敷地にある焼却炉で灰にされた。

明くる日、何事も無かったかのように極北中央高校の生徒たちは血の惨劇の起こった場所へ登校してきている。

仇は隣に……（前編）（後書き）

遂に一人の女子中学生の命は奪われた。
更なる悲劇が始まる。

仇は隣に……（後編）（前書き）

殺害された女子中学生、指原理子。

少女の命を簡単に奪った残酷な犯人への制裁を加えることができるのは一体誰なのか？

『極北女子中学校に通う三年生の女子生徒が、二日前から行方不明となっております。指原理子さん１５歳は、当日朝から普通に登校しており、そのまま授業を受けて帰宅中に行方が分からなくなったという事です。下校直前に最後に会って話したという同級生は、指原さんはいつもと変わらない別れの挨拶をして帰路についたという事です。警察では事件と事故の両方で捜査を進めています。さて、次のニュースですが……』

学校を休ませてもらい、アイドル活動をしていた菅野莉央たち拷問処刑人は、撮影の休憩中に待機部屋のテレビでニュースを知ることになる。

「大野さん、小野さん、指原理子ってあたしたちがお仕置きした……あの子だよね？」

菅野莉央が同じ中学に通っている二人に問いかけた。

「うん。三年を仕切っていた指原理子のことに間違いないよ。今頃親友になった二年の宮垣咲良は落ち込んでるんだろうなぁ」

極北女子中学二年生の大野真子に小野メグも続ける。

「なんか親友通り越して付き合ってる噂まで出てた二人だから……落ち込んでるどころか泣き崩れてるんじゃない？」

数時間後、料理番組の撮影を無事に終えた真・絆ガールズのメンバーたちは指原理子の心配をしながら帰路についた。

――――菅野莉央自宅。

「おい莉央」

「ん？」

「今日ニュースで言ってた指原理子って俺たちが北部の中学校に乗り込んで倒したあの指原理子のことじゃね？」

「……そうだよ。極北女子中学といってたから間違いなく本人だし、同級生の大野さんと小野さんも一昨日辺りから姿が見えないって言ってたし」

風呂上がりの一杯を飲みながら兄の菅野京介が妹の莉央に質問責めをしている。

「なんか事件性を感じるな……近々藤堂長官から犯人の処刑命令来るんじゃね？」

『ジリリリリリン……』

絶妙なタイミングで莉央の電話が鳴った。

「はいもしもし……はい、ご無沙汰です。はい。はい……そうですか……はい。え？　はい、そうだったんですね。分かりました。では明日の午前6時には港で待機してます」

わずが数分の電話だが、京介には誰からなのか何の用件なのか推測できていた。

「今回の拷問処刑人には誰が選ばれた？」

「あたしと大野さんと小野さん……それと……宮垣咲良さん」

「ん？……ええっ！？　宮垣咲良だとっ！？　ヤンキーとはいえそもそも普通の女子中学生じゃねーかよ？」

「うん。なんか部室に忘れ物を取りに来たサッカー部の生徒が、別の部室から悲鳴や呻き声を聞いたらしくて……その人が宮垣咲良さんの兄で……」

「……そんな韓国ドラマのような奇跡のような偶然あるのか？」

「本当なんだから仕方ないじゃん。チャチャ入れるならもう話さないよ」

「すまんすまん！　あ、婆ちゃんお休みっ！……それでそれで？」

寝床に向かうお婆ちゃんに挨拶してから振り向き、莉央の話の続きを催促する京介。

「宮垣さんは極北中央高校に通うサッカー部の兄から怪しい悲鳴を聞いたことや、その声の一部で〝さくら〟と叫んで声が完全に途切れたこと……を聞いて行方不明になった指原理子を拐った犯人だと予想したらしいよ」

「そうか。その兄に聞いたら怪しい声がした部室が何の部室かも分かるしな。その部活動をしている奴らが指原理子を監禁して拷問したと読んだんだな？」

「そう。そして分かったのがその部室を使っていた一年生の須藤梨沙子と三年生の男三人。そして渋谷凪子とゆう宮垣さんの親友と二人で真意を確かめにその生徒の一人、須藤梨沙子に辿り着いた所で……残念ながら」

「残念ながら？」

莉央は残ったミックスジュースを一気に吸い上げて飲み込むと、ため息をついてから続きを話した。

「特殊任務省の手のものが現れて犯人の四人を拐ったの」

「やっと見つけた！って所で横槍入っちまったのかぁ！　そりゃ残念だ……ん？　でも残酷処刑島に呼ばれたってことは？」

「主犯は極北中央高校三年生の須藤梨沙子。この主犯と喧嘩させるみたい」

飲み込みかけた生ビールを思わず吐き出してしまう京介。

「は～！？　処刑する島で喧嘩だと！？　宮垣咲良と喧嘩させた後で結局拷問処刑しちゃうんだろ？　意味ねーじゃん」

「……しない。須藤梨沙子は今回拷問刑だけだよ。一生女として後悔させる意味で去勢はしちゃうらしいけど。男の三人組である大林、中林、小林は拷問処刑執行するの」

「そうか……よほど残酷なリンチを指原理子にやっちゃったんだろうなそいつら三人で……」

「違う。拷問して指原さんを殺してしまったのは全て須藤梨沙子一人による犯行だよ」

眉にシワを寄せて天井を見上げる京介。

「はぁ？　だから意味わかんねーって！何で指原理子を殺した主犯の女が拷問だけで済んで何もやってない男たちが拷問処刑になるのってことだよ？」

「……須藤梨沙子の妹さんは……たしかに指原理子によって暴行されて落ち込んでいた。でもその後数人にレイプされて……そのことが原因でそのまま公園で首を吊っちゃったの」

「いくら仕返しとはいえ暴行だけ行った指原理子を殺しちまうのはダメだろ勿論？」

「うん。この話には続きがあって……須藤梨沙子の妹さんをレイプしたのは……もう察しがつくでしょ？」

沈黙して口を開けたまま天井を見つめ続ける京介。
必死で点と線を頭の中で繋いでいる。
１０秒ほど経ってから大きく声を上げた。

「…………あっ！！」

「そう。まさかの須藤梨沙子の仲間である三人組が、指原理子にボコられて落ち込んでいる所を輪姦したみたいだね。その他には女子大生もその三人で輪姦した事があったみたいだし」

「指原理子も可哀想だけどなんか一番哀れなのは須藤梨沙子姉妹だな。分かった。思い存分その三人の男に地獄を見せてやってきてくれ！」

「何をホッとしてるの？　お兄ちゃん」

血を見るのが苦手な拷問処刑人である菅野京介は、残酷少女である妹の莉央に全てを見抜かれていただけに、頭も上がらない。

「うっ！？　そ、そんなことはないけど……シメてきてやってください莉央様」

「あはは。じゃあアナニーでもしてサッサと寝て。明日は5時起きであたしを埠頭まで送っていってね？」

「オナニーじゃなくアナニーだと！？　俺は変態かっ！？　って……変態だったよな俺って！　ははは！……ってゆうか小学生の女のコがアナニーとか言うなよ……」

――明くる日。残酷処刑島への船が出る小さな埠頭。

「着いたぜ莉央。頑張って須藤梨沙子の仇を討ってきてくれよ」

「うん。あたしと大野さんと小野さんで一人ずつ殺ってくるから」

「小学生のガキに素でそう言うこと言われたらかなり怖いぞ」

「まぁいいじゃん。あ、咲良さんも先に連れてこられてる。段取り説明するからもういくよ。じゃあありがとねお兄ちゃん」

「ああ」

内心ホッとしているヘタレが運転する真っ赤なマーチはまだまだ薄暗い夜道を颯爽と帰っていった。

「おはよう咲良さん」

「あ、お前はあの時の！？」

「お前はひどいなぁ。莉央って呼んで」

「あ、ああ。莉央ちゃ、莉央でいいんだな？」

「うん」

「お前あの時ワザとあたいのパンチ受けて負けたフリしただろ？もう一度本気でタイマン張ってくれないか！？」

「そ、そんな事ないですよ……ホントに負けちゃいましたあたし。ってゆうか“お前”って呼ばないで下さい」

「おはよう菅野さん」

「おはようございます」

大野真子と小野メグが菅野莉央に挨拶する。
挨拶をかわしてから再度宮垣咲良に対峙する。
いきなり同性の恋人に行方不明になられて挙句に死なれて……犯人を見つけたと思ったら訳の分からない島に連れて来られることになって……色々とハプニングが連続で起こりすぎた宮垣咲良はかなり動揺していた。
見た目以上に内心のショックは大きく、強がっているように見えてもかなり憔悴仕切っていたのである。

「ともかく指原を殺した女をボコらせてくれると聞いたから訳の分からない奴らに大人しく連れられて来たんだが本当なんだな？」

「うん。でも彼女も妹を理不尽に失った被害者であるから……命までは取らないで下さいね」

「バカ！ったりめーじゃねぇか！　そんな簡単に人殺せるかよっ！あたいはあの女みたいに鬼畜じゃねーから！」

極北女子中学同級生の大野真子が口を挟む。

「おい咲良。お前が負けそうになったら手を貸してやろうか？」

「いるかっ！」

「へイ咲良。須藤梨沙子に負けたら仇討ってやろうかな？」

「やかましいっ！」

大野真子も小野メグも優しさから宮垣咲良を気遣うが、即座に怒られてしまう。
なんだかんだで気が紛れて、指原理子のことを思っては度々流していた涙は、一旦お預け出来そうであった。

一年中強風が吹き荒れる残酷処刑島に小型の船が着き、全員目隠しを外される。
去ってゆく船の看守に軽く敬礼する菅野莉央。

「あの丘の少し向こうに四人は拘束されています。今日はかなり特殊なやり方で任務を遂行しますから……」
「そうなんですか……でも私たちがアイドル活動だけじゃなく処刑人までやってることって……咲良に見せちゃってもいいんですか？」

小野メグが気になって仕方ないので莉央に問いかける。

「一応藤堂長官の許可は得ているけど……特殊任務省の調査によると、ヤンキーだけど人としての信頼度が抜群に高いんです宮垣さんは。でも刺激が強すぎるのでショックによって発症する精神的な病も心配だし……宮垣さん本人の意思に任せるように言ってました」

大野真子はゆっくりと振り向き、宮垣咲良に囁きかけた。

「あのね咲良。須藤梨沙子はあんたと喧嘩して少し酷い事して終了なんだけど……連れの男三人組は全員殺しちゃうのね」

「あ、ああ。莉央から聞いてる。まだ信じられないけど……さっきの船の奴らは紛れもなく国の機関の者たちだった。雰囲気であたいにもそれは分かった。嫌でも信じるしかないだろう」

「そうか。それは分かった。でも処刑する瞬間は無理に見る必要ないからな？　私だって菅野さんやメグみたいになかなか平常心を保ってられないんだ」

「おい真子っ！　私だってまだまだ平常心じゃあないぞっ！？」

一瞬頭にきて親友の大野真子を怒鳴るが、ふと莉央と目が合って即座に黙り込む小野メグだった。

「ご、ごめんなさい。菅野さんだって少しは動揺してますよね。喧嘩は強いとはいえまだ小学生の女の子ですもんね……」

「すみません。全く動揺していませんし、虐めたり殺したりするのは昔から大好きなんです」

菅野莉央の一言で、全員が言葉を失い押し黙る……。

真・絆ガールズの中でもトップクラスの美形な少女だが、冷酷さ、残酷さもトップクラスの小学六年生であった。

そのまま莉央たち四人は、囚人が拘束されている丘の上に辿り着いた。

須藤梨沙子は服も着ていて、木に手錠で拘束されているだけであった。

対して大林太志、中林並兵、小林小治の高校三年生の三人は、素っ裸にされてそれぞれ別々の格好で拘束されていた。

大林は立ったまま大の字に。
中林は小型のテーブルにうつ伏せ状態で四つん這い。
小林は仰向けでベッドに。

それぞれ叫んで怒鳴って怒っているようだが、全く気にもせず菅野莉央が先ずは須藤梨沙子の元へ歩み寄る。

「須藤梨沙子。あなたを本日殴り合いと去勢刑に処します」

「え？　な、殴り合い……きょ、強制？」

「去勢です」

「去勢!？　私は犬や猫じゃないんですが？　何バカな事言ってるのですかお嬢さん？」

いきなり手錠を外す莉央に周りの処刑人たちは一瞬たじろぐ。

「宮垣咲良さん！　こちらへ」

「あ、ああ。やっと再開できたなクソ女っ！よくも指原を」

「あなたはあの時の……いきなりあなたに腕を掴まれて怒鳴られたと思ったらいきなり数人に拘束されて連れて行かれるし……私は私で大迷惑な話ですよ？」

梨沙子と咲良の手を掴み、両者を対峙させる莉央。

「今からこの男たち三人が見守る中思い存分殴り合ってくださいね？　さぁファイトッ！」

いきなりファイトと言われてたじろぐ二人だったが、宮垣咲良の指原への仇は討ち果たさねばならない事であった。

「指原の仇っ！！　いくぞオラァァアアッ！！」

血相変えて殴りかかる咲良。
一方的……あまりにも一方的な殴り合いだった。
殴り合いと言うよりはサンドバッグであった。
大林、中林、小林の三人に片っ端から頼ってきた須藤梨沙子は、

自ら殴り合いの喧嘩などしたことはなかった。
女性ならそれで当たり前の話なのだろうが、極北女子中学では女子全てが殴り合い上等の生徒たちなのだ。

殴る蹴るの猛攻で倒れてしまう梨沙子に、馬乗りになってマウント状態からの振り下ろしの連続殴打。

『バキバキッ！！　ドカッ！！　グシャッ！！』

「いだっ！！　痛いっ！！　ひいっ！！　やめ……ぎゃあっ！！」

三分ほど殴り続けても一向に止める気配のない咲良に、莉央がそっと肩に手を掛ける。

「勝負は着きました」

「はぁ。はぁ。はぁ。はぁ。ふう〜……」

「もう顔面ボコボコで血塗れで気絶しています。これ以上やったら処刑になっちゃいますからダメです」

「あ、ああ。すまない。もうあたいは気が済んだよ」

「それはちょっと早すぎませんか咲良さん？」

「ん？　まだ何か……そういえば去勢が何だとか色々言ってたな？

去勢って犬や猫にするアレか？」

「そうです。男はチンポやキンタマを切り取ったり潰したりしますがコイツはメスだから……クリトリスや子宮を抉り取ります」

話を聞いているだけで様々なシモ的な単語を連発で聞き、恥ずかしくて顔を真っ赤にする咲良。
そのあと青ざめてきた……。

「あ、あの……莉央……さん？　今までそんな物切り取ったり潰したりしてきたのですか！？」

動揺して莉央に対して咄嗟に敬語を使ってしまう咲良だった。

「はい。男はあと前立腺も……気持ちよくさせて射精させた後、無理矢理抉り取ったりもしました」

「え、抉り取っ……はい。分かりました！　もういいです。もういいわ！そう言えば指原も莉央たちに去勢された事があったな……。あたいはそこの木陰で休ませてもらうからな……話聞いてたら頭痛くなってきた……」

大野真子と小野メグも予想はしていたが、流石の咲良でも莉央の残虐さにはついていけないみたいで何か安心していた所がある。

「おいクソガキッ！！　解きやがれ！！」

「ぶち殺すぞゴラアッ！！」

「僕たちを怒らせると小学生や中学生でも犯しちゃうよ？　早く縄を解かなきゃ後悔するからお嬢さんたち」

ヤンキー三人組は好き放題怒鳴っているが、完全に無視したままで、菅野莉央監修で製造された〝子宮抉り取り器〟をセットする莉央。

『ガチャ！　ガシャン！　カシャ！！』

「大野さん、小野さん、すみませんがコイツを少し高さのあるベッドに担ぎ上げてもらえます？　死刑囚の男たちにも見えるように」

「はーい」

「はい」

二つ返事でメグと真子は須藤梨沙子を二人で担ぎ、腰の高さほどのベッドに乗せて、動けないように拘束ベルトをセットする。

「下半身だけでいいから……スカートとパンツ脱がせてくれます？」

「了解でーす」

『ズル……ズルルル……』

「なっ！？　何をするんですかっ！？」

「スカート完了です。次、パンツも脱がせちゃいますねー♪」

『ギュッ……スルル……ズルリッ』

「やめてっ！！　エッチ！！」

「完了しました菅野さん。その機械を挿入しやすいように股を開かせたまま拘束しましょうか？」

「そうだね。お願いします。できれば分娩みたいにM字開脚でお願いします」

言われた通りささっとこなす二人だった。

「くっさ……菅野さん、コイツのマンコむっちゃ臭いですぅ」

パンツを脱がせて開脚で縛り付けた小野メグが、思わず鼻を摘んだ。

「わあっ！？　ほんとにくさっ！　開脚してオマンコが少し開いた

瞬間スッゴイにおい……」

大野真子も鼻を摘んで苦笑いしている。

「女子高生のアソコ勝手に見て何を好き放題言ってるのですかあなたたちっ！！　酷いですっ！！」

M字開脚で小陰唇や膣口まで丸見えにされて怒鳴り散らす女子高生の須藤梨沙子……。

「そんな醜い歪になった顔で……更に性器も汚いとか……もう救いようがないですね里沙子さん？」

莉央が〝子宮抉り取り器〞を構えて局部に近づけながら囁きかける。

「こら小学生のガキッ！　私が丁寧に話してるからって舐めないでくれますかっ！？　臭いとか汚いとか相手に失礼でしょう！？　謝って下さいっ！！」

『つぷっ』

「ヒャアっ！？」

文句を言う須藤梨沙子に構わず直径１０センチほどもある円筒形の挿入部分を小陰唇ごと内側に押し込みながら膣へ突き入れる莉央。

「汚くて臭いオマンコに……あたしがお仕置きしちゃうぞぉっ！」

『ズブブ……メリメリ……バリッ！』

「あら？　処女膜なんか付いてたのね……あたしがこんな機械で奪っちゃって御免なさい」

「いやあっ！！　お嫁に行けないっ！！　やめてええっ！！」

『ズブブブブ……メリメリ』

「痛いっ！？　うぎゃあああっ！！！！」

「ほうら……ぶっといのがどんどん膣内へめり込んでいくよ？　感じる？　あはは♪」

ブシュブシュと噴き出す鮮血を、たまにウエスで拭きながらどんどんと子宮へ向けてめり込ませてゆく。

「ぎひいいいっ！！　痛いいいっ！！　死ぬううううっ！！」

「死なせないから安心して～。はい、もう数センチで子宮口到着だからね？」

『グリッ！……ザシュッ！！』

「ひんぎいいいいっ！！」

子宮口に辿り着いた機械は、回転刃によって子宮口から子宮全体を抉り取るように腹腔の肉片と子宮を切り分けてゆく。

『ズバズバズバッ……ザシュシュシュシュッ！！』

「ギャアアアアアアアッ！！」

『キュイン……カポッ！』

「今無事に子宮全体をこの機械の中に抉り取っちゃったからねぇ？麻酔無しだから死ぬほど痛いか……でも人一人殺して死刑にならないだけ感謝してほしいなぁ。そう思うでしょ宮垣さん？」

木陰から両手で顔を塞ぎながら残酷ショーを覗き見していた咲良がビックリして飛び上がる。

「あ、ああ。あの、もうそのくらいで許してやったら……あは。あははは。そいつ、性器からむっちゃ血が出てんじゃん？」

「こんなものまだまだ序の口ですよ宮垣さん。まずは子宮抉り出し完了っと♪」

『ポコンッ！！ドクドク……』

機械を性器から抜いた後、ドクドクと大量の血液が流れ出してくる。

「ほら、あなた自身の子宮だよ。あげる」

『カポッ……ベチャッ！！』

須藤梨沙子の顔の真横に取り出したばかりの子宮を落とした。

「んがががが……痛い痛い痛い……んがあああああっ！！」

「痛すぎるわよね。御免なさい。特別に殺さない分どうしても今回は麻酔打ってあげられないの……分かって」

申し訳なさそうにハサミを取り出すと、結構毛深い陰毛をカットしてゆく。

大野真子と小野メグはハラハラしながらその光景を見ているが、隠れて見ている宮垣咲良は半端なく震えていた。

素っ裸で拘束されながら残酷ショーを見せられている三人の高校生たちは絶句して須藤梨沙子の心配を本気でしているようであった。

『ギュッ……』

「ヒャアッ！？」

残った陰毛を左手でかき分けて、右手に握り締めたハサミで梨沙子の陰核を軽く挟む。

子宮内の激痛と戦いながらもそれを超える違和感に反応してしまう。

「一生快感を味わうことはあたしが許さない。えいっ！」

『ジャキンッ！』

「ぎゃあああああああっ！！」

子宮抉り出しの時より遥かに激痛を感じた梨沙子は、M字に開かれた脚を閉じようと必死でもがいている。

もがくたびに太ももに紐が食い込むので、更に痛々しい。

クリトリスを切り取られたショックで勢いよく小便を漏らしてしまう梨沙子。

莉央の太ももとスカートに少しかかってしまった。

「そんなに痛がらなくても死なないから安心してって言ってるでしょう？　何かなこのちっちゃい穴は？　何を出してるのココから？ん？」

『ズッ！！』

「ぎひっ！？」

『ズブブブブブ……ザクザクザクザク』

ハサミを全開に開き、片方の切っ先を尿道に差し込んだ。
ゆっくりと根元まで差し込んでゆく。
尿道の穴より幅のあるハサミを根元まで差し込んだら……刃を上向に差し込んだので、尿道からクリトリスがあった部分までパックリと切開された。

遂に膀胱まで辿り着いた先端をグリグリと掻き回す。
残っていた小便が勢いよく飛び出してきた。
サッと身をひるがして今度はかわす莉央だった。

「んぎいいいいっ！！　ひんぎいいいいいっ！！」

「あれは痛そうだね真子……」

「陰核切除と比べたらマシかも……いや、同じくらいか」

この時点でギブアップした宮垣咲良は、見るのをあきらめて寝転

がって気分を癒している。

「あまりにも色々な部分の激痛に発狂してしまってるのは分かるんだけど……まだ穴は一つ残ってるんだよね。お尻の穴」

「ぐわあああっ！！　ぎひいいいいっ！！」

「痛くて話は出来ないか……特別に肛門だけは陵辱だけで許してあげる」

『つぷ……ズズズ』

莉央は人差し指をゆっくりと梨沙子の肛門へ差し込んでゆく。膣内と陰核と尿道の激痛で、全く肛門になど気にかけない梨沙子に対して、構う事なく直腸を掻き回す莉央。

『グリ……グチュグチュ……グリングリン……』

「ビクビクするたびに指を締め付けてきてるよ？　あははは」

激痛に身体をくねらせる須藤梨沙子の肛門を執拗に掻き回した後、人差し指をゆっくりと抜いた莉央は、指先に着いた便を梨沙子のヘソの中に擦り付ける。

「痛いよね？　苦しいよね？　もう二度と人を殺したりしたらダメだよ須藤梨沙子」

「うがあああっ！！　ぐわあああああっ！！」

涙をポロポロこぼしながら激痛に耐えている梨沙子だった。
莉央は痛み止めの麻酔注射を打ち、痛みの地獄からはとりあえず解放してあげた。

「はぁ。はぁ。はぁ。私……まだ生きてるの？」

「うん。よくあたしの拷問に耐え切ったね。十分苦しんだから痛み止め打ってあげたよ。もうあとはあの三人の処刑を見てるだけでいいから」

「や、やめてあげてっ！！　私の大切な親友なのっ！！　お願いだから殺さないでっ！！」

莉央は梨沙子の顔側へ回り込み、軽く頭を撫でながら語りかけた。

「由真さん……でしたよねぇあなたの妹さん」

「そ、そうです。由真を自殺に追い込んだ指原を殺すためにあの三人は手伝ってくれたりしたのです！　こんな私のために必死で動いてくれてるんです昔からだから絶対殺さないで下さい」

「須藤梨沙子。今からあたしと大野と小野の三人で、ある事実を再現させてもらうからようく聴いててね？」

「事実の再現ですって？　意味が分かりませんが？」
手招きで大野真子と小野メグを梨沙子の側へ呼ぶ。
「じゃあ始めますね大野さん、小野さん」
「はーい」
「はい」
大きな目をパチパチさせながら莉央たち三人を交互に見渡す須藤梨沙子。
何が始まるのか殆ど理解できていない。
「おっ！　こんな時間に女子中学生が公園で一人泣いてるぜ？」
莉央がいきなり男の口調で話し始めた。
呼応して大野真子と小野メグも続ける。
「なんか瞼が腫れてるみたいだな……友達と喧嘩でもしたんだろうな」
「嫌なことは続くものだと思い知らせるために……みんなで犯っち

ゃう？」
三人が一通り話し終わると、まだ意味が分からない梨沙子は顔を傾げる。
「小林は犯るのがホント好きだな！　はははは！」
「大林だって前の女子大生の時も一番に挿入してるじゃゃん」
「いつも大林は一番、俺は二番、小林は最後だもんな！　俺たちの精液まみれなのによく平気だな小林は！　ひっひっひっ！」
「中林だって大林の精液まみれの中挿入しちゃってんじゃん。よくいうよ……」
素っ裸で拘束されている親友の男たち三人の名前が出てきたところで表情が険しくなる須藤梨沙子。
莉央たちは更に続ける。
「何を、ないてるのかなぁ？　俺たちで良かったら悩み聴いてやるぜ？」
「だ、大丈夫です。心配かけて申し訳ございません」
「まだ泣いてるじゃん？　遠慮しないで俺たちに相談しなよ？可愛いな君は。名前なんてゆうの？」

「……ぐす。ぐす。……須藤由真です」

「え？　須藤……由真？」

「おい！　この子はヤバいよ！　梨沙子さんの妹さんじゃないか」

「んん……でも薄暗いし顔も覚えられないだろうし……絶対梨沙子さんにバレないだろ？　やっちまおーぜ！」

「そうだな。梨沙子さんにそっくりでむっちゃ可愛いし」

「いやっ！？　何を！？　ひぃいっ！！」

この時点で真実に気付かされた須藤梨沙子は発狂するように叫んだ。

「もうやめてえええっ！！」

「ズブブ……バッコンバッコンバッコンバッコンバッコン……ドピュッ」

莉央がその後起こった効果音まで口で再現する。
卑猥としか言えなかった。

「もうやめてよおおおっ！！」

「残酷だけど……今のが真実です」

「そんなの誰が聞いてたのよっ！　適当に話を作らないでもらえますっ！？」

未だ真実と受け入れ難い梨沙子は、薄々本当だと気付いていながらも、親友の為に最後の抵抗をみせた。

「ボイスレコーダー……由真さんは日記がわりに色んな事をボイスレコーダーに残す癖があったの。あの日の指原理子からの暴行時や、輪姦時の時の事……ポケットに入っていたボイスレコーダーが全て記録していた」

「そ、そんな……まさか大林さんたちが」

拘束されている大林たち三人は怒鳴り散らすことも忘れ、必死で梨沙子と目を合わさないように視線を避けている。

「そんなにビビらなくてもいいよ御三方っ！　今日があなたたちの最後の日になるんだからねーっ！！」

莉央は大林たちに向かって軽く叫んだ。

ゆっくりと下半身血まみれの須藤梨沙子の拘束を解きながら大野真子と小野メグ二人から梨沙子に声をかける。

「お疲れ様でした。止血剤も大量に打ってるから死ぬことはないのでご安心を」

「あとはカス三人組の処刑ショーでお楽しみください。見ていられたらの話ですが……」

「立っている拘束の大林は大野真子さん、四つん這い拘束の中林は小野メグさん、あたしは小林とかゆう仰向け拘束のやつ。担当は以上でお願いします」

出来るだけ残酷にと莉央から言われながらも、出来るだけアッサリ済ませたい真子とメグだった……。

即死はタブーなので出来る範囲の残酷技を考えなければならない二人である。

いきなり莉央が拷問処刑を開始する。

小林のペニスをツンツンと人差し指でつつき始めた。

「お、おい、小学生の児童にそんなとこ触られても僕は……感じないよ。ろ、ロリコンじゃないからね……」

『ギュッ……シコシコシコシコ』

勃起はしていないが、それなりに大きな小林のペニスを今度は軽

くシゴき始める莉央。

「うわっ！？　な、なんちゅう事をするんだガキのくせに！？　や、やめてくれるかなっ！？」

「うふふ♪　アイドルに手コキされるなんて幸せだろーが？　早くイッちゃえ！」

　この辺りはまだ処刑を開始していない真子とメグ、既に裁かれた須藤梨沙子、木陰から時々見守っている宮垣咲良全員から見守られていた。

　とりあえず女子たちは少し頬を赤くしながら強制手コキを眺めていた。

　少しずつ膨張してくるのが小林本人にもわかる。

　いくら小学生とは言え、破格の美人顔である菅野莉央にコレをやられたらロリ趣味じゃなくても勃ちそうだ。

「おい中林！　小林のやつ気持ち良さそうだが結局俺たち最後は処刑されちゃうんだよな？」

「梨沙子さんにしていた仕打ちを思うとまず生きて帰れないだろうな……ガキのクセに無茶苦茶残酷な事しやがる……」

　素直に興奮できない二人はそれぞれ自分担当の中学生の処刑人である真子とメグをチラチラと覗き見る。

菅野莉央の手コキは少しずつ速度を上げて、遂に超高速手コキに発展。
その頃小林のペニスは、はちきれんばかりにバッキバキに勃起していた。

「ほらほら。イッちゃえ」

「うっ！　そんな、こんなガキにイカされるなん……て……イッ！イクウウウウッ！！」

『ザシュッ！……ポーン』

「ぎゃあああああっ！？」

かなり長めの良く磨がれた刺身包丁を真横に一線すると、射精直前に雁首から先が吹っ飛んだ。

『ドクドク……ドロドロ……』

莉央の足元に転がった亀頭部の切断面と、残っている側の切断面から勢いを完全に無くした精液がドロドロと流れ出てくる。

「あはは。ドピュッと気持ちよく出せると思った？　甘いなぁ」

『プシャーッ！！　ドクドクドクドクドク……』

ワンテンポ遅れて血液が噴き出してくる。
手際よくペニスの根元を配線バンドで思いっきり縛り付けて止血する莉央。

「さてと。お腹を開いてハラワタ出しちゃおっか♪」

あまりに絶叫を上げ続ける小林に、痛み止めの麻酔薬を注射する。

「強力な麻酔打ってあげたから……自分の臓器が取り出されていくところをじっくり落ち着いて見せてあげるよ」

『ズブ……』

「やっ！　やめてくれええっ！！」

刺身包丁の切っ先をゆっくりと肛門へ刺し込んでゆく。
刃を腹部側に向けて挿入された刺身包丁をそのままゆっくり陰嚢を切り裂き、半分残った陰茎を切り裂き、臍のあたりまで切り進んだ。

「痛いっ！！　ぐおおおおっ！！」

「強力な麻酔打ってるんだから我慢して。そのうち痺れて全く痛みは無くなるから」

『ズズズズズズ』

胸骨まで一気に切り裂き、刺身包丁を置くと、両手を腹部に捩じ込んだ。

『グボッ！……グチャグチャ』

「痛いいいっ！！」

「生温かい小腸の感覚がたまらないのよね。えいっ」

『グボッ！　ズルルルルッ！！』

握りしめる腸の部分を決めた莉央は、一気に小腸を引き摺り出してゆく。

「どんどん出てくるね？　こうかこうか？　あはは」

『ズルルルルルルッ！！』

「ん？　全く痛くない？　何をやってるんだこのガキは？」

小腸と大腸は全て腹部から引き抜かれ、直腸が肛門にくっついているのみとなった。

包丁を入れた時に一部切れている肛門を、丁寧に丸くくり抜くと、そのまま肛門ごと引き摺り出した。

大林と中林は既に目を背けて現実逃避状態になり、宮垣咲良と須藤梨沙子は震えながらもじっくり観察していた。

大野真子と小野メグもかなり震えていたが、まだ見ていることが出来ている。

『ズッ！』

「ぐはっ！！」

喉に包丁を差し込むと、猛烈な勢いで首の切断に移行した。

『ズッズッズッズッ！……ザクザク……ズバズバッ！』

「うごおおおっ！　ゴボボッ！！　かひゅうっ！！　かひゅうっ！！」

瞬く間に頸椎まで切り込むと、喉から空気が入り込み、猛烈に苦しみ出す小林だった。

辺りは頸動脈から噴き出した血で染められてゆく。

髪の毛を掴んで色んな角度に引っ張る。

「ほらほら、もう頚椎と首の後ろ側の皮一枚だけの状態だよ？　痛さは麻酔で大した事なくても苦しいでしょう？」

「ゴボボッ！！　うおうおうっ！！　ゴポポポッ！！」

「何て言ってるのか分かんない……本日一番乗りで死亡して。えい」

『バキッ！』

掴んだ髪の毛を横に捻り、頚椎をへし折った時、小林小治は絶命した。

莉央と目が合った小野メグが軽く頷いて中林の元へ歩み寄る。

金属タワシを手にして背中にそっと置くと、一言呟いた。

「まずは背中をズタズタにさせてもらうからね」

「なにっ！？　や、やめろ！？　そんなもので擦られたら血まみれに……ぐわっ！？　ぎゃあああああっ！！」

『バリバリバリバリバリバリバリッ！！』

猛烈な勢いで背中全体を擦り付けてゆくと、みるみる内に背中じゅうの皮が剥けて血まみれになってゆく中林。

皮が剥けても第二波、第三波と更に擦り付けて肉片までも削げ落ち始める。

「ぎゃあああああっ！！」

「傷に塩を塗るって言うけど……どうぞ」

『パラパラパラパラ』

肉片ズタズタにされた血まみれの背中に塩が振り撒かれる。耳が痛くなるほどの絶叫をあげる中林を無視して頭部の方へ回り込むメグ。

「なんかのヤンキーもの映画でもやってた事だけど……」

『ズボッ……ズブッ』

「うひっ！？」

両方の鼻の穴に二つに割った割り箸を、それぞれ突っ込むと、手のひらで思いっきり叩き込んだ。

『ドカッ！！……ズボボッ！！　ぶしゅうううううっ！！』

「ぎひいいいいいっ！！　ふぐあああっ！！」

勢いよく二つの鼻の穴から鮮血が飛び出す。
小野メグは更に割り箸を両手で一つずつ握りしめ、グリグリと鼻腔内を掻き回し始めた。
大野真子は思わず目を背けて顔をしかめてしまう。
冷静に見ながら菅野莉央が口を開いた。

「やるじゃないですか！　かなり痛そうな拷問ですね！」

「ありがとうございます菅野さん」

鼻の穴掻き回し地獄が一分ほど続けられた。
ようやくメグの手は止まるが、中林は涙を流して号泣し続ける。
割り箸を鼻から引き抜くと、更に血が吹き出してくる。
手を真っ赤に染めながらも次は大きなハサミに持ち替えると、下唇を左手でキュッと握って手前に引っ張り出し、一気にちょん切ってしまう。

「アバババババッ！！　んひぃいいいっ！！」

全身をくねらせながらもがき苦しむが、メグは容赦しない。
同じように上唇もちょん切ってしまう。

「痛い？　耳と目玉だけは残しといてあげるから人生最期の風景と

音を聞きながら死んでいくんだよ？　わかった？」

「んぎゃあああああっ！！　ひぃいいいいっ！！」

「中林っ！！　大丈夫かおいっ！？　中林いいいいっ！！」

あまりに壮絶な拷問に絶叫する中林を、大の字で磔られている大林が大声で呼びかける。

「大丈夫なわけないでしょ……馬鹿じゃないの？」

小野メグは冷たく吐き捨てると、今度は中林の背後に回り込む。

「四つん這いと言えば……コレだよねやっぱ」

拷問器具をしまってある大きな箱から今度は日本刀を取り出すと、そっと股間へ切っ先を向ける。

「お尻の穴から……串刺しにしちゃいます！」

「ヒューヒュー！　カッコいい小野さんっ！」

菅野莉央が小野メグの残酷さに感動してエールを送る。

「ありがとうございます。正直無茶苦茶ドキドキしてますけどね……お邪魔しまーす」

『つぷ……』

まだまだ背中と顔面の痛みと戦いながら絶叫中の中林の肛門へ容赦なく日本刀の切っ先が突っ込まれる。

「中学生の女の子にこんな恥ずかしい処刑方法で殺されるなんて……哀れだよねぇあんた？」

『ズボボボ……ザクザク！』

数センチ直腸へ挿入されると、刃が下向きな為に会陰部側の肛門括約筋が切開され、そのまま前立腺も切開された。

『んだぎゃあああああおおおおうっ！！』

「はぁ？なんてひょうきんな叫び声上げてるの？　あはは。肛門の一部と前立腺がパックリいっちゃったからかな？まだまだいっくよぉ〜。それえええっ！！」

『グボッ！！　ズブブブブブブッ！！』

直腸を貫通して小腸を何枚も突き破った切っ先は、遂に胃を貫いて食道まで達する。

「おごおっ！？　うごごごごっ！！」

「もう絶叫すらまともにあげられないでしょ？」

手元に体重をかけて肛門から会陰部、陰嚢まで切開し始めるメグ。

『グボッ！　グリリッ！！　ズバズバッ！！』

「死ぬ前に……キンタマ抜いといてやる」

陰嚢を中央辺りまで切り込むと、二つの睾丸が飛び出してくる。精管と神経の管で繋がっているためにメグの太腿の前でプランプランと激しく揺れている。

「管を切らずに死ぬまで生のキンタマ揺らしていろ！　いくよ？トドメの一撃。ほらあっ！」

『グボッ！！……ザシュッ！！』

「おごおっ！！」

遂に口から切っ先が顔を出す。

「一度も身体や首から抜けずに一撃で口まで貫通させるなんて！　凄いよ小野さんっ！」

菅野莉央はメグの器用さに手を叩いて大喜び。

「ゴボゴボボ……ガクッ」

血の泡を噴きながら息絶える中林。

「相手を悪と割り切って誰かの代わりに敵討ちと思えば……だんだんやれる気がしてきたよ。真子も頑張って！」

処刑を最後に残す血に弱い大野真子を見つめながらゆっくりと日本語刀を流しての遺体から引き抜いてゆくメグ。
右足の裏を臀部に押し付けて最後に残った切っ先を肛門から抜き取ると、ぶら下がっている白い睾丸を人差し指でツンツン突きながら微笑む。

「大野さん、無理しないで下さい」

「は、はい菅野さん……」

大きな道具箱から大野真子が取り出したのは……チェーンソー。

ぎこちない腕捌きで必死でエンジンをかけようとするがなかなかかからない。

菅野莉央がそっと近寄り、エア泣きをしてチョークを引っ張り二、三回ほど引っ張ると、軽快な音を響かせながらエンジンがかかった。

「どうぞ。意外と重いから怪我しないように気をつけて下さいね」

「は、はは。ほんとありがとうございます」

かなり動揺しながらも時々アクセルを吹かしながら最後の一人……大林の元へ歩み寄る真子。

「わーっ！！　や、やめろっ！！　やめてくれえええっ！！　そ、そんな可愛い顔した中学生に殺人なんてできないよな！？　な？？」

「か、覚悟して！て、手足全部切り落としてから処刑しますからっ！！」

「ひっ！？　や、やめて……」

『ウイイイインッ！！……バリバリバリバリバリッ！！』

「ぐわぁあああっ！！」

太もも辺りから右脚を切断にかかる真子。
大腿骨に当たって刃が止まる。

「えいいっ！！……はぁ。はぁ」

遂に手が止まってエンストまで起こしてしまう。
見かねた莉央が再度近寄り、真子の手からそっとチェーンソーを受け取ると、再びエンジンをかける。

「ようく見てて下さいね。次回は必ず一人で遂行してもらいますから……」

『ウイイイインッ！！……バリバリバリバリバリバリッ！！』

「ぎゃはあああああああああっ！！　痛いいいいいっ！！」

莉央によってあっという間に切断された右の太もも。
そのまま両腕、左脚と、三分ほどで全て切断しつくす。
最後の左脚を切断された時、見事に達磨のように転ぶ大林。
夥しい出血をみせながら転が回るが、冷ややかな笑みを浮かべてペロッと舌を出しながら見下ろす莉央だった。

「止めはやっぱり真子さん自身でやってください」

「は、はいっ！」

再度チェーンソーを受け取った大野真子は小野メグと菅野莉央の顔を見渡すと、意を決したように大林の喉元へ狙いを定めると、一気に首へあてがいアクセルを吹かした。

「がはああっ！？……ゴボゴボゴボゴボゴボッ！！」

『ウイイン……ズバババババッ！！……ポトリ』

ほんの数秒で大林の首は胴体から切り離された。落ちた首が真子の足元へ転がり込む……。

「きゃあっ！？　エッチ！！　見ないでえぇっ！！」

『ドカッ！！……ゴロゴロゴロゴロ』

目を見開いた生首は、真下から真子の下着を覗き見しているように見えたため、怖いやら恥ずかしいやらで慌てて蹴り飛ばす真子だった。

「やった！　真子にもできた！」

両手を組み合わせて喜ぶ小野メグだったが、莉央的には不満だった。

「もう少し痛めつけてから殺さないと拷問処刑がただの処刑になってしまいますよ大野さん？」

「ご、御免なさい菅野さん……えいっ！　えいっ！」

『ドガッ！！　ズドオッ！！』

仰向けでピクピクしている四肢切断された上に首まで落とされた胴体に何度も蹴りを入れる真子。

「はは。もう死んじゃってるから……じゃあ死体の性器をコレで破壊してくれます？」

「は、はいっ！……えっと。オチンチンを……」

短刀を取り出した莉央から素直に受け取った真子は、尿道に刃を当てて縦に切断してゆく。
パックリと見事に竹割り状態にしてから親指と人差し指で真っ二つになってしまった片方側の尿道管を掴み、ゆっくり引き摺り出してゆく。

「ごめん……死んでるから痛くないよね……」

「こら真子っ！　聞こえたよ？　死体に謝るなよ！」

「ごめんっ！……はぁ。はぁ。はぁ」

「もういいよ大野さん。よく頑張りました」

処刑をやり遂げた三人は宮垣咲良と須藤梨沙子を引き連れて本土への船の迎えが来る簡易な港へ向けて帰り始める。

「大野、小野……お前らは喧嘩も強くアイドルもやってるのに……こんな残酷な処刑人までやってたのか？」

小刻みに身体を震わせながら咲良が同級生の二人に問いかける。

「ああ。いつのまにかメンバーに入ってた……真子なんて血に弱いから少し可哀想だよ」

後ろを歩いてくる大野真子を振り返るメグ。

「はぁ。はぁ。はぁ。まだ吐き気が……すまない……今はそっとし

ておいてくれ……」

気持ちは分かると思いながら咲良も黙って歩き続ける。

顔面を殴られまくり、子宮を抉り取られた須藤梨沙子もただただ震えながら菅野莉央に身体を預けながらようやく歩いていた。

スカートもパンツも履かせてもらってはいるが、まだパンツの裾から足首へ血が伝っている。

莉央はそっとスカートを捲り上げ、パンツの裾から手を入れ、性器へ中指を挿入した。

『スッ……くちゅっ！』

「ひいっ！？　も、もう許してええっ！！」

「黙れ！　大人しくしてないと処刑しちゃうから！　謝りなさい」

「は、はいっ！……すみませんでした」

「よく出来ました」

『ずぷっ……グチュグチュ……くちゅちゅちゅちゅちゅっ！！』

「あっ！　あはあっ！！　んあああああっ！！」

膣口が全開に開いたり閉じたりするほどの勢いでオマンコを思いっ切り掻き回す莉央。

「んんんっ！！　いく……いっちゃううううっ！！」

「イキなさい」

「あはっ！？　いっくうううううううっ！！」

『グチュチュチュチュチュチュチュッ！！　ガクガクガクッ……ぷしゃあああっ！』

四つん這いで地面に崩れ落ちる須藤梨沙子。
小学六年生の児童にイカされた女子高生はその場から動けない。

「あたしが強力な麻酔打ってあげてるからイけたんだよ？　嬉しい？」

「は、はい。ありがとうございました……グスグス……しくしく」

「泣いてる子は更にお仕置きしちゃうぞぉ？　ほらあっ！」

『ずぷっ！！』

膣から引き抜いた指をそのまま肛門へ一気に根元まで突っ込む莉央。

「はううっ！！　ごめんなさいいいいいっ！！　やめて許してえええっ！！　ひいいいいっ！！」

「今度殺人とかやっちゃったらこの尻の穴から直腸引き摺り出してウィンナーにしてやるからね。わかった？」

「ひいっ！？　は、はいっ！　御免なさい御免なさい御免なさいっ！」

菅野莉央は、ゆっくりと須藤梨沙子の肛門から指を引き抜くと、必死で歩き始めた梨沙子本人の口へ捩じ込んで、指に付着した便を舐め取らせる。

宮垣咲良は莉央のズドオッ梨沙子への性器責めを目の前で見せつけられながら頬を赤く染めて見て見ぬフリをしながら歩を進める。

残酷処刑島に新たに三人の遺体が加わることになった……。

仇は隣に……（後編）（後書き）

残酷処刑島での処刑以外の拷問刑。

処刑人たちにとっても珍しい一日となったが、殺そうが減刑しようが宮垣咲良の恋人は二度と戻ってはこない。

目隠しされた帰りの船の中でも人知れず涙を流す咲良だった。

ダメ親父と鬼畜たち（前編）（前書き）

ギャンブルで膨れ上がってしまった借金。
破産寸前に追い込まれた男に光明が射す。

ダメ親父と鬼畜たち（前編）

「あんたの名前は宮沢一平さん、だったかな？　差し出すのはこの子でいいんだな？」

「は、はい。私の長男の千紘でございます」

「10歳ぐらいか？」

「そうです……小学四年生です」

宮沢一平35歳バツイチ。
別れた妻との間に子は二人。
長男の宮沢千紘10歳と、長女の千佳8歳。
離婚前の話し合いの結果、長男の千紘は一平が育てることとなり、長女の千歌は妻の優美子が連れて出て行くこととなった。

一平は、二階建ての平均的な広さの土地の一戸建てで両親と暮らしていたが、20歳の時に両親を交通事故で亡くして一人暮らしをしていた。
24歳の時にお見合いパーティーで出会った優美子と勢いよくその年に結婚して、子供も二人授かり生活は順調かと思われたが、10年そこそこで今回の離婚となった。

「お父さん！　僕今日中にはお家に帰れるんだよね？」

「あぁ。今日の夜中には迎えに行くからそれまでこのお兄さんと一緒に遊んでるんだぞ？　大人しくいい子にしてるんだ」

「うん！　明日は日曜だし前に言ってた遊園地連れて行ってね！」

「分かった」

２５歳の若い男に手を繋がれて父親と引き離される１０歳の千紘。

「さぁボク。俺のマンションに行こうか」

男子児童の手を引っ張り父親から遠ざかってゆく。
振り返ってジッと父親の一平を見詰める千紘だったが、先に父親の方が背中をむけて反対方向へ歩き出した。

「お父さん……必ず迎えにきてね……」

知らない男にいきなり預けられて、不安で泣きたい気持ちをグッと堪え、２５歳の男の帰る方へ一緒に歩き始めた。

顔も髪型もいでたちも……見るからにイカツイ風態である２５歳の男の名は柿崎竜太。
この中央地方では有名な闇金業者のトップであった。
バックには登竜会とゆうヤクザが付いているため、簡単に借り逃

げなど出来る相手ではない。

夕方に柿崎竜太に会い、息子の千紘を預けてから家に帰り着いたのは午後八時を回っていた。

安物のウイスキーをグラスに半分ほど注ぎ、水道水で割って勢いよく呑み始める。

「グビグビ……ぷはぁ！……助かった。本当に助かった」

二杯目を注ぎ終わると今度は割らずに呑み干す。

「ゲホッ！　ゲホッ！　ううう。効くぜ……千紘……すまない。本当にすまんっ！！」

空きっ腹にウイスキーは流石にキツく、数分と持たないうちにソファーにひっくり返る。

「まさか今回の借金３００万が……千紘を十日間預けるだけでチャラにしてくれるとは……ひっく！　本当に助かった……千紘にはそれなりの目には遭ってもらうとあの野郎は言っていたが……命を奪うことは絶対しない、と約束してくれた。そこは心配しないでくれ千紘……」

なんとなく息子の運命を想像は出来ていたが、無理矢理考えないようにするためにウイスキーを浴びるように呑み続けて意識を失う宮沢一平であった。

「うまいか？」

「うん！　お父さんの作ったカレーには敵わないけど十分美味しい！」

「そうか。腹一杯食ってくれ」

「ありがとうおじさん」

「あのさぁ。俺こう見えてもまだ25だから。おじさんはやめてくれないか？」

「え？」

「お兄さん、とでも呼んでくれないか？」

「分かった！　カレーおかわりも頂きますお兄さん！」

夕食後、風呂場へ向かう二人。

「身体を洗ってやるからお兄さんと一緒に入ろうな」

「うん！　入ろ入ろ！」

壮絶な体験をすることになるとは夢にも思っていない宮沢千紘は、素直に柿崎竜太と共に湯船に浸かる。

「明日はお父さんと一緒に遊園地にいくんだ！　お兄さんも一緒に行こうよ！」

「遊園地なぁ。俺はもっと楽しい事があるから遠慮しとくよ」

「ふぅん。何がそんなに楽しみなの？」

ゆっくり湯船の中で千紘に抱きつく竜太。

「え？」

何が起こっているのか頭がついていかない千紘は、目を丸くして固まってしまう。

何か硬いモノがおへその辺りに当たるのを感じて我に返る。

「お、兄さん？　何か当たってる……？」

「何だろうな？　千紘くん……その硬いモノに触ってごらん」

「う、うん。……え？　コレって……オチンチンじゃ？」

「握ってシゴくんだ」

「え？　し、シゴ……く？」

「根元から先っぽ辺りまで上下運動を繰り返すんだ」

よくわからないままゆっくりと柿崎竜太のペニスをニギニギする千紘だった。

無理矢理手を掴んでピストン運動を強制的に教える竜太。

「な、なんで僕にお兄さんのオチンチンを擦らせるの？」

「うるさい！　黙ってそのまま擦れ！」

本気で怒鳴られた千紘は縮み上がってしまう。

大人しく言われた通りにペニスを扱き続けた。

「もういい。湯船から出ろ」

「う、うん」

１０歳の男子児童の口元へ、ビンビンにいきり勃った２５歳のペニスを突きつける。

「舐めろ」

「えっ！？　そんなの嫌だよっ！！　そこはオシッコするとこだもんっ！」

『バキィッ！！』

「ぎゃあっ！！」

小学生の左の頬を思いっきり殴る大人気ない大人。

「舐めないと殺すぞ？」

「ううう。わーんわーん！　痛いよおっ！」

『ガボッ！！』

「むんぐうううっ！？」

泣き喚く児童の口に無理矢理捩じ込む１８㎝はあろうとゆう大きなペニス。

「噛んだりしたらぶち殺してやるからな？　そのまま舌を使って舐め回せ！」

「んんっ！？　むごごごおっ！！」

最初は抵抗するも、本当に殺されかねないと悟った千紘は、吐気を催しながらも竜太のペニスを舐めまくる。
激しく音を立てながら闇雲に舐め回した。

「うっ。いいぞ……気持ちいい……うっ！？」

『ドピュッ！！　ドピュピュピュピュピュピュッ！！』

「んんんっ！！！……ごくんっ！　ごくんっ！」

いきなり口の中に広がる温かい液体に目を見開いて驚くが、そのまま窒息しそうになり、全て飲み込んでしまった。

「ゲホッ！ゲホッ！……ゴホッ！　ゴホッ！」

派手にむせる男子児童のオチンチンを右手の指で掴み、ゆっくりと皮を剥いてゆく。

『キュッ……メリメリ』

「痛いっ！？　やめてっ！！　痛いいいいっ！！」

初めてこの世に顔を出す児童の亀頭部……半分ほど無理矢理剥かれて尿道口がパックリ開いた。

「痛いよおおおおっ！　ぎひいいいいっ！！」

「ははは！チンカスだらけだな？　小学生の亀頭か……ピンク色で綺麗な色してやがるぜ」

人差し指でチョンチョンと露わになった尿道口を触ると、電気が走ったようなピリピリとゆう痛みが児童を襲った。

「ギャアアアアッ！！　痛いっ！！　やめてえええっ！！」

「チンポ触るのはもうやめてやるから……四つん這いになれ」

泣きながら男の言う通りに四つん這いになる宮沢千紘。
オチンチンの痛みがなかなか治まらず、涙が止まらなかった。

「ほら、次はこっちだ」

『つぷ……ズボボ』

「ひいっ！？」

小さな小さなピンク色の肛門へ、腐った大人の人差し指がゆっくりとめり込んでゆく。

『ズボボボボ……グリグリ』

掻き回しながら捩じ込んでくる人差し指に激痛を感じる児童の直腸であった。

「んぎゃあああああああっ！！　痛いいいいいっ！！」

『ぶっちゅううう～。グリグリグリグリ』

遂に根元まで挿入され、直腸内を執拗に掻き回される小学生。

「人差し指でも張り裂けんばかりに拡がってビクビクしてやがる！なんてエロいんだ……千紘くん、コレから俺がここの穴を調教してやっから！」

「嫌だあああっ！！　やめてえええっ！！」

「調教でき次第、最高のモノをブチ込んでやるからな。楽しみにしてろよ？　ガハハハハ！」

半時間ほど掻き回した後、更に石鹸を付けて中指まで挿入させる。
二本の指で更に痛めつけられる肛門。
左手では睾丸とオチンチンをひたすら揉んで揉んで揉みしだく。
「人生初の射精は……この俺がさせてやるからな！　それも楽しみにしてろよおっ！？」
「わーんわーんっ！！　痛いよおおおっ！！　わーんわーん！！」
勢いよく大便を漏らしてしまう千紘に、睾丸責めを敢行する竜太。潰れるかと思えるほど強く小さな児童の睾丸を握り締めたり離したりを数回繰り返した。
時には睾丸を片方ずつ人差し指で強くピン！　と弾いたりもして、千紘が号泣するのを見て興奮する変態男であった。
泣きながら布団に入って長い不安な闇の世界を感じてしまう土曜日の夜中であった。
明くる日……朝からいきなり手足を縛られてオチンチンを弄りまくられる。
ゆっくりゆっくり剥いては戻し、剥いては戻し……遂に小学四年生のオチンチンの皮は、カリ首までずり下ろされた。
『メリメリメリメリ……』
「痛いいいいいっ！！」

「我慢しろ！　もう少しで全部剥けるぞ？　ほらっ！」

『メリメリ……ベロンッ！！』

「ギャアアアアアアッ！！」

「はっはっはっ！！　遂に全部剥けたぜっ！？　よかったなオイッ！？」

無理矢理剥かれたペニスは、紫色に変色してピクピクと小さく小刻みに痙攣していた。

「エロいなエロいな〜。小学生のチンポの皮引き摺り下ろしてやった♪　ははははっ！　本当にエロいわ〜」

ヤンキー顔だが女性にモテる整った顔の変態男は、ニヤニヤしながら更にペニスの皮を戻したり全開に剥いたりを繰り返す。

少しずつスピードを上げてゆくと、千紘の顔が少しずつ赤く染まってゆく。

縛られたままでも全身に力が入るのが分かった。

『シコシコシコシコ』

「おっ！？　痛みを乗り超えたら今度はだんだん気持ち良くなって

きやがったか！？」

「う、ううう」

「射精させてやる。ほらほらほらほらあっ！！」

『シュココココココッ！！』

全開の速度でピストン運動を始める竜太。

『ドピュピュッ！！　ピュピュピュピュピュウッ！！』

小学四年生の精通であった。

「イッたイッた！　イキやがった！　わははははっ！！」

「はぁ。はぁ。はぁ。はぁ」

顔を真っ赤に染めて激しく肩で息をする千紘。

「気持ち良かったか？」

「う、うん。なんかオチンチンが……変な感じ……」

「それが射精っていうんだ。覚えてろ」

全身の拘束を解くと、今度は宮沢千紘に自分のペニスを握らせて扱かせる。

『シコシコシコシコ』

「もっと速く！……そうだ。気持ちいいぞ……キンタマも左手でマッサージしろ」

「う、うん。こう？」

「そ、そうだ。指の動きが上手くなったな！？　気持ち……いいぞおっ！！」

『キュッ！　キュッ！……シコシコシコシコ』

２５歳の男の睾丸をマッサージしながらひたすらピストン運動を続ける１０歳の男子児童であった。

「い、イクッ！　口に咥えろっ！！」

「う、うん……うぐっ！！ガポッ！！」

『ドクドク……ドクドク……ごっくん！！』

「んあぁ……」

「ははは。ザーメン飲まされて女みたいな顔しやがって……男のくせに可愛い顔してっからなぁ千紘は……もう我慢出来ねぇ。こっちへ来い」

机がある部屋へ連れて行き、四つん這い態勢で机の上に縛り付ける竜太。

「いよいよ肛門を犯してやっからよ？　かなり痛いから逃げられないよう縛らせてもらうぜ？」

「う、うん。お兄さんのこと好きだから……何してもいいよ。僕逃げないし……我慢してみる」

「可愛い事言ってくれるねぇ。では遠慮なくブチ込んで直腸抉ってやっからな？　覚悟しろよ？」

「うん。僕我慢する！」

『ピト……』

四つん這い体勢で両脚を開いて縛り付けられたため、肛門が剥き出しになっている。

その幼い肛門へ、巨大なペニスが押しつけられた。

メリメリと音を立てながら少しずつ開いてゆく児童の肛門。

「んんんっ！？」

『メリメリ……メリメリ』

「我慢できるかな？　俺としては泣き喚いていい声聞かせて欲しいんだけどな……ほらあっ！！」

『メリメリ……ずぼおっ！！……』

遂に巨大なペニスは小さな肛門へすべて埋まり込んだ。

「はっぎゃあああああああっ！！　痛いいいいいいっ！！」

「オラオラオラオラアッ！！」

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

激しく腰を振り始める竜太。

何度も何度も痛々しく窄んだり盛り上がったりを繰り返させられる千紘の菊門。

「すっげえ締まりだなっ！　気持ちいいぞぉっ！　オラオラオラオラァッ！！」

『バコバコバコバコバコバコッ！！』

「いぎいいいっ！！　いだいいいいっ！！」

「ははははっ！　今度はゆっくり出し入れしてと……」

『ヌポッ……ズボオッ！！……ヌププ……ズボオッ！！』

「やはっ！　あんっ！　痛っ！　ひぎっ！」

ゆっくりと窄みと盛り上がりを見せながらピクピクと細かく痙攣する肛門。

少し肛門括約筋が裂けて千紘の内股を伝い、血が流れ落ちている。

無理矢理開かれた脚を必死で閉じようと散々力を込めたため、太ももに縄が食い込み血が滲んでいる。

「ほら見ろ！　縛り付けていなかったら暴れて腰砕けになっちまってただろう？　罰として直腸内にタップリ中出ししてやるからな？」

再び激しいアナルファックが始まる。

白目を剥いて涎を垂らしながら肛門と直腸の激痛に耐える１０歳の男児であった。

『バッコンバッコン！　バコバコバコバコッ！！』

「い、イク……イクぅっ！！」

「痛いいいっ！！」

『ドピュピュウッ！！……ドクドクドクドク』

「んあぁっ！？　熱いいいっ！！」

「俺の精液はあったかいか？　ハハハハハ！」

「わーんわーん！　しくしく……」

ようやく机への拘束を解いてゆく柿崎竜太。
床へ崩れ落ちて泣きじゃくる男の子。

「これからしばらく色んな大人たちにも犯されるんだ。覚悟しとけよ？」

「ぐすん。ぐすん。痛いのは嫌だよぉー。えーんえーん！」

「明日は……えーと……長澤小百合さん。良かったじゃないか女性のお客さんだな。そんなに痛くはされないんじゃね？　まぁ今夜はゆっくり休め。明日のお客さんのために。そそうがあったら折檻してやるからな？　大人しく客の言う通りにするんだぞ？　分かった

か？」

「ぐすん……はい。でも痛いのヤダよ……」

「だから明日は２０歳くらいの女性だから！　心配ないって！」

股を庇うように丸まって眠りにつく小学生の千紘であった。

遂に父との遊園地は叶わなかった日曜日が終わりを迎えてしまう。

――監禁三日目となる明くる日の月曜日。

インスタントラーメンを貪り食う千紘の耳に、優しそうな女性の声が響いてきた。

「本当にいいんですか？」

「いらっしゃいませ！　長澤小百合様。メールでやりとりした通りです。好きにしてやってくださいな。まだ１０歳の小学生とゆうのもマジですから！」

薄い茶髪のロングヘアの女性は頬を少し赤くしながら口角を上げた。

「では今から三時間……午後三時までごゆっくりお楽しみ下さい」

「はい。ありがとうございます」

インスタントラーメンを食べ終わった千紘の部屋のドアがゆっくりと開くと、切れ長の目で睫毛が長い女優のような美形の女性が入ってきた。

「こんにちは」

「こ、こんにちは。お姉ちゃんは僕のこと痛くしない？」

「……あの……私……きちんとお金を払ってるから……」

言ってることの意味が理解できない千紘だったが、隣に座って頭を撫でてくれるこの女性と話すうちに、次第に打ち解けていった。

「そうなんだ！　あはは。お姉ちゃんって何でも料理作れちゃうんだね！　今度僕にもハンバーグ作って欲しいな」

「ハンバーグは得意だよ。いつか作ってあげるね千紘くん」

「ありがとう！　僕、楽しみにしてるよ！」

会話だけで一時間が過ぎた。

「後二時間か……ぼちぼち始めよっか千紘くん？」

「え？　何を？」

「聞いてなかった？　私はね……長澤小百合ってゆうんだけど……小学生の男の子を好き放題虐めちゃう事が夢だったの。インターネットで本当に見つけちゃってね。千紘くんは初めて虐めちゃう子になるんだけど……ほんと可愛いよねあなた……」

よく分からないまま、とりあえず可愛いと褒められて頬を赤くして照れてしまう宮沢千紘だった。

２０歳のお姉さん……長澤小百合はゆっくりと千紘の服を脱がし始めた。

「は、恥ずかしいよお姉ちゃん……」

黙々と脱がせてゆき、最後のパンツ一枚のみとなる。

「やめてっ！　女の人にオチンチン見られたくないっ！」

「もうあの男の人に調教されてるんだよね？　もう恥ずかしくなんかないよ？」

「でも……やっぱり女の人になんて見られたら……」

頬を赤くする児童のパンツを強引に脱がし、足首からも剥ぎ取ってしまう長澤小百合。

「わあっ！？　ヤダよ！　恥ずかしいっ！」

「四つん這いになってくれる？」

「四つん這い？　またお兄さんのような痛いことする気なの？」

「柿崎さんが何をしたか知らないけど……私はとりあえず……」

「……とりあえず何？」

『パァンッ！！』

「痛あっ！？」

可愛い顔とは思えないほどの強烈な平手打ちが臀部を襲った。

『パンパンパンパンッ！！』

「痛いいいいっ！！　やめてえっ！！」

「あは……快感」

思わずお尻を下げて腹這いになるが、背後から腰に手を回されて、再度引き上げられる。

「お尻を……突き上げていなさい」

「やだ……痛いよぉ。やめてお姉ちゃん……お願い」

『パンパンパンパンパンパンパンパンッ！！』

「ひぎいいいいいっ！！」

激しいお尻叩きが数分間続けられた。
何度お尻を下げても再度突き上げさせられ、また叩かれる。
繰り返すうちに１００回は打たれて臀部は左右とも真っ赤に染まっていた。

「わーんわーん！　痛い痛いいいいっ！」

「すっごい気持ちいいっ！　児童の虐待ってホント最高っ♪」

だんだんその気になってきた２０歳の女性は興奮を隠せない。
性癖の夢が現実のものとなり、陰部は既に濡れてしまっていた。

「今度は仰向けに寝てくれる？」

「もう痛いことしないで……ぐすん……」

『ガシッ！　ガシッ！』

両方の足首を両手で握りしめると、そっとオチンチンへ足の裏をあてがう長澤小百合。

靴下を履いていない素足であった。

ミニスカートから白いパンツが覗く。

思わず大人の女性のパンツを初めて見た小学生男児はソコに見入ってしまうが、照れている場合ではないことに数秒後に気付かされることとなる。

「私の生足に当たる男児のオチンチンの感覚……うふふ。エッチだな♪　いっくよぉ〜。それえええっ！」

『ガガガガガガガガッ！！』

「あがががががっ！？　痛いっ！？　んぎゃあああっ！！」

全身が前後に振動するほどの強烈な電気アンマが児童の股間を襲う。

その衝撃は睾丸二つにも襲い掛かる。

「ぎえええええっ！！　潰れちゃううううっ！！」

「潰れちゃうほど痛い？　私の電気あんま。それそれそれえっ♪」

『ガガガッ！　ガガガッ！　ガガガガガガッ！！』

『プシャ〜ッ！　ブリブリブリブリッ！！』

あまりの激痛に糞尿を同時に漏らしてしまう羽目になった。

「やだっ！？　私の足にオシッコとウンチが……信じられな〜い。すぐに謝りなさい」

「御免なさい御免なさい御免なさいいいいっ！　痛いよおお。わーんわーん！」

濡れティッシュで千紘と床と自分の足……全てを念入りに拭き終わると、大きな浣腸器を取り出した。

「ジャーン！　これ通販でこの前買ったの。一度やってみたくって。もう一度四つん這いになりなさい」

グリセリン１００％をガラス製の巨大な浣腸器にセットすると、ピンク色の肛門へゆっくりと先端部を突き入れてゆく。

『ツププ……ズブブ』

「あんっ！　やあっ！？」

「ほら、お飲み」

『ぷちゅううううっ！』

「冷たいっ！　ひいいいっ！」

再度グリセリンを満タンにしてはすぐに注入……を三度ほど繰り返した時点で、水のような便を噴出する肛門。

「グリセリンって１００％でよかったっけ？　５０％くらいだったのかな？　あはは。どっちでもいいか。ウンチ出たんだから目的は達成出来たからねー」

勢いよく噴き出す便をかわしてから再度千紘の肛門を綺麗に拭き取る小百合。

「こんなにウンチ漏らしたからには……お仕置きが必要だよね？」

「ぐすん……ぐすん」

「立って気をつけの姿勢を取りなさい」

気をつけをさせてからそっと陰部を人差し指と親指で摘み、ゆっくり皮を剥いてゆく。

先日、竜太に一度剥かれているとはいえ、まだまだ皮かむりの児童のペニス。

やはり強引に剥かれたら激痛が走る。

「痛いいいっ！！　やだあっ！！」

「雁首まで剥いてあげるんだから……よっ。ほっ」

『ムリュッ……ムリムリムリ……ベロンッ！！』

「ぎゃあああっ！！」

「あはっ！！　真っ赤なムケチンになっちゃったぁ♪」

剥けた亀頭部に指を当て、押さえつけるようにしながら尿道口を強引にパックリ開いてゆく小百合。

「やだ……真っ赤なムケチンにピンク色の尿道が丸見えだわ。ほんとエッチィ～♪」

開かれた尿道に、何度も爪を差し込み、犯された尿道口からうっすらと血が流れ落ちる。

「ごめんっ！　爪でほじくってたら血が出ちゃったぁ。あはは」

「痛い痛い痛いいいいっ！　ふぇーん！　ふぇーんっ！！」

あまりの号泣に心配した竜太が部屋に入ってくる。

「あの……お客さん……尿道口に爪は勘弁してやって下さい……膿んだら次の客に楽しんでもらえなくなってしまうから」

「つい興奮しすぎちゃって……あの、ごめんなさい。もう私はこれで……」

「まだ半時間ほど残ってますが？　満足されましたか？」

「はい。もう尿道からの流血で大満足しちゃいました！」

「ハハハッ……美しいお顔されてる割に残酷な方ですね」

「それほどでも……ではありがとうございました」

そそくさと立ち去ろうとする長澤小百合を呼びとめると、泣いている千紘に命令する竜太。

「俺のアナルファックで射精するところこの女性に見せてやるから四つん這いになれ」

更に号泣する千紘に構わず、いきり勃ったペニスを肛門へあてがい、一気に挿入すると、激しく腰を振り始めた。

竜太が腰を振るたびに上下に跳ねるように揺れるオチンチンを見ながら、頬を真っ赤にして興奮する長澤小百合。

『バッコンバッコン！　バコバコバコバコッ！！』

「ひぎいいいいいいっ！！　ヤダああああっ！！」

右手で千紘のペニスを掴み、ピストン運動を始める竜太。

相変わらず肛門を掘り続けながらのピストン運動に、少しずつ千紘は感じてくる。

「あっ、あんっ！　いやっ！」

「もうすぐ射精しますんで。こいつ、調教したら一丁前に快感感じて射精もしちゃうんですわ。オラオラオラッ！　美人のお姉さんに射精するところ見せて差し上げろっ！！」

『バコバコバコバコバコバコバコッ！！』

「んあああああああっ！！」

『ドピッ！　ドピュピュピュピュピュッ！！』

「えっ？　すっごぉーい！　小学生なのにたくさん出しちゃった…

……」

「オ、俺もイクぞおっ！」

「んああああああっ！！　痛いいいいっ！！」

『ドピュピュピュピュピュピュピュピュッ！！』

竜太自身も千紘の肛門へ中出しすると、ゆっくりペニスを引き抜き、直腸内に射精した精液と、千紘自身が分泌した腸液と便と血を舐め取らせた。
泣きながら嗚咽を続ける千紘。

「ありがとうございました！　いい体験ができました。帰ってシャワー浴びなきゃアソコがビショビショです」

「ハハハ。児童で興奮するのは俺も同じです。お気持ちは分かりますよ。またお越しくださいね」

ダメ親父と鬼畜たち（前編）（後書き）

借金返済のために性的奴隷として貸し出されてしまった悲運の児童。
十日間の地獄に耐え続けることは出来るのだろうか？

ダメ親父と鬼畜たち（中編）（前書き）

ひたすら続く男子児童への性的虐待。
柿崎竜太の調教が始まる。

「どうだ？　少しは慣れてきたか？」

「……痛いからもうやめて欲しいよ」

「明日のお客は男だ。強すぎず弱すぎず程よく握ってシゴいてあげるんだぞ？　ほら、少し弱いぞ？　もっと強く握ってシゴくんだ」

「う、うん。こう？」

『シコシコシコシコ……』

「そ、そうだ……咥えろ！」

「んっ！　んぐっ！」

『ドピュッ！！　ドピュピュピュピュッ！！』

「んごっ！？　んんんんっ！！……ごくんっ！」

柿崎竜太の大量の精液を飲み干す１０歳の小学生男児、宮沢千紘。

午後からは時間をかけてのアナル調教が始まる。

人差し指と中指を千紘の肛門へ差し込み、思いっきり直腸を掻き回す。

「んんっ！　痛いっ！！」

「我慢するんだ。明日の向井悟史とゆう客は俳優らしいが、かなりの巨根らしいぞ？　必ず満足させて差し上げるんだ。分かったな？」

「……痛いのはヤダよ……ぐすん……ぐすん」

ヤクザである25歳の竜太に肛門を掻き回されながらひたすら涙を流す千紘であった。

そして明くる日、巨根を持つ俳優の向井悟史と二人きりにされてしまった千紘は、ひたすら怖気付いていた。

「千紘くんだっけ？　そんなに緊張しないでよ。力を抜いてた方が痛くないし」

28歳の俳優、向井悟史の20㎝はあろうかという巨根がゆっくりと小学生児童である宮沢千紘の肛門へめり込んでゆく……。

絶叫をあげながら泣き喚く児童に構うことなく激しく腰を振り続ける鬼畜な向井悟史。

『バコバコバコバコッ！！』

「いやあっ！！　痛いいいいいいいっ！！　ひいいいいいっ！！」

『メリメリ！　メリメリ！』

小さな肛門括約筋が悲鳴をあげる。

バックで犯して直腸へ中出し。

更に正常位でキスをしながら再度肛門へ挿入。

激しく腰を振り千紘のアナルを掻き回す巨根。

「いやあああっ！！　許してえええええっ！！」

「ほらほらほらほらあっ！！　もう一回中出ししちゃうぞおっ！？」

『ドピッ！！　ドピュピュピュピュピュピュピュウッ！！』

「はぎゃあああああっ！！」

柿崎竜太にお礼を言って部屋を去ってゆく向井悟史。

「ありがとうございました！　またよろしくお願いします！」

「また頼むよ。僕がこんなことしてるのは絶対内緒にしておいてくださいね？」

「当然です！　有名な方ですもんね！　またのご利用お待ちしております！」

丸一日もの間、肛門と直腸の痛みと闘う小学生男児、宮沢千紘に運命の日が訪れようとしていた。

「1億円も頂けるなら構いません！　お好きにしてやってくださいませ！！」

「本当に後始末できるのでしょうね？」

「はい！　父親には事故とゆうことにしておきますので……」

柿崎竜太、長澤小百合、向井悟史……三人の鬼畜たちに性的虐待を受けてきた宮沢千紘だったが、調教五日目にして最悪の日が訪れた。

大金に目が眩んだ柿崎竜太が、死を伴うプレイを承諾してしまったのである。

篠崎涼子23歳独身。
亡き父の跡を継ぎ、二十歳にしてアパレル産業の社長となり、年商三億円を稼ぐやり手だった。

インターネットで秘密の趣味の児童虐待を検索していると、今回の柿崎竜太との契約をかわすに至ってしまう。

「ほら、ようく舌を使って舐めなさい」

「んんん……ペチャ……ペチャ」

「次はお尻の穴を舐めるのよ」

「い、嫌だっ！うんこ臭いよっ！」

逆らう宮沢千紘に容赦なく平手打ちを敢行。
両頬が真っ赤になるまで往復ビンタを食らった１０歳の小学生、宮沢千紘は、２３歳の女性の肛門をひたすら舐め回すハメになる。
更にベッドに仰向けで拘束し、人差し指で千紘の肛門を掻き回す篠崎涼子。

『ツプ……ズブブ』

「んああっ！？」

「何を顔真っ赤にしちゃってるの？　ここから何を出してるのかなぁ？」

「あ、あんっ！　う、うんちです……」

「そうなんだ。私の指に汚い大便をつけた代償は？」

「え？　何のこと？」

「あなたを……解剖してあげるから」

「？？　か、解剖？」

断末魔の叫びが部屋中に響くが、聞こえないふりをしてテレビを見続ける柿崎竜太。

「ひぎいいいいいっ！　んぎゃあああああっ！！」

仰向けに拘束されたまま腹部をカッターで数センチずつ何箇所も切開されて血塗れになってしまう千紘。
一部からは小腸が飛び出していた。

「あはは！　深く切ったらブリブリと小腸飛び出してくるんだね！　楽しいっ♪」

「んがあああああああっ！！　痛いいいいっ！！　やめてえええええっ！！」

『ズズ……ザクッ！……ズズズズ……プルンッ』

次々とハラワタが飛び出してくる傷口。
もう五ヶ所から小腸が飛び出してきている。

「ぎぎぐぐぐうっ！！　痛い……死んじゃううう……止めて」

「千紘くんはねぇ。今日私に解剖されて死んじゃうんだ。色んな臓器を曝け出してね。死んじゃうの」

『ズブ……ザクザクザクッ！！』

「んぎゃあああああっ！！」

更に何箇所も腹部を切開され、新たに飛び出してきた小腸がウネウネと揺れていた。

「皮かむりの小さなオチンチン……大人になる為には邪魔な皮は剥かなきゃダメなの。お姉さんが手術してあげるね♪」

左手で小さなペニスの亀頭を軽くつまむと、根元にカッターをあてがい、皮だけを一周回すように切り裂いた。

『ズッ！　ズズズズズッ！』

「んぎゃあああああっ！！」

血塗れになった児童のペニスをそのまま左手で上方向へ扱き上げると、根元の切れ目から亀頭方向へ一気に全ての皮がめくれてズル剥け状態となってしまった。
尿道口あたりに少し皮が引っ付いているのみであった。

「やだあ……ボクのオチンチンの皮が全て剥けちゃって……真っ赤

な身が丸見えだね？　恥ずかしくないのかな？」

「いだいいいいいいっ！！　んぎゃあああああっ！！」

恥ずかしい所ではない激痛に絶叫する千紘だったが、構うことなくペニスの皮を全て引剝いてしまう。

「あと少しで全部剝き取れちゃうわよ？　トドメを喰らえっ。それえっ！」

『バリッ！！……ズルンッ！！』

「んがあああっ！！」

「あはは！　全部皮を剝き取られた哀れなズル剝け生ちんぽぉっ♪」

耳が痛くなるほどの絶叫をあげる千紘を嘲笑うかのように人差し指で海綿体が丸出しとなっている児童のペニスをピン！と弾く。ドクドクと太腿を伝ってベッドに血が染み込んでゆく。

人差し指と親指でキュッと雁首辺りを掴むと何度もグリグリと揉みながら、児童の生の海綿体の感触を愉しむ篠崎涼子……。

「小学生児童の海綿体……小さくて可愛い♪　今日天国に行っちゃうんだからもう必要ないよね？　コレ……切断してあげる」

丁寧にハサミで根元から切断すると、ペニスの切断面から人差し指を挿入して、尿道口から爪先を突き出させた。

『つぷっ！……ズブブブブ……ニョキッ！』

「やだぁ。生温かいオチンチンの内部……ここをオシッコが通ってたのねぇ？　もう一生使うこともないから安心して私に楽しませてね……」

何度も突き刺しては引き抜き、突き刺しては引き抜き……切断されて皮を剥かれた千紘のペニスは２３歳の変態女の玩具と化した。

机の上に真っ赤なペニスをそっと置くと、尿道口からハサミを入れ、器用に根元まで切り開いてゆく。

見事に真っ二つになって尿道丸見えのペニスを何枚も写メを撮る。

「あはは♪　ボクの大事なトコ、切り取った上に真っ二つに解剖しちゃったぁ！　記念に写真撮らせてね～」

ペニスが無くなった身体をビクビクさせながら泣き続ける宮沢千紘。

顔を顰めての絶叫を見ても、全く気にも留めずに女社長の責めは終わらない。

カッターを取り出すと、身体側のペニスの切断面にゆっくり突き

入れた。

『ズブ……』

「んがあああああっ！！」

「金玉もタダでは済まないわよ？」

相変わらず叫び続けるが、地獄は延々と続くハメになる。

「えいっ」

『ザクッ！！』

「ギャアアアアッ！！」

一気に陰嚢を真っ二つに切り裂くと、小さな睾丸が一つ飛び出してきた。

「やん、エッチィ～。ボクのキンタマ飛び出して来ちゃったよぉ？キモーい♪　あはは！」

「ぎひいいいいいっ！！」

「右のキンタマも出てこいっ。よっと！」

右手の人差し指と中指を入れて陰嚢内を掻き回す白い指。
グチュグチュと音をたてながら掻き回された後、遂に細くて白い指に挟まれたもう片方の睾丸が抉り出される。

「うふふ。少し右のキンタマの方が大きいわね。一つはこのまま潰してあげる」

ペンチを取り出して右の生睾丸を挟み込むと、ゆっくり力を入れて締め上げてゆく。

「ええーいっ！　キモい金玉なんて潰れちゃえええええっ！　ゆっくりゆっくり潰してやろっかなぁ。うふふ」

『ギュウウウウウウ……ぶちゅっ！』

声にならない呻き声をあげて全身を震わせるが、篠崎涼子の握る力は緩むことはなかった。
限界まで変形して、散々生き地獄を味わった後……ゆっくりと小学生児童の睾丸はペシャンコに潰れ果てた。

「左の小さな方は……このままキンタマ袋からはみ出して惨めに揺れてなさいね」

「ひぐっ！！　はぐうっっ！！」

「ん？　どした？」

『ビクッ！　ビクッ！　ビクビクビクビクッ！！』

激痛に耐えきれず強烈な痙攣を起こす宮沢千紘。

激しく震えた後、口から泡を吹いて白眼を剥いてショック死してしまった。

「やだぁ。死んじゃったぁもしかして？　まだまだ地獄を味あわせてやりたかったのに……」

そう言いながら左の睾丸を握りしめて児童の身体から引きちぎった。

精管と神経の管がブチブチと音をたてながら千紘の身体と別れを告げさせられる。

白い生の睾丸を千紘本人の口へ捩じ込むと、ベッドに縛り付けている拘束を解く篠崎涼子。

低いテーブルに宮沢千紘をうつ伏せ体勢で拘束し、ペニスバンドを装着する。

腹部の所々からはみ出している小腸がズルズルと床へ落ちてゆく。

「遺体に対して尊敬の意はあるんだけど……あなたみたいな可愛い男の子を見てるとね、とことん虐めたくなっちゃうんだ……ほら、

下の口からお飲み」

『ツプ……』

篠崎涼子は直径７㎝、長さ２０㎝ほどもある巨大な張り型をペニスバンドに装着して、小学四年生の遺体の肛門へ押し当てる。
そのままゆっくり挿入していった。

『ズブブブブブ……』

「あはは。死んじゃってるから肛門括約筋が開きまくりっ♪　大人の男性でも痛がるようなシリコン極太チンポがスムーズに入っていっちゃってるぅ♪」

遂に根元まで挿入すると、激しく腰を振り始める篠崎涼子。

『パンパンパンパンパンパンパンパンッ！！』

「ほらほらほらあっ！　死体の尻の穴……無茶苦茶に犯してあげるんだからあっ！」

『パンパンパンパンッ！　ズチュズチュズチュズチュッ！！』

もう死んでしまっているので、腰が動かない程度に軽く拘束しているため、頭部や腕や両脚が、篠崎涼子に激しく犯される度に激し

く揺れ動いて、男子児童の遺体はまるで人形の様であった。

「緩んじゃった肛門が盛り上がったり窄まったり……エッチねぇ……まだまだ死姦してやるんだから覚悟なさいっ！　ほらほらほらっ！！」

『パンパンパンパンパンパンパンパンパンッ！！』

小学四年生男児の遺体の肛門をペニスバンドを装着して犯し続ける２３歳の女性。

一見異様な光景だが、人が人を犯す、とゆう意味では正常とも取れる行為と言えるだろう。

死体でなければ……の話だが。

男が女を犯すようにその逆があっても不思議ではないのだ……。

「千紘くん……完全に殺しちゃったみたいですねお客さん……」

急に部屋に入ってきた竜太に驚いて一瞬腰の動きが止まる涼子。

「約束分かってるんでしょうね？　遺体は絶対バレないように始末してくれるんでしょう？」

巨大なシリコン製の張り型を遺体のアナルから引き抜きながら問いかける涼子。

大量の血液と便と粘度のある腸液が肛門から溢れ出てくる。
「当然です。千紘くんは今……腸が複数箇所から飛び出した状態となっておりますので……これ以上の遺体の損壊はご勘弁願います」
「わ、分かってるわよ！　あと少しで部屋を出るから少し出て行ってくれる？」
「はい。ご利用ありがとうございます」
竜太を部屋から追い出すと、血塗れの肛門に指を突き入れる。
人差し指と中指を同時に挿入し、直腸を執拗に掻き回し始めた。
『グチュ……グチュグチュグチュグチュ……くちゅちゅちゅちゅ』
「エッチな音たてちゃって……死んでも可愛いわねあなた……私が天国に辿り着くまで犯し続けてあげる」
死亡して開きまくりの肛門へ、５本全ての指を捩じ込むと、遂に手首まで挿入してしまう。
そのまま激しく出し入れを繰り返す涼子。
『ガボガボッ！！　ボコボコボコボコオッ！！』
「手首まで挿入しちゃうこれは……フィストファックっていうのよ

千紘くん？　気持ちいぃ？　あはは！　死んじゃってるから何も感じないか……」

数分間拳で犯し続けて、ようやく抜き取ると、肛門からドクドクと夥しい鮮血が流れ出てきた。

「死んじゃってるのにまだこんなに血を流す？　あはは♪　笑わせないでくれる？」

篠崎涼子は千紘の肛門から手を引き抜くと、ゆっくり立ち上がる。うつ伏せに拘束されて肛門をパックリ開いて死んでいる男児の姿をスマホで撮影した。

「あはは。直腸の奥の奥まで丸見えだぁ♪　ボクが焼かれた後も、その恥ずかしい痴態はずっと私の自慰行為のオカズにさせてもらうからねぇ？　うふふ」

『ドカッ！！』

思いっきり右足で血塗れの股間を蹴り上げると、千紘の遺体が大きく揺れた。

肛門へ突き刺さった赤い革靴の爪先を引き抜くと、冷たい笑みを浮かべて散々虐めた遺体に背を向ける涼子。

部屋を出ると竜太がタオルで返り血を拭き取り始める。

「構わないわ。血は落ちないから着替えさせてもらうから。帰ったら全部棄てるからもうやめて」

「そうですか。分かりました。こんなガキの為に大金をありがとうございました！　またの機会がありましたら是非ともよろしくお願いします」

「はあ？　そんなに連続で殺害対象のガキなんて拉致れないでしょ？　じゃあね」

「ありがとうございました！」

玄関のドアを開ける涼子に再度声をかける竜太。

「女の子には興味は無いですか？」

「？」

「今回亡くなった宮沢千紘には妹がいるんです。ダメ親父と別れた妻が面倒みてるんですが……うまいことやれば妹も好き放題させてあげられますぜ？」

「……もう1億なら出せるわ。いつ来ればいいの？」

「今週末にここに連れてきます」

「男も女も……児童を虐めるのは私の最高の快楽なの。……更に殺しても良いなんて最高すぎる！　是非よろしく頼むわ」

「お待ちしております！」

妹の千佳の殺害も約束して、ワクワクしながら竜太のマンションを出てゆく篠崎涼子は完全にサイコパスであった……。

――――明くる日。

「千紘くんは残念ながら外国に住む夫婦が引き取って連れて行った」

「な、何ですって！？　約束が違うじゃ無いですかっ！？」

「３０００万……受け取ってくれ」

「え！？　こ、こんな大金を！？」

「心配ないさ。千紘くんは１０年もしたら無事に返してくれるそうだ。１０年分の手当金だ」

「じゅ、１０年も会えないのか……だが元気でいてくれるならそれはそれで安心できます。さ、３０００万ほんとうに戴けるのですね！？」

「ああ。受け取ってくれ」

札束が詰め込まれた紙袋を引ったくるように柿崎竜太から受け取る。
大切な息子が既にあの世に旅立っているとは知らずに目の前の大金に目がくらむ相変わらずなダメ親父、宮沢一平であった。

「ではこれで……」

大金を抱きしめてそのまま競輪場へ向かおうとする一平に、背後から声をかける竜太。

「あんたには別れた妻がいたよな？」

「え？　は、はい。優美子のことですね？」

「そうだ。その優美子さんが連れている長女……一日だけでも預かれないか？」

「……優美子は私と会うことは嫌がってますが……娘の千佳は私の事を結構好いてますので……一日くらいなら連れ出せると思いますが……」

「一日だけでいいんだ。この週末に連れてきてくれないか？」

「……もう私の子供たちに酷い目には遭わせたくないんです……申し訳ございません……」

「一日俺に預けてくれるだけで更に3000万、いや、5000万払うぜ？」

一瞬目を大きく見開く宮沢一平。

「さ、更に5000万!？　分かりました！　この週末に一日だけ娘と過ごさせてくれ、と何とか妻に頼んで千佳を連れてきます！　でも千佳は女の子だし……本当にこれっぽっちも酷い目に遭わせないで欲しいのですが……」

「ははは！　当然だよ！　分かってるって！　もしそんな事になったら更に3000万払うから今回の娘さんだけで8000万払うぜ？」

「8000万!？……い、いや、でも5000万で構いませんから酷い目には遭わせないでやって下さい。お願いします」

「ああ。そのつもりでいるさ。じゃあよろしくな一平さん」

「は、はい。こちらこそ千佳をよろしくお願いします」

上機嫌で競輪場へ向かう一平の背中を見つめながら軽蔑の眼差しを送る柿崎竜太。

『フフフ……カスはどこまでいってもカスだな。息子に続いて娘ま

でもダメオヤジの為にこの世を去る事になるんだぜ？　ほんと哀れな子供たちだ……』

――――金曜日。

「何を言ってるのあなた！？　もう二度と私と千佳に近づかないで！」

「まぁそういうな！　たった一日だけで良いんだ。千佳と一緒に過ごさせてくれよ？　なっ？」

「嫌よっ！　もう帰って！　警察呼ぶわよ！？」

ゆっくりと紙袋から札束を取り出す宮沢一平。
その手には札束が１０個……１０００万円が積まれている。

「一日千佳を借りるだけで１０００万……お前に払うから」

流石に１００万円の札束を１０個も見せつけられては目の色が変わってしまう妻の優美子であった。

「あ、え、えーと……ほ、本当に一日だけでいいのね？」

「ああ。必ず明後日には連れて帰ってくる」

「じゃあ……約束ね」

そう言いながら1０００万円分の札束を受け取り、慌てて安物の鞄に詰め込む優美子。

「千佳！　お父さんと明日一日ゆっくり過ごそうな？」

「うん！　あたし、パパも大好きだから嬉しいよ！　どうしてあたしとママと千紘にいちゃんと……パパの四人で暮らせないの？　寂しいよぉ」

「ごめんな。ちょっと理由があってそれは出来ないんだ……ともかくパパの所へ行こう。着替えを一日分だけでも持ってきなさい」

「うん！　ちょっと待っててね！」

小学二年生になる8歳の長女、千佳はこうしてダメ親父の宮沢一平に連れ去られてゆく羽目になってしまった。

この時はまだ地獄への入り口だとは知る由もなかった。

帰り道、久しぶりの父と娘の会話が弾む。

「この前ね！　ママったらお客さんの前でオナラしちゃったの！　もうおかしくっておかしくって……お腹痛かったんだよあたし」
「ははは。そうか……ついとは言え恥ずかしいなママも……」
「そうそう！　ママは顔を真っ赤にして謝ってた！　あたしはバカ笑いしてお客さんは引き攣った笑いしてたよ！　あははははは！」
その後一平のアパートへ帰り着いた二人は、夜遅くまでたくさん買ってあった刺身を食べながら楽しく語り合った。
これが千佳の人生最期の晩餐となってしまう……。

――――週末の土曜日。

「こんにちは千佳ちゃん。これはこれは可愛い子だ」
「こ、こんにちは」
柿崎竜太のお世辞に対して、頬を赤くして軽くお辞儀する8歳の少女、千佳。
「昨夜話した通り、今日一日だけこのお兄ちゃんと過ごすんだ。楽しく笑顔でいるんだぞ？」

「…………」

急な展開に返事も出来なくなり固まってしまう千佳。
父親とゆっくり過ごせると思って母と住む家を出たのにいきなり知らない男と一日過ごさなくてはならないとは千佳自身思いもしない事だった。

「人生について色々教えてくれるから千佳もかなり大人になれるぞ？　じゃあまた明日迎えにくるからな。ではよろしくお願いします柿崎さん」

「ああ。お疲れ様」

「絶対迎えに来てねパパ！」

「分かってる！　大人しくいう事を聞いて賢くしてるんだぞ？」

「うん。じゃあね！」

去ってゆく宮沢一平に健気に手を振る千佳。

「今晩、千佳ちゃんと遊びたいとゆう女性が来るんだ」

「あたしと遊びたい……何をして遊んだらいいの？」

「うーん……それは篠崎涼子さんとゆう女の人が考えてくれるんじゃないかな？」

「ふうん。じゃあ色々なお話してもらおうかなっ！」

「そうすればいいさ。楽しみにしてて千佳ちゃん」

「うん！」

柿崎竜太が作ったインスタントラーメンを食べ終わると、インターホンが鳴る。

『ピンポーン』

「はい」

「篠崎です。大丈夫ですか？」

「今開けます。少々お待ちを」

部屋に篠崎涼子を迎え入れる竜太。

涼子のあまりの綺麗さに思わず見惚れてしまう千佳。

「わぁー！　お姉ちゃん綺麗だね！」

「そう？　ありがとう。千佳ちゃんってゆうんだね。今夜は私と色々楽しみましょうね？」

「うん！　色々お話ししようねっ♪」

柿崎竜太の部屋を出て奥の部屋へ入る千佳と涼子。

「なんか赤いの付いてる？　何？」

千佳の兄である千紘の鮮血が所々に付着していた。

「あ、気にしないで。私が怪我した時の血だから……」

一応誤魔化す涼子であった。

「ふうん。大丈夫なの？」

「大丈夫だよ。ありがとう。千佳ちゃんは何歳だっけ？」

「来年9歳になるけどまだ8歳。お姉ちゃんは？」

「私は23歳よ。そっか。まだ千佳ちゃんは8歳なんだ」

「うん。小学二年生なの。クラスの友達は面白い子ばかりなんだよ

！」

「へぇ～。そうなんだ。今夜も私と千佳ちゃんで面白いことばかり起きるよ？」

「あははは！　楽しみだねお姉ちゃん！」

タバコに火をつける涼子。
どうやって千佳を責め殺すか内心ウズウズしながら思考を巡らせている。

「お姉ちゃん……タバコは身体に良くないよ？　長生きできなくなっちゃうよ？」

「スパァ～。そうなんだ。でももっと長生きできない子もいるかもよ？」

「え？」

戸惑う千佳の服をシャツから脱がせてゆく涼子。

「とりあえずお医者さんゴッコしようか？　私が先生であなたは患者ね。服を脱ぎ脱ぎしましょうねぇ？」

照れながら拒否する8歳の少女に構うことなく半ば強引に脱がせ

ていき、残すはパンツ一枚となった。

「嫌っ！　これを脱いだら恥ずかしいトコ見られちゃう！」

「お姉ちゃんに見せて。千佳ちゃんの全てを見たいな」

「え？　そうなの？……んん。でも恥ずかしい」

千佳をいきなり抱きしめて強引にキスをする涼子。

「んっ！？　んんっ！？」・

「チュ……くちゅくちゅ」

舌まで挿れて8歳の幼女の口内を掻き回す涼子だった。

「やっ！？　やめ……」

『ガシッ……ズルリッ』

キスをしながら一気にパンツを引きずり下ろした。

「んあっ？　嫌っ！　恥ずかしいっ！」

「お姉ちゃんが千佳ちゃんを……解剖してあげる♪」

「え？　か、解剖？」

殆ど平らな胸を両手で揉みしだき、右の膝を千佳の局部へ当てがい、強く擦り付ける涼子。

「やっ！？　あたしの汚いとこ……そんなに擦られたらオシッコついちゃうよ！？」

「そうなんだ。私の膝にオシッコを付けちゃったら……お仕置きが必要だよね？」

「え！？」

いきなり起き上がって千佳のお腹に馬乗りになると、拳を振り下ろした。

『バキッ！！』

「んがあっ！？」

まともに鼻を殴りつけたため、一気に鼻血が噴き出す。

「痛いいいいいっ！？」

『バキッ！　ドカッ！　グシャ！　』

何度も拳を振り下ろして顔面を殴りまくる涼子。
必死で両手で庇うが左手で払われて更に右手で殴られる。

『バキバキッ！！　ドカッ！！　グシャッ！！』

「んぎゃあああああっ！！痛い痛い痛いいいいいっ！！　やめてお姉ちゃんっ！！」

「オシッコ漏らしたわね？」

あまりの顔面の激痛に小便を漏らしてしまう幼女。
強引に腰を掴み、反転させてうつ伏せにさせると、今度はお尻を何度も平手打ちする。

『パンパンパンパンパンパンパンパンッ！！』

「やだああああああああっ！！　ひいいいいいいいいいっ！！」

臀部への平手打ちは半時間ほど続いた。
痛みで起きあがろうとする度に顔面を殴りつけ、何度も何度も臀

部への平手打ちを敢行する涼子。

「汚い鼻血で敷布団が汚れちゃったね？　先に着いていた血の跡はお兄ちゃんの血だよ？」

「え？……痛い……痛いよぉ。アーンアーン！！」

一瞬何のことか理解できないでいる千佳は、とりあえず激痛に対して泣くことしか出来なかった。

「立ちなさい。そして脚を大きく開くの」

「えーんえーん！　痛い……痛いよぉ。もうやめてお姉ちゃん……酷いよおおっ！！」

泣きながらゆっくりと全裸で立ち上がる千佳。

「8歳にもなったんだから言ってることわかるよね？　脚を大きく開きなさい！」

「えーんえーん！」

号泣しながらゆっくりと脚を開く千佳。

背後に回り込み右脚を振りかぶると、強烈な足の甲による股間へ

の蹴りが炸裂した。

『スパァンッ！！』

「ぎゃあっ！！」

一瞬飛び上がる千佳。

痛みの余りに瞬時に脚を閉じてしまう。

「ほらっ！　大きく脚を開くの。殺しちゃうわよ？」

「痛い……痛いよぉ……お姉ちゃん……」

篠崎涼子に対し、恐怖心が芽生えてしまっている千佳は、恐る恐るゆっくりと、再度両足を開いてゆく。

『スパァンッ！！』

「ぎえっ！！」

再度8歳の少女のマンコを直撃する足蹴りが炸裂した。
性器を両手で押さえながら思わず膝から床に崩れ落ちる千佳。

「どこを私に蹴られたの？」

「んんん……痛い……痛いよおおっ！！」

「どこを蹴られたのか聞いてるのっ！！」

「ひいっ！……オシッコするトコ……です」

「なんていう部分？」

「し、知らない……オシッコする所です」

髪の毛を掴んで無理矢理立たせると、今度は膝蹴りを幼女の股間に突き入れた。

『ズドンッ！！』

「はぎゃあっ！！」

「そのオシッコする汚い部分はね……オマンコってゆうのよ」

『ドカッ！！』

「んぎゃあああっ！！」

再度股間に強烈な膝蹴りをぶち込む篠崎涼子。

小学生児童のクリトリスを直撃したその一撃は、人生で最大の激

痛となって千佳を襲った。

「わぁあーんっ！！　わぁあーんっ！！　痛いよおおおおっ！！」

「オマンコが痛い？」

「アーンアーン！！　痛いよおおおっ！！」

泣き喚く幼女を無理矢理四つん這い体勢でテーブルに縛り付けると、大きく脚を開かせて固定した。

「千佳ちゃんの汚いマンコ……私がお仕置きしてあげなきゃね？」

「わーんわーん！！　やめてええええっ！！　あたし死んじゃうよおおおっ！！」

「え？　知らなかったのかしら？　千佳ちゃんは私に解剖されて今夜死んじゃうんだよぉ～？　あははは♪　それえっ！！」

『ズドンッ！！』

「んぎいいいいっ！！」

立った姿勢からの股間蹴りから、拘束してからの股間蹴りにシフトした涼子の拷問は、半時間ほど続けられた。

幼女の大陰唇は真っ赤に腫れ上がり、たまにつま先がヒットする

小陰唇は、所々裂けてしまって血塗れになっていた。

時々両手の親指を当てて小陰唇をめくり返すように大きく性器を開き、ダメージを確認する涼子。

「うーん。小学生の小陰唇にしては大きいわね。裂けて血塗れになっちゃってるわぁ。エグ……でも更に開いて奥を見ると……膣内はまだまだピンク色でダメージないか……」

「嫌ああっ！　痛いよおおおっ！　見ないで恥ずかしいっ！　痛いいいっ！！」

「幼女のマンコなんてなかなかじっくりくり見る機会なんてないんだから……じっくり見させて♪　うふふ」

『ドカッ！！』

「はぎゃあっ！！」

そう言いながら立ち上がり、更に強烈なマンコ蹴りを入れる涼子。

「このまま蹴りまくってマンコズタズタにしちゃうのもいいんだけど……原型留めてるままでくり抜いてやりたいし……難しい所だよねぇ」

「ひいっ！？　くり抜く、なんて……嫌だああああっ！！」

『ツプッ……』

「ヒャアッ！？」

人差し指をゆっくり膣に突き入れると、全身がビクッとなる8歳の幼女。

「ガキの処女膜……一度でも破ってみたかったの。ゆっくりがいい？　一気にいきたい？　選んで千佳ちゃん？」

「処女膜ってなに？　もう痛いの嫌ああああっ！！」

「そっか。じゃあ私が決めたげる。……一気に……いっけえええええっ！！」

『グチュウッ！！……バリ……』

「んあああっ！！！！」

一気に人差し指の根元まで差し込む23歳女性の白い指が、幼い小学生の処女膜を瞬時に破壊してしまった。

性器を庇うため両脚を閉じようと必死に力を入れるが、縛られているため縄が内股に食い込んで痛みが増すだけであった。

更に中指も強引に捩じ込み、幼児の狭い膣内をグリグリと執拗に掻き回す篠崎涼子。

「ズボオッ！……グチュグチュグチュグチュグチュッ！！」

「嫌ああああああっ！！　痛いいいいいいいっ！！」

「あははは♪　ほらほら……男とエッチすることもなく死んでいくんだから最期に私がグチュグチュに犯してあげるよ？　ほらほらほらあっ♪　この奥にある少し固いのって……子宮口だよね？　ガキだから膣道も短いし……簡単に私の指でも届いちゃうんだね？　あははは♪」

全身を震わせて号泣する小学二年生の幼女。
幼い性器を掻き回す白くしなやかな指は、容赦なく膣内を激しく傷つけてゆく。
指先は子宮口を突き抜け、子宮内にまで達している状態で掻き回されるのだから、千佳の激痛は半端ではなかった。
ドクドクと流れ出る鮮血は、幼女の太ももを伝い、床を赤く染めていく。

「お兄ちゃんの血と妹の血が混じっちゃってるわよ？　兄妹揃って仲良く哀れだよねぇ？　あははは♪」

もう膣内と子宮を掻き回されている激痛で、涼子の言葉の意味も理解できないままうつ伏せの四つん這い状態で拘束されたまま激痛と闘うのみの千佳であった。

「肛門がひくひくしてる。やっぱりこっちの穴もお仕置きが必要だよね？　えいっ」

『ツプッ……ズブブブブ』

「やはあああああっ！？」

左手の人差し指を千佳の肛門へゆっくり挿入してゆく。

右手の二本の指はひたすら膣内を掻き回し、左手の人差し指は新たに千佳の人生初めて味わう肛門への責めとなってしまった。

『ズブブブ！　ズボオッ！！　グリングリンッ！！』

「やんやんやんっ！！　いったああああいっ！！」

「ほらほらほらぁ。二穴同時責めだよぉ？　ガキのくせにオマセさんだねぇ？　あははは♪」

２３歳の美女による幼女の二穴責めは更に半時間ほども続けられた。

腸液がトロトロと流れ出してくる。

「やだぁ～。エッチな液体お尻の穴から垂れ流しちゃって……マンコの方は血だけなのにアナルの方がエッチなんだねあんた……」

「痛い痛い痛い痛いぃいいっ！！」

ひたすら号泣し続ける女子小学生を指で犯し続ける女性。
異様な光景だが、仕掛け人の極道である柿崎竜太は隣の部屋で見てみないフリを決め込んで呑気にテレビを見ていた。

「多分あんたの人生で最強の激痛となると思うんだけど……我慢できる？」

「やあああああっ！！　痛いいいいいいっ！！」

性器と肛門の痛みに耐えている千佳には。篠崎涼子の問いは届かなかった。
構うことなく爪切りを鞄から取り出すと、ゆっくり幼女の股間へ近づけてゆく。
皮被りの小さな陰核を確実に挟み込んで、グリップを一気に握りしめた。

『パチンッ！……ぶちっ』

「んがっ！！！！！」

「幼女のクリトリス……いただきましたあっ♪」

「ぎゃあああああああああああっ！！！！！！！」

断末魔のような叫び声を上げて身体をくねらせる8歳の幼女を見ながら目を細めて冷たく微笑む篠崎涼子。

次はハサミを鞄から取り出して、チョキチョキと小陰唇のヒダヒダを切り取ってゆく。

気が狂ったように白眼を剥いて首を左右に振りながら絶叫する小学生児童。

「あははは！　こんなもう使うこともないマンコなんてズタズタにしてやるうっ♪　それそれそれえっ！」

『ジョキジョキジョキジョキジョキジョキッ！！』

小陰唇はハサミを何度も入れられて全て切除された。

陰核を切り取られた激痛に加えて、小陰唇を失う激痛も加わり、もう千佳の意識は薄れかけていた。

小便も大便も撒き散らし、全身もがいて縄がくいこみ、何箇所も血が滲んでいた。

「まだショック死とかしないでよ？　千佳ちゃんはね。肛門からの串刺し刑でトドメを刺してあげるって決めてるんだから私……」

予め竜太が用意した幅2㎝、長さ1ｍほどの鉄筋を右手に持ちクルクルとバトンのように回す涼子。

「そのまま四つん這い状態で殺してあげちゃおっか？　ここかな？　千佳ちゃんのアナルは？」

『ピト……』

ピンク色の綺麗な8歳の肛門へ、錆が出ているような汚い鉄筋があてがわれた。

「いっくよぉ？」

『ツプ……』

号泣して半狂乱になっている千佳に構うことなく錆塗れの鉄筋は幼女の肛門へ挿入されてゆく。

『ズブブブブ』

「わぁ♪　めっちゃエロ～い！　幼女の肛門に鉄筋がめり込んでいっちゃってるうう♪　ん？　なんかの抵抗の手応えあり！　直腸の突き当たりかなぁ？　ではでは地獄の始まり……まずはこの突き当たりを突き破っちゃいまーす♪　直腸から小腸への道のりだよ！　あはは」

『ズブブ……バリッ！！』

「んぎゃああああああああっ！！　げひいいいいいいっ！！」

「女の子なのになんて下品な絶叫してんの？　マジムカつく……ほら、どんどんハラワタ突き破ってお口を目指しちゃうわよ？」

『ズブブブブ！……メリメリ……バリッ！　バリバリッ！』

懸命にお尻を前後左右に振ろうとするが、キツく縛られているためウネウネ動くことしかできなかった。

時々手が止まり、硬い内臓を貫けない時は、大きな木槌で思いっきり叩き込み、どんどんとハラワタを突き破っていった。

「いくら粘っても木槌で叩き込んだらあんたのハラワタなんて簡単に貫いちゃうよぉ？　無駄な抵抗はやめなさいねぇ？　あはは♪」

胃まで到達したくらいに全身の激しい痙攣が始まった。

８年の短い人生に終止符が打たれようとしている。

一度鉄筋を突き入れる手を止めて、ピクピクしているマンコを全開に開かせる涼子。

爆竹に火をつけ膣内へ捩じ込んだ。

子宮口にまで達するほど人差し指で奥深く捩じ込む。

「マンコ爆破の刑っ♪」

『ジジジジ……パァンッ！！』

かすかに残っている小陰唇部分までもがミンチになって吹っ飛ぶ。ドクドクと膣から子宮からの鮮血が流れ出てきた。

「あははは♪　子宮がミンチになって流れ出てくるまでやったげるわね♪」

新たに爆竹に火をつけ、子宮まで捩じ込み爆破させる、を更に数回繰り返すと、ついに白いドロドロとしたミンチが流れ出してきた。

「やだぁ～。ついに子宮がミンチになっちゃったみたいね……なんてエッチでエグい絵面なの？　うふふ♪」

ハサミを再度手に取り、まだ膨らみのない幼い乳首を一つ切り取った。

「乳首……一つだけはあの世のお土産に残してあげる。感謝しなさいよ？　じゃあ再びお尻の穴からの串刺し刑……再開しちゃいまーす♪」

『グリッ……ズブブブブ！……ブチブチ……ズバァッ！！』

遂に胃を貫通し、口から鉄筋が飛び出してきた。
小腸の残骸がクルクルと巻かれている鉄筋が……。

「おえええっ！！　ごぼあああっ！！……ビックンビックンビックンビックンッ！！……ガクンッ！」

大痙攣を起こしながら最期の断末魔の声を上げて8歳の幼女は息を引き取った。

「やだぁ～。マンコからは子宮のミンチ垂れ流して……上の口からはハラワタ飛び出させて……肛門からはネバネバの汚い腸液混じりの大便と血液垂れ流して……乳首は一つしか残っていないしぃ。クリトリスは切り取られて尿道パックリ丸出し……さいっこうにエロいんじゃないっ！？　あっはははははは！！」

『ビクビクッ！！　ビックンビックン！！　ピクピクピクピク……』

「痙攣する度に腸液や血が噴き出してるんだけど？　ほんと哀れなガキだよねぇ？　あんた……」

右足の裏をお尻の肉に押し当て、両手で鉄筋を握りしめて一気に引き抜いた。

『ズズズズズッ！！……ズルズルズルズルズルズル！！』

巻きついた小腸大腸が肛門からブリブリと鉄筋と共に飛び出してくる。

床は血と粘液とハラワタまみれとなってしまった。

『ズルルルルル……ビチャビチャッ！！』

「わぁ。エロォ～。エグいしエロいし……あ、だめ！　アソコむっちゃ濡れちゃってる！？」

腸を肛門から抜き取られながら激しく痙攣を続ける8歳の幼女、千佳の遺体の隣で、自らの指を使い自慰行為に耽ってしまう23歳の篠崎涼子であった……。

いきなりドアが開いて竜太が入室してくる。

「ちょ！？　ちょっと待ってくれるっ！？　まだ終わってないっ！」

「おっと失礼っ！！　ごめんなさいっ！」

レディのオナニーシーンを見てしまった竜太はなんか変な気持ちになるが、隣に四つん這い状態で横たわっている血塗れ、内臓塗れの千佳の遺体をどうするか……頭を悩ませ始めていた……。

ダメ親父と鬼畜たち（中編）（後書き）

宮沢一平の長男、１０歳の千紘に続き、別れた妻の元で暮らしていた８歳の長女までもが鬼畜な大人たちによって命を落とした。

柿崎竜太は遺体の処理に疲れながらも大金を手にしてほくそ笑む……。

ダメ親父と鬼畜たち（後編）（前書き）

小学生児童への容赦ない虐待者に対し、遂に制裁が与えられる。

ダメ親父と鬼畜たち（後編）

残暑が厳しい中部地方の秋の公園。
多くの家族連れやカップルが、散歩したりお弁当を食べたりして気持ちよく過ごしている。
ベンチに腰掛けて一人タバコをふかす女性がいた。
けたたましく黒電話のベルが鳴り、慌ててスマホを手に取る。
「はい篠崎です。……あ、その件はあなたに任せるから。南部地方の店舗は最近ネットの評価も高いわ。その調子で頑張って。昇進も考えてるから」
部下の扱いに長けた凄腕の女社長は頼れる部下の電話を切ると、さらに一服して携帯灰皿へタバコを納める。
「この公園は禁煙ですよ」
「え？　ごめんなさい。看板とか出てたっけ？　気付かなかった」
「お隣、いいですか？」
「うん。どうぞ。……お嬢ちゃん、まだ小学生でしょ？　しっかりしてそうだね？」

「そんなこともないですけど……」

「お姉さんこれから仕事の打ち合わせがあるからもう行くね。今度から公園でのタバコは気をつけるから御免なさいね」

ゆっくり立ち上がって少女に声をかけると、颯爽と胸を張って歩き出す篠崎涼子。

「今日中に全ての準備をしといてください」

「え？」

意味のわからない少女の問いに思わず立ち止まり、振り向いてしまう。

「全ての準備？　何か深い意味がありそうだけど？　どういうことで？　あなた名前は？」

「あたしは菅野莉央と申します。あなたの人生のしがらみ……仕事関係の方たちや友人関係、ご家族関係、全ての人たちに本日中に挨拶しといた方がいいです」

「な、なんかまるで私の人生最期の時が迫ってるみたいな言い方ね！？　ハハハハ……とっても不愉快だわ。一体なんなのあんた！？」

「後悔しないようにやるべきことは全て本日中に済ませておいてく

ださいね……では」

「黙りなさい！　ほんと気分悪いわ！　脅しのつもり！？　ガキのくせに！」

セーラー服を着た小学生の女の子はスッと立ち上がり、その場を去ってゆく。

鋭い眼光で菅野莉央の背中を睨みつける篠崎涼子だったが、仕事の打ち合わせを思い出してゆっくり会社へ足を向けた。

――――菅野莉央自宅。

「そうか。明日は俺も拷問処刑人に選ばれたか……久しぶりの執行だなほんと……男二人に女二人の四人もいるんだな今回は」

「そう。お兄ちゃんは柿崎竜太とゆう元凶のヤクザを担当して。向井悟史とかゆう俳優は同じ芸能人としてあたしと明日香ちゃんと美香ちゃんでやるから。長澤小百合は美紅ちゃん。篠崎涼子は島崎真理子さん……だったと思う」

「女子高生の江美さんと、不良アイドルの中学生コンビは今回お休みなんだな？」

「うん。坂本江美さんは最近彼氏が出来たみたいだからもう処刑人から外されるかもね……罪人の一人の篠崎涼子だけは今日公園で会ってきた」

「どうしてその女だけ処刑前に会ったんだ？……ゲプッ」

風呂上がりのビールを飲みながら派手なゲップをする莉央の兄の京介。

「すごいやり手で、抱えている社員も多いから……罪のない社員さんたちの為にも引き継ぎとかしっかりして欲しかったんだけど」

「ははは！そりゃ無理だろ。まさかお前の警告が本当に起こるとか夢にも思ってないぜきっと」

「だよね。ま、どうでもいいんだけど」

「どうでもいいなら会わなきゃ良かったんじゃゃね？」

「いちいちうるさいなぁ。明日は４時起きだからきちんと起きて明日香ちゃんと美香ちゃんを迎えに行ってね？　起きてこなきゃ蹴り起こすから」

かなり酔いが回ってきてお尻をボリボリ掻きながら派手な屁をこく兄の京介にイラッとしながらそっと立ち上がる莉央だった。

「お婆ちゃん、明日は朝が早いからお兄ちゃんとあたし、ご飯いらないからね」

「はいはい。忙しそうだけど頑張っておいで。わたしゃ被害者の方々のご冥福を祈ってるよ」

「……本当にお婆ちゃんは復讐刑って必要だと思ってる？」

「う〜ん……どうだろ。復讐しても死者は戻らないからねぇ……」

飲み過ぎてテーブルにもたれかかっていびきをかく京介を優しく見つめながら更に続ける。

「でも理不尽に殺された人たちの遺族の気持ちを思えば懲役とかじゃあ納得するわけないし……死刑でも全然足らない恨みもあるだろうし……前にも言ったけど莉央たちのような仇討ちをしてくれる人は必要なんだと思うよ。頑張っておいで！」

「うん。ありがとうお婆ちゃん……おやすみ」

お婆ちゃんに励まされた莉央は京介にバスタオルを掛けてから部屋に帰ってゆく。

『ジリリリリン！　ジリリリリン！』

ベッドに横になった瞬間、けたたましく響く黒電話の着信音。

「ふぁああ。誰？　こんな遅い時間に……」

目を擦りながらスマホを取る莉央。

『もしもし……』

どこかで聞いた声がする。

「もしもし？　あれ？　どこかで聞いたような声ですね？」

『あたいだよ』

「え？　誰だったかな……」

『宮垣咲良』

「えっ！？　そうだ！　咲良さんだっ！！　どーしたのですか？いきなり」

『先ほどまであんたの親分の所に居たんだ。特殊任務省とかゆう……藤堂長官の所に』

「……何かしょーもない話でも聞かされましたか？」

『いや……秋元さんにも会わされて……あたいと島崎真理子が入れ替えで……真絆ガールズに加えてもらっちゃった』

眠気が一気に覚めてくる莉央だった。
目をパチパチしながら話を整理し始める。

「えっ！？　咲良さんがあたしたちのアイドルグループのメンバーに！？」

『そうゆうこと……よ、よろしく頼むわ。島崎真理子も来ていて、両親が揃って流行りの病にかかっちゃったみたいで……処刑人はとりあえず卒業させられたみたいだ』

宮垣咲良がアイドルになった。
しかし一番大事な部分が聞けていなかった。
莉央は慌てて問いかける。

「藤堂長官と話したとゆうことは……アイドルだけじゃなく処刑人にも抜擢されたって……ことですよね？」

『あ……ああ。理不尽な犯罪リストみたいなのを何冊も読まされて……藤堂長官の説得もあったけど、あたい自身も親友の今は亡き指原のことを思うとなぁ。心を鬼にして処刑人になってやろうかなって……だからホントよろしく頼むわ』

「分かりました。それ相応の覚悟はしてきたのですね……では明日は島崎さんの代わりに篠崎涼子の拷問処刑をよろしくお願いします」

『あ、ああ。分かった』

「一応伝えておきますけど……今回の罪人の中で最も残忍な相手ですので……出来るだけ長時間苦しめて処刑してくださいね？」

『えっ！？……分かった。もしあたいが及ばなかった時はキッチリ指導してくれ。お願い……します菅野……さん』

「莉央でいいです。美香ちゃんも明日香ちゃんも小学生だし……みんな呼び捨てでいいですから」

『あ、ああ。ありがとう莉央。じゃあ明日の早朝、例の港で待ってるわ』

「はい。よろしくお願いします」

なんの相談も寄越さない藤堂長官に腹立たしさを覚えながらも明日の処刑のために眠りにつく莉央だった。

――――明くる日。

霧がかかって数メートル先がまともに見えない状態の港に処刑人たちが集まってくる。

「よ、よろしくお願いします」

少し緊張感が隠せない新入りのアイドル兼、処刑人の宮垣咲良が全員に深く頭を下げて挨拶する。

同い年の中学生である鬼頭美紅が、興味津々な表情で近付き、宮垣咲良のお尻をスカート越しに撫で上げる。

「うわあっ！？」

思わず両手でお尻を押さえて飛び上がる咲良。

「え？　あ？　こら美紅ちゃんっ！！　やめてっ！！」

『パンッ！』

何が起こったのか一瞬理解出来なかった莉央が、慌てふためきながら我に返り、慌てて美紅の右手の甲を叩いた。

「痛っ！　あはは！　ごめんごめん！　ほんの挨拶がわりだよ」

お尻を押さえながら目を細めて美紅を睨みつける咲良。

「そう睨むなって！　明日からあんたもアイドルの仲間入りなんだろ？　アイドルらしく笑顔笑顔っ！　あははははは！」

「もう……仲間同士でイジメとかダメだから！　大野真子さんへの性的虐待も今度からやめてあげてね美紅ちゃん？」

「え？　あいつはあたしに責められて内心喜んでるよ？　莉央ちゃんそんなことも知らなかった？」

目を見開いて左右にいる同い年の小学生、美香と明日香に視線を向けるが、二人とも頬を赤くして軽く頷いた。

これ以上美紅を責められなくなった莉央は集まった全員に罪人の担当と拷問方法、処刑方法などを確認する。

国が用意した小さな船が入港してくる。

一応お約束の目隠しをされて、菅野莉央、富田美香、結城明日香、鬼頭美紅、菅野京介、新入りの宮垣咲良の六名を乗せた船は残酷処刑島へ向けて出港した。

先に連行されてきていた罪人たちが怒り狂って怒号を上げる島へ処刑人たちは足を踏み入れる。

先ずは六人全員で、ヤクザである斡旋人、柿崎竜太に対しリンチを開始。

菅野京介が殴る蹴るで全身を骨折させせてから、鬼頭美紅の顔面タコ殴りが開始された。

『バキバキ！　ガツガツッ！！』

「ぐはっ！？　ぐわあああああっ！！」

延々と顔面を殴り続けるのを処刑人たちだけではなく、罪人たちも後ろ手に縛られて起立した体勢で見せつけられていた。

眼前の恐怖に目を瞑る向井悟史、長澤小百合、篠崎涼子たちだったが、素っ裸にされて拘束されている恥ずかしさと強風の寒さで、少しは恐怖も軽減されていたかもしれない。

タコ殴りを終えた美紅は、柿崎竜太をうつ伏せにさせると、首を押さえ付けておでこを地面に擦り付けた。

その状態で唯一服を着たまま縛られていた柿崎も莉央たち小学生コンビに素っ裸にひん剥かれる。

「用意できたよお兄ちゃん。思いっきり犯してあげて」

妹の莉央からエールを送られた京介は、若い男の裸を見て一気にペニスを硬直させてゆく。

「死ぬほど苦しめてやってね京介さん」

京介のことを好きな小学生、結城明日香からも応援された低脳男

は、ますますイキリ勃てて柿崎竜太の菊門へ、ペニスをゆっくり捩じ込んでゆく。

『ツプ……グリグリ……ズブブブブブ』

「ひぎゃあっ！？　痛いいいいっ！！」

『ズドオッ！！……バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「ひぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃあっ！！！！」

半時間くらい激しい男同士のレイプは続いた。

涎を垂らしながら白目を剥く柿崎竜太へ、髪の毛を掴んで頭部をグリグリ引き回しながら美紅が囁いた。

「アナルを犯される痛みは分かった？　人の痛みなんか全然分からないあんたに聞いてもムダか……」

「うほっ！！　いっくうっ！！」

『ドピュピュピュピュピュピュウッ！！』

「はううううっ！？」

京介が巨大なマラを引き抜くと、ドボドボと肛門から鮮血が噴き出してくる。

「ガッハッハッ！！　鬼畜野郎め思い知ったか！？」

そのまま岩陰へと去ってゆく京介。

「お兄ちゃん！まだ殺してない！」

「ガッハッハッ！！　死よりも恐ろしい巨根での苦痛を与えてやったぜ！　あとは残酷女どもに任せた！」

「…………」

口をポカーンと開けて呆れる莉央に気にも留めず、横になって昼寝を始める京介。

とにかく処刑する事が恐怖で仕方ないヘタレ男は、本日も罪人のトドメを刺すことはなかった。

「美紅ちゃん、ごめん。長澤小百合のみ担当だったけど……柿崎竜太の処刑もお願い」

「やれやれ。ヘタレアニキにも困ったもんだなぁ。おらっ！　聞いたか柿崎？　あたしが引導を渡してやるよ？」

「ぎぎぎぎぎ……ケツが……いてえええっ！！　ぐおおお……」

「ふぅーん。アナルが痛すぎてそれどころじゃないか……」

立ち上がった美紅は拷問道具が詰まった巨大な箱からチェーンソーを取り出してエンジンをかける。

『ブォン！　ブォン！　ヴィイイイイイインッ！！』

一気に数回吹かすと、本体から白煙が立ち込める。

「ケホッ！　この混合、オイル多すぎない？」

ぶつぶつ言いながら柿崎竜太の背後に立ち、チェーンソーの刃先を地面に向けて股間へ近づけてゆく。

「今から真っ二つにしてやるから。ケツの穴からだけど」

「ひっ!?　や、やめ………」

『ヴィイイイイインッ！！……ザクザクザクザクッ！！』

「ギャアアアアアアアッ！！！！」

仰向けに寝転がったまま苦しむ柿崎に構う事なくチェーンソーで切り裂いてゆく美紅。

あっと言う間に背中まで切断されている。

「あはは。もう既に肛門とペニス……陰嚢全て……真っ二つになっちゃったわよ？　痛い？」

「ひぐううううぅっ！！　ぎっひいいいいいいっ！！」

切開された股間からズルズルと大腸、直腸、小腸、前立腺、膀胱が飛び出してくる。

「汚いウンチまみれの直腸飛び出させてんじゃねーよ！　ほらあっ！」

『ヴィイイイイインッ！！　バリバリバリバリッ！！　ズバババババババッ！！』

「ばぎゃあああああああっ！！！！」

更に首まで真っ二つに切り裂く美紅。

『ビクッビクッ……ビクンビクンッ！！』

断末魔の叫びを上げて痙攣を始める柿崎竜太。
２５年の人生に幕を降ろした。

足で蹴り転がして仰向けにさせると、そのままチェーンソーで一気に首を落とした。
更に足でパンパンと蹴り、切り裂いた身体を離してゆく。
内臓がズルズルと辺りに広がるように地面を這ってくる。

思わず目を背ける宮垣咲良。

「咲良っ！　ちゃんと見てろ！」

美紅が恫喝する。

「残忍な奴らを懲らしめるために処刑人になることを決意したんだろ？近くに来て柿崎の遺体をようく見ろよ？」

「う、うう。ゴクン。あ、ああ。分かったよ」

生唾を飲みながら全身を震わせて遺体に近づき跪く宮垣咲良。

「チンポ真っ二つになってるだろ？」

「う、うん」

「ど真ん中切開したから金玉無事なはずだ。金玉袋に手突っ込んで引き摺り出してやれ」

「え！？　あ、ああ」

ビビりながらも恥ずかしくなり、頬を真っ赤にしながら右手で陰嚢内を掻き回す咲良。

睾丸を探り当てると、握りしめて引き摺り出した。

「左の金玉もだよ！」

「は、はい」

思わず美紅に敬語で返事をしてしまう咲良だったが、キッチリと左の睾丸も体外へ引き摺り出した。

ついついだが、クリクリと生の睾丸の感触を確かめてしまう咲良だった。

「おい！　グリグリ金玉指先でころがしてるの？」

「ご、ごめんなさい」

つい咄嗟に謝ってしまう。
同い年だが完全に鬼頭美紅にマウントを取られてしまったようである。
咲良自身、そのことに納得している自分にも気づいているようであった。

生首の元へ行き、跪き、もぎ取った睾丸を一つずつ柿崎本人の口へ捩じ込んでゆく。
二つとも捩じ込み終わると美紅の方を振り返った。

「なかなか残酷じゃねーか。その調子で頑張ってくれよ咲良」

「はい。美紅さん」

「誰のお陰で強くなってきてると思ってるんだ？　あたしのことは今後、美紅様と呼びなさい」

「……み、み、美紅、様。……分かりました」

奇妙な上下関係が築かれている間に次の拷問が始まっていた。
縛りつけているままの状態で乳首を引っ張ったりペニスをツンツンしたりして楽しむ小学生の女の子たち。
富田美香と結城明日香だった。

「ほらほら向井悟史さーん。男前の俳優さんなのにどうしてあんな馬鹿なことしちゃったのぉ？」

「そうよ。素敵なアイドルの彼女さんもいたはずなのに……同じアイドルでも私たちは拷問処刑人です。生きては帰れないから覚悟してくださいね？」

笑顔で乳首を捻る美香に対して、真顔でペニスを突きながら死の宣告をする明日香だった。

莉央は女性に対する拷問用の『子宮抉り出し器』を改良した『前立腺抉り出し器』の調整を行なっている。

『ウィーン……ウィーン』

「この角度で刃が出てきて……直腸を切り裂いたあとこっちの刃が前立腺を抉り出す……と！　完璧だねこれで！」

手足に麻酔注射を打つ美香。

「一応暴れないようお注射させてもらうからねー？」

「いてて……俺もやっぱり殺されちゃうのか？」

「うん！」

「人を殺したことなんてないんだが？　誰の許可をもらってこんな酷いことをやってるんだお前たちは？」

「国の許可もらってやってるよ。殺してなくても児童にあんなことするなんて……親からしたら死刑では物足りないくらいだよ？」

「ちっ！　ガキに何がわかる！」

低い机に仰向けに縛りつけて、まずは三人で静観する。
女子小学生三人の視線は向井悟史の陰部へ釘付けになっていた。

「お、おい！　どこをみている!?　恥ずかしいじゃねぇかっ！」

「そんなもの……見慣れてるよ。人生の最期に射精させてあげようかなって……思ったから」

「ま、マジで殺す気なのか……や、やめてくれ！　お願いだ！　結婚を約束してる女性だっているんだ！　お願いだから助けてくれ！」

美香がそっと足を持ち上げる。

着地した先は……向井悟史のペニスであった。

「うっ!?　や、やめろっ!?　一体何を!?」

目を細めてエッチな笑みを浮かべた富田美香は、ゆっくりと陰部を足の裏で擦り始めた。

『スコスコスコ！』

「ひぐっ！？　ううう……や、やめてくれ……」

『スコスコスコスコスコスコスコスコ』

一向にやめない美香。

「ん？　おやおや？　何か固くなってきてるんだけどぉ？　何かなぁ？」

「こんな事態なのに、もし固くなってるのがオチンチンだったら切り落としてやるんだから」

美香の足コキに耐えられなくなった向井悟史のペニスはビンビンに勃起してしまっていた。
ゆっくり足を上げると、いきりたった立派なペニスがピクピクしている。

「あー……信じらんないコイツ……死刑ね」

結城明日香が本気で呆れながらサバイバルナイフを取り出して刃先を軽く撫でる。

莉央は『前立腺抉り出し器』を一度地面に置き、腕まくりをしながら跪く。

おもむろにペニスをガシッと右手で握りしめると、ゆっくりとピストン運動を開始した。

「あたしの手コキで……もしイカなかったら許してあげる。我慢できたら殺さないであげるよ」

「えっ！？」

向井悟史だけではなく、菅野莉央の言葉に明日香も美香も同時に驚きの声をあげた。

「本当なのかそれは？」

「うん。我慢できたらの話だけどね」

『シコシコシコシコ……』

「う、うう」

絶妙な強さで握りしめて、絶妙な速度でシゴく莉央の右手は、天国を感じさせるものであった。

「くっ！？　とても女子小学生の手コキとは思えない……ぅ、ううぅっ！！」

『シコシコシコシコ……シュコココココココッ！！』

「や、やめ……うっ！！　イクっ！？　いくうううっ！！」

「いいよ。イッちゃえ！」

『ドピッュッ！！　ドピュピュピュピュピュピュピュウッ！！』

えげつないほどの大量の精液を小学生である莉央の手コキによってぶちまけてしまう俳優、向井悟史であった。

「か、紗季とのセックスでもこんなに大量に……出したことないぜ……く、くそうっ！」

「光栄だよ。そう言ってもらえると」

精液まみれの手をタオルで拭きながらゆっくりと立ち上がる莉央。

「紗季さんってあの相葉紗季だよね？彼氏がいるみたいって噂は聞

いてたけど……あなただったんだ。美香ちゃん明日香ちゃん、コイツの体勢、お願いしまーす」

先程地面に置いた器械を持ち上げて美香と明日香に指示を出す。縄を解いてゆっくりとうつ伏せにさせて、もう一度縄で拘束する美香と明日香。

「はーい。出来たよ莉央ちゃん」

「莉央ちゃん、コイツのお尻の穴……開いておいた方がいいかしら？」

「そうね。かなり直径の太い器械だから美香ちゃんと明日香ちゃんで思いっきり肛門内部の直腸が見えるくらい左右に開いててくれると助かるなぁ」

美香と明日香に思いっきり広げられたお尻……パックリと肛門が……直腸までが丸見え状態にされてしまう向井悟史だった。

「今からこの器械を肛門に突っ込んで、あなたの前立腺を抉り出します。動けなくなる麻酔は打ってるけど痛み止めは一切打ってないので……激痛にのたうち回ってくださいね？　いきますよぉ？」

「やっ！　やめろっ！　そんなの入らないっ！　お前ら今流行りのアイドルたちなんだろっ！？　や、やめてくれえええっ！！」

「アイドルだってエッチで残酷なのもいるんだから……ほらっ」

『つぶっ。ずぶぶぶぶっ！！』

「ひぎいっ！？……ぎぎぎぎぎ」

『ズボオッ！！　グリグリグリグリ……バシュウッ！！』

「んぎゃあああああああああっ！！　痛いいいいいいいっ！！！！」

上下左右にこねくり回しながら肛門、直腸、S字結腸を器械で掻き回す莉央。

「ここまで奥に入れなくても前立腺は手前にあるんだけど……やっぱり男を犯すのって……楽しいんだっ♪　それえっ！」

『グリッ！！　ズチュチュチュチュ！！……バリッ！！』

「がぎゃああああああ！！　死ぬ！！　死ぬううううっ！！」

S状結腸を突き破り、小腸を数枚貫いた。

「めり込ませ過ぎちゃった……御免なさい。手前に引き抜くてあげるね？　ほらっ」

『ボコッ！！　ぬるるっ！！』

「はうっ！！」

刃が出る部分を遥か手前の前立腺まで引き抜いて合わせると、スイッチを入れた。

『カチッ。ヴィイイイイイン』

「ん？　え？」

『ヴィイイイイイイイイン！！……ズバッ！　ズババババババッ！！』

「んぎゃあっ！？　ひぎいいいいっ！！」

「ここね？　前立腺は？　えいっ！」

『ザシュッ！　ザクザクザクザクッ！　ボコッ！』

「がはあっ！！」

『ズル……ズルルルルルル……』

ゆっくりと器械を肛門から引き抜いてゆくと、ミンチになった直腸と腸液と血液が同時に垂れ流れてくる。

『ポコンッ！！……ブルンッ！！』

「わあっ！　すごっ！！　前立腺じゃんっ！！　あははははっ！！」

美香が大きく口を開けて爆笑する。

抉り出された前立腺は見事にくり抜かれ、原型を保っていた。
器械から解き放たれて地面に音を立てて落ちる。

『べチャッ！』

「さっき射精した時気持ち良かったよね？　実はコレのお陰だったの。知ってた？」

「ぐわあああああっ！！　ひぎいいいっ！！　ぎゃあああああああっ！！」

激痛で会話が成り立たない状態だった。

明日香は両手で救いあげて、モミモミして感触を楽しむ。

「ここが擦れて快感を感じるんだよね男って……プニプニしてて触り心地いいけど……抉り出されると何か哀れだわ。よっ。えいっ！」

そう言いながら両手で握り潰して地面に叩きつける明日香。

「もう一度ひっくり返して止め刺しちゃおうか」

「はーい」

「了解」

莉央の指示に的確に従う美香と明日香。

前立腺を抉り出したショックで、再度射精してしまっていた。

ドロドロに糸を引いた精液は、血まみれの精液であった。

「莉央ちゃんの手コキの時と比べて地獄のような射精だったに違いないなコレは……可哀想」

「可哀想って言いながら笑ってるじゃん美香ちゃんってば♪」

「てへへ！　バレたか。悪党に情けはいらない！　さぁ莉央ちゃん！止めを刺しちゃおう」

「うん。ナマス斬りの刑ね。美香ちゃん、お願い」

「ほーい」

日本刀を手にした莉央は中段に構える。

刃先は水平方向を向いていた。
美香がペニスの尿道口に糸付きの釣り針を差し込み、貫き、上方向に引っ張り上げてペニスを持ち上げた。

『シュンシュンシュンシュンッ！！』

四回風を切る音が聞こえたあと、四つのペニスの輪切りが足元に転がり落ちる。
一刀目は確実に雁首を切断し、後は根っこまで輪切りを増やすといった手法だった。

「んがあっ！！　がはあっ！！　ひぎいっ！！」

訳の分からない悲鳴をあげてビクビク痙攣を繰り返し始める向井悟史。
そのまま莉央の切っ先は肛門へ。

『ズッ！』

「はううっ！？」

「あたしの手コキ……我慢出来なかったから仕方ないよね？　さようなら……よっ」

『ザシュッ！！　ズボボボボボオッ！！　ばしゅっ！！』

「けびぃっ！？……ガクンッ」

「言い忘れたけど……あなたの彼女の女優さん……相葉紗季さんだっけ？　来月のグルメ番組の収録で一緒になるからタップリと可愛がっておいてあげるね？　あは。もう死んじゃってるか……」

莉央の日本刀は、身体の骨をさけて、見事に口まで貫通させた。
肛門から身体中の血液が滲み出てくる。
一気に引き抜くと、噴水のように鮮血が飛び散った。
返り血をかわした莉央たちは、向井悟史に背を向けて歩き出した。

美紅による長澤小百合の拷問は既に始まっていた。
縛り付けたまま全身の身を削ぎ落としてゆく凌遅刑である。
両方の乳房と性器と臀部のみを残して、首から下の全ての皮と身が削ぎ落とされていた。

「あわわわわ……いたい……いい」

「もうコイツ、まともに悲鳴すらあげられなくなっちゃってるのよ？　弱すぎるよね？」

鬼頭美紅が笑顔で血まみれのナイフを舐める。
傍で勉強のために見せつけられている宮垣咲良は小便をちびりながら跪いて震えている。

「咲良なんてこのザマだよ莉央ちゃん……本当に使えるのかなコイツ……」

「咲良さん……大丈夫ですか？　無理に見なくていいですよ？」

「あ、ああああ……は、はい莉央様」

「動揺して莉央ちゃんにまで敬語使っちゃってるよ……やれやれ」

綺麗に残されている乳首を削ぎ落とした。
反対側も……更に乳房も根元から削ぎ落とす。

「あーあ。もうマンコだけだね？　まともに残ってる身体は……小百合ちゃん！」

「あああ……うぅああ」

「あ、とかう、とかじゃ分からないな。マンコだけは残してあげようと思ったけど……」

『プシャアアアア』

小刻みに痙攣しながら小便を漏らす長澤小百合。
全身は剥き身にされ、性器部分だけが白く残っていた。

『クチュ！』

「ひうう〜！？」

「最期に手マンしてやるよ。ほら、イキたかったらイッていいよ？」

『クチュチュ……クチュクチュクチュクチュクチュ！！』

「あっはあああああああああっ！！！！」

「お？　感じてるね？」

全身を切り刻まれても最期の快感を欲する生命体に感動する処刑人たちであった。

「い、イクッ！」

「そう？　じゃあほら、殺人犯小百合っ！　イッけえええええっ！！」

『クチュチュチュチュチュチュチュチュッ！！』

『プシャアアアアアッ！！』

愛液と小便を撒き散らしてアヘ顔をしながら涎を垂らす長澤小百合。

莉央からライフルを受け取ると、潮を噴いたオマンコに銃口を突

き刺した。

「マンコから脳天吹き飛ばしてやっから。あの世では児童虐待なんかすんなよ？　チュ！」

全身血まみれの身が剥き出しの死刑囚の口に軽くキスをすると、引き金を引いた。

『ドンッ！！……パーンッ！！　ビチャビチャ！！』

膣道をぐぐり抜けた銃弾は、身体を一気に貫通して脳天から飛び出した。

頭部はスイカを割ったようにパーンと弾き飛び、目玉や脳みそが辺りにビチャビチャとブチ撒かされる。

「うふふ♪　見事に吹き飛んだな頭部。アナルからも……もう一発いっとく？」

『ズボ……ドンッ！！』

肛門からももう一発撃ち込む美紅。

少し斜め前に銃弾の軌道がそれたため、今度は心臓と肺が爆発するように辺りに飛び散った。

腰砕けになって震えている宮垣咲良のそばへ歩みよる美紅。
制服のスカートを捲り上げて、パンツをずり下ろし、右手を性器にあてがう。

「ひっ！？」

そのまま中指を咲良の膣口へ捩じ込んだ。

『グチュ……クチュチュクチュクチュ！！』

「やあああああっ！？」

「こら美紅ちゃん！！　やめてっ！！」

莉央が咄嗟に怒鳴るが、咲良は涙を流し始めた。

「ううう……わーん、わーん」

『クチュクチュクチュクチュ』

「イけ咲良」

「は、はい。美紅様……ぐすん……ぐすん」

『グチュチュチュチュチュチュ！！』

「やぁぁぁあっ！！」

『プシャアアアアッ！！』

呆然と見守る莉央と美香と明日香。

無理矢理イカされたはずなのに頬を赤くして美紅に抱きついて号泣する咲良。

余りの恐怖と敵うことのない同級生……色んなことが重なって美紅を主人とする事で気を楽にするとゆう特殊な本能が働いたみたいであった。

「またゆっくり責めてやるから……最後の一人は咲良がやるんだ。分かってるな？」

「ぐすん……は、はい！」

何かを振り切ったように立ち上がり、最後に残された一人……篠崎涼子の元へゆっくり歩み寄る宮垣咲良であった。

「やめて……お願いだから……私を助けてくれたらお嬢ちゃんに一億円あげる。ね？」

『バキッ！！』

「いぎっ！！」

『バコ！　バキ！　ドカッ！　ガキッ！』

「ふぎゃぎゃぎゃぎゃ！！」

まずは咲良お得意のタコ殴りで顔面を歪に変形させる。
素っ裸にされて縛られているので殴られる度に胸が上下左右に揺れる。

「オラオラオラオラアッ！！」

『パンパンパンパンパンパンパンッ！！』

二つの乳房を真っ赤になるまで平手でビンタしまくる。
数回、数十回、数百回。
紫色に変色した乳房の先……乳首からは鮮血が流れ出してくる。

「痛い……死んじゃううううっ！！　助けてお嬢ちゃんっ！！」

「お前みたいな奴らがいるからこの国はいつまでもダメなんだよっ！！」

莉央が巨大な張り型を装着したペニスバンドを咲良に手渡す。

美香と明日香は篠崎涼子の拘束を解き、低い机に四つん這い状態で縛り付けた。

「性器にコレを……犯される者の痛みを教えてあげて」

「うん。やってみる」

莉央に頼まれて初挑戦の性的拷問。

お尻を鷲掴みにして一気に引き寄せると、そのまま一気に股間へ捩じ込んだ。

「ここかあっ！？　腐れマンコはっ！？」

『ズボオッ！！』

「はううっ！？」

『ズブブブブッ！！　バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「やっ！　はっ！　ひっ！　はっ！　ひぎいいいいっ！！」

篠崎涼子の……肛門から鮮血が垂れ流れる。

「咲良さん……穴間違えてる……そこはお尻の穴だよ？」

「えっ！？　あ、ご、ごめん莉央っ」

「もういいからそのままアナルをズタズタにしてあげて……」

「う、うん！　オラアッ！！　ここか臭いケツ穴はっ！？　オラオラオラアッ！！」

『バコバコバコバコバコバコバコバコバコッ！！』

「ふんぎいいいいいいっ！！　裂けるうううううつうっ！！」

性的な責めとかに興味のなかった咲良が、アイドルになると同時に拷問処刑人としても目覚める瞬間であった。
大便まみれの張り型を引き抜くと、そのまま性器へ挿入した。

「オラオラオラアッ！！　痛いかクソババアッ！？」

「んがあああっ！！　痛い痛い痛い痛いいいいいっ！！」

散々膣内を大便まみれの張り型で掻き回すと、ゆっくりと立ち上がり、股間へ強烈な蹴りをぶち込む。

『ズドンッ！　パァンッ！！　スパァンッ！！』

「やだっ！！　痛いっ！！　ひいいっ！！」

股間が鮮血で真っ赤に染まると同時に、蹴りによる内出血で紫色に染まってゆく。

「これで背中を打ち込んでやって」

「うん！」

莉央にイバラの鞭を手渡され、四つん這いに、縛り付けられたままの背中に百回以上鞭打ちを敢行した。
血まみれの背中からは身が所々はみ出している。
中途半端な破壊力ではなかったことが窺える。

「あは。咲良さんすっごーい！　やるじゃん」

「はぁ。はぁ。ありがとう莉央」

「槍と日本刀とライフル……誰で串刺しにする？」

「ライフルが楽そうだけど……人を殺した実感が湧きづらそうだ」

「そうだね。槍でいく？」

「うん。木槌で打ち込んで串刺しにするやつやってみる」

「へぇー。それやれたら立派な処刑人だよ頑張って咲良さん！」

莉央から鋭利に尖った切っ先の長い槍を受け取るとクルクルと回しながら死刑囚に問いかける。

「まあ定番だとは思うけど……肛門とおまんこ…手どっちがいい？」

「や、やめてお嬢ちゃん探偵…二億円あげるから命だけは助けて……お願い」

「ニとゆうことさ二つの穴を両方やって欲しいのね？分かった！」

苦笑いしながら鬼頭美紅が日本刀を手渡す。

「エグい残酷な解答だね。咲良のくせにやるじゃん！」

「はい！　美紅様！　見てて下さい♪　まずはケツ穴に槍っ！　やあっ！」

『ズッ！！』

「はううっ！？」

「数センチだけ差し込んだ状態で……次にマンコッ！」

『ズチュッ！！』

「ひいっ！？」

「日本刀の刃はお腹の方に向けた方が子宮とか胃とか大事な臓器ズタズタにできるからな？」

「はい美紅様。えいいっ！」

『ズズズズズ！！』

「んぎゃああああああっ！！　やめてええええっ！！　お願いいいいっ！！」

日本刀を捩じ込み、おへそから貫通させて、腹部を一気に切開すると、子宮や小腸、膀胱がドボドボと大地に落ちてきた。

「汚い臓器撒き散らしちゃって……お尻の穴も許さないからっ！ほらあっ！！」

『ズボオッ！！　バリバリバリバリッ！！』

「キェエエエエッ！！」

直腸、S状結腸を貫通して更に小腸を何枚も貫通して生き地獄を味わう篠崎涼子。

『グリッ！』

「これ以上なかなか奥に入らないなぁ。臭い肛門め。こうゆう時は……ほらあっ！」

『ドンッ！！　バリバリッ！！　ズチュチュチュチュ！！』

木槌で槍の柄を思いっきり打ち込み、硬い膜や骨を突き破り、更に口へ槍の切っ先が近付いた。

「んぎいいいいっ！！　痛いっ！！　死ぬっ！！　死ぬううっ！！！！」

激しい痙攣を始め、死の予兆を見せる篠崎涼子。
ゆっくり立ち上がり、ナイフを持って背中に乗ると、涼子の髪の毛を鷲掴みにして顎を上に突き上げさせる咲良。
そのまま喉へナイフをあてがうと力強く何度も何度もギコギコと切りつけ始める。

『ザクザクザクッ！！　ゴボゴボッ！！』

「ほら、苦しい？　血が肺に入ってゴボゴボいってるよ？　あはは！」

『ザクザクザクザク……ブシュウウウウッ！！』

「あはは！　取ってやった！」

切り取った首を掲げ上げ、笑顔でみんなに見せつける咲良。

「悪人に……鬼畜に……命なんかいらねーんだよっ！　あははは！」

固まって見守る莉央と美香と明日香と美紅……。

ここで呑気に昼寝をしていた菅野京介が長い眠りから覚めて起きてくる。

「ふぁああああ……もう終わった頃かな？　ん？」

生首を掲げ上げている宮垣咲良と目が合う。

白目を剥いて気を失う京介は再度眠りについた……。

笑いながら槍の柄を蹴り込むと、切断された首の断面から槍の切っ先が飛び出した。

遺体に対しても串刺し刑を完遂してしまう咲良であった。

ダメ親父と鬼畜たち（後編）（後書き）

凄惨な残酷処刑島での処刑を終えて、数日が経つ。
呑気に競輪場で賭博を楽しむ一人の男がいた。
宮沢一平３５歳、バツイチ、独身。
「宮沢一平さんですよね？　ちょっと顔貸してもらえます？」
「今いいところなのに……顔貸せだなんてぶっきらぼうなお嬢ちゃんだなぁあんた。まだ小学生だろ？」
菅野莉央に連れてこられた競輪場の裏の、今は廃墟になっている運営事務所。
「こんな薄暗い部屋にこんなオッサンを呼び出して……小学生三人で俺に何をする気だ？　なんかオッサン恥ずかしいな！　ガハハハハハハッ！」
先程話している時にしれっと麻酔注射を莉央に打たれていた宮沢一平は、段々と全身の力が入らなくなる。
莉央と美香と明日香で服を脱がしてゆく。

「おいおいおい！　まじか！？　なんか恥ずかしいけど勃起しちゃうぜ？　女の子にチンポまで見られたら……」

一分後には全身素っ裸にひん剥かれ、四つん這い状態で縛り付けられる中年男がいた。

『ガシャ！ガシャン！』

「おいおい、解いてくれよ。俺はこんな趣味ないぜ？」

「あなたは被害者の一人だけど……あなたの欲のせいで二人の小学生が死にました。その責任は親であるあなたに取ってもらいます。心配しないでください。命までは取りませんから……」

「二人の命？　え？……最近柿崎さんとも連絡取れないし子供たちとも連絡取れないし……まさか」

『ズッ！……ズチュ』

「痛いっ！？　ひいいっ！！」

「この前立腺抉り出し器であなたの前立腺をもらいますね？」

「え？　前立腺だとっ！？　嫌だ！　痛い！　やめてくれえっ！！」

菅野莉央によって容赦なく肛門から突き入れられた器械は、宮沢一

平の前立腺を的確に捉えて、肛門から見事に抉り出した。

「んがぁぁぁぁぁっ！！　痛いいいいいっ！！　死ぬううううっ！！」

「これで気持ちのいいエッチは今後一生出来なくなりました。あと、オシッコは許しますが子供を作ることは許しません。もしもの可能性を考慮して睾丸も摘出させていただきますね？」

明日香が冷たく言い放つと、美香は不適な笑みを浮かべてペンチを取り出して莉央に渡す。

「麻酔なしで一気に二つとも潰してあげる。そのあと陰嚢を切開して睾丸のミンチを摘出手術しますから……運良くショック死さえしなければ……命は助かります」

「ひっ!?　金玉潰すだとっ!?　やめてくれぇ！！　お願いだっ！！頼むっ！！　やめてっ！！」

『ガツ……ググググ』

「ぎゃあああああああ！！」

『ブチュッ！！』

「ひぎいいいいいいいいいっ！！うがっ!?　はぐうっ!?」

『ビクビクッ！！　ビクビクッ！！』

「あれ？　大丈夫？　まだもう一個いくよ？」

『ガクンッ……』

「え？　ウソ……残念だわ。ショック死しちゃった……なんて運のない……」

「もう一個残ってるのにね」

明日香が残念そうに莉央に囁く。

『ガツッ！　グニッ……ギュウウウウウ……ブチュッ！！』

「でも結局ついでに潰してやるんだけどね」

「あはは！　莉央ちゃんさすが残酷ぅ～♪　やだコイツ……チンポの先から血まみれの精液ドクドク出しちゃってるぅ……死に様がエッチだな、なんか……」

美香は莉央に睾丸を潰されて真っ赤な射精をした遺体のペニスをそっと左手で掴み、尿道に右手の人差し指を根元まで一気に突っ込んだ。

『ズッ！　ズブブブブ……グリグリ……グリグリ』

「あはは。尿道の中を指で掻き回すのって……超気持ち良い～。プニプニしてて生あったかいのよね～♪」

「結局私たちって……性器とゆう性器を全て……それとお尻の穴までズタズタにしちゃわないと気が済まないんだよね……エッチで変態だわ……」

両手の掌を上に向けておどけるようにヤレヤレポーズを取って溜息をつく明日香だった。

――――数日後。グルメ番組収録日。

「以上で今回の美少女グルメ旅の収録を終えさせていただきます！関係者の方々、アイドルの方々、ありがとうございました！」

『パチパチパチパチパチパチパチパチパチ！』

某テレビ局の女子トイレの中で、莉央たちと相葉紗季がすれ違う。

「おい相葉紗季」

「ん？　確かあんたたちは？　何とかガールズとかゆうアイドルグループの……どうでも良いけど誰に向かって呼び捨てにしてるのかしら？ガキが私を舐めてるとタダじゃ済まないわよ？」

「そうなんだ。あたしたちもあなたに喧嘩売ってるわけだからちょっと控え室まで顔貸して頂けます？」

「何！？　いいよ！　まだ時間あるからタップリ芸能界の先輩後輩のケジメってモノを教えてあげるよ。ガキたちにね」

「ありがとうございます。楽しみにしています」

そのまま真・絆ガールズの控え室へ、相葉紗季を連れて帰ってくる莉央たち。

「まずは向井悟史とかゆう外道を彼氏に持っていたことを恨むことね」

「はぁ？　何を言ってるの！？　持っていたことを……って、過去形みたいに言ってるけど今も付き合ってるの私たち！　来週の芸能雑誌で発表されるんだから！」

「あいつのことは忘れて」

「は！？　ほんとバカじゃないのあんた！？　舐め腐るのも良い加減にしろよコラァ！？」

莉央の胸ぐらを掴んで平手打ちを決めようとした瞬間、即座に足を掛けて倒される相葉紗季。

「いたっ！！」

「ちょっとあたしたちからのリンチ……受けてもらいますね？」

「え？　リンチって！？　一体な、何を！？」

数秒後には大野真子と小野メグによって両手を掴んで押さえつけられる。

「さぁ咲良！私たちの仲間になった証にこのババアを痛めつけてやってくれよ」

「そうそう。菅野さんたちに喜んでもらえるよう性的虐待でよろしくな！」

同じ極北女子中学生である二人にエールを送られた新入りの宮垣咲良は、頬を赤くしながらも芸能界の大先輩である相葉紗季の元へ静かに歩み寄る。

「あんたに恨みはないんだけど……ごめんな」

『ズッ！！』

一気に相葉紗季のスカートの下から手を入れ、パンツの裾から性器

へ右手の指を伸ばす咲良。

「わぁっ！？　や、やめてっ！！」

『ズブブ……グチュチュ……』

「やはぁっ！？　やめろおっ！！　この変態っ！！　エッチッ！！」

必死でもがいて大野真子と小野メグの手を振り払おうとするが、なかなか抜け出せない。
そうしている間に宮垣咲良の中指は、膣の奥深くまで挿入されてきた。
掻き回す中指……恥ずかしさが勝ってはいたが少しずつ気持ち良くなってくる。

「あっ、あん！や、やめ……」

『グチュグチュ！　くちゅちゅちゅちゅちゅちゅちゅっ！！』

「やだぁっ！！　ひいいいいっ！！」

三分後には宮垣咲良にイカされた相葉紗季が床に倒れ込んでいた。

「はぁ。はぁ。はぁ。もうやめ……て。お前たちを許してやるからもう私の控え室へ……帰して……はぁ。はぁ。はぁ」

『ズル……ズルリッ！』

相葉紗季のスカートとパンツをいきなりずり下ろす莉央。

「ひいっ！？　やめてえっ！！」

「濡れちゃってるよ？　パンツ……」

「ちょっと……感じちゃって……もう良いから返して私のパンツ……」

「はしたない人には……お仕置きが必要です。児童虐待するあなたの彼氏のようにね……」

「はぁ！？　お仕置き！？　悟史が児童虐待だと！？　とことん私を舐めてるなお前たち！」

『ズブブ』

「はううっ！？」

いきなり人差し指を相葉紗季の肛門へ捩じ込む菅野莉央。
根元まで挿入して激しく直腸を掻き回す。

「熱いっ！！　やめ、ひいいいいいっ！！」

更に左手の人差し指を性器へ挿入する莉央。
両手で前も後ろもグチャグチャに掻き回し始めた。

「痛いっ!?　やあああああっ!!　やめてえええええっ!!」

「アナルもマンコも……かなり臭いんですねお顔に似合わず……」

「ぐっ!　黙れっ!!　くそうっ!!　クソガキめ殺してやるっ!!」

数分後……激しく腰を振る相葉紗季がいた。

「あっ!　あんっ!　あんっ!　ひぃいいっ!　莉央様っ!!　気持ち良いですっ!!　あんんっ!!」

莉央の両手は手首まで肛門と膣へ挿入されていた。
激しくフィストファックが行われている中、何度もイカされた相葉紗季が莉央の両手の拳を前と後ろの体内深く受け入れて激しく腰を振っていたのだ。

『グチュグチュグチュグチュ!!』

「あっ!　あんっ!　あはっ!　はんっ!」

「向井悟史のことはもう忘れなさい。もうこの世に居ない人だから。ダメな大人だったし……分かった？　良いわね？」

「……はい。何となく児童への性癖には気付いていたんです私……もう全て忘れます。ありがとうございました」

莉央たちは何も答えず自分たちの控え室を後にした。

鬼畜な大人と同じく生きる価値のないダメ親父は何人もこの世に存在するみたいである。

乙女の覚悟（前書き）

遂に拷問処刑人の道を選んだ宮垣咲良。
少しずつ気持ちを切り替えようと努力してゆくが、同時にいきなりアイドルと拷問処刑人になってしまった運命はもう変えられない。

乙女の覚悟

極北女子中学校。

北部地方に存在する一年を通して寒い地域にあるこの中学校では、今をときめくアイドルグループに所属する三人が在学していた。

大野真子、小野メグ、宮垣咲良である。

殺人事件の被害者となった三年生、指原理子も在学していた中学校であった。

この女子中学校の最強は大野真子と小野メグであったが、不良の四天王を築いていたのは三年の指原理子と田島美緒、二年の宮垣咲良と渋谷凪子の四人であった。

宿敵から親友、恋人にまで発展した指原理子と宮垣咲良であったが、指原亡き今は、専ら宮垣咲良自身の右腕の渋谷凪子と、指原の右腕であった田島美緒との三人で行動を共にしていた。

「もう指原さんが殺されてから三ヶ月になるんですね……」

渋谷凪子が田島美緒に話しかける。

「そうだな。あの人を失ってから学生生活がなんか張り合い無くなっちまってよぉ……ポッカリと穴が空いたように虚しくなっちまった」

二人の会話を聞きながら芝生に寝転がって目を閉じたまま動かない宮垣咲良。

「あ、私にとっては頼れる姉貴だった指原さんだが、咲良にとっては恋人だったんだよな……思い出させて済まない」

「…………」

寝転がったままそっと目を開ける咲良。
指原理子と戦っていた頃から付き合い始めるまでの色々な場面が走馬灯のように頭の中をよぎってゆく。

「まさか同性から告られるなんて思ってもいなかったな。それも宿敵だったし……」

咲良がそっと呟いた。

三人の間に沈黙が訪れる。

「そう言えば咲良お前……何とかゆう国の機関の仕事を手伝うようになったって言ってたが……無人島で何やらせられてんだよ？　マブダチの凪子も気になってるぜ？　凪子だけにでも教えてやったらどうだ？」

三年の田島美緒がぶっきらぼうに問いかけた。
右腕である渋谷凪子が申し訳なさそうに咲良を見詰めるが、何も答えずに沈黙する咲良。

「……」

「言いにくいなら言わなくてもいいよ！　咲良には咲良の人生があるんだしね」

渋谷凪子は咲良を心から心配して何をしているのか知りたかったのだが、咲良は何も答えなかった。

ふと二人の生徒が三人の前で立ち止まる。
アイドル活動と、拷問処刑人とゆう運命を共にするようになった大野真子と小野メグだった。

「咲良、ちょっと顔貸してくれねぇか？」

「……ああ」

同級生の小野メグに声をかけられてゆっくりと立ち上がる宮垣咲良。
美緒と凪子に手をあげて挨拶してから二人についてゆく咲良。
自動販売機の隣にあるベンチに座る三人。

「ついに私たちの仲間になっちまったんだよなお前も。前回の処刑島では拷問処刑人に選ばれて執行までしたんだって？」

「あ、ああ。無茶苦茶ビビってたけど、突然変なスイッチが入っちまって……人生で初めて人を殺めてきた」

「人を殺すなんてどんな名目でも人生で初めては当たり前だよ！　あたしも最初は無茶苦茶怖かったし今でも怖いさ！　ほんとよく頑張ったよな咲良」

　血に弱く、拷問処刑人では菅野京介と並んでトップクラスのヘタレである大野真子が咲良を誉める。

「大野も最初は怖かったんだな……安心したよ」

「それが当たり前だって！　メグだって平気な顔してるけど内心ビビりまくって処刑してるんだぜ！　な？　メグ？」

「え？　あ、ああ。菅野さんたち小学生トリオみたいに非道に残酷にはなかなかなれねぇよ実際……」

　喧嘩の強さと残虐さで尊敬している菅野莉央の悪口を言ってしまったみたいで気まずくなる真子とメグであった。

「あ、いや、これは菅野さんたちの悪口じゃねぇんだぜ？　尊敬込めて言ってるだけだから！」

「ははは！　分かってるって。あたいも莉央の強さには気付いてるし……以前指原を庇ってタイマン張った時、ワザとあたいのパンチ食らって負けたフリしやがったから……でもなんか莉央は尊敬しちまうんだよな……まだ小学生のガキのくせにサイボーグみたいに強いんだよな」

「サイボーグだとかガキだとかなんて言ったら菅野さんに怒られるよ？　あはは……」

菅野莉央の話で妙に盛り上がる極北女子中学生でありながらアイドルであり、拷問処刑人である三人であった。

「話は変わるけど処刑人の先輩だけど同じ中学生の鬼頭美紅とかゆうヤツ……無茶苦茶強いし残酷なんだよな……真子なんて性的虐待まで受けて大変だったんだぜ？　今はその美紅様に恋しちまってるけど。あはははは！」

「ちょ、ちょっとメグ！！　なんてこと咲良に話すんだよ！？　ちくしょう……何が美紅様だよ全く……」

恥ずかしさで赤面して下を向く大野真子。

横を向いてしばらく真子を見つめてそっと囁く咲良。

「あたいも……彼女に対して変な気持ちがあるんだ……」

「ええっ！？」

大野真子と小野メグが同時に驚きの叫び声をあげた。

「変な気持ちって……まさか咲良も……」

「好きだった指原があんなことになっちまって大した月日も経ってないのに……正直指原には申し訳ないんだけど……あの鬼頭美紅を……好きになっちまったみたい」

ポカンと口を開けたまま宮垣咲良を見つめ続ける真子とメグ。

「それって好きになったとゆうより……主人として家来になったような気持ちってことじゃない？」

メグがツッコミを入れる。
少し間を開けて返す咲良。

「よ、よくわかんねぇけど……鬼頭美紅から責められて……なぜか興奮しちまったんだ……」

「私と同じだ……強すぎて尊敬して……なんか責められたら興奮し

ちゃって……恥ずかしぃ……」

両手で頭を抱え込み、再度赤面する大野真子。
それを見て宮垣咲良も笑えない。
同じように下を向き頬を赤くする。

「要するに……お前ら恋敵ってわけか。恋敵ってゆうか……二人とも鬼頭美紅の強さに畏敬の念が芽生えたわけだな」

小野メグは二人にそっと話しかけると、ポケットからチュッパチャプスを取り出して舐め始めた。

アイドル活動について、拷問処刑について、メグと真子の二人からある程度のしきたりを教えてもらい、宮垣咲良は帰路についた。

――――明くる日。赤霧島小学校。

「莉央ちゃん、ついにあの咲良さんまで仲間になっちゃったね。アイドルだけならまだしも拷問処刑人にまで抜擢されるなんて夢にも思ってなかったよ」

富田美香は昼休みの給食後、窓際の窓枠にもたれ掛かりながら満腹のお腹をさすりながら呟いた。

「でもあれだけ後半にスイッチ入ってたから……元々私たちと同じような素質があったのかもね」

結城明日香も莉央の傍で腕を組みながら話す。
菅野莉央はゆっくり立ち上がると、指の骨をバキバキと鳴らしたあと一人の同級生を指差した。

「横澤幸宏……一時間前の音楽の時間に、音楽室へ移動する際に智子ちゃんのスカートをめくったみたい。お仕置きしときましょう」

「え？　このクラスで女子にそんなことする度胸あるやつなんてまだ存在したんだ！」

「あちゃぁ～。あたしたちの怖さがまだわかってないようだねぇ。莉央様の男子奴隷化計画再び実行開始ぃ♪　了解でーす！」

食べ終わった食器を教壇横のテーブルに運び終わると、ふと足を止める横澤幸宏。
莉央たち三人が仁王立ちしている。

「な、何だよ！？　お、俺に何か用なの？」

「さっき……クラスの女子のスカートめくったよね？」

「え！？　あ、あれは手に持ってた縦笛が引っ掛かっただけで……ついなんだよ！　本当に！」

「へぇ～。智子ちゃん泣きながらあたしたちに訴えてきたんだけど……あくまでついの偶然なんだ？」

「そ、そう！　信じてよ！　嘘じゃないって！」

莉央たち三人はお互いの顔を見合わせる。

「分かった。じゃあお仕置きを軽くしてあげる。みんなの前で恥をかかせないで場所を替えてあげる」

「教室内じゃなくて良かったわねぇ？　大恥かくのなんて嫌だもんね？」

莉央に続いて明日香が囁く。
美香は目を細めてイヤらしそうな笑みを浮かべながら男子生徒の手を掴み、引っ張り始めた。

「さぁ行こう！　女子トイレに」

美香の一言で女子三人と一人の男子生徒は教室を出てゆく。
横澤幸宏は、六年生の使用する女子トイレに連行された。

「まずは土下座しなさい」

三人の怖さは知っているので逆らわずにゆっくりと便所内のタイルの上で正座する横澤幸宏。

「頭を擦り付けてお詫びの言葉をいうのよ」

「は、はい。ご、ごめんなさい！もう二度とこの学校で女子のスカートをめくったりしません！　許して下さい！」

しばらく頭をタイルに擦り付けたまま動かない横澤幸宏。

「あなたオナニーしたことある？」

「え？　な、なにそれ？」

莉央の問いに慌てて顔を上げ、きょとんとする。
ませた友人もいなかったせいか、本当にオナニーの言葉さえ知らないようだった。

再度命令してから仰向けに寝転がさせると、ゆっくりしゃがみ込み、ズボンのベルトを外す莉央。

「ひっ！？……や、やめ……」

『ガチャガチャ……ズルズル』

ゆっくりとズボンを足首まで脱がす。

頬を真っ赤にしてひたすら謝る横澤幸宏。

「嫌だ！　同級生どころかアイドルたちなのに……やめて！　恥ずかしいよ」

「アイドルにオチンチン見られて嬉しいんじゃないの？　大人しくしていたら気持ちいいことしたげるから」

明日香も手伝いながら囁きかける。

「解剖しちゃうぞぉ～えへへ♪」

超がつくほどいやらしそうなスケベ顔を浮かべながら、美香が真っ白なブリーフパンツをゆっくり脱がし始めた。

「うわあっ！！　パ、パンツだけは許してぇっ！！」

『ズルルル……』

「あはは。ダーメ！」

『ズルリッ！　ストーン！』

「やああっ！？」

遂にパンツまでも足首まで脱がされた。
先に脱がせたズボンと一緒に足首から完全に脱ぎとる美香。

「へぇー！　半分かむってるけど少し剥けてるじゃん！」

美香は手を叩きながら同級生の少年のペニスを見て喜ぶ。

ローションを指に塗り込み、人差し指を横澤幸宏の肛門へゆっくり近付ける莉央。

「お尻の穴……あたしがココの処女貰うから」

「やっ！？　やだ！！」

「いくわよぉ？　それえっ」

『つぷ……ズブブブブ』

莉央の白くて細い指先が男子生徒のアナルへと飲み込まれてゆく。

「うわあっ！？　や、やめてえっ！！　痛いっ！！」

「黙りなさい」

『パァンッ！！』

「ひぎっ！！」

結城明日香が騒ぐ少年へ、強烈な平手打ちを頬に打ち込んだ。
根元まで差し込み終わると、次は中指も捩じ込み、徐々に肛門を拡張調教してゆく莉央。

『ぐちゅちゅ……メリメリ』

「んんんっ！！　んんんんんっ！！」

莉央の指が、親指以外全て直腸内に飲み込まれた時、横澤幸宏の目から涙が伝い落ちる。

「お尻の穴……痛いのね？」

「う、ううう。う、うん！　い、痛い……痛いよおお……んんんぐ

ぐぐ」

「あと一本……入るかなぁ？」

「ひいっ！！　む、無理っ！！　絶対無料だよおおっ！！　やめてええっ！！」

『グリッ！……ズブブブ……メリメリ……ボッコオオオッ！！』

「はぎゃあああああああっ！！　痛いっ！！　痛いよおおおおっ！！」

莉央は力任せに全ての指をぶち込んだ。
完全に手首まで捩じ込まれた少女の拳。

「これがフィストファックってゆうんだ。覚えててね」

冷たい真顔で囁きかける莉央だったが、大粒の涙を流しながら泣き叫ぶ横澤幸宏には届いていなかった。
拷問括約筋が数本断裂し、ドクドクと鮮血が流れ落ちてくるが、すぐに明日香が血止めの注射を太腿に打ち込む。

「あまり血を流されると掃除が面倒くさいからね。今から１００回あたしの拳を出し入れするから……頑張って耐え抜いて」

「わぁあああんっ！！　痛い痛い痛いいいいっ！！　許してぇっ！

！」

一度肛門から右手を抜くと、四つん這いにさせるよう美香と明日香に頼んだ。
明日香が両腕を押さえ、美香は両脚を押さえて泣き叫ぶ男子を無理矢理四つん這いにさせる。
注射で血はとまっているが、いきなり拡張調教された肛門は、ヒクヒク痙攣しながら閉じたり開いたりしている。
見るからに痛々しい状態であった。

「声出す度に……泣く度にパクパク開いちゃって……うふふ♪　直腸まで丸見えなんだけど？」

莉央が目を細めながら横澤幸宏の直腸内を覗き込む。

「ほら。もう一回飲み込ませてあげる」

ゆっくり人差し指を差し込んで、一本一本増やしてゆきながら、最後に親指を捩じ込んでゆく。
再び女子小学生の拳は、小学生男子の肛門深くに挿入された。

「んぎゃあああああっ！！　痛いいいいっ！！　抜いてえええええっ！！」

四つん這い体勢に変えたため、明日香は両手を離し、右脚に持ち替えて押さえる。
美香は反対側の左脚を開くように押さえ込む。
両脚を開きすぎるとお腹から床へ崩れ込んでしまうため、加減しながら押さえていた。

「一回目……手首まで入ったわ。後９９回のピストン……我慢出来なかったらキンタマ潰すからね？」

「嫌だっ！！　嫌だあぁっ！！　許してえぇぇっ！！」

「許さない」

『ヌププ……ばちゅっ！！　ヌププ……ばちゅっ！！』

引き抜いては一気に直腸内深くまでぶち込む。引き抜いてはぶち込む……莉央は淡々と繰り返し始めた。

『ヌププ……ズボオッ！！……ヌププ……ばちゅうっ！！』

「　あはあっ！！　はううっ！！」

目を見開いて泣き叫ぶ横澤幸宏の姿を見ながら大笑いしてしまう美香と明日香。

「あははは！　明日香ちゃん！　見て見てっ！　こんなに本人泣いて痛がってるのにチンポの先から粘液出て来てるよ！？　あはははは っ！！」

「気持ちいいってことじゃなくて単に莉央ちゃんに前立腺を猛烈に刺激されているからだよ……哀れな生理現象だわ」

明日香は頬を赤くしながら蔑むように横澤幸宏の顔をそっと見る。ある程度肛門の拡張と刺激に慣れてきたせいか、９０回の出し入れを終えた頃、小学生のペニスはゆっくりと勃起してきた。

「おっ！　遂に性に目覚めたか少年！　あとはあたしに任せて♪」

莉央から聞いていた手筈通り、半勃起状態にまで勃起したペニスをそっと掴み、ゆっくり皮をめくる美香。

「いっ！！」

一瞬顔を顰めるが、すぐに普通の泣き顔に戻る横澤幸宏。そのまま優しく上下にペニスを扱き始めた。

『シコシコシコシコ……』

「うっ、うううっ！？」

「98、99、100！！……よく頑張ったわねぇ♪　あとは美香ちゃんに人生初の快感を味あわせてもらいなさい」

「はぁ、はぁ。ぐすん……ぐすん」

「いつまでもケツ穴の痛みで泣いてないの！この美香様が気持ちよくさせてやるからね！？　ほらほらあっ♪」

『シコシコシコシコシコシコシコシコシコッ！！』

「あ、ああああ、あん……」

少しずつ肛門と直腸の激痛がおさまってきて、陰部の快感へと切り替わってゆく。
美香の手コキに合わせて睾丸がタップンタップンと揺れていた。
同時に肛門からは血の混じった腸液が垂れ落ちてくる。

「な、なんか変な感じ……気持ちがおかしくなりそう……う、ううっ！？」

「それが快感とゆう感覚だよ。ほら、トドメにスピードアーップ♪アイドルに責められてイッちゃええっ♪」

「シコシコシコシコ！　シュコココココココッ！！」

「わああっ！？　うううっ！！」

『ドピュッ！！　ドクドクドクドクドク……ドピュピュピュピュピュピュッ！！』

　小学生の同級生の女子に、半ば強制的に精通させられた１２歳の男子は、女子トイレで精魂つき果てて腹から崩れ込んだ。

「気持ち良かった？　今のが射精とゆうものよ」

「う、うう。うん。なんかよく分からない感覚だったけど……変に気持ち良かった……」

「お尻はまだ痛むだろうけどよく効く薬塗り込んであげたからすぐに傷は塞がるよ。自分のを綺麗にしなさい」

「え？」

『スパァンッ！！』

「ぎひいっ！？」

「あんたの汚いウンコと腸液を舐め取れと言ってるの！　あたしの右手を綺麗にするの！」

「は、はいっ！！ペチャペチャ……ペロペロ」

　莉央の手に着いた汚物を綺麗に舐め取らされると、今度は美香の手に着いた精液を舐め取らされた。

『ペチャペチャ！　ペロペロペロ……ごっくん！』

「飲んじゃった！？　あはは♪　美味しかった？　人生初の射精した自身のセーエキは？」

「おえ……なんかネバネバして気持ち悪い……」

「そーなんだ♪　このこと親とかに話したら殺すからね？」

美香の所詮凄みのない低く作った声に異常にビビる横澤幸宏であった。

泣きながらパンツを履く姿をジッと静観する三人。

「週に一回はあたしたちの前で自分でオナニーして射精するところ見せてくれる？」

「そ、そんな……」

『ガツ！　ギュウウウウウ』

「素直に言うこと聞かないとココ潰しちゃうわよ？」

「ぐわあっ！　わ、わかりましたあっ！！」

いきなりパンツ越しに睾丸を鷲掴みにする明日香に思わず約束し

てしまう少年。
ようやくズボンも履いて涙を拭きながら女子トイレを出て教室へ帰ってゆく。

「莉央ちゃんのフィストファック凄い痛々しかったよね？　直腸自体が張り裂けそうになってたじゃん♪」
「あの直腸内のヌメヌメした感じが気持ちいいからつい……」

美香の問いに苦笑いで答える莉央。

「話は戻るけど咲良さんは処刑人として続けていけるのかな？」

結城明日香が思い出したように莉央に問いかける。

「……どうかな。なんか開き直った勢いだけでやっちゃった感もあるからね今回のは……」

そのうち人を殺めること自体に怖くなって処刑出来なくなっちゃう恐れもある、というのが莉央の正直な思いだった。

「ま、急に出来なくなったらあたしたちがサクッと殺っちゃってあげよーよ♪」

美香は上機嫌で提案する。

「一度会ってゆっくり話しておきたいんだけどなぁ」

「そう言えば来週の日曜日に新曲の振り付けのレッスンがあるからその時に話せると思う」

完全に忘れていた莉央に明日香が教える。

「そうだった……またあの牧野先生による鬼レッスンが始まるのね……」

目を瞑り、おでこに手を掛け大袈裟に落ち込む格好を見せる莉央。宮垣咲良が新しく加わってから初のレッスンとなる来週に備えて、大いに授業中に昼寝しまくる三人であった。

レッスンの日曜日がきた。

「あ、新しく真絆ガールズに、加わることとなりました宮垣咲良です！　よ、よろしくお願いします！」

「こちらこそよろしく！　島崎の代わりに入ったってゆう子ね。…

…あなた、かなり可愛い系の顔してるわね？　モテてるでしょう？」

「え？　い、いやあたいは……いや……わ、私は女子中学なもんで……そんなことは……」

「あらそう。異性がいない学校なんて勿体無いわね。じゃあ男性のファンをこれからどんどん増やしていくため、バリバリ厳しくいくわよ！　さぁレッスンルームへ移動して！」

「は。はいっ！」

かなり緊張している咲良に続いて莉央と明日香と美香も移動する。レッスンルームでは、先に練習している二人がいた。

宮垣咲良と同じ中学は通うアイドルの先輩である小野真子と小野メグだった。

「頑張ってますねお二人さん」

「か、菅野さん！　おはようございます。前の曲のサビの振り付けが私たちだけ少しおかしかったからと、今回早出で呼び出されちゃったんですよ」

「そうそう。もうすでに限界近くまで疲れてます」

泣きを入れる真子とメグ。

「何を泣き言言ってるの！　菅野たちが加わってこれから本格的に
新曲のレッスン開始するんだから！」

「はい」

「はーい」

「こら小野！　返事は伸ばさない！」

「はいっ！」

先が思いやられる莉央たちであった。

牧野杏奈による厳しく激しい新曲レッスン初日を終えたメンバーは、控え室に入る。

「はぁ。はぁ」

椅子に座り込んで苦しそうに息をする宮垣咲良。

「どうでした？　なかなか辛そうですね咲良さん」

莉央が気にして声を掛ける。

「はぁ。はぁ。ダンスってもんがこんなにキツイもんとは思わなかったよ。はぁ。はぁ。莉央たちはよく平気でいられるな……いられますね？」

「タメ口で良いですよ。あたしの名前呼び捨てにしてるくせに敬語は何かおかしいでしょ？」

「あ、それもそうか……」

「あはは！　そりゃそうだ！　敬語使う相手に呼び捨てするなんて聞いたことないよ！」

富田美香が二人に割って入って勝手に爆笑する。

「莉央……」

「咲良さん」

同時に名前を呼び目を見合わせる二人。

「あ、先にどうぞ！」

「あ、ごめんな！　あ、あの……さっきの振り付けのことなんだけど」

「うん」

「本番はヒラヒラのスカート履いて踊るんだろ？　あの足上げるトコってパンツ丸見えになるんじゃない？」

「そうなの。確かに見えちゃうんだけど……ステージに立つ時はみんな〝見せパン〟に履き替えさせられちゃうから心配ないよ」

「見せパン？」

あまり専門用語を知らない超ヤンキーの宮垣咲良に説明し始める結城明日香。

「お客さんに見せることを前提としたパンツの事です。つまり本当のパンツじゃないんですよ」

「そ、そうなんだ。じゃあそんなに恥ずかしくはないな！　あ、安心したよ」

莉央はゆっくり立ち上がり、着替えをロッカーから取り出すと、ゆっくりシャワールームへ移動し始めた。

「ちょっと待って！　あんたの話ってのは何だったたんだ？」

「……もういいよ。忘れちゃった」

そのまま控え室を出てゆく莉央。

「咲良！　菅野さんはみんながいるから話しずらかったのかもよ？　残りのメンバーはまた後でシャワー浴びるから早く菅野さんと一緒に浴びてこいよ」

「そうそう！　お前らが出てきてからあたしたち浴びに行くから」

極北女子中学仲間の小野メグと大野真子が宮垣咲良を後押しする。

「あ、ああ！　ありがとう」

慌てて着替えを取り出して菅野莉央の後を追う咲良だった。

「美香ちゃ……あ、咲良さん」

「私でごめん」

「いえいえ。牧野はかなりムカつくでしょ？」

「え？　あ、確かに無茶苦茶厳しいよね！ムカつくとかではないけど……これから先アイドルとしてやっていけるのかはかなり心配だけどなぁ」

「咲良さんなら絶対心配ないよ！」

ナイロンタオルで身体を擦りながら励ます莉央。

小学生の割にかなり引き締まった筋肉の身体をまじまじと見つめ続ける咲良だった。

「そんなにジッと見つめられると恥ずかしいんですけど？」

「あ、ごめん！」

「うふふ。咲良さんさっきから謝ってばかりですね」

まずは汗まみれの身体をシャワーで流し、ゆっくりと腕から擦り始める咲良。

「さっき言いかけたこと……話してくれないか？」

「……」

「言いにくいこと？」

「言いにくいと言えば言いにくいかも」

「気になって仕方ない！　話して。お願い莉央」

「気を悪くしないでくださいね……あたし的になんだけど……咲良

さんの美紅ちゃんに対する態度とゆうか……服従するような感じのところって言ったらいいのかな……あまり見たくなかったです」

「そ、それは……ごめん！　あたい……いや、私だってあんな情けない態度取っちゃうなんて思ってもみなかったんだ。とにかく鬼頭美紅は強すぎて……無茶苦茶強かったから」

「もういいですよ。あたしが美香ちゃんを好きなように美紅ちゃんを好きになっちゃったんですもんね？」

「え？　あ、そうなんだよなぁ！　ほんとまいっちゃったよ！　え？　莉央は美香とデキてたの！？」

「男の子にも恋したことあったし……あたしはどっちもイケるみたいなんです……両刀使い？　あはは」

「そーなんだ……お互い頑張っていこうな」

「うん。アイドルも大変だけど……これから先拷問処刑人としてやっていく覚悟は本当にできてますか？」

二人きりの話も最後になってきてから話の核心部分を口に出す。

「……一応そのつもりだけど……いや、大丈夫だと……思う……」

「迷った時は理不尽に殺された被害者や、残された遺族の方々の気持ちを想ってみて下さい。かなり強くメンタル部分を後押ししてくれると思いますよ」

「あ、ああ。分かった。そう想って心を鬼にできるよう努力してみる！」

話しながらも身体中を洗い終えて一緒にシャワー室を出てゆく咲良と莉央。

真子とメグが次に入り、最後に明日香と美香が入った。

「帰りの送迎車が到着してるみたい！　帰ろう」

北部地方へ向かう真子とメグの車へ乗り込む咲良。
手を振る莉央たち小学生トリオ。

「一度本気で私と戦ってくれよ莉央」

「え？　」

何も答えることができないまま中学生トリオを乗せた車は走り去っていく。

「手加減したことバレちゃってたのね……」

明日香が呟く。

「生意気な咲良さんめぇー！　こうなったら一度ボコボコにしてやっちゃえば？　莉央ちゃん！？」

「できないなぁ。咲良さんはなぜか全く憎めない」

「あたしより人間レベルが上なの？」

美香が拗ねて莉央を睨むが、構う事なく自分たちの送迎車に乗り込む莉央。

「さ、早く帰りましょ」

美香は拗ねたまま乗り込むが、明日香はそれをみて笑いを堪えるのに必死だった。

来週は土日月と、寮のある南部地方で泊まりがけのレッスンが行われる。

宮垣咲良は拷問処刑人、兼、アイドルとして確実に成長してゆくのであった。

乙女の覚悟（後書き）

――――数ヶ月前。

「この度島崎真理子くんが正式に交際相手を作り、アイドルを辞めてしまう運びとなった。藤堂長官の下で頑張っている国の任務も解任されたそうだ」

「はい。聞いてます」

芸能事務所の会議室で、菅野莉央たちのいるアイドルグループを支える飽本が拷問処刑人である中学生の鬼頭美紅と話している。

「君の容姿は抜群だ。是非島崎くんの替わりに真絆ガールズに入ってアイドル活動をやってくれないか？」

「藤堂長官のさしがねですか？」

「あ、いや、まぁあくまで鬼頭くん本人の許可を得てから、とゆうことで説得の許可を得てるんだが」

「お断りさせて頂きます。あたしはアイドルなんて絶対イヤです」

「君なら絶対菅野莉央くんと同じくらい真絆ガールズでも抜きん出て人気が出ると確信してるのだが……この度新しく加わってくれた

宮垣咲良くんも鰻登りでファンが一気に増えている。これも私の予定通りだ」

大きなソファーにチョコンとお尻を掛けて遠慮気味に座っている美紅は、ゆっくりと左右に首を振る。

「本当に申し訳ございません。あたしは中学生としての学道と、藤堂長官の下で働く国の機関の遂行者としてやっていくだけで精一杯です。アイドルの話は諦めて頂けたら有難いです……」

大きな身体の肩をガクンと落としながらため息をつく飽本。

「分かった。気が変わったらいつでも菅野くんにでも言ってくれたらいい。すぐに私が連絡するから」

「気が変わることはないです。ではこれで失礼します」

鬼頭美紅がアイドルに加われば見事拷問処刑人の全員がアイドルとなったのだが、頑として拒否した鬼頭美紅だけは……普通の女子中学生の拷問処刑人であった。

宮垣咲良とは違った形での覚悟を決めた鬼頭美紅。

アイドルになりたくてもなれない人がたくさんいる中で、頑なに抗うのもある意味一人の乙女の一つの覚悟と言えるのかも知れない。

悲劇の三角関係（前書き）

失いつつある大切な記憶……。

卑怯だと分かっていながらも止められなかった愛。

男女を襲う悲しい運命が幕を開ける。

「私、少しずつ記憶がなくなってゆく病気なんだって」

「え？　どうゆうこと？」

「だから……少しずつ壮一さんとの想い出も……壮一さんの存在自体も……いつか私の記憶から消えちゃうってこと」

「…………」

北部中央大学病院での屋上で、二人のカップルが会話している。
いきなり深刻な内容を伝えられてもすぐに理解出来ない男がいた。

葛木壮一２１歳。
北部中央大学医学部の三年生で、脳神経外科の執刀医である父親が勤める中央大学病院への就職も内定していた。
頭脳明晰、美男子とゆう女性からモテる条件を兼ね備えている好青年であった。

野田元舞衣。葛木壮一の高校時代からの同級生で、高校一年の頃に部活で知り合って間も無く付き合い始め、もうかれこれ五年ほど交際を続けていた。

「そ、そんな冗談言わないでくれる？　たちが悪いよ舞衣ちゃん」

「冗談だったらどれだけいいかと私も何度も思ったよ」

「…………」

何となく分かってはいるものの事実を受け入れたくない心情が働き、ついつい舞衣を責める言葉を発してしまう壮一。

「いつ頃分かったの？」

「もう何度か壮一くんに内緒で検査は受けてた。壮一くんのお父さんにお世話になっちゃった。昨日その結果が出たの」

「それで憧れてようやく入社した大北製薬を辞めちゃったんだ……僕に相談もなしにいきなり辞めたって聞いたからよほどの理由があるんだろうなって思ってたんだ。詳細を君に聞くのも気の毒かなって」

「なんか調子悪くなって……パソコンの画面見てると眠くなって何度も居眠りしちゃって……辞めたとゆうより半分クビみたいなもんかな？　てへへ……」

高卒で就職とゆう葛木壮一とは違う道を選んだ野田元舞衣だったが、三年足らずでの退職となってしまった。

「天国にいるお父さんにはもう報告したんだけどね。お母さんは笑いながら必ず治るわよ、とか言ってくれてるけど……お母さん、自

分の部屋で泣いてたんだ」

「一人娘である君が病気になったらそりゃ……辛いだろうね」

「それまで病気のことで何度も泣きかけたんだけど我慢してた。でも……お母さんの泣いてる声を聞いちゃうと遂に我慢できなくなっちゃって……グス……グス……ごめんね。また泣いちゃった」

そっと上着を掛けて抱きしめる壮一。

12月も中旬……夜空に浮かぶ星々は燦々と美しく輝いていたが、二人には冷たい風が吹き付けていた。

――――明くる日。中央大学病院。

「あまり時間がない。手短に話せ」

葛木悠一郎。葛木壮一の父であり、腕利きの日本有数の脳神経外科医である。

「舞衣ちゃんと僕が付き合ってること知っていたはずなのになぜ早く教えてくれなかったんだよ？」

「……それは……彼女から口止めされていたからだ。ハッキリとした結果が出たら自分の口で伝えたいとのことだった」

「そ、そうだったんだ。分かったよ。それで彼女は……舞衣ちゃんはそんなに病状進んでるの？」

「若年性アルツハイマー……脳の萎縮が確認できた。非薬物療法によるリハビリ治療とＮ　Ｍ　Ｄ　Ａ受容体拮抗薬投与の並行治療で様子を見る」

「確か寿命もかなり短かったのでは……くそう！　どうしてあの子がそんな病気に……」

「十年少しは生きていられると思うが……その時は彼女は３０代だからまだまだ早すぎるな。彼女とこのまま付き合いを続ける気なのか？」

「どう言う意味？」

両手を前で組み、その手の甲に顎を乗せて静かに目を瞑りながら答える悠一郎。

「あの子の世話をつきっきりでするほどお前は暇ではないぞ？　医者としてやっていきたいなら彼女のことは交際相手ではなく患者として見るべきではないのか？」

「もういいよ。それ以上何も言わないで」

静かに立ち上がり、相談室を出てゆく壮一。

――――――八年後。

医師になることと、彼女との交際継続の両取りを心に誓い、頑張ってできた壮一であったが、少しずつ生活の質が低下してゆく彼女を見てゆくことは正直別れを選択していることよりも辛い現実となっていた。

「おはようございます野田元舞衣さん」

「おはようございます。どちら様でしたっけ?」

「葛木と申します。今日もいい天気ですよ。朝食の後はお散歩でもしませんか?」

「今日はなんか身体がダルいからやめとく」

「そうですか。何かあればいつでもボタン押して下さいね。すぐに駆けつけますから」

「ありがとうございます」

葛木壮一のはからいで個室での闘病生活を送る舞衣。

つい最近まで覚えていた葛木壮一のことを、とうとう誰であるか分別がつかなくなった次の日の朝であった。

「もうお前も学習しているとは思うが……若年性アルツハイマーは、脳内でタウと呼ばれるタンパク質が固まりとなって蓄積される。それによって神経細胞が死んでしまうことによって患者の命は絶たれるわけだ」

「分かってる。八年間もよく僕のことを覚えていてくれたと感謝してるよ舞衣ちゃんには……」

「そうだな。ほぼ寿命の寸前まで覚えているなんて聞いたことがない。奇跡と言えるだろうな。思い残すことはないように精一杯看てやれよ？」

「うん。ありがとうございますお父さん」

「フフ。お前も色んな意味で成長したな。これからも私の後を継げるくらい腕を磨いてくれよ」

家に帰って自分の部屋に入ると涙が出てしまう繰り返しの日々。病院では気丈に振る舞ってはいるが、一人になると舞衣のことを想っていつも泣いてしまう壮一。

かなり脳神経外科医としてレベルは上がってきているが、メンタル的にまだまだ若く、情緒不安定であった。

明くる日になって壮一の高校時代からの同級生である男が見舞いに現れた。

「舞衣ちゃんかなり進行してるんだって？　可哀想だよなほんと……」

「久しぶりだなぁ。僕が彼女とまだ付き合っていてこの病院で働いていることも知ってたのか？」

「携帯無くしちゃって皆の連絡先がわからなくなっちゃってて……お前とも随分久しぶりだもんなぁ。いやな、お前の母ちゃんとスーパーでたまたま会って、色々話してたら父親の勧めもあり医者になってこの病院で働いてるって聞いてさ……舞衣ちゃんのことも聞いちゃったわけだよ」

「そうなんだ……つい最近まで僕の名前も覚えてたんだけど……今はまるで他人のように思われちゃってるかな」

「それは辛いな……何号室？」

「個室の３０１号室」

宮武恭二とゆう壮一の同級生は、早速野田元舞衣の病室を訪れ、陽気に話しかける。

「舞衣ちゃん！　俺だよ俺！　高校の時壮一と舞衣ちゃんと俺とテニス部で頑張ってたじゃん！？　分かる？」

舞衣は突然の来訪者にしばらくおどけて見つめていたが、何かを思い出したかのように笑顔を見せた。

「分からないけどなんか昔会ったことがあるような気がする……どちら様だっけ？」

「宮武だよ！　宮武恭二！」

「みやたけ……ごめんなさい。やっぱり思い出せない」

「会ったことがある気がするだけでも嬉しいよ。また顔見に来るからね！　頑張ったら記憶も元に戻るから！　応援してるよ！」

「そうなんだ！　ありがとうございます！」

意気揚々と病室を出ようとした瞬間、壮一がドアの所に立っていた。

軽くぶつかると慌てて謝る恭二。

「おっと！　すまんすまん！」

「適当なことを言わないでくれるか？」

「ん？　適当なこと？」

「そうだ。彼女の病気が治るとかどうとか……その時その時の記憶はあるんだから変に期待持たすようなことを言わないでくれ」

「あ、そうか。もう治らないんだ舞衣ちゃん……てっきり治るものだと思ってた。すまんな」

返事をせずにそっとドアを閉めて恭二を帰るように促す壮一。

手を上げて笑顔で帰ってゆく恭二に何か底知れぬ嫌悪を感じた壮一だったが、気のせいと自分で自分を思い込ませる努力をした。

それから毎日のようにお見舞いに訪れる恭二だったが、壮一としては、個室だし少しは変化がある方が彼女にとってプラスに働くと信じて、大して気にはしなかった。

「葛木先生。少しお話があるんですが……」

三階を担当する看護師長である４０歳のベテラン看護師が、葛木壮一に話しかける。

相談室に誘導されて看護師長の話に耳を傾ける壮一。

「私の指導している新人ナースの夏目さんが夜中の見回りの時に変な声を聞いてるんです。それもここ数日で何度も」

「変な声？」

「あ、えーと、その、あれ、あれですよ。女性のうめき声とゆうかよがり声とゆうか……」

少し頬を赤くして言葉を止める看護師長。

「え？　ま、まさか……」

「とにかく一度先生自身で確認してもらった方が良いかと……」

「わ、分かりました！　ありがとうございます」

物凄く嫌な予感がしたが、まさかそれが現実のものとなるとは思ってもいなかった壮一であった。
その日の夜中にナースに話して交代で病室の見回りをすることにした。

「零時か……３０１号室からいきなりいくか」

３０１号室の前で立ち止まり、ドアに耳を押し当てて神経を集中させた。
微かに聞こえてくる女性の声。
間違いなく舞衣の声だった。

「んん。あん。あ、あんん」

目を見開き、ゆっくりそっとドアを開ける壮一。

『バッコンバッコンバッコンバッコン！』

「あんっ！　あはあっ！　んんっ」

同級生の見覚えのある男がそこにいた。
暗闇の中に、オレンジ色の微かな光の下に、ゆっくりと浮かび上がるその姿は……宮武恭二であった。
しかも彼女である野田元舞衣を、バックで犯していた。

「宮武っ！！」

「おわっ！？　だ、誰だっ！？」

「何をやってるんだお前？」

「ぐわっ！？　何でお前が！？」

『バキッ！！』

歩み寄って素っ裸の同級生の顔面を思いっきり殴る壮一。

ベッドの上から転がり落ちて頬を押さえるが、慌てて立ち上がりそのまま部屋から飛び出してゆく。
慌てて野田元舞衣の傍へ駆け寄る壮一だった。

「だ、大丈夫！？　あいつに何された！？」

「キャー！！　来ないで変態っ！！　壮一さんっ！！　壮一さーんっ！！　お願い帰ってきて！！」

「壮一は僕なんだが……アイツまさか……」

「あれ？　私何でこんなとこにいるんだろう？　あなたは誰？」

素っ裸の身体にパンツを履かせて寝間着を着せてあげると、布団をそっと掛けながら囁く壮一。

「僕は君の仲良しさんだよ。安心してね。少し寝た方がいいからゆっくり休んで」

「ふあ〜。眠たい……ありがとう。じゃあおやすみなさい」

それから数日後、三日ぶりに病院から家に帰れる葛木壮一は、睡眠不足でフラフラしながらも帰路についていた。

パラパラと雨が降り、月も見えない闇夜であった。

「ちょっとすみません。この辺りにコンビニってありますか？」

「あ、少し歩かないとダメですが、５００メートルほどこっちの路

地ををまっすぐ行けば角にありますよ」

「ありがとうございます」

『ドスッ！！』

暗闇で顔もまともに見えなかった見知らぬ男のお礼を聞いた瞬間、腹部に違和感を感じる壮一。

「え？……あれ？」

「地獄へ堕ちろ」

ドクドクと流れ出る鮮血……段々と遠ざかる意識の中、生温かい感覚が下腹部を包み込む。
脳外科名医を目指した葛木壮一は２９歳とゆう若さでこの世を去ることになった。

「君は壮一と俺のことを同じくらい愛してると言っていたが……ごめん。もう耐えられなかった。これからは俺だけを愛してくれよ頼むよ……」

「あん。あんん。壮一さん……気持ちぃい」

「俺は恭二だよ？　もうそいつはこの世にいないから。愛してるよ舞衣……」

北部中央大学病院の３０１号室では、またもや野田元舞衣と宮武恭二の性交が行われていた……。

――数ヶ月後。残酷処刑島。

「あん。気持ちいい……恭二さん」

「愛してるよ舞衣……好きだ」

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「イく……イッちゃううううっ！！」

「俺もだ！　イくうっ！！　舞衣ちゃんんっ！！」

『ドピュッ！！　ドクドクドクドク……』

小学六年性の菅野莉央と、中学二年生の宮垣咲良が見守る中で、二人の２９歳の男女が濃厚な性交を遂げた。

「もう一回してもいいよ」

既に残酷処刑島に連行された野田元舞衣と宮武恭二は、人生最期のセックスの許可をもらってそれを実行に移していた。

「元々俺がアイツより先に舞衣を愛してたんだ……奪い取るような奴は死んで当然なんだ。そうだろ舞衣？」

「愛してる……壮一。恭二。死ぬまで愛してる」

「壮一のことはもういいんだよ！　俺だけ愛してくれ！」

泣きながら叫ぶように懇願すると、再びいきり勃ったペニスを舞衣の局部へ挿入する恭二。

今度はバックで激しく性交を続ける。

二度目の射精を野田元舞衣の膣内へ吐きだした宮武恭二は、そのまま体勢を変え、正面から舞衣を抱きしめて口付けをする。

「野田元舞衣。宮武恭二。あなた方二人に対し、これから拷問処刑を執行します。あたし、菅野莉央とこちらの宮垣咲良の二名にて執行させていただきますのでお覚悟を」

「好きにしろ。もう一番ムカつく壮一はぶっ殺したたし舞衣との愛も堪能したたし……この世に未練はねーよ」

「はぁ。はぁ。壮一さん、恭二さん、無茶苦茶愛してる……」

宮垣咲良は右手に日本刀を持ち、二人に話しかける。

「葛木壮一さんとゆう彼氏がいながら宮武恭二も同時に愛し、お互いを裏切った野田元舞衣……挙げ句の果てに恋敵とはいえ、理不尽な理由で殺害した宮武恭二。あなた方二人は今からこの島で拷問処刑とさせて頂きます」

咲良の語り掛けを無視するように素っ裸のまま抱きしめあい、接吻を続ける舞衣と恭二であった。

「あたしは野田元舞衣をやるから咲良さんは宮武恭二をお願いします」

「分かった。この日本刀で散々拷問してから殺せばいいんだよな？」

「はい。先にあたしが女をやるからそれを見て決意を固めて下さい」

「……ああ。分かった。よろしく」

しばらく二人が抱きしめ合うのを静観していた莉央と咲良だったが、遂に莉央が水を刺す。

「理不尽に裏切られて命まで奪われた葛木壮一さんのために……死んでもらいますね？」

そう言いながら二人に注射を打つ莉央。

数分後、殆ど身動きが取れなくなる二人。

罪人同士抱き合っていた簡易ベッドから野田元舞衣を引き摺り下ろし、地面に寝かせる莉央。

「あなたのことを本気で心配していた壮一さんをなぜ裏切れたの？　答えなさい。まだかろうじて意識はありますよね？」

「二人とも同じくらい愛してしまったの……意識が時々薄れながらも恭二さんと壮一さんを……本当に愛してたの」

「そのお陰でコイツに殺された壮一さんはほんと可哀想よね？　分かる？」

「だって……本当に二人とも……大好きだったから……わーん！　わーん！」

急に号泣を始める舞衣だったが、莉央はそっと傍に跪く。

「壮一さんのことを完全に忘れ去ったのは……演技だったでしょ？　あたしは知ってるよ」

「……ごめんなさい。若年性のアルツハイマーでそのうち記憶が無くなるのは本当なんだけど……それは認めます」

「だよね。もう何も答えなくていいです。本当に記憶が無くなる前に逝かせてあげるね？」

「ほ、本当に今日殺されるの？　私？」

「はい。残念ながら……壮一さんがコイツに殺された時点であなたにも責任が発生しましたので」

拷問器具の子宮抉り取り器を取り出してセットしながら呟く莉央。

「コイツの……宮武恭二の汚い精液が入ってる子宮を抉り出させてもらいますね？」

「え、抉り出す？　えっ！？」

『ウィーン！　ウィウィーン！！』

えげつない器械のスイッチを入れる莉央。
そのまま性器にあてがう。

「いや……そんな太い器械……入らない！」

「強引に入れるのよ。ほら」

『グリ……ズブ！　グチュチュチュチュチュチュチュ！！』

「痛いっ！？　ひぎいいいいいいっ！！」

『メリ……メリメリメリメリ！！　バリバリバリバリ！！』

膣口を引き裂きながら強引に挿入される子宮抉り出し器は、野田元舞衣の膣内へ奥深く挿入されてゆく。

「ひゃあああああああっ！！　痛いいいいいいいいっ！！」

『ズチュチュッ！！　バリバリ！！　メリメリ！！　バリバリバリバリ！！』

「んぎゃああああああああああっ！！」

『ズルズル……ビチャ！！』

抉り出された子宮を野田元舞衣本人の目前へ落とす莉央。

「ぎゃあああああああっ！！」

「あなたの汚い子宮よ？　見納めになるからよく見なさい」

「ひっ！　ひいいいっ！！　人殺しっ！！」

「よく言うねホント……」

莉央は両方の足首を掴んで、電気アンマ体勢に入る。

「マンコの外側も許さないから」

『ガガガガガガガ！！』

「ぎひいいいいいっ！！」

子宮を抉り出されたオマンコに、更に制裁を加える莉央。

激しく何度も蹴り込まれるオマンコは、凄惨なものとなった。
大陰唇と小陰唇は裂け、血みどろになる。
更に莉央の足の裏の強烈な摩擦によってクリトリスまで潰れてしまった。

「ぎゃあああああああっ！！　死ぬうっ！！」

「遠慮はいらないから死んじゃえ」

『ガガガガガガガ！！』

「はひいいいいいっ！！　痛いいいっ！！」

莉央の足の裏から糸を引く血の混じった粘液……白目を剥きなが

ら泡を噴き始める舞衣。
いくら泣き喚こうが莉央の電気アンマは終わらない。
大陰唇と小陰唇はミンチのようにズタボロになって血飛沫をあげ出した。

「ほらほらほらあっ！　腐れマンコに制裁だよ？　ぐっちゃぐちゃにしてやるんだからっ！」

『ドガッ！　ズゴッ！　ガガガガガガッ！！　ドガッ！！　ガシッ！！』

「ほらほらほらほらあっ！」

「んがあああああっ！！」

凄惨な拷問に思わず見入ってしまう宮垣咲良。

「莉央ったらひどいなぁ……その女のアソコ……もうグチャグチャじゃん……」

「そうだよ。あたしは拷問好きだけど性器破壊は特に大好きだから……咲良さんもその男のオチンチンとかグチャグチャにしちゃってくれます？」

「え？　あ、ああ。基本的に性器は念入りに破壊しなくちゃならないんだよな？　分かってるよ」

「そうそう。その調子でどんどん拷問処刑に慣れていってくださいね」

そう言いながら電気アンマをようやくやめて立ち上がる莉央。

チェーンソーを手にしてエンジンをかける。

女の右腕、左腕、右太腿、左太腿……気が狂ったように絶叫する舞衣に構うことなく全て切断してゆく。

「はぎゃあああああああああああっ！！」

「あはは。醜い心のダルマ女の完成だね」

「ひいいいいいいいっ！！　ひどいっ！！　ひどいいいいっ！！」

切断されて短くなった手脚をバタバタさせながら莉央に罵声を浴びせかける舞衣だったが、少しずつ声も小さくなっていき、遂に激しく痙攣を始めた。

「あらあら。出血多量なのに無理するから……」

優しく言葉をかけながらしゃがみ込むと、膣からの出血で血まみれになっている肛門へ人差し指を挿入する莉央。

『ツプ……ズブブブブ』

「あはっ！？　はひぃっ！　あはははは！」

出血多量で意識が朦朧としてきた舞衣は遂におかしくなってしまう。

冷たく微笑みながら舞衣の直腸を激しく掻き回す小学六年生の女の子……。

「もう死にたい？　最近お決まりだけど……お尻の穴から串刺しにしてあげる」

人差し指を舞衣の肛門からゆっくりと引き抜くと、咲良が構えているものと同じ種類の日本刀を手に取る。

鞘から抜くと、切っ先を肛門へあてがう。

『つぶ……ザクザク』

「ふぎゃあっ！？」

「おかしくなってるくせにまだ痛みを感じる？　あはは。哀れだねあなた……」

ゆっくりと確実に肛門から直腸、Ｓ状結腸と突き刺さってゆく刀身。

『ズボボボボボ……ザクザクザクザク』

「きぃえええええっ！！　んぎゃああああああっ！！」

「もうすぐお口まで貫通させてあげるからね？　もっと絶叫して！」

「んぎいいいいいっ！！……ごぼっ！！」

遂に切っ先を口から吐き出す舞衣。

断末魔の叫びをあげて昇天してしまった。

散々内臓を掻き回してゆっくりと日本刀を肛門から引き抜く莉央。

「成仏してね。さぁ咲良さんの番ですよ？」

「あ、ああ！」

子宮を引き摺り出され、外性器をミンチにされ、更に四肢切断されて肛門から串刺しにされて殺された見るも無惨な舞衣の屍を横目に、日本刀を強く握り直す宮垣咲良。

「まずは……お、お、オチンチンを……切断します」

「何だって！？　や、やめてくれっ！！　普通に殺してくれよ頼むからっ！！」

麻酔注射で身体が動かなくなった宮武恭二の身体を足で蹴り転がして仰向けで寝かせると、水平に日本刀を構える咲良。

「何を勃起させてるの？　中途半端に勃ってるからお腹にくっつかずに真上向いちゃってるね？　あたいに切断して下さい、と言わんばかりだわ……分かった。やったげる！　えいっ！」

『ブシュンッ！！……スパァンッ！！』

「ぐわあっ！！！！」

見事に根元から切断させた咲良。

思わず勢いよく切断面から噴き出す血飛沫を見入る。

「勃起してたから凄い血が出るね？　次はキンタマいくよ？」

まだ少し性器破壊に対して照れ臭いのか、頬を赤く染めながら男の睾丸に狙いを定める中学生の少女……。

「やめてくれえええっ！！痛いいいいっ！！　ぎゃあああああっ！！」

『ズッ！！　スパァッ！！』

陰嚢の中心部に切っ先を突き入れ、ゆっくり肛門まで切り裂く咲良。

「おいこら！　なにを生の睾丸を飛び出させてるの？　お尻の穴までパックリ開いちゃって……このエッチ！」

「あはは！　咲良さんってばしっかり言葉責めまでやっちゃってる！　凄いよ！」

理不尽な咲良の問いに、絶叫のみで答える宮武恭二。
白目を剥きながら切断された陰部と陰嚢、肛門を押さえて悶える。
二つの睾丸は飛び出して地面に落ちていたが、精管と神経の管が繋がっているために余計に激痛が長引いている。

一度日本刀を地面に置き、チェーンソーを莉央から受け取ると、股間を押さえている邪魔な両手を膝あたりから一本一本切断してゆく。

「ぎゃあああああああっ！！」

『ドガッ！　ガシッ！　ズガッ！』

「ぐっ！　がっ！　ひいっ！！」

腹部に馬乗りになり、顔面を何度も殴りつける。
宮垣咲良の左右の拳は青年の顔面を見るも無惨にボコボコに変形させていった。
殴られるたびに切り裂かれた陰部と陰嚢、肛門から鮮血が噴き出す。
飛び出している睾丸は地面に擦れて転がりまくり、恭二を更に絶叫させせた。

「ひぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃあああっ！！」

顔を見下ろしたまま両手を後ろへ回し、二つの睾丸を掴む。

「生のキンタマって……プニプニしてて地球グミみたいだね？」

「がはあっ！！　ひぎいいいっ！！」

「同時に潰してやるから覚悟しろ」

『グニュウウウッ……』

「んがあああああああっ！！」

『ブチュチュ！！』

ほぼ同時に二つの睾丸は咲良の掌の中でミンチになった。
目玉をぐるぐる回しながら白目を剥いて泡を噴く宮武恭二。

咲良はゆっくり立ち上がり、再びチェーンソーを手にしてエンジンをかける。
太腿付け根から両脚も切断して、舞衣と同じようにダルマ男を作り上げた。
「これで舞衣さんと同じ姿になっちゃったね？　あの世でダルマ同士仲良くセックスしろよ？」
「かひゅっ！　かひゅうっ！！」
あまりの激痛続きに過呼吸を起こして痙攣を始める恭二。
チェーンソーの刃を切り裂かれた肛門とペニスの切断面、陰嚢部に同時にあてがうと、ゆっくり腹部へ向けて切開を始める咲良。
『ウィーン！！　ヴイイインッ！！……ザクザクザクザクッ！！』
「けぴぴぴいっ！？　キィエエエエッ！！」
宮垣咲良のチェーンソーの刃はゆっくりと確実に男の股間から身体を真っ二つにしてゆく。
前立腺を切り裂いた瞬間、ペニスの切断面から血まみれの精液を射出する恭二。
もちろん快感からなどではなく、前立腺で作られた精液をチェー

ンソーの刃とゆう恐るべき金属によって無理矢理絞り出された結果となっているだけであった。

「あはは！　陰部から飛びだした血が糸を引いちゃってる！　精液まで無理矢理絞り出しちゃったみたいですね咲良さん」

「そ、そうなの？」

頬を染めて照れながらもおへそ辺りまで切開する咲良。
見事に大腸と小腸がブチュブチュと飛び出してきて咲良の右足に絡み付く。

「きゃっ！？　きもっ！！」

「ヌルヌルしてて生温かくて気持ち悪いでしょ？」

「う、うん」

足を振り払って絡み付いた腸を振り解くと一気に首までパックリ切り裂いた。

「ゴボッ！！　ぶくぶくぶくぶく……」

この時点で宮武恭二はショック死してしまう。

口から夥しい量の血の泡を噴き出しながら激しく痙攣し始めた。
首まで切り裂いた刃を一度引き抜き、横方向に切り裂き、首を頭部から切断する咲良。
先程根元から切断したペニスのを拾い上げ、本人の生首の口へ捩じ込む。
「ほら、自分のチンポでも咥えてろ」
ペニスを咥えさせられた頭部を死亡している舞衣の顔の前に置き、切断面を舞衣に咥えさせた。
「あははは！　二人でチンポを口で取り合ってるみたい！　咲良さんもなかなかエッチで残酷になってきましたね？」
「う、うん！　すまない……なんかアソコ濡れちゃってるみたい」
「無茶苦茶残酷にエロく殺害した時って濡れちゃうもんですよ。あたしも今少し濡れちゃってますから」
「え？　小学生でも濡れるのかっ！？」
「六年生と言えば大多数がオナニーもしてますよ」
「あ、あたいは中学入ってから初めて……その……オナニー覚えた

よ」

「中一も小六も変わらないよ。とにかくお見事です。咲良さん」

残酷処刑島に新たに二人の遺体が加わることになった。

悲劇の三角関係（後書き）

同時に二人の男性を愛してしまった事で最悪の事態を招いてしまった男女……。

三角関係にケリをつけたがために招いた最悪の悲劇であった。

愛と欲望（前書き）

恋愛に歳の差は関係ない。
しかしながら一度冷めてしまった愛は、ありとあらゆる欲へと変化する。

愛と欲望

東部地方の辺鄙な田舎の村で、歳の差夫婦が暮らしている。
若い嫁さんをもらって近所の人たちからは散々冷やかされて照れ臭い毎日を過ごしている６９歳の初老の男。
風呂も料理も一日ずつ二人で交代しながら仲良くこなしていた。

「おーい瑞稀」

「はーい！　ちょっと待って。あと少しでお風呂沸くから」

大晦日の夜、かなりの田舎であるこの村の近所には、一軒しか存在しない小さなスーパー。
買いだめしてきた野菜と鶏肉を包丁で刻みながら２９歳という４０歳も若い奥さんからの返事を聞く。

「昨日は瑞稀のスキヤキがこってり系の味だったから今日はあっさり系の水炊きだぞー！　ポン酢で食べるのがさいこうなんだよなぁ。野菜は少し大きめにカットするのが好きだったよな！　うん。これでよし！　と」

白菜や椎茸、鶏肉などの具を大きめの鍋に放り込むと、中火をつけて衣服を脱ぎ始める。

「浩二さんったら気が早い。沸くまでもう少し待ってと言ったでしょ？」

「今日は畑仕事でかなり汗かいたからな。湯船で浸かる前に身体を洗うことにするよ。洗い終わればちょうど程よく沸いてるだろ」

「背中流そうか？」

「ああ。頼むよ。最近肩が痛くて背中が洗いにくいんだ。七十肩だろうなきっと」

「あはは！　すごいなそれ。私は五十肩までしか聞いたことないなぁ」

仲良く夫婦で風呂に入り終わると、鍋の具材を混ぜながら腹を鳴らす津野田浩二、６９歳であった。

６５歳で定年退職してからは年金を受け取りながら、そこそこ広い庭の畑で作る野菜を無人販売所で売ったりしながらのんびりと暮らしている。

去年の６８歳の時に広瀬瑞稀と近所のスーパーで知り合い、バイトの店員と近所の初老……の二人は話もよく合い、仲良くしているうちにいつのまにか付き合いだして早々に入籍という運びになっていた。

村の人たちは外で会うたびに冷やかしたりするが、男たちは単に津野田浩二が羨ましくて皮肉を言うだけの者もいた。

隣の家まで数百メートルも離れている田舎の村だったので、夜に

は家庭カラオケも楽しんで、かなり楽しく幸せに暮らしている二人であった。

「今日は肉じゃがかぁ。瑞稀の料理はほんと味が濃いのが多いよな？」

「美味しくない？」

「いやいや！　そんなことないさ！　無茶苦茶美味い」

「新年の料理は肉じゃがと麻婆豆腐と魚の煮付け。正月っぽくはないけどどれも美味いわ。はっはっは！」

「ありがとう。そう言ってもらえれば作り甲斐があるよ」

――――一年後。

「津野田さんは結婚して間もないのにお気の毒ね」

「ほんとほんと。娘のように若い奥さんできてデレデレしてたと思っていたら……まさか二年も経たないうちに逝っちゃうなんてねぇ。ほんと不憫だわ」

親戚とは十年前に絶縁し、両親は数年前に亡くし、子供もいない津野田浩二は、たった一人の身内である二つ歳上の実の姉の聡子が、

喪主の瑞稀を助けながらのこの度のお通夜となった。

「この度は弟の浩二のためにご足労いただき、誠にありがとうございます」

「妻の私からもお礼を述べさせていただきます。ありがとうございます」

お通夜へ集まってくれた浩二が生前仲の良かった村人たち四人に頭を下げる姉と妻。

明くる日のお葬式も少人数で役場に執り行ってもらい、無事に済ませた。

「瑞稀さん。私は全て知ってるの」

７２歳になる老婆は焼き場で弟の最期を見届けた帰り道、ぼそっと呟いた。

「え？　な、何をですか？」

「糖尿病で医者から甘い物も塩辛い物もダメだと言われていた浩二に一日５０グラム近い量の砂糖や塩を加えた食事を出していたわね。悪気はないんだろうけど死んじゃうよ、と、私にしょっちゅう愚痴

をこぼしていたわ」

「なっ！？　私が浩二さんを殺したとでも言うのですか！？」

「………そうね。分かっててそんな味の濃い料理ばかり食べさせていて今回の脳卒中。殺したも同然だわ。そもそも４０も歳上の浩二と付き合って一年ほどで結婚するだなんて……本当は浩二の家の財産とか目当てで結婚したんでしょう？」

「ひ、ひどいっ！　もう二度と来ないでください！」

振り向いてゆっくりとバス停を目指す瑞稀。

「まだ三時間は来ないよ。それまで私の家で話し合いましょう。浩二の貯金とは家はあなたには絶対わたさないからそのつもりでいて」

キッと睨みつけて走りながら去ってゆくが、まだ背後から罵倒の声がしばらく聞こえていた。

焼き場から家に帰り着いた瑞稀は、玄関の鍵を開けてドカドカと上がり込むと、鞄を畳の上に叩きつけた。

「あのババァ……殺してやる」

スマホを手にして慣れた手先で素早く誰かに電話をかける。

『プルル……プルル……もしもし』

かなり早く受話器を取る相手。

「あ、圭介？　ジジイはやっと死んでくれたんだけど……姉のクソババァが私の作戦に気付いてたみたいで……うん。とりあえずすぐにきて」

村の最北部に住む村田圭介は、瑞稀と同級生の29歳で、村の殆どの若者が都会へ出てゆく中、二人のみがこの村で残った若者であった。

一学年で数十人しかいないような小さな小、中、高を卒業した二人は、昔は仲良し程度の付き合いだったが、瑞稀のスーパーでのバイトが始まってから浩二と同じく客として瑞稀と出会い、自然と付き合うようになっていた。

浩二の妻と知りながらも、バイトの休みの日に、バイト行ってくるように嘘をつき、村田圭介の家で仲良くセックスまでもしていた。

「俺が糖尿病の旦那を“早く死ぬように作戦”を持ちかけた時はお前の返答に驚いたぜ」

「あはは。私だって最初の一週間くらいはほんとに愛してたわ」

「たった1週間かよ！　笑えるな」

「まさかお前もどうやったら早く死んでくれるか……警察に捕まらないで早く殺す方法を考えて実行してたとはな。ほんと驚いたぜ。俺もお前もやっぱ頭良いんだな？　ハハハハハハ！」

「いつまでも馬鹿みたいに笑ってられないわよ？姉のババァをどうにかしないと私たちの苦労が水の泡だわ」

「そうだな……財産も貯金も全て入ってこなくなったら最悪だもんな。ジジイと二年近く我慢して暮らしてきたお前が可哀想すぎるからなぁ？」

「そうそう。早く殺してくれない？」

「うーん。よし！閃いた！人生相談聞いてもらいたいと訴えて俺の車に乗せて……首でも締めて殺してから山の中腹にでも深く埋めてくるわ」

「それいいね！出来るだけ深く掘って埋めてね！　捕まらないように頼むよ？」

「ああ。軽いババァ担いで獣道登るのも楽勝だし！　ハハハ！俺に任せとけ」

恐ろしい殺人計画を楽しく話し合う２９歳の不倫カップルであった。

――数日後。

「すみません！　ちょっと道を聞きたいんですが？」

「はい？　村のどこへ行きたいんだい？」

「分かりにくそうな場所ですから少し横に乗って教えてくれませんか？ついでに俺の悩みも聞いて欲しいんですが……」

「おやおや。こんな婆で良ければ若い子の悩みは聞いてあげるよ。何でも相談してごらん」

気のいい津野田浩二の姉、津野田聡子は疑うこともなく村田圭介の乗用車へ乗り込んでゆく。

しばらく村の山際を走り続けると、急に山道へ登りだす。

「おやおや？　あんたが行きたい住所は山の方じゃないよ？　ん？あんたどこかで見たような顔だけど？」

「あれ？　バレた！？　東部村の宮鬼北に住んでる圭介だよ？ハハハハ！」

「あの悪たれの圭介！？　髪型も雰囲気もまるで別人のようだから気づかなかったよ！　帰しておくれ！　あんたなんかの相談なんて聞く価値も時間もないわ！」

「言ってくれるねぇ……まだ無事に帰れると思ってるのかクソババ

ア」

「え？　何だって！？」

いきなり山道のど真ん中でサイドブレーキを引いて停車し、助手席の老婆の首を絞める村田圭介。

「ぐっ！？　うぐぐ……やめてえええ……うぐううう」

「オラオラァッ！！　死ね死ね死ねぇええっ！！　俺と瑞稀の財産を狙うやつは死んでしまええっ！！」

「うううう……まさかあんたも……うぐうう……ガクッ」

完全に息の根が止まったことを確認するため、鼻先をライターで炙る。

「よし。くたばったな」

遺体を背中に担ぎ上げ、茂みの奥に歩いてゆく。

程よい場所を見つけて用意したスコップで穴を掘っていき、二メートルほど掘った所で息が上がり膝をつく圭介。

「はぁ。はぁ。はぁ。はぁ。深く掘れと言われてもなぁ。こんなも

んが限界だぜ全く。よし！　埋めちまおう！」

連れ去った時の紅い夕焼け空も、いつの間にか完全な闇に包まれていた。

エンジンをかけて慎重に暗闇の山道を村の自宅へと降りていった。

自宅へ帰り着くと、先ず瑞稀に電話で報告する。

『瑞稀か！？　やったぞついに！もうあのジジィの家も貯金もほぼ俺たちのもんだぜ！？』

『…………』

『おい瑞稀っ！？』

『…………』

沈黙を続ける瑞稀に嫌な予感を覚えた圭介は咄嗟に怒鳴り始めた。

『おいっ！！　何とか言えよ瑞稀っ！？』

『……よくそんな簡単に罪もない人を殺せるわね』

『ん！？　だ、誰だお前っ！？』

『村田圭介。あなたにとっての地獄の使者だよ。瑞稀はもうあたし

たちが預かってる。夜中までにあなたの部屋の掃除なり身辺整理なりしておくことね』

『な、なんだと！？　瑞稀は無事なのか！？　身辺整理って何だよ！？　オイコラァッ！？』

『威勢がいいわね。ご両親様にはよう挨拶しとくのよ。もう二度と帰って来られない場所に連れていかれちゃうから』

『はぁ！？　ガ、ガキのくせに何を大人を脅してやがる！？　ぶち殺すぞゴラァッ！！』

誰だか分からない小さな女の子の声に本気で激怒し怒りをぶつける圭介だったが、相手の声は嘲笑うかのように冷静だった。

『今夜零時……あなたを迎えに行きます。それまでに身辺整理とご両親に今までのお礼をきちんと言っておきなさい。では……プツ……プープー……』

『オイコラァッ！！クソガキが舐めんじゃねーぞっ！？』

切れているのが分かっていながら叫ばなければいられなかった圭介だったが、自分たちのした事を全て分かってるかのような少女の口調に例えようのない恐怖と不安が重くのしかかる。

「はぁ。はぁ。早くもバレたのか？　監視カメラなどこの村のどこ

にもないはずだ……どうしてバレた？　何であんな小学生みたいなガキが脅してくる？　はぁはぁ……」

「圭介、お風呂沸いたわよ。先に入りなさい」

「きょ、今日はやめとく。オカンとオヤジだけで入ってくれ」

「珍しいわね。綺麗好きのあんたが……まぁ気が変わったら入りなさいよ」

押入れの中から通販で買った模擬刀を出して、親指の腹を刃先で突きながら確認する。

「よし。一応思い切り突けば刺さりそうだ。変な奴らがきたら腹を貫いてやる！」

ツキノワグマ避け用のカプサイシンスプレーも机の引き出しから取り出して安全ピンを抜く。

「まだ使った事ないけどコレも武器になるか……目潰しの後で刺し殺してやる」

冗談とは思えなかった正体の分からない少女の警告を、本気で万全の体制で待ち構える２９歳の大人であった。

『パリンッ！！……プシュー！！』

「うおっ！？　な、何だこれは！？」

二階の圭介の部屋の窓をぶち破って飛び込んできた鉄の塊のような物体から猛烈な匂いのする煙が噴き出す。みるみるうちに部屋を真っ白に染めていき、村田圭介の意識は薄れていった……。

時刻は午前零時を回った所であった。

――――明くる日。残酷処刑島。

『バキッ！！　ドカッ！！』

「ぎゃあっ！！　いだあっ！！」

津野田瑞稀、２９歳の女が中学生の少女から暴行を受けていた。
正しくは国の司令によって行われる拷問刑である。

瑞穂は、ジャージの上下の姿で軽い子供用の金属バットで全身を打たれて絶叫を上げ続けている。
両手両脚の骨はすでにバラバラになっていた。

「痛いいっ！！　わーんわーんっ！！　やめて許してえっ！！　ひいいいいっ！！」

『バキッ！！……ゴキッ！！』

今度は初めて顔面にヒットする金属バット。
瑞穂の鼻の骨も砕け、鼻血が一気に噴き出した。

「んぎゃあああっ！！」

「手足の次は顔面といこうか？ボッコボコにしてやるから覚悟してねおねーさん♪」

１４歳の鬼頭美紅がツインテールを揺らしながら金属バットを振りかぶり、再び顔面へ打ちつけた。
顎の骨も砕け、まともに悲鳴すら上げられなくなる。

「おごごごっ……うぶぶぶぶ」

鼻と顎を手で押さえようともがくが、肩も肘も骨は粉砕されていたので殆ど動かない。
背中の脊髄は生きていたのでゴロゴロと転げ回りながら声にならない叫び声を上げるしかなかった。

「お、おいっ！　やめろっ！　瑞稀が無茶苦茶痛がってるじゃないか！？　やめてやってくれえっ！！」

長い眠りから目を覚ました村田圭介が彼女である津野田瑞稀を庇おうと怒鳴り始めた。

「あら？　お目覚めかしらチンカス野郎……」

顔面血まみれで転がり回る瑞稀の背中に足の裏を押し付けてグリグリと踏みつけながら圭介の方を振り返る。

ジャージ姿のまま連行された瑞稀とは違い、圭介は全身素っ裸で十時型の木の杭に括り付けられていた。

「あなたの拷問はあたいが……私が行います」

美紅と同じく１４歳の少女、宮垣咲良がセーラー服を風になびかせながら男の前に立った。

「あっ！？　どこかで見たことが……お前は最近真絆ガールズに入ったばかりの新人！　宮垣咲良ちゃんだな！？　マジか！！　俺大ファンなんだあんたの！　マジかほんとー！」

素っ裸で拘束されながら目の前で彼女をボコボコにされながら出てくるセリフとは思えなかった。
呆れて深くため息をつく咲良。
「はぁ。それは嬉しいんだけどあなたみたいな大悪人になんか好かれたくもないよ」
「そうだそうだ！　懲らしめちゃえっ！」
１２歳の少女、富田美香が右手を突き上げながらエールを送る。
「え？　お前は美香！　明日香ちゃんに莉央までいる！？　アイドルのお前たちがこんな場所でなにやってんだ一体？……」
「何で明日香ちゃん以外呼び捨てなのか意味が分からない。早く殺してあげて咲良さん」
かなり長めのツインテールを扱く様に触りながら美香は怒りの表情をわざとらしく作る。
「咲良さんだけじゃなく明日香ちゃんもファンなのかな？　中学生だけじゃなく小学生まで好きなんだ……ロリコン野郎だね明日香ちゃん？」

菅野莉央が目を細めながら結城明日香の方をそっと向く。

「ちゃん付けは嬉しいけど……私たちに拷問されながらこの世の罪をようく反省して死んで逝ってね？　お兄さん」

明日香のセリフで一気に現実に戻されるかなりバカな男、村田圭介であった。

「死……死んでいって？　まさか俺と瑞穂を殺す気なのかお前ら！？　いくらアイドルでもぶち殺すぞ！？」

かなりイカつい表情で明日香を睨みつけながら怒号を上げるが、素っ裸で拘束されながら凄んでも全く拷問処刑人の少女たちには効果がなかった。

『パンッ！！』

「ひぐうっ！？」

いきなり炸裂する咲良の強烈なビンタ。

圭介の左頬を襲う。

「いでででで……可愛い顔してなんて破壊力だ……マジで痛ってえっ！！」

『パンパンパンパンパンパンパンパンッ！！』

「はべべべべべべべッ！？」

往復ビンタはあまりにも激しく、わずか数秒の間に何度も左右に頬がひん曲がる。

鼻を直撃してもいないのにドクドクと流れ出る鼻血。

「痛いいい……やめろっ！！痛いじゃねぇかこのガキ……ん？」

スカートが一瞬盛り上がったように見えた瞬間、股間に突き刺さる少女の膝。

「ぐはあっ！！！！」

咲良の右膝が素っ裸の圭介の急所を直撃していた。

右側の睾丸は完全に潰され、左側のみ辛うじて原型を留めている。

ペニスは直撃は免れたが、激しく下腹に打ち付けられて、ガクンと下方向に下がり元に戻った。

「ぐがあああああっ！！」

「一個潰れちゃったみたいだけど痛い？」

『プシャアアアアッ！』

激痛のあまりに小便を噴き出すが、サッと身体を横にかわす咲良。

「あらあら。金玉の一個くらいでお漏らし？情けないなあんた……」

結城明日香がそっと圭介に近づき、太腿に特殊な痛み止めの麻酔薬を注射する。

「咲良さん、コレで睾丸潰された痛みはほとんど消えてるはずです。彼女の見てる前で恥をかかせてやってください」

「え？　恥を？」

目を丸くして明日香を見返す咲良だったが、その隣で莉央が手でジェスチャーを送り、全てを理解した。

「……こんな最低の男に快楽を与えていいのか？」

「うん！人生最期の射精って単語だけでゾクゾクしちゃうんだあた

し……思いっきり絞り出してやって！」

莉央がさらに激しく右手の指先を軽く曲げて上下に振るジェスチャーを見せる。

「莉央がそう言うなら……おい鬼畜野郎！ 外道の彼女の見てる前で射精させてやるから覚悟しろよ？」

「は？ 咲良ちゃんが俺を射精させるだと！？ それは嬉しいじゃねぇかっ！！ でももし良ければこの頑丈な拘束解いてくれね？」

「うるさい！」

『ギュッ……』

「はうっ！？」

『シコシコシコシコ……』

中学生のアイドルに手コキされながら２９歳の鬼畜男は太腿をキュッと閉める。

「おおっ……おおおぅっ！！」

『シコシコシコシコ！ シュコココココココッ！！』

数秒で超高速に切り替わる咲良の手コキ。

美紅に激しく金属バットで全身と顔面を殴られて意識が薄れつつある瑞稀が辛うじて見たこの世の最期となる光景は……。

中学生に手コキされて夥しい量の精液をペニスから噴き出させられる彼の姿であった。

「あ、あ、けい、圭介……だめ……」

「おおうっ！　い、イクうっ！！」

「いいからイケ！　ほらあっ！」

『シュコココココココココココッ！！……ドピュッ！！ドピュピュピュピュピュピュピュウッ！！』

「金玉一個なのによくこれだけ出せたたね？彼女さんヤキモチ妬いてるかもよ？」

手に付着した精液を圭介本人の腹部に擦り付けて拭き取る咲良。

「彼氏の射精シーン見て興奮した？　オラ！　あたしが聞いてるんだから答えろ！」

『ゴン！　ゴン！』

「いぎっ！　ぐはあっ！」

瑞稀の全身の骨と顔面がズタズタになった所で、頭部に標的を変更する美紅。

頭皮が裂けてドクドクと鮮血が流れ落ちる。

「た、助けて……許して……」

「あはは！　あんたまさかまだ助かるとか思ってるの？」

「うう……死にたく……ない。お願い……もう許して」

美香を手招きして瑞稀の側に呼ぶ美紅。

「この甘えたクソアマに生き地獄を与えてやってくれる？」

「はーい！わかりましたぁ♪脱ぎ脱ぎしよーねぇおねぇさん」

『ガツ！　ズルルル……ズルリッ』

「あはぁ！？　や、やめ……て」

ジャージとパンツを同時に掴んで一気に足首まで引き摺り下ろすと、うつ伏せに転がしてお尻をパンパンと軽快に叩く美香。

「直径３㎝の木製の杭を打ち込んであげるからお楽しみに！」

明日香も駆け寄り、両手で肛門が丸見えになるよう臀部を左右に押し開いた。

「ありがとう明日香ちゃん！　それならアナル丸見えだよー。瑞稀さん、ほうら、入るよぉ？」

『ツプ……ズブブブブ』

「ひゃあああっ！？」

「直腸部分全て奥まで入ったよ。次はこの特製ハンマーで……内臓をブチュブチュ突き破ってお口まで貫通させてあげる♪」

「ひいいっ！！やめて許してええっ！！」

「見た目死にかけてるのにまだ生き残れると思ってるんだ？あははは！面白いよね瑞稀さん。ほらあっ！」

『ドカッ！！……ズボオッ！！　バリバリバリバリ！！』

「ギャアアアアアアアッ！！　いだいいいいいっ！！」

美香が杭を大ハンマーで打ち込むたびに悲鳴を上げる瑞稀。口から飛び出す頃には全身が痙攣を始めた。

「ようし。よく頑張ったね？お口まで貫通しちゃったよぉ？」

「ゴボボ……んんんっ！！　んがががっ！！　ゴボゴボッ！！」

血の泡と涎を口から垂れ流す瑞稀。

薄れゆく意識の中で村田圭介のペニスが切断される所を見るハメになってしまう。

左手で亀頭部を掴み、右手に持ったサバイバルナイフで圭介のペニスを根元から切断した宮垣咲良は、そのイチモツを持ってまさに死にかけようとしている瑞稀の性器に強引に捩じ込んだ。

『グチュ……ズブブ』

「ほら、彼氏のオチンチンだよ？死ぬ前に最期のお別れさせたげる」

「あっはあっ！！！！」

思いっきり叫んだ直後、白眼を剥いて絶命する瑞稀。

子宮まで捩じ込んだペニスをそのまま残して右手を膣から引き抜く咲良。

「ガバガバじゃん……くっさいオマンコだし……何ケツから突っ込

まれてんだよぉっ？　オラアッ！！」

『ドカッ！！……ドボォッ！！』

膣内の血で染まった右手を瑞稀本人の背中に擦り付けて拭き取ると、野々魏肛門から突き刺している木の杭を思いっきり蹴り込んだ。
口から少し出ていた切っ先が２０㎝ほども飛び出した。

麻酔が効いてしまい、睾丸を潰されようがペニスを切断されようが痛みを殆ど感じない村田圭介は、瑞稀の最期を目の当たりにして泣いていた。

「瑞稀……瑞稀いいいいっ！！　うわあああああっ！！」

泣き叫ぶ圭介をチラッと見てから瑞稀の遺体の横に跪く莉央。
手には莉央が発明した子宮抉り出し器が握られている。

彼が泣きながら見ている中、遺体を弄ぶ莉央。
死んでしまって肉の塊となっている瑞稀の膣口に禍々しい筒のような機器を差し込むと、スイッチらしきものをオンにする。

『ウィーン……グチャグチュグチャグチュ！！　グポポポポッ！！』

ビクビクと未だに痙攣し続けている遺体の性器から、子宮が抉り

出される。

「臭いマンコに汚い子宮してるわね？　あなたの彼女……」

そう言いながら器械で抉り出した子宮を地面に落として足でぐちゃぐちゃにすり潰す莉央。

「何なんだよお前ら！！　ほんともうえげつなさ過ぎて呆れるぜ俺は！！　アホかほんと！！」

号泣しながら残酷な少女たちの前で叫び続ける村田圭介。

「瑞稀いいっ！！　瑞稀を返してくれえええっ！！　ううううっ！！」

瑞稀への愛だけは本当だったのか、ひたすら顔をクシャクシャにして泣き続ける圭介。

明日香は圭介の拘束を解き、とりあえず自由に動けるようにしてあげた。

「最期に瑞稀さんに触れてあげたら？」

明日香の情にお礼を言うこともないまま、瑞稀の傍へ歩み寄り、屍を抱きしめて号泣する圭介だった。

「おい圭介！　あんたにトドメを刺すのは明日香か咲良か……選ばせてやるよ」

鬼頭美紅が圭介にトドメを刺すのはファンである二人にさせてあげようと気を利かせる。

「グス……グス……な、なんだと？」

「だからトドメを刺すのはあんたのファンの女の子がいいだろって聞いてんだよ？」

「俺を自由にしておいてタダで済むとおもってるのかお前ら？小学生や中学生に大人の男の俺が負けると思ってやがるのか？」

拳を握りしめて殴りかかる体勢に入る圭介。

『ボコッ！！』

「ぐはっ！？」

莉央の強烈なみぞおちへの一撃で、あっさり倒れ込む。

「チンポからドクドク血を流しながら何カッコつけてるの？弱ぃくせに……」

「ぐはあっ！？　うぐぐぐ」

あまりの激痛に膝をついたまま身動きが出来ない。

「明日香ちゃんも咲良もいいけど……本当は莉央が一番好きなんだ……」

「中学生もいるグループなのに小学生のあたし？　このロリコン」

「菅野莉央……カンリオ！どうせもう助からないならお前にトドメを刺して欲しぃ……大好きだぜ莉央！」

「きしょ……じゃああたしが殺してあげる。でもかなりもがき苦しませちゃうよ？　構わない？」

「そ、それは……嫌だ！　一気にやってほしい！」

「ダメ。残った一つの睾丸を潰してから……そうねぇ……肛門をくり抜いて直腸から大腸から小腸まで全部引き摺り出しちゃおっか？」

「ひっ！？　嫌だ！！　やめてくれえぇえっ！！」

鬼頭美紅と宮垣咲良に抑え込まれて簡易テーブルに仰向けに拘束される村田圭介。

力ずくでも咲良と美紅に敵わなかった自分の弱さを呪いながら……莉央の拷問処刑を受けようとしていた。

「もう痛み止めの麻酔も切れて来てるでしょう？　陰部の切断面がとても熱く感じない？　じゃあいくよ？　力を抜いていてね。まずは麻酔なしで肛門をくり抜きます。えいっ！」

『ツプ……ズブ……ズズズズズ』

「ぎひいいいいいっ！！　んぎゃあああああああっ！！」

「黒くて汚い肛門括約筋……確かに頂きましたあっ♪」

「いぎいいいいいっ！！　痛いいいいいっ！！　やめて莉央ちゃんんんっ！！　ひいいいいいっ！！」

人差し指と中指を直腸内に捩じ込んで、直腸を指に絡め取ると、ゆっくり引き抜いてゆく。

『ズボオッ！……グチュ……ズルルルルルル』

「ぎひゃあっ！！！　はがあああああっ！！！」

中学生の鬼頭美紅と、アイドルグループのメンバーたちに見守られながら壮絶な拷問を敢行される圭介。
ほんとは隠れファンだったボーカルの菅野莉央にトドメを刺されるのは本望と言えるだろう。

「あはは。生温かい汚い直腸と大腸が出てきちゃってるよぉ？ほらほらぁ～。全部抜いたげるね？」

生き地獄とはまさにこのことだった。
村田圭介は今までの人生で最大の激痛を味わいながら歯を食いしばっている。

腸を殆ど抜かれて全身の痙攣が始まったとき、明日香が残った最後の睾丸をペンチでゆっくり潰した。
ビクビクと大きく二回ほど全身を揺らして激痛をアピールする死にかけの身体。

『ボコオッ！！　ズルルルルルッ！！』

遂に十二指腸と胃までもがくり抜かれてパックリ開かれた肛門部分から引き抜かれる。

「あははは♪　胃まで出さなくても許してあげたのに！サービス精神旺盛だね圭介さん……」

「びぎぃっ！！……ゴボッ！！」

大量の血の泡を拭いて白眼を剥き、大痙攣を起こす圭介。
やがて静かに心臓の鼓動が止まった。

「腸に溜まった大便……シゴいて絞り出しておいてあげるから……
くっさ！　最悪」

あまりの激臭に顔を顰める莉央だったが、周りは男の惨めな死に様に対して嘲笑していた……。

残酷処刑島に新たに二人の遺体が加わった。

愛と欲望（後書き）

本気で相手を好きになり、いつか本気で相手に飽きてしまう。
新婚早々に見切りを付けて、他人の人生を奪ってしまった女と男の運命は、あまりにも悲惨なものとなった……。

哀れすぎる男（前書き）

真面目に仕事をこなし続けてようやく退職を迎えようとしている男に訪れる悲劇。

天国から地獄へ……男はどうゆう最期を迎えてしまうのか？

哀れすぎる男

私の名は坂口良平。
齢６４になる定年退職直前の初老である。

「後半年頑張れば遂に私も定年退職か……思えば１８で入社してから一度も会社を変わることなくよく頑張ってきたもんだ」

私は自分で自分を褒めるように呟きながら高橋印刷工業の玄関シャッターを開けた。

「おはよう御座います坂口さん」

「おはよう！　早原くんは最近かなり早い時間にきてるね？」

「はい。妻が働き始めたもので。少し早く出勤するようにすると妻の車で最寄りの駅まで送ってくれるんですよ」

「駅の前を通るんだね。そりゃ半時間くらい早く起きても駅まで送ってもらえたら価値があるなあ」

「そうなんですよ！　半時間早く起きた分、半時間駅まで歩かなくて済むと言う……どっちもどっちですけど。結局早起きしてでも歩かなくて済む楽な方を選んじゃいまして……ハハハ」

「健康のためには駅まで歩いたほうがいいんじゃないか？」

「それを言われると耳が痛いです……」

「ハハハハ！」

気の合う部下との会話も終え、自分の部署である庶務課の机の前に座る。

「そうか……残りの有休消化があるから五ヶ月前にはもう出社しなくて良かったんだよな……」

私がこの高橋印刷工業に勤め始めて、約一年後に新入社員で入ってきた綾波幸子と五年後に結婚、入籍となった。

営業のコツとか要領を色々と指導しているうちに少しずつ気が合うようになっていき、知らぬ間に付き合うようになって間髪入れずに結婚……いや、自分でも驚くほど出会ってから結婚までが早かった。

結婚して一年後に会社を辞めた妻は専業主婦になってくれたんだよなぁ。

妻も私もかなり歳を食ってからようやく子供ができて、その双子の娘が未だに嫁に行かないでいてくれてるから、家族団欒の時間も幸せでいっぱいだよ。

いや、２６にもなって嫁に行けてないのは素直に喜ぶべきではないのか？

んん〜。いてくれると楽しくて嬉しいが……難しいところだ。

「お茶をどうぞ」

「いつもありがとう篠山くん」

２０歳になったばかりの会社で唯一の若い女性である篠山優香くんが淹れてくれるお茶は本当にうまい。

熱いお茶をゆっくりと啜りながら簡単な庶務仕事をこなしてゆく。

仕事量も大したことはなく、気楽にこなせるような簡単な仕事を与えてくれる社長にも感謝している。

「坂口くん、もう一月頑張れば有休消化で実質の仕事納めだね？　父の代から私の代に代わったすぐ君が入社してくれて何十年……本当によく頑張ってくれたよ」

「いえいえ……大した成果はあげられなかったですが今まで本当にお世話になりました！　この会社だからこそ一度も転職することなくやってこられたのだと思っております」

「うむ。こう言えば自慢になってしまうかもしれないが、確かに我社の社員は派遣を含めて素晴らしい方たちばかりだと自負している。本当に皆のお陰で少しずつでも大きく成長できた企業だと思っている。皆には感謝しかないよ」

「それは言えますね！　本当に良い人たちに包まれて仕事をこなしてこられた気がします。あと一月ですがもう少しだけお世話になりますね」

「こちらこそよろしく頼むよ。無理しないで気楽に頼むよ」

「はい。ありがとうございます」

一緒に何度も釣りに行ったりもした、年も近い気の合う社長との会話が終わりかけた時だった。

お茶を淹れてくれるいつもの笑顔とは正反対の神妙な表情で篠山優香くんが大声で私の名を呼びながら駆け寄ってきた。

後になって思うことだがこの辺りからの自分自身の行動に対する記憶があまり無い。

「坂口さん！　一刻も早く中央市民病院へ向かって下さい！」

「え？　いきなりどうしたの？　なぜ私が病院に？」

「お、奥様が……強盗に入られて奥様が大怪我をされているみたいです！」

一瞬篠山くんの言っていることが理解できなかったが、我に返った私は咄嗟に内ポケットのスマホを取り出していた。

そんな肝心なことと真っ先に私自身に連絡をくれるはずだ。

もしかしたら篠山くんがからかっているか他の誰かと間違えているのかも知れない。

震える右手で画面を点灯させるスイッチを押して着信履歴を確認した。

そこには十件を超える色んな番号からの着信が……。

「坂口さん、何かの拍子でマナーモードのスイッチ入れてないですか？　警察の方は病院を教えようと何度も連絡したそうなのですが……」

「……そうか。妻の財布にはいつも私の名刺を入れていたからな。連絡が早かったのは有難い」

まだ自宅へ強盗が入って妻が傷つけられたことが現実と思えない。まさかそんな……。よりによってなぜ私の家が……私の妻が狙われたんだ？

「ともかくすぐにタクシーを呼ぶから一刻も早く奥さんの病院へ向かうんだ！」

社長も懸命に妻の元へと急かしてくれている。
慌てて階段を駆け下り、タクシーを待つ。
エレベーターが来るのを待つ時間もヤキモキして駆け下りたものの、タクシーはまだ来ない。
いまだに現実かどうかさえも区別できないでいるが、会社の正門の前にタクシーが停まる。

「中央市民病院へお願いします」

それからどの道をどう走って病院へ辿り着いたのかさえ覚えていない。
大怪我……かなり控えめな表現なんだろうな。
今の私には焦る気持ちと嫌な予感しかしない。
いくら大怪我とはいえ普通の怪我レベルなら妻本人が電話をくれているはずだからである。

私は病院に着くなり受付で説明を受けた。
普通の病室ではなく手術中だという説明を……。
前の椅子で倒れ込むように座ると、最悪の事態を色々考えてしまい、息苦しくなってくる。

しばらく永遠とも言える長い時間が過ぎ、いや、実際には数時間くらいだろう。
手術中のランプが消灯した。
執刀医を含む何人もの医師がドアが開いてから出てきた。

「坂口様ですか？」
「はい。妻は……幸子は……」
「出来る限りの手は全て尽くしたのですが……残念ですが……」
予想はしていたが胸に突き刺さるようなショックを受けた私は目を見開き茫然と立ち尽くしてしまう。

その日からしばらくは変わり果てた妻の顔が頭から離れることはなかった。
検死を受けてからお葬式、焼き場と、一日一日が目まぐるしく忙しい。
親戚の方々に挨拶をしながら時間がどんどんと過ぎてゆく。

妻を亡くした悲しみも去ることながら、私の頭は一つのことしか考えていなかった。
事件のあった日からずっと行方不明になってしまった二人の娘のことで頭が一杯だ。

検死結果では、妻は散々何者かに犯されて腹部を何度もナイフで刺されての出血死。
体液が検出されてＤＮＡ鑑定を行い、今も警察は必死で犯人を探してくれている。
娘二人も同じ犯人に連れ去られたのであろう。

私は絶対犯人を許さない。
私に恨みを持つ者の心当たりは……一人いる！
湯浅道弘とゆう４０歳の男だ。
その男はあまりにも先輩や庶務の女性に対して言葉遣いも悪く、横柄な態度だった。
湯浅道弘の為にもならないと思い、我慢の限界がきた私はかなり強く叱責した。
その日から彼は会社に来なくなった。

「俺にここまで恥をかかせやがって……覚えてろよ？」

ボソッと私だけに聞こえるようにそう彼は呟いて会社を去って行った。
もしかしたら彼の仕業ではないのかもしれないが、心当たりは彼しかいなかった。
数日後、湯浅道弘の自宅を訪れた私は、彼の胸ぐらを掴み怒鳴り散らしていた。
その後彼に殴られて……蹴られて殴られて……咄嗟に家から持ってきた出刃包丁で彼の胸を刺した。
……そこまでの記憶はあるが、その後の記憶がない。
気が付けば見覚えのない風景の場所に縛り付けられていた。

「ん？……なんだ？　私は一体どうしたんだ？」

目の前で見覚えのある女性が素裸で縛り付けられている。
しかも中学生っぽい女の子に鞭で全身を打たれているではないか！？
篠山くん？　篠山優香くんじゃないか！？
なぜ君がこんな目に遭っている！？
状況が理解できない私に一人の小学生らしき女の子が近寄ってきて声をかけてきた。

「この度は本当に残念です」

え？　何を言ってるんだこの子は？

黒髪ロングの可愛らしい小学生の女の子は間違いなく私に話しかけてきていた。

「誠にお気の毒ですが、坂口さん。あなたの奥様だけではなく行方不明の娘さん二人ももうこの世にはいません」

「な、なんだと！？　そんな……一体どうゆうことなのか説明してくれ！　事情を全て知ってるみたいだな君は！？」

私は思わず取り乱してしまい、目の前の少女に怒鳴り散らしてしまった。

「あなたが早とちりして殺してしまった男……湯浅道弘とゆう男は無罪でした」

「そ、そうか……怒りに任せて怒鳴り込んでしまって……挙げ句の果てに刺してしまった気がする……本当に気の毒だが彼は死んでしまったんだね？」

「はい。無実の人を殺した罪であなたは本日あたしたちによって処刑されます」

処刑？　何を言ってるんだこの女の子は？

私は自分の運命の先を読めないまま木製の杭に縛り付けられたまま同じ会社で働いていた篠山優香の方へ目をやる。

「彼女はなぜ縛り付けられて素裸にされて鞭で打たれているんだ？　やめてあげてくれないか？　あまりにも可哀想じゃないか！？」

「篠山優香は湯浅道弘と会社の人には内緒で付き合っていました。あなたに罵倒されて会社を辞めた湯浅道弘は酒に溺れてギャンブルで借金をしまくって自暴自棄な生活にまで落ちぶれちゃってました」

「え？　どういうこと？」

「最愛の彼が会社を辞めることになり、更に落ちぶれていったのは全て坂口さん、あなたのせいだと思った篠山優香は、幼馴染みのヤクザを頼って……貯金の全てを支払ってまであなたの大切な人たちを奪ってしまったの」

「そ、そんな……そんなしょうもないことで篠山くんが殺人を仕掛けるか！？　ましてやヤクザが人を殺すか！？　ば、馬鹿らしい」

黙って３０代くらいの男の生首を差し出す目の前の女の子……。

「もうすでにそのヤクザの処刑は終わりました。コイツがあなたの奥さんの幸子さんを犯して刺し殺し、二人の娘さんを連れ去って監禁してレイプして絞殺して……挙げ句の果てに裏山に埋めて死体遺棄までやらかしちゃったのです」

本物の生首を見るのは初めてだった私は思わず吐いてしまった。

「ゲエエエェッ！！　ゴホッゴホッ！！」

「ごめんなさいね。あなたは情状酌量の余地がありますから最後に処刑します。その前にあなたの家族を……幸せを奪った女の処刑をじっくりご覧くださいませ」

散々鞭で殴打された篠山優香は、ようやく拘束を解かれ、簡易ベッドに仰向けに寝かせられた。
他の中学生らしい女の子二人が篠山くんの手足を拘束してゆく。
ふと私と彼女の目が合ってしまう。
何とも複雑な表情で少女たちに拘束されながらも私を凝視しているが、何と声をかけるべきなのか私自身分からなかった。

『どうしてあんな酷い事を……』

その一言を言ってやりたかったが声にならない。

小野メグと大野真子とかゆう二人は篠山優香の手足を縛りつけ終わると、宮垣咲良に声をかけた。

「咲良！　本当にヤレる？」

「ああ。この女がやったことは無茶苦茶虫酸が走る。あのオッサンが家族を失った上に処刑になっちまったのも全てこの女のせいだ。許せない」

あの三人は中学生か？
寄ってたかって篠山くんをボコボコにしてベッドに拘束までして……一体何をするつもりだ？
私の家族を殺すよう指示したとは未だに信じ難い篠山優香の凄惨な拷問を見てしまう羽目になった私は最早現実と映画の世界が区別出来なくなってしまっていた。

これは夢だろう……何かの間違いだ……。

あんな幼い少女たちがこんな残酷なことが出来るはずがない……。私の見ている前で篠山くんの両手両足はチェーンソーで切断され、腹部を切開されて内臓を抉り出されている。

夢としか思えないじゃないか！？
ハハハ……。

「やめてええええっ！！　痛いいいいいっ！！」

「これが小腸でこれが子宮……この丸いのが卵巣ね？」

お腹の中のほぼ全ての内臓を咲良とかゆう中学生に引き摺り出されて痙攣しながら息絶える篠山優香くんを目の当たりにした。

「はぁ？　もう死んだ？　お前なんか何度殺しても物足りないくらいだよ」

セミロングの美少女は篠山くんの子宮を握りつぶしながら遺体に話しかけているみたいだった。

「咲良さん、お疲れ様です」

目の前の黒髪ロングの小学生らしい少女が中学生の少女に声をかけた。

何なんだコイツらは一体！？

ん？

ふと篠山優香くんの遺体の隣を見ると、５歳児くらいの幼女が泣き叫んでいるではないか！？

「お、おい！　その幼稚園児は！？　まさか篠山くんと同じように殺すつもりなのか！？」

「この子はあのヤクザの娘。妻とは別れてるみたいだけどこの生首男が育ててたみたい。あなたの双子の娘さんの遺体を切り刻んで笑ってたみたいだから……」

「え？　そ、それはそのヤクザの父親に無理矢理やらされたんじゃないのかよ！？」

「質問して問いただしたら楽しかったみたいよ。切り刻む事自体が……よって……国の判断で悪魔の子とゆうことで処刑しちゃうことになりました」

「よ、幼稚園児だぞ！？　有り得ない！　殺すのは許してやってくれ！！」

私は例え我が娘を切り刻んだとは言え幼女を殺すことには胸糞悪く感じた。
ヤクザの父親を殺せば十分だと思ったからだ。

『パン！　パンパンパンパンパンパンパンパンパン！！』

「ひぶぶぶぶぶぶうっ！！　わーんっ！！　痛いっ！！　痛いよおおっ！！　ひーん！！」

咲良とかゆう中学生は幼女の頬を激しく往復ビンタする。
泣き叫ぶ幼女に構う事なく何度も何度も……。

見てはいられなくなった私は目を瞑って現実回避するが、一時間ほど幼女への暴行は続けられた。

素裸にされて全身までも平手で叩かれ続けた幼女は全身を紫色に変色させて泣きじゃくっている。
もう見ていられないじゃないか……なんて酷いことをするんだこの子は……。

「お尻は特に入念に叩いとかなきゃね～。ほらほらほらほら」

『パンパンパンパパパパパパパンッ！！』

「うわあああああんっ！！　あぎゃあああああっ！！　痛いよおっ！！　やめてえええっ！！」

「うるさいクソガキめ。ここは？」

『ツプ……』

「ひゃあっ！？」

宮垣咲良の人差し指が幼女の肛門へ突き入れられる。

『グリグリグリッ！　ズボボボッ！！』

「やあああっ！？　痛いいいっ！！　お姉ちゃん！　や、やめてええっ！！」

中指までも根元まで突き入れて、二本の指で激しく直腸を掻き回す女子中学生。

「な、なんて可哀想なことを……やめてやれえっ！！」

「黙れオッサン！殺すぞ！……五年も生きてきてやって良いことと悪いことが分からなかったのかなぁ？　あなた確か名前は美奈ちゃんだったかな？……死んでからも反省しろよ？　今からおねーちゃんたちが地獄に送ったげるから」

私に言い返した後、幼稚園児に何かを静かに囁いているみたいだった。

「痛い……あたちのお尻から指を抜いて」

「何が“あたち”だよムカつくなぁ！」

『ズボッ！ズボッ！ズボッ！ズボッ！……グチュチュチュチュチュ！』

中学生の二本の指は幼女の肛門を激しく出し入れし、更に思いっきり掻き回していた。

「んぎいいいっ！！　痛いいいいいっ！　わーん！　わーん！」

「ほらあっ！　美奈のアナルぐちゃぐちゃに壊しちゃうぞぉ？」

「もうやめてやれええっ！！」

え？

何か下半身に違和感を感じると思った私は思わず目を見開き自分

の下半身を見た。
　隆々と勃起しているイチモツに自分で驚いてしまう私がいた。

「は！？　何でこんな状況でこんな……バカな！？」

「あはは。ごめんなさい。無理矢理勃起させる薬をしれっと注射しちゃって……今から仇の愛娘、５歳の美奈ちゃんをレイプしちゃおっかぁ？　あはは♪」

「はあっ！？　何を言ってるんだ君は！？　こんな幼い幼女とセックスしろなんて……キチガイなのか！？」

「咲良さんに肛門の調教されてたみたいだけど……次はあなたのイチモツでガキのマンコ犯しちゃって！　咲良さんお願いしまーす」

「はーい。じゃあオッサンと良いことしちゃおーか幼女ちゃん。お尻の穴の次は前の穴だよね？」

「いやあっ！！　うえええんっ！　うええええんっ！！」

　咲良とかゆう中学生は泣き続ける幼女を背後から抱え上げて、まるで親が小さい子にオシッコをさせるように膝の裏に両手を回して開脚させせて歩いてきた。

「ほら、美奈ちゃん！　５歳にして人生初のエッチさせてあげるから喜べ！」

「や、やめろ！！」

無理矢理私のいきりたったたペニスに幼女の性器をあてがう咲良。

『グリ……グリ』

やはり幼女の性器が小さすぎて私のペニスは先端さえも入らなかった。
ある意味ホッとした私がいた。
だが次の瞬間、目を疑う事態が起こったのだ。

『バキッ！！　バキッ！！』

「んぎゃあああああっ！！　痛いいいいいいっ！！」

『グシャッ！！　ズドオッ！！　ガツッ！！』

咲良とかゆう中学生の少女は、幼女の股を全開に開かせた上で、股間に膝蹴りをぶち込み始めた。

「お、おい！　やめてやってくれっ！　酷いぞ！？」

「オラアッ！！　お前のマンコが小さすぎて入らねぇだろーがっ！？」

『グシャッ！！　ドカッ！！』

「はぎゃあっ！！　ひぎいっ！！」

幼女は顔を全開に顰めて泣き叫ぶが、少女の膝蹴りは連続で続けられる。

何度も何度も……しまいに小便を漏らしてまで泣き叫ぶ幼女。

しかし女子中学生は未だに辞める気配はない。

「オラオラァ！！　何ションベン漏らしてんだよっ！？　悪魔のクソガキめ！　マンコぶっ壊してやるよ！　恥骨バラバラに砕いたらブッといチンポも入るだろうが！？　ああっ！？」

とても女子中学生とは思えない口調で５歳の幼女の性器をズタボロにしてゆく。

「どれどれ？」

『グチュ……ぐちゃぐちゃ』

咲良は指先を数本、幼女の膣口に差し込み、開いたり閉じたりして恥骨が砕けているかどうかを確認する。

「うん！　前後左右によく開くな。恥骨バラバラだ！　コレなら入るぜ」

「んぎいいいいっ！！　痛いいいいいいっ！！」

「マンコに指とかチンポ突っ込まれて気持ちよく感じる年頃になる前に死んじゃうなんてお前も哀れだよな美奈……」

やがて血まみれになった幼女の性器は、確実に私の勃起したペニスにあてがわれ、ゆっくりと挿入されていった。

「や、やめろっ！　可哀想じゃないかこんなこと！？　おいっ！！」

「ほうら。恥骨砕いてやったからこれでチンポ入るだろうが？」

『ズブ……グチュチュチュチュチュ』

「ピギィイイッ！！　ヒャアアアアアアッ！！」

激痛に奇声を上げる幼女には申し訳ないが、勃起時に１３センチはある私のイチモツは、確実に幼い女の子の膣内へ根元まで挿入されてしまった。

幼い子宮を激しく抉り傷付けた。

「う、す、すまない……私の意思ではないんだ！　許してくれ……」

咲良とかゆう中学生は幼女のお尻を抱え上げて激しく膣内への出し入れ運動を続ける。
他二人の女子中学生と黒髪ロングの小学生の女の子は嘲笑うかのように一部始終を傍観していた。
流石にこの速度でピストン運動されてはもう我慢できなかった。
こともあろうに５歳の幼女の膣内へ中出ししてしまう羽目になるとは私自身夢にも思っていなかった。
例え妻と娘の仇の娘とはいえ……。

「ほらほらあっ！　美奈のマンコでオッサンをイかせてやるんだよっ！？　ほらあああっ！！」

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「痛いいいっ！！　死ぬううううっ！！　美奈、死んじゃうううっ！！いやああああっ！！」

「ケツの穴パクパクさせてんじゃねーよ！あはは。もっともっと激しく腰振るんだよっ！　ほらほらほらあっ！」

『バコバコバコバコバコバコバコッ！！』

「うっ！イくっ！……うううっ！！」

『ドピュっ！！　ドピュピュピュピュピュピュウッ！！』

「痛ああああいいいいっ！！　ひぎいいいいっ！！」

「ごめんっ！！　うわあああっ！！」

思わず大量の精液を幼女の膣内にぶちまけて叫んでしまう私がいた。

「ひ、ひいいいいい……痛いよぉ、痛いよおおおお……わーんわーん！！」

咲良とかゆう中学生は、泣き叫ぶ美奈とかゆう5歳の幼女を私から引き離し、割り箸を二つに割る。
何か食べるつもりかと見ていると、片方ずつ幼稚園児の鼻の穴にそっと差し込み始めた。

「んんんっ！？痛い……」

「痛い？　じゃあコレは？」

『ズガッ！　ガシュッ！』

「ぎひゃあああっ！？」

『ブシュウウウウッ！！』

左右の割り箸を二回続けて掌で思いっきり突き上げて、幼女の鼻の穴の奥を突き破る。

凄まじい量の鮮血が噴き出した。

「な、なんてことをっ！？　酷すぎる！！」

『ドカッ！！　グシャッ！！　バキッ！！』

「ひぶぶぶぶうっ！！」

今度は拳で幼女の顔面を殴り続ける中学生。
泣き喚こうが容赦なく続けられて、歯は前歯が全て抜け落ち、唇は上下とも裂けて、鼻の骨もバラバラに粉砕された。

涙と鼻水と切り口からの血と鼻血……。

見るも無惨な顔になる。
腫れ上がってボコボコになった顔は、とても5歳の幼女とは思えないほど痛々しい。

「ふえええええんっ！！　んぎいいいいいいっ！！」

必死で泣き続ける幼稚園児は小便を勢いよく噴き出させていた。

「良い顔になった。そのボコボコの顔で莉央にマンコグチャグチャにされちまえ。さぁ地獄へいくぞ？」

思いっきり股を開かせて小学生らしい女の子の前へ運んでゆく。

「右手と左手の中指と薬指をマンコに入れて……と。全開に開かせる！　えいいっ！」

「んぎいいいいっ！！」

「我慢しろ歪に腫れ上がって顔面妖怪のクソガキめ！　莉央、これくらいマンコ開いたら大丈夫か？」

「うん。恥骨まで砕かれてブヨブヨになったマンコが全開に開いて子宮まで丸見えだよ。そのままパックリ開いてて下さいね」

え？　縦笛を取り出したぞ？
何をする気だ今度は……？

「妖怪みたいな顔になって処女膜無くなった幼女のマンコなんて全く価値がないんだから！　こうしてやる。えいっ」

『グボッ！！　ズチュウッ！！』

「ひっ！？　ヒャアアアアッ！？」

『ズボボボボッ！！　バリバリバリッ！！』

「ぎゃあああああっ！！　痛ったあああああっ！！」

私は目を疑った。
黒髪ロングの小学生らしい女の子は、縦笛の吹き口を幼女の性器に押し当てて、そのまま全て埋まるほど突っ込んでしまった。
ドクドクと真っ赤な血が幼女のワレメから噴き出してくるのが見える。
鼻からもいまだに大量に血が噴き出し続けていた。
私のペニスで傷付いていた子宮は更に激しく硬いもので抉られ、グチャグチャになってしまったみたいだ。
「わあっ!?　バカッ!!　そんなに深く突っ込むと死んじゃうぞ!!　やめてやれえっ!!」
『バチュッ!!　バチュッ!!　バチュッ!!　バチュッ!!　グリリ……グボグボ!!』
「ピギィイイイイイイイイッ!?　ひぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃあっ!!!!」
信じられないことに、入れるだけでも激痛なのに激しく出し入れするピストン運動を何度も何度も繰り返す少女。
「心配しないでください。この子は本日死んじゃいますから」
根元まで縦笛を捩じ込んでグリグリとミンチになった小さな子宮

を掻き回すと、ようやく手を離す少女。
　さらに咲良の膝蹴りが何度も股間を襲う。

『ドカッ！　グシャッ！！』

「ほらあっ！子宮だけで済むと思うなよクソガキッ！！　その奥の内蔵まで縦笛蹴り込んでグッチャグチャにしてやるっ！！　ほらあっ！！」

『ドカッドカッ！！……グシャ！！　グッチャ！！……バリッ！！バリバリッ！！』

「あぎゃああああああっ！！……ガクンッ！！　ビクビクビクビクッ！！」

　白目を剥いて大きく口を開けて涎を垂らしながら失神する幼女を見ていると、注射で無理矢理勃起させられていた私のイチモツも萎んできた。

　ようやく解放されたかと思えば痛み止めの注射とかゆう代物を幼女に打ち、再び私の太腿にも注射を打ち込む莉央とかゆう小学生。
　悔しいが再度いきりたつ自身のイチモツであった。

「美奈ちゃん。目が覚めた？　痛み止めの注射打ってあげたよ？ありがとうございますは？」

「んあ？　ひっ！？　もう許してぇぇぇえっ！！　わーんわーん！！」

「あはっ！　酷い顔になっちゃってるねぇホント……」

マンコからドクドクと血を流しながらも、痛み止めの注射のせいで凄惨な目に遭っている自分の性器に全く気が付かない幼女の頭を鷲掴みにしてこともあろうか私のイチモツを咥えさせる少女。

「おいっ！　莉央とかゆうお前っ！！　鬼畜すぎないかっ！？」

私の怒号を無視して幼女の頭を前後に激しく振り付ける少女。

「ほらクソガキ！　歯も抜け落ちて全部ないんだから安心して舐めてやるんだ」

「んんんっ！？　あうあう！　おおおおううっ！！」

『チュバチュパチュパチュパッ！！』

「うっ！　またしても済まないっ！！」

『ドピッ！！……ドピュピュピュピュピュウッ！！』

「んんんうっ！？……ごっくん！」

またしても射精してしまう羽目になる。
5歳の幼女の膣内と口内に射精することが私の人生で起こるとは……。
もう死んで償いたい。
本気でそう思っているとそれを悟ったのか咲良とかゆう中学生が呟いた。

「心配しなくていい。お前もガキの次に送ってやるから……あの世でも美奈とかゆうクソガキをレイプしてやれよ？」

「くっ！？　バ、バカを言うな！　私の意思ではないんだ！！　こんなことしてタダで済むと思ってるのかお前ら！？　鬼畜の所業だぞ！？」

口から精液を垂れ流しながらベッドに拘束される幼女。
2メートルはあろうかとゆう鉄の槍を取り出し、幼女の背後へ回り込む莉央とかゆう小学生。
ゆっくりと研ぎ澄まされた冷たい鉄製の切っ先を股間へ近づけて、今度は小さな幼女の菊門へとあてがう。

「ここかな？　美奈ちゃんの汚い肛門は？」

『プスッ！！』

「ひぎいいっ！？」

「なっ！？　も、もうやめてやってくれえっ！！」

あまりにも哀れな幼女に私は本気で同情し、感情を取り乱してしまっている。

「さぁ美奈。あなたの処刑を開始します。その小さなお尻の穴から口まで串刺しにしてあげるから……覚悟しなさいね？」

「ひっ！？　やめてくださいっ！！」

「だめ。ほうら。どんどんイヤらしい穴に入っていくよぉ～？　うふふ♪」

『ズブブブブブ……』

「いやあああっ！！　痛いいいいいっ！！　死にたくない死にたくない死にたくないいいっ！！　許して下さいお姉ちゃんんんっ！！」

「あんたみたいな鬼畜なクソガキにお姉ちゃんとか呼ばれたくないわね。ほうら……ゆっくり飲み込みなさい。すぐには殺さないんだから」

『ズブブブブブ……バリッ！！』

「ぴぎいいいっ！！！！」

遂に直腸の突き当たりのＳ状結腸を突き破る菅野莉央の竹槍。

「どお？　一度目の激痛は？」

頬を赤くしながら見守る中学生の三人。

小野メグとかゆうショートカットの子は、沸騰させておいたヤカンを持ってくる。

まさか……そのまさかであった。

肛門を串刺しにされながら頭から沸騰した熱湯を浴びせかけた。

「ぎゃあああああああああっ！！！！」

咲良に殴られて歪に変形した幼女の顔面は、溶けるように崩壊してゆく。

「あは！ブヨブヨになっちゃった！溶けるみたいに皮膚が剥がれてるよ！」

『パンパンパンパンパンパンッ！！』

火傷した顔面を平手打ちで叩きまくると、剥がれた顔の皮膚が辺

りに飛び散った。

「ケツの穴串刺しと私の熱湯刑はどっちが痛かった？」

小野メグの問いには答えられない幼女。
ボロボロと髪の毛も抜け落ちて、もはや妖怪よりも醜くなってしまった。

こんな可愛い少女たちが何て残酷なことをする？
私はこの期に及んでもいまだに現実を受け入れられないでいた。
やがて残酷な女子小学生は、幼女の肛門から口までの貫通刑を成し遂げようとしている。

「美奈。だいぶ苦しんだかな？　顔面凶器どねその顔は手…あはは。可哀想だからぼちぼち逝かせてあげよっか？　せーの……ほらあああっ！」

『グリッ！……ズブブブブブブ！！……バリバリバリバリッ！！』

「ぴぎいいいいいいいっ！！！！　はううううううっ！！！！」

『ぶしゅうっ！！』

口から竹槍の切っ先が内臓の一部を絡めながら飛び出した。
限界まで研ぎ澄まされた鋭い切っ先は、簡単に幼女の身体を縦に

貫く。
ビクビクと激しく全身を痙攣させせながら目玉をグルグルと回しながら絶命する幼女を見た。

「あらあら……なにキモい顔して目ん玉グルグル回してんのぉ？　そんなリアクションくれたらウケちゃうじゃん。あはは！」

莉央は立ち上がって右足の裏で槍の柄を更に口から切っ先が飛び出すよう何度も蹴り込む。
グリグリと足の裏が肛門に当たるまで捩じ込んだ。
更につま先が直腸にまで食い込む。

「ほらほら……柄まで飲み込め。ん？　肛門からだけじゃなくぐちゃぐちゃになってるマンコからも血塗れの粘液垂れ流しちゃってるよ？　エッチな死に方だね～美奈ちゃん？　あはははは♪」

目を背けて歯を食いしばる私は、思わず泣いてしまっていた。

『グリグリッ！……グリングリン……』

「ほらほらほらぁ。醜い顔になった美奈ちゃま？　あたしの靴に汚い便着いちゃった。どうしてくれんのかなぁ？　あらやだ……子宮のミンチがドロドロと垂れ流れてきてる。ヤラシぃ～」

莉央は根元まで刺さった竹槍を、執拗に更に直腸奥深くまで右足

のつま先を捩じ込んで掻き回している。
もう既に絶命している幼女の口からは莉央の足の動きと同時に血の泡がボコボコと噴き出していた。

「あはは。まだ死体の内臓まで掻き回しちゃうんだ。無茶苦茶残酷でヤラしぃなぁ莉央ってば……。　ん？　オッサン……どうして泣いてるの？　あんたの仇の娘だよ？　残酷に殺すほどあなたには喜んでもらえると思ってたんだけど……せっかく死ぬ前に更に激痛をと思ってタコ殴りと割り箸刑まで加えてやったのに……」

咲良はそう言って首を傾げる。
残りの二人の女子中学生は私の拘束を解き始めた。
次は私の番か……。
勘違いで殺してしまった湯浅道弘の事を思えば気の毒で仕方がない。
好きにしてくれ。
もうどうなってもいいさ。
私は覚悟を決めた。

素裸にひん剥かれた私は少女たちから私は殴る蹴るの暴行を数時間受け続けた。
麻酔注射まで打たれたのか？
身体がまともに動かない……。
こんな小さな少女たちからやられ放題だなんて。
まぁどうせこの子たちは私を処刑するつもりだ。
自分の犯した罪を考えれば仕方がないことだろう。

「おい真子！　オッサンのアナル犯してやれよ？」

「ええっ！？　そんな趣味ないよ私は……」

「じゃあトドメを刺す勇気はあるんだな？」

「そんな……分かったよメグ……この極太張り形をペニスバンドに装着して……思いっきり犯すからトドメはあんたがやってよ？」

「あはは。分かった分かった！　じゃあ早く犯してやって！」

大野真子とかゆう女子中学生の拷問が始まった。
四つん這い状態でみんなから縛り付けられて、直径5センチはあろうかとゆう極太なシリコン製の何かを私の肛門に背後から突っ込んで激しく腰を振り続けられる。

「んぎゃあああああっ！！　ひいいいっ！！」

人生でこれほどの激痛を味わったことがあるだろうか？
私は大人気なく涙を流して肛門と直腸の激痛を味わい続けた。
拷問括約筋がメリメリと音を立てて裂けてゆくのが分かった。

「痛かったでしょ？　ごめんね」

そう言いながら大野真子とかゆう美少女は、私の肛門から血塗れ

のシリコン製のイチモツをゆっくり引き抜いた。
生温かい感触が肛門から内股へ流れてくる。
多分かなり出血しているのだろう。
肛門の内側からも外側からも……。
全身に電気が走るほどの痛みと戦っていると、今度は股間を誰かが蹴り始めた。
強制的に四つん這いにされて縛り付けられていたので嫌な予感はしていたが、これも肛門責めと何ら変わらないほど激痛だった。
『スパンッ！！　スパァンッ！！』
「ぐおっ！！　んぎいっ！！」
蹴られる度に奇声を上げてしまう私だった。
情けないがあまりの睾丸の激痛に、小便を漏らしてしまった。
「メグ、そのくらいにしとかないとキンタマ潰れちゃうよ？」
「あはは！　何言ってるの真子……コイツの金玉は二つとも潰すんだよ。百回くらい蹴り込んでから血の精液チンポから出てきた頃に……トドメの全開キックで潰しちゃうの」
『ズドオッ！！！……ドカアッ！！』
「ぐはっ！！　ひぎいっ！！」

「あと８０回蹴ったら潰してやるからね？　それまで潰れそうで潰れない中途半端な地獄を味わいなさい」

『ズドンッ！！……パァンッ！！』

「うふふ。変な音……蹴るたびに金玉袋のシワが動いてキショ♪」

小野メグとかゆうショートカットの美少女は、延々と私の睾丸を足の甲で激しく蹴り上げ続けた。

蹴る力加減によって色んな音が鳴るのを楽しんでいるみたいだった。

『ズドッ！……パコンッ！』

「ひぎいっ！！……があっ！！」

私は睾丸の激痛に全身が小さく震え出すのを感じた。

「も、もうやめて……潰れる……」

「潰されないと本気で思ってた？　コレで９８回。えいっ！」

『ドカアッ！！』

「ぐおっ！！」

「さてさて。あと二回で１００回だよ。よく耐えたわオッサン。右の小さな玉からいくね？」

『ドォンッ！！……ぐちゃあっ！』

中学生の足の甲がまともに私の右側の睾丸を捉えた。
瞬時に音を立てて潰れてしまったことを悟った私は、泡を噴きながら悶え苦しむことになる。

「んぎいいいいっ！！　ぶくぶくぶくぶく……ううう」

『ブチ。ブリリリブリブリ……』

「やだぁ～。小便だけじゃなくウンチまで漏らしちゃったよコイツ……まだ１００回目の左のキンタマ残ってるのに……ほら、もっとお尻突き上げろオッサン」

足の甲を股間の下側に差し込み、ポンポンと軽く蹴り上げてトドメの体勢を作るメグだった。

『シュンッ！！……スドオオオンッ！！！！』

「ごっはあああああっ！！！！」

１００回目のショートカットの子の蹴りは、今までよりも最強に

強烈だった。
　ワンテンポ遅れて左の睾丸の潰れる音がした。

『グシャアッ！！』

『ビクビクビクッ！！』

「あわわわわわ！？」

　下半身だけが激しく痙攣してかなり恥ずかしい動きを繰り返している。

「やだぁ。チンポから血の粘液垂らしながらケツが痙攣しちゃってる……そんなに激しく上下に腰降るなよキンタマ潰れたくらいで……あははは！」

「メグさんお見事です。ありがとう」

　黒髪ロングの少女が私の顔を見下ろしながら中学生の次に近寄ってきた。
　小学生らしい女の子、菅野莉央とかいったっけ？
　コイツが一番美形だけど残酷なんだよな……。
　ロリコンなら大好きになるところだった……。
　こんな酷いクソガキなのに……。

　メス？

鈍く銀色に光るメスらしきものを持って私の股間をいじくっている。
股間は睾丸を二つとも潰されたことにより痺れて麻痺しているようだ。
まだ腰の痙攣は続いているが、小学生らしい子は私のお尻を鷲掴みにして固定した。

「はうっ！！」

次の瞬間、尿道に激痛を感じた私は恐る恐る振り返る。
四つん這いで縛り付けられているまま痙攣していたが、何となく何をされているかは分かった。
莉央とかゆう小学生は私の尿道に指を突っ込んで掻き回しているみたいだった。

「んがががが……痛い……やめ、やめてくれ……」

「そんな萎んじゃってたら簡単に膀胱まで届いちゃうよ？　私の人差し指……」

「ひいっ！？　やめてくれっ！　痛いいいっ！！」

な、どうしてこんなクソガキに赦しを乞うている！？
もう訳がわからなくなってきた。
好きにしてくれ……どうせ処刑されるんだ。
私の人生は今日終わりを告げる。

妻と……娘たちと家族だけでもう一度楽しく食事がしたかった！

「うう……おおう！　おおうっ！！」

号泣してしまっている？
何て恥ずかしいんだ。でも妻と娘たちの事を思い出せば思い出すほど泣けてくる。
私は思いっきり泣いた。
小学生と中学生の少女たちの前で泣き叫んだのであった。

「尿道責めの次は……こうしてやるっ！」

『スパッ！』

「ぐわあああっ！？」

泣く事を忘れるほどの激痛が股間に走る。
ふと見ると莉央とかゆう小学生の手には私のペニスが乗せられていた。しかも亀頭部だけ。
せ、切断されたのか！？　痺れるような激痛が股間に走る……何てこった……。

「そんなに悲しいの？　あのね、あなたのオチンチンを根元から切断しなかったのは何故だかわかる？」

菅野莉央の冷たく響く声に答えが出ない私。

「チンポは半分でも残っていればどうにか立ちションはできるでしょ？　メグさんに潰された金玉の処理もちゃんとしてあげるから安心して」

え？

無邪気な笑顔でなんちゅうことを言ってるんだコイツは……？

殺される人間に立ちションの心配はいらんだろ？

金玉の処理……袋の中でグシャグシャになってるんだぞ。どうするつもりなんだ……？

激痛に歯軋りしながらもふと疑問に思う私であった。

手際よく切断面を消毒し、血止めの注射を打ち、ガーゼでキツく包む莉央。

更にメスで陰嚢を切開……指を入れてキンタマ袋の内側を掻き回しているようだ。

「何の落ち度もないあなたが一度に妻と娘二人を失った。このことはとても可哀想だと思う。でも勘違いで殺された湯浅道弘さんはもっと可哀想だよ？」

睾丸の肉片を掻き出してから手際よく切開した陰嚢を縫っている小学生。

「う、うう。それはわかる。猛省します」

思わず被害者の湯浅道弘を思い、再び涙が出てくる。

「可哀想すぎるくらい哀れな坂口良平さん……そのことは一生深く反省して下さい。あなたの処刑はこれにて終了しました。睾丸を二つ潰されてオチンチンの亀頭部を失い、もう二度とセックスも射精もできないけど……生まれ変わったつもりで天寿を全うしてください」

え？
わ、私は助かるのか！？
いや、妻も娘もいない今、もう生きていても何も嬉しくはない。
死なせてほしい。
私は本気でそう思い、少女たちに土下座してお願いした。
殺してくれ……と。

背後に回り込んだ莉央とかゆう少女は、私の肛門に指を……いや、一本ずつ順番に突っ込んできて、最後には拳まで捩じ込んできた。
小学生の女の子の小さな手とはいえ、手首まで捩じ込まれたら激痛過ぎるほどの激痛だったが、命が助かる事を少しずつ有難いと思ってきている私がいた。

「もう会うこともないと思うから……最後にあたしの指で気持ちよくさせてあげる。フィストファックだよ？　拳ごと前立腺抉ってあげるから」

『グボッ！！　グリグリ……グリグリ……』

「うぐっ！？　な、なんか無茶苦茶気持ちいい！？　ぐううっ！！」

「イけっ！」

『グリッ！　グポポポ！　グププッ！』

「はっ！　はううっ！？」

『ドピュッ！！』

「前立腺セーエキ絞り出し刑。どうだった？　凄いでしょ？」

「はああうう……はぉ。はぁ。恥ずかしいことだが人生で一番の快感だった……亀頭部を失っているのに……」

「前立腺だけは残してあげる。ストレスたまったら自分でアナニーでもすることね……」

「アナニー？　何だそれは？　はぁ。はぁ。はぁ。はぁ」

本当に小学生かこの子……？
こんな小さな少女たちにここまで私がいたぶられるとは……。

その後のことは全くと言っていいほど覚えていない。
気がつけば警察病院の集中治療室にいた。
看護師らしい女性が部屋に入ってくる。

「お目覚めですか？　あなたの罪は全て国から免除がおりてます。これからはひっそりと犯罪を犯さずに大人しく暮らしてくださいね？」

「……うう。は、はい」

「拷問を行った少女が潰されてミンチになった睾丸を除去して縫合してくれています。ペニスの処置も尿道を上手に残すよう管を入れてくれてました。短いペニスになりましたが放尿には差し支えありません」

「は、はぁ。そうですか……警察とあの残酷な少女たちは繋がっていたのですね？」

「……想像にお任せします」

真っ白な天井を見上げたまま私は泣いた。
舌を噛んで死ぬ度胸もなかった私は……あの残酷な少女たちの情けに感謝して残りの人生を真っ当に生きる事を誓うのであった。

残酷処刑島に新たに二人の遺体が加わった……。

哀れすぎる男（後書き）

菅野莉央が藤堂長官に頼み込んで実現した助命処置。

無実の人を殺めた罪は拷問で償う事で無罪放免となった。

莉央の情により辛うじて繋げられた命を、坂口良平は寿命が訪れる１００歳まで繋ぎ続けることができたのであった。

窃盗の報い（前書き）

東部地方の南部に数年ぶりの大雪が振る。

拷問処刑人の中でも一際残虐な気性を持つ鬼頭美紅の通う中学生で、久方ぶりとなる私刑が行われようとしている。

窃盗の報い

かなり冷え込む極寒の冬が到来した。
一月。東部地方は珍しく大雪が降り、昼前からの降雪でかなり雪が積もり、雪道に慣れない東部の人々は各地で車での交通事故を起こしていた。
電車も止まり、あちこちで道路の通行止めが起こり、挙句には車を放置して歩いて帰宅する人も現れ、多くの人が疲れ果ててしまう厳しい一日となる。
そんな中、東部地方でも南部にある甲南中学校では、リンチを楽しむ女子たちの姿が……。

「角山彰文、及川奈緒子。二人はクラスのみんなに内緒で交際をしていた。ある者の通報によると、昨夜の放課後、部室でデートをした後、体育館の物置からバスケットボールを二人で合計二個……盗んで帰ったみたい。間違いないわね？」
「しょ、証拠はあるのかな？　ぼ、僕たちは窃盗なんかしないよ！な、なぁ及川？」
「う、うん！　私たちが付き合っていることは認めるけど……ボールなんて盗んでない……」
共学である甲南中学校は女子が男子を仕切っている珍しい風潮が

あった。
拷問処刑人である鬼頭美紅と、その親友である西村百合香、中田美佐子の三人が学校を支配していた。
二年生ではあるが、三年生の男子でさえ喧嘩で敵わない鬼頭美紅に、実質学校全体を仕切られていたのだ。
基本的に男子にイチャモンをつけて酷いリンチを楽しむ三人だったが、今回はカップルということで、男女一名ずつを詰問している状態である。
「バレー部の木田唯香ちゃんがね……忘れ物をとりに部室に帰ってきた時にね……あなたたちがボールを体育館から持ち出して黒いゴミ袋に入れるところをスマホで撮影してるの。その動画を木田さんがキャプテンの青木さんに転送して、あたしたちにも回ってきたってワケ。ようく見ておきなさいね？」
体育館の出入口には防犯のため一晩中点灯している蛍光灯がついている。
その真下で慌ててボールを袋に詰め込む二人の姿が映っていた。アップにされてまで撮影されたその動画は、少しボヤけてはいるものの、確実に角山彰文と及川奈緒子と識別できた。
「うっ！？　いつの間にそんな……」
「盗撮だなんて酷い！」

角山に続いて及川も叫び出した。

「唯香ちゃんの盗撮が酷いとか……よく言えたもんね？　盗んだ本人たちが一番悪いでしょう普通？」

鬼頭美紅が腕組みをしながら角山と及川の二人を交互に睨みつけながら問いただす。

「男子は角山以外全員グランド２０周！　先生はズルしないかどうか走る男子を監視していてください」

「は、はい」

怯えながら鬼頭美紅に返事する２５歳になる新担任の米田敬子。

校長から鬼頭美紅たち三人には絶対逆らわないよう警告されているだけに、かなり警戒してビビッていた。

相手が先生だろうが男子だろうが性的イジメ、拷問を敢行してくる旨を聞いていれば、歯向かう度胸などは出てこない。

男子たちは溜息をつきながら窃盗犯の二人を睨みつけながら嫌々ながらも教室を出てゆく。

元々クラスのみんなとはあまり関わらなかった角山と及川だけに、周りからの反応も冷たく、二人に味方する者は皆無であった。

ゆっくり走っても歩いても……かなりキツい運動となるグランド

２０周に駆り出していく男子生徒たち……。

「とりあえずクラスの女子全員から平手打ちといきますか？」

黒髪ロングの美少女、西村百合香が美紅に提案する。

続けて茶髪のポニーテールがよく似合う中田美佐子も口を開いた。

「その後は素っ裸にひん剥いてＡＶ撮影ね？　美紅ちゃん」

「うん！　それでいいかもね。殺しちゃダメだけど自殺を考えるほど痛めつけてやろう。じゃあクラス番号一番の青木さんから順番に二人の頬を叩いていってくれる？　手加減はいらないからね」

鬼頭美紅に命令された青木理保子がゆっくりと頷き、先ずは男の角山彰文の前に立つ。

「や、やめてくれっ！！　ごめんなさいっ！！　もう二度としないから！　明日ボールも家から持ってくるから！！」

「謝ったら済む問題ではないと思う。バレてから返すとかも論外だし……歯を食いしばってくれるかな？」

「やめ……」

『パァンッ！！』

「ぶはっ！！」

青木理保子はバレー部のキャプテンだった。

かなり強烈な平手打ちが角山彰文の左頬にヒットする。

そのまま横に移動して及川奈緒子の左頬も思いっきり引っ叩いた。

唸り声を上げながら二人のカップルは並んで左頬を押さえて震える。

「あらぁ～。顔面が歪に歪んじゃったわよ今！？　美紅ちゃんと変わらない破壊力だったんじゃない今の一撃は？　あはは♪」

西村百合香が右手で口を塞ぎながら笑顔ながらもおどけた顔をする。

二人目、三人目、四人目……どんどんと右から左から平手打ちをされ続けてゆく二人だった。

クラスの女子２０人全員からの平手打ちが終わり、西村百合香と中田美佐子も二人を本気で引っ叩く。

両頬を真っ赤にした角山は俯いて歯を食いしばり、痛みに耐えているが、女の方の及川奈緒子は余りの激痛にしゃがみ込んで号泣してしまう。

「まだあたしが残ってるんだけど？」

「鬼頭さん！……僕が及川の分も受けるから……それ以上その子を叩かないでやってくれないか？」

「……いいよ。でもその場合、正拳突きであなたの鼻っ柱をぶん殴るけど。それでもいい？」

目を見開き青ざめる角山。
バレー部キャプテンの青木理保子より強烈な破壊力を持っていることはだいたいながら分かっていた。
しかも拳で鼻なんて殴られたら……陥没骨折は免れない。

「うう……か、構わない。や、や、やってくれ……」

覚悟を決めた角山の前にゆっくり歩み寄り仁王立ちする鬼頭美紅。
指をバキバキと鳴らしながら睨みつけて、恐怖に怯える角山に更に恐怖心を上乗せする。

「やるなぁ角山っ！！　よっ！　色男っ！！」

「死んでも知らないわよ？」

両手を叩いて角山の男らしさに対してエールを贈る西村百合香の傍らで、本気で角山を心配する中田美佐子がいた。

窓の隙から極寒の隙間風が入る。
東部地方に存在する全ての中学校の内で、最もミニスカートで有名な甲南中学校の女子のスカートがヒラっと揺れ、一瞬美紅の白いパンツが見えた。
喧嘩の強さもダントツだが、見た目も学校一の美少女といっても過言ではない鬼頭美紅。
恐怖に怯えながらも垣間見えたパンチラに目を大きく見開いてしまう角山彰文。

「おっ！」

『ドカッ！！……グシャグシャ！！』

「ぐわあっ！！！！」

目の保養を得た次の瞬間、ツインテールが斜めになびいた。
その直後に襲う、顔面が吹っ飛んだかのような衝撃。

「ぐおううううっ！？」

『ドクドクドクドク……』

両手で鼻を押さえるが、夥しい量の鼻血を止めることは出来なかった。
鼻の骨が折れて根元まで陥没してしまっている。
跪きざまに思わず涙が出てくる。
まさかの男子生徒の号泣ショーであった。

「うおおおおっ！！　痛いっ！！　痛いよおっ！！　ううううっ！！　わーん！　わーん！」

四つん這いになって崩れ込み、美紅の足元に土下座するような体勢で泣き崩れた。

冷たく失笑しながら見下す美紅。
百合香と美佐子、クラスの女子たちも全員呆れ顔で角山彰文を見下す。

「そのザマじゃあ二発目は無理かな？」

「うおおおんっ！！　うおおおおおんっ！！　痛いいいい……もう無理ですっ！　ゆ、許してくださいいっ！！　わあああああんっ！！」

美紅を含むクラスの女子たち２３人が見守る中で美紅に土下座をしながらも許しを乞う絵面が展開された。

「だってさ及川。可哀想だけどあんたにも顔面パンチを受けてもらうから」
「ひいっ！？　嫌だ！　死ぬ……私あんなの受けたら絶対死んじゃうっ！！　鬼頭さんお願いっ！　やめてっ！！」
美紅は土下座して号泣を続ける角山の後頭部を右足の裏で踏みつけ、グリグリと額を床に擦り付けさせる。
「おーい、彼女をあんなに泣かせちゃって。あんたは彼氏失格だね？」
「ううう……そんな、ぼ、僕は及川と別れたくない……」
泣きながらも及川奈緒子に対する恋は本気だとアピールする角山彰文であった。
美紅と目を合わせる百合香と美佐子。三人は軽く頷くと、美佐子は角山のズボンを脱がし始めた。
「わあっ！？　な、何を！？」
「じっとしてなさい！　大人しく命令を聞いてたら彼女への顔面パンチも……あなたへの顔面パンチも中止にしたげるから」
「そ、それは有難い。あんな痛いのはもう嫌だ……」

ベルトを外してゆっくりと太腿までズボンを脱がすと、一気に足首までずり下ろす。
つま先に絡んでいる部分も綺麗に取り去り、完全にパンツ一丁の姿にされてしまう。
丸めて二階の窓から校庭へ投げ捨てる美佐子。
続いて百合香がしゃがみ込んで四つん這い状態のパンツ一丁姿にされた角山のトランクスに手を掛ける。
「ひっ！？　そ、それだけは脱がさないでっ！！　彼女も見てるんだぞっ！？」
「はぁ？　まさかズボン脱がされてパンツは無事で済むと本気で思ってたの？　ホント能天気な男ね……それにあんた、普通は若い男子ってボクサーパンツじゃない？　トランクスって……オッサンかっ！？」
『ズルリッ！！』
「ひゃあああっ！？」
オッサンか！？　と、叫びながら同時に膝までトランクスをずり下ろす百合香。

「きゃあっ！？」

及川奈緒子がビンタでみんなから真っ赤にさせられた頬を、更に真っ赤にさせながら両手で目を塞ぐ。

「彼氏のケツ見たくらいで何を大袈裟な……ほら、膝少し上げろ！完全に脱がすから」

「や、やだ……恥ずかしい……」

『ズドオッ！！』

「きぴいっ！？」

中田美佐子がポニーテールを揺らしながら背後から股間を蹴り上げた。
睾丸をギリギリかわしたつま先は、肛門にまともにヒットする。
睾丸の激痛よりはマシだったが、肛門自体が破裂したかのような痺れるような激痛が角山を襲う。
四つん這い状態のまま横に転がって肛門を押さえて奇声を上げる。
その隙に百合香は完全に足首までパンツを脱がせ、足首から剥ぎ取った。

「サンキュ美佐子♪」

「うん。これで完全に下半身スッポンポンだね！」

教壇の上に下半身のみ素っ裸で立たされた角山彰文は、２３人の女子から陰部をじっくりと観察される。
２４人目の女子……及川奈緒子は目の前に正座させられて、一番近くで無理矢理彼氏のイチモツを観察させられていた。
勿論、角山と付き合い始めてから彼のイチモツを見るのは、初めてのことであった。

恥ずかしくて目を背けようものなら、青木理保子の強烈なビンタが顔面を襲う。
結果何度も目を逸らしたお陰で、更に五発くらい余分にビンタを喰らった及川奈緒子は、諦めて彼氏のペニスを泣きながらも凝視していた。

教室のドアがいきなり開き、担任の米田敬子先生が走り込んでくる。

「大変！　岩城君が１８周回目で雪で滑って倒れ込んじゃって！　苦しそうにゼェゼェとゆう荒い息をしてるの！　救急車呼ばなくちゃ！」

下半身スッポンポンで、教壇に一人のみこちら向きで立たされている男子生徒……その目の前に正座する一人の女子生徒……更に後ろからその異様な絵面を観察する２３人の全女子生徒たち。

「え？」

思わず倒れた生徒のことが頭から飛ぶほどの衝撃を受けて大きく口を開けて立ち尽くす米田先生。

「そんなの他の先生がきっと見つけて面倒みてくれるから気にしないで！　そんなことより……この窃盗犯の角山彰文の私刑を手伝ってもらおうかな？」

いきなり美紅に手を掴まれて教壇に連れて行かれるハメになる。

「このリコーダーを角山のお尻に突っ込んでやって」

「えっ！？　そ、そんなこと私にできるはずがないじゃないっ！？」

立たせられている角山のペニスをチラ見して頬を真っ赤にしながら首を何度も横に振る女教師。

「……そう言えば米田先生ってまだ独身でしたよね？」

「そ、それが一体？」

西村百合香は慌てたじろぐ先生の隣に寄り、膝丈までの地味なスカートを捲り上げる。

中田美佐子は両手を後ろから羽交い締めに。
滑らかな連携プレーの直後、パンツの中に美紅の右手がスルッと入り込んだ。

『ズブ！』

「ヒャアッ！？　や、やめ……やめなさいっ！！」

中指の第一関節まで膣口に差し込む美紅に、悲鳴のような奇声を上げる米田先生だった。

「あたしが調べた結果……先生ってまだ処女ですよね？」

「うっ！！　そ、そ、そんなことはあなたには関係が……」

「断ればあたしの中指で先生の処女膜を突き破っちゃいます。その上後ろの穴も大便垂れ流しになるほど激しく拡張調教しちゃいますけど？」

「ひっ！？」

数秒俯いて悩んでいたが、美紅たちは本気でやると確信した米田敬子は、リコーダーを手に取ると、角山の背後に回り込んだ。

「ごめんね角山くん。私の意志じゃないから勘弁してね？」

「ええっ！？　そ、そんな！　そんなもの突っ込んだら痛いよっ！？　やめてよ先生っ！！」

「及川さんもごめんなさい。あなたの彼氏にこんなことしちゃう先生を許してね？」

「や、やめてあげて先生っ！！　そんな酷いこと……お願い先生っ！！」

躊躇いながらもリコーダーの後部にある足部官辺りを硬く握り直した。
百合香と美佐子が挿入しやすいように角山の両脚を全開まで開かせて、更に臀部の肉を各々が手で掴み、左右に思いっきり引っ張って押し開かせた。
くっきり姿を現した男子中学生の小さな菊門は、女子中学生たちの手により更にパックリ押し開かれ、少し直腸までもが見えてしまっていた。

「ほらっ！　奥の直腸まで見せろ！」

「肛門ご開帳っ♪　先生、これで突っ込みやすくなったでしょ？ほら、早く！」

百合香と美佐子はスケベそうな笑みを浮かべて頬を紅潮させせる。

「そ、それはそうだけど……ほんとごめんなさいっ！」

『つぶっ！……ずぶぶぶぶっ！！』

「んぎいっ！？　熱いいっ！！」

口で咥える側の斜めになっている部分の吹き口を、一気に肛門へ突き刺す米田敬子。
ジョイント部分まで直腸内に瞬時に飲み込ませた。

「えいっ！　ここ？　えいいっ！！」

『グボボボッ！！』

「んぎいいいいっ！！　痛いいいいいっ！！」

どんどんと奥深く差し込んでいく米田先生を泣きながら睨みつける及川奈緒子。

そっと美紅が先生の手を止めた。

「そこまででいいです。S状結腸貫いちゃったら後の処置が面倒くさいから」

「も、もうコレ抜いていいの？」

「それはダメです。少し奥まで突っ込み過ぎてますから、リコーダーのジョイント部分が見えるまで少し抜いて、その辺りを激しく掻き回してみて下さい」

「数センチ抜いて……ジョイントが見えたわ。この辺りで……こうかしら？」

『グリ！　グリン！』

「んんっ！？」

美紅の指摘した位置はちょうど前立腺のある部位であった。
激しく前立腺をリコーダーで掻き回され、人生初の快感に腸液を垂れ流してしまう角山彰文。

「あううっ！？　あはあああっ……」

「きゃっ！？　何かネバネバした液が垂れてきた！？」

「腸液だよ。コイツ、先生にケツ穴掻き回されて感じちゃってるの！」

「え？　そ、そうなんだ……そんなとこ気持ちいいんだ……痛くなければ良いんですが」

「痛いどころか気持ち良くてヨガってますからそのまま続けてやってください」

美紅に指導されながらも男子生徒の肛門をひたすらリコーダーで掻き回す女教師。
これはこれで異様な絵面であった。
「あははは！　彼女の前で腸液垂れ流してヨダレまで垂れ流しちゃってるよ？　エッチねぇコイツ！」
百合香は大喜びしてみせる。
百合香と美佐子は更に左右にお尻の肉を押し開きながらリコーダーの出し入れをスムーズにさせた。
前立腺の激しい刺激と、人生で初めての変な快感に、思わずペニスを勃起させてしまう角山だった。
「私で良かったら最高のショーを彼女に見せてあげるわ」
そう言いながら百合香は空いている左手で角山のイチモツをギュッと握り締め、ゆっくりとシゴき始めた。
「うっ！？　うううんっ！！」
肛門とペニスの余りの気持ちよさに思わずヨガリ声をあげてヨダ

レを垂れ流す角山だったが、その光景を見せつけられている彼女である及川奈緒子は下を向いて目を背けて泣きじゃくる。

背後からバレー部キャプテンの青木理保子がそっと歩み寄り、髪の毛を掴んで顔を引っ張り上げる。

「今から西村さんがあなたの彼氏を射精させてくれるそうだよ？　ちゃんと見てなさい」

「いやっ！！　どうしてクラスメイトにそんな酷いことが出来るのっ！？　あなたたち頭どうかしてるよっ！！」

青木理保子は、正座している及川の髪の毛を後方に引き、仰向けに引き倒した。

そのまま前に回り込むと、短いスカートの下に足を滑り込ませ、ガッチリ両足首を掴むと、パンツ越しにオマンコへ足裏を押し付けた。

「汚いマンコはここかしら？」

「ひっ！？　や、やめ……」

『ガガガガガガガガガガガッ！！』

「んひいいいいいいいいいっ！！」

小陰唇と陰核が同級生の足の裏で激しく擦り付けられる。
電気アンマとゆう幼稚なイジメによって……。

「ほらほらほらほらあっ！　蹴り込まないでマンコにくっつけたまま振動させる痛くない方の電気アンマだよっ？　気持ちいいでしょ？　ほらほらほらほらっ！」

少しは気持ちよかったが、流石に同性の女子に擦り付けられても興奮するまではいかなかった。

「んんっ!?　んんんんっ！！　私のアソコが……なんか変な感じっ!?　や、やめてえええっ！！」

その頃、百合香の手コキ速度はマックスになっていた。

『シコシコシコシコッ！……』

「うううううっ！　うわああ……」

「ほうら、女教師にアナル掘られながら同級生の女の子に手コキされて……彼女の眼前でイきなさいっ！！」

『シコシコシコシコッ！……シュコココココココッ！！！！』

超高速に達した百合香の手コキに、ついに限界を迎えた角山彰文は、まだエッチもした事もない彼女の目の前で、無理矢理他の女性たちによって射精させられるのであった。

「んんんんっ!?　き、気持ちいい……いやだ、うわあああああっ!!」

『ドピュッ!!　ドピュピュピュピュピュピュピュピュウッ!!』

同級生に激しく電気アンマされながら彼氏の射精を見せつけられた及川奈緒子は、口を大きく開けてヨダレを垂らしながら余りのショックに意識を失ってしまう。

「まだキスしかした事なかったのに……第三者によって大切な角山くんの射精を……見せつけられちゃうなんて……ひ、酷い……ガクッ!」

「鬼頭さん、及川奈緒子が気絶しちゃった!」

「あはは。それほどショックだったか……だけどまだAV撮影が終わってないんだけどね」

美紅の指示で、青木理保子と木田唯香のバレー部の二人が及川奈緒子の服を脱がせてゆく。

「スッポンポンにひん剥いたよ鬼頭さん」

「ありがとう。あとは百合香ちゃんとあたしでやるから」

素っ裸で気絶したままの及川奈緒子の両脚を開かせて、生の性器に運動靴を履いたまま足の裏を密着させる百合香。

「私の電気アンマはね……理保子ちゃんみたいに優しくないわよ？」

『グリ……』

強く足の裏を性器に押し当て、大陰唇がかなり内側にめり込む。

「せーの……」

「んあ？」

ようやく大陰唇の痛みで目を覚ます及川奈緒子だったが、次の瞬間、百合香の地獄の電気アンマが始まる。

「んあ？……じゃないわよ！　ホラァッ！！」

『ドカッ！！　ドカッ！！　ズドッ！！　グシャッ！！』

「ひんぎいいいいいいっ！！　痛いいいいいいいっ！！！！」

密着させて振動させる青木理保子の電気アンマとは違い、一回一回が思いっきり蹴り付けるタイプの百合香のソレは……まさに地獄の激痛であった。

一回一回足の裏を５０センチほど離して蹴り付ける。

再度５０センチ離しては思いっきり蹴り付けるの繰り返し。

数回で大陰唇と小陰唇がボロボロになり、少女の股間は血まみれとなった。

「痛いっ！　痛いよおっ！　やめてっ！　ひいいっ！！」

「ほらっ！　マンコ壊してやるっ。えいっ！　えいっ！　それえっ！」

『グシャッ！！　ドカッ！！　ズドンッ！！』

泡を噴いて再度気絶してしまう及川奈緒子。

オリモノと血と粘液が混じったゼリー状のモノが百合香の足の裏から奈緒子の膣口まで糸を引いている。

「ヤラシ～♪　変な液垂らしちゃってぇ～。まだまだ終わらないいん

だから。えいえいえいえいっ！　それそれそれえっ！」

『ドガガガガガガガッ！！　ドカッ！！　グシャッ！！』

目にも止まらない速度で激しい打撃系の電気アンマを続ける百合香に、クラスの女子たちは目を背ける者が数名出てきた。

百合香の足の裏が性器を直撃する度に頭と胸までもが激しく上下に揺れていた。

散々蹴り込んで破壊された性器は、もう膣口の穴が微かに識別できるレベルである。

裂けた小陰唇の肉片が肛門を伝って床にベチャベチャと落ちていた。

「もうあたしと美佐子の出番なさそうね？」

「はは……百合香ってここまで残酷だったんだね……」

美紅と美佐子はもう百合香の責めで終わりにしてあげようと決意を固めるのであった。

「あはっ！　楽しっ♪　ここが膣口かなぁ～？」

先程角山の肛門を犯し続けた及川奈緒子本人のリコーダーを、バトンのようにクルクル回すと、一気に血まみれの膣口へぶち込んだ。

「えいっ！」

『ズドッ！……グリン！……バリバリッ！！』

かなり深く突っ込んで……手首を回すと、瞬時に処女膜が破かれた。

「オマンコは奥の奥までタダじゃ済まさないんだから……ほらほらあっ！」

『グボッ！！　グチャアアアッ！！』

処女膜のみではなく、子宮までもがリコーダーの吹き口で抉られ、ミンチにされた。

再び目を覚まして奇声を上げるが百合香は、膣道を掻き回すことをやめない。

「ぎゃあああああっ！！」

「もう赤ちゃん産めないね～？　私のこと一生忘れないでしょう？

うふふ……覚えとけよぉ～。まだまだまだまだ終わらないよっ」

一気に血まみれのリコーダーを膣から引き抜くと、そのまま肛門にまでもぶち込む百合香。

「後ろも……犯してあげちゃう。大サービスだよ？　ほらほらほらぁ」

『ズポンズポンズポンズポンッ！！』

激しく15センチほど入れては抜くピストン運動を繰り返す。肛門括約筋が悲鳴をあげ、激しく鮮血が噴き出した。

「ばぎゃあああおおおおうううううんっ！！！！」

「やだ～。汚い血を私の脚にへり掛けないでよ……お疲れ様。このアナル責めで拷問やめてあげる。ありがとうございます百合香様って言いなさい」

「ご、拷問をやめて頂いて……あ、ありがとう……ございます。もう許してくだ、くだ、さい……百合香……さま」

「よく言えました。抜いてあげる」

ゆっくりと肛門からリコーダーを引き抜く百合香。

便と腸液と血液の混じった粘液がトロトロと垂れ流れてくる。

「うふふ。絵面がエッチ過ぎるぅ～♪　あ、言い忘れてたけど。最後にココ潰しといてあげるね？」

先の尖ったタイプのペンチをポケットから取り出すと、先端で確実に陰核を挟む百合香。

「ぎゃあっ！？　そこだけはやめてええっ！！」

「膣道でのジースポットオナニーは出来るけど……陰核オナニーは一生出来なくなっちゃうわね。痛みは最短で……一気にやったげるから安心して。それっ！」

『ギュッ！……ブチブチ……』

「ぐわあああああああっ！！！！」

「陰核潰しの刑、完了！　更に……引きちぎっといてあげるサービス付き。えーと……一回ひねって……えいっ！」

『グリン……ブチィッ！！』

「ぴきいっ！！！！」

『ガクン……ぶくぶくぶくぶく……』

白目を剥いて泡を噴きながらまたしても失神する及川奈緒子。
小便が勢いよく尿道から噴き出す。

「美紅ちゃん、ごめん、コイツのクリトリス引きちぎっちゃった……後処理お願い」

「もう……縫合とか治療行為は莉央ちゃんほど上手くないんだから……やり過ぎだよ百合香ちゃんってば……ホント処刑人になっちゃあら？」

「てへへ……拷問ってついつい楽しくて……でも最後に人を殺しちゃうのはやっぱ無理かな……ごめん」

意味のわからない奇声を上げるほど地獄の激痛を味合わされた及川奈緒子は、西村百合香の顔を一生忘れることは出来ないトラウマとなってしまった。

「ついでにコイツの尿道に針金突っ込んでいいかな？」

「もうダメ！　及川の拷問はこれにて終了だからっ！　また目を覚ましたら激痛でうるさいから麻酔も数発打っとかないといけないし……」

「はーい！」

授業までもキャンセルして延々と続けられた二人の私刑は、夕方には終了となった。

「ズボンは校庭で雪に埋まっちゃってるし……パンツは記念に貰っておくから。下半身スッポンポンで家に帰りなさい」

「グス……グス……」

泣きながら米田先生によって分泌させられた腸液と、百合香によって射精させられた精液を、股間からティッシュで拭き取りながら女生徒たちによって元に戻された席に着く角山彰文。

何度も気絶していた及川奈緒子もまたもや目を覚まし、泣きすぎて真っ赤になった目を擦りながら席に着いた。

スッポンポンのままで股間は前も後ろも、外側も内側も……百合香によって血まみれにされていた……。

鬼頭美紅によって拷問処刑で使う強力な麻酔を全身に何発も打たれた為、下半身が微かに痺れる程度の痛みが残るだけの及川奈緒子であった。

「及川奈緒子。あたしの前に来て四つん這いになりなさい」

「は、はい。もう痛いことはしないでください鬼頭様」

「礼儀もわかってるじゃん。良い子なってきたわね。クリトリスと子宮は切除しちゃったけど……お詫びに気持ちよくさせてあげる」

「え？痺れて下半身の感覚がないから……」

「大丈夫よ。膣道だけは感じる特殊な麻酔だから。ほら、お尻を突き上げなさい」

「は、はい」

『クチュ……ズチュズチュズチュズチュ！！』

中指と薬指を背後から膣に突っ込み、激しくジースポットを掻き回す美紅。

「ん！……んあ？」

『クチュチュチュチュチュチュチュ！！』

「ほら、イけ！」

「あっ！　あんっ！　なんか変な感じ！？　んんんっ！！　あっはあああんっ！！」

『ブシュウウウウッ！！……ガクガクガクンッ……』

膣内を猛烈な速さで掻き回す美紅の指先は、１０秒もしないうちに及川奈緒子をイかせた。

人生初のオーガズムを同級生の同性の美紅に味合わさせられた少

女は、大量の潮を吹きながら、床にへたり込んでしまった。
ビクビクと全身を痙攣させせながら快感の余韻に浸っている。

「まだへたり込んだらダメ！　ほら、もう一度お尻突き上げて」

『ズボッ！……グリグリ』

「あんっ！？　ひいいっ！！　もう許してぇっ！」

美紅は及川奈緒子の肛門に中指を突っ込み、沈んだお尻を引っ張り上げて再度四つん這い体勢にさせた。

「安心して。もう痛いことはしないよ」

優しく血と愛液、腸液を拭き取ってあげる。
太腿に流れた血の跡も綺麗にしてあげた。

「これでよし！　今度また窃盗とかやっちゃったら……膣自体をマンコから引き摺り出してお尻の穴に突っ込んでやるからね？　わかった？」

「は、はい美紅様、もう二度としません。すみませんでした……わーん、わーん」

外の雪はもう既に止んでしまっており、廊下で寒さに震えながら校庭を２０周して教室に入れる時を待っていた男子生徒たちが米田先生の合図でなだれ込んでくる。

「皆さん、窃盗はホントにやめましょうね。本日の授業はお終いです。まだ路面に雪は残ってますので気をつけて帰ってくださいね」

「はーい」

窃盗の報い（後書き）

担任教師まで巻き込んでの窃盗犯への制裁は夕方に終了した。

角山彰文と及川奈緒子は、明くる日から甲南中学校へ登校することはなかった。

後に落ち着いた頃を見計らいどちらからともなく電話で話し合い、お互いが凄惨すぎる過去を一生引き摺って付き合い続けることは困難だと悟り、二人は別れる道を選択したという。

この度、残酷処刑島に新たな遺体が加わることはなかったが、若すぎる一組のカップルは、一生拭いきれないほどの心の傷を背負うこととなった……。

裏切りの代償（前書き）

糖尿病。
だんだんと身体を蝕んでゆく恐怖の病気であるが、危機感を持たないで放置すれば取り返しのつかないことになる。
愛で支えてゆくはずの恋人であったが、その結末は？

裏切りの代償

北部地方のとある町で、十年以上も付き合っているカップルがいた。
結婚すればいいのに、と周りの人達は思うのだが、それが簡単には出来ない理由がある。

「あーあ。競輪もスマホで簡単に買える時代になっちまったお陰で俺の人生台無しだぜ全く……」

長距離運転手の片山次郎５０歳。
今日も東部地方まで片道５００キロの配送を頑張っていた。
両親を二十歳の時に交通事故で亡くし、一人暮らしを続けること三十年……。
未だに結婚出来ないでいるのには理由があり、競輪で作った５００万円近い借金である。
そんなダメ男にも同い年の彼女がいて、かれこれ十年近く付き合っている。

「もしもし。美奈代か？　雪はまだかなり降ってるか？」

「次郎くん！　今日も長距離頑張ってるんだよね？　お疲れ様！かなり降ってるよ。もう辺り一面雪景色ってレベル……早めに出発して良かったね！　家から会社までが行けなくなってたかも」

「そんなに凄いんだ……備えあれば憂いなしだなホント……」

溝口美奈代５０歳。

片山次郎とはインターネットサイトのミクシィで知り合い、同じ北部地方に住んでいたことも分かって、同い年で話も合うことも重なり、実際に会うことになり、トントン拍子でリアルに付き合うことになった二人であった。

「血糖値大丈夫？　きちんと毎日測ってる？」

「ああ。測ってるよ！　今朝は５５０だったかな……」

「５５０！？　全然良くないじゃない！？　夕食の後何か食べた？」

「夜中に出発して３時間ほど経ってから急に腹が減ってきて……ついついコンビニに寄って特盛スパゲティ食っちゃったよ。ハハハ！」

「ハハハ！　じゃないわよ！　そんな血糖値維持してたらお医者さんの言った通り数年後には失明しちゃうよ！？　危機感持ってるの？」

「分かってるって。そんな怒らなくても分かってるから！……あ！？　キャッチだ！　会社の先輩からだな。電話切るよ」

「もう……ホント危機感全くないんだから……」

『プー……プー』

都合悪くなったら嘘をついて毎回電話を切る片山次郎。
糖尿病を甘く見ていたツケは一年後に支払うことになる。

「あれ？　目を開けてるのに何も見えない！？　おい！　美奈代！？」

「ううん……どうしたのこんな朝早くから」

「今何時だ？」

「八時半ぐらいだね。休みの日は最低でも九時まで寝てるのにどうしたの？」

「やっぱ夜は明けてるよな？」

「あたりまえじゃん。いくら冬でも八時半ならもう完全に明るいよ？　え？　まさか次郎くん……」

同棲している彼女である美奈代の言葉により、不安が確信に変わった瞬間であった。

「真っ暗なんだよ！もう夜が明けてるなら明るいはずなのに！？これは夢か？　まだ俺は夢の中なんだな！？」

「……夢じゃないよ次郎くん……これだけ明るいのに本当に何も見えないの？」

「ああ。目を開けてるのに真っ暗なんだ……夢じゃないとしたらまさか糖尿病悪化のせいで失明したのか俺は……？」

彼氏が失明という辛過ぎる現実をなかなか受け入れられないでいる溝口美奈代は、呆然と立ち尽くしてしまう。

「お、おい！　美奈代！？　そこにいるのか！？」

「いるよ。今からタクシー呼ぶからすぐに病院へいこう！　すぐに手術したら治るかもしれないから！」

「そ、そうだな。ありがとう美奈代。俺のチノパンといつものトレーナーとジャンバー出してくれるか？」

「うん！　すぐに着替えて少しでも早く病院へ行こ！」

――北部市民病院。

「残念ですが片山さんの目は手遅れです。新しく出来た新生血管が多数裂けてしまっていて、手術でどうこう出来る状態ではなくなっていますね。なぜ定期的に眼科検診を受けなかったのですか？」

「そ、そんな！　どうにかしてくれよ！？　眼科の医者だろうが！？　おいっ！？」

あまりのショックに医者に対してブチ切れる片山次郎だったが、彼女である溝口美奈代がすぐに諌める。

「私がついてるから……三年ほど前から約束してたじゃん？　もし次郎くんが失明しても私が一生面倒みるって」

「す、済まない美奈代……ううう」

一生目が見えないとゆう現実を突きつけられた片山次郎は、思わず泣いてしまう。
自殺を考えるまで落ち込んだが、美奈代の慰めのお陰もあり、どうにか生きる選択肢を選んでいた。

それから一年が経ち、二人の状況に変化が現れる。

「次郎くん……本当に申し訳ないんだけど……」

「ん？　何が？　遠慮しなくていいから何でも言ってみなよ。美奈代が俺の手足になってくれているお陰でどうにか生活出来てるんだ。何でも話は聞くから」

「……今まで頑張ってきたけど……もう限界を感じたんだ私」

「え？　限界？　何が？　どうゆうこと？」

しばらく黙り込む美奈代に対して不安になる次郎。

「お、おい美奈代？　限界ってまさか……」

「うん。私ね……生活のために最近始めたバイトで知り合った男性と……付き合い始めたの」

「はぁ！？　何だって！？　浮気してたのかお前！？」

「ご、ごめんなさい……最初は一緒に食事だけの関係だったんだけど……話しているうちに妙に気が合って……次郎くんのことも相談したんだけど……別れた方がいいってアドバイスを受けて」

「不倫相手からのアドバイスだと！？　ふざけるなよお前！？」

「不倫って……私たちまだ結婚してなかったじゃん……次郎くんのギャンブルでの借金のお陰で完済するまで籍入れられないって言ってたよね？」

「うっ……それは悪いと思ってるけど……一生俺の手足になってくれるって約束してくれたじゃんか！？」

「ごめんなさい。今日限りでこの家から出ていきます。目が見えない人の介護ってホント大変なの！　分かって！」

「おい！　美奈代っ！　美奈代おおおおっ！！」

声の限りに暗闇の中、叫び続ける片山次郎だったが、長年付き合った内縁の妻ともいえる溝口美奈代は次郎の元から去っていった……。

——————それから三年の月日が流れた。

北部地方に存在する北海駅へ辿り着こうとする電車に車内放送が流れる。

『ただいま人身事故が発生しました。当車両は緊急停止します。お客様には大変ご迷惑をお掛けしますが、当車両は人身事故により、緊急停止いたします』

５３歳にて片山次郎とゆう名の運転手はこの世を去った。

自業自得とはいえ、病気で失明した上に長年付き合ってきた彼女に裏切られた彼が生きる希望を失ったのは同情の余地があるであろう。

「良弥くーん！ママでちゅよー！よちよち」

５３歳にて奇跡的に子供を授かった溝口美奈代。

普通は加齢とともに卵子が老化して、４０代後半で子供は産めなくなるものだが、まさに奇跡とゆうべき高齢での出産を果たした溝口美奈代は幸せの絶頂期を感じている。

結婚相手である東條圭一郎との新婚生活を満喫しているが、裏切られて死んでいった片山次郎の存在など、すでに記憶の彼方に葬り去っている溝口美奈代であった。

大切な人を裏切って手に入れた幸せ。
天はその幸せを決して許さなかった。

――――残酷処刑島。

雪が降り積もる真冬の残酷処刑島。
三人の女子小学生のうち、一人がブツブツと愚痴をこぼしていた。

「寒〜！　どうしてこんな寒い時期に暴風吹き荒れる残酷処刑島に呼ばれちゃうかしら全く……」

ツインテールの小学生、富田美香がぼやく。

「仕方ないよ。私たちの宿命だから。ね？　莉央ちゃん」

「うん。今日はあたしたち小学生コンビ……選ばれた以上は確実に仕事をこなさないとね」

「はーい」

愚痴る富田美香を諭す菅野莉央と結城明日香であった。

縛り付けられることもなく無人島に連行されている東條美奈代と、まだ一歳にも満たない赤ん坊の男の子、東條良弥。

東條美奈代は大事そうに良弥とゆう名前の赤ん坊を抱いていた。

「こんな赤ちゃんまで殺っちゃうの莉央ちゃん？」

白い息を吐きながら問いかける富田美香。

「うん。可哀想だけど腐った女の血を引く赤ん坊だから……罪がないから理不尽だとは思うんだけど。国からの命令だから仕方ないよ」

「因果応報とゆうやつだよね。本人に罪はなくても代償を支払う運命に産まれちゃったってことだよね」

ポニーテールがよく似合う結城明日香も呟く。

「東條美奈代さん。あなたがこの島に連行されたのには理由があります」

「ふ、ふざけないで！　いきなり見知らぬ数人に取り囲まれて良弥共々誘拐されて……あんたたち一体どうゆうつもりなの！？」

「あなたと子供さんには本日死んでもらいます」

冷たく言い放つ莉央。

「はぁ？　あんたたちみたいな小学生のガキに私を殺せると思ってるの？　笑わせないで！」

赤ちゃんである東條良弥をそっと草むらに置き、莉央たち三人を叩きのめすつもり満々の東條美奈代であった。

殴りかかる美奈代に対して莉央が迎え撃つ。

『ズドンッ！！』

強烈なボディブローが５０代の女のお腹を襲った。

あっとゆうまに腹部を押さえて跪く美奈代。

「残念だったわね。あたしは小学生だけど少し普通じゃないのよね。自分の大切な息子が赤ん坊のうちに死んでゆく様を堪能させてあげるから覚悟しなさい」

「うぐ……私の息子に……良弥に手を出したらお前ら全員殺してやるから！」

「そうなんだ。怖い怖い」

おどける莉央の背後で東條良弥とゆう0歳の赤ん坊を抱える結城明日香。

小さな服を脱がしていき、やがて素っ裸にされる0歳の赤ん坊。

背後から抱え上げて股を開かせる結城明日香。

長くて鈍く銀色に光るカンザシを持って冷たく笑う富田美香……。

やがて目を疑う光景を見せつけられる東條美奈代であった。

『つぷ……』

50センチはあろうかとゆう長いカンザシを赤ん坊の肛門へ差し込む女子小学生がいた。

「オギャアッ！！　オギャアッ！！」

母親である美奈代に抱かれてついさっきまで笑っていた赤ちゃんは、一気に泣きじゃくる。

「良弥くんってゆうのかな？　まだ生まれてきて間もないのにごめんね。お姉ちゃんが逝かせてあげるね？　生まれ変わってくる時はこんな鬼畜な母親じゃないことを願ってるよ」

赤ん坊に語りかけながら、長いカンザシを更に内臓奥深く突っ込んでゆく美香。

「や、やめてえぇっ！！　良弥が死んじゃうううっ！！」

「こんな小さな赤ちゃんでも一丁前にオチンチンついてるんだ……あはは」

菅野莉央はそう囁きながら、ペンチをセーラー服のポケットから取り出し、赤ん坊の小さな小さなペニスを挟み込んだ。

「何をしてるのあなた！？　頭大丈夫なのっ！？」

「あなたの赤ちゃんのオチンチンをペンチで引きちぎるの。頭は大丈夫だよ。あたしの心配よりベイビーの心配してあげたら？」

『ギュッ！……グチャ』

一瞬で潰される良弥のペニス。
更に力を込めてその潰れたペニスを引きちぎる莉央。

「あはは。生の尿道丸見え♪　金玉も潰して抉り取ってやるんだからね」

『ギュッ！　ぶちゅっ！　……グリン……ブチィッ！！』

器用にペンチを操り、手際よく赤ちゃんの睾丸を潰して引きちぎる莉央だった。

そのまま号泣を続ける赤ちゃん。
肛門からはどんどんカンザシがぶち込まれてゆく。
ビクビクと痙攣を始める赤ん坊。

『グリ……ズボボボボ……ばしゅっ！！』

女子小学生である富田美香の手により、カンザシは赤ん坊の肛門から口まで貫通してしまう。
血の泡を噴いて絶命する溺愛していた息子の最期……。

「わあああああっ！！　なんてことすんのよこの鬼畜っ！！　良弥っ！！　死なないで良弥ああああああっ！！」

一歳を迎えない内に死を迎える東條良弥。

血の泡を噴きながら絶命してしまう。

気が狂ったように再び莉央に殴りかかる美奈代だったが、再度ボコボコに殴られて倒れ込む美奈代。

「ガキのくせになんて強いパンチを……痛い……イタタタタ」

既に逆らう気力を失った美奈代は、莉央たちの言うがままに素っ裸にされて両手両足を縛り付けられる。

数時間に至る鞭打ち刑が開始された。

結城明日香はひたすら中年女の臀部を鞭で打ちつけ続けた。

『パァンッ！！　パァンッ！！』

「ぎひいっ！！　ひぐうっ！！」

打たれるたびに悲鳴をあげる美奈代であったが、明日香は手を止めなかった。

「ほらほらほらぁっ！　思ってくれていた最愛の人を裏切った罪は重たいよぉ？」

そう言いながらひたすらお尻に鞭を打ち続ける明日香だった。

「ひいっ！　痛いっ！　もう許してお願いっ！」

泣きながら女子小学生に許しを乞う中年女。
更に鞭打ちを続ける明日香によって、お尻の皮が剥け、臀部を血まみれにされてしまう。

転がりながら痛みに耐えるが、両手両足を縛られているため、所詮転がることしかできなかった。

哀れに転がりまくる美奈代を取り囲むようにして立つ女子小学生の三人。

「良弥くんが先に死んじゃった以上、もうこの世に未練も無いよね？　オバサン」

見下ろしながら冷たく言い放つ莉央。
その右手にはサバイバルナイフが握られている。

「凌遅刑！　東條美奈代……今からあなたを凌遅刑に処す。覚悟してくださいね？」

「りょ、りょうちけい？　何なのそれ……お尻が痛い……早く救急車呼んで……痛いよぉ」

「救急車！？　あははははっ！　このババァ、まだ生きて帰れると思ってるんだね？　哀れすぎるわ……」

富田美香が呆れ気味に爆笑する。
結城明日香は冷静に東條美奈代の両手を押さえつけた。
富田美香も両足を押さえつける。

凌遅刑執行の準備は整った。
菅野莉央はサバイバルナイフを握りしめて中年女の傍らに跪くと、手際よく刑を開始した。

まずは乳首を片方ずつ両方切り取り、次に乳房全体を切断する。
男みたいになった胸を見ながら痛みに絶叫する美奈代。

「ギャアアアアッ！！　痛い痛い痛いいいいいいいっ！！　やめてえええええっ！！」

　この世のものとは思えない程の音量で叫びまくる美奈代だったが、無人島である残酷処刑島に虚しくこだまするだけであった。

乳首、乳房の次は両腕、両脚、次々と身体の肉をナイフで削ぎ取ってゆく莉央。

１００回ほど削ぎ取られた身体は真っ赤に染まり、夥しい量の鮮血が流れ落ちていた。

「ひぃぃ……痛ぃ……痛ぃよおお。お母さん……助けて……」

あまりの激痛に、既に亡くしている母親に助けを乞う美奈代。

「あなたのお母さんなんてとっくに亡くなってるでしょ？　頭おかしくなっちゃった？」

両手を押さえつけながら冷たく問いかける結城明日香。

「痛ぃ……痛ぃよおお。わーんわーん！」

年甲斐もなく泣き叫んでしまう中年女であった。

ショック死を防ぐための気付け薬を注射して、簡単に死ねなくする莉央。

チェーンソーのエンジンをかけて、時間をかけながら両手、両脚

を切断してゆく……。

「ギャアアアアッ！！　ひぎいいいいいっ！！」

声が枯れるほどの絶叫を上げる美奈代だったが、無惨にも四肢切断され、ダルマ女と化してしまう。

「可愛くなったじゃん、オバさん」

嘲るように囁きかける富田美香。

短くなった手足をビクビクさせながら大量に小便を漏らす美奈代。

「ひぎいいいっ！　殺して……お願いもう殺してぇえっ！！」

「もうそんな姿で助けられた所で生きていけないと悟ったかオバサン……あはは。懸命だよ。でも簡単には死なせてあげないんだ〜。汚いトコ焼いちゃおうね？」

そう囁きながらライターに火を付ける莉央。

そっと陰部に近づける。

『ジュ……ジュジュジュウ……』

こともあろうに性器を炙り始めた。

「ぎゃあああああああっ！！　熱い痛い熱い痛いいいいいいっ！！」

「あはは。熱いの？　痛いの？　どっちなのかハッキリ言って？」

「ふぎゃあああああああああっ！！」

ダルマ女にされたまま、まともに残っているのは頭部だけの姿で泣き叫ぶその様は、莉央たちを十分に興奮させた。

「興奮しちゃうわね。ごめん、私、濡れてきちゃった……」

明日香がスカート越しにパンツの中に手を入れ、オナニーを始めてしまう。

「やだぁ明日香ちゃんってば……エッチなんだから」

そう言いながら美香も陰部を濡らしていた。

「ダルマ女ってなんかエロいよね～。頭しか動かすトコ残ってないんだもん」

そう言いながら莉央自身もアソコを濡らしていた。

残酷ですけべな女子小学生三人は、拷問を心から楽しんでいたのである。

『ジュウウウウッ』

小陰唇と陰核が焦げて真っ黒に染まり、どす黒い血が股間を垂れ流れてくる。

激しく頭を上下左右に振り続けるダルマ女の東條美奈代。

この時、結城明日香はオナニーによってイってしまった。

「あ、あんっ！！……はぁ、はぁ」

頬を真っ赤に染めて快感の絶頂を得終わった明日香の傍らで、激痛により更に大声で叫ぶダルマ女だった。

「うぎゃあああああああっ！！」

更に炙り続ける莉央。

小陰唇と陰核、膣口は焼けただれ、溶けてドロドロと流れ落ちてきていた。
「あはは……オマンコを炙り続けるとミンチみたいに溶けて流れてくるんだ……くっさー……」
散々焼かれたダルマ女の陰部からは黒い煙が立ち昇っていた。
真っ黒になってしまった陰核とは対照的に、ピンク色した綺麗な肛門に目がいく三人。
「ケツの穴も炙っちゃう？」
美香と明日香に質問する莉央。
「ちょっと待って！　あたしはアナル責めのパイオニアなんだから遊ばせてよっ！」
美香は慌てて極太バイブを装着したペニスバンドを腰に巻きつける。
背後から抱え上げて、ゆっくりとダルマ女の肛門へバイブの切っ先を挿入していった。

「アナルの処女……あたしがもらうからね？　オバサン……」

『ズブ……ズブブブブ』

「あひゃあっ！？　ひんぎいいいっ！！」

白目を剥きながら涎を撒き散らしながら絶叫するダルマ女。

「まだ気を失ったらダメだよぉ？　ほらほらほらあっ！」

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

超激しく腰を振り続ける美香。

「あひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃあああっ！！　死ぬううううっ！！」

「うふふ。心配しなくても本日オバサンは死んじゃうんだよぉ？　こんな可愛い小学生アイドルに犯されて死んでいけるなんて幸せだよねぇ？　ほらほらほらほらあっ！」

更に激しく肛門を犯す美香のアナルバイブ。
肛門括約筋が数ヶ所裂け、激しく血を噴き出す。

『ブシュウウウウッ！！』

「やだ……汚い肛門からの血であたしの太腿が汚れちゃったじゃん？　やれやれだよ」

ため息をつきながらもまだまだ激しく腰を振り続ける美香。
再び小便を尿道から激しく吹き飛ばすダルマ女。

やがてアナルファックに飽きてきた美香は、地面にダルマ女を投げ落とす。
強く後頭部を打った女は意識を失った。
そのまま死ねていたらどれだけ幸せだったか数分後に思い知ることになる。

激しく襲う激痛で目覚める東條美奈代。
莉央はサバイバルナイフで肛門を丸く抉り取っていた。

『ビチャッ！』

地面にくり抜かれた肛門を投げ落とす莉央。

「はい、中年女にしては綺麗な肛門、いただきました♪」

「あははははは♪　ドーナツみたいに真ん中空洞なんだ肛門って！」

爆笑しながら莉央が投げ捨てた肛門を拾いあげ、指を真ん中に通して楽しむ美香。

「やだ。エッチィ～」

明日香も頬を赤くしながら美香の手で弄ばれる抉り取られた肛門を凝視していた。

「さぁ次は……可哀想なほど肛門パックリ開いて直腸丸見えだから……直腸大腸小腸と引き摺り出してあげようかな？」

くり抜かれた肛門部分から指を捩じ込み、直腸を生で鷲掴みにする莉央。

『ズボオッ！！　ギュッ！……くちゅちゅ』

「生温かい感触が堪らないなぁ。あはは。いっくよお？　それえええっ♪」

『ズル……ズルルルルル！』

「はうううっ！？　はぎゃああああっ！！！！」

再び絶叫を上げる中年女は、もはや生き地獄を味わう奴隷でしかなかった。

どんどんと腸を引き抜かれてゆくが、なかなか死ねない美奈代。

血の混じった泡を噴きながら全身を痙攣させるダルマ女の姿に更に興奮する女子小学生の処刑人の三人であった。

更に直径5センチ程の鉄の棒の先を火で炙り、赤く染まったその鉄棒の先を……膣口にゆっくり捩じ込んでゆく明日香。

「ほら、オマンコもタダでは済まさないんだから。お飲み……少し熱いけど火傷しないでね？　うふふ」

『クチュ……ジュジュジュウ！！』

「はんぎゃあああっ！！　ぎっひいいいいいっ！！！！」

この激痛による絶叫で、完全に喉を潰してしまった美奈代は、もう二度と声を出すことができなくなってしまった。

白目を剥いたまま泡を噴きながら……全身をくねらすことであまりの激痛を女子小学生たちにアピールするしかなかった。

「あらら……まんこ散々焼いたのに中身まで焼いちゃうんだ。痛そ

う……」

富田美香はわざとらしく悲しい表情を作りながら呟く。

更に奥深く捩じ込まれてゆく焼けた鉄の棒は、遂に子宮にまで達する。

『ジュジュジュジュジュジュウウ……』

子宮が焼けただれてゆく嫌な音が鳴り響く。

血の小便を噴き飛ばす尿道。
勢いよく一気に鉄の棒を引き抜く明日香。

焼けただれた子宮と膣が、鉄の棒に絡みつき、丸々飛び出してきた。

『ズルルルル……ゴポオッ！！』

「あははっ！　子宮から膣から焼けてくっついて飛び出してきちゃってるじゃん？　ほんと哀れな女～！」

パックリ大きく開いた膣口に、右足を捩じ込む莉央。

「臭いんだよオバさん……まんこの焼けただれた臭いなんてあたしたちに嗅がせるんじゃないよ？」

『グリグリ……ずちゅちゅちゅちゅちゅちゅ！』

どんどんめり込んでゆく莉央の右足は、遂に膝辺りまで挿入された。

子宮のあった場所を更に奥深く突き破り、胃までも抉る莉央の足。

しばらくグリグリと掻き回してからゆっくり足を引き抜いた。

腹腔内に残っていた卵巣までもが二つ、莉央の足に絡みついて引き抜かれてくる。

「汚いなぁもう。血まみれの卵巣まで見せつけちゃって……」

絶命寸前の大痙攣を起こし始めた東條美奈代。

この時はもう既に意識はなかっただろう。

莉央は細く鋭利な針であるキリを取り出して、尿道口から差し込む。

「オシッコ漏らしまくった罰だよ。膀胱まで突っ込んでやるんだか

ら。ほらあっ！」

『ズブブッ！……バシュッ！！』

尿道内に突っ込んだ桐を円を描くように激しく掻き回す。

『グリグリグリグリッ！』

「ぼちぼち逝かせてあげる。よく頑張ったよね？　オバさん……死ねっ！」

『グリンッ！……ポンッ！！』

最期の言葉をかけながらキリを思いっきり深く抉り、尿道から一気に引き抜く莉央。
その瞬間、大きな痙攣はピタリと静止する。
それは東條美奈代の死を意味した。

「焼けただれて真っ黒になっちゃってるマンコからドクドク鮮血が流れ落ちてきてる……なんか糸引いてるし……側に生焼けの子宮と膣が落ちていて……スッゴいエッチだよねこの絵面♪」

美香は美奈代の哀れな屍を見下ろしながら頬を赤く染めていた。
大切な我が子を眼前で惨殺されて、長い長い生き地獄を本人も味

合わされ……遂に息絶える哀れなダルマ女、東條美奈代であった。

裏切りの代償（後書き）

約束を守らずに浮気をした挙句、振ってしまうとゆう暴挙に出た東條美奈代。
その代償は我が子と自分自身の命とゆうあまりにも大きなものとなってしまった。
残酷処刑島に新たに二人の遺体が加わった。

女教師と男子生徒（前書き）

深い物語もなく単なる女生徒たちのイジメのお話です。

女教師と男子生徒

とある日の放課後…………甲南中学校。
今日も平和に普通に女子生徒が男子生徒をいじめていた。
拷問処刑人である鬼頭美紅と、その親友二人。
三人はある男子生徒の下ネタに苛ついていた。

「や、やめて……」

「じっとしてなさい！」

机を三つほどくっつけて並べて、簡易な手術台のようなものを作っていた。
その上に仰向けに寝かせられた１４歳の少年は、青ざめた顔をして半泣きであった。

ベルトを外し、中田美佐子がズボンをゆっくり下ろす。

「ひゃあっ！？　本当にやめてえぇっ！！」

「うるさい！　黙ってないと大腸肛門から抉り出すわよ？」

鬼頭美紅が睨みつけながら恫喝する。

「ひっ……」

噂で聞いている拷問処刑人……美紅が本当に恐ろしいことをやりかねないと悟っている甲南中学校の生徒たちはこの三人に心底ビビっていたのである。

「パンツは私が脱がすから」

黒髪ロングの西村百合香が、今度は少年のブリーフパンツに手をかける。

『ズルル……』

「やめてえぇえっ！！」

『ズルリッ！！』

「んああっ！？」

一気に足首までパンツまで脱がされてしまう新田和寿とゆうクラスでは一、二を争うほどの美男子の少年。

半分かむっている仮性包茎のペニスを、鬼頭美紅が右手で軽く掴む。
ゆっくり皮を亀頭部の半分くらいまで剥いては戻し、剥いては戻す。

「おい新田！男前だけど包茎は良くないな。あたしたちが手術してやるよ」

「しゅ、手術！？　ひいっ！！　やめてっ！！　嫌だっ！！」

「ダーメ。亀頭部は全て出てなくちゃチンカスが溜まって不潔なのよ」

そう言いながらゆっくりと確実にペニスの皮を剥いてゆく美紅。

『メリメリ……ぷるぷる……』

少しずつではあるが確実に皮かむりの空気に晒されていない亀頭部分が剥き出されてゆく。

『メリメリメリメリ』

「痛い痛い痛いいいいいっ！！　やめてえええっ！！」

あまりの股間の激痛に遂に泣き出してしまうクラス一の美男子、新田和寿であった。

「もう少し！　もう少しで雁首まで剥けちゃう！　頑張れ男前っ！」

「ひんぎいいいいっ！！」

『バリッ！！』

「ギャアアアアアアッ！！！！」

完全に雁首まで引き剥かれた少年のペニス……無理矢理剥いたために少し皮が裂けて血が滲んでいた。

出血している部分にゲンタシン軟膏を塗りながら囁く美紅。

「このまましばらく元に戻さないで生活するのよ？すぐに痛みには慣れちゃうから」

「痛い〜！　痛いいいいっ！！」

鬼頭美紅の問いかけにも痛みでまともに答えられない新田和寿に新たな制裁を思いつく西村百合香。

巨大なガラス製の浣腸器に、タップリとグリセリン濃度８０％の

浣腸液をセットしたモノを新田の顔前に見せつける。

「今から新田を浣腸してやるから！」

「やだっ！　やめてお願いっ！！」

「百合香様、やめてくださいお願いします！　は？」

「ゆ、百合香様っ！やめてくださいお願いしま……」

『プスッ！』

「はうっ！？」

『グリッ……ぶちゅちゅちゅちゅちゅちゅちゅちゅう〜』

「ひゃあっ！？　冷たいいいいっ！？　ひいいっ！！」

答えている最中に太いガラス製の浣腸器の先端は、少年の肛門へ根元まで突き刺され、ゆっくりと浣腸液であるグリセリンが直腸へ注入されていった。

更に２５０ＣＣのグリセリンを洗面器から吸い込み、再度肛門へ差し込む百合香。

「ほうら、おかわりをあげる」

五回くらい繰り返されて直腸と大腸はグリセリン液でパンパンにされてしまう新田和寿であった。

「十分は我慢するのよ？」

美佐子が冷たく問いかける。

「うぐぐ！で、出る……もうダメだああっ！！」

『ブリブリブリブリブリブリッ！！』

噴水のように噴き出す新田の水便をサッとかわす三人。

「やだ……くっさーい」

中田美佐子が鼻を摘んで顔を顰める。

「花も恥じらう乙女たちの前で下痢便噴き出すなんて……どうやらあなたには更にお仕置きが必要みたいね？」

『つぷっ……』

「やはあっ！？」

百合香は中指をゆっくり肛門へ突き刺し、根元まで入れて直腸を激しく掻き回し始めた。

『グププ……グチュグチュグチュグチュ！！』

「はひいっ！？　熱いっ！　お尻が熱いいいいっ！！」

「あはは！　美男子のアナル掻き回すのって最高っ！　ほらほらほらあっ！」

百合香は散々新田の肛門を掻き回した挙句、左手の中指までも突っ込み、思いっきり左右に拡げた。

パックリ開いた肛門からはテカテカ光る直腸が丸見えになる。

鬼頭美紅と中田美佐子も頬を赤くしながら美男子の直腸を覗き込んでいる。

数分、数十分、百合香の指による肛門拡張調教は続けられた。

遂に手首まで全ての指が肛門へ突き刺されていた。

「ほら、ほぐしまくってやったわ！　固いアナルも調教したらこれだけ大きく開くようになるのよ？　嬉しいでしょ？」

「いやああ……」

「女みたいな声出しちゃってぇ～。汚ぃクソ漏らすからこんな目に遭っちゃうんだよぉ？　あはは♪　ほらほらほらあっ！！」

『グボッ！　グボッ！　ズチュッズチュッ！』

「はうっ！　いひいっ！　はぎゃんっ！！」

激痛を耐え抜いた新田和寿は、西村百合香の肛門拡張調教を終える頃には、とうとう快感を得るほどにまでになっていた。

血と便と腸液が混じった粘液が、美紅の机の上に垂れ落ちる。

拳を引き抜いても開ききった肛門はなかなか閉まらない。

ゆっくり時間をかけて閉まってゆく。

「はぁ。はぁ。はぁ。はぁ」

顔を真っ赤にしての痛みと快感を同時に堪能した新田の喘ぎ声はかなり痛々しかった。

ビンビンに勃起したペニスからも透明の粘液が垂れ流れている。

キュッと握りしめて中田美佐子がポニーテールを揺らしながら手コキを開始。

「皮引き剥かれちゃったのにもう慣れたんだね？　スッゴい固いく

しちゃってぇ。私が射精させたげるね？　こう？　こうか？」

『シコシコシコシコッ！』

「んんんっ！？　うううううっ！！」

「イけ！　ほら！」

「気持ち良い……イ、イく……いやあぁぁあっ！！」

『ドピュピュピュピュピュピュピュウウッ！！』

「汚いなぁ。いっぱい出しちゃって……机から降りて四つん這いになれ」

美紅の命令に泣きながら従う新田和寿。
泣きながらも今まで感じたことのない快感に全身をビクビクさせている。

『パァンッ！！』

「痛あっ！？」

四つん這い態勢の背後から、足の甲で軽く睾丸を蹴り上げる美紅。

「ほれほれほれほれほれほれっ」

『パンパンパンパンパンッ！！』

「あひゃひゃひゃひゃああっ！！　痛いいいいいっ！！」

「やだぁ。蹴られる度にチンポとキンタマをプランプラン揺らしちゃって……エッチなヤツだわホント……」

「ほら、股を閉じるなよ？　殺すぞ？」

キンタマいじめのタイミングで教室に入ってくる米田敬子先生。

「あっ！　取り込み中だったのね。ごめんなさい」

「先生もコイツと仲良く下ネタ話してたみたいね？　青木さんから聞いたわよ？」

「え？　あ、あの、ご、ごめんなさい……ついつい軽く下ネタ言っちゃったことは認めます」

「ふぅん。先生にもお仕置きが必要だね？　こっちにきて」

「ご、ごめんなさい、許して鬼頭さん……」

「ダメ。許さない」

あっと言う間に、中田美佐子と西村百合香によってスカートを脱

がされて新田和寿の隣で四つん這い体勢にさせられてしまう米田先生。

「男子生徒と女教師が並んで下半身だけ素っ裸だなんて……なんかエロいよね～？」

頬を更に赤くしながらエッチな笑みを浮かべる美佐子の傍で、ペニスバンドに巨大な張り型をセットする百合香。

「もうコイツの処女奪っちゃっても構わないよね？　美紅ちゃん？」

「うん。本日のロストバージンを記念して塩噴くまでイかしちゃおう！」

「はーい。ってなわけで敬子先生。私が今から先生を犯しちゃいまーす！うふふ！」

「ひっ！？　やめてお願いっ！！　西村さんっ！！」

『ズプ……メリメリ』

「ひゃあっ！？　痛い……んんんんんっ！！」

「もっとケツを突き上げろ敬子っ！　百合香様、許してください、は？　早く言ってごらん？」

「あはあっ！　百合香様っ！　許してくださいいいいいっ！！」

「よく言えました。だめ。許さない！」

『ズチュッ！　ズプププッ！！……バリッ』

「痛いっ！？　はぎゃあっ！！！！」

教え子である西村百合香にバージンを奪われた女教師、米田敬子は、同時に快感も覚えさせられ、必死に腰を振りまくって何度もオーガズムを得た。

まさにイきまくったのである。

『パンパンパンパンッ！！……プシューーッ！！』

床に大量の潮を噴く米田敬子先生。

『バコバコバコバコバコバコバコッ！！』

「やんやんやんやんやんやんやんんっ！！　ひぎいいいっ！！」

『ビクビクビクビクビクゥッ！！』

うつ伏せでお尻を突き上げたまま何度もイかされて痙攣する米田敬子。

その傍で金玉を押さえながら悶え苦しむ新田和寿。

「うううううっ！　んんんんんっ！！」
ついつい本気で蹴り上げた美紅によって、潰れかけた二つのキンタマだった。
「ごめんなさい！かなり本気で蹴っちゃった……でも潰れてはないから安心してね？」
一時間後……。
すっかり日は暮れ、辺りは真っ暗になっていたが、美紅たちのいるクラスだけ赤々と蛍光灯が灯されたままである。
エスカレートした美紅たちの命令で、女教師と生徒の性行為が撮影されていた。
『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』
「あはっ！はんっ！　やめてえええええっ！！　新田くんのおっきいいいっ！！　あはんっ！！」
学園モノＡＶにありがちな担任を男子生徒がバックで犯す……。シチュエーションに興奮する美紅と百合香と美佐子であった。

散々バックで性行為のあとは、愛液と精液まみれのペニスをひたすらフェラするエロい場面までも三人によって撮影された。

「あはは！　いいよおっ！　エロいエロい！　新田、もういいから敬子の口内へ射精しろ！」

「は、はい美紅さま」

『ドピュ！　ドピュピュピュピュピュピュピュウッ！！』

「んごおっ！？　むぐぐぐうっ！？」

大量の中学生の精液を口内へ発射された女教師は、トロトロと口から精液を垂れ流す。

かなりエロいシーンを撮影できた三人であった。

二人を引き剥がして、百合香は先生、美紅は新田を……激しく電気アンマする動画も中田美佐子によって撮られた。

百合香の足の裏に着いた女教師の愛液を新田に舐め取らせ、逆に美紅の足の裏に着いた新田の精液を女教師に舐め取らせた。

仕上げには二人をシックスナインさせて、延々とお互いの性器を舐めさせ合った。

舐め方に迫力ない場合、容赦なく肛門にリコーダーを捩じ込み、直腸を激しく掻き回す百合香と美紅。

「もっと激しく舌を使って舐めまくるんだよ淫乱教師っ！」

「お前もヒダヒダの内側のマンカスまで舐め取れよっ！　ほらあっ！」

美紅たちによって何度もイかさせられた４０代の女教師と１４歳の男子生徒は、素っ裸にされたまましばらく抱きしめあったまま泣いていた。

顔から身体からお尻から美紅たち三人によって踏まれまくる。

「あはは！もうお前ら付き合っちゃえば？」

中田美佐子が冗談で言った台詞。
これが本当になり、中学生生徒の子を妊娠した４０代の女教師と、張本人の新田和寿の二人は、一ヶ月後に甲南中学校を辞めることになる。

「まさかあいつら本当に付き合っちゃうとはね……」

呆れ気味に呟く美佐子。

――――――１１ヶ月後。

「米田先生と新田……あの時に妊娠しちゃってそのまま赤ちゃんまで産んでるらしいよ？」

美紅たち三人は呆れ気味に爆笑する。

「次の担任は長江幹子とかゆう５０代のオバハンね。ほぼ一年経って生意気になってきたからぼちぼちいじめちゃおうか？　あはは！」

美紅は早くも次の担任をどう苛めるかを考えていた。

中学三年生にして妻のバイトの稼ぎで子を育てるとゆうドラマのような展開となる。

米田敬子と新田和寿は一生別れることなく長女の麗央と共に三人で幸せに暮らすことになった。

女教師と男子生徒（後書き）

美紅たちに性的イジメを受けながらもそれがきっかけで付き合いだし、挙句に妊娠までして学校をお互い辞めてまで幸せに暮らしてゆく米田敬子と新田和寿の二人であった。

最近たまにあるパターンで、残酷処刑島に新たな遺体は加わらなかった……。

盗撮の罪（前書き）

絶えることのない盗撮行為。
家族ぐるみで犯してしまう罪に対する裁きが下される。

「もうこんなことやめない？」

「何をバカなこと言ってるんだ？　もうやめるわけにはいかないんだ」

「だって……捕まっちゃうと借金返していくより辛いことになっちゃうし……」

「心配ないさ。昔からの親友の笠木がうまくやってくれてるんだから。俺はあいつのことを心から信頼している」

南部地方に５０年ほど昔からずっと営んでいる銭湯。

二十歳の頃に旅行中の事故で両親を同時に亡くした。

その親の代から受け継いだ古い割に広くて立派な銭湯を、新戸部（にとべ）駿介（しゅんすけ）が妻と経営している。

３５歳である彼は、高校時代から付き合っている同い年の妻、智代梨と若くして結婚し、二人で力を合わせてかれこれ十五年ほど銭湯をやりくりしていた。

年収は銭湯の売り上げで約６００万。

水道代やガス代等の必要経費を引かれての手取りなので、夫婦二人での稼ぎではあるが平均を超えている十分な収入である。

だが全然足りない理由があった。

亡き父がギャンブルで残した借金。
恥ずかしくて打ち明けられなかったのか、息子に話す前にバスの交通事故でこの世を去ることになった新戸部健蔵。
遺産相続したものの借金まで相続して背負う羽目になってしまった。

「バカ親父めちくしょう！　こんな多額の借金あるんなら、何もかも相続放棄した方が良かったんじゃないか？　借金まで相続しちまうだなんて馬鹿げてるぜ！　俺の人生色々後悔ばかりだなホント……」

「そうだよね。駿介は悪くなかったんだもんね。仕方ないか……かなり罪悪感あるけど……完済するまで続けるよ」

「あ、ああ！　頼むわホント……子供たちの人生のためにもまだまだ頑張らないとな」

「うん。乃亜と淳一も友達に声をかけて両親ごと銭湯にきてもらえるよう協力してもらってるし……ホントに感謝だわ」

「女子高生の娘と小学生の息子に盗撮の手伝いさせるなんてとんでもない話だが……分かってて協力してくれてるから余計感謝しかないよな。子供たちの頑張りを無駄にしないよう稼げるうちにどんどん稼いでおこう」

「……そうだね」

――南部地方の更に南部に位置する小さな港町。

裏モノのアダルトＤＶＤを制作して、一部の昔から取引のある金持ち層のみに販売している無法者、笠木慎吾。
満面の笑顔で昼前に車でこの港町を来訪した新戸部駿介に手を振って出迎える。

「おはよう新戸部！　今月もご苦労様」

「おはよう。今回はお前の希望するのがたくさん撮れたぞ。報酬を奮発してくれよ？」

「そ、そうか！　それは有難いな！　超お得意さんの船瀬さんがこご最近ロリータに目覚めたそうだからなぁ。小学生の女の子なら十万は上乗せしてくれるそうなんだ」

「この一ヶ月は家族連れのお客が多かったからな。小学生から幼稚園児から何十人も撮れてるさ」

二階の動画編集室へ二人で移動すると、ＳＤカードからの動画を早速早送りで再生して確認し始める笠木慎吾。

「おおっ！　すごいなこれは！　可愛い小学生ばかりじゃないか！これは高く売れるぞ……一人映っている子が増えるたびに十万ふっかけてみるか！　ははは！」

「欲張りすぎて客失うなよ！　こんな危ない動画買ってくれる人たちはあまり存在しないんだから」

銭湯に仕掛けている超小型の隠しカメラによって盗撮した一ヶ月分のデータを、笠木にすべて渡してかなりの報酬に期待する新戸部駿介であった。

「ふむふむ。小学生が五十人とちょっと……中学生まで五人撮れてるな。ガキのくせにプリプリしたケツしてやがるぜ！　ヒヒヒ……」

「いくらだ？」

とりあえず静かにマウスを動かしてパソコンの電源を落とす笠木慎吾に、鬼気迫るほどの真剣な表情で問いかける新戸部駿介。

笠木は数秒間目を閉じた後、やがてゆっくりと目を開き口を開いた。

「五十万だ」

「そ、そんなに貰えるのか！？」

「ああ。児童だけじゃなくそれなりにスタイルのいい三十路もたくさん撮れてるしな。こりゃあ稼げるぞ今月は！　また儲けによってボーナスもくれてやるからな。期待していてくれ」

「あ、ああ！　本当に助かる」

盗撮により順調に毎月の稼ぎを増やしてゆく新戸部駿介一家であったが、そんな非道な行為がずっと続けられるはずはなかった……。

――残酷処刑島。

素っ裸にされたまま連行されてきた一家がいた。
新戸部駿介含む四人家族である。
３５歳の夫婦は強制的に性行為を行わされていた。

「あん、あん。気持ちいい……駿介さん、もっと！」

「う、ううっ！　イくっ！　イくうっ！！」

『ドピュピュピュピュピュウッ！！』

正常位にて新戸部駿介は妻の智代梨の膣内へ中出しを終えた。

「シックスナインに移行しなさい」

小学生のアイドルであり、拷問処刑人をまとめるリーダーでもあ

る菅野莉央が冷たく言い放つ。

「は、はい」

新戸部駿介と智代梨は、言われるがままに性行為に続き、シックスナインを開始する。
頬を赤く染めながら両親の卑猥な行為を強制的に見物させられている高校生である娘の乃亜と、小学生である息子の淳一。
激しくお互いの性器を舐め合う両親の姿を見て思わず目を逸らしてしまう娘の乃亜。
菅野莉央と同じくアイドルであり小学生の拷問処刑人である富田美香が女子高生である新戸部乃亜の髪の毛を鷲掴みにして引き上げる。

「ほら、両親の哀れな姿をちゃんと見てないとあなたも処刑されちゃうわよ？」

「ひいっ！ゆ、許して……お父さんとお母さんも許してあげて！」

「あのね。何百人とゆう児童含む女性たちの裸を盗撮し続けたあなたたちは重罪人なの。わかる？」

「ご、ごめんなさい」

富田美香の恫喝により、涙を流しながら両親のシックスナインを再度見させられる乃亜。

小学生トリオの三人目、結城明日香は長男である小学四年生の淳一の髪の毛を掴み、姉と同じく両親の痴態を強制的に見せつけている。

いきなり拐われて訳のわからない無人島で素っ裸にさせられて……ともかく途方もない恐怖に苛まれた泣きじゃくる小学生児童の淳一であった。

「私たち三人は小学六年生だよ。あなたの二つ歳上のお姉ちゃんだね」

「うぇーん。うぇーん。お家に帰りたい……父ちゃん母ちゃん！　お姉ちゃん！　みんなと一緒にお家に帰してよー！　えーんえーん！」

顔をクシャクシャにして泣き叫ぶ四年生の男子児童に対し、結城明日香の拷問が開始された。

先ずは激しく顔面を往復ビンタ。

拳に変更して顔面をタコ殴り……。

小学生の女の子にボコボコに殴られた四年生の男子児童は、顔中を真っ赤に腫らし、鼻血を噴き出させて号泣する。

弟を凄惨な目に遭わされて黙っていられなかった姉の女子高生、乃亜は結城明日香に殴りかかる。

富田美香に背後から羽交締めにされ、弟と同じく顔面をタコ殴りにされてゆく。

子供たちの悲惨な光景を見て見ぬふりをしながらシックスナインを続ける駿介と智代梨に対し、菅野莉央が囁きかける。

「新戸部駿介！　あなたの娘が助かる唯一の方法は……娘である乃亜を犯すこと」

「そ、そんな……それだけは勘弁してくれ……」

「できなければ皆殺しにするだけだから。新戸部智代梨！　あなたの息子が助かる唯一の方法は……小学生の息子と激しくセックスすること」

「やだ！　そんなことできるはずがない！　しかも小学生の淳一のオチンチンが勃起するはずがない！」

「ご心配なく。強制的に勃起する強力な薬を息子さんに打ちました。小学生とは思えないほど勃起してますよ？　ほら」

「ひっ!?　淳一……小学生なのに……な、なんてことを……」

莉央たち三人に強制的にセックスさせられる父と娘、母と息子であった。

「すまん、乃亜……お前を助けるためだ。許してくれ」

『ズブッ！……バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「やだっ！　お父さん痛いよおっ！！　やめてっ！！」

『バコバコバコバコッ！！』

「んひいいいいっ！！」

駿介と智代梨は二人の子供を救うために必死であった。
菅野莉央から強迫されていたからだ、
言うことを全て聞けば、幼い子供たちの命だけは助けてあげると予め伝えられていたからである。

『ドピュピュピュピュウッ！！』

女子高生の娘の膣内に中出しする父親の駿介。

「あらやだぁ。娘を犯して中出ししちゃうなんて……父親として最低だね？」

菅野莉央が日本刀を鞘から引き抜く。

「肛門から串刺しにしてあげなきゃ乃亜さんが可哀想だわ」

『ツプ……ズブブブブ』

「ひぎゃあっ!?　痛いいいいっ!!」

いきなり肛門に日本刀を突き入れられた駿介は絶叫するはめになる。

「やめてっ!　私は気にしないからっ!　お父さんを殺さないでぇえっ!!」

「あたしが気にするの!　汚い下の口から飲み込めほらあっ!　えいいいっ!」

小学生アイドルであり、拷問処刑人である菅野莉央に対し、土下座をしてまで父親の命乞いをする娘の乃亜だった。

だがその行為も虚しく、莉央の日本刀は十秒も経たないうちに父親である駿介の肛門から口まで貫通してしまった。

『グリッ!　ズボボボボボ……ザシュウウッ!!』

「ぴぎいいいいっ！！……がくっ」

血の泡を噴いて痙攣しながら絶命する新戸部駿介。

「いやあああああっ！！」

気が狂ったように泣き叫ぶ娘の乃亜。

構うことなく菅野莉央は日本刀を父親の肛門から一気に引き抜く。
母親である智代梨は小学生の息子と激しく腰を振りながら性行為を続けていた。

射精できないまま淳一のペニスは母親の膣から引き抜かれる。

「息子をイかせてあげられなかったのね？　お仕置きだよ？」

『ズッ！　ズチュ！！』

「ぎゃああっ！？」

「ちゃんと息子とセックスもできない智代梨さんには……愛する旦那の跡を追わせてあげるね？　ほら」

『ズボボボボッ！　バリバリ……メリメリ』

みるみる内に小学生のアイドルが握りしめる日本刀は、母親の智代梨の膣内へ飲み込まれてゆく。

断末魔の叫びをあげて口から日本刀の切っ先を突き出し、血の泡を噴いて絶命する智代梨。

激しく痙攣しながら父親の駿介と同様に絶命した。

「あはは。子供たちの見守る中死んでいった両親……哀れねぇ？」

智代梨の膣から日本刀を引き抜きながら冷ややかに囁く菅野莉央。膣からは激しく血が噴き出す。

素っ裸のまま泣きじゃくる女子高生と、小学生の男子児童。

莉央たち三人から更に殴る蹴るの暴行を受ける姉弟であった。

再度強制的に勃起させる薬を小学四年生の児童に打ち込む莉央。強引に無理矢理姉の乃亜の性器に挿入させる美香と明日香。

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「やはあっ！」

「うわあああんっ！」

快感と罪悪感に泣き叫ぶ女子高生と、ペニスの痛みに号泣する男子児童。
姉弟は散々生のセックスを強制的に行なわされた挙句、銃殺刑となる。

長い銃身のライフル。
銃口が女子高生の膣に突き入れられる。
「新戸部乃亜。あなたは今から……マンコからの銃撃により処刑します」
菅野莉央はグリグリと膣内を掻き回しながら銃口を膣内へめり込ませてゆく。

『グボボボ……』
「痛いっ！？　そんなあっ！！　お父さんやお母さんがあなたたちの言うこときいたら私と淳一の命は見逃してくれるって約束したよねっ！？」
「そんな約束したっけ？あたし、全然覚えてない。ごめんなさいね」
「そ、そんな……酷い……」

「新戸部淳一。あんたは金玉を潰してチンポを切断して最大級の苦痛を与えた後……肛門から銃撃により処刑しちゃいます♪　やん！　エッチ！」

富田美香は頬を真っ赤に染めながらスケベそうな笑みを浮かべ、男子児童の睾丸をペンチで挟む。

「先ずは右！」

『グリッ！　ブチュッ！！』

「ひぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃあっ！！」

「泣け叫べ！　あははは！　次は左のキンタマッ！　ほらあっ！」

『グリリッ！　ブチュウッ！！』

「ピギィイイイイイッ！！！！」

赤く染まった粘液を尿道から吐き出しながら絶叫する新戸部淳一。

「金玉の次は……チンポも許さないんだからあっ！　えいっ！」

『ズシュッ！』

「ひぎいいいいいっ！！！！」

カッターを鋭く一閃する美香。
瞬時に根元から切断される小学生児童のペニス。
ポトリと地面に落ちた後、数秒間はピクピクと痙攣していた。

「あはは♪　切り離されても動いてるうっ！　おもしろーい♪」

富田美香は爆笑しながら腹を抱えていた。
拾いあげて皮かむりの小さな切断されたペニスの皮を引き剥く。

「こうしてやるうっ！」

『メリメリ……ぷるるんっ！　ズルリッ！』

無理矢理に切断面の根元まで引き剥かれたペニスの皮からは、真っ赤な鮮血が滲み出てくる。
美香の白い指を粘液混じりの鮮血が伝い落ちてくる。
完全にペニス本体の海綿体の身から、皮だけが剥ぎ取られた。

「あは……児童のチンポの剥き身だぁ。いやんっ♪」

「ズル剥け生チンポにしちゃって。美香ちゃんってば……よっと！」

『ブチュ！』

結城明日香がライフルの銃口を淳一の肛門へ一気に捩じ込む。

「ここかしら肛門は？　お前のトドメは私がするわ」

「痛いいいっ！！　んぎゃあああああっ！！やめてお願い殺さないでええええっ！！　ひいいいん！　ひいいいんっ！！」

最早睾丸を潰されてペニスを切断された小学生児童は、号泣しながら命乞いをすることしかできなくなっていた。

死の間際、肛門に熱い激痛を感じる淳一。

結城明日香は静かに囁く。

「おねーちゃんたちは悪絶対許さないの。生まれ変わってきたら盗撮の手助けなんかしちゃダメだよ淳一くん？」

「やーん！　わーんわーん！」

「さぁいくわよ？　お姉ちゃんの前でピンク色の大腸ぶち撒けて死になさい。ほらあっ！！」

『ドォンッ！！……ブチュチュチュチュチュウッ！！』

明日香がライフルの引き金を引くと、小学生児童の股間はミンチのように吹き飛んだ。

脳天から飛び出した弾丸は、顔面までバラバラに吹き飛ばす。

『ビチャビチャビチャビチャッ！！』

大腸小腸……小さな前立腺……あらゆる内臓から脳みそまで、あたりの地面に降り注ぐ。

「やだ。汚いなぁコイツ……飛び出した大腸からウンチへリだしちゃってるよぉ～」

舌をペロっと出しながら頬を赤くしてぶち撒けられた児童の内臓を見つめる結城明日香。

「わあああああああっ！！　いやあああああああああっ！！」

両親に続き、弟まで殺された長女の乃亜が狂ったように泣き叫ぶ。

「哀れだね。最期にイかせてあげる」

『ズチュ……ズチュチュチュチュチュチュチュ！』

ライフルの銃口を激しくピストン運動する莉央。

あまりのテクニックに、小陰唇をピクピクさせながら潮を噴いてイかされてしまう女子高生の乃亜。

「あんっ！　やだっ！　イくっ！　イっちゃううううっ！！」

「あはは。アナルまでヒクつかせちゃって……ほら、イけ！」

「やはあああああああっ！！！！」

『ぷしゅうううっ！！』

ひっくり返ったカエルのように仰向けで両脚を開き、女子小学生にイかされた乃亜は、涎を垂らしながら快感の余韻に浸る。

「あはは。盛大にイってくれちゃって……ほら、四つん這いになれ！　肛門も犯してやるから」

菅野莉央の言うがままに起き上がり四つん這いになる乃亜。

「肛門がよく見えるようにお尻をつきあげなさい！」

「はぁ、ばぁ。は、はい」

ライフルの銃口をマンコから引き抜き、肛門に突き入れる莉央。

「ほら、後ろの穴も犯してあげるね？」

『ズブッ……ズブブブブブ』

「ひゃんっ！？　熱いっ！！　いやぁああっ！！」

嫌と言いながら四つん這い体勢で激しく腰を振る乃亜。

人生最期のオーガズムを小学生の菅野莉央によって味合わされてしまう。

「ほらほらほら。気持ちいいか？」

『ズチュチュチュチュチュチュッ！！』

「あんあんあんあんっ！！　ヒャアアアアッ！！」

「真っ当に生きていればいつか出来るであろう彼氏にアナル犯してもらって気持ちよく変態エッチも出来たのにね？」

ライフルの銃口を肛門に突っ込まれてイかされる女子高生。

小便を漏らしながら潮を噴く。

「イっくうううううううっ！！　やぁああああああっ！！」

『プシュウウウウウウウウッ！！』

肛門に突き入れられた銃口……潮を噴くオマンコ……。
最高に哀れな人生を演じた乃亜は、ついに人生最期の時を迎える。

「明日香ちゃん。マンコにもライフル突っ込んで」

「はーい」

『ズチュッ！』

「ひぐっ！？」

女子小学生二人に肛門と性器にライフルの銃口を突っ込まれる乃亜。
銃口を突っ込まれた膣口からは、血の混じった粘液が糸を引いてゆっくり垂れ落ちている。

「贅沢だね？　二つの穴を同時に吹き飛ばされるなんて羨ましい限りだわ。さぁマンコとケツの穴……同時に挽肉にしてあげる。覚悟はいい？」

菅野莉央が冷ややかな笑みを浮かべながら乃亜に問いかける。
更にグリッと直腸深く銃口を捩じ込む。

「あ、そうだ。美香ちゃん、コイツのクリトリスペンチで潰してから引きちぎっといて。あまり楽に殺しちゃうのも勿体ないから」

「はーい♪　弟さんもチンポ切り取られてキンタマ潰されて……白目剥いて苦しんでたもんね！姉だけ性器が無傷なまま死なしちゃダメだよね！　ほら！」

『ガシッ！』

「ぎゃーーーー！！！！」

「ゆっくり潰してあげるね」

美香は少しずつ少しずつペンチに力を込めていく。
ゆっくり変形していきながら遂に最期を迎える女子高生の陰核。
音を立ててゆっくり潰された。

『ギュギュギュギュギュウウ……ぶちゅっ！』

「はんぎいいいいいっ！！ぎゃっはああああああっ！！」

「あはは！なんてひょうきんな声でさけんでるのよ。今から死ぬのにクリトリスなんて要らないでしょ？えいっ！」

『ブチブチィッ！！』

「アバババババババッ！！おっひょおおおおううううっ！！」

訳のわからない絶叫をあげながら白目を剥いて痙攣する姿を莉央たち三人はお腹を抱えて笑ってしまう。

気を失って地面にへたり込んでしまう乃亜を美香と明日香が腰に手を回して下半身だけ引き上げる。

「まだダウンするの早いよ？お尻を突き上げて前と後ろの汚い穴をあたしたちに見せなさい」

「やだ……許してやめて……お願いしま……す」

「あれ？　あまりの激痛に神経がおかしくなった？　普通に戻ってんじゃん？　あはは。でもだめだよ。内臓ブチ撒けて死んでくれるかな？　3、2、1……0」

「いやあああああっ！？」

『ドドンッ！！！』

菅野莉央と結城明日香は同時にライフルの引き金を引いた。

「ぴぎいっ！！」

『ビチャビチャビチャビチャビチャビチャッ！！』

直腸と大腸、ミンチになった子宮と卵巣、あらゆる臓器が辺りに撒き散らされた。
脳みそと目玉は遥か十メートル以上先まで吹き飛んだ。

「あはは……下半身と頭部がバラバラなのに上半身だけ原型留めてるぅ。笑えるわねー♪」

小腸のミンチを顔面に食らいながらも笑顔で手で拭き取っては遺体の背中に擦り付ける美香。
直腸と子宮のミンチを太腿に浴びた莉央と明日香は苦笑いするしかなかった……。

「きったないわねコイツ……さぁ咲良さん。今回の拷問処刑のシメをお願いします」

「あ、ああ。分かってるよ莉央……」

女子小学生による凄惨な処刑を一部始終見ていた中学生の拷問処刑人である宮垣咲良。
同じく見せつけられていた処刑される男……笠木慎吾３５歳。
一家四人よりも一足先に処刑島へ連行されて、岩の陰でこの時を待たされていた悲惨な男であった。

「そもそもあなたが変なＤＶＤを販売しなきゃ今回の事件は起きなかったのよね？」

「あわわわわ……や、やめてくれ！　何でもする！　お願いだ！　命だけは助けてくれぇっ！！」

涙を流しながら命乞いをする３５歳の中年男。
新戸部一家四人殺害の現場を見せつけられて恐怖に慄き、小便まで漏らしていた。
簡易ベッドに素っ裸で縛り付けられたままで号泣している。

女子小学生に続き、女子中学生による拷問処刑が開始された。

先ずは人差し指を笠木慎吾の尿道へ差し込む咲良。

『ズチュ……』

「ひぐうっ！？　痛いいいっ！！」

顔を顰めて泣き叫ぶが咲良の人差し指責めは止まらない。
尚更激しく尿道内を掻き回す。
更に根元まで差し込み掻き回す。
あまりの激痛に気を失う笠木慎吾であった。

「気を失うにはまだ早いんだから」

『ズチュッ！　グボッ！！』

左手の人差し指まで尿道に捩じ込み、左右に思いっきり拡げる咲良。

メリメリと音を立てて裂けてゆく尿道……。

「尿道ってヌメヌメして何かヤラしい感触……なんかハマりそ♪」

「ぎゃあああああっ！！」

あまりの激痛に目を覚ます笠木だったが、すでにペニスは真っ二つに引き裂かれていた。

鮮血を噴き出す引き裂かれた尿道とペニス。

根元からカッターで切断した後、今度は肛門へカッターを突き刺す。

「ここから……ザックリいっちゃうね？」

『ズッ……ズズズズッ！』

「ピギィイイッ！！　痛い痛い痛いいいいっ！！　やめてくれえええっ！！」

中年男の叫びも虚しく、女子中学生の宮垣咲良の操るカッターは、肛門から会陰部を切り開き、ペニスを切断された切断面まで切開する。

深くパックリ開かれた股間からは前立腺がポコっと飛び出して、プランプラン揺れていた。

「やだ何これ？　……おい！　この赤黒いキモい内臓は何って聞いてるのよ？」

咲良は垂れ下がって揺れている前立腺を鷲掴みにし、揉みしだく。

『グニグニグニグニッ……グチュグチュ……』

「んがあああああっ！？　ひぎいいいいいっ！！」

少しの快感と超絶激痛を味わった笠木慎吾は泡を噴きながら失神する。

「あたいは性器破壊の趣味なんかなかったんだ。最初はね。莉央たちのせいで変な性癖に目覚めちゃった……」

そのまま前立腺を引きちぎり、右足の裏で擦り潰す咲良。

意識がない内に、小学生トリオも手伝い、四人がかりで低い机の上に腹部を着けるようにうつ伏せにさせて、強制的に四つん這い体勢を作り、縛り上げた。

「サンキュー！　御三方♪」

「お安い御用で……さぁ思い存分バックからの拷問を始めちゃってください♪」

「ほーい」

宮垣咲良は金棒を手に取り、黒と赤の配線を繋ぐ。

「あーあ。これでもう一生快感も得られなくなっちゃったね？　男として終わったからもう死んじゃおっかぁ？　ここからは更に地獄を味わうことになるんだからね？　ほら」

バッテリーに繋いだ金属の棒をパックリ開かれた会陰部と肛門部分へ捩じ込む。

「股間が女のマンコみたいにパックリ開いちゃって……痛々しくてごめんなさいね？　お詫びにコレをあげる。　ほら！」

『ズブブ……グリグリッ！』

もう一本の金棒のマイナス側を背中に押し当てると、直腸内に激しく電撃が走る。

『バリバリバリッ！！』

「どう？　肛門電撃の刑だよ？」

「あぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃあああああっ！？　ひぎいいいいいいいっ！！　死ぬうううっ！！！！」

「目が覚めた？　肛門ってゆうか直腸焼きの刑だねこれ……あはは」

『プスプスプス……』

直腸が電気で焼かれて肛門から煙が立ち上登る。

「くっさ。直腸と一緒に大便の焼けた臭いまでしてる……ほんと死んでほしいわあんたには……まだまだお仕置きが必要だよね？　それえっ！」

『バリバリバリバリバリッ！！』

「ぐえええええええっ！！」

更に電気で直腸内を焼きまくる咲良。

「あんたの直腸……焼けただれて溶けてミンチになって……肛門から垂れ流れ落ちてるよ？」

「うひいっ!?　いだいいいいいっ！　ひどいいいっ!!」

「酷いのはあんたのやらかした盗撮だよ。一体何人の女性たちが恥ずかしい思いをしたと思ってるの？　後の人生にも影響でることあるんだ。もう死んで償いなさいね？」

執拗に肛門と直腸を電気で焼く咲良。

お尻をカクカクと激しく痙攣させながら腸のミンチを垂れ流す笠木慎吾。

「何汚いキンタマをプランプラン揺らしてるの？　風もないのに……死ぬ前に潰してあげる。えいっ！」

『ズドンッ!!……ブチュチュッ!!』

「ひぎゃあああああっ!?」

思いっきり蹴り上げた咲良の足の甲は、中年男の二つの睾丸を同時に潰した。

ペニスの切断面にある尿道の穴に中指を突き入れて掻き回す。

『くちゅ。ズチュチュチュチュチュチュッ！』

「ほらほら……ここからオシッコ出してたんだよね？　オチンチン無くなっちゃったんだし、もう使うことも無くなっちゃったし……ぼちぼち死なせてほしいでしょう？　んん？」

「うおおおーん！　うおおーん！！」

大の大人が声をあげて号泣し始めた。

「痛いか痛いか？　よしよし。女子中学生のアイドルに性的な虐待受けて惨殺される気分はどう？　あはは！」

固く握った拳を肛門に無理矢理捩じ込む。

女子中学生の拳は中年男のぱっくり開かれた直腸内へズルリと捩じ込まれた。

『グリリリ……メリメリ……ズッポンッ！！！』

「ひぎゃあああっ！！　痛いいいいいいっ！！」

『バッコンバッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「はぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃあっ！！」

女子中学生アイドルによるフィストファック……人生で最大級の激痛を味わいながら再び意識を失う笠木慎吾。
焼け爛れた直腸内を激しく摩擦する拳はまさに地獄の激痛となって男を襲った。

宮垣咲良が肛門にライフルの銃口を突っ込んでいた。

「熱い……ケツの穴が熱い……ううう」

「熱い？　うふふ。そりゃそうでしょうね。ライフルのぶっとい銃口がめり込んじゃってるんだから……ってゆうかもうあんたの肛門も直腸もズタボロになっちゃってるよ？　剥き出しになってる直腸の穴に突っ込んであげてるの。もう股間に感覚なんてないでしょ？」

「やめて……許してくれ。お願いだ」

「だめ。ほら、お尻をもっと突き上げなさい。直腸から身体を一直線に頭までライフルで撃ち抜いてやるんだから」

「いやだ！　死にたくない！　許してくださいお願いしますううう！うおおおん！　うおおんっ！」

「気持ち悪いなぁ。中年男が声出して泣くなよ……女子中学生にアナル犯されて内臓吹き飛ばされて死ねるんだから感謝しろよ？」

「ひぃいっ！！　やめてえぇえっ！！」

四つん這いに拘束されたまま宮垣咲良にライフルの銃口を、パックリ裂けた痛々しい肛門部分に突っ込まれて泣きじゃくる中年男。

菅野莉央が顔面を何度も何度も殴りつけた。

鼻の骨は折れて歯も前歯全て抜け落ち、唇は裂けて血まみれになる。

「覚悟して銃撃を受けなさい。パックリ開いてる下半身が更にグチャグチャになるからな？」

「はうう。ゆ、許して……死にたくない……」

「咲良さん。もういいから撃ち込んで」

「うん。ほら、肛門の裂けた直腸口から直接鉛玉を喰らわせてやるよクソ野郎！」

「はううっ！　や、やめ……」

『ドンッ！！』

「ピギィイイッ！！」

『ビチャビチャビチャビチャビチャビチャッ！！』

粉々になった肛門括約筋と直腸、大腸が辺りに振り注ぐ。
頭も吹っ飛び、目玉と脳みそが飛び散った。
残った上半身が激しく痙攣している。
「哀れな死に様だね。もう二度と女性を辱めることなんてしないでね？」
菅野莉央は痙攣する胴体を足の裏で押さえつけながら呟いた。
吹っ飛んだ下半身部分から吹き飛ばずに少し腹腔内に残っていた大腸と小腸がドバドバと流れ落ちてきている。
「ホカホカの湯気登らせちゃって……あんたみたいなカスでも内臓はあったかいんだ……」
皮肉を言う莉央の隣でウインクしながら煙をあげる銃口をカッコよくフウッと吹く宮垣咲良。
残酷処刑島に新たに五つの遺体が加わった……。

盗撮の罪（後書き）

多数の女性を辱めた行為に対する報い。
少々残酷過ぎることとは思うが、国の下した判決は販売に関係した者全てに対する拷問処刑であった。
数日後、船瀬寛次郎６５歳は南部にある倉庫を特殊任務省が借り切り、鬼頭美紅による拷問刑が執り行われた。
夜中の南部倉庫のシャッターが静かに開くと、一人の少女が入ってくる。
「だ、誰だ！？　ワシを早く解放しろ！　国会議員にも警察の上層部にも知り合いがいるんだぞ！　こんなことしてタダで済むと思うなよ？　おい、聞いてるのかっ！？」
鬼頭美紅は薄暗い橙系の電灯をつけると、ゆっくり船瀬寛次郎の元へ歩み寄る。
ゆっくりと手足を拘束している縄を解き始めた。
「は、話せば分かるじゃないか！　早くしやがれ！　タクシーもついでに呼ばんかいっ！　風呂に入りたいんじゃワシは！」
全ての縄を解くと、フラフラしながらも開いたシャッターの方へ歩

いてゆく。

「ホントに！　ワシを拐った奴ら絶対許さんからな！」

「ちょっと待って」

「なんじゃ！？　よく見れば女のガキじゃねぇか！　さっさと帰れ。ママが心配してるぞ？」

長時間の拘束により痺れた身体でありながら無理矢理笑顔を作ると、再び振り向いて立ち去ろうとする船瀬。

「あたしと喧嘩してよ」

「何だと！？　舐めるなよ！？　初老でもガキなんかにやられるワシではないわ！」

腕を掴んで捻りあげようとする船瀬に、反対の手の拳が顔面を捉える。

勢いよく鼻血を出しながら膝をつき、崩れ落ちる船瀬寛次郎。

「うぐっ！？　いだだだだ……くっそおおおっ！！」

禿げかけた前髪を後ろへ指でとかすと、怒り絶頂状態で殴りかかっ

てくる。
一分後、うつ伏せに倒れ込んで咳き込むことになる。
腹と顔面に５０発以上拳と蹴りを受け、早くも戦意喪失してしまっていた。
「はぁ、はぁ、はぁ、な、なんてガキだ……」
「まだそんな口聞いてんの？　殺していい？」
「うっ……す、すまん！　謝るからもう帰してくれ！　妻と子供も心配してるんだ。スマホも全て誘拐された時に奪われちまってるし……」
「あ、コレね。預かってるから返しといてやるよ。ほら」
倉庫の床のコンクリート上へ投げ渡す美紅。
「おいおい、壊れたらどうするんだ！……無事か。良かった。早速妻に電話させてくれるか？」
「どうぞ」
慌ててダイヤルする船瀬寛次郎だったが、繋がる前に一言告げる美紅。

「救急車呼ぶことになるから南部総合病院へ来てもらいな」

「え？　あ、おい、ワシだが。ああ。心配ない。もうすぐ帰るからな」

「一時間後に南部総合病院の救急へ来いと言え！」

「うぐっ……よ、よく分からんが南部総合病院へ一時間後迎えにきてくれるか？　ああ。とにかく頼む」

電話を切ると美紅を睨みつける船瀬。

「どうゆうつもりだ。まだワシに暴力を奮うとゆうことか？」

「まあね。その程度で家に帰れると本気で思ってた？　死にたくなかったらさっさと素っ裸になれ」

かなり抵抗を見せたが、美紅の余りの強さを痛感している船瀬は渋々全身の服を脱ぐ。

直径5センチはあろうかとゆう超極太バイブをペニスバンドにセットする美紅。

「四つん這いになってお尻をつきあげな」

「なっ！　何をする気だ貴様っ！？」

「コレ見て分からないの？　おっさん馬鹿なの？」

可愛いセーラー服を着たミニスカートの少女は、禿げかけたおっさんの背後に膝をつき、両手で臀部を左右に押し開いた。

「ほら、突っ込んでやるから肛門見せろ」

「ひっ！　や、やめろ！　やめてくれっ！」

「ローション無しでいくから。痛いよ？」

『グリ……ズブッ！……ヌププププ！』

ゆっくりだが確実に年寄りの割には締まりの良い肛門を押し開き、直腸内へめり込んでゆく超極太の張形。

「ぐぎゃああああっ！？　さ、裂けるうううっ！！」

『グリリリリ……ばっちゅっ！！！！』

「がはあああああああっ！！！！」

直径５センチの張形は遂に肛門を拡げ切って、直腸へめり込んだ。

長さも１５センチはあり、更に根元までゆっくり挿入してゆく美紅。

『ズブブブブブ……』

直腸突き当たりであるS状結腸に届き、一度止まるが強引に捩じ込んだ。

『バコオッ！！……メリメリ！　ぶちゅっ！』

「がひゃあああああああっ！！」

S状結腸が裂けて夥しい量の鮮血が噴き出してくる。
構わず両手で臀部をガシッと掴んだまま激しく腰を振る美紅。

『バッコンバッコンバッコンバッコンッ！！』

「オラァッ！　どうだどうだ？　痛いか？」

「あがががががあっ！！　痛いいいっ！！　やめ、やめてぐれえええっ！！」

一度張形を引き抜き、動けなくなる弛緩剤と血止めの注射を打つと、今度は体操部が使うバトンを取り出し、血まみれの肛門にあてがう。
一気に直腸深く捩じ込むと、これまた激しく出し入れを繰り返す。

『ズボォッ！！……ズッポンズッポンズッポンズッポン！！』

「ひぎいいいいっ！！　もう許してくれ……い、痛いいい」

「言葉遣いがなってないわね？」

「ぐわあああっ！　お願いです！　も、もう許してくださいいいいっ！！」

ゆっくり立ち上がると、右脚を振りかぶり思いっきりバトンを蹴り込む。

「ほら、全部飲み込め！」

『ズドンッ！！……グチュチュチュチュチュチュウッ！！』

S状結腸は先が丸いバトンでは貫通せず、小腸の奥の奥まで大腸ごとめり込んでいった。
腸捻転の再現処置であり、コレは地獄の激痛を味わうことになる。

「かはあっ！？　ぐおおおお……」

絶叫さえ出ないほどの腹部の激痛にへたり込んで小便を漏らす。

意思に関係なく勃起させる注射も打ち、立ち上がらせる。

「倒れたら殺すからね？」

バトンの反対側の白い部分が肛門から少しはみ出してきて、プルプル震えながら鮮血を垂れ流している。

激痛の中で勃起したペニスをキュッと掴み、シコシコとシゴき始めるツインテールの女子中学生。

「はうはうはうっ！！」

「ほら、アナルにブットイの突っ込まれたまま射精しろ」

『シュコココココココッ！！』

「はへえええええっ！？　ああああっ！！」

『ドピュウッ！　ピュピュピュピュピュピュウッ！！』

激痛が腹部を襲う中、無理矢理ピストン運動された陰部は快感を覚え、ほんの数秒で大量精液をぶちまける船瀬寛次郎。

膝から崩れ込み、後ろへ倒れ込む。

『ガガガガガガガガガッ！！』

「あたしの足が疲れるまでひっこくやったげるから！　覚悟しなさい」

そのまま鬼頭美紅の鬼の電気アンマを半時間以上続けた船瀬の睾丸は、二人とも完全に破壊されて、ペニスも裂けてズタズタになっていた。

もはや切断しないと腐ってしまうまでダメージを受けている。

「はわわ……わわわ……はがはが……」

痙攣しながら白目を剥く船瀬寛次郎であった。

「あはは！　何言ってるの？　とりあえず救急車呼んだいたからね。腸と性器破壊しちゃったけど死んだ奴らに比べたら生きられて良かったじゃん！　バイバイおっさん♪」

悪を懲らしめた女子中学生は、颯爽と血まみれの太腿と制服姿のままで帰ってゆく。

夜中の倉庫に救急車のサイレンが鳴り響く……。

少女の狂気（前編）（前書き）

男と女、男同士と女同士。

世の中には様々な愛の形が存在する。

小学生のレズビアンが存在しても何もおかしくはない。

「この土日、久しぶりに泊まりに行っていい？」
「うん。お婆ちゃんもお兄ちゃんも用事で出かけるからちょうどいいよ」
「やったあ！　それなら気を遣わないで済むね」

１２歳の小学生アイドルであり、拷問処刑人である菅野莉央と富田美香は付き合っていた。
たまにデートをしては、愚痴を言い合ったりしてお互いを癒し合っていたのである。

夏の日の土曜日の夜、二人は莉央の部屋で添い寝している。
「莉央ちゃん、あたし最近悪人を拷問処刑する時なんか興奮しちゃうんだ……。やっぱ変態なのかな？」
「Sなんだろうね美香ちゃんも……あたしもたまに濡れちゃうから気にしないでいいと思うよ」
「あはは！　そうなんだ。でも最近拷問の仕方や殺し方がマンネリ化しちゃってる気がするなぁ」

そう言いながら元々ツインテールの髪のゴムを解いて莉央と同じく黒髪ロングに変身している美香だった。

「基本エッチな所を重点的に破壊しておけばＯＫなんじゃない？」

「そ、そうだよね！　それが一番萌えるし！」

仰向けで寝ている莉央に横向け体勢で抱きつく美香。

「莉央ちゃん……大好きだよ」

「うん。あたしも大好き」

パジャマを脱がしあってから素っ裸で抱きしめ合う女子小学生の二人。

小学六年生でも既に二人に処女膜は無かった。

『クチュクチュ』

「あんっ！　莉央ちゃん、気持ちいぃ」

莉央の右手の中指が美香の膣内を優しく掻き回す。

「あ、あん」

「お尻も気持ち良くしてあげようか？」

「やだ莉央ちゃん……エッチ」

『ズブ……ズブブブブ！』

「ひゃんっ！　んんんっ！」

左手の中指を美香の肛門にゆっくり差し込み、こちらも優しく掻き回す。

「あんあんあんっ！！　イくうううっ！！」

「イけ」

『プシュウウウウッ！……ビクビクッ！！』

潮を噴いて小刻みに全身を震わせながら莉央の指でイかされる美香。

「はぁ。はぁ。はぁ」

「今度はあたしがイかせてあげるね」

掛け布団の中に潜り込み、莉央の小陰唇を押し開き、舌を膣内に突き入れる。

「んんっ、やだ。汚いよ美香ちゃん」

「ペチャペチャ！　んん、汚くない。莉央ちゃんのこと愛してるんだもん。ペチャペチャペチャ！」

満遍なく小陰唇から膣口、膣内を舐め回してからクリトリスの皮を剥き、激しく舌先で舐めまくる美香。
莉央も潮までは噴かなかったが、美香にイかされた。

ティッシュでお互いのアソコを拭きあったあと、再びパジャマを着て仰向けになる二人。
美香がそっと口を開く。

「莉央ちゃん」

「ん？」

「えとね。あの、もしさぁ、あたしが罪を犯して処刑されちゃう側になっちゃって……拷問処刑担当が莉央ちゃんだったら……どうゆうふうにあたしを殺すのかなって……」

暗闇の中で天井を見つめながら美香の話を聞く莉央。

「そうだね。数十回も指と道具でイかせてから……お尻から日本刀で串刺しかな」

「え？　そんなにイけないし……やっぱ最後は殺しちゃうんだ？」

「あはは！　冗談冗談。多分美香ちゃんは殺さないよ。ってゆうか……殺せないと思う」

「じゃあ他の人に代わってもらうの？　明日香ちゃんとか咲良さんとか美紅さんとかに……」

しばらく黙っていたがそっと美香の方を向いて囁いた。

「美香ちゃんはあたしが助ける。美紅ちゃんでも明日香ちゃんでも相手が誰でも絶対殺させない」

「…………」

答えても反応がない。

「なんだ……自分から質問しといて寝ちゃったのか。のび太並に寝つくの早いな……おやすみ」

莉央は呆れながら掛け布団を首まで引き上げて目を閉じた。
反対側を向いてボロボロと涙を流す美香に気付くことなく日曜日の朝を迎える。
朝ご飯の卵焼きを作る莉央に、背後から抱きついてくる美香。
かなり邪魔になるが必死でおかずを作る。
「ちょ、ちょっと美香ちゃん！　邪魔だから！」
「そんな冷たいこと言わないでよぉ！　あたしも何か手伝うよぉ！」
料理の才能がゼロどころかマイナスであることを知っている莉央は、後の地獄を回避するため丁重に美香の申し出を断る。
「大丈夫大丈夫っ！　美香ちゃんはゆっくりテレビでも見てて！朝のニュースでも」
「ちぇっ。つまんないの～。分かったよ。そのかわり早く作ってね」
「はいはい」
呆れる莉央に拗ねた美香。
テレビの置いてある部屋に移動して電源を入れる。
『……繰り返しお伝えします。２３日昨夜１１時頃、北部地方山間

部の小倉山で、小学生児童と見られる遺体を付近に住む山菜取りの男性が発見しました。遺体は頭部と手足を数箇所切断され、バラバラの状態で黒いゴミ袋の中に詰められて埋められていた模様です。昨日からの雨で一部の土砂が崩れ、ゴミ袋が露出し、男性がこの度の発見に至ったと見られています。警察では数日前から行方不明になって捜索願いが出されていた長尾裕二くん１０歳とみて、身元の確認を急いでおります。二週間前から今回で三件目の児童の遺体発見に、警察では同一人物の犯行も視野に入れて捜査を続けています。さて、次のニュースです』

「ひっどーい……小学生の子をバラバラにして埋めちゃうなんて……」

美香は睨みつけるように画面を凝視する。

「お待たせ美香ちゃん。卵焼きと味噌汁作ったよ」

「あ、莉央ちゃん、昨夜とんでもない事件があったみたい！あのね今ニュースで……」

美香の語りを遮るように莉央のスマホが鳴り響く。

「ちょっとごめんね！……藤堂長官だ」

「う、うん」

出鼻を挫かれた美香は、ＣＭに変わったテレビの画面を再び見始めた。

『菅野くんか、おはよう。元気ですか？』

「猪木ですか？」

「え？　猪木？　いや、仕事の依頼だ。この度も警察が協力してくれて本来死刑か無期懲役になるであろう女の身柄を我々に引き渡してくれた」

次の拷問処刑の依頼を真剣になって特殊任務省のトップである藤堂長官から聞く。

「数年前までは警察省と特殊任務省の犯人の取り合いだったのに……我先に捉えた方がその省庁の方法で裁くとゆう」

「そうだな。警察の警視総監と酒の席で話してるうちに気が合ってきて私たちの考え方もアリだと理解してくれたみたいだ。厳密には裁くのは警察ではなく法務省だから、警察で拘束したことは国の機関全体では内密になっているはずだ」

「結局非道な奴らには厳罰を！って考えになっちゃったわけね警察トップも……」

「ああ。度が超えてる犯罪者は今まで通り行方不明扱いにして我々に世間には内密で引き渡してくれるようになった。しばらくは忙しくなるぞ？」

「はい。こちらも人数は初期よりかなり増えてますので……どうにかやれそうです」

ＣＭを必死で見ているうちに新しいシャンプーが物凄く欲しくなる美香。

莉央の電話の内容は全く理解していない。

「佐田山組とゆう北部地方で猛威を振るう暴力団がある」

「何度か聞いたことあります。ちょくちょく野球賭博とかしょーもないことで検挙されてましたよね？　その組長がついにとんでもない罪を犯したのですか？」

「組長ではない。その娘だ」

「え？　娘？」

「うむ。中学を卒業してからずっと組長のスネをかじって遊び惚けている１９歳の娘だ」

チラっと美香の方を見てから再び藤堂長官に問いかける莉央。

「拷問のみではなく、処刑島での拷問処刑ですよね？」

「そうだ。警察の調べによると過去二件の行方不明事件と今回の事件、全て犯人は同一人物であるとのことだ。いずれも小学生児童を付き合っているチンピラに誘拐させては拷問して殺していたそうだな」

「三人もの児童を手にかけるなんて……」

「え！？　児童！？　まさか今ニュースでいってた小倉山のバラバラ殺人の犯人っ！？」

藤堂長官から聞いた事情を美香に話し、次回の処刑の意を固める美香だった。

「小学生の子を三人も殺してバラバラにして埋めちゃうだなんて絶対許さないんだから！くっそぉー！」

怒りに震える美香をよそに、さらに話を詳しく聞く莉央。

「はい……はい。そうですか。分かりました」

電話を切った後美香に全貌を説明する。

佐田山美咲１９歳。
初犯１２歳の男の子、二回目６歳の女の子、今回の三回目１０歳の男の子。
男子児童二人と女子児童一人の命を弄んで絶った罪は重い。

「あのさ莉央ちゃん、これってほうっておいても無期懲役じゃ済まないよね？　三人も殺しちゃってるからもう完全に死刑でしょ？」

「そうだね。でもチンピラが彼氏みたいだから色々証拠隠滅したり庇ったりしたら立証出来ない可能性もあるし。冤罪を恐れての無期懲役とゆう審判は十分あり得るよ」

「そっか。そうなったら三人の被害者と遺族たちも浮かばれないよね……警察もやるじゃん最近」

「うん。佐田山美咲にはきっちり地獄を味わってもらうしかないよね」

「うんうん！　あたし張り切っちゃうぞぉ！」

「あ……ごめん美香ちゃん。共犯者である誘拐者の真鳥和仁と佐田山美咲の二人を処刑するのは今回は四人で……あたしと中学生たち三人の出番なの。真子さんとメグさんと美紅ちゃんとあたし……」

ポカーンと口を開けて数秒固まる美香。

「そ、そんなぁ。ちぇっ！」

「最近美香ちゃんはよく〝ちぇっちぇっ〟言うなぁ。あはは……」

「ちぇっ……」

執行が本日日曜日の夕方となったので、本気で悔しがる美香をタクシーで帰宅させる。

――――二週間前。

「このガキは高嶺のジジイから高く取れそうですぜアニキ」

「そうか。やつは政治家とはいえ陰で悪さばかりしてるからな。悪事を黙っておいてやる上に歳食ってようやくできた大事な大事な一人息子の命……この二つだけで数千万は取れるだろう」

「ワハハハハ！　そうですそうです！　とりあえず姫の自宅倉庫に監禁しときますわ」

「そうだな。アソコならかなり田舎だし多少うるさく騒がれても誰にも気づかれまい。しかしお前も……オヤジの娘と付き合えるなんて幸せものだなぁおい！？」

「いきなりオヤッサンに呼び出された時はドキドキしましたがまさか娘さんがアッシに惚れてるだなんて……夢のようでしたぜホント……」

やがて日も暮れて、はしくれのチンピラである真鳥和仁は佐田山組長の娘である佐田山美咲と共に自宅倉庫の監禁場所へ入る。
不安で泣き続けて目を真っ赤に腫らした小学六年生の男子児童、国会議員の息子である高嶺涼太がすがるような目で二人を見つめてくる。

「あら……悪党の息子と聞いたからどんな嫌味のある顔してるかと思ったら……可愛い顔してるわね」

「そうですね美咲はん。手錠を両手に掛けてロープで柱に繋いでますんで絶対逃げられないと思いまっせ」

児童虐待の映画や小説を最近読んでいて、かなり変な趣向に目覚め初めていた美咲は、彼氏であるチンピラの和仁を自分の部屋に帰した。

「この子と色々遊んでから部屋に帰るから……待っててくれる？」

「へい！　一体こんなガキと何をして遊ぶんで？　よかったらトランプとか縄跳びとかお持ちしましょうか？」

「いい。早く部屋に帰ってて」

「へーい！　愛してるぜ美咲はん」

「うん。あ、やっぱ一緒にいて！　色々手伝ってもらいたいから」

「へ？　手伝う？　わ、分かりやした」

ゆっくりと歩み寄り、拘束された男子児童に話しかける美咲。

「私、一度してみたかったのよ」

「何をっすか？」

「児童虐待」

「は？」

「は、じゃない。このガキの服を全部脱がせて！」

訳の分からないスイッチが入ってしまった美咲の言うがままに手錠を外して拘束を解き、服もズボンもパンツも……素っ裸にさせる真鳥和仁。

「わーん！　わーん！　やだあ！　パンツまで脱がさないでよおおっ！！　返してぇえっ！」

「パンツに黄色いシミがついてるじゃない？　おねーさんがお仕置きしてあげなきゃだね？　ボク……」

それから半時間ほど平手打ちで全身を打ち続ける美咲。
身体中が真っ赤に染まり、号泣を続かるしかない高嶺涼太であった。
和仁に頼んで無理矢理四つん這い体勢にさせると、今度はお尻叩きを延々と半時間ほど繰り返した。
「わーんわーん！　痛いよおおおっ！！　やめてえええっ！！」
「快感っ♪　私の叩く手の方が痛くなってきたわ。和仁、金属バット貸して」
「こ、これで叩くとヤバいんでは？」
「いいから貸しなさい！　ほんと手の方が痛いのよ！」
素手から金属バットに武器を変えて、再び涼太の折檻が始まる。
折檻と言うよりも拷問であった。
『バシッ！　バシッ！』
泣き叫ぶ児童に構うことなく更に半時間ケツバットを繰り返す美咲。
臀部の皮が破れ、広範囲から鮮血が流れ落ちてくる。

「あはは。叩くだけでもいつか血がでるんだね！　おもしろ～い♪　それえっ！」

『ガツッ！！　ドカッ！！』

「んぎゃあああああっ！　やめて許してお願いいいいっ！！」

小学六年生児童のお願いも虚しく、美咲の拷問は更にエスカレートしてゆく。

この辺りからチンピラの真鳥和仁の方がビビリ始めていた。説得しても止めようとしない美咲に、もう諦めて服従することにした。

言われるままにハサミを取り出して美咲に手渡す。

児童の皮かむりのペニスを左手で摘むと、思いっきり引っ張り、右手で持ったハサミで皮の部分を切断した。

『ザクッ！……ズルズル……ベロンッ！！』

「んぎゃああああああっ！！！！」

普通にかむっている先端部分の皮を強引に切られた陰部の残りの皮は、根元へ向けて一気に捲れあがってしまった。

真っ赤な身を剥き出しにしたペニスが血を流しながらプルプル震えている。

「あはははははっ！　見て和仁！　先端の皮をちょんぎったら根元までズル剥けになっちゃったぁっ！」

「み、美咲はん、……この子に何か恨みでも？」

「ないよ。無性に虐めてみたくなっちゃっただけ」

『シコシコシコシコ！』

ズル剥けになった真っ赤なペニスを人差し指と中指と親指でキュッと摘むと、高速でピストン運動をする美咲。
激痛でしかない和仁は声にならない叫びを続ける。
喉も枯れるほど泣き喚いた頃、その時はやってきた。

「これ、お父さんが持ってた中国製の槍なんだけど……お尻の穴から突っ込んでみようかな？」

「し、死んじゃうからそれは……ヤバイっすって美咲はん！」

「ほら、このガキまだ抵抗するから押さえつけてて！」

結局言われるがままに押さえつける和仁。

「ほら、肛門を見せなさい」

左手を血まみれの臀部に当てて、思いっきり肛門が見えるように押し開く美咲。
そのまま槍の切っ先を中心部へあてがう。

「ここね？　ボクのお尻の穴は？」

「イヤ！　やめて！　痛いいいっ！！　んんんっ！！」

『づぷ！』

「ひいっ！？」

１センチほど鋭い切先が男子児童の肛門へ挿入された。

「痛いっ！　抜いてええええっ！！」

「どこまで突っ込んだら死んじゃうんだろうね？　今からそれをおねーさんに教えてくれるかしら？」

ゆっくりと槍を差し込んでゆく。
直腸をすんなり通過した切っ先は、結腸をも簡単に突き抜け、大腸と小腸を何枚も貫通していった。

『ズブブ！　バリバリ！　ぬぷぷぷぷっ！　ずちゅちゅっ！』

「んぎゃあああっ！！　ぎひいいいいっ！！」

肛門から噴き出す鮮血。
痙攣を始める小さな身体。

「ほらほらほら、お尻の穴から内臓掻き回してやるわ」

「ゲエエエッ！！　ぼたぼたっ！」

ついに血を吐いて白目を剥く涼太。

「トドメは足で……お口まで貫通しろ。ほらあっ！！」

『ドカッ！！……ぶしゅううっ！！』

ついに口から槍の切っ先を出すことに成功した美咲は、満足気に痙攣している児童の遺体から槍を一気に引き抜いた。
思いっきり振って血を振り払うと、にっこり笑って和仁に一言。

「快感っ！　次も児童拐ってきて！　今度は女の子がいいなぁ」

「……う、は、はい。美咲はん、そんな残酷な方やったんやね？」

「そうかな？　そうかもね。なんかゾクゾクするの。変な小説読むんじゃなかったわ。でもお父さんだって今まで何人も殺してると思うけど？」

「それはそうやろねぇ……でもまぁ組の為やろうからねぇそれは……って何してはるん？」

「え？　金玉の解剖」

男として下半身がヒュッとなるのを感じて身震いするヘタレなチンピラの真鳥和仁だった。

美咲は男子児童の遺体の横にひざまづき、器用な手つきでハサミを操り陰嚢を十字形に切り裂いてゆく。
そっと指を陰嚢の内側へ差し込んで、生の睾丸を抉り出した。

「小学生ってこんな小さいんだねぇ。和仁のも抉り出してあげようか？」

「うっ、ご、ご冗談を！　は、ははは。終わったら声かけてくだせえ……」

目を背けて後ろを向いて座り、１９歳の少女の児童への性的拷問、いや、……遺体解剖が終わるのを待つことにする和仁。

「ねぇ和仁。チンポって輪切りにするのと短冊切りにするのとどっちが面白いかな？」

「ひっ、ど、どっちも痛いっすよねぇ……面白くはないっすよ……。もう同じ男として痛々しすぎるからアッシには聞かないでくだせえ」

『ザク！　ザク！　ザク！　ザク！』

慎重に小さな剥き身にされた可哀想な児童のペニスを、四回も亀頭部から根元へハサミで輪切りにしてゆく美咲。

「うわあ。スッゴい……金太郎飴みたいに尿道の穴が全部に空いてるぅ。あはははは！」

その後、電動ノコギリで手足と首を切り離し、気の済んだ美咲は風呂場へ向かう。

寒気を覚えながらも黒いビニール袋を何枚も重ねて血が漏れないように慎重にくくりつけた。

「派手な生ゴミだなこりゃ……」

車に乗せて山中深く運び、必死で用意したシャベルで穴を掘って埋める。

「はぁ、はぁ。参ったなこりゃ。ゼニにならない上に呪われたりしそうだぜ……」

明くる日も女の子を攫ってきた和仁は、途方もなく可哀想になり、やっぱり殺さないであげてと美咲に嘆願するが、あっさり申し出を蹴られる。

「二人目の今回の女の子は手伝わなくていいよ。零時頃に倉庫にきて。それまでに終わらせておくから」

美咲の部屋でスマホの映画を見ながら夕方から零時まで時間潰しをする和仁だったが、段々吐き気までもようして来る始末。

「お、おええええっ！！　だ、だめだ。昨夜の涼太くんのバラバラ遺体が頭から離れねぇわ……おええっ！！」

美咲の部屋のカーペット上に二度もゲロを吐き散らす和仁。
そのまま横になっていると数分としないうちに寝込んでしまった。

「あうあうあううううう……」

小さな子供用の口枷を捩じ込み、パンツ一丁のままで見物する美咲。

「こんな小さな子供用の口枷までこの世にはあるのよねぇ。変態だらけなのねきっと」

「あうあうああ」

「なぁに？　お嬢ちゃん。おねーさんが今からイイコトしたがるからねぇ？」

超強力なプラスチックや薄い鉄でも切り裂くようなハサミを構えて吊るされてブランブラン揺れている女の子の前に立つ。

足が閉じられないよう両膝の部分には太い棍棒を横に括り付けて開脚状態でぶら下げていた。

膝と股間だけ開いて足の裏は両方ピッタリとくっつけた変な格好で拘束している。

「このハサミ、すっごいんだよ。だいたいのもん簡単に切り裂くんだ……五千円もしたのを今日買ってきたの」

「ううん、あううううん」

涎を垂れ流しながら吊るされたまま唸り声を上げるしかできない六歳女子児童。

まだ小学一年生になったばかりのその子は、斉藤由希子という名札をセーラー服に付けていた。

「由希子ちゃんっていうんだよねあなた。このハサミを開いてっと！　よっ」

『ザクッ！』

「んんんっ！？」

いきなり縦方向に大きく開いたハサミの下の刃をパンツ越しに女子児童の膣へ差し込む。

真っ白なパンツがみるみるうちに真っ赤にそまり、ガニ股に開かれた太ももを大量の血が流れ落ちる。

「今ので小さな処女膜逝っちゃったよね！？　あはは！」

「んんんんっ！！　あうんんんんんんっ！！」

小さな性器にいきなり突っ込まれたハサミの片方の刃……。
斉藤由希子は生涯で初めて味わう激痛に口から涎を垂らしながら目を思いっきり瞑って顔を顰めながら号泣する。

「さぁここからだよ本番は。両手でしっかり握って！えいっ！えい

いいっ！！」

『ギュッ！　ギュウウウウウウ！！』

『ザクザクッ！　メリメリ……バキッ！！』

「うんぐううあうううあうううあううっ！！！！」

縦方法に思いっきり握り込んだハサミは、尿道とクリトリスを真っ二つにし、更に恥骨まで真っ二つに粉砕した。

『ジョキジョキジョキジョキ！』

膣の上部分と尿道と陰核を一瞬で断ち切ったハサミの刃は、下腹部も切り裂いておへそまで真っ二つにした。

『ズルズル……ドボボボッ』

「ふんぬうううううっ！！　んんんんんっ！！！！」

「あらやだ。腸までブリブリ垂れ落ちてきちゃってるわよ？ヤラシイなあもう由希子ちゃんってば……」

『ズルルル……グチュグチュ！』

「子宮取り出しちゃうから待っててて！」

『グチュチュチュ……ガツッ！　ぬぽんっ！』

手首まで切開した股間から突き入れた美咲は、見事に前方のみ切り開かれた小さな子宮を抉り出す。

「ほら、将来ここに赤ちゃん作るはずだったのになぁ。残念ながら私に弄ばれて今日死んじゃうんだ由希子ちゃん。嬉しい？　もう必要ない子宮なんか足で踏み潰しといてやるからねぇ？」

足元に落として右足でグチャグチャにすり潰した。

「んううっ！！　んあううううっ！！」

激しく首を振りながら激痛に耐える幼女だったが、切開された尿道から……実際殆ど切開されているため、ほぼ膀胱の出口から……激しく血尿を降り注がせた。

足元には腸と美咲が落としてすり潰した子宮のミンチが散らばっている。

吊り下げたまま後ろを向かすように回して、お尻を平手で打ち付け始める。

十回、百回、臀部は真っ赤に腫れ上がり、血まみれの股間と太も

ものような紅に染まる。
電気ノコギリのエンジンをかけ、両脚を太ももから切り落とすと、今度は性器からおへそまでパックリ開かれている股間へあてがう。
『ブイイイーン！！　ブィンブィン！！』
「エンジン絶好調！足の次は手と行きたいけど、ぶら下げたまま料理してやりたいから……ダルマ幼児にするのだけは勘弁してあげる」
「んんんんっ！！　うううううんっ！！」
泣きさけぶ声も段々と弱々しくなってゆく。
出血による失血死が近づいていた。
『ツプ！』
人差し指を膣からの鮮血でまっかになっているが、辛うじて無事な原形を留めている肛門に突っ込んで不敵に笑う美咲。
幼女の直腸は激しく音がするくらい激しく指で掻き回された。
一気に指を引き抜くと、口枷を外して口の中へ便まみれの指を突っ込む。
「ほらあ。自分の汚いうんち、舐めとりなさい」
「んごおおおおっ！！　んぎいいいいいいっ！！」

ようやく喋れるようになっても激痛による叫び声しか出さないでいる斉藤由希子。

「さぁ再開だよ。ハサミで切り裂いたようにお尻の穴もコレで真っ二つにしてやるから由希子ちゃん♪　ほらあっ！」

『ヴィーーンンン！！　ザシュシュシュシュシュシュシュウッ！！　ザクザクザクザクザクザクッ！！』

首まで真っ二つにされた幼女の遺体は吊るされたままでしばらくクルクルと回転していた。
血まみれのハラワタと鮮血を垂れ流しながら……。

少女の狂気（前編）（後書き）

三人目の犠牲者を出してしまった児童に狙いをつけた連続バラバラ殺人事件。

二週間前からの一人目から二人目までの犠牲者の顛末が語られる。

男子、女児、そして最後の犠牲者となる三人目はどんな恐ろしい目に遭わされるのか？

少女の狂気（後編）（前書き）

更に続けられる少女の狂気。
三人目の児童の運命は？

少女の狂気（後編）

「もう今回で最後にして美咲はん……」

「あらぁ。今回はちょっと不細工な男の子なんだね！」

不細工と告げられて、誘拐された身でありながらもムッとする１０歳の男子児童は悪態をつき返した。

チンピラの真鳥和仁は、そそくさと倉庫を出てゆく。

見かけのイカつさに比べ、かなり血が苦手な臆病者みたいであった。

「うるさいんだよババァ！　お前の方が不細工だし！」

「威勢がいいわね。今までで一番楽しませてもらっちゃうんだから」

男子児童に続き女子児童、さらに三人目の男子児童を手にかけようとしている佐田山美咲。

今回も佐田山組のチンピラである真鳥和仁が車で拐ってきた児童であった。

「長尾裕二くん１０歳ね。取り敢えずお尻叩き百回から初めちゃぉ

うか？」

佐田山組の倉庫で組長の一人娘である佐田山美咲が三人目の児童の拷問を開始する。

「ほらどうしたのさっきまでの威勢は？」

「わーんわーん！　痛いよおおっ！　ごめんなさいいっ！」

お尻を真っ赤に染めながら泣きじゃくる１０歳の長尾裕二。

「ごめんなさいではもう済まないんだよねボク……」

四つん這い体勢で低い机に縛りつけたままで尻叩きを終了した美咲は、千枚通しを棚から取り出した。

「金玉を田楽刺しにしてやるから」

「で、でんがくってなぁに？　もう痛いことやめてっ！」

「こうするのよ！」

『グサッ！……ズブブブ……グサッ！』

「がはあああっ！！　いだいいいいいいっ！！！！」

陰嚢ごと二つの睾丸を貫いた銀色に鈍く光るキリ……。

小学四年生の男子児童、裕二は太ももをパクパクと開閉しながら泣き叫ぶ。

どうもがいてもキツく締め付けられた拘束が解けることはなかった。

「うふふ♪　金玉串刺しの刑よ？　痛い？」

「んがあああああっ！！　ぎゃああああああっ！！」

もがき苦しむ児童の肛門へ中指を差し込み、グリグリと掻き回す。

『ズボッ！　グリリリリリリリッ！！』

「あははははは！　もがくたびに締め付けてくるわねボクのお尻ちゃん！」

爆笑しながら肛門から指を抜き、巨大なニッパーを棚から取り出して長尾裕二の指を一本ずつ切断してゆく。

『ザクッ……メキメキ……バキャッ！！』

「があああああっ！！」

悲痛な叫び声を聞くたびにゾクゾクしてくる美咲は、容赦なく一本一本切断していく。
十本全ての指を切断した頃には小便を漏らし、肛門を開いたり閉じたりしてうねうねともがいていた。

「次は足の指全部切断よ？　ほらほら……えい」

『グリ……バキャ！！』

この世の地獄を味わいながら男子児童は号泣を続ける。
やがて手と足の全ての指を切断された裕二は、激痛で気を失う。
その気絶も更なる激痛によってすぐに起こされるハメになる。
巨大なペンチで金玉袋を挟み込み思いっきり引っ張る。

「わあああああっ！！」

激痛で目が覚めた少年は引っ張られるたびにお尻を突き出し、また引っ込めての繰り返し運動をするハメになる。

「あはは！　ほら引っ張るぞぉ？　ほれっ！　ほれっ！　タイミン

グ合わしてお尻動かさないと痛いでしょう？」

散々裕二の反応を楽しんだ後、両手で全力で握り締め、金玉袋へのトドメに入る。

「結局最後は引きちぎられちゃうんだけどね……」

『ギュウウウウウウ……バリバリッ！！』

「ひぎいっ！！」

遂に１９歳の少女によって小学四年生の男子児童の陰嚢は中心部からむしり取られてしまう。

貫通痕を無惨に残した二つの睾丸が飛び出してくる。

神経の管でプランプラン揺れる二つの睾丸を見ながら頬を赤くして微笑む美咲。

「まっ白い生のキンタマ出てきちゃったぁ♪　ヤラシイわねぇ……右の方が少し大きいのねボク？」

声にならない絶叫をあげるしかない長尾裕二。

神経の管と、それにぶら下がっている生睾丸を残したまま、周りの陰嚢部分を股間の付け根まで全てハサミで切り取ってゆく。

『ジョキジョキジョキ！』

「あははは♪　オチンチンにまで血が流れて真っ赤っ赤になっちゃったぁ！まだ金玉と比べて無傷なのにねぇ？」

『ピン！　ピン！　ピン！　ピン！』

哀れにぶら下がっている全ての陰嚢を奪われた生の睾丸を中指で何度も弾く。

左右交互に弾かれた睾丸は、串刺しにされた穴から血と粘液を垂らしながら無惨に揺れている。

「やだぁ。穴開けられて外に引き摺り出されて……弾かれて揺れちゃって……ほんと惨めなキンタマぁ～。あはは！」

指で何十回も弾いて揺れ具合を楽しんだ後、会陰部にハサミを突き刺す。

「もう玉袋は無くなっちゃったんだし……剥き出しになった会陰部のこの辺りから穴を開けて……と！　えいっ」

『ズブ……ズチュチュ！　グリリ……』

男子児童は四つん這い状態で全身をビクビクさせながら号泣を続ける。

１９歳の少女の中指は、穴を開けられた会陰部から挿入され、ペニスの根元にまで突き進む。

さらに膀胱近くの尿道を爪を突き立てて破ると、尿道口へ向けて一直線に指を突き刺してゆく。

『ズブブ……ヌプププププ！』

「んがあああっ！？　痛いいいいっ！！」

口を大きく開けて涎を垂らしながら泣き叫ぶ裕二。
その直後に悲しい事態が起こる。
美咲の会陰部から突き入れた中指が、ついにペニスの根元を通り、尿道を貫いて尿道口から飛び出した。

『ズブブブ……ぶしゅっ！！』

「ピギィイイイッ！！！！」

「ほら、５センチあるかないかの短いガキのチンポだから簡単に私の指が貫通しちゃったね？　痛いでしょう？」

反対側の左手で二つの生睾丸を一気に握り込み、思いっきり引っ張った。

『ギュウウウウウッ！！　メリメリ』

何本かの管が収束された本体と睾丸を繋ぐ線が悲鳴を上げる。

「覚悟しなさい。二つのキンタマに何本がついてる管を……全て引きちぎってあげる」

『メリメリ……ブチブチィッ！！』

「ぎゃああああああああああああっ！！！！」

この拷問が開始されて最高レベルの絶叫が美咲の倉庫にこだました。

「地獄はこれからだよ？　ほらあっ！」

『ズチュチュチュチュチュチュチュッ！！』

会陰部側から突き入れて尿道口から飛び出している指を何度も何度も泣いたり突き出したりを激しく繰り返す美咲。

何度もお尻をくねらせながら激痛から逃れようと抵抗を見せるが、それも叶わない裕二は、声にもならない絶叫をあげ続けるのであっ

た。
　予めチンピラである彼氏に用意させておいた高水圧の洗浄用ノズルを取り出す。
　こんにゃくやトコロテンの生産工場で使われる手を当てても大怪我するレベルの水圧を持つ洗浄機である。

　直径2センチほどの銀色に鈍く光るノズルの先端を握りしめて、冷ややかに微笑む美咲。

「さぁクライマックスよ？　身体の中を綺麗にしましょうね？」

「んぎいいいい……わーんわーん！　痛いよ痛いよおおおっ！ママァーッ！　助けてよおおおっ！！　えーんえーん！」

「ママが助けに来てくれたらいいのにねホント……本当に来たら開放してあげるんだけどね！　あははは」

　そう言いながら小学四年生の男子児童の肛門へゆっくりとノズルの先端を突き刺した。

『つぷ。ズブブ』

「わあああああっ！！　もうやめてえええっ！！」

「やめてくださいい美咲様でしょ？　クソガキ」

「や、やめてください美咲様あああああっ！！　お願いしますううっ！！　痛いよおおっ！！」

「だめ。許してあげない。せっかく汚いハラワタの中を綺麗にしたげるんだから感謝しなさい。いっくわよぉ？　それえっ！！」

『カチッ……ビュウウウウウッ！！！』

美咲がノズルの引き金を引くと、超強力な水圧で水が飛び出した。その先は不幸なことに児童の肛門の中……。

『バリバリバリバリッ！！……パァンンンッ！！！！』

「ひぎゃああえええええううううああっ！？」

四つん這い体勢のまま腹部が爆発するように吹っ飛んで、ありとあらゆる内臓が垂直方向に飛び立った。
口からも内臓が飛び出し、目玉も二つとも吹っ飛んでしまう。
意味のわからない断末魔の絶叫をあげて、長尾裕二１０歳は短い生涯の幕を閉じた。

「やだっ！？　すっごぉーい！！」

裂けた腹部は低い机に縛り付けていたため、すぐに確認はできなかったが、水平に飛び立った内臓でだいたい想像はついた美咲である。

「ほらほら！　死んだか？　あはは！」

『バシュウッ！！……バシュウッ！！』

さらに二回ほど引き金を引いて高水圧を発射する。

ペニスの付け根や会陰部、睾丸のあった場所からも激しく血まみれの水を噴き出させる裕二。

全身を激しく痙攣させて飛び出した目玉の跡からも鮮血をピュッピュッと撒き散らす。

「すっごい威力ね。さすが業務用高圧洗浄機だわ」

ノズルの先端を肛門からゆっくり引き抜くと、タバコを咥えて火をつける。

「すっごい残酷でエッチなんだけどこの絵面……おねーさん濡れちゃったかも……うふふ」

目玉が飛び出して、腹から内臓撒き散らして、更にペニスと睾丸

を破壊され、手足の指まで全て切断された哀れな小学四年生の男子児童の遺体をしばらく眺めながら写真を色んな角度で撮る美咲。

「さて、記念撮影も終わったし全身バラバラにしといてあげるね？」

電動ノコギリに持ち替えて低い机からの拘束を解くと、床に蹴り転がせる。

腹腔内に少し残っている臓器までも撒き散らしながら蹴り転がされる長尾裕二。

手首から肘、肩……足首から膝、太ももの付け根……細かく丁寧に切断してゆく。

『ウイイイインッ！！　バリバリバリバリッ！！』

胴体もおへそ辺りから真っ二つにすると、股間から切断された腹部へかけて切り進める。

「どうにか原型留めている肛門も真っ二つにしちゃうわよぉ？　ほらぁ～。無惨なズル剥けチンポだって真っ二つぅ～。いやん、なんかスッゴい残酷ぅ～♪」

『ズバババババッ！！』

「可愛い乳首……これもタダじゃ済まないんだからっ。えいっ！」

小さな乳首も両方ともハサミで片方ずつ切り取る美咲。
最後の仕上げに首を切断すると、彼氏である真鳥和仁を呼び出して、ゴミ袋に詰め込むよう命令した。
「おえええっ！！　おおおうっ……オエエエエッ！！」
飛び散った内臓をゴミ袋に詰め込みながら思いっきりゲロを吐いてしまう和仁。
「私の作った芸術作品に対してゲロ吐くなんて失礼だわ」
「げ、芸術……やっぱアッシは……内臓ズルビチョ系は無理でやんすなぁ。オエエエエッ！！」
「掃除が増えるだけだよそんなに吐いたら……」
「へ、へい。でも……そもそも飛び散ってこびりついた臓器を掃除するためにと用意した高圧洗浄機なのに……逆に散らかすなんて美咲はんにはホンマ敵わないわ……」
「あそこまで派手にお腹吹っ飛んじゃうなんて思ってもなかったのよ。ごめんごめん」

この時の長尾裕二の遺体、三回目を埋めるときに真鳥和仁の油断が出てしまう。

「これだけ掘りゃ見つからんだろう……サッと埋めてサッと帰ろ……アッシを恨んで幽霊なんか出てきたら恐ろしいわ」

土砂降りの雨で、長尾裕二の遺体の入った黒いゴミ袋は下方にある町まで崩れ落ちた土砂と共に発見されてしまう。

警察は付近の住民からの目撃情報や街にある監視カメラ等で真鳥和仁を絞り出し、逮捕に至る。

その後、誤認逮捕として犯人を釈放後、行方不明扱いとして警察省から特殊任務省へ身柄を引き渡される真鳥和仁。

警察の取調室では散々追いつめられて、佐田山組組長の娘である佐田山美咲も連動して拘束、真鳥と共に特殊任務省へ引き渡される事となった。

――――そして現在。

ここは残酷処刑島。

「どうしてこうなったの？」

「すいやせん……アッシがサツに捕まって尋問されて美咲はんのこと吐いたのは……真実を話せば二人ともかなり減刑される、と刑事に言われたからですわ。もしかしたら死刑は無くなるかも……だから別の機関に引き渡されてこんな檻以外の屋外に連れてこられてるのではないかと思うんでさぁ」

「ってことはもう警察からは無罪放免って訳でいいのよね？」

「へえ。でもなんかこんな変な無人島みたいな所に連れてこられて……自力で泳いで帰れまへんでこれは……」

「え！？　じゃあどうなるのよ私たち！　ちょっと！　しっかりしてよあんた！　お父さんに言いつけて叱ってもらうからね！？」

数本生えている木陰から人な気配がした。
何人かの姿が浮かび上がる。

「その心配はないよ」

声の主は若い女子のものであった。

小学生らしい少女が一人、後方からは中学生らしい少女が三人。
全員セーラー服を着ている。

「あっ！　人が居た！　おい、ここはどこなんだ！？　見たところ

無人島っぽいが船がつく港はあるのか！？　お前たちはなぜここにいる！？」

声の主と思われる小学生らしい少女に怒涛の質問を投げかける真鳥和仁。

「いきなり偉そうに沢山の質問投げかけてくるなんて……礼儀知らずもいいとこだわ」

「あん？　クソガキどもが！　大人をナメてたら痛い目にあうぞ？」

拷問処刑人の中では小学生でも皆のリーダー的存在である菅野莉央が後ろを振り返り三人に囁く。

「だそうですよ。あたしたち痛い目に遭わされるんじゃなくて痛い目に遭わさせにきたんですよね？」

女子中学生の鬼頭美紅と、大野真子と小野メグは静かに頷く。

ベレッタM９３Rをゆっくり右手に握りしめて真鳥和仁と佐田山美咲の足元へ向ける莉央。

「な、なにあの子！？　おもちゃのピストルなんか取り出したわよ？　バカじゃないの？　あははは」

「ワハハハハ！　そんな派手な拳銃、日本にゃ存在しないぜぇ？アッシらヤーサンでももっと落ち着いた小型拳銃持ってるぜ全く。クソガキめ！　とことん大人をナメてんのかぁ？」

『パンッ！！……チュキューンッ！！』

真鳥たちの足元に派手な砂埃が巻き上がる。
土と小さな小石でできた開けた丘の足場は深く抉られていた。

「え？」

「きゃっ！？」

ゆっくりと拳銃を下ろしながら二人を睨みつける莉央。

「だいぶ昔のイタリア製のマシンピストルだってさ。２０発装填してるから後１９発残ってる。このトリガーガードの前に付いてるフォアグリップがカッコいいでしょ？　ちなみに今はセミオートに切り替えてるけど三連バーストにもできるんだからね！　カッコいー♪」

しれっと藤堂長官から受け取ってから教わっていた銃の知識を自慢する莉央。

「な、な、何でそんなもん小学生のガキが持ってるんだ！？ど、どうゆうこと？」

「ちょっとあんた、あんたもトカレフ持ってたでしょ！？　早く応戦してよっ！！」

「組事務所に置いて厳重に保管してまっさ……チャカなんて普段ヤーサンでも持ち歩かんでしょ美咲はん……」

「じゃ、じゃあどうすんのよ！？　なんか普通じゃないしヤバそうだよあのガキども……」

「この三人が今からすることに逆らわないでくれる？　もし抵抗したら即射殺するからね？」

呆然と立ち尽くす真鳥和仁と佐田山美咲。
この時はまだ悲惨な拷問が待っていることなどこの二人が知る由も無かったが、何か得体の知れない嫌な予感だけは感じていた。

「な、なんてこった……」

「あ、あんた……私たちコイツらになにされるの？」

「アッシにもわかりやせんぜそれは……」

鬼頭美紅が一歩前に出て、振り返って大野真子と小野メグに確認

する。

「あたしが組長の娘とやらをヤルから。あんたたちはチンピラ男の方お願いね？」

「は、はいっ！」

二人同時に大声で返事する。
ゆっくり大野真子へ歩み寄るといきなりスカートを捲り上げ、右手をパンツの中へ滑りこます鬼頭美紅。

「やあんっ！？」

『ズブ……ぐちゅ』

「ひゃあっ！！　や、やめてくださ……いいい」

「早く残酷になり切ってメグ以上に拷問処刑を敢行するんだぞ？分かってる？」

「やはあっ！？　わ、分かってますぅっ！やめて下さいいいいっ！」

そう脅しながら真子の膣内で激しく中指を掻き回す美紅。

「とりあえずイかせてやるよ。ほらあっ！」

『グチュチュチュチュチュチュチュチュウッ！！』

「あんっ！　やだっ！　い、イくっ！！　イッちゃううううっ！！」

『プシュウウウウッ！！！！』

激しく潮を噴きながら同性の同い年の中学二年生にイかされる大野真子であった。

パンツがバショコになってしまったため、莉央からまっさらのパンツを貰い、慌ててスカートの中で隠すように履き替えた。

「ごめんなさい真子さん……美紅ちゃんも真子さん責めるの大好きみたいだから……」

「はぁ。はぁ。あ、ありがとうございます菅野さん……私も美紅さん好きだから気にしてないです。はぁ……はぁ」

美紅の強さにはかなりビビっているふたりであったが、大野真子は何度か美紅から性的に責められて美紅に惚れてしまっていた。

嫌そうに辛そうに態度を示しながらも美紅に責められてアソコを濡らして本気で感じて潮まで噴かされる真子。

「チンピラ男のトドメはメグではなく真子、お前がやるんだぞ？　分かった？」

「は、はいっ！　頑張りますっ！」

頬を真っ赤に染めながら美紅に敬礼する。
その姿を見て小野メグは苦笑い……菅野莉央は真子に対して申し訳なさそうな表情を浮かべる。
美紅に性的イジメを注意しても効かないことは分かっているが、変な意味で真子も美紅も相思相愛なことを分かっている莉央であっただけに、結局その二人の行為を見て見ぬふりになってしまう……。

「な、なにあのガキども……今ツインテールのガキがショートカットのガキのアソコに指入れて……エッチなことしてなかった？」

「そ、そんなふうに見えやしたね……なんか変なガキどもですなぁ」

莉央が少し離れた場所から拳銃を持って状況を見張る中、美紅と真子とメグの中学生三人は罪人二人の元へ歩み寄る。

「マセガキ！　なにガキ同士で変なことしてんのよっ！」

ビビらながらもイラついている佐田山美咲は美紅と真子に罵声を浴びせ掛ける。

『パァンッ！！！！』

「ひぶうっ！？」

強烈な美紅の平手打ちが美咲の左頬を捉えた。
ビリビリと焼けるような激痛が頬を襲う。

「いったあああいっ！！」

ワンテンポ遅れて両方の鼻の穴から大量に流れ出る鮮血。

「な、何すんのよこのクソガ……」

『グシャッ！！……メキメキバキボキッ！』

「んがあっ！？」

鼻血が出てるのに更に直撃で鼻頭をストレートで殴る美紅。
鼻の骨が歪にひん曲がり、複雑骨折したことを示唆する。
激痛のあまりに咄嗟に美紅を蹴ろうとして右脚で前蹴りを敢行する美咲。
あっさり身を引いてかわした瞬間、右手の脇で美咲の右脚を抱え込み、大きく振り上げて後部へ転ばせた。
膝丈スカートでもパンツが丸見えになるほど派手に転ぶ。

「うわあっ！？……痛ああああっ！！」

後頭部を打った美咲は、パンツ丸見えのM時開脚状態で後頭部を押さえながらうめいている。
パンツを隠すどころではない激痛であった。

「汚いパンツ見せんなよ……腐れ外道女」

「ちきしょう……お前ら私にこんなことしてタダで済むと思わないでよ……いたたたた……和仁っ！早くコイツらをやっつけて！」

「えっ！？　そやけど銃が……」

チラッと菅野莉央を見て、相変わらずベレッタM93Rの銃口がコチラを向いている事実を確認する。

「このまま好き放題コイツらにやられてもいいのっ！？　このヘタレ男がっ！！」

「そ、そうやな！　お、おい！　これ以上この子に手を出したらアッシがゆるさねぇぞ？」

本気で殴りかかるが美紅に全然敵わない。
何度も腹部と肝臓あたりにボディブローを食らい、腹を抱え込んでうずくまってしまう真鳥和仁。

「ぐううう……何て破壊力だこのガキ……おえっ！！」

思わず胃液を吐き出してしまう。

「なんてダラしない……女子中学生相手に素手で勝てないなんて……あんた本当にヘタレね！？」

数分かけて三人はゆっくり和仁と美咲の衣服を脱がせていった。
最後の一枚のパンツは和仁だけ脱がせて、美咲はまだ履いている。

「やめて……お願いだからコレだけは脱がさないで！」

「汚いマンコ見たくないから勘弁してあげる」

「あ、ありがとう」

『パンパンパンパンパンッ！！』

「ひぶぶぶぶうっ！？」

パンツ一枚姿で往復ビンタを食らいまくった美咲は、泣き叫びながら顔面をガードしながらしゃがみ込んだ。

「さっきまでの威勢はどこへいったの？」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいっ！！　お願いだから命だけは助けてっ！！　わーんわーん！！」

美紅の余りの強さに強気だった組長の娘である佐田山美咲も遂に威勢を張ることを諦めた。

隣で素っ裸にされてペニスを観察されている彼氏をチラ見しながらも怒る気力も出なかった。

「おい女っ！　彼氏を見ろ！」

無理矢理見せつけられた時には小野メグがいきりたったペニスを手コキしている惨状である。

『シコシコシコシコ！』

「うう……き、気持ちいい、ううう」

「このまま彼女の見てる前で射精しなさい！　分かった？」

「は、はい！メグ様」

『シコシコシコシコシコシコシコシコ！！』

「ううう っ！ い、 イくうっ！！」

「さっさとイけ！　おっさん！」

『ドピュッ！！　ドピュピュピュピュピュピュウッ！！』

小野メグは誇らしげに手にたくさんついた精液を仰向けに寝かせられて射精させられた真鳥和仁本人に舐めさせている。

「和仁……なんてだらしない……でも仕方ないよね。相手が悪すぎるもの」

更に大野真子によって電気アンマされる和仁を見せつけられる美咲。

女子中学生の手コキの次は、電気アンマで足の裏に大量の精液をヒリ掛けるチンピラ男であった。

『ドピュピュピュピュウッ！！』

「二回目なのに沢山でたわね？　今の射精が人生最期の射精になるからね？」

「そ、そんな……命だけは助けてほしい……」

チンピラである真鳥和仁でさえ半泣きになる程恐怖していた。
思わず射精してしまったのは大野真子と小野メグがあまりにも可愛いかったからに他ならない。
見て見ぬフリをして号泣し続ける美咲。
最後の一枚のパンツに手をかけながら美紅が囁く。

「いつもお前らがやってるようにセックスしろ」

『ズルリッ！』

「ひゃあっ！？」

一気にパンツを足首まで脱がせて、更にむしり取る美紅。

「臭そうなマンコしてるねやっぱ……ほら、チンピラのオッサンとセックスしろ！」

抵抗を少し見せるが、大野真子が彼氏に注射を打った。
強制的に勃起させられたペニスは腹部を叩くほど固くいきり勃った。

「和仁……すごい……挿れて」

「あ、ああ」

素っ裸で抱きしめ合った大人のカップルは女子小学生と女子中学生たち計四人の見守る前で激しく性行為を行った。

『ズチュ！　バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「あ、あんっ！　和仁っ！　気持ちいいっ！！」

普通に中出ししてキスし合う二人。

「和仁とかゆうチンピラ男！　立ち上がって」

「は、はいっ！」

小野メグの言うがままにすぐさま立ち上がる真鳥和仁。

Uの字に曲がった傘の柄を肛門から差し込み、激しく直腸を掻き回す。

前立腺が激しく刺激され、更に彼女の見てる前で射精させられてしまう。

「こんなに沢山汚い液出しちゃって……彼女も泣いてるじゃないの？　あたいに詫びの言葉は？」

「す、すみませんでしたメグ様……」

「小学生や中学生の……しかもアイドルの前でこんなに射精しちゃって……恥ずかしくないの？　んん？」

ペニスを扱きながら尿道に残った精液を搾り出すメグ。

「あ、あああああ……すみませんメグ様」

哀れな彼氏の姿を見せつけられて更に号泣する美咲だったが、ゆっくり泣かせてくれる筈もなかった。

土だらけの足の裏を性器に押し付け、激しく電気アンマを開始する鬼頭美紅。

『ガガガガガガガッ！！』

「はうっ！？　はうううううんっ！！　ひいいいっ！！」

「ほらほらほらあっ！　クサマン足蹴にされて気持ちいいかっ！？　んんっ？」

「き、気持ちいいです美紅様っ！　ひいいいいっ！！」

足の裏でイかされて潮を噴く佐田山美咲。
もう美紅に先程イかされた大野真子を笑える立場では無くなってしまう。
仰向けに寝かされたまま、まだまだ美紅の電気アンマは続く。
両手で全開に股を開かせると、両足の先端を駆使して性器をパックリと全開に開かせる美紅。

『クパァ～』

「ひゃあっ！？　や、やめて見ないで美紅様……」
「きったないマンコねぇ……膣の中まで汚いよ？」
「ご、ごめんなさい……もう許して下さいっ！　わーんわーんっ！！」

美紅はつま先を器用に動かして、膣口を何度も閉じたり開いたりさせて遊んでいる。

『くぱっ！　くちゅっ！　クパァ～』
「あはっ！　いやんっ！　あひいっ！？」
その度に声をあげてしまう美咲。
美紅が爪先を性器から離すときには、大量の粘液が糸を引いてい

た。

「ヤラしいなぁあんたは……」

「はぁ、はぁ、はぁ」

彼氏のチンピラである真鳥和仁を、簡易ベッドに仰向けにして手足を縛り付ける大野真子と小野メグ。

美紅に手を引っ張られて目の前に連れて来られる佐田山美咲。

「佐田山美咲。あなたには生き残る機会をあたえてやるわ」

「えっ!? ほんと!? あ、ありがとうございます美紅様っ!!」

目を輝かせて安堵する美咲には、かなり悲痛な請求がなされる。

「彼のペニスを根元から切断してそのまま血抜きせずに食べなさい」

「ひっ!? そ、そんな……」

「出来ないならいいよ。この日本製の槍があなたのマンコから口まで貫通するだけだから」

「ひいっ！！　や、やります！　やらせて下さいっ！！」

短刀を美紅から手渡された美咲は、仰向けに縛り付けられた彼氏の元へ歩み寄る。

「ごめんね和仁……私の命のために我慢して」

『ギュッ！……ズズ！　ズバババババ！！』

左手でペニスをつまみ、右手に握った短刀で根元から彼氏のペニスを切断し始める美咲。

「や、やめっ……ぐわあああああああっ！！！！」

『ズズズッ！！　スパァ！！』

遂に根元から切断された真鳥和仁のペニス。
美咲は躊躇いながらも一気に亀頭部から口へ咥え込む。
必死で噛み砕き、何度も吐き気と戦いながら飲み込んだ。

『ムシャムシャ！　ごっくん！』

「や、やったわ！　これで私は許してくれるんだよねっ！？」

「本当にやっちゃうとはね……すっごーい」

莉央がボソッと呟く。
ノルマ達成した１９歳の少女を冷たく冷めた目で見つめる小学生と中学生の少女四人……。
更に追い討ちを掛ける美紅の一言。

「金玉が残ってるわよ？」

「えっ！？　そ、そんな……オチンチンだけでも吐き気がします！　もう勘弁してっ！」

鬼頭美紅は黙って美咲を簡易ベッドにうつ伏せに縛り付ける。
両手で股間を思いっきり拡げると、肛門と性器が奥の奥まで丸見えになった。

「汚いマンコとアナルだね？　あんたの心と同じ……」

そう言いながら膣口から槍の切っ先を刺しこんだ。

『ツプ……ズボボ！』

「ぎゃああっ！？　痛いいいいいっ！！」

両手に力を込めてゆっくりと掻き回しながら膣口に捩じ込んでゆく。
子宮を貫き、小腸までも貫通する鋭い切っ先。
「んがあああああっ！！　死ぬうううううっ！！　やめてえええええっ！！」
「汚い子宮も貫通したわよ？　嬉しい？」
「ひぎゃあああああっ！！！！」
そのまましばらく放置して膣口からドボドボと流れ落ちる鮮血を見ながら愉しむ美紅。
「あはは。汚いマンコからでも赤い血が出るんだね？」
ペニスを切断された激痛に意識を失う真鳥和仁の隣で、最期の時を迎えようとしている彼女、佐田山美咲がいた。
縛りつけられたまま、尚も全身を震わせて激痛から逃れようと抵抗する。
「どんなに身体をくねらせても槍は抜けないわよ？」

『ドカッ！！』

「ピギィッ！？」

足の裏で蹴り込み、口から飛び出す槍の切っ先。

白目を剥いて号泣しながら血を吐くが、未だ絶命出来ないで悶え苦しむ美咲だった。

「莉央ちゃん、コイツまだ息があるからトドメを刺してあげてくれるかな？」

「はーい！」

小学六年生のリーダーである菅野莉央がオマンコから槍を串刺しにされて悶えている女の背後に歩み寄る。

持っている拳銃であるベレッタＭ９３Ｒの３センチほどある銃口部分を美咲の肛門へと捩じ込んだ。

「美咲さん、お尻の穴に銃弾をプレゼントしちゃうね？　覚悟しなさい」

「うあああああ……あうあう……ふぎいいい」

白目を剥きながら尚生きたくて号泣する美咲に、非情なる銃撃が

起こる。

「腐れ外道は……死ね！」

『パンパンパンパンパンパンパンパンパンッ！！』

八発もの９ｍの弾丸が１９歳の少女の肛門から撃ち込まれた。

「はぎゃあああっ！？」

目玉と鼻と口から一気に鮮血を噴き出させて絶命する美咲。

美紅が性器から突き刺した槍を一気に引き抜くと、今度は拳銃の銃口を血まみれの膣口に突き入れ、更に１０発撃ち込む莉央。

「内臓グチャグチャだね？　成仏したかな？　腐れ外道女」

莉央はウインクしながら、銃口からたち登る煙をフッと吹き飛ばした。

穴とゆう穴から鮮血を噴き出させて絶命する美咲。

美紅は遺体を冒涜するかのように、チェーンソーのエンジンをかけて、股間から頭部まで完全に真っ二つに切り裂いた。

辺り一面に飛び散る内臓と血液。

そんな彼女の惨状に気付かないほど股間の激痛と戦う真鳥和仁に、容赦無く責めは続いた。

小野メグは巨大なペンチを手にしてチンピラの睾丸を一つずつ潰していった。

『グリ……ブチュッ！　グリリ……グチャッ！！』

「ぐがあああああっ！！！　ぎっひゃああああああっ！！！！」

ベレッタM９３Rを莉央から手渡される。

「最後の一発が残ってます。トドメを」

「は、はい菅野さん……」

震える手で拳銃を手にして指を引き金に掛ける。
男のこめかみにそっと当ててゆっくりと引き金を引いた。

「ごめんねっ！」

『ぐっ！……パァンッ！！』

脳みそから目玉から顔面の肉片が辺り一面に飛び散る。
大野真子の顔面にも脳みそ混じりの粘度のある血液が降り注いだ。

『ビチャビチャビチャッ！！』

「きゃっ！？」

思わず制服で顔面を拭き取る真子。

「よくやったじゃない真子」

鬼頭美紅が震える大野真子を抱きしめてポンポンと肩を叩く。
泣きながら美紅の優しさに涙する真子。

『クチュクチュ……』

「あはあっ！？　あんんっ！」

こんな状態でも真子のマンコに中指を突き入れて膣内を掻き回す美紅だった……。

呆れてモノも言えない菅野莉央。
小野メグは男の遺体の肛門にもペンチを差し込み、肛門括約筋を

無理矢理抉り出した。

「鬼畜にはチンポだけじゃなくお尻の穴も……タダじゃおかないんだから」

直腸からドクドクと流れ落ちる鮮血を四人で見つめながら、この日の拷問処刑は終焉を遂げた。

少女の狂気（後編）（後書き）

幼い命を残酷な方法で奪ったカップルは、それ相応の報いを受けてこの世の地獄を味わう事となった。

残酷処刑島に新たに二人の遺体が加えられた……。

相変わらずな性的イジメ（前書き）

何度も何度も繰り広げられる少女たちによるイジメ……性的イジメは拷問処刑ではなかったがエスカレートしてゆく。

相変わらずな性的イジメ

二月。
この日の甲南中学校のある町は一面真っ白に染まる。
あまり雪は降らない地域だが、珍しく猛烈な寒波により辺りを別世界に変えた。

「すっごいなぁ。学校きたとたんに降り出して昼には積もりまくりだなんて」

昼休みで食堂での昼食を終えた二年生の三人。
その中の一人、鬼頭美紅が頬杖をつきながら窓の外を見ながら呟いた。

「無事に家に帰れるのかな？」

親友三人組の一人、西村百合香も続ける。

「帰れなきゃ暇つぶしでもするしかないわね」

三人の中では一番落ち着いた雰囲気を持つ中田美佐子が提案する。
この三人の中で暇つぶしとは、何か文句をつけては男子を苛める

とゆうイジメ行為のことである。

「一年生の橋本紗奈とかゆう子が私たちの噂を聞いて陰で悪口言ってるみたいだけど？」

百合香が暇つぶしと聞いてふと思い出したことを美紅に伝える。

「じゃあ最近遅刻ばかりしてる同じクラスの安岡太輔とその橋本紗奈とかゆう子を午後の食堂へ呼び出して同時に楽しもうか？」

昼食を食べ終わった周りの生徒たちに安岡太輔と橋本紗奈を連れてくるよう命令する美紅。
数分後、五、六人の女子に囲まれながら食堂まで連行されてくる橋本紗奈。
　ワンテンポ遅れながらもほぼ同時に同じクラスの安岡太輔も男子二人に両手を掴まれながら連行されてきた。

「ぼちぼち安岡くんには罰を与えないといけないなぁって思ってたのよ最近」

「えっ!?　ゆ、許してよ！　君たちに逆らう気なんてこれっぽっちもないんだし！！」

動揺して半泣きになりながら言い訳をする二年男子の安岡太輔。

中肉中背の中学校にしては筋肉質な引き締まった身体を持っている柔道部の男子だが、美紅たちには決して敵わないことを悟ってた。

「逆らう気はなくても日頃の行動がタルんでるのよ。今年だけで三回目よね遅刻？」

「そ、それは……ご、ごめんなさい！　今後本当に気をつけます」

「気をつけなくていいから服を脱いでくれる？」

百合香が上の制服のボタンを外し始めた。

手際よくズボンのベルトを外してチャックを下ろす美佐子。

「や、やだっ！　やめてよっ！！」

「何を女の子みたいな言い方しちゃってるの柔道部のクセに！　あはは！」

『スルスル……ズルズル』

手際よく制服をどんどん脱がせてゆく二人に、大した抵抗もできないまま素っ裸にされてゆく安岡太輔。

最後の一枚の白いブリーフパンツに手を掛ける百合香。

「やめてっ！　お願いだからっ！」

「男子のチンポなんて見慣れてるわ。だから恥ずかしくないでしょ？　ほら！　抵抗なんかやめて大人しく手を退けなさい」

「わっ！　やめてぇえっ！！」

遂に涙を流しながら嘆願する安岡太輔に呆れる三人の女子。

バトンをクルクルと回しながら美紅がそっと近付く。

「ケツの穴からバトンぶち込んで口まで串刺しにして欲しい？」

そう言いながら白いゴムの部分をサバイバルナイフで削ぎ取り始める。

「ほら、ゴムを取ってこの金属の尖った方からケツへ根元まで刺し込んでやろうか？」

「ひいっ!?　ご、ごめんなさいっ！　言う通りにしますっ！！」

両手を離して大人しく百合香にパンツを下ろされる安岡太輔であった。

『ズルズル……ストーンッ！』

「ヒャアッ！……は、恥ずかしいから見ないで」

「だから男のチンポなんて見慣れてるって言ってるでしょ！」

中田美佐子に背後から蹴っ飛ばされ、勢いよく前方に倒れ込む。咄嗟に手をつくが派手に腹部を床に打ち付けて顔を顰めた。

『ドカッ！』

「ぐはっ！？」

橋本紗奈は目の前で女子に暴行されている先輩の男子生徒に段々と苛立ちを覚えてきた。

「ちょっと！　いくら強いといっても女子なんだから本気で喧嘩したら勝てるでしょ！？　同級生の女になんかに負けないで下さいよっ！！」

美紅の強さを知り尽くしている安岡太輔はとにかく反撃はしない。起き上がると同時に正座をして土下座をする。

「勘弁してください美紅様……もう遅刻は本当に気をつけますから……」

「情けないわねぇ柔道部の男子。この一年生の女の子の前で射精してもらおうか？」

美紅は土下座している安岡太輔を見下ろしながら冷たく言い放つ。

「そ、そんな……勘弁してください。恥ずかしくてできません……」

長い黒髪の耳の上辺りを掻き上げながら西村百合香がシャープペンシルを持って跪く。

「立ってくれる？」

「は、はい」

ゆっくり立ち上がり、陰部を両手で隠す安岡太輔。

「足を開きなさい」

「は、はい」

「自分の手で肛門が見えるように大きく開いて」

「は、恥ずかしいです……」

『パンッ！！』

「痛っ！！」

思いっきりお尻を平手打ちする中田美佐子。

「百合香ちゃんの言うことを聞かないと後悔させるわよ？」

「うう、わ、分かりました……」

半泣きになりながらも両手を背後に回して肛門が見えるように思いっきり開く安岡太輔。
陰部が前に居る美紅と一年生の橋本紗奈に丸見えになってしまうが、恥ずかしさより恐怖が勝ってしまっていた。

「きゃっ！？……何を見せるのよっ！！」

頬を真っ赤にしながら両手で顔を隠して後ろを向く橋本紗奈。

『ツプ！』

「んあっ！？」

シャープペンシルを丸見えになった安岡太輔の肛門へ突っ込む百合香。

『ズブブブブッ！』

「わあぁあっ！？　やめてえぇてっ！！」

しばらく百合香のアナル調教が続けられる。
グリグリと的確に直腸から前立腺を刺激し、強烈な快感を与える。

「んん！？　んあぁあぁあっ！？　な、なんか気持ちいい……やめ……ひいっ！！」

恥ずかしいとゆう意思とは別にムクムクと勃起してゆく中学二年生のペニス。

「あら。はしたないわねぇ。何おちんちん勃起させちゃってるの？」

中田美佐子がビンビンになってはちきれそうになっているペニスを人差し指でツンツンと突つく。

「や、やめて、恥ずかしいっ！」

『グリグリ……くちゅ！　くちゅちゅちゅ！』

あまりに感じた安岡太輔の肛門からは腸液が分泌され、百合香の手にしたシャープペンシルを直腸内で動かすたびに卑猥な音を立てる。

「前からは透明な液が垂れてる……先走り液ね」

美佐子は尿道にそっと人差し指を当ててゆっくり離すと、透明な粘度のある液が糸を引く。

「おい橋本紗奈っ！　安岡太輔のチンポを見なさい」

「いやよっ！　なんでそんな汚いモン見なきゃいけないんですかっ!?　ヤダ！」

抵抗を見せる生意気な一年生の紗奈にの腹に強烈な蹴りを入れる美紅。

『ズドンッ！！』

「ごはあっ!?」

咳き込みながら座り込んで苦しむ紗奈。

『パンッ！！』

「ひぎいっ！！」

更に強烈な平手打ちが左頬を襲った。
大声をあげて泣き出す紗奈だったが、美紅は手を止めない。
スカートを一気に引きずり下ろすと同時に、パンツまでも引きずり下ろした。

背後から左手で首を決めて、右手を性器へまわした。

『くちゅ！』

「やあっ！？……や、そんな所やめてよおおおっ！！」

『ズチュチュッ！！……メリメリ！　バリッ！』

美紅の中指は一気に膣内へ挿入され、１３歳にして同性の一つ上の先輩に処女膜を破かれてしまう橋本紗奈だった。

「痛あっ！？　やだあああああっ！！　わーんわーん！！」

「泣かないの！　ロストバージンのお祝いにあたしがイかせてやるよ」

激しく膣内を掻き回す美紅に、とうとう人生で初めてオーガズムを味合わさせられる紗奈。
唸り声を上げながら全身をビクビクさせ、潮を噴かされてしまう。

「んんんんっ！！あんっ！？　あんんんんっ！！」

『プシャアーッ！！　ヒクヒク……ピュルッ！　ピュルルルッ！』

愛液と小便と血に染まった中指を紗奈から引き抜くと、無理矢理口の中へ捩じ込んで舐め取らせる美紅。

「ほら、マンカスだらけの自分の愛液舐め取れ」

『ガボッ！！……グボグボッ！！』

「んごおっ！？　んぐううう」

とうとう泣きながら下半身スッポンポンのまま、二年生男子の射精ショーを見せつけられてしまうハメになる紗奈。

『シコシコシコシコ！』

「イくときは前もって言いなさいよ？」
「はぁ、はぁ、は、はい！　美紅様」
しばらく男子中学生の立ったままでのオナニーを観察する女子中学生たち四人であった。
百合香のシャープペンシルはまだ刺さったたままにされている。
肛門から抜け落ちないように臀部にガムテープを貼り付けられていた。
「イ、イくっ！！」
百合香がシャープペンシルを一気に肛門から引き抜いた。
次の瞬間、大量の精液が食堂の床へ撒き散らかされる。
「いいよ。イけっ！」
『ポンッ！』
「ひぐうっ！！」
『ドピュッ！　ドピュピュピュピュピュピュピュウッ！！』
「やだぁ。こんなにたくさん汚い液出しちゃって……舐めて綺麗にするのよ！　分かった？」

「は、はい」

床に撒き散らかした精液を本人の安岡太輔に舐め取らさせる百合香。

「どう？　自分の出したザーメンの味は？」

艶のある黒髪を掻き上げながらお尻を何度も足の裏で踏みつける。

「う、うう、な、なんか苦いです……百合香様……」

「そうなんだ。汚いアナル丸見えにしながら必死でセーエキ舐め取るなんて……ほんっと哀れな男ねぇあんた」

『グリグリ！　ズブブ！』

爪先を太輔の肛門へ無理矢理捩じ込みながら冷たく微笑む百合香。

「うぐっ！　い、痛いっ！！　ひいいっ！！」

肛門から血が滲むほど足の爪先でほじくった百合香は、便のついた爪先を背中にグリグリと擦り付ける。

「くっさ！　綺麗にしてよ？　私の爪先」

そのまま中田美佐子が引き起こし、机にうつ伏せに縛り付ける。目の前では橋本紗奈も下半身裸のままで美紅によって机に縛り付けられていた。

強烈な電撃機能がついた改良型のバイブを取り出す美紅。

「直径５㎝、長さ１２㎝の中学生用のアナルバイブだよ。莉央ちゃんからもらったんだ。かなり強烈な電撃機能がついてるからコイツら失神しちゃうかも？　ちょうど二本あるからもう一本は百合香ちゃんにその男をヤッてもらおうかな？」

「はーい！　へぇ凄いなぁ。直腸焼けちゃいそう……」

「私の分はないんだ？」

中田美佐子が少し拗ねて美紅に問いかける。

「美佐子ちゃんは紗奈のマンコと太輔の尿道に適当なモン突っ込んで辱め与えてやってくれる？」

「あははっ！　それ楽しそうだね！　だから二人同じ方向に並べて

縛ってるんだね！」

「そう。同時に中学生男女の性器を責めちゃうの！　ほら、飲み込め！」

美紅はそう言いながら目を細くして微笑むと、電撃アナルバイブを橋本紗奈の肛門へゆっくり捩じ込んでゆく。

『ツプッ！　ズボボボッ！！』

「いやあああっ！？　やめてえええっ！！　痛い痛い痛いいいいいいっ！！」

「根元まで飲み込みなさい。直腸は完全にバイブで埋まっちゃう計算してるから奥を突き破る心配はないよ。気持ちいいことしてあげたいけど痛そうなんだコレ。ゴメンね？」

「あーん！　あーん！　お尻が痛いよおおっ！！　やめてえええっ！！」

横目で橋本紗奈が責められる所をチラチラと見ながら歯を食いしばって目を閉じる安岡太輔。

「何してるの？　現実逃避しても無駄よ？」

百合香はそっと太輔の肛門へ電撃アナルバイブを近づける。

『ピトッ……』

「うはっ！？」

「百合香様、僕の肛門にバイブを突っ込んで下さい……と言え」

「や、やめてくださいっ！！　やめてっ！！」

「ほらっ！　言いなさいっ！」

『グリ……ズブブブブブッ！！』

「んぎゃあっ！？　痛いっ！！」

殆ど一気に根元まで挿入してしまう百合香。

「私に逆らえば逆らうほど痛い目に遭うと知りなさい」

「ご、ごめんなさいっ！　百合香様、僕の肛門に……バイブを突っ込んで下さいっ！　ひいっ！痛いいいいっ！！」

「あはは♪　もう既に根元までズッポリと突っ込まれてるわよバカ」

橋本紗奈と安岡太輔の中学生二人は、うつ伏せ状態で拘束され、

肛門に根元までバイブを突っ込まれて小さく震えていた。

「や、やめてよお願いっ！！」

「やめて……お尻が痛いよぉ！」

頬を真っ赤にして肛門の激痛に堪えながら泣きを入れる二人だったが、美紅たち三人は容赦しない。

中田美佐子が静かに口を開いた。

「さっ！　いきましょうか？　お二人仲良く電撃を味わってね？……直腸に」

二人は悲鳴をあげながら抵抗するが、拘束具は身体を捩ったくらいでは簡単には外せない。

「最大パワーでも直腸が火傷しない程度に計算して作られてるから……安心してスイッチ入れてね百合香ちゃん」

「はーい。でも五秒くらいにしとかないとショック死はあるんだよね？」

「うん。最大パワーは五秒以内でお願い」

「うん！　分かった！　じゃあいこっか美紅ちゃん？　5、4、3、2、1……ゼロッ！！」

美紅と百合香は同時にアナルバイブの電撃スイッチを入れた。
いきなり全開にする二人。

『バリバリバリバリバリバリッ！！』

「うぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃあっ！！！！」

橋本紗奈と安岡太輔の二人は同時に全く同じ発音の悲鳴を上げる。

「あはは。コイツらシンクロしちゃってるよおもしろーい♪　ほらほらほらあっ！　痛い？　痛いでしょう？」

『バリバリバリバリバリバリバリッ！！』

百合香は大きく口を開けて大爆笑しながら罵った。
美紅は橋本紗奈の肛門から電撃に合わせてピュルピュルと噴き出す腸液を見ながら冷ややかに微笑む。

「何くっさい液吹き出しながら痙攣してんの？」

冷たく紗奈にそう言い放つと、中田美佐子に指示をする美紅。

『ガクガクガクガクッ！！』

「アヒャヒャヒャヒャヒャアッ！！　んぎいいいいっ！！」

痙攣しながらまたしても同じ言葉で叫び声を上げる紗奈と太輔の二人。

電撃のスイッチを一度切る美紅と百合香。

しかしあまりの激痛に気を失ってしまった二人であった。

中田美佐子は綿棒をカバンから取り出して、たった今大量の小便を床に撒き散らかしたペニスの先端に押し当てる。

『ぷすっ！』

「ここかしら尿道は？　男のくせに汚いオシッコ漏らした罰をあたえてやるからね？　ほら、お飲み」

『ズブブブブブッ！』

尿道の奥深く、膀胱にまで届くほどの長い綿棒を捩じ込む美佐子。

まだ目を覚まさない太輔に直腸に続くような激痛を与える。

『グリグリグリグリッ！！　ヌプププププッ！！』

思いっきり尿道が裂けそうになるほどに綿棒で中身を掻き回した。

「ぎゃあああああああああっ！！！！」

すぐに目を覚まして全身をビクビクさせながら悶え苦しむ太輔。

「痛いいいいっ！！　オチンチンが痛いいいいいっ！！　やめてええええっ！！」

「汚い小便をココから漏らしたんでしょ？　その責任を取ってもらわないと……」

今度は激しく抜いたら入れたりするピストン運動に切り替える美佐子。

「女の子に挿入するトコを挿入させられる気分はどう？　ペニスを女子に犯されてるのよ？　うふふ」

『ずちゅっ！　ずちゅっ！　ずちゅちゅちゅちゅちゅっ！！』

「痛いいいいいいっ！！　やめてええええっ！！　んぎいいいいいっ！

！」

『ドク…ドクドク』

尿道から鮮血が垂れ落ちてくる。

「ご、ごめんっ、やり過ぎちゃった！」

『ズズズズズ……ポンッ！』

本気で焦って真っ赤に染まってしまった綿棒を尿道からゆっくり引き抜く美佐子。

「美紅ちゃん、コイツ大丈夫かな？」

「ちょっと尿道に傷がついたくらいだから平気だよ。ほっといても数日で治るから。じゃあ次は紗奈のマンコを責めて」

「はーい。お邪魔しまーす！」

『クチュ……ズブブブッ！！』

既に処女膜は破られているため遠慮なく中指と薬指を一気に根元まで膣内に挿入する美佐子。
子宮口付近にある膣の奥の奥まで激しく上下左右に掻き回す。

『グチュチュチュチュチュチュチュッ！！　グププププッ！！クチュチュチュチュッ！！』

「やっはあああああっ！？　あんんっ！！　痛いいいいいっ！！」

涎を垂らしながら目を覚まして号泣する紗奈。

「痛いっ！　ひぎいっ！　や、やだっ！　や、やめて……下さいっ！……んあっ！！」

「あなたも一杯オシッコ漏らしちゃったから……お仕置きが必要なの。分かって」

「わーんわーん！　ぐすんぐすんっ！　もう二年の方たちに逆らいませんっ！　悪口も言いませんから許して下さいいいいっ！　アーンアーンッ！！」

中田美佐子に超激しく乱暴に膣内を掻き回されて、アヘ顔で泣き叫びながら赦しを乞い始める紗奈。

『ポンッ！！』

「んはあっ！！」

一気に性器から二本の指を引き抜く美佐子。

「分かればいいのよ。今度私たちの悪口言ったのが聞こえてきたらもっと虐めてやるんだからね？　分かった？」

指にねっとりとこびりついた愛液と小便とマンカスをハンカチで拭きながら冷たく紗奈の性器を見つめる美佐子。

「ごめんなさいごめんなさいっ！」

「ご、ごめんなさい！　ごめんなさいっ！」

泣きながら二人は何度も謝り続けた。
美紅は四つん這い体勢で縛り付けられている二人の背後に立ち、そっと両手を伸ばした。

美紅の両手によって紗奈の性器と肛門が全開に拡げられる。

『クパァ〜ッ！』

糸を引きながら大きく口を開ける膣口。
小陰唇がヒクヒクと動きまくる。

「いやあっ！！　恥ずかしいからそんなに開いて中を見ないで下さいっ！！」

美紅はマンコを開いたり閉じたりして遊び始めた。

『クパァッ！　ポコンッ！　クパァッ！　ポコンッ！』

全開に開いては閉じ、開いては閉じるを何度も繰り返す。

「マンコの中身がヤラシイ色してるなぁって思って……あはは」

「アーン！　アーン！　うえええええんっ！！」

あまりの恐怖と恥ずかしさに小学生のように号泣する橋本紗奈だった。

「くっさ。紗奈！　あなたちゃんとビラビラの裏もお風呂で擦らないとマンカスだらけよ？」

「ぐすんっ！　ご、ごめんなさい……えーんえーん」

小陰唇を指で摘んで何度も引っ張る美紅。

「このビラビラの裏にたくさんマンカス付くの！　わかる？」

「やんやんやんっ！　痛いよおお……」

静かに右脚を後方へ振りかぶり、狙いを定める美紅。

その目標は……。

マンコだった。

『ズドンッ！！』

「んぎゃあっ！？」

首を左右に激しく振りながら泣き喚く１３歳の少女に容赦なく打ち付けられる足の甲によるマンコ蹴り。

『パンッ！　パンッ！　ズドンッ！　ズドンッ！』

強弱のある蹴りが橋本紗奈の外性器を数回襲う。

大陰唇と小陰唇が真っ赤になり、一部は紫色に変色して内出血までしていた。

「がはあああっ！！　死ぬっ！　死んじゃうううっ！！　私のオマンコ壊れちゃうううっ！！　やめてええええっ！！」

『プシャアアアッ！！　ビチャビチャビチャッ！！』

小便を激しく撒き散らすと同時に、拘束された太ももを縄が激しく食い込むほどに股を閉めようともがくが、拘束具は解けなかった。更に数回思いっきり性器を蹴り上げると、ビラビラ部分が裂けて血が内股へ伝い落ちてゆく。

「あはは！　小陰唇が裂けちゃったよ？　今の蹴り込みの刑はあなたが汚いマンカスたくさん付けてた罰だから」

「ふんぬうううっ！　ふんぬうううううっ！！」

額を机に擦り付け、唸り声を上げる泣き方に変わった紗奈。
少し気がおかしくなってきたようだった。

オキシドールを取り出すと、キャップを開けて紗奈の肛門から性器へ流し掛ける美紅。

『ドボドボドボ……じゅうううううっ！！』

「はんぎゃああああああああああああっ！！！！」

「これはあたしの前で汚いオシッコを漏らした罰ね」

肛門と小陰唇と膣口から猛烈な泡が噴き出し始めた。
この激痛には大便までヒリ出してしまう橋本紗奈だった。

『ブリブリブリブリブリブリッ！！』

「今度はうんこ漏らしちゃったの？　ふーん。あたしの前でまたまたそんなことしちゃったら……それはそれで再三に渡る罰が必要だよね？」

美紅は大型のガラス製の浣腸器を取り出して、オキシドールを大量に吸い込ませた。
ゆっくりと紗奈の肛門へ先端部を捩じ込む。

『ツプッ！』

「やはっ！？　はぁ、はぁ、はぁ、も、もうやめて！　本当に私死んじゃうっ！！　お願いいいいっ！！」

「死んでも誰も悲しまないし。両親くらいは泣いてくれるかもね？ほら！　死ね！」

『ブチュウウウウッ！！』

「ひっ！？」

『ジュウウウウウウッ！！！！』

「ぎゃあああああああああああああああっ！！！！」

直腸にまで注ぎ込まれたオキシドールはまさにこの世の生き地獄なる激痛を紗奈に与えた。

美紅は顔色一つ変えないで浣腸器を最後まで押し込んだ。

全てのオキシドールが注入されたのを確認してゆっくりと切っ先を肛門から引き抜く。

プシュプシュとオキシドールを吐き出させる１３歳の少女のアナル。

美紅は人差し指を根元まで挿入して、冷たく囁く。

「誰が薬液出して良いって言った？　ああ？　肛門くり抜いてやろうか？」

百合香と美佐子は本気で美紅の残酷さに今更ながら怖気付き、少し身体が震えだす。

「み、美紅ちゃん、そいつ本当に死んじゃわない？」

「そ、そうだよ！もうその辺でいいんじゃないかしら？　あは、ははは」

百合香に続いて美佐子も、美紅による紗奈の責めに対して赦しを乞い始めた。

「そだね。もう飽きてきたから許してあげる。最後に殺せないからやっぱイジメやリンチってちょっとつまんないわ」

拷問処刑人と一般人の差を痛感しながらも百合香と美佐子は紗奈の拘束を解き、パンツと制服のスカートを履かせてあげた。

一瞬で真っ赤に染まる白いパンツが妙に痛々しかったが、美紅はまた隣で拘束されたままの同級生の男子の背後に立った。

「玉とチンポ。どっちか選ばせてあげる」

「ぐすん！　ぐすんっ！　え？　な、何のことですか？　ぐすんぐすんっ！」

尿道の激痛が少しマシになってきてはいたが、未だ恐怖と痛みに涙が止まらない１４歳の安岡太輔。

「チンポは一本しかないけどキンタマって二つ付いてるよね？　破壊するならキンタマの方にしてあげる」

「え？」

『ズドンッ！！……ブチュッ！！』

短いスカートをヒラリと揺らしながら真っ白なパンツをチラッと見せた瞬間、一気に男子生徒の股間へ食い込む少女の右足。

「ぴぎいいいいいいっ！！！！」

そのしなやかで美しい中学生少女の右脚の甲は、右の睾丸を瞬間で粉々に砕いた。

「がはあああああああっ！！　痛ああああああああっ！！」

『プルプルプルプルッ！！　ビクビクビクビクッ！！』

拘束されたまま激しくお尻を前後左右に回すようにくねらせて痙攣する姿に、少女たち三人は爆笑してしまうのだった。

「あはは！　ごめんごめん！　大変なことになっちゃったのにお尻の痙攣の仕方が面白くて……」

西村百合香は右手で口を押さえながらも笑いが止まらない。

中田美佐子もしゃがみ込んで身体を震わせて笑いまくっている。
美紅は爆笑から嘲るような嘲笑に表情を瞬時に変えると、痛み止めの全身麻酔を太ももに打ち込む。
取り出したメスで、陰嚢を縦に大きく切開し、ミンチになった右の睾丸を指先を陰嚢内に突っ込み、掻き出した。
飛び出してきた左側の生の睾丸を指で挟んだり転がしたりして散々楽しんでから陰嚢の内部を消毒をして器用に縫合してゆく。
「莉央ちゃんに縫い方教えてもらったのよね。上手いでしょ？　このよく切れるメスも貰ったんだよね」
百合香と美佐子は手際の良さに大きく目を開いて感動しながら拍手する。
「私もコイツのキンタマ生で触りたかったなぁ」
百合香は頬を赤くしながら哀れに睾丸を潰されて陰嚢を切り開かれて終いには丁寧に縫われた痕を見つめながら呟いた。
「もう一回開いて出してあげよっか？」
「い、いや、もうそれは可哀想すぎるからいいよ……あはは……」
慌てて美紅の親切を丁寧に断る百合香だった。

中田美佐子は未だ小さく痙攣しながら意識の飛んでいる太輔の拘束を解き、パンツとズボンを履かせてあげた。

なかなか目覚めない太輔に痺れを切らし、激しく往復ビンタを打ち込む美佐子。

「うう、うう」

「目覚めた？　コレは痛み止めの頓服薬だよ。家でそのうち股間を激痛が襲うだろうからこれを飲みなさい。あたしが国から貰ってきた特殊な頓服だからかなりマシになると思うわ」

そっと頭を起こして薬を渡す美紅。

「ぐすん！ぐすん！」

「もう泣かないの。良い子だから……」

『ズルル……ガツッ！　グリッ！　ギュウウウウウウッ！！……ぶちゅっ！！』

美紅は介抱しながらも太輔の短パンであるズボンの裾から更にパンツの下に手を滑り込ませ、残っていた左側の睾丸も握力で握り潰した。

その後、陰嚢ごと強く手で絞って縫い目からミンチを飛び出させる。

パンツの中と美紅の掌は睾丸のミンチまみれになってしまったが、そのまま手を取り出して太輔に舐め取らせる。

「ほら！　さっきあたしが食べた昼食のお豆腐の残骸よ。舐め取りなさい」

「は、はい、パクッ！　ベチャベチャベチャ！　ゴックンッ！」

「あらぁ。何も言われてないのにゴックンまでできたのね？　偉い偉い！　今のお豆腐は体にいいタンパク質満点だよ？　あははははは♪」

相変わらずな性的イジメ（後書き）

蹲って泣き続けている橋本紗奈にも痛み止めの全身麻酔を打ち、動けるようになってから二人は一緒に食堂を後にした。

安岡太輔のズボンの裾からは白いミンチのようなものがポトリポトリと落ちている。

「二つ目のキンタマまで抜かれたこと気付いてないんだね？　哀れ～」

百合香はそういいながら、両手を頬に当てておどけた顔をする。

美佐子は美紅に問い掛けた。

「結局一生子供作れないんだねアイツ……可哀想」

「そだね。でも遅刻の常習犯にはアレくらいの罰を与えないと」

「はは……ほんと美紅ちゃんって残酷」

美紅はゆっくりと右手の拳を開いた。

そこには小さなお豆さんが乗っている。

百合香と美佐子はその小さなピンク色の５ミリほどの物体が何であるか凝視しはじめた。

「こ、コレってまさかっ！？」

「嘘でしょっ！？」

二人はのけぞって驚く。

美紅はエッチな笑みを浮かべながらゆっくり頷く。

「そう。紗奈のクリトリスだよ！　皮かむってて陰核周りにも汚いマンカス付いてたから段々腹が立ってきて……麻酔をしてやったんだからすぐは痛くないしまぁいいかって……ハサミで切り取っちゃった！てへへ♪」

太輔と共にフラフラしながらも立ち去って行く橋本紗奈。
ミニスカートの制服の奥から内腿を垂れ流れてくる真っ赤な鮮血が、陰部の悲痛さを物語っていた。
クリトリスを切断された少女は、パンツが吸収しきれないほどの血を流しながらも下校するのであった。

この二人は明くる日からこの学校に現れることは二度となかった。

鬼畜犯罪者の親心（前書き）

一度目は辛うじて生かして帰した幼女。
二回目は我慢できずに欲望のまま行動に移してしまう。
弱者は時折理不尽に命を奪われることとなる。

鬼畜犯罪者の親心

俺は笹山武尊。
２８歳の会社員だ。
ある日遂に俺はやってしまった。
若い頃からずっと想像ではやってしまっていた犯罪行為……幼い女の子の強姦。
もう後には戻れない。
せっかくこの世に生まれてきたんだ。
本当にやりたいことをやって死ねるならたとえ死刑でも本望だと言えるだろう。

「わーん！　痛い！　痛いよおおっ！！」

俺は小学生低学年らしい７歳の沙羅ちゃんという児童の性器に無理矢理チンポを挿入して犯している。

『ずちゅっ！　ちゅっ！　バッコンバッコン！！』

「痛ああああっ！！　痛いいいいっ！！　やめてえええっ！！」

顔をくしゃくしゃに顰めて号泣する女の子を正常位で抱きしめながらマンコにチンポを突っ込んで犯している俺。

「痛い？　もうちょっと我慢したら射精するから抜いたげるよ。はぁ、はぁ、はぁ、気持ちいい……よく閉まって無茶苦茶気持ちいいよ沙羅ちゃん……イく、イくうっ！！」

『ドピュッ！　ドピュピュピュピュピュウッ！！』

俺は7歳の少女の膣内へ夥しい量の精液を吐き出してしまった。

「いやあああっ！！　痛いよおおっ！！　あーんあーんっ！！」

「ふう。かなりキツかったけどギリギリ入ったなぁ俺のチンポ。固くなったけど俺のは小さいからこんな小さな子のマンコにでも無事に入ったんだろーなぁ」

普通のサイズではまず入らない児童のオマンコに、根元まで挿入できて射精までできて大満足な俺だった。

泣き叫ぶ女子児童からチンポを抜くと、ドクドクと勢いよくパイパンマンコから血と精液が垂れ落ちてくる。

「はぁ。はぁ。オマンコの中にたくさん俺の精子を出してあげたよぉ。気持ちよかった？　沙羅ちゃん？」

「痛いいいっ！！　アーンアーン！！　ママーッ！！　助けてえぇっ！！」

「ママは助けに来ちゃくれないよ……こんな田舎の俺の家がバレるわけがない。警察にだって絶対捕まらないと思うよ」

「わーんわーん！」

「そんなに泣かないで。夜道を買い物に出させた沙羅ちゃんのママが悪いんだ……もう諦めてね」

沙羅ちゃんとは面識はない。

真っ暗な夜道を歩いているコンビニで買い物をして帰宅中の小学生児童に咄嗟に反応してしまった。

俺は車を降りて少女の口を塞ぎ、抱え上げて速攻で車へ連れ込むと、勢いよく山際にある自宅を目指して車を発進させた。

両親が海外旅行に出掛けて留守だったのをいいことに好き放題できると思ったからだ。

俺との性行為で糞尿を漏らしてしまった児童と一緒に風呂に入ることにした。

「沙羅ちゃん、ごめんね痛いことして」

「ぐすん。ぐすん。お家に帰りたいよおお。わーん！　わーん！」

湯船に浸かりながらも再び号泣する沙羅ちゃんに、俺のSな心はより一層油を注がれた。

「ここはなんていうのかな？」

『ズブ！』

「んあっ！？　やぁあああああっ！！」

俺は沙羅ちゃんの肛門に湯船に浸かったまま中指を突っ込んだ。
夢にまで見た小学生女子児童との性行……そして艶かしいピンク色をした菊門への指挿入。
かなり興奮して再び勃起する俺のチンポ。
そのまま根元まで挿入してから沙羅ちゃんの直腸を掻き回してあげた。

『ズボオッ！　グリグリグリグリッ！！　グリリンッ！！』

「やっ！　ひゃあっ！！　痛い痛い痛いいいいっ！！　やだあああああっ！！」

必死に抵抗して俺の手首を掴んでくる幼い手。
俺はその手を反対側の左手で掴むと、無理矢理ビンビンに勃起したチンポを触らせた。

「き、気持ちいいよ沙羅ちゃん！　そのままきつく握ってくれ！」

「やあああっ！！　わーんわーん！！」

俺は堪らず風呂の湯船に浸かったまま沙羅ちゃんをバックで犯した。

膝の上に座らせるように抱っこして背後からぶち込んでやった。

二回目の射精を終えると沙羅ちゃんは泣くことも忘れて呼吸を荒げてショック状態に陥っていた。

「恐怖と痛みのあまりにショック状態起こしちゃったんだね。可哀想に」

気がつけば俺は台所から包丁を持ってきて、沙羅ちゃんを解剖していた。

風呂場なら血も簡単に流せるから……。

性器に出刃包丁を刺し込んでは引き抜き、何度も繰り返して泣き叫ぶ様を見て興奮していた。

「んぎいいいいっ！！　んぎゃあああああっ！！」

「恥骨が邪魔で奥まで包丁入らないんだよな。こっちの穴も突っ込んであげるからね？」

俺はそう言いながら泣き叫ぶ沙羅ちゃんの肛門にも出刃包丁を刺

し込んでいった。
うつ伏せにさせたまま行なっているため、起きあがろうと両手をつくたび後頭部を思いっきり殴って再度うつ伏せにさせていた。
刃を下に向けていたため、膣口と肛門の境目が切断されて、二つの穴が繋がってしまった。

「ハハハハ！　沙羅ちゃんのマンコとアナル……繋がっちゃったねぇ？　ハハハハハハッ！！」

血まみれになりながら膣と肛門が繋がってパクパク開閉しているのを見てると思わず笑ってしまう俺。
耳が痛くなるほど悲鳴を上げ出したため、俺はそろそろ仕舞いに取り掛かった。
うつ伏せ状態のまま背中に馬乗りになり沙羅ちゃんの顎に左手を掛けてグイッと持ち上げる。

「死んだ後も犯してあげるからね？　安心して死ねばいいよ沙羅ちゃん……」

『ザクッ……ズバズバズバッ！！』

俺は右手に持った出刃包丁を沙羅ちゃんの首に当てて、必死で刃を往復させた。
ゴボゴボと血を吐き出して苦しむ女の子を見ながら再三勃起する俺のチンポ。
遂に幼い沙羅ちゃんの首は胴体から切り離された。

「死んだ目がまた可愛いんだね。ほら、咥えて」

　俺は7歳の少女の生首を両手で掴み、口を無理矢理開かせると、イキり勃ったペニスを根元まで咥えさせた。
　ゆっくりピストン運動すると、可愛い唇に擦れて凄まじい快感が俺のチンポを襲った。
　生首を前後に激しく動かしながら口でピストン運動させる俺の姿は、側から見れば鬼畜以外の何者でもないんだろうな。

「うっ！　沙羅ちゃん！」

『ドピュッ！　ドクドクドクドク！！』

　絞るように沙羅ちゃんの生首の口内へ精液を注ぎ込むと、首の切断部から白い液がトロ〜ッと垂れ落ちてくる。

「ハハハ。首の切断面から出てるよ俺のセーエキ。沙羅ちゃん笑わせてくれるなぁ♪」

　その後は糸ノコギリ持ってきて必死で沙羅ちゃんをバラバラにしたんだ。
　ゴミ袋に入れて運びやすくする為と、女の子の内臓をバラして興奮したかったのもある。

やっぱ俺って変態だったんだなあ。
痛感しながら解剖して取り出した小さな子宮にチンポを挿入して、テンガ代わりにしてオナニーした。
「四回も射精しちゃった。一日でこんなに射精するのは人生で初めてだ。沙羅ちゃんが可愛いすぎるからだよ？」
手足と胴体、頭部と内臓、それぞれに分けてゴミ袋に入れた俺は裏山に車で埋めに行った。
穴を掘るのって結構疲れるんだな。
ドラマでよく死体埋めるのに掘るのを見るけど本当に掘るのは大変だ。
帰ってきてからも風呂場の血を流すのに結構疲れたよ。
それから一週間が過ぎた頃、両親は旅行から帰ってきた。
父さんと母さんはとても悲しそうな顔をしながら俺に言ったんだ。
「武尊、後のことは心配しないでいいからね」
「そうだ。俺たちもすぐに後を追うから。安心してくれ」
何を言ってるんだ？　父さんも母さんも……。
この時は意味が全く分かっていなかった。

――残酷処刑島。

「ん、んん」

深い眠りに落ちていたようだ。
ふと目覚めると強い日差しに顔が歪む。

「ま、眩しい……こ、ここは？」

俺はゆっくりと周囲を見渡す。

「お目覚めですか？　武尊さん」

知らない男が一人と、どこかで見た美少女二人の合計三人が俺の目の前に立っていた。
数秒後にすぐ思い出す。

「か、菅野莉央に宮垣咲良！　なんでアイドルの君たちがこんな所にいるんだ!?　隣のオッサンは知らんけど……」

「こんな所って？　ここがどこか分かってるのあなた？」

そう言えばここが何処なのかどころかなぜこんな場所にいるのかさえ分かっていない俺だった。
しかも木の杭に縛り付けられているじゃないか。

「おいおい！　オッサンとはひどいな！　俺はお前より歳下のはずだぜ？」

「あはは！　お兄ちゃん、そんなことくらいで怒らないの」

髪を金色に染めたヤンキーそうな若い男は俺を睨みつけてくる。

「お、おい、そんなことよりこの縄を解いてくれよ！」

俺はまず意味のわからない拘束を解くように三人に頼んだ。
何やら三人でコソコソと話してると思えば俺の縄を解き始めてくれた。
よかった。とりあえず自由に動けるようになる。
安心した俺の顔面を強烈な一撃が襲った。

『ズチュッ！　ズチュッ！　グボッ！　グボッ！』

「ん、んん？」

俺は再び意識を失っていたようだ。
鈍い痛みと共に目が覚める。

「うっ！？　ぐわぁぁぁぁあっ！？」

四つん這い体勢で机に縛りつけられたまま、バックでさっきの金髪のオッサンに犯されている俺がいた。

「痛いっ！？　や、やめろっ！！　ケツが裂けるっ！！　ひぎいいいっ！！」

「締まりのあるケツしてんなお前。オラオラオラアッ！！　京介様のマグナムマラーを飲み込みやがれえっ！！」

「ひごおおおおっ！！　ぎえええええっ！！」

肛門が張り裂けそうな痛みに耐えている俺の前で、アイドルである少女二人が笑っていた。

「少し血が出てる。根性のないしょーもないアナルだね？」

「あはは。ほんと！　京介さんのはおっきいからさぞや気持ち良いんだろうね」

菅野莉央に宮垣咲良……テレビで見てるのと全く違う。
本物は映像以上に無茶苦茶可愛い……。
でも言ってることは到底アイドルとは思えない。
なんなんだ一体？

『ドピュッ！！　ドクドクドクドクッ！！』

「ひゃあああっ！？　ひいいっ！！」

あまりにも大量の温かい精液が直腸に流し込まれて俺は思わず奇声を上げてしまった。

「じゃあ後は頼んだぞ莉央。咲良ちゃんも頑張ってくれよ！」

血と大便まみれのペニスを拭きながら手を挙げて去ってゆく金髪の男……本当になんなんだコイツら！？

「お兄ちゃん、本当に処刑は嫌がるよね」

「あたいも最近までなれなかったから。普通ならなかなかなれないと思うよ莉央」

「そうだね。仕方ないか。咲良さんは本日トドメをお願いします。私は前戯を担当させてもらいますので」

「うん。分かった。ライフルでトドメを刺したらいいんだよな？」

「うん。お願いします」

処刑？　トドメ？　ライフル？　この少女たちは頭がおかしいのか？

それともアイドルだから何かの番組の撮影なのか？

俺の許可をもらってくれないと困るなそれなら……。

何処のテレビ局だよ一体？

少しずつムカつく方向に行ってしまった俺の思考回路。

次の瞬間そんなものはぶっ飛んじまった。

『ギュッ！』

何か冷たいものが俺の金玉を挟み込んだ。

『ギュウウウウウウッ！』

「ぎゃあああああああっ！？」

なんてこった！

菅野莉央とゆう小学生アイドルが俺の金玉をペンチで潰そうとしているじゃないか！？

俺は四つん這い状態に縛り付けられたまま、あまりの激痛に小便を漏らしながら泣き組るハメになる。

「や、やめてくれえええっ！！　潰れるうううっ！！」

「潰してるんだけど？」

「そ、そんな！？　ぎゃあああああああああっ！！」

『ブチュッ！！』

遂に俺の右側の睾丸はペチャンコになってしまう。
意識が飛ぶほどの激痛が襲う中、必死に太腿を閉めようとするが、股を開いたまま縛り付けられている為それもままならない。
二つ目の睾丸も彼女によって潰されたみたいだ。
痺れて感覚がなくなってゆく中、意識もなくなる俺だった。
薄れゆく意識の中で何か注射を打っているように見えた……。

ふと目を覚ますと俺の父さんと母さんが目の前にいる。
一番見たくないシーンが目の前で繰り広げられていたのだ。
それは両親のセックス行為。
下半身の痛みは消えている。
さっきの注射は何らかの麻酔薬だったらしい。

「あ、あん！　あなた、気持ちいい！イきそう！あんんっ！！」

「はっ、はっ、はっ、イ、イくっ！　美佐恵っ！　イくうううっ！

！」

正常位で激しく腰を振っていた俺の父さんが母さんに中出しするシーンであった。

「わあああっ！？　なんで父さん母さんまでこんなところに連れてこられてるんだっ！？」

中学生アイドルである宮垣咲良がゆっくりと俺の元にやってきた。

「今回の沙羅ちゃん殺害であなたは拷問処刑が確定したんだけど……去年の幼女誘拐、並びに性的悪戯、あなたの両親は気づいていたけど気付かないふりをしていたの。だから両親にも拷問を受けてもらう。これは両親の意志でもあるんだよ」

「え？　そんな！　親は関係ないじゃないかっ！？」

小学生アイドルである菅野莉央は、俺の父さんと母さんを交互に鞭で打ち始めた。
素っ裸で立たせた挙句に、全身に激しく鞭打ちを敢行している。
真っ赤に腫れ上がって紫色に変色し、更には皮膚が裂けて所々から血を流す両親。

「やめろっ！　やめてくれえっ！！」

「金玉潰されちゃったのに元気だね武尊くん？　麻酔が効いてるんだ？」

宮垣咲良はそう言いながら俺の髪の毛を鷲掴みにして、顔を引き上げた。

「ぐっ！？　やめてくれっ！」

「莉央が痛み止めの麻酔打ってあげてるのは両親の卑猥な姿をまともに見てもらうために特別になんだよ？　あはは」

「うっ！　なんて残酷な仕打ちを……くそうっ！」

アイドルだろうが美人だろうが本気でコイツらをぶち殺してやりたくなった。

その時だった。

菅野莉央は俺の母さんをベッドに縛り付けると、股間に何か機械のようなモノを突っ込んでいるようだった。

『ズブブブッ！！　ギュイイイイイインッ！！』

「はぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃああああっ！！」

『ブチュッ！　ズルルルルルルルッ！』

内臓が潰れるような音と共に、母さんの股間から血と共に白い塊のような臓器が出てきた。

「ぎゃあああああああああああっ！！」

「うっ！　あ、あれは子宮！？　じゃあ今の訳の分からない機械は……母さんのお尻じゃなく性器に突っ込んでたんだ」

「美佐恵さん、子宮はいただきました。……本当に殺されても良いんですね？」

「ぐうううっ！　は、はい！　取り返しのつかないことをした息子の前で……私と父である聖司を処刑してくだ……さい」

「分かりました。あなたたちご両親の処刑も本人が望むなら国からの許可は得てますので」

やめてくれ……母さんに酷い事をするな！
俺は必死で叫ぼうとするが、次の瞬間股間に激痛を覚えた。

「ぐわあっ！？」

宮垣咲良は俺のチンポを仮首からカッターで切断し、母さんの元へ歩み寄ってゆく。

「ほら美佐恵。バカ息子のペニスよ。食べなさい」

「はぁ、はぁ、はぁ、は、はい。いただきます。むごっ！　うむむむっ！！」

「もっと咀嚼音（そしゃくおん）を鳴らしながら食べるように」

咲良は母さんの胸を両手で揉みしだきながら強要していた。

「クチャクチャ……クチャクチャ……ごっくん！」

「美味しかった？」

「はい、息子のペニスは美味しかったです」

そのまま宮垣咲良は斧を手に取り、母さんの頭部へ振り落とした。

『ズドッ！！』

一撃で頭部が二つに割れて脳みそが飛び散るのが見えた。
なんて事をするんだコイツら……。
俺は縛られた体勢ながらも大声を出していた。

「やめろおおおおっ！！」

何度も斧を振り下ろして母さんの顔面が原型を留めないほどグチャグチャにされていた。
怒りと悲しみと動けない情けなさが同時に込み上げてくるが、まだ半分夢と思ってしまう自分がいた。

「仰向けに寝て両脚を抱えてそのまま大きく開脚しなさい」

なんて恥ずかしいポーズを父さんに強要してるんだアイツは！？
俺は今度は菅野莉央を睨みつける。
菅野莉央の右脚は大きく上に上がり、まっすぐに振り下ろされる。
父さんの睾丸を少女の踵落としが直撃した。
転がりまわりながら苦痛に耐える父さん。
多分一個の金玉は潰れたのだろう。

「あなた方両親さんには本当は拷問処刑にならなかったのに……」

「うぐぐ……い、いいんです。息子の犯した罪は重すぎる……早く妻の元へ逝かせてください……その後武尊もお願い……します」

「わかりました。睾丸を潰されたのにそこまで話せて……あなた方

は本当に立派でした。バカな息子をこの世に産み落としてしまった以外は……」

何を話してるんだ父さんと菅野莉央は？
よく分からないがライフルを取り出した莉央は何かを父さんに、命令しているようだった。
四つん這いになってお尻を突き上げる情けない姿の父を見た。

「一撃で死なせてあげるから……」

菅野莉央はライフルの銃口を父さんの肛門へ捩じ込んで、弾丸を装填した。

『つぷっ！……ズブブッ！！……ガチャ！』

「な、何を！？　やめろおおおおっ！！」

「さようなら。妻の元へ逝きなさい」

「は、はい。ありがとうございました……」

『ドンッ！！』

肛門から撃ち込まれた銃弾は見事に頭部まで貫き、頭部全体がスイカを割ったようにパーンと粉々に砕け散った。

「父さぁーーんっ！！　ひぃぃっ！！！！」

父さんの臀部へ右足の裏を押し当てながらゆっくりと直腸から銃口を引き抜くアイドルの小学生。
死んで緩んで広がり切ってしまった肛門からは、ドクドクとミンチになった直腸や大腸が流れ落ちてきていた。
まさか父さんと母さんの頭部がグチャグチャになってしまう処刑を目の前で見せつけられるなんて……。
俺は気が狂いそうになってしまった。

「立派な御両親でしたよ？」

「あんたとは大違いね？」

二人の美少女は交互に口を開いた。
何が立派だ！　無惨に殺したのはお前たちじゃないか！
殺したいほど俺が憎むアイドルの少女たちは、無慈悲に次の処刑に移った。
そう。
最後に俺の順番がきたみたいだ。
俺は拘束を解かれ、宮垣咲良とタイマンを張ることになったが、シャレにならないくらい強かった。
顔面をボコボコに殴られ続けて、歪に変形してしまう俺。

「や、やめてくれ……や、やめてください」

必死に命乞いをする俺。

血まみれになっている股間に膝を擦り付ける宮垣咲良。

『グリグリ……グリグリ』

「大切な所、雁首から切断されちゃって……おら？痛いか？」

「うう、痛い……助けて……」

「切断された面からオシッコもらしてるよ？尿道飛び出しちゃってるし……あはは♪」

「ひっ！　ごめんなさい！　命だけは許して……」

宮垣咲良はゆっくり立ち上がると、小型の刃物みたいなものを握りしめてゆっくりしゃがみ込む。

小学生アイドルの菅野莉央は俺に何やら変な色の液体を注射しているのが見える。

『ちゅううううう』

「うっ！？　な、なんだ！？」

全身に力が入らなくなった俺は二人のするがままにされることになる。
菅野莉央は俺をうつ伏せに寝かせて腹に手を回してお尻を突き上げるように下半身を引き起こした。

「咲良さん、これでいい？」

「ありがとう莉央」

『グリッ！……ズズズッ！』

「ぐわあああああっ！！」

肛門に激痛が走った。
円を描くように切り刻まれる感覚……。
刃物で俺の肛門をくり抜いているみたいだ。
あまりの激痛に俺は奇声を上げるが、容赦なく俺の肛門は宮垣咲良によってくり抜かれてしまった。
身体が動かないが痛みは感じられた。

「ぎゃああああああっ！！　さっきの麻酔みたいなのを打ってくれええっ！！　お願いだっ！！ぐぎいいいいいっ！！」

激しく出血しながら痛みに全身を震わせていると、更なる激痛が下半身を襲った。

『グルグルグルッ！！……ズルル……』

「あはは♪　どんどん出てくるのが面白ーい！　ほらほらほらあっ！」

『グルグルグルッ！！　ズルルルルルルルルッ！！』

何を大きなリールみたいなものをグルグル回してるんだコイツ！？
えっ！？　俺の内臓が大型リールに巻き取られてる！？

「んぎゃあああああああっ！！！！」

宮垣咲良がリールを巻くたびに俺の直腸や大腸、更にすでに小腸までも巻き取られていた。

「あっ！？　急に細くなったよ？　コレってここから小腸に変わったってことだよね莉央？」

「そうそう！　そのまま胃がお腹に下がるまで全部ハラワタ巻き取ってあげて！」

「はーい！　ほらほらほらほらあっ！！」

『グルグルグルグルッ！！』

「いぎいいいいいっ！！！！　死ぬうううううっ！！！！！」

やがて全ての大腸と小腸を巻き取った宮垣咲良は、ハサミで腸を切断した。

腹部全体が焼け付くように痛い。

もう俺は死ぬんだな……もう致命傷を受けた覚悟みたいなものが俺の中で生まれつつあった。

菅野莉央はパックリ開いた惨めな俺の肛門から指を入れて、胃を引き摺り出した。

「お邪魔しまーす♪」

『グチュ……グボボボボ……ずちゅうっ！！！！』

「がはあっ！？」

「あはは。お尻の穴から胃を抉り出されて死んじゃうなんて……あなたってホント哀れな人だよね？」

そのまま俺は木の杭に縛り付けられて外見はほぼ無傷な胸や腹部を何度も殴られた。

小学生と中学生のアイドル二人に代わるがわる殴打され続けたん

だ。
肛門からハラワタと胃まで引き摺り出された俺はもう抵抗する気もないし、生き残れるとも思っていない。
覚悟はできていた。
「うう、痛い……は、早く殺して……」
「あはは！　“早く殺して！”を頂きましたぁっ♪」
宮垣咲良は嬉しそうにライフルを取り出すとガチャリと弾丸の装填を終える。
「頭……胸……腹部……どこを吹っ飛ばしてあげよっか？」
「ううう……一思いに頭を……お願いします」
「苦しいから即死したいんだね？　でも頭はやめとく」
宮垣咲良はライフルの銃口を俺の腹部へ向ける。
そのまま臍へ突っ込んだ。
「おへそ……吹っ飛ばしてあげる」
「ひっ！？　そんなとこ……や、やめ」

『ドンッ！！』

臍から打ち込まれた弾丸は、一瞬にして俺の背中に大きく穴を開けてほぼ空洞にされている腹を簡単に突き破った。
ハラワタ以外の残された臓器を吹き飛ばしながら……。

「腸がウネウネと飛び散るのを期待してたのに……事前に巻き取っちゃってたからねー。肝臓や腎臓のミンチだけじゃ少しつまんない」

俺は臍と背中に大穴開けられてもまだ生きていた。
生き地獄のような熱い激痛が胴体部分を犯し続けている。

「ぐわあっ！！　ひぐううううううっ！！」

「ほら、咥えろ」

『がぽっ！！』

「うごおっ！？」

口へ捩じ込まれた銃口。
遂にトドメを刺してくれるのかコイツら……。

「ぼちぼち死ね」

「ううう……うごっ」

『ドンッ！！』

俺の意識はこの瞬間で完全になくなった……。

「親子揃って頭部吹っ飛ばしちゃったねぇ」

「うん。コイツのために死を選んだご両親の誠意には感服するわ」

「そだね。莉央もそうゆうとこ人の心持ってるんだね？」

「……失礼ですね咲良さん」

「あはは……ごめんなさい」

鬼畜犯罪者の親心（後書き）

一人の幼女を弄び、一人の児童を犯して命を奪った行為は、犯罪者自身のみならず、両親までも不幸のドン底に陥れることとなった。

残酷処刑島に新たに三人の遺体が加わった……。

悲しい復讐（前書き）

理不尽な死を遂げた大切な身内の為の報復、復讐。
時にはリベンジを遂げる為に手段を選ばない人も存在する。

悲しい復讐

「お兄ちゃん……ごめんなさい。私はもう耐えられない」

一人の１６歳の少女が断崖絶壁から身を投げた。
とある高校でクラスメイトからのイジメに、とうとう限界がきてしまったのである。

「日下英美里さんのために黙祷」

北部地方にある私立寒川高等学校一年二組の担任である３０代の女教師が儀式的に黙祷を促した。
３５人の男女、生徒全員が目を閉じて黙祷を捧げた。

「日下さんに何があったのかは知りませんが……このような重大で悲惨な結果になるとは思ってもいませんでした」

担任の女教師は淡々と生徒たちに語りかける。

「これからは悩んでるクラスメイトを見かけたら色々相談とか聞いてあげてください。お互いを支え合わなければ弱い生き物である人間は一人で生きてはゆけません」

生徒たちは手を合わせて静かに目を閉じた。

結局イジメを実行した生徒たちは当然の如く名乗り出ることもなく……目撃者たちは報復を恐れたのか担任に告げ口されることもなく……何事もなかったかのように数年の月日が流れた。

そして起こった世間を恐怖に陥れるほどの大事件、３５人もの大人数の毒物による中毒死。

それは寒川高等学校を卒業して、二年後の二十歳の成人祝いの二次会である料亭で起こったのである。

長男である日下真介と次女である日下愛梨が、長女であった日下英美里の仇を討ったのであった。

「お兄ちゃん……お姉ちゃん天国いけたかな？」

「ああ。俺もクラスメイトからのイジメとは聞いていたが……個別に犯人を知る由はなかった。容疑のある二組の奴らは全員殺したから。英美里を虐めて自殺に追いやった奴らも確実に死んだだろうな」

「そうだね。仇は討てたよこれで」

――――残酷処刑島。

菅野莉央と富田美香、結城明日香のアイドルである三人、小学生トリオが今回の拷問処刑人に選ばれていた。

２５歳になる長男の日下真介と、２１歳になる次女の日下愛梨の二人が今回の罪人であった。

長女のイジメによる自殺事件……敵討ちによる３５人の大量虐殺。確かに犯人はその中にいたであろうが、関係のない生徒たちも３０人以上が命を失っているのである。

決して許されることではない。

日下愛梨は結城明日香から拷問を受けていた。

簡易ベッドに全裸で縛り付けられたまま、明日香の拷問を長時間受け続けていたのだ。

ペンチで一枚一枚両手両足の全ての爪を剥がしてからの顔面が変形するほどのタコ殴り。

『ガキッ！　バコッ！　グシャッ！』

「わーんわーん！　痛いよおおっ！！　お兄ちゃん助けてえええっ！！」

「お兄さんもそれどころじゃないの。これを性器に突っ込んで……その苦痛の後楽にしてあげるからね？もう少し辛抱するんだよ愛梨さん」

富田美香は足部分の拘束を一度解き、両膝の間に棒を入れて結び、

二度と股を閉じられないように縛り付けてから膝を立てさせてＭ字開脚型に縛り直す。

「明日香ちゃん、準備できたよ」

「ありがとう。これだけ開かせたら入れやすいわね」

「ううう……股間が丸見えになってない？　恥ずかしい。やめて許して……ぐすん！　ぐすん！」

「性器なんて男女共に見慣れてます。ご安心を」

明日香は鞄の中から洋梨の形をしたものに柄が付いている器具みたいなものを取り出して、グリップ部分を強く握りしめる。

「な、何それ？」

「これ？　形が洋梨みたいでしょ？　〝苦悩の梨〟ってゆうの。男性の肛門や女性の膣に突っ込んで大きく開かせて内部から破壊する拷問器具なのね。西洋の魔女に対する拷問でよく使われていたみたい。ほら、股間の力を抜いてくれるかな？」

「ひっ！？　いやっ！　そんなの入らない！！　やめてっ！！」

「ローションタップリ塗って強引に押し込めばどうにか全部入るから安心して。でもね、コレは入れた後が問題だよ。倍以上の大きさに広がっちゃうんだから。ほら、太腿の力を抜くの！」

『つぷ！　ズズズ』

「ひぎっ！？　や、やめてっ！！」

柄を両手で握りしめて全力で愛梨の小陰唇、膣口を押し開かせて膣内へめり込ませてゆく明日香。

『グリ！　ズググググ！　メリメリ！』

「ぎゃああああっ！？　痛いっ！！　痛いいいいっ！！」

棒を結んだ膝の縄が強く食い込むほど暴れて股を閉じようとするが、美香の拘束が解けることはなかった。

「いっくよぉ〜。一気に根元まで！　えいっ！　えいいいっ！」

「んあああああっ！！」

『グボオッ！！　ぐちゅっ！！』

「はぎゃあっ！！」

遂に根元まで直径8センチはある洋梨型の器具が、愛梨の膣へ収まってしまう。

『キリキリ……キリキリ』

柄についているネジをゆっくり回し始める明日香。
徐々に膣内の器具が開いてゆく。
更に螺旋型のドリルのような針が子宮口を突き破り、子宮の奥へと進んでいった。

『メリメリ……メリメリ』

膣を内側から大きく開かされる激痛に、大きく頭を振りながらベッドの上で悲鳴を上げる愛梨。

「んぎゃあああああっ！！」

明日香は手に何かの抵抗を感じた。

「あれ？　何がネジが固くなったよ？」

「どうゆうこと？　明日香ちゃん」

隣で頬を赤くしながらニヤけて見ているだけの美香が問いかけて

くる。

「普通なら膣を破壊するくらいなら簡単に回せる設計なんだけど……子宮内を貫く螺旋型の針が何かに当たってるみたい」

「ええっ！？　それってもしかして……」

「そう。子宮内に何かあるわ。多分赤ちゃんの頭部を貫いているみたいね」

「あはっ！　コイツまだ２１歳なのに妊娠してたんだ！」

「やだっ！　お兄ちゃんにも内緒にしてたのに言わないでっ！」

激痛の中、今まで兄に隠していた妊娠まで明日香たちに暴露されて更に泣き叫ぶ愛梨であった。

隣で菅野莉央の拷問を受けている兄にはもう何も理解できないので心配する必要は全くなかった。

千枚通しで莉央から全身に穴を開けられて泣き叫ぶ兄に構うことなく更にネジを回す明日香。

『キリキリ……キリキリ……メリメリ！　ズチュチュチュ！』

何かを破壊する貫通音が膣の奥から聞こえてくる。

小陰唇をヒクヒク動かしながら悶え苦しむ愛梨。

『メリメリ！　バリバリ！』

続いて膣道が内部から破壊されてゆく音も響き渡る。

「ひゃああああっ！？　痛いいいいいっ！　アソコ裂けちゃううううっ！！　やめてぇえっ！！」

「殺人者の子供なんてこの世に産み落とされたら困っちゃうわ。子宮の奥まで螺旋針が到達したみたい。もう赤子の頭部から肛門まで貫通したみたいだし膣も破壊できたみたいだから器具を引き抜くわね？」

「わーんわーん！　痛いよおおっ！　んぎいいいいいっ！！」

「美香ちゃんも手伝って！　内部から恥骨破壊しなくちゃ抜けないから」

「おっけー♪　それえっ！」

『バキバキッ！　ぱくっ！　ばくんっ！』

まず大きく開かれた洋梨器具が膣口を全開に開かせながらゆっくり出てきた。

恥骨を内部から破壊して無理矢理引き抜かれてゆく。

『メキメキ……グポオオオッ！！』

「ふんぎいいいいいっ！？」

遂に洋梨器具は全て膣内から引き抜かれた。
すぐ後に続いて血まみれの肉塊みたいなものが出てくる。

『ボコオッ！……ズルズルズル！』

「胎児……出ちゃったよ愛梨さん？」

「はぁ、はぁ、はぁ、うわあああんっ！！　うわあああんっ！！　産みたかったのに！　子供欲しかったのにいいいっ！！」

恥骨も性器も破壊されて大きく膣口を開いたままドクドクと血を流す愛梨を哀れそうに見つめる明日香と美香。

「愛梨さん？　子宮まで丸見えだよ？」

美香が引き裂かれた膣口を凝視しながら愛梨に問いかけるが、もはや号泣することしかできなくなっていた。

結城明日香はゆっくり菅野莉央の方へ顔を向ける。

「莉央ちゃん！　もう愛梨さん楽にさせてあげて構わないかな？」

「そだね。お姉さんを理不尽なイジメで失って……兄と共謀して容疑者全員毒殺だなんて……なんか犯人まで可哀想すぎるもんね。赤ちゃんまで先に殺しちゃったみたいだし。いいよ殺しちゃっても」

「うん。そうゆう訳だから早めに楽にしてあげるね愛梨さん……ほら、コレでも咥えてなさい」

『ズボッ！！』

「うごおっ！？　おえええええっ！！　むごおおおおっ！？」

洋梨器具で抉り出した貫通処刑された胎児を無理矢理口に突っ込むと、サバイバルナイフを首に当てがい、勢いよく何度もスライドさせる明日香。

『ズッ！　ズババパパババッ！！』

「うごおっ！？　うぶぶぶぶうっ！！　ゴボゴボオッ！！」

数秒後には胴体から切り離された生首を持ちあげる明日香がいた。
髪の毛を掴んで持ち上げてから地面に落とした。
胎児の短い足が片方だけ血まみれの口からはみ出している。

「哀れね。あの世で猛省しなさい」

明日香はそう言いながら美香の方に目をやると、日下愛梨の生首を拾い上げて胴体の腹部にそっと置いた。

「はい、首と赤ちゃん返してあげるからね！」

血まみれのセーラー服で両手の血を拭き取りながら、明日香と美香は莉央の方に目をやった。

千箇所以上も、千枚通しで穴を開けられて泣き喚く真介の姿が見える。

「あはは。地味な拷問してるね莉央ちゃん」

美香がはしゃぎながら真介に近寄る。

明日香もそっと歩み寄り、莉央による真介の拷問に参加して三人で行うことにした。

「次は手脚の皮を剥いでいこうか」

莉央の提案により、明日香と美香は切れ味の良い小型のナイフを

渡されて、次々と腕から脚に切れ目を入れてゆく。
数箇所切れ目を入れては切れ目から切れ目の皮を剥ぎ取り、少しずつ手脚の皮を剥いてゆく三人。

「はぎいいいっ！！　痛いっ！　痛いいいいっ！！」

両手両足の皮膚を全て剥ぎ取った後、更に莉央が提案する。

「胴体部分からは肉ごと削ぎ取っていこう。皮剥ぎ刑から凌遅刑に変更ね」

「はーい」

「了解」

深く刃先を入れて、肉ごと削ぎ落とし始める明日香と美香。
莉央は皮を剥かれている両手両足に、塩を塗り付け始めた。
拘束具の縄が切れそうなほど暴れる真介だが、立ったまま両手両足を縛られて首輪をかけて真上から吊り上げている体勢では何もできなかった。爪先立ちしなければ首が閉まるほどギリギリの状態で、上部の木の枝から吊られたロープに首輪を付けてそれを首に掛けられていたからである。

「うごっ！？　おううっ！！」

「ほら、そんなに顎を下げたら息が出来なくなっちゃうぞぉ？　うふふ♡」

注意喚起しながら、更に肉を削がれている胴体部分にも塩を塗り付ける莉央。

内臓が飛び出さない程度に、上手く脂肪や筋肉部分のみを削ぎ取ってゆく明日香と美香に感心する莉央だった。

「凌遅刑も本当上手くなったよね？」

明日香と美香は、照れくさそうに微笑んで返す。

全身をガクガクと痙攣させ始める真介を見て、慌てて注射器を鞄から取り出して全身の数箇所に何度も打った。

「ショック死と失血死を防ぐ注射を打ったから安心して。まだ死なせないから」

「あひあひ！　はわわわわわわ……」

涎を垂らしながら白目を剥く真介だったが、生への本能のせいか爪先立ちだけはキープして窒息死しないよう必死に努めていた。

「何か黒っぽい汚いヘソね？　こうしてやる。ほらっ！」

『ズブッ！』

「ふぎいっ！？」

短刀をヘソに突き入れる美香。
さらにヘソがぐちゃぐちゃになるまで掻き回す。

「えいえいえいっ！」

『グチュチュチュッ！！　グリングリングリンッ！！』

「ぐわあああああああっ！！　んぎいいいいいっ！！」

頭部のみを残して全身の皮と肉を削ぎ落とし終わる三人。
美香はヘソに突き入れて掻き回した短刀を一気に引き抜く。

「もう全身真っ赤っ赤になっちゃったね？　汚いヘソもこれで終焉しちゃったし。ほら、抜いたげる」

『ポンッ！……ズルズルッ！！』

「やだっ！　腸がはみ出してきちゃった！？」

美香は深くヘ先を入れすぎたことを後悔するが既に遅く、ズルズルと小腸がはみ出してきて止まらなくなった。
莉央は出て来た腸を掴んで切断し、ヘソを縫合してこれ以上出て来れなく処置をした。

「ごめん莉央ちゃん、深く抉り過ぎちゃったみたい……」

「いいよ。お臍からズルズルはみ出してくるハラワタもなかなか面白かったよ。あはは♪」

「良かった！　そう言ってもらえたら助かるよ！　オチンチンと金玉は皮も肉もまだ削いでないけど……性器だけ原型留めて全く無事なのも悲壮感漂ってウケるわよね？　あはは♪」

「全身ズタボロにされて真っ赤になって血みどろなのに……チンポだけ平然と胸張ってるみたいでおかしいよねホント！」

あまりに哀れな男の姿に感動して明日香も口を挟む。

莉央は再度注射器を鞄から取り出して、超強力な痛み止めと超強力な滋養強壮剤を全身に注射する。

「まだ殺さないの莉央ちゃん？」

明日香が真介の真っ赤な姿に同情して莉央に問いかける。

「もうちょっと待って。ほら、コイツを見てて」

小学生アイドル三人の見守る中で、全身をズタボロにされながらもある部分を膨張させる真介。

「ええっ！？」

「やだぁ～」

明日香と美香はビンビンに勃起してゆく真介のペニスを見て頬を赤くする。

「全身の肉と皮を削がれてもまだ無事なチンポはイキり勃っちゃうんだ！？　すっごーいお兄さん♪」

美香はイキり勃ったペニスを人差し指でピン！　と弾く。

「ペニスだけ皮削がないでおいてあげた理由は、最期に気持ちいいことしてあげようと思ったからだよ真介さん。ねぇ明日香ちゃん」

「え？　なに？」

「コイツをシゴいて射精させて」

「えっ！？　私が？」

「うん。眼鏡っ子の真面目な子が好きだって妹さんが言ってたから」

「殺しちゃうまでにそんなことまで聞き出してたのね……分かったよ。少し同情できる所もあったからね今回の事件は」

生まれつき薄い茶髪のポニーテールを揺らしながら結城明日香は真介のペニスをそっと握り、ゆっくりとピストン運動を開始した。

『ギュッ！……シコシコシコシコ』

「うっ！？　うほほほほほっ！」

両手両足の皮を剥ぎ取られ、首から下全ての肉を削ぎ落とされても尚、下腹部を隆起させて小学生の女の子にシゴかれる絵面。

相当不気味であり、エロい絵面でもあった。

明日香は睾丸を左手で強弱をつけて揉みしだきながら、ピストン運動を加速してゆく。

やがて人生最期になるであろう射精を終える２５歳の真介であった。

右手にタップリついた精液を、無理矢理舐めたらせる明日香。

「ほら、ここにもついてる。もっと舌を突き出して綺麗に舐め取りなさい」

「んっ、んごっ！　ペチャペチャ！　むごおおっ！……ごっくん！」

「きちんと飲み込んだのね？　偉いわお兄さん」

人生最期の射精を堪能した真介はもう死を受け入れる覚悟を決めたのか、そっと踵を地面に付けて、頸部にゆっくり体重をかけてゆく。

その瞬間、木から吊るされていたロープを少し伸ばして緩める莉央。

「がはっ！　はぁ！　はぁ！」

「まだ死んじゃダメ」

「はぁ、はぁ、も、もう殺してくれ……こんな姿じゃもし社会に復帰できても全身真っ赤な傷だらけで恥ずかしくて生きてゆけないじゃないか？」

「安心して。もう腸も1メートルほど切り取られてるし手術しても手遅れだから」

「ぐうう、なら早く殺して……くれ。お願いだ」

明日香は妹の愛梨を拷問した洋梨型の器具を莉央に渡した。
しゃがみ込んで背後に回る莉央。
真介の視界から消えた少女は恐ろしい行為に入る。

『グリッ！……ズブブブブッ！！』

「はぎゃぁあっ！？」

肛門に洋梨型の器具を突っ込み始めたのだ。
半勃ちだったペニスも一気に萎れて再度歯軋りをしながら苦痛にもがき始める真介だったが、強引に直腸奥深くまで捩じ込まれてしまう。

『グボッ！　バチュッ！！』

「ふんぎいいいいいいっ！！！！」

「直腸破裂させてあげるから」

『キリキリ！　キリキリ！』

かなり高速でネジを回してゆく莉央。
パンパンに拡げられた直腸からの出血で肛門からドクドクと鮮血が流れ落ちてくる。
更に飛び出した螺旋状の針がＳ字結腸を突き破る。

「うがああっ！！　痛い痛い痛いいいいっ！！」

「妹そんのマンコ貫いた器具でお尻の穴貫かれるなんて……哀れな兄妹だよね？　あはは」

莉央は目を細くして微笑みながら全開まで洋梨器具を直腸内で開かせた。
そのまま両手に力を込めて一気に引き抜く。

『グポオオオオッ！！……バリバリバリバリバリッ！！』

全ての肛門括約筋が引き裂かれてパックリと大きな穴と化してしまった男の肛門。
血液と腸液と大便がひっきりなしに垂れ出してくる。
引き裂かれてしまった肛門括約筋を全てメスでくり抜き、直腸を掴むと、凄まじい勢いで大腸を抜き取り始める。

「ほらほらほらほらっ！　ハラワタ抜き取り刑の時間だよ！」

『ズルズルズルズルズルッ！！』

「うふごうおおおおっ！！！！」

意味のわからない奇声を上げながら肛門からハラワタを抜かれてゆく真介であった。
痛み止めの注射が打たれているとはいえ、ショック死しない程度なので激痛には変わりがなかった。
やがて全ての大腸と、先ほど切断された部位までの小腸を引き摺り出されると、真介は気が狂ったように笑い始めた。

「アヒャ！　アヒャヒャヒャヒャヒャヒャ」

胃が下がって来て肛門部分に引っかかって止まる。
十二指腸と、小腸の境目辺りをメスで切断すると、右手を大きくくり抜かれた肛門から突き入れる莉央。

『ズボボボボッ！！　グポオオオッ！！』

「はぎいっ！？　アヒャヒャヒャヒャアッ！！」

「いつまで笑ってられるのかしら？」

莉央の右手はハラワタのくり抜かれたほぼ空洞の腹部を押し進み、ヘソから人差し指を突き出した。

『ばちゅっ！！』

「きぴいっ！？」

「あはは！　せっかく縫ってあげたお臍から指突き出させちゃったぁ。ホントごめんね！　痛い？」

莉央はすぐに臍から指を引き抜くと今度は角度を変えて力を込めた。

「次は……こっちの方へ……お邪魔しまーす♪」

『ズチュチュッ！　ポコッ！』

膀胱と前立腺の間を貫通した莉央の人差し指は、尿道から飛び出す。

「やだぁ〜。莉央ちゃんってばチンポから指突き出すなんて反則だよぉ」

富田美香は頬を真っ赤にして大笑いする。

結城明日香はペニスから飛び出した莉央の指先をチョンチョンと突いた。

「スッゴ！　的確にオチンチンまで突っ込めるのが莉央ちゃんの凄い所だね？」

変なところに感心する明日香だったが、しばらく引き抜いたら突き出したりの尿道ピストンを繰り返す莉央に泣きを入れる真介だった。

「いでええええええっ！！　やめてやめてやめてええっ！！　もう殺して下さいいいいっ！！」

「やっと正気に戻ったみたいだね。分かった。もう抜いてあげる」

尿道から指を引き抜くと、そのまま肛門分から肘までは突っ込んでいた腕までも抜いてあげる莉央。

莉央の顎をしゃくる合図と共に美香は日本刀を構える。

「できるだけ根元から断ってあげるからねー？　この辺りかな？　えいっ！」

『ヒュンッ！……スパァンッ！！』

見事に根元から斬り落とされたペニスはクルクルと回転しながら地面に落ちた。

「チンポ切断の刑！　執行完了っ♪」

『ヒュンッ！……ビチャチャ！』

美香は日本刀を思いっきり斜め下に振り下ろし、ペニスから日本刀に付着した血を振り払う。

「凄いわね相変わらず」

「てへっ！　ありがとう」

美香の刀捌きに今回も感心する明日香だった。
地面に落ちたペニスを拾い上げると、真介本人の口に捩じ込む莉央。

「ほら、自分のペニス食べなさい」

「うごおっ！？　むごごごごっ！！」

無理矢理咥えさせたもののなかなか飲み込めないでいる真介だったが、そのまましばらく放置する三人。
自分のペニスを咥えたままで全身の肉を削ぎ落とされたままで悶え苦しむ姿に、女子小学生の三人は興奮していた。

「足元にハラワタが散乱してるのもまた堪らないよね？」

「あたしはチンポ咥えてモゴモゴしてる所かな？」

明日香と美香はそれぞれの萌え所の感想を言うが、莉央は黙ったまま次の行動に移る。

チェーンソーで両手両足を切断し、地面に寝かせると唯一無事に残された睾丸を足の裏で踏みつける。

『グリグリグリグリ……』

「さて。殺す前に金玉も潰しておかなきゃね？」

「ひいっ！？　やめて下さい……」

「言葉遣いはできて来だしたよね！　偉いわよお兄さん」

莉央は大きく膝を曲げて右足を高く上げた。

「でもね。潰しちゃうの。ここだけは。えいっ！」

『ドカッ！！　ドカッ！！　ズドンッ！！　ズドンッ！！』

「ぐわあああああああっ！！」

完全に二つの睾丸を潰すために四回も蹴り込む莉央。二つの睾丸は完全にミンチになってしまった。

ダルマ男の状態で睾丸を潰された真介は泡を噴きながら白目を剥いて痙攣を始める。

ベレッタＭ９３Ｒとゆう最近莉央のお気に入りの拳銃を取り出すと、斜め下の真介に銃口を向ける。

「愛梨さんよりあなたを苦しめたのはあなたの提案により今回の復讐劇が行われたからだよ。分かってる？」

「ううう、ごめんなさい。あがが。ごめんなさいいい……」

「よく反省できました。生まれ変わったら二度と罪もない人まで巻き添えにしちゃうようなことしないでね？　さあ、妹さんの元へ逝きなさい」

「あ、あり、がとうございい、ました……」

『パンッ！　パンッ！　パンッ！　パンッ！』

「はぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃっ！！」

「さぁトドメだよ。死ね」

『パァンッ！！』

莉央はペニスの切断面、お臍、両側の乳首の切断面、首、額と連続で射撃してトドメを刺した。

最期の額への一撃を喰らうまで銃撃による激痛を何度も味わったとゆう残酷な殺し方をする莉央だったが、行って来た残虐な復讐行為を考慮すると、当然といえば当然の拷問処刑であった。

残酷処刑島に新たに二人の遺体が加わった……。

「目玉飛び出しちゃってる……深海から釣り上げられたお魚みたいだね？　アハハ」

「脳みそも殆ど吹っ飛んじゃってる。莉央ちゃんの新しい銃って凄い威力だしカッコいいね？」

美香に続き、明日香も口を開く。

「コレ気に入ってるの」

銃口から微かに立ち昇る煙をフッと口で吹き飛ばす莉央。

脳みそを撒き散らし、目玉を飛び出させながらも自分のペニスは咥えて離さない真介の死に様を見下ろしながら三人の女子小学生アイドルたちは冷たく微笑んだ。

少年法で裁かせない特殊任務省（前書き）

裏切られた……と言うだけで過剰に復讐してしまう二人。
何事もやりすぎは良くない。
行動に見合った報いが二人に返ってくる……。

「どうして親友だった子にあんな酷いことしたの？」

「ぐすん……ぐすん。お家に帰りたい……」

「あなたの名前は春日絵梨花だったよね？」

「うん。お姉ちゃんお願い！　あたし反省してるから！もうお家に帰して！」

「いじめにも限度ってものがあるのよ……悪人にはきちんと報いを受けてもらわなきゃ」

「え？」

コンクリートで覆われた平屋の建物の中には四つほど部屋があるが、その二つは本日久しぶりに使われることになった。

無人島でもあえて屋内で行う拷問処刑部屋である。

虫の音が静かに響き渡る。

窓の鉄格子越しにその音色は四人に聞こえてきた。

ここ残酷処刑島では、これまで沢山の犯罪者を処刑してきたが、今回も二人の子供が連行されてきていた。

南部地方の田舎町に存在する城山小学校。

小学四年生である１０歳の児童二人が中学生の拷問処刑人である

鬼頭美紅と宮垣咲良によって今夜仕置きを受けることとなる。
夜に行われる拷問処刑は、昼間のそれよりいっそう時間をかけて行われる特に残酷なものとなっていた。

「椅子に縛り付けて全身をカッターで切りつけるなんて……やりすぎだよ。三笠留美さんは出血多量であの後病院で息を引き取ったわ。あなたの親友の佐伯友彦も隣の部屋で今夜から朝までタップリと制裁を受けてもらうことになってるからね」

「ちょ、ちょっと待って！　制裁って……初対面のお姉さんにそんな事する権利あるの？　頭おかしいの！？」
春日絵梨花担当の鬼頭美紅は、木製の古びた椅子からゆっくり立ち上がると、鉄格子越しに見える満月を見上げる。

「小学生のあなたには申し訳ないんだけど夜明けまでこの世の生き地獄を味わってもらうことになるわ」
月明かりに照らされる美紅の横顔はとても綺麗だった。
絵梨花はその横顔を見つめながら全身が恐怖で震えるのを抑えきれなかった。

「あ、あたし今夜殺されちゃうの？」

「……うん。あたしに拷問されて死ぬことになるわね」

「そ、そんなの、イヤ！　やめて……お願いだから……」

思わず土下座して美紅に赦しを乞う絵梨花。
小学生の少女の土下座を見下ろしながら鈍く光る手錠を手に取り静かに囁いた。

「服を全部脱いでそこのベッドにうつ伏せになろうか？」

「ひっ！　お願いっ！！　許してえええっ！！　わーんわーん！！」

――隣の部屋にいる絵梨花と同じ小学四年生の佐伯友彦。
泣き叫びながら土下座する絵梨花とは対照的だった。
鬼頭美紅と同い年の中学二年生の拷問処刑人である宮垣咲良は、男子児童に胸ぐらを掴まれて恫喝されていた。

「こんなとこに拐ってきやがって！　いい加減にしろよクソ女っ！！」

「拐ったのはあたいじゃないんだけど……まぁ落ち着けって少年」

「落ち着けるかっ！！　父さんも母さんも今頃俺を心配して怒りまくってるよ！！どうしてくれるんだ！？　それと……絵梨花ちゃん

はどこにやった！？」

胸ぐらを掴んでいる男子児童の手をそっと上から掴み、軽く捻ると大きく体勢を崩して床に倒れこむハメになる。

『ステーン！……ゴンッ！！』

「ぐわっ！？」

受け身が取れない投げ捨てだったために後頭部をコンクリート製の床でかなり強く打って唸り声をあげる佐伯友彦。
咲良のセーラー服は胸部のネクタイが取れてシワクチャになってしまっていた。

「調子に乗るのはその辺にしとけよガキ」

「いたた……くそう、中学生みたいだけど女のクセに生意気だ！」

「威勢がいいなぁキミは」

ゆっくりと馬乗りになり、男子児童に殴りつける咲良。

『ドカッ！　ガツッ！　バキッ！　ゴンッ！』

「ぐっ！　痛っ！　ぎっ！　おうっ！」

鼻の骨が折れて歪んでしまい、激しく鼻血を流す友彦だったが、咲良は振り下ろす手を止めない。

マウントポジションのまま数分間男子児童を殴り続けた。

「わーんわーん！！　痛いいいっ！！　わーんわーん！！」

「あたいに負けちゃったねぇ？　罰として服を脱いでもらうからな」

「や、やめてっ！！　お願いお姉さんっ！！　やめてええっ！！」

ボコボコに変形させられた顔面を押さえたまま、宮垣咲良に一枚一枚服を脱がされてゆき、遂にブリーフパンツ一枚のみとなる。

仰向けに寝転がったまま泣き続ける友彦の最後の一枚に手をかける咲良。

「生意気なガキのチンポでも拝ませてもらうか。ほら！」

『ズルリッ！……スルスル。すぽん』

「ヒャアッ！？　やめて見ないで恥ずかしいっ！！　わーんわーん！！」

ピラピラと脱がしたてホカホカのブリーフパンツを右手に持って

高々と挙げて何度も振る。

「小学生のくせに絵梨花とゆう同級生とみんなに内緒で付き合ってたんだよなお前？」

「ぐすん！ぐすん！……そうだよ……絵梨花ちゃんを裏切った三笠瑠美は絶対許せなかったんだ！　だから放課後二人で椅子に縛り付けて……」

鼻血まみれの顔面を押さえていた両手を慌てて股間に当てがい、泣いてしまいながらも咲良の視線から陰部を隠す友彦だった。

「そっか。動けなくしておいて絵梨花と二人でカッターを使って全身切り刻んだんだな？」

「い、いや……俺は縛り付けて動けなくしただけで……カッターで切り付けたのは絵梨花ちゃん一人だよ」

宮垣咲良は話を聞きながら両手の指をバキバキと鳴らしている。

「だから俺は殺してない！　カッターぐらいで切ったからって死んじゃうとも思ってなかったし殺す気なんてこれっぽっちもなかったんだ！」

「……だから？」

「え？」

『バコォンッ！！』

「はぎゃっ！？」

隙だらけになった顔面を思いっきりサッカーボールキックする咲良。

股間を隠していた両手を再び顔面に当て、声の限り大声をあげて号泣を始める。

「先ずは死なない程度に顔面をボッコボコにしてやる。立て」

「わーん！　うわぁあああんっ！！　ごめんなさいごめんなさいごめんなさいいいいっ！！　許してぇえええっ！！」

素っ裸の男子児童を髪の毛を鷲掴みにして無理矢理立たせると、さらに顔面への殴打を繰り返す残忍な女子中学生アイドル。

顔をガードすればみぞおちに強烈な膝を入れて、再び顔面を殴る……の繰り返しは延々と二時間ほど続けられた。

「うう……ううあうあう……」

意識が朦朧とする中浮かび上がるのは今まで育ててくれた両親の

笑顔とキスもした事のない同級生の彼女である絵梨花の笑顔であった。
薄れゆく意識の中で残酷中学生が縄を持って立っている姿が見える。
「お、俺を縛り付けるつもりか……な？」
原型を留めないほどに顔面だけを傷つけられた佐伯友彦は完全に意識を失った。

――――その頃美紅の担当である隣室では…………。

抵抗はしたものの結局非力な小学生では鬼頭美紅に太刀打ち出来るわけもなく、無理矢理素っ裸にされてベッドにうつ伏せ体勢で拘束されていた。
手首と足首を手錠でベッドの柱に繋がれたまま美紅の鞭打ち刑が始まる。
「じゃあぼちぼち始めようかな絵梨花。先に後ろの面……背中とお尻と脚の裏側」
「な、何をするつもりですか！？　やめてくださいっ！！」
『ヒュンッ！……スパァンッ！！』

「ぎゃあっ！！！！」

皮の鞭が思いっきり振り下ろされ、春日絵梨花の背中を打ち付ける。

物凄い乾いた激しい打撃音がコンクリートの部屋に響き渡った。

「痛いいいいいいっ！！　うわぁあああああんっ！！！！」

『スパァンッ！！　スパァンッ！！』

「んがあっ！！　がはあっ！！」

臀部、ふくらはぎ、人体の後ろ面を容赦なく打ちつけてゆく美紅。

１００回を打ち終えた頃には所々皮が破けて血が流れ落ちていた。

号泣することしか他に何もできない絵梨花は喉が潰れて声がかすれてしまう。

「もう１００回いこうか？」

「んぎいいいっ！！　やめて……死んじゃううう……痛いいいい」

「だからぁあなたは今日あたしに殺されるんだって！　まだ生きて帰れるとか思ってるの？」

『ヒュンッ！……スパァンッ！！』

「んがあっ！！」

白いコンクリートの床は背中や臀部の皮が裂けて飛び散った鮮血で真っ赤に染まってしまった。
所々皮だけでなく肉まで削げて、激しく流血している部分もあった。

「さぁ体勢を変えるわよ。２００回我慢できたからご褒美に痛み止めの薬をあげるわね」

『プチュ！……ぷちゅううううう』

「あはあっ！？　やんっ！？」

「ガキのくせに変な声出さないの！　この浣腸のお陰で体勢変えるまでの間の数分間だけでも痛みが麻痺するんだから感謝しなさいね」

ガラス製の浣腸器にタップリ充填された緑色の薬液を１０歳の児童の肛門から注ぎ込む美紅。

「はぁ。はぁ。んあ？　痛くない！　治った！　ありがとうお姉さん！」

「はあ？　だから一時的なだけで何も治ってないって。あはは……

さぁ立って。今度は立ったままで柱に縛り付けるから」

背中や臀部の激痛から解放された絵梨花は美紅に言われるがまま立ち上がり、鉄製の柱に両手と足首を縛り付けられた。

「ガキの割に胸が少し出てるんだね？」

「やだ……見ないでください。恥ずかしい」

『パァンッ！！』

「ぎゃあっ！？」

強烈なビンタが絵梨花の左頬を襲う。
更に激しく何度も往復ビンタを繰り返す美紅。

『スパパパパァンッ！！　パパパパパパパパンッ！！』

「ひぶううううううっ！！　んぎゃあああっ！！」

両頬を真っ赤にされて涙が止まらなくなる絵梨花。

「ぎゃああああっ！？　顔と背中とお尻が焼けるように痛いいいいっ！？　わあああああんっ！！　ひいいいいいっ！！」

目を見開いて顔面と鞭打ちされた部位の痛みに泣きじゃくり始める。

「さぁ前面の鞭打ちを開始するわよ？　それえっ！」

『ヒュンッ！……スパァンッ！！』

「痛いいっ！！」

どんなに泣き喚こうが小便を漏らそうが手加減なくお腹や胸、太もも等に鞭を打ち付ける美紅。
短いスカートの制服のために何度もパンツが見えるが、構うことなく激しく打ち付ける。

一発がワレメを直撃した。
白目を剥いてアへ顔で首を左右に振り続けて激痛をアピールする絵梨花。

「やだ。マンコ直撃しちゃった！　ごめんね」

謝りながらも真っ赤に染まってゆく大陰唇を見ながら嬉しくなる美紅。
それから狙いを定めてワレメを打つ。
五発くらいヒットした後大陰唇は左右ともにパックリ裂けてしま

い、大量の血が流れ落ちてきた。

「あへへへえっ！？　ひぎいいいいっ！！」

「あはは！　何をアヘ顔でアヘアヘ言ってるの？　受けるぅ♪　なかなか楽しませてくれるわね絵梨花は……」

今度は微かな膨らみを見せる小学生の左右の胸に狙いを定めて、何度も鞭を振るう。

「お次はと……可愛いピンク色の乳首を真っ赤に染めあげてやろうかなっと♪　それえっ！」

全身を真っ赤にされて胸や太ももまで皮が裂けて肉が削げて大量に出血し始める春日絵梨花。

白目を剥いて意識を失ってしまうが、ここで美紅は一旦鞭を置いた。

ハサミに持ち替えると左手で右の乳首を摘み、引っ張る。

右手のハサミで乳首を一気に切断した。

『ジョキンッ！！』

「んがあああああああっ！？　ひぎいいいいいいっ！！」

「うるさいなぁ。左もチョン切るよ？　ほら」

『ジョキンッ！』

殆ど掠れた声のままで口を大きく開けて白目を剥きながら叫び続ける１０歳の女子児童であった。

丸めた鼻くそを飛ばすように人差し指でピン！と二回弾き飛ばす。二つの切り取られた乳首はあっとゆうまに視界から消えてしまう。

「かひゅうっ！　かひゅうっ！」

激しく全身を痙攣させながら過呼吸が始まった。

「早くも死ぬつもりなの？　まだ隣の彼氏も生きてるはずよ？　ほら頑張れ少女っ！」

『ズチュ！　メリメリ……ぷちゅううう……』

ショック死を防ぐ薬を、浣腸ではなく今度は性器から注入する。ガラス製の切っ先の長い浣腸器を膣から突っ込んだため、十年間張っていた膜は瞬時に破られた。

破瓜した性器からは少しだが太ももにかけて血が伝いおちる。

「あはは！　浣腸器で処女膜破いちゃった！　ごっめーん！」

「アへ？　アヘアへ！」

『ブリブリブリブリッ！！』

オマンコからの浣腸器挿入にびっくりした児童の身体は大便を漏らすとゆう形で応えてきた。

「マンコから浣腸……いや、腸じゃないから浣マンかな？　どっちでもいいや。浣腸されてウンチ漏らすなんて……まだまだお仕置きが足りないみたいねお嬢さん？」

一気に浣腸器を膣から引き抜くと、強烈な膝蹴りを股間に打ち込む美紅。

『ドカッ！！　ズドンッ！！』

「きぇええええっ！！　ふんぎいいいいっ！！」

大陰唇どころか小陰唇まで裂けて大量の血が児童の太ももを伝い落ちる。

「恥骨を砕いてやるからね？　ほらっ！ほらあっ！」

『ドカッ！！　グシャッ！！……バキバキッ！！』

「んぎいいいっ！！」

美紅は大人の女性でも痛がるような超ぶっといバイブを手に取ると、小さなワレメに押し当てる。

『ググ……メリメリメリメリ！』

「直径５センチ……婦人でも激痛を味わうバイブを挿れてあげるから。大丈夫。恥骨がないから簡単に入っちゃうんだわこれが！　あははは！」

『グリッ！　メリメリ！　ぐぼちゅうっ！！』

「やっはあああああああっ！？　いだいいいいいいいいっ！！」

直径５センチ、長さ２０センチの超大型のバイブは女子児童の膣口から膣を通り、子宮口を貫いて子宮の奥の奥までぶち込まれた。

太ももをビクビクさせながらヨダレを垂らして白目を剥く春日絵梨花。

膣は裂けて子宮は破壊された。

もう二度と性行為できない身体にされてしまった絵梨花。

「もうエッチすることもないんだからいいっしょ？　んふふ」

バイブから手を離すとニュウッとゆっくり膣から飛び出してくる。

「はぁ？　抜いて良いなんて一言も言ってないわよお嬢さん？」

「はわわわわわ……痛い……痛い」

『ドカッ！！……ズッポオオオンッ！！！！』

はみ出しているバイブの柄を、膝で思いっきり再び膣内へ蹴り込む。

めり込みすぎて奥の奥にある子宮を突き抜けて腹腔内へ留まってしまうバイブであった。

「あんなおっきいの全部飲み込んじゃった！？　偉い偉い♪」

針と糸を取り出して体勢を変えても抜けないように膣口を縫い付ける美紅。

「これでよしっと！　彼のオチンチン挿れられることなく人生終わ

るんだもん。あの世にバイブ持って行きなさい」

「あうあう、アヘアへ」

「あ、そうだ！　最期に彼氏に会わせてあげょっかぁ？　ちょっと待っててね」

美紅は扉を開けて隣の部屋にある宮垣咲良のいる拷問処刑部屋へ移動する。
いきなり扉を開けて叫んだ。

「おい咲良っ！　面白いこと思いついたよ！　……ん？」

「ひゃあっ！？　び、ビックリしたあっ！　いきなり扉を開けられたらびっくりしちゃいますよ美紅さん……」

頬を赤くして照れている咲良は、１０歳の男子児童の肛門に三本の指を突っ込んでいた。

「アナル調教してるんだ」

「あ、これは……は、はい。あたい……わ、私も性器破壊やエッチな部位を破壊することに少しずつ興味が……」

「昔の咲良は硬派で喧嘩して勝ってもそんなこと一切相手にしなかったのにね？」

「は、はい。すみません」

「いいよ。性器破壊は拷問処刑する上で罪人に人生最大級の恥辱感を与える、とゆう制裁も兼ねてるから。どんどんやってやれよ」

「はい。無理矢理指を捩じ込んでもう三本も入っちゃったんですよ。拳まで挿入してから殺そうかと思ってました」

そう言いながら佐伯友彦の肛門に捩じ込んだ三本の指を激しく直腸内で掻き回す咲良。

『グリグリッ！　グチュグチュ！！』

「んあああああっ！！　痛いいいいっ！！」

「そいつ、まだオチンチンついてる？」

「殺す直前に切断しちゃおうかなと……まだ無事ですけど？」

「そいつ連れてあたしの部屋に来なよ！　小学生に本番セックスさせちゃおうよ！」

「え！？　でもコイツ顔面ボコボコにしちゃってますからもう勃起とか無理なんでは？」

得意げに菅野莉央からもらった超強力な滋養強壮剤を取り出す美

紅。

「この薬を股間の付け根に打ったらジジイだろうがガキだろうがビンビンになっちゃうんだから」

「へぇ。すごい薬があるもんですね……わかりました。アナル調教はもうやめて今から抱きかかえてそちらに行きます」

「ほーい。あたしも手伝うよ」

美紅と咲良は、全身の痛みに泣きじゃくる１０歳の男子児童を抱き抱えて絵梨花の拷問処刑部屋へ運んだ。

二人は白目を白目を剥いて潰れた喉を痛々しく鳴らしながらも号泣を続ける春日絵梨花を、低いテーブルにうつ伏せに縛り付け、お尻を突き上げるようにして両脚を開いたまま拘束する。

「ほら、大きく脚を開くんだよ」

女子児童の全身は、痛々しいほど皮が剥けて真っ赤になっていた。

「女の子はこれでよし！　と。咲良、ちょっと男のガキの両脚を開いてて」

「はい。こうですか？」

「うん。オッケー。肛門と睾丸の中間辺りの……前立腺に注射を打ち込むのよね。えい！」

『ツプッ！　ぷちゅうううううっ！』

「痛いっ！！　あひゃああああっ！？」

「前立腺を針が直撃したでしょう？　かなり痛いわよね？　あはは♪」

美紅は笑いながら薬液を注入し終えた注射針を股間から引き抜いた。

否応なくムクムクと勃起してくる小学生児童のペニス。

「すっご〜い！」

「でしょ？　皮かむったままでも勃起すんのよね……引き剥いてあげて咲良」

「あたい……わ、私がそれしてもいいんですか？」

「いいよ。性器破壊に目覚めちゃったんでしょ咲良も」

「あ、ありがとうございます！　コイツのチンポの皮引き剥くのが

今夜の一番の楽しみだったんです！」

美紅の喧嘩の強さとエッチさに心底惚れてしまっている咲良は美紅の前ではヤンキーのヤの字もなく、借りてきた猫状態であった。

「おいクソガキ！今からお前のチンポの皮めくってやるから覚悟しろよ？」

『ギュッ！……メリメリメリメリ……バリッ！！』

「んぎゃあああああっ！？　いったああああああいっ！！！！」

「チンカスだらけだな雁首辺り……あはは！一気に血が滲んできちゃってるじゃん？　痛いか痛いかそうかそうか！」

激痛を感じても萎むことはない小学生のペニス。

美紅は背後から両脇を抱えるようにして彼女である春日絵梨花の元へ連行する。

「あんたの彼女のマンコは残念ながらバイブが入ったままだから使えないの。肛門に突っ込んでやりなさい」

「え！？　そんな汚い所に俺のチンチンを！？　なんか病気貰っちゃいそうだから嫌だよ！」

「今日死んじゃうのに病気なんて関係ないよ。ほら！　早くぶち込んじゃえ！」

美紅は佐伯友彦の無理矢理勃起させられたペニスを強引に掴んで、春日絵梨花の肛門に当てがった。

「ほら、ローションも塗ってやったからゆっくりで良いからお前のチンポ肛門に突っ込め！」

咲良はそう言いながら佐伯友彦のお尻をグッと押す。

『グプ！……ズボボボボ……』

「ひゃあっ！？　熱いっ！！　やめてっ！！」

再度全身の痛み止めの薬が効き出したのか、肛門への遺物侵入へ思いっきり反応してしまう。

『メリメリメリメリ……ズボオッ！！』

「ひぎいいいいいっ！！　熱い痛いいいいいっ！！　抜いてえええええっ！！」

遂に根元まで入ってしまった１０センチにも満たない男子児童のペニス。
肛門もバージンであった春日絵梨花にしてみれば、人生初の激痛であった。
美紅による性器破壊よりはマシであったが大好きだった彼氏との初エッチがアナルセックスになろうとは二人とも夢にも思っていなかった。

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「お尻に入れるなんて嫌だあぁっ！！　痛い？　ご、ごめん絵梨花ちゃん……」

強引に美紅と咲良に腰を振り続けさせられる友彦は、泣きながらも大好きな彼女のアナルを犯してしまうのであった。

「な、なんか変な感じ……うわあぁっ！？」

『ドピュッ！　ドピュピュピュピュピュウッ！！』

「やんんっ！？　あったかいいっ！？」

遂に１０歳の彼女のアナルへ中出ししてしまう友彦。

「気持ち良かったでしょう？　今のが射精って言うんだよ。本来は

オマンコの中に精液を出して、赤ちゃんを授かるモノなんだけど……」

美紅は言いかけてやめる。

「汚い肛門に射精しても赤ちゃんはできないぞ？　でも死ぬ前に快感を得られて良かったじゃないかクソガキ」

咲良はそう言いながら佐伯友彦の腰を絵梨花から引き剥がし、ペニスを肛門から抜かせた。

切れ味抜群の日本刀を取り出す咲良。

「彼女の汚いトコを抉った汚いクソまみれのチンポは成敗してやる！　えいっ！」

『ヒュカッ！！……ポトンッ！』

「ぎゃあああああっ！！！！」

咲良の一太刀で未だイキり勃っていた佐伯友彦のペニスは根元から斬り落とされた。

麻酔も部位によっては中途半端に効果を表しているため、切断部のあまりの激痛にうずくまって動けなくなるが、まだ朝まで時間があるため殺さない咲良。

ゆっくりと友彦の肛門に日本刀の切っ先を突き入れる。

「彼女のアナル犯したんだから次はあたいがアンタのアナル犯してあげるから。覚悟はいい？」

「痛いいいいいっ！！　ぎゃあああああっ！！」

切っ先が突っ込まれただけで肛門括約筋は深く切り裂かれ、夥しい量の鮮血が肛門から噴き出す。

「おっと！危ない。汚い血が制服にかかっちゃう所だった」

咲良はサッと鮮血をかわし、更に直腸奥深く日本刀を突き刺した。

前立腺と膀胱を切り裂いてから一気に引き抜くと、会陰部から陰嚢まで切開された。

二つの睾丸が飛び出してくる。

『ぱくんっ！……ズルズル』

「やだ……真っ白な金玉飛び出して来ちゃったじゃないかクソガキ」

うつ伏せに倒れ込み激しく痙攣を始める男子児童。

「もうお前の精子なんて製造しなくていいからね。チンポももう二度と使うこともなく逝くんだから。……あたいがミンチにしてやる」

咲良は飛び出した二つの睾丸を右足で踏み潰し、グリグリとミンチになるまで床に擦りつけた。

『グリッ！ギュッ！……ぶちゅちゅっ！！　グチュグチュグチュグチュ！！』

「んぎいいいいいいっ！！」

神経の管は繋がっているまま咲良の足の裏ですり潰されたので、死ぬ程の激痛が男子児童の股間を襲う。

そのまま背後から馬乗りになり、佐伯友彦の顎に手をかける。

右手に日本刀から持ち替えたサバイバルナイフを首筋に当て、激しくスライドさせた。

みるみるうちに掻っ捌かれてゆく佐伯の首。

『ズッ！……ズバババババッ！！』

「やっ！？　やだ！　ひいいいいいっ！！」

『ズシュシュシュシュシュ！！　ブシュウウウウッ！！！！』

頸動脈から激しく血が噴き出す。
続いて首の骨を反対側から叩き折ると、左右の首の皮のみが繋がっている状態になる。
この瞬間、佐伯友彦はこの世の生き地獄から解放される事となった。
目の前で彼氏の首を切断されてゆく様を見せつけられた春日絵梨花は、半狂乱状態に陥り、真っ赤になっている顔面を両手で掻きむしり始めた。
微かに残っている皮の部分を髪の毛を掴んで上部に持ち上げて引きちぎった。
遂に咲良のナイフ捌きによって佐伯友彦の頭部は身体から完全に別離させられる。

「最期にキスするか？　ほら」

真上を睨みつけるようにして血の泡を噴きながら死んでいる彼氏の生首を、春日絵梨花の目の前に掲げる咲良。
口から鼻から瞼から顔面全体がボコボコに腫れ上がったまま息を引き取った彼氏。
その彼氏である佐伯友彦の唇にそっとキスをする絵梨花。

「私のためにこんな目に遭っちゃってごめんなさい」

生首を抱きしめながら濃厚にキスをする絵梨花に興奮した美紅は、

人差し指と中指を絵梨花の肛門に捩じ込んで思いっきり掻き回す。

「分かってるんだ自分のせいだってこと！　ここに死んじゃった彼氏の何を注ぎ込まれたの？　言ってみろホラアッ！」

『グリグリッ！　グチュチュチュチュ！！』

「あはあっ！？　熱いっ！！　痛いっ！！　んんんううっ！！」

便と腸液と彼氏の精液がたっぷりついた指を引き抜き、絵梨花の口へ捩じ込む。

「精液だよ。アンタの彼氏の人生最初で最期のセーエキ♪」

「むぐううっ！？　ごくんっ！」

美紅の指についた友彦の精液を無理矢理飲み込ませた美紅は満足してトドメを刺す段階に入る。

鎌を取り出して四つん這いにさせたままヘソに切っ先を突っ込んだ。

『ズッ！！』

「ふぎいっ！？」

「内臓掻っ捌いてから殺してあげるね？　ほら」

『ズバァッ！！』

美紅は一気に鎌を手前に引き出した。
ヘソから下腹部、クリトリス、尿道口、膣を真っ二つにして肛門手前で止める。
内臓がバシャバシャと腹部から床にこぼれ落ちてゆく。

「んがあああああっ！？　わ、私死んじゃうのに……まだ信じられない」

「あの世で彼が待ってるんだから信じなさい。アナルもタダじゃおかないんだから。えいっ！」

『ザクッ！……ズバババババッ！！　ばくんっ！！』

「ピギィッ！？」

「アナルも見事にパックリ♪　恥骨粉砕してるからザクザク切り裂けて気持ちいいわね。あはは」

ヘソから性器、肛門まで切開した鎌をようやく引き抜き、トドメを刺しに掛かる美紅。
せっかく縫った膣も、鎌で糸もついでに切り裂いたために極太バイブが膣口から飛び出してきた。

それを引き抜き、鉄の槍を少しだけ性器に突っ込む。

『ツプ！』

「ケツの穴かマンコか悩んだけど……ケツ穴はお前の彼氏が犯しちゃったからあたしはマンコを犯してやるからね？」

『ズチュ！　ズボオッ！！』

「んあああああっ！！　死ぬっ！　死んじゃうううっ！！」

「だから死ぬんだってば♪　ほらあっ！」

『ズボズボズボズボオッ！！　バリバリバリバリッ！！　ボコオッ！！』

「ぎゃぴいっ！！！！」

美紅の槍は春日絵梨花の膣から口まで見事に貫通した。
ビクビクと激しく痙攣するが、肝心な臓器を避けて貫通した為、未だ死ねないでもがき苦しんでいる。

「死にきれてないみたいだからケツの穴にもくれてやろうか？」

みかねた宮垣咲良は、佐伯友彦のペニスを斬り落とした日本刀をヒクついている女子児童の肛門に突っ込む。

「美紅さんの槍と並行して肛門からぶち込んでやるよ。ほらぁっ！！」

『グリッ！！　ズプププ！！　ザシュウッ！！』

「はぎゃあああっ！？　けぴぴぴぴいいいっ！？……ガクンッ！！　ビクビク……ビクビク」

咲良の日本刀も見事に口から貫通した。

「お見事咲良。今度の痙攣は死んだ時の痙攣だ」

「ありがとうございます」

肛門に刺し込んだ日本刀をしばらく掻き回す咲良。

「ほらほらお腹の中掻き回してやるよ。内臓全て掻き出してやろうか？」

鎌で切開された腹部からはドボドボと大腸と小腸が降り注いでくる。

床は鮮血と臓器まみれになってしまった。

少年法で裁かせない特殊任務省（後書き）

「残酷処刑島に新たに二人の死体が加わった！」

「二人の“遺体”ですよ美紅さん」

「はぁ？　何しょーもないとこ突っ込んでんの？」

「ご、ごめんなさい美紅さん！　でも身元が分かっている場合は死体とは呼ばなくて遺体と呼ぶみたいですよ？」

「あたしに生意気なこと言うとどうなるかわかってるんでしょうね咲良？」

「いやっ。やめてください」

美紅は小学生二人のボロボロの遺体の隣で無理矢理咲良のセーラー服を脱がせた。
胸を揉みしだき、指は膣に突き入れる。
激しく掻き回してイかせてしまう。

「あんっ！　嫌っ！　あんんっ！！」

『プシュウウウウッ！！』

同い年の拷問処刑人の鬼頭美紅にまたもやイかされて潮を噴いてしまう咲良だった。

「おい咲良！　最近わざとあたしの事怒らせてない？」

「えっ！？　き、気のせいですよそれは！　莉央にも美紅さんにヘコヘコするあたいは見たくなかった、とか言われてからずっと凹んでましたもん……」

「そう……なら良いんだけど。わざとならなんかあたしが負けてるような気分になっちゃってね」

「そんなぁ！　同性に犯されて喜ぶ人なんてあまり居ませんから！」

美紅を言いくるめて残酷処刑島からの迎えの船を待つ宮垣咲良。

水平線が微かに白む中、美紅の手を握りしめる。

「お、おい！　あたしは責めるのが好きなだけでアンタのことは……」

「あたいのことは？」

「…………なんかしらけちょったなぁ。やれやれだよ」

本気で鬼頭美紅を愛してしまった咲良は、次回会った時も如何にし

て美紅を怒らせて自分を責めさせるかの作戦を思考回路を巡らせてニヤつくのであった。

ヤンキー時代の宮垣咲良からは想像もつかない風上にも置けないマゾ少女になってしまっていた……。

愛してしまった同い年の鬼頭美紅の前、だけの話だが。

残酷処刑島に新たに二人の遺体が加わった。

自意識過剰なる愚行（前編）（前書き）

勘違いや思い込み。

時には人生を棒に振ってしまうほどの代償を支払う事もある。

自意識過剰なる愚行（前編）

大学受験に何度も落ちて、それでも進学を諦めきれずにコンビニでアルバイトをしている男がいた。
女子高生アイドルを妹に持つことだけが自慢の浪人、高嶺義史二十歳。
水曜日だけ休みにしてもらいながら週六日間真面目に頑張って働く。
「高嶺！　最近思うんだけど勉強もしなくちゃならないのにそんなに働いて大丈夫か？」
「はい。息抜きに必要なプレステ5を銀行のカードで借金して買っちゃいまして……早く返しとかないと落ち着かないですから」
「そうか。ゲームなんて借金してまで買わなくても良かったんじゃないの？」
「ホント田舎に住む親も裕福じゃないんで……貯金もない俺には借金しか思い浮かばなくて。すみません」
「ハハハハ！　お前が謝らなくてもいいんだけどな。俺が貸してる訳じゃないし。ってゆうか相談してくれたらゲーム代くらい貸してやったのにな。そう言えばお前の妹ってアイドルやってるらしいじゃん？　きちんと頼めば五万くらい貸してくれるんじゃないのか？」

「一年二年働いてるだけの俺がお金貸してくださいなんて言えませんよ……夏海はアイドルって言ってもまだまだ駆け出しだし、もっともっと名前と顔売らなきゃ給料もかなり安いみたいなんですよね……あ、いらっしゃいませ！」

夜中の店内に数人のお客が入ってきて、店長との話は中断された。

その中にいつも金曜日の夜中にだけ来店する女性の姿があった。ショートカットで化粧も分厚くなく自然な感じでとても若々しく見える女性。

『この人ホント綺麗だなぁ。綺麗とゆうかもう歳は４０くらいなんだろうけど熟女の色気が凄いんだよなぁ』

「ホットコーヒーのブラック。Ｍサイズでお願いします」

「はい！　少々お待ちください」

コーヒーを淹れながらふと思うのであった。

『最近特に思うんだけど……絶対向こうも俺に気があると思う。他の店員や店長と話す時より笑顔で応えてくれるからなぁ』

いつもホットのブラックコーヒーを買ってゆく４０代の女性。
完全に熟女の魅力に恋してしまった若い男の物語が始まる。

東部地方。
その大都会に隣接する中部地方に位置するこの場所は、東部中心部へ通勤する人にも人気があり、田舎の割にそこそこ栄えている町だった。
物価も家賃も東部地方より遥かに安く、何かしら都合が良いためである。

「はぁ、はぁ、うっ！　ううっ！」

『シコシコシコシコシコシコシコ……ドピュッ！！』

名前も知らない遥か歳上の女性を想いながら毎日自慰行為にふける高嶺義史であった。
一方的ではあるが、どうしても衝動を抑えきれない恋もある。
薬指の指輪を確認しながらもいつも自分が働いているコンビニで買い物をしてくれる女性、今年で４５歳になる斉藤智子に対しある作戦に踏み切ることになる。

――――――数日後。

『ピンポーン！』

「はい！　どちら様でましょうか？」

『ガス配管の点検に参りました須藤ガスと申します。半時間もかかりませんのでお時間よろしいでしょうか？』

「あ！　ガス屋さんですか！　よろしくお願いします。今開けますね」

斉藤智子は危険なガスの点検を是非行ってもらおうといとも簡単に玄関のドアの鍵を開けた。

「こんにちは。お邪魔します」

「こんにちは。ご苦労様です！　よろしくお願いしますね」

ワザとらしく大袈裟に点検する“振り”をする若い男。

「少し古いですが大丈夫そうですね」

「そうですか。なら安心しました」

「奥さん……お、俺のこと……た、タイプですか？」

「え？　何ですか？」

「俺とセックスしてくださぃ！」

「!?」

動揺している４５歳の婦人の服を無理矢理脱がせようとする二十歳の高嶺義史。

「キャアッ!?　や、やめて下さいっ!!　警察呼びますよっ!?」

「俺みたいな若い男とヤレるのは興奮するでしょう奥さん?　俺のことタイプなんでしょう?」

「やだっ!?　やめてええええっ!!」

あまりの大きな悲鳴に高嶺の方がビビってしまう。
自分の顔と容姿には大きな自信があり、男前に犯されるなら世の中の婦人などは殆どが興奮するものだ、と勘違いしていただけに、大きな誤算が彼を襲う。

「だ、黙れ!!　殺すぞ!?」

「キャアアアアッ!!　誰かっ!!　誰か助けてえええええっ!!」

『ギュッ!……ギュウウウウウウッ!!』

「うっ!?　ウウウウウウッ!!」

想定外の婦人の反応に対して、全力で首を絞めている自分がいた。

「くっそおお！！　若い男とならら喜んでセックスしたいんじゃぁないのかああああっ！？」

「うううううっ！？　んんんんんっ！！」

首を必死で締め続けると、遂に悲鳴をあげなくなった婦人。

「くそっ！　殺すつもりなんかなかったのに……何でこうなったんだ！？」

やってしまったことに対して気が動転している高嶺だったが、本来の性的欲望を満たす為にほぼ無意識にズボンとパンツを脱ぎ始める。

手際よく婦人の部屋着のズボンも黒いパンツも脱がせてゆく。

「ごめんなさい……あんたが大人しくしていてくれたら殺す気なんて本当になかったんだよ」

『グリッ！　ズブブ……』

「中年の割に綺麗な色したオマンコしてるなぁ。ハハハ！」

乾いた４５歳の性器にペニスを無理矢理捩じ込む若干二十歳の浪人男。
自称若い男前による死姦が始まった。

『バッコンバッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ」

口から泡を吐きながら白目を剥いて息絶えてしまった斉藤智子。
死んで肛門が開いて糞尿漏らしながらも死姦をされ続ける。
５０歳になる夫を心底愛してこれまでの人生を生きてきたが、まさか殺されて犯される日が来るようなどとは夢にも思っていなかったであろう。

正常位、バックで計二回、女性の遺体相手に射精を遂げる高嶺義史。

未だムラムラが収まらない高嶺は、大便塗れの肛門に指を突っ込んで激しく掻き回す。
遺体の便の臭いも全く気にすることもなくひたすら肛門を掻き回す。

「ふふふ。綺麗なお顔してるのにウンチは臭いですよ？」

便の悪臭にも変な興奮を覚えた高嶺は、今度は肛門にまでペニスを突っ込み、三度目に出す精液を直腸内に注ぎ込んだ。

「はぁ、はぁ、はぁ……ん？」

突然隣の部屋の襖がスッと開く。

五歳になる小さな男の子が顔を出す。
どう見ても姿が変わり果てた下半身裸の母親を見て泣き叫ぶ斉藤智子の一人息子の聡樹。

「だ、黙れ！　殺すぞ！？」

いくら脅しをかけようが全く聞くこともなく泣き喚く小さな子を抱き抱えて床の上に叩きつける。

鈍い音がして首の骨が折れてしまう幼児。
まだまだ人生始まったばかりの幼い命は、他殺での即死とゆう形で幕を下ろした。

歪んだ愛情を向けてしまった他人の妻とその息子の小さな遺体を見ていると、またもや変な衝動に駆られ、幼児のペニスを揉みしだく高嶺。

「小さな子供なら女の子みたいに可愛いなぁ。同性でもイケるかな

俺……」

無理矢理皮を剥いて小さなペニスを口に含み、舐めまわす。

幼児の遺体の陰部を舐めるとゆう異常な行為をしながらも、右手で自慰行為をして四度目の射精を遂げる高嶺義史だった。

「気持ち良かった！　お、俺はお前らを殺す気はなかったんだ……済まなかった！　成仏してくれ……」

残業で遅くなった斉藤智子の夫が帰宅すると、数分間現実を受け入れられず我が最愛の妻と息子の遺体を交互に凝視して固まってしまうのであった。

かなり遅れて我に戻ると思わず二人の名を叫んでしまう。

「……智子……智子おおおっ！！……聡樹いいいっ！！」

声が掠れてしまうほどの大声で叫んでしまった後は、息が止まるほど泣き続けてから、ようやく呼吸が整い救急と警察に通報する夫である５０歳の斉藤悠馬。

同時に最愛の妻と子を失った悲しみは計り知れるものではなかった。

――数日後。特殊任務省の電話が鳴り響く。

『もしもし。特殊任務省藤堂です』

『藤堂長官ですか。この度の強盗殺人事件についてですが』

「これはこれは！　新しく警察省の警視総監になられた篠原裕一郎殿、今後ともご贔屓に宜しくお願いします」

金目のモノを奪ったこの度の強盗殺人事件は、真の目的は一方的に惚れてしまった男による強姦目的であった、と判断した警察省。

詳しく調べるうちに、あまりにも残虐な犯人の強姦殺人であったため、警察トップからの拷問処刑の依頼であった。

『……そうですか。せっかく警察で捕らえたのにこの度も感謝いたします』

『遺族の旦那さんと話しましてなぁ。その後あまりのショックと悲しみからか鬱になって数日間寝込んでしまい、最後には電車に飛び込み自殺してしまったとゆう訳ですわ。妻と息子をあんな目に遭わされて殺されて……本人も自殺だなんて……ワシはこの歳で久し振りに泣いちゃいましてなぁ。普通に裁判で処刑するだけでは被害者たちのご両親も浮かばれませんでしょうし……例の残虐アイドル少女たちに懲らしめてもらいたいのですよ。是非とも宜しくお願いします』

『分かりました篠原さん。斉藤家の旦那様と奥さん、息子さん、夫

婦のご家族にあたる方々の無念は、この特殊任務省が必ず晴らさせていただきますのでご安心を』

――――東部地方、ブジテレビ。

ゴールデンタイム放送中の人気クイズ番組に抜擢された“真絆ガールズ„の小学生トリオ。
元気に台本通りの答えを笑顔で答える。
菅野莉央は普通に答えられる小学生。
結城明日香は殆ど答えられる秀才。
富田美香はボケた答えばかりのウケ狙い役。
台本など作らなくてもほぼキャラ的には見事に合っていたが、番組からの指示に従いながら収録を進めていった。

『サメのペニスは何本付いているでしょうか？』

司会者が小学生アイドルも出演しているのにとんでもなく下品な問題を出す。
莉央たちは一本から三本まで全員バラバラに答えた。
『結城明日香さん正解！　おっしゃる通り何とサメのペニスは二本

付いてるんです！』

爆笑の渦に巻き込まれる観客席。
照れたフリをする他のアイドルたちだったが、莉央たち三人はその程度では何も恥ずかしくなかった。

『一本はマンコ用でもう一本はアナル用なんですよね！？　同時に二穴で犯せるサメってあたし大好きいっ♪』

富田美香が両手を大きく挙げながら大声で二本ある間違った理由を説明する。

『カ、カ、カーットオオオッ！！』

『え！？』

『おい富田美香さん！　それは放送禁止用語だから！　二度と言っちゃダメだよ？　撮り直しするから！』

『はーい。ごめんなさい……』

収録も無事に終わり、控え室に戻る三人であったが、莉央と明日香は涙を流しながら笑っている。

「もうそのへんにしてくれるかなお二人さん」

「だってマンコとアナル用って……相手お魚ちゃんだし。そんな概念ないでしょ？　しかもテレビでそんなの通る訳ないじゃん！　あはははは！」

「そうよね。そりゃ通らんわ。あはははは！」

莉央に続いて明日香も更に爆笑する。

「だってあの司会者ペニスとか言ってたじゃん！　ペニスはＯＫなのにマンコはダメなの？」

「ダメ」

「絶対だめ」

爆笑しながら更にダメ出ししてくる二人にしょぼくれる美香。
いつもの三人での光景であったが、控え室の扉が勢いよく急に開く。

「おいお前ら」

アイドルでは大先輩に当たる肌色四葉スクールガールズのメンバーたち三人であった。
高校生アイドルで売っている１７歳の三人が睨みつけながら入っ

てきのだ。

「何調子に乗って下ネタ言ってんだよ？」

「お前らのお陰で私の肝心なアドリブがせっかくバッチリ決まったのに撮り直しになっちゃったじゃんか！？」

「どうしてくれるのかしら？」

三人が各々に文句を言ってきた。

「あ、あたしたちに対してのクレームですね？　分かりました。他の関係者の皆さんにご迷惑をおかけしちゃいますので部屋にきちんと入って扉を閉めていただけますか？」

「あ？　分かってるよそんなことは！　小学生アイドルでチヤホヤされてるからって大人の先輩を舐めてるとどんな目に遭うか思い知らせてやるから！」

…………そして一分が経った。

顔面から血を流して土下座をしている１７歳の三人がいた。
小学生トリオは椅子に座って脚を組んで見下ろしている。
菅野莉央による三人まとめての分殺ショーが終わったのだ。

「すみませんでした！　もう二度と菅野様、結城様、富田様に逆らいません！　お許し下さいっ！」

リーダーである短髪の大きな目の子が泣きながら叫ぶと、後の長髪の二人も同じように叫んで頭を床に擦り付ける。

莉央たちはそれぞれ高校生アイドルの後ろにしゃがみ込むと、制服越しにパンツに手を入れる。

「今から先輩たちには反省してもらうからね？」

「ひっ！？」

「やあっ！？」

「んあっ！？」

ほぼ同時に三人の性器に莉央たち小学生トリオの中指が根元まで挿入された。

悲鳴までほぼ同時に叫ぶ三人にバカウケしながら膣内を激しく中指で掻き回す莉央たち。

『グチュグチュ！　ぐちゅちゅちゅちゅちゅちゅちゅちゅっ！！』

「やはあああああんっ！？　痛いっ！？　やめてえええええっ！！」

散々マンコを掻き回してから引き抜くと、それぞれ本人の口に指を突っ込んで綺麗に舐め取らせる。

「ほら舐めとれ！　短髪のリーダーはさすがっ！　処女でした！」

「茶髪のロングも処女だわ」

「黒髪ロングだけ膜無し！　お前だけ経験しちゃってたんだなおいっ！？」

富田美香の担当だけ処女膜が無かった。

破け無かった事に腹を立てた美香はその子の制服だけ全て脱がせる。

リーダーの奈美恵と彩月の二人は制服とスカートのみでパンツだけは許してあげる莉央と明日香。

「どうして私だけパンツまで脱がすのですかっ！？　やめてよっ！！」

「うるさい淫乱女め！　お前確か高嶺夏海っていうんだよね？　素っ裸のまま四つん這いになってケツ突き上げろ」

「いやっ！　ごめんなさいっ！　もう赦してっ！」

美香は人差し指をピン！　と突き出して目を細めながらすけべそうな笑みを浮かべる。

「お前だけは特別にお仕置きしてやる。お尻の力を抜け！」

そう言いながら夏海のピンク色の菊門へ人差し指をそっと押し当てる。

「やだっ！？　そんなとこ！　やめてええっ！！」

「アナル検査の刑だよ。ほら！」

『つぷっ！』

「んああっ！？　そんなとこ指入れないでえええええっ！！」

ゆっくり突き入れていき、根元まで入ると一周直腸の奥を抉ってから一気に引き抜き、今度は中指も足して二本でゆっくり差し込んでゆく。

『ぐぷっ！　ズブブブブッ！』

「わーんわーん！　やめてええっ！　お尻が痛いよぉ！　恥ずかしいよおっ！」

遂に痛みよりもあまりの恥辱さに泣き出してしまう高校生アイドルの高嶺夏海。
艶やかな長い黒髪を振り乱してアへ顔になってゆく。
明日香は制服のスカートを履いたまま、パンツだけを脱ぎ、夏海の前で股を顔面に擦り付けた。
「あなた三人の中で一番綺麗だわ。短髪のリーダーよりイケてる！私のアソコを舐めなさい」
「んんんっ！？　うぶあうううっ！！」
「どうしたの？　明日香ちゃんが舐めろと言ってるよ？　聞こえないのかな？　ほらあっ！」
『ズボオッ！！』
美香は薬指までも足して三本の指を直腸に無理矢理突っ込んだ。
激しく掻き回すと粘度のある腸液が分泌されてきたためか、卑猥な音が控え室内に激しく響き渡る。
『グチュグチュ！　くちゅちゅちゅちゅ！』
「あはは！　マンコみたいなクチュクチュ音立てないでくれる？肛門なのに紛らわしいから。早く明日香ちゃんのアソコ舐めないと手首まで全部突っ込んで膣を破壊してやるわよ？」

泣きながら顔を顰めながら必死で小学生アイドル明日香の女性器を舐め始める高校生アイドルの夏海。

「んんっ！　臭いっ！　ひぃいいっ！」

あまりお風呂で陰部を擦って無かったのか元々臭いのかは不明だが、明日香の性器の臭いに思わず舌を膣から抜いてしまう夏海。

サッと立ち上がりパンツを履く明日香。

殺気を感じた美香は三本の指を夏海の肛門からゆっくり引き抜く。

「あ、明日香ちゃん、小学生なんてみんな丁寧に洗わないから少々は臭うものだから……あまり気にしないでね？」

莉央が引き攣った笑顔で明日香を慰めるが、全く慰めになっていなかった。

デスマスクのように無の表情のまま部屋の隅に置いてある箒を二本手に取り戻ってきた。

「莉央ちゃん、美香ちゃん、こいつのこと強く押さえてて。動けないように」

気まずいままで莉央と美香は、夏海を四つん這いのままで頭部と腹部を押さえ込む。
顔を明日香側へ向けて夏海に馬乗りになる莉央。
顔を夏海側に向けて馬乗りになって顎を引き上げて固定する美香。

「奥まで突き破らないでね？　死んじゃったらほんとマズいから」

「うん。分かってるよ莉央ちゃん」

「どっちからいく？」

「人のこと臭いとか言った汚いマンコから」

「分かった」

莉央は掌全体を使ってお尻に押し当て、ゆっくりと膣口がパックリ開くように左右に押し広げていった。

『くぱあ～っ』

「やだっ!?　恥ずかしいっ!!　そんなとこ拡げて見ないでええっ!!」

『ズブ！』

「ひいっ!?」

『ズボオッ！！』

「痛あああああああああああっ！！！！」

明日香は一気に子宮口までプラスチック製の箒の根元を夏海の性器へ突っ込んだ。

あまりに泣き叫ぶため、美香は頭部を押さえるのに必死だった。

「もうそれ以上入れたら赤ちゃんが産めない身体になっちゃうから」

「分かってるよ。でもね。あのね」

『ギュッ！』

明日香は思いっきり箒を両手で握りしめる。

「コイツだけは許さない！」

『ズボオッ！！……メリメリ！！　バリバリ！！』

「ぎゃあああああああっ！？」

明日香の握りしめた箒は、夏海の子宮口を突き破り、奥の奥まで

挿入された。
　更に奥の奥を突き破るほどの勢いだったため、生き地獄のような激痛が夏海の腹部を襲った。
　血の泡のような粘液混じりの血液が膣から溢れ出してくる。
「明日香ちゃん、もうマンコはそこまでにしといて！」
「うん。よっと！」
　一気に膣から箒を引き抜く明日香。
　溢れ出る血を本人のスカートで拭き取る莉央だった。
「アナルもやるの？」
「うん。お願い」
　莉央は再び両手を使い、夏海の肛門が丸見えになるくらい大きくお尻を押し広げてゆく。
『ぱくんっ！』
「やだあっ！　アソコ痛いしもうやめてよっ！！　お願いっ！！」

莉央は直腸が剥き出しになるほど力を入れて全力で肛門を押し広げた。
「はーい拡げたよ。ズッポリいっちゃってあげて！」
「ありがとう。ほら、串刺し刑寸前までの激痛を味あわせてあげるわ」
『ズブ！　ズボボボ！』
「ひっ！？　熱いっ！！　痛いっ！！　ぬ、抜いてえええっ！！」
センターの短髪の奈美恵ともう一人の彩月は土下座したまま号泣している。
Ｓ状結腸まで深く突っ込んだあとは、激しく掻き回したり抜いたり入れたりを何度も繰り返す明日香。
更に奥まで突っ込んで突き当たりの結腸を破ける寸前まで奥に押し込む。
キリキリと腸が裂けるほどの激痛だ。
「処刑島での実践でどれほどの力で突っ込んだら腸が裂けるか分かってるから。ギリギリまで捩じ込んでやるわね？　覚悟しなさい」
Ｓ状結腸に穴が開く寸前までの力で箒の柄が腹腔内の奥の奥まで押し込まれる。
あまりの激痛に遂に白目を剥いて意識を失ってしまう夏海だった。

それを確認して気が済んだ明日香は一気に肛門から箒を引き抜いた。

美香と莉央も意識のない四つん這い体勢の夏海をそっとうつ伏せ状態で床に寝かせる。

両手で両足首を掴んで仰向けに転がせると、今度は靴を履いたまま電気アンマを開始する明日香。

「ほらっ！　起きなさいっ！」

『ガガガガガガガガッ！！』

「はひ？」

『ドガガガガガッ！　グシャグシャグシャアッ！！』

「はぎいいいいいいっ！？　やだっ！　痛いいいいいいっ！！」

密着型の電気アンマから一回一回射程距離を空けて蹴り込む蹴り込み型電気アンマにチェンジされたものだから大陰唇は真っ赤に腫れ上がり、小陰唇は所々裂けて千切れてミンチのようになってしまう。

「そこまで激しくしちゃうんだ……明日香ちゃん怖い」

美香は口を押さえながら怯えたフリをする。

数分間激しく蹴り込む電気アンマをようやく終えた明日香は血まみれの股間にカラシを塗りつける。

再び泡を噴いて失神してしまう夏海を見ながら腹を抱えて笑う三人だった。

笑いながらも流石に可哀想になってきた莉央は夏海のパンツとスカートを履かせてあげる。

かなりふくよかに育っている胸を両手で揉みしだいてから上の制服も着せてあげた。

「もうコイツのリンチは済んだから……二人で肩を貸してあげながら事務所お迎えの車まで運んであげてくれる？」

「は、はい！」

「分かりました！　本当に申し訳ございませんでした！」

心底莉央たち三人にビビってしまっている奈美恵と彩月の二人は、額を床に擦り付けながら詫びを入れ続けた。

泣きながらも自分でスカートとシャツ、制服をどうにか着終わると、両側から真ん中の夏海に肩を貸しながらゆっくりと控え室を出てゆく高校生アイドルの三人だった。

女子高生の愛液と腸液とうんち塗れの手を念入りに洗い終わると、小学生アイドルであり拷問処刑人でもある三人も、自分たちの控え室を後にした。

この後すぐに、あまりの精神的ショックのために三人は芸能界を引退してしまう。

このテレビ番組収録からしばらく経った日曜日、残酷処刑島での執行が菅野莉央に告げられた。

自意識過剰なる愚行（前編）（後書き）

少しのことで怒りに身を任せて怒鳴り込んだ結果、相手によっては返り討ちに遭ってしまう。
判断を誤った女子高生アイドルは惜しまれながらも解散という運命を辿る。
小学生に性的リンチを受けた三人は、更にこの先、思いもよらぬ悲劇に見舞われてしまうのであった……。

自意識過剰なる愚行（後編）（前書き）

見知らぬ無人島へいきなり送られた一人の浪人。
自身の行った悪行への裁きが下される。

⚠　このお話にはカニバリズム（人肉食）の場面が出てきます。
苦手な方はお控えくださいませ。

自意識過剰なる愚行（後編）

――――残酷処刑島。

この度は小学生の菅野莉央と富田美香、中学生コンビの大野真子と小野メグの二人の、四人での執行となる。

「かなり自信過剰な方のようですね高嶺義史さん？」

「ここはどこだよ！？　け、警察がこんなことしていいのか！？」

「あたしは小学生だし。警察なワケないでしょ？」

「そ、そう言えばそうか……ん？　お前の顔見覚えあるぞ？……真絆ガールズの……カンリオ！！」

「へぇ～。あたしのこと愛称で知ってたんだ。そりゃ光栄だわ。ならこの人たちも知ってるよね？」

富田美香、中学生コンビの大野真子と小野メグの三人も莉央の背後から現れた。

「マジかっ！？　咲良と明日香は！？」

「フルメンバーの名前覚えてくれてるんだね？　うれし～♪」

富田美香がぴょんぴょん跳ねながら全身で喜ぶ。

「残念ながら咲良は今日選ばれなかったよ。あんたの推しなのか？」

男まさりな小野メグが睨みつけながら問いかけた。

「いや、俺は……莉央推しだ」

顔を赤くして本音を話すアイドルオタクな高嶺義史だった。

「私ら中学生でも大概若いのに小学生推しだなんて……ほんとロリロリだねお兄さん？」

大野真子が半ば呆れながら目を細める。

「実は俺の妹もアイドルやってんだ！　高嶺夏海って言うんだけど……」

莉央と美香は思わず目を大きく見開いて目を合わせる。

「え？」

「まさか」

固まっている小学生コンビに小野メグが割って入った。

「菅野さん？　どうしたのですか？」

「あ、いや、本日追加で１７歳の女性の処刑も執行するようになったんだけど……それが以前あたしたちに喧嘩売ってきたアイドルの高嶺夏海だったの。アソコに縛り付けられてるんだけどね」

２０ｍほど離れた十字架に制服姿のまま縛りつけられている女性がいた。

「高嶺って男の苗字と同じだったけど偶然かなって思ってたよ。藤堂長官め！　肝心なところ教えてくれなかったな。今度文句言ってやるんだから！」

莉央は眉を吊り上げて怒りの表情を露わにする。

「高嶺義史！　あなた聞いて無かったの？」

「へ？　何を？」

「何をって言われても……」

「ああそうだよ！　警察に捕まったはずなのにこんな島に連れてこられて縛り付けられて……確かに何も聞いてないよこんな仕打ちは！」

「そうじゃなくて……向こうにもう一人拘束されているのが見えるでしょ？」

莉央に指を差されて必死で見つめるが、視力が悪い高嶺義史は誰であるのか分別できない。

「ん？　誰かはいるけど……女性っぽいな。誰だ？」

「高嶺夏海。あなたの妹さん」

「ええっ！？　嘘だろ！？　アイドル活動で忙しいのにこんな無人島なんかにいるワケない！」

「あたしだって今この時まで知らなかったのよ。あなたたちが兄妹だなんて……妹さんがアイドル辞めちゃった事は知ってたでしょう？メンバーの子を二人も殺しちゃったことまでは知らなかった？」

「さ、最近俺は警察から逃げることに必死だったから……そんなことがあったのか……あの優しい夏海が人を殺しちゃうなんて……よ

ほど酷い仕打ちを受けたんだなきっと。だがいくら推しのカンリオだからって妹に何かしやがったら許さないからな！？」

富田美香が気まずそうに引き攣った笑顔を作りながら莉央に小声で囁く。

「はは。まさかあたしたちがあれだけ懲らしめたアイドルが処刑される身になってしまった上に……コイツの妹さんだったなんて……凄い偶然だね莉央ちゃん」

「うん。藤堂長官が肝心な事言わないからあたしたちが驚くハメになっちゃったのよ。絶対今度話す時に文句言いまくってやる」

しばらく執行人たちと罪人との間で沈黙が続く。

クイズ番組の収録に呼ばれなかった中学生コンビの大野真子と小野メグは全く意味が分からなかったが、莉央と美香は変に気まずくなっていた。

「莉央ちゃん！　なんで今回あんなに罪人同士を離して拘束してるの？」

「あたしに聞かれても……特殊任務省の関連してる方々の都合じゃないのかな？」

「でも兄妹って分かった以上は……」

美香は目を細めてイヤラしそうな笑みをうかべた。

「そうだね。懲らしめる意味でも兄妹はお互いの最期を見届けてもらおう。近親相姦でもさせちゃおっか」

「キャハハッ！　さすが莉央ちゃんだね！　エッチィ～」

莉央は大野真子と小野メグにも今までのことを一通り説明した。

「そんな偶然あるんですね」

真子は顔もハッキリ認識できない距離にいる高嶺夏海の方をそっと振り返りながら呟いた。

「でもアイドルの妹さん……拷問処刑になっちゃうようなとんでもない事件をどうして起こしちゃったんだろ？」

メグは顎に親指と人差し指をそっと当てて首を傾げる。

アイドルたちの会話をずっと聞いていたが、遂に辛抱たまらなくなり大声で叫び出す高嶺義史。

「おいっ！　とりあえずこの拘束を解いてくれよっ！　手首と足首が痛いんだよっ！」

「あらごめんなさい」

莉央は高嶺義史の両手両足全ての拘束を解いた。

「マジか……二十歳の男の拘束をアイドルの女だらけのこの状態で解くなんて……何を意味するのか分かってるのか？」

「さぁ。何を意味するのかしら？」

大野真子がキョトンとしながら聞き返す。

「アイドルだからってこんな時だから手加減しないぜ。俺は逃げてこの島でそのまま住んでやる。サバイバルだ」

「どうせ本島に帰っても警察に捕まるもんね」

「う、うるさい！　夏海だってあそこにいるし今からお前らを倒してから妹を連れ出して一緒に生活していくんだ！でも安心してくれ。お前らは大好きなアイドルグループだから命まではとらねぇよ」

胸を張って自己主張と演説を続ける高嶺義史に四人の少女たちは

欠伸しまくる。

「ふぁあああ。もう言いたいことは終わった？」

「あ、ああ！　だから覚悟してくれってことだよ！　夏海の見えない場所でお前ら犯しまくってやる！」

「ふぅん。そんな行動に出るんだ。ならより一層過酷な拷問で懲らしめる必要がアリそうだよねあなたは……」

菅野莉央が拳を握りしめながらキッと高嶺を睨みつける。

「おっ！　怒った顔もむっちゃ可愛いなカンリオは！　やっぱ俺の永遠のアイドルだよお前は。今からかなり痛い目に遭ってもらうけどな。最愛の妹、夏海をボコったってこともさっき話してるの聞いちゃったし。許さねえ！　行くぞオラアアッ！！」

高嶺義史が莉央に本気で殴りかかる。
連続攻撃をいとも簡単に避けてかわす莉央。
蹴りも出すが前蹴り回し蹴り、全てをかわされた。

小学生の割に力が弱いわけではないが、かわせるものは受けずにかわすのが小学生の莉央の闘い方である。

「はぁ。はぁ。はぁ。はぁ。ちょこまかと動きまくりやがってちく

しょう……」

「あたしのファンでありがとう。あの世でもあたしのこと応援してね。妹さんと一緒に」

「ぐっ！　本気で俺たちを処刑する気なのかお前ら……？」

「警察だってあなたみたいな凶悪犯を冗談でこんな島に連行させないでしょう？　いい加減気付きなさい！」

どこかの熱血教師みたいなセリフを吐いた莉央が反撃に出る。

『シュンッ！……ズドンッ！！　ズドドドドドッ！！』

「えっ！？　ふごおっ！！　ごはははははあっ！？」

腹部を重点的にみぞおちから下腹から凄まじい連打を加えた莉央は、一定の距離を空けてから様子をみる。

「ぐぐぐ……おえええええっ！！」

思わず膝をついて倒れ込み、胃の中のものを全て戻してしまう高嶺義史だった。

「まだやる？」

「がはあっ！　ゴホゴホゴホゴホッ！」

大野真子と小野メグが高嶺の前に仁王立ちする。

「菅野さんも疲れてるだろうからここからは私たちが」

莉央はまだまだ疲れてなどいなかったが、とりあえず戦闘がしたかったと判断して中学生組の二人に任せることにした。

「ではでは。もうあたしたちに逆らう気がなくなるくらいまでボコっておいてくれますか？」

「はい。おまかせを」

「了解です菅野さん」

莉央は右手を上げて左右に振りながら真子たちと高嶺に背を向けて、２０m前方に拘束されている少女の方へ向かった。

目を閉じてずっと涙を流している少女。
高嶺夏海１７歳。
元“肌色四葉組スクールガールズ”とゆう女子高生アイドルグループの一人だ。

「こんにちは」

　そっと目を開けて莉央の顔をジッと見る夏海。

「どうしてお兄ちゃんまでこの島に連れてこられてるの？」

「自分がどんな目に遭うのか分かってるような口ぶりだね？　分かっていても先にお兄さんの心配をするなんて大したもんだわ」

　莉央はハサミを持ってゆっくり近付く。
　震えながら強く目を閉じるが、身体を切られるのではないと分かった瞬間、再度目を開けた。
　ジョキジョキと大きなハサミで全身のセーラー服を切ってゆく莉央。

「またあなたたちに裸にされるんだね私……」

「うん。今回は前のリンチと違ってこの世の生き地獄を味わってもらうから覚悟しといて。その上で生きて帰れないから」

　莉央の言葉の意味を分かってはいたが、まだ彼女の中で少しは生きて帰れる、とゆう希望的観測もあった。

「殺す気はなかったの……」

「夏海さん、あなた誰を殺したの？　アイドル辞めて大人しく休んでるものと思ってたのに」

「あの後たびたびメンバーの子と三人で会って慰めあってたんだけど……ある日を境に全て私のせいにされて。あなたたちに怒鳴り込むのも私は反対したくらいなのに。酷いよ奈美恵も彩月も……」

「そうだったんだ。それはお気の毒だけど」

「だから皆でロープウェイで月見山に登った時、人気のない景色のいい絶壁があったからそこまで誘導して……二人同時に突き落としちゃったの」

大きく目を見開いて驚く莉央。
最後の一枚のパンツに手を掛けると、ハサミで切らずに手を離した。

「そこだけは晒さないでいてくれるの？　ありがとう」

「ごめんなさい。パンツだけ残して拷問した方がより一層エロいかな、と思って」

「ええっ!?　そんな……結局最後はあの時みたいに脱がされるの？」

「うん。脱がされる。二人を殺した罪を全身の激痛で償ってもらうから。鎌か刀でパンツ越しにマンコは切開予定だから……覚悟はしておいて」

少しは許してくれるかも知れないと思った自分の甘さを呪い、これから我が身に起こるであろうあまりにも恐ろしい事態にショックで気絶してしまう夏海だった。

莉央は意識のない高嶺夏海の全身の拘束を解き、そっと地面に寝かせた。

「人生最期の睡眠になるからゆっくりお休み夏海」

簡易ベッドに寝かされて手足を再度拘束されている高嶺義史。
その傍で静かに目を覚ます妹の夏海がいた。

『シコシコシコシコ』

「ううう、き、気持ちいいです……ああ」

「妹の夏海が目を覚ましたみたいね。さぁあなたの射精シーンをみせてあげなさい。えいいいっ！」

『シュコココココココッ！！』

手コキの速度を凄まじいほどアップする莉央。
妹の夏海の見ている前で夥しい量の精液を射出してしまう兄の義史だった。

「あっ！　あああああっ！」

『ドピュッ！！ドピュピュピュピュピュピュウッ！！』

パンツ一枚のまま寝転がったまま目覚めた夏海は、いきなり人生で初めて兄の射精シーンを見せつけられるハメになる。

「やだ……」

「ほら、義史。何か言うことあるよね？」

「はぁ、はぁ、は、はい莉央様。大ファンの莉央様の手コキで高嶺義史は射精してしまいました。ありがとうございます」

「よくできました。そう言う事だからしばらく妹の夏海は兄の痴態を見ていてね？」

「もうやだっ！！　そんなの見たくないよっ！！」

二回、三回、莉央の手コキによって更に射精を重ねさせられる義史だったが、遂に勃起しなくなってしまう。

アナル責めの得意な富田美香がグーパーグーパー繰り返しながら義史の肛門に当てがった。

「ローション塗ってあげてるから多分入るよ。くらえ！　美香様のフィストファーック！！」

『グリリ……ボコオッ！！……メリメリ！！　ブチブチッ！！』

「ぐわああああああっ！？　はぎゃあああああああっ！！」

美香の拳が無理矢理に義史の肛門へねじ込まれた。
小学生の女の子の拳とはいえ、肛門が受け入れるには大きすぎる。
何枚も拷問括約筋が張り裂けて、大量の血が噴き出す。

『ブシュウウウウッ！！　ピュルルルルッ！！』

「痛いいいいいいっ！！　おわああああああっ！！」

富田美香は妹の夏海の方を見ながら何度も兄のアナルを拳で犯し続けた。

『グボッ！　ズボッ！　ズチュッ！　ボコオッ！』

「ほら、あたしにも何か言うことあるでしょ？」

「んぎいいいっ！！……み、美香様の腕を肛門にぶち込んで頂き、光栄ですぅ～。ひぎいいいいっ！！　抜いてええええっ！！」

「前立腺はここかっ？　ほらあっ！」

『グボッ！！』

「はうっ！？」

『ドピュウッ！！』

三度も莉央に手コキでイかされた上、美香の前立腺責めでもイかされる義史。

夏海は大声で泣き叫び始めた。

「あああああーんっ！！　もうやめてえええっ！！」

強制的に前立腺刺激で射精させた後も何度も何度も激しく出し入れする美香の拳。

すぼんだり盛り上がったり肛門が慌ただしく上下させられる。

特に拳を抜く時は、直腸が飛び出しそうになるほど派手に盛り上がり、痛々しい。

ようやく飽きてきた美香は、拳を完全に拷問括約筋から引き抜くと、大便まみれの右手を綺麗にバケツで洗い、タオルで拭き取る。

その傍で中学生コンビの大野真子と小野メグがチェーンソーのエンジンをかけて義史の元へ歩み寄る。

「本来拷問処刑は気持ちいい事はタブーだから。気持ちよく射精させてもらえたなんてとってもラッキーだったのよお前は」

『ヴィーンッ！！……ヴィーイイインッ！！』

「菅野さんのファンだから特別に何度もイかせてもらえたことを感謝しなさい。じゃあ今からは地獄の入り口を通ってもらうよ？」

二人は激しくエンジンを吹かしながら義史の両手両足を肘と膝辺りから切断し始めた。
スプラッター映画を見ている感覚で現実味がないまま兄がダルマにされていくシーンを見てしまう夏海だった。

「ぎゃあああああっ！！！！」

「ひっ！？　や、やめてあげてえええええっ！！　酷いいいいっ！！」

『プス！　ぷちゅうううううっ！！』

手際よくショック死防止薬と血止め薬のブレンドされた注射を、おへそのど真ん中にブッ刺す莉央。

「そんな簡単に死なせてあげないわ」

その後注射器を鞄に戻し、義史の手足の切断面を包帯でグルグル巻きにしてから簡易ベッドから地面へ蹴り落とす。

更に会陰部に紫色の薬液の注射を打ち込むと、またもやムクムクと勃起してくるペニス。

富田美香が抱き抱えて両膝の上に股を開かせて乗せる。

「さぁ莉央ちゃん！　手術してあげて♡」

「りょーかい♪」

メスを取り出した莉央は、左手で皮を掴み、引っ張りながら器用に右手のメスで陰嚢を手際よく切開し、完全に皮だけを除去した。

睾丸の纏っている服を脱がすように、見事に陰嚢だけを剥ぎ取る手術に成功する。

無事な姿でいるペニスと、皮を失った生の白い睾丸がプランプランと揺れている。

麻酔をしているためかアヘ顔で真上を見つめながら笑っている義史。

見るに見かねて後ろを向いてしまう妹の夏海を、大野真子が立ち上がらせて、小野メグが日本刀を手に取り、刃を上に向けて夏海の背後から股間の真下へ通した。

性器のワレメへ日本刀の刃の側が密着する。

パンツ越しに更に食い込ませるメグ。

「ここね？　臭いマンコは。ちゃんとお兄さんの痴態を見てないとコレ後ろへ思いっきり引いちゃうから」

「ひいっ！？　や、やめてっ！　そんなことしたらアソコが真っ二つになっちゃう！？」

「真っ二つにしてやるよ。わかってるのか？」

「は、はい！　見ます！　見ますから許してくださいっ！！」

菅野莉央は五回目の射精を試みる。

『キュッ……シコシコシコシコシコシコシコッ！！』

「はううううつうっ！？　ヒャアアアアッ！！」

莉央のピストン運動は今回も激しく、超高速で右手がペニスをシゴキあげる。

莉央の手の動きに合わせて、股間から精管と神経管のみでぶら下

がっている睾丸が振り子のように前後左右に揺れまくる。

あまりの哀れさに笑いが止まらない美香と真子だった。

「あはははははっ！　生の金玉がプランプラン踊りまくってるぅ♪」

「菅野さん……残酷ですねやっぱ……」

美香に続いて真子は笑いながらもゾッとする。

「生の金玉を女子中学生や女子小学生に見られてシゴかれて……ほんと哀れだよね？　激しく揺らしちゃってエッチなんだから。ほら、更に加速してやるからイッけえええ！」

『シュココココココココココッ！！』

一分も経たないうち内に五回目の射精をさせられてしまう義史は、舌を突き出して涎を垂らしながら白目を剥いて精液をぶち撒ける。

「はうううっ！！」

『ドピュピュピュピュウッ！……ピピピッ！』

莉央の膝に精液が少しヒリ掛かった。

「菅野さんに精液かけやがったなお前のアニキ……責任は妹にもあるよな？」

「ひっ！？　そんなっ！！」

『ヒュカッ！！』

一気に日本刀を背後から後方へ引き抜く小野メグ。

『ぱっくん！！』

ワンテンポ遅れてパンツごと切開されて大きく肉片が開いてしまう夏海の股間。

「ヒャアアアッ！！！！」

『ドパアッ！！　ドクドク！！』

メグの一閃は、夏海のクリトリス、尿道口、会陰部、肛門までを綺麗にパックリと真っ二つに切開してしまっていた。
真っ白なパンツはみるみるうちに真っ赤に染まってゆく。

更にメグは斜め後ろから肛門へ深く突き入れる。

「お前とアニキをセックスさせてやろうと思ってたけど……もういいや。それは勘弁してやるよ」

『ズドオッ！！……ズブブブブブッ！！』

「ピギィイイイッ！！　痛いいいっ！！　ひゃっはあああああっ！！」

血まみれの尿を撒き散らしながら倒れることもできない体勢で肛門から串刺しにされる夏海。

大腸小腸を串刺しにしたまま内臓を何度も掻き回すメグ。

『グリグリ！　グチュグチュ！』

「ほら、アニキの哀れな姿を見ろよ！　生のキンタマをプランプラン揺らしながら射精してるんだぜ？　笑えるよなぁ？　ははは」

膝に付いた精液をハンカチで拭きながら莉央は立ち上がる。

「メグさん、串刺し上手になりましたね！　はいこれ。剥ぎ取ったキンタマ袋。妹に食べさせてあげるね？」

「アヘアヘアヘッ！！」

白目を剥いたまま短くされた手足をパタパタさせながら糞尿を漏らす義史。
無理矢理夏海の口内に兄の陰嚢を捩じ込むと、無理矢理噛ませて食させる。
「むぐうっ、むしゃむしゃ……グニャグニャ！」
硬くて硬くて結局全く噛み切れないまま夏海に飲み込まれる陰嚢であった。
「むごおっ！！　むぐぐぐっ！！　お腹が痛いっ！！　ぎひいいいっ！！」
『バチュッ！！』
しゃがんだまま夏海の背後から肛門へ串刺しにしている日本刀を、見事に臍から突き出させるメグ。
「わおっ！？　刀さばきホントお見事ですメグさん」
莉央は感心しながらペンチを構えて、夏海の右の乳首を挟み込んだ。
一気に潰して引きちぎると、真っ赤な鮮血がドクドクと日本刀の突き出している臍まで流れ落ちる。
そのまま左の乳首も挟んで潰して引きちぎる。

地面に落とされた潰れた乳首はもうどこにいったのか分からなくなっていた。

莉央は鉄の槍を取り出して夏海の膣口にあてがう。

「アナルだけじゃないよ。臭いマンコもタダでは置かないんだから」

「ひいいっ！！」

『ズブウッ！！』

「ぎゃあああああっ！！」

槍を性器から突き入れるが、すぐにメグが肛門から臍まで串刺しにしている日本刀に当たる。

『キンッ！』

「一度抜いてもらって良いですかメグさん？」

「は、はい！　よっと！」

小野メグは慌てて肛門から日本刀を抜いた。

その直後、莉央の突き入れた槍は下の口の膣口から上の口まで一気に貫通する。

『グポオオッ！！　ザシュシュシュシュ！！』

「うんごおおおっ！？　はへえええええっ！！」

「あの世でバカ兄貴を待っててね。さよなら」

『バシュバシュバシュバシュッ！！』

莉央は何度も抜き差しを繰り返した。
完全に白目を剥いて全身が痙攣を始める。
口から高速で突き出たり消えたりを繰り返す切っ先。
その度に粘度のある血の混じった涎の泡が噴き出していた。

最終的にはオマンコからの串刺し刑で、小学生の莉央たちに性的リンチを受けた元アイドルの高嶺夏海は、１７年とゆう短い生涯を終えたのであった。

膣口から槍を引き抜くと、内臓と血の混じったドロドロの粘液が性器から噴き出してくる。

莉央は夏海の顎を引き上げて首を突き出させて、手際よくサバイバルナイフで首を切断してゆく。

『ぐいっ。ズバズバズバズバッ！！』

『ゴボ……ゴポポポポポポ』

大量の鮮血が首の切断面と口や鼻から噴き出す。
薬で無理矢理勃起させた義史のペニスを、生首になってしまった妹の口を強引に開かせて捩じ込む美香。
「ほうら、お兄さんのオチンチンだよぉ？　咥えろ！」
美香は激しく前後に頭部を何度も動かす。
六度目の射精は妹の口内だった。
生首の口内へ出された精液は、ドクドクと首の切断面から垂れ落ちてきた。
「きったな。よく妹の口の中に出せるわね？　切断面からドロドロ出てきちゃってるしぃ。めっちゃエロ～い♡」
夏海の生首を地面に投げ捨ててから義史の顔を何度も殴る美香。
ダルマにされたまま激しく殴られ続けて歪な形に変形してしまう顔面。
莉央はまな板を用意して、ダルマにされた義史のペニスを寝かせるように置いた。
義史自身も地面に横向きに寝かせられている。
石の上にまな板を置いて、横向きにさせたままペニスを切断でき

るように準備した。

「さぁ真子さん。オチンチンを輪切りにしてあげて」

莉央が微笑みながら包丁を手渡す。

「え？　私が！？」

「うん。毎回あまり拷問してなかったみたいですから。先っぽから根元に向けて十回は最低でも包丁を入れてくださいね？」

「は、はい。いきます！」

『トントントントンッ！……ザクザクザクザクッ！！』

「ぎいやあああおおおおうっ！！」

断末魔の声をあげて叫ぶ義史のペニスは、大野真子によって先から根元へかけて輪切りにされていった。

「宰丸も輪切りにしてくれます？」

「はーい！」

ペニスと生の睾丸は大野真子によって何十個分にも切り分けられて、輪切りの刺身が出来上がってしまう。

刺身醤油をつけて睾丸の刺身を口にする莉央。

「んん。プリプリしてて美味しい。少し生臭いけど」

他のメンバーたちもぺと睾丸の刺身を食した。
カニバリズムとは本来タブーではあったが、彼女たちの好奇心がそれを上回ってしまったのである。

鹿や牛の睾丸でも美味しく食べられるのだから人も性器だって大丈夫だろう、とゆう都合のいい考えだった。

全て食べ尽くした莉央はたち四人は、既に死んでいる夏海の小陰唇とクリトリスもまな板の上にくり抜いたモノを置き、手際よく刺身にした。
メグによって真っ二つにされていたが、上手にくり抜いて四人分に切り分けて頂いた。

「マンコの刺身も美味しいっ♪」

美香は驚くほどの美味しさに思わず舌鼓を打つ。

傍ではまだ息のある義史が痙攣しながら叫んでいた。

「あああああああおおおおううっ！！」

「はいはい。何言ってるか分かんないけどあんたたち兄妹の性器は美味しかったよ。初めてカニバリズムしちゃったけどはまっちゃいそう♪」

「あうぅおおお」

「分かったよ。もう少し痛めつけてやるから変な声出さないで」

莉央は小さく萎んでしまっている義史の右の乳首を左手でつねって引っ張り、右手に持ったカッターでスパッと切断した。
カパカパ口を開閉させながら痛がる姿を見て、反対側の乳首も同じように切断する。

「綺麗なお臍してる。お母さんから栄養もらった大切な穴だよね？」

『ズブッ！』

「んぎゃあっ！？」

『ズボオッ！！……ズズズズズ』

「ぎひぃいいいっ！！」

カッターを両手で持ち、力を込めて臍に突き刺して、ゆっくり股間方向へお腹を切開してゆく。

「ほら、ハラワタ掻っ捌いてあげる。もっといい声で泣きなさいよ」

「はぎゃあっ！？　いだだだだだだあっ！！」

ブリブリと切開部から飛び出してくる小腸と大腸。
恥骨に当たるまで切り裂いてからカッターを抜くと、今度はライフルを手にしてダルマ男の肛門へ銃口を捩じ込んだ。

「ここ？　お尻の穴。ヒクヒクしてるよ？　ビビってるのかな？」

『グリッ！　ズブブブブブッ！』

「んひいいいっ！！　やはあっ！！」

「最期はこの汚いお尻の穴から……吹っ飛ばしてあげちゃう♪」

「びぎいいい……」

「莉央さま、アナルから銃弾ぶち込んで殺してください。は？」

「ひ、ひぐうう〜。り、莉央様、アナルから……銃弾ぶち込んで……夏海の所に逝かせて下さい……」

『ガチャ！』

銃弾を装填しながら囁く莉央。

「良くできました。あの世で兄妹揃って猛省しなさいね？　あたしもあなたたちが生まれ変わっても兄妹であることを願っててあげる。じゃあさようなら」

「うう。ううう！　ぐす、ぐす」

「泣いてるの？　肛門から撃ち抜かれるのそんなに怖い？」

「うわーん！　うわあーん！　死にたくないっ！　まだ死にたくないいっ！！　うわーん！　うわーん！」

「見てられないからもう泣かないで。あたしのファンのあなたは肛門からライフルをぶっ放されて即死するの。じゃあね」

『ドンッ！！……パァンッ！！』

莉央が引き金を引くと同時に高嶺義史の頭部はスイカのように粉々に割れて吹っ飛んだ。
肛門から撃ち込まれた銃弾は、内臓を突き破りながらつぶれて段々と大きくなり、破壊力を増してゆく。
やがて頭部を激しく粉砕してその役目を終えた。

頭部を吹っ飛ばされた遺体の肛門からライフルの銃口を引き抜く菅野莉央。

「ヤギの金玉より美味しかったかも……」

最後に呟く莉央の言葉に静かに頷く真子とメグと美香であった。

本来タブーとされている人肉食も、性器のみなら許されるのかも知れない。

残酷処刑島に新たに二人の遺体が加わった。

――翌日の朝。

菅野莉央のスマホに特殊任務省藤堂長官からの連絡が入る。

「おはよう菅野くん。より残酷に拷問処刑を終えられたようだね今回も」

「はい。毎回毎回罪人をいたぶって辱めて殺して差し上げてます」

「そ、そうか。ご苦労様。被害者の遺族の方々も少しは報われるであろうな……」

数秒間の沈黙の後に莉央が強い口調で話し出した。

「どうして肝心なことを始めに教えてくれなかったのですか？」

「あ、ああ。アイドルの高嶺夏海の方は急に起こった事件で、今回の処刑にギリギリ間に合ったのでな。あまりに急過ぎて細かく説明できてなかった。すまんな」

「あまり言い訳になってないみたいですが、ともかく言い忘れたのですよね？」

「うむ！　分かりやすく言えばそういうことだ！　菅野くんは相変わらず勘がいい」

再び沈黙が入る。
莉央は少しずつ苛立ってきていた。

「しっかりしてくださいほんとに。それと……罪人の二人をなぜあんなに距離を空けて拘束したのですか？　意味が分かりません」

「調書をじっくり読んでみるとお互いを想う気持ちが強い兄妹だと思ったのだ。あの距離のまま菅野くんたちが二手に分かれて処刑し

てくれたら兄妹がお互い処刑されることを知らないまま同時に死んでいけると思ってな」

「甘いです。目の前で身内が残酷に殺されてゆくのを見せつけるのも拷問の内ですから」

「そうか。まぁ結局そうなるかも、とは思ってはいたがね」

「今度からは些細なことでも事実が分かっていることは教えてくださいい」

「ああ。済まなかったな。別にこれといった用はない。ではゆっくり休んでくれたまえ」

「……失礼します」

電話を切り終わった後、そっと目を閉じて兄妹の拷問処刑を思い出す。

『やれることはやったはず。まだまだ残酷にできたかもだけど』

「おい莉央！」

突然莉央の部屋に入ってきて背後で呼びかけられたので驚いて肩がビクッとなる。

「ビックリしたぁ！　人の部屋に入る前はノックぐらいしてくれる？」

「戸は開いてたぞ？　それより最近俺の処刑島の出番少なくねぇか？」

「お兄ちゃん結局少しの拷問はできてもトドメを刺さないから……藤堂長官も使いにくいんでしょ。もう半分首だよお兄ちゃんは」

「ええっ！？　マジか！？　まだまだ欲しいもの沢山あるのに仕事させてくれよ全く！」

「ヘタレはヘタレなりに真っ当に働いたらいいじゃん」

頭を掻きながら舌打ちをして自分の部屋に去ってゆく京介だったが、その姿を見つめながら安堵している自分もいた。

「お兄ちゃんは優しすぎるから拷問処刑人は向いてないよ」

残酷に人を殺すことに興奮してしまう自分と他人を比べるたびに、自分のことがあまりにも特異な異様な存在なのかと思い悩んでしまう莉央だった。

とある兄妹の過酷な運命（前編）（前書き）

毎日の学業や仕事から解放される時、趣味や道楽を楽しむ人たち。ストレス解消には欠かせない事である。

とある兄妹の過酷な運命（前編）

南部地方の山岳地帯に広がる重井沢高原。
夏はかなり涼しく気持ちよく過ごせるキャンプ地として有名な場所であった。
八月の猛暑の中を、避暑地で数日間過ごそうと訪れている家族が何組も存在する。

寝る時には丸太造りのクーラー付きの小さな六畳一部屋、シャワー付きが備わっているために、何週間も滞在する人もいるくらい人気の場所であったので、数年前から予約していてやっと来られた、とゆうわけだった。

高校時代から付き合っていてそのまま平穏無事に結婚して、今まで共に過ごしてきた４０歳の井関勝男と美喜代の夫婦と、１２歳の長男慎吾と、１０歳の長女亜衣里、の四人家族もそのキャンプに二泊三日で訪れている。

その他にも核家族が三組くらい来ていて、制限人数の１６人、四組の核家族で賑わう重井沢キャンプ場であった。
昼間っからバーベキューをしてビールを飲み、酔いながら楽しく雑談する大人たち。

子供たちは子供たち同士で、自然と意気投合して近くの谷のほとりで水遊びをしていた。
初めて会った他の家族の人たちと一緒に飲むビールは、少し気は遣うもののお酒が入っている脳内状態とゆうこともあり、かなり楽

しい時間を過ごせていたのであった。

しかし夕方になり、飲み会もお開きとなり片付けも終わったころ、異変に気付く大人たち。

「子供たちが帰ってきてない！？　慎吾！！　亜衣里！！」

「どうゆうことかしら？　さっきまで何度か他の子供たちとみんなで顔を出してはまた走り去って……何度も近くにいたはずなのにどうゆうこと！？　あなた、探しに行きましょう！」

「慎吾くんと亜衣里ちゃんはどうした由真！？　お前たちと一緒にさっきまで遊んでただろう？」

「谷に裸足で入って小さなお魚獲ってたよ」

「谷に！？　どうして一緒に帰ってこなかったんだ？　義照！　お前はどうなんだ！　なぜ井関さんの子供さんたちを置いて帰ってきた！？」

「ごめんなさい。後ろから付いてきてると思ってたんだ。なぁ由真」

「うん。お魚逃げられて獲れてなかったしすぐに付いてきてるとあたしも思ってた」

他の家族の両親がしきりに我が子供たちを叱りつけるのを聞いて井関勝男は、とりあえず落ち着いてもらうようお願いする。

「皆さん！　私と妻の子供たちのせいで子供さんたちを叱るのはよしてあげてください！　みんなについて来なかった本人たちが一番悪いんです。私たちは探しに行きますがもう日も暮れて危ないので皆さんはテントか部屋に戻ってゆっくり休んでください」

賑やかな各々の家族たちが静かになる。

「でも安全に歩いていける場所くらいまでは探しますよ。なんと言ってもまだ小学生ですからそんなに遠くには行けないと思いますし」

「それもそうですよね。……では申し訳ございませんがよろしくお願いします」

「消防や警察にも連絡しておきますね」

「それはまだ構いません！　どうせ暗闇で動けなくなって泣いているに違いないですから！　私たちが恥をかきますので」

井関の妻の嘆願を聞き、他の家族の両親たちも消防や警察への通報は一旦見送ることにした。

懐中電灯を灯して谷からいくつも伸びる獣路を登っては行き止まりで引き返し……別の路を登っては引き返し……。

「慎吾おおおっ！！　亜衣里いいいっ！！」

何度も叫びながらもう五本目の獣路に入るが、ここも行き止まり。もう谷に落ち込んで溺れて沈んでしまったか熊に襲われて連れて行かれたか、大人では通らないような草の根を掻き分けて山道を進んで行ったか……。

どちらにせよ諦めて警察に電話しようとする井関勝男。

「ちょっと待ってあなた！　まだ早いわよそれは！　怒られるのは両親の私たちよ！　ニュースになっても恥までかくし！　数日間は様子を見ましょう！　道に迷ってるだけだからそのうちひょっこり出てくるわよ。しっかりしてる兄の慎吾もついてるし！　亜衣里もきっと無事だから」

「お前……よくそんな悠長なこと言ってられるなあ？　もうあれから七時間も探し続けたんだぞ俺たち！　夜中の零時回ってるんだ！」

「落ち着いてよ！　明日の朝から昼まで探してそれでも見つからなかったりキャンプ場へ戻ってなかったら、その時は警察へ相談しましょう」

明くる日も朝から懸命に捜索するが、とうとう二人の兄妹を見つけだすことはできず、警察、消防に通報して昼からは大々的に捜索活動が行われた。

「井関さんですね？　ちょっといいですか？」

管轄の刑事二人組が、キャンプ場の切株ベンチに両親二人を誘い、座らせてから事情聴取を始める。

「子供さんたちのことで心配している中、非常に不躾で申し訳ないのですが……」

「はい。何でしょうか？　注意やアドバイスならいくらでもお聞きします。まだまだ子供たちをこんな山中に残して帰れませんから」

二人の刑事はお互いの顔をそっと見合わせてから切株ベンチの方の井関勝男と妻の美喜代の方を交互に見た。

「では大変不躾な質問をしますが……どうしてもっと早く我々に通報してくれなかったのですか？　こんなにも時間が過ぎてしまったらもし遭難や事故ではなく誘拐だった場合、遠方まで犯人に逃げ切る隙を与えてしまいます」

「神谷！　もっと他に言い方があるだろう！」

「はい！　申し訳ございませんでした」

「謝るのはこちらのご夫婦の方々の方だ。自身の子供さんたちが二人も同時に行方不明になっているんだ。責任を押し付けるような言い方は慎め」

若い刑事の神谷は大先輩の笠井刑事に叱られて、夫婦へ大きく頭を下げた。

「いえ、この刑事さんのおっしゃる通りです。ほんと夜中まで素人が捜索して更に朝まで待って更に昼まで捜索を続けるなんて……私たちが愚かでした」

「な、何よ！？　それって私が全て悪いって言ってるようなもんじゃないの勝男！？　いい加減にしてよ！！」

急に夫へ怒鳴り散らす妻の美喜代。

刑事たちは優しく声をかけて怒りを鎮めようと努めた。

しばらくしてようやく冷静を取り戻した美喜代は、息子と娘の名を叫びながら頭を抱えた。

「井関さん、美喜代さんは辛すぎて取り乱しておりますので別の場所でお話し伺っても良いでしょうか？」

「はい。分かりました」

「神谷！　だからお前は言い方とゆうものが分かって……」

先輩刑事が若い刑事を、先ほどみたいに叱ろうとした瞬間、美喜代は大声を上げ始めた。

「私が取り乱してるですって！？　失礼な刑事ねぁなたは！　向いてないんじゃないの刑事なんて！？」

「神谷。一度頭の中で言いたいことを整理してから口に出す癖をつけたほうがこれから先お前のためにもなると思うぞ？」

「は、はい。申し訳ございませんでした」

何度も怒られる若ぃ刑事に申し訳なさを感じながらも二人に聴取を取らせる井関勝男。

「そうですか。では夕方のたった五分ほどの間に慎吾くんと亜衣里ちゃんは姿が忽然と消えてしまったわけですね？」

「そうです。谷と言ってもそんなにここから距離はなく、十分ほども歩けば往復できるような距離しかないですから。しかも数分おきに何度か顔を出してたんですよ。なので余計こんなことになるなんて夢にも思わず……」

必死で涙を堪えるのが窺える。

「分かりました。ともかく私たち警察や消防も昼夜問わず捜索しますので一旦はごゆっくり休まれてください」

「私たちも捜索します！」

「もう井関さんたちは十分捜したじゃないですか？　あとは私たちにお任せ下さい。消防のヘリも到着してくまなく山中を捜索開始しましたので」

懸命に続けられる数日間の捜索活動も虚しく、神隠しにあったように二人の小学生児童を見つけ出すことは出来なかった……。

更に一年の月日が流れ去り、いまだに少しの手掛かりも掴めないまま事件は迷宮入りを余儀なくされる。

――――井関勝男邸。

「慰謝料はいらないから」

「あぁ。助かるよ。山岳の捜索費で凄い大金を請求されちゃってなぁ……貯金も殆ど使い果たしてあれから全く働く気力が出てこないんだ」

度数の高いウイスキーを軽く薄めただけでグイグイ呑むと、テーブルにグラスをドン！　と置きながら激しく呟き込む勝男。

「いつまでも引き摺っていてもこれから先の人生やっていけないわ

よ？」

「分かってるつもりなんだけどな。お前は次でも見つけて幸せに暮らしていけよ」

「あんたに言われなくてもそうするわ。貯金もないアル中の働かない男なんて百年の恋も醒めちゃうから」

必要最小限の大切な荷物を、大きなプラダの鞄に詰め込むと、ゆっくり立ち上がり玄関へ歩いてゆく。

「さようなら」

振り返ることもなく一言遺して玄関を出てゆく美喜代。

「ゴホッゴホッゴホッ！！……オエエエエッ！！」

咳き込みながら嘔吐してしまう勝男だったが永遠の別れを誓った相手はそのまま玄関のドアを閉めた。

「うぃぃ〜。ひっく！……これは夢か？　幻なのか？　つい去年まで賢くはないけど料理は上手な妻と、可愛い息子と娘の四人で暮らしてたんだぞ俺は！　昼間っから薄暗い部屋で独りっきりで酒を浴びるように飲むって……これって人生オワタなパターンにハマって

るじゃねぇか！……チクショウ！！……ヒック！」

泥酔した井関勝男はそのまま眠りについた。
妻の美喜代と同棲することも会うことも話すことも……全てが人生で最期となってしまう。

その頃、南部地方の西部にある高級住宅が建ち並ぶ檀園調布団地の家である事件が起こっていた……。

「うごうっ！！　んぐううううっ！！」

素っ裸にされて口枷を嵌められ、目隠しをされた13歳の少年がまともに叫ぶこともできず呻いていた。

「ほら、ほらぁっ！　キャハハハッ！」

18歳になる女子高生が13歳の中学一年生の年頃の少年をいたぶって楽しんでいる。
円満愛衣（えんまんあい）18歳。
南部地方にある南部共栄女子高校の三年生であった。
父親を五年ほど前に病気で亡くし、母である円満美絵子が女手一つで育ててきた愛娘であり、たった一人残された家族でもあった。

「ほら慎吾！　もっと泣いていいのよ？　ほらほらぁっ！」

「うんんうっ！？　うううっ！！」

愛衣は数分間少年の肛門を指で掻き回すと、満足したのか指を引き抜いた。

「お母さん、亜衣里も１１歳になったんだね？　どう？」

「従順になってきて私の言うことなんでも聞くわよ最近は」

「そうなんだ。あはは！　自分でオマンコ指突っ込んで掻き回してる！受けるぅ～♡」

「私がこの一年間で調教しまくってるからね。１１歳でもイきまくってるわよ？　うふふ」

井関勝男と美喜代の息子と娘は、この高級住宅団地内の一軒家に監禁されていた。

無事生きていたことは素晴らしいことだが、この状態ではかなり悲惨である。

――行方不明事件の起こる三ヶ月前。今から一年三ヶ月前。

インターネットで知り合った井関美喜代と円満美絵子は、歳が同じとゆうこともあり、趣味も一致して意気投合していった。
リアルに会い出してからも喫茶店で話が弾むようになって、親交を深めていったのであった。

「そうなんだ。美絵子さんってばそんな趣味があったのね？」

「うふふ。そうゆうふうに改まって言われると恥ずかしいけど」

「その夢、叶えてあげようか？」

「え！？　マジで！？」

「慎吾も亜衣里も実は浮気相手の子供なの。旦那はバカだから気づいてないいんだけどね。でもその浮気相手が私を裏切って他の女のマンションに住み込んじゃったの」

「へぇ。でもあなたの可愛い息子と娘でしょ？　大事にしなくちゃ」

眉をキリッとさせながら不機嫌な表情を見せながら少し大きな声で話し出す美喜代。

「顔や性格までアイツに似てきてね。ほんと見てるだけで腹が立ってくるのよ。実は来月あたり家族でキャンプに行くんだけど。重井沢」

「うんうん。あの有名な重井沢！　私もよく散歩に行ったよ。庭みたいなもんだねあそこは」

「なら誘拐して逃げ去る自信ある？」

「え！？　誘拐！？」

「子供たちは間違いなく谷の方へ遊びにいくからその時南東にある草で覆われた見つけにくい獣路から連れ去れば誰にも見つからずに車道へ出られるから。そこから車で逃げ去れるから」

円満美絵子は、会話の内容と美喜代の表情から少しずつ冗談で言ってるふうではないことに気付いてきた。

「私もその獣路知ってるよ。でも本当にいいの？　私も娘も中学生や小学生を虐待する小説や漫画が大好きで大好きで……本当にあなたの子供さん二人を拐って虐待しちゃってもいいの？」

「もちろんよ！　私はアイツの血を引いた子供なんて自分の子供と思ったことは一度もないから実は」

事細かく獣路からの二人の児童の誘拐を画策する井関美喜代と円満美絵子であった。

二人が行方不明になった事件があったあの日……。

母親である美喜代に誑かされながらもその気になってキャンプ場の南東側にある山道に車を停め、娘の遠満愛衣と二人で秘密の獣路から北上してゆき、美喜代の二人の子供を拐ってきたとゆうわけであった。

「本当に二人で一億円でいいのね？」

「いいわよ。そんだけくれるなら虐待の末に殺しちゃってもＯＫね」

「本当に！？　なら話は成立ね！　うまく行ったら一生息子と娘に会えなくなるかもだけど本当に構わないのね？」

「うん。た、確かに一億円……頂いたわ。こんな大金貰っても本当に良いのかな？　うまく私の子供たちを拐いにきてね！　できるだけ警察とか消防とか呼ばれないように時間稼ぎ出来るよう仕向けるから！　逃げ切ってね！」

「うん！　死んだ旦那の遺産が五億はあるからまだまだお金は残ってるし……あなたの息子と娘を大好きな趣味の小説のように現実に虐待できるなんて。想像しただけでゾクゾクしてきちゃった！」

行方不明になった小学生の男児と女児は、円満美絵子と愛衣の親子によって虐待を受ける日々を一年以上続けられていた。

誘拐してきた後、完全防音の虐待部屋を作っているため、いくら泣こうが叫ぼうが近所に聞こえる事はなかったのである。

うまく父親とも別れることに成功した美喜代は、我が身一つで一億円を手に入れて、北部地方に高跳びして家を新しく購入して贅沢

に過ごし始めた。

　慎吾と亜衣里が本当の自分の子供でないことも、まさか誘拐されて生きていて、今も虐待を受けながら生存していることも……妻の描いた子供を売る筋書き通りの犯罪行為も、何も知らない気付かない井関勝男は、今日も呑んでは吐き、呑んでは吐きをくり返す日々を送るのみであった。

「慎吾はもう中一になるんだね？」

「うん。中一の男子生徒の奴隷……あはは！　マジ興奮するぅ！　明日からはオチンチンも責めてやるんだ」

「オホホホホ！　まさか愛衣ってばこの一年間オチンチン全く責めてなかったの？」

「うん！　楽しみに取っておこうと思ってお尻の穴ばかり調教してきたんだ！」

「成果は？」

「私の全ての指が入るようになったの。手首までズッポリ入っちゃうわ」

「愛衣のアナル調教凄いわね……こわ」

「うふふ。明日は仮性包茎のオチンチンの皮を雁首まで引き摺り下ろしてやる！」

変に気合いが入る愛衣。
親子の二人は慎吾と亜衣里の拘束を解き、部屋に外から鍵を閉めて各々の寝室へ帰っていった。

「亜衣里、もうそんなことしなくていいよ」

「うん。お兄ちゃん……いつになったらお家に帰れるのあたしたち!?　もう帰りたいよおおっ!!」

オナニーするのをやめて13歳の兄である慎吾に泣きながら抱きつく11歳の妹、亜衣里であった。

「大丈夫。いつか帰れるよきっと!　俺が亜衣里を守るから心配いって!　もう泣くなよ」

「わーんわーん!　ふえええーん!」

泣き喚く妹を慰めながら布団に入る慎吾と亜衣里。

次の日、円満美絵子と愛衣の折檻は一気にエスカレートしてゆき、慎吾と亜衣里に死を覚悟させるほどであった。

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「ひぎぎぎぎいいいいっ！！　いやあああああああっ！？」

円満美絵子は腰に巻いたベルトに、巨大なペニスを模した張り形を装着して、バックで女子児童の性器を犯し続ける。
四つん這い体勢から、余りにも強い痛みに腰を下げてしまうが、無理矢理引き上げられてさらに激しく犯される。

『パンパンパンパンッ！！』

「ひぎいいいいいいっ！！　痛いいいいっ！！」

「ほら、お尻下げたら犯せないでしょ？」

号泣しながら小さな女性器を激しく犯されて少しずつ感じるようになってきている小学五年生になったばかりの幼い身体……。

「あんっ！……んんんんんっ！！」

真っ赤に頬を染めながら人生で初めて味わう女の快感に、思わず涎を垂らしながらアヘ顔になる１１歳の井関亜衣里であった。

「痛みが快感に変わってきたみたいね？　オホホホホ♪」

『パンパンパンパンッ！！』

「あはっ！　はんっ！　んんっ！　あひいっ！」

「亜衣里！人生で初めてのオーガズムを味あわせてあげるわ。私に感謝しなさいね？　ほらあっ！」

幼い児童のお尻の肉を両手で鷲掴みにし、左右にパックリ大きく開きながら一層激しく腰を振り始める円満美絵子。

「あっ！？　だめえっ！？　へ、変になっちゃう！！　んんんっ！！」

「オホホホ♪　さぁイきなさい！」

「あんんっ！？　ひゃあああああんんんっ！！！！」

『プシャー！！』

思いっきり潮を噴きながら全身をガクガクと震わせながらグッタリする亜衣里。

ほぼ白目を剥いて涎を垂らしながらアへ顔で仰向けにへタりこんでしまった。

「ふぅ。どう？　私の腰使い。なかなか激しかったでしょう？　オホホホホ♪」

「亜衣里っ！？　大丈夫かっ！？」

円満愛衣に中指と薬指で肛門を激しく掻き回されながらも妹の変わり果てた姿に動揺して声をかける兄の慎吾。

「大丈夫よ。あなたが心配しなくても亜衣里ちゃんは天国を味わってて力が抜けてるだけだから」

「そ、そうなんですか？　なら良かった」

そっと反対側の左手で１３歳の少年のペニスに触れる。

「わあっ！？　そ、そこだけは触らないでくださいっ！」

「ダメよ。ココの皮を剥かなきゃ立派な大人になれないから……この一年我慢してあげたのはあまりに小さなオチンチンだから可哀想かなと思っただけ。もう勃起したらそこそこ立派な大きさになったから潮時だよ」

愛衣は少年のペニスの皮をゆっくり下方へ下ろしてゆく。

『むにゅっ！　ズルル……』

「あぁっ！？　やめてえっ！　中身が出てきちゃう！？」

「あはは♪その中身が亀頭部と言ってね。皮をかむってちゃダメな所なのよ？　おねぇさんがズルリッ！　っと剥いてあげるから力を抜いてなさいね？」

「ひっ！？　や、やめて……」

「やめて下さい。でしょう？」

『グボッ！！　ズボオッ！！』

『ひぎいいいっ！！　痛いいいいいいっ！！　ごめんなさいいいいっ！！』

慎吾の肛門へ右手の手首まで全て埋まり込ませる愛衣。
一年間愛衣によって調教された肛門は、女性の拳ならズッポリと飲み込むほどにまで拡張されていた。
腸液を垂らしながら直腸と肛門をヒクヒクさせる慎吾。

「肛門から腕突っ込んで脳みそ引き摺り出してやろうか？」

「オホホホ！　それを言うなら大腸引き摺り出す……でしょ？　愛衣」

「何かの漫画でそんなセリフあったのよお母さん」

「そうなの。ついに慎吾のペニスを剥いちゃう日がきたのね？」

「うん！　今半分まで剥いてるけどここから皮がピンと張ってなかなか剥けないわ」

ゆっくり力を込めながら少しずつ下方に剥かれてゆく慎吾のペニスは、少し紫色になってしまっていた。

「痛いいいいっ！　愛衣様っ！　許して下さいいいいっ！！　痛いですうっ！！」

「言葉遣いは分かってきたようね。賢いよ慎吾。でもね、ヒクヒクしながら少しずつ剥けていくオチンチン見てたらね……おねえさん濡れてきちゃった」

「んぎいいいいっ！　んんんんわっ！」

激痛に必死で耐える１３歳の少年であったが、愛衣の左手は無情にも少しずつ確実にペニスの皮を下方へ引き剥いてゆく……。

『メリメリメリ……』

「嫌だああっ！　いだいいいいいっ！！」

「ほら、素敵なおねえさんにアナルをフィストファックされながら

チンポの皮剥かれる気分はどう？　あははは！」

『ズッポンズッポンズッポンズッポン！！』

　右手を手首まで肛門に突っ込んだまま激しく出し入れしながらも確実に左手亀頭部の皮を引き剥いてゆく愛衣の表情は、うすら笑いを浮かべ、とてつもなく冷徹に見えた。

「亀頭部さんこんにちはまで後五秒だよ？　うふふ」

『メリメリメリメリ……ムリュウウウッ……バリイッ！！』

「ぎゃあああああっ！！！！」

「ほら全開に剥けちゃった！　これで大人の仲間入りだね少年♪」

　顔をクシャクシャにしながら泣き喚く慎吾。
　少年のペニスからは少量ではあったが鮮血が流れ落ちる。
　雁首まで引き摺りおろした１８歳の少女の手も、少年の陰部からの出血で、所々赤く染まっていた。

「オホホホホ！　見事に露わになっちゃったねぇ。慎吾のペニス！」

　妹の膣から愛液と血の混じった張り形を引き抜きながら美絵子が微笑む。

「亜衣里っ！　お兄ちゃんが、大変よ！　起きなさいっ！」
『パンッ！　パンッ！　パンッ！　パパパパパパンッ！！』
　１１歳児童である亜衣里のお尻を激しく何度も平手打ちする美絵子。
「んあ？　んんっ！？　痛いいいっ！！」
　あまりの気持ちよさにイきながら意識を失っていた亜衣里は、臀部の激痛によって一気に目覚めた。
　肩までのセミロングの黒髪を背後から鷲掴みにして引き上げる。
「ほら、起き上がって兄ちゃんを見なさい」
「んんっ！　は、はいっ！」
「どう？　何が起こったか分かる？」
　泣きじゃくる哀れな姿の兄をようく見てみると、愛衣の右手が手首まで肛門にぶち込まれていることと、左手がオチンチンを握っていて、出血しているのが確認できた。

「お、兄ちゃん！？　大丈夫っ！？」

「わーんわーん！　痛いいっ！　痛いよおおっ！！」

「あはは！　妹ちゃんの前で恥ずかしいなぁお前は！　男のくせに……とりあえずお尻の穴の手は抜いたげるわ」

ペニスの激痛に耐えきれず、妹が見てる前でも関係なく泣きまくり、恥を晒す兄の慎吾。

円満美絵子は妹の亜衣里の手を引き、愛衣によって床に寝かせられた兄の前に座らせる。

「お兄ちゃんのオチンチンを……」

兄の痴態から目を背けようとする妹の頭部を両手で押さえつけ、無理矢理引き剥かれたペニスを見せつけながら口を開く美絵子。

「舐めなさい」

「え？」

「ペニスの皮を無理矢理に剥かれて少し血が出てるでしょう？　可哀想だから舐め取ってあげなさい、と言ってるの。分かる亜衣里？」

「い、嫌ですっ！　お兄ちゃんのオチンチンを舐めるなんて……無理ですっ！」

低いベッドに仰向けに寝かせたままベルトで全身を拘束してゆく愛衣。

「これで兄ちゃんは動けないわ。さぁお母さんが言う通り早くオチンチンを舐めるのよ亜衣里！」

母娘から無茶を強いられる小学五年生の女の子は、両手で顔を塞ぎながら泣き喚く。

「嫌だあぁっ！　許してええっ！　そんなこと絶対できませんんんっ！！」

愛衣は綿棒を取り出して慎吾のベッドに座る。

左手でペニスの亀頭部をそっと掴むと、右手に持った綿棒を、尿道口へ突き刺した。

『つぷっ！　ズブブッ！』

「ぐわああああああっ！？　ひいいいいいっ！！」

今度は外部ではなく内部の激痛に泣き叫ぶ兄の慎吾。
愛衣の左手でパックリとこじ開けられた尿道口は、ピンク色で艶々していたが、真っ白な綿棒が深々と挿入されてゆくと同時に、ビクビクと鼓動して小さく震えるハメになる。

「舐めないと全部突っ込んでオシッコする穴をズタズタにしてやるんだから」

「や、やめてっ！　お兄ちゃん痛がってますっ！」

「やめて欲しかったら早く舐めたら？　後五秒でチンポは内部から破壊されちゃうよぉぉ？」

「分かりましたっ！　もうやめて下さいっ！　舐めますからっ！」

涙を手の甲で拭いながら素っ裸のまま兄の慎吾の元へ這いながらも近寄ってゆく。

「お兄ちゃん、変なことしちゃうけどごめんね。あたしがこうしないとお兄ちゃんのオチンチンが壊されちゃうから……」

「ぐすん、ぐすん、痛ぃ……チンポが痛いよぉ」

まだ痛みに堪えることだけに必死な兄は妹の言葉も届かない。
そっと兄のペニスを小さな指で掴み、口を開ける。

「うわあ〜！　エロ〜い♪　中学生の兄と小学生の妹の淫乱行為！　受けるぅ〜♡　お母さん！　記念にスマホで撮っちゃおうよ！」

「オホホホホ♪　なかなかこんなシーンお目にかかれないものね。愛衣、バッチリ撮影して！」

「はーい♪」

鬼畜な母娘に見られながら、更に撮影されながらまでも、必死で兄の慎吾のペニスを小さな口を全開にして咥え込む亜衣里。

『パクッ！』

「んんっ！！」

血の味と少し漏らした小便のしょっぱさに思わず身体が拒否反応を起こす。

「いいわよぉ。そのまま舌を使って咥え込んだ雁首をくまなく舐め舐めしなさい！」

「んっ、んんんっ！……ペチャ……ペチャ」

円満美絵子と愛衣の親子二人は、小さな子の性的行為にあまりに

も興奮してしまい、性器をビショビショに濡らしてしまっていた。

「スッゴォ♡　可愛い顔した妹ちゃんにチンポ舐め舐めされてる中学生のお兄ちゃんかぁ。お母さん、私もうダメ……私オナッていいかな？」

「あらあら……なら私が続き撮るからスマホよこしなさい」

「はーい！　お願いしまーす♡」

スマホを母に渡した愛衣は、亜衣里がペニスを舐め回すシーンを見ながら中指を膣に突っ込んでオナニーを始めた。

「もっと根元まで咥え込んで！　ほらっ！」

『パンッ！！　パンッ！！』

左手で撮影しながら右手で亜衣里のお尻を激しく叩く。
益々激しい尺八を強要する美絵子だった。

痛みも少しマシになってきた慎吾は、ペニスの異様な感覚に目醒める。

「んん、ん？　な、なんか変な感じ……チンポの先っぽ辺りがジュワアっとくる感覚!?　何、コレ!?　んんんんっ！！」

「あははは！　亀頭部舐められると変な感じ？　それを気持ちいいってゆうのよ？」

首までベッドに拘束されているため、まさか妹が自分のチンポを舐めているなど全く思ってなかった慎吾は、下半身をヒクヒクさせながら人生で初めて味わう異様な感覚……快感に打ち震えていた。

『ペチャペチャ！　ペロペロ！　ペチャペチャ！』

「いいわよぉ。金玉をモミモミしてあげながら唇窄めて高速で上下に頭動かしなさい」

「ん、んんうっ！　は、はい、むぐうううっ！」

『ズッポンズッポンズッポンズッポン！！』

小学生児童によるピストン運動的な激しい上下駆動フェラが開始された。

「んんんんっ！？　へ、変な感じ！？　わわあああああっ！！」

『ドピュッ！！　ドピュピュピュピュピュピュピュウッ！！』

「んごおっ！？　ふぶううううっ！？　おえええええっー！！」

夥しい量の人生初の精通精液を、こともあろうに実の妹の口内へ発射してしまう中学生の兄であった。

「おえええっ！！　ゲホッ！！　ゲホッ！！　おえええっ！！」

精液が気道に入ってしまって思いっきりむせる亜衣里。

懸命に口内を襲った粘度のある異物を吐き出す。

「気持ち良かった？」

顎をグイと掴み、ご満悦な表情を浮かべる慎吾に問いかける娘の愛衣。

「は、はい。なんかよく分からない感覚だけど……無茶苦茶気持ち良かったです……」

「今のが射精ってゆうんだよ。今日は記念すべき精通日だね！　一皮剥けて大人になったたしぃ♡」

「は、はい、ありがとうございます愛衣様」

「でもね、あのね！　精液出させてくれたのお前の妹ちゃんなんだよぉ？」

「え？」

「だからぁ。妹の亜衣里の口の中にお前の汚い精液出しちゃったの！妹ちゃんに感謝しなさいね？」

事実を知って拘束されているままながらも首を思いっきり横に向けると、咳き込みながら号泣している妹の姿が見えた。

「あ、亜衣里！？　ご、ごめんなっ！　お兄ちゃん知らなかった……本当にごめん亜衣里いいっ！！」

目を閉じて天井を向きながら溢れ出る涙が止まらない慎吾だった。

『プス！』

「ヒャアッ！？」

『プチュウウウウ～』

「冷たいっ！？　ひいいいっ！！」

いきなり四つん這いのまま咳き込んで泣いていた亜衣里は、円満美絵子に浣腸された。

「グリセリンたっぷり注ぎ込んであげたからね？　五分は我慢するのよ？　オホホホホ♪」

強烈な便意と戦うこと五分……ついに亜衣里は限界を迎えようとしていた。

「愛衣、左脚持ってくれる？　私右脚持つから」

「はーい」

太腿の下に片手を滑り込ませ、片手は背中を支えて、母娘で抱き抱えながら慎吾の元へ歩み寄る。

そっと慎吾の顔に股間が当たるように妹を座らせた。

「オホホホホ！　さぁ慎吾！　妹ちゃんに謝る気があるのなら身体で示してもらえるかな？」

「口を大きく開けなさい慎吾！」

「な、何をする気ですか？」

「いいから早く大きく口を開けろ！　もし何かあっても口を閉じたりしたら金玉潰して抉り出して妹に食べさせてやるからね？　分かった？」

「ひいっ！？　は、はいっ！　分かりました美絵子様っ！！」

目を閉じて大きく開けた口元に、妹の肛門を密着させる母娘。

「ほら、もういいわよ。思いっきりお出しなさい」

美絵子は許可をくれるが、自分の肛門が兄の口元に押し当てられていることを理解していた亜衣里は全力で便意と戦う。

「そ、そんなことできない……お兄ちゃんの顔に出すなんて……でも……んんんっ！！　いやあああああっ！！」

『ブリブリブリブリブリブリブリブリブリッ！！』

大量の軟便が慎吾の顔面どころか口内へ注ぎ込まれてゆく。喉の奥にまで直撃する便もあり、息が止まるほど激しくむせる慎吾。

「ゴボボボッ！？　ゴボゴボッ！！　オエエエエエッ！！　ごっくん！！」

かなりの便を飲み込んでしまいながらも口を閉じずに頑張った。

「くっさ……全部出した？　亜衣里？」

鼻を摘みながら問いかける愛衣に、号泣しながら静かに頷く亜衣里。

母娘は亜衣里の股間を何度も前後にスライドさせ、慎吾の顔中をクソまみれにした。

それでも健気に口を開けたまま言われた事を守っている。

妹を床に降ろすと、美絵子はバケツの水を慎吾の顔に振りかけた。

『ザバァッ！！』

「ゴホゴホッ！！　オエエエエエッ！！」

大便のあまりの臭いと味に、仰向けに拘束されたまま激しく嘔吐する慎吾。
何度もバケツの水を振りかけられながら必死で吐き気と戦うハメになる。

ようやく二人の拘束を解き、この日の調教は終わりとなった。

幼い兄妹は裸のまま抱きしめ合いながら、何度もお互いに謝りあいながら泣きじゃくる。

タオルとパンツとシャツのみ二人の傍に投げ捨てると、円満美絵子と愛衣は部屋を出てゆく。

「明日からは更にエロい事させちゃうからねぇ？　あはははは！　おやすみさないオマセなお子さんたち♡」

とある兄妹の過酷な運命（前編）（後書き）

キャンプ地から拐われて、悲惨な監禁生活を余儀なくされた幼い兄妹……。

二人の未来に光はあるのか……。

とある兄妹の悲惨な運命（後編）（前書き）

非道な主婦たちによる画策で、人身売買された子供たち。
毎日のように虐待を受け続ける幼い兄妹。
一年以上続くこの暴力や性的虐待に終焉は訪れるのか？

とある兄妹の悲惨な運命（後編）

高級住宅街の一軒家の完全防音を施された一室で、今日も二人の子供が虐待を受けていた。
去年訪れたキャンプ場から拐われた小学生の兄妹。
楽しいはずの場所が人生最大級の辛く悲しい思いをする結果となってしまった。

「ほら、こんな可愛い女子高生に虐められてほんとは嬉しいんじゃないの？」

１８歳になる女子高生、円満愛衣は、拐ってきた当時は小学六年生であった、中学一年生の慎吾をひたすら責めている。
お気に入りのアダルトショップの通販で買ったアナルバイブを根元まで突っ込み、激しく出し入れしていると、ムクムクと膨れ上がる小さなペニス。
無理矢理に責められているとはいえ、綺麗な顔立ちであることには間違いない円満愛衣に肛門を責められて、多少興奮するところも出てきた中学一年生であった。

「こんなにビンビンにしちゃってぇ……どこにバイブ突っ込まれてるの？」

「はい、愛衣様！　ぼ、僕のお尻の穴です……」

「気持ちぃいんでしょう？」

「は、はい。んんんっ！　あっ！　あはあっ！」

愛衣の手が激しく上下左右に動き、慎吾の直腸内をぐちゃぐちゃに掻き回す。

前立腺を的確に掻き回され、思わず射精してしまう慎吾。

「愛衣様っ！イ、イく……イくううっ！！」

「たっぷりお出しなさい」

「は、はいいっ！！」

『ドピュッ！！　ドピュピュピュピュピュピュウッ！！』

ゆっくりと慎吾の肛門からアナルバイブを引き抜きながら黒髪ロングのパッツン頭を左手で掻き上げながら冷たく微笑んだ。

「あははは！　手を使わずにイけるようになるまで性感が研ぎ澄まされてきたようね？　自分で出した汚いザーメンを舐め取りなさい」

「はい。愛衣様……ピチャ、ピチャ」

隣では兄の射精シーンを見せつけられながらも愛衣の母親である円満美絵子に犯される妹の姿があった。

『クチュクチュクチュクチュ！！』

「あっ！　あんっ！　あはあっ！！」

「お兄ちゃんがイッちゃったわよ？　アンタもさっさとイくんだよ!?　ほらほらほら！」

「あはああああっ！！　気持ちいいっ！！　イくっ！　イくううっ!!」

『プシュウウウウッ！！』

派手に小便を撒き散らしながら潮を噴き、全身を快感によって小さく痙攣させせる亜衣里だった。

「派手にイっちゃったみたいねぇ亜衣里。小学生のくせにオマセになっちゃって……オホホホホ♪」

亜衣里が漏らした尿までも本人に舐め取らせた後、鬼畜な母娘は嘲笑しながら調教部屋を出てゆく。

「今度あの二人に本番させちゃおうか？　お母さん」

「オホホホ！それもいいわねぇ。でも慎吾が実の妹相手に勃つかしら？」

「んんん……勃たない時は私の前立腺責めで無理矢理勃たせちゃう！」

「その手があったわね！　とにかく出来るヤラシいことは全てやらせて楽しみましょう♪」

ダイニングで盛り上がる二人だったが、突然玄関のチャイムが鳴り響いた。

「こんな時間に誰かしら？」

「私がいくよ。お母さんはゆっくりコーヒー飲んでて」

「うん。多分隣家の戸田さんね。回覧板か何かでしょう」

「そうだね。じゃあちょっと行ってくるね」

玄関の覗き窓から外を確認すると、宅配便らしきドライバーの姿が見えた。

「今晩は！　お荷物が届いております」

「え？　荷物？　お母さん何か頼んだのかな……はーい！　今開けます」

大きな箱を持ち上げて玄関に入り込むドライバーらしき男。
ハンカチらしき物を取り出すと、円満愛衣の口と鼻を塞ぐように被せ込む。

「んんっ！？　うううううんっ！？」

激しく抵抗するが、更に後から入ってきた男二人と計三人の男たちに身体を取り押さえられ、身動きできないまま意識を失う愛衣。
強烈な催眠薬を嗅がされた愛衣はそのまま深い眠りに落ちた。

「愛衣～っ！　愛衣～っ！」

玄関からなかなか戻らないため心配になって様子を見にくる母親の円満美絵子だったが、そのまま男たち三人に同じように催眠薬を嗅がされて深い眠りにつく。

「リーダー！　監禁されている兄妹の子供たちはどうするのですか？」

「一番奥の部屋の防音部屋と聞いてますが僕が行きましょうか？」

部下である２５歳の川内と原内が、リーダーの山内に問いかける。

「構わない。いつも我々が残酷処刑島まで連行した後、拷問処刑を執行する女性たちがもうすぐやってくることになっている」

黒いハイエースに乗り込むと、すぐにエンジンをかけて三人の男たちは円満美絵子と愛衣を拐って高級住宅街を後にした。

「リーダー！　毎回毎回僕たちの仕事になる処刑の後処理ですが……」

「どうした原内？　何か疑問でもあるのか？」

「いえ、疑問とゆうか提案とゆうか……もう少し内臓や肉片を散らかさないで処刑できないものでしょうか？　いくら慣れてきても毎回吐いちゃうんですよね僕……」

「原内の言うとおりですね。私もあそこまでズタズタにバラバラにしなくても普通に苦しめて殺すだけならもっと簡単だと思うのですが」

川内も原内に同乗する。

しばらく部下二人の愚痴を聞いてからも、まっすぐ前を見ながら運転を続けるリーダーの山内。

かなり車を走らせてから口を開く。

「………女性アイドルが拷問処刑人だなんて……なんて業の深い」

「え？」

「はい？」

リーダーの返事に思わず固まる二人。

「あそこまで人の身体をズタズタにバラバラにして処刑してるのって……女性アイドルだったんですか！？」

「マジですか……僕も知らなかったですよ今まで。ごつい身体のイカつい男たちが拷問処刑してる物だと思ってましたよ……まさかアイドルの若い女の子たちが……」

「菅野莉央とゆう小学生がセンターで、小学生と中学生ばかりで結成された“真絆ガールズ”とかゆうアイドルグループだったと思うのだが」

部下の若い二人は後部座席で顔を見合わせる。

「はいはい！　聞いたことありますそのアイドル名は！」

「あ、あのう……ま、誠に言いづらいのですが……私、そのグループのファンなんです。最近加入した宮垣咲良とゆう子が三年前に事故で無くした妻にそっくりなもんで……」

思わず沈黙するリーダーの山内と、若手の原内。

「し、知っているどころかファンだったのか……言いにくいがお前のファンである宮垣咲良も……最近拷問処刑人に加わって結構残酷さに磨きがかかってきてるそうだぜ？」

「そ、そんな……あの子が罪人とはいえ人を拷問して処刑まで出来るなんて到底思えません！」

再び沈黙が続く車内。

「会ってみるか？」

「え？」

いきなり交差点で転回する山内。

「監禁されている兄妹を迎えに行き、父親の住む家まで送り届ける役目に、宮垣咲良と菅野京介の二人が選ばれているんだ」

「じゃ、じゃあ本物の咲良に会えるんですか！？　で、でも無茶苦茶緊張するんですけど……」

「女性アイドルとはいえ一応拷問処刑人だからな。そりゃ緊張するだろうけど俺たちがビビる相手じゃあないさ」

「そっちで緊張してるんじゃないん……うわあっ！？」

急ハンドルで車内の右側に吹っ飛ばされる若手の二人。

「すまん！　猫が飛び出してきたんだ。ってゆうか後部座席でもシートベルト付けろよお前ら」

吹っ飛ばされて逆に怒られる二人だったが、黒いバンは再び円満邸の前に到着した。

赤いマーチの中で足をハンドルに上げてふんぞり返っている茶髪の若い男を見つける山内。

「このマーチに乗って偉そうにしてる奴が菅野莉央の兄であり、拷問処刑人である菅野京介だ。見た目のヤンキーぶりとは裏腹に超ヘタレで処刑はなかなか執行出来ないでいるみたいだな。近々解任される予定と聞いている」

「え？　ボーカルの莉央の兄ですか？　全く妹と似てないですね」

「一応男前ではあるけど……ホント似てないですよね確かに」

その頃、兄妹の監禁されている部屋の鍵を開けて中に踏み込む宮垣咲良。

兄妹は寄り添うように座りながら俯いていた。

パンツ一枚だけは、就寝前に身につけることを許されているみたいであった。

監禁されてから一年数ヶ月……ずっと酷い仕打ちを受け続けてきたのか全身のいたる所に痣や擦り傷が見受けられる。

「お家に帰りましょ」

ビクッと身体を大きく動かすと、咄嗟に抱きしめ合う兄妹。

あからさまに人影に怯えて、半泣きになりながら咲良の様子を窺っている。

そっと咲良は歩み寄り、二人の前に跪くと、兄妹は素早い動きで土下座をして、大声で謝り始めた。

「ごめんなさい！　すぐに下着脱ぎます！」

「亜衣里がイくところをお見せいたします！」

兄妹は何度もイかされているにも関わらず、咲良の前で各々オナニーを開始する。

「もうそんなことしなくていいんだよ」

二人の頭をそっと撫でると、二人は右手の動きを止めて咲良を見上げた。

「ようく見て。おねぇちゃんはあんな外道たちの仲間じゃないよ？　君たちを助けにきたんだ」

しばらく兄妹で顔を見合わせてから再び咲良の方に視線を移す。
ジワジワと少しずつ涙が込み上げてくる。
やがて号泣に変わり、咲良に抱きつく兄妹。

兄の慎吾は咲良と一つしか歳は変わらなかったが、痩せ細った身体でとても中学生には見えないほど衰えていた。

一年数ヶ月の間、まともな栄養を摂らせてもらえていなかった証拠である。

咲良はリビングから兄妹の服を運良く見つけると、早速二人に着せてあげた。

「お父さんのお家に帰ろうね」

「うん！　お父さんとお母さんに早く会いたい！」

一瞬笑顔になり、大声で返事する妹の亜衣里だったが、今回の事件の黒幕であり、これから残酷処刑島で処刑される運命の待つ母親である井関美喜代のことは何も話すことは出来なかった。

玄関の扉を開けて屋外へ出ると、見るからに怪しそうな男たち三人がこちらを見ている。

「あたいに何か用か？」

慌てて視線を逸らす三人だったが、気になったらとことん追求しなくては気がすまない性格である宮垣咲良は駆け足で詰め寄り恫喝する。

「あたいがあの家から出てくるのを知ってたかのようだったね？何者だあんたら？」

「あ、あの、あの」

「特殊任務省所属の山内とゆう者だ。一応先輩である俺たちにその口の利き方はないな」

咲良のファンである川内は舞い上がってしまい、理想のアイドルを目の当たりにして頬を赤くして緊張しているが、それを遮るようにリーダーの山内が咲良へ話しかけた。

「特殊……あ、あたいたちの上の人になるのか……す、すみませんでした！」

「いや、こちらも盗み見するような現れ方で申し訳なかった。コイツが君のファンだと言うのでな。会わせてやりたかったんだ」

頬どころか顔中を真っ赤にした川内がどもりながら必死で挨拶する。

「ど、ど、どうも！　咲良推しの川内と申します！　あ、握手してもらっていいですか！？」

先輩とゆう立場を忘れ、咲良にヘコヘコしながら右手を差し出す。

「そう言っていただけると悪い気はしませんね。ありがとうございます」

咲良も素直に握手に応じた。

握手の後小型の手帳とボールペンを取り出して、サインまでしっかり貰う川内をよそに、原内は眉間に皺を寄せた厳しい表情で咲良へ話しかける。

「あの、宮垣咲良さん。残酷処刑島での任務、お疲れ様です。僕は原内と申します」

「え!?　あ、あ、はい!」

「ご存知かと思われますがあなた方が処刑した遺体は僕たちが毎回処理してるんですね。散らばった肉片や臓器を拾い集めて一人一人最終的に土葬してるんです」

「はぁ。それはありがとうございます。ご苦労さまです」

「できれば……必要以上にバラバラにすることはやめて欲しいんですよ。ライフルで頭吹っ飛ばすとかしなくても殺せますよね?　オーバーキルはできるだけ控えて欲しい」

四人の間に沈黙が訪れる。

しばらくしてリーダーである山内が口を開いた。

「できるだけ派手に……残酷に殺すことが君たちの仕事だもんな。みんなその辺を分かっていて無茶苦茶な処刑方法をとっているんだろう?」

「はい。ごめんなさい。理不尽な殺され方をした被害者やその遺族の悲しみを少しでも晴らすためには手段は選ばないんです」

「菅野莉央の言いそうなセリフだ」

「！！」

図星を突かれた咲良は、目を見開いて山内の無精髭を生やしながらもホリの深い整った顔を見詰める。

「莉央に会ったことあるんですか？」

「……数ヶ月前に一度だけ会った。俺が今の嫁の家へ養子に入る前の頃だから今の名前で言っても分からないだろうけどな」

「よろしく伝えときましょうか？」

「いや、構わん。向こうは俺の名前すら覚えてないだろうし」

と言いながら山内はいきなり振り返り、右足の踵が咲良の右の頬を目掛けてすっ飛んでくる。
山内得意の後ろ回し蹴りだ。
たまに罪人と戦うこともあるこの三人は、空手、柔道、剣道と、全て三人全員が二段の腕前であった。

『ブシュンッ！！』

「！？」

咲良は咄嗟にしゃがんでこれをかわし、そのまま両手を地面につ

いての足払いをかける。
蹴り足が戻る前にかけられた軸足。
転ぶしかなかった。

『ガッ！！……ステーンッ！！　ドンッ！！』

「ぐわっ！？」

まともに受け身も取れず思いっきり派手に尻餅をついて動揺する山内。
即座に左足で踏み込み、右脚の膝を顔面に合わせる咲良。

『ブシュンッ！！』

「ぐっ！！」

『ピタッ！』

「……」

鼻っ面数センチの所で寸止めだった。

「どうゆうつもりだ？」

「さ、流石だな……力はあくまで女性なんだろうけど反射神経と筋

力のバネがハンパじゃない。こりゃその辺の男では敵わないはずだ」

山内の部下の二人はポカーンと口を開けて一部始終を見ている。

「え？や、山内さんを？……マジか……咲良つよっ！」

ファンである川内はサインをもらった手帳を思わず落としてしまっていた。

戦えばほぼ同等の三人である一人、山内が負けるとゆうことは束になってかかっていかないとこのアイドルの少女に勝てない、とゆうことになる。

原内は言葉すら出てこずに、文字通り固まっていた。

「ふざけるな！　もうちょっとであたいの顔に傷がつく所だったぞ？　今のは本気の蹴りだったよな！？」

「ああ……もし今のが君にヒットしていたら……次回の残酷処刑島での拷問処刑は、俺たちも護衛に在籍させてもらおうと思っただけさ。悪気はない。許してくれこの通り」

山内はそのまま土下座をして咲良に謝罪する。

何も言わずに目を大きく見開いたままその姿を見詰める咲良。

やがて三人の特殊任務省の先輩たちは、黒いハイエースで走り去

る。
心配そうに見守っていた井関慎吾と亜衣里が咲良に駆け寄って抱きつく。
二人の頭を撫でながらまだ少し怒りが消えないでいる咲良だった。
「アイドルの顔面を本気で蹴ろうとするなんて……とんでもない奴だな山内は……先輩の風上にもおけないクソ野郎め」
ぼそっと愚痴をこぼしながらしばらく兄妹二人の頭を撫で続けた。
「見事に転ばされましたね？」
「ああ。本気で最後の膝もらってたらダウンしてたかもな……あの強さで女子中学生アイドルとは……女子学生の風上にもおけないガキだなアイツ……」
「それは言えますすね。私もファンとはいえあんなに強いとは思わなかったもので……ビックリしましたよホント……」
原内は未だに一言も喋らない。
固まっている。
「おい原内？　まだ宮垣咲良の強さに動揺してるのか？」
「え？　あ、すみません！　あの娘のワンシーンがまだ頭から離れ

なくて……」

「そりゃそうだよね。私も山内さんの顔面にヒットするかと気が気でなかったから。本当によく寸止めで堪えてくれたもんだよ」

そう答えた咲良ファンである川内の顔をジッと見詰める原内。

「ん？　どうした？　まさか原内まで咲良のファンになったのかな？」

あまりに見詰められるので思わず問いかける川内だった。

「違うんだ。僕の脳裏に焼きついたのは……」

「焼き付いたのは？　足払いか寸止めの膝だろ？」

山内は後部座席にいる二人の部下の会話を聞きながらも黙って運転している。

「パンツ」

「はぁ？」

「純白のパンツにイチゴの柄が沢山付いてた」

「！？」

川内の顔色が変わる。

「な、なんだと！？　俺には見えなかったぞパンツなんて！？」

「僕の立ち位置からは丸見えだったんだけど。ファンの川内には非常に言いづらいことだが……すまん。無茶苦茶可愛くて未だに脳裏にイチゴが何個も浮かぶんだ。僕もファンになっていいかな？」

「お、おのれえぇぇぇ～」

冗談ぽく言いながら半分本気で原内の胸ぐらを掴み、かなり強く揺すぶりまくるヤキモチやきの大人になりきれない川内であった。
ハイエースの更に後部の檻の中では、そんな騒ぎもつゆ知らず円満美絵子と愛衣が深い眠りに堕ちて爆睡していた……。

赤いマーチの後部ドアを開ける菅野京介。

「おかえり咲良。子供たち、無事に救い出せたんだな？」

「はい。無事に救出とゆうか……藤堂長官の部下たちが来ていて罪人たちは先に連行されてたみたいだから……単に連れ出してきただけ……ですね」

「どうぞ。慎吾くんに亜衣里ちゃん。お家まで送らせて貰うからね～。良くバカの相手を一年半も耐え抜いたよ。立派だな君たちは」

不思議そうな表情でマーチに乗り込む慎吾と亜衣里。

咲良は信頼していても、金髪の男、菅野京介のことはかなり怪しんでいるみたいだった。

咲良を助手席、後部座席に慎吾と亜衣里を乗せて、京介の運転するマーチは一路、井関勝男の住む井関邸を目指して走り出す。

「山内さんって知ってます？」

「いや、聞いたこともないけど？」

「山内さんと川内さんと……原内さんだっけ？　確か。その三人があたいに接触してきたんですさっき」

「ほう。どいつも知らないなぁ俺は」

「特殊任務省の人たちで、あたいたちが残酷処刑島で処刑する前に罪人たちを拐ってくる仕事してるみたい。その後の遺体の片付けもしてるみたいです」

京介は顔を顰めながらゆっくりと左右に首を振りながら答える。

「オエエエ～。嫌だなその役目……俺なら莉央たちがバラした遺体なんて見たくもねぇぜ。勘弁してくれよって感じ」

「あたいは慣れて来ました」

「そ、そうか。それは良かった、良かったなぁ。ははは！」

かなり動揺する京介だったが、所詮ヘタレ男より遥かに残酷で気合いの入った咲良には敵わない部分であった。

どうでもいい会話をしながらもマーチは井関邸の前に到着した。

「さぁ着いたぜ！　パパと感動の再会と行こうぜ咲良」

「そうですね。さぁ慎吾くん、亜衣里ちゃん、お家に着いたよ。お父さんに会いに行こう」

笑顔で会釈すると、真っ赤なマーチから飛び出して一目散に家に駆けつけて玄関を開ける慎吾。その後を亜衣里も追いかける。

ゆっくりと後からついてゆく咲良と京介だったが、兄妹の大きな悲鳴を聞いて、慌てて玄関から飛び込んだ。

四人の前に現れたのは……ドアノブにビニールロープをくりつけ、首吊り自殺を図り、既に生き絶えていた井関勝男の変わり果てた姿であった。

舌を突き出し、泡を噴いて糞尿も垂れ流し、哀れな死に様を子供

たちに見せつけている。

「お父さんっ！！」

「パパァッ！！　やだあっ！！　死なないでえええっ！！」

父親の亡骸にしがみつきながら号泣する兄妹の姿を見ながら、宮垣咲良と菅野京介は声一つかけてあげることもできないまま、ただ突っ立って母親に裏切られて悲惨な運命に陥った親子たちを見守るのみであった。

しばらくしてから妹の亜衣里が咲良に抱きつき、叫び出す。

「咲良おねえちゃん！　ママは!？　お母さんはどこにいったの!？」

「あ、あのお母さんは……」

「ざ、残念だがお母さんは先月交通事故で死んじゃったよ」

咄嗟に嘘をついてしまう京介。

彼なりの優しさであったが、それを聞いて辛い思いをすることには違いがなかった。

全ての希望を失ったかのように声が枯れるほど泣き喚く兄妹。

たまらず咲良は部屋を飛び出した。
後を追う京介だったが、咲良の姿が見当たらない。
辺りを走り回ってやっと見つけたのは、小さなボロいアパートの階段に座る咲良の姿だった。
「咲良……辛いのはわかるが俺たちの使命はここまでだ。もう帰ろう」
「……分かってる。もう少しだけそっとしといてくれませんか？」
急に降り出した雨により咲良も京介もビショコになってしまっている。
「風邪ひくぜ？　早く車に帰ってきなよ？」
「はい……」
明くる日、咲良は特殊任務省の藤堂長官に直接電話をかける。
「あの、おはようございます。宮垣です」
『ああ。どうした？　私に直で電話など初めてのことじゃないか？拷問処刑の任務には慣れて来たかね？』
「はい。かなり慣れました。今日は例の兄妹のことについて相談が

ありまして……」

「うむ。分かっている。知り合いの孤児院に連絡して、そこで暮らしてもらうことにしたよ。あの家は私たちが責任を持って売り払い、将来成人した時にあの兄妹たちに返してやるつもりだ」

自分の意思を全て見抜いている藤堂長官に一瞬たじろぎながらも慌ててお礼を言う咲良だった。

「ありがとうございます。ちなみにどうして今回の犯人があの親子だとわかったのでしょうか？」

『スーパーでの会話だよ』

「スーパー？」

『そうだ。あの親子は調子に乗って監禁中の兄妹のことを人混みのスーパー内で話してたのだ。それをたまたま聞いた人からの通報が警察に入り、捜査を進めて犯人が特定され、我々に二人の処分の依頼がきた』

「すごい小さなことから分かるモノですね……感服いたしました」

『ハハハハ！　感服したのかね？　警察省と特殊任務省の底力はヤクザも顔負けだからな！　ハッハッハッハッ！！　では菅野くんとともに本日の昼からは頑張ってくれたまえ』

「え？　本日昼って……」

『ガチャ！……プー、プー、プー』

言いたいことを言って電話を切る藤堂長官に半ば呆れながらも菅野莉央に電話する咲良。

本日昼から夜にかけて先日自宅で首を吊り亡くなった井関勝男の元妻、美喜代と、円満美絵子と娘の愛衣の処罰について、執行人に咲良自身も選ばれていることを確認する。

――――そしてその日の正午、残酷処刑島。

「はひいいいいっ！！　あひゃああああっ！！」

素っ裸で手足を切断されて木の杭に縛り付けられている女性の姿があった。

慎吾と亜衣里を友人に売り飛ばし、元旦那を自殺に追いやり、のうのうと贅沢に暮らしていた井関美喜代である。

鬼頭美紅がダルマ女にされた美喜代の前に立ち、中指を性器に差し込む。

「いやあっ！？　助けて許してっ！！」

『クチュ！……クチュチュチュチュチュチュチュチュッ！！』

激しい美紅の手マンが開始された。

ダルマ女にされても思わず感じてしまうのは、痛み止めの麻酔注射を莉央から受けていたためである。

「あはあああっ！！　あんあんあんあんっ！！　気持ちいいいっ！！」

「あんたが人に売った子供たちも無理矢理気持ちいい目に遭わされたんだよ？　あんたも思い知るがいいわ。ほらほらほらぁっ！」

何度も何度も美紅の指でイかされたダルマ女の井関美喜代は、涎を垂らしながら更に美紅の指をねだる雌豚と化してしまう。

潮を噴こうが糞尿を漏らそうが、美紅の激しい手マンは続けられた。

２０回ほどイかされたあと、ようやく美紅の指は美喜代の膣から引き抜かれ、人生最期の快楽は終わりを告げる。

日本刀を抜いて再び美喜代の前に立つ美紅。

何度も何度も高速で刀身を振り付ける。

『ズバズバズバズバッ！！』

見事に切り刻まれていったのは胸であった。左右の乳首、左右の乳輪、左右の乳房。
手際よく一つずつ斬り落とされていった。

「んぎゃぁああああっ！！　痛いっ！　痛いいいいっ！！」

「手足を切り落とされているのに今更痛いの？　あはは。笑わせるわね」

『ドスッ！！』

美紅は美喜代のお臍に切っ先を突き入れた。
背中まで貫通させて内臓を臍ごとグリグリと掻き回す。

「グギャギャギャギャアアアッ！！　ぎひいいいいいいっ！！！！」

麻酔も切れて来た頃に、オッパイ切断と臍から串刺しはさすがに地獄を味わうハメになってしまう井関美喜代。

日本刀を臍から引き抜くと、今度はしゃがみ込み、肛門から切っ先を差し込んだ。

『ズブ！……ズブブブブ』

「ひんぎいいいいっ！！　許してお願いやめてえええええっ！！」

何も答えずに刀身を手前に抉る。
肛門括約筋を手前に斬り裂いた刃は、更に手前にある性器までも縦に真っ二つに斬り裂いた。
そのまま更に上部へ捏ねると、尿道口とクリトリスまでもが真っ二つになってしまう。

「んぎいいいいいいいっ！！　ひゃああああああああっ！！」

白目を剥いて人生で最大レベルの激痛に苦悶の表情を浮かべながら絶叫する美喜代であった。
性器を斬り裂いた後、再び垂直に戻し、肛門から口まで貫通させる美紅。

「ほら、悪友の円満美絵子の見てる前で先に逝きなさい美喜代」

「あばばばばっ！？　ピギィッ！！！！……ガックン」

息子と娘を売った鬼畜な母親は人生最期の断末魔を上げてこの世をさった。

「ひっ！？　美喜代さん？　し、死んじゃった？　嘘でしょ！？
ひ、人殺しいいいいっ！！　警察呼ぶわよおおっ！？」

素っ裸で縛り付けられている円満美絵子と愛衣の親子は、目の前で見せつけられた井関美喜代の拷問処刑を見て狂ったように喚き散らし始める。

「人殺しっ！　人殺しぃぃぃぃっ！！」

泣き叫ぶ愛衣の母親である美絵子は、小学生アイドルである菅野莉央によって小さくされていく。
チェーンソーは一分も経たないうちに中年の女性の手足を付け根から切断していった。

チェーンソーを地面に置き、美絵子を四つん這い体勢で縛り直す。すぐに鉄の杭を手にすると、ゆっくりと美絵子の肛門から突き刺した。

「ここね？　汚いケツの穴は？　ほらっ！」

『ズボッ！！　ズブブブブッ！！』

「ぎひぃぃぃっ！？　痛いぃぃぃぃっ！！　やめてお嬢ちゃんっ！！」

ある程度刺し込むと、今度は大型の木槌に持ち換える莉央。
当たり前のように肛門から刺しこんだ鉄の杭を木製の槌で打ち込んでゆく。

『ドカッ！！　ブチュチュッ！！……ドコオッ！！……バチュチュ！！』

「んがあっ！！　ぎひいいいいっ！！　やめて！！　死んじゃううううつっ！！！！」

五回ほど打ち込んでから娘の愛衣の元へ歩みよる莉央。

「お母さんの肛門からの串刺し刑だよ。どう？」

「やめてっ！！　なんて酷いことするのっ！？　今すぐやめてええええっ！！」

泣き叫ぶだけの状態から、母親である美絵子を救うために必死で莉央を罵倒する女子高生の愛衣。

横に立っていた宮垣咲良がそっと手を伸ばして愛衣の膣へ中指を捩じ込んだ。

『グチュ！！』

「んひゃあっ！？　やめてええっ！！」

愛衣の叫びを無視して激しく膣の中を掻き回す咲良。

「この汚いマンコから串刺しにして逝かせてやるからな？」

「ひっ！？　や、やだ！？　殺さないでっ！！」

『ブチュゥウッ！！』

「やっはあああああっ！？」

間髪入れずに今度は左手の中指を肛門に根元まで突き入れる。

「ケツの穴とマンコ……どっちの穴から串刺しにするかは選ばせてやるよ。ありがとうございますは？」

「やはあっ！　痛い！　抜いて……お願い」

抜くどころか更に激しく両手の指を掻き回す咲良。

『グチュチュチュチュチュチュッ！！　ヌプププププププッ！！』

「ほらほらあっ！　どっちの穴から串刺しにされたいか聞いてるんだよおっ！？　ああっ！？」

「やだあっ！！　わーんわーんっ！！」

ついに宮垣咲良とゆう中学生アイドルに責められた高校生、愛衣は号泣してしまう。

「円満愛衣。あなたは人は殺してないのよね。しかも兄妹を拐ったのもバカな母親の企みだった……」

「ぐすん、ぐすん。そうなの。私、あのね。こんなことされることした覚えないの。だからお願い。許して……ぐすん」

縛り付けられながらも死の覚悟がなかなか定まらない愛衣は懸命に助命を願うのであった。

「一つだけ助かる方法があるんだ。実行できたら……だけど。やってみる？」

莉央は微笑みながら素っ裸で縛り付けられている愛衣に問いかける。

「本当に助けてくれるの？　な、何でもします！　ありがとうございます！」

「あなたの母親である美絵子の肛門串刺し刑……続きをあなたがやりなさい」

「えっ！？　や、やだ！　そんなこと出来るわけないっ！！　酷いっ！！」

莉央は静かにライフルの銃弾を装填する。

『ガチャ！』

「分かった。じゃああなたの下の口、おまんこからこのライフルで吹っ飛ばしてあげちゃう♡」

「ひっ！？　ま、待って！　や、やってみます！　やらせて下さいっ！！」

死を恐れるあまりに自身の母親である美絵子の横に大きな木槌を持って立つ愛衣。

「ほら、打ち込め」

莉央が冷ややかに急かす。

しばらくためらっていたが、意を決したように思いっきり横方向に振りかぶり一気に打ち込む愛衣だった。

『ドカアッ！！……ズボボボボボオッ！！　ブチブチブチブチッ！！』

「ひぎゃあああああああっ！！　いだいいいいいっ！！　愛衣っ！　お願いだからやめてえええっ！！」

「ごめんなさいお母さんっ！　えいっ！」

『ドカアッ！！……バチュチュチュチュチュウッ！！』

「ぎゃあああああああああっ！！！！」

何度も何度も木槌で母親の肛門に刺し込まれた鉄の杭を打ち込む愛衣。
ついに口から鉄の杭の切っ先が飛び出した。

「がはあっ！！　愛衣、愛衣……ガクンッ！！」

死ぬ寸前まで自分を殺そうとしている娘の愛衣に対して愛情を捨てなかった美絵子に感服する莉央と咲良と美紅だった。

「よくやったわね。まさか自身の母親である美絵子の処刑なんて出来るとは思わなかったけど。本当残酷な性格だわ」

美紅は拍手喝采。

咲良は背後から抱きつき、二つの胸を後ろから揉みしだく。

『ギュッ！！　ムニュムニュムニュムニュッ！！』

「あっ！？　あんんんっ！！　やめて……」

そのまま莉央は愛衣の前に跪き、膣に中指を差し込んだ。

『グチュグチュ……クチュチュチュチュッ！！』

更に激しく膣内を掻き回す。

「あんっ！？　やだっ！　イくっ！　イッちゃううううっ！！　あはあああああああああっ！！！！」

咲良と莉央は肛門と膣から指を引き抜くと、冷たく微笑みながら愛衣の顔を見つめる。

「あなたは今日からあたしたちの仲間になることを命ずる！」

「え？　どうゆうことでしょうか？　はぁ、はぁ」

咲良と莉央に指で犯された股間の二つの穴を両手で押さえながら問いかける愛衣。

「殺さないで命を助けてあげる代わりに次回からの残酷処刑島での拷問処刑人になりなさい、と言ってるのよ？　分かる？」

莉央がクリトリスを人差し指と親指で摘み、激しく上下左右に振り回す。

「イヤイヤイヤイヤアッ！！　イく！　またイッちゃうううっ！！あはああああんっ！！」

今度はクリトリスで小学生アイドルにイかされる女子高生の愛衣。

「あなたほど残酷な気性なら平気でやっていけるはず。それと……あなたには家も部屋も与えられないから。あたしの部屋でペットとして飼わせてもらうからそのつもりでいて」

「え？そ、そんな」

『パァンッ！　パンパンパンパンパンパンパンパンパンッ！！』

「ひぐうっ！！　はぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃあっ！？」

股間を粘液で濡らしながら莉央の往復ビンタで倒れ込む愛衣。

「分かりましたっ！　私、円満愛衣はこれからの人生、拷問処刑人として粉骨砕身、頑張っていきますっ！　そして……菅野莉央様のペットとして、奴隷としてこの身果てるまでご奉仕させていただきますことをここに誓わせていただきます！」

「よくできました。咲良さん、美紅ちゃん、きちんと聞いてくれましたよね？」

「うん。莉央ちゃんに逆らったらあたしがいつでも殺しにくるからな。覚悟しとけよ女子高生」

「確かに聞いたよ莉央。愛衣が歯向かうようなことがあったらあたいも愛衣を殺すの手伝うから」

とりあえず命が助かったことに安堵しながら残酷処刑島をみんなと共に後にする円満愛衣。

残酷処刑島に新たに二人の遺体が加わった。

二人の子供を非道な人間に売りつけた母親。
凄惨な最期を当然の如く迎えることになった。
更にもう一人の極悪人の母、円満美絵子は、何の因果か変な性癖を共に楽しんだ実の娘から直々に手を下されて命を奪われることになる。

唯一生き残った罪人、円満愛衣１８歳。

これからの人生は女子高生ながら拷問処刑人として……菅野莉央の奴隷として生きてゆくことになる。

『もしもし。菅野くん、本日の任務遂行ご苦労様。予定通り円満愛衣だけは処刑せずに生かして帰って来れたかな？』

「はい。彼女の犯した罪は重大ですが、拷問処刑するまでには至らないレベルでしたから。でも十分に恐怖を味合わせて自身の母親である円満美絵子を処刑するとゆう哀れな行為を実行させました」

『そうか。それは本人もかなりキツかったであろうな……一応井関美喜代と円満美絵子と同じく行方不明扱いにしてあるので戸籍上は彼女はこの世に存在しないことになった』

「はい。あたしが責任を持って菅野家で養います。高校へは行かせてあげられない代わりにインターネットで勉強はさせてあげようと思ってます」

『ほう。それは菅野くんにしては珍しく優しいじゃないか。何か特別な感情でも芽生えたのかね？』

「…………以上です。本日は疲れたのでこれにて失礼します」

『ん？ ちょっと待て……もう少しいいではない……ガチャ！ プープー……』

意表を突かれてドキッとした莉央は咄嗟に電話を切った。

莉央の内緒の恋人である同級生、富田美香がどうゆう反応をするのか現時点では全く分からないが、そのうち円満愛衣のことは美香にも話さないといけないと覚悟した莉央は、部屋の天井を見上げてため息をついた。

「高校生とはいえ同性の女の子と同棲なんて言ったら美香ちゃん怒るだろうなぁ……ふぅ」

数日後の日曜日。
菅野莉央は学校もアイドル活動も休みだった。
兄の京介はお婆ちゃんと一緒にマーチで買い物に出掛けていた。

「二人きりだね愛衣」

「は、はい莉央様」

ベッドに押し倒して円満愛衣の通う制服のまま、スカートを捲り上げ、パンツの下に右手を滑り込ませる莉央。

「やだ、莉央様、こんな昼間っから……」

『クチュ、クチュ、クチュ』

「あんっ！　いやんっ！」

莉央の指技に一分と持たない内に昇天してしまう円満愛衣。

「舐めろ」

「は、はい。ペチャペチャ、ペロペロ」

「んっ！　んんんっ！　もっと舌を膣に突っ込んで！」

「んんんっ、はい！　莉央様っ！　グチュ！　クチュクチュ！」

「気持ちいい……愛衣、あたしイく！イッちゃううううっ！！」

『プシャーッ！！』

円満愛衣の卓越した舌捌きに思わず潮を噴かされる莉央だった。

「はぁ、はぁ、はぁ、どうしよう。美香ちゃんだけじゃなく愛衣まで愛しちゃったみたい……あたしって最低……」

なんだかんだ思いながらも女子高生の愛衣に、肛門まで舌を入れて舐めさせる莉央であった。

知らぬが故の無鉄砲（前書き）

若者に人気のギオンモール百貨店。
仲良く買い物に出かける莉央と愛衣だった。

「このベージュのワンピースも似合いそうだね」

「それも素敵ですね！　でも愛衣には高すぎて勿体無いです」

「いいよいいよ。あたしが買ってあげるから。寝間着はあたしとお揃いのピンク色のコレでいいでしょ？」

「あ、はい！　莉央様とお揃いにしていただけるなんて愛衣は幸せです！」

東部地方にある有名な超大型規模の百貨店ギオンに仲良く買い物に来ていた莉央と愛衣。

側から見れば仲のいい姉妹に見えた。

母親である円満美絵子を目の前で亡くしただけではなく、トドメを刺したのは娘である愛衣自身だった。

それを強制させた側の本来憎むべき側の人間……それが菅野莉央であったのだが、自分だけは命を助けてもらえた、喧嘩してもとても敵わないことは本能でわかっていた、とゆう様々な理由から莉央に対して畏れだけではなく、尊敬や服従の気持ちまで表れてきている愛衣だった。

その服従心は後々優しく扱ってくれる莉央に対して、少しずつ愛へと変化してゆく。

あくまで服従的な愛、奴隷としてのM的な愛ではあったが……。

「ああもう！　なかなか取れないっ！」

ムキになってぬいぐるみを取ろうとする莉央。

「あ、それもう取れてますよ！　反対側から手前のアームを当てて転がすようにすれば次で取れそうです」

「ほんど！？　じゃあ代わりにやってみて！」

「はい」

見事に３００円の一回で大きなクマのぬいぐるみを転がし落とした愛衣。

「すっご！　ありがとう愛衣」

「いえいえ。莉央様に喜んでいただけて光栄です」

しばらくレースゲームや格闘ゲームを楽しんで、最後のシメに二人で何枚もプリクラを撮った。

百貨店を出る頃には休みの日曜日も終わる間際、夕方になっていた。

「なんか漫画であったよね。愛衣みたいな名前の女の子が人を地獄に流すやつ」

「地獄少女！　愛衣も大好きで毎週見てました」

「あの主人公の決め台詞、“　いっぺん死んでみる？〟　みたいのを愛衣も作ろうよ」

「は、はい。今度の初仕事からですよね？」

「そうそう！　実際は二回目だけど……実のお母さん結構平気で殺してたよね？」

「あ、ありがとうございます！　正直かなり辛かったのですが……でも自分が助かるなら致し方ないと割り切ったら、意外と勝手に手が動いてました……」

「あはは……別に褒めてはいないんだけどな……でもその残酷さなら本当これから先拷問処刑人として拷問も処刑もやっていけるよ愛衣は」

「は、はい」

「罪人をイかせる時に……　〟いっぺん、イってみる？　〟　その後トドメを刺すときは、“　いっぺん、逝ってみる？　〟　とかいいんじゃない？」

「あの莉央さん……書いたら違いがわかっても喋るとどっちがどっ

ちゃら見分けつかないですよね？　言ってる単語は同じですから……」

「あっ！　そうか！　なら……男は“いっぺん射精してみる？„で、女は“いっぺん潮噴いてみる？„でいいんじゃない？」

「もうそのまんまですけどそれならＯＫですね！では愛衣が罪人をイかせる時はそのセリフ、使わせていただきますね！」

「あはは！　ダイレクト過ぎかな？　でも最後は“いっぺん、逝ってみる？“で締めくくってね！」

電車を待ちながら夕陽に頬を染めてつまらない会話をする二人。

ふと目の前に一人の小学生が立ち止まる。

「！！　美香ちゃん！？」

「その女子高生と仲良さそうだね莉央ちゃん？」

睨みつけながら仁王立ちする美香に、かなり動揺する莉央。

「え！？　あ、あのこれは……藤堂長官から命令されて殺さずに静かに暮らさせろ、とのことであの……これからあたしたちと一緒に残酷処刑島での執行人としても……デビューとゆうことで」

しどろもどろになる莉央に更に被せ込む美香。

「ギオンの中で買い物中……手を繋いでたよね？　プリクラまで一緒に撮ってたよね？」

「あ！　あの、それは……」

「莉央ちゃんはその女を好きになっちゃったんだね！？　あたしには莉央ちゃんしかいないのにっ！」

「ご、ごめんなさいっ！！好きになったことは確かだけど美香ちゃんのことも大好きなんだ！」

眉間に皺を寄せて莉央を睨みながら頬を伝う涙。
富田美香は莉央のことが本当に大好きで、小学生同士ながらもレズ行為も何度も行っていた。
裏切りとも取れるこの度の行為に、かなりショックを受けていた。

「わーんわーん！！」

突っ立ったまんまで大声で泣き出す美香に、莉央はどうしていいかわからないであたふたしている。
円満愛衣はそっと立ち上がり、美香の前で膝をつき、肩をギュッと抱きしめた。

「！？　な、なにを……」

目を見開いて動揺する美香の頭を優しく撫でながらツインテールの頭頂にキスをする愛衣。

「ごめんなさい。この度皆さんの仲間になりました円満愛衣と申します。莉央様から何度も美香様のことを好きだと聞いてました」

「え？　そうなの？　正直にあたしのこと話してたんだ莉央ちゃん……」

「はい。罪悪感がすごいけど美香様も愛衣のことも好きになっちゃった、とかなり悩んでおられました」

そのまま美香に口付けする愛衣。

「んっ！？　ちょ、んんんっ！？」

莉央はかなり複雑な心境で目の前の二人のキスを静観している。

「美香様も愛衣のタイプです。これからは三人で愛し合っていきませんか？」

「ええっ！？」

「え！？」

美香と莉央が同時に反応する。

再度抱きしめながらキスをしてくる愛衣に、美香は悪い気がするどころかゾクゾクとくる電気のようなものを感じて、何か愛衣に対して興奮してきていた。

「んっ。んんん！」

「んん。美香様も愛衣を愛して」

「んあっ！んんん。もう……分かったよ！莉央ちゃんがそれでいいならあたしは構わないよ」

キスを止めて愛衣と美香が莉央の固まった表情を覗き込む。

「え！？　あ、そ、そうだね！　さ、三人でこれからは愛し合っていこうよ！　あは、あはは！」

こうして奇妙な三角関係……ではなく奇妙な女子高生女子小学生のレズトリオが完成したのであった……。

――――明くる日、東部地方。

赤霧島小学校六年三組では、本日も女子による男子の折檻が行われている。

「あたしたちの前を通り過ぎながらオナラをするなんて……失礼にも程があるよ」

富田美香が杉田章介とゆうクラスメイトの男子の胸ぐらを掴みながら威嚇する。

『カチャカチャ……』

結城明日香がその隙にしゃがみ込んで杉田章介のベルトを外す。

「やっ！　やめてっ！　脱がすのだけはやめてっ！！」

喧嘩で敵わないことを悟っている章介は、半泣きになりながら明日香にお願いする。

『カチャ……スルスル』

ベルトを外してズボンから抜き取ると、チャックを全開に開けて一気に足首まで引き摺り下ろす明日香。

『チィーッ……ガツッ！　ストーンッ！！』

「ひゃああっ！？　やめてええっ！！」

勢い余ってパンツまで同時に足首まで脱げていた。

「あはは！　パンツごとずらしちゃったね♡」

莉央がすけべそうに微笑みながら椅子に座って脚を組んだまま皮かむりのペニスを見詰める。

「ほら、私たちの見てる前で自分でオチンチンの皮を剥けるだけ剥きなさい！」

「うっ、見ないで……恥ずかしいよぉ」

授業そっちのけで全生徒が振り返ってまでこのリンチを鑑賞して

いた。
恥ずかしさのあまり涙が溢れてくる章介。

『ズドッ！！』

「んがあっ！！！！」

明日香は立ち上がり、いきなり陰部に膝蹴りをぶち込んだ。
思わずしゃがみ込んで号泣してしまう。

「早くオチンチンの中身を見せないと睾丸潰しちゃうわよ？」

珍しく明日香の機嫌が悪かった。

「ぐすん、ぐすん……」

ゆっくり立ち上がって親指と人差し指で自分のペニスを摘み、ゆっくりと剥いてゆく。

「痛いっ！！こ、これで限界ですぅ」

「チンカスだらけで臭いオチンチンだね？　お仕置きが必要だから

四つん這いになってお尻を高く突き上げなさい」
「は、はい、しますから痛いことはしないでくださ い結城様」
「下半身だけ素っ裸になって何を言ってるの？　立場を考えなさいよ？」
結城明日香の勢いが強過ぎて、菅野莉央と富田美香は苦笑いしながら見ているだけだった。
クラスメイトたちは真顔で静観している。
担任教師は莉央たちの仕返しを恐れ、何食わぬ顔をして黒板に数字を書きまくり、必死で算数の説明をしているが、誰も聞いてはいなかった。
「自分の両手でお尻の穴が見えるように思い切り開きなさい」
「は、恥ずかしい……もうやめてよ結城さん……」
「開かないならこの縦笛を肛門から突き刺してやるんだから。それでもいいのね？」
「ひっ!？　そんなの無理っ！　分かりました！　開きますぅ」
イジメている莉央たち三人だけではなく、クラスの男女全員に見られているとゆう羞恥心が、更に涙を誘う。
止めどなく涙を流しながら歯を食いしばる男子児童であった。

明日香の利き手によるお尻叩きが開始される。

『パンッ！　パンッ！　パンッ！　パンッ！』

「いたっ！　うっ！　んっ！　ひっ！」

「いちいち喘がないの！　男の子でしょ！？」

「ごめんなさい結城さん……」

両側の臀部が真っ赤になるくらい十分くらい平手打ちを続ける明日香。

歯を食いしばって痛みに耐える杉田章介だったが、床に肩と胸を着けて、お尻だけを突き上げて、両手で肛門が見えるようにお尻を開いた非常に恥ずかしい体勢のまま、本人にとっては無限とも思える時間が流れた。

楽しい時間に比べて苦痛な時間は長く感じるものである。

「莉央ちゃん、ごめんなさい」

「どしたの？」

「愛衣さんを含めた三人で付き合い出したこと、明日香ちゃんに話しちゃったの」

「ええっ！？　内緒にしとこうって言ったじゃない？」

「本当にごめん！　なんか後でバレたら余計気分悪くしちゃうかなって思ってついつい……ごめんなさい」

普段冷静な明日香が怒りに任せて男子児童のお尻を引っ叩く姿を見ていると、一発で納得する莉央だった。

「ほらあっ！　直腸が見えるくらいまで思いっきりお尻の穴開きなさいよっ！」

『スパァンッ！！』

「んぎゃあっ！？　痛いいいっ！！　あーんあーん！」

遂にクラスメイトが見てる前で恥ずかしい姿のまま号泣してしまう章介。

「ふぅん。ピンク色の綺麗な直腸してるわね」

「わーんわーん！　もう許してよおおっ！　わーんわーん！」

人差し指をそっと肛門へあてがう明日香。

「だめ。許さない。ココは？」

『ピトッ……』

「んはあっ！？　そんな汚いとこ触らないでえぇっ！！　恥ずかしいっ！！」

「触るだけで済むと思ってるの？　ほらっ！」

『ズブッ！……グリグリッ！……ズボボボ！』

「あひゃあああっ！？　いやああああっ！！」

根元まで人差し指を挿し込むと、肛門括約筋が張り裂けそうになるほど激しく上下左右、奥、手前に掻き回す明日香。

「杉田の直腸にガンがないか触診してあげるから大人しくしてるのよ？」

『グチュチュチュッ！　グボオッ！　グリグリッ！　グチュグチュッ！』

「痛いいいいいっ！！もうやめてえぇえてえっ！！」

「少し腸液で湿ってきたからもう一本挿れてあげる。ほら！」

「んああっ！！　痛いっ！！　やだああっ！！」

中指まで挿し込んで更に激しく掻き回すこと五分……少し直腸が

爪で傷ついたのか、穴の奥からの出血が見て取れた。

「明日香ちゃん！　腸壁傷ついちゃったみたいだからもうアナル責めはそのくらいにしといてやって」

莉央が直腸内を激しく掻き回す明日香の指を静止させる。

「……分かったよ。ついつい熱くなっちゃってごめんなさい」

莉央に言われるがままに、ゆっくり章介の肛門から二本の指を引き抜く明日香。

「もういいわ。パンツと服を着なさい」

「えーんえーん！　わーんわーん！」

「ちょっと痛過ぎたわね？　ごめんね杉田」

「ぐすん、ぐすん！　はい。もういいです。今度からは気を付けます。許してくれてありがとう結城さん……ぐすん」

涙を手で拭きながら鼻水を啜りながらパンツとズボンを履く杉田章介の姿を一部始終見終えてからクラスメイトたちはようやく前の教壇方向を向いた。

「明日香ちゃん、黙っててごめんね。なんか話しづらくて……」

「いいよ。なんか私だけ一人ぼっちになったような気分になって少し悲しかったから……ついつい杉田に当たってしまった。こちらこそごめんなさい」

冷静になった明日香を見てとりあえず安心する美香と莉央だった。

「明日香ちゃんには莉央ちゃんのお兄ちゃんがいるよね？　ね？　あはは……」

美香は恐る恐る明日香に質問する。

「もう別れたよ」

「ええっ！？」

同時に大声を出してしまう莉央と美香。

「つい最近の話だけど、京介さんに京介さんと同い年の彼女ができたの。私のことも好きだけど新しく知り合ったその女性の方が歳も近いし話が合うから……まだ若いキミにはもっといい男がこの先い

くらでも寄ってくるさ。だとさ」

「……あのクソアニキ……そんなの明日香ちゃんを振るための言い訳に過ぎないじゃん。帰ったら懲らしめてやるんだから」

「もういいよ莉央ちゃん。私もあんな歳上の人と付き合うのなんてどうかしてた。両親にも話しにくかったし……独りでも平気だよ」

同性に興味のないノーマルな明日香に対し、四人で付き合おうとも言い難く、莉央と美香は気まずく俯いて黙ることしか出来なかった。

その時、授業が終わるチャイムが鳴り響く。

「五時限目の算数はこれにて終わります。ではこのままホームルームに入りますね。本日の授業はこれで終わります。起立、礼、皆さんさようなら」

「先生、さようなら」

最後の挨拶も終わり、六年三組の生徒たちが帰宅を始める。
莉央と美香的にはタイミング的に救われた感じになった。

「じゃ、じゃあ明日香ちゃん！　また明日ね」

「気をつけてね！」

「うん。また明日。あなたたちも気をつけて帰ってね」

挨拶をして帰路に着く明日香。

その後を少し時間をずらして下校する二人。

「かなり気まずかったね莉央ちゃん……」

「そだね。でも後になるほど気まずく苦しくなるから美香ちゃんのお陰で早期に安心できたよ。ありがとう」

「いやぁ！　それほどでも！　うふふふ♡」

口が軽い自分を責めることもなく、褒められて浮かれる相変わらずな能天気娘、富田美香であった。

菅野邸に帰宅した莉央は、早速2階の京介の部屋に上がる。

『ガチャン！』

「おわあっ！」

『ドピュッ！！　ドピュピュピュピュピュピュウッ！！』

「あんっ！　京介さんったらイっちゃったのね！　まだ私イってないのにいいいっ！」

莉央がいきなり入ってきたせいで思わず射精してしまった京介。

「ご、ごめんな菜摘！　妹が急に入ってきたからビックリしちゃって……おいこら莉央っ！　人の部屋に入る時はノックぐらいしろよ！」

「早速連れ込んでエッチかぁ。やれやれだなぁお兄ちゃんは……」

「い、妹さん？　は、初めまして！　神崎菜摘と申します。京介さんとはネットの出会い系で知り合って……色々話が合うから友達でずっといたんだけど……三日ほど前にリアルで会って見たらすごくカッコよくて……そんでね、あのね」

「お兄ちゃんをよろしく」

『バタン』

マシンガンのように喋る京介の新しい彼女、神崎菜摘の長い挨拶を遮るように一言挨拶を返して部屋を出てゆく莉央。

「まだ菜摘が喋ってるのに……冷たい奴だなアイツ」

「い、いいのよ京介さん。いきなり素っ裸でエッチしてる男女が現

れたら妹さんもビックリするでしょ？　あはは」

「それもそうか。まぁ悪気はないと思うから許してやってくれ！　ガハハハハ！」

下の部屋まで聞こえるほどのバカ兄貴の高笑いに頭を痛くしながらも、莉央は愛衣とお婆ちゃんの三人で夕食をとる。

「京介さんってタフですね？」

「え？」

「昼から今まで何回も何回もエッチしてたみたいですよ。莉央様の部屋で愛衣はずっといましたから、何度も何度も女の人の喘ぎ声を聞かされました」

「……クソアニキでごめんね。さっき藤堂長官からも電話がきて、正式に菅野京介の解雇を伝えてきたよ」

「何か失敗でもされたのですか？　お兄様は」

「失敗とゆうか……ヘタレだからまともに処刑も出来ないし仕舞いには明日香ちゃん裏切って女作っちゃうし……付き合う相手が出来たら基本的に拷問処刑人から外されちゃうから」

「え？　莉央様と美香様と愛衣の三人は大丈夫なんですか？」

「結婚も出来ない歳だ心配ないよ。ってゆうか藤堂長官には一応内

緒にしてるし。あはは……ずるいなあたしも」

「ずるくなんてないですよ！　そりゃ結婚がまだまだ先の話になるのですから恋愛すらしないなんてどっちでもいいと愛衣も思います！」

黙って二人の会話を聞いていたお婆ちゃんが口を開く。

「あの子は見た目と違って優しいからねぇ。神崎菜摘さんとやらもきっと幸せにするだろうさ」

「そ、そうかな？　浮気性だし心配しちゃうよ」

あとは黙々と夕食を摂り、莉央の部屋に帰る二人。

布団を敷いているときにいきなりドアが開いた。
そこに立っているのは先程とはまるで違う険しい表情をした神崎菜摘だった。

「おいクソガキ！」

別人のような雰囲気でいきなり放つ言葉が莉央の耳に届く。

「え？」

「え？　じゃねーわ。いきなり入ってきやがってびっくりしたじゃねーかよ！　お前のせいで京介がイっちゃったじゃねーか！　私がまだまだ気持ちよくなりたかったのにどうしてくれる！？」

　まさにほんの半時間前とは全くの別人だった。
猫を被るとはこういうことを指すのであろう。
しばらく現実を受け入れるのに時間が必要だった莉央は、布団を敷きながら呆然と菜摘を見つめている。

　つかつかと部屋に入り込んできて莉央の胸ぐらを掴んできた。

「お兄ちゃんは？」

「あんっ！？　京介はタバコ切らしてコンビニに買いに行ったよ。今のうちに私のことを妹やババアに分からせておいてやろうと思ってな。人間舐められたらお終いだからなっ！」

　莉央は現状を完全に把握した。
ゆっくりと掴んでいる手の甲に手のひらを当てがい、思いっきり捻る。

「ぐわっ！？」

　勢いよくすっ転ぶ菜摘に馬乗りになると、激しく往復ビンタを打

ち込んだ。

『パンパンパンパンパンパンパンパンッ！！』

「びぶうううううううっ！？」

トドメに正拳突きを鼻に入れる。
鈍い音がして鼻の骨が粉砕し、激しく鼻血を噴き出させる菜摘。
更に数回往復ビンタを叩き込むと、必死になって許しを乞い始める京介の彼女の菜摘であった。

「やめて！　お願いっ！」

「愛衣。コイツのスカートとパンツ脱がしてくれる？」

「はい。莉央様」

『ズルル……ズルリ』

「ヒャアッ！　な、何を！」

見事にパンツごとスカートをずり下ろす愛衣。

「じっとしてないと子宮を抉りだすわよ？」

「うっ！　は、はい」

莉央の強さに畏れを成した二十歳の女は、小学生と高校生の女の子に素っ裸にひん剥かれてゆく。

先ずは莉央の電気アンマが開始された。

グリグリと陰部に擦り付けるような電気アンマは、莉央の白い靴下を粘液で濡らしてゆく。

『グリグリ……グチュグチュ』

「やだ。お前何濡らしてるの？」

「んっ！　んあああああっ！」

たまに親指の爪先を膣口に突っ込んでは掻き回し、抜いては足の裏で外陰部や尿道、クリトリスをグリグリと踏み込んだ。

「やんっ！　いやっ！　んんんっ！」

「莉央様、この女イきそうですけど？」

「まずイかせてから地獄を味あわせてやるの」

「そうなんですか……莉央様に喧嘩売ったのですから、いきなり地獄でも良かったのでは？」

ひたすら菜摘の陰部を足の裏でグリグリと踏み込みながら、どうやって痛めつけるか思考を巡らす莉央。
「あんっ！　イくっ！　だめえっ！！　イっちゃううううっ！！」
「イけよ！　ほらあっ！」
『グリグリ！　グチュグチュ！　グチュチュチュチュチュチュチュッ！！』
「やっはああああああんっ！！！！」
『ビクッ！　ビクビクッ！　プシャアアーッ！！』
思いっきり潮を噴きながら下半身をビクビクと痙攣させて硬直させる菜摘。
莉央の靴下は足の裏全てが愛液と小便とオリモノでびしょびしょに濡れてしまっている。
女子小学生の電気アンマで思いっきりイかされてしまった兄である京介の彼女であった。
「すごく豊満なオッパイだねコイツ。愛衣！　内出血するほど強く揉みしだいてやって！」
「はい！　莉央様」

『ガツ！　ガツ！……ギュウウウウッ！！』
「はぁ、はぁ、ひっ！？　痛いっ！！　痛いいいいっ！！」

見かけによらず力は強い愛衣だった。
二十歳の豊満な胸を無茶苦茶になるほどの勢いで捏ねくり回す。同性の、しかも小学生の足の裏とはいえ、イかされた瞬間は天国を味わい、次の瞬間胸が引きちぎれそうなほどの激痛に襲われる。

「やめてぇえっ！！　痛いいいっ！！　お願いっ！！　胸が潰れちゃうううっ！！」
「あはは！　結構強いんだね愛衣」
「こう見えて愛衣は空手と柔道二段なんです」
「ふーん。凄い。なぜあたしにかかってこないでされるがままに奴隷化してるのかな？　今からあたしとやる？」
「と、とんでもないです！　格闘技をやってたからこそ本当に強い人は本能で分かりますから」
「ふうん。そんなもんなんだ」
「はい。そんなもんです。そんなことより莉央様、コイツのオッパイ潰しちゃいます？」

二つの胸は、紫色になるほど愛衣の５０を超える握力で強烈に揉みしだかれる。
仰向けになったまま性器からは愛液を垂れ流し、胸を潰されそうになりながら号泣して鼻水を垂れ流しながら許しを乞う菜摘。
莉央は電撃棒を取り出して菜摘のオマンコにゆっくりと差し込んでゆく。

「あたしの靴下も汚い液で汚されちゃったし……ぼちぼちトドメに入っちゃおうかな。コレは痛いよぉ～？　それっ♡」

『グリッ。つぷ！』

「ひゃあっ！　冷たいっ！？」

「鉄製の棒だから冷たいよ。でもこれから電撃でマンコの中焼いてあげるからイヤとゆうほどあったかくなるから覚悟しといてね？　あはは♪」

「ひぃっ！？　やだそんなこと！　お願いやめて許してなんでもします！り、莉央様！　お願いします許してくださいっ！！」

「愛衣以外から様付けなんかで呼ばれたくないよ。ムカついたから膣だけじゃなく子宮と卵巣まで焼いてあげる」

「ひぃいいっ！！　お願いだから許してええええっ！！　わーんわーん！！」

子宮口まで鉄製の電撃棒を突っ込んだ所でドアが開いた。

「お、おい！　何をやってるんだ莉央！？」

「ん？　何をって……見たらわかるでしょ？　今からお兄ちゃんの彼女の死刑を執行するの。そこで見てて」

慌てて駆け寄り愛衣と莉央を突き飛ばす京介。

「だ、大丈夫か！？」

「きょ、京介！　京介えええっ！！　わーんわーん！！」

「莉央。この棒って……1000ボルト超えの殺人級の電撃棒だよな？　マジで菜摘を殺す気だったのか？」

「マンコの中焼いたくらいで死なないでしょ。ってゆうかそんな女やめといた方がいいと思うよあたしは。ねぇ愛衣？」

「はい。京介さんのことも舐めてかかっていらっしゃるように見受けられました」

震えながら泣き続ける菜摘を抱き起こして、莉央と愛衣を睨みつける京介。

ゆっくりと膣に半分ほども差し込まれている電撃棒を引き抜くと、莉央に土下座する。

「この通りだ！　コイツはこんな奴なんだよ！　でも俺は愛してしまったんだ！　だから頼む！　菜摘を、許してやってくれ！」

「お兄ちゃん？　土下座までして妹に許しを乞うなんてどうかしてるよ？　そいつを置いてこの部屋から出て行って」

「莉央！　お願いしますっ！　この通り！」

額を擦り付けてまでの土下座で許しを乞う兄の姿を見て、力が抜けてくる莉央。

「はぁ。もういいよ。お兄ちゃんがそう言うなら好きにしたら？　でもきっと後悔するよ？」

「愛衣も莉央様と同じ意見ですお兄様」

「分かってる。後悔してもいいんだ。でも今俺はコイツのことが一番好きなんだ」

「はいはいお兄ちゃん。あのね、正式に特殊任務省からの解雇が決定したから。もう人を殺さなくてよくなったよ？　良かったね。とゆう訳でサッサと菜摘をあたしの部屋から連れて出て行って」

「あ、ああ。すまんな！　さぁ行こう菜摘。莉央のこと詳しく話してなくてすまない。俺にも非がある」

「ぐすん。ぐすん。もういいよ京介。なんて強い小学生なの……助けてくれてありがとう」

「ああ！　立てるか？」

「うん」

京介は菜摘に肩を貸して莉央の部屋を出てゆく。

「莉央様。アイツの衣服が落ちてますが？　愛衣が返してきましょうか？」

「ありがとう。お兄ちゃんの部屋の前に置いといてやって」

「はい」

そっと京介の部屋の前へ菜摘の衣服を置いて莉央の部屋に帰ってきた

愛衣は、莉央にそっと抱きついた。

「今夜も愛衣を虐めてください」

「……うん。お尻の穴もう少し調教してあたしの手首まで飲み込むようにしてあげるね？」

「イヤッ♡　莉央様のエッチ♡」

頬を赤くして下着を脱ぎ、布団に入る愛衣。
莉央も一緒に入る。

「縛ってから調教してくれませんか？」

「ホントMだよね愛衣は。本気出せばかなり強いのに……」

「いえ、莉央様には敵いませんから！　早く愛衣のアナルを犯してください！」

かなり興奮しながら四つん這いになってお尻を突き上げる愛衣。

「M時開脚よりバックがいいのね？　分かったよ」

『つぷ……ズボボ！』

「あはあっ♡」

二人の愛し合う長い夜は続く……。

知らぬが故の無鉄砲（後書き）

見た目の判断で喧嘩を売る相手を間違えた菜摘。
京介に救い出されながらも心に大きな傷を負うハメになってしまった。
性格の悪さを分かった上で結城明日香よりも菜摘を選んだ京介。
二人の未来に幸せあれ。
数ヶ月続いた女子小学生と二十歳の大人の恋は実ることなく終わりを告げた……。

大量殺人犯には容赦はしない（前編）（前書き）

幼い子供二人と共に拷問処刑となってしまった核家族。
四人の運命はいかに？

大量殺人犯には容赦はしない（前編）

「こ、ココは？」

「お目覚めですか。ココは残酷処刑島と呼ばれている無人島です」

「……残酷処刑？　聞いたこともない島だな……こんな場所で素っ裸で拘束されているとゆうことは俺はもう生きてはこの場所から帰れないってことだな？」

「お察しの通りです。家族ぐるみで団地の人たち数十人を毒殺した罪はあまりにも重い。この度の主犯であるあなたには、奥様と子供さんたちを拷問処刑する場面を一部始終見て頂きますね？」

「そ、それは勘弁してくれ！　どうせ一家皆殺しにされるなら俺を先に殺ってくれ！！」

稲畑道明３５歳。
妻の優美子と小学三年生の娘、芽依と、五歳の幼稚園児である孝善の四人家族である。

残酷処刑島での初任務に就く円満愛衣。
莉央に服従してからは言葉遣いも丁寧になり、罪人にまで敬語を使うほどであった。

「先ずは奥様の優美子さんから始めますね？」

愛衣がそう言うと、宮垣咲良が髪の毛を鷲掴みにして岩山の陰から現れた。

「ほら、最期に夫に会わせてやるよ。早く来い！」

「痛いっ！　髪が千切れるっ！　ひいいいっ！」

髪の毛をボサボサにされながらも気の杭に縛り付けられている稲畑道明の眼前に連行されてくる妻の優美子。

「あなた……私たち一体どうなっちゃうの？　子供たちはどこ？」

「す、済まない。俺にも子供たちがどこにいるのか分からないんだ。この島に連行されてきていることには違いないだろうけど」

「この子たちは一体何者なの？　ちょっとお嬢さん！　あなたたちは何者で私たちをどうする気よ！？」

咲良は黙ったまま質問に答えず、大きなハサミで白いワンピースを切り裂いてゆく。

何度も何度も切り抜く内に、とうとう下着のみの姿となってしまう。

「や、やめなさいよ！　危ないでしょう？」

『パァンッ！！』

「ひぎっ！？」

抗おうと咲良の手を掴むと、強烈な平手打ちが頬を襲う。
焼けるように痛む頬を抑えながら咲良の強さに怯え始めていると、スルスルとパンツを脱がされた。

「ひゃあっ！？　やめてっ！！　パンツだけは許してっ！！」

「あのねおばさん……パンツ脱がさないとマンコ破壊出来ないでしょ？　お前のマンコは今からあたいがズタズタにしてやるんだから覚悟しろ」

「やだ！？　そ、そんなことやめてお願いっ！！」

宮垣咲良の殴る蹴るのイジメのような暴行が始まった。

『パンパンッ！！　ズドッ！！　ドカッ！！』

「ひっ！　や、やめっ……痛いっ！　きゃあっ！」

全身が赤や紫色に染まってゆく。

たまらずうつ伏せになり背中を丸めてお腹側をガードする優美子。

「やめてえええっ！！　痛いいいっ！！」

咲良は顔をお尻側に向けて、反対向きで馬乗りになる。

そのまま鋼製の直径１０センチほどのフックを取り出すと、性器へ突き刺した。

『ズボッ！！』

「んぎゃあああっ！？　痛いっ！！そ、そこはやめてええっ！！」

「マンコから刺し込んだフック手前の、上方向に捻ってきて……と。肛門から抜く。えいっ！」

『ブチブチッ！　バシュウッ！！』

なんと、膣から突っ込んで肛門からフックの切っ先を突き出させた。

優美子の二つの穴は同時に貫通される。

「ぎゃあああああっ！！！　いだあああああああっ！！！！」

そのまま更に上方向に思いっきり引っ張り上げると、フックの通っている部分である会陰部が、モリモリと盛り上がり、引きちぎれそうになる。

「ほらあっ！　このまま会陰部引き裂いてマンコとケツの穴繋げてやろうかっ！？　あはははは♪」

『モリモリ……ぐちゅちゅちゅちゅ！　メリメリ！』

フックに貫かれた二つの穴からは湿り気のある卑猥な音が何度も響いてくる。

血と愛液と腸液とオリモノと便によるハーモニーであった。

「んぎゃあああああっ！！　死ぬうううううっ！！」

フックの内側部分を少し研いであるので、ナイフほどまではいかなくとも、あまりに強く引っ張ればそのうち会陰部は引き裂けるほどの鋭利さではあった。

『ブチブチ……メリメリメリメリ！』

「いくよ？　マンコとアナル。繋げてあげる！　それえっ！！」

『グリンッ！！……メリメリバリバリッ！！　ブチィッ！！』

「あぎゃあああああああーーーーッ！！！！」

優美子の股間を引き裂いた血みどろの鋼製のフックを優美子本人の眼前でプランプラン揺らして見せつける咲良。

「ほらぁ。見てこのフック。お前の色んなもの着いちゃってるでしょう？　臭いなぁほんと」

馬乗りになっている咲良を、跳ね除けるほどの勢いで立ち上がると、股間を押さえて気が狂ったように号泣する優美子だったが、股間からの血の勢いが治らない。

ドバドバと内股を伝って地面に流れ落ちてゆく。

「人殺しいいいいっ！！　いだいいいいいいいっ！！」

「ふん。なにが人殺しだよ。聞いてて呆れるわお前には……」

今度は戦国武将が扱うような大きな槍を手に持ち、クルクルと回す。

「食らえ！あたいのヤリ捌き！……さみだれ突きいっ！！」

『ヒュヒュヒュヒュヒュヒュヒュヒュンッ！！』

何度も疲れる槍の矛先は優美子の胸や腹部、太ももや腕やにまでも容赦なく突き刺さる。

全身が穴だらけになりながら二つの手では傷を押さえきれなくなる優美子は、もう一度倒れ込むしかなかった。

「ひぎいいいっ！！　痛いっ！！　やめてえええええっ！！」

「何を丸まってるんだ？　早く立てよ！　オラオラオラオラオラッ！！」

『ヒュヒュヒュヒュヒュンッ！！……ズドドドドドッ！！』

今度はうつ伏せに丸まっている背中を穴だらけにする槍の矛先。

「もうやめろおおおっ！！」

いきなり叫び出す夫の稲畑道明だったが、咲良の手は止まるどころか更に激しく何度も優美子の全身を貫きまくった。

出血が多すぎたのか、ついに抗う気力も無くしてペタンとカエルのような格好で仰向けにひっくり返る。

咲良は右足の裏で顔面を踏みつけると、右手の槍を下方向に突き刺さるよう持ち替える。

「汚いヘソ……こうしてやる！」

『ズドオッ！！』

「けぴいっ！！」

お臍から突き刺された矛先は、裏側の背骨を直撃するまで深くめり込んだ。

『ぶしゅっ！』

「んが……ああ……あ」

だんだん虫の息になってくる優美子。
出血は激しく、全身の穴から股間から止めどなく噴き出していた。
咲良は冷たく微笑みながら槍を水平方向へ持ち直すと、そのまま鈍く光る矛先を繋がってしまっている股間へ押し当てた。

「真っ赤っ赤でぐちゃぐちゃになってるからどこが膣かケツ穴か分からんけど……トドメをさしてやるからな。ほら！」

『バチュッ！！　ズボボボボボッ！！』

「ピギィッ！？……ひぎひぎひぎいい……いいい」

動かなくなっても串刺しにされている激痛は感じるのか、大きく開いた両脚をパタパタ開閉させながら咲良の刺しこむ槍の矛先に対して無意識に抗おうとする。

お構いなく両手でしっかりと柄を握って、力強く刺し込んでゆく咲良だった。

『ズブズブズブッ！！　ぐちゅちゅちゅちゅちゅ！！　バリバリバリ！！』

何枚もハラワタを突き破り、口を目指して突き進む矛先を咲良がぶち込んだのは……肛門だった。

血まみれの会陰部の上側に、引き裂かれた肉片の内側に、パクっと開く穴が見えた。

「あたいが差し込んでいる上に穴があるってことは……ケツの穴に刺さってるんだコレ……女の串刺しはだいたいマンコからなんだけど……ま、いっか。どっちも恥ずかしい穴には違いないしな。オラアッ！！　肛門から口まで串刺しにされる気分はどうだ？　クソ女っ！！」

「ひぎっ！　ひぐうっ！……ゴボゴボッ！！」

白目を剥いて涙と涎を流しながら全身を痙攣させ始める優美子。膣口は血と愛液の混じった赤い粘液が何本も糸を引いたままパックリ開いている。

「ヤラシいなぁ。てかてか光るマンコの内側曝け出しやがってぇ♪」

「ごぽぽっ！　ぶくぶく」

血の泡を吐きながら痙攣を続ける優美子に容赦なく追い討ちをかける咲良。

『グチャアッ！！』

縦に繋がってしまっている膣口と肛門に、爪先が殆どめり込むほどの勢いでトゥキックをぶち込んだ。

『グリングリン！……ぐちゃぐちゃ！』

卑猥な音を立てながら膣と直腸からも真っ赤な泡状の粘液を垂れ流す優美子。

「やめろっ！　やめてくれああっ！！」

妻の悲惨な姿をまともに見ることができず遂に目を固く閉じて真横を向いてしまう道明。

「咲良さんすごいヤラしいエッチな殺し方してますね莉央様」

「うん。ヤンキー時代はあんなエッチじゃなかったんだけどね。あたしたちの責め方見てる内に性的な責めのＳに目覚めちゃったみたい。あはは……」

引き裂かれて剥き出しになった膣道と直腸を足の裏でグチャグチャに掻き回す咲良に、妙に感動する愛衣だった。

ふと前の夫を見ると、なんとペニスをフル勃起させている。

「え？やだコイツ！　莉央様っ！　コイツ自分の奥さん殺されてるのに勃起させちゃってますうっ！！　酷いっ！！」

不適な笑みを浮かべながら、大きな注射器を持ったまま微笑む莉央。

「超強力な精力増強剤配合の勃起薬！　バイアカマグランよ。最近特殊任務省の元で開発されたの。頼んだのは私だけどね」

「だ、だからこんな状況でも勃っちゃうんですね……納得です」

「さぁ愛衣！　愛しい妻の最期を見ながら射精してしまう超哀れな男を演じるの手伝ってあげて！」

「あ、は、はい！」

莉央の要求を理解した愛衣は慌てて道明のペニスを右手で握る。
そのまま高速でシゴキ始めた。

『シコシコシコシコシコ！』

「うぐっ！？　な、何をする！？　やめろっ！！」

「そのように高圧的な態度に出られるなら……更に手の動きを早めますが？　ほらほら！」

『シュコココココココココココッ！！』

「ううっ！？　んんんぬぬぬぬうっ！！」

意識とは別にとんでもない快感が道明の陰部を襲う。
女子高生の愛衣の手コキは莉央と変わらないほどの凄まじい速度で雁首を擦りまくる。

「いっぺん、射精してみる？」

『シュコココココココココココココッ！！』

「うぐうっ！　おわあああああっ！！」

『ドピュッ！　ドピュピュピュピュピュピュウッ！！』

咲良が槍の柄を思いっきり蹴り込み、妻の口から矛先が飛び出した瞬間、息絶えた瞬間、大量の聖液を愛衣のスカートと太ももにへりかけてしまう道明だった。

「うぐ……優美子！　優美子おおおっ！！」

激しく痙攣して昇天した妻の姿を見て号泣してしまう道明だった。しかしペニスからはまだ精液が何度も飛び出している。

「あはははっ！　射精しながら泣かないで頂けます？　愉快な方ですね？」

「愛衣の手コキ速度スッゴ！」

「いえ、それほどでも……お褒めいただきありがとうございます莉央様」

槍を肛門から口まで貫通させられて、痙攣しながらもまだボロボロになった股間を足の裏で掻き回す咲良。

「ほらほらほらぁ。旦那が見てる前でマンコもアナルもぐっちゃぐちゃにしてやるよぉ♡」

咲良は、貫通した槍を肛門から引き抜くと、マシンガンを手にして優美子の遺体に銃口を向けて静かに構える。

「奥さんの見納めだよ？　オチンチン勃ててる場合じゃないのに……」

「うう……や、やめてやってくれ」

「もう死んでるし」

そう言いながら今度は莉央の手コキが始まった。

『ガガガガガガガガガッ！！』

優美子の身体は浴びせられる銃弾によって、みるみる内に小さな肉片と化してゆく。

「うわあああああっ！？　ゆ、優美子おおおっ！！」

『シコシコシコシコシコ！……シュココココココココココココッ！！』

「おうっ！　ゆ、優美子お、おおおうっ！　はうっ！！」

『ドピュピュピュッ！！』

「あははは♪　だから泣き叫びながらイくなって！ほんと受けるぅ～♪　あはははは！」

女子高生の次には、女子小学生に手コキで二度までもイかされる３５歳の大量殺人犯、稲畑道明。

原型を留めている頭蓋骨も執拗に銃弾を浴びせて、バラバラに粉砕する咲良。

脳みそと目玉が飛び散り、咲良の太ももに飛沫が当たる。

「快感っ♡　あ、きったねーなぁもう。人の脚に飛ばしやがって！これって脳みそだよな？」

宮垣咲良の拷問処刑は、完全に終了した。

ペニスから糸を引きながら精液を垂れ流し、号泣する道明をよそに、富田美香が長女であり、八歳になる芽依の手を引いて現れた。

「め、芽依っ！　芽依ぃぃぃっ！！」

「あ、パパッ！！　どうして縛られてるの？　どうして裸なの？」

芽依は腰まで伸びた艶々の黒髪をなびかせながら、富田美香に質問する。

「あのねぇ。パパはねぇ。もうすぐ凄いものを見てしまうんだよぉ」

「凄いものってなぁに？　おねぇちゃん」

「芽依ちゃんのね……」

「うん。あたしの？」

「もがき苦しんで死んでゆく姿だよ」

美香のことがツインテールの素敵なおねぇちゃんに映った芽依は、言葉の意味を理解できないでいる。

いきなり無人島に連れてこられたとはいえ、お父さんとお母さんと弟の四人で楽しくバーベキューをするように美香から聞いていたからである。

「し、死んでゆく？　え？　バーベキューだよね？　おねぇちゃん？」

「バーベキュー……ほら、この辺りにお肉が沢山落ちてる。これ焼いて食べる」

「ええっ？　地面に落ちてるお肉なんてヤダよぉ！」

「ママの変わり果てた姿なのに」

「え？」

結城明日香も、弟の幼稚園児を連れて岩陰から現れる。

「美香ちゃん、そいつ先にやるの？」

「そだね。このガキをやってからその弟をやって……絶望を見せつけてから最後にお父さんだね」

「分かった。じゃあ手伝おうか？」

弟の孝喜は、５歳になったばかりであった。
６歳を迎えることもなく、幼稚園児でこの世を去ることになろうとは、本人も家族も思ってもいなかったであろう。

「パパも見てくれてるし、おねえちゃんたちとお医者さんごっこしよっか？」

「うん！　あたしが先に先生する」

「それはダメ！　やっぱり歳上のあたしが先だよ。後であたしたちも芽依ちゃんにきちんと診てもらうから」

「そうよ。私たちが歳上なんだから譲ってね芽依ちゃん」

美香と明日香は目一杯微笑んで良い人振りをしながら、芽依をベッドに寝かせて拘束してゆく。

首の上に幕を下ろして自分の身体を見えないようにすると、全身数箇所に注射を打つ明日香。

「痛いっ！　痛あっ！？」

「痛かった？　ごめんね芽依ちゃん。もう注射は終わったからじっとしていてね♪」

注射を打ち終えると、明日香は弟の手を引っ張って父親の元へ歩き出す。

美香は舌なめずりしながら小型の電動ノコギリとメスを手に取り、姉である芽依の解剖へと専念する。

『ヴィイイイインッ！！』

「なんか凄い大きな音してるね？」

「そうねぇ。なんか堅いものに当たってるなぁ。ガンかな」

「ガンなら取って！　あたし長生きしたいから」

「分かった！　取ったげるね♪」

美香は電動ノコギリの刃を上に向けて小さな児童の膣に突き入れると、尿道とクリトリスごと、恥骨まで切断してゆく。

お臍まで切りあげてからメスに持ち替え、肛門を丸くくり抜いてから大陰唇、小陰唇を切除していった。

「おねぇちゃん。なんか大変そうだね？　あたしのガンってそんなにたくさん出来てるの？」

「うん！　ガンだらけだよ芽依ちゃんの下半身は」

適当に話を合わせながら、麻酔で全く痛みを感じていない女子児童の下半身を切り刻んでゆく美香。

くり抜いた肛門部分にメスを入れてから性器まで繋げるように、上へ切り開く。

ついに膣と肛門が繋がってしまった。

更に深くメスを入れ、直腸を掴めるほど周りの肛門括約筋を削ぎ落としてゆく。

「よし！　これで直腸掴めるぞぉ♡　大腸引き摺り出してやる」

『ギュッ！　ズル！　ズルズルズルルルル！』

「え？　大腸をなに？」

「なんでもないよー♡　もう少しジッとしててね芽依ちゃん♡」

「なんかオシッコするところあたりが熱いな」

「熱い？　そうなんだ。少しずつ麻酔が切れてきてるのかもね……地獄の痛みを味合わせてやるからね」

「え？　おねぇちゃん言ってること怖いよ？」

パックリ恥骨ごと切開されてまっ縦に大きく切開された女の子の股間。

その性器と肛門は、周りの皮と肉を全て削ぎ取られ、二つの穴が肉片に空いている、とゆう見た目になっていた。

下側の穴、すなわち肛門があった部分からは、引き摺り出された直腸、大腸がぶら下がっている。

今度はお臍の切開部分から左手を差し込んで、小腸を引き摺り出してゆく。

大腸は肛門から。小腸はお臍から引き抜いた。

胃の真下にメスを入れて十二指腸を切断すると、お腹の下半分は完全に空洞化してしまった。

「な、なんか身体が……ふ、震えてきたんだけど？　お、おねぇちゃん、なんかお腹も痛くなってきた……診て！　あたしを診て治して！」

「任せておいて！　美香様はナースの神様とクラスで言われてるほどの腕前なんだよ実は！」

ナースはナースでも黒いナース……悪魔のナースであった。

くり抜かれた性器の穴に右手をぶち込み、子宮を卵巣ごと引き摺り出した。

「これでよし！　悪いガンの部分は全て切除できたよ？　芽依ちゃんはこんな腕のいい美香様に手術してもらえて幸せだなぁ。あははは♪」

もう一度電動ノコギリに持ち替えると、両脚の付け根から切断してゆく美香。

「なんか身体が痛くなってきた！　おねえちゃん、痛いよおっ！」

「あはははは！　自分の下半身をよく見て！　それえっ」
首からかけてある幕を取り去る美香。
臍から性器にかけて縦にパックリと開いた下半身を見て思わず固まる芽依。

「え？」

「ん？　どうかしたの？　芽依ちゃん？」

「キャアアアアアアッ！？」

「あはは♪　なんて顔して驚いてるのよバカだよねほんと」

とんでもない自分の姿に、狂ったように号泣を始める芽依。

「芽依ぃいいいっ！！」

その姿を目の当たりにした父親の道明は、泣き叫ぶしかできなかった。
円満愛衣は莉央から教わった通りに、道明の陰嚢を根元から切り取ってゆく。
服を脱がすように下方向に皮を引っ張ると、見事にズルリと金玉袋が脱がされた。
白い膜に覆われた生の睾丸が哀れにぶら下がっている。

激痛のあまり狂ったように全身をくねらせる道明だったが、愛衣の手はまだ止まらない。

今度はペニスを掴み、根元から円を描くようにメスを入れる。

上方向に引っ張ると、見事にズルリとこれまた服を脱がされたように皮がズル剥けて、ペニスの付け根から雁首までの皮が剥がされ、真っ赤に染まるペニス。

「ぐわあああああああっ！！　痛いいいいいっ！！」

「娘はもっと痛い目に遭ってるよ？　睾丸とペニスの皮を剥かれたくらいでお騒ぎにならないで下さいね道明さん」

優しく囁く愛衣だったが、ズル剥けにされたペニスと睾丸からは鮮血が流れ落ちていた。

大量殺人犯には容赦はしない（前編）（後書き）

目の前で惨殺された妻を見てショック状態の上に、今度は下半身をズタボロにされた娘の姿を見せつけられる父親……道明。

道明本人も射精の快楽の後、遂に性器の皮を剥かれ、拷問に突入した。

長男の拷問は、明日香と美香が、芽依のトドメを刺した後、道明を殺す前に行う予定である。

遂に愛衣と莉央による道明への本格的な拷問が開始されようとしていた……。

大量殺人犯には容赦はしない（後編）（前書き）

ペニスを皮を引き剥かれ、激痛に襲われながらも目の前の娘の哀れな姿を見せつけられ、号泣を続ける道明。

妻に続いて娘の命が奪われようとしていた。

大量殺人犯には容赦はしない（後編）

莉央は先端が尖っているようで少し丸い鉄の棒を取り出して地面に立てると、大きな金槌でそれを打ち込んでゆく。

「な、なんだそれは？」

「見てのお楽しみだよ。ちょっと待ってて」

富田美香と結城明日香は二人で両脚を切断面済みの８歳の少女を運んでくる。

「パパ！　助けてっ！　お腹と脚が痛いよおおっ！！　パパァッ！！　わーんわーん！」

「芽依っ！！　芽依いいいいっ！！」

莉央が立てた鉄の棒の先端部分へ芽依の股間をあてがう明日香と美香。

「もう少し前かな？　そこなら肛門に入っちゃうよ。もうちょっと後ろ！　そこっ！」

「了解！　おまんこの位置に合ったのね！　じゃあゆっくりおろしていくわよ美香ちゃん？」

「うん！　そのままおろしていこう！」

少し丸い鉄の棒の先端が小学三年生の少女の性器に挿入されてゆく。

『つぷ……ズボオッ！！』

「あはあっ！？　やだあっ！！」

先端が少し丸いが故に、一気に貫通せず、ゆっくり時間をかけて芽依自身の自重でジワジワと内臓を何枚も突き破ってゆくものだが、既にハラワタを抜かれている芽依は、一気に胃まで突き刺さる。

『ズブブブ……バリッ！』

「はぎゃあっ！！　ぎひいいいっ！！　痛いいいいいいっ！！」

両手で鉄の棒を掴み、必死で身体への侵入を阻止しようと試みるが、出血多量な状態で力もまともに入らない。

無情にも鉄の棒は女子児童の膣から子宮のあった空間を通り越して胃を貫き、食道へと差し掛かった。

聞くに耐えない痛々しい音が喉から響き渡る。

「あははは！　変な声出して血の泡噴いてる♪　特別な注射打ってなかったらとっくに死んでるんだけどねぁなたは。長時間苦しんで死んでね！　外道なガキにはお似合いの最期だし」

莉央はハサミを取り出すと、まだ微かにしか膨らみを帯びていない小さな胸の小さな乳首を摘み、思いっきり引っ張って伸ばしてから一気にちょん切った。

『ジョキン！』

「うぼぼぼぼおっ！！」

血の泡を噴きながらも乳首を切断された痛みは感じているようだ。更に反対側の乳首も同じように切断する莉央。

「はぁ。下半身はもうズタズタだから乳首くらいしか責められないか……さぁ愛衣！　決め台詞を」

「はい莉央様。芽依ちゃん、いっぺん、逝ってみる？」

『バシュウッ！！……ゴポゴポ……ビクビクッ……ガクンッ！』

遂に鉄の棒の先端部分が芽依の口から飛び出して、夥しい量の血

の泡を噴き出した後、大痙攣を起こして絶命に至る。

「芽依っ！！　芽依ぃいいっ！！」

「奥さんに続き、娘さんまで逝っちゃったねぇ？　次は幼稚園児の息子さんの番だよ？」

莉央は３５歳のオッサンの乳首を摘んでグリグリとこねくり回しながら冷たく囁いた。

「愛衣、このオッサンはあたしがやるから5歳の男の子、好きにして。児童虐待は大好きなんでしょ？」

「はい！　大好きです！　今はM化してるのは自分でも分かってるんですが……やっぱり児童をいたぶるのはゾクゾクします♡　でも本当にいいんですか？」

「基本的には一人一殺だから。たまに二人三人で一殺になっちゃうこともあるんだけどね」

宮垣咲良が5歳児の男の子を手を繋いで反対側の岩陰から現れる。

「莉央！　本当にコイツに処刑執行できるの？」

「うん！　自分の母親を串刺しにできるほど残虐だからＯＫですよ」

「……そ、そうだったなそういえば」

愛衣と対峙する咲良。

「何見てる？　ガン飛ばしやがって！　またあたいに手マンされたいのか？」

「い、いえ。そんなつもりは……その子を引き受けます」

「もう父親の姿を見てバーベキューでないことはバレちまってる。恐怖で固まってるから適当にほぐしながら殺ってくれよ」

「はい。了解いたしました」

愛衣はしゃがみ込んで幼稚園児の顔を見つめる。

「可愛い顔してるわねボク。なんてゆう名前かしら？」

「パパ！　パパが血まみれになってる……オチンチンから血がでてる……助けてあげておねぇちゃん」

「パパはねぇ。ボクが死ぬところを見てから後を追うの。だから先にあの世でパパを待っててあげてくれるかしら？」

固まって震えながら涙を流す喜孝。

「うぇーん。うえぇーん」

「確か喜孝くんだったわね名前。じゃあ服を全部脱いじゃおうか。おねぇさんが今から地獄を見せてあげる♡」

「ひっ！　い、いやあっ！！　そんなのヤダあああああっ！！」

激しく泣きながらしゃがみ込んで裸になることを嫌がる幼児。
愛衣は冷たく微笑んでから喜孝の髪の毛を鷲掴みにし、無理矢理立たせると、顔面への往復ビンタを開始。
凄まじい勢いのため、激しく左右に顔が揺れ動く。

『パンパンパンパパパパパパパンッ！！』

「んぶうううううっ！？」

激痛で一瞬涙も止まり、我に返るが、間髪入れずに腹部への膝蹴りが入る。
すぐにうずくまり、食べたものは全て戻して咳き込んで苦しみ続ける。

サッカーボールキック。
顔面に愛衣の足の甲がまともにヒット。
鼻血を撒き散らしながら仰向けにひっくり返った。

「うわぁぁあんっ！！　うわぁぁああんっ！！　痛いいいいっ！！
パパママ助けてえええっ！！」

自分の息子の泣き叫ぶ姿を見せつけられながらも、自分のことで必死の道明。

「ぐわぁあああっ！　痛いっ！　や、やめてくれぇ……」

「喜孝くんの方も心配してあげなきゃ。鼻血出しまくってるよ？」

菅野莉央はそう問いかけながら、尿道の割れ目にメスを入れ、まっすぐ雁首へ向けて切り裂いてゆく。
亀頭部は完全に尿道口に沿って真っ二つにされた。
二つに割かれた亀頭部を明日香と美香が左右に開き固定する。

「さぁ莉央ちゃん、尿道引き摺り出してやって！」

「雁首まで見事に真っ二つね。さすが莉央ちゃん。後は膀胱にまで繋がってる尿道を引き摺り出すだけね」

美香に続いて明日香も催促する。

「おまかせあれ♡　いくよオッサン？　オシッコする管を全部引き抜いてやらんだから！　覚悟しなさい」

「ぐわっ！　ぎえぇぇえっ！」

莉央は切開されて二本になった尿道を二つに分かれた亀頭部内部から指でほじくり出し、人差し指にクルクルと巻きつけた。

「いっくよぉ～。それそれそれぇっ♡」

『ズル！　ズルルルルッ！！』

白目を剥いて大きく口を開けて断末魔の叫びをあげる父親の道明。

『ニュルルッ！　ブチィッ！！』

抜けるだけ抜き取った尿道を思いっきり引きちぎる莉央。

「どうだ？　オチンチンの芯から燃えるように痛いでしょう？」

「あがががが……」

叫びすぎて顎が外れて激痛と戦っている道明。

「あらら。顎が外れるほど痛かったの？　じゃあついでに金玉串刺しにしてあげよっか？　ほれ」

『ズブッ！……ズズズ……プスッ！』

「ほげえええええええええっ！！！」

竹の長い串に、ぶら下がっている生の白い膜に覆われた睾丸を二つとも串刺しにすると、引き抜かれた尿道のあった穴の奥から潮を噴くように小便を飛ばしてしまう。

『プシャアアアアッ！！』

「やだ……きったないなぁもう。女性が潮噴くみたいにオシッコ噴き出させないでよ……もう一本いっとくぅ？　ほらあっ♡」

二本目も二つの睾丸を串刺しにした。
三本目、四本目、遂に十本もの串が二つの睾丸に突き刺さった。

「あはは♪　二つ同時と、一個の金玉だけと色々分けて刺したらハリセンボンみたいになっちゃったね？」

まさに地獄のような激痛に、全身を痙攣させながら失神している道明。

満足げに太ももについたオッサンの小便をハンカチで拭きながら愛衣の方を見てみると、喜孝が服を脱がされている所であった。

「泣かないのボク。こうやって素っ裸にしないときちんと拷問できないからね。分かるかな?」

泣きじゃくる幼児を素っ裸にし終えると、地面に寝かせて両足を掴み、お約束のイジメ技、電気アンマを開始する愛衣。

「ほら、おねぇさんが気持ちよくしてあげるね?」

『ガガガガガガガッ!!』

「ぎゃああああああっ!! 痛い痛い痛いいいいっ!! やめてえぇっ!! わーんわーん!!」

ペニスが真っ赤になるほど激しく電気アンマを敢行した愛衣は、今度はうつ伏せに寝かせる。

ハイヒールの靴に履き替えてから再度電気アンマに入るが、スニーカーと違って今回はハイヒール……踵の長いヒール部分を当たり前のように幼児の小さな菊門へあてがった。

「ピンク色の綺麗な肛門だね？　今からハイヒールでアナルアンマといきましょうか？　いくわよぉ……」

『つぷっ！』

「ひゃあっ！？　や、やめ……」

『ズボオッ！！』

「んぎゃあああっ！！　やだっ！！　おねぇちゃんお尻痛いよおおっ！！　お願い抜いてえええっ！！」

根元まで差し込んで何度も掻き回してから激しく電気アンマによって出し入れされるヒール。

固いヒール部分は幼児の肛門を……直腸を激しく犯してゆく。

「ほらほらほら。お尻の穴ピクピクさせてもやめたげないよぉボク？　うふふ♡」

『ズッポンズッポンズッポンズッポンッ！！　ズチュチュチュチュチュチュチュッ！！』

愛衣のハイヒール肛門直撃電気アンマは何百回も続けられた。

肛門括約筋は何枚も引き裂かれ、直腸内は激しく傷ついて鮮血が噴き出してくる。

制服とスカートと両脚に鮮血を浴びながら、ますます興奮して激しく出し入れさせる愛衣。
まさに幼児を犯している、とゆう興奮が愛衣のアドレナリンを分泌させまくっていた。
ようやくハイヒールを肛門から引き抜くと、そのまま泣き崩れて動けない幼児の腰を引き上げ、四つん這い体勢にさせる。
「動かないでね？」
ポケットから取り出したのは爆竹だった。
肛門と小さなオチンチンの小さなワレメに無理矢理ねじこむ。
「汚い穴にお仕置きするわ。いっぺん、爆破されてみる？」
「痛いいいいっ！！　やめえええええっ！！」
『シュボッ！　ジジジジジジジジ……パパンッ！！』
ほぼ同時に爆竹は爆発した。
肛門からは更に激しく出血、小さなオチンチンは雁首とみられる先っぽ半分くらいが完全に吹っ飛んでしまっていた。
小便が断面の白い管から飛び出してくる。
切断面の肉片からは、滲み出るように真っ赤な血液がゆっくり垂れ流れてきていた。

「ええっ？　オチンチン吹っ飛んだのにアナルはまだ原型留めてるわねぇ？　失敗かなコレは……じゃあ次はコレをあげる」

莉央からもらった鉄製の超強力電撃棒だった。

子供用の直径は2センチほどで、長さは15センチあった。

「ほら、お尻の穴……奥からヒダヒダまで焼いてあげるから力を抜いて」

もう何を言ってるかわからないほど色々と泣き叫びまくっている喜孝だったが、強引に下半身を引き上げて、肛門へ狙いを定める愛衣。

「ここね？　可愛い菊門は……地獄を見せてあげる。ほら」

『ズブッ！……メリメリメリッ』

1000ボルトの殺人級の電撃棒は、アースを取り電流をおこさなくとも、熱で皮膚や肉を焼くための細工が施された特殊なモノであった。

幼児のアナルに突き当たりのS状結腸まで奥深く差し込まれる。

「んっ！　んあああああっ！？　痛いいいいっ！！　痛いよぉ〜痛いよぉ！」

長い黒髪をかきあげながら伏せ目がちにヒクヒク動く肛門を見下ろし、そっと呟く。

「いっぺん、お尻の穴から奥まで……焼けてみる？」

『カチッ！……バリバリバリバリバリバリバリバリッ！！！！』

この世のモノとは思えない幼児の声とは思えない、地獄の雄叫びをあげながらお尻を前後左右に激しく痙攣させる幼児。

ひざまづいたままで冷ややかにその哀れな姿を見つめて微笑む女子高生の円満愛衣。

一分が過ぎるが、まだ電撃を止めないでいると、小さなペニスの破壊された断面から湯気がでてくる。
ついで口からお臍からボコボコと沸騰した血の泡が噴き出してきた。
目玉が飛び出して、血の泡の涙を流す喜孝。

「もう死んでるよ？　愛衣」

莉央が道明の金玉を何枚にもスライスしながら愛衣に教える。
睾丸から串を抜くときも激痛だったので、目の前で息絶えた息子のことにも未だ気付いていない父親であったが、更にぶら下がっている穴だらけにされた睾丸に刺身包丁を何度も入れ、見事に睾丸のお造りを完成させる莉央。
今は、睾丸とゆう主人(あるじ)を失った精管と神経の管が痛々しく風に揺れているだけだった。

『バリバリバリバリバリバリバリバリッ！！』

「ペニスからお臍から沸騰した湯気なんか出しちゃって……無事に地獄へ辿り着いたみたいだから抜いてあげるねボク……」

愛衣は電撃をようやく止めて、ゆっくりと鉄製の棒を幼児のアナルから引き抜いてゆく。
焼けこげた直腸や肛門の肉片がタップリこびりついた棒が、見るからに痛々しかった。

「臭い……可愛い顔してる割にお腹の中焼いたらとても臭いわボク？うふふ♡」

そっと立ち上がり、莉央に微笑みかける。

「お疲れ様でした愛衣。この父親はあたしたち小学生トリオでやるから見てて」

「はい、莉央様」

「自分の痛みが強すぎてあまり家族を失った悲しみが味わえなかったよね？　ごめんなさい。あたしたちの不徳といたします」

お臍に莉央愛用のベレッタＭ９３Ｒの銃口を押し当てながら、莉央は最後に残された父親である道明に詫びを入れた。

『ドンッ！！』

「ぶはあっ！？」

いきなり臍にぶち込まれる短銃の鉛玉。
背中側に大腸と小腸が激しく吹き飛ぶ。

『ベチャベチャベチャッ！！』

「うぐうおおおおおっ！？　ふんぐうううううっ！！」

血を吐きながら人生最期になるであろう激痛に顔を歪める道明。
明日香はライフルを手に持ち、弾を装填すると、銃口を真下から肛門に１０センチほどぶち込んだ。

「毛だらけの汚いアナルしてるわね？　ほらあっ！」

『ズボッ！！』

「はうあっ！？」

「喰らいなさい。外道オヤジ」

『ドォンッ！！』

「ぺぎいいっ！！！！」

その銃弾は縦に身体を貫通し、頭部をスイカが破裂するように粉々に吹き飛ばした。

目玉や歯がポタポタと莉央たちの周りに降り注ぐ。

「やだ！　あたしも生きてる内に撃ちたかったのにぃ！」

美香はマシンガンを手にして、無事に残っている手足や胸、臀部などを肉塊になり果てるまで撃ちつづけた。

『ガガガガガガガガガッ！！』

「ほらほらあっ！　まだ少し原型残ってる前立腺やチンポもバッラ

バラにしてやるんだからあっ♡　あははははは♪」

『ベチャベチャベチャベチャッ！！　グチャチャチャチャッ！！』

辺り一面ミンチだらけになったのを確認して美香はマシンガンを撃ちやめた。

「皆さんお疲れ様でした。鬼畜な一家を見事に制裁したよね本日も」

菅野莉央はスカートや太ももに飛び立った肉片を手で払いながらベレッタＭ９３Ｒをカバンに戻して、港へ向けて歩き始める。

「おい愛衣」

「はい？」

「お前なんかムカつくんだよなやっぱ。あたいに足開いてマンコ見せろよ？　もう一度手マンで泣かせてやるからよ？」

愛衣はそっと莉央の目を見る。

一瞬天を見上げ、少しため息をつく莉央。

「あの、咲良さん」

「どうした？」

「もう愛衣は一応処刑する側の人間になったわけだから……もう許してあげてくれません？」

「もう一度だけ責めさせてくれたら許してやるよ。なんかムカつくのが収まらないんだ」

「……分かった。もういいです。愛衣、思うように行動して構わないよ」

「え？　本当ですか？」

「うん。でも追い討ちはダメ！　最小限の手数でできるだけ顔はやめてあげて。分かった？」

「はい莉央様」

二人の会話を黙って聞いていた咲良は頬を真っ赤にして憤怒する。

「おいおい！　黙って聞いてたらこのあたいが負けるみたいな言い方じゃねぇかよ！？」

莉央の顔を見ながら文句を放つが、莉央の反応は……。
咲良の目を見つめながら顔を静かに左右に振った。

これは、やめておいた方がいい、とゆう合図だとゆうことは、さすがの咲良でも理解できた。

「え？　そんな、ブルースリーみたいに敵に対して“もうやめておけ″みたいな……ええっ！？　まじで！？」

莉央は静かに頷くが、咲良はもう止まらなかった。
プライドが許さなかったのである。

「まさかこんなヤツが……オラァ行くぞ愛衣いいっ！！」

『サッ、サッ、ヒョイヒョイッ』

後も簡単に咲良の攻撃をかわす愛衣。

『ズドンッ！！』

「ひぶうっ！？」

最後に放ったモーションの大きな回し蹴りをかわしながらの強烈な三日月蹴りが咲良の脇腹を襲った。

「がはっ！？」

ひざまづいて咳き込む咲良に、優しく手を伸ばす愛衣。

「くっ！　舐めんなっ！」

その手を豪快に弾き飛ばす咲良だったが、目には悔し涙が浮かんでいる。

「だから言ったのに………ごめんなさい。無理矢理でも止めるべきでしたあたし……」

「あ、謝るなよ莉央っ！　逆に虚しくなるじゃんかっ！」

宮垣咲良の怒りの矛先が莉央に向いた所で簡易な港へ船が着いた。
拷問処刑人たちの一日が終わりを告げる。
残酷処刑島に新たに四人の遺体が加わった。

大量殺人犯には容赦はしない（後編）（後書き）

大量殺人を家族ぐるみで犯してしまった一家。
どんな恨みがあろうとも人を殺めることは許されない。
この拷問処刑が執行された夜、宮垣咲良は一晩中泣いて泣いて泣いて泣き崩れ、目を真っ赤に晴らしての登校となってしまった……。

女子高生集団リンチ殺人（前書き）

未成年だからといって許されるものではない大罪を犯してしまう三人の少年の運命は？

女子高生集団リンチ殺人

「ほら、どうだ？　感じるか？」

「あっ、あんっ、あはあっ！」

東部地方の住宅街で、一人の女性が１７歳の少年たち三人に拉致監禁されていた。

「ほら！　もっとケツを突き上げろ！　殺すぞ？」

「あんんっ！　はいっ！」

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

不良のリーダー格である森田正文は、散々バックで女性を犯すと、大量の精液を膣内にぶちまけた。

「ふぅ。次はどっちがやる？」

「俺がいくぜ！　ヒヒヒ」

林田静男が次に女性を犯しにかかった。

犯されている女性の職業は婦人警官であり、東部中央警察の管轄である東部内町交番の警官であった。

札付きのワルが集うことで有名な中学を出てから、無免許でバイクを乗り回し、何度も警察にも捕まって少年院にも入った経験がある三人であった。

「ワイが今日も最後か……お前らの精液まみれのマンコに入れるの嫌なんだけどな……」

「ワハハハ！それが嫌なら俺とタイマン張って勝ってみろよ？　次からは最初にハメられるぜ？」

「冗談いうな！　お前に勝てるヤツなんざそうはいねぇよ……お前と林田はムチャ強ぇからな。まぁ女とヤレるなら少々のことは我慢するさ」

三人の中で一番喧嘩の弱い木田裕平が諦めて三番目に婦人警官を犯し始めた。

「あんたも災難だな。よりによって二回もワイらに説教するなんてな。しかも二回目の時はあんたが見逃してくれてたら先月までの少年院は入らなくて済んだかもしれんのに……うっ、イくっ！」

『ドピュピュピュピュピュッ』

「あんっ！　やだ……はぁ、はぁ」

「何が“あん、やだ“だよっ!? レイプされてるのに感じやがって淫乱メス豚め! はっはっはっ」

パンツを履きながら二十二歳の婦人警官、加藤文絵の素っ裸の背中に唾を吐きかける木田裕平。

婦人警官の井村蘭世は、ある日の週末、私服でのスーパーでの買い物中、たまたま二度も補導した不良たちに見つけられた。後をつけられて夜道で三人に押さえ込まれて、無理矢理に睡眠薬を飲まされ、リーダー格の少年である森田正文の自宅で監禁、強姦、暴力を受けていた。

「オラオラ! もっと激しく踊れよ!」

「裸踊りだけがお前の取り柄だろうが?」

「ハハハハ!」

なんのダンスも習っていない井村蘭世は、適当に手足を動かして適当に踊るしかなかった。
踊りの最中にも殴る蹴るの暴力は続けられた。

「もう許して……ここから帰して」

「俺たちを刑務所にぶち込んだお前にはまだまだ借りがあるからな。

そう簡単には帰せないぜ？　なぁお前ら」

「そりゃそうだ。最低でも十年は俺たちのオモチャになってもらわなきゃーな」

「ハハハハ！　ワイらに責められてそこまで生きていられたら、の話だけどな！」

監禁部屋となる森田正文の部屋は二階にあるが、両親は正文からの暴力を恐れて女性のことは見て見ないふりをしていた。

この正文は、両親にまで平気で暴力を振るう鬼畜といえるほどの不良であった。

小学生の頃、正文には二つ上の姉がいた。

公園のトイレで変態にイタズラされて殺された事件があり、その時から性格が歪んでいったのである。

「あなた……」

「どうした？」

「今日もあの女性、正文たちに酷い暴力受けてたわ。本当に警察に通報しなくてもいいのかしら？」

「ああ。その内前の女性みたいに飽きてきたら解放してやるだろう。変な騒ぎになったら会社も首になるだろうし世間体も悪くなるからな。その時まで様子を見ようと思う」

「分かりました。変に刺激して私たちが殺されるのも堪らないもん

ね」

「祐子が殺されてからあんな性格になってしまったんだ。一番悪いのはそんな鬼畜を逮捕できなかった警察だ」

「それはそうだけど……今の女性には全く関係ないわ」

「そ、そうだな。ともかく！　今は様子を見よう」

森田の両親は、その内飽きるだろうと読んで息子を含む少年たちのことを、しばらくほったらかしにしていた。

イジメもそうだが、何度も続けていると、だんだんとエスカレートしてゆくのが人間の本質でもあり、森田たち三人も例外ではなかった。

センマイ通し、いわゆるキリを手にした森田正文は、井村蘭世のアザだらけの身体を何度も蹴り、右の乳房にキリを突き刺す。

悲鳴をあげるのを楽しみながら何度も何度も突き刺し、遂に穴だらけになってしまう右の乳房。

「ハハハハ！チチが血まみれになっちまったな！左のチチも穴だらけにしてやるから覚悟しろよ？」

そのまま林田と木田で暴れる井村蘭世を押さえ込み、更に左側の乳房にも何度も何度もキリをつきいれてゆく森田正文。

「ううう、痛い。お願い、もうやめて許して……」

「甘いな！　そうだな。ションベン漏らしまくってるだらしないオマンコにはこの釘をくれてやろう♪」

かなり大きめの五寸釘を五本ほど取り出すと、ベッドに仰向けに縛り付けた蘭世に対して、性器から釘を金槌で打ち込んでいった。

五本、十本、三十本と打ち込んでいくうちに、先に打ち込んだ釘を更に後から打ち込む鎚が重なり、倍の深さまで突き刺さる。
五本ほどは子宮頸部を通り越して子宮内にまで到達した。
その頃になると井村蘭世は狂ったように泣き叫び、何度も失神してしまう。

失神してもバケツに汲んだ水を顔から浴びせられ、目を覚まさせられる。

「こんなくらいで気を失うなよクソアマがっ！？」

「ハハハハッ！！　もうマンコは釘だらけだから……ケツの穴に打ちか込んでやるか？」

「それ賛成！　シリの穴はワイにやらせてくれよ？」

「ああ。そんな臭い穴俺は興味ねぇから」

直腸内にこれ以上入らないほどの五寸釘を打ち込む木田裕平。
直腸奥から流れ落ちる真っ赤な鮮血をティッシュで拭きながら漏らした便だらけの肛門の縁を指先でなぞる。
「こんなにクソ漏らしたら恥ずかしくて仕方ないだろ？　おい！」
馬乗りになり、拘束されて身動きできない婦人警官を何度も何度も殴りつける木田。
「おい、それ以上殴ると死んじゃうぞ木田」
「はぁ、はぁ。そうだな。もうこれくらいにしといてやるぜ」
顔面をボコボコに晴らした井村蘭世は、縄が腕や脚に食い込むほど激しく痙攣を始める。
やがて静かに動きを止めて、大きく腫らした瞼から大量の涙を流したまま、目を閉じることは無くなり、激痛を味わいながら息を引き取った。
「おい、それ死んじゃったんじゃね？」
「あ、ああ。くたばっちまったみたいだな」

「運びやすいようにバラしてゴミ袋に入れて埋めに行こうぜ？」

仲のいい土建屋の先輩に軽四トラックを借りて、東部地方南部にあるこの辺りでは一番高い山へ井村蘭世を埋めにゆく計画を立てた。

「なかなかノコギリじゃあ引けないな！　骨が硬い……」

「そうだな。こりゃ大仕事になるぞ」

「硬いもん切る時は糸鋸使えよ、ホラ」

「おっ、こっちの方が楽に切れるぜ！　やるな木田」

三人がかりで数時間かけて全身をバラバラにしてゆく。内臓は細かく切って数回に分けてトイレに流した。

「おい！内臓も袋に詰めて埋めた方が楽だったんじゃゃね？」

「そ、それもそうだな……でも見てると気持ち悪いから早めに処理して正解だろ？」

「確かに腸とか細かく切ってるとオエエってなったわ」

ゴミ袋を両手に持ち、三人が風呂場から庭に停めてある軽四まで運んでいると、森田正文の父親が家から出てきた。

「こんな時間にまで風呂場で何やってた？」

「三人で背中の流し合いしてたんだよ！　クソオヤジは黙ってろ」

「そうか。今夜は女の人の声が全く聞こえなかったんでな。それも気になってな」

「関係ねぇだろ！　ガタガタ言ってるとぶっ殺すぞ！？」

父親を恫喝すると、森田はスタスタと軽四トラックの方へ両手に持ったゴミ袋を二つ運んでいった。

林田と木田も後ろから続く。

「狭いな。もっと寄ってくれよ」

「これ以上寄ったら変速の棒みたいなのにあたっちまうわ！」

「うるさいな！　一人荷台に乗れよ？」

バラバラの遺体の入った袋と一緒に暗闇の中荷台になることは正直嫌だった林田と木田は、狭い助手席で我慢することを決意する。

どんどんと街中から外れてゆき、遂に東部地方南部にある甲南山への山道に曲がり込んだ。

どんどんと暗い峠道を登ってゆく軽四トラック。

「おい、なんか不気味だな？」

「そりゃこんな山昼間でもあまり登らねぇからな」

「しかも死体積んでるし」

「ってゆうか森田免許持ってるのか？」

「ハハハ！　１７歳で持ってるワケねぇだろが！　笑わせるな」

思わず固まる林田と木田。

「ま、マジか……でも普通に運転できてるよな？」

「先輩に何度か練習させてもらってたからな！　さぁもうすぐ山頂の展望台だ。獣道が二本は通ってるからどっちか適当に運んでいってた土の柔らかそうな所に埋めちまおうぜ？」

誰もいない真夜中の甲南山で、三人の外道たちはさっさと穴を掘り、遺体の部位がたまった黒いゴミ袋を一つずつ埋めていった。

「はぁ。はぁ。やっと終わった……もう空が白んできてるじゃねぇか！？」

「穴掘るのって結構大変だよな！　ふぅ〜まいったぜ」
「夜明け前に早く帰らないと色んな奴に見られたら怪しまれるぞ？」
無免許でも運転の上手い、リーダー格の森田正文がハンドルを握り、山道をかなり飛ばしながら帰路を急いだ。
「ぷはあっ！　野良仕事の後のビールは格別だな！」
「汗をかいた後はホント最高だぜ！」
「それはそうとあのＪＫ。まさか早くもくたばっちまうとはなぁ。まだまだいたぶってやりたかったのに……」
先程まで遺体を切り刻んでいた風呂場でシャワーを浴びて、談笑しながら酒を煽っている三人だった。
「もう昼か……少し寝ようぜ」
「そうだな。結局徹夜作業になっちまったから泊めてもらうわ」
「ワイも！　すまんな森田」
「ああ。夜まで寝てから帰りゃいいさ」

昼まで飲んでいた三人は、ほぼ同時に目覚め、林田静男と木田裕平は原付バイクに乗り込み、笑顔で森田正文に手を振りながら車庫から出ようとしたその時……。

「帰宅途中ごめんねーボクたち」

黒いハイエースから鍛え抜かれた身体が見て取れる三人の青年が降りてきた。

「ああ!? ボクたちだぁ? 舐めてんのかオッサンゴラァ!?」

「おっ! 元気いいねぇ。降りてきてオッサンたちと勝負……ボクたちの世界じゃ“タイマン”ってゆうのかな? タイマン張ってみるかい?」

一瞬体付きを見てたじろぐ林田だったが、降りるやいなやハイエースの男に殴りかかった。

ヒョイとかわすとみぞおちに膝蹴りをぶち込む。

ゲロを吐きながらしゃがみ込んで動けなくなる林田に手錠を嵌める男。

「な、なんなんだよあんたらは!? 警察に通報するぞ!?」

林田でも敵わない相手に敵うわけがないことを承知して戦うことを諦めた木田裕平は、警察を助け舟に選択した。

「警察？　ハハハハ……その警察に近い存在なんだよな俺たち……とりあえず拐わせてもらうことにするわお前らをな」

「ぶち殺されてぇみたいだな？　オッサンだからって手加減しねぇぞ？」

「……お前が森田か？　コイツらの中では一番強いみたいだな。よし、相手してやるから全力でかかってこい」

「ちっ。後悔すんなよ？　オラァアアッ！！」

三十秒ほどは持った森田正文は確かに強かった。
だが鍛え抜かれた特殊任務省所属の山内には到底敵わない。

「ぐおっ！？……オエエエッ！！」

強烈なみぞおちブローに飲み食いしたものを全て吐き出してしまう森田正文だった。
そのまま手錠を嵌められて三人は麻酔を嗅がされて深い眠りに落ちてしまう……。

――残酷処刑島。

『ん？　ここはどこだ？　何か痛いぞ？』

森田正文はゆっくりと目を覚ます。

「ぐわああああああっ！！」

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

黒髪ロングの女子高生にバックからペニスバンドに装着した張形で肛門を犯されている自分に気が付く森田正文。

「痛いっ！！　やめろおおおおっ！！」

「血まみれになってるよ？　お尻の穴……」

円満愛衣は意識が戻った森田に対して、更に激しく腰を振り始める。

直径５センチ、長さは１５センチもある極太の張形が森田正文のアナル処女を犯し続けていた。

「ぎゃあああああっ！！　裂けるううっ！！　やめろおおおっ！！」

いくら叫ぼうが円満愛衣のアナルファックは更に激しくなってゆくばかりであった。

肛門括約筋は悲鳴をあげ、数箇所裂けて鮮血が流れ落ちる。

「あのね。汚い血が愛衣のスカートや膝に掛かってるんだけど？いっぺんイってみる？」

『ドク、ドク、トロトロ……』

「んうおおっ！？　はううっ！！」

強引に前立腺を激しく抉られた森田正文は、尿道口から勢いのない射精を無理矢理にさせられてしまう。

「んぐうううっ！！」

「ん？　何か垂れてるわね？　まさか精液かなぁ？」

「ぐっ！　勝手に出たんだよちくしょう！！」

低い机に素っ裸でうつ伏せで縛り付けられ、バックで女子高生の

愛衣に犯されながら強制的に射精させられる主犯格の森田正文は、怒り任せに叫び狂うのであった。

お尻を両手で掴み、更に激しく肛門を犯す愛衣。

「ペニスからは粘液……アナルからは鮮血……あはは。哀れな男よねあなた……」

「痛いっ！　や、やめろおおっ！！　クソアマがあっ！！」

円満愛衣を罵倒するが、更に激しさを増す腰の振りに対して、遂に涙を流して泣いてしまう森田。

「痛いいいいっ！！　やめてくれえっ！！」

「お願いするときはなんで言うの？」

「や、やめて下さいっ！！　肛門が裂けそうですうっ！！　ひいいっ！！」

「もう何枚か肛門括約筋避けちゃってるけどね……でもよく敬語で言えましたねぇ。最期に少しでも反省が見られて愛衣も安心しました」

「さ、最期？　ど、どうゆうことだ！？」

「こうゆう事ですす森田正文」

愛衣は肛門から極太張形を引き抜くと、両手で二つの睾丸を鷲掴みにした。

『ガツ！　グムッ！』

「うぎいっ！？　金玉だけはやめてくれえっ！！」

『ギュッ！　ギュウウウウウッ！！』

５０を軽く超えている女子高生とは思えない握力で締め上げられる森田の睾丸。

「んぎぃぃぃぃぃぃっ！！　やめてぇぇぇぇぇぇっ！！」

「うふふ♡　潰れそうで潰れない金玉って痛々しいよね？」

何度も握りつけては緩めて、また強く握りつけては緩めて、を何度も繰り返して反応を楽しむ愛衣。

前立腺を掘られて勃起していたペニスも完全に縮み、愛衣の睾丸責めに対して上下に揺れるだけであった。

「えっ！？　嘘だろ！？」

睾丸の激痛に堪えながら目の前に見える光景。
それは親友の林田静男の両手両足を切断する女子中学生の姿であった。
宮垣咲良は素っ裸の林田静男の両手両足を電動ノコギリでサッサと切断していった。
断末魔の悲鳴をあげながら号泣するが、宮垣咲良は容赦しなかった。

「小さくなったね林田」

「ぐわあああっ！！　ぎひいいいいっ！！」

激しく両手両足の切断面から鮮血を吹き出させながら仰向けでもがきまくる林田静男。
馬乗りになり、顔面を何度も何度も殴る咲良。

『バキバキッ！！　グシャッ！！　ガツッ！！　ガンッ！！』

「ふがががあっ！？　いだいいいいっ！！」

女子中学生に、百回以上殴られて、顔面をボコボコに腫らした林

田静男は、惨めにも小便を漏らしてしまう。

「ダルマにされて殴られて小便漏らす？　ホント哀れだなお前は……このあたいが更にお仕置きしてやるから覚悟しな！」

「痛いいい……もうやめて下さい……死んじゃううう」

「はぁ？　死ぬんだよお前たちは今日この残酷処刑島で！」

メスを肛門に入れて、丸くくり抜くと、直腸を掴み、一気に引き摺り出す咲良。

『グボッ！　ズルルルルルルルッ！！』

「ぎひゃあああああああっ！？　いだいいいいいいいいっ！！」

「ほらほらほらほらあっ！どんどん出てくるなぁクソまみれの汚い大腸が！　痛いかっ！？」

「痛いいいいっ！！　んぎいいいいいいいっ！！」

中学生アイドルの宮垣咲良に大腸と小腸を引き摺り出され、ショック死する林田静男を目の前で見せつけられるリーダーの森田正文。

「あれ？　痙攣しちゃった。死んだの？」

咲良は引き摺り出した林田静男の大腸を足の裏でシゴき、大便を肛門部分から抜き出してから、ぐちゃぐちゃに踏み潰してミンチにした。

泡を噴いて息絶えた林田静男のペニスをナイフで根元から切断する咲良。

「汚ぃチンポは切り取っておいてやるからな。これでもうあの世では女の子は犯せないよ」

友人の死を目の前で見せられた森田正文は、現実逃避を始めてしまう。

「嘘だろ!?　おい!?　ホントこんなの嘘だよなっ!?　あははははっ!!」

今度は小学生らしい女の子が現れる。

木田裕平の髪の毛を鷲掴みにして無理矢理引きづり出してきた感じに見えた。

「木田っ!　しっかりしろ!　そんな小さなガキに何好き勝手されたんだお前!?」

「ごめん森田！　このガキとタイマン張ったんだけど……負けちゃったわ。小学生のくせに無茶苦茶強いんだわコイツ……負けたら処刑されるとゆう条件で負けちゃったんだわ。先に逝って待ってるからな森田……」

「嘘だろおいっ!?　相手は小学生のガキだぞ!?　おい木田っ！！　殴り殺してしまえっ！！」

タコ殴りにされてボコボコにされてゆく姿を森田正文に見せつけられたのは……木田裕平だった。

「あたしがさっき教えたセリフは？」

「あ、はい。莉央様。ワイの肛門を……犯して……下さい」

「よく言えたね木田。ほら！お尻を突き上げて四つん這いになれ！」

「はいっ！　こうですか!?」

『ツプッ！……ズボッ！！』

「あひいっ！！」

女子小学生菅野莉央による木田裕平のアナルファックが開始される。

『バコバコバコバコバコバコッ！！』

「ふんぎいいいっ！！　痛いいいいいいっ！！」

涙を流しながら歯を食いしばり、ペニスバンドを装着した女子小学生によるレイプを見せつけられる森田正文。

「おい！　マジか!?　そんなガキぶち殺しちまえって！！」

「そ、そんな事言っても……コイツ……この子は……無茶苦茶、つ、強くって……あひいいいいいっ！！」

女子小学生に肛門を犯されて射精してしまう木田裕平。

「はうっ！！　はうううっ！！」

『ドピュッ！　ドピュピュピュピュゥッ！！』

「おい木田！　何汚い液出してんの？」

「ご、ごめんなさい莉央様……思わずイってしましまいました……」

木田の肛門から張形を引き抜いた莉央は、スッと立ち上がり、四つん這い体勢の木田裕平の股間を思いっきり蹴り上げた。

「あたしの前立腺責めは気持ち良かったの？」

『ズドオッッ！！……ぶちゅちゅちゅっ！！』

莉央の足の甲は、木田の二つの睾丸を同時に潰してしまう。

「ぎゃあああああああっ！！！！」

うつ伏せにペタンと倒れ込んで股間を両手で押さえながら号泣する木田裕平の姿を見ながら、目を瞑りある種の覚悟を決める森田正文だった。

「もう俺たちはここで殺されるんだな？」

「……そうよ。あなたは友人二人の死を見届けた後、この私、愛衣に睾丸を潰されてペニスを切断されて……死んでもらうわ。覚悟しといてくれる？」

「そ、そんな。そんな恥ずかしい事しないでくれよっ！　お願いだからっ！　普通に殺してくれえええっ！！」

「命乞いする女子高生の願いを聞いてあげたの？」

「そ、それは……」

「だよね？　なら愛衣が同じように辱めを与えて逝かせてあげる。もう覚悟を決めなさい」

「ぐっ！　く、くそおおおおっ！！」

『ギュウウウウウッ！！　ブチュチュ！！』

「ぐわあああああああああああっ！！」

円満愛衣は森田正文の二つの睾丸を一気に握り潰した。奇声を上げて悶絶する森田だったが、愛衣は手を緩めない。即座に取り出した短刀で、根元からペニスを切断した。

更に激しく断末魔の悲鳴を上げる森田正文。

薄れゆく意識の中で、女子小学生に足蹴りで金玉を潰された後、ライフルを肛門に捩じ込まれる友人の姿を見た。

『ズブ！……グチュチュ！』

「や、やめてやってくれ！　ケツの穴から銃撃なんて……酷すぎる」

森田は激痛に薄れゆく意識の中でも木田裕平のことを心配した。その言葉は菅野莉央に聞こえていない。

「汚い腸に詰まったウンチごと吹っ飛ばしてあげるんだから」

「や、やめ……」

『ズドォンッ！！』

菅野莉央はライフルの引き金を引き、その瞬間、木田の頭部はバラバラに吹っ飛んだ。

目玉が飛び出して脳みそが地面に降り注ぐ。

「あはは。お尻の穴から頭まで鉛玉で貫通だね？……くっさ〜い♡」

莉央は血まみれの肛門から銃口を引き抜きながら冷たく微笑んだ。

林田と木田の最期を見せつけられた森田は、もう死を覚悟する。

円満愛衣は切断したペニスを本人の森田正文の口へ強引に捩じ込んだ。

「さてと。後はあなただけになっちゃったね？　ほら、自分のアソコを咥えなさい」

「むぐうっ！？　むむむむむうっ！？」

円満愛衣は、切り取った森田のペニスを無理矢理本人に咥えさせ

ると、槍を手に取り森田正文の肛門へその穂先を突き刺した。

『ブスッ！』

「はうっ！？」

「お尻の穴からお口まで串刺しにしてあげるね？」

「むぐううううっ！？　うううううううっ！！」

自分のペニスを喉深く突っ込まれた森田正文は、喋る事もままならないまま、肛門への槍の鈍く光る矛先の侵入を受け入れざるを得なかった。

『ズブブブブブブッ！！　メリメリメリメリっ！！』

円満愛衣の刺し込んだ槍の穂先は、森田正文の直腸奥深く突き刺さり、更に小腸を何枚も突き破ってゆく。

「ぐわああああああっ！！　痛いいいいいいいいっ！！」

激痛のあまりに咥えさせられた自分のペニスを吐き出してしまうが、次の瞬間喉元を襲う熱い激痛。

「いっぺん、逝ってみる？」

『ズブブブ……』

「ふごおおうっ！？」

『バシュッ！！』

円満愛衣が肛門からねじ込んだ槍の切っ先が、ついに森田の口から飛び出した。
白目を剥いて鼻と口から血の泡を噴出しながら絶命する森田正文。

「良くやったわね愛衣」

「ありがとうございます莉央様。なんかハラワタみたいなのが穂先に引っかかって口から飛び出してしまいました……」

「あはは！　直腸が口から飛び出しちゃってるじゃん♡　どこまで運んでるの？」

「その気はなかったのですが……申し訳ございません」

莉央に賞賛されながら、肛門から突っ込んだ槍をグルングルン掻き回す愛衣。
下から上まで貫通させられた直腸が、飛び出した穂先と共にネチャネチャと音を立てて森田の唇の上でくるくる回る。

赤い粘液と泡を垂らしながら……。

残酷処刑島に新たに三人の遺体が加わった。

女子高生集団リンチ殺人（後書き）

因果応報。

犯した罪の重さを痛感しながら死んでいった未成年の少年三人。

あの世で更に猛省してほしいものである。

卑怯者への私刑（前書き）

ヤンキーにはヤンキーのルールがある。
プライドを捨てて道を間違えた三姉妹にスケバンたちの仕置きが始まる。

卑怯者への私刑

今はアイドル活動を続けることになった宮垣咲良。
数ヶ月前は極寒の極北中学校で、指原理子の率いる三年２００人対一年二年の連合軍２００人率いる宮垣咲良の喧嘩三昧だった。
三年生の頭を張っていた指原理子とは何度もタイマンを張り、最後には付き合い始めることとなってしまっていたが、結局指原理子の死を持って二人の関係は終焉を迎えてしまう。
酷い死に方を余儀なくされた指原理子を思い出し、度々涙を流す咲良だったが、アイドルになり、拷問処刑人になり、今は拷問処刑人の先輩である甲南中学校に通う鬼頭美紅に心が靡いてしまっていた。
圧倒的な美紅の強さは、強さを一番とするヤンキーの咲良にはある意味尊敬に値するのである。
寒さも和らいできた三月中旬、金曜日の放課後、ここ極北中学校では私刑が執行されていた。
「あれだけ極北中学生同士の喧嘩はタイマンのみだと教えていたのになぜ三人で一人をボコったんだ？」
「この中学校じゃそこそこ名の売れた浅宮三姉妹。一人でも結構強いのに三人がかりとは情けないにも程があるよ？」

黄昏時の人気のない体育館に、宮垣咲良とその右腕の渋谷凪子と、元指原理子の右腕であった田島美緒の三人が浅宮三姉妹を取り囲むようにして立っている。

咲良と凪子の問いに、下を向いたまま黙り込んでしまう三姉妹。

この場で唯一の三年生である田島美緒が二人に続く。

「服を全部脱いでもらおうか？」

急に青ざめた顔になり、浅宮三姉妹はそれぞれの顔を見渡す。

３つ子の長女である浅宮由貴がついに口を開いた。

「お、お願いだ！　私が全て制裁を受けるから陽子と唯は許してやってくれないか？」

妹たちを庇おうとする由貴は、田島美緒に深く頭を下げて懇願する。

「だってさ。どうするんだ咲良？」

「ダメだな。三人とも同じように痛みと恥辱を味わってもらうつもりだ。凪子！　三人とも制服を脱がせるんだ」

「ラジャー♪」

「やっ！？　やめてっ！！」

「大人しくしてろ殺すぞコラァッ！！」

抵抗できないよう激しく恫喝しておいてから手際よく三姉妹のセーラー服と丈の長めのヤンキースカートを脱がしてゆく渋谷凪子。

パンツのみを残して裸に剥かれてしまった三姉妹は、とりあえず小さな胸を両手で隠して頬を赤く染める。

「まず三女の唯からいく。手を後頭部に回して脚を開いて立つんだ」

「いや、胸が見えちゃう……」

ヤンキーの割に恥ずかしがり屋な三姉妹。
唯は必死で胸を隠して手を後頭部に回すのを拒否する。
宮垣咲良は強烈なボディブローを下腹にぶち込んだ。
思わずゲロを吐きながら四つん這いに崩れ込んでしまう。

「ぐえっ！？　オエエエエッ！！」

そのまま運動靴を履いたまま、唯の後頭部を踏みつけて、自分が吐いたゲロを顔面に擦りつける咲良。

「汚いな。舐め取って綺麗にしろ」

「ううう……ペロペロ……ゆ、許して……」

「あたしをやってくれって！　妹たちは勘弁してくれよっ！！」

長女の叫びには耳を貸さずに無視しながらそのまま渋谷凪子に右手で指示を出す。

静かに頷いた凪子は唯の後ろへ回り込み、床に膝をついている両脚を全開に開かせてゆく。

「ほら、ケツを高く突き上げろ！」

「ペロ……ペロ……は、はい。こう、ですか？」

ゲロを舐め取りながら恐る恐るお尻を突き上げる唯。

『ズドオッ！！』

「ひぎいっ！！」

足の甲で思いっきり股間を蹴り上げる渋谷凪子。

性器と肛門を同時に直撃した激痛に、思わず顎を上げて叫んでし

まった。

田島美緒が駆け寄り、再び脚を開かせてお尻を突き上げさせる。

「誰がケツ下げていいっていった？　ああ？」

「痛いいいいっ！ぐあああああ……」

必死で痛みに耐えながら身体を震わせる唯の姿を裸で見せつけられている由貴と陽子は、固く目を閉じて唇を噛んで我慢を続けている。

二度、三度、と何回も股間を蹴り上げて、ついに１０回目を蹴り込んだ時、真っ白なパンツはジワジワと赤く染まっていった。

「ついに何処かが裂けちゃったみたいだな？」

「うわーん！　うわーん！　痛いいいいっ！！」

ついに泣き叫び始める唯。

「ケツ穴からの血？」

咲良は赤く染まってゆくパンツを指差しながら瓜子に問いかける。

「いや、多分マンコだと思う。最後の一回コントロール誤って膣に運動靴の爪先がめり込んじゃった感触だったから……」

「いやあああっ！！　痛いいいっ！！　痛いよおおおおっ！！」

股間に両手を当てて転げながら泣き叫ぶ唯を渋谷瓜子が押さえ込むと、田島美緒が強引に最後の一枚であるパンツを脱がした。

「しれっと脱がしてやる。ほらっ」

仰向けのままお腹の上になってマウントポジションを取る瓜子。その瓜子に遮られて自分のパンツを脱がされるシーンは見えなかった。

ふと急に涼しくなる股間の感覚に、ワンテンポ遅れて下着を脱がされたことに気づく唯。

「きゃーっ！！　やめてやめて！！　パンツだけは脱がさないでぇっ！！」

どこから血が出てるか田島さんが見てくれるんだよ。ジッとしてたらすぐに終わる」

瓜子は優しく囁きかけながら小さく膨らみを帯びた二人の胸をかなり荒々しく揉みしだき始めた。

『ギュムッ！　グリッ！　グムムッ！』

「小さなチチだなお前？」

「嫌だっ！？　痛いっ！！　やめてっ！！」

思わず瓜子に飛びかかる長女の由貴。

「もう唯を責めるのはやめてくれえっ！！」

宮垣咲良の反応は速すぎた。
あっとゆうまに足を掛けられて床に倒れ込み、そのまま強烈な電気アンマをかけられる由貴。

『ガガガガガガガッ！！』

「はひぃいいいいっ！？」

「我慢してみてないと一生エッチ出来ない身体にしてやるぞ？」

「はひゃひゃひゃひゃひゃひゃあっ！！　は、はいいいっ！！　ごめんなさいいいいっ！！　あんあんあんっ！！　んあああっ！！」

『ガガガガガガガガッ！！』

咲良の足の裏は、外性器と陰核を適度な強さで踏みつけ、パンツごとつま先を膣口に浅く突き入れては引き抜き、また陰核と小陰唇を擦り付け、一分間の電気アンマで由貴を三回もイかせてしまっていた。

「あんあんって……こいつまさか咲良さんの電気アンマで感じちゃってないっすか？」

「分かった？　実は三回イかせちゃった♡」

咲良はパンツを貫通して足の裏に付着した透明の粘液を、由貴の膝に擦りつけながら冷たく微笑んだ。
溢れ出る愛液は、パンツを濡らしただけでは収まらず、内股を叩い床にまで垂れ落ちている。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ」

「あたいに逆らったらどうなるか分かっただろ？　じっと妹の醜態をみてるんだ」

「はぁ、はぁ、はい、分かりました宮垣さん……」

その後、体育館に卑猥な音が鳴り響く。

『クチュクチュ……ズチュチュチュチュチュチュチュチュッ！』

「やはあっ！？　痛いいいっ！！　わーん！　わーん！」

田島美緒の高速手マンが開始された。

凪子が腹に座っているお陰で身動きが取れないまま、激しく膣内を指で掻き回される唯、初めての指マンに激痛を感じ、号泣してしまう。

「小陰唇の付け根辺りから血が出てるな。くっさ！　マンカスだらけじゃんかコイツ……ヒダの付け根もちゃんと洗えよ？　まぁあと少し我慢してたら天国にいけるからな？」

目を細めて不敵に微笑みながら更に激しく中学二年生のマンコを指で激しく犯す三年生の田島美緒。

血に混じって透明の液が垂れてくる。

痛みが快感に変わる瞬間であった。

『クチュチュチュチュチュチュッ！！』

「痛っ！　んあっ！　あ、あんあんあんっ！　なんか変な感じ？あはあっ！」

「ほらイかせてやるよ。イっけええええっ！」

「やはあああああっ！！」

『プシャアァーーッ！！』

全身を引き攣らせながら潮を噴く唯。

同性の先輩である田島美緒に人生最初のオーガズムを味合わさせられてしまった。

静かに膣口から中指と薬指を抜き取ると、唯の肉付きの良い太腿に愛液とマンカスを擦り付けながら立ち上がる美緒。

「もういいわよ凪子。咲良は長女。三女のコイツは私がイかせてやった」

「ふうん。同性に責められてイっちゃうなんて……世の中変態ばっかだな」

一回唯の頬を思いっきりビンタしてからようやく立ち上がる渋谷凪子。

アヘ顔で涎を垂らしながらまだ下半身をヒクヒクさせていた。

膣口からはトロトロと大量の愛液が垂れ流れてくる。

田島美緒の手マンがよほど気持ちよかったのであろう。

中心が赤く染まったパンツを履かせて、スカートと服も着せてあ

げる田島美緒。
「浅宮唯！　お前のリンチはこれで終わりだ。帰るなり姉のリンチを見ていくなり好きにしろ」
　怖さと痛さと快感で、全てが訳が分からなくなってしまった唯は、体育館の隅にフラフラしながらも辿り着き、そのまま膝を抱え込んで涙を流し始めた。
「頭おかしくなってないかアイツ？」
「ショックが大きかっただけだろ。姉たちの私刑が終わるころには元に戻ってると思うけど……」
　先輩の田島美緒の問いかけに、気楽な返事を返す宮垣咲良。
　続いて次女である陽子の私刑に移る三人。
　三角形に切ってある木の椅子を体育館の床に置く咲良。
「さて。これに座ってもらおうかな」
「出た！　三角木馬♪」

咲良の提案に喜ぶ凪子。
田島美緒だけは顔を顰めて本気でビビっている。
「ひええ〜。マンコも肛門も裂けちゃいそ。怖っ」
「や、やめて……そ、そんなの無理」
「無理じゃねぇんだよ陽子！　パンツ履いたままで勘弁してやるから座れ！」
「ひいっ！　許してっ！　お願い宮垣さんっ！！」
早くも泣き叫ぶ次女の陽子の黒髪ロングの髪の毛を鷲掴みにして無理矢理椅子へ座らせる凪子。
「ほら、また開いて座るんだ！」
「ひいいっ！　やだあっ！」
咲良と凪子と美緒の三人がかりで強引に三角椅子に座らせると、一気に股間に角がめり込んでいった。
『グリッ！　メリメリッ！』
「やっ！？　いだいいいいいっ！？　ひいいいいいっ！！」

股間にめり込んだ角は、容赦なく中学二年生の女の子の性器と肛門に深く食い込んでゆく。
ジュワアっと、ゆっくりだが確実に白いパンツは赤く染まっていった。
「んぎいいいっ！！　許してぇええっ！！　死ぬううっ！！」
「これくらいで死なん死なん。まずはパンツごしに食い込ませるのがエロいんだよなぁ♡」
両手を後ろでに背中で括られて、全体重を股間にかけさせられる陽子。
美しい黒髪を何度も左右に靡かせて首から上だけ激しく抵抗するが、下半身はめり込んで動かせなかった。
三人に固く押さえ込まれているだけに全くといっていいほど動けなかったのである。
三角椅子から床に鮮血が流れ落ち、結構な規模の血溜まりができてしまうほどであった。
「許してください！　やめてください！　ひいいいいっ！！」
「ダメ！　まだまだ許してやるかよ」

しばらくしてようやく三角椅子から下ろされた陽子は、号泣しながら股間を押さえることも出来ないまま身体をくねらせて悶え苦しむ。

「診察してあげるから仰向けになってくれる？」

平な長い机を運んできて仰向けに寝かせると、結局最後の一枚を脱がされてゆく陽子。

「血まみれの汚れたオパンチュなんて脱ぎ脱ぎしちゃおーねぇ♡」

「痛いっ！　いやっ！　ひっ！？　脱がさないでっ！！　アソコ見ないでええぇっ！！」

「マンコなんて見慣れてるんだよクソアマがっ！」

『スルスル……ズルリッ！』

「マンコもアナルも見慣れてるし」

容赦なく足首まで下着をおろす咲良。

「やだ……それでも恥ずかしいっ！　見ないでお願いっ！」

田島美緒と渋谷凪子は動かないようにベッドに手足と腹部をバンドで固定してゆく。

親指を大陰唇にグッと押し当て、冷たく微笑む咲良。

「血まみれのマンコの中身……あたいたちに見せろ。ご開帳っ♡」

『グリッ！　くぱあっ！！』

一気に左右に開くと、膣の中がパックリと丸見えになる。

「やあああっ！？　やだああああっ！！」

『くぱくぱくぱくぱっ！』

何度も開いたら閉じたりを繰り返して楽しむ咲良。

「あはは♡　マンコの中身が血と粘液で糸引きまくってるじゃん？ヤラシィなぁこの穴♪」

「やめてくださいい宮垣様っ！　お願いしますからあっ！」

「何が宮垣様、だよ。これからこっちの穴の中身も見てやるからな？」

人差し指の先を軽く肛門へ突っ込むと、陽子は大きく身体をのけ反らせる。

『ツプッ』

「やはあっ！？」

更に凪子と美緒の協力手マンが始まった。

凪子がクリトリスを親指でさすりながら美緒は中指を膣内へ突き入れる。

『スコスコスコスコ……』

「グチュッ！」

「やだっ！　恥ずかしいっ！　うえええええんっ！！　うえええええええんっ！！」

「やだな。変な泣き方。あははは♪」

二人にクリトリスと膣内を責められながら頬を真っ赤にする陽子。

咲良は銀色の医療用クスコを鞄から取り出して、肛門にそっとあてがった。

冷たい金属の感触が陽子のアナルへ鈍く伝わる。

「ヒッ！？　冷たいっ！？」

「ほらぁ。お前の汚い穴に金属が入るよぉ？　えい♡」

『グリッ！　ズブブッ！』

「ひやあっ！？　そんなとこやだああああっ！！」

「マンコは何度も剥き身にしたの見てきたけど……アナルはまだじっくり見たことないのよね。ほら、奥の奥までケツの穴見せてもらうよ？」

『ズボボボッ！　ずちゅうっ！！』

「はううっ！？　やだあっ！！　抜いてえええっ！！」

ついに根元まで挿入されたクスコ。

黒髪を振り乱しながら咲良たちに懇願する陽子だが、無情にも咲良はクスコを根元まで差し込み、全開に開いていった。
パックリと押し広げられ、丸見えになって行く肛門内部の直腸。

「やだあああっ！！　見ないでえええっ！！」

「黙れ！　マンコくり抜かれたいか！？」

「ひっ！？」

なんとなく咲良の闇の仕事を噂で聞いていただけに、本気で恐怖に凍りついて大人しくなる陽子。

怪しくエロくピンク色に光る肛門内部を交互に観察する瓜子と美緒と咲良の三人は、次は性器にクスコを差し込み変える。

「お尻のあとで前に差し込むなんて酷いいいいっ！　汚いいいいっ！！」

「あ！それもそうだな。失礼♪　ってゆうか立場分かってんのかお前は？　マンコにクソ食らえだ！　ほらあっ！」

『グチュッ！！　くぱあっ！！』

「ひゃーーーっ！！」

直腸に続き、マンコまでも全開に開かれる陽子。

大事な性器の穴を大便まみれにされる屈辱と激痛で、溢れ出る涙が止まらなかった。

半時間もかけて散々三人に性器と肛門の内部をじっくり観察された後、四つん這いにさせて浣腸まで施されるハメになる。

「臭いケツアナ綺麗にしてやるよ。ほら」

「ズブ！　ぷちゅううう～」

「ひあっ!?　んんんんっ!　ひ、酷い。しくしく。しくしく。酷いよおぉ」

泣き疲れて恨み節を語るしか無くなった陽子は、浣腸器を肛門に差し込まれながら小便を漏らしてしまう。

「グリセリン濃度高いやつだけど5分は我慢しろよ?」

「う、うう。んんん……」

一分も持たずに噴水のように便を噴射する陽子。

「あーあ。きったねえなお前は」

咲良たち三人は腕を組んで笑いながら糞尿を漏らす女子中学生を見下ろす。
渋谷凪子はバケツに汲んであった水を下半身にぶっかけた。

「パンツ履けるようにクソやションベン流しといてやるよ。感謝しろよ?」

「ううう……あ、ありがとうございます凪子様……」

田島美緒は中学生に挿入するには大きすぎるサイズのペニス形の張形を取り出して、腰に巻いたペニスバンドに装着する。

『ガチャ！　ガチャン！』

「セット完了！これでよし。ヒィヒィ言わしたるぞぉ♪　さぁもう一度四つん這いになってケツ突き上げろ」

「ひいっ!?　そ、それをどうする気!?　ま、まさか!?」

宮垣咲良と渋谷凪子に強引に四つん這い態勢にされて固定される浅宮陽子。

「そのまさかだよ。臭いマンコにくれてやるから喜べ」

咲良は陽子の顎を掴んでグイッと引き上げてからゆっくり語りかけた。

美緒もゆっくりと背後から歩み寄りながら話しかけた。

「姉と妹も処女膜破かれてイっちゃったんだし。お前だけオーガズム味わえないのも不憫だと思ってな。ほら、脚を開いて力を抜け。力むと余計痛いぞ？」

「そ、そんなおっきいの入らないいっ！　お願いやめてえええっ!!」

『ピト……ツププ！』

「ヒャアッ！！　やめてっ！！」

中学生の菊門に押し当てられた巨大な張形は、ゆっくりと少女の肛門括約筋をこじ開けてゆく……。

「入らないことないよぉ。たっぷりローションも塗ってやってるから入りそうだけどなぁ？　ほら」

『ズブブッ！……ばちゅうっ！！』

「ほげええっ！！！！」

「根元までズルンッて一気に入っちゃった♪　すまんすまん。じゃあ覚悟しろよメス豚」

田島美緒の激しい腰振りが開始された。
直径7センチ、長さ20センチはある中学生には超極太クラスの張形が陽子の膣内を犯す。
子宮頸部を抉り抜き、子宮内にまで到達する先っぽは、浅宮陽子に人生で最大級の激痛を味あわせた。

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「やはっ！　ひんぎきぃいいいいっ！！　死ぬっ！　死んじゃうううううううっ！！！！」

「まだまだ速くなるよぉ？　擬似チンポの先端は子宮まで届いちゃってるだろ？　あははは！　ほらほらほらほらあっ♡」

「はへっ！？　あへえええぇっ！！……ガクンッ」

膣道を強引にこじ開けながら高速ピストン運動による摩擦で激しい熱を感じながら、さらに子宮頸部を突き破る長さの異物の侵入に、陽子の下半身は悲鳴をあげる。

ついに白目を剥いて気を失ってしまった。

膣から張形を引き抜くと、ゼリー状の粘度のある血液がタップリとこびりついている。

「うわぁ～。すっげ！　なんか変なの付いてきたよ？」

美緒は粘度のある血液を陽子の臀部に塗りたくって張形を綺麗にした。

「子宮からの血じゃない？　マンカスと愛液とオリモノの混合物だよきっと……」

渋谷凪子がマジマジと血液を見つめながら呟いた。

うつ伏せに倒れ込んでいる陽子のお腹に手を回してお尻を高く引

き上げる美緒。

「ようく見せてみろよ」

大陰唇に親指を押し込み、思いっきり左右に開くと、血の混じった粘液だらけの膣内が丸見えになった。

「マンコの奥から変な音出してるよ。何かグチュグチュいってる……」

「ほんとだ。エッチ♡」

「マンコに釣られて肛門までヒクヒクしてるぅ。アハハ♡」

咲良たち三人は好き勝手なことを言いながらヤンキー姉妹の次女の股間を観察した。

「凪子！　ちょっとクリトリスの皮剥いてて」

「いいよ。何するの？」

咲良はヒクヒク動き続ける膣の上方奥側に狙いを定め、思いっきりデコピンする。

正確にはクリピンだった。

オデコでも痛いのに、弾かれた咲良の中指の爪は陽子のクリトリスを直撃する。

『バシィンッ！！』

「はぎいっ！！！！」

白目はあっとゆうまに黒目に変わる。
あまりの激痛に瞬時に目を覚ましてしまう陽子であった。
せっかく突き上げたお尻を再び下げて、完全にうつ伏せ状態で股間を両手で押さえながら泣き叫ぶ姿を見ながら爆笑する三人。

「咲良のマンピンすっご！」

「いや、クリピンです田島さん」

的確に細かく訂正する凪子。

「クリトリス千切れて飛んでいってないか？」

「うぎぎぎ！　ぎひいいいいっ！！」

コロコロと転がりながら陰核の痛みに耐える姿は咲良たちSの心

を更に湧き立てさせる。

「ほら、立てよ」

無理矢理立たせる瓜子と美緒。

「さっぱり涼しくしてやるからな」

『じょきん！　じょきん！』

「やあっ！？　やめてえええっ！！」

黒髪ロングの艶のある美髪を適当に荒々しくカットしてゆく咲良。

「何で私だけ！？　やめてよおおっ！！」

「陽子の髪が一番綺麗からだよ？なんか見てるとイライラしてきちゃってな。てへへ」

最後はバリカンを持ち出して、完全にツルッパゲに剃いてしまう。

「どうだ？　あたいの腕前は？」

「わーんわーん！　ひ、酷いよおおっ！！」

「もうパンツ履いていいよ？」

泣きながらもパンツを履き終えると、綺麗な黒髪が全て消えた頭を手で触り、またまた号泣してしまう陽子。

「もういい加減泣きやめよ？　三人とも私らに犯されてラストバージンした感想は？」

「き、気持ち良かったです」

「わ、私も！」

「ぐすん、ぐすん」

由貴と唯に続いて感想が言えなかった陽子。
同性に犯されたことより髪の毛を剃られた方がショックだった。

「まぁ処喪失とかゆうけど、最初からマンコの膜なんて穴開いてるらしいじゃねーか。そんな気にするな」

「そうなの咲良？」

田島美緒が目を丸くして描き直す。

「そりゃそうだよ。穴空いてなきゃ大変だぜ？　膣の奥からのオリモノとか血とか出て来れなくなっちゃうじゃん！」

「そ、そりゃそうだよな！まぁ初めから破れてるようなもんなんだ処女膜なんて。アハハ！」

先輩なのにあまり知識がない賢くない田島美緒であった。

卑怯者への私刑（後書き）

泣きながらも下着と全ての衣服を着終えた浅宮三姉妹。
咲良たち三人に対して並んで土下座をする。

「今度卑怯な喧嘩したら半殺しにしてやるからな？　分かった？」

「はい！　すみませんでした！」

同時に叫びながら額を床に擦り付けて詫びを入れる三姉妹。
股間を押さえながら人生初の痛みを伴うロストバージンを味わった三姉妹は黄昏の体育館をようやく出してもらえたのであった。

「しまった！　アイツらに糞尿とか愛液とかで汚れた床を掃除させるの忘れてたじゃんか！？」

「あっ！　掃除しなきゃ！」

「ほんとだ！」

田島美緒が思わず叫ぶが、咲良と凪子はせっせと雑巾掛けを始めていた。

「はぁ……凄惨な性的リンチはしてもそうゆうとこ真面目なのねお

前ら……」

極北女子中学生二年のヤンキー三姉妹は、この日を最期に二度と投稿してくることはなかった。

SとMの人間模様（前書き）

少しずつ深まってゆく女子高生と女子児童の愛。
元罪人とゆう異例の壁をのりこえて、二人はどんどん深みに落ちてゆく。

SとMの人間模様

赤霧島小学校に通う菅野莉央は、最近毎日のようにオーガズムを感じている。
戸籍からは抹消されて、この世に存在しない人間となってしまった女子高生、円満愛衣の舌使いが絶妙だったのだ。
女子小学生に奴隷にされる女子高生、とゆうのもなかなか考えられない関係だが、実際それに近いものはあった。

「あん。いいよ！　気持ちいい……」
「ペチャ！　ペチャ！　はい。ありがとうございます莉央様」
「もっと深く舌を……」
「くちゅ！　グチュチュチュチュ！」
「だめ！　あっ！　イ、イく！　イっちゃうううっ！！」

女子高生の円満愛衣は、菅野莉央に自宅でかくまわれて過ごせることを本当に幸せに感じていた。
そこには年の差や性別をモノともしない愛が存在していたからである。

「んんん、やだ愛衣ったら！　またイっちゃうじゃん！　あ、あん

んっ！！」

舌で膣を掻き回してもう既にオーガズムに達した莉央に対してまだまだご奉仕をやめない愛衣。
陰核から肛門まで丁寧に卑猥な音を立てながら舐めまくる。
更に滲み出る莉央の愛液をジュルジュル啜ると、一気に飲み込んだ。

「も、もうあたしはいいよ！　今度は愛衣がイく番だから！」
「はい莉央様。愛衣を激しく犯して下さい♡」
「うん。タップリお返ししてやるんだから覚悟しなさい！」
「いやんっ！　エッチ♡」

三人で付き合うことになった同性の内の二人は、毎晩のように愛し合い、抱き合うのであった。
普段はＳの円満愛衣も、菅野莉央の前では完全にＭ化して奴隷のように従順になっている。

相手は小学生とはいえ、決して喧嘩で敵わないことを悟っている愛衣が莉央にバックで犯される。
ペニスバンドを装着して適度なサイズの張形をセットして四つん這いにさせた愛衣を激しい腰使いで何度もイかせる莉央。

「ほら！　イけ！　愛衣っ！」

「あっ！　あはあっ！！　莉央様っ、イく！　イっくううっ！！」

ベッドにうつ伏せのまま倒れ込んで頬を真っ赤にして早い呼吸になる愛衣。

「はぁ。はぁ。倍返しですか……この度は？」

「うん。四回確実にイかせてやったよ♡」

「そんなにイかされたらますます莉央様のことが好きになっちゃいますよ？」

「なったらいいじゃん。ってゆうかなれ！」

「うふふ！　はい♡」

「素直な愛衣は好きだよ」

「ありがとうございます。でも美香さんは別に住んでますから毎晩愛し合えなくてなんか気の毒な気もしますね……」

「……そ、そうだね。三人で会った時しかエッチしてないことにしようよ」

「莉央様。おずるいのですね……」

「てへっ！」

少しの会話を終えると、二人は再び素っ裸のまま抱きしめ合い、夜中の二時頃までチチクリ合うのであった。

――明くる日の朝。富田美香邸。

「早く食べないと遅刻しちゃうわよ美香」

「昨夜夜中に何故かクシャミが止まらずになんかムシャクシャしちゃって……アイス三つも食べちゃったの」

「どうして夜に冷たいモノ馬鹿食いすんのよ？　お腹こわしちゃうわよ？」

「だからそうなったの。今のトイレで五回目だよ。あー！？　またジクジクしてきたぁ！　ママ！　今日学校休んでいい？」

「ダメです！　あなたからも言ってあげてくださいよ？」

新聞を読みながらケラケラ笑っている美香の父に助け舟を出す母だったが、父はまだ笑いの余韻を残しながら問いかけてくる。

「まぁまぁたまには良いじゃないか。無理矢理行かせても授業なんて頭に入らないぞ？」

「あなたってば相変わらず美香には甘いのね。分かった。今日だけよ？　明日からは必ず登校するように！　分かった？」

「ありがとう！　物分かりのいい両親を持ってあたしは幸せだわ♡」

勢いよく立ち上がり、駆け足でダイニングキッチンを飛び出してゆく美香。

「元気じゃないの！？　こらっ！！」

母親の叱責も聞こえぬふりで部屋に駆け込むと、思いっきりベッドに横たわる。

「ふぅ。なんか今日は学校行く気分じゃなかったのよね。ゆっくり昼まで寝ようっと！」

ツインテールを解くと、そのまま涎を垂らしながらスヤスヤと深い眠りにつく美香であった。

――――赤霧島小学校。

「おはよう」

「おはよー」

顔を合わせていつものように挨拶をかわす莉央と明日香。

「あれ？　美香ちゃんは？　いつも明日香ちゃんと合流して一緒に来てるのに」

「今日電話して聞いたらお腹壊しちゃったから休むんだって。絶対サボりグセが出ただけだよね？」

明日香は目を瞑って首を横に数回振る。

「そうなんだ。まぁたまにはゆっくり休むのもいいと思うよあたしも。土日だってレッスンとかライブがある時どうしても無理しちゃうからね」

「それはそうだけど……ん？」

視線を感じる明日香は咄嗟に振り向く。

最後列の窓際の席に座るメガネをかけた優等生、平野吉行が明日香を見つめていた。

「きしょ！」

「どうしたの？」

「あのね。最近平野が私たちのことマジマジと見てくるの。一度文句言っていい？」

結城明日香はそっと立ち上がり、一限目の授業が始まる直前に平野へ歩み寄る。

「何ジロジロ見てるのよ？　なんか私たちに文句でもあるのかしら？」

「い、いや。文句なんて……」

「数日前も美香ちゃんに牛乳ぶっかけて頭ど突かれてたわよね？　あれもわざとじゃないの？」

「そっ、そんなことないっ！　絶対わざとなんかじゃないっ！！」

急に怒鳴るように大声で反論する平野吉行に、明日香の方がびっくりしてしまう。

教壇に立ったばかりの新米の女担任も、周りの生徒たちも一斉に

平野の方を見る。

「ちょ、びっくりしたじゃないの！　この馬鹿野郎！」

『ポカッ！』

「ご、ごめん」

軽くゲンコツで頭をど突いた後、席に戻る明日香。

「今の反応、怪しいわね莉央ちゃん」

「うん。あたしたちになんか恨みでもあるのかもね。そのうち問いただしてやろうよ」

「最近平野のことをムカつくムカつく言ってた美香ちゃんがいるときにね。明日は美香ちゃん学校来るでしょ？」

「そうだね。明日平野を尋問しちゃお！」

そのまま長い一日の授業も終わり、それぞれ帰宅する莉央と明日香。

莉央が帰宅すると円満愛衣が玄関でいつものように莉央を出迎える。

「おかえりなさい莉央様」
「ただいま。今日のオカズは何かな？　お腹減ったよ」
「お婆様が風邪をひいて体調崩されてますから、愛衣がハンバーグを作りました」
「えっ！？　ハンバーグ大好きっ！早く温めてっ！」
「出来たて焼きたてです。だいたいの帰宅の時間分かっておりますから」
愛衣のお尻を挨拶ついでにポン、と触ると慌ててキッチンへ向かう莉央。
炊き立てのご飯もスタンバイされており、大好物のハンバーグと共に勢いよくガッついてしまう。
「あー美味しかった！　愛衣は強いしほんと才能もあるよね色々と」
「いいえ、それほどでも」
「あのさ。学校……」
「え？」
「学校行きたくない？　藤堂長官に帰りに電話して聞いてみたんだ。そしたら全く別人の円満愛衣として……学校では菅野愛衣に名前を

変えて、とゆう条件だけど。黒霧島高校へ転入生として受け入れてくれるように根回ししてくれたって」

しばらく身動き一つせずに固まる円満愛衣。
目だけは大きく見開いているのが少し不気味だった。

「残酷処刑島のお仕事入る日まで家でずっといるのも退屈でしょ？愛衣はアイドルにも所属してないし」

莉央が更に話しかけても少し俯いたまま身動き一つしない。

「あれ？　あのう……　聞いてる？」

いきなり大粒の涙を流し始める愛衣。

「え？　なんで！？　あたし何か泣くようなこといった！？」

「ありがとうございます！　愛衣も学校行きたかったんですぅ！」

泣きながら莉央に抱きついてくる。

「ちょ、ちょっと危ない！　ハンバーグが吹っ飛んじゃうじゃん！

？」

「ほんとありがとうございます莉央様！」

「そんなに喜んでもらえるとはね……は、ははは」

そのまま晩御飯を食べ終わると、一緒にシャワーを浴びてから二階に上がる二人。

「最近お兄ちゃんなかなか家に帰ってこないよね？」

「彼女さんをかなり傷つけてしまったから無理もないですよね。最近はその彼女さんのアパートで同棲してるとお婆様から聞いております」

「そうなんだ。また連れてきたらあたしたちが可愛がってやるのにね」

「うふふ。おっしゃる通り」

裸のままベッドに入り、抱きしめ合う莉央と愛衣。
お互いの胸を揉みながらディープキスを長時間行う。

「んん。莉央様、愛してます」

「んっ、あたしも愛してるよ」

「今日はアナルも責めて欲しいです」

「愛衣も好きだなぁ。いいよ。アナルは電動バイブで掻き回して前はあたしの指でぐしょぐしょにしてあげる♡」

「やん！　莉央様のエッチ♡」

そのまま邪魔になる掛け布団を床に落としてM字開脚させると、莉央のアナル責めが開始された。

執拗に直腸内を掻き回されて、膣を愛液でぐしょぐしょに濡らす愛衣。

溢れ出る愛液がアナルまで垂れ落ちてきて、ローションがわりになると、更に激しく出し入れを繰り返す莉央。

「お尻の穴でこんなに濡らしちゃってぇ。ヤラシいなぁ愛衣は」

「あんっ！　あんっ！　莉央様の、エッチイイ！　あんあんっ！」

そのまま右手の中指と薬指をビショビショになってしまっている膣へゆっくりとあてがい、差し込んでゆく。

「ここ？　ここにも欲しいのね？　ほら！」

『くちゅ！　ズブブブブ！』

「あっはああんっ！　んんんんっ！」

『グチュチュチュチュチュチュチュチュッ！！』

莉央の高速の指マンでそのまま潮を噴かされる愛衣だった。
そのまま電動バイブの振動と莉央の指マンに五回もイかされて、顔を真っ赤にしながらビクビク身体をのけ反らせる愛衣。

「気持ち良かった？」

「は、はい！　六回もイっちゃいました♡」

「次はあたしだね。クリをメインにヤラシく舐めて♪」

「はい！　莉央様。ペロペロ……クリクリ……ペロンペロン！」

「んあっ！　んんんん！　あ、相変わらず舌使いが絶妙だね？　んんっ！」

愛衣の舌で六回ほどイかされる莉央。
同じ回数だけ絶頂を味わった女子高生と女子小学生の二人は、抱きしめ合いながら眠りに落ちた。

――翌朝。赤霧島小学校。

「では一時限目の算数の授業を始めます。１８ページを開いてくだ

さい」

今月から担任になった女教師が教壇に立って授業が開始された。
黒板にチョークでテンポよく数字を刻んでゆく女教師。
前の担任は莉央たちが怖くなって辞めてしまった。
六年三組の担任は何度も辞めてしまうので、赤霧島小学校の校長も頭を悩ませている。

結城明日香はスッと席を立ち、メガネ少年、平野吉行の横で立ち止まる。

「平野！　一番後ろのスペースに来てもらえるかな？」

「え？　あ、うん。」

目をパチパチしながら明日香に連れられて教室の後部スペースに連行される平野吉行。

菅野莉央と富田美香が腕を組んで立っている。
その隣に明日香も並び、平野をジッと睨みつけた。

「最近美香ちゃんに色々と攻撃してるみたいね？」

「牛乳わざとぶっかけたり、つまずいたフリして体当たりしたり……美香ちゃんに恨み持ってるのは明白だよね？」

明日香に続いて莉央も問いかける。
張本人の美香も続けた。

「その前も廊下で転んだフリしてスカートの中覗いたでしょ？　全てワザとでの嫌がらせだよね？」

「ち、違う！　ホントにツイなんだ！　ごめん……」

目を細めて更に睨みつける美香。

「まずあたしたちにオイタしたことに対して土下座してもらおうか？」

「う、うん。本当にごめんなさい！」

ゆっくり土下座をして額を床に擦り付ける平野吉行。
更にその後頭部へ運動靴の足の裏を置く美香。
グリグリと踏みつけるように左右に捏ねる。

「痛いいいっ！」

「本当に反省してるの？　だったら誠意をもっと他の方法であたしたちに見せてくれるかな？」

美香は足の裏で右の顔面をパンパンと軽く叩きながら囁きかける。

「はい……富田さんたちのいつもの制裁を見てたので……僕もそうさせてもらうから……それで許して」

しゃがみ込んで髪を鷲掴みにして顔面を引き上げる美香。

「いつものあたしたちの制裁？　何をしてくれるのかなぁ？　しょーもないことだったらホント張り倒すからね？」

スッと立ち上がり、自分でズボンを脱ぎ始める平野吉行。

きょとんとして目を丸くしながら呆然と見つめる美香たち三人の少女。

他の生徒たちも授業そっちのけで振り向いて三人対一人のイジメらしい行動を凝視している。

「あ、あれ？　これから言おうとした事を自分から率先してやってる？」

パンツを脱ぎながら頬を赤くする平野吉行。

「富田さん、僕のオチンチン見て！」

「ええっ！？」

思わず声を上げてしまう美香。

「分かった！　コイツ私たちに恨みがあるんじゃなくて美香ちゃんの事を好きでしかも性格がＭでイジメて欲しかっただけなんだ！」

明日香がそのことに気づいて大声で叫ぶと、クラスメイトたちも驚きの共鳴をする。

「ち、違うっ！　オチンチン見せなきゃこの子たちは許してくれないから……殴る蹴るとかされるの怖いんだよ！」

「……だってさ美香ちゃん。どう思う？」

「だってさ、って言われても……こんなナヨナヨしたメガネ男なんて興味ないしなぁ。とりあえずお望み通り性的イジメをやってやろうよ」

美香のその言葉に反応する平野吉行の仮性包茎のペニス。
ムクムクとあっとゆうまに下腹部にめり込むほど勃起した。

「やだコイツ……自らはいそうです。お願いします、って言ってるようなもんじゃないの？　呆れるわね」

明日香は目を閉じてため息をついた。

「さぁ美香ちゃん推しのお仕置きタイムといきましょうか？　あえてここは美香ちゃん以外のあたしと明日香ちゃんで責めようか？」

「………」

隆々とイキリ勃ったメガネ少年のペニスを見つめながら固まっている美香。

「美香ちゃん？」

「え？　あ、そうだね！それもいいかも」

莉央と明日香は顔を見合わせて平野吉行の前後に回り込む。

「クラスのみんなにあんたの射精シーン見てもらおうね？」

莉央はそう言いながらペニスを握ろうと右手を出しかけた。

「待って！」

「ん？　どうしたの？」

「やっぱあたしが責めちゃう！　せっかくファンでいてくれてるならそれがコイツに対してのせめてもの情けかなぁ、なんて思っちゃったりして……てへへ」

再び顔を見合わせる莉央と明日香。

「良かったねメガネ少年。あんたの推しの美香様が直々に責めてくれるんだってさ」

「アナル責めを特に得意とする子だからお尻の方はかなり激痛だよ？覚悟しときなさいね？」

莉央と明日香は捨て台詞を吐きながら平野吉行から離れる。

「さぁ写生の時間、じゃなくて射精の時間といこーか平野？」

「うっ！そ、そんな……富田さんにそんなことされるなんてシアワ……恥ずかしいよっ！　やめて！」

「うるさい！　両手を後ろで組んでジッとしてなさい！」

「嫌だ……みんな助けて！」

クラスメイトたちに助けを求めるがそれが本音でないことは男子も女子も理解しているため、総スカンを食らう。

『ギュッ！』

「わあっ！？　そんなとこ握らないでよおっ！」

「うるさい！　そうして欲しいくせに！　スッゴ！？　何この硬さ……そんなにあたしのこと好きなんだ？」

「そ、それは……は、恥ずかしいからやめて……」

美香の手コキが開始される。

『シコシコシコシコ……』

「思いっきり飛ばさせてあげる。１メートルは飛ばさないと金玉潰しちゃうからね？」

「ひっ！？　やだそんなの！　やめて富田さん」

『シュコココココココッ！！』

「これくらいの強さで高速でシゴくのが気持ちいい？　ほらほら！」

平野吉行は頬を真っ赤にしてツインテールのアイドル、富田美香の手コキを堪能しているように見えた。

「んんっ！　やめ、あああっ！」

「気持ちいいでしょ？　もうイっちゃっていいよ？」

「んああっ！！　富田さんっ！！」

『ドピュッ！　ドピュピュピュピュピュウッ！！』

８０センチほど精液を飛ばしてしまった。

「たくさん出たわねぇ。でも１メートルには及ばないんじゃないかしら？」

明日香が苦笑いしながら呟くと、莉央も続けた。

「金玉潰しの刑だね美香ちゃん？」

「や、やめてっ！　そんなことされたら死んじゃうよぉ！　でも富田さんに潰されるなら僕は……」

みんなが見ている前でついに白状してしまうようなセリフを吐いてしまう平野吉行。
我に返って超恥ずかしそうに顔面中真っ赤にしながら射精したばかりの性器を両手で隠す。

『ギュッ！』

「はうんっ！？」

いきなり右手で右側の睾丸を鷲掴みにする美香。

「右が少し大っきいわね。こっちから潰しちゃおっかぁ？」

少しずつゆっくりと力を込めてゆくと、段々激痛に変わってくる。

「ぐっ！？　い、痛いっ！　やめてっ！」

「本気で潰しちゃう気なのかな？　美香ちゃんは」

その光景を見ながら少し心配になった明日香が莉央に問いかける。

「心配しなくてもそれはないよ。美香ちゃんの片手の握力では全力

でも金玉は潰せないから。かなり見た目以上に強くできてるんだよねタマタマって。でもなまじ潰れない程度の握力でジワジワ締め付けられたら余計生き地獄なんだけどね……あはは……」

「痛いいいっ！！　ぐおおおおっ！！　やめて許して美香様っ！！」

「あれ？　富田さんって読んでたのにいつから美香様になっちゃったのかなあたしは？　あははは♪」

しばらく握り続けてからようやく手を離す美香。

「金玉はこれくらいにしといてやるか。上の服も脱いで素っ裸になれ！」

激痛を味わった平野吉行は、半泣きになりながら服を脱ぐ。

「四つん這いになってお尻を突き上げろ」

「は、はい美香様。こうですか？」

「もっと高く突き上げるの！」

「は、はいっ！」

恥ずかしいポーズを取らされたタイミングで明日香と莉央に目配

せする美香。

「はーい！　分かってますよ美香様～♡」

「得意のアナルタイムだね。入れやすいように協力させてもらいまーす♡」

明日香に続いて莉央も楽しそうに美香に確認した。

『ぐっ！　グムムムッ！……パックン！』

「ひゃあっ！　やだっ！　そんなとこ開いて見ないでええっ！！」

平野のお尻は思いっきり左右から莉央と明日香に開かれ、直腸が剥き出るほど肛門が露出した。

「どうぞ美香ちゃん♡」

莉央が肛門を閉じたり開いたりして催促する。
明日香は人差し指でココ、ココ、と言わんばかりに肛門を指差してニコッと笑った。

「ありがとうお二人さん。ではでは平野吉行のバージンを戴いちゃ

うとしますかっ♪　ほらあっ♡」

『ツプッ！』

「んあっ！？」

富田美香の人差し指がメガネ少年の肛門へ突き刺された。

『ズブブブブ！』

ゆっくりと挿入していき、ついに根元まで人差し指が小さなアナルを貫いた。

「やだっ！　美香様、そんなとこに指入れないでっ！　痛いよ……」

「まだ一本だよ？三本までは突っ込んで拡張してあげるからね？覚悟しろこのマゾメガネ！」

マゾメガネに反応してクラス中に爆笑の声がこだまする。
女子たちは頬を赤くしながらも美香のアナル責めをしっかり観察していた。

二本、三本、と突っ込まれ、美香の人差し指と中指と薬指は男子児童の直腸を激しく掻き回す。

『メリメリ！　グチュチュチュチュ！』

「あんっ！　あんっ！　あんっ！！　痛いいいっ！！」

「あははは！　アンアンアンってドラえもんの歌かよ？　受けるわぁ♪」

嘲笑しながら卑猥な音が出るほど激しく直腸内を掻き回す美香。

「腸液溢れてきたわね。エッチなヤツだお前は……ローションがわりになって掻き回し易くなったし別にいいんだけど」

あまりの激痛に、ついに涙を流して泣き始める平野吉行だった。
１２歳になるまで出すだけの臓器が、まさか逆に指を、侵入させられて掻き回されるとは夢にも思っていなかったメガネ少年であった。

「んんん！　なんか変な感じ……美香様、なんか変な感じがするっ！　僕死んじゃうかもっ！？　うわあっ！！」

『ドクッ！　ドクドクッ！』

トコロテンであった。
美香の指捌きによって的確に前立腺を責め、ペニスに触れずに見

事射精させたのでえる。

「あはは！　その変な感じは気持ちいい感じってことでしょ？」

「はぁ、はぁ、はぁ、よくわかんないけど、き、き、気持ち良かったです」

「ヌメヌメしてヤラシイ直腸してるね平野？」

「やだ！　もう脱いてよおおっ！」

快感の前に激痛も味わった平野吉行は、まだ涙が乾いていなかった。

美香は三本の指をゆっくり肛門から引き抜くと、本人の背中に指に付着した便を擦り付ける。

「くっさぁ。可愛いアナルしてるけどやっぱウンチは臭いんだね？」

「ご、ごめんなさい美香様……」

「オナニーはしたことあるの？　精通はしてた？」

平野吉行のお尻を両手でパクパク開閉させせながら問いかける。

「は、はい。いつも富田さん……美香様のライブを見ながらあの変な液を出してました……」

「富田さんでいいよ。そうなんだ。あたしのライブまで見てくれてありがとう。でもお尻の穴いじられて射精したのは初めてだったでしょ？」

「は、はい。まさか激痛から快感に変わるなんて……思ってもみなかったです。なの変な感覚の気持ちよさは忘れられません」

静かに右手を高く上げる美香。

「あたしたちはとびっきりのSなんだ。もう少し楽しませてね平野？」

「え？」

『パァンッ！！』

「痛っ！？　やめ……ひっ！！」

『パンパンパンパンパンパンパンパンパンッ！！』

唐突に高速のお尻叩きが始まった。
教室中に響き渡る鈍い音に、再び生徒たちは振り返る。
女担任も一瞬驚いた表情を見せるが、すぐに黒板にチョークで数字を刻み始めた。

みるみる内に真っ赤に染まってゆくメガネ少年のお尻。
五分くらいかけて左右満遍なく叩かれて、臀部全体が真っ赤っ赤に染まってしまった。

思わずうつ伏せにペタンとヘタリ込んでしまうが、四つん這いに戻さないまま更に平手を打ち付ける美香。

「えいえいえいっ！アイドルのあたしにアナルまで犯してもらって嬉しいでしょ？ほら、答えなさいよ？」

「痛い痛い痛いいいっ！　う、嬉しいです富田さん！　痛いいっ！！」

しばらく痛々しいお尻叩きの刑は続くが、莉央と明日香は美香の優しさを感じて物足りなさも感じている。

「お尻責めは痛みより気持ちよさが勝ってたよ美香ちゃん？」

莉央が皮肉を言う。

「テヘッ！　バレちゃってた？あたしのファンだからかなりサービスしちゃってたのよね。だからこの地獄の尻叩きで調整してるよ」

「しっかり調整してるんだ……やれやれ」

明日香も呆れながら納得した様子。
臀部を真っ赤になるまで叩かれた平野吉行は、本気で号泣し始めた。
ガラス製の特大浣腸器を鞄から取り出すと、真っ赤に染まったお尻の肉のど真ん中にある菊門へ一直線に差し込む美香。
「グリセリン１００％の特別をキミにあげちゃう♡」
『プスッ！』
「んあっ！？」
『プッチュウウウウウウッ！！』
「冷たい！？　やめてええっ！！」
３００ｍｌほどもグリセリンを挿入された平野吉行は、思わず指で肛門を押さえてしまう。
「さぁ立て平野」
「は、はい、うっ！？　なんかウンチしたい！？　ト、トイレ行かせて」
「教壇の上に立って後ろを向いて排便するのよ」

「そんな！？　恥ずかし過ぎる！　先生にもおこられちゃう！」

莉央たちの噂を聞いていていてビビり切っている新米の女担任が怒るはずもなく、すぐに教室を出て行こうとした。

莉央がそれを阻止する。

スカートの下から手を入れて、パンツ越しに中指を根元まで差し込んだ。

「痛いっ！　や、やめて菅野さんお願い」

「こんな臭マンなんてパンツ越しで十分なんだから。ちゃんと平野の排便ショーをみていくのよ？　分かった？」

「それは……担任の私がそんなことを見過ごしては教頭に怒られ……」

『ズブッ！！』

「ひゃあっ！？」

四本の指が女担任の性器にめり込んだ。

パンツまでも膣の奥深くまで無理矢理ひきづり込まれてゆく。

足首に血が伝い落ちてきた。

「あたしと教頭どっちが怖いか思い知らせてあげるわ。肘までぶち

込んであげようか臭マンに？　子宮がパンツを履くことになっちゃうわよ？」

「いやあっ！！　わ、わかりました見ていきますっ！　ひいいっ！」

莉央に泣かされる２５歳の若い新米女教師、田中美佐子であった。

結局教壇の上に立たされた平野吉行は、クラスメイトの見守る中、勢いよく排便をさせられてしまうのであった。

悲鳴を上げながら立ち上がって後部へ逃げる児童たち。

立ったまま水のような便をへり出さされる恥辱感に、涙が止まらない平野吉行。

そんなこんなでようやく制服を返してもらい、服を着て一日が終わった。

――――明くる日。

富田美香の膝の上に座って授業を受ける平野吉行の姿があった。

その姿は上下に動いている。

『ズブ！　ズブ！　ズコ！　ズコ！』

「ほら、もっと腰を振るのよ？ 今日は直径3センチ、あたしの指三本と大して変わらない太さだけど毎日毎日サイズを大きくしていくからね？ どんどんお前のアナル拡張してやるから♡」

「んっ！　んっ！　んあっ！　あはっ！　やめて富田さん、痛いよぉ」

そう言いながら美香の膝の上で必死に腰を上下に振り、美香のペニバンレイプを受けている。

「こら！　腸液垂らしすぎだって！　あたしの膝までビシャンコになっちゃってるじゃん！？　殺すよ？」

「そ、そんなこと言われても……気持ちいい」

「そう？　十日後くらいにはあたしの拳が入るくらいまで拡張してやるからね？ そんなこと言ってられなくなるよぉ？　あはははは♡」

「そんな、うっ！？」

『ドピュッ！　ドクドクドク……』

美香の机のに平野吉行野の精液がブチ撒けられる。

莉央と明日香はやれやれと言った表情で、美香に犯されている平野吉行のこれから先を本気で心配していた。

床に下ろされた平野吉行は、今度は美香の電気アンマによって責

められていた。
　下半身だけ全て脱がされていたので、生のペニスを女子の運動靴の裏で踏みつける何ともエロい電気アンマであった。

『グリグリグリグリッ！』

「んんんっ！！　そっと！　痛いっ！　そっとして富田さんっ！」

「これでも痛いの？　残酷処刑島なら蹴り込むタイプの性器破壊系の電気アンマなんだけどなぁ。何の罪もないお前の金玉潰しちゃったら莉央ちゃんに怒られちゃうからね～」

「こ、怖いよ金玉潰しだなんて……」

「え？　何チンポおっ勃ててんの？　この変態メガネッ！」

「だってパンツがさっきから見えちゃって……ごめんなさい！」

「エッチ！　電気アンマされててもそうゆうのはちゃっかり見てるのね」

　やり過ぎはダメだとよく分かってる美香に安心しながらも、少しの違和感を感じ始めていた莉央。
　ペニバンで射精させたあと電気アンマでも射精させられるメガネ少年は、頬を真っ赤にして美香の責めに興奮しているみたいであった。

　電気アンマ中に垣間見える美香のイチゴ柄のパンツに更に興奮し

て、襲いかかる運動靴の裏さえ跳ね返すほど勃起したまま踏まれて射精していた。

「あたしの足の裏についた汚いセーエキ……綺麗に舐め取ってくれるかな？」

「は、はい。ペロペロ……」

「よくできました。皮を剥いて中身見せて」

「うっ！？　は、はい」

じっくりとピンク色の小学生男子の亀頭部を見つめる美香。

「ピンク色できれーなチンポしてんじゃん？　でもカリの所にチンカスついてるよ？　取ってあげるからジッとしてて」

ティッシュで丁寧にチンカス掃除をする美香に、莉央は確信した。

「なるほど！」

「え？　なに？」

明日香がいきなり声をあげた莉央にびっくりする。

「見てて分かったのよ。美香ちゃん、アイツに好意もっちゃってる」

「ええっ！？　単に性奴隷にクラスメイトを選んじゃったってことじゃないの？」

「すべてが優しいのよ。なんてゆうか痛みを与えて興奮するあたしたちなのに……平野を気持ちよくさせようって気持ちが凄い伝わってくるんだなコレが……」

「そ、そう言えば……そんな感じだね。美香ちゃんってば」

三回目はチンカス掃除の後の優しさ溢れる手コキ。

「毎日あたしが抜いてやるから！　出なくなったら今度こそ金玉つぶしてやるからね？　分かった？」

「うん。いっぱい出させて下さい富田さん……うっ、イ、イくっ！」

「タップリ出せ！　ほらあっ♡」

『ドピュピュピュピュピュウッ！！』

まだ恥ずかしい上に嬉しいのか、頬を真っ赤に染めながら女子小学生アイドルに何度もイかされる男子小学生であった……。

――――一ヶ月後。黒霧島高校。

空手部の部室に足を組んでふんぞり返る女子高生がいた。

「愛衣さん、先輩を舐めてる生意気な男子の一年生を拐ってきました！　どうしましょう？」

「あんた一年の分際で三年の私のことも舐めてるのね？　いっぺん愛衣とタイマン張ってみる？」

「こ、こんな女がこの高校の番長だと！？　自分のこと名前で呼ぶ奴は苦手だしな。ほんとふざけてやがる！　男女数人に囲まれたから大人しくついてきてやったけどタイマンで女になんか負けるか！　相手してやるぜ！」

一分後に顔面中腫らしまくった喧嘩自慢の一年生、服部進が顔面の痛みに涙を流して泣いていた。

「家政科のみんなの前でオナニーしてもらうよ？」

女子ばかりのクラスである家政科は20人くらいの三年生のクラスであった。

この女子だけのクラスをまずシメてから男子の空手部の全学年を

シメて、わずか一ヶ月でこの高校の番長となってしまう円満愛衣。
この黒霧島高校では、菅野愛衣と名乗っていた。

「三年の家政科の皆様、僕のオナニー見て下さい」

強制的に決め台詞を言わせられ、素っ裸で教壇に立って女子生徒20人の前でオナニーさせられる服部進。
Mっ気のあまりない服部は、本気で悔しがり、泣きながらペニスをしごいている。
恥ずかしさと悔しさからなかなか勃起しないので、フニャチンのまま一生懸命シゴいていた。

「愛衣が勃起させてあげるわ」

「う、うう、くそう……」

「まだそんなこと言ってるの？　立場弁えなさい」

そう言いながら極太の通販のエネマグラにローションをタップリかけて、肛門に押し当ててゆっくり差し込んでゆく。

『ヌプ！　ズププププププッ！！』

「ひゃっはあっ！？　熱いいいっ！？」

ゆっくり差し込んだエネマグラは、途中から一気に直腸へ引きずり込まれていった。
肛門や直腸が熱く感じる服部進は、耐えきれず思わず叫んでしまう。
固いエネマグラの先が的確に服部進の前立腺に食い込んだ。
ゆっくり掻き回す愛衣。
「ううっ！？　な、なんか変な気持ちが……気持ちが……よくなってくるような……やめてくれぇ」
意識に反してムクムクと大きくなる高校一年生のペニス。
「ほら、ケツ穴掘られて勃起したチンポをシゴくのよ？」
「うう、ううう。は、はい」
結局強制的に前立腺マッサージにより勃起させられて、家政科の女子の前で大量の精液をぶち撒けるハメになった服部進だった。
射精を終えると同時に一気に肛門から抉るように引き抜く菅野愛衣。

「ぎゃああっ！？」

うずくまって股間を押さえながら恥辱感に苛まれて涙を流す少年であった。

SとMの人間模様（後書き）

傷ついた三角関係から同級生男子の奴隷を作ることでストレス解消した富田美香。
支配する気持ちから恋に変わりつつあった。
一方円満愛衣は菅野愛衣に、名を変え三年生として黒霧島高校に転入するが、一月と経たないうちにその力を発揮して高校全体をシメてしまう。
SとMの人間模様が交錯する一年であった。

真っ赤な肉塊と化す二人の児童（前書き）

少年法に守られた子供。
たとえ子供でも犯した罪の重さは変わらない。
国が裁けない児童をも平等に裁いてしまう特殊任務省の拷問処刑人たちは、被害者遺族の心を癒す唯一の存在である。

真っ赤な肉塊と化す二人の児童

金曜日の六時限目の国語の時間。
赤霧島小学校は本日も普通ではない一日を終えようとしていた。

『シコシコシコシコ』

「あう、ううう」

富田美香はクラスメイトの平野吉行を膝の上に座らせて、後ろから手を回してペニスをシゴいている。
ズボンとパンツをを足首まで下ろさせたままひたすらシゴく美香。

「最近アイドル活動じゃない方のお仕事がないよね莉央ちゃん？」

喘ぐ吉行を無視するように莉央に質問する。

「そだね。少し間が空いちゃったみたい。でも明後日の日曜日はあたしたち三人と愛衣の四人で久しぶりに仕事入ってるから」

「そうなんだ！　罪人は何人？　大人？」

結城明日香が美香より先にズレたメガネを上げながら聞き直す。

「同い年の小学六年の男女だよ」

一瞬黙り込む美香と明日香。

『ズブッ！』

「あひいっ！？」

右手でシゴきながら左手の中指を肛門に突き入れる美香。
平野吉行は思わず悲鳴をあげた。
ゆっくりと中指も差し込み、二本の指で直腸を掻き回しながら前立腺を刺激する。

「うっ、ううああ！　で、出ちゃうっ！！」

「だせ！　ほらあっ！」

『シュコココココココ！』

「わああっ！」

右手のシゴく速度を全開に速めると、イキり勃った小学生の小さ

なペニスから大量の精液が噴射される。

『ドピュピュピュピュピュピュピュウッ！』

「きったないなぁ。あたしの机の上セーエキまみれになっちゃったじゃん？　舐めて綺麗にしてよね？」

「は、はい！　富田さん」

肛門から指を引き抜き、付着した大便をバケツに汲んである水で洗う美香。

「やっぱり普通の法律じゃ裁けない子供を処刑できるのがあたしたちの特権だよね。気合い入れて惨殺しちゃおーね♡」

「だ、誰かを殺すんですか？　や、やめてあげてください富田さん」

「冗談に決まってるでしょ！　バッカじゃないのあんた！」

『グニュニュ！』

「ひうっ！？」

自分の精液を舐め取らせた後、更に膝の上に無理矢理座らせると、今度は睾丸を背後から両手でマッサージし始める美香。
優しく強く、揉むたびに強弱をつける美香のマッサージは、気持

ちいいのと痛みが交互に襲ってくる。

「あはっ！　ひっ！　痛いっ！　ぁんっ！」

「いちいち喘ぐなキモい！　潰すよ？」

「んはっ！　ご、ごめんなさい美香様！　でも……痛っ！！」

「あたしの呼び方いつから美香様に変わったの？」

「ご、ごめんなさい！　あはっ！　はんっ！」

美香の睾丸マッサージに喘ぎ続ける吉行を目を細くしながら見つめる莉央と明日香。

「あら？　また勃起しちゃってるよコイツ。はぁ～」

明日香が小さくても元気なペニスに呆れながらため息をつく。
美香は右脚の膝を股の間に食い込ませるように突き上げて、そのまま太腿で睾丸ごとペニスを摩擦し始める。

『ゴシゴシゴシゴシッ！　スコスコスコスコ！』

「やはあっ！？　き、気持ちいいです美香様っ！！　んんんっ！！」

「足の裏の足コキより太腿での足コキの方が気持ち良いのは当たり前だよ。ほら、もっと股開け！　そしてあたしの脚にタップリひりかけてみろ吉行！」

「はっ、はいいっ！！」

頬を真っ赤にして大好きな美香の太腿に擦られて一回目と変わらないほどの量を吐き出させる吉行だった。
垂れ落ちた精液が美香の右膝を満遍なく濡らした。

「よくそんなに出るね？　そんなにあたしのこと好きなの？」

「は、はい。毎日犯してください……」

「ハハハ……犯してください……か。確かに逆レイプみたいなもんだよねコレって」

立ち上がらせて膝に着いた精液を舐め取らせる美香。
くすぐったさにケラケラ笑いながら我慢していると、スカートの中に頭部をどんどん入れてくる吉行の頭を思いっきりしばく。

「こら！　パンツ見えるほど上の方舐めなくていいの！」

「はい！　ごめんなさい美香様！」

「罰としてズボンとパンツを没収ね？」

足首まで下げて絡まっていたズボンとパンツを完全に剥ぎ取ると、下半身スッポンポンのまま席に返させる美香。

美香のすぐ前の席に席替させているので、責めるのも簡単な状態にあった。

生のお尻で座っている姿を後部席から見ながら笑っている美香を見ながら莉央と明日香は呆れながらため息をつく。

「美香ちゃんは平野吉行ホント気に入っちゃってるよね？」

「うんうん。こりゃ毎日射精させられちゃうぞ平野は……」

そっと囁く莉央に笑顔で答える明日香だった。

一日の終わりを告げるチャイムが鳴り響き、児童たちは蜘蛛の子散らしたように教室から帰ってゆく。

「吉行！　何か言いたいことありそうだね？」

「み、美香様！　お願いです！　僕のパンツとズボンを返してください！」

「よく言えました♪　ほら、返してやるから土下座して額を床に擦り付けるの」

「は、はい！」

元々土下座して頼んでいたのだが、更に額を床に付けるよう強要された吉行は、美香に命令されるがまま下半身スッポンポンの土下座をする。

ようやく戻ってきた下着を慌てて穿きながら何度も礼を言う吉行。

「卒業するまで毎日射精させてやるから覚悟しなさいね！」

「は、はいっ！　ありがとうございます！」

「何お礼述べてるのよ？　ホント変態だねぇあんたは！」

好きな女子に責められて喜んでいることを分かっていながら責めるのをやめられない美香に、莉央と明日香は再三ため息をついた……。

学校から帰宅すると、いつものように『おかえりなさい』と言いながら迎えてくれる円満愛衣の姿がないことになかなか慣れない莉央。

「そっか。もう愛衣も学校行ってるんだもんね。なんかあたしが先に帰っちゃうと物足りない変な気分になっちゃう」

「ただいま帰りました！」

いきなり玄関のドアが開き、数秒遅れで帰宅する円満愛衣に一瞬ビクッとなる莉央だった。

「びっくりしたなもう！　おかえり愛衣」

「今日はシチュー作りますからね！　楽しみに待っててください」

「あのさ愛衣」

「え？」

大きな目をパチクリしながら振り返る愛衣。

「噂で聞いたよ。早くも高校シメちゃったんだって？」

「はい！　なんか自慢するようですぐに言いづらくて……すみませんでした莉央様」

「別にいいんだけど……あまり目立たないようして欲しかったんだよね実は。もう遅いからいいんだけどね」

「え？　そうなんですか！？……それは本当に申し訳ございませんでした。次登校時から大人しくします」

「あはは……もう既に遅いと思うんだけど」

「申し訳ございませんでした……それじゃあ急いで夕食の準備します。また出来たらしく声をかけますんで上で寛いでいてくださいね」

「あ、うん。楽しみに待ってるよ」

慌ててジャガイモの皮を剥いて下準備を始める愛衣。
お婆さんも少し回復してきたのか、起きて台所に座り、三人で夕食を摂った。

「もう大丈夫なの？　無理しないでね」

「ありがとね莉央。かなり楽になってきたよ。寝たきりだとどんどん筋力落ちていくって医者に言われてたから……動ける範囲で頑張るよ」

「そだね。バカアニキも家にいて色々助けてあげればいいんだけどなぁ」

「ハハハ。あの子はあの子で色々頑張ってるよ。今は好きにさせてあげようねえ。それより愛衣さんは料理上手だね？　とってもおいしいよ今日のご飯も」

「ありがとうございます！　そう言って頂ければ光栄です」

上機嫌になって一気に明るくなる愛衣。
小さい頃から少し鬱を持っているせいもあり、感情の起伏は激しいタイプであった。

お婆さんのシャワーを手伝って、その後愛衣と莉央は二人一緒にシャワーを浴びた。

二階に上がってから二人はパジャマを脱ぎ捨てると、ここのところ毎晩の抱擁に入る。

素っ裸でベッドの中で抱きしめあい、濃厚なディープキスを続けた。

シックスナインに移行してお互いの膣口や陰核を舐め回す。

お互い二回ずつイってから添い寝して電気を消す莉央。

「今日も気持ちよかったです」

「うん。あたしも最近イきまくりだよ。てへへ……」

「愛衣はどうして小学生の女の子を愛しちゃったんでしょう？」

「あたしに敵わないと認めてMっ気がでたからでしょ？　人を好きになるのに理由なんていらないよ愛衣」

「そ、そうですね。一生側にいてくださいね莉央様♡」

「…………」

薄暗い橙の灯りの下、天井を見つめて黙り込む莉央。

「莉央様？　寝ちゃいました？」

「明後日の拷問処刑はかなり残酷に行こうと思うから愛衣もその気でいてね？」

「小学六年生の男女二人ですよね。小さい子供なのにそんな酷い罪を犯したのですか？」

「うん。男の子の彼女の女の子がイジメを受けていて、その仕返しにいじめっ子の家に放火したの。張本人だけじゃなく姉と両親まで焼死。姉は大火傷を負いながらも辛うじて庭に這い出してきたんだけど……女の子本人が更にガソリンをかけて再度着火させちゃって……」

「酷い……そんな大きな火事で消防は間に合わなかったのですか？」

愛衣はぱっつんの前髪の下のオデコを掻きながら問いかける。

「田舎の家で隣家まで５００ｍほどもあったらしく、夜中とゆうこともあって明くる日の朝に初めて通報があったみたい。たまたま設置してた隣家の防犯カメラに犯人の子が二人映ってたらしく、今回警察から特殊任務省に依頼がきたとゆうわけ」

「そうですか……普通に裁けば小学生の子供の犯罪なんてほぼお咎めなしですもんね。いくらイジメの仕返しとは言え関係ない人たち三人も殺しちゃったらもう手加減なしですね」

「うん」
「オデコから足から痒いのですがダニでもいるんでしょうかこのお布団……」
「……そろそろクリーニング屋さんに出すよ」
「ありがとうございます」
最高級の苦痛を与える拷問処刑の覚悟を決めた愛衣と莉央はそのまま眠りについた。

――――残酷処刑島。

簡易な港に船が着いた。
菅野莉央と富田美香、結城明日香の小学生トリオと、円満愛衣の女子高生一人、計四人が島に降り立つ。
「菅野様。特殊任務省の拘束部隊リーダーである山内さんから伝言をもらっています。よろしいでしょうか？」
「……どうぞ」
「処刑に処すだけでも小さな子供には十分残酷過ぎる。せめてできるだけ楽に即死させてあげて頂きたい、との事です」

「無理です」

「え？　私に答えられても困ります……や、山内リーダーに……」

船の番人はバツの悪そうな表情を浮かべながら莉央たちに敬礼すると同時に、勢いよく船は港を離れていった。

小さなテーブルに椅子が二つ。
１２歳の小学生カップル、飛田光輝と西野美波が美味しそうにステーキを食べている。

「あらあら……これから拷問処刑されるとは思えないほどハッピーなシーンが目の前に……」

莉央は目を閉じて深くため息をつく。
明日香も静かに頷いた。
食いしん坊の美香は本気で怒っている。

「あんな美味しそうなステーキ罪人に馳走するなんて頭おかしいんじゃないの特殊任務省の拘束部隊って！」

「山内さんらしいですね莉央様」

円満愛衣は山内たちの優しさを感じていただけに、これが普通のように莉央へ問いかけた。

「うん。昔の拘束部隊は単に肉片を片付けるのが面倒臭いだけみたいな人が多かったのに……あの人たちは優しすぎるみたいだね」

ステーキを全て平らげてから莉央たち四人に気付く小学生の光輝と美波。

「お姉ちゃんたち……一体何者ですか？　僕たちはこの島から帰れるのでしょうか？」

「あ！　この人たち真絆ガールズの小学生メンバーたちだよ！　マジ！？　でも女子高生らしい女性の人は知らないなぁ」

「ど、どこかで見たと思ったらそう言えば菅野莉央だなお前！」

飛田光輝は改めてアイドルの存在に気付くと、菅野莉央をガン見しながら叫んだ。

「お前って……同い年のあんたにお前呼ばわりされるとは思ってなかったなぁあたし」

「自分たちの立場全く分かってないみたいですねこの子たち……」

莉央に対して偉そうに言った飛田光輝を睨み付けながら制服の腕を捲りあげる円満愛衣。

「最後の晩餐は美味しかった？」

唐突に言い放つ富田美香。

「え？　最後のって？　どうゆうこと？」

飛田光輝はキョトンとした表情で美香の目をじっと見つめる。

「今日はねぇ。あんたと彼女の美波ちゃんの……人生最期の日になっちゃうんだ~。怖いねぇ。やだよねぇ？」

一瞬目をパチクリさせた後、大爆笑する光輝と美波。

「やだなあ！　アイドルが僕たちを脅すって？　これ何かのドッキリだろ？　カメラどこに隠してるの？　あははは！」

「冗談は置いといて早くお家に帰してくれる？　お母さんたち心配してるからきっと」

十時型に立てられた木製の磔台に、手際よく二人を拘束してゆく円満愛衣。
抵抗するたびにみぞおちを殴り、有無を言わさずに拘束を終えた。

「うぐぐ……いたたた……な、なにをする？」

「光輝くん！　たすけて！」

ほぼ愛衣に抵抗することもできないまま拘束された西野美波は、一転して恐怖に怯えながら叫び始める。
帰宅途中に拘束されたため、光輝と美波も執行人たちと同じ制服姿であった。

「本日飛田光輝と西野美波に対し、凌遅刑を執行します！」

「了解です」

菅野莉央の一言に三人が同時に返事した。

「りょ、りょうち……けい？」

「な、何よそれ？」

光輝と美波は初めて耳にする単語に思わず問い返す。

「分かりやすく言えば刃物で全身の肉を削ぎ落としてゆく処刑方法よ。愛衣は大好き♡」

円満愛衣は笑顔で語るが、小学生の二人は凍りついてしまう。まだ心の奥では冗談だ、と半信半疑状態だった。

菅野莉央たちは小声で何かを相談している。恐怖で少しずつ震えてくる光輝と美波だったが、拷問処刑人たちは時折笑顔を交えながら話し合っていた。

「では決定！　男子は残す！　女子は切除！」

各々切れ味の良さそうな小型のナイフを手にして二人に歩み寄ってきた。

「の、残すとか……切除とか……どうゆう意味だよ！？」

「光輝！　あなたは性器だけ残して全身の皮と肉を削ぎ取るわ。彼女の美波は……逆に胸や性器だけを削ぎ落とすの。分かった？」

「なっ！？」

「や、やだっ！？」

「やだって言われても……決定事項だから覚悟してくれる？　でも結局最後には全身剥き身にされるんだけどね美波ちゃんも♡」

結城明日香は鈍く光るナイフの刃先をスカートに押し当てて、一気に切断した。

パラリと足元に落ちて、純白のパンツが丸出しになる。

「キャアッ！？　エッチ！！　やめてっ！！」

今度は切っ先を性器のワレメにそっと押し当てた。

「あなたの汚い性器なんて見たくもないからパンツ越しに破壊してあげるわね？　オマンコはここかしら？　ほら！」

『ズッ！』

「ひゃあっ！？」

切っ先がパンツを貫通して膣口へ刺し込まれた。

「ここかな？　臭いオマンコの入り口は？　ん？」

明日香は膣口を確認するようにナイフの角度を何度も変えながら確実に突き入れてゆく。

『ググッ！……ザクッ！！』

「ぎゃああああっ！！！！」

ゆっくり挿入されてゆく刃先は、ついに子宮頸部を貫き、子宮の内部まで刺しこまれた。
みるみる真っ赤に染まってゆく白いパンツが痛々しい。

「刃が上向きに刺しこんでるから……根元ほど太くなってるこのナイフをあと数センチ突っ込めば……当たり前だけど尿道とクリトリスが真っ二つになるからね？　いくわよ。覚悟しなさい外道」

『ザシュウッ！！……ザクザクッ！！』

「ぎぇえええええっ！！　ひんぎいいいいいっ！！！！」

断末魔のような叫び声が残酷処刑島にこだまする。
根元まで全部小学六年生のオマンコに突き立てられた刃渡り２０センチの短刀は、子宮の奥を貫通し、膣口と尿道口、陰核を真っ二つに切断してしまった。

「やめろおおおっ！！　人殺しぃぃぃっ！！」

「人殺しのあんたに言われたくないわね全く」

莉央は呆れながら光輝の制服をハサミで少しずつ切り落とし始めた。

「普通はオチンチン切断がメインなんだけど……たまにオチンチンだけ残してみるのも楽しくてね♪」

腕、脚、背中、お腹と、切れ味の鋭い短刀で肉と皮を削いでゆく莉央。

少年は人生で最大級の苦痛を、同い年のアイドルの女の子から味合わさせられるハメになる。

二人の児童の絶叫は一時間ほど残酷処刑島に響き渡る。

「ペニスと陰嚢と肛門……だけを残して全ての皮と肉を削ぎ終えたよ。すっごいエロいわね？　あはは♪」

菅野莉央は血まみれの短刀を舐めながら、白目を剥いて声を枯らし切ってガクガク震えながら小便を漏らす男子児童をじっくり見直す。

「チンポと金玉だけにしよ！　肛門も切除しちゃってよ莉央ちゃん」

「私も賛成。性器だけ残す方がエロさ倍増だと思うわ」

美香の提案に明日香も同調する。

「はーい。分かりました！」

『ズブッ！』

「かはあっ！！……いだいいいい………こ、殺して……もう殺して」

「だめ。まだ顔面の皮も剥ぎ取ってやるんだから死ぬなんて許さないよ？」

死にたい宣言を拒否した莉央は、肛門へ短刀を刺しこみ、円を描くように肛門を丸くくり抜いた。

『ズグッ！　ザクザクザク……』

「んぎぎぎぎいっ！！……ひいいいっ！！」

全身からも肛門からも激しく出血するが、強力な血止め薬を全身に注射して死なせないように工夫する。

会陰部に残る皮も陰嚢の付け根まできっちり刃先でくり抜くように剥ぎ取った。
次に鼻を削ぎ落としてから耳を削ぎ落とし、唇を上下とも削ぎ落とす。
完全に拘束されているため、目玉くらいしか動かせないが、必死で目玉を上下左右に動かして激痛に耐える光輝。

「うわあ……顔面の筋肉がヒクヒクしてるぅ～。なんか理科の実習室にある人体模型みたいな顔になっちゃってる！　あはははは♡」

爆笑する美香の目前で、ペニスと睾丸のみ無事な光輝のペニスが勃起してきた。

「やだ！？　うっそ！？」

目を大きく見開き驚愕する美香だったが、莉央が強制的に勃起させる超強力な精力剤のことを理解して納得した。

「なるほど！　さすが莉央ちゃんだ。全身の肉と皮を削ぎ落としたあとで唯一無事なチンポから射精させるなんて……なんて残酷でエロいんだろ♡」

「その通りだよ。ほらほら！　彼女の見てる前で人生最期の射精させてやるからハッスルしなさい！　ホラホラァ♡」

『シコシコシコシコッ！……シュコココココココッ！！』

「はっ！？　はぁぁぁぁあっ！！　んひぃいいいっ！！」

莉央の激しい手コキによって、全身の皮を削ぎ落とされた男子児童は、夥しい量の精液を噴射した。

「んああああああっ！！」

「んああじゃない！　ほらっ、イけっ！！　ほらあっ！！」

『ドピュピュピュピュピュピュウッ！！』

彼氏である飛田光輝の射精を見せつけられながらも、自分の性器を切開された後大陰唇から全て明日香によってくり抜かれ、二つの胸を乳首、乳輪、乳房と三回に分けて切断された胸部から大量の血を流しながら白目を剥いて絶叫する西野美波。

更に全身の皮と肉を削いでゆく明日香。

「あばばばば！　痛い……もう殺して…殺してえぇっ！！」

「彼氏の光輝くんも、みんなの前で射精してまでまだ頑張って生きてるんだからあなたも頑張って！　ね？」

ついに光輝を追い越して顔面の鼻も唇も耳も頬の肉も、性器部分も全て含む全身をむき身にされる西野美波。

股間にパックリ三つの穴が見えるのは、尿道と膣口と肛門だった。

明日香は美波の性器と肛門を、かなり深く削ぎ落としているため、血まみれの股間に三つの穴らしきモノしか確認できなかった。

一番上部に見える穴から透明の液体が噴き出した。

「あはは。そこが尿道の穴なのね？　その下がマンコでその更に下が肛門……分かっているけど会陰部全体を深く抉り取っちゃったからただの糸引くヤラしい穴にしか見えないのがまた哀れなんだよね～。うふふふ♡」

明日香はイヤらしく微笑みながらくり抜いて地面に落としてある大陰唇や小陰唇、肛門括約筋を足の裏ですり潰した。

あまりの激痛に頭がおかしくなり、絶叫しながらも笑っているように見える美波。

顔の肉まで深く削ぎ落とされているため、最早どんな表情を浮かべているのかさえ分別できない明日香たちであった。

円満愛衣は、肛門括約筋をくり抜かれ大便を垂れ流している飛田光輝のパックリ開いた肛門部分、剥き出しになってしまっている直腸へ思いっきり拳を突っ込む。

「何汚いウンコ開いたケツ穴からへリ出してるの？」

『グポオオオッ！！　ブチュチュチュチュッ！！』

「ぴぎいいいいいっ！！　死ぬううううっ！！」

「笑わせないで。あなたが死ぬのは決まってるのよ？　今からこの愛衣が大腸引き摺り出してあげるから覚悟しなさいね？」

『グボッ！　ズルルルルルルッ！！』

「はぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃああああっ！！」

切り裂いた。

愛衣は数メートル直腸、大腸、小腸を引きずり出すと、途中で手を離して刃渡１０センチほどの短刀を右手に掴んだ。
一気に根元まで短刀をお臍に突き刺すと、真っ直ぐ真下へ向かい

そのままの勢いで唯一無事だったペニスを根元から亀頭部へ向かって真っ二つに切開してゆく。
続いて陰嚢までも真っ二つに切り裂く。

飛び出した尿道の管と生の睾丸が二つ、惨めに揺れ始めた。

「あーあ。オチンチンだけ無事な所がまたエロかったのに……愛衣のせいで見るも無惨なオチンチンに……金玉まで飛び出しちゃってるじゃん……はぁ。もうついでに前立腺も抉っちゃって！」

ため息をつく莉央の横で、愛衣は制裁を止めなかった。

「はい！　莉央様。そうゆう訳だからお覚悟を。あなたの前立腺……いっぺん取ってみる？　えい！」

『ズグッ！……グリングリンッ！……ぶちゅちゅちゅう～』

「はぎいいいいっ！？　うぎゃあああっ！！」

そのまま深く会陰部に突き刺し、器用に刃先を捏ね回して前立腺を抉り出す。

「この赤黒い臓器が今まであなたの股間で精液を作ってくれてたのよ？　金玉と協力して射精させてくれてたの。快感もこの部分による刺激なんだ。もう一生イくこともないからこんなモノ必要ないでしょ？　うふふ♡」

切り裂いたお臍に手を突っ込み、残された腸を全て引きずり出すと、今度は睾丸を両手の握力で一つずつ潰してゆく。

全身を痙攣させて人生を終えようとしている飛田光輝１２歳。

「汚い便を愛衣の手に着けた罰よ」

『スパアッ！　ザシュシュシュッ！』

「トロトロ……ドクドク……」

真っ二つにされているペニスを根元から切断し、陰嚢も精管も下腹部から切断する円満愛衣。
前立腺まで抉り取られた為、股間の奥深くから赤黒い粘度のある臓器系からの血がドロドロとゆっくり流れ出てくる。

「これで全身全ての皮と肉が削ぎ落とされましたよ？　飛田光輝、いっぺん逝ってみる？」

「ううううう……かひゅう、かひゅうっ」

「あらあら……死にかけて過呼吸起こしちゃってるの？　じゃあお待たせしました。いくわよトドメのハートブレイクショット♪　えいっ！！」

『ズボオッ！！　ぐちゃっ！！』

パックリと大きく開いた腹部から強烈なアッパーカットを打ち込み、胃をかすめながら心臓に直撃させる愛衣。
心臓はザクロのように潰れ、臨終の激痛が一瞬のみ小学生男児を襲った。

「あばばばばばっ！　がはあっ！！」

あまりの衝撃で、腹腔内にまだ残っていた胃と腎臓、肝臓までもが足元に振り落とされた。

女の子たちによって全身を剥き身にされながら、ついに絶命を許された小学六年生の飛田光輝は、壮絶な人生終焉の時を迎えてしまう。

菅野莉央はチェーンソーを手に持ち、エンジンをかける。

「ついに死んじゃったか光輝は。よく今まで心臓動いてたよね。天晴れ天晴れ♪　じゃあ西野美波！　あなたも彼氏の後を追わせてあげる。最期はどこから切り裂かれたい？」

「んああ！　んぎいいっ！」

白目剥いて痙攣を始める西野美波にはすでに莉央の言葉は届いていなかった。

「分かった。『私の臭くて汚いオマンコから真っ二つにしてください』って言ったのね？　その願い、あたしが聞き届けたよ」

「あうううう……いぎぎぎぃ～」

「何て言ってるのか聞こえな～い。ま、どう答えようが結局オマンコから切開しちゃうんだけどね！　てへへ♡　あれ？　縦に並んだ

穴が三つしか見えない股間……クリトリスもぐちゃぐちゃだし……よほど股間を深く抉り取られちゃってたんだね」

莉央は原型を留めていない哀れな陰部に、チェーンソーの歯をあてがうと、ゆっくり股間からお腹へかけて恥骨ごと切開していった。

「見るからに悲惨なマンコだけど……殺人者のあなたに容赦はしないよ？　更に悲惨な絵面にしてやるんだから♡　ほらほらほらあっ！　アクセル全開！　逝っくうう？」

『ギュイイイインッ！！　ザクザクザクザクッ！！　バキバキバキバキイッ！！』

「んあああああっ！？　ひんぎいいいいいいっ！！！」

「ほらあっ！　マンコの穴もアナルの付いてた直腸もあたしが真っ二つにしてあげる♡」

『ビチャビチャ！　ズルルルッ！　ビチャビチャ！！』

「ひぶぶぶふうっ！！！　んぎいいいいいいっ！！」

「臭い股間から真っ二つにされて死ね♡　ほんとくっさいなぁ美波のオマンコは……」

「ほげええっ！！……ゴボボボッ！……ガクンッ」

『ズルズル……ベチャベチャベチャ！』

股間から首まで切り裂き終わると、腸や胃、子宮や卵巣、肝臓腎臓などの臓器がズタズタになりながら足元に振り撒かれていった。
血の泡を吐きながら悶絶の表情を浮かべて力尽きる。
皮や肉を削ぎ取られた全身を激しく痙攣させながら人生最期の動きを止めた。
この時点でようやく光輝の後を追うことができた12年の短い生涯を終えた西野美波であった。

「その汚い顔も地面に落としてやるよ。よっと！」

そのまま横向けに刃を入れて首を切り、頭部を足元に落としてから思いっきり蹴飛ばす莉央。
皮を剥かれた美波の生首が美香の股間まで転がって止まる。

「キャアッ！？　なに汚い顔してあたしのパンツ覗いてるのよっ！？　とおっ！」

美香は更に生首を蹴飛ばす。
更に転がった生首は彼氏である飛田光輝の真下で止まった。
切り落とされた真っ二つのペニスに口が当たって止まったため、円満愛衣がしゃがみ込んでペニスを口の中へ捩じ込む。

「ほら、彼氏の縦割りにされたオチンチンよ。お食べなさい♡」

無理矢理ペニスを口内へ捩じ込まれる遺体の姿を見ながら爆笑する莉央たち小学生トリオ。

円満愛衣は、潰してミンチになった睾丸までも西野美波の口内へ捩じ込んだ。

「あの世で一緒になってもいいわよ？　うふふ♡」

頬を赤く染めながら呟く円満愛衣。

血まみれのセーラー服を風に靡かせながら、四人の拷問処刑人たちはその任務を遂行し終えた。

残酷処刑島に新たに二人の遺体が加わった。

真っ赤な肉塊と化す二人の児童（後書き）

菅野莉央は続いて飛田光輝の首もチェーンソーで切断した。

ポトリと地面に落ちる生首を足の裏で何度も踏みつけ、陵辱の限りを尽くした。

児童の処刑だから即死をと願う山内リーダーの願いはここに潰えることとなる。

残酷な拷問処刑を執行しながら秘部を濡らすほどのサディスティックな少女たちに、悪人に対する情けは皆無であった。

「莉央様、睾丸を潰した時愛衣は濡れてきちゃいました……やっぱり変態ですよね？」

「あたしもオマンコから全身真っ二つにする時濡れちゃった……気にしない気にしない！」

「莉央様、愛衣をイかせてください」

「み、みんないるから今はダメ！　ハハハ……あははは」

簡易な港へ向かいながらパンツで吸収し切れないほどの愛液を太腿に垂れ流す円満愛衣だった……。

「よく考えたらあたし……遺体の生首蹴っ飛ばしただけで何も今回拷問してないじゃん！？　そんなぁ～酷いよぉ……」

返り血さえ浴びていない綺麗なセーラー服を何度も確認しながら愚痴をこぼす美香。

半泣きになる美香に何も答えられずひたすら港を目指して歩く莉央たち三人は、美香の順番をみんなで飛ばしてしまったことを少し反省していた。

「くっそぉ～。こうなったら月曜日にあたしの性奴隷の平野吉行をギッタギタに責めて１００回くらいみんなの前で射精させてやる！」

好きな異性のクラスメイトに八つ当たりすることを決心する富田美香は、まだまだ全てが子供である……。

菅野愛衣と三人のヤンキーたち（前書き）

菅野愛衣がシメる黒霧島高等学校。
東条登美子、西条早希、南条奈百合の部下を作り、更にスケバンの基盤を固めてゆく愛衣だった。

菅野愛衣と三人のヤンキーたち

黒霧島高等学校三年Ｂ組。
拷問処刑人の一人である円満愛衣がこのクラスに転入してきてからというもの、高校自体を仕切るほどの強さを全学年で表した。
今では誰一人愛衣に逆らうものは存在しない。

普通のスケバンは長い丈のスカートを履くが、円満愛衣とその部下たちは、超ミニスカートを履いていた。
逆の意味でそれは目立っていたのである。

菅野愛衣と名乗って在学しているが、三人の部下を従え黒霧島四天王と呼ばれ全校生徒から恐れられている。

東条登美子、西条早希、南条奈百合の三人だ。
喧嘩を片っ端から買い、相手を悉くボコボコにしてきた菅野愛衣に心底惚れて部下になった結構絆の固い三人であった。
まだ一ヶ月少々だが、確実に信用できる仲間を手に入れた菅野愛衣は、毎日が無茶苦茶楽しかった。
莉央に警告はされたが、結局もうすでに遅かりし、とゆうことでどうにか好きにさせてもらえる許可も降りたようなものだったし、弱者の演技はせず、そのまま高校生活を満喫しようと決めたのであった。

昼休み、菅野愛衣たち四人は一人の男子生徒を女子トイレに連れ込んでいた。

「登美子のスカートを覗いたのはまちがいないのね？」

「いや、だからその、つぃ……ごめんなさいっ！　転んだ振りして下着を見ちゃいました！　許してくださいっ！」

覗きを認めて四人に対して大きく頭を下げる沢木修吉。

木刀を手に取り、沢木の頭を殴りつける菅野愛衣。

「ぐわあっ！？　痛いいい……」

頭部からかなりの流血が見られたが、構うことなく全身を何度も殴りつけると、手足の骨は何箇所も複雑骨折し、もはや自分で動くことも出来なくなる。

女子生徒に教室から机を運んで来させて、机上にうつ伏せ状態でナイロンロープで縛り付ける三人の部下たち。

東条登美子は手際よくベルトを外し、ズボンを一気にずり下げた。

「パンツも下げて」

「はい！　愛衣さん」

菅野愛衣に言われるがままに全身骨折して呻いている沢木修吉の下半身を素っ裸にする。

『バシイッ！！』

「ひぐうっ！？」

木刀での尻叩きが開始された。

打たれるたびに悲鳴を上げ、涙を流して許しを乞う沢木だったが、スケバン四天王たちは薄笑いを浮かべながら見ているだけだった。

菅野愛衣は臀部が真っ赤になるまで百回叩き終わると、今度は木刀の切っ先を肛門へあてがう。

「泣いても許さないから。本番はこれからなのよ？」

『ピト……』

「ひいっ！？そ、そこだけはやめてええっ！！お願いだっ！！なんでもするからそこだけは許してくれえっ！！」

「許さない」

『つぷっ！』

「わああっ！？　やめてくれええええっ！！」

菅野愛衣はゆっくりと力を込めて、じわじわと木刀の切っ先を沢木の肛門へ差し込んでいった。

『ズブブブブッ！』

「熱いっ！？　痛いっ！？……ヒャアアアアッ！！！！」

男子生徒の肛門を押し広げながら少しずつ挿入されてゆく木刀を見ながら東条、西条、南条の三人は頬を赤く染めながら恥ずかしそうに見つめていた。

「あ、あの、愛衣さん？　も、もうそのくらい突っ込めば十分なのでは？」

スカートを覗かれた張本人の東条登美子が行きすぎた折檻を静止に入る。

「まだ切っ先しか入ってないわ。直腸の突き当たりまでは突っ込んで激痛を味合わせてやるから見てなさい」

「は、はい」

『グリッ！　ズボボボボッ！！』

「いだいっ！？　んぎゃあああああっ！！」
直腸全てを木刀が埋め尽くした。
切っ先はＳ状結腸に突き当たり、更にグリグリと押しこんでゆく。
キリキリと腹部の激痛が沢木修吉を襲った。
号泣しながら左右に激しく首を振り、激痛をアピールするが、愛衣は掻き回すことをやめない。
「このまま結腸突き破ってやりたいんだけど……やり過ぎたら莉央様に怒られるからこの辺で許してあげる」
『グリッ！　ヌポポポポポポ……ポンッ！』
「はううっ！！……痛いい。ううう。しくしく、しくしく」
大粒の涙を溢して女子高生にアナルを掘られた男子高生はひたすら啜り泣いた。
少し肛門から血が出ている。
この中では一番優しい気性の南条奈百合がティッシュで沢木の肛門の血を拭き取ってあげた。
「すっごい痛かったよね？　ごめんなさい」
「ぐすん。ぐすん。うん、いいよ。俺が悪かったんだから……あり

がとう南条さん」

西条早希が菅野愛衣にそっと囁く。

「全身骨折してるみたいだから救急車呼びましょうか？　愛衣さん」

「何を言ってるの？　まだコイツの私刑は終わってないのよ？」

「ええっ！？」

三人の部下たちは流石に引いた。
当の本人である沢木修吉も泣くのを一瞬忘れるほど驚愕して愛衣を振り返った。

東条たち三人に拘束を解かせて、今度は仰向けに寝かせる。

「ト、トイレのタイル上に寝かせるなんて……酷い」

「黙ってなさい」

四人が取り囲むように立って見下ろすと、当然のことながら超ミニスカートを穿いている四人のパンツは沢木から丸見えとなった。

少しずつ大きくなってゆくイチモツ。

「やだコイツ……全身骨折して肛門に木刀突っ込まれたのに普通勃起する？　信じられない……」

東条登美子に次いで西条早希も南条奈百合も頬を真っ赤にして頷く。

菅野愛衣はしゃがみ込み、左手でイキリ勃ったペニスをグッと握りしめて、右手の人差し指をペロッと舐めた。

そのままそっと沢木のペニスの先端へ指を押し当てる。

『つぷっ！』

「痛いっ！？」

菅野愛衣の人差し指がみるみる内に沢木の尿道口へ侵入してゆく。

『ズブブブブッ！　ズボオッ！！』

数秒のことだった。

愛衣の人差し指は根元まで沢木のペニスに突き刺さり、沢木は全身をビクンビクン痙攣させせながら激痛と戦う。

「あぎゃあああああっ！？　痛いいいいっ！！　ぬ、抜いてええっ！！」

『シコシコシコシコッ！』

なんと、右手の人差し指を尿道に刺しこんだまま左手でシコり始めたのであった。

「痛いいいいっ！！　ひいいいっ！！」

「愛衣が気持ちよくしてあげようか？」

「痛いい……はい！　お願いしますっ！　痛いのは嫌ですっ！」

「一生愛衣たちの奴隷になることを誓いなさい。そしたら射精させてやるから」

「は、はい！　誓います！　痛いっ！！」

菅野愛衣は人差し指をそっと引き抜き、シゴく手の動きを速めた。

『シュコココココココッ！』

「は、はううっ！！　イくっ！　イくうううっ！！」

『ドピュッ！　ドピュピュピュピュピュウッ！！』

初めて男子の射精シーンを見た東条登美子と西条早希と南条奈百

合は頬を真っ赤に染めてしばらくヒクヒク動くペニスと愛衣の指に絡まった粘液を凝視していた。

「あ、あの、愛衣さん」

「ん？」

「こ、これが動画で見た精液ってものですか？」

「うん。初めて見たの？　無茶苦茶ウブなんだねあんたたち」

そのまま救急車を呼び、本人には階段から転げ落ちたと言わせ、少しもお咎めを受けなかった四人であった。

――――数ヶ月後。

退院してきた沢木を囲むように後ろの席へ座らせる愛衣たち。

「どうだった？　入院生活は堪能できた？」

「うん、おかげですっかり治ったよ」

『パシイッ！！』

「ぐわあっ！？」

いきなり頬を平手打ちする愛衣に一瞬尻が浮いてしまう沢木。

「何タメ口きいてるの？あんたは愛衣たちの奴隷になるって約束したんだよねぇ？」

「は、はいっ！　申し訳ございませんでしたっ！」

「土下座して皆に謝りなさい」

「はいっ！　東条様、ごめんなさい！　西条様、ごめんなさいっ！　南条様、ごめんなさいっ！　愛衣様、ごめんなさいっ！」

授業が始まり、英語の先生が必死で黒板に英単語を書き綴る。その間、ひたすら何かを舐める音が教室に響き渡った。

菅野愛衣の足の指を必死で舐める沢木修吉の姿があった。

素っ裸にひん剥かれたまま、女子生徒の足の裏を必死で舐める光景は、非日常的なモノであることに変わりはなかった。

菅野愛衣の指示通りとはいえ、かなり緊張して恥ずかしそうに東条登美子がボールペンを手にして沢木の背後へ歩み寄る。

「ゆっくりでいいからね？　半分くらいまでなら大丈夫だから」

「はい、愛衣さん。ごめんね沢木……痛かったら言ってね？」

「ペチャペチャ！……うう、な、何をするのですか東条様？」

「こ、こうするの」

『ぷすっ！』

「あはあっ！？」

愛衣の足の指を必死で舐めながら肛門へ突き刺さる違和感に思わず大声で喘いでしまう沢木だった。

一瞬先生とクラスメイトたちが振り返るが、慌てて授業を再開するみんな。

『ズボボボボッ』

「痛いっ！　やめて東条様っ！　ひいい」

「ごめんね。半分くらいまでまでは突っ込まないと愛衣さんに怒られちゃうの。我慢して！」

ボールペンを沢木の肛門へ半分ほど突っ込み終えると、直腸内を掻き回すようにグリングリンとほじくる東条登美子。

「ほら、東条さんがアナルを掻き回してくれてるのよ？お礼を言い

なさい」

「んっ、あはっ！　あ、ありが……はうっ！？……ありがとう……ございい……熱いっ！？……ますぅ」

「ほら、お礼を言い終わったらしっかり舐める！」

「はい！　愛衣様。ペチャペチャ……ペチャペチャ」

西条早希にボールペンをまわし、次は西条が沢木の肛門をほじくる。

頬を赤くしながら必死で愛衣の足の指を舐める沢木は大粒の涙を溢して泣いていた。

まだ完全にMになりきれていない沢木にとって、同級生の女子に肛門をほじくられる、掻き回されるなんてことは夢にも思っていなかった屈辱であった。

最後は南条奈百合にボールペンを渡す西条早希。

大便が所々にこびりついたボールペンを受け取った奈百合は、愛衣に指示されるがまま、先の二人同様沢木の肛門へボールペンを突き入れた。

たまたまか偶然か、南条奈百合の掻き回す角度が前立腺を直撃しまくり、透明の粘液をドクドクと肛門から垂れ流す沢木。

「きゃっ！？　なにこれ？　愛衣さんっ！なんか変なネバネバの液がお尻の穴から……」

「あら？　やるわね奈百合！コイツ、あなたのアナル責めに感じているわよ？それは腸液といって直腸を刺激されて性的に感じると特に分泌するモノなの」

「えっ！？　そ、そうなんですか？……じゃあもっと感じてもらいますね？」

「うっ、うんんんっ！　んんんっ！　ぎ、気持ちいい……です。イ、イくっ！イくうううっ！！」

「奈百合！もっと激しく掻き回して！」

「はいっ！」

『グチュチュチュチュチュチュッ！！』

「はううっ！！」

『ドピュッ！！　ドピュピュピュピュピュピュピュウッ！！』

南条奈百合のボールペンによる前立腺責めで、大量の精液を床にぶち撒ける沢木修吉。

「すっごい！　奈百合は男のアナル責め隊長に任命するよ！」

「ええっ！？　そんなの嫌です！」

一応抵抗してみるが、結果愛衣に逆らえないことは分かっている南条奈百合だった。

「はぁ。はぁ。はぁ」

気持ち良さそうに下半身をヒクヒクさせながら涎を垂らす沢木。

「沢木修吉！　あなた段々とMに目覚めてきたかしら？　ウフフ♡」

南条奈百合は雑巾を用意して、沢木が垂れ流した腸液と精液を拭き取ろうとした。

慌てて静止する愛衣。

「精液と腸液を舐め取りなさい」

「は、はい！　愛衣様。ペチャペチャ！　ペチャペチャ！」

「美味しい？」

「な、なんか変な味です……」

「愛衣の足の指とどっちが美味しい？」

「あ、愛衣様の足の指はピリピリして……なんか痺れるような味でした」

「はぁ？　痺れるって……なんか菌だらけみたいに言ってくれるわね？　お仕置きするから仰向けに寝なさい！」

「ご、ごめんなさい愛衣様っ！　ひいっ！」

『ガガガガガガガッ！！』

「はうううううあっ！！」

菅野愛衣の電気アンマが数分間続けられた。
生足の指による生ペニスの電気アンマに、またもや勃起してしまった沢木は、愛衣の足の指に大量の精液をヘリかけた。

「またイっちゃったのね……ほんと責めてる方が損してるくらい感じてないかあんた？　んん？」

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、愛衣様……東条様、西条様、南条様……俺はあなたたちに……これからも責められたいです」

そう言いながら号泣し始める沢木修吉に、どう言っていいのか分からなくなる愛衣たち四人であった。

「お、おい？　責められて悔しくて泣いてるのか？　嬉しくて泣いてるのか？　答えてくれる沢木」

「うわーん！　うわーん！　俺にも分からないんですうっ！！」

号泣する沢木に授業は一旦止まってしまうが、そのうち再開される英語の授業。

それから毎日沢木のアナル調教が始まった。

南条奈百合のように、前立腺を的確に刺激して、トロコテン射精を施せるように東条登美子と西条早希の訓練が始まる。

毎日のようにアナルを女子高生にボールペンで掻き回される日々。

初めは泣いていた沢木修吉も、次第に自分から高くお尻を突き上げるようになった。

「そうそう。やればできるじゃん沢木。ついでにもっと足を開いて両手で肛門を広げてくれるかな？　入れやすいように」

「はい、東条様。こうですか？」

「うん！　直腸まで丸見え～♡　そのままジッとしててね。えいっ」

『ぷすっ！』

「んあっ！」

ボールれペンの差し込む深さや角度を色々と変えながら沢木が感じるスポットを探す作業に専念する東条登美子。ミディアムのカールが入った髪の毛を掻き上げながら必死で肛門をほじくる。

「あんっ！！」

「ん？　今のトコ気持ちよかった！？」

「は、はい。東条様、気持ちよかったですぅ」

「えいえいえいっ！」

「はっ、はううううっ！！」

東条登美子のボールペン責めによってパニスに触れずに射精させることに成功した。

あとは西条早希のみ。

二時間ほどもかかったが、ようやく射精させることに成功して、スケバン四天王全員が男子のアナル調教、トコロテン射精の技を習得した。

「二時限目の社会の授業中は、潰さない程度のキンタマ蹴りの時間だから。吐くほど痛いと思うけど我慢できるわね沢木？」

「は、はい！　愛衣様たちの責めなら俺は……なんでも耐えて見せます！」

ここまで来ればほぼ彼女たちによる沢木の奴隷化が成功したと言っても過言では無かった。

素っ裸にひん剥かれたまま立たされて大きく脚を広げさせられる。

大きく足を振り被る菅野愛衣。

「ここかっ？　えいっ！」

『ヒュンッ！……スパァンッ！！』

「ぎえっ！！！！」

悶絶してうずくまり、しばらく身動きできない沢木。
まともに愛衣の足の甲が睾丸とペニスを背後から捉えた。
ペニスの裏も大概痛かったが、睾丸の激痛が半端ではなかったのだ。

「立て！　次は東条さんが待ってるんだから！」

愛衣に髪の毛を鷲掴みにされて無理矢理立たされる沢木修吉。

「い、いくよ？」

「う、うう。は、はい。お願いします……」

「えいっ！」

『ヒュンッ！……ズボオッ！！』

「ピギィッ！！？？」

なんと東条登美子の親指の先がまともに肛門へめり込んだ。
浅い刺さりだが、勢いがあったので肛門括約筋全体が痺れるほどの激痛を受ける。

「ごっめーん！　足の指お尻に入っちゃったみたい？　沢木許して！」

「痛いいい……ぐおおお……穴が裂けるぅぅ〜」

「甘えるな沢木！　次は西条さんが待ってる！」

「ググ……は、はい愛衣様」

ようやく立ち上がった沢木は、背後から襲ってくる激痛の恐怖になかなか足を広げられない。
仕方なく愛衣と東条登美子が強制的に広げさせた。

「いいわよ西条さん。どうぞ」

「は、はい。せーのっ……はいっ！」

三つ編みの髪を二本揺らしながら白く美しい脚が股間を襲う。

『ヒュンッ！……スパァンッ！！』

「ぎゃあああああっ！！」

菅野愛衣ほど美しくまともに睾丸とペニスを捉えた西条早希の足の甲だった。

「ナイスッ！　今のマトモだよ早希！」

「がはあっ！！　オエエエエッ！！」

睾丸の激痛によりついにゲロを吐いてしまう沢木修吉。

「あちゃー。愛衣より強力なのが金玉直撃しちゃったから……戻しちゃってるよ。うふふ♡」

そのままもう一度手を引っ張って立たせると、最後に構える南条奈百合の姿が見えた。

「愛衣さん、もういいですかぁ？」

「もういいよ！　泣いちゃってるけど元々奴隷だからコイツ……遠慮はいらないもんね」

「はーい。南条奈百合！　いっきまーす！」

『タタタタッ！……ズヒュンッ！！……ドコオオッ！！！！……ブチュ！』

「ひんぎゃあああああっ！！　痛いいいいいいいいいっ！！　わああああああんっ！！ぎぇえええええええっ！！！」

顔面蒼白になり普通ではない奇声を上げる沢木に、蹴り込んだ南条奈百合はアタフタしてどうしていいか分からなくなっている。

「今……変な音しなかったですか？」

「私も聞こえた。愛衣さん、今の奈百合の蹴りって……」

「一つ潰れたわね。心配しないで。愛衣が今から処理するから救急車は呼ばないで」

教室は騒然となるが菅野莉央に教えられた通り睾丸摘出手術を開始する愛衣。

四人で机を二つくっつけて並べてから仰向けに寝かせると、痛み止めと血止めの注射を打つ。

莉央から授かった切れ味バツグンの医療用メスを手に取ると、イソジンを陰嚢全体にぶっかけて、まず陰嚢中心点を真っ二つに５センチほど切り裂く。

『ズズズズ……パックン！』

潰れた左の睾丸を指で丁寧にほじくり出し、精管と神経の管を切断した。

『ぐちゅ！　ズルルル……』

痛みは麻酔で抑えられているのか、目を大きく見開いて震えてはいるが落ち着いて天井を見つめながらじっとしている沢木修吉。

一応南条奈百合が両肩を押さえつけてはいたが、全く抵抗することなく愛衣の手術を受けている。

『ぷるんっ！……ベチャ！』

「ふう」

全ての睾丸ミンチをほじくり出して机の上に落とすと、ため息をつきながら一つ睾丸をなくした陰嚢を器用に縫ってゆく。

「これでよし！　しばらく安静にしてたら一週間もすれば登校できるわ」

「ううう、お、俺のキンタマは？」

「一つ奈百合の足で潰されたわ。でも右の大きな方の睾丸が残ってるからこの先子供も作れるから心配しないで！」

「あ、ありがとうございます愛衣様……ううう。わーん、わーん」

ショックで泣き崩れる沢木修吉の頭を優しく撫でてあげる南条奈百合。

「よしよし。本気で蹴っちゃってごめんなさい。まさか潰れるなんて思ってなかったの……早く治して元気になってきてね！」

顔をクシャクシャにしながら泣き喚く沢木修吉を見ながら四人は少し可哀想になってきていた。

でも基本冷酷な四人……。

麻酔で痛みを感じないことを良いことに、全員で代わるがわる沢木の尿道に人差し指を突っ込んで感触を楽しんでいた。

『ぬちょぬちょ！　くちゅくちゅ！』

「どう？　生々しくて気持ちいいでしょ？」

「はい！　男子の尿道って結構広がるんですね愛衣さん！」

「でもこれ、麻酔効いてないと激痛なのよ？　うふふ」

散々女子高生四人に尿道を指で犯され続けた沢木修吉は、夕方ようやく担任の車に乗って自宅へ送り届けられた。

「一週間後、またイジメてやるからねー♡　早く治して帰ってこいよぉー♡」

愛衣が叫びながら手を振ると、東条登美子たちも笑顔で車が見えなくなるまで手を振り続けた。

明くる日、担任の細川道枝先生から呼び出しを受ける愛衣たち四人。

事情聴取をされるが、頑なに沢木を痛めつけたのは自分たちではないことを主張する。

「目を閉じて歯を食いしばりなさい！」

ある程度のイジメ現場を見ている細川先生は、愛衣たちを一人ずつ平手打ちしてまわった。

「校長から菅野愛衣には逆らうな！　……とか聞いていたから見て見ぬふりしていたけど……あなたたちのすることは度を超えています！　性的イジメなんて絶対してはダメです！　分かりましたか！？」

しばらく言いたいことを言わせてから細川先生を空手部の部室に四人で連行する。

ズボンを脱がされ、上着とパンツ一枚のみの姿で縛り付けられて泣いている４０歳の先生がいた。

「やめてええっ！　ごめんなさいごめんなさいごめんなさいいいいっ！！」

『スパァンッ！！　スパァンッ！！』

「痛いいいいっ！！　やめてお願い私が悪かったですぅ！」

股間を背後から四人に代わるがわる蹴り続けられる女教師。
大陰唇が少し裂けて血が出たのか、パンツが少し赤く染まる。
股を閉じるたびに愛衣に顔面パンチを喰らい、鼻からも唇からも大量出血している細川道枝先生。

「ほら、臭い股を開くんだよ？　顔面タコ殴りしてほしいの？」

「ご、ごめんなさい菅野様っ！　本当に申し訳ございませんでした！私を許してくださいっ！」

「もう遅いわ。散々いたぶって愛衣たちに説教したことを一生後悔させてやるから覚悟しなさい細川道枝！」

しばらく股間を蹴り上げられて号泣を始めた頃、東条登美子がパンツを下ろして陰部を確認する。

「うーん……大陰唇は少し裂けちゃってますが、小陰唇やクリトリスは無事みたいですねぇ先生」

「もう許して！　お願い東条さん……」

東条登美子は中指を細川道枝の膣口に突き入れた。

『ぐちゅっ！』

「やんっ!?　そんなとこ指入れないでえぇっ！！　やめてええっ！！」

『グチュチュチュチュチュチュッ！！』

「あんあんあんあんあんあんっ！！　あひいいいっ！！」

「感じてるんだろつが？　んんっ？」

東条登美子は執拗に膣内を掻き回して先生をイかせた。
潮を噴く細川道枝先生に呆れる愛衣。

「何イっちゃってるの？　あなた、自分の置かれてる立場分かってる？」

「ひぃいっ！？　ご、ごめんなさい！　許して菅野さん！　お願いですっ！」

「許さない。今からお尻の穴開発してあげるから覚悟して」

「やだっ！　そんなとこ旦那にも触られたことないのに！　やめてっ－！」

西条早希と南条奈百合は細川道枝の服を全て脱がせる。
更にうつ伏せに机の上に拘束して、お尻を突き上げさせて拘束した。

背後から極太バイブをセットしたペニスバンドを腰に巻いた愛衣がそっと近づく。

「先生……しばらくお尻の穴使い物にならなくしてあげるね？」

「やだ！？　やめてっ！！　お願い菅野さんっ！！やめてぇええっ

！！」

『ズブッ！……ブブブブ！……ばちゅっ！！』

「ぎゃあああああああっ！！！！」

「旦那さんのオチンチンなんて比べ物にならないわよコレは……」

直径5センチ、長さ20センチもある超極太バイブが、細川道枝先生の処女アナルに根元まで食い込む。

「ホラァ！　臭いアナルにお仕置きだよ？　えいえいえいえいっ！」

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「ひんぎいいいいっ！！　裂けるうううっ！！　はぎゃああああっ！！」

髪を振り乱して白目を剥きながら悶絶する細川道枝先生。

構うことなく激しく腰を振り続ける菅野愛衣。

肛門括約筋が裂けて夥しい量の鮮血が愛衣の太腿を染め上げてゆく。

「汚いなぁババア！　愛衣の脚がケツ穴からの血で汚れちゃったわよ？」

『バコバコバコバコバコバコッ！！』

「死ぬっ！　死ぬうううううっ！！」

ようやくペニスバンドの極太バイブを抜かれ、拘束を解かれた頃には、股間を押さえて悶絶する先生の姿があった。

部室の床は細川先生の肛門からの鮮血で真っ赤に染まっていた。

「ほら、もう一度お尻を突き上げて四つん這いになるのよ？」

「しんじゃう！　本当もう勘弁して下さい！　お願いします！　何でもしますから！」

仰向けに寝かせた細川先生の上にまたがり、力を入れる愛衣。

「愛衣のうんち……食べなさい」

「は、はい！　食べます！」

『ムリュリュリュリュッ！　ボトッ！』

「んごおっ！？　んぶぶっ！！　うごおおおっ！！」

「よく噛んで飲み込まないと肛門から口まで串刺しにして殺してやるから！」

「うぶうううっ！！　ムシャムシャ……ごっくん！」

たっぷり排泄した愛衣の大便は、全て細川道枝先生の口の中へ入り、全て飲み込まれた。

「おええっ、んごおおあっ！　はぁ、はぁ」

「よく飲み込めたわね！　次は愛衣の肛門を舐めて綺麗にするのよ？」

「は、はい！　ペロペロ！　ペチャペチャ！」

排泄した便も肛門に付着した便も全て飲み込んで綺麗にする細川道枝先生。

「ずっご！　うんちって食べても死なないんですね？」

南条奈百合が思わず愛衣に問いかける。

「下手したら死ぬかも……今から殴りまくって全て吐かせてやるから安心して」

お腹を何度も愛衣に殴られて、食べた大便をほぼ全て吐き出して

しまう細川道枝。

「オエエエェッ！！　おうおうおおおおっ！！」

「くっさ。ほぼ吐けたようね？　これで死ぬことはないわ」

クリトリスを人差し指と親指で摘み、思いっきり捻りあげる愛衣。

「んぎゃあああああああっ！！」

「今後二度と愛衣たちに逆らわないと誓いなさい。そうしないとクリトリス引きちぎるよ？」

「わ、分かりしました愛衣様っ！！　お許しをっ！！」

四人の超ミニスカートのヤンキーたちに散々性的リンチを受けた細川道枝先生は、空手部の部室でしばらく泣き崩れていた。

「もう泣くなよ。最後に指マンでイかせてやるから四つん這いになってお尻突き上げなさい」

「ぐすん。ぐすん。はい。愛衣様」

『グチュッ！　ズチュチュチュチュチュチュチュチュッ！！』

「あはあっ！？　あはんはんはんはんはんはんっ！！　ひんぎいいいっ！！　イくっ！！　イっくううううっ！！」

「ホライけババアッ！！」

「はひいいいいいいいっ！！　愛衣様ああああっ！！　気持ちいいいいいっ！！」

『プシュウウウウッ！！』

菅野愛衣の太ももに掛かるほど派手に潮を噴いてイってしまう細川道枝先生だった。

「愛衣様……イかせていただきありがとう……ございました」

「オリモノたくさん出てて臭いよ先生？」

「ごめんなさい！　ごめんなさい！　ごめんなさい！」

「もう勘弁してやるよ」

そう言いながら中指と薬指を先生の膣から引き抜くと、ゆっくり立ち上がり部室を出てゆく愛衣たち四人。

愛衣以外の三人も哀れそうな目で細川道枝を見下ろしながら去ってゆく。

女子生徒たちに責められて愛液を垂れ流す哀れな自分の性器を指で

拭い、更に涙が溢れ出す。

細川道枝先生の啜り泣く声が夜中まで響く部室であった。

菅野愛衣と三人のヤンキーたち（後書き）

この高校で愛衣たち四人に逆らう者はしばらく出てこないであろう。
今回の事件で懲りた細川道枝先生は、愛衣たちに自分から挨拶をして、何かあるたび土下座して謝るようになった。

「誤って済むと思うの先生？パンツ脱いで私たちにマンコの中身見せなさいよ？」

「は、はい！南条様！私のオマンコ……見てください！」

「あはは！くっさそうな汚いマンコ♪」

愛衣たちは担任もシメることに成功するのであった。

異性の友（前書き）

信仰心。時と場合によっては人を狂気に陥れる。

異性の友

「お母さん……ごめんね。今まで育ててくれてありがとう」

１６歳の少女が母親の寝室に入り、豆球の薄暗い中で両手をそっと伸ばす。

ゆっくりしっかりと首を両手で掴み、思いっきり力を込めて締め上げてゆく。

「ううっ！？　んうううっ！！　うんんんんっ！！」

柔道を小さな頃から習って身体を鍛えていた少女は、その自慢の怪力で確実に４６歳になる石塚直子の息の根を止めた。

ピクリとも動かなくなった母親の前で両手を組み祈りを捧げる石塚俚実。

「これで私は確実に神通力を得ることができる。お母さんの死は決して無駄にしないからね」

予め購入しておいた小型の電動ノコギリで、石塚直子の両手両足、首、胴体、全身をバラバラにしてゆく。

「はぁ。はぁ。内臓は全て庭の土に埋めて、残った胴体と頭部と手足は……」

内臓部分を庭に埋め終わると、残りの部位を袋に入れて二階の自分の部屋に戻る俚実。

床に描いておいた魔法陣へ内臓のくり抜かれたバラバラ遺体は元の形通りに並べられる。

「んーと。あれ？　あの次祈祷が先だったかな？　んん……」

ポケットから取り出したスマホで誰かに電話をかける。

『ガチャ！……もしもし』

『あ！　孝文？　教えられた通り母を殺して内臓くり抜いて頭部と手足を切断したんだけど』

『そうか。部屋に戻って俺が描いた魔法陣の上に元の身体通りに並べたか？』

『うん！　次どうするんだっけ？』

森脇孝文は石塚俚実の中学時代からの同級生であり、なんでも相談できる頼れる親友であった。
恋人のそれとは違い、手を繋ぐ訳でもなくキスをする訳でもなく、本当に異性の友人といえる仲である。
柔道で強く逞しく鍛えられている俚実は、一人娘で我儘に育てられた性格も重なり、周りの女の子たちから敬遠されて同性の友人は一人もいなかった。
集団から無視される姑息なイジメのようなものをクラスメイトたちから受けていたのである。
高校へ進学はせずにバイトをしながらの生活であったが、森脇孝文とは毎日のように電話して色々相談する親友であり兄のような存在である。
「これから教える呪文を唱えてから目玉をスプーンでくり抜いて食べるんだ」
「え？　そ、そんなことできるかな……」
「俺と同等の神通力を手に入れたいのなら実行するんだ俚実！」
完全に森脇に洗脳されている俚実は、自身の母親を殺害し、更に遺体をバラバラにしてからその一部を食する……という想像外の非道な行為をしてしまう。
『これで俚実も俺と同じ……両親はいなくなり一人きり。寂しい者

同士一緒に生きていこう』

森脇孝文の本当の狙いは人生で一番大切な親友である俚実を独り占めすること、自分と同じ一人ぼっちにすること、であった。
魔法や神通力や神、仏を数年前から信じ込まされてきた俚実にしてみれば最善の行動をとってきたつもりである。

「後は遺体を一緒に海へ還しにいこう。お母さんは極楽浄土へ間違いなく辿り着けるから」

「うん。ありがとう孝文。私の神通力でクラスの女の子たちに報復出来るよね？」

「ああ。死んで欲しい奴の名前を三人白紙に書いて俺に渡してくれ」

自分の願いを実行してくれた俚実に対する孝文の恩返し。
それはイジメの主犯格を呪いと見せかけて殺害することであった。
週末の土曜日、部活帰りの夜道で三人の女子生徒を刺身包丁で刺殺することに成功した。

明くる日の日曜日に二人は海へドライブに出かける。

「ありがとう孝文。あいつら全員即死だったみたい」

「ああ。俺と俚実の二人分の呪力が掛かっていたからな。当然の結果だ」

「海へ還したお母さん……今頃天国に辿り着いてるかな？」

「もちろんだ」

「お前たちは地獄行きだけどな！」

背後で何者かが二人へ声を掛ける。

「だ、誰だ！？」

孝文と俚実が振り返ると、いかにも格闘技をやっていそうな屈強そうに見える男たちが三人立っていた。

「俺たちと一緒に来てもらおうか？」

「や、やめろ！　何者だお前ら！？」

あっとゆうまに二人を拘束すると、黒いハイエースへ担ぎ込む三人。

「やめてよっ！　離してっ！　孝文！　神通力でこいつらやっつけ

て！」

「あ、ああ！……ナンミョーホーレンヘンジョーコンゴーナンミョーホーレンヘンジョーコンゴー……ブツブツ……ブツブツ」

なにやらわけのわからない呪文を唱え始める森脇孝文。

三人は特殊任務省の外部行動部隊であった。

リーダーの山内は騒ぐ男女二人へ全身麻酔の注射を打ち込む。

一分と経たないうちに眠りにつく孝文と俚実。

そのまま二人は地獄の待つ残酷処刑島へと連行されていった。

――――残酷処刑島。

「こいつら男女で仲良かったはずなのにエッチもしたことないんだってさ」

「そうなんだ。男前だし美人だし……勿体無いよねぇ」

「おそらく童貞と処女とゆうことらしいよ。死ぬ前に男女の悦びを感じさせてやろーか？」

好き勝手に会話する美少女たち。

美少女たちといってもその辺の男より遥かに冷酷な気性の者たち……〝拷問処刑人〟と呼ばれていた。

今回は鬼頭美紅を筆頭に宮垣咲良、大野真子、小野メグとゆう全員が１４歳の中学生とゆう組み合わせである。
小学生組の菅野莉央たち三人と、高校生の円満愛衣はお休みの周りだった。

「やめろ！　やめてくれっ！」

素っ裸にされて十字型の木の杭に拘束されている森脇孝文は、必死で女の子たちに許しを乞うていた。

『シコシコシコシコ』

「やめろって言う割にチンポおっ勃ててんじゃん？　笑わせてくれるよお前」

１４歳のアイドルであり拷問処刑人である宮垣咲良は、ギンギンに勃起した森脇孝文のペニスを右手で高速でシゴいていた。

「ん……んん。こ、ここは？」

その時だった。
孝文の親友の石塚俚実がようやく目を覚ました。

こちらはベッドに寝ているだけで服は着ている上に拘束すらされていなかった。

「え！？　な、何をしてるのあなたたち！？」

「何をって……見たらわかるでしょ？　センズリできない状態だからあたいがシゴいてやってるんだよ？」

「し、しごく？　そんなトコ握って激しく擦っちゃったら孝文が痛がるじゃないの！　やめてあげて！」

本当にエッチもセックスもしたことがない処女の俚実が孝文を心配する。

「男女のこと全く何も分かってないお嬢さんなんだなぁあんた……ようく男のチンポ見てるんだ。楽しいことが起こるから」

「いたっ！？」

鬼頭美紅がダンゴにくくっている俚実の髪の毛を鷲掴みにして顔を孝文の方へ強引に向け直す。

「やっ、やめてくれえええっ！！」

「ほら、イくんだ」

「は、恥ずかしいからもうやめて……うっ！？　うわあっ！！」

『ドピュッ！！　ドピュピュピュピュピュピュピュウッ！！』

中学生アイドルの宮垣咲良に手コキでイかされた森脇孝文は、頬を赤く染めて俯いたまま涙を流し始めた。

「キャッ！？　な、何今の！？　白いネバネバした液体が！？」

「本当に何も知らないんだねあんた……真っ白な可愛いスカート穿いてるね？」

美紅は白いスカートの下から手を滑り込ませて太腿を撫でた。

「ヒャアッ！？　や、やめて！？　触らないでっ！！」

そのまま股間まで指先を進ませると、内股のパンツの裾から中指を秘部へ差し込んだ。

『ススス……くちゅっ！』

「やあああっ！？　エッチ！！　やめてええっ！！　どこに指入れてんのよおっ！？」

美紅は冷ややかに微笑みながら耳元で囁いた。

「お、ま、ん、こ♡」

「ひいっ！　やだっ！　抜いてっ！　変態っ！！」

『グチュチュッ！……メリッ！……グチュチュチュチュチュチュチュチュッ！！』

一気に根元まで中指を突き入れて処女膜を突き破ると、そのまま激しく指マンを開始する美紅。

「あひひひひいっ！？　やだあああああっ！！」

足元がガクガクしてくる俚実は膝から崩れ落ちそうになるが、大野真子と小野メグによって両腕を掴まれて、無理矢理立ったままに維持させられた。

「どう？　美紅さんの指マン……気持ちいいでしょう？」

「自分の指さえ突っ込んだことないマンコに同性の女の子から無理矢理突っ込まれる感想は？　あははは♡」

中学生の真子とメグは、半泣きになりながら人生初の快感を味わっている高校一年の少女に面白可笑しく問い掛ける。

美紅の激しい指マンをされながら、目の前では親友の森脇孝文がタコ殴りにされていた。

『バキッ！　ドカッ！　グシャッ！　ズドオッ！』

「オラオラオラオラオラオラオラアッ！！　なに汚い液をアイドルのあたいの指にへリ掛けてんだあっ！？　死んで詫びろよお前！」

「ひぎぎぎぎっ！　ぐわあああああっ！！」

顔面への正拳突き、フック、アッパーと、腹部へのボディーブロー、三日月蹴り、膝蹴り、ありとあらゆる攻撃でアイドルの中学生美少女からめった撃ちにされる高校一年生男子の森脇孝文。

「ほら、ぼちぼち天国にイかせてやるよ俚実」

『グチュチュチュチュチュチュッ！！』

「やんやんやんやんっ！　やだあああああっ！！」

『プシュウウウウッ！！』

パンツの裾から噴き出した愛液は、太腿を伝い、足首まで垂れ流れてきていた。

「ツンとする臭い液タップリ垂れ流しちゃって……そんなにあたしの指マンが気持ち良かった？」

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ。ひ、酷い……自分の指さえそんなとこに入れたことなかったのに……えーん！えーん！」

同性に犯された、とゆうあまりにも非現実的な陵辱を受けたことに対し、思わず涙が溢れ出してきて号泣してしまう俚実だった。

泣いてる女子高生に構うことなく大野真子と小野メグは緑色のTシャツと白いスカートを脱がしてゆく。

「やだ!?　やめて！　私の服を脱がさないでぇえっ！！」

抵抗するたびに先程まで膣に突っ込まれていた美紅の右手が左の頬を激しくぶった。

『パァンッ！！』

「ひっ！！」

三回ほど平手打ちをされた頃には抵抗することを断念して真子とメグから施されるままに大人しくする俚実。

パンツ一枚のみとなった時に美紅が真子とメグの手を止める。

「？……パンツも脱がさないんですか？」

「うん。コイツのマンコ、かなりの臭マンだからパンツ穿かせたままでズラしちゃおうかなって。あはは……」

確かに美紅の中指付近から強烈な異臭が漂っていた。
俚実のパンツに擦り付けて臭い愛液と恥垢を拭き取る美紅。

「とりあえず足を開いて両手を頭に付けてジッと立ってなさい。動いたら目玉くり抜いてやるからね？」

「ひいっ！？　わ、分かりました」

背後に回り込んで美紅と真子とメグは交代ごうたいでパンツ越しに股間を蹴り上げた。

「いっくよお？　ココかな臭いと噂のマンコは？　ほらあっ！」

『パァンッ！！』

「ひぐっ！！」

「私の靴に臭い付けないでね？　えいっ！」

『ズドオッ！！』

「ぎゃあっ！！」

一人５０回、合計１５０回ほど蹴り込むと、白いパンツの下側が真っ赤に染まっていた。

大陰唇と小陰唇が裂けて大量に出血していたのである。

「うわあーん！　うわあーん！　痛いよおおおっ！　孝文助けてええぇっ！！」

「孝文？　そう言えばもう死にかけてる頃だよ？　ほら、動いていないから後ろ見てみな」

四肢を切断されて包帯を巻かれ、背後から宮垣咲良の膝蹴りを何度も何度もぶち込まれている姿が見えた。

『パァンッ！　パァンッ！　ズドオッ！　ズドオッ！』

睾丸が咲良の膝で蹴り上げられる度にペニスが上下に激しく揺れる。

「あはは！　咲良の膝蹴りでもうキンタマ二つともミンチになってるよアイツ……無事なチンポだけがプランプラン揺れてるのがむっちゃ惨めだよねぇ？　あははは♡」

「ひっ！？　やだ……やめてあげてえええっ！！」

『ズドオッ！！　スパァンッ！！』

「ぎゃああっ！！」

俚実の願いを無視して笑みを浮かべながら孝文の睾丸を膝で蹴り上げ続ける咲良。

「ミンチになってもやめたげないんだから……そんなにチンポ揺らすなよ？　笑っちゃうから♡　尿道から粘度のある液体垂れ流しちゃって汚いなぁ……血の混じった精液だなきっと」

咲良自身もプランプラン揺れて膝に当たるペニスに笑いを堪えることができなかった。

「あばばばば……ぶくぶく」

泡を噴いて白目を剥いて失神している森脇孝文だったが、四肢を

切断されて睾丸を潰されても未だ死なせてはもらえなかった。
ショック死や出血死を防ぐ薬は、拷問処刑を執行するに当たって当然の施しでもあった。
被害者に代わって、罪人たちに地獄の苦しみを少しでも長く与え続ける為である。
短くなった両手の脇を左右から抱えていた大野真子と小野メグだったが、咲良の膝蹴りを見ながらかなり興奮していた。
「おい咲良！　私たちにも責めさせろよ？」
「ほんとだよ！もうキンタマ二つとも潰しちゃってんだから後はあたしらに任せろよ？」
「あ、ああ。手足切断とキンタマ潰し……あたいはもう満足したし」
咲良は、睾丸を潰した時に尿道から噴き出した血と精液の混じった液体を右膝から手で拭うと、孝文の背中に擦り付けた。
「あわわわ……た、孝文が……ひ、酷い」
「酷いのは何の罪もないあなたの大切な人であるはずの母親を殺したあなたの方じゃない？　孝文と同じようにダルマにしてあげるから覚悟しなさい」
そう言いながら鬼頭美紅はチェーンソーのエンジンをかけて何度

も力強く吹かす。

『ギュイイイインッ！！　ギュイイイインッ！！』

「ひっ！？　やだ！！　やめてえええっ！！」

右腕、左腕、右脚、左脚……一本ずつ確実に切断してゆく美紅。

短くなった両脚をパクパク開閉する姿に拷問処刑人たち全員が爆笑してしまう。

中心だけ真っ赤に染まっていたパンツも全て鮮血で染まってしまった。

サバイバルナイフを手にした美紅は俚実の股間前に跪き、パンツの中心点に切っ先をそっとあてがう。

「痛い……痛い……手足が……股間が……痛いよおお」

「そうなんだ。ちなみにあんたの臭いマンコはコレから地獄の激痛モードになっちゃうからね？　良かったね？」

『ズッ！……ズブブ！』

「んぎゃあああああっ！！」

１６歳少女の性器へ突き入れられたサバイバルナイフ。
細身の刀身である美紅のナイフは、幅は３センチだが、長さが４０センチもあった。
膣を貫通し、一気に子宮頸部を貫いた。

「ここかな？　もう一生使い道のなくなった臭い子宮は？」

「ぎひいいいっ！！　んぐうううっ！！」

そのまま子宮の奥まで貫き、何度も角度を変えて抜き刺しを繰り返すと、子宮のみでなく卵巣までもズタズタにされた。
ナイフを膣から引き抜いた後、左手で小陰唇を摘み、見事に刺身のように捌く。
左右二枚の小陰唇が美紅の左の掌に乗せられた。

「あたしたちに蹴られまくって所々裂けて惨めになった小陰唇だね？」

「ううう……」

手足切断によるあまりの激痛と出血に、意識が遠のきつつある俚実だったが、更に地獄を与えてゆく美紅。

「クリトリスもくり抜いちゃお！」

『ズッ！　グリンッ！　ブチュ！』

死にかけであるにも関わらず断末魔のような絶叫をあげる俚実に、拷問処刑人たち皆が振り返る。

更に尿道からナイフを刺し込み、膀胱まで抉り込む。

噴き出す小便をかわしながらうつ伏せにひっくり返すと、ダルマ女のお尻を突き上げさせて縛りつける。

「最後の晩餐だよ。お食べ」

「んんっ！？　むぐうっ！！」

美紅は先ほど切り取った二枚の小陰唇と、くり抜いたクリトリスを無理矢理俚実の口の中へ捩じ込んだ。

「ようく噛んで食べるんだ。臭いマンコだから冥土の土産には贅沢でしょ？」

「ううああ……むしゃむしゃ……ごっくん！」

「偉い偉い！さすが１６歳のお姉さんだね！　ご褒美に……破壊しちゃう前にこっちの穴でもイかせてやるからね♪」

美紅は先端が直径５センチほどもある球体状になっている１メー

トルはある鉄の棒を手に取り、ゆっくりとピンク色の菊門へ押し当てる。

「やはっ！？　そこだけはやめて……恥ずかしい」

「恥ずかしいじゃなくて〝汚い〟の間違いでしょ？　いくよ。入るよお？　ほらぁ～♡」

『ツプッ！……ズボボボボ！　メリメリメリ』

「ひぐうっ！？　いったあああああいっ！！！！」

「今までの人生で一番大きなウンチより大きいでしょう？　あははは！」

美紅はイラらしそうな笑みを浮かべながら、球状の鉄の先端がS状結腸に当たるまで直腸奥深くまで捩じ込んでいった。

「あんんっ！！　おしり痛いよおおっ！！　えーんえーん！」

「ココからが本番なのに……泣くのはココからにしてくれるかな？　ほらほらほらあっ！」

『ばちゅばちゅばちゅばちゅ！！』

鉄球が全開に肛門を押し拡げる位置まで引き抜いてはまた一気に直腸突き当たりまで捩じ込む……それは超高速でピストン運動される。

「ぎゃはあっ！！　熱い痛い熱い痛いいいいいっ！！！！　許してぇええっ！！」

「熱いの痛いの？　どっちなのぉ？アナルって激しく擦ると熱く感じるってゆうもんね♡しかもきっちり痛いし。おもしろ～い♡」

笑顔で語りながらも美紅の激しいアナルピストンは続けられる。
透明の粘度のある液体が垂れ流れてきた。

「こらぁ。痛がってて感じてもないのに腸液垂れ流すんじゃないわよ？　殺すわよ？」

殺すクセに……周りの女子中学生たちは皆そう思いながら美紅の激しいアナル肛虐を凝視していた。

更に完全に先端の球体を肛門から抜き切って、一気に突っ込む、といゆ手段も施す美紅。
白目を剥いてアへ顔になりながら短い脚を開閉させて更に拷問処刑人たちを笑わせた。

大きな鉄球によりアナルを限界まで押し拡げられた為、肛門括約筋も数枚裂けて、直腸からも腸液と出血、肛門自体からも流血して

しまう俚実。
カクカク腰を振りながら意味不明な呻き声をあげ始めた。

「あら？あまりの気持ちよさにお気が触れちゃったかしら？　じゃあこの美紅様が今から本格的に捌いてあげる。お魚みたいに肛門からナイフを入れるのが常套手段なのよね。ほら！　血まみれのきったない穴はここ？」

『ズッ！……ズブブブブ！』

「はうあっ！？　痛いいいっ！！　ぎゃあああああっ！！　もう殺して殺して殺してぇえっ！！」

会陰部と恥骨を切断しながら強引に肛門と性器を切開して繋げてしまうと、そのままもう一度ひっくり返して仰向けにし、ヘソまでザクザクと切り開いてゆく。

「かひゅっ！かひゅっ！ぴぎいいいっ！！……ゴポポ……ガクッ」

激しく痙攣しながら血の泡を吐きながら絶命する石塚俚実。

四肢切断され、下半身はお臍までパックリと切開され、さまざまな臓器をぶちまけながら絶命する１６歳の少女であった。
ズタズタになった子宮と卵巣、膀胱が切断面から飛び出してきて、その上に大腸と小腸がトグロを巻くように覆い被さる凄惨な姿とされてしまった１６歳の俚実。

残されたダルマ男は、まだ中学生アイドルの二人から拷問を受け続けていた。

「ほらほらほら。キンタマなくても射精できるって知ってた？」

大野真子は中指と人差し指をダルマにされた１６歳の少年の肛門へ突っ込み、グリングリン掻き回している。

「掻き回すたびに腰がヒクヒク動くのが面白いよねメグ？ん？腸の奥にデカいウンチ当たってるぅ？　汚いわねぇ～♡」

「あはは……真子もエッチになったもんだホント……菅野さんからもらった強制勃起薬を注射しまーす♪」

メグは会陰部へ紫色の液体を注射した。

ムクムクと大きくなってくる陰部に真子とメグは大爆笑。

「やだあ～♡　あはははは！」

「四肢切断されてキンタマ潰されても勃起するって……笑うしかないよねホント！　あはははは♡」

真子による激しい直腸からの前立腺掻き回しと、小野メグによる高速手コキが始まる。

白目剥きながらも必死で腰を振る孝文は、都合よく痛みのみ麻痺して快感だけ感じているのかも知れない……。

『ドピュッ！……ドクドク』

「やだ！　ホントにイっちゃったよコイツ……」

「あたしの前立腺責めが効いたのかな？」

「私の手コキでしょ？」

「ま、どっちでもいいか。オラオラ！　ケツマンコ掻き回されて射精した気分は？　答えろクソガキ！」

「クソガキって……真子より年上じゃんソイツ……」

人生最期の射精を真子とメグによって施された孝文は、ヨダレを垂らしながら先に旅立った俚実と同じくアヘ顔になって必死で何かを呟いている。

「うぁ……んぅぅ……」

「ん？　なんていってるの？　聞こえなーい」

「殺して……もう殺して……」

「殺して頂きましたぁっ♪　何度聞いてもソソるわぁそのセリフ！」

真子は頬を赤くしながら悦びを噛み締める。

「まだよ。オチンチンとアナルを処刑しなくちゃ死なせてやんないんだからね♡」

「いつまでも……無事と思うなアナルとチンポ！」

小野メグは切れ味最強の医療用メスを取り出すと、亀頭部にあてがう。

「どの角度でどう切ろうかなぁ。ねぇ真子？」

「ヤラシぃ～♡　そうだなぁ。まず尿道に縦に突き刺してから裏筋までパックリ開いて……雁首切断してから裏筋部分から皮を剥いて剥き身にしちゃおーよ」

「注文多いなぁ真子は……了解」

器用にメスを使いこなすメグは、見事に真子の要望に応えた。

雁首を失って尿道にから裏筋側へ切開された哀れなペニスは、更に真子の指先で皮を剥かれてゆく。

『バリバリ……ズルズル……』

「やだぁ。真っ赤なムケチンになっちゃったぁ」

「尿道飛び出しちゃってプランプランしてるじゃん！　哀れだなぁ♡」

真子の手作業に思わず興奮するメグだった。
女子中学生アイドルの手によってぐちょぐちょに解剖、分解されてゆく哀れな少年の性器。
トドメは根元から切断することで孝文の男人生に終わりを告げる。

「潰れた睾丸もほじくり出しといてあげるね？」

メグは陰嚢にもメスを入れ、ミンチになった睾丸をほじくり出してあげた。
根元から陰嚢までも綺麗に剥ぎ取る。

「キンタマ袋も見逃してあげないんだから♪」

美紅がライフルを持って真子たちに歩み寄る。

「可愛くなったじゃんダルマ男。去勢済みダルマ男かな。トドメはあたしに任せて。まずは汚いヘソに……」

『グリッ！……ブチュ』

強引に銃口をヘソにめり込ませる美紅。

「コレではまだ死なないけど……まずは喰らいなさい」

『ズドオンッ！！』

「げはああああっ！！」

大腸小腸が辺りにぶちまけられた。

弾丸が地面へ向いて貫通して、背中の脊髄までも粉々になってしまったため、もはや痙攣するぐらいしか全く動けなくなってしまう。

激しく痙攣する最期の近い森脇孝文。

「トドメは……肛門から弾丸ぶっ放して頭部を吹っ飛ばしてあげる。二発目は本格的な火薬量だから内臓全て吹っ飛んだ頭から飛び出しちゃうからね？　覚悟しなさい。ほら、臭いアナルに激アツをくれ

てやるよ」

『ズボオッ！……グリグリ……ズブブブブ』

「痛い？　熱い？　あれぇ？　直腸の突き当たりがない？　一撃目でミンチになっちゃってるみたいよ？　うふふ♡」

「はうう〜。はうあああ〜。ヒィーハァ〜」

「何訳の分からないこと言ってるの？　人生最期なのに……あの世で同級生三人と……俚実の母親に懺悔しなさいよ？　さようなら」

『ズドオンッ！！……パァンッ！！！！』

スイカを割ったようにバラバラに吹っ飛ぶ頭部。
首より上は全て粉々に砕け散る。
肛門とヘソと首から噴水のように鮮血が噴き出し続ける哀れな遺体となった。

残酷処刑島に新たに二人の遺体が加わった……。

「おい真子！　ちょっと来い」

「え！？　は、はいっ！」

港への帰り道、鬼頭美紅から唐突に呼ばれる大野真子。

「久しぶりね。ちょっと遊んであげようか？」

「あ、いえ、あの……きょ、今日はちょっと」

そっと背後に回り込み、スカートの下から手を入れてパンツ越しにお尻を撫でる。

「ひゃっ！？あの美紅さん！　ホントき今日は堪忍してください！」

『スルリ……グチュ！』

「あはんっ！！　ダメッ！！」

お尻側のパンツの裾から二本の指を入れて膣へ挿入する美紅。何度か膣内を掻き回して指を引き抜くと、中指と薬指が真っ赤に染まっている。

「そうゆうことね。生理だったんだお前」

「はい……美紅さんの指が汚れちゃいますから……」

『ズチュッ！』

「やはあっ！？」

「血なんて慣れてるからね。生理中の方が感じるでしょ？　ほらほらほらっ！」

「あんっ！　美紅さんっ！　気持ちいいっ！」

鬼頭美紅に責められている大野真子の親友である小野メグも、真子自身が美紅に惚れていることを理解していたため、見て見ぬふりをして港を目指して歩き続けた。

『ヒュンッ！！』

「！？」

『ガシッ！！』

いきなり背後から美紅の後頭部に襲いかかるハイキック。咄嗟に空いている左手の肘を立ててガードする。

そこに美紅を睨みつける咲良の姿があった。

「どうゆうつもりかな咲良。……死にたいの？」

「やってみろよ」

真子をイかせる寸前まで膣内を掻き回していた二本の指を引き抜くと、付着している生理の血と愛液を真子のスカートで拭い取る美紅。

「いつからそんな生意気な口をきくようになった？　とことん思い知らせてやるから覚悟しな咲良」

キッともう一度睨みつけてから一気に攻撃に入る咲良。

パンチの乱れ撃ちとローキックミドルキック、ハイキック……ありとあらゆる角度、方向から美紅に襲いかかる。

たまにガードするが殆どの攻撃をかわされてしまう。

鬼頭美紅の戦闘力は、宮垣咲良より遥かに強い小野メグと大野真子をも上回る。

菅野莉央と同等のレベルであった。

「さ、咲良！？　何やってんだお前！？」

今まで美紅にマンコを掻き回されていた真子が我に返り咲良へ恫喝する。

「お前に敵うわけないだろーが！」

「真子。あんた咲良の心配とゆうか……もうちょっとで大好きな美紅さんにイかせてもらえるところだったのに邪魔されて怒ってるんでしょ？」

「え！？　な、なに言ってんのメグ！　ば、バカなこと言わないで！」

図星だった真子は思わずどもりながら頬を真っ赤にして黙り込んでしまった。

爆笑するメグの傍ではいまだに咲良の猛攻が続いていた。

「本気でやってんのか咲良？　あたしを舐めるにも程があるよ？」

咲良のフックをかわしながらの勢いで、ミドルの回し蹴りを繰り出す美紅。

咲良のみぞおちに深く突き刺さる。

「がはあっ！？　オエエエエエッ！！」

一撃でダウンした咲良は、苦しそうに朝食べたものを全て吐き出してしまった。

「皆の前で素っ裸になってもらうよ」

「ゴホッ！　ゴホッ！　はぁ。はぁ。はぁ。はぁ」

セーラー服を上から脱がし始める美紅。
真子とメグは咲良への情けと気を遣い、その場を見ないように港へ歩き出した。

スカートも脱がされパンツ一枚のみとなる。

「ほら咲良！　パンツは自分で脱げ。あたしにワレメ開いてマンコの奥の奥まで見せろ」

「は、はい」

「素直になったじゃんか？　それでいいんだよ」

宮垣咲良は頬を真っ赤に染めて自分の性器を両手の中指と薬指で思いっきり開いた。

『クパァ～ッ！』

透明の糸を引きながら小陰唇と膣口がパックリ開く。

「濡れてるじゃん……まさかお前」

「早く指を入れてください」

「はあっ！？　咲良お前……」

『ギュッ！　ブチュッ！』

「んんっ！？　んんんんっ！！」

超ミニスカートのセーラー服を着た鬼頭美紅に素っ裸の咲良はいきなり抱きついてキスをする。

コレには、あまりにも想定外過ぎて流石の美紅も不覚ながらかわすことが出来なかった。

本当に自分のことが好きだと確信した美紅は、半ば呆れながらも咲良のオマンコを掻き回した。

ビクビクと身体を震わせて頬を真っ赤に染めてキスをしてくる咲良が、莉央と同等の残酷気性を持つ美紅でさえも優しい気持ちにさせてしまう。

「もういいや。咲良をとことん虐めてやる。ほら、もっと舌をあたしの口内で動かしまくるの！わかった？」

「は、はい美紅さん……レロレロ……くちゅくちゅ。あん！　そこ気持ちいいですっ！　あんっ！」

そのまま美紅の指マンで潮を噴かされてオーガズムを味わった咲

良。

一方、簡易な港についている膜と真子は……。

「おいメグ！もしかして咲良のやつ……あたしにヤキモチ妬いて邪魔したのかも？」

「あっ！　そ、それなっ！　私もそう思う！　言われてみればそう思った！　あはははは！　してやられたな真子？わ、笑わせるなよホント！あはははは！」

「ちっ！　美紅さんにイかせてもらえなかった恨み……今度咲良をボコってやるんだから！」

「あはははは！　だから笑わせないでってて！もう！」

異性も同性も愛は同じ。
嫉妬も同じなのであった……。

異性の友（後書き）

過ちの信仰心を持つ、悪魔のような男友達に翻弄された少女の悲しい結末。

何の罪もない母親は、一番可哀想な被害者となってしまった。

やり過ぎた四天王（前書き）

菅野愛衣に名を変えて黒霧島高等学校を短期間でシメた円満愛衣。四天王と呼ばれる愛衣と三人の女子高生たちの粗暴さは日に日にエスカレートしてゆく。

やり過ぎた四天王

とある夏の日の黒霧島高等学校。
蝉の鳴き声がかなりうるさい上に教室のクーラーも壊れて修理屋が来るまで使えなかった。
温度計が指す数値は３３℃……。

二時限目の細川道枝先生の授業中、黒霧島四天王のボス、菅野愛衣が遂にキレる。

「あっついなぁもう！　おい細川！　もう授業いいからちょっと後ろに来い」

「え！？あ、はい菅野様」

「なんかエアコン壊れてムカつくから土下座して私たちに謝れ」

「は、はい！……ごめんなさい菅野様に東条様、西条様に南条様」

超ミニスカートのスケバン四人に言うがままに扱われる三年Ｂ組の担任、細川道枝であった。

「はら、愛衣の足の指舐めて」

「はい。ピチャピチャ……ピチャピチャ」

ひたすら指と指の間まで丁寧に舐め続ける細川先生。
土下座させたまま舐めさせている中、西条早希が背後からスカートを背中まで捲り上げる。

「んはっ！？や、やめて！」

「愛衣たちに逆らうの？」

「今日はやめて……お願い。生理なの……」

菅野愛衣はアゴをシャクって早希に合図する。
静かに頷いた早希はそのまま手を動かした。

『ズルリッ！』

「ひゃあっ！！　お願いやめて菅野様っ！！」

「菅野様って……今パンツ脱がせたの早希だろーが？　殺すわよ？」

「だ、だって……菅野様が止めるよう言って下されば西条様だって……」

『ツプッ！』

「ひゃんっ！！」

西条早希のボールペンが細川道枝の肛門へ突っ込まれる。
初めはゆっくり、そして一気に半分くらいまで挿し込んだ。

『ズズズ……ズボッ！！』

「やだあっ！！　お尻痛いっ！！　やめて西条様っ！！」

「あのね、土下座してたら穴を責めにくいし、パンツも中途半端にしか脱がせられないから……一度四つん這いになってくれるかなぁ？」

「やめてって言ってるのに！」

あまりにひつこい教え子たちに、少しキレ気味に叫んでしまう細川道枝先生。
次の瞬間菅野愛衣の激しい平手打ちが左の頬を襲った。

『スパァンッ！！』

「ひぎいっ！！」

強烈過ぎて左の鼻の穴から鼻血が垂れ流れてくる。

「黙って早希の言う通りにしないと更に１００回ビンタするよ？」

「は、はい。ごめんなさい菅野様……しくしく」

ついに泣き始めてしまう４０代の女盛りである細川道枝先生。

「まだこんなので泣かれちゃ先が思いやられるわ」

東条登美子も西条早希の隣にしゃがみ込み、四つん這いになって菅野愛衣の足を必死で舐め続ける細川道枝のパンツを膝までズリ下げた。

「ココまで脱がせたら二つの穴も丸見えね♡」

「ありがとう登美子。そのまま血まみれのマンコ責めてやって！」

「そうだなぁ。私の生指を真っ赤に染めてもらっちゃおーかな？　えい！」

『グチュ！……ズブブ！』

「んはあっ！？　東条様っ！　汚いからやめてくださいいいいっ！！」

「汚くても臭くても後で洗えばＯＫ！　気にしないで先生♡　思いっきりイかせてやるよ♪　それそれそれえっ！」

中指と薬指を根元まで挿し込み、上下左右に膣内を激しく荒く掻き回す東条。
なんだかんだやめてやめてと言いながらも小刻みに腰を振りながら感じている細川先生を、四人は少し醒めた目で見下ろしていた。

「ボールペン根元までぶちこんで直腸突き破ってやろーかなコイツ」

「それはだめ！　愛衣が莉央様に大目玉喰らっちゃうから！」

「はーい。その莉央様って小学生の女の子ですよね？　そんなに強いんですか愛衣さん？」

「多分小学生の姿をした１０万馬力のサイボーグだよ莉央様は……」

「さ、さいぼーぐ？　１０万馬力ってあの有名な……」

東条登美子が考え始めると、さっと横槍を入れる南條奈百合。

「鉄腕アトム！　すっご！　その莉央様って……何かやらかしたら高速で空飛んできて愛衣さんをシバいちゃいそうですね？　怖っ……」

――――その頃、東部地方にある東部テレビでは……。

「はーーーっくしゅんっ！！」

「かっ、かーーーっとおおおっ！！」

いきなり鼻水を数メートル飛ばすほどの大きなクシャミをする小学生アイドル、菅野莉央の姿があった。

富田美香と結城明日香の小学生三人組のクイズ番組収録中のことである。

「びっくりしたよ莉央ちゃんってば！　何今の豪快極まりないクシャミは？」

メガネっ娘の結城明日香が目をパチクリさせ、心臓をバクバクさせながら莉央を怒る。

「ごめんごめん！　よく分かんないけど急に鼻がムズムズしちゃって！　監督さんもごめんなさいっ！」

「気をつけてねもう……ベテラン俳優さんも数人出演していらっしゃるんだ。何度もの撮り直しは非常にご迷惑が掛かるんだよ？」

「はい、本当に済みませんでした……」

莉央が元気なく頭を下げる姿を見ながら、クスクスと笑う富田美香。

「美香ちゃん！　笑い過ぎだよ。怒るよ？」

「あはははは！　今監督と明日香ちゃんに怒られた所なのに！　八つ当たりであたしを怒るんだ？　あっはははは！」

「もう！　……よっし！　頑張ってクシャミも堪えて噛まないで収録早く終わらせて……事務所帰って帰宅しよっと！」

元気を取り戻して再度クイズ番組の収録に取り掛かる莉央たち三人であった。

――――再び黒霧島高等学校。

東条登美子は細川道枝の膣内で二本の指を回転させたり、掻き回したり、出し入れを繰り返したり、Ｇスポットをこねくり回したり……女の悦びを感じる場所を的確に責めた。

数分と経たないうちに潮を噴かされる。

「やんっ！！　やだっ！！　と、東条様っ！　私、い、い、イっくうううううっ！！」

「イけよ！　ほらあっ！」

「ひんぎいいいっ！！」

『プシュウウウッ！！』

女子高生たちに大量に潮を噴かされてイかされた細川先生は、今度は愛衣の性器を舐めさせられる。

「ほら、もっと舌を奥に入れろよ？……んんっ！　んっ！」

結局四人に素っ裸にひん剥かれた女教師は、菅野愛衣の性器を舐めさせられながら東条登美子に膣内を更に掻き回され、西条早希に今度は中指で肛門を掻き回されている。

唯一まだ何もしていない南条奈百合は、自身で睾丸を一つ潰してしまった男子クラスメイトの沢木修吉を傍に呼んでいた。

「沢木。あんたはあたしのオモチャになって。三人は細川いたぶってるから」

「は、はい！　奈百合様っ！」

「昨日あたしが頼んだこと覚えてる？」

「は、はい。もうすぐココに来るようちゃんと呼んでます」

その時、教室のドアがスッと開き、中学一年生になる沢木修吉の弟が入ってきた。

「お兄ちゃん！　助けに来たよ。僕が来たらお兄ちゃん助かるんだよね？」

クリンとした大きな目で三年Ｂ組の教室全体を見渡しながら恐る恐る兄の元へ歩み寄ってくる女の子のような顔立ちをした美男子、沢木海斗１３歳。

「髪型変えれば女の子じゃん！　ホント可愛いなお前の弟！」

「あ、ありがとうございます奈百合様……約束通り頭を撫でるか手を握るぐらいで済ませてやってくださいね。お願いします。兄想いの優しい弟なんです」

「え？　そんな約束したっけあたし？」

南条奈百合は美少女だが、恐ろしく嫌らしい笑みを浮かべながら沢木海斗の方を見詰める。

南条奈百合しか知らなかった訪問者に、愛衣も早希も登美子も思わず細川道枝イジメの手を止める。

「奈百合！　そんな可愛い弟が沢木にいただなんて……愛衣は一言も聞いてないわよ？」

陰部を舐めさせるのを止めてパンツを穿き始める愛衣。

「これはこれは……可愛い弟さん。ココにくるなんてなんて命知らずな」

東条登美子も愛衣に続いた。
更に西条早希も南条奈百合に問い掛ける。

「まさか一人占めする気じゃないでしょうね奈百合？」

「そ、そんなことしないわよ！　みんなでヤっちゃいましょ♡」

今の言葉に泣きそうな顔で振り返る沢木修吉。

「ちょ、ちょっと！　奈百合様今なんて？」

「うるさい！　あたしたちに逆らえばこの弟は去勢しちゃうからね？分かった？」

「ひっ！？　そんなこと絶対止めてあげて！　お願いします！」

「なら大人しく愛衣さんの言う通りにしなくちゃ。ね？」

「うう……は、はい。愛衣様、ほんと酷いことしないようよろしくお願いします！」

半泣きになりながらスケバンリーダーである菅野愛衣に土下座する沢木修吉だった。

――半時間後、教室中に響きわたる肌と肌のぶつかる音。

『パンパンパンパンパンパンパンパンパンッ！！』

「あんっ！　んんっ！　んんんんっ！　んふんっ！！」

なんと愛衣たちは、細川道枝先生を四つん這いにさせたまま、背後から沢木修吉にレイプさせていた。

生徒たちのほぼ半数が振り返って、異常な光景を凝視している。
残る半分は、俯いたまま教科書を見ていた。
勉強を続ける生徒たちは、裸を見ることに慣れたのか、飽きたのか、はたまた恥ずかしいのか……色んな想いの生徒たちであった。

恥ずかし過ぎて目を瞑って下を向いている沢木の弟、海斗だった

が、欲情を抑えられなくなってきた菅野愛衣がついに凶行に出る。

「沢木海斗。海斗くん……目を開けてお兄ちゃんのしてる行為をきちんと見るのよ？」

「うう、止めて！　もう止めさせてあげて！　好きでもない人とあんなことしちゃいけないよ絶対！」

正義感の強い、優しい海斗は泣きながら愛衣に訴える。

止めに入ろうとしたが、その度に奈百合と登美子と早希に両手両足を押さえられて身動きができなかった。

せめてもの反抗で、目を閉じていたのだが、それも愛衣に咎められる。

これが愛衣の凶行のキッカケとなってしまうのである。

『パンパンパンパンパンパンパンパンッ！！』

「いだいいいいいいいっ！？」

目を開けて兄のセックスを見ない沢木海斗に対し、強烈な往復ビンタを敢行する愛衣。

「目を開けてお兄ちゃんのセックスを見なさい、と言ってるの」

「痛いいいい！　い、嫌だっ！　お兄ちゃんのあんな姿恥ずかしくて

見たくないよっ！！　もう僕たちを自由にしてよっ！」

まだ歯向かう姿勢を崩さない海斗に、徹底的にビンタを打ち込む愛衣。

頬は真っ赤に染まり、ついに大声をあげて泣き出してしまった。

美少年の泣き顔に更に興奮してきた愛衣たちは、さらなる愚行に出る。

東条登美子は、机を二つ並べて簡易ベッドを作ると、西条早希と南条奈百合が海斗を担いで机の上に寝かせた。

「や、やめてえぇっ！　痛いよおおっ！　顔が、顔が痛いいいいっ！！　わーんわーん！！」

四人は手足をロープで机に縛り付け、身動きできなくさせる。

「今からボクの手術を開始しまーす♡」

頬を赤くしながらイヤらしく囁く奈百合。

「やだっ！　手術なんてやめてえええっ！！　怖いよおおっ！！」

『カチャカチャ』

奈百合がズボンのベルトの金具を外してゆく。
チャックを全開に開けてズボンの上部へ手を掛けた。

『ズルリッ！』

「うわあっ！？　やめてっ！！」

そのままズボンを足首までズリ下げると、今度はパンツに手を掛ける奈百合。

「オチンチンの手術しちゃおーねー？　うふふ♡　それ！」

『ズルリッ！　ストーン！』

ついにパンツまでも足首までズリ下げる南条奈百合だった。
小さな皮カムリのペニスが、女子高生たち四人の好奇の目に晒された。

「やああああっ！！　やめてえええっ！！　恥ずかしいいいっ！！」

まずは何もせずじーっくり観察する四人。

「男前の少年のオチンチンはこーなってるんだ」

「少し先端が剥けてて尿道ちょっと見えてるね？」

「金玉袋ちっちゃーい！　可愛いっ♡」

「誰からいく？」

各々に好き勝手に喋る女子高生たちの前でひたすら涙を流す海斗。

その時、担任の細川道枝の膣内へ沢木修吉が射精しそうになる。

「うっ、い、イくっ！　イくっ！」

『ズドオッ！！』

「ぎゃあっ！？」

『ドピュッ！　ピュピュピュピュピュピュウッ！！』

「あんんっ！！　やだあっ！！」

遂に中出ししてしまったが、少し状況は奇妙であった。

菅野愛衣の右足の爪先が、沢木修吉の肛門内部の前立腺へ、ダイレクトに蹴りこまれ突き刺さっていたのである。

射精するトドメとなったのは愛衣の直腸にまでめり込んだ前立腺への蹴り込み刺激であった。

激痛にペニスを抜いてから転がりまわる沢木修吉。

ペニスからピッピッと、残った精液を吐き出しながら床を転がる姿は、哀れとしか言いようがなかった。

「ごめんね沢木。そのまま気持ちよくイっちゃったら愛衣たちはなーんも面白くないから。痛かった？　うふふ♡」

「ひぎいいいっ！！　いだいいいっ！！　股間が……肛門の奥が痛いいいいっ！！　ひぐうううっ！！」

冷たい笑みを浮かべながら爪先に付着した沢木の腸液と便を沢木自身の腹部に擦り付ける愛衣。

他の三人も哀れな姿に爆笑する。

「さてと……先生は沢木のチンポひたすらフェラしててね？」

「はぁ、はぁ、はい。菅野様」

肛門を必死で押さえながら苦しんでいる沢木のペニスを貪るように舐め始める細川道枝に背を向けて、遂に沢木海斗の手術が始まる。

「奈百合は後ろでいい？」

「うん！」

「登美子は玉ね？」

「はーい」

「早希は……綿棒やって」

「わーい！それ楽しそう♡」

四人それぞれの担当が決まり、遂に女子高生による男子中学生の手術が始まった。

「大人しくしてないとボクの金玉潰しちゃうからね？　分かった？」

「やめてええっ！！　わーんわーん！！」

菅野愛衣はそっと海斗のペニスを左手で摘むと、右手の親指と人差し指でゆっくり皮カムリの亀頭部を掴む。

「沢木海斗の手術を開始します！」

「はいっ」

三人が愛衣に対し同時に返事して凶行が開始された。

『ぎゅっ！　ムリュリュリュリュ……』

「痛いっ！？」

ペニスの皮はゆっくりと腹部方向へ引きずり下されてゆく。
かなりの抵抗で引っかかるが、愛衣は力を緩めない。

「完全に雁首まで引き剥いてやるんだから。覚悟しなさいホーケイ」

「やっ！？　やだっ！！　痛い痛いいいいっ！！　やめてお姉さんたちっ！！　んぎゃあああっ！！」

『メリメリ……むちゅむちゅ！……ズルルルル』

強引に捲(めく)られてゆく小さなオチンチンは、スケバン四天王にとってかなりの興奮をもたらす。
全員がアソコが少し湿ってくるのを感じた。

『ズルリッ！！　ベロンッ！！』

「んぎゃあああああっ！！」

遂に小さなペニスは愛衣の白くしなやかな指によって雁首まで引き摺り剥かれてしまう。
絶叫が教室中に響きわたるが、女子高生たちは手を止めない。
西条早希は綿棒を手に取り、愛衣が力を込めて腹部方向へ引っ張っているとパックリ開いたままになっている尿道口へゆっくり挿し込んでいった。
ロープに食い込むほど体をくねらせて激痛に泣き叫ぶが、早希は構わず根元まで突っ込んでしまう。
更に出し入れ運動までも開始した。

「ぎゃーーーーっ！！」

素直に絶叫するしかないほどの痛みがペニスの内部を襲う。
もちろん愛衣によって引き剥かれた雁首部分までの上半分は焼けるようにヒリヒリピリピリと鈍痛が続いているが、更に中身の管までも激痛が加えられるものだから堪らない。

「剥けた亀頭部から血が滲み出てるわね。消毒しなくちゃ」

そう言いながら愛衣はオキシドールをペニス全体に振りかけた。

『バシャッ！　ジュウウウウウウッ！！』

「ぐわあああああああっ！！」

亀頭部のみが沸いた気泡に飲み込まれる。
あまりの激痛に海斗は意識を失ってしまう。
この激痛は海斗の今までの人生で、最高レベルのものとなった。

「あらあら……気絶しちゃって……私の金玉潰しが始まるとゆうのに」

『ギュッ！！　ギュムムムムッ！！』

東条登美子の金玉責めが開始された。
本当に潰すわけではなく、潰れる寸前で止めるつもりの拷問であった。

「ぎゃあああああっ！？」

白目が黒目に変わり、瞬時に目覚めると、今度は睾丸の潰れそうな激痛に襲われている哀れな中学生。
三人の責めが終わり、それぞれ下半身の観察に入る。
ひたすら中学一年生の啜り泣く声が教室中に響いた。
耳を塞いで現実逃避している沢木海斗の兄、修吉だったが、遂に気持ちよく快感の中で射精することができたのであった。
担任の細川道枝先生の口内に……。

「さぁこれで最後だよー」

南条奈百合が頬を赤くしてボールペンを器用にクルクル回転させる。

海斗の下半身の真横に立つと、ボールペンをピタリと止めた。

「力を抜いててね！　ほら、ココかなぁ？　入るよぉ？　それっ♡」

『ツプッ！』

「やあっ！？　そんなとこ絶対やめてええっ！！」

ペニスと睾丸の痛みに耐えながらも、更なる未知の責めに対して許しを乞う海斗。

自分でも突っ込んだことのない大事な部分に、女子の手によって刺し込まれた恥辱感と感触は、１３歳の少年にとってはなんとも複雑なものとなった。

「はら、ケツマンコ初めてでしょ？　先端が入ったわよぉ？」

「あはははは！　ケツマンコだって……卑猥な表現するわね奈百合♪　ピンク色の綺麗なアナルだねコイツ♡」

妙にウケる東条登美子。
肛門への異物の侵入を防ぐために、必死で内股を、キュッと閉めようとする海斗だが、登美子と早希が左右に思いっきり開く。
「ほら、力抜かないとケツマンコ余計に痛いよ？　無理矢理捩じ込むようになっちゃってもいいの？」
「ううう……ぐすん。もう許してお願い……痛いよぉ」
「ダメなんだー。ほうら。お飲み」
『ズブブ！……ぐりんぐりん！　ヌポヌポッ！』
「痛いっ！！　うわーん！　うわーん！」
南条奈百合はボールペンを半分まで刺し込んで前立腺あたりを掻き回し、更にまた出し入れを何度も繰り返した。
無理矢理皮を剥かれたペニスの先端から透明な粘液が机の上に垂れ落ちる。
「おい沢木！　ちょっと来い」
「は、はい」

弟の惨事を救うことも諦めて呆然としながら奈百合のアナル調教を見守っていた兄の修吉を強い口調で呼ぶ愛衣。

「チンポから何が出てる？」

「あ、こ、これは……カウパー液……ですか？」

「正解。少しは精子の混じっている精液みたいなもんだよね。舐めて綺麗にしてやりなさい」

「ええっ！？　弟のチンポを舐めろだなんて！　それは出来ません愛衣様っ！　どうかご堪忍ください！」

愛衣は奈百合の手を掴んで肛門へ刺しこまれているボールペンを一気に引き抜くと、人差し指と中指、薬指を束ねて一気にねじ込んだ。

『グリッ！！　ズボボボボボォッ！！　メリメリッ！！』

「はぎゃあああああああっ！！　いだあああああーーいっ！！！！」

「このまま海斗のアナルに、愛衣のフィスト捩じ込んで肛門破壊しちゃってもいいのね？」

「ぎゃあああっ！！　熱いっ！！　痛いいいいっ！！」

簡易ベッドに拘束されたまま首を激しく振りながら号泣する沢木海斗。
それほど菅野愛衣の肛門責めは、凄まじい破壊力であった。
鍛えられていて少し大きな手と指を持つ愛衣の三本の指は、海斗の肛門を張り裂けそうになるまで拡張させている。

「分かりましたごめんなさいっ！！」

「さっさと舐めろ」

『カプッ！……ペチャペチャ！　ペロペロ』

「わーん！！　やめてよ兄ちゃん！　気持ち悪いよおおっ！！　わーんわーん！！」

「我慢するんだ海斗……ペチャペチャ……」

兄弟によるフェラチオを本気で嫌がり更に泣きじゃくる海斗に、残酷スケバン四天王は爆笑しながら近親相姦とも言えるその行為を眺めていた。

『ボコオッ！！』

「ふぐうっ！？」

“アナル責め隊長”の名を、菅野愛衣から以前に授かった南条奈

百合の拳が、一気に手首まで沢木修吉の肛門へぶち込まれた。
そのまま激しく拳をピストン運動させせると、腸液と血液が奈百合の膝まで垂れ落ちてきた。

『ガボオッ！！　ガボガボガボッ！！……トロトロ……ツツツ』

「きったなーい♡　何臭い腸液垂れ流してるのよ？　あたしの肘までぶち込んで欲しいのかな？」

「はううっ！！　死んじゃう！　それは死んじゃいますぅ！　許してください奈百合様ああっ！！　ひいいっ！　痛い痛い痛いいいいっ！！」

今度は兄の修吉が号泣を始めた。
それでも愛衣が怖いのか弟のペニスをひたすら舐め続けるのであった。
そのまま授業も一日の学科も終了し、夕方を迎えた黒霧島高等学校三年Ｂ組の生徒たちは、蜘蛛の子散らしたように帰路につく。
細川道枝先生に服を着て帰宅することを許した愛衣は、ようやく二人の兄弟の口淫行為をやめさせてあげた。
まだ沢木の弟である海斗の拘束は解かれていない。
南条奈百合はさっきまで兄の肛門を掻き回していた右手を今度は海斗に指し込んだ。
愛衣の指は三本でも無茶苦茶痛がっていたが、奈百合の指は小さく細長いため、三本でも大して痛がる様子はない。

『グボッ！　グリグリグリ！！』

「ここね？　海斗くんの前立腺は♡」

『ヌポッ！！グチュグチュグチュグチュウッ！！』

「あんっ！　あんっ！　あはあっ！　あはあんっ！　あんあんあんあんっ！！」

女の子のような顔をした美男子である１３歳の海斗は、頬を真っ赤にしながら南条奈百合の前立腺責めに思いっきりよがり声を出し始める。

数時間による女子高生たちの調教で、アナル開発されたみたいであった。

愛衣は右手で血の滲む亀頭部から下の部分を軽く摘み、優しくピストン運動を開始。

『ギュッ！　シコシコシコシコッ！』

十秒と持たないうちに、１３歳の美男子は大量の精液を女子高生たちの手やスカートに撒き散らした。

「あああんっ！！　気持ちいいっ！！　ひいいいっ！！」

『ドピッ！！　ドピュピュピュピュピュピュピュウッ！！』

愛衣は手に着いた精液を、海斗の口元へもってゆく。

「舐め取りなさい」

「うう。は、はい……ペロペロ」

ようやくかなりエッチで残酷なお姉さんたちの過度なお仕置きが終わりを告げる。

やり過ぎた四天王（後書き）

「おかえりなさい莉央様。今日はカレーライス作りますから」

アイドル活動をしていた莉央は帰宅が夕方遅くになり、円満愛衣よりも遅くなっていた。

得意料理を作る意欲を燃やす愛衣だった。

「愛衣……ちょっと部屋に上がってきてくれる？」

「え？　あ、はい」

深刻な表情で背中を向けて先に二階へ上がる莉央に続いて愛衣も階段を上ってゆく。

「土下座して座って」

「え？　わ、分かりました」

意味が分からないまま土下座をする円満愛衣。

目の前に見慣れた小学生の白い脚が瞳に映る。

『パァンッ！！』

「痛っ！？」

強烈な平手打ちが愛衣の左頬を襲う。

「痛い……莉央様！？　な、なにを？」

「歯を食いしばれ愛衣！」

「はっ、はいっ！」

『パンパンパンパンパンパンパンッ！！』

「んぐううううっ！！」

莉央に良く似たロングの黒髪が打たれるたびに前後左右に振り乱れる。
大きな目をパチクリさせて未だ何で打たれているのかさえ意味が分からない愛衣。

「分かってるわよね？」

「は、はい」

「じゃあどうしてあたしに叩かれてるか答えなさい」

「いや、それは……何か嫌な事でもあったのですか？　あはは……愛衣にはいくらでも八つ当たりして構いませんから」

莉央は黙ったまま愛衣の髪の毛を掴み無理矢理立たせると、制服の超ミニスカートを一気にずり下げる。

「あっ!?　り、莉央様、こんな時間から？　まだ夕飯も食べていませんけど？」

返事はせずに更にパンツも足首まで下ろすと、愛衣を見上げて強い口調で言う。

「ベッドの上に上半身をうつ伏せで乗せて。下半身だけ四つん這いになるような体勢を作るの」

「は、はい……アナルを責めて頂けるのですか？　愛衣は興奮してきました♡」

愛衣の思惑は見事に外れ、莉央の“本気”のお尻叩きが開始される。

初めの１０発ほどでは愛衣は感じて性器を濡らしてしまうほどだったが、５０発、６０発辺りから臀部の皮が裂け、出血し始めた頃には激痛に変わっていた。

臀部の左右二つとも満遍なく真っ赤に染まり上がり、所々からは内出血や流血まで起こっていた。

『パァン！！　パァン！！』

愛衣は性器を濡らしているどころでは無くなり、たまらず本気で号泣し始める。

「痛いいっ！！　やめて！！　ひいっ！！……莉央様お願いです！お尻の肉がさけちゃいますぅっ！！……えーんえーん！！　えーんえーん！！」

「お尻の肉が腐っちゃうほどズタズタにしてあげようか？」

『パァンッ！！　パンパンパンパンパンッ！！』

「はぎいいいいっ！！　死ぬううううっ！！　痛いよおおっ！！わーんわーん！！」

莉央はゆっくりベッドに上がると、愛衣の顎の下に掌を当てて引き上げる。

『グイッ！』

「んああっ……痛いよぉ！　痛いよおおっ！！　わーんわーん！！」

いつもの凶暴な円満愛衣とは思えないほど小さな児童のように顔をクシャクシャにしながら泣き続ける。

「関係ない小さな子まであそこまで酷くやっちゃダメだよね？　沢木や先生だけなら良かったんだけど……弟は何も悪くないじゃない？　前にも性的リンチとかはやりすぎないで、ってあたし言わなかった？」

「ぐすん。はい。そう言えば言ってたように思います……ごめんなさい」

右手の掌を開いて思いっきり高く振り上げる莉央の動作に、思わず強く両目を瞑り、歯を食いしばる愛衣。

……その右手は顔面を打つことはなく、優しく愛衣の頭部を撫でる。

「全く……愛衣は本当ならあたしたちに処刑されてる立場なのよ？もし何か特殊任務省内部で問題になって再度あなたが拷問処刑になっちゃったらあたし……」

不思議そうに莉央の固まった表情を覗きこむ愛衣。

「あたし……絶対嫌だから……愛衣のこと愛してるんだから」

一粒の大粒の涙が流れ落ちる。
その後何かの糸が切れたかのように号泣し始める莉央に驚き、愛衣の涙が止まってしまう。

正に本来の姿である小学生児童のように泣き喚く莉央を見ながら愛衣も再び涙が溢れ出してきた。

莉央を強く抱きしめながら、今人生で自分の事を一番想ってくれているのは菅野莉央だと痛感するのであった。

「もう今後一切罪の無い人のリンチは絶対しないと約束します。本当にごめんなさい莉央様」

愛衣に抱きついたまま泣き続ける莉央の頭を優しく撫でながら夜中を迎えて、そのままシャワーも浴びずにご飯も食べずに眠りにつく結局仲良しの二人であった。

究極の選択（前書き）

一見平和な家族での食事。
それは一家最期の食事となってしまうのであった。

究極の選択

「亮二、佑月、ママのカレーは美味しい？」

「うん！　今日のもすっごく美味しいよママ」

「佑月もママのカレー大好き♪」

三人用の木製テーブルで、親子三人で食事を楽しんでいる。

１１月。秋の涼しい風が心地よい中、一つの家族の温かな時間が流れていた。

「ご馳走様！　美味しかった！」

「ご馳走様っ！」

礼儀正しく母親である広末良子にお礼を言う兄妹の二人。

未亡人である広末良子３５歳は、五年前に父親を交通事故で亡くし、女手一つで実の子である１２歳の兄、亮二と、妹である１０歳の佑月（ゆづき）を育ててきた。

「こんな無人島にきちんと料理を作る台所や道具があるなんて」

広末良子は３６０度海に囲まれたその場所で、一番自信のあるカレーを作って子供たちに食べさせてあげた所であった。

「満足していただけたかしら？」

黒髪ロングで前髪パッツンの美少女女子高生、円満愛衣が木立の合間から現れた。

「……はい。わがままを聞いて下さりありがとうございました」

拷問処刑人のリーダーである１２歳の菅野莉央と、同じ六年三組の富田美香、結城明日香もゆっくりと現れて広末一家に歩みよる。

「お兄ちゃんの亮二くんは私たちと同い年なんだね」

少しズレたメガネの位置を直しながら結城明日香が呟く。

「妹さんの佑月ちゃんが四年生で１０歳かぁ。まだまだ若いのにお気の毒だよね莉央ちゃん？」

富田美香は二人の兄妹を見つめながらそう莉央に話しかける。

「いくら児童でも幼児でも罪もない人を殺めちゃったらお終いだよ。あたしたちは手加減しない」

突風が拷問処刑人たちのセーラー服のリボンを揺らす。

その風はスカートも靡かせながら全員の純白のパンツが丸見えになる。

「エッチな風ね。みんな白いパンツ穿いてたし。あたしピンクにしたら良かった。大体愛衣の高校はなんでこの時代にセーラー服なのよ全く……」

莉央はあまり意味のないことをブツブツ呟きながら母親の広末良子の前に立つ。

三人家族の一家団欒の食事が終わるのを待っていてくれたかのように強風が吹きつける残酷処刑島であった。

「この十字型の杭に今から全裸になってもらって拘束させてもらうから」

「はい。覚悟はできています」

この島で処刑されることを莉央たちに説明されて、数時間も泣き続けてからようやく覚悟を決めて最期の食事を摂らせてもらった訳だった。
子供たちはまだ処刑されることまでは理解していない。
莉央たち小学生トリオの三人が、母親の良子の服やスカートを脱がしてゆく。
「やめてっ！　ママを裸にしないでよっ！」
「わーん！わーん！　ママ風邪ひいちゃううっ！！　やめてあげてええっ！！」
兄の亮二に続いて妹の佑月も莉央たちに叫びながら訴えるが、円満愛衣に片手ずつ繋がれているためその場から動くことができない兄妹であった。
黒いパンツ一枚のみとなった広末良子は、大きく全身を震わせて泣き始めた。
「ぐすん……ぐすん。やっぱり死ぬの怖い……許してください」
「えー？　今更それ言う？」
富田美香は呆れながら黒いパンツを両手で掴み、ゆっくりと脱がせてゆく。

「覚悟できてるはずじゃなかったのかな？　とりあえず邪魔だからパンツも脱いじゃおーね？　えいっ！」

『ズルズル……』

「やめてっ！　パンツも脱がさないでっ！　恥ずかしい……」

「あのねオバさん……心配しなくてもあたしたちマンコなんて見慣れてるから。なーんにも恥ずかしくなんかないんだよ？　ほら、みんなに見せろ！　よっと！」

『ズルリッ！　ストーンッ！』

「ひゃっ！？　いやあっ！！」

足首まで完全に脱がせて、更に踵と指先からも剥がし取った。
文字通りスッポンポンにされてしまい、慌てて両手で股間を隠す良子。

兄妹は更に泣き喚きながら母親を脱がせる美香に怒鳴り散らす。

「やめろーーっ！！　ママに何するんだっ！！」

「ママ可哀想っ！！　やめてええっ！！」

円満愛衣は容赦なく兄妹をビンタし、服を脱がせてゆく。

強く抵抗しようものなら、顔が吹っ飛んでゆくほどの勢いで顔面を殴り、徐々に抵抗する気も失わさせた。

愛衣の手で、完全に母親同様素っ裸にされてしまう兄の亮二。佑月だけはスカートとパンツを残してくれていた。

啜り泣きながら亮二は股間、佑月は殆ど無い胸を両手で押さえて恥ずかしそうに涙を流していた。

「これで仲良く広末一家スッポンポンだね？　ん？　どうして佑月ちゃんだけ下半身脱がせてないの？」

「愛衣さんの趣味でパンツ越しにズラすのが好みなんでしょきっと♪　なんか生で差し挿し込むよりエロいよね？　あははは♡」

美香に続いて明日香も頬を赤くして照れ臭く笑った。

莉央は、荷物を吊り下げるような鉄製のフックを取り出してから舌なめずりして冷ややかな笑顔を見せる。

「よおーし！　今日はコレでいこっか！　マンコフック♪」

陰部を隠している良子の両手を無理矢理引き剥がして、十字型の杭に金具で両手両足を拘束してゆく明日香と美香。

「本当にごめんなさい！　お願いだから私たちを許してくださいお

嬢さんたち！」

「残念だけど本日があなたたちの命日になります。先ずはこのフックを大事な所に挿し込ませてもらうから」

伸ばしても全長10センチほどしかない釣り針のような形をした小さなフックを、良子の股間へ近づける莉央。

直径も2センチほどの小さなフックは、先端がかなり鋭利になっており、皮膚とかは簡単に貫通させそうである。

「ひっ!?　どこにそれを挿し込むのですか!?　やめてっ!!」

「オマンコだよ。これはマンコフックと言ってね。性器や肛門から挿し込んで反対側から抜くの。最終的に無理矢理引き抜くと会陰部が千切れてマンコと肛門を繋げちゃうってわけね」

「ひっ!?　そ、そんな恐ろしいことを……」

明日香と美香が足首の拘束を一度解き、両膝を外に向けるように縛り直した。

自然と股間部分が少し開いてフックを挿し込みやすくなる。

「や、やめて……」

「広末良子。今からあなたの拷問処刑を開始します。早速だけどコレ……どちらからとゆう決まりは無いんだけど……お尻からいこうか？　マンコから先端が飛び出してくるほうが何か見た目がエロい

もんね♡」

「や、やめ……」

『つぷっ！……ズボッ！！』

「ひぎいっ！？」

「はーい。では直腸から膣道へ車線変更しまーす♪」

「や、やめてえっ！！」

肛門に先端を突き入れた後は一気に直腸を抉り、肛門と膣の境界線の薄い膜を突き破った先端が膣口から飛び出してくる。

「ほらあっ♡」

『グボオッ！！　ブチッ！　バシュウッ！！』

「ぎゃあああああああっ！！　痛いいいいいいいっ！！」

莉央はフックの根元に括り付けている細いロープを5メートルほど前面の木に括り付けた。

良子は拘束されたままの体勢で腰を前に突き出してジッとしている。

少しでも腰を引けば肛門と膣の境界膜が引き千切られてしまうか

らであった。

「痛いっ！　うんぎいいい……そ、そんなにロープを張らないで……痛い……お願いだからもう少し緩めて……痛っ！！」

「ほら、もっと腰を突き出さないとアソコが菌まみれの汚い肛門と繋がっちゃうわよ？　穴が空いて少しはもう繋がっちゃってるけどね」

富田美香が二つの巨乳の胸を両手で激しく揉みしだきながら、薄ら笑いを浮かべて囁きかける。

ドクドクと太腿を伝い落ちる鮮血を見ながら、莉央はクリトリスをペンチで挟み込み、ゆっくり握り潰すと、そのまま引きちぎった。

『ギュッ！　グムムムムム！　ブチィッ！！』

声が枯れるほどの絶叫を上げるが、構うことなく腹部を数発殴り続けた。

つい先ほど食べたカレーライスを全て戻してしまう良子。

クリトリスが破壊されて引き千切られた激痛が強烈すぎて、吐くことへの苦しみは殆どなかった。

未だにゲロを撒き散らしながらも絶叫を上げ続けているのは、全て陰核を失ったことによる要因である。

円満愛衣による子供に対する折檻が目の前で開始されたが、それを見て悲しむ余裕などは無かった。

先ずは妹である佑月の身体を簡易ベットに仰向けに寝かせて手足を拘束してゆく。

スカートを胸まで捲り上げパンツ丸見え状態にすると、Ｍ字開脚態勢で両脚の膝を立たせせて股間を開かせて固定した。

「やだあっ！　やめておねえちゃん！　パンツ見えてるしこんな格好恥ずかしいっ！！」

「それくらいで恥ずかしがられたら困っちゃうなぁ。、おねーさんは」

「やめてっ！！」

隣にいる兄の亮二は愛衣の鉄拳が怖くてすくみ上がって震えている。

「佑月ちゃんの女の子抉り出して見せてあげるからね♡」

「え？　あたしの女の子？　どう言う意味なの？」

「それはねぇ。女の子にしかないモノを身体の中から取り出すの。それを本人に見てもらうの。そうねぇ……この際だからママと亮二にも見てもらっちゃおうよ♪」

広末佑月は未だ意味が分からず、小学四年の頭脳で必死で考える後、答えには及ばなかった。
理解できようが出来まいが愛衣たち拷問処刑人には関係のないことである。
プラスチックや、細い鉄の棒くらいなら簡単に切断できる三日月型の刃をした超強力大型ハサミを冷ややかな笑みを浮かべながらガシャガシャさせる愛衣。
『ガシャガシャ！……ガッ！』
刃を大きく開いた状態で縦方向に持ち、下側の刃を肛門を　辺りにそっと近寄せた。
『つぷっ！』
「やあっ！？」
パンツ越しに下側の刃が肛門へ１センチほど食い込む。
まだパンツを貫通はしていない。
「いやだあっ！　そこお尻だよっ！？　おねえさんやめてよおおっ！！」

「今日ウンチした？」

「うん！　だから汚いからそんなとこ変なもの入れないで……汚いよ……」

「そのウンチが佑月の人生最期のウンチになっちゃったねぇ？」

大きく目を見開いて、自分の膝とスカート越しに顔だけしか見えない愛衣を必死で見ながら更に怯え始める佑月。
ゴソゴソ何かをしているようでも愛衣の手元が見えないため不安は増すのみであった。
しかも肛門に軽く触られたような突っ込まれたような違和感を感じたから尚更である。

『ズブブ！……バリッ！……ズボオッ！！……』

「いたああああああっ！！！！」

一気に方刃の根元まで肛門へ突き入れる愛衣。三日月のように円を描いている刃は、パンツを簡単に貫通し直腸の奥の膣側の膜を先端が突き破る。
そのまま悲鳴をあげる佑月に構うことなく思い切りハサミを両手で握りしめて上側の刃を膣口に合わせて突っ込む。

『バチュウウウッ！！　バリバリッ！！』

小さな処女膜を簡単に貫いた刃は、子宮頸部まで貫通して子宮内で止まる。
その時奥に突っ込んだため、下側の刃は直腸奥のS状結腸を突き破ってしまう。
声にならない絶叫を上げながら必死で股を閉じようとするが、拘束具が太腿や足首に食い込むのみで、全然股を閉じられない。
ハサミの二枚の刃によって、二カ所に穴を空けられた白いパンツがみるみる内に赤く染まっていった。お尻の部分は血を吸収出来ずに簡易ベッドに染み込んで地面にまでポタポタと落ちている。
「子宮口まで届いちゃったみたいね？どう？あなたが大人になったらここから赤ちゃん生む予定だったのよ……」
「ぎゃあああああっ！！　んぎぎぎぎぎぃっ！！」
「何を言っても聞こえないか……パンツ脱がさないでこのままパンツごとズラしてあげるね♡」
『ガシャンッ！！……ザクザクッ！！』
愛衣が思い切りハサミを閉じると、膣道や子宮が裂けるような音が何回も響いた。
その度に島中に響きわたるほどの絶叫をあげる佑月。

「肉が裂けるいい音出してるね？　それえっ！！」

佑月の絶叫と様々な破壊音も全て無視して、最後までハサミを強引に閉じ切る愛衣。

『ガチュンッ！！！！』

「ぴぎいいいいいいっ！！！！　はびゃあああああああっ！！！！」

完全に子宮頸部から直腸部分までが切開され、腹腔内で繋がってしまった。
夥しい量の血液が縦に裂かれた股間からドクドクと流れ落ちてくる。

「あらあら……そんなに死にたいの？　でもね。まだまだ死なせてあげないわ」

お約束の超強力止血薬とショック死防止の気付薬を二本全身の数箇所に打ち込む愛衣。

「一応薬は打ったんだけど……痛みのショックでも死なないよう少し麻酔も打っといてあげるわ。感謝しなさいね？」

「あうう……ひぃぃぃっ！　あたし死にたくない……あたしの下半身どんなことになってるの？」

「どんなことって……まだ教えてあげなーぃ。でもさっきまでの激痛と血の流れた感覚でかなり悲惨なことになってるとは思うでしょう？」

「お、お願いです！　許して下さいおねえさん……えーんえーん！」

「マンコと肛門繋がってまでそんなこと言われても……女の子の大切なとこバラしてるんだからもう死んだ方がマシだと思うけど？」

呆れ気味に首を傾げて囁く愛衣だったが、麻酔の効いている内にもう一度ハサミの片刃を膣から挿し込んだ。

下側の刃を挿し込んだため、上側の刃は尿道やクリトリスの方へ刃を向けて添えられて上方で待機している。

「今度は本当ならショック死レベルだよぉ？　うふふ。先ずは尿道口！　それえっ♡」

『ギュッ！……ザクザクッ！！』

「やめて……オシッコできなくなっちゃうよぉ！」

「麻酔が強すぎて余裕じゃん？　これはホント大サービスだからね？まぁ死んじゃったら元も子もないから仕方ないか……次は皮カムリの小さな小さなお豆さんを真っ二つにしてあげるわ♡　ここね。

よっと！」

『ギュギュッ！　ザクッ！！』

確実に児童の尿道口と、小さな陰核を真っ二つに切り裂いた狂気のハサミは、恥骨に当たって止まった。

「うふふ。ここからがこのハサミの凄いところなのよね！」

『ギュッ！！ググ！！……バキッ！！バキバキ！！メキメキバキバキ！！』

陰核と尿道口、性器上部を切開したハサミは、更に内側にある恥骨を断ち切ってゆく。

完全に縦方向に恥骨が切断され、ハサミはようやく引き抜かれる。

「なんか下半身が熱いんですけど？」

「麻酔が効いてるのになんとなく熱くは感じるのね。あはは♡」

愛衣は恥骨の左右も切断し、腹部側の恥骨を完全に取り除いた。

「よし！　これで子宮も卵巣も取り出しやすくなったわよ」

『ザクザク……ズブブ……ザシュザシュ！』

大きく切開された性器と腹部から器用に子宮全体を抉り出すことに成功した。

卵巣も管を引き抜き、強引に引き摺り出す愛衣。

子宮を抜かれて、パックリ開いて直腸や大腸が飛び出してきている性器の写真を撮って本人の広末佑月にそっと見せてあげる。

「こんなになっちゃったよ？　佑月ちゃんのアソコ」

「ひっ！　ヒャアアアアッ！？オシッコとウンチする所がグチャグチャじゃんっ！？イヤアアアアっ！！！！」

ようやく事の重大さに気付いた佑月は、顔をくしゃくしゃにして号泣し始める。

徐々に痛みの方も現れてきて、佑月にとっての地獄の入り口が見えてきていた。

「熱いよぉ！　い、痛い！？　股が痛いいいいっ！！」

「やっと麻酔が切れてきたのね……もうショック死しちゃってもOKよ？いつでも死んでね♡」

愛衣はM字開脚の拘束を解き、膝上から両脚をチェーンソーで切

断してゆく。
短くなった脚をパタパタさせながら股間の大きく切開されたワレメ全体からハラワタや大便小便、腸液に血液をゴボゴボ噴き出させながら絶叫を続ける佑月。

亮二は恐怖で小便を漏らしながら泣き続けていたが、そんな亮二に構う事なく残酷に佑月の拷問処刑を継続してゆく円満愛衣。

「亮二くんもオチンチンとキンタマはグチャグチャにしてあげるから覚悟派しておきなさいね？分かった？」

「ひっ！？　ひいいっ！！　わーんわーん！！」

一瞬恐怖するがまた再び号泣し始める亮二。

「妹ちゃんにはそろそろ終焉の時が近付いてきたわ。心とお似合いの顔にしてから送らなくっちゃね！ほうら、お顔に１００度の湯をあげる♡」

泣き喚く妹の佑月の顔面に沸騰した湯を振りかけると、激しい音を立てながら皮膚が変形していった。

「ギャアアアアアッ！！」

真っ赤に染まったあとは顔中水脹れになり、髪の毛までボサボサと広範囲に抜け落ちてゆく。
子役の女優のような可愛い顔立ちはもはや原型を留めないものと化した。
「微かな膨らみのピンク色の乳首だね？　死にゆくあなたには必要ないよ」
『ギュッ！　ブチュッ！！　ブチィッ！！』
小さな右の乳首をペンチで掴み、一気に握りつぶしてから引きちぎった。
摘む、潰す、千切る、を一定のテンポで三段回で見事に行った愛衣。
「んがあっ！！　んぎいいっ！！　がはあっ！！」
小学生の女子児童とは思えないような声の掠れた絶叫をあげる佑月だったが、そのまま左の乳首もペンチで潰してから引きちぎられた。
小型の拳銃トカレフを鞄から取り出すと、佑月のお臍に銃口を突っ込み、そのまま撃ちこんだ。

『パァンッ！！』

「ゴボオッ！！」

ベッドの反対側に突き抜ける銃弾。
下半身と上半身が真っ赤に染まってゆく。

今度は眉間にトカレフを構える。

「佑月ちゃん……アソコもお腹もお顔ももう無茶苦茶だよね？　生きていたくないよね？」

「あへ、あへ、あううう。あうあああ……」

歪に変形した顔はもう、しかめることもできなく固まっている。
水脹れになった瞼の奥から大量の涙が溢れ出てくるのは愛衣にも確認できた。

「極悪犯罪者にも涙はあるのね……死になさい」

『パァンッ！！』

眉間に見事な穴が空き、広末佑月１０歳はついに逝くことを許された。
娘が死んだことにも気づかずに未だに絶叫をあげる母親の良子に、

莉央は強力な痛み止めの麻酔注射を打った。

「見て。あの首から上がないハラワタぶち撒けちゃってる肉塊があなたの娘の佑月ちゃんだよ」

「!？………え？………ひっ!？　ひいいっ!!」

ようやく陰核を失った激痛から解放されたと思った瞬間に絶望感を味わうハメになる良子。

「ひ、酷いっ!　あああーんっ!!　わああああああーんっ!!　佑月っ!!佑月いいいいいっ!!」

その時、まだほぼ無傷で生き残っている長男の亮二は、これから愛衣が拷問を開始するところであった。

四つん這いにさせて富田美香と結城明日香が両側から固定して脚をひらかせている。

円満愛衣は、子供用の直径2センチ、長さ10センチほどの小型のペニス型をした張り形をペニスバンドにセットしてゆっくり跪き、小学六年生児童の肛門へそっとあてがった。

「やあっ!？　そんなとこ触るのやめてっ!!」

美香が首を傾げてツインテールを靡かせながらイヤらしく微笑みかけながら囁きかけた。

「その触れてるモノはねぇ……触るくらいじゃ済まないわよぉ？　あははは♡」

『グリッ！……ズプッ！！』

「ひゃあっ！？」

「一気にいくわよクソガキ。えいっ！」

『ズボオオオッ！！　メリメリッ！！』

先端部分をゆっくり挿入した後は、一気に根元まで腰を突き上げて埋め込んだ。

「見事に奥まで入ったわね？　すっごい顔して痛がってるわ。ほら、動かないの！」

結城明日香は、ズレたメガネを元の位置に戻しながらも再び広末亮二の身体を固定する。

『パンパンパンパンパンパンパンパンパンッ！！』

「はぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃあああっ！！！！」

女子高生、円満愛衣の激しい腰使いは１２歳の男子児童の小さな肛門を全開に押し拡げ、直腸の奥の奥まで突き上げて激痛を与えてゆく。

顔を左右に振りながら泣き喚いて抵抗するが、股を閉じようとしても美香と明日香に強引に開かれて儘ならない。

「ほらほらほらほらあっ！　アナルが盛り上がったり窄んだり忙しいわねぇ？　エッチィ～♡　あははははは♪」

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！……パンパンパンパンパンパンパンパンッ！！』

ゆっくり出し挿れ、激しく出し挿れ……愛衣の太腿を亮二の肛門からの鮮血で真っ赤に染まる。

それでも一向にやめてあげない残酷な女子高生であった。

「亮二っ！　亮二いいいっ！！　やめてっ！！　やめてあげてぇええっ！！」

泣きながらバックで女子高生に犯される息子の助けを懇願する良子だったが、愛衣のピストン運動は延々と続けられた。

「広末良子！　一つチャンスをあげようか？」

「え！？　亮二を助けてくれるのですかっ！？」

「残念。あの子は確実に殺されて本日ジ・エンド」

そんなぁっ！　お願いです本当許してください！　私はなんでもしますからっ！！」

「分かった」

そう言いながら莉央は母親である良子の拘束を解いてゆく。痛々しいマンコフック突き刺した肛門側から引き抜く。

『ズチュッ！』

「ひゃはあっ！！」

「マンコとアナルは繋がらずに済んだからね？　安心しなさい」

「あ、ありがとうございます……」

短刀を取り出して良子に手渡しながら呟いた。

「これで亮二くんを殺めてきなさい。そしたらあなたの命だけは助

けてあげる」

「え！？」

「え！？……じゃないよ。このままだったら亮二をあたしたちが残酷に長時間苦しめて殺した上に、あなたも数時間かけて地獄の苦しみを味わいながら死んでいく羽目になるわ」

「ひっ！？　そ、そんな……」

「やるのやらないの！？　早く答えなさい！」

「そんなことできる訳がないじゃない！　無理ですっ！」

莉央は愛衣に目配せで合図をする。

一度引き抜かれたアナル責めの張り形を、直径5センチ、長さ20センチもある大人でも直腸を突き破り、肛門括約筋を全て引き裂く殺人レベルのモノに装着し直した。
このタイプの張り形の先端部分は、他と違って鋭く尖っているため、S状結腸を円滑に突き破る為の細工であった。

『ガシャンッ！！』

「セットOK！　コレはかなり痛いけど……いくわよ？　亮二くん……」

『ズプ……メリメリメリメリメリッ！！……』

「いったあああいっ！？　おねえちゃん！　お願いっ！　やめてやめてやめてやめてええええっ！！」

『ブチブチブチブチッ！……バチュウッ！！』

「ぴぎいいいいいいっ！！！！」

「ほうら、半分入ったよぉ♡　ここから一気に腸を突き破ってやるからね？　えいっ！！」

『ズボオッ！！バリバリッ！！……ピュピュピュピュピュウッ！！』

肛門から噴水のように鮮血が噴き出してくる。
小さな直腸の奥は、後も簡単に突き破られ、地獄のような激痛に喘ぐ広末亮二であった。

母親の方は、もう一度拘束し直してから、莉央によって一枚一枚ペンチで手の指の爪を剥がしていく。
絶叫を上げながら痛みと戦うが、左手の爪を全て剥がした頃にとうとうギブアップ。

「ひいっ！　お願いです。もう一度チャンスをください」

「息子を殺す気になったの？」

「はい、散々苦しめられて結局殺されるのなら私が即死させてやった方が亮二も楽だと思います。これ以上苦しむ姿を見たくない……」

「そんなこと言って自分が助かりたいだけじゃないの？」

「ううう……痛い……痛いい……そ、そんなこと……ないです」

莉央はもう一度拘束を解き、良子にラストチャンスを与えた。

「次はないからね？　もし失敗したら二人とも全ての爪を剥がして目玉くり抜いて……歯を全部抜いて四肢切断して火をつけて焼き殺してやるからね？」

震えながらもあまりの恐怖のオンパレードに我を失いかけている良子であった。

その時強制勃起薬を美香に打たれた亮二は、小さなペニスをイキり勃てながら肛門の激痛に号泣していた。
メガネっ娘の明日香がポニーテールを揺らしながら仮性包茎のペニスの皮を根元まで引き剥きながら激しくピストン運動を開始。

タップンタップン揺れる金玉を愛衣が左手で掴み、メスで陰嚢を切開する。
生の睾丸をほじくり出して管だけでぶら下がっている状態にすると、明日香の手コキで射精するのを待つ愛衣。

「ほら、少年。私が人生最初で最期の射精させたげるからたくさん出しなさい♡」

「う、ううっ！　なんか……き、気持ちいぃ」

『ドピュッ！　ドクドク……』

美香の配慮によって痛み止めの麻酔も少し打たれていたので、肛門の激痛にも負けず、辛うじて精通を体験させてあげることに成功する。

「なんだ……男の子としての精通なのに大して出ないのね。まぁいいわ。愛衣さん、この子の人生最期の射精、終わりました」

「はーい。じゃあ精管と神経の管切断するわね」

愛衣によって生で飛び出していた睾丸はついに亮二の本体から完全に分離されてしまった。

去勢完了である。

広末良子はフラフラと歩み寄り亮二の前に立つと、背中にいきなり短刀を突き刺した。

『ヒュンッ！　ズドッ！！』

「ギャアッ！？」

「わあっ！？　びっくりしたぁ！？」

愛衣は去勢手術を施して真っ赤に染まっている両手でペニバンの張り形を掴み、肛門から引き抜くと、慌てて少し距離を取った。明日香と美香も愛衣に続いて驚きながら飛び退く。

「ごめんなさい亮二っ！　私が早く楽にしてあげるからお願いだから大人しくしてて！」

「痛いよおっ！！やっ、やだよママ！？」

起き上がって必死で抵抗する亮二。

『ズボオッ！！』

「んぐうっ！？」

振り下ろした短刀がお臍に突き刺さる。更に力を込めて臍がグチャグチャになるほどまで掻き回した。

「私とココで繋がってたのよ？　最初も最期もママの宝物だからね亮二……」

『グリッ！　グチャグチャグチャグチャアッ！！』

「ギャアアアッ！！　痛いいいいいっ！！」

肛門と陰嚢とお臍から大量出血しながら膝から崩れ落ちる亮二。

ペニスからは明日香の手コキの余韻で透明の糸を引いている。

「痛いから抜いて！　ママ……痛いよおおおっ！　えーんえーん！」

「大切なタマタマまでくり抜かれちゃってたんだ……ほんと可哀想な亮二……でも同い年の女の子に手淫でイかせてもらってたわよね？　最期に気持ちよくなれたこと……それだけが私には救いだわ。じゃあ今から楽にしてあげるからね？　えいっ！」

『ズチュ！　ズバババババッ！！』

刃を上に向けて突き刺した短刀を、そのまま胸部の中央の骨に当たるまで切り上げた。

夥しい量の小腸が飛び出してくる。

「首切らないとなかなか死なないわよ？」

「は、はい！」

莉央に言われた通り、左手で顎を突き上げさせ、右手の短刀を握

り替えてから喉仏の真上辺りに狙いを定め一気に何度も引いてゆく。

『ザクザクザクザクッ！！　ぶしゅしゅしゅしゅしゅううっ！！』

「うごおっ！？　ゴポポ……ゴポポポポッ！！」

首の頸動脈を切断してから一気に奥へ切り進め、ついに喉まで刃が届く。

血の泡を口から吐きながら苦しそうな息の音になってゆく亮二。

『ゴポポポポッ！　かひゅうっ！　かひゅうっ！　コポポッ！』

ついに首を切断寸前まで切ることに成功した良子は、ここで力尽きてくずれこむ。

莉央は落とした短刀を拾い上げ、右手に握ると、残った頸椎を後ろ側から数回叩きあげて骨折させると、両手で頭部を持ち何度も回転させるように捻り上げ、残った皮一枚も引き千切った。

完全に胴体から分離された首を、母親の眼前に髪の毛を掴んで掲げる莉央。

「ほら、生首だよ。こうやって最後はちょっとコツがいるんだ。分かった？」

「ほ、骨が固くて……最後の最後で力が無くなっちゃいました……ごめんなさい……」

地面に首を落として何度も足の裏で踏みつける莉央。

『ガツ！　ガツ！　ドカッ！　ドカッ！』

無様に口を開いて血の泡を噴いている１２歳の生首は、両目を見開き恨めしげに母親の良子を見つめているようだった。

「ひっ！？　ご、ごめんね亮二！　ママを許してっ！　あの世で佑月のこと守ってあげてね？ううう……おおうっ！　おおおうっ！ぐすんぐすんっ」

二人の子を目の前で失い、嗚咽をあげて泣きじゃくる母親の広末良子。

「あなたたちの分まで長生きするからね私……わーんわーん！」

「あのねオバさん？　なんか勘違いしてるみたいだけど……」

「え？」

菅野莉央は冷たく囁きながら良子の髪の毛を掴んで引き起こした。

その傍ではライフルに銃弾を込めながら独り言を言う円満愛衣。

「いっぺん……逝ってみる？」

「完全に首を落とせなかった時点であなたは失敗なのね？　後ろか前か選ばせてあげるよ」

「ひいっ!?　そ、そんな！　あの時首の骨だけ残っていても完全に死んじゃっていたはずです！」

「残念～！　まだ微かに過呼吸で息してたのよそれが。早く選べババアッ!!」

莉央は恫喝して良子の選択を急かす。

「ま、前か後ろって……どうゆう意味ですか？」

「はぁ。ほんと鈍感なのね。マンコかお尻の穴からこの女子高生愛衣がライフルを撃ちこんでくれるのね？　そして頭や顔が全部吹っ飛んじゃうから即死できるわけ。感謝しなさいよあたしたちに」

「ひいいっ！　頭部が吹っ飛ぶなんてイヤアアアッ!!　お願い許

して許して許してえええっ！！　なんでもしますからゆるえええっ！！」

泣き崩れてしまう良子を両脇から抱えて簡易ベッドの方へ引きずってゆく明日香と美香。

「ほら、莉央ちゃんの気が変わらないうちに銃殺されないとえらいことになっちゃうよ？」

「そうそう！　麻酔なしで手足切断と、目玉くりぬきと、歯を全部ペンチで抜かれてから焼き殺されますわ。それでもいいのかしら？」

美香に続いて明日香も脅しをかける。

「ひっ！！……わ、わかりました。楽に殺してください……アーンアーン！！」

なかなか死ぬ覚悟が出来ないのかゆっくり歩きながらも泣き崩れてしまうのであった。

明日香と美香は、上半身だけ簡易ベッドに縛り付け、お尻は丸見え状態で突き上げさせる。

その上で大きく脚を開かせてから拘束していった。

「準備ＯＫだよ莉央ちゃん！」

「うん。では愛衣！　好きな穴から撃ち込んでやって」

「はーい！」

『グリッ！　ズブブッ！！』

「アナルに一発……撃ち込まれてみる？」

愛衣は少し大便を漏らしてしまっている肛門に銃口を挿し込んだ。

「やあっ！？　やめてええ……死ぬの怖いよおお！　わーんわーん！」

子供のように泣きじゃくる姿は哀れとしかいえなかったが、そんなことで許すはずもない拷問処刑人たち。

ライターに火をつけてしゃがみ込み、もう血も止まっている性器を焼き始めた。

「死ぬの怖いんだ……このまま生きてる方が地獄だとゆうことを教えてあげるね♡」

『チリチリチリチリ……ジュウウウウウウウッ！』

「ばぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃあああああああっ！！！！　殺してっ！！

殺してえええっ！！」

「うふふ♡　殺して、いただきましたぁ～♪　でもまだまだ焼いちゃうんだなコレが♡」

大陰唇、小陰唇、膣口と、真っ赤が真っ白、更に真っ黒に焦げるまで炙ってゆくと、溶けた肉塊がトロトロと垂れ落ちてきた。

白目を剥いて気を失う良子だった。

「くっさぁ。マンコ焦げちゃってるよお？あはは♡　クリトリス引き千切られた痛みと比べたらマシでしょ？　うふ♡」

散々陰部全体も満遍なく焼いてから可愛く微笑む莉央に、明日香も美香も苦笑い。

「もういいですか？　莉央様」

「うん。マンコが焼け焦げてクッさーいからもう殺っちゃって！」

「はい。いっぺん死んでもらいます広末良子……えい！」

『ズドオンッ！！』

頭部は粉々になるまで吹っ飛び、目玉一つだけが丸いまま吹っ飛

んでいき、息子の生首の前に転がり込んだ。

「あはは！　最期に息子の顔見たかったんだね？　泣かせてくれるじゃん？」

「あはははははは！」

親子の処刑後の見つめ合いに、なんかスイッチが入り爆笑してしまう。四人の少女たちであった。

残酷処刑島に新たに三人の遺体が加わった。

究極の選択（後書き）

無様な親子の遺体を見つめながらふと美香が呟く。

「一体この家族って何をやらかしたのかな……」

莉央は静かに空を見上げながらそれに答える。

「だいたい児童や幼児の犯罪の場合って殆どが焼殺なの」

「なるほど……親子三人で灯油でも撒いて数人殺めちゃったんだ……」

「そう。殺した相手は良子自身の両親だよ。養子にきた息子に全財産を譲るとなってしまったから……今回の凶行に及んだ」

「三手に分かれて一斉に家を囲むように灯油撒いて母親の良子が火をつけた。だから最期にマンコやいてあげたの」

おまけの拷問の理由になんとなく納得する愛衣たちであった。

焼けただれてゆく小陰唇や膣口の様を思い出してゾクゾクしながらアソコを濡らすドSな残酷美少女たちであった……。

生への執着（前編）（前書き）

周りから見れば仲良く話をしている親友に映る二人。

二人を取り巻く運命は、思わぬ方向へ流れてゆく……。

生への執着（前編）

夏でもそこそこ涼しい北部地方にある極北大学。

入学するにあたっては比較的難易度の低い、とりあえず“大卒”というステータスが欲しいから……といった理由と、まだまだ就職しないで遊びたい、といった願望が強い生徒が集まった大学である。

「愛美！　帰りにちょっと付き合ってよ」

「うん。どこか行くの？」

「駅前にできたケーキ屋さん、すっごく美味しいんだってさ！　だから一緒に行ってみたいなぁって」

「いいね！　私もケーキ大好き！　行こう行こう！」

そのまま友人関係にある、２０歳の大学二年生の二人は、放課後駅前へ向けて歩き始める。

梶田真莉（かじたまり）と芦田愛美（あしだまなみ）は、高校時代からの知り合いであったが、今みたいに親友レベルに発展したのは大学に入ってからであった。

楽しくケーキと紅茶を堪能した二人は、すでに真っ暗になってしまっている電車沿いの細い道を歩いている。

「ほんと美味しかったなぁ！　また行こうね愛美」

「うん！　私の大好きなダージリンティーも最高だったよ」

数分後、突如現れた二人の男たち。

「ちょっと失礼！　芦田愛美だな？　俺たちと一緒に来てくれるかな？」

「え？　ご、ごめんなさい。私たちもう家に帰らないと」

隣の梶田真莉の方へ目をやる愛美。
暗い街灯の灯りだけではハッキリ認識できないが、何か微笑んでいるように見えた。

「真莉？」

「あは……あはははは！」

「！？」

突然笑い出す真莉に不信感を抱いた刹那、とてつもなく強い眠気に襲われる芦田愛美。

「な、なんか眠くなってきちゃっ……た……」
その場に座り込んでそのまま道路で横になってしまう愛美。
二人の男は協力して愛美を抱え上げてうつ伏せで肩に乗せるようにして歩き出した。
女性も一人いたこともあり、少ない通行人から見ても大して怪しくは映らず、酔っ払いを担いで運んでいるようにしか見えなかった。

「本当に大丈夫なんだな？」

「うん。絶対大丈夫」

「リスクもあるがあんな綺麗な子と一発ヤレるなら価値はあるぜ」

山田隆（やまだたかし）と川口武（かわぐちたけし）は梶田真莉より五つ歳上だが、小さい頃からの幼馴染であり、遊び仲間でもあった。
中卒でバイトしながら遊んでいるいい加減なヤンキーたちである。
田舎道の田んぼの縁にポツンと建っている農業用倉庫。
梶田真莉の親戚の所有するものであったが、意外と中は広くて、そこに簡易な敷布団を敷いていた。

「ここなら誰も来ないし見つからないわ。私がたまに泊まるからって叔母さんにも話しつけてあるし」

「おう！　オシャレなホテルと比べたら無茶苦茶レトロでいいんじゃねーか？」
「ワハハハ！　お前レトロとか意味わかってて使ってんのかよ！？」
「う、うるさいな！　要するに古っぽいとかゆう意味だろ？　どーでもいいんだよそんなこと」
梶田真莉のお願いを聞き届け、隆と武は交互に芦田愛美を犯した。目が覚めても泣き叫んでも構うことなく犯し続ける。
「いやあああっ！！　痛いっ！！　やめて許してぇえっ！！」
『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』
「オラオラオラァッ！！　血を流してるぜ？　また処女だったのかよ？　はっはっはっ！！」
膣と肛門を何度も犯し終えると、二人は梶田真莉に軽く敬礼して倉庫を出て帰って行った。
弱々しく啜り泣く愛美の声が倉庫に響く。
「ぐすん。ぐすん。どうして？　どうしてこんなことしたの真莉？」
「いいじゃん！　どうせそのうち失くすものなんだから処女なんて……」

「好きでもない人からあんなことされたくなかった……」

「ふうん。まぁいつか彼氏ができた時の予習ができたんだからヨシとしてよ？　ね？」

「どうしてこんな酷いことを？」

「酷い？　私がずっと憧れていた小栗先輩とキスしてるところ見ちゃったのよ」

「！！」

まさかの場面を見られていた驚きと再度湧き上がる罪悪感に苛まれ始める芦田愛美。

――一週間前。

「ねぇキミキミ！」

「は、はい？」

「二年の子だよね？　いつもショートカットのボーイッシュな子と歩いてる……」

「そ、そうです。梶田真莉ちゃんといって私の親友なんです」

顎の下に親指を添えてジッと品定めするかのような目つきで全身を見回す小栗俊治。

親友の梶田真莉同様、芦田愛美もタイプだったので小栗に見つめられて頬が真っ赤に染まってゆくのを感じていた。

「キミ……名前なんてゆうの？　今度俺と一緒に飲みに行かない？」

「あっ！　あのっ！　わ、わ、私は芦田愛美です！　わ、私の親友が先輩のこと想ってて……だから、あのね！」

帰宅中の生徒も多数いる中、いきなり肩を抱きしめてきた小栗俊治に衝撃を受ける愛美。

「分かってたよ。キミたちとすれ違うたび俺の方見ながら顔真っ赤にしてたじゃんその子……でも俺のタイプは……キミなんだよなぁ」

「え！？　ええっ！？　だ、だけど真莉が……んっ！？」

遮るように軽く唇を重ねる俊治。
あまりの出来事に少し記憶が飛んでしまう愛美だったが、全身の力が抜けてその場に座り込んでしまう。

「……俺じゃダメなのかい？」

「……あ、あの……やっぱり私……ご、ごめんなさいっ！」

気力を振り絞って立ち上がり、その場から走り去る愛美だった。

「ショートカットで面長は無理なんだよな俺……やっぱセミロングのまーるい顔立ちした愛美ちゃんの方がいいわぁ。諦めないからな。絶対そのうち落としてやる」

強引にキスされたことを最初から想っていた梶田真莉に話せなかった……言いたくても言えなかった。

『まさか見られていたなんて……』

「どうしたの？　どっちが酷いかまだ分からないの？」

「ご、ごめん真莉っ！　本当にごめんなさい！」

「もう謝っても遅いよ。これからも色んな男さし向けてレイプさせまくってやるんだから。あはははは！　覚悟しとくことね愛美！」

レイプされた哀しみと親友を裏切ってしまった罪悪感と、親友が自分を恨む敵に変わってしまったこと……この一週間色んな不幸がありすぎてその場で泣き崩れてしまう芦田愛美だった。

――――明くる日。

早朝から警察や消防が取り巻いて大騒ぎになっている極北大学。

「朝イチに警備員が見つけたんだって！」

「ええっ！？　そんなの見たらトラウマになっちゃうわ」

「ほんとよね！　脳みそそこらじゅうに飛び散って目玉も飛び出してたみたいよ？」

生徒たちが残された血痕を洗い流したであろう濡れているコンクリートを見ながら好き勝手に話し合っていた。

「芦田愛美……いい気味だわ。本当に脳みそ撒き散らして死んだのなら私も見たかったよ。あはははは！」

臨時で休みになる大学。
救急車と消防は去り、警察のパトカーのみが残る正面入り口。
騒がしいいつものキャンパスは少しずつ静寂に包まれていった。

――――――残酷処刑島。

珍しく無風の残酷処刑島に、男女三人の姿があった。

「だ、誰だこんなとこに連れてきやがったのは!?」

「ホントだよ!　早く縄を解けっ!!　ぶっ殺すぞっ!!」

「こらあああっ!!　誰か知らないけど私たちにこんなことしてタダで済むと思わないでよ!?」

山田隆と川口武。
梶田真莉の悪友である25歳の二人は、今にも人を殺してしまいそうなほど怒りを顕にしていた。

梶田真莉20歳も同様であったが……。

ゆっくりと歩いてくる人影が見える。

「お、おい!　そこのお前!　俺たちをたすけてくれっ!」

そっと目の前に立ったその少女は……鬼頭美紅。

「なんかさぁ。あんたたち今日ここで死を迎えることになっちゃったんだけどぉ～」

「はぁ？　ちょっと何言ってるのか分からない……お前バカでしょ！？」

中学生である拷問処刑人の鬼頭美紅に、本気で呆れる２０歳の真莉。

一瞬真顔で睨みつける美紅の眼力にビビってしまい、少し目を背けてしまう真莉だったが、すかさず両隣に拘束されている男二人の内、山田隆が怒号を飛ばす。

「コラこのクソガキッ！！すぐにこの縄解かねぇと犯してボコボコに殴りまくって海に沈めるぞ？　おうコラアッ！？」

「はは……威勢のいいの通り越してまるでヤクザだな」

呆れるように微笑みながら両手の掌を真上に向けて目を細める美紅だった。

「そうされるのが嫌だったら舐めたこと言ってないで早く縄を解いたほうがお嬢ちゃんのためだぞ？　ん？」

少し柔らかい態度で脅しをかけてくる川口武。
それぞれ立派な口を持っているようだ。

岩の影から更に数人の少女が現れる。

「美紅ちゃん、これ使う？」

「あたしは素手でいぃよ」

「そう。咲良さんは？」

「あたいはあんたらほど強くないから使わせてもらうよ」

ツインテールの鬼頭美紅は素手。
ミディアムの宮垣咲良は日本刀を受け取る。
咲良に日本刀を渡した菅野莉央はヌンチャクを箱から取り出した。

「お、おい、クソガキたちよ。そんな物騒なもん握りしめて一体何する気だ？」

少しビビって少女たちに問いかける一番威勢の良かった山田隆。

「そ、そうだ。そんなもん置いといて早くこの縄を解いてくれないい

かな？　そのヌンチャクってのは小学生みたいなキミには扱えないぜぇ？　自身の頭砕いて大怪我するからやめときな？」

「あはは！　ホントだ！　中学生のガキでも難しそうなのにお前小学生だよなあっ？　バッカじゃねぇのほんと！　あはははは♪」

山田隆、川口武に続いて梶田真莉までも目の前の少女たちにおちょくった罵声を浴びせた。

「あちょーっ！」

『ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンッ！！……ヒュヒュヒュヒュヒュヒュヒュヒュンッ！！』

物凄い風切り音を立てながらまさにブルース・リーのようなヌンチャク捌きを目の当たりにして、思わずあんぐり口を開けたまま固まってしまう罪人の三人。

「え？」

「ほ……」

「うそ……」

「相変わらず凄いな莉央……でもあたいも最近日本刀慣れてきたんだ。よっ！　ほっ！」

『ヒュンヒュンヒュンヒュンッ！！　ブシュンブシュンッ！！……パラパラパラパラ……』

更に宮垣咲良も、重いはずの日本刀を瞬時に何回も振り続けて、木の枝や木の葉をスパスパと粉々にしてしまう。

もうあまり驚かない三人の罪人たちであったが、目の前の少女たちが普通でないことだけは理解した。
だが心の中では、実際戦えば所詮小学生や中学生の女、負けるはずはない……とゆう根拠のない自信はあった。

「今からあんたたちの拘束を解いてやるよ」

美紅がそう言うと、一斉に莉央と咲良も拘束を解き始めた。

「おいおい！　まじか……俺たち助かるぜ？」

「ホントだよな！　お嬢さんたち、ありがとうな。優しくレイプして優しく殺してやるからねぇ？」

「私、知～らないっ。２５歳の大人の男を舐めたら後悔するよ？あはははは！　ホントこいつらバカで助かったわね♪」

言いたい放題言いながら少女たちに拘束を解かれた三人。

「えーと。今9時だから……昼まであたしたちから逃げ通せれば命は助けてあげる。更に本土に船渡しで帰してあげるよ。でもあたしたちはあなたたちを追いかけるからね？　捕まったら殺されちゃうからその時は戦った方がいいかもね」

「あははは！　小学生のガキが何抜かしてるの？　ホントお前バッカじゃない？」

「梶田真莉。じゃああなたはチャンスを拒んで逃げないでこの場であたしと喧嘩する？」

「そうだね！　喧嘩しちゃおーか！？　あははは！　一応私だけ女だから小学生のお前が保険付きで固いからね。いいわよね？　隆、武？」

「おう！　中学生のガキどもは俺たちに任せとけ！　いてまえ真莉」

楽勝の予感を感じながらじわじわと詰めてくる梶田真莉。
菅野莉央はヌンチャクを足元に落とした。

「あれあれ？　武器が落ちちゃったよ？　お嬢さん」

「男相手なら保険で、と思ったけど。あなたなら武器なんて要らないよ」

小学生に舐められたとゆう事実に憤慨した梶田真莉は、一気に菅野莉央に襲いかかった。
まずは強烈なみぞおちへのボディブロー。
速すぎて男たちには見えていない。

「はがっ？」

倒れ込もうとする所へ顎への膝蹴り。
完全に顎の骨を砕いた所へ右手と胸ぐらを掴んで体落とし。
受け身を取らせない体落としは、地面に後頭部を激しく打ち付けた。
後頭部からの鮮血が茶色い土へドクドクと染み込んでゆく。

「痛いっ！？　ギャアアアアアッ！！」

「みぞおち？　顎？　後頭部？　どこが一番痛かったの？」

今度は馬乗りになってマウントを取ると、怒涛の打ち下ろしラッシュに入る。
鈍い音を立てながらグシャグシャに変形してゆくショートカットの美女の顔面。

『グシャッ！　ドカッ！　バキィッ！　ガッ！』

「んおおおあああっ！？　ひんぎいいいいいいっ！！」

前歯が四本折れ、瞼は両方とも腫れ上がり、鼻血はドバドバ流れ落ちて見るも無惨な顔に変形してしまった。

「お、おい！　コイツらやばいかも……」

「ああ……俺たちが負けることはないと思うが万が一もある。ズラかるか？」

「そうだな。俺たちは逃げさせてもらう！　本当に逃げ切れたら無事に帰してくれるとゆう約束は守ってくれるんだな？」

莉央はゆっくり立ち上がり血まみれの拳を突き出し、親指だけを真上に立ててニコッと微笑む。

「当然♡」

唾を吐き捨てて何度も振り返りながら二人の男は拷問処刑人たちの前から走り去ってゆく。

「本当に時間までに見つけられなかったら助けてやるのか？　アイツら梶田真莉の親友のくせに自分たちのことしか考えていないみたいだぞ？」

二人の背中を見ながら咲良が莉央に問いかける。

「見つけられなかったら……ね！　ＧＰＳつけたままどこへ逃げても隠れても無駄ですぅ♪」

「は、はは。そうゆうことね。莉央もイヤらしいな……」

「さてと。あたしと美紅ちゃんで男どもを始末してくるから咲良さんはこの女ダルマにしててくれます？」

「あ、ああ。分かった。この後は殺していいのか？」

「うん。出来るだけ苦しめて逝かせてやってください」

「よし！　即死出来ないように止血剤とショック死防ぐ気付薬と……何本か注射打ってから包帯で切断面はグルグル巻きにしとくわ」

「やる気満々ですね！　ではよろしく」

宮垣咲良と顔面ボコボコに腫らした梶田真莉を残して、菅野莉央と鬼頭美紅が二人を追って丘を駆け降りて行った。

「じゃあとりあえず死ぬ前にダルマになってもらうからな？」

チェーンソーのエンジンをかけてそっと真莉の腕に当てがおうと

する咲良。

「ひ、ひいっ!?　お願いやめてお嬢さんっ!!　いやあっ!!」

「心の醜い女……せめて旅立つ前に見た目だけでも小さく可愛くしてあげるよ」

『ギュイイイインッ!!……ザシュシュシュシュ!!』

「ギィヤアアアアアアッ!!」

梶田真莉の絶叫は残酷処刑島全体に響き渡る。

「お、おい、今の声はもしかして……」

「ああ……あいつ本当に殺されてるのかもな」

「ここからは二手に分かれて逃げるか……俺は林に入るから武は砂浜へ降りるか?」

「分かった。無事に昼を迎えられたらまた会おう」

「もし見つかった所で中学生のガキだ。しかも女……ボコボコに殴りまくって幼いマンコ犯しまくってやろうぜ!　ハハハハ!」

「それもそうだな!　俺はツインテールの女がタイプだな」

「俺はアイドルにそっくりな目の大きいミディアムの子だ。ま、どっちが見つけるか分からないけどな。見つけられなかったら普通にこの島から帰してくれるみたいだし……それはそれで甘んじて受けよう」

挨拶を済ませた２５歳の男二人は二手に分かれて逃げた。
気持ちの半分は、彼女たちに見つかった方が暴行も出来てレイプも出来るし得なんじゃないか？　とかも思いながら、とりあえず走って彼女たちから遠ざかるのであった。

――――スタート地点の丘の上。

全ての四肢を切断された梶田真莉が号泣しながら仰向けで天を見上げている。
咲良の打った強力な薬の効果で、痛みは殆どなかったが恐怖のあまりに小便を漏らしてしまう。
シャツとパンツを残したまま切断していたため、ピンク色のパンツが尿で湿って色を濃く染めてゆく。
「やれやれ。お漏らしか？　そんな部位にはお仕置きが必要だね？」
宮垣咲良はチェーンソーを傍に置き、短く小さくなった梶田真莉の下半身側に跪くと、ゆっくりパンツを脱がせていった。

「やめてえっ！　酷いっ！こんな姿にされてお嫁に行けないじゃないのよぉ〜。ひっ！？　パ、パンツだけはやめてえっ！！」

「ダメ。マンコ見せるんだ！」

『ズルズル……ズルリッ！』

「ひいっ！　いやあんっ！！」

完全に切断面の太もも辺りまで下ろして下着を脱がしきると、20歳の女子大生の性器をマジマジと見詰める中学生アイドルの咲良。

「くさっ！　腐った性根してるからマンコも汚いね？　お仕置きしよっか？」

「や、やめてお願い……そんなとこそっとしといて」

「ほら、指挿れるぞ？　力を抜けよ」

『ズブブ……ぐちゅうっ！！……メリメリ！』

中指と人差し指を膣口に当てがうと、一気に奥まで挿し込む。

「痛いっ！？　やだあっ！！」

『ズチュズチュズチュズチュ！！　グチュチュチュチュチュチュ！！』

激しく指マンを開始すると、短い両脚をパタパタ開閉させながら拒否しだす真莉だったが、無駄な抵抗であった。

「血？　お前まさか処女だったのか？　そーいえばなんか小さな穴を押し広げてぶち抜いた感触があったな……逝く前に処女喪失も体験出来て良かったじゃん？」

「わーん！　わーん！　酷いっ！　酷いよおおっ！」

プライドも何もかもズタズタに引き裂かれた女子大生は、女子中学生アイドルに泣かされる。

膣から指を引き抜くと、今度は足の裏を性器に当てがい、強烈な電気アンマを敢行する。

「さぁて。土だらけの汚い足の裏で生マンコにお仕置きだ。くらえ！　臭いバージンマンコめ♡」

『ガガガガガガッ！！』

「やはあああああああっ！！　やだああああああああっ！！」

泣き喚こうが脚を開閉させようがお構いなく外陰部を足の裏でグリグリとこねくりまわす咲良であった。
破瓜による膣口から流れ落ちる処女膜からの出血と、電気アンマでの外的損傷による小陰唇の裂傷。少しヒダが破れて血が滲み出ている。
陰部全体に地面の土がたくさん付着してしまっていた。
「あはは！　汚れちゃったな腐れマンコだけに♡　手足の痛みは麻痺しててもマンコは痛いだろ？　薬液の調整意外とシビアなんだぞぉ？」
「痛い……もう許してお願いっ！　えーんえーん！」
子供のように泣き崩れる大学生であったが拷問処刑人の咲良は動じない。
「こんなトコももう誰も舐めてもくれないし要らないな？」
左手で乳首を摘んで思いっきり引っ張り上げると、右手でカッターを取り出して乳首を左右一つずつ切り取ってゆく。
これも麻酔がほぼ効いていない部位なので顔を顰めて絶叫する真莉。
「あはは。この切断面がまたヤラしいんだよな♪　次は乳輪もいくぞ？　ほらあっ♡」

『ザクッ！……ズッズッズッ！　ペロンッ！』

「ひぎゃぁあああぁあっ！！！！」

乳首、乳輪と二回に分けて左右の胸を切り取られた真莉は、まさに生き地獄の激痛を味わっていた。

ペンチを手にした咲良が冷たく微笑んだ後、数秒後には彼女の意識が飛んでしまう羽目になる。

陰核を挟み込んで一気に潰して、そのまま力任せに引き千切ったからである。

「ぎゃぁあああぁあっ！！」

『がくんっ』

「クリトリス死亡♡　潰して千切った後ペンチ開くと……うわぁスッゴ♡　なんかミンチになっちゃってて意味わかんない肉塊だよ？あははははは！」

白目を剥いて泡を噴きながらまだまだ意識を回復しない真莉。

膣口と肛門が激痛のあまりにヒクヒクと開閉していた。

「ん？　お尻の穴もお仕置きして欲しいのか？　好きだなぁお前も」

まずは生の人差し指を挿し込んで、肛門括約筋や直腸の感触を楽しむ咲良。

『ズボッ！　グリグリ……グプグプ』

「ん？　なんか締まりのないケツ穴。まさかコイツ……処女のくせにアナルオナニーしてたんじゃね？　やだなぁ……サイテー」

「んあうう……」

「お！　今意識戻っちゃうのかな？」

再び亡くなった陰核の激痛で狂ったように泣き叫ぶ真莉だった。

咲良のアナル責めも、感じたり痛がったりする余裕もなかったのである。

ゆっくり人差し指を肛門から引き抜くと、切断面である胸の肉に突っ込んで付着した便を擦り取った。

「胸に大腸菌入っちゃったねぇ？　汚い……」

「ぎひいいいっ！！　んぎゃあああっ！！」

「しばらくそのまま苦しんでなさい」

もがき苦しむ梶田真莉を見下ろしながら椅子に腰掛け、ひとまずティータイムに入る咲良。
切断されて短くなった手足を、うねうねとくねらせながらひたすら絶叫を上げ続ける悲惨な運命となった。

「莉央からもらったマンコフック使ってみようか？」

『ズブッ！……ズブブ！……ばちゅっ！……バシュッ！』

「ふんごおおおおっ！！　ぐあうううおおおっ！！！！」

咲良は、返事もできず色んな叫び声を上げている真莉の膣口からフックを挿しこみ、内部を貫通して肛門から切っ先を飛び出させる。
そのまま無理矢理膣口と肛門が繋がるように会陰部を引きちぎる。パックリと開いた股間からは糸を引いた血の粘液がドクドクと垂れ落ちてくる。

「ヤラシイなあ。興奮させてくれたお礼にぼちぼち逝かせてやるよ。汚くて臭いオマンコからぶっ放してあげるね？　さよなら……」

『ズドォンッ！！……パーンッ！！……ベチャベチャッ！……ボトボトッ！』

開いた股間の膣口部分へライフルの銃口を捩じ込むと、そのまま子宮方向へ撃ち込んだ。

貫通した銃弾は頭部をバラバラに吹っ飛ばす。

「あはは。見事に頭部吹っ飛んだな♡　よく生き地獄の時間を頑張った！　お疲れ様」

宮垣咲良はとりあえず腰を下ろして休憩を取ることにした。

紅茶を一杯飲み終わった時点でポケットのスマホが鳴る……。

――――――――――海岸近くの洞穴。

「あー暇だ。かなり入り組んだ入り江を幾つも越えて、しかも小さな洞穴の中だ。まず見つからないだろーな。後一時間で昼か……楽勝だぜ」

「何が楽勝なの？」

「！？」

茂みの隙間にある見た目では分からないような小さな洞穴。

空耳ではなく確実に少女の囁くような声が聞こえた川口武。

「だ、誰かいるのか！？」

「あたし……鬼頭美紅だよ」

「マジか……よくこんな自然の一部のような場所にある隠れた洞穴見つけられたな？　信じられらん！」

「襟の裏に何か付いてない？」

慌てて襟の裏を弄ると、小さな送信機のようなものが出てきた。

洞穴から飛び出してGPSを岩肌に思いっきり叩きつけて破壊する武。

「ちくしょう！　卑劣な手を使いやがるぜ！」

「やれやれ……それ高いやつなのに……」

「知るか！　ん？　お前は俺のタイプの方だな♪」

指の骨をバキバキ鳴らしながら美紅を笑顔で見つめる武。

その表情は美紅をボコって犯す気が満々であった。

「ガキが大人を舐め過ぎたことを後悔させてやるぜ！　犯した後でその素っ首叩き落としてやる！」

「その粗っチン斬り落としてやるぅ♪」

「な、舐めやがって！　見てもないくせに俺が一番気にしてることを言いやがったな？　ぶっ殺す！」
鬼頭美紅に全力で殴りかかる25歳の喧嘩自慢だったが、何をしても当たらない。
殴って空振り蹴っても空振り……掴みにいこうが軽くいなされる。
「はぁ、はぁ、ちっくしょうチョコマカと小賢しい！」
「ふぁあ〜。もういいかな？」
「うぐぐ……ほんと舐め腐りやがって中二病がぁっ！」
最後の気力を振り絞ったパンチも空を切り、しばらく動ける状態ではなくなってしまう川口武だった。
跪いてスタミナが回復するのを待つしかない武であったがゆっくりと歩み寄ってくる美紅がそれを許さなかった。
珍しくほぼ無風の残酷処刑島に突風が吹き、短いスカートが捲れ上がる。
中学生美少女の白いパンツが丸見えになった。
「おっ！！　その顔で白かっ！　ムカつくガキだけどやっぱ可愛いなぁ♡」
『バコォンッ！！』

「ひぶうっ！？」

強烈な膝が顔面にヒットする。
前歯が二本飛んでいき、鼻の骨が折れて左にひん曲がり、唇はバックリ裂けて顔面下半分が血まみれになってしまう。

「はがっ！？　うごおおおっ！！」

『プシュウウウウッ！！　ドバドバ！　ドクドクドクドクドク！』

『バキバキッ！！　グシャグシャッ！！　バコォンッ！！』

押さえてる手ごと更に激しい殴るからの猛攻。
美紅は全ての攻撃を顔面だけに集中させた。

トゥキックによって両手の甲の骨も折れ、ガードは肘や腕を使うようになるが、前蹴りで後方へ蹴り飛ばして倒すと、馬乗りになってからの百烈拳……。

腕の骨まで折れてぶらんぶらんになってしまい、もはや手を使ってのガードは不可能となってしまう。

激痛と戦いながらも、大きな一つの疑問だけはずっと川口武の頭の中に残っている。

『な、なんだこの激痛は？確か俺って……女子中学生と戦ってなかったか？　え？　なんでこんな目に遭ってる！？　ええっ！？　意味わからねえ！？』

そんなことをなん度も頭の中で思い巡らせながら少しずつ意識がなくなってゆくのを感じ始める武であった。

数秒？
数分？

どれくらいの時間が流れたのか分からないがふと激しく揺れている自分に気付き目が覚める。

『ズチュッ！　ズチュッ！　バッコンバッコン！！』

「んひ？……ひっ！？　あっ！熱いっ！！　熱いいいいっ！！」

ペニスバンドを装着した美紅が、極太バイブをセットして自分の肛門を犯していることに気が付いた。

『バコバコバコバコバコバコッ！！』

「はぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃあっ！！　裂けるううっ！！」

「悪いんだけどとっくに肛門括約筋が数枚裂けてガバガバになっちゃってるよ？　ごめんね♡」

『バッコンバッコンバコバコバコバコバコバコッ！！』

「なっ、痛いいっ！？　はぎゃあああああああっ！！」

太ももに伝い落ちる肛門からの生温かい血を感じる武だったが、違和感を感じて後ろを振り向いた。

なんと、両手両脚は見事に切断されてダルマ男にされていたのである。

女子中学生、美紅の腰の高さの簡易なベットに、うつ伏せに縛り付けられ、バックから犯されている……そのような非常に痛ましい状況であった。

股間から膝まで少し脚の部分を残してくれてはいたが、パカパカ開閉するシーンがなんかエロくて興奮するから、とゆう残酷少女たちの“こだわり”であったのだ。

「熱いっ！　痛いいっ！　ひぎいいいいいっ！！」

「手足の切断面は痛くないでしょ？　不思議に思わないオッサン？」

「うぐぐ……そ、そういえば痛くない……何か細工したのか？」

「ショック死したら困るから強烈な痛み止めの麻酔注射打ってあげてるんだ♪　ありがとうございます！　は？」

「あ、ありがとうご、ご、ございます……つ、ついでにお願いがあります」

「何？　オッサン図々しいわね」

「もうこんな身体では生きていても楽しくない……こ、殺してください」

美紅はアナルを掘りまくる腰の動きを一旦止め、切れ長の目を輝かせる。

「あはっ！　殺してください、頂きました♡」

誰かもその言葉を罪人に言われて喜んでいたことを思い出し、なぜか美紅自身も嬉しくなったのだ。

「でもまだ楽しませて♡」

『バコバコバコバコバコバコバコッ！！』

美紅のスカートや太ももまでも鮮血で染まるほど、激しいアナルファックはまだまだ続いてゆくのである。

「アヘアヘアヘエッ！！」

「あはは！　なに男のくせにアヘ顔してんの？　可愛くないわよお

前なんかじゃ……アヘ顔へのお仕置きが必要ね？」

極太バイブを張り裂けた肛門から一気に引き抜くと、今度は拳を肛門へグリグリと押し当てた。

「極太より極太♡　あたしのフィストファックをくれてあげるわ」

「ひっ!?　そんなの入るわけないっ！！　や、やめろ！　やめてくれえええっ！！！！」

「生意気な口の利き方が許せない！　ほら、いっけええっ！！」

『ズボオッ！！　ばっちゅううううんっ！！』

「ぴぎいいいいいっ!?」

ハラワタが全て抉られるほどの腹腔内の激痛と違和感と異物感に、子供のように号泣を始める武。

『ボッコン！　ボッコン！　ボッコン！　ボッコン！』

激しく拳を出し入れする美紅のフィストファックはまさに地獄の激痛であった。

腸内の便が美紅の足元にドボドボと垂れ落ちて、その上に腸液と血液が降り注いでゆく。

「痛い？　一発とびっきりのをあげるわ」

美紅は右手の肘を後方へ思い切り引き、渾身のストレートの構えに入る。

「やあっ！！」

『ドッボオオオン！！　ブチュチュチュチュッ！！　メリメリメリメリッ！！　プシュウウウウ！！』

「ごわあああああああっ！！！！」

手首までの出し入れだった美紅の右手は……渾身の一撃により武の直腸内へ肘までめり込んだ。
鋭利なものでなく、拳だったためにＳ状結腸を突き破ることはできなかったが、勢いが凄まじ過ぎて小腸の中を無理矢理に奥の奥まで移動させられる直腸とＳ状結腸……。

いっそ突き破られたほうがまだマシだったかもしれない。
それほど腹腔内は大ダメージを受けた。

「ついに肛門ぶっ壊れて直腸が奥にいどうしちゃったぁ♡」

ついに口から血を吐き、悶え苦しみ始める武を目を細めて見つめながら肛門から挿し込んだ腕を掻き回す。
腹腔内で大腸と小腸がグチャグチャに混ざり合う音は妙に艶かしく美紅は性器を少し濡らしていた。

「内臓グチャグチャになればなるほど興奮しちゃう……」

「あばばばばば！……ゴボゴボッ！！」

「ほらほら、もっと血の泡噴いて苦しんじゃえ♡　ケツマンコガバガバに開いちゃって……ほんっと哀れだねぇ武くぅん♡」

生き地獄を散々味わったがまだ死なない武。
ついに全身が痙攣を始める。

美紅は慌てて肛門から右手を抜く。
掴まれた大腸がズルズルと引き摺り出されてくる。

「ちょっとぉ！　まだ死んじゃダメだぞぉ？」

血まみれの右手を股間に差し向け、ペニスをしっかり握りしめると、左手にサバイバルナイフを持ってゆっくり当てがう。

一気にスッと引くと簡単にペニスは根元から切断された。

「死ぬ間際の痙攣中だけどチンポの痛み感じてくれた？　あはは！」

血の泡を噴く口に切断したペニスを切断面から捩じ込む。

尿道を逆流した血の泡が尿道口からピュッと飛びだした。

「まるで口からチンポ生えたみたいだね？　カッコいいぞ武！」

突き上げるような激しい痙攣の後、静かに目を見開き、ついにあの世へ逝くことが許された瞬間であった。

「やだ。まだキンタマ潰してなかったのにぃ〜。死んだら面白くないな……あとはお前のダチを咲良が送ってくれるから寂しくはないからね？　ちょっと待ってなさい」

大きく開かれた肛門から大量のハラワタを引き摺り出されて、口から血の泡を吐き、切り取られたペニスを咥えさせられた哀れすぎる遺体に灯油を満遍なく振り掛けると、ライターで頭に火をつける美紅。

ゆっくりと確実に全身に回った火は、川口武とゆう男を見るも無惨な姿のまま真っ黒に焦がしていった。

生への執着（前編）（後書き）

美紅の凄惨な拷問処刑が執行された。
まだまだ絶叫と悲鳴が足りない残酷処刑島……。
更なる地獄が罪人に待ち受ける。

生への執着（後編）（前書き）

生き地獄を味わいながら一番先に逝ってしまった梶田真莉。
続いて散々苦しんだ末に生焼きにされて人生を終えた哀れな男、川口武。
拷問処刑人たちの責めは更にエスカレートしてゆく。

生への執着（後編）

一方こちらは島の北東部にある森林の中。

「隠れてても無駄だぞー？　出てこーい！　莉央がお腹痛くなったからお前の相手はあたいだよー！」

「ぐっ！？　なぜここが分かった！？」

「答えるのも面倒くさいからここで死んでもらうね？　山田隆２５歳独身野郎」

「独身はいちいち言わなくていい！　見つかっちまったのはビビったけど女子中学生自体にビビった訳じゃない。幸いお前は俺のタイプのアイドルにそっくりだ！　散々気持ちよくさせてやってから殺してやるさ」

「ふうん。化粧濃くして誤魔化してるけどあたいは宮垣咲良本人だよ」

「え！？……ええっ！？　嘘をつくな！　なぜこんな島で人殺しなんてするアイドルが存在するかよっ！？　せ、生年月日を言ってみろ！」

「３月１９日」

「！！……マイナーな地方局のラジオで話してた好きな動物は？」

「パタスモンキー」

「！！……マジか……本物がこんな所に……さくちゃん！」

「キショいなその呼び方……早くかかってこいよキショタカ」

罪人に対してサッサと始末したい気持ちが勝り、戦闘を催促する宮垣咲良。
たとえ自分のファンでも非道な人間には容赦しない咲良であった。

「これでぶっ殺してから犯してやる！」

「え？　なんで武器持ってんの！？……ってゆうか自分が日本刀持ってくるの忘れちゃってるじゃんか！？……はぁ。なんてバカなんだあたいは……」

錆びた日本刀を振り回しながらジリジリと咲良に迫る山田隆。

「嘘だろオイッ！　いくらあたいでも日本刀と素手じゃ勝てる気がしないぜ！　ちょっと待ったぁ！」

「待てるか！　殺してから死姦してやるから覚悟しやがれさくちゃん！」

「その内容で“さくちゃん”言われても違和感しかないぞ！？

ちょい待てっておい！」

本気で数回斬りかかるが咲良は上手くかわしてゆく。

「こんなの時間の問題だろ！？　やばいな今回はマジで……」

かなり死の恐怖を感じてビビった咲良は防御と逃げに徹する。
意外と体力もある山田隆は、１００回以上も日本刀を振り回して尚、勢いおとろえず斬りかかってくる。
その勢いに死の覚悟まで迫られる咲良だった。

「追い詰めたぞ？……可愛い顔して残酷な悪魔め！　まずは死ねえっ！！」

しゃがみ込んだ咲良に渾身の一撃で斬りかかる山田隆。

「うわあっ！！」

『パンッ！！……キーン！！』

銃声と共に山田の手にしていた錆びた日本刀が地面に落ちる。

「ぐっ！？　誰だ！？」

「丸腰の女子中学生に対して日本刀で襲いかかるだなんて……あまりカッコいいとは言えないよね？　その日本刀はかなり前の処刑に使ったやつ……片付けミスの山内さんにクレーム言わなきゃ……」

ベレッタＭ９３Ｒの銃口からゆっくり立ち上る煙を口を窄めながら吹き飛ばす菅野莉央がいた。

「咲良さん、危なかったですね。山内リーダーのポカのせいで死ぬ所でしたよね……でも相手が素手なら大丈夫でしょ？」

「あ、ありがとう莉央。マジで死ぬかと思ったぜ今のは……ってゆうか肝心な所で腹壊してんじゃねーよ！　急に連絡来たから慌てたせいであたい自身の武器も忘れてきちゃったじゃんか！」

「ご、ごめんなさい。てへっ」

呆然としながら短銃を持った小学生児童を見つめる山田隆。

「船の中で食べた饅頭が傷んでたみたい……やれやれだよ全く」

「な、なんで小学生のガキが拳銃なんて使ってやがるんだ！？　嘘だろオイ……ってゆうかお前も化粧濃いけどカンリオじゃねーのか！？」

「バレたか……冥土の土産に教えてあげる。アイドルが拷問処刑人とゆう裏稼業やっちゃってるの……」

「やはりな……なんとなく似てると思ってたぜ最初から」

「あたいのファンなんだろ？　そのあたいが直々に手を下してやるよ。色んな意味でな」

意味ありげなセリフを最後に山田隆に殴りかかる咲良。

攻撃を喰らわないように戦う修行を美紅からここ最近受けている咲良は、素手の戦いでは危なげが無くなっている。

確実に殴り疲れた所にカウンターを合わせて徐々に山田隆の体力を奪ってゆく。

「はぁ、はぁ、アイドルのくせにとゆうか……はぁ、はぁ、本当に中学生かお前？」

「一応ね。ぼちぼち終わりにさせてもらうよ。あたいも少し疲れてきたからさ」

結構粘り強かった山田だったが、遂に顔面への回し蹴りで意識を飛ばすことに成功する咲良。

「はぁ。はぁ。はぁ。はぁ」

「おい咲良！　そんな男やっつけるのに時間かかりすぎ！　前の体育館での修行忘れたの？」

「はぁ、はぁ。ご、ごめんなさい美紅さん……」

叱りながらも一番ホッとしてるのは鬼頭美紅であることに菅野莉央は気付いていた。

「咲良さん、お疲れ様でした。お見事でした！　でもなんか憎めないよね？　さくちゃんさくちゃん言いながらかかってこられたら……」

「そうなんだよな……じゃあせめて苦しめずに殺してやろうかな」

「それはダメ。あたしたちの使命は国が普通に裁けない仇討ちの拷問処刑執行です。そこは忘れないでくださいね？」

莉央に念を押されて改めて甘い自分を反省する咲良だった。

「でも苦しめる前に快楽を与えてやったらいいんじゃないですか？」

「莉央ちゃんらしいなぁもう……」

さすがの美紅も、莉央には昔から逆らえない何かがある。

簡易ベッドに寝かせて衣服を一枚一枚脱がせてゆく美紅と莉央。
最後のパンツ一枚を脱がせた時に意識が戻った。
だが既に拘束も終えた後だったので身動きは出来ない。

「うわっ!?　な、なんだこれ!?　す、素っ裸にされてる!?」

咲良は軽く撫でるように山田隆のペニスを触る。

「わあっ!?　ど、どうゆうつもりださくちゃん!?」

「いちいち調子狂うなぁその呼び方……あたいのファンとゆうことに免じて拷問する前に気持ちよくさせてやるよ。嫌なのか?」

「い、いや……嫌じゃないが……お、俺はやっぱりここで殺されるのか?　お前たちに……」

答えずに静かに頷く咲良。

「そうか……戻ってこないところを見ると武も既に真莉の元へ旅立ったのだろうな」

『シコシコシコシコ』

「うっ！？　そ、そんなことタイプの子にされても……殺されると分かっていたら勃起なんてするわけ……」

死ぬと分かっていて絶望の淵に追いやられていても、理想の女性に手コキされたら勃ってしまうのが山田隆とゆう男であった。

莉央と美紅は静かに拍手して見守っている。

「うっ！　イ、イくっ！？」

「射精しろ隆！」

『ドピュッ！！ドクドクドクドク……』

手コキだけではなく、名前まで呼んであげる大サービスにふと涙を流してしまう山田。
更に激しく手コキを繰り返して合計５回も三人の少女が見守る中で射精してしまう２５歳の男。

「気持ち良かったの？」

「あ、ああ……」

「まだ出せそう？」

「い、いや……もうチンポ痺れてるぜ……なぁおいっ！　お願いだ

から殺さないでくれ！　もう俺に十分恥もかかせたし怖がらせただろ！？　頼むよぉ！　まだ俺死にたくないよおおっ！！　うおおおおおんっ！　うおおおおんっ！！」

少女たちの前で、恥も外聞も捨てて命乞いを繰り返しながら小さな子供のように号泣する山田隆。

チラッと莉央の方へ目をやる咲良。

微かに数回、横に首を振る仕草が見えた。

寂しそうに振り返り、残念なお知らせを伝える。

「ダメ。やっぱりあなたにはここで死んでもらう……」

「ううう～。お願いです。許してください咲良様っ！　なんでもしますっ！　なんでもしますからぁっ！！　うおおーん！　うおおーん！」

号泣を続けながら必死で命乞いを続ける隆だったが、どうやら残酷少女たちには許してもらえそうにはなかった。

美紅は、隆の手首と指まで硬く拘束していきながらそっと囁く。

「タイプの女の子に……ましてやアイドルの相手から手コキしてもらえたなんて……死ぬ前にホント良かったね？」

「はい。ぐすん、ぐすん。でも、俺やっぱり死にたくねぇよぉ。許して！　許してください皆さんっ！　うおーん、うおーん！」

「大の男がうぉんうぉん泣かない！　いい加減覚悟を決めなさい。可哀想だけどね……どうしてもあなたを許す訳にはいかないのよ。さぁ咲良！　爪を全部剥がしていくよ？」

「は、はい」

爪をしっかり掴んで剥がす拷問を前提に作られた特殊なペンチを右手に持つと、そっと隆の小指に近付ける。

「わああっ！！　やめてっ！！　やめてぇぇぇっ！！」

『ガツ……メリメリメリメリ……』

「まずは左右の手の小指からいくから。薬指、中指、人差し指、最後に親指……全て左右の手交互に剥がしていくね。えいっ」

『バリッ！』

残酷処刑島に絶叫がこだまする。
山田隆の中では本日最大級の大声だった。
一枚一枚確実に爪を剥がしてゆく咲良に、号泣しながら何度も何度も許しを乞うが、一枚１０秒ほどの速度で全ての指の爪を剥がし終わった。
　喉が枯れて歪な響きの絶叫に変わっていたが、今度は同じ要領で足の指の爪も全て剥がしていった。

「手伝いましょうか？」

一息ついて隆の顔を見つめる咲良に、隣で声をかける莉央。

「あ、ああ。お願いするよ莉央」

「ちょっと可哀想に思ってきちゃってるでしょ？　まるバレですよ？」

「莉央には敵わないなぁ……あたいはこれで降りていい？」

「うん。あとはあたしと美紅ちゃんに任せて。でもちゃんと最期まで見てなきゃダメですからね？」

素直に頷いてから数歩後ろへ下がると、指についた血と汗をハンカチで拭いながらため息をつく咲良。

美紅は両手で無理矢理隆の顎を外し、口を閉じられないようにしてから一本一本歯をペンチで抜き始めた。

首を左右に振ろうとするが、頭部まで固定拘束されていたため、数ミリしか動かせない。

『メリメリ！……グポンッ！！……グリグリ……ポコンッ！！』

「あがっ！　んがががあっ！！」

様々な音を立てて一本一本引き抜かれてゆく。
顎周りも血まみれに染まっていった。

その横で莉央は、尿道口から焼き鳥用の串を膀胱に届くほど深く挿し込む。

「尿道口から串刺しにして更に輪切りにしてペニスの刺身造ったげるわね♡」

『ツプ！……ズボボボボボッ！！』

「んがはあっ！？　あががが……」

喉は枯れ、歯を抜かれながらではまともに悲鳴を上げることも不可能である。
全身をビクビク震わせながら少女たちの拷問にひたすら耐える生き地獄の時間は、隆の中ではとても長く感じられた。

莉央は小型のまな板を隆の太ももの上に置き、ペニスをまな板上に横たえさせる。

「薄造りにするからまな板使わせてね？　レッツメイクお刺身♡　いっくよぉ〜。一刀目は尿道口がオチンチンからなくなっちゃうよぉ♪　それそれそれっ♪」

『ズッズッズッ！』

陰茎の先端部分から、器用に2、3ミリの薄さで輪切りにしてゆく。

30回ほど包丁を入れると、細い串が尿道に残ったまま造られたペニスの輪切りが完成した。

ご丁寧に本人の顔の真横にペニスの刺身を置くと、冷たく微笑んで囁く。

「オチンチンの中心部に串通さないと、勃起してないフニャチンってとっても切り辛いのよ。ごめんね～。次は睾丸のお刺身造ってあげるからね♡」

美紅は全ての歯を抜き終わり、ナイフで舌の先端を切断していた。ほぼそれと同時に陰嚢の中央部にまっ縦に包丁を入れ、生の睾丸を掴んで引き摺り出すと、精管や神経の管が繋がっているまま器用にまな板の上に載せてから包丁を当てがう。

「んーと。チンポは輪切りにしたから金玉は……真っ二つに切断して中身がどんな構造になってるか分かるようにお造りにしちゃお♡」

「結局輪切りにするのめんどくさいんでしょ？」

「そ、そんなことないけど……分かった！　じゃあ右の睾丸を真っ

二つにして左の睾丸を輪切りにするよ！　それで文句ないよね美紅ちゃん？」

「あはは……そんなにムキにならなくても……って訳で左右での合計二度の激痛だけで済んだものが結構長い地獄に変わっちゃったけどごめんね？　許して山田くーん♡」

「美紅ちゃんが歯を抜いたり舌切ったりしたから呻き声や唸り声しか出させなくなっちゃったじゃん？　あたしの金玉の刺身造りが終わってからやってくれたら楽しめたのに……ま、いっか。いっくよぉお兄さん？」

『ズッ！……ザクッ！！』

「本日で一番の激痛かも？　今までの悪行を反省して地獄へいくのよ。分かった？」

まずは右の睾丸を真っ二つにして咲良と美紅に突かせたり触らせたりする莉央。
人差し指を切断面に突っ込んだり、中身をかき回したりして結局二つに分割された左睾丸はズタズタになってしまう。

「あーもう！　ほじくり出しすぎだよ中身……」

「ごめんなさい」

「す、すまない」

美紅に続いて咲良も謝った。
残った半分を血を流し続ける悲惨な口内へ無理矢理捩じ込んで食べさせる莉央。
「ほら、右の金玉食べて！　半分だけだけど……」
顎関節は元に戻ったが、歯がないので結局まともに噛めず飲み込めないで苦しむハメになる。
そのまま左睾丸をゆっくり何回も包丁を入れて輪切りにしてゆくが、もうこの時点で激痛のショックも重なり血の泡を拭いて白目を剥いて痙攣が始まってしまう。
「あらやだ。そんなに金玉の輪切りは激痛だったんだ？　ごめんね……」
最後の一回の包丁を入れると、完全に睾丸は本体から切り離され、白い数本の管だけが腹腔内から飛び出して粘液をドクドク垂れ流している。
「何かな？　前立腺で作られた精液かしら？」
「リンパ液じゃない？」

「え？　金玉の管の中にリンパ腺とかも混じってるの？」

「でも主人である金玉無くなったのに管みたいなものだけブラブラ揺れてるのって何かとてつもなく哀れだよねぇ～♡」

残酷少女たちは各々好き勝手に凄惨な姿にされた男の陰部を見ながら楽しく会話していた。

「チンポと金玉獲っちゃったんだから前立腺も抉り出してやる？」

美紅が前に垂れてきたツインテールの髪の束を、左手で肩の後ろへ掻き上げながら微笑む。

「そだね。ならあたしがやるよ。子宮抉り出し器を改造した前立腺抉り出し器もこの前作ってもらったの」

「へぇ。そんなエゲツナイもの……でもそんなのアナルに突っ込んだだけで肛門破壊じゃん？」

「肛門括約筋を破壊してガバガバにしてから無理矢理挿入して前立腺周りを回転刃でズタズタにしてから機器内部に収納して取り出す……って感じ♡」

「あはは……そんな爽やかな笑顔でそんなエグいこと言わないで！　莉央ちゃま……。怖い怖い……」

「てへ♡　んじゃいっくよぉー！　電源オンッ！」

『ヴィイイイーーンッ！！』

エゲツナイ機器のスイッチを入れると、顔と下半身の激痛で死にかけている山田隆の肛門へ無理矢理ねじ込んでゆく莉央。

「ほら、これが終わるまで死んじゃわないで！　お願い」

『ズブッ！！　グポオオオッ！！……バリバリ！！　グチャチャチャチャチャチャッ！！』

「ぴんぎいいいいいっ！！　はうあああああっ！！！！」

「ほらほらぁっ♪　性器の類は全て破壊してあげるんだからっ！お仕置きよっ♡」

『ズルズル……ベチャ！』

肛門をガバガバに破壊した恐ろしい機器を引き抜くと、機器の先端部の穴から赤黒いプルンプルンした臓器が出てきた。
前立腺を見事にくり抜いたみたいである。
回転刃によってズタズタにされた肛門や直腸がパックリ開いた肛門のあった大穴からブリブリとミンチのようにヘリ出してくる。

「やだぁ〜。めっちゃ凄惨っ！……何か絵面がエッチィ〜♡」
残酷な行為をした菅野莉央本人が他人事のように頬を赤くして呟いた。
「ほんと！　破壊されてガバガバになったアナルからミンチになったハラワタが飛び出してきてる♡」
「す、すっげえ……チンポの切断面からも白い粘液飛び出してるぞ？前立腺抉られての無意識な射精反応か……エロいな♡」
かなり興奮してしまった莉央に、美紅と咲良も続く。
三人の拷問処刑人は、山田隆のズタズタに破壊された性器と肛門を見ながら秘部をかなり濡らしてしまっていた……。
「コイツ……まだ生きてる？」
「すっご！　地獄の激痛の中でよくもまだ……」
莉央は驚く二人の肩をポンと軽く叩くと、サバイバルナイフを持って上半身の方へ移動した。
「まだ生きてるお礼にここも責めてあげるわ」

莉央はヘソの穴に一気にサバイバルナイフを突き刺すと、残っている小腸までもミンチになるほど掻き回した。

『ズブブッ！　グチャグチャグチャチャチャ！！』

「うむむううぅっ……うおうおううあぁ……」

叫ぶ気力すらなく、更に血の泡を噴き出しながら大痙攣する山田。

莉央は、ヘソから胸の骨に当たるまで上方へ一気に腹を引裂き、残っている小腸や横行結腸までもぶち撒けさせる。

『ブリブリブリブリッ！！　ドバドバドバアッ！！』

「ほら、エッチな部分だけじゃなく汚いハラワタ全部抜いてあげる。安心して死ね♡」

『ガボオッ！！……ビックンビックンビックン！！……ガクンッ！！』

最期に大量の血の塊を噴き出すと、ついに絶命することが許された山田隆。

三人の罪人の中でも、一番の地獄を見たことに違いは無い。

残酷処刑島に新たに三つの遺体が加わった。

生への執着（後編）（後書き）

山田隆は拷問処刑人たちの秘部を濡らすほどまで凄惨な拷問を受けて死んでいった。
彼の望む所ではなかったかもしれないが、彼が持つ強い生への執着が彼女たちを一段と冷酷にさせたのかもしれない……。

未知なる性癖への覚醒（前書き）

黒霧島高等学校には円満愛衣……菅野愛衣を女番長筆頭として東条登美子、西条早希、南条奈百合、以上四名のスケバンが存在している。

中にはこの四人の強さや恐ろしさをあまり知らない生徒も存在していたみたいである。

――俺は黒霧島高等学校に通う高校三年生だ。

恋も勉強も色々……山あり谷ありだが今日も一日頑張って登校するか！

未知なる性癖への覚醒

俺は西田達也１８歳。

今――――放課後の教室で犯されている。

しかも女子高生に……。

『ズッ！　ズッ！　ズッ！』

「あうっ！　はひっ！　うはっ！　はうっ！」

パニスバンドにアナルバイブを装着した少女は四つん這い体勢に縛り付けた俺をバックで犯し続ける。

突かれる度に不甲斐ないが情けない声が出る。

とゆうのも女子高生が挿入しているアナルバイブが絶妙に俺の前立腺を抉るからであった。

最初は初めてのアナルで痛みの方が勝っていたが半時間も犯されているうちに段々と快感に変化していったのである。

黒髪ロングのその少女は可愛い顔をしているが滅法喧嘩慣れしていた。

そもそも少女とのタイマンに俺が勝てていたならば今頃犯しているのはこの俺の側であったであろう。

顔面を何度も殴られて蹴られてボコボコに腫らした俺を素っ裸にして机に四つん這いにさせて縛り付けたその少女の仲間たち。

俺が犯されているのをニヤニヤしながら観察していた。

『バッコンバッコンバッコンバッコン』

「ほらほら！　気持ちいい？　なんとか言ってみろ」

「あっ！　はあっ！　き、気持ちいい……はうっ！……です愛衣様……」

「そう。人生初のアナル掘られながら射精させたげるわ。たくさん出しなさい」

「あ、は、はいっ！　ひっ！　い、いくうっ！！」

『ドピュッ！　ドクドクドクドクッ！』

「あははは！　そんなフニャチンのままでも前立腺突かれまくったら射精できちゃうのね？」

本当に情けない話だが女子高生に肛門を犯されながら射精に至ってしまう俺だった。

「もう二度と女性に暴力は奮いません！　許して下さい！」

やっと拘束を解かれ、俺の身体は自由になった。

菅野愛衣とかゆう名の……俺を喧嘩でフルボッコにした後、俺の肛門を犯した女子高生の足元に跪き、土下座する俺。
女番長の菅野愛衣、仲間の登美子、早希、奈百合……四人の会話で全員の名前も覚えた。

菅野愛衣に後頭部を何度も蹴り付けられて、教室の床に鼻を打ちつけて二度目の鼻血を噴き出させてしまった。

しかしまさかクラスは違うとはいえ同級生の女に喧嘩で負けるなんて……いくら女番長とはいえ所詮女じゃないか……男に勝つだなんておかしいだろ？
無茶苦茶強いとゆう噂は聞いてはいたのだか……まさか女がこれほどとは……。

「達也くん！」

聞き覚えのある声に俺は顔を上げた。
目の前には違う高校に通っているはずの俺の彼女、佐々木理恵ちゃんが俺のことを心配そうに見下ろしている。

「佐々木理恵さん……コイツの彼女で合ってるわね？」

「う、うん」

登美子とかゆうヤツが俺の彼女に確認を取っている。

「わざわざよその高校から連れ出してきてごめんね。理恵さんに話した通り最低の男だからコイツ……だからね。あなたには私たちのコイツへのお仕置きをじっくり見てもらうことにしたの」

最悪だ……どうして理恵ちゃんがこんな所に……事実がバレてるとしたらもう全てお終いだ……。

後輩の子が俺のことを好きだと告ってきたから俺は……放課後の体育館の裏でキスをしようとしたら拒まれて……訳が分からない拒否に頭に来て思いっきりビンタしちゃったんだよな。

「一年生の黒崎春奈ちゃん……あんたのビンタで唇切ってたくさん血を流して泣いてたの。すぐに逃げたあんたにはわからなかっただろうけどね」

俺はそのまま人生で最高レベルの生き恥を晒すハメになってしまう。

彼女の見てる前で同級生の四人の女たちに性的イジメを受けることになってしまうからだ。

女たちは順番に俺の股間を背後から蹴り上げていった。

何度も襲う睾丸とペニスへの激痛に耐えながらも5ターン目に入った頃ついに限界を迎えた俺は、股間を押さえて座り込んでしまう。

「まだ20回くらいしか蹴ってないんだけど？」

愛衣が腕組みをしながら俺に冷たく問いかけてくる。
「うぐぐ……もうやめてくれ……キンタマ潰れちゃう」
「理恵さんもあんたのリンチ執行を認めてくれたわ。諦めて地獄を味わいなさい」
早希とかゆう気の強そうな女が威嚇してくるが、金玉が痛すぎて立つこともできなかった。
その後登美子と早希に両腕を押さえられ、立ったまま身動きできなくされてしまう。
「な、何をする気だ！？」
「こうするのよ」
『ズブッ！』
「はおうっ！？」
思わず声を上げてしまった。
菅野愛衣が背後から俺のケツの穴に指らしきものを突っ込んできたからだ。

『ズボボボ……グリグリ！』

「ううっ！？　はううっ！！」

痛みと恥辱感に思わず情けない声を出してしまうが更に不憫なことに俺のイチモツが固くなってきやがったのだ。

「どう？　私の中指でのアナル調教は？　あらやだ……勃起してきちゃってるもしかして？」

別にＭっ気があるわけではなかったが、菅野愛衣とかゆうかなりの美少女に直腸内を掻き回されてついつい反応してしまったのだ。

「愛衣さんに先程ペニバンで犯されてた時は勃つことなんてなかったのに……あはは！　彼女の見てる前なのになんて不謹慎なチンポなの？」

登美子がそう言いながら更に俺の右腕を固く抱えてますます動けなくする。

先程のバックでのアナルファックは勃起することなく無理矢理気持ちよくされての強制射精だったが、今度は優しく前立腺を刺激する愛衣の指先についつい勃起反応がでてしまったのだ。

彼女である理恵は頬を真っ赤に染めながら俺の痴態を観察してい

た。
既にこんな惨めな俺への愛情など消え失せているだろう……。

『ギュッ！……シコシコシコシコ』

「うっ!?　や、やめ……」

俺は一瞬息が止まった。
奈百合とかゆう一番上品そうで大人しそうな子が俺の勃起したペニスを右手で握りしめ、いきなり扱き始めたからだ。

「ほうら、照れて頬を赤く染めながら見ている彼女さんの前で他の女に手コキされて射精しちゃお？うふふ♡」

「なっ!?　や、やめてくれっ！！　それだけは勘弁してくれっ！！」

「ダーメ♡　スピードあーっぷ♪　それそれそれそれえっ！」

『シコシコシコシコ！……シュコココココココココッ！！』

「んはあっ！！　ひぃいいいいっ！！」

「ドピュッ！！　ドピュピュピュピュピュピュピュウッ！！」

なんてこった……こんな惨めで恥ずかしい姿を……無理矢理にイ

かされるシーンなんかを理恵ちゃんに見られちゃうだなんて……くそうっ！

俺はつい泣いてしまった。

恥ずかしさからなのか罪の意識からなのか美少女たちに二回も射精させられた悦びからなのか……涙の理由は自分でもよく分からないままであった。

『グリグリ……グチュグチュ！』

愛衣はまだ俺の直腸を指で掻き回し続けていた。

チンポからだけでなく、肛門からも何か液体が流れ落ちるのを感じた。

「あはは。クソまみれのくっさい腸液がドロドロと流れ出してきたよ……」

そう言いながら菅野愛衣はようやく中指を俺の直腸から抜いてくれた。

奈百合は優しさ溢れる笑顔で右手に付着した俺の精液を、俺の腹に何度も擦りつけて拭き取っている。

「最低……」

そう言いながら理恵ちゃんも涙を流し始める。
俺はその場に崩れ落ちて強く目を瞑り、もう全てを無かったことにしたいほどの気持ちから、無理矢理にも現実逃避を始めたのだ。

「キャアッ！？」

ん？　理恵ちゃんは何をいきなり大声だしてるんだ？
俺は現実に戻りゆっくりと顔を上げた。

「やめてえっ！？　いやあっ！！」

目の前で違う制服の理恵ちゃんが愛衣たち四人に無理矢理服を脱がされていた。
どうゆうことだ？
彼女は何も悪くないだろう！？

抵抗する度に愛衣の強烈なビンタを喰らうものだから、ついに諦めてされるがままに大人しく従順になる理恵だった。

「お、おい！　彼女は悪くないだろ！？　やめてやってくれ！」

「一年生の黒崎春奈に命令したのはこの子なの」

え？
愛衣の言ってる言葉の意味が分からない俺はついつい固まってしまう。
「だからね。あんたと別れたいから従姉妹の黒崎春奈にあんたに告白するよう指示したのが佐々木理恵。分かった？だから今から理恵の私刑（リンチ）タイムなの♡」
奈百合が再度優しそうな笑顔をもってして俺に説明してくれた。
机を二つ縦に並べて簡易ベッドを作り、そこに横にされたまま手足を縛られてゆく理恵ちゃんの姿が見えた。
もはやパンツ一枚のみでほぼ素っ裸にされていた。
「な、なんてこった……理恵ちゃんは既に俺のことは……」
「可哀想だねあんたも……でもね。あんたの代わりに今からこの子の処女を私たちが奪ってあげるから！　安心して見ててね？」
同性にそんな酷いことを！？
別にそこまでしなくてもいいよ俺は……。
登美子が最後の一枚のパンツに手を掛けるのが見えた。
「やめて……パンツだけは許して」
「あはは！　じゃあパンツ越しに突っ込んでやろうか？　そっちの

方が遥かに痛いよお？どうする？」

「ひっ！？　痛いのは嫌っ！！　お願いやめて下さいっ！！」

「じゃあ大人しく私たちにマンコ見せようね。ほらあっ♡」

『ズルズルッ！　ストーンッ！』

「やだああっ！！　恥ずかしいっ！！　見ないでえぇっ！！」

登美子は一気に足首までパンツをズリ下ろすと、次に手を出そうとする早希と目を合わせて続きを譲っていた。

早希はボールペンをポケットから取り出すと少し便のこびりついている肛門へゆっくりと突き刺してゆく。

「先ずは臭いお尻の穴にお仕置きしてあげる♡　ほらあっ！」

『ズブッ！　ズボボボボボボッ！！』

「ひあっ！？　やだあああああっ！！　そんなとこに挿れないでっ！？　抜いてええええっ！！」

な、なんで理恵ちゃんが性的リンチ受けてるとこ見ながら俺は勃起してるんだ！？

まじか……な、なんか興奮するぞ女同士って……。

生唾呑みながらチンポおっ勃てながら元彼女が受けている厳しい状況を見て興奮している俺って変態だったのか？

先がボールペンで直腸内を隈なく掻き回して楽しんでいる内に、奈百合は両方の乳を揉みほぐし始めた。
と思えば本気で乳房を平手打ちで連打し始めたのだ。

みるみる内に真っ赤に染まってゆく左右のオッパイだったが、小便を撒き散らしながら号泣を始めた理恵に俺は益々興奮してきて自慰行為を初めてしまったんだ。
なんともお恥ずかしい話ではあるが……。

可愛い顔して優しそうなのに奈百合の平手打ちは加減を知らない強烈なものであったから、紫色に変色して乳首からは少し血が垂れ流れていたほどである。

「うわあああああんっ！！　痛いよおおおっ！！　わああああああんっ！！　わあああああんっ！！」

小便を漏らしてまで泣き喚いている理恵に手を止めることがない早希のアナル責めと奈百合の乳房責めだった。
下手なＡＶ見てるより興奮するぞ……隠された自分の性癖に覚醒しつつあるな俺は……。

「さあ本丸いっくよお？」

『ギュギュッ！　クパァ～ッ！！』

登美子が両手の親指を大陰唇に押し当てながら理恵の性器を思いっきり左右に押し開いていった。

「やん♡　ピンク色の小陰唇と膣がヒクヒクしててかてか光ってるぅ♡」

「すっごくエッチィ～♡」

登美子と早希が頬を赤くして同級生の同性のオマンコ内部を凝視する。

奈百合も胸を叩くのを一度やめて膣内を覗きにきて頬を赤くしているじゃないか……。

なんて卑猥でエロい絵面なんだこれは……。

うっ！？

俺はここで……三度目の射精を、自らの手によって敢行してしまったのだ。

直径3センチ、長さ20センチほどの木を丸くチンポみたいに削って造られた張形みたいなものを手に取る愛衣。

そのまま登美子によって全開に拡張された性器へと押し込まれてゆく。

「いっぺん……おまんこ貫かれてみるぅ？　一気にいくわよ？　ほら……」

『ズチュッ！……ズブブブブブッ！　メリッ！！』

「んぎいっ！？　ギャアアアアッ！！　痛いいいいっ！！！！」

「処女膜貫通完了。更に子宮口貫通……大量の出血を膣口から確認。赤ちゃん造るスペースに到達したわよ？」

愛衣によって一気に根元まで挿し込まれた張形は、処女膜を一瞬で突き破り、子宮口までも貫いて子宮内でようやく止まったみたいだ。

恐ろしいことやっておきながら冷静に淡々と説明しやがって……すごい残酷だな愛衣は……。

ショックで肛門へ挿し込んだボールペンがニュウッと飛び出してくるが奈百合が素早く掴み、再度根元まで突っ込み直すのか？

「早希、私にもボールペンでこの子のアナル掘らせて♡」

「どうぞ。元々アナル責め隊長は奈百合だもんね～。今回はごめんね！　その汚い女の臭いアナル……グチャグチャに掻き回してやってよ♪」

「ありがと♡　いっくよぉ？　えいえいえいえいっ！」

な、な、更にマンコとアナルを同時に激しく出し入れピストンだとおっ！？

う！？　お、俺、ま、また勃ってきたじゃないか……。

愛衣と奈百合による二穴ファックは延々と続けられた。

「理恵さん？　前も後ろも血塗れになっちゃってるわよ？　大丈夫？」

「ひぐうっ！！　はぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃあっ！！　やめて許してお願いですうっ！！　あたし死んじゃううううっ！！」

「あなたは醜い性格の割に綺麗なマンコしてるし……うふふ。このまま子宮ズタズタになるまで掻き回して殺してあげようか？」

『ズボボボボボボッ！！　ズチュチュチュチュチュチュチュッ！！』

「あひひひひひひいっ！？　ひぐうううううっ！！！！」

無理矢理イかされたのか白目を剥いて内股を痙攣させ始める理恵の姿を見ながらまたもや四度目の射精か……。

俺も元気だな……。

ゆっくりと二つの股間の穴から引き抜かれる張形とボールペン。

どちらも赤い糸を引いていた。

愛衣と奈百合はそれぞれ理恵ちゃんの制服で愛液や大便を拭き取りはじめた。

「終わったよ。起きなさい理恵」

『パンパンパンパンパンッ！！　パパパパパパパパンッ！！』

早希がピクピク動いている理恵ちゃんの血と粘液まみれの性器を平手で激しく叩きつけた。
何度も何度も……痛すぎて目覚めるだろうなアレは……。
外性器である大陰唇までも真っ赤にされた理恵ちゃんは目覚めてすぐに号泣。
拘束を解かれて起き上がってからも愛衣によって中指と人差し指をマンコに突っ込まれて掻き回されていた。

「生指での感触も楽しませてね？」

『グチュグチュ……グチュチュチュチュチュチュッ！！』

「ひいっ！　あんっ！？　あはっ！　やっ！　ダメ！イ、イっくううっ！！」

今度は指でイかされたか……一回目の張形と違って気持ちよさそうにしてたな……。
愛衣の最後の挨拶がわりとゆうことか？

「理恵……今月いっぱいで今の高校辞めてココに転校してくるって本当？」

「……うん」

「私たちには敬語使いなさい。卒業まで私たちの奴隷にしてあげる。散々可愛がってあげるわね？」

「ひっ！……は、はい。よろしくお願いします愛衣さん……」

しまった！　また俺の息子がフルボッキ！？

え？　理恵ちゃんはこの学校に転校してくるのか？

そう言えばお父さんの仕事の都合で寮みたいな一戸建てに移るかも、とか言ってたな……。

ふぅ。チンポ痺れてきた……さすがにもう出せないか……。

未知なる性癖への覚醒（後書き）

「はい、制服。自分で着て。それとこれからは私たちのこと“様付け”で呼びなさいね？」

「はい。愛衣様……ぐすん……ぐすん」

「深く抉ったけど赤ちゃん産めなくはしてないから安心して。ほらほら！　早くパンツも穿きなさい」

「はい」

「おい達也」

「はいっ！？」

「しれっとオナニーしながら私たちの私刑見てたみたいだけど……沢木修吉と同じくお前も今日から私たちの奴隷だから。分かったわね？」

「ひっ！？　はっ、はい愛衣様っ！！」

え？
俺何言ってるの？
俺までコイツらの奴隷になるのか？
沢木修吉？
このクラスの既に奴隷化させられてるヤツだな。

「何ぼーっとしてるの？　毎日昼休みと放課後はこのクラスに来なさい。分かった？」

「はいっ！！　愛衣様っ！！」

おいおい……なんてこったこの展開は……。

痺れながらも今後の展開を想像してチンポを勃たせてる俺って一体……？

――――卑劣な手段で恋人を陥れて別れようとした女子生徒には、彼以上の辛い仕打ちが待っていた。

菅野愛衣たちによってとことんお仕置きされてしまった佐々木理恵は、これからの人生、清く正しく生きていくことを心に誓うのであった。

黒霧島高等学校に転校してくる不運も重なり、毎日が猛省の日々となるであろう。

スケバン達の無法地帯（前書き）

度を超えなければ菅野莉央に怒られずに暴力行為を行える。
加減することを覚えた円満愛衣は、黒霧島高等学校で今日も暴れてしまうのであった。
菅野愛衣、東条登美子、西条早希、南条奈百合、スケバン四天王による鬼畜の所業は毎日のように繰り返されるのであった。

スケバン達の無法地帯

「おはようございます。本日は皆さんにお知らせがあります」

朝イチから黒霧島高等学校三年Ｂ組の担任である、細川道枝先生の挨拶が始まる。

静かに頭を下げてからゆっくり顔をあげてクラス全体を見回す転校生。

「佐々木理恵さんです。さあ、挨拶を」

「はい。佐々木理恵と申します。今日から父の転勤の為、この高校に転校してきました。皆さん、よろしくお願いします」

再度深々と頭を下げながら挨拶を終える佐々木理恵。

「えーと……あなたの席は……」

わざとらしくクラス全体を見渡してあたかも今決めたように演技するが、菅野愛衣に強制されて、すでに佐々木理恵の席は決まっていた。

「菅野愛衣さんの前です」

理恵の左側に東条登美子、右側に西条早希、前に南条奈百合、背後に菅野愛衣……スケバン四天王に囲まれるような配置にされてしまう佐々木理恵だった。

「では佐々木さん、席へ着いて下さいね。一時限目の授業を始めます」

静かに授業が始まるが、違和感のある音が響き渡る教室。

『クチュクチュ……クチュクチュ』

粘度のある液体が響き渡るような音……。

「あんっ！　あんんっ！」

『グチュグチュ！　クチュクチュクチュ！』

菅野愛衣は、自分の机を後ろへどかせてから椅子を前に移動させ、佐々木理恵の真後ろに密着させて理恵の股間を右手の指で弄っていた。

パンツの裾から指を忍びこませて理恵の膣内を激しく指マンしていたのである。
中指と薬指が激しく理恵のマンコ内部を掻き回す。
「愛衣様……アソコが痛い……もう許して下さい……」
「はぁ？　何甘えた事言ってんの？　まだまだこれからだよ？」
左手の中指をアナルに突っ込み、二つの穴を激しく掻き回す愛衣。
「あはあっ！？　んぎいいいっ！！　やめて下さい愛衣様っ！！　ごめんなさいごめんなさいごめんなさいいいいいっ！！　やはああいっ！！」
『プシャアアアアッ！！』
潮を噴いてイかされた理恵のパンツは瞬時にびしょびしょに濡れてしまった。
床にまで溢れるほど潮を股間から撒き散らす理恵。
「おい沢木！　床に垂れている理恵のションベンを舐め取りなさい！」
「え！？　あ、は、はいっ！！　愛衣様っ！！」

『ペチャペチャ……ペチャペチャピチャピチャ……』

冷たく薄ら笑いを浮かべながら、佐々木理恵の漏らした小便を必死で舐めとる沢木修吉の姿を見下ろす四人のスケバンであった。

「もうお前ら全裸になれよ」

東条登美子が冷たく言い放つと、逆らう勇気もない二人はそそくさと自ら制服を脱ぎ始める。

「素っ裸で土下座して額を床に擦り付けなさい」

髪型をショートボブに決めている西条早希が続いて命令すると、これにも即従う理恵と修吉。

二人並んで素っ裸で土下座する光景は異様というしか表現の仕方がなかった。

他の生徒たちは、教室後方で異様な行動を繰り広げるこの六人に対して振り返ることもなく授業を続けていた。

「理恵に修吉……どっちのアナルが締まりいいかしら？」

肛門責めが得意な南条奈百合が二人の背後にしゃがみ込み、右手

の中指を修吉、左手の中指を理恵の肛門へゆっくりと根元まで突っ込んでゆく。
髪型は大人っぽく前髪を立ち上げて後頭部で纏めたポンパドール。大人しく可愛い雰囲気とは裏腹に手加減を知らない恐ろしき女子高生であった。

「それっ♡　入るよぉ？」

『ツプッ！……ズブブブブ』

「やんっ！？」

「はおうっ！？」

唐突に差し込まれる異物に対して思わず声を上げてしまう奴隷の二人。

「やだ……修吉の方がかなりガバガバ……私たちに調教され過ぎ！？うふふ♡」

「はひいいっ！　奈百合様……酷いです……」

「だってぇ～。あんたのアナルほんとガバガバじゃんほらぁ～？あははは♡」

そう言いながら更に激しく修吉の直腸を掻き回す奈百合。

「肛虐隊長南条奈百合」

「え？　なにそれ？　そんな愛称酷いですよ愛衣さん……」

「あはははは♪」

愛衣と奈百合の会話に爆笑するスケバンたち……。

『ガボオッ！！』

思わず笑った勢いで手首まで拳ごと捩じ込んでしまう南条奈百合。

『メリメリ……ばしゅうっ！！』

「はぎゃあああああっ！？」

「ほんと加減知らないんだから奈百合ってば……」

呆れる愛衣だったが、こと既に遅かりし。

肛門括約筋を三枚ほど破壊された沢木修吉は絶叫を上げながら肛門から激しく出血をしてしまうハメになる。

「やだぁ。汚い血を飛ばさないでよぉ。あはは♡」

『グリグリ！　ボコボコオッ！！』

「ピギィイイッ！！　死ぬっ！！　死ぬううううっ！！　奈百合様っ！！やめてえええええっ！！　ひいいいいいっ！！」

笑顔で沢木の直腸を拳で抉り倒す奈百合。

無邪気な加減知らずな女子高生の拳で破壊された肛門は、ピクピクと激しく痙攣していた。

腸液と血液をドロドロと垂らしながら菅野愛衣から手当を受ける沢木修吉。

「はい、これで血は止まったわ。消毒もＯＫ。しばらく股間を閉じて大人しくしてるのよ？」

「は、はい。ありがとうございます愛衣様……うええん、うええええん！」

あまりの肛門の激痛に、普通に声をあげて泣き始めてしまう男子高生であった。

「何を安心してるのかな？」

『クチュ！』

「やはあっ！？」

茶髪のミディアムレイヤーに決めている少し吊り目の西条早希が、沢木修吉の隣でホッとしている佐々木理恵の膣を責め立てる。

「ほらほらほらあっ！アナルは締まりあってもマンコは緩いわねえっ！？……お仕置きが必要だわ」

「ひいっ！？　お願いです！　許して下さい早希様っ！！」

『グボオッ！　グチュグチュ！　メリメリ！』

「ひんぎいいいっ！！　痛いいいいいっ！！」

子宮へ指先が届く。
手首まで強引に陰部へぶち込まれた早希の右手だった。
子宮頸部を中指で激しく擦り付けると、激痛のあまりに失神してしまう理恵。

長く美しい黒髪をかきあげながら菅野愛衣がしゃがみ込む。
そのまま超強烈な張り手を理恵の臀部に打ちつけた。

『パァンッ！！！』

「はぎいいいいっ！？」

瞬時に目を覚ます理恵だったが、みるみる内に愛衣の手形が臀部に真っ赤に浮かび上がる。

『ビリビリビリビリ』

強烈過ぎてしばらく痺れた感覚が襲い続ける。

「あーんあーん！　痛いいいっ！　痛いよおおっ！！　うぇえーんうぇえええーん！！」

「うぉーん！　うぉーん！」

隣では沢木修吉も号泣している。
奴隷二人が素っ裸にされたまま号泣しているが、先生と他の生徒たちは完全に見て見ぬふりを敢行していた。
とばっちりを恐れてのことであった……。

「細川先生」

「……」

「細川道枝っ！！」

「は、はいっ!?」

恐怖のあまり一度無視してしまったのが愛衣の逆鱗に触れてしまう。

「先生、ちょっと後ろへ来てくれる?」

「え?　あ、は、はい!」

怯えながら授業を中断して菅野愛衣たちのいる教室後方へゆっくり歩いてゆく細川先生。

「今から沢木を射精させろ」

「え?そ、そんなこと……」

「できないの?　直腸引きずり出してほしいのかな?」

「ひいっ!?　わ、わかりました!!　やらせてください愛衣様っ!!」

「分かればいいよ。手じゃなくて足コキ」

「え?」

「え?じゃない!　足の裏で擦り付けて射精させるの!　一分以内

に沢木が射精しなかったら……ケツから手を突っ込んで脳みそ引きずり出してあげるわ」

無茶苦茶な内容だが細川道枝先生にとって恐怖でしかない四人のスケバンたち……。

本気で怯えながら沢木修吉の前に立つ。

「ほら、沢木！　仰向けに寝てチンポを晒しなさい」

「は、はい愛衣様……」

手で隠していた陰部をそっと晒けだし、細川道枝先生に身を任せる沢木修吉。

「ごめんなさい沢木くん。ほんと先生を許してね。ごめんね」

「いいです。この人たちには逆らえませんから……覚悟はできてます」

スリッパを脱いでゆっくりと沢木修吉のペニスへ足の裏を乗せる細川道枝先生。

そして少しずつ前後にスライド運動を開始する。

『スコスコスコスコ……』

「んっ！？　あっ！」

不本意ながらもかなり年上の担任の足コキで感じてしまう沢木修吉だった。

「んんんっ！」

「……おい沢木！　なに担任のオバハンなんかの足コキで感じてるの？殺すわよ？」

西条早希が目を細めながら威嚇するが、細川先生の足コキは絶妙な力加減と速度で沢木の快感を激しく高めてゆく。
やがて絶頂を迎える時が来た。

『スコスコスコスコ』

「わあああっ！！　せ、先生っ！　イくっ！　イっちゃううううっ！！」

「いいわよ。イって。沢木くん」

『ドピュッ！！　ドピュピュピュピュピュピュウウウッ！！』

夥しい量の精液を四十代の細川先生の足の裏にへリかける18歳

の沢木修吉であった。

「ご、ごめんなさい先生」

「いいわよ。たくさん出してくれてありがとう沢木くん……先生も助かったわ」

その時だった。
昼休みのチャイムが鳴り響く。
慌ててクラスを出てゆく他の生徒たちに入れ替わり、三年Ｃ組の西田達也が入ってきた。

「や、約束通り来させていただきました……」

「本当に来てくれたのね達也」

「は、はい！　愛衣様のご命令なら何でも聞きます」

すっかりＭに目覚めてしまった西田達也は、言われる前に自ら素っ裸になり、愛衣たち四人の前で土下座した。

「挨拶がわりに私たちへアナルを見せて」

南条奈百合が頬を赤くしながら命令すると、素早くM字開脚体勢に座り込むと、両手でパックリ脚を開いて肛門を見せつけた。

「肛門を……指で押し開いて直腸まで見せなさい」

更に欲求を満たす命令を続ける奈百合。

「はい。僕の直腸見て下さい奈百合様」

『クパァ～』

「やだ……ヤラしい～♡」

自分で命令しておきながら頬を真っ赤にして興奮している奈百合に半ば呆れながら愛衣が一歩前に出る。

「いい具合に勃起してるじゃん？　沢木」

「は、はい愛衣様。お、俺、もうなんか愛衣様たちに責められるのに興奮を覚えてしまって……これからも虐めて下さい……」

しばらく冷たく微笑みながら西田達也の顔を眺めていたが激しく往復ビンタを何度も喰らわせ始める愛衣。

「私に叩かれて更にバッキバキに勃起しちゃってるじゃん？　あはは♡」

「い、痛い……お、俺ってやっぱ変態なんでしょうか……」

「うん。立派な変態だよ。変態ついでに沢木のアナルを犯すんだ」

「え！？　お、俺、男は無理……」

そう言って立ち上がった刹那、南条奈百合の中指が西田達也の肛門へめり込んだ。

激しく掻き回すと、意図に反して再びビンビンに勃起してしまう西田達也。

東条登美子と西条早希が沢木修吉を抱え上げて四つん這い体勢にさせる。

南条奈百合が肛門へ指を突っ込んだまま強引に沢木の背後に移動させ、沢木のアナルへ西田のペニスを当てがわせた。

「ほら、同性のアナルへチンポを突っ込め♡」

奈百合がイヤらしそうな笑みを浮かべながら命令する。

『ズブ……ズブブブブ！』

「うわあっ！？　男になんかハメちゃった！？」

『ズポンッ！！』

沢木の菊門に根元までぶち込まれる西田のペニス。

「痛いいいっ！？　はうううううっ！！」

「わあああっ！？　す、すまないっ！　俺だって同性になんか入れたくねぇんだが……」

菅野愛衣が腰に手を回して激しく強引に西田の腰を振らせた。

「擦れたら気持ちいい事には変わりはないよ。男だろうが女だろうが穴は穴だから♡」

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「はぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃあああああっ！！！！」

『ドピュッ！！　ドクドクドクドク……』

「す、すまん！　男のケツでも……き、気持ちはいいもんなんだな……」

「はひいいいい……」

同性の精液をタップリ直腸に注ぎ込まれた沢木がうつ伏せにグッタリと崩れ去る。
肛門からペニスが引き抜けると同時に何度も謝る西田達也。
「ごめん！　ほんとごめん！　同性に中出ししちゃうなんて……お、俺、ほんと謝るよ……」
爆笑しながら同性同士のアナルセックスを堪能して爆笑している四人のスケバンたち。
「沢木！　女教師に足コキされて射精して……同性に犯されて中出しされて……情けないわねぇほんと……」
「ご、ごめんなさい愛衣様……」
「足でイかせてくれた細川先生のマンコを舐めてお返しをしなさい」
「は、はい」
細川道枝先生の性器をひたすら半時間も舐め続けて愛液を啜りまくった沢木修吉。
今度は西田達也のペニスを咥えさせられる。

「ほら、あんたの汚いアナルを掘ってくれたペニスにご奉仕しなさい」

「うむうっ！　むぐうっ！！　ペチャペチャ……ペチャペチャ」

愛衣に髪を掴まれながら必死で同性の西田達也のを咥えさせせられてファラチオ沢木修吉。
愛衣の手は激しく前後にピストンされてゆく。

「ほらあっ！　喉の奥まで咥え込めよ？　うふふ♡」

そのせいで激しいイラマチオに変化していった。

『ガボッ！　ガボッ！　ガボッ！　ガボッ！』

「おええっ！！　おごごごおっ！！　むんぐうううっ！！」

「うっ！　き、気持ちいい……男に舐められてもこんなに気持ちいいなんて……イ、イくっ！？イくううっ！！」

西田達也の精液を喉元に大量に注ぎ込まれた沢木修吉は思いっきりむせながら何度も嗚咽をするほど苦しむ。

「おえええっ！？　おええええっ！！」

「沢木！　せっかくの西田のザーメン……吐き出したりしたらもう一つのキンタマも潰しちゃうわよ？」

過去に南条奈百合の手加減を知らない足蹴りで、睾丸を一つ潰されてしまっている沢木修吉。

もう一つだけは結婚して子供をつくるまでは絶対に失いたくなかった。

必死で精液を飲み込んで奈百合に媚びる。

『ごっくん！　こ、これでいいですか？　奈百合様……右の玉だけは潰さないで下さい……』

「いいよ。よく飲めたわね同性の汚い精液なんて……あはは！　この変態♡」

執拗なるスケバン四人のリンチも終わりを告げ、放課後を迎える。

「細川道枝！　西田達也とセックスしなさい」

「ひいっ！？　教え子と！？　そ、それだけはご勘弁を愛衣様！」

歪に顔が歪むほど殴打された後、無理矢理西田達也と性行為をさせられる細川道枝。

『バッコンバッコンバッコンかバッコン！！』

「ああっ！？　あんっあんっあんっあんんんっ！！」

「せ、先生イくっ！！　イっくうううっ！！」

「あんっ！　あんっ！　だ、ダメよっ！　出さないでええっ！　あんんっ！！」

『ドピュッ！！　ドクドクドクドクッ……』

四十代の先生に中出ししてしまった西田達也。

二人はその場に崩れ込んでしまう。

「よくできました細川先生に西田達也」

生徒たちの前で泣き崩れる担任の細川道枝。

「先生、仰向けに寝てＭ時開脚してくれる？」

「な、なにを！？　もう許して下さい愛衣様……」

銀色に鈍く光る巨大なクスコを鞄から取り出して不適な笑みを浮かべる愛衣。

「どれだけセーエキ溜まってるか子宮の奥まで検査してあげるの」

「ひっ！　そんな大きくて太い器具……だめ！　私の股間が壊れちゃう」

東条登美子と西条早希が両手を押さえつけて無理矢理仰向けに押し倒すと、南条奈百合がM時型に両膝を立てて左右に大きく股を開かせてゆく。

「せんせーの臭マン……みんなにみてもらお？　ほーら、ご開帳♡」

『ギュギュッ！』

南条奈百合は冷たく笑みを浮かべながら先生の性器が全開に開くほど大きく股を開脚させた。

『クパァ～』

大きく開かれた膣口からは数本の透明の糸が引いている。
トロトロと白い精液も溢れ出してきた。

「それだけ濡れちゃっててよく言うよ先生……はしたないマンコにはお仕置きしちゃうからね？」

「ヒッ！！　や、やめて下さいいいいっ！！」

『つぷっ……ズププププププッ！！』

「痛いっ！？　いやああああっ！！」

髪を振り乱しながら泣き喚く細川道枝先生の膣に、容赦なく捩じ込まれてゆく巨大な銀色の鉱物。

『メリメリメリ……バリバリ！』

奥に突っ込むほどに一緒に奥まで巻き込まれてゆく小陰唇が裂傷を起こし、悲鳴をあげる。

血と愛液と精液が入り混じって垂れ流れてきた。

「ほら、子宮の奥まで突っ込んで強引に開いて中身見せてもらうわよっ？　えいいいっ！」

『グボオッ！！　グチュグチュグチュッ！！』

「んぎゃあああああっ！！　死ぬうううっ！！」

『ぐぱあ〜〜！！　ぷるるんっ！！』

精液まみれにされながらクスコを突っ込まれた振動で子宮全体がプルプル揺れているのが丸見えになる。
秘部の奥の奥を丸見えにされた細川道枝先生は痛みと恥ずかしさのあまりに気を失ってしまった。

「すっご～い♡」

「ネバネバぬとぬとしてる感じだね？マンコの奥って……」

「マンコの奥って……子宮だし」

スケバンたちは好き勝手な意見を述べ合いながら先生の子宮を観察していた。

「もういい？」

全員に確認してから愛衣はゆっくりとクスコを閉じて、優しく膣から引き抜いた。
裂けた左右の小陰唇がビクビクと痙攣している。

「あはは。ヒダヒダがヒクついてるよ♡」

「よほど痛かったのね。アーメン」

「ごめんね先生。でもこれからも毎日私たちが虐めてあげるからね」
「だってさ。みんな先生を虐めたくて仕方ないって感じ。諦めて毎日マンコの奥私たちに見せなさい。分かった？」
意識が戻ったばかりの少し朦朧とする中、泣きながら返事をする細川先生。
「はい。私を無茶苦茶にして下さい……愛衣様」
「Mに目覚めちゃったのね先生も……可愛い♡」

スケバン達の無法地帯（後書き）

担任の細川道枝先生を含め、同級生の男女……少しずつ性奴隷を増やしてゆく愛衣たちであった。

きっと世の中にはSとM……強者と弱者が必ず存在するものである……。

同級生男子のアナル開発（前書き）

拷問処刑人たちのいるクラスでの愚行。

当たり前の運命が一人の男子児童に降り注ぐ。

同級生男子のアナル開発

「やめてあげて！　実はあたし、貴文くんのことが大好きだから！　お願い菅野さん！」

実は清家貴文と付き合っていたことを告白して必死で許しを乞う町田美知瑠。

赤霧島小学校に通う拷問処刑人、兼アイドルである菅野莉央と富田美香、結城明日香に放課後リンチを受けている小学六年生の男子児童、その子が清家貴文１２歳であった。

彼女である美知瑠の願いも虚しく、莉央は貴文の顔面をゲンコツで殴りまくる。

夥しい量の鼻血が床に飛び散るが、構うことなく殴り続ける莉央。

「わあああんっ！　痛いよおっ！　やめてよっ！　わあああんっ！！」

結城明日香は頭を思いっきり足の甲で蹴飛ばす。

横に吹っ飛んで倒れ込んだ所を富田美香が顔面を踏みつけてグリグリと床に擦り付けるのであった。

瞼を晴らして鼻から血を流しまくり、号泣しながら女子小学生三人に許しを乞う清家貴文。

もちろん内緒で付き合っていた彼女である町田美知瑠も、一緒に莉央たちに許しを乞い続けている。

ズボンのベルトを外し、性的いじめの準備に入る莉央。

床に仰向けに寝かせたままで、一気に制服である短パンをずり下ろすと、間髪入れずにパンツに手をかける。

「やめてぇえっ！！　菅野さんっ！！　お願いだからそれだけは残してあげてえっ！！」

「ダメ。コイツは神田彩月ちゃんのお尻に触ったの。彼女のあなたが見てる前でお仕置きをさせてもらう」

「そ、そんな……あたしでよかったら貴文くんの代わりにお仕置き受けるから！　だからやめてあげてお願い！」

美香と明日香に身体を押さえつけられ、莉央にパンツを脱がされてゆく。

「ダメだよ。清家自体が二度と女の子に嫌な思いをさせない為にもお仕置きは敢行するから。きちんと見ててね？」

『ズルズル……ズルリ』

「わあっ！？　や、やめろおおっ！！」

ついに下半身のみ素っ裸にされた清家貴文の皮かむりのペニスが莉央たち女子児童の眼前に晒される。

「きゃー！！　やめてあげてよ変態っ！！」

抵抗するたびに顔面を殴りつける明日香と美香。
もう抵抗する気力も失い、ただただ涙を流しながらじっとしている貴文だった。

莉央はそっと右手の人差し指を股間に近づける。

『ツプ！』

「わあっ！？　やめてくれえっ！！」

1センチほど貴文の肛門へ指を突っ込んでから町田美知瑠の表情を窺う莉央。

「今からコイツ……犯すからね？」

「え？　女の子が男子を犯すなんて間違ってる！　絶対やめて菅野さん！！」

半ば怒りを顕にしながらも止めようとするが、菅野莉央には全く効かなかった。

次の瞬間には莉央の人差し指は貴文の肛門へ根元まで突っ込まれていた。

更にぐりぐりと掻き回されている。

「痛いっ！　痛いいいいっ！！　ひいいいいいっ！！」

『グリグリ！……ぬぷぬぷ！』

「締まりがいいのね……あんたの肛門……ガバガバになるまで調教してあげるから覚悟してね？」

「え？　ちょ、調教って何？」

莉央にアナルを掻き回されながら不思議そうに問いかける、何も知らない１２歳の男子児童であった。

頬を真っ赤に染めて恥ずかしそうに見つめる町田美知瑠の前で１２歳の男の子はアイドルである同い年の女の子によって調教されてゆく。

『グチュグチュ！　グプグプ！』

既に莉央の指四本が、直腸内に全て突っ込まれていた。

グチュグチュと卑猥な音を教室に響かせながら莉央に掘られ続けるピンク色の肛門であった。

貴文の肛門から腸液が床に流れ出て、辺りを変な匂いに染める。

「痛いっ！！　やめてええええっ！！」

ついに涙を流して号泣し始めるが、莉央の指で肛門括約筋はゆるゆるに調教されつつあった。

ついに親指まで捩じ込み、拳全てが清家貴文の直腸内に埋まり込んだ。

「ほら、全部飲み込め」

『グポオオオッ！！　メリメリ……ボコオッ！！』

「ひぎいいいいっ！！　わああああっ！！　いだいいいいいいっ！！！！」

莉央のフィストファックが、激しく何回も繰り返されてゆく。腸液に混じり、避けた肛門からの鮮血が床に流れ落ちてきた。

『ボコッ！　ボコッ！　ボコッ！　ボコッ！』

「ガバガバになっちゃったね？あんたの肛門……彼女の町田さんに

見られながら同級生の女子にアナル掘られる気分はどう？」

「ひ、ひいい、や、やめてください……痛いいい」

「やめてよおおっ！　酷いよおおっ！　貴文くん苦しんでるからやめてあげてええっ！！　わーんわーん！！」

彼氏の惨めな姿に号泣して許しを乞う町田美知瑠。

莉央に前立腺を掻き回されて、激痛のあとに快感を与えられた清家貴文のペニスは小さいながらもいきり勃ってきていた。

富田美香が目を細めてペニスを握り、町田美知瑠の目を見ながら問いかける。

「彼氏を射精させてあげるね？　ようく見てて」

射精の意味が分かってない美知瑠は泣きながらも不思議そうに首を傾げる。

『シコシコシコシコ！！』

「な、なんて事を！？　そんなそんなに擦ると痛いよっ！？　富田さんお願い！！　やめてあげてええっ！！」

菅野莉央の拳でアナルを豪快に犯されながら、強引に勃起させられたペニスを富田美香にシゴかれる清家貴文。

「あっ！？　あううううっ！！」

頬を真っ赤にして腰を振り始める貴文を見て、一気に恥ずかしくなる美知瑠であった。

「貴文くん？……まさか富田さんにオチンチン擦られながら気持ちよくなっちゃってるの？」

「あうあう……んん」

頬を赤くしながら更に腰を自ら激しく振り続ける貴文。

「ほら！　あたしたちに犯されながらアへ顔しなさい」

「あっ！　あっ！　はうっ！　はあうっ！　アヘッ！！」

ついに涎を垂らしながら莉央にアナルを掘られながら美香にペニスを扱かれながらアへ顔になる清家貴文。
結城明日香も加わり睾丸をグリグリと揉みしだき始めた。

「アヘアヘエッ！！　な、なんか股間全体が変な感じ！？　気持ちいいっ！！　んあぁああぁあっ！！」

『シュココココココッ！！』

「アヘアヘ言ってないでイけぇええぇっ！　ほらあっ！！」

美香は秒速5回にもいたる超高速で貴文のペニスをシゴく。

「んあああぁぁぁあっ！？　あへへへへええっ！！！！」

『ドピュッ！！　ドピュピュピュピュピュピュッ！！』

白い粘度のある液体を大量に尿道口から吐き出す貴文に、思わず声をあげて驚いてしまう美知瑠。

「キャアッ！？　な、なに今の！？」

「セーエキだよぉ♡」

富田美香はイヤラシそうに微笑みながら右手にこびりついた貴文の精液を貴文自身の腹部に擦り付けて拭き取る。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ」

「あたしたちにお礼の言葉は？」

莉央は肛門から引き抜いた便と腸液と血に塗れた右手を清家貴文の頬に擦り付けながら問いかける。

「菅野様、富田様、結城様……気持ちよくさせて頂いてありがとうございました……僕は一生女子たちの奴隷になります」

「よくできました。矢野委員長！　トドメにあなたの電気アンマで二回目の射精をさせてあげて」

「うん。これで清家も二度と神田さんのお尻触ったりできなくなるよね？ほら、清家！　股を開いて力を抜くの！」

「は、はい！　弥生様……」

六年三組の委員長である矢野弥生がそっと貴文のペニスへ足の裏を密着させる。

ゆっくりと始まる電気アンマ。

『スコスコスコスコ……』

「んんんっ！？　あはあっ！　いい、気持ちいいいっ！！」

「そう？　もう彼女である町田さんとは別れなさいよ？　私たちに二度も恥ずかしい射精させられたら付き合っていけないでしょ？」

「は、はい……弥生様」

「とゆうわけだから……本日で町田さんと清家はお別れだよ？　分かった？　町田さん」

「う、うん。他の子のお尻触っただけなら別れたくなかったけど……菅野さんたちや委員長の女子たちからの性的イジメに興奮しちゃってる姿に興醒めしちゃった……私も菅野さんたちと一緒に男子虐めるのに助太刀するよ今度から……」

矢野弥生の電気アンマに二度目の射精を終えた清家貴文はしばらく泣いた。

女子にリンチされながらも興奮して射精してしまうシーンをクラス全員に見られた後……ひたすら泣き続けた。

次々と下校を始めるクラスメイトたち。

「わーんわーん……しくしく」

「まだ服を着ちゃダメだよ？四つん這いになってお尻を突き上げなさい」

矢野弥生と菅野莉央、富田美香、結城明日香のリンチは更に続けられた。

四人全員から交互に拳を肛門に突き入れられ、更にアナルをガバガバに調教されてゆく男子児童の姿があった。

「臭くてヤラしい腸液ダラダラ垂れ流しちゃって……そんなに後ろの穴が感じるの？」

矢野委員長が激しく拳を出し入れしながら囁きかける。

『グッチュグッチュグッチュグッチュ！！』

「あんっ！　あはっ！　ひぎっ！　やはあっ！」

激痛を通り越してよほどの快感なのか、アへ顔で涎を垂らしながら自ら激しく腰を振りながら弥生の拳で犯される貴文。

「委員長も前立腺責め上手くなってきたじゃん」

「あはは……菅野さんたちに比べたらまだまだだけどね……」

「男子をアへ顔にさせるのって楽しいよね？」

「うん。全身ヒクヒクさせながら前立腺の快感に耐える姿がたまらないよ」

Ｓっ気を顕にさせる矢野弥生委員長。

六年三組の女子の結束力とエッチ度は菅野莉央たちの影響もあり、更に急上昇してゆくのであった。

同級生男子のアナル開発（後書き）

清家貴文とゆう一人の男子児童がトラウマになるほどのリンチをどうきの女子から受ける。

本人はMに目覚め、莉央たちによる性的虐待はもはや性的快楽サービスと化してしまう。

清家貴文はこの後何度も自宅で四人の女子生徒たちの顔を思い浮かべながらオナニーを繰りかえす日々を送るのであった……。

気持ちの変化（前書き）

無謀な戦いを挑む少女。
当たり前の結果を当たり前に受け入れるハメになる。

気持ちの変化

「秋山沙也加……噂には聞いたことあるな。タイマンはいいけど……もしあたいに負けたらわかってるよな？」

「あ、ああ！　お前をやらなきゃあたしは蔭山さんに恩を返せないんだ！　いくぞ！　咲良」

アイドルであり、極北女子中学校の番長である宮垣咲良。

下校中にワルだらけで有名な下沢中学校の三年生、秋山沙也加に喧嘩を売られていた。

「そこで見ている彼氏もタダでは帰さないから。いいんだな？」

「そもそも負けるつもりはないさ。死ね咲良っ！　オラァッ！！」

五分間の激闘の末に、全ての攻撃をかわされ、咲良にボコボコに顔面を殴られて別人のようになってしまった秋山沙也加。

「こ、これが宮垣咲良……っ、強すぎる……すみません蔭山さん……良弥もすまんな……」

下沢中学校一年生の狭山良弥は、目の前でボコボコにされた最愛

の彼女である三年生の秋山沙也加の側に駆け寄り、必死で声をかける。

「沙也加さんっ！　大丈夫！　しっかりしてっ！！」

咲良は狭山良弥の横にしゃがみ込み、そっと囁きかける。

「彼女をこれ以上傷付けたくないなら……ズボンとパンツを脱げ」

「え!?　そ、そんな……沙也加さん以外の女に俺のチンポ見せたくないよっ！」

「良弥！　咲良の言うことを聞くのよ！　あたしはタイマンに負けたから……お願い！　あたしのために大人しくしてて」

最愛の彼女である沙也加に懇願されて絶句する良弥であった。

「うん。分かった。咲良さん……あなたの言う通りにするからこれ以上沙也加さんに手を出さないで！」

「いいよ。なら早く下半身裸になれ」

「は、はい」

中学二年生の他校生徒である宮垣咲良に言われるがまま、一年生の狭山良弥はズボンとパンツを手際よく脱いでゆく。

咲良の右腕である極北中学二年生の渋谷凪子が下半身スッポンポンになった良弥を四つん這いにさせる。

「ケツを突き上げて力を抜きなさい」

「は、はい……」

『ツプ……』

「ひゃあっ!?　や、やめっ……」

渋谷凪子は人差し指を四つん這いにさせた狭山良弥の肛門に突き挿した。

「オラッ!　じっとしてないとお前の彼女の沙也加のマンコ……ずたずたに破壊するぞ?　良いのか?」

「ひっ!?　や、やだそんなの!　分かりました!　じっとしてますうっ!」

『グププ……ヌプヌプヌプヌプ!』

「んああ!　んんんっ!」

渋谷凪子に散々直腸を掻き回された良弥は、前立腺の刺激によるあまりの快感に思わず四つん這い体勢のまま勃起してしまう。

冷ややかに笑いながら良弥の肛門から人差し指を引き抜くと、今度は宮垣咲良が良弥を立ち上がらせた。

そのまま渋谷凪子に勃起させられたペニスを右手で掴み、ゆっくりとシゴき始める宮垣咲良。

「なんだこれは？　んん？」

「はあっ!?　ううううっ！　や、やめてっ!!」

「やめてだと？　気持ち良いんだろ？　あたいが彼女の見てる前で射精させてやるからな？」

「そ、そんなっ!?　や、やめてお願いだからっ！　咲良さんはアイドルなんでしょ!?　そんな酷いことしないでよっ!!」

『シコシコシコシコシコシコシコシコ!!』

激しくシゴく速度を上げながら良弥の耳元で囁く咲良。

「アイドルでもエッチなんだよ。最愛の彼氏を目の前で他の女にイかされる……あはは♡　なんて興奮するシチュエーションなんだ！」

「そ、そんなぁっ！　き、気持ちいい……イ、イっちゃう！　ひいいっ！！」

「ほらあっ！　彼女の目の前でイけぇえええっ♡」

『シュコココココココッ！！』

「イっくううううっ！！　ごめんなさい沙也加さんっ！！　あああああっ！！」

『ドピュッ！！　ドピュピュピュピュピュピュピュピュウッ！！』

咲良と沙也加がタイマンを張った公園の砂場に、沙也加の彼氏である秋山良弥の精液が撒き散らかされる。

他の女に手コキでイかされるシーンを見せつけられた沙也加は、ボコボコに変形した顔のまま号泣して崩れ落ちた。

「わああぁーん！　良弥っ！　良弥あああああっ！！　わあああああああんっ！！」

「あたいに彼氏を手コキでイかされるシーンを見せつけられて、そんなにショックだったの？」

右手に付いた精液を、良弥本人に無理矢理舐めとらせながら沙也加に問いかける咲良。

「咲良さんはアイドルなんだ。手コキでイかされて光栄に思えよ？」

再度良弥の肛門へ人差し指を捩じ込みながら良弥へ話しかける渋谷凪子。

更に勃起してくる良弥を今度は電気アンマで射精させる咲良。

咲良のスニーカーの裏に、タップリと精液をへりかける良弥の姿を見て、更に号泣する沙也加であった。

『グリグリ……グリグリ』

「ひぃいいっ！？　痛いいいいっ！！」

仰向けに寝かせた良弥のペニスを足の裏でこねくり回す咲良。

「彼女の見てる前で情けないなぁ。このまま足の裏でチンポとキンタマすり潰してやろうか？」

「んひぃっ！！　や、やめてください！」

「お願いするときはなんて言うんだ？　んん？」

「さ、咲良様、お願いですから僕のオチンチンと金玉を……潰さないでください……どうか許してください……」

「ふぅん。やればできるじゃん良弥」

そっと足の裏をペニスから解放する咲良。
足の裏には糸を引くカウパー液が光っていた。

「今からあたいたちが見てる前で彼女とセックスしろ」

「そ、そんな……許してください咲良様……」

「出来ないなら女のマンコと肛門をカッターで切り開いて繋げてやるからな？」

渋谷凪子がチャキチャキと音を立ててカッターの刃を全開に出す。
脅されながら無理矢理正常位で性行為に及ぼうとするがなかなか勃起出来ない良弥だった。

「ほらあっ！　勃起させろよ早く！」

『ズブッ！　ズボボボボボ！』

「はうああっ！？」

良弥の肛門へボールペンを一気に半分まで突き刺す渋谷凪子。
グリグリと直腸を掻き回す。

「ほらほらあっ！　前立腺掻き回してやるから早く勃起させてみろよおっ？　あはははは♡」

「ひいいっ！　凪子様っ！　き、気持ちいいですうっ！！　んあああああっ！！」

渋谷凪子に無理矢理勃起させられた良弥は、一気に彼女である秋山沙也加の膣にイチモツを根元まで挿し込むと、激しく腰を振り始めた。

『ズチュッ！！　バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「あっ！　あんんっ！　りょ、良弥っ！！　気持ちいいっ！！」

タップリと中出ししてしまった良弥は沙也加の膣からペニスを抜くと何度も沙也加に謝った。

「ごめんなさいごめんなさいっ！　中に出しちゃってほんとごめんなさいっ！！」

「い、いいよ良弥……どんなことがあっても私を離さないでね」

「う、うん。絶対離さないよ沙也加さん」

臭い恋愛映画みたいなセリフを聞かされた宮垣と渋谷凪子は一気にしらけてしまい、二人に服を着ることを許して家に帰させた。

――――一ヶ月後、残酷処刑島。

「まさかあなたが彼女を殺すことができるだなんて……」

「別れようと言ったのに受け入れてくれなかったんだ！　新しく出来た俺の彼女をイジメにかかったからつい……集団で袋叩きなんて酷すぎる！」

「……あなたを愛していた沙也加さんを裏切ることの方が酷すぎない？　妹と共謀して殺害だなんて……妹も妹だわ」

「誰を好きになろうが愛しようがそんなの自由だろ！？　文句言われる筋合いはないよ！　狂ったように怒りながら毎日電話をかけてくるし……あまりにしつこかったから殺すしかなかったんだ……」

菅野莉央は黙ったまま鋭利に研ぎ澄まされた短刀を右手に持ち、立ったままで素っ裸で拘束されている狭山良弥に近寄る。

「今から秋山沙也加を殺害した罪で……狭山良弥１３歳と妹の狭山愛梨１１歳を処刑します」

「な、なんだと！？　冗談はやめてくれ！　愛梨まで処刑だなんて！　妹の愛梨はまだ小学生なんだぞ！？」

ツインテールの少女、鬼頭美紅が莉央に変わって良弥に答える。

「小学六年生だね。でも沙也加さんを殺す計画に協力した罪は決して許されないよ？　ここで兄妹揃って死んでもらうから。あなたは菅野莉央によって処刑される。あたしは妹の愛梨を処刑するわ」

中学二年の拷問処刑人である鬼頭美紅が妹の小学生、愛梨の処刑を宣言した。

日本刀を持って愛梨の肛門へ切っ先を突き入れる鬼頭美紅。

「妹の愛梨は……お尻の穴から一気にいくわよ。まだ小学生なのにごめんね！　ほらっ！」

『ズッ！　ズブブブ！』

「んぎゃあっ！？　いだいいいいいっ！！　助けてお兄ちゃんんんっ！！」

「お兄ちゃんも後から送ってあげるから……安心して先に逝きなさい。　えいっ！」

『ザシュッ！！』

「ひぎいいいいいいっ！！」

美紅の日本刀は一気に小学六年生の少女、愛梨の肛門から口へ貫通した。

ビクビクと激しく痙攣する妹の愛梨。

運良くショック死ができたようだ。

運が悪ければ串刺しにされても数時間、数日間も死ねない人もいる。

愚かな兄に頼まれての愚行だけに少し楽に処刑してやろうとゆう美紅の情けもあったのかもしれない。

「愛梨っ！　愛梨いいいいいいっ！！　わあああああああっ！！」

妹の串刺し刑を目の前で見せつけられた兄の良弥が、狂ったように泣き叫ぶ。

口と肛門から夥しい量の血液を噴き出しながら昇天する妹の姿はとてつもなく哀れであった。

肛門から引き抜いた日本刀を今度は膣へ刺しこむ美紅。

「処女のまま死んだんじゃ哀れすぎるから……くっさぁ～いバージンマンコも串刺しにしてやる」

『ザシュウッ！！』

今度は性器から刺し込まれた日本刀が同じく口から突き出てくる。

性器と肛門の間にある会陰部までパックリ切り裂かれ、股間は一つの大きな穴のようなワレメとなってしまった。
小さなクリトリスと、尿道口までも無惨にも真っ二つになっていた。

白目を剥いて激しく痙攣する妹の姿は、兄である良弥にとっては人生で最悪の場面であった。
そのまま同じく一気に膣から引き抜くと、今度はその日本刀で首を切断に入る美紅だった。

「あはは♡　マンコとケツ穴が繋がっちゃったね？　ごめーん♡」

股間の大きく切開されたワレメから血を噴き出しながら、首を切断された愛梨。
その生首を思いっきり蹴飛ばして崖下へ転がり落としてしまう美紅だった。

「なにゴロゴロ転がってきてあたしのパンツ覗いてんの？　メスガキの生首め♪　えいっ！」

『ガツッ！　ゴロゴロゴロゴロ……』

首の無い妹の遺体を四つん這いに机に縛り付け、股を開かせる。

「ほら、首の無い妹の遺体を後ろから犯すのよ」

肛門とマンコを串刺しにして、更に首を切断して殺した妹へ死姦を強要する鬼頭美紅。

「な、何を言ってるんだおまえは！？　首を落とされた妹を犯せだと！？　正気か！？」

「二つの穴が繋がってガバガバになっちゃってるけどね……うまく射精できないと酷いお仕置きが待ってるわよ？　うふふ♪」

「美紅ちゃんの説明よく聞いた？　ほら、あたしが協力してあげるから。オチンチン勃たせてみなさい。レッツ勃起チャレンジッ♡」

小学六年生である拷問処刑人のリーダーである菅野莉央が、良弥のペニスと睾丸を優しく揉みしだく。
更に強制的に勃起させる強力な薬を会陰部に注射する。
半ば強引に勃起させると、そのままバックで首の無い妹と性行為させることに成功したのであった。

「ほらあっ！　もっと激しく腰をふれえっ！」

「は、はうっ！　はいいっ！！」

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

『ドピュッ！！　ドピュピュピュピュピュピュピュピュピュウッ！！』

首の無い妹の膣内に中出ししてしまう良弥だった。

「どう？　直腸も膣もグチャグチャになった妹を犯した感想は？　締まりが悪かったでしょ？　でもね、子宮も穴開いちゃってるから妊娠の心配もないよ？」

真顔で問いかける莉央に爆笑する美紅。

「あはは！　首もないのにそもそも妊娠なんてしないから莉央ちゃん！」

「そだね。あなたのセーエキとこの子の愛液と……オシッコと便まみれのオチンチン……臭いなぁ。この悪臭には仕置きが必要だね」

「わーんわーん！　ごめんよぉーっ！　愛梨いいっ！！　わーんわーん！！」

ローションで右手をネトネトにしながら鼻歌を歌う莉央。

「お兄ちゃん泣かせちゃって……酷いなぁ莉央ちゃんは」

「よく言うよ。本当に酷いのはこれからだし」

「妹の死姦に成功したのにやっちゃうの？」

「うん。オチンチン臭いから処刑するの」

美紅が机の上に仰向けに寝かせ、赤ちゃんを産もうとする妊婦のような体勢に拘束してゆく。

「ほら、じっとして！　M字開脚で拘束させてもらうわよ？」

「ひいっ！？　こんな格好は、恥ずかしいからやめてぇっ！！」

「良い格好ね。解剖されるカエルみたいだよ♪」

冷笑しながら莉央の拷問が開始された。
人差し指を肛門にゆっくり挿し込むと、お腹側の直腸内を軽く掻き回す。

「アイドルのあたしがお尻の穴……犯してあげる♡」

『つぷっ！……ズブブ』

「はうあっ！？　んんんんんっ！！」

「前立腺マッサージだよ。気持ち良いでしょ？」

「んんんっ！　あああんっ！！」

「妹を殺されてよく顔真っ赤にしてアナルなんかで感じてられるわね……」

『グリグリ！　グポグポグポグポッ！』

「あああっ！？　やあああっ！！」

中指も挿しこみ、今度は二本の指で激しく直腸を掻き回すと、尿道からドクドクと大量の精液を吐き出す良弥。

「泣くのか気持ちよくて喘ぐのかどっちかにして」

美紅はケラケラ笑いながら分娩中の女性みたいな格好で縛り付けられた良弥を嘲る。
ここから本格的に拷問が始まる。

「いくよ？　おりゃあっ♡」

『ボコオッ！！』

「ぎゃあああっ！？」

握り拳を作って一気に手首まで直腸内にめり込ませる莉央。
そのまま高速でピストン運動を始める。

「締まりがいいアナルしてるね？　ガバガバにしてあげる。あはは♪」

『ボコボコボコボコボコボコボコボコオッ！！』

「はぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃあああああっ！！　痛い痛い痛いいいいっ！！　お尻が裂けちゃううっ！！　やめてえええええっ！！」

肛門括約筋が激しく内側にめり込んだり外側にめくられたり、凄惨なエロい動きを見せる。

一枚、二枚と肛門括約筋が裂けて鮮血が飛び散るが、うまく体をよけて更に激しく直腸を拳で犯す莉央だった。

「血が汚いからあまり出ないようにするね」

「ありがとう美紅ちゃん」

強力な血止めの注射を内股に打つ美紅。

「ほらほらほら！　大人のオチンチンより遥かにおっきなあたしの拳……感じてくれてるかなぁ？　うふ♡」

「はぎゃあああっ！！　し、死ぬうううううっ！！」

「このガバガバケツマンコめぇ〜。お仕置きよっ！　ほらほらほらぁ〜♡　ふぅ。手がダルくなってきちゃった……ぼちぼち抜いてやろうかなぁ。それ！」

『ズッ！　ズッ！　ズッ！　ズッ！……ヌポンッ！！』

５分ほど犯された後ようやく莉央は肛門から手を引き抜いた。腸液と便と血まみれの拳を閉じたり開いたりしてペニスに塗りたくる。

「くっさぁ〜♡　ほらほら。オチンチンもう一回勃ててみ？」

「わあーん！　わあーんっ！！」

「ほら見て莉央ちゃん！　アナルが閉じたり開いたりしてヒクヒク痙攣してる！　あはは♡」

「ほんと……ヤラシイお尻の穴……ケツマンコ汁をドクドク垂らしちゃって♡　そんなに気持ち良かった？ってゆうか……泣いちゃってるぅ〜」

莉央はそっと立ち上がって拷問を美紅と交代する。

「アナルからチンポから粘液垂らしまくりやがって……」

「ううう……痛い……熱い……」

「とりあえずあたしもケツマンコ犯しちゃおっかな！」

莉央に続いて美紅も拳を握り、そっと肛門へあてがう。

女子小学生より一回り大きな女子中学生の拳が調教された肛門からぶち込まれてゆく。

『グボボボ！　ヌプププ！　ボコオッ！！』

「はぎゃあああああっ！！」

莉央の倍激しく出し入れを繰り返される中学一年生男子のアナル。

拘束された両脚をカクカク痙攣させながらも美紅のフィストファックを受け続ける地獄の時間が流れる。

肛門へのあまりの激痛に、思わず気を失ってしまう狭山良弥。

ふと目覚めた時には手足が自由に動くことに安心する。

「あ、足も手も拘束されてないぞ!?　じ、自由に動く……あれ？」

「あはは！　可愛くなっちゃったね良弥くん♡」

ふと寝ぼけ状態から我に返ると、なんと両手両脚が膝と肘から見事に切断され、ダルマ男にされていたことに気付く。

「うわあっ！？　こ、これは！？　ひ、酷いっ！！　ひぃぃぃぃっ！！」

「大丈夫よ。簡単には死なないからね。強力なショック死を抑える麻薬と止血剤をタップリ全身に注射してあげてるから」

莉央は注射器を……美紅は血まみれの刃から鮮血が滴り落ちるチェーンソーを……それぞれ手に持ったまま冷たく微笑んでいた。

手脚を切断するために拘束されていた簡易ベッドから地面に転がり落ちて、便を大量に垂れ流す感覚に思わず人生の終わりを感じる良弥。

莉央と美紅の拳で犯された肛門は、全ての肛門括約筋が分断され、パックリと大穴が開いていた。
丸見えになった直腸からブリブリと、人生最期になるであろう排便を終える。

「覚悟してね。可愛い顔した中学一年の美少年♡　穴とゆう穴は全てあたしたちが犯してあげるから……」

莉央が指の骨を鳴らしながらキツく男を睨みつける。

「次はどこの穴がいいかなあ？　かなぁ？　あはは♡」

「ひっ！？　お願いです！　もうやめてえええっ！！　助けて下さいいいいっ！！」

小便も勢いよく漏らしながら号泣する良弥。

「そんな姿になってまでもまだ生きていたい？」

「うっ！？　あ、あうう……ひいい」

切断された腕と脚を見ていると、絶望感による涙が溢れ出してきた。

美紅は長さ1メートル、直径2センチほどの丸い鉄の杭をてにすると、良弥を足で蹴りまくり、仰向けに蹴り転がした。

「次はその汚い臭そうなヘソにするわ」

『ズッ！！……グリグリ！！……メリメリ！！』

大して先が尖っていない鉄の杭を捏ね回しながら無理矢理ヘソの穴に捩じ込ませてゆく。

号泣するも構うことなくついにヘソを突き破って小腸を何枚も貫いた。

背骨に到達した時、莉央が木槌を振りかざし、鉄杭の反対側を鍵

を打つように一気に打ちつける。

「莉央ちゃん、ヘソにトドメ刺しちゃって♡」

「はーい♪　もっと飲み込むのよ？　それっ！」

『ドカッ！！……ぐちゅちゅちゅ！　バキバキッ！！』

美紅が手に持った鉄杭は、莉央の木槌の強烈な一撃により背中側にある背骨を砕いて地面にまで突き刺さる。

ヘソから背後の地面に串刺しにされた良弥は全く動けなくなってしまう。

更に杭による物理的な仕業だけではなく神経が切断されて全身麻痺状態に……。

電気が走ったように全身をくねらせて痙攣を始めた。

「背中の大事なとこ砕いちゃった！　脊椎か腰椎か忘れけど……もうまともに動かなくなっちゃったね？　ごめーん。てへ」

莉央はドクドクとヘソから鮮血が垂れ流れてくるのを見ながら舌を出して笑う。

「さってと。次は最近定番のアレするか」

「うん！　性器のお刺身のことだね♡」

美紅はペンチとハサミを、莉央は刺身包丁を器用に駆使しながら淡々と良弥の陰部を解剖……料理していった。

「前の男は横に数回輪切りだったから今度は縦に三枚に下ろしちゃった！」

「うーん。魚みたいに骨のないチンポを縦方向に三枚に下ろす意味はあるのかなぁ？」

「背骨に見立てた尿道管を傷付けないで抜く♡　これがあたしのテクかな？　うふふ♡」

『ギュッ！……ズルルルルルッ！』

親指と人差し指で摘んで、お腹の付け根から尿道口まで丸見えにされた尿管をペニス本体からエビの背腸を抜くように引き抜く莉央。

「お見事！　残った二枚と　下ろしのチンポはイカソーメン見たいに縦に何回も切って仕上げようよ？」

「そだね。美紅ちゃんは？」

「肛門からハサミ入れて金玉袋切り裂いてとりあえず生の金玉抉り出して……ペンチで潰しておいたわ。美味しそうな摺り下ろし白子

でしょ？」
好き勝手言いながら残酷な拷問を執行してゆく二人。
美紅は更に会陰部をハサミで深く抉り、前立腺も摘出した。
「こんなキショいクルミみたいな大きさの臓器で快感を感じるなんて……惨めな生き物だね男って」
「あはは。あたしたちだって豆みたいなものやジースポットで感じるじゃん……男のこと笑えないよ」
斧を取り出して大きく振りかぶる美紅。
「さてと。バラした股間からズタズタに肉塊にしていこっか♡」
「うん。おへその杭を抜くからちょっと待って！　最終的に華麗に真っ二つにしてね？」
莉央に言われた通り、慎重に尿管を抜かれて縦長に何度も切り裂かれたペニス部分を的確に捉える美紅の斧攻撃だった。
五回ほど打ち下ろした所で、陰部と肛門、下腹からヘソまで真っ二つに切開された。
ズルズルと大腸や小腸が流れ出して地面を覆ってゆく。

「ホカホカして湯気出してるぅ！」

「腐れ外道のハラワタでも温かいんだね……」

「あわわ……ひぎぎぃいいい」

「そんな姿にされてもまだ死にきれないんだ。哀れだね？」

何度も何度も斧を打ち下ろして、肺と心臓を破壊した所で良弥の人生はようやく終焉を迎えることができたのであった。

最終的に頭部まで真っ二つにされた遺体は脳みそも辺りに飛び散り、悲惨な状態となっていた。

気持ちの変化（後書き）

浮気心から進展しての殺害計画は妹と共に実行された。
その代償はあまりにも大きかったのである。

久々となる拷問処刑を執行した鬼頭美紅と菅野莉央は血まみれのセーラー服を海風に靡かせながら島を去ってゆく。

残酷処刑島に新たに二人の遺体が加わった……。

強制ＳＭ蝕まれる無垢なる少女（前編）（前書き）

健気にも大人の狂気に応じてくれた無垢なる少女。
純粋なその児童にさえ容赦ない真の鬼畜は存在した。

強制ＳＭ蝕まれる無垢なる少女（前編）

『２０〇〇年４月４日、１２歳になる馬詰紗夜ちゃんが両親と訪れていた西部地方〇〇区のショッピングモールで行方不明になり、警察は現在も誘拐事件として捜査しています。未解決のまま今月５月で丸一年となるのを前に、警察は今月〇〇区にあるショッピングモール全店でポケットティッシュなどと共にチラシを配った他、紗夜ちゃんの動画を流し、情報提供を呼びかけました』

「可哀想だけど紗夜ちゃんって子はもうこの世にはいないわね」

「え？　どうしてそんなことが……変態に監禁されてまだ生きてるかもしれませんよ？」

「生きてるならもうすでに解放されてるでしょ。相変わらず能天気だね愛衣は……」

「は、はぁ。すみません莉央様……」

菅野邸でののんびりした朝食の時間が流れるが、流れるニュースはとてつもなく物騒であった。

「ぼちぼち登校しなきゃ二人とも遅刻だよ！　サッサと行った行った！」

お婆さんに急かされて駆け出すように家を出る菅野莉央と円満愛衣。
タクシー通学が許されているアイドルであり、拷問処刑人の二人は一緒に待機しているタクシーに乗り込み高校と小学校へ向かう。

――――一年前。

「良い子だなお嬢ちゃん。名前はなんてゆうの？」
「馬詰紗夜。おじちゃんはどうしてあたしにパフェなんてご馳走してくれるの？お母さんに見つかったらあたし、すっごく怒られちゃうかも……」
「ちょっと家に来て欲しいんだ。重い病気で死にかけてる寝たきりのワシの母がボケてしまってどうしてもワシの娘に会いたいと毎日のようにせがんでくるもんでなぁ」
「ふぅん。可哀想に。良いよ！　お母さんもお洋服買うのに必死だから一時間くらいで終わるからならなら気づかれないうちに帰って来られるから」
「ありがとう紗夜ちゃん……おっちゃんは優しいお嬢ちゃんに本当に感謝してるよ！　じゃあ行こう！」
「うん！」

――山岳部にある犯人所有の別荘。

「ほらほら、おっさん！　痛いか？」
『パンッ！　パンッ！』
「あうっ！　おほおっ！　紗夜様、もう許して下さいっ！」
「ダメだよ。お尻の皮が破けて血が出るまで叩いてやるんだから！　えいえいっ！」
『パンパンパンパンパンッ！！』
「痛いいっ！！　やめて下さいっ！　ひいいいっ！！」
『ドピュッ！！　ドピュピュピュピュウッ！！』
「キャッ！？」

小学六年生の女の子、馬詰紗夜に平手で何度もお尻を叩かれながら自ら手コキして射精してしまう４０歳の変態中年男、佐和山隆起。
フローリングに撒き散らかされる白濁液に驚きの色を隠せない紗夜。人生で初めて目の当たりにする男性の精液だけに致し方のない

ことである。

「だ、大丈夫！？　オチンチンからなんか変な色のオシッコ出ちゃったみたいだけど！？」

「あ、ああ。大丈夫。紗夜ちゃんのお仕置きが強烈すぎて白いオシッコ出ちゃっただけだから。苦痛を感じてる時に白いオシッコ出ちゃうんだワシは」

「そ、そうなんだ。ごめんなさい」

「いいよ。ワシが頼んだんだから」

次々と無垢な紗夜に変態的な行為をねだって行く佐和山隆起であった。

ついには仰向けに寝転がり、紗夜を胸元へ跨がせて、マウントポジションからのパウンドをさせる。

「えい！　えいっ！」

『ポカッ！　ポカッ！』

「ひぐうぅ～。紗夜様、もっとワシの顔面殴って」

「はぁ、はぁ、もう疲れたよおじちゃん……ぼちぼち病気のお母さ

んに会わせてくれる？　早く帰らないとあたしのお母さんも心配してる頃だから……」

「そうか……もうそんな時間なんだな。じゃあ交代するか」

「え？　交代？」

「実はワシは女の子に責められるのも大好きだが責めちゃうのも大好きなんだよ紗夜ちゃん♡」

「え？　え？　そんな……あたしはそんなのイヤ……オチンチン見せられただけでも恥ずかしくて泣きそうだったのに！　お、お願いだからやめておじさん……や、やめて！」

小学六年生の児童にとっては地獄とも言える時間が流れてゆく。

『ズブ……メリメリメリメリ』

「んぎいいいっ！？　痛いいいいいっ！！」

『ズチュウ！　ズボオッ！！……バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「ほうら、入ったぁ♪」

「んぎゃあああああっ！！　痛いいいいっ！！　やめてえええっ！！」

ローションをペニスに塗りたくり、強引に、小学生児童の膣へ捩じ込み、とうとう根元までぶち込んだのち更に激しく腰を振り始める鬼畜の所業を行う佐和山隆起であった。

膣口は裂け、真っ赤な鮮血が細くて白い太腿に流れ落ちる。
構うことなくバックで激しく小さな性器を犯しまくる。
お尻を下げようとするたびに頭部を背後から本気で殴られて、またお尻を突き上げて犯される。
その繰り返しで少女はついに声が枯れてしまう。

「ひ、ひぎいいいい……や、やめてぇぇ」

か細く訴える児童の声も虚しく、男は膣から引き抜いた血まみれのペニスをピンク色の小さな肛門へあてがう。

「手コキの次はケツの穴に中出ししてやるか。マンコより締まり良さそうだ♪」

『ピト……ググググ……めり、めりめり』

「ひぃやあっ!?　らめ、らめてえええっ!!」

「ガハハハハ!!　痛すぎてまともに日本語も喋れなくなっちゃったのかい？　お嬢ちゃん？　おら、綺麗な色したアナルにもぶっと

いのをくれてやるよ！」

こちらも無理矢理根元まで捩じ込んで激しく腰を振る隆起。
肛門までも裂傷を負い、激しく出血してしまう紗夜だった。

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「んぎいいいいいいっ！！」

「おらっ！イ、イくっ！？　中に出すぞおっ！？　イくぞおおおおっ！？覚悟はいいか紗夜ちゃん！？　あはああああっ♡」

『ドピュッ！！　ドピュピュピュピュピュピュピュウッ！！』

「ふんぎいいいっ！！　紗夜、死んじゃうううううっ！！　えーんえーん！！」

大量の精液を肛門から噴き出させながらうつ伏せに倒れ込んで泣きじゃくる小学生児童の紗夜。
髪の毛を掴んで強引に引き起こすと、今度は便と精液と腸液まみれのイチモツを小さな口を無理矢理大きく開かせて捩じ込んで尺八させる。

『ガボオッ！！　グププ！！』

「うごおっ！？　んぶぶぶうっ！？」

「ほら、舐めるんだ紗夜ちゃん。お、おお、いいぞ、もっと舌を使え！　雁首を入念に舐めるんだ！　おおおっ！　気持ちいいいいっ♡」

強制的にフェラさせられた挙句、口内いっぱいに変態男のザーメンを注ぎ込まれた馬詰紗夜は、顎が外れてしまい、ダラダラと精液を吐き出してしまう。

「飲み込めよ！　誰がワシのセーエキ吐き出して良いって言った？　ああっ!？　のこのこ不審者についてきくさるアホなクソガキがあっ－！」

『バキバキッ！！　グシャグシャッ！！　ボコッ！！　ガキッ！！』

「あひひひひぃ～。やはあああぁ～」

血まみれになって歪に変形した顔面を押さえながら小学六年生の馬詰紗夜はその短い生涯を終えた。
小さな痙攣が始まり、数秒で全身が反りかえるほどの激しい痙攣へと変化してゆく。
致命傷を顔面と頭部に負ってしまった馬詰紗夜。

『ビクッ！　ビククッ！　ビックンビックン！！』

「ん？　顔面タコ殴りくらいで死んじゃったのか？　ガハハハハハッ！！　開いたケツの穴からクソまで垂れ流しやがって……くっせ

え♪」

病に伏せる母親の存在など真っ赤な嘘であり、小さな子供の良心に漬け込んだ類い稀ない鬼畜な犯罪者、佐和山隆起。
一年の時を経て、ついに警察の手が及ぶことになる。

——————現在。特殊任務省。

『もしもし？　藤堂長官、ついに捕えたよ』

「そうですか。おめでとうございます」

『うむ。裁判にかけられても奴は無期懲役が良いところだ。だが無惨に白骨化した遺体で見つかった紗夜ちゃんの体験した痛みと恐怖を思えば我々表の機関の処罰では生ぬるい。わかってくれるな？』

「はい。誠におっしゃる通り。残酷処刑島へ明日にでも連行を」

『うむ。今回だけは拷問処刑の中でも最も苦痛を与えられる手段をとってくれるかな？』

「はい。一週間くらいかけて処刑させましょう。拷問処刑人の彼女たちにはその間、島に泊まってもらい、八日目に迎えの船を出すように致します」

『さすが藤堂長官だ。では残虐少女たちによろしく頼む！』

「はい。了解いたしました」

――――――――赤霧島小学校。

「ってなわけで前日のニュースで言ってた犯人、警察が捕まえたみたいだから」

「さすが！　やるなあ警察！　これで紗夜ちゃんも成仏できるよね！」

莉央の報告に胸を撫で下ろす同級生の拷問処刑人である富田美香。同じく結城明日香も静かに頷いて涙を流している。

「佐和山隆起４０歳。あたしたちの今までの拷問処刑で超ド級クラスの激痛を与えてやるから。滅多にないオールスター参加だよ。ちなみに犯罪を分かってて黙認していた妹も拷問処刑に処すから」

「佐和山正子３５歳ね？　全然正しくない生き方なのに正子だなんて……余計許せない。ギッタギタにしてやるんだから！」

莉央の報告に罪人の妹の名前だけでブチ切れる軽率な美香に呆れる莉央と明日香であった……。

――暖かいを通り越して真夏並みの３０度を超える５月の末、かなりの強風が吹き荒れる残酷処刑島へ、拷問処刑人の少女たちが結集した。

女子高生である円満愛衣、女子中学生である宮垣咲良、大野真子に小野メグ。

更に女子小学生でありアイドルでも処刑人でもリーダーである菅野莉央を筆頭に富田美香、結城明日香。

唯一アイドルには属さない最強の戦闘力を持つ中学生、鬼頭美紅の全八人である。

「やあやあ、なんて可愛い少女たちなんだ。ってゆうかお前たち真絆ガールズのメンバー全員揃ってんじゃねぇか！！　一人知らない奴いるけど……すっげえ……生で拝めるなんて光栄だぜ」

「は、離せっ！　私は関係ないっ！！」

ある意味覚悟を決めている兄の隣で、かなり納得いかない３５歳の妹、正子が発狂しながら叫び続けている。

兄妹の二人は十字型の磔台に素っ裸で拘束されていたが、妹の処刑が手際良く進められてゆく。

先ずは小学生トリオの三人が、妹の正子に対し、短刀で全身の肉を削ぎ落としてゆく凌遅刑を兄の隆起の見てる前で開始した。

「や、やめろおおおおっ！！　ワシにならしても良いが妹は痛みに強くない！　やめてやってくれえええっ！！」

「鬼畜野郎も妹のことは大切に思ってるんだ？」

「当たり前じゃないか！　や、やめろおおおっ！！　鬼畜どもおっ！！」

「ふぅ。あのね。あんたにだけはそれ絶対言われたくないよ……」

淡々と三人で肉を削ぎ落としてゆく。

ある程度全身を平均的に剥き身にしたら、今度は乳首、乳輪、乳房、左右交互、と、一回ずつ切り落としていった。

明日香と美香が二つの胸を、菅野莉央が性器を切り落としてゆくのであった。

大陰唇、小陰唇、陰核、膣口と女性器をバラバラに解剖してゆく莉央。

白目を剥いて命乞いをするが一向に手を止めない小学生の三人。

ヘソに短刀を突き刺し、小腸を全て引き摺り出すと、肛門にも刃を入れて肛門をくり抜き、大腸も全て引き摺り出す。

「ほら、鬼畜野郎の妹さん。マンコにもくれてやるから」

莉央は膣口に短刀を刺し込み、会陰部を切開、肛門と性器をつなげてしまう。

その切り口から右手を突っ込み、奥の奥まで捩じ込んでいった。

「もう用のない汚い子宮と卵巣……抜き取ってあげる」

子宮と卵巣を鷲掴みにし、パックリ開いた膣口から引き摺り出す。

『クプッ！　ズルズルズルッ！　プルルンッ！』

「ひいっ！？　痛いいっ！！　やだあっ！？　酷いいいっ！！　……ぐっ！！　ぐえええええっ！？……ぶくぶく……ぶくぶく」

この時点で口から血の泡を吐きショック死した佐和山正子だったが、更に目玉をくり抜き、舌を切り取り、鼻も唇も削いでいった。

「顔面全体をズタズタにしておいてあげるね♡　死んだって許さないんだから……紗夜ちゃんにあの世で懺悔なさい」

『ズッ！　スパァッ！　ザクザク……ズズズ！』

真っ赤な剥き身と化した正子の遺体は、明日香と美香によって灯油を振りかけて燃やされる。

残酷処刑島で一気に火柱が天に登る。

『ゴオオオオオオオッ！！　パチパチ……パチパチ』

「正子おおおっ！！　正子おおおおおおっ！！」

妹を目の前で惨殺された佐和山隆起は、涙を流しながら叫び続けるが、遂に声が枯れて殆ど喋れなくなった。

人の形をした肉塊がどんどんと焦げて真っ黒になってゆく姿を見つめる拷問処刑人の少女たち。

その姿は兄である佐和山からすれば鬼、悪魔、阿修羅、畜生の類にしか見えなかった。

やがて墨のように炭化した遺体が姿を現すと、莉央はそっと歩み寄り、ダイナマイトに着火して遺体の上に置く。

「醜い姿だね正子？　炭化した遺体さえ目障りだよ。もう二度とこの世に生まれ変わってこないで……」

導火線が長いので落ち着いて安全圏まで離れると、派手に爆発して木っ端微塵になる正子の遺体だった。

『ドオオンッ！！！！』

「わあああっ！　うわあああああっ！」

殆ど声も出ないが振り絞ってまで泣きじゃくる兄の隆起。

「さてと。ちょっと今回は特殊な処刑になるわ」

莉央が勢揃いしたメンバーたちの前に立ち、説明を始める。

「あたしたちは本日から一週間、この島に泊まり込んで佐和山隆起を拷問し続けます」

何も聞かされていない他のメンバーは唖然とした表情になり、一斉にどよめき出した。

「生かさず殺さず、あたしたち八人でコイツを一週間いたぶり続け……この世の生き地獄を堪能してもらってから殺す。八日目にはお家に帰れます」

「ちょ、ちょっと待って！　そんな話聞いてないよ莉央ちゃん！一週間もこんな殺風景な怨霊が蔓延ってそうな島にいられないよ！？」

鬼頭美紅が一番に莉央へ噛みついた。

「そ、そうだよ莉央！　あたいだってシャワー浴びなきゃ寝れないし、着替えも持ってきてないんだ！　あたいが罪人より先に死んじゃうからなっ！？」

「そうよ！　歳上連中はおいといて、どうして同じクラスの私たちにまで隠してたの？

宮垣咲良、続いて同級生の結城明日香までもが文句を言ってくる。

「ご、ごめんなさい。最初に伝えたら一週間帰って来られない任務なんて皆嫌がって仮病使って拒否る子が出てくるからと……藤堂長官が言ってたから……ほんとごめんね」

「…………」

一斉に黙り込む拷問処刑人の少女たち。
藤堂長官は彼女たちの心理を完全に先読みしており、図星を突かれた少女たちは開いた口が塞がらず、数秒間は固まっていた。

「ぐっ、あのエロオヤジ……なんかムカつくんだけど……」

美紅が目を吊り上げて感情を顕にする中、少しのタイムラグを経て覚悟ができてきた少女たちは一週間のお泊まりを受け入れる。

莉央から大まかな拷問方法を聞き、それを実行に移す。

妹の正子を処刑執行した今、本格的な隆起への制裁が始まった。

変態だが身長１９０センチ、体重９０キロ、なかなかの鍛え上げられた屈強な体格を持つ隆起は、油断せず縛り上げられたままの状態で拷問が行われる。

一日目は菅野莉央、富田美香、結城明日香による殴る蹴るの人間サンドバッグ刑。

ブリーフのパンツ一枚のみ残して裸にし、小学生たちの打撃練習が始まった。

『ドカッ！　ズドンッ！　バキイッ！！』

「おうっ。ほおっ。んはっ。そのくらいの痛みなら気持ちいいぜぇー。もっとだ！もっとワシを殴ってくれえ～っ♪」

ブリーフが一気に隆起し、莉央たちの打撃が殆ど効いてない事実が皆に伝わる。

「こ、このオッサン……すっごい筋肉してる。あたしのパンチとか全然効かないよー！」

処刑人の中でも一番非力で喧嘩も弱い、ツインテールの富田美香が疲れて愚痴をこぼす。

「はぁ、はぁ、ほんと身体が硬すぎて私たちの手の方が痛いくらいねこれは……」

メガネっ子の明日香も息を荒くしながら莉央の方を窺う。
黙って拳と蹴りで身体中を攻撃するが、莉央の攻撃でさえ興奮してペニスをおっ勃てている始末……。

「コイツの拘束解いてタイマンで殴り合ってたらヤバかったかもね……」

莉央だけは殆ど息を切らしてはいなかったが、百発を超える打撃を与えているが少し皮膚が赤くなる程度のダメージで、ほぼ効いていないみたいであった。

「おほほおっ！　可愛い小学生のお嬢さんたちに殴られ蹴られ……ワシは最高じゃぁーっ♡　ガッハッハッハッハッ！！」

『ドピュッ！ドクドクドクドク……』

「きゃっ！？」

ボディーに蹴りを入れた瞬間白いブリーフの前面が粘液で染まってゆく。

「やだコイツ！　莉央ちゃんの渾身の前蹴りくらって射精しやがったよ！？」

美香が半分切れながら隆起を睨みつけるが、頬を真っ赤にしてうっとりしている表情を見ていると、怒りを通り越して呆れてくる美香だった。

「はぁ、はぁ。覚えときなさいよ」

少しプライドが傷付いた莉央は、佐和山隆起をどのように苦しめるか痛めつけるか、如何なる苦痛の最期を与えるか……色々と思考を巡らせるのであった。

コンクリートで造られた１２畳平屋の部屋でシャワーを浴び終わった少女たちが集まる。

色んな即席ラーメン、お菓子や缶詰などが段ボール三つにギュウギュウ詰めになって置かれていた。
冷蔵庫もあり、中にはビールやお茶、ジュースなどこちらもいたれりつくせりな品が並んでいる。

「贅沢とは言えないけど……普通に一週間毎日宴会できそうだね」

「すごい！　美味しそう！　私は高校生だからビール頂きますね！」

円満愛衣は５００ml入りの缶ビールを掲げて音頭を取った。

「かんぱ～い♪」

喜んでジュースを掲げる美香。
後のメンバーたちは表情一つ変えずに手にしたジュースやお茶を飲み始めた。

「みんなノリが弱いわね？　愛衣さん、今夜はどんどん飲んじゃって！」

そう言いながら円満愛衣のためにビールをどんどん開けてゆく美香。

「ぷはぁ！　冷暖房付きで食べ物飲み物まで用意されちゃ……あたしゃもう文句は言わないや」

富田美香はラーメンと缶詰で満腹になるど、仰向けに寝転がってお腹をパンパンと叩く。

「おっさんか……」

「ん？　今何か言った？」

ボソッと呟く明日香に即、聞き返すが、無視して即席ラーメンを啜る明日香。

「あたいたちのしてることって……ほんと正しいのかな？　一人一人みんなの思ってる本音……聞かせてくれないか？」

まだ処刑人としては浅い宮垣咲良が口を開く。

しばらく沈黙が続くが、一人また一人と、個人の想いを話し始める。

「正しいさ。被害者や遺族の為の仇討ちだから」

「私もそう思う」

小野メグに続き、大野真子も意見は同じ。

「私は……莉央様に助けられた命だから……何も考えずに悪人を処分するのみ。ですね」

チラッと莉央を見ながら答える円満愛衣。
命を助けてくれた上に心底惚れてしまった菅野莉央に、この高校生は一生ついてゆくであろう。

結城明日香はズレたメガネを直しながら囁いた。

「私も表向きの国では裁けない理不尽な犯罪に対して目には目を……的な刑を執行することには全然賛成してる。相手が子供だとまだ少し可哀想、とか思っちゃうけどね」

「あたしは最近拷問することに興奮を覚えてきちゃって！　相手が幼児だろうが年寄りだろうが可哀想とか全然思わないよ！　参ったなこりゃ！　あはははは♪」

馬鹿笑いする美香の隣で窓から星を見ながら深く溜息をつく莉央。

「さぁ一番残酷な方の感想を聞かせてもらおーかぁ？　あはは」

「……あたしは……今みんなの言ったこと全て含む。かな。人を性的虐待で責めることも拷問することも殺すことも……すっごく興奮しちゃう……これは生まれ持った性癖とかもあるだろうから仕方ないと思うし」

鬼頭美紅は莉央の想いを聞いたのち、そっと立ち上がり宮垣咲良の元へ歩み寄る。

「おい咲良！　ちょっと外で話そうか？」

「え？　あ、はい」

美紅と咲良が屋外へ移動した後もまだまだジュースやお菓子を貪り続ける美香。

「あなたほんと糖尿病になるわよ！？」

「日本人の二人に一人は糖尿病だっつーの！」

「そ、それは人が生涯のうちでガンにかかる確率じゃ……」

「もううるさいなぁ。たまに親がいない時くらい自由に食べさせてよぉ！」

明日香に怒られても聞く耳持たずな美香。
やがて飲み食い疲れて円満愛衣が全員分の布団を敷いてくれた一つに入り込むと、あっとゆうまに爆睡を始めた。
雑用で疲れたのかいつのまにか円満愛衣も夢の中。
小野メグと大野真子も何もしてないくせに精神的に疲れたのか布団に入るとすぐさま眠りに落ちた。
莉央と明日香はまだ寝付けない。

「あの二人どこにいったのかな？」

「わかんない」

「咲良さんが惚れちゃってるみたいだから抱き合ってるのかもね」

「え？　あ、あはは。そうかもね！」

ストレートにきた明日香に一瞬ビビる莉央だったが、どうにか愛想笑いで乗り切る。

大きな蚊帳に囲まれたテーブルと椅子がある裏庭。

健康的に引き締まった長い足を組んで、両手を頭の後ろでも組んでそり返りながら欠伸をする美紅に対し、横で大人しく両手を膝の上に乗せてじっと暗闇を見つめる咲良。

「人を殺す時って萌えない？」

「え？」

「あんたと一度ゆっくり話したかったんだわ」

「は、はぁ」

気の抜けた美紅に妙に緊張が隠せない咲良。
対照的な二人は静かに会話を続ける。

「単刀直入に言うよ。咲良、あたしと付き合え」

「はひっ！！」

「はひ？」

「い、いや、あたいはまだまだ美紅さんに見合う相手じゃないし……あの、でも、その」

「見合う相手じゃないから見合うように力つけてやるって言ってんだよ。莉央ちゃんに勝てないけど負けない……つまりあたしぐらいあんたなら強くなれるからきっと」

「ん？え？」

「だからぁ。この任務が終わったら最終日格闘技教えてやるって言ってんの！」

勝手に勘違いして正気に戻された咲良は頬を真っ赤にしたまま慌てて両手でさすり、誤魔化しにかかった。

「ほ、ほんとに良いんですか！？　ありがとうございます！」

「腕を上げたら莉央ちゃんとタイマン張ってビビらせてやれ。あっはっはっはっ♪」

「あははは……美紅さんほどの人でも小学生相手に“ちゃん”付けなんですね……」

「あ？　なんか言った？」

「別に」

静かにジュースを飲みながら咲良から少し他愛もない会話をきりだして……半時間後には二人も眠りについた。

莉央と明日香も既に夢の中。

――残酷処刑島での初日が終了する。

強制ＳＭ蝕まれる無垢なる少女（前編）（後書き）

拷問初日を終えた少女たち。

一週間かけての超異例の長期間拷問処刑は、二日目以降に持ち越されることとなる。

強制ＳＭ蝕まれる無垢なる少女（後編）（前書き）

初日の拷問が終了。
拷問処刑人の少女たちにほとんど動じていない佐和山隆起に地獄を味合わせることができるのか？

「おいオッサン！　初日の年少組の殴る蹴るは気持ち良かったみたいだね？」

宮垣咲良がブリーフ一枚で拘束されて一晩が過ぎた４０歳の罪人に問いかける。

「ふぁ？　ふああああああっ！よく寝た……お前らこんなバカなことはもうやめてワシを解放してくれないか？　妹の死だけでもう気はすんだだろう？」

「どうして主犯のオッサンだけ解放しなくちゃならないんだよ。ほんとバッカだよねお前……」

初日の小学生組に続き、二日目は中学生四人組による拷問となった。

鬼頭美紅は革の鞭、宮垣咲良は木刀、大野真子は金属バット、小野メグは木製バット。

それぞれの武器を持ってきて何度も交代しながら叩きのめしてゆく。

『ガンッ！　ドカッ！　バキッ！　グシャッ！』

全身の骨は数箇所砕け、普通の人間ならば号泣するレベルのダメージを受けながらも未だにイチモツを隆々と勃起させながら光芒の笑みを浮かべる。

「ぐおお……痛ええ……ほ、骨がやられちまった……だがこんな可愛い娘たちに叩かれて叩かれて……萌えるぜぇ～♡　ぐほほ！」

「こいつ……これだけ骨砕かれてもまだチンポおったてやがる！？」

宮垣咲良はビンビンに勃起している隆起の陰部をマジマジと見つめながら呟いた。

だが頭部を本気で殴打すれば致命傷になることも重々承知しているだけにそこは手加減して殴る。

鼻の骨もへし折られ、歯も前歯は全てへし折られ、涙を流しながら呻く隆起。

究極のSとMを持つその男はここまでの大ダメージを受けてもなお……局部を勃起させ続けていた。

「面白いじゃないか！七日目までの少しずつ本気で許しをこうまでの姿を楽しみにしていてやるよ」

咲良は殴り疲れて手にできた血豆をさすりながら半分負け惜しみ

のような捨て台詞を吐く。

「その通り。とりあえず全身の骨が砕かれた痛みと戦いながら空腹とも戦ってグッスリ眠れるもんなら眠ってみろ」

腕組みしながら美紅も続けた。

小野メグと大野真子は息が上がってしまい、隆起を睨みつけるくらいしかできなかった。

こうして二日目の拷問も終了となる。

三日目は女子高生の円満愛衣の出番だ。
眠気まなこの隆起の前に立ち、そっとブリーフを足首までずり下ろした。

「ほら、いっぺんチンポ出してみる？」

『ズルリ！』

「ふおうっ！？　な、なにを！？」

「こうするの……」

『ギュッ！……シコシコシコシコシコシコ』

「はうっ！　はううっ！」

「いっぱい……出してみる？」

『ドピュッ！　ドピュピュピュピュピュッ！！』

「たくさん出たわね？　まだまだイくわよ？」

朝から手コキでイかされっぱなしの隆起は、本日既に五回目の射精を終えた。

『シコシコシコシコシコ』

「は、はひいい……も、もう出ない」

『ズドオッ！！』

「ぐぎゃあっ！！」

「私に対してタメ口？　膝蹴りで金玉潰してやろうか？」

愛衣の真っ白な生膝が隆起の睾丸を直撃した。

「すみません愛衣様っ！！　もう射精できません！　許してくださいっ！！」

『シコシコシコシコシコシコ』

「ダメ。後五回はイってもらうから」

「はうっ！　はひぃいっ！！」

骨が砕けて顔面ボコボコにされた二日目よりも、愛衣による連続射精責めに対して本気で泣きを入れ出す佐和山隆起であった。

『ドクドク……』

「九回。後一回！　頑張れほらあっ！　後ろの穴……お邪魔しまーす♡」

『ズブ……ズボボボ！　グリッ！』

「はううっ！？　熱いいっ！！」

「熱いの？　ほらほら！　ケツマンコかき回されて気持ちいいでしょ？んん？」

「あ、愛衣様ああっ！！　イ、イっくううう！！」

「いいよ。イっちゃえ♡」

『ドクッ！　ドロドロドロ』

愛衣は人差し指と中指に続き、薬指までも隆起のアナルへ突っ込

み、三本の指で前立腺を激しく掻き回す。
思わず強制勃起させせられて、遂に十回目の射精に至った。
「最後の二回はホント勢いのない垂れ流し射精だったね？　情けない」
「す、すみません愛衣様……はぁ、はぁ、はぁ、はぁ」
結局丸一日かけて十回も射精させられる。
「だらしがない射精に対して……いっぺん、ハラワタにお仕置きしてあげる」
『グボオッ！！　メリメリ！！』
「ぐぎゃあああああっ！！」
人差し指、中指、薬指を肛門に突っ込んでいた愛衣。
そのまま全ての指、拳までも直腸にぶち込んだ。
更に肘までグリグリ直腸内を掻き回しながらS状結腸まで捩じ込む。
S状結腸を鋭く切ってある爪で突き破り、小腸と大腸を掴んで掻き回す。
『グポポポ！　ぐっちゅぬっちゅ！！』

「ぎゃあああぁっ！！　痛いぃいいっ！！　愛衣様お許しをををっ！！」

「とりあえず大腸と小腸グチャグチャにしといてあげるね。後三日ほどでやっと死ねるんだからあの世へ渡る準備しとこうね？」

三日目の円満愛衣の拷問によって、十回の強制射精の快楽と腹部の苦しみ、地獄の激痛を味合わされた隆起は、愛衣のフィストファックによってゆるゆるに拡張された肛門から、ドバドバとハラワタからの鮮血を流しながら四日目の朝を迎えることとなる。

菅野莉央がペンチを手にして歩み寄る。

「かなりお尻の穴から出血してるみたいだけど？　まだ大丈夫？」

「はぁ、はぁ、全身の力が抜けてゆく……さすがのワシも一週間は持たないように思うぜ。もう殺してくれお嬢ちゃん」

「ダメだよ。きっちり一週間生かしておいて生き地獄を味わってもらうから。四日目の本日は生爪剥がしの刑だよ。手足の爪全て麻酔なしで剥がしてゆくから」

「ぐっ！　お、鬼め」

「あなたにだけは言われたくないよ」

『ガツッ！　グリッ……メリメリメリメリ』

「がぎゃあああああっ！！」

「いい声ね。もっと哭いてよ？　ほら」

『バリッ！！』

「ぎゃあああああああっ！！！！」

一枚、二枚、三枚、時間をかけてゆっくりペンチで爪を剥がしてゆく莉央。

手の次は足の爪を剥がしてゆく。

鬼畜の絶叫は休憩室の中にいる全ての拷問処刑人にまで聞こえた。

「やってるやってる。今日は莉央ちゃんだけで全ての生爪剥がすんだって」

「あはは！　見てみたかったけど何故か私たち、今日はこの部屋出られないんだよね……」

美香がはしゃぐと明日香がそれに応える。

他のメンバーはスマホをいじってヒマを持て余していた。

「爪全部剥がし終わったよ？」

「うおお、ぐおお、ううう」

「涙流してる？　鬼畜でも涙なんて流せるんだね？」

「はぁ、はぁ、ワシにも責めさせてくれえ、お願いだぁ」

「はあ？　何寝ぼけたこと言ってるの？　あなたは死刑囚なの。Ｍはこれ見よがしに体験させたげるけど、Ｓは無理なの」

「ううう……いでえ……いでえよぉ……ぐすん、ぐすん」

「後少しの辛抱だよ。最終日まで頑張って生き抜いてね」

呻きながら泣き続ける佐和山隆起に背を向け、休憩室へ戻る莉央。

五日目の朝には肛門からの大量出血で半死に状態となっていた隆起へ栄養剤を点滴。

更に血止めの注射を全身に打つ。

「強力な血止め注射の意味はもう一つあるのよ。それがこれ！」

『ヴィイイインッ！！』

宮垣咲良はチェーンソーのエンジンをかけて不敵に笑う。

「佐和山隆起。今から四肢切断の刑。執行します！」

『ヴィイイインッ！！　バリバリバリバリッ！！』

「はぎゃあああああああああっ！！」

セーラー服を返り血で真っ赤に染めながら咲良はダルマになった哀れな男を見下ろす。

「可愛くなったじゃん。やだ！　ダルマ男にされてもチンポおったてる！？　とことん変態だねあんた……」

八人の拷問処刑人の少女たちに囲まれて見下されながら四肢を切断され、ペニスを隆々と勃起させる哀れな男、佐和山隆起。

少女たちは隆起の顔面やペニス、腹部などを交代で何度も踏みつけていった。

切断面は包帯で強く縛り付け、強力な止血薬の効力もあり、出血性ショック死を防ぐことに成功する。

『シコシコシコシコシコシコ』

円満愛衣が四肢切断されたダルマ男のペニスを握りしめ、ピストン運動を開始した。

周りの少女たちは爆笑を始める。

これだけ哀れな姿にされてもなお、ペニスを勃起させ、女子高生にシゴかれる。

哀れすぎて笑わずにはいられない少女たち。

『ドピュッ！！　ピュピュピュピュピュピュピュッ！！』

大量の精液を愛衣の手コキによってぶち撒ける隆起。
拷問処刑人の少女たちの足元へ大量の精液が撒き散らかされた。

「やだ。手足ちょんぎられてまで射精すんなよオッサン！」

「可愛い女の子たちに射精するとこ見られて嬉しい？　痛くても苦しくてもまだ興奮してるんでしょ？　あはははは♡」

好き勝手に罵声を浴びせかける少女たち。
全身の激痛と陰部の快感とのギャップに、全身を硬直させてヒクヒク震え始める佐和山隆起。

四肢切断されたため、磔台から簡易ベッドの拘束に変更された隆起は、六日目の朝を迎えることになる。

「アーン。お口いっぱい開いてぇ〜」

『むごっ!?　むごごおっ!!』

『ガツッ!　メキメキメキメキ……バコンッ!!』

「ぎひいいいっ!!」

前歯以外の残っている歯をペンチで引き抜いてゆく鬼頭美紅。
奥歯の奥まで全ての歯を麻酔なしでグリグリとペンチでこね回しながら引き抜いていった。

「あ、あばばばば」

「あはは!　歯を全て失ったら一気に老人みたいな顔になっちゃったねぇ?　歯って大切なんだねやっぱ」

「いあい……いあすぐううう」

「え?　なんて言ってるの?　歯がないからわかんなーい♪」

『ズボッ!!』

「ぎぇえええええっ!!」

ペンチの柄をいきなり右の眼球に突っ込む美紅。
そのまま掻き回して眼球をミンチにすると、一気に引き抜き今度

は左目へ差し込む。
　同じく掻き回してゼリー状のミンチへと変える。
「もうぼちぼち光も要らないよね？　闇の世界へ堕ちなさい」
　今までで最高の絶叫をあげるが、既に喉が潰れていて大した音量にはならなかった。
「もうお前には何も見えない方が幸せだろ？　最終日を前に視界での恐怖を除いてやるよ。色々と拷問器具や処刑器具が見えたら怖いだろ？」
　激痛に悶え苦しむ隆起だったがダルマ状態で簡易ベッドに拘束されている為身動きすら取ることが出来ない。
　更にペンチで鼻を掴み、無理矢理先端部を引きちぎる。
　二つの穴が丸見えになり、鼻血が勢いよく噴き出した。
　ガーゼを突っ込んで無理矢理ガムテープで止めて止血する。
「かひゅうっ！　かひゅうっ！　ゴポポ……」
　苦しそうに口だけで息をする隆起。
　血が邪魔をしてまともに息ができない苦しさを味わうこととなる。
　鬼頭美紅の適当な拷問が終了し、遂に最終日の七日目の朝を迎え

ることとなった。

――――最終日。七日目。

残念ながら未だ男に息はあった。

最新医療の技術を駆使した菅野莉央が失血死、ショック死、全ての死から佐和山隆起を救ってきたからである。

今までのように、簡単には死なせてくれないところが今回の処刑のより一層残酷な部分であった。

「佐和山隆起。聞こえる？」

「あうう、うううあ」

「目も鼻も歯も……爪に両手両脚まで失って……まだオチンチン勃てられる？」

眼鏡っ子の小学生、結城明日香が佐和山隆起のペニスを握り締めながら問いかける。

まともな返事がないので、さすがの屈強だったこの男も、かなり弱っている証拠であった。

「頑張れオッサン！　今勃起出来たら人生最期の射精をさせてあげ

る♡」

同じく小学生の富田美香がそう言いながら隆起の肛門へ中指を挿しこみ、前立腺を掻き回す。

「ほらほらほらぁ～。ここ？　感じる部位はここなのかなぁ？　あはは♡」

『ズプ！　グチュグチュグチュグチュ！』

ゆっくりゆっくり、確実に勃起してゆくペニス。

明日香が激しく手コキを開始する。

「やだ！　本当に勃起しちゃった……じゃあご褒美よ。明日香ちゃんの超高速手コキいいいいっ！！　ほらあっ！　イっけえええええっ！」

『シコシコシコシコシコシコ！　シュコココココココ！！』

「ふんぬううううっ！！」

『ドピュッ！　ドクドクドクドク……ピッ！　ピピッ！』

明日香のメガネに精液がへり掛かった。

「きったな……オッサン、私の大切なメガネにザーメンへりかけた罪は重たいわよ？」

『スパッ！！』

カッターで一気に根元からペニスを切断する明日香。

声にならない声で白目を剥いて絶叫するが、明日香は構うことなく陰嚢へカッターの刃を入れる。

中心部をまっ縦に切り裂いて手際よく二つの睾丸を引き摺り出す。

「どれどれ？　オッサンの睾丸は柔らかいかな？」

『グリグリ……ぷにぷに』

まだ神経の管が繋がっている生の睾丸を両手でそれぞれ摘み、ぷにぷにと弾力性のある手触りの感触を楽しむ明日香。

「さてと。オッサンの睾丸もーらいっ♪」

『ブチブチイッ！！』

一気に二つとも神経管を引きちぎる。
完全に本体から切り離された睾丸が虚しく女子小学生の掌の上で転がっていた。
泡を噴いて失神する隆起の肛門へカッターを突き入れ、会陰部を縦に切り裂く。

『ザク！……ズズズズズ』

「前立腺……抉り出してあげるから♡」

以前莉央に教わった通り会陰部を切り開き、手際よく右手を突っ込んで前立腺を掴み、引き抜く。

『プルルンッ！』

「はぎゃあああああっ！！」

「あはは。痛い？　こんな丸くて小さなヤラシイ臓器で快感得てるんだ男って……クルミみたいな大きさだね？　潰してやる。えいっ♡」

『バチュッ！！』

あまりの激痛に意識を取り戻した隆起だったが、前立腺を握り潰されるシーンを見せつけられてもう一度失神する。

前立腺と共に膀胱まで切ってしまったのか、激しく尿が噴射した。
これもメガネにくらってしまった明日香は、更に頭に来て大きく開かれた肛門、会陰部から右手の拳を捩じ込み、激しく出し入れを開始。
『ズッポズッポズッポズッポ！！』
「何ヤラシイ音立ててんの？　アナルから血だけじゃなく透明の汁まで垂れ流しちゃって……これって腸液かしら？　……この変態！」
拳を捩じ込み、肘まで肛門深く差し込んでの激しいピストン運動に、直腸と大腸は更に激しく損壊していった。
腹腔内でほぼミンチと化していたのである。
「ほらほらほらあっ！　小学生の女の子の腕でも肘まで突っ込まれたら死ぬほど痛いでしょう？うふふ♡　ハラワタぐちゃぐちゃになってそのまま死んじゃえ！」
『バチュバチュバチュバチュ！！』
「ふんぐううううう！！　はあうううううううっ！！」
「まだそんな声出せるんだ？　やるなぁ」

結城明日香は半時間ほど中年男のアナル、直腸を拳と腕で犯し終えると、ゆっくり立ち上がり血と便と腸液まみれの右腕をタオルで拭き取った。

「もうガバガバだね。オッサンのお尻の穴。みっともない」

アナル調教に自分も一役買っておいて平然とそんなセリフを垂れる明日香。

小野メグと大野真子は短刀を握りしめて隆起の全身に切れ目を入れてゆく。

ある程度切れ目を入れたらそのまま腹部や顔面、背中と皮を剥いていった。

『バリ、バリバリバリッッ！！』

「んんぐううあうあう」

半時間も経たないうちに女子中年生二人による人体生皮剥がしが成功した。

皮を剥ぎ取られて全身真っ赤になったダルマ男は、ヒクヒクと小さく痙攣を始めていた。

目を潰されて歯を抜かれて鼻を削がれて全身の皮を剥かれ、全ての爪を剥がされて四肢を切断される。
更にペニスは切断、睾丸は潰さないまま管ごと引きちぎられる。肛門はガバガバに調教され前立腺摘出、更に肛門から大腸までの腕ファック。
恥と激痛の生き地獄をこれほどまでに味わった罪人は残酷処刑島で過去に存在しないだろう。
円満愛衣も短刀を持って歩み寄り、全身の皮を剥がされて真っ赤になった男のヘソへ切っ先を突き刺した。
そのままペニス切断面まで切り下ろし、ミンチになって腐りかけている大腸や小腸を全て引き摺り出した。
「汚いヘソから切開して……臭い内臓抜いといてあげるわ。いっぺん、逝ってみる？」
『ズルズル！　ズルルルル！！』
愛衣が全ての腸を抜ききったころ、息が大きく激しく変化してゆく佐和山隆起。
死が近づいていている。
「一週間、よく頑張ったたね。なかなか死なないようにするのも結構

大変だったんだよ？　わかるかな？」

菅野莉央はそう言いながら２００度に熱したサラダ油を、ハラワタを抜いた腹腔内の空洞部分へ注ぎ込む。

『トクトクトクトク……ジュウウウウッ！！』

「グエエエエエエ！！」

人のものとは思えないおぞましい絶叫を上げながら全身を激しく痙攣し始める隆起。

会陰部からペニス切断面まで大きくパックリ開いた股間に直径２０センチもあろうかとゆうぶっとい木の杭を差し込み、木槌で打ち込んでゆく。

口まで見事に貫通させるためにみんなで罪人の体勢を変えながら、鬼頭美紅が肛門から杭を打ち込む役であった。

『ドカッ！！　ドコオッ！！　ゴンッ！！』

「はぎっ！　きひっ！　ピギィッ！」

「あはは！　コイツ、死にかけてるのに杭打ち込むたびに変な声出してるよ？　受けるぅ♪」

鬼頭美紅は爆笑しながらも一撃一撃確実に強烈な打ち込みを行い、遂に肛門から口までの木の杭串刺しに成功する。

『ドカッ！！……がぼおっ！！』

「お腹の部分空洞だから杭が丸見えなのね。あはは……さようなら佐和山隆起」

肉片や腸の一部が混じった赤い塊と粘液が、佐和山隆起の口から太い杭の切っ先と共に飛び出した。

「きぴいいっ!?……やは、やは、やはあっ！……ガク」

「何がやはっ、だよ。あはは。ケツマンコぶっといので掘られて昇天なんて哀れだねぇ？　やっとくたばっちまったか鬼畜野郎め」

『グリグリ！　グリグリ』

「ほら、もっとケツ穴から上の口からハラワタのミンチ撒き散らせよ？」

『グリングリン……グチュグチュ！』

美紅が見事に突き刺さっている木の杭の柄を足の裏で捩じ込み

ながら更に内臓を掻き回す。
内臓が掻き回される卑猥な音があたりに響き渡った。

宮垣咲良はマシンガンを手にして銃口を遺体へ向ける。

「お前みたいな鬼畜な野郎は何度生まれ変わってきてもあたいたちが処刑してやるからな？　覚えとけボケェ！」

『ガガガガガガガガガガガガガガガガガ！！』

『ベチャベチャ！　ビチャビチャビチャビチャビチャッ！！』

肉片があたり一面に飛び散り、遺体だけではなく木の杭までも原型を留めないほどズタズタになった。

「ふぅ。スッキリした」

血とハラワタと肉片まみれのセーラー服を、島に吹く強風に靡かせながら、少女たちは迎えの船の待つ簡易な港へ向かうのであった。

残酷処刑島に新たに二つの遺体が加わった。

強制ＳＭ蝕まれる無垢なる少女（後編）（後書き）

残酷処刑島で拷問処刑が開始されて以来の最強クラスの拷問処刑が遂行された。

一週間にも及ぶ生き地獄を佐和山隆起に味合わせたことで、理不尽に命を奪われた馬詰紗夜ちゃんがあの世で少しでも癒されることを願う少女たちであった。

恋の行方（前編）（前書き）

異性を愛する人。
同性を愛する人。
様々な愛がこの世には混在する。

中学生たちの愛の行方は？

「はぁ～」

「…………」

「はぁ～」

「あのさぁ咲良さん、さっきからため息ばかりついてるけどどうしたの？」

「ん？　あ、ごめん」

慌てて顎の手と机に付いていた肘を元に戻しながら渋谷凪子に謝る宮垣咲良。

中学生アイドルである宮垣咲良と、大野真子、小野メグが通っている極北女子中学校では今日も平和な日々が続いている。

「鬼頭美紅……無茶苦茶喧嘩強い同い年の女……週一でわざわざあたいの近所に来てくれて格闘技を教えてくれてる」

「ふぅん。そんなに強いんだ鬼頭美紅って子は」

「うん。はっきりいって大野真子と小野メグを遥かに凌ぐ強さだな。あのサイボーグ小学生、菅野莉央と多分同等だと思う」

「出た！　サイボーグ♪　確かに指原をあそこまでボコる小学生はきっとサイボーグだわ。あはは」

午前の授業が終わり、昼休みのチャイムが鳴る。

『グチュグチュグチュグチュ！』

「あんっ！　あはんっ！　もう許して……」

渋谷凪子に手マンされている同じクラスの三木美喜代。
アイドル活動をしている宮垣咲良にかなり嫉妬していて陰口を言いまくっていたのがチクられてバレて折檻中とゆうわけであった。

「咲良さん、コイツどうする？　ボコる？」

「……ボコるほどの価値もないだろ。素っ裸にひん剥いてあたいと凪子にオナニーでも見せてもらっちゃお」

「とゆうわけで……よかったなボコられなくて。さぁ脱げ」

「ひ、ひいっ！　やめて！　お願い許してぇえっ！！」

結構何度も顔面を渋谷凪子に平手打ちされた三木美喜代は自ら制服を全て脱ぎ、中指を根元まで膣に突き入れて強制オナニーを開始

した。

「潮吹いてイかないと許さないから」

「はい。渋谷さん。あん、あん、あは、はぁん」

給食を食べながら他のクラスメイトたちも三木美喜代のオナニーを静観している。

床の上で素っ裸になって必死にオナニーするが、なかなかイくことができないでいる美喜代。

宮垣咲良はそっと席を立ち、美喜代の横にしゃがみ込む。

「手伝ってやろうか？」

「え？　だ、大丈夫です宮垣さん……」

「早くイかないと給食食べられなくなるよ？」

「で、でも……ひっ！？　やああああああっ！？」

『ガガガガガガガッ！！』

咲良は両足首を掴んで仰向けに倒し、スニーカーを脱いで靴下を履いただけの足の裏で電気アンマを開始した。

膣にくっつけたままの電気アンマは蹴り込むタイプと違い、痛み

は殆どなくむしろクリトリスと小陰唇と膣が強力に摩擦されてかなり気持ちの良いものであった。

「やあああああっ!?　んんんんっ!!　や、やめてえええっ!!　アンアンアンアンアンアンッ!!」

「気持ちいいだろ?　あたいの電気アンマは?」

『グチュグチュ!　ガガガガッ!　グチュグチュ!!』

時折親指を膣口に挿入し、また足の裏で外性器全体を擦り付ける電気アンマ。

これの繰り返しでついに三木美喜代は、人生初めての潮吹きとオーガズムを同性の同級生である宮垣咲良にやって味合わされることになる。

「やはあっ!?　気持ちいいいいいっ!!　んんんんんっ!!」

「ほら、イけよ」

『プシャアアアアッ!!　ブシュウウウウッ!!』

咲良の靴下は三木美喜代の愛液と潮でビショビショに濡れてしまう。

「おいおい、潮吹きすぎだぞお前……」

「はぁ、はぁ、はぁ。だって……き、気持ち良かったんだもん……はぁ、はぁ」

そのまま濡れている咲良の足を舐め始める。

自分の指を膣に挿入しながら顔を紅潮させてその行為を行う。完全に宮垣咲良に主人としてMに目覚めたと周りが思った瞬間であった。

「おい、もういいからやめろ！」

「宮垣さん、さ、咲良様。私をもっといじめてください……」

「き、きもっ！　さ、咲良さん、コイツなんかヤバそうだよ？」

「あ。ああ。あたいもかなりそう思う」

この日から咲良の虜となった三木美喜代は、渋谷凪子が嫉妬するほど咲良の側を離れなくなってゆくのであった。

――数日後の金曜日。

「咲良様、私の処女を足の指で奪ってくれてありがとうございます」

「あ、そ、それはすまなかった。ん？　お前その前に自分の指深く突っ込んでオナニーしてたじゃねぇか？　元々なかっただろ処女膜なんて？」

「そんなことはどうでも良いんです。今日は指でイかせてください」

「あ、ああ。もう面倒くさいし服は脱がなくて良いからジッとしてろ」

「はい。制服を着たままスカートの下からパンツの裾から手を差し込まれて咲良様に犯されるのも無茶苦茶感じるシチュエーションですっ♡」

自ら担任を説得してまで咲良の隣に席替えした三木美喜代は、今日も咲良の手マンで何度も絶頂を感じている。

ふと何かの疑問を感じた渋谷凪子がそっと口を開いた。

「……お前、もしかして元々咲良さんのこと……ま、まさか悪口言いふらして折檻されたのも全て計算ずくだったのでは！？　おい美喜代っ！？」

「はぁ？　何をバカなことをおっしゃってるんですか渋谷凪子」

「え？　私にはフルネームで呼び捨て！？」

「アンアンアンアンッ！！　イ、イくっ！！　さ、咲良様ああ～♡」

『プシャーッ！！』

「はぁ、はぁ、はぁ。も、もう一度イかせてください！　お願いしますうっ！」

全てを悟った渋谷凪子にもう三木美喜代を責める気力は完全に消え失せていた。

嫉妬とも取れる微妙な恨みが残った後味の悪いものとなってしまうのである。

『こ、このクソガキめ。なんか咲良さんが嵌められたみたいで納得いかねぇ……』

「凪子！　おい凪子！」

「え？　ど、どうしたの咲良さん？」

「コイツ膣痙攣起こしやがってあたいの指が抜けなくなったんだ！ローションか何か持ってないか？」

「…………はぁ～」

数日前の宮垣咲良のように深いため息をつく渋谷凪子であった。

放課後、このまま無事に帰れるはずもなかった。

「咲良さまぁ～っ♡　今日もパフェ食べに行きましょう！」

ここ数日間、連続で駅前のパフェを食べに連れて行かれる咲良。
渋谷凪子もついてくるが、奢ってくれるのはあくまで咲良のみ。
凪子は自腹で買って食べていた。

「後少しで全ての品を食べ尽くしちゃいますね咲良様っ！」

「あ、ああ。そうだな。どれも美味いよな……」

「おい美喜代！　たまには私にもおごってくれよ？」

「渋谷凪子はお金持ちじゃん？　お父さんの年収二千万円超えだよね？　私に奢らせなくても大丈夫」

「ど、どうしてそんなこと知ってやがる!?　お前いったい……」

ニヤリと微笑みながら咲良の腕を組む美喜代の顔を、一瞬凪子は恐怖と戦慄を覚えたのであった。

凪子とも別れて咲良と美喜代はそれぞれの自宅に分岐する交差点に差し掛かる。

「じゃあな。また明日」

「……」

「どうした？　美喜代」

「今晩、と、と、泊まりに行っていいですか？」

「ああっ！？　な、なんでお前をあたいの家に……うぷっ！？」

いきなり抱きついて強引にキスをする三木美喜代。
薄暗い夕闇の中、目を見開いたまま固まってしまう咲良だった。

『パァンッ！！』

「ひぶうっ！？」

強烈なビンタで地面に倒れ込んでしまう三木美喜代。
叩かれて真っ赤になった左頬を押さえながら宮垣咲良の目をジッと見つめる。

「や、やめろ！　あたいには想ってる人がいるんだ！」

「！！……そ、そんな」

「今度こんなことしたらぶっ殺すからな！？」

そのまま振り向いて帰路につく咲良の背中を見つめながら三木美喜代はしばらく固まっていた。

「ふぇえーん。わあぁーん！　わあぁーん！」

完全に夜の帳が折りた北部地方の田舎道で涙が枯れるほど泣き崩れる三木美喜代。

背後で号泣する声を察知しながらも足を止めずに帰路につく咲良であった。

――極北公園。日曜日。

「はぁ、はぁ」

「どうした？　そんな早く息が上がってたら長期戦では不利になるよ？」

「まだまだ！　オラァッ！！」

鬼頭美紅のスパルタ的な修行を、ここのところ毎週受け続けている宮垣咲良。

少しずつではあるが、確実に強くなっていることに、本人は全く気付いていなかった。

『ガツ！　ガツ！　ガツ！』

美紅の三連撃を全て肘で受けると、反撃の回し蹴りを放つ。

「うっ！？」

『ガツッ！』

間一髪で同じく肘で受ける美紅。

『今のは危なかった！　コイツ、確実に強くなってる？』

右手を挙げて咲良へ慌てて呼びかける。

「ちょっと待て！　休憩だ」

「は、はい」

缶ジュースを飲みながら汗を拭く咲良。

「ふぅ〜。相変わらず美紅さんの指導はキツイですね」

「当たり前でしょ。あんたには強くなって貰わないと困る」

「え？」

隣で寝転がりながら白い雲を見つめる鬼頭美紅をチラ見する咲良。

「美紅さんはどうしてこんな辺鄙な田舎にまで足を運んでくれるんですか？　あたいなんかの為に」

「……まだ莉央ちゃんにも話してなかったんだけど」

完全に首を美紅の方へ向けて気になる話の続きに備える咲良。

「あたし、今月限りで拷問処刑人辞めるから」

「!？」

「小学生の時好きだった男の子とたまたま再開して……そのまま付き合うことになった。彼氏彼女がいると拷問処刑人は首になるんだ。だからあたしから藤堂長官に直接伝えた」

「………そ、そんな。まだまだ美紅さんと一緒に頑張っていける

と思ってたのに……」

「莉央ちゃんのこと、よろしく頼む。木村真紀さんや大山加奈さんからも頼まれていたけどあの子は本当は心優しい子なんだ」

「え？　あんな残酷なのに！？」

目を見開いて不思議に想う咲良に構うことなく続ける美紅。

「幼い頃の境遇があの子を残酷にしてしまったかも知れないけど……人を愛する気持ちとか弱者に対する情けは誰よりも強く持ってると思う」

咲良はふと極北女子中学校での菅野莉央との初めての対決を思い出していた。

「あの子は仲間の為に戦うあたいに対して……ワザと負けてくれたんだ。あたいにとって絶対負けるわけにはいかない場面であたいに勝たせてくれた……本当だ！　芯から冷酷なやつにできる芸当ではない！」

「気付いてたんだ。やっぱお前にあたいの修行付けてきて正解だったよ」

「でも……美紅さんに拷問処刑人を辞めてほしくない。お願いですから考え直してくれませんか？」

無言のまま流れる雲をずっと見つめ続ける美紅。

「美紅さん……正直に言います。あたいは美紅さんのことが大好きです」

「…………」

「強引にヤラしいことされた時、本気で感じてました。同性のあたいで本当に迷惑かも知れませんが、あたいと付き合ってください」

静かに目を閉じて色々と思考を巡らせる美紅だったが、やがてそっと目を開ける。

「本気で感じてたよね。それはあたしにも分かってた」

「大野真子も同じ。美紅さんのことを本気で好きになっちゃっています。わかってました？」

「うん。あたしもバカじゃないから。責めてる相手が嫌々イってるのか本気で感じてイってるのかくらいは分かる」

「え？　強いけどバカじゃなかったんですか？」

「お前……殺していい？」

「冗談です。あたいと大野真子も美紅さんのことを愛しています。それでもその男の子を選ぶのですか？」

ゆっくりと起き上がり深く溜息をついた後、そっと口を開いた。

「咲良の修行も今日で最後。もしあたしに勝つことができたら付き合ってやるよ」

「……本当ですか？　二言はないですよね？」

「ああ。それほどまで強い相手にはあたしも濡れちゃうからね」

「今までの修行の成果を全てぶつけます」

「うん。かかってくるがいいわ」

恋の行方（前編）（後書き）

鬼頭美紅の衝撃の拷問処刑人引退宣言。
本気で好きになってしまった宮垣咲良は引くに引けない覚悟を決めて告白。
お互いの想いをかけての決闘が始まろうとしている。

恋の行方（中編）（前書き）

遂に決着を迎えようとしている拷問処刑人同士の闘い。
咲良と美紅。
憎しみではなく愛で闘う咲良の運命は？

恋の行方（中編）

殺風景な小さい三角公園で、本気で闘志を燃やす女子中学生の二人。
宮垣咲良の連続攻撃から幕を開ける。

『ドカッ！　ガッ！　ガシッ！　ズンッ！』

拳と蹴りの複合技が次々と鬼頭美紅を襲う。
全て腕と肘で受けながら後退する美紅は、不敵に笑っていた。

「本当に強くなったな咲良」

『シュン！……バキイッ！！』

「ぐっ！？」

超高速の前蹴りが顔面にヒット。
咲良は開始早々から鼻血を出しての闘いとなってしまう。

「あはは。血の気が多いなぁ咲良は」

「ちっ、笑わないで下さい。たまには血も流さないと身体に悪いですから」

「凄い負け惜しみだね？　本当受ける」

『ドカッ！　ガシッ！　ドガガガガガッ！！』

強烈な咲良の連続攻撃。
美紅は体勢を崩してよろけてしまう。
そこに回し蹴りを放つ咲良。

「しまった！」

『バキィッ！！』

「ぐわっ！？」

カウンター的に顔面に入った咲良の回し蹴りは、鬼頭美紅の意識を一瞬とはいえ完全に飛ばしてしまう。

仰向けに倒れ込んだ所へすかさず馬乗りになり、マウントポジションからの強烈な本気のパウンドが開始される。

みるみる内に変形してゆく美紅の顔面。

『ガツッ！　ドカッ！　ボコッ！　バキィッ！』

「はがががががっ！？　ぐひいいいいいっ！！」

「参ったか！？」

「ぐっ、ま、まだまだ」

『バキバキッ！！　グシャグシャッ！！』

なかなか降参しない鬼頭美紅へ更なるパウンドを浴びせかける咲良。

瞼は腫れて鼻血をドバドバ流し、唇も裂けてもはや原型を留めていない美紅。

ここまでボコられたことは、美紅の人生で初めてのことであった。

スカートの隙間から手を入れ、更にパンツの裾からも手を滑らせる。

『ズッ！　スルル……』

「ひぐっ！？　わ、わあっ！？　や、やめろっ！！」

「あたいが美紅さんを……犯すの初めてだよね？」

『ズブッ！　グチュッ！！』

中指が美紅の膣口へ突き入れられてゆく。

「やあっ！？　やめてっ！！」

「ダメ。美紅さんのオマンコ……あたいが掻き回してあげる」

『グチュウッ！！　クチュクチュクチュクチュッ！！』

「あっ！　痛いっ！　や、やめ……あんんっ！！」

「黙れ美紅！　黙ってあたいに犯されろ！」

「ひっ！？　やはああああああっ！！」

『パンパンパンパンッ！！』

顔面を更にビンタで連打され、膣内を右手の中指で掻き回し続けられる鬼頭美紅。

完全に戦意喪失して咲良になすがままにされる。

「こ、こんな屈辱人生で初めてだ……なんたる不覚……あんっ！？」

「後ろの穴も許さない」

『ズボッ！　ズブブブ！！』

平手打ちを止めた左手も美紅の下半身へ回し、人差し指をアナルへ挿し込む咲良。

激しく前と後ろの穴を掻き回された美紅は強制的に咲良にイかさせれてしまった。

「やだっ!?　イくっ！　んんんんっ！！」

「ほらイけ！　美紅っ！」

『プシャアアアアッ！！　ビクビクッ！！』

愛液と便まみれになった両手の指を抜き、美紅の私服に擦り付ける咲良。

「あたいの勝ちだね。約束通り付き合ってもらうから」

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ」

「お尻の穴、無茶苦茶締まり良かったな？　初めてだったの？」

「あたしに対してそんなことした上で、更にタメ口か……参ったな。でもかなり気持ち良かったかも……まだ膣がヒクヒクしてる……ちくしょう……」

頬を真っ赤にしてゆっくり座り込み、咲良の目を見つめる。

「あたしが同性に負けて犯されるなんて初めてだ。つい油断したとはいえまさかお前に負けるなんて夢にも思ってなかったよ咲良……」

「あたいだって必死だったから。それほど美紅さん……美紅のことを好きだった。今日からあたいと付き合ってくれるな？」

「……仕方ねぇな約束だから。でも好きになったアイツのこと忘れられるかな……？」

しばらく美紅の目を見つめながら、ニコッと微笑んだ後ブワッと涙が溢れ出す。

そのまま美紅を強く抱きしめる咲良。

「あたいが毎週のデートで忘れさせたげるよ」

「そうか。元々あたしもお前のこと好きだったしな」

「え？」

「なんでもない……こんなに乙女の顔面ボコボコにさせやがって……今まで稽古付けてきた師匠にあんまりじゃないの？　痛たたた……」

「それほど美紅さん……美紅を他の奴に取られたくなかったの！

わーん、わーん」

美紅に抱きついたまま号泣する咲良。
顔面をボコボコに腫らしながら鬼頭美紅は半ば放心状態になってしまっていたのであった……。

数日後、菅野莉央の携帯へ連絡をする美紅。

「ま、マジで!?　そこまで咲良さん強くなっちゃったんだ」

『一瞬の油断だったんだけど、そのあと猛烈なパウンド食らって負けちゃた……』

「油断しすぎ!　今度やれば負けないけど運悪く負けちゃったたってやつだねそれ……やり返さなくてその上に付き合っちゃって……美紅ちゃん本人は構わないの?」

「あれほどまで本気で愛されて泣かれたらボコボコにされながらも嬉しかったんだ。あたしも元々咲良を愛しちゃってたみたい」

「あは…あはは……そうなんだ。でも女同士の場合は藤堂長官に内緒にできるよ。辞めなくてもダイジョブジョブジョブ♪」

「そ、そうなんだ。じゃあ同性と付き合うことになって辞めていった大山加奈さんは辞め損なのでは?」

「加奈さんは入籍したからね。そりゃ無理でしょ」

「そうなんだ。じゃあこのまま咲良と付き合いながら続けても大丈夫なのね？」

「うん！　頑張って続けよう拷問処刑♡」

もう一度やれば負けることはない。

いや、もう二度と負けることはないであろう相手に今回運だけで敗北してしまった美紅も、やり返す選択をせず咲良の意思に応えてあげる選択をした。

それは美紅自身の意思でもあったのである。

――極北女子中学校。

「ええっ！？　あの鬼頭美紅に勝っちゃったの！？」

「うん。油断し過ぎてたのだろうけどね。勝ちは勝ち。美紅のアソコ犯してやった」

「ま、マジで！？　すっごいなぁ咲良さん……」

「そんで付き合うことになったからあたいのモヤモヤも一気に晴れちゃったよ！」

渋谷凪子と宮垣咲良の会話を聞きながら本気で涙を流す三木美喜

代がついに耐えきれず号泣し始めた。

「わーんわーん！　えーんえーん！！」

「わっ！？　びっくりしたなぁもう……」

「咲良様が他の女と付き合うなんて信じられませんっ！　私のことはどうなるのですかあっ！？　えーんえーん！！」

こちらも本気で咲良を好きになっていた相手……。号泣も致し方のない所である。

「あーもう。うるさいなぁ。これからも奴隷として虐めてやるから」

「え！？　本当ですか！？　やったあ♡」

「奴隷でもええんかい」

思わず呆れ顔でツッコミを入れる渋谷凪子であったが、とにかく咲良に責めて欲しい美喜代は、これからも咲良に犯してもらえると思っただけで大いに安心して喜んだわけであった。

「彼女できたのに私のこと責めてくれるなんて本当ありがとうございます咲良さまっ♡」

「あ、ああ。キスとかはダメだけど指や足でイかせてやるくらいなら構わない」

「ありがとうございますぅ～っ！！　良かったあ～♡」

凪子は何度も溜息をついて机に覆い被さり眠りに入る。

咲良の前でパンツを脱いで催促をする美喜代に、かなり面倒くさいと思いながらも応えてやる咲良。

指マンで二回ほどイかせてから凪子と同じく眠りについた。

気持ちよくなって眠くなった三木美喜代も眠りにつく。

結局この日、三人が授業中に目覚めることはなかった……。

――――更に、一ヶ月後。

「もう三日目だね。アイツ来なくなって」

「うん。どうしたのかな？」

「咲良さんのことあれだけ想ってたら毎日登校するはずなのに」

「そだね。もうあたいに飽きちゃったんじゃない？」

「あはは。それはないよ」

特殊任務省の藤堂長官から菅野莉央へ、とある連絡が入り、授業中にも関わらず咲良の携帯がなる。

「はい。莉央？　どうしたの？」

『明日の土曜日。仕事です』

「そうなんだ。分かった。予定開けとくよ。どっちの仕事？」

『アイドルじゃない方。三木美喜代さん。遺体で見つかりました。夕方にはニュースで速報入ると思うけど』

「！？」

『前に咲良さんを好きになった変態がクラスにいるって聞いてたけど……その変態さんが被害に遭っちゃうなんて……以前行方不明になっていた二十歳の男性も同じ犯人に殺害されて死体遺棄されてたことが分かったみたいです。今回の拷問処刑は被害者二人分のお仕置き、とゆうことで。じゃあまた明日お願いします。加害者の男と妻である女、二人の処刑をあたしと咲良さんと愛衣さんで行いますから。では失礼します』

スマホを手にしたまましばらく放心状態になるが、すぐに凪子から遮られた。

「……さん！　咲良さん！　咲良さんってば！」

「え？　あ、ああ」

「どうしたの？　真剣な顔して」

「アイツが……美喜代が死んじゃった」

「えっ！？　まさか……そんな……だ、誰かに殺されたの！？」

「うん。その犯人を明日殺しに行くの」

「……特殊任務省からの電話だったのね。思いっきり仇を討ってきてあげて」

「……分かった」

――三日前。

「悪いなお姉ちゃん。道教えるためにわざわざ車に乗ってきてくれるなんて」

「うん。いいよ！　北部中央図書館の場所が分かったら私の中学校前まで本当に送ってね」

「もちろんだよ。なぁ幸恵」

「そうそう。本当にありがとうねお嬢さん」

助手席の彼女か奥さんであろう３０歳前後の女性も、男と同じく微笑みながら美喜代に話しかけてきた。

数分後、車は山道に入り、一軒の古ぼけた小屋らしい場所へ辿り着く。

「あの……私が教えた道と全く違う所なんですが？　ここに何か用があったのですか？」

「うん！　大アリさ。ここで俺たちと一緒に遊んでいこう」

埃と蜘蛛の巣だらけの小汚い部屋の中で、三木美喜代は想像を絶するおぞましい体験をすることになる。

『バッコンバッコンバッコン！！』

「痛いっ！　ひぎいっ！！　許してえぇっ！！」

「中学校のマンコは締まりがあって最高だなぁ！ガッハッハッハッハッ！！」

柴崎俊之３０歳。
同い年の妻である幸恵と俊之の二人は、最近レイプと解剖、殺人

に目覚めてきた変態夫婦であった。
　タバコを吸いながら夫である俊之が行為を終えるのを待つ妻の幸恵。
『ドピュッ！　ドピュピュピュピュピュピュピュッ！！』
「あんっ！！　やあああああっ！！」
「中出し完了！　でも心配はいらねぇぜお嬢さん。妊娠するまもなく本日あの世へ送ってやるから。ガッハッハッハッ！！」
「仰向けにして縛っておいてね！　前の若い男みたいに」
　妻の幸恵に交代する前にバックで犯していた三木美喜代を汚いベッドに仰向けに寝かせて手足を拘束してゆく俊之。
「俺の妻はな。解剖が趣味なんだ。解剖学を学んで遺体を解剖する仕事に就きたかったんだけど夢が叶わなくてな……趣味で解剖してるって訳さ。ガハハハハハハ！！」
「余計なこと言わなくていいの。サッサと代わって」
　ベッドに拘束されてままある程度手慣れた手つきでお臍にメスを突き入れると、一気に恥骨上部まで切り下げる。
　ブリブリと飛び出してくる小腸を見ながら舌なめずりして冷笑を

浮かべる幸恵。

「腹部の下部じゃないと萌えないの。上部切り裂いちゃうと心臓や肺傷つけちゃって早く死んじゃうかもしれないし……時間をかけて解剖してあげる♡」

「ぎゃあああああっ！！　んぎきいいいいいっ！！」

あまりの激痛に叫び声しか出ない三木美喜代だったが、徐々に声も枯れてきて悲痛な唸り声しか出なくなってきた。

小腸と大腸を引き摺り出し終えた幸恵は、子宮と卵巣に手をかけて一気に引き摺り出した。

取り出した子宮や卵巣に何度もメスを入れてスライスしてゆく。

「あはは！綺麗な子宮や卵巣だね。切り開いた中身も綺麗なピンク色してるし♡」

ビクビクと全身を痙攣させて泡を噴き始める美喜代の顔をジッと見つめながら腹腔内深くに手を突っ込む。

そのまま性器である膣口から指を突き出させた。

『グチュッ！　ズブブブブ！……ヌポォッ！！』

「ほら、オマンコから私の手が飛び出してきたぁっ！　あはははは♪」

粘液と血に染まった指をぐちゃぐちゃと音をたてながら何度もピースサインして楽しむ幸恵。

「うげ！　腹からマンコに貫通だと？　悪趣味だなお前……もうそいつ死にかけてるじゃんか。早く殺してやれよ？」

「まだ生きてるしぃ。左手はこっちにあげる」

そう言いながら左手の人差し指を美喜代の肛門へ差し込んだ。

腸液、粘液混じりの血がドロドロと流れ落ちている肛門はいともも簡単に幸恵の手首までも飲み込んだ。

『ズブブ！……ボコンッ！！』

「あはは！　ガバガバになっちゃってるんだ？　半分死にかけてるからお尻の穴開きかけちゃってるの？　うふふ♡」

そのまましばらく膣と肛門へ挿し込んだ両手を激しく出し入れ運動を繰り返す。

大きく身体をのけぞらせて遂に絶命する美喜代。

「死んじゃったか……こんなに二つの穴はヌメヌメしてヒクヒク動いてるのにね……」

「やっと殺したか。早く庭に梅に行こうぜ」

「待ってよ。まだ遊ばせて」

メスで小陰唇を切り取り、更にクリトリスをくり抜いた。

「やだー。痛いぃ。そんな所切り取らないでぇ～♡」

「サイコパスだなほんと……ちょっと庭で吐いてくる」

「どうぞどうぞ。後少しで解剖実習終わるから」

乳首まで切り取られ、心臓や肺や肝臓腎臓、全ての内臓を摘出した後、幸恵は満足してオナニーを始めた。

「あん、あん。こんなにズタボロにされたら死んじゃうよお～♪うふふ♡　私に殺されて気持ちよかった？　あははは！　イ、イくっ！　イくううつっ！！　あんんんんっ！！」

自分が解剖した遺体の前で思い切り潮を噴いて絶頂を迎えた幸恵。庭では何度も嘔吐する俊之の姿があった。

三木美喜代を殺害、死体損壊、死体遺棄する以前にも一人の男性を殺害していたこの夫婦。

普通に国が裁いてもおおよそ死刑執行であったが、それでも特殊任務省の拷問処刑へ委ねた警察のトップの判断は……きっと間違ってはいない……。

恋の行方（中編）（後書き）

変態とはいえ自分をご主人とばかりに慕ってくれていた三木美喜代の死を聞かされた宮垣咲良。

猟奇的犯罪者の二人を捕らえた警察は、特殊任務省へ全ての刑を委ねた。

残酷処刑島での、俊之と幸恵への刑の執行が近づく。

恋の行方（後編）（前書き）

いよいよ執行される拷問処刑。
残酷拷問処刑人の少女たちに被害者の復讐は委ねられる。

恋の行方（後編）

「柴崎俊之、幸恵の夫婦二人は、本日この残酷処刑島であたしたちに処刑される事となりました。着ているモノを全て脱いで素っ裸になりなさい」

手足を拘束している器具を全て外しながら菅野莉央が二人の罪人に命令する。

「意味がわからないままこんな場所に連れてこられて……お前らみたいなガキに囲まれて……一体何なんだ？」

俊之の質問には答えないまま拘束が解き終わる。

「どっちにせよ有難い。喧嘩売ってる大人相手の拘束を解いて……本物のバカなのか？　処刑だの何だの意味がわからん事もほざいてるようだし……ガキどもには可哀想だが死んでもらうとするか……」

女子高生である円満愛衣が柴崎俊之の眼前に立つ。

「私に勝てる？」

「は、ははは。舐められたモンだぜ全く……大の男が女子高生に負けるはず無かろうが？」

「俊之！　後で犯しちゃってもいいからここにいる三人のガキども全員ぶっ潰してやって！」

宮垣咲良に拘束を解かれながら夫に声援を送る柴崎幸恵。

物凄い勢いで殴りかかる俊之だったが、全て見切られて攻撃が当たらない。

残酷処刑島に吹き荒れる強風に煽られて、円満愛衣の制服のミニスカートが靡き、ピンク色のパンツを時折覗かせていた。

「どうしたの？　攻撃が当たらないと赤ちゃんにだって勝てないよ？」

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、ちくしょう！　おらあっ！！」

ヤケクソ気味で放った大振りの右ストレートを愛衣は見逃さなかった。

見事にカウンターを合わせ、俊之の鼻の骨は一瞬で愛衣の拳に砕かれる。

『バキィッ！！』

「ぐわっ！？」

一瞬目の前が真っ暗になり仰向けに倒れ込む俊之。
愛衣はすかさず馬乗りになり、まだ焦点が定まらないでいる男の顔面へパウンドを浴びせかける。

『バキバキ！！　グシャグシャ！！　ドカドカっ！！』

「ぐががががあっ！？　ぎひぃいいいっ！！」

一分間もの間、雨あられのような怒涛の連打を俊之に浴びせかける愛衣。
みるみる内に歪に変形してゆく顔面。

『バキバキッ！！ドカッ！！グシャッ！！』

「うぎぃいいいいっ！！」

「愛衣！　その辺にしときなさい。死んじゃったら長時間の拷問が出来なくなっちゃう！」

「はい！　莉央様。すみません……」

莉央に叱られて瞬時にパウンドを止める愛衣だった。
前歯は全てへし折れて、唇も裂け、瞼は腫れ上がり最早柴崎俊之の原型を留めていなかった。

ジーンズのパンツの股間辺りが変色してくる。

「やだなぁ。だらしない。愛衣に殴られておしっこ漏らしちゃったの？」

莉央が冷めた表情で冷たく呟く。

「いやあああっ！？　俊之！！　俊之いいいっ！！」

女子高生にボコられた旦那を心配する幸恵であったが、咲良に真っ赤なワンピースを脱がされてゆく。

「きゃあっ！？　何すんのクソガキ！？」

鼻血が出るほどの往復ビンタを叩き込んで大人しくさせると、パンツ以外全て脱がし終える咲良。

「ほら、パンツは自分で脱ぐんだオバハン」

「ひっ！　やめて！　許してお嬢ちゃん！」

「口で言っても分からないようだな？　旦那と同じような顔にして

やる」

幸恵を押し倒して馬乗りになると、愛衣が俊之をボコったように、咲良の顔面打ち下ろしが開始される。

『バキバキバキバキッ！！　ドカドカドカドカッ！！』

「んぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃあっ！！　んひぃいいいいいいっ！！　痛いいいいいいっ！！」

俊之と同じように妖怪のように顔面を腫らし、前歯を全てへし折られ鼻血をどくどく流しながら号泣する幸恵だった。

小便を漏らし、パンツにシミが刻まれてゆく。

「痛いいいいっ！！　痛いよおおっ！！　助けて！！　許してお願い！！」

やがて攻撃を止めた咲良はゆっくりと立ち上がり、幸恵のパンツをゆっくり脱がせてゆく。

『ズルズルズル……』

「ひっ！？　やだ！！　やめてお願いっ！！　恥ずかしいっ！！」

「黙れ！　しょんべん漏らした汚くて臭い臭れマンコをあたいたちに見せろ！　ほらあっ！」

『ズルリ！……ストーン！！』

「ひゃあっ！？　エッチイイイ！！」

「……オバハンのくせに無茶苦茶綺麗なマンコだな？」

見本のようなピンク色をして綺麗なオマンコに嫉妬する咲良。

「綺麗なマンコしてるから死ぬ前にイかせてやるよ！」

『グチュ！　クチュチュチュチュチュチュチュウッ！！』

幸恵の膣口へ中指を挿しこみ、激しい手マンを開始する咲良。

「あんんっ！？　やだ！　気持ちいいっ！？　アンアンアンッ！！やあああああああっ！！」

『プシャアアアアッ！！』

女子中学生アイドルの拷問処刑人、宮垣咲良に潮を噴かされてイかされる三十路の柴崎幸恵だった。

隣では円満愛衣に電気アンマされながらよがる俊之の姿があった。

「ほら、私の足の裏で擦られて……いっぺん、イってみるぅ？」

「うひいっ！？　はうううっ！！」

『ドピュッ！！　ピュピュピュピュピュッ！！』

…………夫婦仲良く少女たちにイかされるのであった。

「せっかくこの世で夫婦になったんだ。二人があの世へ逝く前にセックスさせたげる」

菅野莉央が頬を赤くして息を早くしている柴崎夫婦二人に囁きかける。

「そ、そんなことが許されるのか？　だ、だったら是非やらせてくれ……」

「あ、あんた……愛してるわ」

「俺もだ。幸恵。セックスしよう」

「うん！」

『バッコンバッコンバッコンバッコンバッコン！！』

半ば死を悟った二人は拷問処刑人の少女たちの前でセックスを開始した。

『ズッコンバッコンズッコンバッコン！！』

「やだ……激しいわね」

食い入るように接合部を見つめる円満愛衣。

「スッゴ！　バケモンみたいな顔面した二人が激しくセックスするなんてウケるぅ♡」

一人爆笑する菅野莉央。

「人生最期のセックス……お互い激しく感じるがいいわ。でもよくあの状態で勃起できるな……」

咲良も微笑みながらセックスを見物する。

『ズブ！』

「はおうっ！？」

「オラ！　もっと激しく腰を振るんだよ！」

宮垣咲良がバックで妻とセックスする俊之の肛門に中指を突き入れながら命令する。

激しく直腸を掻き回すと、更にビンビンに固くなったイチモツを激しく出し入れさせる俊之だった。

女子中学生にアナルを掻き回されながら大量の精液を妻である幸恵の膣内へぶち撒ける俊之。

「あはは♪セーエキ縛り出す度にアナル締め付けるんだね？」

イヤらしそうな笑みを浮かべながら俊之の締め付ける直腸の感触を指で愉しむ咲良だった。

「次はシックスナインよ。激しくお互いの性器を舐め合いなさい！」

「はい！」

「はいっ！」

少し頬を赤くして命令する咲良に即答する罪人の夫婦。

激しく膣口とペニスをしゃぶり合い始める二人。
夫婦がシックスナインをしている最中、咲良は俊之の肛門、愛衣は幸恵の肛門を激しく指で掻き回す。
「さてと……サービスタイムは終わりだよ。今からは生き地獄を味わってもらうから」
菅野莉央が真顔で言い放った。
反撃する気力も失せている二人を莉央はそのまま簡易ベッドに拘束してゆく。
これを合図に咲良は俊之の爪を、愛衣は幸恵の爪をペンチで剥がし始めた。
一枚一枚手の指の爪を剥がしてゆく。
絶叫を上げながら顔を顰めるが、全く気にすることもなく爪を剥がしてゆく拷問処刑人の少女たち。
全ての爪を剥がし終わると、今度は足の爪まで剥がし始める咲良と愛衣。
激痛すぎて声を張り上げすぎ、喉がかなり枯れてしまうが、搾り出すような奇声をあげる夫婦であった。
「このまま拘束した状態で殺しちゃうのも面白くないわね。よし！拘束を解いてみんなでリンチしちゃおう♪」

莉央の提案に愛衣も咲良も賛成した。

すぐさま二人の拘束を解き、再び自由に動けるようになる柴崎俊之と幸恵だった。

「日が暮れるまでにあたしたちを倒すか……逃げ通せば命はたすけてあげるよ」

莉央は冷たく言い放つ。

爪を剥がされた血まみれの足で必死で逃げようとする二人。

３メートルほどもある革の鞭を手に取った円満愛衣は背を向けて必死で逃げる俊之を背後から背中に叩き込む。

『バチィン！！』

「ぐわあっ！！！！」

痛みでしゃがみ込んだ俊之を更に数回、数十回と背中やお尻を叩きまくる愛衣。

「どうしたの？　背中とお尻が真っ赤だよ？　逃げないの？」

『バチィン！！　スパァンッ！！』

「ふがあっ！！　んぎいっ！！」

莉央に教えられた愛衣の鞭使いは洗練されたものであった。
見事に的確に狙った部位にヒットする革の鞭。
背中と臀部の皮が数箇所剥がれ、鮮血が流れ落ちる。

「ほら、奥さんが見てる前でお尻広げて肛門見えるようにしなさい」

「ぐっ……は、はい。こ、こうです……か？」

『ギュッ！　ぱくんっ！』

「いいわよぉ。汚いケツ毛だらけのアナルが丸見えねうふふ♡　えいっ！」

『バチイィィィンッ！！！』

「ギャァアアアアアッ！！　痛いいいいいいいっ！！」

愛衣の放った渾身の一撃は柴崎俊之の肛門を的確に直撃した。
肛門括約筋が何枚も裂け、激しく鮮血を撒き散らす俊之の肛門。

『ピュウウウウッ！！』

「痛いいいいっ！！　ぎひいいいいいっ！！」

肛門を押さえながら転げ回って泣き崩れる俊之を見ながら爆笑する莉央と咲良。
愛衣は押さえている手の甲までも容赦なく叩く。
思わず手を離した所へ追撃。
またもや肛門を直撃する。

噴水のように噴き出す肛門からの血を見ながら冷たく微笑む円満愛衣。

「汚い穴から血を噴き出しちゃって……奥さんにそんな情けない姿見られて恥ずかしくないの？」

「んぎいっ！！　痛いっ！た、助けてくれ！！　許してくれお願いだっ！！　いだいいいいっ！！　わあああんっ！！　わあああんっ！！」

女子高生の打つ鞭により、肛門を引き裂かれた俊之は、プライドさえも投げ捨てて少女たちに命乞いを始める。

「後一回叩けばあなたのアナルは完全に破壊されるわね。大便垂れ流しながら泣いてなさい。それっ！」

『スパァアアアンッ！！！……バリッ！！　メリメリ！！』

「がぎゃあああああっ！！！！」

出血多量で死ぬほどの鮮血を噴き出しながら転げ回る俊之。
妻である幸恵は半泣きになりながら夫の姿を見つめている。

「俊之……大丈夫？」

「んぎいいいいっ！！　いでぇよおおおっ！！　いだいいいいいっ！！」

泣き叫ぶ俊之に幸恵の言葉は通じていなかった。
更に転げ回る俊之の全身へ容赦なく鞭は振り下ろされた。
何度も何度も満遍なく全身を打ち付ける鞭は、直撃する先端部が真っ赤に染まっていった。

100回目に打ち付けた部位は……俊之の右睾丸。
瞬時に皮が裂け、精巣は潰れ、ミンチ状態の右精巣が飛び出してきた。

『グチャアッ！！ズルルル……ぷるるんっ』

「ぎひいいいっ！！！！」

「あはははは！　キンタマゼリー状になって飛び出しちゃったよ？大丈夫？」

大丈夫な訳はなかった。
白目を剥いて泡を噴き、失神してしまう俊之。
そのまま構うことなく何度も鞭を打ち付けて、ついにもう一つの左睾丸も潰れて飛び出し、ペニスもズタズタに裂けて、尿管が飛び出した。
「白い管まで飛び出させちゃって……その管からオシッコ噴いちゃってるし……ほんと哀れだわあなた。ほらほらほらあっ！もっとグチャグチャになれ！　鬼畜の性器なんて破壊してやるんだからっ♡」
『バチイィィィン！！　スパァンッ！！　バシイイイッ！！』
俊之の肛門と睾丸、ペニスは愛衣の鞭によってズタズタに破壊されていった。
もはやミンチ状となる男の股間。
泣き崩れる妻の幸恵は悲鳴をあげながら叫んだ。
「俊之っ！！　俊之いいいいっ！！　キャアアアアアアッ！！　この鬼畜どもっ！！　俊之のオチンチン返してええっ！！」
愛衣は幸恵の見てる前で更に数回、数十回と全身を叩いてゆく。
下腹部だけではなく全身の皮が裂け、真っ赤に染まりながら鮮血

を垂れ流す。
出血性ショックで痙攣が始まった所へ円満愛衣はゆっくりあゆみよる。
その手は鞭からマシンガンに持ち替えられていた。
「醜いわね。外道のあなたには相応しいわ。いっぺん、逝ってみる？」
『ズボッ！！』
マシンガンの先端部分を全身剥き身にされた哀れな男のヘソへ突き刺す。
「逝きなさい」
『ズガガガガガガガガガガガッ！！』
「あぴいいいいいいっ！！！！」
訳の分からない絶叫を上げて痙攣しながら絶命する柴崎俊之。
『ビチャ！！　ビチャチャチャチャチャチャチャッ！！』

ヘソから始まった射撃はお腹全体にまで拡大し、下半身と下腹部がマシンガンによって吹き飛ばされた。
大腸や小腸、腎臓肝臓膵臓、前立腺までもがミンチになって辺りに飛散する。

「性器やアナルと同じく……ヘソから下半身全て吹っ飛ばしてあげたわよ？　汚い内臓地面にぶち撒けちゃってぇ……気持ち良すぎてイっちゃったぁ？　うふふ♡」

愛衣は返り血でセーラー服を血まみれにしながらも満足げに煙を吐くマシンガンをみつめる。
狂ったように泣き叫び、四つん這いになって逃げようとする妻の幸恵にそっと歩み寄る咲良。

「あたいの大切な友達を奪った男。当然の末路だよ」
「ううう、やっ、やだっ、許して助けてお願いですぅ」
「お前、本気でまだ助かると思ってるのか？」
「何でもしますから助けてください！　命だけは許してええっ！」
宮垣咲良の怒涛の暴行が開始される。
何度も全身を殴る、蹴る。

倒れた幸恵を足の裏でドカドカと踏みつける。
全身アザだらけにしながらも泣き叫びながら許しを乞うが、咲良は構うことなくけりまくり、踏みつけまくった。

『ドカッ！！　ズドッ！！　グシャッ！！　ガツッ！！』

「んぎっ！　きひっ！　あはっ！　ぎゃあっ！」

菅野莉央に交代して更に拷問リンチは続けられる。
仰向けに押し倒してから更に馬乗りになり、ボコボコに変形した顔面を更にボコボコに殴りつける莉央。

『ドカッ！　グシャッ！　バキッ！　ガッ！』

「ひぎいいいっ！　死ぬっ、死んじゃううううっ！　痛いよおお！！　もう許してお嬢ちゃん……わーんわーん」

「いい歳したオバハンが泣かないで気持ち悪い……」

「アーンアーン！！　痛いよおおっ！！　エーンエーン！！」

ボコボコに変形した顔面を揺らしながら号泣する幸恵。

「串刺しにしてあげる。どっがいいか選びなさい」

「ぐすん、ぐすん。え？どっちって……何がですか？」

「オマンコかお尻の穴……どっちから串刺しにして欲しいのか聞いてるの」

『バキイッ！！』

「はぎゃあっ！？　ひいっ！？　く、串刺しなんていやあっ！！　お願いだからやめて許してっ！！　お願いですううっ！！　わーんわーんっ！！」

夫を目の前で殺されたのに自分だけあくまでも命乞いする幸恵に呆れ果てる三人の拷問処刑人の少女たち。

「ごめんなさい。あなたは必ず死んでもらうしかないの。選ばないとあたしたちに選択権が回るから」

「選べない……どっちに突っ込まれても絶対痛いから！お願いだからやめて……しくしく」

「いくら泣こうが喚こうがあなたの串刺し刑は変わらないわ。ゆっくり時間をかけてハラワタ貫通させたげるから安心して」

可愛い顔をして微笑みながら恐ろしい内容を伝えるアイドル兼、拷問処刑人の女子小学生を前に、更に小便を漏らしながら戦慄を覚える幸恵だった。

だが後悔しても全てが遅過ぎる。

「あ、あなたアイドルだよね？テレビで見たことある……とっても可愛い顔したアイドルがこんなことしちゃいけないよ？　ね？　お嬢さん？」

「褒めてくれてありがとう♡　でも残念ながら容赦はしないからオバさん……咲良さん、しっかり身体押さえててね？　愛衣、ダルマ女制作よ！」

「はいっ！　莉央様♡　よっこいしょ！　よっこいしょ！　それそれそれそれえっ！　いっぺん、ダルマの気持ちになってみる？」

かなり大きくて長い糸鋸で両手両脚を時間をかけて切断されてゆく。

莉央と咲良が身体を押さえつけて、愛衣が四肢を切断していった。

『ギコギコギコギコ……ギコギコギコギコ』

「ギャァアアアアアッ！！　んぎいいいいいいっ！！」

一時間後、全ての四肢が愛衣の挽く糸鋸によってゆっくりゆっくりと切断された。

「やだぁ♡　可愛くなったじゃん？　オバさん！」

莉央が笑いながらショック死と失血死を防ぐ注射を、胸と腹部辺りに数回打った。

「でもね。簡単には死なせてあげないの。これで簡単には逝けないよ？」

『プツッ！　プチュチュチュチュチュウウウ～』

「あうう、あひひひ、えひゃひゃひゃひゃひゃ」

ダルマ女にされたあまりの絶望感に、半分狂って目玉をグルグル回しながら涎を垂らして笑顔まで見せる幸恵。

「あはは……もう狂っちゃったの？　本当の地獄はこれからなのにね……」

三人で簡易ベッドに仰向けに縛り付けていった。
短くなった両脚は股関節が外れるまで左右に開き、ロープで強く縛って固定した。

「あはは。これでマンコもお尻の穴も丸見えだよ？刑の執行がしやすくなったぁ♡　さて、今から身体を貫通しちゃおうねオバハン♪」

莉央は冷たく微笑みながらそう言うと、研ぎ澄まされて赤くなる

ほどまで焼かれた鉄の槍を膣口に近づけた。
予め二本の槍を熱と冷気を保つよう細工していたのである。

「マンコの中身は貫通前に焼かせてもらうから。そんでもってもう一つの穴は……愛衣、用意できてる？」

「はーい莉央様♪　肛門は……これで凍傷になって直腸壊死してもらうから」

莉央に続いてキンキンに凍った槍を肛門へ近づける円満愛衣。

「スッゴ……熱さと冷たさで同時に二つの穴を責めるなんて……残酷すぎるぜまったく」

宮垣咲良は頬を少し赤く染めながらこれから起こる惨劇に興奮の色を隠せなくなっていた。

その槍は二本同時に幸恵の下半身へ挿し込まれた。

『ズボ！……ズブッ！』

「ひいっ！？　はぎゃあああああああっ！！　熱い冷たい痛いいいいいっ！！」

『ジュウウウウウウッ！！　シュウウウウウッ！！』

熱と冷気で同時に焼かれる膣道と肛門、直腸。
熱と冷気で違った色の煙を吐く下腹部。
泡を噴いて失神するが、莉央と愛衣は槍を挿し込む手を緩めなかった。
どんどんと膣と肛門奥深くへ挿し込まれてゆくのであった。
挿し込まれた二本の槍は、子宮を挟むように腹腔内で並行する。

熱と冷気で焼かれ、一瞬で焼けただれる子宮と卵巣。
膀胱も沸騰して尿が泡立つ音がする。

「ギャァアアッ！！」

「知ってた？オシッコした直後でも膀胱が乾かないようにある程度尿は残ってるんだってさ。その尿が今沸騰してるわけだよ。うふふ♡」

「これ以上素手では無理ね。咲良さん、あたしの槍と愛衣の槍を木槌で交互に打ち込んで」

「う、うん！　もう口まで貫くんだね？」

「そだね。まだ死ねないように急所はかわすようにあたしと愛衣で角度調整しながら押さえてるから安心して」

安心してと言われてもこの状態になってもまだ殺してあげない莉

央の残酷さに改めてゾッとする咲良だった。

『ドカッ！！……バリバリッ！！　ドカッ！！……グチュウッ！！』

咲良の打ち込んでゆく二本の槍はどんどん罪人女の口を目指して進んでいった。

喉あたりまできてその二本が重なる。

「槍の柄を二本くっつけるから同時に打ち込んで。口から二本同時に飛び出すように角度保ってるからね♪」

「分かった！……できればこの一撃で死んだ方がいいぞ？オバさん。せーの……」

『ドカッ！！……バシュシュウッ！！』

「おごおっ！？あがががが……」

見事に突き出した性器と肛門から刺し込まれた二本の槍の切っ先。

その衝撃で意識が戻った幸恵は身動きできないまま、まともに呼吸すらできないままもがき苦しむバメになった。

「うごごっ！？　カヒュウッ！　カヒュウッ！」

「あはは！　二本の槍が喉通ってるから呼吸するのも大変でしょ？　オバハン？　生きたまま貫通させるのって以外と難しいんだよ？」

莉央は芸術のように上手く二本の槍を串刺しにできたことを自慢するかのように幸恵に囁きかけた。
身体の中心部を炎と冷気でズタズタにされ、ハラワタを貫通され、呼吸困難とゆうまさに生き地獄の中で目玉を見開いでドバドバと涙を流しながら微かに入り込む空気を必死で吸収している。

「こんなになってもまだ必死で空気吸ってるわ。生への執着って凄いわね」

円満愛衣は感心しながら瀕死の幸恵の頭を優しく撫でてあげる。

「よしよし。痛かったね、苦しかったね？　いっぺん、更に苦しんでみる？」

そう言いながらハサミを取り出した愛衣は、右の乳首をゆっくりちょん切る。
大きく身体がビクッとなるが、結局身動きできないまま目玉をクルクル回して痛さをアピールする幸恵。

「うふふ♡　左の方は乳輪ごと切り取ってあげるね？　それ！」

『ズブブ……ジョキンッ！！』

「うぶぶっ……おうおうおごごごご……」

更に激しく目玉を回しながら必死で何かを訴えかける幸恵だったが、気に留めることもなく愛衣は下に落ちた二つの乳首を拾って、顎を突き上げるような体勢で貫通させせられている幸恵の顎の上にそっと置いた。

「こんな短くなった脚を全開に広げられて串刺しだなんて……見てるだけでゾクゾクしちゃう♪」

莉央は罪人を責めるあまりの興奮に、アソコをかなり濡らしていた。

他の処刑人には黙ってはいたが、しれっと全員が濡らしている。

しばらくはビクビクと身体を痙攣させせながら苦しそうに息をしている姿を見つめて雑談する三人の少女たち。

内臓が熱と冷気でかなり焼かれて灰色の煙が鼻と口から立ち昇る。

「どう？ハラワタ貫通させられた上に中心部を焼かれる感想は？」

莉央は髪の毛を掴んでバリバリとむしり取るらながら問いかけた。
返事できるわけもない瀕死の幸恵の髪の毛を数回に分けて全てむ

しり取る。

『バリバリ……バリバリ』

「うふ。ツルツルになっちゃったなぁ？　このハゲ！」

「スパァンッ！！」

全ての毛髪を抜かれて血が滲む頭皮を何度も平手で叩きつける莉央。

「咲良さん、もう気が済んだ？」

「え？あ、ああ。ってゆうかあたいの恨みはほとんど男の俊之の方だったんだけど……まぁその最愛の女がこうなるのは飯ウマもんだよな」

「じゃあトドメ刺しちゃいますか莉央様？」

「そだね。もう散々苦しんだでしょうこいつ。でもよく旦那の俊之のレイプを黙認したわねこの女。本気で愛してなかったのかな？」

莉央が今更ながら当然の疑問を投げかけた。

頭を傾げながら本歌で考える咲良と愛衣だったが、結局本人しか分からない。

その本人のトドメに入る。

「愛衣、槍を二本とも抜いて」

「え？　抜いちゃうんですか？　せっかく哀れなカエルみたいな姿で串刺しにされてる姿見て興奮してたのに……」

「電動ノコギリで股間から頭のテッペンまで真っ二つに切断しちゃお♡」

「それも興奮しそうですね莉央様っ！　分かりましたっ！」

慌てて槍を、マンコ側から順に二本とも引き抜いてゆく愛衣。

顎を突き出している体勢を普通に寝ているように戻して表情を観察する。

ゴボゴボと血の泡を吐き出しながら過呼吸を起こしていた。

「早くやらないとコイツ死んじゃうよ！」

慌てて縦向きに電動ノコギリをセットする。

下部から突き出しているタイプのノコギリは、手に持たなくても車輪が付いているため、軽く押すだけで上部にあるものを切断していける代物だった。

「楽でいいなこれ」

咲良は感心しながらノコギリの刃を股間の中心部に当てがわせ、調整する。
そっと中指を膣に挿しこみ、焼けこげた内部を掻き回すと、魚の身のように白く脆くなった膣の焼き身がなたくさん指に付いてきた。
「あらぁ～。焼かれてズタボロになっちゃってるねオマンコ……あっ！？　肛門開いてきたよ！」
「愛衣！　死んじゃう前に切断よ！　早くスイッチを！」
「はいっ！　莉央様っ！　最期にマンコもアナルも陰核も……真っ二つにしてあげるね？……いっぺん、逝ってみる？」
『カチッ！……ヴィイイイインッ！！』
爆音を奏でながら巨大な電動ノコギリが回転を始めた。
愛衣はゆっくり幸恵の股間へ向けて押してゆく。
『ズッ！　ズズ！　ズバババババッ！！』
「ギャァアアアアアッ！！」
焼かれた喉を懸命に震わせながらも断末魔の絶叫をあげる幸恵。
ゆっくりと確実に性器と肛門からクリトリス、尿道口と真っ二つに切断してゆく回転刃。

「これ多分クリトリス切られる時が一番激痛だよね？」

莉央が顎の下に親指と人差し指を添えるポーズで考えながら呟く。

「え？　恥骨ごと真っ二つに破壊されるんだからもはやクリだけの問題じゃねーだろ？」

咲良も本気で莉央に答えた。

「ほうら。女の子の大切なトコはもう真っ二つになっちゃったわよ？うふふ♡ほらほら！後はあなたが決めることよ？」

「何を決めるのよ？」

莉央が訳のわからないことを呟く愛衣にツッコミを入れる。

「え？ごめんなさい莉央様……地獄にいくのか天国にいくのか決めなさいって思っちゃって……深い意味はないですぅ」

謝りながらも手を止めない愛衣によってついにヘソまで切開された。

焼けただれた大腸小腸、膀胱や子宮などが焦げたような異様な臭

いを放ちながら飛び出してベッドの上に撒き散らかされてゆく。

『ビチャビチャ！　ドロドロ……ズルルルル』

「きもっ！やだなあ……内臓が焼けてズタボロじゃん」

顔を顰めながらも悦びを隠せない莉央。

胸まで切り裂いた頃に白目を剥いて激しく痙攣する幸恵。

ついに三十年の短い生涯を終えることが許された瞬間であった。

「死んじゃったみたいね？　愛衣！　まだ止めないでそのまま頭部も切断して」

「はい。莉央様」

『ヴィイイインッ！！　ズガガガガガッ！！　バリバリバリバリッ！！』

固い頭蓋骨も後も簡単に切断してゆく改造型処刑用電動ノコギリ。

ついに簡易ごと真っ二つにされ、中心部から地面へ遺体が転がり落ちる。

『ドサッ！！　プルルンッ！！　ズルルルルル』

内臓から脳みそから辺りに撒き散らかされる。
「スッゴ！脳みそズルビチョ♡」
「何よその表現？」
思わず口から出た咲良の表現に思わずタメ口で返してしまう莉央だった。
「ごめんごめん！あまりにグチャグチャになった遺体見てたらなんか興奮してきちゃってな」
「本当に残酷さに目覚めちゃったですね咲良さんも……」
莉央は呆れながらも少しホッとしていた。
悪人に対しての情けは無用とゆう残酷さが薄ければ、どうしても無意識に罪人を即死させたがる傾向が出てしまうからだ。
簡易ベッドを蹴飛ばして遺体の横に立つ三人。
「生まれ変わってきたら悪事はしないでね？　アーメン」
「それはないでしょう。この方は地獄へ堕ちて未来永劫苦しみ抜き

ますわ。幸恵さん、それはあなたが決めたことなのだから」

「本人そんなこと決めてないだろ？……なんか愛衣さんって突然変なセリフ言うよなぁ……あ、子宮の生焼けだ♡」

咲良は幸恵の子宮を足で踏みつけ、グリグリとミンチになるまで踏み潰す。

「うわっ！　切断面えぐっ！……マンコの中ってこんなふうになってるのかぁ〜。肛門とマンコなんてこんな薄皮一枚で隔てられてるんだな」

「何をぶつぶつ言ってるんですか？　もう帰りましょう」

「あ、ああ。莉央、愛衣さん、お疲れ様」

特殊任務省の後片付けのプロたちに後は任せて島を後にする三人であった。

残酷処刑島に新たに二人の遺体が加わった。

――――夕方。

「おえっ！……アイツら今日も派手にバラしてくれたな」

特殊任務省の跡形部隊でもある三人が思わず驚愕する。

「もう毎回のことですから今更ですよリーダー」

三人の中でリーダーである山内のぼやきに対し、部下の川内がそう答えた。

もう一人の部下である原内も続ける。

「そうですね。今回は僕の推しであるアイドルの咲良ちゃんも執行人になってるはず」

「それがどうした原内？」

「いや、あんな可愛い子がここまで人を残酷に殺せるなんて思ったらなんか……」

「なんか？　なんかどうした？」

「こ、興奮してきちゃう、と言いますか……いや、なんでもないです。日が暮れるまでに片付けてサッサと帰りましょう」

「変なやつだ」

部下の川内と原内は宮垣咲良のファンであり、完全にアイドルオタクでもある。

リーダーの山内は二人の部下に半ば呆れながらも黙々とバラされた遺体を袋に詰めていくのであった。

「数ヶ月前までは遺体なんか鳥の餌に放っておいたらしいのになぁ……やれやれだぜ全く。……ブツブツ……」

愚痴をこぼすリーダーの山内。

以前宮垣咲良に見事なカウンターの回し蹴りを寸止めされてかなりショックを受けている特殊任務省のリーダー山内の仕事は愚痴と共に日が暮れるまで続くのであった……。

アイドルが好きすぎて裏目に出る少年（前書き）

一人の中学生男子と妹の小学生がいた。

二人に訪れる運命とは？

アイドルが好きすぎて裏目に出る少年

僕は今小学生の女の子に犯されている。
四つん這い体勢で簡易的なベッドに縛り付けられて。
……って言ってもこれには訳がある。

――――昨日。

僕は中学三年生榊原直哉15歳。
大ファンであるアイドルグループの〝真絆ガールズ〟のライブを見にきていた。
一番の推しである富田美香ちゃんのダンスを目に焼き付けている。
三時間ほどのライブが終わり、その後の握手会では富田美香ちゃんのブースに並び、無事に握手をすることができた。

「美香ちゃん！　僕は直哉っていうんだ！　無茶苦茶ファンです！お会いできて光栄です！」

「ありがとー♪　直哉君！　君の顔はあたしもタイプだよ！　これからも応援してね！」

「うん！　一生応援してる！　美香ちゃん大好きだっ！！」

そんなこんなで大好きなアイドル、富田美香ちゃんと会話ができて握手もできて……僕は幸せだった。

その幸せは別の形でも継続されたんだ。

『ブズブ……ズブブブ！　グリグリ！』

「痛いっ、やめて美香ちゃん！　痛いよぉ」

「タイプのあたしにこんなことされて嬉しいんでしょ？　興奮してるんでしょ？　ほらほらぁ！」

小学生アイドルの大ファンである富田美香ちゃんに僕は……お尻の穴に指を突っ込まれて直腸を掻き回されている。

無茶苦茶恥ずかしいけど無茶苦茶興奮して僕のチンポは全開に勃起していた。

『グチュグチュ！』

「あっ！　んあああっ！！　美香ちゃん、やめて許してっ！」

「何をお尻の穴から垂らしてるの？　このヌメヌメした液体は直哉君の腸液かな？　あたしにほじくられて感じちゃってるのかなぁ？　エッチでオマセな中学生だなぁ全く……」

『シコシコシコシコ！！』

「わあああっ!?　オチンチンまで握らないでえっ!!」

富田美香ちゃんは右手の人差し指で僕の肛門を掻き回しながら左手でオチンチンを握ってシゴき始めたんだ。

僕はたまらず数秒経たないうちに射精してしまった。

「うわあっ!!　イくっ!!　イっちゃううっ!!」

『ドピュッ!!　ドピュピュピュピュピュピュウッ!!』

夥しい量の精液を噴き出した僕は、頬を真っ赤にして興奮の余韻に浸っていた。

そこで二番目にファンである、中学生アイドルである宮垣咲良が目の前に現れた。

「睾丸……潰してあげる」

「え!?　今なんて言ったのサクちゃん!?」

宮垣咲良は僕の金玉を両手で握り込み、同時に二つの玉を思いっきり圧迫していった。

中学生とは思えない握力で握り締めてくるサクちゃん。

天国から地獄とはまさにこのことだった。
生涯で最大級の激痛が僕の股間を襲った。

『ブチュブチュ！！』

咲良ちゃんの両手によって僕の金玉は二つ同時に潰されたみたいだ。
今までの人生で最大級の激痛が、股間と下っ腹に電撃のように走るのを感じた。

「ギャアアアアアアアアッ！！！！」

激痛に転げ回る僕を同じく中学生アイドルである大野真子と小野メグの二人が押さえつける。

「どうしてあんなことをしたの？」

悲しそうな顔をして大野真子が僕に問いかけた。

僕は……そうだった。
そう言えば……。

“真絆ガールズ”の握手会の抽選会。

それに当たった見知らぬ小学生の男児を裏路地で襲って殺してまでその券を奪い取ったのだった。

それもこれも大ファンであるアイドルの富田美香と握手がしたかっただけだったのに……。

人を殺してしまうなんて今までこれっぽっちも思っていなかったんだ僕の人生……。

「あたしのファンであったことはありがとう直哉君。でもね……何の罪もない小学生の男の子を殺めた罪は……君の死を持って償ってもらうからね？」

美香ちゃん……やめて……あの子を殺す気はなかったんだ……泣き叫んで大人を呼ばれそうだったからつい……痛い！？　そんなに深くお尻の穴に手を突っ込まれたら……僕死んじゃうよ？

嘘でしょ？

『グボオッ！！　ズチュチュチュチュチュチュウッ！！　ガボボボォッ！！』

意識が薄れるほどの激痛の中、微かに見えたものは……僕の肛門へ膝まで突っ込む富田美香ちゃんの右腕……　だった。

お腹の中が焼けるように痛い。

激痛が腹腔内に走る。

「咲良さんに金玉潰されて嬉しかった？」

「んああっ！　痛いよおお！　許して美香ちゃん……」

「ごめんね直哉君。今日君はこの残酷処刑島であたしたちに処刑されちゃうの。あたしのファンなのに本当ごめんなさい」

美香ちゃんは半泣きになりながら僕の肛門へ更に奥深く右腕をぶち込んでいった。

熱い！　痛い！　お尻の穴が裂けるように痛い！　お腹の中が壊されるように痛い！！

「ぎゃああああああああっ！！！！」

僕は泣き喚きながら全身を痙攣させていた。
美香ちゃんの腕はついに肩まで全て僕の肛門へ突き刺さっていたんだ。

大腸、小腸、胃までをも美香ちゃんの右腕に貫かれた僕。
大量の血を噴き出す肛門と口。

僕はこの瞬間、死を覚悟した。

ん？　この子はボーカルの菅野莉央ちゃん？
僕のペニスを握りしめている。

この子も僕的にタイプなんだよなぁ。
富田美香ちゃん、宮垣咲良ちゃんに次いでタイプである菅野莉央ちゃん……。
僕のペニスを握りしめて反対側の手でカッターをスライドさせる。
僕のオチンチンは雁首から一(ひと)引きで切断された。
あまりの激痛に叫びまくるが美香ちゃんが腕を掻き回すごとに血の泡が口から噴き出してなかなかうまく叫べなくなっていた。

薄れゆく意識の中で一番見たくない光景が目に入ってきた。
12歳の妹である杏子(きょうこ)がアイドルたちに服を脱がされている。
パンツだけ残して裸にされた杏子は、殴られて蹴られてボコボコにされていった。

「や、やめてあげて……杏子だけは手を出さないで……」

「雁首から先のないチンポでよくそんなカッコつけられるわね？」

そう言いながら菅野莉央ちゃんは今度は根元から僕のオチンチンをカッターで切断した。
今回も手際よくたったの一引きで……。
痺れるような激痛が股間に走るが、睾丸を潰された痛みと重なり、もう脳みその伝達に付いていかないみたいだ。
お尻の穴からは直腸と大腸が引き摺り出されていた。
僕の一番のファンである、富田美香ちゃんの手によってズルズル

と引き摺り出されてゆく僕のハラワタ……。

「痛い……痛いよお……わーん、わーん！　許してください美香ちゃん……　僕やっぱり死にたくないよおお！わーんわーん！」

「だめ！　死んで。大腸から小腸まで全部あたしが引き摺りだしてあげる。妹さんもすぐに送ってあげるから安心して逝きなさい直哉くん。それそれそれえっ♡」

『ズルズル……ズルルルル！！』

「ひぎいいいいっ！！　いだいいいいっ！！」

意識がどんどん薄れてゆく中で、大切にしてきた妹である杏子の姿を目に刻む僕。

宮垣咲良ちゃんによって最後の一枚であるパンツを脱がされ、何度もオマンコを蹴られている。

『パンッ！　パンッ！　パンッ！　パンッ！』

「痛いいっ！　あはっ！　ひぎっ！　んぎいっ！」

股を開いたまま直立を命じられた杏子は、背後からサクちゃんにオマンコを激しく蹴られ続けていた。

「股を閉じたら承知しないからね？」

「アーンアーン！　痛いよおお！　アソコがいたいいいいっ！助けてお兄ちゃんんんんっ！！」

や、やめてあげて……杏子は悪くないんだ……僕のことを思ってあの子を連れてきてくれたんだ……。

そう、悪いのはみんなこの僕……だから杏子だけは……。

僕と同じ四つん這いに縛り付けられた杏子。

「おい小学生のガキ！マンコかケツの穴か選びなさい」

『ズブ！　ズグッ！！　バリッ！！』

「んぎゃあっ！？」

なんてこった。

美香ちゃんが杏子の性器に指を根元まで突っ込んで血がたくさん流れ出てきてるじゃないか？

同性の同い年の女の子によくそんな酷いことが……。

「アソコは嫌っ！　絶対痛いから嫌っ！！」

「じゃあお尻の穴からやったげるね？」

美香ちゃん切っ先の鋭い鉄の槍を杏子の肛門へゆっくり刺しこんでいった。

や、やめてあげて！　痛すぎるだろそれは！

「ゆっくり串刺しにしてあげるから覚悟して杏子ちゃん♡」

『ズブブ！　ズブブブブブ！！　メリメリッ！！』

「ピギィイイイッ！！　痛いっ！！　痛いいいいっ！！　お願いやめてエエエッ！！　はぎゃああああああああっ！！」

何度もグリグリと捻りながらも確実に妹の肛門から腹腔内へめり込んでゆく鉄の槍。

激しく肛門から血を噴き出す杏子。

ん？もう一本槍を持ってきたぞ？

サクちゃん？や、やめて！！

「その小さなワレメ見てたら……やっぱ我慢できないな。それえっ！」

『グサッ！！』

「あぎゃああああああっ！！！！」

ついにオマンコにまで槍を突っ込まれる妹。
サクちゃんまでそんな酷いことを……。
あ、あれ？　目玉が上に向いてきたぞ？　んん？

『ガボオッ！！　ゴポポポポッ！！……ガクンッ！』

「あらやだ。妹の処刑を見届けずに逝っちゃうなんて……情けないお兄ちゃんだね？」

菅野莉央は三つ編みの杏子の髪の毛を掴んで顎を突き上げさせる。

「ううう……許して……」

「まだ本気で助かると思ってるの？　あなたのオマンコとアナル……もう既に大変なことになっちゃってるよ？」

『メリメリ！　バリバリ！　グシュシュシュシュ！！』

美香と咲良は、ほぼ同時に杏子の口から切っ先を貫通させるつもりで膣口と肛門から槍を突き入れていった。

『んぎぎぎぎぎいっ！！』

「もっと苦しみなさい。クリトリス……潰してあげる」

『ギュッ！　ぽつんっ！！』

「ギャアアアッ！？」

「更にこうしてやるっ！　千切れろっ♡」

『グリリッ！！……ブチィッ！！！』

莉央は躊躇いもなくまだ女子小学生である榊原杏子のクリトリスをペンチで挟み込むと、一気にペチャンコに潰してしまった。

そのまま股間から切り離すように一気に引きちぎった。

白目を剥いて尿道から小便を飛ばしながら悶絶する杏子。

大野真子と小野メグは、それぞれ乳首をペンチで挟んで握り潰した。

更に捻りながら引きちぎる。

全身を痙攣させながら呻き声を上げる頃には口から二つの槍の切っ先が同時に飛び出した。

「お見事！　美香ちゃんに咲良さん」

「うん！　アナルにお仕置き完了っ♡」

「あたいはマンコにお仕置き完了だ！　貫通のショックで死んだみたいだなコイツ？」

「そだね。でも死ぬ前にクリトリスと乳首潰されて千切られた激痛は味わえてると思うから……あの世で反省してるでしょ。あはは……」

アイドルが好きすぎて裏目に出る少年（後書き）

莉央は遺体から槍を全て引き抜いた。
倍の長さのある木の杭を取り出して、兄である榊原直哉の肛門へ刺し込んだ。

「どうする気だ莉央？」

咲良が問いかける。

「兄妹仲良く串刺しにして冥土に向かわせてやろうかなって……」

「同じ杭でそのまま妹も串刺しにするのか？」

「そうだよ。咲良さんはこの木槌で直哉くんの肛門から口まで打ち込んでいってくれます？」

「あ、ああ。相変わらず可愛い顔して残酷だな莉央は……」

言われるがままにどんどんと木槌を打ちつけてゆき、ついに口から血の泡と共に木の杭が飛び出す。

「真子さんとメグさんは妹さんのマンコ開いてお兄ちゃんの口から

飛び出している杭の先を膣口へあてがっていてくれます？」

「は、はい」

「う、うん」

二人は頬を紅く染めながらも同時に膣口を全開に開かせて固定した。

「死んでるのにごめんなさい。それっ！」

「ほら！　思いっきり開きなさいっ！」

『ギュギュッ！　クパァ～！』

大野真子と小野メグは女子小学生の遺体のオマンコに指を突っ込んで、全開に開口させた。

「咲良さん、打ち込んで」

「あ、ああ！」

『ドカッ！！　ドカッ！！　ドカッ！！　ドカッ！！』

何度も木槌で木の杭を打ち込んでゆく咲良。

直哉の肛門から口へ飛び出した血まみれの木の杭は、妹である杏子

の膣口へ深々と突き刺されていった。
やがて杏子の口から飛び出す先端。

「これでトドメだ！　えいっ！！」

『ドカッ！！』

『バシュウッ！！　ぶしゅううううっ！！』

痙攣する兄妹の串刺し遺体が完成した。

「あはは！二人並んでお尻とマンコから串刺しだなんて……受けるうっ♡」

富田美香はかなりアソコを濡らしながら興奮していた。

莉央はライフルを手に取り、直哉の頭部目掛けて引き金を引く。

『ズドォンッ！！』

スイカのように木っ端微塵に砕け散る。
脳みそがあたり一面にぶち撒けられた。

「きゃあっ！？　脳みそが脚に掛かっちゃった！？」

飛び跳ねながら半泣きになるヤンキーだがヘタレの中学生、大野真子。

「ごめん真子さん。今度はもっと飛び散るかも？　ほら妹さん、お尻の穴に強烈な一撃を呉れてあげる♡」

『ツプッ！　ズブブ……』

長い銃口を根元までゆっくり肛門へ挿仕込んでゆく莉央。

「うふふ。槍で貫通された割にまだ弾力残してるアナルだね？さて、いっくわよおっ？　それえっ！」

『ズドォンッ！！』

『ビチャビチャ！　パラパラパラパラ！』

肛門から膣までも下半身パックリ開いたように破壊され、更に頭部までも砕け散り脳みそもぶち撒ける杏子の哀れな遺体。

「きゃーっ！！」

拷問処刑人全員に降り掛かる女子小学生の肉片……。
叫びながら笑う者、本気で泣き叫ぶ者、拷問処刑人たちも所詮は人間であり女の子であった。
残酷処刑島に新たに二人の遺体が加わった。

芽生えた恋心と手に入れた友（前書き）

黒霧島高等学校ではあらゆるクラスでイジメが起きていた。
愛衣たちのクラスでもそれは例外ではなかった。

芽生えた恋心と手に入れた友

「ほら！三回回ってワンと言うんだブタ！」

「はい！　わん！」

「ブタなのにワンだってさ！　受ける！」

「あははははは♪」

黒霧島高等学校で本日もイジメが起きていた。

里中友美恵。
体重９０キロを超える巨体だが、常に同級生から虐められていた。

「触るな気持ち悪い！」

「ブタはブタらしく大人しく私たちの言うことを聞いていれば良いんだよ！分かってるのかオラアッ！？」

泣き喚きながら三年Ｂ型の女子たちに虐げられる友美恵であった。

――放課後。

里中友美恵は掃除当番をサボった女子の代わりに必死で床に雑巾掛けをしている。

菅野愛衣たち四人のスケバンたちに声を掛けられる。

「おいブタ！　よくそんなに皆から虐められて平気でいられるよな？」

東条登美子が話しかけた。

「……ごめんなさい。私はこんな醜い姿してるから……」

「あはは！　ブタにも自覚があるのね？」

西条早希も薄ら笑いを浮かべながら里中友美恵に問い掛ける。

「ごめんなさい。こんなに太って本当にごめんなさい」

ひたすら謝りながら床を拭き続ける友美恵。

「床掃除が終わったら裸になって私たちの前で土下座しなさい」

一番おっとりとしたスケバンである南条奈百合も続ける。

「はい。南条さん……」

教室中の床を掃除し終えた里中友美恵は、９０キロ近い巨漢を揺らしながら必死でセーラー服をぬぎ、最後の一枚であるパンツまでも脱いで菅野愛衣たちスケバン四天王に対して土下座をする。

「やだ……豚のくせに土下座なんてできるんだ？」

ボスである菅野愛衣が腕を組みながら見下しながら問い掛ける。

「はい。菅野様。私はみんなのために役に立つなら何でもします。だからあまり酷いことはしないで……」

「そうなんだ。なら四つん這いになって這いまわりながらもブヒブヒと鳴くんだ」

「はい、菅野様。ブヒブヒ！　ブヒブヒ！」

素っ裸で床を這い回りながらブヒブヒ鳴く里中友美恵を見ながら

薄ら笑いを浮かべる四人のスケバンたち。

四つん這いのまま菅野愛衣に何度もビンタを喰らう。

『パンパン！　パンパンパンパンパンパンパンッ！！』

「ひぶぶぶぶぶうっ！！」

「オラメスブタ！　痛いか！？」

「ひいっ！！　痛いっ！！　痛いですうっ！！」

菅野愛衣に数十回ものビンタを喰らい、泣き崩れる里中友美恵。

そのまま巨漢の里中友美恵に対し、殴る蹴るの暴行を加え続ける菅野愛衣、東条登美子、西条早希、南条奈百合であった。

散々暴行を加えた後、巨漢の里中友美恵は涙を流しながら感謝の念を述べる。

「ありがとうございます皆さん」

暴行を加えたスケバン四天王たちに礼を言う里中友美恵に、違和感を覚えながら問いかける菅野愛衣。

「何を礼なんてほざいてるやがる？　私たちを舐めてんの？」

「他のみんなは私を気持ち悪がって触れることすらしなかった。でも菅野さんたちは私に平気で触れてくれた。それだけでも私は嬉しかった……」

そう言いながら号泣する里中友美恵。

流石に本気で哀れに思い始めてきた愛衣たちは、服を着ることを許すのであった。

鼻水を垂らしながら必死でセーラー服を着る友美恵。

「ごめんな友美恵……私たちが悪かった。明日からお前を虐めるクラスメイトたちは私たちがやっつけてやるから」

「しくしく……わーんわーん！」

愛衣たちの優しさに触れて号泣を続けてしまう友美恵だった。

「気をつけて帰れよ」

「…………」

泣くのをようやくやめた巨漢の女子高生、里中友美恵は俯いたま

まじっとしている。

「？……あのさ、友美恵？　もう帰っていいんだよ？　私たちはもうお前を虐めたりしないから……ね？」

頬を紅く染めながら菅野愛衣に抱きついてくる。

「ぐわあっ！？」

９０キロの巨漢からの体当たりに近い攻撃を喰らい、流石の愛衣も後ろに倒れ込んでしまう。

床で思いっきり後頭部を打ってしまうのであった。

『ゴンッ！！』

「痛っ！？　このブタ！！　殺すぞオラァッ！？」

「もっと虐めて！　私をもっとかまって！」

「え？」

急すぎる展開に、周りの三人も呆然と二人を見下ろしたまま固まっている。

「私に平気で触ってくれて嬉しかったの！　気持ち悪がらずに触れてくれて嬉しかった……」

「痛いって！？　ぐわあああっ！！」

きつく抱きしめるパワーは相当のものがあったため、菅野愛衣は本気で苦しむハメになる。

「分かったからもうやめてって！　死ぬうっ！！」

「！？……ごめんなさい菅野さん！　ごめんなさいっ！！」

我に帰った里中友美恵は、再度土下座をして泣きながら愛衣に詫びを入れる。

「仕方ないなぁ……私たちにどうしろと？」

「菅野さん……たちを好きになっちゃったみたいです……お願いだからもっと虐めて……」

「……だってさ。どうするみんな」

愛衣はため息をつきながら予想だにしない展開に本気で困っていた。

「コイツの希望通り虐めてやろうよ。痛いことはやらない縛りで」

腕を組みながら西条早希が提案する。

「そうだね。暇つぶしにもなるし……天国にイかせてやろうよ」

東条登美子も早希に同意した。

南条奈百合は冷たく笑いながら続ける。

「コイツが私たちに求めてるものは……性的リンチだよ愛衣さん？やってやる？」

「はぁ。仕方ないなぁ。虐めた罪滅ぼしに今度は私たちが奉仕してやるか……」

四人全員で里中友美恵を床に仰向けに寝かせてセーラー服を脱がせてゆく。

「友美恵……じっとしてろよ？」

「は、はい！」

頬を真っ赤に染めながらこれから起こる事態に興奮する友美恵。

南条奈百合が最後の一枚であるパンツを脱がすと、透明の糸を引いているのが見えた。

「やだ……このブタちゃん、濡らしちゃってるよぉ」

奈百合が呆れながら呟く。

愛衣は中指をピンと立てて傍にしゃがみ込む。

「力を抜いて股を開きなさい」

「はい！　菅野さん……こうですか？」

必死でぶっとい脚を左右に開きながら顔を両手で隠す。

『ズブ……ズブブブ！……バリッ！！』

「痛いっ！！」

「ごめんっ！！　処女だったのお前！？」

愛衣に処女膜を破られて泣き始める友美恵。

「ぐす、ぐすん。私が望んだことだから気にしないで……もっと深く突っ込んでくださいさい菅野さん……」

「う、うん。こう？」

『ズチュッ！！　グチュチュチュチュチュチュチュ！！』

そのまま友美恵のバージンを奪った愛衣の中指は、激しく膣内を掻き回した。

「あんっ！！　あんあんあんっ！！　気持ちいいっ！！　やだあっ！！」

小便を漏らしながら太い脚をヒクヒクさせて興奮する友美恵。

そのまま潮を噴いて愛衣にイかされる。

「だ、だめ！イ、イッくううう！！」

『プシャアアアアッ！！』

愛衣の膝やスカートに大量の潮をヘリかけて内股を痙攣させる友美恵だった。

「気持ち良かった？」

「は、はい！　あ、あはああ……」

両手でオマンコを隠しながら頬を真っ赤に染めて今更ながら恥ずかしがる友美恵に、愛衣たち四人は半ば呆れていた。

「後ろの方も……気持ちよくさせてあげようか？」

南条奈百合が問い掛ける。

「う、うしろ!？」

「ケツの穴だよ」

東条登美子が代わりに答える。

「そ、そんな……汚いよ？触れるだけでも汚い私の……お尻の穴なんて……」

「汚くないからお前のアナル」

そう言いながら無理矢理四つん這いにさせる南条奈百合。

「力を抜いててね？」

「や、やん。汚いからやめて……」

「汚くない。じっとしてなさい」

『ツプッ！』

「あはっ！？　やだ！！　南条さん！？　やめて」

そのまま人差し指を根元まで肛門に突っ込み、直腸内を掻き回す奈百合。

『グチュ！グチュチュチュチュチュチュッ！！』

「ほら！お尻の穴かきまわしてあげる」

「あんっ！？　やはあっ！！　気持ちいいですっ！！　あんんんっ！！」

反対の左手でクリトリスを激しく擦る。

「ひいっ！？　やだあぁぁぁあっ！！」

『プシャアアアアッッ！！』

奈百合の手によって二度目の絶頂を迎える里中友美恵。
肛門からゆっくり人差し指を引き抜きながら優しく囁く。

「お前は汚くなんてないからね？」

「あ、ありがとう。私、みんなのこと本気で愛しちゃったみたい……」

四つん這いのままうつ伏せにへタりこんで再び号泣する友美恵の頭部を優しく撫でる西条早希。

「愛しちゃったは言い過ぎじゃない？　あはは。悪い気はしないけどね……ほら、もう震えなくてもいいよ。みんなにイかせてもらって良かったね？」

「は、はい。ありがとうございます。私なんかに何度も触れてくれてありがとう」

「何を言ってるのかな？　触れるのなんか当たり前だよ。今日から私たち友達でしょ？」

早希のセリフに反対する者は他の三人のスケバンたちに誰もいなかった。

うつ伏せのままで、またまた号泣してしまう友美恵に四人のスケバンたちはパンツを履かせ、スカートを履かせ、全ての服を着せてあげた。

「友美恵。今から一緒に駅前のスタバに付き合えよ？」

「え？あ、は、はい！！」

今まで見せたことのない満面の笑みを浮かべながら愛衣たち五人は教室を出てゆく。

三年Ｂ組のスケバン四天王は五人になった……。

こうして愛衣たちの仲間は五人になり、スケバン四天王と呼ばれる存在は消滅してしまうハメになってしまうのであった。

芽生えた恋心と手に入れた友（後書き）

虐めから芽生えた恋心。
同性を本気で好きになった友美恵は、愛衣たち四人の恋人とも言える友達を得て、これからの高校生活を満喫していくようになった。

痴漢行為者への恥辱刑執行（前書き）

思わぬ出来心で同級生の胸を揉んでしまった男子生徒。

三年Ｂ組の制裁が開始された。

痴漢行為者への恥辱刑執行

「や、やめて！　本当に反省してるから……もう二度としないから許して……」

「だめよ。相手の子は下手したら一生トラウマになっちゃうかも知れないの。あなただけ無事に過ごされたら余りにも不公平だから」

黒霧島高等学校三年Ｂ組。

円満愛衣――この学校在学中では菅野愛衣と名を変えた元死刑囚の拷問処刑人である女子高生である。

愛衣とその仲間たちの五人組の女子が一人の男子生徒を二つ並べた机の上に仰向けに寝かせていた。

教室の戸がゆっくりと開く。

一年Ａ組の河本綾華が顔を覗かせる。

「きたきた！　妹さんご来場♡　さぁどうぞ入ってきて」

ある程度の事情は聞かされている綾華は表情を険しくしてかなり緊張しているようであった。

「兄の河本裕哉が皆さんにこの度ご迷惑をお掛けしました。本当に

申し訳ございませんでした！」

ミドルの黒髪を垂らして深々とお辞儀をする妹の綾華。

「……立派な妹さんだね。見事な謝りっぷりだわ。でもね……同級生である三年Ｂ組の女子生徒、山西明子さんの胸を触った罪はしっかり晴らさせてもらうから。この里中友美恵から聞いてるでしょ？」

「はい。覚悟はできています」

菅野愛衣、東条登美子、西条早希、南条奈百合のスケバン四天王と、最近仲間になった元いじめられっ子である里中友美恵たちが見守る中、スタスタと気丈にも寝かせられている兄の元へ歩み寄る河本綾華であった。

「ほ、本気なのか！？　い、妹にさっき言ってた事させるなんて……じょ、冗談だよな？」

「この状況でまさか本気で冗談だと思ってるの？　そりゃ平気で女子のオッパイ揉んじゃうわ……いっぺんイッてみる？」

そう愛衣が返事した瞬間、妹である綾華は兄のベルトを外し始めた。

「わあっ！？　や、やめろ綾華！！　嘘だろっ！？」

「私たちが無事にこの学校を卒業する為にはこのクラスの全員に誠意を見せなきゃならないの。お兄ちゃんとはいえ男の人のアソコ……触るのなんて初めてだから上手くいくかどうか分からないけど……」

『ズルズル……ズルリッ！』

「ヒャアッ！？」

強く掴んだ綾華の手は、パンツごと一気に足首まで脱がせてしまう。

中型の平均的な大きさのペニスが顕になる。

「さっきも説明したように男はオチンチンを扱くと射精するの。お兄ちゃんを射精させることができれば今回は許してあげるわ」

「はい。やってみます」

「おい！　まじでやめろ綾華！！」

半泣きになりながら絶叫する兄の裕哉の声も虚しく、妹の綾華はそっと兄のペニスを右手で握りしめる。

「上下に擦りなさい」

菅野愛衣は冷たく言い放つ。

静かに頷くと、かなりの速度で兄のペニスを扱き始める綾華。

「わああっ！？　やめろって！！　やめてくれええええっ！！」

数分間扱き続けるが、さすがに実の妹に扱かれて勃起する兄は類まれである。

「友美恵。妹のスカートとパンツを脱がせて」

「あ、はい！　愛衣さん」

「いや！　やめて下さい……」

「ごめんね……」

９０キロの巨漢である里中友美恵は、恥ずかしがる綾華に謝りながらも愛衣の言う通り迅速にスカートとパンツを足首までずり下ろした。

p

三年Ｂ組の生徒たちは全員この光景を見せつけられている。
頬を赤くしてみる女子生徒、興奮気味にみる男子生徒、様々な好奇の目に晒されながら異様な行為は続けられてゆく。
「お尻をいいと言うまで平手打ちして」
「は、はい！　ごめんね綾華ちゃん……」
『パァンッ！！　パァンッ！！』
「痛っ！？　痛いっ！！」
余りの臀部の激痛に兄のペニスを扱くのを止めてしまう綾華。
「１００回叩いても兄が射精しなかったらマンコに指突っ込んで処女膜破ってあげて」
「はい。分かりました愛衣さん」
『パァンッ！！　パァンッ！！』
涙を流しながら痛みに堪える綾華。
再度兄である裕哉のペニスを激しく扱き始める。

『シコシコシコシコシコシコシコシコシコ！！』

「うっ！　酷い目に遭いながらも必死で俺の為に……綾華、ほんとすまん！　好きなアイドルの裸でも連想してここは射精するしかない！」

「おいバカ兄貴の裕哉！　思ったことが全て声に出てるぞ？」

「え！？　し、しまった！」

頬を赤く染めながら恥を凌ぐ裕哉は、目を閉じてファンである宮垣咲良の顔と裸を連想し始めた。

ムクムクと勃起し始める普通サイズのペニス。
妹の手の中での勃起であり、非常に恥ずかしい事ではあったが、宮垣咲良の笑顔と裸の連想は妹に扱かれながらの勃起を可能にした。

「さ、サクちゃん……なんて可愛いんだ君は……咲良……ううっ！」

『シコシコシコシコシコッ！……ドピュッ！ドピュピュピュピュピュピュピュピュウッ！！』

「きゃあっ！？」

勢いよく飛び出した精液は、妹の手と顔面にヒリ掛かる。

「サイテー……コイツホントに妹の手コキでイキやがったよ……」

東条登美子が腕組みしながら本気で呆れて呟いた。

西条早希は、はしゃぎながら頬を赤らめながらバカ受けして爆笑している。

南条奈百合は脱がされた綾華のパンツとスカートを履かせてあげた。

「よくやったね。アンタの刑罰はお尻叩きだけで堪えてあげるわ」

ホッとしながらも恥ずかしさと罪悪感と惨めさに泣き崩れてしまう綾華だった。

手や顔に付いた精液を拭き取りながら愛衣が囁く。

「クラスのみんなの見てる前でよく妹の手コキなんかで射精できたよね？　恥ずかしいし惨めな男ね？　あなたって……」

愛衣はガラス製の大きな浣腸器を鞄から取り出すと、グリセリンを目一杯吸い込ませた。

「そのまま机の上で四つん這いになってお尻を突き上げなさい」

「え！？　妹の手コキでイケたら許してくれるんじゃあなかったの！？」

「痛い事はしないよう許してあげる。でもみんなの前でまだまだ恥はかいてもらうから。お尻を突き上げて肛門丸見えになるよう自分でケツの肉開きなさい！」

「は、はいいっ！！」

余りの愛衣の迫力にビビりまくった裕哉は、言われた通り机の上で四つん這いになり、思いっきり両手でお尻の肉を開き、肛門が丸見えになるようにした。

「いいわよぉ。そのままジッとしてなさいね？」

「は、はい。恥ずかしい」

『ツプ！』

「はうっ！？」

『プチュウウウウウッ……』

「冷たいっ！？　ヒャアアアアッ！！」

『ブリブリブリブリッ！！』

これ以上恥をかきたくなかった裕哉だったが、グリセリン濃度100％の超強力な浣腸はそれを許してはくれなかった。
妹や五人のスケバン、三年Ｂ組のクラスの全員が見守る中、派手に大便を噴き飛ばしてしまう裕哉であった。

「はしたないわね。うんち撒き散らすなんて……友美恵！　コイツのアナルを思いっきり激しく掻き回して！」

「え？　あ、は、はいっ！」

『ズブ！　ヌププププ！……グチュグチュグチュグチュ！！』

「はぎいっ！？　痛いっ！？　ンギイイイイッ！！」

友美恵の太い指が河本裕哉の肛門を……直腸内を激しく掻き回す。激痛に思わず叫んでしまう裕哉だったが、前立腺を激しく刺激されたことにより、再度射精してしまう裕哉。

「はうううっ！！」

『ドピュッ！！　ドピュピュピュピュピュウウッ！！』

「きゃっ！？　やだ！」

手に大量の精液をヒリ掛けられた里中友美恵は、頬を真っ赤にして照れている。

「お尻の穴を掻き回されて射精なんてしちゃうんだ……妹さんの前で再度恥ずかしい思いさせてごめんね？」

心の優しい巨漢女子である友美恵は、ゆっくり肛門から人差し指を引き抜くと、腸液と精液で濡らしまくっている裕哉の下半身をティッシュで綺麗に拭いてあげた。

「お兄ちゃん……宮垣咲良のこと想像しながらイッちゃったんだね？　ホント最低だよね？」

「す、すまない綾華……ホント済まなかった！」

大勢の前で射精してしまう事、それが妹の手コキであった事、更に同級生女子の前立腺掻き回しで二度目の射精までしてしまう失態……。

冷静になればなるほど涙が溢れ出してくる裕哉であった。

痴漢行為者への恥辱刑執行（後書き）

河本裕哉は散々恥をかいて自宅への帰宅となる。

「お兄ちゃん……よくも私に恥をかかせてくれたよね？」

「す、すまない、ホント済まなかった綾華！　許してくれ！」

『ズチュ！　ズチュズチュズチュ！』

兄である裕哉のアナルを掻き回す白く細い二本の指。

妹の綾華はＳに目覚め、兄を陵辱する行為に快感を覚え始めていた。

人差し指と中指で激しく兄のアナルを掻き回す。

「ほら、アイドルの宮垣咲良の事想像しながらもう一度射精してみたら？」

「あっ、ああっ！綾華、や、やめて……気持ちいい……」

「きしょ……アイドルの咲良じゃなくて私の名前呼びながら興奮するのやめてくれる？　きゃっ！？」

もはやアイドルに頼らずとも実の妹である綾華の責めに本気で興奮

して射精してしまう愚かで哀れな兄が出来上がってしまう河本家であった……。

ホストオーナーの過ち（前編）（前書き）

年収１０００万を超える有名店を経営するホストであり、オーナーである男。

普通にいつもの暮らしを続けていれば一生贅沢な暮らしも出来たはずであった。

男の歯車を狂わせた行為とは？

ホストオーナーの過ち（前編）

「この峠から見える星空は最高だろ？」

「うん。ほんと綺麗」

夜中2時過ぎ、重低音が響くエンジン音を轟かせながら赤いフェラーリが極北大坂峠の頂上付近にある駐車場に到着する。

「このまま君と朝まで一緒にいられるなんて夢のようだよ」

「……そう言ってもらえると嬉しいです」

堀越邦明28歳。

《フェイストゥフェイス》とゆう店名のホストクラブのオーナー兼、人気Ｎｏ．２のイケメンであった。

「俺さぁ……」

「ん？」

長い沈黙の後、腕を枕がわりにして後頭部へ回して静かに口を開

く邦明。

「どこで道を間違えちゃったのかなぁ？」

「…………」

「もう後悔しても遅いんだろうけどさぁ……ホントに俺、今日死んじゃうんだよね？」

「……うん」

「咲良ちゃん、キミが本当に俺を？」

アイドルに所属しながら拷問処刑人である中学生の宮垣咲良。

ホストクラブのイケメン社長が所有する超高級車で真夜中のドライブに訪れていた。

「あたしとメグと真子とゆう中学生三人で……」

「……三人？」

「そう。その三人であなたを本日、拷問処刑執行します。こう見えて残虐な罪人に対しては情けはないですからお覚悟されてくださいね？」

神妙な表情で、セーラー服の少女は静かに問い掛ける。
ジッと運転席から咲良の横顔を見つめていたが、やがて満天の星空へ目を移し替える邦明。
「あ、ああそうか！　あの短髪の美少女と言われているメグと真子のことね。アイドルなのに拷問処刑人とは……ほんと信じられないけど……」
「あなたがロリコンでなければこんな事にならなかったのにね」
「は、ははは。そりゃそうだ……中学生相手でしか本気で萌えないんだよねここ数年前から……。君たちの歌ってるテレビ番組なんか見なきゃ良かった」
しれっと言い訳じみたセリフを吐きながら車の窓を開けてタバコに火をつける。
「ってゆうか中学生ってロリコンになるのかな？　あ、ごめん！　吸っても良い？」
「うん。どうぞ」
「って……火をつけてから言うなってな？　ははは」
流石に恐怖を実感し始めてきたのか、タバコを持つ指先が静かに

震えているのを咲良は見逃さなかった。

「怖いの？」

「え？　あ、んーと……はっきり言ってまだ殺される実感が薄いかな……」

更に数時間、他愛もない事や昔の事を咲良に話しながら夜明けが近付いてきた。

「ぼちぼち行きましょうか？」

「もうそんな時間か……ありがとう咲良ちゃん。最期に楽しかったよ。俺の人生で一番の理想のタイプの君と二人っきりでドライブ出来た事に本当に感謝してるよ」

「うん。さぁ、約束通り島への船が迎えにくる埠頭へ直接運転してくれますか？」

「ああ。だがその前に……」

『ガツッ！！……ぎゅううううう！！』

「うっ！？　んんんんっ！！」

いきなり咲良の首を両手で掴み、思いっきりそのまま締め上げてゆく堀越邦明。

「悪いな咲良ちゃん。俺はまだ死にたくない。まだまだ女子中学生を犯したいんだ。ここで死んでくれ」

思いっきり苦しんでいるような表情から、スッと無表情になる咲良。

「死んだか？　保険をかけてもう少し締めておくか。ふんんっ！」

『ギュギュウウウウッ！！』

宮垣咲良の目から一筋の涙が溢れ落ちるのが見えた。

「え？　泣いてる？　死んでるのになけるものなのかっ！？　ええっ！？」

『ガツッ！！　ギュギュッ！！』

「わあっ！？」

締め上げている両手の手首を物凄い握力で握り締める咲良。
ゆっくりとそのまま両手を首から外した。

「いてっ！？　イテテテテテッ！？」

「大人しく言う通りに埠頭へ向かっていてくれたら……苦しめないで即死させてあげようと思ってたのに……」

「え？」

「そこであたしに惚れられてたら女の子としてはね……国に背いてまで苦しめたくないとゆう感情が湧くものなのよ」

車から降りて逃げようとする邦明に数秒で追いつき、足を掛けて倒すと、マウントを取ってパウンドの嵐をお見舞いする咲良。

『バキバキッ！！　ガツッ！！　グシャッ！！』

「ひぎゃっ！？　はぎゃあああああっ！！」

そのまま半時間ほど顔面をタコ殴りにする女子中学生。

「このまま殺してあげても良いんだけど……あなたにはやはり本当

の地獄を見てもらわないといけないから……」

大人しくなった堀越邦明の手を引き、フェラーリまで連行する。

……血まみれになって腫れまくった顔面で子供のように泣き始めた。

「ううう……うわあああんっ！！　まだ死にたくねーよおおっ！！お願いだから許してくれえっ！！」

「あたいの首絞める前にそのセリフ言えっつーんだよこのボケェ！！」

「え？」

「そしたら即死させてやるつもりだったのによぉっ！！」

一瞬にして泣き止んだ男は思わず咲良の顔を凝視する。

「あらごめんなさーい。あたし、元ヤンキーだったもんでつい……しかも同じ事を何回も……あは、あはははは……」

今日この世を去る罪人が自分のファンであるため、出来るだけアイドルっぽい話し方を意識してあげている咲良であった。

「か、カッコいいなぁ……俺、そんな咲良ちゃんも大好きだわ」

「そ、そうなんですかぁ？　てへへ。今日はあたしが無人島にて邦明様に生き地獄をみせてあげちゃいますからねぇ？　うふふ♡」

「ふ、ふふふ、ううう。お願いだから許してください……うわああぁあんっ！！　うわあああんっ！！」

女子中学生アイドルの咲良の足元で土下座をして命乞いを始めるホストクラブのオーナーに、少し憐れみを感じながらも許す気は毛頭無い咲良だった。

「よしよし。でもね、地獄の前に天国もみせてあげるから……」

「ぐす、ぐす、て、……天国？　生かして帰してくれるの？」

「まさか。あなたがオチンチンを勃て続けることができる限り、拷問処刑は開始しないで射精させ続けさせてあげる」

「さ、咲良ちゃんが俺のチンポを!？」

「うん。あたしで良かったら……メグと真子にはさせないよ」

「う、嬉しいけど……射精出来なくなったその後俺は……」

「あたしたちの手でミンチになるの」

「わあああああっ！？　嫌だあああああっ！！　ほんと許してくださいいいいいっ！！　ひいいいいいっ！！」

何度も頭を地面に擦り付けながら咲良の脹脛（ふくらはぎ）を掴んで泣き叫ぶ。

「だから許せないんだって。あなたがレイプした中学生の女の子……自殺しちゃったの……お母さんまでショックで睡眠薬大量に飲んで死んじゃったんだから……」

「ごめんっ！　ほんとごめんなさいっ！！」

「あのね邦明さん……謝って済む問題じゃないって事がまだ分からないの？　あ、それと……嘘をついて部屋まで誘き出して、被害者を監禁するのを手伝ったあなたの妹さんも後で逝かせてあげるから。兄の拷問処刑ショーをじっくり観てもらった後、きっちり後を追うように地獄へ送ってあげる」

狂ったように泣きじゃくりながら、思わず脹脛を抱きしめる力が強くなる。

「唯香（ゆいか）には手を出さないでくれっ！　アイツは俺の事を小さな頃から大切にしてくれていたんだっ！！　アイツがいたからグレかけて

た俺がホストクラブのオーナーにまで登り詰められたんだ！　ほんとやめてくれえっ！！」

「自殺した二人の前でそんな言い訳通用すると思ってるの？　普通にグレて喧嘩でもしまくってた方が中学生犯しちゃうよりよっぽどマシでカッコ良かったのでは？　あなたとかなり歳の離れた１２歳の妹さん。あたしたちが何度もイかせまくって女の悦びを教えてあげてから殺すから。感謝するくらい天国にイかせてやるから兄のあなたは素直に喜びなさい」

「ぐっ！！……く、くそうっ！！　わああああああっ！！」

やぶれかぶれになって立ち上がり、再度咲良へ襲いかかる邦明。
数回顔面に膝蹴りと回し蹴りを喰らい、殆どの歯をへし折られて仰向けに崩れこむ。

「はががっ！？　はぎいっ！！」

「オラァッ！　どうしたオッサン？」

『ガツッ！　グリグリグリグリッ！！』

「ぎひいいいいいっ！！」

右足の裏を男の顔面へ乗せて、何度も足首を回転させる咲良。
血まみれの顔面は鼻の骨もへし折られて唇も裂け、化け物みたいに腫れ上がっていた。

そこへ更に、足の裏での踏みつけグリグリの刑を執行する咲良だった。

小便を漏らし、ジーンズの股間は濃い紺色に変色していた。

「何漏らしてるの？　女子中学生のアイドルの前でお漏らしなんて……とってもはしたないわね？」

「ううう……痛い……なんで顔面ばかりボコボコにする……んだ？」

「今日の残酷処刑島での拷問や処刑でのお楽しみを残すために顔以外は控えさせてもらってるんだよ？」

「お、俺の最期はどうなる？」

「妹がオマンコ串刺しだから……あなたは肛門からの串刺し刑かな？いや、マシンガンでミンチにしちゃおかな？　いや、アレもいいしコレもいいなぁ」

色々想像して頬を赤くする咲良だったが、邦明からすれば録でも無い恐怖の所業しかあり得ない思考だとゆうことは容易に推測することができる邦明であった。

更に大便まで漏らす邦明だったが、髪の毛を掴んで強引に立たせると、半ば強引に車内へ連れ込んで運転を強要する咲良。

「くっさ。まさか……あなたそこまで落ちぶれたの？……さぁ今度こそ埠頭へ行きなさい。次逆らったら２３時５９分の日付け変わるギリギリまで殺さないで生き地獄を与えてやるんだから」

「は、はいっ！　出発します……咲良ちゃん……」

「うんちもこれ以上漏らしたら許さないよ？」

「は、はい……」

女子中学生アイドルとは到底思えない脅威的な強さと、朝から迎える運命である死の恐怖に、全身を震わせながらハンドルを握る年収１０００万越えの名門ホストのオーナー。

実は特殊任務省が認めた最後の恩赦である宮垣咲良とのドライブデート。

人生を終える最期の一日は、これまでに想像でレイプしていた理想の少女、宮垣咲良本人との夢のデート達成となった。

ホストオーナーの過ち（前編）（後書き）

妹と協力しながらも女子中学生を監禁してレイプした男。
それによって尊い親子二人もの命が絶たれた。
妹の唯香は監禁の手伝いだけであったが、拷問処刑を選択した特殊任務省。
間接的にとはいえ何の罪もない二人の命の代償は兄妹二人に取らせる事となったのである。

ホストオーナーの過ち（後編）（前書き）

ついに残酷処刑島での拷問処刑が開始される。
ホストクラブのオーナーにまで登り詰めた男と妹である唯香の運命は？

ホストオーナーの過ち（後編）

――――――夜明けの残酷処刑島。

目隠しをされて島へ連行される罪人の堀越兄妹と、拷問処刑人三人。

「あなたたちの拘束は最期の串刺し刑執行までやらないから」

「そ、それは有難いが……結局殺されるなら同じだと思うんだが」

「じゃあガッツガツに拘束しちゃおうか？」

咲良はキツく睨みつけながら堀越邦明を威嚇する。

「ご、ごめんなさい。出来るだけ痛くしないでほしい。妹の唯香も……」

「唯香ちゃん、今からお兄ちゃんのエッチなショーが始まるんだけど見る？」

「見ません！　早くこんなバカな事をやめてあたしとお兄ちゃんを解放して下さい！　訴えますよ？」

想像以上に気の強い小学六年生に一瞬たじろぐ咲良と真子とメグの三人。

咲良は唯香の眼力の強さに、同じ小学生の拷問処刑人リーダーである菅野莉央を見たのである。

「り、莉央！？……え？」

「咲良！？　しっかりしろ！　何言ってるんだ？　この子は罪人であるコイツの妹！　唯香だぞ？」

「！？　あ、ああ。そうだな……おい唯香とやら」

「何ですか？」

「兄の痴態を嫌とゆうほど見せてやるから覚悟してろよ？」

「兄の最期とゆうのならあたしは最期まで見るつもりです。でも本当に処刑など行えばあたしは一生あなたたちを許しません。恨み続けてやります」

鬼気迫る表情は冗談とも取れず、本気で寒気を催す咲良だった。

『このガキ……なんかとてつもないオーラみたいなのを感じる……莉央と被って仕方ない……ちっ！　やりにくいな今日は……』

そのまま兄の邦明を素っ裸にする真子とメグ。

「四つん這いになれ」

「は、はい！　メグ様っ」

「ケツを突き上げて」

「は、はい！　真子様っ」

誰に命令されても今日一日命尽きるまで“様”付けで咲良たちのことを呼ばせることにしてあった。

命令通り三人を様付けで呼ぶ邦明だった。

「股を開くのよ邦明」

「はい！　咲良様っ！」

「もっと開け！」

「はいっ！！」

四つん這いになったまま全開に股を開く邦明。

それを頬を真っ赤にしながらも真顔で見つめている妹の唯香。

人差し指をペロリと舐めながら妹の表情を窺う咲良。
ゆっくり２８歳の兄である邦明の肛門へ当てがう。

『つぷ……』

「はうっ！？」

まさかの事態に悲鳴をあげる邦明だった。
咲良の人差し指はゆっくりと確実に邦明の肛門へ挿し込まれていった。

『ズブブブブ……ずちゅっ！』

「ひいっ！！　痛いっ！！」

「指一本で痛いとか笑わせるんじゃないわよ。次中指いくから」

人差し指、中指、薬指とどんどん挿し込まれてゆく咲良の指。
アナルに慣れていないのか本気で苦痛の表情を浮かべ涙を流す邦明。

「お兄ちゃん……今この人たちにされてる事、あたしは絶対告発するから。頑張って耐えて！……ぐす、ぐすん」

あまりに酷い性的虐待についに気丈な妹の唯香は泣き出してしまう。それでも兄の姿を目を見開いて見続けていた。

「すべての指を飲み込んだわね？　次はあたしの拳をくれてやる……お飲み……汚いアナルめ！　えいっ！！」

『ズブブ！　ボコオッ！！』

「ぎゃあああああっ！！」

白目を剥いて涎を垂らし、肛門を引き裂かれて泣き喚く邦明。
肛門括約筋が数枚裂けて、夥しい量の血が噴き出す。
咲良はセーラー服を血に染めながらも邦明の直腸内をグリングリン掻き回す。

「オラオラオラァ！　ここ？　ここが効くのか？　んん？」

「はうううっ！！　いだいいいいいいっ！！」

『ドピュッ！！　ドピュピュピュピュピュウッ！！』

咲良の拳が激しく前立腺を刺激して意志とは関係なく大量の精液を噴き出させてしまうのであった。
白濁液は地面に強く振り撒かれた。

泣きながらも頬を赤く染めて一部始終を見ている唯香。

更に無理矢理勃起させたペニスを掴み、いきなり激しくピストン運動する咲良。

『シコシコシコシコッ！！』

「うっ！！　うぐううううっ！！」

「気持ちいいか？」

「はい！　さ、咲良様っ！」

「なら出せ！　今の前で十回は射精させてやるからね？」

「そ、そんな咲良様……ひ、酷い……イ、イくうっ！！」

「イけえっ！！」

『シュコココココッ！！』

『ドピュピュピュピュピュピュウッ！！』

頬を真っ赤に染めたまま……妹の唯香の下半身が顕になっていた。
背後から真子がスカートとパンツを同時に足首までズリ下げていたのである。

「キャアッ!?」

「可愛いお尻♡」

『パァンッ!!』

「痛いっ!! や、やめてっ!!」

『ズル、ズルリッ』

そのままスカートとパンツを足首からも完全に剥ぎ取る真子。
下半身スッポンポンにしたまま背後から羽交締めにして持ち上げる。

両脚をバタバタしながら対抗する12歳の少女、唯香。

「やめなさいっ! やめてえぇっ!!」

前から小野メグが両手で両足首を掴み、左右に思いっきり広げた。

『ぱくんっ！』

「やんっ！！」

小学生児童のオマンコが全開に広げられる。
小陰唇が左右に開かれて膣内が丸見えになる。

「ピンク色の綺麗なマンコしてるね。さすが小学生だわ♡」

小野メグが頬を赤くしながら嘲笑する。

「さぁ、私の膝蹴り連打を受けてもらおうかな？　それえっ！」

『スパァンッ！！』

「ひぎっ！？」

背後から羽交締めにしたまま、背後からの膝での股間蹴りをキメる大野真子。

「あはは♡　マンコに決まったよぉ？　まだまだいっくよぉ？　それそれそれえっ！！」

『パンパンパンパンパンパンパンパンッ！！』

「ヤダあああああああああっ！！　アソコが痛いいっ！！　やめてえええええっ！！」

漏らしたオシッコが真子の太ももに降り注がれた。

「あらぁ？　唯香ちゃんってばあんなにいきがってたのにぃ。お漏らしなんてしちゃうんだぁ？　あはは♪」

「メグ、もうちょっと手前に引っ張りながら股開かせてくれる？　アナルにも直撃させたいから」

「真子のエッチィ〜。はいっ！　こう？」

『ズドンッ！！　メリメリッ！！』

「んぎいいいいいっ！！　痛いいいいいっ！！　わーんわーん！！」

ついに号泣し始めてしまう妹の唯香だった。

そのまま何度も肛門への膝蹴りを繰り返す真子。

ついに小学生の性器と肛門は皮が裂けて血まみれになる。

「泣けば許してくれると思った？　血を流せば許してくれると思った？」

『パァンッ！！　パァンッ！！』

「ひぎっ！！　ひぐうっ！！　えーんえーん！！　痛いよおっ！痛いよおおっ！！！」

泣き喚きながら数百回以上真子の膝蹴りをマンコと肛門に喰らい続ける唯香だった。

血に混じって粘液まで垂れ流れてくる。

「ん？　糸引いてるぅ？　やだなぁもう……小学生のくせに愛液と腸液垂れ流しちゃってるよメグ」

「ホントだ……真子の膝蹴りに感じるなんてオマセちゃんね！コイツ♡」

『つぷっ！　メリメリ……』

「ひゃあっ！？　やだあっ！！」

冷ややかな笑顔を浮かべながら舌舐めずりしながら唯香の小さな

膣へ中指を突き立てるメグ。

「処女膜……もーらいっ♡」

『バリッ！』

「んぎゃあああっ！？　わーんわーんっ！！　痛いいいいっ！！」

『グチュ！　グチュチュチュチュチュチュッ！！』

小野メグは、血と粘液塗れの小学生児童の処女膜を突き破ると、そのまま膣内を中指で激しく掻き回す。

「ほらほらほら！　小学生のマンコ……私がイかせてやるからな？」

『グチュチュチュチュチュッ！！』

「やんやんやんやんやんっ！！　ふんぎいいいいっ！！」

『プシャーッ！！』

勢いよく潮を噴いて昇天する唯香。
コレまでの人生で最高レベルの快感を、同性のメグによって味合わされる。

「はぁはぁはぁはぁ……」

「あはは！　思いっきりイったみたいだぜコイツ……オマセだなホント」

「あたしのアナル蹴りと同時だからイけたんじゃない？」

「かもね！　あはははは♡」

妹を犯しながら爆笑する真子とメグの前で、兄の邦明が悲惨な目に遭っていた。

宮垣咲良の本気の調教が開始されていたのである。

拳までブチ込まれて更に膝まで挿入されて掻き回されていた。

「あばばばばっ！！　はぎいいいいいっ！！」

直腸にぶち込まれた腕は、S字結腸を貫いて小腸までも到達しているのが目に見えて明らかであった。

「咲良！　早から殺すきなのかっ！？」

思わずメグが叫ぶ。

「あっ……ごめん！　責めてるうちについついムキになっちゃってたよ」

『グボッ！！　ズルルルルッ！！』

そのままパックリ開かれた肛門から大腸と小腸を引き摺り出す咲良。

大腸を右手で握りしめて扱くと、大便が肛門からブリブリと飛び出してくる。

「ほら、死ぬ前に便を抜いといてやるからね？　妹さんの前で醜態晒しなさい」

「あばばばばっ！　ぶくぶくぶくぶくっ！」

あまりの激痛に白目を剥いて泡を噴きながら小さく痙攣する邦明だったが、咲良はどんどんとハラワタを引き摺り出してゆく。

「この辺で……一旦やめとくよ」

ようやく腸から手を離し、今度は小型のドリルを手に持つ。

『ヴィイイインッ！！』

そのままスイッチをオンにして、四つん這いからそのままうつ伏せに倒れ込んで痙攣している邦明を足で蹴り転がして仰向け体勢にさせると、ヘソにドリルをあてがう。

そのまま全開にスイッチを握り込み、一気にヘソに穴を開けてゆく。

『ギュイイギュイイイイインッ！！……グチュチュチュチュチュチュチュウッ！！』

「グエエエエッ！！！！」

血を吐きながら悶絶する邦明だが、咲良の刺し込んだドリルは背中にまで貫通してしまった。

背骨を砕かれた男は遂に全身麻痺状態となってしまう。

痛みを伝える神経だけは無常にも残ってしまったのか、目玉をグルグルさせながら悶え苦しんでいた。

肛門とヘソから大量の鮮血とハラワタをを吐き出しながらビクビ

ク痙攣する姿を見て、真子とメグは少し引いている。

「えぐ……」

「スッゴ……」

咲良は本気の蹴りを、睾丸へ浴びせかけた。

「先ずは右側の玉からいくよ？」

『ズドンッ！！……グチャッ！！』

「ぐふうっ！！！！」

「うるさい！　次左の玉っ！　それえっ！」

『ドカッ！！……グチュ！！』

二発のサッカーボールキックで二個の睾丸を潰された邦明は、更に激しく全身を痙攣させて、血の粘液を射精する。

「妹ちゃんの見ている前で血まみれの精液を射精しちゃうなんて……見てられないほど哀れだねコイツ……」

頬を赤くしながらつぶやく大野真子。
「真子、もうそいつ、最期が近づいてるから串刺し前にチンポちょん切る？」
「あ、それもそーだね。私がやっていいの？」
振り向いて咲良の方へ目をやる真子。
咲良は無言で頷く。
カッターの刃をジャキジャキと全開に出すと、邦明の下半身の横側にしゃがみ込む真子。
左手の指で亀頭部を掴み、クイッと真上に持ち上げると、尿道に沿って刃を入れる。
『ズッ！　ザクッ！』
「え？　切断じゃなくて縦に切るの？」
根元まで一気に切開されたペニスは真っ二つに分かれるように開きながら左右に倒れていく。
尿道口から縦に尿道を切り裂きながら見事に縦に真っ二つにされたペニスは、痙攣に合わせて踊るようにプランプランとお腹の上で

揺れていた。

「縦の方が面白いでしょ？　このまま玉袋も切り裂いて……っと。えいっ！」

『ズズズッ！！……ドロドロ、ドクドク』

咲良に蹴られて潰されていた睾丸のミンチが真子に切開されて溢れ出してくる。

「やだぁ、ミンチになっちゃってるぅ、なんかエッチィ～♡」

真子はかなり興奮してきた。

メグはそっとミンチを指で掬い取り、人差し指と中指と親指で更にすり潰して感触を楽しむ。

「ヌトヌトしてる……すっごい粘度だなこれは……セーエキ以上に粘いぞぉ」

ミンチになった金玉の粘度に、妙に感心する小野メグだった。

縦に切開されたペニスを両手でそれぞれ掴み、思いっきり引っ張る真子。

ついに根元から引きちぎられて、真っ二つにされた尿道が二本飛び出してくる。
それも掴んで二本とも腹部から引きちぎると、大きく身体をビクンッとのけぞらせる男前のホスト。
「あ！　いけね……射精し続けるまでは拷問開始しない約束忘れてた！」
そう言いながら直径１０センチ、全長８０センチほどもある長いドリルのエンジンをかけて男の肛門へあてがう。
「槍じゃなくてドリルで貫通に変更したよ。唯香ちゃん、ちゃんと見てるのよ？」
「あ、あああ……お、お兄ちゃん」
「アクセル全開っ！　いっくよおおおっ！」
『ヴィイイインッ！！』
「おごごごごごおっ！？　げはあっ！！……がくんっ！」
口とヘソと肛門から歪に飛び出すハラワタ。
ついに女子中学生とその母親を自殺に追いやった男はあの世へと旅立つことを許されたのであった……。

あまりのショックに気を失ってしまう唯香。
ふと目覚めた時に目の当たりにした光景は…………。

「あらお目覚めですかお嬢さん？」

「元気そうでなりよりですわねぇ」

黒とピンク、二色のゴスロリ風ドレス姿をした二人の女子高生らしい少女がこちらを振り向いて笑っている。
その傍には先ほどまで自分を責めていた大野真子と小野メグがボコボコになって伸びていた。

「あれ？　私、下半身裸にされてたのに……」

知らぬ間にスカートとパンツを履いている自分き付く唯香。

「そのガキも拷問処刑が決定してるんだ！　国の命令に抗うことは許されない！」

宮垣咲良も顔面をボコボコに腫らしながらようやく立っている状態だった。

「あなたたちが私を？　助けてくれたの？」

「唯香ちゃん！　私は姉の沖野夏帆、この子は妹の秋帆！　正義のヒロイン、双子のＪ　Ｋ姉妹の活躍をそこで見てて下さいね♡」

「あ、ありがとうございます！」

姉の夏帆は髪がピンク色、妹の秋帆は水色の髪。

アニメから飛び出してきたような風貌をしている姉妹だった。

謎の姉妹の勝利を心から祈る唯香であった。

もし負ければ結果自分は殺されるのだ。

当然のことではある。

その幼い小学生の期待に応えるべく、宮垣咲良は姉の夏帆によって期待通りボコられる運命に。

「な、なんて強さだ……お前ら一体……」

「だから夏帆と秋帆って言ってますでしょう？」

「カホと……アホ？　な、なんて名前を妹に付けるんだお前たちの両親は？　可哀想に……ガクッ！」

「な、なに人の名前の心配しながら気絶してやがりますのあなたは!?　お姉様、咲良さんとやらブチ殺して差し上げてよろしいでしょうか？」

「ダメですわ秋帆……どんな悪人でも殺すことは罷りならないですよ。それが私たちの属する人道第一省の定義ですわ」

「分かりました。では叩き起こしてこの三人をイかせてから帰りま

しょう」

「そうですわね。私はこの咲良を……秋帆は真子とメグを」

「はい」

無理矢理起こされた拷問処刑人の三人は、いきなり現れて罪人の妹の唯香を助けた沖野夏帆と秋帆によって性的制裁を受けるハメになる。

超強力な媚薬を性器にタップリと塗られ、手マンで何度もイかされた。

「ほら、イって下さい鬼畜少女たち」

『グチュ！　グチュチュチュチュチュチュッ！！』

「やはあっ！！　だめ！！　イくっ！？　あはあああああっ！」

「こっちの穴も指突っ込んで差し上げますわ。ほら、もっと激しく潮を噴いておイきなさって下さい」

『グチュチュチュチュチュチュッ！……ズブッ！ズボズボズボォッ！！』

「んぐうううっ！！　やんんんっ！！」

優しい口調とは裏腹に膣と直腸が剥がれるほど激しく手マン、手肛虐を続けて咲良と真子とメグを何度もイかせまくる沖野姉妹であ

った。

その光景をまたしても頬を真っ赤に染めながら口に手を当てて目だけ見開いて恥ずかしそうに見つめる唯香の姿があった。

拷問処刑人の女子中学生たちの膣から、イかされた後の酸っぱい臭いが立ち込める中、ヘリコプターが舞い降りてくる。

「さあおねぇさんたちと一緒にお家に帰りましょう唯香ちゃん」

「そうですわ。お兄さんは残念ですが私たちにも止めることは出来ませんでした。処刑されて当然だったからです。でもあなたは違う。殺されるには理不尽すぎました。一緒に来てくれますね？」

謎の女子高生姉妹、沖野夏帆と秋帆についてゆく覚悟を決めた女子小学生である堀越唯香は、一緒にヘリコプターへ乗り込み、残酷処刑島を後にした。

残酷処刑島に新たに一人の遺体が加わった……。

（予定は二人であった……）

ホストオーナーの過ち（後編）（後書き）

残酷処刑島に舞い降りた謎の姉妹の活躍によって、妹である唯香の処刑は未遂に終わってしまう。

特殊任務省の執行を妨げた《人道第一省》の存在。

――数日前。

「特殊任務省の行なっている処罰について皆に聞きたい。既にご存知かと思われるが、どう見積もっても処刑に適さない罪人まで処刑執行されているのが現状だ」

「そうですね。私もそう思います。警察省まで特殊任務省に協力していて、警察による逮捕者までも処刑人に引き渡すなんて行為も最近普通に行われているみたいですしね……いくら鬼畜な加害者とはいえあれもどうかと……」

「私も同感。特にまだ自分の意思さえハッキリ持てていない幼い子供たちへの拷問処刑など言語道断だと思う」

十人もの法務省官僚が緊急会議を行い、藤堂長官率いる特殊任務省に対する対抗策を練っていた。

「遺族の感謝状がかなりの力を持っていまして……いくら我々でも特殊任務省を潰すことは不可能かと……」

「では目には目を……力には力といこうじゃないか。私に名案がある」

法務省トップの笠井吉行。
この人物が急遽執り行った緊急会議にて、《人道第一省》が新しく発足されることになった。
法務省トップと人道第一省を兼ねるトップになる。

「男女混合の地下総合格闘技でも連続優勝して姿を消した化け物的な強さの元女子高生姉妹がいる。既に説得に向かわせているのだが……もし彼女たちがうまく引き受けてくれれば拷問処刑に適さない罪人をこれ以上死なせないよう……強制的に拷問処刑人たちに圧力をかけてもらうことにしたいが、どうだろう？」

満場一致で賛成。
超短期間内に、新しい省庁は発足されることになった。

「咲良さんたち中学生トリオも全然歯が立たなかったのですね……」

「ああ。バケモン的な強さだった。しかしヘリで処刑島にやってくるなんてとてつもない力を持ってる奴らに違いないぜ？　こりゃ一筋縄ではいかないかも……」

菅野莉央の自宅へ病院帰りに新幹線で立ち寄った宮垣咲良の報告を受ける。

「とりあえずあたしと美紅ちゃんは、次回処刑人確定にしてもらいます。次回執行時にも奴ら来るでしょうか？」

「空から来ると思う。きっと……」

円満愛衣はお菓子を頬張りながら二人の会話を静かに聞いていた。
特殊任務省の拷問処刑執行を一部阻止する組織の出現。

「咲良さんたちの仇をとりあえず取らなきゃ……」

「む、無理しなくていいぜ莉央！　あいつらほんとバケモンだから！」

揺れ動く心。
姉妹との対決は不可避となった。

残酷処刑島での決闘（前書き）

ついに二つの省庁同士による戦闘が起こってしまう。
菅野莉央たち拷問処刑人たちの命運は？

残酷処刑島での決闘

西武マンション。
西部地方に存在する高級マンションである。
「出来ましたわよぉ～。この夏帆ねぇさん一番の自慢料理、回鍋肉（ホイコーロー）ですよー♪」
「わあっ！　美味しそう！　さ、唯香ちゃんも食べて！　夏帆ねぇちゃんの中華は最高なんだよ？」
「うん！　頂きますっ」
沖野夏帆（おきのかほ）と秋帆（あほ）の18歳になる姉妹と、一週間前に残酷処刑島へ、ヘリで出向き救い出してきた小学六年生の少女、堀越唯香の三人はあれから今日までずっと一緒に暮らしていた。
「お兄さんの死を目の前で見せつけられて……ほんと可哀想だよね」
「秋帆！　その話はやめときましょう」
「はいお姉様。ごめんなさい唯香ちゃん、傷つけちゃったかな？」
「ううん！　もう平気だよ。お兄ちゃんはお兄ちゃんで、酷いことをしてしまったのだからもう気持ちを切り替えます。生まれ変わっ

たらまともに生きて欲しいですけど……」

健気な小学生相手に何も言えなくなってしまう沖野姉妹。
黙々と夕ご飯を食べて川の字で眠る。
もちろん真ん中は唯香だった。

「夏帆ねぇちゃん……」

「ん？」

「どうして大人は私の股間とか汚いトコ触るの？　指入れてきたりするの？」

自分たちも倒した後の拷問処刑人たちに性的制裁をやってしまっている姉妹は、一瞬言い訳に戸惑う。

「あ、あれ、あれはあの……は、恥をかかせて反省させるとゆう意味で……ねぇ秋帆」

「そうですわねぇ。でもアイツらが唯香ちゃんにやったのは単なる拷問とゆう暴力行為だから……非常にやってはダメなことなのですよ？」

「ふぅーん。なんか恥ずかしいし痛いし……少し気持ちいいような

変な感じにもなっちゃったりしたけど……でもやっぱりあんな所は蹴ったり指突っ込んだりしないでほしいなぁ」

「あ、あったり前ですよねそれは！　ねぇ秋帆」

「うんうん！　私たちは唯香ちゃんにそんなことしないから安心してくださいねぇ？」

「うん！　ありがとう！　おやすみっ」

「お休みなさい」

二人同時に寝る前の挨拶を返す夏帆と秋帆。

五日前に、堀越唯香の両親が首吊り自殺したことは絶対内緒にすることを固く誓いながら唯香と一緒に暮らす決断をするゴスロリ姉妹であった。

――――一ヶ月後、赤霧島小学校。

「せっかく敵の正体分かったのに。あれから全然処刑執行命令来ないね？　早くそのゴスロリ姉妹とかを見たいのにぃ」

ツインテールを揺らしながら一番喧嘩の弱い富田美香が菅野莉央にぼやく。

「そーだね。早く会って一戦交えたいんだけど」

「莉央ちゃんらしくないほど好戦的になっちゃってるね？　大丈夫？」

結城明日香が、感情的になりすぎている莉央を気遣う。

「藤堂長官とも話し合ったんだけど……とりあえず同じ国の機関の相手だったとゆうことが分かった。相手方はあたしたちの命を取る気は全くないとゆうことと、罪が軽いと判断した生かしてあげたい罪人の救出が最大目的だとゆうこと。その上で次回は拷問処刑人全員で島に渡ってもらうことにしたの」

「やった！　じゃあみんなそのゴスロリ姉妹にお目にかかれるんだね！？」

「うん。あたしと美紅ちゃんであの二人と決着を着けるとゆう方で藤堂長官の許可をもらったから」

「陰からライフルでぶっ放してぶっ殺してあげようか？」

人差し指をガチャガチャと引くジェスチャーを見せながら不敵に笑う美香。

「バカ！　相手方にその気が無いのに殺せるわけないでしょ？」

「てへへ！　分かってるよそれは。冗談冗談！　でも負けちゃったらオマンコからお尻の穴から凌辱されちゃうんでしょ？　そんなこと莉央ちゃんがされてたら本気で銃使っちゃいそう……」

「ふぅ。その時は私が美香ちゃんを止めたげるよ」

結城明日香がため息をつきながら美香の頭を数回撫でた。

法務省トップであり、人道第一省も兼ねてトップで指揮を取る笠井吉行。

藤堂長官はとりあえず莉央たちにゴスロリ女子高生姉妹と闘わせて様子を見るつもりである。

倒さなければあの姉妹を止めることは出来ない。
それどころか次回からも好き勝手に処刑を妨害されることとなる。

本来残虐な気質を持つ莉央や美紅にとっても、拷問処刑が減るとゆうことはストレスがたまることに繋がるのであった。

そしてついに迎えた拷問処刑の執行の日。
残酷処刑島はいつになく無風状態にある。
静かで暖かい一日となっていた。

「この擬似射精機能付きのペニスバンドはあたしと国の共同開発だよ」

「莉央ちゃんはほんと頭が良いんだね～♪　よくそんなおっかないもの考えつくもんだわ」

美香は半ば呆れながらもその効果を楽しみにしていた。

中学二年生の親殺しの罪で拷問処刑となった森山直子のジーンズとパンツを脱がせる円満愛衣。

「はい。直子さんの下半身、丸見えになっちゃいました。莉央様が今からあなたをバックで犯してくれるから……上の服はそのままでいいからお尻を突き上げて股を開きなさい」

「いや、やだあっ！　許してください！　ごめんなさいっ！　ごめんなさいっ！！」

『スパァンッ！！』

お尻の肉が裂けるかと言わんばかりの強力な愛衣の平手打ちが右臀部を襲った。

「んぎいっ！？　わ、分かりました！　やりますからもう叩かないで下さいっ！！」

『カチャカチャ……』

ペニスバンドを制服のスカートの上から腰に巻き装着する莉央。

「長さ20センチ、直径5センチのシリコン製極太チンポが一秒間に十回ピストンするから……一分も経てばあなたの膣からは摩擦で煙が出ると思う」

「ひっ!？　そ、そんなことになれば私のアソコは……」

「膣壁が摩擦熱でズリ剥けてオマンコの中はグチャグチャになっちゃうわね。どうせ死ぬんだからもう使い道ないし良いでしょ？さぁお尻を突き上げて力を抜いて……」

「やめてえええっ!!　お願いですすやめて下さいお嬢さんっ!!お願いですうっ!!」

泣き喚きながら首を左右に振るが、円満愛衣と鬼頭美紅によって両膝を押さえつけられて開脚体勢を維持されているため、下半身は身動き一つできない。

「ここ？　森山直子の膣口は……挿れるよ？」

『ピトッ……』

「ひぃっ！？　やだっ！？　やめて下さいぃぃぃいっ！！」

「あなたのことを最後まで心配していたお母さんが天国で見守っていてくれるわ。あなたは地獄行きだけどね。さぁいくよぉ？」

莉央は両手で直子のお尻の肉を鷲掴みにして左右に大きく開く。

パックリ開かれた肛門と性器。

直腸と膣内が丸見えになった。

そのまま極太シリコン製バイブを膣口に埋め込ませてゆく。

『ズブブブブ……メリメリメリメリ』

「あぎゃあああっ！！　いだいいいいいいっ！！」

ついに根元まで捩じ込まれる20センチもあるバイブ。

処女膜を突き破り、子宮口をこじ開け、子宮の奥の奥まで食い込む極太バイブの先端。

「痛いっ！！　痛いいいいいいっ！！　ぎひいいいいっ！！」

「本当の地獄は……これからだよ？　森山直子。莉央様の地獄のピストン刑を喰らいなさい。スイッチ……オンッ♡」

『カチッ！』

秒速十回とゆう超高速で20センチのバイブが20センチ分伸び縮み運動を繰り返す。
激しく激しくピストン運動は繰り返されてゆく。
直子の膣内は数秒で焼けただれ、肉片が膣口から垂れ流れてくる。
『バコバコバコバコバコバコバコバコバコッ！！』
「ひんぎゃあああああああああああああああああっ！！！！」
「それえっ！　更にスピードあーっぷ♡」
『バコココココココココココココココココッ！！！！』
「ぴぎいいいいいっ！！うぎいいいいいいいいっ！！！！」
散々膣内を破壊した極太シリコン製バイブを一度抜き、ミンチになった子宮や膣壁の残骸を中指を挿し込んで掻き出す莉央。
「想像以上にグチャグチャになっちゃったわね……ピストンが激しすぎたかな？　テヘッ♡」
舌を出して天使のような笑顔を見せながら今度は悪魔のそのバイブを肛門へ押し当てる。

「今度はアナル……後ろの穴も許してあげないんだから」

『ツプ……ズボォッ！！』

「ぎゃんっ！？　やめれえええっ！！　はひいいいっ！！」

あまりの性器の激痛に、半ば頭がおかしくなってしまった直子は、目玉をグルグル回しながら涎を垂らしながら腰を激しく振り始めた。

「そんなに腰振るとバイブのピストン運動と連動して更に激しく擦れちゃうよ？　いいの？」

「アヘアへ！　あははは！」

「おかしくなってる……ま、いっか。スイッチオーン♡」

『バコバコバコバコバコバコバコバコバコッ！！』

肛門括約筋が直腸内に激しくめり込んだり外側に飛び出したりを繰り返す。

その内肛門は完全に破壊され、パックリ大きく開きっぱなしとなった。

摩擦でミンチとなった直腸がドロドロと煙を吐きながら垂れ流れてくる。

莉央の太ももはマンコとアナルの肉片で真っ赤に染まっていた。

「こんな汚い肉片あたしの太ももに着けちゃって……どうしてくれるのかな？」

「あがががが……はひひひひひひいいいっ！！」

白目を剥いて下半身をガクガク痙攣させながらうつ伏せに崩れ落ちる森山直子。

パックリ開いた膣口と肛門をヒクヒクさせながら、お尻を高く突き上げた体勢のまま痙攣し続けている。

「すっご……マンコもアナルも内側から破壊されてグッチャグチャじゃん……莉央ちゃんらしい残虐な兵器だわコレ……こわ」

さすがの鬼頭美紅も莉央の開発したペニスバンドに恐れ慄く。

「直子ぉー！　おーい直子ぉ！」

「痛い痛い痛い痛い……許してください許してください許してくださいい……はがはがはがはが……」

白目を剥いたまま泣き崩れて最期の命乞いを始める直子だったが、莉央は再度膣口へ極太バイブを根元まで挿し込んでゆく。

「人工射精してあげる。すっごい勢いで人工精液が飛び出しちゃうから気持ち良いかもよ？」

その勢いは水で鉄さえ切り裂く工場のモノと変わらない破壊力を持っていることを愛衣も美紅も知っていた。

「直子さん、言い残すことはない？」

円満愛衣が髪の毛を掴んでグイッと持ち上げながら問いかける。

「わ、私ころされちゃうの？　こ、このまま死んじゃうのかなぁ？」

「そうね。莉央様の発明されたこの人工射精装着の威力は物凄いわ。膣から子宮を貫いてそのまま全ての内臓までも貫き、口から飛び出しちゃうわよ？　いっぺん、死んでみます？」

「わーんわーん！　死にたくないよおお！！　お願いです莉央様、許してくださいぃぃぃっ！！　わーんわーん！！」

「5秒。5秒後に射精するよう設定してるから……それまで最期の快感を溶けたマンコで感じ取るがいいわ♡」

無情にもそう言い放つと極太シリコン製バイブの最終スイッチをオンにする莉央。

『ヴィィイイイン……バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「ヒャアアアアアアアッ！！　ひんぎいいいいいいいっ！！！！」

「死んじゃえっ♡」

『ドビュウッ！！！　ドビュビュビュビュビュビュビュウッ！！！！』

「けぴいいいいいっ！？」

『バリバリバリバリッ！！　バシュウッ！！！！』

口からヘソから肛門から勢いよく飛び出す子宮や卵巣、大腸小腸や胃までもミンチとなって飛び出す。

『ビチャビチャビチャビチャッ！！』

「きゃあっ！？」

思わず手でガードしてしまう美紅と愛衣。

全身に森山直子のホカホカの内臓が降り注いだ。

莉央の腹部もスカートも膝までも内臓でビチョビチョに汚れてしまう。

「やだ……ここまでグチャグチャにしちゃうとは……我ながらすごい出来っ！　テヘヘ♡」

内臓まみれで可愛く笑われても美紅も愛衣も固まるしかなかった。

ゆっくりバイブを膣から引き抜くと、更に人口射精が数メートル噴射し続ける。

『ドピュッ！！　ドピュッ！！』

「こらこら！　もう出さなくていいから！　相手死んじゃったからね？」

自分が開発した悪魔の兵器に、語りかけながらペニスバンドを外す莉央だった。

微かに響くヘリの音……黒服のゴスロリ姉妹が空からハシゴにぶら下がり、ゆっくり降りてくる。

「ちっ！　出たな変態ゴスロリ姉妹！」

美紅は嫌でも見えてしまうゴスロリ姉妹の黒とピンクのパンツを見上げながら舌打ちをする。

「人のパンツ覗かないで頂けます？　変態処刑人ども……」

姉の沖野夏帆が黒いパンツを見せつけながら莉央たちに喧嘩を売る。

静かに地上に降り立つ姉妹だったが、穴とゆう穴から血や内臓を噴き出して絶命している女子中学生の姿を見て、いきなり嘔吐を始める。

「オエエエエッ！！　ドバドバドバッ！！」

「オエエエエッ！！　ドボドボドボッ！！」

島に降り立ったと思ったらいきなり苦しそうに嘔吐する姉妹に、意味のわからない違和感を覚え始める拷問処刑人たちであった。

菅野莉央を筆頭に富田美香、結城明日香、鬼頭美紅、宮垣咲良、大野真子、小野メグ、円満愛衣……拷問処刑人が全員集結している。

「遅かったみたいですわねお姉さま……少女の命を今回は救えなかった……？……おやおや……私たちにボコボコにされた中学生トリオまで来てらっしゃいますわお姉様」

「ほんと……本日のお相手は菅野莉央と鬼頭美紅とゆう小学生と中学生だと聞いてましたが？　数にモノを言わすおつもりですか？」

鬼頭美紅がそっと前に出る。

「黒いパンツのお前！　ピンクの髪したお前だ！　あたしが相手してやるから掛かってこい！」

姉である夏帆に宣戦布告をする鬼頭美紅。

睨み合う二人を周りは静かに見守る。

ゴスロリとセーラー服の少女の闘いの幕は切って落とされた。
激しくパンチと蹴りを繰り出す両者、全て見切ってかわす両者。
一歩も譲らない攻防は一時間ほども続いた。

「はぁはぁはぁはぁ……無茶苦茶お強いですわねあなた……もう疲れましたわ。秋帆！　代わって頂けますか？」

「はーいお姉様。私の相手は菅野莉央とかゆうガキさん、あなたで

すね？」

「ガキさん？　水色の髪したキチガイゴスロリに言われたくないわよ。ピンク色したパンツ脱がせて恥かかせてあげる。掛かってこいアホ」

「なんかお前に名前呼ばれると……アホと言われてる気がする……私は秋帆（あほ）だよ。なんかムカつくから半殺しにしちゃいますわ。お覚悟を！」

「だからアホと名前を呼んでるし……あたしの発音が悪かった？　名前が間抜けすぎてなんか憎めないんだよねあんた……」

「お黙りっ！！　しぇーっ！！」

「え！？　まさかあんた……出っ歯！？」

「出っ歯じゃねーし！　死ねええええっ！！」

敬語を使うキャラを忘れて、本来の地が出てしまうほどまで熱くなってしまった妹の秋帆。
感情の乱れからなのか元々の実力なのか……数秒で勝負はついた。

「ご、ごめんなさいお姉さん……ガク」

莉央の強烈な膝蹴りをまともに腹部に受けた秋帆は意識を失って

しまう。

ゴスロリのくろいドレスを剥ぎ取り素っ裸にさせると、中指を突き立ててペロリと舐めながら姉の夏帆を振り返る莉央。

大野真子と小野メグは再度莉央の強さを痛感させられる。

「妹さんの処女膜……頂くわよ？」

「……負けたからには致し方ないですわ。せめて優しくしてあげて下さい」

ゆっくりと秋帆の膣口へ中指を挿入してゆく莉央。

『ツププ……ズズズズ……グリ！……バリッ！』

「ロストバージン♡」

「はへ？　ううう……」

処女を失った痛みに目を覚ます秋帆。

「お目覚めかしら？　水色頭のピンクパンツ。それそれそれえっ！！」

『グチュチュチュチュチュチュッ！！』

「あひひひひひっ！？　やめてっ！　はひゃああああっ！！」

『プシュウウウッ！！　プシャアアアアッ！！』

ほんの数秒の指マンで小学生にイかされてしまう女子高生の秋帆だった。

潮を噴きながら絶頂を感じた秋帆は、頬を真っ赤に染めながら両手で性器を押さえて泣き始める。

「ひーん！　おねぇ様ああっ！！　ひーんっ！！」

「泣かないの秋帆っ！　負けちゃったのだから仕方ないですわ……」

指に着いた愛液とマンカスを脱がせておいた秋帆本人のゴスロリ服で拭き取りながら姉の夏帆を指さしてからファックユーのジェスチャーを送る莉央。

「次はあんたよ。掛かってこーい」

「な、なんて子なのこのガキ！？　あれだけ激しく妹と闘った直後にまだ私と一戦まみえるだと？　舐められたモノですわねほんと……ほんと半殺しにして差し上げますわ小学生のおガキさん」

ダッシュで莉央に駆け寄り、怒涛の連続蹴りを繰り出す夏帆。
あまりの速さに少し焦りながらも巧みに交わし続ける莉央。
一分間ほど夏帆の攻撃は続けられる。

「はぁはぁはぁはぁ……なんてガキですの？　全然攻撃が当たりませんわ……鬼頭美紅なんかとはケタ違いの強さですわね」

美紅は思わず莉央の方を見る。

「り、莉央ちゃん？　ま、まさか……」
「たまたまだよ。夏帆と美紅ちゃんの一戦を見てたからね。攻撃パターンが学習できただけの話！」
「そ、そっか！　あはは！ずるいなぁ莉央ちゃんそれは。とにかくソイツ早くやっつけちゃって！」
「うん！　さぁあたしの番だからね。いくよ？」
「はぁはぁ……ちっ、ヤバいですわこれは……ひっ！？」
『ドカッ！　バキッ！　メキッ！　グシャッ！』
「やはっ！？　ひぎっ！　ぅはっ！　やんっ！」

莉央の連続攻撃を喰らい、仰向けに倒れ込む夏帆。

「真っ黒なパンツ丸見えだよ？」

「グアア……なんて重たいパンチと蹴りなんてましょう……まだ小学生の華奢なあなたに負けるなんて……ガク」

夢を見ているような顔で意識を失う姉の夏帆。

目が覚めると体が揺れているのを認識した。

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「ひっ！？　痛いいいいいっ！？」

「ほら、ジッとしてないと射精スイッチ押して水力でマンコ串刺しにしちゃうわよ？」

「やだっ！　やめて下さいそれだけは……」

「なら大人しくあたしに犯されてなさい。ほらほら！　感じるでしょう？この腐れマンコめ」

「あ、あんっ！？　あはっ！　あんんっ！　気持ち良いっ！！　イくっ！　イっちゃいますうううっ！！　はひいいいいっ！！」

ペニスバンドを装着した女子小学生にバックで犯されてイかされ

てしまったゴスロリ姉妹の姉、夏帆であった。
姉妹揃って菅野莉央一人で惨敗した結果となる。
更に空からハシゴで降りてきた小学生の少女、堀越唯香。

土下座をして莉央にお願いを始めた。

「この二人をもう許して下さい。私はこの姉妹がいなければ生きていけません……これ以上酷いことをしないで下さい。お願いします！」

泣きながら必死で土下座しながら謝る唯香を見ていると、莉央は一言冷たく言い放つ。

「あたし……エッチで変態なの。分かる？」

「え？　ど、どうゆう……」

「唯香のマンコ……見せてくれたらコイツらこれ以上痛めつけないで許してあげる」

「あ、はい！こうですか？」

『ズルズル……ぱくんっ』

自らサッとスカートを捲り上げ、パンツを脱ぐと股を全開に開いて莉央たちに見せる。

「指で思いっきり膣を開くの。子宮が見えるくらい全開に広げなさい」

「はい、こう……ですか？」

『ぱくんっ……クパァッ！』

莉央たち拷問処刑人たち全員が唯香の性器を凝視した。
限界まで左右に押し広げられ、微かに見える子宮口までもを凝視する。

「ヤラしいわね……ほんとエッチなマンコしてるんだね？」

「はい……菅野莉央様、これで許してもらえますか？」

「うん。もういいよパンツ履いて」

「あ、ありがとうございます」

唯香に救われる形となったゴスロリ姉妹と、莉央たちは数時間にわたり話し合った。
考え方や理想、これからの方針などを……。

「話は決まったね！　それでいこーよ！」

「そうですわね！　それなら私たちも賛成ですわ！」

ゴスロリ姉妹と拷問処刑人たちが話し合って決めた事……その内容はこうであった。

（罪人が小学生以下の幼い子の場合、余程の理由がない限り、ゴスロリ姉妹と唯香によるお仕置きで済ませる）

（基本的に処刑は拷問処刑人のみが遂行する）

（処刑とお仕置きは共同で残酷処刑島での執行とする）

この三点であった。

残酷処刑島での決闘（後書き）

「とゆうわけで藤堂くん。この度は迷惑をかけてすまなかったな」

法務省長官兼、人道第一省長官の笠井吉行は、素直にこの度の件に対し、藤堂長官に詫びを入れるのであった。

「いえ……私たちも少しやり過ぎてました。たとえ被害者のための仇打ちとはいえ……幼児までも処刑するのはできるだけ今後止めておきます」

「それだけご理解頂いただけでもあの姉妹を無人島へよこした価値があったとゆうものですわ。ほんとすまんな藤堂くん」

上の官僚たちの意見もまとまり、とりあえず此度の件は一件落着となった。

――数日後、残酷処刑島。

「ほら、お尻を突き上げて」

「はい、唯香様」

「今から私が瀬戸麻美のお仕置きを開始します」

ゴスロリ姉妹と小学生児童の唯香による一人の少女へのお仕置きが開始されていた。

ボールペンを瀬戸麻美の肛門へ奥の奥まで挿し込んで掻き回す堀越唯香。

「何オマンコピクピクさせてるの？　こっちも突っ込んで欲しいの？」

「いや！　やめて唯香様っ！」

「私のお仕置きは甘くないわよ？　ほらぁっ！」

『ズチュッ！　メリメリッ！……バリッ！！』

「いったぁあああいいいっ！！　わーんわーん！！　ごめんなさいごめんなさいごめんなさいいいいいいいっ！！　えーんえーん！！」

「反省した？　分かればいいのよ。ね？夏帆さんに秋帆さん♡」

「あはは……同じ小学生をお仕置きするのはもうあんたに任せましたわ……」

「ほんと……あの菅野莉央とかゆう化け物と同じ目をしたあなたが末恐ろしいですねぇ……おほほほは……」

残酷処刑島で一つの小学生の処女膜が小学生の少女により奪われた
……。

清家貴文の二度目のアナル開発（前書き）

以前にアナル責め調教された赤霧島小学校の男子生徒、清家貴文。
二度目のお仕置きが彼を襲う。

清家貴文の二度目のアナル開発

「あんなに大人しそうな子が《ゴスロリお仕置き姉妹》に加わっちゃうとはね……」

メガネっ子の小学生アイドル、結城明日香が呟く。

富田美香も同級生男子である清家貴文のズボンを脱がせながら同意する。

以前女子のお尻を触り、更に菅野莉央たちに調教されてMに目覚めてしまい、町田美知瑠に振られていた気の弱い男児であった。

「うんうん。ほんとそれ。隠れSだったんだろうねきっと……ほら、清家！　ついでにパンツも脱がしちゃうよ？」

「イヤッ……やめて」

「ダメ。今日は元彼女の町田美知瑠ちゃんに犯してもらうから」

『ズルリッ！』

「ヒャアッ！？　やっぱり数人に見られるとは恥ずかしいよおっ！町田さんにそんなことされるのも絶対イヤだっ！」

六年三組の教室の後方部にあるそこそこのスペースを利用して女子たち五人による男子一人の性的イジメが開始されようとしていた。

他の生徒たちはこんなシチュエーションにも慣れてしまい、普通に振り向きもしないで、授業を受けている。

「先ずは委員長の矢野弥生ちゃんによるお尻叩き１００回ね♡」

「はい。床に四つん這いになってお尻を突き上げてくれる？」

「やめてよ！　委員長がそんなことしちゃダメだとおもうよ！？」

下半身のみ素っ裸の清家貴文を、リーダー格の拷問処刑人兼、アイドルの菅野莉央が髪の毛を掴んで強引に土下座させる。

「痛いっ！　や、やめ……」

「お尻を突き上げないと二度とウンチ出来ないほど肛門広げちゃうわよ？」

「ひ、ひいっ！　わ分かった！　分かりましたあっ！」

女子児童の脅しに怯えきるお、素直に額を床に擦り付けたままお尻を高く突き上げて、両脚を大きく開く男子児童。

『パァンッ！！』

「痛っ！！」

そのままゆっくりのペースだが、委員長である矢野弥生のお尻叩きが延々と１００回続けられた。

「９９……１００！！」

『スパァンッ！！！！』

「ぎひっ！！……わーんわーん！！　痛いよおおっ！！」

お尻全体が真っ赤っ赤に染まり、何箇所かは紫色に変色している。全身を震わせながら涙が頬を伝う清家貴文。

「矢野さん……なかなか強力な平手打ちだったわね？」

結城明日香がセーラー服を捲り上げながら前に回り込む。

「次は私のビンタ１００回よ。かわしたり大勢崩したりしたら１０００回に変更するから……」

「は、はい……結城さん……ぐすん、ぐすん」

『パァンッ！！』

「ひぐうっ！！」

痛々しい男子児童への女子による暴行は終わることなく続けられていった。

「ごめん、鼻打っちゃった……」

『うぇぇえんっ！！　痛いよおおっ！！』

ドバドバと床に鼻血が流れ落ちる。

笑顔で拭き取りながら富田美香がガラス製の本格的な浣腸器を鞄から取り出した。

「町田さんの指や手が汚れないようにウンチ全てだしてもらっちゃうわよ？　ほら、泣いてないでもっとケツ突き上げろおっ！」

「は、はい富田さん……こ、こうですか？」

「いいわよぉ〜。両脚もっと開いてハッキリ穴が見えるようにしてぇ〜」

「はいい〜……」

『ガクガク……ガクガク』

お尻と頬と鼻の激痛で膝をガクガクさせながら懸命にお尻を突き上げる清家貴文の姿に、莉央たち五人は笑いを堪えるのに必死だった。

「ぷっ！　だ、だめっ！　笑っちゃったぁ！」

「笑ってないで早くグリセリンセットして５００ミリリットル全てぶち込んでやって」

莉央はお尻の肉を両手で思いっきり開く。
ピンク色の小学生男児のアナルが、アイドルの手によってパックリと押し広げられていった。

『グリリッ！クパァ～』

「やあっ!?　そんなに広げないでぇえっ！！　奥まで見えちゃうよおおっ！　エーンエーン！」

「そんなに泣くな清家くん。あたしが今からタップリそのヤラシイ色した直腸に強烈なのをくれてやるからねっ♡」

『プチュウウウ……』

目を細くしてはにかみながら美香はガラス製の本格的な浣腸器に

５００ミリリットルものグリセリンを満たしてゆく。

「ほらぁ。入るよぉ？」

『ツプッ！……ぷちゅちゅちゅちゅちゅううう～』

「ひゃあっ！？　冷たいっ！！」

「それくらい我慢しなさい。１０分は耐えないと承知しないわよ？」

猛烈な腹痛が清家貴文の下腹部を襲う。

『クルクルグルグル……ピキピキグリュリュリュゥ～』

「あはは！　豊富なバリエーションの音出しちゃってるわねあなたのお腹♪　よほど喜んでくれてるのかな？」

「ぐっ！！　いでえええ！　お腹が痛いいいいっ！！」

転がりまわりながらもどうにか１０分耐えることに成功する。

「ほう……濃度１００％のグリセリン５００もぶち込まれてよく耐えたわね……ご褒美にクラスの女子全員集めてあんたの排泄ショーを見せてあげる♡」

「い、嫌だぁあ！　それだけはやめて……恥ずかしくて明日から来られなくなっちゃうよぉ～」

「なら来なきゃいいじゃん。女の子のお尻触るようなヤツが来なくてもこの学校はなーんにも困らないから。ねっ！　みんな？」

女子全員が激しく同意する中、男子生徒たちは一斉に教室を出てゆく。

担任教師へ莉央が命令した通り、素直に生徒たちに働き掛けた坂本先生。

この私刑ショーが終わるまで他の男子たちと坂本先生は教室へ戻れなくなった。

「この洗面器の中に出しなさい」

莉央はそっと四つん這いになってヒクヒクしている貴文のお尻の下へ丸いタイプの洗面器を置く。

「嫌だ……見ないでみんな……」

莉央の命令とゆうか、単に思春期を迎える少女たちの興味本位からその瞬間を期待して貴文の下半身を凝視する女子たち。

ヒクヒクと肛門が盛り上がり、ゆっくり開いていくのが見えた。

「やだ……」

「きしょ！」

「なんか海洋生物のお口みたい」

「湯気出てるじゃん！？　もう出るねこれは！」

『ブリッ！！……ブリリリリリリリリリッ！！！！』

一斉に大声で叫び出すクラスの女子たち。
笑う者もいれば顔を顰めて鼻をつまむ者、真顔でただただ排泄とゆう行為を見守っている者……反応は様々であった。
見慣れている菅野莉央と富田美香、結城明日香は素の顔で腕組みしながら一部始終を見ていた。
莉央は泣きながらうつ伏せにへたり込む貴文の傍にしゃがみ込んで、そっと囁く。

「数ヶ月前にあたしが調教して拳まで入るようにしてあげたのに……かなり普通に回復してるじゃん？　あんたのアナル……」

「はぁ、はぁ、う、うん。かなり痛みも無くなってきて垂れ流しもしなくなってきたよ。ありがとう菅野さん」

「はぁ？何がありがとうなの？もう一度調教し直して今度こそガバガバ垂れ流しのアナルにしてやるんだから。覚悟しなさい」

そう言い放つと、直径3センチ、5センチ、8センチ、10センチの四種類のアナルプラグを鞄から取り出す。

「この銀色に輝く所が鉄や鋼感があってそそるのよね。コレは固いわよぉ？」

富田美香がアナルプラグをニギニギしながら囁きかけた。

直径10センチのものは女子小学生のフィスト……拳と同等の大きさであった。

「コレが入るようになるまで再びアナル調教しちゃう！　お仕置きよっ♡」

以前莉央の拳を肛門に捻り込まれ、美香に高速手コキされて射精させられた時の激痛と快感が、脳裏に蘇る貴文。

「ひっ！？あ、あんな痛いのもう嫌だ！やめてくれえっ！！」

『パンッ！！』

「ひぶううっ！？」

「お願いするときはどんな言い方するの？」

思いっきり頬を平手打ちする矢野弥生学級委員長。

「私たちには今から敬語を使いなさい。下の名前に様付けで呼ぶの。そして菅野さんたちに土下座してお願いするのよ。“僕のアナルを拡張調教してくださぃ„って。分かった？」

「は、はい弥生様」

「あはは！やるなぁ矢野さん！男子奴隷化計画忘れてなかったみたいね？」

富田美香が弥生の肩をポンポンと叩きながら褒めちぎる。

「ありがとう富田さん。なんか最近弱々しくて女々しい男子見てるとイライラしてきちゃって……ついついぃ」

「それでこそ委員長さんね。私たちも仲良く下の名前で呼び合いましょうよ？　うふふ」

結城明日香が矢野弥生の手を握り締めながら微笑みかける。
町田美知瑠も手を乗せてくる。

「私も男子のお仕置き、コレからも参加させて明日香ちゃん」

「もちろん。ね？　莉央ちゃん？」

「もちのロン♡　じゃあ3センチから突っ込んじゃおおっ！」

3センチのアナルプラグを肛門へ根元まで突っ込まれる貴文。

「んっ！んんん……」

簡単に丸呑みしてしまう。

「やだ！　いともあっさりと飲み込んじゃったよ？　あはは！」

莉央は笑いながら5センチのアナルプラグに持ち替えて、一気にぶち込んだ。

『グリッ！　ズボオッ！！』

「んぎいっ！！　痛いいいっ！！」

「コレは効いたか？　やっぱりほぼ完全に回復してたんだね？あんたの肛門括約筋……生意気だわ」

「さぁ美知瑠ちゃん！　コレを……」

拳ほどもある太さのアナルプラグを莉央から受け取る町田美知瑠。

「スッゴ～い……こんな太いの本当に入るの？」

「バックドアとゆう有名メーカーの粘度抜群のアナル用ローションを浣腸しとくから心配ないない♡」

そう言いながら今度はローションを浣腸器にセットして肛門へガラス製の切っ先を突っ込む美香。

直腸内部へ１００ミリリットルほどのバックドアローションが注ぎ込まれた。

『プチュウウウウ！！』

「あんっ！！　あはあああああっ！？」

「女みたいな声出しちゃってこのガキ～♪もっとアナル責めまくってケツマンコバッカバカに広げてやるんだからねっ♡　ほらっ！突き上げろケツ！」

美香は注入し終えた後、切っ先を肛門から引っこ抜くと、腹部に両手を回して一気に腰を突き上げさせた。

「さぁ美知瑠ちゃん。元変態彼氏へお仕置きよ！　アナルプラグをゆっくり肛門に当てがってからグリグリと捻り込む感覚でゆっくりゆっくり挿入していって」

「う、うん！い、いっくよぉ～」

『ピト……グリグリグリッ！……ヌプププププ！』

「んはあっ！？い、いだいいいいいっ！？」

ゆっくり両手で全力で捩じ込んでゆく町田美知瑠。
二本の三つ編みを濡らしながら懸命にアナルへ突っ込んでゆく。

『メリメリ！　ズボボボボボッ！！　メリメリ』

「痛いいいいっ！！や、やめてっ！！やめてください美知瑠様あああああっ！！！ぎひいいいいいいっ！！！」

半分くらい入った所で手が止まる。

「キツくて……これ以上入らないよ莉央ちゃん？」

「持っていってあげるから蹴り込んで」

「え？ そら、そんなことしたら肛門が裂けるかも？」

「一度あたしの拳埋め込んでるからその心配はないよ。裂ける前にユルユルのガバガバアナルになっちゃうと思うよ？ うふふ♡」

「分かった。莉央ちゃん！ きちんとソレ持っててね？ ズレないように」

「はーい！ さぁどーぞぉ」

真っ白な長い脚を思いっきり振りかぶる町田美知瑠。
三つ編みを靡かせながら激しく足の裏が莉央の持つアナルプラグの柄の部分に当たるよう思いっきり蹴り込んだ。

「いっくよぉ？ えいっ！」

『ドカッ！！……バチュウウッ！！！！』

「ピギィイイイイイッ！？……ギャァアアアアアアアッ！！！！」

見事に根元までぶち込まれたアナルプラグは、柄の部分までも完全に食い込んでしまい、最早普通に抜くことは出来なくなる。
号泣しながらお尻を両手で押さえて転がりまくる貴文を見下ろしながら、莉央たち五人のお仕置き組と、他の女子たち全員は嘲るように笑っていた。

あまりの激痛で気を失っていたが、どうやら目覚めても状況は好転していなかったみたいである。

アナルプラグを抜くためにお腹の上に乗り、踏んで踏んで踏みまくっている女の子がいた。

大嶋典子とゆうクラス一番の巨漢、小学生にして７０キロを超える体重だった。

『ボコッ！　ボコッ！』

「ぐはっ！　げはあっ！」

「よし！　柄の部分が出てきた！　よっと！」

『ヌポポポポッ！……ボコオッ！！』

莉央は見逃さずグッと掴むと、ゆっくりアナルプラグを肛門から引き抜いた。

「やっぱりガバガバだね……すぐに戻っちゃったみたいだよ？えいっ♪」

『ボコオッ！！』

「ふぎいっ！！」

次の瞬間、右手の拳を思いっきり正拳突きでぶち込む。
手首まで貴文の肛門へ拳を捩じ込んでグリングリン掻き回す莉央。
激痛は快感へと変化して、ペニスはゆっくりと確実に勃起していった。

「美知瑠ちゃん！　射精させてやって」

「え？そ、それは……」

「私にやらせて」

矢野弥生がペニスを握ると、高速でシゴき始めた。

「えいえいえいえいいいっ！かちんかちんになっちゃってるオチンチン……エッチね……」

『シュコココココココッ！！』

頬を真っ赤にしながらも貴文のペニスをシゴきまくる委員長。

「や、やははははあっ！？や、やめてっ！き、気持ちいい……イく、イっちゃううっ！！」

「いっけぇーっ！！」

矢野弥生は真っ赤な顔で照れながら手コキの速度を落とさない。
更に速くシゴき上げる。

『ドピッ！！ドピュピュピュピュピュピュピュウッ！！』

大量の精液を委員長の手コキによって床に撒き散らす貴文。

「どう？クラスの女子全員に見られながらの射精は？」

「は、恥ずかしく……ぐすん、ぐすん」

泣き崩れる貴文だったが莉央たちはまだ解放させてあげない。
上半身も素っ裸にさせると、床に仰向けに寝かせてからの……電気アンマ。

結城明日香の軽快な電気アンマが開始される。

『ガガガッ！ガガガガガガガッ！！』

「はわわわわわわわっ！！　明日香様っ！　い、痛いですうううっ！！」

「そのうち気持ち良くなるよ。そらそれそれ」

「は、はううっ！！」

『ドピュッ！』

またしても女子小学生にイかされてしまう貴文であった。

清家貴文の二度目のアナル開発（後書き）

せっかく元に戻った肛門括約筋も更なる莉央たちの肛門拡張調教によって、またしてもガバガバアナルに戻されてしまった清家貴文。手コキと電気アンマで二度も射精させられてしまった。

「気持ち良いだけで終わらさないから」

股を開いて立たされたまま背後から女子生徒たちにかわるがわる陰部を蹴られてゆく貴文。

「えいっ！」

『スパァンッ！！』

「ギャアッ！！」

「ここっ？」

『ズドオッ！！』

「ふぎいっ！！」

クラス全員の女子たち全員から蹴られた陰部と睾丸は、真っ赤に腫れ上がり、痛々しいモノとなった。

「どうだ？　過去の事件、再度反省した？」

「はい、莉央様……もう許してください」

「週に一度はアナル拡張調教するから放課後あたしたちの前で裸になるの。分かった？」

「ひっ？　ひいい……」

小学生アイドルたち三人と、矢野弥生委員長、町田美知瑠の五人による赤霧島小学校の男子奴隷化計画はまだまだ続くのであった。

現認痴漢にお仕置きを（前書き）

毎日繰り返される痴漢行為。
たまたま見かけた円満愛衣たちは卑劣な男をどう裁く？

現認痴漢にお仕置きを

「やっぱスタバのチーズケーキは最高だよな！」

「うんうん！　ほんと最高！」

「私は甘いの嫌いだからブラックコーヒーが一番だね」

黒霧島高等学校三年Ｂ組のヤンキー四天王……に新たに加わった仲間である里中友美恵。

９０キロの巨漢と、女子プロレスラー並みの破壊力は凄まじいが、恐ろしく気が弱いため、クラスでは虐められていた。

ひょんなことから萱野愛衣たち四天王の同情を買い、仲間になってしまったのであった。

ゆっくりと店内を練り歩いてデパートでの買い物も終えた四人は、人気の百貨店、蛸島屋にも足を運ぶ。

「あー、今日は歩き疲れたなぁ。ぼちぼち帰ろうか」

ほぼ近所の五人は、行きも帰りも同じ駅から電車に乗る。

「きゃっ！？」

満員電車の中、一人のＯＬが声を上げた。
後ろを少し振り向いてみるが、お尻を触った犯人が分からない。
触れそうな位置に三人もの男性がいたからであった。

「きゃっ！！」

二度目のお触りを菅野愛衣は見逃さなかった。

「あの黒縁メガネの、のび太が大人になったような冴えない顔したサラリーマン……女性が小さな悲鳴を上げる時、肩が不自然に動いた。間違いなく触ったのは奴ね」

「私たちの降りる駅に引き摺り下ろす？」

「そうね。たまたま同じだったら都合いいんだけど……」

『次は御免那菜駅～。御免那菜駅～』

男は獲物だった女性を、降り際にチラッと横目で見てからニヤリと微笑んだ。

「降りていったわよ……なんて好都合なヤツ」

早足で帰路につく男を離されないように追いかける五人。

団地に入る直前の、小さな公園へと続く並木道入り口辺りで男の手を背後から掴む円満愛衣。

「ちょっとおじさん」

「ん？　なんだね君たちは？　もしかしてコレって……逆ナンパってやつかな？」

「はは。冗談キツいよオッサン」

東条登美子が反対側の左手を掴みながら、強い口調で話しかけた。

西条早希も続ける。

「ちょっとあたしたちに顔貸してくれないかなぁ？」

南条奈百合と里中友美恵は無言のまま男の背後を歩く。

手入れがあまりされていない寂れた小さな公園へ辿り着くと、男は不敵に微笑みながらそっと口を開いた。

「僕こう見えてもさぁ、空手習っててさぁ……だからナンパじゃないならやめといた方がいいと思うよ」

「そう。ご忠告ありがとう。早速だけど私とタイマン張ってよ」

「え？……は、ははは。長くて素敵な黒い髪だね？　ほんと可愛い子だ」

――――一分後。

女子高生に囲まれてズボンとパンツを脱がされている中年男の姿があった……。

「ほらほら！　ジッとしてろオッサン」

「抵抗するならオチンチンちょん切っちゃうよ」

「そうそう。愛衣さんとのタイマンに負けちゃったんだから大人しくしなさい」

「ううう……や、やめて……脱がさないで……」

結局少しだけ抵抗を見せたが、三分ほどでズボンとパンツは完全にずり下ろされた。

「くっさ！　お前きちんとチンポ洗ってるのかよ！？」

西条早希が鼻を摘みながら片方の手で臭わないように扇ぐ。

「潰してちょん切る？　愛衣さん」

東条登美子がペニスの根元を親指と人差し指で摘みながら愛の方を見た。

「まさか。完全な私刑だからそれは無理だわ。私が莉央様にまたキツく叱られちゃうし……」

「出ましたわねぇ莉央様……あのサイボーグ女子児童だよね……あ、友美恵は知らなかった？　すっごい強いらしいんだよその子」

「え？　あ、そ、そうなんだ……ふぅん」

愛衣に即答した後、すぐに里中友美恵に説明する力加減を知らない女、南条奈百合。

静かに男の陰部を見つめながら頬を真っ赤にしている巨漢少女の里中友美恵に菅野莉央の強さを語るが、大人のペニスに見入ってしまっている友美恵にはは全く通じていないみたいだった。

「友美恵！　あなたの太くて長い指をこの男の肛門に突っ込んじゃって！」

「えっ！？　そ、そんなこと……」

頬を赤く染めながらもそっと男の傍にしゃがみ込む巨漢の少女。
人差し指をゆっくり立てると、男の肛門へ指先を当てがった。

「一気に根元までいっちゃって」

「うん。えいっ！！」

『グリッ……ズボオッ！！！！』

「ぐわあああああっ！！　いでええええっ！！！！」

目を見開いて絶叫する男、変態痴漢常習犯サラリーマンの木梨則夫４１歳であった。
里中友美恵の指は直径5センチほどはあった。
調教されていない肛門には大きすぎるサイズの指が一気にぶち込まれた。
愛衣が言いたいことを分かっているかのように、次は中指もねじ込んでゆく。

「ごめんなさい。でも痴漢なんてしちゃダメだからね？　こうしてあげる」

『グボッ！！　グリュリュリュ！！』

「ギャァアアアアアッ！！　裂けるっ！！　ひぎいいいっ！！！！」

「根元まで激しく出し入れして」

「う、うん。こう？」

しばらく二本指でのピストン運動が続く。

ついに激痛のあまり泣き出す男。

ゆっくり肛門から指を引き抜くと、血の混じった腸液と便がながら流れてくる。

「何ケツマンコヒクヒクさせちゃってるの？盛り上がったりすぼんだり……あはは！　受けるんだけどぉ♪」

西条早希が妙にツボにハマってしまう中、円満愛衣が足の裏を性器にそっと押し当てる。

「いっぺん、オチンチンと金玉潰してみる？」

「ひいっ！　やめてっ！」

「お願いする時は何で言うの？」

「お、お願いします！　許して下さいっ！」

そのまま無言で足の裏を軽く前後に擦り始めた。

『スコスコスコ……』

「うっ！……は、はうう」

泣きながらも女子高生の足コキにムクムクと勃起してくる木梨則夫の陰茎。

「やだコイツ……あれだけアナル痛めつけられたのに大っきくなってるよ？」

南条奈百合がニヤかながらしゃがみ込んでマジマジとペニスを見つめる。

「友美恵のアナルファック凄かったな。あとは下がって見ててね♡」

「うん」

東条登美子に言われて９０キロの巨漢を持ち上げて後方へ下がる里中友美恵。

「可哀想だから地獄を味わう前に一度だけイかせてあげるわ」

『スコスコスコスコ！』

愛衣の足を動かす速度が急速に速くなる。

「うっ！？　ううあああうううっ！！」

「いっぺん、イってみる？」

「はううっ！！」

『ドピュッ！！　ドピュピュピュピュピュピュウッ！！』

精液まみれになった足の裏を木梨則夫の顔面に押し当てて何度も強く擦りつける愛衣。

「汚い液女子高生の足につけてタダで済むと思ってるの？　舐めて綺麗にしなさい」

「むごむごっ！　うぐぐ……足の裏ですから……土が沢山ついてるから汚いです……か、勘弁してください」

『ドカッ！！』

「ぐえっ！！」

思いっきり頬を蹴飛ばすと、奥歯が二本折れて宙に舞う。

「スッゴ……強烈な蹴りだね！　やっぱ愛衣さん怒らせちゃダメだわ……」

西条早希は真顔で動揺していた。

「奈百合、コイツの股開かせて」

「はーい」

愛衣に言われるがまま、腹に後ろ向きに座り込み、両膝を持ち上げて開脚させる南条奈百合。

「ほーら。言うこと聞かない悪い子は愛衣さんがキョーレツなお仕置きしてくれるからねぇ？　お尻の穴全開に開かせてあげる♡　今からアナルちゃん……後悔することになっちゃうわよ？」

女子高生にマングリ返し……ではなくチングリ返しされた男は、身動きできない体勢のまま肛門丸見え状態にされた。

愛衣は人差し指と中指、更に薬指をピンと立てると、ゆっくり男の肛門へ突き挿してゆく。

「ここ？」

『つぷっ！……ズブブブブ！　メリメリメリメリ！』

「んぎゃあああっ！？　痛いいいいっ！！　裂けるうううっ！！」

「私は友美恵みたいに甘くないから……本当に大便垂れ流しになるほどガバガバにしてあげるわ」

「ひいいっ！　やめて下さいいいいっ！！　何でもしますからやめて下さいいいいいっ！！」

「ふん。最初から土ごと自分のザーメン舐めてたら良かったの。まぁいいわ。トコロテンだけでやめてあげるから」

「ひっ！？　ト、トコロテンって……な、何ですかっ！？」

「前立腺掻き回してオチンチンに触れずに射精することをトコロテン射精っていうの。黙ってジッと股開いてなさい」

『グチュグチュグチュグチュ！！　グポグポグポグポッ！！』

「は、うううぅっ！！」

愛衣の三本の指で直腸越しに前立腺を、激しく掻き回された男は、哀れにも勃起していないままのペニスにから二回目の射精をさせられてしまうのであった……。

『ドクッ……ドクドクドクッ』

「あはは……トコロテン射精って、勢いないんだね……」

東条登美子は勢いのない情けない射精をしたペニスの先端辺りを指で摘んでパックリ尿道口を押し開いた。

ピンク色した中年男の尿道内部が、女子高生五人の目に晒される。

「オッサンのくせに綺麗な色してるんだね？　チンポの中……」

早希は頬を赤くしながら尿道口奥深くを覗く。
登美子はそのまま開いたり閉じたりして遊び始めた。
尿道口内に残されていた精液が、全て絞り出されてゆく。

便と腸液まみれになった指を男の唇に当てがい、無理矢理口へ捩じ込む愛衣。

「舐めなさい」

「くさっ！？　クソが付いてる！？　か、勘弁して下さいっ！！」

「女子高生の生指にうんち着けといて……まだ分からないの？　ほんと後悔させてあげようか？」

愛衣の合図の元、今度は可愛い系の幼い顔をした南条奈百合が男の両足首を掴み、持ち上げる。自分は立った体勢からの仰向けに寝ている男への電気アンマ体勢に入った。

『グリッ！　グリグリ』

「痛いっ！！　ひいいっ！！」

まずは足の裏でペニスの感触を楽しむ奈百合。

「愛衣さん、もう初めていい？」

「うん。潰しちゃダメだよ？　奈百合は加減知らないんだから」

「てへっ♡　お褒め頂きありがとう」

「……褒めてはいないんだけど」

爪先や踵、色んな部位をペニスや睾丸に押し当てて位置を確認し終えると、奈百合の電気アンマが開始される。

『ガガッ！……ガガガガガガッ！！』

ペニスと睾丸が潰れる寸前ほどの圧力が加わって、木梨則夫は数秒で白目を剥き泡を吐き始めた。

「がはあああああっ！？　んぎいいいいいっ！！」

「何言ってるのか分かんなーい……手気持ちいいの？」

『ガガガガガガガッ！！』

オシッコを漏らし、奈百合の足の裏は小便まみれになった。
尿道口が少し裂けたせいで、小便に血が混じっている。

「あれ？　キンタマ潰した覚えないのに血が混じっちゃってるなぁ？どれどれ……」

しゃがみ込んで陰部を握り、摘み、持ち上げて、色んな角度から診察する。

「あっ！　チンポの穴から血が出てるっ。こんなと傷負っちゃったんだねぇ……」

両手の親指を亀頭部に押し当てて、思いっきり左右に開くと、ピンク色した尿道口内部が女子高生たちの前で丸見えになる。

「早希、出番だよ」

愛衣がそうゆうと、奈百合の横にしゃがみ込む西条早希。
ペロっと人差し指を舐めると、ゆっくり尿道口に挿し込んでゆく。

「そのまま開いていてね？　奈百合」

「オッケー！　指を根元まで突っ込んじゃうの？」

「そーだね。チンポの内部をズタズタにして外傷わからないようにするの。その方が何かと無難でしょうあたしたちも……」

「あはは。見えない部分の方が痛そうだけどね……」

他愛のない会話をしながらもゆっくりと確実に挿入されてゆく早希の人差し指。

『グリグリッ！　ヌポポポポッ！』

「んぎいっ！！　いでえてててててっ！！」

「あらお目覚めかしら？　またまだ生き地獄は続くわよ。もう一度寝てた方がいいんじゃねーの？」

『ズブブ……ズチュッウッ！！』

「んぎゃあああああああっ！！」

今度は気を失うこととなく陰茎内部を襲う激痛に全身をのけ反らせて小さく痙攣する木梨則夫。

奥を掻き回したり、少し抜いたり又挿し込んだりを繰り返す早希。

「チンポの中の感触って気持ちいいもんだなぁ。ぷにぷにヌルヌルしてて……なんか濡れてきちゃったよあたし」

「やだ！　ほんとSだなぁ早希も……」

東条登美子は半ばあきれながらも男の睾丸を二つ同時に右手で握り込み、強烈な握力で締め付ける。

二人のタマと竿の同時拷問にサイド白目を剥いて泡を吐き、意識を失う中年男であった。

――――木梨則夫がふと目覚めると、公園にある色褪せたボロボロのベンチにうつ伏せに縛り付けらて、全く身動き出来ない自分に気づいた。

「うう……お、俺はたしか……あれ？　女子高生たちは？」

「みんな後ろにいるよ」

「ひっ！？……も、もう許して下さい……二度と痴漢なんてしませんから！　お願いします！」

円満愛衣は直径8センチ、長さ20センチもの超極太バイブをペニスバンドにセットし終わると、そっと男の菊門へ押し当てた。

『ピト』

「ひっ！？　な、何をする気ですかっ！？」

「多分あなたのアナル……壊れちゃうけど覚悟はできてる？」

「嫌だ！　そんなとこ壊されたらこれから先垂れ流しな人生じゃんか！？　やめてくれえええっ！！　ひぃいいいいっ！！」

「大丈夫よ。しばらく入院したら治る程度に壊してあげるから」

女性の拳ほどの直径がある極太バイブを少しずつ肛門へめり込ませてゆくと、男は全身をウネウネとうねらせながら対抗する。

『ヌププ……ズグッ！』

「はおううっ！！　うぐぐ……」

腰と両脚辺りを特に硬く拘束されているので、お尻はあまり動かせなかった。

「ほら、入るよぉ～♡」

『メリ！　メリメリ！　ズボボボボ！……バリバリッ！！』

「ひんぎゃああああああっ！！　痛いいいいっ！！　死ぬううううっ！！」

拷問括約筋が半分ほど裂けるが、構うことなく上からローションを垂らしながらも強引に突っ込んでゆく愛衣。

「ほら、こんなに大きく開くものなのね。お尻の穴って……いっぺん、女子高生の私に犯されてみる？」

「いぎいいいいいっ！！　やめて……あ、愛衣様っ！　やめて下さいいいっ！！」

『ズッボオオオオオオッ！！！！……メリメリッ！！　バリバリバリバリッ！！』

超極太バイブは完全に中年男の直腸へ埋め込まれてしまった。
Ｓ状結腸を身体の奥がわへ５センチも食い込むほどであった。

「突き当たりのカーブしてる腸を突き破っちゃったら、莉央様に後で怒られちゃうから。ギリギリ突き破らないよう長さも考えてあるの……Ｓ状結腸が張り裂けるように痛いでしょう？」

「はうううっ！！　ぴぎいいいいっ！！」

激痛すぎて愛衣の質問に答える余裕はなかった。

「まだ終わらないわよ？　犯すとゆうことはこうゆうことすることだから……」

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

超極太バイブを何度も出し入れして激しいバックからのアナルファックが開始された。
長い黒髪を前後左右に揺らしながら激しく腰を降る愛衣。
夥しい量の鮮血が肛門から溢れ流れてくる。
セーラー服の下部分からスカート、白くて美しい脚までも中年男

の肛門からの鮮血に染まってゆく。
泣き喚きながら苦痛にもがく男の姿を見ながら、女子高生たちは薄ら笑いを浮かべていた。
巨漢の少女である里中友美恵だけが目を逸らし、半泣きになっていた。

「あ、あの、愛衣さん、それくらいにしといてあげようよ？」

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！　パンパンパンパンパンパンパンパンパンッ！！』

それを聞いて更に激しく腰を振る愛衣。

「女の敵は再犯率が高いから。とことん痛めつけておかないとまた誰かが被害に遭うわ」

「そ、それは……」

「分かったわよ。あんたに免じてこのくらいにしといてあげるわ」

『グポポ……ポコンッ！……ドロドロドロドロ……』

そう言いながら愛衣は超極太バイブをゆっくりと男のアナルから引き抜いた。

大量に溢れ出る血液と腸液と大便……。

『ドボドボドボドボ』

「はひ、はひぃぃぃぃ……」

「やめてくれてありがとうございます、は？」

「は、はぎぃぃぃぃ……ぐすん、ぐすん」

「出血多量で死んじゃわないように……アナルプラグで肛門に栓をするから股を開いて。救急車も呼んであげるから病院で抜いてもらいなさい」

「ううう……は、はぃ」

そのまま激痛によるショックで泣き崩れてしまう中年男であった。
南条奈百合が拘束を解きながら話しかける。

「無理矢理触られたり犯されたりするのってイヤでしょ？　もう二度と痴漢なんてしちゃダメだからねおっちゃん」

「は。はい、分かりました。本当に申し訳ございませんでした……ううう、ぐすんぐすん」

「もう泣かないの大の大人が……はい。拘束も解けたし、ズボンとパンツ履いてもいいよ。奥歯折れちゃってるみたいだけど大丈夫？」

「ぐすんぐすん……あ、ありがとう。歯医者も行ってきます……」

現認痴漢にお仕置きを（後書き）

「おい、どうした？　大丈夫か？」

「ひぐう……は、はい」

自転車でパトロール中の警察官に声をかけられて、どうにか返答していると、救急車のサイレンが近づいてくる。

女子高生の円満愛衣たちによって、一人の男が自分の卑劣さに気づき、立ち直った日でもあった……。

ゴスロリ姉妹と少女の拷問倉庫（前書き）

拷問処刑と拷問に分けさせた国家の決断。

ゴスロリ姉妹と少女による拷問が埠頭の倉庫にて繰り広げられる。

ゴスロリ姉妹と少女の拷問倉庫

「そうなんだ……あのゴスロリ姉妹と女の子が西部地方からこの地方に……拷問する場所も処刑島じゃなくこの付近に構えるの？」
「そう。〇〇埠頭の倉庫を一つ購入したみたいだから、そこで執行するそうよ」

赤霧島小学校六年三組での朝イチ。
授業開始前に菅野莉央が結城明日香に三人のことを説明する。
「先月こぞって引っ越してきたみたい。お母さんが自殺したことは小学生の子……確か堀越唯香だったっけ？……には内緒にしてるみたいだから気をつけてね」
「莉央ちゃんにコテンパンにやられて手マンされちゃったから大人しくはなってるでしょーね♪」
富田美香は眠そうな顔で大欠伸をしながら、担任の坂本先生が入室して来るのを見つめていた。

――その夜、〇〇埠頭の第三倉庫。

中学一年生の１３歳の少年が父親を殴り殺した罪で、ゴスロリ姉妹の沖野夏帆と妹の秋帆、小学六年生の堀越唯香の三人が拷問を執行しようとしていた。

首輪を装着され、その首輪は上部のＨ鋼からぶら下がっているロープに固定されている。

両手は左右に引っ張るようにロープで繋がれて、両足も足首をロープで縛られている体勢であった。

首が閉まるのでしゃがむことも座ることも出来ない苦しい状況だ。

「石堂優希くん。自分のお父さんを金属バットで殴り殺しちゃうなんて……私たちの存在する前なら間違いなくあなたは残酷処刑島行きだったんだよ？　分かってる？」

「な、何だよそれ？」

「はぁ……全く今の状況も自分の犯した罪の重さも理解してないようね」

そう言いながらＴシャツをハサミでバラバラに切り取って裸にしてゆく唯香。

すぐに短パンにもハサミを入れてパンツ一枚にする。

「おいっ！　ちょ、ちょっと待てよ！　恥ずかしいじゃないか！」

「恥ずかしいのはあなたの取った行動でしょ？　だから恥ずかしい所を重点的にお仕置きしてあげるんだから！」

頬を少し赤くしながらも、ついにパンツにもハサミを入れる。

「今から綺麗な女子高生姉妹さんたちが虐めてくれるから」

シャッターの隣にあるドアがゆっくりと開き、ピンク色と水色の派手な髪をした姉妹が入って来るのが見えた。

黒のドレスが映える。

「ゴ、ゴスロリ女……な、なんだお前たちは！？」

「威勢が良いですわね石堂優希くん……」

ピンク色の長い髪をした姉の夏帆(かほ)が呟いた。

「後悔すんじゃねーぞクソガキ」

西部地方から東部地方へ引っ越してきてから、本来の野蛮な性格に戻ることを許可された水色の髪に染めたショートボブの妹の秋帆(あほ)は、本性を露わにしながら荒い言葉で少年を威嚇する。

「ほんと秋帆は言葉遣いが下品ですわねぇ……いくら上からの許可が下りたとはいえ、野蛮すぎるのもどうかと思いますわ」
「あっはっはっはっ！　こんなゲスガキに気なんて遣わなくてぃーんだよ！　まずはウチからいくぞぉ！？」

真っ黒な革の鞭を取り出すと、床を数回叩き上げる。
乾いた音が倉庫内に響く。

「ひっ！？　や、やめろ！！　そんなので叩いたら痛いじゃないかっ！？」

『スパァンッ！！』

「ぎゃあっ！！」

思いっきりしなった鞭は、少年の臀部を襲う。
二回目、三回目、四回目と、次々に連続で打ち込んでいった。
お尻は真っ赤っ赤に染まり、少年の目から涙が溢れ落ちる。

「痛いいっ！！　わーんっ！！　わーんっ！！　痛いよおおおっ！！」

「さっきまでの威勢はどこにいった？　ああ？　クソガキがっ！！」

『バシイッ！！』

「んがあっ！！！！」

あまりの激痛に、小便を撒き散らす中学一年生の石堂優希。

「赤いのが紫色に変化してきたわね。ぼちぼち皮が裂けて血が流れるわよ。ようく見てて下さいねぇ唯香ちゃん」

「うん。無茶苦茶痛そう……打たれるたびにオチンチンが上下左右に激しく揺れるのが何か可笑しい……くすくす♡」

「唯香ちゃんもまだ小学生なのにオマセでエッチですわねぇ……おほほほほ♪　秋帆！もっと激しく打ち付けてお尻の皮を剥いちゃってあげて下さいな」

「分かってるよ！　任せとけえっ！　オラアッ！！」

『ヒュンッ……バチィイインッ！！！』

「ぎゃあああああっ！！　やめてっ！！　痛いいいいっ！！エーンエーン！！」

女子高生二人と女子小学生の前で、素っ裸にされて鞭で何十回も打たれ続けて泣き喚く中学一年生の男児。

その叫びは人気（ひとけ）のない埠頭の倉庫に虚しくこだまするだけであった……。

臀部の皮がほぼ全体的に裂けて、かなりの量の血が床に滴り落ちる。

『ツツツ……ポタ……ポタポタ』

「ぐすん……ぐすん。痛いよお。許してください……ごめんなさい。しくしく……」

啜り泣く少年の前に立つゴスロリ姉妹の姉である夏帆。

「そのお顔とお腹に……私の平手とゲンコツを受けて頂きますわね？」

「ひっ……や、やだそんなの……お願いですからやめてくだ……」

『スパァンッ！！』

「ひぐうっ！！」

『スパパパパパパパパパンッ！！』

まずは往復ビンタを十回くらい喰らわせると、間髪入れずに下段突きの正拳がヘソの辺りに食い込む。

『ズドンッ！！』

「ぐはあっ！！……オエエエエッ！……ドボドボドボドボ！」

思わず一撃で嘔吐してしまう石堂優希であった。

「あらまぁはしたない……臭いのキツい液体吐き出しちゃって……不愉快ですわ」

『ドカッ！　バキッ！　グシャッ！　ガッ！』

顔面へのタコ殴りに再び号泣するが、泣けば泣くほど激しく殴る沖野夏帆。

「おほほほほ。鼻血ブーブー垂れ流して……そんなに歪な顔になっちゃって……ほんと哀れですわねぇ♪」

膝蹴りをみぞおちにぶち込むと、再度激しく嘔吐する。
吐くものも無くなり透明の胃液を吐くしかなかった。

ここでゴスロリ姉妹は後方へ下がる。

「顔面とお尻ズタズタになってるけど、後はあなたに任せますわ。唯香ちゃん」

「はーい。私がこのお仕置きの仕上げを担当しまーす。覚悟はいい？」

「う、ううう……ゆ、許してく、下さい」

「やだなぁ。小学生に敬語で許しを乞うなんて……恥ずかしいとか思わないのかなぁ？」

そう言いながらピンク色のミニスカートを履いた１２歳の女の子は男の前に歩み寄った。

「いっぱいお漏らししちゃったのね……とりあえず潰しちゃおっか？」

「ひっ！　な、何をですか！？」

「潰すと言えば睾丸に決まってるでしょ？　キ・ン・タ・マ♡」

「わあああっ！！　やめてくれえっ！！　ほんとやめてえええっ！！」

右側の睾丸を左手でキュッと掴み、玉袋を思いっきり引っ張って手前に伸ばすと、右手に持った大型のペンチに挟み込んだ。

『グリッ……』

「はぎゃあっ！！　お嬢様っ！！　お願いだから！　や、やめて下さいいいっ！！」

「右のキンタマだけで勘弁してあげる……血の混じった精液吐き出させてやるんだから♡　えいっ！」

『ギュウウウウッ！！』

「ぐわあああっ！！」

『ブチュッ！！』

小学生の女の子によってぺっちゃんこに潰された中年男の睾丸。
全身を痙攣させながら泡を吹いて失神する。
同時に睾丸内に蓄えられていた精液が無理矢理鮮血と共に尿道口から飛び出した。

『ドピッ！　ピュピュピュウッ！！』

「きゃっ！？　よくも私の太ももに汚い液へりかけてくれたわね？もう片方も許さないわよ？」

『ビクビクッ！　ビクビクッ！』

唯香は左側の睾丸もペンチで挟み込み、ゆっくり時間をかけて潰

してゆく。
激痛に目覚めた男は再度地獄を味わいながら白目を剥くハメになった。

『グニュウウウ……』

「ほらほらぁ。ゆーっくり時間をかけてミンチにしてあげるね？　女の敵の痴漢さん♡」

やがて限界までひしゃげた睾丸は、間抜けな音を立てて破壊された。

『グニュニュニュニュウ……ブチュッ！』

「あれ？　今度は射精しないの？　なんか白いミンチみたいなのオチンチンからはみ出してきたけど？　……あは……あはは♡」

「尿道口から金玉のミンチ出させちゃってるわ……やるなぁあの子」

沖野夏帆と秋帆も男に歩み寄り、足首の拘束を解く。
そのまま足首を両手で掴み、姉妹が反対方向へ押し広げていった。

「股裂きぃ～♡」

「股関節外してやるから覚悟しろよ!？　えへへ♡」

ゆっくり確実に限界まで左右に開かれてゆく股関節。
ついに音を立てて外れてしまう。
股関節を外した位置でロープを固定し直して、土の字になって固定された。
膝の下側に、肘置きのような台をセットして、体重が掛かるようにしてあげて、拘束されている部位が鬱血しないように処置をされていたため、少しは苦痛がマシであったのだが……。

『ググググ……バコンッ！！』

「ぐぎゃあああっ！！」

再び目覚めた石堂優希はカクカク腰を振りながら激痛に耐えようと踏ん張った。

「やだなぁ……小学生の女の子の前なのにヤラしい腰の動きさせないでよ！　股関節外れちゃった？　このオマセちゃん……えいっ♡」

『ブシュンッ！！……ズボォッ！！』

唯香の高速の爪先蹴りが股間を直撃した。
更にその爪先は半分ほどピンク色の幼い菊門へ突き刺さる。
声にならない奇声をあげ、激しく鮮血を吹き出す少年の肛門。

「私の脚に何度も汚い血をへりかけて……爪先にウンチ付いてるし……ほんと悪い子だから更にお仕置きが必要だね！　えいいいっ！」

『ポンッ……ズドオッ！！』

引き抜いた瞬間、次は下に垂れ下がって血の泡を噴いているペニスを足の甲で思いっきり蹴り上げる唯香。

何度も何度も股間を蹴り上げてゆくうちに、尿道口から激しく出血し始める。

「唯香ちゃん、もうそのくらいにしとかないと……睾丸は良くてもペニスは破壊しちゃダメですのよ？」

「ごめんなさい……ついピクピクする反応が楽しくて……てへへ♡」

ペニスを摘んで皮をゆっくり根元へ剥いてゆく。

「ほらほら……チンポの口から血の泡噴いてる罰として……皮をムキムキしてあげるね？」

『ググ……メリメリ……ブチブチ！』

「あがあああああっ！！……いだいいいいい……ひいいい」

「半分剥けたよ？　残りは一気にやったげる。ほらあっ！！」

『ズルリッ！！　バリバリッ！！』

「ぎゃはああああああっ！！！！」

仮性包茎の皮を無理矢理根元まで引き剥かれた１３歳の少年は、絶叫しながらまたしても意識を失う。

手を血まみれに染めながらもズル剥けになった真っ赤なペニスを激しく上下にシゴき続ける小学生の女の子。

『シコシコシコシコ……シュコシュコシュコシュコッ！！』

睾丸のミンチと血の泡を噴き出しながら、哀れに皮を剥かれたペニスは小さな白い手でオモチャにされていた。

「だからそれ以上責めたらチンポが壊れちゃうって唯香ちゃん！……やれやれ」

秋帆までも呆れさせるほどの残虐さを持つ小学生、唯香であった。菅野莉央によく似た美人がとことん血まみれのペニスを扱き続ける。

ようやく地獄の手コキをやめてもらえて、拘束を解かれた中学生、石堂優希は無理矢理四つん這いにされ、ゴスロリ姉妹と唯香の三人に交互に股間を蹴り上げられる。

『ドカッ！！　ズドンッ！！　ズビッ！！』

「はひっ！　はうっ！　あひゃっ！」

号泣しながらもお尻を突き上げて少女たちに股間を蹴り上げられ続ける姿は……哀れとしか言いようが無かった。

「結局コイツのチンポズタズタですわね……怒られませんかねコレって……あ！　唯香ちゃん、最後はフィストで締めくくって」

「えへへ！　そりゃいいな。肘までぶち込んでやれ！」

夏帆と秋帆に励まされながら唯香は腕まくりをしながら呟く。

「直腸張り裂けるほど捩じ込んであげちゃう♡　ほら！もっとお尻を高く突き上げて肛門丸見えにしなさい！」

小学六年生の少女はもはやＳＭ女王顔負けの脅威を醸し出していた。

「はひっ！　や、やめてくださ……」

『つぷっ！』

「ここ？　お尻の穴は？　奥の奥まで私の手で犯してあげる♡　使い物にならなくしてあげるね？　ん？」

冷たく微笑む唯香は、拷問処刑人リーダーである菅野莉央と被って見える姉妹であった。

「やはあっ！！　やめてええっ！！」

「だめ！　汚いアナルね！？　飲み込めほらあっ！　えいいっ！！」

『ズブブブブ！！　グボオッ！！』

「ぎひいいいいいっ！！！！」

唯香のアナル調教は、半時間ほど続けられた。
最終的に肘あたりまで直腸に腕を突っ込み、大腸を抉り出すほど掻き回し、強制的にトコロテン射精までさせてしまうエッチな唯香であった。

「こんなにアナル掻き回されてまで……血まみれになってまで射精しちゃうんだ？　あはは……つくづく哀れだねお前って」

「ウヒイ……あひあひいっ」

「やだぁ。パックリ開いたまま閉じなくなっちゃってるよぉ？　あなたの臭いお尻の穴♡　ヌメヌメした腸液たっぷり垂れ流しちゃって……ヤラシイなぁ♡」

頬を赤く染めながら目を細めてすけべそうにはにかむ女子小学生の唯香の姿に、さすがのゴスロリ姉妹もかなり引いていた……。

ゴスロリ姉妹と少女の拷問倉庫（後書き）

唯香が腕を引き抜くと、しばらくポッカリ大きく開いたままなかなか閉じないアナル。

小学生の少女に腕まで突っ込まれて、完全に肛門拡張調教された中学生男子……。

激痛に喘ぎ再三意識を喪失し、気がつけば東部中央病院のベッドの中であった。

開いたまま閉じない肛門で一生過ごさなければならない事実を看護師から聞いた少年は、肛門を縫合し、人工肛門を付ける覚悟を決めた。

一晩中泣き崩れる１３歳の少年の姿は、哀れとしか言いようがなかった……。

転校生来る（前書き）

残酷処刑島での決闘も終えたある日……。

ゴスロリ姉妹と堀越唯香は、法務省長官兼、人道第一省長官である笠井からの司令を受けて、菅野莉央と会うことになる。

喫茶店で待つ莉央はどうゆう態度でくるのか、色々と不安を持ちながらも沖野姉妹と唯香は、待ち合わせの場所へ歩を進めるのであった。

転校生来る

東部地方繁華街にある小さな喫茶店。
学校帰りに菅野莉央たち小学生トリオがたまに立ち寄るミックスジュースの美味しい店であった。

小学生アイドルのセンターであり、拷問処刑人リーダーでもある菅野莉央が一人でミックスジュースを飲んでいる。

「これ、良かったらどうぞ」
「え？　あ、ありがとうございます」
「今帰られたお客様、上司から急に呼び出しがあったみたいで……お金だけ払って帰っちゃったから……そんな理由だから遠慮しないでくださいね」
「でもありがとうございます。儲けちゃった♪」

注文せずにゲットした二枚のトースト。満面の笑みで頬張る莉央だった。
その時、ドアが開いて三人の少女が入ってくる。

「こんにちは」

「あ、どうも……今日は上からの命令……いや、あの、引っ越してきた挨拶にと思って」

かなり攻撃的な性格をしたゴスロリ姉妹の妹、沖野秋帆（おきのあほ）が水色の頭を掻きながら照れくさそうに挨拶した。

「何か良い話があると聞いて菅野さんに会いに来たのですが……」

「はい。まぁ座って何か注文してください。あたしがご馳走しますので」

「ありがとうございます」

ピンク色の髪をした姉の夏帆がお礼を言って席に着く。

普段着で来店したゴスロリ姉妹と、莉央と同い年の小学六年生の堀越唯香の三人は、こぞってカフェオーレを注文した。

「あの……それで何か良い話とゆうのは？」

「以前の残酷処刑島での闘いの後、夏帆さんたち姉妹と唯香ちゃんにエッチなことしちゃって……本当に申し訳ありませんでした。お許し下さい。え～と……夏帆さんと秋帆さんが連れている堀越唯香ちゃんの事なんですが……」

夏帆と秋帆は、首を真横に振って真ん中に座っている唯香を見つ

める。

「何か酷い事をされるつもりでしたらどうかご勘弁願います。私たちはこの子の事を妹みたいに慕っておりまして……」

「まさか……これ以上そんな事考えてません」

「あ、どうも」

一安心して胸を撫で下ろす姉の夏帆。

「唯香ちゃん」

「あたしが通っている赤霧島小学校に来週から来ない？」

「は、はい？」

「えっ！？……私がまた学校にいけるのですか？」

「うん。あなたたちのボスである法務省長官兼、人道第一省長官の笠井さんにもあたしたちのボスである藤堂長官から話は通してるから……。もし良かったらと思って」

一瞬固まった後、左右のゴスロリ姉妹を見て表情を窺う堀越唯香。

「そ、そりゃ良かったじゃん！　友達も出来るしウチらは大賛成だよなアネキ？」

「そ、そうですわね。私たち以外にも親しい人が出来るのは少し寂しい気もしますが……唯香ちゃんが楽しく毎日を過ごせるのなら……是非ともよろしくお願いします」

少し姉妹に申し訳ないような気持ちになりながらもかなり嬉しく思った唯香は、ついつい大声で叫んでしまう。

「お願いしますっ！」

「あ、う、うん。あたしにはタメ口でいいよ。今日は来ていないけどまた会うことになる同じクラスの明日香ちゃんや美香ちゃんにもね」

「は、はい……うん！」

そのままミックスジュースを飲みながら残酷処刑島での処刑方法や、拷問のレパートリーを話す莉央。

内容が強烈過ぎて、カフェオーレを半分くらい残してしまうゴスロリ姉妹であった。

「あ、あの……ちょっとトイレ行って来て構いませんか？」

姉の夏帆が吐き気を催して足早にトイレへ駆け込む。
妹の秋帆も身体が震えるほどのショックを受けていた。
意外と平気そうに聞きながら莉央のトーストを半分もらって食べている唯香。

「唯香ちゃん……あたしの目にそっくり」

「あ、そ、そうかな？　あはは……でも莉央ちゃんに似てるなんて言われたら光栄です……こ、光栄だよ」

「前世では姉妹だったりして」

「そ、そんな事もあったりするかもね！　あはは！　ねっ、秋帆ねーさん」

「あ、ああ。生まれ変わりとかホントにあるかもな……は、ははは」

額を押さえながらフラフラしながらトイレから帰ってくる夏帆に声をかける唯香。

「だ、大丈夫？」

「はい。ありがとう。唯香ちゃんはやっぱり優しいですわねぇ」

店員や他の客には聞こえない声で話していたが、沖野姉妹にはかなり強烈過ぎて、これ以上拷問処刑についての話はやめることにした莉央。

「以前あたしたちで話し合って決めたんですけど……結局国の方針で『拷問のみで処刑無しの場合』については〇〇埠頭の倉庫での執行とゆうことになったみたいで……これからもそちらでお願いします」

「はい。処刑しないなら遺体の後始末もしなくていいですので……島へ渡る手間も省けますものねぇ」

「唯香ちゃんも可愛い顔して結構残酷だからなぁ！　ウチより遥かに残酷だわ！　あはははは！」

褒められてると解釈した唯香は、少し照れながらカフェオーレを飲み干した。

それから一時間ほど雑談をして、喫茶店を出る四人。
莉央とゴスロリ姉妹――――お互いが驚く程、好戦的ではなく平和的な会話で終えた事に、後になってから気付くゴスロリ姉妹。

「あれだけ菅野莉央に、無理矢理イカせられたこと文句言ってやる！　とか言ってた割に……最後まで平和的に会話してらしたわね？」

「あ、ああ。思ってたより丁寧な対応しやがるもんでつい……言い

そびれちゃったわ……今度会った時はキツく言ってやるぜ！」

「うふふ。まぁまぁ。もう仲直りしたも同然なんですから……許してあげて差し上げたらどうですか？　私も菅野莉央にはバックでペニスバンドで犯されたわけですが……かなり気持ちよかったのでもう根に持つのはやめましたわ。ねぇ唯香ちゃん？」

「そーだよ。私だって……莉央ちゃんにアソコ開いて見せろ、なんて言われて……なすがままに見せちゃって傷ついたんだから！　許してあげてよ秋帆ねーちゃん♪」

「そ、それはウチらを庇うために……ホント済まなかった！　ありがとう唯香ちゃん」

「莉央ちゃんって……小学生であんな小さな身体なのにどうしてあんなに強いんだろ？」

「ううん……サイボーグとか人造人間とかかも知れませんわね……」

「…………」

夏帆の本気か冗談か分からない真剣な答えに秋帆と唯香は黙って頷いた。

転校生来る（後書き）

――――後日、赤霧島小学校。

「起立、礼」

「先生、おはようございます。みなさん、おはようございます」

「はい、おはようございます。本日はお知らせがあります。今日から皆さんの仲間になる堀越唯香さんです。堀越さん、挨拶を」

莉央にそっくりな目をした強いストレートのミドルの髪を揺らして深々と頭を下げる唯香。

「本日からこのクラスで皆さんと一緒に頑張っていきたいと思います。堀越唯香です。よろしくお願いします」

少し冷たく見える瞳は、切れ長のようでパッチリしており、数人が莉央と似ていることに気付いた。

「あなたの席は……え～と、菅野さんの隣ね。富田さんは一つ前の結城さんの隣でお願いします」

四人の席は教室の後部へ固まるような形になる。

「一番後ろのスペースはバカな男子を懲らしめる私刑のために必要なの」

「え？　あ、そうなんだ……」

席に着いて先ず菅野莉央に話しかけられる。

「よろしくね。唯香ちゃん」

「よろぴくー！　色々あったけど仲良くいこーねー♡」

結城明日香と富田美香も唯香に挨拶した。

「う、うん！　なんかまだ照れくさいけど……こちらこそよろしくね」

新たに莉央たちの仲間に加わったゴスロリ姉妹と堀越唯香。
男子も恐れる六年三組女子小学生トリオも、堀越唯香を加えて四人となった。

美少女四人による男子への私刑、性的お仕置きも、今まで通り何度

も行われることになるであろう。
堀越唯香の残酷な気性は、莉央たちと行動を共にすることにより、
更に少しずつ開花してゆく……。

女子からの兄弟リンチ（前書き）

相変わらずな女子による男子イジメ。
本日もワンパターンの如く繰り広げられるのであった。
最近マンネリ気味でごめんなさい……。

女子からの兄弟リンチ

男子奴隷化計画。
それは赤霧島小学校六年三組の女子たちによる男子を虐める作戦であった。
週に一度は調教されるハメになった男子児童、清家貴文が放課後女子トイレに呼ばれる。
「今日は転校生の堀越唯香さんによる調教の練習台になってもらうわよ？」
菅野莉央が両手の甲を腰に当てて威嚇するような格好で冷たく宣言した。
六年三組の女子は菅野莉央の他に、富田美香、結城明日香、町田美知瑠、委員長である矢野弥生、それに転校生の拷問執行人である堀越唯香の六人が高学年が使う女子トイレに集まっていた。
先ずは莉央による殴る蹴る、の暴力から始まり、美香と明日香によって素っ裸にひん剥かれる。
「やめ、やめてええっ！　毎週こんなことされるの嫌だよおっ！！」

鼻血を出しながら泣きを入れる。

「女の敵が何を言うの？　ねぇ、町田さん」

「そうだよ。私も最近男子奴隷化計画の主要メンバーに加入しちゃったから……大人しく諦めて四つん這いになってお尻を突き上げなさい」

そう言いながら三つ編みの美少女、町田美知瑠は、ガラス製の浣腸器を手にとり、高濃度のグリセリンを吸い込ませてゆく。

「ま、また無理矢理みんなの前でウンチさせてお尻の穴虐めるの！？　恥ずかしいしむちゃ痛いからもうやだよっ！」

『スパァンッ！！』

「ひぶうっ！！」

矢野委員長の強烈なビンタが左頬を襲った。

「全身痣だらけにしちゃって……菅野さんから痛めつけられたついでに性的イジメをうけるのよ！」

無茶苦茶な言い分を述べる矢野弥生だったが、結局美香と明日香に強引に四つん這い体勢にさせられてしまう貴文だった。

以前と同じく女子に浣腸され、莉央が用意した洗面器にブリブリと排便する。

『プスッ！……ぷちゅうううう～』

「ひっ！　冷たいっ！　やめてええっ！　わあぁーん！　わあぁーん！」

号泣しながら許しを乞うが、５００ml全てのグリセリンを美知瑠から直腸内に注ぎ込まれ、膝をガクガクさせる惨めな姿となる。

その時、担任の坂本先生が一年生の男子児童を連れて、一瞬顔を覗かせた。

「あら、ご、ごめんなさい」

慌ててトイレから出てゆこうとする担任へすぐさま声をかける莉央。

「ちょっと待って！　その子は？」

「そ、そこにいる清家くんの弟です。同じクラスの女子のお尻を触ってたところをたまたま廊下で見かけたので……職員室へ連れて行こうとここを通ったとゆうわけです」

「職員室で説教しなくていいからその子をここに置いて行きなさい」

「え？　そ、それは……」

「先生も……またあたしたちが調教し直さなきゃダメなのかなぁ？」

「ひっ！　わ、わかりました！　尚寿くん、続きは六年生の菅野さんから叱ってもらってね。私はもういいから……」

ふと女子トイレの中を覗くと、五つ歳上であるお兄ちゃんの清家貴文が女の子にお尻を叩かれて泣いているのが見えた。

町田美知瑠のお尻叩きは執拗に繰り返される。

『パァンッ！　パァンッ！』

「お兄ちゃん！？」

「わーん、わー……ん？　あっ！？　尚寿っ！？」

艶のある長い二本の三つ編みを揺らしながら何度もお兄ちゃんのお尻を引っ叩く少女に、思わず震え上がる六歳の男子児童。

「唯香ちゃん、弟さんの尚寿が見てる前でアナル調教やったげて！」

「はーい」

「い、嫌だ！　やめて……」

「力抜かないと余計に痛いよぉ？　えいっ」

『ズブブッ！……グリグリッ！！』

「はぁうっ！！　痛いいっ！！」

人差し指と中指をゆっくり肛門へ挿しこみ、グリングリン直腸を掻き回す唯香。

哀れな兄の姿を横目に、弟である尚寿に歩み寄る莉央。

「お兄ちゃんはあたしたちの奴隷なの。わかる？」

「痛がってるからやめてあげて！　わーんわーん！」

急に号泣を始める一年生の弟だったが、莉央たちは甘くはなかった。

ベルトを外し、一気にズボンとパンツをずり下ろす矢野弥生。

『カチャカチャ……ストーンッ！！』

「ヒャアッ！？　嫌だあっ！！」

「小さなお尻……可愛いわね♡」

委員長が頬を赤くしながら弟のお尻を撫で回す。

「矢野委員長、一本だけならいいよ」

莉央が調教の許可を出す。

「やった！　小さな可愛い男の子犯すのなんて滅多にできないし♡」

「お、おかす？　なにそれ？」

「こうすんのよ！　ほらあっ！」

『ツプッ！……ズブブブブ』

「んあああっ！？　やだあっ！！　そんなとこに指突っ込まないでぇえっ！！」

叫びまくる一年生児童に構う事なく、矢野委員長の人差し指は幼い肛門へ捩じ込まれていった。

交代しながら莉央たち全員が弟のアナルを指で犯してゆく。

「すっご！　こんな締まりのあるアナル……無理矢理フィストぶち込んで拡張してやりたいんだけど？」

最後に順番が回ってきた富田美香が激しく肛門へ中指を出し入れしながら莉央に問いかける。

「その子はまだ小さすぎるから拡張調教はダメだよ。今度オイタした時はホントにやっちゃうけどね」

「ちぇっ」

莉央に制止されて少し落ち込む美香だった。
その後、兄弟は全身素っ裸にひん剥かれ、土下座させられる。

「今からお互いのオチンチンを舐め合いなさい。シックスナインと言ってね……お互いの顔を陰部に向けて抱き合うの」

細かく説明しながら兄弟をシックスナインの体勢にさせる女子たち。

泣きながら許しを乞う兄弟だったが、その度に思いっきり脇腹を蹴られ、ついに対抗するのを諦めた。

『カプ……』

「ひゃあっ！？」

先ずは兄が弟のペニスを口に含んだ。

「舌を使って舐め回すのよ！」

『んっ、むぐむぐ、ピチャピチャ！』

「お兄ちゃん！　やめてええっ！！」

縦笛を兄の肛門へ突っ込む町田美知瑠。

『ズボッ！』

「うぎいっ！？　むごむごおっ！！」

「あんたも早く咥えないと……お兄ちゃんのお尻の穴……私が壊しちゃうわよ？」

貴文の苦痛の叫び声を聞いた尚寿は、ついに兄の為に兄のペニス

を咥え込んで舐め回すのであった。

『カプッ！　ペチャペチャ……レロレロ……』

頬を赤く染めながら幼い弟とのシックスナインを見守る莉央たち女子生徒。

「やだ……エロいなぁもう♡」

「もっと激しくなめろー♡」

「キョーダイなのに……哀れだねー♪」

各々に言いたいことを言うSっ気満々の少女たち。

散々お互いのペニスをフェラさせられた挙句、気をつけ体勢で立ったまま、町田美知瑠と堀越唯香の手コキが開始される。

兄は美知瑠、弟は唯香が担当した。

『シコシコシコシコ！』

号泣しながらも全身をビクビクさせながら美知瑠に射精させられ

る兄の貴文。
弟は勃起すらしないので、莉央が人差し指を肛門へ突っ込み、幼い前立腺を激しく掻き回す。
強制的とは言え一年生のペニスを無理矢理勃起させせる。
「唯香ちゃん、この子まだ真性包茎だから強引に亀頭の皮剥いたら血まみれになっちゃうから……チンポの胴体部分だけを指で挟むようにして優しくシゴいてやってね？」
「うん。分かった。本当は思いっきり根元まで引き剥いてあげたいんだけど……じゃあいくよぉ。それえっ」
そのまま唯香の高速手コキにより、人生初の射精となる精通を強制体験させられてしまう運命の尚寿。
「あんんっ！　やめてっ！　うっ！？　何か変な感じ……んあぁっ！！」
「その感覚が射精する時の快感ってことなのよ♡　ほら、生まれて初めてのザーメン発射を私たちに見せろぉ～っ♡」
「んあああっ！！」
『ドピッ！　ドピピピピッ！』

小さな皮カムリのペニスから無理矢理扱き出された精液は、小刻みに尿道から発射された。

「床に飛ばした汚い液を舐め取りなさい」

「は、はい。ペチャペチャ……ペチャペチャ」

命令された通り必死で舐め取る二人。

腕組みをしながら兄弟の哀れな姿を見下す女子児童たちは、みんなかなりのS気質であった……。

「尚寿くん！　反省したかな？」

「ぐすん、ぐすん。はい、ごめんなさい。もう二度とイタズラしません」

「今度やったらチンポの皮根元まで引き摺り下ろして剥き身にしてやるからね？　そのままワサビ醤油振りかけて最強の激痛を味わってもらうわよ？」

「ひ、ひいっ！　わーんわーん！」

莉央に脅された六歳の男子児童は女子たちから好奇の目に晒され続けているオチンチンを両手で隠しながら泣き続けた。

女子からの兄弟リンチ（後書き）

ようやくお仕置きが終了し、女子トイレから解放された兄弟。
泣きじゃくる弟の尚寿の手を繋いで下校する。
お互いのペニスをしゃぶった事実は一生トラウマになりそうであった……。

とある家族の陰謀（前編）（前書き）

お金を稼ぐために春を売る少女。
春を買う汚い大人。
二人に壮絶な運命が待ち構える。

とある家族の陰謀（前編）

「菜美ちゃん、イ、イく！イっちゃうよぉ」

「あん、あんっ」

『ドピッ！　ドピュピュピュピュピュッ！！』

「ふぅ〜。今日も気持ち良かったよ」

６０歳になる初老の男、渡瀬常雄はコンドームを外しながら幸せそうに呟いた。

田舎のラブホテルで初老の男と女子高生がセックスを終えたばかりの夕方……その少女はパンツも履かないままベッドの上でタバコに火をつける。

「なぁ菜美ちゃんよぉ〜。今度はゴムなしの生でやらせてくれんか？」

「フゥーッ……それはダメ。もしものことがあったら大変だからね」

鼻と口から白煙を吐き出しながら渡瀬常雄の申し出を断る山田菜美。

「それは残念だな。だがこうして孫のような若い娘とセックスが出来るだけ有り難く思わないといけないな……」

「私だって一回五万も払ってもらえてるからホント助かってるわ。ありがとうね、おじ様♡」

最初はほんの小遣い欲しさで体を許してしまった山田菜美だったが、金銭欲はエスカレートしてゆき、歯止めが効かなくなっていた。

中肉中背で、そこそこの可愛い童顔をしていたため、同級生の男子からは何度か告白もされていた。

――――数ヶ月後、少女はついにお金目的ではなく本当の恋に目覚める日がやってくるのであった。

「おじ様、実は私、好きな人ができちゃったの」

「ん？　それがどうかしたのかな？　そのまま彼氏ともワシとも行為を持ち続ければ良いだけの話じゃないのかね？」

「……今まで本当に助かったから……ありがとう。でもエッチはもう出来ないよ。本気で彼に恋しちゃったみたいだから……これ以上おじ様と続けるわけにはいかないの」

「知ってるとは思うがお前の父親はワシの会社の課長だ。タダで済

むと思うのか？　解雇した上に全てをバラしてやるぞ？」

「そんな事をしたら、買春行為でおじ様の方が色々と被害被る事になるわよ？　普通に考えたら分かる事だと思うけど？」

山田菜美は、渡瀬常雄と落ち着いて話をする為に、この日はセックスをする気は全くないままラブホテルに来ていた。

拒否する菜美を押し倒して強制的に衣服を脱がしにかかる渡瀬。

「や、やめて！　嫌だって言ってるじゃない！　や、やめ……」

『ゴンッ！！』

「うぐあっ！？」

『ガンガン！！　ゴンゴン！！』

ふと気づけばベッドのシーツは血まみれになっていた。

頭部から止めどなく溢れ出る鮮血を見ながら固まってしまう菜美。

枕元の台の上にあった灰皿を咄嗟に掴み、渡瀬の頭部を何度も殴りつけたのであった。

両手で頭を押さえて激痛に耐えている男の姿をしばらく眺めていたが、我に帰った時には既に遅かった。

激しく痙攣を起こし、素人目にも眼前の人間が息を引き取るのが理解できた。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ」

しばらく呆然と渡瀬の遺体を眺めていたが、どうして良いのかわからないまま父親に電話をかけていた。

「どうした？　声が震えてるぞ？　何かあったのか？」

「じ、実は私……お父さんの会社の会長さんを……殺しちゃった」

「え！？　何だって？　会長を殺した？　何を訳のわからない事を話してる？　菜美！？　今どこにいるんだ！？」

山田菜美は時間をかけながらもどうにか心を落ち着かせ、父親である山田周吉に今までの顛末を説明した。

「とりあえずそのままそこにいろ。今から早退してそちらに向かう」

「うん。ホテルの人には新たに一人入室するよう私から話しておくから……」

二時間後、父親である山田課長が自家用車で駆けつけた。

「まさかお前と会長がそんな事になっていたとは……まぁとにかく早く運ぶぞ。大きめの旅行バッグを二つ持ってきたからコレに詰め込むんだ」

「無理だよ！人が入る訳ないじゃん」

「コレでバラバラにしてから運ぶんだ。仲の良い後輩の家が土建屋やってるからな。電動ノコから糸鋸から色々借りてきたんだ。切断したら風呂場で血を出来るだけ抜いて少しでも軽くして……ゴミ袋に入れてからバッグに詰め込もう」

親子二人で時間をかけての猟奇的な作業が繰り広げられた。
両手両脚、首を切断し、内臓を抜いて適当に二つのバッグに詰め込んでゆく。

「オエエエエッ！！」

「大丈夫か？　あとは俺がやるから少し休んでろ」

「だ、大丈夫。血まみれになっちゃったシーツは？」

「新しいのを持ってきた。サイズが合うかどうか分からんがとりあえず変えとこう。ベッド本体も遺体同様に小さく刻んでお持ち帰りだ。とにかく血跡を残さず立ち去るしかない」

「ベッド代弁償だね」

「そんなもの安いもんだ。とにかく急ぐぞ！」

時間の問題ではあるが必死で捕まらないよう頭を巡らす父親。
ゴミ袋と黒い二つの大きなバッグ……必死で出入り口の正面に停めてある車へ運び込み終えると、ホテルの管理人へ電話を入れた。
「え？　ベッドが気に入ったから買い取らせてもらうですって？　何をおっしゃっているのですか？　分かりませんが？」
「とにかくベッド代を今話した住所の私宛まで請求してください。必ず支払いますから」
一方的に電話を切ると、一目散に親子の乗った車は西武地方にある断崖絶壁へと向かった。
周りに人がいなくなるのを待つうちに時刻は夜の9時を回っていた。
次々にバラバラの遺体とベッドの破片が入ったゴミ袋を崖から放り投げてゆく修吉。
「はぁ、はぁ、はぁ、コレで運が良けりゃしばらくは時間が稼げるぞ」
「しばらくって……結局私たち捕まっちゃうの？」
「……間違いなく捕まるさ。でも時間はできた」

「意味ないじゃんそんなの！　普通に自首した方がマシだったんじゃないの！？」

そのまま殆ど話さずに車を黙々と走らせる周吉。

「ちょっとお父さん！　もう夜が明けちゃうよ？　一体どこまで行くつもりなの？」

「お前に見ておいてもらいたいものがあるんだ」

「え？」

西武地方から北部地方まで遠路はるばる車を走らせた後、ついに辺りは夜が明けていた。

「もう少しで着く」

車が着いた場所は丘の上にある墓地だった。

「こっちだ」

父親の言うがまま後をついてゆく菜美。

「……由紀子。お前が幼い頃にこの世を去った俺の妻だ」

「え？　お母さんとは私が物心つく前に別れたと言ってたじゃん？どうゆう事？」

「俺が殺した」

絶句する菜美。

周吉は話を続ける。

「実はお前は俺の子じゃないんだ」

「え！？」

「妻の浮気相手の子だった。あいつ自身反省して後悔して……０歳のお前の首を絞めて殺そうとしたから……思わず突き飛ばして阻止する事には成功したのだが……そのまま倒れ込んで棚の角で側頭部を強打して」

「死んじゃったの？」

「救急車を呼んで病院へ運ばれたが植物状態になっちまって……一ヶ月後息を引き取った」

墓石の前に辿り着き、両手を合わせる周吉。

しばらく気持ちの整理がつかないまま父親を見つめていたが、やがて菜美も母親の墓石の前で両手を合わせた。

「私を守ってくれたんだね」

「……そんなカッコいいもんでもないさ。お前の実の母親を殺してしまったんだからな」

車を駐車してあった場所に戻り、娘の菜美と数時間あまり今までの思い出話を語り合い、エンジンをかけた時、眼前に見知らぬ男たちが三人立っている事に気付く親子。

「山田周吉さんだね？　ゆっくり娘との最期の会話を楽しめたかい？」

「な、なんだね君たちは？　まさか早くも警察に……」

「残念ながらそんな生優しい存在じゃないんだよなぁ俺たちは……娘のいるこの場では本当のことは隠しておいてやるよ。俺たちと一緒に来てもらおうか？」

「な、なんのことだ？」

特殊任務省の拘束部隊であるこの三人はリーダーである山内と、部下である原内、川内の三人で結成させていた。

山内リーダーに続き、原内が周吉に答える。

「あなたが妻を亡くされた１８年前、一緒に弟さんが住んでましたよね？　その弟さんは当時事故で片付けられた奥さんの死亡原因……全て真実を語ってくれました。もう既に時効が成立してますけどね」

「一茂……あいつが全てをバラしてしまったのか……確かにあれは事故ではなく俺が意図的に殺害した。だがそのことで今俺に責任を追及することは出来んだろう？　早くここから立ち去ってくれ」

一呼吸おいて川内も続けた。

「だからねぇおじさん……私たちは警察みたいに甘くないし時効なんて関係ないんだよ。もう娘さんに嘘ばかりついた事もバレちゃったし……バラす気はなかったんだけどなぁ」

「お父さん……私をお母さんから庇ってくれて、偶然頭を打ったんじゃなく……意図的にお母さんを殺したのね？」

「こうなったら仕方がない……実は俺の浮気が妻にバレて……多額の慰謝料を請求するとか言い出した上、娘のお前も連れてゆくと言い出したんだ」

「そりゃ浮気なんかされちゃ当然なんじゃない？　お父さんが悪いじゃん！」

「済まなかった……俺の弟、一茂が黙っておいてやるから言う通り

にしろと……その案のお陰で俺は完全犯罪にありつけたのだが……今更時効になった事にまさか得体もしれぬ奴らにバラしてしまうとは夢にも思わなかったがね」

――五人の間に、しばらく沈黙の時間が過ぎる。

「得体もしれぬ奴らか……一応国家公務員なんだがね俺たち……まぁいい。そうゆうわけであんたの会社の会長を一緒に殺した罪は娘さんにも取ってもらうが……また連れてゆく場所が違うんだ。娘さんには未来がある」

「!？　お、俺にはないのか？」

「……済まないがあんたは残酷処刑島とゆう無人島に送られる。そこで拷問を受けたのち……処刑される」

「そ、そんな！　会長殺しのことまで早くもバレてたのか！？　だ、だが昔の妻殺しの件はもう時効のはずだぞ！？　拷問処刑なんてあり得ないんじゃないかっ！？」

リーダーの山内と、部下である原内の二人が山田周吉を両側から腕を掴んで手錠で手首を拘束する。

もう一人の部下である川内は、娘の菜美の細くて白い手首にそっと手錠を掛けた。

「周吉さん、この娘さんにもそれなりの痛みを味わってもらいますが……次の日には病院で手当が受けられます。その後は社会復帰もできますのでご安心を」

川内は父である周吉に優しく囁きかけた。

「う、ぐぐ……し、死にたくない……お願いだ！　今すぐ俺を警察に届けてくれ！　正式な裁判にかけてくれ！　絶対拷問処刑なんておかしいから！！　な、頼むよ！！」

「恨むならあんたの弟の一茂さんを恨むんだな。報酬として国から１０００万円が支給されているから今頃豪遊してるだろうからな……」

「くっ！　金で兄である俺を……売ったのか……なんて卑怯な……」

「自分のせいでお母さんを殺しておいて私を庇って殺したなんて……そんなひどい嘘つくからよ！　お父さんなんか死んじゃえ！」

本心ではなかったのかそう言いながら泣き崩れる山田菜美。
川内がそっと頭を撫でる。

山田周吉は残酷処刑島へ、娘の菜美は〇〇埠頭にある拷問倉庫へ連れ去られてゆくのであった……。

とある家族の陰謀（前編）（後書き）

思いもよらぬ味わって弟の裏切りで隠し通していた過去の犯罪の真実が明かされた。
娘の山田菜美は川内の運転する父所有の車の助手席で泣き続けていた……。

『この子に拷問は少し可哀想なんじゃないかな……はぁ～』

心優しい川内は一人ため息をつきながら少女を◯◯埠頭へと連行してゆく。

とある家族の陰謀（中編）（前書き）

――――――◯◯埠頭倉庫。

１８歳の沖野夏帆と秋帆の姉妹……１２歳の少女、堀越唯香の三人による山田菜美への拷問が開始される。

とある家族の陰謀（中編）

――――山田菜美。女子高生の少女は、とある場所でふと目を覚ました。

「ん、んん……こ、ここは？」

無とも思えるほどの静けさの中、暗闇の中を手探りしながら短い歩幅で歩く。
全く見えないがため、かなりの恐怖心が湧き上がる。

夜明けが近づいたのと、目が暗闇に慣れてきたのも重なって、うっすらと周りの輪郭が見え始めてきた。

「そ、倉庫かな？」

そう呟いた時、メインシャッターがキリキリと音を立ててゆっくりと下から上へ開いてゆくのが見えた。
薄暗い屋外には波止場にともる水銀灯がいくつか見えてくる。
倉庫内の全ての電灯が一斉に灯り、三人の人影が入って来て立ち

止まった。

「どこかの港の倉庫？　あ、あなたたちは？」

「私たちは犯罪者にお仕置きするため選ばれた拷問執行人よ」

「今までの人生で多分最大級の激痛を味わうハメになっからよお。期待してるんだな！　アハハハハ！」

ゴスロリ風の黒い衣装を身を纏った元女子高生であり、格闘技を極めた水色の髪の沖野夏帆（おきのかほ）。

同じくピンク色の髪をした夏帆の妹である秋帆（あほ）も続けた。

手前にいる背の小さな女の子はピンク色のワンピースに身を包み、静かにこちらを見ている。

堀越唯香（ほりこしゆいか）１２歳。

この三人の拷問執行人の中では、一番残酷な本性を持っている事に、この時はまだ沖野姉妹さえも気付いていなかった。

「山田菜美。とりあえず今からあなたをお仕置きしますわ。服を脱いで素っ裸になって頂けます？」

夏帆が冷たく微笑みながら問いかけた。

「い、嫌です！　恥ずかしいしお仕置きなんてされたくない！　警

察に自首して正式に裁いてもらうから私をここから出して！」

「やかましいなぁもう……ウチたちはケーサツと変わらん組織だからな？　大人しく裸にならないと余計いたぶってやるぞ？」

そう言いながら山田菜美の胸ぐらを掴み、みぞおちに強烈な膝を入れる秋帆。

『ズドンッ！！』

「がはあっ！？……おえええええっ！！」

膝から崩れ込み、ドボドボとゲロを吐く菜美。

「きったねぇなあ……オラアッ！！」

足の裏で何度も後頭部を踏みまくり、更に背中や横腹を蹴りまくる。

「いやあああっ！！　痛い痛い痛いいいいいっ！！　やめてえぇっ！！」

散々秋帆に殴る蹴るの暴力を受けた山田菜美は、ついに激痛に負

けて衣服を脱ぎ始めた。

「痛い……痛いよおお……は、裸になるから許してくださいっ！！」

少女たち三人が見下す前で、パンツ一枚のみの姿になり、土下座をして許しを乞う女子高生。

「どうしたの菜美さん？素っ裸になるって約束だよね？」

小学生の堀越唯香は、しゃがみ込んで菜美の泣きじゃくる顔を覗き込みながら問いかける。

「お、お嬢ちゃん……恥ずかしいからパンツだけは許して……お願い」

「はぁ。やっぱりあなたには最高級のお仕置きが必要なようね。夏帆さん、得意のムチで全身の皮が裂けるまで打ち込んであげて」

「はーい♡　わたくしめにお任せあれ〜。よっと！」

『ヒュンッ……ピシィッ！！』

長い革の鞭を手に取ると、思いっきり床を叩きつける夏帆。

「ひいいっ！！やだ……そんなので打たれたら死んじゃう……やめてええええっ！！」

『ヒュンッ……バシイッ！！』

「ギャァアアアアッ！！」

あまりの強烈な一撃に、内出血した背中の肌に赤い筋がゆっくり浮かび上がる。

「全身内出血させてあげますわ。それっ♡」

『ヒュンッ……ピシィッ！！……ヒュンッ……バシイッ！！』

「いぎいっ！！　んがあっ！！」

五十回ほど打たれて全身が真っ赤に腫れ上がるほど歪な色に変色する。

「わあああんっ！！　痛いいいいっ！！　わあああんっ！！」

『プシャアアアア～』

号泣しながら小便を漏らしてしまう菜美。

「いけない女だね？　お漏らしなんて……」

そう言いながらパンツを両手で掴み、一気に足首まで引き摺り下ろす唯香。

「キャアッ！？やめて見ないでお願いいいい……わーんわーん！」

「そんなに傷めつけられてまだオマンコ見られることが恥ずかしいとか……頭おかしいんじゃゃない？」

足首からも濡れたパンツを完全に剥ぎ取ると、両足首を掴んで右足の裏を性器に押し当てる。

『グリッ……グムムムッ！！』

「ひゃあっ！？やめてお嬢ちゃんっ！！そんなとこ土足の足の裏で押し付けないでっ！！」

「オシッコ漏らしちゃうような汚いオマンコには土のついた足の裏がお似合いだよ？　うふふ♡」

『ガガガガガガガガッ！！』

「痛あああいいいいいっ！！　やめてえええっ！！」

女子小学生による性器直撃の電気アンマは延々と半時間以上続けられた。

痛すぎて唯香の足を手で掴んだ瞬間、夏帆と秋帆に顔面を殴られたので、結局なすがまま性器を壊されていった。

グリグリと押し付ける電気アンマと、離しては蹴り込むタイプの激痛を伴う電気アンマを交互に半時間受け続けたため、大陰唇と小陰唇は何箇所も裂けて血まみれになってしまっている。

「へぇ～これだけ蹴り込んでもまだクリトリスは無事なんだ……」

「ひぃい……いだいよぉ！ いだいよおおっ！もうやめれええっ！！」

「あはは……やめれぇって何よそれ？強烈過ぎてまともに言葉も喋れなくなったの？菜美さん？」

「おほほほほ！　ほんとですわね！　面白い！」

「ひゃっはー！　マンコズタズタじゃん！　あははは！」

唯香の残酷な電気アンマショーを見ながら爆笑する夏帆と秋帆。

「オマンコ蹴られまくった気持ちは？」

「い、痛過ぎです……もう許してください……しくしく」

「泣いても許さないよ。とりあえず前は一度お預けにしたげる。次は後ろいっちゃうから四つん這いになってくれる？」

「う、後ろ？な、何のことですか？」

『パァンッ！！』

「ひぎいっ！！」

思いっきり真っ赤に染まっている臀部を更に平手で打ち込む唯香。

「菜美さんのお尻の穴のことよ！　私が指と手でガバガバにしてあげるから四つん這いになりなさいと言ってるの！」

「やだっ！？そんなとこまで責めないでっ！！ね？そんな可愛い顔した小学生の女の子が……そんな酷いことしないよね？」

涙目になりながら唯香を見つめて情けを乞う女子高生だったが、夏帆と秋帆に強制的に四つん這いにされてしまう。

「どうぞ唯香ちゃん。ガバガバにしてやってくださいな」

「やれやれえっ！　拳ごとぶち込んでやれえっ！　アハハハハ！！」

「うん。いくわよ？股を開いて力を抜いて」

「やだ！やめてっ！いやあぁぁぁっ！！！」

夏帆と秋帆によって四つん這い状態から更に股を全開まで開かされた

菜美の股間は、血まみれの性器と肛門が同時にパックリと全開に開かれる。

「ここ？」

『つぷっ』

「んああっ！？やだあぁぁぁっ！！」

最初は人差し指、更に中指、薬指、と順に挿し込んでゆき、ついには手首まで強引に捩じ込む事に成功する唯香。

『グボオオオッ！！……メリメリブチブチ……ボコボコッ！！』

更に直腸内で拳を作り、激しく回転させる。

『グリュングリュンッ！！……グチュチュチュチュチュッ！！』

「ピギィイイッ！！裂けるうううっ！！死ぬっ！！死んじゃうううううっ！！」

「あなたは死なせないから安心して。お父さんは昼から処刑されるけどね」

『グボオッ！！ボコッ！ボコッ！ボコッ！ボコッ！』

何度も拳を直腸深く出し入れさせる唯香。

流石に痛々しすぎて、夏帆と秋帆は目を細める。

「凄いですわね……なんて残酷な唯香ちゃん……感服いたしました」

「スッゲ……ウチより残酷だなほんと……アハ……ハハ」

激しく犯された菜美の肛門から、ドクドクと溢れ出てくる血と便と腸液が唯香の腕に伝い流れてくる。

「臭い腸液ドクドク垂れ流しちゃって……汚いなぁほんと」

ゆっくり拳を直腸深くから引き抜くと、パックリ開いたまま閉じなくなってしまった肛門がヒクヒクと小さく痙攣していた。

「やだなぁ菜美さん……お尻の穴開いたまんまになっちゃってるよ

？恥ずかしくないの？」

白目を剥いてヨダレを垂らしながら意識を失ってしまう菜美だった。

――どれだけの時間が経っただろうか……とてつもない違和感と異常な痛みにふと目覚める山田菜美。

分娩台みたいな器械に拘束され、仰向けで股を開いたままカエルみたいに固定されている自分に気づく。

「目覚めたかな？莉央ちゃんから教わった私の必殺技……受けてみなさい。いくよ？」

「な、何？　何する気？　やめてお願いっ！！」

肛門に再度突っ込まれる女子小学生の指……やがて先程のように手首まで飲み込まれてゆく。

「やあああっ！？やめてえええっ！！」

『ズブ……ザクザクッ……』

声にならないほどの激痛が山田菜美の股間を襲う。
しかも外部の股間ではなく内部側の股間であった。

「直腸……切り裂いちゃった……ここに指を入れて……膣道へ移動させて……と」

『グボオッ！！グチュチュチュッ！！』

「んぎいいいいいいっ！！」

「いっくよぉ？　喰らいなさい！　ま、ん、こ……トンネルッ♡」

『バチュウウウウウウッ！！！』

肛門から挿し込まれた唯香の手が、菜美のマンコから飛び出した。
内部で直腸と膣道を繋げられて貫通されたのである。

「んぎゃあああああっ！！　死ぬうううううっ！！」

「お尻の穴とオマンコ……繋がっちゃったぁ♡」

頬を赤く染めながらイヤらしそうに微笑む唯香。
膣から飛び出させた手は、血と粘液に染まったままピースサインを出していた。

指と指で血の混じった粘液が糸を引くシーンは夏帆と秋帆も興奮させた。

「私、興奮し過ぎて濡れてきちゃいましたわ」

「ウ、ウチも……すっごいエロいなこの光景……唯香ちゃん、やり過ぎじゃねえのそれ？……アハハ」

激痛で再び意識を失う菜美だったが、しばらくグーチョキパーをしながら楽しむ唯香だった。

「これくらいにしといてあげる」

ゆっくりと、パーを作り性器のワレメに沿って右腕を引き抜く。最後に肛門から引き抜いたときにはマンコもアナルもパックリ開いたままヒクヒク小刻みに痙攣していた。

「まだ分娩台拘束を解かないで」

聞き覚えのある声に慌てて振り向く三人の拷問執行人。

「か、菅野莉央……莉央さん」

「莉央さんがどうしてここに？」

姉の夏帆に続き妹の秋帆も思わず問いかける。

「なんかくすぐったいからあたしの名前呼ぶときは莉央でいいよ。夏帆さんも秋帆さんも……」

「え？あ、それは……私は莉央さんと呼ばせてもらいますわ」

「じゃあウチは遠慮なく莉央と呼ばせてもらう」

静かに頭を下げてから山田菜美の前に歩み寄る莉央。

「身体中鞭で打たれてオメコとアナル貫通されて……痛いでしょう？

「痛いいいい～！痛いよおお～！！」

全身を振るわせながら分娩台で大きく両脚を開かされたまま号泣し続ける菜美。

「ポッカリ開いた肛門は数日間安静にしていれば普通に排便できるくらいには回復すると思うから安心してね？」

「ゆ、許して……莉央ちゃんってゆうの？　もう酷いことしないで

「……お願いです」

菜美の懇願には首を横に振って後ろに立っている唯香の方へ振り向いた。

丸い円筒形の器械を取り出して唯香に手渡す。、

「これは？」

「子宮を抉り出す器械だよ。この人の最後の仕上げに去勢しちゃうから」

「去勢？子宮を取り出しちゃうの？」

「そう。唯香ちゃん、あなたがやって。使い方説明するから」

莉央に子宮回収器の説明を聞きながらスイッチを入れてみる唯香。

『カチッ！　ウィイイインッ！！』

「凄い……こんな回転刃で子宮の周りの肉を抉るんだね……」

「そう。卵巣はミンチになっちゃうけどね」

沖野夏帆と秋帆は説明を聞いているだけで腹部が痛くなる気がしてとりあえず倉庫の隅へ移動して座り込んだ。

「私たちここから見てますわ」

「ウチも内臓取り出したりする系は苦手やからな……あとは任せたぜ唯香ちゃん……へへへ……」

夏帆と秋帆は引きつった笑みを浮かべながら倉庫の端から唯香にエールを送る。

「そ、そんな……私まだ赤ちゃん産んでないし……やめて……やめてえええええっ！！」

急にキレたように泣き叫び出す山田菜美だったたが、身体は全く動かせない状態であった。
力むたびに血の泡が膣口と肛門から垂れ流れてくるのみである。

『ブクブク……ドクドク』

「ほら、力まないの……死なないように止血の強力な注射を打っておいてあげるから」

莉央の下準備が終わると、物騒な器械を手にした唯香が菜美の前

に立つ。

「菜美さん……ごめんね。これであなたへの拷問は終わるから……辛抱するんだよ？」

「嫌だっ！そんなの突っ込まれた上に子宮なんか抉り出されたら私死んじゃううううっ！！　ひいいいいっ！！」

メスと縫合糸を鞄から取り出して菜美に見せつける莉央。

「ちゃんとあたしが手術して処理してあげるから心配ないって」

横を向いて目で合図を送る莉央に軽く頷いて答える唯香。

「子宮口が見えるほどオマンコ開いちゃってる……クスクス……ごめん！　笑っちゃって……いくね？」

『つぷ……ズズズ』

「んひゃあっ！！　やめてお嬢ちゃん！！　お願いいいいっ！！」

「ダメ。拷問執行人である私、堀越唯香１２歳……今から山田菜美のマンコにコレを突き刺して子宮を抉り出しちゃいます！　お仕置きよっ！　飲み込め……えいっ♡」

『ズボオッ！！……グチュチュチュチュ！！』

「はひぃいいっ！！　やだっ！！　やめれえぇえっ！！」

顔に返り血を浴びながらも女子高生の性器へ恐怖の器械を挿入してゆく女子小学生の唯香。

目を細めて静かに微笑みながらスイッチを入れる。

「マンコの奥……グチャグチャにしてあげる♡　ほらっ！」

『カチッ！……ヴィイイインッ！！　グシュシュシュシュッ！！バリバリバリバリッ！！』

「ギェエエエエエッ！！！！　じぬうううううううっ！！！！」

膣内で飛び出した回転刃は見事に子宮をくり抜くように抉り出すと、器械内部に回収して蓋を閉じた。

「もういい？」

「うん。既に子宮は器械内に取り込まれてるわ。抜いてもいいよ」

莉央に促されながら４０センチほどもある冷たいメタルの輝きを

する器械を引き抜いた。
開閉ボタンを押すと原型を留めている子宮が足元に落ちた。
『ズルズル……ビチャッ！！』
「えぐっ！……スッゴいなぁ。丸々子宮が出てきた」
「上手ね♡　完璧な使いこなしだよ唯香ちゃん♪」
「ありがとう……でもほんと凄い器械だねコレ」
白目を剥いて痙攣している菜美に、ショック死を防ぐ気付け薬を注射をする莉央。
「おーい！　菜美さーん？　卵巣のミンチがマンコからはみ出しちゃってるよ？」
卵巣の残骸を指で摘んで引っ張り出す莉央。
「あはは！　血と粘液まみれでヤラシいなぁ～♡」
唯香もミンチを掻き回しながら膣口から抉り出すのを手伝った。

「ちょっと膣口思いっきり開けててくれる？」

「はーい」

莉央の言う通り両手で思い切り左右に押し広げる。

血の泡が溢れ出してくるがお構いなしに莉央の右手が突き刺さった。

『グボオッ！！　ボコボコボコッ！！　グチュグチュ……グチュグチュ』

子宮のあった腹腔内奥深くへ右手を挿し込んで空洞になったことを確認する莉央。

「見事に空洞だけど……そのうち腸が下がってきてこの空間埋めちゃうから心配しないでね？　菜美さん♡」

小刻みに痙攣させせながら涎を垂らすその姿はもはや廃人のようであった。

「皮カムリのクリトリス……切除しとこうか？」

メスを取り出して見事な手捌きで菜美の陰核をくり抜くように切

除し終えると、ついでに小陰唇のビラビラも切り取る。

「あなたはね……人を殺して死体を解剖して遺棄したの。女を象徴する部分切り取られても抉り出されても文句言えないでしょ？」

切り取った左右の小陰唇を唯香に手渡す莉央。

「なんかイカの耳みたい……ほんと残酷でエロいなぁ莉央ちゃんは……」

「あはは……唯香ちゃんもあたしとよく似た目をしてるし残酷な本性表してきちゃってるよ？」

「そ、そうかな？　それほどでもぉ……」

褒められたのかけなされたのか分からないまま取り敢えず照れてみる唯香だったが、倉庫の隅では夏帆と秋帆が躊躇うこともなくゲロを吐いていた……。

とある家族の陰謀（中編）（後書き）

「あれ？クリトリスは？」

「あ、ごめん……丸めた鼻くそ飛ばすみたいに飛ばしちゃった……」

「ええ～っ！？じっくり指でモミモミしたかったのにぃ～」

「唯香ちゃん……あなたホント素質あるよ……拷問執行人じゃなくて拷問処刑人にならない？」

「……そ、それは……私は夏帆さんと秋帆さんと一緒に暮らしたいしあの人たちに合わせたいからいいです」

「合わせるって……もうとっくにあの姉妹を超越してるわ唯香ちゃんは……あはは……」

莉央が応急処置をしたあと、特殊任務省の息がかかった東部セントラル病院へ救急車で搬送される山田菜美。

午後から執行される父親の処刑を心配する所ではなかった……。

とある家族の陰謀（後編）（前書き）

ついに山田周吉への拷問処刑が執行される。

とある家族の陰謀（後編）

「こ、ここは？」

「名もなき島だが……俺たちは《残酷処刑島》と呼んでいる」

「ざ、残酷……処刑」

船から島へ降り立つと、目隠しを取って罪人と会話する特殊任務省の看守。

「薄々勘づいているとは思うが……お前には今から酷い拷問が待っている」

「ご、拷問だと？……そんなことがこの日本で許されると思っているのか？」

「それは俺に言われても分からない。そして……いや、もはや何も言うまい」

「ん？　そこまで言ってそれはないだろ？　教えてくれ！　俺は拷問されてどうなるんだ？」

軽く頭を下げて船に乗り込み、島の簡易な港から去ってゆく小型船を呆然と見送る周吉だった。

とりあえず島の全貌を確認するため緩やかな坂道を登り始める周吉。

「かなり大きな島だが……やはり無人島だな……ん？　あれは……家？」

一階建なのにコンクリートで造られた建造物が見えてくる。

警戒しながら近付くと入り口らしい鉄格子の扉があった。

「牢屋みたいな造りだな……こんな無人島で牢屋になんか閉じ込める意味あるのか……」

「無いよね普通」

「!?　だ、誰だ!?」

長い黒髪が美しい少女、円満愛衣がセーラー服姿で現れた。

「こ、これは驚いた……拷問だの処刑だののゆうこんな場所に……到底似合わない女子高生の登場か……」

「奥さん殺しといて時効だなんて……絶対許せないわねオッサン」

「まさかねーちゃんが俺を処刑するってのか？」

「この建物の中には四つの部屋があって、一つ一つ違う拷問を受けながら移動してもらうの」

「ふ、ふざけるな！　一回でもごめん被るのに四回も……俺は最後まで抗ってやるからな」

静かに歩みよってくる円満愛衣に対し、拳を強く握りしめて抗戦体勢に入る山田周吉。

「正確には五回かな……私が今からここであなたを痛めつけちゃうから」

「く、くそが！やれるもんならやってみろ……中年とはいえ一応男だぞ？　舐めるなよ？」

一気に駆け寄り間合いを詰める愛衣。

「うわっ！？」

殴る蹴るの凄まじい連打は、何度も何度も中年男の顔面や頭部、腹部にヒットする。
ダウンを奪うのに一分は必要なかった。

「ぐわあっ！？……いてててて っ！」

更に腹部にまたがりマウントポジションを取る愛衣。
ゆっくりと拳を振り上げる。

「ひっ！？　分かった！　もう逆らわないからやめてくれっ！」

『バキッ！！』

思いっきり振り下ろした拳は周吉の鼻っ面へ直撃する。
一瞬で鼻の骨が折れ、夥しい量の鼻血が噴き出してきた。

「ひぐうっ！！」

『バキッ！　バキッ！　ドカッ！　グシャッ！』

更に顔面へのパウンドを続ける愛衣の右手は男の鼻血で真っ赤に染まっていた。

山田周吉の顔は、両目の瞼を腫らし、鼻はひん曲がり、唇は何ヶ所も裂け、原型を留めないほどボコボコに変形してしまう。

「まだ足りないわね……」

「ひっ!?　も、もうやめてええっ!」

『バキバキッ!!　ガツガツッ!!』

「ぐぐぐ……痛いいいい……」

腫れ上がった瞼の下から流れ落ちる涙。

「泣くほど痛かった?　いい歳したオッサンが泣いちゃうんだ?」

「や、やめてくれ……お願いだ……痛い……ううう」

愛衣は、目を細めてしばらく歪に変形した顔を眺めてから男の髪の毛を鷲掴みにして一気に引き起こした。

「一つ目の部屋まで私が連れて行くから立ちなさい」

「ぐっ……わ、分かった」

突然目の前に現れた女子高生の桁外れの強さに抵抗する気力さえ失った山田周吉は、ある意味これから自分に訪れる悲劇を受け入れた。

受け入れざるを得なかっただけであるが、覚悟に似た気持ちを持った中年男は、円満愛衣に手を引かれながら、冷たいコンクリートの建物へ連行されてゆく。

入り口から一つ目の部屋の前で立ち止まる二人。

『コンコン！』

愛衣がノックをすると、数秒後扉が開いて部屋の中から声がする。

「どうぞ」

「よろしくね大野さん」

そう言いながら愛衣は男を部屋の中へ押し込んだ。
今度は女子中学生に見える少女が制服を着て立っていた。

「ん？き、君はどこかで見たことがあるような？」

見えづらくなった腫れた目を必死で見開き、眼前の少女を凝視する周吉。

「思い出した！　真絆ガールズの子だな？　確か大野真子……」

「私のこと知っていてくれたんだね。嬉しいけどテレビで見てるような私とは一味も二味も違うから……覚悟して下さい」

「え？　あ、あの……まさかと思うけど……アイドルの子が拷問なんて……しないよね？」

「残念でした。私たちはアイドル兼、拷問処刑人なの。おじさんには今から数時間、死ぬより辛い目に遭ってもらうからね？」

いきなり現れた見覚えのあるアイドル……アイドルであるだけにまさか酷いことはしないだろうと希望的観測をした周吉だったが、現実の厳しさを受け入れるしかなかった。

先ほどの女子高生よりは弱いだろうと一応抗ってはみたものの、更に顔面をタコ殴りにされ、土下座をして詫びを入れるハメになる。

「ごめんなさい……もう逆らいませんから許してくださいっ！」

椅子に座らされて足首と手首を完全に動けないよう革製ベルトで固定された。

「真子ちゃん……お、俺はショートカットがよく似合う真子メグ中学生コンビ大好きだったんだ」

「そうなんだ。ありがとう。私たちと変わらない娘さんがいる歳なのにキショ」

「そ、そんな……」

銀色に鈍く光るペンチを取り出してしゃがみ込む大野真子。

「この部屋では生爪二十枚……全て剥がしていくから」

「えっ！？　そ、そんな……痛すぎるでしょそれは！？　やめてくれえええっ！！」

「拷問なのに痛くないと思ってた？　あはは……能天気なオッサンだよね？」

ゆっくり右手の小指をペンチで挟み込み、グリグリと前後左右にこね回しながら剥がしてゆく。

メリメリと鈍い音を立てて少しずつ剥がれてゆく生爪。

「ぐわあああああっ！！　いだいいいいいいっ！！」

絶叫する中年男の声を聞きながらも淡々と一枚一枚爪を剥がしてゆく真子。小指から順に薬指、中指、人差し指、親指、次は左手も同じ順で剥がしていった。

手の爪を十枚全て剥がし切った頃には声が枯れて掠れ声に変わっていた。

「あらあら……オシッコ漏らしちゃったのね。いけないオジサンだわ」

冷たく笑いながら靴と靴下を脱がしてゆき、手と同じ順で小指の爪から剥がし始める。

『ガッ……グリグリ……メリメリ……バリバリッ！！』

「ぐえええええっ！！……かはあっ！！」

「これで手足の爪全て剥がしちゃったわよ？　叫び過ぎて声もまともに出なくなっちゃった？」

全身をビクビクさせながら激痛に耐えている周吉の拘束を解いてゆく真子。

「私の執行はこれで終わり。さ、次の部屋に案内するわ」

「も、もう嫌だ……楽に殺してくれ……た、頼む」

「ダメ。まだまだ序の口だから……さぁ、おいで」

無理矢理立たされて手を引っ張って連行されてゆく隣の部屋。

『コンコン！……ガチャ』

「メグ。続きお願いね」

「ほーい。さぁ入って周吉さん」

殺風景な部屋の中央で膝をついて崩れ落ちる周吉。

「ぐ、ぐぐぐ……ゆ、指が痛くて立ってられない……」

「寝ていてもいいから服を全て脱いでくれる？」

「メグちゃん、俺は君のこともファンなんだ……真子ちゃんみたいに酷いことしないでくれ……」

「嬉しいなぁ。じゃあおじ様のこと素っ裸にしてあげる」

「だ、だから痛いし恥ずかしいし……やめてくれ」

抗っても殴られることを分かっていた周吉は女子中学生アイドルに服もズボンも一枚一枚脱がされていった。

最後の一枚のパンツに手をかけるメグ。

「お願いだメグちゃん……それだけはやめて」

「ここまで脱がせてパンツだけ許してくれると思った？往生際が悪いなぁもう……それっ♡」

『ズルリッ！』

「ぐわあっ！？……み、見ないでくれ……恥ずかしい」

「わぁ〜！　結構デッカいじゃん！」

タイプの少女にマジマジと陰部を見られて、思わず勃起してしまう山田周吉。

「顔面ボコボコにされて生爪全て剥がされて……勃起できるなんてすごい神経してるんだね？」

革製の鞭を手にして床をバシバシ叩きながら微笑むメグ。

「そ、そんなので叩かれたら皮が裂ける……やめてくれ……」

『ヒュンッ……スパァンッ！！』

「がはあっ！！」

仰向けで勃起したまま何度も何度も鞭で全身を打たれてゆく周吉だった。

全身が紫色に変色する頃にはついにペニスはフニャフニャになってしまう。

「どうした？　もうチンポ勃てないの？」

「ぐわあああ……痛い……痛いいいい」

更に何度も鞭を振り下ろす。

ついに胸部と腹部の皮が裂けて鮮血が流れ落ち始めた。

「全身から血が出るまで叩いてあげる」

両腕、両脚、顔面と、何度も何度も鞭で打ち付けられ、ついに全身から血が滲み出て、床へ流れ落ち始める。
またもや小便を漏らしてしまう周吉であった。

「何漏らしてるの？　汚いわね」

小野メグはスニーカーを履いた靴の裏を男の陰部へ押し付けた。

『ギュッ！　グリグリ！！』

そのまま捻るようにこねくり回す。

「はわわわ……痛いいいっ！　やめて……」

「え？　また勃ってきたぞ？　嘘だろ？」

メグの足の裏の感触があまりにも気持ちよかったせいか、再び勃起させる周吉。

メグは両手で自分の右脚の太ももを押さえながら上下にペニスを足の裏でシゴき始めた。

『スコスコスコ……』

「はうっ！？　ううう……」

「私の足コキで射精しろ」

「ううっ！　足の裏なんかで……や、やめてくれ……ううっ！」

「やめたげない！　ほら、イっけえええっ！！」

『スコスコスコスコスコスコスコスコスコッ！！』

「はううっ！！」

『ドピュッ！！　ドピュピュピュピュピュピュウッ！！』

中年男とは思えないほどの夥しい量の精液を噴き飛ばす周吉。

「たくさん出しやがって汚いなぁ」

足の裏にタップリ精液をひりかけられたメグは、足の裏を男の腹部に擦り付けながら拭き取った。

「さてと。私の拷問はこれで終わりだ。立て」

「あうう……うう」

「チンポはもう勃てなくていいぞ？　分かってるな？」

「は、はいい……」

激痛と快感をメグに味合わされた周吉はヨロヨロしながら立ち上がる。

そのまま手を引かれて次の部屋へ連行された。

同じようにノックをしてからすぐに扉が開く。

「お願いします美紅さん」

「分かった。よくこれだけ叩いたね？お疲れ様メグ」

「あはは……ありがとうございます」

部屋を出て行くメグの背中を見ていると更に涙が溢れてきた周吉。

「しくしく……ぐすん。どうして真子ちゃんやメグちゃんが……こんなとこにいてこんな酷いことをする……んだ……ぐすんぐすん」

「山田周吉！　メソメソ泣くんじゃないよ。後二人からの拷問の後きっちり送ってあげるから♡」

「嫌だ……まだ死にたくない……娘にもう一度会いたい……」

「それは無理……彼女は本土で入院中だし。さぁ始めようか？」

美紅は部屋の中央にある机の上にうつ伏せ状態にさせて周吉を縛り付けて行く。

「これでよし。と。股間は大きく開いて固定……と！」

「な、何をする……気だ？」

「え？　アナルを壊しちゃうだけだよ？」

「うっ！　そ、そんなこと……や、やめろっ！！」

『ズドンッ！！』

「ぎえっ！！」

背後から股間を思いっきり蹴り上げる美紅。

睾丸を直撃して激痛に悶絶する周吉だった。

「誰に向かって口を聞いてるの？やめてください、でしょ？　痛くても手で押さえられないって辛いでしょ？」

「ぐおおおお……うぐぐぐ」

全身をビクビクさせながら局部の痛みに耐えていると、そっと肛門に触れる物体に気付く。

『ピトッ！……ツプ……』

それはゆっくりと拷問括約筋を押し広げ、直腸内へ入り込んできた、

『ズブブブ……』

「はうっ！？　やめろおおっ！！」

「は？やめてくださいって言えって言ってるのがまだ分からないの？ほらあっ！」

『ズボオッ！！……ボッコオォォオ！！』

「ぐえぇえっ！！」

ペニスバンドにセットされた直径5センチ、長さ15センチの極太アナルバイブが根元まで突き刺さり、更に激しく腰を振り始める美紅。

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「こんなにぶっといバイブぶち込んでるのに……アナルのヒダヒダが裂けないなんて……さてはオッサン……アナニー愛好家かな？」

「はうっ、はうっ、はうっ、はおおっ！」

「あはは♪　ホントのこと恥ずかしくて言えないみたいだね……まぁいっか。序の口でケツマンコ血まみれにならされちゃうより楽しめちゃうから許してあげよう♡」

数分間激しく出し入れされるアナルバイブ。
便まみれになり、太ももを伝い床にまで垂れ落ちる少し血の混じった腸液。

「直腸傷つけちゃった？　少し血が出てるわよ？」

「ほげえええ……はうう」

キツい顔をしてはいるが超美形である美紅に犯されて、痛みの中でも快感を得ている山田周吉であった。

「アイドルや女の子に犯されたい願望があったみたいだね……勃起までしちゃってるよ？よくそんな痛々しい状態でまたまた勃起なんてできるよねぇ？　あたし、関心しちゃう」

アナルバイブを少し引き抜き、少し反り返っている先端部を前立腺へ当てがい、激しくこね回し始める美紅。

「ほら、気持ちいいでしょ？」

「はうっ！ううう……」

「ペニスに触れないで射精させたげる。世に言うトコロテン射精ね♡」

『グニュグニュ！　グチュグチュ！』

腸液がローション代わりになり、ピンポイントで前立腺を掘られた周吉は、ついに射精に至ってしまうのであった。

「ほら、イけ！　ケツマンコ掻き回してやるうっ♡」

『グチュチュチュチュッ！！』

「うっ！　はうああっ！」

『ドクッ、ドクッ、ドロドロ……』

勢いはなかったが確実に尿道から精液が搾り出されてゆく。

ゆっくりと便と腸液まみれの極太バイブを肛門から引き抜くと、チェーンソーのエンジンをかける美紅。

『ヴィイイイーンッ！！』

けたたましいほどの爆音を奏でて回転刃を回転させる。

「ヒッ！？　や、やめ……やめてくださいっ！！」

「今頃敬語使っても許さないんだから。最後の部屋に送る前にダルマになってもらうわよ？」

膝辺りから右脚、左脚とチェーンソーの回転刃は男の脚を本体から切り離していった。
大量に噴き出す鮮血。
「あ、御免なさい。血止めの注射打ち忘れてた！　今止めてあげるね♪　ほれ！」
『プチュウウウウ』
超強力な血止め薬は、僅か数秒で男の流血を殆ど止めてしまう。
「副作用は２日後死亡……だけど今から死んじゃうから関係なーい！　あはは♡」
「がぎゃああああっ！！　ひぎいいいいっ！！」
両脚を切断された激痛に、莉央美紅の言葉など通じていなかった。
「そのままケツマンコピクピクさせながらじっとしてるのよぉ？それえっ♪」

両手も肘から見事に落とされてしまう周吉。
美紅の肛虐によって、緩んで少し開いたままになってしまっている肛門から大便が垂れ流れてくる。

「ついに便までもらしちゃった？　くっさいなぁもう……お仕置きが必要だわ」

右脚を大きく振りかぶる美紅。
セーラー服姿の短いスカートから真っ白なパンツが丸見えになる。

「キンタマ……蹴り潰してやるからね」

『ヒュンッ！……グシャアッ！！』

「ふんぐうううっ！！」

「先ずは一個。次は左のキンタマよ！それっ！」

『ヒュンッ！……ブチュウッ！！』

泡を噴いて白目を剥きながら意識を失う山田周吉。
両手両脚は切断されているためフリーだったが、腰と首にはまだ拘束具が掛かっているため、短い手脚をピクピクさせながら悶えるしかなかった。

「やだ……血の混じったセーエキが尿道口から垂れてきちゃって……オッサンってばエロいなぁ♡　あははは♪」

『ズブッ！』

便を出し切った肛門へ人差し指を挿しこみながら目を細める美紅。

「ケツマンコ……ガバガバになっちゃってるよ？直腸丸見えだし……ほんとエロいんだからぁ♡」

「ぶくぶく……はがはが……」

泡を大量に吐きながら悶え苦しむ男の拘束を解き、抱き抱えて部屋から運び出す美紅だった。

「さぁ人生最後の調教部屋にいきましょーね？オジサン……」

意識のないまま最後の部屋へ担ぎ込まれてくる山田周吉を待つのは……中学生アイドルの宮垣咲良だった。

「咲良……コイツの最期をよろしくね」

「うん。美紅がバラしたの？」

「そーだよ。ダルマ男の方が色々やりやすくない？」

「まぁね。あとはあたいに任せて」

「アナル調教済みだから。あ、あと、キンタマ両方潰してるからね」

「りょーかーい！」

特殊任務省には内緒にしていながら、レズカップルである鬼頭美紅と宮垣咲良。

美紅は笑顔で挨拶して咲良に後始末を預けて部屋を去っていった。

先ずはベッドにうつ伏せ体勢で首と腰をベルトで拘束し、痛みを少し軽減する麻酔と気付け薬を注射する。

「う、ううう……こ、ここは？」

「あれ？　あまりのショックに自分の身体がどんなことになってるかも忘れちゃったの？」

「お、お前は……宮垣咲良！？」

「へぇー。オッサンのくせにあたいのこと知ってたんだ？　オタクかな？　ロリコンっぽいしなぁオッサン」

動かしたくても動かせない手脚に気付いて気が狂ったように泣き叫ぶ中年男。

「ヨシヨシ……手脚がなくなっちゃったら怖いよねぇ～？」

頭を数回撫でてそっと囁く咲良。
そのまま髪の毛を鷲掴みにして、力任せに数本引きちぎる。

「ぎゃあああっ!?」

更にガッツリ掴んでまた引きちぎる。
何度も繰り返す内にどんどん髪の毛が少なくなってきた。

「痛いいっ！　痛いいいいっ！」

「涙ダラダラ流してみっともないなぁ……あと百本くらいかな？全部剥いてやるんだから」

咲良の手によって全ての髪の毛をむしり取られ、マダラ模様に血が滲み出てくる頭皮。

「うふふ！　マダラハゲみたいで面白い」

何度もひん剥いた頭を平手で張り倒す咲良。

「さてと。鞭打ち刑で背中側はほぼ無傷だったみたいだから……これで焼いちゃおっか？」

『シュー！！シュー！！』

小型ガスバーナーに点火して青く長い炎を噴き出させる咲良。

「や。やめでえええっ！！死んじゃううう……」

「え？四肢切断までされてまだ生きて帰れるとでも思ってたの？」

冷たい真顔でそっと横側に歩み寄ると、そっとガスバーナーの炎で背中を炙り始める。

『シュー！！……ジュジュジュジュジュジュジュウ！！』

「ふんぎゃああああああっ！！！！」

ダルマ男にしては凄まじい絶叫をあげる周吉だったが、鼻歌を歌いながら背中全体を焼いてゆく。

「うふふ……白く変色して皮が剥けていくのが面白ーい♡　熱傷ってこわいよねぇ～♪」

再び意識を失う周吉だったが今度は左手でお尻の肉を押し開き、肛門を露出させた。

「やだぁ～。お尻の穴がガバガバにされちゃってるじゃん……もう使い物にならないだろうから焼いてあげるね？」

肛門を満遍なく炙り、焼き続けると、肛門括約筋がドロドロに溶けて太ももを伝い流れ落ち始めた。

『ジュジュジュジュウ～！　ドロドロ……ドロドロ』

「んぎゃあああああっ！！　熱い痛い熱い痛いいいいっ！！　ふんぎいいいいいっ！！」

「あはは……どっちなんだよ一体……背中の方の痛みがまだマシ？　痛み止めが中途半端に部位によって効いたり効かなかったりしてるのかな？」

臀部を押し開いていた左手を離すと、山田周吉の首と腰の拘束を解いた。

「この状態だとそのうち麻酔が完全に切れたら……全身の痛みで悶絶死しちゃうなぁ」

独り言を言いながらも鎖で器用に男を逆さ吊りにしてゆく咲良。

釣り針のような形をした鉄製のフックを道具箱から取り出して、先端の鋭利さを確認する。

山田周吉の悲惨な現状……腹部側は鞭打ちで真っ赤にされ、背中側は火傷で水膨れだらけ為され……手脚の爪は全て剥がされて四肢は切断、頭皮は全てむしり取られる、更に顔面はタコ殴りで歪に歪んでいた。

「ぼちぼちクライマックスが近付いてきたよぉおじさん♡」

『ズポッ！！』

「はううっ！！」

大きく開かれた肛門に冷たく光る鉄製のフックを挿し込むと、大きくのけ反るダルマ男の全身。

太さが直径3センチほどもあるフックを両手を使って直腸深く突っ込んでゆく咲良。

「ほらほら！ケツマンコからその臭そうなヘソまでフックで貫通させたげるよ♡」

『グボボ！　ズブブブブブッ！！』

「うぎゃあああああああっ！！　死ぬっ！！　死ぬうううっ！！」

「だから死んじゃうんだってば！いっくよぉ？　えいっ！」

『ボコオッ！！……ドクドクドクドク』

逆さ吊りにされたまま肛門から突き入れられた湾曲を描いた冷たい鉄製のフックは、前立腺と直腸と小腸を次々と破壊してヘソから飛び出した。

夥しい量の鮮血が中学生の少女の足元を染めてゆく。

「あはは♪ケツ穴からオヘソまで貫通なんて……エロいなぁ♡」

頬を赤く染めながら少し自分の性器が濡れてくるのを感じながら冷たく微笑む宮垣咲良は、アイドルとは言えないほどの冷酷さであった。

「恥骨をえぐるように貫通してるからこのフックにロープを繋いでと……鎖の方は外して……あはは！　フックだけでぶら下がっちゃったぁ～♡」

「あばばばば……ぶくぶく……ぶくぶく」

逆さに吊り下げられて頭に血が上り、顔面が真っ赤に染まってゆきながら大量の泡を噴き悶絶する山田周吉。

「死ぬ前にチンポも頂くからね？」

カッターの刃をチリチリと音を立てながら伸ばして、そっとペニスの雁首へあてがう。

一気に横に引くと、床にポトリと音を立てて転がり落ちる亀頭部分。

「汚いなぁ」

『グシャッ！！……グリグリ！　グリグリ！』

落ちた亀頭部を、咲良は足の裏で踏みつけてミンチになるまで何度も擦り潰した。

「切断された尿道からオシッコ撒き散らしちゃってる……もうグチャグチャにしてやるんだから」

もう一度カッターを取り出し、ペニスを根元から切断すると、陰嚢も切り裂いて潰されてミンチになっている睾丸を指でほじくり出

した。

「やだぁ～……フルーチェみたい」

大きく身体をくねらせて大痙攣が起きる。

「おー。もう僕死んじゃいますぅ……のサインね？分かった。裏切り者の弟を恨みながら死んでゆきなさい」

ライフルを頭部へ向けて、そっと口の中へ捩じ込むと、ゆっくり引き金を引いた。

『ドォンッ！！……パァアンッ！！』

スイカのようにバラバラに吹っ飛ぶ頭部。
辺りに脳みそが飛び散る。

「うわっ！？　あたいの顔に脳みそが……最期まで汚ねぇオッサンだったなぁ……さよなら♡」

とある家族の陰謀（後編）（後書き）

円満愛衣、大野真子、小野メグ、鬼頭美紅、宮垣咲良の五人の少女たちによって凄惨な生き地獄を味わいながら死んでいった山田周吉。

弟への恨みを思い出す暇もなく、娘の笑顔を瞼に焼き付ける術もなく……地獄へと旅立った。

残酷処刑島に新たに一人の遺体が加わった……。

いじめ潜入捜査（前編）（前書き）

どこの国でも……どこの町でも終わることなく繰り広げられるイジメ……。

莉央たち小学生トリオが潜入調査部隊に選ばれた。

黒幕を見つけて制裁を加えることは出来るのであろうか？

『――とゆうことだ。これ以上幼い命が絶たれることを必ず阻止したい』
「分かりました。以前にもありましたよねそーゆうの……潜入捜査みたいなのが……」
『そうだったな確か……今回も小学生児童のイジメだ。くれぐれもやり過ぎんようにな。去勢とか論外だぞ？』
「分かってます。一週間その問題のクラスで様子を見て、イジメの本質を見抜いた後……黒幕たちには放課後にかるーくお仕置きしておきますね」
『うむ。では明日の朝、菅野くん宅玄関前まで迎えを寄越すからよろしく頼んだぞ』
「はい。また一週間後結果を報告します」

――日曜日の朝、菅野邸では平和な時間が流れていた。

「仕事なのかね？」
「うん。小学生の自殺が同じクラスで二回も続いたらしいの。明日

からその陰湿なイジメが続いてるとゆう隣町の私立小学校へ一週間ほど転校してくるよ。んで悪いやつを特定してから制裁してくる」

「特殊任務省には処刑じゃなくてそうゆうのをもっと念入りにやって欲しいもんだけど……必要悪とはいえわたしゃやっぱり莉央には人を殺してほしくないからね」

「え？　前にお婆ちゃん言ってたじゃん？　普通に裁いても足りないような極悪人には仇を討つ人間が必要だって。それがあたしたちなら賛成して応援してるって……」

「そ、そりゃそうなんじゃけど……遺族や被害者のことを思えばね。でも……まぁもう何も言わないよ。今回も他人の痛みを分からない悪ガキどもを懲らしめてきておやり！」

「は、はは。そうだね。頑張ってくるよお婆ちゃん」

朝食のトーストをホットのカフェオーレで流し込むと、二階の自分の部屋に上がり、風邪で寝込んでいる円満愛衣に声をかける。

「大丈夫？」

「あ、は、はい。少しマシにはなってきてます。お仕事ですか？」

「よく下で電話してたの聞こえたわね？　すっごい地獄耳だよ愛衣は」

「ありがとうございます。地獄少女に憧れてるだけに地獄耳と言われたら嬉しいです」

「……そうなんだ」

「はい。明日までには回復すると思いますので是非私にも……」

「今回は小学生トリオの出番。転校ごっこしてくるだけだから」

「……残酷処刑島でのお仕事ではなかったのですね。では引き続き私は学校休んで寝てます」

「一週間寝ててもいいよ」

「そんなに寝てたら腐っちゃいますよ」

クスクス笑いながらパジャマを脱ぎ捨て、私服に着替える莉央。

「私を置いてお出かけですか？」

「ちょっと久しぶりにパチンコ打ちたくなっちゃって……夕方までには帰ってくるよ」

「はーい。今晩抱いてくれます？」

「うん。あたしもぼちぼちやりたかったんだ」

「わーい！　じゃ楽しみに待ってますね莉央様♡」

彼女を作って二人暮らしをしている莉央の兄の親友である男が経営する近所の小さなパチンコホール。

平然と小学生がパチンコを打てるのはこの店だけであった。

「あらお嬢ちゃん！　久しぶりだねぇ！」

「こんにちは河野のおばちゃん。調子はどうですか？」

「エヴァの１０００ハマり台見つけて追いかけたら２０００回転まで連れていかれちゃったよ。オーナー兼店長に文句言ってやったらジュース代くれたから許してやったのさ」

「一発蹴りでもいれてやれば良かったのに……」

「持ち金六万全てスッちゃったから帰るね。頑張って仇を討っておくれ。ハハハ……」

手を振りながら笑顔で帰ってゆく近所のおばさんの後ろ姿はとても寂しそうだった。

「可哀想に……ノーヒットで１０００回もハマったらあたしなら台パンしちゃうよ」

――――五時間後。

『ドカッ！！』

「舐めてんの！？　１０００回転ハマりって……」

「お、お客さん……ん？　小学生？　あ、店長の言ってた警察に内緒で入店ＯＫのアイドルの子だね？」

「そうだけど！　どーなってるのこのクソ台？」

「お客様の引きが悪いだけでイカサマとかはしておりませんので……ご勘弁を……あとボタンを必要以上に強く叩くのは他のお客様のご迷惑になりますのでご遠慮下さいね？」

「分かってるわよ。もういいよ帰るから！　ストレス解消のつもりが逆にストレス満タンなっちゃった！　フンッ！」

怒り心頭で頬を膨らませて席を立つ菅野莉央。
その背中は同じ１０００回転ハマって帰った河野のおばちゃんよりも寂しそうであった。

「おい店員さん！　あのお嬢ちゃん怒るの無理ないわ。その台甘デジだぜ？　どーやれば甘デジで１０００回もハマれるんだよ？　この店最近怪しいなぁ」

「き、気のせいですよお客さん……ハハ……ハハハハハ」

帰宅後、奇跡のようなヒキの悪さを披露した莉央は、一番にシャワーを浴びて二階に上がる。

「愛衣！　お婆ちゃんがお粥作ってくれたから一緒に食べよ」

「あ、はい。でもまだ食欲があまり……」

「食べないのなら今夜のエッチは無しね。行為の最中に倒れられたら虚しいから」

「そ、そんな！　分かりました！　頂きます」

「分かればよろしい♪」

食欲のない愛衣に半ば無理矢理食べさせる莉央であった。
しばらく祖母と三人で雑談した後、二階へ上がる莉央と愛衣。
ベッドに入るとお互いのパジャマを脱がし合った。
ノーブラであった愛衣の胸をゆっくり握り、乳首を口に含む莉央。
女子高生と女子小学生の、不思議なカップルの快楽の一夜が幕を開ける。

「あ、あん、莉央様……気持ちいぃ」

更に反対側の乳首も激しくしゃぶり始める。
両手で両乳首を揉みしだきながら……。
パンツに染み込むほど陰部を濡らした愛衣は、今度は莉央の乳首を舐め始める。

「チュパチュパ……ペチャペチャ」

「んっ！……んん」

「気持ちいいですか？　莉央様」

「んん……うん。もっと激しく舐めて……」

お互いの乳首を舐め合ったところでお互いの秘部へ手を伸ばす。
お互いパンツを濡らしていたため、お互いが感じ合っていたことを改めて痛感する二人。

『クチュ！　クチュクチュ！』

ほぼ同時にお互いのパンツの上部から手を入れ、相手の膣口へ中指を挿し込み、膣内を掻き回した。

「あんっ、いいわよ愛衣……気持ちいい……指二本挿れて」

「あはあっ！　わ、私も気持ちいいっ！　私にも二本下さいっ！」

『グチュチュチュッ！！　グチュチュチュチュチュッ！！』

唇を重ね、舌を激しく出し入れする二人。

「んっ！　イクっ！　イッちゃうううっ！！」

「あたしも！　んんんんっ！！」

同時に仲良くオーガズムを得た莉央と愛衣。
愛液でグショグショになった指を舐めとる愛衣。
莉央の指に着いた自分の愛液も舐めとる。

「愛衣のはあたしが舐めとるつもりだったのに……」

「私は莉央様の恋人兼奴隷でもありますから……お風呂入ってない臭い指を舐めて頂くわけにはいきません」

「そんなの気にしないよ」

「莉央様は優しいですね……これからも愛衣のこと……見捨てないで下さい」

「愛してるのに見捨てるわけないじゃん！　さ、もう寝よ。あたし朝が早いんだ。六時には迎えが来るから」

「あ、ごめんなさい！　おやすみなさい莉央様」

「おやすみ愛衣」

強く抱きしめ合いながら眠りにつく女子高生と女子小学生の奇妙なカップルであった。

――――明くる日の月曜日。

菅野邸に特殊任務省の送迎車が到着する。

「おはようございます菅野様」

「おはようございます。富田と結城の家分かります？」

「はい。お聞きしておりますので順にお迎えに上がります」

新入りらしい五十代くらいの運転手は誇らしげにハンドルを握り直す。

「ではその後で例の小学校までよろしくお願いします」

「かしこまりました」

菅野莉央と同じく小学生であり、アイドルであり、拷問処刑人でもある富田美香と結城明日香を迎えに行き、送迎車は隣町の東西小学校へ到着した。

「到着致しました。あとはよろしくお願いします。毎日行きも帰りも送迎致しますので」

「ありがとう。運転手さん。また帰りの時間は藤堂長官に連絡しますね。お気をつけて。……ここね。自殺者を出すほどの激しいイジメがある小学校は……」

「へぇー！　私たちの学校より豪勢な創りだね」

莉央に続いて明日香も口を開く。

「さっさとやっつけて仕舞いにしたいけど……一週間たっぷり掛けてじっくり黒幕を選定しなくちゃだよね～」

ツインテールの黒髪をしごきながら美香も呟いた。

正門を入った時、慌てて校舎から飛び出してくる女教師が目に入る。
「おはようございます！　菅野さんに富田さんに結城さんですね？」
ようやく三人の場所に辿り着くと息を切らしながらしばらく早い呼吸が続く。
「はぁ、はぁ、はぁ……ごめんなさい。運動不足で少し走っただけでコレなんですよ……アハハ」
笑い事ではないのに平然と笑う３０歳くらいの女教師に呆れながら問いかける莉央。
「あたしは菅野莉央です。先生が例のクラスの担任の方ですね？」
「は、はい！　私が六年三組担任の矢井田仁美です！　本日は遠方よりお越しいただきありがとうございます！」
能天気そうでも意外と礼儀正しい矢井田先生に少し違和感を感じながらも案内されて職員室へ向かう三人だった。
「私が校長の遠藤です。特殊任務省とかゆう内密機関のことを教え

ていただき、この度特殊任務を遂行されるあなたたち三人を呼ばせていただきました。本当にこの度はお世話になります」

「初めまして。こちらこそよろしくお願いします」

莉央たち三人はほぼ同時に口を合わせて挨拶しながら頭を下げた。小学生児童相手にこれだけ礼儀を尽くすとゆうことは、莉央たちがどれだけ凄い任務をこれまでに遂行してきているのか、おおよその察しがついているみたいであった。

そのまま挨拶を終えた三人は、担任の矢井田仁美先生に連れられて三階の六年三組へ案内された。

「皆さん、今日からこのクラスに転校してきた菅野莉央さん、富田美香さん、結城明日香さんです」

「よろしくお願いします」

三人は順に挨拶して頭を下げていった。

「よろしくお願いします」

クラスの全員も挨拶を返す。

「この子達は顔の皮膚に病気があって……女の子ですし……特別に化粧を許可されてます。皆さんのご理解よろしくお願いしますね。菅野さんの席は……え～と、一番後ろの窓際ですね。富田さんはその隣、結城さんはそのまた隣です。横一例で申し訳ないですけど」

「はい。分かりました」

三人が後方へ移動して席に着く。
移動中好奇の目で見つめるクラスメイトたち。
特別に許可をもらってかなり厚化粧を施し、アイドルだとバレないようにしていたが、その厚化粧が気になって仕方ないのであろう。

「三人揃って同じ病気なんて有り得ぇんじゃね？」

「どっかで見たことあるような……」

「皮膚に病気？　でも化粧したら無茶苦茶可愛い子たちだな」

男子生徒たちのヒソヒソ話が莉央たちに聞こえてくる。

「やっぱり三人同じ病気って設定はまずかったかな？」

「藤堂長官、ほんとバカだよね」

「でももうそれで通すしかないわよ」

今度は莉央たち三人が超声を潜めてヒソヒソと話す。

この会話は誰にも聞こえていなかった。

一時間目の国語の時間が終わり、その時はいきなり訪れることになる。

「前野！　教壇の上に寝転がれ」

「そ、それだけはやめて……なんでもするから」

「バカかお前は！　なんでもするなら早く寝転がれ！　殺すぞ？」

前野修二。

このクラスではかなり背が小さく太っていて、見るからに気が弱そうなイジメられそうなタイプであった。

「大山くん、俺たちが寝かせようか？」

「そうだな……動きそうにないから強引に頼むわ中山」

「分かった。おい、小山も手伝えよ。前野を教壇に寝かせてやろうぜ」

クラスのボスらしき男子児童である大山太朗の命令にかなり抵抗する前野修二を、無理矢理引っ張ってゆく子分のような中山次郎と小山三郎。
横に長目に出来ている教壇へ強引に仰向けに寝かせた。
暴れるたびに頬をビンタで打ち、何度も叩かれるうちに抵抗しなくなる。

「大川、いつものように頼むわ」

「うん。分かった」

背の高いスポーツの出来そうな女子がスッと立ち上がり、教壇の方へ歩み寄る。
黒髪のポニーテールを揺らしながら手際よく前野修二の制服を脱がせてゆくのであった。

「え？女の子までイジメに参加してる？　ほっといていいの？　莉央ちゃん……」

「とりあえず様子を見なきゃ……まだどうゆう構図か理解できないわよ」

明日香の問いに冷静に答える莉央。

「男女共同でイジメするなんて……最低ねコイツら！」

美香は頬を赤く染めながら怒りを露わにする。

ついにズボンのベルトを外し始める女子、大川優奈。

「大川さん、下半身だけは許して……恥ずかしいよぉ」

「ごめん。みんなの前で下半身も素っ裸になってもらうわ」

「そ、そんな……」

『ズルズル……ズルリッ』

「わあっ！！　やめてええっ！！」

絶叫する前野修二に構うことなく真っ白なブリーフパンツに手をかける大川優奈だった。

「大川、一気にずり下ろしちゃえ！　アハハハハ！」

高笑いしながら見物する、今の所主犯格らしく見える大山太郎。

『ズルズル……ストーン！』

「ヒャアッ！！　わーんわーん！！」

女子児童によって足首までパンツをずり下ろされ、クラス全員に陰部を見られて泣き叫ぶ前野修二。

そのままズボンとパンツを足首から剥ぎ取って床に落とす大川優奈の表情は氷のように冷たく見えた。

「次、中川玲那ちゃーん！　お前もいつものやつやったれやー♪」

「はーい」

今度は美香と同じようなツインテールの背の小さな女の子が前野修二の元へ歩み寄る。

中川玲那はボールペンをポケットから取り出すと、器用に親指と人差し指の上でクルクルと回転させる。

「前野……コレ……突き当たりまで挿れてあげるからね？」

「やだあっ！　そんなもの挿れないでえええっ！！　お願いします中川さんっ！！　許してよおおっ！！」

「ほら膝を立ててお尻の穴が見えるように脚を開きなさい。ジッと

してないと痛いわよ？　ほらっ！」

『ギュウウウウッ！！』

「んぎいいいっ！？」

開脚を強要しながら思いっきり二つの睾丸を同時に左手で握り込む中川玲那に、思わず屈服してしまい、言うがままに両脚を大きく開く前野だった。

「じっとしてろ！　すぐ終わるから」

「は、はい」

『ツプッ！……ズブブブブ』

「んがあっ！　痛いっ！？　痛いよおおっ！！　やめて中川さんっ！！」

「玲那様、やめてください、でしょ？　どんどん入ってくよお？汚い穴に♡　ほらほらあっ！」

『ズブブブブブブッ！！』

ついに突き当たりのＳ字結腸まで届くボールペンの先……芯を引っ込めてあるとはいえ、直腸をグリグリ突かれる痛みは正に激痛であった。

「ギャアアアアッ！！　痛い痛い痛いいいいっ！！　やめてくださ
い玲那様あああああっ！！」
「だーめ♡　やめたげなーい♡　ほらほらほらほらあっ！」
泣き喚きながらツインテールの少女によってボールペンで肛門を
掻き回されながら腰をウネウネとくねらす前野の姿に、クラス全員
が大爆笑を始めた。
「アハハハハ！　痛そう♡」
「なんだコイツ情けない！　女にアナル掘られてないちゃってるぜ
？ガハハハハハッ！！」
ゆっくりとボールペンを肛門から引き抜くと、便まみれになった
それを、前野修二の口へ捩じ込む中川玲那。
「あたしのボールペン……汚れちゃった。綺麗にしてね？」
「ううう……オエエエエッ！！　うごごご……」
強引に口内へ捩じ込んで掻き回す中川玲那とゆう少女の姿はなぜ

か富田美香と被ってしまう莉央だった。

「あの子、美香ちゃんみたい……」

「え？　あたしはあんな何も悪くない子のアナル責めたりしないよ？　一緒にしないで莉央ちゃんってば！」

いじめ潜入捜査（前編）（後書き）

唐突に始まったクラスでのイジメ。
莉央たちの想像を遥かに超える凄まじいものであった。
男子のみならず、女子までも参加しての実行、更にクラス全員による嘲笑。
莉央たち三人は一週間も見守ることが出来るのであろうか？

「ごめん、イジメ見てたら私、少し濡れてきちゃったみたい……」

「こら！」

「おい！」

一番真面目な結城明日香の一言に、思わずツッコミを入れる莉央と美香であった。

いじめ潜入捜査（中編）（前書き）

次々と現れる違和感に立ち向かう莉央たち三人。
真の黒幕に辿り着くことが全ての解決へと繋がる。

「何か変だと思わない？」

「え？」

「何が？　私が濡らしちゃったこと？」

凄惨なイジメを目の当たりにしながら莉央が美香と明日香に問いかける。

咄嗟に聞き返す美香だったが、明日香の返事は見当違いであった。

「ち、違うよ！　あの子……見て」

莉央の指差す先には、色白で女の子のような顔をした超美形の男子児童が教科書をひたすら黙読しているのが見えた。

「あらまぁ！　すっごいハンサムな男子ですこと……」

美香は頬を赤くしながら目を見開いてその男子児童を見詰める。

「確かにあの子……超男前だけど……それがどうして“変”だ

と思うの？」

明日香は不思議そうに莉央に質問した。

「みんなイジメを見ながら……言い方を変えれば傍観することによってイジメを〝盛り上げてる〟のに、あの子はそれを無視して教科書読んでるの」

「うんうん。で？　それがどうして変なのよ？」

美香も頬杖突きながら莉央をチラッと横目で見て質問を投げかける。

「あれだけ華奢（きゃしゃ）そうな女の子みたいな顔した美形なら、即イジメの対象になりそうなもんだけど……しかもイジメに参加してるように見えないし……傍観すらしていないとなれば、余計いじめっ子たちが黙っていないでしょ普通……」

「んん……そう言えばそんな気も……あ！　大欠伸した！」

「ほんと……今の大欠伸はボスらしき大山とかゆうヤツに見られてたわよ？　なのに全然文句も言わずに素っ裸の前野を見てる。確かに何か変だわ」

美香と明日香も違和感に気付いて、色白の女の子みたいな顔をした男子児童をひたすら見詰める。
ふと振り向いたその男子と目が合う莉央。
微かに微笑んだように見えた。
「あ！　今あいつあたし見てニヤけたよ？」
目を細めながらガンを飛ばす莉央だったが、静かに目を逸らして今度は机の上に置いた両手におでこを押し付けて寝始めた。
「なっ、何アイツ……なんかムカつくんだけど」
「まぁまぁ莉央ちゃん！　そんなことよりまた他の女子生徒に前野が……」
ふと教壇に目を遣ると、今度は皮カムリのペニスをグリグリと引き剥く女の子の姿が……。
「痛いいいいっ！！　やめてえええっ！！」
「全部までは剥かないわよ。尿道口くらいは全部見えるまで剥いてやってるの！　ジッとしてなさい！」

腰ほどまでの長い黒髪を揺らしながら親指と人差し指でペニスの皮をグリグリ揉みしだきながら剥いている女の子。

「小川はチンポの皮剥くの好きだよなぁ？　前の死んだヤツなんか血まみれになってたじゃんか？　ガハハハハ！」

「愛菜ちゃん！　根元まで引き剥いてやってよ！　コイツのひん剥かれたチンポ見てみたい♡」

小川愛菜。
女子生徒のイジメは三人目へ突入していた。

愛菜はクラスメイトの女子たちにエールを贈られながら何度も何度も下方へ皮をズラしてゆく。
メリメリと音を立てて、尿道口を痛々しくパクパク開閉させながら号泣を始める前野修二。

「ぎゃあああっ！！　痛いいいいっ！！　やめて小川さんんんっ！！ひいいいっ！！」

「おしっこ出る穴が開いたり閉じたり……エロいわねぇほんと……中身はピンク色で綺麗だよね？　うふふ。ほうら、もっと剥いてあげるよ♡」

『グリグリ……メリメリ……メリメリ』

「んぎゃあああぁっ！！　痛いよおおっ！！　わーんわーん！！」

女子数人で全身を押さえつけられて身動きが出来ないまま、ゆっくりとペニスの皮を引き剥かれてゆく前野修二。

「莉央ちゃん！　あれヤバくない？」

「そうよ！　このままほっとけば雁首辺りの皮がズリ剥けちゃって出血しちゃう……莉央ちゃん？」

少し神妙な表情で小川愛菜のイジメ行為を見ていたが、美香と明日香に急かされて、ついに立ち上がる莉央だった。

「ちょっと！」

小川愛菜の手が止まる。
クラスメイト全員の視線が菅野莉央に注がれた。

「あのさ……チンポの皮剥いちゃうのはそれくらいにしとかないと……救急車呼ばなきゃいけなくなっちゃうよぉ？　てへっ！」

一瞬空気が固まる六年三組。
しばしの沈黙が流れる……。

「り、莉央ちゃん？　なんか凄いこと言っちゃった？」

「え？　い、いや、普通に止めたつもりだけど？　あたし何か変だった？」

美香が沈黙に堪えられず思わず莉央に問いかける。
莉央はなぜか恥ずかしくなり、頬を真っ赤にして頭を掻き始めた。

「ガハハハハ！！　お前、可愛い顔してるのにチンポとか言うんだな？　なかなか面白いヤツだ！　なぁみんな？」

「アハハハハハ！！」

大山太朗の一言に、クラスが爆笑の渦に呑まれてゆく。
とりあえず前野修二の雁首を救う事には成功したみたいだったが、釣られて笑うしかない莉央たち三人であった。

『ドカッ！！』

「！？」

笑いを断ち切るように大きな音が教室内へ響き渡る。
皆の目は一人の男子児童に注がれた。

美男子である色白の児童が、自分の机を思いっきり蹴飛ばしてから立ち上がったのであった。

「は～あ……ダル……ふぁあああ～」

そう呟くと、大欠伸しながら静かに教室から出て行った。

「お、大山くん！　荒木くんどうして急に？」

「そ、そんな事知るかよ！　オ、俺は普段通りイジメを指示してたし……キレられる覚えはねぇ！」

子分のような男子、中山次郎から声をかけられ、慌てふためきながら言い訳とも取れる台詞を震えた声で吐き出す大山太朗。

「あの転校生のヤツを怒らずに笑いで済ませたから怒ったんじゃ？」

「そ、そうか？　なるほど……な、ならアイツら転校生のせいだな！」

子分のような男子、小山三郎に諭され、莉央たちの方へ詰め寄る大山太朗。

「おい！　お前らのせいで荒木くんを怒らせちまったじゃねぇか！？　どう落とし前付けてくれるんだ？　ああ！？」

恫喝してくる大山に即座に言い返す富田美香。

「何偉そうに女子相手にキレてんのっ！？　あんな女みたいなガキにビビりやがって！　このヘタレ野郎がっ！！」

「なっ……何だとっ！？」

大山が拳を握りしめて美香に詰め寄ったその時、教室のドアがゆっくり開き、大きな声が聞こえてくる。

「はいはいはい！　二時限目の授業を始めますわよ！　みんな席に着いて！」

手をパンパン叩きながら担任である３０歳のベッピン女教師、矢井田仁美が入ってきた。

「ちっ、覚えてろよお前ら！　次のターゲットはもう決まったからな！？」

「べーだ！」

思いっきり両目を瞑って舌を突き出しながら、あっかんべーをする子供みたいな美香。
それを見た莉央と明日香は思わず吹き出してしまう。

「笑ってやがる……大山くん、アイツら完全に俺たちの事舐め切ってやがるよ？」

「わ、分かってる！　次の休み時間に絶対ギッタギタにしてやる！」

クラスメイトみんなが席に着き、前野修二も服を全て着てから席へ戻った。

「二時限目の授業は算数です。教科書の５５ページを開いて」

とりあえず授業が始まったが、前野修二に服を着せて、保健室へ連れて行く莉央と明日香。
手を振りながら見送る美香だった。
ぐっすり眠りについたのを見届けてから教室へ帰る二人。
笑顔で迎えてくれる能天気な美香。

「お疲れ様！　さ、作戦作戦っ♪」

完全に悪ガキたちに目をつけられた莉央たちは、次の行動の作戦を練らなければならなかった。

「莉央ちゃんの言ってた通りになったよね？　まだあのハンサム帰ってこないし……」

「ほんとほんと！　先生も注意出来ないほどの何かを持ってるってこと？　ヤバくない？」

二人に急き立てられるように話しかけられる莉央。

「……一番の黒幕はアイツかもね……荒木永遠(あらきとわ)か……まだ大山たちをぶちのめすのは早過ぎるんだけどなぁ」

「莉央ちゃん!?　そ、それ……クラス全員の名簿？　いつの間にそんな物持ってたの？」

「校長から預かってたのよ。まぁこんな物見なくても、その内悪ガキたちの名前は覚えていくようになると思うんだけど……」

黙り込んでそれぞれ何かを考え始める莉央たち三人……。
どんどんと二時限目の授業も終わりに近付いてくる。

「大変だよっ！　早くどうするか決めないと！　大山があたしたちをやっつけにきちゃう！」

「おい！　そんなセリフを笑顔で言わないの！」

何か今のシュチュエーションを楽しんでいるようにしか見えない美香は、自分の意に反して笑顔で言ってしまったようだ。

咄嗟に明日香にツッコミを入れらて、舌を出して笑って誤魔化すのであった。

「はぁ～……みんなほんと能天気だよね？　あたしだけ真剣悩んでたらバカみたいじゃん……」

刻々と時間は過ぎて、二時限目の算数の時間も終わろうとしていたその時、美男子児童の荒木永遠が教室に帰ってきた。

「へぇ～。先生何もおこらないいんだね……無茶苦茶怪しいなぁ」

美香は目を細めながら、荒木を気にもせず授業を続ける矢井田先生を静観し続けた。

ついにチャイムが鳴り、二時限目の授業が終わる。

荒木は大山太朗のそばへ行き、教室を出て行く。

その後をついてゆくように大山もそそくさと出て行った。
「あれ？アイツ私たちをやっつけるんじゃなかったのかな？」
明日香はつまらなさそうにため息混じりで呟いた。
「二人で大事な話でもしに行ったのかな？」
美香も腕組みをしながら教室のドアを眺めていた。

——三階にある六年生用の男子トイレ。

「や、やめて荒木くん……今まで何でも言うこと聞いてきたじゃん？」
「笑いに変えてあの転校生たちを許そうとしたのが気に入らないんだ。全裸になれ」
「そ、そんな！二度と甘い顔しないから許して……」
土下座をする大山太朗の目の前にしゃがみ込み、胸ぐらを掴むと、何度も激しく平手打ちで顔面を叩く荒木永遠。

見た目は完全に美少女だが、気性は荒いみたいである。
観念した大山太朗は泣きながら制服を全て脱ぎ、全裸になった。
ゆっくりズボンとパンツを下ろす荒木。

「ひっ！？な、何を！？」

目の前には美少女のような顔とは反対照的に、小学生とは思えないほどの大きなペニスがいきり勃っていた。

「四つん這いになってケツをつきあげるんだ」

「な、何をするの？あ、荒木くん？」

恐る恐るお尻を突き上げる大山の尻を思いっきり引っ叩くと、ゆっくりイチモツを同級生児童の菊門へ押し当てた。

『ピトッ……』

「うわあっ！？あ、荒木くん！？何をっ！？」

『ズブブ……ブブ』

直径3センチ、全長12センチはあろうかとゆう巨大なペニスはどんどんと大山太朗の直腸へ捩じ込まれていった。

「はぎゃあっ!?　いだいいいいっ!!」

『ズブブ!　メリメリメリメリ……ブチュウッ!!』

「ぎゃあああっ!!」

「根元まで入っちゃったな。しばらく我慢しててね。僕はアナルしか興味はないんだ……」

そのまま腰を鷲掴みにすると、激しく腰を振り始める荒木。

『グチュグチュグチュグチュ!バッコンバッコンバッコンバッコン!!』

「んんんんっ!!　ぎひいいいいっ!!　やめてえええっ!!痛いよおおおっ!!」

泣き喚く大山太朗を気に留めることもなく激しく腰を振り続け、ついに拷問括約筋が少し裂けて鮮血が垂れ流れてきた。

「ん?　血が出てきちゃった。僕のイチモツはそんなに大きかった?」

「は、はい……無茶苦茶大きくて……尻の穴が……張り裂けそうですぅ……わーんわーん！」

「いじめっ子の癖にワンワン泣かないでよ。分かった。もう出してあげるから」

一度止めていた腰を再び激しく振り続け、腸液溢れる直腸内をペニスが擦れる卑猥な音がトイレ内に響き渡る。

『バコバコバコ！　グチュグチュグチュグチュッ！！』

「んがあああああっ！！　痛いいいいっ！！」

「イク……ほらたくさん飲むんだ僕の体液を……うっ！」

『ドピュッ！　ドピュピュピュピュピュピュウッ！！』

「はぎいいいいいいっ！！……ガクンッ」

肛門と直腸のあまりの激痛に、気絶してしまう大山太朗。

ゆっくりとパンツを履き、ズボンも履き終えると、トイレから出てゆく荒木永遠。

二人の女子生徒、加藤麗子と佐藤唯子が見張りに立っていた。

「ありがとう。君たちの見張りのおかげで安心して大山を犯してやれたよ」

「いえ……」

「どういたしまして……」

二人は静かに荒木に頭を下げると、男子トイレに入ってゆく。ティッシュで血と精液塗れにされた大山の肛門を、二人がかりで丁寧に拭き取り、パンツやズボンを履かせてゆく。

「うう……」

目が覚めた大山は、人生で初めて体験する同性からのレイプにより、かなり精神が崩壊しかけていた。

解放してくれる二人の女子の前で再び大声で泣き始める。

「痛かった？　あんな可愛い顔した男の子から男に犯されたのなら……アナル……少しは感じちゃったんじゃないの？」

「ぐすん、ぐすん……」

「そうでもなかったか……その内あなたも自殺しちゃうのかなぁ～……頑張って生きなよ？」

「ふーん……やっぱりね」

「だ、誰！？」

二人が振り向くと、そこには転校生の三人が立っていた。

「自殺の原因は大山のイジメじゃなくてあの荒木永遠とかゆう女みたいなガキの仕業だったのね？」

「ちょっと！　ガキとか言ったら酷い目に遭わされるわよあんたたち？」

「そうよ！　転校生だから何も知らないんだろうけど荒木くんのお父さんは東部地方極東部を仕切るヤクザの組長なの！　逆らったりしたら拐われて埋められちゃうよ？」

莉央は加藤と佐藤の質問には答えず、そっと大山太朗のそばへ歩み寄り、膝をついてしゃがみ込んだ。

「荒木に酷い目に遭わされたんだね？」

「ううう……痛い……けつの穴が焼けるように痛いよおお……ぐすん……ぐすん」

まだショックと痛みから立ち直れないでいる大山太朗は膝をガクガク震わせながら涎を垂らしていた。

「可哀想に……早く荒木ってゆう女男やっつけちゃおうよ！」

富田美香が拳を握り締め何度も空を殴る素振りをする。

「莉央ちゃん……どうする？」

明日香も哀れな大山太朗の姿を見つめながら莉央に問いかける。

「まだ待ってくれるかな？　一つ心残りがあるの」

「もう荒木やっつけちゃったら終わりじゃん！」

剣幕を起こす美香の方をそっと向いて立ち上がらながら呟く莉央。

「あの女担任……矢井田仁美がまだ得体が知れないから」

「あ！そういえばあんな能天気な担任生徒からズタズタにされててもおかしくないよねそう言えば……」

「矢井田先生か……明日一日くらいは様子を見てからにしよっか…

…元々一週間の予定だったたんだし」

美香も明日香も矢井田先生の素性を探る案に賛成し、荒木をやっつけるのは明日以降にすることに納得したのであった。

「私たち……殆ど相手にされてないみたいだからこれで失礼するわ」

「全くだわ。あんたたち……死にたかったら好きにしなよ。忠告はしてあげたからね私たち……」

加藤麗子と佐藤唯子は莉央たちを睨みながら男子トイレを後にした。

「さぁ立って！　男なんだからしっかりしてよ」

「ううう……しくしく」

莉央と明日香が肩を貸して、大山太朗を保健室まで連れてゆく。

「あたしたちをギッタギタにするとまで威勢を張ってたのに……はぁ～情けない」

美香はその姿を見て大袈裟に肩を落とした。

結局三人で夕方まで側にいながら大山太朗の心のケアを施した為、結果的に自殺には至らずに済んだ。

一人の男子児童の命を救えた功績は大きなものとなる。

いじめ潜入捜査（後編）（前書き）

ついに矢井田仁美先生と荒木永遠のしがらみの全貌が明かされてゆく。

イジメに関わった東西小学校六年三組の生徒たちにも厳しい制裁が下されることになる。

いじめ潜入捜査（後編）

「お疲れ様でした」

「送迎ありがとうございます。あの、お名前は？」

「梶田孝之（かじたとしゆき）と申します。５１歳になります」

「梶田さんね。また明日もよろしくお願いします」

「はい。お任せください菅野様」

特殊任務省の送迎車で帰路につく莉央たち三人。

「矢井田仁美……絶対なんかに絡んでるよね？」

「あたしもそう思う！」

富田美香に答える結城明日香。

「……クラスの子たちと今回いじめられた子たちに深く掘り下げた話を聞いてみるかな明日から……」

菅野莉央も更なる決意をかためた。
小学生トリオによる一日目の潜入捜査は、無事と言えるかどうかは分からないがとりあえず終了した。
それぞれ自宅に送り届けて深く頭を下げて帰って行く運転手の梶田孝之。
「はぁ……まさかあの女みたいなのが凶悪とは……でも少しは予想できてたかもね」
「そんな綺麗な顔してるんですか？　その荒木って子は？」
「うん。髪を伸ばせばその辺の女の子より可愛いと思うよ」
「そうですか……ヤクザの組長のドラ息子のくせにそんな美男子なんですね」
祖母と円満愛衣と三人で夕食を食べながら今日の出来事を色々と語る莉央。
「ヤクザか……また話がややこしくなりそうだねぇ莉央」
「……心配ないよ。あたしたちは警察と同等クラスの国の機関に属してるからいざとなれば組長ごと処刑できるし」
「ヤクザよりヤクザだね莉央は……暴力には暴力だね……はぁ」

「ごちそうさま」

深く溜息をつくお婆ちゃんを見ながら食後のコンソメスープを飲み干すと、スッと席を立ち二階へ向かう。

「あ！　莉央様！　私も食べ終えたので一緒に……ごちそうさまお婆ちゃん」

部屋に入るとすぐにパジャマに着替えて、そそくさとベッドに入る莉央。

「お風呂入らないのですか？」

「今日はいい。朝にするよ。なんかとても疲れちゃった」

「なら私もやめときます。もうかなり風邪は治ってきたのですけど」

「そうゆう時がぶり返す恐れ高いのよ。お互いお風呂は明日にしよ」

愛衣もパジャマに着替え布団に入る。

抱きしめようと思ったが疲れている莉央を気遣ってそのまま目を閉じる愛衣だった。

その頃、とあるマンションの一室では…………。

「ん、んん……はぁはぁ」

『グチュ！　グチュチュチュ！』

「ああっ！　んひいっ！」

小学生児童の肛門へ中指を挿し込み、直腸を執拗に掻き回す女性がいた。

「ほら、ここ？　気持ちいいでしょう？」

「は、はい……そこ、き、気持ちいいです」

『グリグリグプププブッ！！』

「あっ！　イ、イクっ！！　イッちゃううううっ！！」

「先生の膝の上にタップリ出しなさい」

『ドピッ！　ドクドクドクドク……ひくひく』

矢井田仁美先生の肉付きの良い太ももの上に、大量の精液を撒き散らす六年生の美男子……荒木永遠。

「私の前立腺揉みほぐし強制射精はどうだった？　毎回たくさん射精しちゃってるわねぇ？　うふふ♡」

「はぁ、はぁ、ボク、仁美先生のこと愛してる……先生にお尻責められるとても興奮しちゃいます……はぁ、はぁ」

「そんなにスッゴく歳上の私のこと好きになってくれて嬉しいわ♪　次は電気アンマでイカせてあげるから仰向けに寝て脚を開きなさいね」

「は、はい」

ワンピースの隙間から矢井田仁美の黒いパンツがチラチラと見える。

その状態でグリグリと足の裏で荒木永遠の勃起したペニスを踏みまくる。

他の人間たちにはかなりのSでも、この担任である矢井田仁美に対してだけは超Mと化する永遠であった。

「う、うううっ！　仁美先生……もっと激しく踏んで下さい」

「エッチねぇ永遠くんはほんと♡　いっくよぉ？　それそれぇっ！」

『スコスコスコスコッ！！　グリグリグリグリッ！！』

「んあああっ！　イ、イク……イッちゃうううっ！！」

『ドクドクドクドク……ドクンドクン……』

そっと精液まみれのペニスを右手で握り、口に咥える矢井田仁美。

『ペチャペチャ……チュウチュウ……ごっくん！』

精液まみれのペニスを舐めたり、綺麗にすると今度は頬に両手を添えてそっと口付けをする。

「んっ！　んんん……」

激しいディープキスが数分間も続けられた。
ペニスを左手でこね回しながら……。

１２歳の男子児童との淫らな行為を終えると、添い寝に入ってそっと囁きかける矢井田仁美先生。

「あのね永遠くん……次はあの転校生の菅野莉央とかゆう子をズタズタにしてやってくれないかなあ？　なんか目つきが先生まで見下してるように見えてムカつくんだよね……」

「先の二人みたいに自殺するほど徹底的にやっちゃいます。先生のためなら殺してもいいです」

「殺しちゃダメ♡　散々恥をかかせて性的なイジメを繰り返すうちに勝手に死んでくれるわよ自らね♡」

「はい。三人目の自殺者にその菅野莉央とかゆう長い黒髪の女になってもらいましょう」

「頼んだわよ。あ、永遠くんは私に犯される以外は男子のアナルしか興味ないんじゃ？」

「はい。女を虐める時はチンポ突っ込む気にもならないから、縦笛でも性器にぶち込んでグチャグチャに掻き回してやりますからご心配なく」

「あはは！　性器破壊かぁ♪　そりゃ残酷だわ♡　自殺した二人や今回の大山太朗みたいにアナル犯して欲しかったんだけど……仕方ないわね。期待してるわよ永遠くん♡」

パンストとパンツを脱ぎ、荒木永遠の顔面へ跨る矢井田仁美。

「ほら、先生のアソコ……くまなく舐めて綺麗にしなさい」

「んんっ！　は、はい……ペロペロ……ペチャペチャ」

「あんっ♡　いいわよぉ……ヒダヒダの裏の恥垢も全て舐め取りなさいねぇ？　あはは！」

半時間ほども矢井田先生の性器を舐め続けた永遠……二度も射精しておきながら再三ペニスをフル勃起させていた……。

父親である組長には友人の家に泊まると嘘をついてしょっちゅう矢井田のマンションへ泊まりにきていた為、その時は安心して矢井田先生との熱い夜〈?〉を、堪能できた永遠であった。

――二日目の朝。

「皆さんおはようございます。本日の一時限目は社会ですね。85ページを開いてもらえますか？」

二日目も、淡々と矢井田先生の授業が続けられてゆく。

何度となくチラチラとこちらを見る荒木永遠に更なる違和感を感じる莉央たちだった。

「莉央ちゃん、せっかく話を聞こうと思ってたのに大山太朗休んじゃってるね？　やっぱり昨日の荒木のアナルレイプが相当キツかったんだろうね？」

「そりゃそうよ。同性なんかに犯されたら普通の子なら自殺まで考えちゃうでしょ。あ、自殺した二人もやっぱり荒木のレイプが……」

莉央に聞いたのに明日香が咄嗟に口を挟んだ。

数秒間置いてから莉央が口を開く。

「あの目つき……あたしたちに何か接触してきそうな雰囲気ね……次の休憩時間に多分来るわよその時が……」

「え？　そうなの？　でどうするの莉央ちゃん？」

「あたしのこと舐めてるからボコボコにするつもりで来そうだし……クラスのみんなの前で思いっきり恥かかせてやるよ」

指の骨をバキバキと鳴らす莉央に、美香と明日香は青ざめる。

「は、はは。お手柔らかに……去勢とかダメだよ？」

「分かってる。ついでにあの女教師とのしがらみも全て聞き出してやるんだから！」

一時限目の授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響く。
おそらくこの学校での潜入捜査では最期の仕事になるであろうことを三人は予測していた。

ゆっくりと席を立ち、最後列にいる菅野莉央たちの前へやってくる美男子。

「あのさ、キミは菅野莉央だっけ？　悪いんだけどクラスのみんな

の見てる前で素っ裸になってもらうよ？」

「はぁ？」

「聞こえなかったの？　裸になってもらうよ？　そしてボクが持ってるこの縦笛……キミの大事な穴へ突っ込ませてもらうから。死ぬほど痛いだろうけどボクは女をイチモツで犯す趣味はないからね」

「はあぁ！？　何訳のわかんないこといってるのかな男のくせに女顔の美男子くん♡」

眉間にシワを寄せて一気に詰め寄ってくる荒木永遠。

「一応男だから。大山たちを使わなくてもボクだけでキミくらい簡単にボコれる！」

いきなりストレートで顔面に殴りかかる荒木永遠に、クラスメイトたちは立ち上がって応援を始めた。

「頑張って荒木くん！」

「そんな転校生やっつけちゃえ！」

「早く素っ裸にひん剥いちゃってぇ！　あははははは♪」

クラスメイトの声援を受けて荒木のパンチに磨きがかかる。
かわされながらも何度もかなりの速度の正拳が莉央に襲いかかってきた。
「ん？　なかなか当たらないなぁ。マグレでかわされちゃってだけじゃんねきっと……そろそろ本気でいくとする……」
『バキッ！！』
「かっ！？……がはあっ！？」
『ププーッ！！　ポタポタポタポタポタ……』
真っ赤な鼻血が勢いよく噴き出し、教室の床を染めてゆく。
一瞬莉央からの鼻血と思った生徒も居たであろうが、それは荒木永遠からのものであった。
仰向けに倒れ込んでから慌てて起き上がるが、尻餅体勢から立ち上がれない。
鼻の鼻が陥没骨折しているみたいで、形が凹んでしまっている。
「あ、あわわわ……え？　な、何がどうなったんだ？　ええっ！？」

そのまま両腕を組んで股を少し開いて、荒木の正面に仁王立ちする菅野莉央。

「はぁ〜。あんたみたいな甘ったれた悪童……クソガキにはきつ〜いお仕置きが必要だよね？」

一瞬にして教室全体の空気が変わる。

沈黙の中、そっと呟く莉央の声だけが不気味に響く六年三組であった。

『パァンッ！！』

「ぶっ！！」

顔面へ超高速のサッカーボールキックを叩き込むと、瞬時に馬乗りになり、マウントからの激しいパウンドが開始された。

『バキバキッ！！　ドカッ！！　グシャッ！！』

「ひんぎいいいいっ！！　痛いいいいいいいっ！！」

顔面中腫れてボコボコになる荒木永遠の胸ぐらを掴んで強引に引き起こすと満面の笑みでそっと囁きかける莉央。

「上の服はいいから下半身だけ全部脱いでくれる？」

「ううう……そ、そんな……恥ずかしい……やめて」

『パンパンパンパンパンパンパンパンパンッ！！』

「ひぎぎぎぎぎいっ！？」

猛烈な往復ビンタに激しく左右に揺れる男前の原型さえ留めていない荒木永遠の顔面……。

結局は結城明日香と富田美香によって四つん這い体勢に押さえつけられ、菅野莉央にズボンとパンツをずり下ろされた。

「先ずはズボン……んでパンツ。えいっ！」

『ズルリッ！……ストーン！』

「やあああっ！？　や、やめてええっ！！」

泣き叫ぶヤクザの息子、荒木永遠のお尻を突き上げさせ、激しいお尻叩きが開始された。

「あはは。顔も綺麗だけどお尻も綺麗だね？」

「やだ……や、やめ」

「悪い子には……お仕置きよっ！　それっ！」

『パァンッ！！』

「ぎゃっ！？」

腕まくりをした後、思いっきり平手打ちで臀部を引っ叩く莉央。
そのまま百裂拳のような凄まじいお尻叩きが繰り広げられた。

『パンパンパンパンパパパパパパパパンッ！！』

「ひんぎゃあああああっ！！　死ぬうううううううっ！！　やめてええええええっ！！」

赤から紫色に変色してゆく美男子の臀部……ガクガク全身を震わせながらついには小便を漏らしてしまう。

『プシャアア～ッ！！』

「あら？　お漏らし？　あんたが持ってたあたしを辱める予定だったそこに落ちてる縦笛……コレをお尻の穴にぶち込んだあげるから♡」

そう言いながら舌舐めずりして両手の親指をお尻の肉へ当てがい、全開に左右へ押し開く。

「ほら、美男子のアナル、ご開帳♡」

『グリッ！……クパァ〜ッ！！』

「やだあっ！！　見ないでええっ！！　ひいいっ！！」

「美香ちゃん、出番だよ。コイツのことタイプなんでしょ？」

「え？　ま、まさかぁ〜！　あは、あはは……」

頬を赤く染めながらも莉央から縦笛を床から拾い上げて、小さな菊門へ口を付ける側の先端部を押し当てる美香。

『ピト……』

「ここ？　永遠くんのあ、な、る♡」

「ひっ！？　やめろっ！　やめてくれええっ！！　仁美先生以外の女なんかに責められたくないっ！！」

「え？　今なんて？」

「！？……な、何でもないです……お願いだから挿れないで……」

「はぁ。そうゆうことか……莉央ちゃん、コイツ矢井田先生とデキちゃってたみたいよ？」

肛門へ縦笛を押し当てたまま莉央に話しかける美香。
臀部の肉をさらに思いっきり左右に広げて、直腸が丸見えになるほど強く全開に拡げる莉央。

「こんなに開くんだ……かなり調教されてる肛門ねコレ……美香ちゃん、そんな縦笛なんか何なく突き当たりまで入っちゃうよ？」

「ほんと……莉央ちゃんの手で開いただけでガバガバだわ……男前なのにガッカリ……美香様の怒りの一撃を喰らわせてやる♡それえっ！！」

『グリイッ！！　ズボオオオッ！！』

「ぐわあああっ！！　痛いいいいいっ！！」

一気にS字結腸に突き破るほどの勢いで、全開にぶち込む美香に白目を剥いて絶叫する荒木永遠。

しばらく回転させながら内部を掻き回すが、肛門括約筋が前後左右にガバガバ開き、矢井田仁美先生のアナル調教の上手さがよく分かる絵面だった。

「こんな……ガバガバのアナルで……よくもまぁ……垂れ流しにならなかったわねぇ？　ほらほらあっ！」

話しかけながら何度も力を込めて直腸内を激しく掻き回す美香に、クラスメイトたちはざわめき始めた。

「美香ちゃん。もうその辺でいいよ。死ぬほどの激痛味わってるみたいだから……」

「ふん！この辺で許してやるかな。美香様、私のアナルから縦笛を抜いて下さい、は？　ほら、早く言ってみろ！　矢井田先生にはケツ突き上げて従順なんでしょ？　ん？」

「ふんぎいいい……み、美香さま……抜いて……くだ…」

『ガクンッ！……パタンッ！』

気を失ったのを確認した明日香と莉央が、押さえつけていた手を離し、四つん這い体勢からうつ伏せに倒れ込んでしまう荒木だった。

美香はゆっくりと縦笛を直腸から引き抜くと、更に後方の棚の上へ投げ捨てる。

「くっさ！クソまみれだわ……さてと……あたしのタイプだと見抜かれたことだし……次もあたしでいい？」

莉央と明日香は静かに頷いた。
三人で引き起こして今度は仰向けに寝かせてから両脚を持ち上げて、両足首が荒木本人の顔の左右に並ぶまで動かす。
マングリ返し……男なのでチングリ返しにさせた。
「この格好じゃ自然とオチンチンやアナル丸見えだよね……あはは♡」
美香は右手のセーラー服の裾を捲り上げ、フィストファックの準備に移る。
「先ずは人差し指と中指でほぐしてから……あら。ガバガバだわ……あっさり拳入りそう」
「膝まで一気にいっちゃえ♡　腸液でグショグショになっちゃってるからさっきの縦笛で掘られまくった時に少しは感じてたみたいね」
莉央の推測は当たっていた。
矢井田先生を愛してしまっていながらも、調教されまくっているアナルは感じやすくなっており、別人の美香に責められてもかなりの快感度だったみたいである。
『グボッ！　グチュチュチュチュチュッ！！』
「はうあっ！！！！……はうううあああううう」

「アハ♡　なんて声出してるの？　いい声で鳴くわねぇ♡」

美香の腕は肘までも荒木永遠の肛門へめり込んだ。

回転させたり出し入れしたり、様々な動きで直腸内を掻き回す美香。

「ほらほらほらあっ！　矢井田先生なんかよりあたしの方が気持ちいいでしょ？　あたしの奴隷になりなさいよ？　前にいたあたしの奴隷が転校しちゃって寂しかった所なのよ……」

「あはっ！　やはあっ！　き、気持ちいい……美香様、ボクのアナル……無茶苦茶気持ちいいですぅ」

「そお？　じゃあ今からあたしだけの性奴隷になると誓いなさい」

「そ、それは……ボクには矢井田先生が……」

『グチュチュチュチュチュッ！！』

「あはあああああっ！？　ひいいっ！！」

「誓いなさい！」

『グボッ！　グチュッ！　ヌポッ！』

「ほらほらほらあっ！　アナルも直腸もあたしが腸液まみれにしてあげるわっ！」

「はひいっ！　して下さいっ！　誓いますぅっ！　ボクは今から富田美香様の性奴隷にならせていただきますぅっ！！……あんあんあんっ！　気持ちいいいいいっ！！」

『ドピュッ！　ドクドクドクドク……』

「何汚い液を立派なオチンチンから噴き出させてるの？　んん？　小学生のくせにマラがデカすぎんだよ！？」

「ごめんなさい美香様……ごめんなさい」

「もうぼちぼち抜いてやるか……スッご！　ヌトヌトヌルヌルしてるぅ♡」

腕ごと男子児童の直腸内の感触を散々楽しんだ美香はゆっくりと肛門から腕と手を引き抜いた。

『パカァ～……ヒクヒク……ヒクヒク』

「やだなぁ……アナル開いたまま閉じないじゃん？　しかも肛門全体がヒクヒク動いてるし……エロいわ♡」

夥しい量の腸液を垂れ流しながら痙攣する肛門を見つめて興奮する美香であった。

明日香と莉央も美男子の悲惨なアナルを静観し続けている。

「もうひっくり返ったカエルのような格好は解いていいよ。土下座して頭を床に擦り付けてみんなに謝り続けてなさい」

「うう、えーん、えーん。ぐすぐす……ご、ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

土下座をしてもトロトロと垂れ落ちてくる腸液を見ながら冷たく微笑む莉央たち三人だった。

「さてと……とりあえず三時限目をこのまま受けてから……中山次郎と小山三郎……そして大川優奈に中川玲那、小川愛菜。以上五名の私刑を執行します。もし授業中に逃げたりしたら一生子供ができない体にしてやるんだから」

名前を呼ばれた五名は目を見開いて恐怖に全身を震えさせた。だが逃げる勇気は誰一人持ち合わせていなかったため、覚悟を決めて次の科目の理科の教科書を机の上に出し始める。

ゆっくりとドアが開いて、何が起こっていたのか何も知らない矢井田仁美先生が入ってきた。

「はい、この時間は理科です。１５ページを開いて……!?」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

下半身素っ裸で必死で土下座して謝っている男子児童に目が留まる。

「え？　あ、あの……誰だったかな？　謝ってる子は？　あれ？　なんでズボン履いてないの？　ええ？」

「酷いなぁ先生……愛しの生徒の顔を見て分かってあげないなんて……荒木永遠くんが不憫すぎるわ」

富田美香が雑巾で腕の腸液を拭きながら呟いた。

「え！？　と、永遠くん！？」

思わず動揺して、クラスのみんなの前で荒木永遠を下の名前で呼んでしまう矢井田仁美であった。

慌てて駆け寄り必死で謝り続ける荒木永遠の背中をさすする。

「大丈夫！？そんなに顔腫らしちゃって……一体何があったの？」

「うう、せ、先生……わーんわーん！顔とお尻の奥が痛いよお～！」

涙をハンカチで拭いてあげながら莉央たちを睨みつける矢井田仁

美。

「まさかぁなたたちが……菅野莉央さん、富田美香さん、結城明日香さんの三名は放課後この教室に残っていなさい。話があります」

「はい。私たちも話したいことが沢山ありますので……ちょうど良かったです」

結城明日香が少し下がったメガネを人差し指でずり上げながら返答する。

「……よろしくね。荒木くん、大丈夫？　保健室へ行こう」

そのまま肩を貸して起こし、荒木永遠を保健室へ連れてゆく矢井田先生。

約二十分後に帰ってくると、暗い表情のまま理科の授業を始めた。

三時限目も終わり、先ほどの五名は教壇の前に立たされる。

「歯を食いしばるの」

一斉に目を閉じて歯を食いしばる児童たち。

莉央は一人ずつビンタで頬を打ってゆく。
乾いた音を立てて五人全員の左頬はワンテンポ遅れて真っ赤になってゆく。
「全裸は許してあげる。女子の三名はスカートのみ、男子の二名はズボンのみ脱いで。股を開いて両手を頭の後部で組みなさい」
なんとなく何をされるのか検討が付いている五名は、震えながらも言う通りに行動した。
「パンツも脱がせて蹴っちゃおうよ！」
「この子たちはそこまでしなくていいよ。パンツ越しに一回ずつ蹴れば十分。美香ちゃんは男子二名、明日香ちゃんは女子三名お願い」
男女の股間を、美香と明日香は順番に、ゴムの靴を履いたままの足の甲で蹴り上げていった。
『パァンッ！！』
「いたっ！！」
『スパァンッ！！』
「きゃあっ！！」

全員蹴り終えると、全員が股間を押さえて座り込んで激痛と戦う。
苦痛に耐える唸り声が教室中に響いた。

「もう金輪際誰かに脅されてもイジメなんてしちゃダメだよ?」

「はい……ごめんなさい」

莉央に言われた五名は土下座をして詫びを入れていった。
半泣きになりながらもスカート、ズボンを履くことを許され、慌てて履き始める。

「みんなも!　傍観してないで止める勇気を持たなきゃ!」

明日香がクラス全員を見渡しながら叫んだ。
一瞬沈黙が走るが、数秒後全員が大声で叫ぶ。

「ごめんなさい!」

――――そして放課後。

六年三組のドアがゆっくりと開き、矢井田仁美先生が入ってきた。

「他のみんなは全員帰ったみたいね？」

「はい。私たちにとっても先生と四人だけの方が都合がいいですから」

「は？　一体あなたたちは何を言ってるのかしら？　とりあえずどうしてあんな酷いことをしたのか話してくれる？」

莉央たち三人に詰め寄る矢井田先生。

「先生……どうして幼い生徒の荒木くんを性的虐待したのですか？」

「!？　せ、性的……虐待？そ、そんなことをするわけないでしょう？何を言ってるの！？」

「荒木くん言ってたよ。矢井田先生以外の人にアナル犯されたくないって……大人が児童に手を出した罪は重いですよ？」

「くっ！　そ、そこまでバレちゃってたら仕方ない……私と永遠くんは愛し合ってるんです！　お互いが好きで合意のもとで調教プレイもやってました！　もうほっといてくれる？」

うつむいて拳を握りしめながら屈辱に耐える矢井田仁美だったが、莉央たち三人は聞く耳持たずに取り囲んだ。

「矢井田先生……いや、矢井田仁美。本当にお気の毒ですけど明日、残酷処刑島にてあなたの拷問処刑が警察と特殊任務省のトップによる秘密会議で決定しました」

「？？……特殊……警察？……拷問処刑？？　え？　な、何言ってるのあなたたち？」

「先生……自分の気に入らない男子生徒を荒木永遠に頼んでレイプさせたよね？その子たちは二人とも心身共に深い傷を負いながら死を選択しちゃったの……どうゆうことか分かる？」

莉央は切れ長の鋭い目で矢井田仁美を見据えながら問いかけた。

「そんなことまで……永遠くんが全部喋ったのね？」

「あたしたちがきつ～いお仕置きしちゃったからね。あの子はもうあたしの性奴隷……今日からはあたしの下僕なんだ♡」

美香は楽しそうにツインテールを手で扱きながら呟いた。

「な、なんてことを……いつも以上にお尻が開いてたと思ったら……あなたの仕業だったのね？　許さない……」

「あんたに許さないなんて言われる覚えはねーんだよ！！」

美香はブチ切れて思わず殴りかかりそうになるが、莉央に抑えられて我慢する。

「それと……五時限目にある人から電話があったの。荒木くんのお父さん、同じ組の組員に銃殺されたみたい。若くして荒木組の跡を継いだから、それを良しとしない組員たちが謀反起こしたみたいね。警察がなだれ込んで強制的に解散に持っていかれるみたい」

「荒木くんのお父さんが……死んだ……わ、私がいなきゃあの子は生きていけないかも！？」

両手で頭を押さえ込んで座り込んでしまう矢井田仁美の前に、そっとしゃがみ込んでニコリと微笑む莉央。

「心配ないよ。荒木永遠も拷問処刑執行したことになるの。つまりこの世では彼は行方不明者扱いになって戸籍上この世から消えてなくなる」

「ど、どうゆうこと！？」

「先生は明日死んじゃうから話してあげるんだけど……あたしたちが処刑した罪人たちは全て行方不明者扱いになるんだよ。でもあんしんして。永遠くんは殺さないから」

「え！？」

「菅野永遠としてあたしのお婆ちゃんちで一緒に暮らすの。美香ちゃんの奴隷として……とゆうか拷問処刑人に新しく加わることになっちゃって……はは……」

一瞬美香と明日香の目が丸くなり、二人揃えて大声を出してしまう。

「えええっ！？」

「ごめん、黙ってて。さっきの長官との電話で、唯一の荒木永遠の肉親であった組長を亡くして処刑するには忍びない……と。しかもレイプは全て愛する矢井田仁美のためにやったこと……後の人生も考慮してあたしの家で住みながら拷問処刑人として新たな人生を歩んでもらうことになっちゃった」

かなりの沈黙が流れた。

「え？　あたしの性奴隷の話は？」

「赤霧島小学校へ菅野永遠として転校してくるから好きにしたらいいよ。拷問処刑人兼、美香ちゃんの奴隷……なんか変なの」

「へ？自分で言って何か変とか……おかしくないそれって？莉央ちゃん！？」

突然教室のドアが開き、三人の見覚えのある顔が入ってくる。

「よろしくお願いします」

「……了解。矢井田仁美だな？　あなたを本日俺たちが港まで連行する。その後明日の早朝、無人島へ渡ってもらう。いいな？」

山内、川内、原内の三人は、何が起こっているのか理解できず呆然としている矢井田仁美に手際よく麻酔を嗅がせ、眠らせた。
特殊任務省の拘束部隊の三人であった。

大きなドンゴロス袋に入れて三人で運び去ってゆく。

「相変わらず冷たい目をしてるな……菅野くん」

「ほっといてくれます？　生まれつきですから……」

「明日の拷問処刑、お手柔らかに」

敬礼して速やかに教室から去ってゆく三人であった。

「拷問処刑なのに……お手柔らかに……だってさ。バッカじゃないのアイツ……」

思わず本音が漏れてしまう美香だったが、莉央と明日香も無言で頷いた……。

いじめ潜入捜査（後編）（後書き）

「――――――こ、ここは？」

「お目覚めですか先生？」

「んん……あ、あなたは？　え？」

「私は円満愛衣。本日あなたを地獄へ送り届ける者です」

「そ、そんな……許して！　お願い！」

拘束もされておらず、服もＯＬが着るような上下の服を着替えさせられていた。

下は超ミニスカートだった。

残酷処刑島の強風で時折真っ白なパンツが丸見えになっていた。

「黒い心を持った矢井田仁美……死ぬ時ぐらい純白のパンツを履かせてあげたからね？」

「か、勝手に裸にして着替えさせたの！？　いつの間に！？　もう！　わけわかんない！　早く私を元の場所に帰してよ！！　永遠くんと将来結婚するんだからっ！！」

「……あなた、まだこの状況で本気で生きて帰れると思ってたの？」

「くっ！　ああもう！　ヤケクソだ！　お前なんかぶっ殺してやる！　女子高生みたいな制服着てるけど何なのよ一体！？　大人を舐めないで！」

ヤケになり飛びかかってゆく矢井田仁美。
一分後、顔面をボコボコに腫らして鼻血を噴き出しながら、しゃがみ込んで泣いている姿があった。

「ひいい～！　強い！？　痛いいいいっ！　は、鼻が……ひいいいっ！」

「あなたは特別に拘束しないで殺してあげる」

「ひっ！？やめてお願い何でもするから！　許してよおおっ！！」

「でも動いたら酷い目に遭わせるから……じっとしてて」

愛衣の命令するがままに気をつけをして突っ立つ矢井田仁美。
手際よくＯＬ風の制服とブラジャーを剥がしてゆく。
上半身裸にすると、背後からそっと胸を握る。

「あっ！？　あんっ！！」

「立派なオッパイね……気持ちいい？」

「んん……やめて……私同性なんかに興奮しないから……あんんんっ！」

『カプッ！』

散々両手で胸を揉んだ後、右の乳首を咥える愛衣。
舌を使って激しく舐め回すと思わず愛衣の頭を掴んでしまう。

「ガブ……ブチィッ！！」

「ギャァアアアアアアッ！！」

「ぺっ！」

『ベチャ！』

乳首を歯で噛み切り、足元に吐き捨てた。
絶叫を上げながら乳首のあった胸を押さえてへたり込んでしまう。

「動かないでって言ってたのに動くから……罰よ」

そのまま倒し込み、両腕と両脚の骨を次々とへし折ってゆく愛衣。

「ぎゃあああああっ！！いだいいいいいっ！！」

斧を取り出して、何度も振り下ろしながら肘と膝を切断していった。

「かはああっ！？ひんぎいいいっ！！いだいいいいいっ！！」

「麻酔もなく四肢切断してあげたのに……よく気が狂わないでいられたわね？　褒めてあげる」

太ももを両手で掴み、マングリ返しをさせると、真っ白なパンツが丸見えになる。

「サバイバルナイフをパニスバンドに装着してみたの……パンツ脱がすの可哀想だから履いたままコレで犯してあげる」

『ズッ！……バスッ！！』

「ぎぃえええええっ！！」

パンツ越しに矢井田仁美の膣口を的確に貫く鋭利なサバイバルナイフの切っ先……刃渡２０センチもあるソレは、瞬時に膣道を貫き、子宮にまで突き刺さる。

『バコバコバコッ！！』

そのまま激しくサバイバルナイフの出し入れを始める愛衣。

真っ白なパンツは瞬時に真っ赤に染まり、愛衣の白い太ももまでも鮮血に染まってゆく。

「オチンチンがナイフって……エグいわよね？　うふふ」

「カヒュウッ！！カヒュウッ！！」

あまりの激痛に過呼吸を起こし、白目を剥いて短くなった手脚をバタバタさせる矢井田仁美。

刃が上向きだったため、尿道口とクリトリスまでもパックリ真っ二つに切開されていた。

ドクドクと流れ出る鮮血を見ていると、興奮してきて性器を濡らしてしまう愛衣。

「手足の切断面は完全な止血処理を施してるから……股間だけ血みどろになるのがまた興奮しちゃう……」

「ご、ごろしでえええっ！！　おねがいいっ！！　いだいいいいっ！！　早くごろじでええてっっ！！」

「まだ早いわ。今度はうつ伏せになってもらうから……よいしょ！」

「ひゃあっ！？」

「バックでも犯してあげる」

『ズブブ……』

「ぎひぃぃぃぃっ！！」

「今度はオマンコから会陰部を切開してるわよ？もうすぐアナルまでパックリと……ほら！」

『バコッ！！……ザクッ！！』

「ギェエエエエエッ！！」

ついにバック体勢でので上向きの刃は、膣から肛門へかけてパックリと切り開いてしまった。

繋がった性器と肛門を更に深く激しく腰を振ってズタズタに切り裂いてゆく愛衣だった。

「汚い股間なんて見たくなかったけど……やっぱり脱いでアソコ見せてね？」

『バリバリバリバリッ！！』

両手で穴の開いてしまっているパンツを左右に引き裂くと、パックリ開かれた大きな割れ目が顔を出す。

ズタズタに切り裂かれた肛門と直腸、子宮口までもが大きな股間の割れ目から飛び出して、プルプル揺れていた。

「わあ～。もう何が何だか分からないわね……これがアナルの一部で……このヒダヒダが子宮かな？　これが直腸ね……うふふ♡　ヤラシいなぁもう。びしょびしょに慣れちゃったわ私ったら」

サバイバルナイフのペニスバンドを外して右手を股間に突っ込み、子宮と大腸を掻き回す。

そのまま人差し指をヘソから突き出させた。

『グチュグチュ……ぽんっ！！』

「かはああっ！！ぴぎいいいいっ！！」

全身を痙攣させながら死のダンスが始まった。

「もう死んじゃうの？まだまだ解剖したかったのに……」

『ズルズル……ズポッ！！』

ヘソの穴から血まみれの卵巣が二つ、飛び出した。

更にそれを掴んでいる愛衣の白い人差し指と親指が飛び出してくる。

「子宮はミンチになっちゃったけど……卵巣はそのまま残してあげたからて…あの世でいっぺん……排卵してみるぅ？」

大きな血反吐を吐いて舌を突き出し、矢井田仁美は死亡した。
三十年とゆう短い生涯を終えたわけだが、自殺に追い込まれた二人は12歳でこの世を去った。
そう思えばこの女の生涯は長すぎる人生であったとも言える……。
真っ二つに切開された股間からヘソまで大きく切り裂き、小腸大腸を全て引き摺り出した。
更に乳房も切断してゆく。

「矢井田仁美。もし生まれ変わったら今度こそ児童に手を出したりイジメを指図したりしないで真面目に生きるのよ。自殺者たちの恨み、円満愛衣が地獄へ流しました……」

――――六年三組。

「今日からこのクラスの担任となりました、安西理恵といいます。みなさん、よろしくお願いします！」

「よろしくお願いします！」

東西小学校六年三組の生徒たちは性根を入れ替えて二度とイジメを起こさないよう心に誓うのであった……。

荒木永遠から菅野永遠へ……その後（前書き）

ＳとＭを合わせ持つ男子児童。

幼少時代から続いてきた荒木永遠の過酷な人生は、拷問処刑人たちとの出会いによって、幸か不幸か奇妙な方向へと転じてゆくのであった……。

荒木永遠から菅野永遠へ……その後

前回の東西小学校連続自殺事件の黒幕であった女教師、矢井田仁美の処刑を終えて一週間が経ち、銃殺されたヤクザの組長の一人息子である荒木永遠も菅野邸での生活に馴染んできていた。

月曜日の朝食中。

「礼儀正しい賢い子じゃないか。顔も可愛いし」

菅野莉央の祖母は新しく迎え入れた家族の一員である永遠を、とても気に入っていた。

「お父さんのお葬式、出なくて本当に後悔しなかったの？」

「……うん」

「お父さんのこと……あまり大切に思ってなかったみたいね？」

何か寂しさみたいなものを押し隠しているように見える永遠に、莉央も愛衣も違和感を感じ始めていた。

「あのさ……永遠くんにとってはとっても残酷だと思うんだけど…

…矢井田先生はもうこの世にはいないわ」

「え！？」

箸を止めて莉央の目を見つめる。

「すぐには信じられないかもしれないけど……これからキミも残酷処刑島での拷問処刑に手を貸してもらうようになるの。だから耐性がないのなら慣れてもらうしかない……愛衣、食事が終わり次第“アレ”を見せてあげて」

「はい。とりあえず朝食を食べてしまってくれる？」

「は、はい」

歳上の愛衣にはやはり敬語を使ってしまう永遠。

朝食の納豆かけご飯を食べ終わると、少し青ざめた表情で恐る恐る続きを聞こうと努力する。

「これを見て」

愛衣は三枚の写真を永遠に差し出した。

「！？……うっ！？」

「本物の人の亡骸よ」

「オエエエッ！！　ぐっ！　オエエエエッ！！」

せっかく食べた納豆かけご飯を全て吐き出してしまう永遠に、莉央は写真を見せるタイミングを誤ったことに今更ながら気付く。

永遠に見せつけた写真は、手脚を切断された女性、更に内臓を抜かれたほぼ空洞の腹腔内、三枚目は白目を剥いて血の泡を噴いて死んでいる顔のアップ。

その顔は見覚えのあるものだった。

「誰だかわかる？」

「ううっ！　ゲロゲロ……オエエエッ！！　ごほっ！　ごほっ！」

むせるのが治まるのを待つ愛衣だったが、莉央は少し心の中で反省していた。

「あの、ごめんなさい永遠くん……タイミング間違えたみたい」

「ほら！　誰だか答えるのよ？」

愛衣は莉央ほど優しくはなかった。
嘔吐や嗚咽が治まるやいなや、再度写真を突きつける。
「こ、この顔は……この顎にある小さなホクロは……矢井田先生です」
「そ。私が処刑したんだよ？……私を恨む？」
「!?……こ、こんな酷いことが人間に出来るのですか？」
「………ごめんねヒトじゃなくて……鬼かもしれないわね私……」
二人のやりとりを静かに見ていた莉央だったが、いきなり大声で叫ぶ。
「ホントごめんなさいっ！」
一瞬肩がビクッとなる永遠。
お婆ちゃんと愛衣まで、びっくりして肩をすくめるほどの大声であった。
「昨日藤堂長官から聞いたんだけど……小さい頃からお父さんに性的虐待を受けたり、殆ど構ってもらえなかったり……幼い頃からかなり酷い育て方されてきたんだよね？」

静かに目を伏せて、黙り込む永遠。

その目には微かに涙が浮かぶ。

過去のことを色々と回想し始めたみたいだった。

「でもね。キミと担任だった矢井田仁美のせいで、二人もの幼い命が失われたのも事実なの。キミは処刑こそ免れたけど……これからの人生……気の毒な人たちの仇を討つために手を貸してもらえる？　お願い、分かって」

「ぐすん、ぐすん……えーんえーん！」

莉央に語られて号泣し始める永遠にそれ以上キツく言える気力を無くしてしまう愛衣。

「少し残酷過ぎたかもね。ごめんなさい」

矢井田仁美の凄惨な遺体写真を全て回収する愛衣。

お婆ちゃんは何も言わずに寝室へ去っていった。

グロい遺体写真をチラ見して、かなり気分が悪くなったみたいである。

三人を学校まで送迎する車が玄関前に到着した。

「最近自動車通学になったからほんと楽になったよね愛衣？」

「ほんと助かりますよねぇ。さぁ頑張って勉学に励みに行きましょう」

永遠も涙を手で拭いながら莉央と愛衣に続き、送迎車へ乗り込んだ。

愛衣を高校へ送り届けた後、明日香と美香の家を回り、赤霧島小学校へ到着する。

「永遠！　今日もあたしの膝の上に座るのよ！」

「は、はいっ！」

拷問処刑人となってからまだ初仕事は巡って来ないが、美香の性奴隷とゆう名目は健在であったため、ここ一週間毎日のように美香のオモチャにされている始末であった。

短パンの裾から指を入れてペニスを摘むと、雁首までの剥きグセをつけるためゆっくりシゴき始める。

「ほら、あんたの調教も今日で一週間くらいになるかしら？　そろそろ雁首まで皮が剥けるようになると思うよ？　力を抜いてなさい

ね？」

『シコシコシコシコ……スコスコスコスコ』

「んっ、んんんっ！　いたっ！？」

「ごめんっ！　強く剥き過ぎちゃった！」

いきなり痛がる永遠に慌てて謝り、手を離す美香。

性的いじめを行いながらも、美香のタイプの美形だった永遠に対し、美香自身、恋愛の感情も持ち合わせてあることに莉央も明日香も気付いていたのであった。

睾丸を軽く握っては離し、優しくマッサージしてゆく。

「ううう……やめて下さい美香様……」

「チンポコ痛めちゃったお詫びにあんたの好きな穴をほぐしてやるから許して……ほら！」

『ツプッ！……ズブブブブ』

「やはあっ！？　痛いいっ！！　いやだあ～！　んんんっ！」

美香の右手がズボンとパンツの裾から入り込み、中指が肛門へ突き刺さる。

ゆっくり根元まで挿し込むと、回転させるように拷問括約筋を内側からほぐし始めた。

「あんっ、ああああんっ！」

「あはは！　良い声で泣くなぁ相変わらず……女の子みたいな顔してケツマンコでこんなに感じちゃうなんて……この変態♡」

しばらく掻き回してから美香の前に立たせると、ズボンとパンツをずり下ろす。

「ほら、チンポ見せるのよ」

「うう……ぐすん」

「こんな可愛い女の子にアナル調教してもらえるなんて……幸せよねぇ？　ねえっ！？」

『ズブッ！！……ズボボボボ……』

「あんんっ！！」

美香は座ったまま再度指を挿入してゆく。
今度は中指と人差し指の二本だった。

「あたしの巧みな指使いで、数秒でトロコテン射精させてやるから覚悟しなさい！　うふふ♡」

『ズブブ……グリングリン！　グチュチュチュ！』

「あんっ！　あはあっ！　んんんんっ！　やめてええっ！」

「やだ……早から大量の腸液分泌開始？　ぐちょぐちょになってるよ？　ケツマンコ内部が♡　ほんとエッチだよねあんたは……」

授業そっちのけで永遠を責める美香を頬杖付いて静観している莉央と明日香。

「あのさ美香ちゃん……元処刑囚とはいえ永遠くんは可哀想な子なんだから……少しは加減してあげてくれる？」

「ほんとよ。最近少しひど過ぎない？」

莉央に続き明日香も口を挟む。

「だってさ永遠……あんたの気持ちを正直に話してごらん」

「み、美香様にアナル掘られて……き、気持ちいいです……あんっ！　あんんっ！　もっと掻き回してくださいい……」

「ハハ……とゆうわけで分かってくれましたぁ？　お二人さん？…

…よく言えたね永遠♪　ご褒美をあげるわ。それええっ！　フィニーッシュうううっ♡」

『グチュチュチュチュチュチュチュッ！！　グリグリグリイッ！！』

「あっ！？　あはああああああんっ！！　美香様っ、イク！　イッちゃうううううっ！！」

「ケツマンコ掘られてイッちゃええっ♡　ほらあっ！」

『ドピュッ！！　ドクドクドクドクッ！！……ポタポタポタポタ……』

起立させられたまま大量の精液を床に撒き散らす永遠。
前立腺を美香の指でシゴかれ、無理矢理搾り出されたザーメンは、最初の一噴きの後はあまり勢いはなく、ドクドクと床に垂れ流されてゆく。

『グチュチュチュ！　グチュチュ！　グリングリン！』

腸液まみれになっている永遠の直腸を射精後も激しく掻き回す美香に、アヘ顔で目玉を真上に剥き、全身をビクビク震えさせる永遠。
涎を垂らしながら美香の指使いに絶頂を感じてしまっていた。
本人に気持ちいい、と言われてはもはや止めることも出来なくなった莉央と明日香は、二人で口元とペニスを拭いてあげる。

「はぁ。こんなアヘ顔になるほどアナル責められて気持ちいいの？　永遠くん？」

明日香は涎を拭き取りながら半ば呆れた表情で問いかける。

「う、うん……最初は仁美先生だけに責められたいと思ってだけど……美香様にイジめられてるうちに……美香様をご主人様と思えるようになっちゃって……」

「そうなんだ……美香ちゃんだけには敬語使うのもそうゆうことね……」

莉央はペニスに着いた精液を綺麗に拭き取ると、パンツとズボンを履かせてあげてから席に戻る。
明日香も涎を拭き終わると同じく席に着いた。

美香の性的いじめをチラ見していた六年三組の生徒たちも、ようやく授業に専念し始めるのであった……。
男子のうちの半分は、Mっ気を持ち合わせているのか……しれっと勃起してしまっていた。

スリッパと靴下を脱いで右足を突き出す美香。

「永遠……足の指舐めて」

「は、はい美香様」

両手でそっと美香の右足を掴み、必死で全ての指を満遍なく舐めまくる永遠の姿は、完全にＭにしかみえなかった。
だが男を犯したいとゆうＳの部分も強く持っているため、拷問処刑人として男の罪人相手に屈辱を与えるには十分有効だと菅野莉央は考えていた。

「永遠くん、キミは男のアナルは犯したいんでしょ？」

「……うん。美香様には掘られたいけど男相手なら……思いっきりチンポ突っ込んで犯したい」

「あはは……了解いたしました。残酷処刑島での初任務の時はとりあえず殺さなくていいから男罪人のアナル犯してやってね？」

「うん。ボクもそれなら楽しく出来る……」

足を引っ込めた美香は自ら制服のスカートを捲り上げてパンツを膝まで脱がした。

「永遠……あたしのマンコも舐めろ！」

「は、はい！」

「え！？」

「そこまでする！？」

莉央と明日香は目を見開いて美香の行動に驚愕する。

「もう正直に言ってやるけど……あんたの顔は無茶苦茶好きよ！　だからあたしのアソコ舐めさせてやると言ってんの！　ほら、早く舐めろ永遠！」

「はいっ！……ペチャペチャ……ペロペロ」

「んっ！！……あん♡」

しばらく莉央と明日香は、女の子みたいな顔をした男子児童に、陰部を強制的に舐めさせる変態女子小学生の行為を観察していたが、やがて飽きてきて授業をまともに受け始めた。

「アナルも舐める？」

「は、はい！……ペロペロ」

「あっ！　あんっ♡」

「美香様……舌を挿れたらたくさんウンチがついちゃいました……どうします？」

「ご、ごめん！　さっきウンチしたばっかりだからアナルの内側に

残ってたんだね……てへへ♡　飲み込んでそのまま続けなさい」

「オエエエエ～」

「オエエエエ～」

それを聞いて吐き気を催す莉央と明日香に構うことなく、更に肛門深くへ舌を突き入れて舐めまくるM全開の永遠であった……。

荒木永遠から菅野永遠へ……その後（後書き）

菅野永遠に名を変えてから一週間が過ぎ、赤霧島小学校にも馴染んできた頃、富田美香を主人（あるじ）としても目覚めてしまう。

残酷処刑島での、男の罪人相手へのＳっ気ぶりをただひたすら期待する菅野莉央であった……。

放火殺人の罪（前編）（前書き）

許されることのない重罪……放火殺人。
罪を償う親子への試練が始まる。

放火殺人の罪（前編）

残酷処刑島に朝日がのぼる。

――大海にポツンと浮かぶその島は、いつになく無風に近い状態であった。

本日も国からの指令により、凄惨なる拷問処刑が執行される。

「田辺麻由子４５歳……只今よりあなたの拷問処刑を執行します！」

「え？　こ、ここはどこ？　私今まで何をしてたの？」

「ここは残酷処刑島。罪深き悪人たちが人生最期の日を迎える島です」

「ちょ、ちょっと待って……私は娘の由花を性的虐待した憎き男を殺しただけ……死刑になるなんておかしい！」

「その再婚相手の最低な男性を殺すだけなら……あたしたちは出番がなかったのかもね……。でもあなたが放火した家にはその男の前妻にあたる幼い子どもたちが三人いたの。全員焼死体で発見された」

「そ、そんな……アイツには睡眠薬をタップリ飲ませていたけど子供達には飲ませてない！　自力で逃げることが出来ると思ってた…

……」

俯いて本気でショックを受ける田辺麻由子だったが、急速に流れ込んできた煙に巻かれて、一酸化炭素中毒に陥ったのち焼け死ぬとゆう事態までは予測できていなかった。

「……もし私がここで殺されたら……息子の優樹はどうなるの？　虐待を受けてＰＴＳＤを発症するまで精神的にも肉体的にも傷付けられてる娘は？　親戚とも殆ど縁を切ってるのに……誰が育ててくれるというの？」

「その心配はいらないよ」

「？？」

顔を上げて１２歳の拷問処刑人リーダーである菅野莉央の目を覗き込んだ。

「あの丘の向こうに見えてる白いコンクリートの建物……拷問部屋なんだけどあの建物で田辺優樹くんも本日処刑されます」

「ちょっ、ちょっと待ってよ！　まだ優樹は１４歳なのよ！？　中学二年生なの！　処刑！？　絶対嘘でしょ！？」

「娘の由花さんは先ほど電車に轢かれて亡くなりました。多分自殺

……ほぼ即死だったみたいだからそこだけは不幸中の幸いだったと思います」

「う、嘘でしょ！？　な、何が不幸中の幸いよ！？　親の気持ちも分からないガキのクセに！！　ゆ、由花っ！！　由花ああああっ！！」

娘の死を告げられて狂ったように泣き始めた母であったが、焼き殺された幼い三人のことを思うと目の前の罪人に対して情けの感情は全く浮かんでこない莉央だった。

――――コンクリート製の拷問処刑棟。

「目が覚めた？」

「う、うう……あれ？　ここは？　どうして僕こんな場所に？」

「眠らされて連行されたからだよ」

「え？　誰に？」

その質問には答えずセーラー服を着た少女はそっと振り向く。

「あなたが知る必要はないわ」

顔を見て一瞬固まってしまう田辺優樹。

「あっ！あんたは！？」

「私のこと知ってるの？」

「知ってるも何も大ファンなんだけど……宮垣咲良！　サクちゃん！」

ミディアムの黒髪を右手で掻き上げながら、木製の椅子にゆっくり腰を掛ける咲良の姿を両目を大きく見開いて見つめる。

「そっか。真絆ガールズもたくさんいるけど私のことがイチオシなんだ……ありがとう」

「うん！こんな島で大好きなアイドルに会えるなんて……何かのドッキリでしょ！？　ファンを対象にしたドッキリなんだね！？」

咲良は白く長い脚を組みながら何も知らない哀れな罪人の運命を思い巡らせた。

「私はね……アイドルでありながら、拷問処刑人でもあるの」

「ご、肛門所見人？」

「ば、バッカじゃねぇのお前！？」

「え！？　さ、サクちゃん？」

「すまん、思わず地が出た。あのね……私は罪人を拷問してから処刑しちゃう人なの」

あまりに現実味のない咲良のセリフに、数秒間とはいえ呆然としてしまう優樹。

「サクちゃんが僕を拷問して殺すの？」

「そう。私のファンであることは少し悲しいんだけど……焼死した幼い子供たちのことを思うとね……なんだか遣る瀬無いよ」

「…………」

「何黙ってるの？」

「い、いや、確かにお母さんの仕返しを手伝って灯油を家の周りに撒いたけど……」

「その行為がどれだけ恐ろしく愚かな行為だと気付いてたの？」

「妹の仇……アイツが由花に最低なことをしたとお母さんから聞い

たから……まさか幼い子供たちも死んじゃうなんて思わなかったんだ！」

その場にへたり込んで泣き始める中学生の少年。

傍にしゃがみ込み頭を数回撫でる咲良だった。

「残念だけど死んでもらうから。あなたのお母さんもぼちぼち死んじゃう頃だわ」

「え！？　お母さん……そんな、いやだ！　お願いだからお母さんを殺さないであげて！　えーんえーん！」

人を何人も焼き殺してしまったことの現実味が湧いてき始めた田辺優樹は、必死で咲良に命乞いを始める。

自分ではなく母親の命乞いを……。

――その頃、菅野莉央の拷問は佳境に迫っていた。

「んぎいいいっ！！　痛いいいいっ！！　ひいいいいいっ！！」

四肢を肘と膝から全て切断されて包帯で止血処理を施され、大量出血で死なないようにされた哀れな女がバックで犯されていた。

犯されると言っても男性からではなく小学生の女の子によるフィストファックであった。
丸い石の上にうつ伏せで縛り付けられ、背後から犯す。
莉央は拳を膣の奥深く……子宮の奥の奥まで突っ込んで激しく出し入れしていた。

『バチュバチュバチュバチュッ！！　ズチュッ！！　ズチュッ！！』

「ほらほら。ガバガバのオマンコにお仕置きだよ？痛い？」

「んぎいいいいっ！！　やめてお願いっ！！　お嬢さんお願いだからっ！！　痛いよおおっ！！」

「あはは♡　ショック死も出血死もできない薬駐車してるからね。散々地獄を味わってくださいおばさん♡」

冷たい笑みを浮かべながら更に激しく子宮の奥を拳で掻き回す莉央。
そのまま媚薬注射を、麻由子の小陰唇を貫くように打ち込む。

「あっ！？　あへっ！！　アヘエエエエッ！！」

莉央の激しいフィストファックに猛烈な快感を得る麻由子。
ダルマ女にされたまま尿道から潮を吹いてオーガズムを迎えてしまう。

「ほら、イッちゃえ！」

「あひゃあああああっ！！　イク、イックウウウッ！！」

『プシャアアアアッ！！』

愛液と血液とマンカスまみれの腕をゆっくり麻由子の膣口から引き抜くと、“　子宮回収器　”を鞄から取り出す莉央。

「何切断された短い太ももバタバタさせてるの？お尻の穴までヒクヒクさせちゃって……今から麻由子の子宮抉り出してあげるから覚悟してね？」

「あひ、あひぃぃぃ……ひぃぃぃ」

「まともに理解できないか……気持ち良すぎたかな？　あたしのフィストファック……ほら、ぶっといのをあげる」

『グリ……ズプププ！メリ、メリメリメリ！！』

「んぎゃあああああっ！？死ぬっ！！死ぬうううっ！！」

莉央の拳の直径を遥かに上回る冷たい金属製の器械を膣口からめり込ませてゆく。

『バリバリッ！！　グボオッ！！』

「ふんぎいいいっ！！」

「汚い子宮……取り出してあげちゃうからね？　ほら！」

『ギュイイイインッ！！ズバババババババッ！！』

「ピギィイイイイイッ！！！！」

子宮口まで突っ込まれた器械の先端部から飛び出した回転刃が、麻由子の子宮を腹腔内から隔離してゆく。

卵巣の管も左右とも切断され、子宮だけが器械の内部に飲み込まれるように吸い込まれた。

『グボオッ！！　ポコオンッ！！』

莉央は器械を膣内から引っこ抜くと、スイッチを押して先端部をひらける。

『ズルルル……ベチャッ！！』

見事に抉り取られた子宮が足元に音を立てて落ちた。
右足で踏みつけ、グリグリと踏み潰してゆく。

「やだ……柔らかい子宮ね。あたしに踏みつけられたくらいですぐにミンチになっちゃった」

膣口をパックリ開いたまま痙攣し始める麻由子。
肛門まで激しくピクピク動き出した。

「白目剥いて痙攣しても許さないよ？　その汚い色したアナルにもキッツい仕置きしてあげるんだから……」

細身の剣であるサーベルを取り出すと、フェンシングのように速く剣を前へ突き出した。

『シュッ！……ズボオオオッ！！』

「はううぅっ！？」

莉央の振るった剣の切っ先は肛門にまともに突き刺さり、Ｓ字結腸を貫いて小腸を何枚も貫いて胃まで達していた。
目玉をグルグル回しながら血の泡を噴き、奇声を上げ続ける麻由子。

「お尻の穴からお口まで串刺し刑に処す。えいっ♡」

『バシュッ!!』

「ほごおおおっ!! ごぼぼぼぼっ!!」

ついに細身の剣の切っ先は麻由子の口から飛び出した。

「まだ生きてる? 痛いでしょ?」

「ううあああ……ごぽぽぽ」

血の泡が止めどなく口から垂れ流れてくるが、構うことなく内臓を掻き回すように剣を大きく上下左右に激しく動かす。

「ほら、お尻からも血の泡噴き出してきちゃったよ? おばさんってばヤラシイなぁもう……あはは♡」

サーベルをゆっくり引き抜くと、メスに持ち替えてしゃがみ込む莉央。

「肛門を丸くくり抜いてあげる」

『ズプッ！ズズズ……スパァアアッ！！』

「ほげえええええっ！！！！」

「まだそんな奇声上げる気力体力残ってたのね……」

見事にくり抜いた肛門括約筋を親指と人差し指で摘みあげ、プラプラと振りながら臭いを嗅ぐ。

「くさっ！　こんな臭いアナルしてるから地獄に堕ちちゃうんだよぉ？　分かった？」

「は、はぎいいいいいっ！……ごはあっ！！」

莉央の言葉を殆ど理解しないまま大量の血を吐き出しながら永遠の眠りにつく田辺麻由子だった。

くり抜いた肛門を遺体の口へ捩じ込むと、ゆっくり立ち上がり出刃包丁で首の切断を始める。

「身体は重たいけど……頭部だけでも最期に息子に会わせてあげる」

切断し終えた田辺麻由子の頭部を持って、血に染まったセーラー服を気にすることもなく宮垣咲良と田辺優樹のいる拷問処刑棟へ向かう莉央だった。

放火殺人の罪（前編）（後書き）

ついに菅野莉央によって田辺麻由子の拷問処刑が執行された。

切断した生首を持って、息子である優樹のいる冷たいコンクリート製の拷問処刑棟へ向かう。

「まだ生きてるかな優樹……これ見せてやりたいんだけどなぁ。咲良さんのファンだと聞いてるし……まだ生かされてる気がする」

口と鼻と目、更に首の切断面からもドロドロと血を垂れ流しながら、拷問処刑人であり、アイドルのボーカルでもある莉央によって息子の元へ運ばれる麻由子。

死して生首となってでも、息子の死に目に遭えるものかどうか……。

放火殺人の罪（中編）（前書き）

果たされる親子の対面……。
残酷少女たちの責めはエスカレートしてゆくのであった。

放火殺人の罪（中編）

しばらく丘を降ると、白いコンクリート製の拷問処刑棟に辿り着く。

「あー腕だるっ！　生首って意外と重いんだよね……舌突き出して白目剥いちゃってるねぇオバさん……ちょっとごめんなさい」

『ドシャッ！』

一度髪の毛を離して地面に落とす莉央。

「咲良さんの拷問はどこまで進んでるかなぁ〜っと」

『ガチャ！』

「咲良さん……あれ？」

そこには一緒にスマホを見ながら笑っている二人の姿があった。

「このライブの時はほんと大変だったんだよ！　降り込んできた雨で床が濡れてちゃってててね……よく滑るんだこれが……」

「あはは！　このライブは見に行けなかったから配信で見たけどサクちゃん転んじゃったんだね！」

「思いっきりファンの人たちにパンツ見られちゃった……」

「ええ～っ！　でも見えてもいいパンツなんでしょそれって？」

「まぁそうなんだけどね……大股開きですっ転んで見られたら見せパンでも恥ずかしかったよ。……ねぇ莉央ちゃん」

愛想笑い１００％の作り笑顔で軽く頭を下げる莉央。

「楽しく盛り上がってたんですね」

「ん？　あ、ああ。ごめんごめん……」

ついとはいえ罪人と意気投合してしまった自分を少し恥ずかしく感じながら照れ笑いする咲良だった。

「え！？　か、カンリオまでいる！？……本物？？　菅野莉央ちゃん？」

「本物だよ一応ね……優樹くん、あなた自分がこれからどうなるか咲良さんから聞いてないの？」

「え？　あ、ああ。聞かされたけど……結局アイドルの話をし始め

たし……これから殺す相手にそんな話しないだろうからね。やっぱり僕を殺すなんて冗談なのかなぁって」

「……お母さんのことは？」

「こんなに楽しく過去のライブの事とか話してくれるんだもん。きっとそれも冗談なんだよ。ね？　サクちゃん」

ゆっくりと立ち上がりスマホを制服のポケットにしまうと、莉央の目をチラッと見て頭を下げた。

「ほんとごめん莉央」

「全て真実じゃないと思われるような軽率な言動や行動は逆にこの子を苦しめることになりますよ？」

「そ、そうだよな。ほんとごめんなさい！」

ゆっくり振り向いてもう一度ドアを開く莉央。
先ほど落とした田辺麻由子の生首を掴み上げ、部屋に持ち入る。

「な、なにそれ！？　マネキンの首？」

「マネキンなんかと見間違えたらママに叱られちゃうよ？　親子のごたいめーん♡　ほいっと！」

『ドシャッ！……ゴロゴロ』

鮮血を振り撒きながら優樹の足元へ転がってきたソレは、優樹にとって見覚えのある顔であった。

「うわああああっ!?　お、お母ちゃんっ!?」

半信半疑でしゃがみ込み、母親にみえるその頭部を何度も触りマネキンでない事を確認する優樹。

「母ちゃんっ！　母ちゃぁああああんっ！！　わああああああんっ！！」

「あたしが殺してきたの。最期に挨拶させてあげようと思って持ってきたんだけど……冗談でないと理解してくれたかな？」

気が狂ったようになりふり構わず莉央に殴りかかってくる優樹だったが、余裕で全てかわされて、足を引っ掛けられて派手に転んだ。

「痛っ！！……わーんわーん！！」

痛みと悲しみで今起こっている現実が理解できていないようであった。

アイドルの少女が自分の母親を惨殺したこと……本気で殴りかかったのにあっさり倒されたこと……処刑は冗談だと思えてしまうほど愛想良く色々話してくれた咲良のこと……。

自分の起こした罪は棚に上げて発狂したくなるほど怒りと悲しみを全身に現す優樹に見かねた莉央は、馬乗りになって激しく顔面を殴りまくる。

敵わないと本気で悟ったのか抵抗を止めて、ただ泣きじゃくるのみになる。

「あーあ。莉央の強烈なパウンドで顔面ボコボコになっちゃったね」

「この部屋でのミッションは、爪剥がしと抜歯と……両脚の切断。それと、浣腸して大便を全て排出させること。あたしがやりましょうか咲良さん？」

「いや……あたいの……私のファンの子だから私がやるよ」

「そうですか……次の部屋のミッションも急がないと。処刑があまり遅くなると迎えの船がきて怒られちゃいますから」

「そうだな。遺体の片付けなんてタダでさえ文句言ってる三人組がいたもんな。了解！　じゃあ始まるよ」

莉央が椅子に座って見守る中、簡易ベッドに仰向けで拘束してゆく咲良。

「暴れると更に痛い目に遭うからね？」

「う、ううう。痛いよぉ。やめてサクちゃん……冗談だと言ってよぉ」

「お母さんの生首見たでしょ？　あなたを拷問処刑することは現実であり真実なの。覚悟しなさいね？」

拘束を終えるとペンチを取り出し、手の指の爪から順に一枚一枚何度も前後左右に捏ねくり回しながら、むしるように剥がしていった。

小さな6畳ほどの部屋に田辺優樹の絶叫がこだまする……。
どんなに泣こうが喚こうが咲良の手は止まらなかった。

手足の爪を20枚全て剥がし終えると、ふぅ、と大きく息を吐き、チェーンソーを手に取りエンジンをかける。

「次は……チェーンソー！　正解です。後で邪魔になるから膝上辺りから切断してもらえます？　少し短めに……」

「はーい。わかりましたぁ莉央様」

分かっていることを敢えて言う莉央に少しイラッときたのか、小

馬鹿にしたように返答する咲良。
だが仕事はしっかりと遂行した。
ズボンをハサミでズタズタに切ってTシャツとパンツ一枚のみの姿にさせると、手際よくチェーンソーを手に取り見事に両脚を膝上から切り落とした後、強力な止血薬とショック死を防ぐ麻酔を太ももに打つ。

「うわあああっ!? ギャァアアアアッ!! やめてやめてやめてえええええっ!! ひどいいいいっ!!」

「酷いのはあなたの方だよ? 優樹くん。幼い三人の命を奪っといて」

麻酔薬を打ったとしてもかなり激しい焼けるような痛みが優樹の両脚の太ももを襲う。
剥がされた爪の痛みが消えるほどの激痛であった。
麻酔がなければショック死するレベルである。
注射と包帯ぐるぐる巻きで脚からの流血を防ぎ、次の段階に入る咲良。

拘束を解いてベッドから下ろし、今度はうつ伏せ状態で縛りつけてゆく。
痛みがほぼ治まり、目の前の大きな鏡に自分の姿が映る。天井から壁から部屋中に十枚ほど置いてある鏡のお陰で、いろんな角度か

らの自分の姿が眼前の大きな鏡に映っていたのだ。

パンツに手をかける宮垣咲良の姿も映っている。

「や！？　やめてサクちゃんっ！！　恥ずかしいっ！！」

「パンツ脱がさないと浣腸できないじゃん？ごめんね」

『ズルリッ！』

「ひゃあっ！！　わーんわーん！！」

頬を真っ赤にして恥ずかしくて号泣を始める優樹だったが、それを見ながら莉央はふと思った。

『両脚切断されて爪まで剥がされてお尻見られるのが恥ずかしい？バッカじゃないのコイツ……違う心配するべきだわ』

ボソッと口から出た莉央の一人言を確実に聞き取った咲良は、大きく二回も頷いた。

「うんうん！それは言える。痛みはほぼ麻酔で消え去ったみたいだね？さぁてと……お！　意外と綺麗なお尻してんじゃん男のくせに」

莉央がそっと立ち上がり、二人の元へ歩み寄る。
お尻の肉に両手の親指を押し付けて、思いっきり左右に開いた。
「汚い穴……あたしたちに見せろ！　それえっ♡」
『グリッ！……パカァッ！！』
「やあああっ！？　そんなとこ開いて見ないでえっ！！」
莉央によって全開に開かれたお尻の肉……中心部にピンク色に近い綺麗な菊門が見え、更に力を入れると曝け出された肛門自体も大きく左右に開かれていった。

『ググ……クパァ～！』
「あらやだ。直腸まで丸見え♡」
「あはは！　ほんとだ！　ホント莉央ってば……やることがエロいなぁ♡」
「えへへ……あたしが拡げてるから早く浣腸しちゃってください」
「あ、そうだったな！　よいしょっと。ほら、タップリとグリセリン飲み込むんだ」
『プスッ！……ぷちゅううううううっ！』

「ヒャアッ！？　んんんんんっ！！」

　何度も何度もグリセリンを直腸に注ぎ込まれ、その都度激しくなりのような便をヘリ出してしまう優樹。

「わーん！　恥ずかしいよぉ！　もうやめてええ！」

「内臓とか抉り出す時便がかなり臭うんだよ。だからこの度からは基本的に罪人全てに浣腸しようと思ったわけ」

　咲良の説明にも号泣するのを止めなかった。

『ブリブリ！　ブリリリリリ！　ぷしゅーっ！！』

「便が液体に変わったわね。もう浣腸はそれくらいで構いません」

「ほーい」

「次の部屋に移動する前に綺麗にしとこーね。臭いから」

『シャー！　バシャバシャバシャ！！』

「ひぐうっ！？　冷たいいいいっ！！　ひいいいいっ！！」

水道の蛇口を捻り、ホースを構えると、便まみれの下半身を勢いよく水で飛ばす莉央だった。

「臭いから部屋移動してから抜歯しましょう」

「そーだな。じゃあ拘束外してあたいが運ぶよ」

「あたしも手伝います」

先に次の部屋のドアを開け、二人で田辺優樹を運ぶ。

椅子に座らせてから、背後にある後頭部まで支えられる背もたれに、オデコを平たいベルトでガチガチに拘束すると、ペンチを取り出して静かに語りかける咲良。

「はい、アーンして」

「ひっ！ひいいいいっ！さ、サクちゃん……やめてお願いだよぉ」

『ガツ！ガツ！ゴン！ゴン！』

無理矢理閉じる口……唇や顎をペンチの柄で突つくように強く叩きつける。

唇が何箇所も裂け、前歯もグラグラになるほど強く叩きつけてゆく。

「ぎゃあっ！！　ぐわああああっ！！」

「早くお口開けないとお口周りのお顔面のお肉がズタズタになっちゃうよ？歯も結局折れちゃうし……観念して大きく口を開けて？」

号泣しながらこれ以上の抵抗を諦め、震えながら口を開けると、前歯から順番に一本一本捏ねくり回しながら引き抜いていった。

痛みで口を閉じるたびペンチの柄でガツガツと唇ごと突かれるので、結局激痛に負けて口を開く。また更に隣の歯を抜かれる……といった繰り返しであった。

地獄のような激痛の時間が過ぎてゆき、ついに全ての歯を抜かれて切断されて短くなった膝上にボタボタと鮮血が流れ落ちてゆく。

「あが……あがががが……はひはひはひっ！！」

「もうまともに喋れないかもな……優樹はあたいのファンだから最期まであたいが執行してやるからな？」

短くなった脚をパタパタ開閉させながら小便を勢いよく飛ばす優樹。

『プシャアア〜！！』

「お漏らししちゃったね？　お仕置きが必要だよね莉央？」

「はい。オチンチンなんてさっさと切断しちゃいたい所だけど……その前にエロいシーンを見たくないですか？」

「え？　両脚切断されて爪剥がされて抜歯までされて……口からドボドボ血を流してる少年見てるだけでも十分エロいけど？」

莉央は静かに目を閉じてパチンと指を鳴らした。

ドアが静かに開き、新たに拷問処刑人となった荒木永遠あらきとわが二番目の拷問部屋に入ってきた。

「同級生の荒木永遠くん。怖いだろうけど咲良さんがこの子を処刑するシーンはよく見ておくようにね」

「う、うん。分かったよ」

「間近で見るとスッゲェ可愛い顔してんなコイツ……美香の性奴隷にされてるらしいな？」

「あはは……美香ちゃんの性奴隷、兼、拷問処刑人だよ」

「なるほど……女みたいな顔してるのに元々気性は残酷なんだな？お前……」

静かに頷きながら目を伏せて、ズボンとパンツを脱ぎ始める永遠。

「おっ！？　いきなりチンポ見せつけんなよ！？」

「うふふ……永遠くんはね。男を犯すことにすっごい絶頂を感じる子なの」

哀れな姿に変貌した田辺優樹のペニスを見ながらムクムクと勃起させる永遠に、全てを納得した咲良だった。

「で、でけぇな！　小学生のチンポとは思えねぇ……直径は３センチ、全長は１０センチチってところかな？」

「１１センチ……です」

「あ、ごめん！」

見積もりを間違えた咲良に一言注意喚起してから拘束を外し始める荒木永遠。

莉央と咲良も手伝って再度うつ伏せ状態で拘束し直すと、莉央が超粘度の高いペペローションを永遠の肛門へ塗りたくる。

「はひいっ！？　つ、冷たいっ！！」

「あらごめんなさい。コレ冷蔵保存してたから……心配しなくてもブットイの突っ込まれたらすぐに熱くなるわよ♪　ねぇ永遠くん」

「そうだね。顔面も血まみれだし脚は切断されちゃって……可哀想な姿になっちゃってるけどボクを気持ちよくさせてくれる？　ほら」

『ピト……ツププ……』

そっと幼い菊門にあてがわれたイキリ勃ったイチモツは、ゆっくりと確実に直腸内へめり込んでいった。

「ひいっ！？」

『ズボボボッ！……メリメリ！』

「ピギャアアアッ！！　やめてえええっ！！　痛いいいいっ！！」

お尻の両側の肉を両手でつまみ、左右に押し広げながらペニスを突っ込んでゆく。

『ズボボボッ！……バチュウッ！！』

「んぎゃあああっ！！　熱いいいっ！！　痛いいいいっ！！」

ついに根元まで、ガチガチになっている荒木永遠のペニスが幼い肛門を串刺しにしてしまう。

「んぎいいいっ！ぬ、抜いてええええっ！！」

「うふふ！　切断された両脚はまだかなり麻酔が効いてるみたいね……アナルは麻酔してないから痛いのは分かるんだけど……でも痛いのはそっち？って思って笑っちゃう……クスクス」

莉央が笑いを堪えきれず吹き出す隣で、荒木永遠の猛烈な速度の腰使いによるアナルファックが開始された。

『ズチュッ！！　ズコズコズコズコッ！！　バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「ぴぎいいいいいっ！！あぎゃあああああああっ！！」

宮垣咲良も美男子児童による同性児童へのレイプを見ながら頬を赤く染めている。

「こうゆうのって……とてもエロいですよね？　咲良さん」

「あ、ああ。ごめん、少し濡れてきちゃったよあたい……」

「あたしの指でイカせてあげましょうか？」

「だ、ダメだよあたいには美紅が……」

莉央の冗談に本気で抵抗を見せる咲良だったが、後の薄ら笑いを確認してから漸くからかわれたことに気付くのであった。

「ちっ！　いくら喧嘩強いからって……あたいまでおちょくるとは……」

「テヘッ！　ごめんなさい。……そういえば美紅ちゃん咲良さんとは遠距離恋愛だからなかなか仕事や任務がないと会えないし寂しくないですか？」

「え？そ、それは……でもまぁスマホで顔見ながら電話してるし……ちょ、ちょっと待て！　拷問中に聞くことかそれ？」

他愛ない会話の隣ではひたすら小学生児童に肛門を犯される少年がいた。

『バコバコバコバコバコバコバコバコッ！！』

「んぎゃああああああっ！！痛い熱いいいいっ！！」

「んっ！で、出そう……」

「まだ早いよ？」

『ズブッ！』

「んはっ！？」

イキそうになる永遠の後ろから手を伸ばし、肛門へ中指を突き挿れる莉央。
いきなりの攻撃に射精をし損なう永遠は、慌ててペニスを引き抜いてしまった。

「せ、せっかくイキそうだったのにぃ……」

「あのね、後5分くらい我慢してくれる？」

「う、うん、分かったから早く指を抜いて……美香様以外の女性に責められたくない……」

「あはは……美香ちゃんの虜になりきっちゃってるのね！　ごめんね～」

笑いながらそっと中指を引き抜くと、田辺優樹の口内へ捩じ込んで永遠の便を掃除する。

「はがはが……うごおお」

永遠は一度流れを止められたものの、ヒクヒク動く拷問括約筋を見ているうちにみるみる再勃起していった。

『ズチュ！　ズブブブブッ！』

「あがああっ！！」

再び激しく腰を振り始めると、切断された短い脚をパタパタ開閉させながらもがき苦しむ優樹。

正面に回り込んだ咲良は指の骨を数回バキバキと鳴らす。

「咲良さん、死んでもいいですから手加減いりませんよ？」

「そう……じゃあそーゆうわけだから覚悟しろ！」

バックで荒木永遠にアナルを激しく犯されながら宮垣咲良に顔面をタコ殴りにされてゆく……。

鼻が陥没骨折し、歯茎もぐちゃぐちゃに潰れて瞼は軟球ほどにも腫れ上がってきた。

目玉も見えなくなるほど腫れ上がった隙間からとめどなく涙が流れ落ちてくる。

『バキバキ！　グシャグシャ！　ボコオッ！！』

「うひいいい〜！！」

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「んんんんんっ！！」

腕組みしながら二人の責めを見ていた菅野莉央だったが、医療用メスを鞄から取り出して冷たい瞳で眺め始めた。

「もうイッチャってもいいよ。タップリ直腸内に中出ししてやって」

「う、うん！はっ、はっ、はっ、イ、イク……イッチャうよおっ！！」

『ドピュッ！！ドピュピュピュピュピュピュウッ！！』

「んやあっ！？　はひはひはひいいいいいっ！？」

小学生のペニスにしては極太極長のイチモツをゆっくり引き抜くと、ヒクヒク痙攣し始めた肛門からドクドクと血の混じった精液が垂れ流れてきた。

「こんな美男子にケツ穴犯されて……ほんとエロいよなぁ……中出しはどうだった？　前立腺掻き回されて気持ち良かったか？」

ようやく殴ることをやめた咲良が顎の下に手を回してしゃくり上げ

ながら話しかける。

「うぅあああ……かはあああぁ……」

「歯もないし顔面ボコボコだし……ケツも掘られたことだし……ぼちぼち殺しちゃう？」

「まだ待って。荒木永遠から菅野永遠に名前も変わったことだし……初日の今日で惨殺にも遺体にも慣れてほしいから」

菅野永遠に交代するよう促すと、莉央が優樹の背後に歩み寄り、しゃがみ込んだ。

「先ずはキンタマ抜かせてもらうわよ？」

「ううううっ！？んごおおあおっ！！」

「え？　何て言ってるのか聞こえなーい。お願いしますって？　分かった」

メスを取り出して陰嚢の中心部を一気に切開すると、ズルリと飛び出して精管と神経の管で辛うじて繋がっている生の睾丸がプランプランと揺れ始めた。

「生の睾丸よ。触ってみる？」

「う、うん……」

ドキドキしながらも優樹の飛び出して揺れている生の睾丸を両手の親指と人差し指でプニプニと揉みしだき、感触を楽しむ永遠。

「次はオチンチンの皮を全て剥いちゃうからよく見てて」

「え？剥くのにメスなんて使うの？」

「うん。剥くと言っても皮かまりのチンポをカリ首まで剥くわけじゃないから……」

そう言いながらペニスの亀頭部を左手で握り、右手のメスで付け根辺りを丸く円を描くように皮を切る。

一度メスを置き、ペニスの中心部を強く右手で握りしめて冷たく微笑む莉央。

「優樹くん？オチンチンの皮を剥いてあげちゃうから覚悟してね？」

「んんんっ！？んおおおおっ！！」

「だから何言ってるか分からないって！オチンチンの服を脱がせて下さいって？はーい。文字通り服を脱ぐように根元から脱がせてあ

げちゃう♡　えいっ！」

『メリメリメリッ！！　ズルリッ！！』

一気に付け根側から鬼頭側へシゴくと、見事にペニス全体の皮が剥ぎ取られた。

雁首から尿道口までズルリと引き剥くと、真っ赤に染まる肉塊と化したペニスが血を流しながら睾丸と同じく揺れ始めた。

「生のキンタマとズル剥け生チンポか……残酷だけどエロすぎるぜ莉央……あたいはまた濡れてきちゃったじゃんか！」

「オナニーでもしてて下さい」

「お、おい！」

そのまま雁首にメスを入れて一気に引くと、ポロリと床に落ちる亀頭部。

「はい、永遠くんにあげる」

「ひっ！？あ、はいっ！」

血まみれの皮を引き剥かれた亀頭部を莉央から手渡してもらうと、震えながら眺め続ける永遠だった。

放火殺人の罪（中編）（後書き）

ついに開始された田辺優樹への拷問。
性器破壊を楽しむ拷問処刑人たち。
どれだけ生き地獄を味わえば死なせてもらえるのか……罪人には到底分かる筈もなかった……。
凄惨なる拷問は遂に処刑へと続く。

放火殺人の罪（後編）（前書き）

ついに少女たちの拷問は陰部へと向けられる。
１２歳の美男子である新しく任命された拷問処刑人、菅野永遠は、莉央と咲良の拷問を無事最後まで見守ることは出来るのであろうか？

放火殺人の罪（後編）

「痛そう……」

「まぁね。だんだん身体全体の麻酔も切れかかってきてるし……まだ快楽を得られる機能がある内にこの子も射精させてあげちゃおっか？」

亀頭部と皮を失った惨めなペニスを左手で掴み、軽くピストン運動する莉央。

「そんな……もう射精なんてできないよこの子は」

青ざめた顔で永遠が呟く。

「トコロテン射精だよ。前立腺を抉りまくって無理矢理射精させちゃうのよ。見てて」

人差し指と中指をヒクヒク動く肛門へ根元まで挿しこみ、グリグリと掻き回す。

ボコボコにされた顔面から涙と血とヨダレがとめどなくこぼれ落

ちるが、構うことなく莉央は直腸を掻き回す。

「ほらほら、小学生アイドルのあたしにお尻の穴掻き回されて……気持ちいいでしょ？　うふふ♡」

『グチュ！　グリグリ！　グポグポッ！！』

「ううううう……うひいいいい～」

「再三言わせないでくれる？　なんて言ってるか分からないってば。ほらあっ！イッけえええええっ！！」

『グチュチュチュチュチュチュチュチュチュウッ！！』

「はうううううっ！！！！」

『ドクッ！ドクドクドクドクドクドクドクッ！！』

亀頭部の無いペニスからは勢いよく射精することは不可能だった。しかし莉央の指捌きによって人生最期になるであろう射精をすることができた田辺優樹であった。

「あはは……人生最期の射精がアナルの奥を掻き回されてのトコロテン射精だなんて……惨めな思いさせてホントごめんね？もう死んじゃおうか？」

莉央の問いに、涙を激しく流しながら首を左右に振る優樹。

「こんな状態にされてもまだ死にたくないんだ……往生際が悪い子だね？」

見かねた咲良がチェーンソーを手にし、エンジンをかけた。
手際よく、残された四肢である両腕を膝から切断してゆく。

『ヴィイイイインッ！　ギュルルルルルッ！！』

「これで生きる希望無くしちゃったかな？」

全身を震わせながら絶叫する少年に、すでに話は通じていなかった。
莉央は慌てて切断面の止血処理と、ショック死防止薬を注射する。
ついに四肢切断された優樹は、全ての拘束を解かれて莉央と咲良に次の部屋に運ばれていった。

――――天井から二本のロープのみがぶら下がっている他に何もない部屋。

「……この子にはここであの世へ旅立ってもらうから」

分かってはいたが四肢切断されたダルマ少年を見ていると、何度も吐き気が催す永遠。

『ドカッ！　ガツッ！　グシャッ！』

「うぎいいい……」

手足の切断面は、分厚く包帯が巻かれ完全な止血処理が施されている。

ショック死を防ぐ注射もタップリと全身に打たれてあるため、虫の息ながらいまだに死ぬことができない優樹。

そのダルマ少年の身体や顔面、頭部を何度も何度も叩き、殴り、そして蹴りまくる莉央。

『バキッ！！　スパァンッ！！　ドカッ！！スパァンッ！！』

皮を剥かれて亀頭部を切断されたペニスを激しく足の甲で蹴り上げると、血の混じった精液が辺りに飛び散ってゆく。

「尿道内に残ってたセーエキ……蹴り込んで強引に出させてあげたよ？　嬉しい？」

「ふごおおっ！うんごおおおおっ！！」

歪に変形した顔を強張らせて局部の激痛に耐える田辺優樹。

「日本刀でいく？」

「んーと。今回はサーベルでお願い。串刺しの後にハラワタ引き摺り出しの刑にしちゃうの。出来るだけ腸を切断しないでキレイなまま抜き出したいから……」

「サーベルね、分かった。確かに日本刀なら腸を数ヶ所は切断しちゃうわよねぇ……じゃあ吊り下げてくれるか？」

「うん」

天井からぶら下がっているロープ二本を掴み、腰周りと両腕の脇に巻くように二箇所を括り、優樹の身体を吊り下げた。

吊り下げる高さを咲良の腰の辺りに調整すると、思いっきりお尻を叩いて一言叫ぶ莉央。

『パァンッ！！』

「準備オッケー♪」

吊り下げられてお尻を叩かれたダルマになった少年は、身体全体がプランプランと揺れ動く。

「うふふ♡　身体と比例してチンポと金玉も揺れてるぅ〜。哀れで残酷で……なんだかとってもエッチだなぁ♡」

莉央は哀れな姿になってあらゆる箇所を揺らしている優樹を嘲笑しながら罵った。

宮垣咲良は興奮してパンツをかなり濡らしていたが、二人に悟られないように知らぬフリをしたまま細身の剣、サーベルを手に取る。

切っ先をそっと、腸液ダラダラのユルユルになってしまっている肛門へ挿し込む。

「突っ込んで欲しいのは……ここか？」

『つぷっ！』

「はうはうはうっ！？」

「ほうら……締まりのなくなったケツ穴にお仕置きだ」

『ズブブブブブ……』

直腸奥深くへゆっくりと挿し込むと、股を少し開いて足を踏ん張り力をため、一気に両手で刺し込んだ。

「さてと……一気に口まで貫いてやるからな？　それぇえっ！！」

『ズボボボボッ！！　バリバリバリバリッ！！』

無事だったのは真っ直ぐに存在する直腸のみで、後はS字結腸や大腸小腸、胃まで一気に切っ先が何枚も貫いていった。

「ほごおおおおっ！！ゴポポポポッ！！」

口から鼻から大量の血を噴き出すのを見て、咲良による肛門串刺し刑の威力を痛感する莉央と永遠だった。

「ほら、ケツ穴から口までもうすぐだぞ？　気持ちいいか？」

ペニスの切断面から大量の小便を噴き出させ、短くなった手脚をパタパタと動かしながら串刺し刑の激痛と戦う少年。

「ションベン漏らしたお仕置きに……口まで貫通させてやるよ！ほらあっ！！」

『グボオッ！！……バシュウッ！！』

「ふんごおおおおっ！？　ゴポポポポ！！」

口から飛び出すサーベルの切っ先……ワンテンポ遅れて血の泡が噴き出してくる。

白目を剥いて暫く痙攣するが、あまりに中心部を見事に貫いているため、絶命できずにもがき苦しむ姿は、まさに生き地獄そのものであった。

「オエエエエッ！！」

ついに堪らず嘔吐してしまう菅野永遠。

「ここで吐いちゃったかぁ……まだ生きてるから次の刑があるんだけど……大丈夫永遠くん？」

「ゴホッ！　ゲホッ！　だ、大丈夫だよ。頑張って見てるよ……」

『ヌププププ……ポンッ！！』

咲良はゆっくりとサーベルを肛門から引き抜く。

そのままサーベルを強く空を振り抜き、血や腸液を払い飛ばした。

『ブシュンッ！！　ピピピピピッ！！』

「肛門串刺し刑、終了っ！　浣腸してクソ出してたからあまり臭く

なかったな♪」

払い飛ばされた鮮血が、床や壁を赤くて丸い斑点が染めてゆく。

「お疲れ様咲良さん」

今度は脚のロープを外し、両脇部分だけを残して身体が縦縦になるように吊り下げる莉央。

右手にメスを手に取り、左手に生の右睾丸を掴むと、見事な手つきでスライスしてゆく。

管の繋がっている側と反対側から２０回くらいスライスして刺身を作り上げた。

綺麗に白いお皿に盛る莉央。

反対側の睾丸も同じように最後まで激痛が襲うように精管と反対側から捌いてゆく。

「あぶぶぶぶぶっ！！」

激しく全身を痙攣させながら、睾丸を刺身にされた激痛を身体全体を通して表現する田辺優樹。

更に根元からペニスを切断して無理矢理本人の口の中に捩じ込むと、肛門にメスを突き入れ、会陰部を一気に切開した。

『ズブ！　ズズズズ……』

「咲良さん、前立腺抉ってみる？」

「あ、あぁ。やらせてくれ」

咲良は切開されて繋がってしまった肛門と会陰部の中心部に、右手を深々と突っ込み、こね回して前立腺を探す。

「これだな……えいっ！」

『ヌププッ！　グボオッ！！……ぷるんっ！』

「見事に抉り出しましたね咲良さん！」

「う、うん！　ぷにぷにして握りつぶしたくなる触感だなコレ……」

「握り潰してやってください」

「よし！　おらあっ！！」

『グチャアッ！！　ピュルルルッ！！』

咲良によって握りつぶされた前立腺から血の混じった精液が飛び散る。

「あはは！お見事です。じゃあお次はいよいよフィナーレだよ」

莉央はメスを肛門のフチへ刺しこみ、円を描くように丸くくり抜いた。

「お尻の穴……くり抜いちゃった♡」

「ほげえええええっ！！　はうううううっ！！」

「準備できたわよ永遠くん……あたしがくり抜いた肛門括約筋を掴んでハラワタを引き摺り出して」

「え！？　ぼ、僕が！？……オエエエエッ！！」

四肢切断され、会陰部を切開され、睾丸を刺身にされ、肛門をくり抜かれた状態でいまだに死にきれず痙攣する優樹の身体を見て、透明の胃液を豪快に吐く永遠だった。

「仕方ないなぁ。よぉく見ててよ？」

『ギュッ！！　ズルルルルッ！！』

莉央は右手で肛門を掴み、一気に数メートル直腸、大腸を引き摺り出した。

「んぎぎぎぎいい……」

「そんな悲惨な状態になってもまだ痛みを味わってるんだね？　生き地獄ってホント哀れだよねぇ？」

『ズルズル……ズルルルルッ！！』

両手でどんどんハラワタを引き摺り出してゆく莉央。

ついに菅野永遠は意識を失い、地面に倒れ込みかける。頭を打たないように咲良が咄嗟に抱き止めた。

「おっと！　拷問処刑人が頭打って死んじゃったら意味ないぜ……ったく。だらしないなぁ……」

クスクス笑いながらハラワタを全て引き摺り出し、胃まで抉り取られた肛門部分から抜き取る莉央。

『ズルズル！　グボオッ！！』

「ふぅ～。腸ってホント長いよね……血の泡噴いて大痙攣起こしちゃってる……トドメをさしてやるかな」

莉央の大好きな短銃であるベレッタＭ９３Ｒの銃口を虫の息の田

辺優樹のヘソに突っ込んで何度も掻き回す。

『グリグリグリグリ』

「ほらほらほらほらぁ、お母さんから大事な栄養もらった大切なヘソ穴にぶっ放してあげちゃうね♡」

「あばばばば……ゴボゴボゴボ……」

血の泡を噴きながら大痙攣する少年のヘソの穴へ向けて……莉央は引き金を引いた。

『パンパンッ！！……ドパアッ！！！！』

「ピギィイイッ！！」

まだ身体に残されていた臓器が背中から激しく飛び散る。
人生最期の悲鳴をあげて……ついに田辺優樹はその生涯を終えることができた。

放火殺人の罪（後編）（後書き）

「んっ！んん！！」

ゆっくりと目を覚ます菅野永遠。

『グチュグチュグチュグチュ』

「んあっ！？　痛いっ！？」

「途中で気絶した罰だよ。あたしのトロコテン射精を味わいなさい」

宮垣咲良に首根っこを腕で固められ、菅野莉央のアナル責めがひたすら続けられる。

「もうすぐこの島にお迎えが来ちゃう……その前に射精しろ」

「うっ！うううんっ！！」

富田美香のみを主人とする菅野永遠だったが、莉央に責められ過ぎて号泣してしまう。

「泣いても許さないんだから。美香ちゃんには内緒にしといてあげるから安心してイキなさい。こんなにあたしの指で感じてるクセに……腸液でアナル内部がドロドロになっちゃってるよ？　うふふ♡ほら、イッケえええええっ♡」

『グチュチュチュチュチュチュッ！！』

「やだあああああっ！！！！」

『ドピッ……ドクドクドクドクドクッ！……ヒクヒクッ』

トロコテン射精では勢いよく射精出来ない。惨めにドクドクと粘液を絞り出される永遠を見ながら咲良は性器を激しく濡らしてしまっていたのであった……。

残酷処刑島に新たに一人の遺体が加わった。

美女たちによる執拗なる性的暴力（前書き）

一度目の残酷処刑島での任務に加わった菅野永遠……。

莉央たちが思ってた以上に気が弱いことが発覚し、富田美香だけではなく莉央と愛衣にまで性的虐待を受けるハメになるのであった。

美女たちによる執拗なる性的暴力

東部地方にある二階建ての古い家。
菅野莉央の祖母が住むその家には、莉央と愛衣、永遠(とわ)の三人が住み込んでいる。
形式上はれっきとした四人家族であった。

「愛衣、今日も永遠くんを二発ほど抜かせちゃおっか？」

「そうですね。美香ちゃんにはバレる事もないはずですし……さぁ永遠くん、パジャマを脱ぎなさい」

「ひっ！もうやめて下さい……ぼ、僕は美香様だけにしか……」

拷問処刑人、兼富田美香の性奴隷となって、菅野家に養子扱いで家族に加わった１２歳の男子児童、荒木永遠……今は菅野永遠と名を変えて莉央と愛衣と一つ屋根の下で暮らしている。

あまりにも美男子なため、莉央と愛衣までもＳ心を抑えきれず、結局美香に内緒で性的虐待を繰り返す日々となっていた。

「ほら！　ここ？」

『ズブ……ズボボボ』

「あはんっ！？　んああっ！！」

二人掛かりで無理矢理パジャマを脱がせ、素っ裸にさせると、愛衣が馬乗りになって四つん這いにさせる。

背後から人差し指をピンと立てた莉央が肛門へゆっくりと挿し込んでいった。

「ここに何が欲しいの？　ちゃんと言葉に出して言いなさい」

「んんんっ！？　あんん……」

「喘ぐだけじゃ莉央様に通じないわよ？　ほら！　早く言いなさい！」

愛衣が髪の毛を鷲掴みにして激しく上下に振りまくる。

「うわあああっ！！　ひいい！！……り、莉央様の指を僕のアナルに突っ込んで下さいいいっ！　んぎぎ……」

「あはは♪　よく言えました。望み通り今日も愛衣と二人でお前のアナル拡張調教してあげるよ♡」

『グチュグチュグチュッ！　グリグリグリッ！！』

「やあっ！？　痛いいいいっ！！」

中指も挿入して二本の指で直腸を掻き回す莉央。

「前立腺……ダイレクトアタ～ック♡　ほらぁ、イッけえええっ！」

「イッ、イクっ！！　莉央様っ、イッ、イキますうううっ！！」

『ドピッ！！　ドクドクドクドクッ！！』

たまらず日曜日の朝から一回目の射精を終える永遠。

直腸を何度も掻き回し、尿道口から精液を絞り出すと、二本の指をティッシュで拭きながら金的を背後から蹴り上げる。

『ズドンッ！！』

「ぎゃあっ！！」

「ごめんね永遠くん。あなたはこれからの人生、罪人を拷問処刑しながら私と莉央様と美香ちゃんの三人に虐待され続けながら生きていくことになるのよ」

「しくしく……ぐすんぐすん……そんなぁ」

四つん這い体勢から起き上がった愛衣は、脇腹を蹴飛ばして永遠を仰向けに転がらせた。

「次は前立腺じゃなくて直接ペニスに触れて射精するの」

「ぐすん……は、はい、愛衣様……」

両手で両足首を掴むと、パジャマ姿で裸足の足の裏を１２歳の児童のペニスにあてがう。

「私の強烈な電気アンマを喰らうがいいわ……ほらぁ」

『ピト……』

「ヒャアッ！？　痛くしないで愛衣様っ！！」

「しないで下さい、でしょ？　もう遅いけどね」

『ガガガガガガガガガガガッ！！』

「びぶうううううううっ！？」

愛衣の電気アンマを傍で見ていた莉央は、ゆっくりパジャマの下を脱ぎはじめる。
パンツも脱ぎ終えると、そっと永遠の顔面に跨った。

「泣いてないであたしのアソコ……舐めなさい」

「んんんっ！！　痛いいいいっ！！　あがががが　っ！！」

睾丸が潰れるほどの激しい電気アンマを続ける愛衣だったが、莉央の意図を悟った後は足の速度と力を弱める。

「ほら、これでもうキンタマ痛くないでしょ？　早く舐めるのよ？」

「うう、は、はい……ペロ、ペロペロ」

同い年の小学六年生である莉央の陰部を泣きながら舌を出してゆっくり舐め始める永遠。

「あ、あん……いいわよ。もっと深く舌を入れなさい」

「んんんっ、ズブブ……ペチョペチョ！　ペチャペチャ！」

莉央に言われるがまま激しくマンコの中身を舐めながら、女子高生の愛衣に素足で生チンでの電気アンマを喰らう男子児童の姿は、非現実的とも言える絵面であった……。

『ガガガガガガガ！！』

「んんんっ！！　ピチャピチャ……んぐううっ！！……ペロペロ……」

愛衣の足裏の攻撃が一瞬止まる。

「莉央様、ぼちぼち永遠くんを足でイカせちゃってても構いませんか？」

「あ、あんんっ！！」

『ビクビクッ！！』

全身を震わせて莉央はオーガズムに達した。
見事に永遠の舌使いによってイカされたのであった。

「はぁ、はぁ、はぁ……ふぅ〜。気持ち良かった。あたしを無事イカせることができたご褒美に思いっきり二回目ぶち撒けさせてやって♡」

「はい。莉央様。二回目でもタップリ出すのよ？　分かった？」

「あああうう……は、はいい……ペロペロ」

唇に着いた莉央の愛液を、舌なめずりして舐めとる永遠だったが、愛衣の足コキが開始されると歯を食いしばって全身を震わせ始める。

『スコスコスコ……スコスコスコスコ』

「ううっ！　んんんっ！！」

「どう？　歳上のおねぇ様に足コキされる気分は？」

「んんんっ！　き、気持ちいいですっ！！　ううううっ！！」

「もう私と莉央様に対しても服従心が深まってきたみたいね？　うふふ♡いいわ。イカせてあげる！　ほらあああっ！！」

『スコスコスコスコ！　スコココココッ！！』

「はううううっ！！　イッ、イクっ！！　イックうううううっ！！」

『ドピュッ！！　ドピュピュピュピュピュピュウッ！！』

前立腺絞りとは違い、足とはいえ直接触れてシゴかれたピストン運動からの責めは、激しく勢いよく永遠を射精させた。

ねっとりと糸を引く素足をそっと永遠の乳首に当てて塗りたくる愛衣。

「莉央様の時よりたくさん出たわね？　そんなに良かったの？　私の足コキ……」

「はぁ、はぁ、ど、どちらも……き、気持ち良かった……です。はぁ、はぁ」

莉央はパンツを履き、腰にペニスバンドをセットする。

「あたしのアナル拡張アンド前立腺絞りよりも、愛衣の足裏の方が沢山セーエキ出しちゃうなんて……愛衣に負けたみたいでなんか悔しいよ。コレでお仕置きしてあげる」

男子小学生には限界近い大きさと長さの巨大なシリコン製の張形をペニスバンドにセットすると、うつ伏せにさせて腰を引き上げて四つん這いにさせる。

「ひっ!?　そんな大きいの無理ですうっ！！」

「高級ローションのぺぺ……バックドアをタップリ塗ってあげるから安心して。抜群の粘度だからどうにか裂肛はしないと思うよ♡ほら、飲み込め！」

『ピト……ググ……メリ！メリメリ！』

「んあっ!?　い、いったあああいいいいっ！！！！　莉央様っ！！　やめて下さいいいいいっ！！」

「ダメ♡　根元までぶち込んでやるんだから！　前立腺抉りまくって三回目の射精させてやるぅ♡　ほらあっ！」

『グボオオオッ！！……ばちゅうっ！！！！』

「ギャァアアアアアッ！！　痛い痛い痛い痛いいいいいっ！！」

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

莉央の激しいバックでのアナルファックは、ペニスと睾丸を前後左右に激しく振りながら１２歳の男子児童をアヘ顔に変化させた。

「ほらほらほらあっ！　腰を突く度に何チンポやキンタマ揺らしちゃってるのぉ？　同い年の女の子にお尻の穴ガバガバにされちゃうのってエロくない？　ねぇ美男子さん？　あはは♡」

『パンパンパンパンッ！！』

「あへへへへえええっ！！　ひぎいいいいいいっ！！」

「すっご♡　永遠くんの肛門……ガバガバになってきてるね？可哀想に♡」

「ほんとですね……腸液が垂れ始めてます……かなり莉央様に感じてるみたいですよそいつ……」

小学生とは思えないほどの勢いで激しく腰を振り続ける莉央……抉られ続けている肛門と直腸、そして前立腺は、小学生男子児童である永遠に絶頂を与えることになる。

激痛が快感に変化した時、三度目の射精を迎えることになった。

「痛い……熱い……あ、あんんっ！？　ぎ、ぎもちいいいいっ！！イ、イク、イクうううっ！！」

「イイわよぉ～。タップリ出さなきゃぶっ殺すからね？　イッけええっ♡」

『パンパンパンパンパンパンパンパンッ！！……グチュチュチュチュッ！！』

『ドピッ！！　ドクドクドクドクドクドクドクッ……』

前立腺刺激による射精は何度やっても勢いのない垂れ流しのような射精であった。

床にタップリと振り撒いた三度目の精液。

「だらしない射精ね……まぁいいけど」

「ご、ごめんなさい莉央様……許してください」

「舐めて床を綺麗にしてよ」

「は、はい！……ペロペロ……ペロペロ」

莉央と愛衣に散々責められた永遠は、素っ裸のまま正座して二人のレズプレイを見せつけられる。

まだ一人だけイッていない愛衣を、莉央が指マンでイカせる場面であった。

「あ、あん……莉央様！　気持ちいぃ……」

「アナルも同時にやったげる」

「はい。あはあっ！！　イク！　イックウうう！！」

『プシャアアア〜ッ！！』

二穴同時責めに数分と持たずに潮を噴かされる愛衣。

抱きしめあって濃厚なディープキスをしばらく続ける二人。

涙を流しながら莉央に掘られまくった肛門を右手の指で触って確認する永遠。

「うう……開いたまま閉じなくなっちゃってる……えーんえーん」

愛衣との愛を確かめ合い終えた莉央がそっと歩み寄り永遠の頭を優しく撫でながらそっと囁きかける。

「まだまだ序の口だよ。栓をしてなくちゃ垂れ流しちゃうくらい拡張させてあげるから覚悟してなさい。うふふ♡」

「ひっ！？　い、嫌だぁああ〜！　わーんわーん！！」

顔をクシャクシャに歪めて号泣する永遠の顔面を何度もつねりながら爆笑する莉央。

「美男子いじめるのってスッゴく興奮しちゃうわねぇ愛衣？」

「あははは。ホントに……どんどん拡がってゆくアナル見てたらエロすぎて濡れちゃいますよね……自分の指でもう一度イッちゃっても構いませんか莉央様？」

「……仕方ないなぁ……いいよ。この子のガバガバアナル見ながらイッちゃえ！」

「はーい♡　あ、あん！　あんんっ！」

莉央と愛衣からの性的暴力を終えた永遠はようやく眠りにつくことが許されたのであった……。

三人ともぐっすり眠り、明くる日の月曜日、元気に登校していった。

――――赤霧島小学校。六年三組。

「ふぁあああ～。眠たいなぁ今日は……一日中寝ちゃおーかな？」

富田美香が大欠伸をしながら涙を流す。

「永遠！　あたしの隣に来い」

「は、はい！　美香様」

『スルリッ……ぎゅむっ！』

「ひゃあっ！？」

短パンの裾から手を差し込み、パンツの裾も通り越して生でペニスを握り込む美香。

「えへへ♡　頬赤くしちゃってぇ……あたしに握られて興奮してるんでしょう？」

「あ、あんん。美香様……」

莉央と愛衣と比べるとやはり心から心服している美香に責められると、拒否感は全くない興奮のみが永遠の全身を貫いた。

目を細めてツインテールを揺らしながらペニスを扱き始める。

『シコシコシコシコ……』

「今日はズボンもパンツも履いたままイカせてやるから……濡れてオチンチン気持ち悪いまま一日中授業受けるのよ。分かった？」

「は、はい！　分かりました美香様っ……うっ！　ううっ！」

莉央は昨夜のことを思い出しながらニヤけるが、美香は気付いていなかった。

「まだ出るの？」

「え？あ、はい！　出そうです莉央様！」

永遠の返事を聞いた美香の手が止まる。

「ん？今莉央ちゃんに様付けで答えた？」

「！！……えっ！？　いや、そのあの……分かったよ莉央ちゃん！……の間違いです美香様っ！　あは、あははは……」

顔を青くして必死で誤魔化す永遠。
莉央もバツの悪そうな顔をして青ざめてしまい、心から永遠をアホだと痛感した。
ビビったのは永遠だけではなかったのである。

「なぁんだ。そっか。びっくりしたよ。あたし以外に様付けで呼ぶなんてことがあったら許さないんだから」

笑顔で再度ペニスを扱き始める美香。
やはり単純単細胞な性格は変わっていなかった。

ホッと胸を撫で下ろした莉央と永遠。
安心した瞬間、憧れの主人である美香の手コキに強烈な快感を覚え、昨夜何度もイカされた筈なのに朝一から大量の精液をパンツの上にへりかけるのであった。

「み、美香様！　イク！　イキますうっ！！」
『シコシコシコシコ……ドピュッ！！　ドピュピュピュピュウッ！！』
「えへへへ♡　たくさん射精しちゃったなぁ～♡　偉いぞ永遠」
『トロトロ……』

パンツに付着しきれなかった精液がズボンの裾から垂れ流れてきた。

「やだぁ～。太ももにまで垂れ流しちゃって……ごめんなさいは？」
「ご、ごめんなさい美香様……」

とっくに一限目の授業は始まっていたが、朝イチでイカさせた永遠はパンツを濡らしたまま一日中我慢してどうにか無事に帰宅するのであった。

「あれだけあたしたちがイカせたのにまだ美香ちゃんにタップリ出させられちゃうなんて……お仕置きだよね愛衣？」

「そんなことがあったのですね……私たちの責めが全く足りてなかった、とゆうことですものね」

「そーなのよ。ってなわけで永遠！……四つん這いになってお尻を突き上げなさい」

「ええっ!？　今日もですかっ!？　酷いっ！　酷すぎますうっ！！」

本気で抵抗を見せる永遠を愛衣が平手打ち数発喰らわせて瞬時に大人しくさせると、自ら全裸になってお尻を突き上げる永遠であった。

「ごめんなさい愛衣様……大人しくしますからぶたないでください……ぐすん、ぐすん」

頬を真っ赤に染めて泣きながら四つん這いになる永遠に、背後から手首をぐるぐる回しながら迫る莉央。

「今夜はフィストファックの刑だから……思いっきり拡張して二度と閉じられない開きっぱなしのアナルにしてあげるわ」

「そ、そんなぁ……嫌ですぅうっ！！　わーんわーん！」

『ズプ……』

まずは人差し指と中指を突っ込み、肛門括約筋をほぐし始める。三本、四本、ついには五本全ての指を捩じ込み、ゆっくりと拳までをもぶち込んでいった。

『グボボボボッ！！……メリメリメリッ！！』

「ひぎいいいいいっ！！　痛いいいいいいっ！！」

上の口と同じく悲鳴をあげて音を立てながら拡張されてゆく美男子のアナル……ローションをタップリ塗ってあるとはいえ、莉央の拳の侵入は超激痛であった。

『ガボオッ！！……バチュバチュバチュバチュバチュウッ！！』

そのまま手首までぶち込むと、抜いたり挿れたりの猛烈なピストン運動を開始。

拳部分で全開に開き、手首まで捩じ込んだ時少し窄んで……を猛烈な速度で繰り返される。

地獄のような激痛を肛門と直腸に味わいながら、更に小便を漏ら

しながらアへ顔で涎を垂れ流す美男子。

『バチュッバチュッバチュッバチュウウウッ！！』

「あぎゃあああああっ！？　お尻が、こ、壊れちゃううううっ！！　ひいいいいいっ！！　アヘアヘアへえええっ！！」

「痛い？……あんたのアナル、壊してるのよ？」

「そ、そんなぁっ！！　あへえええええっ！！」

莉央が右手の拳をようやく引き抜いた時、パックリと全開に開いた菊門は、しばらく閉じることはできなかった。

直腸の奥の奥までピンク色の粘膜を前回のまま覗かせて太ももを痙攣させる永遠。

「すっごぉーい♡　直腸の奥の奥まで丸見えだよ愛衣」

「ほんとだ……突き当たりのS字結腸まで見えちゃってますよ？　コレ……めっちゃエロ♡」

スマホを手に取り、永遠の全開に拡張されたアナルの写メを撮る莉央。

「もう二度と閉じられない哀れなアナルを記念写真撮ってあげるね

？　ありがとうございます、は？」

「あへへへぇ～痛いいいい……あ、ありがとう……ございました莉央さ、ま……」

「あはは！ありがとうございました、だって！日本語おかしくない？」

「うふふ！　激痛のあまりに言葉を忘れちゃったみたいですね……莉央様の拳は小学生とはいえ猛烈な速度で出し入れしちゃってましたから……肛門括約筋二、三枚破れて少し血が出ちゃってますよ？」

「今日はコレくらいにしてあげる。パンツ履いていいよ」

「は、はい……ぐすん、ぐすん」

美女たちによる執拗なる性的暴力（後書き）

莉央と美香、高校生の愛衣から激しく性的暴力を受け続ける永遠……。

本来責める側の拷問処刑人とはいえ、罪人側の痛みを痛感できている数少ない拷問処刑人となるであろう……。

約束（前編）（前書き）

愛し合う拷問処刑人同士である二人。
更に絆が深まってゆくのであった。

約束（前編）

桜満開の４月1日、二人の少女が東部地方にあるラブホテルに宿泊していた。
土曜日の夜を共に過ごし、日曜日に花見デートをする予定である女子中学生の同性カップルである。

「あん……もっと奥まで挿れて」

「うん」

『ペチャペチャ……ズブブッ！』

「あっ！　い、いい！　イクっ！！……さ、咲良……愛してる」

鬼頭美紅の性器を満遍なく舐めて、更に膣の奥深くまで舌を挿入する咲良に思わずオーガズムを迎える美紅。

お返しとばかりに美紅は咲良の乳首を舐め始めた。
指マンと胸への舌使いで、五分も経たないうちに潮を噴かされる。

「あっ！　美紅……あたいもイッちゃう！　ああんっ！！」

お互いをイカせた後も素っ裸のまま抱きしめ合い、舌を絡め合う

濃厚なキスを繰り返す二人。

「汗かいちゃったね。もう一回シャワー浴びる？」

「うん。あたいは湯舟に浸かりたいな……一緒に入ろ。用意してくるよ」

「あ、ありがと。疲れも取れそうだし……久しぶりに温まるかな」

湯舟に湯を張って大きめの豪華な作りの風呂にゆっくり浸かる咲良と美紅。

「あたしの学校に今月からくるんだよね。極北女子中学の友達にはきちんと挨拶してきた？」

「うん。引っ越す前日もみんなで一緒に過ごしたよ。あたいの家に泊まってくれたから」

「渋谷凪子……だっけ？　咲良が指原理子に半殺しにされた時、無茶苦茶心配してたヤツ……泣かれなかった？」

「…………」

俯いて黙り込む咲良を見て察した美紅はそれ以上その話をすることなく湯舟の湯で顔を洗う。

「はぁあ〜。やっぱ風呂はいいなぁ」

「……凪子もみんなも……泣いてくれた。あたいも恥ずかしいくらい泣いちゃった」

「……恥ずかしくなんかないよ。アイドル活動から拷問処刑人としての仕事から辺鄙な場所にいたら色々大変だもんなぁ。藤堂長官の好意による転校だと聞いてたけど……友人との別れは素直に喜べないよね」

「でも永遠のお別れじゃないし……たまには北部地方にも顔出すつもり。その時は一緒に来てくれる？」

「もちろん。咲良のことは一生離さないから♪」

今更ながら頬を赤く染めて嬉しさを表現する咲良だったが、のぼせて赤くなっているのか照れているのかどうかは美紅には判断できていなかった。

「甲南中学校……綺麗な学校だしあたしの親友の二人もまた紹介するね」

「うん……その二人とはまさかとは思うけど……」

「あはは！　ないない！　同性を好きになっちゃったのはあんたが初めてだから……でも付き合ってることは二人には話すつもり」

「そうなんだ。ヤキモチ妬かれないかな？」

「だから親友だって言ってるじゃん！　ひつこいなぁ咲良も……」

黙って目を閉じながら鼻歌を歌い始める美紅。

「あたいもその歌大好き。……あのさ、そう言えば美紅も飽本さんに声かけられたんでしょ？　アイドルにならないかって」

「そだね。あたしには処刑する相手以外にパンチラ見せたり踊ったりするの無理だから。丁重にお断りしたよ」

「美紅と一緒にライブしたい！」

「え？　だからあたしには無理だって！」

「莉央も言ってたよ。劇場支配人である飽本さん曰く、可愛い系が多い真絆ガールズの中でもトップクラスの綺麗な顔立ちしてるって。気が変わったらいつでも声かけてきてって。だからあたいが莉央に話すから」

「ひ、人の話聞いてる？」

「お願い！　お願いします！　この通り！　一緒にアイドルになって下さい！」

あまりにも独りよがりな咲良の願望に、引き攣った笑顔を続ける

美紅だったが、遂に愛しい咲良の想いに押し負けてしまうのであった。

「わ、分かったよ！　分かったからオッパイ強く握るのやめて！　いっ、痛いし！」

「あ？　ごめんごめん！　つい無意識に握り込んじゃってたわ。てへっ！」

「てへっ……じゃねーわ。莉央ちゃんのマネかそれ？……それ言って可愛いの小学生までだからな？」

「だはは……そっか。あたいでも莉央には敵わないかやっぱ」

少し寂しそうな顔をする咲良に、かなり慌て気味にフォローを入れる、最近益々咲良に弱くなってきた美紅。

「いや、幼稚すぎて中学生には適さないってこと！　咲良は私の中では一番可愛いよ」

「んん？　本気かそれ？　怪しいなぁ～。まさか莉央とエッチしたことあったりするんじゃ……」

「はぁ～。またそのパターンか……だから無いって言ってんじゃん！　意外と疑り深いな咲良は……もう風呂上がって寝よ。明日の花見の場所取る為にも早起きしなくちゃだし」

「はーい。満開らしいし花見超楽しみだね♪」

そのまま平和に眠りにつく二人のレズビアンカップルであった。

明くる日、まだ真っ暗な中ホテルを出て、歩いて半時間ほどの東部南端公園へ辿り着く。

うっすらと周りが見え始めたころ、周囲の人の多さに驚く二人。

「まだ暗いのにこんなに人いたんだ……すっごい人気ある公園なんだね？」

「みたいね。あたしも初めて来たから……」

「おはよう！　お二人さん」

薄暗い中、聞き覚えのある声がする。

「え？　ん？……あ！　百合香に美佐子！？　今日は用事があるって言ってなかった？」

「せっかく美紅と同じ〃噂の拷問処刑人〃が転校してくるってゆうのに……クラスの子たちより先に会ってみたかったからね！ねぇ美佐子」

「そうそう！　初めまして宮垣咲良さん。噂は聞いております。私

は中田美佐子で、コイツは西村百合香。甲南中学では美紅と三人で全校生徒を仕切ってます。よろしくね！」

茶髪のポニーテール、高身長である美佐子に、いきなりペラペラと喋られて握手を求められてキョトンとしている咲良だったが、美紅から大体の身の上話は聞かされてるんだなと理解して、握手をした。

「あたしは西村百合香！　よろしくお願いしまーす」

小柄で引き締まった身体つきで、艶やかな長い黒髪の美女が手を差し出す。

「あ、どうも。宮垣咲良です。美紅から二人のことは聞いてました。今月からよろしくお願いします」

緊張して敬語になってしまっている三人に大声で笑いながら美紅が助け舟を出す。

「気楽に気楽に！　同級生同士敬語なんて使わない！　仲良く学校の男子をイジメながら楽しくやってこー♪」

爆笑する三人に戸惑いを隠せない咲良だった。

「だ、男子だからって悪くもない子をイジメるのはダメだ美紅……」

正義感の強い咲良は、咄嗟にツッコミを入れる。

「あはは……分かってる分かってる！　オイタをした生徒にお灸をすえてる程度だから……何もしてない子をイジめたりしないから安心して」

ジュースやお菓子をたくさん持ち込んできている百合香と美佐子からお裾分けをもらいながら、自分たちで持ってきた分と共に美味しく食べることにした咲良と美紅。

「綺麗だなぁ……」

「ほんと……咲いては散ってゆく運命なのがまた切なくていいのよね」

満開の桜を見上げながら、美味しくお菓子を食べながら楽しく話をして、気付けば昼０時を回っていた。

「じゃあ学校来だしたらまたよろしくね」

「今日はありがとう」

百合香と美佐子は笑顔で手を振りながら駅へ向かって帰ってゆく。美紅と咲良も手を振り返す。

「あの子たち、あたいたちが裏でやってる仕事のこと……」

「知ってるよ」

まだ帰るつもりのなかった二人は、もう一度シートの上に寝転がった。

「気持ち悪がられない？」

「うん。自分たちには人を殺めるなんて無理だけど、残虐な犯罪者に同害報復刑や、それ以上の苦痛を与えて処刑することは遺族の気持ちゃ理不尽に殺された被害者にとっても当然だと思うって。賛成してくれてる」

「あたいも最初は引いたなぁ。まさか罪人とは言え人を殺めることが自分にできるなんて夢にも思ってなかった。美紅は？」

「……あまり抵抗なかったなぁ。選ばれた時からあたしは……。やってやる！　被害者や遺族の仇をこの手で討ってやる！ってゆう気持ちで溢れてた」

空を見上げながら淡々と話す美紅の横顔を大きな目を見開いて見つめる咲良だった。

「あたいたち……天国にはいけないよね」

「……天国や地獄？　そんなもの最初からないよ心配しなくても。犯罪でもなんでもやったもん勝ち、みたいな被害者が泣き寝入りするような世の中にしたくない想いだけで特殊任務省の命令を遂行し、自分自身を毎回奮い立たせてるんだ」

「そっか。敵討ちが果たせない弱者の代わりになって成敗……どっちかゆうと正義の味方だねあたいたちって」

「あはは。天使のような顔をしたアイドルが残酷に人を殺す……正義の味方はちょっと違うんじゃない？」

美紅の返答に半ば納得した天使の顔をした悪魔……処刑人咲良はゆっくりと起き上がり、つぶやいた。

「少し雨も降ってきたし……ぼちぼち帰ろう」

「そだね。咲良の家まで送ってやるよ」

「美紅の家の近所だよ。両親は仕事の都合で北部地方から離れられないから……あたいだけこっちに越してきた」

「そ、そうなの！？　なら今度からホテルなんて行かなくても泊まりに行くよ！　一緒に通学もできるじゃん！」

「うん。毎日泊まりに来なさい」

「ま、毎日……うち年老いたジィちゃん一人いるから二日に一度くらいにしてくんない？」

「はいはい。そりゃ仕方ないよね。じゃあ二日に一度は泊まりに来ること！　約束ね」

年甲斐もなく指切りげんまんで約束を交わす女子中学生の同性カップルであった。

「ねーちゃんたち！　可愛いなぁ。ちょっと俺らと飲んでかない？」

「ヒャハハハ！　ワイはツインテールの子がタイプだな！……ヒック！！」

「あん？　俺もツインテールのやつがタイプなんだけど？　俺に譲れよ健介！」

「ちっ！　しゃーねぇなあ……悠太郎、お前はホントにワガママだよな……なら俺は目ん玉デカい方で我慢したるわ」

かなり体格の良さそうな２５歳くらいの男二人が絡んできた。
ちょうど雨も降ってきて周りの人たちも数人程度にまで減ってい

たため、酔っ払いの男たちにとっても絡みやすい状況でもあったのである。

「なんか女性に対して無理矢理誘うこととかどうでも良くてさぁ……あたいをどっちも選ばなかったことに対してムカつくんだよなぁ。美紅に妬いてる訳じゃないけど……コイツらあたいにやらせてくれ」

「な、なるほど。確かにこんな奴らに好かれたくはないが……なんか傷付く気持ちは分かるよーな気がする。よし咲良！　ボッコボコにやってしまうべし！」

「うん！　言われなくても……」

しばらく呆然と美紅と咲良の会話を聞いていた二人組の男たちだったが、我に返り前に出たのは無理矢理咲良で我慢することになった健介とかゆう方であった。

「咲良ちゃんとかゆーのお嬢ちゃん？　お前はタイプじゃないけど若いから締まりはキツそうだから許してやるぜ。喜べ！　俺の子、産ませてやるからな？」

「お、落ちぶれた松本仁志みたいなこと言ってんじゃねぇっ！　オラァッ！！」

一気に間合いを詰めて飛びかかる咲良。
図体はそこそこデカいが所詮その辺のチンピラ、ヤンキー程度と

思っていた美紅。
安心して咲良の喧嘩を見守るのであった。

『ガツッ！　ガツッ！』

「え？　あれ？」

ワンツーがどちらもガードされる。
次の瞬間強烈な右フックが咲良の左頬を捉えた。

『バキィッ！！』

「ぐわあっ！？」

倒れ込む咲良にそのまま馬乗りになり、パウンド攻撃に入るその姿を見た美紅は、咄嗟に素人ではないことに気付く。

「咲良！　そいつらプロの格闘家だ！　気を付けろ！」

「い、今更そんなこと言われたって……身動きが……」

『バキッ！！　グシャッ！！』

「ぐっ！　ぎひいっ！！」

鼻血まみれになって瞼を腫らす咲良の胸を鷲掴みにして、激しく

揉みしだきはじめる健介。

「ヒヒヒッ！　ボコボコに顔面腫らした少女を犯すのってほんと最高だよな！マンコもケツ穴もガバガバにしてやっからよ？ゲハハハハッ！！」

「や、やめろ！　やっ！　美紅っ！　た、助けてっ！　やあああああっ！！」

瞬時に動く影。
影のようにそれは速く動いた。

『グシャアッ！！』

「ごはあっ！！」

咲良の胸を揉む健介の顔面に炸裂する美紅の膝蹴り。
瞬時に前歯四本と鼻の鼻を破壊した。

「うぎいいいいいっ！！　いってえええええっ！！」

ニヤけてレイプシーンを傍観していた悠太郎の顔が固まる。

「こ、このガキ……スピードだけじゃなくとてつもない破壊力まで……ちゅ、中学生かほんと？」

「ぐぐ、いてて……く、くっそう！　不意打ちとは言えワイの前歯へし折るたぁいい度胸してんなクソガキめ！　ぶっ殺してやるっ！！　オラァアアアッ！！」

「健介！！　油断するな！！」

美紅の強さを見抜いた悠太郎の声も健介には届いていなかった。

『バキイッ！！』

「ほごおおおっ！？」

右ストレートをかわしながらカウンターで右拳が鼻先に食い込んだ。

更に鼻の骨は複雑骨折し、激痛でもはや戦闘意欲は打ち消される。痛みに耐えながらも転がり回る健介から視線をあげて、そっと悠太郎の方を睨みつける美紅。

「お前……ほんとに女子中学生か？」

「そんなことはどーでもいい。あたしの大切な人に対して犯した行為と……何よりムカつくのはお前ら二人とも咲良をタイプと思わなかったことだ」

「はぁ？……何言ってんだお前？　お前の方が可愛いと言ってるみたいなモンだぜ？　そこでキレるのおかしくねーか？」

宮垣咲良は強く揉まれてヒリヒリする両胸を押さえながらも美紅の挙動を食い入るように見つめていた。

「この子はあたしの一番大切な人……貶して汚したお前らは徹底的にぶちのめすから覚悟しろ」

「……ほう、俺たちのことをプロ格闘家と見抜いた上でそんな大口叩いてやがるのか？　俺は転がり回っているそいつより格上だぞ？」

「分かってるよ。コイツを倒したことが不意打ちによるマグレじゃないってことをお前を倒して証明してやる。かかってこい」

「ふは！フハハハハッ！！　こんな可愛い顔したお嬢ちゃんに喧嘩売られて……しかも俺を倒すだと？クククッ……おかしくて鼻水出てきやがった……俺が勝ったら二人まとめて犯しまくってやるからな……覚悟しろよツインテール」

健介より格上だと気付いている美紅は慎重に間合いを詰めてゆく。力はかなり強そうなので捕まればまず勝てない。

戦意喪失させるレベルの打撃を数発当てるしか勝ち目がないことに気付いている美紅に隙はなかった。

腕の太さの割に速いパンチが数発空を切る。

『ブンッ！！　シュンッ！！　……ジャッ！！』

美紅の束ねた髪の毛に悠太郎の拳が当たると、摩擦時の濁った音が響いた。

まともに食らえば一発で終わることを再認識した美紅は、慎重に攻撃をかわしながらカウンターの隙を探す。

なかなか当たらず掴むこともできない悠太郎は痺れをきらし、少しずつパンチが大振りになってくる。

その時を待っていた美紅は一気に懐に入り、しゃがみ込む。

『タンッ！……スッ』

「くそっ！？」

『グシャアッ！！』

思いっきり立ち上がりながらのバネを効かせたアッパーが悠太郎の顎下に突き刺さる。

「がはあああっ！！」

健介より一回りデカい図体が仰向けにひっくり返った。
すかさず馬乗りになり、弾き返される前に顔面を集中殴打する美紅。
『ドガガガガガッ！！　バキバキッ！！　ドカドカッ！！』
更に両手の親指を目玉にめり込ませ、二つとも目潰しする。
「ぎゃあああああっ！！　いでえてててててっ！！」
この時点で強引に弾き飛ばされたが、受け身を取って素早く立ち上がり、再度あらゆる角度から蹴りまくる美紅に、悲鳴をあげるしかできなくなった悠太郎。
目が見えないため、素早い美紅を捉えることはもう不可能となってしまったのである。
『ドカッ！！　グシャッ！！　ズドンッ！！　ズガッ！！』
うつ伏せになり、身体を丸めて急所を守るが、執拗に美紅の蹴りは続く。
「や、やめて……やめてください……」

ようやく胸の痛みから解放された咲良はそっと立ち上がり美紅の元へ歩みよる。

そっと背後から美紅の腰へ両手を回し込み、攻撃を止めた。

「もういいよ美紅」

「はぁ、はぁ、はぁ。分かった」

「本当にもうやめてくれるの？」

「もう攻撃はしない……でも女性をレイプして脅した挙句に泣き寝入りさせるような悪党だから……去勢だけはさせてもらうよ？」

「……うん」

「あたしは悠太郎とかゆうのやるから咲良は健介とかゆうやつの方頼む」

「分かった」

カバンから注射器を取り出して暴れられないように全身が麻痺する薬液を二人に注射する美紅。

「一生レイプ出来なくする代わりに……痛みだけは勘弁してやるよ」

「な、何をする気だ……？」

「玉抜き」

「あ？　た、たま……なんだって？」

「とにかく黙ってじっとしてたらすぐ終わるよ」

美紅と咲良は格闘家二人のズボンとパンツを脱がせると、メスを手に取り丁寧に陰嚢の中心部を縦に切開してゆく。

「ほんとはこんなヤツらのキンタマなんてペンチで潰してやりたいんだけど……国の使命じゃないときは無茶すると莉央ちゃんに怒られるからなぁ」

「あはは……ほんと莉央には弱いんだね美紅は」

「そ、そうかな……昔からなんてゆうかあたしのこと全部理解してくれてるってゆーか……妹みたいに思ってるよ」

「ふぅん。エッチしてないなら許す」

「またそっち行くか！？　やれやれ……」

だわいない会話をしながらも二人は確実に男たちの睾丸を二つとも引っ張り出して、精管と神経の管を切断し終えた。
菅野莉央に教わっていた美紅と咲良は、手際よくタマを抜き取った袋を縫合してゆく。

「はい。おしまい。そっちは？」

「あと二、三針縫えば……よっ、ほっと。出来たあっ！」

痛みも何も感じないまま男を終了させられた悠太郎と健介。

「もう射精なんてできないよお前たち……」

咲良は顔面を腫らしながらも見事に去勢をやってのけた。
その横顔をじっと見つめる美紅の目つきが変わった。

「予定変更。ペニスも切断しちゃお」

「え？ やりすぎたら莉央に怒られるんじゃ？」

「咲良の顔を……女の子の顔を平気でそこまで酷く殴れるコイツら
……玉抜きだけじゃ許せなくなってきたの」

「気持ちはありがたいけど……一生子供も作れなくしちゃったんだ
から立ちションの権利くらいは残してあげようよ？」

「嫌だ。切る」

そう言いながら履かせたパンツを再度膝までずり下ろし、左手でデカいペニスを掴むと、右手に持ったメスを根元にあてがう。

「一生座ってションベンしな。えい」

『スパァッ！……ブシュー！！』

尿道口と切断面から激しく血が噴き出す。
慌ててタオルを当てて止血注射を会陰部に打つ美紅。

「先に注射してから切るべきだったよ。汚い血が顔にかかっちゃった……」

「やだなぁ……あたいはちゃんと前処理してから切るから心配ないよ」

「結局咲良も切っちゃうんだ？」

「え？　切るんでしょ？　一人だけなんて……不公平だしこいつが可哀想だよ？」

「冗談冗談！　早く切っちゃって！」

先ずは尿道口にメスの刃をあてがい、まっ縦に腹部に当たるまで切開する咲良。
竹割りにされたペニスは二本になり、左右に倒れる。

尿道までも真っ二つにされ、白い管が飛び出していた。

咲良は人差し指と親指で尿管を掴むと一気にペニス内部から引っ張り出して引きちぎった。

「やだぁ、縦に切っちゃった切断面から尿管引き摺り出すなんて……咲良もエッチだなぁ♡」

「なんか尿道口とか尿管見てたら興奮するんだ……ぐちゃぐちゃにしてやりたくなってきちゃう。あたいってこんな変態じゃなかったんだけどな……」

「性器破壊が好きな超Sばっかりの集まりだし……真絆ガールズってゆうアイドルのくせに」

「美紅だってもうアイドル確定しちゃったんだから……天使の顔をした悪魔……楽しくやっていきましょ」

そう言いながら二本になってしまったペニスを束ねて、根元から切断する咲良。

『ギュッ……スパパァッ！』

切断面にガーゼをあてて救急車を呼ぶ美紅。

「後の処理はオシッコ出るようにしたりするの結構面倒臭いから……医者に任せてトンズラしましょ！」

「医学的な処理は美紅も莉央にはまだまだ敵わないみたいね。あはは……」

ペニスと睾丸を女子中学生の二人に切除された格闘家の二人は、パンツも履かされないまま陰部にガーゼをテープで留められただけの姿で放って置かれたのであった。

やがて到着した救急隊によって近くの総合病院へ運ばれて、無事に尿道を残す処理の手術を施されたのであった。

約束（前編）（後書き）

性犯罪者には特に妥協しない少女たち。
天使の顔をした悪魔たちの悪への粛清はこれからも続く。
去勢された二人の格闘家はレイプ常習犯であり、これを機に格闘家をやめて真面目に働くことを決意したのであった。
美紅と咲良はこれからこの二人に犯される女性たちの被害を未然に防ぐことに成功したのであった。

約束（後編）（前書き）

甲南中学校での挨拶、自己紹介。
鬼頭美紅は、自分の側に宮垣咲良が住むことに大きな幸せを感じるのであった。
それは咲良も同じであった。

約束（後編）

甲南中学校への転校手続きを終え、無事に鬼頭美紅たちのクラスの仲間入りした宮垣咲良。

同い年の二年生だけではなく、どの学年の男子も女子に対して媚び諂っていた。

「な、何だここの男子たちは？」

女子たちとすれ違う度に頭を下げ、常に緊張感を醸し出している。

「皆さん、席に着いて。今から朝礼を始めます」

２５歳の若い女教師が教壇に着くと、生徒たちは席に着いた。

「みなさん、おはようございます。本日から新しくこのクラスに転校して来た宮垣咲良さんです。ご存知の人もいらっしゃるとは思いますが、今若い子に人気の、真絆ガールズとゆうグループに所属しているアイドルさんです。仲良くしてあげてくださいね。そう言えば鬼頭美紅さんもこの度デビューが決まったみたいに聞いてます。宮垣さん、鬼頭さんと一緒に芸能活動頑張りながら学校も励んでくださいね！」

「はい。先生、皆さん、よろしくお願いします」
咲良は、富永千春先生に紹介されて、深々と頭を下げた。
クラスの全員からも小さな声で挨拶が返ってくる。
「どう？　女子が仕切ってるって雰囲気感じた？」
「うん。あたいは女子中学だったから共学には正直緊張するけど……男子に覇気が感じられないよね」
「そりゃそうだよ。生意気な奴や女子にオイタした奴は百合香と美佐子とあたしが私刑しちゃうからね。咲良もバンバンやっちゃってよ！」
「ハハハ……悪いことした奴には……ね」
鬼頭美紅に今まで甲南中学校で起こった事件や騒動など、大雑把に説明を聞いた咲良は、西村百合香と中田美佐子にも少しずつ打ち解けていった。
甲南中学校の四天王として活躍してゆくことになるのであった。
担任である富永先生の受け持つ英語の授業も終わり、休憩時間に入ると、二人の女子に両手を捕まれた男子がクラスに入ってきた。

「鬼頭さん、コイツ、陰で鬼頭さんたちの悪口言ってたみたいなの。友達の彼氏がソレを聞いて、友達に話して……私たちにチクってくれたんだ」

「離せよ！　いちいちチクってんじゃねーよ！　最悪だなこの学校のやつらは！」

かなり抵抗するが二人の女子の方が力は強かった……。

振り解くことを諦めた隣のクラスの井内和也は、半泣きになりながら美紅たちを見回す。

「ありがとう。休み時間内にコイツの私刑済ませるからあなたたちも見たいって」

「うん。暇だから見ていく」

二人の女子は教壇に飛び乗って座り、美紅たちによる私刑を楽しみに待つ。

一応抵抗を見せる井内和也だったが、中田美佐子の強烈な往復ビンタを数発喰らうとあっさりしゃがみ込み、美紅たちに身を任せる。

「脱ぐのは下だけでいいわ。サービスよ」

「そ、そんな……上だけの間違いでは……」

『バキッ！！』

「うごっ！？」

西村百合香は正拳突きを顔面鼻っ面にまともにぶち込んだ。

『ツツウ～……ボタボタボタボタ……』

「痛いい……ううう」

両側の鼻の穴から鮮血が床に滴り落ちる。

「自分で脱がないの？　私が脱がせてあげようか？」

「わ、分かりました……脱ぎますから痛くしないで……」

鼻血をボタボタ垂れ流しながら起き上がり、必死でズボンとパンツを脱いでゆく井内和也。

中学生にしてはかなり大きなパニスがクラス全員と隣のクラスの女子二人の眼前に晒される。

「はい、四つん這いになって」

「うう……恥ずかしい」

「お尻を突き上げてから胸を床に着けて……自分の両手でお尻の肉を左右に拡げるの」

「そ、そんなことしたら穴が……見えちゃう……やめて」

「あのお尻の穴に用があんのよ！　思いっきり拡げて直腸まで見せないとキンタマぶっ潰すわよ！？」

黒髪ロングの美少女、西村百合香は見た目とは逆にかなり残酷でエッチな気性で知られていた。

「ごめんなさい！　こ、こうですか？」

『ググ……パカァ～』

「やればできるじゃん。ヤラしいなぁ。アナルも直腸も丸見えだよぉ～？　あはは♡」

クスクス笑いながらボールペンを人差し指と親指の上で器用にクルクル回す百合香。

回転を止めてからしっかり握ると、そっと井内和也の肛門へ挿し込んでゆく。

『ツプ！……ズブブブブブ』

「はううっ！？　やだ！やめてえぇっ！！」

「私たちの悪口を言った罰よ。本気で後悔させるには口で言っても無理だから……身体に教えておいてあげる」

そう言いながらＳ字結腸までゆっくり挿し込んで、上下左右に直腸内を掻き回す。

『グボッ！　グリッ！　グププ！　ズチュチュ！』

「んっ！　痛っ！　ひいっ！　ぎゃっ！」

クラスの生徒たちは頬を赤くしながらその光景を凝視しているが、中には恥ずかしすぎて目を背けて、下を向く女子も数名いた。

「百合香は男の性感帯責めるの得意だから……そろそろかな？」

美紅が何を言ってるのか意味が分からないでいたが、少しずつ固く大きくなってくる井内のペニスを見ていると、すぐに納得する咲良。

ペニスの先から先走り液が糸を引いて床に落ちる。

「あれあれぇ？　私に折檻されてるのに何ヤラしい液体出しちゃってるのかなぁ？ ねぇ？」

「あっ、ううっ！」

「んん？　後ろの穴からも透明な液垂れ流しちゃってるよぉ？ これは腸液かなぁ？　アナル、そんなに気持ちいいの？」

百合香は首を傾げながら不敵に微笑むと、ボールペンを引き抜き、中指と薬指を肛門へ突き入れてゆく。

「ケツマンコ濡らしまくっちゃってぇ……次は私の指で掻き回してやるからね？」

『ズブブ！……グチュグチュグチュチュチュチュ！』

「あっ、あはあっ！？　あああっ！！」

大量に分泌されている腸液によって、卑猥な音が教室中に響き渡る。

挿れたり抜いたり、掻き回したりピストンしたり、百合香の二本の指は男子生徒の肛門を激しくエロく犯してゆく。

「はあんっ！　イク！　イッちゃううううっ！！」

「いいよ。みんな見てる前でイッちゃえ！」

『ドピュ……ドクドクドクドク』

百合香によって無理矢理に大量に出させられたトコロテン射精による精液。

床に落ちた精液を全て舐め取らせて飲み込ませると、次は百合香の指に着いた便と腸液を舐めて綺麗にさせる。

うつ伏せに倒れ込んで涙を流す井内和也だったが、鬼頭美紅が傍にしゃがみ込んで問いかける。

「あのさ。泣いちゃってるけど……気持ちいいままでは終わらせないからね？　分かってる？」

「わーんわーん！　もうやめてくださいいいいっ！　二度と女子たちの悪口は言いませんからぁ～！　えーんえーん！」

しくしく泣く状態から号泣に変わるが、美紅は許さなかった。

教壇の前まで引きずっていき、上の制服も脱がすと、革の鞭を鞄から取り出して、背中やお尻を激しく打ち付ける。

『パァンッ！！　スパァンッ！！』

「があっ！！　ぐぎゃあああっ！！」

これは本気で激痛だった。一分ほども打ち続けていると、数ヶ所の背中と臀部の皮が裂けて、鮮血が滲み出て皮膚を伝って床に落ちてゆく。

「顔もあるし前は勘弁してあげる。その代わり背中とお尻とモモ裏と脹脛……後ろ側をズタズタにしてやるからね？」

『パァンッ！！　スパァンッ！！』

「んぎゃあああっ！！　ぎひいいいっ！！」

泣き喚きながら全身を震わせてついにしゃがみ込んでしまう井内和也。

その時二時限目が始まり、社会の男性教師が入室してきた。

一瞬立ち止まり、周りを見渡すが、慌てて一言。

「二時限目の社会は自主勉強とします。好きな科目を復習予習しておいてください」

そう言い残すと男性教師は、そそくさと教室を後にした。

背中と臀部を真っ赤、もしくは紫色に染めて、何ヶ所からも流血させて震えて泣き続ける男子生徒。

「あと１００回で許してやるよ」

「ひぃいっ！？　そ、そんなに打たれたら……し、死んじゃううっ！　わーんわーん！」

うつ伏せに丸くなり、小便を垂れ流しながら恥をかくことも忘れて号泣する井内和也。

美紅は狙いを定めて大きく振りかぶる。

……そこに宮垣咲良が立ち塞がった。

「美紅、もうやめとこ。コイツは十分反省してるよ」

「……とことんイジめとかないと、またコイツあたしたちの悪口言っちゃうかもよ？」

「これだけやったらもう言わないよ……ね？　やめてあげて」

静かに頷いて微笑みながら、革の鞭に着いた血を濡れティッシュで拭き取り始める美紅。

百合香と美佐子もニヤけながら井内和也の元へ歩み寄り、タオルで血を拭いてあげてから服を着せてゆく。

パンツを履かせるとき、しれっと二つの睾丸を左右の手で握りしめて、大きさを確認する美佐子。

『ぎゅむっ！　グリグリ』

「あはあっ！？」

「右の方がデカいのね……」

「いきなり握るから恐怖で全身震わせてるじゃん。早く離してあげてよ♡　それ測って何か意味あるの？」

百合香が不思議そうに、美佐子に問いかけながらも井内和也に情けをかける。

「べ、別に……おほほほ。玉だけにタマには触りたくなっちゃうってのはダメ？」

「あはは！　そうゆうことね。もう私たちは睾丸潰しは禁止されちゃったし……モミモミくらいはしてもバチは当たらないっしょ♪」

散々美佐子に睾丸とペニスを揉みまくられて、ようやくパンツとズボンを履き終えられた和也は、しばらくうつ伏せに倒れ込んだ体勢で泣き崩れていた。

「学校でキンタマ潰してたの？」

宮垣咲良が美紅に問いかける。

「……以前はね」

「残酷処刑島に連行する訳でも、〇〇埠頭にある拷問倉庫に監禁して私刑(リンチ)するわけでもないのに……学校でそこまでやってたんだ……」

「うん。莉央ちゃんに怒られてから禁止にしてる。藤堂長官からの頼みだったらしいから」

「そりゃそーでしょ。やり過ぎだよいくらなんでも……ところで」

百合香と美佐子が肩を貸して和也を立たせているのを見つめながら静かに咲良が口を開く。

「なに？」

「今更だけど言わせてもらうわ。ずっと前に一戦交えた時、何であたいにわざと負けた？」

「…………」

即答できずに黙り込む美紅に対し、更に続ける。

「つい最近倒した格闘家の男……奴は無茶苦茶強かった。でも美紅

は簡単に倒しちまった。あたいに少し前ボコられた美紅がね」

「……そ、それは」

俯いて黙り込む美紅。

「……なーんてね。分かってるよ。早く付き合いたかったんだろ？　あたいと……前に散々辱めて、酷い目に遭わせた好きな相手への罪滅ぼし、と言った所か……」

図星で見抜かれた美紅は何も言葉が出てこなかった。

「はぁ。だからたまたまだって。体調によって同じ相手に負ける時も勝つ時もあるよ」

咲良を気遣い嘘を続ける美紅。

その時隣のクラスの女子二人に井内和也を引き渡して見送ったばかりの百合香と美佐子が戻ってくる。

「どしたの？　真剣な顔しちゃってお二人さん？」

百合香が腰まで伸ばしている艶やかな黒髪を、頭を振って整えながら微笑みかける。

「な、何でもないよ。今回の私刑でまたあたしたちの怖さが男子たちに広がるだろーなぁって……」

「うふふ。そりゃそーだわ。でも逆らうヤツらが減ったら私刑するヤツ減るわけだから……退屈になるよね〜」

美佐子が溜め息をつきながら天井を見上げる。

「今度の日曜日は初のレッスンだね美紅。牧野杏奈とかゆうオバさん厳しいけどキレないで頑張るんだぞ？」

「あ、ああ。莉央ちゃんからも聞いてる。かなり鬼ってるみたいだねソイツ……まぁ頑張るよ。約束しちゃったし……あは、あはは」

自らの意思とは裏腹に、アイドルになる運命に流される鬼頭美紅。北部地方から東部地方に引っ越した宮垣咲良や菅野莉央たちと共に、複雑な心境でアイドルの道を進むのであった……。

約束（後編）（後書き）

正式に飽本支配人への面接も終えた鬼頭美紅。

以前飽本支配人からの誘いを断ったものの、ついに咲良や莉央たちと共に芸能界デビューすることとなる。

残酷な気性を持ちながらも……好きな人との約束を守った美紅であった。

二人の決断（前書き）

唐突にやってくる苦楽を共にしてきた仲間たちとの別れ。
二人は本来の姿である１４歳の学生生活のみに専念することを決断した。

二人の決断

「とゆうわけでさ……私たちはアイドルも拷問処刑人も辞めることにした」

「そうゆうこと。せっかくあんたには鬼頭美紅とゆう愛する同級生もできて東部地方に引越しまでしたんだから……頑張ってあたし達の分まで悪人懲らしめてやってくれよこれからもな」

北部地方にある極北女子中学校――

宮垣咲良と同じく拷問処刑人であり、アイドルである大野真子と小野メグ。
二人から話がある、と呼び出された咲良は、美紅と二人で電車で北部地方に訪れていた。

「……寂しくなるな。劇場でも会えなくなる上に特殊任務省まで辞めちゃうとは……それほどこの学校のこと想ってたんだな」

「なんかせっかく仲良くまとまってきてたのに……急に派閥がいくつもできて昔のように喧嘩だらけになっちゃったからなぁ。真子とあたしで暴れまくって極北女子全体を締めてやろうって……三年の田島さんも協力してくれるって」

「そうそう。喧嘩しながら学生生活続けるのが私たちには一番合ってる気がしてきて……藤堂長官も菅野さんも了承してくれてるから」

かつての敵、かつての仲間と関係は変化してきたが、咲良にとって大切な仲間である真子とメグとのお別れはかなり胸に迫るモノがあった。

「長官も莉央も……あたいに隠してたなちくしょう……」

震えながら堪えようとする咲良だったが、両目に涙が滲み、ついには頬を伝い落ちる。

「バ、バカ!?　泣いてんじゃねぇよ!　そんな暇あるなら……」

「そうだぞ咲良?　そんな暇あるならメグが最後に一戦交えたいんだってさ。付き合ってやってくれるか?」

拳を握りしめて咲良に躙り寄る小野メグ。

かつては大野真子と小野メグには全然敵わなかった宮垣咲良だったが、今の咲良は拷問処刑人の中では、莉央と並ぶほどの戦闘力を誇る。

鬼頭美紅から、嫌とゆうほどスパーリングで鍛え上げられていたからである。

今では敵わないことを承知の上で、咲良にお手合わせを願い出るメグであった。

彼女なりの、咲良とのお別れに対する心を込めた挨拶がわりだ。

「オラアッ！！」

全身全霊を込めて殴りかかるメグに、一瞬ひるむも心を冷静に落ち着かせた咲良は滑らかに攻撃をかわしてゆく。

数発、数十発と拳と蹴りを繰り出すが、ことごとく躱されて、ついに疲れ果てたメグは動きが止まってしまうのであった。

「はぁ、はぁ、はぁ、こ、これほどまで強く……」

「すっご……咲良の動きが前と全然違うし……こりゃメグも敵わないわ……ってことは私も敵わないってことで納得したぜ……」

二人の攻防を見て咲良への戦闘意欲を喪失する大野真子に、半ば呆れながら教室の床へ大の字にひっくり返る小野メグ。

「もうええわ。お前を挨拶がわりに最後にぶちのめすのは諦めた。さぁ好きなだけタコ殴りにでもしてくれ」

日曜日の夕方……咲良たち以外に誰もいない極北女子中学校の教室で行われた再会と喧嘩。

その時ゆっくりと教室の扉が開いた。

「美紅……校門で待ってるって言ってたのに気が変わったの？」

咲良がゆっくり振り向きながら、廊下へ差し込む夕日に紅く染まる美紅に問いかける。

「ごめん。絶対そうなるだろうなって思ったから……どんな闘い方するのかコッソリ見させてもらった。ガードも躱すのも完璧だったよ」

「そっか。あたい昔より強くなってたんだな……でも美紅にはまだまだ敵わない。一生勝てない気がする」

「勝てなくてもいいじゃん。あたしたち愛し合ってるんだから」

その美紅のセリフを聞いた真子も、大の字にひっくり返ってドクれているメグも、頬を紅く染める。

「ちょっと！……こいつらの前でそんなこと……そりゃあたいもむっちゃ大好きだけどさ……」

咲良もかなり照れてしまい、俯いて黙り込んでしまった。

「おいおい。やれやれだな全く。反撃タイムなのにあたしに殴りかかることも忘れて二人でノロけ放題とは……あの、美紅さん………咲良をこれからも守ってやって下さい」

大の字から正座に体勢を変えたメグは、美紅に土下座してお願いをした。

「これからも国の任務遂行してたら……色々危険な場面にも遭遇すると思うけど……咲良をよろしくお願いします」

目を見開きながら土下座するメグを見つめて驚いていた真子も、ふと我に返り深々と頭を下げた。

「わ、私からもお願いします！　これからもずっと咲良と仲良くしてやって下さい！」

そっとメグに歩み寄る美紅。

「分かった。お前らも頑張ってこの学校締めちゃって！」

そう言いながらそっと手を差し伸べて、メグの手をそっと掴み、引っ張り上げて立ち上がらせる。

「また会いに来るから」

「ああ。待ってるよ」

「その時にはこの学校……一つにまとまってるかもな。ハハハ」

しばらく別れを惜しみながら談笑するも、時間は早々に流れてゆく。

「じゃあ帰る。お互い頑張ってこうな！」

咲良はグランドで見送ってくれる真子とメグに小さく手を挙げて応える。

「元気出してね。百合香と美佐子もアイツらと変わらないくらい大事にしてやってよこれから」

「あ、ああ。もちろん！」

グランドから裏門を出て駅へ向かう咲良と美紅。

しばらくは林と公園に挟まれた細い田舎道が続く。

殆ど日も暮れて薄暗い中、林の方からうめき声らしきものを聞い

た。

「咲良……林の方」

「うん。あたいも聞こえた。女のうめき声？　行ってみる？」

「聞こえちゃったら素通りできないよねぇ……合意のエッチなら即ごめんなさい……だけど」

「うん。でも声聞いてるとそんな平和なもんじゃ無さそうなんだよなぁ」

スマホのライトで照らしながら少し林に入ると、激しくバックで腰を振りながら女性を犯す男の姿が見えてきた。

「お？　なんだお前ら！？」

腰を止めて咲良と美紅の方を見つめる男。
ふと近くから女の声もする。
その女が結構明るいスタンド型のライトを灯すと、日曜日なのに制服である咲良に気づき、目を大きく見開いた。

「あれ？　ウチの学校の制服？……ん？」

そっと近寄ってきて咲良の顔を凝視する女。

「あ！　お前二年の宮垣咲良だな！？ちょうどいいとこにドラマみたいに現れやがって！あはは！」

「？？　誰だお前？」

咲良には認識のないその女は話を続けた。

「お前がアイドル活動に没頭した挙句……学校まで辞めやがるもんだから前から学校仕切ってるお前らに不満を募らせてたあたしたちが結束してお前のマブダチ関係全員ボコってやったんだよ！分かったか？」

「な、なんだって！？じゃあその顔面ボコボコに腫らして犯されてる子は！？」

「さ、咲良？……逃げて……お、女は三年のザコだけど……この高校生はマジで強いから……逃げて……」

固まって動けなくなる咲良。
そっと咲良の肩に手を置きながら声をかける美紅。

「知ってるやつ？」

「凪子……なんでこんな酷い目に……お前らぁあっ！！」

鬼の形相で極北女子中学三年の知らない女を睨みつけると、いきなり振り返って渋谷凪子を犯してる男に飛び蹴りを喰らわせる。

『ドカッ！！』

「ぐわあっ！？　このクソガキ！！　何すんだいきなり！？」

咲良に蹴られた勢いで、凪子に挿入していたペニスが抜けてしまい、痛みで一気に萎んでゆくのであった。

「何すんだ？　ソレはこっちのセリフだ！　凪子をこんな目に遭わせた罪は重たいぞっ！！」

三年の女と屈強そうな男は目を丸くして咲良と美紅を交互に見ていたが、やがて声も高々に笑い始めた。

「罪は重たいだと！？　ガハハハハッ！！　更に可愛い女二人……コイツらも犯しちゃって良いんだよなぁ？由麻」

「あははははは！　良いよ良いよ犯しちゃっても！　咲良のツレには

何の罪もないから悪いけど……おまんこズタズタになるまでヤッちゃってぇ～♡　あははははは！！」

ひたすら笑い続ける二人の傍で、バックで犯されながらもようやくペニスを引き抜かれた渋谷凪子がうつ伏せに倒れ込む。

「ううう……痛い……痛いい……しくしく……は、早く逃げてよぉ！　咲良ああっ！！」

顔面をボコボコに腫らすまで殴られた挙句、巨大なイチモツで性器が裂けるほど激しく犯されたにも関わらず……親友である咲良の身を案ずる姿は、咲良だけではなく鬼頭美紅までも修羅に変えることになった。

「私は椎名由麻ってゆうんだ。極北女子三年を締めて更に全校生徒を……ん？」

『バキィッ！！』

「がっ！？」

咲良の飛び膝蹴りが顎にヒットした由麻は仰向けにひっくり返る。ソレを見た屈強そうな男は、怒りを顕にして咲良に飛び掛かろうとする。

「お前の相手はあたしがするよ。空手でもやってそうな動きだな？」
「よく分かったなクソガキ！　俺は高校生では全国三位だ！」
「すっごいじゃん！　あたし、オシッコちびりそう！」
「……その割には表情メチャクチャ素だな？　あと俺はなぁ、生意気な中坊をボコッて犯すのが生き甲斐なんだ。邪魔するヤツはことごとく犯してやるっ！　ガハハハッ！！」
ペニスを丸出しにしたままイキがる男に呆れた美紅はそっと質問を投げかける。
「下半身スッポンポンで後々手間が省けそう。ありがとね。それと一応聞いとくけどさぁ。その由麻とかゆう三年の女……あんたの彼女？」
「お、おう！　付き合ってる上に色んな中学生の女をヤラせてくれるからよぉ！　むっちゃ愛してるぜぇ！！」
咲良と美紅の冷たい視線が、顎を押さえながらようやく起き上がって苦痛の表情を覗かせる由麻に注がれる。
「あんた、付き合ってる男に自分の学校の生徒犯させてるの？彼氏がそんな事して平気なの？」

「付き合ってるけどそいつとエッチはしてねぇんだよ！」

「あ、なるほど！　自分の陰謀の為に利用してるだけなのね！　納得」

小さな声での会話が気になる高校生である自称極真空手全国三位は、思わず割って入った。

「何ボソボソ話してるんだ？　由麻！　日曜日なのに制服でうろついてるアホみたいなこの二人も犯していいんだよな？」

「うん！　愛する善次郎……私のために犯しまくってやってよ！」

西山善次郎、私立農業高校三年……身長１８５センチ、体重８５キロの逞しい身体つきをしたこのレイプ魔は、由麻のことを想いながらも女子生徒を犯し続けるバカであり鬼畜でもあった。

「はぁ。人がどんな格好で旅行しようがあんたに関係ないでしょ？」

美紅が目を細めて怒りを堪える。

「美紅、こいつらとことんやっつけてもいいよな？」

「うん。二人とも性器破壊と去勢しちゃお。あたしから莉央ちゃん

や藤堂長官に説明したげるから」

「……分かった。すぐに救急車呼んで死なないよう段取りしてよ？」

「ほーい。許可してもらえる可能性高いから救急車呼んじゃってOKだよー♡」

呆れながら咲良と美紅の話を聞いていた西山善次郎と椎名由麻だったが、当たり前の如く、その日の拷問処刑人である二人との遭遇は、人生最悪の一日となる。

由麻の前にしゃがみ込んで髪の毛を鷲掴みにする咲良。

「とりあえず顔面をボッコボコにしてやるから覚悟しろ。瓜子をあんな顔にさせやがって」

「わ、私じゃない！殴ったり犯したりしたのは善次郎だ！わ、私は……」

そこまで言ったあと咲良の膝が顔面に食い込む。
前歯が折れて鼻の骨もへし折れ、顔面血まみれになってしまった。

「うぎゃあっ！？　や、やめろ！　やめてっ！……」

『ドカッ！　ガツッ！　グシャッ！　バキャッ！』

何度も何度も顔面へ膝を入れる咲良。
右の膝は返り血で真っ赤に染まる。
瞼も腫れ上がり、誰か分からないほどボコボコに腫れてしまう顔面。
激痛のあまり、両手で顔を押さえて叫びまくる。

「ぎゃあああっ！！　やめてぇぇぇっ！！　助けて善次郎っ！！
助けて早くううっ！！」

ふと隣の偽りの恋人？　である善次郎に目を遣る由麻。
そこには全くの想像しがたい光景が見えた。
馬乗りにマウントをとった美紅が善次郎の顔面をタコ殴りにしている絵面であった。
泣きながら許しを乞う巨漢男を見た由麻は、助かる最後の希望を絶たれて絶望に打ちひしがれる。

「前歯も殆ど折れちゃって……あはは。彼女とそっくりな顔になっちゃったね？　オラ、立て！」

「は、はい」

下手に逆らわずに、女子中学生である美紅に敬語まで使い始める

善次郎。
下半身スッポンポンのまま立ち上がると、美紅が背後に周り、そっと陰部に右手を伸ばす。

『ギュムッ！』

「はううっ！？」

「大好きな彼女が見てる前でイカせてやるよ」

「ええっ！？　そ、そんな！　まだエッチもしてない処女の由麻にそんなトコ見られたくねぇ！　ゆ、許してくれぇ……」

『シコシコシコシコ……』

「はぁううっ！！　や、やめ……ひいい」

男の願いを受け入れず、うすら笑いを浮かべながら手コキを始める美紅。
恥ずかしそうにしてるのかボコボコになった表情からは判断出来ないが、俯いて目を逸らそうとする由麻。

「あんたも立つんだ。きてる服全部脱げ」

「ひっ、や、やめてお願い！　もうこんなことしないから許して咲

良さん！　お願いです！」

「だめだ。とりあえず早くしないとマジで殺しちゃうぞ？」

「ひいい……ぐすん、ぐすん」

咲良の膝でボコボコにされた顔面から大粒の涙をボロボロ流しながら言われる通り服もスカートも脱いでゆく由麻。

パンツに手をかけた瞬間、動きが止まる。

「お願い……下着だけは許して」

「だめ。全部脱ぐの。履いたままじゃマンコと肛門バラせないじゃん？」

「ば、バラす？ど、どうゆうことですか！？」

「いいから脱げ！」

『ズルルル！　ストーン！！』

ついに最後のパンツは咲良の手によって足首までずり下されてしまうのであった。

「やあっ！？　み、見ないで恥ずかしい！」

「そんなもの見慣れてるから心配するな。股を開くんだ」

「やだ……痛いことしないでお願い……」

「ロストバージンの刑……少し痛いかもな。せーのっ……オラアアッ！！」

恐る恐る素っ裸になって股を開くと、眼前に火花が散るほどの激痛が股間を襲う。

『シュンッ！！……バチュウッ！！……パァンッ！！』

「はぎゃあああっ！？」

背後から思いっきり蹴り上げた咲良の右足の爪先が膣に半分ほどまでめり込み、処女膜を瞬時に深くぶち抜く。と同時に足の甲は、肛門を激しく打ち付けた。

二つの穴を同時に襲う激痛に、思わず小便を撒き散らしながら首を激しく左右に振りながら叫び狂う由麻。

「痛いいいいっ！！　はぎゃああああっ！！」

「どれどれ？　あたいがマンコの中を触診してやるから四つん這いになってケツ突き上げろ！」

今回も咲良に言われるがまま四つん這いになり、股を開いてお尻を突き上げる。

『ツプ！グチュ……グチュチュチュチュチュ！！』

中指と薬指を破れた処女膜のあった場所よりはるかに深く突っ込み、子宮口辺りを激しく二本の指先で掻き回した。

「あはあっ！？　あんあんあんあんっ！！　いやだぁあぁっ！！やめて咲良様ああっ！！」

「何あたいのこと様づけで呼んでるの？　気持ち悪い。あの鬼畜野郎と同時にイカせてやるよ」

美紅に激しく手コキされながらビンビンになったイチモツをヒクヒクさせる姿が見えた。

「ほら、ぼちぼちイカせてやる！ちゃんと同時にイカないとぶっ殺しちゃうからね？　いい？」

『シコシコシコシコッ！！　シュコココココココッ！！』

「はうううっ！そんな早くシゴかれたら俺、イ、イク……イクう

うううっ！！」

『ドピュッ！　ドピュピュピュピュピュピュウッ！！』

激しく尿道口から噴き出す精液。
美紅の高速手コキはまだまだ止まらない。
絞り出すように女子中学生アイドルに何度も射精させられてしまう善次郎だった。

「男より遅れたな？　早くイケよ！　ほらあっ！」

『グチュチュチュチュチュチュウッ！！』

「やはっ！　はんっ！　イ、イク、イッちゃうううううっ！！」

『プシャアアア〜ッ！！』

潮を噴く性器からゆっくり指を引き抜くと、血とオリモノと愛液と小便の混じった粘液が地面に垂れ落ちる。

「くっさ！　由麻！　お前マンコくっせえんだよ！　どう責任とってくれるんだ？」

「はぁ、はぁ、はぁ、そ、そんな……責任って言われましても……遅れてイッちゃってすみませんでした咲良様」

美紅は手に着いた善次郎の精液を本人に舐め取らせている。

「ほら、お前も汚いマン汁やマンカス舐め取れよ？」

「は、はい！うごごっ、ペチャペチャ！」

必死で指を舐めるボコボコになった由麻の顔を見つめる咲良。

「もういいよ舐めるのは……そのままお尻を高く突き上げてろよ？」

「はい……」

『ツプ！』

「ひっ！？う、後ろ！？そこだけはやめてえええっ！！」

「こっちの穴だけ無事で済むと思ったの？」

『ズボオッ！！』

「きゃあああっ！！！！」

咲良は人差し指を、初めは第一関節から、そして一気に根元まで由麻の肛門へ挿し込んだ。

「ひゃんんっ！！　お願いやめてえええっ！！　恥ずかしいし痛いよおおっ！！さ、咲良様お願い、抜いて……」

何度も指を出し入れしながら直腸を掻き回し、粘膜の感触を楽しむ咲良だったが、隣では悲鳴が上がっていた。

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「ぐわああああああっ！！いでええええっ！！死ぬううううううっ！！ひいいいいいっ！！」

直径7センチもある美紅のペニスバンドに装着された陰茎を型取った張り形、鉄製の巨大バイブが、善次郎の肛門を破壊しながら何度も何度も直腸内部を抉り倒している。

四つん這いで女子中学生にバックで犯される巨漢……普通ではなかなか見られない絵面であった。

大量の血が地面に降り注ぎ、美紅の膝やスカートは血まみれになっていた。

「肛門がズタズタになっちゃってるよぉ？　もうまともにウンチもできなくなっちゃったわねぇ？うふふ♡」

美紅は目を細めてスケベそうな表情を浮かべながら窄んだり盛り上がったり激しく動く肛門括約筋を見ながら笑みを浮かべている。
ソレでも激しく腰を振り続ける……肛門、直腸からの血液と共に、粘度のある腸液までもがドロドロと美紅の生膝に伝い流れてきていた。

「何ヤラしい液まで垂らしてるの？これ腸液かなぁ？くっさ！ウンチも混ざっててほんとくっさい！罰として去勢の刑に処してやるんだから。覚悟しなさいよ？」

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「はがあああああああっ！！　熱い！！　痛いっ！！　お願いだから抜いてくれえええっ！！　ひいいいいいっ！！」

「コレ抜くのはいいけど……その時はお前の性器、破壊しちゃうけどいい？」

「とりあえずこのケツの痛みから……解放してくれええっ！！ぎゃあああああっ！！」

そっと肛門から極太鉄製バイブを引き抜くと、開ききった肛門は二度と閉じることはなく、ひたすら血液と腸液がコポコポ流れ落ちるだけだった。

「さすがに肛門括約筋破壊したら閉じられないか……あはは。直腸奥まで丸見え♪　お前、ほんとエロいなぁ～♡」

咲良は一度由麻の肛門から指を引き抜き、善次郎の直腸を覗きにゆく。

「ほんとだ！スッゴ♡ピンク色でヌメヌメしててヤラシイなぁお前の直腸♡」

そう言いながら両手の中指を肛門に引っ掛けて思いっきり左右に拡げる咲良。

「お前の彼女もすぐに同じようにしてやるから安心してね？うふ♡」

泣き叫びながら土下座をして糞尿垂れ流しながらも二人に許しを許を乞う善次郎だったが、大型ペンチを手にした美紅が背後にしゃがみ込み、睾丸へゆっくりセットする。

「右の大きい方からやったげるね？」

「もう二度としませんから許して……お願いです」

「今更土下座しても泣いて謝っても遅いの。麻酔は打たないで潰すから失神するかもよ？　いっくよぉ？」

「やめてやめてやめてええええっ！！　ひいいいいいっ！！」

「せめて一気にやったげるわ。それええっ！！」

『ギュムムムムッ！！…………ぐちゃあっ！！！！』

「きぴいいいっ！！！！」

奇声をあげて白目を剥いて失神する男。

うつ伏せに倒れ込んで両脚をビクビクと痙攣させていた。

下半身だけ引き上げて無理矢理四つん這いにさせると、そのまま左の睾丸もペンチで挟み込み、一気に潰す美紅。

『ギュウウウウウッ！！…………ブチュウッ！！！！』

『ドピッッ！！　ピュルルルッ！！』

血の混じった精液が尿道口から勢いよく射出した。

「人生最期の射精が血まみれのセーエキだなんて……なんて哀れな♡」

満面の笑みを浮かべながらペンチを置くと、今度はハサミに持ち替える美紅。

「メスでスパッといくのもいいけど……何度もハサミでジャキジャキやりながら切断ってのもいいわよね？」

「やだ……切断面が美しくないぜそれは……美紅のチンポ切断を見てから女の方やりにいくわ」

咲良もペニス切断シーンを見たい気持ちマンマンだった為、美紅は初めに雁首を切断、次に切断面の尿道口から指を突っ込んで掻き回し、最後に根元から切断、とゆう見せ場を作ってあげた。

「どう？　今の性器破壊は感じた？」

「うん……あたいは見てるだけでビショビショ……夜に責任取ってもらうからな美紅？」

「あはは……チンポちょんぎるところ見て濡らしちゃうとは咲良もエッチになっちゃったもんだ」

大笑いしながらハサミの片刃を肛門に突っ込み、会陰部を切開、陰嚢手前まで切り裂くと、指を突っ込んで股間内部を掻き回し、見事に前立腺を抉り出してしまう美紅。

「ほら、これが男が快感を得る臓器、前立腺だ」

「あはは！　知ってる知ってる！　クルミみたいな大きさだないつ見ても……あまり暴れないし出血も少ないな？」
「痛みで暴れられたら押さえるの大変だから殆ど力入らなくなる麻酔注射打っといた。あと血止めもね」
「莉央みたいに抜かりないな。さすが美紅だ。あたいは女の方お仕置きしてくる」
「うん。コイツの方は、包帯巻いて止血して……バイ菌入らないように処置しとくよ」
咲良が戻ってくると、恐怖に怯え戦慄した表情で震える由麻。
「お願い！　もう許して下さい！　お願いします！」
額を地面に擦り付け、これぞ土下座とゆう土下座の真骨頂を披露するが、咲良はそっとしゃがみ込み、一言伝える。
「子宮抉り出すのとお尻の穴をくり抜くのと、どちらか選ばせてやる」
「ひっ！？　そんなのどっちも嫌ああああっ！！　許してお願いいいっ！！　わーんわーん！！」

ついに土下座したまま号泣し始める由麻。
その時背後から声がした。

「咲良」

「あ？……え？　凪子……どうしたの？　もう動いて大丈夫？」

「うん。子宮抉り出すとか肛門くり抜くとか……そんな残酷なこと止めてやってほしい。ここは拷問処刑島とかゆう島じゃないんだし」

「え？あ、そりゃまぁそうだけど……あたいはあんたの復讐がしたくてウズウズしてるんだが」

「私からのお願い。もういいから許してあげて」

「ええ？……まぁ酷い目に遭わされた本人がそうゆうなら……み、美紅！」

「……咲良が了承するならあたしはいいよ。でも条件付き」

先ほど切断した善次郎のペニスを手に持って来ながら由麻を許すことを許可する美紅。

「亀頭部とチンポ本体と……どちらか食べたら許してやろうかな。亀頭部の方は少し柔らかいかもね？　ほら」

右手に亀頭部、左手に根元から雁首までの本体を掌に乗せてスッ

と由麻の眼前に差し出す美紅。

「ひいっ！？　や、やだっ！」

血と粘液にまみれた切断されたペニスの肉片を目の前で見せつけられた由麻は、あまりのショックに再び号泣し始める。

「……本気なの？」

「……冗談」

咲良の鋭い視線を浴びせかけながらの質問に、少し動揺しながら反省する美紅だった。

「でも鬼畜野郎の無惨な残骸はよぅく見せつけておいてやらなきゃね。えーと……これがキンタマのミンチ。潰したらほじくり出して縫合しとかないと袋の中で腐っちゃうからね……」

ひたすら泣き続ける由麻を見てもう悪さはしないだろうと感じた咲良と美紅。

渋谷凪子の言う通り許してあげることに決める。

「ま、でもあたいのトゥキックで処女膜は破壊してやったしな。そ

れだけでも気が済んだよ」

「ありがと。私も置き手紙でコイツに呼び出されて……一人のこのこと林までやって来たのも悪かったし」

救急車のサイレンが少しずつ近付いてくる中、渋谷瓜子と再び別れの挨拶をかわす。

「大丈夫？　途中まで送ってくぜ？」

「反対方向だし……顔だけこんなだけど身体は動くから一人で帰れるよ。美紅さん、咲良をよろしくお願いします」

「うん。また遊びに来たらその時もよろしくね」

美紅も咲良と並んで笑顔で手を振る。

「やっぱ美紅は強いなぁ。まだまだ身体鍛えるわあたい」

「まぁ適当に頑張って。あたしが守るからそんなに筋肉付けなくていいし……」

二人の決断（後書き）

懐かしの母校に……大野真子と小野メグにお別れをした宮垣咲良。最愛の彼女である鬼頭美紅と暗闇の中、駅を目指すのであった。

「あれ？　咲良ちゃま？この駅……終電時間過ぎてない？」

「ほんとだ！だから田舎は嫌なんだよ！なんで２１時に終電出ちゃってんだよ!？」

「はぁ。あんたの住んでた町のことちゃんと把握しておいて欲しいよねほんと……」

「電車なんて滅多に乗らなかったからな……タクシーも北部地区では２０時で閉店してたな」

スマホで調べて近くのホテルまでひたすら歩く二人の女子中学生アイドルであった……。

「一番近いホテルまで１０キロって……このまま歩いてどれだけかかるの？」

「あたいに聞かれても……そんな距離今までの人生で歩いたことないし……」

最低夫婦の末路（前編）（前書き）

残酷処刑島で本日も二人の夫婦が拷問処刑されようとしていた……。
人生最期の苦痛を味わうことになる二人の運命は？

最低夫婦の末路（前編）

「あ、あん、あん……彰（あきら）……気持ちいい」
「お、俺もだ……愛してるぜ沙羅（さら）」

青空の下、性行為に精を出す２２歳同士の若い夫婦。
見渡す限り雑草と野花に包まれた屋外でのセックスは、かなり興奮度の高いものである。

――――が、そこが無人島とゆうことと、人生最期のセックスになるとゆう事実が無ければの話だが。

「おい、まだイッちゃダメだよ。一度抜いてアナルに挿れ直しなさい！」

足を組んで椅子に座っている人物がいる。
大人の性行為をジッと観ていた黒髪ロングの１２歳の少女が、腕組みしながらそう伝える。

拷問処刑人のリーダーでもあり、アイドルグループのセンターでもある菅野莉央は、組んだ膝に肘を置き、頬杖を付きながら生々しいセックスを堪能していた。

その隣には女子高生の円満愛衣……元々は処刑される側の立場だ

ったが、莉央に命を救われて、今は菅野愛衣と名を変えて同じ屋根の下で暮らしている。

そのまま愛し合うようになってしまった１２歳と１８歳のレズカップルであった。

拷問処刑人のメンバーは殆どが、《真絆ガールズ》とゆうアイドルグループに属しているが、菅野愛衣は女子高生であり、拷問処刑人、とゆうだけである。

「莉央様、あの男、妻が痛がってるためか奥までペニスを挿入せずに腰を振ってますね。お仕置きしましょうか？」

「あはは……アナルセックスは未経験だったか……そだね。とりあえずあのデカいオチンチンを根元まで挿れるとこが見たいな」

「わかりました」

付き合ってるとはいえ、小学生である莉央の奴隷からの進展でカップルになったため、女子高生の愛衣は莉央に敬語を使う。

それでも過去の恐怖心はもうすでに失せて、莉央への愛情だけを持つ愛衣だった。

そっとアナルセックス中の二人に歩み寄り、男の方へ語りかける愛衣。

「正常位だから奥まで入らないの？　妻が痛がってるから入らないの？」

「す、すみません……両方です」

「とりあえず抜いて立ち上がりなさい」

「は、はい」

坂部彰は妻の沙羅へ半分ほど挿し込んでいたビッグサイズのペニスをそっと引き抜くと、ゆっくり立ち上がり、愛衣の方へ向いた。

いきなり襲いかかる強烈な往復ビンタ。

ロン毛の彰は左右に激しく髪をたなびかせながら女子高生からの往復ビンタを数十発喰らい続ける。

『パンパンパンパン！！　パパパパパパンッ！！』

「あぶぶぶぶっ！？　へべべべべえっ！！」

前髪パッツン、黒髪ロングの菅野愛衣の往復ビンタは強烈だった。

頬は真っ赤に染まり、裂けた唇からは血が流れ落ちる。

拷問処刑人からの暴力は本日これが初めてであった。

「バックでやりなさい」

「はがが……痛いいい」

「早く！　ほら、沙羅とかゆうお前も起きて四つん這いになってお尻突き上げろ。人生最期にセックスしたいって言ったのはお前たちの方なんだから」

「は、はいっ！　わ、わかりました！」

少し夫とのノーマルセックスと、アナルセックスで感じていたのか、かなり性器を濡らしたまま起き上がり、愛衣の言うがままに四つん這いになる沙羅。

死ぬとわかっていても……殺されるとわかっていても……拷問処刑人の美少女二人に裸を見られて、更に愛する妻とセックスするとゆうシチュエーションに、ペニスをビンビンに勃起させ続けている彰であった。

『ズブ……メリメリメリメリ』

「ひぎっ!?　痛いっ！！　やめて彰っ！！　それ以上挿れられたら私……」

「ごめん！　こいつらの言うこと聞かなきゃ紗羅は八時間もかけた拷問の後、処刑されるみたいなんだ……そんな長時間君が苦しむ様なんて絶対見たくないから……我慢して」

「そんな……痛あああああっ！！」

ついに18センチはあろうかとゆう大きなペニスは、沙羅の肛門を貫き、直腸の奥深くまでめり込んでいった。
突き当たりのS字結腸を激しく突く夫のペニス。

肛門括約筋が少し裂け、鮮血が溢れ出る。

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「ひぎいいいいいいっ！！　裂けるうううううっ！！　やだああああああっ！！」

激痛に髪を振り乱して号泣し始める沙羅。
腕を組んでその光景を目を細めて見つめながら呟く愛衣。

「そのまま妻のアナルに中出しするのよ」

「は、はいっ！　はっ、はっ、はっ、はっ……沙羅！イ、イクッ！イクよっ？」

「いだいいいいいっ！！」

『ドピュッ！！　ドピュピュピュピュピュピュピュウッ！！』

「やはあっ！？　お尻の奥が熱いいいいいっ！！」

大量の精液を妻である沙羅の直腸へ注ぎ込んだ彰。
全ては自分たちが処刑されることを受け入れた上で、妻の苦痛を少しでも和らげてもらうために奮闘した彰なのであった。
そっと血まみれの肛門からペニスを引き抜くと、ドクドクと精液が溢れ出てきた。
「はぁ、はぁ、はぁ、き、気持ちよかったよ沙羅……痛くしてごめんな」
菅野愛衣は、セーラー服を着たままで腰のスカートの上から何かをセットしている。
「ガチャガチャ……ガシャン！」
長さ20センチ、直径5センチはあろうかとゆう超極太、超ロングのアナルバイブを腰に巻いた革製ベルトに装着したのであった。
俗にゆうペニスバンドである。
「次はあんたが四つん這いになるのよ」
「え？　ま、まさか」
「そう。あんたは今から私に犯されるの。愛しい妻が見ている前でね」

「そ、そんな……やめてくれ……そんな大きくて長いのケツに入らない！　しかも沙羅が見てる前で女子高生に犯されるなんて……絶対嫌だ！　やめてくれお願いだっ！！」

しばらくやりとりを見ていた女子小学生、菅野莉央がゆっくり立ち上がり、沙羅の元へ歩み寄る。

「沙羅……あなたからもお願いしたら？　これを拒否したら死ぬまで八時間は苦しませてやるんだからね？」

「ひっ！？……お願いお嬢ちゃん、私たちを許して……もう二度と小学生の子供たちにイタズラしたりしないから」

「あなたたちにイタズラされた幼児二人は出血性ショックで死んじゃったの。知ってた？」

「すぐあのアパートから逃げたから……まさか死んでたなんて知らなかった……彰も私もあの子達を殺す気なんて本当になかったの！　信じて！」

「わかった。信じるよ」

大きく目を見開いて莉央の顔を覗き込む沙羅。

「ホント！？　じゃあ許してくれるの！？」

「そんなわけないじゃん。それとこれとは別。やめて許してと嘆願した幼児たちに対してあなたたちはイタズラをやめたげたの？」

「そ、それは……」

「泣き喚いてる幼い兄妹を夫婦で犯しまくったんだよね？　指や道具を使って……この変態夫婦！」

一瞬垣間見えた生への希望を再び失いつつある沙羅の前に、愛しい夫の悶絶する表情が飛び込んできた。

『ズブブブ！！……メリメリメリメリ……ブチブチブチ』

「ぎひいっ！？　ぐわあああああああああっ！！！！」

愛衣にバックで無理矢理アナルバイブをぶち込まれた彰は、この世のモノとは思えないほどの苦痛の表情を見せて絶叫する。

「まだ半分だよ？　あと10センチ……ほら、あんたの汚い肛門にどんどん入るよぉ？　ほらぁ♡」

『ズボボボボ！！……グチュチュチュチュ！！……バリバリバリバリッ！！』

「ぎゃあああああっ！！　裂けるっ！！死ぬうううっ！！」

殆ど全ての肛門括約筋を破壊しつつ、直腸内壁を激しく擦り付けながら犯してゆく愛衣のペニスバンド攻撃。

悶絶しながらガクガク震えながら地面に胸を着いてへたり込むが、更に激しく腰を押し付け、ついに根元までズッポリと飲み込まれてしまった。

『ズチュチュチュ……バチュンッ！！』

「ほらぁ～。全部入ったぁ♡」

「ぎぃえええええええっ！！　いだいいいいいっ！！　死ぬ死ぬ死ぬうううっ！！」

「汚いケツマンコ……もっと血まみれにしてあげるわ♡」

『バコバコバコバコバコバコバコッ！！』

半分ほど抜いては根元までぶち込む超高速のピストン運動を始める愛衣。

裂けた肛門から噴き出す血液と、直腸内の便、腸液が混ざり合って愛衣のスカートや太ももを汚す。

「臭い便から腸液から……色んな液体出てるよ？」

『バコバコバコッ！！』

「いだいいいいいいっ！！　やめでえええっ！！」

女の方へ歩み寄り頭を撫でながら囁きかける莉央。

「夫の哀れな姿を見ながら先に逝っちゃおうか？」

「い、嫌っ！お願いお嬢ちゃん、殺さないで……」

女子高生に激しく肛門を犯される夫の姿を見ながらも、死への恐怖で号泣し始める妻の沙羅。

道具箱のようなものから何かを取り出す１２歳のアイドル、菅野莉央を涙目で見つめる沙羅だったが、それが何かを認識した時に全身に震えがくる。

細身の剣、サーベルであった。

ブシュンブシュンと振り回して風切り音を立てる莉央に、更に震え上がる沙羅は思わず叫び出してしまう。

「やめてっ！そんな剣で斬らないでぇえっ！！」

しゃがみ込んで再び剣を持つ反対側の左手で頭を撫でる莉央。

「斬らないから安心して」

「え！？じゃあ許してくれるの！？」

「挿し込むんだよ」

「え？」

そのまま髪の毛を掴み、右手の剣を地面へ置くと、頬に激しく往復ビンタを打ち込む。

「パンパンパンパンパンパンパンッ！！」

「ぎひいいいいいっ！！　痛いいいいいいっ！！」

仕上げに正拳突きを鼻っ面に打ち込むと、激しく鼻血が噴き出した。

「痛いいいいっ！！やめてお嬢ちゃん……ほんと助けて！何でもしますから……」

「じゃあこの簡易ベッドにうつ伏せに寝てくれる？上半身だけでいいわ。膝は地面に置いて、両手はベッドを抱え込むようにして。四つん這いでお尻を突き出すような体勢で縛らせてもらうから」

簡易ベッドに縛り付けながらも何度も泣きながら許しを乞う沙羅だったが黙々と拘束を続ける莉央。

目の前ではアナルを女子高生の愛衣に散々犯されて大量出血しながら簡易ベットに仰向けに拘束される夫の姿を見た。
太ももに注射のようなものを打つと、みるみるウチにペニスがフル勃起してきた。

「旦那さん……これから夫婦揃って殺されるって時に元気だよね？」

「ううう……私もあんな夫の姿を見たくない……」

『シコシコシコシコ』

そのままシゴキ始める愛衣。
夫は頬を赤くして必死で感じないように我慢しているみたいだったが、更に愛衣の手コキは速度を増す。

『シコシコシコシコ……シュコココココココッ！！』

「射精しないで我慢できたら夫婦二人とも殺さないであげるわ」

「うっ、ううっ！！ほ、本当ですか！？うううっ！！」

「本当よ。私の手コキに我慢出来たらの話だけどね……」

微かに二人のやりとりを聞いた妻の沙羅は莉央に大声で問いかける。
「ちょ。ちょっと！あの子が言ってること本当なの！？夫が我慢できたら許してくれるって！？」
「本当だけど……１００％無理だから期待はしないで。後ろから前か選ばせてあげる。どっちにする？」
「え？　な、何が後ろ？　前？　え？」
「今からこの剣で沙羅さんの性器か肛門からお口まで串刺しにするの。どっちから挿し込むか決めさせてあげるって言ってるの」
「ひっ！？　そ、そんなのどっちもヤダぁあっ！！　許してえええええっ！！まだ夫が我慢してる……あ！？」
『シュコココココココッ！！……ドピュッ！！　ドピュピュピュピュピュピュピュピュウッ！！』
「ええっ！？そ、そんなっ……バカアアッ！！　なんで命かかってるのにイッちちゃうのよ！？　バカアアアッ！！」
愛衣の超高速手コキによって大量の精液を噴き出す夫の姿を見た沙羅は、一気に絶望感に覆い尽くされた。
「ね？あたしが言ったとおりでしょ？」

「ううう……そ、そんなぁ～。えーんえーん！」

年甲斐もなく子供みたいに泣きつづける沙羅の頭を優しく撫でる莉央。

「処刑する前に気持ちよくさせてあげようか？……同性のあたしで良ければだけど」

「しくしく……ぐすんぐすん……もうどう足掻いても殺されちゃうの？」

「うん」

「じゃあお願いします。同性でもあなたほど可愛い女の子になら我慢できる。イカせてお嬢ちゃん……」

「わかりました。お尻クリトリスと膣、全ての性感帯を責めてあげるわ」

「はい。お願いします……せめて優しくして……」

四つん這い状態で縛り付けられたまま、人生最期のオーガズムを処刑人の小学生アイドル、菅野莉央から与えられることを絶望の縁で受け入れた坂部沙羅であった。

最低夫婦の末路（前編）（後書き）

必死で泣き叫んで怒りを伝える沙羅だったが、夫の坂部彰は無情にも妻の眼前で女子高生に射精させられてしまう。

ついに生きられる希望を完全に失った紗羅は、夫と同じく死ぬ前のオーガズム、快感を得ることを望むのであった。

菅野莉央による女をイカせる処理が開始される……。

「ほら、汚いオマンコにご褒美くれてあげる……人生最期の快感をね♡」

最低夫婦の末路（後編）（前書き）

菅野莉央に指で犯されながら快感を得る坂部紗羅。
のちに襲う地獄の入り口であった。

『つぷ……ズブブ』

「あ、あああん」

膣内を二本の指で掻き回し、親指でクリトリスを激しく擦る。
女の性感帯などはこれまでの死刑囚たちで知り尽くしているため、小学生相手にとはいえ、全身を痙攣させせるほど感じてしまう沙羅だった。

更に肛門へも二本の指を挿入して掻き回す。

『グチュグチュ！　ズブブブブ！　グリグリッ！』

「はああっ！！　んんんっ！　イ、イク……イッちゃうううっ！！」

『プシャー！！』

四つん這い体勢のまま簡易ベッドに縛り付けられた女は、潮を噴きながら莉央にイカされる。
更に膣内を激しくピストン、更に掻き回すと、二度目も絶頂を味わうのであった。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ」

「気持ち良かった？」

「は、はい。でもやっぱり死にたくない……ぐすんぐすん」

急に我に返った沙羅は再び莉央に命乞いを始める。

「そんな沢山愛液垂れ流しながら言われても……直腸内の便もかなり硬かったよ？　便秘なのかなぁ？」

「は、はい。もう一週間ほど出てないの……」

「じゃあその便をやっつけゃおっか。死ぬ前にせめて一矢報いようよ！……坂部沙羅。あなたを肛門串刺し刑にて処刑執行することに決定しました」

「ひっ！　やだ！　お願いやめて許してっ！！」

再度サーベルを手にする莉央に、唯一の可動部分である頭を激しく振りながら抵抗を見せつつ命乞いをする女。

「多分オマンコから突き刺すよりも少し痛みはマシだと思うよ。今まで串刺しにしてきた罪人たちの死に様を見てるとそう思うの」

「ほ、本当にそんな可愛い顔した小学生のアイドルのあなたが……

そんな酷いことしてきたの！？　冗談って言ってよお願いだから！」
なかなか子供に処刑される現状を受け入れられず、訪れる死をも受け入れられず、泣きながら必死の抵抗を見せる沙羅だったが、目の前の彰への仕打ちで冗談ではないことを思い知る事になる。
菅野愛衣が日本刀を手にして鞘からゆっくり引き抜くと、仰向けに拘束されていながら真上に向いて勃起しているペニスを目掛け、水平に振るシーンであった。

「まだ勃ってきてるよ？　奥さんの前でちょん切ってあげる」

「えっ！？　わ、わあああっ！？　やめろ！　やめてくれええっ！！」

『ブシュンッ！！……スパァンッ！！』

「ぐぎゃああああああっ！！！！」

セーラー服を着た女子高生の一閃は、見事に男のペニスを斬り落とした。
雁首を失ったペニスは血を噴きながらくるくるお腹の上で回っている。

「クスクス……斬られた勢いでクルクル回ってる！あはは！……ご、ごめんなさい。私としたことが……笑っちゃ気の毒だよね」

『スチャッ！』

笑いを我慢しながら再度強く握り込む愛衣。
そのまま再度水平斬りを放つ。
唯一残されたペニス本体の根元から、上に吹っ飛ぶ大きな胴の部分。
これで見事に、男の身体からペニスが完全に取り除かれた。

上下から血を噴きながら亀頭部とは反対方向に飛んでゆくペニスの胴部分。

「デカマラめっ！　いくわよっ！」

『スパパパパパパッ！！』

愛衣は落ちてくるペニス目掛けて何度も日本刀を振り付ける。
バラバラの肉片が地面にボタボタと降り注いだ。

「凄いね愛衣！チンポのミンチ完成じゃん♡」

「ありがとうございます莉央様♪　亀頭部はそのまま残しておいて後で紗羅に食べさせようかと……」

「あはは！そうしょっか。だってさ沙羅……旦那のオチンチンを刺身で食べさせてあげようか？」

「ひっ！　ひぃぃぃいっ！！　やだっ！　やだあああっ！！　アキラッ！！　彰あああっ！！」

「ぐわあっ！！」

『ズドッ！！』

愛衣の日本刀の切っ先がヘソに突き刺さる。
そのままペニス切断面まで一気に斬り下げると、大量の小腸や大腸がブリブリとはみ出して地面へ落ちてゆく。

「うふふ。ピンク色や白いハラワタがたくさん出てきたわね？面白ーい♡」

「愛衣、もう殺しちゃうの？」

「後もう少し……乳首と睾丸もサバイバルナイフに持ち替えて斬り落として……最期は首をゆっくり時間をかけてＩＳＩＳの処刑みたいにやっちゃおかなって♡　どうですか？」

「結局キンタマも破壊しちゃうんだ……了解っ！　男の方殺すとこ最後まで見てといてからこの女殺すよ」

「はーい！　莉央様」

日本刀を置き、サバイバルナイフに持ち替えた愛衣は、手際よく左右の乳首を切断してゆく。

声にならない悲鳴をあげながら身体を捩りまくって暴れる彰だったが、ベッドに硬く縛った拘束ロープはびくともしない。

股間の前に立ち、右脚を振り上げる愛衣。

「踵落としでまず一個潰してあげるわ。それえっ！」

『ドカッ！！……ぐちゃあっ！！』

的確に振り下ろされた愛衣の踵は、男の右睾丸を一瞬で破壊した。更に腹部からハラワタを垂れ流しながら白目を向いて痙攣し始める彰。

「女子高生に蹴り潰される気分はどう？　奥さんの見てる前なんだからもっと頑張れ！　ほら、気絶してる場合じゃないわよ？」

更にもう一撃、今度は左睾丸を踵落としで潰すと、ペニス切断面から血まみれの精液が飛び出した。

「やだ……まだセーエキ残ってたんだ……そんなに全身痙攣させて……奥さんの前でみっともない」

性器破壊されてゆく夫の姿を見ながら号泣を続ける沙羅だったが、ついにその時はきた。

『つぷっ』

「ヒャアッ！？」

菅野莉央が手にしたサーベルの切っ先が、遂に女の肛門へ侵入してきたのである。
冷たい金属の感覚が紗羅の肛門へ伝わる。

「ヤダァッ！！　やめてっ！！」

「やだ。夫の最期を看取るくらいのタイミングで沙羅も死んじゃうように調整するから……ゆっくり挿し込んであげる」

「そんなっ！　殺すなら苦しまないように一気に貫いてっ！ゆっくりなんて嫌ああああっ！！」

『ズブブブブ……』

「やあああああっ！！」

ゆっくり挿入されてゆくサーベルは、固まった便を貫通し、ついにS字結腸まで届いた。
そこで一度手を止める莉央。

「ここからは地獄の始まり……どんなにもがいたってゆっくりハラワタを貫いてお口まで進んじゃうからね？　お覚悟を」

なかなか死の覚悟ができないままふと顔をあげると、ちょうど菅野愛衣がサバイバルナイフで、潰した睾丸を摘出しているシーンが見えた。

「見事にグチャグチャになってるわよ？あっ！！　女に食べさせる時亀頭部に睾丸ミンチをソースがわりに振りかけよっと♡」

恐ろしいことを言いながら先ほどちょん切ったペニスの亀頭部と、陰嚢を切り裂いてほじくり出した睾丸のミンチを乗せた皿を持ってくる愛衣。

「莉央様、少し待ってくださいね。そこ突き破ったら激痛でせっかくのご馳走が食べられなくなりそうですから」

「そりゃそーだね。じゃあ早くコイツに食べさせて」

紗羅の髪の毛を鷲掴みにして思いっきり上方に突き上げると、脅すように愛衣が囁く。

「ほら、オバさん！　愛しい旦那の亀頭部だよ。ピンク色のソースは睾丸のミンチ……血と精液が混ざってるから粘度があってピンク

色になってるけど、本当は真っ白なんだ」

「ひいっ！！　そんなの食べられないっ！！　喉に詰まるっ！！」

「そうゆう問題なんだ……じゃあ包丁数回入れてお造りにしてあげるわ」

愛衣は料理人のような腕捌きで、見事に亀頭部の薄造りを造り終える。

箸で掴んで一枚一枚沙羅の口へ捩じ込んでゆく。

「むごごっ！　むぐうっ！！　ううううっ！！」

「どうしたの？　早く飲み込むの。愛する旦那のチンポなんだから」

時間をかけて咀嚼し、ようやく飲み込むと、次の一枚がすぐに口内へ突っ込まれるのを繰り返し、遂に全ての亀頭部お造り睾丸ソース掛け……を食べ切ることに成功する沙羅だった。

「完食！　偉いわね。じゃあ莉央様、男の処刑を開始します」

「うん。串刺し刑は口まで貫通しても死なないから……夫の最期は堪能できると思うよ」

ゆっくりと彰の元へ歩み寄り、再度サバイバルナイフを手をすると、

ハラワタまみれの男の胸の上に座り込む愛衣。
そっと喉元にナイフをあてがい、ゆっくりと左右にスライドさせる。
パカっと開いた喉元から鮮血が噴き出してくるが、構わずゆっくりゆっくり左右に引き続けると、呼吸音が泡が吹くような音に変化した。

「気道まで切れちゃったわよ？　苦しい？」

「ゴポポッ！！　ふんぐううっ！！　ガバガバッ！！　カヒュウッ！！　カヒュウッ！！」

過呼吸と血液による恐ろしいほどの呼吸音に変化した後、少し手を止めて呼吸困難で苦しむ彰の姿を見下ろしながら目を細めて冷たく微笑む愛衣。

「すぐには殺さないよ？　しばらく苦しんでくれる？」

陰部の切断面と切開された陰嚢部分と、肛門からドクドクと鮮血を垂れ流しながら懸命に呼吸を続ける彰。
殺してほしいと願いながらも声も出せずに苦しむ様を見て冷笑する愛衣の姿は、妻の沙羅から見ると悪魔そのものであった。

「苦しそうだね旦那さん……」

「も、もう見たくない……早く殺してあげて！　私も早く殺してっ！」

「おっ！　ついに死を受け入れたんだ！　凄いじゃん。じゃあ地獄の国へご案内～♡」

『グリッ！　ズブブッ……バリッ！！』

ついに直腸の突き当たりで待機していたサーベルの切っ先が、女のS字結腸を突き破った。
一瞬で冷たいだけの感覚から激痛に変化する瞬間であった。

「ぎゃああああああっ！！　痛いいいいいいいっ！！」

「もう旦那さん所でないでしょ？　自分の心配だかすることね」

ゆっくりゆっくりと何枚も腸を貫きながら腹部奥深くへ進んでゆく莉央のサーベル。
胃まで達した頃に血と一緒に彰の性器のミンチを嘔吐してしまう。

「んぎいいいいっ！　がはあっ！？　ゴボゴボッ！！」

「ん？　せっかく頂いた食材を吐くなんて……お仕置きが必要ね紗羅……沙羅だけにサラにお仕置き……あはは！」

しょーもないシャレを自分で言って自分でウケながらサーベルを肛門から一気に引き抜く莉央。

「オマンコからの痛みも味合わせてあげる♡　えい！」

一気に突っ込まれたサーベルは膣内を貫通し、子宮口を突破、更に子宮の奥を突き破って胃まで届いた。

「ぐえええええっ！！」

「どう？　同じ胃まで串刺しでもアナルからいくのとマンコからいくのでは少し痛み方が違うでしょ？　実はマンコから子宮貫く方が痛いんだよ？　知ってた？」

冷たく問いかける莉央の声はもう女には届いていなかった。
激痛で身体をクネクネともがくように動かしながら首を激しく振り続けるその姿は、もはや狂人にも見える。

「突き刺す穴と角度を少し変えるだけで色んな臓器を貫通出来るんだよ？」

「ギャァアアアアアッ！！　ぎひいいいいいいっ！！！！」

このタイミングで再び愛衣の手が動き始める。

ついに背骨につながる首の脊椎を断絶させると、皮一枚で繋がっている状態になった。
この瞬間、坂部彰は痛みも意識も失い、永眠することが許されたのであった。

「もう手で千切れそうね。よっ」

『グリグリッ！……ブチッ！！』

ついに胴体から隔離された生首を手に取り、高く掲げる愛衣。

「オバさーん！　旦那の首、獲ったよぉー！！」

夫の最期に泣き喚くどころか、自分の身体の激痛に絶叫する紗羅には当たり前だが愛衣の言葉は届かない。

『ズポンッ！　ザシュッ！　ズポンッ！　ザクッ！』

何度も何度も引き抜いては刺し込み、引き抜いては刺し込み……膣口と肛門を交互に替えながら数十回も繰り返した。

「心臓以外の臓器は全て貫通させてあげたわよ？　痛いでしょう？」

「あぐうっ！　ぐごおおっ！　ぎひぃぃぃぃぃっ！！」

「もうねぇ。挿し込む二つの穴をいちいち変えるの面倒だから……一つの穴になるよう繋げてあげる。えいっ！」

肛門に刺しこまれているサーベルの根元部分を性器側にこねると、ザックリと会陰部が切開されて、性器と肛門が繋がってしまった。

激しく出血する口と股間……白目を剥いて痙攣を始める女の口からついにサーベルの切っ先が飛び出した。

『ズブブブブ……ばしゅっ！！』

「うごおおおっ！？　ゴポゴポッ！！」

苦しそうに目を回転させるが、いまだに死にきれない沙羅は、まさに生き地獄を味わうことになる。

莉央は全身の拘束を解き、沙羅を地面に蹴り転がす。

「あはは！　一つになった穴からお口まで貫通しちゃったから身体をまともにくねらせられなくなってるぅ♪」

そこに生首を手にした愛衣がやってきた。

「莉央様、この苦しそうな表情の生首、どうします？」

「その辺に投げ捨てといて。今からオッパイ切り刻んで切除しちゃおうと思うから愛衣も手伝って」

「この状態でまだ胸を……うふふ。凄く残酷ですね莉央様」

「てへっ！……もう愛衣だってあたしのこと言えないじゃん？」

「あっ！　それもそうですね。うふふ」

二人の可愛い顔をした悪魔は串刺しにされたままヒクヒクしている女の傍にしゃがみ込み、各々が手にするメスで二つの胸をズタズタに切り裂き始める。

切るたびにビクビクと反応するのを楽しみながら数十回切れ込みを入れると、ついに根元から削ぎ取って平らな胸に手術することに成功する二人。

「さてと……剣を抜いてトドメをさすか」

莉央はゆっくり股間から口まで貫通しているサーベルを引き抜くと、愛用の短銃を手にした。

「いきなり頭や心臓は撃たないんですよね？」

「もち！　もう少し生き地獄を与えたいからね」

両手両脚、ヘソ、切開された膣と肛門、死なない場所へ何発も撃ち込む。

『パンパンパンパンッ！！　パンパンパンパンッ！！』

膣と肛門からミンチになった子宮と大腸がドロドロと垂れ流れてきた。

「ヤダァ……二つの穴から何かのミンチへリ出すなんて……エロいなぁ」

莉央はこの時点で興奮してきて陰部を濡らしてしまう。

「莉央様、私も濡れちゃったです。今夜は激しいエッチをお願いします」

「そ、そうだね！　お互いの激しく掻き回して気持ちよくなろうね。じゃあさようならカス女……」

『パンッ！！……グチャアッ！！』

額へぶち込んだ鉛弾は後頭部へ抜け、大量の脳みそを撒き散らかせる。

「ヘソからも何かのミンチが……」

「卵巣っぽいね。中が風穴だらけだから変なとこから出てきてる……」

最低夫婦の末路（後編）（後書き）

本来気持ちよくさせるのはタブーである拷問処刑であったが、最近方針が変わってきて、いくら罪人でも人生最期の日くらいは気持ちよくさせるのも可、とゆう規則に変更された。

罪人本人が望む場合と、強制的にイカせる場合があるが、最近このパターンが増えてきたのである。

「莉央様、殺された幼児たちもこれで成仏できますかね？」

「あたしはあの世なんて信じてないけど……少なくとも殺された本人や遺族たちの仇は討てたんじゃないかな」

残酷処刑島に新たに二つの遺体が加わった……。

悪魔の母（前編）（前書き）

とある市営住宅に、息子の友達に目を付ける非道な母親がいた。
薬物中毒になりながらも母親一人で家庭を切り盛りしてきたのだが
……。

悪魔の母（前編）

「悠太！　あれだけお友達は美形な子を連れてきなさいと言ったでしょう！？　あんな不細工なヤツ二度と連れてくるな！」

「ごめんなさい母さん……僕には真介くんがハンサムに見えたから……」

「私のことは“ママ”と呼ぶようにいつも言ってるでしょ！？まだ分からないの！？」

「ひっ！！　ごめんなさいママッ！！」

東部地方にある古びた市営住宅の四階……母親と中学一年生の男の子の、二人暮らしの家庭があった。
父親を数年前に交通事故で亡くし、その後は母親の変わった趣味を露わすようになってきていた。

『パァンッ！！　パァンッ！！』

「嫌ああああっ！！　痛いいいいっ！！　許してママァアアーッ！！」

「うるさいっ！！　せっかく楽しみにしてたのに！！」

ズボンとパンツを膝まで脱がされ、四つん這いにさせられたまま、

お尻を平手打ちで何度も何度も叩かれる息子の赤崎悠太。
３４歳になる母親の名は赤崎美恵子。
元々悪趣味な性癖を持っていた彼女は、夫を亡くした辺りから豹変して露骨な仕打ちをみせるようになってしまう。

「今日はお尻叩きだけじゃ済まさないからね？」

「え？　ママ……お願いだから痛くしないで」

「うるさい！　早く自分の両手でお尻大きく開いて穴を見せな！」

「え？　あ、はい！」

悠太はそっと臀部に両手をあてがい、ゆっくり左右に開く。
中学生のピンク色の肛門が露わになる。

「私って変かしら？　我が息子にこんなことをして……」

『ツプ……』

「やはあっ！？　や、やめてママッ！！」

「黙って力を抜いてなさいっ！　股を閉じたりしたら承知しないわよ！？」

『グリリ……ズボボボボ！』

「痛いっ！！　痛いよぉママ……お願いだから抜いてぇ～」

　人差し指を悠太の肛門に挿し込み、直腸奥深く突っ込ませてゆく母親の美恵子。

「ああっ！　痛いっ！　やめてええっ！！」

　息子の悲痛な訴えも聞かず、遂に美恵子の指は根元まで挿入されてしまった。

　更に直腸内を掻き回し始める。

『グチュ……グプグプッ！……ぬちゅぬちゅ！』

「あっ！　あんっ！　やめてママァ～ッ！」

「なんかアンタ見てるとイライラするんだよね。このまま腕ぶち込んで殺してやろうか？」

「んぎいいいっ！！　やめて痛いっ！！　お願いママ許してええっ！！」

　号泣する息子の菊門から指を引き抜いたのは更に五分が経過した後であった。

「えーんえーん！　痛いよぉ〜！　ぐすんぐすん……」

引き抜いた便まみれの指先を冷ややかな無表情でしばらく見つめる美恵子。

「いつまでも肛門ヒクヒクさせてるんじゃないわよ？　明日こそはクラス一の美男子を連れてきなさい」

「ぐすん……うん。頑張ってみる」

――あくる日の甲南中学校。

この学校にはアイドルであり、拷問処刑人でもある鬼頭美紅と最近転校してきた宮垣咲良も通っていた。

この時点ではまだ……二年生の美紅と咲良には一年生の男子生徒がこれから先、悲惨な運命を辿ることを知る由もなかった。

甲南中学校一年二組。放課後。

女子の数人に聞き込み調査をして、クラス一の男前を特定することに成功した赤崎悠太。

武市伸也とゆう少年は性格もよく、芸能界に即スカウトされるほ

どの美男子であった。
クラスの女子たち数人は、彼のレベルが高すぎてなかなか打ち明けられずに我慢している状態とゆうこともあり、まだ伸也に彼女とゆう存在はいなかったのである。
悠太と伸也は格別仲が良い訳でもなく不仲でもなく……たまに談笑する程度の仲であった。

「武市くん！　ちょっとお願いがあるんだけど……」
「ん？　どうしたの？　あらたまって」
「この前話してたお笑い芸人のホライチのことなんだけど……僕の母さんが凄くファンなんだよ。握手してもらった時の話、詳しく聞かせて欲しいと頼まれたから家に来てくれないかな？」
「ええっ？　赤崎くんのお母さんも変わり者だよね〜。結構下品なギャグ連発するから女性ウケ悪いんだけどホライチは……いいよ。君の家は帰り道にあるし寄らせてもらうよ」

二人は仲良く話しながらチャリにまたがり帰路に着く。
１５分ほども走ると、赤崎悠太の市営住宅に辿り着いた。

「こんちちは〜。武市です」
「あら悠太のお友達？　いらっしゃい！　上がって。ゆっくりしていってね！」

「ありがとうございます。お邪魔しまーす！」

気分よく靴を脱いで丁寧に揃えてから部屋に上がる武市伸也。

出されたオレンジジュースを飲みながらお笑い芸人の話で盛り上がる三人。

一時間が過ぎ、窓の外は薄暗くなってきていた。

「じゃあ僕はそろそろ帰ります。ご馳走様でした」

「あら。もう帰るの？もう少し付き合ってくれない？奥の部屋で面白いものを見せてあげるから」

「え？　あ、は、はい」

奥の六畳の部屋へ呼ばれて入ってゆくと、悠太の母によって少し薄暗い照明が灯される。

「ほら、早く言われた通りにしなさい」

「はい。母さ……ママ」

素っ裸になった息子を平手打ちで叩き始める母親。

にわかに信じがたい光景が薄暗い小さな部屋の中で垣間見える。

顔、背中、お尻、何度も何度も叩かれてゆくうちに遂に痛みで泣き出してしまう悠太。

「おばさん！　もうやめてあげて下さいっ！　……赤崎くん可哀想です！　泣いちゃってます！」

暴力の手を止め、ゆっくり振り返り伸也の目を見つめる美恵子。

「そんなに息子のことを心配してくれてるの？　親友でもないと聞いてるけど？」

「ふ、普通の友達ですけど……それでも」

「それでも？」

「今日家に呼ばれたから……ぼ、僕の中で親友に近付いた感があるんです……だからもうやめてあげて下さい」

女優なみの美女であり、子供を産んでいるとは思えないほどスタイルもいい赤崎美恵子は、そそくさと衣服を脱ぎ始めた。
ＳＭ女王が着用する黒のボンテージが少年の目に飛び込んでくる。

「なら……キミが代わりに私の仕置きを受けてもらうわ。ソレでもいいのね？」

「え？そ、そんな……」

全身真っ赤に染めて泣き続ける悠太を見つめる伸也。
ここで逃げたら男として最悪だと思い始める正義感の強い心が一気に溢れ出る。
「わ、分かりました。僕が代わりにお仕置きされますから赤崎くんはもう許してあげて下さい」
「うふふ。その言葉、忘れないでね。服を全て脱ぎなさい」
「は、はい」
後悔しても遅かった。
伸也が思っていた以上に、Ｓっ気溢れる美恵子の責めはキツかった。
まずはお尻叩き……強烈な平手打ちが美男子の臀部を真っ赤に染め上げてゆく。
『パァンッ！！　パァンッ！！　スパァンッ！！』
「痛っ！！　ひっ！！　んぎいっ！！」
綺麗な大人の女性に裸を見られ、お尻を叩かれているうちに、変な興奮を覚えた伸也は、みるみるうちに勃起していった。

「あら？お尻叩かれてオチンチン勃起させちゃうなんて……なんてはしたない子なんでしょうね。更なるお仕置きが必要かな？」

「お、おばさん……綺麗だから……痛いけどなんか恥ずかしくて変な気持ちになっちゃって……オチンチン変に固くなっちゃってごめんなさい！」

「そのおばさんって呼ぶのやめてくれる？なんか引っかかるから。女王様とお呼び！」

「はい！　ごめんなさいっ！　じょ、女王様っ！」

涙を流しながら変な理由で何度も謝る息子の同級生であったが、美恵子は黒い手袋を脱いで人差し指をクルクル回す。

「ほら、お尻を高く突き上げなさい」

「な、何をする気なのですか！？」

「あなたの処女を奪ってあげるから……」

「しょ、処女？　ど、どうゆう意味ですか？」

「ケツマンコ初めてでしょ？　こうするのよっ！」

『ズブッ！！……グリリリ』

中学一年生の美男子の肛門へ、一気に根元まで突っ込まれてゆく美恵子の人差し指。

「あんっ！？　痛っ！！」

「あはは。いい声出すわねぇ。オチンチンもフル勃起させちゃって……あんたMっ気素質あるわよぉ？」

そう言いながら冷ややかな笑みを浮かべ、人生で初めての異物を突っ込まれた幼い肛門と直腸を激しく掻き回す。

『グリグリグリッ！！　ヌプププッ！！』

「んぎいいいいっ！！　痛いっ！　熱いっ！　ヤアアアアッ！！」

恥ずかしさと痛みで悠太のように号泣し始めるが、勃起したペニスは萎むどころか更に固くなってゆく。

『トロッ……ポタ』

「やだ……私のアナル調教で我慢汁垂らしちゃったわね？　そんなに前立腺ほじくったら気持ちいいのかな？とっても男前の美男子ちゃん♡」

『グチュグチュグチュチュチュチュッ！！』

「あはっ！？な、なんか変な感じ！？何これえええっ！？」

『ドピュッ！！　ドクドクドクドクドクッ！！』

一瞬勢いよく飛び出してから後は絞り出されるようにドクドクと垂れ流される精液……。

１３歳の少年の精通は同級生の母親による性的虐待によるものとなってしまった。

「うふふ。中学生のくせにトコロテン射精なんて……前立腺シゴかれて射精なんて……　ウケるわねほんと。たくさん出てるし♡　」

「はぁ、はぁ、はぁ、な、なんか変な感じ……気持ち良かった……です」

「ソレが射精とゆうものよ。大人がセックスするときは固くなったオチンチンを女性の性器に挿入して身体の中に出すわけ」

「そ、そうなんですね」

「子供のくせにたくさん出しちゃって……ほら、綺麗に舐め取りなさい」

床に垂れ流した精液を指で掬い取り、本人に舐め取りさせる。

「ペチャ、ペチャ」

「どんな味？　あなたの赤ちゃんの元の味よ？」

「生臭い……変な味です」

「一度立ちなさい」

「はい」

正面から近づくと、そっと抱きしめてキスをする美恵子。
射精だけでなく異性とのキスも人生初めての伸也は身体を震わせて怯えながらも、大人の女性の舌を口内に受け入れる。

「んっ！？　んんっ！！……ペチャペチャ……」

「キミも舌を使いなさい。私の舌に絡めるように……そうそう。ペチャペチャ……ペチャペチャ」

「んんんっ！」

身体中が熱くなるほど変な興奮に目覚め始めた１３歳の少年は、同級生の母親にされるがままに身を預ける。
再度ペニスはビンビンにフル勃起してきていた。

散々少年の口内を舐め回し、掻き回すと、ゆっくり舌を抜き長い

ディープキスから解放する美恵子。
畳の上に敷いてある敷布団の上に仰向けに寝かせると、上から覆い被さり再度キスをする。
「んんんっ！んん」
頬を真っ赤にして激しく興奮し始める伸也。
やがて右手でイキり勃ったペニスを掴み、自分の膣口へ誘導すると、ゆっくり腰を下ろしてゆく。
『ズブブ……ズチュチュ！』
ゆっくり確実に美恵子の膣に根元まで挿入された少年のペニス。
「あっ！　少し小さいけど固くてイイわ♡　伸也……今日からキミは私のモノよ。いいわね？」
そう言いながらゆっくり腰を振り始めると、未知の快感が中学生の下半身を襲う。
さすがにこの時点で息子である悠太は、後ろを向いてこの行為を見ないようにしていた。

「あっ、あっ、あんっ！良いわよっ！伸也も腰を振りなさい！」

「んんっ！　は、はいっ！　んんんっ！　ああっ！！」

二人が激しく腰を振り合い、ＡＶのように艶かしい淫らなシーンが続けられる。

人生二度目の射精は、友人の母親の膣内へタップリと中出しとなってしまう武市伸也であった。

「はぁ、はぁ、はぁ、女王様……気持ち良かったです……」

「ふぅ〜。ほんと私もイッちゃったわ……一生私のことを愛すると誓いなさい」

「はぁ、はぁ、あ、愛してます女王様……」

そのまま服を着て帰路に着く伸也。

振り向いて赤崎美恵子と友人の悠太を交互に見る。

「あ、あの……武市くん、今日はほんとに……ご、ご」

「君の母さん、僕は好きになっちゃった……また明日も来ていい？」

「え！？　あ、そ、それは……」

謝ろうとした悠太に被せるようにまた遊びに来る宣言をする伸也だった。

ソレからとゆうもの、ほぼ毎日のように放課後も土日も赤崎悠太の市営住宅を訪れる武市伸也。

大人の快楽を覚えた少年は、セックスも、女性から責められるＭにも目覚め、一気に大人の階段を登ってゆくのであった……。

————一ヶ月後。

その日も赤崎美恵子は、１３歳の少年武市伸也を激しく責めていた。

浣腸をしてから排便する所をじっくりと見ながら満足げに微笑む。

何度も浣腸しては仕舞いにグリセリン液しか出なくなっているのに、肛門から勢いよく飛び出すその液を見ながら楽しんでいる。

その日の美恵子は、ＯＬのようなフォーマルな服装で、ミニスカートを履いたままヒールの高いブーツを履いて伸也を責めていた。

仰向けに寝かせてハイヒールの踵の棒部分を肛門へ挿し込む。

「ほら、ここは？」

『つぷっ！』

「あんっ！！女王様っ！恥ずかしいですっ！」

「ビンビンにしちゃって……ほんと伸也ってマゾだよね？　ほらほら、歳上の女性にアナルほじくられてヨガってる変態少年♡」

的確に直腸内の前立腺を掻き回すヒール……伸也はこの日もペニスに触れないまま強制射精させられてしまうのであった。

『グリッ！　グリリッ！！　ヌププッ！！』

「んああっ！！　イ、イクっ！！」

『ドクッ！！　ドクドクドク……』

美恵子のハイヒールによるアナル責めで大量の精液をひりだす伸也の傍で、全身傷だらけになって泣いている息子の姿があった。

ここ最近悠太への責めは、完全な暴力と化して、全身にアザが出来ているほど酷いものであった。

「悠太！　美男子とのセックスも調教も終わったし、2ラウンド目といいこうか？」

「ううう、もうやめてママ！　僕このままじゃ死んじゃうよぉ！　痛い！　全身が痛いよおお〜！」

泣きを入れるも受け入れられず、母親の美恵子は殴る、蹴るを激しく浴びせかける。

「お前を見てるとさぁ、暴力ふるいまくってくれたバカ夫を思い出してイライラしてくるんだよね。今日は美男子の友達を紹介してくれたお礼にシメてあげるわ」

「え？　し、シメる？　やだ！　痛い事しないでママァ〜ッ！！」

ささくれだらけの長い木製の机に、仰向けに縛り付ける美恵子。

そのままペニスを掴み一気に根元まで皮を引き摺り下ろした。

『ズリュッ！！……バリバリッ！！』

「ぎゃあああああっ！！！！」

この一ヶ月で最上級の激痛に、思わず号泣してしまう悠太だったが、そのまま更に尿道口へ人差し指を捩じ込む。

「私が今までしたかった事……今日ハッキリ分かったわ。息子のお前を……殺しちゃいたかったって事」

「んぎゃあああっ！！　痛いいいっ！！　やめてママァアアッ！！」

そのまま高速で人差し指を抜いたら根元まで突っ込んだりを繰り返す内に、叫びすぎた悠太の喉は枯れて、声が殆ど出なくなってし

まう。

「伸也！ペンチ持ってきて悠太のキンタマ両方潰してやりな！」

「え？　そ、そんなことしたら赤崎くんが……」

「だから今から殺すのよ。幼馴染の親友にヤクザの幹部がいて、その人に頼んだら遺体も運んでくれて山に埋めてくれるから……もうコイツの顔なんて見たくもないの！」

「は、はい」

震えながらも命令された通りペンチを握りしめて、悠太の傍にしゃがみ込む伸也。

ゆっくり右の睾丸を挟み込むと、美恵子の表情を窺う。

「早くやりな！　私は尿道口破壊してやってるから。キンタマ潰すとココからも血が噴き出しちゃうんだろーね！あはははは♪」

「ごめん……赤崎くん……僕は君のお母さんの事……本気で愛しちゃったから。一生この人に責められてエッチして暮らしたいんだ。ほんとごめんね」

『ギュッ！……グググ』

「や、やめてっ！！　ぎゃあああああああっ！！」

『ブチュッ！！』

女の子のような顔をした美男子、武市伸也は、とうとう友人の睾丸を一つ潰してしまう。
白目を剥いて失神してしまうが、そのままもう一つの睾丸も一気にペンチでミンチにした。
美恵子の指が差し込まれている尿道口から激しく血の混じった粘液が噴き出してくる。

「あはは。鮮血の射精だわ……次はこの小型ドリルで解剖の時間よ」

おへそにドリルの先端を当てがい、不敵な笑みを浮かべると、小型ドリルのレバーを握り込む美恵子。

『ギュイイイイインッ！！』

「おごおおおおおっ！？」

腹部に風穴を開ける超激痛に再び意識が戻る悠太。
しかし殺す気で責める母親の手が緩むことはなく、ヘソからハラワタまで貫通したドリルは冷たく高速回転を続ける。

『ズリュリュリュリュッ！！　プシュウウウウッ！！』

ヘソから噴き出す鮮血はかなり激しく、天井まで血が着くほどであった。
ワンテンポ遅れて白いハラワタがウネウネとうねりながらドリルの淵から飛び出してきた。

「ごはああっ！！」

『ぷるるるんっ！！』

血を吐きながら悶え苦しむ悠太の姿を見て、思わず恐怖で目を背けてしまう伸也だったが、ヘソだけではなく、乳首や尿道口、脇腹、あらゆる部位に電動ドリルで穴を開けてゆく美恵子を見て、変に興奮する自分の隠された本性も感じたのであった。

「ほらほらっ！死んじゃったぁ？」

『パンパンパンパンッ！！』

白目を剥いて血の泡を噴いて痙攣する息子の顔面を何度もビンタしながら弄ぶ美恵子。
赤崎悠太13歳……哀れにも狂気の実の母親に殺されてしまう。
狂気の裏には、幼馴染のヤクザから頻繁にもらって打っていた薬

物注射による錯乱もあったのである。

短い人生を終えた屍の隣で更に繰り返される未成年に対する淫らな行為。

「ほら、もっと舌を使って舐め回すの！　そっと噛んで……あんっ！　そうそう！　上手だわ♡」

３４歳の大人の女性と中学一年生の幼い少年は、だお互い素っ裸になり身体を重ねている。

お互いの乳首を入念に舐め合いながら異常なほど興奮する二人。

本番行為も終えて服を着ているとと玄関の鍵が開く音がした。

幼馴染であり自由であり、不倫関係でもあった４０歳のヤクザ、椎名洸平が死体処理の依頼を受けて駆けつけたのであった。

「久しぶりに俺を呼んだと思ったらガキを殺っちまったのか……内臓はみ出てるじゃねぇか！？もっと綺麗に殺さなかったのか？」

「あらごめんなさーい。そのうち殺してやろうと思いながら我慢してたからついついオーバーキルしちゃった♡　土建屋でバイトしてる重機使える部下のチンピラいたよね？　そいつに深く掘らせて埋めといて」

「ああ。分かってるって。お！？　そいつがガキの同級生のハンサムちゃんか！？　男のくせにむちゃ美形だな！」

無言で目線を合わせて意思のやりとりをする二人。
やがてニヤけながら静かに頷くと、武市伸也の方へ歩み寄る。

「ちょっとオジサンのオモチャになってくれないか？」

「……な、何をすればいいんですか？」

見るからにチンピラ風の男に対し、かなり恐怖を感じる伸也だった。

そのまま仰向けに倒されて抱きつかれる。
勢いよくキスをして舌を口内へねじ込んだ。

「んんっ！？うぐむむうっ！！」

同じ大人にされる行為でも、今回は同性の男からである。
当たり前のように本気で抵抗をみせる伸也だったが、半ば強引に力づくで押さえ込まれてしまう。

激しいディープキスを終えると、今度はピンク色の乳首を舐めまわし始めるチンピラ。

「あまり壊さないでね。その子は私の奴隷であり、彼氏でもあるん

だから」

「おう。ペペローションを塗りたくってからぶち込むから怪我しないと思うぜ！げへへ」

両脚をガツッと抱え込むようにつかむと、そのままM字開脚体制にさせて陰部や臀部が真上に向くよう背中を畳に押さえつけた。

いわゆるマングリ返しではなく、男なのでチングリ返しである。

「おっ！ケツ穴までピンク色してるじゃねぇか！中学生と言っても去年まで小学生だったんだからな。そりゃ子供だよなぁ？　ゲへへ」

下品な笑いを連発しながらゆっくりとイキリ勃ったペニスを１３歳の少年の菊門へ捩じ込んでゆく。

『ズプ！……ズブブブブ！』

「んあっ！？　痛いいいっ！！　おじさんやめてえええっ！！」

「すぐに慣れるさ。前立腺えぐってやるからそのうち気持ちよくなるぜ？　がっはっはっ！」

タバコをふかしながら未成年を犯す変態ファックを観察する赤崎美恵子。

ついに根元までぶち込んで激しく腰を振りながら更にディープキ

スで口を塞ぐ。

息苦しさと激痛でかなり苦しむ少年だったが、美恵子はそのシーンを見ながら興奮し、自らの指でオナニーを始める始末だった。

悪魔の母（前編）（後書き）

ついに二人からの汚い大人から性的虐待を受ける少年。
家畜たちから解放される未来は、武市伸也に訪れるのか？

悪魔の母（中編）（前書き）

外道のチンピラによって同性のペニスまで挿入される武市伸也。１３歳の少年は汚れた大人たちによって、未知の領域へ誘われてゆく。

「あっ！　あんっ！　痛いっ！　あうんっ！」

「顔も声も女の子みたいだな！　げへへ！　余計興奮するぜ」

『バッコンバッコンバッコンバッコン！』

ペペローションをタップリ塗ったペニスで、１３歳の少年のアナルを犯しながら涎をたらすチンピラだった。

「オラ！　イ、イクっ！　イクぞおおおおっ！！」

『ドピュッ！　ドクドクドクドクッ！！』

「やあああああっ！？　熱いいっ！！」

伸也の肛門からペニスを引き抜くと、精液が腸液やローションまみれで、ヌトヌトになったまま糸を引いて畳の上に垂れ落ちる。

アへ顔で涙と涎を流しながら小さく身体を震わせる伸也へ歩み寄る赤崎美恵子。

「あらら……お尻の穴に中出しまでされちゃってるじゃん？　感じ

ちゃったの？」

そのまま両足首を両手で掴み、足の裏を陰部に押し当てる。

「もう一回イッちゃおっかぁ？　今度は私の電気アンマで」

『ガガガガガガガッ！！』

「ほらほらほらあっ♡」

「んぎゃああああああっ！！　痛いいいっ！！」

「あらごめんなさい。金玉圧迫しすぎたみたいね。オチンチンに軽く圧力かけてっと……こう？」

陰部に圧をかけながらグリグリと押し当てる電気アンマに変更する美恵子。

半勃ちになっていたペニスから再び透明に近い精液が射出された。

「うふふ。大人に責められて何度も射精しちゃって……可哀想なボク……後ろもまんざらでないでしょう？」

足の親指を肛門に捩じ込みながら冷たく囁きかける。

全身をヒクヒクさせながら腰を振り、アナルが気持ちいいことをアピールする伸也。

「さてと……少し重たいが死体を運ぶとするか……俺の弟子に連絡してちゃんと深く埋めといてやっから安心しな。最期のお別れはいいのか？」

「いいよ。もう見飽きたムカつく面だから……最後に美男子伸也を連れてきてくれたことだけがアッパレだわ。あははは」

「……そうか。分かった。じゃあまた連絡する」

膝を腹部に付けるように小さく折りたたみ、大きめのドンゴロスに死体を詰めると、背中に担いで部屋を出てゆく洸平。

洸平のヤクザの弟子でもある部下の男は、ゴミを埋め立てる山地でショベルを使い、深さ3メートルほどの穴を掘り、ドンゴロスの袋ごと遺体を投げ入れ、土砂で埋め立てた。

「まだ小さい身体でしたねアニキ。小学生ですか？」

「中一だ。余計な詮索はしなくていい」

「すいやせん！　これだけ深く埋めれば足がつくことはまずないと思います」

「すまんな。車内もビニールシートで包んでドンゴロスから滲み出た血痕も残らないようにしたからな」

椎名洸平が車に乗り込み帰宅する頃には、既に日が上り朝を迎えていた。
それからも放課後になると毎日のように赤崎美恵子の市営住宅を訪れる伸也。
かなり性的な快感にも敏感になるよう調教されているためか、本人も強制ではなく半ば楽しみにしている部分もあったのである。
色んな服を購入し、コスプレも楽しみながらの少年への調教。
この日は女教師風ののコスプレだった。
超ミニスカートを履いている所だけ普通の女教師とは言えなかったが……。

「ほら、伸也くん。成績悪い子にはお仕置きが待ってるってゆうのは知ってたよねぇ？」

「は、はい赤崎先生」

「何回も浣腸してあげる。透明の便が出るまで続けるからね？」

「は、恥ずかしいです先生……」

思いっきり平手打ちで頬を叩くと、大きなガラス製の浣腸器を手に取り、グリセリン濃度の高い液を吸い込ませてゆく美恵子。

「ほら、お尻突き上げて肛門を見せるのよ！」

「は、はいっ！　僕の肛門……お仕置きして下さい……」

「素直でよろしい。じゃあエッチな菊門内部へお邪魔しまーす♪」

何度も何度もグリセリンを直腸へ注ぎ込む行為が1時間ほど繰り返された。

透明の液のみが排泄されるようになると、白く細い指が滑らかに挿し込まれる。

『ツプ！　ズブズブズブ！』

「あんっ！　先生っ！　恥ずかしいです！」

「あら？　お仕置きされてる筈なのに何をフル勃起させちゃってるの？」

そう言いながらアナルを中指で掻き回しながらペニスを咥え込む。

『パクッ！！……チュバチュバチュバチュバッ！！』

「あっ！？　せ、先生っ！！　気持ちいいですううっ！！」

前立腺を激しく指で掻き回されながらの高速のフェラ……10秒

も持たずに、大量の精液を美恵子の口内へ吐き出した。

『ドピュピュピュッ！……ゴクンッ！』

舌なめずりしながら全ての精液を飲み込むと、まだカッチカチのままでいるペニスを掴み、膣口へ誘導する。

「さぁ本番いくわよ？　私を感じさせないとちょん切っちゃうんだから！」

「ひっ！？　嫌ですそんなの……」

「なら私を今日もイカせることね。ほら、早く腰を振りなさい」

正常位で下に寝ている美恵子の上で、激しく腰を振り始める１３歳の少年。

『バッコンバッコンバコバコバコバコバコッ！！』

「あ、あああああっ！！　子供とは思えないわ……あんんっ！　良いっ！！　もっと、もっと激しく……伸也」

更に一ヶ月ほど１３歳の少年と友人の母親とゆう、奇妙なカップルのふしだらな夜が続いた。

月も変わって7月一度目の月曜日、この日も急激に大人に成長してゆく伸也が登校してきた。

一時限目が始まる前、一年二組の教室のドアが開いて、この学校ではもはや誰もが知っている二年生のアイドルたちが入ってくる。

綺麗なだけじゃなく、喧嘩も学校一強いので有名だったので誰も逆らう生徒はいなかった。

鬼頭美紅と宮垣咲良は、他に目もくれず伸也の席へ足早に辿り着く。

「あ、あの、お、おはようございます」

「おはよう。あなたが武市伸也くんね？」

「は、はい！　そうですけど……僕が何か？」

アイドルを目の前で見た喜びと、相手が学校一の喧嘩最強である恐怖心とが同時に伸也を襲う。

身体をかなり震わせながら返事をした。

「行方不明になってる赤崎悠太くんのことについて詳しく聞かせてくれる？」

美紅がしゃがみ込んで伸也の顔を覗き込む。
咲良も続けた。
「毎日のように放課後帰り道……彼の住んでた市営住宅へ入り浸ってるわよね？　友人本人の悠太くんがいないのに、なぜお母さんの家に行ってるのかな？」
「え？　あ、あの……それは……」

——二日前の土曜日。

「菅野くん、休みの日にすまんな」
拷問処刑全てを統括している、特殊任務省の藤堂長官から連絡が入る。
「ふぁあああああ〜。こんな朝早くから起こされたらせっかくの休日が台無しですよね？」
「だからすまんと謝っておる。すまんすまん！　ところで……甲南中学校は通っている鬼頭美紅と宮垣咲良に連絡して一年二組の武市伸也とゆう生徒の話を聞いてきて欲しいのだが……」
「今回はあたしじゃなくてその二人の仕事なんですね？」

「うむ。ある建設会社から警察に通報があり、怪しい二人組が重機を使って何かを埋めている所が防犯カメラに映っていたと言うことだ」

「何か？　まさか一年生の……嫌な予感しかしないんですけど？」

「相変わらず勘がいいな菅野くん……警察ではなく特殊任務部隊が現場に行ってくれた。そして……一年二組の赤崎悠太くんの遺体が掘り起こされた」

「これだけ日数が経てば生存率はかなり低いと思ってたけど……残念です。お母さんもさぞや辛かったでしょうね」

数秒間の沈黙が続く。

「辛くはない」

「え？」

「その母親が、実の息子である悠太くんを殺害したのだ。暴力団に所属している赤崎美恵子の不倫相手、椎名洸平とその子分である男……その男が働いている土建屋の山地現場から今回遺体が見つかった。すでにその二人は我々が拘束している」

「な、なんて事……もう美紅ちゃんたちが一年生の武市伸也に話を聞く必要はないのでは？」

「椎名洸平は、赤崎美恵子が息子を殺して、遺体の処理を俺に頼んできただけ……としか答えないのだ。子分の四谷繁晴は、椎名洸平から命令されて重機を使い、死体遺棄を手伝っただけとゆうことも吐いたのだが。どうゆう経緯で実の息子を殺めなければならなかったのか……友人である武市伸也が一番よく事情を知っていると思ってな」

「なるほど……分かりました。では早急に二人へ連絡して月曜日の朝イチにでもアプローチしてもらいます」

――そして現在。

武市伸也との話は長引きそうだと判断した美紅と咲良は、一時限目の授業をボイコットし、体育館裏へと場所を移してベンチに座り話を続けた。

「ぼ、僕は本当に悠太くんのことは知らないんです。悠太くんの母さんも本当に心配してたし……」

半時間ほど質問しても、とことんシラを切る伸也に対し、美紅と咲良は限界に近付いてきていた。

「あのね。もう喋っちゃうけどさぁ。悠太くんの母親である美恵子の不倫相手のチンピラ二人が白状して美恵子が殺したと言ってるの

！　わかる？　犯人は実の母親なの！」

胸ぐらを掴んで捻じ上げながら美紅が脅しにかかる。

「ひっ！？　だ、だって知らないもん！　美恵子様はそんなことする人じゃない！」

「ん？　美恵子様？」

今度は咲良がイヤらしく笑みを浮かべながら問いただし始めた。

しまった、とゆう表情を浮かべながらしどろもどろになる伸也。

「ストックホルム症候群みたいなもんか……こりゃ手強そうだね美紅」

「そうみたいね。母親と関係まで持っちゃってるみたいだから最初は無理矢理でも終いには本気で好きになっちゃってそうだもん」

ベンチから立ち上がると素早く土下座をして、美紅と咲良にワビを入れる伸也。

「ごめんなさい！　本当何も知らないんです！　もう許して下さい！　赤崎さんは息子を殺したりするような人じゃないんです！」

腕を組んで呆れながら、お互いの目を見つめ合うアイドルでありながら拷問処刑人でもある二人。

「仕方ない。話を聞き出さないと藤堂長官より莉央ちゃんに怒られちゃうからね。お仕置きしちゃおっか？」

「そだね。問いただす為だから……お仕置きとゆうより拷問かな？」

「咲良も細かいな……じゃあとりあえず全裸にするか」

「下半身だけスッポンポンにした方が余計恥ずかしくない？絵面的に♡」

「あはは！　そりゃ言える。肝心な方だけ脱がされてるのが哀愁漂いそう♡」

恐怖と羞恥心が全身を襲うが、一応抵抗をみせる伸也。

当たり前のように二人に敵うはずもなく、美紅の一撃で鼻血を大量に噴き出してダウン……そのままズボンとパンツを下ろす咲良だった。

「中一の割には立派なチンポしてんじゃん？」

「ほんとだ……悠太くんのママのマンコにズッポズッポ挿入してたんだよねぇ？」

咲良と美紅の会話を聞きながら鼻を押さえる手を離して再度パンツを履こうと手をかけるが、再び頬を数回ビンタで打たれて即諦めて手を離す伸也。

足首まで下ろしたズボンとパンツを完全に足から剥ぎ取ると、ポーンと螺旋階段に放り投げる咲良。

「今度パンツ履こうとしたらキンタマ潰しちゃうからな？」

「ひっ！！　わ、分かりましたごめんなさいっ！！」

恐怖で引き攣った表情のまま、最後の抵抗で陰部を両手で隠していたが、サッと左右に開いて仰向けのまま気を付け、の体勢をとる。

「ほら、僕のチンポをようく観察して下さいって言うんだ！」

咲良の脅しに屈した少年は、ついに涙を流しながら言われた通りに喋る。

美紅咲良の反対側にしゃがみ込み、そっとペニスを握る。

ビクッと大きく身体をのけぞらせるが、殴られる恐怖で身体を動かすことはできなかった。

「チンカス付いてるかどうか診察してあげる」

そう言いながら半分皮を被っている仮性包茎ペニスを、ゆっくり腹部へ向かって下ろし始めた。

『ムリュリュ！……メリメリ』

「ぐわああっ！！！！　痛いいいいっ！！！！」

「ゆっくり剥いてあげるから安心して！一気に引き剥くともっと激痛だよぉ？」

尿道口をパクパク開閉しながらゆっくりゆっくり女子中学生によって皮を剥かれてゆく男子中学生のペニス。

伸也の方向へ顔を向けて馬乗りになり、暴れるのを押さえ込む宮垣咲良。

「やめてやめてやめてええっ！！　痛いよおおおっ！！　ぐわあああああっ！！」

「うるさいんだよ！　黙るんだ！」

『パンパンパンパンパンッ！！』

「ひぶぶぶぶうっ！？」

泣き叫ぶ顔に追い討ちである往復ビンタを始める咲良。
激しく音を立てて何度も何度もビンタを喰らいながら再度鼻血が噴き出してきた。

ソレと同時についに雁首まで皮を引き剥きおえる美紅。

『バリィッ！！』

「んぎゃあっ！！！！」

「あ、血が出てきちゃった……」

雁首からゆっくり流れ落ちる血液。
更にピストン運動を開始する。

『シコシコシコシコ』

快感どころか激痛のピストンであった。
再び号泣しながら暴れようとするが、咲良がソレを許さない。

「チンポの皮っていつか全開に剥かなきゃならないから包茎手術請求しちゃおっかなぁ？　おーい！　聞いてる？」

「んぎいいいいっ！！　痛いいいいっ！！」

超高速の美紅の手コキはセーラー服に返り血を浴びるほど激しく、あまりの激痛に大便を漏らしてしまう。

「わあっ！？　コ、コイツ！　クソ漏らしちゃったよ？」

「あたしの手コキで脱糞しちゃうなんていい度胸してんじゃん？　残ってるのも全部出させてやるよ」

カバンからガラス製の浣腸器を取り出すと、高濃度グリセリン液をセットする美紅。

「オラ！　起きて四つん這いになるんだ」

咲良は髪の毛を鷲掴みにして無理矢理引き起こすと、強引に四つん這いにさせる。

「ほら、もっと高くケツ突き上げて！　股も大きく広げろよ！」

「わぁーん！　わぁーん！　痛いよぉ！　わーん！　わーん！」

「泣いても許さないからな？ほら、見せてみ。ケツ穴」

両手を臀部に押し当てて、左右に全開に開くと、ピンク色に近い幼いアナルがパックリ口を開ける。

「あらぁ～。こんなにユルユルのケツ穴も珍しいなお前の歳で……相当変態女やチンピラ野郎に調教されたみたいだな。可哀想に」

「思ってもいないこと言わないでよ咲良。そのユルユルガバガバのケツマンコに特大浣腸をくれてやる！　それっ！」

『ぷすっ！……プチュウウウウウッ！！』

「ひゃあっ！？　冷たいっ！！　やめて……」

「女みたいな顔してケツマンコヒクヒクさせてんじゃないわよ！　とことんウンチ搾り出してやるからね？」

浣腸しては排泄、浣腸しては排泄、犬のように四つん這いのままで十回ほども繰り返された。

羞恥心と鼻の痛みとペニスの痛みで号泣するしかなかった。

「美紅！　もうとっくに透明の液排泄してんじゃん？」

「そだね～。この辺で浣腸地獄は勘弁してやるか」

そう言いながら剥き出しにされているお尻を思いっきり蹴飛ばす美紅。

尻まで撒き散らしながら派手に数回横転する伸也。

「ぐわあっ！？　えーんえーん！」

「相手が美男子なら、泣けば泣くほど虐めたくなっちゃうのよねぇ♡」

「え？　美紅の場合、関係なくそうしたいだろ？」

うつ伏せでペニスを両手で押さえて泣きじゃくる少年の背後に歩み寄る二人。

冷笑しながらパニスバンドに極太バイブをセットしてゆく。

『ガチャガチャ！カシャン！』

直径４センチ、長さ１５センチもある子供には凶器のような鬼バイブであった。

「咲良にお尻は任せるよ」

「ほーい！　おっけー♡」

うつ伏せに倒れている伸也の上にまたがり、ゆっくりしゃがみ込むと、両手を腹に回して腰を引き上げる。

『グイッ！』

「あんっ！？」

「あはは！　女みたいな声出しやがって……今ぶっといのくれてやるからな？　ケツアナ破壊して大腸飛び出しちゃっても知らないからな？」

「そ、そんなの嫌あああぁっ！！　やめて下さいっ！！　お願いしますううっ！！」

「ダメだ。赤崎のオバハンのことやチンピラのこと……悠太くんが殺されたあの日のことを喋るまでは許さない」

両膝が当たる地面にクッションを起き、バックで１３歳の少年のアナルを犯し始める咲良。
ゆっくり確実に肛門括約筋を押し広げながらめり込んでゆく極太バイブ……。
美紅が上半身も引き上げて四つん這いにさせ、ほぼ同時に極太バイブを口へ捩じ込んでゆく。

「ほうら、上の口と下の口……同時に犯してあげるわ♡」

「な、何でそんなに可愛い顔したアイドルがこんな酷いことできるの！？　ねぇ……むごごっ！？　うぐうっ！！」

「うるさい。これもあたいたちの仕事なんだよ！　大人しくケツ穴破壊されてれば良いんだ。ほら、ケツマンコ全開に拡がったねぇ？　お邪魔しちゃうよ？　入るよぉ？」

「んぎぎぎっ！！　いだああああっ！！　んんんんっ！！」

『ズブブ！　メリメリメリ！……ボコオッ！！』

絶叫をあげるタイミングで、美紅のバイブも口へ完全に捩じ込まれ、意図に反して沈黙の中、地獄の激痛を受け入れるハメになる伸也。

「ううんんんんんっ！！！　んんんんんっ！！」

『ズチュッズチュッズチュッ！！　バッコンバッコンバッコン！！』

「オラァッ！！　窄んだり飛び出したり忙しいなぁお前のケツマンコは♡　そのうち直腸飛び出してきそうだぞ？」

激しく腰を振り始める咲良に合わせて、美紅も激しく口内を犯す。

『ガボガボガボガボッ！！　ボコボコボコッ！！』

声にならない悲鳴をあげる伸也。
咲良のアナルファックによって、肛門ははち切れんばかりに拡がり、窄んだり飛び出したりの動きを余儀なくされる。

「はぁ？　なんて言ってんのかわかんなーい！　これだけぶっといのブチ込んでも血もでねぇのか……スッゴい調教されてたんだなほんと……感心するぜ」

「上の口は初めてなのかむっちゃ苦しそうね。白目剥いて気絶しそうになってるよ」

楽しそうに会話をしながら１３歳の美男子を前後から犯す二人のアイドル兼、拷問処刑人だった。

悪魔の母（中編）（後書き）

体育館の裏で口と肛門を激しく犯される武市伸也。
子供ながら幼いながらも本気で愛してしまった遥か歳上の女、赤崎美恵子をどこまで庇うことが出来るのか？
美紅と咲良の責めは過激な程にエスカレートしてゆく……。

悪魔の母（後編）（前書き）

犯罪者の女を愛してしまった罪。
犯罪に手を貸してしまった罪。
犯人隠秘の罪。

幼い少年は、それぞれの罪を償うことになる。

悪魔の母（後編）

体育館の裏で二人の中学生少女から性的拷問を受ける同じ中学生の少年、武市伸也。
心から好きになってしまった同級生の母親である赤崎美恵子を必死で庇い続ける。

「わぁーん！　わぁーん！　痛いよおおっ！！　もう許してええっ！！」

口と肛門から少し鮮血を流しながらうずくまる伸也。
美紅と咲良によるアナルバイブ責めで激痛に耐えながら号泣していた。

アナルバイブを外しながら肛門を押さえながら泣き続ける少年を見下ろす美紅と咲良。

「穴責めはこれくらいにしといてやる。次は打撃系でいくからな？覚悟しろよ」

咲良は太ももに付着した肛門からの血をハンカチで拭いながら冷たく囁きかける。
抵抗する力さえ無くした伸也は、美紅の思うがままに再度四つん這いの格好にさせられた。

「ぼちぼち上も脱いで全裸になろうね？」

美紅は制服とシャツも脱がせて、完全に全裸にさせる。

咲良による打撃系のお仕置きが始まった。

「順番逆になっちゃったけど……ケツ穴責めの次に臀部叩きになっちゃってゴメンな？」

「ひいい〜！　もうやめてええええっ！！」

『スパァンッ！！』

「ぎゃあっ！？」

強烈な咲良の尻叩きは１００発打ち込むまで続けられた。

「凄いね咲良の平手打ちは……もうお尻真っ赤っ赤じゃん？　一部紫色になっちゃってるしぃ……」

「えーんえーん！　痛いよおお〜！！」

「まだまだ序の口だけどな。尻の皮が裂けて血まみれになるまで引っ叩いてやる」

あまりの痛さにそのままうつ伏せに倒れ込む伸也だったが、その度に美紅が、親指以外四本全ての指を肛門に突っ込み、掻き回しながら腰を突き上げさせる。

『ズボオッ！……グチュグチュ！……グイッ！！』

「ほらほら、咲良ちゃんが必死で叩いてくれてるんだから遠慮しないで♡」

「ひぎいいいっ！！　裂けるっ！！　痛いいっ！！」

「大人しくお尻突き上げていないと本気で肛門引き裂いちゃうわよ？」

更に１００回ほど打ち付ける咲良。
遂に臀部の皮が裂け、所々から鮮血が流れ落ちる。

「す、全て……は、話しますからもう……やめてくださ……い」

ついに激痛に耐え切れず真実を話す決意を固めた伸也だった。

「よく言えました。じゃあ鬼畜ママが悠太くんを殺した動機から教えてもらおうか？」

美紅が髪の毛を鷲掴みにして顔を思いっきり引き上げながら問いかける。

「元々数年前から顔を見るたびイライラしてたそうです」

「それだけで我が子を殺さないでしょ？」

「……何かヤクザの幼馴染の人から薬みたいなのをもらって……しょっちゅう腕に注射してました。元気が出て気分がハイになるからと……」

「なるほどね。幼馴染じゃあないんだけどなぁ。ヤクザの愛人からの贈り物である薬物注射が単なるイライラから殺意へと変えさせたみたいね……怖いなぁやっぱヤクは。ねぇ咲良？」

咲良はベンチに座ったまま脚と腕を組んでじっとやりとりを聞いていたが、そっと立ち上がって伸也に歩み寄る。

「ヤクザの愛人男は、本当に悠太くん殺しに関与していないんだな？」

「はい」

「キミも何も手伝ってないんだな？」

「…………」

下を向いたまま震えながら黙り込んでしまう伸也。

更に咲良は問い詰める。

「もし嘘をついたことが後で分かったらキミを必ず殺しちゃうから……本当のことだけ話しなさい」

「……あ、赤崎くんのママに頼まれて……キンタマを……つ、つ、つぶ」

途中まで言いかけて再び号泣する。

話してしまうと咲良と美紅からの拷問が更にエスカレートすると察した少年は、話きる勇気が出なかった。

しかし話さないところされる……それも冗談ではないとゆうことも理解していたのである。

咲良は顔面を足の甲で蹴り上げてひっくり転がせると、両脚首を掴んでスニーカーの足の裏をペニスにあてがう。

『ガガガガガガガガッ！！』

「ひっ！？　あうううううっ！！」

性器に激痛を与える蹴り込むタイプではなく、擦り付ける快感をもたらすタイプの電気アンマであった。

「とりあえず一発出してから考えようか？……オラオラオラオラオラァ～ッ！」

「んっ！！　んんんんうううっ！！」

『ドピュピュピュピュピュピュピュウッ！！』

亀頭部を激しく擦り付ける電気アンマに数秒ともたずまたもや射精させられてしまう。

そのまま睾丸に踵を押し付けゆっくり圧力をかけていった。

「こっち側のキンタマから潰してやろうか？　んん？」

『ギュウウウウウウッ！』

悶絶するほどの激痛を味わうハメになるが、ようやく一分後には解放された。

「真実を話さないと激痛を何度も味わうことになるわよ？」

美紅がしゃがみ込んで、股間を押さえながら悶絶する伸也を覗き

込む。

「ぼ、僕が悠太くんの金玉を潰しました！　ごめんなさいっ！」

「……やっと話してくれたか。じゃあ今日のお遊び拷問はここまでだ。服を着ていいぞ」

「武市伸也！　あんたの本格的な拷問は◯◯埠頭にある拷問倉庫で執り行われるから。今から学校早退してあたし達と一緒に来てもらうわよ？」

必死で泣き喚きながら土下座して、美紅と咲良に許しを乞うが、決して許されることはなかった。
抵抗するたび激しく殴る蹴るの暴行を加えるので、ついに諦めて素直に二人についてゆく伸也。

そのまま◯◯埠頭倉庫にタクシーで連行され、明くる日の拷問に備えられる。

「この倉庫から逃げようなんて考えないことね。もし脱走して捕まったら死刑に変更されるからそのつもりで」

「そうだ。逃げないで自分の犯した罪と向き合うんだ。土建屋勤めの下っ端チンピラも明日キミと同じ拷問を受けてもらう。もう拘束されているから朝までにはここに連行されてくるからな」

うつ伏せに寝転がり、ひたすら号泣する伸也だったが、そのまま美紅と咲良は倉庫から引き上げてゆく。

――――明くる日の朝。

○○埠頭倉庫に椎名洸平の部下であるチンピラが連行されてきた。

「大人しくしろ！」

「くっそう！　こんなことしてタダで済むと思うなよワレェッ！！　俺は高木組の極道だぜ！？」

「いいから黙って入れ！　この倉庫で二人の美女がお前の相手をしてくれるからな？」

「び、美女だと！？　へへへ……手錠ぐらい嵌められてても女二人くらいボコボコにしてやるぜ！　その上で犯してやってても構わねえってことだな！」

特殊任務省の山内、原内、川内の三人がチンピラ男を突き出して挨拶する。

「沖野姉妹さん、じゃあよろしくお願いします」

「はい。承知いたしましたぁ～」

「あとは任せとけ」

敬礼しながら三人は倉庫を去ってゆく。

待ち受ける二人の美女は……。

死刑は無理なヘタレ拷問官である沖野秋帆と夏帆の姉妹であった。

夏帆は、ロングをピンク色に染めている礼儀正しい姉であり、妹の秋帆は、水色に染めたショートボブで、言葉遣いが汚かった。

「アネキ……あのチンピラ男の手錠外してやっていいか？」

「問題ありませんわ。お聞きした限りでは私たちに勝てると思ってらっしゃるみたいなので……現実を思い知らせてあげてもよろしいかと」

妹の秋帆は、そっとチンピラ男である四谷繁晴に歩み寄り、いきなり手錠の鍵を解いた。

「ヒャハハッ！！　屈強そうな男三人が帰っちまって残ったのはガキ一人と女二人だと？　笑わせるぜ！　しかも手錠は外されて両手まで自由となりゃあ、もうお前らが俺に犯されるのは確定だな！」

自身ありそうにバキバキと指の骨を鳴らしながら姉妹を交互に睨

みつける。
　昨夜からこの倉庫で監禁され、少しも寝れずに泣いていた１３歳の少年、武市伸也も内心四谷繁晴とゆうチンピラ男が拷問執行人の姉妹を倒してくれることを願い始めていた。
　あわよくば無事に脱出できるかと思ったのだが……。
　一分も立たないうちに顔面がボコボコに腫れて鼻血まみれになってのたうち回る四谷の姿があった。

「ぐわあああああっ！！　いでええええっ！！」
「もうおしまいかよ？　お楽しみはこれからだぞオッサン！？」
　気がつけば武市伸也と四谷繁晴は並んで土下座するハメになっていた。
「えーと。罪状をお読みしますわね？」
「はい」
　二人は力ない返事を同時にする。
　姉の沖野夏帆によってメモしてある拷問内容が読まれ始めた。

「単刀直入に申しますと、あなたたち二名は、私たちによって拷問刑を受けてもらいますわ。その内容は、顔面ボコボコフルボッコ♪　それと完全去勢♡　以上ですわ」

内容を聞いて顔面蒼白になり固まる二人の男。

「そ、そんな……」

「おいおい！　俺まだ子供いないんだぞ？　去勢なんて死刑より残酷じゃあ……」

「黙れ腐れ外道が！　お前たち二人は島に渡った二人と違って生きて帰れるんだ。有り難いと思いやがれ！」

「え？　島に渡った二人って……もしかして……」

四谷繁晴は鼻血を噴き出しながら顔をあげて秋帆の目を見る。

「だからぁ。お前の組のアニキとの不倫相手の女、そこのガキの友達の母ちゃんである赤崎美恵子と……そのアニキ本人のヤクザ、椎名洸平のことだよ」

「そ、そんな……アニキが生きて帰れないだって！？　アニキは一人も殺してさえいないぞ！？」

「幼い中学生の男子を犯した罪、これは死体遺棄幇助よりも重たい

ですわ。死して償って頂くのみですので」

「全身バラバラにされて殺されちまうんだ。そう思えばキンタマの一つや二つ失くした所でへっちゃらだろがっ！？」

　秋帆の言うことは確かに正論だろうが、やはりペニスと睾丸を失うことは男にとって死刑に匹敵するほどのショックであることに違いはなかった。

　大の男である四谷繁晴までが中一男子の武市伸也の隣で号泣し始める。

「許してあげてくれぇっ！　アニキを殺さないでやってくれよおおっ！　うおーん！　うおーん！」

「おいおい！　自分の金玉よりアニキのタマの方を心配してんのかよ！？　漢気あるじゃねぇか！　なぁアネキ？」

　隣を見れば涙を浮かべる秋帆の隣では鼻歌を歌いながらダガーナイフを磨ぐ姉の姿があった。

「って……あれ！？　アネキは今のチンピラの心意気に感動しねぇのかよ！？」

「いくらアニキ思いでも少年を平気な顔して地中深く埋めるような人はもはや人ではありませんわ。ここじゃなく全員処刑島に送られ

れば良かったですのに……」

丁寧な口調で恐ろしいことを述べる沖野夏帆にドン引きする妹の秋帆と、号泣アンド土下座中の二人の男……。

「さぁてと！　おペニスとお睾丸を切り取るナイフの準備もできたことですし……秋帆さんはどっちを責めたいですか？」

「え、えーとウチは……タコ殴りにしたチンピラでいいぜ。アネキは美男子責めるの好きだよな？」

「おほほほほ♪　好きとゆうか相手が美形なほど興奮しますわねぇ」

「じゃあガキの方よろしく！……ってなわけだからすまねぇなオッサン……とりあえず感覚無くなるくらいまで顔面殴ってやっから覚悟しなよ？」

「ひ、ひぃいっ!?　や、やめてくれ！　これ以上殴られたら死んじまう……」

「安心しなよ。そんなに簡単に人は死なねぇから。それにここで拷問刑を受けたら経過観察付きだが無罪釈放となるらしいぜ。喜びな♪」

ゴスロリ姉妹による殴る蹴るのお仕置きタイムが始まる。

姉の夏帆もほぼ抵抗をしない少年……武市伸也を仰向けに倒して

胸の上にまたがり、最初の数分は往復ビンタ、最終的にはゲンコツで鼻の骨が粉砕するまで何度もパウンドを打ち下ろした。

「うわあーん！　うわあーん！　痛いよおおっ！」

「痛いですねぇ。私も一応本気で殴らせてもらってますからぁ」

『バキバキッ！！　グシャッ！！　ドカッ！！』

両目の瞼は腫れて鼻の骨は骨折、唇も裂けて血まみれ……前歯も二本抜け落ちる。

美男子が悲惨な顔になるが、いまだに夏帆のタコ殴りは続けられる。

「アネキー！　それ以上殴ったらそのガキ死んじゃわねーか？」

「おほほほほ！　そうかしら……ではバケモンみたいな顔に変形した所で去勢に切り替えましょうかぁ」

「そうだな。ウチも顔面ボッコボコにしてやったからぼちぼちチンポちょんぎるよ」

ゴスロリ姉妹は顔面を歪に変形させせられたオッサンと少年の服を全て脱がせてスッポンポンにさせると、用意された簡易ベッドに仰向けに縛り付ける。

「麻酔はしないからなオッサン。遠慮なく泣いたり叫んだりしていいぜ？」

「ひっ、や、やめて……やめて下さい」

「急に丁寧になってもダメだから。先にキンタマ潰して血まみれのセーエキ射精させてやるよ」

妹の秋帆は、大型のペンチを取り出して、二つの睾丸を同時に挟み込んだ。

ゆっくり握り込んでゆき、時間をかけて潰してゆく。

『ギュムッ！！　グニュウウウウウウッ！！』

「ぐえええっ！？　ぎゃあああああああああっ！！！！」

妹のチンピラへのキンタマ潰しを横目で見ながら１３歳の少年の肛門へ中指を挿し込む夏帆。

『ズブブ！』

「ああっ！？　あんん……」

「うふふ♪　女の子みたいな声でよがるんですねぇあなた……前立腺で人生最期の射精させてあげますわね？」

夏帆は人差し指も挿入し、ぐちゃぐちゃと直腸内を激しく掻き回し始めた。
腸液が分泌され、卑猥な音を立てる美少年のアナル……。
美少女の夏帆によって無理矢理絞り出される幼い少年の精液だった。

「いやあっ！　イ、イク！　イッちゃうううっ！！」

「タップリおイキなさい♡　ほらほら♪」

『グププ！　グチュチュチュチュチュ！……ドピュッ！　ドクドクドクドクッ！』

大量の精液を吐き出したペニスを左手でゆっくり掴んで真上を向くよう引っ張りあげると、先ほど研いだ鋭利なナイフで、根元から一瞬で切断した。

「いきますわよっ！　えいっ！」

『スパッ！』

少し間を開けて一気に噴き出す鮮血は、夏帆のゴスロリ洋服を血

で染める。
元々黒系の服なので鮮血は袖の白い部分しか目立たなかった。
激痛に必死でもがくが、拘束具がキツくてほとんど身体は動かせない。
そのまま陰嚢の中央部へナイフを突き立ててザックリ縦に掻っ切ると、二つの小さな睾丸が飛び出してくる。

「中学生のお睾丸って小さいですわねぇ？　管がついてるまま潰して差し上げますから苦しんで下さいね？」

神経の管が腹部から繋がっているまま、右の睾丸にハサミを入れる夏帆。
白いゼリー状の睾丸内部がトロトロと流れ落ちてくる。
そのまま左の睾丸もハサミを入れた。

真っ二つにされた生睾丸から全ての中身を絞り出し、陰嚢を腹部に添うように身体から切り離していった。

『チョキチョキ！　チョキチョキ！』

二つ目の睾丸を切開された時点で白目を剥いて失神している伸也だったが、その間にペニスのみならず睾丸と陰嚢全てを下半身から除去されてしまうのであった。

「うふふ♡　オチンチンとお睾丸……全て無くなって可愛くなりましたわね。コレで身体も女の子みたいですわ」
　その時、ゆっくり時間をかけすぎていまだに潰していないまま寸前でペンチを止めている秋帆も、ついに最後の域まで握り込む。
　音を立てて粉砕される二つの睾丸。
『ギュッ！！　グシャシャッ！！』
「がわあああああっ！！」
『ドピュピュウッ！！』
「おっ！　ウチが見たかったセーエキと血の混じったピンク色の射精だな♡」
　血まみれの精液が勢いよく尿道口から飛び出し、秋帆の頬を赤く染める。
　そのままペンチを置いてメスに握り変えると、手際よく陰嚢を切開して睾丸に繋がる管も切除。
　伸也と同じく痙攣しながら意識を失うチンピラ男、四谷繁晴であった。
　莉央に教えてもらった方法で綺麗に下半身の切断部を縫合してゆくゴスロリ姉妹。

「コレでよしっと！　さぁ帰ろっかアネキ」

「そうですわね。少し二人とも痙攣が激しいみたいですが大丈夫でしょうか？」

「た、確かにちょっとヤバそうかな……もし死んでもウチらは無罪だよな？」

「そう聞いてますね。後は特殊任務省か、私たちのボスである法務省笠井長官の担当者が病院にでも運んでくれるでしょう。帰りますか秋帆さん」

タオルで手や顔に着いた血を拭き取ると、足早に〇〇倉庫を去るゴスロリ姉妹。
無事に二人の拷問任務は遂行された。

その頃、残酷処刑島では……。

「ほらほら、もっと激しく腰振って！」

「あ、はんっ！　ああっ！」

『バッコンバッコンバッコンバッコンバッコン！』

小学生の菅野莉央、高校生の菅野愛衣、最近二人と共に同居している美少年、荒木永遠の三人が本日拷問処刑の担当だった。

素っ裸にさせた赤崎美恵子と、椎名洸平の二人を、無理矢理セックスさせて見物しているところであった。

色んな体勢でセックスさせ、既に三回は中出し射精している洸平。ヘトヘトになり腰を振るのをやめる。

「もう出来ないの？」

「はぁはぁ、も、もう無理です」

愛衣の冷たい問いかけに、息を切らせながら答える極道の洸平。

「永遠くん、あの男を犯して」

「はい愛衣様」

菅野莉央と同級生であり、同じ拷問処刑人の富田美香の性奴隷となっている荒木永遠こと菅野永遠だったが、莉央と高校生の愛衣からも激しく調教されて、性奴隷とされている悲痛な運命の持ち主、１２歳の少年、永遠くんであった。
拷問処刑人としても抜擢されている。

「椎名洸平！　四つん這いになってお尻を突き上げるんだ」

「う、うう。まさかお前が俺を……」

『ズブ……グボオッ！！』

「はうっ!?　いてててっ！！」

小学生の割に大きなイチモツを持つ永遠のペニスは、大人相手でもなかなか激痛を与えた。
そのまま激しくバックでアナルを犯す永遠。

いつものようにセーラー服をきた莉央と愛衣は、腕組みしながら男同士の性行為を観察する。
その先に這ってでも森林へ逃げ込もうとする赤崎美恵子。

「莉央様、あの女、まだ助かる気でいるんでしょうか？逃げ切れるとでも？」

「……さぁ。でも素っ裸にされた上で無理矢理セックスまでさせられても逃げようとする神経には関心するわね。先にヤっちゃおか？」

「はい。私が行きましょうか？」

「うん。武器は……今日は日本刀でいこ」

「はい」

武器を詰め込んである大きなボックスから日本刀を取り出すと鞘から引き抜き切っ先を見つめる愛衣。

「全身なます斬りにして最期は串刺しでよろしいですか？」

「そーだね。マンコでもアナルでも愛衣のお好きな方からブッ刺してやって」

「分かりました。口からの串刺しはすぐ死んじゃうから楽しくないですもんね。やはり股間のどちらかの穴から……」

その頃永遠に中出しされた極道があまりの事態にブチ切れて永遠に殴りかかっているのが見えた。

「莉央様！　永遠くんが」

「分かってる。あのチンピラはあたしに任せて女の方お願い」

莉央は既に数発永遠を殴りつけている男にゆっくり歩み寄ると、手にした短銃の引き金に指を掛ける。

『パンパンッ！！』

「ぐわあっ！？」

右の脹脛に銃創が二つできた。
更に左足の脹脛にも二発撃ち込む莉央。

「どう？　二連射できるベレッタＭ９３Ｒの威力は？　すぐ殺さない拷問用に少し威力下げちゃってるけどね……」

足が使い物にならなくなった洸平は激痛にのたうち回ることしかできない。
更に両膝、両腕と次々と二連射を撃ち込んでゆくと、地面をコロコロと転がりながら逃げようとする洸平だった。

「永遠くん、斧を持ってきてコイツの四肢を切断して」

「はい莉央様」

泣き叫ぶ極道男だったが、その大きな声は島に虚しくこだまするだけであった。
小型の斧を手にした永遠が戻ってきて、何度も何度も打ち下ろし、少しずつ肉や骨を砕いてゆく。

『ドカッ！　ドカッ！』

「ぐわあっ！　ぎゃあっ！！」

何度かは転がって逃げたり躱したりするが、少しずつ肉と骨は削られてゆき、とうとう完全に四肢切断されてしまう。
すぐに死なないように手足を包帯でグルグル巻きにして応急処置する莉央。
「コレくらいで死なないでね洸平さん。少し痛みが和らぐ麻酔打ってあげたから……大好きな不倫相手の美恵子さんを見て！」
愛衣によって全身を何度も切り刻まれて、血まみれになりながら土下座する赤崎美恵子の姿があった。
「う、うう。美恵子……どうやらお前も殺されちまうのか」
「そうだよ。先にあの女が死ぬとこ見てからあたしがあなたにトドメを刺してあげる」
「ぐっ！　まだ死にたくない……助けてくれないか？」
「あれ？　麻酔効いてきて忘れちゃったのかな？　洸平さんの手足はもう無いよ？」
「え？　ぐわあああっ！！」
まさか本当に四肢切断されていることを忘れていた男にかなり呆れる莉央だった。

愛衣は無理矢理女を立ち上がらせて、二つの乳首を斬り落とした。

「んぎいいいっ！！　痛いいいいっ！！　死ぬうっ！！」

「死ねば？　次は乳房ごと胸元から落としてやるからもう一回立て！」

「許してくださいいいいっ！　お嬢ちゃん！　お願いいいっ！」

「ダメだよ。言うこと聞かないなぁオバさん……そんな四つん這いで土下座されてたらオッパイ斬りにくいんだけど？」

「もうやめてえええっ！！　痛いよおおおっ！！　ひいいいいっ！！」

「……もういいいっか。乳房はやめてあげる。膣からか肛門からか選びなさい」

「え？」

「この刀でオマンコかアナルから串刺しにしてあげるから好きな穴を選びなさいって言ってるのよ」

激しく首を振りながら号泣して謝り続ける赤崎美恵子だったが、許されることはなかった。

「オバさんのオマンコかなり臭いから……お尻の穴にしてあげるわ

ね。愛したチンピラ男がダルマ男にされてこっち見てるわよ？　最期に手を振ってあげたら？」

「あは、あはははは……洸平さん、私もう死ぬみたい」

絶望して半分気が狂いそうになり、笑いながら洸平に手を振る美恵子。

その笑顔のまま四つん這い体勢で簡易ベッドに拘束され、最期の時を迎える準備がなされてゆく。

身動きできなくされてから、愛衣の日本刀がゆっくり肛門へ突き入れられてくる。

『ズブ！……ズブブブブ！』

「ひぎいっ！？　いだいいいいいいっ！！」

「刃を下に向けて刺しこむ意味わかる？」

肛門が性器側へ向かって切開された激痛で叫び狂いながら腰を引いて逃げようとするが、少ししか動けない。

肛門からの先決が激しく噴き出し、愛衣の頬を掠める。

「貫通前に寄り道するの。こっちにね」

『グリッ！……ザシュッ！！』

「ぐええええええっ！！」

４０センチほど切っ先を直腸奥深く突っ込んでＳ字結腸を貫通させた後、下方へ下げるように力を入れると、刃が会陰部を切り裂き、肛門から膣口まで繋がってしまった。

「ほうら、お尻とマンコが繋がっちゃったわよおばさん？　うふふ♡」

「いだあああああっ！！　やめてお願いいいいっ！！」

「貫通前にもっと寄り道しようか？　もっと下方に抉ればクリトリスや尿道口も真っ二つになるわよ？えいっ」

『グリッ！……ザクザクッ！！』

声にならない悲鳴をあげる赤崎美恵子。
今の愛衣の一撃によって肛門から刺し込まれた日本刀の刃により、膣口、尿道口、陰核までもが真っ二つに裁断された。

大腸や小腸を何枚も貫通されている内部的な痛みと、外性器や肛門破壊による外部的な痛みが同時に襲い、美恵子は半狂乱になってしまう。

その後は腹側にある内臓を容赦なく切り裂きながら更に奥深く口を目指して刺し込まれていった。

「ほらほらほら、もうすぐお口まで貫通するわよ？　痛い？」

「おごおっ！！　ふごおおっ！！　うぶぶぶっ！！」

血の泡を噴きながら全身をビクビク痙攣させる美恵子。

その姿を見つめながら自分の最期も悟り始めるチンピラの椎名洸平は、ついに生きることを諦めた。

「お、お願いだ。アイツより先に殺してくれ……頭を撃ち抜いてくれ……」

「頭？　何甘えたこと言ってるの？」

そう言いながら目を細める菅野莉央。
ゆっくり銃口を下腹部へ移動させる。

『ズブ！』

「うっ！？」

「ココよ。あたしが撃ち込むのは」

「け、けつの穴じゃねぇか！　や、やめて……」

銃口を肛門に何度も突っ込んだり抜いたりしてチンピラを弄ぶ莉央。

「ほらほらぁ！　もうすぐこの汚い穴にキョーレツなイチモツ撃ち込んであげるからね？　あはは。ん？　ヒダがピクピク動いてるよ？　怖いの？」

「そんなとこやめてくれ……頭撃ってくれよぉ！　ううう」

恥ずかしさと死の恐怖と、愛する美恵子の串刺しシーンを見た絶望感でついに泣き始めてしまう洸平。

「ダルマ男、ついに泣く♪　男らしくないからお仕置きだよ。チンポを先に撃ってあげる」

『パンパンッ！！　パンパンッ！！　パンパンッ！！』

「ぐわあああああっ！！」

ミンチのように砕け散るペニス。
肉片が辺りに飛散する。
その時、赤崎美恵子はついに人生最期の瞬間を迎えようとしていた。

「すっごぉい……お口だけじゃなくマンコとアナルからも血の泡みたいなの噴き出してきちゃってるわよ？　私の串刺し刑とても痛いでしょう？」

「うごうごうごおっ！　ゴポポ！」

愛衣の日本刀の切っ先は、もう喉まで届いていた。
刀と内臓からの血と嘔吐物で呼吸困難になりながら白目を剥いて痙攣する美恵子。

「そんなにケーレンしちゃって……少しチンピラより先に逝っちゃおっか？……さよなら鬼畜おばさん」

『グリッ！……ズズズッ！……ザシュっ！！』

「んぎいっ！！　ゴボオオッ！！」

口から飛び出した切っ先は、更に２０センチほど口内から伸びてくる。
愛衣の握る刀の鍔が激しく臀部に当たる。

「ほら、一番奥まで突っ込んであげる。でももう口から飛び出してるから意味ないか……よっと」

『ズシュシュッ！……パンッ！！』

上の口と下の口から激しく鮮血を噴き出し、激しく痙攣させながら絶命する赤崎美恵子。

「運良く絶命できたようで良かったわね？」

右足の裏をお尻に押し当てて、一気に刀を引き抜く愛衣。
刀の血を振り払うと、鞘に納めて莉央の方へ歩み寄る。

「女の方、串刺し刑終了しました」

「お疲れ様。絶叫ばかりあげて面白くないから痛み止めの強力なやつ打ってあげてるの」

「……四肢切断された哀れな自分の姿と、愛する赤崎美恵子の遺体をじっくり見てもらって感想をもらいたいくらいですものね」

「あはは！　感想か……そりゃ良いわ♪　ほら、あと数分だけ意識もしっかり痛みも少なく生きられるようご褒美をあげる」

莉央の打った注射のお陰で死にきれず痛みもましになり、現実を見つめ直さなければいけなくされる極道……。

「げっ！？　俺のチンポがっ！？……！？……美恵子！？　美恵子おおっ！！」

「何をさぞ愛してたかのように叫んでるのよ。そもそもお前が薬物なんて与えてなかったら息子の悠太くんを美恵子は殺してなかったと思うし……だからお前は死刑なの。分かる？　誰も殺してなくても殺したのと同じなのよ？」

莉央は冷たい表情で人生の最期を迎えようとしている男に拷問死刑の要因を説明する。

「ひっ!？……も、もうどうでも良い。生き残ってもこんな姿じゃ何もできん……は、早く殺してくれ！　だんだん手足や下腹部が痛くなってきた」

「あ、ゴメンゴメン。強力だけど量が少な過ぎたかな？　てへっ」

アイドルっぽく可愛く舌を出して笑うと、再度短銃を構え、今度は睾丸を撃ちまくる。

赤やピンク色したペニスのミンチの上に、白い睾丸のミンチが降り注いだ。

断末魔のような絶叫をあげて転がりまくるが、愛衣の足で止められる。

「じっとしてなさいオッサン。アイドルの莉央様が性器破壊してくれてるんだから。Mなら歓喜して泣いちゃうほどのご褒美だよ？」

「あはは！　うまく言うわね愛衣は……さてと。、トドメはお尻の穴からハラワタに撃ち込みまくって……」

『ガチャガチャ！』

莉央は新しい弾をバレッタM93Rに装填すると、再度銃口を洸平の肛門へ捩じ込む。

「よっと！　装填おっけー♡　ここかなぁ？　オッサンの汚いアナルは？」

『グリッ！　ズボボボ……』

「はうっ！！　痛いいっ！！」

愛衣は日の日本刀を再度鞘から引き抜いて、切っ先を乳首に突き刺した。

見事な手捌きで乳首だけをくり抜いてゆく。

反対側もくり抜いた。

「ほら、綺麗にくり抜いてあげたわよチクビ♡」

「ほげえええっ！！　んぎゃあああああっ！！」

目玉が飛び出すほど両目を大きく見開いて首を振りながら激痛と戦う洸平。

「トドメのアナル撃ちの前にやってくれるじゃん愛衣♪　オヘソにもブッ刺してあげたら？」

「そうですね……穴とゆう穴を破壊するのも興奮しますものね」

『ズッ！！……ズグッ！！……グリグリ！！』

愛衣は日本刀の切っ先を１０センチほど臍に刺し込んで、回すように腹腔内を掻き回す。

ドクドクと鮮血が噴き出してくるが、構うことなく何度も何度も激しく掻き回した。

「んぎいいいいっ！！　死ぬっ！！　しぬううっ！！」

「だから死ぬんだってば♡　じゃあいくわよ？　莉央様の乱れ撃ちをくらえっ♡」

『グリリッ！！　ズボオッ！！』

莉央は銃口を限界まで深く肛門へ挿し込むと、高速で何回も何回も引き金を引き始める。

『パンパン！　パンパン！　パンパン！　パンパン！』

「はうううううううううっ！！！！」

「ほらほらほらほらっ！お腹の中銃弾で埋め尽くしてあげちゃう！……前立腺もグッチャグチャにしてやるんだから♡」

更に弾を装填して再度肛門から連射すると、顔中から血を噴き出しながら短くなった手足を激しく痙攣させて絶命する哀れなダルマ男の姿が晒された。

「ぴぎいいいっ！！！！……がくんっ」

『ぶしゅしゅしゅしゅううっ！！』

肛門やヘソからも噴水のように噴き出す血を躱しながらゆっくり立ち上がる莉央。

「スッゴ……１００発は撃ち込んであげたからもう内臓ほとんどグチャグチャだね……」

『ビクビクッ！！　ビクビクビクビクウッ！！』

「よく身体から弾丸出てこないですね莉央様？」

「肛門から一直線に喉の中、脳天へ撃ち込んでるからね。ようく頭部の方見て！　目玉や脳みそ吹っ飛んじゃってるでしょ？」

「あらら、ほんとだ！　すごい正確ですね♪　さすが莉央様」

ヘソや肛門から腸が少しずつ飛び出してくる。

「口や目玉からも腸が飛び出しちゃってますけど……下からもはみ出しちゃってますねぇやっぱ」

「コレでも威力抑えて火薬調整してるんだよ。腹部で止まってる弾が沢山あるから分かるでしょう？」

莉央が遺体の腹部を足の裏で何度も蹴り込むと、中でガチャガチャと金属が触れ合うような音が響いてくる。

「そんな事まで出来るんですね？　身体の原型留めたままお尻の穴から銃撃してお腹の中鉛玉だらけにできたのはそのせいか……すっごいですすほんと」

グチャグチャになった頭部を見ながら思わず吹いてしまう愛衣。

「でもやっぱり銃は銃ですよね……すっごいことになっちゃってる……私、濡れてきちゃいました莉央様」

「今夜はエッチしよっか？　永遠くんのアナルでも犯しながら♡」

「はーい莉央様っ♡」

悪魔の母（後編）（後書き）

残酷処刑島にあらたに二つの遺体が加わった……。

悲劇のドライブ（前編）（前書き）

一度目の犯行に味をしめた二人の若者。
またしても同じ過ちを犯してしまうのであった……。

悲劇のドライブ（前編）

南部地方にある南部千鳥スカイラインは、昼は絶壁の美しい海岸を見下ろせる家族向けの観光スポット、夜は広々としたパーキングに車を止めたまま眺める満天の星空が絶景な若者に人気のデートスポットでもあった。

冬の澄み切った空気の中、夜中の三時頃に二人のカップルが星空を眺めていた。

「俺さぁ、今年いっぱい頑張ったら船乗り辞めようと思ってるんだ」

「え？　水産高校まで卒業してやっと本格的に船乗りになれて頑張ってきたのに……本気なの？」

「うん。もうすぐ俺たちの子が産まれるのにさぁ……ひと月に一週間しか家に帰れないんじゃあ……亜紀と子供が不憫で仕方ないよ」

「…………」

黙ったまま隣に停車した車の方を見ながら、缶ジュースを飲み干す亜紀。

白石幸則（しらいしゆきのり）２５歳と、南部亜紀（なんぶあき）２２歳のカップルであった。

二人は幸則が水産高校一年の時にできた親友の南部聡の妹である亜紀と、三年になった頃から付き合い出すようになる。

何度か聡の家に遊びに行っているうちにお互い引かれあい、妹の亜紀の方から兄の聡に打ち明けて、幸則を信頼できる親友と思っていた聡から何度も家に招待するようになっていった。

「船乗りは幸則の夢だったんじゃないの？　私のことを心配して辞めちゃうなんて……何か悲しいな」

「この町の小さな港で毎日家に帰れる近海の漁師になろうと思ってる。やっぱり海が好きだから」

「漁師は続けてくれるんだね。なら良かった」

「とびっきり新鮮な魚を毎日たくさん食べさせてあげるから」

「それは楽しみだね！　ありがとう♪」

右隣の車からドアの閉まる音がした。

人が降りてきたらしい。

コンコンと運転席の窓を叩いてくる。

白石幸則が窓を下ろして相手を確認すると、二十歳そこそこの若い男性が笑顔で問いかけてきた。

「あのう……ちょっとブレーキランプ切れてるらしいんですけど左右どっちか見てもらっても構いませんか？」

「あ、はいはい。いいですよ」

助手席の南部亜紀に軽く笑みを見せると、サッと車を降りて若い男性の車の後部へ移動した。

「じゃあブレーキ踏んでもらえますかー？」

少し大声で、運転席に乗り込んだ男性へ声をかける。

少し間を置いてブレーキランプが点灯した。

「大丈夫ですね！　どちらも点いてますよー！！」

そのまま連続してバックランプも点灯する。

「ありがとうございます！　バックランプも点いてますか？」

「はい！　どちらも点いてます！」

運転席から顔を出して白石幸則へ頭を下げ、笑顔を見せると、そのままアクセルを全開にして猛スピードでバックする。

『ドカアッ！！』

「ぐわっ！？」

何が起こったのか理解できないまま地面に尻餅をついてしまう幸則だったが、ワンテンポ遅れて骨盤に激痛が走った。
今のバックによる激突でどうやら腰の骨が折れているみたいだった。

「ぐわああああっ！！」

「キャアアアアッ！？」

それを見ていた南部亜紀は、悲鳴をあげながら助手席から飛び降りて幸則の元へ駆け寄った。

「大丈夫！？」

「ぐぐぐ、痛い……骨が折れちゃったみたいだ……おい！　どうゆうつもりだ！？　危ないじゃないか！！」

ふと見上げると、幸則と亜紀の前に二人の若者が金属バットを持ちながら薄ら笑いを浮かべて立っていた。

「こ、コイツら……わざとか！？　亜紀！　逃げるんだ！」

「な、何言ってるのよ！　怪我してる幸則を置いて逃げられる訳ないじゃん！　ちょっと！　あんたたちこれ以上暴行すると警察呼ぶわよ！？」

　ポツンと弱々しい灯りの電灯しかない場所のため、ハッキリ顔を認識出来なかったが、若くて茶髪らしいその二人組はゆっくりと金属バットを振りかぶり、幸則目掛けて打ち下ろす。

『ドカッ！！　バキッ！！　グシャッ！！　バコンッ！！』

　手足の骨までも数ヶ所砕かれた幸則は、ただ絶叫を上げることしかできなかった。

「嫌ああぁっ！！　止めて止めて止めてええええっ！！」

「ハハハハは！！　さっきまでの威勢はどこに行ったんだ？　ああ？」

「ほんとだな。受けるぜ全く……。警察なんか呼んだらお前ら二人ともぶち殺してやっからよ？」

「そ、そのうちここにも誰か来るわよ？　絶対早く逃げた方があなたたちのためだから」

どうにか今の現状から回避しようと必死に脅しにかかる亜紀だったが、若い二人は動じない。

「それなら心配ない。この駐車場入った後、車降りていって鎖張って工事中侵入禁止の札まで貼ってきた」

「この前お前が工事現場でパクった奴だなそれ!?　ガハハハハ！！」

「要するに、もう誰もここには入って来ないって訳だ。諦めなオネーサン♪」

そのまま激痛にのたうち回る幸則の服とズボンを大型のハサミで切りまくり、素っ裸にさせる男。

「真司も好きだなぁ……まぁ狩った獲物は好き放題やってくれ！ハハハハ！」

「勇二もすぐやるんだろ？」

「いや、とりあえず目の前で彼氏が犯されるシーンをタップリ女に見せつけて……どうゆうリアクション見せるか堪能してからにするわ」

「ハハハハハ！それも楽しそうだな。じゃあ女！　今からあんたの彼氏レイプしてやったからようく見てるんだよぉ？　ヒャハハハハッ！！」

「や、やめ……止めなさいっ！！　止めてえええっ！！」

『グリ……ツプブ……ズボオッ！！』

「ふんぎいいいっ！！　いだいいいいいっ！！」

「俺のデカマラを喰らえよ？　まだ半分しか入ってねーぜ？」

亜紀の見ている前で同性の男に肛門を犯される幸則。

遂に根元まで挿入された、佐藤真司の巨大なペニス。

肛門から激しく出血しながらも、何度も出し入れされる。

泣くことも叫ぶことも忘れ、両手で口を塞ぎながら激しく震えながらその一部始終を見つめる南部亜紀。

「どうだ？　彼氏が目の前で全身の骨砕かれたまま素っ裸にされて……アナル犯されるのを見せつけられるってのは？　ハハハ……興奮するだろ？」

無理矢理腰を引っ張り上げてバックで激しく犯す佐藤真司の太ももは、肛門からの返り血で赤く染まっていた。

「どうだ？　お前の女が目ん玉見開いて観察してくれてるぜ？笑顔で応えてやれよ？」

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「ぐえっ！　ぐはっ！　はうっ！　んんんっ！！」

「ガハハハハ！！　気持ち良いのか？　喘いじゃってるぜコイツ！！　受けるぜホント！！　オラオラオラオラァァッ！！イ、イク……」

『ドピュッ！！　ドクドクドクドクドクッ！！』

「ふぎいいいいいっ！？」

佐藤真司の生温かい大量の精液が、白石幸則の直腸内へぶち撒けられた。

激痛と屈辱感で、目を瞑ったまま現実逃避をしながら嗚咽する幸則。

「さぁ……次はオネーサンの番だな？」

「酷い……こんなのって酷すぎるよ……幸則が何をしたってゆうの？　ぐすん、ぐすん……」

ようやく現実に戻った白石亜紀が、誰に語りかけるでもなく独り言のように呟く。

悲しんでいる場合では無いことに、数秒遅れて気付かされることになる。

亜紀の隣で暴挙を傍観していた加藤雄二の手が、スカートの下から下着へ滑り込んでくる。

「ひっ！？　や、止めなさいっ！！」

「アイツと何度も使ってるんだろ？　俺にも使わせてくれよ？オネーサンの……ま、ん、こ♡」

そう言いながらパンツを一気にずり下ろすと、スカートを捲り上げて押し倒した。

「キャアアアアアッ！！　やめ、止めてえええっ！！」

「大人しくしてたら楽に殺してやるから。逆らうと散々苦しめてから殺しちゃうぜ？」

どっちみち生かして帰す気のない狂気の発言に、一気に戦慄が走る亜紀。

「やだ……私まだ死にたくない……お願い、大人しくしてるから命だけは助けて。あなたたちのことも黙ってるから……お願い」

「とりあえずセックスしてから考えるとするわ。じゃあ遠慮なく。オラッ！」

『ズブッ！！　メリメリメリ！！』

「痛っ！！　んんんっ！！」

「ヒヒヒ！　まだマンコ濡れてねーから痛いか？　その内ぐしょぐしょになってくるさ。俺のイチモツに興奮してきてな。ヒャハハハハッ！」

　正常位やバック、二度犯された後、アナルまでも犯され、更に口淫までも強制的に施される羽目になる亜紀。
加藤雄二の精液を殆ど飲み込み終えると、再度睾丸やペニスを舐めまくる。
　亜紀による必死の命乞いの行動であったのだが、男たちの下した判決は……。

「ふう。気持ちよかった。じゃあ死のうか？」

「えっ!?　そ、それだけは許して！！　お願いっ！！」

「ほら、お前の彼氏見てみろよ？　もう真司に殴り殺されちゃってるぜ？」

　ふと振り向くと、幸則の頭部へ何度も何度も金属バットを振り下ろす男の姿がぼんやりと見えた。

「俺たちの性行為を最後まで見なかったもんで、とりあえず先に殺しちゃうことにしたんだわ。せっかく頑張ったのに見ねえなんて最低だよなアイツ……」

加藤雄二の言葉は、もう亜紀の耳には入っていなかった。
死への恐怖の中、彼氏を目の前で殺されたショックに両手で頭を抱え込んで泣き崩れる亜紀。
完全に殺害した後、ゆっくりとこちらへ歩み寄ってくる男。
それは男しか愛せない男であり、男を無理矢理犯すことに至極の快楽を覚えた変態男、佐藤真司。

「さぁいつものようにやってくれ雄二」

「そだな。俺は女を殺るときは凶器なんか使わねえ……こうするのさ」

『バキッ！！』

「ギャァッ！？」

いきなり亜紀の顔面を殴りつける雄二。
逃げようと何度も抵抗するが、その度に顔面を襲うゲンコツの嵐。
何十回、何百回と殴るうちに、辺りは血まみれになってゆく。

前歯が殆ど折れて、鼻の骨も折れ、瞼と唇は原型を留めないほどに腫れ上がってきていた。

「綺麗なオネーサンの顔が妖怪みたいになっちゃったねぇ？」

「あ……がが……たす……けて」

「妖怪や化け物は……た、す、け……なーい♪」

『バキッ！！　グシャッ！！　ガツッ！！　バコオッ！！』

その後、休憩しながらも一時間近く全身を殴る蹴るを繰り返し、ついに南部亜紀は外傷性ショックで命を落としてしまう。

２２年とゆう、短い人生の幕を閉じた。

一人が被害者の車を運転して、唯一ガードレールの途切れた箇所から崖下へ車を落とす。

ドライブに入れて車から飛び降り、ゆっくり動き出すクリープ現象を利用しての犯行であった。

カップルの遺体も車に積み込み、ロープでグルグル巻きにしてから錘を付けて腐敗しても海上に浮かび上がらない工夫まで施している。

「前の奴らも車ごと海底で眠ってるだろうから、あの世で仲良くしてくれよ？」

「この下はかなり深いから車も屍もしばらく見つからねーからなぁ♪」

「ほんとそれ！　また来週くらい三組目襲っちゃおーぜ♪」

悲劇のドライブ（前編）（後書き）

カップルが行方不明とゆうニュースが流されてから間もない二度目のカップル行方不明事件。

警察も三度目の悲劇を防ぐべく、数百人を動員しての捜査に踏み切った。

悲劇のドライブ（後編）（前書き）

ついに悪事への天罰が下る。
囮捜査と言う名の地獄が幕を開けた。

悲劇のドライブ（後編）

二度目のカップル失踪事件を受けて、警察本部はついに犯人を割り出すことに成功していた。
南部千鳥スカイラインへ登る手前の町にある防犯カメラに、車で移動する二人の男の顔がかなりボヤけながらも録画されており、状況証拠ではあるが、ほぼ犯人確定とゆう段階である。

――土曜日の正午、菅野邸。

「とゆうことで、今回は囮捜査とゆうか……たまにあるあたし達自身が犯人を逮捕しちゃうような展開になるよ」
「そうですか……その残虐な男二人組は、その場で処刑しちゃわないのですか？」
「うん。とことんお仕置きしてから車に積んで〇〇埠頭へ運び、そのまま残酷処刑島へ連行していくの」

アイドルであり、拷問処刑人のリーダーでもある小学六年生の少女、菅野莉央が同棲している同じく拷問処刑人の女子高生である円満愛衣に、今回の事件の成り行きを説明している。
姓を変えて菅野愛衣となり、莉央の奴隷、兼恋人とゆう奇妙な関係であった。

ここには荒木永遠とゆう、莉央と同級生の男の子も暮らしていた。

永遠は学校では富田美香のオモチャ……菅野邸では莉央と愛衣の性奴隷……愛衣も永遠も元々死刑囚であったが、莉央が特殊任務省のトップに頼み込み、同じく拷問処刑人となって莉央と同棲していた。

二人とも菅野愛衣、菅野永遠と名前を変えて法律上別人となって生活している。

『グチュグチュ……グリグリ』

「あっ、ああんっ！」

女子高生の愛衣の白く長い人差し指が、１２歳の永遠のアナルを執拗に掻き回す。

かなり調教されて肛門括約筋はユルユルになってしまっていた。

永遠に性的虐待を与えながら莉央の説明を聞いていたのであった。

更に二本、三本と指を直腸内部にねじ込んでゆく愛衣。

「あはあっ！？　痛いっ！　愛衣様！　やめて下さい」

「わかりました。では私、最近運転免許も取って国から車も頂いてますので……そのスカイラインへドライブさせてもらいますね。ほら永遠くん、君の大好きな前立腺マッサージだよ。トコロテン射精

させてあげるから四つん這いになってお尻を突き上げなさい」
「あ、あはっ、はぁはぁ……はい。愛衣様、お願いします」
三本の指を出し入れさせながら肛門の内側や直腸を激しく犯す愛衣。
前立腺をシゴかれて強制的に射出させられた精液に勢いはなく、ドクドクと垂れ落ちるように床に注がれてゆく。
「ねぇ永遠くん……チンポに触れないでイカされるのってどんな感じなの？」
「はぁ、はぁ、はぁ、と、とっても気持ちいいですぅ」
「うふふ。莉央様も例のヤツをしてくださるみたいよ？」
私服で白いワンピース姿の莉央が腕を組んで永遠を見下ろしていた。
「永遠！　その下半身だけスッポンポンとゆう姿がまたエロいのよね？」
「は、はい莉央様……きょ、今日は痛くしないで……ください」
「それはあたしが決めることよ。さぁいつものように仰向けに寝て少し脚を開きなさい」

莉央はしゃがみ込み、右足の裏を永遠の精液まみれのペニスにそっと押し付けた。

「お願いする時は何て言うの？」

「り、莉央様、その真っ白な綺麗な足で……僕を電気アンマでイカせてください……お願いします」

「よく出来ました。尿道口から血が出るくらい激しくやってあげるわ」

「ひっ！　そ、そんな！」

『グリッ！……ガガガガガガガガガガッ！！』

「いだあっ！？　んぎいいいいいいいいいっ！！！！」

全身が大きく前後左右に揺さぶられるほどの、莉央による激しい電気アンマが開始された。
ここ最近では、愛衣の前立腺抉りと莉央の電気アンマは定番の責めになっていたのである。

「痛いいいいっ！！　許して莉央様あああああっ！！」

「うるさい！　黙って耐えてないとキンタマ蹴り潰しちゃうわよ？」

少し的をずらして睾丸を蹴り込む莉央。
強烈な腹痛が永遠の下腹部を襲う。
更に加減しながらのペニスへの刺激に変更。
一気に快感が押し寄せ、たまらず二度めの射精をしてしまう永遠。
「莉央様っ！　イク！　イッちゃいますうううっ！！」
「早くイケ♡」
『ドピュピュピュピュピュッ！！』
女子高生と同い年の女子小学生アイドルの二人から、痛々しいながらも気持ちも良い性的お仕置きを受けた永遠は、床にこぼした自分の精液を全て舐め取らされる。
『ペロペロ……ピチャピチャ』
「あたしの素足に汚い液なんか着けちゃって……指の間まで綺麗に舐め取りなさい」
「は、はい」
床と莉央の足の裏を満遍なく舐めとった後、ようやくパンツとズ

ボンのパジャマを履くことを許される永遠だった。
泣きながら愛衣の膝枕で眠りにつく永遠。
そっと頭を撫でてあげながら囮作戦の段取りを話し合う莉央と愛衣。

夕方になり、辺りは黄昏に染まり始める。
愛衣は駐車場の車に乗り込み、助手席に莉央が乗り込んだ。
「唯香ちゃんも今回の拷問処刑人に選ばれてましたよね？」
「うん。今回は三人でやっつけて、そのメンバーのままで処刑しちゃう」
「はい。では唯香ちゃんが住んでるゴスロリ姉妹のとこへ向かいますね」

黒いレクサスが低い静かなエンジン音をたてて出発する。

「こんばんは。今日は唯香ちゃんが出番なんだよな？」
「そうです。ゴスロリ姉妹さんはゆっくり休んでてくださいね」
「あ、ああ。アネキは昼間から飲み過ぎて爆睡しちゃってるから見送りはウチだけで悪いけど……」

「ありがとう秋帆さん」

ゴスロリ姉妹である姉の沖野夏帆と、妹の秋帆の二人は堀越唯香のことを本当の妹と思うぐらい慕って大切に育てている。

酔い潰れて寝ている姉の夏帆を起こすこともなく、そのまま秋帆に手を振られて莉央たちの後部座席に乗り込む唯香。

「行ってきまーす！　夏帆ねーさんによろしくね♪」

「ほーい！　よろしく言っとくわー！　」

レクサスが見えなくなるまで手を振り終わった後、ふと呟く秋帆。

「人をぶち殺しに行くはずやのに……なぜにあそこまで楽しそうに……うっ、は、吐き気がしてきた……唯香ちゃんやっぱスゲェわ……」

東部地方から南部地方へ数時間かけて到着する莉央たち三人。

「ここから南部千鳥スカイラインへ上がるみたいね」

「はい。まだ少し早いみたいですけど……向かいますか？」

「そだね。とりあえず缶ジュースでも買って、のんびり夜中を待とう。あまり人がいるうちは犯人も来ないだろうし……」

まだ20台ほどの車がいて、それぞれ夜景を楽しみながら車内で寛いでいる。

「唯香ちゃん！　今日は犯人をあたしたちがぶちのめすまでは見てるだけだよ？　拷問が始まったら頑張ってもらうけど……」

「うん。莉央ちゃんと愛衣さんの戦いぶりをじっくり拝見させてもらっちゃう♪」

「面倒くさいから基本愛衣に任せるわ」

「はい。莉央様」

三人で色々会話をしたり、自販機コーナーでパンやジュースを買ったりして時を待つ三人の美少女。

やがて数時間が過ぎ、気がつけば周りに車は一台もいなくなっていた。

「ぼちぼちくるかな？」

「そうですね……私たちの車だけしか残ってないのが入り口から見

えますので……見つけたらすぐ来そうです」

その時一台の車のライトがこちら側を照らしてくる。

何かを引きずるような音が微かに響いてきた。

「お出ましだね。ここのパーキング入り口を鎖で封印してる」

「はい。自ら他者の助けが来ないように施してまで地獄へ入ってくるなんて……馬鹿な彼らにはまだ知る由も無いでしょうね」

一台の車が愛衣たちの隣に停まる。

ドアの閉まる音がしてどうやら二人一度に降りてきたみたいであった。

『コンコン！』

窓ガラスを叩く男の姿が見える。

少し窓を開けて愛衣がその男たちを見上げた。

「あら！　茶髪のカッコいいお兄さんが二人。どうされました？」

「ハハハ……カッコいいなんて言われたら照れちゃうなぁ。ちょっと車のブレーキランプを見て欲しくってさぁ」

「そうなんだ！　なんか暗くて球が切れてるかも知れないんだよ。お願いしまーす！」

まず運転席のドアが開き、愛衣が降り立つ。

「おおっ！　セーラー服！？　じょ、女子高生かよ！？」

思わず声に出して喜ぶ茶髪の男……一度目の被害者の女性と、二度目の被害者、南部亜紀を犯して殴り殺した男である。

更に助手席から菅野莉央、後部座席からは堀越唯香が降りてきた。

「え？　小学生！？　お、男はいねぇのかよ！？」

同性の男性を犯すのを楽しみにしていた変態男、佐藤真司はあからさまに残念がってみせる。

「おい真司！　そんなふうに言うとバレちゃうだろーが！？」

「あっ！　す、すまん！」

慌てふためく二人の茶髪男。

「犯される」

ボソッと呟くように莉央の口が開いた。

「え？　君、小学生のお嬢ちゃんだよね？　今なんて言ったのぉ？」

「犯されちゃうの……」

「……ハハ！　ヒハハハハ！！　そうなることがもう予測できちゃってたんだ！？　小学生のくせにオマセちゃんだな！　じゃあ仕方ないな！　周りにゃ誰もいないし俺たちが君の予測通り君たちを犯しまくってやるぜ！！　小学生の君なら大切なとこ裂けちゃうかもな！？　ガハハハハ！！」

「お兄さんたち！　ちょっといい？」

唯香が申し訳なさそうに、後方から口を開く。

「ハハ……？　ん？　どうしたの？　君もまだ小学生だよねぇ？この子と同じようにオマンコぐちゃぐちゃに破壊してお嫁に行けなくしてやるから楽しみにしてるのでちゅよぉ？　ヒヒヒヒ！！」

「ガハハハハハ！！」

雄二のセリフにつられて真司も爆笑し始める。

「バカ受けしてる所、本当に申し訳無いんだけど……この子が言ってる〈犯される〉って言うのは……おにーさんたちのことだよ。ほんとごめんなさい」

一瞬耳を疑った二人の男。

数秒間目を丸くして固まっている。

必死に笑いを堪えていたが、ついに大爆笑を始めてしまう。

「ちょっと聞いたか今の！？　俺たちがこのガキたちに犯されるんだってさ！！　ひーひひひひひ！！」

「腹いてぇ！！　頼むからそんなに笑わせないでくれお嬢ちゃん！！　ガハハハハハハッ！！　まだそこの女子高生になら万が一ワンチャンあるかもだがな！！……まぁでも有り得ねーか。女ごときに負ける俺たちじゃねーからよぉ！！」

本当に読んで字の如く、地面を転がりまわりながら大爆笑を継続する二人の男を、愛衣と莉央と唯香の三人は、しばらく真顔で観察していた。

「なんか段々腹たって来ちゃった……愛衣！　あなたは女性の敵で

あろう加藤雄二をやって。あたしは変態ホモ男のほうをやるから」

「はい。じゃあ遠慮なく」

構えを取り、加藤雄二へ躙り寄る女子高生の拷問処刑人、円満愛衣。

「おいゴラァ！！　誰が変態ホモ男だって!?　俺には佐藤真司って名前があんだよ!?　小学生だからって構わずぶち殺すぞこのクソガキがっ！！」

殴りかかる茶髪の男たちの猛攻が始まった。

殴る蹴る、肘や膝、あらゆる部位による連続攻撃が繰り出される。

一分ほど躱され続けると、ついに息が上がってしまう二人。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……こ、このクソガキめ！　何てすばしっこい」

「はぁ、はぁ、はぁ、ほ、ホントだ！　全然殴れねぇじゃねーか……ちくしょう！　オラァッ！！」

気力を振り絞って再度襲いかかるが、全て身を翻して躱す莉央と愛衣。

「もういいかな？　反撃しちゃっても……」

膝をついてゼェゼェと苦しむ男たちの前に立つセーラー服の女子高生とワンピース姿の女子小学生……。

それから半時間ほどの時間、ひたすら二人の顔面だけを目掛けて殴り続ける二人の少女。

堀越唯香は息を飲みながら、莉央と愛衣の強さを痛感していた。

「スッゴ……もうコイツらの顔、どっちがどっちかわかんなくなっちゃってるじゃん……」

『バキバキ！！　ドカッ！！　グシャッ！！』

「ひいいっ！？　や、やめて」

「ぐわあっ！？　いでええっ！！」

顔面をボコボコに腫らしながら土下座をして泣きを入れる佐藤真司と加藤雄二であった。

土下座をしている加藤雄二の頭に、スニーカーの足の裏を乗せてグリグリと擦り付けながら鳴り出したスマホに応答する菅野莉央。

「はいもしもし。あ、長官ですか。……はい、はい。え？　手間を省く為にこの場所で処刑執行しちゃっても構わないのですね？」

莉央の応答を聞きながら、愛衣と唯香は思わず目を合わせて固まった。
スマホをポケットにしまうと、愛衣と唯香に説明を始める。

「今から加藤雄二と佐藤真司の拷問処刑を執行しちゃいます！　ではよろしくねお二人さん」

「はい！　予定変更ですね」

「了解！　私も頑張る！」

愛衣と唯香は、突然の執行命令に気合いを入れ直す。

まずは二人を自主的に素っ裸にさせる莉央。

「あなたたち二人とも……全裸になって抱き合いなさい」

逆らう度に、赦しを乞う度に、血まみれの顔面へサッカーボールキックを喰らわす莉央に、とうとう全て服従してしまう雄二と真司だった。

「シックスナインしてよ。お互いのチンポを根元まで咥えて舐めまくるの」

「ひ、ひいい、は、はい！」

「わ、わかりました！」

言われるがままに、お互いのペニスをしゃぶり合う二人の茶髪男。

「殺されるかも知れない恐怖心からか勃起が弱いわね……愛衣！
唯香ちゃん！　コイツらのアナル犯してやってくれるかな？」

「はい莉央様」

「はーい！　指でいい？」

「そだね。激痛与えたら余計フニャっちゃうから……指で前立腺シゴいてやってくれる？」

「はーい」

愛衣は雄二を、唯香は真司をそれぞれ担当した。

「ほおら、ここがカス野郎の汚い排泄穴ね？」

『ツプ！……ズブブブ！！』

「ひっ！？」

「はうっ！？」

愛衣と唯香は激しく男たちのアナルを指で掻き回す。
二本、三本と突っ込んで激しく出し入れしたり直腸内を掻き回したり……。

みるみるうちに二人のペニスは固くなってゆく。

「あれ？濡れてきちゃってるよ？　女子高生や女子小学生なんかにアナル掘られて……腸液分泌しちゃうほど興奮してるの？」

莉央が目を細めながら、冷ややかに問いかける。

「ご、ごめんなさい！　なんか気持ちよくてつい……うっ！？で、出る！！　出ちゃううっ！！」

『ドピュッ！！　ゴポポッ！！』

「んぐうっ！？　ごっくん！！……オエエエッ！！」

思わず愛衣の指技で先にイカされた加藤雄二が、ホモ男の佐藤真司の口内へタップリと精液をヘリ込んでしまった。

飲み込んでムセまくる真司を腕を組んで見下ろしながら嘲笑する

莉央たち三人の少女。

「お前もイケッ！……えいっ♡」

『グシュウッ！！……グボオッ！！』

唯香は拳を握りしめて一気に肛門へぶち込んだ。
更に掻き回す。

『ボコッ！！　グチュチュチュチュッ！！』

「ひぎいいいいいっ！？」

『ドピュピュピュピュピュウッ！！』

愛衣の指技より激しく、夥しい量の精液を吐き出させられる真司だった。

「小学生だからってナメないで！　オチンチンなんかよりぶっとい拳をケツ穴にぶち込んじゃうんだから♡」

「唯香ちゃん！　ケツ穴だなんてはしたない言葉いつから使うようになったの？　あはは……」

「てへへ……ごめん莉央ちゃん……私最近むっちゃSに目覚めちゃ

って……言葉責めでも興奮しちゃうの」

そう言いながらも直腸が飛び出すほどの勢いで、右腕をアナルに出し入れさせる唯香。

『ボッコボッコボッコボッコ！！　グチュチュチュチュチュチュウッ！！』

「ひんぎいいいいっ！！　いだいいいいいっ！！　腸が飛び出ちゃうううううっ！！　やめれえええっ！！」

「あはは！　やめてー、の間違いでしょ？　舌も回らなくなってきたのぉ？　肛門括約筋が窄んだり飛び出したり激しく動きまくって面白〜い♡　男ってホント痛みに弱いのねぇ？」

冷たく微笑みながら真司の肛門へ肘近くまでも腕をぶっ刺す唯香の姿は、もはや莉央と並ぶほどの拷問処刑人の顔をしていた。

「唯香ちゃん、そいつの肛門くり抜いて……もうそのまま大腸引き摺り出してやって」

「え？　いいの？　死んでしまわない？」

「腸を抜いたくらいじゃ死なないように、気付け薬を注射しておいてあげるから♡」

「あは！　じゃあ遠慮なく……おい真司とやら！　愛する彼女の見

てる前で彼氏を犯した罪は重ぃよ？　あんたの汚いアナルや大腸や小腸、全部私が引き摺り出してやるから覚悟してね？」

「ひぃっ!?　や、やめてっ！！　やめて下さい唯香様ああぁっ！！」

「あはは！　様付けしたって許したげなーい！　まずはその汚い肛門をくり抜いてやるうっ♡　ほらあっ！」

『ザクッ！！　ズズズズズッ！！　ポコッ！！　ズルズルズルズルー～！！』

「それそれえっ！　そのままハラワタ抜きに移行♡」

肛門をカッターで丸くくり抜いた後、指に直腸を巻きつけてどんどん大腸を引き摺り出してゆく唯香。

「ほらほらほらあっ！　どんどん出てくるねぇ？　オッサンの汚くて臭っさい腸が……腸液ドバドバ垂れ流しちゃって……エロいなぁ♡」

「がぎゃあああぁっ！！　死ぬっ！！　死ぬううぅっ！！」

「女の子に肛門抜き取られて、大腸まで引き摺り出されてゆく気分はどう？　お、急に細くなった！　ここから小腸だね？　ポコポコ出てくるわよおっ？　あはははは♪　えいえいえいっ！！」

隣で女子小学生に肛門と大腸を抜き取られながら絶叫する親友の姿を見せつけられて、震えながら涙を流していた加藤雄二だったが、ついに自分にも地獄の時間がやってきたことを悟る。

円満愛衣により無理矢理起立させられて、背後から膝でペニスと睾丸を蹴りまくる責めが開始された。

「ほら、股を大きく開いて」

「は、はい……殺さないで……しくしく」

『パンッ！！　パンパンパンパンパンッ！！』

「ぎゃっ！？　はぎいいいいっ！？」

「ほらほらほら！　何上下にオチンチン揺らしてるの？　そんなに蹴り上げられて嬉しぃ？」

「う、嬉しくはないです……泣いてるんです……痛いです愛衣様……」

完全に抵抗する気力も無くした二人の犯罪者は、莉央たちを様付けで呼び、屈服することであわよくば彼女たちに命だけは許してもらおうと願っていたのであった。

何十回、何百回と背後から膝で蹴り上げるうちに、ペニスも睾丸も痺れて痛みさえ鈍くなってきた頃、愛衣の本気の一撃が陰部を襲った。

『グシャシャッ！！』

「ピギィッ！！！！」

二つの睾丸が同時に愛衣の膝によって蹴り潰された。
全身に電気が走り、呼吸さえまともにできなくなる。

「まだよ！　ミンチになるまで蹴り続けてやるんだから！　ほらっ！　ほらあっ！」

『ズドンッ！！　ドコオッ！！　バコオッ！！　ズンッ！！』

「あひっ！！　はうっ！！　はぎゃっ！！　ぎひいっ！！」

白目を剥いて全身を痙攣させながらも愛衣の股間への膝蹴りは終わらない。
逆らわなければ生きて帰れるかも知れない……心の奥底にそういった希望的観測が存在する以上、愛衣たちに逆らわず死に物狂いで激痛に耐えているのである。

しかしどうやら、相棒の命運は尽きたみたいであった。

堀越唯香は肛門、直腸、大腸、小腸の全てを抜き取り終わり、更に肛門のあった部分からハサミを入れて、陰嚢まで切り開き、前立

腺を鷲掴みにしていた。

「ひぐうううっ！！　いだいいいいっ！！　許して唯香様……ぎひいいいいっ！！」

『グニュグニュ！！　クチュクチュ！！』

「握り直すたびヤラシイ音立てちゃって♡　エッチだねお前の前立腺……ここで男は快感を得てるんだよね？」

「はひ、はひいい、気持ちいいような痛いような……ひいい」

莉央の打った麻酔注射の影響もあり、ハラワタを抜かれていてもまだ前立腺の刺激に気持ちよさを感じている佐藤真司であった。

『ギュッ！！……ドクドクッ！！』

「やだ！　前立腺強く握ったら射精しちゃったぁ♡」

「はぁ、はぁ、はぁ、もうこ、殺して……」

「わーい！　私もついに死刑囚から『もう殺して』頂いちゃいましたぁっ♪」

そう言いながら、嬉しそうに莉央の顔を覗き込む唯香。
莉央は静かに頷くと、短銃を手にして歩み寄る。

鉄製のお皿を睾丸の下へ敷き、金槌を振り上げる唯香。
一気に振り下ろし、睾丸を叩き潰した。

そのまま何度も叩きつけ、もう一つの睾丸やペニスも叩きまくる。
ぐちゃぐちゃのミンチ状になった性器を確認した後、莉央は真司のヘソ穴へ短銃の銃口を差し込んだ。

「ヘソの穴も犯してあげる。鉛玉で、だけどね。カス野郎は死ねばいいよ！」

『パンッ！！　パンパンパンパンパンパンッ！！』

「ぶはあっ！！　おごごごおっ！！……ゴボゴボ……」

『ガクンッ！！』

銃口の煙をふうっと吹き飛ばしながら、クルクル回した後ホルダーへしまう莉央。

「かっこいいなぁそれ！　また私も使いたい！」

「いいよ。あたしは普段ベレッタM９３R愛用してるからこのリボルバーあげる」

「わーい！　ん？　もうタマ無いじゃん！？」

「あ、ごめん！　それ予備のタマ無かったの……唯香ちゃんはまた今度ね」

「えーん。分かった。今度の処刑時には必ず銃器使わせてね♡」

ヘソに大穴を開けて死亡した相棒の姿を見ながら号泣する雄二だったが、もう人のことは気にしていられない。

睾丸を蹴り潰された後は爪切りで両胸の乳首を切り取られ、ペニスもカッターで尿道のワレメから縦に切開された。

『ズッ！……ズバズバズバァッ！！』

「ほら、二本に増えたよ！　オチンチン♡」

「んぎいいいいいっ！？　いだいいいいいっ！！」

号泣する雄二を四つん這いにさせると、銃口の長いライフル銃を手にしながらゆっくり背後にしゃがみ込む愛衣。

「串刺しにしてあげる。って言っても鉛玉で、だけどね」

「ぐすん、ぐすん、やめて……」

『ズボッ！』

「はうあっ！？」

『ガチャ！』

６０センチはあろうかとゆう長い銃身を、ゆっくり肛門へ挿し込むと、安全装置を外す。

「アナルから腹腔内を貫通して脳みそふっ飛ばしてあげるわ」

「ひいっ！！　や、やめてっ！！　やめて下さい愛衣様ああああっ！！　わーんわーん！！」

『ズボズボグチュグチュ！！』

「あひっ！？　熱いっ！！　あはあっ！？」

銃口を銃身の半分ほどまで、深く挿し込んだり抜いたりを何度も繰り返して肛門を犯す愛衣に、死の恐怖の最中でも喘ぎ声しか出ない雄二であった。

「汚い腸液垂れ流しちゃって……感じてるの？」

「はぁ、はぁ、はい愛衣様。愛衣様に肛門を掘られて感じてます。だ、だから、命だけは…お許しを」

愛衣は竹割りに真っ二つに裂いたペニスの内部へ指を這わせ、真っ二つにされた尿道を引き摺り出した。
生の尿道の感触を指で愉しんだあと、そのままペニスから引きちぎる。

「がはあっ！！」

「汚い液やオシッコが通ってた管も割いた上に引きちぎってやったし……ぼちぼちね？　いっぺん、逝ってみる？」

「い、いやだっ！！　逝きたくないっ！！　ひいいいっ！！」

愛衣は肛門の奥の奥、Ｓ状結腸まで銃口を突っ込むと、ゆっくりと人差し指をトリガーに掛けた。

「最期よ。殺した人たちに……懺悔しなさい」

「はひ、はひ、ひいい、やめて許して……ご、ごめんなさい！　ごめんなさいいいいいいっ！！」

『ズドオオオンッ！！　パァンッ！！　ビシャビシャ！！』

肛門から撃ち込まれたライフルの銃弾は、腹腔内を貫通し、ハラワタを絡め取りながら脳みそを吹っ飛ばした。
脳みそと内臓、ハラワタがあたり一面に降り注ぐ。

「きゃっ！　汚いっ！　たぁまやぁ～♡」

顔に鮮血や臓器を受けながらも、嬉しそうにはしゃぐ堀越唯香。

莉央は冷静に、ミンチの雨を掻い潜って躱してゆく。

「莉央様、コイツの肛門……原型留めてます」

「その銃、銃身長いからね～……下半身だけ原型残っちゃったみたいだね～。くり抜いちゃお♡　よっと」

莉央はメスで器用に肛門を丸くくり抜くと、煙を吐き出している直腸内部へ突っ込んだ。

「肛門より少し奥はほぼ空洞」

「スッゴ……やっぱりライフルは威力抜群ですね莉央様」

「私も撃ちたいいっ！」

「はいはい。また次回ね……肛門に空洞開いてるのに脚と臀部は綺麗に残っちゃって……なんか余計哀れだよね♡」

ため息をつきながらも、まだ原型を留めている雄二のお尻の肉を

足の裏でグリグリと踏みつける莉央だった。

悲劇のドライブ（後編）（後書き）

凄惨な拷問処刑を終えた三人は、南部千鳥スカイラインパーキングを後にした。

「今回の被害者のお兄さんもお気の毒よね」

「……うん。アイドルオタクのあの三人組も可哀想だけどね。あはは……」

三人の処理班たちが到着したのは明け方前だった。

「ちっ、また派手にやってくれたなアイツら……」

「ウプッ！！　オエエエエッ！！」

「こいつなんかケツと足しか残ってねぇ……相変わらず天使の顔した悪魔たちだな彼女たちは……一応通さなくはしてあるが散歩とかなら簡単に侵入できそうだ。出来るだけ急いで片付けなきゃな」

特殊任務省の雑用処理班でもある山内、川内、原内の三人は、黙々と辺りに飛散している肉片を片付けてゆくのであった。

残酷処刑島に……いや、千鳥スカイラインパーキングに二つの遺体

が残された。

性的イジメは何度でも（前書き）

学校でのお仕置き……以前よりはかなりライトになったのではあるが……普通から比べればやはり莉央たちのその行為はとてつもなく規格外であった……。

かなりマンネリ化された少女たちによる性的イジメのお話です。

飽きてきたらスルーして下さいね……。

性的イジメは何度でも

猛暑日になる八月の中頃、赤霧島小学校にも全教室にクーラーが設置された。
もう扇風機を周りに何台も置く必要はなくなり、生徒たちも授業を受けやすくなる。

「みなさん、これからはかなりこの学校で過ごしやすくなったと思います。より一層勉学に励んで下さいね！」

「はーい」

担任の坂本温子先生が教壇から全員に伝えた。

「さて、この度は残念なことが起こりました。このクラスで窃盗事件が起こったのです」

ざわめく教室……それぞれの生徒がみんなの顔を見渡し始めた。

「おい清家！　お前じゃ無いだろうね？」

『ツプ！……ズブブブブ！』

「んひぃっ！？　ち、違います！僕じゃ無いですっ！」

莉央の指が肛門へゆっくり突っ込まれた。

一斉に莉央たちの集まるクラス後方の先を振り返る生徒たち。いつものように……この日も以前痴漢行為とゆうオイタをやらかした男子生徒、清家貴文が莉央たちのお仕置きを受けることはもはや定番となっている。

下半身だけ素っ裸にされ、床に四つん這いで取り囲まれていた。菅野莉央、富田美香、結城明日香、堀越唯香、町田美知瑠、矢野弥生、以上六名によるお仕置きとゆう名の、性的イジメである。

犯人を問いかける先生のことを気にもかけず、美香はゆっくり何度も往復ビンタを敢行。

明日香は足の裏で頭をグリグリと擦り付け、唯香は莉央のアナル責めをスマホで撮影、美知瑠はペニスの皮をめくり、亀頭部にチョンチョンと人差し指を触れて頬を真っ赤に染めている。

「全員目をつむってくれる？　その間に財布を盗んだ犯人は静かに手を上げなさい。分かりましたか？」

先生の言う通り莉央たち六人と清家貴文以外は全員目をつむり、静かに俯いた。

「菅野さん……あ、あなたたちも目をつむってもらえます？お願いします」

担任が頭を下げて生徒にお願いする奇妙な絵面……犯人を見つけ出したいがために勇気を振り絞って莉央たちに声をかけたが、結果は最悪となってしまう。

「先生……いや、温子」

「は、はい！」

担任教師を睨みつけながら手招きする莉央。

「ど、どうしたのですか？　な、なにかそちらにあるのですか？」

「何もないけど用があるからちょっと来いと言ってるの」

「ひっ……ご、ごめんなさい私……別に」

「別にじゃ無い！　早く来い温子！！」

『グボオッ！！』

「んぎいいっ！！」

怒り心頭で指どころか拳全体を清家貴文のアナルにめり込ませる莉央。

不意打ちのフィストファックを食らった貴文はあまりの激痛に号泣してしまう。

「はうっ!?　んぎいいいっ!　痛いよおおおっ!!　うわぁーん!!」

「あらごめん!　つい担任にムカついて拳ぶち込んじゃったわ……てへ♡」

莉央は舌を出して可愛く謝るが、貴文は顔をクシャクシャにして更に号泣を続けている。

突っ込んだ拳を抜かずに直腸内を掻き回していることで、決して“つい”では無いことが伺える。

「莉央ちゃん残酷ぅ~♡」

「あははは!　清家の顔見てよ!　おもしろ~い♡」

全身をガクガク震わせながら莉央のアナル調教に耐え続けている最中、担任の坂本温子が莉央たちの前に辿り着いた。

「弥生委員長!センセーの服全て脱がしてくれる?」

「うん。……先生!　分かってるよね?」

「ひっ!　や、やだ……ごめんなさい許して……」

「だめ。莉央ちゃんに逆らったら酷い目に合うこと……知ってて今回の行動取ったのでしょう？　なら大人しくしてることね」

半泣きになりながらも抵抗せずに矢野弥生と堀越唯香によって少しずつ脱がされてゆく坂本先生。
ついにブラも外されて大きめのオッパイが晒されて上下に揺れる。

「きゃあっ！？　やだあっ！！」

パンツ一枚になっても未だ許しを乞う坂本先生に、またしてもイラつく莉央。
思いっきり右の乳房を平手打ちした。

『スパァンッ！！』

「ぎゃあっ！！」

思わずしゃがみ込んで胸を押さえて叫び出す。

「先生、立って」

町田美知瑠と堀越唯香が両側から左右の腕を掴み、無理矢理立ち

上がらせた。
右の乳房は真っ赤に染まっている。
莉央の破壊力は物凄かった。

「バトンとボールペンでいい？」

結城明日香がカバンからその二つを取り出すと、莉央は満面の笑みで受け取る。

「センセ！……前と後ろ、同時に犯してあげるから」

「え？　ど、どうゆう意味ですか？」

「何しらばっくれてんの！？　マンコとお尻の穴に決まってるでしょ！？」

『スパァンッ！！』

反対側の乳房も平手打ちされ、ついに両胸が真っ赤に染まってしまった。

「ひぎいっ！？　痛いいい……や、やだそんなの！　バトンなんてアソコに絶対入らない！！」

富田美香はツインテールを揺らしながらサッとしゃがみ込むと、残った一枚のパンツに手を掛けた。

「それが入るんだよオバさんの大人マンコになら♡　さぁ先生！　覚悟を決めてね。最後の一枚、はぎ取っちゃおうか？」

「やめて富田さんっ！　お願いしますううっ！！　アーンアーン」

小学生女子の生徒たちに責められて、号泣する先生は全国でもこの赤霧島小学校にしか存在しないであろう。

「あーあ。泣かせちゃった！　美香ちゃん悪い人だわ」

とぼけた顔して明日香がメガネの位置を直す。

「泣いても許さないよぉ！それえっ！」

『ズルズル！　ストーン！！』

「やだあああっ！！　見ないでえええっ！！　アーンアーン！！」

ついに美香に最後の一枚のパンツを足首までズリ下され、素っ裸にされてしまう坂本先生。

丁寧に片足ずつ持ち上げながら完全にパンツを剥ぎ取る美香。

「後で返してあげるから泣かないの！　ほら、清家と並んでや四つん這いになれ！」

「やめてぇえっ！！わーんわーん！！」

『パンパンパンパン！！』

「ひぶううっ！？」

莉央の強烈な往復ビンタが４０代の担任の顔面を襲った。
涙が辺り一面に激しく飛び散る。

「バックで犯してあげるって言ってんの！　早くしないと子宮抉り出すわよ？」

「ひいいっ！！　わ、分かりました！　ごめんなさいっ！！」

「唯香ちゃん、まずセンセーのお尻……１００叩きしとこうか？」

「え？　いいの？　先生だよ？」

「あたしたちに逆らったらこうなるってことを毎回毎回教えてあげないと調子に乗っちゃうからね。皮が剥けちゃうほど強く１００叩きお願い」

「はーい！　じゃぁ先生、思いっきりいくから逝かないでね？」

「やだあっ！　堀越さん、お願いだから酷いことしないでぇえっ！」

前髪を右手で掻き上げながら左手で坂本先生のお尻の肉を揉んで肉質を確認する唯香。

「ふむふむ。結構柔らかいお尻してるね歳の割に……では始めまーす♡」

『パァンッ！！』

「ギャァッ！！　ひぃいいいっ！！」

髪を振り乱しながら四つん這い体勢で泣き叫ぶが、唯香の全力のお尻叩きは終わらない。

「99！……100っ！」

『スパァンッ！！』

「うわあああんっ！！　痛いいいいっ！！　わああああああんっ！！」

大人げもなく大号泣して胸を床に着けるように崩れ落ちる坂本温子。

臀部は左右とも真っ赤に染まり、所々紫色に内出血している部位さえ見受けられた。

背後からそっと歩み寄る莉央。

「センセ……誰が崩れ落ちていいって言ったの？」

「わーんわーん！　痛いいいいっ！！もう許してえええっ！！」

『ズドォンッ！！』

「んぎゃあああっ！！！！」

お尻だけは突き上げている体勢なので、陰部はガラ空きだった。莉央の右足の甲は、坂本先生の性器をまともに捉えた。

『プシャアアアッ！！』

激しく小便を漏らしながら両腕を踏ん張り直し、四つん這い体勢に戻る。

「そう。それでいいのよセンセ♡」

「ううう……ぐすんぐすん」

みるみるうちに真っ赤に染まってゆく坂本温子の外性器。

「マンコ大丈夫？　私が診てあげます」

矢野弥生は慌ててしゃがみ込んで、心配したフリをしながら先生の大陰唇に両手の親指を当てがい、ゆっくり力を込めてゆく。

「みんなに見せてもらうわよ先生の内臓……ほらあっ♡」

『ぐっ！……クパァアア～！』

「ヒャアッ！？　やめて見ないで広げないでえええっ！！」

子宮が見えるほどまでに全開に拡張されたオマンコが莉央たち六人の目に晒される。

「やだ臭そう……」

「糸引いてる？　あは！　濡れてんじゃん？」

「莉央ちゃんに蹴られた刺激で愛液分泌しちゃったみたいね……身体の防御本能みたいなものかな？」

「ふぅん。こんなになってんだ大人のオマンコって……小陰唇のヒ

ダヒダが所々黒くて……形が左右非対称ね……」

各々に意見を言われ、傷ついた坂本温子は更に号泣を始めた。

「もういやあっ！！　見ないでお願いっ！！　許してくださいいいいっ！！　わーんわーん！！」

結城明日香がふと莉央に囁きかける。

「莉央ちゃん、お願いがあるんだけど……」

「分かってる。マンコにバトンなんて使わないから安心して」

「！？　どうして分かったの？」

「先月くらいにこの先生に……明日香ちゃん膝擦りむいたとき治療して貰ったんでしょ？」

「知ってたんだ……ありがとう」

莉央は中指と薬指をクネクネと動かしながら不敵に微笑んだ。

「だからあまり痛めつけないように……指で優しくクチュクチュッとね♡」

ホッとして成り行きを見守る明日香だったが、いくら恩があっても莉央に注意したことはきちんとケジメをつけないといけない、でも少しでも痛くしないであげてほしい、そうゆう複雑な気持ちで見守るのであった。

「あたしの呼び方……分かってるわよね温子」

「は、はい……菅野様」

「よろしい。じゃあ脚をもっと開いて力を抜きなさい」

「はい……痛く……しないで」

「ここ？　センセーの生殖器は」

『ツプ……ズズズッ！』

「あはあっ！？　あんん……」

先ずは中指を半分ほど挿しこんで先生の反応を楽しむ莉央。

『ズブ！……グシュッ！！』

「はあんっ！！」

『グリリ……ズブブブブ！』

ついに薬指も突っ込み、二本の指を根元まで挿入した。

「あたしたちが見てる前で思いっきりイカせてやる」

「あん、やめ……お、お願い……します菅野様」

「お願いします……か。素直でよろしい♪　１０秒でイカせてやるからね？　いっくよぉ！」

『グチュッ！！……グチュチュチュチュチュチュチュッ！！』

「あんあんあんあんっ！？　あはあああああっ！！」

全身を痙攣させながら尿道からは潮を噴き、肛門を激しくビクビク動かす。

莉央の指捌きは凄まじくジースポットを捉え、人生で最高クラスの快感を与えられている坂本温子だった。

ここまで気持ちよければ同性だろうが教え子だろうがどうでも良くなってきていた。

「やあああああっ！！イクッ！！イッちゃううううっ！！」

「3、2、1……イッけえええっ♡」

『グシュシュシュシュ！！』

「んやあああああああっ！！」

『プシャアアアッ！！』

莉央は一気に指を膣から引き抜く。

『プシュ！』

「すっご〜い！　大洪水だね。潮も凄いけどマン汁も……理性で本能を抑えきれなかったって感じかな？　あはは……」

愛液まみれの指を、開いたり閉じたりしながら糸を引くのを眺める莉央。

膣内からはまだ止めどなく愛液がドロドロと垂れ落ちてきている。ツーンとした酸味のある独特の女の匂いが立ち込める六年三組……。

「どんだけマン汁垂らせば気が済むの？　淫乱センセ」

「ああ……はぁ、はぁ、はぁ、はしたないけど……すっごく気持ち……よ、良かったです」

「先月離婚しちゃったんでしょ？　欲求不満だったんだよねぇ？　あははははは！」

美香は先生の頭をポンポン叩きながら囁きかけた。
未練があったのかそれを聞いた瞬間、再度号泣しながらうつ伏せに崩れ落ちる。
「傷付けちゃった？ごめんなさい。お詫びにコイツと我慢比べゲームをしてあげる♡」
意味が分からず四つん這いのまま振り向くと、堀越唯香と町田美知瑠が、ガラス製の特大浣腸器を手にして、洗面器から何かの液体を吸入しているのが見えた。
「ほら、５分は我慢しないとキンタマ潰しちゃうからね？」
『つぷっ！』
「やはあっ！？」
町田美知瑠は三つ編みの黒髪を揺らしながら清家貴文の肛門へ浣腸器の先端を突っ込んだ。
「ほら、タップリお飲み♡」
『ぷちゅううう～』

「冷たいっ！？　やめてぇえっ！！」

四つん這いのまま叫ぶが、美知瑠によって５００ｍｌのグリセリン液が貴文の直腸内へ、高濃度で注ぎ込まれた。

思わず少し噴き出してしまうが、美知瑠が咄嗟に人差し指を突っ込む。

「こらこら！　漏らしちゃダメだよせっかく私が注入してあげたのに……」

挿し込んだついでにグリグリと肛門括約筋の裏側を抉るように執拗に直腸内を掻き回す。

「アナルの感触楽しんでるねぇ美知瑠ちゃんのエッチ♡」

富田美香は目を細めながら、激しく人差し指で掻き回される肛門を見て喜んでいる。

「えへへ……ごめんなさい。なんか性的リンチって興奮しちゃうわよね？」

「美知瑠ちゃんもドＳかぁ～。やっぱこの六人全員そうなのかもねー♡」

腕組みをしながら感慨深く首を縦に振る美香だったが、その間に坂本先生にも堀越唯香によって浣腸器の先端が突っ込まれ、５００ｍｌのグリセリン液が注ぎ込まれていった。

「少しでも噴き出したらお尻の穴からライフルぶっ放してやるからね？」

「ひぃっ！？　お許しくださいっ！！しくしく……」

全く冗談に取れない坂本先生は、唯香の脅し文句に本気で恐怖し、タップリ注ぎ込まれたグリセリン液を漏らさないよう必死で肛門括約筋を引き締めるのであった。

クラスの女子たちは、担任と男子生徒の性的リンチを全員振り向いて一部始終を観察しているが、男子生徒たちはほぼ見て見ぬふりをしてスマホで動画を見る者、眠る者、それぞれ全く後ろを振り返らず時が過ぎるのを待っている。

六人の女子生徒の見守る中、二人の我慢比べが始まった。

「ううう……もうダメだよぉ」

「ああん……出ちゃう！　んあああぁ！」

必死で堪える二人を見下ろしながら談笑を始める莉央たち。
後から浣腸されたのに先にギブアップしそうな坂本先生が悲鳴をあげる。
「も、もうダメ……ひいい！！」
その時、明日香がしゃがみ込んで貴文の睾丸を思いっきり指で弾いた。
『ペシィッ！！』
「ギャアッ！？」
『ブリブリバリバリ！！　プシュウウウウッ！！』
最初は半固形の便……続いて液体の便が２ｍほど勢いよく後方に噴射された。
ほんの一瞬遅れて、坂本温子も同じく噴射……。
「だめええぇっ！！　あああっ！！」

『ブリブリブリ！！　プシャー！！』

「惜しかったね貴文。お前の負けよ。バケツに水汲んできてお前たちの大便綺麗に拭き取りなさい」

「そ、そんなぁ……いきなりキンタマにデコピン……いや、キンピン……」

『ボコオッ！！』

「ぐはあっ！？ゲエエエッ！！」

言い訳を最後まで聞き終わらない内に莉央の強烈なボディへのフックが入る。

思わず再び四つん這いになって嘔吐してしまう。

負けた罰として下半身スッポンポンのまま、雑巾がけを何度もして、教室の床を大掃除させられる清家貴文。

「ほら、クソだけじゃなくお前の汚いゲロもきちんと拭き取るのよ！」

美香がお尻を叩きながら催促する。

担任の坂本温子はここで服を着るのを許されるが、唯香によって濡れタオルで性器と肛門を満遍なく拭かれるハメになった。

便を肛門から拭き取り終わると、性器を開いたり閉じたりしなが

ら丁寧に拭いてゆく。
「あ、あん、堀越さん、そんな奥まで拭かなくても……」
「遠慮しないで！　奥の方もマン汁だらけでかなり臭いから……」
そのまま反対側の左手をそっと股間に滑り込ませ、クリトリスに触れる。
思わず顔を突き上げて声を上げてしまうが、そのまま優しく擦り始める唯香。
『スコスコスコスコ』
「あんんっ！　んんんんっ！！」
結局莉央の指マンに続き、唯香の陰核責めで二度めの潮噴きを味あわさせられる。
ようやくパンツと服を返してもらい、全てを着込むと、そのまましゃがみ込んで泣き崩れてしまう。
「センセ……恥ずかしくて泣いてるの？」
「ひっく、ひっく、えーんえーん！……は、はい」

「ふぅん。反省した？」

「は、はい。ごめんなさい」

「きちんとあたしたちの前で土下座して謝るの。分かる？」

莉央は右手で坂本先生の顎を摘み、左右に軽く振り回した。

慌てて両膝を付き土下座体勢に入る。

「ごめんなさい菅野様っ！皆様っ！先生を許してくださいっ！」

そっと右足の裏を後頭部に置く莉央。

「このまま足で床に顔面擦り付けてやりたいんだけど……明日香ちゃんの顔で我慢してあげる」

「あ、ありがとうございます」

そのままフラフラしながら教壇に戻り、授業の終了を告げる坂本先生だった。

その頃、床掃除を終えた清家貴文は、坂本先生と同じように土下座をして謝る。

思惑は見事に外れ、莉央たちはまだ許してくれなかった……。

髪の毛を掴んで無理矢理立たされた後、股を全開に開かされ、背後から矢野弥生委員長による膝蹴り……。

「ほれほれほれほれ！　チンポポンピングだよ？　痛い？」

『パンパンパンパン！』

「いぎいいいいっ！！　痛いいいいっ！！」

弥生の膝蹴りにより、激しく何度も上下に揺れるペニス。
たまに睾丸にもヒットするので、数回に一度は不意打ちの激痛となった。

「わあ～……普段真面目な委員長もドSだなぁ」

町田美知瑠が何度も蹴り上げられるペニスを見つめながら頬を赤くしながら呟いた。

「膝に当たるん柔らかい感覚がなんか興奮しちゃうよのね～♡」

『パンパンパンパンッ！！』

「んひっ！やあっ！ひっ！んごおっ！」

蹴り上げられるごとに嗚咽を漏らすのがまた少女たちのＳ心を揺さぶった。
堀越唯香に交代し、同じくペニスポンピングを続行。
弥生よりも激しく物凄い速度で何度も何度も蹴り上げられるペニスからは、透明のカウパー液が上下左右前後に糸を引きながら飛散されてゆく。
「おい！　床中先走り液だらけにしちゃって……まだまだお仕置きが必要そうね？ んん？」
莉央が貴文の正面に立ち、上下左右に激しく揺れながらカウパー液を飛ばしまくるペニスを睨みつける。
更に唯香も続けた。
「ほんとよ。私の膝も汚い液まみれになっちゃった。どうしてくれるの？」
唯香の冷たい視線が貴文の後頭部に向けられるが、本人は股間の激痛でそれどころではない。
素っ裸にひんむかれ、仰向けに寝させられた後、六人による足蹴りの猛攻が開始された。

『ドカッ！！　バキッ！！　グシャッ！！　ガスッ！！』

「いだぁあっ！！　ひいいっ！！　わーんわーん！！」

泣いても止まないドS女子児童による踏みまくり……。

トドメは定番の莉央による電気アンマであった。

「先走り液じゃなくて精子タップリ入ったマトモな精液を再度出させてあげるわ。ほらほらあっ♡」

『ガガガガガガッ！！』

「んぎぎぎぎぎいっ！！　やめてぇえええっ！！　莉央様ああっ！！」

『ドピュピュピュピュッ！！　ドクドクドクドクッ！！』

菅野莉央の凄まじい電気アンマは、ほんの10秒足らずで貴文の睾丸の奥の奥に残されていた精液を絞り出してしまった。

「あれだけ射精したのにまだ残ってたの？すっごいなぁ」

町田美知瑠が関心しながら囁いた。

莉央の靴下にタップリ染み込んだ清家貴文の精液……。
靴下を脱いでゴミ箱に捨てると、最後に一言。

「清家！　歯を食いしばれ！」

「ひっ！？　はいっ！」

『パンパンパンパン！！　パパパパパパパンッ！！』

「ひぶうううううううううっ！！！！」

破壊力抜群の往復ビンタを超高速で打ち込む莉央。
鼻血を噴き出しながら膝から崩れ落ちる。

泣きながら再度土下座をして六人の女子に謝ると、ようやく許してもらえて服を返された。

制服を着終わった後も泣きながら土下座をして何度も何度も謝る貴文だった。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

取り憑かれたように謝り続ける清家貴文の教室には、いつのまにか誰もいなくなっていた……。

性的イジメは何度でも（後書き）

菅野莉央、富田美香、結城明日香たち拷問処刑人たちに影響されてなのかどうかは分からないが、どんどんドＳぶりを発揮してゆくクラスの女子たち……。

明くる日の朝。

「結局財布を盗んだ犯人は誰だったのかしら？」

「誰だろう？　もうどうでもいいけどね……」

結城明日香が思い出したように問いかけるが、素っ気なく答える莉央だった。

障害者への愚行（前編）（前書き）

ジャンルを問わずに繰り返される弱者に対する攻撃は、鬼畜の領域まで止まることを知らない。

障害者への愚行（前編）

日曜日の昼過ぎ、菅野莉央のスマホがけたたましく鳴り響いた。

昨夜も同居人である女子高生の愛衣と、性奴隷の扱いである小学生児童である永遠との濃密なＳＭプレイを愉しんだ三人は、この時間でも爆睡していた。

永遠だけはかなり強制的に責められていたが、本人は既に莉央と愛衣に美香と同様の忠誠を誓っているため、悦びの中、興奮しながら何度も二人から強制射精させられていたのである。

目を擦りながら半分夢の中で電話に出る莉央。

『ふぁーい。菅野です』

『おはよう！　この前の南部地方パーキングでの拷問処刑執行はご苦労であった。さて今回だが……さまざまな理由で保護が必要な障害児や、日常生活に関する障害児を対象に生活支援を行う“障害児入所施設″　ゆうものがあるんだが』

『はい。詳しくは分かりませんが聞いたことはあります。ってゆうか一度にあまり話されても……まだ頭が半分寝てるんですけど……』

『まぁそのうち目覚めるさ。……その施設は城東光の園といって東部地方にある。私たちの住む町だからかなり近場だな。知的障害に

限らず、身体障害・精神障害・発達障害のある児童が対象になっているのだが……防犯カメラに背を向け死角を作りながらかなり怪しい動きをしている男女の職員が存在するらしい』

『……演技をすれば良いのですね？』

『その通り！　相変わらず勘のいい……君と荒木永遠くんといったかね？　菅野永遠と姓を変えている児童は？　その子と堀越唯香くん。その三人が今回適任と判断した。知的障害を装って潜入操作を命ずる。すでに施設の所長には話を通してある』

『あのう……もの凄く抵抗あるんですけどそれ……なんか申し訳ないとゆうか罪悪感とゆうか……』

『うむ。それは私にも分かるのだが……上手く死角を作って卑劣なことをしているかも知れぬとなったら……誰かが早目に暴かないとこの先何人もの被害者が出るのだ。だから……お願いします』

『お、お願いしますって……はぁ。分かりました。確かに真面目な明日香ちゃんと演技ベタな美香ちゃんは向かないか……さすが鋭い人選洞察力ですね』

都合いい時だけ下手に出る藤堂長官に呆れながらも、永遠と唯香との三人での囮捜査を引き受ける莉央であった。

「ふぁああ～。よく寝た……莉央様、おはようございます」

「おはよう愛衣。明日の月曜日から数日間、学校休んで障害児入所

施設へ入ってくるよ」

「え？」

「最近よく国からやらされる囮捜査とゆうか潜入調査とゆうか……リスクもあるし面倒くさいしあまり好きじゃないんだけどね」

「確かに。拷問処刑だけなら何も考えなくても大丈夫ですものね」

「どうやったらもっと苦しむかとか、恥辱感を与えられるかとか……一応色々考えてるつもりなんだけどね」

「すみません……メンバーは？　いつもの小学生トリオですか？」

「明日香ちゃんは真面目すぎて嫌がるだろうし美香ちゃんは演技下手くそっぽいから……藤堂長官のご指名通り、永遠と唯香ちゃんとあたしの三人で行くよ」

愛衣と莉央は電話でも起きなかった永遠を起こして下へ降りた。お婆ちゃんとの四人での食事をしながら他愛のない家族での雑談を終えた頃、特殊任務省のレクサスが家の前に停る。

堀越唯香が運転手にドアを開けてもらって降りてくる。

「どうもありがとうございました。あ、こんにちは。今夜は莉央ちゃんの家で明日の作戦を相談するよう藤堂長官に言われてきたよ。そのまま泊めてもらえるの？」

「もちろん。作戦って言ってもバレないよう障害者のフリをして、

容疑者に犯行に及ぶよう導くとゆうか……要するに隙をわざと見せて油断させて……って感じ」

「知的障害者のフリね。分かった」

「永遠も気合い入れるのよ？」

「は、はい！」

力を抜いて出来るだけ自然に演技をしてみるがかなり難しく、円満愛衣に何度も何度も注意されながら訂正していった。

夜中になる頃にはようやく愛衣に太鼓判をもらい、明日からの入所に備えることができた莉央と唯香と永遠の三人であった。

シャワーも浴び終わり、再度二階に上がってきて冷たい炭酸水を飲んで寛ぐ四人。

「さてと寝るか……その前に永遠」

「は、はい！」

「唯香ちゃんに電気アンマでイカせるコツを教えたいから下のパジャマとパンツ脱いで仰向けに寝ろ」

「はい……」

莉央に命令されただけでフル勃起してしまう永遠だったが、慌て

て言われた通り下半身素っ裸になる。

「あ！　おっきい」

小学生とは思えないペニスの大きさに思わず声を出して驚く唯香。

「無理矢理あたしたちに責められてたときと違って最近悦んでるから……全開に勃起しちゃうのよ」

「ふぅん。こりゃ男のお尻掘ったら相手は痛がるハズだねぇ。じゃあ永遠くん、いくよ？」

両足首を掴んで開かせたまたの間に座り込み、ゆっくり素足の足の裏をフル勃起したペニスの裏筋へ当てがう唯香。

「足で射精させたげる」

「は、はい！　お願いします唯香様っ！」

『スコスコスコスコ』

「んんうっ……ううぅん」

「指の間に挟んで……そうそう。キンタマもたまに踏み込んでやって。そうそう」

雁首を親指と人差し指の間に挟んだり、踵で睾丸を圧迫したり、色んな技を唯香に教えてゆく莉央。

角度や力加減を変えながら擦り続ける唯香の足技に、たまらず二分と経たないうちに射精させられてしまう永遠だった。

「イク！　イクううっ！！」

『ドピッ！　ドピュピュピュピュッ！！』

足の指を開いたら閉じたりして精液が糸を引くのを見て微笑む唯香。

その後顔の前に足を持っていき、綺麗に舐め取らせた。

「気持ちよかった？　たくさん出しちゃって……」

「ペチャペチャ！……んんん、は、はい」

「この変態！　完全にMにも目覚めちゃったわよねお前……」

莉央は呆れ顔で永遠の顔を平手打ち。

腹の上にお尻を着けて座り込み、マウントポジションのまま何度もビンタするが、再度永遠のペニスはフル勃起してしまう。

愛衣がそっと歩み寄って再び電気アンマの体勢に入る。

「いっぺん……速攻でもイッてみる？」

「え？」

『ガガガガガッ！！　スコスコスコスコッ！！』

「んはあっ！？」

『ピュッ！！　ドクドクッ！！　ドクドクドクドクッ！！』

円満愛衣の拘束足コキでまたしても射精してしまう永遠。

「愛さんスッゴ♡　二度目なのにあんなに早くイカせちゃうなんて！」

唯香は愛衣のテクニックに感動している。

「ほら永遠くん、あなたの汚い粘液、パジャマで拭かせてもらうわよ」

愛衣は永遠の着ている上着へ何度も擦り付けて精液を拭った。

「じゃあみんなおやすみ。お前ほんとよく出すなぁ？　昨夜も何度も射精してるし……どんだけ溜まるの早ぃのよ？」

「ご、ごめんなさい莉央様……ぼ、僕女の子たちに責められることにホント……すっごく快感覚えちゃうようになっちゃって……」

「可愛い顔したドMのおぼっちゃん♡　これからもずっとあたしたちがイジメめてあげるから♪　明日はお互い頑張って演技しようね！　おやすみ♡」

そして夜が明けて月曜日、再び特殊任務省の高級車が迎えにきた。莉央と永遠と唯香は、お婆ちゃんと愛衣に手を振りながら菅野邸を出発し、一路、車は障害児入所施設である“城東光の園”を目指す。

20分ほども走らないうちにその施設へ到着する。

「では菅野様、後はよろしくお願いいたします」

「はーい。ご苦労様です。また犯人とっちめたら長官へ連絡するから」

「分かりました。そう伝えておきますね。それまで何日かかるか分からないですが……早目の解決を期待しております。では手筈通り私がご案内いたします」

運転手の小林について行く莉央たち三人。

城東光の園……一見普通に見えるこの施設で、鬼畜な所業が行わ

れているらしき情報を元に、もう既に障害者のふりをしながら小林の後ろを歩きながら周りをキョロキョロと見渡す二人。

「小林様、おはようございます。藤堂さんからお話は聞いております。どうぞこちらへ。後ろの御三方もどうぞ」

「ありがとうございます」

事務室へ通されておおよその施設の運営や、方針について話をする所長の中山久子。
白髪頭を染めもせず、服装も上下ジャージ姿とゆう気楽な姿で齢59になる初老の女性である。

「三人の方々は車の事故によるショックと頭部への外傷で脳にダメージを受けた知的障害者の方たちと、お聞きしておりますが……では、そうゆう設定でよろしくお願いいたします」

「そうなんですよ。その辺りを藤堂から説明を受けておられるとゆうことでこちらも助かります」

「分かりました。ではそのように……」

四人人で話を聞き終わり、小林はそのまま帰ることに。

「じゃあ藤堂おじいちゃんの為にもお利口にしてるんだぞ？また顔

出すからな」

演技とはいえ、小林の上から目線の言い方に少しカチンとくる莉央だったが、口を開けたまま天井に見つめて我慢したのであった。

とりあえず本日の任務を終えた運転手の小林は一人帰っていった。

「おはよう。菅野莉央ちゃんと荒木永遠くん……。それに堀越唯香ちゃんね？　一応今からお決まりの所長挨拶だけはさせて頂きますね？……今日からこの施設を自分の家だと思って気楽に過ごしてください。私たちにできることがあれば範囲内で何でもするからね。もうすぐお世話する担当になる宮崎と笹山が来られるハズだから。まだ二人とも２５歳とゆう若い……」

『コンコン！　ガチャ！』

中山久子所長がそこまで莉央たちに話した時、ノック音がして、ドアが開き二人の男女が入ってくる。

「やぁおはよう！　僕は宮崎努（みやさきつとむ）よろしくね」

「おはようございまーす！　私は笹山夏妃（ささやまなつき）よろしく～」

スポーツ刈りのスポーツマン系の男性職員と、妙に明るいテンションのポニーテールの女性職員である二人が莉央たちに挨拶した。

莉央たちは二人の若い職員を、障害者の演技をしながらジッと観察してから事務室を出る。
莉央はふと中山所長を振り向くと、目を閉じて深々と礼をした。
『所長さん、後は任せて。二人の容疑者であるコイツら絶対に闇を暴いてあげるからね』
心の奥からの園長の願いに、心の中できちんと応える莉央だった。
その二人は食堂や休憩室、リハビリステーション、様々な施設の場所を紹介してくれる。
理解したのかしてないのか分からないような演技をしながら莉央たち三人は、四人部屋に案内された。
外側から鍵をかける音がする。
「……永遠！　なんか部屋の外から鍵かけられるって……ヤな気分にならない？」
「そ、そうですね。部屋の鍵は普通、内側からかけるものですもんね……」
「それに男も女も同じ部屋に放り込むなんて大雑把でなんかイヤ」
慎重に小声で会話する莉央たち三人。

「昼頃に個々の部屋へ行ってリハビリルームまで連れてくるまでにだいたい犯行は起きてるらしいの」

「そうなんですか……死角まで計算に入れて虐待するなんてよほどの鬼畜ですよね」

「そうね。お前からしたらあたしたちも鬼畜だよね？」

「いっ！　いえっ！！　そ、そんなことはないです莉央様っ！！ぼ、僕は莉央様や唯香様にイジめられたく……」

「シッ！　声が大きい！！」

「あ、ご、ごめんなさい莉央様」

そして12時が過ぎ、食事を済ませた後再び知的障害を持つ児童たちの個室へ向かう職員たち。

莉央たちの担当になった宮崎努が9歳女児の部屋へ入った。

「さぁ今日も頑張ってリハビリしょーか彩音ちゃん？」

「あうあう～」

重度の知能障害を持つ岸田彩音(きしだあやね)は、今日も努の魔の手に堕ちる。

「ほら、服を脱いでオシッコやウンチ漏らしてないから確認しよー
ねぇ？　ふふふ」

『ズルズル……ズルリ』

岸田彩音は涎を垂らしながら脱がされた自分のパンツを見ている。

しゃがみ込んでそっと中指を彩音の性器へ触れて、何度も唾で指を濡らしながら少しずつ膣内へめりこませてゆく。

『くちゅ、くちゅ、ズブブ！』

「あー、ううううあああああ～」

口を大きく歪ませて目をパチパチしながら陰部の痛みに耐える彩音。

「ぐちゅ、ぐちゅ、クチュクチュクチュ！！」

「ふふふ。彩音ちゃんのオマンコ僕の指を締め付けてきてるよお？
もしかして児童のくせに感じてる？　気持ち良いのかなぁ？　くふふふふふ♪」

散々小さな９歳児の膣内を掻き回した後、肛門にも左手の人差し指をゆっくり挿入していく努。

「後ろの穴もウンチ漏らしてないから検査してあげるからねぇ？　ほら」

『ツプ！……ズボボボボッ！！』

「あうっ！？　うおおおおうっ！！」

肛門の痛みに思わず大声を出してしまう彩音だったが、慌ててキスをして口を塞ぐ。

『ぶちゅ！』

「んんんうあうあう～」

女子児童の下半身を散々指で犯し、口までもディープキスで犯してしまう宮崎努。

抜いた指は匂いをかいでから舐め回す変態男であった。

「先月退園していった女子児童より反応がいいから楽しかったが、また本日可愛い女の子が二人も入所したんだよ。９歳の君より３つ

上の１２歳で、莉央ちゃんと唯香ちゃんってゆうんだ。今日からはその子たちを可愛がることにしたからね。今までありがとう彩音ちゃん♡　処女膜はとっくに僕がぶち抜いてあげてるからね♪　うふふふふ♡」

「うう～あああ～」

「んん、やっぱり君も可愛いなぁ！　これからも莉央ちゃんと交互にマンコ検査してあげるよやっぱ」

散々掻き回した膣と肛門についた便と小便を拭き取ると、パンツを履かせて部屋を出る。

隣の部屋ではこの家畜男、宮崎と内緒で付き合っている相手、笹山夏妃が６歳の男子児童である安倍颯斗(あべはやと)の部屋へ入る。

「颯斗くん！　今日もお漏らししてないから検査しよーね！」

「あうあう」

宮崎と同じく防犯カメラの死角になるよう工夫して、そっと颯斗のズボンとパンツを脱がせる夏妃。

念入りに石鹸で泡を立てて指で皮カムリの小さなペニスを洗う。

「オシッコ漏らしちゃってるからきれいにしよーねぇ♡」

「あうう〜」
ぼうっと立ち尽くす６歳男子児童のペニスを咥え込む夏妃。
舌を使って猛烈な勢いで舐め回す。
『ペチャペチャグチュグチュクチュチュチュチュチュチュ！！』
「んあおおおおおっ！！」
颯斗は毎日のこととはいえ、くすぐったさと痛みで声をあげてしまう。
そのまま人差し指を肛門へ捻じ込み、直腸を激しく掻き回し始めた。
ペニスの皮の内側亀頭部に舌が当たる激痛と、肛門や直腸の痛みに思わず泣き出してしまう颯斗だったが、サッと口を塞がれて更に陵辱は続けられる。
人差し指に続き、中指まで捩じ込んで肛門拡張の調教を、知的障害児童へ敢行する笹山夏妃であった。
児童に猥褻行為をする興奮から、陰部をびっしょりと濡らした夏妃は、決まって休日に宮崎努とホテルでセックスをするのが定番となっていた。
「あ、笹山さん！　また颯斗くん泣いちゃってますけど何かあった

のですか？」

「あはは！　いつものことですよ。私のお漏らし検査で泣いちゃうんです。宮崎さんの担当の彩音ちゃんも太ももに血痕がついてますよ？　どこを怪我しちゃってるのですかねぇ？　あはははは！」

「こりゃ参りましたね！　うふふ！　ふははははー！」

そのままリハビリルームで他の児童や職員たちとともに笑顔で歩行や体操を指導するのであった。

彩音と颯斗の二人だけは天井を見上げながら必死で股間を押さえて呻き声をあげていた……。

障害者への愚行（前編）（後書き）

二組目の被害者となってしまっている９歳の女子児童彩音と、６歳の男子児童颯斗。

次の鬼畜カップル職員のターゲットはついに……。

莉央と唯香と永遠の三人へ、魔の手が迫ろうとしていた。

障害者への愚行（中編）（前書き）

言いづらい気持ちを押し切って宮崎努と笹山夏妃に対し、とうとうお願いとゆう形で愚行を止めるよう踏み切った副所長であった。
若き二人の鬼畜職員はどう動くのか……。

「宮崎くん、とてもご機嫌ね？　何かいいことあった？」

「え？　あ、あはは！　別にいいことなんてないですけど……今日から入所してきた、確か莉央ちゃんっていう六年生の女の子と、唯香ちゃんって子と……永遠くんっていう男の子……三人同時に同じ交通事故で脳に障害負ったみたいだけど……とっても可愛い顔してるなと思いましたね」

「ああ。あの子たちね。確かに……あの髪の長い女の子の方は何か見覚えあるような……テレビかなんかで見たことがあるような……」

「フフフ！　あれだけ美形ならアイドルとか女優に似てることもあるでしょうそりゃ。他人の空似ですよ。口なんか斜めに開けっぱなしでヨダレたくさん垂らしてるアイドルなんていませんからね。でも原型は無茶苦茶可愛いかったですよ」

「小学生の女の子にそれだけ可愛いだの美形だの……もしかして危ないほどロリコンなんじゃないの宮崎くん？」

副所長のいう言葉が図星だけに、かなり狼狽してあたふたと手帳やボールペンを床に落としてしまう宮崎努であった。

その後職員の宮崎努と笹山夏妃は、所長の一人娘で副所長の中山里美に面会室へ呼ばれ、数分ほど話し込むことになる。

「あのね、今日あなたたちをここに呼んだのは一つお願いがあって……」

神妙な面持ちで俯いたまま切り出す副所長の里美。

「どうしたのですか急にあらたまって……」

「私たちにできることなら喜んで協力させて頂きます」

宮崎と笹山の二人は胸を張ってそう答えた。

「言いにくいんだけど……この施設にはかなり怪しい黒い霧が立ちこめてるの」

「え？　そ、それはどうゆう……」

宮崎も少し表情を曇らせる。

「前に退所した親御様から性器や肛門に擦り傷や裂傷があったと……今あなたたちの担当の二人の児童もたまに股間を押さえて痛そうにしている時がしばしば見受けられます」

宮崎と笹山の二人は思わずお互いの顔を見合わせる。

「え？　はい？　そ、それはつまり僕と笹山さんが児童たちに性的な虐待とかしてると……疑われているとゆうことでしょうか？」

「いえ！　決して疑っている訳ではありませんが……それをした職員が仮に本当に当施設において実在したとして……名乗り出てとお願いした所で、名乗り出る訳もないと思っています。だから……」

いきなり頭を下げて半泣きになりながら話し始めた。

「もし虐待とかを行っているのなら……やめて欲しい！　そういった愚行を行っている職員を知っているのなら、誰なのか教えて欲しい！　お願い！　お願いします！」

「え？　ちょ、ちょっとまっ……そ、そんなこと僕らがするはずないし……してる人も知りませんって！　ねぇ笹山さん！」

「あ、当たり前ですよ副所長！　私たちはあの子たちを本気で大切に思ってますから！」

しばらく俯いたまま黙っている里美だったが、ゆっくり顔をあげて呟くように話す。

「姉が……所長がだいたいの犯人の目安をつけてるみたいなの……

私には詳しく教えてくれなかったけど……何か解決の糸口を掴んでいるの知れません。だから……今のうちに止めさせないと、この施設は閉鎖に追い込まれる可能性もあります。大ニュースになって、みんながこの先の人生でも恥ずかしい思いをすることにもなりかねません」

「いい加減にして下さい！　今日のところはもう僕たちは帰らせて頂きます！　交代の職員も来たみたいですし……」

宮崎と笹山が振り向くと、夜勤の職員が廊下を歩くのがドアのすりガラス越しに確認できた。

そのまま無口で着替えそそくさと施設を後にする二人。

「ムカつくからちょっと飲みに行こう」

「確かに当たってるけど……なんか私たちを疑ってると思ったら腹立つわねホント……」

そのまま居酒屋で夜中まで飲み、代行を呼んでホテルへ移動する二人。

「あん、あん！　気持ちいいわ努！」

「はぁ、はぁ、はぁ、僕もだよ夏妃！」

二人は正常位で激しく抱き合った。

「バックもしていい？」

「うん。激しく突いてイカせて！　今日は颯斗くんのオチンチン舐めまくってやったらアソコ濡れまくっちゃって……早くイキたかったのよ」

「ふふふ！　児童のチンポしゃぶりながら濡らすなんて……君もSだなぁ！　ハハハハ！」

「お尻の穴も指突っ込んでグリグリしてやったわ。顔真っ赤にしてウーウー唸ってたからあの子も少しは気持ちよかったんじゃないかな？　あはは！　早くバックで挿れてイカせて……努、愛してるわ」

「ああ。僕も夏妃が大好きだ！　そう言えば僕が指マンした子も涎垂らして唸ってたから少しは感じてたかもな！　どうせセックスもすることなく人生終わっちゃう奴らなんだから……僕たちがたまに気持ちよくしてやってもバチは当たらないよな？　逆に感謝して欲しいくらいだよ！　へへへへ♪　明日は新人の知的障害小学生たちをグチャグチャに犯してやろーぜ」

「あはは！　なによグチャグチャに犯すって？……あはははは！まぁお互い指で犯すだけ……だけどね♡」

『ズチュ！！』

「あんっ！！　努のアソコ、お、おっきい……」

そのままバックでも激しくセックスし、疲れ果てて抱き合ったまま眠り、ホテルで朝を迎えるようになる宮崎努と笹山夏紀のカップルであった。

そしてついにその日はやってきた……。

色々検査をするとゆう名目で、莉央は宮崎努が個室へ連れて行き、唯香と永遠は笹山夏妃が個室へ連れて行く。

莉央の可愛さに惚れ込んだ宮崎が、笹山へ二人を押し付けた結果である。

本来なら虐待の容疑がかかった時点で、莉央たちの担当に宮崎と笹山が当たることはなかったのであるが、中山所長から警察への依頼により、囮捜査となったがため、あえて当てがわれたものであった。

警察のトップはこの度の施設での愚行による情状酌量の余地は無し、との判断。

よって、一般の人道的な逮捕には踏み切らず、特殊任務省へ逮捕、監禁、非人道的な拷問処刑を依頼してきたのである。

まさか施設所長の依頼が、警察や特殊任務省にまで通っているとは全く思ってもいない宮崎と笹山であった。

特殊任務省の存在自体、一般人は知らない訳であるが……。

ゆっくり個室のドアを閉めると丁寧に内側から鍵をかける宮崎努。

「菅野莉央ちゃんだったね？　キミはほんと可愛い顔してるなぁ」

一瞬演技がバレてるかと肝を冷やす莉央だったが、直後の行動でとりあえず安心できた。

さっと莉央を抱き抱えると、ベットの上へ仰向けに寝かせる。

「当施設では小便や大便を何時頃に漏らしちゃうのか……小便だけじゃなく大便も漏らしちゃう子なのか……毎回毎回検査しせてもらってるからねぇ莉央ちゃん」

「あああー、うーう～」

「うんうん。そんなこと言っても分かんないよなぁ？　脳障害おこしちゃってるんだから……だから恥ずかしくもなんともないからねー？　グフフ♪」

見るからに嫌らしい笑みを浮かべた瞬間、莉央のジャージのズボンへ手をかける。

「あうう、ううう～」

とぼけながら口を開けたり閉じたらする莉央。

涎を垂らすことも忘れない用心さであった。
先の被害者のことを思えば、ここまで来てバレてしまって、犯行を未遂で終わらすわけにはいかなかったのである。

『ズルルル！』

顔を少し赤く染めながら莉央のズボンを脱がして、純白のパンツをしげしげと眺める宮崎努。

「や、やっぱり小学生は純白に限る！　ぐへへへへ♪　可愛いなぁもう……」

陰部を全開に勃起させながら今度はパンツに手をかけた。
引き続き涎を垂らしながら少し大きい声で抵抗を見せてみる莉央。

「おおおううっ！！　あーうううううっ！！」

「げへへっ！？　バカになっちゃってるくせにパンツは恥ずかしいのっ！？　そんなわけねーよなぁ？　一生処女で終わる運命の可哀想な女子児童のオマンコ……僕が突き破ってあげようって言ってるの！　アハハハハ！！」

『スルスルスルスル……ズルリッ！！』

ついに足首まで莉央のパンツを下ろすと、そっと足首からも外し、そっと顔へ持ってきて匂いを嗅いだ。

「くんくん！　うーん！！　小学生独特のしょんべん臭い香りだぁ～！！　んんん最高っ♡」

「あうあうあううううっ！　うーあーうーあー！」

股を閉じて無意識の抵抗を見せる莉央だったが、両手で全開に股間を広げる宮崎。

「ほらあっ！　オマンコ丸見えだよおっ？　綺麗なピンク色した小陰唇がお花のように開いちゃったよぉ～？　ゲへへへへへっ♡」

かなり気持ち悪い内心を抑えて、まだ演技と我慢を続ける莉央だった。

――――その時、この愚行と同時進行で、別室では堀越唯香と菅野永遠が同じように施設のジャージズボンを大人に脱がされていた。

笹山夏妃は、二人を間隔を開けたベッドに寝かせて、その中央に自分が入り、左を向けば永遠、右を向けば唯香といったように、どちらも簡単に責められる配置に二つのベッドを設定していた。

先に永遠、次に唯香のズボンを脱がした後、悦びで興奮しながら徐々に陰部を濡らしてゆく夏妃だった。

「二人も同時に検査するなんて初めてなの私！とりあえず先に女の子検査しちゃうからねー！永遠くんは待っててねー？」

美味しいものを最後に食べるタイプの夏妃は、先に同性の唯香のパンツに手をかける。

「女の子のマンコになんて興味ないけど……一応見させてもらうか……唯香ちゃん？　汚いオマンコ、ネーサンに見せてねー？　ほらあっ♡」

『ズルリ！！』

一気に足首までパンツを下ろすと、指で絡め取って足元に投げ捨てる。

「わっ！　小学生のマンコのクセにワレメでかっ！！」

小さな子供は、意外と長いワレメだとゆうことを子供もいないために全く知らなかった夏妃は、急に興味を持ってじっくり眺め始める。

「うーうー！！　あーあー！！」

なんかムカついてきた唯香は少し力を込めた唸り声をあげてしまう。

性器が大きいだの汚いマンコだのと言われた事で少し感情的に声を出してしまったのである。

「んん？　今の唸り声……何か私に怒ってるの？　頭イかれたガキのくせに？」

『ギュッ！……ばっくん！』

「ひあっ！？」

いきなり大陰唇に親指乗せて、左右に全開に広げられた為、思わず普通の声で叫んでしまう唯香だった。

「え？……今普通に叫んだ？」

「あうあうあううっ！うーあーうーあー……うはは」

「……気のせいか。さぁガキのマンコの中身、オネーサンに見せてねぇ？うふふ♡」

開いたら閉じたらしながら膣内を舐め回すように観察する夏妃に、我慢の限界が近付く唯香だったが、ここで永遠が救いの手を差し伸べる。

「うわーん！うわーん！うううあおおおおううううっ！！」

いきなり叫びながら左右の手足をバタバタして暴れ始めたのであった。

「おおどうしたどうした？　可愛い顔したボクちゃん？　唯香ちゃんばっかり相手にするからヤキモチ妬いちゃったのかなぁ？」

「うーうー」

「そっかそっか！　じゃあ唯香ちゃんのマンコの中も観察できたし、キミのオチンチン観てあげよっか？　ねぇ♡」

唯香の性器を閉じると、回れ右して今度は永遠のパンツに手をかける。

「可愛い顔した男の子だねーキミは♡　オネーサンにじっくりオチンチン診せてねー♪」

『ズルズル……ズルリ！』

ゆっくり、そして最後の方一気に足首まで脱がす。
パンツが擦れた反動で永遠のペニスが上下に激しく揺れる。

『ぷるるるるんっ！！』

「やだ！　アッハハハハハッ！！……そんなに激しく揺らさないでよ笑えちゃうからぁ！　あははははは！！

男にはSっ気のある永遠も、最近は女性に責められること続きで、対女性に対しては完全なるMになりつつあった為、やってはならない事をやらかしてしまうのであった。

『ムクムクムクムク……』

「え？」

なんと！　永遠のペニスは全開に勃起した！

横目でそれを見ていた唯香は咄嗟に声をあげてしまう。

「なっ！？　こらっ！！」

「ええっ！？」

知的障害児童のフル勃起に驚いた笹山夏妃だったが、更に隣のベットで唯香が叫んだので、再度ビックリして唯香の方を振り向く。

「こらこらカラカラ〜。うっほっほぉ〜」

白目を剥いて舌を突き出しながら歌を歌うように誤魔化す唯香。まだまだ先の犯行までさせないと、夏妃を拷問処刑には出来ないことを知っていたが故に、必死で誤魔化そうとしていた。

「き、気のせいか。今こらって怒鳴った気がしたんだけど……」

「あーうー！うーはー！」

永遠の方も必死で平常を装うことに専念するが、イキリ勃ったペニスは一向に縮むことはなかった。

「へえ〜。知的障害者でも勃起するんだぁ〜！　身体障害者の場合なら、自分で自慰行為できないけど頭は働くから性欲自体はあるのよね。だから手でイカせてあげるサービスを行ってる……確かホワイトハンズとかゆう会社は知ってたけど……まさか知的障害者でも勃起しちゃうとは……」

そのままそっと小学生児童にしてはビッグサイズのイチモツを握

り込むと、ゆっくり上下にシゴキ始めた。

「ほら、ついでに射精してみなさいよ？」

『シコシコシコシコ……』

「ううううあぁっ！？　うおおおううううっ！！」

唯香はとんでもない展開に、更に冷や汗をかきながら夏妃による手コキを傍観するしかなかった。

「ほら、男前くん、早く出して♡　あはははは！」

「うううううっ！！」

『ドピュッ！！　ドピュピュピュピュピュウッ！！』

夥しい量の精液を撒き散らかす永遠に、唯香は覚悟を決める。

『ば、バレちゃったよコレは……知的障害者が射精だなんて……ど、どうしたらいいの……莉央ちゃん、助けて』

「あはは！　次は私の口の中で射精させてあげるわ♡　パクッ！ペチャペチャペチャペチャ……ぺろぺろぺろ……」

『え？　まさかバレてない？この女ホント馬鹿なの？』

唯香は全く演技を疑わない馬鹿な女に安心して、少し力を抜いた。

――――再び宮崎努の莉央の部屋。

莉央のパンツの匂いを嗅ぎながらズボンとパンツを下ろし、センズリを始める宮崎。

『この変態男め！　早く暴れたいから早くすることしなさいよ！それにちょっと寒いんだけどこの部屋……』

センズリする鬼畜職員を見ながら、心の中で催促する莉央だった。大量の精液を床に振り撒いた後、指に付着した精液を莉央の口の中に突っ込んでくる。

「おごっ!?　うぐうううんっ!!」

「ほら、僕の精液は栄養タップリだよ？　ぐへへへ」

「ごくんっ！　おえええっ!!　おえええっ!!」

「おやおや、飲み込んだショックでむせちゃったかい？　ごめんね

莉央ちゃん♡」
そう言いながら人差し指を唾でタップリ濡らし始めると、莉央の下半身へ近付ける。
「こんな可愛い子が障害者になっちゃうなんて……ほんと可哀想だよね。でも僕が気持ちよくさせてあげるから……六年生ならオナニーしてる子もいる年齢だからイクことも可能なんだよぉ？　ぐへへへへ」
「ズブ！……ずぼぼ！」
「んあうっ！！　うおおおううつ！！」
思わず痛みで叫んでしまう莉央だったが演技は忘れていなかった。一つの違和感を除いては……。
『グリグリ！　ズボボボ！　グリングリン！』
「んあおおっ！　あうあううっ！！」
「グハハハ！　莉央ちゃんは引き締まった綺麗なアナルだねぇ♡」
『先そっちいくか？　このクソど変態男め！　早くマンコやってくれないと拷問処刑できないじゃん！　ちっ！』

肛門の痛みに耐えながらも、思っている穴と別の方に来たことに呆れながらも焦りと怒りが込み上げる莉央だった。

散々莉央の肛門や直腸を掻き回し終えると、その指を舐め回して目を閉じる宮崎。

「ちゅぱちゅぱ！……う～ん。女子児童の肛門臭、味までも最高だな！」

そう言いながら口を開けて唸る莉央へ強制的にディープキスを敢行してきた。

『んううう～。このオッサン！　絶対あたしが拷問処刑担当してやるう～。んんんっ！！　臭い！！　早く止めてえぇっ！！』

心の中で宮崎努の息の臭さに苦痛の悲鳴をあげる莉央だった。

「次はとうとうオマンコ検査だよ！　お、ま、ん、こ検査♡膣の中身の触診だよぉっ？　ぐへへへへっ！！」

「ううう～。あうあうう～」

「そうか、早く指突っ込んで欲しいんだね？　分かった。じゃあいくよ莉央ちゃん？　それぇっ♪」

再び指を唾で湿らせた後、そっと莉央の性器へ中指を滑らせてきた。

『ツプッ！』

「んあんあっ、あうあうあうう～」

「そんなに頬を赤くしちゃってぇ。気持ちいいんだね僕の指が？もっと深く深く突っ込んで処女膜も奪ってあげちゃうからね～♡ぐはへへへっ！」

『グシャッ！！』

「え！？」

その瞬間、莉央の拳が宮崎努の顔面に正面から突き刺さる。鼻の骨は折れ、前歯も二本吹っ飛んだ。

『ごぽっ！　ドクドクドクドク』

吹き出す鼻血を押さえるために、慌てて莉央の膣から指を引き抜き、両手で顔を押さえる。

「え？　ん？　あら？」

いまだに何が起こったのか現実が理解できない宮崎努は、折れた前歯にも気づかないまま、勃起したまま、呆然と立ち尽くしていた。

「宮崎努！　やっぱりお前だったのね犯人は」

「え？　あら？　莉央ちゃん？　ち、知的障害だった……よ、ね？」

その質問には応えずにベッドから降りてとりあえずパンツと施設からの支給品であるジャージのズボンを履く。

「息は臭いし汚いセーエキ人の口の中に突っ込んでくるし……アソコだけのつもりがお尻まで指突っ込まれるし……」

「このガキ！　まともじゃないか！？　ぼ、僕をよくも騙したな！？」

「どの口がそんなこと言ってんのよ。一つ言っておいてあげる。あなたはあたしたち拷問処刑人によって、無人島で処刑されちゃう運命だから。あと、あなたの彼女の笹山夏妃もね」

「な、なんだと！？　わ、笑わせるな！　そんな漫画みたいなことが今の世の中で出来るはずが……」

『ブシュンッ！……バコォンッ！！』

「ほげえっ！？」

白いパンツを覗かせながら、莉央の強烈な回し蹴りが左の頬を襲った。

回転しながら吹っ飛ぶ宮崎努。

「痛たたたたたっ！！　な、なんだコイツ！？」

「なんだコイツじゃないわよ。あたしにこのまま大人しくついてくるか、タイマン張って万が一勝てれば逃亡可能、を選ぶか早く決めなさいよ！」

莉央の言葉の意味を理解するのに数秒かかったが、ようやく脳内を整理した宮崎は当然ながら莉央に襲いかかる。

「いくらパンチ力やキック力強かろうが所詮小学生のガキなんだよおおっ！！　おらあああっ！！」

『ブシュンッ！……ドコオッ！！』

「あらあああっ！！」

かつてのマクドナルドのＣＭに出ていたドナルドみたいにひょうきんな奇声を上げて今度は反対方向に吹っ飛ぶ。

「今の回し蹴りで奥歯もイッたわね。もう下の歯くらいしかまともに残ってないか……じゃあ戦闘意欲を削ぐためにトコトンいかせてもらうわよ？」

「ひっ！　ひいいいっ！　やめてええええっ！！」

『ドカッ！　バキッ！　グシャッ！　パンパンパンパンッ！！』

「し、死ぬぅ……痛いい……ご、ごめんなさい、お嬢ちゃんに……ついて行くから……もう許して」

『ガクッ』

そう言いながら顔面が原型を留めないほど殴られまくり、最後の往復ビンタで頬の骨まで折れてしまった宮崎は、意識を失ってしまうのであった。

そのまま莉央は、笹山夏妃の部屋へ向かう。

あらかじめ二人の愚行がどの部屋で行われるかは、所長から教えてもらっていたのである。

――宮崎努の運命を知る由もない笠山夏妃の部屋。

「ほらほら、イキリたったチンポを唯香のマンコに挿れるんだよ！

ほらあっ！」

『ズッ、ズチュ！　ブチュウッ！！』

「痛っ！？　やだあああ！！」

「ああっ！？　は、挿っちゃったあ！？　ご、ごめんなさい唯香様っ！！」

永遠を抱き抱えて仰向けに寝かされている唯香の上へ乗せて、ペニスを握りしめながら唯香の性器へ無理矢理導く夏妃。
タップリとペペローションをペニスに塗られていたこともあり、ついに根元まで永遠のペニスが挿入されてしまった。

しかし生での膣へのペニス挿入とゆう、そのショックの威力は、唯香と永遠に演技を続けることは、もはや不可能とさせるに相応しいレベルであった。

ついに限界を超えて叫んでしまう唯香。
それに釣られる大失態を犯した永遠も……であった。

「え！？　今なんか喋った！？　お、おいお前たち！？」

『ガチャッ！！』

「はっ！？　だ、誰！？　お、お前は！！」

いきなり言葉を喋った唯香と永遠に驚き、更にいきなり乱入してきた莉央にも驚愕し、訳のわからないショックに陥った夏妃はその場に固まってしまう。

「り、莉央ちゃん！　わーんわーん！」

「ごめんなさい莉央様っ！　ぼ、僕の意思じゃないんですこれはっ……」

『ドピュッ！！　ドクドクッ！！』

唯香が泣き出した瞬間、膣がキュッと締め付けられた為、我慢していた永遠だったがついに射精までしてしまう。

しかも当然だが中出しだった……。

「きゃっ！？　ば、バカァッ！！」

『スパァンッ！！』

「ひぶううっ！？」

強烈な唯香のビンタで鼻の骨を折った永遠は、凄まじい勢いで鼻血を噴き出させた。

慌ててペニスを抜いてベッドから飛び降りるもまだまだ精液は尿道口から飛び出している。

「あちゃあ……少し遅かったかな。ごめんなさい唯香ちゃん……」

「わーん！　莉央ちゃんんっ！　な、中出しなんて信じられないっ！　好きでもない奴に……気持ち悪いよおおっ！！　わーんわーん！」

「え？　怖かったじゃくって？　そっち？　そ、そんなに永遠の中出しが嫌だったのね……」

永遠は永遠で唯香の反応に本気でショックを受けたらしく、ついにあれだけイキリ勃っていたペニスも、こじんまりと縮まってしまっている。

「さてと……笹山夏妃！　あなたはあたしたちに無人島にて拷問を受けた後、処刑されちゃいます。今ここでタイマン張ってあたしに勝てば……生き残れる可能性はあるけど。どうする？」

「な、何を言ってるのか意味が分からない……あ、あなたたちって知的障害者じゃなかったの？」

莉央と永遠の見ている前で、唯香による本気の殴る蹴るが展開された……。

「こ、この子も結構強かったのよね本気出すと……」

「そ、そうですよね……ぼ、僕も鼻の骨折られちゃったですから……」

莉央と同じく原型を留めないほど顔面をタコ殴りにした唯香は、意識を失っている夏妃の顔面へ足の裏を何度も何度も擦り付けるのであった。

「お前のせいで好きでもない男に挿入されて……中出しされて……お前の処刑は絶対私がしてやるからね？」

莉央は、どこかで聞いた唯香のセリフを聞きながら、改めて自分に似てる堀越唯香の存在を、自分自身の中で大きくしてゆくのであった。

障害者への愚行（中編）（後書き）

ついに現行犯で拘束することに成功する莉央たち三人。
小林に連絡をとり、とりあえず残酷処刑島までの船が出る〇〇埠頭倉庫へ連行した。
未だ現実を受け入れられない宮崎努と笹山夏妃だったが、残酷な運命の時は、刻一刻と迫るのであった。

障害者への愚行（後編）（前書き）

施設所長である中山久子に対し、今回の真相を求める長女であり副所長の里美。
一筋縄ではいかない国家の闇の世界に、一般人の二人が気づくことはなかった。

「お母さん……本当のことを話してください」

「施設内では所長と呼ぶように言ってたはずよ？」

「すみません所長……あの二人が怪しいことは私自身も気付いてはおりました。ですので個室に呼び出して直接話をして、もし愚かな行いをしているのなら止めて欲しい、とまでお願いしたのです」

「……今連行されていったあの二人は……警察は私にも詳しくは話してくれませんでしたが……宮崎と笹山の二人は、当日より施設から行方不明になったことにしてくれと。多分そのまま拘束、逮捕されるのではないかと思っています」

「そうですか……夕方か明日くらいには大ニュースになっちゃいますね」

「ええ。この施設も各所から叩かれそうです。しばらく辛い状況でしょうが踏ん張って乗り越えていきましょう」

――夜七時、〇〇埠頭倉庫。

「さてと……とりあえず早朝四時頃に島への渡し船が来るわけだけど……」

莉央は両手を腰に当てて少し屈めるようにしてグッタリ座り込んでいる宮崎努と笹山夏妃を見下ろす。

「おーい！　起きてる？」

「うう……こ、ここは？」

「んんん……」

莉央の問いかけに、無事意識を取り戻した宮崎努と笹山夏妃が目をこすりながら口を開く。

「あのね、とりあえず朝の四時までここの倉庫で殴る蹴るのみの拷問を受けてもらうから」

「そ、そんな！　こんなことが許されると思ってるのかクソガキ！」

「そうよ！　け、警察呼ぶわよ！？」

「両手に手錠嵌められたその状態でどうやって警察呼ぶつもり？　それに……一言だけ言わせて貰えば、その警察からあたしらの管轄にお前たちの処罰を託されてんだけど……」

「な、何言ってるんだこのクソガキ！？」

夏妃も莉央を睨みつけながら続ける。

「はぁ？　ホント何言ってるの！？　警察に託された？　良い加減なこと言ってんじゃないわよ！！……ん？　あなたどこかで……あ！！　真絆ガールズの菅野莉央じゃないの！？」

知的障害者に扮する演技の終わった素顔を目の当たりにして、ようやく莉央の正体に気付く笹山夏妃であった。

「ん？　そ、そう言えばテレビで見たことあるような……どうしてアイドルの女の子がこんな酷いことやってる！？　僕たちを施設で騙したりもしたよな！？」

「騙したって……人聞きの悪いこと言わないでくれる？　犯罪者のくせに」

莉央は少しムッとしながら親指と薬指で指を鳴らすと、シャッターが音を立ててゆっくりと開き始める。

倉庫内から二人の影が現れた。

「これはこれは若いカップルですわねぇ」

「美男美女なのに勿体ねー！　あれ？　もう既に顔面少し腫れちゃってるみたいやけど……ウチらがボッコボコに変形させたるから安

心しなよ♪」

ピンク色と水色の髪の色をしたゴスロリ姉妹、沖野夏帆と沖野秋帆がゆっくり歩み寄ってくる。

「夏帆さん、秋帆さん、こんばんは。今回の使命はこの二人の全身を……打撃系での拷問のみとなります。深く傷付けない程度の性的な責めは認めます」

ゴスロリ姉妹の表情が変わった。

「おほほ！　打撃だけでは面白くないと少々不満に思っていたところでしたの。良かったですわ♡」

「そうだなアネキ！　後も前もウチらが散々掻き回してやんぜ♡アハハハハ♪」

「それでは朝までよろしくお願いしますね」

菅野莉央はゴスロリ姉妹に挨拶すると、倉庫の2階にある休憩所へ移動。
堀越唯香と菅野永遠は今回の処刑人から外され、すでに帰宅させられていたため、明日の残酷処刑島での拷問処刑に備えて一人で眠りにつくことにした。

「唯香ちゃん、永遠……なぜか今回外されちゃってごめんなさい……藤堂長官何考えてんだろ？　私情をはさむ拷問はダメってことかな？　じゃああたしもダメなはず……あ！？　あたしの担当は男じゃなくて女の方にされてた！　そ、そうゆうことか結局……仕方ない。美香ちゃんと明日香ちゃんとあたし。久しぶりの六年生トリオで頑張るか」

簡易シャワーを浴びながら独り言を続ける莉央。
下でのゴスロリ姉妹の拷問に興味を持ちながらも、妙に疲れた一日のせいで眠気に勝てず……そのまま眠りに落ちるのであった。

「どうされました？　男のくせにそんなものかしら？」

必死でゴスロリ姉妹、姉の夏帆に殴りかかる宮崎努であったが、ヒラリヒラリと躱されて全く殴れない。
その隣では笹山夏妃も秋帆に対して同じ目に遭っていた。

「はぁ、はぁ、くそう！こんなお嬢様みたいなガキをぶちのめせないなんて……はぁ、はぁ」

「ほ、ほんと……はぁ、はぁ、なんてすばしっこさなのコイツら……派手な頭のカラー見てるだけでムカつくのになかなか殴れないわ」

一方的に攻撃しながらも好き勝手なことを言う二人に、少しずつ

感情の高まりを覚えてくるゴスロリ姉妹であった。

「じゃあぼちぼち私たちも反撃させていただきますわねぇ？」

「アハハ！でかい口叩けるのもこれまでってことだな。覚悟しろよお前ら」

全身を殴る蹴るで痣だらけにさせるゴスロリ姉妹。

そのまま金属バットで二人の肘と膝の骨を粉砕した。

激痛に泣き喚く施設職員の鬼畜カップルであったが、尚もゴスロリ姉妹の攻撃は続く。

夏帆は努に、秋帆は夏妃にマウントを取ると、激しいパウンドを繰り返した。

『バキッ！！　ズガッ！！　ドゴォッ！！　グシャッ！！』

「はぎゃっ！ひっ！ぐひっ！うはあっ！」

二人のカップルは殴られる度に悲鳴をあげるが、ゴスロリ姉妹の打ち下ろす拳は勢いを弱めることはなかった。

鼻と頬の骨、前歯は全て粉砕され、ゴボゴボと鼻血を掃き出しな

がら悶え苦しむ努と夏妃。

「さてと……莉央からもらった例の注射……早速試してみようぜアネキ」

「そうですわね……これだけ全身と顔面砕かれたら痛みで性交なんてできませんものね……」

莉央に貰っていた強力な痛み止めの麻酔注射を二人に打つ秋帆。

「確か痛みは麻痺しても性的感度は上がるとかゆう、すごいヤクみたいでしたわよねぇ？　死刑囚専用に国の開発した薬って……ホント凄いですわ。一般人の大怪我した方々の為にも使って差し上げたら良いですのにねぇ」

「副作用が強力で、２４時間以内に身体中の組織が壊死しちまうみたいだぜ？　だからこれからどっちみち死にゆく者にしか使えないとか言ってたわ。だから死刑囚限定使用な訳。便利だけどおっそろしーよなぁ……」

二人の姉妹の会話を聞きながら、本物の死への恐怖が全身を駆け巡り、号泣し始める笹山夏妃。
宮崎努は狂ったように大声で命乞いを続ける。

「お願いだっ！　もう悪いことはしないから許してくれ！助けてくれっ！」

構うことなく仰向けに倒れて叫び続ける男の上に、女をゴスロリ姉妹二人がかりで担いで、覆い被せるように置いた。

顔と足が逆になるよう置いていた訳は……。

「さあ、カップル同士お互いのエッチなトコ舐め合えよ」

妹の秋帆が夏妃のお尻をパンパンと叩きながら催促する。

「いやぁ！……いやあっ！　ゆ、許して……」

「許せるわけないじゃん！ほら、早くチンポ舐めろ」

そう囁きながら、夏妃の肛門へ中指を捩じ込む秋帆。

「ひゃあっ！？やあっ！！やめてっ！！」

お尻をビクビク震わせながら秋帆に肛門を掘られて徐々に陰部を濡らしてゆく夏妃。

更に姉の夏帆が宮崎努の肛門へ人差し指を捩じ込んだ。

『ズボ！！』

「はうっ！？　ひいっ！！」

こちらも麻酔を兼ねた媚薬注射を打ち込まれているため、敏感に反応する。

みるみるうちに夏妃目の前で勃起してゆく努のイチモツであった。

『ズボボボ……グリグリ！　グリングリン！』

執拗にアナルを掻き回すゴスロリ姉妹に屈した二人は、ついにお互いの性器を舐め始める。

「ペチャペチャ……ズズズッ！！」

愛液とカウパー液を音を立てて舐め合う二人を見ながら更に激しく直腸を掻き回すゴスロリ姉妹。

「どうかしら？　人生最後のシックスナインの味は？おほほほほ♡」

「まぁ明日も莉央たちによく似たことされるかも……だけどな。ど

っちみちラスト一回か二回のカップルでいられる最後のエッチには違いねーかな？　アハハハ♪　お！？　女の方グッショグショの大洪水じゃん？　溢さないで全部吸い取れよ男！あはは♡」

『ジュルル……ペチャペチャ、ズルルルル』

大量に噴き出す愛液を必死で吸っては飲み込む宮崎努だったが、ついに我慢の限界を超え、大量に夏妃の口内へ射精してしまうのであった。

『ドピュッ！！　ドクドクドクッ！！』

「ふんぬううっ！？　んんん……ごっくん！！」

「おほほほ。よくお互いのエッチ汁飲み合いできましたわねぇ。お次は……」

低いベッドに二人をうつ伏せに寝かせて、口を合わせてキスをさせる。

膝は床に着くよう四つん這いにさせるための短いベッドであったため、ゴスロリ姉妹の装着した極太ペニスバンドの餌食になる二人。

ディープキスをしながらゴスロリ姉妹にバックで犯される体勢となった。

「ほぉら夏妃さん。オマンコが張り裂けそうになるくらい開いちゃったですわ。気持ちいいでしょう？おほほ！」

『メリメリ！！グチュッ！！……バッコンバッコン！！』

「んぐううっ！！んんんっ！！」

ディープキスをしながらもあまりの膣の痛みに絶叫をあげる夏妃だったが、夏帆は上品な見た目に反して凄まじい速度で腰を前後に振り続ける。

愛液が床や夏帆の膝に飛び散り、小陰唇が裂けて鮮血までも垂れ流れてきた。

一方、妹の秋帆は、当たり前だが後ろの穴しか犯さない。

仕方なく肛門にこれまた極太バイブを装着したペニスバンドを埋め込んでいった。

「ほら！彼女みたいにバックで犯してやるよ！喰らいやがれ♡」

『ズプッ！！……メリメリメリメリ』

「ふんぐうううっ！？」

『バチュウッ！！』

ついに肛門へ根元までぶち込まれた極太バイブ。

突き当たりのS字結腸を突き破る寸前まで突き上げる。

その腸から響く激痛は、そのまま彼女とキスを続けることを許さなかった。

「ぎゃあああああっ！！　いだいいだいいだいいいっ！！　抜いてええええっ！！」

「ダメだな。トコトンけつ穴掘らせてもらっちゃうぜえっ！？　オラオラオラアッ！！」

『バコバコバコバコバコバコバコバコッ！！』

「死ぬっ！！　死ぬううううっ！！」

「どうせお前たちは明日死んじゃうんだわ。性的な快感や痛みも今日、明日で終わりだから。後少し我慢すんだな？アハハハ」

そのまま夏帆にイカされてしまった夏妃は、下半身をビクビク痙攣させて快感の余韻に浸っていた。
一方努な方は肛門から激しく鮮血を噴き出させ、血止めの注射を打たれる羽目になっていた。

「どんだけ汚ねぇ血飛ばしてんだよこら！ほら、血止め薬打ってやっからもう飛ばすなよ！？」

『プスッ！……ぷちゅううううう』

「ひうっ！？　はぁ、はぁ、はぁ」

そのまま二人を放っておいてティータイムに入るゴスロリ姉妹。

階段を降りてくる音に気づき、緊張してしまう。

「莉央さん……もう少しお眠りになられた方が良いのでは？　まだ0時過ぎですわ」

「そ、そうだよ。出船までまた早いから、まだまだ寝れちゃうぜ？」

「ふ、ふぁああああ～」

全開に両手を上に突き上げながら豪快な欠伸をする莉央。

「かなり痛めつけちゃったみたいですね？」

「はい。もう手足の骨は折れて、鼻も頬も……前歯も殆どへし折ってます」

「そうですか。二人はキスを続けてるみたいですね……」

そう言いながらカップルに歩み寄る莉央。

笹山夏妃は下半身を震わせながら夥しい量の愛液を、内股から床についていている膝にまで垂れ流していた。

宮崎努の方は涙を流しながらひたすら夏妃の舌に自分の舌を絡めている。

肛門の痛みでペニスは縮み上がっていた。

大体の状況を理解した莉央はこの辺りで拷問を中止するようにゴスロリ姉妹に伝えた。

「わかりました。では私たちはこれにて帰らせて頂きますね」

「ええっ！？　マジかよぉ？　まだコイツらに強制セックスさせたかったのになぁ」

「それは明日の残酷処刑島でやりますからご安心下さい」

二人を少し強引に納得させ、タクシーで帰宅させると、再び二人のカップルの元へ歩み寄る莉央。

「痛かった？ごめんなさいね」

「ひ、酷い……こんな目に遭うなんて信じられない」

夏妃がつい愚痴をこぼした。

「もういくらお前たちを脅しても逆効果……だよな？こ、この通り。お願いだから僕たちを殺さないで。お、お願いします！許してくださいっ！」

泣きながら小学生の女の子に詫びを入れ、赦しを乞う努。
「障害を持つ児童たちにしてきた行いは決して許されることはないわ。死を持って償いなさい」
「そ、そんな！誰も殺してもいないのに死刑だなんて……お願いだから許してっ！この通りです！」
土下座もできない低い机に拘束された姿のまま泣きを入れ続ける努だった。
莉央は目を細めながら警棒を持って歩みよると、そっと背後に回り込む。
お尻を叩かれると思った努は思わず悲鳴を上げる。
「ひいっ！！」
『つぷ！』
「はうあっ！？」
叩くのではなく、突っ込んできた。
お尻の穴を抉るように回転させせながら直腸奥深くまで差し込んでゆく莉央。

『グリリッ！　ズチュチャチャチャチャチュッ！！』

「ぎゃあっ！？いだいいいいいいっ！！抜いてえええっ！！」

『ズチュズチュズチュズチュズチュ！！』

そのままS字結腸に当たるまで深く突っ込んでは肛門近くまで先端を引き抜き、激しい速度で出し入れを繰り返す。
窄んだら盛り上がったり激しく上下に動かされる肛門括約筋。

「熱いっ！痛いっ！ひぎいいいいいいっ！！」

やがてゆっくり手の動きをとめ、半分くらい警棒を引き抜くと、ダイレクトに前立腺を抉り出した。

「前夜祭よ。とりあえず一回射精させてあげる。あ、もう日が変わってるから前夜祭とは言えないか……まぁ別にいいけど」

『グリッ！！ぐちゅうっ！ぐちゅうっ！』

「あっ！！はうっ！！あはあっ！！」

的確に前立腺を抉る莉央のテクニックに、思わず内股を締め付けて快感を味わう努だった。

「こ、こんな小さな女の子に……ボコボコにされるわ強制的にイカされるわ……一体どうなってるんだ……はううっ！！　あはあっ！！」

莉央による執拗に繰り返される直腸越しの前立腺攻撃。
ついに努は人生最期の日の一回目の射精をしてしまうのであった。

「ほら努！　莉央様、僕射精しちゃいますって言いなさい」

「あはっ！はううっ！り、莉央様、僕射精しちゃいますうううっ！！」

「あはは。いいわよ。アイドルにアナル掘られてイケえっ♡」

「はあうううっ！！」

『ドピュッ！！　ドクドクドクドクッ！！』

ペニスに手を触れないで射精させることに成功した莉央は得意顔で夏妃の顔の横へ立った。

「あなたの彼氏、あたしにお尻の穴掘られて射精しちゃったよ？あなたの位置からは見えなかったでしょ？」

「……な、なんてことを……あなたたちはアイドルのくせにガキのくせに……変態なの！？」

思わず彼氏を陵辱した相手に泣きながら叫んでしまう夏妃だったが、数秒で後悔することになる。

「まだまだあなたにはお仕置きが足りなかったみたいね」

ゴスロリ姉妹とは比にならないほど激しく重たい平手打ちが夏妃のお尻の肉を襲った。

『パンパンパンパン！！　パパパパパパンッ！！』

「ほらブサイク女、莉央様ごめんなさいって言え！」

「ほげえええっ！！　ご、ごめんなさい莉央様あああああっ！！ごめんなさいいいいいっ！！」

『プシャアーーッ！！』

あまりの激痛に大量に小便を撒き散らしてしまう夏妃。

「骨折とか抜歯には麻痺する麻酔打たれてるみたいだけど……それって打撃系には効かないのよね。まぁそれを打たれてるなら明日中には放っておいても死んじゃうんだけど……心配しないで。あたしたちが明日逝かせてあげるから」

「ぐすん、ぐすん、いや、死にたくない。お願いだから許してください莉央様……」

「もう遅いの。ほら！　女もアナルだけでイクことできるって知ってた？」

　そう言いながら、たった今彼氏を犯した警棒を夏妃のアナルへも捩じ込む。

『ツプッ！……ズボボボッ！！』

「ひぎいっ！？　痛いいいいっ！！」

「力を抜いてて。だんだん気持ち良くなってくるから」

　しばらく巨大な警棒の太さに顔を歪めていたが、直腸内のジースポットを何度も抉られる内に、思わず絶頂を迎えてしまう夏妃であった。

「あんっ、あはっ！　イ、イクっ！？　イッちゃううううっ！！やだあああっ！！」

「ほらほらぁ！イケ♡」

『プシャー！　プシャアアアアッ！！』

潮を吹き、大量の愛液を内股に垂れ流しながら全身を硬直させてイッてしまう。
肛門から一気に警棒を引き抜くと、そのまま床に転がし、手ぐしで髪をときながら振り向く莉央。
「じゃあまたね。朝によろしく」
右手を上げて、散々痛めつけて気持ちよくさせた二人を振り向くこともなく二階へ去ってゆくのであった。
「もうちょっと寝られるかな？　ふぁああ～」
二度目の眠りにつく莉央だった。
――午前四時半、残酷処刑島。
去ってゆく船の警備員たちに敬礼する三人。
仰向け状態で簡易ベッドに拘束された宮崎努と笹山夏妃の二人は、人生最期の時を迎えようとしていた。

「お願いします！　許してください！　ほんと反省してますから！」

「えーんえーん！　死にたくないよぉ！」

いまだに死を受け入れ切れない二人は泣きまくり、命乞いを続けている始末であった。

「宮崎努、笹山夏妃。あなたたち二名を本日あたしたち三名が拷問処刑執行させていただきます。お覚悟を」

「私は結城明日香、男のあなたを担当します」

「あたしは富田美香、同じく男の貴様を担当しちゃいまーす！　よろぴくね♡」

「あたしのアソコに指突っ込んだ男なんだから……明日香ちゃん、美香ちゃん、過激によろしく頼むわね」

莉央のセリフを聞いてぼちぼち生還出来る可能性がほぼないことを悟り始めた努。

ここからは命乞いよりも号泣するのみとなる。

「あたしは菅野莉央。もうバレちゃってるかもだけど、あたしたち三人は真絆ガールズとゆうアイドルグループのメンバーなの」

「し、知ってるわ……女ながらにもとっても可愛いから覚えてたの」
「ありがとう。お世辞言ってくれても拷問は許さないから」
「お世辞じゃないわ！　だから許して！　お願いだから生かして帰してくださいいいいっ！！　わーんわーん！！」
溜め息をつきながらチェーンソーを手にしてエンジンをかける莉央。
隣で明日香もエンジンをかける。
『ブイイイーンッ！！　ギュルンギャルンッ！！』
何度かアクセルを吹かして調子を確認する二人。
「四本連続で一気にいくわね？　明日香ちゃん」
「はーい！」
そのまま身動きできない二人の手脚をチェーンソーでぶった斬ってゆく莉央と明日香。
ショック死しないように痛み止めの薬は更に増し打ちしてあるので、殆ど痛みは感じない。

「わあああっ！？　や、やめてくれえええっ！！」

「ひいいいっ！！　お嫁にいけなくなっちゃううううっ！！」

咄嗟に出たとは言え、夏妃のセリフにバカ受けしてしまう莉央たち三人だった。

「あはは！　また嫁に行けるとか本気で思ってたの？」

明日香はメガネを落とすほどバカ受けしている。

「嫁にはいけないけど人生最期の恋人とのセックス……させてあげちゃうわっ♡」

美香はウインクしながら切断された手足を包帯でぐるぐる巻きにしていった。

とりあえず失血死を防ぐためにである。

莉央は最後の一本を切断し終えると、夏妃の元へそっと近づき、媚薬を指にタップリ塗り付け、そのまま夏妃の膣内へ塗りたくった。

『くちゅ！　ぴちゃぴちゃ！　くちゅくちゅ！』

「あんっ!？　あはあっ！！　やめてっ！！　何それっ!？」
「地獄の前に天国を味あわせてあげるわ」
下半身を襲う猛烈な痒み。
ジュクジュクと愛液が溢れだし、下半身をヒクヒクさせながら何かの挿入を求める身体が出来上がる。
男の方にも美香が、ペニスの付け根の会陰部に大量の強制勃起薬を打った。
「ほうら、あたしたちが見てる前で最期に彼女と思いっきりセックスするのよ？　分かった？」
注射器を引き抜くと、ツインテールを揺らしながら睾丸を思いっきり指で弾く美香。
ビクッと仰け反った循環、一気にビンビンにフル勃起してゆくペニス。
四肢切断されたダルマ男とダルマ女は、そのまま男が下側での正常位で性交が出来るように重ねられる。
「そら、大好きな夏妃ちゃんのマンコだよぉ。お邪魔しまーす♡」
美香はイキりたったペニスを握り、そっと上から下ろされてゆく

夏妃の性器へ誘導する。
トロトロと垂れ落ちてくる愛液をペニスにタップリ絡め取りながら、ゆっくりと亀頭部から挿入されてゆく。

『ぐちゅ、ぐちゅちゅ、ぶちゅんっ！！』

ついに根元まで挿入された。

「おうっ！！」

「あはんっ！！」

そのまま少女三人に担がれたまま、上部の位置から激しく上下に動かされ、四肢切断されたまま強制セックスさせられる努と夏妃。

『グッチュグッチュグッチュグッチュ！！』

「やだぁ♡　すっごく卑猥な音たててるぅ〜」

明日香は頬を赤く染めながら出入りする膣口を見つめる。
美香も半分口を開けて興奮しながら凝視していた。

「おうっ！　おうっ！」

「あんっ！　あはあっ！」

『ズッチュズッチュバッコンバッコン！』

静かに見つめていた莉央も口を開いた。

「やっぱ大人のセックスって見応えあるわね」

大きく持ち上げすぎたと思った瞬間、ペニスが膣から抜ける。再び下がる時に位置がズレて肛門へめり込んでしまった。

『ずぽんっ！……ズブッ！！』

「あれえっ？　アナルにしっぽり嵌っちゃったあ♡」

「狙ったわけじゃないのに……ごめんなさい」

美香に続いて明日香も微笑みながら呟く。

「ま、いいいか。とりあえずこのままアナルセックスでイカしちゃおう」

莉央の言うがまま明日香と美香も軽く頷いて更に激しくダルマ女を上下させる。

「うっ！　し、締め付けがっ！？　イ、イッちゃううっ！！」

『ドピュッ！　ピュピュピュピュピュ！』

肛門内へそのまま射精させられてしまう努だった。

「やだあっ！！」

『ブリブリブリブリ〜ッ！！』

「うわあっ！？」

直腸へ中出しした瞬間、大量の便を噴射させる夏妃。

「ごめん、手足切断した後、しれっと女だけ浣腸しといたの忘れてた……」

明日香が額に手を当てて舌を出す。

「あーあ。コイツの人生最期の射精が、アナルな上にウンチ塗れな

んて……何てかわいそ♡　と、とりあえず臭いから流しちゃおうね」

美香が慌てて腹部に溜まった便をバケツの水で流し飛ばした。

「彼氏のアソコや腹部にウンチ漏らすなんて……キッついお仕置きが必要だよね？」

莉央は夏妃の身体を一度下ろして、下半身を洗い流した。
首と両脇と両太ももも付け根辺りにワイヤーをかけて、小型クレーンで吊り上げる。
ダルマ女が普通に立っている縦向きで吊り上げられた。
小型の充電式電動ノコギリを取り出し、電源を入れる。

『ウィィイイインッ！！』

「それ改造してない？」

即明日香が異変に気づく。

「バレた？　小型ながら胴体真っ二つに出来ちゃうくらいバッテリーもパワーアップしてるの。いつものチェーンソーは重たいから」

「四肢切断するときに使いたかったなぁ」

「まぁまぁ。どっちが切りやすいから同じく日に試して見たかったのよ」

「なるほどぉ」

「みんなの分も用意してあるからね。とりあえずクソったれの罰としてパックリいっちゃおっか？」

その真下にはダルマ男の stretched努を仰向けに寝かせる。

ほとんど全開に開かされている股間とお尻しか見えない状態であった。

莉央の手にした小型電動ノコギリの刃が激しく回転しながら女の股間へ迫る。

「さぁ夏妃さん、人生のカウントダウンが始まっちゃったわよ？あなたたちが陵辱した児童たちと同じような小学生の幼いあたしたちに殺害されちゃう気分はどう？」

「やだっ！！　ほんとごめんなさいっ！！　やめてっ！！　そ、そんなので真っ二つなんて残酷すぎるっ！！」

「パックリ中身開いてあげる♡　彼氏のお腹や顔に小陰唇や膣、子宮や肛門、更にハラワタぶち撒けてあげなよ？　ホカホカして温もり感じて喜ばれちゃうわよ？」

莉央は冷たく囁きながら先ずは回転する刃先を背中の筋に当てる。

『ヴィィィィン！！……バリバリバリバリッ！！』

「がぎゃあああああっ！！」

股間を前方へ進む。

「先ずはその汚い肛門からいくよ。それっ！」

『ズババババッ！！』

「ふぎいいいいっ！！」

強力な血止め薬を打たれているせいで、切断面からも新しい切り口からもあまり出血は見られない。

その方が逆に切断面をまともに見られたので莉央たちは余計興奮するのであった。

『ズル！　ズルルル！』

「うわあ！　スッゴ♡　直腸まで真っ二つになって飛び出してきちゃったぁ♡」

「あまり肛門から深くいく前に角度を戻して……はい、会陰部から

ど真ん中のマンコ！」

『ギュイイインッ！！……ズバババババッ！！……ぱっかぁ～！』

「やん！　オマンコ大きく左右に開いちゃったよぉ？　どんどんいくよぉ～♪　膣口の次は……クリトリス！！　それえっ！」

『バリバリッ！！』

「ピギィイイイイッ！！！！」

全身を激しく震わせて絶叫する夏妃だったが、ショック死できないよう痛みは少しだけ抑えられている。
だが肛門や膣、クリトリス切断は、人生で初めて味わう激痛には違いはなかった。

「あ！　クリトリスはギザギザ系の刃で切っちゃうとミンチになっちゃうから原型留めてないわね……ま、別にいいけど。次、膣道から子宮まで一気にイッケえええっ！」

ついに膣や肛門を切り裂いた刃は子宮まで到達し、更にヘソの穴までも切り裂いた。
大腸や小腸がドバドバとはみ出してくるが、落ちることはなく切断面からぶら下がっている。

「切っただけじゃ子宮まで落ちてこないか……じゃあくり抜いてあ

げる」

刃の角度を何度も微調整し、子宮を腹部からくり抜くように抉り、ついに子宮が股間から飛び出してきた。

莉央は一度電動ノコギリを地面に置き、子宮や卵管、卵巣までも引き摺り出し、努の腹の上に乗せていった。

島中に響き渡るほどの絶叫を上げたのち、身体を大きく痙攣させて白目を剥くダルマ女。

「お別れの時が来たみたいね。股間からそのまま首まで切り裂いて……トドメに水平方向へ首を切断！」

真っ二つに開かれた体から唯一まともな頭部が転がり落ちる。

顔はボコボコにされているため一目で笹山夏妃と判断するには無理があるほどであった。

「ひっ！　ひいいいいっ！！」

子宮や卵巣、大腸小腸、夏妃の臓器やハラワタを殆ど胸や腹部に乗せられた宮崎努は、ひたすら震えて泣き続けている。

努の拷問処刑担当の富田美香と結城明日香が、ダルマ男の両サイドに立ち、女の身体から垂れ落ちた臓物等を手で払い除けた。

「どう？女の身体真っ二つに開いたらこんなになってるのよ？ようく見ておきなさいね？」

「自分の彼女で解剖学を学べるなんて凄いことじゃゃん！？あはは！」

明日香に続いて美香も努に語りかける。

「えーと……四肢切断のこの状態から……更に全身の肉を削ぎ落とす凌遅刑を私、明日香と隣の美香ちゃんで執行しますね？生きたまま地獄を味わってもらうから覚悟して下さい」

明日香と美香の二人は、研ぎ澄まされた短刀を持って刀身の横側部分でペンペンと努のお腹を叩く。

「ひっ！？　そ、そんな……どうせ殺されるなら早く殺して……」

「だめ。最低でも１００回は肉を削ぎ落としちゃうからね」

「じゃあ始めるよぉ？　先ずは太もも！　お覚悟を♡」

『ズッ！……ザクザクッ！』

「ひっ！　ギャァアアアア！！」

莉央は彼女の生首を拾い上げ、努の頭部の真横に置き、彼氏の最期を見せつける。

「夏妃！　あなたは股間から全身真っ二つだったけど……彼氏は身体中の肉を削がれるわ。ようく見ててあげるのよ」

十箇所、二十箇所とどんどん肉を削いでゆく内に、激痛のあまり糞尿を同時に漏らす宮崎努。

美香はバケツの水をぶっかけて洗い流すと、元凶であるペニスに狙いをつけた。

先ずは尿道口にナイフを刺し込み、そのまま腹部まで突き刺す。刃側がペニスの下側に向いていたため、尿道を縦向きに真っ二つに切開して刃が飛び出してくる。

「やだエロい♡尿道口ブッ刺したまま尿道パックリ根元まで開いちゃったわ♪　ねぇ明日香ちゃん見て見て！」

「あはは！　ほんとだ！　そのまま根元から切断してあげて」

明日香は哀れに開かれたペニスを見て爆笑している。

縦に切られた後根元から切断すると、今度は陰嚢の皮だけを綺麗に剥ぎ取り、生の睾丸だけ残す芸当を見せる美香。

「やだ美香ちゃんってば！　あははは！　管だけでぶら下がってる生の睾丸なんて……痛々しいったらありゃしないわ」

「そうでしょ？　あはははは！」

そのまま二つの睾丸は真っ二つに切開され、管を切り離された。泡を噴いて全身を痙攣させる努だったが、更に明日香の手が股間に伸びる。

「こっちもお仕置きしなくちゃだよねオッサン？」

肛門の周りにナイフの切先を当てがい、見事に丸くくり抜いてゆく。

『ズズズ！……グリッ！ぐちゅん！』

「ほら、抉り取っちゃったらリングみたいな輪っかのお尻の穴♡」

明日香はくり抜いた肛門を美香に見せて真ん中に指を通したりして遊んでいる。

「あらら。もうウンチもできなくなっちゃったね。肛門くり抜いたらセットでハラワタ抜き取りの刑？」

「もちろん！　さぁいくわよ」

『ぎゅむ！　ズル！　ズルルルルッ！！』

ほぼ全身の肉を削がれ、真っ赤に染まりながらハラワタを引き摺り出されてゆくダルマ男。

「ぴぎぃいいいいっ！！」

『ガクガクガクガク……がくんっ！』

ついに彼女の後を追ってあの世へ旅立つことを許された瞬間であった。

菅野莉央がボコボコに変形しながらももがき苦しんだ死に顔を覗き込み、そっと語りかける。

「おーい！……ついに死んじゃったか……私たちと同じ小学生の岸田彩音ちゃんや安倍颯斗くんにも謝っておいてあげるね？その前の児童たちにも……さようなら」

「明日香ちゃん！もう良いんじゃない？腸って結構長いから疲れるよ？」

必死でハラワタを抜き取る明日香を見ながら美香は苦笑いで止め

に入る。

「はぁ、はぁ、結構長いけどさっき細くなったからもう小腸に変わってるんだけどね……はぁ、はぁ。もういっか。臭いし……やーめた！」

残酷処刑島に新たに二人の遺体が加わった……。

障害者への愚行（後編）（後書き）

「前回に続き、この度も児童に対する性的虐待を職員から受けていたそうですね？」

「なぜ疑いのある職員と分かっていながら二度目も担当にさせたのでしょうか？」

「警察では行方不明と公表していますが宮崎努と笹山夏妃の訪れそうな心当たりは！？」

障害児入所施設の中山久子所長と副所長の里美は、ひたすら頭を下げて報道陣の問いかけに対応する。

「この度は被害に遭われた方々、そのご身内の方々に大変ご迷惑をおかけしました。本当に申し訳ございません」

「犯人は行方不明と発表がありましたが、本当に何も知らないのですか？　こうなることを分かっていて再び児童たちのお世話に当たらせたとゆうことはどう説明されるのですか？」

延々と頭を下げて謝り続ける二人の姿を見ながら施設を後にする菅野莉央。
所長たちが心配で記者会見の様子を見に来たのだった。

「たとえ人を殺めてなくても……立場を利用して障害者にあんな卑怯で鬼畜なことしたんだもん。あたしたちのしたことは間違ってないよね……」

国の決断とは言え、拷問処刑は少しやり過ぎたかな？と、自問自答しながら黄昏に染まる街を一人歩いて帰路につく莉央だった。

横恋慕の罪（前編）（前書き）

とある兄妹の悪巧み……。

被害者の敵討ちは当たり前のようにお仕置きとなって執行されるのであった。

横恋慕の罪（前編）

菅野莉央の奴隷、兼恋人である菅野愛衣が通う黒霧島高等学校。
東条登美子、西条早希、南条奈百合の三人と絆を深めて今日も学校内の悪者を成敗する。
元々は愛衣たちのイジメ対象の相手だった９０キロの巨漢である里中友美恵も仲間に加わり、四天王＋ワンとなっていつも五人で行動を共にしたいる。
三年Ｂ組の午後、最終の６時限目。
担任の先生は教室から追い出され、一人の男子生徒と一年生の女子生徒が教壇に立たされている。
「お、俺は彼女のことを……ほ、本気で愛してしまっただけなんだ……」
「はぁ……だからって一年の妹使ってまで同級生の男の子から彼女奪おうとするだなんて……卑怯すぎるわよ」
「ごめんなさい……言い出しのは私なんです！　私が罰を受けるますからお兄ちゃんは許してあげて……ぐすん、ぐすん」
愛衣たち五人は教壇の正面に横並びに席を構えて裁判員のように兄妹を見据えていた。

――――三日前。

「お兄ちゃん！　今日こそ同じクラスの沙梨さんって人に告っちゃうんだよ！　早くしないと誰かに先越されちゃう！」

「そ、そんなこと言ったって……無茶苦茶恥ずかしいんだぜそれって……」

「とにかくご飯にでも誘っちゃって早く唾だけでも着けとかなきゃ！」

「唾ってお前……なんか汚い表現だなぁ」

「美味しい料理と同じくだから。どんな料理でも他人が唾着けるの見ちゃったら避けちゃうでしょ？　あはは！」

「ははは……そりゃそうだけど。分かった！　勇気を出して食事に誘ってみる」

「頑張れお兄ちゃん！　その意気だ！」

黒霧島高等学校一年C組である、二つ下の妹、地紙梓（じがみあずさ）と冗談を交えながらも笑顔で作戦を練って、明くる日実行に移そうとする三年B組の地紙健太であった。

明くる日の放課後、同じB組の成績優秀、見るからに真面目そうな草食系の宮本正文が、健太の初恋の相手である伊藤沙梨と仲良さそうに会話していた。

数学の難解な問題を宮本に伊藤が教えてもらうため話しかけたのがきっかけである。

忘れ物がないか机の上や下をゴソゴソと物色するフリをしながら二人の会話に必死に聞き耳を立てる地紙健太。

「私、数学苦手だから助かったわ。これからも色々教えてね宮本くん」

「うん。僕で良かったら……学校のすぐ裏の団地が僕の家だから良かったら少し寄っていかない？」

いきなり自宅に招かれた伊藤沙梨は、少し躊躇いを見せながらも両親も在宅中であることも聞いていたので、素直に応じたのであった。

自宅に帰った健太は、妹の梓に半泣きになりながらそのことを伝えると、不貞腐れるように大の字になって横たわる。

「あーあ。宮本なんかに間入られたら俺の出る幕はねーよ。もう諦めるわ」

「……お兄ちゃん」

兄の悲しそうな笑顔にかなり胸が締め付けられる梓だった。

「あ！　そう言えばこの前駅前でその宮本さんってゆう人と会ったじゃん！？」

「あ、ああ。確か先月だっけかな。それがどうしたんだ？」

「私のこと“可愛い”と、言ってたってお兄ちゃん言ってたよね？」

「……まぁ確かに宮本はお前のことタイプとか言ってたけど……ってゆうか同級生に妹と付き合われるなんて想像もしたくねーし。本気で言ったのかどうかも分からないし。もう気にするなよそのことは」

「私が伊藤さんから宮本正文を奪ってやる！　そしたらお兄ちゃん再度アタックかけられる勇気湧くじゃん！？」

慌てて起き上がり、妹を見つめる健太。

「おいおい……そんなことしたらお前……そのまま宮本と付き合っちゃうんじゃないのか？」

「適当に理由つけてエッチとかする前に別れちゃうから平気だよ！」

「……そうゆう芝居打って人を騙すとか……かなり胸が痛むけど……それなら確かに俺が沙梨ちゃんと付き合えるチャンスは巡ってくるかも」

「決まり！　明日放課後にでも校門前で待ち伏せして宮本さんに告っちゃうよ私♪　あとは頑張れよおにーちゃん♡」

――――再び現在の三年Ｂ組教室。

「まぁ宮本正文が……本当にあなたのことがタイプで、しかも告られて大喜びしたのも束の間、実は嘘でした……的なこと言われて登校拒否起こしちゃってるみたいだし……それ相応の罰は受けてもらうわ」

愛衣が腕組みしたまま冷たく語る。
東条登美子も続けた。

「罪悪感を抑えきれず地紙が伊藤沙梨ちゃんに正直に話したから今回のことが公になったんだけど……沙梨ちゃんまでショックを受けて登校拒否……たぶん二人ともこの学校このまま辞めちゃうんじゃない？　友美恵はコイツらどうしたい？」

９０キロの巨漢を誇る里中友美恵はいきなり東条登美子に振られて一瞬戸惑うが、我にかえって自分の意見を述べる。

「兄思いの気持ちは分かるんだけど……宮本がタイプだと知りながら嘘の告白するのは最低だと思う。地紙くんも、いくら妹さんの名案だとしても誰かを傷付けちゃう内容ならきっちり断って実行しなければいいだけの話だと思った。だから……」

菅野愛衣は前髪ぱっつんの黒髪を掻き上げながらそっと立ち上がり、地紙健太の正面に立つ。

「あなたたち兄妹の私刑を執行するわ。クラスのみんなが見てる前で大恥かかせてあげるから覚悟しなさ……」

「愛衣さん！」

愛衣の私刑宣告を遮るように声をあげる人物がいた。
里中友美恵である。

「友美恵……どした？」

愛衣はそっと振り返り友美恵に問いかける。

「あ、あの、今回の件は確かにこの兄妹のしたことは卑劣で残酷なことだけど……健太くんの本気の愛と、梓ちゃんの兄を想う健気な優しさが感じ取れるの……だから私刑執行はせめてクラスのみんなは家に帰してからにしてくれないかな？」

せめて大勢の前での恥辱を回避させてあげようとゆう里中友美恵の優しさであった。

ゆっくり目を閉じてゆっくり開く愛衣。

「みんなはどう思う？」

「それでいいんじゃない？　愛衣さんが認めてくれるなら……」

愛衣の問いかけに即答する西条早希。
登美子も奈百合も静かに頷いて同意を示した。

「そっか。みんながそうゆうなら……とゆうわけで、みんなはもう下校してくれる？」

愛衣の一言で他の生徒は一斉に教科書を鞄にしまい、席を立つ。

とっくに追い払った担任も他の生徒たちもいなくなり、三年Ｂ組には愛衣たち五人と、裁かれようとしている三年と一年の兄妹のみとなった。

「先ずは兄の健太！ズボンとパンツを脱いで下半身だけスッポンポンになりなさい」

「えっ！？　そ、そんな……妹の前でそんなの嫌だ！　勘弁してくれ」

活発で美形の西条早希がそっと歩み寄り、いきなり往復ビンタを喰らわせる。

『パンパンパンパンッ！！』

「ひぐううぅっ！！　痛いいいいいっ！！」

「梓ちゃん！　反省も出来ないし自分の立場ってゆうものも理解できていないバカ兄貴のズボンとパンツを脱がせてくれる？　出来ないならお兄ちゃんのオチンチンをちょん切っちゃうからね？」

「ええっ！？　や、やだそんなの！！　わ、分かりました！　すぐ脱がせますから酷いことしないでください！」

慌てて兄の側へ駆け寄り、ベルトを外しにかかる梓。

「わあっ！？　や、やめろ梓っ！！」

「この人たち本気だよ！？　お願いだから言う通りにして！　一生立ちション出来なくなってもいいのお兄ちゃん！？」

「そ、それは……うう」

半泣きになりながら妹にズボンとパンツを脱がされてゆく健太。

「目を逸らさないでちゃんと見なさい！」

「は、はいっ！」

自身の兄の陰部など見慣れてる兄妹も存在するだろうが、兄が中学生になった後は一度も見たことがなかった。
かなり立派になったイチモツを頬を紅く染めながら凝視する梓だった。

「さぁ地紙健太被告！　お仕置きの時間だよ。妹ちゃんに一部始終をじっくり見てもらおうね？」

「や、やめてくれ！　妹に見られるなんてやっぱり……は、恥ずかしい……」

「言葉遣いにも気をつけてもらおうかな？あなたたち兄妹は私たちに敬語で話すの。分かった？　後頭部に両手を回して組しっかり組んで立ってなさい」

「う、うう。は、はい」

「1mくらい股を開いて」

「……はい」

五人の中で一番のお転婆娘である西条早希が健太の背後に回り込む。

「とりあえず先発の私は10回キックいくから踏ん張るのよ～？あはは！」

「な、何が10か……」

聞き直そうと振り向きかけた瞬間、股間を激痛が襲う。

『スパァンッ！！』

「ぎゃっ！？」

ショートボブの外ハネの先端を揺らしながら右足の甲が健太の陰部にまともにヒットした。

睾丸ごと的確に当たっているため思わず大声をあげてしまう。

「オチンチン蹴りまくりの刑よ♡　まだまだいくわよぉ？　これでも手加減してやってるんだから」

「早希、それって手加減じゃなくて、足加減じゃない？　アハハ♪」

東条登美子がミドルの茶髪を掻き上げながらツッコミを入れる。

「そっか！　確かに足加減かも……てへへ。じゃあいくよ二発目。それえっ！」

『ズドオッ！！』

早希の股間蹴りは続けられる。
思わず膝から崩れ落ちてしまう場面もあったが、東条登美子とポニーテールの南条奈百合に両脇を抱えられて無理矢理立たせられた。
ついに１０回目の蹴りが終了した時、健太は激痛のあまりしゃがみ込んで股間を押さえながら震えている。

「お、お兄ちゃん！大丈夫！？」

「う、ううう、うぎぎぎぎぃ」

西条早希は髪の毛を掴んで無理矢理顔を起こして苦痛に歪んだ健太に囁きかける。

「オチンチンとタマタマどっちが痛かったの？」

「う、あうう……き、金玉です……は、吐き気がしますぅ」

セーラー服の裾をまくりながら今度は南条奈百合が健太の横に膝をついて座り込む。

「次はあたしのお尻叩きだよ。四つん這いになれ」

「あうう、そ、そんな……それも恥ずかしい……です」

「あ、心配ないない！恥ずかしいなんて言ってる場合じゃないから」

意味深なセリフのあと不敵に微笑んで右手を大きく振りかぶった。

その意味はすぐに理解することとなる。

『スパァアアンッ！！！！』

「ふぎゃあああああっ！！！！」

中学生なみの可愛い系のあどけなさを持つ奈百合は五人のスケバンたちの中では一番加減を知らない天使の顔をした悪魔であった。

あまりにも平手打ちの破壊力が強烈なため、お尻の肉が吹っ飛ぶほど激しく上下左右に振動する。

「お兄ちゃん！？」

心配して妹の梓が健太のお尻に手を被せて庇ってしまう。

「あーあ。そんなことしなきゃあなたは裸にひんむくくらいで許してあげようと思ってたのに……残念ね」

菅野愛衣が目を細めながら残念そうに呟き、里中友美恵に目で合図を送る。

巨漢の友美恵は力は尋常じゃなく強かったため、ヒョイと梓を抱き抱えて兄から引き離した。

「や、やめてあげてください！あんなに強く叩いたらお兄ちゃん死んじゃう！」

「あはは！大袈裟だよそれは！あたしをかいかぶらないで♪」

“かいかぶる”の今も知らずにそう言いながら、更に二発目、三発目を叩きつける奈百合。

『パァンッ！！　スパァンッ！！』

「ひぎいっ！！　はううっ！！」

みるみるうちに真っ赤に染まってゆく臀部を見ながらついに涙を流して泣き始める健太。

それを見ていた妹の梓も涙が頬を伝う。

「ぐすん。お兄ちゃん！」

兄を想いながら涙を流す梓だったが、下半身が涼しくなるのを感じた。

里中友美恵が両腕を固めているまま、菅野愛衣がスカートを一気に脱がせたのである。

「きゃあっ！？」

激しく抵抗するが、９０キロの巨漢の力持ちである里中友美恵の拘束からは逃れられない。

続けて真っ白なパンツに手をかける愛衣。

「ひゃあっ！？そ、それだけは許してくださいっ！！」

「ダメ。私たちはパンツの中身に用事があるの。ん？　高校生なのに純白って……せめてピンクか水玉にして欲しかったわね」

『ズルル……ズルリッ！！』

「やだあああっ！！　わーんわーん！！」

地形兄妹は、愛衣によってついに妹までも下半身スッポンポンにされてしまうのであった。

「お兄ちゃんのお尻叩き刑を見ながら興奮させてあげるわ」

『スス……』

「ひいいっ！？」

愛衣はそっと指先を梓の秘部へ這わせていった。
白くて長い指先は、ゆっくりと梓の膣内へめり込んでゆく。

『ズブ！……ずぶぶ！』

「痛っ！！　いやああっ！！　そんなとこに指入れないでええええっ！！　許してええええっ！！」

「私たちには敬語を使うようにいったわよね？　更なるお仕置きが必要だわあなたにも……」

東条富美子は、乾き切っている梓の膣にペペローションをタップリ塗り込むと、そっと指先を会陰部に這わせて、肛門にも塗り込んだ。
　更に愛衣が所有する媚薬をクリトリスや膣口に塗り込む。

「うふふ。妹ちゃん、愛衣さんに思いっきりイカせてもらうのよ♡」

「ひっ！？そ、そんなのやだ……同性の人にそんなこと……」

『グチュッ！！……バリッ！』

「痛ああああっ！！」

　一気に根元まで中指と薬指を梓の膣内へめり込ませる愛衣。そのまま激しく掻き回す。
　愛衣の長い指は、処女膜を破いただけでなく、梓の子宮口までも達していた。

『グチュグチュ……くちゅちゅちゅちゅちゅ！』

「あはあんっ！？あんあんあんんっ！！」

　媚薬を塗り込まれていたこともあり、愛衣の指は愛液でぐしょぐしょになっていた。

血の混じった愛液を見ながらそっと耳元で囁く。

「出血？　処女だったのね……私が初めてになっちゃってごめんなさい。お詫びに……いっぺん、イッてみる？」

「え、ええっ！？　お詫びって……」

「イクかイカないかは……後はあなたが決めることよ」

『グチュチュチュチュチュチュチュチュッ！！』

「はひっ！？　はひいいいいいいいっ！！　んんんんんっ！！」

愛衣により、激しく性器を犯される妹の姿を見ながら大声で叫んでしまう兄の健太だったが、奈百合の手加減を知らない強烈な平手打ちがどんどん臀部の肉を真っ赤に染め上げて行った。

「妹ちゃんの心配してる場合じゃなくってよ？　お兄ちゃん？」

「あ、梓っ！……」

『スパパパパパパパパパパンッ！！』

「ぎゃあああああああっ！！」

兄が激痛に叫んだその時、妹はオーガズムで叫ぶハメになる。

「あはあああああああああんっ！！」

「ほら、イキなさい」

「イクってこんなに気持ちがいいの！？あっはあああああんっ！！」

『プシャアアアッ！！』

五人のスケバンたちが見守る中、豪快に潮を噴き出させて絶頂を迎えてしまう梓だった。

「あはあんっ！……はぁ、はぁ、はぁ、はぁ」

太ももをビクビクさせながら昇天を迎えた余韻に浸る梓。

異性だろうが同性だろうが媚薬の威力は凄まじかった。

それに加えて愛衣の指捌きも膣内の性感帯を的確にシゴキあげるので、イカせる速度は二つの相乗効果といっても過言ではない。

その隣で、奈百合のお尻叩きの刑がようやく終わった兄の健太は顔を手で覆って号泣している。

その尻の色は真っ赤や紫に染まり、皮が何ヶ所も破れて出血していた……。

横恋慕の罪（前編）（後書き）

激しく平手打ちされて、臀部の皮が剥けて……血を流す兄。
処女膜を破かれて、快楽の中……血を流す妹。
少し明暗は別れたが、まだまだ愛衣たちのお仕置きの時間は続くのであった。

横恋慕の罪（後編）（前書き）

愛衣たちによる本格的な性的リンチが始まる。

横恋慕の罪（後編）

頬を紅く染めながら速く呼吸をする地紙梓。
これまでオナニーの経験もなく、イクとゆうことがこれほどまでに気持ちのいいものと、皮肉なことに残酷少女たちによるお仕置きから教わる経験となる。

「媚薬が効いてるとはいえ……見事なイキっぷりねあなた……だけどまだ終わらせないわよ」

「はぁ、はぁ、はぁ……あ、愛衣さん……もう許して……ください。私、おかしくなりそうです。はぁ、はぁ」

愛衣は優しく頭を撫でながら、このあとの運命を囁きかけた。

「今からお兄ちゃんを登美子が犯しちゃうから。ようく見てるのよ」

「そ、そんなことやめてあげてください……」

極太アナルバイブをペニスバンドに装着してスイッチをオンにする東条登美子。

『ヴィィイイイインッ！！』

静かなモーター音を立てて歪にウネウネと回転するアナルバイブを見ながら爆笑する。

「あははは！　やだこの動き～♪　お尻の穴ガバガバになっちゃいそう♡」

「ひっ！？　や、やめて下さいっ！！」

「ダメ！　大人しく再度四つん這いになってお尻を高くつきあげなよ。奈百合、早希、ちょっと四つん這い体勢のまま押さえててくれる？」

「ほーい」

「はーい。ほら、大人しくケツ突き上げて登美子様に犯されちゃえ♡」

「わああっ！！　や、やめてくれえっ！！」

そのまま両側から西条早希と南条奈百合に押さえつけられ、強引にアナルバイブを肛門にあてがうと、妹の見ている前でゆっくりと挿入していった。

「敬語使えと言ってるでしょうが！？　ああ！？　ほーら！　おっきいのが入るよぉ？　処女の汚いケツマンコに♡」

『ピト……メリメリ！』

「ひっ！？　やめ……」

『バチュウッ！！　ぐしゅっ！！』

「はぎゃあああああっ！！！！」

ついに初めはゆっくり後は一気に……幅４センチ、長さ１５センチはある極太バイブが地紙健太の肛門を抉った。
突き当たりのＳ状結腸まで深く歪ませるほどめり込むアナルバイブは、人生で一番クラスの激痛を健太に与えることになる。

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

更に激しく腰を振り始める登美子。
絶叫しながら首を左右に振りながら号泣するが、両側を押さえつけられたまま抵抗虚しく女子高生に直腸を掻き回される恥辱を受ける健太。

『バコバコバコバコバコバコバコッ！！……グチュチュチュチュチュチュッ！！』

「はぎいいいいいいっ！！　痛い熱い痛い熱いいいいいいっ！！　壊れちゃうううううっ！！」

「あはは！　何が壊れちゃう♡　だよ。犯されてる女の子みたいなセリフ吐きやがって！　壊してるんだよケツマンコを♡　オラオラオラオラァ〜！　どうだ？　熱いか痛いかどっちなのぉ？　臭い汚いアナルなんてガバガバにしてやるんだからっ♪　えいえいえいえいいいっ！！」

「あひいいいっ！！」

『ドピュッ！　ドクドクドクッ！』

前立腺を激しく抉られて強制トコロテン射精させられてしまう健太。

気持ちいいのと激痛が混ざり合う複雑なオーガズムであった。

「やだ……お兄ちゃん？」

「どう？　男子はね、肛門掘られると射精しちゃう時もあるの。トコロテン射精と言って無理矢理前立腺刺激して搾り出すみたいな感じなんだけど……」

「そ、そうなんですか……お兄ちゃんのそんなとこ、初めて見ちゃいました……あ、愛衣さん、もう可哀想過ぎるからやめてあげてくれませんか？」

背後から太い指が回り込んでくる。

巨漢の少女、里中友美恵の指であった。

愛衣の目を使った合図で人差し指を肛門にゆっくり挿し込んでゆく。

「ごめんね梓ちゃん……後ろの処女は私が奪っちゃうことになるわ」

『ずぶぶぶ！』

「やあっ!?　痛いいいいっ！！」

「キツい穴ね？　締まりが凄い」

「痛いいいいっ！！　やめてくださいい友美恵さんっ！！　ひいいいいっ！！」

バックでひたすら犯されながら鼻水飛ばしながらもがき苦しむ健太と、性器の次は肛門、直腸を指で犯される梓。

兄妹揃って号泣する姿を見ながら薄ら笑いを浮かべる愛衣たち四人だった。

心優しい里中友美恵だけは申し訳なさそうに梓のアナルを掻き回し続けている。

「さてと。お待たせしました。極太バイブのスイッチを入れちゃうわよぉ？」

「うぐぐ……ぎひいいいい……お腹の中が壊れちゃう……や、やめて

……ください東条さん」

「大人しくもう一回セーエキ床にぶち撒けろおおっ♡　えいっ！」

激しく歪な回転が始まった。
今まで当たったことのない直腸内部を片っ端から抉り倒す恐怖の武器であった……。

『ヴィイイインッ！！　グチュチュチュチュウッ！！』

「ばぎゃあああああっ！！」

『ドピュピュピュッ！！　ドクドクドクドクッ！！』

再び半勃ちのペニスから大量の精液が噴射される。
登美子が一気にバイブを引き抜くと、健太は膝から崩れ落ち、両手で肛門を押さえながら悶絶するしかなかった。

「どう？　二回も妹ちゃんの前で強制射精させられた気分は？哀れだよねぇ？」

嗚咽を繰り返しながら泣き続ける健太を再び両腕を抱えて立ち上がらせる奈百合と早希。

「愛衣さんが持ってる強制勃起薬を注射してあげるから……立っているままセンズリするの。分かった？」

「もう出ません……許してくださいぃぃぃ～。梓のお尻責めもやめてあげてくださいぃぃぃ～。お願いいたしますぅ～。うぉーん！　うぉーん！」

顔をクシャクシャにして同級生の女子たちに赦しを乞うが、全く許してもらえる気配はない。

玉袋と肛門の間の辺り……会陰部へ太い注射針での注射を打つ奈百合。

「ほら、ここ？」

『ぷす！……ぶちゅううううう』

「んぐうっ！？　痛い……」

「我慢しろ！　妹ちゃんが見てるし三発目発射だ！」

そう言いながらイヤらしそうなはにかむ笑みを浮かべながらペニスを中指で弾いた。

激しく上下に揺れながらそのまま少しずつ勃起してゆく。

「あはは！　ほんと元気ねあんた♪」

「ほら、妹の愛液まみれのオマンコと指突っ込まれてるアナル見ながらシコりなさい」

愛衣は里中友美恵の太い指でアナルを掻き回されている梓の大陰唇に両手の親指を添えると、一気に全開に押し広げた。

「お兄ちゃんに、ぬちょぬちょになっちゃってるエロ〜いマンコの中身……見せてあげて」

「やっ！　やめて……ください……」

『くぱぁ〜！……グチュチュ！』

愛液まみれの性器は愛衣によって強引に広げられると、グチュグチュと淫らな音を立てながら左右の小陰唇に糸を引きながら床へ垂れ落ちていく。

泣いてばかりでなかなかシゴき始めない健太の肛門へボールペンを突っ込みながら睾丸を思いっきり握る西条早希。

一応直腸に突き刺さらないように気遣い、ボールペンの反対側から挿入しゆく。

「ほぉら……お尻の穴はココかなぁ♡」

『つぷっ！　ズボボボボ！……ぎゅううううっ！！』

「はぁうああっ！！」

「ほら、早くシコらないとケツ穴串刺しにしながらキンタマぶっ潰すわよ！？」

「んぎいいいいいっ！！」

なぜかその早希の責めによってフル勃起した健太は速度はゆっくりながらシゴき始める。
早希はボールペンの角度を調整して前立腺を時々抉る。

「お前、Mっ気あるんじゃないの？　ほらほらぁ♡」

「はうっ！　うはっ！　んあっ！」

その度に情けない声が出てしまう。

「へぇ〜。ほんと愛衣さんの言った通りこんな汚いところに感じる臓器付けたんだ男って？　ネバネバの腸液がドバドバ垂れ流れてきちゃってるしぃ〜……エッチね〜！　あはは♡」

その時、愛衣は梓にそっと耳元で囁きかけた。

「お兄ちゃんと同時にイカせてあげよっか？」

「あ、あはあっ！　あんっ！」

友美恵にアナルを掻き回されながら少し感じ始めている梓は、もう逆らう気力もなく愛衣の進言を受け入れる。
中指、薬指とゆっくり膣口へ滑り込ませると、激しく掻き回し始める。

「ほら、マンコの力抜きなさい。奥まで挿れちゃうわよぉ？」

『ズププ……ぐちゅちゅちゅちゅちゅちゅちゅっ！！』

「あはあっ！？　あんんんっ！！」

早希は睾丸を左手で握ったり離したりのマッサージをしながらボールペンでアナルに出し入れする。

「ほらほら、妹ちゃん早くもイッちゃいそうだよ？　同時にイカないとマジでキンタマ潰すからね？」

「は、はいっ！　ううう……ぐすん、ぐすん」

泣きながらシゴきつづけ、ついに健太は射精を迎える。
愛衣によって同時にイカされる梓。
見事に同時にイクことに成功した兄妹であった。

「よく出来ました。ほら、床に振り撒いた精液舐め取るのよ！」

「は、はい。……ぺちゃぺちゃ」

一通りのやりたい事も終わり、最後のショーへと移行する。
早希と奈百合は兄妹の上の制服やシャツ、ブラジャーを全て脱がせて完全に素っ裸にすると、下側に仰向けで梓を寝かせ、その上に抱き重なるようにうつ伏せに健太を乗せる。

「さぁてと……ぼちぼち最後の仕上げといきましょうか。兄妹でキスしあってもらえるかな？　お互いの胸を揉みしだきながらね」

「そ、そんな……」

「逆らっちゃダメ！　言う通りにしよ……お兄ちゃん」

「ちゃんと舌入れろ！」

言われるがままに抱きしめ合いながらディープキスを続ける兄妹。
五人のスケバンたちはあまりのエロさに少し陰部を湿らしながら観察していた。

「次はシックスナインよ。健太が向きを変えて」

愛衣が冷たく言い放つ。

「セーエキまみれのチンポに愛液まみれのマンコかぁ～♡　兄妹で仲良く糸引いちゃって！　ほんとエロいなぁ♡」

南条奈百合は頬を真っ赤にしながら卑猥な音を立てながらお互いの陰部を舐め合う姿を見て、オナニーを始める始末。

「こら奈百合！　そこまでするならパンツ脱いじゃえよ？」

早希が呆れながら注意するが、そのままパンツの裾から指を入れてオナニーを続ける奈百合。

「そんなの恥ずかしいじゃん……すぐ終わるからそっとしといてよぉ～」

早希へ甘えた声で返答しながら指の出し入れを止めない奈百合であった。

「肛門もしっかり舐めなさい！」

愛衣はそう言って、ミニスカートを揺らしながら脚を組む。

無理矢理に勃起させる媚薬を再度健太の会陰部に注射する早希。

「はい。ビンビンのチンポ舐めて口の中に出してもらいなよ？」

早希は、梓の髪の毛を掴んで強引に健太のペニスを再度咥えさせると、激しく頭部を前後に振りまくる。

「むごっ！？　んごごごおっ！！」

「うっ、うううっ！！」

『ドピュッ！　ドクドクドク……』

再三にわたる強制射精により、少量の精液しか出なかったが、確実にそれは妹の口内へ注がれた。

「ゴクンッ！！　おえぇっ！！　ごほごほごほっ！！」

思わず飲み込んでしまったものの、そのまま激しくむせかえる梓。

二人をそのまま土下座させ、額を床に擦り付けさせる。

「さぁ被害者の人たちに謝りなさい」

「……人の恋路を邪魔して申し訳ございませんでした」

「よく言えました。以後は気をつけるように」

「はい」

口を揃えて謝罪する二人は号泣しながら正座したまましばらく震えていた。

横恋慕の罪（後編）（後書き）

「友美恵！　元いじめられっ子のあなたが逆に責める気分はどうなの？」

二人の姉妹に服を着ることを許して下校させた後、愛衣が里中友美恵に唐突に問いかけた。

「あ、あの、そ、それは……」

巨漢を揺らしながら前側に両手の指を絡めてもじもじする友美恵。

「一年の妹のこと……可哀想だと思いながら指マン責めやってたでしょ？」

「え！？　あ、ご、ごめんなさい愛衣さん……まだ少しそうゆう感情はあります」

「敬語はいいって！」

「ご、ごめんなさ……ごめん」

「あはは♪　素直だなやっぱ。いいよいいよ。友美恵はパワーあるから……いざとゆう時は頼むよ？」

「う、うん！」

残酷で冷酷な美少女四人と、心優しき巨漢少女一人……五人は楽しく雑談しながら黄昏に染まる黒霧島高等学校を後にした。

僕の女王様（前書き）

サドがいればマゾもいる。
ＳとＭが織りなす奇妙な現実が幕を開ける。

僕の女王様

僕は今、９年前のことを思い出している。

榊原涼子ちゃんは一つ歳上の近所の女の子で、今通ってる中学校も、去年まで通っていた小学校も、ずっと彼女とは同じクラスだ。六年間と一年、合計七年間もずっと同じクラスだなんて……奇跡としか言いようがない。

「何ぼぉっとしてるの？　もっとお尻を突き上げろ！」

「う、うん。でももう痛くて痺れてきちゃったよ。手加減して」

「仕方ないなぁ。赤から紫に変わって出血するところまでが見てて興奮するのに……じゃあ次いくよ？」

「う、うん。痛くしないでね？」

榊原涼子……僕が４歳の頃近所に引っ越してきてからのこの九年間、ずっと友達として一緒に通学したり遊んだりしてきている。

でもここ一年くらい前からの彼女は……その、なんてゆうか典型的なＳで、僕のことを虐めて毎日を愉しんでいるみたいだった。

僕の性格を見ていて突然にＳに目覚めたのか、元々そうゆう気質なのかはわからないけど……。

「ほら、ココの力を抜いて。四つん這いのままもっと脚を広げるのよ」

『つぷ！……ズブブ！』

「あんっ！？」

いつも彼女はお尻叩きの後、肛門に指を突っ込んでくる。
毎回変な声が出ちゃうけど、なぜか興奮してされるがままにジッとしている僕がいるんだ。
これって彼女がSなら、僕は完全なMとゆうものなんだろうな。

「人差し指の次はいつも通り、中指も突っ込むわよ？」

「うん。二本までは我慢できるから……」

「もう一年間もやってきてるし……今日は三本目挿れちゃおーかなぁ？」

冗談じゃない！
二本目までは、かなり痛くてもおちんちんが固くなるほど気持ちよくなるけど、三本目まで挿れられちゃったら……きっと僕の肛門は裂けちゃう！

『グボッ！　グチュチュ！』

「んぎいっ！？　痛いっ！？」

「我慢して！　後半分中指が入ったら……やだ！　なんか肛門がヒクヒク動いてるよ？」

「痛いいい……涼子ちゃん、お願い！　抜いて！！」

僕の願いも虚しく、中学二年生のＳ女、榊原涼子ちゃんは、僕の肛門に三本の指を捻じ込みきったんだ。

裂けちゃうほど痛かったけど、いざ入ってみるとだんだん慣れてきたのか、違和感が少なくなってきた。

それどころかいつものように時々すごく気持ちよく感じる所に何回も指が当たる。

その気持ちよさが今までとは格別に違う。

「な、なにこの感じ！？」

『グチュチュチュチュ！』

「いつもと違うでしょ？　男の子ってお尻の穴の……この部分刺激されたらエッチな液噴き出しちゃうんだって。ネットで調べちゃったんだ。ほら、この辺り……」

『クプクプッ！！　ぐちゅぐちゅ！！』

僕は今までの人生で一番の変な感覚……気持ちよさを感じた。

『ドピュドピュッ！　ドクドク！』

「わあっ！？　なんか出た！？」

涼子ちゃんは目を細くしながらそっと僕の出した液体みたいなものを指で掬い取ると、ピースサインをするようにして僕の眼前に持ってくる。

それは長い長い糸を引いた。

「ほら見て」

「ご、ごめん！　ぼ、僕オシッコ漏らしちゃったみたい」

「うふふ。コレが男性の精液とゆうものなの。赤ちゃんのタネみたいなものだよ」

去年そう言えば六年の時に授業で習ったことがあるのを思い出した。

「あ！……オチンチンから液体と一緒に出る精子……こ、こんなに気持ちいいものなの？」

「快感を得るって先生が言ってたじゃん。ほんと頭良くないよね章

司」

僕の名は吉田章司（よしだしょうじ）。
歳下だからか僕のことは昔から下の名を呼び捨てで呼んでいる涼子ちゃん。

僕は射精とゆうものを、榊原涼子とゆう一つ歳上である中学二年生の女の子の指で人生初体験させられることになったのだ。
恥ずかしいな……性器を刺激して出すと習ったモノを……まさかお尻の穴を掻き回されて出しちゃうなんて……。

「なんか栗の花みたいな臭い……ネットで調べた通りだわ。明日から毎日この射精とゆうものをしてもらうからね？」
「そ、そんな！　な、なんかお尻の穴痛いし毎日はやめて涼子ちゃん！　お願いっ！」
「心配しなくても明日からはチンポの刺激で射精させてあげるから。お尻は傷が治るまでまたしばらくお預けよ」

なんかホッとする感覚と共に、明日を期待してしまうM男に成り果てた中学一年生の僕がいた。

――明くる日の夕方。

再び僕は彼女の家に来ている。

彼女の両親はこちらに引っ越してくる前に別れて、母親一人で涼子ちゃんを育ててきていた。

中学生になってから成長した娘に対して安心したのか、スナックで働き始めたらしく、夜中まで帰ってこない。

その夜中までが涼子ちゃんが僕を虐める時間となっていた。

それまでの数ヶ月は、近所の廃墟になった倉庫の中でその行為をしていたんだ。

ベッドに仰向けに寝かされたまま彼女は僕のズボンを脱がしている。

「今日はあたしの手でやってやるから。動画で見た通り上下にスライドさせたらドクドク出してた。手コキとか手淫とか言うらしいわ」

「そ、そうなんだ……お尻痛くないよね？」

「チンポだけしか触らないから心配ないって言ったでしょ？　大人しく精液出さないと肛門にバトン突っ込んじゃうわよ？」」

「ご、ごめんなさい」

『スルスル……ズルリ！』

そんな会話をしながら彼女は僕のパンツも足首まで脱がし切った。まじまじと見つめられるだけで恥ずかしくてみるみるうちに固くなってゆくのが自分でもわかる。

「あたしに見られるのがそんな嬉しいんだ？」

「そ、それは……だって涼子ちゃんとても美人だから……」

「……誉めたって何も出ないよ。出るのは章司の精液ぐらいだわ」

『ぎゅっ！……シコシコシコシコ』

「うっ！？　あああん」

握られてゾクっとして、更にいきなり上下に皮を剥くようにシゴかれてなんとも言えない感覚を味わうハメになる僕だった。

「なに女の子みたいな声出してるの？　早く出しなさいよ！　ほらほらほら！」

『シコシコシコシコ！……シュコココココココッ！！』

ものすごい速度で僕のオチンチンをシゴき始める彼女の表情は、少し意地の悪い天使みたいだった。

更に彼女は頬を紅くしながら、反対側の左手で僕の金玉を軽く握ったり離したりし始めたんだ。

「あっ！　やだあっ！　んんんんっ！！」

『ドピッ！　ドピュピュピュピュピュピュウッ！！』

肛門を指で掻き回された時よりも気持ちよく、勢いよく精液とゆうものが噴き出した感覚があった。

「きゃあっ！？」

彼女の顔に僕の精液がたくさんへリ掛かったのをみて、僕はなぜか更に興奮してきた。

指で顔に付着した粘液をこすり取ると、僕の口の中に捩じ込んでくる。

「むごおっ！？　んんん」

「汚いなぁ！　あたしの顔に引っかけた罰よ。　綺麗に舐め取りなさい！」

結局自分で出した精液は、自分で殆ど全て舐め取らされた僕。

そのまま彼女はベッドに上がり、僕の両足を掴んで股を開かせると、右足の裏を股間に密着させてきた。
僕の中では昔から、嫌な予感は的中するものだった。
僕は一気にクラスでの男子同士のイジメ現場を思い出した。
ま、まさかこの流れは！？

『ガガガガガガガガッ！！』

「わあああああっ！？　や、やめて涼子ちゃんっ！！　ひぎいいいいっ！！」

「男子たちのやってるコレ……一度あたしもやってみたかったのよね。痛いの？　気持ちいいの？」

そう言いながら長く腰まで伸びたツインテールの髪を揺らしながら激しく僕の股間を足の裏で攻撃してくる涼子ちゃん。
時折り覗く、白いパンツがまた可愛かった。
程よく肉付きのある太もも……白く長い脚を容赦なく僕の股間に叩き込んでくる彼女のエッチそうな顔もまた……。

「うっ！？」

『ドクッ！！　ドクドクドクドクッ！！』

いけない！！
彼女の真っ白な脚やパンツを見てると、更に気持ちよくなってきて……真っ白なハイソックスにヘリ掛けてしまった……。

「やだ……まさか電気アンマでイッちゃうなんて……予想外だわ。あたしのソックス汚しちゃって……どうしてくれるの？」

『グリグリ！……ぐりんぐりん！』

「痛いっ！！　やめてっ！！　潰れちゃううっ！！」

今度は怒りに任せてキンタマごと激しく圧迫してくる足の裏……。チラチラ見える純白パンツは無茶苦茶興奮するけど流石にキンタマをグリグリやられては激痛だよ。

「汚されちゃった靴下はもう履けないわ」

彼女は両足のハイソックスを脱ぎ捨てると、今度は生足で僕の股間に乗せてくる。
雁首を親指と人差し指で挟み込んで扱き出すと、意思とは別に、また僕のアソコはギンギンに勃起してきた。

『シコシコシコシコ』

「うっ！？　そ、そんな技ありなのっ！？　ひぃいっ！！」
「コレも動画で見て覚えたの♪　気持ちいいでしょ？」

再三射精させられてしまった僕は、今までの人生で最高に快感を得た一日となったんだ。

しかしそんな幸せな日々も長くは続かなかった。
いや、友達として10年、エッチな行為をし始めて一年間くらい続いたのは十分長かったのだろう。
けどこれからまだまだ期待していた僕にその日は突然やってきた。

『本日午前三時過ぎ、西部地方西武公園団地の一戸建てに住む、榊原洋子さん48歳と、長女の涼子さん14歳の二人が血を流して倒れているのを、近所からの叫び声がするとゆう通報で駆けつけた警察官によって確認されました。二人は近くの総合病院へ緊急搬送されましたが、病院で死亡が確認されました。死因はいずれも頸部圧迫による窒息死で、衣服に乱れが確認されていたようです。警察は、逃走した人物の特定を急ぎ、強姦、強盗殺人容疑で捜査を開始しました』

そのニュースをテレビで見たとき、僕の頭は真っ白になった。
全身が凍りつくような感覚と、大好きな人を失った喪失感に近いものを感じた。

別に付き合ってたってわけでもないのに……。

ただ毎日のように廃墟になった倉庫の中で、最近は彼女の部屋で……僕は責められて虐められて彼女を好きになってしまっていたみたい。

女王様といった感覚と似たようなものなのか？
ハッキリ分からないけど彼女に責められるのが毎日興奮して嬉しかったことには違いなかった。

――――こ、ここは？

白く霞む世界。
閉じているはずの瞼（まぶた）越しにも白く霞んだ眩しさが視界に突き刺さる。
今自分が太陽の下にいることが理解できる。

身体が動かない？
その理由は数秒後に気づくことになる。
僕はどうやら全身を拘束されているみたいだった。

「おはようM男くん」

ん？　誰だ？
どこかで聞いたことのある声がするけど……。
僕はとてつもなく眩しく感じながらもゆっくりと目を開けていっ

た。

女の子が数人？……あれ？……み、みんな見覚えのある顔？

「り、莉央に美紅に咲良！！」

「ふぅん。ドMさんだけにアイドルにも詳しいんだ。まさかあたしたちのMVとか見ながらオナッたりアナルほじくったりしてたんじゃないでしょうね？」

菅野莉央が両手首を腰に当て、両肘を外側に突き出した威張った姿勢で僕を睨みながら問いかけてくる。

黒髪ロングがとってもよく似合っている美女だと改めて痛感した。

「そ、そんなことしないよ！　そもそもなぜ僕がMとか知ってるんだ！？」

しまった！

自分でMと認めたような返事をしてしまったじゃないか！

なんて馬鹿なんだ僕は……。

「特殊任務省の情報網を甘くみてもらっちゃ困るわ。吉田章司！唐突だけど、あなたのお父さんである吉田栄次郎５３歳を本日拷問処刑執行します。あなたは一部始終をそこで見てなさい」

は？
何言ってんだ菅野莉央は……？
アイドルである真絆ガールズのメンバーが三人もいる上に僕の父さんを拷問処刑！？

「ちょ、ちょっとあの……イチから説明してくれないと全然意味が分からないんだけど？　僕の父さん仕事してるし……こんな訳のわからない場所にいるわけが……」

その時、鬼頭美紅と宮垣咲良が左右に移動すると、素っ裸で十字型の磔台に拘束された見覚えのある顔が現れたんだ。

「えっ！？　と、父さん！？」

「しょ、章司か……」

マジか！？
なぜ父さんが！？
一体ここはどこなんだ！？
なぜ父さんが処刑されなきゃならないんだ！？
ば、僕がなぜ拘束されなきゃならないんだ！？
だめだ……やはりこの子たちに詳しく聞かなきゃ意味がわからない！

「あの……」

「色々頭こんがらがってるみたいね？　今から説明してあげるから
よく聞きなさい」

ツインテールの美紅が僕に語りかけながら歩み寄る。

やっぱりこの子が一番タイプだ……。
目の前で生で見るとホント綺麗だなぁ。

いかんいかん！
ぼうっと見惚れてる場合じゃ無いんだ今の僕は……。

「そっか。章司くんはあたしの推しみたいね？」

な、なんでバレた！？
鋭いなこの子……。

「殺された涼子ちゃんに虐められて興奮しながらもたまにあたしの
ＭＶとか見て抜いてたでしょ？」

！？
なんてこった。
そこまで見抜かれちゃってるとは。

でも初めてイカされたのは涼子ちゃんで、美紅を見ながら抜いたりしたのは最近の話……。
あくまで僕の射精のメインは涼子ちゃんの責めなんだよ。
鬼頭美紅はアイドルだけど涼子ちゃんの次！
この世で二番目にタイプなだけなんだ……。

「単刀直入に言うわ。榊原涼子ちゃんとお母さんをレイプした挙句に絞殺した犯人は……あなたのお父さん」

え！？
何を言ってるんだ美紅は？
気が動転して美紅の言ってることが頭で理解できない。
美紅はそんな僕に構わず説明を続けている。

「お父さんね……あなたが涼子ちゃんから性的なイジメを受けていたことを最近になって気付いたみたい。あなたの鞄に盗聴器を取り付けてＳＭまがいのことをしていたのも確信したの。そして大切なあなたのことを傷付けて陵辱した涼子ちゃんに……殺意を抱いたのね」

そ、そんな……僕は喜んで虐められてたのになんてことをしてくれたんだ父ちゃん……。

「涼子ちゃんのお母さんは……とばっちりとしか言えない。死ぬ気

で庇おうとしたからつい殺してしまい、先に娘をレイプしてから絞殺した後、次に既に生き絶えたお母さんを死姦しちゃうの。そうよねオッサン？」

「うう……は、母親は殺す気はなかったんだ……娘を犯してやろうと思ったら気が狂ったように向かって来やがったから……」

「つい殺しちゃって遺体まで犯しちゃうんだ？」

「そ、それは……」

「数年前に奥さんと別れてから男手一つで育ててきた寂しさや苦労はわかるけど……人としての一線を超えちゃったみたいね」

そう言いながら美紅は父さんの首にかなり大きなサイズの配線バンドをセットして、ゆっくり首を締めていった。

『ギリギリギリギリ……』

「ぐえっ！？……うぐううううっ！！」

「や、やめて！　父ちゃんが死んじゃうっ！！」

菅野莉央が僕の顎を持ち上げて冷ややかに微笑んだ。

「だからお父さんあたしたちが殺しちゃうんだって。何度も言わせ

ないで」

くそおっ！
どうしてこんなことになっちゃったんだ？
眼前にいるのは小学生や中学生のアイドルたちじゃないのか！？
…………いくら冷静になってみても、何度彼女たちを見返しても、やっぱり真絆ガールズの莉央に美紅に咲良だ。

『ギリギリギリギリ……』

「うぶうううううっ！！」

どんどん首を締め付けてゆく美紅は、僕の無茶苦茶好みの綺麗な憧れ……の人の筈だったのに。

「やめてくれえええええっ！！」

僕は心の底から父さんの為に叫んでいた。
やっぱりたった一人の家族だし、今まで僕のために一生懸命働いてくれた父ちゃんなんだ！

「咲良！　フル勃起してきちゃったから一発抜いてやってくれる？」

「あらあら……男って死にそうになると子孫を残す生存本能で勝手に勃起しちゃうみたいだもんね。でも哀れだなぁ……この世の終わりみたいな表情して苦しんでるのに、チンポだけこんなになっちゃうなんて……あはは」

鬼頭美紅と同じ年の１４歳、宮垣咲良はそう言いながらなぜか大っきくなった僕の父ちゃんのオチンチンを握って激しくシゴき始めちゃった。

どうして首を絞められてるのに大っきくなっちゃうんだ！？　ってゆうか僕の一推しの美紅が父ちゃんのチンチンをシゴいちゃうなんて……なんか複雑だ。

「ほらオッサン！　死んじゃう前に子孫残さなきゃ。たくさんへリ出しなよ？」

そう言いながら咲良はいっそう激しくシゴく。

「うぐうあああ……はうっ！！」

『ドピュッ！……ドクドクドクドクッ！』

父ちゃんの大量の精液が地面の土や雑草に振り撒かれた。

「たくさん出たね？　ご褒美に首を解いてやるよ」

「がはあっ！！　ゴホゴホゴホッ！！　はぁ、はぁ、はぁ」

死にかけていた父ちゃんの顔がみるみる赤みを取り戻してゆく。

そのまま磔台の拘束までも解いてゆく美紅。

こ、これは父ちゃん助かるんじゃないか！？

中学生や小学生の……しかもアイドル、女の子なんかに喧嘩で負けないだろ父ちゃん！？

僕の思惑通り、一気に美紅を殴り倒しにゆく父ちゃんを心の底から応援したんだ。

だけど……。

なぜそうなっちゃうの？？

「グハァアアッ！！　ひぎいっ！！　た、助けてくれ！！」

顔面ボコボコに腫れてアイドルに許しを乞う父ちゃんの姿があまりにもみっともなくて涙が出てきたよ。

「そうそう。そのまま大人しく四つん這いになって」

「は、はい」

「美紅様、わかりました、でしょ？」

「み、美紅様……わかりました」

「そうそう。ケツを高く突き上げるんだ」

「はい」

あんな綺麗な顔してなんて残酷で強いんだ……。

そう言えば先週、鬼頭美紅が初センターのシングル出てたな。

曲の題名は確か……見た目は天使、中身は悪魔……。

美紅そのままじゃないか！

運営もなんて曲を出すんだホント……。

そんなことを思いながら目の前で信じられない光景が行われている。

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「ぐえええええっ！！いだいいいいいいっ！！」

かなりデカそうなバイブを腰に巻いたベルトに装着して父ちゃんを犯している美紅が見えた。

許容範囲を超えたデカさなのか、大量に返り血を太ももやスカート、セーラー服に浴びながらも激しく腰を振り続けている。

お尻の穴、突っ込まれた瞬間に裂けちゃってるんだろうな、と容易に推測できた。

「いでぇぇえっ！！　やめでぐだざいいい～！！　美紅さまあああっ！！」

「強姦や死姦された二人の苦痛や恥辱はこんなもんじゃすまないわよ？　ほらほらほら！　ケツ下げるんじゃないわよ！」

『バコバコバコバコバコバコッ！！　グシュシュシュシュウッ！！』

粘度のある液体と一緒にかなりの鮮血が地面に溜まってる……父ちゃんあのまま死んじゃうんじゃないかな？

その後肛門責めは終わったみたいだけど、咲良と美紅に全身を激しく殴る蹴るの暴行を受けている父ちゃん。

僕は涙が溢れてくるのを感じた。

ん？

なに？

「わあっ！？」

小学六年生のセンター、菅野莉央が僕のズボンとパンツを脱がしている！？

「や、やめてっ！？」

『ズルズル……ストーン！』

「やあっ！？」

莉央は僕のオチンチンに右膝をグリグリと押し込んでくる。

推しではないがこの子もかなり可愛い……。

涼子ちゃんによってMに目覚めさせられた僕は……当たり前のようにフル勃起しちゃう。

「や、めて。は、恥ずかしいよぉ」

「あなたの推しは美紅ちゃんでしょ？　責めるのあたしなんかでゴメンね。でもぼちぼちお父さん最期の時を迎えるから」

「あ、あん、あん……え！？　そ、そんな！　やめてあげて！！」

莉央の、膝でオチンチンをグリグリ責め……があまりにも気持ち良くて、つい喘ぎ声を出してしまっていたが、今はそれどころじゃ無いことに気付いたんだ。

父ちゃんが殺されちゃう……ほんと許してあげて欲しいよぉ！！

『ズドンッ！！』

「はぎいっ！？」

莉央の膝グリグリが、膝蹴りに変化した。
僕は小学生とは思えない強烈な蹴りに、一瞬意識が飛んだ錯覚をおこしてしまった。

き、金玉潰れた！？
痛い！
痛すぎるううう！！

「ギャァアアアアッ！！！」

「うるさいなぁ。もうお父さんのこと諦めないと本気でアンタのキンタマ潰しちゃうわよ？」

な、なんだと！？
今の一撃が本気じゃないだと！？
こんな小さな小学生の女の子にどうしてこんなパワーが！？

睾丸の激痛に耐えながらも目に飛び込んでくる凄惨な光景。
仰向けに簡易なベッドに拘束された父ちゃんの身体にガスバーナーで何ヶ所も炙ってゆく美紅と咲良。
今までに聞いたことのない父ちゃんの絶叫を聞きながら目を閉じて現実逃避に入ってしまう。

「咲良、足だけ拘束といてからM字開脚にしてくれる？」

「ほーい。そうしないとアナル炙れないもんね♡」

「よくわかったわね……じゃあああたしがペニスと睾丸焼くから咲良は肛門焼いちゃって♡」

「わかった」

全身の皮が重度の火傷でただれて、たとえ彼女たちがここで許してくれたとしても……既に命は助からないだろうと直感した。

「ほらほら、大切なトコが焼け爛れて液体化しちゃってるよお？　痛い？」

『ゴォオオオオ』

「ぐわあああああああっ！！！！」

「お尻の穴も……やだぁ♡　黒い菊が溶けて直腸が飛び出してきちゃってるわよ？」

わざわざよく見えるように簡易ベッドを僕の眼前に転がしてきてからの鬼のような所業……確かに新曲の通り、天使の顔した悪魔だなこの子たち……。

「咲良！　見て見て！　キンタマが半熟で飛び出してきた！」

「わぁ～。ホントだ……エロいなぁ♡　」

そう言いながら既に炭と化したペニス同様、睾丸もドス黒く変色してゆくまで炙り続ける美紅。

「飛び出してきた直腸もドロドロに溶かしてやったし……次はオヘソ♡」

口から血と煙を吐きながら断末魔の雄叫びをあげながら絶命する父ちゃんの姿を見た。

「逝っちゃったね。お父さん」

「ううう。わーんわーん！」

あまりの辛さに小学生の少女、莉央の前で思わず号泣してしまう。
全身が真っ黒になるまで炙り続け、焼き続けた咲良と美紅も僕の前に歩み寄ってくる。
もう許して……お願いだよ。

「あなたの大好きな美紅ちゃんに責めてもらいなよ？」

咲良が唐突にそう言った。

まさか……自身の父親を焼き殺されたこの現場で……感じることなどできるわけがないだろ？

『ツプ！グチュグチュ！』

「あはあっ！？んんんっ！！」

僕は憧れのアイドル、鬼頭美紅にお尻の穴を掘られている。

彼女の中指で直腸を激しく掻き回された僕は、父ちゃんの遺体の前なのにフル勃起してしまう。

「よくこんな状況でチンポ勃てられるよなお前……」

『パンパンパンッ！！』

咲良はそう言いながら僕の頬を何度も平手打ちしてきた。

気が付けば美紅は僕のペニスを握り、莉央の指が代わりに僕のアナルに挿入されていた。

『グリリ……ボコッ！！』

「ぎゃあああっ！！！！」

莉央の指はどんどん本数が増え、しまいには手首まで僕の肛門にぶち込んできた。
これがフィストファックか……痛い……痛すぎる。

『シコシコシコシコ』

そのまま美紅の手コキが始まる。

「あ、ああんっ！」

生前の涼子ちゃんに散々責められ……可愛いアイドルたちにも本日こんなに責められて、僕は益々ドMを極めていくのかな？
咲良に往復ビンタされながら、莉央に肛門に拳ごとぶち込まれながら、一番大好きな美紅に手コキで……。

「ほら、トドメだ。イッけえええええっ♡」

『シコシコシコ……シュコココココココッ！！』

「はっ！　はうううっ！！　イク……イッちゃいますうっ！！み、美紅様ああっ！！」

『ドピュピュピュピュピュピュピュピュウウウッ！！』

気持ち良かった。
まだ莉央の拳がグリグリ直腸内を掻き回している。

『グリグリッ！！……ドクドクッ！！』

前立腺とやらの刺激でまたイカされちゃった。
咲良はあまりタイプじゃ無いけど美紅と莉央はホント可愛いな……。
父ちゃん……殺されちゃったのにこんな僕でごめんなさい……。

僕の女王様（後書き）

莉央は拳を肛門から引き抜くと、手にタップリ付着した腸液と便と血液を吉田章司の太ももに擦り付けた。

「これからはあたしたちのＭＶでも見ながらオナニーアナニーに励むことね。わかった？」

「はい！……美紅様」

「たまに暇ができたらあたしがアンタ犯しにきてやるよ」

「ほ、ほんとですかっ！？　ア、アイドルが僕なんかを！？」

顔を上げてツインテールを後方に振り払いながら満面の笑みを見せる絶世の美女……吉田章司の新しい女王様、鬼頭美紅だった。

幼き犯罪者（前編）（前書き）

ある日突然妻を無くした男。
悲しいまでの復讐心が全身を包み込む……。

幼き犯罪者（前編）

「おねーちゃん！　今度アレ乗りたい！」
「僕も！　美由と一緒に乗っていい？」

小学三年生の兄である瀧田浩介と、小学一年生の妹である美由の二人がはしゃぎながらメリーゴーランドに並ぶ。

東部地方にある大型遊園地、ファンタジーランドに二人の兄妹を連れて来ている菅野莉央と円満愛衣。

「莉央様……幼いとはいえ、重大な罪を犯した犯罪者を遊園地で遊ばせていいものなのですか？」

「明日の処刑を前に人生で最期の一日になるからね。これくらいはいいんじゃない？」

「藤堂長官も幼い子を拷問処刑に処する決断をする割に……変に優しいトコあるんですね」

「…………」

明日の運命を全く知る由もない幼い兄妹は、メリーゴーランドに乗って無邪気な笑顔を振り撒いていた。

拷問処刑人である女子高生の愛衣と、小学生の莉央は肩まで伸びた艶やかな黒髪をたなびかせながらその笑顔を見守る。

愛衣は女子高生ながら、小学六年生の莉央に服従し、奴隷みたいに扱われながらもいつの間にかお互いを愛し合う奇妙な同性カップルとなっていた。

「お兄ちゃん！　次、観覧車乗ろうよ！」

「うん！　高いとこ怖いけどすっごく楽しそう♪　ねぇ！　おねーちゃんたちも一緒に乗ろうよ？」

静かに頷きながらベンチから立ち上がる莉央だったが、愛衣は微動だにしない。

「?……愛衣、一緒に乗ろう」

「ご、御免なさい莉央様……わたしこう見えて……超高所恐怖症なんです……絶対無理です」

本気で全身を震わせているのがすぐに分かる莉央。

「あはは……あなたほどの残酷な女性が……あははははは！」

妙にツボにハマる莉央は笑いを堪えきれず腹を押さえて爆笑してしまう。

「酷いです莉央様……」

大量の冷や汗をかきながらも莉央に抗議する愛衣。
頬を膨らませながらも両脚はガクガク震えている。

「乗ってもないのに……想像するだけでそこまで震えるなんてよほど怖いんだね……じゃあ三人で乗ってくるから待ってて」

「はーい。故障で真上辺りで止まっちゃっても……いくら莉央様でも私は助けに行きませんからね？」

「はいはい。鉄柱滑り降りてくるから心配ないよ」

冗談のようで本気でやりそうな莉央に再度戦慄を覚える愛衣だった。

その後も、小さな子供が乗れる乗り物は殆ど全て乗り切った兄妹。
閉園を迎える午後九時が迫ってきていた。

四人はベンチに座り、ソフトクリームを舐めている。

「あのね浩介くん」

「なぁに？　おねーちゃん？……このソフトクリームむっちゃ美味しいね！　ほんとありがとう」

「かなり言いづらいんだけど……」

そこまで言って黙り込む莉央。
二人の幼い兄妹はソフトクリームを舐めながらマジマジと莉央の横顔を覗き込む。

「莉央様……なんなら私が代わりに伝えましょうか？」

「あ、う、うん。お願い」

「お兄ちゃんの浩介くんと妹さんの美由ちゃんは、明日天国へ旅立つことになるの」

愛衣の言葉の意味を理解できない兄妹はキョトンとした表情のまま固まってしまう。

「地獄かもしれないのによく言うよ」

「え？」

「何でもない。続けて。まだ理解してないわよこの子たち」

愛衣は頭上に見える満月を見つめながら深く息を吸い込み、再度語りかける。
「明日ね……とにかく浩介くんと美由ちゃんは知らない未知の世界に旅立つことになるんだよ」
ポカンと口を開けて愛衣を見つめる兄妹。
莉央も同じく口を開けたまま愛衣を見つめていた。
「こら愛衣！　なんかズルいぞその伝え方……結局イモ引いちゃってるじゃん」
「イモ？　私はお芋は嫌いです。一度食べてから一切食べてないですけど？」
「臆病になってるってことね……はぁ。もういいよ。運転手の小林さん中央ゲート前に到着してるからもう行こう」
「はーい。とりあえず◯◯埠頭に監禁してから早朝あの島へ渡るのですね？」
「そう。あたしと愛衣の二人でヤるから。愛衣は浩介くんを担当ね。あたしは美由ちゃん」

いまだに全く二人の会話が理解できない兄妹はソフトクリームを全て食べ終わると、笑顔で莉央たちと遊園地を跡にするのであった。

「お待たせ小林さん。例の埠頭へむかってくれる？」

「承知いたしました。０時までには到着予定ですがもしお疲れでしたら休んでいてください。到着したらお声掛けさせていただきますので」

「ありがとう。眠くないから心配ないよ。安全運転でお願いします」

「はい」

特殊任務省所属のレクサスは静かなエンジン音を立てながら一路、〇〇埠頭を目指して進んでゆく。

その埠頭から出航する海の向こうには、罪人たちを悶え苦しめさせて絶命させる拷問処刑場……残酷処刑島が存在する。

２３時半頃、レクサスは〇〇埠頭へ到着する。

ぐっすり眠っている兄妹を抱きかかえて倉庫内へ運び込む莉央と愛衣。

小林は二人に敬礼をして月夜の中を走り去る。

「すっごく明るい夜ですわね莉央様」

「うん。ヘッドライトなんか点けなくても帰りつきそう」

簡易なベッドに二人を寝かせると、莉央と愛衣も朝まで仮眠することにした。

０時を回り、兄妹にとって人生最期の日が訪れたが、スヤスヤと眠り続ける二人。

早朝６時半頃、ようやく辺りが微かに白んでくる中、莉央たちは二人を起こし、船着場まで手を繋いで連れてゆく。

「わー、すごい潮の香り！　お兄ちゃん！　見て見て！　水平線から太陽が！」

「ほんとだ！　すっごい綺麗だなぁ♪」

はしゃぐ兄妹を乗せた特殊任務省の船は、非情にも残酷処刑島の簡易な港へ着いた。

敬礼をして船を見送ると、愛衣は浩介を、莉央は美由の手を繋いで、ゆっくり坂道を登ってゆく。

しばらく歩くといろんな雑草の花が咲く丘の上に辿り着いた。

「わぁ！　浩介黄色の花がたくさん咲いてるぅ♪」

「いい匂いがするなぁ」

兄妹は景色を見ながら感動しているが、ぼちぼちこの島に来た理由を説明しなければならない時が迫る。

「午前八時から拷問開始するからそれまでに罪状を告げるんですよね？」

「うん。両親のことも含めて色々複雑だけど……たとえ幼くても何も知らないで死んでゆくのは余りにも可哀想だし」

名前もわからない野に咲く黄色い花を摘み、妹の頭にそっと飾ってあげる兄の浩介を見つめながら目を細める莉央。

――一週間前。

「いいか？　この粉を二人で手分けして五つある全ての鍋に入れるんだ」

「父ちゃん……これ何？」

浩介と美由は、小さな袋に入った白っぽい粉を父から受け取り、訝しげに首をかしげる。

地元の猟友会。
害獣駆除の依頼があると、熊や猪、鹿などを鉄砲で駆除する漁師の団体だ。
一年前に起きた事故があった。
山菜を摘みに山へ入っていた女性が、猟友会の会員から害獣と見間違えられて散弾銃で撃たれ、死亡するとゆう痛ましい惨事である。

「熊のような色合いの服着て山に入るほうもどうかしてるぜ」

「そりゃ見間違えられてもおかしくねーわ」

「誤射しちまった山ちゃんのほうが可哀想だな。まぁアイツ本人も“誰でも間違えるさアレは……„とか言って、大して反省もしてなかったしな。執行猶予付きの判決が下って、それも当たり前だ！　みたいに言いながら苦笑いしてたぞ」

喫茶店での猟師たちの会話を聞いていた男が一人。
それはほぼ全員の見解が、亡くなった被害者側に非があるとゆう内容であった。

妻を失った怒りの矛先は、当人の山田竹蔵のみならず、猟友会全員に向けられる事となる。

『コイツら全てブチ殺してやる……』

愛衣に、なぜ幼い小学生たちまでもがこの島で、拷問処刑に処せられるのかを淡々と説明する莉央。

「そりゃ撃ち殺されて反省もしてないわ仲間たちも被害者が悪いわみたいに言われたらキレちゃう気持ちもわかりますね……その猟友会皆殺し事件の犯人、張本人の父親はどうなったのですか？この島に連行されてる筈ですが？」

「この子たちまで利用して毒殺させてからね……全員の死をニュースで確認した後、その日の夜に首を吊って自殺したの。どうせ死刑になるからなのか、耐えられない罪悪感からなのか……そこまでは本人しかわからないけど。子供たちの未来より奥さんの為の復讐心が勝っちゃったのかな？」

莉央は強力な麻酔薬注射を鞄から取り出して、これから処刑される兄妹を見つめる。

「この子たちは……相手が死ぬことをわかっていて毒をもったのですね？」

「当たり前でしょ。知らなかったのならこんな幼い兄妹に拷問処刑が下される訳がないよ」

「はぁ。ちょっと可哀想だけど……お母さん殺した本人のみならず合計八人も殺しちゃったら仕方ないですよね。最初に麻酔使うのですか？」

「そだね。八人も殺しちゃったら死ぬほど地獄をみせるのが当然だけど……母親の仇討ちとゆう名目と、父親からの依頼だった、とゆうことを考慮したらできるだけ苦しまないでバラしちゃお」

拷問具を収納してある大きな箱には、電動ノコギリが二つ、上部に確認できた。

「痛みが少ないだけで、残酷なことはやっぱりヤっちゃうんですね？」

「当然。自分の身体が少しずつ欠落していく過程をじっくり見てもらいながら逝かせてやろう」

「はい。ベッドに拘束します？　それとも磔に？」

愛衣も麻酔注射を手にして、針先から液が飛び出すのを確認しながら莉央に問いかける。

「切断系では殆ど痛みがない大サービスしちゃうから……せめて打撃系では激痛を与えちゃお。顔面をフルボッコにして地面の上で四肢切断ね？」

「そ、それも酷い話ですが……わかりました莉央様。では先に私からいきますね」

「うん。妹ちゃんに兄の哀れな姿を散々見せつけてからあたしも始

めるよ」

愛衣は亡くなった八人の命の重さを感じながら小さな犯罪者の元へ歩を進めた。

セーラー服のミニスカートと、艶やかな黒髪をたなびかせながら瀧田浩介と美由の前に立つ。

「お姉ちゃん！　一緒に遊ぼうよ？　美由と同じように髪の毛にお花飾ってあげる」

無邪気な笑顔を見せるが、母に続き自分の父までもこの世にいないことを未だわかっていない兄妹であった。

「午前八時。今から瀧田浩介と瀧田美由の拷問処刑を執行します」

「え？　こうもん……しょけん？」

浩介はキョトンとした表情で聞き直す。

「ごうもん。しょけい！　たくさん痛い目に遭ったり、傷つけられたりすることよ。先ずお兄ちゃんの浩介から始めるわね？」

「えーっ！　痛いのなんてやだよぉ〜！　早く遊ぼうよおねーちゃん！」

『スパァンッ！！』

「ひぶうっ！？」

頬の肉が削げるかと思えるほどの強烈な平手打ちが９歳児童の顔面を襲った。

両手で押さえて何が起こったのかわからない顔をしている所へ、膝蹴りを入れ、両手の甲の骨を折る。

「ガードなんかしたら許さないわ」

『パパパパパパパンッ！！』

「ふぎぎぎぎぎいっ！？」

涎と鼻血が往復ビンタで打たれながら四方八方に飛び散る。

痛みで倒れ込み、顔をクシャクシャにしながら号泣を始める浩介。

「やあぁっ！？　お兄ちゃんに酷いことしちゃダメぇっ！！」

妹の美由が愛衣の白い脚にかきつき、動きを止めようと抵抗して

きた。

肩まで伸びているミドルの髪を背後から鷲掴みにする手があった。

『ガツ！　ギュウッ！！』

「痛いっ！！」

そのまま後方へ転がして仰向けにさせ、馬乗りになる莉央。

両膝を叩きつけ、美由の両肘をへし折ると、怒涛の往復ビンタを炸裂させる。

泣く暇もないほどの１００烈ビンタが終わると、今度は拳で顔面をタコ殴りのパウンド。

初っ端から手加減を知らない莉央たちであった。

幼き犯罪者（前編）（後書き）

幼い小学生児童といえども、大量殺人には容赦のない特殊任務省の決断。

ついに菅野莉央と菅野愛衣による残虐な拷問が開始された。

幼き犯罪者（後編）（前書き）

激しく続けられる拷問刑。
幼い兄妹は真の地獄を見ることになる。

幼き犯罪者（後編）

「莉央様、死んでしまいますよ？」

「手加減してるわよ。浩介の方も歪に変形するまで顔面殴りつけてね？」

「はーい」

それから半時間ほど莉央と愛衣は、幼い兄妹の顔面を殴り続けた。

号泣しながら糞尿を漏らす二人。

「ん？　なんか臭うわね？　まさか漏らしちゃったのかな？」

愛衣は首を傾げながら浩介のズボンとパンツを脱がしてゆく。

「あらあ……大までたくさん漏らしちゃって……更なるお仕置きが必要ね浩介くん？」

莉央も美由のスカートを腹部に捲り上げ、真っ白なパンツが黄色くなっているのを確認する。

「お兄ちゃんに続いて妹ちゃんまでお漏らし？」

そう言いながらパンツ越しに秘部へ人差し指を突き入れる。

『つぷっ！』

『ビクウッ！！』

号泣しながらも股を必死で閉じようとするが、莉央は一気に足首までパンツを引き摺り下ろした。

「美由のオマンコ見せてもらうわね？」

「やだあっ！！　わーんわーん！！　痛いよぉ！　恥ずかしいよぉ！！」

「このワレメは何ていうのかな？」

「わーん！　わーん！　し、そんなの知らないいっ！！　痛いよおおっ！！　おねぇちゃん助けて許してええええっ！！

愛衣と莉央は、それぞれに児童にも効くように特別に造られた媚薬をペニスと膣にタップリと塗り込んだ。

みるみるうちに勃起してゆく小学三年生の皮かむりペニス。

「浩介。ガキの割にボッキしたら結構大きいのね？　今から大人の楽しみ方を教えてあげるわ」

「顔と手が痛いよおお！　えーんえーん！」

痛みで下半身の変化にも気付かない浩介だったが、ここで痛み止めの薬を兄妹に注射する愛衣。

「まだ小学一年生だけど、処女はもらっちゃうよ♡」

『ツプ！……ズチュッ！！……バリッ！』

「んああっ！！痛いいっ！！」

莉央は中指を根元まで美由の膣内へ突っ込んだ。

「もう直ぐ痛み止めが効いてくるから、顔も手もマンコも楽になるわ」

『クプクプ……グチュグチュ！』

「んああっ！　そ、そんなとこに指入れないでっ！　やめて！　やだあっ！」

「うるさい！　黙ってないとお尻にも突っ込むわよ？」

指一本でも張り裂けそうになっている小さな膣内を激しく掻き回す莉央。
少しずつだが愛液が滲み出てくる。
「おお♪　湿ってきた湿ってきた♡　あの世へ逝く前にお兄ちゃんとセックスさせたげるからね。たくさん濡らしなさい」
「セ、セックスって何？」
「うるさい！　黙ってて」
そのまま幼い兄妹を素っ裸にひん剥き、簡易ベッドに妹を仰向けに寝かせて、兄を上から抱きつくように寝かせた。
愛衣は、無理矢理イキり勃出された9歳男児のペニスを掴み、妹の膣口へ誘導する。
莉央もそれに合わせて二本の指で美由の膣口を全力で開かせた。
「やだぁ！　そんなとこ広げて見ないでぇ！！」
「おねーさんたち見慣れてるから心配しないで！　んん……オマンコの穴が小さすぎて入らないですね……」
「穴の大きさとゆうより……幼女は恥骨の幅自体が狭いからね。このくらいのチンポなら無理矢理突っ込めばマンコの方はどうにか開

くから問題ないよ」

「恥骨……とゆうことはアレをやるのですか？」

「うん。一度浩介を引き離してから美由をあたし側に向かせて抱いててくれるかな？」

「はい。オシッコさせるように両膝開かせて抱いてますね」

莉央は美由の前に歩み寄ると、ゆっくり右膝を引いた。

『ズドンッ！！』

「ひゃっ！？」

「ほら、邪魔な骨砕けちゃえ！」

『ドカッ！　ズドドドドッ！！』

「いったあああいっ！！」

執拗に繰り返される幼女の陰部を目がけての膝蹴り。
骨にまでは麻酔が効いていないのか、激痛に顔を顰めて泣き喚く美由だったが、２０回、３０回と激しく膝をぶちこんでゆく。
大陰唇と膣口が裂けて鮮血が滴り落ちるが、更に力強く膝を入れる莉央。

「汚い血、流さないでくれる？　あたしの膝が汚れてるじゃん？　えいっ！」

『ドカッ！　グシャっッ！　ドコォッ！』

「いだああっ！！　んぎゃあああああっ！！　やめてえええっ！！」

「後少しで砕けるから我慢して。それえっ！」

『ドカッ！　ズゴッ！……バキバキッ！！』

ついに莉央の膝蹴りで膣口と小陰唇はズタズタに潰れて外部へめくり上がり、恥骨までも無惨にも砕かれてしまう。

「ギャァアアアアッ！！　死ぬうううううっ！！」

「わぁ～スッゴ……恥骨砕いてやったら小陰唇めくれちゃって子宮口まで丸見えだぁ♡」

愛衣はそっと右手の指を膣に挿しこみ、内部を確認した。

「うわ！ぐっちゃぐちゃ……莉央様本気の膝を１００発近く喰らえばそりゃこうなるか……外性器どころか恥骨と膣内まで破壊されちゃってる……」

「愛衣！　遊んでないで早く兄のチンポ入れちゃって！」

「はーい、莉央様♡」

血まみれの幼女の性器に容赦なく挿入させられる兄のペニス。
今度は恥骨が砕けているため簡単に挿入されていった。

「ほ〜ら！　お兄ちゃんのオチンチン……入るよぉ？」

愛衣は頬を紅く染めながらヤラしい笑顔で破壊された膣へペニスを挿入させた。

『ズチュ！　ズボオッ！！』

「んああっ！！　痛い痛い痛いいいいっ！！」

「ほらほら！　激しく腰振って妹ちゃんイカしてやれぇ♡」

『ずっちゅずっちゅずっちゅずっちゅ！！』

顔面をボコボコにされた上に、両手の骨を折られ、恥骨まで砕かれて強制セックスさせられる兄妹は、麻酔も効いてきたのか少しずつ下半身に快感が訪れる。

「み、美由……ごめんよ……股が血まみれなのに僕のチンチン突っ込んじゃって……ほんとごめん」

「んんんっ！　あ、あんっ！　でもなんか……変な気持ちになって……きちゃう……何この感じ？　あんんっ！！」

裂けた小陰唇がめくれあがり、ペニスを出し入れする度に浩介のソレを包み込むように擦れている。

「兄のペニス……子宮口まで届いちゃってるみたいですね？　あれだけ気持ちよくなってるところ見ると……」

「あはは……ビラビラとか膣が中までズタズタなのに喘ぎ出しちゃったね～。ほんと残酷なエッチってエロくて良いわね♡」

「愛衣も少しヤラしい気持ちになってきちゃいました……今夜は抱いてくださいます？」

「あたしも……久しぶりにエッチしようか♡」

「はいっ♡」

そんな気楽な会話をかわしながらも激しく浩介のお尻を押したり引いたりしながら強制性交を続けさせる愛衣。

「わぁあっ！？　なんかおかしくなりそう！　き、気持ちいいっ！！」

「お兄ちゃん！　わ、私も変な感じ……あぁあぁんっ！！」

『ドピュッ！　ドクドクッ！』

『プシャ～！』

ついに6歳の妹の子宮口にタップリ精通となる人生最初の射精をしてしまう9歳の浩介であった。

妹の美由も、6歳にして人生初めてのオーガズムを幼女ながらに達成してしまう。

「精液がマンコから溢れ出てきました。妹の尿道からは潮も……二人とも完全にイッちゃったみたいですね」

「うん。精通のくせに妹ちゃんの中にこんなにたくさん中出ししちゃうなんて……コイツ最低ね？……ま、人生最初の射精とオーガズムが人生最期のソレになっちゃうんだけどね……後ろも初めてでしょクソガキ？」

莉央は人差し指をピンと立てると、妹に抱きついたままヒクヒクさせている浩介の肛門へ一気に奥まで突き入れた。

『ズボッ！！』

「やあっ！？」

「ふん！　何を女の子みたいな声出してるの？　妹を犯した最低アニキさん？」

莉央は、自分たちのせいで起こってしまった近親相姦なのに、冷たく囁きながら直腸を掻き回す。

愛衣と莉央の二人で兄妹を引き剥がすと、簡易ベッドに一人ずつ寝かせて拘束ベルトで両肘と両膝を拘束する。

更に大量の痛み止め麻酔薬を全身数箇所に打ち、いよいよ解体作業へ進むのであった。

『ヴィイイインッ！！　ブルルルルンッ！！』

電動ノコギリのエンジンをかけて、高速で回転刃をブン回す拷問処刑人の少女たち。

目隠しをしてから愛衣は浩介を、莉央は麻由を……それぞれ両手両脚を切断してゆく。

「ダルマ男！　できました♪」

「こっちもダルマ女……できたよ♪　綺麗に肘上と膝上から切れてるじゃん！　腕を上げたなぁ愛衣」

「ありがとうございます♪」

強力な痛み止めの麻酔薬と、血止めの注射までも大量に打たれている二人は、失血死もショック死も許されないまま、四肢切断されてもなお、拷問を続けられてゆく。

「ほら、お互いの姿を見て感動するのよ？」

莉央はそう言いながら妹の目隠しを解いた。
それと同時に愛衣も兄の目隠しを解く。
兄妹は、しばらくきょとんとしながらお互いの姿を見つめ合っていたが、この瞬間あたりからもう生きては帰れない事を悟り始めていたのであった。

「美由！？……わーんわーん！！」
「お兄ちゃん！？……こんなことするなんて酷いよおおっ！！　わーんわーん！！」

ダルマにされたまま再び二人からの暴力が始まる。

「責める相手交換しよ。あたしの鞭でとりあえず浩介の全身の皮剥

いてあげる」
莉央は革の鞭を取り出すと、地面へ思いっきり叩きつけた。
乾いた音を立てて砂や土が激しく舞い散る。
「スッごい破壊力ですね莉央様……なら私は……真っ赤になるまで焼いた日本刀で美由を責めますわ」
セーラー服姿の二人の美女による、鞭打ちと全身焼きの拷問は半時間ほど続けられる。
強力な麻酔薬のお陰で痛みは殆ど感じなかった二人だが、腹部側のみが鞭で全身の皮が破け、真っ赤な肉ダルマに変形している浩介と、美由も腹部側全身の皮が水脹れになって剥がれ落ち、大火傷を負った。
「莉央様？　オチンチンにのみ完全に鞭が当たってないみたいですが？」
「あはは♪　そーだよ。チンポだけが完全無事ってのがまたエロいでしょ？」
「うふふ♡　ホントですね」
「そうゆう愛衣だってオマンコだけ焼いてないじゃん？　膣も小陰唇もズタズタだけど……クリトリスと尿道はほぼ無傷で置いてるから安心して」

「そうですねぇ。このまま日本刀で焼き付けるのも面白くないので……このハサミで切り取っちゃいます♡」

「クリトリスを？　もう麻酔効果も少し弱待ってるから……手脚の切断面もそうだけど……ソコは超激痛だと思うよ？」

そう言いながら浩介の腹部側で唯一無事であるペニスを握りしめる莉央。

ゆっくりと腹部へ向かい剥いてゆく。

「ここだけ最期まで無事とか甘いわよ。とりあえず仮性包茎手術やったげるわ♡」

『グリッ……ズズズ………むりゅりゅりゅりゅっ！』

小学六年生のアイドル、兼、拷問処刑人の少女によって無理矢理引き剥かれてゆく数時間も強制的に勃起させられたままの哀れなペニス。

「んぎゃあああっ！！　オチンチンが痛いいっ！！やめてえええっ！！」

「だめ。ズル剥け赤チンポにしてやるからね？　根元まで剥けろっ！　ほらあっ！」

『バリバリッ！！　ブリュンッ！！』

「ぎゃあああああああっ！！」

根元まで引き剥かれたペニスからは数ヶ所から血が滲み、全身と同様真っ赤に染まっていった。

「妹ちゃんを犯しちゃったんだから……快感の次は地獄を味わうのよ。あははは♪　血と一緒にまだセーエキ噴き出しちゃってるぅ……生産力高いキンタマね。それとも尿道にたくさん残ってたのかな？」

顔面や手脚の激痛と、全身の激痛がかなり強くなってきた上に、中でも鮮明な陰部の激痛が兄の浩介を狂わせてゆく。

訳のわからない言葉を叫びながら発狂し始めたのであった。

「あらら……お兄ちゃんもうあの世へ逝きたいんだってさ。あなたも激痛で見守ってあげちゃおうね？　えい」

『ジョキンッ！！』

「ギャァアアアアッ！！　んぎいいいいいいっ！！」

愛衣はハサミで一気に妹のクリトリスをちょん切ると、指先で弾いて浩介の顔に飛ばした。

莉央はメスを手にして痛々しくそそり勃つ9歳児童のペニスを雁首から切断する。

「カリクビからいくわよ？　ほら！」

更に激しく絶叫を始める浩介だったが、次は根元からペニスを切断。

「やだ莉央様……わざわざ二段階で切断しちゃうなんて……」

「まだキンタマが残ってるんだけど……陰嚢だけ剥くように切り取って生の睾丸プランプラン揺らしながらトドメ刺しちゃおっか？」

「なんてエッチな……敢えて潰さないで生キンタマ揺らしながら殺しちゃうなんて♡」

「最後は潰しちゃうかも……てへ♡」

『ズズ！　ズズズ！』

器用に陰嚢だけをメスで削ぎ取ってゆく莉央。

何十回とメスを入れながら少しずつ丸裸にされてゆく小さな睾丸……。

皮を切り取るごとに肛門がビクビクと痙攣するのを見て吹いてしまう莉央だった。

「よし！できた♡」

『ピン！……ぷらーんぷらーん……』

片方の生の睾丸を中指で弾くと、勢いよくもう一つに当たり、二つとも並んで激しく揺れ動いた。

莉央は、爆笑しながら手足は無いが四つん這い体勢にさせたまま、再び身体を拘束し始める。

両脇と二つの脚の付け根、股関節にロープをくくり、丈夫な木の枝に吊るしあげ、浩介の高さを腰の位置まで調整する。

「ヨシ！　ちょうど良い高さね。さ、また責める相手交換！　愛衣の串刺しショーを始めましょう」

「わかりましたぁ！　日本刀でのアナル串刺し！　いつ見ても興奮しますよねー♡」

「戦国時代から幼児の処刑には串刺しが採用されてたみたいだし……狂ったように叫び続けてるこの子がどんな顔に変化してゆくのか楽しみだわ」

愛衣は既にほぼ冷め切った常温の日本刀を中段に構えて浩介に歩み寄る。

「はぁ、はぁ、はぁ、あううあああ……ひーん！ひーん！」

「うふふ。泣き疲れて少し冷静になってんじゃん？」

「あはは！　ほんとだ。相変わらず顔面ボッコボコのままだけど……背中やお尻は鞭打ちしてないから綺麗なままなんだよね。さぁ愛衣、アナルからブッスリいっちゃお！」

「はーい。じゃあ今から瀧田浩介の処刑を執行します。肛門から刺し込んであげるわ。いっぺん、貫通されてみるぅ？」

刃を下向きにして切先を肛門へそっと近づけながら冷ややかな笑みを浮かべる愛衣。

「わーん！　わーん！　死にたくないよお！　許してくださいいいっ！！　えーんえーん！！」

麻酔が再び効き始めたのか、急に狂乱状態から命乞い状態にスイッチが切り替わる浩介に、莉央も少し驚いた。

「こんなパターンもあるんだ……かなり多めに麻酔打ってあげたから……」

「そんなの刺しこまれたら死んじゃうよぉ！　お願いおねえちゃん！　僕を許してくださいいいっ！　えーんえーん！！」

「ダメ。妹ちゃんの見てる前で串刺しにしてあげるわ。さぁ肛門の力を抜きなさい！　いくわよ？」

『ツプ！』

「いぎゃああっ!?　やめてええっ！！」

『ズブブブ！……ザクザク！！』

ゆっくり１５センチほど切先が肛門から直腸へ突き刺さる。
睾丸側の肛門括約筋は下向きの刃によってパックリと斬られ、大量の血液が辺りに飛び散る。
更に切先をお腹側に調整して、Ｓ字結腸を突き破り、更に更に前立腺までをも突き破った。

「ほら、この辺りでしょ？　前立腺って。気持ちいいのを感じる臓器だけどさすがにブッ刺されたら激痛だよね？」

「ぐわあああああっ！！いだいいいいっ！！」

更に角度を調整して斜め下へ抉り込む。

『グリッ！　ザシュウウッ！！……ぴゅーっ！！』

ヘソから勢いよく飛び出す切先と鮮血を目の当たりにした浩介は、白目を剥いて首を左右に振りまくる。

「ほれほれほれほれ！　生の金玉に往復ビンター♡　あははは♪」

『ぱんぱんぱんぱん！』

愛衣に串刺し刑を執行されながら莉央は横槍を入れてくる。この生の睾丸叩きがシンプルだが超激痛を与えることとなった。全身に電気が走ったように莉央の平手打ちが入るごとにビクビクと上体を仰け反らせて苦しんだ。

「そのタマ、プランプラン揺れまくってウザいですから切断しちゃっていいですか？」

「待って！せっかくまだ神経繋がってるんだから……これで潰してからにしよう」

莉央は大型ペンチを鞄から取り出すと、右、左と順番に潰してゆく。

「一つ目はゆっくりね！……んで二つ目は……一気にぶっ潰す！！」

『ギュウウウウ……くしゃ！……ギュッ！！……ブチュッ！！』

吊るされたまま大痙攣を起こし口を開けて泡を噴き始めた。
愛衣は一度肛門から刀を引き抜き、再度口へ向かって真っ直ぐに挿入し直してゆく。
「ほら、浩介！　まだ死んじゃダメよ？　私のアナル串刺し刑が終わってから死になさいね？」
『ズッ！　ズブブブブブッ！』
大腸、小腸、胃を突き破りながら遂にその切先は口から水平に飛び出してきた。
『バシュッ！……んおうっ！？　ゴポゴポゴポッ！！』
口から鼻から……ペニス切断面からまでも大量に血の泡を噴き出しながら更に激しく痙攣してついに動かなくなる浩介。
ようやく死ぬことを許された瞬間だった。
お尻に右足の裏を当てがい、一気に肛門から日本刀を引き抜く愛衣。
『ザシュッ！！……ピピッ！！』

裂けたヘソに再度外側から突っ込んで胃まで掻っ切ると、ドバドバとハラワタが地面に降り注ぐ。

「きゃ、キャアアアアッ！！」

放心状態から急に意識が戻ったのか、兄の残虐な死を見せつけられた美由は、狂ったように泣き叫び始める。

「あはは……垂れ落ちた腸からホカホカ湯気が出てる～。生々しくて可笑しいわ」

莉央は大腸や小腸を足の裏で何度も踏み潰しながら美由へ微笑みかける。

「いやあっ！　許してっ！　やめてっ！」

「はぁ。四肢切断されてクリちゃんまで切断されて……そんなになってまでまだ生きたいの？」

愛衣は優しく髪を撫でながら呆れたように囁く。

号泣しながら命乞いを続ける美由。

そっと鏡を置いて四肢切断されて前歯も抜けて顔面がボコボコに腫れ上がっている姿を見せつける莉央。

「ほら、こんなになっちゃってるのよ。鞭打ちで二つの乳首まで千切れちゃってるし……アソコはびらんびらんになって子宮口まで丸見え……もう死にたいよね？」

「う、うう……あーん！あーん！やだあああっ！！わーんわーん！！」

現実を受け入れられない幼い小学一年生の女の子は、現実逃避を始めるかのように泣きじゃくる。

「莉央様、コレを」

「さんきゅ！」

『カチャカチャ！カシャン！』

「まだ無事な穴があるわね？穴とゆう穴は全て犯して破壊してあげるから覚悟しなさい」

長さ20センチほどもある歪に反り上がった形のバイブをペニスバンドに装着して、美由を背後から抱き上げると、そっとバイブを股間へ近づける。

「ひいい！？　な、なにを！？」

「ペニバンで犯してあげる♡」

『つぷ……』

「やあっ！？　だ、だめええっ！！」

『ズボボ……ばちゅうっ！！』

超長いバイブはズタズタの膣内を簡単に通過して、子宮口まで辿り着くと、瞬時に突き破り子宮の奥の奥の粘膜まで到達した。

「んぎゃああああっ！！　いだいいいいっ！！」

『バチュバチュバチュバチュ！！』

大きく激しく腰を振り、子宮の奥まで内臓を犯す莉央。
膣や小陰唇の肉片が、腰を引いてバイブが膣口から抜け出てくるたびにボタボタと莉央の足元へ垂れ落ちていった。

「すっごい凄惨なペニバンレイプですね莉央様……マンコの肉片がブチュブチュと垂れ流れてますわ」

「あへあへあへえっ！！ヒィやあああああっ！！」

「あはは！６歳女子児童のアヘ顔だよ！ボコボコの顔面でアヘ顔さ
れても怖いよね？」

莉央は美由の顔を覗き込みながら尚も激しく腰を振り続ける。

快感と激痛を同時に味わっている少女は大量の便を漏らしてしま
う。

「きゃっ！？」

莉央は咄嗟にバイブを引き抜き、さっと後方へ身をかわした。

「危なかったですね莉央様……今のオイタのお仕置きしときますね」

『パンパンパンパンパンパン！！』

「はぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃああっ！！」

愛衣の猛烈な平手打ちが美由のお尻の肉を襲う。

火傷だらけの腹部とは違い、まだ白い肌を残している背中側であ
ったが、みるみるうちにお尻は真っ赤に充血していった。

「このトカレフとかゆう拳銃……安物で命中率悪いらしいのですが
……これだけ近いとまず外さないですよね？」

愛衣はトカレフ拳銃を鞄から取り出して地面にうつ伏せでもがいている美由の肛門へ銃口を差し込んだ。

『ズブ！』

「ひゃあっ！？そ、そんなとこにピストルなんてやだあっ！！」

「そのトカレフね……アナル撃ちの場合は腸を二、三枚突き破って止まっちゃうくらいに火薬の量を調整してるらしいから」

「へええ……じゃあ直ぐ死んじゃうこともないから拷問用には持ってないですね？」

「そだね。そのまま便までお漏らししちゃう汚いアナルに撃ち込んじゃって！」

「はい」

愛衣は目を細め、少女の肛門に差し込んだトカレフのトリガーに指をかける。

パックリ開き切ってしまっている膣口から子宮や膣の肉片をブリブリと吐き出してながらもダルマにされた身体を捻り、必死で銃撃をかわそうとする美由だったが、直腸深くまで銃口を捩じ込まれ、口方向へ水平に構え、ついにトリガーが引かれた。

『パンッ！！』

「ごはあっ！？……ゴポポッ！！」

一撃打ち込んだだけで大量の血を口から吐き出すのを見て、莉央は首を傾げる。

「あれ？なんか威力強すぎるような……血を吐いたってことは軽く胃までは貫通しちゃってるわね……」

「そうですね……もう一発だけいいですか？」

「いいけど……同じ方向には撃たないで。まだ死なれたら困るから」

「はい。面白いことを思いつきました」

そう言いながら愛衣は兄のように四つん這い体勢で拘束して自分の腰の位置まで吊り上げる。

「もういっぺん、撃たれてみる？」

『ズボッ！』

「ごはあっ！！ゴポポポポッ！！ドクドク」

白目を剥いて血の噴きだしながらも再度肛門へ銃口を捩じ込まれる美由。

「ゴポゴポ吐血してるときに申し訳ないんだけど」

『パンッ！！……ボコオッ！！』

ヘソの穴から飛び出す銃弾。
続いて破れた小腸が数センチ飛び出してきた。

「やるなあ愛衣！オヘソ内側から撃ち抜いちゃうなんて……あたしでもズレちゃうかも」

「えへへ。やった！」

「ヘソから抜いちゃおっか？　今からあたしにもやらせてね」

莉央は、その少しはみ出したハラワタを鷲掴みにすると、左右の手を使ってズルズルと引き摺り出してゆく。

『ぎゅっ！……ズルルルルルルッ！！』

「ぎゃほほほははおっ！！……ゴプッ！！ゴポポポッ！！」

「美由……もう叫ばないでいいから大人しく血を吐いててくれる？」

静かに微笑みながらどんどんどんとハラワタを抜きとってゆく莉央だった。

激しく全身が痙攣を始める。

「愛衣！もうこの子死んじゃう！　その前にエロいトドメを！」

「うふふ。はーい莉央様」

愛衣は斬撃力の高い円月刀を手にすると、背後に周り真っ直ぐ振りかぶった。

「一直線に……醜く開いた臭い穴を二つ……叩ききってあげる！……やあっ！！」

『ズバアッ！！』

「ピギィイイッ！？……がくっ！」

「人を殺せば穴二つ……真っ二つにされちゃうのよ？　思い知った？」

思いっきり振り下ろされた円月刀は、６歳少女の股間から胴体を

真っ二つに揺っ斬る。
肛門、会陰部、膣口と見事に股間のど真ん中を……。
その瞬間、瀧田美由は6年とゆう短い生涯に幕を閉じることになった。
「スッゴ……エロい死に方だわ♪　腕上げたわね愛衣。しかしすごい威力ねそれ……」
「はい！　ありがとうございます！」
『ドバドバドバッ！……ズルルルルッ！』
股間から胸くらいまで切開された身体からは様々な臓器やハラワタが飛び出して地面に降り注ぐ。
『ビチャビチャ！！……ズルル……ビチャビチャ！』
「やだ……なんてエッチなの♡　子宮と卵巣まで真っ二つになって地面に落ちちゃってる」
莉央は子宮と卵巣を足の裏で踏み潰し、ミンチにしながら頬を紅く染める。
そのまましばらく胴体下半分全開に開かれた遺体はプランプラン揺れていたが、愛衣は横へまわり込み、再度円月刀を振り下ろした。

「内臓撒き散らしながらの胴体に頭くっついてたら死んでも恥ずかしいよね？　今更だけど……斬っといてあげるわ」

鮮血を撒き散らしながら何度も空中で回転しながら首が吹っ飛ぶ。

『ザシュッ！！　くるくるくるっ！……ズシャッ！！』

莉央の足元に見事に着地する少女の生首。
愛用しているベレッタＭ９３Ｒを取り出すと、頭部めがけて何度も撃ち込む。

『パンパンッ！！　パンパンッ！！』

脳みそが辺りに飛散し、莉央と愛衣の制服にも降りかかる。

「生まれ変わってきたらもう人を殺しちゃダメだよ……」

飛び出した一つの目玉を手に取り、亡骸の正気のない瞳を見つめながら呟く莉央だった。

幼き犯罪者（後編）（後書き）

「愛衣！ちょっと来て」

「は、はい莉央様」

幼い兄妹の無惨な遺体を見つめていると急に呼ばれる愛衣。

『スルリ』

「やっ！？」

いきなり制服のミニスカートの中へ右手を滑り込ませる莉央に、思わず声をあげてしまう。

『ススッ……くちゅ』

「あんっ！」

パンツの中にまで滑り込んできた小さな手……いきなり中指が愛衣の膣口へ挿入されてきた。

「やっぱビショビショかぁ。今夜は何度も潮ふかせてやるからね？　あはは♡」

「やん……莉央様♡　愛してますぅ～♡　小さな子の処刑ってホント興奮しちゃうんですよね……」

「あたしも……幼く小さな男女の性器破壊……昔から濡れちゃうの……」

菅野莉央も、太ももに愛液が流れ落ちるほどに興奮していた。
彼女たちにとって、罪人たちを残酷にエロく処刑することは、性的興奮をより増幅させるものであった。
残酷な拷問処刑を普通に執行し終え、血まみれのセーラー服を風に靡かせながら抱きしめあい、手を繋いで簡易な港へ向かう二人であった。
残酷処刑島に新たに二つの遺体が加わった……。

とあるオッサンの穢れた夢（前書き）

小さな女の子にしか性的な魅力を感じなくなった男がいた。
ついに超えてはいけない一線を超えてしまう男に訪れる悲劇とは？

とあるオッサンの穢れた夢

「ついに拐ってしまった……もう後に引けない」

午後９時、秋祭りの花火大会も終わり、各屋台も後片付けが始まった。

親とはぐれたのか、神社の境内にある山道、獣道へと続く人気のないその道へやってきた１０歳の少女は、トイレが我慢できなくなったのか、浴衣を捲り上げて小便をし始めた。

木々のせいで、俺の存在には全く気づいていないようだった。

『間違いない。月明かりでうっすら見える横顔……小学生の少女だ』

若い頃から小学生の女の子にしか性的欲求が湧かない。
自分でもお墨付きのロリコン中年はこの俺だ。

俺はこの神社のある山の全ての地理を知り尽くしていた。
幼い頃早くに交通事故で同時に他界した両親から、よくお祭りに連れてきてもらっていたからだ。

母方の祖父の残した莫大な遺産を持つ母方の祖母に引き取られて、この町へやってきたのは俺が小学生の頃だった。
それから２０年、俺ももう３０歳になる。

初恋をしたのも小学生の女の子。
だがその頃なら俺も小学生だったので、間違えてもロリコンとゆうことにはならない。

現実と非現実の超えてはいけない一線を超えてしまった俺は、後悔と興奮の伴う、何とも言えない訳のわからない感情になっていた。

「ほら、もっと舌を使って舐めるんだ。噛んだりしたら殺してやるからな？　まだまだ死にたくはないだろう？」

「うぐ、んんん！……ペチャペチャ！　ペロペロ」

脅されながら必死で俺の男根を貪り舐める少女は、間違いなくビデオや人形ではなく、生身の小学四年生の女の子だった。

「そ、そうだ。うっ、気持ちいい！」

『ドピュッ！　ドクドクッ！』

「んごっ！？　オエエエッ！！」

夢にまで見た女子小学生の子によるフェラ……口内射精。
なんて気持ちがいいんだ。
泣きながら、むせかえりながら、俺の精液をヨダレのように垂らしながら手の甲で拭き取る姿を見てるだけでまた勃起してきた。

俺は水色の可愛い浴衣を少しずつ脱がせていったんだ。
必死で抵抗していたが、その度顔面を平手打ちしてやったら、最後には大人しくなった。

「やっぱり小学生は純白が一番だな」

真っ白な汚れを知らないパンツに手をかけ、一気に膝までずりおろすと、一層激しく泣き始める少女。
素っ裸にさせた後、強引に四つん這いにさせると、微かな膨らみを持つ胸を背後から両手でもみしだきながら、俺のギンギンになったチンポを彼女の股関へ擦り付けた。
まずは禁断の聖域を指でさすりながら、左右に広げて中身を凝視する。

『クパァ〜』

「やだあっ!?　そんなとこ見ないで広げないでぇえっ!!　わーん!!　わーん!」

１０歳の少女のオマンコだ。
押し広げて膣が丸見えになると、俺は衝動を抑えきれなくなってきたんだ。

「入るかな？」

オマンコが小さすぎてたっぷりとローションをつけないと挿入は無理だと思った俺は、ペペローションをタップリとチンポへ塗りたくる。

そしてまず亀頭部を膣口へ押し付けた。

『ピト……』

「ひっ！？　な、なにを！？」

「動いたら殺しちゃうよ？　痛くてもジッとしてるんだ」

「やめてぇっ！　そんなとこ触らないでぇえっ！」

「触ってるんじゃなく俺のチンポが当たってるんだよ？　キミのオマンコにね」

『メリメリ！　ズブ！　ずちゅちゅちゅちゅちゅ！』

「ギャアアアアッ！？　痛いいいいいいっ！！」

俺は根元まで無理矢理チンポを突っ込んだ。

かなりキツいし締め付ける。

一度抜いてみると処女膜や膣道からの出血かわからないが、血まみれに染まっていた俺のチンポ。

奇声をあげながら腰を落とす彼女の尻を両手で持ち上げて四つん

這いをキープした俺は、激しく腰を振りまくっていた。

『パンパンパンパンパン！！』

「ひぎいいいいっ！　こ、壊れちゃうううううっ！！」

首を激しく左右に振りながら号泣する彼女だったが、構うことなくそのまま腰を振り続けた。

「うっ！　イ、イクッ！」

『ドピュッ！　ドピュピュピュピュピュピュウッ！！』

「やあああああっ！！」

二回目の射精は、女子小学生のオマンコに中出しだ。

俺は夢が叶った嬉しさと、女の子が可哀想とゆう情けと……色んな感情が入り混じっていた。

家族のもとへ帰したら間違いなく精液の鑑定で捕まっちゃうなぁ。

殺すのも可哀想だし……。

「ごめんね。キミ、名前なんてゆうの？　今更だけど」

「ぐすん！　ぐすん！……今田……優子」

「優子ちゃんか。ちょっと昭和っぽいけど可愛い名前だね？」

俺は下半身だけじゃなく上も脱いで優子ちゃんと同じ素っ裸になると、そのまま彼女を抱きしめてキスをした。

「むぐっ！？　んんんんっ！！」

かなり抵抗して口を固く閉ざすが、手を振り上げて叩く素振りを見せると、すぐに従順になる優子ちゃん。

俺は舌を優子ちゃんの口内へ捻じ込み、舌を絡めたり吸ったりして、ハードな大人のディープキスを教えてあげたんだ。

肩まで伸びたミドルのストレートの髪から、シャンプーのいい香りが鼻をくすぐる。

それから六年間、俺は今田優子ちゃんを部屋に監禁し、食事からお風呂、排泄まで全てを管理して毎日のように性的欲求を満たすために利用した。

「腹が膨らんできたな……優子ちゃんも、もう１６歳か……」

「はい。道人様」

俺を主人のように呼ぶように躾けてきたお陰で、かなり従順な奴隷と化していた彼女は、幾度にも及ぶ性行為でついに妊娠してしまうのであった。

「弱ったな……産婦人科なんかに連れて行けないし、俺に赤ちゃん産ませる補助なんて出来るわけないし」

本気で弱った俺は、下の部屋で何も知らないままいる９９歳になるお婆ちゃんに頼ることもできず……彼女を殺すことにしたんだ。だってもう女子高生になる年頃だし、あまり興奮しなくなってきちゃったから……。

やっぱりキツキツマンコの小学生を犯すのが俺の昔からの夢だった。

大人になったこの子にもう用はない。

働かなくても生きていける財産の蓄えはまだまだこの家にはある。外で働いていなければまず捕まらないだろう……。

俺は彼女を確実に仕留める為に、近所のホームセンターへロープを買いに出かけたんだ。

『握力自信ないからな。絞殺するならロープを使わないと……刺して血まみれになるのも部屋が汚れちゃうしな』

そんなことを思いながら祖母の家を出て狭い側道を抜けて国道へ

出る。

「岩田道人だな？」

「な、何だお前たちは！？」

「外道に名乗る名前は持ち合わせていないが……冥土の土産に教えてやる。特殊任務省の山内だ。それに川内、原内」

ガタイのいい三人の男たちに取り囲まれて無理矢理連行されてゆく俺。

黒塗りの車へ押し込まれてからも、後部座席で両脇を固められ、絶対に逃れられない状況だ。

「よくも六年間も今田優子さんを監禁し続けたもんだな？　あの子の人生、大切な青春の時間をお前みたいなクソ野郎に奪われた気持ち……分かるか？」

「え？　は？　な、なぜそんなことまで知っている！？　とゆうかお前たちは一体何者だ！？　警察じゃなさそうだけど？」

運転しているリーダーらしき男に何度も質問をしてみたが、やはり腑に落ちない。

「あのな貴様。とりあえず貴様を本日捕まえたのが警察じゃなく、僕たち特殊任務省だったってことが……最大の不幸だった、と伝えておく」

「そうそう。警察がついにお前の少女拉致監禁を確信してから、私たちに任務代行を通達してきたんだ。それは普通に裁いては決して死刑にできない悪党たちを……確実に死刑にするためにな」

運転してるのがリーダーの山内として、今両脇から話しかけてるのは川内と原内とかゆう奴か……。

しかし俺が死刑だと！？

ど、どうゆうことだ？

俺は確かに少女を六年間監禁して強姦もしてきたが……殺しちゃいないぞ！

今日殺すつもりではあったが……。

人一人殺してもいないのに死刑なんかあり得ない！

辛抱しきれずに俺は叫んでしまっていた。

「ふざけるな！　確実に死刑にするためだと！？　俺は人を殺しちゃいないんだぞ！？　死刑になんてなってたまるかよ！！」

しばらく三人の男たちは黙っていたが、運転している山内とかゆう奴がそっと口を開いた。

「お前が小学生の女の子にしたように……お前もまた小学生の女の子からお仕置きされるんだ。皮肉な事だな……」

小学生からお仕置きだと！？
また訳の分からないことを言いやがって……。
俺の中で段々と現実味を失ってゆく気がした。
これはもしかしたら夢なんじゃないのか！？
もしかしたら女の子を拐ってきた時からすでに夢だったのかも……。
そんなことを考えているうちに俺の意識は無くなったみたいだった。

「――――ん！？　ま、眩しい……」

「オッサンおはよー！」

なんか可愛い女の子の声がするぞ？
瞼を閉じていても眩しかったが俺はそっと目を開けてみた。

「ん？……な、なんだ！？　可愛い小学生の女の子が三人も！？」

セーラー服姿の少女三人は、どこかで見たことがあるような気がした。

「あっ！？　真絆ガールズの小学生トリオだっ！！……一体なぜキミたちがこんな所に！？」

「こんな所にって……あなたがこの場所を何処なのかさえ分かっていないのに……バカなの？」

挨拶してくれたのは目を閉じてたから誰か分からなかったけど、今俺の質問に激しく罵倒してきたのはメガネっ子がウリの薄い茶髪ポニーテール……結城明日香だな。

黒髪ロングがボーカルの菅野莉央……ツインテールのバカキャラが富田美香だったな確か。

ってゆうかいつの間にか俺、素っ裸にされちゃってる！？

しかもクイに縛り付けられてるし……。

「六年間も当時四年生だった女の子を拉致して監禁するなんて……ほんと最低なクズ野郎ね。しかもぼちぼち優子ちゃんを始末しちゃおうとか思ってた頃でしょう？　ロリコン変態岩田道人！　今からあたしたちがあなたを拷問処刑執行します。覚悟してね？」

「ご、拷問……処刑？　え？　ど、どうゆうこと？　あの三人の男たちが言ってたことがまさか本当なのか！？」

いまだに夢と現実の区別に苦しんでいる俺だったが、彼女たちが言うにはどうやら俺の誘拐と監禁は警察にバレちゃって、その警察から特殊任務省とかゆう変な機関に連絡がきて、昨日の男たち三人が俺を拉致し、薬で眠らされたまま次の日に当たる本日、この島で

目覚めたと……。

そして俺は拷問を受けて殺される。

え？

こんな可愛い顔した女子小学生のアイドルに俺は殺されるのか！？

バカな……そんなこと出来るわけが……。

『バキッ！！　ドカッ！！　グシャッ！！』

「ふぎぎいいっ！？」

俺はあまりの激痛に、この変な場所で拘束されて、女の子から拷問を受けている、とゆう現実を受け入れざるを得なくなったのだ。

菅野莉央は拘束された俺の顔面を拳で何度も何度も殴りつけてきた。

「ぐわあっ！？　痛いいっ！！　ぎえええっ！！」

あまりの激痛に思わず声が出てしまう。

なんて破壊力のあるパンチなんだ！？

これがあの可愛い歌を歌っている菅野莉央か！？

そんなことを思いながら１００発ほど殴られた俺は、前歯は全てへし折れて、鼻の骨もグシャグシャになり、鼻や唇や瞼からは大量出血していたのだった。

「あなたの心に相応しい醜い顔になったわね？　おめでとう♪」

莉央は冷たく笑いながら拳にビットリ着いた俺の血をハンカチで拭き取っている。

そのまま結城明日香は金属バットを手にして俺の手足を殴りつけてくる。

何度も何度も叩きつけられると、流石に成人男性の俺でさえ骨折しちまうってもんだ。

「がぎゃあああああっ！！　いでえええええっ！！　やめてくれええええっ！！」

メガネっ子、明日香の力は莉央より弱いと思ったがなんせ金属バットだったから激痛には変わらない。

俺の四肢の骨はバラバラになるまで金属バットで殴られたのだ。

激痛の最中、俺は拘束を解かれた。

拘束を解かれたと言っても手足の骨がバラバラでは何も抵抗などできない。

そんな俺を簡易ベッドに仰向けに拘束してゆく少女たち。

俺の全身数ヶ所に、莉央が注射を打ってゆくのが分かった。

みるみるうちに顔と手足の激痛が治まってゆく。

「ぐぐ……痛みが消えた？　な、何を打った？」
「麻酔だよ。今からあなたの好みの小学生アイドルによる手コキタイムしてあげる♡」
「え？　て、手コキ！？」
俺はもしかしたら本当に殺されるかも知れない……と、マジで危機感を覚えながらも、麻酔で体の痛みも消え、手コキを想像してみるみるうちに勃起してゆくのを感じた。
「ヤダなぁコイツ……これからあたしたちに殺されちゃうのにフル勃起しちゃってるし……あはは♪　この変態野郎！」
ツインテールの可愛い子ちゃん、富田美香が俺のチンポを見ながらはしゃぐ。
俺のタイプは一番バカそうだけど一番幼く可愛く見える美香だった。
「さぁ人生最期の大サービスだよ。誰に手コキしてもらいたいのか答えなさい！」
莉央が急かしてくる。
俺は恥ずかしいながらも富田美香を指名してしまうのだった。

「み、美香ちゃん……で」

「え〜っ？　あたしがタイプなの？　こんな顔面と心の醜いオッサンに好かれるなんてキモッ！」

本気で嫌がる表情を見せながらも俺のチンポを右手で握り込み、作業的な手コキが開始された。

「むっちゃカッチカチじゃん！　オッサンほんとキショ！」

『シコシコシコ……』

「うっ、うう」

「ほらぁ〜。小学生に手コキされる気分はどうなの？」

美香ちゃんの白い可愛い手が俺のチンポを握ってる……それだけでも興奮なのに手コキなんて……最後に殺されないのならなんて幸せなんだ……ついでに一発ヤラせてくんねーかな？

「ほら、何ぼうっとしてんの？　さっさとイケ！」

『シュコココココココココココッ！！

「うわっ！？　ううううっ！！」

『ドピュッ！！　ドピュピュピュピュピュウッ！！』

なんて速度でピストンするんだ美香ちゃん……そんな可愛いツインテール揺らしながら猛烈にシゴかれたら俺……無茶苦茶ヘリ出しちゃったじゃないか！？

「汚い液たくさん出しちゃったわね？　あたしの太ももに少しかかっちゃったんだけど？　オッサン早く死んじゃえよ！」

そんなこと言わないでくれ美香ちゃん……。

どうせもう……手まで俺の精液まみれじゃねぇかよ……。

「さて次は……トロコテン射精の刑だよ。あたしか明日香ちゃんかを選びなさい！」

「ト、トコロ……何それ？」

「肛門から指突っ込んでセーエキ絞り出すの」

「え……そ、そんなことまで……汚いぜ？」

「分かってるよ。でも生指突っ込んであげるわ。これから死にゆく哀れな者たちに敬意を示すためにも……ゴム手袋なんて野暮なもの使わないもの」

結局俺はそう言ってる菅野莉央本人を指名した。

「分かったわ。でもそれする前にね……最後まで選ばれなかった明日香ちゃんによる四肢切断刑が執行されちゃうの。心配しないで。射精させるためにも痛みは感じなくしてあげるから」

「お、おい、冗談だろ！？　や、やめて……く」

「さぁ小さく可愛くしてあげるね♡」

『ギュイイイインッ！！』

アクセルをふかして回転刃を高速で回転させる明日香に俺はひたすら許しを乞うのであった。

「や、や、やめてえええええっ！！」

「ほら、じっとしてないとオチンチン切っちゃうわよ？」

「ひいいいっ！！」

『ザシュシュシュシュッ！！』

「はぎゃあああああっ！！！！」

あまりのショックにしばしの間、意識を失ってたみたいだが……
痛みは全くない。
やはり夢なのか？

「うっ！？　な、なんてこった……手足がほぼ付け根から無くなってるじゃねぇか……包帯でグルグル巻きになっちゃってるがこれは血止めなのか？」

「そうだよ。いくらショック死を防ぐ注射打っていてもキツく縛らないと太ももの血管とかめっちゃブットいからね～。副作用で翌る日には死んじゃう薬なんだけど心配しないで。今日中にあたしたちが殺してあげるから♡」

そう言いながら長い黒髪を風に靡かせながら人差し指をピンと立てて俺のケツへ寄せてくる莉央がいた。

「きったない色してるねぇ……ほら、ここ？」

『ツプッ！』

「うはっ！？　ああう」

「莉央様、お尻の穴を掻き回してください、と言うの」

「え？……うう……り、莉央様、その可愛い顔と白い指で俺のお尻の穴を……か、掻き回してくださ……」

『ズボボッ！！』

「はぁうっ！！」

俺が全て言い終える前に一気に根元までブッ刺してくる莉央だった。

美香、莉央、明日香の順にタイプだが、みんな本当に可愛いぜ。

こんな子を監禁してレイプできたらなぁ。

もし俺が本当にこのまま処刑されるのなら……思い残すことはそれだけだぜ。

「ほらほら、オッサンねぇ……いくらあたしを褒めても煽てても拷問処刑は執行しちゃうよ？」

『グリッ！　ググプッ！　ズチュチュッ！』

「うはっ！　はひっ！　いひゃあっ！」

な、何だこのテクニック！？

ケツの穴の奥が気持ち良すぎて……これが前立腺マッサージとゆうやつか！？

『ズチュズチュ！！　ヌプププッ！！……くちゅくちゅ！！』

「ケツマンコ……くちゅくちゅいってるよ？　腸液ドクドク分泌しちゃってるみたいね。んふふ♡　そんなに感じてるんだ？」

もう正直どうでもよくなってきたわ俺。
四肢切断までされたらもう生きて帰れてもまともな生活できない。
もう全て受け入れていつも責めるのに喜び感じてた俺だが人生最期の日くらいは逆に女から責められて……興奮しても良いんじゃないか？
　そう思えてきた時だった。

『グチュチュチュチュッ！！』

「はううっ！！　イ、イクッ！！」

「イッちゃえ！」

『グリリッ！！　グチュチュチュチュッ！！』

「わあああああっ！！」

『ドピュッ！……ドクドクドクドク』

なんか手コキの時みたいに勢いよく飛ばないぞ？
だが無茶苦茶気持ち良かったな。

「これがトコロテン射精だよ。前立腺直撃で意外と気持ち良かったでしょ？」

「は、はい莉央様」

「よしよし。偉いわね。そのままあたしたちに最期まで敬語使ってなさい」

「はい」

なぜか責めたい女子小学生に逆に責められて興奮して射精させられるなんて……俺ってMも少しは持ってたんだな。

死ぬ前に分かってももう遅いか……。

「これからは本格的な拷問が始まるから……徐々に痛みも現れてくるけど……もう麻酔は打たない。地獄の激痛を味わいながら死んでゆくがいいいわ」

莉央が冷たく言い放つと、三人がかりで俺の身体を持ち上げて、胸と腰辺りを二箇所ロープで縛り、電動式の巻き取り器みたいなので木の枝に吊り上げてゆく。起立したような状態で少女たちの腰辺りの高さで固定された。

背後に回りこんだ美香は静かにこう言った。

「あたしの膝で……性器破壊してあげる♡」

「え！？」

「汚い液あたしの手や太ももにへリかけた罰よ。それっ！」

『ズドンッ！！』

「ぐわあっ！？」

「キンタマが先か……チンチンが先か分からないけど……ぶっ潰してやるからね？　えいえいえいっ！！」

『ズドッ！　ドカッ！　ズンッ！』

背後から膝で蹴り上げる美香の破壊力は絶大だった。

俺は睾丸に直撃するたびに白目を剥いて口から泡を噴いて苦しむ羽目になった。

「99……100！！」

『ズンッ！！　ズドンッ！！』

「はがががががあああぁぁ」

美香は100回股間は膝蹴りを終えると、岩田道人の正面に回り込む。

「痛かった？　あはは！」

「美香ちゃん……そいつのキンタマ……二つともミンチになっちゃってるよ？」

莉央が半ば呆れながらそう言った。

「ええっ！？　そうなの！？　気付かなかったホント……ごめーん♡」

激痛の中でも残酷な美少女たちの会話は俺の耳に届いていた。もう殺して欲しい……痛みがどんどん強くなってきたし。

「ぐぎぎぎいっ！！　もう殺してくれえええっ！！」

「はい。もう殺してとの哀願、頂きましたぁ♡」

明日香は満面の笑顔をみせると、細身の剣を手にして俺のヘソにブッ刺してきた。

「臭そうなヘソしてるね？　えい！」

『ズボッ！！』

「ぐぎゃあああああああっ！！」

明日香はゆっくりとその剣を俺の腹部へ刺し込んでゆく。

「オヘソから刺したこの剣……どこから出てくると思う？」

「ぐえええ……ぬ、抜いてください明日……香さま……」

「この辺りかな？　とおっ！」

『ズシュッ！！……ズポンッ！！』

「ぎゃはあああっ！！　いだいいいいいっ！！　し、死ぬうううう
うっ！！」

結城明日香の刺し込んだ剣はなんと俺の肛門から突き出てきた。
熱さと激痛が直腸や肛門に電撃のように鋭く走る。

「キャハハ！　やだ明日香ちゃんってば！　アナルから抜くなんて
……エロ過ぎ♡」

美香は大はしゃぎで喜ぶ。
俺は早く殺してくれと願いながら更に激痛の中、最悪の景色を見
ることになった。

莉央はメスを手にして、俺のチンポを切り刻み始めた。
しゃがみ込んで必死で切ってる……あ、パンツが見えた！

可愛ぃピンク色のパンツだ……なんて思ってるとついに手を止めた莉央。

「わあっ！　スッゴ！」

「見事に皮だけ削ぎ取って肉塊だけになったペニス……哀れすぎて笑えるぅ♡」

美香と明日香は莉央のあまりにも見事なメス裁きに喜びを隠さないでいたが、俺は絶望感しかなかった。
亀頭部の薄皮から陰茎全ての皮まで、全てメスで削ぎ取られていたからだ。

真っ赤に染まる俺のチンポ……なんてこった。
痛みまで鈍くなってきた……意識が朦朧としてきたし。
このまま俺は死んじゃうのかな？

「明日香ちゃん、ヘソからアナルへ貫いてる剣を抜いてくれる？」

「はーい」

莉央がそう言うと、明日香は俺のヘソから一気に引き抜いた。
その後は……莉央がメスでヘソを丸くくり抜き、肛門までくり抜いたんだ。
これまた激痛だったが、この痛みもまだ生きている俺は鮮明に覚えている。

可愛いセーラー服を俺の血で真っ赤に染めながらなんて残酷なことをするんだろうこの子たちは……。

そのまま俺の直腸と大腸は肛門から明日香に引き摺りだされ。
ヘソに手を突っ込んで小腸を引き摺り出したのは美香だった。
全てのハラワタが抜かれる頃には俺の意識はついに失われようとしていたんだ。

最期に莉央は俺の顔を覗き込みながらこう言った。

「あたしがあなたの肛門とオヘソをくり抜いたのは……人のパンツ覗いた罰だよ」

そ、そんな理由だけであんな酷い拷問を追加したのか莉央様……。

日本刀を手にした莉央は俺の首辺りに横向きに一閃したのが見えた。

景色が急に回転し始めた。

「あれ？　ピンク色のパンツが見える？……お、俺のダルマにされた胴体も……そうか。首を斬られたんだな俺は……」

「生首になってもあたしのパンツ覗くのね……さよならクズ野郎……」

莉央様のそのセリフを最期に聞いたのを覚えている。
岩田道人は三人の女子小学生から、ついに死ぬことを許されたのであった。

とあるオッサンの穢れた夢（後書き）

「莉央ちゃん、遺体からチンポ切断していい？」

「うん。ズル剥けにしちゃってるけどね」

美香は遺体の根元からペニスを切断すると、まな板の上に皮の剥かれた痛々しいペニスを置いて、縦方向に切開する。

「この真っ白な尿道を指で摘んで抜き取るのが楽しいんだよ♡」

「何をするかと思えば……ほんとエロくて残酷なツインテールちゃんだわ」

明日香は腕組みしながら解剖されてゆくペニスを見下ろしていた。
莉央は遺体の陰嚢を切り裂き、ミンチになった睾丸を指でほじくり出すと、ナマス切りにした陰嚢と共に、それもまな板の上に並べる。

「ちょっと刺身で食べてみる？」

「やだ莉央ちゃん！」

「でも……少しだけなら……どんな食感か気になるね？」

莉央たち三人は、禁断のカニバリズムを行ってしまった。

岩田道人のペニスと睾丸は、莉央たちによって一口二口だけだが食されるハメになってしまうのであった。

「おえ……」

「にがっ！」

「噛んでも噛んでも飲み込めない……陰嚢ってゴムみたい」

残酷処刑島に新たに一人の遺体が加わった。

転校生の失敗（前書き）

いきがるのがカッコいいと本気で思ってしまっている中学生。
調子に乗りすぎた転校生をお仕置きする美紅たち。
中曽根泰三の運命は？

転校生の失敗

「転校生かぁ……まぁ仕方ないよね」

「うんうん。まさかこの中学シメてるのが二年生だとは思ってもみなかっただろうし……ましてや女子だなんて絶対予想すらできなかったでしょう」

東部地方の南部にある甲南中学校。

学生であり、アイドルであり、拷問処刑人でもある鬼頭美紅と宮垣咲良が通っている。

その二人の親友である西村百合香と中田美佐子が転校生の方を見ながら静かに呟いた。

「二年四組の鬼頭と宮垣ってのはどこだ!？　この学校で誰が一番強いか教えてやる」

三年一組に先月転校してきた空手初段のいじめっ子、中曽根泰三（なかそねたいぞう）は、角刈りの頭でわざわざ上半身の制服とシャツを脱ぎ捨てて、ムキムキの筋肉を見せつけながら二年の教室で怒鳴り散らす。

百合香がそっと歩みでて、無言で美紅と咲良の方を指差した。

「あん!?……え?」

目を丸くして一瞬固まる中曽根泰三。

「お、女だと!?……ちくしょう一組の奴らめ。肝心なことを俺に教えなかったな。転校初日に俺にボコられたことを思い出させてやるか。クラスに帰ってもう一度ギッタギタにしてやる」

怒りを顕にしながら美紅たちに背を向けながら、シャツを着て制服を拾い上げ、さっさと帰ろうとする泰三。

「おーい! そこのお兄さん」

「あ? 何だ? 俺はガキや女(アマ)には用はない」

振り返りながら眉間にシワを寄せて美紅を睨みつける。

「この学校で誰が一番強いか教えてくれるんじゃなかったのかなぁ~?」

「そうだ。デカい口叩いといて逃げんじゃねーよ」

美紅と咲良は教室から去ろうとする泰三を挑発する。

短気な彼は即、顔面を真っ赤にして憤怒した。

「ああんっ！？　この俺が逃げるだと！？　このクソアマぶっ殺すぞ！？」

ツインテールを揺らしながら軽くステップを踏み始める美紅はすでに戦闘態勢に入っていた。

「美紅がやるのか？　あたいがやりたかったのに」

「コイツかなり強そう。咲良とは五分五分ってとこかなぁ……今回はあたしに任せといて」

「あー。やっぱあたいは美紅より弱いんだ……ショックぅ～」

「あはは……まぁそう拗ねない。咲良、見ることもまた戦いだよ」

「どっかで聞いたセリフだなそれ……ト、トキじゃねーか！」

冗談っぽく話し合う美紅と咲良に泰三の怒りは頂点に達した。

「黙れゴラァッ！！　マジでぶっ殺してやるからなっ！！」

怒った大魔神のような凄まじい形相で、指の骨を鳴らしながら近

寄ってくる姿に、周りで見ている生徒たちは本気でビビっていた。

「あたしに勝てると本気で思ってるの？」

「当たり前だ。二つの中学校で三年全てをシメたんだぞ？　だがこの学校は二年がシメてると聞いて来てやったんだがな。お前らみたいなクソアマだとはな。呆れて屁が出るぜ」

『ブウッ！！』

そう言いながらクラス全体に響き渡るほどの大音量のオナラをする泰三。

「くっさ！……あたしたちの前でド臭いオナラした罰は必ず受けてもらうからね？」

屁の余りの臭さに、今度は美紅の表情が阿修羅と化した。

咲良と百合香と美佐子は……鼻を摘みながら静かに泰三を睨みつけていた。

「死ねや！」

いきなり飛んでくる右脚上段蹴りをしゃがんで躱し、更に左足での後ろ回し蹴りが飛んでくるが、コレもスウェーで躱す。

「すっごいキレッキレの蹴りだね！　こりゃ美紅ちゃんしか勝てないわ」
百合香が目を見開いて驚く。
美佐子も静かに頷きながら泰三の動きを静かに見つめている。
咲良は少し拗ねた表情を見せながらも、同性の恋人でもある美紅の身を心配しつつ、勝利を心から祈っていた。
「ちっ！　今の両方躱すか普通！？……たまたまか？　ちくしょうめ！　オラアッ！！」
中段突き、上段突き、前蹴り、足払いと、あらゆる攻撃を繰り出すが全て寸前で見切られて躱される泰三。
スタミナがかなり落ちてくる頃には、一応格闘家として才のある泰三は気付き始めたのであった。
「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……こ、コイツ……ただモンじゃねぇ……はぁ、はぁ、はぁ」
「だからこの学校シメてるんだって。三年一組の奴らにそう聞いてあたしたちを捜しに来たんでしょ？」
「苗字だけな。下の名前も言ってくれてたら二年のクラスになんか

来なかったのに……ほんとムカつくぜアイツら……」

「ここに来たこと……後悔してるでしょ？」

静かに息を落ち着かせると、怖いくらいの満面の笑みを見せながらティーシャツを脱ぎ捨てると、全身の筋肉をこれ見よがしに盛り上がらせる。

『ムキムキムキムキ！』

「今度こそ……ギッタギタにしてやる。もう俺も本気を出すぞ」

「おいおい！　それって空手の筋肉じゃなくボディービルの方じゃないの？　道を間違ってないあなた……？」

「うるさい！　死ねゴラァ！！」

一気に踏み込んで手脚の連続技を披露する泰三だったが、やはり全て紙一重で躱されて一発たりともヒットしない。

疲れ切って膝から崩れ落ちる泰三へそっと歩み寄り、両手を組んで見下ろす。

そのまま泰三の顔面に膝蹴りを入れた。

『ズガッ！！』

「がはあああっ！！」

辺りに飛び散る泰三の鼻血。
クラスの男子も女子も恐る恐るながらその光景を見ていたが、百合香と美佐子が男子生徒のみグラウンドへ退出させる。
泰三以外は、全て二年四組の女子生徒のみが教室に残ることになった。
「うぐぐ……いでえええ！」
「鼻の骨折れちゃったね今のは……」
美佐子が引きつった笑顔でそう言うと、美紅が即答する。
「前歯もイッちゃおーかなって思ったんだけど……喧嘩するつもりの相手が女と知って去ろうとした辺り……ちょっと男らしいかなって」
「だから歯には当てなかったんだ……珍しいな。美紅がそんな情け持ってたなんて」
「あの……ほんとあたしのこと、鬼みたいに思ってない？」
咲良の冷たい一言に一瞬力が抜ける美紅だったが、振り向いて顔を押さえながら苦しむ泰三の眼前へしゃがみ込む。

「痛がってる所申し訳ないんだけど……このクラスの女子みんなが見てる前でこれから恥をかいてもらうわよ」

「う、ぐぐぐ……は、恥だと？　ど、どうゆうことだ？　何をする気だ？」

『ガツッ！　グイイッ！！』

「ううっ！？　んんん」

美紅は鼻血で真っ赤に染まっている下顎に右手を差し込み、一気に顔を上へ向けさせる。

「あんたのその偉そうな言葉遣いが気に入らないわね。今から女子たち全員には敬語で話しなさい。そして様付けで呼ぶこと。そうしないと前歯へし折ってやるんだから。分かった？」

「うぐぐ……は、はい。分かりまし……た。き、鬼頭様」

「下の名前で様付けするの！　何度も咲良から呼ばれてるから覚えてるよねあたしの下の名前？」

「はい！　み、美紅様っ！」

完全に敵わないことを身体で悟ってしまった泰三は、前歯を失う

リスクを避けて、美紅たちの言いなりになることを選択したのであった。

机を三つほど並べて合体させ、簡易なベッドを作る百合香と美佐子。

「ほら、この上に寝転がれ」

咲良は泰三の髪の毛を掴んで頭部を振り回すように引っ張る。

「いでで！　は、はい」

大体何が起こるか察しているクラスの女子たちの中には、少し頬を赤く染めて、恥ずかしそうな表情を見せる者が多数いた。

「中曽根泰三！　今からお前の手術を行う。動いたら前歯無くなると思いなさい。いいわね？」

「は、はい……しゅ、手術!?　切られるのは嫌です！　勘弁して下さい美紅様」

「ホントに切ったりしないよ。手術ゴッコだから安心して」

ホッとしたのも束の間、百合香と美佐子は手際よくベルトを外し、ズボンを脱がせてゆく。
早くも残すはパンツ一枚のみとなる。

「わあっ！？　な、なにを！？」

「さぁラスト一枚も脱がしちゃうんだから。じっとしてないと殺すわよ？」

『ズルル！』

「ひゃあっ！？」

『ズルリッ！……ぷるるるるんっ！！』

百合香は、陰毛が見える位置で一度止めた手を勢いよく下に動かせて、パンツを足首まで一気にずり下げた。
パンツに擦り付けられたペニスが上下に激しく揺れる。

「アハハハハッ！！　チンポが揺れてる揺れてるうっ！」

笑い出す者と頬を真っ赤にして顔を手で押さえる者、色んな反応を見せる女子たち。

美紅と咲良は見慣れてるためか静かにペニスを見ていたが、百合

香と美佐子は他の女子たちの一部と同じく、バカ受けしていた。

「ガタイがいいクセに仮性包茎じゃないの。臭そうなチンポしてるねぇ？」

美紅はそう言いながらペニスを握り、ゆっくり皮を腹部方向へ剥いてゆく。

『ぎゅむっ！……メリメリメリッ！』

「いでええええっ！？　や、やめろ！！　や、やめて下さいいいいいっ！！　痛いいいいいっ！！」

「まずは包茎手術よ。我慢して！　あなた男の子でしょ？　もう少しで亀頭部分が全て顔出すから。あたしに感謝するようになるわよ？　ほらほらぁ」

『ムリュムリュ……メリリリ……ズルンッ！！』

「んぎゃああああああっ！！」

涙を流して号泣し始める泰三だったが、美紅の手はペニスを離してはくれない。

それどころか今度は皮を剥いたり戻したりを激しい速度で繰り返し始めたのだった。

『シコシコ……シコシコシコシコシコシコシコシコシコッ！！』

「はううっ！！　はあああうううううっ！！」

「手コキの刑。仮性包茎なんだからオナニーくらいはしてたんでしょう？　んん？」

泣きながらも美紅の手コキに少しずつ痛みが快感へ変化してゆく泰三は、みるみる内に全開に勃起してゆく。

クラスの女子たちから歓声が上がる。

「おおおっ！　すっごぉーい！」

「やだ、チンカスついてるじゃん……臭そう」

「鬼頭さんの手コキ、すっごいスピードだわ♪」

各々が好き放題な感想を述べてる中、ついに絶頂を迎えてしまう泰三。

「ほら、イケ！」

「あうっ！　うううっ！！」

『ドピュッ！！　ドピュピュピュピュピュピュピュウッ！！』

咲良がティッシュを手にして泰三のペニスに付着している精液を拭き取り始める。

「う、うう、恥ずかしい……お願いだからもう許して下さい……もう絶対みんなに喧嘩売ったりしませんから……」

「やったことは取り返しがつかないから。あなたがボコった三年一組の男子、七人の内二人も不登校になっちゃってるの知ってる？」

「……は、はい。今では申し訳ないと思って反省してます」

「じゃああたいたちの私刑を全て受けろよ。今からお前をレイプしてやるから。その前に汚いクソを身体から抜いてやるから浣腸な」

「え？　そ、そんな、みんなの見てる前でそれだけは……咲良様……」

「黙れ！　早く四つん這いになってケツ突き上げるんだ！」

「ひっ！　は、はいっ！」

泰三は結局、咲良の言う通り、机を並べた手術台の上で四つん這い体勢のまま、全長４０センチもあるガラス製の５００ｍｌ浣腸器にセットされた高濃度グリセリンを肛門から注入されてゆく。

浣腸をし終えた咲良の隣で目を細めながら美紅が囁きかける。
「最低一分は堪えないとメスで肛門くり抜くからね？」
「ひっ！？　そんなの嫌です！」
「冗談よ。でも頑張って我慢しなさい」
百合香と美佐子にとっては、美紅と咲良が言えば冗談に聞こえない……。
百合香がクラスの女子から受け取ったバケツを泰三の股間の真下に置いた。
「ほら、もう出してもいいわよ？」
「うぐぐ、もう限界でした！　ありがとうございます百合香様」
『ブリブリブリブリ！！　ぶしゅしゅしゅしゅしゅうっ！！』
腸に溜まっていた便をほぼ出し切らされた泰三は、机を並べた手術台からようやく下ろされ、床の上で再度四つん這いにさせられる。
中田美佐子はパニスバンドにアナルバイブをセットして、そっと背後に回り込んだ。

「私があんたのアナル処女頂くことになったわ。ほら、お願いする時は何て言うの？」

「う、ううう。美佐子様、俺の肛門にバイブを突っ込んでください……ぐすん、ぐすん」

鼻血と鼻水と涙で顔面をぐしょぐしょに濡らしながらお尻を突き上げてゆく。

「うふふ。それって鼻が痛いからじゃなく、あまりにも恥ずかしくて泣いてるんでしょう？」

「ぐすん、ぐすん、は、はい。お願いです、もう許してください」

「それはダメ。四人全員からあなたのアナルは犯されるの。しかも段々サイズが大きくなって……最後の美紅ちゃんの時は直径５センチもあるのよ」

「ひっ！？　さ、避けちゃう！！」

恥ずかしさと恐怖に全身を震わせながら、美沙子の直径２センチのバイブを挿し込まれてゆく。

「ここね？　ケツマンコ」

『ツプ！』

「はうあっ！？」

『ズボボボッ！！』

「ぎゃあああっ！！」

首を左右に振りながら肛門の痛みと戦う泰三だったが、長さ10センチ全てをぶち込まれたまま号泣し始める。

「ちょうど奥まで挿し込んだ所で壁を感じるわね。直腸一番奥のS状結腸まで先端が当たってるみたい。突かれるとキリキリと激しい痛みを感じるでしょ？」

そう言いながら腰を泰三の臀部に思いっきり押し付けて、突き当たりの直腸を責める美佐子。

『グリッ！！』

「ぐわあああっ！！　いだいいいいっ！！」

「うふふ。曲がった腸を裂いたらいけないから後のバイブも全て10センチに合わせといてあげる。優しいでしょ？　私たち」

「あ、ありがとうございます……わーん、わーん」

号泣を再開する泰三に構うことなく腰を本格的に振り始める美佐子。

「ほら、始めるわね？　今から歳下の女の子に犯されるのよ。気分は？」

『バッコンバッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「痛い痛い痛いいいいっ！！　やめてええええっ！！　わあーん！！わあーん！！」

いきがってはいても所詮は中学生の子供……中曽根泰三は小さな幼児のように泣き続けるのであった。

それでも美紅たちは許してはくれない。
二番手は西村百合香。
長さは10センチに合わせてあげてはいるが、太さは3センチと、中学生にとっては張り裂けるほどの激痛サイズであった。

「はい、次私ね。男が泣く所見るのってゾクゾクしちゃうわ～♪じゃ、ケツマンコに入るよぉ？　それぇ♡」

『つぷっ！　メリメリ！！』

「ぎゃああああっ！！」

そのまま激しく腰を振りまくる百合香。
艶やかな腰まで伸びた黒髪を揺らしながら歳上の男子を犯す。
５分間犯した後、ゆっくりとアナルバイブを引き抜くと、二人から１０分も犯された直腸は、腸液を大量に分泌していた。

『ポコンッ！！……ドクドク……トロトロ』

「やだっ？……お前、なにアナルから透明の液みたいなの垂れ流してるのよ？」

「痛いい、痛いよおお！　ひーん！　ひーん！」

百合香の質問には答えず、ひたすら号泣し続ける。

「百合香ちゃん、それは腸液と言って、直腸への刺激によって分泌される液体なの。二人に１０分も出し入れされちゃったから腸が興奮してるか悲鳴をあげてるんだよ」

美紅がそう説明している傍で、咲良が４センチのアナルバイブをセットする。
恐る恐る肛門を右手でさすり、状態を確認する泰三だったが、粘液の正体は泰三自身、全然分かっていなかった。

『ひっ！？　なんか俺の尻の穴、ヌメってるぞ？　な、何が出てきてるんだコレ！？』

少し怖くなる泰三だったが、咲良が容赦なく次を急かしてくる。

「ほら、次はあたいだ。エッチな液垂らしてる場合じゃないよ！早くケツ穴から手をどけろ！」

「ひいいっ！！　もうやめて下さいっ！！　裂けちゃいますっ！！」

宮垣咲良は冷ややかに微笑むと、そのまま無理矢理アナルバイブを肛門から捩じ込んで直腸奥深くまで突っ込んだ。

『ツプッ！……ズボボボボォッ！！』

「あひいっ！！」

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「はぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃああああっ！！」

はち切れんばかりに全開に開ききっている肛門括約筋が、見ていても痛々しいほどだったが、それを見ているクラスの女子たちは頬を真っ赤に染めながらも興奮して観察していた。

Ｓっ気のある少女たちの場合、性器を濡らしている者も数人いた。

「さぁよく頑張ったね。ついにラスボスの登場だよ？」

そう言いながら直径5センチもある大人でも肛門裂傷は避けられない超極太バイブをペニスバンドにセットする鬼頭美紅。

「本当に入るかなコレ？　久しぶりに返り血浴びちゃいそうだわ……肛門の血って凄いからね～」

『カシャ！　カシャン！』

「お願いします！　やめて下さいっ！！　そんなの入れられたら死んじゃいますうっ！！　わーんわーん！！」

「アナルは裂けちゃうかもだけど……こんなんじゃ死なないわよ。安心しなさい」

そう言いながら腰を落としている泰三の背後に回り込み、一気に腰を引き上げた。

『グイッ！』

「ひっ！！……お願いです！　許して下さい美紅様っ！！」

「腸液たくさん分泌してるからローション代わりになって少しは痛

みもマシでしょ？　あれ？　肛門が開いたままで固まっちゃってるよ？　あはは♪」

「あたいの時だそれ。抜いた時、元に戻らないまま開いたままになっちゃったんだ。大きいのブチ込んじまったからかな？」

「でも咲良のやつよりコレ……1センチ大きいから……コイツの肛門、破壊確定だよね？　どれ、ちょっと奥の方あたしに見せてみ♡」

『ズボボッ！……くぱぁ～！』

「やはあっ！？」

心配そうに両手の中指を肛門に突っ込み、大きく左右に広げて中身の直腸を覗き込む美紅。

「はううっ！！……もうやめてえぇっ！！　お願いしますうううっ！！」

「初めから少し開いてる穴に突っ込まれるんだから、少しは痛みもマシだと思うよマジで……ほら、飲み込んじゃえ♡」

『ピト……メリメリ……ずちゅちゅちゅ！』

「ひぎいっ！？　ぐわあああっ！！」

『バリバリバリバリッ！！……バシュウッ！！！！』

「ピギィイイッ！！！！」

ついに肛門括約筋を数枚破壊し、美紅の５センチもある極太バイブは直腸奥深くの突き当たりまで全てぶち込まれた。

「飲み込めたじゃん？　肛門ズタズタなっちゃってるけど♡　さらにぃ……高速ピストンッ！　それそれそれえっ！！」

『バコバコバコバコバコバコッ！！』

あまりの美紅の腰を振る速度に、周りの少女たちは目を背ける者もいた。
肛門から激しく鮮血が飛び散り、美紅のスカートや太ももは血まみれになる。
床にも血痕が大量に広がってゆく。

「ぴぎぎぎぃっ！！……ガクンッ！」

ついに激痛のあまり意識を失ってしまう泰三だったが、美紅はまだ腰を振り続ける。

「ほらほらほらあっ！　拳が入るくらいアナル拡張してやるから覚悟するのよっ！　わかった？」

『バッコンバッコンバコバコバコバコバコオッ！！！！』

美紅がアナルバイブを抜いた時には、全てのヒダヒダを破壊されてパックリ開き切ってしまった哀れな肛門が残った。
血止めの注射を打たれて出血こそ止まってはいたが、直腸が奥まで丸見えになるほど開かれた肛門が閉じることはなかった。
泡を噴いて白目を剥いて細かく痙攣してしていている泰三。

肛門をライトで照らしこむと、突き当たりのS字結腸まで丸見え状態であった。
身体の構造に興味のある女子たちは、順番に泰三の直腸を奥まで観察していった。

「スッゴ……一番奥にある突き当たりの部分まで見えちゃってるぅ」

「てかてかしてヌメヌメしてなんかヤラシイわね直腸って……」

好き勝手感想を述べながら全ての女子が観察し終えると、美紅は拳を作り、その肛門へそっと当てがい、力を込める。

「いつまで気を失ってるの？　良い加減目覚めなさいよ？　えいっ！」

『ボコォっ！！』

美紅の拳は手首まで泰三の直腸へ捩じ込まれた。
ショックで目を覚ましたが、その直後に激痛で号泣を再開してしまう。

「どう？　あたしのフィストファック♡」

『バチュバチュバチュバチュ！！』

「ひぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃあっ！！　死ぬううううっ！！」

「だからコレくらいじゃ死なないって。大袈裟だなぁ」

上の制服だけ着ることを許された泰三は、泣きながら立ち上がる。
痛み止めの注射をお尻に打ち込むと、嘘のように肛門の激痛は消えてゆく。

「もう痛くないでしょ？」

「は、はい美紅様。ぐすん、ぐすん」

「いつまでも泣かないで！　男の子でしょ？」

百合香はそう言いながら背後から股間を蹴り上げた。

『スパァンッ！！』

足の甲が睾丸を直撃する。
それでも痛みが麻痺してる下半身のお陰で全くケロッとしている。
それどころか、局部の刺激でペニスは勃起してきた。
「みんなの前でその大きくなったチンポをシゴくのよ。射精できたらパンツもズボンも返してあげる」
「そ、そんな……」
散々恥をかかされた泰三は、すでにオナニーする行為をあまり恥ずかしいとさえ思えなくなっていた。
『シコシコシコシコ』
泣きながらも行為に及ぶ泰三を、女子たちは全員観察している。
「もう出る？」
「はい。もう出そうです美紅様」
「いいよ。出せ」
「は、はい、はう、はううっ！」

『ドピュッ！　ドクドクドクドクドクッ！！』

射精し終えてまだ涙が止まらない泰三のお尻を思いっきり引っ叩く咲良。

『スパァンッ！！』

「いだあっ！！」

「早く舐めとるんだ！　お前が汚した床を舐めて綺麗にしろよ！」

「ごめんなさい咲良様っ！……ペロペロ……ペチャペチャ」

中曽根泰三はこの日を堺に、三年生の同級生から逆に虐められるほど大人しい性格になってしまったのであった。

転校生の失敗（後書き）

美紅たちに散々リンチを受けて、大きく性格が変わってしまった中曽根泰三。
しかし彼の学生生活は同級生からのいじめだけでは済まないものとなってしまった。

「今日はもう帰っていいけど帰りに肛門科のある病院行くのよ？　それと……毎日あたしたちの２年４組に挨拶にきなさい」

「え？　ど、どうしてですか！？」

「毎日あたしたちが手コキしてやる」

「そ、そんな……」

半泣きになりながらも、みるみる内に勃起してゆく。
すでにMに目覚め始めたことを見抜いていた美紅は、目を細めながらイキり勃つペニスを睾丸ごと膝で軽く蹴り上げる。
数回蹴り上げられ、その度に上下にプルンプルンと揺れ動く睾丸。

『ぽんぽんぽんぽんっ！……ぷるるるるんっ！』

「金玉ポンピングってゆうのよコレ……知ってた？」

「はうはうはうっ！　し、知りませんでした……」

「もうパンツ履いていいわよ」

「はい。ありがとうございます」

中曽根泰三は、慌ててパンツとズボンを履き、２年４組の女子全員に深々と頭を下げて教室を出て行った。

「アイツ後半少し興奮してたな」

咲良も見抜いていた。

「変態」

「やだやだ」

百合香と美佐子は初めて知ったみたいである。

「そう言えばアイツの妹が一年にいたわよね」

「うん。噂でそう聞いてたけど？」

美紅の質問に即答する咲良。

「今度会ってみようよ」

「そうだな。性格悪かったら素っ裸にしてリンチしてやろうぜ」

美紅たち四人は、兄妹揃って下僕にする事を画策するのであった。

戦慄の闇バイト（前書き）

齢９０になる木崎幸三とヨネ。

幸せに暮らしてきた老夫婦を襲う魔の手。

たまたま遊びに来ていた曾孫の小学生三年女児、木崎麻依にまでその手は及ぼうとしていた。

果たして三人は生き延びることができるのか？

戦慄の闇バイト

西部地方にある市営の西久保団地。
犯罪者のターゲットは非力な老夫婦に向けられた。
「金はどこだ！？　正直に教えねぇとぶっ殺すぞ！？」
「ひ、ひいっ！お許しを……ナンマイダブナンマイダブ……」
「このくそババァ！！　経なんて唱えてんじゃねえ！！」
泣きながら経を唱える９０歳になる老婆の前で、血まみれで倒れている同い年の老人……。
老婆の長年寄り添って生活してきた最愛の夫であった。
どちらに原因があるのか分からないが、若い頃から子供に恵まれず、二人きりで７０年も暮らしてきた。
その夫が目の前で若い男たちに金属バットで頭部を殴られて倒れ込んでいる。
「おい、ジジイの方まだ動いてるぜ？」
「そうだな。トドメを刺しとかないと通報されるかも知らないからな」

そう言いながら一人の男が老人の頭を更に数回金属バットで殴りつけた。
数秒間痙攣しながら泡を噴いていたが、ついに動かなくなる。
それを見た老婆は狂ったように号泣しながら男の脚を掴んできた。

「何すんだババア！？」

『ゴンッ！！』

「ぎゃあっ！！」

側頭部にまともに入った一撃は、たった数秒で老婆もあの世に送ることとなってしまう。

「おい！　ババァやっちまったら金の在処が分からなくなったじゃねぇか！？」

「うるせぇ！　いきなり脚掴まれたんだから仕方ねぇだろうがよっ！？」

「ちっ！　コレだから素人と組むのは嫌だったんだ」

「何を偉そうに言ってやがる！　闇バイトに素人も玄人もあるかよ！……ん？」

大金を報酬として与えてもらえる、とゆう話にのり、闇バイトに参加した二人。

伊坂正人と脇田忠司はたまたま同い年の20歳で、闇バイトグループに所属していて知り合った。

この度、強盗を実行するにあたり、ペアを組むことになったのである。

18歳から2年前から闇バイトをやっていた先輩である伊坂正人は、今回初めての任務にあたる脇田忠司とペアを組まされたのであった。

織田信勝とゆう偽名を使った闇のボスからの指令だったのだが、勢い余って金の在処を聞き出す前に二人とも殺害してしまう失態をやらかした脇田だった。

「おい、伊坂！　何か鳴き声みたいなのが聞こえねえか？」

「おぃ！　俺は先輩だぞ！？　呼び捨てにすんなと言ってるだろうが！？」

「まぁそう言うな。同じ凶悪犯同志対等にいこーぜ。ん？こっちか？」

扉を開けて隣の部屋へ入る二人。

押し入れの中から微かに鳴き声が聞こえる。

「この中だ。開けるぞ？」

「ああ」

『ガラガラ』

脇田が押し入れの襖をゆっくり開けると、小学生らしい少女が口を押さえて泣いていた。

「お！？　ガキがいた！」

「見られたな……三年生か四年生くらいか。サツで顔の特徴喋られたらヤバそうだ」

「ガキまで殺すのか？」

「幼稚園児なら生かしておいても心配なかったけどな。９歳１０歳はある程度正確に謳われそうだ。可哀想だが始末しろ」

金属バットを握りしめて振り上げる脇田。
よくよく見ると可愛い顔をしているのに気づく。

「お、おい伊坂！」

「ああっ！？　呼び捨てするな、と何度も言ってるだろが！？」

「まぁそう怒らない伊坂ちゃん！　このガキ殺す前に犯していいか？」

「そんなガキ相手にチンポ勃つのかよ？どうせこれから殺すんだ。好きにしろ」

「じゃあ10分だけくれ！　あっちの部屋で待っててくれ。全て終わらせたらすぐ行くからよ？」

「出来るだけ早くしろよ」

そのまま肩ほどまで伸びている少女の髪の毛を鷲掴みにすると、強引に押入れから引き摺り出し、白いワンピースを強引に脱がせてゆく。

「わあぁんっ！！　やめてええっ！！　おじちゃんやめてええっ！！」

「お、おじさんだと！？　俺はまだ20だぞ！？」

『パァンッ！！』

「ふぎいっ！！」

おじさん呼ばわりされて立腹した脇田は少女の顔面を思いっきり

平手打ちした。
　横向けに倒れ込んだ少女の両足を掴み、床の上を引き摺り回すと、真っ白のパンツに手をかけて一気に足首まで脱がせる。
「やあああっ！！　許してやめてお願いいいいっ！！」
　脇田は素早くズボンとパンツを脱ぎ捨て、泣きじゃくる少女の前に、ギンギンに勃起したイチモツを突き出して顔に押し当てる。
「舐めろ！」
「いやあっ！！　わーんわーん！！」
『スパァンッ！！』
「ひぎいっ！！」
「言うこと聞かないと殺しちゃうよ？　お嬢ちゃん何歳？　名前なんてゆうの？」
「木崎麻依……9歳。ぐすん、ぐすん」
「麻依ちゃんかぁ、可愛い名前だね？顔も可愛いけど♡」
　そのまま無理矢理口を開かせて、イチモツを麻依の口内へ突っ込んだ。

「おごおっ！？　むごごごごおっ！！」

「ほら、舌を使って舐め回せ。きちんと舐めないとぶっ殺すからね？」

「んんんっ！！……チュパチュパ……れろれろっ」

「ううう……き、気持ちいいっ！　麻依ちゃん最高だぜ！」

散々舐めさせてから今度はシックスナインの体勢にさせ、自分も麻依のワレメを舐め始めた。

「がはは！児童のマンコもエロいねぇ……ペロペロ……ペチャペチャ。しょんべん臭えのがまた堪らん！」

「んんんっ！……カプッ！」

「ぐわあああっ！！　いってえええええっ！！」

いきなり性器を舐められたことに驚いた少女は思わず咥えて舐めていたペニスを噛んでしまった。

皮が裂けて血が滲み出るのを見て、本気で発狂してしまう脇田だった。

「このクソガキッ！！」

激痛を味わって少し萎んでしまうが、麻依を押し倒してマングリ返しの体勢にさせると、再び一気に勃起してくる。

『メリメリ……』

「痛いいいっ！！」

「小3ならどうにか入るだろ？　ほらあっ！！」

『メリメリ！ぶちぶちっ！！……バチュウッ！！』

「ふんぎいいいいいっ！！ぎゃあああああああっ！！」

少女の膝の裏に両手をかけて、無理矢理マングリ返しの大勢のまま、ペニスを根元まで挿入。

みるみるうちに床が膣からの鮮血で染まってゆく。

『バコバコバコバコバコッ！！』

「ひんぎいいいいいっ！！　やめれえええっ！！」

激しく腰を振り続ける脇田。

膣口と小陰唇が裂けて、外性器からも大量に出血し始めた。

「うう、イク！　げへへ……麻依ちゃんの処女マンコの中に精液タップリ出しちゃうぞおっ！！うううっ！！」

『ドピュッ！　ドクドクドクドクッ！！』

「はひゃあああっ！？」

体内へ注ぎ込まれる生温かい奇妙な液体の感覚に、麻依は全身を震わせながら拒否反応を示す。

「はぁ、はぁ、締まりが凄くて気持ち良かったぜ！」

そう言いながら、人差し指を麻依の肛門へ強引に突っ込む。

『ズブッ！　ズボボボッ！！』

「んぎいいっ！？」

『グリリッ！！　グリングリンッ！！』

散々9歳の少女のアナルを掻き回して、指の感触と麻依の反応を愉しむ脇田。

「あっ！　あはっ！　痛っ！　ひいっ！」

「ガハハハッ！　頬を真っ赤にしてケツ穴の感覚によがりやがって！　面白い反応だな麻依ちゃま♡」

その時待ち侘びた伊坂が突然部屋に入ってきた。

「おい脇田っ！　長すぎるぞ！？」

麻依の肛門へペニスを捩じ込んで腰を振っている所を見られた脇田は驚いて直腸内にも射精してしまう。

「くっさ……ガキはガキで堪らん！　このウンチの臭いさえもまた興奮するぜぇ～」

「ロリコン野郎め。カス中のカスだなお前」

「強盗殺人平気でやってきたお前に言われたかねーよ」

そのまま立ち上がりパンツとズボンを履き終えると、再び金属バットを手にする脇田。

「じゃあな麻依ちゃん。バージン奪えて気持ちよかったぜ？あの世で俺の子でも産んでくれや♪」

「えーんえーん！　痛いよおお！　えーんえーん！」

「死ねやっ！　オラアッ！！」

『ドカッ！！　グシャッ！！　ドコオッ！！』

「ギャアアアアッ！！！！……ゴボゴボッ！……がくんっ！」

『ビクビクビクンビクンッ！！』

金属バットで頭部を激しく三度も殴られて、そのまま血の泡を噴いて激しく痙攣し始める少女。
尿道口からは小便を噴き出す。

『プシャアァ〜！』

「へっへっへっ！　死にながらションベン飛ばしてるぜコイツ……受けるわ♪」

「金は台所の棚から見つけた。隠してやがったんだなクソババァが……目標は達成した。さっさと退散するぞ脇田」

「おうよ！　ちょ、ちょっと待ってくれ！　チャックが引っかかって閉まらねぇ！」

「誰もお前の股間なんか見ねぇよ！　早く逃げるぞっ！」

そのまま男たちは部屋を出て帽子を深く被りひたすら隠れ家の裏山のほったたて小屋に逃げ込んだ。

一週間後、ついに警察は町中の防犯カメラ等を徹底的に調べあげ、二人の身元確保に至る。

自供させた内容を聞いた刑事は警察上層部に報告し、その後上層部のみでの緊急会議が行われた。

西武地方、西久保団地における伊坂正人、脇田忠司による強盗殺人、及び強姦殺人は……そのあまりの冷酷さにより、特殊任務省へ刑の執行を譲渡されることとなった。

――――――――残酷処刑島。

「はぁ、はぁ、はぁ、くそう！なぜたかが女子高生なんかに……」

「ぐっ！……チクショウ！　お前もダメだったか……どうすんだよこのままじゃ俺たち殺されるんだぜ！？」

「そんなこと知るかよ！　お前だって先に負けてんだから文句言うんじゃねえ！」

女子高生の拷問処刑人である円満愛衣。菅野姓を名乗ってはいるが、本名は円満愛衣である。

伊坂正人と脇田忠司の二人は強盗殺人、強姦殺人の罪で警察に逮捕されるが、首脳会議により裁きを特殊任務省に委ねられ、本日こうして残酷処刑島に連行されてきていた。

「せっかく二人のうちどちらかでも愛衣に勝つことができたら命は取らないでおいてあげるって言ったのに……残念だったわねお二人さん」

女子中学生の拷問処刑人である鬼頭美紅が足を組んで椅子に座ったまま呟いた。

円満愛衣と罪人二人が闘う一部始終を観戦していたのであった。

「美紅さんの出る幕なくてごめんなさい」

「あはは。愛衣さんのお陰であたしは楽できたから別に良いですよ」

セーラー服姿の女子高生と女子中学生を座り込んだまま血を拭いながら見つめる伊坂と脇田。

「未だに信じ難いのだが……コレは本当に国が決めた事で、俺たちはこんな訳のわからない無人島で女ごときに処刑されるのか？」

「そうだ！こんなこと国が認める訳がない！そもそもきちんと弁護士を立てて裁判して……それからの刑の執行が普通じゃないのか！？　お前ら頭おかしいんじゃね！？」

女子高生にタイマンで負けるとは本気で思っていなかった二人は、半分ヤケクソになりながら各々の気持ちを愛衣たちにぶつけてくる。

美紅と愛衣は、何も答えずに二人に歩み寄ると、更に殴る蹴るの激しい暴行を加えた。

「ぐわあああっ！！」

「ぎひゃあああっ！！」

完全に繊維喪失した二人。

美紅は伊坂正人の着衣を、愛衣は脇田忠司の着衣をスルスルと脱がせてゆく。

最後のパンツを脱がし終わると、特殊任務省の特注品である強制勃起薬を二人に注射する。

「その辺に寝転がってシックスナインしなさい」

「うぐぐ！？なんだこれ！？チンポが全開に勃ってきやがった！？」

「俺もだ……ぐぐ……変な薬を打ちやがって」

「聞こえなかった？どっちが下側でも良いからお互いのオチンチンを咥えあってシックスナインしろと言ってるのよ？」

美紅は少し苛立ちを見せながら再度繰り返して命令した。

「それをしたら俺たちは助かるのか？」

伊坂が美紅を睨みながら問いかける。

「助からない」

「じゃあホモでもないのでやめとくわ」

「お、俺も同感だ！　男のチンポなんてしゃぶれるかよ！　ふざけるなクソアマがっ！！」

数分後、かなり少女二人からボコられた後……美紅たちにデカい口を叩いたことを後悔しながら必死にお互いのペニスをしゃぶり合う二人がいた。

ついでに様付けで、名前を呼ぶことも約束させる美紅。

『ペチャペチャ……むごごっ！……チュパチュパッ！』

「ううっ、脇田！　なんかその舐め方、気持ち良いぞ……」

「俺もだ……口内に出しても良いか？」

「ペロペロ……うっ、そ、それは困るな……ペチャペチャ」

腕を組んで、男二人の痴態を見下ろす二人の少女。

「ほら、お互いの肛門に指を突っ込んで前立腺を刺激し合うのよ！」

「は、はいっ！」

「分かりましたっ！」

愛衣が強い口調で命令する。
即答で返事をする二人。
抵抗する気力もなく、ひたすら言うことを聞いていればもしかしたら許されるかも知らない……一縷の希望を持ちながら、言われるがままにお互いの肛門へ指を突っ込み合う二人だった。

「どうします愛衣さん？」

「そうね。伊坂は脇田の口内へ射精。脇田はバックで伊坂のアナルを犯してケツマンコに中出し……でいい？」

「あはは！　お互い口内へ射精じゃないんだ？　それも良いんじゃない。人生最期の日なんだからお互い本番セックス気分も味合わせてあげたいもんね♪」

美紅に命令されるまま、まずは伊坂が射精する。

「ぼちぼちイッちゃえ伊坂！　脇田は出された精液は吐き出さずに飲み込むのよ？　わかった？」

「は、はい美紅様。イ、イクッ！　すまん脇田っ！」

『ペチャピチャ！……ドピュッ！！……』

「うごおっ！？　ううううっ！！……ごっくん！」

手を叩きながら脇田を讃える美紅。

「よく頑張って飲み込んだわね！偉い偉い！さぁ次はバックで伊坂を犯しちゃえ♡」

「……うっ……は、はい」

全く興奮しないまま、フル勃起したペニスを伊坂のアナルへ挿入してゆく脇田。

半泣きになりながら根元まで挿し込むと、ゆっくり腰を振り始め

る。

「挿れるぜ？」

「あ、ああ。痛いからそっと頼むぜ」

『ズプププ……ズボッ！！』

「はううっ！！」

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「ぎゃほほほほほほうっ！？痛いいいいいっ！！」

「うっ、気持ちいい……イキそう……うっ！！」

嫌々ながらも肛門の締め付けは脇田を絶頂へと誘う。
大量の精液を伊坂正人の直腸内へ注ぎ込んだ。
四つん這いから腹を地面に着いて崩れ込む伊坂の隣で、脇田もうつ伏せに倒れ込んだ。

「はぁ、はぁ、はぁ、はあ」

二人は合わせたように呼吸を早めてゆく。

「キモいエロシーンはもういいよ。さてと……伊坂正人！　今からお前の全身の骨を砕いてやるからね」

そう言いながら美紅は金属バットを手に持つ。

愛衣は日本刀を手にして鞘から抜いた。

「脇田忠司！　あなたは私の刀で……全身ナマス斬りにしてあげる」

苦しそうに呼吸してジッとしている場合ではなく、反応が逃げることを選択した。

二人は慌てて立ち上がり、別々の方向へダッシュする。

「へえ〜。逃げるんだ？　拷問のバリエーションを増やして苦痛を数倍にしてやるんだから」

「足の速さも私たちに叶わないことくらい理解出来ないのかしら？　本当おバカな闇バイトたち……」

丘を超え、脇にある山道に入りひたすら走る二人。

何キロ走っただろうか、目の前にコンクリートできた平屋の建物が目に入る。

「おい、建物があるぜ！ここに逃げ込もう」

「そうだな……誰かいたら助けてくれるかも」

二人は慌てて引き戸を引っ張る。
鍵は掛かってなく、すんなり開いた。

「ラッキー！　早く入って内側から鍵かけようぜ！」

「この広い島でこの無人の建物に逃げ込んでるとか多分気づかねーと思うけどな。念には念だ。……あれ？　鍵がないぞ？」

「マジか？え？お、おい脇田！」

「どうした？」

「この部屋、なんかヤバそうだぞ？」

「ん？……げっ！？な、なんだこれ！？」

薄暗い室内に段々目が慣れてきた二人の視野に入るのは、拷問に使う椅子タイプの拘束具、ベッドタイプの拘束具、磔型の拘束具……しかもどす黒く血みたいなシミがそこらじゅうにこびりついている。

『ガシャン！』

「わあっ！？」

いきなり外側から鍵が掛かる音がしたため、二人はビクッと仰け反った。

「まさか自分たち自ら来てくれるなんて」

「そうそう。逃げ出したお前たちを一層細かく苦しめてやるために、捕まえてからこの拷問部屋へ連行しようと思ってたの。ほんと飛んで火に入る夏の虫とはよく言ったものね♪」

先ほど聞いた聞き覚えのある声がする。
白い壁がくるっと回り、回転扉から現れた鬼頭美紅。
その後円満愛衣も現れた。

恐怖で腰が抜けてしまい、立つことも出来ない二人に、美紅たちは睡眠薬を嗅がせて眠らせる。

椅子に拘束された伊坂正人の背後に立つ美紅は、電動ノコギリを手にしてエンジンをかける。
そのまま耳の真上辺りからぐるっと一周、頭蓋骨を切断してゆく。

『ウイイインッ！！　ギュイイイインッ！！』

「どれどれ、よっと！」

『ズズズ……カパッ！……』

「あはは♪見て見て愛衣さん！」

『ぷるるるるんっ！』

見事に頭蓋骨を切開した後、真上に帽子を脱がすように取り外すと、丸見えになった脳みそが静かに揺れている。

「まぁ凄い！脳みそ傷つけずに綺麗に頭蓋骨だけ剥がしちゃったのね？さすが美紅さん」

「ありがとう！更にチンポが勃つように脳に直接この薬をぶっ掛けて……」

『コポコポコポコポ……ぷるるるるんっ！』

小瓶一杯の液体薬を脳みそに振りかけると、脳みそが波打つように複雑に動く。

「……あへっ？」

「あらお目覚めかな？　オチンチンおっ勃てながら♡」

「ん？ホントだ！……な、なんか頭がスースーするような……」

「そう？ 気にしない気にしない」

美紅はそう言答えながら、椅子に拘束されて脳みそを丸出しにされながら勃起している伊坂正人のペニスを握り、上下にシゴき始める。

「うう、き、気持ちいい……よく見ると綺麗……ですね美紅様って」

「一応アイドルもやってるから……でも誉めたって許さないよ。一回射精させたら地獄をみせてあげる♡」

「うっ！……そ、そんな……うう、イ、イク……イクうううっ！！」

『ピュピュッ！……ドクドク』

美紅の手にへり掛けながら人生最期の射精を手コキで終える伊坂だった。

「じゃあぼちぼち拷問はじめちゃおっかぁ？　金属バットでタコ殴り刑から……この刑に変更したよ」

短刀を手にして笑顔で解説する美紅。

「か、この刑って？」

「全身の肉を少しずつ削ぎ落としてゆく凌遅刑だよん♡」
「ひぃっ!?　少し切られるだけでも痛いのに!?　絶対嫌です!　やめて下さいっ!!許して下さいぃぃぃぃっ!!　ひぃぃっ!!」
美紅の凌遅刑は、円満愛衣と、脇田忠司にも時間をかけて披露した。
『ズズズッ!……ザクッ!……スパスパスパアッ!』
「かひゅううっ!!かはああっ!!はひぃぃぃぃっ!!」
激痛に叫び続けすぎて喉が枯れて殆ど声が出なくなっている伊坂正人。
すでに1000回以上身を削ぎ落とされて、全身の80%が真っ赤な肉を曝け出している。
「どう?痛いでしょ?」
「かひゅううっ!!　かはあああああっ!!」
白目を剥いて口を大きく開けて涎を垂らしながら激痛に歪む表情を見せる。
脳みそをぷるんぷるんと揺らしながら地獄の肉削ぎ落とし刑は続

けられてゆく。

「1999、2000！ふぅ。2000回でほぼ全身の肉を削いじゃった……昔の中国では三千何百回とかゆう記録残ってんのに……まだまだ大きく切り取りすぎなんだろーね」

「でも見事だよ美紅さん。莉央様から教えられた短刀捌き♪」

「あの子はホント器用だもんね～」

ベッドに拘束されて凌遅刑の一部始終を見せつけられた脇田は小便を漏らしながら全身を震わせていた。

「どうしたの？怖いの？」

「こ、こんな恐ろしい事が……よ、よくできますね？」

「……あなたに言われたくないわね。相棒くんが死ぬまでじっくり見せてあげるから」

「ぐぐぐ……」

涙を流しながら死の恐怖と戦い始める脇田だったが、美紅による伊坂正人への拷問はまだまだ続けられる。

美紅は伊坂の椅子の拘束を解き、両手をバンザイさせて手首を縛

り、立ったままの状態で固定させると、椅子への接地面で無事だったお尻や背中の肉を削ぎ始めた。

脳みそ全体がポトリと落ちそうなくらいタップンタップン揺れている中、陰茎と睾丸、肛門以外全ての肉を削ぎ終える。

「次は……お尻の穴ね。円を描くようにくり抜いてやるわ」

「あばばばば……やめれ……かひゅかひゅ」

「過呼吸起こしちゃってる？まだ死なないでよね？チンポと金玉も残ってるの」

『グサッ！……ズズズ……バリバリ』

「ふんぎいいい〜！あひゃひゃあ〜」

手際よく肛門を丸くくり抜いた。

鮮血が溢れ出すが、血止めの強力な薬を注射してるため、ドクドクゆっくり溢れ出てくる程度だった。

「うふふ。脳みそピンチだから言語障害出ちゃった？何言ってるか分からないけど……ほら、これお前の肛門」

『くちゅっ！ズボボッ！』

「はひゃあっ！？」

くり抜かれた肛門を脳みその中にねじ込む美紅。

「次は唯一無事でいる性器ね。覚悟しなさい」

左手でペニスと睾丸を同時に握り、腹部の根元から右手に持った短刀で一気に切断してゆく。

『ザクザク！……スパァンッ！！』

「うぴょーーーっ！！」

「アハハ！面白い声で鳴かないでよ。吹いちゃうから！チンポとキンタマ、同時に切り取ってあげたからね？」

血まみれになったセーラー服の右手の裾を捲り上げ、肛門が付いていた穴へそっと突き入れる。

『ガボオッ！！』

「肛門なければガバガバも良いとこだわ♪お前の直腸掴んで大腸小腸全部抜き取ってあげるわ。この激痛が終わる頃にトドメ刺してあげるからあと少し頑張って♡」

「かひゅう～かひゅう～」

白目を剥いて涎をたらしながら涙を流し続ける伊坂正人。

『ズルズルズルズル！！……ズリュリュリュリュリュッ！！』

「ひゃほほほほほはほおっ！？ひんぎいいいいっ！！」

久しぶりに激痛を感じる奇声をあげるが、みるみるうちにハラワタが引き抜かれ、床へ落とされてゆく。

「ほらほらほらほらぁ！臭い腸から湯気出してんじゃないわよ」

『ズルルルルルルッ！！』

直腸、大腸、小腸を全てくり抜かれた肛門から抜き取られた伊坂正人は、真っ赤にそまった全身を痙攣させながら首を激しく左右に振り始めた。

『ガボッ！！グチャグチュグチュグチュ！！』

「ほらほらっ！」

左手に切り取ったペニスと陰嚢付きの睾丸を、脳みその中へ無理矢理捩じ込んで掻き回す。

脳がミンチになりながら局部を飲み込んでいった。

「ぴひゃぁあっ！！……がくんっ！」

ついに死ぬことを許された伊坂正人だったが、これ以上にない生き地獄を味わっての最期であった。

「どうしてあなたの頭部をベッドに固定してあるかわかる？」

「わ、わ、分かりません……や、許して下さい愛衣様……俺、ほんと怖い……なんでもしますから許して……ぐすん、ぐすん」

恐怖のあまり溢れる涙……それは自分が殺してきた相手にも味あわせてきたことである。

「泣いて許しをこう老夫婦を二人、殺してきたのよね？　お金の為に……その上あなたは小学生の女の子をレイプして殺害。鬼畜にもほどがあるわ」

愛衣は先の尖っているスプーンを手にすると、脇田の目へそっと向ける。

「目ん玉を抉り出すから」

「ひっ!?や、やめて!」

必死で目を固く閉じて回避を試みるが、所詮柔らかい瞼……いとも簡単にスプーンは右目の眼球の下部へ眼球を掬い取るように滑り込んだ。

『グサッ!ズブブ!』

「ぎゃああああああっ!!」

絶叫をあげるが、愛衣の手は止まらない。
眼球奥深くまでスプーンをねじ込むと、奥の神経が、繋がっている部分を抉るように引きちぎり一気にくり抜いた。

『ブチチッ!……ポコンッ!!』

喉が枯れて声が出なくなるまで叫び続けた後、左目も同じように抉り取ってゆく。

「がはあっ!かはあああっ!!」

「あなたの目玉、綺麗にくり抜けたわよ？」
目玉を両手に握りしめて、グニャグニャした手触りを愉しむ愛衣。
そっと美紅に目配せをする。
そのまま美紅は右手にメスを手にして、脇田のペニスを左手で軽く握ると、付け根辺りを一周薄皮を切る。
「愛衣さん、このままチンポを強く掴んで上へ引っ張るとどうなると思う？」
「服を脱ぐようにオチンチンの皮がベロンッと剥ぎ取られちゃうと思うけど……雁首で一度止まるかしら？」
「試してみるよ。えいっ！」
『バリリッ！！……ズルンッ！！』
「はひゃーーーっ！！！！」
声にならない掠れ声で必死で叫ぶ脇田のペニスは雁首まで引き剝け、尿道口まで一気に皮が剝ぎ取られた。
剝き出しにされた真っ赤に染まるペニスが、心臓の鼓動と共に共にヒクヒクと波打つ。

「やだ……ズル剥け生チンポ♡　やっぱ皮剥いたらエロいわね♡」

愛衣は頬を赤く染めながら美紅に剥かれたペニスを凝視している。

「肛門からメスを刺し込んで……そのまま陰嚢まで切り裂き……生の睾丸を引きずり出す。えいっ！」

『ズブッ！……ズズズ……ズルリッ！』

「かはあっ！ひゅうっ、ひゅうっ！」

性器解剖中も愛衣はペンチで一本ずつ前歯から抜いてゆく。

「死ぬ前に間抜けな歯抜けにしてあげるわね」

『ガッ！……グリュグリュ！……ブチィッ！！』

「はがっ！がはあああっ！」

「愛衣さーん！　見て見て！　陰嚢も全て腹部辺りから剥ぎ取ったわ。コレでチンポとキンタマは素っ裸ね♡」

美紅は血まみれの手で愛衣へピースサインを送る。

「うふふ♪　管で繋がって揺れてる生の睾丸！エロいエロい♡」

やがて全ての歯を抜き終えた愛衣は、そのまま下半身へ移動。美紅に陰嚢を剥ぎ取られた生の睾丸をペンチで一つずつ握り潰していった。

『ギュッ！……プチュッ！！……ギュムッ……グチャッ！！』

「かはあっ！！かはあっ！！かひゅうっ！！かひゅうっ！！」

あまりの激痛に過呼吸を起こし、全身が痙攣を始めた。

愛衣は日本刀を鞘から引き抜くと、肛門括約筋を半分だけ美紅によってメスで切開されてヒクヒクしている肛門へそっと刺し込んだ。

「アナルから串刺し刑よ。いっぺん、貫通してみる？」

『ズブズブ！……スボボボボッ！！』

目玉を失い、歯も全て引き抜かれて化け物みたいな顔になったまま脇田忠司は串刺しにされてゆく。

「ほうら、ハラワタ何枚も貫いてお口へどんどん近付いていってるわよぉ？　痛いでしょう？」

『ズブブブブブッ！！グボボボボッ！！』

「かひゅかひゅかひゅううっ！！……ガクンッ！」

「あと数センチで口から出てたのに……死んじゃったのね？ほら！」

『バシュッ！！』

血まみれの切先が醜い顔の口から飛び出した。
肛門串刺し刑と同時に死を迎えた脇田忠司は、先に旅立った伊坂正人と同等か、それ以上の苦痛を味わいながら地獄へ落ちることになった。

残酷処刑島に新たに二つの遺体が加わった。

戦慄の闇バイト（後書き）

愛衣と美紅によって、ここ最近では最高レベルの苦痛を味あわせる拷問処刑が執行された。

老夫婦と9歳の少女の魂は少しは報われたことだろう。

幼女の顔をした悪魔（前編）（前書き）

相手が手を出してこない限り、普段は大人しい中曽根葵だったが、ついにその逆鱗へ触れてしまう三人が現れた。

幼女の顔をした悪魔（前編）

「なんかさ……アイツほとんどみんなと話さないし……陰気臭いわよね」

「ほんとそれ。ってゆうか最近見てるだけでムカついてくるんだよね」

「転校生のくせにみんなを舐めてるのかしら？　私たちでヤキ入れてやる？」

甲南中学校一年二組。

最近転校して来た中曽根葵（なかそねあおい）は、つい先日二年四組の鬼頭美紅たちにボコられた三年一組の転校生、中曽根泰三（なかそねたいぞう）の妹である。

小学生低学年と言ってもおかしくないほどの可愛い幼い顔立ちをしていた。

その葵のことをヨシと思わないクラスでも不良生徒である三人組がイジメのターゲットに決めようとしているところであった。

ポニーテールの浅野麻美（あさのあさみ）、ツインテールの昼間（ひるま）まひる、三つ編みの夕木真夜（ゆうきまよ）の三人が放課後に中曽根葵の前に立ちはだかる。

「おい転校生！　ちょっと私たちに顔貸してくれるかなぁ？」

「嫌だと言っても連れて行くんだけどね」

「最近さぁ、あんた見てると何かムカつくんだ。ちょっと大事なこと教えてやるからついてきなよ」

静かに三人の話を上目で見つめながら聞き終えると、肩まで伸びた黒髪をゴムで纏めて縛りながら、そっと席を立つ葵。

返事もせずにそのまま三人の前に歩み寄る。

「お？　素直じゃねぇか」

「体育館の裏まで行くよ」

「逃げるなよ」

三人は、麻美、まひる、真夜の順に、キチンと順番通りにセリフを吐く。

辺りが黄昏に染まりつつある中、四人の１３歳の少女たちは人気のない体育館裏へと歩いてゆく。

「転校して来てから二ヶ月が経とうとゆうのに、まともにみんなに挨拶もできてないよね？　舐めてるの？」

胸ぐらを掴みながら麻美が怒鳴りつける。
目を細めながらされるがままに動かない葵に、残り二人もエスカレートしてゆく。
まひるは髪の毛を掴んで前後に振りまくった。

「なんか言えよコラアッ！？　おおっ！？」

真夜はセーラー服の内側のスカートに手をかけて、一気に足首まで脱がせた。

「下半身だけひん剥いてやるから覚悟しなよ？　アタシたちがお前の汚いマンコ見てやっからよ？」

冷静に大人しくしていた葵だったが、スカートを脱がされた瞬間、ついにスイッチが入ってしまう。
次々に入る左右の強烈なボディーブローと右手のフックが、三人を数秒間で薙ぎ倒していった。

「がはあっ！？　ゴホッ！　ゴホッ！　いててて」

「ぎえっ！？」

「いぎぎっ！？　いったぁーい！」

瞬時にそれぞれ二発ずつ攻撃を受けて、何が何だか理解不能状態である。

更に葵の追い討ちが三人を襲い、顔面がボコボコに腫れ上がるまで殴られた時点でようやく現実を理解した。

「ご、ごめん！　許してっ！」

「痛いいいいっ！　ごめんなさいいいいっ！」

「な、中曽根さん、もう勘弁してくださいっ！」

上半身はセーラー服、下半身は純白パンツ一枚のみとゆう姿でヤンキー娘たち三人を滅多打ちにしたため、慌ててスカートを拾い上げて履き始めるおっちょこちょいの中曽根葵だった。

横並びに土下座して謝る三人の前にしゃがみ込み、それぞれの頭を撫でてゆく。

逆に不気味に感じるその行為だったが、その予感は当たってしまう。

「下だけ脱いでくれる？」

「え？　し、下だけ？」

「うん。スカートとパンツだけでいいから脱いで」

「そ、そんな……それだけは許して……は、恥ずかしい」

「自分たちもそれを葵に強制してたじゃん？」

最後まで抵抗した麻美だけは更に顔面を殴られて、ついに鼻血まみれにされてしまった。

ついに三人とも覚悟を決め、下半身スッポンポンになってみせる。

「エッチビデオに出てる人みたいにM字開脚ってやつ……見せて」

「は、はい……こうですか？」

三人は並んだままお尻を地面について、M字開脚をする。
それを見ながら頬を赤く染めるが、笑顔は決して見せない葵だった。

「よく出来ました。とてもエロいわね」

あまりの恥ずかしさと屈辱感に三人とも頬に涙が伝う。

「両手でワレメ広げてマンコの中身を見せて」

「そ、そんな！？……わ、わかりました」

抵抗しても無駄なことは分かっているが、一瞬拒否反応をみせる麻美。

特に麻美は、先ほどの鼻血が出るまで顔面を殴られる恐怖からも、真っ先に両手で局部を全開に開き、膣の奥の奥まで葵に見せる。

「エロいけど臭そう。あなたも……汚そう……あなたは……マンカスだらけか……」

普通にマンコの奥まで覗かれ、言葉で陵辱する葵に、三人はついに号泣してしまう。

「泣いちゃったの？　ごめんね。じゃあラストはお決まりの土足での電気アンマ……これでシメだからね。もう許したげる」

土だらけのスニーカー、その足の裏を、生の性器へ直接押し付ける葵。

『ぎゅっ！』

「ヒャアッ！？　わ、わ、や、やめ……」

「いくよ？　声出したら更にキッツいお仕置きが待ってるからね？　ほらあっ！」

『ガガガガガガガッ！！』

「！！！！！」

葵に脅された麻美は、必死で発声を我慢するが、強烈な葵の電気アンマは、小陰唇がズタズタになると錯覚するほどまでに激しく振動する。

激痛に混じってクリトリスへの刺激が妙に心地よく、喘ぎ声と悲鳴の狭間で苦しむ麻美。

「それそれそれっ。オリモノがタレ流れ出して来ちゃってる。きったなーい！」

『ガガガガガガッ！！』

「いぎいいいいっ！！　痛いいいいいっ！！」

陰核の快感よりも、膣口と小陰唇の激痛の方が勝ってしまい、ついに悲痛の叫び声をあげてしまう。

「はい。あなたお仕置き決定！　次あなたね？」

ターゲットを昼間まひるに替えて、同じように強烈な電気アンマを13歳の性器へ敢行する葵。

「ピンク色で一番綺麗な色してる。クリトリスに重点を置いたバージョンにしてあげるね？　ほらほらあっ！」

『グリグリグリィッ！！』

「！！！！！……あんっ！！　あはあああんっ！！」

「ん？　よがっちゃってる？　ならイッちゃえ！　ほらあっ！」

『グリグリッ！！　グリリリリッ！！』

「あっ！！　んんんっ！！」

『プシャアアアッ！！……びくんっ！びくんっ！』

葵の足の裏でイカされたまひるは、潮を噴きながらアへ顔になって葵の脹脛を掴み、自分で更に陰部へ擦り付けている。

「あは、はへ、あ、葵様っ、気持ち良かったです……はぁ、はぁ」

「葵様って……キモいなぁまひるちゃんってば。潮と愛液で葵の足の裏を汚してくれたわね？」

「はぁ、はぁ、ごめん……なさい。でも気持ち良かったんだもん…

…」

「そう。でもあなたもお仕置き決定！　次はあなたよ」

夕木真夜はまひると違い、同性に感じることは絶対にないタイプだったが、アヘ顔で葵にイカされてヒクヒクしているまひるを見て、少し変な気持ちを感じてはいた。

「いくわよ？　あなただけでも我慢して更なるお仕置きを阻止してみてよ？」

「が、頑張ります」

『ピト……ビチャ！』

「ひっ！！」

まひるの愛液とオリモノが足の裏に残っているまま密着させられて一瞬声を出してしまうが、そこは葵に見逃してもらえた。
土までが水分で余計にひっつき、ジャリジャリと膣口から不快な音を立てる。

「拭くの忘れてた。ごめーん。どうせ汚いマンコしてるんだから気にしないよね？　じゃあいくわよぉ？　それえええっ！」

『ガガガガガガッ！！』

「！！！！！！！！」

『グリグリグリグリッ！！』

普通の電気アンマと、クリトリス重点アンマをどちらも声を出さずに辛抱仕切ることに成功した真夜。

「やるじゃん。葵の電気アンマで声出さなかった子はあなたが初めてだよ真夜ちゃん……二人のお仕置きを座ってゆっくり見ててね♪」

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、はい。分かりました葵様」

「中曽根様よりも葵様の方が響きがいいなぁ。みんなも葵のこと……下の名前で呼んでくれる？」

「はい」

麻美とまひるは同時に返事をして葵への忠誠を誓う。

「麻美ちゃんとまひるちゃんへのお仕置きを始めちゃうわね。四つん這いになってお尻を突き上げて」

「は、恥ずかしい……」

「わ、私も……ど、どうか酷いことしないで」

葵は小型のハエ叩きを鞄から取り出すと、二人の臀部を交互に叩き始める。

『パァンッ！！　スパァンッ！！』

「ひぎっ！！」

「んがっ！！」

思わず声を出してしまう麻美とまひるだったが、見た目以上に地味に痛い仕置きであった。

左右のお尻の肉を満遍なく叩きまくる内に、ピンク色から赤、更に紫色に変色してゆく。

「ああああんっ！！　痛いよおっ！！　やめて許して葵様ああっ！！　ひーん！！」

「わーん！　わーん！　痛いいいっ！！　許してええっ！！　えーんえーん！！」

ついに皮が裂けて鮮血が滴り落ちる。

号泣する二人へのお仕置きである尻叩きはようやく終了した。

葵は改造した大きなサイズの爆竹を鞄から取り出して二人の肛門

へ突っ込む。

『つぷ！』

「ひゃあっ！？」

『ズボ！』

「はぁうっ！？」

ライターを点火してそっと爆竹の導火線へ近づけた……その時だった。

「待ちなさい！」

いきなり暗闇から声がする。

「誰！？」

葵は慌てて体育館の角の死角に目をやると、二人の少女が現れる。二年生の鬼頭美紅と宮垣咲良であった。

「別名アナルクラッシャーの中曽根葵さん。その子たちにそのお仕

置きは少しやりすぎだと思うなぁ」

美紅が苦笑いしながら腕組みをする。

「そうそう。スカート脱がされただけで肛門破壊なんてオーバーキルも良いところだわ」

咲良も呆れ気味に口を開いた。

「なぜその呼び名を知ってるの？　あなたたちは何者？」

「葵ちゃんのお兄ちゃんを犯した中二女子と言えばわかるかな？」

美紅がそうゆうと、ただでさえ笑みを見せない葵が更に険しい表情になる。

「そっか……あんたたちがお兄ちゃんの敵なのね。コイツらの次に肛門破壊してやるから覚悟して待ってなさい」

そう言いながら浅井麻子の肛門へ突っ込んでいる爆竹の導火線に火をつける葵だったが、美紅が一気にダッシュで駆け寄って、爆竹を引き抜いた。

「だからこの子たちに肛門破壊はやりすぎなんだってば！人の話聞いてる？」

「邪魔をするな！　殺すわよほんと！」

本気でブチ切れた中曽根葵は、我を忘れるほど激怒して鬼頭美紅へ襲いかかる。

前の小学校でも中学校でも喧嘩最強を誇る葵だったが、流石に美紅には敵わない。

一分も経たない内にみぞおちへ強烈な一撃を入れられ、そのままダウンしてしまう。

「ごはあっ！……な、なんて強さなの……流石お兄ちゃんをボコって犯したやつ……」

美紅の余りにも桁違いな一撃の破壊力に、葵の戦意は一瞬で喪失してしまう。

「ふぅ〜。でもなかなかの強さだったよ。咲良と五分五分くらい強いと思う」

「え！？　マジか！？」

ショックを受けた咲良がまたまた落ち込んでしまう。

「えーと……前の中学でも男三人、女三人、合計六人をボコった後、肛門へ改造爆竹を突っ込んで着火……人工肛門を使わなければ生きていけない身体にしちゃってるわね？」

「……そこまで知ってるなんて……ほんと何者なのあなたたち？」

美紅と咲良を交互に睨みつけながら、膝をガクガクさせながらようやく立ち上がる葵。

その隙に麻美とまひるは慌ててパンツとスカートを履いた。

幼女の顔をした悪魔（前編）（後書き）

美紅に打ちのめされて、麻美とまひるの肛門破壊を阻止されてしまう葵。
本来優しい気性だった葵を、ここまで残虐に変えてしまった理由。
それを聞いて同情せざるを得なくなった美紅と咲良だった。

幼女の顔をした悪魔（後編）（前書き）

美紅と咲良も先日知った事実。
中曽根泰三と葵の壮絶な過去が明かされる。

幼女の顔をした悪魔（後編）

――葵から聞かされる暗い過去……六年前。

まだ小学三年生だった中曽根泰三は、一年生の妹である葵と仲良く歩いて近所の小学校へ通っていた。

この頃の泰三は喧嘩も弱く、毎日のようにクラスメイトからいじめられていた。

「おい中曽根！　次の時間担任いねーから教壇に立ってみんなにチンポ見せろ。分かったな？」

「そ、そんな……女子もいるし恥ずかしいよ」

「そんなこと言っていいのか？　この前みたいに一年の妹の目の前でフリチンにさせてグランド３周させてやろうか？」

「うっ、葵の前でもう恥はかきたくない……」

「そうだろ？　分かったら必ず実行しろよ。完全に足首までずり下ろして脱ぎ捨ててラジオ体操をやれ！」

男子のいじめっ子グループ四人に脅されて泣く泣く教壇に立つ中曽根泰三。

「きゃあっ！？」

「なっ！？　なにやってるのよ！？」

いきなり下半身を露出した泰三に女子たちの叫び声と罵倒が浴びせかけられる。
いじめっ子たちの命令で仕方なくやらされているのは何となく分かっている女子だったが、それでもいきなり陰部を晒す行為には、彼を非難する声が出てしまう。
しっかりペニスをガン見した後、恥ずかしいフリをして顔を手で塞いだり、下を向いて見て見ぬフリをしたり、様々な反応をみせる女子たち。

「次は尻叩きだ。四つん這いになってケツ突き上げろ」

「う、うう。恥ずかしいからもうやめてよ……」

いじめっ子たちは哀願する泰三を無視して、代わる代わるに平手で何度も尻を叩いた。

「おい星野！」

ずっとその行為を冷静に見ている成績優秀な女の子、星野美玲の名を呼びつけるいじめっ子のリーダー格である橋出祐太郎。

ふと祐太郎の方に目をやる美玲。何か用？　とでも言わんばかりにそのままじっと目をそらさない。

「お前もコイツのケツ叩けよ。女子代表で」

「…………」

そっと無言のまま席を立ち、教壇の方へ歩みよる美玲。

「いいよ。ヘタレな男なんて生きてる価値もないわ。やるならとことんやらなきゃ」

「え？　は、ハハハ！　女子のくせに怖い事言うなぁ星野……そいつにどうするつもりだ？」

「ねぇ中曽根くん。股を開いてお尻を高く突き上げてくれる？」

「や、やめろ！　女子にまで暴力受けたくない……」

美玲は黒髪をかきあげながらそっとしゃがみ込み、泰三の腰を引き上げて股を開かせる。

「やめてくれ……女子なのに見ないでくれ」

「いつも男子のいじめ見てて思ってることがあるの。生優しいなぁって……」

「え？　そ、そんなことないと思う。無茶苦茶恥かかされてるし痛い思いもしてきてるよ？」

星野美玲の右脚がゆっくり後方へ引かれてゆく。
まさかと周りが思った瞬間、そのまさかが起こってしまう。

『ズドォンッ！！』

「ぐわあああっ！？」

惨めな四つん這いのお尻を突き上げた格好のまま、女子児童に股間を思いっきり蹴り上げられてしまう中曽根泰三。
うずくまって絶叫をあげながら小便を漏らしてしまう。

「痛いいいいっ！！　わーんわーん！！」

ペニスと睾丸にまともにヒットした美玲の足の甲……潰れるかと思うほどの激しい打撃音がクラス中に響き渡った。
股間を押さえてうつ伏せに倒れ込み、自分の小便をお腹にたくさん塗りつけながら泣き喚く。

「すっごいなぁお前……女子の方が残酷なんじゃね？」

「ほんとだな。俺たちでもそこまで激しくチンポ蹴ったりしたことないぜ？」

「ワイも……見てて金玉がヒュッってなったわ。ハハハ……」

「星野のキンタマ蹴りのお陰でクラスの女子全員がオレたちのリンチを観察し始めたぜ？」

悶え苦しむ中曽根泰三のお尻や背中を足の裏で何度も踏みつけながら冷笑する美玲は、クラスメイトからはかなり危なく映った。

その時、教室の扉が開き、一年生の女子児童が入ってくる。

「!？……お、お兄ちゃん！？」

女子に身体中を踏みつけられている姿をいきなり目の当たりにした妹の葵は、目を丸くして兄の醜態を見つめる。

「葵！？　ど、どうして三年のクラスに来た！？」

「ママが交通事故に逢って病院に運ばれてるからお兄ちゃん連れて来るように先生に言われたの。早く行こう。先生が車に乗せていってくれるって」

以前にも兄のイジメを見ている葵は、親の事故を理由にこの場から兄を救えると考えながら歩み寄ってくる。
連れて行こうとする妹の腕を握り、静止させる星野美玲。

「……これ以上お兄ちゃんに酷いことしないで！　あたし達病院へ行かなくちゃならないから離して！」

美玲を睨みつけながら腕を振り解こうとするが、それを許さない美玲は、そのままいじめっ子男子たち四人へ、兄への更なるイジメを提案する。

下半身裸のまま仰向けに寝かせて、リーダー格の橋出祐太郎に電気アンマをさせた。

「中曽根！　許せよ？　コレは星野の命令だからなぁ。汚いチンポなんてオレも蹴りたくもないんだけどな……オラオラオラッ！！」

『ガガガガガ！！』

「がはああああっ！！　いだいいいいっ！！　やめてえええっ！！」

目を背けようとする妹の葵の顔を無理矢理兄の泰三へ向けさせる美玲。

「うふふ。ようく見て。弱い者は強い者のオモチャにされちゃうの……あなたのお兄ちゃんって惨めで哀れだよね？　電気アンマで大事なトコ潰されちゃえば良いのにね？」

ついに泣き始めてしまう葵だったが、美玲は振り解くことを相変わらず許さない。
痺れを切らして腕に思いっきり噛み付くと、激痛でついに離してしまった。

「痛っ！？　な、何すんのよクソガキ！！」

怒り任せに葵の制服のスカートを強引に脱がせると、パンツ越しに膣口へ中指を突き立てる。

『ズプッ！』

「やあっ！？　痛いいっ！！」

「臭そうな同性のアソコになんて興味ないけど……パンツごと奥まで指突っ込んであげるんだから！　えいっ！」

『ズボボボッ！……メリメリ！』

一瞬にして小学一年生の処女膜が悲鳴をあげる。
そのまま人差し指をパンツ越しに肛門へ突き刺していった。
ついに激痛のあまり号泣してしまう葵だったが、そのまま激しく膣内と直腸を掻き回す星野美玲。

「ほら！　前と後ろの汚い穴……同時にあたしの指でほじくり回してやるわ！」

『グチュチュチュチュ！！　グリグリグリッ！！』

「んぎいいいいっ！！　やめておねぇちゃん！！　痛いいいいいっ！！　わーんわーん！！」

真っ白なパンツが、みるみるうちに赤く染まってゆく。
美玲の中指は、葵の膣の奥、子宮口までも突き抜け、子宮内膜を傷つけていた。
処女膜だけの出血ではなかった。

「お、おい！　中曽根の妹の小便するトコから……血が出まくってるぞ？　それちょっとやばいぞ星野！」

「だよね〜。でもオシッコ出す穴じゃ無いんだケドね〜♪　もう抜いてやるから先輩には二度と逆らわないでね？　妹ちゃん」

そう言いながらようやく指を引き抜き、葵のセーラー服で指に付

着した大便や体液を拭き取る。

「葵っ！？　大丈夫か！？」

「お兄ちゃん！　痛いよぉー！　えーんえーん！」

クラスのみんなが同情するほど痛々しい男子四人と星野美玲によるリンチは終わった。
兄妹で泣きながら服を着て一年の担任の待つ職員室へ向かう二人。

「おい！　妹の股間ってどんな感触だった！？」

「オメコとかオマンコって言うのよ女の股間は」

「お、おま、おま…んこ？」

同級生の女子に初めて女性器の呼び方を教わったいじめっ子たち四人は、頬を赤く染めながら泰三の妹への美玲によるリンチを思い出して、少し興奮していた。

結局交通事故に遭った母親は亡くなり、父一人の手で育てられたが、仕事しながら子供の世話も出来ないとゆう理由から父方の祖母に引き取られて小学生生活を続けることになる兄妹。

イジメの話を学校から聞かされていた祖母は、昔からの親友である70歳の男性に相談をする。

その男性は総合格闘技の元世界王者で、これ以上学校で酷い目に遭わないように中曽根泰三と葵に徹底的に格闘技を教え込んだ。

兄が六年生、妹が三年生になる頃には、既に小学校に敵はいなくなっていた。

兄の泰三よりも妹の葵のほうが、イジメで受けた心と身体の傷が大きく、自分に害をなす相手にはトコトン叩きのめし、トドメは爆竹を肛門へ突っ込んで爆破させるとゆう、恐るべき一連の仕打ちを繰り返すようになった。

（アナルクラッシャー）とゆう名を陰で囁かれ、同級生の男子だけではなく、女子の間でも恐怖の存在となってゆく。

特に星野美玲への復讐は凄まじく、一生人口肛門を装着して生活せざるを得ない身体にさせていた。

子宮口までも爆破され、子供も産むことが出来なくなってしまっていた。

そうして鬼頭美紅たちの通う甲南中学校へ転校してくる運びとなる。

――――そして現在。

「…………そっか。辛い過去を経験してきたんだね。こちら側でも色々調べさせてもらったけど、ホントあんたたち兄妹には同情するよ。お兄ちゃんの泰三くんを犯すのも虐めるのも今日から止めてあげる」

拷問処刑人である冷酷少女である鬼頭美紅は、特殊任務省の藤堂長官から過去の真実を聞かされてから深く反省していたのであった。

「あたいも悪かったよ。泰三くんの件、ごめんな。転校生がいきなり喧嘩売ってきたもんだからかなりムカついてたし……妹のあんたのことも喧嘩っ早い子とかだったら兄ごとお仕置きしてやろうとか思ってたんだ」

宮垣咲良も美紅に続けて反省の言葉を葵に告げる。

「……もういいです。兄のことも許してくれて、葵のことも……兄妹の過去を知った上で理解してくれたのならもういい」

葵はそう言いながら怯えて泣きながら土下座をしている三人のヤンキー娘たちを見まわした。

「いくら格闘家の元王者の教えがあったとは言え……たった二年ほどであたいと変わらないくらい強くなるなんて……凄いよあんた。またいつでも二年四組に遊びにきなよ」

「はい。ありがとうございます」

意外と物分かりのいい良い子だと悟った美紅と咲良は、葵の教室を後にする。

「もう理不尽なイジメなんてするなよ？」

「は、はいっ！！」

去る間際の美紅の一言に、土下座していた三人はほぼ同時に返事をした。

「ごめんなさい葵ちゃん！」

「……もういいよ」

幼女の顔をした悪魔（後編）（後書き）

浅野麻美、昼間まひる、夕木真夜の三人は、この一件から心を入れ替えて、中曽根葵を親友として仲間に加えることになった。

だが昼間まひるだけは違う感情が芽生えていた。

「葵ちゃん……あの」

「どうしたの？」

「あのね、うまいこと言えないんだけど……私、葵ちゃんのことが……」

少し首を傾げてしどろもどろしているまひるの顔を覗き込む葵。

「多分きっと……私……あなたの事が…………好き」

「私も好きよ。親友になってくれてありがとう」

「い、いや、そうじゃなくって……あの、あの」

昼の長い休み時間、以前のいじめっ子である浅野麻美と昼間まひる

と夕木真夜、そしていじめられかけていた中曽根葵。
四人は窓際の陽だまりの中でぼうっとしていた。
結局葵に対して何を言いたいのか全く理解できない麻美と真夜と葵を他所に、一人だけずっと落ち着かないまひるだった。
「し、親友としてじゃなくて好きなの！！」
いきなりの叫び声に驚き、周りの三人は目を丸くして固まる。

「え？」
「は？」
「！？」

葵だけは完全に言葉が出なかった。
数秒かけて、ようやくまひるの言いたい本心を理解してゆく葵。
「あ、あ、そ、そうなんだ。……嬉しいよ。ありがとう」
頬を真っ赤に染めながらも葵の返事に涙を滲ませながら両手を祈るように組むまひる。

「あの、私ね、葵ちゃんに責められながら本気で感じちゃって……今度は敵意無しで責めたり責められたり出来たらいいなあって……思えて来ちゃって」

葵の返答へ麻美と真夜の意識が全集中する。

「あ、葵は……まひるちゃんのこと大好き。でもまひるちゃんの気持ちに全て応えることは出来ないかもしれないけど……これからも葵のこと大好きでいてね？」

苦笑いする二人と、嬉しいような振られたような複雑な気持ちに動揺するまひると……幼女のような幼い笑顔でまひるを見つめる葵。滅多に笑顔を見せない葵の微笑みは、麻美たち三人には天使のように見えた。

その時チャイムがなって、四人それぞれの心境の中……無情にも午後からの授業が始まるのであった。

後悔と興奮と生き地獄（前書き）

弱者に対しての凶行。
卑劣な少年が犯した罪は、さらに強者からのお仕置きで晴らされることになる。

後悔と興奮と生き地獄

「アイドルになる前は普通の中学生だったんだね」

「うん。最初はなりたくなんてなかったから断ってたんだけど……好きな人ができて……その人にお願いされちゃって」

「ってことは一度は断ったけど……好きになった人のためにアイドルになる決意をしちゃったんだね。美紅ちゃんにそんな人がいたなんてかなりショックだけど……アイドルだって人間だもんね」

「……そう言ってもらえたら助かるよ」

秋の過ごしやすい季節から、寒い冬へ変わろうとしている境目……この日の残酷処刑島は風も穏やかで、眩しい日光が降り注いで少し暖かいくらいであった。

その無人島を手を繋いで散歩をしているのは、拷問処刑人であり、アイドルである鬼頭美紅と、中学一年生の少年である安原祐樹（やすはらゆうき）……少し離れて後ろをついてくるのは女子高生の拷問処刑人である円満愛衣だった。

「まさか本物のアイドルと……しかも大ファンの美紅ちゃんとデートできるなんてホント夢のようだよ」

黙ったまま立ち止まり、静かに高い秋空に目をやる美紅。
１０ｍほど後方をついてくる愛衣も距離を保ったまま立ち止まる。

「あの……僕……」

美紅の手を強く握り締めながら祐樹が続ける。

「僕は……本当に殺されちゃうの？」

「……うん」

「し、死にたくない……まだ死にたくないよ」

何者かに下校途中連れ去られ、睡眠薬で眠らされたまま気付けば訳のわからない場所にいた安原祐樹。
傍にいた美紅と愛衣に自分の運命について大体の話を聞かされてはいるが、未だ本人は半信半疑のままであった。

しかも美紅は、自分のタイプであり大好きなアイドルの女の子。
中学生のアイドルに殺されるなんて余計に実感が沸かない。

「あのさ……どうしてあんなことをしたの？」

美紅は目を閉じて優しい口調で問いかける。

「ずっと梶谷に虐められてきて……仕返しがしたかったんだ。でも柔道初段の喧嘩最強と謳われた梶谷に敵うわけもないし……」

「だから妹に手を出したのね。最低だよそれ……」

「こ、殺す気はなかったんだ！　階段から突き落として骨折でもすりゃあいい！って思っただけで……まさか死んじゃうなんて……あの時誰もいなかったハズなのになぜ捕まったのかも未だ分からないんだ！」

「呆れるわね。階段から突き落とされたら頭打って死んじゃう可能性も十分あるってことに気付かない時点でホントおバカさんだよ。そもそも相手が強くて敵わないからって女性にアタるなんて……妹さんからすれば、とばっちりも良いところだわ。あの時ね、皮肉なことにキミに想いを寄せてる子がいて、告白しようとキミの後ろを隠れながら尾けてたみたいなの」

「！！……そ、そんな……こんないじめられっ子の僕のことを好きになってくれる女性が存在したなんて……癒してくれる彼女ができるのなら……ホントあんなことするんじゃゃなかった」

同級生のいじめっ子、梶谷への恨みよりも、その妹を殺してしまったことへの後悔と、夢にまで見た彼女ができていたかもしれない可能性を逃した愚かな自分に憤りを強く感じながら、様々な想いが入り混じった涙を流す安原祐樹だった。

「ぼ、僕を殺すのは本当に美紅ちゃんなの？」

しばらく泣いていたが、ようやく話せるくらいに気持ちが落ち着いた祐樹は、俯いたまま美紅に問いかける。

「あたしと……後方にいる女子高生の愛衣さんの二人によって拷問処刑が執行されるの」

「ご、拷問……そ、そんな……痛いのも死ぬのも怖いよおおおおっ！！　お願い許してよおおっ！！　わーんわーん！！」

しゃがみ込んで泣きじゃくる中学一年生のまだまだ人生これからだった哀れな少年の頭を、右手で優しく撫でてあげる美紅。

「ごめんね。キミを許すことも助けることも出来ないの。憎んでいたいじめっ子である梶谷恭助の双子の妹である梶谷梨花さんの無念はきっちり晴らしてあげないと」

泣き崩れて土下座してまで生を嘆願する少年だったが、拷問処刑を逃れる術はなかった。

あるとすれば無人島と聞かされているこの島に現在存在する自分以外の人間、二人の女性を倒すことのみだが……。

『僕だって男だ。女子中学生と女子高生ならどうにか倒せるかも…

……一か八かやってやるか』

奮起を決めた少年はスクっと立ち上がり、美紅に殴りかかる。

「残念ね。あたしたちに大人しく殺されるなら少しでも拷問の数を少なくしてあげようと思ってたのに……」

ツインテールを揺らしながら攻撃を躱してゆく美紅の表情は少し哀しそうに見えた。

「え！？……はぁ、はぁ、はぁ、はぁ」

何十回と殴りかかり、蹴りまくるが一度たりとも祐樹の攻撃が美紅にヒットすることはなかった。

「はぁ、はぁ、はぁ……どうして一発も当たらないんだ！？　嘘だろ！？」

「でも安心して。せっかく男の子に生まれて来たんだから地獄に送る前に天国も味あわせてあげるから」

「嫌だ！　最期に死ぬなら一緒じゃないか！！　許してお願いだからっ！！」

「キミ、オナニーしたことある？」

「え！？　な、何それ！？」

未だ精通も出来ていない幼い少年だったが、人生最期の日に美紅と愛衣によって調教されるハメになるのであった。

美紅は祐樹を押し倒して、馬乗りになる。
そのタイミングで、愛衣はズボンとパンツを手際よく脱がせていった。

「わあああっ！？　やめてっ！！　恥ずかしいよおっ！！」

「憧れのアイドルと手を繋いでお散歩デート楽しめた？　今から安原祐樹１３歳の拷問処刑を執行します。あたしのファンでありがとね。さぁ始めちゃうわよぉ？」

『パンパンパンパン！！　グシャッ！！　ガツッ！！　ドカッ！！』

「ぐぇえええええっ！！　ぎゃあああああっ！！」

激しい往復ビンタから始まり、怒涛のパウンドが打ち下ろされる。
女子中学二年生である美紅の拳が、何度も何度も激しく少年の顔面を叩き付けた。

「ほらほら、男前になったねぇ♡」

仕上げに平手打ちを二回しながら冷たく微笑む美紅。

『パンパン！』

「ひぎいいいい……いだいいいい」

「愛衣さん、先にコイツの便、腸から抜いちゃおっか？」

「うん。了解！　あのね、少しでも周りが臭くならないようにしてあげるからね」

低い木製の簡易ベッドにうつ伏せに縛りつけ、浣腸を施す愛衣。

「ほうら、下の汚いお口からグリセリンをお飲みなさい」

『ツプッ！……ぷちゅうううううっ！』

「ひっ！！　冷たいっ！？　やあああああっ！！　何か入ってくるううっ！？　やだあああっ！！」

「グリセリンだと言ってるでしょう？　たくさん排便しなさいね？」

愛衣が二度目の浣腸を注入すると、一分も持たない内に溜まって

いる大便を噴き出させる祐樹。

「ううっ！　で、出ちゃうよおおっ！！」

「出しなさい」

「ズボ！……ポコンッ！」

「はうっ！　んぎいいいっ！！」

愛衣は人差し指を少し肛門へ挿しこみ、勢いよく引き抜いた。

『ブリブリブリッ！！　プシャー！！』

更に５００ｍｌの高濃度グリセリン浣腸を三回、四回と繰り返す愛衣。

「何度も何度もお尻から浣腸液噴き出させちゃって……もうかなり便の色が無くなってきたわね。スッキリした？」

「わぁーん！　わぁーん！　お腹とお尻が痛いよおおおっ！　もうやめておねぇちゃんたち……酷いことしないでよおおっ！」

愛衣はそっとしゃがみ込んでヒクヒク動く肛門を眺めながらお尻の肉を右手で鷲掴みにすると、激しいスパンキングを開始した。

「汚い便を女性の前で噴き出した罰として……お尻叩き１００回の刑ね？　ほらほらほらあっ！」

『パンパンパンパンパパパパパパパンッ！！！』

「痛い痛い痛いいいいいっ！！　んぎゃあああああっ！！」

超高速で破壊力抜群の尻叩きは、臀部の皮が真っ赤に染まった瞬間、すぐに紫に変色してゆく。

「９９９、１０００！」

『パンッ！　スパァンッ！！』

「あぎゃあああっ！！　んぎゃあああっ！！」

愛衣は１００回と言いながら、そのままの勢いで１０００回引っ叩いた。

紫色に繁殖した臀部の皮は、数箇所裂けて鮮血が滴り落ちている。

号泣しながら小便を漏らす祐樹だったが、二人の責めは止まらない。

「顔面ボコボコ、お尻はズタボロ……大便強制排泄の次はお漏らし

……更なるお仕置きが必要だよね？」

「許してえっ！　お願いだからぁっ！　わーんわーん！」

「とりあえず痛みが序の口のうちに精通させてあげる」

美紅はそう言いながら佑樹の肛門へ人差し指を挿し込むと、前立腺を的確に指の腹で揉みシゴいた。

『ズブ！……ヌポポ……ヌププッ！　グリグリッ！！』

「あはあっ！？　ううぅっ！　んんんんっ！！　美紅ちゃん……やめて！な、なんか下半身が変な感じだよぉ！？」

「恥ずかしいの？　でも気持ちいいんでしょ？　おちんちん勃起してきてるよ？」

美紅の指使いに、どんどんと勃起してゆくペニス……ついにはち切れんばかりに全開にフルボッキしてしまう。

「これが……オナニー……ってゆうか手コキとゆうものだよ？」

『ぎゅむっ！……シコシコシコシコシコ！』

「あうっ！？　あはあああっ！？　な、なんか変な感じ……こそばいような気持ちいいような……やめて……美紅ちゃん……」

「ほらほら！　人生最初で最期の射精しなよ？　ほらあああっ！」

『シュコココココココッ！！』

いきなりマックススピードで手淫をする美紅に、祐樹は絶頂を迎えてしまう。

「あっ！　な、なんか出そう！？　んあああっ！！」

『ドピュッ！　ドピュピュピュピュピュピュウッ！！』

美紅の激しい手コキにより、何度も何度も噴き出す大量の精液は、残酷処刑島の地面へ降り注いでゆく。

「どう？　射精ってゆうの。これが気持ち良かったでしょ？」

「はぁ、はぁ、はぁ、き、気持ち良かった……なんか変な感じ……なんか興奮してるよ僕」

「大きくなったオチンチンをね……好きになって付き合っている彼女の性器へ挿し込んで……体内へ射精すると赤ちゃんができるってわけなの。それがセックス。キミにはもう叶わない夢だけど」

「そ、そうなんだ。子供作るのってこんな気持ちいいものだったんだ……でもオチンチンから飛び出すなんて……すごくエッチなんだ

ねセックスって」
祐樹と美紅との会話を聞きながら着々と次の仕置きの準備をする愛衣。
まずは簡易ベッドでのうつ伏せ状態の拘束を解き、上半身も服を脱がせて、立たせたまま輪っかを作ってあるロープを首にかける。
そのまま手足を縛り、大の字になるように両手を左右に伸ばして固定、両脚は大きく開いたまま固定、動くと首が締まるように拘束を終える。

「うっ、く、首が……ゲホゲホッ！！」
「次は愛衣さんによる股間蹴りの刑よ。ここでキミの睾丸は蹴り潰されるから二度と射精はできなくなるわ」
「ひっ!?　そ、そんなあっ！　軽く握っても痛いのに蹴るなんてやめてよおっ!?」
泣きながらボコボコに腫れた顔面のまま全身を震えさせる少年。
更に恐怖で小便を漏らした。
「まだお漏らししてるの？　私の股間蹴りの刑を早く受けたいみたいね？じゃあ始めちゃうわよ？」
『スパァンッ！！』

「ぎゃあっ！！」

『ズドッ！！　パァンッ！！　ドコオッ！！』

足の甲が股間に当たる場所、角度により、様々な打撃音が響く。
意図的に睾丸がなかなか潰れないよう加減しながらの股間蹴りは、
まさに生き地獄であった。

『ズドンッ！！　ドカッ！！』

「ぎゃっ！！　ひぐっ！！」

声も枯れて腫れあがった顔面をクシャクシャにしながら愛衣の蹴りを何度も喰らう少年は、意識が朦朧としてきていた。

「ちょっと待って愛衣さん！　もうそろそろ潰れそうだからその前にケツマンコ犯してあげたいの」

「はーい」

直径3センチの極太アナルバイブを装着したパニスバンドを腰にセットして、背後からそっと祐樹を抱きしめる美紅。

「ほら、しっかりしなさい！　まだまだこれからなのよ？　ブット

イの、ボクのアナルに挿れてくださいって言え！」

「ぐすん、ぐすん、オチンチンと金玉が痛いよぉお〜！痛いよおお！」

「言えないか……まぁいいわ。ほら、はち切れんばかりにアナル拡げてあげる♡」

『ピト！……ズブブ！……メリメリメリ！』

「ぎっ！？　ぐぎいいいいいっ！！！！」

『ばちゅうっ！！！……バコバコバコバコッ！！』

直径3センチ、長さ12センチもある極太アナルバイブは、しっぽりと少年の直腸へ捩じ込まれた。
直腸自体がはち切れて爆発しそうなほどのサイズのバイブを、更に激しく腰を振りピストン運動を繰り返す美紅。

『バッコンバッコンバコバコバコバコッ！！』

「きゃぴいいいいっ！！！！……がくんっ！」

激痛のあまり白目を剥いて失神する安原祐樹だったが、意識のないまま更に数分間激しくケツマンコを犯す。

『ドクドク……トロトロ』

血の混じった腸液が糸を引きながら垂れ落ちてゆく。
美紅のセーラー服とスカート、太ももにも大量の腸液が付着した。

「なにヤラシイ液アナルから垂れ流してるの？んん？」

アナルバイブを引き抜くと、今度は改造爆竹をそっと突っ込んだ。

「愛衣さん、コイツの肛門吹っ飛ばして大穴開けちゃうけどいい？
多分直腸飛び出しちゃうと思うけど……」

「うふふ♪　アナルから直腸飛び出したままでも、睾丸やペニスは蹴られるから大丈夫よ」

美紅は冷たく微笑みながら、ライターで改造爆竹に火をつけて、少し距離を取る。

『パァンッ!!』

「ギャーーーーーー!!!!」

『ズルズル……プラーン……プラーン』

爆発にやって肛門括約筋は完全に吹っ飛び、ポッカリ開いた肛門からは直腸が２０センチほど飛び出して大きく揺れる。

「あはは♡　綺麗な直腸してるね？　風に揺れておもしろーい♡」

美紅は激しく揺れる直腸を見ながら大受けしている。

愛衣は頬を赤くしながら背後に周り、はみ出した直腸を右手で握り、指先で何度も摘みながら感触を楽しむ。

「プニプニしててヤラシイわね～♡　私、生のハラワタ見てたら興奮して来ちゃった♡」

『ズドォンッ！！』

「ピギャアッ！！」

愛衣の股間蹴りが再会する。
直腸ごとペニスと睾丸は再び激しく打撃を受け始めた。

『ズドオッ！！……グチャッ！』

ついに右側の睾丸が完全に潰れてしまう。

再び意識を失うが、愛衣の股間蹴りは更に本気の力で激しく続けられる。
すぐにもう一つの睾丸もミンチになってしまった。

「面白くないから目を覚ましてもらおうかしら？」

そう言いながら痛みがかなり麻痺する薬と、気付薬を会陰部に大量に注射する美紅。
しばらく経ってから意識を取り戻した安原祐樹だったが、目の前には見覚えのあるモノが皿の上に乗せられているのに気づく。

「アーンして」

「うっ!? そ、それはもしかして……ち、ちんぽ!? ひ、ひどい」

「よくわかったわね♪ 皮が数箇所剥けちゃってるけど、原型留めてるからバレちゃうか！ てへへ……このヨーグルトみたいなのは何か分かる？」

「そ、それはわからないよ……な、なにそれ？」

「グチャグチャにすり潰した睾丸……キミの白子だよぉ」

「ひっ！ ひいいっ!!」

愛衣によって無理矢理口を開けられて、美紅のスプーンに乗せられた自分の性器を食べさせられる絶望感……死を覚悟できない少年にとっては発狂しそうになる事態であった。

「美味しかった？　白子はネバネバしててなかなか飲み込めなかったでしょ？　あはは♡」

「おえっ、おえっ！　ごっくん！」

どうにかペニスと睾丸を全て食した祐樹は、ついに死を受け入れる覚悟を手に入れた。

「美紅ちゃん……痺れて痛みはないけど……もう僕の股間って……無茶苦茶になっちゃってるよね？　もう殺して……お願いだから」

愛衣と美紅はしばらく股間を眺めて頬を赤く染めると、再びウケ始める。

「アハハハ！　もうチンポは根元から切断されちゃってるし、金玉も陰嚢ごと引きちぎってただの空間……お尻の穴からはピンク色の直腸がはみ出してプルプル揺れてるの……ぷぷっ！　あははは！！」

「簡単には死ねないショック死を防ぐ強力な麻酔薬も打ってあげたからね？　まだまだ壊れてゆく自分の姿を堪能していくがいいわ」

必死で笑いを堪えるも、耐えきれず爆笑する美紅。
愛衣は必死で笑うのを止めながら簡単には死なせないことを告げて、はみ出している直腸を両手で掴む。

「このエッチなハラワタ……引き摺り出してもいい？」

「ううう……全身が痺れてゾワゾワする……も、もう僕死んじゃうの？」

「だから死ぬって言ってるでしょ？今から愛衣さんがキミのハラワタを全部抜いてくれるから……お尻の穴からね。もうマンコみたいに縦長に裂けちゃって空間みたいになっちゃってるけど……あは！あははは！」

まだ笑いのツボにハマった美紅は爆笑を続けてしまうのであった。

「ほんとケツマンコってよく言ったものね。さぁ愛衣さん、お願い」

「はーい！　直腸から大腸、小腸まで全部引き摺り出してあげるから。いくわよ？」

『ズルズル！　ズルルルルルルルッ！！』

「ギャァアアアアアアッ！！！！　痛いようで痛くない！？僕の身体どうなってるの！？」

両手を交互に掴み替えながらどんどん引きだり出してゆく。
やがて全てのハラワタが抜かれて、胃が恥骨に引っかかって止まった。
足元から生臭い湯気が立ち昇る。
「美紅ちゃん、ハラワタって意外と白いんだよね？」
「うん。ピンクか白か……ヌメヌメテカテカしててなんかエロいよね？」
この時ようやく拘束から解放された少年は地面に下ろされた。
「死ぬっ！　死んじゃうううっ！！　ヒイィー！！」
慌ててぶちまけられた自分の腸を肛門から押し戻そうとするが、すぐにはみ出してきて収拾がつかない。
そのまま愛衣と美紅は全身を足の裏で蹴りまくり、踏みまくる。
そして電動ノコギリを手にした愛衣はそっと囁く。
「指、手首、肘、肩口と切断してから足の指、膝、足の付け根、と順番にやってあげる。左右交互にね。どんどん壊れてゆく身体を見ながら興奮しなさい」

「ひっ！　ひぃぃぃっ！！　もう殺してええええっ！！」

『ウィイイインッ！！……バリバリバリバリッ！！』

痛みさえ無くした少年の全身をどんどん切断してゆく愛衣。
セーラー服は返り血を浴びまくり、真っ赤に染まり切っていた。

「うふふ。ダルマ少年の出来上がり♡」

「お見事！　愛衣さん！」

美紅も満面の笑みで手を叩いて喜ぶ。
そのままハサミを手にして片方ずつ乳首を切り取っていった。

「ピンク色した可愛い乳首ね？　あたしが切り取ってあげる。卑劣な犯罪なんて犯さなければ彼女にしゃぶってもらえたのにね？ココもオチンチンも……残念だわ」

『ジョキンッ！……ジョキンッ！』

「あがががが……美紅ちゃん……こんなの酷いよぉ……こんなにバラバラにされてもまだ死なないなんて……酷すぎるよおおっ！！
わーんわーん！！」

何も答えないまま目を細めながらハサミを思いっきりヘソへ突き刺した。

『ドスッ！！ぴゅうううううっ！！』

噴水のように鮮血が噴き出すが、構うことなくジャキジャキと胸の中央へむかって切り開いてゆく。

かなり鼓動が弱くなった心臓が肋骨越しに見える。

「まだ動いてる心臓が哀れすぎて笑えちゃうわね♡」

そう言いながら肋骨もハサミで切断してゆく。

『ジョキンッ！！　ジョキンッ！！』

「さすがキッチンバサミ！　よく切れるわ♡」

「あわわわ……ぶくぶく」

泡を噴きながら激しく全身を痙攣させ始める安原祐樹。
ついに１３年の人生に幕を閉じる時が迫って来た。

「トドメはやはり大ファンである美紅さんに……」

そう言いながらサバイバルナイフを手渡す円満愛衣。
そっと受け取ると、髪の毛を鷲掴みにして血まみれの胴体に馬乗りになると、ナイフの刃を首に押し当てる美紅。

「手足もないハラワタも抜かれた哀れな胴体から切り離してやるよ。来世では男らしく生きるのよ？　じゃあもう死んでいいわ」

『ザクッ！……ザクザクザクザクッ！！』

「ごぽおおっ！？……ゴポゴポゴポッ！！　カヒュウッ！　カヒュウッ！」

美紅は激しくサバイバルナイフを左右に動かして、少年の首を切り開いていった。
血の泡を口から履きながら目玉がぐるんと回る。
白目を向いて口を大きく開けた瞬間、ついに１３歳の短い人生を終えることを許された安原祐樹であった。

切断した首を髪の毛を掴んで持ち上げ、グルグルとぶん回す美紅。

「喉の切断面から口から汚い血の泡たくさん噴出しやがって……汚いわねほんと」

「うふふ。そんな鬼畜でも美紅さんのファンだったんだから……言わないであげて」

美紅は小型爆弾を生首の口にねじ込んで、そのままスイッチを押すと、思いっきり遠くへぶん投げた。

『ドォォオオンッ！！……ビチャビチャ！パラパラ』

あたりに飛び散る頭蓋骨や脳みそを見ながらハイタッチで拷問処刑完了を喜びあう愛衣と美紅。

残酷処刑島に新たに一人の遺体が加わった。

後悔と興奮と生き地獄（後書き）

「人生最期の日に射精できただけでも幸せと思いなさいね？」

「そうだわ。あなたが美紅さんをファンだったからこその特別なサービスだったの。あの世でも美紅さんを思いながらオナッてなさい」

鬼頭美紅と円満愛衣による拷問処刑は、凄惨な内容となりながら無事に終えることとなった。

複雑な心境（前書き）

中一少女の想いはエスカレートしてゆく。

せめてデートとゆう気持ちもあり、葵と一緒に街に出かける約束を果たしたまひるだったが……。

複雑な心境

「あのさ、お兄ちゃん」

「ん？　どうした？」

「ちょっと話しにくい相談なんだけど……」

「お？　悩み事か？　何でも聞くぜ！」

日曜日の昼前、朝昼兼用の食事をする中曽根泰三と葵の兄妹。
朝起きるのが苦手な二人は、休日ともなると、用事でも無い限り必ず昼前までは起きてこなかった。
父方の祖母はこの日、親戚の家に出かけていたため、二人きりの食事となる。

「お兄ちゃんだったら……もし同性の男の子から告られたらどうする？」

「ぶはっ！！」

質問のあまりの内容に、カレーのニンジンのカケラを吹き飛ばす泰三。

「やだ！　汚いなぁもう……ニンジン嫌いだからって吐き出さないでよ！？」

「ごほっ！ごほっ！……すまんすまん。お前がいきなりとんでもないこと言うから」

「……やっぱ普通じゃないよねそれって」

「だな。でも何かの拍子やキッカケで急に今まで恋愛対象じゃなかった同性を好きになる、なんてこと……世間ではそこそこ実例あるんじゃねぇかな？」

「そうよね。よくそんな内容見るもんね。雑誌とか記事とかネットとかで」

その後なぜか無口になり、黙々と祖母が作り置きしておいたカレーを食べる兄妹。
食べ終わると皿を洗い場に運ぶ泰三。

「置いといてお兄ちゃん。葵が自分の分と一緒に洗うから」

「そうか？　悪いな。もうちょっとだけ寝てくるわ。夕方からチョコザップでもいって筋トレしてくる」

「週に一回なら通っても意味ないんじゃない？」

質問には答えず後ろ向きのまま手を挙げて二階へ上がってゆく。

ふと立ち止まってボソッと呟いた。
「さっきの質問の答えだけどな……やっぱ俺は無理だわ。女しか興味ねぇ」
「ふぅん。一人の意見として参考にするよ。おやすみ」
兄が再び眠りについた後、よそゆきのワンピースに着替えてスマホを手に取りＬＩＮＥを送信する。
『今から家出るから、駅のポスト前に着くのは一時過ぎになると思う』
数秒で返信がきた。
『りょーかーい！　私もう着いてるから！　待ってるね』
『え？　早すぎるんじゃない？』
『勝手に早く来ただけだから気にしないで♪』
展開の早さに少し戸惑いながらも慌てて玄関の扉を開ける葵。
実は、先ほどの台所で、兄である中曽根泰三に以前鬼頭美紅にボ

コられた時のことを聞こうと思っていたのだが、やっぱり辛い過去を思い出させるのも可哀想だと思い直し、口に出すのを我慢していた兄想いの妹である葵だった。

バスに乗り甲南東部駅に降り立つと、目の前に現れたのは昼間まひるだった。

以前葵を虐めようと仕向けてきたが、葵から手痛い反撃を受けて逆に性的虐待を食らった三人組の一人である。

葵の性器責めを受けている内に本気で感じてしまい、同性の葵に恋愛的な意味での好意を寄せてしまう。

「葵！　やっほー！」

「こ、こんにちは。まひる」

新たな仲間として三人組に加わった葵。
四人組の仲間になったわけであるが、お互いのことを下の名前で呼び、呼び捨てで呼ぶことにみんなで決めあっていたのであった。

「昨日私が言ってたとってもオススメのパンケーキが美味しい店、早速行こうか？」

「うん。葵もパンケーキは大好きだから楽しみだよ」

有名人気店だけあって、若者でごった返す中、順番に並び色々な話をする二人。

「あのさ、前から思ってたんだけど葵ってめっちゃ幼い顔立ちしてるよね？」

「そ、そうかな？　そう言えばお婆ちゃんも前にそう言ってたけど……自分では普通の中学生に見えるんだけどなぁ」

「それに可愛いし……そんな幼くて可愛いのにすっごく強くて……ホントあの時は本気で感じちゃって……なはは」

「なははって言われても……」

元々敵としてのまひるを責めてる時、相手は単に性的刺激で快感を得ているだけであり、まさか自分自身を恋愛対象として好きになられるとは夢にも思っていなかった中曽根葵。
葵自身の恋愛対象はあくまで兄である泰三と同じ、異性であることに間違いはなく、まひるの気持ちには応えられない罪悪感みたいなものがあった。

「葵？」

「え？」

「遠くを見てるような顔してボ〜っとして……今あんたの記憶どこか行っちゃってたよ？　おーい！　早くここに戻って来て〜」

「ヤダなぁ。人のこと記憶飛んじゃってるみたいに言って！　少し考え事してただけなの！」

そのまま無事に順番が回ってきて、お洒落な造りの店内の椅子に腰掛ける二人。

「木の匂いがしてすっごい雰囲気いいなぁ～」

「そだね。田舎のログハウスみたい」

話もそこそこに美味しいパンケーキを堪能すると、後が支えているため気を遣ってそそくさと店を出る。

「あー美味しかった！」

「ほんと！　葵が今まで食べたパンケーキの中で一番美味しかったよ！」

「ほんと！？　良かったぁ♪　また来ようね♡」

「うん」

そのまま昼間まひるの勢いに乗せられて、東部地方最大級の規模の大きさを誇る大丸東部店へ連行される葵だったが、人の多さと品

揃えの多さと店内の広さに、　初めて訪れた葵はかなり度肝を抜かれて疲労困憊してしまう。

「ちょっとごめん！　少し座っていい？」

「葵？　大丈夫？　疲れた？」

「なんか人の多さに酔っちゃったみたい。少し休ませて」

「あはは！　葵でも疲れてダウンしちゃうこともあるんだ？」

「最近あまり人気の多いトコ来てなかったから……異常に疲れちゃったよ」

その後もまひるに振り回されて買い物した荷物を持つ係にまでされてしまう葵であった。

夕方になり、待ち合わせた駅のポスト前に戻ってくる二人。

「今日はありがとね葵！　楽しかった」

「うん。こちらこそ。それだけの荷物抱えてバスに乗れるの？」

「ちょっと無理かな……ってなわけで……タクシーで帰ろうかなって」

「ええっ！？　リッチだなぁまひるは……」

駅前だけに色んなタクシー会社の色とりどりのタクシーが１０台くらい並んでいる。
先頭から出発するルールがあるらしく、タクシーの色が気に入ったからと言って最後尾に乗ろうとしても断られるまひる。

「先頭から乗ってくれだってさ……客が気に入って乗ってやるって言ってんのにね。なんか腹立つ」

「順番待ちしてるんだから先頭から出るのが当たり前だよ」

「ま、しゃーない。聞き入れてやるか。葵がそう言うなら」

結局タクシーが並ぶ先頭車へ向かう二人。

「葵！　今晩わたしんちに泊まりに来ない？」

「え？と、唐突すぎるんじゃない！？」

「お願い！　何も変なことしないから！　んで朝は一緒に通学しよっ！」

半ば強引にタクシーへ押し込まれる形となるが、断りきれず同乗してまひるの家の方向へ出発する。

１０分ほど走るとまひるの近所の三角公園まで帰って来た。
黄昏が暗闇へと変わる中、タクシーを止める。

「運転手さん、ここでいいです」

「はい。では１０４０円になります」

「はーい」

タクシーから降りると街灯が一つしか点いていない薄暗い公園のベンチへ葵を誘導する。

「ちょ、ちょっと！　こんな暗い公園で何する気？」

「なんかこんな雰囲気が好きなだけだよ。ベンチに座って少し話してから帰ろう。ここからなら私の家歩いて一分だから」

団地の一番奥に位置する三角公園は、裏山の袂にあり、子供の遊具もブランコだけしかなく、日が暮れると殆ど人も寄りつかない。
ベンチに座ったまま、小学生時代の恋愛話や大失態な話などで結構盛り上がる二人。
そんな中、公園へ入ってくる二人の人影が見えた。

「こんな寂しい場所で何やってるのお嬢ちゃんたち？」

「俺たちも話に混ぜてよ？」

薄暗い街灯に照らされるその姿は見るからにヤンキーそうな角刈りの茶髪と、長髪の二人は高校生みたいだった。

「葵、走って逃げよう。コイツらなんかヤバそう……」

「すみません、私たちもう家に帰ろうとしてた所なので」

まひるの問いに即答するように男たちに返答する葵。

「まぁそう言わないでよ。よく見たらキミたち可愛いね？中学生？」

「ほんとだ！　俺のタイプだなどちらも！」

そう言いながらベンチの両側に二人を挟み込むように座る二人の男。

そっと肩に手を掛けたり手を握ったりしてくる。

「やめないと警察呼びますよ？」

まひるは握られた手を振り解きながら叫ぶ。

葵は長髪の男にされるがままに、肩から腰から太ももから触られている。
ワンピースを少し捲り上げ、内側の太もも辺りに少し手が入ったその時、派手な音が夜の公園に響き渡る。

『スパァンッ！！』

「ふぎゃっ！？」

強烈な平手打ちが長髪男の右頬を捉えた。
勢いで派手に舞い上がる長い茶髪。

「ぶっ殺すぞゴラアッ！？」

あまりの激痛に我を忘れて少女相手に殴りかかる。
角刈り男もビックリして立ち上がり葵へ掴みかかろうとするが、あまりに速い動きについて行けず、ひたすらみぞおちや顔面を殴られ蹴られするうちに、ついに膝から崩れ落ちてしまう二人。

「がはっ！？　な、なんだコイツ！？」

「うううう……いってぇええ！」

男ほどの力はなくても、確実に急所へ当たる拳や蹴りは、確実に

ダメージを深めていった。

手をついて激しく呼吸している長髪男に、トドメの膝を顔面へ入れる葵。

前歯が二本へし折れて暗闇へと吸い込まれてゆく。

「ぐはあっ！！」

そのまま回し蹴りで隣で踞る角刈り男の顔面へ、踵を直撃させた。鼻へ直撃して骨をへし折ってしまう。

「げはっ！！」

葵の白いワンピースは男たちの返り血を浴びて赤い斑点が大量にこびりついている。

「ゆ、許してくれ！　ひいいっ！」

二人は一斉に走って逃げ出そうとするが、葵に回り込まれてさらに腹部へ前蹴りを食らう。

『ドドッ！！』

瞬時に二発の前蹴りを左右に繰り出し、ほぼ同時に二人は倒れ込んだ。
女子中学生にボコられるとは夢にも思わなかった二人の高校生だったが、相手が悪すぎたみたいであった。
葵の命令通りズボンとパンツを脱いで、公園の地べたに仰向けで寝転がる二人の高校生。

「あんたたちがしたかったのはナンパ？　それともレイプ？」

「ナ……ナンパだ！」

「うそ。ならどうして葵の肩や太もも触ってきたの？　ワンピースの中にまで手を入れてたじゃん？」

「そ、それは……あわよくばエッチできるかな……とか思っちゃって……ご、ごめん！！　ごめんなさいっ！！」

少女たちの前で下半身を露わにする行為は、元々二人のヤンキー高校生が望んでいたことであったが、暴力で抑え込まれ強制的に男側だけが脱がされるのは本意ではなかった。
勃起することさえもできず、ひたすら中一の少女に本気でビビりまくる二人。
葵がコソコソとまひるに対して指示を出す。
しゃがみ込んで両手で男たちの足首を握った。

「ま、まさかこの体勢は！？」

「マジか！？　や、やめてくれっ！！」

「なんだ。何されるのか分かっちゃったんだね。つまんない……さぁまひる！　同時に始めちゃうわよ？」

「はーい♪　それえっ！」

『グリッ！！　ガガガガガガガガッ！！』

革靴の足の裏を生のペニスに押し付け、激しく電気アンマを敢行する葵とまひる。

「あがががががあっ！？」

「はひひひひひいっ！？」

「ほらほらほら、土足の汚い足の裏で大事なトコ踏みつけられて……電気アンマされちゃう気分はどう？」

葵はそう言いながら、頬を赤く染めスケベそうに笑う。
隣でまひるも必死で角刈り男の方を責めまくる。

「ほらねまひる。勃起してきたでしょ？」

「ほ、ほんとだ!？　足の裏で踏みつけられまくってるのに……摩擦で気持ちいいんだね？」

葵に言われた通り、蹴りまくる電気アンマではなく、密着させて振動させる『気持ちよくさせる』タイプの電気アンマであった。
光芒の表情を浮かべながら、二人のヤンキー高校生はほぼ同時に射精させせられてしまった。

『ドピュピュッ！　ドクドクドクドクッ！』

「あううっ！　はひぃぃ」

足の裏へタップリと精液を着けられた葵とまひるはそっと立ち上がり、二人の顔面へ押し付ける。

「よくも足の裏に汚い粘液着けてくれたわね？　顔で拭かせて貰うから」

『ガツッ！　グリグリッ！　グリグリッ！』

「ぐおっ!？　ゔゔゔっ……」

顔面を踏まれながらもチラチラ見える葵とまひるの純白パンツ…

…。

再び勃起してくる二人であった。

「きゃっ！？　あ、葵っ！　コイツら私たちのパンツ見てまた勃たせちゃってるよ？」

「男のプライドを普通に持ってる奴なら恥ずかしくて泣いちゃうほどなのにね。まさかの見かけに反してM男たちだったとは……」

「なんかムカつくね？　恥辱感味合わせるつもりが快感得られちゃうなんて！」

「ほんとそれ。キツいお仕置きが必要だわ」

葵はハエ叩きみたいな形をした小型の革のムチを鞄から二つ取り出して、まひるに一つ手渡した。

「まひる、これでお尻の皮剥けるまで叩いてやろうよ」

「わあっ！　痛そうコレ……ホントにいいのかな？」

「葵とまひるをあわよくば犯そうと思って奴らだよ？　いいに決まってるじゃん」

葵はヤンキー高校生たちに再び命令し、下半身剥き出しのまま四つん這いにさせた。

「さてと。あなたたちがいつまで勃起してられるか……M度合を確認させてもらっちゃうんだから！えいっ！」

『パァンッ！！』

「ぐわあっ！！！！」

ハエ叩き型の革のムチは男たちの予想以上に激痛であった。
まひるも葵に回数を合わせながら打ち付けてゆく。
やがて１００回打ち終わったころ、お尻の肉はズタズタになり、何十ヶ所も流血していた。
あまりの激痛に二人とも小便を漏らして涙を流してないていた。

「あら？あんなに元気だったオチンチン……萎んじゃったのね？しかもオシッコまで漏らしちゃって……そんなに痛かった？」

葵は冷たく笑いながら血まみれの臀部を右手で優しく摩る。

「んぎゃあああっ！！いだいいいいっ！！うおおーん！！うおおーんっ！！」

「ううう……ぐすんぐすん」

二人並んで四つん這いになったまま大粒の涙を流す。

「はぁ。これで気が済んだわ。帰ろうか葵？」

「え？まだこれからだよ？　逆レイプしちゃうのが最終目的だから……」

「ぎゃ、逆レイプ！？な、なにそれ！？」

「このアナルバイブをバンドに装着して……いわゆるペニスバンドってやつだよ」

『ガチャ！ガチャン！』

直径２㎝、長さ１２㎝ほどのノーマル的な大きさのアナルバイブを長髪男の肛門に押し当てる。

「や、やめてええっ！？　ケツの穴にそんなもの突っ込むなんて……嘘だろっ！？」

「ホントだよ。さぁ始めちゃあわよ？ほら！」

『ツプ！』

「やはあっ！？」

『ズボボッ！！』

男子高校生の肛門へ無理矢理捩じ込まれてゆくアナルバイブを少し照れながら凝視するまひる。

「やだぁ～。エロ～い♡」

喜ぶまひるとは裏腹に根元までぶち込まれた長髪男は絶叫をあげて首を左右に激しく振りながら涙を流す。

「直腸が短いのね？　なんか突き当たりをかなり突いちゃってる感触あるし……ごめんね？」

「んぎぎぎぃ！　痛いいいいっ！！」

「でもやめたげなーい♡　ほら、ピストン開始だよぉ？」

『バコバコバコバコバコッ！！』

激しく中一少女にアナルを掘られる長髪男は、膝をガクガクさせながら激痛に耐え続けている。
血の混じった粘液が男の太ももを伝い落ちてきた。

「あれ？　この粘液は……腸液かな？　私に感じてるのね」

『バココココココッ！！』

さらに激しく腰を振り始める葵。

「ち、違いますうっ！　いだいいいいっ！！」

さらに5分ほどアナルを犯された長髪男は、ようやくアナルバイブを抜いてもらえた。

「うぎぎっ！　うぎぎいっ！　いだい……いだいよおお！」

子供のように泣き喚く男の口元にクソまみれのアナルバイブを近づける葵だった。

「ほら、自分の汚い便と腸液を舐めて綺麗にしてくれる？」

「がぼっ！……おごおっ！？　んぐぐ……ペロペロ、ペロペロ」

無理矢理口の中へ捩じ込んで口内を掻き回すと、かなり綺麗になって引き抜かれてきた。

「よくできました。あとは反省しながら角刈り男のお仕置きを見てなさい」

「うあうう……痛い……痛いいい……ぐすん、ぐすん」

肛門を押さえながら激痛に耐える姿を横目で見ながら少しアソコを濡らしてしまうまひる。

「男の子を犯すって、なんか……興奮しちゃうね？」

「そうね。ケツマンコって美紅さんたちは呼んでたよ」

「け、けつまんこ……そのネーミングもかなりエロいわねぇ……あは……あはははは」

角刈り男は立ち上がらせて股を開かせたまま動かないように命じる葵。

「もっと脚を開くのよ」

「は、はい。こうです……か？」

「そう。えいっ！」

『スパァンッ！！』

「ぎゃあっ！？」

背後から足の甲を打ち付けるキンタマ蹴りが開始された。

「いきなりクリーンヒットだね葵！」

「うん。ほら、何を脚閉じてるの？　加減してやってるんだから潰れはしないわよ？」

「や、やめて……痛いいい」

『バコオッ！！』

「ぐはあっ！！」

更に三発、四発とペニスと睾丸に的確にヒットさせる葵。
ついにうつ伏せに崩れ落ちて泣きじゃくる角刈り男。

「チンポとキンタマ、どっちが痛かった？」

「うううあああうう……き、金玉で……すぅ……ぐすん、ぐすん」

中一の少女たちに性的イジメを受けて泣かされる男子高校生。
少しまともではない絵面であったが、痴漢も強姦も相手を間違えればこうなる可能性もある。

『ズボオッ！！』

「はうあっ！？」

トドメに放った蹴りは、爪先が肛門にめり込む勢いでヒットした。
ワンテンポ遅れて鮮血が噴き出す。

「ぎゃあああああっ！！」

『ブシュウウウウッ！！』

葵はサッと身を横側に躱して、鮮血の洗礼を回避すると、スニーカーの爪先についた便を、角刈り男のTシャツに擦り付けて拭き取る。

「直腸までくいこんじゃった？　痛そう〜♡」

まひるが心配そうに血まみれになったアナルを覗き込みながら囁きかける。

「こんなに血が出るとは思わなかったからなんか可哀想……コイツは犯すの勘弁してやろうかな」

「そだね。まだ血が止まらないし……優しいじゃん葵ってば」

「……優しいかどうかは分からないけどね」

やがて男たちの傷が癒えるのを待って、パンツとズボンを履くことを許して正座をさせる。

「もう二度と女性に対して手を出すようなことはしません。許してください葵様、まひる様」

二人同時に懺悔をさせると、ようやく解放された男たちは、そそくさと暗闇の中へ逃げ去っていった。

「葵……制服血まみれだね？」

「うん。家に三着くらいあるから問題ないよ」

「とりあえず明日は私の貸してあげるね」

「ありがとう」

「お父さんもお母さんも今日は居ないから気楽に泊まっていってね」

まひるの家に帰り着いたのはすでに午後九時を回っていた。

先に葵にシャワーを浴びさせてから自分も浴び終えると、烏龍茶やオレンジジュースを持って二階のまひるの部屋へ案内する。

「私、寝相悪いからベッドはダブルなの」

「そ、そうなんだ」

「だから……一緒に寝ることになるけど」

「……」

同性に対してまだ恋心を抱けない葵に対して、まひるは発情している状態である。
このまま、まひると同じ布団で寝ていいものか……かなり複雑な心境の葵だった。

とりあえずまひるに借りたパジャマを着てベットに入り、色々雑談すること数時間、時間は午前0時を回っていた。

「そろそろ寝ないと明日やばいかな……」

眠気を感じた葵が呟いた。

「あ、そうだね……6時には起きなきゃだもんね！」

そのまま数分間目を閉じる二人。
興奮して全く眠気が来ないまひるに対して、葵はスヤスヤと寝息を立てて熟睡していた。
豆球の薄暗い灯りの中、葵の顔を見つめるまひる。
『もうダメ……むちゃ可愛いよこの子……一か八か強引にいっちゃおっかな？』
良からぬことを考えながら必死で自分を抑えようと努力するが、すでに右手は自分の膣口へ移動していた。
『くちゅ……くちゅくちゅ』
すでに葵の顔を見ているうちに沼と化している性器は、指を入れると卑猥な音を立てた。
「んんっ、あんっ、葵……大好き」
葵の寝顔を見つめながら結局手を出す勇気もなく、オナニーで昇天する。

「イ、イクっ！　あんんっ！！」

「すー、すー」

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……いつか付き合ってね葵……」

女性独特の酸っぱい匂いが部屋に立ち込める中、葵に抱きついて眠りに堕ちるまひるであった。

複雑な心境（後書き）

デートと悪者退治と……夢にまで見た葵とベッドを共にすることに成功したまひるだったが、結局襲うことまでは出来なかった。

いつか自分と付き合って貰うために……これからもまひるは思考を巡らせ、その一方的な恋心は暴走してゆくことであろう……。

串刺しカップル（前書き）

強盗殺人……放火殺人と並ぶほどの残酷極まりない凶悪犯罪である。
しかしその報いは必ず本人に返ってくるのであった。

串刺しカップル

「ほ、本当にいいのか？　俺は剣道三段だぞ？」

「だからいいって言ってるじゃん。好きな対戦相手まで選ばせてあげるって」

「聖斗！　絶対負けないで！　私まだ死にたくない！」

「ああ！　分かってるさ」

残酷処刑島に今日も拷問処刑を執行される罪人が連行されてきていた。

このカップルの二人は、生活苦からとある老夫婦の住む一軒家に押し入り、抵抗する老夫婦を絞殺して金品を奪い取った。

警察トップによる判断で、特殊任務省にその制裁を委ねられたのである。

「そこの女子高生……と言いたい所だが……必ず勝たねばならない命懸けの死闘ゆえ、申し訳ないがそっちの小学生のお嬢ちゃんにさせてもらう」

２５歳になったばかりの石堂聖斗が指名した相手は１２歳の菅野莉央。

共犯者の彼女である白石小百合の命も救いたいがゆえに、一番弱そうな小学生の莉央を選択したわけであるが……その決断は最悪であった。

「あたいを選んでくれたらまだ可能性があったかもしれないのにな……よりによって莉央を選ぶなんて」

「いえいえ。咲良さん相手でもまず勝てる見込みはないわよ」

謙遜する中学生の宮垣咲良に微笑みながら返答する高校生の円満愛衣。

細身の剣であるサーベルを鞘からゆっくり引き抜くと、生あくびをしながら一歩前に出る莉央。

この日は高校生の円満愛衣、中学生の宮垣咲良、小学生の菅野莉央、同じく小学生の堀越唯香の四人が拷問処刑執行人に選出されてこの島へ渡航してきていた。

「じゃああたしがお相手しまーす。あなたの武器は日本刀？ サーベル？」

「竹刀に近いのは日本刀だよな……に、日本刀で頼むぜ」

「分かりました。はい、どうぞ」

愛衣から日本刀を受け取ると、模擬刀とは全然違うズシリとした真剣の重さを感じ取り、震えながら鞘から引き抜く聖斗。

「こ、これは！　本当に本物じゃねぇか！」

「当たり前じゃん。なに今更なこと真顔で言ってるの？　あんたバカ？」

愛衣は呆れながら二人から距離を取る。

「お、お前を斬り殺したら本当に俺たちは助かるんだな？」

「うん。万が一にもそんな事が起これば……の話だけどね」

「ま、万が一だと？……小学生のガキに成人男性である俺が本気で負けるとでも？……しかも有段者だぞ俺は！」

聖斗のいきがったセリフが途切れるやいなや、円満愛衣は右手を掲げて死合開始を告げた。

「小百合！　一番弱そうなガキを選択した俺を笑わないでくれ」

「当たり前じゃん！　あなたが一番体格のある女子高生なんて選んでたら私、本気で怒ってたわよ！　でもまぁ所詮女だから負けることはないんだろうけどね……でもやっぱ念には念よ」

彼氏の選択肢に間違いは無かったことを確信している小百合であったが、結果的に三人の少女の誰を選ぼうが敗北とゆう結果は同じである現実。

石堂聖斗の人生最期の剣道……いや、真剣による戦いが始まった。

「悪いな嬢ちゃん。こんな無人島で俺に無謀で甘い選択を許したことを後悔しながら死んでゆけ。後から高校生と中学生も送ってやるから安心しろよな？　おらあっ！！」

人生で初めて手にする真剣で莉央に斬りかかる聖斗。
軽快なステップとスウェーで横から袈裟懸けから全ての攻撃を躱す。

「は、ははは。すばしっこいなおチビちゃん？」

「どうも」

常に強風が吹き荒れる残酷処刑島。
風で捲れ上がる制服のスカートを左手で押さえながら右手のサーベルを横に一閃する。

『ブシュンッ！！』

「前のサーベルより軽くて使いやすそうね。あたしコレ、気に入っちゃったかも♡」

「フッ。何をガキが危ない物振り回してやがる。怪我するぜ？　死ねえええっ！！」

『ブン！　ブン！　シュッ！　シュッ！』

必死で斬りかかる聖斗だったが一向に攻撃は当たらない。
莉央の長い黒髪が数ミリほど斬られた程度だった。
風に舞う髪を見て眼光を鋭くさせる莉央。
疲れ切って肩で息をする聖斗相手に、ついに反撃のスイッチが入ってしまう。

『ヒュンヒュンヒュンヒュンッ！！』

「うっ！？」

目にも止まらぬ速度で斬撃を繰り出す莉央に、全く動かず固まってしまう聖斗だった。

『パラパラパラ……』

服とズボンが風に乗って飛ばされてゆく。

みるみるうちに聖斗は素っ裸にされてしまった。

「う、嘘だろ！？」

「きゃあっ！？　やだ聖斗ったら！」

「うっ！く、くそっ！　なんて腕してやがるこのガキ！？」

慌てて左手で陰部を隠すが、莉央たちは涼しい顔でその姿を見つめていた。

「しょ、小学生のガキにこんなモノ見せられねえっつーの！」

「お言葉だけど……オチンチンなんて見慣れてるから隠さなくてもいいよ？」

莉央はそう呟きながらゆっくり歩み寄る。
咲良も続けて口を開く。

「その隠してる部分……莉央は彼女の見てる前でブッタ斬るつもりだぜ？　両手で刀持って戦わないと根元から全部無くなっちゃうよ？」

「なっ！？　何だとっ！？」

「ちょっと咲良さん！　いきなりブッタ斬って本人も彼女さんもびっくりさせてやろうと思ってたのに……ネタバレは酷いですよ？」

「あっ！　そーだったんだ！？　ごめんごめんっ！」

莉央に怒られた咲良はバツが悪そうに頭を掻いて誤魔化す。

「ちょっと聖斗っ！　早く本気出してよ！　そんな小学生のガキなんて早くブチ殺しちゃって！」

「お、おう！　さ、さっきから……ほ、本気なんだけどな」

莉央の大きくて少し目尻の上がった鋭い眼光が聖斗を睨みつける。ガキガキとカップルから何度も呼ばれたことにかなり苛立ちを感じていたのである。

「男も女も……凄惨な性器破壊しちゃってやるんだから！」

「莉央様、少し今の日本語……おかしくないですか？」

怒りで言い方を間違えた莉央はそのまま聖斗へ斬りかかった。

「わあっ！？」

『ズバババババッ！！　バシュバシュバシュッ！！』

「ギャァアアアッ！！！！」

『ガクンッ！』

胸や腹部、腕に脚、あらゆる部位を切り刻む細身の剣。
石堂聖斗は、あまりの激痛に日本刀を地面に落として、膝から崩れ落ちてしまった。

「愛衣！　四肢切断するから電ノコ用意して。咲良さんは強力な痛み止めの麻酔薬を全身に注射して」

「はい。分かりました」

「りょーかーい！　それって男の方ダルマにしたままで、女の前でチンポしごいてイカせるやつだよな？　短くなった手脚をパタパタ動かしながらセーエキ飛ばすなんて……結構興奮するんだよそれ♡」

「私も好きですそれ……哀れすぎてウケちゃいます♡」

愛衣も同感だった。

咲良は頬を赤く染めながら両腕の肩口と両脚の付け根辺りへ、４箇所強力な麻酔薬を注射してゆく。

電動ノコギリのエンジンをかけた円満愛衣が聖斗の傍にしゃがみ

込む。
風に靡くスカートから愛衣のピンク色のパンツが垣間見えるが、恐怖で興奮はできない状態である。

『ヴィイイインッ！！』

「わあああっ！？　や、やめてくれえええっ！！」

エンジンを吹かしながらまずは右腕の肩口へ回転刃を持ってゆく愛衣。

彼女の小百合は目を両手で覆いながら泣き叫んでいる。

「ひぃいいっ！！　人殺しぃいいいっ！！　やめてあげてえええっ！！　聖斗に酷いことしないでええっ！！」

『バリバリバリバリッ！！』

「ぐわああああああっ！！！！」

最初は激痛が襲ったが、右腕が完全に切り落とされる頃には痛みは消えていた。
そのまま咲良と莉央に押さえつけられながら左腕、右脚、左脚と、四肢全てを切断されていった。

「ひ、ひぃぃぃ……や、やめて許して殺さないで……ううう」

聖斗は四肢切断されながらも泣きながら命乞いを始める。

「きゃあっ！？」

その時、大きな叫び声が上がる。

「動かないで白石小百合！　じっとしてないと無茶苦茶苦しめて殺すわよ？」

莉央と同い年の１２歳の少女、堀越唯香がこの日、初めて口を開いた。

１３歳も歳上の女性である小百合のワンピースをナイフで切り裂き、ブラジャーとパンツ一枚のみの姿にさせたのである。

「おしっこする時の姿勢になりなさい」

「ひっ！？　な、なぜそんな！？」

「うるさい！　早くウンコ座りするの！」

「ひっ！　は、はいっ！」

唯香の迫力に遂に折れた小百合は、下着姿のまま慌ててしゃがみ込む。背後に回り込んだ唯香は右手をパンツの後部から滑り込ませてゆく。

「ひゃあっ！？　そ、そこは！？　お願い、や、やめてお嬢ちゃん！？」

「だめ。黙ってなさい」

『ススス……ツプッ！』

「んひいっ！？」

「ほら、お前のヤラしいケツ穴犯してあげるね♡」

小百合の肛門へ突き刺さる唯香の人差し指。

『ズボッ！　ズブブブブ！』

「あはっ！？　あんんんんっ！！　やめてえっ！！」

「小百合！　お前はアナルが一番感じるんでしょう？」

「あっ、あんっ、ど、どうしてそんなことを……あんっ！！」

『グリッ！　グリングリンッ！！』

激しく肛門内を掻き回す唯香に、思わず全身を震わせて感じてしまう小百合。

「変態」

「ああっ、あんんんっ！　お嬢ちゃん！？　やめてお願い……」

『ズブッ！　グリリリッ！！』

「やはあっ！？　んはああああっ！！」

更に中指も挿入して直腸を激しく掻き回す唯香。

菅野莉央はダルマ男にされた聖斗の傍にしゃがみ込み、円柱形をした細身の剣の鞘を肛門へあてがう。

『ピトッ！』

「うっ！？」

「この鞘ってさぁ、アナル掘るには丁度いい長さ太さでしょ？」

「こんな姿にされてそんなことまでやられるのか？……もう殺してくれ……」

「え？　さっきまで命乞いしてたのに？　殺してもいいの？」

「し、死にたくないけど……女からそんな辱めを受けるならいっそ殺してくれ、と言ってるんだ！」

「何偉そうに叫んでるの？　立場が分かってないみたいね？　ほら」

『グリッ！……ズボッ！！』

「んぎいっ！！」

莉央はサーベルの鞘の先端をゆっくりと聖斗の肛門へ突っ込んでいった。

２０センチほど挿し込んでから激しく出し入れするピストン運動が始まる。

「ほらほらほら。彼女と同時にお尻の穴犯される気分はどうかしら？」

『ズチュズチュズチュ！！』

「はうはうはううううっ！！　痛い熱いいいいっ！！」

「あはは♪　痛いの？　熱いの？　どっちなのよ？　ウケるぅ♡」

隣では、唯香の指で激しくアナルを掻き回されて膣を湿らし始め

る小百合の姿があった。
　左手もそっと背後の太ももの下側から滑り込ませて、膣へ中指を突き立てる。

「こっちもやったげる♡」

『クチュッ！』

「はひいっ！？　や、やめてお嬢ちゃん！！　そんなエッチなとこまで触らないでえっ！！」

「アナル掘られてこんなにマンコ沼らせちゃって……この変態女」

「んんっ！　はぁ、はぁ、だって気持ちいいんだもん……あなた可愛いし……触られたら感じちゃう……」

「そうなんだ。褒めてくれてありがとう。死ぬ前に思いっきりイカせてあげるねオバさん」

「オ、オバさん！？　わ、私はまだ25なんだけ……はあんっ！！あうあうあうっ！！」

『クチュチュチュチュチュチュチュ！！』

　唯香の激しい指マンが開始され、腰を振りながら愛液を大量に垂れ流す小百合だった。
　隣では同じく小学生である菅野莉央に、サーベルの鞘でアナルを犯されていたダルマ男の聖斗のペニスがフル勃起していた。

「殺してほしいとゆう人が……オチンチン勃てちゃうの？」

「うっ！　ざ、残酷なガキとはいえ……こんな可愛い子にそんなことされたら……し、仕方ないんじゃねぇか？　はうっ！！」

「またガキって言ったわね？　ムカつくけど可愛いとか言ってくれたから女と同じように気持ちよくしてあげる。ほら」

『ギュムッ！……シコシコシコシコ』

「んんうっ！？　うううううっ！！」

アナルに鞘を突っ込んだまま右手でペニスを掴み、ゆっくりと上下運動を開始する莉央。

「小百合とかゆう彼女と同時にイカせてやろうか？」

「ううう……ど、どうせ殺されるなら最期に小百合と同時にイクのも……悪くねぇかな？……頼んだぜ」

「おっけー♡　唯香ちゃん、聞いた？」

「うん。このまま指マン続けてるとね……んーと。コイツは後１０秒くらいでイッちゃうと思う」

「そっか。じゃあそれくらいで射精するようピストン速めるわね」

莉央と唯香は息を合わせて二人の罪人カップルを絶頂へと招き入れる。

『シュコココココココ！』

「ううううっ！！」

『グチュチュチュチュチュチュ！』

「あんんんっ！！」

『ドピュッ！！　ドピュピュピュピュッ！！』

『プシャアアア～ッ！！　ビクビクビクウッ！！』

ほぼ同時に射精とオーガズムを迎えさせられた二人のカップルは、頬を真っ赤に染めて息を荒くしている。

「あたしの指セーエキまみれにしちゃって……殺すわよ？」

「あたしの方も……潮とマンカスと愛液まみれ……女がイッちゃったら必ずツーンと鼻をつく独特の臭いするわね」

そう言いながらうつ伏せに倒して小百合のパンツを脱がせ始める

唯香。

「やんっ！　脱がさないで……恥ずかしい」

「小百合の汚いマンコとアナルを破壊しちゃうから。見えないと出来ないでしょ？」

「ひっ！？　せ、性器破壊！？　や、やめてそんなっ！！　お願いお嬢ちゃん！！　一生お嬢ちゃんの奴隷にでも何でもなるから命だけは助けてっ！！」

「ダメ。あたしはオバハンの奴隷なんて要らないよ……」

号泣しながら脱がされたパンツを履こうとするが、唯香に手を引っ叩かれて諦める。
ブラジャーも背後から剥ぎ取られ、遂に男と同じく素っ裸にされてしまう小百合だった。

「さてと。女の方もダルマにしようか？」

莉央は立ち上がって愛衣と咲良に指示を出す。
手際よく麻酔を打つ咲良。
そのまま連動するように愛衣は小百合の四肢を切断してゆく。
ショックで尿道から噴水のように小便を飛ばす小百合の姿を哀れそうに見つめる四人の拷問処刑執行人たち。

「あのさぁ……臭いおしっこ漏らしたお仕置きだよ？」

莉央は聖斗の股間に脚の裏を押し付け、電気アンマを開始。
その隣で唯香が小百合の股間に脚の裏を押し付けて同じく電気アンマを開始した。

「ほら、キンタマ潰れたらごめんね？」

「ほら、マンコ裂けたらごめんね？」

『ガガガガガガガガッ！！』

「ぎゃほほほほほほうっ！！！！」

莉央と唯香の同時攻撃に、同じように口を尖らせながらヨダレを垂らしながら嗚咽を上げるカップル。

足遣いが巧みなのか、聖斗も小百合も再度イッてしまう。

「電気アンマでもイッちゃったのね？　汚い精液であたしの脚の裏を汚しちゃって……許さない」

「そうそう。汚い愛液をあたしの足の裏にべっとり着けちゃって……更なるお仕置きが必要ね？」

もうすでに死を覚悟していた二人は、莉央たちの言うがままに従うのであった。
ダルマ状態では従うしかなかった……。
死ぬ前に気持ちよくさせてもらえたことに感謝さえ覚え始めているカップル……次は小百合を地面に仰向けに寝かせて、その上にシックスナインの体勢で聖斗をうつ伏せに寝かせる。
重なった二人はお互いの陰部を激しく舐め合った。
もちろん莉央の命令であったのだか……。
サーベルの切先を傷付かない程度に少しだけ聖斗の肛門へ挿し込む莉央。

『ズッ！』

「んひいっ！！」

「アナル刺激されたらまた勃起しちゃうでしょ？　彼女もオチンチン舐めるの人生最期になるんだからフニャちん舐めさせるのは可哀想だよ？」

「は、はい」

莉央にそう終われてサーベルで肛門を弄ばれている内に、どんどんイキリ勃ってゆくペニス。

「うごうごっ！？」

小百合も彼氏のフル勃起したペニスに涙を流しながら喜んで、再度貪り舐め始めた。

「莉央様に剣でアナル犯されながら……四肢切断されたカップルがお互いの陰部舐め合うなんて……とってもエロい絵面ですわね？」

愛衣が咲良へ問いかける。

「そうだな。後女のケツアナも責めてやったら……」

咲良はそう答えながら唯香の方を見た。

「はいはい。こうすれば良いんですよね？」

唯香は小百合の肛門へ日本刀の切先を突き入れた。

『ズッ！　ズブブブ！』

「ギャァアアアッ！！……ガブッ！　ぶちっ！！」

「ぐわあああっ！？」

そっとのつもりが３０センチも突き刺さり、激痛のあまり聖斗のペニスを雁首辺りから噛みちぎってしまった。
辺りは血まみれになり、もうシックスナインどころではなくなってしまう。

切断されている手脚のみしか麻酔は効いていなかったため、転げ回りながら苦しむカップルだった。

円満愛衣は二人をタコ殴りにして、顔面をボコボコに腫らせさせると、簡易なベッドを用意して、二人を仰向けに寝かせて拘束した。
いよいよ最期の仕上げの時が迫ってくる。

「男はアナルから串刺しだよね？」

莉央が指でサーベルを全開に曲げてから一気に離すと、激しい風切り音と共に真っ直ぐに戻りながら空を斬る細身の剣。

「そうですわね。聖斗は莉央様が肛門から串刺し刑を執行とゆうことで……あと小百合の方ですが……唯香さん、やってみる？」

「あ、はい。でも女の人だから穴が二つ……どっちに刺し込めばいいかな？」

「それは本人に聞けばいいんじゃね？」

咲良が小百合の乳を鷲掴みにして激しく揉みしだきながら問いかける。

「おい！　ケツの穴とマンコ……どっちからがいいんだ？」

「い、いやあっ！　どっちも痛そうだから嫌ああっ！！お願いだから助けて！　私まだ死にたくないっ！！　わーんわーん！！」

四肢切断されてまでまだ生き残りたいとゆう気持ちが理解できない執行人の美女たちであった。

「いくら泣いてもそれは無理だ。諦めな」

咲良は冷たく言い放つと、中指を肛門に突っ込み、激しく掻き回し始める。

「死ぬ前にケツ穴でもう一回だけイカせてやるから……納得して死ねよ？　ほらほらほらあっ！」

『グチュ！グチュチュチュチュチュチュッ！！』

「あんあんあんっ！！　あはああああっ！！　イク！　イッちゃううううっ！！」

「イケよ！　同性のあたいの指で悪いけど……ほらほらほらほらああっ！！」

『グリリッ！！　ヌププププププッ！！』

「はひいいいいいいっ！！」

『プシャア～ッ！！』

「愛液まみれだな腐れマンコ……ほら、あたいの指に着いた自分の汚いクソ、舐め取るんだ」

　咲良は指を小百合の肛門から引き抜くと、本人の口へ捩じ込んで指についた便や腸液を舐め取らせた。

「唯香、コイツはマンコからやってくれ」

「う、うん。男はアナルしかないけど女の人は穴二つ……迷うところだもんね。じゃああえてオマンコからいっちゃいます！」

　セーラー服を着た美女たち四人による処刑執行の時が遂に訪れた。

　莉央と唯香は並んでサーベルと日本刀を構えてそっと男女の股間へ近づける。

「石堂聖斗。あなたを強盗殺人の罪で只今より処刑執行します。拷問お疲れ様でした」

「白石小百合。あなたを同じく強盗殺人の罪で処刑執行します。拷問お疲れ様でした」

莉央に続けて唯香もしっかりと宣言する。

泣き叫ぶ二人のカップルを見つめる四人。
そっと莉央と唯香の切先が男の肛門と女の膣口へと突き刺さる。
そしてそのまま内臓奥深くへと侵入していった。

『ズッ！　ズボボボボ！』

『ツプッ！　ザクザクザクッ！』

絶叫が残酷処刑島に響き渡るが、莉央と唯香は返り血を浴びながらもどんどん深く串刺しにしてゆく。
半分ほど突き入れられた頃、咲良は聖斗の睾丸へ向けて踵落としを2度決める。

「オラアッ！　潰れろキンタマアアアアッ！！」

『ズドォンッ！！……ブチュッ！！……ドカッ！！……ブチャッ！

！』

「ギャァアアアアアッ！！！！」

噛みちぎられて丸見えになったペニスの切断面から精液の混じった粘度のある鮮血が噴き出す。

「お見事です咲良さん。二つともミンチです」

肛門へサーベルを刺し込みながら莉央が笑顔で呟く。

「愛衣！　女の方も」

「はい莉央様」

唯香によって膣口から刺し込まれた日本刀は、刃が下向きだったので、会陰部も切開して肛門まで切開……結局性器と肛門が繋がってしまっていた。

それを考慮した上でターゲットを陰核に絞る。

爪切りで確実にクリトリスを挟み込むと、そのままゆっくり閉じていった。

『ググ……ザクッ！……ポロリッ』

「ぎぃぎゃああああああああーーーーっ！！！！」

白目を剥いて泡を噴きながら悶絶する小百合。
膣と肛門串刺しの時よりも激しく絶叫してしまう。
陰核が、女性の身体では最も敏感で、痛みまでも激しく感じる部位であることを痛感する四人のセーラー服を着た美女たちであった。

「男は睾丸、女はクリトリスかぁ。そりゃ痛いわ♡」

莉央は舌舐めずりをしながら仕上げに入る。
器用にサーベルの向きを調整しながら口まで貫通させることに成功したのだ。

『ブシュ！！』

「ゴボボッ！！　おえええええっ！！」

見事に貫き過ぎてまだ息がある。
隣で唯香は悪戦苦闘していた。
性器から刺し込まれた日本刀は、ヘソから飛び出して、さらに首から飛び出し……挙句に右の目玉が飛び出したと思えば切先が後から飛び出してきた。

「があぁ……ぐえええ……かひゅうっ！　かひゅうっ！」

「早く口から抜かないと……もう死んじゃうよ？　その女」

「だって！　うまくいかないんだもん！　やっ、よっ！それっ！」

『グシュッ！　グボッ！　バシュシュ！』

過呼吸を起こした小百合は全身を激しく痙攣させながら穴とゆう穴から鮮血を噴き出しながら息絶えた。
激しく死後の痙攣が始まる。

「口以外から何度も突き抜かれて……男以上に悶え苦しんだわねその女……」

「ごめんなさい。まだまだ未熟でした」

唯香は猛省しながらようやく遺体になった小百合の口から切先を出すことに成功する。

『バシュッ！！』

「やったぁ♪」

「やったぁって……生きてる内に貫通させなきゃダメだよ唯香ちゃん」

「ほんとごめん！　また練習しておくから許して♡」

唯香は舌を出しながら日本刀を小百合から引き抜くと、もう一度膣口から突き入れる。

「やれやれ。遺体損壊罪だよほんと」

呆れながらサーベルを石堂聖斗の肛門から引き抜くと、目玉をグルグル回しながら痙攣している身体に馬乗りになる。更に首にサバイバルナイフの刃を押し当てて激しい速度で左右に切りつける。

ほんの数秒で首は身体から切り離され、聖斗の目玉は上下左右に激しく動いた後、ゆっくり白目を剥いた。

「見てた唯香ちゃん？　死んだ瞬間グルンって目玉が上向くのよ」

「うん！　首でも結構深く切り裂かないと死なないんだね？」

「喉までの切開では苦しいだけで死ねないよ。脊椎断ち切った瞬間、ようやくあの世行きなの」

そう教えながら切り取った生首を天に掲げる莉央。

生首の頬に軽くキスをすると、彼女である白石小百合の頭部の隣へ並べてあげた。

「ほら、彼氏だよ。掃除屋さんが来るまでここで仲良く顔並べて眠ってなさい」

太ももに着いた大量の鮮血をハンカチで拭き取りながらサーベルを小百合のヘソへブッ刺した。

少し斜めに突き刺したため、子宮へダイレクトに突き刺さっている。

「唯香ちゃん、この位置に子宮があるの。覚えておいてね？」

「へぇ〜。思ったよりヘソに近いところにあるんだね……覚えておく」

いつのまにか強風も収まり、穏やかになっている残酷処刑島だった。

残酷処刑島に新たに二つの遺体が加わった。

串刺しカップル（後書き）

「格闘も剣技もどんどん教えてね莉央ちゃん」

「うん。もちろん」

「女子高生の愛衣さんでも敵わないなんて……ほんとどうしてそんなに強いの？　誰かも言ってたけど莉央ちゃんってホントにサイボーグだっりして？」

「……そんなこと言ってるとまたあなたのマンコ……奥の奥まで開いて見せてもらうわよ？」

「ひっ！？　やだぁもう。莉央ちゃんが怖くなるからもうあの時の事は思い出させないでよぉ」

膝を付いて、本気で涙を流して怯える唯香をそっと抱きしめる莉央だった。

ツイてない男（前編）（前書き）

一人のツイてない男がいた。
頑張っても頑張っても何か足りない男の悲しい物語。
偶然出会った少女は、彼の不運を変えることはできるのであろうか……。

ツイてない男（前編）

東部地方の都心から、北東に位置する東部競馬場。
年に数回催される大きな記念レース開催日だけに、数千人を超える入場者で賑わっていた。
「この本命ガチガチのレースで当てないと……全てが終わってしまう……」
１．８倍の一番人気の馬券を５００万円分購入した２８歳の男は、震えながら入場してくる馬と騎手を見つめている。
「どうした兄ちゃん？　人生の全てを賭けたようなツラしてるぜ？」
年金が入れば即二、三万握りしめて勝負にくる髭面の常連客が震える男に声をかける。
ふと馬券を見て驚愕し、男と同じく身体を震わせた。
「お、おい、そんなに賭けて大丈夫なのか兄ちゃんよ？」
「こ、これ絶対くるよな!?　オッサン!?」
「お、オッサンって……そりゃ確率は高いだろうけど……ギャンブ

ルに絶対はねぇよ。そんなこと分かってて買ったんだろうが！　あとは神に祈るしかねぇな」

「あ、ああ。そうだよな……頼む！　きてくれ！！」

大盛況の中、記念レースも閉幕し、時刻は夜の八時。
当たり前だが人生はそう甘くない。
全てを賭けた勝負に完敗し、自殺までも考えながら矢島泰介（やじまたいすけ）28歳は、駅のホームに力無く立っていた。

「もうダメだ……知り合いに頼んでヤクザ絡みの闇金業者に借りた500万円が一瞬で消えちまった……今度こそ死ぬしかない……くそう！　なんでこんなことになっちまったんだ！」

電車がホームに入ってくる時、既に矢島泰介の覚悟は出来上がっていた。
三歩ほど歩けばホームに転落できる位置から、一歩、二歩と踏み出す。

「南無三……」

『パァアアアンッ！！……ゴオオオオッ！！』

駅を通過する快速電車がけたたましく警笛を鳴らしながら通過する。

周りにいた人たちは一斉に同じ場所を見つめていた。

「いたた……何が〝南無三〟だよ全く」

「うう……あ、あれ？　俺は……」

アイドルであり、拷問処刑人の一人でもある女子中学生、宮垣咲良は右手を差し出して未だに倒れ込んでいる男を引き起こした。

「き、君は？　お、俺を止めてくれたのか？」

「目の前で死なれちゃ後味悪いからね。あんたは何となく飛び込みそうな気配を醸し出してたから……大丈夫なのか？」

「あ、ああ。少し擦りむいたくらいだ。君みたいな可愛い子に命を救われるなんて勿体無い話だが……本当に死なせて欲しかった」

「……あたいで良かったら少し話聞こうか？」

「え？　見るからに中学生っぽいけど……もう八時回ってるし早く帰らないと親御さん心配するぜ？」

「あはは！　余計なお世話だな。今日は担任の一言にムカついてさぁ。昼から学校抜け出して一人カラオケで歌いまくってたんだ。こんなあたいだから親なんて居ても居なくても気にも止めてくれないよ。あんたの方が数倍心配だわ」

そのまま駅を出て、すぐ近くにある駅前公園に立ち寄る二人。
街灯が数ヶ所にあり、交番もすぐ近くにあり、治安が良いためかカップルも多い人気のある公園であった。
宮垣咲良は、一通り矢島泰介の話を聞き終わると、ため息をつきながら星空に向けて顔を上げる。

「そっか。ボクサー目指して頑張ってたのに夢は叶わなかったんだ。せっかくプロテストに受かったんならもっと練習して強くなろうとか思わなかったのか？」

「限界を感じたんだ……何度も勝ったり負けたりを繰り返すうちに……俺にはボクシングで頂点に立つことは出来ない、チャンピオンになんて到底なれない。頂点にならなければプロでも飯は食っていけない。そう思い知った時、妻と娘はもう俺のアパートから去った」

「……そりゃ奥さんや娘さんは生活かかってるからね。あんたの夢にいつまでも付き合ってたら今頃飢え死にしちゃってたかもな」

「うっ！そ、そりゃ酷いな……」

「酷くないよ。本当だもん。その後が問題なんだよなぁあんたの場合……ヤケクソになってギャンブルに溺れて更にその借金を返すために闇金から借りて命をかけた大勝負。そんでその結末……あんたホントにただのバカだから」

「……」

頭を抱えて両手で掻きむしりながら、低い唸り声を上げて涙を流す矢島泰介だったが、咲良は更に追い討ちをかける。

「あんたの元奥さんと娘さん……間違いなく攫われて闇の風俗に売られちゃうよ？　極悪組って言ったら東部地方でも悪名高い組だから。親分の大森龍介（おおもりりゅうすけ）にその息子で若頭の靖（やすし）、子分のチンピラたちも同じく女子供でも容赦しない鬼畜のようなヤツらばっかだしな」

「そ、そんな！　俺たちはもうとっくに別れてるんだぜ！？　里美と結衣にはなんの罪もないじゃないか！？」

いきなりベンチから立ち上がって咲良へブチギレする男。

じっと男の目を覗き込みながらそっと囁く。

「ふぅん。まだ一応心配はするんだ。でもあんたのせいだよ。さっきあのまま無事に死んじゃってたら、元とはいえ奥さんと娘さんを救うことも出来ないままサイテーの男のまま地獄行きだったよな？　分かってる？」

「ううう……ど、どうにかならないもんかな？　お、俺はどうしたらいいんだ……」

「お金借りれる親とか親戚とか友達は？」

「親は俺が幼い時に離婚して婆ちゃんに育てられたんだ。その婆ちゃんも去年死んじまった。親戚とは昔縁切って付き合いない」

「友達もいなさそうだよね？」

「ひ、一人で行動するのが好きだからな昔から……」

呆れた笑みを浮かべながら一つ提案をする咲良。

「明日の土曜日〇〇埠頭って場所にある倉庫に来れるか？」

「え？　そ、そこに行けばなんとかしてくれるのか！？……そ、そんなこと出来ないよな……何を中学生なんかに期待してるんだ俺は……本当バカだぜ」

『パァンッ！！』

「ひぶうっ！？」

いきなり飛んでくる咲良の強烈な平手打ちに顔面が激しく歪む。

「いってぇええ！！　な、なんだよいきなり！？　ほ、ホントいってぇえええ！！」

女子中学生とは思えない破壊力に驚きや怒りを通り越して本気でビビる矢島泰介だった。

「何かの縁であんたを助けちまったんだ。あんた次第ではどうにかしてやるつもりだ」

「ど、どうにかって……まさか金を！？」

「さっき聞いた闇金からの５００万と、本来必要だった４００万、闇金の利息が１００万ほどにはなってるはずだから……１０００万あんたにくれてやるよ。もちろん条件をクリアーできたらの話だけどな」

「は、はは。咲良ちゃんとやら……大人をおちょくるのはそのくらいにしてくれ……中学生にどうやったらそんな大金を用意できるってゆうんだ？　バカにする気なら勘弁してくれ。もうほっといてくれ」

カバンからゴソゴソと取り出した銀行口座の通帳。
おもむろにページを開き、印字された残高を泰介に見せつける咲良。

「ほら」

【１２３４５６７０】

「えっ！？　１２０万だと！？」

「はぁ？よく見ろよ。ケタが一つ違うだろ？　ちょうちょ銀行は通常預金の限界が１３０００００００だからなぁ」

目を数回パチパチとさせながら何度も確認するが、やはり一千二百万以上の金額が印字されていた。
拷問処刑人たちは、成年や未成年関係なく、残酷処刑島で執行される一拷問処刑に一日参加するだけで、一千万円の給料が国から支払われていた。
相手が罪人とはいえ、人を傷めつけ、殺める行為に対する慰め、謝礼みたいな意味合いを持つが、殆どの拷問処刑人たちはそれほどの罪悪感を持ってはいなかった。
むしろ虐めて拷問して殺害することに快感を得ている者まで存在しているからである。

「マジか！……行く！　必ず明日行くから！」

「分かった。じゃあ待ってるからな。必ず来いよ」

「ああ！　必ず」

〇〇埠頭での拷問専門である沖野姉妹に連絡を済ませた後、とりあえずは帰宅してサッサと寝ようと思った矢先、見慣れた人影がドアの前に立っている。
同じくアイドル兼、拷問処刑人のクラスメイト、鬼頭美紅だった。
同性カップルでもある二人は、しょっちゅうどちらかの部屋に泊まりに来て、一晩中語り合ったり愛し合う行為にも及んでいた。

「美紅!?」

「遅かったじゃん。あたしの予想では歌い疲れて七時には帰り着くと思ってたのに……大誤算だわ全く……へっくしゅん!!」

四月とはいえまだまだ早朝や夜中は底冷えする日が続いていた。

「ごめん! 心配して来てくれたんだ……担任にムカついて勢いで飛び出しちゃったから……とにかく早く入ろ!」

「そうさせてもらうわ。ズルル……あらやだ鼻水が……」

糸を引きながら落ちてゆく美紅の鼻水を見ながら吹き出す咲良だったが、少し罪悪感があったため慌てて笑いを噛み殺す。

「とりあえずお風呂入ろ」

「ズルズル……うん。やれやれ、風邪ひいちゃったかなこりゃ」

狭い湯船に強引に二人で入り、温まりながら駅のホームでの出来事を美紅に話す。

「へえ〜。でもいつもはぶっ殺してる側だから、たまには命を救う側でもいいいんじゃない?」

「ぶっ殺す側って……どちゃくそ悪人みたいな言い方しないでよ」

「あはは！　ごめんごめん。そっか。あの水色とピンク色の髪のヤツらに調教させてから咲良がボクシング教えてやるんだね？」

「……そのつもりだったんだけど……やっぱその役美紅にお願いできない？」

「どうして？」

「そりゃ美紅の方が強いから……アイツ一応プロらしいから、たっぷりシゴいてやったらもっともっと強くなって賞金で食べていけるかもしれないし」

溜め息をつきながら湯船の湯を両手で掬い取り顔を洗うと、少し呆れ気味に答える美紅。

「命を助けただけじゃなくそこまでしてあげるとか……なんか変な感情持っちゃったんじゃないでしょうね？」

「そ、そんなんじゃないよ！　毒を喰らわば皿までって言葉あるじゃん？　そ、そんな感じかな？　単にちょっと応援してみたくなっただけ」

「ふぅん。まぁいいわ」

『クチュ！』

「あんっ！？」

いきなり咲良の膣へ中指を突っ込んでGスポットを掻き回し始める美紅。

「あたしがその男を鍛えてやる代わりに……今日は濃厚なエッチしよーね♡」

「あ！　あんんっ！　う、うん！　ああっ！　やめて美紅っ！　イッちゃう！」

そのまま一発湯船の中で指マンでイカされた咲良は、頬を真っ赤に染めながら風呂場から上がる。

パジャマを着て寝室のベッドへ入る二人。

お互いのパジャマを脱がし終えてからパンツも脱がしあい、そのまま素っ裸で抱きしめ合う。

「咲良……好きだよ」

「うん。あたいも大好き♡　強くて綺麗で……憧れてる」

「そこまで言われちゃ照れちゃうなぁ。咲良も凄く可愛いじゃん」

濃厚なディープキスをかわしながら、お互いの胸を揉みしだき合う。
大洪水になってしまっているお互いの膣口をシックスナインで舐め合い始めた。
女子中学生の秘部を舐め合う卑猥な音が、咲良の寝室に響き渡る。
「あんっ！！」
ターゲットをクリトリスに変更した美紅。
思わず喘ぎ声を出してしまうが、咲良もクリトリスを激しく舐める。
「んんっ！　咲良、その舐め方気持ちいい」
先にイカされたのは美紅だったが、その後すぐに咲良も美紅の舌技でイカされた。
再度膣口、更に乳首もアナルも優しく舐め合い、お互いの指を挿入して二度目のオーガズムを得た二人は、パンツを履くことも、パジャマを着ることも出来ないまま、深い眠りに落ちてゆくのであった。

――――そして夜が明ける。

「むにゃむにゃ……へーっくしゅん！！……ん？　あっ！？　お、おい咲良っ！　早く起きて！」

「ん？　んんん……あっ！　目覚まし忘れてたっ！　早く行かなきゃ！」

時間ギリギリにたまたま目覚めた美紅によって、どうにか遅刻を回避することができた咲良。

そのまま速攻で顔を洗い、歯を磨いて洋服ダンスを開ける。

美紅が制服しかないことに気付き、それに合わせて自分もセーラー服を着ることにした。

「美紅は早いな……お待たせ！　さぁいこうか！」

「うん。タクシーいつも通り駅前に停まってるかな？　乗れたらどうにか間に合う計算だけど……」

運良くタクシーにも乗れた二人は、例の男と沖野姉妹との約束の〇〇埠頭を目指して進み、無事にギリギリ八時前に到着したのであった。

ツイてない男（前編）（後書き）

女子高生のゴスロリ姉妹である沖野夏帆（おきのかほ）と秋帆（あほ）による、中途半端なプロボクサーへの調教が始まろうとしていた。

沖野姉妹には、拷問はできても処刑は出来ない器のため、〇〇埠頭第三倉庫に於いての拷問のみの担当となって、菅野莉央たちの所属する特殊任務省に加わった姉妹である。

姉であるピンク色の髪をした夏帆よりも、水色の髪をした妹の秋帆の方が気性が荒い。

２８歳の矢島泰介の運命はいかに？

ツイてない男（中編）（前書き）

○○埠頭第三倉庫。
女子高生の姉妹による成人男性への拷問が開始される。

ツイてない男（中編）

倉庫の大きなシャッターがゆっくりと開いてゆく。
そこには二人のゴスロリ姉妹と、一人の男がいた。

「あれ？　もうすでに拷問されちゃってんじゃん？」

「あ！　なんて気の早い姉妹たち！」

『バチィン！！　スパァンッ！！』

「ぎえっ！！　んぎゃあっ！！」

革の鞭を片手にゆっくりと振り向くゴスロリ姉妹。
先に姉の夏帆が口を開いた。

「これはこれは！　美紅さんに咲良さん。おはようございます♪」

「おはよう！　なんかこのオッサン、初対面での態度にむかついちゃってなぁ……もうおっ始めてるんやけどかまへんよなぁ？」

続いて気性の荒い妹の秋帆も挨拶する。

素っ裸にひん剥かれ、四つん這いにされたまま姉妹からの革の鞭

でのダブルアタックを受けまくっている男の姿があった。
背中とお尻が真っ赤に染まり、所々皮が破れて出血もしていた。涙を流して声を上げて号泣する２８歳の男。
「いだいいい！　許してくれええっ！　うううううっ！　いたいいいいっ！！」
「鞭叩きはこの辺で堪えてあげますわ」
「そうだなアネキ。次はケツ穴破壊してやっか♡」
妹の秋帆は直径３センチ、長さ６０センチの円柱形をした金属製の特殊警棒を手にすると、矢島泰介の臀部を軽く叩いた。
「オッサン！　ウチが今からコレを汚い穴にぶち込んでやるからな？」
「ひっ！？　そ、そんな太いの入らねえっ！！　やめて……うう～！　ひっく！　ひっく！」
「泣いても許さんねんやんかぁ？　ほら、尻の肉開いて汚いアナル見せなよ？」
『ぐっ！……パカッ！』

特殊警棒を床に置いて両手で思いっきり男の臀部を左右に押し開く。
女子高生二人と、女子中学生二人の、四人の少女たちに晒される28歳の男の肛門は、男にしては意外と綺麗な色をしていた。
「お！　きれーなケツ穴してはるぅ♪　直腸も見せろ♡」
『グリリリッ！！……クパァ〜！』
「ひいっ！？　み、見ないでくれ……恥ずかしい」
秋帆の手で更に強引に左右へ開かれたお尻……開ききった肛門がめくれるように押し広げられ、ピンク色の艶やかな直腸までもが丸見えになる。
「ほら！　借金まみれのヘタレ野郎！　ぶっといのくれてやるわ」
『ズッ！　ズボボボッ！！』
「んぎゃあああっ！！　いだいいいいっ！！　裂けるうううっ！！」
目を細めながら冷ややかに微笑みながら男の直腸へゆっくりと特殊警棒を埋め込んでゆく秋帆。
本気で涙を流しながら許しを乞う矢島泰介の前に白く綺麗な脚が見えた。
宮垣咲良が腕組みしながら見下ろしている。

「どうだ？　人生で初めて女子高生にお尻の穴を犯された気分は？」

「いだいい……ぐおおおっ！！」

「ほらあっ！　出し入れしてやるよぉ？」

『グリリ！　ぬぷっ！　ぬぷっ！』

「熱いいっ！！　痛いいっ！！　やめてえぇっ！！」

ようやく特殊警棒が男の肛門から引き抜かれた時、散々沖野秋帆に弄ばれたアナルからは、便と共に大量の腸液が糸を引いて床に滴り落ちていた。

「ヤダなぁオッサン！　もう抜いとるのにケツ穴閉じなくなっちゃってるやん？　ん？　ゆっくり閉まっていってるやん！　おもしろ～い♡　あはははは♪」

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……ううう」

大粒の涙を流しながら四つん這い体勢を崩し、胸から床に崩れ落ちる。

そのまま額を床に擦り付けながら号泣しはじめた。

「おい！　アナル調教くらいで泣いてるようじゃコレから受ける訓練持たないぞ？　顔を上げろよ」

咲良はしゃがみ込んで矢島泰介の髪の毛を鷲掴みにして一気に引き上げた。

「３０近いオッサンが本気で泣くなよ……ほら、もう服着ていいぞ。お尻の穴も裂がない程度に頼んでたから心配するな」

涙と鼻水でぐしゃぐしゃになった顔のまま、咲良の顔を見上げるが、まだ全身は震えていた。

「倒せると思った派手な髪のゴスロリ女子高生にボコられて……鞭で叩かれて……アナル調教されて。哀れだなアンタ」

姉の夏帆は、ペンチとカッターを持って男の傍にしゃがみ込む。

「咲良さん、この方のペニスと睾丸、切り取って構いませんか？」

「そ、それはまだやめてやって！　もう夏帆さんと秋帆さんは今日の仕事は終わり。お疲れ様でした」

「まぁ！　ほんと残念ですわ……亀頭部からと根元からと二回に分けて輪切りにして差し上げようと思ってましたのに……」

「ホンマやわ。ウチも電気アンマかペンチでキンタマぶっ潰してやろうと思ってたんや。しゃーないな。帰ろうアネキ！　ほなお先」

咲良は、しぶしぶ引き上げてゆくゴスロリ姉妹の沖野夏帆と秋帆に頭を下げて見送ると、美紅も同じく頭を下げて見送った。

「美紅。もう少し回復するまで待ってあげて」

「そだね。かなりアナル激しく掘られてたからまだ直腸も痺れちゃってそうだしね」

そのまま一時間ほど経過して、ようやく震えも涙も止まり、パンツとズボン、上着を着終わる矢島泰介だった。

「もう大丈夫か？」

「は、はい」

「なぜ敬語になってるんだ？」

震えながら固まってしまう姿を見て美紅が口を開く。

「昨日咲良に引っ叩かれて、更に勝てると思っていたゴスロリ姉妹

にもとことんボコられて……アナル調教までされて……もう女性恐怖症になっちゃったんじゃない？」

「え？　それは参ったな……ボクシング強くしてやるどころじゃないかもなぁ……」

『もしもし？　どうしたの莉央ちゃん？』

その時鬼頭美紅のスマホが鳴った。
二人と同じ拷問処刑人であり、アイドルであるリーダーの菅野莉央だった。
小学六年生ながらも美紅に勝るとも劣らない戦闘力を誇る少女だ。

しばらく相槌を打ちながら会話をするが、咲良にはなかなか話の内容が読めない。
美紅は莉央との話を終えてスマホを切ってから、そっと囁いた。

「コイツの元嫁と娘さん、行方不明になってるらしい……多分元旦那であるコイツが作った借金の肩代わりをさせるために攫ったんだろうね」

「え？　行動早いな極悪組……さすがガラの悪さで有名なヤーさんだな」

「お、俺は知らない！　俺のせいじゃないんだ！　もう別れちまってるんだから！　ううう……」

「泣いてる所、悪いんだけど……アンタの完全去勢が確定したよ」

いきなり叫び始める矢島泰介。

その内容を本気で言っていないのは泣きながら嗚咽の中で叫んでいる所で容易に二人には理解できたが、重い刑罰をゴスロリ姉妹によって執行される運命になってしまう……。

――翌日、極悪組の借りているマンションの一室。

「オラオラ！　もっと舌を使うんだ！　そんなんじゃなかなかイケないぜ？」

「ううん、あおおお、ちゅぽっ！　ちゅぽちゅぽっ！」

極悪組組長の長男であり、若頭でもある大森靖(おおもりやすし)は、矢島泰介の元嫁の里美２８歳と、小学二年生になる7歳の娘の結衣を部下に誘拐させ、マンションの一室で闇のルートでの客に斡旋するため、ソープ嬢のテクニックを教えていた。

素っ裸で見知らぬ男のペニスを舐めさせられる姿を目の前で見せつけられている7歳の娘、結衣は号泣しながら、ママ！　ママ！　と叫び続けていた。

「ほら、俺のチンポ舐めてるとこ、結衣ちゃんにじっくり見せつけてやりな？　ガハハハハ！　マセガキだぜ全くよぉ！」

「わあぁあんっ！！　わあぁあんっ！！　ママアァッ！！　ママアアァッ！！　ひーん！！ひーん！！」

泣き喚く娘の前で今度は靖の子分のチンピラも下半身素っ裸になり、イキリ勃ったイチモツを四つん這いのままフェラを敢行し続ける母親、里美の後方へ回り込み、ゆっくりと膣口へ挿入していった。

「お？　かなり濡れてるなお前！？　アニキ！　この女アニキのイチモツしゃぶりながら濡らしてますぜ？　へへへ！」

「本当か？　庄司の特大のをぶち込んでやれ！」

「ハイ！　では遠慮なく！　ほらママ！　娘の見てる前でバックで犯してやるぜ？　ヒヒヒヒ♪」

「ペチャペチャ！　そ、そんな、あわわ……ペチャペチャ！や、やめれえぇっ！！　うごご……」

『メリッ！……ズブブブブ！……バチュウッ！！』

「はひぃいいっ！？」

品川庄司のデカマラが一気に里美の膣へ根元まで突き刺さった。
子宮口までめり込むほどの大きなペニスを激しく腰を振りながら

出し入れする。

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！　バコバコバコバコバコバコバコッ！！』

「んぎいいいいいっ！？　痛いいいいいいっ！！　ヒャアアアァッ！！」

長い髪を振り乱して泣き叫ぶ母親の里美。
それを無理矢理見せつけられて隣で号泣する小学二年生の結衣。
まさに鬼畜の所業ともいえるヤクザたちのしうちであったが、まだまだ序の口であった。

靖は髪の毛を掴んで激しくイラマチオさせると、喉の奥に大量の精液をぶち撒いた。

『ドピッ！！　ドクドクドクドクドクッ！！』

「うごおおおっ！？　ゴホゲホゲホッゲホッ！！」

食道に流された精液のせいで、盛大にむせかえる里美。

「ふぅ。次は庄司にタップリ子宮内に中出ししてもらえよ？」

そう言いながら娘の結衣の側に移動する靖。

「勘弁してくれやお嬢ちゃん……幼女好きな闇の客は数千万も払ってくれるんだ。ママよりもお嬢ちゃんの方が稼ぎが良いんだ」

「えーんえーん！　ママにひどいことしないでええぇっ！！　わーんわーん！！」

泣き喚く結衣のピンク色のスカートを捲り上げ、純白のパンツに手を掛ける。

「ひゃあっ！？　な、何！？」

思わず母親の心配より、一瞬だけ自分の事を考えてしまう結衣だった。

『ズルリッ！』

「やあぁっ！？」

７歳の少女のパンツを一気に脱がせると、そのままスカートも無理矢理脱がせてゆく。

「！？……やめてえええっ！！　娘だけは手を出さないでえええっ！！　やめてええええっ！！」

「うるせぇぞクソアマッ！！　自分の心配してろや！　オラオラオラアァッ！！」

『バコバコバコバコバコバコバコバコバコッ！！！！』

「はひぃいいいいいっ！！　んんんんっ！！　やめてええええっ！！」

激しく犯されながら娘が丸裸にされてゆく過程を見せつけられる母親の心情は、計り知れないほど痛烈なものである。

激しく抵抗する結衣だったが、その都度思いっきり頬をビンタされ、頬を真っ赤にさせられながらも大人しくなってゆくしかなかった。

「大人しくしてれば叩いたりしないからな？ほら、ママみたいにコレを口に含むんだ」

先ほど里美の口内に大量射精したはずなのに、再びビンビンに勃起したペニスを7歳の少女の口元へ押し付ける大森靖。

「んんん……あ、あ、ぱくん」

「そうだ。やればできるじゃねぇか」

「むごごごっ！！　うんんんんっ！！」

目を思いっきり瞑りながら、現実逃避するが、口の中の気持ち悪い異物感は拭うことができなかった。

「よしよし！　そのまま舌を使って舐め回すんだ」

「んんん！　ペチャ、ピチャピチャ」

生まれて初めて口にする大人の穢らわしい異物。
小学二年生の少女は、命令されるがままにフェラチオを１０分近くもやらされる。

微かに膨らみを見せる幼い胸を、汚い手で掴み、ピンク色の小さな乳首を人差し指と親指で摘み、クリクリとコネ回す。

「んんんっ！？　痛いっ！！うごおっ！！」

「強く摘み過ぎたか？　すまんすまん！　ほら、出るぞ？　全部飲み込まないとママをぶち殺してやるからなぁ？」

『ドピュッ！！　ドピュピュピュピュピュウッ！！』

「むごおおっ！？　んううっ！！……ごっくん！！」

勢いよく結衣の口内へ大量の粘液を射精する靖。
脅しを恐れて吐き気と闘いながらも意味のわからない粘液を無理矢理飲み込む結衣だった。

「ゴホッ！　ゴホッ！　オエエエエッ！！」

あまりの気持ち悪さに殆ど吐き出してしまう。

「おい！　吐き出しちゃダメじゃないか？　お仕置きだなコレは……指突っ込んでやるからな！」

『ヌプッ！』

「ヒャアアッ！？」

『ズブブブブッ！　メリッ！』

中指を結衣の膣口から挿しこみ、処女膜を一気に貫いた。
少量だが鮮血が少女の内腿を伝い落ちる。

「痛いいいいっ！！　えーんえーん！！」

「ローションタップリまんこと肛門に塗ってやるからな？痛みも最

小限になるさ。ふふふ♪」

『ズブッ！　グリリッ！』

「はぎゃあっ！？　痛いっ！！　助けてママアァッ！！　オシッコするあたりとお尻が痛いよおおおっ！！」

「ヒヒヒ！　マンコと肛門同時に指で調教してやるぜ？そのうち痛みから気持ちよくなるからよぉ？」

「アニキ！　前の母娘で死んじまった6歳のガキも2穴同時調教やってましたねぇ？　小学生のガキでも締め付けてきますかぁ？　げへへ」

「ああ。マンコもケツ穴もキュッキュキュッキュと俺の指を締め付けてくるぜ！　ガハハハハ！！　恥骨が邪魔してチンポをぶち込めないのが残念でならねぇがな。小さなチンポなら入りそうなのになぁ。貴重な収入源になるコイツらも自殺とかしなけりゃいいんだが……」

右手の中指で性器を、左手の中指でアナルを掻き回す鬼畜なヤクザ、大森靖だった。

痛みで号泣する7歳の少女の大切な二つの穴に、何度も何度も出し入れしながら掻き回す。

隣では庄司の激しい腰使いで、二度も三度もイカされる母親の姿があった。

Mっ気も元々持っていた里美は、チンピラとは言えかなり男前の

庄司に最後の方は本気で感じていたのだった。

「このアマ、マンコビショビショにしてやがりますぜアニキ！　ひひひ！」

「そうか。幼い娘も見てるのにはしたないのう。いいか結衣とやら。女は気持ちよくなるとココが濡れるんだ。ビショビショにな」

『グチュッ！！　クチュクチュ！！』

「ひゃんっ！？　あはあっ！！」

ローションで滑っている幼い性器を中指で何度も掻き回すと、激痛に思わず叫んでしまう結衣。

処女膜からの流血も治まり、靖の指マンは更に激しくなる。

同時にアナルも掻き回され、まだ幼女のような幼い顔つきの7歳の少女は、少しずつ膣内に快感を見出すようになってゆくのであった。

「あ、あん……あんん」

頬を真っ赤にして気持ちよさに耐える結衣。

「ハハハ！　母親も好きモンだがその娘もさすがだな。カエルの子はカエルか……ほら、母と同時にイカせてやる！　庄司、里美のマ

ンコを指で掻き回したれや！　このガキと同時に潮噴かせてやろう」

「へ、へいアニキ！　げへへへ！」

『グチュッ！！　グチュチュチュチュチュチュッ！！』

『ヌプッ！！　ヌチュチュチュチュチュチュッ！！』

母娘で激しく膣内を掻き回され、卑猥な音が部屋にこだまする。

「あっ！　あはあああああっ！！」

「んひいいっ！！　ひゃひいいいいいいっ！！」

『プシャシャシャー！！』

里美と結衣はほぼ同時にオーガズムを得てしまう。

「ハハハハ！　コイツら本当にイキやがった！」

「しかしアニキ！　小学二年生のガキのくせによく潮噴きましたな？　指マンがよっぽど気持ちよかったんでしょうなぁ？　ゲへへへへ！！　こりゃ今度のロリコン客も大満足してくれそうですぜ！？」

そのまま母娘を裸のままで抱きしめあいさせ、シックスナインで

お互いの性器を舐め合うように強要し、そのシーンを撮影までする鬼畜な大森靖だった。

「ほら、次はママのケツに指入れろ！　母親もだ！　娘のケツに指突っ込んで掻き回せ！」

『ヌププ！　グチュグチュ！　ヌプヌプ！』

ヤクザに言われるがまま、母娘のレズビデオはどんどん撮影されていった。
一部のマニアックなＤＶＤコレクターに、途方もなく高く売りつける為である。
本物の女子小学生が素っ裸で出演して、卑猥な行動をとるような代物は滅多に手に入らないものだからだ。
更に小学生にフェラチオしてもらえる、手コキもしてもらえる、とゆうウリで、一時間一千万払う客もいるとゆうことであった。
以前にも母娘が同じ手口で調教され、裏ソープで働かされたが、数ヶ月前に無理心中してこの世を去っていた。
その代わりとなる今回の母娘は、極悪組にとって新たな収入源となり得るのである。

ツイてない男（中編）（後書き）

矢島泰介は少女たちに散々痛めつけられ、調教され、咲良の意に反して救いようがなくなるほどまでに落ちぶれてゆく。
その陰で元妻である里美と、実の娘である7歳の少女、結衣までもが鬼畜なヤクザたちに調教され、穢されてゆく。

自業自得で落ちるところまで落ちた男と、最低男のせいで無理矢理人生を落とされた母娘。

三人の未来に安らぎは訪れるのであろうか……。

ツイてない男（後編）（前書き）

ついに宮垣咲良にまでも見捨てられた矢島泰介。
更に里美と結衣を傷付ける要因を作った彼は、命までは取られなくとも、少女たちからそれなりの残酷なお仕置きを受ける運命が待つ。

ツイてない男（後編）

あれから一週間が経ち、矢島泰介のボクサー強化計画は見事に崩壊し、ゴスロリ姉妹による調教コースに変更されていた。
もう美紅からの性器破壊の許可も得て、いつでも実行できる状況にあるゴスロリ姉妹だったが、あえて楽しむためにアナル調教に力を入れてペニスと睾丸はまだ残してやっていた。

『ガボッ！　ガボッ！　グリリッ！　グボボッ！』

「あひっ！　はうっ！　ひゃっ！　はぎいっ！」

ピンク色の髪をした姉の夏帆が拳をねじ込むごとに喘ぎ声を出す矢島泰介。
もうすでに肛門括約筋は限界まで拡張調教され、拳を抜いてもポッカリと穴が開いている状態だった。

「すっかり大きくなりましたわねぇ。あなたのアナル♡　もう元には戻りませんわよ？　うふふ♡」

「アネキも残酷だよなぁ。一週間以内にはもう拳入るほど拡張しちゃうんやからなぁ。やれやれ」

「何がやれやれですか秋帆さん。あなたも毎日肘くらいまで突っ込んで前立腺が腫れちゃうまで直腸内掻き回していたではないですか

？」

「は、はは。まぁそうやけど……男のクセにアヘ顔で喘ぐ姿を見てるとマンコ濡れてもうたんよ……」

「わたくしも……やはり姉妹揃ってドSなんですわねぇ。おほほ♪　可哀想ですが完全去勢の執行命令が上から下ってますので……今日はとってもとっても盛大に泣き叫んでもらいますわ」

『ガボオッ！！　グチュグチュグチュ！！』

「はぎいいっ！！　夏帆様っ！！　僕のアナル、壊れちゃいますううっ！！　んぎいいいいっ！！」

「うふふ♡　もうすぐ本当に壊して差し上げますわよぉ♡」

姉の夏帆は、お淑やかに話しながらも、激しく拳から肘までも肛門にぶち込んで直腸内が腸液でグチャグチャになるまで掻き回し続けた。

「今日もキンタマリフティングの時間だ。ほら、立って股を大きく開くんや」

「は、はい！　秋帆様っ！」

『パンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパンッ！！』

男の背後から膝でサッカーボールをリフティングするように、何度も陰部を蹴り上げる。
その度にペニスと睾丸は何度も上下に激しく振動させられるのであった。
「オラオラオラオラアッ！！　もっと激しく上下に揺らすんやっ！！」
「はひひひひひひいっ！！」
『パンパンパンパンッ！！　ビョンビョンビョンビョンビョンッ！！』
その陰部の動きを見ながらバカ笑いする姉の夏帆。
「おほほほほっ！　やめてっ！　笑い死んじゃいますわ！」
「ほらほらほらあっ！　今日も元気にビョンビョンビョン♡」
「はひひひいっ！！」
『ドピュッ！　ドクドクドクドクッ！』
「あ！？　こらっ！　誰がウチの膝に出していいって言ったんや！？　ぶっ殺すで！？」
『ドカッ！！……ぷちゅっ！！』

「ギャァアアアアアッ！！！！」

蹴り上げられた刺激でタップリ秋帆の膝へ精液をへリ掛ける姿に腹を抱えて笑う夏帆だったが、秋帆は本気で怒っている。

思いっきり蹴り上げてとうとう左の睾丸を潰してしまった。

激痛で転げ回る矢島泰介だったが、美紅からもらっていた麻酔注射を打つと、数秒の内に平静を取り戻す。

「ごめんな！　ついついムカついてキンタマ一つ潰してもうたわ……かんにんやで」

「かんにんできないですわそんな……でも最初からそのつもりでしたので……おほほほほ！」

相変わらず笑い転げる姉の夏帆に、秋帆も少しイラついてきていた。

「アネキ！　わざとやないんやから！　笑い過ぎやで？」

「だって……ツボにハマって無茶苦茶おかしいんですもの……おほほ！　あはははは！」

呆れた秋帆は、美紅に教えられた通り、睾丸を潰してしまった後

の処置を始めた。

「左側か……ミンチになったままほっといたら膿んでくるみたいやから取り出すで？　ええな？」

「ひぃ……キンタマ抜いちゃうんですか？　そんな……ぐすん！」

「泣かんでええわ。ほっといたら腐ってくるで？　ほな金玉袋切開するで？よっ！」

『ズッ！　ズズズズッ！』

器用に陰嚢を切開してゆき、指で押し広げて潰れた左側の睾丸をほじくり出す秋帆。

更に見事に縫合までこなした。

「お見事なお手捌きですわ秋帆さん。美紅さんから教わってましたものね？」

「そ、そうやな。ゴム人形みたいな模型で切開したんやけど……ホンマものの身体でもうまいことといったわ。良かった」

「でもこの後、東部中央病院へ搬送予約ができてますのでねぇ。手当はそこそこで構いませんわよぉ」

「そうなんや……はら、食えよお前のキンタマ」

ほじくり出した睾丸のミンチを、本人に無理矢理食べさせる。
嗚咽を上げながらも全部飲み込んでしまった。

「キンタマは栄養満点やで？　あははは♪」

一人バカ受けする秋帆をよそに、夏帆は、足の親指を男の口内へ捩じ込む。

「ほら、お舐めなさい。足の裏に着いた汚れを全て舐め取ってくださいます？」

「むごおっ！？　んごんご！……ペチャペチャ！」

言われるがままに泣きながらも夏帆の足の指を一本ずつ全て口に含んで綺麗に舐め取っていった。

「よくできましたわ。ご褒美です」

『ぎゅむっ！　シコシコシコシコ』

「あひっ！　はうううっ！　か、夏帆様、気持ち良いですうっ！」

「おほほ！　タップリお出しなさい。わたくしは妹みたいに怒ったりしませんから」

言葉に甘えて一つの睾丸になりながらもたくさん射精してしまう矢島泰介だったが、その精液が夏帆の頬に付着してしまう。

「よくもわたくしのお顔に……」

ワニ型ペンチを手にした夏帆は、唯一残った右の睾丸を挟み込み、一気に力を込めて握り込む。

『ギュウウウウウッ！……ぐしゃっ！！』

「がわあああああっ！！！」

二つの睾丸を失った男は、今の手コキが人生最期の射精となってしまったのである。

「もうやっちゃいまっか？」

「そうですわね。国からも美紅さんからも許可はもらってますしねぇ」

口にタオルを噛ませて、両手両足をロープで縛り、大型のカッターを手に取る夏帆。

秋帆はペニスを二本の指で摘み、左手の指を肛門へ突き刺して前立腺を刺激する。

みるみる内に勃起したペニスを夏帆は雁首から一気に切断した。

『スパァッ！！……ポトリ！』

「ギャァアアアアアアッ！！」

再び麻酔が弱まったのか、陰部切断に絶叫する矢島泰介。

「次は根元からいきますわよ？　お覚悟♡」

『ズッ！　スパァッ！！』

「ひんぎいいいいいいっ！！！！」

「あなたみたいな男らしくない方には、オチンチンや睾丸なんてものは必要ないですわ。また子供なんて残されたら迷惑ですので」

結局ゴスロリ姉妹によって睾丸とペニスを完全去勢され、泡を吹きながら気絶してしまう。

気絶したままうつ伏せにさせて、お尻を引き上げて無理矢理四つん這いにさせると、極太アナルバイブを装着したペニスバンドを腰に巻いて、矢島泰介のアナルへ突き挿れてゆく秋帆。

「おら、気を失っても許さないで？」

『ズブブ！……バチュッ！！』

根元までぶち込むと、激しく腰を振り始めた。

『バッコンバッコンバッコンバッコンバッコン！！』

水色の髪を振り乱して、28歳の男のアナルを犯しまくる女子高生の沖野秋帆だった。
ペニスの切断面からは尿道の切断面ものぞいている。
そこから飛び出す粘液。
前立腺を極太バイブで抉られて、まだ少し体内に残っている精液が絞り出されていった。

元妻と娘に危害が及ぶことの罰として、去勢される運びとなった矢島泰介。

傷口からの感染症による死亡を防ぐため、特殊任務省により後始末の段取りは行われ、管轄の東部中央病院へ治療、入院のために搬送された。

――――そして更に一週間が過ぎた。

極悪組組長の一人息子であり、組の若頭である大森靖の住むマンションで、今日も鬼畜な行為が繰り返されていた。

靖は、全裸で立ったままで、前からは小学二年生の少女にペニスをひたすら舐めさせ、後ろからは母親である里美に肛門を舐めさせている。

尺八させながら指でひたすら小さな膣内を掻き回す。

「おら、もっと舌を使えと言ってるだろう？　大事なオマンコを叩いてやるぞ？」

「うう、ペチャペチャ！　ちゅぱちゅぱ！」

「おお！　そ、そうだ！　気持ち良いぞ！　母と娘の親子丼ってか!?　ゲハハハハッ!!　結衣がせめて六年生くらいだったらのう……無理矢理チンポをぶち込んでやったのだがな」

その時、いきなり玄関のドアが開き、二人の少女が近づいてきた。

「ん？　誰だ？　おい庄司！　今日誰かの来客あったか？」

「いえ？　聞いてないですけど？」

そこに現れたのは二人の女子中学生、鬼頭美紅と宮垣咲良だった。

「ん？　あ、お前たち何処かで見たことあるような……　確か鬼頭美紅と宮垣咲良！？」

芸能オタクであり、アイドルファンの庄司は、真絆ガールズ所属の美紅と咲良を知っていたのである。

「な、なんでアイドルがこんなトコに！？」

「お！？　アイドルなのかコイツら！？」

外に出るときなどは、いつも厚化粧で誤魔化している拷問処刑人たちだったが、それでも気づいたヤクザの男に少し驚く美紅たちであった。

「短刀直入に言わせてもらうけど、大森組のバカ息子の大森靖、そのバカ弟子の品川庄司。二人はココでフルボッコにされて、ある場所で処刑されちゃうの。覚悟してね」

セーラー服で颯爽と現れて、黒髪のツインテールを靡かせながらヤクザたちを指差す美紅。

「そうだ！　里美さんに結衣ちゃんね？　もうそんな汚いモノ舐めなくてもいいよ。危ないからそいつらから離れていて」

咲良も両手を腰に当てて胸を張りながら被害者の母娘へ声をかけた。

「お前ら二人とも中学生だろが！？　素手でも俺らに勝てると思うなよ！？　おおうっ！？」

粋がる二人だったが、そのまま歩み寄って美紅は大森靖のみぞおちへ強烈な膝蹴りを入れた。

ほぼ同時に咲良は品川庄司の鼻っ面へ強烈な正拳突きをお見舞いする。

「ぐおおおおっ！？」

「がはああっ！？　いってええええっ！！」

ほんの数秒で激痛に倒れ込むヤクザたち。

その隙に美紅は二人へ、念の為身体が動かなくなる麻酔薬を注射した。

恐怖に引き攣った顔で美紅と咲良を見つめる母と幼い娘……。

「大丈夫ですか？」

「は、はい！……どうにか生きてはいます」

母親の里美は、慌てて服を着ながら咲良の問いかけに返事をした。
7歳の娘である結衣が素っ裸のまま咲良の前に駆けてくる。

「おねぇちゃんたちも結衣のココ……触ってもいいよ」

そう言いながら咲良の手を掴み、自分の股間へ擦り付ける。

「ゆ、結衣ちゃん！？……も、もういいんだよそんなことしなくても」

咲良は慌てて結衣の幼い性器から手を離すと、しゃがみ込んで頭を撫でながら抱きしめた。

「……あん」

「え？」

抱きしめている結衣から喘ぎ声がするのを聞き、不審に思いふと顔を上げる咲良。

『クチュクチュ』

「あんんっ！　おねぇちゃん……結衣のそこ、気持ちいぃ」

美紅が結衣の膣へ中指を突っ込み、卑猥な音が鳴るほど掻き回している。

「こら美紅っ！　やめんかーい！！」

「え？だって可愛い過ぎてつい……感度も確かめたかったしぃ……ごめんなさいっ！」

咲良に怒られて慌てて膣から指を引き抜く美紅だった。

しばらく本気で睨みつける咲良に対してバチが悪くなった美紅は口笛を吹きながら立ち上がり、倒れて動けなくなっているヤクザ二人の顔面を代わる代わる足の裏で何度も踏み付けた。

『ドカッ！！グシャッ！！』

「がはあっ！？」

「いでえっ！！」

「そもそもお前らが鬼畜なことするから悪いのよ。死ね死ね！」

戦闘に備えて、部屋の中へスニーカーのまま土足で上がってきて

いたため、生足で踏みつけられるのとは訳が違った。
鼻から口から大量の血を流しながら悶絶する靖と庄司。

「やめでぐれえええ！！　痛いいいい」

「ゆ、許してくれ！　な、なんでもくれてやるから！　な！？　お願いだ！！」

動かない身体のまま処刑宣告までされた二人は、美紅たちが現れた最初の時は、悪い冗談と内心バカにしながらタカをくくっていたが、ここまで酷い状況になり、ようやく本気でヤバいと気付き始めてきていた。
必死で命乞いを始めるが、美紅は二人のトランクスを脱がしてゆく。

「里美さんと結衣ちゃんにやってもらおうか？」

咲良の方に振り返り、指で摘んだ医療用のメスをクルクル振り回す。
7歳の幼い女の子でも、軽い力で人間の身体などは簡単に切開できるほど超鋭利な切れ味を持つメスだった。
莉央から貰ったメスは二本。
一本ずつ里美と結衣に手渡してゆく美紅。

「汚いチンポちょんぎってあげて」

「ええっ！？　わ、私には無理です」

「結衣……オチンチンを……ママに突き刺して虐めてる所見ちゃったから」

母親の里美は震えながら拒絶してメスを床に置いたが、小学二年生の結衣は健気にも母親の仇をとる気持ちでいるらしかった。

「二人ともちょんぎる？」

「……結衣……ちょんぎる！」

「偉いぞぉ結衣ちゃん！　ママとあなた自身を穢した男たちの拷問手伝ってくれちゃうんだ！　ありがとう♪」

そんな女性たちの会話を聞きながら本気で震え出して必死で許しを乞うヤクザたち。

聞く耳持たない結衣はメスを手にして歯を食いしばりながらママを犯した品川庄司のペニスを小さな左手で握りしめた。下側に覗く付け根辺りにメスの刃をそっと当てがい、少し躊躇っている。

「ひ、ひぃいっ！！　や、やめさせてくれこのガキに！！頼むわお前らああっ！！」

「人にモノを頼む言い方じゃないわね。さぁ結衣ちゃん！　ママを虐めたその汚いチンポを思いっきり根っこからスパッといっちゃって！」

「うん！……ママのカタキ！　えいっ！！」

『スパァッ！！』

一気に引き切ったメスの刃は、見事一刀にして品川庄司のペニスを根元から切断する。

『ブシュウウウッ！！』

「きゃっ！？」

顔面に飛散した返り血を受けてしまい、思わず顔を背ける結衣。

「ギャアアアアアアアアアッ！！」

ワンテンポ遅れて絶叫する庄司だったが、身体が震える範囲しか動かせない。

この世の地獄のような激痛を味わいながら小便を撒き散らす。

「あはは！　切断面から鮮血で尿道切断面からはションベンが飛び出してる！飛ばしまくりだよねコイツ」

受ける美紅の隣で静かに隣の大森靖のペニスを握る咲良。

「次はコイツだ。おねぇちゃんがチンポ持ってるから、この先端の穴から刃先を突き刺してやって！」

「う、うん！　切るより痛そうだけど……結衣、やっちゃう！」

「ひいいっ！？　本気かよ！？　尿道口にそんなのブッ刺されたら死んじゃうぜ！？やめてくれえぇっ！！　俺は極悪組組長の息子で若頭だぞ！？　お前らこんなことしてこの先生きていけると思ってるのか！？　おいっ！？」

『ズッ！！』

「がぎゃあああっ！！　いでえぇえぇっ！！」

「結衣ちゃん、そのまま全部突き刺してから金玉がある側に倒して。そうすれば裏筋と一緒にオシッコの通り道の尿道が縦に切開出来ちゃうから♡」

「うん。オシッコが通る管なんて切っちゃう！　えいっ！！」

そう言いながら結衣は一気に膀胱辺りまでメスを突き刺した。

『ズズズズズ……』

「そこで手前に刃を向けて手前側に倒してみてー」

「うん！」

『ズバアアッ！！……ブシュシュシュシュー！！……ズルル』

「ぎひいいいいっ！！！！」

鮮血の後から切開された尿道が飛び出した。

ペニスの裏側を全て切り開くことに成功した結衣は、そのまま陰囊と会陰部を切開して肛門までも切り裂く。

「えいいっ！　全部切れちゃええええっ！！」

『ズババババアッ！！』

「ぴぎいいいいっ！！！！」

白目を剥いて泡を吹きながら失神する靖。

その股間からは夥しい量の鮮血と、尿道管、更に切開された陰嚢から生の睾丸が二つとも飛び出して、管に繋がったまま股間でブラブラ揺れている。

肛門も縦に真っ二つにされ、直腸の一部がめくれるように飛び出していた。

「結衣ちゃん……それやり過ぎ……そこまで切開しちゃったらもうコイツ死ぬしかないよ？　死ぬんだけどね」

苦笑いしながら母親の置いたメスを手にしてヘソに突き刺す美紅。

『ズッ！』

「え？　美紅？　ココで処刑しちゃうの！？」

「そうするよ。もうどうせ助からないから」

慌てて咲良が止めようとするが、もう美紅の判断が覆る事はなかった。

一気にヘソからペニスの切断面の陰毛密集地帯まで切開し、大腸と小腸を飛び出させる。

『ズズズズッ！……ブリブリブリリリリリリッ！！』

白やピンクのハラワタが数メートルほどもウネウネと飛び出してきて、本人の股間の切断面を隠してゆく。

「予定変更よ。ココで処刑執行しちゃうから死んでね？」

「げはっ！　ぐはあっ！？　うごごご……ぐげげげげえっ！！」

血の泡を吹き出しながらもがき苦しむ大森靖。

結衣が切開した股間へ指を深く突っ込み、前立腺を引きずり出した。

「見て結衣ちゃん。この部分で男は気持ちよさを感じるんだよ。前立腺ってゆうの」

「ぜんりつ……せん？　なんかレバーみたい」

咲良ももう諦めてこのマンションを処刑場にすることを受け入れた。

靖の胸に馬乗りになり、サバイバルナイフを首に当てがうと、凄まじい速度で左右に動かして首の切断作業に入った。

「先に死ぬんだ大森靖。後から子分の品川庄司も送ってやるから安心しろ！」

『ザクザクザクザクッ！！』

「ぐえええええっ！！　んごおおおおっ！！」

流石に首を半分ほどまで深く切開すると、結衣も目を瞑って顔を

背けた。

「死ね！」

『ザクザクザクザクッ！！　ガシュッ！！　ガシュッ！！』

首の骨は切らずに叩き折る。

『ガシュッ！！　バキバキッ！！』

「けぴっ！！」

ココで短く奇声を上げて、目玉をグルンと回して完全に絶命する靖。

更に首の裏側の皮も切り取って完全に身体から切り離された生首。

咲良は髪の毛を鷲掴みにして高く掲げる。

「首獲った！　里美さん、結衣ちゃん。これでコイツの罪、少しでも許してあげて」

震えながら頷く里美と結衣。

結衣は初めて見る生首を見つめながら、小便を漏らしてしまっていた。

美紅は持ってきた刃渡り４０センチ、柄の長さ８０センチの全長１２０センチの鉄の槍を取り出し、ペニスをねもから切断されて隣でアニキを惨殺されて半狂乱になっている品川庄司の横にしゃがみ込む。

「この机にうつ伏せで縛りつけるからね？」

「あああ……ううう」

泣きながら半狂乱になって首を左右に振り続けるが、身体は相変わらず麻酔のお陰で動かない庄司。

小さな木製の机に、素っ裸のままうつ伏せで縛り付け終わると、股を大きく開かせてバンドで固定する。

最後にお尻を思いっきり引っ叩いた。

『スパァンッ！！』

「いてえっ！？」

「品川庄司の処刑方法は、大森靖の斬首に続き、槍での串刺し刑とするわ。わかった？」

「く、串刺しなんて嫌だ！　なんでもするから許してくれええっ！！」

「あれ？錯乱してたみたいだったけど？復活したんだ……そんな偉

そうに言われてもねぇ」

「お、お願いします美紅ちゃん！　テレビで美紅ちゃん見ながらオナニーもしたことあるんだ！　隠れファンだったんだぜ！？」

「ふぅん。ありがとう。ロリコン変態オヤジ」

「アイドルの君たちがまさかこんな残酷な……いや、俺たちも間違っていた……ほんとごめんなさい」

『ツプ』

「ひいっ！？」

鉄の槍を庄司の肛門へ突き刺す美紅。

「挿入される者の痛みや苦しみを知ることね」

『ズブブブブ！』

「いだああああっ！！　やめて抜いてえええっ！！　美紅ちゃんお願いっ！！」

美紅は力任せに胃まで一気に刺し込んだ。

肛門から直腸、大腸小腸を突き破った槍の切先は、胃まで達してしまう。

鮮血を口から吐きながら悶絶する品川庄司。

「何チンポの切断面からオシッコ飛ばしてんの？ はしたないわね」

『ズブブブブ！』

「はがががががっ！！　死ぬ、死ぬううううっ！！」

「死になさい！　結衣ちゃん、槍の柄を木槌で思いっきり叩いてくれる？」

「わかった、それえっ！」

『ドカッ！！……バシュウッ！！』

「ぴぎいいいいっ！！　ほげえええっ！！」

結衣の放った木槌の一撃で、庄司の口から槍の切先が勢いよく飛び出した。

激しく痙攣しながら白目を剥く。

「まだ生きてる内に金玉も抜いちゃおっか？」

「うん！　えいっ！」

『ズズズッ！……ぷるるんっ！』

結衣はメスで陰嚢を切開。
勢いよく二つの生睾丸が飛び出してくる。
精管で繋がって激しく揺れていた。

「生の睾丸出てきたね？　摘んで引きちぎって！」

「うん！　それえっ！」

『ぎゅぎゅっ！　ブチブチッ！！』

結衣は両手で二つの睾丸を掴み、二個とも一気に管から引きちぎった。

「けぴいっ！！」

ココで白目を剥いて絶命する庄司。

「小学二年生の女の子に金玉抜かれて肛門から串刺しにされて死んじゃうなんて……エロくて哀れな死に方だわ。ね？咲良」

「あ、ああ。むちゃエロいな確かに……結衣ちゃんの復讐、撮影させてもらったぜ」

「莉央ちゃんや愛衣さんにも後日見せてあげようね」

「そだな。莉央は喜んでくれそうだ」

　そんなこんなでヤクザ二人組は、アイドル兼拷問処刑人と、結衣の責めによって人生の幕を閉じる。

以前同じように靖と庄司に性的調教をされて、仕舞いには無理心中で命を絶った母娘も、少しは報われてほしいと願う美紅と咲良だった。

ツイてない男（後編）（後書き）

鬼頭美紅と宮垣咲良は、里美と結衣を無事に救って、ヤクザである大森靖と品川庄司の拷問処刑を完了したことを莉央に告げた。

以前無理心中した母娘のためにも無念を晴らした美紅と咲良、果敢に復讐を遂げた結衣。

特殊任務省の藤堂長官も、拷問処刑人リーダーの菅野莉央も納得する今回の特別な処刑執行であった。

後日、宮垣咲良は東部中央病院へ出向いた。

「ご無沙汰です。どうですか？」

「あ、咲良様……だ、大丈夫です」

かなり本格的な女性恐怖症を患い、小学生だろうが中学生だろうが話すことすら恐怖を感じる泰介だった。

「もう矢島さんの罪は拷問と、去勢刑で終わってます。そんなに怖がらないで下さい」

丁寧に話す咲良に、別の恐怖を抱く泰介だったが、話を進める内に

少しずつ落ち着いてきた。

「だから様付けももう要らないから普通に咲良でいいよ」

「ご、ごめん。そ、そんなに多額の借金を咲良ちゃんが！？」

「ヤクザの闇金の方は払ってないけどね。あんなの違法だからほっといたらいいです。去勢しちゃいましたから座って小便とか色々生きていく上で不便とは思いますが……もう借金は無くなりましたので残りの人生、精一杯頑張って生きてください。それを伝えに来ました」

「あ、ありがとう咲良さん」

軽く頭を下げて病室のドアを開く。
振り向いて更に一言。

「元奥さんと娘さん、国が管轄する施設でしばらく暮らすようになりましたので。ご心配なく」

「そ、そうなんだ……本当にありがとう」

再度軽く頭を下げ、病室を後にする咲良だった。

これを機に、酒やギャンブルをやめて、真面目に働いて生きてゆく決心をした矢島泰介であった。

現在も、そして百年先の未来にも（前編）（前書き）

１００年前、国が特殊任務省を設けて被害者や遺族の代わりに冷酷な罪人たちを拷問、処刑する制度が生まれた。

数年続いた後、一度取りやめになるが、それから百年後、凶悪犯罪が増えつつあるのを堺に、再び日本に特殊任務省は復活するのであった。

東部地方中央部にある赤霧島高等学校三年Ｃ組。

女子高生でありながら、拷問処刑人でもある神崎美央と唐田由衣夏の残酷物語が始まる。

現在も、そして百年先の未来にも（前編）

――――時は西暦２１２５年。日本国は東部地方を中心に、飛躍的な進歩を遂げていた。

※（このお話から先頭にしばらくの間は、１００年後の未来の拷問処刑人たちの物語が続きます）

燃料である石油が５０年前に枯渇(こかつ)し、自家用車は全て電気自動車となり、更に空飛ぶ車と呼ばれる自家用ドローンを所有する者も人口１億人の内で数百人ほど存在した。

ドローン免許には年齢は関係なく、操縦技術の実技試験と、飛行に関する筆記試験に受かった者は何歳であろうと操縦することが許されている。

飛行機やヘリコプターのパイロットでもない一般人が操縦して民家の上空までも飛行できるものであるため、合格率は１０万分の１程度とゆう、とんでもないものであった。

東部地方最東部にある私立霧島高等学校。

屋上に一機のドローンが着陸した。

「校長先生、ついにこの学校にも救世主が舞い降りてくれましたね」

「う、うむ。想像を絶するほど喧嘩の強い女子生徒と聞いているが……一体どんな子たちなのだろうか……」

スライド式のドアが後方へ開き、二人の女子生徒が降りてくる。
「やっほー！　あたしたちが来たからにはもうこの学校もすぐに平和になるわよぉ～♪」
降り立った瞬間、満面の笑みで大きく手を振りながら駆けてくる黒髪ロングの美少女。
「こら美央！　校長先生と教頭先生にそんな口聞いちゃダメ！　前にも言ったでしょう？」
「てへ！　ごめんちゃい！……おはようございます。申し遅れましたが、あたし、わ、ワタクシ、神崎美央（かんざきみお）と申します。東部地方の真ん中辺り……隣町にある私立赤霧島高等学校在籍の三年生です。この度はお世話になります。そしてこの子が……」
「唐田由衣夏（からたゆいか）と申します。よろしくお願いします」
外国人とのハーフである由衣夏は、金髪のポニーテールを揺らしながら頭を下げて挨拶した。
「私は校長の須田義夫（すだよしお）です。こちらは教頭であり私の妹でもある中道由貴（なかみちゆき）」

校長は６０歳で、頭も髭も真っ白ないかにも校長先生とゆう風格のある見た目をしている。

「おはようございます。わざわざ私たちの生徒のために助けに来てくださり、ありがとうございます」

神崎美央１８歳。
百年ほど昔、小学六年生でありながらアイドルでもあり、拷問処刑人のリーダーともなりつつ極悪非道なる罪人たちの拷問処刑を執行してきた菅野莉央の子孫にあたる。

当時、同性の六つ歳上の女子高生、円満愛衣と付き合っていたが、莉央が二十歳を迎えた時に愛衣に癌で先立たれ、それを機に拷問処刑人を卒業して同じく拷問処刑人でありながら同棲している性奴隷だった美男子、菅野永遠（荒木永遠）に強制性行させ、一人の女の子を出産した。

唐田由衣夏１８歳。
同じく百年ほど昔、莉央と共に拷問処刑人となった小学六年生の少女、堀越唯香の曾孫にあたる。
莉央の卒業と共に二十歳で拷問処刑人を引退し、飲み会で出会った一般男性と結婚。
一人の男の子を出産する。

その赤ん坊たちが大人になり、更に結婚して子を産む。
更にその子が成長して子を産む。

その二人が現在女子高生にまで成長した神崎美央と唐田由衣夏であった。

莉央が引退して五年後、特殊任務省の拷問処刑制度は一度終焉を迎えるが、２１５０年から度重なる凶悪犯罪を抑止する為に再び設けられたのである。

そして国から選出されたのは……百年ほど前に国に設けられた、被害者たちに代わり、残酷な拷問と処刑を罪人へ与える任務を持つ“特殊任務省”に所属した拷問好きな少女たち……彼女たちの残酷な血を百年後の現在でも受け継いでいることが小学六年生の時に起こした事件により確認されたこの二人の女子高生であった。

「では早速ですが、問題のクラスへ行ってもらえますでしょうか？三年五組の担任である岡部智子先生も教員室でお待ちしておりますので」

教頭の中道由貴に案内され、教員室へ着くと、ドアの前の廊下に立っている女性がいた。

「岡部先生」

「え？　あ、はい！」

「この方たちが先ほどお話しした、この度の問題解決をしてくださるとゆう神崎美央さんと唐田由衣夏さんです」

「あ！　これはどうも！　お、お待ちしてました！　お、おはようございますっ！」

しどろもどろしながら挨拶する岡部先生は、まだ２５歳と若く、少しの問題にもなかなか一人で対処できなさそうで見るからにおっちょこちょいそうでもあった。
そう察した二人は、少しでも気楽に話せるよう陽気に話しかける。

「おはよーございまーす！　あたしが神崎美央でーす！　拷問処刑人とゆうお仕事を始めてからかれこれ7年目となりますが、よろしくお見知りおきを〜♪」
「おはようございます。私は唐田由衣夏と申します。よろしくー♪」

普段礼儀正しい由衣夏も、空気を読んで美央と同じように明るく挨拶をした。

「ではあとはお願いしましたよ岡部先生。この方たちはこう見えて男性の格闘家も倒すほどの強さと聞いています。安心して任せていいのですよ？」
「あ、は、はい！」
「では神崎さん、唐田さん、よろしくお願いします」

「はい。また解決したら報告させて頂きます」

深々と美央たちに頭を下げて去ってゆく中道教頭を見つめながら、何度も何度も頭を下げる岡部先生。

すでにクラスの中では例の事件が起こっていることは、美央と由衣夏にもすぐに理解できた。

叫び声やら泣き声、笑い声が入り乱れて共鳴しているからであった。

「あの、早速ですが問題を起こしている生徒は………主犯格が三人、男子生徒の名は亀田彰良と鶴田幸次郎。女子生徒は秋吉冴子。いずれも父親が極道の親分らしくて……後が怖いのか逆らえる生徒は誰もいません」

「そうですか。よくあるパターンですねそれ」

「どうせ小さな小さな枝別れなら末端の組でしょうけど。まぁ私たちにはヤクザなんて関係ないですから」

警察と同等、もしくはそれ以上の権力を持つ特殊任務省に属する美央と由衣夏は、ヤクザを含む数十人を既に始末してきている殺し屋であった。

拷問した挙句に処刑する、百年前に、存在していた拷問処刑人の子孫たちであったからだ。

ドアを開けて担任の岡部先生がクラスに入る。
その後美央と由衣夏が後に続いた。

「ハハハハ！　もっと深く指突っ込めよ！」

「そうだそうだ！　辰雄はMっぽいからよぉ！　深く突っ込まれると勃起しちゃうぜぇ！？　げへへへへッ！！」

「ほんとだ！　辰雄ってば友美恵ちゃんに感じちゃってるわよぉ？　アハハハ！！」

主犯格らしい例の三人は、素っ裸にさせた男女の周りを囲むように机に座って足を組んで罵声を浴びせたり声援を送っている。
担任の岡部のことはどうでもよかったのだろうが、後に続く美央と由衣夏には過敏に反応する。

沈黙の中、問題生徒三人と、全生徒たちから視線を浴びる美央と由衣夏。

「あ、あの、お取込み中とっても申し訳ないんだけどさぁ。こんなエッチなこと強制されたらこの二人恥ずかしくて自殺しちゃうかもよ？」

「そうそう。友美恵ちゃんっていうのかしら？　辰雄くんのお尻の穴から指抜いてあげて。泣いちゃってるじゃん？」

「あ、ご、ごめんなさいっ！」

由衣夏にそう言われて慌てて我に返り、辰雄の肛門へ突っ込んでいた人差し指をゆっくり引き抜く友美恵。

笑っていた全生徒は三人の仕返しを恐れて慌てて担任の教壇の方へ向き直す。

三人だけは机に座ったまま静かに美央と由衣夏を睨みつけてきていた。

「あれれ？　何か間違えたこと言ったかなあたし？」

「アハハ……そんな風になっちゃってるわねこの雰囲気……ほらほら！　早くパンツ履いて服も着て！　風邪引いちゃうわよ？」

由衣夏に急かされて、慌てながらパンツや靴下を履いて制服を着る白木辰雄と高峰友美恵の、いじめられっ子である二人。

「おいお前ら」

「え？　あたし？」

「そうだよ」

「何か御用かしら？」

「俺たちを舐めてるのか？」

主犯格でもリーダーらしい亀田彰良がツルッパゲの頭をテカらせながら美央に凄んでくる。

左右からも鶴田幸次郎と秋吉冴子が冷たい視線を送っているのを感じた。

「別に舐めちゃいないけど……一つ良いこと教えてあげようか？」

教室の一番後ろに用意された、転校生二人の席に座りながら美央は肩まで伸びた艶やかな黒髪を首を振ってサラリと揺らした。

「美央？　シャンプー変えた？」

「よく分かったわねぇ！　それほど差はない筈なのに！　さすが由衣夏だわ」

途中まで話してから由衣夏に話を逸らしたため、ブチギレて近寄ってくる秋吉冴子。

「おいテメーら！　あたいたちが転校生の心得ってヤツをようく身体に刻み込んでおいてやるからな？　覚悟しろよ？」

「……だってさ由衣夏。少し様子をみてみる？」

「そだね。何やってくるのか様子をみましょう」

余裕の態度の二人に主犯格の三人の怒りはピークに達する。

いきなり立ち上がって冴子の隣へやってくると、美央の机を横側に蹴り倒す鶴田幸次郎。

『ドカッ！！　ガッシャーン！！』

「おいコラ！　調子に乗ってんじゃねーぞ？　女だからってオイラたちにゃ関係ねーんだからな？」

目を大きく見開いてしばらく鶴田幸次郎を見つめていたが、数秒後に腹を抱えて笑い始める美央。

「アハハハハハハ！　聞いた由衣夏！？　コイツ自分のことオイラだって！　アハハハハハ！！　いつの時代の生まれなのよ！　アハハハハハ！！」

「そ、そんなに可笑しいかな？　あ、あはは」

美央ほどツボにハマらなかった由衣夏は、両脚をバタバタさせながら笑い転げる美央を苦笑いで半ば呆れながら見つめている。

ふと気がつけば、クラスの全生徒が教室から姿を消していた。

先ほど責められていたいじめられっ子の男女二人だけを残して……。

「あれ？　みんなどこいった？」

「私たちのコイツらへの振る舞いにビビっちゃって、早退しちゃったんじゃない？」

「そっか。さっきSMプレイしてた二人は残ってるよ？」

「コラ美央！　好きでやってたんじゃないんだし、そうゆう言い方しないの！」

「テヘッ！　ごめんなさいっ！」

ついに堪忍袋の尾が切れた亀田彰良が、美央の胸ぐらを掴み、無理矢理に立たせる。

『グイッ！！　グググッ！！』

「ちょ、ちょっと痛いっ！　いたたたっ！　きゃー！　やめてええっ！」

美央のクサい演技に呆れながらも、由衣夏もゆっくり立ち上がる。

「ホントに殺すぞてめーら！」

「ちょっと待って！」

演技とは取らなかった二人がいた。
白木辰雄と高峰美恵子の二人。

「わ、私たちがさっきの続きをするから！　お願いだからこの子たちに手を出さないで！」

「ぼ、僕からもお願いするよ！　また高峰さんとＳＭプレイするからその転校生たちは許してあげて！」

そのままそそくさと制服とパンツを脱ぐと、再び四つん這いになる白木。
その傍に同じく素っ裸になった高峰がしゃがみ込み、再度白木の肛門へ人差し指を突き挿れた。

「ほら、ここ？」

『ズブッ！』

「はうっ！　あ、ああ。美恵子様、痛いです」

「我慢しなさい。ほら、もっと奥まで突っ込んであげる！」

『グリッ！　ズブブブッ！』

「うああっ！　痛いいっ！」

頬を紅く染めながらも、いじめっ子たちの考えたであろう筋書き通りのプレイをジッと見てしまっている美央と由衣夏。

その傍でいじめっ子の三人も大はしゃぎ。

「ガハハ！　いいぞ！　よく分かってんじゃねぇか！？」

「もっと掻き回してやれ！　ＳＭプレイは見てておもしれーな！」

「あはは！　もうケツアナはいいから立ち上がって背後から金玉蹴り上げてやるんだ！」

散々肛門を掻き回した挙句、今度は女いじめっ子の秋吉冴子から立ち上がるように命じられ、金玉蹴りを要求される高峰美恵子。

「わ、分かりました。ほら辰雄！　き、金玉がよく見えるようにもっとお尻を高く突き上げなさい！」

「は、はい！　こ、こうです……か？」

蹴られる恐怖に震えながら四つん這いのまま、さらにお尻を高く突き上げる白木辰雄。

「ごめんね、白木くん。……えいっ！」

『ズドォン！！』

「ぎゃあああああああっ！！」

睾丸を押さえながら床を転がり回ってもがき苦しむ白木の姿に、いじめっ子たち三人は大爆笑。

「ごめんなさい！　強すぎちゃったかな！？」

そのまましばらく様子を見ている美央と由衣夏。

「ねぇ由衣夏。まだ止めなくていいの？」

「現認とゆう私たち二人の証拠が取れるから……とりあえずもう少し様子をみましょう」

そのまま二人の会話を気に止めることもなく、二人を責めるのに必死な亀田たち三人は、更に高峰美恵子へ要求をする。

「コイツのチンポって仮性包茎だからさぁ！　剥いてやれよ雁首ま

で！　ガハハハハ！！」

「う、うん」

そう答えながらようやく睾丸の痛みも落ち着いてきた白木辰雄をそっと立ち上がらせると、背後に回り込み股間の下側から右手を入れ、そっとペニスを握り込む美恵子。

女子に陰部を握られて少しずつ勃起してゆく。

「ええっ！？　コイツこんなときなのに勃起しちゃってるぅ！恥ずかしくねぇのかよ？　アハハハハハハ！」

思いっきりツボにハマって爆笑する秋吉冴子は、頬を真っ赤に染めながら更なるＳＭプレイを愉しみにしていた。

「ごめんね。白木くん。今度はオチンチン責めちゃう」

「ううう……そっとしてね高峰さん」

「うん。えいっ！」

『ムリュリュ！……バリ！　バリイイッ！！……ドクドク』

『ぐぎゃあああああああああっ！！』

高峰美恵子の右手は、雁首どころか腹部まで……ペニスの根元まで皮を引き剥いてしまっていた。
かなり流血してしまう白木の陰部。

「ごめんね！　ちょっと強く剥きすぎちゃったかな！？　かなぁ！？」

ここまでくると流石にワザとかな？　と疑問に思ってしまい、苦笑いしてしまう美央と由衣夏だったが、三人のいじめっ子たちは腹を抱えて爆笑している。

神崎美央はうつ伏せになって悶え苦しむ白木辰雄の傍にしゃがみ込んで、背中をさすってあげながらそっと囁いた。

「よくコイツらのイジメに我慢したわね？　もう悪気のない可愛らしい女王様と一緒に、早々に服を着て早退してくれる？」

「う、ううう。ホ、ホントに、悪気は……な、なかった……のかな？　高峰さん……すっごく痛いんだけどぉ……う、ううう」

「た、多分ね……」

「ぷっ！」

引き攣った笑顔で本心とは思えない返事をする美央を見ながら、唐田由衣夏は思わず隣で吹き出してしまう。

どうしてもワザととしか思えなかった高峰美恵子の強い責めに対し、そのまま必死で笑いを堪える由衣夏だったが、当の本人は本気なのか演技なのか……真っ青な顔で白木を見つめて震えている。

元々Ｓっ気を持ち合わせていたのか……それともたまたまなのか……多分悪気はなかったのであろう。

無理矢理そう自分に思い込ませる、美央と由衣夏だった。

服を着終わった二人は、足早に教室を出てゆく。

入れ替わりに飛び込んできた女性がいた……担任の女教師である岡部智子であった。

「ごめんなさい！　怖くて生徒たちと一緒に飛び出しちゃったけど……やはり最後を見届けたくて帰ってきました」

「岡部先生……おかえりなさい。ねぇ由衣夏！　岡部先生はあたしたちの拷問最後まで見ていられるのかな？」

「う〜ん……どうだろうなぁ。でもココでするのは拷問だけで、処刑はドローンで残酷処刑島へ運んでからだから……きっと大丈夫なんじゃゃない？」

「なるほどね。あのさ、前から思ってたんだけど……　“空飛ぶクルマ”　とかよく言われてるけど、どっからどう見てもクルマじゃなくてヘリとゆうか、ドローンなのよね……道路を走れる訳じゃないし。“空飛ぶクルマ”　って呼んじゃう意味が全く分からないわ」

「はいはい！　前にも聞いたわよそれ……今それについて話してる場合じゃないから」

「あ、それもそうね。てへへ……」

意を決したのか、胸を張ってゆっくりと歩み寄ってくる岡部先生。

「亀田くん、鶴田くん、秋吉さん！　あなたたちはこれまでにもずっと暴力や性的イジメをこのクラスで繰り返してきました。ですので本日ここにお越し頂いたこの二人の転校生は……あなた方を懲らしめるために国の機関からとある使命を受けて来られたのです」

一瞬目を見開いて固まる亀田たち三人。

「あ！？　俺たちを懲らしめるため……だと？」

「本気で言ってんのか岡部？」

「あたいらにそんな口聞いて無事に旦那の待つ家に帰れると思うんじゃねぇぞババア！？」

三人に凄まれて一瞬ビクッとなるが、勇気を振り絞り更に続ける。

「あなたたち三人は今から彼女たちに……今まであなたたちが他の

生徒たちにしてきたことと同じような事をされます。可哀想ですが、私にそれを止める力も権限もありません」

静かに岡部先生からの拷問宣告を聞きながら由衣夏は拷問器具である電撃警棒を用意する。

「進化した強力ハイパワーリチウムイオンバッテリー内蔵のこの電撃警棒でビリビリやったげる♡」

由衣夏が手にした全長３０センチほどの黒い棒のスイッチを入れると、激しく炸裂音を奏でながら火花が散る。

『バリバリバリバリッ！！』

「そ、それ何に使うのか、しら？」

岡部先生はビビりながら由衣夏に尋ねると、冷ややかな笑みを浮かべながら答える。

「男のアナルと女のマンコに突っ込むの♡　そして最後には内側から焼いちゃう♪」

「ひいいっ！！」

「先生に執行するんじゃないんですから……そんなに怯えないでくださいよ。うふふ」

亀田たち三人は、鬼の形相で美央たちを睨みつけている。

「お前……俺たちに性的イジメとかする気か？　とことん舐め腐りやがって！　マジでぶっ殺してやるぜ！」

「美央！　徹底的にタコ殴りしちゃおう」

「そだね～。じゃあ始めますか♪」

現在も、そして百年先の未来にも（前編）（後書き）

ついに、いじめっ子たちへの拷問が開始されようとしている。
素直に拷問に応じるはずもない三人の抵抗は、美央と由衣夏にどこまで通じるのであろうか……。

現在も、そして百年先の未来にも（中編）（前書き）

全国の男子高校生と闘わせても、まず誰も勝てないほどの格闘家でもある美央と由衣夏についにブチ切れて戦闘を挑む亀田と鶴田。必死でエールを送る冴子の期待に応えることは叶うのか……。

現在も、そして百年先の未来にも（中編）

美央に殴りかかる亀田彰良、由衣夏に殴りかかる鶴田幸次郎。
とりあえず秋吉冴子は観戦しながら応援している。
ストレート、フック、前蹴り、回し蹴り……喧嘩自慢の二人は勢いよくたたみかけるが、美央と由衣夏は全ての攻撃をヒラリヒラリと躱してゆく。
数分後には息が上がった二人が膝に手を置いて、全身を揺らすほどの早い呼吸を始めた。

「おいおい！　あんたら女相手に何やってんだよ！？　早くやっつけてくれよ！？」

「はぁ、はぁ、はぁ、そ、そんな事言うけど……すばしっこすぎて攻撃が当たらねぇんだよ！」

数分後には更に疲れ切った亀田と鶴田の腹部に馬乗りになって顔面をパウンド攻撃する美央と由衣夏の姿があった。

『バキバキッ！！　ドカッ！！　グシャッ！！』

「うごごおっ！！　がはあっ！！　ぎええっ！！」

『パンパンパンパンッ！！』

「ひぶううううっ！！」

美央は拳、由衣夏は平手打ちで何度も何度も叩き込む。

「おいっ！　しっかりしろよっ！！　相手は女だぞっ！！」

未だに現実を受け止められないでいる冴子は、狂ったように叫びながら二人にエールを送る。

更に顔面を殴られ続けた二人は、もはや性別も判別出来ないくらいに顔面をボコボコに腫らして涙を流していた。

「鼻の骨折れちゃって前歯も四本折れちゃって……可哀想に。もう嫁に行けないね？」

「あはは……それを言うなら婿にいけないね？　でしょ美央」

『プシャアアアァァ〜！』

あまりの激痛に二人はほぼ同時に小便を漏らしてしまう。

「あら？　やだなぁもう。オシッコ漏らしちゃった？」

「コイツも……ねぇそこの女！　冴子さんだっけ？　コイツらのズ

ボンとパンツ脱がしてくれる？」

「え！？　ああっ！？　何だと！？　あたいにそんな事できる訳ねぇだろが！！　殺すぞてめぇら！！」

まだ現実が受け止めきれない冴子は、由衣夏に激しく反抗する。

「美央……先にこの女ヤッていい？」

「うん。完全服従させちゃって♡」

「分かった。ちょっと待っててね鶴田くん♪」

鶴田をボコった由衣夏がスッと立ち上がり、冴子の方へ歩み寄る。

「お！？　や、やるのかてめぇ！？」

『パァンッ！！』

「ひぶうっ！？」

『パンパンパンパンパンパパパパパンッ！！』

金髪のポニーテールを揺らしながら、高速の往復ビンタを冴子の顔面へ叩き込む由衣夏。

速さだけではなく、破壊力も抜群であった。

「痛いいいいいっ！！」

思わず倒れ込む冴子に馬乗りになり、更に顔面を拳で数十回殴りつけると、亀田たち二人と同様に顔面を歪な形にされてしまった。

「はぎいい……ゆ、許してくだ……さい」

「ダメ♡　今から私がアンタを犯してあげる♪」

由衣夏は制服のスカートの上側、腹部側からスッと手を差し入れ、更にパンツの内側へ生で秘部を触れるよう指を這わせた。

そして中指を一気に根元まで膣口へ突き入れる。

「ここ？　冴子さんのオマンコは？」

『ススス……グチュッ！！』

「あんんっ！？」

『グチュチュチュチュチュチュチュッ！！』

「あはああああああんっ！！　やめてえええっ！！」

「やめなーい！　アハハ♪　ん？　少し濡れてるね？」

しばらく指マンで責め続けると、ついに腰を激しく痙攣させ、イカされてしまう冴子。

「あはあんっ！！」

『ビクッ！　ビクビクビクッ！！』

「あらやだ。イッちゃった？」

「は、はい。由衣夏様に……イカされちゃいました……」

「きしょ！　あんたなんかに様付けされてもキショいだけだからやめてくれる？　岡部先生！　コイツのスカートとパンツ脱がせてもらえますぅ？」

「あ、は、はい！」

慌てて駆け寄り冴子のスカートとパンツを脱がしてゆく岡部先生。

「パンツ……愛液でビショビショになってますね」

由衣夏の指でイカされてビショビショになったパンツを掲げて美央にも見せる岡部智子。

「先生！　この子に電気アンマしてくれます？」

「え？　女の子の大切な所に足の裏なんかで……そんな事して本当にいいのかしら？」

「靴履いたままでやって。早くしてくれる？」

「は、はい！」

なぜか急にタメ口になった由衣夏に恐怖を感じ、慌てて冴子の両足を掴んで右足の裏を性器へ押し付ける岡部先生。

「ごめんなさい」

『ガガガガガガガガガガガッ！！』

「せ、せんせ……そんな！　やめっ！　やめれえええええっ！！はひいいいいいいっ！！」

由衣夏はそのまま冴子のセーラー服とシャツ、ブラも脱がせて素っ裸にさせると、二つの胸を鷲掴みにして激しく揉みしだきまくる。

『ギュム！　ギュギュギュギュウウウッ！！』

『ガガガガガガガッ！！』

「痛いいいいっ！　やめてぇえええっ！！　先生っ！　由衣夏様っ！！　許してくださいいいいっ！！」

しばらく続けられる電気アンマ。
岡部先生の足の裏によるクリトリスの刺激により、再びイカされてしまう冴子だった。

「あれ？　イカされた冴子さん見ながらオチンチン勃起させちゃったぁ？　あははは！」

顔面ボコボコにされて血まみれのまま、亀田も鶴田もビンビンにフルボッキしてしまっている。
思わず笑ってしまう美央に、由衣夏が提案する。
苦笑いしながらその内容を聞き終える美央。

「おーい！　ちょっとこっち来て」

「あ、は、はい」

二人は由衣夏に言われるがまま、フラフラしながらも歩み寄ってくる。

「あなたたち、何チンポ勃ててんの？　誰がボッキなんかしても良いって言ったの？」

「ご、ごめんなさい……」

「……すみません」

うなだれて謝るしかない二人だったが、由衣夏は更に要求する。

「ズボンとパンツを脱いで私たちの前で手コキしなさい！」

美央と由衣夏は、痛みと恥ずかしさで動かない亀田と鶴田の前に立ち、ベルトを外しズボンを脱がせた。

「や、やめてくれ！……ください！」

「ううっ！」

そのままほぼ二人同時にパンツも足首までずり下ろすと、足の裏からも完全に抜き取る。

「ズボンとパンツは……もうお前たちの人生で二度と履くことはないわ。ほら、早くシゴくの！」

『ギュッ！……シコシコシコシコ』

泣きながら勃起したペニスをシゴき始める二人を、じっと交互に見つめる美央と由衣夏。

後方からは、冴子と岡部智子先生も見つめていた。

「うっ、ううっ！」

『ドピュッ！　ドクドクドクドクッ！』

一分ほどで大量の精液を床にぶち撒ける亀田と鶴田。

『パァンッ！！　パンパンパンパンパンッ！！』

「ひぶうううううっ！？」

美央と由衣夏は、二人の顔面に容赦なく往復ビンタを叩き込む。

「女の子の前でよくも汚いセーエキ出してくれたわね？　オラオラオラアァッ！」

『パンパンパンパンパパパパパパンッ！！』

「うぶぶぶぶぶううっ！！」

ボコボコに腫れている顔面は更に腫れ上がり、紫色に染まっていった。

「由衣夏！　次なにしよっか？」

「そうねぇ……とりあえずココでは殺せないから……でも性器破壊くらいはやっておこうか？」

「あはは！　良いね♪　２５歳のベッピン女教師にも凄惨シーン見せてあげられるし」

亀田と鶴田は素っ裸にされ、手を後ろ側で縛られて、股を大きく開いたまま立たされた。

「鶴田くん！　もっと脚開いてくれる？」

「うう、ぐすん、は、はい。も、もう許して……」

「ええっ？　あなたたちってもしかして……未だに無事に生きてお家に帰れるとか思っちゃってるの？　アハハハ！　由衣夏、どうする？　笑っちゃうよね？」

「ここで生き地獄の性器破壊の刑を受けて、残酷処刑島とゆう無人島でバラバラのグッチャグチャになって死んじゃうんだよ？　分かった？」

「ひっ！？　そ、そんなっ！？　お願いです！　何でもしますから許してくださいっ！！　美央様！　由衣夏様っ！！　うおおおんっ！　うおおおんっ！！」

「うおんうおん泣くなよ……男の子でしょ？　さぁそろそろ始めちゃいますかあ？」

「おっけー♪　私は鶴田幸次郎で美央は亀田彰良でいい？」

「うん！　じゃあ股間１００発蹴りの刑、執行しちゃいまーす！」

ほぼ同時に美央と由衣夏の一撃目が股間へ入る。

『ズドドンッ！！』

「がはあっ！？」

「ぐおおっ！？」

冴子と岡部先生の見ている前で凄惨な拷問は続けられる。
途中何度も激痛で倒れ込むが、その都度顔面をタコ殴りにされ、泣く泣く立ち上がって股を開く……。

「キンタマ直撃したりチンポ直撃だったり……アナルに爪先入っちゃったり……色んな部位に当たるからドキドキしちゃうでしょ？

あはは！」

「ふんぎいいいっ！　痛いいいいいっ！」

「ぐぐぐっ！　つ、潰れるぅぅ！もう許してぇえっ！」

「この学校って靴はスニーカーだもんね。暴れやすくて良いかも。あ！？　爪先に少しウンチ着いちゃってるじゃん！　もう……」

小便を漏らして膝を付き、床を這いながら美央たちから逃げようと必死でもがくが、激痛のあまりに全身に力が入らなくなっていた。美央は20センチほどの円柱形をした警棒のような器具をポーチから取り出して、スイッチをオンにする。

『カチッ！　ヴィイイイン！』

「特殊任務省が特別に造らせた氷の槍作るヤツね」

「うん。あたしは結構気に入ってるんだコレ」

数秒で長さ1メートル、直径3センチほどの氷柱が形成されていった。

先端の尖り具合も長さも太さも調整できる優れ物である。

「私のはただ警棒みたいに伸ばせるだけ……でも電撃機能付きだからまぁいいか。でも美央の氷の槍のほうがカッコいいなぁ」

「ごめんごめん……でも電撃のほうが罪人の反応は面白いじゃん！
直腸とか膣の中焼いちゃうワケだから♪」

「まぁそれはそうだけど……よっ！」

『ズブッ！』

「はうあぁっ！？」

由衣夏は美央と話しながら鶴田の肛門へ電撃警棒の先端を数センチほど突っ込んだ。

「ここはなんてゆうの？　鶴田くん？」

『ズボボボボ！』

「んぎいっ！？　や、やめてっ！　け、ケツの穴……ですぅ」

「ふぅん。ケツの穴なんだぁ。今はお口まで貫通させないから安心してね。突き当たりのＳ字結腸までの深さは……と」

『ズブブブブブ！』

「んぎゃあっ！　いだあああああっ！！！」

更に深く挿し込んで、激痛を感じた鶴田の反応で直腸最深部のＳ

字結腸まで先端が辿り着いたことを知る由衣夏。

「腸って意外と繊細なのよねぇ。ちょっと先端当たっただけで激痛だよね？」

頬をうっすら紅く染めながら目を細めて冷ややかに問いかける。美央も由衣夏もドSな性格であるため、エッチな責めを行う時には興奮して顔も少し紅くなるのであった。

「は、はい……むちゃくちゃ痛いですから、抜いて……ください。由衣夏さま……うぅあぁ」

美央も鶴田の肛門へ突きささっている由衣夏の警棒を見ながら頬を紅く染めて冷たい笑顔をみせる。

「亀田くーん。あたしも挿れちゃっていいかなぁ？」

「ひっ!?　ひいっ！！　嫌ですうっ！！　やめてください美央様っ！！　お願いしますうっ！！」

「だめ」

『ズブッ！』

「はおうっ!?　がはあっ!?　つ、冷たいいいいいっ！！」

『ズボボボボッ！』

美央の氷の槍も、Ｓ字結腸に当たるまで深く突っ込まれてゆく。

「ほらほらほらぁ～。冷たーい氷の槍がどんどん亀田くんの汚いアナルに飲み込まれていってるわよぉ？　アハハ♡」

『ズブブブ……つんっ！』

「ぎゃあああっ！！　いだいいいいいっ！！」

「あたしも最深部へ到着っ！　じゃあ例のヤツやっちゃおっか？」

美央は不敵な笑みを浮かべながら氷の槍のスイッチを押し、氷の長さを１５センチ、先端を丸く造形し直した。

由衣夏も電撃警棒の長さを１５センチほどに短く調整する。

「今回は負けないわよ美央！」

「うふふ。じゃあいっせーのぉ……でっ！」

『グリグリグリグリッ！！』

「はうううううっ！？」

直腸内から当たる前立腺を二人は武器をこねくり回して激しく刺激し始めた。
激しく優しく何度も刺激される亀田と鶴田の前立腺。
ボコボコに腫れがった顔で涙を流しながら、肛門からの前立腺責め、とゆう未知の快感を人生で初めて美少女から与えられる気持ちは二人にしか分からない。

「えいえいえいっ！　ここ？　ここか？　早く射精しろおっ！」
『グリリリリッ！！……クチュクチュクチュッ！！』
「お？　音が変わってきたぁ♡　感じて濡れてきちゃったみたいねぇ？　腸液タップリ分泌しちゃって……オマセだわ♡」
「美央！？　さすがね……私の方はまだ腸液分泌してないみたい……急がなきゃまた負けちゃう！　ほらあっ！　早くケツマンコ濡らすのよっ！　えいえいえいっ！」

岡部智子先生は、両手で顔を隠しながらも真っ赤な顔で美央たちの男子の肛門前立腺責めを凝視している。
その隣では冴子も愛液を垂れ流しながらボコボコの顔のまま必死で見ていた。

美央と由衣夏のピンク色のミニスカートから覗く白い太ももは、亀田と鶴田の肛門から時折噴き出す腸液が付着して濡れていた。

「あはは！　そっちも濡れてきたじゃん。腸液太ももに付いてるよ？　でもくっさ！　コレやる前に浣腸してクソ抜きしておいた方が良かったかなやっぱ」

「透明の粘液に便が少し混じってるもんね～。まぁ後で洗えばいいんじゃない？　そんなことより美央の方……あっ！！」

『ドピュッ！　ドクドクドクドクッ！！』

手コキに続いて二度目の射精は、美央による無理矢理前立腺を抉られてのトロコテン射精であった。

「あはあっ！　うう、はぁはぁはぁはぁ。ごめんなさい美央様、またイッちゃいました……」

「うんうん！　それでいいんだよ。シゴかれる刺激と冷たい刺激とダブルで気持ち良かったでしょ？うふふ」

「は、はい……で、でもやっぱり死にたくない！　お願いします許してください美央様ああっ！！」

いきなり美央の方へ頭を向けて、額を床に擦り付け土下座しながら命乞いを始める亀田。
隣ではようやく鶴田のペニスから、精液が弱々しく噴き出させられていた。

「ううっ！　イ、イクうううっ！！　はううっ！！」

『ドクドクッ！　ドクドク……』

「勢いない情けない射精だわ。お仕置きしてあげる」

『カチッ！……ビリビリビリビリビリビリッ！！』

「ふんぎゃあああああああっ！！　ぎゃほほほほほほほおおおっ！！！！」

１００ボルトを上回るかなりの電圧で鶴田の直腸内を焼く由衣夏。

「あはは！　もっと強い電撃あげちゃおっか？　次２００ボルトいくからね？　それそれ！」

『バリバリバリバリバリバリッ！！』

声にならない奇声を上げながら、四つん這いで突き出したお尻を上下左右に激しく振りまくる鶴田。

「こらこら！　そんなにお尻振らないでよ！　もうすぐ抜いてあげるから」

そう言いながら更に一分ほど２００ボルトの電撃を与え続ける由

衣夏だった。

「ちょ、ちょっと！　そいつのアナルから煙出ちゃってるよ？直腸バーベキューになっちゃってない？」

「ほんとだ！　なんか焦げ臭いわね。もうホントに抜いてやるか」

『グリッ！……ボコボコッ！　ズルルルルッ！』

「やだっ!?　焼け焦げた直腸が私の電撃警棒に張り付いて……S字結腸まで出てきちゃった……どうしよ？」

「泡噴きながら白目剥いちゃってるわね。やれやれ由衣夏のおっちょこちょいな所と残酷さには恐れいるよ毎回……鶴田幸次郎の方はココで殺っちゃお。後で山西長官に謝っとくから」

「分かった。ありがとう美央」

そう言いながら絡みついた大腸を足で踏みつけて強引に電撃警棒から剥ぎ取ると、長さを元の1メートルに伸ばす。

「まだ虫の息でもあるうちに宣告してあげる。今から鶴田幸次郎の串刺し刑を執行します。あなたのせいで自殺まで追い込まれた五人の生徒たちの冥福を祈りながら心からお詫びしながら死んでゆきなさい。分かった？」

「あばばばば……痛いいいい……だずげでえぇえ……ねでがいでずう

～。いだいよおお……」

「ほら、お尻の穴から串刺しにしてあげるわね」

『ズボッ！……ズブブブブ！』

「はうううっ！！　ふんぎいいいっ！！」

　もう後ろで見ていた岡部智子先生と、冴子はあまりの恐怖に失神してしまっていた。

『メリメリ……バリバリバリッ！　ツプツプツプッ！』

　大腸壁、小腸壁を何枚も貫いては口へ向かって進んでゆく電撃警棒。

　グロテスクな内臓を破壊する音を立てながら胃から喉まで到達した。

「オエエエエッ！！　オエエエエッ！！　かひゅうっ！　かひゅうっ！」

「過呼吸まで起こしちゃって……苦しいでしょ？　もうすぐ汚い穴から臭い口まで貫通しちゃうから。今までのイジメ行為に十分反省したかな？」

四つん這いから床にうつ伏せに倒れ込んでしまった体勢のまま、構わず由衣夏の串刺しは続行されてゆく。

『バシュ！』

「ふごおっ！？」

「あ、そうだ。まだ意識あるうちにオチンチン切断していい？」

「あはは……もう口から先端飛び出しちゃってるしぃ。返事なんてできないよ」

「あらら……とりあえず串刺し刑は完了ね。じゃあこのメスを使って……」

由衣夏は一度電撃警棒から手を離し、蹴り転がらせて仰向けにさせる。

そうしてペニスを左手でつまむように握ると、右手のメスで尿道口の割れ目に沿うように刃を入れてゆく。

「さぁーてと……一丁やりますか！　チンポの口から根元までバッサリいっちゃおっか？」

「やだあ～♡　由衣夏ったらエッチな切り方ぁ♡」

『ズブッ！……ズズズズズズッ！』

鋭利なメスの刃は、あっとゆうまに尿道口から腹部の付け根にまで縦方向へ切開していった。
メスを置いて左右に押し開くと、見事に真っ二つにされた真っ白な尿道が両側から飛び出してくる。

「お見事っ！　オチンチンどころか尿道まで綺麗にまっ縦に切開できちゃってるじゃん！」

「裏筋を目安にして、ど真ん中に狙い定めながら切り裂いていったからね~。うふふ♡　さてと。激しく痙攣し始めたけどまだ痛みは感じてるみたいだし……金玉潰しもやっとかないとね」

『ぎゅ！……ギュウウウウウウッ！！』

一個ずつ両手で睾丸を掴むと、８０キロほどある握力で一気に締め上げてゆく由衣夏。
五秒と経たないうちに鶴田の睾丸は完全に破壊された。

「一気に潰しちゃうからね。そら、いっけえええええっ！！」

『ギュウウウウウッ！！　ブチュチュッ！！』

「ゴボボッ！！　ぴぎいいいっ！！」

血の泡を貫通された口から噴き出し、下の口からは便まみれの腸

液を噴き出し……縦に切開されてパックリ左右に開かれた切断面からは、血の混じった尿と精液を垂れ流す。
　更に数秒間激しく痙攣してから、目玉をグルングルン回す。ようやく停止する眼球……だがそのまま開いた目が再び閉じることは無かった……。

「由衣夏の握力凄いな相変わらず」

「金玉潰すのも握力７０くらい必要って聞いたけど……８０の私ならオーバーキルとゆうことで！　えへへ♡」

　一直線に鶴田の体内を貫いた電撃警棒のグリップを掴み、一気に引き抜く。

「私の武器返してね」

『バシュウッ！！……ドクドクドクドク……』

　粘度のあるドス黒っぽく見える鮮血が肛門からどんどん溢れ流れてくる。

「クサッ！……ホント汚いなぁ……腸液から血から便から色々垂れ流しちゃって。なんて惨めな男」

そう言いながら電撃警棒を縮めてポーチに仕舞う由衣夏。

「あ、そうだ！」

何かを閃いたように急にしゃがみ込んで鶴田の下半身を見つめる。

「鶴田幸次郎くん、潰れた金玉のミンチと縦に切られたチンポも……もらうからね？」

『ズブッ！　ズズズ！……スパァ！』

手際よく陰嚢の中心部を縦に切り裂き、更にペニスを根元から完全に切断する。

そのまま皿の上に二本になってしまったペニスを置き、切開した陰嚢を左右に押し開き、睾丸ミンチを指で丁寧に全てほじくり出してゆく。

「ホント白子みたいだね。って白子かタマ金は！　あはは♪」

同じく先ほど置いた二本にされてしまった哀れなペニスの上にソースのようにふりかけてゆく。

「やだ！　それ、めっちゃエロいんだけど♡」

「さすが美央！よくそこに気付いてくれました！　私も自分で料理しながら、この性器盛りザーメンソース掛けがエロすぎて濡れてきちゃってるもん♡」

「あたしも少し……じゃあ少し昼には早いけどランチタイムといきましょうかぁ？」

美央はそう言いながら、串刺し刑を生で見させられて気を失っている二人の女性のほうに目をやる。

「きっと美味しいわよね！　チンポの刺身に金玉タルタルソースなんて贅沢すぎだわホント♡」

現在も、そして百年先の未来にも（中編）（後書き）

ついかわざとか、一人の処刑場が高校内となってしまった。
特に慌てることもなく特殊任務省の山西長官へ報告すれば大丈夫と
タカをくくる美央。
死んだ鶴田の性器料理は誰かが美味しく？　いただくことになるの
であった。

現在も、そして百年先の未来にも（後編）（前書き）

凄惨な拷問、まさかの所業、処刑執行まで見せつけられ、秋吉冴子と担任の岡部智子は気を失ってしまう。
ついに冴子へとその矛先は向けられる。

現在も、そして百年先の未来にも（後編）

清掃用にバケツに汲んである水を秋吉冴子と岡部智子先生に振りかける由衣夏。

虚ながらも二人は目覚める。

冴子は何度も周りを見渡して自分が置かれていた状況を少しずつ把握していった。

「さてと……秋吉冴子。あなたの拷問も今このクラスでやっちゃうわよ？　覚悟はいい？」

「ひいっ!?　お、お願いです！　許してくださいいいいっ!!　わーんわーん!!」

由衣夏はポーチから取り出した金属製部品を組んでゆき、銃器みたいな形のものを完成させる。

その禍々しい武器は銃口直径7センチ、銃身は長さ４０センチ程もあり、銃にしては大きく太すぎる仕様であった。

「机の上に寝てくれる？　拘束しないと痛みで暴れちゃうから」

「いやっ!?　や、やめてっ!!　そんな大きな銃みたいなので撃たれたら死んじゃうっ!!」

「あ、コレ？　銃みたいだけど銃じゃないわ。美央のご先祖様が提

案して作らせた凄いものだよ」

「あたしより先にソレ使っちゃうんだ？　やれやれ。亀田のオチンチン先に破壊してやろうと思ったのに……先は女の方ね。りょーかい」

二人の会話を聞きながらひたすら震える冴子だったが、美央まで歩いてくるのを見て土下座をし始める。

「お願いします！　許してください！　痛いのイヤ！　殺さないで！」

「とりあえず机に仰向けに寝てくれるかな？　膝を立てて股を開いて……出産するような格好してもらうから」

泣き喚く冴子の頬を何度も叩きながら無理矢理出産体勢を取らせる美央。

「拘束完了♪　さて……痛みで死んじゃわないでよ？」

「やだあっ！　アソコ丸見えで恥ずかしい！　な、何する気なのですか！？　許してくださいお願いしますっ！」

「その丸見えになってるマンコの奥にある臓器を頂くのよ♡」

美央は冷たく言い放ちながら両手の親指を大陰唇に押し当て、一気に膣口を全開に左右へ開く。

「え！？　ぞ、臓器って！？　ええっ！？」

「お前の大切なアレをもらっちゃうの♡　ほらっ！」

『ググッ！……クパァ～！！』

「ひゃあっ！？　やめて見ないで恥ずかしいですっ！！」

美央はクパクパと愛液で湿っている膣を何度も閉じたり開いたりしながら性器の中身を観察する。

「糸引いちゃって……ヤラしいなぁホント。高校生のくせに汚い色してるね？　冴子さんのオマンコ。男とやりまくってたんでしょ？」

「やだ！　そ、そんな……酷い！　ううう……えーんえーん！」

美央から膣内をじっくり観察され、更に罵られて傷ついた冴子は、涙を流しながら啜り泣いた。

「マンコの奥見られてるくらいで泣いてる場合じゃないわよ？　コレであなたの子宮抉り出してやるからね？　ほら！」

『ズブッ！　……グチュチュ！』

銃身のような長い筒を、強引に冴子の膣口へめり込ませる由衣夏。

「痛いっ！！　そんな大きいの入らないっ！！」

「入るの！　ローション塗ってあるから♪」

『グリッ！　ズブブブブブッ！！　グチュチュチュチュッ！！』

「はぎいいいっ！？　いだいいいいいっ！！　抜いてえええええっ！！」

銃口のようなその器具は、美央と由衣夏が所持する女性専用の拷問器具で、《子宮採取器》と呼ばれていた。

百年前の菅野莉央の時代でゆう《子宮抉り出し器》である。

「ほら！　子宮口まで入ったわよ？　今から子宮と卵巣抉り出してあげるから覚悟しなさい」

『グリリリッ！！　ヌプププププッ！！　グチュチュチュチュチュッ！！』

「ギャァアアアアアアッ！！　死ぬうううううっ！！」

『バリバリバリバリッ！！　ズチュチュチュチュチュッ！！』

機器から飛び出した円形の刃は、見事に腹腔内から子宮をくりぬき、機器内の空洞へ収納する。

「子宮回収完了！　卵管及び卵巣ごと引きずり出します！」

「あはは！　太ももビクビクさせながら血の泡マンコから噴き出しちゃってる！　説明しなくてもわかるよ由衣夏♡」

「うふふ。じゃあ抉り出すよ？　それえっ！！」

『グボオッ！！　ズルズルズルッ！！……ポコポコッ！！』

銃身みたいな筒状部分が引き抜かれた次の瞬間、卵管と卵巣までも膣口から飛び出してくる。

「ピギャアアアッ！！　いだいいいいっ！！」

『ドクドク……ドクドク』

「そりゃ痛いでしょ？　子宮と卵巣抉り出しちゃったんだから……でも今日処刑されちゃう冴子さんには全く必要ないモノでしょ？」

由衣夏はスイッチを押して筒状の先から抉り出した子宮を射出する。

『ベチャ！！　ぷるるんっ！！』

「やだぁ～♡　相変わらず生の子宮丸ごと抉り出しちゃうのって見てるだけでエロいわねぇ♡」

『つんつん！……プニプニ！』

美央は頬を紅く染めながらホカホカの湯気を上げる生の子宮を指先でつつく。

更に二本の卵管と二個の卵巣を何度も指先で揉み、感触を楽しんだ。

『グニュグニュ……クチュクチュ』

「んぎいいいいっ！！　ギャァアアアアアッ！！」

子宮を丸ごとくり抜かれ、卵巣までも引き抜かれた秋吉冴子は、気が狂ったように首を上下左右に振りながら絶叫し続けていた。

「痛かった？　子宮の無くなったマンコの中身、ちょっとあたしの手で確認させてね？」

『ズボッ！！　グチュチュチュチュチュチュッ！！』

「はぎいいいいっ！！　死ぬううううううっ！！」

そう言いながら膣口から拳をぶち込み、子宮のあった空洞を右手の指や掌で掻き回しながら確認する美央。
肘まで突っ込んだ右手で散々お腹の中を掻き回して、ようやく引き抜いた頃には、冴子は白目を剥きながら泡を噴いていた。
「ショック死されたらまだまだ苦痛与えられないから麻酔打っといてあげるね？　ほら！」
『プス！　プチュウウウウウッ！』
「ぶくぶくぶくぶく……あ、あひ、あうぅあうぅあうぅ……」
美央の優しさ（？）により激痛からは解放された冴子。
ただ、目の前に皿の上に乗せて見せつけられる自分の子宮と卵巣を見ながらひたすら号泣するのであった。
隣には先ほど切り取ったペニスのザーメンソース掛けも皿上に乗せられている。
「食べやすい大きさにナイフで切り取って……ほら、アーン」
「ひっ！？　んごおっ！？」
由衣夏は縦に切開された二本のペニスの片方をナイフで一口大に切り、冴子の口へ運んだ。

閉じた口を無理矢理こじ開けながら強引に口内へ押し込むと、諦めてゆっくりと咀嚼し始める冴子。

「くちゃくちゃ……ガブガブ」

「どう？　美味しい？　剥ぎ取りたての新鮮なオチンチン」

「ごっくん！……な、生臭くて不味いですぅ〜。えーんえーん！」

「そっか。じゃあ次はお前の子宮よ。ほら、アーン♪」

ペニスに続けて自分の子宮までも食べさせられる拷問を受ける冴子。

「むごご！？　モグモグ……ごっくん！……あううう……食べちゃった大事なあたいの子宮を……もうお嫁に行けない……赤ちゃん生めない……しくしく……ぐすん」

「だから赤ちゃん産む暇なんてないの！　お前は今日死んじゃうんだから……まだ分からないのかな？」

「えーんえーん！　嫌だよおお！　まだ死にたくないっ！　母さん父さん……亮介」

「あ！　ちなみにその亮介ってゆうアンタの弟、この学校の一年生だよね？　もうすぐこのクラスに来るわよ」

由衣夏の話す内容についていけない冴子は、膣口から血の泡を垂れ流しながらも目を丸くする。

「え！？　りょ、亮介が！？　ど、どうゆうことです！？」

「一年生の中でイジメの主犯格だったことが判明したから……姉弟仲良く殺してあげるの」

「！？　や、やだ！！　そんな！！　亮介だけは許してあげてっ！！　お願いしますっ！！　私はどんな拷問でも受けますから！！　お願いしますっ！！」

「あなたたち同様、弟さんのイジメのせいで自殺した男子が二人いたらしいのね。だから亮介くんにも……」

その時、教室のドアが開き、一年生である１６歳の秋吉亮介が三年のクラスに入ってきた。

「ね、ねぇちゃん……校長に言われて来たんだけど……ど、どうしてそんな姿に！？」

「亮介！　逃げて！！　アンタの叶う相手じゃない！！　早く逃げてえええっ！！」

「え？　ど、どうゆうこと！？　でも僕逃げられない！　ねぇちゃんをそんな目に合わせたヤツらは許せないよっ！！」

必死で弟の無謀な行為を止めようとする姉の冴子だったが、目の前で素っ裸にされた姉の姿を見た弟としては逃げるわけにはいかなかったのである。
しかも顔面はボコボコ……机上に縛りつけられて股を全開に開いたまま、膣口からは血の泡を垂れ流し。
堪忍袋の尾が切れた亮介は、当たり前のように姉を痛めつけたであろう美央と由衣夏へ襲いかかる。

「よくもねぇちゃんを！　お前ら許さないぞっ！！　おらあああああっ！！」

半泣きになりながら、二年先輩に当たる美央に殴りかかる亮介。
結果は説明するまでもなく、数秒で鼻の骨と前歯をへし折られ、激痛のあまりにしゃがみ込んでダウンした。

そのまま美央が馬乗りになり、亀田や鶴田、姉と同じように顔面タコ殴りにされる。
亮介を仰向けのままで手際よく由衣夏がズボンとパンツを脱がせると、生のペニスへ土足のスニーカーの足裏を押し付ける美央。

「クサそうなオチンチンね？　ほら！」

『グリッ！！　グリリリリッ！！』

「ひっ！？　や、やめてえええっ！！」

強弱をつけながら巧みにペニスや睾丸、肛門を足の裏で刺激すると、みるみるうちに勃起してくる16歳の割には大きなペニスだった。

美央も由衣夏もアイドル並みの美貌を備えていたため、亮介はそんな美央からの電気アンマで、不甲斐なくも強制勃起させられてしまう。

「りょ、亮介っ!?　ええっ!?」

「ご、ごめん、ねぇちゃん!　そんな気はなかったんだけど……」

「それでいいの。もっと固くしなさい!　そしてそのままイッちゃえ!」

『ガガガガガガッ!!』

「やはあっ!?　わわわわ!?　やめてえぇっ!!」

『ドピュッ!!　ドクドクドクドク』

「やだ!?　亮介っ!?」

美央の巧みな足裏さばきにより、大量の精液を……姉の敵であろう女相手からまさかの強制射精をさせられてしまう……最低な弟であった。

「ねぇ。あたしの足の裏に汚い液着いちゃったんだけど？　どうしてくれるの？」
「はぁ、はぁ、はぁ、ご、ごめんなさい！　ごめんなさい！」
目を背けて弟の失態から現実逃避をする姉の冴子。
実の弟の射精など、人生で一度たりとも見たくはなかったであろう。
更に自分を処刑しようと拷問までしていた同い年の女子生徒の足でなど……姉からすれば論外な話である。
「おねぇさん見てるけど……もっと気持ちよくさせてあげよっか？」
「え？　う、うう……は、恥ずかしいからやめて！」
もう戦闘意欲はとっくに失せてしまっている亮介は、無理矢理可愛い美央からの性的虐待に対し、少し興奮してきていたのであった。
姉には死んでも言えない本心であるが……。
美央は再び氷の槍を生成すると、２０センチほどの長さで先は丸く仕上げた。
いわば氷製のアナルバイブみたいなものであったが、前立腺を激しく抉れるように滑らかに調整して仕上げたのだった。

無理矢理四つん這いにさせられて、美央からアナルを掘られ続ける弟の姿をつい見てしまう姉の冴子。
唇を噛んで目を閉じて啜り泣くことしかできない。
「ほらほらぁ。ここ？　お尻の穴……あたしに掻き回されてほじくり回されて……気持ち良いんでしょう？　うふふ♡」
「あはっ！　冷たいっ！　あんっ！　でも……んはあっ！　はへえっ！　気持ち、いい……あへあへえっ！！」
完全に美央からのアナル調教を受け入れるのに一分とかからなかった。
アヘ顔で涎を垂らしながら、お尻を自ら高く突き上げて腰を振りながら、美央の氷の槍でのアナル調教に快感を得ていた。
「ほら、エネマグラみたいに反り返ってる形にしてあげてるから的確に前立腺にヒットさせちゃうわよ？　うふふ♡」
『ズッズッズッ！　グボッ！』
「あっ！！　あはあんっ！！　んひいいいっ！！」
『グチュチュッ！！……グチュグチュ！！』
「ん？　その音は……ケツマンコ湿って来たわね？」
「んっ！　んんっ！　はぁ、はぁ……あへあへえっ」

頬を真っ赤に染めて美央のアナル調教を自ら受け入れる亮介は、もはや人もしての、男としてのプライドなどは失ってしまっていた。それほどまでに美央の氷での前立腺マッサージは強烈だった。
大量の腸液を分泌させながら、腰を振りまくってしまう。
結果的に再度強制射精させられてしまった亮介は、そのままうつ伏せに倒れ込んでしまう。

「気持ち良すぎてダウンしたの？　はしたない弟ね……由衣夏！　コイツもココでやっちゃお」

「え？　いいのかな？」

「なんかムカついて来ちゃったから、由衣夏の電撃警棒でお尻の穴から直腸からドロドロに溶けるまで焼いてあげてくれる？」

「はーい！　山西長官の方はよろしくね？」

「うん」

机上に仰向けで姉の冴子と同じ体勢で拘束してゆく美央。

「おねぇさんと同じ出産ポーズで殺ったげるわね？」

「え！？　やるって……何をしてくれるの？」

「殺しちゃうのよ」

「！？」

腫れ上がった顔面を必死で持ち上げて、何やら長い鉄製っぽい棒を持って歩み寄る由衣夏に気づく亮介。

「コレを……もう一度あなたのケツマンコに突っ込ませてもらうかられ？　覚悟して」

「ひっ！？　そ、そんな長いの突っ込まれたら痛いよっ！？　やめてっ！！」

「あはは。痛いどころかお口まで貫通して死んじゃうんだよぉ？　さっさと自分の立場を理解しなさいクソガキめ！」

急に怒りの表情になった由衣夏を見たその時、一気に肛門へ侵入する異物を感じる亮介。

『ズボオッ！！　ズブブブブッ！！』

「はぁううぅっ！？……熱いぃいいいいっ！！」

「熱い？　もう余熱はしてるからね。もっと熱くなるわよぉ？お尻の穴の奥の奥までね！　S字結腸まで突っ込んで……よいしょっと。んでスイッチおーん♡」

『バリバリバリバリバリバリバリッ！！』

「あぺぺぺぺぺぺぺええええっ！？　はぁうううううっ！！」

『プシャアァ～ッ！！』

思いっきり小便を撒き散らして両脚を閉じようと太ももをビクビクさせるが、由衣夏の直腸電撃は止まらない。

いきなり殺意のある２００ボルトの電圧を受けながら焼けこげてゆくハラワタ。

『ジュウウウウウウッ！！』

「熱いっ！！　痛いっ！！　ピギャアアァアアッ！！」

『ガクガクガクガクガクッ！！　ビクビクビクビクッ！！』

激しい痙攣を始めた亮介は、白目を剥きながら舌を突き出して血の泡を噴き始める。

その数秒後、彼の呼吸は停止した。

「由衣夏！　もう死んじゃったわよ？」

「いいの。汚いケツマンコ内部と肛門をドロドロに溶けるまで焼いてやるから」

『バリバリバリバリバリバリッ！！　ジュウウウウウウッ……』

「やだ……直腸とアナルが溶けて垂れ流れてきちゃってる？見てるだけでも濡れてきちゃうじゃん！」

「あはは。私も少し濡れちゃってる。一日に何回も濡らされたらパンツが冷たくて気持ち悪いけどなぁ全く。それもコレもコイツらいじめっ子たちのせいよね？」

『バリバリバリバリバリバリッ！』

『ブシュシュシュシュシュシュウウウウウウッ！！』

「きゃっ！？　熱っ！！」

数分間電撃で焼き続けると、腹腔内が沸騰して、口と尿道口とヘソから蒸気が噴き出してくる。

少しそれをへりかけられた由衣夏は一瞬たじろいだ。

ゆっくりと電撃警棒を体内へめり込ませていく由衣夏。

『グリッ！　グボボボボ！！』

「汚いアナルからお口まで貫通させてあげるね？」

既に息を引き取っている冴子の弟、亮介の体内を口まで貫通させ終えると、更に電撃を加えて、顔面の口からだけではなく、目や鼻からも沸騰した血の泡の蒸気が噴き出してきた。

ついに高熱の蒸気のために、目玉が二つとも飛び出してくる。

『ジュウウウウウ……ポンポンッ！！』

「やだぁ。顔きしょ～！」

「あはは！　由衣夏ってば自分でやっといてそれは酷いわ」

「さてと。もう抜いたげよっか。えいっ！」

『ずるっ！　ズルルルル！　ぐちょぐちょぐちょ……』

睾丸とペニスに右足の裏を押し付けて、一気に電撃警棒を肛門があった股間の空洞部分から引き抜くと、溶けたハラワタまでもがミンチになって垂れ流れてきた。

「くっさ！　やっぱり浣腸してウンチは抜いとくべきだったわねコイツも……」

「もういいんじゃない？　あたしたちもそうゆう臭いにも慣れてきちゃってるし……先に秋吉亮介と鶴田幸次郎の遺体をドローンに運ぼうよ」

美央と由衣夏の二人は、背中に担いで血まみれの遺体をドローンに運ぼうとしたその時、屈強な体格の男たち二人が部屋に入ってくる。

「あ！　海原さんに川原さん！」

「どうも毎度です！」

特殊任務省で拷問処刑人が処刑した後処理を担当する角刈りの男前である海原拓磨（かいばらたくま）と、長髪で後ろ側で髪を括っている三枚目の川原（かわはら）雄二（りゅうじ）の二人であった。

「相変わらず派手な殺し方しちゃってるねぇキミたち……残酷処刑島で執行してくれたら自動清掃装置が付いてるっていうのに……はぁ〜」

角刈りの頭をかきながら溜息をつく海原。

「でも海原さん、この前の四肢切断と内臓ばら撒き現場よりかなりマシな方かと……あれは処刑島に運ぶまでに何度も吐いちゃいましたから僕……」

同い年のコンビでも、海原が上司にあたるため、一応敬語を使う川原。

「串刺しで内臓破壊しちゃってるだけだから運びやすいでしょ？よろしくお願いしますぅ♪」

「す、すみませんでした。よろしくお願いします」

美央が無邪気に答える傍で、由衣夏はかなり申し訳なさそうに謝る。

「了解！　由衣夏ちゃん、相変わらずセクシーな金髪だねぇ？　俺はファンだからね？」

「あ、ありがとうございます」

「よっこらしょっと！……じゃあな美央ちゃんに由衣夏ちゃん！　そいつらはきちんと今から処刑島まで運んでから、やっちゃってよ？　原則こんな場所ではダメなんだから！　山西長官も終いにはキレちゃうぜ？」

「はーい！　分かりましたぁ！　もうとっくに前回ので何度も怒鳴られちゃってるんですけどね〜。てへへ……」

由衣夏ファンの海原に笑顔で答えて手を振りながら見送る二人。遺体を担いで去った後、二人は亀田彰良と秋吉冴子、岡部智子先生がいる場所へ歩み寄る。

亀田と秋吉には素っ裸のまま完全に痛みを取る麻酔を打ち、首輪を付けて縄で手綱を持ち、犬を散歩するように引っ張る。

「ほら、そのまま四つん這いで這ってゆくのよ！」

美央は亀田の脇腹を蹴り上げながら無理矢理床を這わせる。

秋吉にも由衣夏が首輪を付け、頭を撫でながら囁く。

「あなたはちょっと待っててね。二、三分で終わるから」

「うう。ぐすん……は、はい」

「じゃあコイツ連れて先に屋上行ってるね！」

「うん。すぐに行くよ」

「ほら来い！　亀田」

「ううう……許して……殺さないで」

抵抗するたび何度も美央に腹を蹴られながら泣く泣く廊下に出て階段目指して這ってゆく亀田であった。

「あのさ岡部先生」

「え？　あ、はい？」

「ちょっと下半身だけでいいから裸になってもらえます？」

「え！？　な、ど、どうしてですか！？」

静かに歩み寄るといきなり強烈な膝蹴りをみぞおちにぶち込む由衣夏。

『ズドォンッ！！』

「ごはあっ！？　お、おえええええっ！！」

うつ伏せに倒れ込んで激しく咳き込む岡部智子先生だったが、そのままスカートとストッキングを切り裂いてゆく。

「ひやあっ！？　やめてえっ！！　どうして私まで！？」

『ズルズル……スルリッ』

質問には応えずパンツを完全にずり下ろして脱がせる由衣夏。

「ちょっと先生の子宮と卵巣を貰うことになったの。この子宮搾取機器をオマンコから突っ込んで……この筒状の先端部に格納して取り出すんだけど……正常位でいく？　それとも四つん這いのバックがいい？」

「ひっ!?　ど、どっちも嫌あああぁっ!!　そんな太いの入らないっ!!」

「ローションたっぷり塗ってゆっくり力込めれば大人ならどうにか入るよ。小さな女の子は恥骨が邪魔するから無理だけどね」

「ひっ!　し、子宮なんて抜かれたら赤ちゃんも産めないし……お、お願いだから冗談だといって!　どうして私が!?やだああっ!!」

下半身スッポンポンで立ち上がって後退りする岡部智子。

「逃げようとしても無駄だからね。私は100メートル5秒代だよ?」

「うっ、ううう。本当にやめてえええ!　私が何をしたと言うの!?　教えてよっ!」

「あのねぇ。半年くらい前から三名の生徒が先生にイジメの事で相談してきてるわよね?　覚えてる?」

「!!……そ、それは覚えてるけど」

「その子たちみんな不登校になってその後三人で一緒に練炭自殺しちゃったのよ。全部話させる気?　もうなぜ拷問されるか気付いてるでしょう?」

目を見開き、過去のその時のことを思い出す岡部智子。

「ご、ごめんなさい！　私にはどうしてあげることもできなかった！　あの子たちに申し訳ないとは思ってます！」

「そう思っていても亡くした命は戻らないの。教師であるあなたにはもっと何かやれることがあったはずなんじゃない？もういいから早く股を開きなさい！」

「やああっ！！　許してぇぇえっ！！」

泣き叫びながら許しを乞うが、国からの指令が下っている以上、赦すこともできない由衣夏は何度も顔面を殴り、子宮抉り出し刑を自ら受け入れるまで殴打を続けた。

「は、はがががが……ど、どうか私の子宮を……お取り下さい……だからもう殴らないで……ぐすん、ぐすん。わああーん！　わあああーん！！」

暴力が怖くてようやく受け入れたものの、子供を産めなくなる事実を思うと、どうしてもを号泣せざるを得ないのであった。
震えながら四つん這いになり、股を大きく開く。

「もっとお尻を突き上げて！　床に胸を付けて両手をフリーにしてくれる？」

「は、はい」

「自分で膣口をパックリ開けろ。子宮口が見えるくらいにね」

「ううう……ぐすん、ぐすん。は、はい。こうです……か？」

『ぐぐっ！……クパァ～！』

大きく開かれた性器の奥には、ピンク色の膣道が覗く。

「25歳の割に綺麗な色してるんだね？」

そう言いながら岡部智子自らの両手で左右に開いている小陰唇の内側に筒状のモノをそっと押し当てた。

「ここ？　臭いマンコの入り口は？」

『ピト……』

「ひっ!?　冷たいっ！！」

『グリッ！……ズブブッ！！』

「痛いいいっ!?　ヒャアアアッ！！　抜いてえええっ！！」

お産の時ほどまで全開に開かれた膣口は、卑猥な音を立てて筒状の機器を飲み込んでゆく。
腰が砕けて前のめりにへたり込む岡部智子。

「さすがに拘束しないでやるのは難しいかな……特別に麻酔注射打ってあげるわ」

由衣夏の温情で強力な麻酔を施されたのちは、お腹の下に踏み台を敷いて、うつ伏せに寝ていながらお尻を突き上げたような体勢を作らされる。
そのまま無痛のままで、完全に子宮と卵巣を抉り出された。

「ほら、先生のマンコの奥からこんなの出てきたよ？」

『ベチャ！　ボトッ！』

ぷるんぷるんの弾力を持つ艶やかな色をした子宮と、管で繋がっている卵巣がそのまま抉り取られて、機器の筒状の開いた口から本人の目の前に落とされる。

「きゃっ！？　んきゃあああああっ！？」

痛みがないまま抉り出されたので、実感が湧かないまま時間が過ぎたが、目の前に見せつけられた臓器を見て現実を受け入れるしか

なかった。
狂ったように泣き喚く岡部智子先生の前で、足の裏で踏み潰してミンチのように擦り潰す由衣夏。
『ベシャッ！！　ブチュブチュブチュッ！！　グリグリグリグリッ！！』
「やめてええええっ！！　やだあああっ！！」
「あなたには子供なんて作る資格もないわ」
ぽっかり開いた膣口からは止めどなく鮮血が流れ落ちてくる。シリコン製の栓を無理矢理ねじ込んで血止めをすると、機器を背中に担いで背を向ける由衣夏。
「もうすぐ救命救急ヘリが来るように段取りしてるから。死ぬことはないから安心してね先生♡」
「ううう……酷い……酷いいいい……わぁあああん！　わあああああんっ！！」
シリコンを詰め込まれた膣口を右手で押さえながら号泣する岡部智子先生だったが、そのまま屋上へ向かう由衣夏であった。
「お待たせ美央」

「遅かったじゃん。何かあった？」

「拘束なしで麻酔なしではさすがに子宮抜けないかな……と思ってね。麻酔打ったたりしてたからついつい時間が……ごめんなさい」

「そりゃ仕方ないなぁ。じゃあ離陸するわね」

高校三年生の罪人二人を乗せたドローンは、一路残酷処刑島と呼ばれる無人島へと飛び立っていった。

――――残酷処刑島。

離陸してから半時間後、美央の操縦するドローンはその無人島へと着陸する。

「昔はこんな色々な拷問部屋ってなかったみたいよ？」

「そうなんだ。私たちはもう色々な拷問に慣れてるから当たり前なんだけどね」

冷たいコンクリートで八つに区切られた拷問部屋は、一つ一つが決まった拷問用の部屋に仕立てられている。

そのおぞましい部屋とは……爪剥がし部屋、鞭打ち部屋、水責め部屋、火責め部屋、身体切断部屋、ハラワタ抜き取り部屋、串刺し部屋、凌遅刑（りょうちけい）部屋であった。

「えーと。とりあえず亀田彰良！　あなたは凌遅刑の後、ハラワタ抜き取り刑で拷問処刑とします。由衣夏は秋吉冴子をどうしたい？」

「えーと。久しぶりに四肢切断したいから身体切断部屋と、え～と……ダルマ女にしてからぁ……串刺し刑でいくわ」

「了解っ！　じゃあ行こうか亀田彰良」

「許して……許してえええっ！！」

再び命乞いを始めるが、何度も引っ叩いて無理矢理に凌遅刑部屋へ引き摺り込む美央。

一本の木製の柱に立たせたまま両手と腰と両足を拘束し、首も締めすぎない程度に首輪で木に引きつけて拘束する。

少し息苦しいほど締め付けるので、罪人はかなり苦しい状態で、全身をナマス切りにされてゆく。

「凌遅刑って知ってる？　このサバイバルナイフで亀田くんの全身の肉を削ぎ落としていくのよ。でもショック死されたら面白くないから最初は麻酔打っといたげるね。全身を削ぎ取ったくらいから効果が切れてくるように調整済みなの♡」

「嫌だっ！　そ、そんなの怖すぎるううっ！！　やめてくださいいいっ！！」

泣いても喚いても美央は許さなかった。
第一刀が頬の肉に入れられる。

「ぐぎゃあああああっ！！」

『ズッ！　ズズズ』

まずは顔面の肉を全て削ぎ落としてゆく美央。
叫びすぎて喉が枯れてしまう亀田だったが、美央のナイフ捌きは止まらない。

腕、腹部、背中、お尻、太もも、脹脛、と満遍なく皮と肉を削いでいった。

ここまで来ると糞尿を垂れ流し、化け物のような表情で悶え苦しむようになる。
バケツで水をぶっかけて糞尿を床に流すと、一度サバイバルナイフを床に置く。

「ぼちぼち麻酔が効いてくるわ。数分間は痛みが消えるよ」

右手でペニスを握りしめて、強制勃起薬を会陰部に注射する。

『シコシコシコシコ』

「ふひいいいいっ！？」

美央がピストン運動してゆくうちに、少しずつ勃起してくるペニス。

無論、薬によって半ば強引に勃起させられているので、恐怖に怯えながらの強制勃起とゆう惨めな状態であった。

痛みが和らいできた頃に陰部は快感へ変化する。

左手の人差し指をゆっくり肛門へ突っ込んだ。

『ツプッ！　ズブブ！』

「はうっ！！」

『シコシコシコシコ』

そのままフル勃起したペニスを右手で激しくシゴく美央。

「ほらほらほら、全身剥き身にされたまま女の子にシゴかれるなんてすっごい哀れでエロいよね？　アナルに指まで突っ込まれて……うふふ♡」

「うひうひ、うううあああぁ」

『グチュグチュ！　グリグリッ！！』

「気持ちいいか？　ほらほら♡」

「は、はい美央様……き、気持ちいい……です！イク！イッちゃううっ！！」

肛門から指で前立腺を激しく掻き回されながら、ペニスへは高速ピストン運動……白目を剥きながらも勢いよく射精させられてしまう。

「人生最期の射精タイムだね！　ほらぁイっけぇ～♪」

『ドクドク……ドクドク』

その射精は勢いなく床に滴り落ちる。

「あれ？　垂れ流し？　人生最期だとゆうのになんて情けない出し方なの？」

美央は右手にへりかけられた精液を肉を剥がれた顔面に何度も擦り付ける。

鮮血がついて余計に汚れてしまう。

「あたしの手をセーエキと血で汚した罰として……オチンチンと金玉の皮も剥いちゃおーね」

ほぼ麻酔も切れてきて、全身に焼け爛れるような激痛が戻り始めるというタイミングで、更に性器破壊に移行となる。
まさに鬼のような拷問であった。

「さて。綺麗に剥いてあげるからね？　うふ♡」

『ズッ！……ズズズズ！……ズズズズ！』

「んぎいいいいっ！！　いだいいいいいいいっ！！」

どんなに泣こうが叫ぼうが１８歳の残酷少女を止めることはできなかった。
みるみる内に性器の皮が全てメスで剥かれてしまう。
睾丸は陰嚢部分を綺麗に剥ぎ取られ、腹部からの管で繋がっているだけで、白い生の睾丸は風もないのにブランブラン揺れていた。

「なんて痛々しい性器破壊なの？　あーあ、また濡れてきちゃったじゃん！」

「うぎぎぎぎぎいっ！！　痛い痛い痛い痛いいいいいっ！！」

「じゃあ本格的に性器破壊いっちゃうわよ？　お刺身にしてあげち

ゃうんだから♡」

美央は高さのあるまな板を用意して、その上にペニスと生の白い睾丸を置くと、メスで巧みに捌きながらペニスの先である尿道口辺りから、どんどん腹部方向へ輪切りにしてゆく。

『ザクザクザクザクッ！』

激痛のあまり失神してしまう亀田だったが、更なる極め付けの激痛で再び目覚めることになる。

「オチンチンの輪切りで失神してちゃ金玉の輪切りでは死んじゃうかもね？　いくよぉ？　えいえいっ！」

『ズッ！　ザクッ！　ザクッ！　ザクッ！』

「がはあああああああっ！！！！」

精管や神経の管が繋がっているまま生の睾丸をスライスされる痛みは最早激痛を通り越していた。

管に届くまで１０回ほどメスを入れて１０枚の睾丸お造りが出来上がる。

そのままもう片方の睾丸も同じように輪切りにスライスしていった。

全身をビクビクさせながら白目を剥いて涎を垂らし、すでに発狂状態になってしまった亀田彰良を、磔台ごと台車を転がして隣の部屋へ移動する。

美央は返り血で全身マダラに血まみれ姿になっていた。

鮮血に染まる制服を気にすることもなく、腰ほどの高さのベッドにうつ伏せに寝かせて、股を開かせ気味に拘束する。

「さてと！　お待たせ亀田くん。ぼちぼち逝かせてあげちゃうわね」

「うひうひ……ひぎいい、死にたく……ない」

「あら？　発狂してもまだ少し意識あったんだ？　まだ生きて帰れるなんて少しでも思ってる所が笑えちゃうよ♪」

そう言いながら子宮搾取器みたいな銃型の機器を部屋の棚から取り出すと、念入りに埃を拭き取る。

子宮搾取器に比べると、銃身みたいな筒状の部分の直径が３センチほどしかなく、かなり細い。

「あ、コレね。亀田くんのアナルをくり抜いて同時に直腸を絡め取ってハワラタ全て引き摺り出しちゃう機器なの」

「うあうう……やめ……れれ」

「あとはその大腸をこのリールに巻きつけて、どんどんハンドルを

回して巻き取っていくわけね。胃がアナルがあった穴まで来たら終了だよ。ハラワタ抜き取られていきながらこの世での悪事を反省してね。ほら、始めるわよ？」

『つぷっ！……ズブブ！』

「うはっ！？　はひいい～」

先端部が肛門へ突っ込まれた次の瞬間、先端から返しの刃が飛び出し、引き抜くと内側から肛門をくり抜いて直腸ごと抉り出すことが出来る代物であった。

『グチュ！　バリバリッ！！……ずるんっ！！』

「んぎいっ！！」

「ほかほかの湯気出しながら綺麗な直腸が飛び出してきたわよ？この肛門括約筋付きの直腸をこのリールに引っ掛けて……と。あとは巻くだけ」

『グルグルグルグルグルグルグルッ！！　ズルルルルルルルルッ！！』

「げひゃひゃひゃひゃああああっ！！！！」

美央は途中何度も巻き取り速度を変えたり、止めたりしながら亀田彰良の反応を見ながら楽しんだ。

全ての大腸、小腸を抜き切ると、胃の真下の十二指腸辺りを切断した。
大きくポッカリ開いた肛門のあった穴から、血の泡が止めどなく噴き出してくる。

『じゅるじゅるじゅる……ブクブクブクブク』

「あがが……ぴぎぎいいい……ビクンビクンッ！！」

真っ赤に染まった皮無しの全身を拘束を解き放つほどの勢いで激しく痙攣させる亀田に、遂に最期の瞬間が訪れる。

「うふふ♡　そのポッカリ開いたヤラしい股間の穴に……あたしの足を蹴り込んであげる。あの世へイカせてあげるね？」

『ビクビクビクビクッ！！』

「いくよぉ？　せーの……いっけえええっ！！」

『ズボオオオッ！！　ずちゅちゅちゅちゅっ！！』

「ぴぎいっ！！……がくん」

美央の白い美脚が、股間へ膝までブッ刺さる。
足の裏が、胃を元の位置まで押し戻すほどめり込んだ。
その瞬間痙攣が止まり、亀田彰良は１８年の人生の幕を閉じた。

「やだ……色んな臓器が脚に当たって……ヌメヌメして気持ち良い♡」

『ずちゅ！　ずちゅ！　ずちゅちゅ！』

突っ込んだ右脚を入れたり出したりしながら遺体を弄び、内臓の感触を愉しむ美央。

「さてと。由衣夏の様子を見に行こっかな」

清掃スイッチをオンにすると、自動で遺体は床下に落とされ、地下の焼却炉へ転がり落とされる。

部屋中にジェット水流の高圧水が飛び出し、落とし床にへばり着いている臓器や肉片なども綺麗に床下へ流されてゆく仕組みだった。

「昔は遺体の始末する人たちって、きっと大変だったんだろうなぁ」

――――四肢切断部屋。

ドアが開き、美央が入ってゆく。

右脚と両腕はすでに切断され、残るは左脚一本のみとなっている秋吉冴子の姿が見えた。

「あたしに見せてくれるため時間差でやってくれてたのね？」

「バレた？　まぁ冴子さんと色々話もしてたんだけどね。結局命乞いばかりで内容はなかったけど」

『ウィイイイイイッ！！……バリバリバリバリバリッ！！』

「んぎゃあああああああっ！！」

最後の一本の脚も、由衣夏の電動ノコギリによって、膝上１０センチ辺りから切り落とされた。

「この子も痛み止め打ってイカせてやろうよ？」

「亀田もイカせてやったの？」

「うん。もう人生最期の射精だしね」

「ふぅん。私もそうしてあげようかな」

由衣夏は麻酔注射と血止め注射を打つと、とりあえず切断面を包帯でぐるぐる巻きにして綺麗なベッドに寝かせる。

激痛での絶叫から一時的に解放された冴子はゆっくり目を開けた。

「あ、あれ？……痛くない？　アタイは手足を切られてたんじゃなかったのかな？」

「天井にある大きな鏡を見て」

「き、きゃあああああああああっ！？」

見事に小さくなった自分の身体を見て、再び気が狂ったように泣き叫ぶ冴子。

そっとベッドの端に両側から座る美央と由衣夏。

左手の中指をクリトリスにそっと当てて、静かに数回擦る。

『スコスコスコスコ』

「んんっ！　あはあんっ！！」

「あれ？　子宮や卵巣抜いちゃってるのにこんなに感度いいの？」

「ごめん！　しれっと超強力な媚薬注射も打っちゃいましたぁ～。テヘへ」

美央の最後の優しさなのか、嫌がらせなのかは由衣夏には分からないが、四肢切断されて生殖臓器も抜かれて気持ちよくさせられる

とゆうのは、冴子にとって望む所なのかどうかは冴子本人にも分からない。

そのまま右手の中指を、小陰唇を左右にかき分けながら膣の中へ深く突っ込んでゆく。

「子宮搾取器ぶち込んじゃったからガバガバマンコになっちゃってるよ……こりゃクリトリスしか感じないわねきっと」

「あはは！そりゃそうかも……じゃ、あたしは後ろを。お邪魔しまーす♡」

『つぷっ！』

「あんんっ！？　いやぁんっ！！」

頬を紅く染めて涙を流しながら、由衣夏と美央の指での手淫に感じまくる冴子。

元々レズっ気も持ち合わせている少女だったがために、内心は超美人の美央と由衣夏にエッチな責めをされて、かなり興奮してきていた。

『グリ、グリ……くちゅ！くちゅ！』

「あれ？　コイツ濡れてきちゃったよ？」

「あたしのアナル責めに感じちゃったのかな？　可愛いなぁ♡」
「ね？　どうなの？　私のマンコ責めがいいの？　美央のアナル責めに感じてるの？　答えなさい」
「あんっ、あんっ！　ど、どっちも気持ち良いです……美央さまも由衣夏さまもタイプなんです……」

殺される間際につい本音を漏らしてしまう冴子だったが、もう情が湧いてもこの姿では生きて帰せない。
美央と由衣夏にとって悪い気はしないが、とにかく時間いっぱいまで何回もイカせてやろうと決心する。

指で2回ほどイカせたあとは、うつ伏せに寝かせてバックで肛門へ氷の槍を挿し込む美央。
２０センチほどに長さを調整して、アナルバイブとして激しく出し入れする。

「ほら、あたしの氷の槍でもお尻でイカせてやるわ。挿れて下さいは？」
「はぁ、はぁ、美央さま……アタイのお尻に……ブットイの……入れて下さい……」
「うん。いくよぉ？　それっ♡」
『ズボッ！……ずちゅちゅちゅちゅちゅちゅちゅちゅっ！！』

「ひっ!?　冷たいいっ!!　あんあんあんあんあんあんっ!!」

『プシャアアアッ!!』

激しく潮を噴いて切断された両脚をパタパタ開閉しながら、強烈な快感の余韻に浸る冴子。

「次は私の電撃警棒だよ?　ほら!」

『ズボオッ!!』

「んはあっ!!　由衣夏さまあっ!　おっきい!　おっきいですうううっ!!」

そのままほどよい電撃で膣内を刺激され、4回目イカされてしまう。

「4回もイッちゃったね?　よしよし」

美央は、由衣夏に膣内電撃を食らいながらアヘ顔で腰を振り続ける冴子の頭を数回優しく撫でてやる。

「顔の腫れも少し引いてきたかな?　結構あなたもベッピンさんだよ?」

「あ、ありがとうござ……いますす美央さま……はぁ、はぁ」

血まみれのブレザーの制服とピンク色のスカートを手でさすりながらゆっくり立ち上がる美央と由衣夏。

「じゃあぼちぼち……やっちゃう？」

「うん。せっかく二人いるんだから前と後ろどちらがいい？とか聞かなくてもいいよね？」

「もちろん♡　二穴同時にブッ刺してあげちゃお♡」

何の話か意味が分からないまま膣から愛液を垂れ流して興奮の余韻に浸る冴子だったが、内容を聞かされて息を呑む。

「あたしの氷の槍でアナルから、由衣夏の電撃警棒のソードバージョンでオマンコ……二つの穴から同時に突き刺して……お口まで串刺し形が決定しましたぁ！　冴子さん、お遊びはここまでよ。覚悟しなさい！」

「ひっ！　ひいいっ！！　やっぱり怖いいいっ！！　許してくださいいいっ！！　わーんわーん！！」

ベッピンの美央と由衣夏。

どちらも好みだった同性愛者の秋吉冴子だったが、さすがにコレで人生の終わりと思うと本気で恐怖を覚えてくる。

「四肢切断までされても私の拷問にしっかり興奮してたじゃん？今更死ぬのが怖くなった？」

「は、はい！　許してくださいい由衣夏さまぁあっ！　お願いしますうう っ！！　ぐすん、ぐすん！」

由衣夏は冴子の右の乳首を摘み、そっと顔を近づけて、舌で優しく舐め始める。

『ピチャ、ピチャ、ちゅううっ！！』

舐めたり吸ったり何度も繰り返す内に右の乳首は即座に勃起する。勢いで左の乳首までも勃起してきた。

再び愛液を垂れ流しながら興奮し始める冴子だったが、美央の手にした黒いグリップから１００センチほどの長い氷が形成されてゆくのに気付かない。

『シュウウウウウッ！……シャキーン！！』

ついに串刺し用の長い氷の槍は形成完了してしまう。

そっと冴子の後部へ回り込む美央。

由衣夏に乳首を舐められて、興奮しながらいきなりの激痛が襲うハメになる。

「ごめんね冴子さん。あたしたちのことタイプだと分かっていても自殺した子たちのことを思うと……やっぱりこうするしかないの。えい！」

『ズッ！　ズブブブブッ！！　バリッ！！』

「ふんぎゃあああっ！？」

肛門から挿し込まれた氷の槍はあっとゆうまに直腸を貫通し、Ｓ字結腸まで突き破った。

快感を与えるアナル責めではなく、殺意のある肛門串刺し刑の開始であった。

麻酔が切れてきた頃、四肢切断の痛みも段々と戻ってくる。

その最中、肛門から腹腔内へのおぞましい激痛が冴子を襲う。

由衣夏は乳首を舐めるのをやめて立ち上がり、首を振って金色のポニーテールを後方へ靡かせると、電撃警棒を伸ばすスイッチを入れる。

『シャキシャキシャキーン！！　バリバリバリバリッ！！』

こちらも殺意満々の２００ボルト電圧が電撃警棒ソードへ流れる。
火花をバチバチ散らしながら一旦スイッチをオフにする。
「身体の中、コレで焼いてあげる」
「ひっ！？　やっ！　やだあっ！！」
『ズブッ！！　すぼぼぼぼっ！！』
「ぐえええええっ！！」
こちらも一気に膣内を貫通し、子宮のあった空洞に到達する。更にハラワタを何枚も突き破りながら口へ進んでゆく。
「アナルとオマンコ……同時に突き刺さってるとこ見てたらまたまた濡れてきちゃった♡」
「私も……たくさん興奮させてくれてありがとう。もうトドメ刺してあげるからね？」
そこからは突き入れる速度を下げ、ゆっくりゆっくりと串刺しにしてゆく二人。
腹腔内の途中で氷の槍と電撃警棒ソードが何度もぶつかり音を出す。

「またぶつかった！　あはは。まっすぐ進んでよ由衣夏！」

「美央がズレてない？……もうぼちぼち喉まできたわね。この辺りで臓器全て焼いちゃうよ」

「うん。やっちゃって♡」

由衣夏はスイッチを入れて、２００ボルトの電圧が体内に襲いかかる。

『バリバリバリバリバリバリバリバリバリッ！！　ジュウウウウウウッ！！』

「ふがふがふがふがふがあああああっ！！！！　んぎいいいいいいっ！！！！！」

穴とゆう穴から蒸気の煙が噴き出し、目玉が二つともポンポンと飛び出す。膣と肛門だけではなく、ヘソからも血の泡が激しく噴き出してきた。

『ブシュウウウウッ！！　びちゃびちゃ！！』

「きゃあっ！？」

美央と由衣夏の制服や太ももに少し沸騰した体液がへりかかるが、

どうにか大量の塊は躱した。

「きったないなぁもう！　もう口から出そうか？」

「うん！　せーの！」

『ばちゅちゅっ！！』

美央と由衣夏の切先が同時に口から飛び出した。
前歯も殆ど内側から外側へへし折られ、鼻からも血の泡が噴き出す。

「すっご♡　目玉どこ飛んじゃったのかな？」

「ほんとね……あ！　壁まで飛んでいってる!？　そんなに電撃警棒ソードの焼き焼き攻撃って凄いんだ♡」

「あたしの氷より電撃の方が怖いかな確かに……派手すぎるよぉ」

二人は冴子の臀部に足の裏を当てて、一気にお互いの槍とソードを引き抜いた。

「四肢切断刑と串刺し刑、執行完了っ！　お手伝いありがとう美央」

「いえいえ。アソコ沼っちゃうほど興奮できて今回も楽しかったよ♡　お疲れ様」

本日、残酷処刑島に新たに四人の遺体が加わった。

現在も、そして百年先の未来にも（後編）（後書き）

清掃ボタンを押して遺体を地下に落として串刺し部屋も綺麗にし終えると、美央と由衣夏はコンクリート製の冷たい部屋を出て太陽の眩しさに戸惑う。

「眩しっ！」

「あーっ！　スッキリした！」

両手を天に伸ばして精一杯の伸びをして深呼吸する美央。
由衣夏は背後からそっと美央を抱きしめる。

「今まで黙ってたけど……私、美央のこと好き」

「え！？　あ、そ、そーなんだ」

「前から言おう言おうと思ってたんだけど……嫌われるのが怖くって……私のこと嫌いにならない？」

あまりの衝撃告白にたじろぐ美央だったが、美央も人として親友として大好きだったため、嫌な気はしなかった。
ただ同性と恋愛対象として付き合うとなったら……少し考える時間が欲しい所であった。

「指で……イカせて」

「えっ!?　ええっ!?」

――――一分後。

『くちゅくちゅくちゅ……くちゅくちゅくちゅ』

「あん、あぁん……美央……大好き♡」

「はぁ〜。ホント一回イクまで指だけだよ?」

「うふんっ♡」

残酷処刑島に卑猥な音がこだました……。

＊(読んでくださった方々へ。後編のみ長文になりすぎて申し訳ございません。読みにくいとは思いますがご了承願います。強引なほどのレズカップルの作りすぎも、個人的な性的趣向で大変申し訳ございません。)

拷問処刑人の素質（前編）（前書き）

残酷でエッチな女性の拷問処刑人。
菅野莉央と堀越唯香をご先祖に持つ二人の女子高生は、１００年先でも拷問処刑人だった。
その二人が、特殊任務省から拷問処刑人として選任される決定打となった小学生時代の少女たちの物語が始まる。

拷問処刑人の素質（前編）

――――時は２１１９年。

霧島第一小学校６年C組では、全校生徒で一番、二番に喧嘩の強い女子児童であり、後に拷問処刑人に選任される神崎美央と唐田由衣夏の二人に逆らう生徒は存在しなかった。

特に６年生にはエッチな男子が多かったため、イジメの対象としてそうゆう男子を懲らしめるのが二人の日課である。
放課後に全校生徒が帰宅した後に女子たちだけ教室に残り、リンチを行うため、美央と由衣夏の真の怖さを知る男子はクラスにもいなかった。

ただあまりに酷いため、殆どの男子が不登校になり、転校してゆくといった流れになってきている。

新垣郁夫（あらがきいくお）もそんなエッチな男子の一人だった。
昼休みに隙を見せた女子に早速嫌がらせをする。

「きゃっ！？」

「がはは！　中西のパンツ今日はシマシマだな！」

「もう、やめてよ！　先生に言いつけてやるんだから！」

中西美紗子は艶やかな三つ編みの長髪を揺らしながら必死でスカートを押さえる。

「最近新垣が調子に乗ってきてるよね？」

神崎美央がこのところ愚行が目立つ男子生徒に目を付ける。

「うん。今回で三回目のスカートめくりだからそろそろ限界だよ。今日の放課後お仕置きしちゃお」

親友の唐田由衣夏もそれには賛成であった。

「りょーかい！　女子たち全員にそのこと伝えておくよ」

昼休みも終わり午後の授業が始まると、女子たちはメモ用紙をどんどん回していき、全員が新垣郁夫のリンチを行う予定を知る。

チラチラと新垣の方に視線をやるが、当の本人は机にもたれかかってうたた寝をしてかなり呑気だった。

「新垣くん！　体調が悪いのなら保健室いきますか？」

「んにゃ？……な、なはは！　大丈夫でぇーっす！」

この反応に男子たちはヘラヘラ笑うが、常識知らずな性格なのを分かっている女子たちは軽蔑の眼差しを送る。

そのまま午後の授業も終わり、ホームルームが始まった。

「はい、では本日の授業はこれで終わります。最近よく男子たちの破廉恥な行動が目立ちますが、される側である女子の立場になってようく考えて行動を謹みましょう。自分がされたら嫌なことは他人にしないようお願いします。それでは皆さん、気をつけて帰ってくださいね。起立、礼、皆さんさようなら」

「先生さようなら。皆さん、さようなら」

一斉に席を立って、先生と生徒たちに帰りの挨拶をする。

「おーい新垣！　帰りにゲーセン寄っていこうぜ？」

「お！　いいなぁ！　この前やったバーチャンファイターで闘うか？　今日もクソババアでいくわ」

「またか！　じゃあ俺もいつものイジワルバーサンでいかせてもらおうかな？」

ゲラゲラ談笑しながら仲良く帰ろうとしている時、背後から声がかかる。

「おい新垣」

「あ？　なんか用かな神崎さん？　お前ホントいい顔してるよな？　もっと隙を見せろよ？　何度もスカートめくりまくってやっから♪」

「あはは！　隙見せたらすぐめくるからなぁお前は……　あははは！　可愛い顔しててもパンツにシミがついてるかも知れねぇぜ？　けへへへへ！」

ゲーセンに誘った新垣の親友はバカウケしている。

「……ちょっと新垣に用事があったんだけど……予定変更で磯野もちょっといいかな？」

磯野勝治（いそのかつはる）は新垣郁夫の親友であるが、だいたいは新垣の武勇伝を聞くだけで、自らは女子のスカートをめくる度胸はなかった。

「俺たちに何かプレゼントでもくれるのかな？　アイドル顔の神崎ちゃん♡」

「え？　僕にも何かもらえるんだ？　隣の唐田ちゃんからもらいた

いかな僕は……あはは！」

何を勘違いしているのか、この男子生徒二人は女子からのお仕置き対象に選ばれたことに全く気付いてはいなかった。
とことん能天気な新垣郁夫と磯野勝治である。

教室の後方の机と椅子を片付けて、広々とさせる女子たち。

「おいおい？　お前ら何やってんの？　勝手に動かしたら先生に怒られるぜ？」

新垣の問いには答えず黙々と片付けて、ついにかなりのスペースが出来上がった。

「美央ちゃん由衣夏ちゃん！　これでいい？」

「うん。ありがとう」

小学生と中学生は、セーラー服を着用する霧島中央地区。
この赤霧島小学校でも紺色の上下に、ピンクのリボンとゆう可愛らしい制服姿であった。
膝上20センチとかなり短いプリーツスカートであった。

「さてとお待たせ。今から新垣と磯野には女子の気持ちとゆうもの

を分かってもらうの。それには闘うのが早いかな……みたいな」

「あ？　女子の気持ち？　そんなの分かるわけねーじゃん！　俺男だし。なぁ磯野」

「あはは！　そりゃそーだ。そんなの分かるわけないやい！」

神崎美央はいきなり新垣郁夫の胸ぐらを掴み、捻り上げる。足が数センチ浮くほど強烈な力だった。

『ギュウウウウッ！』

「うっ！？　うおおおおっ！？」

「あたしと実写版バーチャンファイターやろうって言ってるの！　あんたたちがゲーセンでやってる格闘ゲームをリアルでやろうってこと！　分かる？」

「ぐ、ぐるしい……わ、分かったから離せって！……ぐおおお……」

パッと離した瞬間床に着地すると、両手で首を押さえながら激しく咳き込む。

「な、何て力だお前……そんな可愛い顔してんのに何でだよ？　ゴホゴホッ！！」

クラスの女子は１５人ほどいて、美央と由衣夏の他にも１３人が周りを囲って逃げられないようにしていた。

「あたしと由衣夏に二人が勝てたら、今回のスカートめくり三回の罪はなかったことにしてあげる」

「あっ？　そんなことで喧嘩すんのかよ？　俺は女子となんかやる気ねーし！　なぁ磯野」

「そりゃそうだけど……あ、あの……僕は女子のスカートめくったことなんて一度もないんだけど？　とばっちりじゃないのコレ？」

「磯野は美央を馬鹿にして、パンツにシミついてるとか言ってたよね？　それがムカついたから。それで同罪って訳！」

唐田由衣夏がビシッと磯野を指差しながら金髪のツインテールを揺らす。

高校に進学してからポニーテールへ変えることになるが、小、中学校時代はツインテールだった由衣夏。

「じゃあやっちゃいますかぁ？　いつでもかかってきなさい！」

手のひらをクイクイしながら足でリズムを取り始める神崎美央。ピョンピョン跳ねるうちに、たまに純白パンツがチラチラと覗いていた。

「うひょーっ！！　可愛い顔には純白がよく似合うぜホント！！」

目玉を♡マークにしながら、美央パンチラに興奮する新垣郁夫だったが、磯野の方はタイプの由衣夏の太ももを凝視している。

「おい磯野！　私は美央みたいに簡単にパンツは見せたげないよ？　変な期待しないでくれる？」

「え？　あ、ご、ごめんなさい！　そんなつもりは……綺麗な白い脚してるなぁと思っただけで……」

頬を真っ赤にしながら照れて下を向く磯野だったが、いきなり由衣夏の回し蹴りが側頭部にヒットすると、数メートル横に吹っ飛んで床を勢いよく転がり続ける。

『バキイッ！！……ドテッ！！　ゴロゴロゴロゴロッ！！』

「いだあっ！？」

それをゴングがわりに、美央も前に出て新垣郁夫へボクシング風のパンチの嵐を喰らわせる。

『バキバキッ！！　パンッ！！　ドカッ！！』

　ワンツーからストレート、強烈なアッパーカット。全てが新垣の顔面へクリーンヒットする。

　思わず顔を押さえながら足にくるが、どうにか倒れずに踏ん張って叫んでくる。

「いってぇじゃねーかこのクソボケがあっ！？　ぶっ殺すぞおっ！！」

　女子相手でも、激痛のあまりについにブチキレた新垣は、美央に殴る蹴るで襲いかかる。

いとも簡単にヒョイヒョイ躱しながら、更に何度も顔面を殴り続ける。

　その隣では一方的に唐田由衣夏のマウントからのパウンドを受け続けて、顔面ボコボコにされている磯野勝治の姿があった。

「痛いよおおっ！！　わーん！　わーん！！　もうやめてえええっ！！」

「磯野……な、泣くなよ男のくせに……俺がカタキを討って……やる……から……」

『バタッ！』

同じく顔面をボコボコに晴らしながら前のめりに倒れ込む新垣郁夫。
　両手をパンパンと叩きながら爽やかな笑顔で勝利宣言する美央と由衣夏。

「一丁あがり！」

「おととい来なよ！」

周りで拍手する１３人の女子たち。
もうコレから起こることを予想して、頬を紅く染める生徒も半数ほどはいた。

女子たちの間では手術台と呼ばれる、机を二つくっつけて作った簡易ベットを２組作り、新垣と磯野をその上に仰向けに寝かせる。

「うう、な、何をする気だ？」

「黙ってろ！　じっとしてないともっとボコボコにしちゃうわよ？」

「ひっ！　わ、分かったよ……ぐすん、ぐすん」

ついに顔の激痛と恐怖で新垣郁夫も泣き始めてしまう。

「いつも強気なあんたでも泣いちゃうんだ？　しかも女子たちの前で。恥ずかしい」

美央の煽るセリフに、更に大声で泣き出してしまう。

「泣いても許さないから。今から新垣と磯野の手術を始めまーす！」

拍手しながらいっせいに周りの女子たちが近寄ってくる。
神崎美央と唐田由衣夏の行う男子たちへのお仕置きを、ようく観察するためだった。

「しゅ、手術？　き、切るとかホントやめてくれ！　痛すぎる！」

「あはは！　そんなことするわけないじゃん。あたしたちが逮捕されちゃうし」

「そうそう。“手術する”とゆうことは、素っ裸にして女子たちでエッチな部分を観察したり触ったりするとゆう隠語なの」

そう言いながら由衣夏は磯野勝治のズボンのベルトの金具を外してゆく。

「え！？　そ、そんな！？　は、恥ずかしいからやめてお願いっ！

！」

いきなり我に返って叫び出す磯野だったが、由衣夏の手は止まらない。

『ガチャガチャ……ズルズル！　スポーン！！』

ズボンに続き、速攻でパンツも足首まで引きずり下ろした。

「わあっ！？　見ないで見ないで見ないでぇぇぇぇっ！！　わーんわーん！！」

恥ずかしくて顔から火が出そうだったが、抵抗すればまた殴られる……その恐怖で何も出来ずに、ただ目を閉じて現実逃避をしながら泣き続けるしか出来ない磯野だった。

『ぷるるるるんっ！！』

由衣夏があまりに高速でパンツをずり下ろしたので、擦られた小さなペニスが上下に激しく揺れ動く。

「アハハハハハハ！！　チンポ揺れまくってるぅ♡」

「やだぁ！　臭そう」

「ちっちゃ！　なんて哀れなほど小さいオチンチンなの！？」

様々な声が飛び交い、磯野は目を閉じたまま恥ずかし過ぎて号泣してしまう。

隣では美央が同じように新垣のズボンとパンツをゆっくりずり下ろしてゆく。

『ずるるる………ぷるんっ！』

「こんにちは！　あら？　かなり大っきいね新垣のチンポは」

思わず目を見開いて驚く美央。
由衣夏も隣から見つめながら一言呟いた。

「いいなぁ美央ってば！　コイツのは新垣の半分もないし」

「まぁいいじゃん！　勃起させせたら逆転しちゃうかもよ？」

「うふふ。それもそうね。ってなわけで……今からあなたたちにはオチンチンを大きくしてもらっちゃいまーす♪」

何となく家でいる時に勃起した経験はあるであろう新垣と磯野は、想像するだけでも恥ずかしいその状態を、女子たちに見られながら作り出すとゆうことに、絶望しかないほどの羞恥心を感じるのであった。

「おい新垣！　あんた射精したことある？」

「うう……な、なにそれ？」

「この前特別授業でやってたじゃん！　赤ちゃんの元を男はオチンチンから出すの。授業聞いてなかったの？」

「え？　ご、ごめん！　聞いてなかった」

『ギュッ！……ぐむぐむっ！』

「んひいっ！？　か、神崎！？　な、なにをっ！？」

いきなりペニスを摘んでこねくり回し始める美央に、思わず叫んでしまう新垣。

「何を偉そうに叫んでるの？　今からあたしたちのことは様付けで呼ぶこと！　いいわね？」

「そ、そんな」

「出来ないなら金玉潰しちゃうけどいいのね？」

『ギュムッ！！　ギュウウウッ！！』

「があああああっ！？　わ、わかりました神崎さまあっ！！ごめんなさいごめんなさいごめんなさいいいいっ！！　つ、潰れちゃうううぅっ！！」

「分かればいいのよ」

ようやく解放された睾丸の激痛。
美央と由衣夏の握力は、女子小学生では化け物級の４０キロはあった。

しばらくは由衣夏も、磯野のペニスを摘んだり揉んだり指で弾いたりして弄ぶ。

美少女の指で散々いじくりまわされた男子児童のペニスは、数分も経つと完全にフル勃起してしまうのであった。

「見て見て！　こんなに大っきくなったよ！」

「わあっ！　すっごーい！！」

「倍くらいになっちゃうんだねー。不思議」

「やだぁ〜！　先っぽだけ皮剥けて本体はみ出してるぅ……オシッコ出すところって唇みたいな形してるね？」

「白いカスみたいなのいっぱい着いてる……くっさ！」

またしても好き勝手な感想を述べる周りの女子たち。

「あたし、勉強したんだ」

「何を？」

頬を紅く染めながら自慢げに話す美央に問いかける由衣夏。

「あたしたちがリンチして学校辞めていった男子たちは、この状態からチンポ蹴りまくったり金玉蹴りまくったりしてお仕置きして終わりだったんだケド……」

「うんうん？」

「射精させちゃお！」

「ええっ!?　精液って、女の人とセックスしないと出ないのでは!?」

「それが手で刺激しても出しちゃうんだって！　あたしネットでそうゆう動画見て勉強しちゃったんだ。手コキってゆうらしいよ」

「て、手コキ？　な、なんてひょうきんなネーミング……どうする

の？」

「こうするの！」

『しこしこしこしこ』

「ううう っ！？　そ、そんなとこ擦るなあっ！？」

いきなり美央の手でピストン運動が開始され、怒りに似た叫び声をあげてしまう新垣。

一度シゴく手を止めると、ボコボコに腫れ上がった顔面を睨みつけ、再度激しくパウンドを喰らわせる美央。

『バキバキバキバキッ！！　グシャグシャッ！！　バキャバキャッ！！』

「はぶぶぶぶぶぶううううっ！！　ぎひいいいいっ！！」

「よくもあたしにそんな偉そうに言えるわね？　様付けだけじゃなく敬語でも話さないとホントにお尻の穴から手突っ込んで脳みそ引きずり出しちゃうわよ？　分かった！？」

「ご、ごめんなさいごめんなさいごめんなさいいいっ！！　許してくださいい神崎さまああっ！！」

「フン！　分かればいいのよ」

『しこしこしこしこしこ』

再び何事もなかったように新垣郁夫のペニスを透き通るような真っ白な手でシゴき始める美央。

顔面の激痛で少し萎んでしまっていたが、アイドル級の美貌を持つ神崎美央にペニスを触られるだけで、勃起しない男子はいないだろうと周りの女子たちも思っていた。

隣では一番タイプの女子である唐田由衣夏に手コキされ始め、フル勃起しながら恥ずかしさに震える磯野勝治の姿があった。

内股をキュッと閉めて、痛い、恥ずかしい、変な興奮……ありとあらゆる感情が交差する複雑な心境で、由衣夏にされるがまま固まっていた。

『しこしこしこしこ！』

『シュコシュコシュコ！』

ストロークの違う二人の手コキが静寂の中続けられる。

静かな小学校の放課後……外は薄っすらと茜色に染まりつつある中、１２歳の女の子二人に手コキされて泣いている男子二人。

奇妙な絵面だが、激痛と戦いながらも奇妙な快感を得始める新垣と磯野。

「うっ、な、なんか変な感じ！？　ううあ」

「磯野が先かな？　どんな感じ？」

金髪のツインテールを靡かせながら、さらに手コキのストロークを早めてゆく由衣夏。

悪魔的な微笑みで、人生初の射精ショーを楽しみにする。

「あたしもスピード早めちゃおうかな？　それそれ！」

『しこしこ……シュコココココココッ！！』

本気を出して猛烈な速度でシゴき出す美央に、前立腺を襲う人生初の快感が一気に噴き出す新垣郁夫。

「はっ、はうううっ！？　な、なにこの感じ！？　なんか！　き、気持ちぃいいいっ！！」

「ほらぁっ！　お前も初めてならあたしたちも目の前で本物の射精シーン見るのは初めてなのよおっ！　早くイッちゃえええっ！！」

『シュコココココココココッ！！』

「はうううううううううあああっ！？」

『ドピュッ！！　ドピュピュピュピュピュピュピュウウッ！！』

美央の超高速手コキにより、由衣夏を逆転することに成功した。
先に人生初の射精シーンを女子たちの前で披露したのは、射精することと自体も人生初めてだった新垣郁夫……何とも言えないエロい空気を教室内にもたらす結果となった。

『ビチャビチャビチャッ！！』

『きゃっ！？　汚いっ！』

大量の精液を尿道口から噴き出した新垣は、かなり息が速くなっている。
美央の指と机の上は精液まみれになっていた。

「うわぁ～何コレ……糸引いてるぅ」

美央は指についた人生で初めて見て触る本物の精液をマジマジと見つめる。
親指と人差し指を開閉しながら何度も糸を引くのを見て楽しんでいた。

「ほら、あんたもイッちゃえよ！」

『シュコココココココココッ！！』

「ううぅっ！！　へ、変なこと感じいいいっ！！　何か出そう！？あひいいいっ！！」

「だからそれが精液なんだってば！　ほらイケええっ！！」

『シュココココココココッ！！』

「はぁうううっ！！」

『ドピュピュピュピュピュピュッ！！』

続いて磯野勝治も、由衣夏の手と机の上に大量の精液を撒き散らした。

「すっご！　ホント出ちゃうんだね擦るだけで……」

由衣夏も周りの女子たちも、マジマジと精液の粘度を頬を紅く染めて凝視していた。

出すだけ出したらみるみる内に萎んでゆく二人のペニス。

「おい新垣！　気持ち良かったの？」

「はぁ、はぁ、はぁ、は、はい！　神崎さま……なんか変な感じで……き、気持ち良かったです……」

「そう。良かったわね。ほら、汚いお前の粘液を汚い顔で拭いてあげるね？」

『ピトピト……グイグイ』

「あう……あああう」

手と指に絡みついた精液を、ボコボコになっている本人の顔面に擦り付けて拭く美央。

隣では由衣夏も磯野の太ももで拭き取っていた。

「お腹が飛んで落ちてきた精液でビショビショになっちゃってるから顔や太ももでしか拭けないのよ。ごめんなさい」

「は、はい唐田さま……」

「アンタも気持ち良かったの？」

「はい、なんか下半身が変な感じになって……最後の瞬間が一番気持ち良かったです。はぁ、はぁ、はぁ」

「あはは……そりゃ射精の瞬間だもん。当たり前でしょーよ♡」

女子たちによる暴力と陵辱は終わり、次にどんなお仕置きをするか思慮を巡らす神崎美央だった。

拷問処刑人の素質（前編）（後書き）

人生初の射精を強制的にさせられてしまう男子生徒二人。
そのシーンを人生で初めて見る女子生徒たち。
新垣郁夫と磯野勝治へのお仕置きはまだまだ続く。

拷問処刑人の素質（後編）（前書き）

Ｓっ気を持つ女子小学生たちの責めは少しずつエスカレートしてゆく。

大人顔負けの性的イジメともいえるお仕置きが続けられてゆくのであった。

拷問処刑人の素質（後編）

しばらく考えてからついに閃く。

「んーと……そうだ！　アレやっちゃお！」

「アレ？」

「そうそう！　前の男子たちにもしてやって本気で泣かせたやつ！……お尻の穴に鉛筆突っ込んじゃうやつ♡」

「良いわねえ！　やっちゃおう！！」

美央は、新垣郁夫の髪の毛を鷲掴みにして問いかける。

「おい新垣！　今からお前のお尻の穴に鉛筆突っ込んじゃうから四つん這いになってお尻突き上げろ！」

「そ、そんな……恥ずかしいし痛そうですから許してください神崎さま！」

「うるさい！　逆らうな！」

『パンパンパンパンパンパンパンパンパンツ！！』

「びぶうううううううううっ！！」

猛烈な往復ビンタが炸裂し、腫れ上がった顔面を激しく左右に振らされながら涙と鼻水と涎と鮮血を撒き散らす。

「ほら、返事は？　神崎さま、お尻の穴に鉛筆を突っ込んで下さい、でしょう？」

『パパパパパパパンッ！！　パンパンパンパンパンッ！！』

「いだあああああああああいっ！！　わ、分かりましたあっ！！　神崎さま！　俺のお尻の穴に……鉛筆突っ込んで下さいいいいいいっ！！　痛いからビンタやめてえええっ！！」

激しい往復ビンタからようやく解放され、激痛で大声をあげながら四つん這いになり、お尻を高く突き出す。

「ほら、机に胸と顔着けて自分の両手でお尻の穴が見えるように押し開くの！　早くしろ！」

「はいいっ！！　こ、こうですか？」

『むにゅうう……ぱくんっ！』

小学生男子児童のピンク色の肛門が、ヒクヒクしながら女子たちの眼前に晒される。

「お前、男の割にキレーな肛門してんじゃん？」

「あ、ありがとうございます……わーんわーん！　恥ずかしいよおお！　わーんわーん！」

「あたしたちの前で射精までしといて何が恥ずかしいよお、だよお前バカ？」

隣では唐田由衣夏によって仰向けのままマングリ返しのようなポーズを取らされる磯野。

「磯野！　アンタは仰向けのままやったげる。膝の下に両手を入れて思いっきり股開いてM字型に股間を開くのよ？」

「は、はい唐田さま……こうですか？」

「うーん……もっと膝を持ち上げて……股もまだまだ開くでしょ？」

「ぐすん、ぐすんぐすん……は、はい。こうですか？」

再度マングリ返しのポーズを取る磯野。

何とその時、ペニスがフル勃起してきた。

「あら！？……ねぇ磯野。どうしてまた勃起しちゃってるのかな？」

「え！？　そ、そんなつもりは……ごめんなさい」

タイプの女子にペニスをシゴかれ、さらに肛門にまでコレから鉛筆を突っ込まれる、とゆうシチュエーションを想像しただけでとてつもなく恥ずかしい中にも、激しい興奮を覚えてしまう……Mの素質に目覚めつつある磯野勝治であった。

「ふぅん。私にそんな恥ずかしいポーズ取らされて興奮しちゃたんだ？　大人たちが言う“Ｍ″に目覚めちゃったわけだよね？」

四つん這いにされた一人と、マングリ返しＭ字開脚させられた一人……陵辱される二人の男子を見ながら秘部を濡らしてしまう女子は数人ほどいたが、恥ずかしくて誰にも言えないで黙ったまま隠していた。

完全なＳ気性の神崎美央と唐田由衣夏は、パンツがビショビショになるほど沼っていた。

「さてみんなで順番にやっていこーか！」

「きゃー！　えっち！」

「ええっ！？　前回できなかったけど今回はやってみようかなぁ……」

「あたしもやる！」

女子たちは大喜びであったが、二人は泣きながら肛門を丸見えに晒したまま泣き続けることしかできなかった。

「じゃあ委員長の木村さんから！　はい、鉛筆」

「はーい！　どっちに突っ込もうかなぁ……顔まで見られて恥ずかしいヤツ。オチンチンも全て丸見えのチングリ返ししてるお前！　いっくよぉ？」

「ひっ！？　や、やめて……」

『つぷっ！……ズブブブ！』

「あはあっ！？　ひいいっ！！」

学級委員長である木村佳子は、まず磯野勝治の責めを選択した。

「あははは！　女の子みたいな声出してるなぁ。ほらほら、どんどん奥まで入っていくねぇ？　あはは！」

『ズブブブッ！！』

「痛いいっ！！　抜いてえええっ！！　いだいいいいっ！！」

「あ！　木村さん！　それ以上突っ込んだらＳ字結腸突き破っちゃうよ。１０センチ以上は突っ込まないであげて」

「え？　あ、ごめーん！　そう言えば直腸って意外と短いものだったな……ごめんね磯野」

「は、はひいいい……痛いいい〜」

ゆっくり鉛筆を肛門から引き抜くと、そのまま便がべったり着いた鉛筆を次に手渡す木村佳子。

「はい、中西さん」

「あ、う、うん」

本日スカートをめくられる被害に遭ったばかりの被害者本人である中西美紗子。
頬を紅く染めて恥ずかしそうにしながらもそっと新垣郁夫の突き上げられたお尻の前に立つ。

「そりゃそうよね……ブッ刺してやって！　少々内側掻き回してやってもいいわよ」

「ううう……やめて下さい……ぐすん、ぐすん、恥ずかしい」

「新垣くん……私だけのスカートだけめくってたら許してあげてたのに……どうして私が３人目なの？」

「え？」

「ん？」

お尻を突き上げて鉛筆刺しを待つ体勢の新垣郁夫本人より、美央と由衣夏の方が思わず声が出てしまった。

「新垣くんのこと……森さんと中谷さんのスカートめくったことを知るまでは、好きでした……本当に残念だよ」

「ぐすん、ぐすん……え？　お、俺のことをそんなふうに思って……くれてたんだ……ごめんなさい中西さん」

「もういいよ。この性的イジメとゆうお仕置きでコレだけみんなの前で辱めを受けてるんだもんね」

『ズボッ！』

「はうっ！！」

「女の子にこんなことされてどう？　恥ずかしい？」

『ズブブブ！』

「あはああっ！！……は、恥ずかしいです……中西さま」

思わず中西美紗子にも敬語を使ってしまうほど、美央と由衣夏への恐怖心は強く彼の心に植え付けられていた。

「あはは……私にまで敬語なんだ……ほんと可哀想で哀れだよね？」

『ズボッ！　ぬぽんっ！　ズボッ！　ぬぽんっ！』

「うはあっ！　はうっ！　はひいっ！　んはあっ！」

抜いたり差し込んだりを何度も繰り返しながら好きだった男子の肛門を犯す中西美紗子。

「あれ？　中西さん泣いちゃってるよ……こんな奴でも好きになっちゃったら悲しいのかなやっぱ」

美央は泣いてる中西美紗子を見てそれ以上面白おかしく声援送ったり笑ったりできなくなってしまう。

「そうなのかも……色々あるわよね男と女は。でも泣きながらもきっちりアナル責めてる所が笑えるかも……何度も出し入れしちゃってるし……」

由衣夏は少し笑いを堪えながらも真剣な表情になって美央に答える。

少し白けたムードになりながら鉛筆は受け継がれ、１３人全ての女子が新垣郁夫と磯野勝治のアナルに鉛筆を突っ込んで散々弄んだ。

「新垣！　どう？　かなり反省した？」

美央は四つん這いで泣きじゃくる新垣の机の上に腰掛けると、そっと問いかける。

「はい……本当にごめんなさい」

由衣夏もチングリ返しで震えている磯野の机に座り、同じことを聞く。

「磯野も猛省したのかな？」

「は、はい！……ごめんなさい唐田さま……」

「あれ？　あんたまた勃起してるわよ？」

「ひっ！？　そ、そんなつもりは……」

呆れて美央も磯野の隣へやってくる。

「ホント、Mに目覚めたらおぞましいものね？　それだけ感じられちゃったら、お仕置きしてる側が何か損した気分だわ。あたしのこの複雑な心境、分かる？」

「はい！　も、申し訳ございません美央さま！……ぐすん、ぐすん」

「それだけ辱めを受けて泣きながらもチンポおっ勃てるなんて……初めてだよお前みたいなやつ」

美央は全ての女子たちに解散の意思を告げると、蜘蛛の子散らしたようにそそくさと帰宅していった。

「おい新垣！　お前はもう帰って良いよ」

「はい！　ありがとうございます美央さま！」

「今度女子のスカートめくったら素っ裸のまま四つん這いで首輪付けてグラウンド3周させてやるからね？　あ、それと！　磯野は置いていってもらう。コレからもっと泣かしてやるから。なんかムカつくのよ」

「ひっ!?……俺の友達ですからどうかお手柔らかに……お願いしますぅ」

『スパァンッ!!』

「痛ああああっ！！」

四つん這いでお尻を突き上げたまま震えている友人思いの新垣郁夫の尻を思いっきり引っ叩くと、ズボンとパンツを背中に置いてやった。

「ほら、早くパンツ履いて帰れ」

「は、はいいっ！！　磯野！　頑張れよっ！　で、では神崎さま、唐田さま、し、失礼しますっ！」

なんだかんだいってパンツとズボンを履いたら友人を見捨ててすぐに退却してしまう新垣郁夫。
女子たちに鉛筆を何度も突っ込まれた肛門が痛いのか、内股気味でガクガクフラフラしながらも、ようやく歩いて帰っていった。

「もうチングリ返しのポーズはいいから、今度はさっきの新垣みたいに四つん這いになれ」

「は、はい」

そのまま右の臀部は美央、左の臀部は由衣夏と、お尻を半分ずつに担当を分けて、引っ叩くダブル尻叩きが始まる。

『パパンパパンッ！！　パパンパパンッ！！』

「ひぎゃあっ！！　んぎいいいっ！！」

これはかなりのダメージを磯野に与えることになる。
数十回、数百回と二人で同時に叩く内に、肌の色はピンクから赤、赤から紫、そして皮が裂けて出血……とゆう過酷な過程になった。

同時に平手打ちがヒットするたびに肛門が強制的に開かされて、直腸まで丸見えになる。

「ほらあっ！　あたしたちに叩かれる度に、お尻の肉開いてケツの穴が丸見えになってるの分かってる？　そんなになっても見て欲しいか？　んん？」

「お尻の皮も破れてすごい血が出てるよ？　それも分かってる？」

美央と由衣夏は優しく問いかけるが、磯野本人はもうとっくにペニスも萎え、本気で号泣していた。

『パパンパパンパパンッ！！』

「痛いっ！　があっ！　んぎいっ！！えーんえーん！！　ごめんなさいいいいっ！！　許してくださいいいい～！！」

しばらく二人の美女からの本気の尻叩きが続けられて、放尿までしてしまう。
バケツで水をかけて流した後、ようやく手術台代わりの机から下ろされた磯野は、お尻を押さえながら膝から崩れ落ちてしまった。
「もう許してくださいぃ〜！　痛くて死んじゃいそうですぅ〜！わぁん！　わぁん！」
両足を掴んで足の裏をペニスに押し当てる美央。
「コレでもう一回イカしてあげようか？ほらぁ！」
『ガガガガガガガガッ！！』
「あひゃひゃひゃひゃはゃあっ！？」
涎を振り撒きながら美央の強烈な電気アンマを数分間受け続ける内に、再度快感を得て射精してしまう磯野。
「あ？　ホントにイッちゃった？」
「美央の足の裏ベトベト！　あはは！　なんか殺したくなってきちゃった……」

「ホントにマゾだよねコイツ……上も全部脱がせてタコ殴りにしちゃう？　それなら勃起できないかも？」

「それいいね！」

上の制服もシャツも全て流された磯野勝治は神崎美央による本気の殴る蹴るを全身に受けることになってしまう。

『バキバキ！　ズドズドッ！！』

顔面への正拳突きや腹部への膝蹴りがまともに何度も入る。
百発くらい殴る蹴るを繰り返してから由衣夏に交代し、同じように暴力を繰り返した。
倒れ込んでゲロを吐いても、横腹を激しく蹴りまくる由衣夏。
足で仰向けに蹴り転がして、ペニスをスニーカーの足の裏で踏みつける。

『ギュ！……グリグリ！　グリグリ！』

「さすがにもう勃起できないか……ほらほら、再度おっ勃ててみなさいよ？」

足の裏を何度もグリグリと回すように踏みつけて擦りつける。

『ブリブリ……ブリブリ』

血の泡を含む大便を垂れ流し始める磯野勝治。

「くっさ！　うんち漏らしちゃったよコイツ」

「え？　その色、さすがにヤバいかも……内臓破裂しちゃってるかもね」

美央も少し気になってきた。
白目を剥いて上の口からも血の泡を吐きながら、痙攣が始まる。

「あらら！　どうしよう！」

美央と由衣夏が本気で心配し始めた時、教室のドアが開き、担任の先生が入ってくる。

「ちょ、ちょっとあなたたち！？　なにやってるの！？」

担任の先生が素っ裸で痙攣する磯野勝治を見つけて大慌てで駆け寄ってくる。
その時痙攣が治まり、完全に呼吸が停止した。

「か、神崎さんに唐田さん！　こ、これはどうゆうことなの？磯野くん！！　磯野くん！！」

しゃがみ込んで磯野を揺り起こそうとするが、目を開いたまま呼吸停止を確認すると、慌てて駆け出してゆく。

「教頭がまたおられるから救急車呼んでもらってきます！　それまでここに居て！」

「はーい」

二人は気の抜けた返事をして磯野の左右にしゃがみ込む。

「ごめんね～。まさか殴る蹴るくらいで死んじゃうなんて思わなかったんだもん」

「ホント。責められる度にチンポおっ勃ててたアンタがまさかねぇ……」

担任と教頭が救急隊員を連れてやってくる。

磯野勝治はそのまま担いで病院へ直行したが、その日のうちに死亡が確認された。

小学生ながらも、一度警察へ連行され色々と聴取される美央と由

衣夏。
一通りのいきさつを少し照れながらも刑事へ話し終えると、髭面の齢６０ほどの男が現れた。
頭も見事に真っ白な白髪で、髭も真っ白だった。
シワひとつないスーツに金色に輝くバッジが、只者ではない雰囲気を醸し出していた。

「席を外してくれるかな？」

「はい！　それでは失礼します！」

刑事が新米の警察官の如く態度を取るその相手に美央と由衣夏の視線は集中する。

「まぁ気を楽にしてくれたまえ。えーと……名前は確か……神崎美央くんと唐田由衣夏くんだったね？」

「はい。そうです」

二人はほぼ同時に返事した。

「ちょっとタバコ吸ってもいいかね？」

「どうぞ」

レトロなジッポライターで紙タバコに火をつけると、深く深呼吸するように肺に送り込む。

「すうううっ……ふふぁああ～」

ゆっくり煙を吐き出し終えると、ゆっくりと話し始める髭面の男。

「申し遅れたが私はこの度新設された特殊任務省とゆう省庁の長官に選任された山西幸三（やまにしこうぞう）とゆうものじゃ。新たにと言っても１００年ほど昔には同じ名の省庁が存在したのだが……一度取りやめになってまた再開して……数年間は続いたのだが……それもまた取りやめになったまま、ほぼ１００年が経つ」

じっと山西長官の目を見つめたまま微動だにしない美央と由衣夏。二人は正直、ちょっと何言ってるのか分からない。全く分かっていなかったこの時点では……。

「お主らのその残酷で冷酷なやり方……人を殺しても大して動揺もしていないキモの座り方……お主ら……私の下で拷問処刑人として働いてはくれぬか？」

「え？　ご、拷問……しょけい？？」

「働くとはどうゆうことですか？　私たちまだ小学生ですが？」

美央は目を丸くして、その言葉の響きに驚いている。

由衣夏は、まだ子供なのに仕事として本当に成り立つのかどうかを、冷静に聞き直す。

「任務のある日は学校を休んでもらい、私たち特殊任務省のエキスパートたちが送迎もする。所有するドローンは大型なので7人ほど乗れるでな。お主らもその内勉強してパイロット免許を取るが良い」

「それを承諾すれば……この度のあたしたちの磯野勝治殺害は……罪にならないのですか？」

「うむ。磯野くん本人にはこの度の事件は気の毒だったが……両親には１０億円を進呈して許しを得ている」

「…………お金は命より重いのね」

「美央！　今の私たちにはそれ言える立場じゃないよ？　そのお金のお陰で私たちは遺族に訴えられずに許されて罪に問われないんだから……感謝しなくちゃ！」

「あ、そうか！　でも心から許されてはないような気もするけど……本当にご両親には申し訳ないです。反省します」

少し罪悪感はあるみたいだが、リンチの内容を全て聞いている山西長官には、この度の拷問処刑人の選任にかなり自信を持っていた

のである。

「国の名の元、凶悪犯にお仕置きができるぞ？　同害報復刑として犯されて殺された者の復讐は犯して殺す。お主らなら楽しんで執行できるであろう？」

心の底からワクワクしてくる美央と由衣夏。

「引き受けます！　やらせて下さい！」

「私も！　よろしくお願いします！」

話は数分でまとまった。
更に数分間雑談をし終えると、山西長官は満足げに胸を張って部屋を退出する。

その後刑事が戻ってきて二人に話しかけた。

「では特殊任務省の一員となって頑張ってくれよ？　ワシからも頼むわ。近頃残酷極まりない事件が跡を経たないもんでな。遺族の泣き叫ぶ声が夢にまで出てくるのだよ。キミたちは普通の人間ではない、と何となく分かる」

「ちょ、ちょっとその言い方……」

「美央！　刑事さんの言うこととほぼ合ってる。私たちはかなり残酷なことも平気で出来る類の……少し違う人種だと思うよ」

「そ、そっか。それもそうね。なら罪人たちを思いっきりお仕置きしてぶっ殺してやろうよ！　被害者本人や遺族の為にもね！」

拷問処刑人の素質（後編）（後書き）

小学６年生にして神崎美央と唐田由衣夏は、国に新たに発足された《特殊任務省》の拷問処刑執行人としての任務を遂行することになる。

１００年前からの、残酷な血を引く少女たちの物語は、まだまだ始まったばかりである。

男子児童の初恋と性癖（前編）（前書き）

特定の小学生児童へ頑なに執着する女教師。
美男子児童が大好きなショタ女、滝川紗絵の欲望が暴走してゆく。

男子児童の初恋と性癖（前編）

――２１１５年、七月末。

僕は赤松陽一。
今月で１０歳になったばかりの小学四年生。
成績はクラスで最低の３０位、多分学年全体でも最低の１２０位だと担任の滝川紗絵（たきがわさえ）先生から聞いている。
男子１５人、女子１５人で、男女比半々で四年一組から四組まであるんだけど、四組だけ女子１４人……とゆう少し勿体無い感じなんだ。

今日は、僕だけ昼過ぎから呼び出されての補習授業。
呼び出されたと言っても、滝川先生は数少ないドローン操縦士だから自宅の庭まで迎えにきてくれた。
校長や教頭などを含めて先生たちは４０人ほどいるこの学校でも、ドローン通勤してるのは一人だけ。
よほど頭と運動神経が良いんだなぁと思ってる。
他の先生たちの電気自動車もカッコいいのばかり乗ってるんだけどね。
やっぱ空飛ぶってゆうのは、とてつもなくカッコいいよ。
「ここのスペルはＫじゃなくてＣよ。気をつけて覚えていってね」

「あ！　そうですね。ごめんなさい」
　昔は小学生ではローマ字くらいしか習わなかったらしいんだけど、僕らの時代では一年生からすでにローマ字、二年生から日常会話レベルの簡単な英語を習うようになったみたい。
　高学年ではヒアリングの授業もあるみたいなんだけど、あんなの聞き取れるようになるのかなぁ？
　とにかくお母さんとお父さんの期待にも応える為に、頑張って勉強しなくちゃ。
　それから数時間が経ち、少し外が薄暗くなってきた時に補習が終わった。
「さぁてと。よく頑張ったわね赤松くん。今日はもうこれぐらいで終わりにして帰りましょう」
「はい！　先生、ありがとうございました」
「明日からもしばらく頑張ろうね！　とにかく同じ最下位でも群を抜いての最下位なんだから赤松くんは……」
　２８歳とゆう滝川紗絵先生は、切れ長の綺麗な目でスッキリした顔立ち、いわゆる美人ってやつ。
　僕はそんな先生のことが大好きだったんだ。
　八月の下旬頃まで自宅から学校までの往復をドローンで送迎してくれた先生だったけど、土日以外ほぼ毎日教えてくれたお陰でかな

り分かってきた気がする。
もう僕が思うには、クラスでもビリではないだろう。
これも先生のお陰だなぁ。

「お疲れ様。ご両親さんはいつもいないんだね？」

「うん。お仕事の残業で週末以外は二人とも夜の八時頃に帰ってきます」

「そうなんだ。前の参観日からまだ一度も挨拶してないなぁと思ってね」

「そう言えばそうですよね。でも僕から先生には、夏休みお世話になってると話してあるから大丈夫です」

そんなこんなで夏休みも後五日となったんだ。
かなり色んな問題が解けるようになり、みっちり補習を受けた甲斐があったもんだと本当に先生に感謝してる。

「赤松くん、残り月、火、水の三日間だけどね」

「あ、はい」

「私の自宅で勉強しましょう。教室のクーラーが少し調子悪いから、熱中症対策としてだけど。他の教室使うのはなんか他の先生に申し訳ないし……どう？」

「え？　あ、はい！　よろしくお願いします！」

僕は正直とても嬉しかった。
憧れの美人担任の自宅で勉強できるなんて。
嬉しさだけじゃなく、なんか胸がドキドキするんだ。
……僕ってもしかすると……先生のことが本気で好きなのかな？

「じゃあ明々後日、いつもの昼過ぎに迎えに行くから。待っててね。土日ゆっくり休むのよ？」

「はい。ゲームとかして少し息抜きしときますね♪」

翌る日の朝、両親と三人でご飯を食べてる時、ふとお母さんが僕に問いかけてくる。

「陽一」

「ん？」

「あなたの成績が悪いのは分かるんだけど……夏休みほぼ毎日のように学校で勉強させるなんて……先生も少しやり過ぎなんじゃないの？　まだ小学生なんだから」

「え？　あ、それは……学校とゆうより滝川先生の優しさでしてくれてるから」

「優しさ？　なにそれ？　ウチの子ばかり拘束してみっちり教えるなんて……厳しすぎるんじゃないいって言ってるのよ！　ねぇあなた」

その時、新聞を読みながら眉間にシワを寄せて必死で政治の記事を読み漁るお父さんに、お母さんの矛先が向いたんだ。

「あなた！」

「お？　え？　ど、どうした？」

「どうしたもこうしたも！　陽一だけ夏休みまでずっと勉強させる担任が問題なんじゃない？　って聞いてるのよ」

「んん……まぁでも塾に行かせるとお金がたくさんかかるし、本人も喜んで勉強しに行ってるんだから別にいいんじゃないか？　俺はそう思うけどなぁ」

思ったより冷静な父に、少し呆れ気味になる母。

「はぁ。あなたは昔から、子供のことにも家のことにも無関心なんだから……結婚する相手間違えたかしら本当……」

「おいおい！　それは少し言い過ぎなんじゃねぇの？　陽一の前でそこまで言わなくても……」

「だいたいあなたは最近ずっと私の話を……」

母のガミガミ説教が始まったため、僕はそっと席を立って二階にある自分の部屋に戻ったんだ。

あれが始まったら半時間は終わらないからね。

しばらくシューティングゲームをして息抜きをしてみたけどなんか虚しいなぁ。

早く先生に会いたい。

あーあ……土日も行けるように相談してみたら良かったよ。

なんだかんだで土日も終わり、滝川先生が迎えにきてくれる月曜日がやってきた。

僕は昼を過ぎると、ワクワクしながら一人ベランダで空を見つめ続けているんだ。

「来た！　先生だ！」

僕は先生の操縦する真っ赤なボディーのドローンを見つけると、大きく手を振りながら慌てて庭へ降りた。

少し砂煙を上げながら垂直に着陸するドローンに駆け寄ると、スライドドアが開いた瞬間に大きく挨拶したよ。

「こんにちは先生！　今日もよろしくお願いします！」

「こんにちは。じゃあ早速行きましょうか。さぁ乗って」

「はい！」

今日は学校じゃなくて先生の自宅なんだよな。

あーもうどうしよう。胸のドキドキが止まらないよ。

しばらく会話がないままドローンは東の海ぶちまで飛行していったんだ。

先生の家ってかなり東の方だったんだなぁ。

綺麗な海を見下ろしながら僕らを乗せたドローンは白い鉄筋コンクリート製の一戸建ての屋上へ降りていった。

「ここよ。私の家。両親は海外へ旅行中だからしばらくは私一人しかいないの」

「ふぅん。とっても大きい家なんですね！　凄いよ先生って！」

「うふふ。両親の持ち家だし、私は何も凄くはないわよ。じゃあ着陸するからバーをしっかり握っていて」

「はい！」

無事に屋上へ着陸すると、そのまま階段から三階にある一室へ連れていってもらった。

どうやら先生の仕事部屋らしい。

「ここでみんなのテストの答え合わせしたり、ホームルームでみんなに話す内容とか色々と学校関係のことやってるの」

「へぇ～。なんかそうゆう硬そうな雰囲気の部屋ですよね確かに……」

「あはは。でもこの部屋で今日の勉強やってもらうから。早く雰囲気に慣れなさいね？」

「あ、はい！　分かりました！」

僕はしばらく、先生に出された算数のドリルをやったんだ。
間違えた問題は何分も何十分もかけて、一つ一つ丁寧に教えてくれる先生。
真横で見る横顔は、すっごく綺麗でドキドキしたよ。
それから更に一時間算数の勉強をしてから、滝川先生は予想外のことを僕に言った。

「とりあえずドリルはここまで。ちょっと隣の部屋行って卓球しよ」

「え？　た、卓球？……ですか？」

「そうよ。スポーツもして体力もつけちゃおうかなって……もちろん隣の部屋もクーラー効かせてるから安心してね」

「は、はい！」

まさか先生の家で卓球をすることになるとは、これっぽっちも思ってなかった僕は、それはそれでワクワクしながら隣室へ移動したんだ。

先生は無茶苦茶上手かったけど、僕のレベルに合わせてくれたみたいで、ゆっくりだけど結構ラリーが続けられて楽しめたなぁ。

さすが滝川先生は優しいよ。

ラリーを長く続けたくて張り切り過ぎた僕は、ジャンプして球を打ち返そうとした時に、内膝を卓球台の角に打ちつけて擦りむいてしまった。

これは痛くて股間を押さえて悶絶してしまったよ。

すぐに先生が隣に来てくれて、短パンの裾から右手を少し差し込んで、傷を確認したんだけど、パンツ部分も少し指が侵入してきてオチンチンから二、三センチの所だったから、全身がビクッてなっちゃった。

え？　そのままオチンチンに触れちゃうんじゃないかって思ったけど……すぐに立ち上がった先生は消毒の軟膏薬と絆創膏を持ってきて、僕の内膝の傷の手当をしてくれた。

傷の痛みより、短パンの裾から先生の指が入ってきて、オチンチンに触れられそうになったことが、まだ僕の心臓をバクバクさせている。

僕が最近体験する不思議な出来事、それは、女の人のオッパイと

か股間がどうなっているか？　とかを想像する時、オチンチンがカッチカチになっちゃう事。
これは病気なのかとも思ったけど……僕の本能がそれを否定した。お母さんにそのことを相談することもなく、病院に連れて行くことをお願いすることもなく、自然に硬くなった僕のオチンチンを握ったり揉んだりして遊んでいた気がする。

「滝川先生！」

「ん？　どうしたの？　まだ痛むのかな？」

「あ、あの、そうなんです！」

言っちゃった！
本当はもうほとんど痛みなんてなかった。
もう一度オチンチン近くの内膝を、先生の手で触れられたかっただけなんだ。

「大丈夫？　もう一度傷口みてみるわね」

そう言いながら滝川先生はもう一度僕の短パンとパンツの裾から指を這わせてきた。
今回はさっきより下心があった為か、僕のオチンチンはカッチカチになっちゃってる……。
先生の手が傷口をさすりながら少し奥に入った時、キンタマ袋の付け根に少し指先が触れた。

「んあっ！？」

僕はびっくりして思わず声を上げてしまったんだ。
顔面が熱くなってきて、頬はみるみる内に真っ赤に染まってゆくのを自分で確信したよ。

何度もさするうちに、何度もキンタマ袋の付け根に触れる大好きな滝川先生の指先に、僕は恥ずかしさと嬉しさとで無茶苦茶興奮してきたんだ。

「せ、先生……お願い……ぼ、僕のオチ、オチ、オチン……」

オチンチンが大きくなって硬くなって病気じゃないのかを質問するなりゆきで、もしかしたらオチンチンも触ってもらえるかと下心見え見えかもしれないけど……そう言おうとしたんだけど……恥ずかし過ぎて吃って言えない！

ど、どうしよう……早く言わないとオチンチン触ってもらう前に手を抜かれちゃうよぉ！

「ススス……ぎゅっ！」

「ひゃあっ！？」

先生は僕の気持ちを読んだかのように、なんとオチンチンをいきなり握ってきた。
僕はびっくりして腰が抜けそうになって、思わず先生の手首を握ってしまう。

「わたしに触って欲しかったんでしょう？」

「え！？　あ、そ、そんなこと……いやその、あの」

『モミモミ！　ギュムギュム！　モミモミ！　ギュムギュム！』

「ああああっ！？　んんんんっ！！」

なんと先生は、カッチカチになっちゃってる僕のオチンチンとキンタマを交互に揉んだり握りしめたりし始めたんだ。

恥ずかしさやら嬉しさやら、これが本当に現実かとゆう疑問やら……色んな感情が瞬時に湧いてきてもう何が何だか訳が分からなくなってきた。

「私に触られて嬉しぃの？　って聞いてるのよ？」

「あ、あうう。せ、先生、僕今、す、凄く恥ずかしいです……」

「恥ずかしいんだ。こんなにフルボッキさせちゃってるのにねぇ……ねぇ、オチンチンから粘度のある液出したことあるの？」

「ね、粘度……な、ないです。あ、先生の手が……あん。なんかゾクゾクしちゃうぅ」

憧れの美人担任にエッチな部分を執拗にいじられている僕は、このまま先生に抱きつきたかった。
夢じゃないんだこれって……。

そのまま先生は僕を仰向けに寝かせると、制服の短パンとブリーフパンツを脱がし始めた。

「ほら、先生に見せなさい。見てほしいんでしょう？」

『ズルズル……ズルリ！』

「ひゃあっ！？　やだ！　見ないでぇえっ！！」

「だめ！　脱ぎなさぃ！」

パンツを掴んで抵抗する仕草を見せるも、僕の気持ちを理解している先生に敵うわけがない。
力も僕より強い先生は、あっとゆうまに足首までずり下ろして下着までも足首から剥ぎ取った。
目を硬く閉じて、仰向けでの気をつけの姿勢のまま、僕は震えている。
大好きな滝川先生にオチンチンを見られている……その事実だけ

で、触られるのと同じくらい恥ずかしくて興奮して、これ以上ないくらい硬くなってゆくのがわかった。

「小学生にしては大きいわ。今から射精させてあげるからね？」

『シコシコシコシコ』

「あうう！？　しゃ……しゃせい？……うううううぅ！？」

変な感じがする！
オチンチンがとてつもなく変な感じ……先生一体何やってるの！？
そんな擦ると痛いよぉ！
でもなんか変な感じ……え？　これって何か気持ちいい？？

「私にこんなことされることも、家で想像してオチンチン硬くしてたんでしょ？　今日は私のオモチャになってもらうから……両親には絶対内緒にしなさいね？」

「う、うう、は、はい先生……な、なんかオチンチン気持ちいいですうっ！！　はううっ！！」

男子児童の初恋と性癖（前編）（後書き）

ついに発動した滝川紗絵のリアルショタ行為。

小学四年生の赤松陽一は、鬼畜な大人によって性を開拓されてゆく……。

男子児童の初恋と性癖（中編）（前書き）

エスカレートしてゆく女教師の児童への淫乱行為。
鬼畜な所業はまだまだ続いてゆくのであった。

「うわあああああっ！？　せ、先生っ！　やめてぇええつ！！」

「私の手コキで赤松くん人生初の射精をするの！　ほらほらほらあっ！　いっけええええ！！」

『シコシコシコシコ！！　シュココココココッ！！』

僕のオチンチンは滝川紗絵先生の透き通るような真っ白な手で激しく上下運動され、オシッコする穴がパクンパクン閉じたり開いたりするほど強烈に擦られちゃったんだ。

人生で初めての壮絶な股間の快感……これが射精ってゆうんだね先生。

「やだっ！？　もうダメえええっ！！」

「いいよ！　たくさんお出し！！　それええええっ！！」

『シュコココココココココココッ！！』

「あはあっ！？　んんんんっ！！」

『ドピュッ！！　ピュピュピュピュピュピュピュピュウッ！！』

何か変な液体がオチンチンから飛び出した……。
何だろコレ？
でも硬くなった時と同じく僕の本能が病気とかではないから心配するな、とゆう風に教えてくれる。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ」

「たくさん出したわね？　このオマセさん♡」

この時滝川先生は、僕に精液や射精のことを詳しく教えてくれた。
クラスメイトより一足早く性の授業を受けられたみたい。

「チュパチュパ！……レロレロ……ごっくん！」

先生は指に着いた僕のオチンチンから出た粘液……精液を綺麗に舐め取って飲み込んでくれた。
大人ってそんな汚いこともしてるんだ……なぜか更に先生のことが愛おしく大好きに思えてくる自分がいた。

そのまま隣の部屋に連れて行かれ、薄暗い電灯に切り替えた先生は、僕の服を全て脱がせて、自らも裸になった。

「私が仰向けに寝るから陽一くんはうつ伏せになって！　頭は私の

足の方に向けるの」

「は、はい！」

「私の股間、触ってみて」

「ごくんっ！　は、はいっ！」

先生の股間はワレメがあった。

指で弄ると、穴みたいなものが開いていて、かなり濡れていたんだ。

指を突っ込むとクチュクチュと湿っぽい音が響いた。

僕は更に興奮してきて、何度も先生の股間の穴へ指を出し入れした。

「それが女性器よ。そこの膣ってゆう穴から赤ちゃんが出てくるの」

「はぁ、はぁ、はぁ、は、はい。ち、膣……そんな大切な所に指突っ込ませてくれてありがとうございます！」

「舐めて」

「え！？」

「舌を使って舐めなさい」

正直オシッコ出すような部分を舐めるのはかなり抵抗があったの

だが、大好きな滝川先生の股間だと別の意味で興奮してきたんだ。
僕は必死で舐めまくり、舌を無意識にワレメの穴へ突っ込んだりした。

「あ、あん……いいわよ陽一くん……上手よ」

「ペチャペチャ！　ペロペロ！　ジュルル！……ゴクンッ！」

思わず先生の股間から湧き出してくる粘液みたいなのを吸い込んで飲んでしまう。
その次の瞬間、僕の股間がコレまで味わったことのない感覚に襲われる。

『パクンッ！　ペチャペチャペチャ！　じゅるるるるっ！』

「あはあっ！？　やだ先生っ！！　オチンチンなんて舐めないでえっ！！」

滝川先生は僕のオチンチンを口に咥え、激しく舌を使って舐め回し始めたんだ。
コレは無茶苦茶不思議な感覚だった。
とにかく気持ちがいい。
再度カッチカチになった僕のオチンチンを更に激しく舐めまくる先生。

「あっ！　ああっ！！　先生っ！！　やめてええっ！！」

『ドピュッ！……ドクンドクン……』

「んっ！！……ごっくん！……陽一くんの精液、美味しかったわよ」

何度も味わう快感……もう僕は滝川紗絵先生がいなくちゃ生きていけないかも……。

それほどまで愛おしくて結婚したいとまで思うようになっていったんだ。

それから半時間ほど裸で抱きしめあって、至福の時間が過ぎてゆく。

でも、ある違和感に気づき始めた僕だった。

「あれ？」

「どうしたの？」

「な、なんか僕のお腹に当たってます？」

僕のお腹に食い込むくらい何か長いモノが……僕のヘソ辺りに突き刺さってくる。

「先生！？　な、何か股間に付けてます？」

「……失礼ね。付けてるんじゃなくて……付いてるの」

「ええっ！？」

「もう……仕方ないわね」

起き上がって灯りをつける先生。
僕の目の前に映ったモノは……男なら誰でも見覚えのあるモノだった。

「オ、オチンチン！？」

「そうよ。内緒にしてたけど私は両性具有者なの。オマンコとオチンチンを両方持ってるの」

僕は頭の中が真っ白になっていった。

「え？　えええええっ！？」

「このオチンチンの他に……睾丸と、膣も子宮も卵巣もあるんだけど……どうやら赤ちゃんは産めない身体らしいの。でも妊娠させられる精液は腹部に埋まっている睾丸から作られて……ちゃんと勃起も射精も出来ちゃうんだよ？　見かけも心も女なのにね。なぜか性行為に関してだけは男みたいでしょ？」

「そ、そうなんですね……で、でも僕はやっぱり……せ、先生のこ

とが……」

「私のことが？」

「だ、大好きです！　将来僕と結婚して下さいっ！！」

言っちゃった……ついに前から思ってたこと言っちゃったよぉ。
恥ずかしいなぁ！
どうしよう……断られたらもっと恥ずかしいじゃん僕……。
ってゆうか、オチンチン付いてるのに平気なの？　僕は……？

冷や汗かきながらドキドキしてる僕を先生は無言で抱きしめて、四つん這いにさせた。

「私のことが大好きなら……私の勃起したペニス……身体の中に受け入れられるわよね？」

「え！？　ど、どうゆう意味ですか？」

「私のは直径2センチほどの細いオチンチンだけど……陽一くんのアナルには少し大きすぎるかも……」

『ピト……ツプッ！』

「んあっ！？　ひいっ！！」

先生は自分のオチンチンを、僕のお尻の穴に突き入れてきたんだ。
もうびっくりしちゃって腰が引けたんだけど、強い力で腰を引きあげて引き付けられ、僕は先生のオチンチンを……。

「さぁ飲み込みなさい。男子児童の処女のケツマンコ……いただき♡」

『ズボボボボ……ズブブブブッ！！』

「いっ！？　痛いいいっ！！　熱いいいいいっ！！　ひいいいいいっ！！」

その時、激痛と灼熱とを同時に僕の肛門が感じだんだ。

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「はうううううっ！？　痛いいいいいっ！！　やめてえええええっ！！　んはあああああああっ！！」

先生は僕の背後で激しく腰を振り続けた。
僕の肛門には、破壊されちゃうかと思うほどの激痛と灼熱が襲ってきたんだ。

「痛いよおおっ！　わーんわーん！！」

「ほらあっ！　我慢しなさいっ！　肛門がめり込んで窄んだり盛り上がったり激しく躍動してるわよっ？　うふふ……ヤラしいわねぇ！？　ほらほらほらぁ！」

「ぴぎいいいいいっ！！」

「んんっ！　出ちゃう！　陽一くんの直腸ケツマンコに……出しちゃうわよっ！　……ううっ！」

『ドピュッ！！　ドピュピュピュピュピュピュピュウッ！！』

「んあっ！？　熱いっ！？　熱いいいいいいいっ！！」

『ピュピュッ！！』

先生の出した粘液はとてつもなく熱かったんだ。
僕の肛門やハラワタを溶かすほどに……。
その瞬間、僕のオチンチンからも粘液が飛び出してしまった。

「わーんわーん！　痛いよおお！　えーんえーん！」

気がつけば僕は肛門から大量の精液を噴き出しながら、全身を震わせていた。
あんな綺麗な顔して僕のお尻の穴を犯すなんて……しかも男みたいに夥しい量の精液を僕の直腸内に注ぎ込んじゃうなんて……。

でも、でも僕は先生にお尻の穴を犯されて……また勃起しちゃって射精までしちゃってたんだ……。

「私にアナル犯されて中出しまでされて……また射精したの？　うふふ。前立腺ってゆう精液作る臓器を抉り倒してあげたからね♡」

「はい！　射精しちゃいました。痛いけど……僕は先生になら何をされてもいいです……は、恥ずかしいけど興奮しちゃうんです」

一体何を言ってるのか自分でもよく分からなかったんだけど……とにかく先生に色んなことをされて、無茶苦茶気持ち良かったことだけは確かなんだ。

こんな綺麗な女性に……滝川先生になら奴隷になってもいい……毎日弄ばれて犯されてたい！

あーあ。僕って小学生なのにかなりの変態だったんだなぁ……。そんなことを考えていると、先生はもう一度勃起させたペニスを僕の口の中に押し込んできた。

『ズボッ！！　グチュグチュグチュ！！』

「んごおっ！？　んぐあううあううあっ！？」

喉の奥まで突っ込まれてくる先生のオチンチン……時々オエッてなるけど、コレも無茶苦茶興奮しちゃったんだ。

お尻の穴もお口も全て先生に犯してほしい……滝川紗絵……先生はもう僕のものだ！

先生は僕の頭を両手で掴んで激しく前後に振る。
その都度喉の奥まで届くほど激しく出し入れされて息苦しかったけど、我慢してなすがままに身を任せる。

突然喉の中にあの粘液が……再び射精された時、かなりむせかえっちゃう。

「うえぇっ！！　ゴホゴホゲホゲホッ！！」

「イラマチオってゆうの。喉が膣代わりよ……エロい行為でしょ？」

その後も色々とエッチなことを説明して教えてくれた先生。
人生初の経験だらけで、興奮しっぱなしの時間だったけど、優しく頭を撫でながら癒してくれる。

「明日も色んなことしてあげる。もちろん勉強もしなくちゃだけどね」

「はい！　先生。明日もこうやって裸で抱きしめ合いたいです……さ、紗絵さん」

「下の名前で呼ぶなんて……ほんとオマセな子♡」

――――「なぁーにがほんとオマセな子♡　だよ」

ドアの向こうから女の人の声がした。
先生のお母さんかなと一瞬思ったんだけど……。

『ガチャ！！』

「ジャジャーン！　正義の味方、神崎美央ちゃん登場っ！！」

「同じく唐田由衣夏様も参上……なんかむっちゃ古臭いなこのセリフ」

いきなり現れた二人の女子高生に思わず切長の目をひん剥いて無言で見つめ続けてしまう滝川先生がいた。

白いワイシャツに真っ赤な蝶々型リボン、茶色のブレザーを羽織り、ピンク色のひだつきミニスカートで黒い靴下、革靴に見える茶色のスニーカーを履いて……とゆういでたちで土足で入り込んで来ちゃってる……。

先生の知り合いかなぁ？

「なっ！？　何ですかあなたたち！？　人の家に土足で勝手に上がり込んで！！　警察呼ぶわよ！？」

え？
知り合いじゃないんだ……だとしたらなんて太々しい常識知らずな女子高生たちなんだ。
気づけば僕も先生に続いて怒鳴ってた。
「出ていけ！　ここは滝川紗絵さんの家だぞっ！！　泥棒っ！！」
「あちゃあ〜！　あたしたちが泥棒って……まいったなぁ。コレってあの犯罪に関わる心理のストックホルム症候群ってやつ？」
呆れ顔で、隣の金髪ポニーテールの人に聞いている長い黒髪の女子高生。
僕が怒鳴ってるのに、なんだか余裕そうで少し腹が立った。
「んん〜。強制的な誘拐とか監禁とかじゃないからそうとも言えないような……いやまぁでも……犯罪者に情や愛情を持ってる時点で、プチストックホルム症候群と呼べるかもね」
「あなたたち！　一体何者！？　見たところ普通の女子高生みたいだけど！？」
二人組はゆっくりと歩み寄ってくる。
先生も相手が女性だからか変に怖がることもなく、ずっと睨みつけていた。

『パァンッ！！』

「きゃあっ！？」

いきなり強烈な平手打ちを先生に食らわせた黒髪の神崎美央とかゆう女子高生。

僕はびっくりして倒れ込んだ先生に駆け寄った。

「滝川先生っ！！　大丈夫ですかっ！？」

「ううう……い、痛い……」

かなり顔面にダメージを受けたのか、身を固く閉じて頬にずっと手を当てている先生だったけど、もう一人の金髪ポニーテールの唐田由衣夏とかいってた女子高生が、膝蹴りを顔面に叩き込んだんだ。

数メートル後ろに吹っ飛ぶように転がる先生を見て僕は恐怖を感じた。

コイツら無茶苦茶強い！

「ぎゃあああっ！！　痛いいいいっ！！」

「先生っ！！　先生いいいいっ！！」

鼻の骨と前歯が二本折れて、顔面血まみれのかなり凄惨な顔になってしまった先生に抱きつきながら、思わず泣いてしまう。
先生を助ける作戦を必死で模索する僕は、一つの行動に出た。
「ごめんなさい！　ど、どうか先生をこれ以上虐めないで！　許して下さいお願いしますううっ！！　大好きなんです僕は！！　わーんわーん！！」
ふと気づけば、泣きながら二人の女子高生に土下座を敢行している僕。
「先ほどまでのあなたたちの行為……留守中にセットしてたカメラで盗撮してたの」
小型カメラを再生しながら頬を紅く染める美央と由衣夏の二人だったけど、何を見てるのかよく分からない。
「んあっ、出ちゃう！　陽一くんのケツマンコにいい～。んあっ！熱いいいいい～って……ほんとアホか！」
女子高生が口に出す聞き覚えのあるセリフに、僕の頬から耳まで真っ赤になる。
先生とのエッチを全て盗撮されてたんだ。

「ど、どうしてそんなことするんですか！？　盗撮なんて卑怯だよ！」

由衣夏は土下座をしながら吠える僕を素通りして先生の元へゆき、美央と二人で先生を無理矢理立たせてベッドまで連行してゆく。

「あのさ先生……以前の学校でも顔立ちの整った可愛い男の子を二人ほど勉強と偽って犯してるわね？」

「そうそう。怪しいと周囲から思われて密かに警察の調査が入ってたの。だから今の小学校でまたやらかすだろうなって……警察絡みだから、鍵屋さんも呼んで勝手にあなたの家に侵入して、カメラ設置とか……何でもアリだったから」

え？
先生……僕だけじゃなかったの？
前の学校でも二人も性行為してた？
そ、そんな……。

僕はよく分からないけど……自分の頬を涙が伝い落ちてゆくのを感じた。
その間にベッドの上では、先生がお仕置きされてるみたいだった。

美央と由衣夏が先生を真ん中に挟むように座り、美央は先生のペニスを握り、激しくピストン運動し始めた。
由衣夏は中指と薬指をワレメの穴へ目一杯突っ込んで激しく掻き回していたんだ。

「へぇ～。フタナリって初めて見たよ。ホント女性なのにマンコとチンポ付いてるんだね？　しかも媚薬塗ってやったからフル勃起じゃん！　あはは！」

『シコシコシコシコッ！！』

「あはあっ！？　うんんんんっ！！」

「あなたが本来持ってるマンコの方も……同時に指マンしたげるわ。私たちの手コキと指マンで同時にイクのよ。分かった？」

『グチュチュチュチュチュチュッ！！』

「んひいっ！？　あんんんっ！！」

二人の女子高生の責めに本気で感じているみたいだけど……コレってお仕置きなのかな？
気持ち良さそうな声を出して頬を真っ赤に染めて涎を垂らしている先生を見てると……少し安心してきた。
この人たちはこれ以上先生を傷つけないんじゃないか？って。

先生は僕の見てる前でオチンチンから射精しながら同時にオマンコから潮を噴き出していたんだ。
どうやら同時に二つの性器をイカされたみたい。

「はぁ、はぁ、はぁ、な、何者なの？」

「二つの性器を同時にイカされてから言うセリフ？　クスクスクスクス……ほんとウケる！　児童を襲う鬼畜フタナリ女」

「滝川紗絵！　殺人もしていないあなたには少し可哀想だけど……今からあなたの拷問処刑を執行します！　お覚悟を」

ちょ、ちょっと何言ってるんだこの金ピカポニーテールは？

先生を拷問処刑だって！？

ご、拷問ってどうゆう意味だろ？

と、とにかく処刑は殺しちゃうことだよな！？

ヤバい！　ヤバいって！！

「ホントは残酷処刑島で執行する予定だったんだけど……内臓ぶち撒けない拷問処刑ならどうにか今回はＯＫもらったんだ！」

「ドローンで運ぶ手間が省けて助かるよホント」

「でも結局遺体は、海原さんと川原さんが島に運ばなきゃダメなんだけどね……」

二人は先生の身体をベッドに拘束してゆく。

あれだけベルトで巻かれたら全然動けないじゃないか……せ、先生！！

助けに行きたいけど……無茶苦茶美人な女子高生二人は無茶苦茶強いと分かってしまった今、僕は神様に祈ることしかできなかった。

「氷の槍、アイススピア形成！」

「特殊警棒、焼き焼きサンダー！」

「ちょ、ちょっと何？　その命名……焼き焼きサンダーって……由衣夏らしくないわね」

「そ、そうかな？　まあともかく……今回も前も後ろも美央と私で同時に串刺しにしちゃお！」

「同時じゃなく後ろ、前と一本ずつやっちゃおうよ！　どっちもの反応見れるし♡」

もうちょっと……何言ってるか理解できない。
串刺しって……豚や鳥じゃあるまいし……本当に殺しちゃうの？　や、やめてよ！

二人は拘束した先生の股をM字になるよう大きく開かせた。
肛門や膣口がビクビク動いてるのが見える。
先生、怖がってるだろうなぁ。
助けてあげたいけど……うう。

そのままの体勢で更に拘束して立ち上がる美央と由衣夏。
二人がしゃがむたびに、ピンク色のミニスカートから真っ白なパンツが垣間見える。

うっ、女子高生もこんなに美人なら僕も責められたい……。
でも殺されるのは嫌だ！
ってゆうか何を思ってるんだ僕は！？　変なこと考えてる場合じゃない！　せ、先生を殺さないでっ！
助けたくても、怖くて助けられないでいる僕の心の中の葛藤は続く。
「前回はあたしがマンコだったから……今回はアナルいくよ」
「そうね。私もこの変態女にはマンコから膣から子宮までグチャグチャに溶かしてやりたいと思ってたの」
無茶苦茶怖い二人の会話を聞きながら、僕は再び涙が溢れ出してくるのを感じた。
「いやあっ！！　やめて！！　お願いだからやめてぇえっ！！」
「紗絵さん、だっけ？……先にあたしが肛門から口まで氷の槍で串刺しにしちゃうから……安心して。急所をかわして突き刺すから、その時でもまだ生きてる」
「そうそう。次に私のサンダー焼き焼き警棒をその汚いマンコに突っ込んで……口まで貫通させてから電気で膣道とか子宮とかドロドロに溶けるまで焼いたげる♡　その時超激痛が襲って、あなたはもがき苦しみながらあの世へ逝くの」

「ひっ！？　そ、そんな！　お、お願いします！　ホント許して下さいっ！！　お願いだから助けてくださいいいいっ！！」

「小学生児童を犯すとかね……大人が絶対やっちゃダメなことなのよ。分かる？　被害者が受けた心の傷は一生モノだよ」

『ツプッ！！』

「ひいっ！？　つ、冷たいいいいっ！！」

美央の手元のグリップから伸びた氷の槍が先生の肛門へ突っ込まれた。

冷たそうだし痛そうだし……やめてあげて……。

「ほうら、どんどん入っていくよぉ～。この臭そうなきったないお尻の穴に……あ、それとね、肛門と直腸は真っ先に凍りついちゃうからね？」

『ズブブブブ』

「んぎいいいいいっ！　痛い冷たいいいいいっ！！」

『ズブブ！……ジュウウウウウウッ！！』

先生の肛門からドライアイスのような蒸気が噴き出しちゃってる！？

よっぽど冷たいんだろうなぁの槍……もう許してあげてよおお。
僕は恐る恐るながらも、先生の肛門を責める美央の姿を見つめてしまっていた。
「ほらほら、大腸小腸何枚も突き破って胃まできたよ？　痛い？」
「いだいいいいいっ！！　んごおおおおおっ！！　んげえええええええっ！！」
目を大きく見開いたまま絶叫を上げ続ける先生。
ついに美央の氷の槍の切先は、蒸気を噴きながら口から飛び出した。
「よっと！」
『バシュウッ！！……ジュウウウウウウッ！！』
「オゲエエエエッ！！　かはあぁあっ！！」
カエルみたいな格好のままお尻の穴から口まで串刺しにされる先生を見てると、僕まで苦しくて息が止まりそうになってきたよ。
「わあああんっ！！　先生っ！！　紗絵さあああんっ！！　死なないでえええええっ！！　えーんえーん！！」

貫通を確認すると、一度グリップを離して横にかわす美央。

「お尻はおーわりっと！　じゃあ交代ね。」

次は太い警棒みたいなのをシャキーンと伸ばして固定すると、先生の膣口へ押し当てる由衣夏。

綺麗な金髪ポニーテールを後ろへ靡かせると同時に、真っ直ぐに先生の子宮口目指して突っ込んでいった。

『グチュ……ズブブッ！』

「はおおおううう っ……ほがほがほが……」

「子宮口貫いて今子宮の奥よ。ここからは一気にいっちゃうわよぉ？　それえっ！」

『ズボボボボッ！！　バシュシュシュシュシュシュッ！！』

「ぶはあっ！？　ピギィッ！！」

なんてことを……ひとが死ぬところを見てしまうことになるなんて……もう二本も口から飛び出しちゃったら助からないや……。

「先生、先生いいいっ！！……ぐすん、ぐすん」

串刺しにされながらも先生の息がまだあるうちに、美央はサバイバルナイフを手にしてしゃがみ込んだ。
まさかお腹でも切っちゃう？
もう痛いのはやめてあげてよぉ……。

『ズッ！スパァッ！！』

「うごおおおっ！！！！！」

「チンポを切断される痛みもあの世に持っていきなよ！　あはは♪」

『プシューッ！！』

オチンチンの切断面から、かなりの勢いで噴き出す鮮血がまともに僕の顔にかかった。

「わあっ！？　ひいいっ！！」

震える僕の元に、切り取ったオチンチンを持ってやってくる美央。
この人たちは普通じゃない……絶対まともじゃない！
許して……僕まで殺さないで！

男子児童の初恋と性癖（中編）（後書き）

ついに命の糸がこと切れようとしているフタナリ女教師の滝川紗絵。
児童に犯した過ちの代価は、非常に高くついてしまった。
歳上好みな小学生児童、赤松陽一の運命はいかに……。

男子児童の初恋と性癖（後編）（前書き）

まさかの性奴隷児童からの引き留めを受ける美央と由衣夏。
Mに目覚めてしまった男子児童への対応を迫られる女子高生の拷問処刑人の二人であった。

男子児童の初恋と性癖（後編）

「カタキは討ってあげたからね～♪　ほら、鬼畜女の細チンポ！」

「ひっ！？　あわわわ……」

「ちょっときて。滝川紗絵の最期を目の前で見せてあげるから」

「え？　あ、は、はい！」

「フタナリねぇ。ホント不思議だわ。オシッコはチンポから出してたのよね……陰核と尿道口がマンコに無かったから……」

美央は、手にした先生のオチンチンの尿道口から人差し指を突っ込んで、中身の感触を楽しんだ後で、ソレをゴミ箱に投げ込んでいた。

そして僕の手を繋いで連れていく。

「先生のオッパイでも揉んでてあげて。よほど陽一くんのことがタイプだったみたいだからコイツ……」

由衣夏はそう言いながら、先生のオッパイを足の裏でグリグリグリと踏みにじる。

僕は二つの異物を口から飛び出させて、血の泡を噴きながら白目

を剥いて震えている先生の両方の胸を、何度も何度も揉んであげて最期のお別れをしたんだ。

「せ、先生、助けてあげられなくてごめんなさい……僕とエッチしてくれてありがとう。大好きでした」

泣きながら何度も何度もオッパイを揉んでいると、由衣夏に処刑執行を告げられる。

慌てて手を離した僕の横に立ち、オマンコに突っ込まれている警棒みたいなもののスイッチを入れた。

「滝川紗絵……お別れの時だよ。あの世で反省してね？」

「うごうご……おごごご……うううああ」

『カチ！……バリバリバリバリバリバリッ！！』

「おごおおおおおっ！！……ぶくぶくぶくぶくっ！！」

凄まじい勢いの電気が流れて、沸騰した血の泡がドボドボ口から噴き出してきてるよ。

目玉も沸騰しながら飛び出してきて、先生の顔面は少しずつ溶けてゆくように見えた。

「うっ！　おえええっ！！」

思わず吐いてしまう僕の隣で、二人は股間からぶっ込んだ武器をようやく引き抜く。

「あらら……結局子宮だけじゃなくて直腸やアナルまで溶けて垂れ流れてるじゃん！　由衣夏の電撃は凄まじいわね……」

「うん！　入り口と出口、つまり顔と股間の破壊度が強烈だから電撃で焼くのはワクワクしちゃう♪」

僕はその場にへたり込んで動けなくなったまま、目の前で人が串刺しのまま焼き殺された恐怖で、オシッコを漏らしちゃった。

しかもそれが初恋の滝川紗絵先生だったから余計にショックを受けたよ。

「おいキミ！　もう大人とエッチなんかしちゃダメよ」

神崎美央はウインクしながらしゃがみ込んで、僕の頭を撫でてくれる。

隣では唐田由衣夏が電撃棒を先生の遺体のオッパイに当てて、乳首と乳輪までドロドロに溶けるほど焼いていた。

『バリバリバリバリバリ！……ドロドロ……』

「遺体にも容赦ないなぁ由衣夏は……顔なんかもう理科室の模型化しちゃってるし♪」

楽しそうに話す二人だったが、ミニスカートでしゃがまれたら真っ白なパンツが丸見えになっている。
僕は思わず超強い女子高生のおねぇさんにも興奮を覚えたのか、一気にオチンチンが硬くなってきちゃった。

「あれ？……やだ！　あたしのパンツ見て勃起しちゃったの？」

「うっ!?　ご、ごめんなさい！　許して下さいっ!!」

思わず土下座をして謝ってしまう。

「このマセガキめ！」

怒らせたら本当に殺されかねないとゆう恐怖が、僕に無意識に土下座をさせちゃう。

「さてと。美央！　もうすぐ特殊任務省の後片付け部隊がやってくるから……帰ろうか？」

「そだね。由衣夏の大ファンの海原さんね♪」

先生のオッパイ二つと、オヘソの穴まで焼きまくった由衣夏は、ようやく電撃警棒を短く収納してこちらにやってきた。

「じゃあね陽一くん。大人は変なの多いから、歳の変わらない彼女を見つけて真っ当に生きるんだよ？　分かった？」

この衝動は何なんだろう……この美人なおねぇさんたちともエッチがしたくなってきた……。
先生を殺しちゃった人たちなのに……。
いや、エッチじゃなくてもいい……この女子高生たちに性的なイジメをされたい！

う～ん……僕ってやっぱり変態だったのか……。

「うう。わーん！　わーん！」

とりあえずいきなり泣き出したくなってきた僕は、立ち上がった美央の脹脛にかきついて号泣したんだ。

「ちょ、ちょっと！？　どうした少年？」

「あのね、私たち任務が終わったから、もう帰らなくちゃならないの。分かる？」

今度は由衣夏がしゃがみ込んで僕の頭を撫でてくれる。
由衣夏さんのパンツも真っ白だ！
やっぱり女の人の白はいいなぁ……。

美人にイジメられたいだけだったのか僕は……。
自分に情けない気持ちになりながらも衝動を抑えきれない僕は、とんでもない行動に出てしまった。

気づけば美央の脛を股間で挟み、オチンチンを擦り付けてしまっていた。

「きゃっ！？　な、何してんの！？」

「帰る前にぼくを虐めて下さい！　お願いしますぅ～！！」

泣きながら恥も外聞も捨ててしまった僕は、哀れな変態となって女子高生からのＳＭプレイを嘆願している。

「だってさ。小学生のクセにほんとオマセさんねこの子……」

「あれ？　そのセリフどこかで聞いたような……」

しばらく僕から一度離れて、腕組みしながら何やら相談している二人。

綺麗な女子高生二人から裸を見られてるだけで僕のオチンチンは

カッチカチのままだった。

滝川先生、ごめんなさい！

僕は綺麗な歳上のおねぇさんにエッチな責めをされたかっただけだったみたい。

今はあなたに残酷な所業をしたこの二人に、欲情しちゃってます……。

ほんとごめんなさい。

神崎美央と唐田由衣夏は、僕を素っ裸のまま小さな机に四つん這いになる体勢で拘束してゆく。

「いや……やめてください」

「自分で頼んでおいて今更何言ってるの？　この変態」

「うふふ。特別サービスよ。半時間くらいしか時間ないけど私たちがヒィヒィ泣かせてあげる♡　私たちのことは今から様付けで呼びなさい。いいわね？」

「はい！　由衣夏さま！　美央さま！……酷いことはしないで……」

それから五分ほどは平手打ちによるお尻叩きを交互にやってきた。

僕のお尻は真っ赤に腫れ上がり、激痛のあまりにまたオシッコを漏らしちゃった。

「ほらほら！　痛くてチンポ縮んじゃってるじゃん？　Mなんだか

ら痛いほどフルボッキしてみろ！　あはは♡」

『パァンッ！！　スパァンッ！！　パンパンッ！！』

美央さまは楽しそうにそう言いながら、更に激しくお尻を叩いてくる。

ようやく二人からのお尻叩きが終わり、しばらく泣いていたんだけど、今度は由衣夏さまが僕のお尻の肉をかき分けて強制的に拡げられた肛門をじっくり見ている。

隣で美央さまが人差し指をピン！　と立てて冷たく微笑んだ。

「ココは？」

『ピト！』

「あんっ！？」

お尻の穴に、人差し指の先をツンと押し当ててくる美央さま。

これはMにとっては最高に興奮するパターンの……。

「こうしてほしいんでしょ？　ほらあっ♡」

『ズブッ！！』

「はううっ！！」

先生よりベッピンの女子高生の人からこんな……こんな責めされたら……た、たまらないよ……。

「中指も入るかな？　いっくよぉ？　それっ！」

『ズボボ！……メリメリ』

「痛いっ！！　いだあああいっ！！」

「あたしの指二本の方がそこの腐った死体のチンポより太いからねぇ♡　お尻の穴掻き回して射精させたげるから覚悟するのよ？」

『グリリッ！！　グポポポポッ！！』

「んがあっ！！　痛い痛いっ！！　熱いいいいっ！！」

縛られて動くことが出来ない僕は、ひたすら神崎美央さまの指での肛門と直腸責めに腰をビクビクさせながら耐え続けた。

『グリリッ！　グリングリン！……くちゅくちゅ！』

え？
何だ！？
湿ったような音に変わったぞ？
出血したのかな？

怖ぃよぉ……。

「このマセガキ……直腸掻き回してたら腸液タップリ分泌しちゃってるよ……ほんと将来素晴らしいMに成長するわアンタ」

美央さまは僕に呆れて、更に激しくお尻の穴を掻き回し始めた。な、何か変な感じ！？

お尻の穴を責められてるのに射精しちゃいそう……何だこの感覚は！？　き、気持ちいい……。

「あんっ！　あはあっ！　み、美央さま……気持ちいいですぅ〜！あはああっ！！」

「ほらクソガキ！　おねぇさんがケツ穴でイカせてやるからタップリ射精しろ！」

『ぐちゅちゅちゅちゅちゅちゅちゅちゅっ！！』

先生にイカされた時ですら、ココまで気持ちいいと感じたことはなかった。

ハラワタが掻き回されるように痺れるように快感が下半身全体を駆け巡った。

「で、出ちゃう！！　うああっ！！」

『ドクッ！　ドクドクドクドクドク……』

「アナルで……前立腺シゴキまくりでイカされる気分はどう？」

美央さまはイヤらしく微笑みながら二本の指を引き抜き、付着した僕の便と精液を僕の背中に擦り付けて拭き取っている。

あぁ……すごく気持ち良かった。

まだ両脚がガクガク震えてる。

その時、由衣夏さまによって拘束を解かれ、今度は床に仰向けに寝かされた。

「靴履いたままやったら睾丸潰れちゃうから……サービスで靴下も脱いで素足でやったげるわ」

しゃがみ込み、白いパンツが丸見えになる由衣夏さまだったが、喜んでるのも束の間。

右足の裏をピタッと僕のオチンチンと金玉に密着させてくる。

「ま、まさか……」

「そ！そのまさか♡」

『くにゅくにゅ！……ガガガガガガガガッ！！』

「はぁうああああああああっ！？」

すごい脚力で押し付けて振動する由衣夏さまの白くて長い綺麗な脚……パンツが時々垣間見えて少し勃起してきたところに激しい電気アンマを受けて、僕はわずか十秒ほどでまたしても射精してしまったんだ。

『ガガガガッ！！……ドクッ！　ドクドクッ！』

「え！？……まさか早からイッちゃったの？」

「はぁ、はぁ、は、はい！　由衣夏さまの電気アンマでまたまたイッちゃいました……はぁ、はぁ」

「汚い液何度も何度も吐き出しちゃって……将来汁男優にでもなったら？」

そう言いながら僕の顔面で、足の裏に付着した精液を拭き取る。

「ほれほれ！　可愛い顔にザーメン塗ってあげるよ」

「うぶぶぶぶうっ！？」

その屈辱的な行為さえ、何とも言えない興奮が僕の全身を再び襲ったんだ。

「じゃあね変態少年くん♡」

「もしキミが将来女性を泣かせるようなことをしたら、お尻の穴から串刺し刑にしてぶっ殺してあげるから覚悟しててね♡　バイバイ！」

そのまま神崎美央さまと唐田由衣夏さまは、僕に別れの言葉を告げて部屋を出て行ってしまった。

素っ裸のまま追いかけると、庭からドローンが飛び立つのが見える。

ふと思ったことがある。

ベッピンさんは、殆どみんなドローン操縦できるのかなぁ？

男子児童の初恋と性癖（後編）（後書き）

後処理を担当する角刈りのイケメンである海原拓磨と、長髪で後ろ側で髪を括っているイケメンではない川原雄二の二人が部屋に入ってくると、まず素っ裸の赤松陽一を見つける。

海原は近くに置いてあるパンツや制服を渡してあげて、服をきさせてあげた。

「大丈夫かい？　大人の女性に酷いことされたみたいだね？　僕たちはこの担任の方の遺体を……うっ！？　な、なんて凄惨なお姿に……あ、ある島へ遺体を運んで後処理を行う者だ。さ、先にキミを両親の待つ自宅へ送らせてもらうからね？」

「どうも。本当にありがとうございます」

まだ小学生の赤松陽一が体験した女教師とのエッチ。

惚れてしまったその女性の死。

神崎美央と唐田由衣夏の女子高生拷問処刑人による性的虐待……ごっこ。

当の本人が悦びを感じているのなら、女教師も女子高生もどちらの責めも、虐待には当て嵌まらないのかも知れない。

一人の幼い男子児童の心に、強烈なマゾの魂が宿ってしまった一日であった。

残酷処刑島に新たに一つの遺体が加わることになった……。

性的嫌がらせの代償（前編）（前書き）

残酷少女の血を引く二人。
未来でも相変わらずなドＳぶりを発揮する女子高生の凄惨なお仕置きが始まる。

性的嫌がらせの代償（前編）

２１２５年の夏……大都会の東部地方中央に位置する私立赤霧島高等学校。

三年Ｃ組で一時限目の英語の授業が行われていた。

「はい、次は日下くん。この英文を訳してくれる？」

英語担当の女教師、野村美智子が男子生徒である日下海斗の名を呼ぶが、返事はない。

『ズッ！　ズッ！　ズッ！　ズッ！』

「はうっ！　んはっ！　んんっ！　んぎっ！」

国から雇われた拷問処刑人でありながら、三年生の女子生徒でもある神崎美央の膝の上に乗り、上下に激しく揺れている日下の姿を見た野村美智子先生は、即座に違う生徒の名を呼ぶ。

「た、田村くん！　この英文を訳して！」

何が行われてるのかいつものことでだいたい想像がつくのか、代

わりの田村尚輝の名を読んだ後で、頬を真っ赤に染めながらも教壇の上で生徒たちに背を向けてホワイトボードを見つめる。

「ほら、もっと激しく突いて欲しいんでしょ？」

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

艶やかな長い黒髪を揺らしながら、激しく肛門を犯す美央。

「んぎいいいいっ！！　痛いいいいいっ！！　やめてぇっ！！ゆ、許してくださいいいいっ！！」

「あはは♪　やめて欲しくないくせに……あたしの膝とスカートが腸液でぐちょぐちょになっちゃってるじゃん？」

授業中にも関わらず、ペニスバンドを装着して極太ディルドをセットした美央は、同級生の男子生徒を膝上に乗せ、激しく腰を突き上げながらアナルを犯していた。

制服もパンツも全て脱がされて素っ裸にされた日下海斗は、神崎美央の膝の上で号泣しながら肛門の痛みと戦っていたのである。

「一昨日、昨日とアナル拡張調教してあげてるからもうぼちぼちあたしの拳が入るかしら？」

「ひっ！？　ひいい！！　は、入りませんっ！！　死んじゃうから

やめてくださいっ！！」

「うるさい！　抵抗すればケツ穴くり抜いて直腸引きずり出してやるわよ？」

「ひいっ！！　もっと僕を犯してください美央さまぁあっ！！」

「うん。言われなくてもお前の汚いアナルなんてガバガバにしてあげる♡」

『バコバコバコバコバコッ！！』

「ひぎいいいいいっ！！」

隣で頬杖をつきながらそのレイプシーンを見ていた同じく拷問処刑人の女子高生、唐田由衣夏が口を開いた。

「美央、そのオチンチンみたいなディルドって直径４センチくらいあるんじゃない？　すっごい肛門広がってるじゃん？」

「ピンポーン！　正解♪　あたしの指から始まって昨日は３センチディルド、本日は極太４センチディルドでのアナル拡張調教なので～す♡」

「痛そ……可哀想だけどソイツは何度もクラスの女子のお尻触ってたから仕方ないか」

前立腺を抉りまくられ、意思とは反して勃起してくるペニス。
背後からアナルを犯しながら右手でペニスを握りしめる美央。

「はおうっ！？　や、やめて美央さま……」

「だめ。そのままケツマンコ掘られながらみんなの前で射精するの」

『シコシコシコシコ……』

「うはっ！？　うんんんんっ！！」

いきなりシゴき始める美央に、全身を震わせながら力を入れる日下海斗だったが、あまりの綺麗な顔立ちとアイドルのようなオーラを持つ少女からの責めは、M男なら大歓迎なところだが……不幸なことにこの男子生徒はどちらかと言えばSであった。

プライドをズタズタにされながらも、前立腺に快感を覚えさせられてフル勃起してしまう自分を呪いながら、ついには英語の授業中に射精させられる始末。

「ほら、イケ！」

『シュコココココココッ！！』

「イ、イクうっ！！　んんんんっ！！」

猛烈な速度で手コキする美央に最早抵抗も我慢も出来なかった。
夥しい量の白濁液を、美央の机の上と膝の上にぶち撒けてしまう日下。

『ドピュッ！！　ピュピュピュピュピュピュウッ！！』

その瞬間をたまたま見てしまった英語の女教師は、慌てて生徒たちに背を向けて英文を読み始める。
生徒たちはチラチラと何度も美央たちの方を見て、お仕置きを時々観察していた。
美央は指に着いた精液を無理矢理口に捩じ込み、綺麗に舐め取らせた。

「んんん、むごむご……んんん、ペチャペチャ！」

「指の次はあたしの膝！　早く！」

「は、はいっ！！……ペロペロ……ペロペロ」

美央の親友でもあり、恋心までも抱いている唐田由衣夏は、そのシーンを見ながら変にモヤモヤしていた。
一種のヤキモチであることに気付いたか気付かないのか自分でもよく分からないまま日下海斗の後頭部を拳で殴る。

『ガンッ！！』

「ふぎゃあっ！？」

前歯が美央の膝に食い込むほど強く殴られた日下は、びっくりして顔を上げる。

そのまま何度も往復ビンタを食らわせる由衣夏。

「え？　ちょっと……どした？」

思わず美央が由衣夏に訊ねるが、由衣夏はビンタをやめない。

ついに鼻血が噴き出して辺りを鮮血に染めてしまう。

顔を押さえてうずくまり、号泣する日下海斗を見下ろしながら冷たく見下ろす由衣夏を見て、少し動揺する美央だった。

「ごめん、……美央にイカされて膝まで舐めてるトコ見てたらなんか腹立ってきちゃって……ほんとごめん」

告白は既に成されていた為、美央はそれがヤキモチである事に気付いた。

なぜかそれに気付いていないフリをしながらそっと囁く。

「生理かな？　もしかして……由衣夏がそんな風に急にブチ切れる

なんて珍しいし」

　そのまま一時限目の英語の授業が終わり、１０分の休憩時間に入る。

　生徒たちは美央たちの怖さを知っている為、見て見ないフリをしながら雑談したりトイレに行ったりして、次の授業までの時間を過ごした。

「仰向けに寝て両手で股を開いてごらん。全開にだよ？」

「ぐすん、ぐすん、は、はい美央さま……こ、こうですか？」

『パクン……クパァ～！』

　解剖されているカエルのような恥ずかしい格好を取らされる日下海斗……股を開いた瞬間、肛門が３センチほど力無く開いた。

「あら？　ヤダなぁもうユルユルじゃん！」

「ほんとだ！　すっごぉ～い！　さすが美央の調教は激しいわね……もうファストファック出来そうだよ？」

「そうね。次の歴史の授業中にヤッちゃうか！　ちょっとチェックさせてね♡」

『ズブッ！　グチュグチュ！』

「んはあっ！？　あんんっ！！」

美央は、しゃがみ込んでパックリ開いた肛門を覗き込みながら中指と薬指を挿し込み、肛門括約筋の弛み具合を何度も直腸側にある内側から揉みながら確認した。

腸液でヌトヌトだった日下海斗の直腸は、卑猥な音を立てながら18歳の女子高生に何度も何度も二本の指で掻き回される。

「あたしの拳に耐えるられるかな？　お前のケツマンコ……うふふ♡」

「うぐっ、んんっ、んあっ、ぐすん、ぐすん……裂けちゃう死んじゃう……お願いだから許してください……ううう」

「そんなに泣かないでよ。側から見たらあたしたちが悪者みたいに見えちゃうじゃん？」

「そーよそーよ。元々はアンタが女子に痴漢行為しちゃったからお仕置きしてるんだから。いわば正義の制裁！　お仕置きなのよコレは……分かる？」

以前に国の機関である特殊任務省の山西長官からの司令で、同じ東部地方の高校へ出向き、極悪非道なる生徒や先生を拷問や処刑したことがあった。

その時の学校のスカートが気に入った二人は、母校である赤霧島高等学校でも着用するようにしている。

他の女子生徒の制服は、紺色のスカート着用なので美央と由衣夏の桃色スカートの存在は、見た目でもすぐに認識出来るほど可愛く派手であった。

二時限目の授業が始まり、ついに日下海斗への性的暴行のクライマックスを迎える時が来た。

「や、やめてくださいお願いします！　この通りです！」

素っ裸のまま土下座をして、何度も何度も美央と由衣夏に許しを乞うが、美央にその恩赦はかけらもない。

右手の指をグリングリン動かして、アナルファックの準備運動を始めていた。

「ダメよ！　お前は女の敵！　絶対許さない。拳が無事にアナルに入ったら、次はお尻の奥の奥までグチョグチョ音がするくらい直腸掻き回してあげるからね？　えへへ♡」

頬を赤く染めながら、目を細めてエッチな表情を浮かべる美央。

「あの直腸のヌメヌメした感触が堪らないのよね～。腸液……アナル汁をタップリ分泌させてからの音♡」

「やだその言い方……コイツのケツマンコだけじゃなく私まで濡れ

てきちゃったじゃん……」

「あはは……性的暴行は興奮しちゃうよねぇ毎回毎回♪」

由衣夏は額を床に擦り付けるように後頭部に足の裏を乗せて、グリグリと押し付ける。

「痛いいいっ！　や、やめてええっ！！」

「もう諦めなさい。男が土下座なんてみっともないわよ？」

「そ、そんなぁ……4センチでもケツがユルユルになっちゃったのに！　美央さまの拳なんて突っ込まれたら……し、死んじゃいますぅ……うわーん！　うわーん！」

ついに土下座をしたまま号泣し始めてしまう日下海斗。

由衣夏は髪の毛を鷲掴みにして無理矢理立たせると、胸とお腹を机の上に密着するように革のバンドで拘束してゆく。

「両膝はこの椅子の上に乗せてね。はい、股をできるだけ開いてぇ～。こら！　もっと開くでしょ？」

「やめ、やめてええ！　お願いします由衣夏さまぁ～！　わーんわーん！」

可哀想なほど泣き続けるも唐田由衣夏は許してくれず、腰と両手と両脚、両足首をそれぞれ机と二つの椅子に器用に拘束し終えてしまうのであった。

歴史の先生が黙々とホワイトボードに偉人の名を書いてゆく中、生き地獄を味わう羽目になる哀れな男子生徒は泣きながら震えながらその時を迎える。

「今度はその格好で分かってると思うけど……バックでやったげるからね？」

「ひ、ひぃぃぃ……やめて許して……ううう」

『ジョロロロロ……プシャー』

恐怖のあまり、小便を漏らしてしまう日下海斗。

「あれぇ？　オシッコ漏らしちゃうほどビビってるんだぁ？　あはは！　教室の床を汚した罰もしっかり付け加えてあげるから覚悟しておきなさいよ？」

そう言いながら血止めの注射を臀部に打つ。

「肛門の血ってすごい勢いで飛び散っちゃうからね。制服汚された

くないから……少し痛い注射だけど我慢してね？」

『ズッ！　ぷちゅううう〜』

「ひうっ！？……痛いっ！！　んぎぎぎぎ」

「さぁて逆レイプ！　いっちょヤッちゃいますかあっ♪　お邪魔しまーす♡」

まず人差し指と中指を閉まり切らない緩んだ肛門へゆっくり挿し込む美央。

「ほら、ここかなぁ？」

『つぷっ！　ずぶぶぶぶ！』

「ひあっ！？　許して下さい美央さまっ！　い、嫌だああっ！！」

由衣夏は日下海斗の顔の真横へお尻を置き、脚を組んで苦悶の表情を見守る。

そっと頭を撫でながら冷たく囁きかけた。

「美央のフィストファックを受けたら、アンタのアナルは一生閉じなくなっちゃうからね？　毎日オムツ付けないと学校来れなくなっちゃうわよ？」

「そ、そんなぁ！？　や、やめてええっ！！」

「やめて下さい美央さま、でしょ？　えい！」

『ガボオッ！！……メリメリ……ブチブチ！』

「んぎゃあああおおおおおっ！！」

美央の拳が半分ほど肛門へブチ込まれた。

瀕死の肛門括約筋はついに悲鳴をあげ、ヒダヒダが全て断裂してしまう。

この時点で美央の拳の最大幅、７センチほども拡張されてしまった肛門は、完全に破壊されてしまうのだった。

「すっごぉ～い！　こんなに開いちゃうんだ？　あはは！　いっくよぉ？　更に全部飲み込んじゃええっ！！」

『ボコオッ！！』

「ぐわあああああああああっ！！」

ついに美央の右手は、手首までずっぽりと直腸内へめり込んでしまった。

「痛い？」

「アバババババッ！！　ふんぎいいいっ！！」

顔を真っ赤にして涎を垂らしながら激痛を訴える日下海斗だったが、美央は冷たく微笑みかけながら何度も出し入れし始める。

「出し入れ運動開始ぃ～！　それそれそれぇ♡」

『ズボッ！　ボコオッ！　ズボッ！　ボコオッ！』

ビクビクしながら激痛のあまり意識を失ってしまう日下海斗だった……。

性的嫌がらせの代償（前編）（後書き）

人生で初めての気絶するレベルの激痛を味あわされた１８歳の男子生徒、日下海斗。

美央と由衣夏の性的虐待はいつまで続けられるのか……。

束の間の眠りから目覚めた時に、彼はそれを理解することとなるのであった。

性的嫌がらせの代償（後編）（前書き）

意識は戻っても状況は変わることはない。
更なる陵辱が日下海斗を待ち受ける。

性的嫌がらせの代償（後編）

股間に響く鈍痛……暗闇の世界から記憶が戻る引き金となったのはその痛みであった。

「ぐわあっ！？」

いきなり目覚めてとりあえず叫んでしまう日下海斗。

その目に飛び込んできた光景は、隣のＢ組の男子生徒が顔面をボコボコに腫らしたまま制服を脱がされている場面だ。

「あらお目覚め？」

「うう……痛っ！？　け、ケツが痛い……ううう」

「お前のケツマンコだけどね……３センチくらい開いたままになっちゃってるからしばらく垂れ流しになるわ。ちゃんとオムツ付けて生活しなさいね？」

Ｂ組の男子生徒の名は新田雅之。

美男子でそこそこモテる男だったが、階段で女子のスカートを覗く趣味を持っていたため、最近では女子から避けられるほどに落ちぶれていた。

その新田のパンツを脱がしながら美央が日下に忠告する。

「そ、そんな……いたた」

「新田って言ったわねお前……あたしのクラスの女子のパンツを覗くだなんて……よくもできたもんだそんなこと」

足首まで完全にパンツを脱がせ終わると、強制勃起薬を会陰部に注射する美央。

恐怖心で震えながらも、意思に反して大きくなるペニス。

「用意できたよ由衣夏」

「はーい。ほらこっちへ来なさい日下」

「う、うう、は、はい」

由衣夏に髪の毛を鷲掴みにされて無理矢理立たされた日下は、美央と新田の隣へ連行される。

「舐めろ」

唐突に出た神崎美央の言葉を理解できない日下海斗は、キョトンとしながら目をパチパチさせていた。

『パァンッ！！』

「ひぶうっ！？」

美央はいきなり、日下の頬に強烈な平手打ちを入れる。
左頬を押さえながら涙を流す日下に、今度は由衣夏が冷たく囁きかける。

「勃起してるコイツのオチンチンを舐めろと言ってるの。分かる？」

「うひっ！？　そ、そんなことできない！　ゆ、許してください！」

美央が日下の正面に膝をついて座り、ニコッと微笑みかけると、怒涛の往復ビンタラッシュが始まった。
涙と涎を左右に振り撒きながら、激しく顔が左右に振られる。
男の平手打ちより強力な美央のそれは、数秒で日下を改心させせることになる。

「ひぎいいいいっ！！　わ、分かりましたっ！！　な、舐めますからやめてええええっ！！　痛いいいいっ！！」

「最初から素直にしてたら痛い目に合わなくてすむの。いい加減理解しなさいバカ！」

『ガツッ！……ギュウウウウウッ！！』

「ギャァアアアアッ！！」

日下の睾丸を握りしめてかなりの握力で締め付ける。
美央の１００近い握力は、本気でやれば睾丸を完全に潰してしまうことも可能だった。

「今度逆らったらキンタマぶっ潰すからね？」

「ひいい、は、はい。ごめんなさい美央さま！　ごめんなさい！」

「じゃあもういいから……早く新田のチンポ舐めろ」

「……は、はい」

そっと新田の股間に顔を近づけて、勃起した大きなペニス。右手で握り込むと、泣きながら亀頭部をそっと咥え込む。

「パク……」

「おい！？　や、やめろっ！！　お前何やってるか分かってるのかよ！？　おいっ！！」

必死で叫ぶ新田だったが、美央と由衣夏の命令通りに根元まで咥

え込んで、また雁首まで吐き出し、また根元まで飲み込んで……口でのピストン運動を激しく繰り返す日下。

「グポッグポッグポッグポッ！！」

「あはは！　激しいフェラだこと♪　同性の性器を舐められるなんて幸せでしょ？」

「ペチャペチャ！　むごむご……は、はい美央さま」

しばらく二人の残酷少女が見守る中、強制フェラを続けさせられる日下だった。

先ほど打たれた注射は、強制勃起薬と媚薬も含まれているため、全く興味のない同性からのフェラに対しても激しく快感を得てしまう新田であった。

「うっ、うう」

「どうした新田？　日下のフェラが気持ちぃいんでしょ？」

「うはっ、ううう！……イ、イキそう」

「口の中にたっぷり出してあげたら？」

「うっ！　イッ！　イクうううううっ！！」

同性である日下の口内へ大量の精液を噴き出す新田。

「おごっ!?　むごむごっ!!　ごほごほっ!!……ごっくん!!」

あまりにも大量だったため、喉の奥までへりかけられた日下は、むせかえってそのまま勢いで飲みこんでしまった。

「飲みこむように命令しようと思ってたら……勝手に飲んじゃったのね?　従順な下僕だこと♡」

唐田由衣夏は、目を細めながら見下したように微笑みながら呟いた。

「次は……そうだ!　日下のチンポを新田のケツマンコにぶち込んで犯してあげて!　正常位で抱き合ったままキスしながらね!」

「ええ〜っ!?　そんなシチュエーション私興奮しちゃうじゃん!」

美央の提案に腐女子の如く頬を紅く染めながら喜ぶ由衣夏。

抵抗したいのはやまやまだが、とてつもなく酷い目に遭うことは容易に推測できた二人の男子生徒は、あまりの我の醜態に啜り泣きをしながらも、美央たちの指図通りの体勢を取る。

「そうそう。新田が仰向けに下に寝て……日下は上からうつ伏せで正常位でね！　新田も上の制服脱いで素っ裸になってくれる？」

「は、はい」

背後から由衣夏が日下の会陰部へ注射を打つ。

「ほら、ビンビンにフルボッキさせて新田のケツマンコ犯してあげて♡　今では女子の敵だけど学年一の美少年だから犯し甲斐があるでしょ？　あはは！」

『プスッ！……プチュウウウウウゥッ！！』

「痛いっ！？　あああああっ！」

新田の萎れてしまったペニスがヘソに当たる中、ムクムクと膨らむ海綿体。
陰嚢辺りに勃起したペニスが食い込む。

「うう……ほ、本気で挿れるのかよ？　お、おい？」

「もう諦めようぜ……命令聞かないとコイツら本気で俺たちのキンタマ潰しちゃうぞ？」

耳元でコソコソ会話する日下と新田だったが、地獄耳の美央は完全に聞き取ってしまっていた。

「コイツら？　あたしたちのことコイツらって言ったわよね今？」

「ひっ!?　ご、ごめんなさい」

『ズボオッ！！』

「ふんぎいいいいっ！！」

スニーカーを履いている足の爪先部分が半開きの肛門へ半分ほどまで深くブッ刺さる。

前立腺を直撃した美央の足は、さらに深く直腸へ侵入していった。

『グボボボ……グチュチュチュ！』

「ほら！　汚い穴にどんどん足が食い込んでいくわよぉ？　うふふ♡」

「ぎゃあああああっ！！　死ぬううううっ！！」

『ドピッ！！……ドクドク！！』

前立腺を激しく足で擦られた日下は思わず射精してしまった。

「痛い？　あっ！？　何射精しちゃてんのよ？　コイツの中に出すセーエキちゃんと残してる？　このままあたしの足を膝くらいまで突っ込んでやろうかな……ケツマンコから内臓破壊してやるわよ？」

「ひいいっ！　許してください美央さまっ！！　ごめんなさいごめんなさいいいいいっ！！　ひいいいいっ！！」

ようやく足を引き抜いた頃には、腸液と鮮血で日下の内股から床までもが真っ赤に染まっていた。

「血止め打ってたからよかったけど……それでもこれだけ出血しちゃうのね……アナルのヒダヒダ裂いちゃってるから仕方ないか。じゃあ早く挿入しちゃって！」

「うう、は、はい」

『ツプッ！……メリメリ』

「ぐわっ！？　痛いいいいっ！！」

人生で初めての大きな異物に思わず絶叫してしまう新田だったが、そのまま激しく腰を振られて同性にアナル処女を奪われてゆく。

『バコバコバコバコバコバコバコッ！！』

「あぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃあっ！？　ややめろおおおっ！！　裂けるううっ！！　痛あああああっ！！」

スケベそうにニヤけながら腕組みして見守る美央と由衣夏。

「男前が不細工に犯されてるぅ♡」

「日下は不細工なのか……あたしには普通に見えるけどね」

新田は由衣夏のタイプだったみたいだが、今は美央のことを本気で愛してるため、犯されるシーンを見て興奮する程度の感情だけであった。

由衣夏本人は美央に犯されたい願望をもっていたからである。

そのまま新田の直腸へ中出しを済ませた日下が、ゆっくりとペニスを引き抜く。

ドクドクと垂れ流れてくる腸液と精液と血液。

「あはは！　三点セットでドクドク噴き出してきてるぅ♡」

「ほんと！　ヤラシイなぁコイツら♡」

泣きじゃくる二人を土下座させて、日下海斗の後頭部へ足の裏を置きグリグリと床に額を擦り付けさせる美央。

その隣では由衣夏が新田雅之へ同じ行為をしていた。

すでに休憩時間も終わり、三時限目の国語の授業も終わりかけていた頃、ようやく服を着ることを許された日下は、パンツを履きながら半開きの肛門に触れて絶望感に打ちひしがれた。

「さてと……男前のアンタはこのまま全ての授業が終わるまで教室の最後部で土下座してなさい。素っ裸のままでね」

「そ、そんな……許してください……ぐすん、ぐすん」

そして全ての授業が終わり、教師も生徒も帰路についた。

「じゃあ行こうか新田雅之。分かってるわよね？」

「え？　な、なにをですか？」

「昨夜から東部中央公園で母親が目を離したすきに行方不明になってる４歳の女の子……眠らせてバッグに詰め込んで帰宅……両親が旅行中なのをいいことに散々イタズラして……」

神崎美央がそこまで話したところで唐田由衣夏の方がびっくりして大きな声をあげてしまう。

「ええっ！？　ちょ、ちょっと待ってよ美央！　じゃあコイツが幼

女にイタズラして殺して遺体損壊までして用水路に遺棄したって事件の犯人なの！？」

「黙っててごめん……残酷処刑島へ連行する直前まで他言無用されてたんだ山西長官から」

「うう……なんかムカつくんだけど山西長官め……私も拷問処刑人なのに……了解。じゃあこのド鬼畜野郎本人をここで納得させた後、連行しちゃいましょ！」

美央と由衣夏は指の骨を鳴らしながらすぐには認めないと読んでリンチの準備運動を始める。

「赤崎由真ちゃん４歳……お前が誘拐してイタズラしてオマンコを指で散々掻き回して……さらに大陰唇ごと肛門までくり抜いて……お腹や乳首を切り刻んで……遺体は両親に見せられないほど傷んでたみたいね」

凄惨な殺戮内容を、一つ一つ細かく説明する美央。

「よ、よくもそこまで幼女に酷いことできるもんねアンタ？聞いてるだけで寒気がしちゃう。素直に私たちと一緒にドローンで処刑場へ赴くか……殴り合いして万が一の逃亡にかけるか……どちらか選びなよ」

土下座から痺れた足を震わせながらようやく立ち上がる新田だったが、表情は青ざめていた。

「あ、あの公園のあの場所の防犯カメラは死角だったはず……ど、どうしてバレたんだ？　お、俺の一生はもう台無しだ……ちくしょう！」

「何が一生台無しだよ。お前はこの神崎美央さまと唐田由衣夏さまによって拷問された挙句……本日即地獄へ行くんだよ！　覚悟しろ！」

「痺れが取れるまで待ってあげるから、好きな方にかかってきて」

由衣夏にそう言われて、最期の足掻きで新田が襲いかかったのは……由衣夏だった。

想像に容易く数秒で関節を極められて、両腕の肘の骨をへし折られる。

『ギュウウウッ！……バキッ！！』

「がぎゃあああああっ！！　いだだだだっ！！」

「はい。勝負あり。あ、一つ教えておいてあげるけど……私にかかってきた事への代償として……拷問で苦しむ時間が確実に増えたからね？　当たり前だけど」

「そ、そんなぁ……ううう、噂に聞いた事がある拷問処刑人女子高生って……まさか」

「うん。あたしたちのことだよ。そんな噂が流れてるの何かヤダなぁ」

そのまま両脇を抱えられながら、屋上のドローンへと続く階段を上がってゆく新田。

啜り泣きながら自分の運命を想像する。

それが少しずつ現実のものとなってくると、号泣に変わった。

「許してぇえっ！　もう二度と子供に乱暴とかしませんからぁっ！！　お願いしますぅっ！！　うおーん！　うおーん！」

「どんなに泣き喚こうが命乞いしようが無駄だよ。イタズラされて残虐に殺された幼女のことを思うと、絶対にカタキを討たないとね」

「そうそう。さぁ着いたわよ。ドローンに乗りなさい」

涙が枯れるほど泣いた新田雅之は、美央と由衣夏に強引に搭乗させられて、黄昏れ色に染まりつつある大空をいざ残酷処刑島へ向かって飛び立っていった。

――――夕方の残酷処刑島。

死刑囚を乗せたドローンはゆっくりと島へ着陸する。

二人の女子高生に無理矢理引きずり下ろされて、複数の拷問部屋がある場所へ連行されてゆく新田雅之だった。

その部屋は、殺風景な場所に冷たい平屋のコンクリートで覆われていた。

「さてと。ここが色んな拷問が可能な部屋がたくさんある訳なんだけど……とりあえずお外で楽しみたくない？」

「そだね～。私もとりあえず殴る蹴るを楽しみたいな。真っ暗になる前に」

美央の提案に賛成する由衣夏。

素っ裸のまま両肘をへし折られたまま、女子高生二人による拷問とゆう名のリンチが始まる。

美央の膝蹴りがみぞおちに突き刺さる。

『ドッ！！』

「がはあっ！！」

一撃で膝をつき崩れ込む新田だったが、間髪入れずに由衣夏の膝

が顔面に入る。
　前歯四本と鼻の骨がへし折られ、勢いよく鼻血が噴き出す。
　肘が折られているため、まともに顔も押さえられないまま激痛で叫びまくるしか出来ない状態で、前のめりに額を地面に打ち付けるように倒れた。

「あはは。土下座してるみたいに倒れちゃって……面白ろーい♪　でもまだまだこれからだよ？」

　美央はそう言いながら、髪の毛を鷲掴みにして強引に顔を上げさせる。
　そのまま背後に周り、右腕を首に回して締め上げてゆく。

『ギュウウウウウウッ！！』

「うぐっ！？　んううううっ！！」

　そのまま落ちてしまい、完全に意識が飛んでしまう。
　暗闇の世界から元の世界へ引き戻されたのは、顔面の焼けるような激痛によるものだった。
　由衣夏によってひたすら顔面を左右の拳で殴られ続けている自分にふと気付く新田雅之。

『バキバキッ！！　ドカッ！！　グシャッ！！』

「あがががががあっ！？　や、やめでえぇぇぇっ！！」

顔面をボコボコに腫らして小便を漏らす。

美央は仰向けに寝させた新田の顔面にお尻を置き、両脚で胴体を極めた。

そのまま新田の両脚を引き上げてマングリ返しの体勢で固める。

「ほらぁ～。お前のきったないアナルが丸見えよぉ？　由衣夏！　お願い」

「はーい！……色んな意味で臭いのイヤだから便抜いとこうねぇ？　ほら、臭いお尻の穴にくれてやるよ！」

『プス！……プチュウウウウウ！！』

由衣夏は、グリセリン濃度８７％の５００ｍｌ入り特大浣腸器で直腸へ注入してゆく。

「はひいいいい～っ！！　冷たいいいいっ！！」

新田が排便に至るまでの間も、無理矢理立たせては殴る蹴るを繰り返す二人の美少女。

「やめでええ～！！　じぬぅううっ！！」

『ブリブリブリブリッ！！』

「やっと出たわね。透明の液に変わるまで繰り返すから」

由衣夏は更に三回、新田に浣腸しては排便を繰り返させると、ようやく透明の液しか出なくなるのを確認してから拷問部屋へ連行していった。

「やめて……お願いです。死にたくないぃぃぃ～」

「同性の日下にアナル犯されて恥ずかしくてもう生きていけないでしょ？」

神崎美央は呆れ顔で学校での回想をする。

「いえ！　それでも生きていきたいですぅ」

「あんな小さな女の子に酷いことして、更に殺しちゃって……本気で許されると思ってる？　もうアンタは死ぬしかないよね？」

唐田由衣夏は被害者の幼女の無念を想い、いい加減死を受け入れ

るよう促す。

「ぐすぐす……うわーん！　うわーん！」

もう何を言っても許してもらえそうもないことを悟ると、ひたすら怖くて涙が止まらなくなる。

美央と由衣夏に始末されるとゆうことは、本当に恐ろしいのは死そのものではなく、彼女たちの拷問方法であることに新田雅之はこの時まだ気付いていなかった。

まず最初に収監されたのは水責めの部屋。

大きな車輪に背筋を伸ばしてのけぞるように拘束されて水槽の中の水中と空気中を半々くらいで回転させられる。

水中では息を止めないと溺死してしまうため、必死になってもがくが、美央はハンドルの回転を早めたり遅めたり緩急つけるやり方をするため、なかなかタイミングを合わせづらく、何度も水を飲み込んでは死ぬほどむせかえるハメになった。

「ごほっ！　ごほっ！　はぁはぁはぁはぁ！」

「次で100回目。よく溺死しないで耐えてくれたわね。褒めて遣わすぞぉ新田雅之」

『バシャ！…………ザパァッ！』

「ゴボボッ！　ごほごほごほっ！！……はぁはぁはぁはぁ」

水車から解放された新田は、速攻で火責めの部屋へ連行される。
大きな鉄板の上に登らされて、下から火を点けられる。
残酷焼きのように熱された鉄板の上を転がりまわるが、立っていれば足の裏、座れば臀部、寝転がれば腹部や背中と、容赦なく皮膚を焼いてゆく。

「ギャァアアアアアッ！！　熱い熱いいいいいいいっ！！」

「あははは！　ほらほら、もっと必死でもがいて焼かれる部位を変えていかないと……真皮どころかレベルＩＩＩの皮下組織まで焼けちゃうぞお♡」

「残念ながらもう全身レベルＩＩＩまで焼けちゃってるみたいよ？　少し火加減が強すぎたかな？」

死のダンスを見ながら笑い転げる美央に対して、由衣夏は少し心配している。
凶悪犯を早く死なせてしまえばそれだけ楽に殺すことになり、面白くなくなるからであった。

スイッチを押して炎を止めて巨大な鉄板を回転させると、鈍い音を立てて床に全身を強打する新田。

「んぎぎぎ……熱い痛い……うあああああ」

「よく焼けたわねぇ？　白くふやけて黒くただれて……もう全身殆ど感覚無くなってない？」

冷たく笑いながら囁きかけ、思いっきりお尻を蹴飛ばす美央。

『ドカッ！……ズルルルルッ！』

「あう……あううううあああ」

足の裏で蹴った右側の臀部の皮がズルリと剥けて、筋肉組織が丸見えになってしまう。

発狂しそうになるほどの激烈な痛みが新田の全身を襲うが、喉が蒸気で焼けて声がまともに出なくなってしまっていた。

「やだなぁ。汚いお尻の皮が私の足の裏にくっついちゃったじゃん……ついでに左側のケツ皮も剥いてあげるね。えい！」

『ドカッ！……ズルリンッ！！』

「ぐわあああっ！？　ううあううあうう～！」

美央はそのまま背中と腹部も足で蹴り転がしながら、火傷している範囲の皮を、足の裏で剥ぎ取っていった。

枯れた声で必死に叫ぶが、所詮焼けた喉では小鳥のさえずりと変わらない。

次の部屋では、革の鞭による百叩きが執行される。
両手を天井から降りたロープで拘束され、立ったままでの鞭打ち。
金髪ポニーテールを靡かせながら、バシバシと引っ叩く唐田由衣夏の鞭打ちは凄惨を極め、火傷している部位の皮と肉が四方八方に飛び散っていた。

「ほらあっ！　全身の皮が剥いでやろうか？」

『バシイッ！！　ビシイッ！！　パァンッ！！』

「ほげえええええっ！　やめでええっ！　じぬううううっ！！」

百叩きが終わる頃には顔面の皮までも殆ど剥かれてしまっていた。
由衣夏による、満遍なく血みどろにする鞭打ちのテクニックである。
性器だけは後の楽しみに無傷で残していた。

「白目剥いちゃって……また死んじゃダメだよぉ？」

「もうイヤだああっ！！　いだい！　いだいよおおっ！！　もう早く殺してくれぇっ！！」

「アハハハ♪　ついに“殺してくれ”……を頂きましたぁ♡」

「うふふ♪　どうしたの？　あれだけ死にたくない死にたくないって何度も言ってたのに？」

そう言いながら美央と由衣夏は車椅子に無理矢理新田雅之を座らせると、また隣の部屋へ移動する。

「さてと。この部屋は四肢切断の部屋だよ。小さく可愛くしてあげる♡」

美央は優しく微笑みかけながらベッドへ胴体と手足首、首を拘束してゆく。

『ヴィイイインッ！！』

エンジン音が、けたたましく鳴り響く軽くて切れ味抜群のチェーンソー。

「腕からいこうか。両腕、両脚、チンポの順でいく？」

「あはは！　そんな物騒なモノでオチンチンはオーバーキルだなぁ……」

「てへへ！　それもそっか。とりあえずダルマさんにしちゃおう」

時間をかけてゆっくりと四肢切断してゆく美央。

ある程度の痛み止め麻酔薬と血止めの薬は注射しているが、それでも全身レベルIIIの大火傷と、切り刻まれる激痛はかなりのショックを新田に与えることとなる。

「ふんぎいいいっ！　うぎぎぎぎいっ！　お、お願いです……こ、殺して……く、くだ……さい」

切断されて短くなった手脚をパタパタ動かしながら必死に激痛と戦うが、少しずつ意識が薄らいでくることに気づく。
新田雅之自身が、もう人生最期の時だと悟り始めた瞬間だった。

由衣夏はギザギザがかなりイカつい大型ペンチを手に取り、新田のペニスの雁首を軽く挟む。

「切らないで引きちぎっちゃおうかな？　ね！　美央」

「それも面白そうだけど……先キンタマ袋破壊して生の睾丸飛び出させちゃおうよ」

「や、やめれぇ……あううう」

「やめない。男前の生の睾丸、見せてもらうわよ？　えいっ！」

陰嚢の真ん中を挟み込み、思いっきり引き抜くと、挟んだ部分の皮が引きちぎられ、生の睾丸が飛び出した。

管に繋がったままベッドの上にポトリと落ちる二つの白い玉に、二人の残酷少女は興奮を抑えきれない。

「やだエッチ～♡　生のキンタマ飛び出しちゃったぁ！」

由衣夏は生の睾丸を指先で摘み、クリクリと感触を楽しむ。
その間に美央はペニスを雁首からメスで切断すると、手にしたグリップから氷の槍を成製する。

「もう限界そうだから……生きてるうちに串刺しにしてあげるね？」

「移動中に死なれたらつまらないし。どの部屋にも遺体遺棄装置付いてるから同じことよね」

由衣夏も、新田雅之に死なれる前に串刺し刑に賛同した。

「さてと。ダルマ男の串刺しショーだよぉ。ここ？　哀れな美男子のアナルは？」

『ツプッ！……ズブブブブ！』

「ふぎっ！？　あううう」

『ズボボボ！……メリメリブチブチブチッ！』

直腸を通過した氷の槍は、小腸を何枚も突き破りながら口へ向かって貫通していった。

「ぴぎぃぃぃぃっ！！」

「ほらほら、全身大火傷で四肢切断されてアナル串刺しなんて……とっても哀れだよねぇ新田くん？」

『ズブブブッ！　バシュウッ！！』

「ごぽおっ！！！！」

『ビクビクビクビクッ！！』

ついに口から飛び出した氷の槍。
上の口と下の口から血の泡を噴き出しながら激しく痙攣し始める新田雅之。

１８歳の卑劣な犯罪者は、貫通された後も１０分ほど痙攣を続け、もがき苦しみながら死んでいった。

「新田雅之の死亡確認！　拷問処刑完了」

「りょーかい♪」

美央と由衣夏は拷問部屋を出て、床を落とすスイッチを入れる。
遺体は地下の焼却炉へ転がり落ち、再び閉じた床は自動清掃装置が稼働して数分で元通りとなった。

残酷処刑島もすっかり日は落ちて、真っ暗闇の中、電池の灯りを頼りにドローンへと乗り込む二人。

「さぁ帰ろうか」

「その前にちょっと……」

唐田由衣夏の悪いクセが始まったことを瞬時に理解した神崎美央は、もうすでに要求を受け入れることに慣れてきていた。

「美央……前と後ろ……どっちも挿れて」

「もう……分かったからそんな強く抱きつかないで！」

「ごめん！」

室内灯の薄明かりの中、愛した同性の親友である美央に、何度もイカせてもらう由衣夏だった。

「こう？　気持ちいい？」

『クチュクチュ！　ズプズプッ！！』

「あんっ！　やあっ！　お尻の方も二本挿れて♡」

「はぁ。はいはい」

半時間で三回ほどイカせてもらった後、ようやく離陸させてもらえることになる。
由衣夏の愛液がタップリ付着した指を、ティッシュで綺麗に拭き取ると、操縦桿を握ってドローンを漆黒の大空へと離陸させる美央だった。

性的嫌がらせの代償（後編）（後書き）

幼女に手を出した最も卑劣な犯罪者、新田雅之は、拷問処刑人女子高生二人によって、この世の生き地獄を味合わされた挙句にあの世へと旅立った。

拷問処刑を執行したところで幼女が生き返ることはないが、遺族の気持ちに少しでも応えられた筈である。

残酷処刑島に一つの新たな遺骨が加わった。

妹たち（前編）（前書き）

楽しくショッピングモールへお出掛けする二人の女子高生。
学生らしく心から楽しく過ごす週末のひと時であった。

妹たち（前編）

「空って渋滞がないから楽で良いよね！」

「うん！　あたしは高い所苦手だからちょっと怖いけどね……」

「え？　美央はそんな風に見えないけど……」

週末の土曜日、女子高生拷問処刑人である神崎美央と唐田由衣夏の二人は、ドローン飛行での食事に出掛けていた。

規模の大きなショッピングモールの屋上には、救急ヘリ用のヘリポートと、数少ないドローン乗りと操縦士付きのドローン利用客の為に、平均五機分くらいのドローンポートが用意されていた。

昨今では世界何十国もの美味しい料理をオインモールで堪能出来るとあって、東部地方ではダントツ一番人気のショッピングモールである。

この日は由衣夏の希望で、フランス料理店での食事となった。

「やっぱりエスカルゴって美味しいよね♪　美央は苦手だった？」

「うん。這ってるところを見たらどう見てもナメクジだもん。絶対無理」

「う……ナメクジとか言われるとなんか気持ち悪いな確かに……ま、でも美味しいからいっか！」

皿に並べられた八つのエスカルゴを、結局全て一人で平らげる由衣夏。

二人で違うコースを注文して様々なフランス料理を堪能した後、私服や靴を買い漁り、大満足して屋上へ向かうのであった。

拷問処刑執行人としての給与は年収1億円を超えており、すでに高校や大学に通わなくても将来食べていけるレベルであったが、やはり学生生活を楽しんでいる二人にはお金より暇つぶしである。

「人生楽しんだもん勝ち！　って昔のアイドルが言ってたけどホントよね」

買い物袋をドローンに積み込みながら、笑顔で語る由衣夏。

「うん。人生は暇つぶしとか言ってる人もいたけどそれも正解だと思う」

「お金は腐るほどあるけど……結構楽しいもんね女子高生は♪」

日も少し傾きかけた午後四時頃、ドローンは大空へ舞い上がる。

「あのさ美央」

「ん？」

「時々思うんだけど……私たちの先祖も拷問処刑人じゃん？」

「そうね。おばあちゃんのお母さんに当たるのかな？　お母さんのおばあちゃん？　ん？　あれ？　まぁ確かあたしの先祖の執行人の名前は“莉央”って聞いてる。小学生の頃からサイボーグかと疑うほど強かったみたい」

「へぇ〜。サイボーグって……無茶苦茶凄かったのね……。私のご先祖様は……漢字は違うけど同じ名前の“唯香”って言ってた」

「由衣夏も名前聞いてたんだ。でもそれがどうしたの？」

「……処刑してきた罪人たちの遺族たちに……恨まれてなかったのかな？」

由衣夏の質問に少し沈黙する美央。

「その事なんだけど……まだ由衣夏に話してなかったのね、ごめん。現代では遺族に逮捕、監禁、処刑執行と報告してるけど昔はその報告をしていなかったみたいなの」

「え？　じゃあ遺族からしてみれば、拷問処刑された家族のことは……」

「そう。身内が処刑されたこともわからないまま一生過ごすことになってたみたい。拷問処刑とゆう特殊な処刑を執行するにあたっての遺族への配慮かな？　要するに国からは行方不明者として扱われたわけ」

「……そうなんだ。１００年前の時代でも年間何千人も行方不明者出てるけど……その内の数パーセントは拷問処刑された人も含まれてたのね」

「そう。今は遺族に処刑されたことは報告されてるけど……女子高生のあたしたちが執行してるなんてことは、口が裂けても国が外には出さない極秘事項だから安心して。命を狙われるなんてことはないからね」

「うん。処刑されたことを知らされるのが良きなのか……行方不明となって心配したまま少しずつ忘れ去られてゆくのが良きなのか……難しい問題だね」

「あたしなら妹たちがもし処刑されたらきちんと報告して欲しいけどなぁ。それは人によるかもね」

「そりゃそうだ。逆に知らぬが仏って言葉もあるし……」

そのまま美央の操縦するドローンは、由衣夏の家を通り越してゆく。

「あれ？　私の家過ぎちゃったよ？」

「ちょっとあたしんちへ寄ってくれる？　会わせたい奴らがいるから」

「奴ら？　あ！　二人の妹さん？　何年も会ってないから会いたい会いたい！！」

「あはは……アイツら更に悪ガキ化しちゃってるから由衣夏に失礼しちゃうかもだけど……」

「お父さん亡くしてから五年くらいアメリカのおじいちゃんちで暮らしてたんだよね？　お母さんとは仲直りできたってこと？」

「まぁ……どうにかだけど。いまだに少しぎこちないけどね」

神崎美央の自宅の庭へ着陸するドローン。

そこへ駆け寄ってくる二人の女子小学生が、私立赤霧島小学校で最恐双子姉妹と恐れられている美央の妹、次女の神崎理沙と、三女の美月であった。

「わあ！　大きくなってる♪　もう小学六年生になったんだねぁあの子たち！」

不思議そうに唐田由衣夏を見つめる神崎理沙と美月。

「あれ？　まさか忘れられちゃった！？　ショックゥ～」

傷ついた由衣夏は半泣きになるが、美央から昔遊んでくれたおねぇさんだとゆうことを聞かされていただけに、好意は十分に持っていた。

　姉の美央が連れてくる由衣夏に会いたいが為に庭で待っていたわけであるが、理沙と美月は全く覚えていない自分に動揺してついつい不思議顔になってしまったみたいである。

「やれやれ。まさかの記憶にございませんパターンか……そのうち思い出すかも……あたしと同じ黒髪ロングの方が姉の理沙で、ツインテールの方が妹の美月だよ」

「うんうん！　私は覚えてるから。二人とも更に可愛くなったなぁ♡」

　褒められた姉妹は一気に表情が緩み、満面の笑みで由衣夏に駆け寄って抱きついた。

「由衣夏ぁ〜！」

「由衣夏ちゃーん！」

　ほぼ同時に叫びながら抱きついてくる。

「おおよしよし！　ホント可愛いなあ二人とも！　理沙ちゃんは美央にそっくりだし♡」

いきなりスカートを捲り上げる美月。

「え？」

『ズブッ！！』

「ひゃんっ！？」

そのまま純白パンツ越しに肛門へ突き刺さる二本の人差し指。
理沙のカンチョーを不意打ちに喰らった由衣夏は思わず奇声を上げてしまう。

「ひゃん！　だって！　アハハハハ！！」

「指根元まで全部入っちゃった！　パンツにウンチ着いちゃってたらごめんねー由衣夏！　あはははは！」

はしゃぐ姉妹の傍で思わずしゃがみ込んでお尻を押さえる由衣夏だった。

「痛った……うぅう」

高速で一気に突っ込まれたパンツ越しのカンチョーは、由衣夏にかなりの激痛を与えたのであった。

「コラあんたたち！　いきなりあたしの親友になんて事すんのよ！？」

姉の美央に怒られて不敵に笑いながら謝る姉妹だったが、その言い方に反省は微塵も感じ取れなかった。

「ごめんね由衣夏ぁ〜！」

「五年ぶりらしいからちょっと刺激の強い挨拶しようとお姉ちゃんと相談してたんだ！　ごめーん！」

ふざけながら謝る姉妹をキツく睨みつけてから、由衣夏へ詫びを入れる美央。

「ご、ごめんね由衣夏……お尻大丈夫？」

「うがが……しょ、正直むっちゃ痛い……あんな超高速で二本の指突っ込まれたら……でも……あれ？」

「どうしたの？」

「な、なんでもない！　だ、大丈夫だからもう。可愛い美央の妹たちだから許してあげる〜♡」

そう言いながらも、姉の美央にそっくりな二人の可愛い妹たちからの仕打ちに、満更でもない自分に気づき始めていた。

「頬が赤いけど大丈夫？」

「え！？　そう？　全然大丈夫だよ！」

そのまま美央の部屋がある二階に登り、そこで驚愕の事実を聞かされることになる由衣夏。

「ええっ！？　ま、マジか！？」

「うん。そうなの」

「ま、まさかの三姉妹拷問処刑人……あの子達まで加わっちゃうなんて……なんて残酷な運命なの」

「元々残酷ご先祖様、莉央の血を引く一族だからね……残酷なのは慣れてるとゆうか……」

「血統書付なのね……」

「……犬や猫みたいに言わないでくれる？」
「人間には使わないのかな……ごめんなさい。それよりあの可愛い顔した小学生の妹さんたちが……拷問処刑人って……未だ実感湧かないよ」
美央のベッドに座りながらまだ驚きを隠せない由衣夏。
「あの子たちの通う小学校は悪ガキが多いことで有名だから、一階の一部屋に調教部屋とゆうか……簡易な拷問部屋を造られたの。特殊任務省からの命令でね。つい一昨日も女の子二人を理沙と美月がすっ裸にして電気アンマしまくって泣かしてたわ」
「えっ！？　家の中に拷問部屋！？　すっごいことしてくるなぁ……山西とかゆうあのバカ長官は……女の子に電気アンマって……男子と違って気持ちよくさせちゃいそうだね」
「昼から監禁してきている五年生の男女の拷問がもう始まってるはず……見物に行く？」
「！！……見ていてもいいの！？」
「当然。あたしたちも拷問処刑人なんだからそれくらいの権利はあるよ」
由衣夏は少しビビりながらも、理沙と美月の拷問を見たい好奇心はとてつもなく大きなものであった。

はやる心を抑えながら美央に続いて階段を降りてゆく。

「入るわよ？」

『コンコン！……ガチャ！』

拘束ベッドや手錠、立ったまま拘束するための十字形の杭、四つん這い大勢で拘束する横幅が狭くて低いベッド、様々な拘束道具がある中で、二人の児童が土下座している。

「あらお姉ちゃん！　由衣夏も来たのね♪」

理沙が振り向きながら微笑みかけてくる。

「ちょうどこれから本格的に痛めつけてやろうと思ってたの。今まで待ってたのは由衣夏ちゃんに見せるためでもあったのよ～♡」

妹の美月も長いツインテールを揺らしながら由衣夏の方を見ながら話しかけてきた。

理沙は男子児童、美月は女子児童を担当しているらしく、同時に後頭部へ足の裏を乗せて、床に顔面を密着させる。

「ぐわあっ！　や、やめろ！」

「痛いいっ！　やめなさいよ！」

まだ元気である拷問対象の二人は、必死で理沙たちへ強気に抵抗していた。

「弱い者イジメのボスが男子は高岡優太、女子は工藤美咲、あんたたちにイジメられて不登校になった生徒が男女合わせて四人いるの。それが誘拐されてここに来た理由」

更に激しく後頭部を蹴りつけながら理沙が呟く。

「ぐおお！　ち、ちくしょう女のくせに！」

一度はねじ伏せられたにも関わらず、何かの間違いだと思いたい悪童高岡優太は、強引に理沙の足を手ではねのけると、一気に立ち上がり殴りかかる。

いとも簡単そうに全ての攻撃を躱すと、強烈な膝を腹部に叩き込む理沙。

たまらず膝から崩れ落ちる優太だったが、そこへ更に顔面へサッカーボールキックを叩き込む。

激しく鼻血を噴き出しながら後ろへ数回転。

哀れな姿で吹っ飛ぶ。

「ぐわああっ！！　いだいいいいいっ！！」

「五年生のくせに上級生のあたしたちに逆らうなんて許されないことよ？」

更に倒れている優太の元へ歩み寄り、胸ぐらを掴んで引き起こすと、激しい往復ビンタを打ち込み始めた。

『パンパンパンパンパパパパパパンッ！！！』

「ひぶぶぶぶぶうううううっ！！！」

頬を真っ赤に染めながら鼻血を周囲に撒き散らす優太。

その光景を見せつけられた工藤美咲は、完全に対抗する気力を失い、全身を震えさせる。

「おい女！　工藤美咲だっけ？　私の足の裏を舐めろ！」

後頭部を押さえつけているスニーカーの足の裏を一度止めて、つま先で顎の下から掬い上げると、顔面に足の裏を密着させる美月。

「ペロペロ……ペロペロ」

目を瞑って必死で舐める美咲だったが、さっきまでの強気な心は消滅し、うっすらと涙を浮かべながらただただ舐め続けるだけだった。

「女子の方はもう従順になったけど……男子の方はどうかな？」

「もう同じでしょ？　理沙のパワーは半端ないから……多分ご先祖の莉央と変わらないかも……」

「ええっ！？　そんな強いのあの子！？」

理沙と美月の責めを見ながら小声で話す美央と由衣夏だったが、思わずサイボーグ並みの強さと聞いていた菅野莉央レベルとゆう事実を聞くと、ついつい叫んでしまう由衣夏だった。

二人は優太の短パンと美咲のスカートを脱がせ始める。

「や、やめて！」

「ひいっ！　上はいいけど下は許してっ！」

二人は必死で赦しを乞うが、嘲笑うかのように冷たく無視して淡

々と脱がせていった。

「股を開いて立ってるのよ？　動いたら殺すから」

「や、やめてくれ」

「な、何をする気なの？　お願いやめて許して！」

二人の願いも虚しく、理沙と美月の背後からの股間蹴りの刑が開始される。

『ドカッ！！　パシィンッ！！』

「ふぎゃあっ！？　ぎえええっ！！」

１０回、２０回と蹴り上げ続ける二人。
ついに声を上げて泣き出してしまうが、必死で痛みに耐える優太と美咲。

「理沙ねーちゃん！　マンコ蹴りの方が音が響くよね？」

「ペッタンコだから高音になるんでしょ。ぼちぼち止めてやろう」

「はーい♪」

ようやく理沙と美月の股間蹴りから解放された二人だったが、もうとにかく泣きながら土下座をして赦しを乞い、謝り続けるのみであった。

「美咲！　土下座してももう遅いから立ち上がってくれる？」

「は、はい。ぐすん、ぐすん」

「アソコ怪我してないか見てあげる」

「や、やめ……」

『ズルリッ！』

「ひゃあっ！？　見ないでぇえっ！！」

先に美月によって純白パンツがずり下ろされた。
手で陰部を隠す美咲だったが、鼻っ柱に正拳突きを入れる美月。

『ガツッ！！……ブシュウウウウッ！！』

鼻の骨が砕け、大量の鼻血が美咲の制服と剥き出しになった下半身を染め上げてゆく。

「んぎゃあああああっ！！　痛いいいいっ！！　わーんわーん！！」

今度は鼻を押さえて泣き叫ぶ美咲だったが、その隙にしゃがみ込んでまだ産毛しか生えてないワレメの両側に親指を押し付ける。

「どれどれ……よぉくマンコ見せなさいね。大陰唇は真っ赤になってるけどぉ……中身はどうなのおっ！？」

『クパアッ！！』

「ひゃあああっ！？　やめて見ないでええっ！！」

小さなワレメを一気に左右へ押し開く三月。

勢いで小陰唇が斜め上に捲り上がり、膣道までもが丸見えになった。

「あはは！　マンコの中身から粘液出てるじゃん？　まさか私のマン蹴りに感じちゃってたぁ？」

「やめてええっ！！　恥ずかしいよおっ！！　えーんえーん！！」

全開にまで性器を押し開かれたまま、鼻血と涙で顔面ぐしゃぐしゃになってしまう美咲だった。

そのまま美月によって四つん這い体勢で拘束される。

「バックでやったげるわ」

「え？　なにを！？　も、もう許して！　わーんわーん！」

「許さない♡　理沙ねーちゃん、ちょっとコイツのマンコ開いててくれる？」

「ほーい。指でも突っ込むの？」

「うん。とりあえず悪ガキのバージンはぶっ壊しといてやるの♡」

「あはは！　人生初のロストバージンなのに同性の指なんて……少し可哀想ね」

「本気で可哀想だなんて思ってないクセにぃ～。あ、もっと全開に開いてて！」

『ギュウウウ～……ムリュリュ！　クパアアァァ！！』

「やだぁ！　ムリュムリュ言いながら小陰唇が大陰唇にくっついちゃうほど捲れ上がっちゃったぁ！　さすが理沙ねーちゃん♪」

「子宮まで見えちゃうほど大きく開いてあげたぞぉ？　さぁヤッちゃって！」

「うん！　ありがと♪」

小型のベッドに下顎、胸部や腹部を乗せたまま強く拘束されて身

動きできないまま、１１歳の少女の陰部へ魔の手が迫る。

「エロいわねぇ。マンコの中身って……ほら、いくわよぉ？」

『つぷ……ズブブブブ』

「んひゃあぁあっ！？　そんなとこ指入れないでぇぇぇっ！！　やめてえぇぇぇえっ！！」

「やめなーい♡　ほらぁ！　どんどん入るよぉ？　うふふ♡」

『ズブブ！……ぺちゅ！』

「ぎゃぁあああっ！！！！」

何とも情けない音を立てて破れる１１歳児童の処女膜。
あまりの下腹部の激痛に白目を剥いて泣き叫ぶ美咲だった。

「やだぁ！？　アハハハハハ！！　ぺちゅ、だって！！　顔も気持ち悪いけどマンコの膜破れる音まで気持ち悪いわねあんた！　アハハハハ！！！」

「んぎいいいいいっ！！　痛い痛い痛いいいいいいっ！！」

「更に突っ込んでぇ……ここ？　子宮の入り口は？」

「ぐぎぎぎぎいいいいっ！！　いだいいいっ！！　抜いでぇぇぇぇっ！！」

美月は、目を細めてスケベそうな笑みを浮かべると、少し残っていた指の付け根部分を完全に膣内へ埋め込んだ。

『ぐちゅちゅちゅっ！！』

「ふんぎゃあああっ！！」

理沙も両手の中指を膣に突っ込み、更に膣口を全開にした。

『くちゅちゅ！……グリリリ！……くっぱぁああ～！！』

「ヒャアアアアッ！！　そんなに開かれたら裂けるっ！　裂けちゃううううっ！！　許してええええっ！！」

「ほら、美咲……もっともっと限界までオマンコ開かせてあげるわ。痛い？　美月の指がもう子宮にまで届いてるんでしょ？」

理沙の日本の中指で、恥骨が砕けるほど全開に拡げられた性器……嘲笑うかのように更に美月の二本の指で子宮の中まで激しく出し入れするピストン運動が始まった。

『ズチュズチュズチュズチュッ！！』

「ピギャアアアアッ！！」

白目を剥いて泣き叫んでいた美咲に変化が訪れる。
しばらく美月が激しく膣内を掻き回してる内に、だんだん表情が変わってきたのである。

「あっ！　あはっ！　あんっ！　アへっ！　あへへへへえっ！！」

「お！　効いてきたなぁ！　小学生でもよく効く特殊任務省が研究所へ造らせた超淫乱媚薬……その名もアヘイク薬」

「あ、アヘイク？　アヘ顔でイッちゃう薬ってことね……どおりで愛液ドクドク垂れ流してる訳だ……やれやれだわ」

美月の仕打ちを聞いた理沙は呆れながらワレメをパクパク開閉させて、膣が愛液で奏でるクチュクチュ音を楽しんだ。

「アへえええっ！！　あんあんあんあんっ！！　き、気持ちいいっ！！」

「そうでしょそうでしょ？　すっごく効くでしょこの薬♪　１１歳にして生まれて初めてのオーガズムを体験させてあげるよ♡　うふふ」

肛門をヒクヒクさせながら自ら腰を振り、美月の指を幼いオマンコに受け入れる美咲の姿を見ていた同じ五年生の男子児童、優太のペニスが小さいながらも少し勃起していた。

鋭くそれに気付いた理沙は、冷たい笑みを浮かべる。
更に鬼畜な仕打ちを思いついてしまうのであった……。

妹たち（前編）（後書き）

新しく拷問処刑人に加わることとなったまさかの美央の妹、理沙と美月。
更なる残酷さで、罪を犯した者たちへの、拷問とゆう名の制裁が始まった。

その一部始終を傍で見守る三姉妹の長女である神崎美央と、唐田由衣夏であったが、由衣夏の陰部は沼っていた……。
タイプである親友の美央とよく似た美女である理沙と美月の残酷な責めを、自分に当てはめて自身が犯されているプレイを想像しながら観察している内に……だんだんと濡れてきてしまっていたのであった……。

『わ、私も美咲ちゃんみたいに美央や理沙に責められたい……は、恥ずかしくて美央に言えない……でもいつか……あ！　理沙ちゃんがヤラシイ顔で優太くんのオチンチン見てる？　またエロい事やらかしちゃいそう♡』

一人心で呟きながら、頬を赤く染めて更にアソコを湿らせる唐田由衣夏であった。

妹たち（中編）（前書き）

ついに執行される二人の小学五年生への無慈悲な拷問処刑。
理沙と美月の真の残酷さが試される。

「ちょっと優太をシバいてくるわ」

そう呟いて立ち上がる理沙。

「うん！　もうコイツはマンコの中グショグショだし開いてくれてなくても大丈夫♡」

『グチュグチュグチュチュチュチュ！』

そう言いながら、更に激しく膣内を人差し指と中指で掻き回す美月。

左手の人差し指を、そっと美咲のピンク色をした肛門へ触れさせる。

「綺麗な色してるね？　お尻の穴」

『ピト……』

「ひゃんっ！？　あんっ！　入れてっ！　そこもイジメてぇっ！」

ハリのあるお尻の肉を激しく連打しながら叱りつける美月。

『パンパンパンパパパパパンッ！！』

「んぎいいいっ！！　いだいいいいいっ！！」

「イジメて、じゃなくイジメて下さい美月様、でしょ？」

「は、はいいっ、い、イジメて下さい美月様ああっ！」

目を細めて冷たく微笑みながら、従順な奴隷のようになった小学生女児のアナルまでも指で犯し始める上級生の美月。

「やればできるじゃん。ご褒美だよ♡」

『ツプッ！……ズボボボボ！』

「あひっ！？　あんんんんっ！！」

『ズボッ！　ズボッ！　グリリッ！　ズブブッ！』

「うん！　何て締まりのいいアナルなの♡」

浅く挿し込んだり深く挿し込んだり、色々角度を変えたり……肛門のヒダヒダがめくれるほど激しく人差し指で犯し続ける。

再びアヘ顔になり、愛液まみれの上、潮まで噴き出させる女子児

童であった。

「んんんんっ！！」

『ガクガク……ガクガク』

「ん？　イッちゃったの？　あははは♪」

膣と肛門から全ての指を引き抜き、アヘ顔の口内へ捩じ込む。

「ほら、自分のマンカスやうんちを舐めて綺麗にしてくれる？」

『ガボッ！　グリグリ！』

「むごおおおっ！？　うむむううううっ！！　ペロペロ……ペロペロ」

とりあえず工藤美咲への責めに満足した美月は、姉の理沙の方を振り向く。

容赦ない電気アンマを食らわせているところであった。

「それえええっ♪」

『ガガガガガガガガッ！！』

「ぎゃあああああっ！！　痛い痛い痛いいいいいっ！！」

「そりゃ痛いわよ。たまに玉も蹴り込んでやってるんだから♡」

理沙の言う通り、数回に一度睾丸を直撃するのが、優太にとって人生最大の苦痛となっていた。

１００回ほど蹴り込み型の電気アンマを執行すると、もうとっくに勃起も解消して、尿道口から血の混じった粘液が垂れ流れている。

「擦り付けるような、気持ちのいい系の電気アンマだとでも思った？　甘い！　悪党には蹴り込み型のが妥当だわ」

「ドカッ！　ドカッ！　ドガガガガガガガッ！！」

「んぎいいいいいいいいっ！！」

ついに白目を剥いて気絶してしまう高岡優太であった。

「理沙！　その子の金玉一つ潰れちゃってるわよ？　本当の地獄は処刑島で味合わさせると言ったでしょう？」

「あ！　ごめーん！」

いきなりの美央からの警告に、舌を出して片眼を瞑りながら戯け

たように舌を出す理沙。
それを聞いた由衣夏が即座に反応する。

「え？　本当の地獄は処刑島って……まさか」

「うん。先ほど長官から連絡があって、この子たちからイジメられてた生徒が二人自殺したって。私刑から拷問処刑へと変更になったの」

「そ、そうなんだ……女の子の方は？」

「美咲にイジメられてた女子の方も……一人自殺しちゃったから……」

「そっか……児童の処刑って少し悲しい気分になっちゃうのよねぇ」

由衣夏は珍しく深刻な顔をして呟くが、理沙の責めを見ていたため陰部はじっとり沼化していた。

「アソコ濡らしながらそんなこと言っても、全然しっくりこないわよ？」

「えっ！？」

いきなり美央に痛いところを突かれ、顔が真っ赤になる由衣夏。

「ど、どうして分かったのかな？」

「理沙の責めを見ながら、机の角へ股間擦り付けてた。顔真っ赤にしながら」

「…………は、恥ずかしい」

美央も少し頬を赤く染めながらティッシュを手渡す。

「あ、ありがとう。……理沙ってホント美央にそっくりだよね？」

「うん。あたしの小学生の頃の写真と今の理沙は全く同じに見えるとかよく言われるわ」

美央は優太を背中におんぶして、理沙と美月へ拷問処刑へ変更の旨を伝えて、ドローンへ乗り込むよう指示した。

由衣夏も美咲を担ぎ上げ、神崎邸の拷問部屋を後にする。

黄昏れの黄金に染まる景色の中、ドローンは残酷処刑島へと飛び立つのであった。

「えーんえーん！　おうちへ帰りたいよお！　早く帰してええっ！えーんえーん！」

優太と違って意識もハッキリしている美咲は、こんな夕方から未だに帰宅を許されず、見たこともない景色の海上を飛んでいることにかなりの恐怖を感じていた。
人間としての本能が、現在命の危険に晒されていることを察知していたのである。

「邪魔になるから上の服も脱いでおこうね」

そう優しく囁きかけながら、制服を脱がし始める由衣夏。

「なぜ！？　胸まで見られるのヤだぁっ！　許してぇえっ！」

泣き叫びながら抵抗するが、理沙の強烈な往復ビンタが顔面を激しく左右に弾く。

『パンパンッ！！』

「ふぎいっ！！……ふぇえ～ん！　ぐすんぐすん！」

砕けた鼻の骨が鼻腔内を刺激して再び大量の鼻血を噴き出す美咲。

「ちょっと理沙！　あたしのドローン内で血を出さすのやめてくれる？」

「はーい！　アンタのせいで怒られたじゃんか……」

「えーんえーん！　おうちに帰りたいよおお！」

「あのさ……この状況でまだ家に帰れるとか本気で思ってるわけ？　どこまで頭ん中お花畑なのよ？」

更に間接的に、死の恐怖を言葉で与えてしまう理沙だった。

胸が張り裂けそうになるほどの戦慄を覚えた美咲は、恐怖のあまりに気を失ってしまった。

「あっ！　コイツおしっこまで漏らしちゃってる！？」

「えっ！？　おいおい！！　早く拭き取りなさい理沙っ！！」

「あたしに当たらないでよ！」

「アンタがヘタに脅すからでしょ！？　あーもう！　やだ、くっさ！」

一時ドローン内は大騒ぎとなるが、無事に残酷処刑島へと着陸する。

「本日の処刑島での拷問処刑は、拷問部屋を使用せず屋外で行うから」

長女である神崎美央の説明に、理沙と美月は何度も頷く。

「聞いてる？」

「うん！　当たり前じゃん！」

初めて降り立った残酷処刑島に、理沙と美月はワクワクしながらキョロキョロ周りを観察する。

それゆえに美央からすれば、話を聞いていないように見えてしまうのであった。

「理沙、美月……本当にこの子たちを殺せるの？　まだ人間の処刑執行は未経験なんでしょ？」

「アメリカでは模型や猿を人に見立てて練習してたけど……でも大丈夫。基本的に何の罪もない人の命を奪った者には無慈悲でいいから」

理沙は眉をキリッと吊り上げながら、泣き続ける優太と美咲を睨みつける。

美月も隣で静かに頷いた。

「完全に日が暮れるまでに殺ってしまうわよ。ここでの拷問は手短

に」

美央の指示通り早めに拷問の段取りをする二人。
白いセーラー服に赤いリボン、チェック柄のミニスカートが理沙と美月の制服だったが、残酷処刑島の強い風に煽られて何度もスカートが捲り上がる。
理沙は得意の近代武器である鋼の鞭を鞄から取り出した。
細かい部品を複雑に繋ぎ合わせ、革の鞭の如くウネウネと自在に動く特殊な鞭であった。
破壊力は革の鞭の数倍もある。

「さっきと逆でいく？　あたしが女の子、美月が男の子」
「そだね。猿以外のオチンチンやキンタマも責めてみたいし♡」
美月も指の骨をバキバキ鳴らしながらやる気満々だった。
「じゃあ始めましょう。やり易くするからちょっと待って」
拘束するのも手間だと判断した美央は、手早く優太と美咲の膝の骨を氷の槍で貫いて破壊した。
麻酔を使っていないので二人の小学生の絶叫が残酷処刑島に響き

渡る。
地面を這ってでも逃げようとする美咲のお尻を、超破壊力を誇る理沙の鋼の鞭が襲い掛かる。

『ヒュンッ！！　ビシィィンッ！！』

「はぎゃあっ！？　いだいいいいっ！！」

打たれる度に悲鳴を上げる美咲だったが、何度も何度も容赦なく打ち付けられ、ついにお尻の肉がミンチとなってボロボロと地面に垂れ落ちてゆく。
尾てい骨が剥き出しになって、もはや座ることもできなくなってしまっていた。

「すっご♡　やるなあ理沙ねーちゃん！」

あまりの鞭捌きに、思わず見惚れていた美月がふとある事に気付いた。

「あれ？　お尻の肉なんてグチャグチャなのに……中心部のアナルだけ無傷じゃん？　あははははは！」

「凄いでしょ？　お尻の穴はまだ残してやってるの」

チェック柄のミニスカートと真っ白な長い脚に、夥しい返り血を浴びながら血まみれの鋼の鞭をペロリと舐めながら中心に狙いを定める理沙。

「ピンク色した可愛いアナル……この理沙様がトドメを刺してあげちゃう」

「やん！　エロいわね♡　許してあげて～」

由衣夏が思わず横槍を入れる。

「えへへ♪　見ててね由衣夏！　あたしの鞭捌きを♪」

「うんうん！　やっちゃってやっちゃって♡」

一点に集中して一気に振り下ろす理沙。
音速を超えるほどの速度で肛門を直撃する鋼の鞭。

『スパァアアンッ！！！！』

「ぎゃあああああああっ！！」

辺りにピンク色をした肛門の肉片が飛び散る。

「あれ？」

「ん？　どした？」

勢い余って破壊してしまったために、半分千切れた直腸が飛び出して大便を噴き出させていた。

「やだぁ～……はみだした直腸から直接ウンチもらしちゃってるぅ。くっさぁ～い……更にお仕置きが必要だねこれは」

腕組みをしながら絶叫し続ける美咲の元へ歩み寄る理沙。

『ジャキンッ！！』

鋼の鞭を、円柱形をした細長いサーベルに変形させる。

「凄いっ！　鞭から槍みたいに変形しちゃった！？」

由衣夏は理沙の武器に驚きを隠せない。
ワクワクしながら展開を見守るが、大体美咲に起きるこれからの運命は概知していたのであった。

「美月！　まだ男の子殺らないのなら例の注射打ってやってくれる？」

「ほーい！　理沙ねーちゃんにもそんな慈悲があったんだ」

「そんなんじゃないよ。ただコイツのマヌケなアへ顔が最期にもう一度見たくなっただけ。もうすぐ自分が死んじゃうのに、アソコ気持ちよくなってアへ顔でイッちゃうなんて……うふふ。すっごく哀れじゃん？」

「なるほどね。残酷でエロいねそれ♡」

納得した美月は、鞄から二本の注射器を取り出すと、美咲の傍にしゃがみ込んで、背中と内腿に注射を打ち込んだ。

「はい。オッケー！　お尻の肉片と肛門がミンチになってることなんて忘れちゃうくらい強力な麻酔薬と……超興奮媚薬アヘイクだよぉ！　今から理沙ねーちゃんが気持ちよくさせてくれるからね？」

そう言いながら破壊された肛門部分からはみ出している直腸を握り、大腸部分を引き摺り出す。

「直腸から湯気が出てるよ？　ほれ！」

『ギュッ！……ズルズルズルズル！』

「はぁうあああああっ！？　ぎひいいいっ！！」

「あ！　ごめん！　まだ麻酔完全に効いてなかったみたい……超即効だからもう痛みも消えてくるからね～♡」

引き摺り出した大腸は細い腸へと変わった。
全ての大腸を摘出した所で、ナイフでカットして地面に投げ捨てる。

「これでよし！　子宮がお腹の中で動きまくれるように少し空洞作ってあげたから喜べ♪」

そう言いながら苦痛に歪んだ表情の美咲の頭を数回撫でて、ゆっくりと立ち上がる美月。

「さてと。死んじゃう前にイッちゃおうね？」

『クチュ！』

そっと小さなワレメの膣口へ中指を突っ込む理沙。

「あん！？」

痛み止めの麻酔と媚薬が既に効いてきており、性器への刺激は猛烈な快感へ繋がる美咲だった。

ゆっくり出し入れするだけで腰を振りまくる。

「あはは！　頬真っ赤にしちゃって……そんなに気持ちいいんだ？　ほれほれほれ♡」

『グチュチュチュチュチュチュ！』

「あん！　あん！　あはあんっ！！」

二本、三本と挿入する指を増やしていき、遂に四本目まで無理矢理捩じ込んでしまう。

小陰唇と膣口は少し裂けて出血し始めるが、肛門部分にパックリと開いた穴からの出血が激しくて、見分けがつかない。

「美月、血止め薬も打ってくれる？　まともにマンコ見えないよこれじゃ……」

副作用で２４時間後には死亡するほどの強力な血止め薬を注射する美月。

お尻全体の出血は見事に止まり、ついでに性器周りを水で洗い流して綺麗にする。

「手を全部突っ込んで肘まで挿入したいんだけど……恥骨が邪魔して無理か……」

理沙は一度指を引き抜き、金槌を手にした。

「頭殴るの？　まだ殺しちゃダメだよ？」

美月が心配そうに呟くが、理沙は笑顔で答える。

「邪魔な恥骨をコレで粉砕してやるのよ♪」

『ガンッ！！』

「んぎっ！？」

思いっきり金槌で美咲の性器目掛けて打ち込んだ。
全身が大きく揺れる。

「まだ砕けないなぁ。小学生のくせに硬い骨してるわね。恥骨は猿より硬いかも」

『ガン！　ガン！　ガン！　ガン！…グシャ！！　バキバキ！！』

理沙の強烈なパワーで更に４回ほど打ち込むと、性器周りの恥骨はバラバラに粉砕されてしまった。
痛みがないためその事に美咲本人は気づいていない。

「再びお邪魔しまーす！　ほうら、あたしの腕、肘まで飲み込め♡」

『ズチュ！　グボボボボッ！　ズッボオオオオオッ！！……バリバリッ！！』

ついに恥骨を砕いてまでファストファックに成功する理沙だった。
そのまま肘までぶち込む。
指先は子宮口を貫き、子宮最深部までも突き破っていた。

「あはあんっ！　気持ちいいっ！　あんん」

頬を真っ赤に染めながら、ヨガリ声を出して興奮する美咲。

「そんなに感じちゃって……お前の大事なマンコ……どんな悲惨な事になっちゃってるか全く分かってないようね？うふふ……クリちゃんもこすってあげるね？」

『スコスコスコスコ……』

片方の手の人差し指で、血まみれになりながらも勃起しているクリトリス。
その敏感な部位を指先で激しく擦り付ける理沙。
美月は頭部側へ回り込んで美咲の顎を掴み、一気に持ち上げながらその表情を楽しんで見つめていた。
「理沙ねーちゃんのレイプは気持ちいい？　あはは♡」
「もっともっと激しく犯してやるからね？　それそれそれえっ！」
『バコォッ！！　バコバコバコバコッ！！』
手首くらいまで引き抜いてから再度肘まで突っ込み、また引き抜いて突っ込む……凄惨な理沙の腕による凌辱行為が開始された。
「アへ！！　あはああっ！　あへへへへええっ！！」
完全なアへ顔でニヤけながら舌を突き出して興奮しまくる美咲に、少し離れて見物している美央と由衣夏まで爆笑してしまう。
「ほらほらほらぁ！　どうだ？　気持ちいいか？　同性に犯されて哀れだよねぇ？　マンコの前に子宮をミンチにしてあげちゃうから……　えいえいえいっ！」

『グチュズチュ！！　バチュグシュッ！！』

指先と鋭い爪で子宮全体をズタズタにするピストン運動は、ついに美咲をオーガズムに導いた。

「イクッ！　イッチャうううぅっ！！　あんんんっ！！」

『プシャー！！』

尿道から大量の潮を噴き出させて、太ももを激しく痙攣させながらイッてしまう美咲。

『ガボォッ！！……ズルズル！　ぷるるんっ！』

「赤ちゃんなんてどうせもう産めないんだからいいわよね？　アンタの子宮頂きました♡」

何度も肘まで突っ込んでは引き抜くピストン運動を終え、ようやく手と指先まで引き抜いた理沙の手中には……ほぼミンチになったズタズタの子宮が握られている。

二つの卵巣までもズルズルと引き摺り出されてきていた。

「さてと……潮まで噴いて絶頂も得られたみたいだし……あの世に逝っちゃおうか？」

『ズブッ！』

理沙はそう言いながら立ち上がり、再び鋼のサーベルを手にすると、恥骨が砕けてポッカリ開いたオマンコへ、冷たく硬いサーベルを突き入れてゆく。

「あんんっ！　気持ちいい……」

「いつまで感じていられるかしら？　もうすぐ喉よ。そして口から……」

『メリメリ！　バリバリ！』

「んがああっ！？　うごおおおっ！！」

喉まで切先が到達すると、猛烈な違和感と激痛が再度美咲を襲った。

ついに切先は口から飛び出し、同時に白目を剥く。

そのまま全身の激しい痙攣が始まった。

「ぶはあっ！　うごおおっ！！」

『ぐるんっ！　ガクガクガクガクッ！　ビクビクビクビクッ！』

「うふふ♡　猿もそんな感じで激しく痙攣してたよ。人間も同じようになるんだね最期は♪」

１１年の短い人生に終止符を打った美咲。
理沙は一気に鋼のサーベルを膣から引き抜き、思いっきり空振りさせて血と愛液を弾き飛ばした。
チェックのミニスカートや太ももは血飛沫で真っ赤に染まっているが、気にすることも無く武器を鞄に収納する。

「お見事ね。さすが美央の妹ちゃんだわ……」

「本当に殺しちゃった……もしかしたらと思ったけど……やっぱ莉央婆ちゃんの血を引く者たちなのね」

由衣夏と美央はお互い独り言のように呟きあった。

「そんなに理沙が可愛いならついでに処刑してもらったら？」

「こわっ！……痛いのは少しだけのＳＭごっこしか無理！てへへ……」

「……パンツ履き替えてきたら？」

「え？　あ、え？　んん……さ、次は男の子だね！　どんな風に処刑しちゃうのかなあの子たち？　へへ……へへへ」

いきなり美央から、理沙の拷問処刑を見ながら大量に濡らしてる

ことを見抜かれた由衣夏は、目をパチクリさせながら変な反応をして誤魔化す。

冷たい股間を我慢しながらも、次の優太の処刑方法を色々と想像し始めるのであった。

妹たち（中編）（後書き）

一部始終を震えながら見ていた優太は、泣きながら土下座して狂ったように「ごめんなさい」「許してください」を繰り返していた。

残酷少女たちが許してくれるはずもなく……。

ゆっくりと歩み寄る二人の少女に優太の運命は握られている。

妹たち（後編）（前書き）

ついに残酷処刑島に連行されてしまう工藤美咲と高岡優太。
もう二度と生きて帰ることは出来ない……。

妹たち（後編）

「潰れたキンタマはもう大丈夫なの？」

見下ろしながら冷たく問いかける理沙に、涙で顔をぐしゃぐしゃにしたまま掠れ声で答える優太。

「ううう……ぐすん、ぐすん。うん。女子高生のおねぇさんが麻酔みたいなの内股に打ってくれたの。そしたら痛みが消えたんだ」

「そう。今から妹の美月がアンタのこと拷問処刑するからね。覚悟はできた？」

「ううっ！？　い、いやだあっ！！　死にたくないよおおおっ！！許してぇえっ！！　えーんえーん！！」

12歳の女子児童二人の前で、素っ裸にされたまま土下座をして命乞いをする11歳の男子児童。

その滑稽なシーンに水を差すかのように、美央が真後ろから理沙の肩を叩く。

「もう暗すぎてよく見えないから、予定変更して灯のある拷問部屋に移動して続きをやってもらうことにするわ」

「あ、うん。それもそうだね。分かった」

美月も隣で頷く。
土下座している優太に手綱付きの首輪を装着して、無理矢理引っ張ってゆく美央。

「さぁ来なさい」

「うごっ！？　い、嫌だよおおお！　許してよおおおお！」

『グイッ！……ズルズル……ズルズル』

「ぐわぁあっ！？　痛いいいいいいっ！！」

強力なパワーで土下座しているまま優太を引き摺って歩き始める美央。
慌てて立ち上がり膝と首が怪我しないように、そのまま歩いてついて行くしか無かった。

5分ほど歩いてその場所へ到着すると、いくつかある拷問部屋のベッド付きの部屋へ男子児童を連行する。

「ここは？」

美月がどんな拷問をする場所なのか美央に問いかける。

「手脚を切断してダルマ人間にする部屋よ。ベッドに拘束して手術したりもできるし」

「あ！　それしたい！」

美月が手を叩きながら嬉しそうに答える。

「男の身体についてよく勉強しとこうよ！　猿じゃなくて人間の……うひひ！」

「そうね。美央ねーちゃんに色々教えてもらいながら解剖でもしちゃうか♡」

理沙も賛同して、美央に目線をやる。

「ふぅ。ま、とりあえず好きなように切り刻んでみたら？　どこがどうなってるとか、その時その時で説明してあげるから」

そう言いながら、美央は椅子へ腰掛ける。
隣に由衣夏も座り、そっと脚を組む。
抵抗する優太を何度も殴りつけ、顔面フルボッコにした挙句に拘束してゆく理沙。

「大人しくあたしたちの言うこと聞かないと、余計痛い目にあうわよ？」

「うえーん！　痛いよぉ！　うえーん！」

鼻血をドバドバ流しながら、結果理沙によって暴力で抑え込まれて拘束されてしまうのであった。

「手脚を切断してから解剖した方がやりやすいわよ」

「あ！　なるほど！……分かった」

美月は得意の武器である斧を鞄から取り出して、ゆっくり振りかぶる。

「え！？　チェーンソーの方が楽じゃない？」

『ズドォオオオンッ！！』

理沙が慌てて問いかけるが、そのまま激しく振り下ろす美月。
拘束されてベッドに拘束されている優太の右膝は、一瞬で持ち主の元から離れた。

「すっご！　美月ちゃんも力強いんだね！！」

驚く由衣夏の隣で美央が呟く。

「あれだけ瞬間に切断したら痛みがかなりマシだから……苦しめるとゆう意味では、チェーンソーでゆっくり切った方が上なのに……」

断末魔のような絶叫を上げる優太に構うことなく、美月は次々と手際よく手脚を斧で切断してゆく。

理沙は大量の気付け薬と血止め薬を注射して、激痛によるショック死や出血性ショックによる死亡を未然に防いだ。

二つの肘と二つの膝から綺麗に切断していたため、もう一度拘束し直す理沙。

「これでよし！と。膝上と肘上を金具で固定したから思い存分解剖できるわよ」

「肛門と会陰部まで切開できるよう股を全開に開いてから拘束するの。やり直して」

「あ！　そーか。太もも閉じてたらお尻の穴見えないし、切開しにくいもんね……ごめんなさい」

美央に指導されて、慌てて優太の太ももを拘束し直す理沙だった。

医療用のメスを美央から受け取った美月は、そっと優太の頭を撫でる。

「優太……あなたの身体の中身……上級生のおねぇさんたちに見せてね♡」

「ううう……僕の手脚が……うわーん！　うわーん！　こんな姿じゃお母さんに怒られるうう！！　わーんわーん！！」

「……その心配は要らないよ。もう本当のこと教えてあげるけど……優太くんは、今からこの場所で死んじゃうの」

「ええっ！？　嫌だああっ！！　許してえっ！！　何でもするから許してえええっ！！」

金具が肘上と膝上の身に深く食い込み、内出血するほどもがいて逃げようとする優太。

「何でもする？　じゃあ私たちにここで殺されて♡」

「嫌ああああっ！！　死にたくないよおおっ！！」

泣き叫ぶ優太に隣で喝を入れる理沙。

「黙れクソガキッ！！　お前の理不尽なイジメで自殺した子はこれからの人生を奪われたんだよお前に！　だから死んで詫びろと言ってるんだ！！」

「ひっ！？……ぐすん、ぐすん」

いきなり怒鳴られた優太は返す言葉もなく鼻血と鼻水を啜りながら小刻みに震え出す。

「ってゆうかそんなダルマ姿にされて生きていても仕方ないでしょ？　うふふ」

そう言いながら、冷たく微笑んでメスを構える美月。

「さぁ手術を開始しまぁーす♡　まずはこの臭そうな穴から！……えい！」

『ズッ！』

切開を始める前に、強力な麻酔注射を追加で打った理沙。
メスを入れられた優太に痛みが殆どないのは、慈悲ではなくショック死を防ぐためだけの、美央による配慮であった。

「やだ！　何で一刀目がおヘソなのよ？」

いきなりに、ペニスや睾丸切開を期待していた理沙が文句を言う。

「とりあえず腹を開いといて生のハラワタ見ながらオチンチンをバラしていこう、なんて思ったの♪」

「そ、それもエロいわね！　うんうん！　それでいこう♡」

理沙も納得して、美月のメス捌きを見守る。

『ズズズズズ……パカァ～！』

ヘソからペニスの真上まで一気に切開する美月。

「うわっ！　すっご！」

白やピンクの小腸がウネウネと脈を打つように動いている。
理沙と美月は、指で生の小腸を突いたり握ったりして感触を楽しみ始めた。

「猿より太いのね」

「小学生でも全部抜いたらかなり長そう」

理沙に強烈な電気アンマを施され、アザだらけになっている痛々しい仮性包茎のペニスを、そっと握り込む美月。

「あらら……傷だらけのオチンチン……」

皮が擦り剥けて少し出血している部分を数ヶ所見つけて、親指の腹で軽く摩る。

「蹴り込み過ぎたかな……美央ねーちゃんが言ってた射精ってやつさせてみる？」

「あのオチンチンから出る子供の元の粘液ね？」

「うん。女性の膣に出し入れして摩擦で出すみたいなんだけど……手コキと言って手でやっても出るみたい。本人の手でするのが自慰行為。オナニー」

「私が手で出させたらオナニーとは言わないんだね」

「そう。それは他人による手コキって言うことね」

超媚薬の強制勃起薬を内股にタップリと注射する理沙。

腰掛けて見ている由衣夏が関心しながら呟く。

「美央の妹たち……まだ小学六年生の女の子なのにホント残酷でエッチね～♡」

「最近マセガキが多いからね～。あの子たちのエッチで残酷なのは全て莉央ばぁちゃんの血筋のせいよ」

「家系のせいにばっかしないの！」

美央にツッコミを入れる由衣夏だったが、二人の見てる前で女子児童による男子児童のペニスをシゴくとゆう一般社会では普通お目にかかれない奇妙な絵面が展開されていた。

「こうかな？　ほら、美月様の手コキでいっぱい射精するのよ？」

『しこしこしこしこ』

媚薬によりフルボッキした１１歳のペニスは、神崎美月によって人生初の精通を迎えようとしていた。

「あっ、ううう……」

「どした？　気持ち良いのかぁ？　ほれほれ！」

四肢を切断されて腹を切り開かれたまま、更に顔面血まみれ状態でペニスをシゴかれながら感じている優太。

「ダルマ男にされてハラワタ丸見えにされて……それでもオチンチンシゴかれて感じちゃってるのねぇ？　哀れで、はしたないわねホント」

スケベそうにニヤけながら、ツインテールの長い黒髪を頭を軽く振り上げて後方へ靡かせる美月だった。

「お尻の穴がヒクヒク動いてるよ？　感じちゃってるからかな？」

「私の手コキで感じちゃってるからねー。そんなはしたない肛門にはお仕置きが必要なんじゃない？」

「だよね」

そう美月に返答しながら理沙は人差し指をピンと立てると、そっとダルマ男にされた男子児童の肛門へあてがった。

「ここは？　なんて言うの？」

『ピト……』

「んあっ！？」

「んあ、じゃないのよ！　ココはなんてゆうトコなのって聞いてるの！」

『ズボッ！！』

「あはあっ！？……お、お尻の……穴です」

「この理沙様にココをどうして欲しいの？」

「んん……指を……突っ込んで下さい……わーん！わーん！」

痛みは麻痺していてもペニスや肛門の感覚は残すとゆう特殊な媚薬のお陰で、いちいち快感を得て反応してくれる優太だった。

手脚を切断されて腹を切開され、哀れすぎる状況の上、女子に『肛門へ指を突っ込んで欲しい』とゆう情けないセリフまで言わされた優太は思わず号泣してしまうが、理沙と美月の責めには本気で感じていたのも事実であった。

恐ろしく都合のいい効力を誇る麻酔薬と媚薬であった。

『ズブブブブブ！……グリグリグリグリッ！！』

ついに理沙の人差し指は、優太の肛門へ根元まで突っ込まれてしまう。

更にこねくり回すように直腸を掻き回す。

「あんっ！　理沙様っ！　気持ち良いですぅっ！」

「あはは！　男の子もアナルでも感じちゃうんだ！　早くあたしたちに射精とやらを見せてね♡」

まだ男性の射精シーンを一度も見たことがない理沙と美月は、ワクワクしながら美央に教わった手コキとアナル責めを高岡優太に駆使して楽しんでいる。

肛門からは透明の液体が垂れ流れてきた。
あまりの刺激により、快感を得た末に分泌された腸液である。

『グリグリ……グチュグチュ……トロトロ！』

「え？　音が湿っぽく変わった？　やだ？　何コレ？　ネバネバしてるぅ……」

腸液に驚く理沙だったが、後方から由衣夏が説明する。

「理沙ちゃん、それは腸液といって直腸から分泌される液だよ！　ケツマンコが感じて分泌するアナル版の愛液ってところかな？」

「ふぅん。あたしの指で感じちゃってたんだねコイツ」

『グチュグチュ！　グリグリ！　グチュチュチュチュチュ！』

嬉しくなった理沙は更に激しく直腸内を掻き回し始めた。

「お尻の穴から粘液垂れ流すなんて知らなかったよ……あ！オチンチンからもなんか粘液少し出てる！？」

「それは先走り液、カウパー液といって、感じてきた男性が射精前に分泌する薄い精液みたいなものよ。もう射精が近いかも♪」

美月も由衣夏から説明され、納得した表情を見せた。

そのまま1分ほど手コキと指でのアナル責めが続き、ついに人生初の射精、精通を迎えてしまう優太。

「あっ！　んんんんっ！　なんか出そう！　出ちゃうううっ！！」

「出せ！　ほらほらほらあっ！！」

『しこしこしこ……シュコココココココッ！！』

一気にピストン速度を全開にする美月。

理沙も中指までも肛門へ突っ込んで、二本の指で前立腺を激しく掻き回す。

「ほら、ここでしょ前立腺……イッちゃえええっ！」

「んあああああああっ！！」

『ドピュッ！！　ドピュピュピュピュピュピュピュウッ！！』

1メートルくらい高く何度も何度も噴き出す精液。
小学生の精通とは思えないほど、大量で勢いのある射精を見せつけられた四人の少女たちであった。

『ピピッ！』

「きゃっ！？」

その精液の一部が、美月の頬にへリ掛かった。

「もう……汚いなぁ。なんか生臭いし……栗の花みたいな匂いね……」

右手の甲で頬に着いた精液を拭い取りながら、気持ちよさそうな顔で早い呼吸をする優太を見下ろす美月。

理沙も肛門から二本の指を引き抜いてから、ベッドに落ちた精液

をそっと触れてみる。

「コレが赤ちゃんの元かぁ……中にオタマジャクシみたいなのがたくさん詰まってるんだよね？」

「そう。この子は生涯で、女性を孕ませることなく死んでいくんだけどね……初めての射精日、精通日が命日となるなんて……因果な話だわ」

神崎美央は射精を終えて、フニャフニャになってしまった優太のペニスを見つめながら静かに答えた。

美月は理科の実験で液体を混ぜるのに使用する長さ２０センチ、直径５ミリほどのガラス製の棒を取り出して、尿道口へそっと近づける。

「工藤美咲みたいに性器の穴……犯してあげるね？」

『ツプッ！……ズボボボボボ！』

「んぎいっ！？　痛いいいいいっ！？」

左手でペニスを握り、右手に持ったガラス製の棒を尿道口へどんどん深く突き刺してゆく美月。

ついに膀胱まで突き入れると、そこから激しくピストン運動を開始する。

『ズッ！　ズッ！　ズッ！　ズッ！』

「はぎいいいいいいっ！？　痛い痛い痛いいいいいいっ！！　抜いてええええっ！！」

　あまりにも激しく出し入れされるガラス製の棒により、尿道内は摩擦で熱を持つほどであった。

　それは激痛となって、優太の脳へ信号を送ることになる。

「穴とゆう穴は全て犯してあげる♡　オヘソはメスでブッ刺され……オチンチンはこのガラス棒で膀胱とゆう汚い内臓まで突っ込まれ……あはは！　エロいなぁ♡」

　美月はペニスを犯す行為にかなり興奮してきて、思わず陰部を濡らしてしまう。

　隣で見ている理沙もそれは同じであった。

「ちょ、ちょっと美月！　男子の尿道口ブッ刺すなんて……その責めってかなりエロいわね？」

「そうでしょ？　本来女性に挿入する部分が逆に挿入されちゃってるんだよ？　うふふ♪　哀れすぎてイカすわぁ～。マジで濡れてきちゃった♡」

根っからのSな気質であるが故に、エロく責めてるときにかなり興奮してしまう理沙と美月。
後ろで見ている美央と由衣夏も、そこは同じであった。
由衣夏は昨今、美央と理沙から責められたいM気質も発揮してきているのだが……。

激痛により絶叫を続ける優太に、更なる地獄が待つ。
潰された右側の睾丸の痛みが、少しずつ戻ってきたのであった。

「痛い!?　痛いいいいいいっ!!　ぐわあああああっ!!」

尿道から膀胱への焼けるようで突き刺さるような激痛と、潰された睾丸の下腹部を締め付けるような鈍痛が同時に襲ってくる。
幸い腹部切開と四肢切断の方はまだ麻痺していたが、その部位の痛みが戻るのも、時間の問題であった。

美月はメスに持ち替えると、ペニスの根元から真横に滑らせた。

「とりあえず性器切断しちゃう!　よっ!」

『スパアッ!』

「ギャアアアアッ!!」

左手に切断したペニスを握りしめて、テーブルの上に用意してあるまな板の上にそっと置く。

「美月？　なんでまな板の上に？」

「料理して食べちゃお♡」

「ええっ！？　チンポを！？　汚くない？」

「捌いて綺麗に水で洗ったら心配ないよ」

カニバリズムにまで興味を持つ美月にドン引きする理沙だったが、とりあえず美月を見守ることにした。

「おねぇちゃん！　チンポなんて食べて大丈夫かな？」

「……そんな集まりが以前あったわね。性転換した男性が自ら切断したペニスを食材にして……男女十人ほど集めてみんなで食されてたわ」

「なっ！　なんてこと……女性まで参加したの？」

「そう。性器を食べることは外国じゃなくてもこの日本でも……愛好家がいるみたいね」

「美月が料理したらおねぇちゃんも食べるの？」

理沙の質問にしばらく沈黙する美央だったが、隣の由衣夏と顔を向け合い同時に頷く。

「ええっ！？　おねぇちゃんや由衣夏まで！？」

大人のペニスじゃなく、小学生児童のペニスだったとゆうこともあり、そこは拷問処刑人女子たちの変態好奇心を揺さぶったのであった。

美月の料理を内心楽しみにしている美央と由衣夏が……そこにはいたのである。

「分かったわよ。あたしも……少しだけ食べてみる」

負けず嫌いの理沙は、自らを奮い立たせて性器を食する勇気を振り絞る。

「ちょっと待ってね。潰れてない左の睾丸も摘出しちゃうから♡こっちも刺身用にしよう♪」

『ズッ！　ズズズッ！』

陰嚢の中心へメスを入れ、左手を差し込んで睾丸を摘み出す美月。
精管や神経の管を睾丸側から切断すると、白目を剥いて泡を噴きながら失神してしまう優太。
「あはは……潰さなくても神経の管切断したら激痛なんだね……許して♡」
次にピンク色した肛門の縁にメスを入れる。
「肛門はまぁるく……くり抜いて……と。よっ！」
『グリッ！　ズズッ！　ズズズッ！』
見事に肛門部分である肛門括約筋を丸くくり抜いて、皿の上のペニスと睾丸の隣へ並べる美月。
「ちょっと！　アナルまで食べちゃうの!?　やだよソレは!!」
「大丈夫！　綺麗に洗って料理するから」
理沙はかなりビビりながら、くり抜かれた肛門を指で挟んで摘み上げた。
マジマジと眺めながら匂いを嗅ぐと、少しウンチの臭いがする。

「うっ！？……ウンチの臭いが染み込んじゃってる！？　あたしにはやはり無理かコレ……ううう」

青ざめている理沙を無視して、作業を続ける美月だった。
そのままぽっかり開いた肛門のあった部分へメスを深く挿し込み、陰嚢まで切り上げてゆく。
会陰部がパックリ切り開かれた。

「性器はまだもう一つあるのよ」

『グボッ！……グチュチュチュ！』

その切開部位へ指を突っ込み、何かを手探りしているようだった。
次の瞬間、美月はとある臓器を引きずり出した。

「あった！　ほら出てこい♡」

『グチュ！　ズルルルルッ！……ぷるるんっ！』

胡桃大の臓器が、血まみれの美月の指に握られていた。

「取ったよ前立腺！　ここで精液の一部も作ってるんだって。美味しそうでしょ？」

「そ、そんなお尻の穴の奥にあるような臭そうな臓器まで食べちゃう気！？」

理沙は寒気を感じて更に目眩がして、とうとうしゃがみ込んでしまうのであった。

前立腺も丁寧に皿の上に並べ終わると、優太の元へ再度歩み寄り、切開された腹部へ右手を突っ込んだ。

「ここから手を入れて……よっと！」

『ズボッ！……ヌプププ……ボコオッ！！』

肛門のあった空洞部分から、拳ごと突き出させる美月。

「アナルトンネルの刑♡　あはは！　ハラワタと直腸の生温かさがまた堪らない♡」

ここで思わず吐いてしまう理沙。

「オエエエエッ！！」

「え？　理沙ちゃん！？　今まで平気だったのに何故に今更？ここで吐いちゃうんだ……大丈夫？」

由衣夏が、苦しむ理沙にツッコミを入れる。

「はぁ、はぁ、だって……カニバリズムを想像すると……生々しすぎてちょっと……そのうち慣れてくると思うからどうにか平気だよ」

美月は腕を腹部から引き抜くと、そのまま斧を手にして振りかぶる。

「ぎひぃいいい……いだいよぉ！　いだいよおお！　んぎぎぎぎ」

「よく頑張ったわね。性器破壊も完了したし……十分楽しめたわ。もう殺してあげる」

「ううう……死にたくない……うひぃいい」

「ダメ！　死んじゃえ！」

『ドガッ！！……ブシュウウウウウ！！』

力強く振り下ろされた斧は、１１歳の男子児童の首を一瞬で切断してしまった。

夥しい量の鮮血が噴射されるが、数秒で止まり、全身は大きく痙攣を始める。

『ビクビクビクッ！！　ビックンビックンビックンッ！！』

「四肢切断されてお腹開かれて……全開まで股開かされた挙句……性器類全て摘出♡　ほんと哀れな死に方だったよねぇ優太くん？あははは♡」

美月は切断された生首の髪の毛を掴み、自分の顔の位置へ持ち上げると、白目を剥いた死に顔の唇へそっとキスをした。

沼のように膣を湿らせながら……。

「やるなぁ美月ちゃん！　理沙ちゃんより残酷なんじゃゃないの？」

由衣夏は笑顔で拍手するが、理沙はまだしゃがみ込んで立ち上がれない。

そのまま美月は刺身包丁を手に取り、鼻歌を歌いながら優太のペニスと睾丸、肛門括約筋と前立腺を捌いてゆく。

ペニスは尿道口をくり抜いてから尿道管を抜き取り、指を突っ込んで綺麗に洗う。

その後１０回ほど包丁で輪切りにして、皿へと盛り付けた。

「え～と。オチンチンは皮付きで……睾丸はすり潰してオチンチン

にかけて……ザーメンソース！　なんてね♡　あははは！」

「おい美月！　どうしてそんなに楽しく汚い部位の料理が……って
ゆうかカニバリズムはどうかと思うよあたし」

ようやく立ち上がった理沙が、まな板の上の生々しい性器を見な
がら問いかける。

「汚くないよ。ちゃんと洗ってるから。それにカニバリズムって言
っても、脳みそさえ食べなきゃ何とかゆう不治の病になる心配もな
いからね？」

そのまま肛門括約筋は縦横と二回切り、四等分にして、前立腺も
同じく四等分に切り分けた。

「さぁ出来た！　小学生男子児童の性器の刺身盛り合わせ♡」

遺体を地下の投棄場所へ蹴り込んでから、各々椅子に座り机の上
に並ぶエッチな部位の刺身を見つめる四人の少女。

「私から食べてみるね？」

「と、当然でしょ！」

美月がペニスの輪切りを箸で摘み上げ、パイオニア宣言をすると、即座に当たり前だと答える理沙。

「パク！……もぐもぐ」

美央と由衣夏と理沙の視線が、美月の小さな口元へ集中する。

「うっ！？……ブハッ！！」

数秒してから吐き出されてくる輪切りのペニス。
ツインテールの少女は、この度のカニバリズム主犯格のくせに生食を拒否してしまう。

「うう……生臭い……まずい！」

「と、当然でしょ！」

「豚肉のように生臭いから、臭みを生姜で消しちゃお♪」

刺身で食べることを諦めた美月は、フライパンで市販の生姜焼きのタレを使い、炒めて調理することにした。

結局全ての部位を生姜焼きにして再度挑戦。

コレは意外に美味しかった。
恐る恐る美央たちも少し食べてみるが、どの部位もなかなか美味しかったのである。
肛門は結局誰も食べなかったので美月が一人で平げた……。
「肛門括約筋だって綺麗に洗ってるから大丈夫なのに……コリコリした歯応えが最高♡　さすが締まりのある筋肉の類だけあるわ〜」
こうして理沙と美月の人生初の拷問処刑が、無事に執行されたのであった。
人生初のカニバリズム経験も……。
残酷処刑島に新たに二つの遺体が加わった……。

妹たち（後編）（後書き）

意外と美味しかった性器料理に、帰宅してからも熱く語る美月だったが、理沙は体調不良で早めに布団へ入る。
結局理沙も美味しいと感じて食してしまうのだったが、ペニス自体を想像して悪心状態で苦しんでいた……。

由衣夏も美央の家に泊まることになり、二人は結局同じベッドで寝ることに……。

「理沙ちゃんより美月ちゃんの方が残酷だとは……顔は理沙ちゃんの方が美央や莉央さんに似てるのにね？」

「うん……ってゆうか性器を食べることにドン引きしてるだけで残酷さは変わらないと思うけど……」

「ん？　そ、そう言われたらそうだね……あはは」

「今日はお疲れ様。明日も早いしもう寝よう」

そう言いながら美央は背中を向ける。

「美央……やっぱ私じゃダメ？」

「え？……ダ、ダメとゆうか……同性自体に性的な興味がないだけ

で……由衣夏のことは大好きよ。友達、親友としてね」

そう答えた後返事がない。

泣いてるのかと心配して振り返る美央だったが……。

口を開けて涎を垂らしながら爆睡している由衣夏であった。

「おいヨダレ！！……はぁ。ま、いっか。おやすみ」

拷問処刑人の血筋（前書き）

残酷処刑島での初処刑執行を成し遂げた神崎美央の妹たち。
理沙と美月は、意外と平気で人を拷問処刑できることに少し驚いた美央と由衣夏だった。
拷問処刑執行後、美央の家に泊まることになった由衣夏だが……。

拷問処刑人の血筋

任務執行を終えた四人は、疲労から爆睡してしまっていた。

午前三時、尿意に目覚めた由衣夏は一階のトイレへ向かう。

「むにゃむにゃ……え〜と、トイレは確か西側の奥だったはず……あれ？　こっちだったかな？」

神崎邸はかなりの豪邸なので、由衣夏は疲れているせいもあってかトイレの場所を忘れてしまう。

その時背後から声が掛かり、飛び上がりそうになる。

「由衣夏ちゃん」

「はっ！　はいっ！？」

現れたのは美央の母親である神崎美琴であった。

三十路ギリギリの３９歳であったが、少しキリッとした美人系の美央や理沙にはあまり似ていない、どちらかといえば美月に似ている可愛い系だ。

肩に少し髪が掛かる程度の薄紫色に染めたウルフカットが、更に彼女を若く見せている。

「こんな時間にどうしたの？」

「あ、あの……トイレが分からなくなって」

「そこの部屋から三つ奥の左側よ」

「ありがとうございます！　おやすみなさい」

「美央たちがいつもお世話になって。ありがとうね。何かあったらいつでも言ってきてね。おやすみ」

そう言いながら、部屋に帰る美央の母親の美琴。

ようやくトイレに辿り着いて安堵したのも束の間、カギがかかっている。

『ガチャガチャ！』

「え？　開かない？　やだ漏れちゃう！」

地団駄踏んでいるとトイレのドアがそっと開き、寝ぼけまなこの理沙が出てきた。

「むにゃ？　ん？　あんた誰？」

「え？　わ、私よ！　由衣夏！」
「アハ♡　早くしないと漏れちゃうよ？」
「あ！　そうなのよ！　ちょっとごめん……」
慌てて用を足した由衣夏がホッとしてトイレを出ると、そこには理沙が膝を両手で抱えて座っている。
「あれ？　どうしたの理沙ちゃん……こんな所で寝てたら風邪ひいちゃうわよ？」
「目ん玉開いて座ってるし……あのさ、ちょっとあたしの部屋に来ない？」
「え？　何か用なの？」
「由衣夏に見せたいものがあるんだ」
こんな真夜中に何を見せてくれるのか想像もつかないまま、一階にある理沙の部屋についてゆく由衣夏。
部屋に入ると、いかにも小学生の女の子らしい縫いぐるみがたくさん置かれている。
「あ！　ミッキーだ！　こんな大きなミッキー……いいなぁ」

「由衣夏も好きなんだミッキー」

「うん！　私、ハーフだしよく本場の外国のディズニー連れて行ってもらってたもん」

「ふうん……女の子はみんな大好きだよね、ディズニー」

　そんなこんなで、しばらくディズニーランドの話しで盛り上がる理沙と由衣夏だった。

「ふぁああ〜。ちょっと眠たくなってきちゃった……明日は七時起きで学校だし……理沙ちゃんも学校でしょ？　もう寝ましょ」

「……美央ねぇちゃんの部屋に帰るの？」

「うん、美央はセミダブルの広いベッド使ってるから」

「あたしのベッドもセミダブルだよ」

　そう言われても……と、理沙が何を言いたいのか本意が分からなくなってきた由衣夏は、しばらく理沙の目を見つめてしまう。

「あの……理沙ちゃ」

「ここで寝て」

話しかけている途中で遮られる由衣夏。

「え？」

「あたしの部屋で寝ていってよ」

親友でもあり同じ拷問処刑人でもあり、愛してしまっている同性の美央にそっくりな顔でそんなこと言われたら……いくら相手が小学生とはいえ、一瞬変な感情が湧いてしまう由衣夏だったが、生唾を飲んで堪えながら返事をする。

「いや、でも……私は美央のことが」

「好きなんでしょ？」

「え！？　どうしてそれを？？　まさか美央に聞いたの！？」

「そんなことおねぇちゃんが話してくれる訳ないじゃん。おねぇちゃんと一緒にいる時の由衣夏を見てたら誰でも気付くわよ。美月も心配してた」

「美月ちゃんにまでバレてたんだ……なんか恥ずかしいな。てへへ」

「おねぇちゃんは同性に全く興味ないから、付き合うのは無理だよ？」

「え？　そ、そんな唐突に無理って言われても……本気で大好きだから……でもね、私がお願いしたら指でエッチな事とかしてくれたりするの……こんなこと話すのほんと恥ずかしいんだけど……」

しばらく由衣夏が沈黙していると、理沙はベッドに入る。
そのまま理沙も黙り込み、数分間会話が途切れた。

「隣……入っていい？」

「うん」

由衣夏の心の中で、悪魔が微笑んだ瞬間だった。
理沙の強気な性格も顔も美央には激似していたため、理沙のことも内心大好きだったのである。
美月も大好きだが、タイプとゆう点では美央に似ている理沙が上だった。
ドキドキしながらベッドに入ると、理沙が電気を消して就寝灯に切り替える。

「由衣夏は今までに何人殺してきたの？」

「え？　こ、殺してきたって言い方だと……なんか私、殺人犯みたいじゃん？　執行してきたとか言えないかな？　あはは……」

「かなり殺してきたの？」

「……小学生の頃からだからもう百人くらいは処刑してきたよ」

「凄いね！　そんなたくさん……昨日みたいに小学生とかもいた？」

「うん。小学生どころか幼稚園児もいたよ」

「え！？」

思わず固まる理沙。
何をどうやったら幼稚園児が拷問処刑されるのか、到底理解できなかったからである。

「たとえ幼稚園児が親の指示で動いても……相手が死ぬと分かっていて放火とかすれば……将来も人を殺すだろうから更正の余地無し、と判断されて拷問処刑の対象となるの」

「どんな拷問したの？　その園児に」

「女の子だったんだけど……乳首とクリトリスをペンチで潰してちぎり取って……肛門から杭を打ち込んで口まで串刺しにしたわ。貫通しても生きてるままもがき苦しんで、１時間くらいは生きてた。だからせめてもの情けとして、膣口から小型爆弾を子宮まで挿し込んで……ドカンッて感じ」

「わぁ～。幼女にも容赦ないんだ……下半身ミンチだねそれ」

「うん。おへそから下は無くなって、ハラワタ撒き散らして違う生き物みたいになってた」

まさかの園児処刑に少しビビる理沙だったが、爆破シーンを想像しながらゾクゾクする自分がいた。

「やっぱあたしたちって残酷なのよね」

「うーん……普通の人には出来ないことを結構平気でやっちゃってるからねぇ。いくら被害者と遺族の敵討ちとはいえ、残酷といえばそうなのかも」

再びしばらくの沈黙が続く。

「理沙ちゃん？　もう寝ちゃった？」

返事がない。
なんか一人で変にドキドキしたことが、急にバカバカしく思えてきて、吹き出しちゃいそうな衝動を抑えながら目を閉じる由衣夏。

「おやすみなさい」

「……」

「？」

何かが唇に触れる感覚がして、咄嗟に目を開ける。
薄暗い暖色の中、理沙の顔が……。

「んんっ！？　り、理沙ちゃん！？」

慌てて顔を横に捻り、重なった唇を離す由衣夏。

「な、何をしてるの！？」

「ねぇ……おねぇちゃんがダメなら代わりにあたしが付き合ってあげようか？」

「は？」

唐突なキスと、告白にも近い囁きに一瞬頭が真っ白になってしまう由衣夏。

「だから……あたしとエッチしようよ」

「ご、ごめん理沙ちゃん！　わ、わ、わた、私には美央しか考えられないの！　ごめんっ！」

「…………」

「ヤダなぁ理沙ちゃんってば！　そ、そんなこと言って！　実際の所、美央から相手にされない私を慰めてくれてるだけなんでしょ？　そうよね？　でもありがとう」

「……よく分かってるじゃん。見てて可哀想すぎたからね。おねぇちゃんに似てるあたしが相手してあげたら、喜んでくれるかなあって」

理沙の気持ちに思わず涙ぐむ由衣夏。

手の甲で涙を拭うと、理沙をギュッと抱きしめる。

「残酷なのになんて優しいの理沙ちゃん！　ありがとうねほんと」

「残酷で優しいって？……それって褒められてるのか何だかよく分からないけどね」

そのまま小学生の胸の中で泣くだけ泣いた後、爆睡した由衣夏は朝九時に目覚める。

「んん……ん？　あれ？　理沙ちゃん！？」

時計を見ると九時……完全にもうどう足掻いても学校は遅刻であった。

「みんな私を起こしてくれないで登校しちゃったの！？　チキショー！　みんな冷たいいいっ！！」

結局ドローンでの空から登校はできず、無人のドローンタクシーを利用して行くことにした。

「ここから最寄りのドローンエアポートまで１５分歩き……更に学校の近くのエアポートからまた１０分ほど歩き……あーダルい！くそう！」

ようやく高校へ辿り着いた由衣夏は、早速美央に食って掛かる。

「ちょっと美央！　私をほっといて行っちゃうなんて酷いじゃない？」

「え？　散歩がてら早めに出て歩いて行くって……理沙から聞いてたんだけど？」

「え？　あ、あの子そんなこと言ってた？」

「うん。でもなかなか来ないから道にでも迷ってご飯でも食べに行ったのかなって……今勝手に思ってたところ」

「仮に歩いて来たとしても幼子じゃあるまいし通学路迷うか！！」

少し不機嫌だった由衣夏だが、なんだかんだで放課後にはすっかり元気を取り戻し、仲良く美央のドローンでの帰宅となる。

「ちょっとウチに寄ってく？　理沙に文句言いたいんじゃない？」

「ん！？　そりゃそーだ！　寄ってくからお願いします」

再び神崎邸へ着陸するドローン。

先に帰宅していた理沙と美月が駆け寄ってくる。

「美央ねぇちゃーん！　ちょっと聞いて！」

「あれ？　由衣夏ちゃんもいるよ？」

理沙に続いて話しかけてくる美月は、由衣夏の存在に先に気付いた。

その二人を見て何か違和感を感じる由衣夏。

「あっ！？　理沙ちゃんその髪！？」

美央ほど長くて艶やかな黒髪ロングは、見事なまでにショートカ

ットになっていた。
文句を言う事すら忘れて、理沙が断髪した理由を聞く事になる。

「一体どうしてそんな短く！？」

由衣夏は目を見開いて理沙に問いかける。

「……失恋しちゃったの」

「え？」

「だからさぁ……好きな人に振られちゃったんだ。だから思い切ってバッサリ切って気分転換ってわけ」

「理沙ねぇちゃん好きな人なんていたっけ？」

理沙の隣から、三女の美月までもが目を丸く見開いて問いかけてくる。

「最近好きになって最近振られちゃった。まぁ別に良いんだけど」

「良くないから髪バッサリ切ったんでしょ？」

「うるさい！」

美月のツッコミに少し怒りの感情を見せる理沙。
一人固まって動けなくなっているのは……由衣夏だった。
できるだけ落ち着こうと、心の中で気持ちの整理を始める。

『え？　ええっ！？　ま、まさかあの告白って……ほ、本気で……』

「…………おーい由衣夏！　聞こえてる？」

ふと我に返ると、美央が大声で自分を呼んでいた。

「え？　ご、ごめん！　なに？」

「ついでだから、お母さんのことも伝えておこうかなと思って」

「お母さん？　あ、あのウルフカットでめっちゃ綺麗な……美琴さん……だっけ？」

「お母さんも……先月から拷問処刑人に選出されたの」

「ええっ！？　そ、そんなことって……神崎家、全員じゃん……」

「昨日までにもう十人は拷問処刑してる。今ちょうど今回の三人目と四人目の拷問してるところ……」

「さ、三人目と四人目？　同時なの？」

「そう。大学生と中学生の兄弟を拷問してる」
興味津々に、美央の母親である美琴の拷問を見学に行く事を決める由衣夏だった。
神崎邸一階にある拷問部屋にやってきた美央と由衣夏、理沙と美月。
そこで美央たちの母、美琴による拷問を初めて見ることになる。
軽くノックをしてから、そっと扉を開く美央。
大の字の磔台に、素っ裸で拘束されている２１歳の大学生男子。かなり激しく抵抗したのか、身体はアザだらけ、顔面も瞼が腫れて鼻血を垂れ流し、唇も裂けていた。
１４歳の弟らしい少年も、ベッドに仰向けに拘束されて身動きが取れない状態でいた。
「あら？　これまた大勢で……ご見物かしら？」
「うん。お母さんの趣味を活かした拷問、みんなでゆっくり見物させてもらうから」
「おほほ！　こんな責めが法律的に許されるなんて……私ゾクゾクしちゃうわ♡　さてと……大学生の寛孝くん、私に敵うと本気で思ってましたの？」
「うぎぎぃ……ゆるじでぇ……いだいいいい」

黒づくめのボンテージに網タイツ、革のロングブーツといった完全なＳＭ女王様風な格好で、大学生の乳首をさすりながら囁きかけている。

「うう……ゆ、許してください……弟の雄也だけでも……」

「だめ。大崎寛孝、雄也の二人は本日拷問処刑されちゃうの」

「そ、そんな……お願いだから許してええええっ！！」

そのセリフには答えずに、寛孝の背後に回り込む美琴。

『パンパンパンパンッ！』

「ひぎいいいいっ！？」

男の背後から、膝で陰部を何度も蹴り上げる。
ペニスと睾丸が激しく上下に揺れ動く。
美琴は更に激しく連発で蹴り上げ続ける。

「おほほほ！　陰茎と陰嚢のダンスよぉ～♡　仲良く踊り続けなさい！　ほらほらほらぁ～♪」

『パンパンパンパンパンパンパンッ！！』

「んぎゃあああっ！？　つ、潰れるううっ！！」

「潰させてもらってるの♡　先ずは右のキンタマよぉ。それっ！」

『ドカッ！！……グシャッ！！』

「ぎゃあああああああああっ！！」

「次！　左っ！！」

『ズガッ！！……グチャッ！！』

「ばぎいいいいっ！！……ぶくぶくぶくぶく……」

「おほほ……二つとも綺麗に破壊しちゃったわよぉ？」

強烈な最後の二撃の膝で、二つの睾丸を完全に潰された大崎寛孝は、白目を剥いて気絶してしまう。

構う事なく今度は足の甲で股間を激しく蹴り上げた。

「ほらぁ！　潰れた睾丸から精液搾り出して差し上げますわぁ♡足でだけどね……」

『スパァンッ！！　スパァンッ！！……ドピュッ！！　ピュピュピュッ！！』

潰れた睾丸と共に蹴り上げられるペニス。
尿道からは血と精液の混じった赤い粘液が、蹴り上げられる度に勢いよく噴き出す。
潰れた睾丸からの出血が尿道から噴き出していたのであった。
激しく痙攣し始める寛孝。
美琴は串刺し用に作らせた、刃のない模擬刀なような日本刀を鞘から引き抜くと、寛孝の肛門へそっと突き刺す。
切先だけは鋭く尖っていて、貫通力は強烈だった。

「アナルから串刺しにしてあげる♡　ここ？」

『ズプッ！』

「ピギィッ！！！！」

美琴は男の反応を楽しむが如く、ゆっくりゆっくりゆっくり日本刀を肛門へ突き入れてゆく。

『ズプ！　ズブブブブブ！』

「んぎいいいいいっ！！　いだいいいいいっ！！」

「弟の見てる前で肛門串刺しの刑よ！うふふ♡」

「お兄ちゃん！！　お兄ちゃん！！　わぁあああああんっ！！」

泣き叫ぶ弟の前で肛門から口まで串刺しにされる兄の寛孝。

「ふんごおおおおおおっ！！……ガクンッ！」

「ペニスを蹴られまくって……キンタマ両方潰された直後の肛門串刺し刑……そそるわねぇ？　あら？　逝っちゃったみたいね？　オホホホホ！」

「やだぁあああっ！！　お兄ちゃぁあんっ！！　死なないでええええっ！！　わーんわーん！！」

美琴は口まで串刺しにした日本刀を引き抜き、更に突き入れて再度口から飛び出させる。
その残酷なピストン運動を何度も何度も繰り返した。
とっくに絶命している寛孝の遺体を弄んでいたのである。

ようやく肛門から日本刀を完全に引き抜くと、サバイバルナイフに持ち替えてペニスを一刀両断。

床に落ちたペニスを拾い取り、弟の口へ捩じ込む。

「ほら、お兄ちゃんのペニスよぉ？　お食べ」

「むごおっ！？　んうううぅ！？」

一部始終を見ている美央たちだったが、由衣夏がついに口を開いた。

「さすが美央のお母さん……綺麗だけど残酷だわ」

「まぁね。莉央ばあちゃんの冷血な血を引く者たちだからね……」

切断されたペニスを指でシゴき、尿道内に残された血の混じった精液を全て弟の雄也の口内へ搾り出す美琴。

「んんんっ！？……ごっくん」

「うふふ。きちんと飲み込めたみたいね？　ご褒美にコレをしてあげるわ」

そう言いながら１４歳の中学生の肛門へ人差し指を突っ込む美琴。

『ズプッ！　ズボボボボッ！』

「わんああっ！？　抜いて！　お願いっ！」

人差し指をグリグリ掻き回し、前立腺を刺激すると、中学生よイ

チモツは立派なほどにフル勃起してしまう。
両足首を両手で掴んで目一杯上部へ持ち上げると、そのまま装着していたペニスバンドのディルドを少年の肛門へ捩じ込む。

『つぷ！……ズブブブ！』

「やあっ！？　痛いっ！！　やめておばさん！！」

「誰がおばさんよ？　なんか腹立つわねぇ……肛門が壊れるくらい激しく犯してあげるわよぉ」

『バッコンバッコン！！……バコバコバコバコバコッ！！』

「はぎぎぎぎぎぎいいいいいいいいあっ！！　いだあああいっ！！」

直径3センチ、長さ15センチもある極太ディルドは、中学二年生のアナルを容赦なく犯し続けた。
無理矢理前立腺を激しく抉られたため、強制的に射精させられてしまう。

「んぎいいいいいっ！！　やだあああっ！！」

『ドピュッ！！　ドピュピュピュピュウッ！！』

「はぁ？　何汚い粘液を吐き出してんのかしらぁ？」

腹部に精液をへりかけられた美琴は、怒りに任せて更に激しく腰を振る。

『バコバコバコバコッ！！……ブチブチブチイッ！！』

あまりに激しく出し入れされる極太ディルド。
ついに肛門と直腸までをも破壊してしまう。

張り裂けた肛門から直腸が飛び出し、ベッドは血まみれに染まってゆく。

『バッコンバッコン！！……ぷるるんっ！！……グチャグチャグチャグチャ！！』

「何を汚い直腸飛び出させてるの？　ほらほらぁっ！！　もっともっとハラワタグチャグチャにしてあげる♡」

白目を剥いて失神する１４歳の少年。
肛門から直腸を抉り出されながらも更に激しく犯され続ける。

「うふふ♡　アナルがグチャグチャになっちゃったわねぇ？　直腸もどんどん壊れていっちゃってるし……どう？　痛い？　気持ちいい？」

『パンパンパンパンパンパンッ！！』

失神しているにも関わらず、激しく腰を振り続ける美琴の姿を見て、思わず興奮してしまう美央たち四人の拷問処刑人。

失神しながらも勃起しているペニスを右手で握り、激しくピストン運動。

失神中にまで射精させられてしまう男子中学生の雄也だった。

ようやくペニスバンドの極太ディルドを引き抜く美琴。

破壊された直腸がディルドに絡みついて、ズルズルと飛び出してくる。

「あらやだ……ハラワタどんどん出てちゃった？　うふふ♡　もういっそ全部引き摺り出しちゃおうねぇ？　それそれそれぇっ！」

『ズルズル！　ズルルルルルルルッ！！』

数分かけて直腸、大腸、小腸までも肛門から引き摺り出してしまう。

激しく痙攣を始める雄也。

散々ハラワタを抜き取った後、トカレフ拳銃を手にすると、ヘソに銃口を押し当て引き金を引く。

「臭そうなこっちの穴には鉛玉を差し上げちゃうわぁ」

『パァンッ！！』

「ぐぎゃあっ！？」

『パンパンパンッ！！』

更に数回撃ち込む。
血の泡を吐きながら悶絶する雄也。

「まだ生きてる？　トカレフは8発あるからね？」

そう言いながら血まみれのヘソから銃口を引き抜くと、ハラワタを殆ど抜かれてポッカリ開いた肛門へ銃口を捩じ込んだ。

『グリリッ！　ズチュッ！……パンパンパンッ！！』

口から血の泡を噴き出して、人生最期の大痙攣を始める。

「あはは♡　アナル銃撃！……そんなに効いた？」

銃口を引き抜くと、更に口の中へ捩じ込む美琴。

『ガツッ！！　ズボォッ！！』

「最後の一発は口から脳みそ吹っ飛ばしてあげるわよぉ？　さようなら♡」

『パァンッ！！……ビチャアッ！！』

あたり一面に雄也の脳みそが降り注ぐ。

『ビチャビチャビチャッ！』

「ふぅ～」

銃口から立ち昇る煙を、色気のある厚めの唇を窄めて吐く息で吹き飛ばす。

「コレにてお終い♪　どうだった？」

「あ、はい！　とっても興奮しちゃいました！」

陰部をかなり濡らしていた由衣夏が一番に返事する。

「お母さん！　自宅で殺しちゃって後始末どうするのよ！？」

少し怒りを露わにして美央が怒鳴りつける。

「え？　特殊任務省の後片付け部隊がもうすぐ来てくれる段取りになってるわよ？」

「あ！　そ、そうなんだ……アイツらが遺体回収に来てくれるんだね……」

「そう。安心して。そんなことより美央！　あなたを大好きな由衣夏さん……もう我慢できないほど興奮しちゃってるわ。……指でしてあげなさい」

「え！？」

いきなりの母親からの命令に思わず従う美央だった。

「もう……じゃあ由衣夏、あたしが久しぶりにイカせてあげる」

『スルリ……くちゅ！』

「あんっ！？　いきなりそんな……」

スカートの下側から手を入れて、パンツの裾から膣口に中指を突っ込む美央。
頬を真っ赤に染めて愛しの美央の手マンに興奮絶頂の由衣夏だった。

『グチュチュチュチュチュチュチュ！！』

「あんあんあんっ！！　ダメぇぇっ！！　美央！！　愛してるううっ！！」

『プシャアアアッ！！』

美央の手マンにより大量の愛液と潮を噴き出させる由衣夏。

「美央……大好き」

「……あたしも好きだけど恋愛感情までは……」

「それ以上言わないで。分かってるから……たまに責めてくれるだけでも嬉しいよ」

美央の返事を遮りながら強く抱きしめる由衣夏。
隣で見ていた理沙はかなり嫉妬するが、由衣夏の幸せそうな表情を見てどうにか理性を保つことに成功する。

「理沙ねぇちゃん！　よく我慢したね！　偉い♪」

「うるさい！　生意気言うな！」

妹の美月に慰められて少しムッとしてしまう理沙だった。

その後、間も無くして登場する二人の男性。
特殊任務省の後始末係である角刈りの男前、海原拓磨と長髪で後頭部で髪を括っている川原雄二であった。

「神崎のお母さんまで……こんな激しく拷問処刑しちゃって……ふぅ〜。前回までは処刑島で処刑してくれてたのになぁ」

「あら海原さんに川原さん……お世話になります♡　ここでの処刑も山西長官さんから許可もらってますからぁ。おほほほ♪」

「はーい！　あとはお任せくださいお母様！」

川原の方は神崎美琴のファンになってしまっていたため、海原ほど落胆はしていない。
積極的に兄弟の遺体を袋に詰めてゆく。

「お前、いつから美琴さんのファンになった？」

「前回からですよ。むっちゃ綺麗で色気があって素敵な女性ですか

ら……３９歳とは思えないです」

「川原さん！　歳のことは言わないでくれます？　なんならペニスバンドで犯して差し上げましょうか？」

「あ！？　ご、ごめんなさい美琴さん！　えへへ……ちょっと犯して欲しいかも……あ、いや、ごめんなさい！」

ボンテージ姿の美琴に対して思わずＭっ気を見せる川原を、軽蔑の眼差しで見つめる美少女拷問処刑人たちだった。

拷問処刑人の血筋（後書き）

神崎邸で執行された美央の母親、美琴による二人の兄弟への拷問処刑……。

凄惨な遺体に呆れる海原、美琴に惚れ込む変態部下の川原、更に美央に嫉妬する由衣夏に惚れてすぐに失恋した理沙。

様々な想いをよそに、みんなの様々なドラマを楽しんで……一人ほくそ笑む神崎美月だった……。

特殊任務省の海原と川原によって、島に新たに二つの遺体が運び込まれ、焼却と埋没処理が手際よく行われた。

残酷処刑島に新たに二つの遺体が加わった。

動揺と決心（前書き）

先週に引き続き、この週末も神崎邸にお泊まりする由衣夏。
何か大変な事が起こるやもしれない……。

動揺と決心

神崎邸で執行された拷問処刑から一週間が過ぎ、何事もなく平和に過ごしている美央と由衣夏。

美央の母親の神崎美琴と、妹の理沙と美月に会いたくなった唐田由衣夏は、美央にお願いして土曜日の夕方から再び神崎邸へ泊まりに行くことになった。

「今週も連続でごめんね！　ありがとう」

「いえいえ……みんなも由衣夏のこと大好きみたいだし」

「うふふ♪　私は幸せだぁ！　美女たちに囲まれて♡」

「そうゆう貴女も大概ベッピンじゃん……あたしは大したことないよ」

本気かどうかは由衣夏には分からないが、とりあえず謙遜してみせる美央。

ドローンは何気ない会話をしているうちに神崎邸へ辿り着き、無事に着陸する。

例の如く二人の姉妹がお迎えに出てきていた。

笑顔で挨拶してから家の中へ入り、夕食のテーブルに着く五人。

今後の拷問処刑の方針や、考え方などの意見を交わし合い、似てるようで少し考え方の相違があること等にも気付くことになる。

「じゃあ今話し合ったように、拷問はこの家でも執行するけど、基本的には処刑は残酷処刑島で執行することに決めます」

「了解！」

美央のまとめに、他四名はほぼ同時に返答した。

「罪人による犯行時の冷徹さによって、苦しませる時間を変更したり、破壊する部位を増減したりすることも……よろしくお願いしますね」

「了解！」

結構細かく方針を決めてゆく五人だったが、拷問処刑を興奮しながら楽しみながら執行できるとゆう点においては、みんな同等の冷酷さを誇る。

「由衣夏ちゃん」

「あ、はい？　何ですかお母さん？」

「人生は一度きり。後悔しないように本能に従って生きればどうか

な？　時には強欲にね」

「え？　そ、それはどうゆう……」

少しの間美琴の言いたいことが理解できないでいたが、ウインクされてからようやく気付く。

「え！？　そ、それは……でも」

意味が理解できてない美央たち三姉妹は、黙々と寿司を頬張るが、由衣夏だけ頬が赤くなって食べ物が喉を通らなくなる。

「ごほっ！　ごほっ！」

思わずむせてしまうが、すぐにティッシュを差し出してくれる美琴に感謝しながら、口の周りやテーブルに飛ばした寿司のシャリを拭き取ってゆく由衣夏だった。

みんなで楽しく普通の会話も交わして、就寝時間がやってくる。

二人は美央の部屋に入ると、パジャマに着替えて布団に入った。

「電気消すね？」

「うん。今日は楽しかったぁ！　美琴さんもとっても美人だし♪　美央にはちょっと似てないけどすっごく綺麗でスタイルもいいし！　大好き♡」

「そ、そっか……お母さんも由衣夏のこと、とっても大好きだって言ってたよ」

「ほ、ホント！？……嬉しいなぁそれは！」

なかなか興奮して眠気が訪れない由衣夏だったが、最後の会話から一分も経たないうちに、美央はすでに寝息を立てて爆睡してしまっていた。

しばらくは考えてはいけないレベルの変なことを想像しながら、自分の指をアソコへ這わせる由衣夏。

『クチュ！』

「んっ、んん」

必死で声を我慢しながらオナニーを始めてしまう。

その時誰かの気配を感じて一気に指を引き抜いた。

「だ、誰！？」

就寝灯の薄暗い中、そこに立っていたのは……美央の母親だった。

「み、美琴さん！？　ど、どうしたのですかこんな時間に？」

「ちょっと私の部屋に来てくれる？」

「あ、は、はい！　美央は……」

「美央はいいからそのまま寝かせておいてあげて」

「はい」

なんか昔の美央の写真でも見せてくれたりするのか……美味しいお酒でも飲ませてくれるのか……色々想像しながら廊下を着いて行く。

美琴の部屋に辿り着き、扉を開けると……そこには理沙がいた。

「えっ！？　ええっ！？　り、理沙ちゃんまでいるの！？」

「もういい加減自分に正直になろうよ由衣夏」

かなり動揺しながら美琴に助けを求めるよう振り向くが、美琴は寝巻きのままペニスバンドを装置し始める。

「そ、それは！？　ちょ、ちょっと待って……んんっ！？」

小学生の割にかなりの強力な力で引き寄せて、強引にキスをする理沙。

これには抗えなかった。

「んんんっ！！　んんっ！！」

そのままベッドに押し倒され、舌まで挿入される。

色々想像していた事態とは全く違う系統の想像が当たってしまった。

まさか現実になるとは……未だに信じられない気持ちで理沙のディープキスを受け入れている自分がいた。

ようやく長いディープキスから解放してくれたと思った刹那、パジャマの上を手際よく脱がす理沙。

「あっ！？　やだ理沙ちゃ……ヒャアッ！？」

ほぼ同時に寒くなる下半身。
なんと美琴がズボンをずり下ろしている。
ペニスバンドを装着し、男性器を模した１５センチほどもある長

さのディルドを不気味に揺らしながら……。

「わああーん！」

思わず涙が溢れてしまう由衣夏。

本気で泣かれたと思った理沙と美琴は、パンツだけになって胸を隠して震えている由衣夏に速攻で陳謝する。

「ご、ごめん！」

「ごめんなさい由衣夏ちゃん！　私の勘違いだったのかしら？」

美琴の言う勘違いとは、自分と理沙のことを性的な対象としても好きでいてくれている、とゆう美琴なりの見解であった。

「ぐすん、ぐすん！」

しばらく由衣夏が泣き止むまで何もできないで見つめる理沙と美琴。

五分ほど泣いてからようやく口を開く。

「こちらこそごめんなさい……わ、私の想像してたことがまさか本

当に起きちゃうなんて夢にも思ってなかったから……つい涙が出てきちゃった」

由衣夏はなぜ涙が出たのか何となく理解していた。

付き合ってはいないが、愛してる美央に対する罪悪感と……嬉し涙であった。

「美央……ごめんなさい、私……」

そう言いながら理沙に抱きつき、今度は自分から理沙のパジャマを脱がしてゆく。

「美琴さん……続けて下さい」

「本当にいいのね？」

「はい。私は……今日から理沙ちゃんと付き合います！」

びっくりして目をパチパチさせながら素っ裸にひん剥かれた理沙が固まってしまう。

数秒後我に返って残った由衣夏のパンツを脱がしながら母親に語りかける。

「お母さんの言ってた通りだ……やっぱ好きな相手には多少強引に

いかなきゃダメだよね？」

「そりゃ当然よ。なかなか美央から受け入れてもらえない由衣夏ちゃんを見てるのは、私も辛かったから……」

理沙はベッドに仰向けに寝て、その上で由衣夏を四つん這いにさせる。

「上半身はこのままあたしとキス。お尻を突き上げてお母さんに後ろから犯してもらうから」

「え？　そ、そんな……」

大好きな二人の美女に……親子に責められることが夢のようであり、とめどなく溢れ出してくる愛液は内腿を伝い、瞬く間にシーツを濡らしてゆく。

「理沙、ペニバンディルドで犯すの……本当に私でいいの？」

「うん。お母さんも由衣夏のこと大好きでしょ？　何度も突き上げて気持ちよくさせてあげて♪　あたしは後でアナル処女貰っちゃうから」

「そう。ありがとう。じゃあ先ずは膣内(なか)を……見せてもらうわよぉ♡」

『ぐっ！……クパァ〜』

「ひゃんっ！？　ああ……もっと拡げて見て下さい……由衣夏のオマンコを見てくださいっ！　美琴さん♡」

そっとディルドの先端を膣口に押し当てて、ゆっくりと、挿し込んでゆく美琴。

『ググ……グチュ！　ヌプププ！』

「んひっ！？　んんんっ！！」

「痛い？　由衣夏ちゃんは処女？」

「はい……でも美央に指でしてもらってる時に……処女膜は破れちゃったみたいですから……」

「そう。なら全部挿入しちゃっても大丈夫ね？　いくわよ由衣夏ちゃん？」

『ズズッ！　グボボボボッ！！』

「あんっ！！……んううっ！」

理沙に再び抱きつかれてディープキスをされながら、美琴のペニバンディルドが膣口までも深く埋めてゆく。

ついに根元まで挿入され、激しく腰を振り始める。

『パンパンパンパンパンパンッ！！』

「んんんんんっ！！！！　ゔゔゔゔゔっ！！！！」

理沙の舌で口内を掻き回されながらも、必死でヨガリ声をあげてしまう由衣夏。

理沙は舌を引き抜くと、少し大きめのハリと艶がある由衣夏のオッパイを両手で鷲掴みにして揉みしだく。

『グニュ！　ぐにゅにゅにゅにゅ！！』

「夢にまで見た由衣夏とのキス……オッパイモミモミ！　実現しちゃった♡」

「あんあんあんあんっ！！　理沙ちゃんもっと激しく揉んでっ！あはあんっ！！」

『パンパンパンパンパンパンッ！！』

更に激しく膣内を犯す美琴。

「はら、もういいわよ。イキなさい」

『パパパパパパンッ！！』

「あっはぁーーーんっ！！」

『プシャーーッ！！　プシュシュシュシュウウッ！！』

大量の潮を理沙の腹部や股間にヘリかける由衣夏。

タイプの同性二人から激しく責められて絶頂の中全身を痙攣させる。

『ビクビクッ！！　ビクンビクンッ！！』

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、はぁ」

ゆっくりペニバンディルドを膣から引き抜くと、理沙に全体重をかけて倒れ込んでいる由衣夏の頭を数回優しく撫でてドアの方へ向かう美琴。

「後は任せたわよ」

「うん。あ。母さん！　最近まであたしと美月……母さんに冷たい態度取っちゃって……ごめんね」

「いいのよ。私もＳＭ女王の仕事で疲れちゃってて……まともにあなたたちのご飯も作ってあげられなかったし……そんなことより由衣夏ちゃんをもっと可愛がってあげてね。じゃあおやすみ」

「はーい。おやすみ。由衣夏の事、色々ありがとう」

美琴のお陰で由衣夏とのアプローチに大成功して嬉しそうな理沙へ、ニッコリ微笑みかけてから部屋を後にした。

「あのさ……その体勢、重いんだけど」

「はぁ、はぁ、あ……ごめんなさい」

まだ全身が震えている由衣夏は必死で起き上がり、座る体勢に入る。

「よしよし！　思いっきりイカされて気持ち良かったねぇ？うふふ♡」

「うん……まだアソコがウズウズしちゃってるの」

「ふぅん……じゃあ付き合い出した記念日とゆうことで大サービスしてあげる」

理沙は由衣夏を仰向けに寝かせて、膝を立てた上、両脚を大きく開かせる。

「やだ！　そんな近くで見られたら恥ずかしぃよ理沙ちゃん」

「付き合ってるんだから当然でしょ？　ほら、オマンコ全開にして見せてみ♡」

『クパァ～！』

親指を大陰唇に押し当てて、思いっきり左右に拡げると、小陰唇が縦に捲り上がり、粘液まみれの陰部が膣内まで丸見えになった。

「小学生にこんなことされるのって……どんな感じ？」

「やんっ！……見ないで……」

黙って由衣夏の性器を舐めるように観察する理沙。

「しょーぃんしんのヒダヒダが少し右の方が大きぃわね～。んでクリトリスは半分剥けてるタイプか……綺麗な肛門！うっすらピンク色してるなんてエロいなぁ由衣夏♡」

タイプの美央激似である理沙からマジマジ見られてると思うだけで、夥しい量の愛液が分泌されてくる。

「んんん……理沙ちゃん、もう許してぇ」

「ダメ！　分かってると思うけど喧嘩してもあたしに勝てないんだからどちらかと言えばあたしが上だからね？　分かった？」

「うん。理沙ちゃん……責められる方がゾクゾクするかも……」

「うふふ……このドMめ！」

散々観察した後、中指と薬指を膣口へ挿し込み、ジースポットを掻き回す。

更に狂ったように全身をくねらせながら激しく感じてしまう由衣夏。

「お尻のバージン貰っちゃうよ？えい！」

『ツプッ！』

「んああっ！？　だ、駄目そこは！！」

「駄目じゃないの。ほら！　もうあたしの中指全部入っちゃったよ？」

『グリグリッ！……ズブブブブッ！！』

「んんんっ！！　あんんっ！！　理沙ちゃん……気持ちいい♡」

理沙による性器と肛門の二箇所同時責めが開始される。

親指も器用に使い、クリトリスまでも優しく激しく緩急つけながら擦り倒した。

あまりの気持ちよさに悶絶する由衣夏をよそに、目を細めてイヤらしい笑みを浮かべながら女子高生を指で犯す女子児童だった。

「あはああっ！！　イクッ！　イッちゃううううっ！！」

「いいよ。イッちゃえ由衣夏！　ほらぁっ！」

『グチュチュチュチュチュチュチュ！！　ぐりりりりりっ！！』

高速で二つの穴に突っ込まれた指を出し入れしながらクリトリスも激しく擦り倒すと、再び潮を噴きながら昇天してしまう由衣夏。

「あはあああああっ！！　んぎぎぎぎぎいっ！！」

指に付着した潮と愛液、便をティッシュで拭き取りながら一つ息を大きくつく理沙。

「ふぅ～♪　どうだった？　あたしの三点責めは強烈でしょ？」

「うん……はぁ、はぁ、はぁ……全身が痺れちゃってもう……はぁ、はぁ」

理沙は由衣夏の上に、逆向けになって覆い被さる。

「あたしも濡れちゃった。アソコ舐めて綺麗にしてくれる？」

「んん……り、理沙ちゃんのオマンコ小さくて可愛い♡」

「指で拡げて膣口と中身舐めてよ」

「うん！　失礼しまーす♡……ペチャペチャ！　レロレロ」

「あっ！……うんん」

今度は陰毛さえまだ産毛である小学六年生の理沙が、本気で感じながら陰部を湿らせる。

その勢いのまま由衣夏の膣口も舐め返した。

二人は互いにビクビクと全身を震わせながら、時の経つのも忘れて舐め合い続けるのであった……。

やがて二人は頭を揃えて重なり合って、熱い抱擁をしながらキスをし合う。

バードキスの連続から濃厚なディープキス……色んなやり方で接吻を愉しむ。

「由衣夏、愛してるよ」

「わ、私も理沙のこと愛してる……でも本当に六つも歳上の私なん

かでぃいのかな？」

「由衣夏がいいの！　余計なこと言ってると乳首噛み切るぞ？」

そう言いながら軽く右の乳首を噛む理沙。

「痛いっ!?」

「ごめん！　強すぎた!?　ごめんね」

心配そうに目を見つめてくる理沙を見て、もう一度強く抱きしめて、ハリのある小さな頬に、自分の頬をスリスリ擦り付ける由衣夏。

「んん!?　ちょ、ちょっと！　顔が痛いよ？　由衣夏ってば！んごご……」

理沙の顔面が激しく上下左右に歪むほど強く擦り付けてくる由衣夏に呆れながらも、なすがままにジッと耐えているのであった。

「コラ止めろって！　由衣夏っ！！」

動揺と決心（後書き）

そのまま美央の部屋へそっと戻り、爆睡している様子を見て安心して隣に入るが、まだ身体の火照りと興奮が抜け切らない。

美央にどのタイミングで妹の理沙と付き合うようになった事を告白するか……それを考えているとなかなか眠れたものではない。

「はぁ～。ごめんね美央……ほんとごめん」

「ス～……スピ～」

理沙そっくりの寝顔で寝息を立てる美央を見つめながら思わず涙を溢してしまう。

『私って最低なのかも……でもこれからも最高の親友でいてね。おやすみ美央』

心でそう呟きながら、いつの間にか深い眠りに落ちる由衣夏であった。

由衣夏……真実を知る（前書き）

不幸にも美央たちの恐ろしさを事前に知らなかった者たち。
その代償は決して安くはなかった……。

由衣夏……真実を知る

東部地方中央部に位置する私立赤霧島高等学校。
拷問処刑人である神崎美央と唐田由衣夏が通っている。
この二人の強さや恐ろしさを未だに分かっていない生徒たちも数少ないが存在する。
「三年の神崎美央と唐田由衣夏とかゆう奴……どうしてアイツらだけピンク色のスカート履いてるんだ？　ほんと舐めてるな」
「かなり目立ってるもんね廊下とか歩いてても……宮下くんが一度シメてやったら？　ポニーテールの金髪とかもムカつくし」
「そうだな……あーいう目立ちたがり屋とかむっちゃムカつくんだよな俺も」
一年Ｂ組の宮下章雄（みやしたあきお）と、その彼女である兼田瑠美子（かねだるみこ）は時折廊下ですれ違うピンク色のスカートの三年生二人に、少なからず敵意を抱いていたのであった。
放課後ドローンに乗り込もうとしていた所を、章雄と瑠美子が声をかけて引き留める。
「おいお前ら！」

ドローンの扉を開けながら振り返る美央と由衣夏。

「誰？　あたしたちに何か用？」

「派手なミニスカート履いてる上にドローンでの登下校か？　ほんと生意気な奴らだな？」

いきなり喧嘩を売ってくる一年生たちに少し戸惑いを見せるが、じわりじわりと頭に血が昇るのが分かる美央と由衣夏だった。

「何こいつら？　由衣夏の知り合い？」

「冗談！　知らないよこんなヤツら……」

「見てるだけでムカつくから前から一度シメてやろうと思ってたんだ。なぁ瑠美子」

「そうそう。かなり痛くて恥ずかしい目に遭わせてやるから覚悟しときなよ？」

そう言いながらドローンに乗りかけた二人を階段へ誘導するヤンキーカップル。

連行されてきた場所は……もはや定番とも言える体育館の裏であった。

「あたしたちを虐めて暴行するつもり？」

「あたり前だろーが！」

「こんな場所にノコノコ付いてくるアンタらも本当バカだよね？　あははは♪」

章雄に続けて瑠美子も口を開き、バカウケしている。

この二人は凶暴過ぎる上に性格も悪いので、同級生からも避けられて嫌われていたため、仲間同士が共有する情報とゆうものが根本的に不足していた。

〔三年の神崎美央と唐田由衣夏には絶対に手を出すな〕

とゆう殆どの生徒が知っているであろう内容だ。

「まだこんなヤツらいたんだね……どうする美央？」

「殺しはしないけど激痛と辱めはタップリ与えちゃいましょ♪　よく見れば美男美女じゃん！　そそルゥ～♡」

「やれやれ……不細工なら許してやるってことそれって？」

ゆっくりとにじり寄ってくるヤンキーカップル。

左手で美央の胸ぐらを掴んで右手で殴ろうと振りかぶる。

『バキッ！！』

「ぐえっ！？」

当たり前ではあるが、殴られて吹っ飛んだのは男の方だった。
仰向けに倒れて、鼻血を噴き出させる章雄。

「きゃっ！？　ちょ、ちょっと！？　章雄！？」

彼女である瑠美子が見守る中、美央は馬乗りになって、激しい嵐のようなパウンド攻撃を開始。

『パンパンパンパンッ！！　バキバキバキバキッ！！　ガツッ！！
グシャッ！』

「ひゃぶぶぶぶうっ！？　がぎゃあああああっ！！」

鼻の骨は折れてひん曲がり、前歯も二本根元から抜け落ちた。

「あはは♪　可愛い顔になっちゃって……」

「うごごご……がはぁあああ」

「章雄っ！？　ちょっともうやめてっ！！」

まさかの彼氏の敗北に、思わず駆け寄る瑠美子だったが、セミロングのカールした茶髪を鷲掴みにして静止する由衣夏。

「アンタは私が相手してやるよ」

「痛いっ！？　や、やめろ離せっ！！」

髪の毛を強引に引っ張りながら何度も左右に振り回すと、数十本も毛が抜け落ちてしまった。

「じっとしてないとどんどん引きむしられて、髪の毛無くなっちゃうよ？」

「いたたた！　いだぁーいっ！！」

反撃する気力も失せた彼氏の方に目を遣ると、美央が制服のズボンとパンツを脱がせている所であった。

「な、何しやがる！？　や、やめろ！」

「何その偉そうな言い方？　ぶっ殺すわよ？」

『スパァンッ！！』

「ひぎいっ！？」

頭部が吹っ飛ぶほど強烈なビンタを喰らい、一気に大人しくなる章雄であった。

「コレからはあたしたちのことを、敬語で更に様付けで呼ぶの。良いわね？」

「は、はい……美央さ……ま」

「よくできました。ほいっと！」

『ズルリッ！』

満足して笑みを浮かべながら遂にパンツも足首までずり下ろす美央。

「ひゃっ！？　み、見ないで……」

「オチンチンなんて見慣れてるから心配しないで」

そう言いながら電気アンマの体勢に入る。
両足首をしっかり両手で握りしめ、スニーカーの裏側をそっと股間に密着させた。

「ここかなぁ？　性器は……」

「ヒャアッ！？　な、なにを……す、する気です……」

「見たら分かるでしょ？　こうすんのよ！」

『ガガガガガガガガッ！！』

「はぎゃあああああああっ！？」

口を押さえて震え始める彼女の瑠美子だったが、由衣夏がそっと背後から下に手を回す。
スカートの内側からパンツの裾を経由して膣口へ魔の手が迫る。

『スルスル……ズチュ！』

「やあっ！？　や、やめてっ！！」

「抵抗したらぶっ殺しちゃうわよ？」

「や、やだ……ゆ、許して由衣夏さん」

「あはは！　勝てないことが分かったら急に大人しくなるのね？

ヘタレヤンキーの定番あるあるだわ」

『ズチュ！……クチュクチュクチュクチュッ！！』

「あっ！？　あはあっ！！　んんんっ！！」

由衣夏のあまりの指遣いに、本気で感じてきてしまう瑠美子。

隣では、美央に電気アンマを受けている彼氏がいたが……こちらもあまりの気持ちよさに、射精寸前まで追い込まれていた。

「蹴り込み型じゃなく、擦り付け型電気アンマだから気持ち良いでしょう？　男前だからサービスサービス♡　」

『ガガガガガガガッ！』

『クチュクチュクチュクチュッ！』

美央と由衣夏に足と指で散々性器を責められ、ほぼ同時にイカされてしまうヤンキーカップルだった。

「うっ！　イ、イクっ！！」

『ドピュピュピュッ！　ドクドクッ！』

「あんあんっ！　だめっ！　イクッ！　イッちゃううううっ！！」

『プシャア～ッ！！』

頬を真っ赤に染めて激しく息をする章雄と瑠美子だったが、まだまだ許されるはずもなく……美央と由衣夏によって全ての衣服を剥ぎ取られてしまう。

素っ裸にされた二人には、国が特別に製造させた強力な媚薬である“アヘイク”が打ち込まれ、男はフルボッキ、女は大洪水となってしまった。

その媚薬の名付けの由来は、アヘ顔でイク……そのままである。

「良い感じね♡　四つん這いになって向かい合ってキスしなさい」

「は、はい」

ヤンキーカップルは美央に言われるがまま、四つん這いになってキスを始める。

ペニスバンドを腰に巻き、結構太めのディルドを装着する美央と由衣夏。

「あたしたちがバックで犯してあげるね？」

美央は瑠美子のオマンコに……由衣夏は章雄のアナルへ……地面に直接膝を付けると痛いので、クッションを置いてその上に膝を付

いてから背後から挿入してゆく。

『ズチュッ！！』

「あんっ！！」

『ズボッ！！』

「うごおおっ！？」

それぞれの反応を楽しみながら、美央と由衣夏の激しい腰使いが披露される。

「ほら、感じるのは良いけどちゃんとキスしてろ！」

「うんんっ！　は、はいいっ！」

一度は唇を離してしまうが、再度口付けしながら舌を絡めて感じ始める二人。

『パンパンパンパンッ！！』

リズムに乗って、背後から同時に犯す美央と由衣夏。
ディープキスをしながら喘ぎ声をだすヤンキーカップルを見下ろ

しながら、由衣夏がそっと口を開く。

「美央……あのさ……」

「どしたの？」

「あ、あの……私、あの」

「……理沙を幸せにしてあげて」

「えっ！？　ええっ！？」

思わず男のアナルを掘る腰が止まってしまう由衣夏。

「ほらほら、早く腰振ってあげないと……章雄が自ら腰振って催促しちゃってるじゃん？　特殊任務省の造らせた媚薬アヘイクはむっちゃ強力なんだからぁ」

動揺しながらも再度腰を振り始めて章雄を犯し始める由衣夏だったが、もう責めている二人のことはどうでも良くなるくらいに、頭の中は真っ白になってしまっていた。

「寝てたんじゃ……」

「気配に敏感なあたしが、隣でベッドに出入りなんてされたら気付

かない訳ないでしょ？　このまま黙ってるつもりだったけど……最近の由衣夏がかなり苦しそうに見えたからとうとう言っちゃった……ははは……」

「ご、ごめん！　ホントごめんなさい！　あれだけ美央のこと好き好き言ってたのに……あっさり妹さんも好きになっちゃって……」

バツが悪そうに俯きながら目線を逸らす由衣夏だったが、美央はすぐに続けた。

「もういいよ。由衣夏の気持ちにずっと応えてあげられなかったあたしに由衣夏を責める権利なんてないから……理沙を大切にしてあげて。お母さんにも言ったけど、もう二人の間に入らないようにって」

「あ、そ、そうなんだ……ありがとう美央！　ホントごめんね！」

「もういいって。でも理沙はあたしより強くて残酷だから寝るたび激しく責められちゃいそうよ？　大丈夫？」

「あ、そ、それは……私の方が望むところかな……ドMな一面も持つ私……あはは……」

「ヤンキー男犯しながら何がドMよ……あはは♪」

少しの間、沈黙して腰を振り続ける二人。

気づけば章雄は三回ほど射精、瑠美子も三回ほど潮を噴いて白目

を剥いてアへ顔のままディープキスを続けている。

緊張して話すような大事な内容を、他人を犯しながら成し遂げるとゆう拷問処刑人たちであった……。

「でももう指マンはしてあげられないよ？」

「うん。分かってる。理沙ちゃんに悪いもんね」

更に二回ほどイカされたヤンキーカップルは、ペニスバンドディルドを二人が穴から引き抜くと、地面に胸から崩れ落ちてしまった。

「よく五回も六回もイケるものね……恐ろしい媚薬だわアへイク……」

「ホント……まだアへ顔して精液と愛液垂れ流しちゃってるもんコイツら……エロ♡」

美央は瑠美子の胸の上に馬乗りになると、右手を大きく振りかぶる。

「彼氏だけ顔面ボッコボコって訳にいかないよね？　あなたも仲良くフルボッコにしてあげるわね？」

「あ、アへ？　あへへ？」

涎を垂らしながらまだ快感のるつぼにいる瑠美子を、瞬時に現実に引きずり戻すほど冷酷な美央の制裁が開始される。

『パンパンパンパンッ！！　バキバキバキバキッ！！　ガツッ！！グシャッ！！』

「ぴぎいいいいいいいっ！！！！」

一分ほど激しく殴りつけると、前歯は四本へし折れ、唇は四箇所も裂け、鼻の骨も陥没骨折してしまった。

激痛のあまり号泣する瑠美子の髪の毛を掴み、無理矢理引き起こして座らせると、今度は腹部へ強烈な膝蹴りを入れる。

『がはっ！？　おえええっ！！　ゴボゴボゴボゴボッ！！』

思わず大量の昼ごはんを吐き出してしまう瑠美子。

血まみれの右拳を、ピンク色の乳首をした二つの胸へ何度も何度も擦り付けて血を拭う美央だった。

「み、美央？　大丈夫？」

「え？　何が？」

「いや、な、なんかいつもより残酷な気がして……」

「そう見える？　ふぅん」

そう言いながら大型の銃みたいな機器を鞄から取り出す。

「そ、それってもしかして……」

「そう。代々特殊任務省に伝わるあたしのご先祖様、菅野莉央開発の……子宮摘出器だよ」

「エロ……ってゆうか相当エグいわよねそれ……」

美央は顔面ボコボコになって号泣している瑠美子の股間近くに両膝を付いてしゃがみ込むと、その器具の銃口先端部分を膣口へ捩じ込んだ。

「ほら、メスの去勢を始めるわよ？」

『グリ……ズチュッ！！』

「あはあっ！？　もうやめてええええっ！！　これ以上虐めないでええええっ！！　痛いいいいいっ！！　わーんわーん！！」

銃口みたいな筒の部分は４０センチほどの長さがあり子宮の奥の奥まで到達できるものであった。

『ズブブブブ！』

「痛いいいいいっ！！」

「あたしたちに喧嘩売ったらどうなるか……とことん思い知らせてあげる。アンタの汚い子宮と卵巣、抉り出してあげるんだから」

「ひっ！？　やだ！！　赤ちゃん産めなくなっちゃう！？　絶対嫌あああああああっ！！！！」

泣き叫びながら起き上がってこようと抵抗するが、胸の上に由衣夏が馬乗りになってそれを制止した。

「ごめんね。美央は今日少し機嫌が悪いみたいなの」

「そ、そんな……助けてよおおっ！！　痛いいいいいっ！！」

『ヴィイイイイインッ！！　ズバズバズバズバッ！！　グチュチュチュチュチュチュウッ！！』

「ぎゃああああああああああああああっ！！！！」

由衣夏はすかさず、強力な痛み止めの注射を腹部に打つ。
ショック死を防ぐためだった。

銃口部分から展開される回転刃が、腹腔内の子宮と卵巣を固定する全ての肉塊を切断していった。
更に先端部が開き、子宮と卵巣を内部へ引き摺り込む。
あとは銃口部分を膣から引き抜くだけで回収作業は完了となる。

『ズズズズ……ポコンッ！！』

「摘出完了」

「ひっ！？　ヤダあああああっ！！」

「先端部を開いたら、何が出てくると思う？」

「ひっ！？　な、何がって……もしかして私の……」

「そう。子宮と卵巣よ」

『パカッ！……ズルルルル……ぷるるるるんっ！』

湯気を立てながら、ピンク色をした臓器みたいなものが開かれた銃口部分からゆっくり出てくる。

続けて二つの丸いモノが、長い管と共に垂れ流れてくる。

『ぷるるんっ！……ベチャ、ベチャ！』

「後から出てきた二つのキンタマみたいなのが……卵巣だよ」

「ひいっ！？　ひいいいいいいっ！！」

「なんか汚いからすり潰しておいてあげるわ」

『ドカッ！……グリグリ！　ぐちゃぐちゃ！』

取り出した子宮と卵巣を汚い地面の上に落とすと、右足で踏みつけてグリグリと踏みにじりながらミンチにしてしまう美央。

美央の右脚を両手で掴みながら必死で止めるよう訴える瑠美子だったが、踏みにじる足の動きが止まることはなかった。

車に轢かれてぐちゃぐちゃになってしまった動物のミンチのような子宮と卵巣を残し、美央は更に女をいたぶる。

大きく開かれた膣口へ拳を打ち込み、一気に肘までブッ刺した。

『ガボオオッ！！』

「ぎひいいっ！！」

そのまま激しく出し入れを開始……激しいファストファックでま

たしても潮を噴いてオーガズムを迎える瑠美子。

「あはあはあはっ！？　あひいいいっ！！」

「あはは！　子宮摘出されてもイケちゃうんだ？　すっごいねぇ？」

美央が膣から拳を引き抜くと、全身を痙攣させながら意識を失ってしまう瑠美子。

「これぐらいにしといてあげる」

『ドカッ！！』

愛液とマンカスを拭い取りながら、痙攣するお尻を足の甲で蹴り上げる美央。

「男の方だけ去勢しないってのもねぇ……」

「ん？　それもそうか！　じゃあ由衣夏、お願い」

「はーい♪」

麻酔薬を打たれて、アヘ顔のまま陰嚢をメスで切り裂かれ、生の睾丸を摘出される章雄。

管も切断され、ついに二つの睾丸を摘出する由衣夏。
失神している瑠美子の口を無理矢理開かせて、その睾丸を捩じ込む。
「お食べ！　彼氏の精巣だよぉ？　うふふ♡」
あとは雁首から輪切りにして、根元から切断部までは情けで残してやるようにした。
「これならどうにか立ちションはできるでしょ？　感謝してよね私の慈悲に♡」
ペニス切断面である尿道切断面から人差し指を突っ込んで、尿道口から第一関節を突き出させながらイヤらしく微笑む由衣夏。
「指で雁首串刺しぃ～♡」
「あ！　それいい！　むっちゃエロい絵面ねぇ♡」
美央も頬を赤くして雁首を指先で摩った。
「もうすぐ救急ドローンが到着するから安心してね。東部中央病院

で完璧に治療してくれるから♪　両親にも公務執行妨害の罪で去勢と連絡がいくと思うわ」

美央の説明も届かぬまま、二人のヤンキーカップルは深い眠りについた……。

由衣夏……真実を知る（後書き）

命こそ奪われなかったものの、永遠に子供を授かれなくされてしまう二人のカップル。

この日以降、退院後も宮下章雄と兼田瑠美子が登校してくることは二度となかった……。

性的嫌がらせの代償（前書き）

神崎美央の妹たち、理沙と美月が通う小学校。
今日も二人の姉妹によるお仕置きタイムが始まる。

性的嫌がらせの代償

「あの……神崎理沙さん……美月さん」

「はーい！　どうしました？」

「露口くん……無茶苦茶痛そうで……号泣してるし……もうぼちぼち許してあげられないかな？」

私立赤霧島小学校六年B組に在籍する、小学生ながらにして拷問処刑人である理沙と美月は、毎日のように悪さをした生徒にあらゆる手法で制裁を加えていた。

自宅に監禁して責める場合と、そのまま学校の教室で責める場合と……。

この度は、四つん這いにされてズボンとパンツだけ脱がされた男子生徒、露口浩文(つゆぐちひろふみ)が涙を流しながら震えていた。

「だって赤崎先生……コイツはこのクラスの女子のお尻に触ったのよぉ？　あたしと美月が黙って見過ごす訳ないじゃん？」

「そーですよー！　なんなら先生がコイツの代わりになっちゃう？」

理沙は何度も何度も男子生徒の顔面へ激しく往復ビンタを打ち付けながら冷たく微笑む。

美月は縦笛を浩文の肛門へ１０㎝ほど突っ込み、ゆっくり出し入れしていた。

『ズボッ！ヌポッ！ズブッ！ヌポッ！』

「ひぎいいいあっ！！また痛い痛い痛いいいいいいっ！！」

美月が出し入れを繰り返すたびに、浩文の肛門は窄んだり捲り上がったり激しく開閉させられる。

「美月にお尻の穴掘られて気持ちいいんでしょ？　ほら、オチンチン勃起させてみてよ？」

『パァンッ！！スパァンッ！！』

理沙はそう語りかけながら激しい往復ビンタを続ける。
前立腺を的確に抉るテクニックで、露口浩文は瞬く間にビンビンにフル勃起してしまった。

男子も女子も、美月にアナルを掘られてカチカチになってしまった１２歳児童のペニスを凝視している。

美月は縦笛を上下左右に激しく掻き回す。
直腸内は腸液でぐちょぐちょに濡れてきていた。

「あはは！　アナル大洪水じゃんお前！　このままみんなの見てる前でイカせてやろうか？」

「はう！　はうううっ！！　んあぁっ！！」

「ヤダなぁ……女の子みたいな声出しちゃって♪　先生、ちょっと近くに来て！」

「い、いえ、わ、私は……」

「来ないと先生の二穴同時に犯しちゃうけど？　それでいいのね？」

「ひっ！？　は、はい！　今すぐ行きます！！」

担任でさえ拷問処刑人には逆らえない。

その脅しが冗談ではないことにも気付いていた。

担任の赤崎結菜（あかざきゆいな）23歳は、理沙と美月の言いなりになるしかなかった。

「先生あのさぁ……コイツお尻の穴掘られて感じてるの。わかる？」

「え！？　あ、はぁ。な、なんとなく……顔も真っ赤だし」

「先生が続きやって。この縦笛をこの女子の敵であるクソガキのアナルへ激しく出し入れしてやるの」

「そ、そんな……わ、私は担任だからそんなことは……」

赤崎先生のタイトスカートの裾から手を這わせ、パンツ越しに膣口へ中指を挿し込む美月。

『スルル……ズボッ！！』

「あひいっ！？　や、やめて美月さん！！」

「このまま生徒たちの前で果したなくイカされるのがいいか……クソガキをイカせるのがいいか選べ！」

『グチュチュチュチュチュチュチュチュ！！』

美月による秘部へ突き立てられた指は、パンツ越しでも容赦はしない。

ジースポットを的確に掻き回すその指遣いは、大人の女性でも絶頂を感じるほどのテクニックであった。

「あんあんあんあんっ！！ダメええっ！！分かったからやめて美月さんんっ！！」

「ふん。分かればいいのよ」

パンツ越しにでも即座に感じさせられた膣からは、大量の愛液が分泌されていた。

美月は先生の愛液がタップリ付着したその指先を舐め取りながら、強引に縦笛を手渡す。

『ズチュ！ズチュ！ズボ！ズボ！』

「んぎいっ！？やはあっ！はうっ！やめて先生っ！！」

「ほら、先生が感じさせてあげるから……もっとオチンチン勃起させるのよ？」

赤崎結菜先生も、半ば強制とはいえ、男子児童の肛門を犯す行為に少なからず興奮を覚え初めていた。

「やだぁ〜……すっごいエロいわね♡」

男子児童を犯す担任の絵面を見つめながら、勝手に興奮し始める美月。

理沙も美月と同じく、秘部を濡らし始めていた。

しばらく教室に結菜先生によるアナル責めの湿った音が鳴り響く。

『クチュクチュ……ズッチュズッチュ！』

「んああっ！……せ、先生！　や、やめて……はううっ！」

理沙は先生の反対側の手を取り、露口浩文のフル勃起したペニスを握らせる。

「アナル責めながらシゴいてやって」

「え？　わ、私が？」

「他に誰がいるのよ？」

「ご、ごめんなさい……こ、こうですか？」

『シコシコシコシコ……シコシコシコシコ』

「わあああっ！？　先生やめてええっ！？」

頬を真っ赤に染めながらも、露口浩文のペニスをシゴき始める。男子児童のペニスを握ってピストン運動までさせられているのである。

年頃の女教師なら平常心ではいられるはずもなかった。

『ドピュッ！ドピュピュピュピュピュピュピュウッ！！』

「きゃっ！？」

夥しい量の精液を床にぶち撒けてしまう浩文に、思わず手を離し

てしまう赤崎結菜先生。

それでも肛門へ挿し込んだ縦笛の出し入れは止めてあげないでいた。

「うふふ……先生、もうアナル責めもやめていいよ？イッちゃったからソイツ」

「あ、は、はい！ごめんね露口くん！」

『ポコンッ！……ドロドロ』

慌てて縦笛を引き抜くと、大量の腸液が垂れ流れ落ちてきた。

「さてと……露口浩文！　気持ちよかった？」

理沙がお尻を突き上げてビクビク震えている露口浩文の髪の毛を掴んで思いっきり引っ張り上げながら問いかける。

「う、ううう……ぐすん、ぐすん」

思わず涙が溢れる浩文だったが、理沙はその顔面を容赦なく殴りまくる。

『ドガッ！バキッ！グシャッ！ボコッ！』

「いぎいいいいっ！？……いだあああああいっ！！わーんわーん！！」

歪に顔面を腫らしながら、大号泣してしまう浩文。

理沙は更に仰向けに蹴り転がせると、電気アンマの体勢に入る。

「先生の手の次はあたしの足の裏よ。二回目イッけえええええっ！！ほらあああっ！！」

『ガガガガガガガガッ！！』

「はああうううううううっ！？やめてえええええっ！！」

男子児童たちは思わず目を背けてしまうが、女子児童たちはほぼ全員理沙の電気アンマを静観していた。

頬を赤く染めながらも、男子の性器がとことん責められるのを見て少なからず興奮していたのである。

『ガガガガガガガガッ！！』

前髪パッツンでおかっぱ頭の理沙は、目を細めて冷たく微笑みながら更に激しく浩文のペニスと睾丸を足の裏で擦り付けまくる。

痛みよりも気持ちよさが勝った瞬間、露口浩文は理沙たちの奴隷となる。

「理沙様、イカせてくださいは？」

「んはあああああっ！……り、理沙様、僕をイカせて……下さい！……んんんんっ！！」

「良き良き♡イカせてあげる！イッけえええええっ！！」

『ガガガガガガガガガガガガガガッ！！』

「ぴぎいいいいいいいいいいっ！！」

理沙の足の裏に大量の精液を噴き出させる露口浩文。
睾丸へ踵を当ててグリグリと圧をかける。

「痛いいいっ！？やめて潰れちゃううっ！！」

「女教師と同級生の女子から二回もイカされて……恥ずかしくないの？」

「ご、ごめんなさい……は、恥ずかしいです」

『グリングリン！！グリリリリッ！！』

「んぎゃああああああっ！！」

『プシャアアア～ッ！！』

理沙は踵を二つの睾丸へ当てて、潰れる寸前くらいまで蹴り付けた。

あまりの激痛にお漏らしまでしてしまう。

「ちょっと！？……くっさ！お漏らしまでしちゃって情けない男ね」

美月は特大のガラス製の浣腸器を手に取り、グリセリンを１００％吸い取って露口浩文の肛門へ切先を挿し込む。

『プス！……プチュウウウウウッ！』

「ひゃあっ！？やあああああっ！？」

大量のグリセリンを浣腸された浩文はしばらく肛門を押さえて転げ回る。

「先生もみんなも見てる前でウンチまで漏らしちゃえ♡ほらあっ！！」

『ズドォッ！！』

「ぐはあっ！！」

『ブリブリブリブリブリブリブリッ！！　ブシュウウウウウウウッ！！』

小便の次は大便まみれとなる浩文。これには殆どの女子児童たちも目を背けてしまう。

「やだ」

「くっさ」

「汚い」

「おええ……」

各々に嫌悪感を示す独り言を言いながら目を逸らす女子児童たち。小便と大便まみれになった浩文の下半身へバケツに汲んであった水をぶっかける美月。

「今度女子のお尻なんか触ったら……チンポ切断してやるから。分かった？　ぺっ！」

理沙は立ったまま仰向けに倒れて震えている露口浩文のペニスを踏みつけながら、胸まで捲り上げられた腹部へ唾を吐きかけた。

ヘソの穴へ直撃した理沙の唾が溢れ落ちるほど激しく陰茎を擦り付け続ける。

『ドクドク……』

「やだコイツ……またイッちゃった！？」

理沙は呆れながら右足を引いた。
スニーカーの裏は精液まみれ……そのまま顔面へ持っていき、自分の精液を舐め取らさせる。

「はら、綺麗に舐め取れ」

「は、はい、理沙様……ペチャペチャ！……ペロペロ！」

虐められながらも完全に理沙と美月の奴隷と化してしまった露口浩文であった。

この日以降、ほぼ毎日のように自ら下半身裸になり、理沙と美月の前に突き出してくるようになる。

『グリグリ……グリングリン！』

「あっ！あはっ！んんんっ！り、理沙様！もっと激しく掻き回して下さいいいい……おごごごっ！」

理沙は呆れたような表情でひたすらM男と化した浩文のアナルを中指で掻き回す。
美月も涎まみれの口内へ指を三本突っ込み、舌や喉を掻き回す。
「これだけ悦ばせちゃったら……なんか損した気分になるよね？」
「うん。ここまでM気質とは思わなかったわホント……」
理沙と美月は責められてひたすら感じて悦ぶ露口浩文の姿を見ながら、少し後悔し始めていたのであった……。

性的嫌がらせの代償（後書き）

あまりにもM化してしまった露口浩文を、これ以上責めても利がないと判断した理沙と美月。
担任の女教師である赤崎結菜にバトンタッチしてしまう。

『パンパンパンパンパンッ！！』

「うひっ！はぎゃっ！いひいっ！んぎいっ！」

ペニスバンドを腰に巻き、大人用の極太ディルドを無理矢理小学生児童の肛門へ捻じ込み、激しく腰を振って犯す赤崎結菜。
理沙と美月が飽きるまでの数日間、放課後毎日のように続けられる女担任による男子児童のレイプであった……。

常連客（前編）（前書き）

生活のためではなく、趣味を兼ねて楽しみながら働く３９歳の母。
神崎美琴を慕う常連客の物語。

常連客（前編）

東部地方中心部から、更に数百メートルほど東側。
ソープランドやラブホテル、色んなプレイが楽しめる豊富な種類の風俗店がひしめき合っている。
その中の一つ、《ＣＲＵＥＬクイーンズ》とゆうＳＭ専門店で働いている神崎美琴。
拷問処刑人リーダーである、神崎美央たち三姉妹の母親である。
３９歳であるが、綺麗とゆうよりは可愛らしい系であり、三女の美月に似ていて幼さが残る童顔であった。
長女の美央は、次女の理沙に瓜二つである。
少し切れ長で目つきが鋭いが、まつ毛も長く整った顔をしている。
綺麗系の美女であった。
親友である同じく拷問処刑人の女子高生、唐田由衣夏が美央に惚れ込み、友情ではなく愛情を伝えたのだが、なかなか受け入れてもらえないまま妹の理沙と付き合うことに……。
数奇な運命に、その身を任す由衣夏だった。
猛暑日が続く八月、週末の午後三時……ＳＭ店であるクルーエルクイーンズでの仕事に精を出しているボンテージ、網タイツ姿の神崎美琴がいた。

『パンパンパンパンッ！』

「うっ！　はひいいいいっ！」

「ほらほら、こうかこうか？」

大きさも形もハエ叩きのような形状をした革の鞭で、４５歳の男性常連客のお尻を何度も打ち付ける美琴。

臀部は真っ赤に染まり、一部紫色にまで変色している。

「痛いいいいいっ！　許してください美琴様ぁ～」

「お客様、本当にこれくらいでやめないと……あと数回打てば皮が裂けて出血しますよ？　今まで通り今日もこの辺りで終わりにしませんか？」

ウルフカットで薄紫に染めた前髪をかき上げながら、お客に気遣う。

「え？　い、いや、やめないで……今日は血が出るまで叩いてください……」

「本当に良いのですか？　これ以上打てば一生お尻に傷が残るかも知れませんよ？」

「良いです。美琴様にボロボロにされたいです……嫌な事を忘れた

いのです」

「色々とご事情があるのですね……分かりました」

客を心配する表情から、スッとＳＭ女王様の顔に変貌してゆく美琴。

「まだ許さないわ！　お尻から血を流すまでお仕置きしてあげる」

『パンパンパンパンッ！！』

「ひっ！　んぎいいいいっ！！」

更に五分ほど打ち続けると、ついに何箇所も皮膚が裂けて血まみれになってしまう男の臀部。

「うえええん、痛いよお〜！　美琴様……許してくださいいい〜」

「ケツ叩きくらいで許されると本気で思ってるの？　下僕のくせに黙ってなさい」

「ひいい、は、はい美琴様」

そのまま予めお客と相談して予定していたプレイへ移行する事になった。

美琴はペニスバンドを装着すると、不気味に光る真っ黒な極太ディルドをセットする。

「ほら真也！　四つん這いのままお尻を突き上げなさい」

「は、はい、こうですか？」

高く突き上げられた中年男、梶原真也（かじわらしんや）のお尻の両側を鷲掴みにすると、ヒクヒクおねだりするように動く肛門へ、大きなガラス製の浣腸器の先端部をブッ挿す美琴。

「ここ？」

『ブス！……プチュウウウウウウ』

「はうっ!?　んひいいいい、やめてください美琴様ぁ～」

「ヒクヒク動くエロくて汚いアナルね？　グリセリンたっぷり注ぎ込んでやるから覚悟しなさい！」

大量のグリセリン液を浣腸し終えると、仰向けに寝かせてお腹やオヘソを黒いブーツの尖った踵部分で何度も踏みつけた。

「ほら、最低五分くらいは我慢するのよ？」

「ううう……腹痛いいいぃ……で、出ちゃいそうですぅ」

美琴は再度男を四つん這いにさせると、大きめの洗面器を股間の下に置き、排泄を許可する。

激しい勢いで大便を噴出させると、再度浣腸器を挿しこみ、三回ほど排泄させた。

「汚いお前のアナルもかなり綺麗になったはずよ。さてご褒美をくれてあげる」

直径3センチ、長さ18センチもある陰茎を模して作られてあるディルドの先端を、そっと真也の肛門へ押し当てると、ゆっくり腰を前に突き出していった。

『ピト……ツプププ！』

「ほら、入るよぉ？」

「うはあっ！？」

『ズボボボッ！！……メリメリ！！』

「んぎゃああああっ！！　いでええええっ！！」

ペニスバンドを装着した女王様美琴は、ついに根元まで真也の肛門へ貫通させてしまう。

ヒクヒクと痛々しそうに痙攣する肛門括約筋を見下ろしながら不敵に微笑みかける美琴。

「うふふ……アナルが痛い痛いって言ってるみたいね？」

「うぎぎぎぎ！　さ、裂けちゃいますぅ！　ぬ、抜いて下さいいい」

「いいわよ。抜いて挿れて、抜いて挿れてを激しく繰り返さなくちゃねぇ？」

「そ、そんなあああっ！？」

粘度の高いペペローションをタップリ肛門へ垂らしてから、激しく腰を振り始める。

『ズチュッ！　ズチュッ！　グボッ！　グボッ！』

「んぎいいいいっ！！　美琴様っ！　許してくださいいいいいっ！！」

「オホホホ♪　直腸がアナルから飛び出すほど盛り上がったり思いっきり窄んだりして面白いわよぉ？　うふふふ♡」

臀部を両手で激しく叩きながら腰を張りまくると、臀部とアナルからの出血で床が赤く染まってきていた。

「汚い血が垂れてきてるわねぇ？　私の白い太ももに血液の混じった汚い腸液を散々へりかけてくれたお仕置きに……最速でピストンしてあげちゃうわ」

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！……パンパンパンパンパンパンッ！！』

更に腰を振る速度を全開まで上げて、真也のアナルと直腸を激しく犯す美琴。

『パンパンパンパンパンパンパンパンッ！！』

網タイツを履いた美琴の腰元が、激しく男の臀部にぶつかり、乾いた音がＳＭルームに響き渡る。

「がぎゃあああああっ！！　いだいいいいいいっ！！」

更に五分ほど掘りまくり、ようやく極太ディルドを引き抜いてやる美琴。

『ヌポポポ……ポコンッ！』

「あはあっ！！……んんんんん……痛い痛い痛いいいい」

生々しい粘液の音と、肛門から先端部が抜ける時に間の抜けた音がする。

そのまま力尽きた真也はうつ伏せに床へ倒れ込んだ。

半開きになっている肛門から、トロトロと粘度の高いローションと血液混じりの腸液が溢れ出している。

「泣いてるの？」

「うううう……ぐすん……ぐすん」

予定していたシナリオ通りのプレイとはいえ、男の想像を遥かに超える激痛に、思わず本気で泣いてしまっていた。

「ごめんなさい。大丈夫ですか？」

思わず従業員の顔に戻り、客を心配する美琴だったが、そのまま眠りについてしまう梶原真也。

――――どれくらい眠ったのか本人も分からないまま目が覚める。

「あれ？」

ふと気づいたことがあった。
それは目覚めたにも関わらず、真っ暗だったことである。
しかもうつ伏せにベッドへ拘束されているみたいであった。
手脚を大の字に開かされた体勢で全く動けない。

「ん？　あれ？　み、美琴様？　美琴さーん！？」

ＳＭルームに来ていたことを思い出して、大声で美琴を呼んでみたが、返事はない。

『スパァンッ！！』

いきなり臀部へ電撃のような激痛が走った。

「ぐわあっ！？」

『パシィンッ！！　スパァンッ！！　ビシィッ！！』

更に沈黙のまま何度も何者かによって真也の臀部を打ち付ける硬い鞭みたいなもの。

「いだだだだあっ！？……も、もうやめて下さい美琴様っ！！　僕ホントに死んじゃいますううっ！！」

数ヶ所美琴の革の鞭によって皮膚が裂かれ、血まみれの臀部は更に重症化してゆく。

ついには皮膚が剥けて、生の脂肪組織、筋肉組織までもが丸見えになって所々肉が抉れていた。

「きしょー……あたしのお母さんの名前を様付けで呼びながら全身ヒクヒクしちゃってるよコイツ」

「あはは！　仕方ないよ。そうゆうプレイを愉しむ所だから」

子供のような声と若々しい声が聞こえてくる。

どちらも女性のようだったが、美琴の声ではない事に真也はすぐに気がつく。

美琴の三姉妹の中の長女である１２歳の神崎理沙と、付き合っている１８歳の唐田由衣夏であった。

「４５歳のオッサンのくせに、責められた痛みで泣いたまま眠っちゃうなんてダッサ！　ホントキショい」

「お尻の皮が裂けちゃうまで美琴さんに叩かれたのね……でも理沙ちゃんの鋼の鞭は……肉片が抉れちゃってるぅ♪　オーバーキルキル♡　こわっ」

「何がキルキルよ？　バカにしてる？　後で由衣夏もお仕置きしてやるから」

「ご、ごめんなさーい！」

母から娘に受け継がれた鞭打ち刑によりボロボロになってゆく臀部は、ＳＭ部屋のあらゆる場所に設置されている鏡によって自分からもハッキリ見えていた。
痛みと恐怖で絶叫してしまう真也。

「ぎゃああああああっ！！」

「あーもう！　うるさいうるさい！　分かったから少し静かにして」

そう言いながら鞄から注射器を取り出し、強力な痛み止めの麻酔薬を打つ理沙。

「これで速攻痛みは激減するわ。でも責めは続行しちゃうから……どんどん壊されてゆく自分の身体を鏡で見ながら興奮しちゃえ♡」

「ホントすっごい部屋ね～。この鏡って、一体何十個あるのかしら？」

金髪のポニーテールを揺らしながら唐田由衣夏の専用器具である電撃警棒を手にすると、真也の口へ捩じ込む。

「くごおっ!?　んごごごおっ!」

「ほらほら、今からコレ突っ込んであげるから唾で濡らしておいて」

理沙は鋼の鞭を棒型に変形させて一旦床に置いた。

そのまま男の傍へ歩み寄り、人差し指をピンと立てて舌を出してウインクしながら……血まみれの臀部の中心部、肛門へ挿し込む。

『つぷっ!』

「はうっ!?」

「今から女子高生のおねぇさんが美琴様の代わりにココ……責めてくれちゃうから悦べ♡」

理沙は根元まで人差し指を挿し込むと、グリグリと直腸を掻き回し始める。

『グリッ!　グププ!　ぐちゅちゅ!』

「うはあっ！　うぬぬ！　やはあぁ……」

的確に前立腺を刺激する理沙の指に、思わず感じてしまう真也。

「小学生の女の子からこんなトコに指突っ込まれて……感じちゃうなんて……哀れなオッサンだよねぇ？」

「う、ううう……」

真也は訳のわからない状況に陥り、責める女性が変わってまでもまだＳＭプレイが続いていることを、なかなか受け入れられないままでいた。

「お母さんからクソ抜きされてるわね。綺麗な直腸してる」

「うう……ど、どうして僕はお前らからこんな目に……訳がわからな……はうっ！」

真也が問いかけている時も激しく前立腺を捏ね回す理沙の指に再度反応してしまう。

「教えてあげようか？　オッサンの運命を……由衣夏、任せるわ」

「はーい。あのね、自分の胸に聞いたらわかると思うんだけど……

あなた小学四年生の娘さんいたわよね？」

「な、なぜそんなことを知っているんだ！？」

「黙って話を聞けオッサン！」

『ガボオッ！！……ずちゅちゅちゅちゅっ！！』

「はぎいっ！？」

由衣夏が少し頭にきて強く叱りつけた時、理沙の指が一気に四本突っ込まれる。

「自分の立場わかってる？　あたしたちに生意気な口聞くとトンカチでキンタマ叩き潰すわよ？」

「ひっ！？……ご、ごめんなさいお嬢様っ！　女子高生様っ！」

『ボコッ！！』

「ふぎいいいっ！！」

理沙は美琴によって何度も調教されてきた緩んだアナルへ、ついに拳ごと埋め込んだ。

「フィストファックで許してやるわ♡」

「痛いいいいいっ！！　ぬ、抜いてえええっ！！」

「泣いてください理沙様、でしょ？　こちらの女子高生様は由衣夏様ね。分かった？」

「は、はいいっ！　抜いてくださいい理沙様ああっ！　裂けちゃいますううっ！！」

おかっぱ頭が少し伸びて、肩までのショートカットになった理沙は、しばらく直腸の感触を拳や五本の指全てで楽しんだ後、散々掻き回してから一気に引き抜いた。

直腸が一瞬肛門から飛び出すほど激しく高速で引き抜く理沙。

『ポコンッ！！……ドクドク……トロトロ』

「うぎいいい……うぉおーん！　うぉおーん！」

臀部には効いている麻酔薬も、肛門や直腸にはあまり効いていないようだった。

あまりの激痛に、再び泣き崩れてしまう４５歳のオッサンであった。

セーラー服やチェック柄のミニスカートに腸液を少し浴びながら、右手に着いたその腸液を真也の背中に何度も擦り付けて拭き取ってゆく。

「ありゃ～。理沙ちゃんのフィストファックのお陰で、アナルがポッカリ半開きになっちゃってるよ？　あはは……ホント哀れねぇ。じゃあさっきの続きだけど……」

「は、はい……ご説明をお願いいいたします由衣夏様……」

――――半時間前。

「お母さん！　頑張ってる？」

「あれ？　理沙と由衣夏ちゃん！　二人が来たってことは……まさか」

「そう。その人お母さんの常連客らしいけど……残念ながら」

「……そっか。この店も特殊任務省と繋がってるもんね。でも私はこの人を処刑したくない」

自分を慕って指名してくれていた常連客である梶原真也に、ある程度の情けが生まれていた神崎美琴。
山西長官から経緯はある程度聞いていたため、母の美琴が拒否することは承知の上であった。
冷たいようでも、人情味も強い母だったのである。

「眠ってるみたいねソイツ……」

「うん。私の前立腺責めに感じすぎて、イク前に寝ちゃったの」

「……あたしが人生最期の射精させといてあげる」

「ありがとう。じゃあ私は先に帰ってる。残酷処刑島には行くの？」

「うん。拷問はこのＳＭ部屋で執行するけど……処刑はできる限り島で執行するよう山西長官から強く言われちゃったから……」

「そう。分かった。じゃあよろしくね理沙。由衣夏ちゃんもよろしく」

「はい！　了解しました」

ＳＭ部屋を去ってゆく美琴の後ろ姿は少し寂しそうであったが、理沙と由衣夏は拷問の意思を固めてゆくのであった。

――――そして目が覚める梶原真也。

由衣夏から一通りの説明を聞いた真也は、自分の運命をある程度悟る。

「無理は承知でお願いします！　娘の紗綾香だけは助けてくれませ

んか？　お願いします！」

「ダメなの。既に１０歳の娘さん、紗綾香ちゃんは残酷処刑島に連行されてる。父と娘の同時進行拷問処刑はその島で執行されるの」

「そ、そんな……娘は僕の頼みを聞いただけなのに……うぉーん！うぉーん！」

理沙と由衣夏の前で泣き崩れる梶原真也の犯した罪。
それは娘の友達の女子児童を家に連れてこさせ、乱暴を働いて自殺に追い込んだことであった。
一人娘を自殺とゆう形で失った絶望感から、後に両親まで自殺してしまっている。

父親の真也の目的を知りながら、ファザコンである紗綾香は父の為に仲のいい友人を家に遊びに来させ、父親に悪戯させたのである。

「幸せに暮らしていた三人の命を……ふざけた犯罪で奪った紗綾香の罪は……決してお前と変わらないくらい重たいから……地獄の苦しみを味わいながら死んでゆく愛娘の姿を見ながら処刑してあげるから楽しみにしてなさいね？」

そう言いながら更に肛門へ拳を突っ込み、前立腺や直腸を掻き回す理沙。

悲しい現実を知らされながらも、理沙の責めによりフルボッキし

てしまうペニス。
理沙は反対の左手でそのペニスを握り、牛の乳を搾り取るような指使いで上下にシゴき始める。

「骨盤辺りに柱があるからペニスはベッドに密着してなかったんだ」

「そう。うつ伏せのままチンポシゴけるようにね……由衣夏はコイツの顔面フルボッコにして。ボコボコになりながら射精させてやるから」

「それエロいなぁ♡　分かった！」

女子高生由衣夏の強烈な往復ビンタをくらいながら、女子小学生理沙の激しい手コキで、一分と持たないうちに絶頂を迎えてしまう梶原真也。
顔面を叩かれる痛みよりも、理沙のアナル責めによる前立腺刺激と、小学生とは思えないほどの超高速手コキにより、夥しい量の精液を噴き出させる中年男であった。

「ほら、イッちゃえ！」

『シュコココココココココココココッ！！』

「はうっ！！　んひいっ！！　り、理沙様っ！！　ダメえええっ！！」

『ドピッ！！　ドピュピュピュピュピュピュピュピュウッ！！』

ベッドと理沙の指を精液まみれにする真也。
射精し終えても由衣夏の往復ビンタは止まらない。

『パンパンパンパンパンパンパンパンパンッ！！』

「何汚い粘液を理沙ちゃんの手にへリかけてるのよっ！？　ここでぶっ殺してやろうかオッサン！？　んんっ！？」

「ひぶぶぶぶぶぶうっ！！」

そのまま顔面を拳でタコ殴りにする由衣夏。
前歯は二本折れ、唇も上下数ヶ所裂け、鼻の骨は粉砕されて瞼は両目とも腫れ上がる……。
激しく鼻血を噴き出させながら、悲惨な顔面になりながらも理沙の手コキの余韻で、腰を振り続けながら半開きの肛門をビクビク痙攣させる真也。

「もうお尻から拳抜いてあげてるのに……あはは♡　ガバガバアナルがヒクヒク痙攣しちゃってるぅ♡」

理沙は頬を赤く染めながら、かなり興奮している。
男の顔面をタコ殴りにしてやった由衣夏も、理沙の責めを見ながら陰部を湿らせていた……。

常連客（前編）（後書き）

二人の拷問処刑は、残酷処刑島へ連行した後に再開されることとなる。

梶原真也と１０歳の娘の紗綾香の運命は？

常連客（後編）（前書き）

美央の母親である神崎美琴から女王様としての責めを受け、更に娘の理沙、女子高生の由衣夏から拷問処刑を執行される中年男の悲惨な末路。
娘と共謀しての卑劣な行為の代償は、とてつもなく高いものとなってしまう。

常連客（後編）

ＳＭクラブ、クルーエルクイーンズ駐車場へ神崎美央の操縦するドローンが着陸する。

「ソイツが梶原真也ね」

「うん。麻酔がかなり効いててフラフラしてるけど……ある程度自分の運命は覚悟してるみたい」

長女の美央に答える理沙。

速やかに唐田由衣夏と理沙によってドローンへ連行された梶原真也は、人生最期を迎えることとなる残酷処刑島へと飛び立つことになる。

神崎美央が操縦するドローンが残酷処刑島へ着陸した時、時刻は午後六時を回っていたが、夏場とゆうこともありまだまだ辺りは明るかった。

しゃがみ込んで、野に咲く花を摘んでいる少女がいた。

「ほら、降りろ」

「うう……は、はい」

理沙に促され、ドローンから降り立つ梶原真也。
最初に愛娘が視界に入る。

「紗綾香！！」

振り向いて大好きな父親である真也を見つけると、慌てて立ち上がる。

「お父さん！！」

すぐさま駆け寄ってくるなり、父親の真也へ抱きつく。

「紗綾香！……こんなことになって本当に済まない！」

「いいよ。あたしだって友人があんなことになるかもしれないと分かっていながら家に連れてきてたから……お父さんが喜んでくれる顔が見たくて。まさか詩織ちゃんも両親も自殺しゃうとか思わなかったもん……」

「紗綾香……ううう……」

愛娘の紗綾香を抱きしめながら号泣する真也だったが、その二人を見つめる美央と理沙と由衣夏の目は冷たかった。

「バカ親子の最期の抱擁はそれくらいでいいかな？」

「ううう……さ、紗綾香だけは……紗綾香だけは許してやってくれませんか？　お願いします！」

理沙たちの前で、号泣しながら土下座をする真也。

「あのさオッサン……紗綾香は友達がオッサンから性的イタズラ受けること分かってて家に連れてきたんだよ？　この罪は決して許される事じゃないの」

「うううぅ！……お願いします！　お願いしますぅぅう〜！！」

理沙の脚を掴んでまで我が娘の許しを乞う男だったが、膝蹴りを顔面に食らい、あえなく仰向けにひっくり返ってしまう真也。

「甘えるな！　お前たち親子のせいで自殺に追い込まれた三人に償うには死ぬ事以外あり得ないのよ！　カスたちの命じゃ死んでも追いつかないけどね……」

理沙は激怒しながら、ようやく上半身を起こした真也へ怒鳴りつ

ける。

「梶原紗綾香！　今からあなたの拷問処刑を開始します……小学四年生か……まだ１０歳くらいなのにごめんね……」

「い、いや……まだ死にたくない……許してお姉ちゃん」

半泣きになりながら１８歳である拷問処刑人、唐田由衣夏を見つめる梶原紗綾香。

肩より少し下まで伸びたミドルの髪の毛を鷲掴みにすると、そのまま激しく往復ビンタをする由衣夏。

『パンパンパンパンパンパンパンパンパンッ！！』

「いだああああああああいっ！！　ひいいいいっ！！」

白いセーラー服と紺色のスカート姿の紗綾香。

押し倒してスカートを捲り上げ、一気に純白のパンツを引きずり下ろす。

「いやあっ！？　やめて！　恥ずかしいよおっ！！」

四つん這いにさせたまま、女子高生由衣夏による平手打ちでの激

しいスパンキングが開始される。

『パンパンパンパンパンパンパンッ！！』

「うわぁぁぁぁあんっ！！　痛いいいいいっ！！」

あまりの激痛に涙を流して硬く目を閉じるが、由衣夏のお尻叩きはますます激しくなってゆく。

思わず駆け寄ろうとする真也の顔面へ、飛び膝蹴りを入れる理沙。

絶叫して顔を押さえながら、鼻血を手で拭うが、なかなか出血は止まらない。

「あたしは今回執行人に選出されていないから見てるわね」

妹の理沙へ静かに囁きかける美央。

「うん。コイツの娘の歳を思うと少し可哀想だけど……被害者の事思うとやっぱ責任とってもらわないとね……」

「……その通りよ。たとえ小学生でも情けは要らないから」

理沙は長女の美央の答えに静かに頷くと、そのまま真也の顔面を

馬乗りになって何度も殴りつけた。

「や、やめて！　お父さんに暴力振るわないでええっ！！」

『ずちゅ！……ズボオッ！！……バリッ！』

「んぎいいいいっ！！」

「お父さんの心配してる場合かしら？紗綾香ちゃん？」

由衣夏は中指を１０歳の少女の膣内へ一気に挿しこみ、処女膜を一撃で破ってしまった。

更に激しく女子児童の膣内を掻き回す。

『グチュチュチュチュ！！』

「やはあっ！？　いだいいいいいいっ！！」

思わず倒れ込んでしまう紗綾香だったが、腰を引き起こして更に激しく指マンを続ける由衣夏。

「もうあなたは男性とセックスすることもないだろうから……私がとことんマンコを犯してあげるよ」

「いやっ！　痛いよぉ！　やめておねぇさん……」

泣きながら由衣夏の方を振り返るが、更に左手の人差し指を肛門に挿し込む。

「後ろも許さないわよぉ？　それっ！」

『つぷっ！……ズブブ！』

「んひゃあっ！？　そ、そんな汚いトコまで指挿れないでぇえええっ！！　やあああああっ！！」

「ごめんね。私たちの拷問は性器破壊とアナル破壊が洩れなく付いてくるから……紗綾香ちゃんの二つの穴はグチャグチャに破壊しちゃうの。覚悟しといてね？」

「ひっ！？　そんなああああっ！！　やめて許してお願いいいいいっ！！」

泣き叫ぶ紗綾香を心配しながらも理沙にタコ殴りにされている父親の真也。

『バキバキッ！！　グシャッ！！　バコバコバコッ！！』

「ぐはあっ！！　ぎえええええっ！！」

あまりの激痛に親娘同時に失禁してしまう。

「おい……漏らしたわね？」

「ひ、ひいいい……ゆ、許してくださいい……理沙さま……」

理沙は大型のペンチを手にすると、真也の右の睾丸をガッチリ挟んだ。

「まずは右からいくね？　えいっ！」

『ギュウウウウッ！……ぶちゅっ！！』

「ぐわあああああああああああああっ！！！！」

娘の紗綾香までビクッとなるほどの絶叫を上げる真也。
理沙によって潰された睾丸は、一瞬にしてミンチになった。
尿道口からは血液混じりの精液が射出する。

『ドピュピュピュピュウウッ！！』

「血の射精か……エロいわね♡　左のタマもイッちゃおっか？それ！」

『ギュムム……グチャッ！！』

「ぴぎぃぃぃぃぃぃぃっ！！！！」

二つの睾丸を大型のペンチで潰されて、白目を剥いて泡を噴きながら気を失う真也。

父親の悲惨な状況に悲しんでいる余裕もない娘の紗綾香は、由衣夏の指マンでオーガズムを得て、人生最初で最期の快感とゆうものを得ていた。

「あんあんあんっ！！やめてえええっ！！なんか変な感じ！？　やあああああっ！！」

「イカせてあげる。ほら、イッけえええええっ！！」

『グチュチュチュチュチュッ！！……プシャアアアッ！！』

由衣夏の指で潮を噴かされてオーガズムを初体験した１０歳の少女は、頬を真っ赤に染めながら地面にへたり込んでしまう。

「ほら！　私の指に着いたマン汁と便を、舐めて綺麗にしてくれる？」

「むごごっ！？……ううううう……ペロペロ……レロレロ」

由衣夏に無理矢理口内へ指を突っ込まれて、強制的に掃除させら

れる紗綾香だった。

理沙は二つの睾丸を潰されて失神している真也に、下半身の感覚が麻痺する麻酔注射を打ち、何度も顔面を殴りつけて強制的に目覚めさせる。

「う、ううあああ……」

「起きたみたいね？　もうキンタマ痛くないでしょ？麻酔なんてホント特別だよぉ♡」

「あ、ありがとうございます……理沙様……」

「いえいえ！……とゆうのもね……素の顔のままある刑罰を受けてもらいたくって。可愛いお前の娘が見てる前でね」

「え？そ、それはどうゆう……」

「それはねぇ……うふふ♡　おーい由衣夏～っ！　この新兵器でイチモツ始末しちゃうからちょっと紗綾香を連れてこっちにきてくれるう～っ？」

理沙は強制勃起薬を真也の会陰部に注射して、無理矢理フル勃起させると、ギロチンを小さくしたような機器を鞄から取り出し、真也のペニスの雁首両側から挟み込んで固定した。

「ちょっと大っきくなったチンポを失礼するね。よいしょ！」

『ガシャン！』

ギロチンで人の首に嵌め込む部位を、理沙の小型ギロチンではペニスの雁首に嵌め込んだ。

「ひいっ！？」

「この亀頭部が人の頭部みたいなものよ。頭部のギロチンに因み、切ろうチンポ……とゆうことで“キロチン„と名付けたんだ」

「す、すごいネーミングねそれ……理沙ちゃんらしくて残酷でエロくていいと思うよ♪　しかもわざわざフルボッキさせてからの切断ってのがまたエロいわ♡」

由衣夏は紗綾香の髪の毛を鷲掴みにして、引き摺るようにして父親の隣まで強制連行してきている。

理沙の発想に驚きながらも興奮していた。

「や、やめて下さい理沙様……娘の前でこんなこと……」

「キンタマの激痛緩和してやってるんだから有り難く思いなさい！雁首吹っ飛んだって痛くも痒くもないから安心しなさい」

「ひいい……そ、そんなぁ～……グス、グスン」

自分の娘を含む少女たちの前で、自分が情けなさ過ぎて再び啜り泣きしてしまう真也。

「ほら、今からパパの勃起したオチンチン……ちょん切られちゃうわよ？　ようく見てなさいね？」

目を瞑って顔を背ける紗綾香。
由衣夏は上の制服やスカートを全て脱がせると、電撃警棒を小さなワレメに押し当てる。

『カチッ！……バリバリバリバリバリッ！！』

「あぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃああっ！？」

強烈な電撃が紗綾香の外性器を襲った。
大陰唇と小陰唇は焼けただれ、原型を留めなくなってしまっていた。
膣口からユラユラと煙が立ち昇る。

「あはは！　焼きすぎちゃった。ごめん」

股間を押さえて転がりまわる紗綾香を何度も足の裏で踏みつけ、全身を土まみれにしてゆく由衣夏。

理沙が娘にも強力な麻酔薬を注射すると、性器火傷の痛みは程なく消失し、泣きじゃくる小学生の女の子と、同じく啜り泣くその父親の姿が悲壮感を滲み出していた。

５キロほどもある重たい斜めに施された刃がゆっくりと吊り上げられてゆく。

「ほら、娘のあなたがこのロープの先端咥えて」

「んっ!?　ガブッ！！……んぎぎぎぎ」

「離したらお父さんのチンポ……亀頭部が吹っ飛んじゃうからね？５分我慢できたら二人の拷問処刑は中止してあげる」

「んううううっ！！……んぎぎぎぎいっ！！」

５キロもの重たい刃を、１０歳の少女が５分も咥え続けていられるはずがないことは、この場にいる全員が理解していた。

「ほら、口が開きかけてるよ？　あはは！」

必死で耐える紗綾香に、誰にも予想だにしなかった奇跡が起きようとしていた。

「4分50、51、52」

時計を読み始める由衣夏。

「あれ？　マジか？　なんちゅう根性してんのコイツ……」

理沙の顔にも焦りが見え始める。

「……57、58」

由衣夏のカウントが間も無く5分を告げようとしていたその時だった。

『ズボオッ！！』

「がはあっ！？」

理沙の鋼の鞭を槍型に変化させ、必死で噛んだまま離さない紗綾香の膣口へブッ刺した。

その先端は子宮までも串刺しにするほど深々と突き刺されてしまっている。

これには耐えきれずついに口を開いてしまう。

『シュルルルッ……ザシュッ！！！！』

皆の見守る中、キロチンの刃の重力で落ちてくる斜めに加工された凶器によって、真也のペニスは雁首から切断され、その亀頭部はクルクルと回転しながら5メートルほどの高さに吹っ飛んでしまう。

「んぎゃあああああっ！！　いだいいいいいっ！！」

麻酔の効いている父親の陰部切断より、性器のみしかまだ麻酔の効いていない紗綾香の激痛は、まさに地獄のようであった。

「痛いでしょう？　オマンコ……串刺しの刑よ♡」

「ぎひいいいいっ！！　ぎゃあああああっ！！」

目を細めて不敵な笑みを浮かべながら紗綾香の耳元で囁きかける理沙。

右手にはまだまだ深く突っ込まれてゆく鋼の槍があった。

『ズチュチュチュ！！……バリバリメリメリッ！！』

子宮口から子宮を貫通し、そのまま胃、食道へと串刺しにしてゆ

く。
鋼の槍の根元部分を膨らませて高速回転させ、恥骨もバキバキに粉砕した。
目を見開き大きく開口し、本日一の絶叫を残酷処刑島に響き渡らせる紗綾香。
「アハハ♪　いい声で鳴くじゃん……痛いでしょ？　酷い顔になってるわよ？」
「あれ？理沙ちゃん……娘の前で父親殺すんじゃなかったっけ？」
「え？……そうだっけ？　逆でしょ？　まぁどっちでもいいよもう。由衣夏もこの子の後ろ……ヤッたげて。鋼を高速回転させて既に恥骨も破壊してるからスムーズインだよきっと♡」
「あ！　私にお尻ヤラせてくれるんだ♡」
先ほど陰核と大陰唇や小陰唇を溶けるほど焼いた電撃警棒を手にして、すけべそうな笑みを見せる由衣夏。
鋼の鞭を槍に変形させて更に腹腔内で回転させるとゆう恐怖の武器を見つめながら由衣夏は電撃警棒をそっと１０歳の少女の股間へ近づける。
「子宮のミンチ噴き出せながら肛門がパクパク開いたり閉じたりしちゃってる♪　エロいエロい♡　じゃあ後ろの穴もブッといのくれてあげる」

『ピト……ズボボッ！！』

極太の先端部が、紗綾香の小さな肛門を押し開いてゆく。

「はぎゃあああっ！！　やめてよおおおっ！！痛いいいいいいっ！！」

『ボコオッ！！……ドクドクドクドクドク』

「ぴぎいっ！！！！」

由衣夏の電撃棒が直腸を貫き、S字結腸まで辿り着いた。

「ほらほら、これが突き当たりかな？　串刺しには邪魔だからS字結腸突き破ってやるわね？」

『グボボボボ！……バリッ！　ズチュチュチュ！……バリバリバリバリッ！！』

「ほげえええっ！？」

由衣夏の電撃警棒は1メートルほどに伸び、直腸を貫いた後、S字結腸、小腸を何枚も貫き、一気に喉まで貫通させた。

ビクビクと激しく全身を痙攣させながら死の直前を予感させる。

『ビックンビックンビクビクビクビクッ！』

「由衣夏、この子もう死んじゃうからトドメ刺そう。あたしの鋼の槍の先端細めるから由衣夏の電撃警棒と同時に口から出しちゃお！」

「うん！えいっ！」

『グボボボボ……バシュシュッ！！』

『ゴボボッ！！　ぶしゅしゅしゅしゅしゅうううううっ！！』

見事に理沙と由衣夏の膣口と肛門から突っ込まれた武器の切先が、同時に幼い少女の口から飛び出した。

「二穴同時串刺し成功♡」

「すっごい量の血が口と下の二穴から噴き出しちゃってるね〜♡」

理沙は更にペンチを手にして、また微かに膨らみを持つ程度の胸に付いているピンク色の乳首を挟み込み、一気に潰してから引き抜いた。

「まずは右の乳首、もぎ取ってあげる」

『ブチュ！……バリイッ！！』

「じゃあ私は左の乳首、それっ！」

由衣夏も同じくペンチで左の乳首を潰してから引きちぎった。

「も、もうやめて……もうやめろおおおっ！！

一部始終を見ていた父親の真也はペニスの切断面から夥しい量の鮮血を噴き飛ばしながらブチ切れる。

「はぁ？　誰に口聞いてんのお前？」

『ビクビクビクビクッ！！……ガクンッ！』

理沙に凄まれながら愛娘の最期の時を看取るハメになる真也。

「紗綾香ああっ！！　紗綾香ああああああっ！！　うおーん！！うおーん！！わああああああっ！！」

怒りは号泣へと変化した。

「キロチンで切断された尿道から血と一緒に粘液出てるわよ？」

理沙は血止めの注射を真也の血まみれの会陰部に打ち込むと、耳元でそっと囁く。

「今から娘の死体、ドロドロに溶けるくらい焼いてあげるね？うふふ」

「うう……お願いです……もう殺して……娘のそんな姿、見たくない」

『バリバリバリバリバリバリバリッ！！』

無言で肛門から口まで伸ばしている電撃警棒のスイッチを入れる由衣夏。

『バリバリバリバリッ！！……ボコボコッ！！……しゅうううううっ！』

二つの目玉が飛び出し、血の涙と共に煙が立ち昇る。

沸騰してボコボコと音を立てながら目玉も溶けていった。

「鼻からも沸騰した鼻血と粘液垂れ流しちゃって……きったない死

に様ねぇ？　オジサンの娘さん……」
「すっごい温度まで上がるのね由衣夏の電撃警棒って……あたしの鋼の鞭が溶けたら大変……よっと」
『ズシュシュッ！！……ドクドクドクドク』

一気に性器から槍に変形していた鋼の鞭を引き抜くと、何度も空打ちして血と愛液をふき飛ばす理沙。
短く収納して武器を置くと、全身の穴から煙を吹き出しながら内側から焼かれてゆく姿を楽しむ。

「おお〜。すごいすごい♪　焼け爛れて溶けてる部分もあるわ」
『バリバリバリバリバリバリッ！！　じゅううううううっ！！』
「見て理沙ちゃん！　もう肛門なんて原型留めてないわ！溶けて大腸や小腸がドクドク流れ出してきちゃってる♡」
「ヤラしいなぁハラワタ溶けて垂れ流しちゃって……あたしク濡れてきちゃった」
「え？あ、後で私に舐め取らせて！」
「由衣夏の変態！　大量だけど全部飲み込んでもらうんだから♡」
「うん！　理沙ちゃんのアソコ想像したら私も濡れてきちゃったじゃん……」

真也からすれば訳の分からない会話を散々聞かされ、目の前で愛娘の溶けて焼けこげた見るに見れない悲惨な姿にされた紗綾香の遺体を見つめながら泣き続けるのみであった。

「臭いなぁ」

『ドカッ！！』

肉片と真っ黒なコゲのみとなって、もはや男女の分別さえつかない肉塊となった紗綾香を思いっきり蹴飛ばす理沙。

『グシャ！！……グリグリグリグリグリッ！！』

「ホント……ここにあった子宮や卵巣は？」

腹部らしい部位を足の裏で踏みつけ、更に踏みにじる由衣夏。生焼け部分がグチュグチュと卑猥な音を立てる。

「あああっ！！　わーんわーん！！　紗綾香あああぁっ！！」

理沙と由衣夏は腕組みをしながら、真也の前に仁王立ちして睨みつける。

「チンポとキンタマ失って……目の前で愛娘殺されて……気分はどう？」

「う、ううう……ぐすん、ぐすん」

理沙の問いに答えることも出来ず、啜り泣く真也に由衣夏も続ける。

「被害者の三人の命は、お前とバカ娘だけでは償いきれないけど……責めて地獄を味わいながら死んでゆくがいいわ」

「由衣夏、あたしコレやるの初めてなんだけど……コツとかある？」

「凌遅刑ね。コツとゆうか……出来るだけ小さく切って三千回、四千回と切り刻んで出来るだけ長時間殺さずに皮や肉を削ぎ落としていくだけなの」

「ふぅん。むちゃくちゃ残酷で痛そうな刑だよね」

「中国人恐るべしね。こんなの日本人じゃ考えつかないでしょ」

「でもはるか昔の戦国時代とかなら、地面に埋めて頭だけ出して通行人に首を鋸で挽かせる刑があったって聞いたけど？」

「あ、あれは実際に挽く人ほとんどいなかったみたいよ。普通の通行人にそんなことできるヤツいる訳ないよね。アハハ」

「あたしたちなら相手が悪人なら平気で挽いちゃうけどね」

「そだね。私も自信ある♪……やっぱ普通じゃないのかな私たち拷問処刑人って……」

大の字の杭に縛り付けられたまま震えながら泣き続ける真也だったが、人生最悪の時間がついに訪れてしまう。

拷問処刑人の少女二人によって、脚や腕、腹部や背中、ありとあらゆる部位を、鋭利なナイフで削ぎ落とされてゆく。

「ぎゃあああああっ！！　いでえええええっ！！　おごおおおおおおっ！！」

「うるさいわね。ほとんど全身の麻酔も切れてきてるから仕方ないか……睾丸潰されてる痛みが完全復活するとナイフで肉削ぎ落としてること忘れちゃうくらい激痛なんだろうな」

「あはは！　そりゃそうだ。男にとってキンタマ潰しは最凶最悪だろーね♡」

女には到底分からない男の痛みについて語り出した理沙に、由衣夏も納得してついついウケてしまう。

『ザクザクッ！……ズズズッ！』

「ぎゃあああああっ！！　ぎひいいいいいっ！！」

絶叫を続ける男に構うことなく、どんどん全身の皮と肉を削ぎ落としてゆく二人。

ついに糞尿まで漏らしてしまう。

「あ、オシッコ漏らしたな？　お仕置きが必要だわ」

運悪く、理沙の手に真也の小便が掛かってしまった。

「こんな亀頭部切断された惨めなチンポからでも、放尿出来たことは褒めてあげる」

そう言いながら残っている胴体部分を左手で握り、根元へナイフの刃を当てがう。

「え？　理沙ちゃん……ついに根っこから切断しちゃうんだ♡」

「うん。もう立ちションも出来なくしてやるの」

「アハハハ♪　もう死んじゃうんだからそれ必要なの？」

真剣な理沙に何度もウケてしまう由衣夏だった。
真剣な表情のまま、理沙は右手のナイフをスッと引いた。

『スパァ！……ドクドクドクドク』

「いぎいいいいっ！？　ぐわあああああっ！！」

「そんな大袈裟な……雁首切られた時点でチンポ生命終わってたでしょ？　ヤダなぁコイツ」

それから更に一時間もかけて、ついには全身の皮と肉を削ぎ落としてしまう二人。

「ふぅ。お疲れ様理沙ちゃん。もう全身真っ赤っ赤だね！」

「うん。もう刃を入れる部位が顔しか残ってないよ」

「肛門は？」

「あ！　そう言えば肛門部分だけ残してるけど？　くり抜いていいかな？」

「もちろん！　くり抜いて直腸ごとハラワタ引き摺り出しちゃお♪」

「はいはい。由衣夏もそんなウキウキしちゃってかなりスケベで残

酷だよね？」

拷問処刑を自分より楽しんでやっているように見えた由衣夏に半ば呆れながらも、まだ無事に残っている肛門括約筋へナイフを突き刺す理沙。

「きったないアナル……真っ黒じゃん。よっと！」

『グリッ！……ザシュシュシュシュシュシュッ！……ベロンッ！』

「はい、肛門」

「くっさ！　私そんなのいらないよ！　捨てちゃって！」

行き場を失った抉り取られた真っ黒な肛門を、本人の男の口内へ捩じ込む理沙。

「ほら、お前の汚いアナルだよ。食べろ！」

「うごごご……カヒュウ、カヒュウ」

あまりの激痛に、すでに過呼吸を起こしながら死の予兆を感じさせる真也。

「顔の肉削ぐの忘れてたわ」

「え？　まだ顔までやっちゃうんだ？」

「逆に聞くけど、全身の肉削いでるのに顔だけ残すのおかしくない？」

「そ、それもそっか……さすが理沙ちゃん。目の付け所がシャープだね」

「あたし東芝派なんだけど？」

とてつもなくつまらない会話をしながら、無惨にも真也の顔面の肉までもどんどん削ぎ落としていく理沙。

「よし！　理科室の解剖マネキンみたいに不気味な顔になったぞぉ、あと上下の唇で仕上げね」

「えっぐ……もうこのオッサンが別人に見えちゃう」

由衣夏は少し寒気を感じながらも理沙の人生初の凌遅刑を観察していた。

「さてと……まだ生きてるうちにコレでトドメ刺しちゃおか？」

理沙はかなり大きめのライフル銃を取り出し、銃弾を一発込める。

「さ、それはＭ８８ライフル！　像も一発で吹き飛ばしちゃうほどの強力な……」

「よく知ってるじゃん。こんな悪党のトドメはオーバーキルでなきゃね♪」

大の字に磔られて、全身の肉を削ぎ落とされても尚、生死の境を漂ってもがき苦しんでいる真也の背後へ回り込む理沙。

「お邪魔しまーす♡　とうとうトドメの時間だよぉ？　ほら飲み込めっ♪」

『ズボッ！……ズブブブブ！』

「ほげえっ！？」

６０センチ近くある銃口を、２０センチほど元々肛門のあったパックリ開いた部位の開口部へ突っ込む。

Ｓ字結腸を貫きかけるほど深く挿入された。

「肛門まで抉り取っちゃってごめんね。直腸引き摺り出すの許してあげるから……ココから撃ち込ませてね？」

「アナルからその銃ぶっ放すとどうなるの？」

「頭どころか上半身ごと吹っ飛んじゃうかも」

「へえ～。早く見たい見たい♪」

由衣夏はワクワクしながら、理沙による銃撃を心待ちにする。

遠くで見ている神崎美央が久しぶりに口を開いた。

「もう時間だよ。ソイツはもう十分過ぎるほど苦しんだわ。早く吹っ飛ばして逝かせてやりなさい理沙」

「うん！　じゃあトドメ刺してあげるね？　よく頑張ったぞオッサン。あの世で自分の愛娘でも犯してろ♡　えい！」

『ズドオオオオンッ！！……パァアアアンっ！！！！……ビチャビチャビチャビチャッ！！！！』

頭部と顔面が真っ先に粉々に吹っ飛び、ほぼ同時に胸から上全体が消し飛んでしまった。

「すっご……辺り一面肉片だらけだわ」

由衣夏は２１２５年製外国産ライフルの、あまりの破壊力に興奮してしまっていた。

「もうそろそろ後片付けのアイツらがやってくるから……サッサと帰ろう」

「そだねおねぇちゃん。でもアイツらの一人に由衣夏のファンがいた気がするけど？」

「あはは……私海原さんタイプじゃないから……早く帰りましょ」

神崎美央の操縦するドローンは、任務を遂行した後、そそくさと残酷処刑島を後にした。

残酷処刑島に新たに二つの遺体が加わった……。

常連客（後編）（後書き）

「凌遅刑って、色んな拷問処刑の中でも一番残酷そうだけどそそるわねぇ」

理沙はかなり気に入ったみたいだった。

「理沙ちゃんのお気に入りになった？」

「うん！　チンポ切り落とす時と……乳首や肛門くり抜いちゃう時って一番興奮しちゃうんだ」

「理沙も残酷な上にかなりエッチだねホント」

美央は苦笑いしながら理沙に答える。
由衣夏は理沙のスカートの中に顔を埋め、そっとパンツを脱がせると、愛液まみれの性器を舐め始めた。

『ペチャペチャ……』

「あ、あん」

敏感に理沙の声に気づく美央。

「コラ！　人が操縦してる時に何やってるのアンタたち！？」

「ば、バレちゃった！？」

理沙は慌てて由衣夏の頭部をスカートの中から引き抜く。

「理沙ちゃん……大好き」

「う、うん！　あたしも」

激しくディープキスをする由衣夏と理沙に、気付いて気付かないふりをしながら帰路につく美央の心境はかなり複雑であった……。

拷問処刑人たちの性癖（前編）（前書き）

小学六年生なのに、１８歳の自分より遥かに強い神崎理沙から普段のＳっ気をかき消され、その理沙の前では根っからのＭに目覚めてしまっている唐田由衣夏。

同性で普通に愛し合うだけでは終わりそうにない二人だった。

拷問処刑人たちの性癖（前編）

――土曜日の夜、神崎邸。

セミダブルベッドの上……薄い夏用の羽毛布団の中で、素っ裸で抱きしめ合いながら、お互いの愛を感じている二人の女。

女子高生と女子小学生の二人は、本気で付き合っているレズカップルであった。

女子高生の唐田由衣夏は１８歳。

小学六年生の神崎理沙より遥かに身体は大きいが、戦闘能力は理沙が上回っている。

二人はもうかれこれ、数分間ものディープキスを続けていた。

「んんん……」

「レロレロ……んんん」

そっと理沙の指が由衣夏の太ももを伝い、秘部へ向かう。

『ススス……ズチュッ！』

「あはあっ！？」

『グチュチュ！……クチュクチュクチュクチュ！』

「あんんっ！　いきなりそんな……」

理沙の中指が、愛液まみれの由衣夏の膣口へ一気に挿し込まれ、そのまま膣内を激しく掻き回す。

「もうグショグショじゃん？　大洪水だよぉ？」

「やだ……理沙ちゃんのエッチ」

「よく言うわね？　どっちがエッチなのよこんなに濡らしちゃって……」

「だって……大好きなんだもん」

「えへへ。あたしもだよぉ由衣夏♡　あたしにも挿れて」

由衣夏も理沙の秘部へ優しく中指を挿し込みながら、更に舌を激しく絡ませてゆく。

「あん！　優しくしてよ由衣夏……あたしはまだ小学生だから膣口も小さいし……」

「うんうん♪　理沙ちゃんもかなり沼ってるぅ♡」

理沙に言われるがまま、優しくそっと小さなワレメを愛撫する由衣夏。

そのまま指でお互いをイカせ合うと、由衣夏は四つん這いになってお尻を高く突き上げる。

「今夜も……虐めて」

「好きだなぁ由衣夏もホント……」

理沙の愛情が篭ったスパンキングが開始された。

「ほらほら、こうかこうか♡」

『パン！　パン！　パン！　パン！』

「あんっ、んんっ！　ひっ、やはあっ♡」

お尻を真っ赤に染めながらも、更に大量の愛液を分泌する由衣夏に半ば呆れながらドSな理沙も興奮してきている。

右膝を股間の下へ差し込み、性器を何度も何度も擦りつけると、由衣夏は敏感に反応して全身を震わせた。

『ズシュッ！　ズシュシュッ！』

「あんっ！　いやんんっ！」

理沙の膝に潮を噴きかけてオーガズムを迎える由衣夏。

「またイッちゃったの？　このままマンコに腕突っ込んで子宮抉り出してあげようか？」

「はぁ、はぁ、やだ……そんな激しいこと言われたらまた濡れちゃう♡」

「SとMどっちも持ってるんだね由衣夏は」

「そ、そうみたい……すっごいタイプの美央に責められるのが夢だったから……瓜二つの理沙ちゃんとまさか付き合えるなんて思ってなかったし……ホントにこんな歳上の私なんかでいいの？」

『ズブッ！』

「はうっ！？」

少しイラッときてしまった理沙は由衣夏の肛門へ人差し指を一気に根元まで突っ込んだ。

「あたしから告ったんだよ？　忘れたの？」

『グリグリッ！　グリリリ！』

「あんんっ！？　痛いっ！」

「ごめん！」

本気で痛がる由衣夏に気付き慌てて直腸を掻き回す力を弱める理沙。

「もう二度とそんなこと言わないで。あたしは由衣夏のことを愛してるの。一度は振られちゃったことも思い出しちゃうから」

「うん。ごめんなさい。ありがとう……ぐすん」

「もう……あたしの前ではホント泣き虫だなぁ」

再びベッドに添い寝して、由衣夏を強く抱きしめる。

「理沙ちゃん、愛してる」

「……あたしも。理沙のこと裏切らないでね」

「当たり前だよ。……あ！　そう言えば……美琴さんたちの拷問処刑、もう終わる頃かな？」

神崎美央と母親の美琴、三女の美月は夜の残酷処刑島での拷問処刑を命じられていた。

「もうトドメ刺す寸前くらいじゃない？　あの罪人のカップルは今頃生き地獄味わってるよきっと」

――――残酷処刑島。

２５歳の罪人二人は、同じ赤霧島茜小学校の教師であった。

二人の性癖は全く同じようなものであり、笹岡健吾（ささおかけんご）は女子児童、佐伯乃亜（さえきのあ）は男子児童……お気に入りの児童を放課後に補習の名目で居残りさせて、パンツを脱がせたり性器をスマホに撮影したり指で触ったりして、性的な虐待を続けていた。

友達や親にバラすと自分自身が恥ずかしい思いをする上に、いい中学へ入れない、などと脅しをかけながらの卑劣な犯行であった。

その二人の教師は今……特殊任務省に拘束、連行されている。

夜の無人島の冷たいコンクリートの拷問処刑部屋で素っ裸にされて、抱きしめあった体勢で立ったまま一本の鉄の杭に縛られて仕置きを受けていた。

「あなたたち二人で十人では追い付かないほどの児童たちを虐待してきたのよね……ホント変態。虫唾が走る」

『パァンッ！！　スパァンッ！！』

「ひぎっ！！　ぎゃあっ！！」

女子高生の拷問処刑人である神崎美央は、ハエ叩き型の革の鞭で健吾と乃亜のお尻を交互に引っ叩く。
すでに百回以上叩かれた臀部は、皮が剥けて紫に変色して所々流血していた。

「お尻叩きはこのくらいでいいか……お母さん、美月、次お願い」

神崎美琴はＳＭ嬢が生業だけに、ボンテージ姿の網タイツ、黒いブーツと言ったいかにも女王様らしい姿で残酷処刑島へ任務遂行に来ていた。
美央の妹である美月は白いセーラー服に赤いリボン、紺のスカートと言ったごく普通の女子小学生の服装である。

美琴は二人の教師の拘束を解き、ベッドに四つん這いにさせてキスを強要した。
二人は恋人ではなかったが、性癖がよく似ていたのがお互いバレた事をきっかけに、よく飲みに行ったりする男女の親友とゆう滑稽な仲であった。

お互い嫌いではなかったためか、素直にキスを交わしながら言いなりになる。

「ほら、舌も入れて！　もっと激しく接吻するのよ！」

美琴が声を荒げて命令すると、二人は下の絡み合う音を立てながら激しくディープキスをし始めた。

美琴と美月はペニスバンドを腰に装着して、二人の背後にそっと膝をつく。

「美月は健吾の方お願いね。私は乃亜の方やるから」

「はーい！　男は穴一つだからアナルって決まってるけど……そっちの女の方はどっちに挿れるの？」

「まずはアナル。性器は美央の氷の槍で、お口まで串刺し予定だから」

「そっか。分かった」

直径４センチ、長さ２０センチほどの極太ディルドをペニスバンドにセットしている美琴と美月。

ほぼ同時に二人の教師の肛門へ、そのイカつい先端を押し当てる。

『ピト……』

「ひっ！？」

肛門へ異物を押し当てられた驚嘆の声までも、二人はほぼ同時だった。

『ズボボボッ！』

「痛ああああああああっ！！」

「ひぎいいいいいいっ！！」

「おほほほ……悲鳴は少し違ったわねぇ」

３９歳の母である拷問処刑人の美琴が冷たく囁く。
二人の教師の肛門へ根元までぶち込まれたディルドをほぼ先端まで引き抜いては再び根元まで挿し込む。
更にピストンの速度を上げてゆく美琴と美月。

『ズッコンバッコンズッコンバッコン……バコバコバコバコ！！』

「はぎゃあああああっ！！　熱いっ！！　痛いいいいっ！！」

「やめれえええっ！！　お尻が壊れちゃうううううっ！！」

あまりにも激しい出し入れが数分間続く。

ついに肛門の激痛に耐えきれなくなった二人は、ほぼ同時にうつ伏せに胸と腹をベッドに打ち付けるように崩れ落ちた。

血まみれになっているディルドからは腸液と血液が混じった粘度のある鮮血が滴り落ち、美琴と美月の太ももまでも赤く染めていた。

「ヤラしい粘液垂れ流しちゃってコイツら……浣腸してクソ抜きしてて正解だったわねお母さん」

軽く首を回して、ツインテールの束ねた髪を後方へ靡かせながら美琴へ同意を求める。

「そうね。五回くらい高濃度グリセリン打ち込んで徹底的に排泄させてたから……腸液が少し臭いけどこれくらいなら許容範囲だわ」

美月は得意の武器である小型の斧を手にすると、男の肩口へ向けて一気に振り下ろした。

『ドカッ！！……ブシュウウウウウッ！！』

一撃で右腕が肩口から切断され、激しく血飛沫があがる。

「ぎゃあああああっ！？」

「コラ美月！　血止め薬打ってからでないと早々に出血性ショック死されたらどうするの？」

「あ、忘れてた……ごめんなさい」

慌てて斧を置き、強力な血止め薬と麻酔薬を全身数ヶ所に注射する美月。

女の方も同じ薬を美琴が打ち込んだ。

「これでしばらく痛みまでマシになっちゃうけど……死ぬ直前には麻酔が切れちゃう算用よ♪」

「あはは！　お母さんそれって……超残酷じゃん♡」

「とにかく、簡単に楽に死なれないように手を尽くすのが拷問処刑人の勤めよ」

「うん。分かった！」

そのまま美月は健吾の左肩、右脚、左脚までも斧で切断してゆき、ついに男をダルマにしてしまう。

涙を流しながら絶叫する健吾を目の当たりにした乃亜の方までも

号泣し始める。

「きゃ！？　きゃあああああああっ！？　や、やめて！！　許してあげてええええっ！！」

「何言ってるのオバサン？　あんたもダルマになるのよ？」

「ひっ！？　ゆ、許してくださいっ！！　な、何でもしますから許してええええっ！！」

ベッドからコンクリートの冷たい床へ降りて、美月へ土下座をして赦しを乞う乃亜。

「小学生なんかに命乞いの土下座なんかして……情けないとは思わないの？　オバサン……よく見るとセミロングの髪に前髪ハの字分け……私の好きなヘアースタイルだわ♡」

「許してくださいいっ！！　ごめんなさいごめんなさいごめんなさいいいいっ！！　わーんわーん！！」

美月は目を細めながら乃亜の後頭部を見つめる。

「その女のこと可哀想に思ってる？　私がやろうか？」

「……私がやる。その前に自分から切断して下さい、と言わせてや

るから」

「ボコるのね？」

「正解。さすがお母さん」

　美月は乃亜の髪の毛を掴んで引き起こすと、往復ビンタや正拳突き、アッパーカット……あらゆる素手の打撃で顔面だけを狙い、何発、何十発と殴りつけていった。

『ガツッ！　ドカッ！　グシャッ！　バキバキッ！』

「はぎゃぎゃぎゃぎゃあああっ！！　いだいいいいいっ！！　やめれえええええっ！！　死ぬううううっ！！」

『バキバキバキバキッ！　ドカッ！　ベキッ！　ドコォッ！』

「痛いいいいっ！　も、もうやめてええっ！！　何でもしますからあっ！！」

「あ、そ。じゃあ四肢切断の刑執行するね。このクズ野郎と同じようにダルマになりなさい」

「ひ！　ひいっ！？　わあああんっ！！　わあああんっ！！」

「大の大人がそんな泣かないの。ね？」

そのまま美琴に押さえつけられたまま、美月の鋭い斧によって四肢を切断されてしまうのに数分とかからなかった。

「はぎゃぎゃぎゃぎゃ……ひいいっ！？　酷いいいいっ！！」

「酷いのはあんたらの方じゃん？　被害を受けた児童たちは一生トラウマもんだからね。男の奴と違ってお前は肘と膝からにしてあげたよ♪　少しでも手脚が残ってるから嬉しいでしょ？　うふふ♡」

健吾と乃亜はダルマにされた挙句、正常位でセックスさせるために重ねられた。

しばらく美琴と美月の拷問を静観していた長女の美央が、二人の罪人へそっと囁きかける。

「逝く前にセックスさせたげる。二人で飲みに行くほどだから、お互いそんな嫌いとかじゃないんでしょ？」

「ひっ！？　こ、こんな格好にされてこれから殺されると分かっているのに勃つわけない！　もう殺してくれぇっ！」

「はい。殺してくれ、頂きました♡」

健吾は四肢切断されて生きる希望さえ失いつつあった。

美央はそんな哀れな罪人の会陰部へ注射を打つ。

「これねぇ。アヘイクといってどんな状況でも興奮してオチンチン勃起しちゃう特殊な媚薬なの。男女兼用で女性も愛液まみれになってゴートゥヘブン間違いなしだわ」

『ズッ！……プチュウウウウウ』

「うっ!?　や、やめ……」

どんなに絶望しようが四肢切断されていようがみるみる内にフル勃起してゆく健吾のペニス。

「やだぁ～。むっちゃデカいじゃん♡」

美央は健吾のペニスを右手で握ると、ゆっくり手コキを開始。短くなった手脚をパタパタさせながら頬を紅潮させ、白目を剥いて口を開き、舌を突き出す……完全なアヘ顔と化した健吾は、美央の手コキに凄まじく反応してしまう。

「あへぇっ！！　あへあへあへぇっ！！」

「ほらほら、どう？　とりあえずあたしの手コキで射精しちゃう？」

『シコシコシコシコッ！！』

「あひひひひっ!?　はへぇええっ！！」

『ドピュッ！！　ドクドクドクドクッ！！』

大量の精液を撒き散らした健吾は、美央の手が止まった後も腰を振り続けながら精液を搾り出していた。

精液まみれの指を、隣にいる乃亜の口内へ強引に捩じ込む。

「ほら、お前と同じ鬼畜のザーメンよ？　舐めとりなさい」

「あがが っ！？　うごおおおっ！」

妹の美月も注射器を手にして、アヘイクを女の会陰部へ打ち込む。

「乃亜だっけ？　あんたの大人の割に小さなマンコにはちょっと大きすぎるかもしれないけど……人生で最期のセックスになるから我慢できるよね？　うふふ♡」

「ひっ！　や、やめて……あ！？　あへあへあへえええっ！！」

美月が注射針を抜く寸前くらいから早くも愛液が滝のように膣口から垂れ流れてくる。

「ヤダなぁエッチ♡」

美月は目を細めてヤラしそうにはにかむと、乃亜のぐしょぐしょになっている性器を両手で全開に拡げた。

「マンコの中身見せて♡　はい、ご開帳～♪」

『ぐっ！……くぱぁ～！！』

「あへぇええっ！！　もっと開いてっ！　指挿れてぇえっ！！　あへぇええっ！！」

美月の拡げた膣口を、美琴と美央も覗き込む。
そのまま美月は鞄からクスコを取り出して、膣内へ突っ込んだ。

『グリッ！……ズチュッ！』

「はひいっ！？　あんんっ！！」

『ぐぱあぁ～！　ニュチュチュチュ！』

卑猥な音を立てて膣道が奥まで全開に拡げられ、子宮口までも丸見えになった。

「ヤラしいなぁ～♡　子宮ちゃんまで見えちゃってるよぉ？　閉じて～開いて～……閉じて開いてぇ～♪　あはは♡」

『ニュチュチュ！　くちゅちゅちゅちゅ！』

美月はクスコを閉じたり拡げたりして、粘度のある愛液が奏でる卑猥な音を立てて愉しんだ。

「コラ美月！　いつまでもマンコで遊ばないの」

「そうよ。早く男の挿入を待ち侘びてるんだから期待に応えてあげなさい」

美央に続いて美琴も催促してくる。

「はーい。お母さんも美央ねぇちゃんもホントせっかちねぇ」

美央は健吾の両脇へて腕を回して持ち上げる。
美琴は少しだけ残っている太ももを掴み、水平にさせ、ゆっくりと仰向けに寝かせている乃亜の上から下ろしてゆく。

「美月、ペニス掴んで女の膣口へ誘導して」

「はーい。オーライオーライ！　もう少し左、あ、もうちょっと前！　その位置だと肛門に入っちゃう」

美月の誘導通りに美央と美琴は微調整しながら健吾を下げていき、ついにイキリ勃っているペニスは乃亜の膣内へ挿入されていった。

『ツプッ！……ヌププププッ！』

「おっけー！　ど真ん中よ♡　どんどん降ろして」

『ツププ！……メリメリ！』

「やあっ！？　はひいっ！！　痛いいいっ！！」

健吾のペニスは乃亜には少し大きすぎた。

超強力媚薬のアヘイク効果が保たれていながらも激痛も感じて思わず股を閉じて拒否し始める乃亜。

美央はボコボコに腫れ上がっている乃亜の顔を更に数回殴りつけた。

『バキバキバキッ！！』

「ぎひゃっ！？　ぐええっ！！　ごめんなさいいいいっ！！」

「股を全開にしなさい。コイツのチンポ根元まで咥え込まないとマンコから手突っ込んで脳みそ引き摺り出すわよ？」

「ひ、ひいっ！！　は、はい！！　わかりましたああっ！！」

『パカッ！……ズブブブ……メリメリ！……ズボォッ！！』

「はぎゃあああっ！！　あへあへあへえっ！！」

短くなった太ももを開くと、そのまま乃亜の性器は一気に健吾のペニスを根元まで飲み込んだ。

「やればできるじゃん♪　ほら、早く腰を振りなさい」

「は、はいい……」

『バコバコバコバコバコッ』

「あはは！　男の方は胴体付け根から切っちゃってるから、ホントにイモムシみたいな動きだねぇ」

ダルマ男が必死で腰を振る姿を真上から見下ろしながら、美月は一人ウケていた。

媚薬アヘイクは絶大な効果があり、健吾と乃亜はそのまま三回ほどイッてしまう。

「おい！　誰が何度もイッて良いって言ったの？」

『ツプ……ズボッ！！』

「はうあっ！？　ひいっ！　ご、ごめんなさいいいいっ！」

美央は人差し指を健吾の肛門へ一気に根元まで突っ込みながら調子に乗っている健吾を叱りつける。

「ここからＭ８８ライフル突っ込んで脳みそ吹っ飛ばしてあげるわ」

「そ、そんなっ！？　ゆ、許してくださいいいっ！！」

美琴が不思議そうに首を傾げながら男に問いかける。

「あら……先ほどまで殺して欲しいみたいにおっしゃってなかったかしら？」

「ううう……やっぱりまだ死にたくないですう～。うおおんっ、うおおんっ！」

「乃亜も見てるのに男のお前がウオンウオン泣くな！　ほら、お尻で四回目イカせてやるから」

『グリグリグリッ！　グチュチュチュチュ！』

哀れそうに目を細めると、そのまま直腸内に差し込まれている人差し指を掻き回し、前立腺を激しく刺激する美央。

「はうはうううっ！？　あへへへへえっ！！」

「哀れね。こんなになっても感じちゃうなんて……」

『グチュチュチュチュチュッ！！　ぐりんぐりんっ！！』

「腸液たくさん分泌しちゃって……エロい音立てちゃってるわねぇ？　ヤダなぁホント」

「はうううっ！！」

『ドピュッ！　ドクドクドクッ！』

肛門を指で掘られて無理矢理射精させられる健吾。
その精液は乃亜のヘソの穴へ滴り落ち、更に溢れ出してクリトリス、小陰唇へ流れ込む。

「ひゃっ！　もっと温かいのを私にへりかけてぇ～。あへあへあへえ～」

「乃亜さぁ～ん♪　あったかいの振りかけてあげるからちょっと待っててね～♪」

美月は満面の笑みを浮かべながら二人の背後に回り込むと、この時代を代表する破壊力Ｎｏ．１のライフル銃であるＭ８８を手に

した。

「え？ザーメン代わりに脳みそ振りかけてやるの？」

「しっ！　先にバレたら怖がっちゃって反応が楽しめないよ！」

「もうアヘイクで脳みそ飛んじゃってるから大声で話しかけないと聞こえないわ……じゃああたしたち下がってるからホントにふっ飛ばしてやって」

美琴と美央は、脳みそや内臓を被らない位置までそっと距離を取る。

「ほら、短い脚開きなさい」

「アヘアへ……はいい〜。まだ乃亜さんに挿れて腰振っててもいいのですか？はぁ、はぁ」

「良いよ♡」

「あ、ありがとうございます！　無茶苦茶気持ちがいいんですぅ〜」

『ズチュ！　バッコンバッコンバッコンバッコン！』

再びフル勃起したペニスを、腰の位置をあれこれ変えながら自力で膣口へ捩じ込む健吾。

そのまま先ほどのように激しく腰を振り始めた。

「あんあんんっ！！　あへえええっ！！」

乃亜も下側で腰を必死で振りながら、激しく感じている。

「コイツらきしょ！……何人もの児童に犯した卑劣な犯罪は決して許されないわ。先に健吾、お前を逝かせてあげる。ここね？」

『スッ……ピトッ！』

美月は１２歳ながらも小学校では理沙の次に力も喧嘩も強く、重たいライフルも軽々と構えて、男の肛門へ銃口をそっと押し当てた。

『ズブブブブ！』

「はうあっ！？　はひいいっ！！」

「やだぁ。アナルに銃口突っ込まれても感じちゃってるんだぁ？アハハハ！　ウケるぅ♡」

４０センチはあろうかとゆうＭ８８の銃身が２０センチほど肛門へ突き刺さる。

前立腺を、丸く太くなっている銃口部分が前立腺を擦り付け、健

吾は真っ赤にただれたお尻を突き上げて快感を美月に伝えた。

『ズボッ！　ズチュッ！　ズボッ！　ズチュッ！』

「はううっ！　ひいいっ！　やはあっ！　んんっ！」

美月は、激しく銃口を肛門から直腸内部へ出し入れをし始めた。

「ほげえええええっ！？　はうはうはううっ！！」

「ほらほらほら！　何感じてんだこの変態鬼畜野郎！　お前なんか銃口で犯してやるから最期にもう一発メスブタに中出ししちゃえ！」

美月の銃口アナル責めに、カッチカチになったペニスは、乃亜をもう一度昇天させた。
その瞬間、健吾自身も射精してしまう。

「アヘアへえっ！！」

『ドピュッ！　ドピュピュピュピュッ！！』

「私のアナル責めで余計興奮できたみたいね？　さぁお逝きなさい」

『ガチャ！……カシャン！』

「ケツ穴からライフル突っ込んで……脳みそ吹っ飛ばしてあげる。笹岡健吾……もう死ね！」

『ズドォンッ！！……パーーーンッ！！！！』

胸から上、首や顔面、脳みそが木っ端微塵に吹き飛ぶ。脳みそや心臓、胃のミンチが辺りに降り注いだ。

『ビチャビチャビチャッ！！』

「ぎゃああああああああっ！？」

顔面や全身に脳みそと内臓のミンチを受けた乃亜は、ワンテンポ遅れて状況を理解し、数秒後に絶叫をあげる。

「たまやー♡　お見事よ美月」

「結構重たいライフルなのに凄いよ美月」

美琴と美央は手を叩きながら、上半身がバラバラになるシーンを見て賞賛している。

褒められた美月は、乃亜の肛門へも銃口を突っ込む。

『ズボッ！』

「いやあああっ！！　やめてええええっ！！　お願い殺さないでええええっ！！」

「ダメ！　佐伯乃亜、お前の脳みそも花火のように辺り一面にブッ飛ばしてあげる」

「ひ、ひいいいいいっ！！」

『プシャアアアーッ！！』

恐怖のあまりに小便を噴き出させる乃亜。

「やめてください！　何でもしますから！　ホント命だけは助けて！　お願いですうっ！！」

ボコボコに腫れた顔を更にくしゃくしゃにして泣き喚くその姿に、変な感情が芽生えるのを感じる美月だった。

「ゾクゾクしちゃう！　なんかねぇ、お前のことじっくり虐めてやりたくなってきちゃったぁ」

肛門へ深々と突き刺さっている銃口を引き抜き、今度は膣口へ突っ込む。

『ポコンッ！……ズチュッ！！』

「はぁうっ！！」

「私にこんなことされて嬉しい？」

「はぁ、はぁ、はぁ、お嬢ちゃんみたいな可愛い子に……責められて乃亜は興奮してますうっ！　な、何でもいうこと聞きますからどうか私を飼って下さいっ！」

「？」

飼うとゆう言葉の響きに一瞬何かが閃いた気がする美月。
しばらくコンクリート製の天井を見上げて親指と人差し指を顎に当てて沈黙する。

美琴と美央は美月の雰囲気に違和感を感じながら歩み寄ってきた。

「うわぁ～。すっごい脳みそだらけだね床は……もう女の方も殺しちゃってもいいよ。何やってるの？」

美央は、性器へ差し込まれたライフルの銃身を見つめながら妹へ問いかける。

「あのさ美央ねぇちゃん……」

「どした？　ソイツはマンコから撃ち込むつもり？」

「そうじゃなくて……あの、こ、コイツ家で飼ってもいい？」

「…………え？……はぁ？」

ほぼ同時に聞き返してしまう美琴と美央であった……。

美琴は原型を留めている健吾のペニスを根元から切断していたが、一瞬手を止めて美月を見つめる。

とりあえず完全に切断し、更に尿道口から刃先を突き入れ、裏筋と尿道を切断面へ向けてパックリ切開してゆく。

「母さん、オチンチン解剖してる場合なの？」

「ちょっとだけ待ってよ！……縦割りに切開したペニスの中に、コレをね……よっ！　よいしょ！」

『ズズズッ！グチュチュ！』

陰嚢を中央から切開し、飛び出してきた管付きの生睾丸を掴み、そのまま引きちぎると、ペニスの中へ詰め込んでゆく。

「ほら、ペニスの刺身の生睾丸添え♡」

「おえっ！……誰が食べるのよそんなもん」

美月が連れて帰ろうとしているダルマ女の方を指差しながらそっと歩み寄る。

「乃亜さん？　そんな大切な所に銃口突っ込まれちゃって……」

「あん、あん、はぁ、はぁ」

「とりあえずコレでもお食べ」

美月に陰部を責められながら喘いでいる口へ無理矢理捩じ込む美琴。

「むごおっ！？　うごごごっ！？」

「ようく噛んで食べないと喉に詰まっちゃうぞぉ？おほほほ♪」

何度も何度も必死で噛んで……十分もかけてようやく全て食べ終わる乃亜。

「ごっくん！」

「お母さん、そんなもの乃亜に食べさせたらお腹壊しちゃうよ？」

「死にはしないわよ。そんなことよ美月……本気なの？」

拷問処刑人たちの性癖（前編）（後書き）

美月のとんでもない提案？　お願い？　に、困惑する美琴と美央。

拷問処刑から生還させる拷問処刑人の計らいは百年前にも前例はあったが……。

佐伯乃亜の生死の運命を握るのは、もはや神崎美月のみである。

拷問処刑人たちの性癖（後編）（前書き）

あまりにも唐突すぎる美月の願い。
呆気に取られながらも、美琴と美央の決断が迫られる。

「私ね、乃亜みたいな顔、髪型共にタイプなの。だからペットにしてとことん虐めてやりたいんだ」

目が点になりながら、しばらく美月を見つめる美琴と美央。

「あ、あのね美月……もう男の方は処刑しちゃったのよ？　この女だけ生かして連れ帰る訳には……ねぇ母さん」

「……そうね。特殊任務省の山西長官が認めてくれる訳がないわ」

涙目で美月を見つめる佐伯乃亜。
そっと唇を震わせながら口が開く。

「お願いです。美月様……どうか命だけは助けてください……お願いします」

「ほら。こんな姿になってまで命乞いしてるし……あ、そうだ！山西長官には内緒にして神崎邸で隠して飼おうよ！　そしたらバレないし！　ね？」

困惑する美琴と美央だったが、言い出したら聞かないのは理沙と同じ美月だった。

「乃亜」

「は、はい！」

「今、ここで殺された方があなたのためだと思うけど……四肢切断されたそんな姿で一生苛まれて生きるなんて嫌だよね？」

美央は寂しそうな表情で、佐伯乃亜に問いかける。

「死ぬのは嫌っ！　私、美月様や皆様の言うこと、何でも聞きます！　だからお願いします！　殺さないで！」

美央は母親の美琴の方をそっと振り向く。

「…………」

「母さん？」

「海に飛び込んでサメに食べられた……とでも報告しておく？　山西長官には……」

「母さん！？　本当にそれでいいの？」

「この女性、顔も綺麗だし……ストレス発散に責めまくるのもアリかも……美月も本気で気に入ってるみたいだし」

「……はぁ。分かったわよ。美月！　毎日エサやって風呂もいれてやるのよ？　できる？」

「うん！　できる！　ありがとうお母さんに美央ねぇちゃん！」

美月は大喜びで乃亜の頭を撫でる。

「これから一生私が虐めてやるから……覚悟しなさいよ？」

「は、はい！　ありがとうございます美月様っ！！　えーんえーん！」

殺されずに済んだことを悟った乃亜は、後先考えずに安堵感から号泣してしまう。

美央は四肢切断された乃亜を担ぎ上げ、ドローンへと運ぶ。

その後を、美琴と美月がゆっくり歩きながらついてゆく。

「処置しなくても大丈夫かな？」

「血止めの注射も一時的なものだし、このままじゃ死んじゃうわよ。

美央の旧友の女医さんがいる病院へ連れて行って処置してくれるみ

たいだから安心して」

「そうなんだ！　ありがとう」

「お礼は美央に言いなさいな」

「うん！　美央ねぇちゃんありがとー！！」

美央は左手を挙げて返事すると、そのまま乃亜をドローン内へ寝かせる。

健吾の遺体だけを残酷処刑島へ残し、一行は赤霧島中央病院へ向かった。

「梓ちゃん久しぶり！　手術もできる女医さんってカッコいいなぁほんと！」

「美央ちゃん！？　中学卒業の時以来だね！　まだ拷問処刑人やってるの？」

「うん。小学生の頃から今までずっとね……もう七年目になるかな」

「ふぅん。私は特殊任務省の拷問処刑には大賛成だよ。何も落ち度のない善良な人が無惨に殺されて、懲役くらいで済むなんておかしい話だからね！」

今川梓。

神崎美央が中学の頃、唐田由衣夏と共に仲良し三人組だった一人である。

人手不足の為、中卒で父の病院に就職して以来、外科医の修行を積み、名医となる。美央たちとはお互い忙しくずっと会っていなかったが、拷問処刑人の任務に就いていることまで話せる信用できる親友であった。

密かに、弱い者を虐めて興奮するようなSな気質も持ち合わせていた。

「四肢切断しちゃったんだけど……処置できそう？」

「血止めが完全にできてるし……人工皮膚を移植して一週間ほど入院したら迎えに来て。ついでに最新医療用に進化したクッションシリコンを切断面に埋め込んで、四つん這いで歩きやすいようにしといてあげる」

「ありがとう。せっかく両肘や両膝も付け根まで残ってるから……生きていく以上は這ってでも歩けた方が本人も嬉しいと思う。梓は元気そうでなによりだ」

「美央も顔色良いし♪　美月ちゃんも大きくなって！　三年間でこんなにも成長するもんなんだね～」

「こんにちは梓さん！　理沙ねぇちゃんも元気してます」

「そう。それなら良かった」

半時間ほど何気ない雑談をした後、佐伯乃亜を預けて神崎邸への帰路に着く三人。

梓の診察室でダルマ女の乃亜が二人きりになる。
興味深そうにその姿を見つめながら囁きかける梓。

「さてと……私の腕にかかれば元気に歩けるようになるからねぇ？」

「はい。よろしくお願いします」

美琴によって一応シャツとパンツを着用してもらっていたが、梓はパンツをゆっくり脱がせた。

「やだ。見ないで梓先生」

「昔から香港に売られた女性がよくダルマ女にされてたって都市伝説があったんだよね……私、一度生で見てみたかったのよ」

「そ、そうなん……ですか……」

「そうなの」

『ススッ……』

「んあっ？」

そっと右手を乃亜の秘部へ向かって、短くされている太ももから這わせてゆく。

そのまま中指を根元まで一気に膣口から突き入れた。

『ズチュッ！　ズボボボッ！！』

「やはあっ！？　んんんっ！！　やめて先生っ……」

『グチュチュチュッ！！』

「濡れてるわよ？　私にアソコ見られて、指まで突っ込まれて感じちゃってるのよねぇ？　うふふ……」

そのままシャツも脱がされて、乳首を強く摘んだり揉んだりされる乃亜。

「２５歳の割に綺麗なピンク色の乳首してるわね♡」

ビクビクと腰を振りながら、梓の責めに思いっきり感じてしまう。

「ほら、乳首だけじゃなく乳房も揉みしだいてあげるわ。もっとオマンコ濡らしなさい」

『グチュチュチュチュチュッ！』

「あんんっ！！　せ、先生っ！！　私イク！！　イッちゃうううぅっ！！」

「イキなさい。ほら、クリトリスも擦ってあげるわ」

「はひいいいいっ！！」

『プシャアアアッ！！』

大量の潮を診察台の上から梓先生の白衣にへりかける乃亜。

ビクビクしながらアヘ顔で、膣口へ深く突っ込まれた梓の中指の隙間からマン汁をドロドロ垂れ流し続ける。

「私も快感♡　こんな姿の人間虐げるのってホント濡れてきちゃう♡　美月ちゃんの気持ちも分かるわね」

「ああうう……あへあへ……もっと乃亜のオマンコ掻き回して下さいい……んんん」

「この変態ダルマ女！　あの子たちが迎えにくるまでの一週間、明日の手術の後も調教しまくってあげるからね？」

「はい……ありがとうございます梓先生……はぁ、はぁ」

今川梓の秘密の悪戯が終わる頃にはすでに夜も明けかけて、辺りは少し白んでいた。

泊まりに来ていた由衣夏と次女の理沙へ、この度の経緯を詳しく話す美月。

「嘘でしょ！？　そんなのアリなの？」

「お母さんも美央ねぇちゃんも分かってくれたよ」

「特殊任務省への報告もしないで……バレたらかなり怒られそうだけど……」

「それは心配ないない！　まずバレないから」

気楽そうに話す美月の屈託のない笑顔に、理沙も少しずつ事態を受け止めかけていた。

「そうなんだ……その佐伯乃亜って女性を首輪付けて飼うんだ」

「そう。毎日調教して虐めまくってやるんだ♪」

「はぁ……毎日のお世話が大変そうだけど……あたしや由衣夏に迷惑かけないでよね？」

「分かってる。お母さんも手伝ってくれるみたいだし」

――一週間後。

「ほら、気持ちいい？」

『グチュ！　グチュチュチュチュッ！！』

手脚を切断されたダルマ女の佐伯乃亜。
神崎邸に引き取られ、次女である美月の奴隷、ペットとなって一生を過ごす運命となった。

「あんあんあんっ！　美月様、乃亜のオマンコもっと掻き回してくださいっ！　あんんっ！」

「すっごい愛液……小学生の私にこんなに犯されて感じちゃってるの？２５歳のオバサンのお前が？　んん？」

「はい。私は一生美月様の奴隷です。毎日犯して下さい……」

「そう言えばお前……梓先生からも悪戯されて、子宮の奥の奥まで４０センチもあるバイブ突っ込まれて失神したらしいわね？ホントＭなんだから……」

「き、聞いてたんですか！？　内緒だって言ってたのですが梓先生……」

「まぁいいよ。たまにお前を病院に連れて行って、梓先生にもオモ

チャにさせてあげるつもりだから」

「は、はい！　黙っていて本当にごめんなさい美月様」

「今度私に隠し事なんてしたらマンコから口まで串刺しにして丸焼きにしてやるからね？」

「ひ！　ひいい……それだけはご勘弁を……」

「ほら、股を開きなさい。メスブタ」

「は、はい！」

『ズボボッ！！』

「はううっ！！　やんんんっ！！」

睨みつけながら乃亜の膣口と肛門へ左右の人差し指を突っ込む美月。

激しく膣道と直腸内を掻き回しながら……その指レイプは白目を剥いて昇天するまで続けられた……。

――――神崎邸。更に一週間が経過。

この週末も唐田由衣夏は、理沙の部屋に泊まりに来ていた。

「処刑を免れた美月ちゃんのペット……犬みたいに四つん這いで這い回ってるって言ってたけど……」

「そうなの。美月が毎日家の中散歩してる。気味悪いったらありゃしない。でもきちんと世話は続けてて、毎日お風呂も入れてあげてるみたい」

「へぇ。面倒見がいいのね美月ちゃん」

そう理沙へ答えた瞬間、理沙の部屋のドアがいきなり開いた。

「早く来い乃亜！」

「はい！　美月様」

四つん這いのまま四肢切断された手脚を器用に使い、犬のようにヒョコヒョコと美月の後をついてくる女……佐伯乃亜。
美央の旧友の病院で受けた名医の手術により、切断面に特殊なシリコンが埋め込まれ、痛みもなくそこそこ早く歩けるように施されていた。

「唐田由衣夏ちゃんに挨拶しなさい」

「はい。私はこの度、美月様のお慈悲で処刑を免れた佐伯乃亜と申します。２５歳です。以後お見知りおきを」

「え？　は、はぁ。よろしくお願いします」

素っ裸で四つん這いで、首輪を嵌められて鎖を繋がれて散歩させられているその姿は、まさに犬、そのものであった。

由衣夏は、その生々しい姿をじっくり目に焼き付ける。

「え？　尻尾生えてる？」

「あ、これね！　２０センチくらいアナルにバイブ突っ込んでるの。その柄の部分に犬の尻尾みたいに飾りの毛を付けてる」

「そ、そうなんだ……２０センチも突き刺さってるんだアナルに……痛そう」

「痛くなんかないよね？　乃亜」

「はい美月様。私のアナルはすでに美月様によって開発されてます。ガバガバになって私は幸せです」

「ほらね。従順でしょ？　アハハ♪」

お手やお座り、チンチンなど、様々な芸を美月によって調教された乃亜は、完璧にやりこなして由衣夏と理沙を驚かせた。

「すっごいね。美月のためならホント何でもやりそう」

「てへへ♡　もうバター犬にも仕立ててるの」

「はい美月様。今宵も美月様のマンカスを隅々まで舐め取らせて飲み込ませて頂きます」

一瞬固まる由衣夏と理沙。

「はぁ！？　マ、マンカスだって！？　私にそんなもの付いてる訳ないでしょ！？」

『バキバキバキバキッ！！』

「ぐぎいいっ！？　ごめんなさいごめんなさいごめんなさいいいっ！！」

美月のゲンコツでいきなりタコ殴りにされた乃亜は、鼻血を撒き散らし、唇からも鮮血を噴き出させながら土下座をして美月に詫びを入れる。

「はぁ、はぁ、はぁ、今度私にマンカス付いてるなんて言ったらぶち殺すからね？　わかった？」

「はい美月様！　申し訳ございませんでした！　しくしく……ぐすん」

大粒の涙を流しながら号泣する乃亜。
何か気まずそうに一部始終を見ていた由衣夏と理沙は、慌てて別の会話を切り出した。

「あ、あの美月ちゃん……男の方は殺しちゃったんだよね？」

「うん。Ｍ８８ライフルで肛門からぶっ放してやった」

「すっご！　頭部なんて跡形も残らなかったでしょ？」

「うん。頭いく前に肋骨くらいに弾が当たっただろうから、そこで弾が潰れて内臓への破壊力が増して……心臓や肺とかの臓物も全て吹っ飛ばしちゃったの」

そんな会話をしているうちに、隣で乃亜が力んでいる。

『ムリュリュリュ……ポコンッ！！』

勢いよく尻尾飾りのアナルバイブが抜け落ちたと思った刹那……。

『ブリブリブリブリッ！』

「きゃっ！？　またウンチ漏らしたな！？　お仕置きしてやる！」

激しくお尻叩きをする美月。

「あ、あのさ……とりあえず早く掃除して！　あたしの部屋で今度お漏らししたらホントあんたたちまとめてぶち殺すわよ？　いいわね？」

「ご、ごめん理沙ねぇちゃん！　来い！　私の部屋に帰るぞ乃亜！」

「はい美月様……ま、まだ出そうです」

「ま、まて！　もう少し我慢しろ！　分かった！？」

美月は慌てふためいて再度アナルバイブを乃亜の肛門へ捩じ込む。慌てて大便をナイロンに拾い入れると、そのまま鎖を引っ張りながら、乃亜を半ば引き摺りながら連れて行ってしまった。

「何だったのかな？　今の……」

「さぁ……もうそっとしとこ」

理沙に怒られて美月の部屋へ戻ってくる二人。

「理沙ねぇちゃんに怒られちゃったじゃん！　どうしてあのタイミングでウンチしちゃうかなぁ？」

「ごめんなさい美月様……手脚無くしてから何か身体が言うこと効かないってゆうか……急に便意が来ちゃったりするんです……本当に申し訳ございません」

「そっか。なら仕方ないわね。ほら！　舌で私を気持ちよくさせて」

美月はパンツを脱いで股を開き、仰向けに寝転がる。

「はい。美月様……小さくて可愛いオマンコですね？　ペロペロ……ペチャペチャ！」

「あんっ！　んんんっ！　お世辞はいいから……も、もっと膣に舌を挿れろ」

「はい！……レロレロ……ズチュッ！」

「あはんっ！　う、うまくなってきたわね乃亜……気持ちいいわ……んんん」

しばらく乃亜にクンニさせた後、仰向けに寝かせて切断面の膝を両手で掴む。

「電気アンマでイカせてやるから」

「あんっ！やめてください美月様♡」

『グリッ！　ググググ！』

美月の電気アンマの気持ちよさを身体で覚えさせられた乃亜は、美月の足の裏が秘部に押し付けられた瞬間から大量の愛液を分泌させた。

「電気アンマする前から私の靴下濡れちゃったじゃん？」

「あ、ああ……早く……蹴りまくってくださいいい」

「言われなくても分かってるわ……よ！」

『ガガガガガガガガガッ！！』

「はひいいいいいいいいっ！！」

一分ほどの電気アンマで、ついにイカされてしまう乃亜。
愛液でビショビショになってしまった右側の靴下を脱ぎ捨て、今度は素足をワレメに押し当てる。

『グチュ！』

「やはあっ！？」

右足の親指を膣口へ突っ込む美月。
そのまま何度も出し入れを繰り返した。

「あんあんあんあんっ！！またイッちゃいます美月様ああああっ！！ひいいいいっ！！」

『プシャアアアアッ！！』

潮を噴いて美月の太ももや股間にへりかける。

「汚いなぁもう……床を舐めて自分の出した液とか全て舐めとるのよ！」

「は、はい！……ペチャペチャ……ペロペロ」

神崎美月の趣味を兼ねての、佐伯乃亜への調教の日々が幕を開けた……。

拷問処刑人たちの性癖（後編）（後書き）

「母さん」

「ん？　どしたの美央」

「あの乃亜って人のことだけど」

「あの子がどうかしたの？　美月が風呂にもいれて、ちゃんと面倒見てるみたいよ」

夜中にトイレに立った美央が、廊下で美琴と鉢合わせての会話であった。

「あんな姿で家中這いまわられたら気持ち悪いんだけど」

「それはそうかもしれないけど……犬とでも思ってそっとしといてあげてよ」

「はぁ……理沙は理沙でしょっちゅう由衣夏呼んで泊らせてるし……なんか寂しぃなぁ」

思わず沈黙してしまう母親の美琴だった。

「由衣夏ちゃんが理沙にいっちゃって余計寂しいんでしょ？」

「…………」

「図星かな？ごめんなさいね。美央も奴隷作ったら？同級生の男子とかの中からでも」

「え？……うーん……それいいかも」

自分の寂しい心を癒すために同級生男子を奴隷化させることを決意してしまう美央であった……。

これが正解なのかどうかは、仄めかした美琴も当の本人の美央さえも理解していなかった。

短気は損気（前編）（前書き）

夕焼けの中、映画を観てから楽しく車で帰路につく二人。
そのカップルに、狂気の運命が襲い掛かろうとしていた。

短気は損気（前編）

「ちょっと健太！　煽らないで！　運転荒いわよ！？」

「分かってるよ！　こいつが僕の前にノーウインカーで切り込んできやがったからちょっとやり返してるだけだよ」

週末の映画館デートを終えて、自家用スポーツカータイプの電気自動車で帰宅途中である古屋健太（ふるやけんた）と坂口茜（さかぐちあかね）。

二人は１９歳であり、同じ高校を卒業して、同じ電気自動車販売店営業部へと入社していた。

普段は温厚で優しい性格の健太であるが、ハンドルを握ると人が変わる性格であった。

「健太が先に無謀な運転することはないのは分かってる……でもやられたからといってやり返したら結局相手と同じレベルだよ？」

「わ、分かってるって！……気をつけるよ」

南部地方にある小さな山である御坂峠を越えると、二人の住む町までは５分ほどで帰り着く。

「さてと……御坂峠まで帰ってきたな。これを越えたら今日はさよ

うならか……それも寂しいな」

「私も……でも今日は19時に従姉妹の美幸がくるから……お父さんとお母さんと一緒にディナーする約束は守らないと……あ、そうだ！　健太も来る？」

「え？　じょ、冗談！　美幸ちゃんには何度か会ってるけど、ご両親とはまだ一度も会ったこともないし挨拶もしていないし……緊張するし恥ずかしいからいいよ。もう少し月日が経ってから覚悟決めて挨拶行くから」

「うふふ！　一丁前に緊張なんかしちゃうんだね」

「と、当然だよそんなの！　彼女の親に挨拶する際に緊張感持たないやつなんて、この世に居ないと思うぜ？」

気持ちよくワインディングロードを颯爽と駆け抜ける真っ赤の電動スポーツカー。

楽しく会話をしながらのドライブ中だったが、背後に迫る車がミラーに映る。

『パァアアアアアアンッ！！』

けたたましく聴こえてくるクラクション。

後方に見えた黒いセダンは、瞬く間に真後ろへへばり付き、右へ左へ車体を振りながら派手に煽ってきていた。

更に再び、長時間クラクションを鳴らし続けてきている。

「ちっ！　くそう！」

必死でアクセルをふかして差を広げようとする健太だったが、相手の運転捌きは異常なハイレベルで、いくら本気で走っても真後ろから離れない。

「ムカつくヤツめ！　降りて行って怒鳴り込んでやる！」

いきなりブレーキを踏んで後続車を停める健太。
後方で白煙を立てながら、黒いセダンも衝突寸前の所で停止した。

「ちょっと待ってて！」

「や、やめてよもう！　キチガイみたいな人も世の中にはたくさんいるのよ！？　もし刺されたりしたらどうすんのよ！？」

「向こうが悪いんだから一言言ってやらないと気が済まない！　それに僕はこう見えても空手二段だ。もし掛かって来たら返り討ちにしてやるさ。すぐに終わるから待ってて！」

「ちょっと健太！　やめなさいって！！」

恋人である坂口茜の制止を振り切り、ついにドアを開けて車から

降りてしまう古屋健太。
ツカツカと歩みより、黒いセダンのフロントガラス越しから相手の顔を覗き込む。
右手を握りしめて拳の第二関節で運転席の窓を三回ほど叩く。
「おい！　窓を開けろ！　あんなに煽って来たら危ないじゃないか！？」
窓が開き、角刈りでサングラスをかけたガタイのいい男の顔がハッキリ見えた。
隣には紫色のワンピースを着た、赤毛セミロングの女がいた。
健太の目には、その男女二人は同じく３０歳前後に見える。
ガタイのいい男がそっと口を開いた。
「話があるならその先のゼブラゾーンで聞いてやる。ここはまだまだ車も通るだろうから迷惑だ」
意外なほど落ち着いて返答する相手に、少し怒りの感情を削がれながらも、とりあえず他者への迷惑を考えて自分の車へ乗り込む健太。
「無事に戻って来て良かった。危ない相手だったらどうしようとか思って心配してたのよ？」

「その先で話してくる。まだ相手は僕に謝っちゃいないから」

「え？　も、もういいじゃん！　帰ろうよ早く！　喧嘩なんかホントやめてって！」

「相手次第さ。素直に謝ってくれたら僕は何もしないよ」

「やめてって！　ホントお願い！　もう帰ろ！　相手やっつけちゃったら刑務所行きだし、もし逆にやられちゃったら入院か最悪死んじゃうからんだよ！？　どっちに転んでもバカ相手に怒ってもロクなことないんだから！」

この時くらいから、茜の心の中は不安が立ち込めてきていた。嫌な予感とゆうものを、今までの人生の中で一番強く感じているのである。

赤と黒の二台の車は、夕焼けの茜色に染まる峠の中、並んで停車した。

再び降りていく健太だったが、今度は相手も降りてくる。

自分より遥かに身長もある相手に少し怯むが、引くに引けない健太は強気に出る。

「おい！」

「どうした？　何か俺に文句でもあるのか？」

「煽って来たことを謝れって言ってるんだ」

「お前がポンコツ車で俺たちの前をノロノロ走ってるからだろうが？　ぶっ殺されたいのかお前？」

その一言で健太はキレてしまう。
更に距離を詰めて胸ぐらを掴んだその時……。
一瞬で意識が飛ぶほどの強烈な右フックが健太の左頬を襲う。

倒れ込んだままあまりの激痛に目の前に銀色の星がチカチカと瞬くのが見えた。
顎の骨が砕けて喋れなくなってしまっていることに気付いた時には更に角刈り男の追撃が待っていた。
マウントを取られ、硬い拳で激しく顔面を殴打され続け、ついに戦意喪失となってしまう健太。

車内から一部始終を見ていた茜は、慌てて車から飛び降りると、倒れて動けない健太の元へ駆けつける。

「健太!?　大丈夫っ!?　健太!!」

「おい」

「え？　あ、あの……お願いだからもうやめてあげて。健太はこれ以上は……」

気づけば助手席にいた赤毛の女も降りて来て、角刈り男の隣に立っていた。

しばらく二人の顔を交互に見上げる茜だったが、少しでも物分かりが良さそうに見えた赤毛の女の方へ、ゆっくり立ち上がって歩み寄る。

「あの……彼女さんですか？　もうこれ以上健太に酷くしないでください。お願いします」

隣で角刈りの男が健太を担ぎ上げ、黒いセダンへ運んでゆく。

「ちょ、ちょっと!?　あ、あの！　あの男性を止めてください！健太を連れて行かないで！」

必死で赤毛の女にお願いする茜だったが、顔面に重たい衝撃を感じた瞬間に、地面に倒れている自分に気付く。

「え？」

一瞬自分に何が起こったのか、理解できない。

『ポタポタ……ポタポタ』

数秒遅れてから鼻に激痛を感じた。
鼻からの鮮血が、自分の白いワンピースとゼブラゾーンを赤く染めてゆく。

「痛い……痛いいいいいっ！！」

思わず顔面を両手で押さえながら泣いてしまう茜。

「女にも容赦ないなお前は」

「ウチらに喧嘩売ってきたヤツらは全員後悔させてあげなきゃ……武志、コイツも運んで」

山中武志32歳と藤田不二子30歳。
二人とも両親が極道であり、今ではその二つの組は統合されて、山中組となっていた。
武志は組長の一人息子で、すでに組の跡を継ぎ、山中組組長となっていた。
不二子は組員たちから“アネゴ”と呼ばれている頼れる存在であった。
幼い頃からグレーシー柔術やキックボクシング、合気道など、様々な格闘技を習っていた山中武志は、武道全般に長けていたため、

体重差が５０Ｋｇ以上もあり、空手二段のみの古屋健太では話にならなかった。

黒いセダンは武志が運転し、赤い健太のスポーツカーは赤毛の女極道、不二子が運転してその場から去ってゆく。

二台の車は峠を越えて、健太と茜の住む町を素通りしていった。

隣町にある山中組を目指して……。

「んん……」

「やっとお目覚めかしら？」

意識を取り戻した茜。

いつも通りの健太の車の助手席に座っていることに気付く。

ただいくつか違うのは、手脚を何かで縛られていることと、運転しているのが健太ではなく赤毛の女に変わっていた……とゆうことであった。

あの後更に女から数十発殴られて、健太と同様、意識を失っていたことを思い出す茜。

恐怖の寒気が全身を駆け抜けるが、車は見たこともない豪邸へと入庫していった。

「こ、ここは？　あ、あの……健太は？」

「安心して。もうすぐ会わせてあげるから」

周りを取り囲む黒いスーツの男たち。
見るからにガラの悪そうな人相、いでたちであった。

「ヤ、ヤクザ……」

「そう。アンタの彼は喧嘩売る相手を間違えちゃったの。でもまさか極道の組長なんかが自分で車運転してるとか思わないわよねぇ？
おほほは！」

「そ、そんな……お願いです！　私たちを許してください！」

そのまま黒いスーツの男たちによって地下室へ連行されてゆく茜。
そこには素っ裸にされて天井から吊るされた鎖に両手を繋がれて、万歳する格好で拘束されている健太がいた。

「健太！！」

「う、ううう……あ、茜」

お互い顔面は腫れ上がっているが、どうにかまだ本人を確認できる状態ではあった。

黒いスーツの男たちは十人ほどで地下室の周りを取り囲んでいたが、その内の一人が金属バットを赤毛の女、不二子へ手渡す。

「私はね……裸にひん剥いた男をなぶり殺すのが趣味なの。どうゆうことか分かるわよねお嬢さん？」

「ひっ!?　そ、そんな!!　やめて!!　絶対に警察に捕まっちゃうわよ!?」

「うふふ。何も知らないのねアンタ……車も回収してるし町の至る所にある防犯カメラも、山中組のお願いで丸一日分くらい町の関係者が全消去してくれるってわけ。従わない人や店は……ウチらが完全に潰すからね。あ、始末しちゃうってことね？　うふふ」

「そ、そんな……そこまでして人を拉致したり殺したりしたいのですか!?　胸が痛くならないのですか!?」

不二子は、金属バットを握りしめたまま静かに健太の方へ歩み寄りながらそっと振り向いて囁いた。

「愛してる男が、目の前で壊されてゆく姿を目に焼き付けてあの世への土産にしなさい」

「!?」

女のその一言で、健太だけではなく自分も殺されるとゆう確信を得た茜は、忘れかけていた恐怖が再び全身を襲う。
そのまま死の恐怖と、恋人がこれから殴り殺されるとゆう恐怖……人生で最大の苦痛に満ちた時間がゆっくり流れようとしていた。
気づけば黒いスーツの男たちに自分まで衣服を脱がされてゆく。

「やだ！　やめて！！　お願い許してくださいいいいっ！！」

数人ががりで押さえつけながら脱がされれば最早抵抗すら及ばなかった。
白いパンツ一枚のみを残して全て剥ぎ取られてしまう。

「アネゴ！　これでよろしいでしょうか？」

「うん！　パンツだけはまだ残しておいてやって。最後の希望を剥ぎ取るのもウチの楽しみやからねぇ……おほほ♪」

目の前で不二子は健太の身体を、背中、お尻、腹を中心に何度も何度も金属バットで殴りつけていった。
打たれる度に悲鳴を上げる健太だったが、腕や足の骨を折られる一撃の時は、声が掠れるほどの絶叫である。

自分も天井から吊るされた鎖に縛られてゆく茜だったが、目を閉

じて、健太の壊されてゆく姿を見ることからだけは現実逃避をしていた。

『バキッ！！　ドカッ！！　グシャッ！！』

「ぐわっ！！　きひっ！！　ギャッ！！」

どんどん悲鳴も弱々しくなってゆく健太。
全身を紫色に染めて、あらゆる箇所から皮が裂けて流血していた。
不二子のバットによる殴打の凄まじさがよく理解できる傷跡であった。

「解いて」

「はい！」

数人ががりで健太を鎖から解いて床に寝かせる黒いスーツの男たち。
どうにか生きていることがやっととゆうほど弱々しく息をしている健太を足で何度も蹴飛ばしたり、踏んづけたりして反応を愉しむ不二子。

「ほらほら、どうしたの？　まだ死ぬのは早いよ？」

ドスを手渡された不二子は、健太の脇に座り込み、アザだらけのペニスを左手で掴む。
そのまま右手に持ったドスの刃を雁首に滑らせた。

「もう彼女とセックスする機会もないし、男根なんてもう要らないわよねぇ？　うふふ」

『ズズッ！……ズズッ！……スパァッ！！』

「ふんぎいいいいいいっ！？　ギャァアアアアアアッ！！」

最期の力を振り絞るように白目を剥いて涎を垂らしながら絶叫する健太。
切断された雁首から大量の血液を噴き出させながら、コロコロと床を転げまくる。

「こらこら、転がって逃げてもムダよぉ？　オチンチン責めのの次は睾丸って決まってるの♡」

そう言いながら転がる健太を足の裏で静止させ、再びしゃがみ込んで陰嚢の真ん中にドスの切先を深く突き入れ、そのまま肛門まで切り開いてゆく。

『ズッ！！……ズズズズズッ！！』

「ぴぎいいいいいっ！！！！」

「あらまぁ！　生の睾丸が二つとも同時に飛び出してきちゃったわよ？　ん？　肛門まで切り裂いちゃったからウンチまで出てきちゃったねぇ？　くっさ」

そのまま丸く肛門括約筋をくり抜き、睾丸を二つとも精管から引きちぎった後、丸見えに開いている直腸へ突っ込む。

「ほうら、パックリ開いちゃったお尻の穴に……食べさせてあげる。二つのキ・ン・タ・マ♡」

『ズチュッ！……ズブッ！』

睾丸は二つとも、直腸の奥の奥まで不二子の指先で押し込んでゆく。

S状結腸まで突っ込まれた二つの生の睾丸は、もう二度と出てくることはなかった。

激痛のショックで白目を剥いて激しく痙攣を始める健太。

目を固く閉じて泣き叫ぶ茜。

『ザクザクザクザクッ！！』

嫌な音に恐る恐る瞼を少し開くと、ドスを何度も左右に動かし、何かを切断しているような音だと気付く。

「きゃ！？……きゃあああああっ！！」

『ブシュシュシュシュウウウッ！！』

「ごげえっ！！……ごぼごぼごぼおっ！！」

首が半分ほど切断され、血の泡を噴きながら悶え苦しむ健太の姿があった。

「ほらほらほらあっ！もうすぐ喉の骨までイッちゃうわよぉ？おほほほほ！」

「ぐがあああ……ゴポポ……ゴポゴポ……」

鼻と口から噴き出る血の泡が床を真っ赤に染めてゆく。

ついに首の骨にまで到達するドスの刃。

不二子は引き切るのをやめて、高く振りかぶった。

『ドカッ！！ドカッ！！……バキバキ……バキボキッ』

「硬い骨は叩き折らなきゃね♪」

やがて首は胴体から完全に分離され、健太の激しい痙攣も少しずつ治ってゆき、静かに動きを停止した。

「健太くん、死んじゃったみたい」

「ひっ！！　ひいいいいっ！！」

目を見開いてどん底の恐怖を感じた茜。
生首の髪の毛を鷲掴みにして茜の足元に転がす不二子。

『ゴロゴロゴロ……』

「ギャァアアアアアアッ！？」

『プシャア〜〜〜〜！！』

恐怖のあまり、思わず小便を漏らしてしまう茜。
白いパンツがみるみるうちに、水気を得た薄暗い黄色へ変わっていった。

「あらぁ？　お漏らし？　そのだらしのない股間の穴にもお仕置き

が必要だねぇ？　おほほほほ♡」

短気は損気（前編）（後書き）

いつもの運転中での短気を起こして、最悪の事態となってしまった健太。

茜の最愛の彼への拷問処刑を終えた藤田不二子。

その魔の手は坂口茜にまで迫ろうとしていた。

短気は損気（中編）（前書き）

冷酷女、藤田不二子の狂気の矛先は……ついに茜へと向けられた。

短気は損気（中編）

そっと茜の前にしゃがみ込む不二子。

「パンツ一枚だけは残して殺してあげてもいいとか思ってたんだけど……床を小便まみれにされてはそういう訳にもいかない……か」

「ひ、ひいっ！！　ご、ごめんなさいごめんなさいごめんなさいいいっ！！　ゆ、許してくださいいいいいっ！！」

そっと茜のパンツへ両手の中指を掛ける不二子。

「とりあえずウチに見せてくれるかなぁ？　お嬢さんの大切な部分♪」

「や、やめてください……恥ずかしいです」

『ズルズル……ズルリッ！』

「ひゃあっ！？　見ないでぇえっ！！」

そのまま一気に足首まで引きずり下ろし、完全に素っ裸にさせられる。

「何歳なの？」

「じゅ、１９です」

「若いわねぇ♡」

背後に回り込み、後ろから両側の乳房を両手でゆっくり揉みしだき始める不二子。

『ギュウウウウ……グニグニ……プニュプニュ』

「やっ！？　やめて……」

「おほほほ！　なんて張りのある若々しいオッパイ♡　１９歳はやっぱり凄いわねぇ〜♪」

「や、やあああっ！……んん」

『ズチュッ！』

「ひゃああっ！？　そ、そこだけはやめてくださいお願いっ！！」

しばらく胸を揉んだり乳首を指で摘んで捏ね回したりと、茜の反応を見て愉しむ不二子だったが、ここでターゲットを性器へ変更する。

長時間の胸責めにより、意思とは反して少し濡らしてしまっている茜の膣は、不二子の指をいとも簡単に受け入れた。

「こんなに濡らしちゃって……ウチに感じちゃってたのねぇ？　うふふ♡　中指を全部挿れてあげる♡」

『グチュチュチュ！……ズチュッ！！』

「ひいいっ！！　ぬ、抜いてくださいお願いしますうう……んんんっ」

「少しは湿ったか？」

旦那である山中武志がズボンとパンツを脱ぎながら問いかける。

「うん！　ウチの指テクで更に大洪水にしてあげるからちょっと待ってよ」

「ああ。もうギンギンになっちまってるから手早くしてくれ」

「慌てない慌てない。ほら、ウチの旦那がブットイの挿れてくれるって……もっと濡らしとかないと痛いよぉ？　ほらほらほらほらぁ～♪」

『グチュチュチュチュチュチュチュッ！！』

「あはあああああんっ！！　やだあああああああっ！！　やめてぇえええっ！！」

膣口から太ももを伝い、床にまで到達する愛液。
それを確認してから中指を引き抜き、茜の口へ突っ込む。

「ほら、ウチの指に着いたマン汁、舐めて綺麗になしなさい」

「うごっ！？……んんん……レロレロ……ペロペロ」

藤田不二子は茜の責めにも満足して、武志に続きを委ねる。
天井から吊るされた拘束具に両手をバンザイする格好で縛られていたが、その拘束が解かれ、四つん這いにさせられる。

『スパァンッ！！』

「んぎいっ！？」

「もっとケツを突き上げるんだ」

「は、はいっ！」

目一杯お尻を高く突き上げたところで、山中武志の自慢のビッグマグナムの先端がそっと膣口へ押し付けられる。

「20センチはあるけど大丈夫か？　幅も5センチはあるぜ？」

「ひっ！？　そ、そんな大きいの無理です！　壊れちゃうっ！！」

『グリッ！……ズブブ！』

「痛いっ！？　やめてえええっ！！」

『メリメリメリメリ！』

「ほれほれほれ……裂けるくらい開いて受け入れちゃってるぜぇ～？　ハハハ！　まだ半分しか入ってないのに血がたくさん出てきたな？」

『ズズズ……メリメリ！』

「ぎゃあああああああっ！！　死ぬうううううっ！！　抜いてえええええっ！！」

必死で腰を前に移動させて逃れようとするが、不二子によって前方へ這えないよう頭部を押さえつけられる。

「いい顔してるわねぇ？　そんなに痛いのかしら？」

『バコォッ！！』

「ふぎいいいっ！！！！」

ついに巨根は１８歳の少女の性器へ根元までぶち込まれてしまう。激痛に絶叫しながらも、不二子に押さえつけられて身体の自由は効かない。

構うことなく、激しく腰を振り始める武志。

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

そのまま白目を剥いて意識を失うまでの数分間、小陰唇と膣口がかなり裂けて血まみれになりながらも犯され続けた。

『ドピュッ！　ドピュピュピュピュッ！！』

「ふう……締まりが良くて最高だったぜ」

「そりゃ１８だもんね。痛すぎて失神しちゃってるのに犯し続けるなんて鬼畜だねアンタも」

「ハハハハ！　そう妬くなよ。今夜はたっぷり可愛がってやるから」

「そうかい？　この子とのセックスにくたびれてもし寝入ったりしたらトンカチで叩き起こしてやるからね？」

不二子は周りを囲んでいる組員の一人へ目配せして、茜にバケツの水を振りかけさせる。

眉間に皺を寄せながらゆっくり目を開くと、ぼやけながらも鮑の

ようなものが目に映る。

「……んん、ん？　何これ？」

『プシャ～～！』

「ひゃあっ！？」

「お飲み！　口を開けて全部飲み干さないと斬首してやるわよ？」

「ひっ！？……ゴポポッ！　ごくごくっ！　ゴポポポッ！　ごくごくごくごくっ！」

口を開いてたくさん小便を受けては必死になって飲み込む茜。気持ち悪さと吐き気に襲われながらも、できるだけ逆らわずに、万が一にでも助かる可能性に賭けるのであった。

『ごくごくっ！……はぁ、はぁ、はぁ、はぁ』

「おほほ♪　たくさん飲んだわねウチの黄金水♡」

茜は、仰向けに寝かせられているその体勢のまま、今度は陰部を口に押し当ててくる不二子。

「むんんんっ！！」

「舐めなさい。大陰唇と小陰唇、更に膣の奥まで舌を入れて舐めて」

強制的に満遍なくワレメを舐めさせられる茜だったが、逆らえばすぐに殺されることは明白だったため、臭いのキツい性器だったが、必死に耐えながらご奉仕を続けた。

「あん……若い子にそんなんされて気持ちえええわぁ～♡　クリちゃんもしっかり下の先で転がすように舐めてぇ」

「は、はい。レロレロ……クリクリ……ペロペロ」

「はあぁあああんっ！　イク……ウチそないに舐められたらイッちゃううう！」

『プシャ～～ッ！！』

「んあっ！？……ごくんごくんっ！」

いきなり顔面に潮を振りかけられて焦る茜だったが、咄嗟に口を全開にして飲み込む判断をした。

「はぁ、はぁ、こんな可愛い小娘にマンコ舐められるなんて……ホント最高だわ♡」

性的対象は男女どちらもＯＫな藤田不二子は、茜に舌でイカされて大満足であった。

そのままエスカレートして、変態的な行為までも要求する。

「ウチのアナルに指突っ込んでくれる？」

「え？　お尻に……あ、はい」

言われるがままに白く長い人差し指を、不二子の肛門へゆっくり挿入してゆく茜。

微かに便の臭いが鼻をつくが、そのまま不二子の要求通り、根元まで突っ込んでは引き抜き、ゆっくりと出し入れを繰り返す。

『ズブブブ！……ヌポポポ！……ズブブブ！……ヌポポポ！』

「んんっ！　あんっ！　あっ！　はんっ！　出し入れだけじゃなく掻き回してっ！　ウチ気持ちいい……んんん……」

頬を真っ赤にして茜の指責めに興奮する不二子は、再び大量の愛液を分泌させ、茜の顔面に垂れ流してゆく。

その愛液を性器ごと舐めて飲み込み、再び肛門内、直腸を強く掻き回す。

「はぁ、はぁ、はぁ……なんかアンタのこと……可愛いすぎて殺す

のが惜しくなってきたわ」

「ん？　何を言ってるんだ不二子？　彼氏を目の前で殺ってるんだ。そいつも早目に始末しなきゃ後々足がつくかも知れんのだぞ？」

「もういつものように行方不明ってことでやり過ごせるわよ」

「……そ、そうか。そこまで気に入ったのなら奴隷として飼えばいい」

「そうするわ。なぁ茜……一生ウチに飼われてくれるかい？　性奴隷としてねぇ♪」

「ひっ！？……は、はい」

一瞬背中に寒気を感じるが、もちろん断れば即斬首されることは分かっていたので、過酷な運命を受け入れるしかなかった。
そもそも処刑宣言されても、もしかしたら生き残れるかも知れないとゆう一縷の希望を持ってこの女に尽くしてきた訳である。
つまりそれは当然の選択であった……。

「もう代わりが出来たし、クソガキの始末しちゃおうかな」

「……庄司をやっぱり殺すのか？」

「いいでしょうもう……生きていても本人も辛いだろうし」

１０歳になる武志と不二子の一人息子は、生まれつきの知能障害で、二歳児ほどの知能しか持ち合わせていなかった。
不二子は五年ほど前ぐらいから、毎日のように息子の庄司のことを折檻し、殴ったり叩いたりして性的興奮を得ていた。

「障害児とはいえ、実の子供をよくそんないたぶれるものだ……」

武志も半ば呆れる中、子分たちは監禁部屋から１０歳の庄司を連れてくる。

「ウーウー……アーアー」

口を大きく開けたまま、いくら折檻されても母である不二子に会うと抱きついてくる。

『パァンッ！！』

「ウヒャアッ！？」

駆け寄ってきたところに思いっきり平手打ちを喰らわせる不二子。

「こんなに怒鳴りつけても叩いても……まだウチのことを母親だと思ってるの？　ウチはお前の泣き叫ぶ姿や苦痛に歪む顔を見るのが

凄く興奮するのさ！　オホホホ！」

　そのまま10歳の息子、庄司は子分たちにより、素っ裸にされて不二子と茜の目の前に立たされる。
　全身が至る所がアザだらけで、普段の虐待の凄まじさが容易に推測できた。

『パンパンパンパンパンパンパンッ！！』

　激しく往復ビンタを打ち込むと、そのまま蹴り倒し、ハエ叩きのような形をした革の鞭で、全身を叩きまくる不二子。
　見ていられなくなった茜は、泣きながら後ろを向き目を逸らす。

「警棒持ってきて」

「はい！　アネゴ」

「ありがと。さぁてと……拷問受けても暴れられないようにしてあげるからねぇ」

　子分が不二子に手渡したのは、長さ60センチ、直径2センチほどの細身の警棒であった。
　手足を何回も、何十回も殴りつけて、歩くことも抵抗することも出来ない身体にしてゆく。

「うっ、おいおい……骨折ってるのか？　俺にはやはり無理だぞこうゆうの……」

不二子のあまりの非道な仕打ちに、次期組長の武志でさえ目を背けてしまった。

「ヴヴヴヴヴウウウウッ！！　ンンンンン〜ッ！！」

全身をくねらせながら折られた手足の激痛と戦う庄司。

「オホホホ……お前が生まれ落ちる前、ココからウチの栄養たくさん与えてやったのに……ほら！」

『ズボッ！……グリリリリ！』

細身の警棒の少し尖り気味の先端をヘソに突っ込み、グリグリと激しく掻き回す。

「ウウウウッ！？　ウンギイイイイッ！！」

ヘソが熱で溶けてしまいそうなほどの勢いでグリングリン掻き回

されて、庄司は激しく全身をくねらせながら必死で回避を試みようとしている。

「痛い？　ほら！　痛いの！？　せっかくウチが腹痛めて産んでやったのに知能に障害なんか持って生まれてきやがって！　代わりの奴隷も出来たし……今日は用無しになったお前を殺してやるからなぁ？　オホホホホ！」

ヘソから血が溢れて床に滴り落ち始める。
チラッと見てしまうが、咄嗟に振り返り現実逃避をする茜。

「茜……こっちに来て」

「え？」

「こっちに来いと言ってるんだよ！！」

「ひっ！？　は、はいっ！！」

いきなりブチキレる不二子に恐怖を感じながらも、慌てて隣へ駆け寄る。
もう嫌でも児童への虐待を見なくてはならない状況に陥ってしまった。

「クソガキはもう動けないから、これでチンポ切り取ってやんな！」

そう言いながら、茜へ大きめのカッターを手渡してくる。

「え？　お、おちんちんを！？」

「切ってこいと言ってるんだ」

「で、でも、あの……実の息子さんじゃ……」

『パァンッ！！』

「痛っ！！」

「早くして！！」

怒りに任せて全力で茜の頬を引っ叩く不二子。
もうここで逆らって殺されたら今までの苦労は水の泡となるため、泣く泣く庄司の隣へしゃがみ込み、小さな皮かむりのペニスを左手で掴む。

よほどヘソが痛かったのか、小便まで漏らして、ペニスと辺りの床は濡れていた。

そっと恐る恐る不二子の顔を見上げる茜。
早くしろと言わんばかりに、顎をしゃくる。

ペニスの根元にカッターの刃を当てて、心の中で強く叫んだ。

『ごめんなさい！』

『ズッズッズッズッ！……スパァ！』

左手に握られたペニスは、茜によって数回左右に引かれて完全に腹部と隔離されてしまう。

プニプニと何度も握って、切り取ったペニスの感触を確かめる茜。

現実でなければいいと願いながら感触を確かめるが、それは何度握っても現実でしかない生々しい肉塊の感触であった。

『ぶしゅううううっ！！』

「ンアアアアアッ！！　ヒィニャアアアアアアッ！！」

断末魔のような絶叫を上げて全身をくねらせながら、もがき苦しむ庄司。

切断面からは激しく血が噴出している。

「きゃっ！？」

茜の顔はペニスからの返り血で、あっとゆう間に真っ赤に染まってしまった。

「おほほほ！やればできるじゃんアンタ♪　ウチの子供とはいえ所詮奴隷としか思ってなかったから気持ちいいよ！」

「……お前ら、後は任せた。男の生首とも目が合っちまって……気分悪すぎる。俺はもう見てられん」

「はい！アネゴたちのやった事の後始末はアッシらがきちっと！無事に今日を終わらせますのでご安心を」

「おう。俺は寝る……」

残酷な気質とはいえ、実の息子に酷い仕打ちをすることにはかなり抵抗があった父親の武志。

吐き気ももようした実の父は、その部屋から立ち去って行った。

不二子は茜の隣へしゃがみ込み、警棒の先で破いたヘソに人差し指を捩じ込む。

『ズッ！　グチュチュチュチュチュチュッ！！』

「アウアウアウアウアウウウウウッ！！！！」

顔面をクシャクシャにして激痛を訴える１０歳男児の庄司だったが、茜にはどうしてやることもできなかった。

いや、どうかしてやるどころか、更に強制的に責めさせられるハメとなってしまう。

「茜！この警棒をケツ穴にブッ刺しておやり」

「え！？　そ、そんな……少しだけでもいいですか？」

「グリップ部分以外全て突っ込むんだ！」

「ええっ！？　でもこれって……６０センチはあるから大腸突き破ってしまい……ます」

「早くやらないと……アンタのハラワタが風穴空いちゃうけど？」

「ひっ！！……わ、分かり……ました」

不二子は庄司を仰向けに固定して、両手で太ももを大きく持ち上げる。

更に左右へ大きく開かせた。

「ほら、こうしたらケツ穴よく見えるでしょ？」

「はい……」

もう一度茜は心の中で大きく叫んだ。

『ホントごめんなさいっ！！』

『ツプッ！』

「アウアウッ！？」

先端部が肛門に少し挿さると、太ももがビクビクと小さく痙攣したように見えた。

「えいっ！」

『ズボボボッ！！』

一気に１５センチほど突っ込む茜。
手応えが強く、一度手を止めてしまう。

「S字結腸までいっちゃった……これ以上は大腸突き破らなきゃ……」

「ハヒイイイッ！？　ウウアウアウウウッ！！」

芋虫のように全身を波打たせながら苦しむ姿を見ながら茜は更に両手に力を込める。

「ごめんなさいっ……えいいいいっ！！」

『ズボボボッ！！……バリッ！！』

「ピギイイイイッ！！！！」

ついに直腸の突き当たり……S字結腸を突き破ってしまう茜。
ペニス切断面からの返り血と同じく、肛門から噴き出す鮮血もその顔にモロ受けてしまうのであった。

『プシャーーー！！……ビチャビチャビチャビチャッ！！』

「きゃあっ！！」

思わず立ち上がって返り血から逃れようとする。

「すっごい！　痛がってるわねぇクソガキ♪　ハラワタ破いちゃったんだ？」

「はい。今の一撃は間違いなく腸を……ごめんなさい」

「ウチに謝ってどうするのよ？　さぁ、今度は睾丸を摘出してやって。まだ生きてるうちに」

「そ、そんな酷いこと……」

茜は自分のしている残虐行為に、泣きたくなってきて思わずヘタリ込んでしまった。
ポロポロと涙が床へ零れ落ちる。
「はい。ハサミ。これでキンタマ袋切って中身取り出すの」
「うう……ぐすん……ぐすん」
風穴の空けられたヘソに突っ込んだ指を引き抜き、庄司のお腹で拭き取りながら冷酷な笑みをみせる不二子だった。

短気は損気（中編）（後書き）

茜へと向けられた不二子の狂気は、実の息子へと向けられてしまった。

どっちに転んでも過酷な運命に巻き込まれてしまった茜に救いの手は差し伸べられるのか……。

短気は損気（後編）（前書き）

１０歳の小学生児童への、性的虐待を手伝わされる１８歳の坂口茜。周りで立って見ている組員たちでさえ直視できない者が数人存在した。

短気は損気（後編）

ビクビクと小さく痙攣しながら、鮮血が溢れ出るペニスの切断面と肛門。
指だけではなく、顔と身体、全身を血まみれにしてもなお、更なる凶行に及ぶ茜。

左手の指で陰嚢をギュッと掴み、目一杯手前に引っ張る。
右手に構えたハサミを開き、中心部にそっと挟み込む。

震えながらも乗り掛かった船である心境の茜は、もう自分自身を止めることは出来なかった。

『ジョキ！　ジョキ！』

「ンギゲエエエエッ！！」

人間とは思えないような掠れ気味の奇声をあげながら、首を左右に振りまくる庄司。

心の中で再三謝りながらもどんどんと切り進めてゆき、ついに腹部の付け根から全ての陰嚢部分、皮部分の切除に成功する。
腹部から飛び出した数本の管に繋がって、白い生の睾丸が庄司の痙攣に合わせて激しく揺れていた。

「フンギイイイイッ！！」

『ぷらんぷらんっ！　ぷるるるるんっ！』

「あははははは！　おほほほほ！　揺れてる揺れてるうっ！　生の金玉が揺れてるううっ♪」

爆笑する不二子に対して、茜は本気で戦慄を覚えた。

『障害を持って生まれたとはいえ……実の息子にこんなこと……く、狂ってる……正気じゃないわ』

震えながらハサミを床に落としてしまう。

「何やってるの？　じゃあウチが続きやったげるわ」

ハサミを拾い、生の右側の睾丸を掴み、縦に真っ二つに切断した。

『ジョキンッ！』

「グギャギャギャギャギャギャアアアアアアッ！！」

更に左の睾丸も横に真っ二つに切断。

手前部分の半分が床に落ちる。

『ジョキンッ！……ペチャッ！』

『アバババババッ！！……ブクブクブクブクッ！！』

ついに泡を噴きながら全身の激しい痙攣が始まった。
不二子は、組員の一人に命じて拳銃を受け取る。

『グリッ！』

穴が空いた血まみれの臍へ、銃口を突っ込む。

『パンッ！　パンッ！　パンッ！　パンッ！』

「ブハァアアッ！！……ゴポゴポゴポッ！！」

血の泡を噴きながら目玉をグルグル回転させ、全身をガクガク震わせながら悶え苦しむ。
背中側からは、吹き飛ばされた小腸がドバドバと垂れ流れて床に広がってゆく。

「きゃあっ！？」

茜はもう見ていられなかった。
頭を抱え込んで泣き崩れてしまう。

「こっちの穴にもくれてやるわ」

『ズボッ！……パンッ！　パンッ！　パンッ！』

肛門から撃ち込まれた弾丸は数発が頭部まで抜け、顔面と頭頂部が吹き飛んだ。
目玉も一つ飛び出し、舌と前歯も殆ど吹っ飛んで原型を留めないほどグチャグチャになってしまう顔面。

「ぎゃーっ！！　ぎゃあああああっ！！」

気が狂いそうになるほど絶叫をあげてしまう茜だったが、不二子は薄ら笑いを浮かべ、組員たちに後始末をさせる。
茜のように返り血で全身血まみれの不二子は、茜の手を握り、そっと囁く。

「おいで。一緒にシャワー浴びるわよ」

「……は、はい」

全身の震えは未だに止まらず、呼吸さえも苦しく感じてしまう茜だった。

不二子はシャワー室で茜に背中を流させる。

「気持ちいいわぁ〜。もう少し力込めて」

「はい」

「人の身体を切り刻むとか初めてかい？」

「！？」

思わず返事に詰まる茜の反応に吹き出してしまう不二子。

「ぷっ！　うふふふ……当然よねぇ。ましてや性器を切断なんて経験者の方が珍しいものねぇ」

「……は、はい」

背中を十分に流し終えると、今度は不二子が茜の背中を流し始めた。

「わ、私は自分で……」

「いいのよ。今日からあなたはウチの奴隷……いや、ウチの彼女になってもらうわ」

性奴隷から彼女とゆう願ってさえいないレベルアップに、喜んでいいものか悲しんでいいものか訳がわからなくなってくる茜。

背後から手を回し、膣口へ指をはわせてる不二子に、またしても大きな反応を見せてしまう。

「あんっ！？」

「ウチのことはご主人様と呼ばせるつもりだったけど……不二子って呼んで」

「そ、そんな……呼び捨てなんて……」

『グチュッ！！』

「んはあっ！？」

『グチュグチュ！……グチュグチュ！』

一気に膣口へ中指と薬指を根元まで突っ込む不二子。
そのまま激しく膣内を掻き回す。

「あんん……や、やめてください……」
「ほら、早く不二子って呼ばないと陰核爪で詰み切っちゃうわよ？」
「ひっ！？……不二……子……き、気持ちいいです……あんん」
「おほほほ！　呼び捨てにしながら敬語なんて……なんか笑っちゃうけど……それはそれで気持ちいい響きやわぁ♪」
笑いながらイカせるつもりで更に激しく指を動かす不二子。
ついに本気で昇天してしまう茜だった。
「あ、あんっ！　不二子っ！……イ、イク、イッちゃううう！！」
身体をビクビク痙攣させながら立ったままでイカされてしまう茜だったが、今回は拘束されていない状態でのオーガズムを迎える。
「もう茜はウチの側から離れないように。普段はウチの部屋で過ごしてもらうから。いいわね？」
「は、はい。分かりました不二子」
「おほほほほ！　やっぱり敬語プラス呼び捨てってウケちゃうわぁ

！　おほほほほほ！」

命は助かったものの、不二子とゆう女に一生尽くさないといけない……この屋敷から一生出られないかも知れない……命の危機からは一段落したものの、新たに襲ってくる強烈な不安に苛まれる茜であった。

その日からは毎晩のように、不二子に身体を求められる生活になってしまう。

「あん、いいわよ茜……お尻の方にも指挿れて」

「はい。こうですか？」

「あんっ！　中指も挿れて……二本の指で前と後ろ同時に掻き回してよ」

「分かりました。こうですか？　不二子」

『グチュチュチュ！　グリグリグリ！』

「あはっ！　あんっ！　あ、茜！　大好きだよ」

「わ、私もです不二子」

山中組に監禁されてから一ヶ月が経ち、二人の関係に変化が訪れ

ていた。
あれだけ残酷な行為を平気で実行するような凶悪人である不二子に、心を開いてしまう茜の姿があった。
すでに敬語さえ使わずになり、完全タメ口での二人……それは性奴隷ではなく本当のレズカップルと呼べるものであった。
この日の夜も当たり前のように閨を共にする二人は、抱きしめ合い、お互いの身体の隅々まで舐め合い、そしてシックスナインも……茜までもが本気で愛してしまっていた。

「不二子は昔から同性を愛したことがあったの？」

「うん。ウチは小学生の頃から男女共にタイプな子には、即告白したりしてたわね」

「同性の女の子とかなら、振られたことの方が多かったんじゃない？」

「そうだね。そんな時は体育館の裏とかに連れていって全裸にさせて無理矢理性的イジメを堪能したわ」

「え？　それって具体的にどんなことするの？」

「そりゃマンコに指突っ込んで処女膜破いてやるでしょ。それからお尻の穴も指挿れて掻き回してやって……胸はまだ膨らんでいないけど乳首を摘んでこねくり回してやって……トドメに土足でマンコに電気アンマかな」

「ひっどぉい……昔から残酷だったのね不二子は……」

「両親もそんな性格だったからね。親の背中見て育つから知らない間に残酷に育ってしまったみたい」

その日の夜はいつになく長く話し込んでしまう二人。
ベッドの上で愛し合った後、寝付くまでの間数時間会話を交わす。

「その子泣いてた？」

「無茶苦茶泣いてたわ。パンツと制服のスカートをハサミで切り刻んで下半身スッポンポンで通学路を歩いて帰らせてやった。父親から怒りの電話があったんだけど……知っての通りウチの家は極道だから……相手は泣き寝入りってわけ」

「ひっどい話……私の彼氏もあんな残酷な殺し方しちゃうし」

「ご、ごめんなさい！　でもよくもまぁ茜の彼氏を殺した私のこと……ここまで愛してくれたよねぇ？　ウチはホントに嬉しいわ」

命の危機に立たされた人間の心境とは、普通の生活をしている人間たちには到底理解できないものである。

ある人が、自分の生死を決定できる立場の者として目の前に存在すれば、殆どの人が生き残るべく相手の機嫌をとり、可能な限りの服従さえしてしまうであろう。

茜も例外ではなくそうして生き残った訳であるが、その中で《生》とゆう道を与えてくれた不二子に本気で愛され、監禁とゆう異様な環境の中で、茜も不二子を愛してしまう。

茜自身、この頃には彼氏を殺された事実自体を受け入れられつつあったが、まさか自分までも仇である相手を愛してしまうなど……夢にも思っていなかったのである。

「私……何やってるんだろう」

「ん？　何のことだい茜？」

「……何でもない。おやすみ不二子」

更に一週間が経ち、山中組の隅々まで勝手に行動できるまでに不二子から信頼されていた茜の姿があった。

昼下がり……山中組の裏庭。

庭師により大きな石が置かれ、池には鯉が泳いでおり、小さな兼六園みたいな風流な庭先でタバコを吸っていると、何か慌ただしく走り回る組員たちが目に入る。

「サツだ！　チャカとドスを隠し部屋に隠せ！」

「オヤジはどちらにおられる！？」

「二階の部屋でお寛ぎなさってるはずだ！　おい田辺！　早くお伝

えしろ！」

「へい兄貴！」

騒がしい屋敷内で、不思議なほどに落ち着いた茜の存在が、妙に浮いているように見えた。

「茜」

背後から優しい声がする。

「不二子……これって」

「ああ。何度も誘拐殺人とか繰り返してるからついに足がついちゃったみたいだねぇ。住民の誰かが防犯カメラの内容警察に見せちゃったのかもねぇ」

「捕まっちゃったら不二子はどうなるの？」

「うーん……この屋敷でのウチの殺害行為自体は組員たちが口を割ることが絶対ないからバレないだろうけど……」

「なら組員の誰かのせいにして！　そうしたら死刑にはならないよ」

「……それは出来んなぁ。ウチらの為に心を悪にしてまで仕えてくれた子供みたいなものだからねぇ。こうなったら腹を括るよ。茜は

無事に家に帰れて両親とも会える。今更ながら解放してやるよ」
「いや！　一緒に逃げようよ不二子！」
泣きながらしがみつく茜に、自身の子を殺害するほど残酷な女である不二子が、大人になってから初めて泣いた。
「二十歳になってから十数年……涙なんか出ないと思ってたけど……ありがとう茜。これからは自由に元気で暮らすんだよ。今まで監禁してホントごめん」
「愛してくれてたからだよね……あなたのことは彼を殺されて本当恨んだけど……今では」
そこまで言いかけた時、豪華な庭へ上空から何かが降下してくるのが見えた。
『キュルキュルキュルキュル……ストンッ！』
「な、なんだこれ！？　ドローン！？」
不二子は目を丸くして、目の前に着陸したドローンを見つめる。スライドドアが開き、降りてくる人物が二人いた。

「こんにちは～！　あたしは特殊任務省に所属する神崎美央でーす！」

「同じく……私は唐田由衣夏と申します」

上は高校の制服である華やかなリボンにブレザー、下はピンク色のスカートとゆう訪れる場所を間違えたような出たちの二人に、不二子と茜は呆気に取られて数秒間固まってしまう。

「ば、場違いな格好だねあんたたち！　ここをどこだと思ってるんだ！？」

ようやく事態を把握できた不二子が、美央たちへ怒鳴りつける。

「山中不二子さんよね？　お前はあたしたちとこれから無人島へ来てもらう。お隣は……行方不明の坂口茜さんだよね？」

「いえ。そんな人知りません。私はこの人の妹です。一緒にその無人島とやらへ連れていってください」

「はぁ？　い、妹？……ねぇ由衣夏！　コイツに妹なんていた？」

「いや……坂口組の組長の子供って、一人娘だと聞いてる。妹なんていないはずだよ」

「そうだよね。あ！　ちょっと待って」

ポケットから、ある写真を取り出して目の前の少女と見比べる美央。

「あ！　やっぱ茜さんだ！……どうしてそんなすぐバレる嘘つくのよ？　アンタも痛い目に遭わすわよ！？」

「まぁまぁ美央！　なんかこの二人見てると監禁してる者とされてる者に見えないもん。それ相応な理由があるんでしょ」

「相応な理由……あ！　そっか！　監禁されてる内に犯人を庇っちゃうって心境になる……スペックホーム症候群だ！」

「……ストックホルム症候群ね」

「そうそう！　それそれ！　こんな外道庇っても何も得しないよお嬢さん。とりあえずアナタは東部中央警察で降りてもらうから。その後、山中不二子は無人島へ来てもらう。分かった？」

ポケットに突っ込まれた茜の手元が、ゆっくり動くのが見えた。
次の瞬間………。

『パァンッ！！』

美央は咄嗟に身体を翻すが、左腕に激烈な熱を感じる。

「……いったぁ！！」

「美央！？……大丈夫！？」

「ものすごく痛いんだけど……大丈夫ではない」

「え？　大丈夫って言ってよ！？」

「！？　由衣夏うしろっ！！」

美央のことが心配すぎて、発砲した張本人に背中を向ける愚かな由衣夏だったが、美央の一言で、咄嗟に同じ方向へ美央を押し倒して銃撃を躱す。

「こんのぉ～！……えいっ！」

『バキッ！！』

一撃の正拳がまともに茜の鼻っ面に入る。
鼻血を噴き出しながら倒れ込むが、更に馬乗りになって追撃しようとする由衣夏。

その振り上げた右手を掴んだのは……山中不二子だった。

「その子には強く言い聞かせるからやめてあげて。ウチは大人しくお嬢さんたちに付いてゆくわ」

「はぁ、はぁ……分かった。その島でお前がどうなるか分かってるの？」

「……だいたい。覚悟は出来てるわ」

「そう。ならいい。茜とやらには念の為手錠させてもらうから。お前にもだけど」

二人に手錠を掛けてから、美央の左腕の傷口をタオルで固く縛る由衣夏。

「ホント大丈夫？」

「だから大丈夫じゃないって！　激痛だよ」

「その割にとっても冷静そうに見えるんだけど……あ！とりあえず痛み止めの注射打っとくわね？」

「ありがとう。それは助かるよ」

不二子はそっと手を伸ばして茜を引き起こす。

「ウチの為にごめんね茜。もういいから行こう。あの子たちは普通

じゃない。逆らってもウチらには到底勝てないよ」

「え？　ふ、普通の女子高生にしか見えない……けど？」

「なんか分かるんだよウチには……殺戮者の目をしてた。多分噂に聞く拷問処刑執行人だよ」

「えっ！？　ご、拷問処刑って……それじゃあ不二子は」

「ああ。ウチも何も悪くない人とかにも……何人も拷問して殺害して……同じようなことやってきたからねぇ。覚悟はできてるつもり。でも普通に警察に捕まって裁判起こされて……法務局により処刑執行となって欲しかったねぇ本音を言うなら」

「不二子……」

「早く歩け！」

二人の会話を遮るように由衣夏が声を荒げる。

「美央は撃たれてるんだよ！　急ぐの！　病院行って警察行って神崎邸行って無人島だから！」

早口で多くの箇所を言いすぎたため、全く不二子と茜は何処何処巡るのかの理解は出来なかったが、そのまま不二子に手を引かれて茜共々ドローンへ乗り込んだ。

「山西長官が言ってた。美央はこのまましばらく入院ね！」

「はぁ。仕方ないか……じゃあ島への連行は？」

「特殊任務省の海原さんが操縦してくれるみたい」

「あの由衣夏のファンってやつね……襲われないように気をつけなきゃ」

「あはは！　そうなったら返り討ちにしてやるわ♪　それと……美央の代わりの執行人は、理沙ちゃんに決定したから」

「そっか。不二子の旦那の山中武志も執行しないとだから二人はいるもんね」

「うん。その山中武志は、特殊任務省のドローンで処刑島へ直行してるから」

「了解！　カップルで仲良くカップルを殺っちゃってきてね♡」

「……なんかその言い方、色々と問題あるように思っちゃうんだけど……気のせい？」

病室のドアがノックされ、一人の男が入室してくる。

「海原です。お久しぶり～！」

「こんにちは。今日はお世話になります」

由衣夏が頭を下げながら挨拶する。
美央も笑顔で軽く会釈しながら少し顔を顰める。

「この度は大変だったねぇ～。美央ちゃんほどの猛者がまさか撃たれちゃうなんてなぁ……ホント不意打ち喰らっちゃったんだねぇ？　あ！　今日もまた可愛いなぁ金髪ポニー由衣夏ちゃん♡」

「私のことはどうでもいいですから美央ちゃんの心配を……」

「ごめんごめん！……美央ちゃん、ホント大丈夫？」

「大丈夫じゃないです」

「え？」

手当も一通り終わり、弾丸も腕の骨を躱して貫通していたため、比較的に不幸中の幸いといえる被弾であったことは既に聞かされていたが、『大丈夫ではない』と言われると本気で返答に困る角刈りの男前、海原拓磨であった。
頭を掻きながら俯いて悩んだ体(てい)を見せる。

「冗談冗談！　もう平気ですよ。ドローンの操縦くらいはまだまだ出来そうなんですけど……山西長官が無理をするなって……由衣夏と理沙をお願いします」

「うむ！　任せといて。ここから由衣夏ちゃん乗せて神崎邸で理沙ちゃん拾って島に行くとゆう段取りで聞いてるから」

「それでお願いします。ドローンに拘束している二人のことだけど……坂口茜にも軽い拷問刑執行命令が下りました」

由衣夏は海原の気遣いのなさにかなりイラッときていたが、ドローンを操縦してくれるのは非常に有り難いために、顔に出さないよう必死で我慢する。

そのままベッドに横たわる美央に手を振り病院を後にする二人。屋上のヘリポートから離陸して理沙を拾いに向かう。

5分ほどで神崎邸上空へ辿り着き、中庭へ慎重に着陸させる海原。

「お迎えありがとうございます。由衣夏ファンの海原さん」

「え？　あ、ああ！　久しぶり理沙ちゃん。相変わらず綺麗な顔立ちだねぇキミも♪　ロリコン親父には気をつけようね？」

自分の愛する由衣夏をタイプだということの角刈り男、海原拓磨のことを、あまり好きになれない理沙は、かなり皮肉を込めて挨拶をした。

「由衣夏は歳下好みだから歳上は論外なの」

「そ、そうなんだ……ハハハ……そうなのか……」

大人であれば冗談で受け流す所を、真剣にショックを受ける表情を見せる海原に、由衣夏はつい吹き出してしまう。

そのまま理沙の嫌味と皮肉を散々聞かされながら、一行を乗せたドローンは残酷処刑島へと向かう。

「この度はお姉さん大変だったね……命に別状なくて弾の当たり所も良くて……不幸中の幸いだったね」

「お気遣いありがとう」

「…………」

この間、罪人の山中不二子と監禁されていた被害者の坂口茜は、何かを話す事もなくひたすら水平線を眺めていた。

海原拓磨は、気楽になろうとするがゆえに少し話を変えたつもりが沈黙になり、余計気まずくなってしまう。

小さな海峡を越え、１０分ほどでドローンは残酷処刑島へと着陸した。

すでに不二子の旦那の山中武志は素っ裸にされて両手両足を拘束され、丘の上の平地へ転がされている。

「山中不二子。降りなさい。山中武志が裸で寝転んでる所に行くの」

唐田由衣夏が静かに命令する。

「分かったよ」

素直に受け入れて自ら島に降り立ち、ゆっくりと山中武志の元へ歩き始めた。

その後を慌てて駆け降り付いて行く茜。

「どうするの？　美央を撃ったクソガキ」

「……由衣夏はどうしたいの？　どうせ行方不明扱いの人なんだから、軽い拷問だけじゃなく処刑しちゃってもいいんだよ？」

フラフラと組長である山中武志の元へ向かう二人の背中を見つめながら、しばらく考察する由衣夏と理沙だった。

「武志……もうウチらも潮時だねぇ」

「くっ！　ちくしょう……防犯カメラ警察へ提出してチクリやがった奴、ぶっ殺してやりたいぜ！」

「もういいじゃないか。悪はやはりいつか滅びるとゆうことやわ」

由衣夏と理沙も、三人の元へ辿り着く。

「山中武志と山中不二子には、本日只今より拷問処刑を執行します」

目を大きく見開き睨みつける武志。
不二子は寂しそうに茜の横顔を覗き込む。

「坂口茜さん、あなたは被害者でもあるんだけど……公務員である神崎美央への発砲の罪は償ってもらいます」

「……私も不二子と一緒に殺してください」

死を前にして、極道の組長以上にキモの座った茜の態度に、なぜ自分がここまで惚れたのかを改めて痛感する不二子だった。

「可愛いだけじゃないんだよなぁ茜は……ホント大好きだわ」

「おい！　コイツらを処刑しても俺だけでも助けてくれないか！？組の金何億もあるんだ！　欲しいだけお前らにくれてやるから！な！？」

妻を身代わりにしてでも自分だけは助かろうとする愚かな本性を顕す武志に、絶望の感情を持ちながら、同性の茜の方が遥かに好きだった自分自身にも改めて気づく不二子だった。

「あはははは！」

「どうしたのいきなり？」

処刑される直前に爆笑する不二子に、嫌悪感を覚えた由衣夏が眉間にシワを寄せながら問いかける。

「いや、もうホントどうしてウチはこんな人と一緒になったのか未だに分かんなくなっちゃってさぁ。気が荒くて喧嘩が強いだけでいざとゆうときにはとてつもなく薄情な……笑うしかないよ全く」

「お前に武志のことが言えるの？　障害者とゆうだけで実の息子をよくもまぁ虐待した挙句に殺せたもんよね？　この鬼畜メスブタめ！」

理沙もつい口を開いてしまう。

そのまま不二子の衣服を、パンツのみを残し全部脱がせ、大の字の磔台に拘束してゆく由衣夏。

「茜さん……あなたは完全去勢の刑に処します」

「……どうでも良いわ。私は不二子の後を追うだけだから」

「いつまで強気でいられるかしら」

由衣夏は強気な茜に対して冷たく言い放ちながら、衣服を下半身のスカートのみ脱がせると、ベッドの上にM字開脚で仰向けに拘束していった。

由衣夏は不二子を担当、理沙は武志を担当と決め、二人の得意の拷問器具を用意する。

理沙は3メートルほどに変化させた鋼の鞭を地面に数回打ち付けて感触を確認した。

由衣夏も電撃警棒を伸ばし、スイッチを入れて電撃を空に放つ。

『スパァンッ！！』

「ぐわあっ！？」

理沙の激しい一撃が武志の胸を打った。

鋼の鞭によるダメージは一撃で皮を裂き、鮮血を撒き散らすほどであった。

腹部を庇うように半回転して背中を向けるが、そこへ再び一撃が入る。

「ほらほら、こっちがお留守だよぉ？」

『パァンッ！！……ビシィッ！！』

身体をくねらせたり回転させせたりしながらも、みるみるうちに全身の皮が剥け、血塗れになっていった。

血で濡れた傷口へ、転がるごとに多量の土や砂がへばり付いてゆく。

隣では、大の字に磔にされている不二子に由衣夏の拷問が開始される。

先ずは電撃警棒を右の乳首に当てて、弱い電撃でジワジワと焼いてゆく。

『ジュ……ジュジュジュジュジュウ』

「はぎいいっ！？……熱いいいいいっ！！　んぎゃああああっ！！」

溶けてミンチとなった乳首は、不二子の足元へポトリと垂れ落ちた。

そのまま左の胸は、大きな乳房の下側に電撃警棒の先を潜り込ませ、強烈な電撃で乳房ごと焼いてゆく。

乳房の真ん中へ穴が開くように肉が溶けて滴り落ちていった。

この時点ではまだ小便を撒き散らしながらも失神せずに絶叫を続ける不二子だったが、隣の武志の方が先に失神してしまう。

「おーい。こんな程度で失神しちゃったのぉ？……鞭打ちはこの辺でいいか……さてと」

理沙は注射器を取り出すと、男の会陰部へ打ち込んだ。

「デッカいチンポだなぁ……図体もでかいけど。これ、アヘイクといってねぇ、超強力な男女兼用の媚薬だから……死ぬ前にフル勃起させてみて♡」

『プスッ！……プチュウウウウ！』

「うっ！？……んん」

みるみる内に巨大化してゆく武志のペニス。

「すっご！　フル勃起したら２０センチくらいあるじゃん！」

理沙は目を細めてスケベそうな笑みを浮かべながらそっと立ち上がり、右足の裏をフル勃起した巨根へそっと乗せる。

「ほら、足コキしてやる」

『グリッ！……スコ……スコスコスコスコ』

「うはっ！？……うううううっ！」

足の裏でデカマラを前後に擦り始める理沙。
女子小学生による足コキ刑が開始される。

これだけ何人もの見てる中で足コキなんかで射精させせられるのは、武志本人からしてみれば死ぬほどの屈辱であった。
しかし理沙の巧みなテクニックによって、わずか数秒で大量の精液を吐き出させせられてしまうのだった。

「うっ！？　き、気持ちいい！？　うわああっ！」

『ドピュッ！　ドピュピュピュピュピュピュウッ！！』

「やだ……すっごい量だなぁお前。きったないのよっ！」

『ズトッ！　ズガッ！……グリグリグリグリッ！』

「はぎいっ！？　ぐはっ！！……いでででででえっ！！」

二回ほど強く、射精を終えて半勃ちになったペニスを蹴り込んだ後、密着させせてグリグリと左右に回転させるように捏ねくりまわす。
理沙の足が左、右とペニスを擦り付けるたびに、睾丸がプランプラン前後左右に激しく揺れた。

「あはは！　何チンポ踏み躙られてキンタマ揺らしてんのよ？ウケるぅ～♡」

「は、はうっ！　だめだ……また出そう……ううっ！」

『ドクドク……ドクドク』

足の裏でこねくりまわされ、再度射精してしまう武志を、目を細めてスケベそうな笑みを浮かべる理沙。

「お前の汚い粘液作ってるのは……せぇ～の……ココかあっ？」

『ズドォオオンッ！！……グシャグチュ！！』

「ピギャアアアアアッ！！」

思いっきり足の甲で睾丸を蹴り上げる理沙。
二つの睾丸はほぼ同時に粉々に破壊された。

激痛で絶叫を上げながら何度も転がりまくる武志。
それを追いかけ回しては何度も潰れた睾丸を蹴りまくる。

『ズトッ！　ドカッ！　バシッ！　ガスッ！』

「あぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃああああっ！！」

ついに尿道口から、血と精液まみれの睾丸のミンチが噴き出す。

『ドピュッ！……ブシュッ！　ブシュシュッ！！』

「あはは！　白子にイチゴジャム振りかけたみたい♡　汚いくせに美味しそうな液体噴き出させないでくれるかな？」

理沙の性器破壊を楽しんでいた由衣夏も、ついに本格的な不二子の責めに入る。

巨大なキッチンハサミを取り出すと、大きく開き、縦に構える。

そして上側の刃先をピンク色のパンツ越しに不二子の膣口へ軽く突っ込んだ。

パンツが突き破かれる。

大の字に磔られている不二子は迫り来る激痛への覚悟を決めてゆく。

「そ、そんな所にハサミを……？」

「そ。性器破壊は私たちの愉しみなの。でもお前の汚いマンコなんか見ないでやったげるわ。この辺りかな？　腐れマンコは？……えいっ！」

『ズブッ！……ズブブブブ！』

「ひぎっ！？……んぎぎぎぎぎいっ！！」

上側の片刃がハサミの根元まで突き刺さった頃には、子宮口を突き破り、子宮の中央部ほどまで刃先が達していた。
鮮血がピンク色のパンツを真っ赤に染めてゆき、太腿を大量の血が伝い落ちてゆく。

「下側の刃先はねぇ……後ろに突っ込んじゃうの！……ここら辺りかなぁ汚いアナル……ほらっ！」

『ズブッ！！……ズズズズズ！！』

「ひんぎゃあああああっ！！いだいいいいいっ！！」

少しハサミを閉じて、パンツ越しにでも的確な角度で肛門に狙いを定め、突き刺す。
S字結腸を少し突き破るまで突っ込む由衣夏。

「うふふ。これを挟み込んだらどうなると思う？」

苦悶の表情で泣き叫ぶ不二子に答える余裕など全くなかった。

「マンコとアナル……内部ごと繋げてあげる♡」

『ジョキンッ！！』

「ぎゃあああああああああああっ！！！！」

あまりの激痛に白目を剥いて失神する不二子。
膣道と肛門、直腸を会陰部ごと完全に切開され、繋げられてしまった不二子は、血塗れの小便と大便を大量に噴き出させる。

「わっ！？　きったないなぁもう……手にウンチ掛かっちゃったじゃん？」

由衣夏はそう言いながらハサミを引き抜くと、粘度のある血の泡のような液体がドバドバ流れ落ちてくるのを確認した。

「えぐぅ♡　愛液も混じってる？　マンコも臭いしウンチも臭いし……ホント色々と汚い人間だよねぇお前って」

そう言いながら血塗れのハサミの先端を左手の指で摘んだクリトリスの付け根へ潜り込ませる。

「マンカスまみれの陰核も切っちゃうんだから♡」

『チョキンッ！』

いきなりクリトリスを切り落とされ、髪を振り乱すほど顔を激しく振りながら目覚める不二子。

「あはあああっ！？　んぎいいいいいっ！！」

「アハハ！　トシマの割にいい声でなくのね？」

「やめてっ！！　お願いだからやめてあげてぇえっ！！」

その姿を横目で見ながら涙を流す茜。

由衣夏は電撃警棒を全開まで伸ばし、串刺し内臓焼きの準備に入る。

中央部が大きく縦に切り裂かれたパンツの部分に電撃警棒を突っ込んでゆき、そのまま口まで貫通させる。

「二つに分かれた臭そうなマンコが切れたパンツ越しに見えちゃってるじゃん？……　私に汚いモノを見せたお仕置きよ。えい！」

『グチュ！……ズボボボッ！！……バシュウッ！！』

「おごごごっ！！……ほげえええっ！！」

あくまでもパンツ越しに性器破壊を続ける由衣夏。

「男より先に逝っちゃえ！　いっくよぉ？　スイッチおんっ！」

『バリバリバリバリバリバリバリバリッ！！……ジュウウウウウウウッ！！』

「おごごごっ！！　はぎぃいいいいっ！！」

激しく全身を痙攣させながら白目を剥く不二子。
ヘソや口、鼻と目……あらゆる穴から煙が立ち登り、身体の内部から焼かれてゆく凄惨さが周りにも伝わる。

「目玉が飛び出して……溶けて垂れ落ちる♡　うふふ。私の電撃強烈でしょう？　もう膣内も子宮も卵巣も……ハラワタまでも溶けてマンコから流れ出てるわよ？」

『ドクドク……ドロドロ……ピチャ……ピチャ』

「あーあ。パンツも焼けこげちゃって……結局汚いお前のマンコまともに見ちゃったじゃん？　このメスブタめ！」

由衣夏は、ほっぺを膨らませて怒った顔をしながら電撃警棒を一気に引き抜く。
するると、更にミンチ状の大量の肉片が湯気をあげながら垂れ流れてくる。

少し離れてコソコソと覗き見ししていた海原拓磨は、何度も嘔吐し、ここでギブアップ。

天を見上げながら……死ぬほどの悪心と戦いながら眠ることにした。

「お、恐ろしい女の子たちだ……お、俺にはやはり真似できん……おええっ！……がくん」

不二子の遺体に灯油をかけて火をつける由衣夏。

全身の外側からも溶けてゆく身体を見ながら電撃警棒を丁寧に洗う。

隣では理沙が、鋼の鞭を鋼の棍棒に変形させた武器で、武志の全身の骨を叩き砕いてゆく。

「あがががが……いやだ……死にたくない……痛いい……お願いだから許して……ください」

「ダメ！　もう女の方は焼け死んじゃったわよ？　お前にはどうでもいいか他人のことなんて……」

理沙は呆れながら簡易ベッドを組み上げ、うつ伏せに寝かせる。

「はい、四つん這いみたいになっておお尻突き上げて！　そんで胸を

ベッドに密着させてくれる？　そうそう！」

「お願いだ！　ゆ、……許して」

土下座するような格好でお尻だけ思いっきり突き上げさせた上に、左右に全開に両脚を開かせて拘束する理沙。

「よし！　準備ＯＫ♪」

大きなハンマーを両手で持ち、横に振りかぶる。

『ドカッ！！』

「ぐぎいいっ！！」

何度も何度も股間へ打ち付け、肛門と腫れ上がった陰嚢をぐちゃぐちゃになるまで叩き潰す。
大の大人が泣き喚くその姿は、とても大きなヤクザ組織の組長には見えなかった。

「理沙ちゃん！　もうそいつのチンポ以外、グチャグチャだよ？」

「うん！　恥骨砕いておかないとあたしの腕入らないから」

「やんっ！　理沙ちゃんのフィストファックどころか更に残酷なアームファック♡」

「そう。よし！　金玉とアナルごと恥骨までバラバラにできたわ。いっくよぉ～……えいっ！」

『バチュウッ！！……ドブドブドブウッ！！』

「ほげえぇえぇえぇえっ！！！！」

理沙のストレートが、ズタズタに破壊されて血塗れの肛門へぶち込まれる。
その拳は一気に胃まで到達し、肘はおろか肩まで突き刺さった。
血の泡を噴きながらもがき苦しむ武志。

『バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

更に激しく出し入れ運動……ピストン運動までして小腸を抉りながらアナルを犯す理沙。
全身を激しく痙攣させながら息絶えるヤクザの組長……山中武志。

「はぁ？　早から死んじゃったの？　まだまだこれからなのに……」

理沙は呆れながら、破壊された肛門から大腸と小腸をズルズルと引き摺り出す。

全てのハラワタを引き摺り出すと、ようやく立ち上がり坂口茜の元へ歩み寄る。

由衣夏は超強力な媚薬、アヘイクを茜の会陰部に注射した。

強気な茜もアヘイクの威力には敵わない。

「あっ！？……アヘアヘエエエッ！？」

アヘ顔になり、腰をカクカク振りながら大量の愛液を分泌させる。

「やだなぁ。ヤラしい粘液がアソコからどんどん分泌しちゃってるわよ？　さっきまでの強情さはどこにいったの？」

理沙は冷たく問いかけながら子宮採取器の先端を茜の膣口に押し当てる。

そのままゆっくり挿入していった。

『ズチュ！……グボボボボ！！』

「あひい！？……や、やめれえええっ！！　はひいいいいっ！！」

「とりあえず腹の中の性器を回収するね？　ほらほらほら」

『バシュウウウッ！！　バリバリバリバリッ！！』

回転刃が子宮を抉り取ってゆく。
やがて子宮と卵巣は完全に子宮採取器の中へ回収された。

「お前の女の子……頂いちゃった♡」

理沙は冷たく囁きかけながら子宮採取器を茜の膣から引き抜く。
血の泡を噴き出す膣口は、小陰唇と共にヒクヒクと激しく痙攣し続けていた。

「あはぁっ！　アヘアヘアヘアヘエエエッ！！」

子宮と卵巣を抉り取られても下半身に打ち寄せる快感は凄まじく、何度もオーガズムに達してしまう茜。

由衣夏はM８８ライフルの銃口を茜の肛門へ突っ込む。

『ズブッ！！』

「はひいっ！？　あんあんあんっ！！　んんんんっ！！」

「美央の仇のコイツは……子宮と卵巣を奪っただけじゃ許せないわ。アナルから弾丸撃ち込んで脳みそ吹っ飛ばしちゃってもい？」

「……うん。ヤッちゃって」

理沙の許可を得た由衣夏は、４０センチ近くあるライフルの銃身を茜の肛門へ挿し込んでは引き抜き、挿し込んでは引き抜き……散々犯し続けた挙句、ついに引き金を引く。

「茜……アナルも犯されて気持ちよかったのね？　じゃあもう死んじゃえ♡」

『ズドォンッ！！』

「ケピイイッ！！」

『パァンッ！！……ビチャビチャビチャビチャ！！』

辺りの地面は、茜の内臓と脳みそで血塗れになる。
降り注いだ脳みそを見ながらＭ８８ライフルの銃身を、下半身しか残らない哀れな屍と化した茜の肛門から引き抜く由衣夏。

『ヌププ……ポコンッ！』

「死ぬ前にイケただけでも有り難いと思いなさい茜」

「あはは！……いまだにマンコから血塗れの愛液噴き出しちゃってる♡　よほど気持ちよかったのね」

唐田由衣夏と神崎理沙による残酷拷問処刑によって、残酷処刑島に新たに三人の遺体が加わった。

短気は損気（後編）（後書き）

「終わったわよ。後始末よろしく」

「むにゃ……んんん……あれ？　ここは？」

返り血で、血塗れの制服を着た由衣夏と理沙に起こされた海原拓磨は、いまだに寝惚けていた。

「途中まで見てられたのに……結構ヘタレなんだね海原さん」

由衣夏は冷たく嘲るように囁く。

「ゆ、由衣夏ちゃん……そこまで言わなくても……」

再び大好きな由衣夏に罵られた海原拓磨は、ショックで落ち込んだまま予め掘っていた穴に三人の遺体を埋めて、使命を全うする。
その後ドローンへと乗り込み、由衣夏と理沙を乗せて帰路についた。
再び美央の入院している病院へ直行し、経過報告をする三人。

「ふうん。結局あたしを撃った、キモの座った茜とかゆう女も処刑

しちゃったんだ……」

「うん。由衣夏がやっぱり許せなかったみたい」

姉の美央に返答する理沙。

「私に気のある海原拓磨さん……近々私と理沙ちゃんで調教しちゃうつもりだから」

「え！？マジか！？」

流石の美央も、仲間にまで狙いを定める由衣夏と理沙の非道さには敵わなかった……。

虚弱体質（前編）（前書き）

二十歳の大学生に迫る漫画のような運命。
イタリアンレストランでのバイトから全ては始まった。

虚弱体質（前編）

「美希さん、この方が今日からここで働いてくれるようになった大学生で二十歳の相原拓実クン」

「あ、どうも。私は岡崎美希です」

「初めまして。相原拓実です。よろしくお願いします」

大都会の東部地方に存在する、そこそこ人気のあるイタリアンレストランで、アルバイトで働くことになった相原拓実。

店長の小倉幸子は４５歳になるが、キッチンからホールまで全てを完璧にこなす超ベテランであった。

その小倉から紹介されたのは、１７歳の女子高生のアルバイト店員である岡崎美希であった。

髪先が肩に付くか付かないかほどのショートカットだが、後ろで束ねて短いポニーテールにして、まだあどけない可愛い顔を更に可愛く見せている。

「岡崎さんは相原クンの三つほど歳下になるけど、仕事の方は他の社員と変わらないほどベテランだから。相原クンの指導担当になってもらうから分からないことは何でも聞いて、できるだけ早く覚えてね」

「はい。そうさせていただきます。ありがとうございます」

女店長からの紹介も終わり、人生初めての飲食店の仕事を頑張る決心を固めてゆく相原拓実だった。

週に木、金、土だけの出勤とはいえ、キッチンもホールもなかなかハードで、軽い筋肉痛になるほどであった。

元々運動神経は良くなく、体力もない、虚弱体質とも言える細身の身体をしている相原拓実は、要領も動きも悪く、小さなミスを何回も犯してしまっていた。

一ヶ月が経つころ、職場の環境には変化が現れていた。

「相原さん！　またお皿に泡が残ってる。これは絶対ダメと何回も言いましたよね？」

「あ……ご、ごめんなさい！　すぐ洗い直します！」

「もうこっちは良いですから！　ホールの方お願いします」

「はい！」

拓実の教育係であり、三つ歳下の女子高生である岡崎美希の指導が厳しくなってきていた。

何度も繰り返す失敗に対して、歳上であろうと苛々が募ってきて

いたのである。
忙しい前半が終わり、休憩部屋に向かう途中、すれ違いざまに更に拓実へ追い討ちを浴びせかける美希。
「みんなに迷惑かけてます。向いてないんじゃないですか？　このお仕事」
「…………」
思わず黙り込んだまま立ち止まる拓実。
あの美人で優しかった美希がこんなに冷たく感じたのは、ここ最近でも今日が一番であった。
「く、くそう！……何もそこまで言わなくたって」
これまで冷静でいたはずの自分だったが、休憩室で段々と頭に血が昇り、自分の失態は棚に上げての恨み節を何度も呟く……。
「顔は可愛いけど性格ブスめ！……ブツブツ……ブツブツ」
イライラしながらの１５分休憩もあっとゆうまに終わり、後半の仕事へ向かう。

他に五人ほどいる３０歳〜４０歳くらいの正社員の人たちは男女問わずみんな優しいままだったが、岡崎美希の態度だけが高圧的で言い方も厳しくなってきていた。

それから更に一週間後の木曜日、更なる変化が起きる。

「何やってんの!?　こっちが先！」

「は、はいっ！」

「あーもう！　蓋開けたら閉める！」

「ご、ごめんなさいっ！」

とうとう拓実への叱り方も、敬語ではなくタメ口になってしまっていた。

『くそう！　女子高生のくせに！　この性格ブスめ！　車に撥ねられて死んじゃえよ！』

心の中で物騒な思考を巡らす拓実であったが、もうそろそろ限界に近い、心が折れてくる自分を感じはじめていた。

「ねぇ相原さん！　この皿、ここじゃないわ」

「そ、そうでしたっけ？……すぐにしまい直します！」

慌てて美希の叱責を受けながら食器棚へ歩み寄る拓実。

『ズガッ！』

「ぎゃっ！？」

思わず奇声をあげてその場にしゃがみ込んで悶絶する拓実へ、おどけた顔で囁きかける美希。

「どうしたの？　大丈夫？」

「ぐおおお……痛いいいい」

他の社員も心配そうにチラチラ見てくるが、忙し過ぎて声もかけられない状況だった。

美希は歩み寄ってきた拓実へ、右膝で股間を蹴り上げた。
まともに陰部を直撃した膝は、睾丸が潰れたかと思うほどに拓実の下腹部へ激痛を与える。

しばらく立ち上がれずに苦しんだが、五分ほど経ってからようやく痛みが少しマシになってきた。
女子高生の美希に対してへの怒りだけではなく、恐怖に近い感覚

も全身で感じてしまう拓実であった。

ようやく辛い一日も終わり、４５歳の女店長である小倉幸子へ、ついに悩みを打ち明けてしまう。

「話があるって？　２階の事務所に来てくれる？」

「……はい」

店内の奥にある小さな鉄製の階段から、２階の事務所へと上がる。

「あ、あの……岡崎さんのことなんですけど」

「……あの子何でも知ってるし何でもできるから……あの子の言うこと聞いてれば何も問題なかったのに」

「で、でも……最近とても僕に厳しくて……今日なんて……蹴られたんです。だからもうこの仕事を早めに辞めたくて……」

「蹴られた？……仕事中に？　どこを蹴られたの？」

「し、仕事中に……あ、あの……き、き、金」

そこまで言いかけた時に扉が開き、誰かが入室してきた。

そして一言を強く言い放つ。

「金玉！」

「え！？……ええっ！？」

帰ったはずの女子高生がいきなり目の前に現れ、思わず息が止まりそうになる拓実。

「な、なぜ岡崎さんがここに！？……て、店長、これは一体？？」

ゆっくりと椅子から立ち上がり、拓実の傍へ歩み寄る小倉幸子。

「ここまで店のみんなに迷惑かけておいて……更に辞めちゃうなんて……考えられないわ。ねぇ美希ちゃん」

「あはは……とりあえずボコッちゃってもいいですかコイツ？」

「いいけど顔は控えてね。親とかにバレちゃうから。しっかり調教して新しいオモチャになってもらいましょう♡」

「はーい♪　ってな訳で今からあたしがお前を泣かせちゃう♪　覚悟はいい？」

とんでもない想像すら出来なかった展開に、とりあえず夢か現実かを考え始める拓実だったが、まだ睾丸の痛みが少し残ってる状態からも、その一部始終が事実であることに相違はないと実感する。

「おい！　もし喧嘩であたしに勝ったら許してやるよ。でも負けたら……」

「え？　な、なんです？　一応僕……男なんですけど？……仕事の先輩とはいぇ女子高生なんかに……」

『ボコッ！！』

「ぶはっ！？」

拓実が喋り終える前に、閃光のような女子高生の右膝が、みぞおちに深く突き刺さった。

「がはあっ！？　おえっ！　おえええええっ！！」

思わず胃液のようなゲロを吐いてしまう。

「あたしの右膝……金玉にも強烈なの食らってるのにまだ分からないのね？」

「うふふふ！　美希ったら金玉金玉ってはしたないわねぇ女子高生なのに……もうこれ以上やらなくても勝負はついてるんじゃない？」

歳下の女子とは思えないほどの圧倒的な破壊力を味わった拓実は、悔しさと腹ただだしさと敗北感……更に力と暴力による恐怖が重なった奇妙な感覚に陥る。
その感覚はどれもマイナスに働く負の要素だった。

『ガツ！……ギュウウウウウウッ！！』

「うぐっ！？……うううううっ！」

背中側から抱きついて右腕を首に掛けてロックする美希。
更に強力なパワーで首を締め上げてくる。

「このまま締め落としてあげよっか？」

「あううう…………うぐっ！　ぶくぶくぶくぶく……」

ついに泡を噴いて落ちてしまう拓実。
数秒間か、数分か……本人には全く分からない漆黒の時が過ぎてゆく。
……ふと女性の笑い声で目が覚める。

「うふふ！　やだ……そんなに奥まで丸見えにしちゃう？」

「このまま開けっぱなしにしてやろうかなぁ？　あはは♪」

ふと意識を取り戻した拓実が、現状に気づくまで更に数秒必要だった。

素っ裸にされたままベッドに拘束され、膝を立ててM字開脚みたいな格好で固定されている。

更にある場所に熱いほどの激痛が押し寄せていることに気づいた。

『ギュムムム……くぱぁ～！』

「ひっ！？熱いっ！！」

「えー？どうしたのぉ？熱いのぉ？」

店長である小倉幸子とムカつく女子高生、岡崎美希の二人が自分の下半身を凝視している姿が目に映る。

しかも美希の手が何やら細かく動くごとに、肛門に熱さと痛みが走るのだ。

「な、何をしてる！？」

「先輩のあたしにタメ口？　アナル裂いちゃうよ？」

『ギュムムム……メリメリ！』

「痛いいいいっ！！　ご、ごめんなさいいいいっ！！」

美希は拓実の肛門へ、女性の膣の中を診るためのクスコを深々とブッ刺して、全開に拡げていた。

「すっご……直腸の奥の奥まで丸見えね♡」

隣で４５歳の店長、小倉幸子までも楽しそうに拓実の肛門の奥を頬を赤く染めながら覗き込んでいた。

「や、やめてください……そんなとこ拡げて見ないで……は、恥ずかしい」

「はぁ？　お前みたいに皆に迷惑ばかりかけるカス野郎が恥ずかしいなんて感じること自体世間を舐めてるわよ！」

よく分からない理屈をこねながら何度もクスコを閉じたり開いたりする美希。

「あなたが意識無くしてる間に、三回ほど浣腸して便は全部抜いてるから……安心して拓実クン」

「え？　そ、そんな……気絶しながら排便してるとこまで見られちゃったんだ僕……」

あまりに自分が哀れに思えてきた拓実は、思わず泣いてしまう。頬を伝い落ちる涙と同時に、会陰部も伝い落ちる液体があった。

『グチュグチュ！……トロトロ』

「やだ？何これ？　お尻から透明の液体垂れ流しちゃってるよコイツ……」

「うふふ！　腸液ってゆうのよそれ。美希ちゃんがあまりにアナルで遊ぶものだから……前立腺ってこと刺激して感じちゃってるのよその子」

「ふぅん……あたしにお尻の穴クスコで掘られまくって感じちゃうなんて……虚弱体質な役立たずなのに生意気だわ」

美希は腸液まみれになったクスコをそっと肛門から引き抜くと、低いベッドの上に上がり、ビンビンに勃起しているペニスへ革靴の足の裏を押し付けた。

「チンポまでこんな固くしちゃって……変態なの？　んん？」

『グリ！……グリグリグリッ！』

「うっ！？……や、やめて痛いい……」

「最近あたしに怒られまくってムカついてるんじゃないの？そんな

相手にこんなことされて勃起までしちゃうって……ほんと哀れな男よねぇ？……やめてください美希様……って言え」

目を細めてそう言いながら更に強くペニスを踏みつける美希。

「痛いいいっ！！……や、やめてくださいさい美希さまっ！　お願いしますううっ！」

「あはは……ほんと情けないカス男ね」

『……スコスコ……スコスコスコスコ』

今度は力を抜いて軽くペニスを擦り付け始める。
前後にシゴくように足の裏で擦り付けられ、無念ながらも再びフル勃起してゆくペニス。

「うふふ！　美希ちゃん得意の足コキだ！　この前辞めたバイトのオッサンなんかー分でイカされちゃってたもんねぇ♪」

「幸子さんだって足の裏でバイトのオバハンをイカせてたじゃん？あれから幸子さんに責められるのが癖になって何度も責められるよう嘆願してくるんでしょ？」

「そうそう。今日もその女ここに呼んでるから。そろそろ来る頃かも」

「ええっ！？　拓実を責めてる時に石田のオバハンまで呼んじゃったの！？」

「美希ちゃんの邪魔はしないわよ。私は私で石田瑠美子を責めて愉しむから♡」

その時、ドアが開いて３５歳になるアルバイト店員、石田瑠美子が入室してきた。

「失礼します……あ！　お取込み中ごめんなさい」

「いいのよ。この男は美希ちゃんが目をつけた奴隷だから」

「はい。今夜も私のこと……虐めてくれますか？……幸子さま」

「もちろん。だからこうして呼び出してるじゃないの」

よく分からない展開に目を丸くしながら怯える二十歳の相原拓実。少しの間だったが、一緒に働いていた仲間である石田瑠美子さんが、まさか店長の奴隷に自ら志願していたとは夢にも思っていなかった拓実であるが、その自分も散々ムカついていた女子高生相手に……屈辱の足コキされながらも、フル勃起させているのであった……。

虚弱体質（前編）（後書き）

嫌いな女性から職場でも、力でも打ちのめされて、更に凌辱を受ける最中、まさかのもう一人の奴隷の出現に困惑する拓実。

泣くほどの悔しさを味あわさせられながらも、その嫌いな相手からの足コキにより、フル勃起させてしまうカオスな心境に陥った大学生の運命はいかに……？

虚弱体質（中編）（前書き）

ついに辞める決心を固めて女店長に気持ちを伝えるが、時を同じくして自分を虐めた張本人の女子高生だけでなく、中年女性アルバイトの石田瑠美子までも居合わせることになる。

虚弱体質（中編）

「さてと……瑠美子！　まずはいつものように裸になりなさい」

「はい幸子さま」

言われるがままに淡々と全裸になってゆく３５歳の石田瑠美子。
用意された二つ目のベッドの上で四つん這いになるよう命令される。
その姿を見ながら美希は拓実のペニスへの足コキ速度を速めた。

『スコスコ…スコココココココッ！』

「ううっ！……き、気持ちいい……で、出ちゃう！」

「はぁ？　何を出す気なの？　まさかムカついてる女になんか足コキされて射精なんてしないでしょうね？」

「で、でも……ごめんなさいっ！」

『ドピュッ！……ドピュピュピュピュピュピュウッ！』

「きゃっ！　マジかお前……」

美希は足の裏に付着した精液を拓実の顔面へ擦り付ける。

「ほら、舐めて綺麗にしてくれる？」

「うああ……んん！……ペロ、ペロ」

「ホントに舐めてる……きしょ」

ブレザーとミニスカートの制服は、たとえ嫌いな相手であろうが男の拓実にとっては悲しくも反応してしまう。

美人な上にスタイルも良く、スラリと伸びた真っ白な長い脚を真下から見ている状態。

真っ白なパンツまでも丸見えだった。

「え？　足の裏舐めさされてるのに勃起してんじゃん！？　……もしかしてあたしのパンツ見たからかな？　ホントお前にはキッツいお仕置きが必要のようね」

「ううう……ご、ごめんなさい美希さま……」

フル勃起したペニスをヒクヒクさせながらも、美希のパンツを凝視してしまう自分のことを少し嫌いになり始める拓実だった。

『あれだけムカついた女にボコられて……こんな辱めを受けさせられて……脚とパンツ見てチンチン勃てちゃうなんて……なんて最悪なんだ僕は……くそう』

反省的な思考を巡らせながら、固く目を閉じたまま現実逃避に入る拓実。
隣では、店長による瑠美子へのスパンキングが開始された。

『パァンッ！！……スパァンッ！！』

「ひっ！……んあっ！」

ベッドに拘束されている拓実の位置からも、みるみる内に真っ赤に染まってゆくお尻が見えた。
見た目とは裏腹に、女店長である幸子の平手打ちも強力で、数十回、百回と叩かれる内に石田瑠美子は泣き出してしまう。

「うぇえええん！……痛いい……うぇえええん！……ぐすん、ぐすん」

「自分が望んでるのに泣いちゃうの？変な女ね」

拓実は、この三人は何か狂ってるように感じながら、頑なに目を閉じてペニスの勃起を鎮めようと試みるが、現実逃避から引き戻される事態が訪れる。
美希が拓実の顔へ背中を向けて、ちょうど腹の上辺りに座り込んだ。

右手にはハエ叩き型の革の鞭が握られている。

「ま、まさか……」

『スパァンッ！！』

「ぎぃやあああっ！？」

『ビシィッ！！』

「いでええええっ！！　やめて痛いいいいいっ！！」

美希は微笑みながら振り向き、そっと呟く。

「平手打ちなんか比にならないわよコレ♡」

「んぐぐぐぅ〜！　ほ、ホント痛いです！　やめてください美希さまっ！　お願いですうっ！」

「あはは♪　こんな楽しいことやめるわけないでしょ！」

『パァンッ！！　スパァンッ！！』

「んぎいっ！！　はぎゃあっ！！」

M字開脚して勃起したまま、激しく臀部へ打ち付けられる革の鞭。

拓実の絶叫も虚しく、美希は一向に手を止める気配はない。

「美希ちゃんの方は凄まじいわねぇ♡あまりに激しそうでチラ見してるだけで濡れてきちゃった私……コイツみたいに」

『グチュグチュ……グチュチュチュチュチュ』

「あはんっ！　あんん」

びしょ濡れになっている石田瑠美子の膣口へ中指を突っ込み、ジースポットを掻き回しながら卑猥な音を立てさせる幸子。

「叩かれてこんなになっちゃうなんて……瑠美子～？　ホントあなたは変態だわ」

そう言いながらズボンとパンツを脱ぎ捨てると、仰向けに寝かせた瑠美子の上から逆向けに重なり、シックスナインを強要する。

「舌を奥まで突っ込んで」

「はい幸子さま」

幸子も感じながら瑠美子の膣口へ舌を這わせる。

美希は店長のレズプレイをチラ見しながらも、更に激しく拓実の

お尻を打つ。
お尻の右、左、太もも付け根と、股間が全体的に真っ赤になるよう満遍なく叩きまくる。
ついに数カ所お尻の皮が裂けて、鮮血がベッドへ伝い落ちてゆく。

「あらら……なんかケツから汚い血が流れてきちゃったよ？」

「ぐわあああああっ！！　痛いいいいっ！！　うおぉーん！　うおぉーん！」

「二十歳の大人の男が本気で泣くなよ～。情けなーい！　アハハ♪」

その激痛は凄まじく、本気で声を上げて号泣してしまうほどであった。
美希は鞭のグリップから手を離し、先端の扇型の方を握りしめた。
そのまま先端が丸く円柱形になっている鞭の柄の部分をそっと肛門へ押し当てる。

「この鞭って便利なのよ。柄の部分はマンコやお尻に突っ込めるんだ♡

『グリッ！……ズブブブ！』

「あおおおっ！？　痛いい……」

「柄の部分だけで20センチぐらいかな？　全部飲み込め……ほらあっ！」

『グリッ！……ズボボボボボッ！！』

「ふぎいいいいいいっ！！」

Ｓ字結腸を突き破りかけるほど深く突き刺す美希。
そのまま出したら抜いたりを激しく繰り返す。

『ズッ！　ポコンッ！　ズッ！　ポコンッ！』

「はぎっ！　んぎっ！　ひっ！　はうっ！」

「アハハハ！　出し入れするたびに変な奇声あげるの面白～い♡
肛門のヒダヒダが窄んでめり込んだり手前に突出したり動きもマヌケで楽しい♡」

肛門の内部、直腸全体に激痛が走る中、美希の激しい動きは止まることがない。
萎み切ったペニスまでもが上下に揺れ、下腹部にペタンペタンと何度も打ち付ける。

「アハハハハハ！　だから笑わせないでって！　アナル掘りまくられてる反動でチンポまで激しく揺らしちゃって♡　ホント面白い！
クスクス♪」

美希が革の鞭の柄をようやく肛門から引き抜いた頃には、拓実は激痛のあまり全身を震わせて号泣していた。
血の混じった腸液がトロトロと垂れ流れてくる。
「やだぁ。何垂れ流してるのぉ？　またあたしのアナルファックで感じちゃった？　もしかして？」
「美希ちゃん！　長い柄をそれだけ激しく出し入れしたら感じてなくても生体反応で分泌しちゃうわよ？　うふふ！　もうその子の直腸ズタズタかもね♡」
美希は再度クスコを握りしめ、ヒクヒクと波打つ肛門へ押し当てる。
「本当にズタズタになってるか……あたしが中身……診てあげる♡」
「ぐすん、ぐすん……無茶苦茶痛いですです美希さま……お願いですからもう許してくだささ……」
「だめ。いっくよぉ？　それえっ」
『グリッ！……ズボボボボッ！！』
「はうあっ！？」
「さぁ全開に拡げちゃうわよ？覚悟はいい？」

『グニュウウ……クパァ～！』

「んぎいいいいっ！！　痛いいいいっ！！　裂けるうううっ！！　やめてええええっ！！」

膣用の太いクスコがほぼ根元まで挿し込まれた。
更に開閉レバーを全開に握りしめ、直腸は張り裂けんばかりに拡張させられる。
小型のペンライトを手にして、直腸の奥の奥まで覗き込む美希。

「うわぁ～。直腸真っ赤になってるわ。血が出てるとこは……一番奥の突き当たりね。S字結腸ってとこ」

「はぁ、はぁ、痛い……お願いですから閉じて下さい……さ、け、ちゃいますぅ～。痛いいい！」

美希は閉じたり拡げたり何度も繰り返して拓実の泣き顔を見て楽しんだ。
やがてそれにも飽きたのか、クスコを抜いて反対側の拓実の顔の方は向いて座り直した。

「お尻犯すのも飽きちゃった！……あのさぁ、お前の顔面ボコボコになるまで殴っていい？」

「ひっ！？　や、やめてください！」

『パンパンパンパンッ！！』

激しい往復ビンタを打ち込むと、再び号泣し始める拓実。
その反応に興奮してしまうSっ気全開モードに入った美希は、拳を握りしめて殴りつけることに変更。
両手で何度も何度もタコ殴りにしてゆく。

『バキバキ！　ガスッ！　ボコッ！　バキバキッ！』

「ほげえええええっ！！　やめてええっ！！　死ぬ死ぬ死ぬううう
うっ！！」

「アハハ！　なら死んじゃえよ♡」

笑いながら何度も殴りつける美希の姿に、石田瑠美子は本気でビビってしまい、小便を漏らしてしまう。
殴られてる本人も、勢いよく小便を漏らしていた。

「お漏らし？　誰が掃除するのこれ？」

ベッドから立ち上がって再度M字型に開かれている股間側へ移動すると、そのまま右脚を大きく後方へ振りかぶる。

『グシャッ！！』

「ピギィッ！！！！」

美希の思いっきり蹴飛ばした標的は……金的だった。
革靴の爪先が拓実の睾丸へ直撃。
一つは辛うじて助かったが、右の睾丸は完全に潰れてしまう。
顔面タコ殴りでも意識は保っていたが、ついに泡を噴いて気絶してしまうのであった。

ビクビクと全身の痙攣が始まるのを見て、少し不安になった美希が、幸子店長へ問いかける。

「なんかケーレンし始めたんだけど？　大丈夫かな？」

「キンタマ潰したら数%の確率で死んじゃう人もいるって聞いたことあるわ。ちょっとヤバいかも……」

「あばばばばば！……ぶくぶく……ぶくぶく」

「おーい！　ここガッツリ潰れちゃったねぇ？　泡吐いてる場合じゃないよぉ？　大丈夫かぁ？」

美希はそう問いかけながら潰れた右睾丸を指で摘み、グリグリと破壊された精巣の感触を陰嚢越しに確かめていた。

「うわぁ～。ホントぐっちゃぐちゃだわキンタマ……左側は腫れ上

がってるけど大丈夫みたいね」

両手で二つの睾丸を何度も揉みながら泡を噴いて痙攣する拓実を見つめる。

「もし死んだらバラバラにして夜中に埋めに行きましょう」

「え？　手伝ってくれるの？」

「当然よ。私までそんな奴のために捕まるの嫌だし……瑠美子！　あなたも手伝いなさい」

『バッコンバッコンバッコンバッコン！』

「あんあん！　あはあはっ！　……は、はい幸子さま」

ペニスバンドでバックから犯されながら……涎を垂らしながら幸子に返事する瑠美子。

「よし。よく言うこと聞く賢い奴隷だわ。ご褒美にイカせてやるよ」

そのまま激しく腰を振られて潮を噴きながらイッてしまう。

――――その時だった。

大きな痙攣はようやく治まり、目を見開いたまま微動だにしなくなる拓実。

「幸子さん……コイツついに死んじゃった」

「え？　まじかぁ～。殴りまくっても死ななかったのにね」

「キンタマって……ホント男の急所だったんだ」

人の死を前にしても意外なほど冷静な幸子と美希に、瑠美子は恐怖を隠せない。

だが同性の幸子に惚れ、更に幸子に責められることでしか興奮できない性癖を持つ自分も存在しているため、警察にチクるつもりも誰かに通報するつもりも毛頭なかった。

「倉庫から電動ノコギリ持ってくる」

「そんな便利なものあるんだ」

「ＤＩＹ好きなの。庭の柵だって私の手作りだし」

「へぇ～。凄いなぁ幸子さん」

一階の倉庫へ階段を降りてゆく幸子。

その間も美希は遺体の睾丸を揉みながら開いてゆく肛門を見つめ

ていた。

「死んじゃったらお尻の穴開いちゃうんだね？」

「え？　あ、そうなの？」

「ちょっとこっちにきて」

「ちょっと服着るから待って」

「はよ来いやババァ！！」

ホールでは敬語で話してくれていた女子高生バイトの美希が、まさかこんな態度を変えてくるとは思いもしなかった石田瑠美子は、思わず震え上がってしまう。

「ひっ！？……す、すぐ行きます！」

そのまま仕方なく、素っ裸のままで美希の隣に小走りで移動すると、更なる命令が下る。

「ピンク色で綺麗なチンポしてるよねコイツ？」

「は、はい」

「あのさオバサン。今日からあたしのことは美希様と呼んでくれる？」

「は、はい……美希さま」

「アハハ！　そんなに震えてビビらなくてもいいじゃん？　ウケるぅ～」

心臓がバクバクするほどの恐怖を、１７も歳下の美希に植え付けられる瑠美子。

本能的にヤバいタイプと感じ取り、幸子同様逆らわないよう心に決めた。

「膝をついてコイツの正面に座って」

「はい」

「チンポ握って」

「え？　ち、ちん」

『パァンッ！！』

「ひぶうっ！？」

少しだけ聞き直した瞬間、強烈な平手打ちが左の頬を襲う。

「あたしから言われたことだけしろババア！！」

「は、はいっ！　ごめんなさい美希さまっ！！」

慌てて遺体のペニスを右手で握りしめる瑠美子。

「若い男のチンポに触れて嬉しいでしょ？」

「はい」

「舐めろ」

「！？」

聞き直すと更なる暴力が襲いかかることを学習していた瑠美子は、一瞬だけ固まるが素直に拓実のペニスを咥え込んだ。

「生々しいフェラやって見せて。大人のエッチを勉強したいの」

「ふぁ、ふぁい！……がぽっ！がぽっ！……クチュクチュ！」

「チンポ咥えたまま返事するなよババア！」

「ポコンッ！……ごめんなさい！……カポッ！　グチュグチュ」

恐怖に怯えながらも、美希の機嫌を損ねないための必死な遺体へのフェラが開始された。

「遺体とエッチなんて……なんかエロいわね♡」

「はい、電ノコ持ってきたわよ」

幸子が下から帰ってきた。

周りを見渡して、警戒しながらドアを閉める。

「ありがとう」

「さぁ分解しちゃおーか……って、あれ？　瑠美子、何やってるの？」

「石田のオバサンったらね、若い男の子だから死体でもチンチン舐めたいって言うから」

「え？　すっごい性癖ねそれも……」

美希の戯言を真に受けた幸子は、半ば呆れながらも隣へやってきてしゃがみ込む。

「ほら、舐めながらでいいからこの椅子に乗ってケツ突き上げて」

低いとはいえベッドの上の遺体のペニスを舐めているため、瑠美子の性器を弄るためには高さが必要だった。
丸くて低い椅子の上に膝を付いて座らせ、そのままフェラを続けさせる。
先ほどの尻叩きで真っ赤になっているお尻を揉みしだきながら生々しいフェラを見守る幸子。
美希もそっと右手を伸ばして、中指をピンと立てると、幸子の肛門へそっと当てがい、一瞬ビクッとなる反応を見てから、一気に根元まで突っ込んだ。

『グリリ……ズボッ！』

「んはあっ！？」

「フェラは続けててねオバサン」

「んんん、ふぁい……ペチャペチャ！」

『ズッ！　ヌポ！　ズッ！　ヌポ！』

第一関節まで抜いたり根元まで突っ込んだり、激しく出し入れさせながら直腸の感触を楽しむ美希。

「おいオバサン！　歳の割に閉まりのあるアナルしてるねぇ？」

「ううっ、んはっ、んんっ」

「うふふ。瑠美子をそんな虐めないで美希ちゃん」

「だって……コイツの顔見てたら、この死んだ男みたいに虐めたくなっちゃったんだもん……もっとやらせて」

「……いいよ。そうゆうわけだから今後美希ちゃんにもいたぶってもらいなさい。分かった？」

そう言いながら二本の指を膣口へ突っ込む幸子。
美希の肛門責めで微かに濡れてきている膣内を、更に激しく掻き回して大洪水にさせた。

『グチュチュチュチュ！……ズブ！　ヌポッ！』

「んんんんっ！！　んくうううっ！！」

『プシャー！！』

二穴同時責めで、フェラをしながらついに潮を噴かされる瑠美子だった。
二人はほぼ同時に指を引き抜くと、指に着いた便や愛液を拓実のボコボコに腫れ上がっている顔に擦り付けて拭き取ってゆく。

「ほら、オバサンのウンチと愛液顔に塗ったげるわ。死化粧代わりよ？」

「あはは！　美希ちゃんってばホント可愛い顔して残酷ねぇ……すっごい女子高生だわ」

「幸子さんには負けると思うけどなぁ……」

虚弱体質（中編）（後書き）

ついに殺害までも犯してしまう狂気の女子高生、岡崎美希。
大した動揺も見せずに、遺体の解体まで協力すると言い出した店長の小倉幸子。
それを手伝うハメになる石田瑠美子も、遺体損壊や隠蔽の罪を一生背負う事になってしまう。
異様なる人間関係を持つ女たちの数奇な運命は……。

虚弱体質（後編）（前書き）

異様な空気に満ちたイタリアンレストランの二階事務所。
後には引き返せない大罪を犯してしまった者たちの末路とは？

虚弱体質（後編）

「さてと。瑠美子！　とりあえず色んな汚物だらけの床をお掃除して綺麗にしようか？」

「はい。幸子さま」

「まだ服を着るなよ？」

「はい。美希さま」

水を汲んだバケツと雑巾を用意して、満遍なく床を雑巾掛けしてゆく瑠美子。

横を通り過ぎる度に、そのお尻を引っ叩く美希。

『スパァンッ！』

「あはんっ！」

「あはは！　色っぽい声だすなよオバサン。まだマン汁垂れてるよ？」

「ご、ごめんなさい……すぐ拭き取ります」

「もういいから拓実の死体、シャワー室へ運ぶの手伝ってくれる？」

「はい」

店長の幸子は上半身、瑠美子は脚を持ち、美希は腰と背中を持つ。拓実の遺体を掃除した床に落とさないように、無事にシャワー室へと運び込んだ。

電動ノコギリのエンジンをかける幸子。

「さてと……肘、肩、膝、太腿と四肢切断していくから、黒いゴミ袋に入れていってくれる？　血抜きをある程度行ってからね」

「はい」

淡々と切断作業をこなしてゆく幸子。
幸子自身も美希も遺体損壊作業は初めてであったが、嘔吐することもなく、ひたすら作業的にバラしてゆく。
瑠美子は何度も嘔吐しながら必死でバラされた手脚を袋に詰めていった。

「よし！これで手脚は切れたわ。次は……首ね」

「ちょっと待って！　首切る前にココ切らせて♡」

美希は萎れてフニャフニャになっている拓実のペニスを左手で握り締め、右手にカッターを持った。

「オバサンが舐めまくってるからフヤけちゃってるじゃん……とりあえず雁首落とすか。マヌケな死に顔を見ながら性器破壊タイム♡」

『ズッ！……ズズズ……スパァッ！』

手際よく雁首部分からカッターの刃を入れて、亀頭部切断に成功する美希。

「わぁ～！　切断面ヤラシイ～♡　ちんこの内部ってこんなになってるんだ」

「海綿体と尿道ね……性器解剖♪　私も本物を生で見るの初めてよ。生々しくてそそるわ♡」

頬を赤く染めながら陰茎の切断に妙に興奮する美希と幸子。
傍で恐る恐るチラ見する瑠美子は、いくら遺体のモノとはいえ、イタイタしくてずっとは見ていられなかった。

「次は根元から切り取ってと……よっ！」

美希は残った陰茎も、根元から切断し、それを縦方向に裏筋に沿って切り裂いてゆく。

『ズズズ……ズズズズズ』

「ほうら、裏筋に合わせて切ったら尿道が縦に見事にパックリんちょ♡」

「ほんとだ！　美希ちゃん凄ぃ♪」

何度も嘔吐しながら、半泣きになって後ろを向いてしまう瑠美子。

「おいオバサン！」

「おえ、おええ……は、はい？」

「はい？……じゃねぇわ！　キンタマ袋切り裂いて生の玉取り出しなさい」

「ひっ！　そ、それだけはご勘弁を……運ぶのは手伝わせていただきますから……切ったり裂いたりするのはちょっと……」

美希は切り取った三つに分解された陰茎を床に置くと、ゆっくりと立ち上がり、瑠美子の髪を鷲掴みにして無理矢理立たせた。

「立て！　後ろ向いて股開け！」

「は、はい……こうです……か？」

「そうよ」

『ズドォンッ！！』

「ぎゃあっ！？」

白くて長い美希の脚が激しくしなやかに上方へ動いた。
その右足の甲が、的確に瑠美子の陰部へ直撃する。

「痛いいいいっ！！　いやあああっ！！」

「股閉じるな！　ほら、もう一回開いて」

「ううううう……やめ……て……ぐすん、ぐすん」

『スパァアンッ！！』

「んぎゃあああああっ！！」

蹴られるたびに絶叫する瑠美子だったが、美希のマンコ蹴りは容赦なく続けられた。
五回蹴り込んだ時には、小陰唇が数ヶ所裂けて、鮮血が太腿を伝い落ちてくる。

「あらあら……やり過ぎじゃないの美希ちゃん？　もうマンコ壊れ

ちゃってるわよ？」

「小陰唇だけじゃ許さない。クリトリスも潰れるまで蹴ってやるんだから」

「ねぇ瑠美子？　美希は言い出したら聞かないから……このままじゃ本当にオマンコぐちゃぐちゃにされちゃうわよ？」

「ううう……あーん！　あーん！……ぐすん、ぐすん」

「泣いてても許してくれないから。ね！　頑張ってキンタマ切開手術しちゃお？　ね？」

「ぐすん……わ、分かりました……幸子さまがそこまでおっしゃるのなら頑張ってみま……す」

女子高生の美希に散々性器を蹴り上げられ、小陰唇をズタズタにされながらも幸子の説得もあり、決意を固める瑠美子。

「ほら、カッター」

「は、はい」

「今度やらなかったら、クリトリス潰れるまでマンコ蹴りまくってやるからね？」

「ひっ！……は、はい」

瑠美子は震える手で泣きながらも、拓実の陰嚢を少しずつバラしてゆく。
潰れた睾丸と、もう一つの無事だった丸い睾丸……二つとも縦に切り裂いた陰嚢から無事に取り出すことが出来た。

「その潰れてないキンタマに繋がってる数本の管みたいなのも切って」

「はい」

『ズッ！……プチプチ！』

「あは♡　ウズラの卵みたい……食べろ」

「えっ！？……は、はい！」

一瞬、美希へ口返事しようと思い固まってしまうが、次は本当にクリトリスを潰されるとゆう最大級の恐怖が全身を襲ってきたため、何とか思い留まる。
勇気を出して、無事な方のまん丸な睾丸を生のまま口へ放り込んだ。

「よく咀嚼して食べなさい。吐き出したら分かってるわよね？」

「モグモグ……ぐちゃ！ぐちゃ！……モグモグ」

『プチュ！……トロトロ』

「あは！……キンタマ内部の精液が飛び出して口元から垂れ流れてるぅ！　エロいなぁ～♡」

「ううう……モグモグ……ごっくん！」

「お！　きちんと飲み込んだのね！？　やれば出来るじゃん♪　美味しかった？」

「お、おえ……な、なんか生臭いです」

吐き気を必死で堪えながら口を押さえてうずくまってしまう瑠美子。

「内臓も摘出して出来るだけ細かく分けましょうか」

「そだね。一度人間の解剖してみたかったんだあたし」

そう言いながら幸子から刺身包丁を受けとると、まずはヘソへ深々と刺し込んだ。

「臭そうなヘソね。こうしてやる」

『ズブッ！……ズボボボボボ！』

溢れ出す鮮血に更なる興奮を覚えた美希は、一気にペニスの切断面まで切り裂く。
恥骨に当たって包丁は停止するが、止めどなく小腸が飛び出してくる。
『ムリュリュリュ！……ドロドロドロ！』
「すっごぉ～い！　少し切り裂いただけで、こんなに溢れ出してきちゃうんだハラワタ♡」
「さすがの私でも吐き気してきちゃった……凄いね美希は」
残酷さに感心する幸子をよそに、更なる非道を見せつける美希だった。
「でもね……腸と言えばやっぱり……こっちから引きずり出す方が興奮しちゃう♡」
『ズブッ！……ザクザクザクザク！』
お腹から抜いた刺身包丁を緩んで開いた肛門へブッ刺すと、円を描くように丸く肛門部分をくり抜いた。
「黒い菊……頂きぃ♡　次はねぇ……こうよ！」

『ドボッ！！……グリ！……ズルズルズルルルル！！』

くり抜いた肛門部分に右手を突っ込み、直腸を鷲掴みにして大腸を引きずり出してゆく。

一度は腹部から飛び出していた小腸も、その傷口から再び腹部へ引っ張り込まれて再び肛門からズルズルと引きずり出されていった。

「それそれそれえっ！　あはは！　どんどん出てくるわねぇ！　生温かくて気持ちいい～っ♡」

ほとんどのハラワタを抜き取り終えると、今度は会陰部を深々と切り裂き、前立腺を抉り出す。

「玉だけじゃなくてココでも精液作ってるのよ。知ってた？」

「ひっ！？……は、はい。一応知ってます」

牛や豚のレバーのように指先で摘んだ前立腺を目の前でブラブラ振り回される瑠美子。

恐怖で再び小便を漏らしてしまう。

「あーん」

「えっ！？……うごおっ！？……うぐぐぐうっ！！」

驚いた瞬間に、無理矢理口内へ前立腺を捩じ込む美希。

「キンタマ食べたついでよ。これも一応性器の類だから味わって食べなさい！」

「むぐぐ……むしゃむしゃ……クチャクチャ……ごくんっ！」

無理矢理噛んで何とか飲み込んだ瑠美子だったが、狂ったように泣きながら倒れ込んでしまった。

「ヤダなぁ……オシッコまで漏らしてだらしない女ね」

全ての性器と肛門までくり抜かれた哀れな遺体は、五臓六腑全ても摘出され、美希と幸子の興味の目に散々晒されたのち、ゴミ袋へ詰め込まれた。

「さてと……私の元旦那が廃棄物処理の会社やってるからそこへ運んで地中深く埋めてもらいましょう。骨になって土に還るまで出てくることはないわ」

「頼りになるぅ！　ありがとう幸子さん！」

――――一ヶ月後。

小倉幸子の経営するイタリアンレストランは、この日もほぼ満席で賑わっていた。

「ほら、仕事中にイッちゃえ！」

『グチュグチュ！……クチュチュチュチュチュチュ！』

「あんっ！！　あはああああんっ！！」

「あまり大きい声出さないでよ……みんな見てるじゃん」

「はぁ、はぁ、ご、ごめんなさい美希さま……」

洗い場で皿洗いをしながら美希に指でイカされる35歳のベテランバイト、石田瑠美子。
その時、ふと低く重たい声がキッチンに聞こえる。

「小倉幸子さんだね？」

「え？　あ、はい」

「アルバイトに雇ってる岡崎美希さんも、本日来ておられますか？」

二人のスーツ姿の男が立っている。

その男の声は、皿洗い場にいる美希にも届いていた。

店長の幸子は何かを感じ取ったように、冷めた表情で瑠美子の方を見つめる。

「瑠美子……お前まさか」

「ひっ！！……も、申し訳ございません！！　許してくださいいいっ！！」

泣き崩れてその場にヘタリ込んでしまう石田瑠美子を見下ろしながら、幸子と美希は低い声の男、二人組の元へ静かに歩み寄った。

「もう勘付いてはいると思うが……小倉幸子、岡崎美希、二人に殺人、遺体損壊、遺体遺棄の容疑で逮捕状がでている。東部中央警察署までご同行願えますか？」

「……はい。美希、行こう」

「うん。……このクソババアがっ！！……ペッ！」

泣き崩れている石田瑠美子へ唾を吐きかけながら二人組の男の元

へ美希も歩み寄る。
　二人は警察署で散々事情聴取された後、翌る日に特殊任務省の管轄する残酷処刑島へと送られた……。

――――――――残酷処刑島。

「や、やめてっ！こんなの絶対いやっ！！」

　小倉幸子は横向けに架けられた直径２０センチほどの丸太へ抱きつくように金具で拘束され、下には薪が置かれている。
　本日の拷問処刑執行人は、女子高生リーダーの神崎美央とその同級生であり親友でもある唐田由衣夏だった。

「人が生きたまま焼かれるのって……見たことある？」
「あ、あるわけないじゃん！……よくもそんな酷いことができるものね！？」
「岡崎美希……あなたに言われるとは思わなかったわね」
　男子大学生を殺しておいてよくもヌケヌケとそんなことを言えたものだ……と半ば呆れながら、薪の傍にスタンバイしている由衣夏

に合図を送る美央。
丸焼き刑に処される小倉幸子から、５メートルほど離れた位置に大の字型の杭に拘束されている岡崎美希。
幸子と違い、紺色ブレザーの上と白いリボン、茶色と黒のチェック柄のプリーツミニスカート、黒い靴下に茶色の革靴と言った完全な女子高生の制服姿であった。
由衣夏の点けた火は少しずつ薪全体に燃え広がり、幸子の背中を炙り始める。
「ギャアアアアッ！！　熱い熱い熱いいいいっ！！　助けてええええっ－！－！」
チリチリと背中やお尻の肉を赤く白く……黒く変色させてゆく。
「や、やめてあげてっ！！　お願いっ！！　どうして一人殺したくらいでこんな恐ろしい拷問付きの死刑にならなきゃいけないのよっ！？」
美希の叫び声に一瞬朝焼けの空を見上げる美央。
そのままそっと問いかけた。
「一人殺したくらいで？……何の罪もない若い人をバラバラにして

棄てに行って……だけだと思ってる？」

「え？」

「あなたがイタリアンレストランで働く数年も前から、気に入ったバイトや社員の男女を何度も手にかけてる。あなたはまだ一人だけだけど……彼女はもう五人ほど殺してるわ」

「ええっ！？……そ、それであたしが殺しちゃった時もあれほど冷静だったってこと……」

「そうね。少なくともあなたと違って完全な殺意を持って最終的に殺してるわ。拘束して性的な拷問をして……最後は知っての通り電ノコで肉塊バラバラのドゥーイットユアセルフよ」

「え？」

拷問処刑、炙り殺しになった理由を淡々と説明しながらも焼けこげてもがき苦しむ幸子の姿を見つめ続ける美央。

「由衣夏！　まだ生きてるうちにやっちゃってくれる？」

「ほーい！」

『ガチャガチャ……シャキーン！』

由衣夏は得意の武器である電撃警棒を、１メートルほどにまで伸

ばして幸子の背後に立つ。

「ぐわあああああっ！！　ぎひいいいいいっ！！」

「幸子さん……熱くてもはや喋ることもできないみたいね？もう放っておいても助からないレベルの火傷負ってるからついでに取っておきのをくれてあげるわね♡」

背中とお尻と脹脛……身体の後ろ側は殆ど黒く焼けこげて、肉と皮が溶けながら残酷処刑島の乾いた地面に滴り落ちている。

膣口と肛門からも生焼けになっているハラワタを象徴するように白い煙が噴き出してきていた。

「あらぁ？　オマンコからドロドロしたもの垂れ流れてきてるよ？焼けて溶け出した子宮ちゃんかなぁ？　もう使うこともない歳だし今日死んじゃうし関係ないか？　あはは♡」

『シュウウウウッ！……ドロドロ……ベチャベチャ！……ジュウウウウウウッ！！』

煙と共に性器から垂れ落ちるミンチのような子宮の生焼けの肉片は、次々に薪が燃え盛る炎の中へ落ちて、瞬時に焼かれていった。

「汚い子宮噴き出させないでくれる？醜いオバハンには更なるお仕

置きが必要ね？」

由衣夏は電撃警棒の先端を幸子の肛門へゆっくり挿し込む。

「ほら、メスブタ……豚の丸焼きのように肛門から串刺しにしてあげる♡　ここかなぁ？　オバハンの汚いケツアナは……」

『つぷっ！……ズブブブブブブッ！』

「あぎゃあああああっ！！　ひぎいいいいいっ！！」

肛門から胃まで串刺しにしてしまうが、焼かれる痛みが激しすぎて大した反応の違いは見せなかった。

焼かれ始めと同じように、断末魔の叫び声を上げながら首を激しく前後左右に振りながら、もがき苦しむのみである。

『カチッ！……バリバリバリバリバリバリバリバリッ！！』

「はぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃああああっ！！！！」

「内側からも焼かれる気分はどう？」

『ビクビクッ！！　ビックンビックンビックン！！』

丸太に拘束されて丸焼きにされながらも激しく痙攣し始めるのが

周りの全員から確認できた。

「喉まで挿し込んで……更に鼻腔まで突っ込む！　ここで電撃最強スイッチオン♡」

『バリバリバリバリッ！！……ポコポコンッ！！……でろんっ！』

二つの目玉が煙を噴きながら飛び出し、鼻と口も爆発して千切れかけた舌が飛び出す。
この瞬間、幸子はついに絶命を許された。
そのまま溶けるように顔と頭が蒸発してゆく。

「あは！　死んじゃったか今ので♪　ほらほらほらぁ！　もっと焼けこげて溶けちゃえ〜♡」

『バリバリバリバリッ！……ジュウウウウウウウウッ！』

「やだ……ホントエグい顔ねぇオバハン？……あの世で殺した人達にきちんと詫びなさいね？」

腰に手を当てて一部始終を見ていた美央が、笑顔で由衣夏へ敬礼する。

「任務完了ご苦労様」

「はーい！　ありがとう美央……ソイツはどうやって殺すの？」

美央はふと隣に拘束されている美希の方へ振り向く。

『ブルブルブル……ガクガクガクガク……プシャー！……トロトロ』

「あら！？　すっごく全身バイブしちゃってる！？……おまけにお漏らしかぁ……可愛いミニのプリーツスカートもビショコだねぇ？」

まるコゲになってもはや原形が何だったのかもわからなくなった真っ黒な肉塊が丸太から薪の灰の中に落ちて埋まり込んだ。

「この遺体もアイツらが片付けにきてくれるのよね！あはは……大変そう」

「フン！　それが普段役に立たない海原さんと川原さんの仕事だからね」

美央は、二人の同業者をバカにしたように軽く罵る。

そのまま大きく目を見開いたまま震えが止まらず放尿を続ける少女の前にしゃがみ込み、濡れた白いパンツを膝まで脱がす。

大の字型に拘束されているので膝から下までは脱がせない為、ナイフで端を切り、足首までずり下ろした。

プリーツスカートもナイフで切り、地面に落とすと、美希の性器が丸見えになる。

「さてと。あなたの拷問始めようか？……美希さん」

「ひっ！？　ひぃいいいっ！！　やめてお願いっ！！　やめてえええええっ！！」

中指をそっと膣口へ這わせ、ゆっくり挿し込んでゆく。

「とりあえず……あたしたちの前でイッてみよっか？　由衣夏！お願い」

「はーい！　こんだけビビってたらいくら美央の指技が冴えてってもイケないわよねぇ？　良いものあげるからね」

『プツ……プチュウウウウウウ！』

「ひっ！？　な、何を！？」

「アヘイクだよ。男女問わずどんな状況でも心境でもアソコが超敏感になっちゃって……すぐイッちゃう身体になっちゃうシロモノ♡」

「ひ！……こ、これから殺されるのに……気持ちよくなるわけない……じゃん……」

『グチュッ……ベリッ！』

「痛あっ！？」

ついに美央の中指が美希の膣へ根元まで突っ込まれた。
ゆっくり流れ出る鮮血。

「へぇ～。まさかあれだけ残酷に男の人殺したのに……処女だったなんて笑えるわね？」

「へ？　ソイツ処女だったの？」

「うん。指先で膜を破る感覚あったよ。まぁ処女でも膜自体完全に塞がってる訳じゃないんだけどね」

美希の顔がどんどん赤く染まってゆく。

「うっ、うんんん！……いや……あ、あん」

「我慢しなくていいのよ？　死ぬ前に天国味合わせてあげる♡」

『クチュクチュ！……グチュグチュ！』

「あはあっ！？……あ、あへえええっ！！」

美央の指がゆっくり、少しずつ激しく動き始めた。

「アハハ！　聞いた由衣夏？　ついに言い出したよ……アヘって♡」

「うふふ。ホントよく効くなぁアヘイクは♡」

由衣夏もしゃがみ込み右手の人差し指を美希のアナルへ激しく突き刺した。

『ズボッ！』

「はううっ！！……アへ……あへぁへあへえっ！！　気持ちいいっ！！　あ、あたしをもっと気持ちよくさせてええええっ！！」

そのまま美央と由衣夏の膣と肛門責めにより、大量の潮を噴きながらオーガズムに達してしまう美希だった。

「イックウウウウウ！！　あはあああああっ！！」

「早くイッちゃえよ！」

冷たく言い放つ美央。

『ビクビクッ！！　ビックンビックン！！　プシャアアアッ！！』

脱力感全開で激しく早く呼吸をする美希。
人生で味わったことのない快感……オーガズム……同性でも責めることしか興味のなかった美希に変な性癖が目覚めようとしていた。

「もっと……あたしを……イカせてください」

「あたしは神崎美央。この子は唐田由衣夏」

「み、美央さま……由衣夏さま……まだあたし死にたくない……お二人の奴隷になりますので命だけは助けてください……お願いしますぅう！　えーんえーん！　まだ死にたくないよおお！！」

美央はナイフを手に持ち、美希の目を覗き込む。
本気で生に執着する、生きた目の輝きをしている。
ナイフで拘束バンドを切り、大の字型磔から解放した。

「お願いします！　許してください！」

下半身裸のままで、土下座をして赦しを乞う美希。
その後頭部へ右足の裏を乗せて、グリグリと踏みつける由衣夏。

「ダメだよ。あなたは今から私の電撃警棒と、美央の氷の槍で二穴串刺し刑で地獄の苦しみの中……死んでいくの」

「ひっ！……ごめんなさいごめんなさいごめんなさいいいいっ！！　勘弁してくださいいいっ！！　何でも言うこと聞きますからあっ！！　えーんえーん！！」

口に土が入るほど踏みつけ、踏み躙られても謝り続けるしかできない美希。

『カチ！……ブイイイン……ピキピキピキピキーン！！』

みるみる内に美央の手に握られたグリップから氷が伸び、氷の槍が形成されてゆく。
全体を1メートルまで伸ばして先端を鋭利に尖らせた。

「せめて焼かないであげる。前と後ろも好きな方選ばせてあげるわ」

「え？……ま、前と後ろって……どうゆう……」

『グシャ！……グリグリ！』

「うごおおおっ！！　ガリガリ」

由衣夏に更に強く踏みつけられて、口の中が砂だらけになってし

まう。

「マンコかケツ穴！……どっちから氷の槍ブッ刺してほしいか選べって言ってんのよ！」

「はぎいいい……い、イヤあああっ！！」

「由衣夏も口が悪くなったよね？……ケツ穴とかブッ刺すって……ガラ悪ぅ～」

「えへ……えへへ……そうかな？　ごめんごめん」

簡易ベッドが用意されて、うつ伏せで寝かせられる美希。股を開いてお尻を突き上げるような体勢で拘束してゆく二人。

「上の制服は、そのまま脱がさないでおいてやるよ」

見下ろしながら、吐き捨てるように呟く由衣夏。

「下半身だけ服剥いて串刺しってのがまたエロいんだよね～♡　早く臭い穴のどっちかにお邪魔したいって言ってるよこの槍が」

美央はエッチな表情を浮かべながら氷の槍をゆっくり撫でる。

「さぁどっちか選びなさいっ！」

『ツプッ！』

「ぎゃあああっ！？」

軽く先端のみ肛門へ挿し込む美央。
一気に突っ込まれると勘違いした美希は目が飛び出すほど大きく見開いて驚き、奇声をあげる。

『ズブブ！』

「んはあっ！？　やめてやめてやめてええっ！！　美央さまあっ！！　お願いしますううううっ！！」

「もうこっちでいいんじゃない？　アナルからで逝こうよ？」

突き出したお尻を、ビクビク揺らしながら号泣する美希。
美央の手元は、ゆっくりと奥へ動かされる。

『ズボボ！……ズププププ！』

「いやあっ！　お尻が熱いいっ！　つ、冷たいいいいっ！！　ヒャアアアアッ！！」

直腸は擦れて熱く感じるが、氷の槍だけに相当冷たい。
同時に熱と冷を感じる妙な感覚に美希は短い髪を振り乱して更に嘆願する。

「美央さま由衣夏さま！　ホント許してくださいぃぃっ！　一生ついていきますからあっ！　わーんわーん！！　あたしを……殺さないでぇええっ！！　えーんえーん！！」

「うるさいわねぇホント……特別サービスで苦しまないよう一気に貫通させたげるから。ね？　覚悟して」

「イヤイヤイヤイヤアアアアッ！！」

『ズプ！……ヌポ！　ズプ！　ヌポ！』

「わーん！　あんっ！　えーん！　あひっ！」

残酷処刑島に、かつてないほどの命乞いの奇声が響き渡る。
お尻で感じさせられている為、泣きながらもあまりの気持ちよさに、ついついよがってしまう哀れな美希だった。
もうすでに太陽もほぼ真上に昇り、美希のお尻の白さが更に強調される。

「はぁ。美希は綺麗な顔と……見事なお尻してるねぇホント」

パーフェクトに近い美貌とボディラインを持つ岡崎美希へ少し嫉妬のような感情を芽生えさせる美央。
それを敏感に感じ取った由衣夏が思わず爆笑してしまう。

「アハハハハハ！！」

「ちょ、ちょっと由衣夏！　なにバカみたいな顔して笑ってるの！？　何かおかしなこと言ったあたし？」

「み、見事なお尻って……アハハハハ！！　何よその表現？どこかのエロオヤジみたい！　アハハハハ！」

美希の肛門へ数センチ挿し込んだり抜いたりを繰り返しながら、目を細めて美希を見つめる美央。

「あのさぁ美希」

「あん、あんん……な、なんですか……んん……美央さま……あはあんっ！」

相変わらず肛門に氷の槍が出し入れされている為、返事もついよがりながらになってしまう。

「アンタには中学生の弟がいるでしょ？」

「はい。ど、どうしてそれを？」

「ヤクザもケーサツもビビるとゆう特殊任務省を舐めないでくれる？」

「……申し訳ございませんでした……あんっ、あんっ」

「その弟って今人気絶好調のグループ、センチュリーボーイズのボーカルの岡崎海斗だよね？」

「!？……そこまで知ってたのですか……身内以外内緒にしてますが……あん、んん……そうです」

「えええーーーっ!？」

『ビクウッ！！』

由衣夏がより大きなリアクションでびっくりしたため、美希だけでなく美央までも飛び上がってしまう。

「ちょっと！　びっくりしたじゃない由衣夏！！」

「ごめーん！　だって……私センチュリーボーイズの歌よく聞いてるから……まさかコイツの弟があのボーカルの海斗だったなんて……あーびっくりしたぁ」

しばらく沈黙する三人……。

『ズプ！　ヌポ！　ズプ！　ヌポ！』

「あん、んんっ、いやん、あはあっ」

肛門を犯す氷の槍だけが動いていた。

「こら美央！　そんな話してる時ぐらいアナル責め止めてあげたら？」

「あ、ごめんなさい。ホントだね」

ようやく何気に長時間続けられた美央の肛門責めは一旦停止となった。

「その弟を毎週平日の一日で良いからあたしの家に泊まりに来させなさい」

「え！？　そ、そんなことは絶対無理です……姉のあたしでさえ月に一度数分電話できるかどうか……無茶苦茶なスケジュールなんです海斗は」

「ふぅん。可能ならアンタの処刑取りやめにするよう特殊任務省の長官に頼んであげようと思ったけど……じゃあ今度こそお口まで貫

通させてあげるわ。マンコかアナルか選びなさい！」

「ひぃっ!?　やめてっ！！　あ、ありがとうございます！　命を助けてくれるなら絶対そうさせます！　シャニーズ事務所を辞めさせてでも来させますぅっ！！　お約束します美央さま！！」

『シュウウウウッ……』

氷の槍をグリップのスイッチを操作して溶解させる。

「……アンタも海斗と一緒にくるのよ。可愛いから由衣夏も妹たちもみんなきっと可愛がってくれるから」

「はい！　週に一度ならあたしも喜んで行かせて頂きます！」

とにかく目の前でバイト先の店長を拷問処刑で焼き殺され、次は自分とゆう身の毛もよだつ恐怖から解放された美希は、拘束も解かれてその場にヘタリ込んでしまう。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……ふうう～」

安堵が強すぎて深いため息の後、地面の上で深い眠りについてしまった。

「スピ～……スピ～……」

「速攻寝ちゃったわね……美央……やってくれたでしょ？」

「ん？　な、なにを？」

「元々この子は……拷問処刑の対象じゃなかったよね？」

「え？　え？」

「まだしらばっくれる気？　キンタマ潰してたまたま相手が死んじゃったくらいで拷問処刑なんておかしいもん。初めから美希と弟が美男美女だから自分たちの奴隷にする気だったよね？」

「…………ご、ごめん。そこまで見抜かれてたか。あは、あはは」

「コイツ、死ぬほどビビってたわよ可哀想に」

「でも一人殺してる事実は事実だから……コイツは由衣夏と理沙の奴隷、海斗はあたしの奴隷で♡　200話記念だしいいじゃん♡」

「200話記念？　何のこと？……ふぅん。結局美月ちゃんにも乃亜とゆう奴隷がいて……私には理沙ちゃんがいて……一人寂しい美央は……アイドルの海斗に目をつけた、と？」

「お母さんを奴隷にすることできないしね～。あたしも退屈だったのよ。分かって♪」

「スピ～……スピ～」

なにも知らない加害者、兼被害者とも言える美希は、ひたすら残酷処刑島で眠り続けるのであった……。

ついに悪事が表沙汰にされ、隠れた主犯格であるイタリアンレストラン店長、小倉幸子は残酷にも生きたままの火刑と串刺し刑に処された。

本当は、平手打ち程度の軽い拷問刑のみだった岡崎美希。

弟がアイドルグループのボーカル海斗だと知った時から、脅して性奴隷にする画策を練っていた美央。

強かで小狡い作戦は見事に成功し、命を救われたと勘違いした哀れな美希は、美央を永遠の命の恩人として崇め奉る覚悟まで決めてしまうのであった……。

悲しすぎる現実である……。

更に不運なこの弟、海斗はこの先、姉の失態の為に手痛い巻き添えを食らい続けることになってしまうのであった……。

アイドル調教（前書き）

女子高生岡崎美希は、１７歳で初めてアルバイトを経験し、持ち前の気の強さから大人しい歳上のアルバイト店員の石田瑠美子にも、新人の大学生の相原拓実にもキツく当たっていた。

殺意こそなかったとはいえ、２０歳の相原拓実の睾丸を蹴り潰し、結果的にショック死させてしまう。

一般人を装いつつ、実は殺害行為に慣れていた店長の小倉幸子の提案で、二人は共謀して遺体をバラバラにして運び、埋めることを計画し、実行に移してしまった。

石田瑠美子は気が乗らないままその二人から、一部の作業を手伝わされる。

人を殺しておきながら事実を隠蔽し、沈黙を貫くことがどうしても出来なかった石田瑠美子の通報で事件は発覚。

小倉幸子は拷問処刑、岡崎美希は軽度の拷問刑とゆう警察省から託された特殊任務省からの刑罰執行命令が下り、小倉幸子はその人生を終えることとなった。

死刑を免れたのは神崎美央の情けのお陰と勘違いした岡崎美希は、アイドルの弟である海斗と共に、週に一度の神崎邸訪問を約束させられてしまうのであった。

アイドル調教

水曜日の真夜中、神崎邸を訪れる二人の姿があった。

『ピンポーン』

「こ、こんばんは。岡崎美希です」

「こんばんは！　岡崎海斗です」

玄関へ駆けつける美央と理沙と美月……そして母親の美琴。

美琴はＳＭ嬢の仕事服である黒いボンテージ姿、美央たち三姉妹は拷問処刑時に着る学校の制服姿であった。

「ちゃんと約束守ってくれたみたいね」

「はい。あたしの命を救って頂いたこと、一生忘れません。ありがとうございました」

深々とお辞儀をする美希と海斗。

「ホントにセンチュリーボーイズの海斗だ！　スッゴ♡」

次女の理沙が目を見開いて海斗の顔や全身を舐めるように見つめる。

「海斗くん、レギュラー番組の収録があったんじゃないの？」

美央の質問に一瞬顔を上げて固まるが、静かに俯きながら語りだす海斗。

「もう社長に会ってシャニーズ事務所は辞めてきました」

「え！？　週に一日だけでも……そうなるの？」

「はい。ほぼ毎日睡眠時間2、3時間しかなくて……目一杯スケジュール組まれてましたから……平日でも半日だけでも毎週休ませてくださいとなると……周りに多大な迷惑をかけるから辞めるしかないと言われまして」

「あーあ。勿体無いなあ……犯罪者の姉を持ったばかりに可哀想な海斗くん」

三女の美月は目一杯の皮肉を言いながら手にしている鎖を引っ張る。

美希と海斗の視界に飛び込んできたのは、四肢切断されて四つん這いで歩いてくる少女、乃亜だった。

「きゃあっ！？」

「うわあっ！？」

美希と海斗は、あまりの衝撃的な絵面をいきなり見せつけられたショックで後方へ思い切りのけぞってしまう。

「ほら、お前も挨拶しなさい」

「はい。この家で美月さまにペットとして飼われている乃亜と申します。よろしくお願いします」

一瞬でも人なのか動物なのかも理解できなかった美希と海斗は、ようやく冷静になり、素っ裸の四つん這いの物体が、人間の女性であることを改めて認識した。

「よ、よろしく……お願いします乃亜さん」

「よろしく……お、お願いします」

美希に続いて海斗も乃亜に挨拶する。

母親の美琴も含めて全員が自己紹介を終え、八畳ほどの客室へ通された。

そこでこの度この神崎邸で、二人の姉弟がどんな仕打ちを受けるか……などを詳しく美央から説明を受けることになった。

「ってわけだから……美希は母と理沙と由衣夏の奴隷。海斗はあたしの奴隷となって毎週水曜日……調教してあげるから覚悟してね？　この家の全員と、もうすぐ来る由衣夏に対してお前たち姉弟は……『さま付け』で呼ぶこと。いいわね？」

「う、うう……は、はい美央……さま」

「はい。美央さま」

かなり青ざめて恐怖を感じている様子の海斗。

対して美希の方は、美央が命の恩人と受け止めているが故に、神崎家からの並大抵の体罰や奴隷扱いなどは簡単に乗り越えられる、とさえ思える覚悟ができていた。

そこで扉が開き、金髪のポニーテール少女が顔を覗かせる。

『ガチャ』

「こんばんは〜……ありゃま！　ほんと岡崎海斗がいるじゃん！すっごーい♪」

「こんばんは」

美希と海斗はほぼ同時に挨拶を返した。

目を輝かせてアイドルの海斗を見つめる由衣夏だったが、理沙から残念なお知らせを聞かされる事となる。

「男前だから楽しく責めたいのだろうけど……あたしと由衣夏は美希とかゆう女子高生担当ね」

「あ！　そうか……待ちに待った美央の性奴隷だもんね。かなり羨ましいけど喜んで譲らせてもらうわ」

しばらく沈黙が続いたのち、美希がそっと口を開く。

「あ、あの……美央さま……海斗にはあまり痛い思いさせたくないのですが……」

「あのねぇ……調教しちゃうんだから多少の痛みくらいは勿論あるわよ」

「そ、そうですか……ごめんね海斗、あたしのために」

「いいよ姉さん。処刑を免除してくれたんだろこの方は……姉の命の恩人なんだから大抵のことは我慢するよ。心配しないで」

姉想いの弟に、拷問処刑人たちは感心して拍手し始める。

ほぼ冷やかし程度の賞賛ではあるが……。

「さてと……とりあえず一階には美琴さん専用の拷問部屋と、もう一つ空きの部屋があるから……そこであなたたち二人は私たちの調教を受けてもらうわ」

金髪のポニーテールを揺らしながら唐田由衣夏が美希の頭を優しく撫でる。

一瞬ビクッとなりながらも緊張からか身体を震わせる美希。

「お母さんとあたしと由衣夏は……お母さん専用の拷問部屋、美央ねーちゃんは隣の空き部屋で海斗の相手。これでいきましょ」

１２歳の次女である理沙が、美希と海斗に降り掛かるこれからの運命の場所を提案する。

「美希ちゃんの相手は私たち３対１じゃあ各々満足出来ないかもだから……３０分交代でいこうか」

美琴も意見を述べる。
理沙と由衣夏はそれに同意。
美央は一人で海斗を９０分みっちりと相手するとゆうことで話はまとまった。

「さぁおいで海斗」

「は、はい」

美央が海斗の手を引き、新しい拷問部屋となる空き部屋へ連れてゆく。

理沙が母である美琴へ先を譲る。

「お母さん、先にどうぞ」

「うん。先ずはスパンキングからとゆうことね？」

「そう。あたしは鞭打ち♪　由衣夏は……エッチな穴責め♡」

「それ残しておいてくれるんだ！　ラッキー♪　ってゆうか理沙ちゃんの鞭打ちってもしかして鋼の……死んじゃうかもよ？」

「あはは！　鋼の鞭なんか使うわけないじゃん！　あれは拷問処刑用だから。革の鞭で真っ赤になる程度に力も加減するよ」

ホッとして苦笑いする由衣夏。

そのまま美琴に手を引かれて、美央の隣の美琴専用の拷問部屋へ連行される美希だった。

――――美央の部屋。

「とりあえず素っ裸になってくれる？」

「う、うう……は、恥ずかしいです」

「男のチンポなんて見慣れてるから気にしないで。あ！　でもアイドルのチンポは初めて見ることになるけど！　あはは」

頬を真っ赤にしながら上の服、Ｔシャツ、ジーパンと脱いでゆく海斗。

残りパンツだけとなったところで手が止まる。

「こ、コレだけはやっぱり勘弁してもらえませんか……？　美央さま」

「早く脱げ！　殺すわよ？」

「ひっ！　は、はいっ！」

美央の怒号に本気でビビった海斗は、半泣きになりながらもパンツを脱いでいった。

パンツに引っかかっていたペニスは、脱がした瞬間上方向へ跳ね上がり、音を立てて下腹部へ衝突する。

『パンッ！』

「え？……なんでビンビンになってんの？」

「ご、ごめんなさい」

海斗は美少女アイドル顔負けレベルの美央の美貌に、一目見た時から心の中で惚れ込んでいた。

芸能界でもまだ一人もいない本気で自分のタイプな女性が、これから自分を責めることになるとゆう神崎美央だったのである。

その理想の女性に罵られ、陰部を無理矢理に見られる……その事実だけでフル勃起してしまうのも致し方のないことであった。

「あのさ……もしかしてあたしにアソコ見られて興奮してる？」

「うう……は、恥ずかしいですけど……そ、その通りです」

「あたしのことタイプ？」

「は、はい！　付き合って下さい！」

「え？」

いきなりの性奴隷アイドルからの告白に、一瞬頭が真っ白になる美央だった。

「アイドルから告られたら悪い気はしないけど……あたしとお前では人生での業が違いすぎるわ」

「ご、業？」

「今まで何十人、何百人ってゆう人間を殺してきている私と……人一人殺めたことのない海斗ではね……生きる世界が違うってゆうか……」

ゆっくり海斗へ歩みよる美央。
背後に回り込み、海斗の股間から右膝を入れる。
フル勃起して腹部にくっついているペニスとは対照的に、下部へぶら下がっている陰嚢を膝上で擦り付ける。

『スリスリ……スリスリ』

「ああっ！？……んんん」

「女の子にこんなことされるの初めてなのね……早くも先走り液が膝に垂れてきちゃってるわよ？」

「ご、ごめんなさい美央さ……ま……もっと擦って下さ……い」

「……変態」

美央の真っ白な膝で股間を……睾丸を何度も擦られながら海斗のペニスは最高硬度まで怒り勃つ。
あまりの興奮からカウパー液が更に溢れ出し、美央の膝を濡らしていった。

『パンパンパンパンッ！』

「んあああっ！？」

「美央さまの調教その1、キンタマリフティング♡」

前後に膝を擦り付ける動きから、上下に軽く蹴り上げる動きに変わり、海斗の睾丸は激しく上下に揺れる。

『パンパンパンッ！』

「うひっ！　痛いっ！　あはっ！　はうっ！」

気持ちいいだけではなく、たまに多少の痛みも感じる美央のキンタマリフティングは、海斗を更に興奮させていった。

「もっと、もっと強く蹴り上げてぇえっ！　み、美央さまぁ～」

「ホント変態」

『パシィンッ！！』

「ギャアッ！！」

海斗の反応に半ば呆れた美央は、思わずかなりの力を込めて蹴り上げてしまう。
激痛のぁまり股間を押さえてしゃがみ込んでしまう海斗。
美央もそのましゃがみ込み、四つん這いの体勢にさせると、大きく右手を振りかぶった。

『パンッ！！　パンパンパンパンッ！！』

「痛あっ！？　うぎぎぎぎっ！！」

美央の調教その2、お尻叩きの刑が開始される。
何度も激しく叩き込まれてゆく内に、ピンクから赤、赤から紫へと海斗の臀部はその皮膚の色を変えてゆく。

『パンパンパンパンパンパンパンパンッ！！』

「いだあああああいっ！！んあああっ！！」

ついに本気で泣き出してしまう始末だった。

「あら？　泣いちゃったの？　男の子はそんな簡単に泣いちゃダメよ？」

「ぐすん、ぐすん……だって……お尻の皮が裂けちゃうくらい痛いんですぅ～。ぐすん、ぐすん」

「そっか。オチンチンも萎えちゃったし……も一回大きくさせてあげる」

そう言いながら美央はガラス製の大きな浣腸器を取り出すと、グリセリン濃度の高い浣腸液を吸入し始める。

「５００ｍｌもあるけど全部飲み込みなさい」

『プス！……プチュウウウウ！！』

「ヒャアッ！？……冷たいっ！？　はうううううっ！！」

「ほらぁ……浣腸されながらもどんどん大っきくなってくねぇ？アイドルのくせに変態でヤラしいなぁ海斗は♡」

大きめの洗面器を床に置き、排泄を強要する。

「み、見ないで下さい……は、恥ずかしい」

「ダメ。さっさと出しなさい。出るとこ見ててあげるから」

「ううう……で、出ちゃううっ！」

『ブリ！　ブリブリブリブリッ！！』

美央の監視の元、大量の便を排泄してしまう海斗。
恥ずかしさのあまり再び泣き出してしまう。

「泣いても許さないわよ？　ほら……排泄物が完全に透明になるまであと４回は続けるから」

更に４回浣腸され、もう出すものが無くなるまで直腸、大腸内を搾り出されてしまうのであった。

「綺麗になった直腸へご褒美をあげるわ。お尻を突き上げなさい」

「はぁ、はぁ……は、はい」

少し余韻が残る腹痛と戦いながらも、震えながら必死でお尻を突き上げる海斗。
美央はそっと人差し指を肛門へ押し当てる。

「ここ？」

「ひっ！？」

『ツプ！』

「んあっ！？　や、やめてそんなとこに指なんて！」

「遠慮しないで。ココをとことん調教してやるんだから♪」

『ズボ！……ヌププププ！』

「やはあっ！？　んんんんっ！　美央さまの指が……汚れちゃぅうう」

「拷問とか処刑する相手にはね……基本ゴム手袋とか着けずに生指突っ込むの。あたしたち拷問処刑人は罪人を責めるにも敬意を持ってるからね」

美央の白くて長い人差し指が、ゆっくりと肛門を押し開き、深部の直腸まで挿入されていった。

『グリリ！　ヌポ！　ズボ！　ヌポ！　ズボ！』

「はうううううっ！！　痛いいいいっ！！」

指を激しく抜いたり挿し込んだりを繰り返すと、直腸内が湿り出してくる。
タイプの美女にアナルを掻き回された海斗は、興奮のあまり大量の腸液を分泌し始めた。

「やだぁ♡　かなり濡れてきちゃったわねぇ海斗のケツマンコ」

『くちゅくちゅ！　グチュチュチュ！』

「んはあっ！！……はうう……み、美央さま……き、気持ちいいです……」

前立腺を巧みに刺激して、浣腸している時よりも固く勃起させると、そのまま射精に至らしめる。

「ほら、イカせてやるよ。前立腺ケツマンコでね♡」

『グリグリッ！！　グチュチュチュチュ！！』

「んんんんっ！！　イ、イクうっ！！」

『ドピュッ！……ドクドクドクドク』

まさか肛門に指を突っ込まれてペニスに触れずにイカされるなど夢にも思ってなかった海斗は、頬を真っ赤に染めながら美央の方を振り返ると、いつの間にか数人の人影があることに気づく。

唐田由衣夏に背後から股を開く体勢で抱え上げられ、ペニスバンドのディルドを肛門へぶち込まれて、アヘ顔になっている姉の美希の姿であった。

「ね、姉さん！？」

「あはは！　親が小さい子供にオシッコさせる時、そうやって背後から抱き抱えてたわよね！」

由衣夏は激しく腰を振りながら、弟の見ている前で美希のアナルを犯し続ける。

その少し前から美央に指で肛門を犯される弟の姿も、姉の美希は由衣夏に犯されながらも見ていたことになるのだが……。

「美希は全身痣だらけけか……かなり鞭打ちで痛めつけたみたいね？」

「美琴さんと理沙ちゃんがかなり張り切っちゃって。私は穴掘り担当だったから、姉と弟に裸の見せ合いっこさせてやろうと皆で話し合って……しれっとこの部屋に移動してきたってわけなの」

理沙が美希の大陰唇に、両手の親指を添える。
美央たちの母である美琴は、後方で静かに今後の展開をワクワクしながら見守っている。

「おーい海斗」

「は、はい？」

「ほぉ～ら！　見てごらん♡」

『グリッ！……くぱあぁ～！』

海斗に見えるように斜め側に立ち、姉である美希の性器を全開に押し開いた。
小陰唇と膣口が捲れ上がるほど強烈に拡げられた。

「うっ！？……や、やめてください！」

「どした？　おねぇちゃまのマンコ見たことないの？　そりゃそーよねぇ。奥の奥まで理沙ちゃんが開いて見せてくれてるじゃん？あはは♪」

由衣夏は相変わらず美希のアナルを犯しながら恥ずかしそうに目を逸らす海斗を罵る。

「美央ねーちゃん、アレ実行する？」

「そうね。近親相姦ってなんかヤだけど他人のを見る分にはそそっちゃうからなぁ♡」

美央は海斗のお尻を引っ叩き、再度四つん這いにさせ、お尻を突き上げさせると、会陰部へアヘイクを注射した。

『プス！……プチュウウウウウ』

「痛っ！？」

「コレねぇ、すっごく効くんだよぉ～♡」

アナルを掘られながら、更に性器を押し拡げられた姉の醜態を見せつけられながら会陰部に激痛が走る。

しばらくすると意思に反してカッチカチになってくるのを感じる海斗。

「わあっ！？　うわああっ！！」

「あれぇ？　おねぇちゃまのマンコ見ながらチンポおっ勃てちゃうなんて……ほんと変態だよねお前って」

美央は掌で海斗の顎を下から掬い上げ、グイッと一気に上を向かせる。

「よく見ろ！　美希ねぇちゃんのマンコ♡　アナルも窄んだり盛り上がったりペニバンで腸液まみれのグッチャグチャにされちゃってるよぉ？　エロいねぇ～？　うふふ♡」

ようやく美希の肛門から由衣夏のぶっといペニバンディルドが引き抜かれ、理沙も性器を押し拡げている両手を離した。

「うわーん！　うわーん！……酷い！こんなの酷すぎるよおおっ！　うえーんうえーん！」

　由衣夏が抱え上げていた両手を膝から離すと、崩れ落ちるように床にへタり込みながら号泣する美希。
　肛門からは夥しい量の腸液が垂れ落ちていた。
　理沙は開いたまま閉じきれなくなるほど調教された濡れた肛門へ、指を捩じ込みながら囁きかける。

「はぁ？　酷いって？　お前に虐められて金玉蹴り潰されて殺された大学生の方がよっぽど可哀想なの！　分かる？」

『ズボ！……ヌププ！』

「やはあっ！？……ご、ごめんなさい理沙さま……おっしゃる通りです」

「お前に殺意がなかったと判断されたから、殺人常習犯の幸子に大学生殺害の罪も着せて……軽い拷問刑程度で無罪釈放にしてくれてるの。美央ねーちゃんの好意で。分かるわよね？」

「は、はい。本当に美央さまには感謝しております」

「分かっていればいいの。次かその次くらいまでにはあたしの拳、入るように調教してあげるからね？」

「そ、そんな……死んじゃいます」

「半分開きっぱなしの哀れなアナルにしてやるから覚悟しててね♡　あははは！」

散々脅したあと、ようやく理沙は肛門から指を引き抜いた。
涙を指で拭いながらゆっくり目を開けると、目の前には隆々と勃起した見慣れないモノが……。

「きゃあっ！？」

海斗が顔を真っ赤にしながらイチモツをおっ勃てて突っ立っている。
理沙と由衣夏の二人がかりで泣きじゃくる美希を四つん這いにさせた。

「ほら、後ろに回って！　バックで犯しなさい」

『ギュウッ！……グイ！』

「あへへえっ！？　痛いいいいっ！！」

美央は海斗の勃起したペニスを強く握りしめて、一気に引き摺りまわし、姉の背後へ誘導する。

「ほら！　おねぇちゃんのお尻を両手で掴んで左右に押し開くの」

「あ、あうう……は、はい」

姉を犯すとゆう行為にかなりの抵抗を感じながらも、超強力媚薬であるアヘイクを注射されている海斗にはもう止まることは出来ない。

生まれて初めて見る女性の性器……しかしそれは実の姉のモノであるとは……かなり残酷な運命であった。

「自分のチンポ握って、マンコの入り口に持っていくの！」

「は、はい」

『ピト……メリメリ』

「あっ！？　や、やめて海斗！　何をしてるか分かってるの！？」

「ごめん姉ちゃん……もう自分を抑えられないんだ！」

『グチュチュチュ！……バチュウッ！！』

「んはあっ！？　いやあああっ！！」

ついにフル勃起した海斗のペニスは、全員が見守る中、姉である美希の膣内へ根元まで挿入された。

由衣夏のアナルファックで性器も濡らしていたため、かなりスム

ーズにインサートされてゆく。

「激しく腰を振って出し入れするのよ」

「はい！　美央さま」

『ズチュ！　ヌポッ！……バッコンバッコンバッコンバッコン！！』

「やはあっ！　痛いっ！　海斗やめ……いやああああっ！！」

恥辱感と苦痛と弟に犯されるとゆう背徳感……様々な負の感情が混ざり合い、ただただ泣き喚くことしか出来ない美希。
海斗のほうは姉の膣に締め付けられて本気で感じながら激しく腰を振り続けている。
そんな光景を興奮しながら見守る神崎家の女たちと唐田由衣夏は、やはり超ドSであり、超がつく変態揃いでもあった。

「アヘェッ！　ア、アヘェエエッ！！」

「分かった分かった。おねーちゃんのマンコ、締まりが良くて気持ちいいんだよね？　ほら、中出ししちゃえ！」

『ズボッ！……グリリッ！』

美央はバックで姉を犯す海斗の肛門へ人差し指と中指を根元まで突っ込み、射精を促すように激しく前立腺を掻き回した。

「はぁううっ！！」

『ドピュッ！！　ドピュピュピュピュッ！！』

「いやあああああっ！！　な、なんで中で出しちゃうのおおおっ！？　危険日なのにいいっ！！　わーんわーん！！」

ペニスに触れなくても射精させることに長けた美央の指テク……膣に締め付けられながらソレをやられては、ひとたまりもなかった……。

「ほら！　まだ前立腺にもセーエキ残ってるわよ？」

『グチュチュチュチュ！』

「あへっ！？　あへえええっ！！」

夥しい量の精液を実の姉の膣内へぶち撒けた海斗は、アヘ顔のまま更に直腸を掻き回され、そのまま激しく腰を振り続けて二度目の射精までもしてしまう。

「あはは！　勢いで抜かずの二発かぁ♡　実のねーちゃん相手に……やるなぁ弟よ」

由衣夏は美希の膣口から溢れ出る精液を見つめながら爆笑してしまった。

「美央ねーちゃんの前立腺シゴキが半端ないからね～」

理沙もスケベそうに微笑みながら精液まみれになっている美希のクリトリスを中指で激しく擦る。

「あっ！　や、やめてください！　あんんっ！」

『プシャーッ！……ビクビクビクビクッ！』

実の弟である海斗との性行為では、感情が邪魔をしてイカなかった美希だったが、理沙の陰核責めでは思わず潮を噴きながらオーガズムに至ってしまう。

「イッちゃったぁ♡　お前は膣内(なか)よりクリちゃん派だったのね？あはは♪」

スケベそうに笑いながら精液と愛液がついた指を美希の口内へ突っ込む理沙。

「ほら、美希のマンカスで汚れちゃったあたしの指を舐めて綺麗にして」

「うごおっ！？……むぐぐうっ！」

一通りの拷問も終わり、納得した美央たち五人は、姉弟を自宅まで送り帰すことにした。

「もう二人とも服着ていいわよ」

「はい」

「ぐす……ぐす」

素直に返事をする海斗と、泣きながら鼻水を啜る美希。

「美希！　あたしに返事も出来ないの？」

『パァン！！』

「ひぐうっ！！ご、ごめんなさいっ！！」

美央に引っ叩かれて慌てて土下座をしながら謝る美希。
腕を組んで見下ろしながら後頭部を踏みつける美央。

「パンツとスカートは海斗に預けておくから下半身裸のまま乗りなさい。ドローンで家まで送っていってあげる」

「あ、ありがとうございます」

そのまま美央と由衣夏で、二人を連れて神崎邸の庭まで移動し、ドローンへと搭乗する。

後部座席に由衣夏と美希を乗せ、運転席隣の前の席へ海斗を乗せて、ドローンは暗闇の中、垂直に上昇してゆく。

美央の隣で静かに夜景を見下ろす海斗。
後部座席では卑猥な音が響き渡っていた。

『クチュクチュクチュクチュ』

「あ、あんっ！　あんん」

「弟には全く感じなかったくせに同性には感じちゃうのねアンタ……私と理沙ちゃんみたいにレズっ気あるんじゃない？」

「あん！　んんん……わ、分からないですけど……あんっ……由衣夏さま……イ、イキそうですぅ」

「あはは！　もう一回イカせてやるよ。尻浮かせて。アナルも指突

っ込んでやるから」

「あ、はい……あんっ！　！」

ツンとした酸味の強い匂いがドローン内に立ち込める中、少し呆れ気味に操縦を続ける美央だった。

アイドル調教（後書き）

東部地方最北部にある岡崎美希と海斗の自宅へ無事に着陸するドローン。

二人を送り届けた時、時刻は午前三時を回っていた。

アイドルまで辞めてしまうハメになった美希の弟、海斗だったが、美央に毎週責められることを苦痛ではなく悦びと感じている自分に薄々気づいていたのであった……。

この作品の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://novel18.syosetu.com/n5597er/

残酷処刑島

2025年9月6日18時59分発行